らき☆すた～変わる日常、高校生編～

ガイアード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
らき☆すた～変わる日常、高校生編～

【Ｎコード】
Ｎ４１０１Ｈ

【作者名】
ガイアード

【あらすじ】
陵桜に入学し1年間は何事も変わらない学校生活をしていたが、2年へと上がる頃に今の日常を変える程の出会いが主人公を待っていた。

プロローグ（前書き）

初めて書く小説ですので、投稿のばらつきや文がおかしい部分がありますが、その辺りはご容赦を。

プロローグ

この春陵桜学園への入学試験に合格し、後は卒業を待つだけになり俺、森村慶一は学校にある大きな桜の木の下でぼーっとしながら桜を見つめて立っていた。

そこに近づいて来る2人の女生徒にも気がつく事無くただ桜を見つめ続けていたが・・・・・・

「先輩、ここにいたんですか?」

そう言いながら俺に声をかけてくる女生徒が一人。

「ほら、こう、私が言った通りだったでしょ?」

もう一人クールな感じの女生徒が”こう”と名前を呼んだ女生徒に声をかけた。

俺はその声に気付いて振り返る。

「ん?こうとやまとか。俺になんか用か?」

少し褐色の入った肌、短髪で癖のある髪型、そして、元気の塊といった感じの少女”八坂こう”

長い髪をポニーテールにしてそれを二股に分けたような髪、そしてクールなイメージを思わせる物腰の話し方が特徴の”永森やまと”

二人とも俺の後輩だ。

「先輩も無事に陵桜に合格したと聞いたんで、お祝いを言いにきたんですよ。」

笑顔で俺にそう言うこう。

そして、やまとも俺にいつものような薄い微笑みを向けながら

「先輩、無事合格おめでとう。」

そう言ってくれた。

俺はそんな2人に

「ああその事か、わざわざありがとう。でも大変なのはこれからだろうな。」

そう言って苦笑する俺を笑って見ている2人。

俺はそんな2人に向き直り

「まあ、俺は一足先にこの学校から去っていくけどお前ら二人は後1年しっかりやれよ?」

そう言って2人にはっぱをかけると、2人は頷きながら

「わかってますよー。でも先輩、私は一応先輩と同じ学校を受験する予定ですから。」

そう言い、やまとはそんなこうと俺の顔を交互に見ながら

「私は聖フィオリナ女学園を受けるので高校は違ってしまうかもね。」

少しだけ寂しそうにそう言うのだった。

俺はそんな2人に激励の意味も込めて

「こう、俺が言うのもなんだが、陵桜もかなりレベル高いから、油断してたら合格は難しいぞ？やまとはやまとでそっちも中々のレベルらしいが、ま、お前なら心配ないだろうな。」

そう言うと、こうはそんな俺の言葉に少し緊張しつつ、やまとは俺の言葉に安堵の表情を浮かべながら

「わ、わかってますよ。私も陵桜に行ったらやりたい事があるんですから、その為にもしっかり勉強はしますよ？」

「・・・先輩の保証付きなら安心かしらね？でも、そう言ってくれてありがとう、先輩。」

そう言って微笑むやまとに俺は頷きつつ

「やまと、高校は違ってしまうだろうけど、こうや俺とも友達なんだから会おうと思えば会えるさ。まあ、お前が俺を友達と思っていてくれればの話だがな。」

苦笑しながらやまとに言う。

そんな俺の言葉にこうは笑みを浮かべながら

「大丈夫。私とやまとは親友だからね。あ、もちろん先輩もですよ？」

そう言うが、やまとは俺に視線を向け、その後にこうへちらりと視線を巡らせると

「先輩はともかく・・・こうが私の親友?・・・。」

そう言いながらやまとがクールな目をこうに向ける。

そんなやまとの言葉に途端に慌てたこうはやまとに

「ええ!!それはないよ、やまとー!」

あたふたとしつつそう言うこうにやまとはこうをからかう時の薄い微笑みを浮かべると

「・・・ふふ、冗談よ・・・。」

と、短く言うのだった。

そんなやまとの言葉に心持ちほっとしつつ、こうは

「ちょっ!!その冗談はきついって!」

そう抗議の声を上げたのだった。

俺は微笑ましくそんな2人のやり取りを見つめつつ

「ともかく2人ともこの2年間楽しかったよ。名残惜しいけど一時のお別れ、だな。」

そう言葉をかけると2人が俺に振り向いてこう言った。

「また高校で会えればいいですね。私もがんばりますけど、もし会えたらまた遊びましょうよ？」

そう、こうが俺に言うと、やまともそんなこうの言葉に頷きながら

「私は学校が違ってしまうかもしれないからどうなるか分からないけど、また会えたらいいわね。」

そう言ってくれた。

俺はその2人の言葉に頷いて。

「そうだな・・・。その時はまた楽しくやれるといいな・・・。」

そう言う俺の言葉に2人ともにっこりと笑ってくれた。そしてそれから2ヶ月後2人に見送られながら俺は中学を卒業した。

高校に入ってから自分の身に起こる色々な事をこの時はまだ気がつかないままに俺は陵桜学園へと進むことになる。

俺はこれから始まる高校生活に向けて、様々な思いを巡らせたのだった。

交わる四重奏～泉こなた～

陵桜に入学し１年間はなんの変化もない日常を過ごしてきた俺だったが、１年の終わり頃になり、俺はある４人のグループに出会う。

その４人はすごく仲がよさそうでいつも楽しそうに話をしているのを事あるごとに見かけるようになった。

一人は小学生並みの背丈、青い長い髪とその頭にある癖っ毛、左眼の下にある泣き黒子が特徴だった。

一人は淡い桜色のふわっとしたロングヘアー、そして視力がよくないのか眼鏡をかけていて、性格的におっとりとした印象を受ける子だった。

一人は紫のショートヘアー、頭には黄色いリボンをつけ、やはりおっとりとした感じの子だった。

一人はやはり同じ紫の髪をしていたが、前の子とは違いロングヘアーでそれを左右に分けてリボンで止めているいわゆるツインテールという髪型をして気の強そうな感じを受ける子だった。

その子は前の子とは姉妹らしいという事もクラスメートの話す会話から知った。

それから2年生に上がるまでその４人の楽しそうな姿を見る機会がたびたびあったのだが、その時点ではまだ接点を持つというところまではいかないでいたが、あるきっかけから４人との係わりを持つ事になる。

それは俺がこれからか係わる事になる四重奏の一人との出会いでもあった。

慶一ｓｉｄｅ

それは1年の終わり頃その日弁当を持ってくるのを忘れ、仕方なく学食に買出しに来ていた時の事。

「すいません。チョココロネとピーナツサンド、焼きそばパンを下さい。」

そう学食のおばちゃんに言ってお金を払い、パンを受け取って、さてどこで食べようか?と思案していたら青髪の小さい女生徒が俺のすぐ後に飛び込んできてパンを買おうとしていたが・・・・・・

青髪の女生徒は購買のおばちゃんに

「おばちゃん、チョココロネある?」

そう尋ねてみたが、おばちゃんは在庫を確認してからその女生徒に

「ごめんね?さっき売切れちゃったのよ。」

と、申し訳なさそうに言うと、女生徒はショックを受けたようで

「えー!!そんなぁ・・・」

と言いながら凹んでいるのが見て取れた。

そんな女生徒の落ち込み様におばちゃんも気を使って

「ほんとにごめんね?他のパンならまだあるけどどうする?」

そう言っておばちゃんはほかに売れ残っていたパンはをその子に薦めながらちらっと俺の方を見る。

その子もその視線に気がついたのか、おばちゃんの視線を辿って俺の方を見て俺の手元にある”チョココロネ”を見つめてため息を一つついて、がっかりしたような表情でとぼとぼと食堂を後にしようとしていた。

「うー・・・楽しみにしてたのになぁ・・・」

落ち込んだ表情で俺の横をすり抜けつつポツリとつぶやいた言葉を俺は聞き逃さなかった。

そして俺は何だか罪悪感のようなものを感じてすかさずその子に声をかけていた。

「ちょっと待って?」

そう声をかけるとその子は俺の方を向いて首を傾げ

「何?私に用事?」

「ああ。確か泉だったよな?同じクラスの。俺、森村慶一っていうんだ。よろしく。」

俺の自己紹介に”泉”は少し頭を捻る仕草をして

「ああ、そういえばそんな名前の人いたっけ。それで私に何の用？ナンパとか？それともフラグでも立てようというのかな？」

そう言いながらニマニマとした笑いを俺に向けてきた。

「い、いや、そうじゃなくてだな。さっき泉はコロネ買いにきてたんじゃなかったか？」

先ほどの会話が聞こえていたので俺はそう切り出すと、泉は

「ん？そうだけど丁度私が来た時に売り切れちゃってさ、がっかりしてた所なのだよ。」

と言って落ち込むそぶりを見せる泉に

「これやるよ。お前これ好きだっただろ？」

そう言って俺は泉にさっき買ったチョココロネを投げて渡した。

コロネをキャッチした泉は慌てて

「ちょっ！！いいの？これ、もらっちゃっても？」

「ああ。俺は他にも買ったパンもあるし、なんか俺が買ったら売り切れた、みたいで後味が悪いしな。」

苦笑しながら泉に言う。

「うーん、ならこれはありがたくもらっておく事にするよ。ありが

とね、森村君。」

ほくほく顔で俺にそうお礼を言いつつ泉は

「でもどうして私がチョココロネ好きだって知ってたの?」

そう言って、俺が泉がチョココロネが好きな事を知ってるのが意外だったのか泉は不思議そうな顔で俺に聞いてきた。

俺はそんな泉に泉達が教室で仲のいい女生徒達とよく食事をとってる所を思い出しながら

「ああ。それはいつもお前と他に3人仲のいい女生徒とよくお昼一緒に食べてただろ?その時にお前がチョココロネをよくほおばってる姿を目にしてたからな。」

そう言うと、泉も俺の言葉に自分達がいつもしている食事の状況を思い出しながら

「ああ、そういうことか・・・なるほど、よく見てるねえ?」

そう言ってまたニマニマとした笑顔を俺に向ける。

その顔に少し慌てながら

「目についたのはただの偶然だ。それだけお前のチョココロネ食べてる姿は意外と目立ってたんだぞ?」

慌てて言い繕うがさらにニマニマとした顔で

「ふーん？まあいいや。せっかくもらえるというのならありがたくもらっておこうではないか。とりあえずありがとう、森村君。」

俺にそうお礼を言った後何かを思い出したらしく、泉は慌てて

「あ、しまった。ごめん、森村君。みんなを待たせてるからこれで行くね？コロネありがとねー。」

そう言って手を振り食堂を後にする泉を俺はちょっと面食らったような表情で見送った。

（初めて泉と話したな。でもなんというか圧倒されそうなエネルギーを感じたな・・・）

心の中でそうつぶやいて俺もまた食堂を後にした。

この学校にある噂の星桜の木の下でパンでも食べるかな、と考えながら・・・。

こなたｓｉｄｅ

森村君からコロネをもらい、みんなの待つ教室へ戻りながら、私はさっきのやり取りを思い出していた。

（チョココロネ売り切れって聞いた時はがっかりだったけど、思わぬところから手に入っちゃったなー。森村君か、同じクラスではあったけど話した事はなかったよね・・・でも、さっきやりとりを見てても悪い人じゃなさそうだね・・・今度はコロネのお礼に私達のグループに誘ってお昼ってのも悪くなさそうだねー。）

そう考えているうちに教室へとたどり着いた。

ドアを開けると奥のほうから私を呼ぶ声がしたのでそっちへと移動する。

「こなたー?ずいぶん遅かったじゃない、何やってたのよ?」

「こなちゃん、チョココロネ買えたの?」

「泉さん、いつもより遅かったので少し心配してたんですよ?」

いつもの3人に迎えられる。

「いやー、実はさっき食堂でさー・・・

この後私達はそれぞれに森村君と係わることになるのだけどそれはもう少し先のお話。

旋律の一本目、それは後にどんどん数を増すそのきっかけなのだった。

交わる四重奏～泉こなた～（後書き）

ここで、オリキャラのプロフィールを書いて起きたいと思います。
名前：森村慶一
身長：１７６センチ：体重６０キロ
髪の色は黒でショートのストレート系、目は大きめで左右の視力１．５
慶一の両親は物心つく前に事故により他界、その後住んでた家だけを残し、親戚の下に預けられる、育ての親が武術家であったため、幼少より武術を叩き込まれる。
そのおかげもあってか、中学に行ってもグレる事なく普通に過ごす。
高校に入る頃には、育ての親の負担を減らすため、一人暮らしする事を決めて、かがみ、こなたの家の中間に当たる久鬼市にある元両親の家で一人暮らしを始める。家事は人並み程度にはできる、勉強はかがみやみゆきにはかなわないが、それなりのレベルはある。
性格は生真面目で優しく、温厚だが、友情には厚い。
人の好意には少し鈍いところが欠点でもある。

交わる四重奏～柊かがみ～

食堂での泉こなたとの出会いがあり、その後しばらくして俺は更なる四重奏の一人と出会うこととなる。

それはある日の学校帰りの事だった・・・・・・

「ふう、今日も一日授業は面倒だったな・・・」

そう呟きながら今日の学校での授業を思い出す。

「・・・はあ、やめよう、余計に疲れるだけだな・・・」

呟きつつ曲がり角の所に差し掛かったとき

「困ったわね・・・ここにもないか・・・。」

と独り言のように呟く声が聞こえたので何事かと思い、声の方へ視線を巡らせてみると・・・・・・

特徴のある紫の髪をツインテールにしている女生徒が何かを探しているかのように辺りをきょろきょろと見回していた。

俺はとりあえずなにやら困っているようだったのでその女生徒に声をかけてみる事にした。

「えーっと、君、どうしたの？何か探してるみたいだけど？」

俺に声をかけられて、一瞬ビクリと反応し、女生徒は俺の方を見て

「あんた誰？っていうか、あんたには関係ない事だからほっといてよ！」

女生徒はいらつくような感じで俺に言った。

俺は、そんな女生徒に警戒されてるようだと思いつつも、自分の事を伝えようと思い、女生徒に

「あ、えっと、俺は泉さんと同じクラスの森村慶一だ。君は確か柊さんじゃなかったかな？」

そう自己紹介をしつつ言うと、女生徒はなおも俺を訝しがりつつも

「そうだけどなんであんたが私の事知ってる訳？」

そう言う柊さんの目には明らかに警戒の色が浮かんでいた。

そこで俺はもう少し詳しい事情を柊さんに話して警戒を解こうと思い

「いつもうちのクラスに来て泉さんや他に二人の子とお昼食べてたよね？だからかな、知ってたのは。」

柊さんを知っている理由を話すと、柊さんは俺の事をじっと見つめながら

「あ、そういえば・・・あんたはこなたのクラスの人だったわね・・・ん？森村？」

突然俺の名字を呼んだかと思うと何かを考え始め、そして何かを思

い出したのか、ぽんと手の平を打った。

「ああ、そうか。あんたがこなたが言ってた食堂でこなたにチョココロネあげた人か。」

そう言うと、俺は泉にコロネをあげた時のことを思い出しながら

「ああ、そんな事もあったっけな・・・」

俺は左手で頭を掻きつつ答える。

それを見た柊さんは俺の方をニヤリとした目で見つつ俺に

「こなた、あんたにコロネもらえた事結構喜んでたわよ?」

と言った柊さんの顔から警戒心が薄らぐのが見て取れた。

俺はそんな女生徒の言葉に苦笑しつつ

「あの時は俺が買った後に泉さんがコロネ買いに来たんだけど丁度売り切れになってしまってさ、泉さん結構楽しみにしてたっぽいから、なんか気の毒になってね。それに俺が買った後で売り切れになったみたいで後味悪かったし・・・。」

と柊さんにあの時の事を説明した。

それを聞いていた柊さんは俺の方をじっと見ると

「まあ、悪い人じゃなさそうね・・・」

少し安心したようにぼそりと呟いた。

「ははは。まあそれはともかく、俺は柊さんが何か探しものをしてるっぽい感じだったから、どうしたのかなと思ってさ。つい声をかけちゃったんだけど、もしよかったらだけど、探し物手伝おうか？」

俺はとりあえず当初の目的を果たす為に柊さんに提案を持ちかけた。

柊さんは複雑そうな表情で俺を見て

「え？でもなんか悪いわよ。あんたも学校の帰りなんでしょ？」

柊さんは手を貸してもらうのはなんか悪いな、という感じで俺にそう言ってきたが俺は声をかけた時点で手伝うつもりだったので

「困ったときはお互い様ってやつかな。性分なもんでね、そういうの見るとほおっておけなくなるんだよな。」

そう言って苦笑する。

柊さんは俺の言葉に考えこんでいたが、やがて

「じゃあ、悪いけど手伝ってくれる？実は携帯電話を気がつかないうちに落としちゃったみたいでね・・・。」

そう言って表情を曇らせる柊さん。

俺も眉をひそめて

「携帯電話かそれは落としちゃまずい物だよな・・・。」

そう言った後柊さんにこれまでの自分の行動を確認してみたのかを聞いてみた。

「自分が行動した場所や立ち寄った場所とかは巡ってみた?」

俺がそう問い掛けると柊さんは自分の取った行動を思い出すように考え込みながら

「うん。今日行った場所や通った場所を追いかけながらここまで来たのよ。後はここから学校までの道と教室かな?」

とりあえずこの時点まで取った行動を教えてくれた。

俺は（なら後はここから後の行動を辿ればいいかな?）と心の中で考えながら柊さんに捜索活動の再開を促して

「なるほど。じゃあ、一緒に行ってみよう。」

そう声をかけて一緒に柊さんの巡った道を携帯を探しながら移動していく

「うーん、ここにはないな・・・」

周りを見渡すがそれらしいものも見つけられず俺は小さく呟いた。

柊さんも心底困ったような顔で

「そうね、どうしよう・・・」

と、俺と同じように周りを見渡しながら答える。
俺は気持ちを切り替えるように再び柊さんに
「まだ探してない所もあるんだし、諦めずに行こうよ?」
そう励ますように言うと柊さんは申し訳なさそうに
「そうね。なんかごめんね?付き合わせる事になっちゃって・・・」
自分の不注意で付き合わせた事を悪いと思っているのだろう、少し沈んだ顔で俺にそう言った。
俺はそんな柊さんの暗い気持ちを少しでも吹き飛ばそうと思い
「いいって。さっきもいったろ?困った時はお互い様ってね。」
軽く微笑みながら柊さんに言う。
すると、柊さんは少し顔を赤らめて照れたようになって
「あ、ありがと・・・。」
と、小さく呟いた。
俺はその言葉が聞き取れなかったので頭にハテナマークを浮かべて柊さんを見ていたがそのうちに学校へと到着した。
後の捜索ポイントは教室に至るまでの廊下と教室だったので、俺達は残りの捜索場所を総当りで当たる事にした。

柊さんにも焦りが見え始めたのか余裕のなくなったような声で

「と、とにかく、後は学校の中。教室へいってみましょ？」

俺にそう促すと俺も頷いて

「そうだな。後は探すとしたら、そこか・・・」

教室へ移動中周りに注意しつつ携帯を探したが結局携帯を見つけられなかった・・・。

俺は最悪の事態も想像しつつ

「うーん、誰かに拾われちゃったのかな？」

自分の考えを口にすると柊さんも半ば諦め気味になって

「後は、警察に届けるしかないのかなあ・・・」

どうしようかな？と考え込む柊さんを見ながら後は他に何か見つける手だてはないだろうかと思案しているとその時俺は一つ試して見たい方法を思いついた。

その方法を試すためにまずは柊さんに確認を取って見る事にした。

「柊さん、携帯電話はマナーモード？それとも着信音鳴るように設定してある？」

俺は柊さんの携帯の設定がどうなってるのかを確認する為柊さんに

聞いてみた。柊さんは何かを思い出すように少し思案して

「一応、着信音鳴るように設定戻してあるはずだけど・・・」

自分のしてある設定を思い出したようなので俺にその事を伝えた。

俺はそれを確認するとさっき思いついた方法を試す為に柊さんの携帯番号を聞いてみることにした。

「柊さん、君の携帯の電話番号教えて？」

俺の突然の申し出に柊さんは困惑して

「え？何よ突然、何で私の電話番号を初対面のあんたに教えなきゃいけないのよ？」

柊さんは俺が言っている意味が分からないという風に俺に強い口調で言う。

俺は柊さんに理由を説明するように

「もしかしたら携帯の着信音で落ちてる場所とかが分かるかもしれない。」

そう伝えると柊さんも俺がやろうとしてる事に気がついたようで自分の定期入れを取り出すとそこから予備で自分の携帯番号を書き込んだ紙を取り出して

「そういう事ね・・・ちょっと待ってね・・・はいこれ。」

俺に携帯番号を渡してくる。

それを受け取った俺はさっそく番号を入力し発信してみる。

すると・・・・・・

”ピピピピ”と携帯の着信音が鳴り出した。

それも柊さんの鞄の中から音が聞こえている。

慌てて柊さんが鞄を開くとそこには着信音を鳴らしつづける柊さんの携帯が入っていたのだった。

二人して顔を見合わせる事数十秒

「ぷっ」

「くくく」

「「あはははははは」」

二人して大笑いしていた。

そしてひとしきり笑った後柊さんはばつが悪そうに俺に

「ごめんね?こんな間抜けな事に突き合わせちゃってさ。」

と恥ずかしそうに俺に言ったが俺は笑って

「いいさ。とりあえず見つかってよかったな?大事にならなくて何よりだ。」

手伝った事なんてなんてことないよ?という風に柊さんに伝えると
柊さんは顔を赤くして

「うん。ありがとう・・・。」

と俺に短くお礼を言ってきた。

俺は携帯を見つけるために柊さんの携帯番号を自分の携帯に入力し
ていた事を思い出し、番号はこのままじゃまずいだろうと思った俺は

「あ、そういえば、俺の携帯に柊さんの携帯番号入ったままだね。
ちゃんと消しとくから安心して?」

柊さんを安心させる為にそう言った。

柊さんは俺の言葉に少し戸惑いながら

「そ、そう?ならいいけど・・・」

と言いいながらも柊さんの顔が少し寂しげに見えた気もしたけどた
ぶん気のせいだろうと俺は思う事にした。

一連の捜索活動も終了して柊さんと校門前まで一緒に来てそこで俺
達は別れる事になり

「じゃあ、私はここで、携帯一緒に探してくれてありがとね。それ
じゃー」

そう言って去っていく柊さんを見て俺は今日は少しいいことできた

なあとしみじみ思うのだった。

そして、柊さんが去った後女の子一人で帰らせた事にはっと気がついた俺は

「あ、駅まで送っていってあげればよかったかな？たはは・・・。」

そう呟きながら最後の最後で間抜けな俺だった・・・。

かがみｓｉｄｅ

帰宅途中にて

（あれがこなたが言ってた森村君か。なんか携帯電話一緒に探してくれたり、思ったよりいい人だったな・・・ああいう人なら友達になるのも悪くないかも・・・でも私から声はかけにくいわよね・・・なんかきっかけがないかなー・・・）

自宅に到着

「ただいまー、今帰ったよー。」

「お帰りおねえちゃん。あれ？何かいい事あった？妙に嬉しそうな感じだけど？」

「うん実は、今日の帰りさー・・・・・・。」

二つ目の旋律がつながっていく

交わる四重奏～柊かがみ～（後書き）

次回はつかさ編予定です

交わる四重奏～柊つかさ～

慶一ｓｉｄｅ

年が明けて冬休みも終わり、寒さにかじかむ手をこすり合わせながら学校へと向かう途中自分の前方で片膝を抱えてうずくまってる女生徒を見つけた。

特徴的な紫色の髪、頭に乗ってる黄色いリボンを見たときああ、この子は確か同じクラスに居た柊さんだと解った俺はとりあえず柊さんに声をかけてみる事にした。

「おはよう。柊さん、だよね？どうしたの？こんな所でうずくまって」

そう俺が声をかけると柊さんは涙目の顔をこちらに向けて

「ふぇ？あ、確か同じクラスの森村くん、だったよね？」

恐る恐る俺に返事を返す柊さん。

俺はとりあえず普通に話し掛けて

「ああ。同じクラスだったけどこうして話すのは初めてだよね？でも、どうしたの？」

柊さんにうずくまっていた理由を聞いてみると

「あ、その、わたし、おねえちゃんに置いてかれておねえちゃんに

追いつこうと一生懸命走ったんだけど途中でうっかり転んじゃって膝すりむいちゃったの・・・。」

膝を押さえながら泣きそうな顔をしている柊さんを見て

「そうだったのか、えーっと・・・・・・。」

事情を聞いた俺はきょろきょろと周りを見回してみた。

すると近くに公園があったので、とりあえず柊さんの応急処置をするために柊さんに声をかけた。

「柊さん。ほら、立てるかい?」

そう言って柊さんに手を伸ばす。

「え?あ、うん。」

そう言いながら柊さんはおずおずと俺の手を取り立ち上がる。

「とりあえずそこの公園へ行こう。傷の手当てもしないとね。」

俺は柊さんの手当てをしようと思い柊さんにそう言うと、おどおどと俺を見ながら

「え?で、でも迷惑じゃないかな?」

柊さんはばつが悪そうに俺に言ったが

「まあ、怪我人を見かけちゃったからな。」

俺は笑ってそう言うと、柊さんは少し顔を赤らめて

「わ、わたしも怪我したくてしたわけじゃないよう・・・。」

慌てながら弁解した。それを見た俺は柊さんに背中を向けてクスリと笑うと柊さんを公園のベンチへと連れていき座らせて

「ちょっと待っててね？」

おもむろに鞄からハンカチと消毒液と絆創膏を取り出し、ハンカチを水にぬらして柊さんの所へ戻ってきて

「はい、傷見せて？」

そう言うと柊さんは擦り剥いた膝を俺の方に差し出して

「う、うん・・・。」

と頷いた。

俺はすばやく柊さんの膝の怪我をハンカチでぬぐい、消毒液をかけて、絆創膏を貼り付けた。

「はい、終わりっと。」

俺が治療を終えると柊さんは

「あ、ありがとう森村君。でも鞄の中にそんなものが入ってるなんてすごいね～。」

と申し訳なさそうな顔をしながら俺にお礼を言ってきた。

「このくらいなんてことないさ。それに俺も武術やってる関係上怪我はつきものなんでね、いつもこういう物を持ち歩いてるのさ。」

そう説明すると柊さんは驚いたような顔になって

「へえ?武術やってるんだ、すごいね~。ところで武術ってなにかな?」

と柊さんが思わぬボケをかましてきたので俺はずっこけそうになりつつも苦笑しながら

「己の体を使って戦う、格闘技の事だよ。」

と軽い説明をすると柊さんは納得したように頷いて

「あ、そういう事なんだね?あはは、一瞬わからなかったよ~。」

と笑いながら俺にいいつつ何気なしに時計に目をやった瞬間、柊さんが慌てだして

「いけない!このままじゃ遅刻しちゃうよ~森村君、膝の怪我治療してくれてありがとうね。それと森村君も急がないと遅れちゃうよ~?」

と俺に言いながらも走りだしたので

「おっと、それじゃ俺も行かないとな。柊さん、今度は転ばないよ

うになー。」

と声をかけて走りだした。

学校に着く頃に再び柊さんが転んでいたのを見かけた時には思わずため息がでていたがとりあえずまた柊さんを助けて何とか無事遅刻寸前だったが学校へと辿り付くことが出来た。

・・・・・そして放課後。

俺はそろそろ帰ろうと教室をでて昇降口に向かっていたが、その時前方から何か忘れ物でもしたかのように慌てて走ってくる柊さんを見つけた。

俺はなんとなくいやな予感を覚えつつ、柊さんを見ていたが、俺とすれ違い柊さんが俺の後ろへ至った瞬間

「きゃっ！」

という短い悲鳴とドテッという何かが転んだような音を聞き、恐る恐る後ろを振り返ってみたら案の定柊さんが転んでいたのだが、その瞬間俺はものすごい速さで前に向き直った。

「ひ、柊さん、大丈夫?」

俺は柊さんに背中を向けたままで声をかける。

「い、いたいよう・・・あ、その声は森村君?う、うん・・・また膝擦り剥いちゃったけど・・・でもどうして後ろを向いてるの?」

柊さんは背中を向けて立っている俺にそう声をかけたが俺は振り向けなかった。

なぜなら転んだ柊さんはその・・・スカートがめくれていて・・・

「柊さんすごくいい難いんだけど、その、スカートめくれてるから・・・。」

俺がそう言うと柊さんは慌てて自分の状態を見たが

「は、はわわっ！ごめんね今直すからまだこっちみないで～！」

と大慌てで服装を整えて再び俺に声をかけた。

「も、もういいよ？こっちむいても。」

と照れながら俺に言う柊さんに心の中で安堵のため息をつきながら俺は柊さんの方に向き直り

「大丈夫？また膝擦り剥いたって言ってたけど？」

俺がそう尋ねてみると柊さんは涙目で

「う、うん。ちょっと痛いけど何とか大丈夫。」

そう言って痛々しく笑う柊さんに俺は再び鞄から絆創膏を取り出して柊さんの膝に貼ってあげた

「やれやれ、2度あることはというけれど3度目があったね。」

俺が苦笑交じりにそう言うと柊さんは顔を赤くして

「ううん、転びたくて転んだんじゃないもん。ううわたしってつくづくドジだなあ・・・。」

と少し落ち込みながら俺に言っていたがやがて元気が出たのか俺に柔らかい笑顔を向けて

「でも、ありがとうね森村君。今日は結局3回も助けてもらっちゃったね。」

と嬉しそうに言う柊さんに俺も笑顔を返しつつ

「まあ、俺はたまたま近くにいただけだよ。柊さんの運が良かったんじゃないかな?」

と柊さんに言うと

「う〜ん?そうなのかなあ?」

といいながら少し考える仕草をしていたが、やがて何かを思い出した柊さんは

「あ、おねえちゃんやこなちゃんやゆきちゃんに待っててもらってたんだった、ごめんね森村君私行かないと〜。」

と言って走り出そうとする柊さんに俺はとっさに声をかけた

「ああ、今度は転ばないように気をつけろよー?」

と俺が言うと柊さんは走りながら俺の方を振り返りつつ俺に手を振りながら

「うん、気をつけるよ～。それじゃまたね～膝小僧の恩人さん～。」

と言いながら去っていく柊さんを見つめながら今日も一応の人助けができたなと頷く俺がいた。

つかさｓｉｄｅ

慶一と別れてみんなの元へ急ぎながら

（あの人がおねえちゃんやこなちゃんが言ってた森村君なんだね・・・朝からなんか恥ずかしい所みせちゃったな～・・・でもわたしの怪我の治療してくれたりとか結構優しい人みたいだなあ・・・でも結局帰りも恥ずかしいとこ見せちゃって、はうう、穴があったら入りたいかも・・・もうすぐ2年生になるけどもしもクラス一緒になれたら今度はお友達になりたいなあ・・・・・。）

「つかさ、遅いー！」

「ずいぶん待たせたみたいだけどなんかあったの？つかさ。」

「なんとなく嬉しそうな顔してるみたいですが何かいいことありましたか？」

「うん、実は今朝と帰りにね・・・・・・

3本目の旋律が重なる・・・・・・

交わる四重奏～柊つかさ～（後書き）

次回はみゆきさんのお話です。

交わる四重奏～高良みゆき～

1年の3学期終了間近、そして春休みに入る少し前の事、俺は育ての両親に用事を言いつけられその用件を聞きに行くため都内にある両親の元へ久々に帰って来ていた。

慶一ｓｉｄｅ

俺は早速道場の方にいる親父の元へ行き用件を聞くため親父に声をかけた。

「親父、今日は一体何で俺を呼んだんだ?」

俺の声に気付いた親父は俺の方に向き直って

「うむ。実はちょっとお前に頼まれて欲しい事があってな。先方の道場主である牧村さんの事はお前も知っているだろう?」

牧村さん、俺の親父の道場とは交流もあり親父との仲も悪くはなく、いつもお互いに切磋琢磨しあっている俺も良く知る道場主の事を思い出し

「ああ、牧村さんか。それで俺は何をすればいいんだ?」

用件の本題を話してくれと促すと

「お前もうちの道場ではかなりの腕だ。そこで牧村道場に出向いて出稽古も兼ねた練習をお前に任せたいのだ。」

「つまり、相手の道場に行って最近のなまった体を鍛え直すのと同時に俺も相手の練習を見てやれ、ってことか？」

「早い話がそういうことだな。行ってくれるか？」

「まあ、牧村さんの事は知らない訳じゃないから構わないけど、それにしてもわざわざ俺を呼びつける用事がそれだとはね・・・。」

やれやれといった感じで両手の平を上にあげるジェスチャーをすると親父が頭にハテナマークを浮かべたような顔で

「む？それはどういう事だ？他になにかあるとでも？」

そう聞き返す親父に俺は

「いや、わざわざ呼びつける程だからてっきり体でも壊して道場を閉めるのかと思ってさ。」

と親父をからかうように言うと親父は怒ったように

「ふん！まだまだお前やその他の若い者には負ける気もないしこの道場を閉める気もないわ！」

俺に怒鳴りつけてきたのを見て

「まあ、この元気なら当分は安泰だな。とりあえず用事は分かった。今から早速牧村さんのところへ行って来るよ。」

親父から逃げるように道場を後にしようとしたら後ろから親父の怒鳴り声が聞こえてきた

「ふん！せいぜい鈍った体を鍛え直してもらって来い！それと、帰りはここに寄らなくてもいいからな！」

「へいへい、分かりましたよー。」

そう言って俺は牧村道場へと向かった。

道場に着いて道場主の牧村さんに挨拶をして俺は鈍った自分の体を鍛えるのと相手方のお弟子さんとの合同練習を数時間に渡って行い、練習を終えて道場を後にした。

俺は自宅に戻る為に最寄の駅に向かって歩いていたがふと前を見ると大きな荷物を持ってふらふらと歩いている同じクラスで学級委員長でもある高良みゆきの姿を見つけた。

見ているとあまりにも危なっかしく感じたのでちょっと手を貸そうかな？と思い俺は高良さんに声をかけてみる事にした。

「こんちは、高良さん。ずいぶん大きな荷物だね。」

俺は高良さんの近くに走り寄って高良さんを脅かさないように気をつけながら声をかける。

高良さんは俺の声に気がつき俺の方に顔を向けて

「あ、ええっと、確か同じクラスの森村さん、ですよね？」

ちょっとおどおどとした表情で俺に返事を返す高良さん

「あれ？俺の事知ってるの？クラスは同じだけどあまり話した事なかったよね？」

俺がそう言うと高良さんはにっこりと笑って

「ええ、確かにあまりお話した事はありませんでしたが、泉さんや、かがみさん、つかささんからお話を伺っていましたので。」

と言う高良さんの言葉に俺はちょっと前に会った3人の事を思い出していた。

「そういえば、高良さんもあの3人とは仲がよかったんだよね？」

俺がその事を尋ねると高良さんは

「そうですね。きっかけは些細な事だったと思いますが今はとても仲良くさせてもらっていますよ？」

といって柔らかく微笑んだ。

そして俺を不思議そうな顔で見つめると

「ところで森村さんは何故私に声をかけてくださったんですか？」

高良さんが俺にそう問い掛けてきた時俺は高良さんに声をかけようとした理由を思い出した。

「ああ、高良さんが大きな荷物を持って大変そうにしてたのを見かけてね。それで手を貸そうかなとね。」

俺が理由を話すと高良さんが困惑したような顔で

「え？あ、こ、これの事ですか？でも、ご迷惑ではありませんか？」

高良さんはちょっと遠慮がちに俺に言ってきたが

「まあ、ちょっと危なっかしくて見てられなかった、っていうのが本音かな？」

とからかうように言うと高良さんは顔を赤くして

「ううん、すみません・・・。」

と申し訳なさそうにうつむいてぼそりと呟いた。

そんな高良さんを見て俺は軽く微笑むとおもむろに手に持っていた荷物を取り両手に抱えた。

そんな俺の行動に高良さんは慌てて

「ひゃっ！び、びっくりしました・・・あ、あの、手伝ってもらってもいいのでしょうか？なんだか悪いなって思ってしまって・・・。」

申し訳なさそうに言う高良さんに俺は

「この位平気さ。それに俺鍛えてるし力には自信があるからさ。」

と笑いながら言うとなぜか顔を少し赤らめてうつむいてしまった。

俺が頭にハテナマークを飛ばしていると

「そ、それじゃ申し訳ありませんがよろしくお願いしますね。」

そう言いながら少し照れている高良さんに俺は

「任せて。ところで高良さんの家ってここから近いの?近いのなら家の近くまで運んであげるよ。」

と言うと高良さんはにっこりと笑って

「ええ。それじゃ私が誘導しますので森村さんは私に付いて来てもらえますか?」

そう言って歩き出す高良さんの後を追って俺も移動を始めた。

「了解っと。でも驚いたな、高良さんの家って都内だったんだね。」

ただ歩いてるのもなんなので俺は高良さんに話かけてみた

「はい、実はそうなんですよ。森村さんもそうなんですか?」

「いや、俺の家は埼玉にあるよ。今日は都内の実家に用事で呼びつけられて来てたんだ。」

と自分がここにいるいきさつを簡単に話した

「そうだったんですか。ご実家はこの近くなんですか?」

高良さんが尋ねてきたので

「まあね。龍神流道場って知ってる？そこが俺の実家さ。」

俺が実家の名前を出すと、高良さんは少し考え込む仕草をして

「龍神流、ですか？聞いたことがありますね。でも森村さんと名字が違うみたいですが？」

高良さんが実家の名字と俺の名字が違う事を不思議に思ったのか俺に事情を聞こうと話を振ってきたが俺は答えにくそうに

「ん、まあ、ちょっと事情があってね・・・。」

そう言って少し暗い顔になった俺を見た高良さんは何かを察したようでその事に関しては深くは聞いてはこなかった。

「すみません・・・森村さんが話づらそうなことを聞いてしまって・・・。」

聞きにくい事を聞いてしまった事に罪悪感を感じたのか高良さんは俺に謝ってきたが俺は笑顔で

「構わないよ。気にしてないからそんな暗い顔はしないで。」

俺がそう言うと心なしかほっとしたような顔になっていた。

しばらくすると家の近くに着いたみたいで

「あ、ここまでで結構です。お手伝いありがとうございました。」

と言って俺から荷物を受け取ると俺に一礼をして

「今日は本当に助かりました。いずれこのお礼はさせてください。」

柔らかい笑顔を俺に向けながらそう言ってくる高良さんに俺は笑顔を返しながら

「別にお礼なんて気にしなくていいよ。俺がやりたくて勝手にやっただけだしさ。」

俺がそう答えると高良さんはにっこり笑って俺に一度手を振り家へと戻っていった。

俺はそれを見届けた後踵を返し駅へと向かおうとしたが結局実家に忘れ物をした事を思い出し、見たくもない親父の顔を拝んでから埼玉に戻る事になった。

みゆきｓｉｄｅ

家へと向かう途中

（今日はまさか泉さんたちが話していた森村さんにお会いする事になるとは夢にも思いませんでしたね・・・お話してみたら結構気さくで優しそうな方だという印象を受けました。泉さん達も森村さんとはお友達になってみたいと言っていたみたいですがあの人ならそれもいいかもしれませんね・・・もしまた御縁があるとしたら、思い切って声をかけてみましょうか・・・なんだかいいお友達になれそうなそんな気がしますね・・・。）

わう！わう！

「まあ、チェリーちゃん。それにみなみちゃんも散歩の帰りですか？」

「はい・・・みゆきさんも・・・お買い物でしたか？・・・」

「そうなんですよ。ちょっと大きい物だったので持ち運びがかなり大変だったんですが。」

「確かにそうみたいですね・・・みゆきさん・・・なんだか少し嬉しそうな感じですが・・・何かいい事でもありましたか・・・？」

「実は、同じクラスの人がですね・・・・・・。」

４本目の旋律が重なる。

そして密かにもう一本の旋律も。

４重奏は今ここに顔をそろえる・・・・・・

交わる四重奏～高良みゆき～（後書き）

主人公のプロフィールの付け足しです。

主人公の実家は都内にあり、龍神流（たつかみりゅう）という拳法と空手，柔術をベースにした複合格闘技を主としている。作中にでてきた牧村さんもその流れを組む道場です。そして，実家からはみゆきさんの家が近い。

誕生日：８月２０日

性格に追記

一応漫画やアニメ，ゲーム等にもそれなりの興味をもっているので、こなたともある程度は話せる。

こうとやまとと慶一と～3つの旋律が生まれた日～前編

高良みゆきとの出会いのすぐ後、俺は埼玉にある自宅へと戻ってきていた。

道場での練習の疲れを癒すためにのんびりと過ごしていたが、ふいに一本のメールが俺の携帯に入ってきた。

内容を確認すると・・・・・・

ＦＲＯＭ：八坂　こう
先輩、元気にやってますか？こうです。私とやまとの高校受験も済んで二人とも無事に自分の目標の高校に合格する事ができました。ついては、私たちの合格祝いに先輩にも来て欲しいなと思ったのでメールしました。もし先輩の都合が良かったらこちらに連絡してください、待ってますね。

ＰＳ：やまとも先輩に会いたがっていたようですよ？できればやまとをがっかりさせないようにお願いしますねー（笑）

メールを確認した後ふう、と一つため息をついて

「会いたがってる、か、やまとをまた困らせてるんじゃないだろうな？」

独り言をつぶやいて苦笑し、とりあえずメールの返事の為にこうの携帯に電話をかけた。

数回のコールの後

「もしもし？」

こうが電話にでたので俺はメールの返事をする事にした。

「”こう”か？メール見たよ、合格おめでとさん。合格祝いに俺を招待したいって事だが俺が行ってもいいのか？」

俺がそう尋ねると

「あ、先輩。お祝いの言葉ありがとうございます。久しぶりですねー。」

と、あの頃と変わらないこうの声を久々に耳にして俺があの頃の思い出に少しひたっていると

「はい。その為にやまととも相談したんですよー？というか先輩だからこそ呼びたいなあと思ったんで。」

俺はその言葉を聞いてあれからのこうとやまとの友人関係を思い出しながら

「でもお前らもあれから仲良くなった友人達がいたんじゃないのか？わざわざ俺でなくてもその友人達とお祝いすればよかったんじゃないか？」

俺はこうに疑問をぶつけてみた。

するとこうは

「それも良かったんですが、今回は先輩とやまとと3人でやりたいなって思ったんですよ。だって私たち同じ中学出身の親友じゃないですか。それにやまともまだ先輩の事は親友だと思ってるようですよ？」

何故か電話口でニヤついてるこうの姿が頭に浮かんだ気がしたが

「そういうこうはどうなんだよ？まだやまとに親友って思ってもらえているのか？」

と、さりげない反撃をしてみた。

するとこうは不満そうな声で

「先輩それはひどいですよー。卒業前のあの時もそうでしたけどー・・・。」

思いがけない反撃に慌てて返事を返してくるこう。

それに満足した俺はその日の予定を思い出してみたが特に何も入っていなかった事を思い出したので

「ははは、すまんすまん。とりあえずは俺もその日には予定はないから合格祝いに行かせてもらうよ。ところで、待ち合わせ時間だけど・・・・・・。」

俺はその日に予定がないから大丈夫だという事をこうに伝えて、こうと約束の時間の打ち合わせをした。

一通りの話が済むと

「それじゃその日にな。久しぶりに会えるのを楽しみにしてるよ。」

俺はこうにそう伝えるとこうも嬉しそうな声で

「私も楽しみにしてますよ?先輩、当日は思い切り遊びましょーね。それじゃ電話切りますねー。」

「ああ、またなんかあったら連絡してくれ。」

「はい、それじゃー。」

そんな訳で思いがけずこうとやまとの合格祝いに付き合う事になった。

そして当日・・・・・・

俺はこうに指定された待ち合わせ場所に来ていた。

時間はというとやまとが来るであろう１０分前、こうが来るであろう１時間前だ。

俺がこの時間に設定したのは当時あいつらとの待ち合わせの際、必ずといっていいほどにこんな感じにこうが遅れて来てたからだ。

やまとは時間に正確だったのだがいつも待ち合わせ１０分前には現れる事を知っていたという事もある訳だが。

（まあ、こんなもんだろう。）

そう心の中で思いつつ、俺は待ち合わせ場所に辿り着く。

俺は待ち合わせ場所に到着したが、しばらくはやることもなかったので待ち合わせ場所でじっとしていると前方からこちらへと走ってくる人影が見えた。

その人影は俺の方へ走り寄ってくると息を少し切らせながら声をかけてきた。

「はぁ、はぁ、先輩、久しぶりね、元気だったかしら?」

久しぶりに見るやまとに俺は懐かしさを感じながらも返事をする

「まあ、見てのとおりだよ。やまとも元気そうだな。それと、高校受験合格おめでとう。」

俺がそう言うとやまとはふっと薄く笑いながら

「あ、ありがとう。まあ、先輩は私なら大丈夫だろうってあの時もいってくれたしね・・・。」

俺はあの時にした卒業前の会話を思い出す。

「はは、そうだったな。それにしても時間には正確だな、やまと。」

俺がそう言うと少しむっとしたような顔をして

「誰かさんと一緒にしないで欲しいわ・・・。」

少し頬を膨らませてやまとは吐き捨てるように言う。

俺はその言葉に苦笑しながら

「ふう・・・という事は、相変わらず、なのか?」

俺が呆れたような顔でそう聞くとやまとも不機嫌そうに

「そう、相変わらずよ?こうは・・・それでも以前よりはマシにはなったかしらね・・・。」

なんだか、それでも達観したような表情で言うやまとをみて思わず俺は思わず吹き出してしまった。

「な、何よ?何かおかしい事いったかしら・・・?」

訝しげな表情で俺に軽く抗議するように言うやまとに俺は少し苦しくなりながら

「いや、お前も苦労してるんだなってな。そう思ったらなんかおかしくなってな。」

腹を抱えて笑いをこらえつつ俺は言う。

そんな俺に不機嫌そうな顔を向けながら

「したくてしてる苦労ってわけじゃないわよ・・・でも、先輩もそう言ってる割には、待ち合わせの時間きっちり覚えてたみたいね・・・。」

そう言うやまとに俺はふっと表情を戻し、軽く微笑みながらやまとを見て

「伊達にお前らと2年間、同じ中学で先輩後輩してた訳じゃないってことさ。」

両手を左右に開きやれやれといったジェスチャーをしながらやまとに言う。

そんな俺にやまとも”クスリ”と笑いながら

「ふふ、そうね。でもあれから中学の頃と合わせて3年もたったのね・・・。」

やまとが懐かしそうな顔をしながら言うと、俺はそんなやまとの顔を見ながらあの頃の事を思い出して

「ああ、そうだな。なあやまと、覚えてるか?俺たち3人が出会った時の事をさ。」

俺はやまとの方を向いて話し掛ける

そんな俺の言葉にやまとも頷いて

「ええ、よく覚えてるわ。今でも・・・忘れたくても先輩との出会いはかなり衝撃だったから・・・。」

やまとの言葉を聞きながら俺はあの頃を思い出していた。

「あの時は確か・・・・・・。」

次回、3人の過去

こうとやまとと慶一と～3つの旋律が生まれた日～前編（後書き）

今回は3部構成で行きたいとおもいます。

こうとやまとと慶一と～3つの旋律が生まれた日～中編～

今を遡る事3年前、俺が中学2年にあがったばかりの頃学校は、やれ卒業生の送り出しだ、やれ新入生の歓迎だと中々に慌しい季節になっていた。

俺は物心つく前に両親を事故で亡くしていて、育ての親の実家に預けられ散々に武術を教え込まれていたのもあったのと、1年の頃少し荒れていた事もあって校内ではちょっとした”怖い人”という印象を持たれる生徒だった。

そりゃあ、習った武術でケンカをする事もあったからそう思われるのは仕方がない事だったんだが、実の所、習った武術を使ったのはたったの1回だけだった。

まあ、その時に起きた事故みたいのが原因で俺はすっかり怖い人扱いになってしまっていた。

だから他の生徒に畏怖の目で見られたり、微妙な距離で避けられたりなんて事もしょっちゅうだった。

俺はこの学校にある校庭の隅で大きな枝を広げて立っている桜の木が好きだったので、よくその場所へとクラスからはぶられるたびに足を運び、その木の下でのんびり過ごすという事が最近の日課になっていた。

そして今日もいつもの場所でのんびり過ごそうと桜の木の下へ向かっていた時丁度先客がいたらしく、なにやら怒鳴り合う声が聞こえてきた。

「もう、いいかげんにしてよ！いっつもいっつも約束守らないで！！あなたは私の友達だと言ったわよね！？なのに私との約束はあなたにとってそんなにもいい加減なものだったの！？」

女生徒はかなり興奮しているようで、怒鳴られている方もそれに負けない大声で反論している。

「そんな事ないってば！今回もたまたまそうなっちゃっただけなんだって！！私はやまととの約束をいい加減にする気なんてこれっぽちも・・・。」

どうやら怒鳴られてる方も女生徒のようで、怒られている理由も約束に関する事らしいというのが聞き取れた。

「信じられないわ！いえ、信じるだけの説得力もこうの行動には出て来てないじゃない！！それなのに私を信じてくれ、ですって！？虫がいいにも程があるわ！！」

”やまと”と呼ばれた方の子が激昂する。

それを聞いていた”こう”という女生徒が迫力に押されて口篭もる

「だ、だから、それは・・・。」

慌てながらも二の句が告げずにいる”こう”そして”やまと”はそんなこうを一瞥すると

「・・・もういいわ。もう終わりにしましょ？私ももうあなたに付き合うのはうんざりだから・・・。」

”やまと”は”こう”にそう告げてその場から走り去ろうとするが”こう”は慌てて”やまと”に静止をかけようと声を発する

「待って！やまと、私にもう一度チャンスを！！”やまと”との約束を果たすチャンスを頂戴！お願い、やまと！！」

その声を聞き一瞬”やまと”は”こう”の方を振り返るがすぐさま踵を返してその場を立ち去ってしまった。

そしてその場に残された”こう”はショックでしばらくうなだれていた。

俺は一部始終を耳にしてまったのでどうしたものかと思案していたが、とりあえずその場に残されたこうに話し掛けてみる事にした。

「えーと、だな、申し訳ないと思ったんだが話を聞いてしまった。君さえ良ければ事情を聞かせてもらえないかな？」

俺がそう言うとこうはびくっ、と体を一瞬震わせた後俺の方を見た

「聞いていた、ってどういう事？盗み聞きなんてサイテーじゃない？」

こうが俺を睨み付けるように不機嫌な声で俺に言う。

俺はどう答えるべきか迷ったがとりあえず正直に返答する事にした。

「いや、聞いてしまったのは偶然だよ。この場所は俺のお気に入りの場所でもあってだな、今日もここで過ごすべくこの近くまで来た

だけさ。そうしたら君たちが怒鳴りあっていたって事かな。突然の事だったから俺もすぐさま動けなかったんだよ。」

俺は包み隠さずここにいた理由を説明するとこうはふう、とため息を一つついて

「話はわかったよ。でもこれは私とあの娘との問題だからあなたには口出ししてもらう必要はないよ。」

分かってはいたがやっぱり拒否され俺はどうしたものかと考えていたがやはりほおっておく事も出来ないと思い

「そうか。まあ、それならしょうがないな。けど何か相談したい事あったら俺に言って来い。俺が出来る事なら協力してやるよ。」

俺はこうにそう伝えた。

女生徒は俺を怪訝な表情で見つめ

「どうして?あなたにとっては私達は他人のはずでしょ?私達に係わってもあなたには何の得もないのに。」

少しむきになりながらもそう尋ねてきたので俺は

「まがりなりにも2人のケンカを見てしまったからな。見てしまった以上はほおっては置けない。それに友達なんだろ?あの娘はさ。仲直り、したいだろ?」

俺がそう言うとこうは苦しそうに顔を歪めて

「仲直りは、したいよ・・・でも・・・どうしたらいいのか分からないよ・・・。」

涙をこぼしながら言うこうの頭に手を置いてぽんぽんと軽く叩いた後

「どんな理由でケンカになったのかは分からないが、あの娘と仲直りしたいというならいい手があるけど、乗ってみるか？」

1つ、2人を仲直りさせられるいい手を思いついたので俺がそういうとこうははっと顔を上げて

「そんな方法あるの？あるならやってみたい！」

真剣な眼差しを俺に向けてくるこうに俺は微笑みながら

「なら、やってみるか？その前にどうしてケンカする事態になったのか、その原因を教えてくれないか？」

俺は事情を話して欲しいとこうに促すと、女生徒はちょっと戸惑いながらも事情を語ってくれた

「実は・・・・・・。」

女生徒の話によると、相手の娘とはよく待ち合わせをする事が多かったのだが、決まって何らかの理由で女生徒が遅れて来るという状態になっていた。

最初の頃は仕方ない、と、その娘も思っていたのだが、そのうちに約束を破られるごとに自分は本当に女生徒にとっての友達なのだろうか？という疑念がわいてきたのだという。

そしてその積み重ねが溜まりに溜まって今回のような事になったのだという。

「と、いう訳なんだよね・・・。」

理由を聞いて俺は腕組みをしてうーん、と一声うなるとこうの方を見て

「事情はわかったけど、そんなに毎回だったのか？そこまで相手を怒らせてしまうほど？」

そう尋ねるとこうも原因を思い出し、かつ、ケンカをした状況を思い出して落ち込んだようで

「確かに数は多かったけど、でも”やまと”の事をいい加減に思った事はないよ・・・。」

弱弱しい声になりながらもこうは俺に言う。

俺はこうを元気付けるように

「なら、その気持ちをもう一度”やまと”にぶつけてみるしかないな。よしそれじゃ”やまと”と仲直りする為に俺が協力しよう。」

俺はこの2人を助けようと決意して、こうにその事を言うとこうは不安そうな顔で

「でも、どうするの？」

と疑問符を浮かべつつ聞いてきたので俺は

「そうだな、とりあえずこの手紙を”やまと”のクラスの奴の誰かに頼んで届けてもらう、後は・・・・・・。」

俺はこうに作戦を伝えた。

「これで上手くいくはずだ。後はお前次第だ。ええっと・・・こう、だっけか?」

俺が名前を呼ぶと女生徒はびっくりしたような顔で俺を見て

「どうして私の名前を?まだ自己紹介してないよね?それに”やまと”の事も・・・。」

不思議そうに聞いてきたので俺はあの怒鳴りあいを思い出して

「さっきも言ったけど2人の会話を聞いてたときに名前がでてたからね。あれだけ大声で連呼してたらいやでも覚えるさ。」

そう言うと”こう”はばつが悪そうに頭を掻きながら

「あー、そういえばそうだった・・・改めて、私は1年〇組八坂こう、だよ。私のことは名前で呼んでくれてもオッケーだから。」

自己紹介してきたので俺も

「2年〇組の森村慶一だ。もう一人の娘はなんという名前?」

自己紹介すると急にこうの言葉使いが変わった。

「ええ!?先輩だったんですか?なんかすいません、ため口で・・・
ええともう一人はですね、永森やまと、といいます。」

急に敬語を使い出したこうに驚いていたが

「別に今更敬語にならなくてもいいさ。ともかく仲直り作戦開始だな。」

俺は笑ってそう言うとこうも

「はい、よろしくお願いします先輩。とりあえずこれをやまとの所に、ですね?それじゃ私以外のやまとと仲がいい生徒に渡してきます。」

そう言って駆け出すこうを見送って作戦の実行のために準備を始めた。

今回の作戦はこうだ。

俺は校内ではあまり評判がいい生徒ではない。

なのでそこを利用してこうを拉致するというデマを手紙でやまとに伝える。

もしもやまとがこうをまだ友達として心配しこうの元へ駆けつけたならこうを痛めつけるという演技をしてやまとに心配をさせる。

ぎりぎりのところでネタばらしをして後はもう一度話し合いに持ち込ませるというものだ。

問題はやまとがこの作戦に上手く乗ってくれるだろうか？と言う事なのだが・・・何故か俺はあの娘なら乗ってくるという妙な確信があった。

・・・・・そして作戦実行の時がきた。

「上手くいきますかね？」

すっかり俺に対して敬語が身についてしまっているこうが俺に尋ねる。

俺はそんなこうに笑いかけながら

「なんとかなるさ、多分な。何となくだけど俺にはそんな予感がする。」

そう俺が自信ありげに答えるとこうはまだ不安がぬぐえないといった感じで俺を見て

「うーん、とにかくやってみるしかないですね・・・あ、誰か来たみたいですよ？」

こうがそう言ったので注意して辺りを探ってみると確かにこっちの教室に来る足音が確認できた。

「いよいよだな。さあて、いっちょやるか。こう、準備はいいな？」

こうに作戦の開始を促すと共に、準備ができたかを確認すると、こうは頷いて

「こちらはいつでもおっけーです。それじゃ先輩、よろしくお願いしますね？」

そう言ってくるこうに俺は頷きで返しつつ、自分に気合を入れて教室に入ってくる人物を見定めようとする。

すると教室のドアが開き中に入ってくる一人の女生徒の姿が目に入った。

その女生徒の姿を確認すると先程こうと大喧嘩をして走り去っていった”やまと”である事が分かった。

やまとは俺の側に近づいて来て

「あなたが噂の森村先輩、かしら？」

そう俺を鋭くにらみつけながら言う。

俺はそんなやまとを睨み返しながら

「ああ、そうだ。噂ってのがどんななのかは興味がないけどな。」

俺は努めて冷静にやまとに返答をする

やがて、やまとは教室の中を見回しながら

「こうはどこなの？あなたが拉致したって事は分かってるのよ？」

憎しみとも取れるような目で俺を見ながら俺に問い掛ける

俺はそんなやまとに不敵な笑いを浮かべると

「こうならここにいるよ。ほらこい！」

そう言って後ろ手に腕を固められて見動きが取れないこうを引っ張り出す＜本当は何も拘束してない＞こうはやまとの姿を確認すると作戦どおりの行動を開始した。

こうは怯えたような表情を作って

「や、やまと、来てくれたんだ？」

やまとに対して絶妙の演技をする。

俺はそんなこうを見ながら（結構演技上手いな、こうは女優にもなれるんじゃないか？）と心の中で思いつつこうに乱暴しそうな演技をする。

「おい、俺は勝手に喋っていいとは言っていないぞ？勝手な真似をするな！！」

そう怒鳴りつけるような演技をすると、それを見たやまとは俺から見ても動揺しているように見えた。

そして俺をキッと睨みつけながら

「こうを離して・・・。」

そう、やまとは俺に懇願してきた。

俺はそんなやまとを一瞥すると、作戦として考えていた台詞をやまとにぶつけた。

「やまとっていったよな?本当にこいつを離して欲しい、そう思っているのか?」

俺はやまとに鋭い視線を投げかけながら問い掛ける。

やまとはそんな俺の視線に少し怯えたようになりつつも

「どういう意味よ・・・?」

と気丈に俺に抗ってきた。

俺は瞳を閉じてしばし沈黙する演技をした後おもむろに目を開きやまとを見据えて

「こいつから聞いたんだけどな、お前はこいつの事なんとも思ってないらしいじゃないか。こいつは言ってたぞ?お前にこいつに付き合うのはうんざりだと言われたってな。」

俺は冷たくやまとに言い放つ。

その言葉を聞いてなおも動揺するやまと見ながら俺はおおむね作戦が上手く行っている事を確認していた。

そんな俺の思惑をしらないやまとは動揺の収まらないままに

「そ、それは・・・・・。」

短く出た台詞だったがそう言いながら言葉に詰まるやまと俺はそこを逃さす畳み掛ける

「そんなお前が何でこいつを助けになんかきたんだよ?友達じゃないんならこいつを助ける義理だってないよな?」

俺の言葉に狼狽するやまと。

こうはそれを心配そうに見つめる。

しかしやまとは動揺から立ち直れていないのでそんなこうの様子にも気付いてないようだった。

そんなやまとに俺はさらに言葉を続ける。

「だったら俺がこいつをどうしようともお前には関係ない事だよな?」

追い討ちをかける俺、慌てるやまと、ここでこうの演技が再び炸裂した。

「もういいよ、やまと。来てくれたのは嬉しいけどさ、この人に逆らったらやまともどうなるかわかったもんじゃないよ?やまともこの人の評判は知ってるでしょ?」

こうの演技を真に受けて瞳を閉じて拳を握り締めるやまと。

そんなこうを心配そうに見つめながらやまとは苦しげに言葉を搾り出し

「でも、それじゃあなたが・・・。」

やまとがそういい終わる頃を見計らい今度は俺の演技が炸裂。

こうの頬を張る真似をする。

”パンッ”という乾いた音が響いたが実際は殴っていない。

実はこうの頬の近くに俺の手をやまとには見え難いように添えて自分の手をひっぱたいたからだ。

それによる効果があったようで俺は心の中でしめしめと思っていた。

「やめてっ!!」

さらに狼狽するやまと。

ここで俺は更なる演技をする。

俺はこうをねめつけ＜もちろん演技＞こうに怒鳴りつける。

「うるさい、お前も余計な事言うな!これ以上余計な事言うともっと痛い思いをする事になるぞ?」

俺がそう言うと打ち合わせもしていないのに涙目になる演技をするこう。

（ほんとに上手いな、こいつ・・・）と俺は心の中で思いながらやまとの様子をみる。

やまとは大分追い詰められた様子になってきていて俺に弱弱しい声で

「待って！やるなら私をやりなさい！でもこうは離して！お願い・・・。」

そう言ってやまとは必死になって俺に懇願する。

俺は感情の篭らない目になりながらやまとを見て＜これも演技＞そんなやまとに静かに問い掛けた。

「・・・どうしてそこまで必死になるんだ？こいつはお前の友達でもなんでもないんだろ？」

俺は冷たくやまとに言い放った。

だがやまとはそれでも負けたくないとばかりに俺に本当の気持ちをぶつけてきた。

「いいえ違うわ。確かにこうはいい加減な所もあって約束を破ったりする事もあるけど、それでもこうは・・・こうは、私の大切な親友だわ・・・。」

その言葉に俺の傍らにいるこうが嬉しさのあまりに涙をこぼし始めた。

俺はそんなこうを見て（良かったな。）と心の中で思う反面ここでそれはまずいかも・・・と焦りも感じていたが、そんなこうの様子にやまとは気付いていないようなので少しほっとしていた。

俺のそんな葛藤など気付きもしてないやまとはさらに俺に言葉を重ねてきた。

「・・・だから・・・だからやるなら私を！こうは離して！お願い・・・。」

そう必死に俺に訴えるやまとを見て俺は作戦の成功を確信し最後の仕上げに入った。

俺はやまとに再度確認するように

「ふうん？ならやまと、お前にとってこうは大事な人間って事なんだな？それは間違いない事なんだな？なら、こうのやったことも少しは許してやれるか？」

俺は念を押すようにやまとに問い掛けやまとの言葉を引き出す。

「許せるわ。こうが無事なら・・・私は、約束を守れなかった事くらい許すわよ・・・。」

やまとは涙を流しながら俺にこうへの思いをぶつけてきた。

これでいいと心の中で思った俺はこうの方を向いて

「・・・だそうだ。よかったな？こう。」

俺がこうに向かって言った言葉にやまとは急に目を点にして事態が飲み込めないといったような顔になっていた。

そして、こうはやまとの気持ちを聞いて涙を流しながら

「はい、よかったです。やまとがまだ私を親友だと思ってくれていて。先輩が言った通りでしたね、上手くいくような予感がするって・・・」

まだこぼれる涙を拭いながら俺に答えるこうに、やまとはこの状況の説明を求めてきた。

「こう、これは一体どういう事なの？先輩、あなたは一体・・・。」

俺たちはやまとに今回の一件についてのネタばらしをした。

「・・・つまり、私はまんまと2人の計画にはまったと・・・。」

やまとが相当不機嫌な表情で、いやおそらく心も相当不機嫌だろうが俺たちを睨み付けながら言った。

そんなやまとの姿を見たこうは慌てながら

「ごめん、やまと。私はどうしてもやまとと仲直りしたかったんだ。あの時偶然に森村先輩が私たちのケンカを見ていた。その先輩が私たちをどうにか仲直りさせたいって思ってこの計画を練ってくれたんだよ。だから、先輩は責めないであげてほしいんだ。」

そう言って必死にやまとに説明をする。

やまとはまだ納得行かないといったような顔をしている。

そこで俺はやまとに申し訳ないという顔をしながら謝った。

「永森さん。さっきは演技上君の事を名前を呼び捨てにしてしまった、ごめんな?それとこうも君に見捨てられるかもと思って泣いたんだし、こうの事は勘弁してやってはくれないかな?俺は君にどう責められても構わないから。」

俺がそう言うとやまとはやれやれといったように首を振って

「仕方ないわね。私もこうにはちょっときつく言いすぎた部分もあったんだろうし、何よりこうが私のために泣いたんじゃこれ以上責める訳にはいかないわ・・・それに先輩にも迷惑かけちゃったみたいだしね・・・。」

どうやらやまとはこうを許したようだ。

「やまと、ありがとう。そして、ごめんね?」

そんな風に言うこうにやまとは少し顔を赤くしつつもこうから視線を外していた。

俺もどうやら許されたらしい。

俺は心の中でほっとしつつ

「迷惑だなんて思ってないさ。これが俺の性分だからな。まあ、お人好しな馬鹿だと思ってくれればいい。」

俺が笑ってそう言うと2人も複雑そうに笑って

「確かに馬鹿よね。こんな事したってあなたには何の得にもならないっていうのに・・・。」

やまとは呆れ顔になりながら俺にそう言った。

こうは逆に嬉しそうな顔で

「でも私は得したかな？またやまとと友達としてやっていけるんだしね。先輩にも感謝かな？」

やまとは少し赤くなりながらもその顔を見られないようにそっぽを向きながら

「こ、こう、なに言ってるのよ。今度また約束破ったらもう知らないわよ？」

照れながらもこうに釘を刺すやまと。

それを見たこうはすかさず

「あ、やまとがデレたー。デレたやまとも可愛いね。先輩もそう思いませんかー？」

いきなり話を振られたので俺は慌てて答える

「ま、まあ、可愛いんじゃないか？」

俺がそう言うとやまとはますます顔を火照らせて

「せ、先輩も何いってるのよ！？からかうのもいい加減にしてよ！！全く・・・ほんと先輩って噂とは違うわね・・・。」

やまとが噂の事を聞いてきたので俺は2人に事の真相を話す事にした。

「あの噂の事か？あれはな・・・・・・。」

先輩は噂の真相を私達に話し始めた。

先輩の話によるとこうだ。

先輩が1年の頃近くの学校等で噂になってる不良グループがいた。あるとき先輩はその不良グループが同じ学校の生徒を痛めつけているの見て助けに入った。

その頃から先輩は武術をやっていて強いと言う噂があり、その噂を耳にした不良グループ連中の頭が先輩を狙っていた。

先輩はその生徒を助けるとその生徒を痛めつけない事を条件に一対一の勝負をしろと頭に申し込まれタイマンを張る事になった。

緊張感の走る中両者がぶつかりあったのだが・・・先輩は結局一発の拳しか打ち込まずそれで勝負がついてしまった。

先輩から受けたダメージが残ったまま頭は無理して立ち上がり再度先輩に挑もうとしたが、そのままふらふらと丁度その場にあったガラクタ置き場に突っ込み盛大に自爆して大怪我を追ったとの事。

それを見ていた取り巻きたちがびびってしまい先輩がその不良をそこまで叩きのめしたという噂に相当な尾ひれがつけられたまま広がった、との事だった。

先輩が話し終えると私達もなんだか呆れたような感じになって

「なんだか・・・迷惑な話ですねえ・・・。」

と呆れ顔で言うこう

「結局先輩はたった一発しか手出ししなかった、って事なのね・・・。」

やまとも呆れ気味だ。

そんな2人の様子を見た俺は思い切って俺に対してどういう印象を持ったかを聞いてみることにした。

「まあ、そういうことだな。2人に聞くけどさ俺ってそんなに怖く見えたか?」

俺が聞くと2人は俺の方をじっと見つめて首を少し傾げると

「私は先輩に会ったときにはそんな噂のある人って思えなかったですね。」

こうは俺をまじまじと見ながら俺の印象を答えてくれた。

やまとも俺をもう一度確認するように見て

「さっきの演技見てたときには噂どおりかも、って思ったけど・・・実際話してみるとそうでもないわね・・・。」

と素直に感じた感想を言ってくれた。

噂とは正反対の印象を持ってくれたようで俺は少しほっとしていた

「まあ、そう言ってくれるだけでも嬉しいよ。」

俺は2人に笑いかけながらそう言った。

こうは俺を見て何か考え込んでいたが、突然

「ねえ先輩?先輩さえ良かったら私たちと友達になりませんか?」

そう提案を持ちかけてくるこう。

やまとはそれに驚いてこうに向き直り

「・・・こう?本気?・・・」

こうの真意を測りかねるような感じでこうに聞いていた。

こうは笑って

「本気だよ?だって私たちの事助けてくれた人だよ?それに悪い人じゃなかったじゃない?」

2人を助けた俺を信用してくれているようだった。

そんなこうの様子を見てやまとは一つ軽いため息をついて

「まあ、確かにそうだけど・・・先輩はどうなの?私たちが友達でもいいのかしら?」

2人の提案に驚く俺だったが、実の所噂のせいで学校では友達らしい友達もいなかった俺はこの申し出は嬉しく思えたが、今回の一件もあって少し不安も覚えていた。

俺は2人に確認するように

「いいのか？2人とも。2人を仲直りさせる為とはいえあんな事をしてしまった俺だけど、そんな俺でもいいのか？」

不安げに2人に尋ねる俺にこうは笑顔で

「もちろんです先輩。これからもよろしくお願いしますね？」

そう言って俺の腕に自分の腕を絡ませてくるこう。

そんなこうを見て呆れながらもやまとも俺に笑顔を向けてきて

「よろしく、先輩。それと私の事はやまと、でいいわ。」

そう言いながら俺に握手を求めてくるやまとに俺も笑顔で握手を返して

「俺の事も名前で呼んでくれて構わないぞ？改めてよろしくな。こう、やまと。」

そう2人に答える俺だった。

・・・・・こうしてここに3つの旋律が誕生する事になる。

この旋律がこの先さらに数を増やしていく事になる事をこの時の俺には気付きすらしなかった。

次回、後編、今の時間に戻った3人の様子を描きます。

こうとやまとと慶一と～3つの旋律が生まれた日～中編～（後書き）

後編は明日にはあげます。ここを終えていよいよ本編へ

こうとやまとと慶一と～3つの旋律が生まれた日～後編～

あの時から2年、俺はこうとやまとの2人と友達となりこうに振り回されながらも2年間の間ずいぶん楽しくやってきたと思う。

俺の卒業時には2人とも珍しく涙を見せていたほどに、俺達3人の関係はいいものであったのだと思う。

そんな回想に浸っているとやまとが俺を見つめながら

「あの時の先輩の計画にはまった時は少し呆れはしたけど今は感謝しているわ・・・。」

あの時の事を思い出しながら俺にそう言うやまとに俺は薄く微笑んでやまとの頭を軽くぽんと叩くと

「俺はお前らがあのまま友達としての関係を終わらせてしまう事が嫌だった、それだけさ。それに俺もまがりなりにも係わった訳だしな。」

あの時の自分の気持ちをそのまま伝えるとやまとは少し頬を赤く染めて

「そうね・・・あの時から私達の事を何かと気にかけてくれたのもあなただったわよね・・・だから、私はあなたを信頼したわ。あなたもそれに応えてくれた・・・。」

そんなやまとの言葉を聞いて俺は頬をかきながら

「まあ、俺には中学時代は友人と呼べる程の奴もいなかったからな。でも、お前らだけは俺と居てくれた数少ない友人だからな。」

やまとを見ながら俺はそう言ってさらに言葉を続けた。

「俺を頼ってくれる以上は、俺もその信頼に応えたいと思ったからな・・・。まあ、お前らのおかげで楽しい中学時代だったさ。」

笑いながら俺がそう応えるとやまともクスリと小さく笑って

「ふふ、そうね。私も楽しかった。」

俺達はお互いに笑いあった、そうこうしてるうちにようやくもう一人の友人が息を切らせてやってきた

「先輩ー!やまとー!ごめん、遅れてー!!」

俺はそんなこうを見てあの頃のこうを思い出し、苦笑しながらやまとに

「ほら、おいでなすったぞ?我等の遅刻姫が。」

俺が皮肉を込めたニックネームでそう言うとやまとも呆れ顔で

「遅刻姫、言い得て妙よね・・・。でもほんと自重してほしいわね・・・。」

お互いに顔を見合わせて2人して笑いつつも、こうを出迎えた

「遅いぞー?待ち合わせしたのならもっと早く来い。今度こそやま

とに愛想つかされたら俺はもう知らんからな？」

こうにそう声をかけるとやまとも不機嫌な顔をこうに向けて

「まったくよ。あの頃に比べたら大分マシにはなったけど、それでももう少し早くきなさいよ？」

2人の嫌味攻撃がこうに直撃すると、こうはばつの悪そうな笑顔を浮かべて

「ごめん、色々と手間取ったからつい。でも今日のお昼はおごるから勘弁してよー。」

俺はそう言って手を合わせるこうを見て中学時代こいつがはまっていたある事を思い出して

「なあ、こう、ひょっとして例のあれをやってたのか？」

こうに確認するように問い正してみるとこうは申し訳なさそうに

「えへへ、実はそうだったりします。こればっかりはやめられないもので・・・。」

苦笑しながら俺に言ってくるのを見てやまとも無理に付き合わされていた事を思い出したのだろう、こうを横目で見ながら

「まだあんな事やってたのね？まったく、あんなものの何がいいのかしらね・・・？」

そう言うやまとも呆れ気味だ。

こうはそんなやまとの態度が不満なのかやまとにまとわり付いて

「やまとーそんなつれない事言わないでよー。やってみると結構楽しいんだからさー。やまともこっちの世界においでよー。」

やまとにすがるように言うこう。

だがやまとは付き合いきれないとばかりに突っぱねる。

「お断りよ！やりたいのならあなた一人でやってればいいでしょう！？私を巻きこまないでほしいわ・・・。」

そんなやり取りを見てた俺は生暖かい視線を送りつつ

「まあ、こうの趣味だしな俺は何も言わないがあまり暴走しすぎるなよ？」

とやんわり忠告する

「分かってますって。でも先輩は意外と私のこの趣味を理解してくれましたよね？普通の人には引かれるかもとは思ってましたから。」

こうがそう言うと俺は自分もそういう物はそれほど嫌いな方でもなかったので

「まあ、俺もアニメやゲーム、漫画は嫌いな方じゃないしな。多少は理解できるつもりだ。だからかな・・・。」

そう応える俺にこうは嬉しそうな顔になって

「やっぱり先輩は話のわかる先輩だわ。いい人と友達なれたなー。」

うんうんと頷いて納得しているいるのを見てやまとがこうに突っ込んだ

「先輩だからよ?他の人だったら普通に引かれてしまうんだから私達以外の人の前では自重しなさいよ?」

その鋭い突っ込みにこうは慌てながら

「わ、わかってるよやまと。それじゃそろそろ行きましょうか先輩、やまと。」

時間も頃合だったのでこうは俺達に声をかける。

俺がこの後の予定等はまだ聞いていなかったのもあってこうにこの後の事について確認の為

「ああ。所でこれからどこへ行くんだ?」

と俺が尋ねるとこうはにっこり笑いながら

「それはついてきてのお楽しみです。」

そう言って歩き出すこうに俺達は付いていて行く事にした。

駅に着き電車に揺られて着いた場所は・・・

「秋葉腹・・・。」

俺は思わずため息まじりにそう呟いた。

やまとも同じようにため息をついていた。

そんな俺達の様子もなんのそのですごくいい笑顔になったこうは

「さあ色々巡りましょうー。結構楽しいもんですよ?ここも。」

俺達の手を引いて歩き出すその横でやまとは自分の額に手を当てながら

「ほかに行く所なかったのかしらね・・・?」

と呆れたように呟いていた。

電車での移動時間もあってか、着いた頃には丁度昼になっていたのでまず俺達は腹ごしらえしていく事にした。

「先輩、やまと、ここでいいかな?」

こうに連れられて訪れたのはマクドナルド俺は奢ってもらえるのなら特に希望もなかったので

「まあ、奢ってもらえるのならどこでもいいさ。」

俺はそう応えやまとも

「まあ、こうの財布事情を考慮したらここでもいいわね。」

やまとの攻撃、こうに５０ポイントのダメージ

「やまと、それはひどいよ・・・。」

こうはやまとに抗議していた。

店に入りそれぞれ注文を取って居る間、俺は３人分の席の確保に回った。

「よし、ここでいいな。こう、やまと、こっちだ。」

俺は注文の品を取って上がって来たこう達に声をかけると俺を見つけたこう達はこちらにやってきた。

「先輩、席の確保助かります。」

そう言いながら俺の前の席へと移動するこうとやまと

「とりあえず奥へ行ってよ、こう。」

２人とも席についたので食事を始めた。

食事をしながら俺はこうにこの後の予定を聞くことにした。

「それで、これからどうするんだ？」

俺がこうに尋ねるとこうはとりあえずの目的地を決めていたのだろう、俺たちに今日回る予定のコースを伝えてきた。

「まずは本屋さん等を巡って、その後ゲームセンターに行こうと思

ってます。」

本屋という言葉に反応するやまと、俺も少し嫌な予感を覚えていたがやまとも俺と同様に嫌な予感を感じたのだろう、こうに確認を取る為に聞いてみるやまとだった。

「まさか、そういう関係の所じゃないでしょうね・・・？」

やまとがつっこむと

「まさかー。まだ私達じゃ入れないでしょ？」

手を振って否定するこう。

そこに俺は前にこうの家へ遊びに行った際に見た本の事を思い出して

「じゃあ、今までお前の家にあったあの本はどうやって手に入れたんだ？」

と尋ねるとこうは、ああ、あの事かと俺の聞いた事に心当たりがあるようで

「それは、知り合いに頼んで買ってきてもらって、ってやつですよ。」

俺に人差し指を立てて説明するこうをみてやまとは額に手を置いて呆れていた

「まあ、今回は普通に漫画とか買いたいだけですから大丈夫ですって。」

俺は苦笑して（本当だろうな?）と心の中で思いながらも

「まあ、それならいいけどな。」

どこか安心している俺がいた。

その後食事の済んだ俺たちはこうに連れられて本屋へと向かった。

向かった先はおなじみの〇ーマー〇、そして〇二メ〇トだった。

俺は店内を見回しながらその活気と店内の様子に見入り、素直な感想を口にしていた。

「やっぱりここは品揃えすごいよな。地元の本屋じゃこうはいかない。」

そんな俺の言葉にこうも同意して目を輝かせながら

「そうですよねー。地元にもこういうの作ってもらえるといいんですけどね。」

そう応えるそこにやまとのツッコミが炸裂した。

「こういうところにあるからこそ、こうみたいな客が集中するからいいんじゃないのかしら?」

こうに８０ポイントのダメージ

「やまと、さっきもそうだけど、なんか酷くない?」

こうは少し涙目になりながらやまとに抗議した。

その後買い物を終えて俺たちは今日の最終目的地であるゲームセンターへとたどり着いた。

「さあて、やってきましたよ？ここが今日の最終目的地。今日こそはあの青髪のちびにリベンジを・・・。」

こうの青髪のちびという言葉に何か引っかかる物を覚えたが

「お前格闘ゲーム結構好きだもんな。でも最近勝てない相手がいるって言ってたよな？」

俺が尋ねるとこうは俺の言葉に頷いて

「そうなんですよ。ここの所負け続きで少し凹んでるんです。今までは現れなかった強敵ですね。」

悔しそうに言うこうに俺はこうの格闘ゲームの腕前を思い出しながら

「お前の腕は知ってるが、それでも、となると相当の相手らしいな。とりあえずは頑張れとしか言えないがな。俺は少しＵＦＯキャッチャーとかのある方へ行って見るから後でここで合流な。いくぞ、やまと。」

俺はこうに健闘を祈ると激励した後、後で迎えに来る旨を伝え、やまととともにＵＦＯキャッチャーに向かった。

ゲームセンターに入った頃からやまとがしきりにＵＦＯキャッチャ

ーを気にしていたようだったからだ。

「ええ、行きましょ？先輩、こっちへ。」

俺はやまとに連れられてＵＦＯキャッチャーのコーナーへ、やまとはＵＦＯキャッチャーを一通り物色すると欲しいものがあったのか、その台へと向かったので俺もそっちへ付いていった

「これを狙ってみよう・・・。」

お金を入れてアームを操作し始めるやまと。

俺はそれを見守りながらも俺もやりたい台で景品を取っていた。

「まあ、こんなもんかな・・・。」

戦利品をあげると、初音ミクフィギュア、キャラ物マグカップ、猫のぬいぐるみを取る事が出来た、俺はやまとの方に再び目をやると取りたかった物が取れなかったのか落ち込んでいるやまとの姿が見えた。

俺はやまとの方へ行き

「どうしたやまと、取れなかったのか？」

俺が聞くとやまとはがっかりした顔で頷いて

「ええ、３０００円くらい使ったんだけどだめだったわ・・・。ＵＦＯキャッチャーは貯金箱って上手い事を言ってた人がいたけど、そうかもしれないわね・・・。」

かなりな落ち込みようだったので俺は持っていた景品をやまとに預かってもらい、挑戦してみる事にした。

「やまと、これ持っててくれ。俺がやってみる。」

そう言ってお金を入れてアームの操作を始める俺。

3回ほど失敗したが4回目で何とか取る事ができた。

俺はその景品をやまとに渡す

「ほら、これ欲しかったんだろ?あとこの猫のぬいぐるみも一緒にやるよ。」

そう言って景品をやまとに渡すとやまとは顔を赤くして

「ありがとう先輩。でも、このぬいぐるみももらっちゃって良かったのかしら?」

そう遠慮がちに聞いてくるやまとに俺は軽く笑いながら

「はは、俺にはそのぬいぐるみは合わないさ。それにこうにも合うとは思えないしな。お前にもらってもらうのが一番だからな。」

俺がそう言うとやまとはますます顔を赤くして

「じ、じゃあ、貰っとくわね?先輩ありがとう・・・。」

やまとが俺に礼を言う。

そして何気に時計に目をやると丁度いい時間だったので、俺たちはこうを迎えに行く事にした。

景品を貰って満足気なやまとに俺はこうを迎えにいこうと声をかける。

「やまと、そろそろこうを迎えにいこう。」

やまとも俺に応えて

「ええ、わかったわ。いきましょう。」

そう言ってこうを迎えに行く為に移動を始めたのだった。

俺達二人はこうのいる格闘ゲームコーナーに向かった。

こうの座る席に俺達が行くとこうは必死の形相で対戦相手に連コインで勝負を挑んでいた。

こうがここまで負けるのを見るのが珍しかったのか俺はふいに対戦相手の姿を確認するため反対側の台へと行ってみたら、そこに見知った人の姿を見つけて驚いた。

「もうー、いいかげんしつこいなあ・・・そろそろ嫌になってきたよ・・・このまま逃げちゃおうかな?」

俺は思わずこうの対戦相手に声をかけていた

「泉?泉じゃないか。何やってるんだ?こんな所で。」

俺の呼びかけに泉はこちらに顔を向けて

「あれ？森村君じゃん。君こそどうしたのさ？こんな所で。」

泉の質問に俺は軽く事情を説明する事にした。

「今日は俺の通ってた学校の後輩の合格祝いも兼ねて後輩達と遊びにきてたのさ。」

そう言って俺は俺の後ろに立っていたやまとを紹介し、泉もやまとに自己紹介をした。

「こいつは後輩の一人で永森やまとっていうんだ。やまと、こっちは俺と同じ学校で同じクラスの泉こなただ。」

「・・・よろしく。泉先輩、でいいのかしら？」

やまとも泉の背丈で俺と同期というのが信じられなかったのだろう、かなり驚いた表情をしていた。

泉のほうもそう思われるのには慣れていたらしく

「うん、永森さんだったよね？なりはこんなだけど森村君と同い年だから。」

改めてやまともそんな泉の言葉に小さく呟いた

「本当なのかしら？それにしても、まるで小学生のような・・・。」

俺とやまと、泉の3人がそんな会話をしているとお金が尽きたのかこうがゲームを止めてこっちへをやってきて対戦相手と話をしている俺を見て驚いていた。

「あーっ、また負けた・・・悔しいなー・・・おいそこの青髪のちび、今度は負けないから覚悟し・・・と・・・け?」

俺がやまと共にこうの対戦相手の泉と親しげに話をしているのを見て

「あれ?あれ?何で先輩がそのちびと話をして?」

訳が分からないといった風にて慌てるこうに俺はやれやれと自分の額を手で押さえながら

「おいおい、こう。泉はこうみえても俺と同い年だ。言ってみればお前の先輩でもあるんだぞ?」

俺がそういうと泉は少し頬を膨らませて

「森村君、こう見えても、はないんじゃない?一応私だって気にはしてるんだよ?まあいいや。とりあえず、初めましてだね。私は泉こなた。森村君とは同じ学校で同じクラスだよ?よろしくね。」

泉の自己紹介にあっけにとられていたこうはそこに重要なキーワードを見出してさらに驚いていた

「え、あ、私は八坂こう、よろしく・・・って、えええ!?泉さんて森村先輩と同じ学校で同じクラス?そ、それ言ったら、私も今年から一緒の学校じゃ・・・でもその身長はどうみても・・・。」

こうがそう言うと泉も少し驚いていたがこうの言ったキーワードに
少し不機嫌な顔になって

「むう、身長の事は余計だよ・・・じゃあ、八坂さんは私の後輩に
なるんだねー？一人また知り合いが出来て楽しみかも。ねえ森村君、
そっちの永森さんは違うの？」

泉がそう聞いてきたのでやまとは

「私は聖フィオリナ女学院なので2人とは違う学校へ行く事になる
わ・・・。」

そう答えたやまとだったがそう答えながらも少し複雑そうな表情を
していた事に俺は気がついていたが、まあ、気のせいだろうと思っ
ていた。

やまとが自分の行く学校の名前を出すと泉は関心しながら

「へえ？お嬢様学校じゃん。結構頭いいんだね、永森さんも。」

泉がそうやまとへの感想を言うとやまとはそれに答えて

「いえ、それほどでもないわ。それを言ったら先輩達も陵桜は結構
レベルの高い所らしいじゃない？そこに通えてる先輩達も中々のも
のだと思うわよ？」

そんな風に答えるやまとやこうや俺の顔を泉は見回して突然何かを
閃いたらしい泉は俺たちに

「ねえ、ここであったのも何かの縁だしさ、私達友達にならない？」

急にそんな事を言って来た。

俺たちは面食らっていたが

「確かにお前とは同じクラスだが、まともにはしゃべった事はないだろう?それに、こうややまととも面識は今できたばかりだが、いいのか?そんな俺達で。」

俺が泉にそう言うと泉はにんまりと笑って親指を立てて

「もちろんだよ。それに森村君には以前の食堂の借りもあるしねー。」

とのほほんとしたような顔で言う。

俺は泉と初めて話した時の事を思い出していた。

そんな俺にこうは興味があったのか事情を聞いてきた

「食堂での借りって一体何があったんですか?」

俺はこうの質問を聞きながらあの時のことを思い浮かべて

「ああ、俺がたまたまパンを買いに来ていた時泉と会ってな、あいつが欲しがってたパンが売り切れてたから俺が持ってたあいつの好物をあげたんだ。」

俺がそう説明するとこうはニヤニヤと笑って

「なるほど、フラグを立てた、と。」

いい笑顔で言って来るこうに俺は手を振りながら

「そんなんじゃないよ。たまたまだよ、たまたま。」

そういい訳する俺に今度は泉までもが憎たらしいほどのいい笑顔で

「ええー？そうなの？本当は狙ってたんじゃないのー？」

と言って来る始末俺は呆れて

「もういい、好きにいってろ、まったく・・・。」

と、ふて腐れたのを見てやまとが軽いため息をつきながら

「先輩も大変ね？これから。あの泉先輩ってこうと似てるみたいだし。」

その言葉に俺も同意して

「まったくだ、これから先が思いやられそうだよ。まあとにかく友達になるのなら俺は構わない。こうとやまとはどうだ？」

2人に聞くとこうは不敵に笑って

「私も構いませんよ？またリベンジ出来そうですしその時はまた付き合ってくださいよ？泉先輩」

こうがそう言うと泉も同じように不敵な笑顔をこうに向けていた。

その様子をみながらもやまとも

「私も構わないわ。よろしく、泉先輩。」

そう言って2人は泉と握手を交わした。

それを見て俺も泉を見ながら

「そういうわけだ。よろしくな、泉。」

といって手を差し出す。

泉は俺と握手を交わした後俺の目の前で人差し指を立てながら

「泉じゃなくて”こなた”でいいよ？友達になるんだしかたっくるしいのは苦手だしね。その代わり私も君を慶一君と呼ばせてもらうよ？」

俺を名前で呼びたいというこなたの提案を受け入れて俺はこなたに

「わかったよ、こなた。これからもよろしくな。」

俺はふっと小さく笑いながらこなたにそう言うと

「うん、よろしくね？慶一君。」

こなたも笑顔で俺にそう応えてきた。

その後はこうと趣味があったのか、そっち系の事で2人は盛り上が

っていた。

俺とやまとはそんな2人を見て苦笑しながらも2人を見守っていた。

そんなこんなで今日の合格祝いの遊びは終わり、それぞれに帰路につくこととなった。

「先輩、今日は付き合ってもらってありがとうございました。知り合いも増えたし中々有意義な一日になったと思います。また学校で会いましょうー。」

そう言って俺に太陽のような笑顔を向けて去っていくこう。

そしてやまとも少し複雑そうな表情を俺に向けながら

「今日はわざわざ来てくれてありがとう。先輩も元気そうだったから安心したわ。まさか一人知り合いが出来てしまうとは思わなかったけど・・・あの・・・先輩・・・私・・・いえ、なんでもないわ。それじゃ・・・。」

何か含みのなる言い方をして去っていくやまとに妙な違和感を覚えたがそれがなんなのかわからないまま、やまとも別れた。

2人と別れ、こなたと2人になった時、こなたは俺と携帯番号とメールアドレスの交換をしたいと言ってきたのでお互いに交換をしあった。

「ねえ、慶一君、携帯番号とメールアドレスを交換しない？」

こなたがそう言ってきたので俺は携帯電話を取り出して

「ああ、構わないぞ？ほら。」

俺はこなたに携帯番号とメールアドレスを渡す。それを受け取ったこなたも俺に番号とアドレスを渡してきた。

「はいこれ。私普段あまり携帯を持ち歩かないから今日も持ってきてないんだよね。けど番号とかアドレスくらいは覚えてるからさ、まあ、次までに携帯探しておくからー。それじゃね、慶一君。今日は楽しかったよ。また学校でねー。私の友達紹介してあげるから楽しみにしててね？」

走り去っていく後姿に俺は声をかける。

「ああ、また学校でなー。」

そう言った後に俺はこなたの携帯番号とメールアドレスを確認しながら

「しかし、普段持ち歩かないってそれって携帯の意味あるのか？」

と一人呟きながら突っ込んでいた。

こうして久々の後輩達との再会は終わった。

その後春休みが終わった学校で俺はさらに驚かされる事態に遭遇する事になるのだが、その時の俺には何も分からないままだった。

こうとやまとと慶一と～3つの旋律が生まれた日～後編～（後書き）

次からはメインキャラ達の登場です

始まりの5本の旋律

春休みの最中にこうとやまとの受験合格祝いに付き合って偶然にもそこで泉こなたと出会ったあの日俺は4重奏の一人と友達になった。

そして春休みも終了し新学期を迎えたその日、そこからが俺の”変わる日常”の始まりになるのだった。

桜舞散る校庭を俺はのんびりとした足取りでクラス分けの掲示板のある場所へ向かっていた。

掲示板付近では同じクラスになれた事を喜ぶ者、一人だけ仲間と引き離され他の仲のいい友人に励まされている者、掲示板を一読してあまり興味ないような素振りをしてる者、色々な生徒達が密集して騒がしくなっている掲示板前で俺は自分のクラスを確認するため人垣を掻き分け掲示板の前へと移動した。

掲示板に書かれている俺の所属するクラスを確認すると”2年D組”と書かれているのが確認できた。

だが俺はさらにその名前の一覧に4重奏の一人の名前を見つけたのだった。

俺が掲示板をチェックして少し離れた場所に移動して一休みしていると俺の近くで聞いた事のある声がしているのに気がついた。

（なんだろう?）と思いながら耳をすまして見ると

「いやー、かがみん。今年はクラスちがっちゃったねえ?」

ニマニマとした顔でこなたが言う

「うるさい！かがみんいうな！まあ、今年もあんたに宿題見せなくて済むんならせいせいするわよ！」

（何で私だけ、クラス違うんだろ・・・ああ、できれば同じクラスになりたかった・・・）

「ほんとにー？実は私達と同じクラスになれなくてがっかりしてるんじゃないのー？」

こなたはかがみに確信をつく台詞を言う。

そのこなたの台詞に慌てながら顔を赤くして

「そ、そんな訳ないわよ・・・寂しいなんて思ってはいないわよ・・・。」

必死に言い訳するかがみにつかさが天然の追い討ちかける

「おねえちゃん、一緒のクラスになれるの楽しみにしてたのにね。」

つかさがそう言うとさらにかがみんは顔を赤らめて慌てて

「つ、つかさ！あんたは余計な事言わない！！」

と、つかさを黙らせようとするかがみ。

その様子を見逃さないこなたはさらにかがみに追撃する。

「へぇー？かがみんは私達と同じクラスになりたかったんだあ？」

そう突っ込まれるとさらに激昂して

「こ、こなたあー！あんたそこに直れ！！修正してやる！！！」

というが早いかこなたに拳骨を落とすかがみん。

食らって頭を抱えてうずくまるこなた。

こなたは思わず情けない声で

「うう、効いたあー・・・かがみってば力強すぎ・・・。」

涙目になりながら呟くこなたのリアクションをみてかがみは少し落ち着いたのか乱れた息を整えつつ

「あんたが悪いんでしょうが！まったく少しは自覚しなさいよ！！」

そんな風に怒るかがみにみゆきが騒ぎを収めようと2人の間に入ってきた。

そして2人に柔らかい笑顔を向けながら

「まあまあ、かがみさん落ち着いて下さい。これから新学期が始まるわけですし、泉さんも悪気があった訳ではないんでしょうから。」

まるで聖人君子のよういい微笑んでかがみを諌めるみゆきにかがみはこなたを見ながら

「みゆきは甘すぎるのよ！こいつにはこれくらいはやらなきゃいい薬にはならないわ！！」

こなたを睨み付けるかがみ。

こなたはみゆきの影に逃げるように隠れて再度かがみの神経を逆撫でするような事を言う。

「ぶー、かがみん凶暴ー。」

その学習能力のない言葉に再び怒り出すかがみ

「こなた、かがみん言うなっていったでしょー！！」

それを見て騒ぎを止めることもできずに苦笑するつかさだった。

「あはは、どんだけ～・・・。」

つかさの言葉に苦笑するみゆきだったがとりあえずなんとか騒ぎを収めなければと奮闘しようとするみゆき。

「つかささん（汗）とりあえず2人を止めませんと・・・。」

そんなやり取りを噴出しそうになりながら見てた俺だったが、とりあえず騒ぎを止めようと4人の元に近づいていった。

4人のうちの一人、泉こなたに声をかける。

「こなた、あまりからかってやるなよ？柊さん困ってるぞ？」

俺が声をかけるとその声に気がついたこなたは俺の方を見て、こちらへ寄ってきた

「あ、慶一君じゃん、おはよー。慶一君もクラス分け見てきたの？」

普通に俺に返事を返してるこなたを見て驚く3人。

俺はこなたに

「ああ、一応な。今日から2年生だし自分のクラスぐらいは把握しとかなきゃな。」

そう答えるとこなたは俺の所属のクラスが気になったのか俺に結果をを聞いてきた。

「そっかー。で、慶一君は何組だった？私とつかさとみゆきさんはE組だったんだよ？」

自分のクラスを伝えてきたので俺は見てきたままをこなたに伝えた。

「俺はD組だったよ。今年はクラス違うようだな。」

俺がそう言うとこなたは少しがっかりしたような顔をして

「そっか、それじゃ仕方ないね。でもクラス違っても友達は変わらないからね？時々うちのクラスに遊びにきて欲しいな。私の友達とお昼一緒に食べようよ。」

というこなたの提案に俺は遠慮がちに聞き返す

「いいのか?俺なんかが行ってもさ。」

俺がそう言うとこなたは満面の笑みを浮かべて

「当然だよ。だって友達じゃん?」

そう答えた後こなたはふと何かを思い出したように後ろを振り返り、3人の姿を確認して

「あ、そうだ。丁度ここに私の友達がいるから紹介するね?おーい、かがみー、つかさー、みゆきさんー。」

こなたが3人を呼ぶと3人とも少しおどおどとした感じで俺達のほうに来た。

そしてこなたが俺に一人一人を紹介してくれるのだった

「まずはかがみん。」

こなたが再び柊さんを怒らせるニックネームで呼ぶと柊さんはこなたをキッっとにらみつけて

「かがみん言うな!!おはよう、森村君。私は柊かがみ、よろしくね?前に携帯電話探すの付き合ってくれてありがとう。あの時は助かったわ。」

かがみはにっこり笑って俺に挨拶してきた。

俺はその時の事を思い出しながら

「ああ、あの時か。でも見つかってよかったな。あれから無くしたりはしてないか？」

俺がそういうとかがみは少し頬を赤らめて照れたようになって

「流石に気をつけてるわよ。もうあんな間抜けな真似したくないしね。それに、こなた達にも笑われたし・・・。」

そう言ってそっぽを向いた。

それを見たこなたはかがみの方をみてニヤニヤとした視線を送っていたが我に返ってさらに友達の一人を紹介してきた

「で、こっちのいかにもどじっこそうなおっとりした子がつかさ。つかさはかがみと双子の姉妹なんだよ？」

というこなたの紹介につかさは思わず反射的に

「こなちゃんのくせに～！」

と叫んでこなたをびっくりさせていたがはっと我に返ると慌てて自分の自己紹介を始めた

「え、えっと、柊つかさだよ。おねえちゃんとは双子の姉妹なんだ。森村君、この前は3回助けてもらったよね？私うれしかったよ？」

つかさに言われ俺は柊さんを助けた時の事を思い出しながら

「あれは俺がたまたま近くにいただけだよ。柊さんの運がよかったんだ。」

俺がそう微笑みながら答えると柊さんは柔らかく笑って

「えへへ、また会えたね、膝小僧の恩人さん。」

嬉しそうな顔をしている柊さんをみて（膝小僧の恩人さんか、俺はたいしたことはしてないけどな）そう思ったが柊さんの嬉しそうな顔をみてたら助けた事は間違いじゃないかもな、と思えた。

そんな俺の姿を見たこなたは少し表情を曇らせたようだったが友達の最後の一人を紹介すべく俺に声をかけた

「慶一君、次紹介するよ。最後に紹介するのは高良みゆきさん。1年の頃は一緒のクラスだったし、学級委員長もしてたから知ってるよね？」

そう紹介すると高良さんは俺の前に進み出て俺に笑いかけながら

「改めまして、高良みゆきです。森村さん、あの時は荷物を運んでいただいて本当に助かりました。またお会いできて嬉しいです。」

そうにっこりと笑いながら挨拶してきた。

俺はその時の様子を思い出しながら

「まあ、流石に女の子が持つっていう大きさの荷物じゃなかったしな。それになんか危なっかしかったし。」

あの時に感じてた事を素直に高良さんに言うと高良さんは顔を赤くしてうつむいて

「す、すみません・・・。」

なんだか申し訳なさそうに返事を返してきたのを見て（しまった、からかいすぎたかな?）心の中で思いながらもみゆきにフォローを入れる事にした。

「ははは、まあ、あれじゃしょうがないし、別に責めてるわけじゃないさ。あれなら高良さんじゃなくても大変だったさ。」

俺は高良さんに心の中で謝罪をしつつ慌てて弁解するのだった。

そんな俺をみてこなたは

「うーん、まさか、慶一君が全員のフラグ立てていたとは思わなかったよ。」

爆弾発言をしたので俺は慌てて

「フラグなんて立てた覚えはないぞ?というか、なんでそうなる?」

俺がこなたに言うとかがみもこなたを睨みつけて

「そ、そうよ。そんなわけないじゃない。だいあたいあんたはその手のゲームやりすぎなのよ。ゲームとリアルをごっちゃにしないでほしいわ・・・。」

かがみも突っ込みをといれる。

つかさとみゆきにいたっては

「ねえ、ゆきちゃん、フラグって何？」

つかさに聞かれてみゆきも困った顔で考え込みながら

「さあ・・・？旗、でしょうか？」

と、見当違いの事を言っていた。

俺と柊さんだけがその意味を分かったのだが、分かった瞬間2人して自分たちは普通の人とはちょっと違うのだろうか？と少し落ち込むのだった。

そしてこなたは

「えー？だって、私と友達になる前に、他のみんなとも知り合ってるじゃん？」

そういうこなたに俺は呆れながらも

「それはそうだが、だからといって知り合った人間とそういう風になるとは限らんだろう？」

そう言って話をそらそうとする俺にこなたはニマニマとした目で俺を見て

「えー？そういう風ってどんなのー？」

などと意地の悪そうな顔で言ってきた。

俺は言葉を詰まらせて

「え、えっと、だからだな・・・つまり・・・。」

しどろもどろになりながらも答えようとする俺だったが

「つまりー？」

さらに追い討ちをかけるこなた。

俺が言葉に詰まってあたふたしているとかがみが助け舟を出してくれた。

言葉を発する前にこなたに拳骨を落とすと

「こなた、森村君が困ってるでしょ？いい加減にしないと殴るよ？」

こなたは涙目でかがみを見て

「もう殴ってるよー・・・。」

と抗議の声を上げるのだった。

一騒動治まるとかがみが俺に改めて

「まあ、こなたが紹介してくれた通り私やつかさ、みゆきもこなたの友達だから。それと、森村君D組って言ってたよね？森村君はどうやら私と一緒のクラスみたいね。」

そう言って握手を求めてくるかがみに俺も手を差し出して

「そうだったのか、ならこれから1年間よろしくな、柊さん。」

かがみに握手を返しながら言うとかがみは俺を見ながら少し顔を赤らめて

「こなたと同じように、私のことも”かがみ”って呼んでくれて構わないわ。柊、じゃ妹も同じ性だし、紛らわしいでしょ？」

そう言ってくれたので俺もかがみを名前で呼ぶ事にした。

「わかった。改めてよろしくな？かがみ。」

俺がかがみの名前を呼ぶとかがみは再び顔を赤らめて少し照れながら

「う、うん、よろしくね。その代わり私も森村君の事慶一くんって呼ばせてもらうから。」

俺の事も名前で呼ばせて欲しいと言うかがみに俺は

「ああ、そう呼んでくれて構わないよ。」

と返した。

そこにつかさとみゆきも寄ってきて

「わたしやこなちゃん、ゆきちゃんとクラス違っちゃったけどわたしも”つかさ”って呼んで欲しいな。わたしも慶一くんって呼ばせてもらうね？」

つかさも俺に名前で呼んで欲しいと言ってきてなおかつ俺を名前で呼ぶからとそう言ってくる。

さらにみゆきも柔らかい微笑を俺に向けながら

「クラスは違いますがお友達になれて嬉しいです。私の事も”みゆき”って呼んでくださいね?私もあなたの事を慶一さんと呼ばせてもらいますから。」

みゆきも俺に名前で呼んで欲しいと俺に言ってきた。

さらに俺の事も名前で呼ばせて欲しいと言う2人に俺も笑顔で

「ああ、つかさにみゆき、2人ともよろしくな。」

俺がそう応えると2人とも笑顔で「よろしくね。」「よろしくお願いしますね。」と言ってきた。

そんな2人とこなたとかがみに俺は微笑みながら

「今年一年どうなるかは分からないが、皆楽しくやれたらいいな。」

俺がそう言うと4人ともそれぞれ、「そうだねー。」「そうね。」「うん。」「そうですね。」と同意してくれた。

かくしてここに四重奏との交わりを見せる一本の旋律、その物語の始まりを告げる鐘の音とともに教室へと戻っていく5人であった。

始まりの5本の旋律（後書き）

次回はまたこうとやまとが出てくる予定です

さらに加わる旋律～前編～

こなた達と友達になり始業式を終えて教室に戻った俺は、ＨＲの終わった後の休み時間にかがみと談笑していた。

そこに二人の女生徒が近寄って来てかがみに声をかけていた。

「よう、柊ーおはようー。なあ、そいつ誰だ?」

そう声をかけてきたのはショーカットに八重歯が似合う、少し舌足らずなしゃべり方だがかなり元気な女の子だ。

そしてもう一人

「柊ちゃん、よかったら私達にも紹介して欲しいんだけど?」

長い髪だが前髪部分をカチューシャで押さえ露出しているおでこが特徴的で、どこか落ち着いた感じの女の子だその二人に声をかけられたかがみは俺の方に視線を向けて

「ああ。この人は今年からうちのクラスになった森村慶一くんよ。1年の時はクラスも違っていたんだけどこの前私が携帯電話を無くして困ってたときにクラスも違う私のことを助けてくれた人なのよ。」

そう言って俺を紹介してくれた。

それを聞いた二人は俺の方に寄って来て片方は輝くような笑顔で、もう一人は柔らかく微笑みながら俺に声をかけてきた。

「へえ、そうだったんだ？森村、うちの柊が世話になったな。私は日下部みさお、よろしくな。」

いきなり”うちの”とかいうその女生徒に驚く俺だったが同時に自己紹介もしてもらった。

「柊ちゃんを助けてくれたのね？私もお礼を言うわ。私は峰岸あやの。よろしくね、森村くん。」

二人が自己紹介してくれたので、俺も自己紹介を返す事にした。

「森村慶一だ。日下部さんに峰岸さん、二人ともよろしく。俺の事は呼びやすいように呼んでくれ。」

俺がそう言うと二人も

「ああ、私のことも”みさお”でいいぞ？私もお前の事は慶一と呼ばせてもらうから。」

みさおがそう言いあやのも

「私の事もあやのでいいわ。私は慶ちゃんと呼ばせてもらうわね？」

そう呼んだあやのに少し驚いた俺は苦笑を浮かべつつ思わず聞き返してしまっていた

「け、慶ちゃん？それはまた懐かしい呼ばれ方だな・・・。」

俺がそう答えるとあやのが首を傾げつつ

「そうなの？私ついちゃん付けで呼んでしまうんだけど、そんな風に呼ばれていた事があったのね？」

俺に聞いてきたので俺は

「ああ、小学生の頃だったけどな。最近はそう呼ばれなくなってたし、柄じゃないしな。すっかり忘れてたよ。」

そんな風に答える俺にあやのは微笑んで

「嫌だったら呼び方変えるけど、どうする？」

と聞いてきたが俺は少し考える素振りをしたが

「別に構わないさ。ちょっと驚いただけだしな。」

と返事をしたのだった。

それを聞いていたかがみとみさおは何故か必死に笑いをこらえていた。

いや、みさおはすでに笑っていた。

「け、慶ちゃん。なんかかわいいわね。」

笑いをこらえるかがみ。

みさおは大笑いしながら

「あははは。慶ちゃん、なんかおもしれー。」

そんな2人の態度を見て思わず顔を赤くして黙る俺だった。

そんな俺を見てあやのはなんか申し訳なさそうに俺に

「ごめんね?なんか私のせいかな?」

と言って謝ってきたので俺は否定するように手を振って

「あやのの所為じゃないよ。まあちょっとだけ恥ずかしかっただけだから。」

そう言うとあやのは苦笑して笑いつづけるみさおの元へ行き

「みさちゃん?そろそろいい加減に笑うのやめないと・・・怒るわよ?」

何故か俺から見ても恐ろしげなオーラは垣間見えたような気がしたが、みさおもそれに気がついたらしくビクッとなってあやのに慌てて謝っていた。

「わ、悪かったよあやのー。だからそんなに怒らないでくれよー。」

みさおは慌ててあやのに謝っていたがあやのは俺の方を指差して

「謝るのは私じゃないでしょ?慶ちゃんにちゃんと謝って?」

あやのがそう言うとみさおは俺の方へやってきて

「ごめんな?慶一、悪かった。」

しゅんとして俺に謝ってきたので俺はみさおの頭をぽんと軽く叩いて

「気にするな、俺も気にしちゃいないから。」

俺がそう言うとみさおはほっとしたような顔になって

「許してくれるのか?慶一、いいやつだなー。」

喜びながらそう言っていた。

俺は苦笑しながらみさおに

「お前にもなかなかにしっかりした友達がいるんだな。付き合いも長いんじゃないのか?」

何となく感じていた二人の雰囲気が気になった俺はみさおにそう尋ねてみた。

するとみさおはさも当然とでも言うかのように

「ああ、私とあやのは幼馴染だからな。小さい頃から一緒だゼ?」

みさおの答えにああ、なるほど、と納得する俺

「なるほどな、そう言う関係だったのか。何となく納得だな。」

俺がそういうとみさおは満足気な顔でさらに

「あやのとも付き合い長いけど、柊とも中学2年の頃からずっと同じクラスだったんだぜ?」

と、付け加えてきた。

それを聞いたあやのもその頃の事を思い浮かべているようで

「そうよね?柊ちゃんとはずっと一緒だったわね。」

柔らかく微笑みながら話すあやのの言葉を聞いていたかがみは軽くため息をついて

「ただの腐れ縁よ。たいした事じゃないわ。」

と言ってはいたがその腐れ縁を特に嫌がってる感じではないようだった。

「腐れ縁といえば俺にもそういうやついたな。最もかがみ達に比べたら付き合いは短いけどな。」

その言葉に興味を持った3人が俺に質問してきた。

「え?それってどういう関係なの?」

かがみが身を乗り出して聞いてくるとみさおも同じように身を乗り出しながら

「へえー、それって男なのか?女なのか?」

同じようにやや興奮気味に尋ねてきた。

あやのも興味深々といった様子で

「どういう経緯でそうなったの？」

三者三様の聞き方で来たので話しても構わないだろうと判断した俺は3人に教える事にした。

中学時代に出会った後輩である事、二人とも女であった事、二人のケンカを治めたのが縁のきっかけになった事を話した。

3人はそれを聞いてなるほど、と言う顔で

「へえ、後輩の子なんだ？でも腐れ縁て程にはちょっと付き合う時間が短い感じね？」

とかがみ。

そして間髪いれずみさおも

「女なのか？慶一も結構モテるのか？」

ニヤニヤと俺をからかうようにいうみさお

「ケンカの仲裁か。上手くまとめられたのなら、慶ちゃんなかなかやるのね。」

俺は3人に答えた

「腐れ縁て言ったのはその後輩の一人がこの学校に来るからだよ。

結局ここでも3年顔をつき合わせるんだろうしな。それに女だけどどちらかと言うと妹ないし友達ってな感じなだけさ。ケンカの仲裁に関しては俺がたまたまその場に居合わせたからってことだな。」

そう一息で言い終えて最後に一言付け加えた

「友達同士がケンカするところを見ているのは嫌だったってのも仲裁をやろうと思ったきっかけさ。お前らもケンカはしたくないだろ？」

俺がそう言うと3人ともそういうケースを三者三様に想像したのか

「まあ、確かにそうよね。なんか、嫌だわ・・・。」

表情を曇らせながらそう言いみさおも心持暗い顔であやのやかがみの顔を見て

「私も柊やあやのに嫌われたらやだな・・・。」

そう呟くみさおを見ながらあやのも困惑した顔つきで

「私もみさちゃんや柊ちゃん、それに慶ちゃんとケンカするのはいやよ？」

あやのが最後に俺の名前を付け加えてくれた。

俺はそんなあやのの言葉に少し嬉しい気持ちになった。

「まあ、もしケンカになるような事があったら言って来い。俺が、俺に出来る事ならなんとかしてやるさ」

そう3人に言うと3人とも少し頬を赤らめて

「ま、まあそうならないとは思うけど、その時は頼らせてもらうわよ？」

少し期待するような眼差しを向けてくるかがみ。

みさおも腕組みしながら俺を見て

「お前の腕前を拝見してとこだなー。」

興味深そうに俺の実力を推し量るかのように俺を見つめ、あやのもフルフルと首振って

「なるべくならそうならないようにしたいわ。」

3人がそう答えたのを見て俺は

「そうならない事が一番いいんだし、これからも仲良くやろうぜ？」

俺がそう言うと3人は「そうね。」「そうだなー。」「よろしくね、慶ちゃん。」と言って同意してくれた。

そんな風に話をしていると俺のところにクラスメートがやってきて

男子生徒「森村、お前を呼んで欲しいっていう女生徒がきてるぞ？」

そう言われて俺は教室の外に目を向けたそこには俺の見知った顔がいたのだった。

次話に続く

さらに加わる旋律～前編～（後書き）

前回でこうとやまとを出す予定でしたが、少し長くなりそうだったので、次で出します

さらに加わる旋律～後編～

俺は新たなクラスでかがみ、みさお、あやのと談笑していたが、そこにクラスメートの一人がやってきて、俺を呼ぶ生徒がいるという伝言を受け取った俺は、その確認のため教室の入り口へと向かうのだった。

俺は3人にちょっと行ってくると断って入り口へと向かった。

その際に3人は俺に「行ってらっしゃい。」と言ってくれた。

俺は教室の入り口の所へやってくると外で待っている俺が見知った生徒が俺に声をかけてきた。

「おはようございます先輩。このクラスにいたんですね？探しましたよ。」

こうはいつもの笑顔で俺に挨拶をしてきた。

俺はこうに挨拶を返事しつつ

「わざわざ来てくれたのか？入学おめでとうだな。こう、制服似あってるぞ？」

俺がそう言うとこうは少し照れた様子で

「まさか先輩がそんな事を言ってくれるなんて夢にも思いませんでしたよ。少し嬉しいかな？」

頬を少し赤くしてそう言うこうに俺はこうの頭をぽんぽんと叩いて

「俺は素直に自分の感想を言っただけだよ。」

と言うとこうは嬉しそうな笑顔を俺に向けてきたがすぐ真剣な顔に変わり俺に

「先輩、ちょっと付き合って欲しい所があるんですが・・・。」

と神妙な面持ちで言ってきた。

俺は何事か?と思ったがとりあえずこうに付き合ってみる事にした。

「どこへ行くんだ?その様子だとなんだかただ事じゃない感じだが?」

俺がそう問い掛けるとこうは言いにくそうに俺を見て

「とにかくついて来てもらえれば分かりますよ。先輩、こっちへ・・・。」

こうはそう言うと俺の手を引いて移動を始めた。

その様子をこっそりと教室から見ている6つの視線に気がつかないままに俺はこうに連れられてこの学校の噂になっている星桜の樹の元へ連れていかれた。

樹の下に着くとこうは俺に

「ちょっと待っていてください。」

と言って樹の奥の方へと姿を消した。

しばらく待っているとこうが一人の女生徒を伴って現れた。

俺はその女生徒の姿を見て言葉を失った。

「・・・・・やまと、・・・お前・・・こんな所で何をやってる・・・・・・？」

俺は呆然としながらも陵桜の制服に身を包んだやまとを見て何とか言葉をしぼりだした。

そんな俺を見てやまとも困惑とも苦悩とも取れる表情で

「・・・見ての、通りよ・・・。」

と、ばつが悪そうに応えた。

俺はこうに

「こう、これは一体どういう事なんだ？確かやまとは聖フィオリナ女学院へ行ったはずじゃなかったのか？」

そう問い掛けるとこうは複雑な表情をしながら

「最初は聖フィオリナへ行くつもりだったらしいです。けど何を思ったのか、やまとは急に自分の行くべき学校をここに変えたらしいんですよ。」

そう事情を説明するこう。

俺はまだ訳が分からないと言った感じで聞いていたのだが、こうはそんな俺の様子を見ながらもさらに言葉を続けて

「先輩、私も知らなかったんですが、やまとは聖フィオリナ女学院以外にもここも密かに受験をしていたらしいんです。私もやまとをここで見かけた時にはびっくりしましたよ。」

そう付け足した。

俺はとりあえずやまとにどういう事なのか聞いてみることにした。

「やまと、一体どういう事なのか説明して欲しいんだが?」

俺がそう言うとやまとは俺の表情を伺いながらどう話すべきなのか迷ってる風だったがやがて意を決したのかぽつりぽつりと事情を話し始めた。

「最初は聖フィオリナ女学院に行こうとしたわ。受験にも合格できてたしね。でもこっちも試しに受けてみたらこっちにも合格して・・・。」

やまとは一旦言葉を切って静かに瞳を閉じると

「私は悩んだわ。私はフィオリナにも行けたけれどそこにはこうや先輩はいない。それを考えたら、私はフィオリナで一人きりでやっていけるかどうかがものすごく不安になった。でも私は先輩やこうにフィオリナに行くと言ってしまったから自分の決めた進路を簡単に覆す事は先輩やこうを裏切る行為になるのかも、と・・・。」

罪悪感とも取れる表情を見せながらさらに言葉を続けるやまと

「だから、陵桜に合格していなかったらそのままフィオリナに行くつもりでいたの。でもフィオリナの合格通知が来た後に陵桜の合格通知が届いた。私は揺れたわ。どうしよう、どうするべきだろう、って。でも、いけるチャンスがあるのならばって思ったら気がついたら陵桜を選んでいたわ・・・。」

やまとは泣きそうな顔で俺たちを見ながら理由を語った。

そんなやまとの姿を見た俺はやまとの苦悩を垣間見たような気がした。

俺はやまとに近づき優しくやまとを抱きしめ出来る限りやまとを責めないように気を配りながらやまとに語りかけた。

「わかった。わかったからもういい。お前も悩んでいたんだな?気付いてやれなくてすまなかった。」

そう言って語り掛ける俺の言葉を聞いたやまとは張り詰めていた緊張の糸が切れたのだろう、俺の胸の中で嗚咽を漏らし始めた。

俺はただ泣き止むまでやまとの頭をなでてやりながらそのままやまとを抱きしめていた。

そんな俺たちを見ていたこうも気がつくと涙を流してやまとの背中からやまとを抱きしめていた。

やまとを抱きしめながら俺は受験合格祝いの帰りにやまとがみせた

複雑な表情と何かを言いかけて何も言わずに立ち去ったあの時のやまとの態度を思い出し、それが今回の一件だったのだと理解した。

しばらくして泣き止んだやまとは俺から体を離して俺とこうを見つめて

「ごめんなさい。みっともない所をみせたわね・・・。」

と言って謝罪した。

それを見たこうもやまとに対しての罪悪感を感じたのか

「やまと、私もごめん。あんたの事悩んでいたって事に気付いてやれなかった。友達失格だね・・・。」

自嘲気味に笑いながらやまとに声をかけるこうそれに対してやまとはフルフルと首を振り

「いいのよ。結局相談できなかった私の弱さが原因なんだし・・・。」

やまとも心なしか落ち込みながらこうに言う。

俺はそんな二人にかけるべき言葉をかけなければと思い、二人を責めないように気を配って話し始めた。

「やまと、相談できなかった事を俺は責めるつもりはないよ。ともあれ、よかったじゃないか。また俺達は3人集まれたみたいだしな。こう、やまとが悩んでいた事に気づけなかったのは俺も同罪だ。お前ばかりを責められるもんじゃない。やまと、少し驚いたがそれが

お前の選んだ道なら俺は何も言わないさ。」

俺は笑って二人に自分の今思っている気持ちを伝えると二人は俺の言葉に少し驚いているようだったがやまとはそんな俺におそるおそる問い掛けてきた。

「私はここにいても、いいの？」

不安げな表情で俺に聞いてくる。

俺はそんなやまとを責められるはずもなく

「いまさら別の学校へ行けなんていえるか！それに、お前がそれを望むのなら好きにすればいい。俺はお前の気持ちを尊重する。」

俺がそういうとこうも安心したような表情で

「先輩、やまとを許してくれるの？」

と聞いてきたので俺はこうを安心させるため

「許すも許さないもないさ。まあ、こうなったらまた3年間楽しむとしよう。」

俺が笑顔で二人にそう答えた。

二人とも笑顔になって

「改めてよろしく。先輩」

「先輩、また私達一緒にいられますね。」

そう言ってきた。

俺はその笑顔に安堵しつつ

「まったく、本当に腐れ縁だな。でもこういうのも悪くないか・・・。」

と、答えるのだった。そして・・・・・・

「おーい、後ろの3人、隠れて見てないで出てこいよ?」

俺が声をかけると

「やばい!ばれた!」

焦るかがみ。

みさおも慌てて

「どうする?柊ー?」

かがみばかりでなくあやのにも意見を聞こうと話を振るみさお。

あやのも苦笑しながら

「どうするって、素直に出て行くしかないでしょう?」

かがみとみさおにそう言うと3人はおどおどとした顔で物陰から出

てきた。

俺はそこにさらに追い討ちで3人を横目で見ながら

「こっそり覗きとはあんまりいい趣味じゃないな?」

とニヤニヤしながら3人を追い詰める。

すると3人は縮こまって

「ご、ごめんなさい・・・。」

申し訳なさそうに謝るかがみ。

みさおも怯えたような顔で

「慶一、ゆるして?」

と、謝ってくる。

あやのも反省の色を滲ませながら

「悪気はなかったのよ。ごめんなさい・・・。」

と言うのを見て十分反省したと判断した俺は

「それならよし。」

そう言って3人を許す事にした。

そんな様子を見ていたこうとやまとは俺に

「先輩、その人達は？」

「先輩の知り合い？」

そう問い掛けてきたので俺はこの3人とこうとやまとを紹介する事にした。

「こう、やまと、この3人は俺のクラスメートでかがみとみさおとあやのだ。今日友達になった。」

俺が3人の紹介をすると

「先輩と同じクラスって事はこの人達も先輩なんですね？」

こうがそう言うとやまとも少し呆れたような顔で

「・・・友達、ね、意外と女性の友達多いのね、この前の泉先輩といい・・・。」

何となくにらみつけるように俺に視線を飛ばしてきた。

俺は努めて冷静に

「縁だけはなぜかある気がするよ。お前らといいかがみ達といい、な。でも言っておくがたまたまだからな、たまたま。」

俺が言い訳めいた事を言っているとかがみたちも二人に自己紹介を始めた。

「慶一くん、その娘達が慶一くんの話していた後輩なのね？私は柊かがみ、慶一君とはクラスメートよ。よろしくね。」

と言ってこうとやまとに手を差し出す。

それに続いてみさおやあやのも

「私は日下部みさお、慶一とは今日知り合ったばかりだけど仲良くしてるゼ？よろしくな。」

みさおもそう言いながら二人に手を差し出し、あやのも微笑みながら

「初めまして、私は峰岸あやの。私もみさちゃんと同じで今日慶ちゃんと会って仲良くなったの。私も二人とは仲良くなりたいわ。よろしくね？」

同じように手を差し出した。

こうとやまともそれに応じる。

「八坂こうです。私も先輩達と仲良くしたいですからこれからもよろしく。あ、私の事は名前で呼んでくださいね？」

そう言ってこうは3人と握手を交わした。

そしてやまとも

「永森やまと。私の事も好きに呼んでくれてかまわないわ。」

そう言って手を差し出し握手を交わした。

そうやって握手を交わす中で後輩二人とかがみとみさおはお互いに心の中で密かに火花を散らしているのだった。

俺はそんな事になっているということにはまったく気がついてなかったのだった。

必然的に加わる旋律は一つだった。

しかし俺というイレギュラー要因が重なり、この旋律の中にもう一つの旋律が加わった。まさにこの時からが俺の～変わる日常～なのだった・・・・・・。

さらに加わる旋律～後編～（後書き）

次回は多少、こうとやまと、そしてこなた達が出てくる予定

広がる旋律～驚愕、俺が仮部長！？～

四重奏との再会、新たにみさお、あやのという旋律が加わり、なおかつ加わるのが必然だったこうと、本来はこの旋律に加わる予定のなかったやまととの衝撃の再会の一件から数日、俺はそれなりに学園生活を満喫していた。

今日も俺はかがみに誘われてこなた達のいるクラスへ一緒に昼食を取るために二人で教室を後にしようとしていたが、なんだか不満顔のみさおとそんなみさおを困った表情でみているあやのに声をかけらた。

「柊、慶一ー、たまには私達ともいっしょに飯食おうってヴァ。付き合い悪いぞー？」

不機嫌な顔で俺達に文句をいってくるみさお、そんなみさおをあやのは嗜めるように

「仕方ないわよみさちゃん。柊ちゃんも慶ちゃんも私達以外にも付き合いあるんだし。」

それでもみさおはまだ納得してないようで

「けどさー、あやのー・・・。」

このままだとみさおが延々ぶーたれてそうなので俺は

「今度はこっちにも付き合うからそうむくれるなよ、みさお。あやの、みさおの事よろしくな？」

俺がそう言うとかがみも困った顔で

「まったく、あんたにも全く付き合わない訳じゃないんだから、少しは峰岸や慶一くんの言う事を聞き分けなさいよ？」

みさおに追い討ちをかける、かがみに突っ込まれたみさおは

「ヴァ～・・・。」

と言いながら黙ってしまった。

それを見た俺とかがみはやれやれといった感じで軽いため息をつきながら

「とりあえず行くか、かがみ。」

そうかがみに声をかけると、かがみも

「そうね、いきましょ？慶一くん。」

そう言い、二人して頷き合うと自分の教室を離れこなたのクラスへと向かうのだった。

そしてこなたのクラスに到着すると教室のドアを開けながらかがみはこなた達に挨拶をした。

「おーす。こなた、つかさ、みゆき、来たわよー？」

それに続いて俺も皆に挨拶をする。

「こなた、つかさ、みゆき、弁当持ってきた。とりあえず食おうぜ？」

俺たちの声に反応して挨拶を返す3人

「やほー、かがみ、慶一君、待ってたよー？」

「おねえちゃん、けいちゃん、いらっしゃい～。」

「お待ちしていました。さあ、食べましょう。」

と、三者三様の挨拶をしてくれた。

ちなみにつかさが俺を”けいちゃん”と呼んでいるのは慶一だと呼びにくいと思ったつかさが、こなたやみゆきを呼ぶように俺につけたニックネームなのだと言う事だそうだ。

まあ、あやのにもそう呼ばれているから今更気にはしないが・・・。

そうこうしているうちにいつもの昼食が始まった。

「慶一君は相変わらずお弁当おいしそうだね。つかさもだけどさ。」

俺の弁当を見つつ、つかさの弁当にも目をやりながらそう言うこなたにつかさも照れながら

「えへへ、そんな事ないよ～。こなちゃんだって料理できるんでしょ？けいちゃんもお弁当作れるのは意外だったけど。」

そう答えるつかさにみゆきもつかさと俺の弁当を見比べながら

「つかささんも料理は得意ですしね。私は少し苦手なものですから。慶一さんも普通に出来てますよね？」

そう言っていたが、そんな俺達の様子を見ていたかがみは軽くため息をつきながら

「なんか、つかさはともかくこなたが料理できるってのは意外だったわ。私はその・・・あまり得意じゃない方だけど慶一くんのお弁当見てるとちょっと自信なくすかも・・・。」

そう言って少し落ち込み気味になるかがみ。

俺は、俺を褒めてくれたこなたとつかさとみゆきに

「俺は人並み程度の腕だよ。そういうこなたも毎回と言っていい程チョココロネだよな？そんなので足りるのか？とはいえ俺もこなたが料理できるってのは意外だ。つかさはともかくみゆきも苦手ってのは驚きだがな。」

そう言い、さらにかがみにも一応のフォローを入れておく。

「かがみ、そう落ち込むな。俺なんかよりも上手い奴だって一杯いるんだし、それに料理できる奴みんながみんな最初から上手いわけじゃないさ。俺だって最初はそうだぞ？つかさやこなただってそうだ。失敗を繰り返して上手くなったんだ。だから、かがみも経験さえ積めばきっとうまくなるさ。」

俺の言葉にかがみは

「そうよね、何事にも経験よね。よかった、私が下手だって訳じゃないんだ・・・。」

少し元気を取り戻したようだ。

俺の言葉につかさやみゆきもかがみを元気付けるように

「そうだよおねえちゃん。おねえちゃんだって頑張ればきっとうまくなるよ。」

「そうですよかがみさん。私も家事が苦手な事を少し気にはしていましたが、慶一さんの言葉で頑張ってみようって気になれました。」

二人の言葉にかがみは少し感激したようになって

「ありがとう、二人とも、なんか少し元気でてきたわ。みゆき、お互いにがんばりましょう。」

そう言うと、みゆきもいつもの笑顔で頷きながら

「ええ、かがみさん。私もがんばってみます。」

そうかがみに答えるみゆきだった。

そんなやり取りをみていたこなたが俺にニマニマとした顔を向けながら

「いやー、上手い事まとめたねえ?」

そう言ってきたので俺はこなたの視線を避けて

「俺は自分の経験と一般論を言っただけだ。何も特別な事じゃないって。」

俺がこなたから顔をそらしながら言うと

「照れる慶一君萌えー♪」

などといってきたので俺はおもむろにこなたの額にデコピンをかまして

「萌え、とかいうな、まったく・・・。」

少し照れ隠しをしながらこなたに言った。

こなたはデコピン貰った額を押さえて涙目になりながら

「うう、慶一君ひどいよ・・・。」

と抗議の声を上げたがあえて俺は無視をした。

そこにさらにかがみが

「自業自得だ。こなた、少しは懲りなさい！」

と突っ込みを入れるとこなたは泣き真似をしながらみゆき達に

「うわーん、みゆきさん、つかさー、かがみと慶一君が酷いよー。」

と言うこなたに

「こなちゃん、どんまい。」
「泉さん、大丈夫ですか?」
二人とも苦笑しながらフォローを入れたのだった。
俺はそんな光景をみながらクスクスと笑っていたがふいに教室の外から俺を呼ぶ声に気がついた。
「先輩ー、慶一先輩いますかー?」
その声に俺は慌てて席を立ち、教室の入り口へ走っていった。
そして声の主にいきなりデコピンをかまして
「恥ずかしいから大声で俺の名前を呼ぶな!」
そう言うと俺の知っている顔なじみの後輩は涙目で
「先輩酷いですよ、いきなり・・・。」
と抗議をしてきたが俺は何か用事があって来たのだろうと察したのでこうに尋ねて見ることにした
「それで?今日は何の用事できたんだ?」
俺がそう言うとこうは教室の中を何気に見回し見知った顔を見つけさらに知らない二人に気付いたらしくニヤニヤとしながら
「先輩、さらに二人の女生徒ですか?中々隅におけませんねー。」

言い終わると同時に俺は再びデコピンを食らわせて威圧する表情でこうをみて

「お前は俺に何か用事があってきたんだろう？」

と再び今度はドスの聞いた声でこうに言うとこうは怯えて

「す、すいません、つい調子に乗りました。実はですね放課後にちょっと付き合って欲しい所がありまして。」

こうがおどおどしながら俺に言う

「付き合って欲しい所？」

俺が聞き返すとこうは頷きながら

「はい。先輩とやまとと星桜の樹の所で会ってから先輩に話した事がありましたよね？」

こうの言葉にあの衝撃の再会の後こうからの相談を俺は聞いていたのを思い出した。

こうの相談とはこういう物だった。

中学の頃からこうはあっち系の活動等が好きだったが中学ではその活動は出来なかった。

でも、高校に上がればその活動ができるかもしれない。

だから、その活動の場を作る事に協力をして欲しいのだと言う事だった。

「”あれ”の事か？やっぱりやる気なのか？」

俺はため息混じりにそう言う。

「はい。この学校に来たらやってみたいと思っていた事ですから。」

こうは目を輝かせて俺に答えた。

俺は顎に手をあてて考え込みながら

「部室の検討はついてるのか？」

そう俺が聞くとこくりと頷いて

「はい。部室の方は何とか、後は顧問と必要部員の確保が必要でして・・・。」

苦笑しながら答えるこうに俺は何となく嫌な予感を覚えたので

「まさか、やまとも巻き込んではいないだろうな？」

本当の事を言え！といわんばかりにこうに問い正してみるとこうはさも言いにくそうに

「あはは・・・なんと言いますか・・・散々説得して手伝ってもらうことに・・・。」

俺はこれからのやまとの苦労を思い、心の中で手を合わせた

「はあ、まったく仕方ないな・・・。それで顧問の方はあてはあるのか?」

俺がそう言うと再び頷き

「はい、物理担当の桜庭先生が引き受けてくれそうなんです。」

その名前を聞いたとき自分のクラスの担任であるちんまい先生を思い出した。

「うちのクラスの担任かよ・・・これはどういう陰謀だ・・・。」

そう言って頭を抱える俺そんな俺を見てこうは

「ええ!?先輩のクラスの担任の先生なんですか?なんという偶然・・・。」

と言って驚いていた俺は後で桜庭先生に呼ばれる事になるかもしれないな、と心の中で思いつつ

「それで?俺は後何をすればいいんだ?」

こうに問い掛けると

「はい、後は部室への資材の搬入のお手伝いと仮部長を務めていただきたいと。」

前半は普通に聞いていたが後半の仮部長の言葉に俺は驚いて

「仮部長!?どういう事だそれは、まさか俺も巻き込むつもりか?こう。」

こうに詰め寄るとこうは申し訳なさそうな顔をして俺にいいにくそうに

「すいません先輩。部の立ち上げには部長と副部長、顧問の先生と何人かの部員がいるらしいんですよ。本当はとても言いにくかったんですが、それをお願いできるのは先輩しかいないと思って・・・。」

うつむきながらそう言ってくるこう。

最初は驚いていた俺だがこうのそんな顔を見ては断れないと思った俺は（観念するしかないか・・・）と心の中で思いながら

「・・・わかったよ、仮部長、引き受けるよ。だからそんな顔するな。」

俺がそう言いながらこうの頭をなでてやるとこうはおもむろに顔を上げて笑顔で

「本当ですか?ありがとうございます。無理を聞いてもらってすいません。」

そう言って喜ぶこうを見ながら俺は（そんな顔見せられたら嫌だとはいえないっての）と心の中で叫びつつ最後の質問をする事にした。

「とりあえず放課後だな?俺はどこに行けばいい?」

行く場所を尋ねるとこうは

「とりあえず、職員室の前で待ち合わせましょう時間は・・・・・・。」

こうから時間を聞いて俺はこくりと頷いて

「分かった、それじゃ放課後にな。」

俺がそう応えると、こうも再び笑顔になって

「はい、お願いします。」

嬉しそうに俺にそう言って話もまとまったのでこれでお開きにしようといたら、突然こなたに声をかけられた。

「ちょっとまったー。なんか面白そうな話だね?」

と、興味深々の瞳で言うこなた。

そしてその後に続いて俺たちの話に割って入ろうとしたのを止めようとしたのだろう、かがみがこなたの肩をつかんで

「こなた、あんたは話の邪魔をしちゃだめよ?」

と突っ込むかがみ。

つかさも何だか良く分からない様相で俺とこうを見比べながら

「けいちゃん、その人だあれ？」

首を傾げつつとりあえず聞いてくるつかさ。

さらにその後ろからみゆきも顔を出してきて

「部活結成のお話ですか？」

少し話が聞こえたのだろう、俺にそう言ってくる。

俺はその４人を見て

「何だお前ら、いつから話聞いてた？」

と言うとこなたはにんまりと笑いながら

「最初からかなー？とりあえず八坂さん久しぶりー。」

とこうに挨拶するこなた。

かがみもそんなこなたの行動に呆れながらも

「まったく、あんたは・・・八坂さん、慶一くんごめんね？邪魔しちゃって。」

俺たち二人に申し訳なさそうに謝って来るかがみ。

かがみが名前を呼んだ女生徒の事を知っている感じだったのでつかさもかがみに

「おねえちゃんも知ってる人？」

つかさがそう尋ねるとかがみは頷いて

「ええ、そうよ。２．３日前だったかな？彼女は慶一くんと同じ中学の後輩なんだって。」

かがみがつかさにそう説明するとつかさはようやく理解したようで

「へえ～？そうだったんだ～。私は柊つかさ、おねえちゃんとは双子の姉妹だよ？よろしくね。」

こうに柔らかく笑って挨拶をした。

そしてみゆきも事情を把握したらしく

「まあ、そうだったんですか。私は高良みゆきです。八坂さん、でしたか？改めてよろしくお願いしますね。」

そう挨拶をしてきたのでこうもそんな二人に笑顔で挨拶を返した。

「あ、私は慶一先輩と同じ中学出身の八坂こうです。私の事は呼びやすいように呼んでくださって結構ですよ？それと、泉先輩に柊先輩、この前はどうもです。」

こうがそう言うとこなたはゲームセンターでの事を思い出して

「私の事覚えていてくれたんだね？ゲーセンでのリベンジはいつでも受けるよ？」

親指をたててこうにそう言うとそれを聞いて呆れながらもかがみも

「あの時はごめんね？興味本位で話聞いちゃったけどさ、でもその様子だとうまくやってるみたいね？」

と、あの時の事を申し訳なさそうに謝っていた。

「楽しみにしてますよ？泉先輩。それと柊先輩、あの時の事は気にしてませんから大丈夫ですよ。」

と、にっこり笑いながらこうが言う。

一通り自己紹介が終わった所でこなたは

「所でさっきの話だけどさ、八坂さんは何の部活を作るつもりなの？」

こなたが興味本位で聞いてきたのでこうはこなたの問いかけに

「実は、アニメーション研究部と言うものを立ち上げようと思っていまして・・・。」

こうはそう答えたするとこなたは少し興味ありそうな顔になって

「アニ研？面白そうだね。つまり慶一君はその部の立ち上げのために仮部長になるって事？」

こなたが俺に聞いてくる。

俺は軽いため息を一つつきながら

「まあ、そういうことさ。副部長はこうがやるとして部員にやまと、後はまだ未定って感じだな。」

こなたにそう言いながら俺はこなたがそういうものが好きだった事を思い出したのでこなたに

「こなた、お前もアニメとかそういった物が好きだっていってたよな?今回の件、協力してみる気はないか?」

協力を要請してみたらこなたは少し考えこんで

「うーん、つまり私が部員にって事だよねえ?どうしようかなあ・・・帰るの遅くなったりしたらアニメとか見れないし、でも少し面白そうでもあるし・・・(何より慶一君もいるしなあ・・・)」

こなたは腕組みしながら悩んでいたがやがて

「ねえ、八坂さん、具体的な活動ってどんな事するの?」

こうに活動内容について問い掛けるこなた。

こうは人差し指を立てて

「そうですね、興味のあるアニメを観賞したり、模型を作ったり、でも自分の本命は・・・泉先輩、ちょっと耳を貸してください。」

こうがそう言うとこなたはこうの側に寄って耳を近づけてこうの言葉を待った。

『同人誌作ったり、とかですかね。』

本来の目的をこなたに伝えるとこなたはニヤニヤとした顔になって

「それは面白そうだねえ、・・・よし、私もアニ研立ち上げに一肌脱ぐよ。」

と拳を天に掲げて高らかに宣言した。

それを見てたかがみはやれやれと額を押さえて呆れていた。

こうはこなたの宣言に目を輝かせて

「本当ですか!?、ありがとうございます。それと、他の方々も部活に入っていないのであればできればご協力をお願いしたい所なんですが・・・。」

こうが皆の方を見回しながら言う言葉にかがみは腕組みしながら

「うーん、確かに私達は部活をやっていないけど、部活動する気はないしね・・・。」

かがみがそういうとつかさとみゆきも

「わたしも、あまりそういう事よくわからないし・・・。」

そう言いながら困惑した顔をしてみゆきも少し考え込みながら

「私は部活はやっていませんが、委員会の事もありますしね・・・。」

そう言って断りかけたのだがこうはすかさず

「大丈夫ですよ。部員といっても部活を立ち上げるまでの数合わせでいいんです。その後は私のほうで部員の勧誘等を行って数を増やして先輩達と入れ替えで外していく感じでやろうと思っていますから。」

そう皆に自分の考えていたやり方を提示すると他のみんなもそれなら、と納得したのか

「そういう事なら立ち上げには協力してもいいわ。」

かがみが同意すると同時につかさも

「おねえちゃんがやるならわたしも協力してもいいよ?」

と言ってつかさも同意を示した。

二人の同意を見てみゆきも

「そういう事でしたら協力させてもらいますね。」

3人がそう言うとこうは喜んでいたが、みゆきが委員会に所属してる事を聞いたのを思い出したこうはみゆきに

「高良先輩は自分の委員の仕事を優先してもらって構いませんから大丈夫ですよ?」

と補足をしたのだった。

みゆきもそれに頷き話も大分まとまったので俺は

「なら、そういう事でいいな？みんな、とりあえず、放課後に職員室前で集合だ。」

俺がそう言うとみんなは「分かったよー。」「放課後ね？慶一くんといっしょにいくわ。」「ゆきちゃん達と一緒に行くよ～。」「みなさんと一緒にうかがいますね。」と言いこうも

「それじゃお手数おかけして申し訳ありませんが、放課後よろしくおねがいします。」

そう言って俺達はひとまず別れた。

俺は複雑な顔をしながら

「やれやれ、新しい部活、しかも仮部長か・・・ほんとどうなるんだろね？これから・・・。」

と一人呟きながらこれからの事に頭を痛めるのだった。

広がる旋律～驚愕、俺が仮部長！？～（後書き）

そんなこんなでアニ研の立ち上げに巻き込まれた主人公、主人公の明日はどっちだ？、次回へ続く

動き出す旋律～アニ研誕生～

思いがけないこうの来訪、そして伝えられた部活立ち上げの話、４重奏のみんなが話を聞いている中で決まった仮部長という名の役職、仮部員に勧誘される４人を従えて俺は集合場所である職員室前へと皆とともに来ていた。

そしてそこに一人の見知った女生徒が待っていたのだった。

その見知った女生徒は俺達を一瞥すると呆れたような顔をしながら声をかけて来た。

「慶一先輩、こんな所に大勢でやってきて何をしてるの？それと、泉先輩と柊先輩だったかしら、ちょっと前に会ったわね。」

女生徒はこなたとかがみに声をかけると二人ともその女生徒に挨拶を返した。

「おお？永森さんじゃん。ちょっと前にゲームセンターで会って以来だね。元気してた？それにしてもゲームセンターで会った時は学校って聖フィオリナ女学院へ行くっていってたよね？何でこの学校にいるの？」

続いてかがみも同じように挨拶を返して

「永森さん、２．３日前に会ったわね。あの時はごめんね？３人の問題だったんだろうし、なんか結果的に邪魔しちゃったよね？」

かがみがあの時の事を謝っていた。

そして俺もそんなやまとに声をかけた

「やまと、お前こそここで何を・・・ってやっぱり”あれ”の事か・・・。」

やまとがここにいる事情を察して俺は額に手を当てて頭を振る。

やまとはこなたとかがみに

「泉先輩、ええ、元気よ?その事に関してはちょっと複雑な事情がね。柊先輩、どの道分かる事だから気にはしていないわ。」

そう言った後俺の方を向いてふう、と一つため息をつきながら

「事情を知っているって事は先輩もやっぱり巻き込まれたのね?ひょっとして泉先輩達も、かしら?」

やまとが呆れた口調で俺に言う。

俺もやまとに頷きながら

「ああ、なんというかそういう感じさ。それとこなた達はこうの言った条件で仮部員になってくれるとの事だ。ちなみに俺は仮部長をやらされる。」

やれやれといった感じでやまとに返事をする俺。

やまとは俺の仮部長という言葉に驚いたのか

「仮部長？そんな事までやらされるの？大丈夫なの？先輩。」

心配そうに聞いてきたので俺は苦笑しながら

「まあ、成り行きでな。部を立ち上げるためには必要なんだそうだ。」

とやまとに答えるやまとは呆れ気味で俺を一瞥すると

「先輩、お人よしにも程があるわよ？」

同情とも憐れみとも取れる表情で俺にいうやまとに俺はやれやれと軽くジェスチャーして

「もう慣れたさ。」

と、諦めの表情で言うのだった。

そんなやり取りを見ながらつかさとみゆきはなんだか分からないといったような顔で俺達を見ていたがとりあえず声かけないとと思ったのか俺達の方へとやってきて

「えっと、けいちゃんこの人は誰なの？」

俺に恐る恐る聞いてくるつかさ。

さらにみゆきも首をかしげながら

「慶一さんのお知り合いの方ですか？それならぜひ私達にも紹介して欲しいのですが。」

そう言ってきたので俺は2人をやまとに紹介する事にした。

「やまと、この2人は俺の友達でそこにいるかがみの双子の妹の柊つかさ。もう一人はこなたと同じクラスで学級委員長もつとめている高良みゆきだ。2人ともこなたとかがみの親友だ。」

俺が二人を紹介するとやまとは俺の方を見て少し不機嫌そうな顔をして

「また、女の人なの?」

とぼそりと呟いていたがすぐに二人にも挨拶を返した

「初めまして。柊、いえ、少し紛らわしいわね、つかさ先輩と呼ぶといいかしら。後、高良先輩ね?私は永森やまと。慶一先輩とは中学の頃の先輩後輩よ?よろしく。」

そう言って二人に手を差し出した。

二人もすかさず笑顔で挨拶を返して

「柊つかさだよ?名字が一緒で紛らわしいと思うから今みたいに名前で呼んでね?」

そう言って手を差し出すつかさ。

みゆきも同じように手を差し出して

「高良みゆきと言います。慶一さんの後輩さん、なんですね?私の

事も呼びやすいように呼んでくださって構わないですよ？」

と握手を交わし終えるのを見て俺はこの場に言い出しっぺの姿が見えない事に気がついた。

俺は一つ軽いため息をついてやまとに

「やまと、言い出しっぺの遅刻姫はまだ来てないようだな？」

俺が皮肉交じりに言うとやまとも腕組みしながら不機嫌そうに

「こうが時間通りに来る確立なんてあってないようなものよ・・・。」

とこちらも皮肉を言っていたそれを聞いていたかがみがこなたの方を見て笑いを必死にこらえながら

「ち、遅刻姫、言い得て妙だわ。」

とこなたに言うとこなたは頬を膨らませてかがみに詰め寄って

「むうー、それはどういう意味さ、かがみー？」

抗議の声を上げるこなた。

俺もそれを不思議に思ったのでかがみに尋ねてみる

「かがみ、こなたも結構待ち合わせとかにはルーズだったりするのか？その様子だと。」

俺の質問にかがみはまだ笑いをこらえながら

「まあね。この子も結構遅れてくるわよ?待ち合わせで３０分４０分の遅刻なんてざらだわ。」

かがみがそう言うとこなたはさらに頬を膨らませて

「そんな事ないよー！かがみの意地悪ー！！」

と言ってむくれてしまうこなた。

そんな二人をみて苦笑するつかさとみゆきそこに俺は更なるツッコミを入れるのだった。

「なら、こなたには2代目の遅刻姫の称号を与えるか。」

俺が笑いながらそう言うとこなたは俺に猛抗議をしてきた

「慶一君なんなのさーそれー、かがみもだけど慶一君も酷すぎない？」

そう言って不機嫌になったので俺は（ちょっとやりすぎたかな?）と心の中で思いながら

「ははは。冗談だ冗談、気にするな。」

そう言ってこなたに一応謝罪をしたがこなたはまだ不機嫌そうだった。

そこへようやく我らが初代遅刻姫がやってきた。

「やまと、先輩、それにみなさん、遅れてすいません。」

申し訳ないといったような顔で謝罪してくるこうに俺も呆れ顔で

「こう、お前が誘った大事な事なんだからもう少し早く来い。」

俺がそう言うとやまともこうに鋭い視線を向けながら

「先輩達まで巻き込んでるんだからそれ相応にしっかりと約束は守りなさいよ?」

と痛烈に皮肉を浴びせた。

こうはますます小さくなって

「わ、わかってるよ・・・ごめんやまと、先輩・・・それにみなさんも。」

こうの謝罪にみんなも「いいよいいよ。」「まあ、謝ってるんだしいいわ。」「わたしは気にしてないよ?」「次はしっかり守ればいい事ですから。」と言う事で全員からのお許しを貰ったこうは早速本題へと入るのだった。

「先輩、中へ一緒に来てください。部活立ち上げの申請で桜庭先生にも待ってもらっていますから。」

こうが俺を中に入るように促したので俺はこうに頷き返すと

「分かった。それじゃみんな行ってくる。」

みんなの方を向いてそう言うとみんなも「「「「「行ってらっしゃい。」」」」」と言って見送ってくれるのだった。

俺はこうとともに職員室へノックをして

「「失礼します。」」

と言って職員室へと入っていった。

そしてアニ研の顧問であり俺のクラスの担任でもある桜庭先生のところへ行き

「桜庭先生、部長になる人を連れて来ました。それと私は副部長と言う事で。」

こうが俺を紹介したので俺も

「アニメーション研究部の部長をやらせてもらいます、森村です。」

俺が挨拶をすると桜庭先生は俺を一目見て

「おお、森村か。八坂から話は聞いていたが本当にやるのか？部長を。お前がそんな事を好きな感じには見えないんだが・・・？」

咥えタバコを吹かしながら俺に聞いてくる。

俺は頷いて

「ええ。一応付き合いの長い後輩からの頼みですからね。」

そう答える俺とこうを見比べながら桜庭先生は

「まあ、お前がやるというのならよかろう。部活立ち上げの許可を出す。後は部室に行って色々準備をしてくるといい。ところで部員の方は大丈夫なのか？」

先生がそれを聞いてきたのですかさずそれにこうが答えた

「はい。協力してくれる先輩達がいたのでそちらは問題なしです。とりあえず後で紹介しますので。」

こうが説明すると桜庭先生も納得したようで

「なら後はお前達に任せる。部室には後で私も顔を出すから後はその時にな。」

どうやら許可は無事に降りたらしいので俺とこうは顔を見合わせた後先生に頭を下げて

「わかりました。それでは俺たちは部室の方へと行っていますね。」

「桜庭先生、ありがとうございました。それじゃ後ほど。」

俺たちは先生に挨拶をして職員室を後にしてこうの案内の元、皆を引き連れて部室へと向かった。

ちなみに職員室から出る際に俺は先生に資材を部室に届けるように頼まれていたので重い荷物を抱えながらあるく羽目になっていた。

程なくして部室に到着し俺は持っていた資材を部室へと運びいれた。
部室はそれなりのスペースがあって活動していくには悪くない環境だと思えた。
他の皆もあてがわれた部室内部を見回してしきりに関心していたようだった。
部室内を見たこなたは
「なるほど。ここが今日から私達の活動拠点になるんだね？」
と顎に手を添えながら頷いてかがみも部屋の中を見ながら
「へえ？意外といい部屋じゃないの。結構人数入っても大丈夫そうだし。」
かがみも関心していてつかさもきょろきょろしながら
「結構綺麗だねー。八坂さん、よかったね。」
とこうに笑顔で言っていてみゆきも
「中々いい環境ですね。うちの学校もまんざらではないようです。」
と部室内の色々な個所を確認しながら頷いていた。
やまとはどこか諦めたような顔で
「はあ、本当にやる事になるのね・・・。」

とこれから先の事に頭を悩ませているようだった。

俺は資材を置き、こうに

「中々の部屋だな。これから部員も集まってくればいいけど。」

部室内を見回して俺はこうに言う。

こうもそれに答えて

「そうですね、がんばりたいです。先輩、みなさん、今日は色々お手伝いいただいて本当に助かりました。」

そう言ってこの場に居る全員に頭を下げるこう俺はこうに

「俺はとりあえず仮部長ではあるが実質の権限はお前が持つ、って事でいいんだよな？みんなも仮の部員、言ってみれば人数が揃うまでの幽霊部員という扱いという条件だったよな？」

と今回協力するための条件をこうに確認した。

「ええ、そうです。まあ、時折は顔は出して欲しいですけど。」

こうがそう言うとこなたは

「時々は顔出すようにするよー。〝あれ〟の事もあるしね♪」

こなたが親指を立てながら言う。

かがみも仕方ないわねと言った顔で

「まあ、機会があればなるべく顔は出すようにするわよ。」

腕組みしながら答えるかがみ。

つかさもかがみを見て

「わたしはおねえちゃん達が行く時にはついていくよ?」

そう言い、そしてみゆきも他の三人の方を見ながら

「私も委員会がない日、こちらに伺える日には活動のお手伝いをさせてもらいますね?」

そう、こうに言っていた。

やまとはあまり乗り気でない顔をしながら

「部員が増えるまではあなたの手伝いはしてあげるわ。でも増えてきたら手を引かせてもらうから。」

そういうやまとに俺も苦笑して

「みんなありがとうな、俺の後輩の無茶な頼み聞いてくれてさ。やまと、お前も時々は顔出してやれよ?一応友達なんだしな。」

俺がそう言うとこうとやまと以外は「分かったよ」と同意してくれたがやまとは

「本当にこうの友達でいていいのか疑問になってきたわ・・・。」

と皮肉たっぷりにこうに言うとこうは慌てて

「何言ってるのさやまとー、それは酷いよー、私達友達でしょー？」

と言ってやまとに抗議していたがやがて桜庭先生が部室にやってきたのでこれからの活動の準備を皆でやって今日はお開きになった。

かくしてここにアニメーション研究部が立ち上がった。

そしてその後新たな同人作家を迎える事になり、さらにはそれに準ずる人材がこの部にくる事になるのを知るのはもう少し先のお話。

訪れる旋律達～増える家族と自宅訪問

四重奏を絡めたアニ研の立ち上げからしばらくは俺達も日々を忙しく過ごしていた。

そんな中でこうの部員勧誘が上手く行き、こなたと俺とやまと以外の3人は新たにアニ研に入った部員と入れ替えで出て行くことになるのだった。

＜それでも俺たちが顔を出しに行く日には付き合って来てくれていた。＞

その中で多少の変化もあった。

こうが桜庭先生をいつのまにか先生とは呼ばずに”ひかるちゃん”と言うようになった事。

何時の間にかに生徒会会計の役職についていた事。

こうの好きなイベントで来年陵桜を受験する予定の漫画を書ける期待のアニ研の新人を見つけたと言う報告があった事。

＜ちなみにこなたもその子の書く作品は知っているようだったのでこなたも喜んでいたようだ。＞

そして俺の方も少し生活に変化があった。

一人暮らしの家に思いがけない家族がやってきたのだった。

学校の帰り道俺はみんなと別れて一人自宅へと向かって歩いていた。
家の近くのゴミ置き場の辺りに差し掛かった時ゴミ置き場の方から子猫の鳴き声が聞こえてきた。
俺は鳴き声のする方へと足を向けて歩み寄って見るとそこには二匹の子猫がダンボール箱に入れられて捨てられていたのを見つけた。
俺は子猫達を見ながら
「お前らも親がいないのか・・・俺と一緒だな。よし、今日から俺の家に来るか？」
そう子猫達に語りかけると子猫の入ったダンボール箱を抱えて家へと連れ帰った。
一匹は真っ白の子猫でもう一匹は白と茶色の良くそこら辺でも見かける模様の猫だった。
俺は白い方をモモ、白と茶色の方をミィと名付けた。
そんな事があってから2．3日後の事いつものように皆で昼食を摂っているとこなたが突然俺に
「ねえねえ、慶一君の家ってどこにあるの？」
興味深そうな目で聞いてくるこなた。
その言葉にかがみも

「そうね、そういえば慶一くんがどこに住んでいるのかって聞いた事なかったわよね？」

そう言うかがみも興味があるようだ。

さらにつかさもそれを知りたいと思ったのか

「わたしも知りたいな。けいちゃんどこに住んでるの？」

つかさが聞いて来た時みゆきは俺がみゆきを助けた時の事を思い出したのか俺に

「実家は都内にあるんでしたよね？でも家は埼玉にあると言っていたのを覚えていますよ？」

みゆきがそう言うと俺はそういえばそんな話をみゆきにしたな、と思って

「ああ、実家は確かに都内なんだが俺が実際に住んでいる家は埼玉県の久鬼市にある。」

俺が3人の質問に答えるとこなたは

「へえー？久鬼市か、意外と近いね。」

こなたが呟くように言いかがみも

「へえ、私の使ってる電車の沿線なのね。なら結構近いかも。」

かがみがそう言うとつかさは

「近いのなら遊びに行ってみたいね、おねえちゃん。」

とかがみに言うとかがみは少し悩んだ後俺に

「うーん、そうねえ・・・ねえ、慶一くん、今度遊びに行ってもいいかしら？」

かがみが聞いて来た時こなたが突然何か閃いたかのようになり俺に

「かがみ、それだ！ねえ慶一君、今日は暇？」

こなたは俺の予定を聞いてきたので俺は一応今日の予定がどうなっていたかを確認して

「いや、今日は部活もないし特にこれといった予定はないな。」

俺がそう言うとこなたは目を光らせて

「じゃあ、今日の帰りに慶一君の家に遊びに行ってもいい？」

こなたの言葉に気圧されながら

「別に構わないが、あまり遅くならないようにしとけよ？」

俺がオーケーを出すとかがみとつかさ、みゆきもそれに食いついてきた

「ね、ねえ、慶一くん、私も一緒に行ってもいいかな？」

「わたしも行きたいな。けいちゃん、いい？」

「私も一度お邪魔させていただいてもよろしいでしょうか？」

3人の勢いに押された俺は思わず

「わかった、わかった。遊びに来ていいからとりあえず落ち着け。」

そう言って皆をなだめるのだった。

そして放課後になり皆とともに校門に差し掛かった時、後ろから俺たちを見つけたこうとやまとは

「あ、慶一先輩と泉先輩達も、みんなおそろいでどこへ行くんですか？」

そう俺たちに声をかけながら側まで来た。

そしてその傍らにはやまとも居てやまとも俺達に声をかけてきた。

「みんな揃ってどこかへ遊びにでも行くのかしら？」

そんな二人にこなたが俺に代わって返事を返していた。

「うん。これから慶一君の家に皆で遊びに行く所だったんだよ。八坂さんと永森さんも来る？」

こなたはさらに二人の人間を仲間に加えるべく声をかけた。

こうはやまとと顔を見合わせて考えていたようだったが

「いいですね、久しぶりに遊びにいってみようかな？」

こうは乗り気でそう言った。

それを見てたやまともちょっと考える仕草をした後

「私も行ってみようかしら・・・。」

そう言って来たので俺はもうどうにでもなれ、と言う感じで

「来るのなら好きにしろ、もうなんでもかまわん。」

俺がそう言うと二人とも笑顔になって

「「それじゃ、よろしく。」」

何だか嬉しそうに言うのを見てやれやれと軽いため息を心の中でつく俺だった。

俺たち7人は一緒に駅まで談笑しながら向かっていた。

そしてしばらくして駅に着くと俺は皆を引き連れて下りのホームへと向かって行った。

俺がそっちに向かう事が変に思ったのかこうが俺に声をかけてきた

「あれ？先輩の家ってそっちの電車で行くんでしたっけ？」

こうがそう言うとやまともそれはおかしいと感じたのか

「先輩の家は確か都内じゃなかったの？私達の家にも近かったはずよ？」

そんな二人の言葉に他の４人も不思議そうな顔で

「え？だって慶一君は自分の家は埼玉県の久鬼市にあるっていってたよ？」

こなたがそう言うとかがみとつかさ、みゆきも

「確かに慶一くんは久鬼市にあるっていってたわよね？」

「わたしもそうきいてるよ？」

「私は都内にある慶一さんの実家の事はうかがっていましたが、やはり埼玉に家があるという事を慶一さん自身の口から聞いています。」

４人と２人のやり取りを見ていた俺は心の中で（ああ、しまった！）と思いながらもこの場を治めるために皆に説明することにした。

「みんな聞いてくれ。中学時代までは俺は確かにこうとやまとの家の近くの実家で暮らしていた。だから、こうとやまとが俺の家が都内にあると思ったのは間違いじゃない。そして、こなたたちに言った久鬼市に家があるというのも本当だ。ただしその家は俺の本当の両親と住んでいた家なんだ、って事さ。」

そう俺が説明するとこうとやまとはかなり驚いたらしく俺に詰めよって

「え?どういう事ですか?先輩。本当の両親って・・・だって先輩は龍神(たつかみ)さんの家で育ったって聞いてましたよ?」

こうがそう言うとやまとも困惑の表情で俺を見ながら

「私もそう聞いていたわ。先輩の本当の両親の事なんて私たちは知らなかったわよ・・・?」

俺に詰め寄るこうとやまとの様子を見ていたこなたは

「ねえ、慶一君。私達にもわかるように説明してくれないかな?」

こなたの言葉に他の3人も頷いて俺に説明を求めた。

俺は今話すべき事なのだろうと判断し自分の隠していた事をこなた達に話した。

「わかった・・・。俺は確かに龍神(たつかみ)さんの所で育ったが、龍神さんは俺の本当の両親ではなく俺の育ての親、つまり俺はあの人達とは血のつながりを持たないただの他人さ。そして俺の本当の両親は俺が物心つく前に俺を親戚の下へ預けて二人きりで旅行にでたが、そこで不幸にも事故に巻き込まれて亡くなった。」

俺はここで一旦言葉を切り再び話し始める。

「両親は亡くなったが、俺たち家族が住んでいた家だけはそのまま久鬼市に残り、俺はその後親戚中をたらいまわしにされ、最終的に龍神さんの所へと辿りついた。そんな俺を不憫に思ってくれたのか、龍神さんは俺を本当の息子のように可愛がってくれ、なおかつ俺が

強くあるようにと武術も叩き込んでくれた。高校に入ってから俺は龍神さんへの負担を減らしたいと思い、まだ残されている俺の家族の住んでいた家に入り、一人暮らしをするようになった、という訳だ。」

俺が説明を終えるとこうとやまとは俺に怒りとも悲しみとも取れる瞳を向けて

「知りませんでした・・・先輩。どうして今まで黙っていたんですか?」

本当の事を話してもらえなかった事がショックだったのかその事を抗議してくるこう。

そしてやまとも瞳を伏せながら

「私達には話す意味もない、と思っていたの?酷いわよ、私達は先輩の親友と思っていたのに・・・。」

悲しそうな瞳を俺に向けてくるやまと俺は今の今までこの二人に事情を話してなかった事を後悔しながら

「すまない二人とも。言い訳にしかならないかもしれないが、いつかは話そうと思っていたんだ。けれどここの所そういうのも忘れるほどに楽しい日々が続いていて話すことを忘れてしまっていた。だがこれだけは信じて欲しい。俺は二人に真実を話したくなかった訳じゃないんだという事を・・・。」

俺はそれでも結局二人を傷つける結果になったなと心の中で思い、二人に頭を下げると

「俺はそんなつもりはなかったが俺を親友と言ってくれたお前らを裏切る事になったな、すまない、本当に。」

俺は心から二人に謝罪すると二人はうつむきながら考え込んでいたがやがて顔を上げてこちらを向くと

「話してくれなかった事は悲しかったですが、今事情を明かしてくれましたしもういいですよ。私は先輩を許します。先輩は私達に事情を説明する気があった、という事がわかりましたから。」

こうがまだ複雑そうな表情をしながらそう言うとやまともじっと俺を見据えて

「先輩が私達に話そうと思っていたと言う事が分かったし、もういいわ。私も先輩を許すわ。先輩が私達をないがしろにしようとした訳じゃないみたいだしね。」

その3人のやり取りを見て事情を知ったこなたたちも声を上げた。

「そういう事だったんだね?慶一君も結構苦労してきたんだね。」

こなたが俺の方を見てそう言ってくる。

そしてかがみも自分の幸せな境遇を思いながら

「私達にはちゃんと両親がいる分、幸せなのかもしれないわね・・・。」

かがみがしみじみと言う。

つかさは涙目になって

「うう・・・けいちゃん、かわいそう・・・。」

今にも泣きそうになりながら言い、みゆきも目を伏せて

「そういう・・・事情でしたか。何となくは察してはいましたが嫌なものですね・・・そういう予想が当たってしまうというのは・・・。」

皆の言葉を聞きながら俺は今までの自分の境遇を思い返し一人だったあの頃を思い出しながらも、自分は今幸せなのだと自分自身に言い聞かせながら

「確かに、あの頃はな・・・だけど、俺には皆がいる。だから今は寂しくなんかないさ。こんな俺だけどさ、これからも皆と一緒に居たいと思ってるよ。」

俺がそう言うとみんなも俺の方をみて黙って頷いてくれた。

俺はそんな皆の気持ちが嬉しくて思わず涙ぐみそうになったが涙を見られるのが恥ずかしかったので少し上を向いて涙が零れ落ちるのをじっと耐えていた。

そうやっているうちに電車が来たので俺は皆につとめて明るい声で

「皆、電車来たぞ?乗り込もう。」

そう促すと皆も俺に笑顔を向けながら各々返事を返して電車に乗り

込んでいった。

そうして電車に揺られ俺たちは久鬼市に到着した。

家へと向かう途中も皆と談笑をしながら歩いた。

さっきの嫌な空気を吹き飛ばす勢いで皆と話しながら・・・・・・

そしてしばらくして家に辿り着いた。

俺は皆に自宅を指差して

「俺が住んでる家はここだよ。」

と言うと皆は物珍しそうに俺の家を見ていた。

そして口々に自分の思ったことを口に出していた

「結構大きいねーちょっとびっくりだよ。」

「ずいぶん立派よね?それにこれだけ目立つなら場所も分かりやすいかも。」

「これならわたしも迷わずに来れるよ~?」

「かなり立派な家ですね。部屋も多そうです。」

「ここが先輩の本当の家なんだね?大分時間も経っているはずだけどずいぶんと綺麗だなあ。」

「ここが先輩の生まれた場所なのね?何だか不思議な感じね。」

そんな感想をこぼす皆に俺も頷きながら

「まあ俺も最初見たときは驚いたけどな。以外に部屋も広いしな。」

とりあえずみんなの言葉に軽い説明をしてから俺はとりあえず皆を家に上げるために声をかけた

「さあ、入った入った。」

そう言って家へ上がるように促すと皆も「お邪魔しまーす。」と言って上がってきた。

皆を居間へと連れて行く間こなたは家の中をきょろきょろと見回しながら俺に色々と質問をしてきていた。

「へえ、中も広くて綺麗だね。でも一人でこれ掃除するの大変じゃない？」

俺はこなたに背を向けたまま

「一応自分の部屋以外はそんなに汚れる事はないからな。まず自分の部屋をみて後は他の部屋をチェックしてちょっとひどい所だけ入念に掃除する、って感じでやってるよ。」

そう答えるとかがみも俺に質問してきた

「でも、それだけじゃ掃除できてない場所とか出るんじゃない？」

俺はかがみに質問の答えを返して

「俺が行く部屋の範囲は広くないからな。そういう所以外はあまり汚れない。とはいえ、ホコリを落としたりはやってるよ？」

俺がそう言うとつかさも会話に入ってきた

「へえー、意外となんとかなっちゃうものなんだねー。」

俺は苦笑しながら

「まあ、なんとかね。とはいっても一人で暮らすにちょっと広すぎるかもな、この家は・・・。」

俺が少し遠い目で家の中を見ているとみゆきも

「確かに今までは一人だったかもしれません。でもこれからは私達もここに来る事ができますよ。私達はお友達なのですから。」

にっこりと笑うみゆきに俺も笑顔になって

「ああ、そうだな。皆に感謝ってとこか。」

俺がそういうと、こうとやまとも

「そうですよ?先輩。私達もいつでも遊びに来てあげますからね?寂しんぼの先輩。」

「一人が寂しいなんて先輩もまだまだ子供、なのかしらね?」

二人の言葉に顔を赤くしながらもやまとこうにデコピンの制裁をくらわせた

「誰が寂しんぼだ!やまと!お前も何を言ってる!」

「痛いです・・・すいませんまた調子に乗りました。」

「痛い・・・ごめんなさい、先輩。」

涙目のこうとやまとは俺に怯えていた。

それを見ながら笑う四重奏。

こなたがふいに2階を見上げて

「慶一君の部屋って2階にあるの?」

と聞いてきたこなたに少し嫌な予感を覚えたがとりあえず質問に答える事にした。

「まあな、一応釘さしておくが、2階には行くなよ?」

俺がそういうとこなたは目をキラリと輝かせ二階にダッシュしようとしたので俺は慌ててこなたを止めて追撃のデコピンを食らわせた。

こなたは額を押さえて涙目になり

「すんませんした・・・。」

と謝った。

その後さらにかがみにも説教を食らっていたこなたを尻目に居間へと辿り付くと2匹の子猫が俺達を出迎えた。

こなたは瞳を輝かせて

「わあー、かわいいね。なんて名前?」

こなたが俺に聞いてきたので俺は名前を教えた

「白いのがモモで、白と茶色の奴がミィだ」

かがみも子猫達を見てニコニコとしながら

「うーん、子猫の可愛さは反則よね。慶一くん、抱いてみてもいい？」

俺はすごくいい笑顔なかがみに

「ああ、構わないぞ？」

と、かがみにいうとつかさも興奮しながら

「とってもかわいいよ～。もふもふしたいな。わたしにもだっこさせて～？」

そう言ってきたのでつかさにも

「構わないけど、まだ子猫だから無茶はさせないようにな？」

つかさの願いを聞き入れる事にした。

みゆきも子猫達を見つめながら柔らかな笑顔で

「家では動物は飼っていませんが、こういうのを見ると飼いたくなってしまいますね。」

こちらも子猫の可愛さにやられたようだ。

こうとやまともにこにことしながら

「可愛いですねー。拾ったんですか？この子達。」

こうが聞いてきたので俺はこうに

「ああ、近くのゴミ捨て場に捨てられていたのを拾ってきたんだ。」

そう応える俺。

やまとも目を細めて

「私も猫飼いたいかも・・・。」

と普段のやまとからは考えられない程に目を輝かせているのが見て取れた

俺は二人に

「お前らのとこじゃ飼えないのか？」

と聞いてみると、こうは苦笑しながら

「親がアレルギー持ちでして・・・。」

と残念そうな顔をするこう。

やまとも表情を曇らせて

「うちも父が苦手なのよね・・・。」

悲しそうにそう言った。

そんな2人に俺も苦笑しながら

「ああ、それは厳しいな・・・」

と2人を憐れむように言う。

俺は皆にリビングでくつろいで居てくれと言った後

「お茶の用意してくるから待っててくれ。」

と伝えてキッチンへ向かおうとした時つかさが俺に

「けいちゃん、わたしも手伝うよ。」

と言って来たので

「いいのか?お客なんだしわざわざそんな事しなくてもいいんだぞ?」

と俺が言うとつかさは

「わたしがやりたいからいいの。だから手伝わせて?」

と言ってきたつかさの頼みを無下に出来なかった俺はつかさに手伝いを頼む事にした。

「じゃあ、他の皆はちょっと猫の遊び相手になってやってくれ。」
俺がそう言うとみんなは「オッケー」と返事をして猫と戯れはじめた。
その間に俺とつかさはお茶の準備を始めた。
「つかさ、そこにお茶菓子入っているから、そこの棚に入ってる皿に入れて持って行ってくれ。」
俺がつかさに促すとつかさもなれない手つきで皿を取り出して
「わかったよ～。これでよしっと。それじゃ先に運ぶね～？」
お茶菓子を持って居間へ向かうつかさに
「つかさ、くれぐれも転ぶなよー？」
と俺が声をかけるとつかさは困ったような声で
「大丈夫だよ～。というか、けいちゃんわたしがどこでも転ぶ人だと思ってない～？」
そういうつかさに俺は
「思ってないけど心配はしてるぞ？」
と返事するとつかさは

「ううう、どんだけ～・・・。」

といいながらキッチンを後にした。

俺も入れたての紅茶を持ってキッチンをでて居間へ戻っていく。

「皆お待たせ。紅茶だけど飲んでくれ。」

と、みなの前に紅茶を並べた。

皆はそれぞれにいただきますと言い紅茶とお茶菓子に手をつけ始めた

「このクッキーも美味しいね、つかさの作ったのも最高だけどさ。」

こなたの言葉に俺は

「つかさのクッキーか、俺も食べてみたいかも。」

俺がそう言うとつかさは顔を赤くして

「今度作ってきてあげようか？」

と俺に言って来たので俺は特に断る理由もなかったので

「いいのか？なら頼むよ。」

というとつかさはますます顔を赤くして小さく「うん」と頷いた

その様子をみていたこなたは少し不機嫌になりながらも

「むう、ならば慶一くんのお弁当を私が作ってしんぜよう。お菓子作りではつかさには敵わないしね。」

突然の爆弾発言に戸惑う俺はそこまでしてもらうのは流石に悪いと思って

「こ、こなた？流石にそこまでしてもらうのは気が引けるんだが・・・。」

俺がそういうとこなたはニマニマとした笑顔を向けながら

「遠慮しなくていいよ。それに私の料理の腕前を見せられるチャンスだしね。」

俺は数日前の昼休みにこなたが料理できるという事に半信半疑だった事を思い出し

「その証明の為、っていうのならこなたの腕を見せてもらうのもいいか。」

俺がそう答えるとこなたも少し顔を赤くして

「ま、まあ、期待しててよ。」

と、どこか余裕のなくなった顔で言った。

そんな様子を見ていたかがみとみゆきは

「私はそういうの難しいもんな・・・こなたやつかさが少しうらやましい・・・。」

と落胆した表情を見せてみゆきも

「私ももっとがんばりませんと・・・。」

と少し暗い顔でそう呟いていた。

さらにこうとやまとも

「私も先輩に何か作ってみようかな?」

「何か他の事でがんばってみるべきかしら・・・?」

と言っていた。

俺はこなたとつかさ以外の声を聞き取れなかったが雰囲気的に何か落ち込んでるっぽいな、というのは分かった。

その後も皆と楽しく談笑したり、騒いだり、ゲームで盛り上がったりして今回の俺の自宅への訪問は終わったのだった。

少しずつ変化していく日常、そして新たに増えた家族と、俺の周りで楽しげな音楽を奏でる旋律、俺の日常は、この旋律と共にあるのだと改めて思う日だった。

巡り会う旋律その1～小早川ゆたか～

四重奏達の自宅訪問から数日。

ゴールデンウィークを間近に控えたある日の休日俺はまた一人の旋律との巡り会いを果たすのだった。

俺は久しぶりに一人きりののんびりとした休日を過ごしていた。

近場への買い物の用事もあったので、そこでの買い物を済ませて家に帰ろうと道を急いでいたら、俺の数メートル前で少しふらつきながら歩く赤い短めの髪をツインテールにした、見た目には小学生のような女の子がいた。

俺はなんとなくその女の子の挙動が気になり自分のペースを落としてその子の様子を見ながら歩いていると、その子は突然その場にうずくまるように座り込んだのを見て俺は急いでその子の元へ駆けつけた。

その子を見ると真っ青な顔をして苦しそうにしていたので、俺はとりあえずその子の容態の確認の為その子に声をかけてみた。

「君、大分具合が悪そうだけど、大丈夫かい？」

俺がその子に尋ねて見るとその子は弱々しい表情で俺を見上げ、けど強がりとも取れる態度で

「へ、平気です。少し気分が悪くなっただけですから、気にしないで下さい・・・。」

苦しそうに俺に返事してくるその子を見て俺は（全然平気に見えないぞ？）と心の中で思いつつ

「とてもそうは見えないよ。とりあえずここにいつまでも居るわけにはいかないな。」

俺はそう言ってその子に手を伸ばして

「ほら、立てるかい？」

と促すと女の子は俺を見て怯えたような困惑したような表情をしながら

「いえ、大丈夫ですから。すぐに具合はよくなりますから心配しないで下さい・・・。」

それでも俺に対して迷惑をかけるかもしれない事を嫌がっているのか中々俺の差し出した手を掴もうとしない。

俺はこのままじゃまずいかもしれない、と心の中で思いながらもとりあえず無理にでも女の子を休ませなければと考え、強行手段に打って出た。

「ちょっとごめんよ？」

「えっ！？きゃっ！！」

女の子は短い悲鳴をあげたが俺は女の子を無理やりお姫様抱っこで抱えあげるとその女の子をあまり刺激しないように注意しながら近

くにあった公園のベンチへと連れて行く事にした。

始めのうちはその体制が恥ずかしかったのか弱々しいながらも抵抗をしていた女の子だったのだが、そのうちに意識を失ったらしく、俺はそれを確認しながらもそーっと女の子を運んでいった。

俺は背中が痛くならないように先程購入してきたタオルを取り出してベンチに引くと、そこに女の子をそっと寝かせてハンドタオルを濡らすのと水を確保するために自販機と水道に向かった。

水を確保しタオルを濡らして戻ってくると女の子の顔色は幾分か良くなってきていた。

俺は女の子の額に濡らしたタオルを当ててそのまま様子を見ることにした。

そうしてどのくらいの時間がたったのだろうか?俺も女の子の傍らで気がついたら寝息を立てていたのだが、女の子がもぞりと動くのを感じた俺ははっと目を醒ました。

女の子の方を見るとどうやら意識が戻ったらしく、上半身を起こして少しぼーっとしながら俺の方を見つめていたが自分の状態に気付いたのか慌てて

「え?あれ?ここは?私一体どうしてここで寝てたんだろう?」

半ばパニックになりながら頭にたくさんのハテナマークを飛ばして困惑する女の子に俺はクスリと笑いながら声をかけた。

「大丈夫かい?君はさっき歩いていて気分を悪くして倒れたんだよ。

俺が具合の悪い君に気付いてここに連れてきたのさ。」

俺が事情を話すとパニックになっていた女の子ははっと我に帰り、
俺の方を見て少し怯えたような表情で

「そ、そうだったんですか・・・私、またやっちゃったんだ・・・
あの、迷惑かけてごめんなさい。」

そう言って落ち込む女の子。

俺はその子を見つめながら

「また、ってしょっちゅうこんな風になるのかい?」

俺が女の子にそう聞くと女の子もばつが悪そうな顔で

「はい、私、昔から体弱くて・・・いつもいろんな人に迷惑かけちゃうんです・・・。」

さらに暗い顔になる女の子を見て何だか気の毒になりながらも俺は

「そうなんだ。大変だな、そういうのも。」

かける言葉が月並みになってしまってるのを自覚しながらもそう言う事しか言えない自分がもどかしかったが

「とりあえず体は大丈夫?まだ気分悪いかい?」

俺はこの暗い雰囲気をどうにかしようと思い、話題そらしの為女の子の体の具合を聞いてみることにした。

女の子も俺に頷きながら

「はい、もう大丈夫です。ごめんなさい、お兄さんは私を助けてくれたんですよね？」

まだ俺に対しての警戒心を残してはいるようだがそれでも目の前の人が自分を助けてくれたのだろうと理解した女の子は俺にお礼を言ってきた。

俺はそんな女の子の様子を見てほっと一息つくと安堵して

「まあ、一応そういう事かな。急に倒れたときには驚いたけど、何事もないならなによりさ。」

俺は女の子に優しく笑いながらそう言うと女の子は顔を赤くして

「ありがとうございます。お兄さん、ご心配をおかけしました。もし良かったら名前を教えていただけませんか？」

女の子は俺に名前を聞いてきたので俺は軽い自己紹介をする事にした。

「いいよ？俺は森村慶一、陵桜学園の2年生。よろしくな。」

俺がそう挨拶すると女の子も俺に名前を教えてくれた。

「私は小早川ゆたかといいます。森村さんは陵桜学園といいましたよね？実は来年私もそこを受けるつもりなんですよ。」

小早川さんは俺ににっこりと笑いかけながら自分が陵桜を受験する事を伝えた。

俺は最初それを聞いて小早川さんに普通に

「へえ、君も陵桜をね、ふーん?そっかそっか・・・・・・ええええ!ちょっ、ちょっと待って?君、今いくつなの?」

俺は目の前の小早川さんの容姿を見てまだ中学生でもないだろうと思い込んでいたために小早川さんの陵桜を受けると言う言葉に、目の前の小早川さんがもう高校受験をする年齢であるという事に気がつかなかった。

というか、それに気がつかなかった俺を誰か責められるだろうか?

俺のそんなリアクションを見ていた小早川さんは何だか落ち込んで

「一応これでも中学3年生ですよ。まあ、私のこの容姿じゃ、みんなそうは見てくれませんけど・・・。」

と、暗い顔になりながら俺に言う小早川さん。

俺はそんな小早川さんを見て苦笑するしかなかった。

小早川さんを傷つけたかもしれないなと思った俺は小早川さんにさっきの事を謝ろうと思い

「ごめん、小早川さん。見た目で君の事をそんな風に判断してしまった。本当にごめんよ?」

俺が申し訳なさそうに謝ると小早川さんは両手を振って

「いえ、いいんですよ。実際中学三年生、ましてや受験生だなんて見てもらえる体じゃないですし。」

そう言いながらもまた少し落ち込む小早川さんに俺はなんとか元気付けてあげようと思い

「大丈夫だよ小早川さん。まだまだ成長期なんだから希望は捨てないで。」

俺がそう励ましの言葉をかけると小早川さんも少し元気を取り戻して

「そうですよね？まだまだこれからですよね？森村さんの言うように希望を捨てずにがんばりますね？」

そう言って笑ってくれた。

俺はそんな小早川さんの笑顔をみて少しほっとしていたがそこに突然後ろから怒気を帯びた声をかけられた。

「君、うちのゆたかに何をしているのかな？場合によってはこの場で逮捕するよ？」

その声に驚いて振り向くとそこには婦人警官が立っていた。

その人は俺を鋭い視線で射抜くように見つめながら俺の近くにいた小早川さんに声をかけた。

「ゆたか、大丈夫かい？変な事されてない？」

その人は小早川さんに無事を確認するように言うと小早川さんは慌てて

「違うよ、ゆいおねーちゃん。この人は、森村さんは具合が悪くなって倒れた私を助けてくれたんだよ。」

と、”ゆい”さんと呼ばれた人に事情を説明してくれた。

それを聞いたゆいさんはさっきまでの鋭い視線を解いて俺の方を向いて

「そうだったんだー。ごめんね?早とちりしちゃってさー。ゆたかは私の大事な妹だから、つい本気になっちゃった。ごめんね?えっと、森村君でよかった?」

そう言って早口でまくし立てながらも謝ってきたので俺はほっと、安堵のため息をつきながら

「いえ、誤解が解けたのならそれでいいですよ。改めまして、森村慶一です。小早川さんのお姉さんだそうで。」

俺がそう尋ねるとゆいさんも俺に自己紹介をしてくれた。

「うん。そうだよ?私は小早川ゆい。そこに居るゆたかのおねーさんなのさ!最も6月には結婚するから私の性は成実になるんだけどね。それと見ての通り交通課に勤務する警察官でもあるのさー♪」

びしっと親指を立ててはじけるような笑顔で自己紹介するゆいさん。

俺はそんなゆいさんに気圧されながらも

「そうなんですか。おめでとうございます。幸せになってくださいね。それと、警察官やってるなんて凄いですね。身内に警察官がいるのなら、小早川さんとしてもかなり心強いでしょうね。」

俺が素直に祝福の言葉と素直な感想を述べるとゆいさんもにこにこしながら

「ありがとうー森村君はいいやつだねー。それと、改めて、ゆたかを助けてくれてありがとうね?」

ゆいさんがそう言うと小早川さんも俺に

「森村さん。私を助けてくれてありがとうございます。とても嬉しかったです。」

二人してお礼を言って来たので俺も照れながら

「いえ、俺は人として当然の行動を取ったまでですから、特にたいしたことをしたわけじゃありませんよ。」

俺は恐縮しながらも二人にそう返すと二人ともにっこりと笑ってくれた。

あれから大分時間も経ったようなので俺はおもむろに携帯を取り出し時間を確認するとそろそろ戻らなければならない時間だったので

「すいません。小早川さん、ゆいさん。俺そろそろ戻らないといけないんで。」

俺が二人にそう言うとゆいさんと小早川さんは

「そっかー。残念だけどここでお別れだねー。ゆたかの事ありがとうね?森村君。」

ゆいさんが俺にそう言い小早川さんも俺に頭を下げながら

「森村さん。今日は本当にありがとうございました。さっきの話なんですが森村さんて陵桜の人なんですよね?」

そう尋ねてきたので俺も小早川さんに

「ああ、そうだよ?それがどうかしたの?」

と返事を返すと小早川さんは下を向いてもじもじとしながらも意を決して俺に

「もし私が陵桜の受験に合格して陵桜に行く事になったら、私とも・・・あの・・・お友達になってもらえませんか?」

顔を赤くしながらも俺に勇気を出してそう言ってくる小早川さんに俺も笑顔で

「ああ、いいよ?俺でよければね。」

そう答えると小早川さんは凄く喜んで

「ありがとうございます。私がんばりますから、だから、陵桜で待っていて下さいね?森村さん。いえ、その時には、慶一先輩って呼

ばせもらいますね?だから、その、私の事も、その時には私の事を名字ではなくて名前で呼んで欲しいです。」

ゆたかが俺にすごくいい笑顔でそう言ってきた。

俺はそんなゆたかの気持ちに応えるため

「ああ、これからも色々大変だろうけど自分の体に負けないようにがんばれ。そして陵桜に無事合格する事を祈ってるよ?その時までがんばれよ?・・・ゆたか。」

俺が最後にゆたかの事を名前で呼ぶとゆたかは目を見開いて驚いていたが、やがてその顔は笑顔へと変わった。

俺はゆたかに伝えるべき事を伝えた後、二人に手を振って別れると、再び自分の家へと足を急がせるのだった。

また一人巡り会った旋律。

俺は何故かは分からないが他にもこんな風に出会う旋律があるようなそんな予感を感じ取っていた。

ゆたかｓｉｄｅ

「いい人に助けてもらえてよかったね?ゆたか」

ゆいおねーちゃんがが私にそう言ってくる。

私も今日の事を思い出して自然と笑顔になって

「うん。優しい人だったよ。ああいう人に出会えたのは運が良かったのかもしれないね。」

ゆいおねーちゃんに返事を返しながら高校受験に向けて更なるやる気が出るのを感じていた。

（絶対に受験に成功して陵桜に行って、森村さんの事先輩って呼びたいから、私、がんばる！）

私は心の中でそう誓い、ゆいおねーちゃんに自分の決意を言った。

「ゆいおねーちゃん、私、俄然やるきでてきたよ。受験頑張るから、応援してね？」

私の決意を受け取ったのか、ゆいおねーちゃんも私に笑顔で

「おねーさんにまかせなさい！絶対に応援するから、受験がんばろう！」

親指をびしっと立てて、私を励ましてくれるおねーちゃんだった。

私は、この受験が何だか上手く行きそうな、そんな予感を感じるのだった。

次々と現れ物語を織り成す旋律達。

それはこれからどんな音楽を奏でていくのだろうか。

旋律達との出会いはまだ終わらない・・・・・・

巡り会う旋律その1～小早川ゆたか～（後書き）

次はみなみを出す予定、ひより、パティはもう少し後の登場予定です

巡り会う旋律その2～岩崎みなみ～

新たな旋律との巡り会いから少し経ったある日、俺は連休前に再び実家の方から呼び出しを受けて龍神（たつかみ）の家へと向かっていた。

長い休みに入る前等は一度顔を見せに来いと言う親父との約束があったため、仕方なく帰るしかなかった。

そこでもまた更なる旋律との巡り会いが待っていることを知らないままに、列車は実家の最寄駅へと走っていくのだった。

実家に着いた俺は早速、親父とお袋に挨拶する為に家へと行ったのだが、お袋はそこにいたのだが親父の姿が見えなかったのでお袋に居場所を聞いた。

「お袋、親父はどこにいるんだ？一応約束だから顔出しにきたけどさ。」

俺は半ば面倒だと言わんばかりにお袋に聞くと

「あの人なら道場にいるはずよ？行って顔を見せてきなさい。そうすればあの人も安心するでしょうから。」

お袋は全く平然としながら俺にそう言い親父の居場所も教えてくれた。

「わかったよ。お袋も相変わらずそうで安心したよ。あの親父はいつくたばっても構わないが・・・。」

お袋に親父への毒を吐くとお袋は苦笑しながら

「相変わらずねあなたたちは。ほんとお互いに素直じゃない所は似てるわよね。」

そう言ってクスクスと笑っているお袋を見てとりあえずほっとした俺はとりあえず親父に会いに行く為道場へと向かった。

道場に着くと相変わらず道場の理念を掲げた額縁を見上げて物思いにふけっている親父の姿を見つけたので、とりあえず顔を出しに来た事への報告をするのだった。

「親父、言われた通り顔見せにきたぞ！俺の顔を見れたからこれで安心して旅立てるな？」

親父に嫌味をぶつけると俺の声に気付いた親父は怒りの形相で

「旅立つとはどういう意味だ！？、私はまだまだ現役だぞ！！全く、口だけは達者になりおって・・・ともあれよく帰ってきたな。元気そうで安心したぞ。」

親父の怒声の後に父親らしい台詞がでてきたのを聞いて（俺も親父も素直にはなれないもんだ）と心の中で思いながら

「まあ、俺は達者でやってるよ。今回の事も約束だったからな。一応息子だし義理は果たすさ。」

そんな風に言う俺を父親の目で黙って見ていたが、何故か急にニヤつきだしながら

「今日は久しぶりに流派の型を復習していくといいだろう。この娘達にも久々にお前の演武を見せてやればいい。」

親父がそう言って道場の奥の方に向かって「こっちにきなさい」と声をかけると奥の方から見知った二人が顔を出したのを見て俺は驚いた。

そんな俺をみてニコニコと笑いながらその二人は俺に

「先輩、久しぶりにお邪魔しにきちゃいました。」

「中学校時代はよくここに来ていたと言うのに、今は別の所に住んでるなんて何だか不思議ね。」

と言って挨拶をしてくるのだった。

俺は大きなため息を一つついて

「こう、やまと、何故お前達がここにいるんだ?」

力なく二人にそう言うとこうが笑いながら

「先輩のお母さんに今日先輩が帰って来るから遊びにいらっしゃい。と言う連絡を受けまして。」

そう答えるのだった。

俺は心の中で（お袋め、余計な真似を・・・。）と悪態をついたがだからと言って二人をそのまま帰すというような無下な真似もできなかったので

「ふう、仕方ないな。少しばかり鍛錬する。退屈だろうけど俺の演武でも見ていてくれ。」

俺は二人にそう言う。

そして親父を睨みつけて

「親父も知ってやがったな?まったく小細工なんかしやがって・・・。」

悪態をつく俺を親父は一瞥したがすぐに知らん顔をしていた。

そんな二人のやり取りをニコニコと見ながら二人は期待の眼差しを俺に向けて

「先輩が中学三年生の頃見せてもらって以来ですね。何だか楽しみです。」

「私はあの時は都合が悪くて見に行く事が出来なかったものね。先輩、じっくりと見せてもらうわよ?」

二人の言葉に俺は笑って演武の準備をして

「まあ、たいしたもんじゃないがな。じゃあ、いくぞ?」

そう言うと同時に流れるように手足を動かし、時に力強く、時に繊細に拳を突き出し、蹴りを放ち、コンビネーションをつなげる体術を組み合わせたような演武をこなすのだった。

一通りの演武を終えて俺は息を切らしながら

「ふう、やっぱり少し鈍ってるな。久々だから息切れもしてる。これはちょっとみっともないかもしれん・・・。」

俺は大分鈍ってしまった自分の体に少し凹んでいたが俺の演武を見ていた二人から拍手と賞賛の声があがった。

「凄いです先輩。とても綺麗な動きでかっこよかったですよー？」

手を叩いて満面の笑みで俺を誉めてくれるこう。

やまとも同じように拍手をしながら

「初めて見るけど中々凄いのね。あの時にこうが先輩を誉めていたのもわかる気がするわ。」

同じように誉めてくれた。

その後練習を終えた俺は家のほうに戻って二人と雑談を交わしたりお茶を飲んでのんびりしたりしながら過ごし、頃合の時間になったので俺は帰る二人を送っていく事にした。

俺に申し訳なさそうな顔を向けながら二人は

「すいません、先輩。わざわざ送ってもらっちゃって。」

「良かったの？私達に付き添っても。」

と、言って来たので俺は笑いながら

「近頃物騒だからな。二人いるとはいえ女の子だけで帰らせる訳にはいかないからな。」

二人にそう言うと二人は少し顔を赤くして

「えへへ。それじゃお世話になります、先輩。」

「頼りにしてもいいのよね？」

と言って来たので俺も二人に力強く頷いて

「ああ、まかせろ。」

そう返事をするのだった。

道中は特に危険な事もなく無事に二人を送り届けると俺は一度龍神の家に顔を出してから帰ろうと思い、家へと歩みを進めていた。

しばらく歩いてると以前にみゆきを助けた場所にさしかかった。

俺は少し足を止めてその時の事を思い起こしていたがすぐに後ろからきた何かに思考を遮られる事となった。

わう！わう！俺の後ろから犬の吠え声が聞こえたと思った瞬間、俺は大きな白いハスキー犬にのしかかられていた。

その犬は俺を押し倒す形になり運悪くそこにあった水溜りに突っ込む形になった。

しかしその犬はそれすらもお構いなしですぐさま俺の顔をぺろぺろと舐めまわし始めた。

俺は上半身びしょぬれになったが、犬は嫌いじゃなかったのでされるがままにされつつ犬の頭をなでていたが、その後ろからか細い声でその犬を止めようとしている少し背の高い、緑色の短い髪の毛が特徴の女の子？の姿を見た。

「・・・チ、チェリー・・・だめ・・・やめなさい・・・。」

その子はおろおろとしながらもなんとか犬を止めようとするが犬は静止を聞かずなおも俺の顔を舐めつづける。

俺はふうと一つため息をつくと、なおも顔を舐める犬を引き剥がしておもむろに立ち上がるとその子を落ち着かせようとつとめて優しい声で声をかけた。

「大丈夫だよ。そんなにおろおろとしなくても俺は別に怒ってはいないからさ。」

俺がそう声をかけるとその子は一瞬ビクッと体を震わせて俺におそるおそる

「・・・す、すみません・・・うちの子がとんだご迷惑を・・・。」

その子はかなり落ち込みながら俺に謝ってきたが、俺は特になんとも思っていなかったのでその子をなだめるように

「ははは、これ位平気さ。それに俺は犬は好きだからね。」

その子に優しく微笑みながら俺がそう言うと、その子は少し安心したのか緊張を解いて

「・・・そう・・・ですか・・・あなたも犬が好きなんですね？」

まだ少し態度に怯えを残しているようだったがそれでも俺が怒っていないというのと犬が好きな人だと言うのが分かって安心したのだろう、さっきよりは柔らかい口調になったようだ。

「ああ、ほかに猫も好きだな。うちでも飼ってるんだ。」

俺が笑顔でそう言うとその子もようやく笑顔を見せてくれて

「・・・猫、かわいいですか？私も猫もきらいではないです。」

そう答えてくれたので俺は携帯を取り出して猫の写真をその子に見せる。

「ほら、こいつらさ。どうだ？かわいいだろう？」

俺が写真を指差しながらそう言うと写真にしばし見入っていたその子も

「はい・・・とてもかわいいですね・・・。」

そう言って微笑んでいた。

その子がふと俺の方を見たとき俺が先程水溜りに突っ込んで上半身びしょ濡れになった事に気付いたようでまたも暗い顔になりながら

「あの、そのシャツうちの子の所為ですよね？もしよろしければ家に寄って行ってもらえますか？そのシャツの洗濯をさせて欲しいので・・・。」

俺のシャツを指差しながら申し訳なさそうに言うその子に俺は言葉を返そうとしたら更にまた後ろから声をかけらた。

「あら？みなみちゃんにチェリーちゃん。どうしたんですか？こんな所で。」

みゆきに声をかけられ”みなみ”と呼ばれた子は少し慌てた様子でみゆきに挨拶を返していた。

「・・・みゆきさん・・・こんにちは・・・私、チェリーの散歩をしてたんです・・・。」

そう答えるみなみを見てみゆきも

「まあ、そうでしたか。今帰られるところだったんですか？・・・あら？」

そうみなみに言いながらふと視線を巡らせた時、みゆきは俺の存在にも気付いたようで俺にも挨拶をしてきた。

「慶一さんこんにちは。どうしたんですか？こんな所で？」

不思議そうに首をかしげながら俺に聞いてくるみゆき。

俺はここには実家の用事のついでで偶然来た事、この場所でさっきまで起きていた事を説明した。

事情を説明するとみなみは少し顔を赤くしてうつむきながら申し訳なさそうにしていた。

俺の説明を聞いてみゆきは柔らかな笑顔を俺たちに向けながら

「まあ、そうだったんですか。それは大変でしたね・・・。」

頬に手をあてて首を少し傾げる仕草でそう言うみゆき。

そしてみゆきは自分の横にいる女の子を一歩前に出させると俺にその子の紹介を始めた。

「慶一さん、この子の事を紹介しますね。この子は岩崎みなみちゃんです。私の家の近所の子で私にとっては妹みたいなものなんですよ。」

みゆきがみなみを紹介するとみなみも俺におどおどとしながらも自己紹介をしてくれた。

「岩崎みなみです・・・みゆきさんとは幼馴染です・・・よろしくお願いします。」

その後自分の飼っている犬も紹介してくれるのだった。

「・・・この子はチェリーといいます。シベリアンハスキーの女の子なんですよ。」

俺は犬の方を見ると犬も一声吠えて自己主張したようだった。

一通りみゆきｓｉｄｅの紹介が終わり、みゆきは今度は俺をみなみに紹介してくれた。

「みなみちゃん、この人は私と同じ学校の生徒さんで森村慶一さんです。私のお友達なんですよ。」

みゆきがみなみにそう言うとみなみは何かを思い出したらしく

「・・・森村・・・慶一・・・さん?じゃあ、あの時にみゆきさんのお手伝いをしてくれた森村さんって・・・。」

そう言うみなみにみゆきはにこりと笑って

「ええ、そうですよ?この人がその森村慶一さんなんです。」

微笑みながらみなみにそう伝えるみゆき。

みなみは俺の顔をしばらく凝視していたがやがて

「・・・と・・・言う事は・・・陵桜の生徒、って事ですよね?」

俺におずおずと聞いてきたので俺は頷いて

「ああ、そうだよ?俺は陵桜の所属さ。」

俺がそう答えるとみなみは感情の読み取り難い目を俺に向けて

「私も、来年はそこを受けようと思っているんです・・・みゆきさんもいる、陵桜を・・・。」

そう言って来たので俺はみなみに笑顔を向けながら

「そうか。結構レベル高い学校だけど無事に合格するといいな?」

俺がそう言うとみなみは顔を赤くしてうつむきながら

「ありがとう・・・ございます・・・みゆきさんは私の目標ですから、絶対に合格したいです・・・。」

それでも決意を秘めた瞳を俺に向けて言って来たので

「まだまだ時間はあるさ。目標があるならそれをモチベーションにしてやっていけばいい。そうすれば自分の実力を本番でも出し切れるようになるさ。」

みなみに激励の言葉を投げかけた。

みなみもそんな俺の言葉にうっすらと微笑みを見せると

「励ましてくれてありがとうございます・・・。」

短くそう言いながらもどこか嬉しそうだった。

その後こっそりとみゆきにみなみを励ました事を感謝され、とりあえずさっきびしょ濡れになったシャツの事を思い出し、どうしても洗濯するというみなみの頑固さに押し負けてみなみの希望通りにしてもらう事にしたが、みゆきが、「洗濯をするならば家に来てください。」という提案にみなみも承諾して俺達はみゆきの家へと向かった。

やがてみゆきの家について・・・・・・

「へえ？ここがみゆきの家か・・・？」

俺が感心しながらいうとみゆきは自分の家の真向かいの家を指差して

「あそこがみなみちゃんの家ですよ？」

と言ってみなみの家を教えてくれた。

俺はなるほど、と納得しつつみなみと共にみゆきの家の玄関へと赴いた。

玄関を開けてみゆきが「ただいま帰りました。」と声をかけるとパタパタと軽い足音を響かせてみゆきにどこかそっくりな女の人が俺たちを出迎えてくれた。

「おかえりなさいみゆき。それとみなみちゃんいらっしゃい。」

みゆきとみなみを出迎えた後俺の事に気がついたのかその女の人が俺に声をかけてきた

「あら？あなたは誰だったかしら？みゆきのお友達？」

その女の人が俺に声をかけるとみゆきがすかざず

「はい、同じ学校の生徒さんで森村慶一さんというんですよ？お母さん。」

そう答えてくれた。

だが俺はそこみゆきがその女の人をお母さんと呼んでいた事に驚いていた。

見た目にはどう見てもおねえさんにしか見えなかったからだ。

俺は少し動揺しつつも

「初めまして。みゆきさんの友達の森村慶一です。よろしくお願いします。」

俺もみゆきのお母さんに挨拶を返すとみゆきのお母さんも俺ににこにことしながら自己紹介をしてくれた。

「森村君ね?私はみゆきの母で高良ゆかりというの。よろしくね?」

人懐っこそうなそれでいて癒されそうな笑顔を俺に向けてくるそしてみゆきに

「みゆき、みゆきが男の子を連れてきたからてっきり彼氏でも出来たのかと思ったじゃない?」

いきなりの爆弾発言にみゆきは真っ赤になって

「ち、違いますよ、慶一さんはまだ彼氏じゃなくて、お友達、ですから・・・。」

パニックになりながらもみゆきも何気に爆弾発言をしている事に俺とみなみだけが気付いて二人とも真っ赤になっていた。

とりあえずみゆきも気を取り直してゆかりさんに俺がここに来た経緯を説明してくれた。

「そういう事だったのね。とりあえず上がって頂戴。洗濯が済むまではお父さんのシャツを代わりに着ててね？」

俺たちはとりあえずみゆきの家にお邪魔して俺はみゆきにシャツを預け、みゆきのお父さんのシャツを借りて着替えてリビングで洗濯が終わるまでの間お茶を頂きながら談笑をしていた。

「・・・・・って事があってですね。」

「そうなんですか。面白いですね。」

「慶一くんのお話って面白いわねぇ。」

「・・・とても楽しいです。」

そんな感じでいろいろ話しながら楽しい時間が過ぎていった。

やがてシャツの洗濯も済み、俺はそのシャツに着替えた後お借りしたシャツを持って「お借りしたシャツは洗濯してお返ししますから。」と俺はそう言ってみゆきとゆかりさんに見送られながら、みなみと共に高良家を後にした。

高良家の家の前で俺はみなみに笑いかけながら

「なんか色々とすまなかったな。わざわざ洗濯もしてもらっちゃったしな。」

俺がそう言うとみなみは顔を赤くしてうつむき

「・・・いえ、元はと言えば私が原因でしたから。チェリーの事もありますし・・・。」

恐縮しながら言うみなみ。

俺はみなみの頭を軽くぽんと叩いて

「その事なら気にしてないっていったろ?だから、あまり気にするな。」

俺が優しい声でそう言うとみなみも顔を上げて

「はい、わかりました・・・でも、森村さんには何かお詫びをしたいと・・・。」

まだ気にしてる風だったので俺はどうしたものかと思案していたが一つ名案が浮かんだのでみなみに

「そうしないと気が済まないという岩崎さんの気持ちは分かった。なら、お詫びの代わりに一つ俺の頼みを聞いて欲しいんだが、いいかな?」

とみなみに聞くとみなみは俺の言葉に首をかしげて俺を見つめて

「・・・頼み、ですか?」

と聞いてきたので俺はみなみに思いついた頼み事を話した。

「ああ、もし岩崎さんが陵桜に受かって学校に通う事になったらさ、是非友達になってやって欲しい子がいるんだ。」

俺がそう言うとみなみは俺に

「・・・友達・・・？その子は一体・・・？」

そう聞いてきたので俺は更に言葉を続けて

「ああ、その子も君と同じで陵桜を目指してる。そして、きっとその子には君みたいな子が友達として必要になると思う。」

俺はみなみの目を見つめて言葉をつむぐ、みなみは俺の言葉を反芻するように

「私が・・・その子にとって、必要・・・。」

俺はみなみのその言葉に大きく頷いた。

そして

「できる事ならばその子の事を助けてあげてくれないか？それが君の俺に対するお詫びの代わりのお願いだ。」

俺が話し終えるとみなみは俺に

「・・・そういう事で・・・いいのでしたら・・・そのお願いを私は受けようと思います。」

みなみは決意を秘めた瞳で俺にそう伝えてくる。

そして俺は

「受けてくれるか。悪いな、こんな頼みごとで・・・。」

みなみに後頭部を書きながらそう言う俺。

みなみは俺を見てこくりと頷くと

「それで、森村さんの言うその子の名前はなんというのですか?」

みなみは俺に最後の確認をしてくる。

俺はみなみににっこりと笑い一度瞳を伏せて再びみなみの目を見て

「ああ、その子の名前はな・・・・・・。」

俺はみなみにその子の名前を告げた後、みなみと陵桜で再開する事を約束してそれぞれの帰路へとついた。

俺は今日一日のあの子との事を思い出し、あの子ならきっと大丈夫だろうという確信を持ったのだった。

みなみｓｉｄｅ

自分の部屋でベットに転がりながらみなみは今日の出来事を思い出していた。

（・・・あの人がみゆきさんの言っていた森村さんか。おおらかでなんか優しい人だったな・・・森村さんが私に頼んだ事、陵桜に合

格できたなら森村さんのお願いに応えよう・・・その子も無事に陵桜に受かればいいな・・・そして、森村さんとも再会できたなら・・・先輩と呼ばせてもらわなきゃ・・・。がんばろう・・・そして私の新たな目標のために・・・。）

みなみはこれからの目標に向かって決意を新たにするのだった。

旋律は旋律を呼びそれらは更なる旋律を呼び寄せる。

そしていつしかそれらは束ねられ大きくなって更に大きな旋律を生み出していく。

俺の作ったきっかけが更なる旋律を呼び込む事になる事を俺は知らない。

運命は確実に一つの場所に向かっている事を気付きもしないままに。

巡り会う旋律その2～岩崎みなみ～（後書き）

1年生組は次の田村ひよりで一度区切ります。

巡り会う旋律その3～田村ひより～

思いがけない旋律との巡り会いから数日後。
世間ではゴールデンウィークに入っていた。
その初日こなたからの提案もあり、四重奏と共に俺は秋葉腹へと来ていたのだった。

「こなた、とりあえず聞くが、わざわざゴールデンウィークの初日にここに来る理由は？」

俺は少し呆れ気味にこなたに聞くとかがみも何だか疲れたような顔で

「まったくよ・・・せっかくの大型連休なのに初日からどうしてこんな濃い場所に来なきゃならないわけ？」

こなたに嫌味をぶつける。
そんなかがみにつかさも苦笑しながら

「まあまあ、おねえちゃん。折角みんなで来たんだからとりあえず楽しもうよ？」

そういいながらかがみをなだめるつかさを微笑ましそうに見て、いつもの微笑みを浮かべているみゆき。

「そうですよ？かがみさん。来た場所はその、こういう場所ではありますけどみなさんこうして集まれたのですし。」

とりあえずかがみにフォローをいれつつなだめていた。
そんな様子を見ていたこなたは少し不満そうな口調で
「いいじゃん、一度みんなと来てみたかったんだよ。それにかがみもそう言ってる割にはまんざらでもなさそうに見えるけど？・・・新刊、買いたいんでしょ？」
こなたがぼそりと突っ込むとかがみは途端に顔を真っ赤にしてこなたにくってかかり
「う、うるさいな！とりあえず欲しいものが無い訳じゃないんだし別にいいじゃないのよ！」
そんなかがみを軽くあしらうこなた。
「はいはい、そうですねー。まったくかがみは素直じゃないんだから♪」
「こ、こなたあー！」
とすかさず激昂しながらこなたに突っ込みをいれるかがみを見ながらつかさとみゆきも苦笑していた。
このままじゃ先にも進まないなと思った俺はとりあえず二人を止めにいった。
「二人ともそれくらいにしとけ、とりあえず巡らないと時間なくなるぞ？」

俺がそう言いながら二人に近づくとこなたはすぐに我に帰って

「おっと、そうだね、そろそろいかないと。とりあえずかがみの欲しい物もある本屋を中心に責めようかー♪」

いきなり素に戻ったこなたに調子を崩されたかがみは大分戸惑ってるようだったがとりあえずこなたの言う事に同意を示した。

「う、なんか調子狂うわね・・・とはいえ確かにそろそろ動かないと時間もなくなりそうよね。とりあえずこなた、あんたが言い出しっぺなんだから私達をちゃんと先導しなさいよ?じゃあ、いきましょ?つかさ、みゆき、慶一くん。」

「うん、行こうか、おねえちゃん。」

「そうですね。行きましょう、みなさん。」

「そうだな、とりあえずお前の方が詳しいんだろうから付いて行くぞ?」

俺たちがそれぞれ返事をするとこなたは無い胸を張って親指をびしっと立てて

「まかせたまへー♪じゃあ、ちゃんとついてきてね?それでは出発しようではないか皆の衆ー!」

そう言って歩き出すこなたに俺たちは付いて行くのだった。

そうしてついた場所は・・・・・・

「やっぱし、〇二メ〇ト・・・。」

俺は疲れたような声でそう呟いた。

そんな呟きを目ざとく聞きのがさなかったこなたが俺に

「〇二メ〇トを馬鹿にしちゃいけないよ？これほどまでにグッズや漫画、ゲーム等が充実してる所なんてそうはないんだからね？」

人差し指を立てて俺に力説するこなたに気圧され苦笑しながら俺は店内で不穏な気配一瞬感じたのだが（気のせいだな）と心の中でその気配の事を否定するのだった。

そして、みんなが各々自分の目的の場所へと散っていったがこなたと漫画を買いたいつかさは一緒に行動して、かがみはラノベコーナーへと移動してみゆきもそれについていくという感じで別れた。

俺はとりあえず探しているゲームがあったのでソフトの置いてあるコーナーへと向かった。

こなたｓｉｄｅ

皆と別れ別れになりそれぞれのコーナーへと散っていったのだけど私はつかさと共に漫画のコーナーへと来ていた。

私はつかさの動向に注意しつつも漫画を物色しながら歩く。

「うーん、今月はあまり新刊でてないっぽいね・・・とはいえ、これとこれははずせないよねー♪」

そう言って手にとった漫画はハルヒの新刊＜漫画の方＞とコードギアス。

つかさは自分が好きだと言っていたケロロ軍曹を手にとっていた。

「やっぱりこれ、面白いしかわいいから好きだな～。」

つかさは私に満面の笑みを浮かべてそう言ってくる。

「つかさはそれ好きだよねー？私も結構好きなんだけどさ。」

「うん、なんか凄く気に入ってるの～。」

無邪気な笑顔でそう返してくるつかさに私はここに皆を連れて来た本当の目的の実行の為につかさに

「じゃあ、つかさはそれを買うんだね？ねえつかさ、お願いがあるんだけどさ。」

そう声をかけるとつかさも私の方を振り向いて不思議そうに首をかしげながら

「うん？なあに？こなちゃんお願いって。」

私は心の中でニヤリとしながら

「つかさの買う漫画の買い物分のポイント、私に頂戴？」

その事を頼むと、つかさは特に気にした様子もなくにっこりと笑って

「いいよ?そんな事くらいならおやすい御用だよ。」

と言ってくれたので私はつかさにお礼を言って自分の分の漫画とつかさの分の漫画の会計をしてポイントをゲットするのだった。

「さて、これでいいかな?それじゃ他の皆のとこいこっかー。つかさ、ちゃんと付いて来ないとだめだよー?」

私がつかさにそう促すとつかさも少々慌てながらも

「う、うん、わかったよ~。」

と返事をしながら付いて来るのだった。

かがみｓｉｄｅ

こなたに散々からかわれながらもとりあえず私も欲しい物があったのでこなたに付き合ってここに来た。

(ここは店の雰囲気とかに目をつぶれば品揃えは確かにそれなりだったから、私も何だかんだいいながら利用している事は否定はしないのだけど・・・こなたに付き合うようになってから何だか自分も普通の感覚って奴を忘れそうになるなあ・・・。)

などと言う事を考えながらみゆきとともに自分が好きなラノベのコーナーへとやってきた。

(そういえば慶一くんもこういうのは特に嫌いなわけじゃないって言ってたわよね?私が読むようなこういうものも好きかなあ?)

という事を考えながら目的の新刊を物色していく。

みゆきも興味深そうにきょろきょろと私が探しているラノベのコーナーを見ていた。

私はふと、みゆきはこういう物は興味あるのだろうか?と思い、みゆきに聞いてみることにした。

「ねえ、みゆき?私と一緒にラノベのコーナーに付いて来たけどみゆきも少しはこういうものに興味あるの?」

みゆきに尋ねてみるとみゆきは頬に手を添えつつにっこりと笑いながら

「そうですね、私は主には普通の小説なんかをよく読んだりしますけど、こういうものもある、という事には興味を惹かれますね。」

そう答えるみゆきの言葉に私は目を輝かせて

「そう?ならさ、みゆきもちょっとこういうの読んでみない?私の周りってこういうの好きな人いなくってさ、すこしがっかりしてたとこなのよ。」

みゆきがラノベに興味を持ってくれそうな事が嬉しかったのか、ついみゆきに詰め寄りまくし立ててしまった。

そんな私の行動に苦笑しながらもみゆきは

「それなら、かがみさんのお勧めを今度お借りしてもよろしいでし

ょうか？」

そう言ってくれる。

みゆきのその言葉に私は嬉しくなって

「分かったわ。今度みゆきには私のお勧めを持っていくから後で是非感想を聞かせてね？」

私が嬉しそうな顔でそう言うとみゆきはにっこり笑って頷いて

「はい。楽しみにしていますね？」

そう言ってくれた。

私はそんなみゆきに同じように笑顔を返しながら

「うん。楽しみにしてて？」

そう返事を返すと、とりあえず私はフルメタとそれ以外のいくつかの新刊を手に取り買い物を済ませる為にみゆきを伴ってレジへ向かおうとした。

すると私の横から

「かがみん！やっと見つけた。ねえ、その手に持ってる本の会計ってもう済ませちゃった？」

そう言いながら私に声をかけてきたのは自分の買い物を済ませ私たちを捜し歩いていたこなただった。

私はこなたに反射的に突っ込みを入れていた。

「かがみんいうな！これの会計はこれからよ。でもそれがどうしたの？」

私がこなたに尋ねるとこなたはキラリと目を光らせて

「ねえ、かがみ、その買い物の分のポイント私に頂戴？」

と懇願してきた。

私はこなたのお願いに呆れつつもとりあえずポイントは集めたりはしてなかったので

「いいわよ。それじゃ一緒に来なさいよ。ポイントカードはちゃんとあんたが出すんだからね？」

私がそう言うとこなたは物凄く喜んで

「やたー♪かがみんありがとうー♪」

物凄くいい笑顔で言っていた。

私はそれをみて軽くため息を一つついてやれやれと心の中で言っていたがとりあえず一つだけやる事が出来たのでそれを実行した。

「こなた、かがみん言うな！」

そう突っ込みを入れたがこなたはポイントをゲットしてほくほくし

た顔をしていてまるで堪えていないようだった。
それぞれの会計を済ませて私達は最後に慶一くんを探す事にした。
とりあえずこなたに
「こなた、慶一くん探しましょ？後は彼だけだしね。」
私がそう提案するとみんなも
「そうだねー。慶一君も何か買い物あるようだったから慶一君の分のポイントももらわなくっちゃ♪」
「わたしも買い物済ませたし、けいちゃん一人っきりで回ってるみたいだもんね？」
「慶一さんを見つけてここから出てどこかで休んでいきませんか？」
そう言って同意してくれたので私達は慶一くんが行った方へと向かって歩き出した。
一人まだポイントをたかりたがってる奴がいるけれど・・・・・。
慶一ｓｉｄｅ
俺はみんなと離れて一人探しているゲームを求めてソフト販売のコーナーへとやってきていた。
そこに辿り着いた時、再び不穏な気配を感じたのでとりあえず周りを見回してみると赤いサンバイザーを被り、真っ赤なエプロンを身

につけた怪しい人物が立っていた。

怪しい人は俺と目が会うと物凄い勢いで俺の側へやってきて

「君、ちょっといいか？君はあの伝説の少女Ａと知り合いなのか？」

と、何だか訳の分からない事を言ってくる。

俺は頭にハテナマークを浮かべて

「伝説の少女Ａ、ですか？誰の事です、それ？」

俺がそう返事を返すとその人は俺の両肩をがっしりと掴み

「君と一緒にこの店に来た青い髪の少女の事だよ！！それでどうなんだ？君はあの子の知り合いなのか！！？」

俺の方をぶんぶんとゆすりながら聞いてくる怪しい人。

俺は困惑しながらも

「一応、知り合いですよ。今日もあの子に付き合ってここに来たんですがね。」

俺がそう言うとその人は途端に笑顔になり

「そうか。伝説の少女Ａと知り合いの君はやはり特別な存在なのかも知れないな。ならば君を今日から伝説の少年Ａと呼ぼう！！」

俺をびしぃ！！っと指差して言う怪しい人。

俺は更に困惑しながら

「なんなんですか？それは、それに貴方は一体誰なんです？」

俺がその人の素性を問うとその人は激しく自分の自己紹介を始めるのだった。

「おおっと、自己紹介が遅れたな。俺は兄沢命威斗、通称アニメ店長だ！！よろしくな少年！」

そう言いながら握手を求めてくるアニメ店長の勢いに押されながら俺もとりあえず握手を返した。

「は、はあ・・・よろしくお願いします・・・。」

お互いの自己紹介が終わるとアニメ店長は俺に

「少年よ、君はこの店のポイントカードを持っているか？ないのであれば新しく作ってあげよう。それにポイントカードは色々お得な特典もついているぞ？」

と、ポイントカードを薦めてくる店長だったが俺は特に断る理由もなかったので

「なら、お願いします。それと、これを下さい。」

俺は探していたゲームを見つけたのでそれを買う為に会計を済まそうとしていたがそこに俺を見つけたこなた達が足早にやってきて俺の会計をストップさせるのだった。

「慶一くん、その会計ちょっとまったー！」

その声に驚いて振り向き俺はこなたに

「こなた？買い物はもう済んだのか？は、いいとして、俺の会計を止める理由を述べろ。」

こなたにそう言うとこなたは俺の方に近づいて俺に自分のポイントカードを差し出しながら

「慶一くんの買い物のポイントを私に頂戴？」

と上目使いに俺を見てきた。

俺は自分のポイントカードをさっき店長に作ってもらったのだがこなたの期待の眼差しを受けていたらこなたの申し出を断れなくなった。

俺はやれやれと心の中でため息をつきながら

「わかったよ、ちょっと待ってろ。店長、俺のポイントをこいつにあげてください。俺は次回からでいいですから。」

そう言って俺の買い物ポイントをこなたに入れてくれるよう店長に頼むと店長も了承してくれ、こなたもかなり喜んでいて満面の笑顔で俺に礼を言ってきた。

「ありがとう、慶一くん。おかげで目標にまた一歩近づいたよ。このお礼は今度必ずするからね♪」

そんな笑顔のこなたに俺は

「じゃあ、少し期待させてもらうかな？」

そう言って俺もこなたに笑顔を返すのだった。

その後でかがみ達が

「ごめんね？慶一くん。この馬鹿の我侭聞いてもらっちゃって・・・。」

「でも、なんだかんだで断らないけいちゃんはやっぱりやさしいね。」

「友達思いの慶一さんは素敵ですよ？」

そう言って来たので俺は照れ隠しにぽりぽりと後頭部を掻くのだった。

それぞれの買い物が終わって俺たちは全員で店を後にし、みゆきの提案もあって近くの公園でとりあえずの休憩を取る為移動をしていた。

その際に俺は、喉が渇いていたので缶コーヒーを一本買い込んで喉を潤しながら歩いていた。

５人で談笑しながら歩いていて公園の近くに差し掛かった時、ふいに誰かが言い争うような声が聞こえてきた。

「・・・・・と謝ったでしょ？いいかげんしつこいよ？」

「うるせえ！そんなんじゃ俺らの気が済まないんだよ！！」

どうやら一人は女の子ともう一人・・・いや、数人の男達と言い争いになっているようだ。

だが俺は女の子の方の声に聞き覚えがあった。

こなたとかがみも何となく気付いたらしく俺に

「ねえ、慶一くん、この声ってどこかで聞いた事ない？」

「私も聞き覚えがあるんだけどこの声ってやっぱり・・・。」

二人が俺に緊張した面持ちでそう言ってくる。

俺も二人に

「ああ、確かにこの声には聞き覚えがあるな。よし、様子見に行って見よう。」

俺は４人にそう言うとこっそりと未だに言い争う声の聞こえている公園の影から中を覗き込んだ。

すると数人の男達に囲まれて怯える見知った女の子とその女の子がかばうようにして後ろに隠しているもう一人の女の子の姿が確認できた。

男達は業を煮やしたのかついに女の子達に手を上げようと動き出した。

俺以外の４人はその光景に小さな悲鳴をあげた。
だが俺は男達が手を上げ襲い掛かるその瞬間に男の手を捻り上げていた。
それを見たこなた達は驚いていた。
なぜなら男達が襲い掛かる瞬間、慶一は自分達の横にいたはずなのにあっという間に男達の所へと移動していたからだ。
その瞬間をこなたたちは捉えられなかったので目をぱちくりとさせて俺たちの方を見ていた。
俺は男の腕を捻りあげながら後ろにいる女の子に声をかける。
「大丈夫か？こう、間一髪だったな。」
俺がこうに安心させるように優しく声をかけるとこうは自分達を助けに入ってくれた人が俺だと気付いたらしく驚きながら
「せ、先輩！？どうしてここに？」
おそるおそる俺に聞いてくるこうに俺は
「話は後だ。とりあえずこの状況をなんとかしなくっちゃな。」
男の腕を捻りあげ男達を睨みつけながら俺はこうにそう言うと連中のリーダー格っぽい男が
「てめえ！何のつもりだ！？誰かは知らないが邪魔するつもりなら

潰すぞ！？」

ドスの効いた声でそう怒鳴ってくるリーダー格に俺は余裕の表情を見せながら

「この子は俺の知り合いなんでな、見過ごすわけにはいかないさ。」

静かに、しかし力強い声でそう返す。

そして俺はこなた達を呼んだ。

「こなた！この二人を頼む！」

俺がこなたにそう言うとこなたは俺の近くへやってきて

「分かったよ。けど、大丈夫なの？」

心配そうな顔で俺に聞いてくる。

こうもやはり心配なのか

「先輩、本当に大丈夫ですか？」

その声はどこか不安げだ。

俺は二人に安心させるように

「大丈夫、今回も一撃で十分片がつくから。こうも俺が強いって事知ってるだろ？」

俺は自信ありげに二人に言うと二人とも少し安心したのか

「そういえば慶一君は武術やってるんだったね。なら少し安心かな？八坂さんともう一人の女の子の事は任せてよ♪」

親指を立ててそういうこなた。

こうも昔の俺の事を思い出したのだろう

「あまり相手に無茶させないでくださいよ？」

そう言って二人ともかがみたちの方へと避難した。

俺は腕を捻りあげていた男を他の仲間のいる方へ突き飛ばしてリーダー格の男を見据えると、リーダー格の男は俺が一撃で決めると言ってた言葉を聞いていたのだろう、激昂しながら

「俺に、俺達に対して一撃で決めるとは大きくでたじゃねえか！本当にそんな事が出来るのなら見せてもらいたいもんだぜ！」

下卑た笑いが公園内に響き渡る。

俺は連中を静かに見つめ左手で先程飲んでいたコーヒーの缶＜スチール製＞を持て遊びながらリーダー格に答えた。

「ああ、お前ら程度なら一撃で十分。今証拠を見せてやるよ！」

俺はそう言い終わると同時に自分が持っていたコーヒーの缶をリーダー格の男の顔めがけて投げつけると同時に飛んでいく缶を追いかけ、リーダー格との間合いを詰めた。

投げられた缶に気付いたリーダー格は顔に向かう缶をぎりぎりのところで避けたがその時には俺も間合いに入っていてリーダー格の顔すれすれに飛んでいく缶に拳を合わせて缶を縦に潰した。

リーダー格のすぐ後ろには壁があり顔すれすれを飛んで行く缶と唸りを上げる拳を耳元で感じ、なおかつすぐ後ろでグシャリと缶のつぶれる音を聞かされたリーダー格は顔面が蒼白になってへなへなとその場に座り込んだ。

周りにいるその男の仲間たちもあまりの早業と缶を縦に潰した俺の力を見て言葉を失っていた。

俺は潰した缶を拾い上げリーダー格の目の前でそれをちらつかせながら、更に追い討ちの言葉をかけた。

「おっと、外しちまったか。運がいいなお前。」

そして更に周りの男達を睨みつけながら恐怖を心に刻み込ませるように

「なあ、まだやるか？まだやりあうって言うのなら、今度はお前らの顔面がこうなると思えよ？」

俺がとどめの一言を言うと男達は短い悲鳴をあげてリーダー格の男を見捨てて散り散りに逃げていった。

リーダー格も正気を取り戻し、慌てて俺たちの前から姿を消した。

連中が去ったのを確認して俺はみんなを呼んだ。

「おーい、終わったぞ。もう大丈夫だ。」

俺がそう声をかけると6人はおそるおそる周りを見渡しながらも俺の方へと集まってきた。

こなたとこうは俺の事が心配だったのだろう、俺が無事な事を確認すると安堵の表情で俺に

「いやー、本当に一撃で決めちゃうとは思わなかったよ。武術やってるとは聞いてたけど、かなり凄いねえ。」

「さすが先輩です。とはいえちょっと心配しましたけど・・・。」

二人がそう言うとかがみたちも俺を心配してくれていたようで

「本当に大丈夫？缶を拳で潰してたし、痛めたりしてない？」

「とっても怖かったよ～。けど、無事でよかったよ～。」

「慶一さんの腕、かなりのものだと思いましたが、それでもあまり無茶はしないでください・・・。」

そんな3人に俺は心配させた事の罪悪感もあって苦笑しながら

「ははは、心配かけて済まない。でもこの通り大丈夫だからさ。」

俺が返事をするとみんな安心したようで先程のような緊張した顔ではなくなっていた。

そうやって安心した頃、俺はこうがかばっていた女の子の存在を思い出してこうにその事を聞くと、こうはその子の紹介をしてくれた。

「先輩、この子が以前に私が先輩に言っていた我がアニ研の期待の新人になるかもしれない子です。さ、ひよりん、挨拶して？」

こうがその子に挨拶を促すとその子はおずおずとしながら俺の前に来て

「田村ひよりっス。森村慶一先輩でいいんですよね？先程は私達を救って頂いて感謝っス。先輩ってかなり強い人なんですね？」

ひよりの言葉に苦笑しながら

「俺の事知ってたんだ？まあ一応名のある道場で鍛えられたからな。それよりも怪我とかしてないか？」

ひよりを気遣うように俺が言うとひよりは頷いて

「はい。こうちゃん先輩から森村先輩の話聞いてましたから。怪我に関してはこうちゃん先輩も庇ってくれましたし、森村先輩も助けてくれましたからそっちの心配はないっス。」

そう答えるとひよりは俺の方を見ながら

「森村先輩はアニ研の立ち上げに尽力してくださったのだとこうちゃん先輩から伺ってるっス。つまり、森村先輩が初代部長と言う事でいいんでしょうか？」

アニ研の現状を聞いてくるひよりに俺は笑いながら

「まあ、実際形だけの部長だからな。実質的なことはすべてこうに一任してるよ。」

俺がそう答えるとひよりは嬉しそうな顔で

「先輩、私もこうちゃん先輩に勧誘されて陵桜を目指す事にしましたっス。森村先輩とは初対面になりますがなんだかとても楽しそうな活動ができそうで今からとっても期待してるっスよ。」

ひよりは更に言葉を続けて

「私が陵桜に合格できた時はまた色々と指導してもらえるとうれしいっス。その時にはよろしくお願いしますね？森村先輩、こうちゃん先輩」

俺はそんなひよりの言葉に笑顔で

「ああ、とはいえ、部活はほとんどこう任せだ、俺はあまり顔出さないかも知れないがな。その頃には3年だし進路決めてそれに向かって頑張ってる頃だろうしさ。」

こうも俺を見て笑いながら

「大丈夫だよ、ひよりん。何だかんだいって先輩は私達の助けになってくれるからさ。」

こうのその言葉にみんなが顔を見合わせて笑っていた。

俺もまた、おそらくそうなるかもしれないなあと心の中で自分の人

の良すぎる性格に問題を感じながらも苦笑するしかなかった。

俺は一つ思い出した事があったのでひよりに

「田村さん、そこにいるこなたもこうと似たようなタイプだから話が合うと思うぞ？」

俺がこなたの事を教えるとひよりは目を輝かせ、こなたもひよりを気に入ったのか二人して色々な話をしていた。

そこにこうも加わって行ったのは必然だったが。

そんな3人を見てかがみは更に頭を痛めてるようでその姿を見ていたつかさとみゆきもただ苦笑するのみだった。

その後は何事もなく7人は談笑しながらその日を過ごし駅で別れる時田村さんが俺たちとの再会を誓ってそれぞれの帰路についたのだった。

賑やかになっていく旋律の調べ。

これから先この旋律はどんな音楽を奏でていくのだろうか。

俺は更に騒がしくなりそうな日々を思いながらも心のどこかでそんな日々を少しだけ期待している自分に気付いたのだった。

巡り会う旋律その3～田村ひより～（後書き）

次回、勉強会お泊まり合宿編予定、お楽しみに

旋律達の勉強会～泊りがけ合宿編序章～

思わぬ旋律との巡り会いの後ゴールデンウィーク中日に俺達は学校で机を囲んでお昼ご飯を食べていた。

こなたはゴールデンウィーク前に行った実力テストの成績とゴールデンウィーク中に片付けなければならない宿題の事で頭を悩ませていた。

ゴールデンウィーク終了まで後5日、その間に宿題の事をどうするべきか悩んでいた時こなたに名案が浮かんだのだろう、食事中にこなたが突然

「勉強会を兼ねて宿題の片付けやろうよ！」

と言い出したのだった。

みんなはこなたの発言に

「勉強会ねえ・・・あんたがそんな事言うのも珍しいわね。とはいえ宿題はまた誰かのを写させてくれ、とかいわないだろうな？」

と、勉強会発言に怪訝な表情をしながらもきっちり突っ込みをいれるかがみ。

「そうだね。わたしも今回のテスト悲惨だったし、宿題も大変そうだし、勉強会には賛成かな。」

つかさも自分の成績の事は大分凹んでいるようだったのと上手くい

けば宿題も片付けられるかもという思惑を持ってこなたの提案に賛成する。

「連休明けからテスト等もありますし、その対策にはいいかもしれませんね。」

元々成績優秀なみゆきはこなた達に比べてかなり余裕のある顔で言う。

そんなみんなの意見を聞きながら俺はこなたに腕組みをしつつ

「宿題の事はともかく、勉強会をするっていうのはいい心がけだな。だが、どこで勉強会をやるつもりなんだ?」

そう尋ねるとこなたは満面の笑顔で俺の方を向くと人差し指を立てながら

「もちろん、慶一君の家でだよ♪」

ニヤニヤしながらしっかりと宣言してくるこなた。

俺は自分の家も広いし、まあ勉強するスペースには事欠かないだろうと思い

「まあ、それはかまわないが、いつやるんだ?」

こなたに勉強会の日程を聞いてみるとこなたは腕を組み考える仕草をしながら

「明日から後連休の残りは5日あるよね?だから明日から3日間や

ろうと思うんだけど。」

何やら企んでいそうなこなたの笑みに真意が良く分からない俺だったがとりあえず

「3日?3日もうちに来てやるってのか?」

俺がそう聞き返すとこなたも頷いて

「うん、そうだよ?だって3日集中してやってしまえば宿題片付くだろうしそうすれば残り2日間遊び放題だもんね♪」

どうやら残りは目一杯遊びたいらしい。

そんなこなたに俺は軽いため息をつきながらも

「まあ、俺も特に用事がある訳じゃないし、皆もやるっていうのなら付き合うとするか。」

俺は他のみんなを見回しながらこなたの提案に同意する。

みんなは俺の許可を聞いて

「でも、いいの?私達も行ってもさ。慶一くんの迷惑になったりしない?」

そう言いつつ少し心配そうなかがみ。

「けいちゃんの所でやるなら落ち着いてできそうかな?」

そう言いながら軽く首をかしげながら考え込むつかさ。

「なんだか楽しく勉強も出来そうな感じですね。私もできるかぎりみなさんのフォローをしていきますよ？」

そう答えるみゆきもやる気だ。

俺はそんな皆を見て笑いながら

「かがみ、俺の所は気を使う事はないから心配するな。まあ、気楽にうちにきてくれればいいよ。」

俺の返答にこなたは嬉しそうに

「さすが慶一君、話が分かるねー♪」

腕組みをしてうんうんと頷きながら言うこなた。

かがみ達も俺の言葉を聞いてやる気になったようで

「なら3日間お邪魔するわ。慶一くん、よろしくね？」

「みんなで一緒にがんばろうね～。」

「3日間で頑張って連休明けのテストはみんなでいい成績を取りたいですね。」

3人ともそう口々に言ってやる気を高めていたようだった。

俺はみんなに笑いかけながら

「ああ、やるからには成果を出そう。」

そう答えながら皆のやる気に乗って俺もがんばるかな?と心の中で思っていた頃、俺はこなたの中に俺たちの気付かない思惑が潜んでいる事に気がつかないのであった。

その後、昼食を終えて自分のクラスに戻った俺はかがみと今回の勉強会について少し話をしていたのだがみさおとあやのも目ざとくその話を聞きつけて私達も参加させて欲しいと言ってきた。

俺は今更2人増えてもあまり変わらないしなと思ったのでみさお達も勉強会に招待する事にした。

学校が終わって自宅に戻り俺は明日からみんなが来るからとりあえず簡単に部屋の掃除でもしておこうと思い、部屋を片付けていた。

ある程度部屋を片付けた後時間的にもそろそろ夕食の支度をしないといけないなと思い、冷蔵庫の中身を確認してみると、足りない食材があったので、買出しをするため買い物の準備をすると玄関へと向かった。

玄関を開けようとしたときふいに家の呼び鈴が鳴った。

俺はこんな時間に誰だろう?と思いつつも

「はーい、どちら様?」

と声をかけながら玄関を開けるとそこには大きな荷物を持ったこなたが立っていた。

こなたは俺にいい笑顔を向けながら

「やっほー、来たよー？慶一君ー♪」

と明るく挨拶するこなた。

俺はこなたが突然にやってきた事に驚きと何故ここにこなたが来ているのかが気になり

「こなた？何の用だ？何故突然俺の家に来た？」

こなたに俺が問い詰めるとこなたはにんまりと笑いながら親指をびしっと立てて

「何故って、今日の昼休み言ったじゃん？勉強会やろうってさ♪」

こなたが俺にそう言ってくる。

俺は困惑しつつ

「確かに勉強会やるとは言ったが、それは明日からじゃなかったのか？」

そう俺が昼休みの時の事を言うとこなたは目を細めて

「確かに言ったよー？でも今日の晩から来ないとは言ってないのだよ。そして、３日間だけど私達その３日は慶一君の家に泊まらせてもらうから。」

こなたが俺にそう言う。

俺はこなたの言葉の意味を理解するのにしばらくの時を要し、そしてこなたのいった言葉を理解すると同時に

「えええ!?ちょっと待て!泊まりってなんだ!そんなの聞いてないぞ!?」

そう声をあげつつ慌てふためきながらこなたに言うとこなたは不敵な笑みを浮かべて

「それはそうだよ。あの時には泊まるって事いってないしね。それに今回はいわゆる勉強合宿と言う形でやろうと皆で決めたのだよ。」

ない胸を張ってこなたは説明する。

俺は更に混乱しながら

「合宿って、お前はともかく他の5人はこの事を知っているのか?」

俺がこなたに聞くとこなたは

「実はあの後に学校から帰る途中で話をしたよー?」

涼しい顔でそう言うこなた。

俺は少し落ち着いてきたがそれでもまだ混乱の抜けない頭で

「それで、結局どうなったんだよ?」

結果を尋ねるとなんだか凄い結果を聞かされた。

「みんな少しためらってはいたけど、みんながいるならって事で同意してくれたよー？」

俺は平然と凄い答えを返すこなたの言葉を聞きながら更なる混乱に陥った。

「本気か？普通ならやばいだろう？俺は一人暮らしだし俺以外は全員女の子なんだぞ？何かあったら、とか考えてないのか？」

困惑しながら言う俺にこなたはニマニマとしながら

「何かあったらとかいうけどさ、慶一君はそんな事をしない人だってみんな信頼してるしねー♪だから私も安心して来てる訳なのだよ。」

こなたのその言葉に信頼されているのは嬉しいかな？という思いと俺の性格見透かされてるなという遠まわしにヘタレ宣言されたような気分がないまぜになっていたが

「はあ、今更帰れと言っても聞きはしないんだろうな？」

俺は呆れたような口調でこなたに言う。

「まあねー。お父さんにも友達の所に勉強会合宿で泊まってくるからって言ってきてあるしね♪」

ウインクしながらこなたは俺に言う。

俺はこうなったら仕方ないか、と心の中で思い

「分かったよ。とりあえず上がれよこのまま玄関にいるのもなんだしな。」

俺がこなたに促すとこなたも笑顔になって

「うん、それじゃお邪魔するねー？」

と言って家に上がって来た。

俺はこなたが寝泊りできる部屋へとこなたを連れて行き

「こなた、この部屋使ってくれ。寝泊りするには問題ない部屋だからさ、それと・・・。」

部屋へと招き入れると俺はさっき買い物に行こうとしていた事を思い出して

「ちょっと夕飯の買い物に行ってくるから、こなたは適当にくつろいでいてくれよ。」

そう告げて部屋を出て行こうとしたらこなたに呼びとめられた。

「待って、慶一君。夕食なら私が作ろうか？今日からお世話になるんだし、みんなより1日早くこっち来てる分、何かしないとねー。」

こなたが夕食を作る事を提案してきた。

俺は少し考えて

「うーん・・・その申し出はありがたいが、ちょっと足りない食材

があるから買いに行かないと、って思っててな。それに俺は元々一人暮らしだからな。自分の分程度の食料ぐらいしか買い込んでないんだよ。」

俺がそう答えるとこなたもそれに納得したようで俺に

「じゃあ、買い物付き合うよ。それで2人分食事作るからさ。」

そう言うこなたに俺もそれならと思い、こなたに

「そうか?なら一緒に買い物に行くか?」

そう言うと、こなたも俺の言葉に頷いて

「うん、それじゃちょっと用意するね?」

そう言って出かける準備をするこなたと共に食材の買い物に出る事にした。

買い物の道すがら、こなたは俺に

「慶一君、何が食べたい?」

と、俺を見上げながら聞いてくるこなたに俺は少し考えてみたが

「そうだな、特に大した希望はないけど・・・なら、こなたの得意料理頼もうかな。」

俺は特に考えつかなかったのでこなたに任せようと思い、そう言うと、こなたは少し考えこみながらちょっと顔も赤くして

「なら、私の好きなチキンカレーでも作るよー♪」

俺に笑顔を向けながらそう言ってきた。

俺もこなたの提案には異存もなかったので

「なら、それで頼むよ。こなたの腕前拝見だな。」

こなたに俺も笑顔を返しながらそう言うとこなたも少し照れながら

「う、うん。それにお弁当作るっていっておきながらその約束果たせてなかったし、〇二〇イトでのお礼もまだだったしね。いい機会だからがんばらせてもらうよ。」

そう言って笑いかけてくれるこなたの顔を見て俺は少しどきりとしたが、つとめて平静を装いながら

「そういう事もあったっけな。」

少しそっけないかな?と思いつつもこなたに返事を返した。

その後、必要な食材を買い揃えて家に戻り、さっそくこなたがチキンカレーを作ってくれたのだった。

出来上がったカレーを並べて2人だけの夕食が始まった。

「さあ、出来たよ?たくさん食べてねー。」

そう言いながら少し緊張の面持ちで俺の前にカレーを並べるこなた。

俺は見た目もかなり美味そうに見えたので

「へえ、こいつは美味そうだな。頂きます。」

と言ってカレーにスプーンを伸ばした。

一口カレーをほおりこむと結構いい味付けと辛さだった。

そんな俺を見ながらこなたは俺を上目使いで見ながら少しだけ不安そうに

「どうかな?美味しい?」

と聞いてきたので俺もカレーが美味かったので素直に

「ああ、美味いよ。こなたの料理の腕はたいしたもんだな。これってお母さんから習ったのか?」

俺がそう言うとこなたは

「えへへ、ありがとう・・・。」

嬉しそうな顔を一瞬したがその後少し複雑そうな表情になった。

俺はなんとなく聞いちゃいけない事でも聞いちゃっただろうか?と思っていたがこなたの表情が気になったので

「なあ、こなた、その・・・もしお前さえ良ければその表情の意味を教えてはもらえないか?」

俺がそう聞くとこなたは一瞬考え込んだが、やがて決心したのかさっきの表情の理由を語ってくれた。

「・・・実は、私の家お母さんいないんだ。私が物心つく前に死んじゃったんだよね。だから私はお母さんからは料理を習えなかったんだよね。だから、これはおとーさんと2人で頑張って覚えたものなんだよね。」

こなたから聞かされた衝撃の事実に俺は（なんて無神経な事を・・・）と自分を心の中で罵倒しながらこなたに謝った。

「すまん、こなた、聞きづらい事を聞いたな。俺が無神経だった、すまん・・・。」

俺がこなたに頭を下げるとこなたは慌てて手を振りながら

「いいよ。それ言ったら私よりも慶一君の方が大変なんだし、私はまだお父さんがいる分は慶一君よりはましだと思うから・・・。」

そう言うこなたを見ながら俺は気まずい空気にしてしまった事を後悔していた。

俺がこの空気をどうしたものかと思案しているとこなたは明るい声になって

「あはは、こういう空気は苦手だからこの話題はもうおしまいー。まだ食事終わってないんだから、さっさと食べて遊ぼうよ？」

そう俺に言うこなたの明るさに救われたような思いになりながらも

心の中でこなたにもう一度謝罪する俺だった。

そして、こなたが変えてくれたこの雰囲気に乗ろうと思い俺は

「そうだな。折角のカレーだから残さず食べなきゃな。それとこなた、何気に遊ぶとかいってるんじゃない！家に来た目的は勉強会だろうが？」

俺も明るくこなたに冗談交じりで返した。

こなたは俺の意図を汲んでくれたみたいだったが、俺の勉強と言う言葉に少し不服そうに

「ええー？いいじゃん、勉強会だって言っても勉強ばっかりじゃ疲れちゃうよー。」

と言うこなたに俺は苦笑しながら

「まあ、そこらへんはやるなとは言わないがほどほどにしろよ？」

俺もこなたにさり気なく釘を刺す

「分かってるよー。とりあえずは宿題ね？」

そんな風にして2人で笑いあって、先ほどの暗い空気を吹き飛ばした俺達だった。

その後は楽しく食事をして2人で洗い物をした後俺はこなたに風呂に入る様促した。

こなたは風呂にはいり際「一緒に入る？」とか言って来て俺を慌てさせたが俺は丁寧に断るとこなたは少し不満そうな顔をしながら風呂に向かった。

やがてこなたが風呂から上がったので、俺はこなたの寝る部屋に布団を準備し終えると、風呂へとむかった。

俺が風呂に入っていると突然風呂のドアが開き、そこにはスク水姿のこなたがタオルを持って立っていた。

その姿を見てパニックになった俺はこなたに思わず

「こ、こなた、お前何してるんだよ！？」

そう言うとこなたは軽く首を傾げて俺に何かを企むような笑みを見せると

「んー？しばらくお世話になるんだし、サービスで背中でも流してあげようかな？とねー♪」

そう言って来たので俺は顔を真っ赤にしながら

「そんなサービスはいらん！恥ずかしいからとにかくでてってくれー！」

慌てながらそう言うとこなたはなおも食い下がってきて

「まあまあ、裸同士って訳じゃないんだし♪」

そういいながらも入り込んでくる。

こなたのその態度に俺は抵抗する事を諦めざるを得なくなり、仕方なくこなたに背中を流してもらう事になった。

その前に一度こなたに外に出てもらい、俺はこなたと同じように水着を着用してきた。

こなたはニヤニヤとしながら俺の背中をこすって

「どう、気持ちいいー？それにしても、広くてたくましい背中だねえ？」

そう言うこなたに俺はただ顔を赤くしながら

「一応、鍛えてるからな。前も言ったと思うけどさ。」

俺が返事するとこなたはあの時の事を思い出したらしく

「そういえば、ひよりん達助けた時に言ってたね。今もまだ鍛えてるの？」

そう尋ねてきた。

俺はこなたの言葉に頷きながら

「前ほどじゃなくなったかな？今は大分体動かす回数も減ったよ。時折親父の道場行った時とか軽く走りこむ程度だな、今は。」

俺がそう答えるとこなたも俺に無い胸を張りながら

「そうなんだ。実は私も小さい頃に格闘技やってた事あるんだよ？」

自慢気にそう教えてくれた。

俺はこなたの方をみて少し考え込むとこなたに

「お前が格闘技やってたなんて想像できないな。とはいえ、今はやってないんだろ？」

俺がそう言うとこなたは少し驚いたような顔で

「へえ？すごいね？そんな事も分かっちゃうんだ？」

そう返事して来た。

その言葉に俺は一つ頷くと

「まあ、体つきや筋肉のつき方を見たら何となくな。尤もこれも最近読み取れるようになってきたんだが。」

苦笑しながらこなたにいうと、そんな俺の言葉に感心しながらこなたは

「へえ？やっぱりたいしたものだね、慶一君はさ。」

そう言いながらこなたも俺に笑い返していた。

その後は2人してのぼせる寸前まで風呂で談笑して危ない所で風呂からあがりこなたは髪を乾かしながら持ってきた携帯ゲームで暇を潰していた。

俺も一度部屋に戻ってパジャマに着替えると、とりあえず居間へと向かった。

居間へ降りると子猫たちが俺を出迎えてくれた。

猫たちにも餌をあげると、とりあえずこなたのいる部屋へと向かった。

部屋に入るとこなたは携帯ゲームをしていたが俺にきづいて顔を上げた。

「用事は済んだの？それじゃ、一緒に遊ぶ？」

携帯ゲームをヒラつかせてこなたが俺に言う。

俺は明日のこともあるのでこなたに

「そうしたいとこだが、明日の事もあるからな。今日は休む事にするよ。こなたもあまり遅くまで遊んでないようにな。それと、明日から3日間きっちりやるから今から覚悟しとけよ？」

俺はこなたにそう告げて部屋から出ようとするとこなたは少し不満げに

「分かってるよー。やるときはちゃんとやるからそんなに釘刺していかなくていいじゃん。」

唇を尖らせてそう言うこなたに苦笑しながら俺は

「分かってるならいいさ。それじゃお休みな?こなた。それと夕飯ありがとな。」

部屋から出る際にこなたにそう言うとこなたは少し顔を赤くして

「う、うん・・・慶一君、いきなりの無茶を受け入れてくれてありがとね。」

俺はその言葉に素直な気持ちを込めて

「いいさ、俺も助かったし、楽しかったしな。」

俺はそう言うとこなたは何となく嬉しそうに微笑んでくれたそんなこなたに手を振ると俺は自分の部屋へと戻っていった。

慶一ｓｉｄｅ

部屋につくと俺は今日の事を思い出しながら布団に入り

（突然の勉強会の提案、驚いたよなあ・・・それにまさかこなただけ前日に押しかけてくるとは予想外だった・・・でも、こなたの料理の腕も知れたし少しこなたの事が分かったような気がするな・・・それに、一人じゃない家も久しぶりでなんだか楽しかった・・・これから3日間どうなるか分からないけど楽しくやりたいよな・・・）

俺はそう思いながら眠気に身を任せて瞳を閉じた。

こなたｓｉｄｅ

慶一君とお休みの挨拶を交わした後、私は布団に潜りながら今日の

事を振り返っていた。

（いやー、いきなり前日に押しかけちゃったけど慶一君が何とか受け入れてくれてよかったよ。それに私の料理の腕も披露できたし、なんとかあの時の義理は果たせたね・・・夕食の時はお母さんの事聞かれちゃったけど慶一君に気を使わせちゃったかな?でも慶一君の方が私より大変なんだよね・・・お風呂の事でも私なりに慶一君を元気付けてあげたくてやっちゃったけどちょっと恥ずかしかったなー・・・でも、最後にお礼言ってくれた時はうれしかったな・・・これから3日間慶一君にも楽しんでもらおうっと・・・。）

私はそのうちに眠気に負けて轟沈していたのだった。

旋律達との距離はすこしづづ縮んで来ている。

それをまだ各々感じ取れるには時間はまだかかるけれどいつしかそれらが素晴らしい音楽となるその日に向かい旋律達は俺の周りでそれぞれの音楽を奏でていくのだった。

旋律達の勉強会～泊りがけ合宿編序章～（後書き）

次はかがみたちがやってきます。どんな勉強会になるのやら。

旋律達の勉強会～泊りがけ合宿編1～

四重奏の一人泉こなたの突然の来訪から一夜が明け、今日から本格的な勉強会が始まる訳なのだが、俺はこの状況をいかにすべきかと頭を悩ませながら何時も通りの時間に起きて朝食を作る為にキッチンへと降りていった。

キッチンへやってくると2匹の子猫達が餌をせがんできたのでまずは猫達に朝ご飯をあげて、俺はこなたと二人分の朝食の準備に取り掛かった。

一応昨日こなたとの買い物の際に皆の分の食事の事も考えねばならなかったので食材は多めに買って来ていた。

俺はその中から卵と食パン、ウインナーソーセージを取り出して食パンはトーストに、卵はスクランブルエッグに、ウインナーも焼いてスクランブルエッグと同じ皿に盛り付けてある程度の準備を終えた後こなたを起こす為にこなたのいる部屋へとむかった。

こなたの部屋の前に着き俺はとりあえずドアをノックしてみる。

が、予想通り返事は返ってこない。

仕方がないので一応こなたに部屋に入る旨を告げた上で部屋の中に入るとだらしのない格好で夢の中を彷徨っているこなたの姿を見た。

俺はやれやれと額に手をあてながらとりあえずこなたを起こす為にこなたの体を揺すって声をかけた。

「おい！こなた、起きろ、朝だぞ！？」

俺が起きるように促しながら声をかけるとこなたは

「う～ん・・・後５分だけー・・・。」

と起こされるのが煩わしいとでも言うかのようにそう言いながら寝返りをうつ。

俺はなおもこなたを起こそうと体を揺すり、声をかけてみたが一向に起きる気配がないので仕方なく強行手段に出る事にした。

俺はこなたの額に照準を合わせていつもよりちょっと強めにデコピンを食らわせるとこなたは

「わきゃっ！！」

と言う妙な悲鳴と共に額をさすりながら目を醒まして少しぼーっとした顔でこっちを見ると、額の痛みに気付いたのか俺に

「おはよう、慶一君。はいいんだけどさ・・・もうちょっと優しく起こせないものかなあ？」

額を押さえて涙目になりながら俺にそう訴えるこなたに

「いつまでも起きないお前が悪い。これでも優しい起こし方な方なんだから文句を言うな。」

冷たく言い放つ俺にこなたはなおも不満気に

「でもさー？普通女の子を起こすのにデコピンなんてしないでしょー？」

と食い下がって来るこなたに俺も負けじと

「だったらされる前に起きろ。とりあえずうちに泊まっている以上はこっちの生活習慣に合わせてもらうからな？」

そう言い返すとこなたは渋々ながらも

「うう、わかったよ・・・慶一君の意地悪・・・。」

一応の納得はしてくれたようなので俺は

「わかればよろしい。とりあえず朝ご飯できてるから、さっさと着替えてキッチンに来いよ？」

そうこなたに伝えるとこなたもおなかがすいたのか、おなかをさすりながら

「お腹空いたね・・・。わかったよ、すぐ着替えてキッチンへいくよー。」

こなたは俺にそう返事を返した。

俺はそれを確認すると再びキッチンへと戻っていった。

程なくして着替えを終えたこなたがキッチンにやってきて

「お待たせー。おお、中々シンプルだけど朝ご飯って感じだね、洋

風だけど。これ慶一君が作ったんだ？」

並べられたおかずとトーストを見ながら言うこなた俺はこなたに

「まあ、一応一人暮らしだし簡単な物は作れないと、だからな。とりあえず席につけ。それと、飲み物は何にする？コーヒーか？牛乳か？」

こなたにどちらがいいのかと聞いてみると、こなたは少し悩んでいるようだったが、、どちらにするかを決めたようで

「じゃあ、コーヒーをお願いー。」

と言って来たので、俺は頷いてこなたのコーヒーの準備をして、ミルクと砂糖をこなたに渡すと

「はいよ。ミルクと砂糖は好きな分量いれればいい。」

そうこなたに促すと、こなたも頷いて

「オッケー。それじゃ食べちゃおうか？」

と言うこなたに頷いて、コーヒーを入れてやり、俺自身もコーヒーを作って食事を始めた。

程なくして朝食も終わり皆がやってくる時間までに勉強する為の部屋の準備や皆が寝る部屋のチェック等を済ませる為にこなたにも手伝ってもらって準備を終わらせた。

準備を終えた頃俺の携帯にかがみからの着信があったのでかがみと

の電話のやり取りをするのだった。

「もしもし、慶一くん？私達これから出るから。３０分くらいでそっちにつくと思うからよろしくね？後、こなたから何か聞いてない？」

かがみが確認するように聞いてくる。

「ああ、一応聞いてるよ。泊まりがけって事なんだよな？俺は一人暮らしだし部屋も余ってるから構わないが、かがみの所の親は何も言わないのか？」

そう返事を返すと同時に親の許可の事について聞いた。

それに対してかがみは

「うん、まあ、その事なんだけどさ、私も言ってあるんだけど私達が着いた時に慶一くんからも話をして欲しいのよ。私達は事情知ってるけど、慶一くんもこなたから聞くまではそんな事になってるなんて知らなかったんでしょ？」

そう言ってとりあえずの許可を取っている事を俺に伝えてきた。

それを聞いて後は俺からも話さないといけないか、と心の中で思いながら昨日のこなたの言葉を思い出して

「まあな・・・こなたから聞いたときには自分の耳を疑ったよ・・・。」

ふうとため息を一つつきながら返事をする俺その様子からかがみは

何かを察したのか

「ごめんね？慶一くん。なんだか色々と勝手に決めちゃってさ・・・慶一くん、一つ聞いてもいいかな？あの時教室でも聞いたけどさ、私達が押しかけても大丈夫？迷惑するかな？やっぱり。」

かがみはそう言って、俺に迷惑をかけるんじゃないだろうか？という事を気にしてるようだったので、俺はかがみの不安を取り除くように明るい声で

「最初は驚いたよ。けど、こういうのも初めてだしな。それに、皆で集まれる事は俺も少し楽しみでもあるんだ。だから、かがみは迷惑になるかも、なんて、気にする事はないぞ？」

かがみを安心させるようにそう言ってやるとかがみもほっとしたのだろう

「そう？そう言ってくれるのなら私も安心かな。実は私もちょっとは楽しみにしてたりしたしね。」

そう返事をしてくれた。

「そう思っているなら遠慮は無用さ。気兼ねなく勉強会合宿に来ればいいよ。」

俺はかがみに気にせずに来いと伝えるとかがみも俺の言葉に少し明るくなった声で

「うん、わかった。それじゃ後でね・・・あ、それとさ、こなたから連絡とか来てない？」

そう言いながらもこなたの事を聞いてきたので俺は真実を話すべきか否か心の中で葛藤をしていたがどの道ばれると思ったので正直にかがみに話すことにした。

「連絡うんぬんより本人がもう来てるよ・・・しかも昨晩からな・・・。」

俺が言いにくそうにかがみにそう伝えるとかがみは驚いた声で

「えええ!?どういう事?それ、何でこなたが昨日の晩から・・・そうか、それであいつの携帯に連絡つかなかったのか・・・慶一くん、念のため聞くけど、何も変な事してないでしょうね?」

俺に問い詰めるように聞いてきたので俺は慌てながらも

「何もしてやしないよ。やましい事は何もない、それだけは誓って言えるから、後はこっちでこなたに問い詰めてくれ。」

なんだか自爆したかもと心の中で思いながら俺はかがみにそう言うと

「・・・わかったわ・・・とりあえずそっち行くから話はその時にね。それじゃ後でね?」

かがみはそう言って電話を切った。

俺はため息を一つつきながら

「何か俺、やっちゃった?」

一人空しく呟きが部屋へと木霊していくのだった。

そうやって一人黄昏ていると他の部屋の準備を終えたこなたが俺を呼びにきた。

「慶一君、こっちはオッケーだよ。あれ？どしたの？」

心なしか落ち込んでる俺をみてこなたが首をかしげながら声をかける。

俺はつとめて平静を装いながら

「・・・なんでもないよ。それより覚悟しとけよ？後でかがみから尋問あると思うからな。」

そう言うとこなたは頭にハテナマークを飛ばして

「どういう事？かがみから尋問って？」

こなたが聞いてきたので俺は先程のかがみとの電話の事をこなたに話すとこなたは慌てて

「ええ！？慶一君、私がすでに来てる事言っちゃったの？むう・・・まずいなあ・・・かがみから電話来てたのは気付いたんだけど流石に時間遅くなってからだったからかけ直せななかったし・・・。」

おろおろしながら俺にこの事を知った時のかがみがどんな態度だったのかを聞いてきたので会話した時のそのままを伝えると

「うー・・・どうしよう、どうしようー」

そう言って慌てながら頭を抱えて悩むこなた。

そうこうしてるうちに玄関の呼び鈴が鳴った。

その音を聞いてこなたはかなりびっくりして怯えていたが、俺はとりあえず客人の出迎えの為にこなたを一人部屋に残して玄関へと赴いた。

「今開けるよ。ちょっとまってて?」

俺がそう言いながら玄関を開けるとそこには息を切らせながらやってきたかがみとそれに必死で食らいついてきたらしいつかさ以下数名がいた。

かがみは乱れた息を整えると俺に

「慶一くん、今日から3日間迷惑かけるかもしれないけどよろしくね。ところでこなたはどこかしら?」

急に鬼のような形相になったかがみに圧倒されながら逆らうのも怖いので素直にこなたのいる部屋を教えるとかがみは猪の如くその部屋へ向かって突進していった。

その姿に他のみんなも苦笑しながら

「おねえちゃん・・・とりあえずこなちゃん生かしておいてあげてね・・・?」

「泉さんの行動には毎度おどろかされてしまいますね。その行動力はうらやましいですよ。」

「泉ちゃんも結構大胆なのね。」
「ちびっこ、積極的だよなあ。私も見習うべきかな？」
と、それぞれがそれぞれに思った事を言っていた。
その後こなたのいる部屋からこなたの断末魔の悲鳴が聞こえてきたのを聞いて俺達は心の中でそっと手を合わせるのだった。
一騒動あった後、俺はつかさたちに
「つかさ、みゆき、あやの、みさお、よく来たな。とりあえず上がってくれ。」
俺がそう促すとみんなも「「「「お邪魔しまーす。」」」」と言って家に上がって来た。
そんな皆の前を歩きながら俺は皆に
「とりあえずは先に寝泊りする部屋に案内するから、そこに荷物を置いてくれ。その後はリビングへ向かおう。」
そう言って、俺はとりあえずみんなを連れてみんなが寝泊りする部屋へと案内した後リビングに集まってもらっていた。
かがみ達を待つ間にみんなが俺にお世話になる事への挨拶をしてきた。
「けいちゃん、今日から3日間迷惑かけちゃうかもだけど、よろしくね～？」
「慶一さん、今日から3日間お世話になりますね。その際に私達に

出来る事があれば何でも言ってください。出来る限り協力しますから。」

「慶ちゃん、しばらくはお世話になるわね？家事関連の事は私もある程度できるから協力するわ。」

「慶一、宿題とかよろしくなー？勉強だけでなく楽しい事もしたいけどなー。」

そんな皆に俺も笑顔で

「ああ、まあ、こんな家だけど使ってやってくれ。それと、こいつらとも遊んでやってくれると嬉しいがな。」

そう言うと、俺の側にやってきたモモとミィを抱き上げて皆に見せながら言う。

みんなはそれを見て

「モモちゃんとミィちゃん、またあったね～。わたしが遊び相手になってあげるね？」

「元気そうで何よりですね。やっぱり可愛いです。」

「この猫、慶ちゃんが飼ってるのね？可愛いわね、私も遊び相手になろうかな？」

「へー？結構かわいいなー。慶一こいつら拾ったのか？」

俺は猫達の遊び相手になりたいというつかさとあやのに遊びの世話を任せ、みさおには猫を拾った経緯を説明した。

そんな事をやっていると涙目のこなたを引き連れたかがみがリビングに戻ってきた。

かがみはこなたを睨みつけながら

「まったく！一人で勝手な事してるんじゃないわよ！？それと慶一くん、さっきの電話の件以外でもちょっと話しあるから後で付き合ってよね？逃げたら、とりあえず命の保証はしないから。」

凄く怖い笑顔で俺にそう言ってくるかがみに俺は怯えながらも頷くのだった。

こなたも流石に今回の事はこたえているのか

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい・・・・・・。」

と震えながら繰り返していた。

言うべき事を言って満足したのか、かがみも俺に改めて挨拶をしてきた。

「慶一くん、挨拶が遅れちゃったけど、今日から3日間お世話になるわね？日下部やつかさのフォローがもっぱらになりそうだけど、サポートはがんばるから。」

そんなかがみの言葉にさり気に自分の名前が入ってない事に気付いたこなたはかがみに泣きついて

「かがみんー、私はー？どうして私の名前だけないのー？」

そう言ってくるこなたにかがみは重いため息を一つつきながら

「その中に入れて欲しかったら、自分のした事ちゃんと反省しなさ

いよ？」

かがみがそう言うとこなたは慌てながら

「反省するー、するから見捨てないでーかがみ様ー。」

そう言って、かがみを様付けで呼ぶこなた。

かがみはその言葉に顔を赤くして慌てて

「様付けはやめい！普通に呼びなさいよ、まったく・・・わかったわよ、あんたの面倒も見てあげるから。」

かがみはどうやらこなたを許したようだ。

かがみに許しをもらえた事にこなたは喜びながら

「ありがとう、かがみー。やっぱりかがみは私の嫁ー♪」

とこなたが言うとかがみは顔を赤くして

「何いってんのよ！まったく・・・あんたの嫁になんかなった覚えはないわ！」

そう反論するかがみにこなたはニヤニヤとしながら

「ふふ、照れるかがみ萌えー♪」

そのようにすかさず返すこなた。

そして、かがみがまたそんなこなたにツッコムというスパイラルが出来そうになっていたので俺は軽くため息を1つつくとこなた達を止める為に

「2人ともそろそろそれくらいにしてくれ。とりあえずかがみ、さっきの電話の件やってしまわないとな。電話の取次ぎ頼むよ。」

そう言ってかがみに促すと、かがみははっと我に帰って

「あ、そ、そうね。わかったわ、今電話繋げるからまってねっ?」

その言葉に俺も頷いて

「ああ、頼むよ。」

俺がかがみにそう返事するとさっそく自宅へと電話をかけるかがみ。

やがてかがみのお父さんが出て今回の事についての話と娘達の事をよろしくというお父さんの許可を正式に貰って電話を終えた。

「これでオーケーかな?」

俺はかがみに確認を取ると、とかがみも頷いて

「うん、ありがとう。改めてよろしくね?慶一くん。」

そう言って改めて挨拶を交わす俺達だった。

そして電話を終える頃には丁度お昼になっていたので俺はみんなに

「そろそろお昼にするか。」

そう言うと皆は口々に「「「「「「「「「」」」」」」」」と返事をしてきたので、俺はとりあえず昼食にスパゲティーを作る事にした。

俺がキッチンに向かうとこなたやつかさ、あやのも食事の準備を手伝いたいと申し出てきた。

「私も手伝うよ。人数多いしね。」

「わたしもやるよ～。料理はまかせてね？」

「私も協力するわね。慶ちゃん、指示をお願いね？」

俺はそう言ってくれる3人に

「そうか？ならよろしく頼む。俺はみゆき達と食器等の準備をしておくから。」

そう言うと、3人とも「「「こっちは任せて。」」」と言ってくれたので俺も頷いてみゆき達に

「かがみ、みゆき、みさお。俺達はこっちの準備をしてしまおう。」

そう3人に声をかけると3人とも頷いてくれたので、俺は3人に指示を出しながらテーブルや食器の準備を3人と共にするのだった。

しばらくすると、昼食が完成したみたいで「「「お待たせー！」」」と言いながら3人が昼食を運んできてくれた。

俺は3人に

「ご苦労さん。こっちは準備できてるから出来た物を順番に並べていってくれ。」

そう指示をして、食事を並べてもらい、準備も整ったので俺達は「「「「「「いただきまーす。」」」」」」と言ってお昼を食べ始めたのだった。

お昼を食べながらこなたはこの光景を見て

「そういえばこうして皆でテーブル囲んでご飯食べるのって学校でやってるけどこれも学校じゃないけど似たようなもんだよね？」

と、こなたが今の状況を見ながら言うと、かがみもそれに頷きながら

「そうね。形は家で皆でテーブル囲んで、だけれどやってる事は同じかもね。」

そう言うと、つかさは周りを見渡しながら

「でも、今回は日下部さんと峰岸さんもいるからちょっと違うよ～？」

そう言い、そんなつかさに同意するようにみゆきも

「そうですね。二人が加わる事でさらに楽しくなった気がします。」

いつもの柔らかな笑顔で言う。

そんな４人の言葉を聞いてみさおとあやのは

「いつも柊ちゃんは泉ちゃん達と食べてるものね。それを考えたらこの状況ってすごいのかも。」

にこにこと笑いながら言うあやのだったが、みさおは今までかがみを隣のクラスに取られていた鬱憤もあったのだろう、こなたにびしっと指を差しながら

「普段は柊を取られてるけど、この3日は一緒だかんな！ちびっこの好きにはさせないゼ！？」

そう言って挑発してくるみさおにこなたもふふん、と、得意げになりながら

「かがみはうちのだから。みさきちがかがみといられるのも今だけだよー？」

と言うこなたの反論にみさおも乗ってしまい、こなたを睨みつけて

「柊はうちんだ！ちびっこには渡さねえ！！」

そう叫んでいるのを俺を始めとしたこなた以外の皆も苦笑していた。

そんな2人に呆れながら突っ込みを入れるかがみ。

「うるさいだまれ！！私はどっちのものでもないわ！！」

かがみがぴしゃりとそう言うと2人は涙目になりながら

「「ええー？そんなあ・・・。」」

と2人揃って言うのだった。

そんな一幕もありつつもお昼が終わり、少しの休憩を取った後勉強会がいよいよ始まった。

まずは宿題から手をつけるという事でかがみとみゆきとあやのがこなた、つかさ、みさおの面倒を見ていたのだが・・・・・・

「ううー疲れたよー・・・ちょっと休憩にしない？」
「もうだめ～・・・限界～・・・。」
「これ以上はきついってヴァ・・・。」

と3人が揃って30分程ダウンしてしまった。

そんな3人にかがみは呆れながら

「何言ってるの！まだ30分しかたってないわよ！？もっとがんばんなさい！！」

と突っ込みをいれるが

「頑張りたいけど無理ー・・・。」
「ごめん、おねえちゃん。わたしもきつい・・・。」
「頭が破裂しそうだってヴァ・・・。」

そう言いながら3人ともなかなか立ち直れそうになかったので俺は軽いため息を1つつくと

「仕方ないな。それじゃ10分ほど休憩いれるか。」

とみんなにそう言うと、かがみは俺の判断に抗議の声を上げた。

「だめよ慶一くん、甘やかしちゃこいつらの為にならないわ。」

と言って来たので俺はかがみに

「いや、甘やかすとかじゃないよ。俺も良く使う勉強方法なんだ。」

俺がそう答えるとかがみは俺の顔を見て訳が分からないという感じで

「どういう事なのか、説明が欲しいわね。」

そう言ってきた。

みゆきは何かに気付いたようで俺の言葉を黙って聞いていた。

「ああ。人間の集中力ってのはな、どんな人間でも３０分が限界だと言われてるんだ。それを超えると一見集中してるように見えるけどその実無意識に集中力が切れていて、集中してるようでも結局惰性になってしまってるんだよ。」

俺は一旦言葉を切った後、再び説明を再会する

「脳の防衛本能ってやつかな。３０分は全開で脳を使うと脳が体に３０分以上を超えたときに来る負担を減らそうとする為にリミッターをかけるのさ。車のエンジンを例に取ればわかりやすいかな?どんなに頑丈に作ってあるエンジンでも常に全開にしつづければそんなに長い時間を待たずに壊れてしまう。けど、一定の時間でリミッターをかけて負担をなくせばエンジンを壊さずに使いつづける事が

できるだろ?それと同じ理屈ってわけさ。」

俺はもう一度言葉を切り、最後の締めの言葉をつなげる

「つまり、３０分集中してやった後１０分の休憩をいれて一度脳をリフレッシュさせてまた３０分やってまた休憩を繰り返す事で効率のいい勉強が出来るって事だよ。」

かがみは俺の説明を聞いて何やら感心しながら

「へえ?そういう事なのね。今度私も試してみようかしら?」

そう言うかがみ。

みゆきも俺がその事を知っていた事を驚きながら

「慶一さんもご存じだったんですね?私もよくその方法は試しますね。その方法だと結構集中力続きますからね。」

そう言うと、そんな俺達の会話を聞いて少し考え込んでいたあやのも

「私も参考にしようかしら?」

そう言って、俺の言った方法を試してみようと思ったらしい。

そしてこなた達３人も

「いい事聞いたね。私も試してみようっと。」

「けいちゃん以外と物知りなんだね。わたしも挑戦してみようかな?」

「いい事教わったな。慶一はやっぱり頼りになるやつだゼ。」

そう言って、俺の示した方法が気に入ったらしく、その後１０分休憩後、３０分勉強、１０分休憩のサイクルで宿題を当初の目標よりも多目に終わらせる事ができた。

予想以上の成果にみんなも満足そうで、とりあえず今日の分の勉強会は終わりになった。

そして夕食をみんなでわいわい騒ぎながら食べて、その後交代交代でのお風呂となった。

俺は自分の部屋でみんなが風呂から上がるのを待ちながらのんびりしていたが、そこにドアをノックする音がしたので俺は

「誰？とりあえず入ってきなよ。」

そう促すとドアを開けて入ってきたのはかがみだった。

かがみは俺に

「さっき後で話があると言ってたわよね？その事について話しましょうか。」

物凄くいい笑顔だけど物凄く怖いオーラを纏ってかがみが俺に尋問を開始した。

俺はそんなかがみを怖がりつつもこくこくと頷くのだった。

そんな俺の姿をみたかがみは軽いため息を１つつきながらも”昼間

の話”を始める。

「慶一くんの家に来た時こなたを問い詰めて聞いた事だけどさ、こなたと一緒にお風呂に入ったらしいじゃない？」

俺は怯え動揺しながら

「た、確かにかがみに言うとおりだが、俺から誘った訳じゃないぞ？あいつが押しかけてきてだな・・・。」

かがみにしどろもどろになりながら説明する俺だった。

かがみは俺を睨みつけながら

「変な事してないでしょうね？これでも一応慶一くんの事は信頼してるんだし、それを地に落とす事は慎んでもらわないと困るわ。」

そう言うかがみに俺は神妙な顔で

「それだけは断じてないよ。あの時電話口でも言ったけど誓ってもいい。それに俺はみんなに信用してもらいたいと思ってるから・・・。」

俺が自分の今の本当の気持ちをかがみにぶつけると、かがみはふっと笑顔になって

「まあ、今のあんたの態度と言葉を聞いて改めて大丈夫だって思ったわ。ごめんね？慶一くんの事試すような事言って。」

俺に笑顔を向けながらそう言ってくるかがみに俺は

「いいよ。結局こなたの行動に流された俺にも悪いとこあったんだろうからさ。」

複雑な顔をしながら後ろ手で後頭部を掻きながら言う俺にかがみはいたずらっぽく笑いながら

「そうよ？もっとしっかりしてもらわくっちゃね。ともあれ、後2日お世話になるけどよろしくね？」

そう言うかがみに俺は笑顔を向けて

「ああ、こちらこそ。後2日、宿題とテスト対策がんばろうぜ。」

そう言うとかがみもにっこりと笑いながら

「うん、頑張りましょ。それじゃ私はこれで部屋に戻るわね？」

そう言って部屋を出て行くかがみを見送りながら俺はかがみに

「ああ、お休みな。かがみ。」

そう声をかけてお互いに挨拶を交わしてかがみは自分の部屋へと戻っていった。

その後、次に部屋にきたのはあやのとみさおだった。

「慶ちゃん、ちょっといいかしら？」

「慶一、入るぞー？」

そう言って部屋に入ってくる2人を出迎える。

「ああ、とりあえずくつろいでくれ。」

俺がそう言うと2人は俺の部屋を見回しながら

「慶ちゃんの部屋って初めて入ったけど、結構物も少なめでシンプルなのね?」

「意外と散らかってないのがおどろきだよな?」

そんな2人の言葉に苦笑しながら

「まあ、散らかしてもすぐに掃除しちゃうしな。」

そう答えると二人は俺の机の上の写真立てに気付いたらしく

「ねえ、慶ちゃん、ここに写ってるのって慶ちゃんのご両親?」

「結構似てるんじゃねーか?」

そう2人は俺に聞いて来た。

俺は少し暗い顔になりつつ

「まあな。尤も今は二人ともこの世にはいないが・・・。」

俺がそう言うと2人ともばつの悪そうな顔になって

「ごめん、聞いちゃいけない事だったかな?」

「悪い、慶一。ちょっと無神経だった・・・。」

落ち込んだ表情で言う2人に俺はこの2人には話していなかった自分の事情を説明した。

その話を聞いた後で2人は俺を同情するような目で見ながら

「一人で寂しくない？」

「大変だったんだな、お前もさ・・・。」

そんな風に俺を気遣い、声をかけてくれた。

俺はそんな2人の気持を嬉しく思いながらもつとめて明るく2人に

「今まではな。けど、今はお前らがいてくれるから・・・寂しくなんかないよ。」

2人に優しげな微笑を投げかけながら俺ははっきりと今の自分の気持ちをそう告げる。

すると2人は顔を少し赤くして

「そう思ってくれるのなら、うれしいかな？」

「私は、これからもお前の友達でいてやるよ。」

優しげな笑みで2人は俺にそう言ってくれた。

俺は凄く暖かい気持ちになって2人に心からお礼を伝えた。

「ありがとな。2人の気持、とてもありがたいし、嬉しいよ。」

その礼に2人はにっこりと笑って答えてくれた。

そうこうしているうちに大分時間も経っていたので、２人とも部屋に戻る事にしたようで、俺に

「それじゃ慶ちゃん、また明日ね。お休みなさい」

「慶一、また明日な？お休みー。」

そう言って出て行く２人を見送った後俺は布団に潜った。

今日はいい夢が見れそうだと思う俺だった。

最初は一つだった旋律は次々に自分の周りに増え初め、気付いたらたくさんの旋律となっていた。

いつしか俺はその旋律の中にいる事があたりまえの事になっていた。

俺はこの旋律達とこれからも共に音楽を奏でる旋律でありたいと思うのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一の部屋から戻った私は布団にもぐりこみながら今日の事を振り返っていた。

（今日から慶一くんのところで３日間の泊りがけになったけど、初日からいろいろやらかしちゃったから少し恥ずかしいな・・・勉強会は慶一くんに新しい方法を教わったわね。今度自宅でも実戦してみよう・・・。こなたがやらかした事聞いたときはなんだか複雑な気分だったな・・・どうしてそんな風に思ったんだろう・・・？自分が何故焦っていたのかがよくわからないな・・・ええい、あまり

ごちゃごちゃ考えてても始まらないや、ともかく後2日がんばろう・・・。）

いろいろ考えてるうちに私は意識を手放した。

あやのｓｉｄｅ

勉強会も初日を終え、慶ちゃんの所で慶ちゃんに関する話を聞いて私はその事を考えながら部屋に戻って布団に入った。

そして、今日の事を振り返っていたのだった。

（みんなとの泊りがけの勉強会は楽しいわね。相変わらずみさちゃんと泉ちゃんの柊ちゃんの取り合いはあったけど勉強も中々効率よくいきそうよね。とりあえずこの調子で後2日がんばろう。慶ちゃんのご両親の事はちょっとショックだったけど私達はこれからも慶ちゃんのお友達でいてあげたいな。とにかく残りの2日楽しくやりましょう）

みさおｓｉｄｅ

あやのと一緒に慶一の部屋で慶一の事についてまた1つ話を聞けた。

あいつは両親を失っていたのだという事知った私は、あいつの顔を見て少し複雑な気持だったけど、そんな思いと勉強会の楽しさを思って、私は布団に潜りながら今日を振り返っていたのだった。

（なんだか修学旅行みたいで楽しいなー。思いがけず柊と一緒に何かできるようになってそこらへんはちびっこにも感謝だな。けど柊は絶対に渡さないかんな・・・勉強のやり方、慶一がいい方法教え

てくれたよな。ちょっとさっきも実戦したけど私にもできそうだよな。これからも活用してみよ。慶一の親の事私ら何も知らなかったな。でもあいつはがんばってる。私もあいつの事は応援してやりたいな。よーし、残り2日も楽しくやるぞー！）

そんな風に考え事をしている時、ふいに隣で寝ているあやのから声がかかった。

「みさちゃん、まだ起きてる？」

その言葉に私も

「んあ？どうしたあやの？」

そう答え、次のあやのの言葉を待つ。

「明日からも楽しくやろうね。」

そんなあやのの言葉に私も大きく頷いて

「ああ、そうだなー。楽しくやろうぜ？」

あやのにそう答えると、あやのはそんな私の答えに満足したようで

「うん。それじゃ、お休みね？みさちゃん。」

そう言うあやのに私も

「ああ、おやすみ、あやのー。」

そう答え、私達は残り2日間を楽しくやろうと約束をして、ゆっくりと眠りについた。

こうして勉強会初日が過ぎて行く。

旋律達の勉強会～泊りがけ合宿編1～（後書き）

初日の終了です、ちょっと詰め込み過ぎた感もありますが；残り二日、果たしてどうなりますやら

旋律達の勉強会～泊りがけ合宿編2～

旋律達が集まっての勉強会も今日で二日目。

昨日はこなたのフライング騒動でいろいろとあったけど、今日はどんな一日になるだろうか。

朝、なにやら寝ている俺の横で柔らかい感触を感じ、寝ぼけ眼で隣を見るとそこには・・・・・なぜか寝ているみゆきがいた。

（・・・・・え？何これ、どうなってるんだ？どうしてみゆきが、え？ええ！？）

俺は混乱しまくり、今のこの状況を何とか理解しようと試みたが何度考えてもこの状況に至る経緯に心当たりすらなかった。

とにかくこの状況のままだとかなりまずいと感じた俺は隣で寝ているみゆきを起こす事にした。

みゆきをゆすりながら

「みゆき、起きろ！とりあえず起きてくれ！この状況の説明をしてくれー！！」

みゆきに向かってそう言うとみゆきはようやく目を醒ましたようだが少し寝ぼけ気味のようだった。

そしてぼーっとした顔で俺を見ながら

「・・・・・あ、慶一さん・・・おはようございます・・・。」

俺はまだしゃっきりしない頭で朝の挨拶を返すみゆきに困惑しながら

「おはよう、みゆき。とりあえずこの状況について説明が欲しいんだが？」

状況の説明を促す俺にみゆきは部屋の中を見回しなおかつ今の自分の状況を見て

「状況・・・ですか？・・・えーと・・・あ、あああああ！す、す、すいませーん！！」

ようやく自分の置かれた状況を理解したのかみゆきは大慌てで

「わ、私、確か自分の部屋に戻ったはずなのにどうして慶一さんの部屋に・・・あ！」

何かを思い出したようだ。

そして、みゆきは恥ずかしさで顔を赤くしつつ俺にこの状況になった経緯を説明してくれた。

「実は、昨日の夜なんですが、私、夜中にお手洗いに行きたくなりまして。お手洗いから戻ってきたのはいいのですが、かなり頭が眠気でぼーっとしてたらしくて、自分の部屋へ戻ったつもりだったんですが何故か自分の部屋の隣の慶一さんの部屋に間違えて戻ってしまったようです・・・。」

みゆきの説明を聞いてようやく納得した俺は苦笑しながら

「まあ、なんというか、みゆきらしいというか・・・ともあれ心臓に悪いから今度は気をつけてくれよ？」

そう言うと、みゆきは赤い顔のまましゅんとしながら

「はい、ご迷惑をおかけしてすいません・・・。」

そう言って、申し訳なさそうに俺に謝ってきた。

俺はみゆきに照れたように笑いながら

「いいよ、怒ってるわけじゃないから。ちょっと驚いたけどな。」

そう言うとみゆきもさらに顔を赤くしておろおろとしながら

「うう、今度は気をつけますから・・・。とりあえず着替えてきますね？」

みゆきはそう言うとその場に居続けるのが恥ずかしいのか逃げるように部屋を後にしようと部屋のドアを空けた。

すると、ドアの前に人影がある事に気付く俺。

「・・・・・慶一くん？朝から一体何をやってるのかしら？」

俺やみゆき同様に早起きをして、なおかつ、先程の俺の慌てた声を聞きつけてきたらしいかがみが、どす黒いオーラを纏い、見るものを凍りつかせるような笑顔で部屋の前に立っていた。

俺はかがみから出るオーラと恐ろしい笑顔に怯えながら慌てて

「かがみ、落ち着け！これは事故だ！不可抗力なんだ！頼むから話を・・・。」

事の顛末を説明しようとした俺にかがみはにっこりと笑って

「問答無用！」

という言葉の後、乾いた音が部屋に響き渡り、俺は改めてかがみを怒らせる事の怖さを知ったのだった。

その後、事情を必死に説明してかがみの誤解を解き、なんとかこの騒ぎは収まった。

誤解とはいえ俺を殴ってしまったかがみはばつが悪そうな顔で俺に謝っていた。

殴られた頬をさすりながらとりあえず顔を洗って朝食を作ろうと洗面所に来た時

「あら？おはよう慶ちゃん。慶ちゃんもずいぶん早起きなのね？」

同じように早起きしていたあやのと洗面所であった。

「おはよう、あやの。そういうお前も早起きなんだな？普段もそうなのか？」

あやのに朝の挨拶をしながら普段も早起きしてるのかどうかを尋ねると

「ええ。私が起きてみさちゃんを起こしに行って、というのがもっぱらの日課ね。」

微笑みながらそう返事をしてくるあやの。

「へえ?お前がみさおを起こしてるのか。みさおも意外と寝起き悪いのか?」

みさおの事を聞くとあやのは頬に人差し指を当てて考える仕草をしながら

「私から見てもあまりいいとはいえないわね。でも小さい頃からそんな感じだし、もう慣れたわよ。」

そう言ってにっこりと笑うあやのに、初めて会った頃から何となく感じていた事があったので、俺はあやのに
兼ねてから聞いてみたいと思っていた事を聞いてみた。

「あやの、面倒見よさそうだしな。ところであやの、ひょっとしてお前には付き合ってる人とかいるんじゃないのか?」

その言葉にあやのは目を見開いて驚いていたが、やがて

「付き合ってる人がいるっていう事はみさちゃん以外にはまだ知っている人はいないはず、誰かから聞いた?それともみさちゃんが喋ったとか・・・?」

少し困惑しながら俺に聞いてきた。

俺はその質問に否定するように首を振りつつ

「いや、誰かから聞いたって訳じゃないんだが、俺の勘ってやつかな？あやのはなんか他の娘達とは少し違う雰囲気を持ってる様だったからな。それでかな・・・？」

俺がそう答えるとあやのは少し考え込みながら

「うーん、そんなにみんなと違和感出るほど雰囲気違うかな？」

そう聞いてきたので、俺はその事に関して

「今のところは俺だけが感じてるものだと思う。たぶん事情を知ってるみさお以外の連中は気付いてないと思うよ？」

そう答えるとあやのは俺の口元に人差し指を立てて

「なら、この事はまだ秘密にしておいてね？然るべき時になったら私からみんなに言うから。」

ウインクをしながら俺にそう言ってくるあやのに俺は

「ああ、わかったよ。俺も口外はしない。」

そう約束する俺だった。

ふいにあやのが俺の顔を見て何かに気付いたのか

「ねえ、慶ちゃん。その右頬どうしたの？赤くなってるけど。」

かがみに殴られた場所がばれたようなので俺はさっきあった事をあやのに話した。

「・・・・・と言うわけでな。」

あやのは苦笑しながら

「慶ちゃんも大変ね。柊ちゃんもよく早とちりする事あるのよね。慶ちゃん、柊ちゃんを怒らないであげてね?」

そう言ってくるあやのに俺は笑いながら

「分かってるよ。今回は俺にも隙があったようだし、仕方がないさ。」

そう言って二人はお互いに笑いあったのだった。

そうこうしているうちにみゆきも洗面所にやってきて

「慶一さん、峰岸さん、おはようございます。この後は朝食作るんですよね?朝は私にお手伝いさせてもらえないでしょうか?先程のお詫びもありますし。」

朝の事を気にしてるらしく苦笑しながら俺達に挨拶をしてくるみゆき。

俺はその行為に甘える事にした。

「おはようみゆき。なら、朝食の準備をお願いしてもいいかな?」

と言うやり取りをしていると話し声を聞きつけたかがみもやってきて

「慶一くん、みゆき、峰岸、おはよう。話は聞いたわ。私も手伝ってもいい？あまり大した事はできないけど少しは役に立ちたいしね。」

そんなかがみの言葉にあやのは俺を見て

「なら、３人でやろうか。それでいいかな？慶ちゃん。」

そう聞いてきたので、俺は頷いて３人に

「じゃあ、３人ともよろしく頼むよ。俺は３人を起こしにいってくる。」

そう言って朝食の準備をお願いした。

その後３人はキッチンへ向かい、俺は残り３人を起こしに各部屋へと赴いた。

今日もこなたは昨日と同じく、みさお、つかさにもデコピンを食らわせてたたき起こして朝食をとる為に３人を引き連れてキッチンへ向かった。

キッチンに入ると今日は和食の朝ご飯が用意されていた。

俺は朝食を作ってくれた３人に

「準備終わったみたいだな。ありがとう、あやの、みゆき、かがみ。」

そう声をかけると3人とも

「とりあえず、こんな感じでいいかな?」

「今日は和風にしてみました。」

「一応味噌汁は私ががんばってみたんだけど上手く行ってるといいなあ・・・。」

それぞれに、そう返事を返してくれた。

俺はそんな3人に

「ありがとうな、3人とも。おかげで助かるよ。」

そうお礼を言いながら俺は、こなた達を席につかせた。

3人とも額をさすりながら少し涙目で

「慶一君、またしてもでデコピンは酷いよ・・・。」

「けいちゃん、もうちょっと優しく起こしてほしいなあ・・・。」

「慶一ー痛かったぞー?もう少し手加減してくれよー・・・。」

と三者三様の文句をいってきたが「そうなる前に起きないのが悪い!」といって3人を一蹴した。

そんな俺の言葉にまだ少し不満があるみたいで、なおもぶつぶつと言っていた3人だったが、とりあえず食事を取ってしまおうと思い

「さあ、文句はそれくらいにして折角かがみ達が用意してくれた朝御飯だから食べてしまおう。それじゃいただきまーす。」

俺が号令をかけるとみんなも「「「「「「「「いただきまーす」」」」」」」」の掛け声で朝食が始まった。

「へえ、中々良くできてるよ。あやの、みゆき、おかずなかなか美味いぞ？かがみ、味噌汁いい感じだ。」

素直に出来た御飯が美味しかったので俺がそう言って褒めると、こなたも頷いて

「うん、結構美味しいね。かがみの作った味噌汁も中々だよ」

朝食の出来に満足しているようだった。

つかさは朝が弱くて起きれない事を気にしつつも

「ごめんね、朝弱いから朝御飯任せる事になっちゃって。その代わりお昼とかは任せてね？」

そう言って、お昼等は自分がやるからと皆に言っていた。

みさおも満面の笑顔で美味しそうに御飯を食べながら

「やっぱ、柊妹もそうだけど、あやのの作る飯は最高だなー。でも柊の味噌汁もなかなかだよなー。」

あやのとかがみの作った物を褒めていたが、そんなみさおの言葉に少し顔を赤くして照れるかがみは

「味噌汁なんとか上手くいってよかった。ちょっと自信ついたかな

？」

そう言って自分の作った物の出来に満足しているようだった。

あやのもまた出来は納得の行く物のようだったようで

「うん、味付けは上手く行ったわね。今日は中々美味しくできたかな。」

そう言って食べながらも満足そうだった。

みゆきも普段は家事は苦手といっていた割りには上手く行ったみたいで

「私のほうもいい感じでできたようです。かがみさんのお味噌汁もいい感じですね。」

やっぱり出来には満足のいくものだったようだった。

そんな事を口々に言いながら俺達は朝御飯の時間を楽しんだ。

味噌汁を作ったかがみは意外にもみんなからも評価は好評だったのでみんなの誉め言葉に顔を赤くして照れていた。

そして、朝食も終わり、早速2日目の勉強会が始まった。

「今日も昨日の感じでやってみるか？」

俺が提案してみるとみんなも賛成してくれたので昨日と同じ方式で宿題と勉強を進めていった。

「・・・・・がこうなるから、これは・・・。」

「だから、そうじゃないでしょ？もう一度問題を良く見て！落ち着いて考えればできるわよ？」

「うん、もう一度がんばってみるよ。」

「ここは、こうするといいわよ？」

「さすがあやの、頭いいなー。」

「ですからこれは・・・こうなるわけです。分かりますか？」

「ここはこうすれば分かりやすいだろ？」

「みゆきさんと慶一君は頼りになるねー。」

こなた、つかさ、みさおに教えつつ俺達も勉強を進める。

それから数時間が過ぎ夕方になる頃にはほぼ宿題も完成するほどに進んでいた。

「・・・・・ふう、さて、そろそろ今日の分は終わりにするかな。みんなおつかれさん。」

と俺が声をかけると、かがみは

「大分いい感じで進んだわね。宿題もほぼ終わってるし、いい感じね。」

宿題と試験勉強の進み具合に満足しているようだった。

こなたも手応えを感じていたようで

「これは連休明けのテストは期待できそうだねー。」

と、少し自信がついたかのような事を言っていた。

つかさもそんなこなた同様にいい感じに勉強出来た事が嬉しかったみたいで

「わたしも頑張ったから、今度はいい点取りたいな。」

そう言って次の試験に向けて意気込んでいるのが見て取れた。

みさおもまたてこずってはいたけど、今回の勉強は自信に繋がったみたいで

「私も今回はいけそうなきがするゼ！」

と、自信満々にそう言っていた。

そんなみさおを見てあやのも微笑みながら

「みさちゃんも頑張ってたもんね、きっといけるよ。」

そんなみさおに更に自信をつけさせる一言を言っていた。

みゆきは普段以上の成果もあったようで、内容にもかなり満足がいっていた感じで

「皆さん今日もお疲れ様でした。進み具合は予想よりもいい感じですね。」

そう言い、それぞれに手応えを掴んでいたようだ。

俺はそんなみんなの様子を見ながら勉強会は成功するかもしれないと思えたのだった。

今日の夕食は何にしようかとキッチンで冷蔵庫を覗いてみたが、少し食材が減っているようだったので、買い足しをしようと思い、みんなに買い物に行く旨を伝えて家を出ようとしたら、つかさとこなたが買い物についてくるということなので、残ってるみんなに風呂の準備と食事の準備をお願いして俺達は買い物にでた。

「さて、今日は何にするかな?」

近くのスーパーに向かい、歩きつつ、俺が献立を考えながら呟くとこなたが

「卵とかはある?あるならオムライスでもつくろっか?」

そう言って来たのを聞いて、つかさも

「わあ、それもいいね。私も作れる料理の一つだよ~。」

そう言ってこなたの考えに同意の意思を示しているのを見て、俺は大体買うものが決まったと判断したので

「とりあえず、卵足りなそうだからそれも買いに行くか。あとひき肉とかがみが大好きなお菓子でも。」

そう2人に促すと2人もかがみの好きなお菓子という所を笑ってい

たがそれに同意してくれた。

買い物を済ませて家に戻るとさっそくこなたとつかさが夕食の準備にかかってくれた。

食事の準備をしてる間に俺はかがみが好きだと言っていたポッキーを買って来ていたのでそれをかがみに渡しにいった。

ポッキーをかがみに渡すとかがみは顔を赤くして恥ずかしそうに「あ、ありがと・・・。」とお礼をいってくれた。

程なくして夕食も出来上がり俺達はみんなで楽しい夕食をとっていた。

「なんだかんだで、2日目か最初はどうなる事かと思ったけどな。」

俺が話を振るとこなたは少し寂しそうな顔で

「こうやってみんなで食事するのって結構楽しいね。でも後1日だけなんだね、少し終わるのが残念な気がするよ。」

そう言うとかがみもどこか寂しげな表情で

「そうね。みんなと寝泊りして一緒に食事してこうやって顔つき合わせる事が私も楽しいって感じてるわ。会おうと思えば学校でも会えるけど、やっぱり楽しい事の意味が少し違うような気がするわね。」

腕組みしながら言うかがみ。

「こうやってみんなで集まって何かする機会ってこれからもあればいいけど、なかなかそうもいかないよね・・・。」

少しうつむきながら言うつかさ。

「そうですね。それぞれの予定や事情はつきものですし、今回たまたま集まれた。こういう事も今後そう上手くは行かないのかも知れませんね・・・。」

みゆきも心なしか少し寂しげだ。

「特に私は柊ちゃんとは接点はあるけれど他のみんなとはまだまだ付き合いも浅いから、またこういう場があった時に私達もいれるのならいいのだけど・・・。」

あやのも複雑そうな表情で話す。

「今回みたいにちびっこと慶一が取り持ってくれたおかげでここにいるけど、そんな機会がそう何度もあるかどうかなんてわかんないしな。」

みさおもちょっと寂しげな顔をしていた。

「けどさ、こういう勉強会みたいな事は確かに終わってしまうけど、こういう機会ってのは俺達が望むなら実現できるものだぞ?」

俺はみんなを見回しながら俺はさらに言葉を続けて

「皆はまたこういう事を望みたいか?またみんなで楽しめるこういうイベントをやってみたいと思うか?俺はまたやりたい。何せ楽し

かったからな、だから・・・だから俺はまた望むぞ?楽しくやるために、みんなと笑いあうために。みんなはどうだ?」

俺の言葉に他のみんなも少し考え込んでいるようだったが、やがて

「私も望むよ!みんなで笑いたいから、楽しみたいからさ!」
「私も望むわ。私達にはそれができると思うから。」
「わたしも望むよ?みんなとこれからも一緒にいたいもん。」
「私も望みます。みなさんとの絆はこの程度で終わるものだとは思いませんから。」
「私も望んでもいいのかな・・・いえ、望むわ!だって私達は友達だもんね」
「私も、柊と、みんなといたい。だから望む。もう一度みんなでこうやって楽しくやりたいしな」

皆の答えを聞いて俺はにっこりとみんなに笑いかけながら

「なら、これは明日で一度終わるけど、これからも機会を作ってやろうぜ?望んだんだから出来るよな?俺達ならさ。」

俺がみんなにそう言うとみんなも満面の笑顔で「うん!」と言ってくれた。

俺はみんなも俺が思っていた事と同じ事を考えてくれていた事がなんだか嬉しかった。

俺達は各々の意思確認をして食事を終えた後それぞれの自由な時間を楽しんで今日を終えるのだった。

旋律達との勉強会の2日目に、それぞれの旋律達との絆を改めて確

かめあった。それと同時に俺達の中のどの旋律も欠けてはならないものなのだと思えた。

旋律達の勉強会～泊りがけ合宿編2～（後書き）

次で合宿編最後になります。

旋律達の勉強会～泊りがけ合宿編最終日～

旋律達といろいろな事のあった勉強会合宿もいよいよ最終日を迎えた。

今日を持って一時勉強会は終わりを迎えるが、俺達は昨日の晩にこれが終わっても俺達が望むならまたイベントを起こしたいと言う意思をお互いに確認しあった。

それがあれば今回の終わりも終わりではないのだと俺達は心に刻んでいるから、たとえ一時の終わりであっても寂しくはないのだとこの中の誰もが思えていた。

そして最終日の朝、俺は部屋に誰かの気配を感じて目を醒ました。

気配の方を見てみると何かを企むかのような笑顔を浮かべながら俺の顔を覗き込んでいるこなたを見つけた。

俺はこなたの様子をうかがうためにあえて寝たふりをしてみた。

するとそれに気付かないこなたは

「慶一君ー朝だよー。起きてー？起きないといたずらしちゃうぞー？」

ニマニマとしながら俺を起こしにかかる。

俺が中々起きないとみるやこなたは俺の上に覆い被さって来て

「ふっふっふっ、さあどうしてあげようか。目覚めのキスでもしちゃおうかなー？」

というこなたの台詞を聞いた俺は少し焦りつつもおもむろに起き上がりこなたの額に無言でデコピンをかますのだった。

「朝っぱらから何してるんだ、お前は・・・。」

呆れた顔でこなたに言うと、こなたは涙目で

「うう、痛いよ・・・慶一君、いつから気付いてたのさ？」

抗議の声をあげながら俺がどこから気付いていたかを聞くこなたに俺は

「お前の気配を部屋に感じた時からだ。その後は寝たふりをしてお前の様子を見ていた。」

そう言い放つとこなたは頬を膨らませながら

「ひどいよー、起きてたのならなんですぐに反応してくれなかったのさー。」

そう言いながらさらに抗議するこなた。俺は

「お前が何をするのかを見極める為だ。ったくリアクションに困りすぎたぞ？」

呆れ顔でこなたに言う俺こなたはなおも頬を膨らませて

「むうー・・・」

と唸りながら拗ねていた。

俺はこなたが俺の部屋にいると言う事に改めてその違和感に気付き、疑問をこなたにぶつけてみた。

「こなた、そういえばお前は何で俺の部屋に居たんだ?というよりも俺よりも早く起きている事に物凄く驚きを隠せないんだが?」

俺の言葉にますます頬を膨らませ抗議をぶつけてきた。

「慶一君それは酷いよ。私だってたまには早く起きれる事だってあるよ。最終日くらいは慶一君の手を煩わせないように気を配ったのにー。」

俺はこなたの真意を聞いてちょっと言い過ぎたかな?と思いこなたに

「そういう事か。すまん、こなたがやる気になってくれてたのに茶化すような真似しちゃったな。」

こなたに謝罪するとこなたはまだ少し不満がありそうだったが俺に笑いかけながら

「いいよ。分かってくれるならその言葉だけで十分だよー。」

と言うこなたの頭をぽんと軽く叩いて

「悪かったな。とりあえず朝食の準備とかしなきゃな。どうせなら手伝ってくれるか?こなた。」

こなたにそう声をかけるとこなたも笑顔で

「まかせたまへー。今日はすべての食事に手をかそうではないかー。」

ない胸をぽんと叩いて言うこなたに

「なら俺は着替えてしまうからこなたは先にキッチンへ行っていてくれないか？」

そう言うと、こなたも俺に頷きながら

「うん。じゃあ先に行ってるね？」

そう言って部屋を出て行くこなたに先にキッチンに行っていてもらうように伝えて、俺は着替えを済ませる事にした。

着替えを済ませて廊下に出ると眠そうな目をこすりながらつかさとみさおも起きだして来ていた。

おそらく前日のデコピンがトラウマになったのかもしれない。

俺はとりあえず二人に挨拶をする事にした。

「おはよ、つかさ、みさお。今日はちゃんと起きたな。」

そう声をかけると2人とも眠い目をこすりながら

「おはよ～けいちゃん。なんか今日に限って目が醒めたの～。」

「おはよ、慶一。私もなんだよなー・・・なんでだろう・・・？」

2人の言葉に俺はやはりあれがトラウマになったかもと確信したので、心の中で二人に謝罪しつつ

「まあ、早起き出来るのはいい事だ。早起きは三文の得ということわざもあるくらいだしな。」

と、昨日の自分の行為を棚に上げながら言う俺。

そんな俺の言葉を聞きながらもつかさは思い出したように

「せっかく早く起きれたし、わたしも朝食の準備手伝いにいこうかな？」

そう言って朝食の準備をしにキッチンへと向かおうとしたが、そんなつかさにみさおも

「私もたまにはなんかやるかな。柊妹、向こうで指示たのむぜー？」

そう言ってつかさに手伝うと言うとつかさもそんなみさおの言葉に頷いて

「うん、分かったよ。それじゃ行こうよ日下部さん～。」

そう答えると、みさおもまた笑いながら

「おう、行こうぜー。」

とつかさに言っていた。

そんな2人に俺はとりあえず

「2人ともよろしくなー。先にこなたも行ってるはずだから協力してやってくれー。」

そう言って、キッチンへかけて行く2人にそう声をかけた。

2人もそんな俺の呼びかけに「分かったよー」と返事をかえしてくれたのだった。

2人を見送り、洗面所へ向かうとかがみとあやのとみゆきの3人が丁度顔を洗い終えて出て来る所だった。

3人は俺に気付くと挨拶をしてきた。

「あら?おはよう慶一くん。これから顔洗うの?」

「おはよう慶ちゃん。今日も早いのね。」

「おはようございます慶一さん。今日も食事の準備やりましょうか?」

俺はそう言う3人にそれぞれ挨拶を返し、食事の件に関してもこなた達が今日はやってくれてると言う事を伝えると

「へえ?珍しいわね。つかさはともかくこなたや日下部まで早起きしてるなんて・・・。」

「そうよね、いつもならみさちゃんは私が起こすんだけど・・・。」

「泉さん達に何か心境の変化でもあったのでしょうか?」

いつもの3人を知る3人はそれぞれに思った事を口にしていたよう

だが俺は内心ドキドキとしつつ

「あはははは・・・さ、さあな、あいつらも最後はちゃんとしなきゃ、って思いがあったんじゃないかなあ・・・。」

そう言いつつ、俺はその原因が自分にあるとは言えず、ただ乾いた笑いをする事しかできなかった。

そんな俺をみて3人はそれぞれ頭にハテナマークを飛ばして俺の顔を見ていた。

俺はこの場の空気を感じているのがつらくなったので

「ともあれ、そろそろ準備が出来てる頃だろうからキッチンへ行こうぜ？」

そう言いつつ話題をそらすのだった。

3人はそんな俺の態度を見て、まだいまいち納得できないと言う感じだったが、かがみのお腹の虫が空腹を告げるとかがみは顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

俺達は苦笑しながらもかがみとみゆきとあやのを伴ってキッチンへと向かった。

俺達がキッチンに顔を出すとこなたたちが俺達を迎えてくれた。

「お？いい所にきたね。丁度出来上がったところだよ、さあ座って座って。」

俺達を席に促すこなたの指示に従って俺達はそれぞれの席についた。

そして、つかさは俺達に

「今朝は洋食メインで作ってみたよー。」

と、今日の朝御飯を指し示してそう言うのだった。

みさおも得意げな顔で

「私もすこしはがんばったぜー？」

そう言うみさおに俺は頷いて、テーブルに並べられた朝食を見ながら

「へえ、なかなか美味そうだ。朝の分量にしては丁度いいんじゃないかな。」

自分の正直な感想を口にすると、かがみも同じように並べられた朝食を見ながら

「さすが我が妹って所かしらね。昨日はお味噌汁誉めてもらえたけど私ももう少し出来るようにはなりたいかな。」

今日の出来に感心していた。

みゆきも昨日の朝食を思い出しながら

「昨日は和食でしたし、ローテーションさせるのもいいかもしれませんね。」

そう口にして、あやのもこなたが料理をここまでやれるという事に驚きながら

「泉ちゃんも結構出来るのね。私もまだまだがんばらないとね。」

そう言い、俺達はそれぞれの感想を口にしつつ「いただきます」の掛け声と共に今日も朝食の時間が始まった。

朝食を食べ終えて俺達は残りの宿題とテスト対策の勉強を追い込む為に食後の少しの休憩後最後の勉強を開始した。

3日前からの追い込みで思ったほど時間もかからずに終わる事が出来た。

「よし、こんなもんだろう。」

と、勉強会の終わりを口にすると、それまで頑張っていたこなたも心底ほっとしながら

「やったー！宿題終われた。残りの連休、これで遊べるー♪」

と、残りの休日を遊びに当てれる事に喜んでいた。

かがみもまた、今回の勉強会に成果を見出せていたようで

「ほんとにいいペースだったわよね。これだけ効率良くやれたのも珍しいわ。」

と、今回の事に納得していたようだった。

つかさもつかさでかなり宿題を終えられた事にほっとしていたようで

「宿題間にあえたよ。勉強会やってよかった～。」

そう言って緊張を解きながらも自分の荷物にちゃんと宿題をしまっていた。

みゆきはいつも以上の成果を出せたみたいで

「皆さんと一緒に私もいい勉強が出来たと思います。」

そう言って喜んでいた。

あやのもかがみやみゆき同様に有意義に時間を過ごせた事が満足だったようで

「本当、有意義だったわ。慶ちゃん私達も誘ってくれてありがとうね？」

今回の勉強会に招待された事に喜んでいた。

一番てこずっていたみさおも皆と同様に宿題を片付ける事が出来て

「宿題終われたのも慶一やみんなのおかげだな。凄く頭使ったけど、やってよかったゼ。」

そう言ってほっとしているようだった。

みんなが口々に笑顔で成果を実感しているようだった。

俺も俺で成果が出せていたので同じように喜んでいた。

「きっかけはともかく、みんなして成果だせたんだ。今回の勉強会は成功だよな？」

みんなの顔をみながらそう言うとみんなも「うん」と大きく頷いているのだった。

勉強会も終わって結構自由な時間が出来た。

お昼をまたいでしばらくはみんな思い思いに自由時間を過ごしていたが、こなたが何かを思いついたようで俺達に声をかけてきた。

「ねえ、私みんなで遊べるパーティゲーム持ってきたんだけどさ、みんなでプレイしない？」

その提案に俺も興味を持ったのでこなたに

「パーティゲームね・・・何を持ってきたんだ？」

俺がすかさず聞き返すとこなたは自分の荷物の中から”桃太郎電鉄”を取り出して

「これだよー。総資産の額で順位決めしようよ。」

と言うこなたに、俺も桃鉄を見ながら

「なるほど、やるゲームは分かった。けど順位をつけるのはいいがその順位で何かやるのか？」

こなたが順位付けにこだわっている感じだったので一応聞いてみると
こなたはしばし腕組みをしながら何事か考えているみたいだったが、
ふいに何かを思いついたらしく

「トップの人がトップ以下の誰かに何か一つ言う事を聞いてもらう、
ってのはどう？」

そうこなたが提案すると、みんなも何やら乗り気になったようで

「中々面白そうなルールね。面白そうだから参加するわ。」
「こういうゲームならわたしでもなんとかなるかなあ？」
「すごろくと不動産売買を組み合わせたようなゲームって感じでしょうか？中々面白そうですね。」
「うーん、こういうのも初めてだけどちょっとやってみようかしら？」
「よーしちびっこ、トップと柊の所有権をかけて勝負だってヴァ！」

それぞれに興味を持ち、そう言う中、最後にみさおが言った言葉にこなたも乗ってきたようで

「ふふふ、みさきちにはかがみは渡さないよ？ゲームで私に勝てると思わない事だね！」

みさおと火花を散らすこなた。

かがみがそこに呆れながら

「あんたら・・・私はあんたらのものじゃないっての！！」

ツッコミを忘れないかがみだった。

俺は苦笑しつつも

「ま、まあ、かがみの所有権うんぬんはともかく、面白そうではあるな。なら早速始めてみるか、こなた、ソフトのセットを頼むよ。」

そう促すとこなたは

「了解ー、ちょっと待っててねー。」

と言ってゲーム機にソフトをセットして電源を入れた。

ゲームの起動を確認してこなたはみんなに簡単なルール設定をするのだった。

「今回は人数が多いし、このゲーム自体も4人同時までのプレイしかできないから、組み合わせはくじ引きで決めて2チームのうち最下位が外れて残りの人数で決勝って事で。ちなみにAチーム、Bチーム共に上位2位までの勝ち抜けって事で。設定期間は5年で、みんなおK?」

ゲームに参加するみんなはこなたのルール設定と確認をして全員が頷いた。

その後くじ引きが行われてチームは以下のように別れた。

慶一、かがみ、みさおがAチーム。

こなた、つかさ、みゆき、あやのがBチームになった。

チーム分けも終わり、まずは俺達のチームからのスタートになった。

「それじゃAチーム、がんばってねー」

と言うこなたの掛け声と共にゲームスタート。

猪突猛進の勢いでとりあえず進むみさおに対して慎重に物件を買い込み少しづつ資産を増やすかがみ。

俺もかがみと同じような感じで徐々に資産を増やしながら進んだのだがここでまさかの事態が発生する。

猪突猛進で進んでいたかのように思われたみさおが、俺達ほどではないにしても資産をすこしづつ上げていっていたのもあったのだが、なぜかボンビーをほとんど背負わず俺か、かがみにボンビーがやってくる回数が多くなった。

「うわ、またかよ・・・」

「うそっ、また私のところにきた!」

そう言ってボンビーを擦り付けられて慌てている最中、そんな俺達の様子をじっと見ていたみさおが

「なあ、そいつあんまし私のとこ来ないみたいだな。さっきから見てるとそいついると結構やばいみたいだし、これはラッキーだぜ!」

そう言ってニヤリとほくそえむのを俺達はどうにも出来ずに歯噛みしながら見ているしかなかった。

そして期限の5年が経過した頃には俺とかがみはほぼ同じくらいの資産ではあったが、ボンビーの影響は大きく、結局みさおの勝ち抜けとなった。

「くっそー、みさお意外と運いいな。」
「ボンビーさえ来なければ勝てたのに、悔しいわね。」

そう言ってくやしがる俺とかがみを見て、みさおは満面の笑顔で

「へっへっへ、わりいな慶一。勝ち抜けさせてもらうぜー」

俺達にそう言うみさおとかがみが今回は勝ち抜けた。

俺は僅差で届かなかったので予選落ち。

俺達のチームの様子を見てこなたは

「とりあえずAチームは、かがみとみさきちの勝ち抜けだね。それじゃBチームの私達も始めようか。」

と言うこなたの声と共につかさとみゆきとあやのもそれぞれに

「こなちゃん、お手柔らかにね？」
「とりあえずがんばってみるわね。」
「さっきので何となくやり方は把握出来ました。どこまでやれるか分かりませんが精一杯やってみますね。」

そう答え、それを確認したこなたがゲームの準備を終えて

「よーし、それじゃゲームスタートー！」

と言う開始の合図と共にAチームの面々の見守る中、こなたたちのBチームのスタートとなった。

こなたは資産を手堅く増やしながらカード等を上手く使いながら順調に進めていた。

つかさは不慣れな部分もあってか、どうしても一歩遅れる状況になってはいたが何とか食らいついていた。

あやのは二人の様子を見ながらも少しずつ資産を増やしつつ進んでいた。

みゆきは手堅い部分では大きい資産を抱き込みつつ、厳しそうなところは慎重にバランスを取りながら着実に手を進めて行っていた。

しかしながらここでもハプニングが巻き起こる。

どういうわけかつかさの不運スキルが発動しはじめたのだ。

つかさは事あるごとにボンビーを抱え込む事になり、どうしてもその呪縛から逃れられなくなっていた。

そして近くに来ていたみゆきやあやのまでをも巻き込み始めた。

つかさの近くに来たみゆきにいきなりつかさのボンビーが襲い掛かり、しかも引っ掛けた瞬間キングボンビー化するという負の連鎖が起こっていた。

あやのの方も同じような感じでつかさのボンビーをそれとなく擦り

付けられてその資産を削られていった。

「はわわっ！ゆきちゃん、峰岸さんごめ～ん！」

つかさがそう言ったと同時にみゆきにボンビーが襲い掛かる。

そして、擦り付けと同時にボンビーがキングボンビー化してみゆきに大ダメージを与え

「ひいっ！ボンビーさんが変身したと思ったら資産がごっそりと！」

と言うみゆきの悲鳴と共にみゆきの資産はごっそりと削られた。

そして、その脅威はあやのやこなたにも襲い掛かる。

「これは厳しいわね・・・どうにかできないかしら・・・。」

予想以上に酷い状況に陥り苦い表情を見せるあやのと、そんなつかさの影響を恐ろしく感じているこなたも

「むう、つかさ、恐ろしい娘・・・」

そう呟きながらもこの事態に頭を痛めていたが、巻き込まれつつも流石に経験の差で被害を最小限にとどめていた。

つかさの暴走はさらに続き、気付いたら不運から逆転して幸運状態になり、少しづつ資産の復活を果たしていた。

そして終わってみたらつかさが1位になっているという予想外の結果となっていた。

そんな結果にこなた達も呆れ顔で

「つかさ、極端すぎるよ・・・。」

と、少々疲れた声で言い、あやのもそんなつかさに

「妹ちゃん、すごいね・・・。」

そう言って感心していた。

みゆきは大物を狙いすぎた事が仇となったようで

「大きい資産を狙いすぎたのが仇になりました・・・なかなか奥が深いですね・・・。」

そう言って、今回の自分の敗因を分析していた。

そんなみゆきとあやのにつかさもすまなそうな顔で

「えへへ、ごめん、ゆきちゃん、峰岸さん。」

そう言っていたが、そんなつかさの言葉に再度苦笑する3人だった。

というわけで決勝に出揃う2人が決定した。

Aチーム、かがみ、みさお。

Bチーム、こなた、つかさ。

そして運命を決する決勝がスタートする。

「負けないよ？かがみを守る為に、1位の賞品のためにも」

と、流石に決勝なので、さっきとは段違いの気合でこなたはそう言い、そんなこなたの言葉を目ざとく聞いていたみさおも

「私だって負けないぜー？柊はうちんだ！！」

と、かがみの所有権を主張していた。

そんな2人の争いにかがみは呆れながら

「2人とも黙れ！私は誰の物でもない！！」

そう言っていつものツッコミを発動させていた。

つかさはつかさでとりあえず

「なんだか分からないうちに決勝にきちゃったよ。でもやるだけやってみようっと。」

そう言って、頑張ってみようと決意していた。

そんな中、決勝は序盤はかがみとこなたの2人の接戦で進んでいった。

後ろから追いすがるみさおに、ここに来てまたしてもつかさのスキルが発動した。

突然のつかさのスキル発動に場は大いに荒れる事になった。

順調に資産を伸ばしていたこなたとかがみがまず被害を受け、一人逃げ延びたみさおだったはずが、気付いたらボンビーを背負わされていた。

つかさも資産を増やしては削られを繰り返して結局あまり資金を伸ばせない状況。

ほぼ全員が横一列状態になっていた。

観戦ｓｉｄｅ

場の様子を見ながら俺は

「うーん、これは分からなくなってきたな・・・。」

そう言って考え込みつつ状況を見て、さらにみゆきも

「つかささんが大分場を引っ掻き回していますね。これは上手くすり抜けられた人が勝つでしょう・・・。」

状況を分析し始めていた。

そんな様子を楽しげに見つめつつあやのも

「波乱万丈って感じよね・・・でも緊迫感あっておもしろいかも。」

そう感想をもらしていたのだった。

プレイヤーｓｉｄｅ

こなたもこの状況に現状の打破を見出せずに苦しんでいた。

「むう、これは厳しいね・・・何とか抜け出ないと勝てないや。」

そう言って、何とかしないと、と現状打破の為に考えを巡らせていた。

かがみもこなた同様、この状況をひっくり返す手を見つけられず

「つかさにここまで引っかき回されるとは思わなかったわ。思わぬ伏兵ね・・・。」

そう言ってこの状況をいかにすべきか、を必死に考えているようだった。

みさおは現状を見ながらつかさから逃げる手段を摸索していた。

「うーん、こいつは厳しいってヴァ、柊妹から何とか逃げねーと・・・」

だが、その摸索も上手くいっているとはいえなかったのだが。

そんな中、ここまで現場を引っ掻き回してしまった当の本人のつかさも皆に悪いと思いながらもどうにも出来ない状況に

「あはは・・・どんだけ～・・・。」

と言いながらただ苦笑するしかできないでいた。

そんな中で、ついに膠着状態からかがみが一歩抜け出る。
混戦の隙をついてつかさからも距離をとり、地味に資産を増やす事に成功していた。
そして、そのまま期限の5年が過ぎてついにかがみが勝利を掴む事となったのだった。
「やったわ！勝てた！！」
ガッツポーズを決めるかがみにこなたは悔しげに
「うう、負けたー。一歩届かなかったよー・・・。」
そう言いながら落ち込み、みさおもまたこなたとは引き分けに終わったのでとりあえず
「ちびっこ、この勝負は一旦お預けだな。」
そう言って勝負を保留にした。
つかさは結局最下位に転落する羽目になったものの、ゲームは楽しめたみたいで
「結局最下位になっちゃったけど、楽しかったよ？」
とりあえず楽しめた事に満足していた。
そして、全員がゲームを終えてこなたから勝利者の名前がコールさ

れた。

「勝者、柊かがみー！！おめでとう。」

こなたが言うとみんなも「「「「「「「「おめでとうー！！」」」」」」」」

とかがみを祝福するのだった。

その様子を見ながらこなたはかがみに1位の賞品の使い方について

聞いてみた。

「かがみ、優勝賞品だけどさ、どう使うつもりなのか考えた？」

こなたの言葉にかがみは腕組みして考え込みながら

「うーん、どうしようかしらね・・・。」

少し悩んだ挙句にかがみは俺の方を見て

「慶一くん、あのさ・・・えーっと・・・ね？」

顔を赤くしてもじもじとしながらかがみは言葉を続ける

「今度発売するラノベの新刊買いに行く時にさ、一緒に付き合って

欲しいんだけど、そんなお願いじゃだめかな？」

かがみの言葉にこなたはやれやれというジェスチャーをしながら

「かがみー、だめだよせっかくのチャンスにそんなお願いじゃーさ。

思い切って”デートしない？”とか言うのが普通じゃない？」

ニヤニヤとしながらかがみをからかうこなた。

かがみは顔を真っ赤にしながら

「う、うるさいわね！いいのよこれで。私がこの権利をどう使おうと勝手じゃないの！」

かがみが反論するとこなたはなおもニヤつきながら

「まあ、かがみにしてはがんばったほうだよねえ？」

そういってからかうこなたにかがみは鉄拳制裁をかまして

「うるさい！いい加減にしないと殴る！」

こなたは涙目になりながら

「もう殴ってるよー・・・。」

と言っていた。

俺はそんな二人のやり取りに軽いため息をつきながらさっきのかがみのお願いの返事をする。

「それくらいにしとけ、二人とも。かがみ、さっきの願い了解だ。本屋へ行く時には声かけてくれ。」

俺がそう返すとかがみはまたも顔を赤くして

「あ、ありがと、慶一くん。」

そう言うかがみに俺は笑いながら

「いいさ、敗者は勝者の言う事を聞くのみだからな。」

そう言うと、かがみはさらに顔を赤らめてうつむいてしまった。

俺はそんなかがみをみながら頭にハテナマークを飛ばしているのだった。

ゲームを終えて時計を何気なく確認したらいい時間帯だったので、俺達は夕食の準備をする事にした。

勉強会最後の夕飯にはこなたとつかさとあやのが料理を作ってくれたのだった。

最後の食事をみんなでとりながら

「これで最後だね。色々あったけど楽しかったな。」

と言うこなたにかがみも頷いて

「本当、この3日間は楽しかったわね。この思い出私は忘れないわ。」

かがみの言葉を聞いてつかさも頷きながら

「うん、本当にたのしかったよ。またやろうね？みんな。」

そう言い、そんな3人の言葉にみゆきもいつもの微笑みを浮かべな

がら

「本当に充実した3日間でした。私も今までに出来なかった事や知らなかった事を体験できたと思います。」

そう言うと、あやのも同じように笑みを浮かべて

「勉強も上手くいったし、いう事ないわよね？」

そう言い、みさおも楽しげに笑いながら

「最後にみんなでゲームしたりとか、面白かったゼ？」

そう言っていたのだった。

俺はその皆の言葉を聞きながら

「またこうして集まるか。誕生日やクリスマス、イベントはまだまだあるよな？」

俺がみんなにそう言うとみんなも

「そうだね。集まろ？」

「そうね。またみんなで。」

「うん。また集まりたい、絶対。」

「私もまたみなさんと集まれる事を願います。」

「私もこの中にいたいわ。」

「私もみんなとまた遊びたいな。」

それぞれに3日間の感想と更なるイベントで再び集まりたいという

意思を示す俺達だった。

食事も済んで最後の夜。

みんなを先に風呂に入らせて俺は最後にゆっくり風呂に浸かっていた。

その際になにやら合宿前日の嫌な予感を感じていたので事前に海パン装着で風呂に入っていた。

するとなにやら脱衣場のあたりで騒がしい声が聞こえてきた。

「こなた！あんた何をするつもりよ！？」

「3日間お世話になったからお礼に最終日にもう一度慶一くんの背中を流してあげようと思ってさー。」

「こ、こなちゃん、さすがにそれはまずいんじゃないかな～？」

「泉さん、落ち着いて下さい、早まった真似は謹んでください。そんなに慶一さんのお背中を流したいという事でしたら私が行きますから。」

「ちょっ！高良ちゃん、何気に問題発言でてるわよ？」

「高良、結構大胆だな・・・。」

そして、その話し声はだんだんこっちへ近づいて来て、こなたが全員の隙をついて風呂場に飛び込んできた。

みんなはこなたを止めるため、こなたを押さえながらも全員で風呂場になだれ込んでくる事になった。

その状況に一瞬何が起きたのか分からなかったが、皆の姿を確認すると俺は顔を赤くしながら

「うわわっ！何だ？何事だこれはー！」

そう叫んで、俺は慌てながらみんなから距離を取りつつ声をかけた。

みんなは俺の方を視認するなり顔を真っ赤にしてそっぽを向き＜こなたは除く＞

「い、いや、その、これはこなたが・・・。」

と言ってかがみは赤い顔のまま言い訳をし、こなたは不満げな顔で

「むう、私はお世話になったお礼に背中を流してあげようと思ったのに・・・。」

そう言って、つかさも顔を赤くして慌てながら

「はわわ、ごめんけいちゃん、すぐでていくから～！」

両手で顔を覆い、そう言っていて、みゆきもしどろもどろになりながら

「わ、私達は泉さんを止めようとしてですね、その・・・。」

そう言って、自分の行動を説明していた。

あやのも赤い顔のままで俺に

「ご、ごめんね？慶ちゃん、止めきれなかった。」

そう言って詫びていた。

みさおも顔を赤くしながら

「わ、私は何も見てないってヴァ。」

そう言ってそっぽを向いていたのだった。

こなたに呆れつつ他のみんなに恥ずかしくなりつつ俺は

「こなた、気持ちは嬉しいがさすがにまずいと思うぞ?それとみんなもとりあえず裸は裸だが嫌な予感してたからな。海パンは一応はいてるからこっち見ても大丈夫だ。」

こなたに諭しつつみんなにもそう言う。

そしておそるおそる俺の方に視線を戻すみんなは俺を見て

(やっぱり鍛えてるだけあっていい筋肉ついてるね・・・。)

(水着着てるとはいえ、初めて慶一くんの体見ちゃったな・・・、でも結構逞しいかも・・・。)

(腕も結構太いな~。足も引き締まってる感じ~。)

(やはり鍛えこまれていますね、無駄のない筋肉です。)

(以前秋葉腹での事聞いてはいたけど嘘じゃないかったみたい。よく鍛えられた体よね・・・。)

(スポーツマンの体だなー。なんかかっこいいかも・・・。)

何故かみんなは一様に顔を赤らめていた。

俺も照れながらもこなたとみんなを外に出して風呂を終えて改めて

自分の部屋に戻るのだった。

寝る時にはみんながそれぞれに部屋に訪れて俺に改めて挨拶をしていってくれた。

こうして俺達の勉強会合宿最後の夜はは終わるのだった。

次の日の朝一でみんなは自分の家へと帰っていった。

またここに集まる事を改めて誓いあって騒がしかった3日間が終わりを告げた。

みんなが去った後少しの間は一人になった寂しさもあったが、それでもまたみんなと学校で会えるのだからと自分を納得させて残りの連休を過ごした。

余談だが、その後どこから聞きつけたのかこうとやまとも勉強を教えて欲しいとやってきて、結局残りの連休も気が休まる事無く過ぎたのだった。

旋律達は一度離れる事になった。

けれど、再びまた集まりたいと誓いあった。

その誓いがある限りはまた俺達は集まれるだろう、何度でも、何度でも。

俺は旋律達と深まった絆を改めてかみ締めていこうと思うのだった。

旋律達の勉強会～泊りがけ合宿編最終日～（後書き）

次はこなた、みさおの誕生日予定です

旋律達の誕生日～こなたとみさお～

旋律達との勉強会の後ゴールデンウィークも終わり俺達は連休明けの実力テストを受けた。

勉強会の成果もあってか今回は勉強会に参加した面々はいつもよりいい成績を取れたようで皆一様に満足気だった。

そして俺は今、今月中にあるイベントに関してどうするべきかと頭を悩ませているのだった。

俺の頭を悩ませるイベント。

それは、こなたとみさおの誕生日の事なのだった。

こなたの方は月末という事もあって本人もそれをやりたいという確認はとれたのだが、みさおの方は部活等忙しいらしく、誕生日会をやる余裕もなさそうだった。

みさおはこなたの誕生日会には出れるという事は後で言っていたので、参加者の頭数に入っていた。

一応みさおには誕生日会が出来ない代わりに俺達はせめてプレゼントでもと思い、みさおが喜びそうな物を選んでそれぞれがそれぞれの物をみさおに送った。

俺はみさおが走る事が好きなのだと聞いていた事があったのとみさおらしいだろうという理由からみさおに新品のジョギングシューズを送ったのだった。

みさおはみんなからプレゼントを貰うと少し照れながら「ありがとなー。」とみんなにお礼を言っていた。

みさおは俺にも礼は言ってくれたのだが、俺はなにかみさおに出来る事がないだろうかと思い、色々考えを巡らせていた。

そこで俺はある決断をする事にしたのだった。

俺はみさおがいない時にみんなにある提案を持ちかけてみた。

「なあみんな、みさおの誕生日会出来なかった代わりに俺達はあいつにプレゼント送ったけどさ、なんとなくそれだけってのも寂しい気がしたんだ。それで一つ提案があるんだけどさ・・・・・って事なんだけどどうだろう？」

俺が提案を持ちかけるとみんなも頷きながら

「私は別に構わないよ？みさきちも一応は私達の友達であり仲間だしねー。」

「まあ、あんたがそうしたいっていうなら私も乗ってあげてもいいわ。」

「やっぱり1年に1度の事だし、ちゃんとやりたいよね。」

「私達で思い出に残るイベントにしてあげたいですよね。」

「私もみさちゃんの事ちゃんとお祝いしてあげたいわ。」

揃って賛成をしてくれたのでじゃあ当日はそうしようって事でこの話は当日まではみさおには秘密という事になった。

それから少ししして俺は勉強会でのゲーム大会の優勝者であるかがみ

のお願いを実行する事になったのと、さり気なくこなたの望むプレゼントを吟味すべくこなたとかがみの二人と共に再び秋葉腹へと赴いていたのだった。

「何か私お邪魔だったかな?二人っきりの方がよかったー?」

そう言いながらニヤニヤとしているこなたにかがみは

「べ、別に二人っきりで、何て事も言ってたわけじゃないんだし、構わないわよ。」

顔を赤くしながら反論する。

そんなかがみの様子をみてこなたはさらに

「ほんとにー?ほんとはちょっと残念、だとか思ってるんじゃないー?」

追い討ちをかけるとかがみはさらに顔を赤くして

「そ、そんな事ないわよ!べ、別にそんなんじゃないんだからね!?勘違いしないでよね!!」

ますます慌てるかがみにこなたは

「はいはい、そーですねー。全くかがみは素直じゃないんだから。」

そう言って更なる追撃になる言葉を発すると、かがみは顔をますます赤くしながら激昂してこなたに詰め寄り

「こ、こなたあー！」

そう言いながらこなたを追いまわすかがみ。

俺はその様子を苦笑しながら見つつ

「まあ、かがみがそれでいいって言うのなら俺は別に構わないがな。」

そういう俺を見て何故かかがみは少し複雑そうな顔をしていた。

俺はかがみのその表情を見て頭にハテナマークを飛ばしていたが、

かがみはそんな俺の顔を見るとため息を一つつきつつこなたを追うのをやめて

「・・・まあいいわ。とりあえずまずは私の目的の方から回らせてもらうわよ？」

かがみがそう言うとこなたもさっき追いかけられていたのはどこへやらで

「おっけー。それじゃ早速行くとしますかー。」

そう言って俺達と共に今回向かった先はゲー〇ーズだった。

俺は店内を見回しつつ

「今回はここか。ここも〇二〇イト同様、品揃え的には悪くない店だよな。」

と言う感想をもらすとこなたもにこにこしながら

「だよねー。この店も捨てがたいもんね、私もよく利用するしさー。」

こなたも嬉しそうにそう答え、かがみも一応は納得してるらしく

「まあ、店の雰囲気とかに目をつぶれば確かに品揃え豊富よね。普通の本屋さんに比べるとさ。」

俺達はお互いに頷きあっていた。

その後こなたは漫画を、かがみはラノベをそれぞれ選んでいった。

漫画とラノベを選ぶ途上で2人は俺に

「慶一君は漫画とかは読むほう?」

「慶一くんはラノベみたいのとかは好き?」

と聞いてきたので俺はどちらもそれなりに読むほうだったので

「漫画もラノベもそれなりに読むぞ?どちらもそれなりに魅力はあるしな。」

そう答えると2人とも結構嬉しそうだった。

その後もこなたの用事にふりまわされつつ秋葉腹の町を散策して回る俺達。

その中で俺はこなたが欲しがってる物がないかどうかをさり気なく

観察してみたのだが、なんというかゲーム系とかグッズ系に偏りがちで、結局そっち系のプレゼントは用意すべきなのかもしれないと思い、そっちはチェックを入れておいた。

その買い物の途中で一つこなたとみさおに似合いそうなアクセサリーを見つけた俺はさり気なくそれを購入しておくのだった。

こっそりとアクセサリーを買っている所をこなたに目撃されて色々追求されもしたが適当にごまかしておいた。

そして最後にやってきた場所はやはり定番のゲームセンターだった。

「ふっ、やはりここに来ないと終われないよね。」

不敵な笑みでうんうんと頷きながら言うこなた。

かがみは呆れ顔で

「はいはい、どうせそうじゃないかとは思ってたわよ・・・。」

俺も苦笑しながらこなたと再会した時の事を思い出しながら

「そういや、こなたと再会したのもゲーセンだったよな?」

俺がこなたにそう言うと

「そういえばそうだね。あの時は八坂さん達と来てたんだよね?慶一君は。」

こなたは笑いながら言う。

かがみも興味があったのか俺に

「へえ?慶一くん、八坂さん達とここに来てた事あったんだ?」

そう聞いてきたので俺も

「まあな。あの時はあいつらの陵桜の入試合格祝いを兼ねて遊びに来てたからな。その時こうと対戦してるこなたがいた訳だが。」

俺がそう答えるとこなたは少し不機嫌な顔を向けながら

「合格祝いか。美女二人を連れて両手に花、してたんだねー・・・。」

少しトゲのある言い方をされた。

かがみも少し面白くなさそうな感じで

「そういうのにもきっちり付き合ってあげるあたり、慶一くんも意外と優しいのね。」

こちらからも突き刺すような言葉を貰う俺だった。

俺は困惑しながら

「どうしたんだよ二人とも、なんだか機嫌悪くないか?」

少しうろたえながら二人に言うと二人は「「別にー。」」と言いながら俺を一人残してゲーセンへと入っていく。

俺は慌てて「ちょっ、待てよ二人ともー！」と言いながら二人を追ってゲーセンへと入っていった。

ゲーセンに二人を追っていくと、こなたは早々に格ゲーコーナーへと行ったようだ。

かがみは入り口近くのＵＦＯキャッチャーを見ながら景品の物色をしているようだった。

とりあえず俺はかがみに声をかけることにした。

「かがみ、何か欲しい物でもあるのか？」

かがみに聞くとかがみはある台の方を指差して

「あの台のぬいぐるみ狙ってみようかなって思ってね。こなたの方は後で迎えに行くとして、一人だと心細いから少しの間一緒にいてくれない？」

手を合わせてかがみが頼んできたのを見て特に断る理由もなかった俺は

「ああ、いいよ？近くにいるから思う存分やるといい。」

そう答えるとかがみは少し顔を赤くして

「あ、ありがと・・・それじゃちょっとやってみるわね。」

そう言うと、そそくさとお金を崩しに両替機の方へ向かった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君とかがみから離れて私はいつも遊びに来る格ゲーコーナーへとやってきていた。

（さっきはちょっとおかしかったな私・・・あの時慶一君達と会った時はなんでもなかったのに何かさっきも嫌味言っちゃってたし・・・まあ、考えていても仕方ないか。今日も楽しみますかねー♪）

そう考えながら周りを見渡してみたが今回は八坂さんがいないようだったので少し安堵しながら手近な相手との対戦を行う事にした。

「さあ、今回は私を脅かすほどのつわものがいるかなー？」

そう呟きながら対戦をスタートさせる私だった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんにあんな事を言ってしまってから私は恥ずかしさを押し殺しながら両替機へと逃げるように走ってきていた。

（うーん、一人になるのがちょっと嫌かもと思ったからつい慶一くんにあんな事言っちゃったけど慶一くんに寂しがりやな子とか思われていないかしら？あの時の秋葉腹での一件もあってつい頼りにしちゃうようになっちゃってるわね。でも、彼優しいからなあ・・・。）

心の中で少し恥ずかしい事を思いながら両替を済ませて欲しい景品の入っているＵＦＯキャッチャーへと戻っていった。

慶一ｓｉｄｅ

さっきのかがみとのやり取りを思い出しながら

（まあ、確かに女の子一人きりでほったらかすのは良くないよな。
前に秋葉腹へきた時の事もあるし、俺が目を光らせておくに越した
事はないよな・・・。）

などという事を考えながら両替機の方を見やると両替を終えたかが
みが戻ってくる所だった。

かがみは目的の台について早速景品を狙い始めた。

「えい、このっ、ああ、失敗・・・ええい！もう一回！」

「あ、嘘、なんで？そんなー・・・。」

かがみの近くに来るとそんな悲痛な声が聞こえる俺はかがみに

「戦果の程はどうだ？かがみ。」

俺のその言葉が聞こえていないのかかなりの額を使って盛大に落ち
込むかがみの姿があった。

俺はそんなかがみの姿を見てため息一つ吐き出すと

「俺がやってみるよ。欲しいのはあれでいいんだな？」

かがみに聞くとかがみははっと顔を上げて俺の指差す先を確認すると

「う、うん。でも、とれる？」

不安そうに聞いてくるかがみに俺は

「まあ、１００％とはいかないが、なんとかなるさ。」

景品を見据えながら言う俺にかがみは「頑張って。」と声をかけてくれた。

俺はその励ましを受けながらＵＦＯキャッチャーのアームを操作していく。

結果一度ミスったが、２度目で目的の景品を取ることができた。

俺はかがみに景品を渡しながら

「ほら、一度ミスったけどなんとかなったぞ？」

笑いながらかがみに言うとかがみは顔を赤くしてうつむきながら

「あ、ありがとう・・・これ大事にするね？」

と言ってくれた。

俺はそんなかがみの言葉に顔を少し赤くして照れていたが、そろそろ時間もいい頃合だったので俺はかがみに

「かがみ、そろそろこなたを迎えに行こうか。」

そう声をかけるとかがみも時計を確認して頷きながら

「そうね、そろそろ帰らないとまずいしね。」

そう言って同意してくれたので、俺達はこなたを迎えに行った。

やがて格ゲーコーナーに辿り着き、そこで破竹の快進撃を続けるこなたに俺とかがみは

「こなたー、そろそろ時間だから切りのいい所で切り上げろよ?」

「そうよ?そろそろ帰らないと怒られちゃうしね」

そう声をかけるとこなたもプレイしながら

「うん、わかったよー。これで終わりにするからー。」

そう返事を返した後ぎりぎりの差でわざと負けてこなたはゲームを終えた。

「いやー今日も戦ったよー♪」

さっきの機嫌の悪さはどこへやら、すっかり満足気なこなただった。

俺はその様子を見ながら

「大分勝ちまくってたみたいだな。前に見たときもそうだけどお前かなり格ゲーの腕すごいよなあ・・・。」

感心したように言う俺にこなたはない胸を張って

「ふふふ、格ゲーはどんと来い、だよー♪」

そんなこたなの言葉にかがみも

「まあ、あんたの強さは私も体験済みではあるからね・・・こなたには勝てん。」

少し悔しげに言うかがみ。

そんなかがみにこなたはニヤニヤとしながら

「かがみんはもっと修行しなきゃねー。」

こなたがまたも自爆するような事を言うと案の定

「こなた、かがみんいうな！」

鋭い突っ込みが入っていた。

やれやれと両手を広げながら俺は二人に

「とりあえず帰るぞ？あまり遅くなってもいけないからな。」

そう言うと二人も

「そうだね、そろそろ行こうー。今日は楽しかったなー♪」

「まったく、こなたの相手してると時間すら忘れそうになるわよ。慶一くん今日は付き合ってくれてありがとね？」

そう返してきたので俺も笑いながら

「ははは、別にこの程度の事ならなんてことないさ。俺もそれなりに楽しかったから気にしないでいいよ。とりあえず今日はこれで、来週のこなたの誕生日会は楽しくやろうな。」

そう返事をすると二人とも笑顔で

「うん、楽しみにしてるよ。慶一君、プレゼントよろしくねー？」

「まったくあんたは・・・まあ、お祝いくらいはしてあげるわよ。じゃあまたね、慶一くん。」

そう言いながらそれぞれの家へと帰っていった。

それから一週間後・・・・・・

こなたの誕生日会が行われる事となったのだがその会場にはまたしても俺の家が選ばれた。

こなたいわく「慶一君の家なら気兼ねしなくていいし。」との事だった。

俺は少しは気にして欲しいと心の中で思いながらも結局オーケーしてしまった。

続々とみんなが集まってくる。

今回はこうとやまともこなたのお祝いをしたいという希望もあって、こなたに聞いてみた所、許可も出たので参加する事になった。

「先輩、こんにちは。もうみんな来てますか？」
「こんにちは先輩、勉強会以来ね。ところで今日の主役はもうついているのかしら？」
そう言いながらやってきた2人に俺は頷きながら
「ああ、すでに待機済みだよ。後はお前らだけだったからな。とりあえずあがったあがった。」
そう言うと、2人も俺の言葉に頷きつつ
「「おじゃましまーす。」」
そう言って、2人は挨拶をしながら上がってくる。
パーティ会場になっているリビングへ着くとこなたたちがすでに待っていた。
「遅いよー？二人ともー。もう少し遅かったら先にはじめちゃう所だったよ。」
「こなた、せっかく来てくれたんだから他に言う事はないの？」
「八坂さん永森さんいらっしゃい～。今日は楽しんでね～？」
「お2人ともよく来てくれましたね。泉さんも喜んでくれてると思いますよ？」
「2人とも元気だった？また何かあったら声かけてくれたりするとうれしいかな。」
「元気そうだなー、私は相変わらずだけどさ。まあ、今日は楽しもうゼ？」
みんなから声をかけられる2人、そんな皆の言葉に2人とも笑顔で

「みなさんありがとうございます。泉先輩、今日は誕生日おめでとうございます。」
「今日は楽しませてもらうわね。泉先輩、誕生日おめでとう」
2人がそう返事するとみんなも一斉に
「こなた、誕生日おめでとう。これ私からよ?」
「こなちゃん誕生日おめでとう。私からはこれ~。」
「泉さんお誕生日おめでとうございます、私はこれを。」
「泉ちゃん、誕生日おめでとう。気にってくれるかどうか分からないけどこれ私から。」
「ちびっこ、誕生日おめでとさん。これは私からだ。」
「誕生日おめでとう、こなた。俺は一応お前の好きそうな物をチョイスしておいたぞ?」
そう言いながらこなたにプレゼントを渡す。
こなたはプレゼントを受け取りながら、満面の笑みを浮かべて
「みんな、プレゼントありがとねー♪」
嬉しそうに言っていた。
それと同時に兼ねてからみんなと打ちあわせておいた事を実行した。
「みさお、こなたの誕生日ではあるけどこの場でお前の誕生日過ぎてはしまったが、あの日誕生日会できなかった代わりに今日ここでやってやろうってみんなで相談してたんだ。だからこれはお前の誕生日会でもある。だからお前も楽しんでくれ。これはあの日お前に

渡したプレゼントとはまた別のプレゼントだ受け取ってくれ。」

そう言って俺はみさおにもう1つのプレゼントを渡す。

それをきっかけに皆も

「まあ、そういう事なのだよみさきち。一緒に楽しもうよ。」

「日下部、慶一くんはあんたの事も考えてくれたんだから今日は楽しみなさいよ?」

「良かったね、日下部さん。こなちゃんと一緒に楽しんでね?」

「日下部さん、これは私達で話し合って決めた事なんです。だから今日は泉さんと一緒に楽しんでください。」

「みさちゃん、後で慶ちゃんにちゃんとお礼いっておかなきゃだめよ?みさちゃんの事気にかけてくれてたんだから。」

「日下部先輩、今日は当日できなかった誕生日会の分まで楽しんでくださいね。」

「改めておめでとう。日下部先輩。」

みんながそう言い、その言葉にみさおは最初驚いたような顔をしていたが、やがて嬉しさがこみ上げてきたのだろう、太陽のような笑顔を見せながら

「みんな、ありがとーな。まさかこんなサプライズあるなんて思わなかったってヴァ!」

そう言った後俺にさっきのプレゼントの事を聞いてきた。

「なあ、慶一さっきのプレゼント開けてみてもいいか?」

そう聞いてくるみさおに俺は頷いて

「ああ、開けてみてくれ。」

箱を開けるように促すとみさおはプレゼントの箱を開ける。その中には星をかたどったペンダントが入っていた。

それを見たみさおは驚きながら俺に

「な、なあ、これ本当にもらっちゃってもいいのか?私に似合うかな?こんなの。」

おずおずと聞いてくるみさおに俺は笑顔で

「ああ、そのために選んだ物だからな。俺はお前には似合ってると思うんだがな。」

そうみさおにいうとみさおは顔を赤らめながら

「そ、そうかな?それじゃ、その、慶一、これサンキューな。」

そう言って嬉しそうに受け取ってくれたので俺も安心したのだった。

そんな二人のやり取りを見てこなた達は

「いいなー。みさきちうらやましい。」
「何か日下部だけいい思いしてるような気がするわね。」
「可愛いペンダントだよね。いいなあ・・・。」
「星、ですか?何か意味のあるものなのでしょうか?」
「よかったね、みさちゃん。いい誕生日になったみたいで。」
「日下部先輩うらやましいですね。私もそんなプレゼントもらって

みたいですよ。」
「優しい所は相変わらずね、先輩・・・。」
そう口々に訴えかけてくるのだった。
俺はそれらを何とか処理しつつ
「ほら、ケーキのろうそく二人で消せよ。」
と言って話をそらすとまだ若干納得行ってない風ではあったが、こなたとみさおは二人でケーキのろうそくを吹き消した。
沸き起こる歓声と拍手が二人をつつみ、一応の誕生日の儀式は終わったのだった。
その後はケーキをみんなで切り分けて食べた。
その時にこなたがかがみにニヤニヤとしながら
「かがみ、前ダイエットしてるとかいってなかったっけ?」
と言うとかがみは明らかにうろたえて
「う、うるさいわね!今は自分の標準体重だからいいのよ!」
と、こなたに苦しい言い訳をしていた。
俺からみたらかがみはそんなに気にするほどに太ってるようには見えなかったんだが、かがみの鉄拳が怖いので言わないでおくとこにした。

みんなもそんな二人の様子を苦笑しながら見ていたが。

その後はゲームしたり、雑談したり、映画を見たりと色々楽しんでいたが、そろそろ頃合となったのでそれぞれに後片付けをして誕生日会のお開きとなった。

それぞれがそれぞれの家へと帰っていくさなか最後に俺の家を後にしようとしていたこなたに俺は声をかけた。

「こなた、ちょっとまってくれるか？」

「ん？なにー？慶一君。」

俺の方を振り向くこなたに俺は誕生日会で渡したのとは別のプレゼントをこなたに渡した。

「これ、お前にさっき渡した誕生日プレゼントとは別のプレゼントだ。受け取ってくれるか？」

そう言ってこなたに包みを渡した。

こなたは包みを受け取りながら

「え？でも、いいの？さっきも貰っちゃってるのにさ。」

そう言ってくるこなたに俺は笑いながら

「ああ、一応秋葉行った時に探したやつさ。お前に似合うかもと思って買ってきたんだ。」

俺がそう言うとこなたはプレゼントの包みをじっと見つめて

「開けてみてもいいかな？」

と俺に聞いてきたので俺も頭をかきながら

「まあ、気に入ってくれたらいいんだが・・・。」

と答えるとこなたは包みを開け始めて中に入っていた箱を開いた。

そこに入っていたのは青い翼の中心に星が1ポイントあしらわれている飾りのついたブレスレットだった。

こなたをそれを見つめながら

「綺麗だね。これほんとにもらっちゃっていいのかな？」

そう俺に確認してくるこなたに俺は

「まあ、気に入らなかったら売ってしまっても構わないけどさ。」

苦笑しながらそう返すとこなたは俺に笑顔を向けて

「そんな事しないよー。こんなに綺麗な物だし私気に入っちゃった。ちょっとまっててね？」

そう言いながらこなたはブレスレットをはめて俺に見せてくれた。

俺はその様子をまじまじと見ながら

「うん、やっぱ、こなたのイメージにはあうな。俺のセンスも捨てたもんじゃない。」

と素直に感想を言うとこなたは顔を赤くしながら

「あはは、何か嬉しいな・・・今までとはまた一味違った誕生日になったよ。慶一君、ありがとう。」

そんなこなたにドキリとしながら俺も照れたように

「いや、その、喜んでくれたのなら俺も嬉しいから。」

俺がそう言うと改めてこなたは笑ってくれた。

俺はこなたに同じように笑顔を向けるのだった。

こなたを駅まで送っていく途中こなたがふいに

「今日は楽しかったよ。慶一君本当にありがとうね。来年もまたやりたいなあ・・・。」

と言い出したのを聞いて俺もこなたに微笑みながら

「そうだな。でもそれを望むなら、俺達が望むならまたできるさ。来年だけと言わずこれからもずっとさ。俺達が仲間でいる限り、つながりがある限りはさ。」

そう言うとこなたも俺に笑いかけながら

「そうだね、そうだよね。私たちならこれからもずっとできるよね。

」

「そうさ、ずっと・・・・・・。」

俺達は約束を交わし、別れた。

今日は旋律達の誕生日。

けれど、この1回で終わりではない。

これからもずっと俺達がつながっている限り何度でも繰り返していこう。

俺はいつまでもそうしていきたいと思うのだった。

旋律達のエピソード～過去の一幕～

旋律達の誕生日会からしばらくして月も変わり6月になっていた。

この時期は俺としてもあまりいい思い出のない月でもあった。

今日もこなた達と共に昼食を食べ、勉学に励み一日が終わろうとしていた。

こなたはあれからコンプ祭りがどうのとか言って突然バイトを始めた。

なので今日はバイトの為に一足早く帰っていた。

柊姉妹も用事があるとの事でやはり先に帰り、みゆきは委員会があるとの事で遅くなると言っていた。

みさおとあやのもそれぞれに所用＜おそらく前に俺が気付いた彼氏とのデートかもだが＞と部活で忙しいとの事で先に行ってしまっていた。

一応アニ研の仮部長でもある俺だから部に顔を出すべきかとも考えたのだが、今日は特に俺は来なくても大丈夫だとこうとやまとから言われていたので、今回は久々に一人で家に帰る事になった。

普段の俺の周りは騒がしい事この上ない状態だったので、時折こういう事になったりもしたのだが、俺はあの喧騒が少なからず気に入っていたのだろう、少しばかりの寂しさを覚えるようになった。

そんな事を気にしつつ昇降口の所へ来て見るといつの間にか外は雨になっていた。

「おいおい、天気もつはずじゃなかったのかよ・・・天気予報はずれたか・・・？」

俺はうんざりした口調で呟きながら空を見上げた。

今日は天気予報では雨は降らないと言っていたのを信じたので傘を忘れてきていたのだ。

俺はため息を一つついてもう一度空を見上げながら

「仕方ない、やむか勢いが弱まるのを待つとするか・・・。」

そう一人呟くとしばらくの間その場で一人ぼーっとしながら佇んでいた。

どれくらいの間そうしていただろうか？気がつくと1時間以上もの間その場にいたらしい。

だが雨の勢いは弱まる気配を見せなかった。

さてこれからどうしようかと思案しているとふいに後ろから声をかけられた。

「なんや？森村か、いつまでも帰らんとこんなとこで何やってるんや？」

独特の関西弁のイントネーションで話し掛けてきたのはこなたのク

ラスの担任の黒井先生だった。

俺は振り向いて困った顔をしながら

「いやー、そうしようと思ったんですが、この雨の所為で帰れなくてどうしようかと思っていましてね。」

事情を説明すると黒井先生は昇降口から外の様子を見ながら

「確かに酷い雨やな。けどお前傘とかもっとらんのか?」

と聞いてきたので俺は苦笑しながら

「いや、実は今日の天気予報を信用してしまったので傘を持たずに学校に来てしまったもので・・・。」

ばつが悪そうに先生に返事をすると先生も少し呆れたような顔で

「それは難儀やな。けど天気予報も過信しすぎたらあかんで?今回の事はいい教訓になったやろ?」

といいながらも顔は笑っているようだ。

俺はその様子をみて少しむくれながら

「先生が生徒の不幸を笑うというのはいかがなものでしょうかね?」

そう反論すると先生はニカッと笑って

「他人の不幸は蜜の味ともいうしなー。まあそれはええとしてうち

も傘の予備でもあるならお前に貸したいところなんやが、あいにくと自分の分しか持ってなくてな。ほんま、すまんな。」

両手を合わせながら俺に謝ってくる先生。

俺は再びため息をつき

「まあ、仕方ないですよ。とりあえずもう少し待ってみます。ぎりぎりまで待ってどうするか決めますよ。」

そう答えると先生は顎に手を当てて俺を見ながら

「そか、まああまり遅くならんうちに決断しいや?下手したら学校から出れなくもなりかねんしな。」

そう忠告してきた先生に俺も

「そうですね、そうなる前に何とかしますよ。」

そう返事をすると先生は笑いながら

「そうか、まあせいぜいきばりや。うちは用事もあるから先に帰らせてもらうで?」

俺にそう言ってこの場を後にする先生を見送りながら、さて、どうしよう?と再び思案に暮れる俺だった。

そうこうしているとまたも俺を呼ぶ声が後ろから聞こえた。

「あら?慶一さん、どうしたんですか?ぼーっとされていたようで

したが・・・。」

その声に振り向くとそこには委員会を終えたみゆきが帰るために昇降口に来た所だった。

「ああ、みゆきか。帰ろうと思ったんだが外があの状態でな、傘もないしどうしたものかと途方に暮れていたってとこだ。そっちも委員会終わったのか？」

みゆきに現状の説明後に聞き返してみると

「はい、先程終わった所だったんですよ。後は帰るだけでしたので・・・なるほど、確かにひどい雨ですね。一応傘を用意しておいて良かったかも・・・。」

みゆきも外を見ながらそう呟いていたが俺はその呟きの中にこの現状の打開策を見つけ出したのでみゆきに

「みゆき、その傘に入れていってくれないか？駅の側のコンビニまででいい。」

俺がそう提案をするとみゆきも俺がやろうとしてる事に気付いたようで

「なるほど、そういう事なんですね？分かりました。それじゃ駅まで一緒に行きましょう。」

そう言ってくれたので俺はみゆきに礼を言って、俺が傘を持ち、みゆきを入れていくという感じで学校を後にした。

駅への道すがら俺達は雑談等で盛り上がりつつ歩いていた。

「そういえばもうすぐ夏だな。みゆきは何か予定あったりするのか？」

俺がそんな話を振ってみるとみゆきは軽く首を傾げながら考える仕草で

「そうですね、みなさんと何かをする予定がなければ今年も田舎へ戻ってのんびりとしているかもしれませんね。」

そう応えるみゆきに俺は

「なるほどな。みゆきの田舎は避暑地には最適って訳か。」

そう返すとみゆきもにっこりと笑いながら

「はい、中々いいところですよ？みなみちゃんとも一緒に過ごした事もありますし。」

と言う事を教えてくれた。

「そういえば慶一さん、あれから猫さん達は元気でやっていますか？」

みゆきが新たな話題を振ってきたので俺もそれに応えて

「ああ、あいつらは元気だよ。病気もしないし俺としても助かってるな。健康なのはいいことだしな。」

俺が笑いながらそう応えるとみゆきも同じように笑顔で

「それはよかったです。また猫さん達に会いに行きたいですね。」

と言うみゆきに俺も

「ああ。俺の予定がない時、みゆきの都合のいい時にでもいつでも会いにくればいい。」

そう言うとみゆきは

「そうですね、その時はお邪魔させてもらいますね。」

俺は「ああ」とみゆきに返事してさらに新たな雑談を楽しんでいたが何度目かのやり取りの後ふと、みゆきは俺に一つ話題を振ってきた。

「慶一さん、慶一さんは雨はお好きですか?」

俺はその質問に少し考え込みながら

「うーん、どちらかというと嫌いな方だな。昔ちょっとした事があってな・・・。」

中学2年、こう達と知り合ってからやはり同じように6月にあった事を思い出していた。

みゆきはそのちょっとした事というのが気になったのか俺に

「慶一さんが話しにくいという事でしたら無理には聞きませんが、

話せるという事でしたら聞かせてもらっても構いませんか？」

みゆきが俺にそう言って来たので俺は

「まあ構わないが、あまり楽しい話じゃないぞ？」

と一応釘を刺しておいた。

俺の言葉にみゆきは頷きながら

「構いませんよ？慶一さんの事ももう少し知りたいですし。」

というみゆきの言葉に俺はため息を一つついて

「なら話すよ。あれは中学2年の6月の事だったんだが・・・・・・

俺とこうとやまとが知り合って2ヶ月近くが過ぎ、雨季の6月に入ってから少ししして、あの日も俺は天気予報を過信して傘を持たずに家を出ていた。

学校の授業が終わる頃には外はどしゃ降り状態で、やはり今日と同じように雨に足止めをくらう結果になってしまった。

その日は朝から少し体調を崩し気味だった俺は、勢いの弱まらない雨にげんなりとしながらもこの後どうするかな？という事を考えていたが、自分の体調の事もあったので、とりあえず家に電話をかけて迎えにきてもらうか傘を届けてもらおうと考えて家に電話をかけた。

数回のコールの後親父が電話に出た。

「あ、もしもし、親父か？もし暇なら傘を忘れて家に帰れないから傘届けるか迎えにきて欲しいんだが。」

事情を説明して助けを請おうとしたが

「迎えにこい？馬鹿者、この程度の雨など無視してそのまま帰ってくればよかろう？」

親父は俺に冷たく言い放つ。

そんな親父の理不尽な物言いに俺は親父に激しく言い返した。

「あのな？体調が普通の状態なら俺だってそうしてるっての！今日は朝から少し体調が悪いんだ。その状態で雨なんて浴びてみろ、崩さなくてもいい体調をなお悪くしちまうよ！」

親父もすかさず反論してくる。

「体調が悪い？お前の気合が足りないからそうなるんだ！ともかく私は知らん、自分でなんとかするがいい！」

そう言って一方的に電話を切る親父。

俺はあまりといえばあまりの事にボーゼンとしながらも親父の物言いに腹を立て

「っざけんなくそ親父が！息子を何だと思ってる！」

思わず叫んでしまった。

その叫びを偶然にも聞いていた女生徒が2人いた。

女生徒2人は俺の方へやってくると俺に心配そうな顔を向けて

「どうしたんですか先輩?何か大声で叫んでたみたいですが。」

「何があったのか知らないけれどあまりみっともいいものではないわよ?」

そう俺に声をかけてきたのはこうとやまとだった。

俺は2人の方を向き少し赤くなってばつが悪そうに

「あー・・・いや、ちょっと今、親父ともめてな・・・。」

大声を出したのが恥ずかしかったのでとぎれとぎれになりながら言い訳をする俺だった。

そんな俺にこうは不思議そうな顔で

「お父さんとですか?一体またなんでです?」

こうがそう、俺に聞いてきたので俺は

「ああ、外、雨ひどいだろ?俺うっかり傘忘れたし、少し体調も悪いから傘持ってくるか迎えに来てくれって親父に言ったんだが、あいつは気合で何とかしろとか無茶いいやがったからな。」

と事の経緯を2人に説明すると2人とも困ったような顔で

「先輩の所は相変わらずみたいですね。」
「確かに、よくケンカしてるわね・・・。それにしても今回は流石にひどくないかしら?」

2人は俺に同情の目を向けてくれる。

そんな2人に俺はやれやれとジェスチャーしながら

「だろ?体調崩してなけりゃ親父の言うとおりにでもなんでもするとこだが、ちょっときついからな。」

そう2人に返事しながらもまた少し悪くなってきた体調を感じていた。

そんな俺の顔色を見たのか2人は心配そうに

「大丈夫ですか?先輩顔色悪いですよ?」
「ちょっとつらそうね、大丈夫?先輩。」

俺に聞いてきたので俺はちょっと辛いものの、少し強がって

「まあちょっときつくなってはきたが、まだ何とかな。所で2人とも傘は持ってないか?」

2人と会話してる時に気付いた事があったので聞いてみる。

「あ、すいません先輩。私、傘忘れてしまってるので、今日はやまとに入れてもらって帰ろうかと思っていたんですよ。」
「私も2本持っていればよかったのだけど、今日に限って置き傘がなかったから手元にある一本しかないのよ。ごめんなさい。」

2人の返答にがっくりときつつも俺は2人の事を考えて

「なら仕方ないな。2人ともそろそろ遅い時間だし、俺の事はいいから先に帰れ。俺は何とかしてみるよ。」

ここに来てまたしても強がる俺を心配そうに2人は見ていたが、これ以上遅くなるのもまずいと感じたらしく

「先輩本当にすみません、お先に失礼しますね。それじゃ行こう、やまと。」

「わかったわ。先輩くれぐれも無理はしないようにね?」

俺は2人に笑いながら

「ああ。こんな状態で無理しても馬鹿を見るだけだしな。ともかく、2人とも事故に遭わないように気をつけて帰れよ?」

そう声をかけると二人とも俺に手を振りながら

「分かってますよ、先輩。それじゃまたー。」

「先輩も気をつけてね?体調悪いんだから早めに帰って養生しなさいよ?」

挨拶を返しながら帰っていく2人を見送りながらさて、どうしよう?と再び思案に暮れる俺だった。

やまとｓｉｄｅ

先輩と別れてこうと2人で帰っている私達だが、私はさっきの先輩

の顔色とつらそうな感じが気になっていた。

「先輩、大丈夫かな？大分つらそうだったよね？」

さっきの先輩の事が気になったのか私に話を振ってくるこう。

「そうね・・・少し心配といえば心配ね。先輩どうするつもりなのかしら・・・？」

私も少し気になっていたのでこうにそう答える。

こうに返事しながら心の中で私は

（先輩、ああいっていたけど、あの顔色と状態見てるとかなり辛そうだったわね・・・こうを送り届けた後傘を届けに学校へ戻ってみようかしら・・・？）

そう考えるのだった。

そして、こうを家に送り届けて、私は先輩に傘を届けてあげようと自分の家に傘を取りに行く為に急いだ。

家について先輩に貸す傘を持つと私は足早に学校へと戻っていくのだった。

慶一ｓｉｄｅ

あれから色々と考えを巡らせてみたが体調不良の頭ではまったく考えがまとまらず、かといって傘を用意できるわけもなくだったので俺は仕方なく親父の言うように雨の中をそのままで飛び出した。

しばらく雨に当たりながら最初のうちは走れていた体だったが、徐々にこの悪い体調が俺の体力と気力を奪い、すぐに走る事ができなくなり雨に打たれながらぼーっとした頭で歩いていた。

「・・・くそ・・・ぼーっとしやがるな・・・やっぱ・・・この状態じゃ・・・無理・・・だった・・・か・・・・・・・。」

その瞬間俺の意識は闇に落ちた。

やまとｓｉｄｅ

先輩に渡す傘を持って私は学校へと急いでいた。

学校に大分近づいた頃、先輩といつも帰っている通学路の途中の道路の電信柱付近になにやら倒れている人影を見つけた。

私は変な胸騒ぎを覚えてその人影に近づくとその人はびしょ濡れになっている先輩だった。

私は慌てて先輩の元に近寄り先輩に声をかける。

「先輩！大丈夫！？しっかりして！先輩！先輩！！」

大声で呼びかけるが先輩からの返答はない、完全に意識を失っていた。

私は慌てて先輩の額を触ってみると、凄い熱が出ていた。

このままじゃまずいと感じた私は先輩の家に電話を入れて助けを求

める事にした。

数回のコールの後

「もしもし、龍神ですがどちら様ですか?」

先輩のお母さんが電話に出たので私は

「慶一先輩のお母さんですか?私は先輩の友人で永森やまとと言います。実は・・・・・と言うわけなんです。お願いです、助けて下さい!」

私が事情を説明すると先輩のお母さんはすぐに先輩のお父さんを迎えによこしてくれた。

倒れた先輩を先輩のお父さんがおぶって私は先輩のお父さんと一緒に先輩の家へと急いだ。

その際にこうにも連絡をいれるとこうも慌てて先輩の家にかけつけたのだった。

家に着き先輩のご家族が先輩を着替えさせ布団に寝かせて様子を伺いながら先輩のお母さんはお医者さんを呼んだらしく先生が来るまでの間私とこうは2人で先輩を見ていた。

「やまと、先輩大丈夫かな・・・?」

こうが心配そうに聞いてくる。私も心配そうな顔で

「私が見つけた時には大分熱も高いようだった・・・。心配がある

とすれば肺炎とかかしらね・・・？」

こうにそう返答するとこうも先輩の顔を見ながら黙り込んでしまった。

しばらくするとお医者さんが来てくれて先輩の状態を診てくれた。

「軽い肺炎になりかかっていました。もう少し発見が遅れていたら命にも係わっていたでしょう。そちらのお嬢さんのおかげですね。ともかく後は安静にしている事です。ではお大事に。」

そう言って帰っていくお医者さんにお礼を言い私は再び先輩の部屋へと戻ってきて先輩の看病をこうと一緒にしたのだった。

結局その日は先輩が心配だった事もあり私達は先輩の家に泊り込む事となった。

次の日の朝先輩が目を醒ますまで私達はずっと先輩の側についていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

（ううん・・・なんだろう、なんだか暖かいな・・・俺は確か学校の帰りに・・・どうしたんだっけ・・・？ん？・・・人の気配？）

俺は人の気配を感じて目を開けた。そこは俺の見知った天井であり、部屋だった。

周りを見渡した時、こうとやまとが俺の側について眠っているのが見えたので俺は驚いて飛び起き２人に声をかけた。

「おい、2人とも起きろ。お前ら俺の部屋で何をしてるんだ?」

2人の方を揺すってみると2人は目を醒まして俺を見るなり涙目になりながら飛びついてきた。

「先輩!先輩、よかった。もう大丈夫なんですね?」

「心配したわ。先輩、もう体は大丈夫?」

俺はいきなり涙目で飛びつかれる状況が理解できず、混乱した頭で2人に

「おい、落ち着けって。2人とも、一体何があったんだ?」

俺が事情を聞くとそれにはやまとが答えてくれた。

「昨日先輩と別れた後、先輩の事が気になったんでこうを送った後、先輩に傘を届けようと家に傘を取りに戻って学校へ向かったら、通学路の途中で先輩が倒れていたのを見つけたのよ。それで私は慌てて先輩の家に連絡して助けを呼んで先輩を家に運んできたの。その時には先輩のお父さんがかけつけてくれたわ。」

そこでやまとは一旦言葉を切り再び悲しそうな顔で言葉を続けた。

「家に着いても先輩の意識が戻らなくて、お医者さんに来てもらって先輩を診てもらったわ。幸い命に別状はなかったけれど、私達は心配だったから、先輩の看病をするために、先輩の部屋にいさせてもらったのよ・・・。」

やまとの説明を受けて俺は申し訳なさそうな顔をして

「そうだったのか・・・2人とも心配かけたな、本当にごめんな？」

俺が2人に謝ると、2人は俺から離れて少し顔を赤くしながら

「先輩が無事でよかったです。今後はあまり心配かけないで下さいね？」

「友達を失うのはごめんだわ。先輩、今度はもうこんな無茶はしないで・・・もうあんな怖い思いはしたくないから・・・。」

俺はますます申し訳なくなって

「そうだな、自分で言った事なのに結局無理してお前らを悲しませるような真似しちゃったよな・・・。」

俺の言葉に2人とも涙を拭って笑顔になって

「もういいですよ先輩。もう体は大丈夫ですか？」

「分かってくれればいいわ。とにかく今日は1日、熱が引いて来てるとはいえ無茶はしないこと。いいわね？」

俺は2人に笑顔を返しながら

「ああ、わかったよ。今日は2人を心配させない為にも大人しくしてるさ。元気になったらまた遊ぼうな。」

そう言うと2人は「「早く元気になってね？」」と言ってくれた。

俺は2人に頷き返して、その後親父に不本意だったが、助けてもらった礼を言いにいったら珍しく親父は

「今回は私の判断が間違っていたようだ。無理をさせたな、すまなかったな、慶一。」

と言っていたのが印象に残っていた。

俺が親父と交わす初めてのお互いが素直になったやりとりだった。

・・・・・ってな事があったのさ。」

話し終えるとみゆきは”ほーっ”と軽いため息をつきながら

「かなり大変な事になったんですね。でも無事でよかったですね。」

と言ってくれた。

「まあ、今こうしてみゆきやみんなと話していられるのもあいつらが俺を助けてくれたからなんだって思うと、あいつらには命を救ってもらった事凄く感謝してるよ。」

俺はみゆきにそう返答するとみゆきもにっこりとしながら

「そうですね、私も感謝ってところでしょうか・・・。その時に慶一さんが亡くなってしまっていたらこうして出会う事もできなかったのでしょうから。」

さり気なく”どきり”とするような事を言うみゆきの顔をまともに見れなくなって俺は照れ隠しに顔をそらす。

顔をそらしながら俺は

「ま、まあ、みゆきの言うとおりではあるな。あの時死んでたら今ここにいなかったんだし。」

しどろもどろになりながらみゆきに答える。

そんな仕草をみながらみゆきはいつもの柔らかな笑顔で微笑んでいた。

「出会えてよかったですよ？慶一さん。」

さり気なくそういうみゆきの言葉に俺は顔を赤くしていた。

そうこうしてるうちに目的の駅前へと辿り着いた。

俺はコンビニを見つけるとみゆきに待っていてもらい傘を買いに行った。

傘を買ってコンビニから出てきて俺はみゆきについでに買ってきた紅茶をみゆきに渡した。

「サンキューみゆき。これはここまで入れてくれた礼だ、こんな物で悪いけど受け取ってくれ。」

紅茶を受け取りつつも恐縮して

「別にお礼なんていいんですよ。私も大した事をしたわけではありませんから。でもせっかくですから、これはありがたくいただかせてもらいますね？」

そう言いながらも紅茶を受け取ってくれたので俺はほっとしながら

「それじゃここで。みゆき、今日はありがとな。おかげで助かったよ。」

そう言って駅でみゆきと別れる。みゆきも俺に手を振りながら

「いえ、このくらいの事でしたらいつでも協力しますから。それと、今後もあまり無茶はなさらないでくださいね？」

と俺に釘を刺してくれた。俺はそんなみゆきの言葉に苦笑しながらも「ああ、わかってるさ。」そう、みゆきに返事をして家に帰るのだった。

俺は旋律達に生かされた。

旋律達が俺を助けてくれた事が今につながっていると今日過去を振り返って改めて実感する俺だった。

それと同時に旋律達が作ってくれた未来に俺は今日感謝をしながら自分がここに生きている事を嬉しく思うのだった。

旋律達のエピソード～過去の一幕～（後書き）

次は柊姉妹の誕生日

旋律達との約束～柊姉妹の誕生日～

雨季もまだ抜けきらない7月、その月は二人の旋律の誕生日がある月でもあった。

俺はここのとこ色々と物入りが多くなってきたのと柊姉妹の誕生日も近い事もあって、それらに対処するために6月の中旬以降から緊急のバイトを始めたのだった。

今回の誕生日会はまた家に押しかけられるのかと思っていたのだが、今回は珍しく柊家でやると言う事になったのだった。

柊家にはまだお邪魔した事のない俺だったが、かがみから家の地図を書いてもらい、当日はその地図を参考にして柊家へと向かう手筈となった。

そして誕生日会まで後3日と迫ったある日の昼休みいつものように昼食を取っている最中こなたが俺の方を向いて

「慶一君ー。今回の誕生日会はかがみの家でやる事になったからね？」

そう言ってくるこなたに俺はちょっと意外だと言う顔をしながら

「今回も家に押しかけられるかと思って、覚悟はしてたんだがな。」

ちょっと嫌味を含ませながらこなたに言うと、こなたは少し頬を膨らませながら

「むう、私だって毎回慶一君に迷惑かけるわけじゃないよ。」

少し怒ったようだったので俺は噴出しつつもこなたをなだめるように

「冗談だよ。遊びに来てくれること事態は迷惑だとは思ってないさ。」

そう返事するとこなたはまだ少し不満顔で

「ほんとなのかねえ・・・。」

と呟いていた。

それを見ていたかがみはすかさず

「あんたが毎回変な行動するから、慶一くんにも警戒心ができちゃってるんじゃないの？」

そう突っ込みを入れるとこなたは

「変なってなにさー！そんなに変な事なんてしてないじゃん、かがみの意地悪ー！」

そんなこなたの反論を軽く受け流して、かがみは俺の方を向くと

「はいはい。まあ、そういう事だからさ。慶一くん、家にはまだ来た事なかったよね？これ渡しておくから。」

そう言って俺に自宅の行き方が書かれた地図を俺にくれたのだった。

「当日は楽しみにしてるから、けいちゃんも遊びにきてね？」

ほんわかとした笑顔でそう言ってくるつかさに俺は頷いて

「ああ、その時はちゃんとプレゼントも用意してお邪魔させてもらうよ。」

つかさに笑顔を返しながら答えるのだった。

そんなやり取りを見ながらみゆきもいつもの柔らかい笑顔で

「当日は楽しみですね。私もなにか用意させていただきますから。」

みゆきがそう言うとかがみは照れながら

「い、いいわよ。そんなに気を使ってもらわなくたってさ。その気持ちだけでもうれしいから。」

俺はそんな2人をみながらかがみに

「かがみ、みさおとあやのも呼ぶのか？今回の誕生日会。」

そう質問してみるとかがみは苦笑しながら

「ええ。とはいえ、日下部がかなり乗り気だったからね。前回のこなたの誕生日の時の雪辱戦をするんだって息巻いてたわよ。」

その様子を頭に思い浮かべながら

「またあれやる事になるのかねえ・・・。」

と少し疲れたように呟く俺だった。

その言葉をきいていたこなたはおもむろに立ち上がり

「ふっふっふっ、今回は私が勝って前回の雪辱をしてみせる！」

拳を握り締めて宣言するのだった。

俺は苦笑しながら

「まあ、せいぜいがんばれ、こなた。」

と声をかけてやるのだった。

そしてその日の放課後・・・・・・

「それじゃ今日もバイトだから私先に行くねー。みんなまた明日ー。」

そう言って俺達のクラスに挨拶にきた後ダッシュでバイト先へ向かうこなたを見送りながら

「あいつのバイト先ってどこなのかしらね？」

顎に手を当て考え込む仕草をしながらかがみが言う。

俺も同じように腕組みしつつ

「そういや俺も聞いてないな・・・あ、かがみ、俺もバイトだから

先に行くよ。また明日な。」

そう言ってかがみに挨拶をして教室を出る時、かがみも

「うん、バイト頑張ってね。当日は楽しみにしてるから。それじゃまた明日ね。」

そう言って俺に声をかけてくれたかがみに手を振ってバイト先へ向かおうとしたが、その前に一度アニ研へ顔を出しに行っておく事にした。

部室前に着き俺はドアをノックして

「入るぞー。」

と言いながら入室すると、他の部員と活動をしているこうとやまとが居たので俺は二人に挨拶をした。

「こう、やまと。一度顔出してからバイト行こうと思ってな。とりあえず来てみたがここのところはどうだ?」

そう声をかけると2人とも俺の方に顔を向けて

「あ、先輩、ちはーです。ええ、今の所は特に問題はないですよ?」

そう言うと、俺に気付いたやまとも軽くため息をつきながら

「先輩、今日もバイトなの?大変ね・・・。」

と答えてくれた。

俺はそんな2人に聞いてみることがあったので

「こう、やまと7月7日は予定空いてるか？」

2人にそう声をかけてみると、2人とも少し考える仕草をした後

「特に予定はないですね。何かあるんですか？」
「私も特には・・・何かイベントでもあったかしら？」

と答えてくれたので俺は頷くと

「その日はかがみとつかさの誕生日なんだよ。こなたの時もお前達も呼んで誕生日会やったし、そうでなくても俺達は仲間みたいなもんだからな。今回も参加してくれればと思ったんだ。」

誕生日会の事を伝える俺。

2人は笑いながら

「柊先輩達の誕生日会ですか。分かりました。参加しますよー？」
「私もかまわないわ。当日は行かせてもらうわね。」
（また先輩のお人好しがでたのね・・・）

2人の返事を聞いている最中、やまとが何か呟いていたような気がしたので

「ありがとう、二人とも。ところでやまと、さっき何か言ってたか？」

一応聞いてみるとやまとはそっぽを向きながら

「別に何も言ってないわ・・・。」

と、素っ気無く答えるのだった。

俺は頭にハテナマークを飛ばしつつも

「じゃあ、当日はこの地図の場所へ来てくれ。2人に渡しておくから。」

そう言って携帯に取り込んだ柊家の地図を2人の携帯に送信した。

それをやりながらこうは俺に

「今回は先輩の家じゃないんですね?」

そう聞いて来たので俺は頷くと、やまともそんな俺の様子を見ながら

「柊先輩の家でやるのね?泉先輩あたりが、慶一先輩の家でまたやろうとか言い出しそうな感じあるけれど・・・。」

そう言いつつ2人は地図を確認しながら俺に言う。

俺は苦笑しながら

「まあ、流石に何度もじゃ迷惑かもというかがみの気遣いかもしれないけどな。」

俺がそう説明すると2人とも納得したようで「「なるほど」」と呟

いていた。

「まあ、そんなわけだから当日はよろしくな。俺はそろそろバイト行かなきゃならないからこれで行くよ。みんな、活動がんばれよ？」

俺はそう言いながら教室を後にしようとするとこうたちが

「分かりました。バイト頑張ってくださいね。それとこっちは任せてください。」

「早く行かないと遅刻するわよ？こっちは大丈夫だから急いで。」

と言って見送ってくれた。

俺は2人に手を振りながら教室を後にしてバイト先へと向かった。

俺のバイト先は自分の腕力を生かした引越し業者手伝いのバイトだ。

手っ取り早くいいバイトがないだろうかと探しているときに親父の知人からの紹介を受けたのだ。

日給も中々良かったので鈍った体を鍛える目的も兼ねてこのバイトを受けることにしたのだった。

「・・・・・すいません、ちょっと遅れました。」

「おう、待ってたよ。今日はここだから、頑張ってくれな。」

「はい、それじゃさっさと行ってきちゃいますね？」

仕事場の予定表を貰い、運転手さんと助手さんの3人で車に乗り込

み出発する。

やがて現場に到着すると早速仕事が始まった。

家具を運び、食器類を運び、冷蔵庫やその他の電化製品を運び、夜中１０：３０頃にはすべてが終了した。

「お疲れ様でしたー。」

「おう、またよろしくな。今日はゆっくり休めよー？」

「はい、それじゃまたー。」

今日の分のバイト代を受け取り俺は上司に挨拶を返して家へと戻っていった。

「明日はこれで、これまで貯めた分もあわせてプレゼント買えるな。当日もまた楽しい誕生日会になるといいけどな・・・。」

家に戻る道すがら俺は誕生日会の事に想いを巡らせながらそう呟くのだった。

しかし当日にまさかの事態が起こる事をこの時の俺は気付くはずもなかったのだった。

誕生日前日の放課後、俺はかがみとつかさのプレゼントを買うために、とあるデパートへとやってきていた。

以前から目をつけていた二人へのプレゼントの品を決めていたのであとはお金が貯まるのを待っていたのだった。

俺は2人にプレゼントを買い、プレゼントには店員に頼んでリボンをかけてもらった。

品物を受け取り、俺は明日の事を考えながら意気揚揚と自宅へと引き上げていくのだった。

家に着いてリビングでのんびりしていると、俺の携帯に着信が入ったので電話に出ると

「やっほー慶一くん、私だよー？明日の準備はばっちりかな？」

元気な声の電話の主はこなただった。

「ああ。今日はプレゼントも買ってきたところだよ。こなたもきっちり準備してあるんだろうな？」

俺はこなたにそう返すとこなたも

「もちろん、私に抜かりはないよ。まあ、後は当日にって事で。明日は楽しもうねー？」

明るい声で言うこなたに俺も笑いながら

「ああ、わかった。俺も楽しみだしな。それじゃ明日、かがみの家でな。」

「うん、それじゃ明日ね。ばいばいー♪」

そう言ってこなたからの電話が終わったのだった。

こなたとの電話からしばらくしてまたも携帯に着信が入った。

俺は再び電話をとると

「もしもし、慶一くん？私よ、かがみ。」

電話の主は今度はかがみだった。

「おう、かがみか。どうしたんだ？」

「うん。明日の事なんだけどさ、一応2人邪魔が入るかもしれないから注意してね、って言っておこうと思って。」

注意というかがみの言葉に首を傾げつつ俺はかがみに

「2人？注意？どういう事なんだ？」

かがみに聞いてみるとかがみは少しいいづらそうに

「実は私の家には私達以外に2人の姉がいるのよ。それで2人にうっかり明日の誕生日会に慶一くんが来るって事言っちゃってね、そしたらものすごい質問攻めされて、明日、慶一くんの顔を拝ませてもらうから、って言い出して、聞かなくってね・・・。」

少し疲れたような声でそう言ってくるかがみに

「かがみの所にはまだ2人のお姉さんがいたのか・・・。しかもその口ぶりだと相当・・・。」

苦笑しながら言う俺にかがみも呆れたように

「まあ、苦労してる・・・。だから明日変な事になったらごめんね、って言っておきたくてさ・・・。」

「そっか、わかった。とりあえず注意しとくよ。わざわざありがとな。」

かがみの苦労をねぎらうかのように優しい声で俺はかがみに答えた。

かがみは少し安心したのか

「あはは。ともあれ、明日は楽しめるといいわね。私も明日は楽しみにしてるから。」

少し楽な感じでそう返事してきた。

「ああ、楽しい1日になるといいな。それじゃ明日行くからさ、時間も遅いし今日はこれでな。」

俺もそう返事をするのだった。

「うん、それじゃお休みなさい。」

「お休み、かがみ。」

2人とも挨拶を交し合って電話を終えた。

俺も今日は早めに休む事にしてやるべき事も終え、プレゼントもしっかりと確認した後眠りにつくのだった。

そして迎えた当日・・・・・・

2人の誕生日会へ行く為に準備をしていた俺だったが、いざ出発すると言うところで俺の携帯が着信を告げた。

俺はとりあえず電話の主を確認すると、とりあえず電話を取った。

「もしもし、森村君か?私だ。」

それはバイト先の上司からだった。

「はい、そうですが、どうかしたんですか?急に電話なんて。」

上司は言いにくそうに少し間を置いていたがやがて

「うん、実は昨日の仕事でチームの一人が作業中に怪我をしてしまってな。急遽この欠員を埋める人員を探したんだが抜けれるものがいなくてな・・・。君にとって今日が大切な日だと言う事は百も承知なのだが・・・頼む、今回だけでいいから力を貸してもらえないだろうか?もちろんバイト代は上乗せする。もはや頼めるのは君しかいないんだ・・・。」

悲痛な声を聞いた俺はしばらく電話口で考え込んでいたが親父の知人の紹介で貰ったバイトでもある事、何よりいままで世話になってきた事を考えた時俺の中のお人好しの血が俺を突き動かすのを感じたのだった。

「・・・・・わかりました。すぐに向かいます。場所はどこですか?」

俺は気がつくと上司にそう返事をしていたのだった。

「そうか！助かる！すぐに会社の方へ来てくれ。現場へと送るから。」

上司は喜びと安堵の声で俺にそう言うと会社へと来て欲しい旨を俺に告げた。

俺はすぐさま仕事できるラフな格好に着替えて家を飛び出していった。

途中、かがみの所に自分が遅れて行く旨を伝えるために電話をいれた。

「もしもし、かがみか？悪いんだけどバイト先でトラブルが起きたんだ。それで少し遅れそうだから誕生日会先に始めていてくれ。」

俺が用件を伝えるとかがみは心配そうな声で

「トラブル？大丈夫なの？とりあえず分かったわ。でも、絶対来てよね？待ってるからさ。」

そう返事してくれたかがみに俺は

「済まない、こんな大事な日にこんな事になってさ。こなた達にもよろしく伝えておいてくれな。」

心からかがみに悪いと謝罪した。

「わかったわ。バイトがんばってね。こなた達には私から伝えておくから、安心して行ってきて。」

そう答えてくれたので俺も

「ああ、バイトさっさと片付けてそっち行くから、待っててくれよな。」

そう返事をするとかがみも

「うん。それじゃ後でね。」

挨拶を交わして電話を切り俺はバイト先へと急いだ。

かがみｓｉｄｅ

楽しみにしていた誕生日会、思わぬ慶一くんのアクシデントが起きて私は内心気が気でなかったが、こなたたちも家に集合してきたので、慶一くんの言うとおり先に始めている事にしたのだった。

「けいちゃん急なバイトなんだよね？大変だよね～・・・。」

つかさが心持ち元気がない顔で言う。

「うーん、不可抗力だけどそれでも仕事場に義理立てするあたり、慶一君らしいかな。」

苦笑しながら言うこなた。

「まあ、そこが慶一さんのいい所でもあるんでしょうね。残った私

達は慶一さんが来た時にすぐに楽しんでいただけるような雰囲気を作っておく事が大事ですね。」

みんなの顔を見回しながら言うみゆき。

「大丈夫よ。ちょっと遅れてるだけなんだし、慶ちゃんが来るまで私達で盛り上がってましょう？」

ニコニコと柔らかい笑顔で言うあやの。

「そうだなー。慶一が来た時の為に前哨戦でもやっておこうぜ？みんな。」

こちらも太陽のような笑顔を振り撒きながら言うみさお。

「先輩ならちゃっちゃと切り上げて戻ってきますよ。それまでは楽しみましょうー。」

同じく笑顔なこう。

「かがみ先輩とつかさ先輩は主役なんだからそんな顔してたらいけないわ。きっとみんな揃うから大丈夫・・・。」

かがみとつかさを元気付けるように言うやまと。

そんなみんなの言葉を受けてかがみは一度深呼吸すると

「そうね。あいつは来るっていったんだから先に楽しんじゃおう。さあ、始めるわよー？」

かがみの一声で全員が「おー！！」と掛け声をかけてパーティが始まったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

誕生日会当日に突如呼び出しを受け誕生日会に遅れて行くことになってしまった訳だが、俺は早く終わらせて誕生日会に行きたい思いを持ちながら上司に言われた現場へと来ていた。

現場は何時も以上の大変な場所だったのと、どうやらやる現場はここだけではないらしく俺自身もどれだけの時間がかかるか予想も出来ない状態でいた。

「すまんな、突然呼び出す事になって・・・。」

バイトの同僚が俺に申し訳なさそうな顔で俺に声をかけてきた。

「いえ、困った時はお互い様ですし気にしないで下さい。それよりもさっさとけりをつけてしまいましょう。」

俺が同僚を励ますように言うと

「そうだな、それじゃとっとと片付けよう。森村、たのんだぞ？」

そう言ってくる同僚に俺は

「分かりました。それじゃ行きますよー。」

そう返事をして作業を始めるのだった。

作業を始めてから数時間が過ぎたので時計を確認してみると午後の３時を回った所だった。

しかしこの時間になってもまだ一つ目の現場作業が終わっていなかった。

中々進まない作業に俺も次第に焦りを感じるようになってきた。

そして午後５時、ようやく一つ目の現場が終わった。

かがみｓｉｄｅ

あれから私達は慶一くんがいつ来ても楽しめるようにと何とか場を盛り上げていたのだが気がつくと時間は５時を回っていた。

私達はいつまでたっても現れない慶一くんが次第に心配になってきていてこの時間になるとみんなも大分元気がなくなってるように思えた。

「慶一君来ないね・・・。何かあったのかなあ・・・？連絡も来ないみたいだし・・・。」

「そうね・・・流石に連絡もないって言うのはちょっと心配かも・・・。」

「けいちゃん大丈夫なのかな？」

「おそらく大分てこずられているのではないでしょうか・・・。ひょっとしたら作業の切れ目も出来ずに、連絡する余裕もないのかもしれませんね・・・。」

「大丈夫、柊ちゃん。慶ちゃんはきっと来てくれるよ。こういう日を大事にしてくれる人だから。」

「そうさ。あいつは友達との約束は何があっても守るやつなんだか

ら。」

「大丈夫です、柊先輩。きっと来ますよ。私達の時だって遅れてきたことあったけれど、ちゃんと駆けつけてくれましたから。」

「そうよ?柊先輩。だから私はそんな先輩を信頼して来たのだから・・・。」

不安になる私達に中学時代からの付き合いである後輩2人と日下部と峰岸もあいつの事を信じているようだった。

私も何故かあいつは信じるに値する人だと思えたから、こなた達に励ますように

「私達は陵桜に入ってから慶一くんと知り合ったけど、それでも彼は信頼できる人だっていう事は分かったわ。だから、私達も慶一くんを信じましょ?こなた、つかさ、みゆき。」

私の言葉に3人は私の方を見つめて何かを考えていたようだったがやがて3人とも

「そうだね。私だって信じるよ。」「わたしも信じる。」「私もです。」

口々にそう言ってくれた。

私達は頷きあいながらぎりぎりの所まで慶一くんを待ってみる事にしたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

最初の現場でてこずりすぎた俺たちは、いそいで次の現場へと赴い

ていた。

午後６時３０分、今日の最後の現場の作業が始まったのだった。

「さあ、ここを終わらせられれば何とかなる。森村、もう一頑張り頼むぞ？」

同僚の言葉に俺も返事をした。

「分かりました。さあ、片付けましょう。」

そう言って俺たちは作業を再開した。

そしてしばらく作業を続けること数時間、時計を確認してみると時間は午後１０時３０分を回っていた。

俺は時計を確認して愕然となったと同時にかがみたちへの罪悪感で一杯になっていた。

誕生日会に行けなかった事を悔やみながら俺は残りの作業を片付けたのだった。

午後１１：００、すべての作業を終えて俺は自宅へと戻ってきていた。

家に帰り、二人へのプレゼントを手にとって俺はどうしたものだろうかと思案に暮れていたが時計を見て、かがみの家の地図を確認した俺はおもむろに携帯を手に取りかがみにメールを飛ばした。

かがみにメールを飛ばした後俺は２人へのプレゼントを引っつかみ、

家を飛び出したのだった。

かがみｓｉｄｅ

結局あれからみんなが帰る頃になっても慶一くんは戻ってこなかった。

みんなも最後まで慶一くんが来る事を期待していたがその期待も空しく終わったのだった。

それぞれ浮かない顔で今日の誕生日会はお開きになった。

私とつかさは後片付けをしながら今日の事を振り返りため息をついていた。

それと同時に私の２人の姉に散々期待してたのに来なかったじゃないかと文句を言われ、凹んでいたのだった。

「慶一くん、結局来なかったな・・・。」

自分の部屋に戻って落ち着いてから天井を見上げながら私はそう呟いていた。

そうして凄く残念な思いで後もう数分で私とつかさの誕生日が終わる時間が近づいてきた頃、私の携帯にメールが飛び込んできたのだった。

ＦＲＯＭ：慶一

かがみ、今日は本当に済まなかった。午後１１時３０分家に着いた

ところだ。連絡もする暇がなくてみんなをがっかりさせちゃったよな。約束したのに俺は最低な奴だな、ごめん。

お詫びついでと言ってはなんだけど、俺は今お前の家に向かってる。せめて用意したプレゼントを日付が変わる前に渡したいからだ。11：55分までにはつけると思うからもしプレゼント受け取ってくれるのなら外に出ていて欲しい。

P．Sもしつかさが眠ってしまっていたらかがみから渡してやって欲しい。

「慶一くん・・・。」

私はそう呟きながらメールを受け取って確認後すぐさま時計を見た。時計は11：53分を示していたので私は慌てて1階へと降りていき、玄関の前で慶一くんを待ったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こんな時間だから電車も当然ない。

だが、かがみの家は隣町だったのが幸いした。

俺は地図を頼りにかがみの家へとひた走りに走っていた。

「はあ、はあ、はあ、約束・・・守れなかったんだから・・・せめて・・・これくらい・・・は・・・しなきゃ・・・男じゃ・・・ないからな・・・」

さっきまでの労働で体も大分参っているはずだった。

けれど今日の約束を果たす、その事だけを考えて俺はかがみの家へ向かった。

目的を果たせれば後はどうとでもなれという気持ちが俺を突き動かしていたのだった。

やがて時間は１１：５５分になる頃、俺はかがみの家の前に辿り着いたのだった。

俺は乱れた息を整えながらかがみの家の玄関前を凝視した。

そこにはパジャマ姿のかがみが俺のメールに答えてくれて俺を待っていてくれたのだった。

俺はゆっくりとかがみの側に近づきかがみに声をかけた。

「はあ、はあ、ぜえ、ぜえ、か、かが・・・み、ごめん・・・遅く・・・なった・・・。」

俺の息も絶え絶えな呼びかけにかがみは俺の方を振り向いて俺の側へやってきて俺を睨みつけながら

「・・・・・本当よ・・・ばか・・・みんなあんたの事信じて待っててくれたのよ?なのに、連絡の一つもよこさないで・・・私も、皆も・・・心配・・・したんだからね?」

俺はようやく息を整えてかがみにプレゼントを差し出して

「ごめん、本当に。でもこれだけは日付が変わってしまう前に渡したかったからさ。受け取ってくれるかな？」

俺の差し出したプレゼントを受け取り顔を赤らめつつ大事そうにそれを胸に抱え込むかがみ。

そして、かがみは俺を上目使いで見ながら

「あ、ありがとう。開けてみてもいいかな？」

おずおずとそう言う、そんなかがみの言葉に俺は頷いて

「ああ、気に入ってくれるといいんだけどね。」

そういうとかがみは1つ頷いてプレゼントの包みを開け始めた。

中に入っていたのはかがみに似合いそうなかがみの髪の色とおそろいで星の模様が一つついたリボンと太陽をかたどったペンダントだった。

かがみは特にペンダントの方に驚きつつ

「わあ！リボンはともかく、こっちはいいの？こんな高価そうな物・・・。」

どことなく悪いと思っている、そんな表情を見せるかがみ。

俺はそんなかがみに笑いかけながら

「ああ、俺が送りたいって思った物だからな。だから貰ってくれると嬉しい。ちなみにつかさにも月をかたどったペンダントを買ったよ。」

かがみは俺の言葉に首をかしげながら

「月？私は太陽・・・何か意味があるの？」

そう質問をしてきたので俺は

「うん。太陽も月もどちらも必要な物、どちらかがかけても輝かない。かがみとつかさは両方がいるから両方ともに輝ける。だから2人の象徴の意味を込めたんだ。」

そう説明するとかがみはペンダントをまじまじと見たあと俺に笑顔を向けて

「太陽、か、ありがとう慶一くん。とても素敵なプレゼント、とっても嬉しかった。これ大事にするね？」

俺もかがみのその言葉に応えるように

「そう言ってくれてよかったよ。それと改めて誕生日おめでとう。かがみ。」

俺がかがみにそう告げた時かがみも俺に返事をしようとしていたがその瞬間かがみの後ろから

「けいちゃん、わたしにはおめでとうって言ってくれないの？」

そう言うつかさの声に俺とかがみは驚いて

「つ、つかさ、あんた眠ってたんじゃないの？どうしてここにいるのよ？」

そう言って、この場に居るはずのない妹の存在に驚いているようだった。

俺もまた、いきなり現れたつかさに慌てながら

「つかさ、お前が寝てると思ったから俺はお前の分のプレゼントもかがみに託したとこだったんだよ。」

そう説明するとつかさはかがみに

「おねえちゃん、私のはどれなの？」

そう聞かれかがみは俺から受け取っていたつかさの分のプレゼントを渡した。

「ほら、これよ？リボンとペンダント。あんたのは月だってさ。」

つかさはプレゼントを受け取るとペンダントを早速つけて俺に向き直って

「ねえ、にあってるかな？けいちゃん。」

にこにこしながらそう聞いてきたので俺も

「ああ、よく似合ってるよ。俺も選んだ甲斐があったもんだ。」

つかさに正直な感想を言うとつかさは満面の笑みで

「えへへ、うれしいな。ありがとうけいちゃん。」

そう、お礼を言って来たので俺はつかさにも言うべき事を言わなくちゃな、と思い

「誕生日おめでとう、つかさ。」

そう言いながら頭をなでてやると、つかさは嬉しそうな顔をしていたのだった。

あれから大分時間が過ぎたようだったので俺は携帯を取り出して時間を確認したら日付がとっくに変わっていたので俺は2人に

「かがみ、つかさ、もう遅い時間だ。特につかさは寝ておかないと明日つらいだろ?そろそろ俺も帰るからさ。」

俺がそう告げると2人はそれぞれに

「そうね、そろそろ寝ないとまずいわよね・・・。それじゃ今日はここまでね。」

「ふああ、すごく眠いよ・・・。おねえちゃん私そろそろ家に入るね?」

つかさはあくびをしながらそう言うと、俺達を残して先に家に戻っていった。

俺はつかさを見送った後、かがみに挨拶をして帰る事にした。

「かがみ、俺はそろそろ帰るよ。今日はほんとうにごめんな。また明日学校でな。」

俺がそう言うとかがみも首をふって

「ううん、日付変わる前に来てくれただけでも嬉しいから。でもまた走って帰るわけ？大変じゃない？」

俺をそう言って気にかけてくれる、そんなかがみの心配を笑い飛ばしながら

「ははは、大丈夫さこれでも鍛えてるしな。親父のしごきに比べたらこの程度なんて事ないさ。」

俺がそう応えるとかがみは呆れたような顔で

「どんな親父さんよ、あんたのとこは・・・。でも気をつけて帰ってね？」

最後には俺を心配してくれたかがみだった。

俺はかがみに手を振りながら柊家を後にした。

去り際にかがみが俺に

「慶一くん、今日は一緒に盛り上がれなかったけど、すごく嬉しい誕生日だったよ。私今日の事わすれないからね？」

そう声をかけてくれた。

俺はそんなかがみの言葉に頷いて、何とかかがみとの約束を果たせた事を安堵しながら自宅へ向かって走っていくのだった。

自宅に帰り着き時間を見るとすでに夜中の2時近くになっていた。

俺は明日は学校での居眠りに注意しなけりゃなと思いながら疲れた体をなるべく休ませるのだった。

かがみｓｉｄｅ

最低の誕生日会になると思った今日、慶一くんからの一本のメールは私に忘れられない誕生日をくれた。

私は慶一くんから貰ったプレゼントを改めて見た後体を休める為に布団に入った。

（今日の誕生日会は一緒に出来なかったけど、慶一くん最後の最後に来てくれた。すごく嬉しかったな。みんなは約束を守る人だと言ってたけど改めてそれを知れたわね・・・。私はこれからも彼を信頼できそうだな・・・。それと同時に・・・なんだろう、この気持ち・・・これからも彼と居たいって思える。でもそれだけじゃないようなそんな感じ、よく分からないな・・・とにかく明日からもまた楽しくやっていこう。彼が側に居るならきっと楽しいと思えるから・・・。）

そう考えながら私の意識は闇に落ちていったのだった。

旋律達との約束。

何とか果たす事が出来た俺はほっとしていた。

これからも約束はなされていくかもしれない。

けれど俺は友との約束はこれからも果たしていきたいと心に誓うのだった。

旋律達の祭り巡り～序章～

旋律の二人、柊姉妹の誕生日の次の日俺は柊姉妹を除く全員に当日の誕生日会に来れなかった事を散々に責められたのだが、かがみとつかさが昨晩の事をみんなに伝えると、途端に今度は二人を除く全員にからかわれるはめになった。

そんな騒ぎもあってそろそろ夏休みも近づいてきた頃、みんなで教室にて雑談を交わしているとこなたがみんなを見回しながら

「夏休みも近いけどさ、その前にみんなで遊びに行きたいねー。」

と言い出したのを聞いて俺はある事を思い出して

「遊びに、か。それならいいイベントがあるぞ？」

こなたにそう返事するとこなたは嬉しそうに目を輝かせて

「え？なになに？そのイベントなんなの？」

そう聞いてきたので俺は

「今月の中旬頃に今の俺住んでる地元で祭りがあるんだ。楽しむにはもってこいだと思うぞ？」

そう応えるとこなた達も口々に

「祭り？いいねー、みんなでいこうよ？」

「慶一くんの地元のっていうと意外と有名なやつよね？確かに面白

そうね。」
「わたしも行きたいな～。ねえ、おねえちゃんわたし達も行こうよ。」
「中々興味深いですね。私も見に行きたいです。」
「どうせだからみんなで行かない？その方が楽しいわよ。」
「私そういうの大好きだゼ！私も一緒にいくぞー。」

みんな乗り気なようだった。

「ならみんなで行くか。いざとなれば家を休憩所代わりに使うのもいいし、集合場所にしてもいいんだしな。」

「いいね。じゃあそうしようか。集合は慶一君の家って事で。」

こなたがみんなにそう言うとみんなも「そうしようか。」と納得するのだった。

そしてどこから聞きつけてきたのか、こうとやまとも今回のイベントへの参加を表明するのだった。

祭りの当日・・・・・・

みんなが来るのを待ちながら軽く部屋の掃除等をしながら暇を潰していると”ピンポーン”と呼び鈴の鳴る音が聞こえたので玄関に迎えに行くとまず到着したのは

「先輩、きましたよー。」
「私達が先についたみたいね。」

こうとやまとの2人だった。

俺は2人をリビングに通して他のメンバーが揃うまでの間くつろいでいてもらうことにした。

俺はキッチンへと行き、2人に麦茶茶菓子を用意して部屋に戻って

「ほら、麦茶。みんなが来るまではゆっくりしてろよ。」

そう言い、2人に麦茶と軽い茶菓子等を出した。

この暑さに更にこのもてなしに喜んだ2人は嬉しそうな顔で

「先輩、いただきますね。」

「いただくわ、先輩。」

そう言うと、お茶を飲み、お茶菓子を食べながらのんびりする2人。

そのうちに残りのメンバーもやってきた。

「慶一君、来たよー。」

みんなを代表してこなたが挨拶をする。

「みんな、いらっしゃい。とりあえず上がってくれ。」

俺はみんなを家にあげてリビングに通すと

「こんばんは。先輩方、先に来てまってましたよ。」

「こんばんは。こちらもいつでもでれるわよ?」

2人がみんなに挨拶をすると皆もそんな2人に

「お？八坂さん、永森さん早いねー。」

「あのな、遅れたのはあんたのせいでもあるんだから少しは反省しろ！」

「二人とも今日はお互いに楽しもうね。」

「私もかなり楽しみにしてたんですよ？今日はいい思いでの一つにしたいですね。」

「八坂さんたちも浴衣できたのね？なかなか似合ってるわ。」

「私は私服でもいいって言ったんだけどあやのがこんな時ぐらいは着ろっていうから着てきたけどなんかやっぱし柄じゃない」

そう挨拶を返した後、皆して話始めたのを見ながら俺はみんなの分の麦茶も出すのだった。

お茶をだしながら俺はみんなの浴衣姿を見て、心に思った素直な感想を口にした。

「みんなの浴衣姿似合ってるよ。」

そう言うとみんなは顔を赤らめて少し嬉しそうにしながら「ありがとう。」と言っていた。

お茶を飲んで落ち着いた後、俺は皆に

「とりあえず必要最低限の物だけ持っていけばいい。残りは家に置いて準備しよう。」

そう言うとみんなも頷いてそれぞれに準備を始めた。

しばらくすると準備も済んだので、俺は皆に

「さて、準備も出来たようだし、そろそろ出発といくか。」

そう促すとみんなも「おー」と掛け声をかけて祭りへと向かうのだった。

祭りのスタート地点として駅前を設定していたのでみんなを連れてそこまで移動する。

「とりあえず駅前まで行こう。あとはそこからだ。」

俺がそう促すとみんなも俺についてきてくれた。

駅へと向かう道すがら、周りの人の数や活気あふれる出店の様子を横目で見つつ、皆はそれぞれ

「へえ?結構人いるんだねー。これはかなり期待できそう。」

「うちの地元もそれなりだと思うけど、これはそれ以上かもしれないわね。」

「うう、迷子になったりしないかな~?ちょっと心配だよ~。」

「噂には聞いていましたが、なかなか素晴らしいお祭りのようですね。」

「駅前だけでもこれだけの人が集まるのね、かなり凄いかも・・・。」

「なんだかわくわくするよなー。こういう雰囲気はやっぱいいゼ!」

「これだけの人を見ると某イベントを思い出しますねえ・・・。」

「それは貴方だけじゃない?こう。まったくあんなとこは二度とごめんよ・・・。」

やまとの最後の言葉を聞いて苦笑しながらやまとに

「やまと、お前も付き合わされた口か？」

そう尋ねるとやまとも俺の方を向いて少し呆れ口調で

「お前も、って事は先輩もなの？」

俺を同士でも見るような目で言ってきた。

そんなやまとに俺は頷きつつ

「まあな。確かにあれは凄かった。」

「そうよね、普通の人が行く物じゃないわ・・・。」

2人して顔を見合わせて、疲れたような口調でそう言う二人の会話を聞いて、こうは抗議の声を上げた。

「えー？それはないですよ先輩、やまと。あれだって私の生きがいなんですからー！」

不満顔でぶーたれるこうの言葉とその前の俺とやまとの会話を聞いていたこなたが

「八坂さんはともかく、慶一君と永森さんもあのイベント行った事あったの？知らなかったよー。」

なんだか嬉しそうな声で俺たちに言ってくる。

俺はそんなこなたの言葉に苦笑しながら

「行った、と言うよりは行かされたって感じだがな・・・。」

そう言うと、やまとも俺に同意するように

「そうね。私も売り子をさせらるために行かされたようなもんね・・・。」

どこか呆れ気味にそう言って、そんな俺達に、こうは慌てながら

「行かされたって・・・やまとも先輩も手伝ってくれるって言ってくれてたじゃないですかー。」

こうの更なる抗議に俺達ははやれやれといった感じで

「まさかそういう事だとは思ってもなかったよ、俺は。」

「そうね、私も知らないで協力する事になったものね・・・。」

その言葉にこうは少しばつが悪そうな顔になり

「そ、それは悪かったけどさー・・・。わかったよ。今度はちゃんと言うからいいでしょ？」

結局あまり懲りてなさそうなこうに俺とやまとの2人は同時に「「よくない！」」と突っ込みを入れるとこうはしゅんとなって「ごめんなさい・・・。」と俺たちに謝っていた。

その会話の最中、やまとの”売り子”と言う言葉に激しく反応を示すこなた。

「ほほう？売り子とはなかなかいい感じだね。私も今度は売り子の手伝いでサークル入場させてもらっちゃおうかなー？」

と言うこなたの言葉にキラーンと目を光らせるこう。

「本当ですか？泉先輩。なら今度売り子でうちのサークル入場します？先輩なら私としてもおっけーですよ？ひよりんもいるし。」

と言うこうの言葉にさらに瞳を輝かせるこなたは

「ほんと？サークルに知り合いができるのは嬉しいねー。ひよりんの描いた作品も私はチェックしてるしね。それじゃ八坂さんよろしくね？」

こなたがこうにそう言うと話がまとまったらしく2人して握手を交わしていた。

俺とやまととかがみは大きなため息を一つ、それ以外の者達は話がよくわからず苦笑いをしていた。

そうこうしてるうちにいくつかある山車の一つを見つけた俺は、皆にそっちの方を指差しながら

「みんな、あれがこの祭りの最中にこのあたりの道路を練り歩く山車だよ。昼間は人形を乗せて練り歩いて夜には提灯に換装して動くのさ。もうすぐ夜だからほら、提灯着けてる。」

俺がそう説明するとみんなも山車の方をみながらしきりに感心していた。

「へーなかなか派手そうだねー。」
「提灯の灯りはもう少し暗くなると綺麗そうね。」
「あんなのがまだ数台あるんだね～。」
「歴史をも感じさせるあの姿はかなり素晴らしいと思いますね。」
「高良ちゃんはああいうのには結構興味もってるのね。でも迫力ありそうね。」
「私もああいうの引っ張るのやってみてえなー。」
「あれ、燃えたりとかしないんですか？」
「結構高いわよね？あんな所に乗っていて怖くないのかしら・・・。」

ふとやまとが口にした言葉に俺はちょっと質問してみる事にした。

「なんだ？やまとは高いところ苦手か？」

やまとに疑問をぶつけるとやまとは少し考え込むような表情で

「特別怖いって訳じゃないわ。とはいえ得意というわけでもないわね。」

そう答えた。

そうこう話をしてるうちに山車の提灯換装が終わり、夜の祭りが始まった。

「お？始まったな。それじゃみんな。ぼちぼち本格的に回ろうか。」

という俺の声かけと共に俺たちの祭り巡りが始まったのだった。

陽気に奏でられる太鼓や笛の音、人々の喧騒を聞きながら俺たちは

人ごみを移動していたのだが・・・・・・

「おーい、みんな。大丈夫か?ちゃんと付いてこれてるかー?」
「何とか大丈夫ー。かがみ、ちゃんと付いて来れてるー?」
「私もなんとかついていけてるわ。つかさーあんたも平気よね?」

かがみがつかさに声をかけるがつかさからの返事がない。

それに気付いたあやのとやまとが慌てながら俺に

「柊ちゃん、妹ちゃんと高良ちゃんとみさちゃんと八坂さんの姿が見えないわ。」
「先輩、こうがはぐれたわ。どうするの?」

そう伝えてきたのを受けて、俺もまた、つかさ以外にもみゆきとみさお、こうまでもがはぐれてしまっていたのという事に気付いたのだった。

俺たちは急遽集まって

「4人もはぐれたのか、困ったな・・・。」
「ごめん。私も必死で付いていってたから気付けなかったよ。」
「どうしようか?慶一くん・・・。つかさが心配だわ・・・。」
「みさちゃん大丈夫かな?高良ちゃんも心配ね・・・。」
「まったくこうは迷惑ばっかりなんだから・・・。」

仕方なく、俺はこなた以外の3人に携帯に連絡を入れてみるように指示した。

「かがみ、あやの、やまと、それぞれの携帯に電話入れてみてくれ。

俺もみゆきに連絡入れてみる。居場所が特定できれば移動しつつ迎えにいこう。」

俺がそう言うと3人ともそれぞれの携帯に電話をし始めた。

「もしもし?つかさ?あんた今どこにいるのよ?・・・・・・分かったわ。そこに居て動かないで、いいわね?」

「もしもし?みさちゃん?今どこ?・・・分かった。すぐ行くから待っててね。」

「もしもし?こう?あんたなにやってるの?わかったわ。そこにいなさい行ってあげるから。」

「もしもし?みゆきか?今の居場所を教えてくれ・・・・・・わかった。迎えに行くからその近くにいてくれ。」

それぞれ居場所を特定できた。

俺はとりあえずみんなを分かりやすい場所に連れてきてこれからの指示を出す事にした。

「みんな。とりあえずこれから迷子の連中を迎えに行くんだが、それぞればらばらの場所にいるようだ。だからこれから俺は俺ともう一人を連れて2人組みになってそれぞれを迎えにいく。その間残ってる人はここに居て欲しい。そしてここから動かないでいてくれ。頼むぞ?」

俺の指示に頷く4人。

かくして迷子を探す為に行動を開始する俺達なのだった。

旋律達の祭り巡り～迷子捜索こなたとみゆき編～

みんなで祭りに行こうという事になり俺の家へと集合してそこから祭りの会場へと向かった俺たち。

最初こそ順調に祭り見物が続いていたのだが、まさかの迷子発覚と言う事態になった。

そこで俺たちは集合場所を決め、それぞれの場所にいるであろう迷子の下へ向かう為捜索部隊の編成をするのだった。

「まずはみゆきの所へ向かう。こなた、一緒に来てくれ。他の人はここで待機を。何かあれば連絡入れるから。集合場所の確保頼んだよ。」

俺の呼びかけにこなたは頷いて

「了解。慶一君、それじゃ第一部隊出発としますか。みんな、後はよろしくね。」

そう答え、みんなも

「わかったわ。こっちは任せて。」

「とりあえずこの場所は確保するわね?安心して行ってきてね。」

「こちらも何かあれば連絡いれるわ。先輩、早く戻ってね。」

俺は「ああ、すぐ見つけてくる。」と言い残してこなたとともに出発した。

俺はこの人ごみを見ながら念のため

「こなた、はぐれるとまずいから俺の服の裾でも掴んでろ。」

移動しながら俺はこなたにそう声をかけるとこなたは

「どうせ掴むんならこっちの方がいいでしょ？」

と言うとおもむろに俺の手を握ってきた。

俺はこなたの顔を見ていなかったので分からなかったが、こなたは少しだけ頬を赤くしてるようだった。

俺は突然の事にどぎまぎとしながらも2次遭難を避けるためにこなたと手をつなぎながらみゆきの元へと行くのだった。

こなたは移動しながら周りを見つつ

「凄い人だね。確かにこれは迷子になったらきびしいね。でも、お店とかも一杯で楽しそうだねー。」

人の多さに驚きつつも緊張感のない事をいうこなたにやれやれと思いつつも

「毎年こうだからな。あのイベントには及ばないとしてもそれに近いものがあるだろ？この人の密集率は。」

俺はこなたに笑いながら言うとこなたもうんうんと頷きながら

「そうだねー。こんなに人集まるイベントなんてあれ以外そんなに

知らないし、何か新鮮だね。」

こなたとそんなたわいのない話をしながら歩いているとようやくみゆきが待っているであろう場所へと辿り着いた。

俺たちは周りを見渡してみゆきを探すと、俺たちの所に慌てながら走ってくるみゆきを発見した。

「す、すいません。慶一さん、泉さん。私がうっかりしてて迷子になってしまい、ご迷惑をおかけしました。」

申し訳なさそうに言うみゆきに俺は笑いかけながら

「いいよ。無事見つかってなによりだ。それにこの人ごみだ、初めてこの祭り見にきたみゆきが迷子になるのは仕方がないさ。」

そう言うと、こなたも心なしかほっとした感じで

「無事見つかってよかったよみゆきさん。私はこれよりも凄い人ごみの中を潜り抜けてきてるけどね。」

そう、ない胸を張って自慢げに話すこなた。

そんなこなたの言葉に驚いたのかみゆきは

「これよりも凄いのがあるのですか？想像できませんね・・・。」

苦笑交じりで答えるのだった。

俺はそろそろ戻らないとまずいな、と思い

「ともあれ、集合場所まで戻らないとな。他につかさやみさお、こうも見つけてこなきゃならないからな。それじゃ行くぞ？みゆき、こなた。」

2人に声をかけるとこなたはそれに同意しつつも

「うん、それじゃ戻ろうか。ねえ、慶一君、帰り際少し出店寄ってかない？ただ戻るのもなんだしさ。」

ただ戻りたくはないようだ。

そんなこなたの言葉にみゆきも苦笑しながらも

「そうですね。とりあえず皆さん心配されていると思いますし、戻りましょうか。泉さん、慶一さん今回はご迷惑をおかけしてますし、その代わりというのもなんですが、出店に寄るというのならお付き合いしますよ。」

2人の言葉に俺もそのまま戻るのも面白くないかな？と思い

「なら、少しだけな。あまり長居はできないぞ？他に迎え待ってる奴もいるんだし。」

俺がそう言うと2人とも

「分かってるよー。あまり食べてなかったからお腹すいちゃったんだよね。」

「私もそういえば・・・なら食べ物のお店に寄りませんか？」

そう言って来たので俺もそれに同意して

「ならそうするか。何か食べたい物あるか？2人とも。」

2人にそう聞くと2人は少し考えながら

「そうだね・・・私はお好み焼きがいいかな？」

「私はやきそばを食べようと思います。」

それぞれ決まったようなので俺は2人に移動を促しながら

「よしわかった。とりあえず移動しよう。それとお好み焼きとやきそばは俺が奢るよ。」

そう言うと2人は

「ほんと？やたー♪ありがとー慶一くん。」

「で、でもよろしいんですか？あまりご無理をされなくても・・・。」

それぞれそう言って来たので俺は

「いいんだよ。かがみたちの誕生日会に駆けつけれなかった俺だしな。あの時の償い代わりさ。それに、そうしなきゃ俺の気がすまないからな。」

2人に笑いながらそう言うと2人ともにっこりと笑顔になって

「そっか。まあ慶一君らしいね。それじゃごちそうになるよー。」

「少し悪いような気もしますが、慶一さんのご好意を無駄にもでき

ませんね。今日はお言葉に甘えさせてもらいますね？」

そう言ってくれたので俺は「ああ、まかせてくれ」といいながら移動を開始するのだった。

移動の際にまたもはぐれたら困るからとこなたが手を握ってきた。

さらには不安もあるのかみゆきも俺の手を握ってきて結局3人で手をつなぐ形になったのだった。

俺は2人のその行為にどきどきとしながらもとりあえず2人の食べたい物の置いてある屋台へと向かった。

そしてお好み焼きとやきそばを買った2人は俺に礼を言い、とりあえず落ち着ける場所でそれらを平らげた。

その後再び移動しつつある屋台へと俺たちは立ちよったのだった。

「ねえ、これで運試ししてみない？」

こなたが指差したのはひもくじの屋台だった。

みゆきもこなたの指差した屋台を見て

「ひもくじ、ですね？たくさんのひもの先に景品がついてるという物ですよね？確かに運の要素はありそうですね。」

屋台をみながらそう言うみゆきに俺も

「結構難しそうだな。俺には運があるだろうかね・・・」

屋台の景品を見ながらそう呟くのだった。

そんな俺たちをよそにこなたは大分やるきのようで

「よーし、それじゃやってみようかー。まずは私から行くよ?」

屋台のおじさんにお金を払って引くひもを慎重に選ぶこなた。そしておもむろに一本のひもを引いた。

「これでどうだっ!」

気合とともにひもを引くとこなたが引いたひもにはアニメフィギュアが付いていた。

「よーし、取れたよー。ってこれパチモン・・・。」

いわゆるパチモンと呼ばれる偽者フィギュアをゲットしたこなただった。

ものすごくがっかりしてるこなたを横目で見ながら俺もとりあえず付きあうべくひもくじに挑戦した。

「これでいいかな?それっ!」

勢いよく引いたひもの先にはアニメ物の絵柄のジッポライターが付いていた。

「ライターか、タバコとか吸うわけじゃないけど、持っていても意味なさそうだなあ・・・。」

その俺の言葉を聞き逃さずにこなたは俺に詰め寄って

「ねえ、それいらないんなら頂戴！お願いー。」

俺に頼み込んできた。

俺はそんなこなたの態度に苦笑しながら

「まあ、欲しいのならやるよ。ほら。」

そう言いつつ、ライターを渡すとこなたは嬉しそうにして

「ありがとう慶一君。私のコレクションとして大事にさせてもらうよー♪」

と言ってきた。

そんな2人のやり取りをみながらみゆきも苦笑しつつ

「良かったですね、泉さん。次は私がやりますね？」

みゆきは屋台のおじさんにお金を払いひもくじに挑戦した。

「これでいきましょう・・・。それではいきます。それ！」

みゆきが勢いよくひもを引くとひもの先には・・・・・・

「携帯ゲーム機、ですか？一応当たりなのでしょうか？」

首を傾げつつもとりあえずゲットした携帯ゲーム機を渡してもらうみゆき。

ゲーム機を取ったみゆきを見てこなたはさもうらやましそうに

「えー？みゆきさんすごい。いいなー。」

そんなこなたの言葉を聞きながら、俺もまさかそんな物を引くと思っていなかったので予想外の成果に感心しながら

「すごいなみゆき。そんな物めったにあたらないぞ？」

俺たちがそう言いながらみゆきを誉めるとみゆきは謙遜しながら

「いえ、たまたま運が良かっただけですよ。それと泉さん。これ、いりますか？私はゲームはほとんどしませんので持っていても意味がなさそうですし・・・。」

にこにこと微笑みながらみゆきがそう言うとこなたは途端に大喜びで

「えっ？ほんと？みゆきさん。ありがとー。すごくラッキーだよー♪」

喜んでるこなたを見て俺も釣られて微笑みながら

「よかったな、こなた。」

というとみゆきも柔らかく微笑みながら

「喜んでいただけて嬉しいです。さあ、それじゃかがみさん達の所

へ戻りましょう。」

みゆきがそう言うと俺とこなたも頷いて

「そうだな。そろそろ戻って次探しに行かなきゃだしな。いくぞ？こなた、みゆき。」

「うん。戻ろう。みんな待ってるもんね。みゆきさんこれありがとねー。」

そう言うこなたにみゆきも

「いえ、大した事はしてませんから。とりあえず行きましょうか。」

そう言って移動を開始すると同時に迷子防止でまたも手を握ってくる二人を連れてかがみたちの元へと戻ったのだった。

「ずいぶん遅かったのね。一体何をしてたのかしら？」

戻った俺たちへのかがみからの第一声が飛んできた。

他の二人も何やら不信な目で俺達を見ている。

「いや、まあ、その・・・いろいろとね・・・。」

俺たち3人はかがみ達に事情を説明した。

かがみたちは大分呆れていたようだったが、とりあえず捜索の第2陣を編成して次の迷子の下へ向かうのだった。

旋律達の祭り巡り～迷子捜索かがみとつかさ編～

旋律達と共に夏の風物詩の一つである夏祭りへとやってきた俺たちだったが、祭りを巡ってる最中に迷子の発覚があったため急遽捜索部隊を編成して迷子捜索へ向かった俺達。

帰り際に少し楽しんでくるという寄り道もあったのだが無事みゆきを保護して俺達はみんなの待つ集合場所へと戻ったのだった。

かがみから少し遅かった事への追求もあったのだが、とりあえず次の編成を行って捜索を再開させる俺達だった。

「よし、みゆきは無事保護できた。次はつかさのところへ向かうか。それじゃかがみ、第2陣出発といこう。」

かがみに声をかけるとかがみも

「そうね。つかさも向こうで待ってると思うし、あの子一人きりじゃ心細くなってる頃だと思うからすぐに向かわないとね。いきましょ？慶一くん。」

そう答えるのだった。

俺はこなたたちに集合場所の確保を頼むとかがみと共に出発するのだった。

移動中俺はかがみにはぐれてしまわないように俺のシャツを掴むように言うとかがみは俺のシャツの裾を握りながら

「とりあえずこれでいいわよね？慶一くん。」

俺に確認をしてきたので俺も

「ああ、それでいい。しっかりと握って離さないようにな。」

そうして少しずつ人ごみを掻き分けながらつかさの元へと急ぐ俺達だった。

途中人ごみに揉まれる際にかがみが俺のシャツから手を離しかけたので俺は慌ててかがみの手を握り離れないようにかがみの手を引く形で歩き出した。

そんな俺のとっさの行動にかがみは驚いて「あっ・・・。」と小さく声を上げて顔を赤く染めていた。

俺はといえばそんなかがみの心に気付く事もなくただ無意識にかがみの手を引っ張っていた。

しばらく歩いているといくつかの出店が見えて来ていた。

その店のいくつかをみながらかがみは俺に

「ねえ、慶一くん。こなた達とも楽しんできたのよね？なら私達も楽しんでもいいのよね？」

と聞いてきたので俺はその質問に苦笑しながら

「こなた達も楽しんできたんだし、かがみ達が楽しむ事を俺はどうこう言える立場じゃないさ。つかさと合流したらそんなに遅くなら

ない程度に出店巡りながら帰ればいい。」

最初に楽しんできた手前かがみ達にも文句は言えないので俺はそれを承服するのだった。

「じゃあ、つかさと合流したら少しだけね。」

「了解だ。ともかくつかさのところへ急ごう。」

「そうね。いきましょ。」

軽いやり取りをしつつつかさの所へと向かう途中手ぶらで行くのも何だしと思った俺は綿飴の出店で一袋購入して待たせてるお詫びも兼ねたお土産にするのだった。

むろんかがみにもリンゴ飴を買ってあげた。

その際にかがみが小声で

『買ってくれたのは嬉しいけどそろそろダイエットしようかな?と考えてたのよね・・・まあいいか、明日からがんばろ・・・。』

そう言っていたのを聞いてしまった俺は心の中で

(かがみ、ダイエットするつもりだったのか・・・。けどここで妥協しちゃうあたりかがみも弱いな・・・。)

そうかがみの顔を見ながら考えているとかがみは俺の視線に気付き

「慶一くん、今失礼な事考えてなかった?」

と妙に鋭いつっこみがきたので俺は適当に

「いや、何も考えてないぞ？」

といってごまかしておく俺だった。

そうこうしているうちにつかさとの合流地点へと近づいてきた俺達だったが、目的地に近づくにつれて何か妙な胸騒ぎを覚える俺達だった。

かがみが俺の方を見ながら少し心配げに

「ねえ、慶一くん。つかさ、ちゃんと待ち合わせ場所で待ってるかな？」

そう聞いてきたが俺はその質問に確信を持って答えることができず

「・・・・・待ち合わせ場所にはいると思うけど・・・・・・なんだろう、妙な不安があるな・・・。」

少し歯切れの悪い答え方になってしまった俺の言葉にかがみも少し不安を覚えたようだった。

2人して妙な不安に駆られながらもとりあえず目的地に辿り着くと俺達はつかさの姿を探した。

その時・・・・・・

つかさｓｉｄｅ

私はおねえちゃんが迎えに来てくれるという事なので、待ち合わせ

場所で大人しくおねえちゃんが来るのを待ってたんだけどそのうちに知らない男の人達が私をナンパして連れて行こうとしてきたので、わたしはおねえちゃんが来るまでここにいなきゃいけなかったから、男の人の誘いを断った。

でも男の人達は私の言葉を聞いてくれなくて

「・・・・・なさい。知り合いと待ち合わせしてるから・・・一緒にはいけないの・・・。」

「いいじゃん、結構待たされてるんでしょ？そこまで待ってもこないんじゃ君、見捨てられたんだよ。そんな薄情な連中なんてほおっておいてさ、俺たちと遊ぼうぜ？」

「そんな、見捨てられてなんかないもん！おねえちゃんはきっと来てくれるよ！おねえちゃんの事知りもしないで勝手な事いわないで！」

「ちっ・・・めんどくせえな・・・いいから来いよ、おらっ！」

中々いう事を聞かないわたしに男の人達が痺れを切らしたのか無理やりわたしの手を引いて連れて行こうとしたのだった。

わたしは怖くなって

「や、やめてよ・・・手を、手を離して～！」

必死に抵抗を試みるわたしだったけど男の人の力に敵うはずもなく

「うるせえな！いいから来るんだよ、おらっ！」

まさに連れて行かれようとしたその時、わたしの手を引く男の人の腕を握り締める人が現れたのだった。

「待てよ。その子をどうするつもりなんだ?」

わたしはその声と姿を見た瞬間思わずその人に声をかけていたのだった。

「けいちゃん!来てくれたの!?」

慶一ｓｉｄｅ

俺が声のする方を振り向くとつかさが今まさに男達に無理やり連れて行かれる寸前だった。

慌てて俺は男達とつかさの元へ進み、つかさの手を引いていく男の腕を掴んで

「待てよ。その子をどうするつもりなんだ?」

握り締める相手の腕に力を込めながら相手を睨みつける。

相手はそんな俺の姿を見て動揺しながらも

「な、なんだよお前は、この子の知り合いかなんかなのかよ?」

握られれた腕を振り解こうとしながら俺に問い掛けてくる男に俺は

「その子は俺の連れだ。悪いがナンパなら他を当たってくれないか

？まあ、痛い目にあいたいというのなら望みどおりにしてやっても構わないがな。」

男に凄みを含ませた声で返答する俺に怯えたのか男は

「わ、わかった。お前の言うとおり他を当たるから勘弁してくれ。」

「ちっ、行こうぜ。しらけちまったよ・・・」

そう言いながらつかさを開放してそそくさと去っていく男達を見送りながら俺はたたずんでいた。

かがみはつかさの元へ駆け寄り

「つかさ、大丈夫？変な事されてない？ごめんね、来るの遅れちゃって。」

男達から開放されて少し放心状態のつかさだったが、かがみの呼びかけに緊張の糸が切れたのか堰を切ったように泣き出して

「お、おねえちゃん怖かったよ～！わたし、どうなるのかとおもったよ～！でも来てくれて嬉しかったよ～！」

かがみの胸の中で泣きじゃくりながら怖さを訴えるつかさをかがみは優しく頭をなでながら慰めていた。

「ばかね。私があんたの事見捨てるわけないわよ。まったくあいつらは好き勝手な事ばかりいってくれちゃって・・・一発ぶん殴ってやればよかったかしらね？」

あいつらの物言いいの一部始終をかがみも聞いていたのでそんな事

をいっていたが、俺もそんなつかさを見てものすごい罪悪感を覚えてつかさに

「つかさ、来るの遅くなってごめんな?怖かったろ。ほんとうにごめん・・・。」

つかさに謝るとつかさは顔を上げて俺の方を見て涙で濡れた顔ではあったがにっこりと笑って

「ううん。来てくれて、助けてくれて嬉しかったよ。ありがとうけいちゃん。」

そんな風に言ってくれるつかさにますますの罪悪感を覚える俺だった。

ひとしきり泣いた後はつかさもようやく落ち着いたようで、俺たちにいつもの笑顔を見せてくれるつかさに戻っていた。

俺はつかさにここに来るまでにお土産として買っておいた綿飴をつかさに渡した。

「ほら。つかさこれお土産だ。それとさっきの迷惑かけた分はみんなの所に戻りがてら出店で何か奢るということで俺の償いとさせて欲しい。」

俺から綿飴を受け取ってつかさはにっこり笑いながら

「ありがとう~。私これ大好きなんだ。さっきの事なら助けてくれただけで十分だしあまり気をつかわなくていいよ?」

つかさがそう言うが、かがみはあまり納得がいっていないようで

「つかさ、こういう時は甘えちゃっていいのよ?元々遅れた原因は慶一くんにもあるんだからね。」

そうつっこんでくるかがみの衝撃の一言に俺のハートにかなり太い槍が突き刺さるの感じながら

「う・・・それを言われると余計に罪悪感が・・・。」

罪悪感で押しつぶされて凹んでる俺を見ながらかがみはしてやったりな笑顔をしていたのだった。

いつまでもこうしていても仕方ないと思った俺は、2人に

「まあ、いつまでもこうしてるわけにもいかないしそろそろ行きますか。」

そう声をかけると2人とも

「そうね。そろそろ行きましょ。それじゃ慶一くんエスコートお願いね?」

「うん、行こうか。けいちゃん今度ははぐれないようにするからよろしくね~。」

そう言いながら俺の手を握る2人だった。

「ああ、わかったよ。って!」

俺はさっき無意識ながらかがみの手を握り締めていた事を思い出し、

かつ今ここで今度ははっきりと意識する形で2人に手を握られている状態に思わず顔を真っ赤にしながらも

「じゃ、じゃあ行こうか。」

かなり動揺しながら2人の手を引いて集合場所への帰り道を辿る俺達なのだった。

帰る途中で今度はかがみとつかさはチョコバナナの店に立ち寄り

「これ美味しいね。慶一くんありがとね。」
「ほんとにいいの?でも美味しいね~。」
「ああ、遠慮せずに食ってくれ。罪滅ぼしには足りないけどさ」

2人に奢りながらもさっきの一件をいまだ引きずっている俺だった。

そして次に立ち寄った店は金魚すくいの店だった。

「金魚かー。ちょっとやってみようかな?慶一くん、いいかな?」
「おねえちゃんがんばって~。上手く取れるといいね~?」

金魚すくいの屋台を見ながら言う2人に俺も頷いて

「ああ、やってみろよ。俺もやってみるから」

そう言うと、早速お金を払ってポイを店のおじさんから貰って金魚を狙うかがみだったが、何故か金魚にことごとく避けられるようでかがみが金魚をすくおうと陣取るたびに金魚たちは逃げていくのだった。

そんな光景を俺とつかさは苦笑交じりに見守っていた。

かがみは少し凹み気味なっていたが、それでも諦めずに偶然側にきた一匹を狙った。

「とりゃっ！」

ポイを突っ込みすくおうとしたが逃げられてしまうかがみ。

唯一のチャンスを逃したことでさらに凹んでいた。

俺はそんなかがみの姿を見てられなくなり、かわりに金魚すくいをやる事にしたのだった。

「かがみ、俺がやってみるよ。」

金魚の動きに集中して心を静めながら狙いを定める俺にかがみとつかさも不安げに

「大丈夫？がんばってね慶一くん。」

「けいちゃんがんばれ～。」

2人して応援してくれたのでこれは何としてもすくわねば男じゃないなと思いながら狙いをつけた金魚に流れるようにポイを動かした。

「それ！」

気合の掛け声と共に俺は2匹の金魚をすくった。

2人は俺の成果に賞賛の声をかけてくれたのだった。

「慶一くんすごい！2匹も取ったよ！」
「けいちゃんうまいね。わたしにはちょっと無理だね～。」
その言葉に俺も照れつつも
「ははは。ありがとな、それとちょっと待っててな。」
そう2人に言うと、金魚すくいの親父さんに袋を2つ作ってもらいそれぞれに金魚をいれてもらって
「はい、かがみ、つかさ。これお前らにだ。」
といってそれぞれに金魚を渡すと2人とも驚いたような顔をしていたが、すごく喜んでくれて
「ありがとう慶一くん。本当に貰っちゃっていいの？」
（この子は大事にしようっと）
「けいちゃんありがとう。大事にするからね～。」
（せっかくもらえたんだしちゃんとお世話しようっと）
そう言ってくれる2人に俺は笑いながら
「ああ。家には猫がいるしな。食われちゃかなわんからな」
猫の事は口実ではあったが、そう説明をすると、2人は何となく納得したようで
「そういえばそうだったわね。でも本当にありがとう。」
「ねこちゃんに食べらちゃったらかわいそうだもんね。」

そう言ってくれたので、俺もその言葉に頷いて

「まあ、そんなわけさ。こんな物ですまないけどな。」

俺が照れ隠しにそう言うと2人ともにっこりと笑ってくれたのだった。

「さて、戻るとしようか。もう大分いい時間だ。」

そう声をかけると2人とも頷いて

「そうね。そろそろいきましょ。」

「うん。みんな心配してるかな～？」

そう言う2人に俺も頷きで答えると

「多分な。それじゃ行こう。」

そう2人に改めて声をかけて、集合場所へと向かう俺達だった。

帰りの途中でいくつかの食べ物の出店でかがみの胃袋を満たす事になったが、まあこれもつかさを迎えに行くのが遅くなった罰だと自分自身に言い聞かせて納得した。

集合場所に近づいてきた時かがみとつかさが俺に

「慶一くん。つかさを助けてくれてありがとう。改めてお礼を言わせて？それと色々ご馳走様。金魚も嬉しかったわ。これ大事にするからね。」

「けいちゃん、迷子になって迷惑かけてごめんね？助けてくれた事嬉しかったよ？それに、金魚もありがとう、わたし、これ大事に育てるからね～？」

そう言ってくる2人に俺は照れながら

「いいさ。つかさの事は俺にも責任あったしな。それに2人とも俺にとってはかけがえのない大事な人だからな。そのためになら俺はこの体を張る事も苦にはならないさ。だから、またみんなで・・・祭りに来よう。」

俺のその言葉に2人とも顔を赤くしながらも笑顔で頷いてくれた。

そんな2人に俺も少しだけ顔を赤くしつつ笑顔で返しながら歩いていると、集合場所へと帰りついたのだった。

「ただいま。ようやく戻れたよ。つかさもこの通り無事だったよ。」

みんなに報告するとこなたは

「ふうーん、その割には大分お楽しみだったようですねえ？」

かがみたちの持っている金魚を見て俺に視線を戻しながらニヤニヤとした顔で言ってくるこなたに俺は慌てつつ

「お、俺達だって寄り道してきたんだからその事をどうこう言えないだろ？」

そう言うと、そこにかがみも俺に助け舟を出してくれて

「そうよ?こなた達も楽しんできたんだから人の事は言えないわよ?」

2人してこなたに反論するとこなたはぺろりと舌を出して

「まあ、確かにそうだね・・・うっかりやぶへびだったよ。」

苦笑しながら墓穴を掘るこなたにみゆきはいつもの柔らかい微笑みを向けてつかさは苦笑しながら

「どんだけ~・・・。」

と言っていた。

そんな俺達の側にやってきたあやのが

「慶ちゃん。とりあえず次の捜索の用意をしましょ?」

そう言って、俺に次の編成を促してきた。

「そうだな。さて次は・・・・・・。」

迷子捜索も3人目へと向かう。

そんな中、やまとは意外にも落ち着いていた様子だった。

旋律達の祭り巡り～迷子捜索かがみとつかさ編～（後書き）

次回はみさお予定ー

旋律達の祭り巡り～迷子捜索あやのとみさお編～

旋律達と共に祭りに来た俺達だったが祭り巡りの最中に迷子が発覚し、みゆきとつかさを保護した。

まだ後二人の迷子が残っているので俺は捜索部隊の第3陣を編成して3人目の捜索へと向かうのだった。

「とりあえずみゆきさんとつかさは戻ってきたね。」

ここにいるメンバーを見ながらこなたがそう言うとつかさとみゆきは申し訳なさそうに

「ごめんね～、迷惑かけちゃって。」

「すみません。予想以上の人ごみでした。」

と俺たちに謝っていた。

「まあ、無事に保護できただけでもいいさ。とりあえず次の捜索へ行かないとな。」

俺がみんなにそう言うとかがみが心配そうに

「探さないといけないのは分かるけど慶一くん大丈夫?私たちは交互に動いてるからまだいいけど、慶一くん動きっぱなしでしょ?」

そう言って俺の体を気遣ってくれた。

俺はかがみに笑いながら

「なあに、この程度でへばるほどやわじゃないさ。道場でのしごきに比べたらなんてことないない。」

そう答えるとかがみは呆れたような顔で

「誕生日の時にも聞いたけどあんたの所のしごきってどんだけよ・・・。」

そう突っ込んでくるかがみ。

そんなやり取りをみてみんなも苦笑していた。

苦笑しながらもあやのは俺に

「慶ちゃん、それじゃ悪いんだけどみさちゃんのお迎え一緒に来てくれるかな?」

そう声をかけてきたので俺も頷いて

「よし。それじゃ行って来るか。じゃあみんなここで待っていてくれ。行こう、あやの。」

そう答えるとあやのも俺に

「ええ、いきましょ?それじゃみんな、ちょっといってくるわね?」

そう返事を返してくれるのだった。

俺はあやのにはぐれないようにその事前対策であやのに伝える事を

伝えようとしたが

「あやの、はぐれないように俺の・・・ってあやの？」

俺が言うより早くあやのは俺の手を握ってきた。

あやのは俺がいきなり焦った事に頭にハテナマークを浮かべて

「あら？慶ちゃんどうしたの？はぐれないようにするためには手をつないでいた方がいいと思ったんだけど何かおかしかったかな？」

あくまでも普通なあやのの態度に困惑しつつも少し顔を赤くしながら俺もあやのに

「い、いや、それは構わないんだが少し驚いただけだからさ・・・。」

そう答えるとあやのは俺に笑顔を向けながら

「なら問題なしね。それじゃいきましょ？たぶんみさちゃん一人で楽しんでるかもしれないけどね。」

少し楽しそうに言うあやのにこれが彼氏のいる子の余裕なのかな？と心の中で思いつつ

「まあ、もし楽しんでいたらみんなの心配する心をこの人差し指に込めておしおきするだけだ。」

ちょっといたずらっぽく笑う俺にあやのはクスリと笑いながら

「できるだけお手柔らかにしてあげてね？慶ちゃん。」

そう言ってくるあやのに俺も

「まあ、みさお次第かな。ともあれ善処はするよ。」

そう返事をしてみさおが待っている場所へと向かうのだった。

その途中にたこ焼き屋の屋台を見つけた俺はあやのに

「なあ、あやの。少しお腹空いてないか？」

と聞くとあやのはお腹のあたりをさするような仕草をした後

「うーん、みんなを待ってる間何も食べなかったから少し空いたかな？」

というあやの言葉に俺は笑いながら

「なら、そこのたこ焼き買ってくるから食べなよ。かがみたちも散々食べたりしてるんだし、構わないからさ。」

そう言うとあやのは少し考える仕草をした後

「ならお願いしようかな。慶ちゃんよろしくね。」

というあやのの言葉に頷いて俺はたこ焼きを買いに屋台に行った。

たこ焼きを買ってきてあやのに渡すとあやのは

「ありがとう。それじゃいただくわね。」

と言ってたこ焼きを食べ始めた。

あやのが食べ終わるのを待っている間俺は近くにあった輪投げの屋台で暇潰しにチャレンジをしてみるのだった。

「狙いはアクセサリー関連かな?よし・・・。」

俺は一つ狙いを定めるとそこに輪を投げ込んだ。

投げた輪は狙いどおり青いカチューシャに飛び込み、もう一つは猫のキーホルダーに入った。

後の3回は外してしまったが一応の結果に満足した俺は景品をもらっているとそこにたこ焼きを食べ終えたあやのがやってきた。

「輪投げで遊んでたんだ?結果はどうだったの?」

そう声をかけてくるあやのに俺はさっき取った景品の一つをあやのに差出して

「あやの、いい物が取れたよ。気に入ってくれるかはわからないけど貰ってくれるか?」

さっき取った青のカチューシャをあやのに渡した。

あやのはカチューシャを受け取るとにっこりと笑って俺が取ったカチューシャをつけて見せてくれた。

「ありがとう、嬉しいな。どうかな?似合ってる?」

カチューシャをつけたあやのを見て俺は素直な感想をもらす。

「うん。よく似合ってる。あやのの髪の色にも合ってると思うよ。」

俺がそう言うとあやのは嬉しそうな顔で「ありがとう」と言ってくれた。

気を取り直して俺達はみさおの元へと移動を再開したのだった。

「慶ちゃん、待ち合わせ場所はもう少し?」

あやのの質問に俺は頷きながら

「ああ。後少しでつくよ。あいつちゃんと待ってるかな?」

そうあやのに返事をする俺だった。

そうこうしながら歩いているとようやく待ち合わせ場所に到着した俺達だったが、待ち合わせ場所にみさおの姿がなかったので俺達はとりあえず周りを見渡してみる事にした。

「うーん・・・いないわね・・・。」

「あいつどこ行ったんだか・・・まったく・・・。」

2人して苦笑しながら話しているとそろそろと背後から近づく影があった。

この暗がりと周りの喧騒のせいもあってか俺もその影には気付けな

かった。

そして・・・・・・

「わっ！！」

という声を背後から浴びせられ俺達は

「きゃあ！」
「うぉわっ！」

2人して思い切り驚いたのだった。

俺たち2人を脅かした影はみさおだった。

俺はみさおの姿を確認すると無言でみさおに近寄りデコピン（強）の刑をかます。

デコピンを食らったみさおは涙目になりながら

「うおお・・・痛いよ慶一ー・・・。いきなりそれはひどいゼ・・・。」

そう抗議してきたが俺はそんな事はおかまいなしに

「散々人を心配させた挙句にそんな事をするお前が悪い。この一発はみんなの心配する心の集大成だと知れ！」

若干俺の脅かされた事に対するうらみも篭っているがとりあえずみさおにそう言うと

「うう、ごめん、心配かけて。つい珍しい物とか面白そうな物とかに目がいっちゃったもんだか・・・ら？」

みさおが最後の言葉のあたりでなにやら言いよどむ感じになったの見て俺は一瞬頭にハテナマークを飛ばしていたがすぐにその理由に気付いた。

みさおが顔を引きつらせながらあやのの方を見ていたからだ。

「あ、あやの？」

みさおがおそるおそるあやのに声をかけるとあやのはみさおに笑顔を向けていたのだが、なんだかあやのの背後にどす黒いオーラを感じ、俺も背筋が寒くなるのを感じたのだった。

あやのは笑顔を絶やさないままにみさおに静かに声をかける。

「みさちゃん？心配かけた上に私たちを驚かす真似までして本当にいたずらっ子ねえ・・・みさちゃん・・・少し・・・頭冷やそうか・・・？」

ゆっくりと、しかし確実にみさおに黒い笑顔を向けながら近寄るあやの。

みさおは涙目になりながら俺に助けを求める。

「慶一ー！お願い、助けてー！あやのー私が悪かったってヴァ。だから許してー！」

助けを求めると同時にあやのにも詫びていたが俺にはどうする事も出来ずにただみさおの無事を祈るのみだった。

「すまん、みさお。今の俺には出来ることはないようだ。せめて無事を祈る。」

そして「ヴァーーー！！」というみさおの断末魔が響き渡ったのを聞いて俺は心の中でみさおに手を合わせるのだった。

一騒動終えて落ち着きを取り戻したあやのと涙目のみさおの二人をみて苦笑しながら

「やっと落ち着いたみたいだな。みさお、あやの」

そう声をかけると2人は

「ごめんね？ちょっと取り乱しちゃったみたいで。」
「ううん、慶一ー見捨てるなんてひどいぜー。すっごく怖かったってヴァ・・・。」

そう言っていたので俺はみさおに詫びつつ

「すまんすまんみさお、これ、詫びがわりといってはなんだがここに来る前に輪投げの景品で取ったやつなんだ。貰ってくれるか？」

俺はさっき輪投げで取った猫のキーホルダーをみさおに渡した。

「へえ？猫かー。デザイン的には気に入ったな。ありがとな慶一。」

そう言ってキーホルダーを受け取ってくれたみさお。

あやのもそんなみさおの様子をみて

「よかったねみさちゃん。大事にしないとね。」

というとみさおも頷いて

「そうだな。これ大事にするよ。サンキューな、慶一。」

とお礼を言って来たので俺はみさおに

「いいって事さ。そんなもんで悪いけどまあ喜んでくれたなら嬉しいよ。」

みさおに笑いかけながら言うとみさおは少し頬を赤くしながら

「そんな事ないって。慶一が私の事も少しは気にかけてくれたんならその気持ちが嬉しいしな。」

というみさおの言葉に俺は照れていたのだった。

色々と落ち着いてきたようなので俺は2人に

「そろそろ戻りながら出店でも回っていくか。みんなも待ってるしな」

そう声をかけると2人も

「そうね。そろそろ戻りましょ？」

「そうだなー。迎えが来るまでの間少し楽しんでたけど、そろそろ

戻らないとみんなにも心配かけるよな。」

俺とあやのは心の中で（やっぱり楽しんでたのか（たのね））と思いながらもみんなの待つ集合場所へと移動を開始するのだった。

「んじゃ行こう・・・ってまたか・・・まあ、いいけどさ・・・。」

俺が2人に行動を促すと同時にまたしても手を繋いで来るあやのだったが、今回はみさおもはぐれないようにと俺と手を繋いで来たのだった。

俺は流石に慣れてきたのかこの状況にはあまり驚かなくなってきていたがそんな俺の心の葛藤などお構いなしで2人は上機嫌で俺と手をつなぎながら歩いていくのだった。

しばらく行くと水風船のヨーヨー釣りの屋台が見えてきた。

それを見たみさおは目を輝かせながら俺を見て

「なあなあ慶一ー、あれやっていこうぜー？」

そう訴えかけて来る。

あやのも苦笑しつつ呆れながら

「みさちゃん。みんなも待ってるんだし程ほどにしなきゃだめよ？」

と注意を促していた。

俺はあやのに苦笑しつつも

「まあ、1．2箇所くらいならいいだろ。かがみやこなた達も寄ったんだしな。お前らだけダメなんて言えないからな。」

俺がそう言うとみさおは大喜びで

「やったー。慶一話が分かるぜー。なら早速やっていこうぜ？」

というみさおに苦笑しながら俺とあやのはみさおに付き合うのだった。

「よーし。どれねらってみっかなー？」

みさおは色とりどりの水風船を見ながらどれを取ろうか選んでいたがやがて

「よーし、あれいくかー。よっと・・・。」

狙いをつけた水風船に引っ掛けようと苦闘するみさお。そして

「ありゃ、失敗だ・・・。」

結果は失敗に終わった。

俺とあやのは取り損ねてがっかりしてるみさおに

「惜しかったなみさお。」

「もうちょっとだったわね。みさちゃん。」

そう声をかけるとみさおは悔しそうな顔で

「うー・・・悔しいなー。そうだ！慶一、私の仇をうってくれよ。」

と、俺にリベンジをして欲しいとせがむみさお。

俺はやれやれと思いながらも

「仕方ないな。でも失敗しても恨まないでくれな？」

とみさおに一応の断りを入れて水風船ヨーヨー釣りをやるのだった。

「よーし、いくぞ？よっと・・・。」

上手く狙いを定めて引っ掛けると何とか狙いどおりの物を取ることができた。

「よし、もう一個・・・。」

俺はさらにもう一個狙ってみた。

一個目でコツを掴んだ俺は二個めはあっさりと取ることができた。

俺はまずみさおにみさおが狙ってた水風船を渡した。

「ほら、みさお。これでいいか？」

「おお！サンキューな慶一ー！」

水風船を受け取るみさおは嬉しそうだった。

そして俺はあやのにも水風船を渡すのだった。

「あやの。これはついでに取ってみた奴だけどいるか？」

あやのは少し驚いたような顔をしていたが、すぐに笑顔になって

「いいの？もらっちゃっても？なら貰うね。ありがとう慶ちゃん。」

と言って喜んでくれたようだった。

その後はお腹をすかせたみさおにイカ焼き等を奢ったりして歩いているうちに集合場所へと近づいてきたのだった。

「慶ちゃん、カチューシャと水風船ありがとう。祭りに来れた事も楽しい思い出になったわ。またみんなで来たいね。」

俺に礼を言ってくるあやの。

みさおも俺のほうを見ながら笑顔で

「迷子になるっていうハプニングあったけど結構楽しめたぜ。キーホルダーとか水風船ありがとな。みんなで来たいっていうあやのの意見には賛成だぜー？」

2人の言葉に俺は少し考えながら

「そうだな。俺からも提案なんだけどさ。今度はみんなの住んでる地域ごとの祭りにも行くってのはどうだろうか？今回はたまたま俺の地元の祭りだったけどさ。」

と俺が提案を持ちかけると2人とも

「いいね。いろいろ見れるから楽しめそう。」
「騒ぐの大好きだし私も賛成だー。」
と行って頷いていた。
「じゃあこの件は後でみんなと話し合うと言う事で」
と言う言葉で締めると、丁度集合場所へと俺達は辿り着いたのだった。
みんなが「「「「「「「「おかえりー。」」」」」」」」と言って出迎えてくれたがこなたとかがみが
「ほほう?そちらは水風船のヨーヨーとかですか。それなりに楽しんできたようだねー?」
「まあ、あんたらも立ち寄ってくるかもとは思ってたけど私たちも楽しんできたしね。」
俺たちの持ち物を見てそう言っていた。
俺は苦笑しながら
「まあ、今更だろ?言うだけ野暮ってもんだよ。」
少し開き直り気味に俺が言うと2人とも自分らも楽しんでる手前、何も言えないようだった。
そんな俺たちの様子を見ながらみゆきが

「とりあえず後一人ですね。みんなが揃ったら最後にみんなで回ってみましょう。」

みゆきの言葉に一同は頷きで答えた。

「とりあえず後一人。やまと、とりあえず行って見るか。」

やまとに声をかけるとやまとも頷きながら

「そうね。こうに関してはあまり心配はしてないけどとりあえずほおっておくのもなんだしね・・・。」

と答えるのだった。

迷子捜索最後の一人を連れに俺とやまとはこうとの合流場所へ向かう準備をするのだった。

旋律達の祭り巡り～迷子捜索あやのとみさお編～（後書き）

最後は後輩組です。

旋律達の祭り巡り～終章こうとやまと編～

迷子捜索もいよいよ最後の一人を残す所となった。

今回俺はこうの迎えを一番最後に回した。

その理由としては今回はじめてこなた達とこういうイベントを回る時の行動がわからなかった事もあるのだが、こうとやまととは今回が3度目であり、ある程度の行動パターンを把握していたのと俺たち2人はなんだかんだでこういう時のこうの行動を信頼していたと言う事もあった。

「さてと、そろそろこうを迎えに行くとするか。っとその前に、やまと、もう一度こうに連絡を頼む。」

俺はやまとにこうへの連絡を頼むとやまとはすぐさま携帯でこうに連絡を入れた。

「もしもし、こう？これから迎えに行くけど現在位置を教えて？先輩に場所伝えるからお願いね・・・・・・わかったわ。先輩に伝えるからそこにいなさいよ？」

やまとはこうから現在位置を聞き出すと俺にその場所を伝えた。

俺はやまとから聞いたこうの現在位置を頭の中にある地元の地図と照らし合わせて大体の位置を割り出した。

「よし、それじゃいくか。やまと。みんな最後の一人を連れに行くからここで待っててくれな。」

俺はやまとに行動開始を伝えると共にみんなにも集合場所での待機を伝えるとみんなは「わかったよ。ここで待ってるから。行ってらっしゃい。」と言い、やまとも

「それじゃ行きましょ？先輩。」

と返事をした後俺と共に行動を開始するのだった。

移動の際に俺はやまとに

「これだけの人ゴミだからな。はぐれないように行くぞ？」

とやまとに気を抜かずに行く事を伝えるとやまとはごく自然に俺の手を取り

「ならこれでいけばいいわね。先輩、エスコート頼むわね。」

そう言ってくるやまとに俺も自然に手を握り返していた。

「よし、まかせろ。」

そう言いながらやまとを伴いながらこうの待つ場所へと歩いていく俺達だった。

歩きながらやまとは俺の方を向いて”くすり”と笑いながら

「思い出すわね先輩、こういうのもなんだか久しぶりな気がするわ。」

と言うと俺も中学時代から高校1年までの事を思い出しながら

「そうだな。あの時は都内の俺の実家の祭行ったんだがあの時もこの3人だっけな。」

懐かしむように言う俺にやまとも当時の事を思い出しているようで

「そうね。あの時もやっぱりこうは一人迷子になって散々先輩の手を焼かせたわよね。・・・・・ごめんなさい先輩。こうがあんな子で大分苦労したんじゃないかしら」

あの当時もやっぱり迷子になり俺達を散々振り回したこうの事を思い出したのだろう、やまとは俺にこうの代わりに謝ってきたが、俺はそんなやまとに笑いながら

「やまとが謝る事じゃないよ。それに俺もその事事態は大変ではあったけど嫌だったり怒ったりしてる訳じゃない。だからこそ俺達は、いや、俺はこうを、やまとの親友を見捨てる事はしなかったんだから。それにこうは今のままが一番こうらしい。俺はそう言うあいつも好きだからな。やまとと同じようにな。」

俺の言葉にやまとも俺に対してなんだか申し訳ないような表情をしていたが、俺の気持ちを理解したのだろう、やまとも嬉しそうな顔になってくれた。

「ありがとう先輩。私やっぱりあの時に先輩と知り合えた事を嬉しく思うわ。そんな先輩がいてくれる事に関してはこうにも感謝かしらね。」

そう言ってくれるやまとに俺は照れて顔を少し赤くしながら

「まあ、そう言ってもらえるのならあの時2人のケンカの仲裁を買って出た甲斐もあったってもんだな。」

やまとから視線をそらしつつそう言うとやまとも薄く微笑みながら

「そうね。でもあの時は本当に驚いたのよ？」

俺とこうとやまとが出会った頃の事をいうやまとに俺は苦笑しながら

「仕方ないさ。あの時はああでもしないと仲直りなんて難しいかもって思ったんだし、俺だって必死だったからな。」

その後に俺はさらに言葉を付け加えて

「それにお前ならそれでもこうの事を見捨てるような事はしない。あいつと親友でいたいと思ってるって思えたからきっと上手く行くだろうって思ったんだ。こちらの狙い通りに事は進んでくれたがな。」

少しいたずらっぽく笑う俺にやまとも苦笑しつつ

「確かに先輩の予想通りに行ったわよね・・・でもあのままこうと元に戻れなかったらきっと後悔してただろうなとは思うわ。そう言う意味では先輩が作ってくれたきっかけは無駄じゃないんだって思えるわ。」

そう俺に言ってくるやまとに俺は一つやまとに確認しておきたい事があったのでその事を聞いてみることにした。

「これからもこうと親友としてやっていきたいとと思うか?やまと。俺としてはこれからもそうあって欲しいとは思ってるが。」

やまとにそう問い掛けるとやまとは少し考えるような仕草をして

「・・・・・先輩、この事は先輩と私だけの秘密にしておいて欲しい。その上で言うわ。私はこうとこれからも親友でいたい、そう思ってる。ケンカすることもあるかもしれないけどそれでも私を友として選んでくれたこうには少なからず感謝はしてるのよ。」

俺から視線を外しつつ照れるように言うやまとに俺は

「2人の秘密って事はわかった。お前の気持ちもな。こうにはそのまま伝えてやりたいが、まあ、俺の胸の中にしまっておくとしよう。それと、今後また何かあるようだったら俺に相談してこいよ?俺の出来る事でならなんとかしてやるから。」

そうやまとに伝えるとやまとは嬉しそうに微笑みながら

「そうね。その時にはまた相談させてもらうわ。」

そう俺に答えるやまとに俺も笑って頷き返すのだった。

そんな会話をしながらしばらく歩くとフライドチキンの屋台が見えてきた。

俺はやまとに

「やまと。みんなを待ってる間ほとんど何も食べてないだろ?あれ買ってくるけど食べるか?」

そう聞くとやまとは屋台の方を見ながら

「そうね。少しお腹がすいたわ。先輩、もちろんご馳走してくれるのよね？」

と言うやまとに俺も頷きながら

「ああ。任せろ。んじゃちょっと行ってくるからここにいてくれよ？」

と言うとやまとも「わかったわ。行ってらっしゃい」と答えたので俺は屋台の方へと向かった。

フライドチキンを買ってやまとの元へと戻ってチキンをやまとに手渡した。

「ほい、これ。熱いから気をつけてな。」

「あ、ありがとう。っ！熱いわね中々、でもおいしそう。いただくわね先輩。」

チキンを受け取ったやまとは大分熱そうにチキンを持っていたが少し冷ました後食べ始めた。

「ふう。中々おいしかったわ。ありがとう、先輩。」

「この位は軽いもんだ。それじゃゴミ片付けてこうのとこ行こうか。」

「そうね。いきましょ？先輩。」

やがて食べ終わると俺達はゴミを片付けた後再びこうの元へと移動

を開始する。

移動の最中やまとは歩きながらも周りをキョロキョロと見回しながら祭りを物珍しそうに見ていた。

「地元の祭りも行ったけどここの祭りもまた独特の雰囲気があるのね。」

歩きながら俺にそう聞いてくるやまとに俺も

「そうだな。他にも祭りやってるところは数あるんだろうけどそのどれもが独特の雰囲気を持ってるんだろうなって俺も思う。ここの祭り見ててもそう思うしな。」

そう答えるとやまとはどこか感慨深げに

「なんだかまた少し視野が広がった、そんな気がするわ。」

俺もそんなやまとの言葉に頷きながら

「ああ、そうだな。こうして色々知って視野を広げていけるんだろうな。いろいろ経験するのは大事な事だってわかる。」

そう言って2人して頷きあいながら歩いていくとこうとの待ち合わせ場所が近づいてきた。

「先輩、もうそろそろかしら?」

と聞いてくるやまとに俺も

「ああ。もう少しだ・・・・・・。よし、到着。」

そう答えながら歩いているうちに待ち合わせ場所へと辿り着いた俺たちだった。

待ち合わせ場所に付いた俺たちに気付いたこうが俺たちの元へ駆け寄ってきた。

「先輩ー、やまとー、ここです。はぐれてしまってすいません。」

そう言うこうの声に振り向いてみると頭にはお面を側頭部被るようにつけて手には鯛焼きを持ちどうやら俺たちが来ない間大分祭りを楽しんでいたらしいこうの姿が目に入った。

「こう。心配したぞ?と一応言っておこうか」

「その姿見たらやっぱり心配は杞憂だったとわかるわ・・・。ほんと、あなたらしいわね・・・。」

俺とやまとのダブルの突っ込みにこうは苦笑しながら

「一応って・・・本当は心配してなかったって事ですかー?」

少し不満顔で俺たちに抗議してくるこう。

俺はそんなこうに笑いかけながら

「心配してなかったさ。こんな時のお前は結構しっかりしてるって事知ってるからな。だからお前の迎えは最後に回したんだし。」

と俺がこうに言うとやまとも

「そうね。言って見れば付き合いの長さってのもあるわね。あなたの事は親友である私がよくわかってるから。」

俺たち2人がそう言うとこうは照れたように

「そ、そうですか?そう言ってもらえると嬉しいかも。それだけ私は2人に信用されてるってことなんですね。」

と言うこうに再び俺たち二人の突っ込みが炸裂する。

「あくまでもそう言う部分ではって事だ。約束した時間の待ち合わせ等に関しては未だ信用薄いって事は自覚しておけよ?」

「先輩の言うとおりだわ。もっとそっち方面もしっかりして欲しいものね。」

2人に突っ込まれたこうはかなりショックだったようで

「ううん、わかってますよ・・・。2人とも酷いよ・・・。」

と言って落ち込んでいた。

ともあれこのままここでこうしているわけにもいかないので俺は2人に

「そろそろみんなの所へ戻りがてら、出店にも寄っていこうか。」

そう言うと2人は頷いて

「そうですね。行きましょうか。」

「そうね。でも、こうは自重しなさいよ？私たちが来るまでに楽しんでたんだから。」

そう言うやまとにこうは「わ、わかってるよ」と言いつつも少し不満な顔をしてたがとりあえず2人を伴って戻っていく事にした。

俺は2人に一応注意を促す為に

「2人ともはぐれないようにしろよ？とりあえずやまととこうで手をつないでどちらかが俺と手をつないで離れないように・・・ってこう！？」

そう伝えようとした矢先、こうは俺の右腕に抱きついてきた。

俺は慌ててこうに

「お、おい、こう、何してるんだよ。」

そう言うとこうはしれっとした顔で笑いながら

「えー？別にいいじゃないですか。前にもやった事あったんだし、今更ですよ？」

いたずらっぽい顔を向けながら言うこうになおも俺は動揺しつつ

「い、いや、しかしだな・・・。」

そこにその様子を見たやまとが慌ててこうに

「そ、そうよ！先輩に迷惑になるから離れなさい、こう！先輩びっ

くりしてるじゃない！」

そう抗議するやまとを見てこうはニヤニヤとしながら

「あれー？何を慌ててるのかな？やまとは。別に私と先輩がこんな事してたってやまとには関係ないんじゃないの？」

そういってからかうこうにやまとはなおも慌てながら

「そ、そういう問題じゃないでしょ？それに先輩だって迷惑してるじゃないの。」

そう言うやまとにこうは俺の方を向いて

「先輩、こうされるのって迷惑ですか？」

と俺に話を振って来るこう。

俺は困惑しながら

「迷惑と言うかなんというか・・・こういうのって普通、恋人とか好きな人にするもんじゃないか？」

そう答えるとこうはきょとんとした顔を向けて

「先輩ってお堅いですねー。私としては先輩の事好きですから問題なしですよ？」

とさらにニヤニヤとしながらいってくるこうにやまとは顔を赤くして動揺しながら

「こ、こう！好きってどういう・・・まさかあなた先輩の事・・・！？」

そう言ってくるやまとにこうはしたり顔で

「好きだよ？友達として、だけどね。あれれー？やまとはひょっとしてそっちの意味だと思っちゃった？でもそんなに動揺するって事はやまともひょっとして先輩の事を・・・。」

ここぞとばかりに逆襲してくるこうにやまとはさらに顔を真っ赤にして混乱しながら

「え？ええっ！？わ、私が先輩の事？ちょっ！こう、あなた何言って・・・私は・・・私は・・・そんな・・・。」

などと言う2人のやり取りを見ながら俺も顔を赤くして動揺していた。

こうはやまとのあまりの混乱っぷりをみてちょっとやりすぎたかな？と思ったらしく

「冗談だよ、やまと。ちょっとからかいすぎちゃったね。とはいえ先輩を友達として好きってのは本当だけどね。」

こうがやまとにそう言うとやまとも幾分か落ち着きを取り戻してきたようで

「も、もう、こうはいっていい冗談と悪い冗談があるわよ？でも、友達として好きでもあなたはそういう事しちゃうのね・・・。」

やまとがこうにそう言うとこうは笑いながら

「まあ、スキンシップは嫌いじゃないからついね。でも誰にでもって訳じゃないよ？やろうと思えばやまとにもやるしね。それに先輩だからかな。安心してこんな事できるんだよねー。」

というこうの言葉に俺もまだ照れと動揺を交えながら

「俺の事をそんな風に見てくれるのはうれしいが、こうのスキンシップは慣れそうにないなあ・・・。」

俺がそう言うとやまとは少し不機嫌そうな顔になって

「先輩はもっと自覚してもらわないと困るわ。でなきゃこうがますます調子に乗るわよ？」

やまとの指摘に苦笑しながら

「そうだな。すまん、みっともないとこ見せた。」

そうやまとに謝る俺だった。

そんな2人のやり取りを見ながらこうは心の中で（やまとやっぱり先輩の事気になってるんじゃないのかなあ？）と思うのだった。

その後何とかこうを説得して手つなぎにとどめてもらい、みんなが待つ集合場所へ向けて出発した。

集合場所に戻りがてら俺は一つ気になってた屋台へと2人を伴って

向かうのだった。

「よし、着いたぞ。ここが気になってたんだ。」

そうして到着したのは射的屋だった。

「射的ですか？何を狙うんです？」
「いい景品でもあるのかしら？」

こうとやまとが俺に聞いてきたので俺は

「まあ、見ててくれ。とりあえず準備しとくか。」

そう言って屋台の主人にお金を払って準備をすると俺は銃を構えて狙いを定める。

（狙いはあれとあれか、よし！）

引き金を引き絞り弾を打ち出すと一つは黄色いリボンに当たり、もう一つは花をあしらったブローチにヒットした。

残りはお菓子を取って終了。

「よし、こんなもんだろ。」

景品を取った俺は2人の元へ行きこうにはブローチを、やまとにはリボンをそれぞれあげた。

「2人とも、これは日ごろの感謝とまあ俺のささやかな気持ちだ。受け取ってくれるか？」

俺がそれぞれに取った景品を渡すと2人とも喜んでくれて

「ありがとうございます先輩。わざわざ気を使ってくれなくてもよかったのに律儀なとこありますよね？先輩も。ともあれこれは大事にさせてもらいますね。」

とこうが言うとやまとも俺に

「ありがとう先輩。私にこれ似合うかしら・・・？でもせっかく取ってくれた物だからちゃんと使わせてもらうわ。」

そう言ってリボンを受け取ってくれた。

その後は帰る途中にこうとやまとに食べ物を奢り、ようやく集合場所へと辿り着いた。

「ただいま。ようやく帰ってきたよ。みんなお待たせ・・・って？」

俺はみんなに話し掛けようとしたときにこなたが見知った顔の人と話をしてるのが見えたのでこなたの所に行って

「ただいま、こなた。それとこんばんはゆいさん。あの時以来ですね、今日はお仕事ですか？」

声をかけた俺に気付いたこなたとゆいさんが俺に

「あ、お帰りー慶一君。ってあれ？慶一君ゆいねーさんの事知ってるの？」

「んう?あー君は確かあの時ゆたかを助けてくれた森村君じゃない。こなたとも知り合いなの?」

そう返事してくる2人に俺も少し困惑気味で

「ああ。前にちょっとな。ってゆいねーさん?ゆいさんってお前の知り合いなのか?ゆいさん。俺はこなたとは同級生なんですよ。それと、ゆたかはあれから元気にしてますか?」

と俺が聞くとこなたは

「うん。ゆいねーさんは私の従姉なんだよ。それにしてもゆいねーさんだけでなくゆーちゃんの事も知っていたとは・・・。」

そう言ってゆいさんも

「うん。ゆたかのは生まれつきだからね、私も一応注意しながら見てるよ。そっかー、こなたとは同級生だったんだね。私もさっきは他の子達とこなたを見て同級生だと気づかないで恥ずかしいこと言っちゃってたしね。」

そう言いながらさらに言葉を続けて

「今日はこういうお祭りの日だからね。交通課としては事故がおきないように見回りをしないといけないんだよ。」

というゆいさんの両手にはフランクフルトと水風船、頭にはお面とどうみても仕事してるようには見えなかった。

俺達は心の中で(仕事っていってるけど思いっきり楽しんでません

か?）と突っ込みをいれるのだった。

そうこうしてるとゆいさんの同僚の人がやってきてゆいさんを引っ張っていってしまった。

俺達はその様を半ば呆れたように見送っていたがその後こなたに

「ねえ慶一君。ゆーちゃんの事について聞かせて欲しいんだけど?」

と言われたので俺はとりあえず事情を説明した。

するとこなたはなるほどと一応の納得はしてくれたのだった。

「そっか。じゃあ、ゆーちゃんが言っていた森村さんって慶一君の事だったんだね。ゆーちゃん感謝してたよ?私からも改めてお礼言わせてね。ありがとう慶一君。」

そう言って御礼を言うこなたに俺は後頭部を掻きつつ照れながら

「たまたま俺がその場に居たからできた事さ。ゆたかの運が良かったってのもあるよ。それに大した事したわけじゃないしそう改めて言われると照れるな。」

と言う俺の答えにこなたは笑って

「慶一君はおくゆかしいねえ。まあそういう所も慶一君のいい所なんだろうけど。」

と言うこなたに俺はますます照れるのだった。

みんなと合流した後最後に俺達は全員で再び出店等を回って今日のお祭りイベントは何とか無事に終わったのだった。

祭りを終えてとりあえず家へと全員で帰宅してみんなは風呂に入ったり浴衣から私服へと着替えたりと各々がすべき事を終えて俺たちはリビングに集まっていた。

「ちょっとトラブルあったけど、今日は楽しかったな。」

俺が今日の感想を漏らすとみんなは

「そうだね。でも楽しかったなー。いい物も手に入ったし、ほくほくですよ♪」

嬉しそうに言うこなた。

「まあ、今回あんたが迷子にならなかったというのが意外な気はするけどね。慶一くん、今日はつかさを助けてくれてありがとう。それと金魚大事にするからたまに家に見に来てやってよ。」

つかさを迎えに行ったときの事を思い出して俺に改めて礼をいうかがみ。

「今回はめいわくかけちゃってごめんね?けいちゃん。助けてくれた事本当にありがとう。おねえちゃんと一緒に金魚大事にするからね。」

迷子になった事を気にしながらもかがみと一緒に金魚を育てようと思っているつかさ。

「今度来る時はご迷惑をおかけしなくても済むかと思います。また一緒に楽しみたいですね。」

にこにこといつもの笑顔で言うみゆき。

「一緒にいてくれて大分心強かったわ。カチューシャ大切にするからね。」

俺があげたカチューシャをつけて嬉しそうにしてるあやの。

「あやのやみんなにも迷惑かけちゃったけど私は楽しかったぜ?またみんなで行きたいよなー。」

今回の祭りを思い切り楽しんでいたみさお。

「色々ありましたが今回も楽しかったです。またこういうイベントの時は誘ってくださいね。」

こちらも相当楽しんでいたこう。

「私も今日は楽しかったわ。これからもこんな風に回れたらいいわね・・・。」

こうの行動に頭を痛めつつもそれなりに楽しんでいたやまと。

みんな最後は笑顔だった。

俺はそんなみんなの笑顔を見ながら、この楽しい生活がこれからも続くならば俺はどんな苦労もしょってやろう、と心に思うのだった。

すでに終電もなくなっていたので全員を家に泊めて次の日の朝一でみんなと別れた。

こうして波乱のお祭り巡りが幕を閉じたのだった。

旋律達と巡る祭り。

さまざまな事があったけれど俺にとっても忘れられない思い出となった。

もうすぐ夏休み、俺はさらにこれから起こるかもしれないこの騒がしい生活に期待に胸を膨らませている自分を自覚していた。

旋律の帰省～慶一のもう一つの過去、前編～

旋律達との夏祭り巡りを終えて3日後、俺は再び親父達への義理果たしの為に夏休み前に顔見せに実家へと帰る事となった。

あれからお袋に知り合いが増えたと言う事を聞いていたのだが、今日は帰った折にはその知り合いを呼んであるとの事なのでその人との顔合わせも兼ねての帰省となったのだが・・・・・・

多少の時間の遅れはあったもののとりあえず実家へと辿り着いた俺は親父はともかく、お袋への挨拶をしとこうと思い、道場の離れの自宅へと赴き玄関のドアを開けた。

「ただいまー。とりあえず約束だから顔見せに戻ってきたよ。ところで親父はまだくたばってないか？」

と家の中に入りながらきっちり挨拶とともに日課の親父への嫌味を言いながら家の居間に入るとそこにはお袋とともに数人のお客さんがいるのに気がついた。

お袋は俺を見るなりニコニコと笑いながら

「あら、おかえり。相変わらずねえ、あなたとお父さんは。」

と俺に声をかけると数人いるお客のうちの一人が呆れたような声で

「帰ってきて第一声がそれか・・・ほんと、あんたと親父さんてどんな関係なのよ？」

そう俺に言ってくる声を聞いて俺は驚きながら

「かがみ？何でお前がここに？」

そう声をかけるとかがみは苦笑しながら

「あー・・・それはそこにいるこなたに聞いてくれる？」

かがみの視線の先を見るとこなたがいつもの目を細めた顔をしながら

「やほー慶一君。お邪魔してるよー。」

そう答えてくるこなたに俺は軽いめまいを覚えつつ額に手を当てながら

「こなたもいるのか？というか何でお前らが俺の実家の場所を知ってるんだよ・・・。」

少し疲れたような声でそう言うとこなたは軽く状況の説明をしてくれるのだった。

「いやー、実は祭りの後にさ、慶一君長い休みの前とかに一度実家に顔出しに行くっていってたじゃん？それで慶一君の実家を一度見に行って見たいなー、と思ってさー。みんなで話をしてたらみゆきさんが場所知ってるっていうから、ならこっそり行って脅かしてみよう、って事になった訳なのだよ。」

となぜか得意げに説明をしてくれるこなたにみゆきが苦笑しつつ謝りながら

「すみません慶一さん。私は一応慶一さんの実家の事を知っていたと言う事もあったのですが、泉さんのどうしても行きたいという希望に歯止めがかけれませんでした・・・。」

そう説明するみゆきに一つ軽いため息をつくと

「なるほどね、事情は理解したよ。まあ今更みゆきは責められないな。いずれは解る事だったのが今回になったと言うだけの事か・・・で？かがみたちはそれに便乗したわけだな？」

かがみ達の方を見ながらそう言うとかがみも俺から視線を外しつつ

「いや、まあ、その・・・一度私たちも見てみたいなと思って・・・ひょっとして迷惑だったかな？」

頬をぽりぽりと掻きながらばつの悪そうにいうかがみに俺は

「いや、ちょっと驚いたけど迷惑って事はないさ。かがみたちもお袋と話をして解ったと思うけど、結構おおらかだからな、うちのお袋はさ。それに人が集まるのが嬉しいみたいでな。だから心配しなくても大丈夫だ。」

かがみにそう答えるとかがみたちも安心したようで

「そう？それならよかったかな。でもここが慶一くんの実家なのね。道場だって聞いてたけど結構大きいんじゃない？」

かがみが外の離れの道場を見ながらそう言うと俺はかがみに

「この辺にもいくつかの道場もあるんだけど、その中では確かに大

きい方だな。弟子もそれなりにいるからね。」

かがみにそう答えるとかがみは感心したように

「へえ、中々凄いのね。慶一くんはたくさんのお弟子さんの一人って事よね?実力的にはどの程度?」

と聞いてきたので俺は「一応師範代クラス程度までは登ったかな。」と答えるとかがみはまた感心しているようだった。

そんな話を聞きながらこなたは感慨深げに

「意外と有名どころっぽいねー。慶一君はここで鍛えられたわけだ・・・。」

同じように道場と俺を見比べつつ言うこなたに俺は笑いながら

「まあな。しごきはきつかったよ。うちの親父は容赦ないからな。」

そう俺が言うとこなたは何やら納得したような感じで

「そっかー。だから慶一君の性格は曲がったりしなかったんだねえ。ほぼ強制的にまっすぐになるように叩き込まれたって事かー。」

俺はそんなこなたの言葉にただただ苦笑するしかなかった。

そんな俺たちのやり取りを見ながら

「龍神(たつかみ)さんの所は中々の実力のある所と伺っています。」

と一応下調べしてきたらしいみゆきがいう。

そんなみゆきに俺も

「まあ、実力的には確かに周りからも一目置かれているところはあるな。家の近くにもいくつかの道場があるけどそこからもたまに出稽古にくる門下生がいるくらいだしな。俺も相手はした事はあるけどさ。」

と、みゆきの指摘を肯定するように説明をした。

みゆきはそんな俺の説明を聞きながら

「そこまででしたか・・・。やはり凄いのですね。」

と離れの道場の方に目をやりながら答えるみゆきだった。

つかさはそんな話を聞きながら秋葉腹での出来事を思い出したようで

「だから秋葉腹のときのあの動きができたんだね。やっぱりけいちゃんて強いのかなあ。」

というつかさに俺は後頭部を掻きつつ

「でも、最近はあまり鍛える事に時間を使ってなかったから大分鈍ってるんだよな。前に見せたあれでも本調子の頃に比べたら大分落ちるよ。」

というとつかさは驚きながら

「ええ～？あれでなの？わたしぜんぜん動き見えなかったよ～・・・。」

というつかさの言葉に苦笑しながら

「まあ、普通の人から見たら確かにそう見えるよな。だからつかさが見えなかったとしても何ら不思議な事じゃないさ。」

そう俺が説明するとつかさは何やら感心していたのだがこなたが横から

「でも、格闘技経験者である私にも見切れなかったけどね。流石に経験者としてのプライドが少し傷ついたよ・・・。」

少し悔しそうに言うこなたに俺はこなたがあの勉強会の時に俺に言っていた事を思い出しながら

「こなた、格闘技経験があるって前にもそう言ってたよな？前にお前に背中流してもらった時にはお前の体つきを見て気付いたんだがな。」

そう尋ねるとこなたは笑いながら

「うん。私は子供の頃にお父さんに進められて習っていた時期があったんだよねー。途中で結局やめちゃったんだけどさ。だからかなーある程度の強さはなんとなくだけどわかるよ？」

そう説明してくれた。

さらにこなたは言葉を続けて

「だから、ある程度強い人ってのも見てきてるから、そういう人とあの時の慶一君の動きを比較してみてレベルを測ったけどさ、正直私が知ってる人よりも上だったから驚きだったんだよね。まさに世の中には上には上がいるって思ったよ。」

あのときは自分も驚いていたのだと俺に言うこなただった。

そんなこなたの言葉を聞きながら俺は

「うーん、こなたがそう俺を評価してくれるのは嬉しいんだがな、うちには化け物がいるからなあ・・・。」

両腕を組んで頭を捻りつつこなたにそう言うとこなたは

「化け物って・・・そんな人いるの?」

そう聞いてきたので俺はその質問に答えようと声を出しかけたが俺達の後ろから突然声をかけられたので、俺達は驚いて声のほうを振り返った。

「おう、慶一、戻っていたのか。ほう?なかなかべっぴんさんが集まっているじゃないか。ところで慶一よ、この中の誰がお前の恋人なんだ?」

いきなり背後から現れて爆弾を投下していく親父に俺は大慌てで

「お、親父、いきなり出てきて何言ってるんだ!この娘等は俺のクラスメートと友人だよ。変な勘違いするな!」

俺が親父の言葉に反論すると他のみんなが少し複雑な表情をしているのが見て取れたが俺は親父に言われた事のほうで頭が一杯でその時の４人の気持ちも知る余裕もなかった。

「ほう？そうか。こうちゃんややまとちゃんといい、お前の周りには女の子が最近は集まるようになったようだしな。最近のお前の周りの変化はいい傾向だと思っていたのだがな。」

親父は顎に手をあてながらニヤニヤと俺をみてそんな事を言っている。

俺はそんな親父に不機嫌な顔を向けながら

「なんでそこでこうや、やまとが出て来るんだよ・・・まったく変な詮索だけはしてくるんだからな。そんな事ばっかりしててお袋に嫌われても俺は知らんぞ？」

そう文句を言うとお袋は笑いながら

「あら？この人のこの性格は今に始まった事じゃないわよ？それに変な事をしようものなら即絶縁状たたきつけて家をでていくだけだしね」

と親父の方を向きながら顔はにこにことしながらもかなり親父を驚愕させるような事をいっていた。

親父はそんなおふくろの言葉に慌てつつ

「ま、待て、私はそんな事はしない。お前も洒落ではすまないような事を言うな。まったく・・・ともあれよく戻ったな。」

お袋の言葉に言い訳をしつつも威厳をもって俺にそう言う親父に（台無しだな・・・）と俺は思いつつも

「一応、息子としての義理もあるからな。とりあえず帰ってきたよ。」

そう親父に返事しつつこなたに小声で

『あれがうちの化け物だよ。』

とささやくとこなたは俺の親父をまじまじとみながらやはり小声で

『あの人がそうなんだ・・・確かに私から見ても雰囲気とかで強さがわかるようだよ・・・なんか普通にしてもオーラみたいなのが違う感じがする・・・。』

そう俺に返事をしてきた。

そんな俺達のやり取りを見つつもかがみ達もとりあえず俺の親父に挨拶をするのだった。

「初めまして。慶一君とはクラスは違いますが友人の泉こなたです。」

「柊かがみです。慶一くんとは仲良くさせてもらっています。」

「柊つかさです。わたしもけいちゃんとはお友達です。」

「高良みゆきといいます。慶一さんには何度もお世話になっています。」

とそれぞれ挨拶をすると親父も豪快に笑いながら

「ははは。みんなよろしく。うちの馬鹿息子が迷惑をかけていないかね？」

と言う親父に俺はすかさず

「自分の息子を捕まえて馬鹿とか言うな！この馬鹿親父！」

俺の反論に親父は呆れたような顔で

「お前のそういう単純な所がだ。まったくつくづく可愛くない性格になりおって、だれの影響を受けたのやら・・・。」

自分の事を棚に上げて言う親父に俺はさらに親父をねめつけながら

「俺はあんたに育てられたんだけどな？とうとう自分が誰を育てたかもわからなくなるほどボケたのか？」

そう言うと親父もカチンときたのか俺に食って掛かってきた

「誰がボケた、だと？相変わらず生意気をいいおって、本当に可愛くない！」

「なんだと？」

「なんだ？」

俺と親父が睨みあう。

お袋はそんな俺たちをあいかわらずにこにこしながら見ていて、こなたたたちは４人でひそひそと

『本当に仲悪そうだね・・・大丈夫なのかな?』
『よくあんなのでいままで上手くやってきたわよね・・・?』
『ど、どんだけー・・・。』
『お2人とも素直にはなかなかなれない性格なのかもしれませんね・・・。』
と言う話をしていた。

俺としばらくにらみ合いを続けていた親父が何かを思い出したように俺に

「おう!そうだそうだ、慶一。一度こっちに戻ってきたのならまた少し鍛えていくのだろう?ならばその子達にお前の演武を見せてやったらどうだ。こうちゃん達にも見せているのだから問題はあるまい?」

そういう親父に俺は上手く話題をそらしやがったな?と思いつつも一つため息をつきながら

「・・・はあ、上手くごまかされたような気もしないでもないがとりあえずやるとするか・・・みんなちょっと道着に着替えてくるから先に道場の方へ行っていてくれ。」

みんなにそう言うとみんなも「わかったよー」と言って道場の方へ行ったのを確認した後、俺は道着に着替えるとみんなの待つ道場へと移動する為玄関をでた。

そして道場へ向かう途中で突如俺を襲ってくる白い物体に飛びつかれて尻餅をついた。

その物体は俺の顔を舐めまわし始めたがよく見ると俺の見覚えのある犬だった。

「お前、チェリーか？何でお前がここにいるんだ？」

チェリーの頭をなでながら周りを見渡すと俺とチェリーをみながらおろおろとしている女の子を見つけたので俺はその子に声をかけた。

「よっ、岩崎さん。あの時以来だね。とはいえどうして君がここに？」

俺が岩崎さんに声をかけると岩崎さんもおろおろとしつつも

「あ、こ、こんにちは、森村さん・・・。あの・・・実は、私、みゆきさんにみゆきさんのお母さんから用事を頼まれたので・・・それで居場所を聞くと龍神さんの道場へお邪魔していると聞いた物ですから・・・でも森村さん、なぜ龍神さんの道場に・・・？」

と説明してくれた。

俺はチェリーを引き離しつつ立ち上がって岩崎さんに

「そっか、事情はわかったよ。みゆきはここに来てる。道場の方にいるよ？それと俺がここにいるのはここが俺の実家だからさ。」

そう説明すると岩崎さんも少し驚いたような顔をしながら

「え？実家、なんですか？でも先輩とは性が違うようですが・・・？」

と聞いてきたので俺は

「ああ、その辺はみゆきにも話してあるから後で聞いてみてくれ。とりあえずチェリーはそこにつないでおくといい。丁度いいから岩崎さんもおいで。これから演武を行う所だからさ。折角来てくれたんだし見ていくといい。」

俺がそう促すと岩崎さんは少し戸惑いつつ

「・・・なら・・・少しお邪魔しますね・・・？」

と言いながらチェリーのリードを結びつけて俺とともに道場へと向かうのだった。

道場に着いて中に入ると俺はみんなに

「みんな、遅れてすまない。ちょっとお客さんが増えたんでね。」

と言った後岩崎さんに

「岩崎さん、とりあえずみゆき達の方へ行って一緒に見ててくれ。」

と促すと岩崎さんもこくりと頷いてみゆき達の方に行った。

こなたｓｉｄｅ

慶一君に促されてこちらにやってくる女の子はどうやら慶一君の知り合いのようだった。

私は少し気になったのでその子に何か聞こうと声を出そうとしたら

「あら？みなみちゃん。どうしたんですか？こんな所に。」

その子に気がついたみゆきさんが先に声をかけた。

その子はみゆきさんに

「・・・あ、みゆきさん、実はみゆきさんのお母さんから・・・・・・。」

と、みゆきさんに事情を説明している。

私もその状況を黙って見ていたんだけど、かがみたちも

「ねえ、こなた。あの子ってみゆきの知り合いみたいね？それに慶一くんもあの子の事知っているって感じだったし・・・。」

「ゆきちゃんとどういう関係なんだろうね？それにけいちゃんとも・・・。」

そう私に聞いてくるが、私も何が何やらだったので

「みゆきさんに聞いてみるのが早いと思うよ？」

と返しながらみゆきさんに

「みゆきさん、その子ってみゆきさんの知り合いなの？慶一君も知っているっぽいようだったけど？」

と私が聞くとみゆきさんはにっこり笑いながら

「ああ、この子は私の家の近所に住んでいる岩崎みなみちゃんです。私にとっては妹みたいな感じなんですよ。それと慶一さんが知っていたのはみなみちゃんと出会うきっかけがありまして・・・・・。」

と、岩崎さんが慶一君と出会うきっかけになった時の事を教えてくれた。

と同時に岩崎さんが私達と同じ陵桜を受験しようとしている事も教えてくれたのだった。

私達は岩崎さんにそれぞれ自己紹介をすることにした。

「私は泉こなただよ。みゆきさんと慶一君と同じで陵桜に通ってるんだ。岩崎さんもゆーちゃんと同じに陵桜目指しているんだね?」

「柊かがみ、よ。そこのこなたとみゆきと慶一くんとも友達なのよ。よろしくね?」

「柊つかさだよ。こなちゃんやゆきちゃん、けいちゃんとはお友達なんだよ?それとかがみは私の双子のおねえちゃんなんだよ~。」

「みなみちゃん。泉さんやかがみさん、つかささんとはお友達です。陵桜に合格できたらまた会うことになると思いますよ?」

最後にみゆきさんがそう言うと岩崎さんはおずおずと

「・・・あ、わ、私は岩崎みなみといいます。みゆきさんの家の近所に住んでいましてみゆきさんは私の姉のような人なんです。よろしくお願いします・・・。」

と自己紹介してくれた。

私たちもそんな岩崎さんに「よろしくー」といいながら握手を交わしたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

道場の隅でそんな5人のやり取りを見ながらどうやらちゃんと打ち解けられたみたいだな、と思いながらみんなにそろそろ演武を始める事を伝えるのだった。

「みんな、そろそろ始めるよ。あまり面白い物じゃないけど、まあ見ててくれ。」

俺がそう言うとみんなはおしゃべりをやめてこっちに注目してくれた。

みんなの注目が少し照れくさい俺だったが、とりあえず演武をはじめる事にした。

流れるように体を動かし、突きや蹴りの動作、特殊な歩法を交えて型をこなす。

そして最後に決めの型をやって一通りの演武が終了した。

演武が終わるとみんなは俺に大きな拍手をしてくれて口々に

「おー！やっぱりすごいねー。動きにキレがあって一つ一つの動作も綺麗だったよー。」

少し興奮気味に感想を言うこなた。

「力強さと繊細さってのがよくわかるわね。すごくかっこよかったよ。」

大きく頷きながら言うかがみ

「なんだかよくわからないけど凄さみたいなのは伝わってくる感じだったよ～？」

あまりわかっていなさそうなつかさ。

「思わず見とれてしまいました。一つ一つの動作にも意味があるのがわかります。とても素晴らしかったですよ？」

とにっこり微笑みながら誉めてくれるみゆき。

「森村さんがこんな事をしているというのも初めて知りました・・・。凄く動きが綺麗でした・・・。」

少し照れながらも感想を言ってくれた岩崎さん。

俺は体の鈍りもあって少し息切れしながらもみんなに

「ははは。とはいえ結構鈍ってるよ。これはもう少し基礎体力鍛え直さないとかもなあ・・・。」

後頭部を掻きながら照れつつ言う俺。

そんな俺の周りにみんなが集まって色々話していると親父が道場に姿をあらわして

「慶一、お前にお客さんだ。さあ、入ってきなさい。」

俺に客人があることを伝えてその人に道場に入ってくるように促すとその人は中に入って来て俺に声をかけるのだった。

「よう、慶一。元気にやってるか?今日はお客さんが多いみたいだな。」

俺に笑顔を向けながら言うその人に俺は複雑そうな表情で

「瞬、お前だったのか・・・しばらくぶりだな・・・。」

そう声をかけるのだった。

旋律の帰省～慶一のもう一つの過去、前編～（後書き）

今回もいつものどたばたをしつつ慶一のもう一つの過去を語ろうと思います。
新たに一人キャラを出してますのでそのプロフィールをば

名前：牧村瞬一
年齢：１７歳
誕生日：９月１５日
身長１７８センチ体重６５キロ

本編で出てきている牧村道場の牧村流の後継者であったが、慶一との過去において武術家としてはやっていけない体となってしまう。なので現在は牧村家の次男が代わりに後継ぎ候補としてやっている。兄弟は３人で瞬一は長男。後継ぎの祐次が次男、もう一人浩也という弟がいる。

旋律の帰省～慶一のもう一つの過去、後編～

いつものように長い休みの前に一度実家に顔を出しに行くという約束を果たす為に実家に戻ってきた俺の前に現れた旋律達。

そしていつものどたばたをしつつも道場に行き、みんなに演武を見せ色々と雑談を交わしている時現れた人物は俺の尤もよく知る、そして一生忘れてはならない係わりのある人物だった。

そしてその人物は俺に

「よう、慶一。元気にやってるか？今日はお客さん多いみたいだな。」

そう声をかけてくるそいつに俺も

「瞬、おまえだったのか・・・。しばらくぶりだな・・・。」

そう、今も拭えない罪悪感を持って返事をする俺だった。

その人物の名は牧村瞬一。

うちの道場との交流もある牧村道場の長男であり、俺とは同い年で、かつ、牧村流の後継者となるはずの男だった。

後継者となるべき男はいまや松葉杖をつき、挌闘家としてはやっていくには無理な体になっていた。

瞬は俺の顔を怪訝そうな表情で見ながら

「なんだ?ずいぶん歯切れの悪い返事だな?」

俺を見ながらそう声をかけてくる瞬に俺は戸惑いつつも

「ははは、なんというか、まだ、ちょっとな・・・。」

何とか声を絞り出し返事をする俺を見て瞬は困ったような顔をしつつ

「まあ、いいか。なんにしても親父から用事をいいつかってここにきたんだ。ついでにお前の顔を見れるとは思わなかったけどな。聞けば最近は実家にはあまり顔をだしていないそうじゃないか。」

そういいながらさらに言葉を続けて

「お前の親父さんやお袋さんも少し寂しいって言ってたぞ?学校もあって大変だろうけど少しは顔だしてやれよ。」

笑いながら言う瞬に俺は半ば上の空になりつつ

「あ、ああ、そうだな・・・。すまん・・・。」

心ここにあらずといったような返事を聞いた瞬はやれやれといったジェスチャーをしていた。

そんな瞬を見て俺は言い訳するかのように

「すまん、ちょっと汗流してくる。瞬、また後でな・・・。みんなもくつろいでいてくれ・・・。」

そう言いながら俺は逃げるようにその場を立ち去った。

そんな俺を見ながらみんなは唖然としていたが俺を見送った瞬は

「やれやれ、まだ気に病んでいるのか・・・。まったく、生真面目なやつだよな・・・。」

そう呟いたのだった。

こなたｓｉｄｅ

彼が現れてから慶一君はどこか様子がおかしくなったようだった。

２人のやり取りを見るにつけ、２人の間に何かがあったのは明白だと思う。

相手の男の人の姿、そしてさっきの呟き、私は気になったのでその人に理由を聞いてみたいと思い、その人に声をかけたのだった。

「あの、牧村さんっていいましたよね？慶一君の知り合いの人なんですか？私は慶一君と一緒の学校に通うクラスメートで泉こなたといいます。」

一応それなりに年上っぽそうだったので敬語で声をかけると、牧村さんは私のほうを向いて

「ん？君が慶一と同じ学校のクラスメート？小学生とかの間違いじゃないよね？一応確認するけど。」

という失礼な物言いに少しカチンと来た私は頬を膨らませながら

「確かに見た目はそう勘違いされがちですけど、私は慶一君と同じ高校2年生です！」

と少し怒ったように言うと牧村さんは慌てて私に謝りながら

「いやー、ごめんごめん。見た目で判断しちゃいけなかったね。それと俺も君や慶一と同い年だから敬語じゃなくていいよ？」

そういいながらさらに言葉を続けて

「君の言うとおり俺と慶一は知り合いだよ。というか親友だったけどな。それと改めて、俺は牧村瞬一。この道場と交流を持ってる牧村道場の長男さ。」

さっきの私の質問に答えてくれつつ自己紹介もする牧村さん。

それにつられて他のみんなも

「私は柊かがみよ。同じく慶一くんとはクラスメートよ？よろしく。」

「柊つかさです。かがみおねえちゃんとは双子の姉妹でけいちゃんともクラスメートだよ？よろしくね。」

「高良みゆきです。皆さんと同じように慶一さんのクラスメートです。よろしくお願いしますね。」

「・・・岩崎みなみです。森村さんとは知り合いですが、私はまだ同じ学校の生徒ではありません・・・。」

それぞれ自己紹介を交わすのだった。

私はさっきの牧村さんの親友だったという部分が気にかかったので聞いてみることにした。

「牧村君、さっきの慶一君と親友だったという過去形を使っていたようだったけど、それってどういう事なの？」

その私の質問に牧村君は複雑な表情を浮かべながら

「ああ。あいつにとってはそうだったということかな。俺は今でも親友だと思ってるけどな。まあちょっと昔に色々とあってな・・・・・。この話、聞きたいかい？」

という牧村君の言葉に私達は「是非聞きたい！（わ）（です）」と言うと牧村君は私たちを見て少し考える仕草をしていたがやがて

「・・・君達なら、この話をしてもいいだろうな。この話を聞いた後でもあいつの側に居てくれるって思えるしな。」

牧村君は私たちを見ながらそう言うと、昔の事を思い出しながら私たちに話をしてくれるのだった。

「今から４年近く前の事だ。小学校６年の後半から中学に入り中学２年の中間あたりくらいまであいつがものすごく荒れていた時期があったんだ。俺も当時はあいつと同じ中学に進んでいてな、そこであいつと出会い、互いの技量の限りを尽くしてケンカしてお互いを認め合い、俺達は親友となったんだ・・・・・・

慶一が小学校６年の後半から荒れ出したのはあるきっかけが原因だった。

それは今の育ての親である龍神家で偶然にも父親と母親がしていた会話を慶一が聞いてしまった事から始まった。

「あなた。慶一が私達の本当の子供ではないと言う事をいつ伝えるつもりなの?遅かれ早かれいずれはあの子はその事を知る事になるのよ?」

「わかっている。いずれは話さねばならない事もな。私もその時期を見定めている所だ。だが、今はまだ話すべきときではないだろう・・・。」

慶一はそれまで龍神の両親が自分の本当の親だと思い込んできた。だからこそこの会話を偶然にも聞いてしまった慶一は2人の会話の真相を聞きたくて部屋へと飛び込んでいった。

「!?慶一?」

「慶一、どうした?急に飛び込んできて。」

慶一は真剣な表情で2人にさっきの会話の事を問い詰める。

「父さん!母さん!さっきの話はどういう事なの!?俺はこの家の、父さんと母さんの子じゃないの!?」

慶一の必死の問いかけに先程の会話を聞かれたのだと思った2人はしばらく無言で慶一を見つめて考えを巡らせていたようだったが、やがて意を決すると慶一に真実を語ってきかせたのだった。

「慶一、私達はあなたの本当の親ではないわ。あなたの本当の両親はあなたが物心つく前に事故で亡くなったのよ・・・。あなたの本

当の両親の名前は森村真一さんと慶子さん・・・。あなたの本当の性は・・・森村というの・・・。あなたは龍神慶一ではなく・・・森村慶一、なのよ・・・？」

「私達龍神は森村君とは親戚筋にあたる。ゆえに両親を亡くし一人きりになってしまったお前は親戚中をたらいまわしにされる事になった。だが私達はそんなお前を不憫に思い、お前を引き取る事にしたのだ。そして、いずれこの事実をお前に伝えるつもりだったのだ・・・。許せ、慶一、真実を隠していたのもすべてはお前を思うあまりにやった事なのだ・・・。責めるのならば母さんではなく私を責めろ・・・。それがお前に対する私の償いだ・・・。」

そんな2人の告白を聞いて慶一は大いに混乱してしまい育ての親たる2人を見て

「そ、そんな・・・俺は、龍神慶一だ！森村なんて知らない！俺はこの家の子だ！そうだよね？父さん！母さん！何とか言ってよ！・・・・・信じない・・・そんなの信じられない・・・う・・・ううう・・・うあああああ！！」

2人が悲痛な面持ちで慶一を見守る中、現実を受け入れられない慶一は叫びながら部屋を飛び出していった。

そして、森村の性を今の今まで知らずにずっと龍神の性を名乗ってやってきた慶一は自分が本当は龍神とは何の関係もない人間なのだという現実を受け入れられずに中学1年から2年の前半を過ごす事になる。

その頃の慶一はそんな現実を突きつけられたことによる苛立ちと怒りと悲しみをないまぜにしたような感情のぶつけどころがわからず

に日々を送っていた。

俺はそんな慶一の側に親友として居れた一人だった。

そのうちに慶一は武術をやっているという事もあり不良グループ連中から目をつけられるようになっていった。

そして慶一はそいつらをぶちのめす事を自分の複雑な感情をぶつける場に選んだ。

「お前が龍神慶一か。結構評判だぜ？かなり強いってな。けど、お前をぶちのめして俺が最強だって事をしめしてやるよ！お前の伝説もここまでだ！」

そう言って向かってくる不良の一人を返り討ちにしつつ慶一は

「・・・龍神・・・俺を・・・その名で呼ぶんじゃねえ！俺は・・・森村慶一だ！わかったら消えろこの屑野郎が！」

切れた表情で不良をボコる慶一。

即座に戦意を喪失した不良は慌てながら

「うわあああ！わ、わかった、もう勘弁してくれあんたには二度と手をださねえよ、だから助けてくれー！」

ボコられながらも哀願して許しを求めて叫んでいた。

俺は慶一の側にいながらその様子を見つつ

「おい、慶一、相手はもう戦意を失ってる、そのくらいで勘弁してやれ。」

と言う俺の言葉に慶一は切れた表情を俺に向けながら

「うるせえ！俺に指図するな！それ以上言ったらお前も黙らせるぞ！」

激昂しながら俺に言いつつも理性はそれでも残っていたようで”お前を黙らせる”とは言うもののそこまでの行為に及ぶ前には冷静を取り戻していた慶一だった。

そして冷めた目でぶちのめした不良を見下ろしながら

「・・・俺は・・・どうしたらいいんだ・・・。」

答えを求めるかのように慶一は暴れた後はいつもそう呟いて自問自答をしていた。

そんな慶一に対する答えは俺にもわからなかったが、それでもこいつをこのまま一人にしちゃいけないと思っていたから俺はどんな時でも常に慶一の側で行動の一つ一つを見つめていた。

そんな日々が続いて2年に上がってすぐの頃だ・・・・・・

俺たちに目をつけている不良グループの連中の中でも特に俺たちに恨みを持った連中がいて、そいつらはある日俺の油断をついて俺を気絶させて慶一を仕留めるために人質として俺を拉致した。

慶一は荒れてはいたが、俺を見捨てるような事だけはしなかったが

ゆえに俺が人質に取られたと知るや罠だと分かっていても慶一は俺を助ける為に連中の呼び出しに応じた。

「よく来たな。龍神、いや・・・森村だっけな。こいつが大事なら無駄な抵抗はしない事だ。さあてお前ら、ショーの始まりだ！」

リーダー格の合図と共に慶一を取り囲む雑魚連中。

慶一は連中を一瞥すると

「・・・好きにしろよ！そのかわり瞬には手を出すな・・・！！」

俺を盾にされて抵抗できないと見るや、連中はこぞって慶一をボコボコにしはじめた。

慶一がボコられているのを歯がみしながら見守っていた俺だったが、一瞬の隙をついて俺を拘束する連中の一人をぶちのめして脱出し、慶一の所へ向かう。

「手間かけさせたな。もう大丈夫だ。さあ、借りを返してやろうぜ？」

慶一にそう言うと慶一もボコボコの顔で不敵に笑って

「ああ、そうだな。後悔させてやろうぜ？俺たちコンビに手出しした事をな！」

今までの借りを返すかのように雑魚連中を二人で叩きのめしていき最後にリーダー格をぶちのめしてこのケンカは終わるはずだった。

だが、俺達はそのリーダー格の動きに気付いておらず、まだくたばっていなかったリーダー格は近くにあった鉄パイプを拾い上げ俺たちに気付かれないように殴りかかって来た。

「へへへ・・・足の一本くらいは貰っていくぜ!?くたばれや!!」

丁度それがボコボコにされて片目が腫れ上がり見えなくなっていた慶一の死角をつく形になりその足に鉄パイプが振り下ろされるその刹那、俺は反射的に慶一を庇うように動いていた。

ゴスッ!!という鈍い音が響き、俺はその一撃を自分の利き足に受けることになった。

「う、ぐあああっ!」

俺は一撃を受けたところを押さえてうずくまる。

「っ!何してやがるてめえええ!」

それをみた慶一は怒りの表情で即座にリーダー格を叩き伏せて沈黙させた。

足を押さえてうずくまる俺の元に来て慶一は心配そうに俺の足を見ながら

「大丈夫か?瞬。すまん、油断してた・・・。」

そう声をかける慶一に俺は「大丈夫だ、心配ない」とだけ答えてお互いを支えあいながら病院へと向かった。

病院で一応の治療を受けたが、俺の足については詳しい検査結果はすぐにはでないから結果が出次第連絡をするという医者の話を聞いてから俺達はそれぞれの家に帰っていった。

そして後日、検査結果を受けて俺は愕然とした。

利き足の膝関節粉砕骨折という結果がでたからだ。

この足は治っても元のようには歩けなくなるだろう、ましてや武術を続ける事は無理だという医者の話に俺の親父は相当落ち込みそして龍神さんの所へと怒鳴り込みに行ったのだった。

事実上、俺は格闘家として終わった体になってしまった。

親父から聞いた話だが慶一は龍神さんに格闘家生命を奪ってしまった事に対する制裁が加えらえたと言う事を聞いた。

だが、俺は元々は弟達に比べてその素質は劣っているという事を自覚していたがゆえにその事は多少ショックだったものの心のどこかではほっとしている自分に気付いていた。

「瞬、すまん、俺のせいで・・・お前は・・・・・・。」

龍神さんに制裁を加えられた顔で俺のところに来て泣きながら俺の前に土下座する慶一を見て俺は

「俺をこんな体にした事を、悪いと思っているのか?」

そういう俺に慶一は額を床に摩り付けながら

「ああ・・・。謝って済む事じゃないって事も分かってる・・・。でも、お前に詫びなきゃ気がすまない・・・。」

泣きながら俺に言う慶一を見つめながら

「詫び、か・・・本気で詫びたいと考えてるのなら、俺の出す条件を飲んでもらおう。」

俺がそう言うと慶一は顔を上げて「条件?」と聞き返してきたので俺は

「そうだ。俺の出す条件はお前が龍神さんときちんと話合い、お前の真実と現実を受け入れる事だ。お前が森村であることを受け入れ、育ての親ではあっても、龍神さん達の事も今の自分の親であるのだという事実を受け入れる事。これがお前に出す俺への詫びの条件だ。」

俺の言った言葉に戸惑う慶一は

「しかし、それは・・・・・・。」

煮え切らない態度の慶一に俺は

「できないのか?俺に詫びたいというお前の言葉は嘘だというのか?お前は所詮はその程度の事も乗り越えれない奴なのかよ?」

俺の指摘に慶一はしばらく考え込んでいる様子だったがやがて意を決したらしく

「・・・わかった・・・。お前の言うとおりにするよ・・・。いつ

までも逃げてちゃいけないよな・・・。」

慶一がそう答えると俺は満足そうに頷いて

「それでいい、がんばれよ?慶一。お前ならきっと乗り越えられるさ。俺の親友たるお前ならな。」

その俺の言葉に慶一はつらそうな顔をしながら

「瞬、俺は、お前の未来を奪ってしまった俺は、お前に親友と呼んで貰う資格なんてない・・・。」

という慶一に俺は苦笑しながら

「相変わらずそういう所は生真面目な奴だな、お前はさ。お前がどう思おうとも俺はいつまでもお前の親友だ。それだけは言っておくからな?」

そんな俺の言葉に慶一は涙をこぼしつつ

「ありがとう、瞬。だけど・・・俺はこの先も・・・お前をそんな風にしてしまった俺自身を許す事はないだろう・・・。だけどお前のその気持ちだけは嬉しかった・・・。」

そう言って目を伏せて慶一はさらに言葉を続けて

「お前の言った条件、乗り越えてみせるよ。それだけはこの場で誓う。それじゃ俺はもう戻るよ。いつかまたな?親友・・・。」

そう俺に告げて道場を去る慶一の後姿を俺はいつまでも見送ってい

た。

その後、慶一は龍神さんのご両親とよく話し合い、俺の言った条件を乗り越えた。

・・・・・と言う事があってな。それでもあいつの龍神さんに対する態度だけは素直にはならなかったが一応は今の関係になった、ってことなのさ。」

一通りの話を終えると泉さん達は全員がつらそうな顔をしつつ

「そうだったんだ・・・その足はその時に負った怪我だったんだね？今でも歩くだけで精一杯なの？」

という泉さんの質問に

「あの頃よりは大分良くはなったけど、まだこれがないと歩き回れないかな？」

松葉杖を振りながら答える。

「そっかー、大変だね・・・。」

心なしか暗い表情で泉さんが答える。

「あまりにも悪いタイミングで慶一くんはその事を知っちゃったのね・・・。そして自分の行動が牧村くんを再起不能に追い込んだことを今でも責めてるのか・・・。」

柊さんがそう感想を漏らしたので俺は

「すべてはタイミングだったって事だな。でも俺も、もっと早くにあいつの目を覚まさせてやればよかった、と後悔してる部分もあるよ。」

今にして思えばという思いをかがみさんに口にすると

「運命だったのかしらね・・・。」

悲しげな表情でそう言った。

俺はそんなかがみさんの漏らした言葉に

「運命か・・・。今思えばそうだといえるところもあったかもしれないな。」

俺もあの時から感じていた事を口にした。

「牧村くんは・・・けいちゃんの事恨んだりしてるの?」

つかささんがおずおずと俺に質問してきたので俺は

「恨んでるとかそういう事はないよ。話の中でも言っていたけどさ、正直才能のない俺が牧村を継ぐことに重荷を感じていたからね。むしろその重荷が取れた事にほっとしてるかな。」

そう答えるとつかささんは複雑そうな表情で

「そう・・・なんだ・・・。でも、けいちゃんはまだ自分を責めつづけてるんだね?」

そう返事をしてきたので俺も

「あいつはあれで結構頑固な所あるからな・・・。あいつのいい所でもあり、悪い所でもあるよな・・・。」

という俺の答えを聞きながらみゆきさんは

「慶一さんが優しくなったのも、人と争う事をしなくなったのも、その時からだったんですね？」

というみゆきさんの質問に俺は

「人と争う事をしなくなったのはその時からだが、優しいという部分はそれ以前からも持ってたあいつの性格だな。でもそこが災いして結果、俺の一件に罪悪感を感じているってのがな・・・。」

そう答えるとみゆきさんも困ったような顔をしながら

「優しさゆえの、生真面目さゆえの頑固さになっていますね・・・。」

俺はそんなみゆきさんの言葉を聞きながら

「そうだな・・・。あいつはもう少し楽に生きてもいいと思う。だけど、あの性格を変えるってのはなかなかできないんだろうな、不器用なやつでもあるしな。」

苦笑しながらそういう俺とみゆきさんの後ろから割り込んでくる声があった。

「不器用でもそれが先輩のいい所でもありますからね。私はそんな先輩を気に入ってるしね。」

「不器用だっていうのは私も知っているわ。けど、あの人には信頼できる何かがあるから、私は一緒にやってきたのよ?」

という言葉に振り向くとそこにはいつの間にやってきたのかこうちゃんとやまとちゃんが居た。

「2人ともいつの間に?全然気がつかなかったよ。」

驚きながらそう言うとみんなも驚いていたようだった。

「牧村先輩が慶一先輩の話を半分くらいしたところですよ。ねえ?やまと。」

「そうね。私達も知らなかった話が聞けたわね・・・。」

2人がそう答えるのを聞きながら俺は（2人には秘密にしてくれっていう慶一との約束破っちゃったなあ・・・。）と心の中で思いつつ焦っていた。

「・・・瞬・・・何の話をしてたんだ・・・?まさかあの事をみんなに話したんじゃないだろうな?」

突如みんなの後ろからかかる声に俺はビクッとなりながらおそるおそる振り返るとそこには気難しい顔をした慶一が立っていた。

「い、いやー、いずれわかる事だしいいかな?と思ってな。お前だっていずれは話すつもりだったんじゃないのか?」

慌てながらいう俺に慶一は大きなため息を一つついて

「はあ・・・話してしまったんじゃ仕方ないな・・・。瞬から聞いた通りさ・・・俺は今でもあの時の罪を背負っている。」

みんなにそう言う慶一だった。

慶一ｓｉｄｅ

汗を流して戻ってみれば瞬がみんなに余計な事を話していたようだった。

俺は瞬を問い詰めたが結局俺の知られざる過去ってやつを暴露された事になった。

俺はみんなを見ながら

「瞬から聞いた通りさ。みんなは俺の事軽蔑したろうな・・・結局俺は自分の弱さに負けて自分勝手に暴れて挙句の果てには瞬を再起不能に追い込んだんだからな・・・。」

俺が自嘲の笑みをもらしながらそう言うとみんなは口々に

「そんな事ないよ！私だって同じ立場ならどうなっていたか分からない。慶一君のように立ち直れなかったかもしれないよ・・・。私には同じくらいの時期には親友と呼べる人なんていなかったしね・・・。」

激しく首をふって俺の言葉を否定するこなた、かがみも

「そうよ。それでも立ち直った慶一くんは強い人だわ。それに昔がどうであれ今の慶一くんは私達にとってはかけがえのない友達よ？」

俺にそんな言葉を投げかけてくれるかがみ、つかさも

「昔をイメージしたら怖いって思った。でもいまのけいちゃんは全然そんな事ないよ？とても優しくて親切で私達を気にかけてくれる人だもん。」

笑いながらつかさは俺にそう言ってくれる。みゆきも俺の目を見ながら

「こんなにも友達を思う慶一さんを、私達が軽蔑するはずはないです。本当のあなたを知っている私達は少なくともそう思えますよ？」

いつもの柔らかい微笑みを俺に向けてくれるみゆき、こうとやまともいう

「私たちは先輩に助けてもらったからこそ、今もやまとと一緒にいられているんです。今の先輩はちゃんと昔の罪を償いながら生きていますよ。」

「私たちをつないでくれた先輩を、あの時からずっと信頼しているわ。高校を変更した事も受け入れてくれた先輩の優しさを、私は知っているから・・・。」

そして今まで黙っていた岩崎さんも

「・・・森村さんとは何度かお会いした程度ですけど・・・森村さんの思いやりの心は私にも分かりました・・・。私も森村さんは人として好きになれる人だと思います・・・。」

そんなやり取りを見守っていた瞬が

「だ、そうだよ？慶一。ここにはお前を軽蔑視する奴は一人もいないそうだ。俺も含めてな。だからお前もあまり自分を責めるなよ？今はまだ無理でも、いつか・・・自分を許してやれ。」

そんなみんなの言葉に俺はみんなに背を向けながら涙をこぼしつつ

「・・・みんな・・・ありがとう・・・。」

俺はみんなに背中を向けたままお礼を言った。

みんなの表情は窺い知る事はできなかったが、なぜかみんなが優しく微笑んでいる、そんな気がした。

今日、俺は自分のもう一つの過去と罪をみんなに知ってもらう事となった。

みんなは驚いていたけれど、それでも俺の罪を知りながらも俺を誰一人責める者はいなかった。

俺はそんなみんなの気持ちに心が軽くなっていくのを感じながらいつしか自分自身を許せる日が来るのかもしれないと思っていた。

旋律の罪、それは一生消えない物として残ってしまったけれど、その罪を知りつつもそれを受け入れてくれた仲間達と更なる信頼を築くきっかけになれた。

俺はこの日を忘れる事はないだろう。

だが、この過去が後に慶一を更なる苦しみに誘う事になる事をこの中の誰一人として気付く者はいなかった。

旋律の帰省～慶一のもう一つの過去、後編～（後書き）

ちょっと重い話になりましたが次からは夏休み編へと突入です。

旋律達の夏休み1～海へ、序章～

旋律達に俺の過去を知られてからその翌日に学校でかがみから話を聞いたのだろう、みさおとあやのは俺の所にやってきて

「柊から話聞いたゼ？大変だったんだな、慶一。でも私らもこれからもお前の友達だかんな？」

すごくいい笑顔を俺に向けてそう言ってくれるみさお、あやのも俺に微笑みかけながら

「慶ちゃん、私もそうよ？過去はどうであれ今の慶ちゃんは私の知ってる大切なお友達だしね。」

と言ってくれる2人の言葉に俺はまたしても目頭が熱くなる思いをするのだった。

その後はみんなと共にいつもの日常を過ごしていき、1学期の最後の日になり成績表を受け取り、終了式を終えて俺達は夏休みを迎える事となった。

とりあえず序盤である程度宿題を進めようという事になり、以前の勉強合宿の時のように俺の家に集まって宿題をやっていた。

ちなみに今回は初日からこうとやまともやってきていて、いつも以上に賑やかな勉強会になっていた。

今回は別段泊り込みではやっていないが、そんな折、休憩中にこなたが大きく伸びをしながら

「うーん、今年の夏はどこかに行きたいねー。」

とみんなを見ながら言うと、かがみはこなたに

「どこかって、どこよ?どこかあてでもあるの?」

そう聞き返すとこなたは腕を組んで考え込みながら「うーん・・・」と唸っていた。

そんな2人のやり取りを見ながら俺もこなたのどこかへ行きたいという言葉に考えを巡らせていたが、ふいに思いついた事がありとりあえずみんなに予定を聞いてみることにした。

「なあ、みんなは7月の25日から8月1日までの間なんか予定とかあるか?」

俺の質問にさっきまで考え込んでいたこなたが急に顔を上げて俺のほうを見て

「慶一君、なにかあるの?その一週間。」

と聞いてきたので俺は頷きながらこなたの質問に答える。

「ああ。実はな、うちの道場で使っている合宿所があってな。親父に頼めばそこを一週間貸してもらえるかもしれないんだ。」

俺の答えにかがみもさらに質問をしてきた。

「合宿所って、そんな所行って体鍛えるとかやるつもりなの?」

そんなかがみの質問に苦笑しながら

「あはは。確かに合宿所ってなるとそんなイメージもあるかもな。けどこの場合はその施設を宿泊施設として使うって事だな。」

そう答えるとみゆきも俺の答えに興味を持ったのか

「宿泊施設って事は、一週間そこで寝泊りをするって事ですよね？避暑目的で、でしょうか？」

と言うみゆきの質問に

「ああ、そういう事だな。それに近くに海もあるし、遊びに行くにはもってこいの場所だろ？」

俺の答えにつかさはぱあっと笑顔になりながら

「海があるんだ～、いいね～。おねえちゃんその合宿所にいこうよ～？」

かがみにそう言っていた。

みさおも満面の笑顔になりながら

「いいなー、海かー、面白そうだぜ。あやのー私達も行こうぜー？」

と言うみさおの提案にあやのもにこにことしながら

「そうね。みんなが一緒なら楽しいかもしれないわね。ねえ、慶ち

ゃん。私たちも一緒に行ってもいいのかな？」

そう言ってくるあやのに俺も頷きながら

「ああ。そのくらいの人数を収容する分には事足りる広さはあるから大丈夫だ。」

2人にそう答えていると、おずおずとこうが俺に

「あのー先輩。私達も行きたいです。行ってもいいですかね？」

そう俺に提案してくるこうにやまとも慌てつつ

「ちょっと、こう！無茶いったらだめよ。先輩の迷惑になるわ。」

そんな二人のやり取りを見つめつつも俺は2人に

「ああ。かまわないぞ？こう。それにやまとも予定がないのなら来るといい。」

というとこうは満面の笑みを浮かべて

「やったー。さすが先輩、話が分かりますねー。」

そう言うと、やまともそんなこうを見て一つため息をつきながら

「まったく、あなたはいつも先輩を困らせて・・・ごめんなさい先輩、いつも我侭につきあわせて・・・。」

と言うやまとの申し訳なさそうな言葉に俺は笑いながら

「今に始まったことじゃないだろ？やまとも気にするな。それより行くのなら楽しんでくれよ？」

そんな俺たちのやり取りを横目で見ていたかがみと少し考え込んでいたみゆきは俺の方を見て

「みんなが行くのなら私も参加しようかな？慶一くん、いい？」

「私もご一緒したいです。構いませんか？慶一さん。」

そこにすかさずこなたも激しく意思表明を入れてくるのだった。

「はいはいー！私も行くー！もちろん置いてったりはしないよね？慶一君。」

上目使いに俺をみてくるこなたに俺も笑いながら

「そんな事はしないよ。それとだ。合宿所を使うから宿泊費はかからないんだが、その代わり生活する為の事は俺たちでやる事になるけど構わないかな？」

みんなを見渡して言う俺にこなたは

「つまり、炊事洗濯掃除は私たちでやるって事だよね？宿泊費無料ならそのくらいはやるよー。もっともそういうの苦手な人もいるみたいだけどねー。」

かがみの方を見ながら口元に手を当ててぷぷぷと嫌な笑いをみせるこなたにかがみが

「うっさい！苦手だけどぜんぜんできないってわけじゃないわよ！」

こなたに食って掛かるかがみ、こなたはさらに挑発するように

「ほほう？それなら今回の食事当番はかがみにやってもらっちゃおうかなー？」

ニヤニヤしながらかがみに話を振るとかがみは困惑した顔で

「な、なんでそうなるのよ。こういうのは分担でしょ？分担。そうよね？慶一くん。」

突如話を振られた俺は困惑しながら

「え？あー、まあそういう事は話し合いで決めてくれればそれで・・・。」

という俺の言葉にかがみはほっとしたような様子で

「ということだから、食事当番はローテーションか何人か一組でやるって感じでやりましょ？それでいいわね？こなた。」

そのかがみの言葉にこなたは不満げな顔をしながら

「むう、思わぬところからの助け舟が・・・ぶー、つまんないー・・・。」

そんなこなたの言葉にかがみはこなたをギロリと睨みつけながら

「なにかいったか？こなた。」

という凄みのあるかがみの言葉にこなたは慌てて「何でもありません。」と言って口をつぐむのだった。

そんなやり取りを一通り見た後俺はみんなに後の連絡事項を伝えて意見を聞こうと思い

「後は、当日親父も車を出してくれるとの事と、他に引率を黒井先生あたりにお願いしようかなと思ってるけど、どうだろう？」

というとこなたは人数を数えながら

「これだけの人数いるんだし、その2台だと足りなくないかな？もしよければ後一人心当たりあるけど頼んでみる？」

と言って来たので俺はこなたに

「なら頼めるかな？連絡はすぐにつきそうか？」

そう聞くとこなたは

「すぐには無理かもしれないけど連絡つき次第慶一君の所に折り返し電話するよー。」

と答えるこなたに俺は「じゃあ、よろしく頼む」と返事をするのだった。

「黒井先生のところには俺から電話入れとくから、後は当日までに準備しておいてくれ。まあとりあえずこんなところかな？」

そう言って締めた後、残りの宿題を進めて今日はお開きになった。
そしてみんなを帰した後俺は黒井先生の所へと連絡を入れるのだった。

数回のコールの後黒井先生が電話に出る。

「もしもし、黒井やけど誰や?」
「もしもし、黒井先生ですか?D組の森村ですけど実は先生にお願いしたい事がありまして。」
「なんや?森村か。お願いしたい事って一体なんや?」
「実は7月25日から8月1日までみんなで海に行こうって事になりまして。それで、車も持っている黒井先生に引率をお願いしたいと思いまして。先生のご予定とかは大丈夫でしょうか?」
「ほう?海か。しかも一週間か。ええよ?うちでよければ引率やってやるわ。どうせ出かける予定もないし暇してるところやったしな。それで?詳しい事はどうなってるんや?」
「詳細はですね・・・・・・という感じです。引き受けてくださって助かりました。当日はよろしくお願いしますね?」
「おう。まかしときー。それじゃ当日になー。」
「はい。それじゃこれで」

という具合に黒井先生の協力も取り付けた俺は一つ思い出した事がありこなたとみゆきに連絡を入れた。

「もしもし?こなたか?俺だ。さっきの件どうなった?」
「あ、慶一君。うん、ばっちりだよ。わざわざ休暇取ってきてくれるってさ。ゆいねーさん張り切ってたよ。」
「え?心当たりってゆいさんだったのか。まあ、なんとかなったんならいいか。それとこなた。今回の旅行にゆたかを連れて来れない

か?受験生だってのは分かってるけど少しは気分転換する時間もあってもいいと思うからさ。」
「ん?ゆーちゃん?そうだね。聞いてみるよ。後で連絡する?」
「いや、メールでいいよ。それじゃその件もよろしくな。それと当日は思い切り楽しもうぜ?」
「うん!思い切り楽しんでいい旅行にしようー。楽しみにしてるからねー。それじゃこれで切るよー?」
「ああ、それじゃな。」

こなたの件はこれで何とかなったと思った俺はみゆきにもすぐに連絡を入れた。

「もしもし?みゆきか?悪いな急に連絡いれて。」
「いえ、取り込み中ではなかったので問題はないですよ?それでどうかされたんですか?」
「ああ。今回の旅行だけどさ。岩崎さんを連れてくる事はできるかな?」
「みなみちゃんを、ですか?けどみなみちゃんは今受験生ですし、そんな余裕もないかもしれませんが・・・。」
「受験生だってのはわかってるんだ。だけど勉強ばかり煮詰めてもどこかで壁にぶち当たるだろうから、こういう機会に気分転換させてあげたいと思ってな。」
「なるほど・・・わかりました。とりあえずみなみちゃんに聞いてみます。その後はそちらに電話を入れたほうがいいでしょうか?」
「いや、どうなるかわかったらメールを入れてくれるか?後は当日前の簡単な確認の連絡だけでいいだろうから。」
「わかりました。それじゃはっきりしたらメールを送りますね。それじゃ今日はこれで。当日は楽しい旅行にしましょうね。」
「ああ。楽しい思い出になるように、だな。それじゃ切るよ。」
「はい。それではまた。」

みゆきの方にも伝えるべき事を伝えて連絡を終えた。

その後こなたとみゆきからメールが届き、２人の参加が決定したのだった。

旋律達と知り合って初めての夏休み、一体どんな展開がまっているのか。

俺は予想のつかないこの旅行にわくわくしているのだった。

旋律達の夏休み1～海へ、序章～（後書き）

二人参戦者を出してみました。

旋律達の夏休み1～海へ、第一話～

旋律達と初めて過ごす夏休み。

俺達は勉強会の時に海へ旅行に行こうという計画を立てた。

いつものメンバーと引率の先生、俺の親父、そしてそこに二人の参加者が加わってって事になったのだが、出発の二日前にこうからもう一人呼びたい娘がいるのでその子も連れて行ってもいいだろうか？という連絡を貰い、俺はそれに許可をだしたのだった。

そして旅行日当日、こなたとこうとみさお以外のメンバーはちゃんと待ち合わせ場所に集合していたのだがいまだ集合場所にやってこない3人に呆れつつ、俺達は雑談を交わしながら待つことにしたのだった。

「まったく、あいつらはしょうがないなあ・・・」

腕を組んでやれやれといった感じで呟く俺にあやのは申し訳なさそうな顔をして

「ごめんね慶ちゃん、私からもよく言っておくから怒らないであげて？」

というあやのに俺は軽いため息を一つきつつ

「しょうがないな。ここはあやのに免じて怒らないでおいておくか。」

そう言うとあやのはほっとしていたが、俺は俺が怒るよりもあやのに怒られた方が堪えるだろうなと思いつつ後はあやのに任せるかなと考えるのだった。

「こんな日にまで遅刻だなんて・・・先輩、本当にごめんなさい・・・」

バツが悪そうな表情で俺に謝ってくるやまとに俺は

「まあ、あいつはいつもの事だからもはや気にするだけ損な気がするよ」

苦笑しながらそう言うとやまとも大きなため息を一つついていた。

「こなたにも困ったものよね・・・あいつの遅刻癖も直さないとこの先もまずいんじゃないかしらね」

かがみも呆れ気味でそう言っていた。

つかさはつかさでそんなかがみの言葉にただ苦笑するのみだった。

「慶一さん。今日から一週間よろしくお願いしますね。みんなで楽しい旅行にしましょうね。」

というみゆきの挨拶に俺も笑顔を返しながら

「ああ。こちらこそよろしくな。大した物があるような所じゃないけど、楽しんでいこう。」

俺がそう言うとみゆきも「はい。そうですね。」といって微笑んで

くれた。

「森村ー、うちもついているけど一週間しっかりやりや？」

みんなと会話を交わす俺に黒井先生が声をかけてきたので俺も

「黒井先生、今日はわざわざ引率の役目を買っていただきありがとうございます。一週間の間よろしくお願いしますね。」

そういうと先生も「おう、まかしときー」と豪快に笑いながら答えるのだった。

「森村君。私も今回は運転手として呼んでもらってありがとうねー。私もしっかり役に立つからよろしくねー。」

そこにゆいさんが横から声をかけてきたので

「こちらこそ、お忙しい所をわざわざありがとうございます。とりあえず車関連では頼りにさせてもらいますから。」

そう答えるとゆいさんは「まかせたまへー」と元気に返事してくれたのだった。

そこへ俺の側にゆたかと少し遅れて岩崎さんがやってきた。

「森村さん、今日は誘ってくれてありがとう。こなたおねーちゃんから話聞いた時は驚いたけど、私も楽しませてもらいますね？」

にこにこと屈託のない笑顔で俺に声をかけてくるゆたかに俺も笑い返しながら

「ああ。受験勉強のいい気分転換になればいいね。しっかりリフレッシュしなよ?ゆたか」

そうゆたかに返事をするとゆたかも俺に「はい!」と元気に返事を返してくれた。

その様子を伺いつつもみなみも俺に

「・・・今日は私も招待してくれてありがとうございます・・・でもよかったのですか?私も連れて行ってもらって・・・」

そうおずおずとした感じで俺に聞いてくる岩崎さんに

「陵桜を受けるってのが大変な事もわかるけど、勉強ばっかりでストレス溜め込んだらいい影響あるわけないからな。適度にそんなストレスを発散して欲しいから呼んだんだよ。だから楽しんでくれな。」

そう答える俺に岩崎さんはにっこりと微笑みつつ、しかしさっきのゆたかとのやり取りが気になっていたようで

「・・・ありがとうございます・・・それと・・・先程森村さんが”ゆたか”ってあの子の事を呼んでいましたね?まさかとは思いますが・・・あの子がそうなんですか?」

そう尋ねてくる岩崎さんに俺は少し驚いたような顔をして

「そっか。あの時の約束を覚えていてくれたんだな。そうだよ。あの子があの時君にお願いした子さ。本当は陵桜に行ってからの予定

だったけど、今からでも友達になってやってくれないかな。頼むよ、みなみ。」

俺が岩崎さんに説明しつつ最後に岩崎さんの事を名前で呼ぶと岩崎さんは

「・・・わかりました・・・!?今私の事を名前で・・・」

驚きながら俺に慌ててそう答える岩崎さんに

「ああ。ゆたかもその他のみんなも名前で呼び合ってるのに岩崎さんだけ名字呼びってのもなんか違うって気がしたからね。嫌だったかな?それなら元に戻すけど」

俺は照れ笑いを浮かべつつそう言うと岩崎さんは首を振って笑顔を見せながら

「・・・いえ・・・それでも構いません・・・これからもそう呼んでください・・・」

そんな俺とみなみのやり取りを見て首をかしげていたゆたかは俺に

「あの、二人して私の方を見て何かお話しているようだったけど私に関係してる事なのかなあ?」

首を傾げながら質問してくるゆたかに俺は

「ああ。実はこちらの岩崎みなみちゃんはゆたかと同じように陵桜を受けるんだよ。それで俺は彼女に二人が合格して学校に通うようになったらゆたかの友達になってあげて欲しいってお願いしたのさ。

だからゆたか、みなみと友達になってやってくれないかな。」

俺がそう説明するとゆたかはみなみの方を見て少し考え込んでいたが、やがて満面の笑顔を作ると

「改めて、小早川ゆたかです。岩崎みなみさん、でしたよね?私でよければお友達になってもらえませんか?」

そう言って手を出すゆたかにみなみも困惑するような、でも悪くないとも言うような表情を見せた後

「・・・よろしく・・・小早川さん・・・」

そう言ってみなみも手を差し出して握手を交わした。

俺はそんな二人を微笑ましく見守っていたが、そこにもう一人のゲストが挨拶にきた。

「森村さん、こんにちはっス。田村です。あの時は助けてもらって感謝っス。今回私も連れて行ってもらえるってことで一言ご挨拶をって思いまして。」

というひよりの言葉に俺もそっちに向き直って

「やあ、田村さん。元気そうだね。今日は来てくれてありがとうな。田村さんも今回の旅行は楽しんでくれよ?」

そう言うと田村さんも笑顔を返しながら

「はい。受験勉強きつくて少し凹んでましたから今回の旅行でリフ

レッシュしたいと思います。それと森村さん、あの二人ですけどあの二人も陵桜を受けるってさっき聞こえたんですが、本当なんですか？」

さっきの俺たちの会話が聞こえてたらしく田村さんがそう聞いてきたので

「ああ、そうだよ。丁度いいな。田村さんもあの二人と友達になってやってくれないかな。同じ学校を目指すもの同士、励ましあえると思うしさ。それと、田村さんの事も”ひより”って名前で呼んでもいいかな？君だけ名字はやっぱり違和感あるしね」

その俺の言葉に田村さんも

「私があの二人と友達に、っスか？受け入れてもらえるかなあ・・・それと名前の件、了承っス。とりあえず二人の所にいってみますね？それじゃ後ほど」

名前の件と友達の件を了承してくれた後、ゆたかとみなみの所に行って楽しそうにおしゃべりを始めたのを見て俺はその様子を少しほっとした気分で見ていると

「なかなかうまくやっているようだな。見事に女性ばかりとはお前も隅にはおけんなあ」

俺の顔を見てニヤつく親父がそんな事を言って来たので

「うるさいぞ親父！このメンバーの誰かに手出しとかしてみろ、即お袋に告げ口してやるからな？そうされたくなかったら余計な口出しするなよな？親父」

この旅行での3人目のドライバーである親父に悪態をつくと親父も俺を睨みつけて

「いわれんでもそんな真似はせんわ！そんな事を言うお前とてこの子らに手出しする度胸があるとは思えんがな！」

という親父の言葉にカチンときて

「なんだと！？」
「なんだ！」

二人してにらみ合う俺たちを見て事情をしってるかがみたちは呆れた顔で俺たちを見つめ、事情の知らない数名は呆然とその様子をみていた。

そうこうしているうちに遅刻姫三連星が到着した。

「みんなー遅れてごめーん」
「待たせて悪かったってヴァ」
「すみません、遅れましたー」

といいながらやってきた3人にゆたか、みなみ、ひより、みゆき、つかさ、ゆいさん、あやのの7人以外に「「「遅い！」」」と突っ込まれて小さくなっていた。

3人に散々かがみたちのお説教を食らわせた後、各自乗る車を選ぶ為にくじ引きを行った。

結果は以下のとおりになった。

ゆいさんの車

かがみ、つかさ、みなみ、みさお

黒井先生の車

俺、こなた、ゆたか、やまと

親父の車

みゆき、こう、ひより、あやの

各自乗る車も決まり、後は全員が乗り込んで出発という事になった。

かがみｓｉｄｅ

私たちの車は埼玉県警の交通課でもある成実さんの車になった。

警察の人だから運転も警察官らしく安全運転でいけるだろうから何の心配もないだろうとそう思っていたのだけど・・・・・・

「成実さん、行きはお世話になります。成実さんは交通課の婦警さんってこなたから聞いているから運転の方は安心できそうでなによりです」

私が代表で成実さんにそう挨拶すると成実さんは笑いながら

「うん、そうだよー？交通ルールはまかせたまへー」

と自身満々に答える成実さんにほっとしながら「「「「よろしくお願いします」」」」と私たちは改めて言うのだった。

そして出発して少しして後ろから私たちの車を無茶な追い越しをしていく車があった。

私はひやっとしながら

「うわ・・・危ない・・・あんな無茶な運転する人もいるんですね？ねえ成実さん。」

運転席にいる成実さんに声をかけるとなんだか成実さんの様子がおかしい。

「・・・あのやろう・・・」

ぼそっと成実さんがそう呟くのが聞こえた。そして突然に猛スピードでさっきの車を猛追し始めた。

「ちょ！ちょっと！成実さん？」

驚いた私は慌てて成実さんに声をかけるが成実さんにはさっきの車しか見えていないようだった。

こちらの言葉にも耳を貸さない成実さんは相手の車とものすごいカーチェイスを繰り広げるのだった。

「ひえええええ！？」「ぎゃあああああ！？」「た、たすけてえ～！？」「・・・・・・！？」

私たちはそれぞれ悲鳴をあげて成実さんの運転に振り回され気付くと一番乗りで目的地に到着していたのだった・・・

慶一ｓｉｄｅ

俺たちは黒井先生の車に乗り込むと黒井先生の運転の元、目的地に向かって出発した。

しばらくは前を走るゆいさんの車の背を見ながら走っていたのだが、ゆいさんの車を無茶な追い越しをして走っていく車を見ると同時にゆいさんの車がものすごいスピードでその車を追いかけていくのが見えた。

その光景を見ながらこなたは顎に手を当ててものすごい勢いで疾走していくゆいさんの車を見ながら

「あー、やっぱりああなったか・・・ゆいねーさんの車を避けれて正解だね。」

と呟いていた。

それと同時にゆたかも苦笑を浮かべているのを俺とやまとは唖然としながら見ていた。

俺はこなたにさっきの呟きの意味を聞くために声をかける。

「なあ、こなた。ああなるってどういう意味なんだ?」

こなたに質問するとこなたはいつもの目を細めた顔で

「ゆいねーさん、車に乗ってああいうの見ると性格が変わって途端に暴走を始めるんだよねー、困った事に・・・多分今ごろかがみたちを巻き込んでのカーチェイスになってると思うよー？」

こなたの言葉に俺は開いた口がふさがらない状態で

「カ、カーチェイスって・・・ゆいさんて確か交通課の婦警さんだったよな？いいのか？・・・それ・・・」

やまとも呆れた表情で

「とんでもない人が警察官やってるわね・・・日本はこれからどうなるのかしらね・・・」

そう言っていた。

そうこうしてこなた達と雑談を交わしていた俺たちだったが、いつのまにか後ろを走っていた親父の車も見えなくなってる事に気付いて黒井先生に

「先生、なんだか親父の車が見えなくなったみたいですが・・・」

黒井先生に話し掛けると先生はなんだか必死な形相で

「うるさい！話し掛けるなや！気が散るやないか！」

そう返してきたの受けつつも進んでいる道が違っている事に気付き慌てて

「先生、そこ違う、そこは右ですよ！そっちは一方通行です！ああ、

通り過ぎちゃった・・・」

先生の向かう道がどんどん目的地から外れていくので俺は

「先生、そこのコンビニで止まってください！」

と言ってコンビニに停車させた。

そんな俺の後ろでこなたは頭を抱えながら（しまった・・・こっちもはずれだったか・・・）と心の中で思っていたのだった。

俺は車から降りるとコンビニで道路地図を買い込んできて

「先生、俺が今からナビしますからその通り走ってくださいよ？」

というと先生もばつの悪そうな顔をしながら

「わかったわかった。すまんな森村、面倒かけるわ」

そして俺たちはコンビニから発進して俺のナビの元、目的地を目指すのだった。

結局俺たちの車が一番最後に目的地へとたどり着くこととなった。

みゆきｓｉｄｅ

私たちは慶一さんのお父さんの運転する車に乗り込んで目的地を目指して出発する事となりました。

慶一さんの乗る黒井先生の車を最初の頃は見れていましたが、いつ

のまにか黒井先生の車が私たちの目の前から姿を消してしまいました。

その事は慶一さんのお父さんが呟いた一言で気付く事になったのでした。

「ん?前の車がいつのまにかいなくなったようだな」

というお父さんの呟きを聞いて前を見ると、いつのまにか黒井先生の車がいなくなっていました。

「先生の車はどこに行ってしまったのでしょうか?・・・」

困惑顔で私がお父さんに話し掛けるとお父さんも訳がわからない様子で

「うーむ、ひょっとすると道に迷ったのかもしれんな・・・」

と言うお父さんの指摘に私は慌てながら

「えええ!?だ、大丈夫なんでしょうか?心配ですね・・・」

と言う私の心配をぬぐうかのように豪快に笑いながらお父さんは

「ははは。まあ慶一がいるんだから大丈夫だろう。いざとなればあいつがナビをするだろうからな。」

と言うお父さんの言葉に私はすこしほっとしながら

「そうですか・・・なんだかんだいってもお父さんは慶一さんを信

頼されているのですね」

そう言ってお父さんに笑いかけるとお父さんは照れたように私から視線を外して

「ふん。そのくらいはこなしてもらわなきゃ私の息子として困るというだけの事だ」

というお父さんお言葉をききながら（やはり素直になれないだけなのですね）と心の中で思いながら
私はいつもの笑顔をお父さんに向けたのでした。

結局慶一さんのお父さんの運転はとても上手くて、その後道中何事もなく目的地へと着いたのでした。

かがみｓｉｄｅ

トラウマになりそうな恐怖体験を経て私たちの車が一番先に目的地へと到達したのだけど・・・・・・

「・・・うー・・・死ぬかと思った・・・」
「柊ー、妹が気絶したままま目を覚まさないぞ？」
「・・・・・・」
「・・・とても・・・怖かったです・・・」

それぞれ疲れきって感想をもらしていたが成実さんだけは

「一番乗りだったねー。んう？どうしたのみんな、そんな疲れきった顔で？」

一番元気だった。

私は心の中で（あなたのせいですよ！！）と思い切り突っ込みをいれてから慶一くん達の到着を待つのだった。

慶一ｓｉｄｅ

まさかの黒井先生の方向音痴が災いして俺たちは目的地から逆に離れる事になってしまっていたのだが、俺が何とか先生のナビをしてようやく目的地に着いた頃にはみんなから3時間以上も遅れたのだった。

「うー・・・疲れたー・・・」

「でも、黒井先生運転は上手かったから私車酔いしなかったよこなたおねーちゃん。」

「長い事座っていたから腰が痛いわね・・・」

「ともかく方向音痴さえなんとかなれば先生は運転上手いみたいだからよかったけどな」

各々凹む俺たちだったが黒井先生は意にも介さない様子で

「まあ、無事ついたんやからよかったやないか？とりあえず他のみんなもまっとるやろうからいくとしよか？」

そんな黒井先生に俺たち４人は盛大にため息を一つつくのだった。

みゆきｓｉｄｅ

慶一さんのお父さんの運転は何の問題もなく、無事に目的地へと到着したのでした。

「ようやくつきましたね。あら?慶一さん達の姿だけ見えないみたいですが・・・」
「いやー、快適なドライブでしたね。何度か先輩のお父さんの運転を体験してますが今回もあたりだったみたいです・・・と、あれ?本当ですね。」
「体の疲れもさほどじゃないから少し余裕もあるわね。ん?どうしたのかしら?」
「森村さん達大丈夫なんですかね?って向こうでは柊先輩達がぐったりしてますが。」

私たちはまだ姿の見えない慶一さんたちを案じていましたが、しばらくするとようやく到着したようでその姿を見たお父さんは

「ふむ。何とか着けたようだな。慶一もしっかりとナビをしたと見える。」

腕を組んで頷きながら慶一さんたちを見ていたのでした。

慶一ｓｉｄｅ

「みんな、遅れてすまん・・・ってかがみ達大丈夫か?」

みんなに遅れた事を謝罪しつつ何気にかがみ達のグループに目をやった俺はかなりぐったりした様子のかがみ達に声をかけるとかがみは弱々しく

「・・・死ぬかと思ったわよ・・・」

そう答えたのだった。

俺は（ゆいさんの運転ってそこまでなのか？）と心の中で思いながらもとりあえず宿泊施設へとみんなを案内する為に声をかけるのだった。

「みんな、それじゃ泊まる所へ行こう。俺についてきてくれ。」

そう言うとみんなも荷物を持って俺の後について来るのだった。

しばらく歩くと裏手に海岸も見える俺達の泊まる宿泊施設である合宿所の建物が見えてきた。

「あれが俺たちが泊まる場所だよ。裏手に行けば海岸にも降りれる。他にも景色のいい所もあるし何かをするにはもってこいの場所だろ？」

俺が軽く説明をするとみんなも建物や海岸を眼にしてしきりに感心していた。

やがて施設の入り口に着き、鍵を開けてみんなを中に招き入れ、各々の部屋を決めてもらってそこに荷物を運び入れようやく落ち着いた。

俺はその後みんなに施設内を案内してそれぞれ何がどこにあるのかを教えておいた。

やがていい時間になったので夕食の準備をしたのだが、こちらはかがみの当初の希望どおり当番制にしたのだった。

最初の当番にこなたとゆたかとやまとの3人に当たってもらい、俺

たちはそのフォローをする。

そうして手伝ってようやく夕食の準備が整うと、全員で顔をつき合わせての夕食となった。

楽しく雑談をしながらの夕食が済み、交代でお風呂に入って明日からの予定を立てて今日は全員寝床につくのだった。

明日からの事をみんな楽しみにして初日の終了とあいなった。

旋律達の夏休み1～海へ、第一話～（後書き）

ようやく海へと辿り着いた主人公達、これからどんな事が待っているのか。次回もお楽しみに

旋律達の夏休み1～海へ、第二話～

旋律達と海に行く事になり、命の危険？と隣り合わせの初日が終わった。

あの後寝る前に次の日の事を話し合ってその日はお開きになった。

そして次の日・・・・・・

俺はいつもの時間帯よりも少し早めに目が覚めたので眠気覚ましも兼ねて裏手の海岸へと軽く散歩に行く事にした。

外に出るとまだ気温的にはそれほど上がっているわけではなかったが埼玉にいる時よりもからっとしたいい暑さで、何気に空を見上げて見ると今日の”やる事”には丁度いい快晴だった。

俺はしばらく波打ち際で腰を降ろして波の音を聞きながら水平線を眺めてのんびりとしていた。

みゆきｓｉｄｅ

いつもと違う環境という事もあるのでしょうが私はいつもよりも早めに目が覚めてしまいました。

とりあえず起きてしまったので顔を洗って来ようと思い部屋を出ると同じように早起きしたらしい慶一さんの姿を見かけました。

様子を見ているとどうやら外へと向かうようです。

私はとりあえず慶一さんを追いかけて外へと向かう事にしました。

しばらく慶一さんの後を気付かれないように付いて行くと慶一さんは波打ち際付近で腰を降ろして水平線をみてぼんやりとしているようだったので私は慶一さんに声をかけるために近くへと寄って行ったのでした。

そして私はなるべく慶一さんを驚かせないように気をつけながらいつものように笑顔で

「おはようございます、慶一さん。勉強会の時以上に今日は早起きなんですね。」

そう声をかけると慶一さんはゆっくりと顔をこちらに向けてきて

「ああ、おはよう、みゆき。お前も前より早いんじゃないのか？」

そう返事をしてくれたのでした。

慶一ｓｉｄｅ

ぼーっと海を眺めていると突然に声をかけられたので驚いて声のほうを向くとみゆきがいつもの柔らかい笑顔を向けて俺に挨拶をしてきてくれたのだった。

俺はそんなみゆきに笑顔を返しながら

「みゆきも朝早いよな。いつも普段からこんななのか？」

そう聞くとみゆきもこくりと頷きながら

「はい。私は家が都内で学校もちょっと遠いという関係もあって少し余裕を持って家をでなければなりませんのでどうしても早起きになってしまうんですよね。」

俺はみゆきの家の場所を思い出しながら

「そういやそうだったな。確かにちょっと遠いな。こうとやまともそっちだからあいつらもそれなりに早起きしてるのかもしれないなあ・・・」

少し考え込むような仕草でそう言うとみゆきが少し不思議そうな顔で俺に

「八坂さんや永森さんもなんですか？でもどうしてご存じなのですか？お二人が都内に住んでいるっていうことを。」

そう質問してきたので俺は

「俺はあいつらと同じ中学の出身だからな。当時は向こうにいたしあいつらの家は実家からはそう離れてるわけじゃなかったからな。」

そう答えるとみゆきも納得したような顔で

「そういえば慶一さんは中学生の頃まではそちらにいたのでしたね。でもなぜ高校に入ってから家を出られたのですか？あの家にそのまま残られていても良かったのではないのですか？」

俺が高校が決まると同時に家を出た事を不思議に思ったみゆきがそう質問してきたので俺はその事情を説明する事にした。

「確かにみゆきが言うこともわかるんだが、俺の過去の事は前に知ったよな？」
「はい。本当のご両親を亡くされて龍神さんに育てられ本当のご両親の事を知ったのでしたね。」
「だからかな・・・」
「え？」
「本当の両親の住んでいた家、つまり俺の本当の家がまだ残されている事を俺は知った。そしてそこには俺の本当の両親の痕跡も残されているのだと親父から教えられたんだ。」

俺はさらに言葉を続けて

「その事を知らされた時俺は瞬との約束を思い出し、どうすべきか悩んでいた。けど、親父の「真実を知ってこい！」と言う言葉に後押しされた俺は実の両親の事を知ろうと決心した。そして俺の過去を乗り越えるために、真実と向き合うためにあの家に戻る決意をしたのさ。後は、まあ・・・高校生になったし今の親父達への負担を減らしたいってのもあったけどさ・・・」

後頭部を掻きながら答える俺にみゆきは優しい微笑みを向けながら俺の手を取って

「そういう事だったんですね？慶一さん自身やっとその事実を受け入れる事を決意された。素晴らしい事です。大丈夫ですよ？慶一さんならきっと向き合えます。そして乗り越えていけます。」

そう力強く言ってくれるみゆきを見て俺も微笑みを返しながら

「ありがとうな、みゆき。不思議だな、お前の言葉は俺に勇気をく

れる。そしていつも優しく背中を押してくれる。それがどれほどに心強いものかがわかるよ。」

俺がそう返すとみゆきは顔を真っ赤にして照れながら、そして自分が無意識に取っていた俺の手を慌てて離しながら

「い、いえ、その、私は私の思ったことを言っただけですから。」

と言うみゆきの慌てた言葉に俺はさっきの礼の意味も含めて

「お前のそう言う部分はもっと自信を持っていいと思うぞ？お前のいい所なんだからさ。」

俺がそう言うとみゆきはさらに顔を赤らめて黙り込んでしまった。

俺はそんなみゆきの様子を微笑みながら見つめていたのだった。

そうしてしばらく海岸で過ごしているとその後で起きてきたかがみとやまととあやのとゆたかとみなみが俺たちの姿を見つけてこっちにやってきて俺たちに声をかけてきたのだった。

「みゆき、慶一くん、おはよう。二人とも勉強会の時より早いのね。それに二人してここで何をしてたのよ？」

そう挨拶してくるかがみに俺は簡単な説明を交えながら

「おはよう、かがみ。まだ頭がさえないからな。とりあえず波の音を聞きながらぼーっとしてた。そしたらみゆきもやってきたって所かな。なあ？みゆき。」

そう言ってみゆきにも話を振ると

「ふふ。慶一さんが言った通りですよ？かがみさん。二人していつもよりも早く目が覚めただけですから。」

と言う説明にかがみは少し疑惑の眼差しを向けていたが一応納得したようで

「まあ、それならいいけど・・・まだ朝食とかにも時間があるわよね？私もしばらくここにいてもいいかな？」

というかがみに俺は笑いながら「今しばらくは海でも眺めてようぜ？」とかがみに言うとかがみも「そうね」と俺に笑顔を向けながら俺達の近くに腰を降ろした。

「おはよう、慶ちゃん。今日もいい天気になりそうね。泳ぐにはいい日よりになりそうね。」

あやのも俺に声をかけてきたので俺も

「そうだな。しばらくはこういう天気が続くといいけどな。あやの、みさおの方は起こしに行かなくて平気か？」

そう聞くとあやのは微笑みながら

「まだ時間もあるし、もうしばらく寝かせてあげようかなって思ってね。私もここにしばらくいるね？」

と言って来たので俺もあやのに「時間までリラックスしてようか。」と言うとあやのも頷いて俺達の側で腰を降ろして海を眺めているの

だった。

「おはよう先輩、あいかわらず早起きなのね。あの頃からそこは変わらないわよね？」

そんなやまとの言葉に俺は苦笑しつつ

「まあ、親父に叩き込まれた結果だな。お前も少しのんびりしてくか？」

そう答える俺にやまとは

「そうね。ここにいると潮風も気持ちいいし時間まではいる事にするわ。」

いつものやまとの特徴のうすい微笑みを俺に向けつつやまとはみんなと同じように俺達の側で海を眺めながらただずんでいた。

「おはようございます、森村先輩。先輩は朝は早いんですか？」

「・・・おはようございます・・・森村先輩・・・気持ちのいい朝ですね・・・」

ゆたかとみなみからの思わぬ呼び方に俺は驚きながらも

「おはよう、二人とも。しかし、いきなり先輩って呼ばれたから驚いたよ。急に呼び方を変えてなんか理由があるのかい？」

二人にそう聞くとゆたかが俺の質問に答えてくれた。

「はい！あの後田村さんと3人で話あったんですが、私たちは陵桜

を目指すのだからここにいるときは私達も森村さんの事をそう呼んで受験に向けてさらにはずみをつけたいなって思ったんです！」

そう説明してくれるゆたかに俺は二人に笑いかけながら

「そうか・・・陵桜を絶対に合格したいからっていう気持ちは理解できたよ。ゆたかたちがそう呼びたいというのなら好きに呼んでくれればいい。そうする事で3人が受験に少しでも気合を込めれるっていうなら呼び方程度どうって事はないしね。役立てるならうれしいからさ。」

そう言うと二人とも照れながら「「ありがとうございます」」と笑顔で返事をしてくれた。

そんな話をしているうちに気付くと朝食の時間が迫っていたので俺たちは合宿所へと戻っていくのだった。

朝食を終えて午前中はのんびりと過ごしていた俺たちだったが、午後には海で遊ぼうという事になっていたので各自着替えて海岸へ集合という事になった。

俺はとりあえず先に自分達のスペースの場所取りのため先に赴きビーチパラソルを準備してみんなが来るのを待っていた。

そしてしばらくしてまずはゆいねーさんと黒井先生が現れた。

黒井先生は黒の大人っぽいビキニ、ゆいねーさんは青と白の縦のストライプのワンピースという姿でこちらにやってきて俺に

「おー森村、場所取りご苦労さん。他の連中も後からくるやろから

まっとけばええ。」
「森村君任せちゃってごめんねー。でもさすが、こういう時には頼りになるねー。」
二人とも（一応？）俺の苦労をいたわって声をかけてくれた。
「この程度はなんてことはないですよ。それよりお二人ともお似合いですよ？水着」
さり気なく誉めると二人ともまんざらでもないような顔で笑っていた。
そして少し後に他のみんなもやってきた。
「慶一君、おまたせー」
一番先に声をかけてきたこなたに俺は勉強会の時に着ていたスク水を着てくるかもとの予想を立てていたのだが、こなたの蒼い髪に合わせた青のワンピースに胸元に星のワンポイントがある普通の水着を着ていた。
「お？こなた、今回はスク水じゃなかったか。」
俺がからかうように言うとこなたは少しほおを膨らませて
「むう、スク水は前に見せちゃってるから違うのにしてみただけだよ。ひょっとして慶一君私がスク水だけしか持ってないとか思ってない？」
俺のほうを睨みつけながら言うこなたに俺は謝りつつ

「ごめんごめん、ちょっとからかっただけだよ。でもその水着も似合ってるぞ。」

そうフォローを入れるとこなたは今度は顔を赤くして「あ、ありがとう・・・」と言っていた。

「まあ、私もあの時こなたのスク水姿見てたけど確かにあれしか持ってないと思われてもしょうがないんじゃない？違和感まったくなかったし・・・」

トレードマークのツインテールをお団子状に頭の左右でまとめて赤いワンピースの水着に身を包んだかがみがこなたに突っ込みを入れるとこなたは涼しい顔で人差し指を立てながら

「そういうニーズもあるんだよ？」

と力説するこなたにかがみは軽いため息をついていた。

俺もそんなこなたに苦笑しつつも

「かがみ、結構似合ってるぞ？その水着」

かがみの水着を誉めるとかがみは顔を赤くしてうつむきながら小声で「ありがと」と言っていたのだが、小声過ぎて聞き取れなかった俺は頭にハテナマークを飛ばしつつかがみを見ていた。

「似合ってるって言ってくれてよかったね？おねえちゃん」

いつものぽやぽやとした笑顔を見せながら薄いピンクのワンピース

にショートパンツの水着を着たつかさがかがみにそう言うとかがみはさらに顔を赤らめて慌てていた。

「つかさのだってかわいいじゃないか。お前らしくていいと思うぞ？」

俺がそうつかさに言うとつかさも照れながら「ありがとう。うれしいな」と言って笑ってくれた。

「お待たせ、慶ちゃん。」
「わりー、待たせちゃったぜ。」

と言いながら次にやってきたのはみさおとあやのだった。

あやのは自分の髪の色に合わせたワンピースの水着でみさおはすごくみさおらしいスポーツタイプのビキニだった。

「そんなに待ってないから平気だよ。あやの、よく似合ってるよ。みさおはなんと言うかかっこいいという感じだがらしいといえばらしいな。」

俺は二人に笑いかけながらそう言うと二人は照れながら

「ありがとう。色々悩んだんだけどやっぱりこれがいいかもって思って。」
「私にはあまり普通のってにあわねー気がしたからな。かっこいいとか言われると何か複雑だぜ」

そうやって3人で話していると次にやってきたのはゆたかとみなみとひよりだった。

ゆたかは髪の色と合わせた赤いワンピースの水着に腰の所にフリルのついたかわいい水着で、みなみはみさおに近い白地にグリーンのストライプのスポーツタイプっぽい水着、ひよりは控えめなオレンジのワンピースの水着だった。

「森村先輩、お待たせしました。」

「・・・お待たせしてすいません、先輩・・・」

「準備に少し手間取りましたっス。待たせてしまいましたかね？」

3人がそれぞれ声をかけてきたので俺も

「そんなに待ってないから平気さ。ゆたかには合ってる水着だな。それと体調は大丈夫か？みなみ、何かお前のもかっこいい感じだな。ひよりも中々似合ってると思うぞ？」

そう声をかけると3人はそれぞれ反応を示しつつ

「あ、ありがとうございます。今日は体調がいいので大丈夫ですよ。」

少し赤らめた顔で笑いながら俺にそう答えるゆたか。

「・・・か・・・かっこいい・・・＞ずーん・・・＜」

何故か落ち込むみなみ。

「いやー、なんだか照れるっすね。」

照れながら俺に答えるひより。

そんな3人を見ながら俺も微笑んでいた。

「まったく、先輩、しまらない顔してるわよ?」

後ろから声をかけてきたのはその後にやってきたやまとだった。

赤い、胸のところにリボンのワンポイントのワンピースの水着に身をつつんだやまとは俺をにらみつつきつい言葉を投げかけてきた。

俺は苦笑しながら

「相変わらずきつい物言いだな。でもそんなにしまらない顔してたか?」

やまとに聞いてみるとやまとは

「はたから見たらかなりみっともない顔だったわね。」

という指摘をしてきた。

俺はさらに苦笑しつつ

「そう言うなよやまと。それと、似合ってるぞ?水着。」

やまとの水着姿を見て素直にそう思えたので感想を口にするとやまとは途端に顔を赤らめて

「な、なにいってるのよ!・・・でも・・・ありがとう。」

としどろもどろになりつつもそう答えるやまとに笑いかけるとさらに顔を赤くして俺から視線をそらすやまとだった。

そんなやまとの態度にハテナマークを頭の上に飛ばしていると最後の二人がやってきた。

「お待たせしました先輩、私たちが最後みたいですね。」

「すいません、慶一さん。ちょっと忘れ物があったので最後になってしまいました。」

二人の声に俺はそっちを振り向いたが即座に二人から視線を外した。

みゆきは白のビキニ、こうはやはり髪の色に合わせた黄色のビキニの水着だったのだが、二人とも、その・・・直視できないほどスタイルが良くて俺は目のやり場に相当困っていたのだがそんな俺の葛藤にも気付かないみゆきは俺に

「慶一さん、どうかしましたか？」

頭の上にハテナマークを飛ばしつつ俺に聞いてきた。

「い、いや、なんでもない。（目のやり場に困りすぎる・・・）」

俺がしどろもどろになりつつ答えていると

「おやおやー？先輩、どうかしたんですかー？」

こちらは俺がなんでしどろもどろになっているのかわかっていながら、いつものように俺をからかってきたのだった。

「先輩ー、どうですかー?私達の水着姿はー?」

なおも追い討ちをかけるこうに俺は赤くなり慌てながら

「ふ、二人とも似合ってるよ（俺にはまぶしすぎる・・・）」

俺がそう言うとみゆきはほおを赤くして「あ、ありがとうございます。」と言っていたが、こうはそんな俺にさらに追い討ちをかけてきて

「そうですかー?何か嬉しいなー」

と言いながら俺の右腕に抱きついてきたので俺はさらに慌てて

「こ、こう!よせ!流石にそれはきつい・・・とりあえず離れてくれー」

とこうの説得を試みたがこうはさらに腕に胸を押し当ててきて俺が慌てる様を楽しみつつ

「嬉しいですかー?先輩」

ニヤニヤした顔でそう言っているのをみゆきは顔を赤くしながら見ていて俺はさらに困惑するのだった。

それを見かねたやまとがこうに

「こう、いい加減にしなさいよ!先輩が迷惑してるじゃない!」

そう言いながら俺とこうを引き離しにかかる。

「何するのさやまと、別にこんなの今回が初めてじゃないんだからいいじゃない。」

やまとにニヤニヤしつつそう言うこうにやまとは

「そういう問題じゃないでしょ！？先輩困ってるじゃないの！」

俺もそのやまとの助け舟で何とか冷静さを取り戻しこうの額にデコピン（強）を一閃する。

「い、痛いです、先輩・・・すいませんまた調子に乗りました・・・」

涙目になりつつ俺から体を離すこうに俺はため息一つつきながら

「お前が俺を慕ってくれるのは嬉しいが、困らせるような真似は勘弁してくれ。俺の身がもたん」

俺がそう言うとこうはしれっとした顔で手を振りつつ

「ああ、心配しなくても先輩とやまと以外にはこういう事しませんから大丈夫です。」

などと言う爆弾発言をしたので俺は再び顔を赤くして困惑していたがそんな俺の様子を見たやまとはこうを睨みつけながら

「まったく、こうはもう少し発言や行動をわきまえたらどうなの？」

明らかに不機嫌の塊になったやまとがこうに文句を言うが、こうは

「別にやまとが怒る事もないじゃない。それとも私にやきもちでもやいたの？」

やまとに言われてもあまり動じていないこうがそう切り返すとやまとは顔を赤らめながら

「な、なんでそうなるのよ！今はあなたの事を言っているのであって私の事は関係ないでしょう！？」

明らかに動揺するやまとは最初の勢いはどこへやら、しどろもどろになりつつこうと相対していたがついに切れたようで

「いいかげんにしなさいよ？こう。とにかくあんたはもう少し常識ってものを・・・・・・」

そういいながらこうに対して説教モードを展開するやまとを俺は軽いため息をつきながら見ていたが、その後ろで俺達のやりとりに不機嫌な視線を向けてる何人かの事には気付かなかった俺だった。

「わ、わかったよやまと自重するからそのくらいで勘弁してよ。」

ついにやまとに折れたこうはやまとに謝り倒していた。

俺はそんな様子をなんともなしに見てはいたが、このままだと時間ももったいないかな？と思った俺は気を取り直してみんなに声をかける。

「とりあえず遊ぼうぜ？時間ももったいないしな。」

俺の提案に全員が「賛成ー」の声をあげてくれたので俺たちは海を楽しむ事にした。

こなたとかがみとつかさは浮き輪を持って海の中へ行き、ゆったりと波に身を任せながらくつろいでいた。

こなたｓｉｄｅ

私はかがみたちと海の中でのんびりと浮き輪に乗って過ごす事にした。

かがみとつかさも私についてきたので3人で浮き輪に捕まりのんびりと水に浮いている事にしたのだった。

私はふと思った事もあったのでかがみたちに話を振ってみた。

「こういう場所だとナンパとかされそうなもんだけど私たちには何もないよねえ？」

そう言うとかがみは私のほうを一瞥して

「あんたのようなのがいるから家族としか見られてないんじゃないの？まあ、うっとうしくなくていいけどさ。」

と言うかがみの言葉につかさも苦笑しながら

「おねえちゃんの言うとおりかもしれないけど、別にナンパされなくってもいいと思うよ？」

といいながら慶一君のいる海岸の方をちらりと見るつかさ。

私とかがみもそっちの方をちらりと見て

「まあ、つかさの言うとおりかもねー。すでにいい人いるしさー。」

私がそう返事するとかがみも顔を赤くしつつも

「ま、まあ、それもそうかもね」

とぼそりと呟いていた。

ふと私達が目を離した隙にいつのまにか慶一君の姿が海岸から消えていた。

頭にハテナマークを飛ばしつつ周りを探ってみていたら突然私達の背後から何かが浮上してきたので驚いてそっちを見ると水中眼鏡をつけて潜水したまま泳いできた慶一君がいた。

「うわっ！驚いたー。慶一君、人が悪いよ・・・」

「きゃあ！何よ一体・・・って慶一くん何してるのよ！」

「ひゃあ！なになになに～？ってけいちゃん、びっくりした～・・・」

私達は揃って驚いて悲鳴をあげて慶一君に文句を言うと慶一君は苦笑しながら

「いや、すまん。驚かすつもりはなかったんだが、なんだか楽しそうだったんでな。見に来てみたのさ。」

そんな慶一君と私達はしばらく談笑した後

「波にさらわれないように気をつけろよ?俺は一旦戻るからさ。」

そう言って海岸に向かって泳いでいく慶一君を見送っていた私達だった。

ゆたかとみなみとひよりは波打ち際付近で砂の城の制作をやっていた。

ゆたかｓｉｄｅ

私たちは私自身があまり体が丈夫ではないというのと岩崎さんが私を気遣ってくれてここで遊ぼうって事を提案してくれたので波打ち際で砂のお城をつくろうって事になって3人で一緒にやっている。

「うんしょ、うんしょ。意外と難しいねー」

「・・・小早川さん・・・こっちの方が少し形が崩れてる感じ・・・砂を足さないと・・・」

「こっち側は上手くいったよ?そっちも手伝うから指示してよ、二人とも。」

そうして悪戦苦闘していると海から上がって来た森村先輩が私達の方へやってきた。

「お?ゆたか達は砂の城作ってたのか。中々大きいの作ったじゃないか。」

私達の作る砂の城を見て感心したように言う先輩に私達も得意げに

「えへへ。私たちがんばりましたからね。田村さんと岩崎さんの協

力のおかげもあるんですよ。」

と私が言うと岩崎さんと田村さんも

「・・・小早川さんが的確に指示してくれたおかげ・・・私はそれに手を貸しただけですから・・・」

「あっ、こっちは私ががんばったっスよ?どうですかね?」

森村先輩にそう返事をしていた。

先輩は笑顔になりながら

「みなみ、あまり謙遜しなくていいよ。お前の力によるところもあるんだろうからな。ひより、意外と手先が器用なんだな。驚いたよ」

そう二人に声をかけてそして最後に私に笑顔を向けて私の頭をなでながら

「ゆたかもがんばったな。けど、あまり無理はしないようにな。」

そう言ってくれたので私も「はい!わかってます」と返事をした。

その後先輩は田村さんと岩崎さんに

「二人ともゆたかの様子には気をつけていてやってくれな。頼んだよ。それじゃ俺はちょっと向こうを見に行ってくるから。」

そう伝えてから日下部先輩達のいる方へと歩いていく先輩の背中を私たちは見送った。

みさお、あやの、こう、やまと、みゆきの5人は輪になってビーチボールによるバレーボールをやっていた。

俺はそんなみんなの元へと向かうのだった。

みさおｓｉｄｅ

私らは5人で集まってビーチボールで遊んでいた。

時折横目で慶一の動向をチラ見しつつ遊んでいると慶一はまずちびっこ達の方へ行ってその後もっとちびっこ達の方へと行った後私らの方へと歩いて来るのが見えた。

「よう。俺も混ぜてくれないか？少し体動かしたいからな。」

片手を挙げてそういいながら私らに声をかけてくる慶一に私は

「一緒にやるのか？なら手加減抜きでやらないとなー。」

私がニヤリとしながら慶一にそう言うと慶一も不敵な笑みを浮かべて

「ほう？それは面白い。その挑戦受けてやる。こい！みさお！」

二人して勝手に盛り上がっているのを苦笑しながら見ている4人だった。

「慶ちゃんお手柔らかにね。」

「私もがんばりますね。」

「先輩、ちゃんと手加減してくださいよー？」

「むしろあなたは手加減抜きでやられたほうがいいんじゃないの？

こう」

最後に永森が痛烈なツッコミを入れると八坂は慌てながら

「やまとー、まださっきの事怒ってるでしょ?ほんとごめんってー・・・」

弱気になりながらあやまる八坂に永森はツーンとそっぽを向いて突き放していた。

結局3対3での簡易バレーボールをすることになったのでチーム分けをした。

私のチームには八坂、高良が来た。

慶一のチームにはあやの、永森が入ったのだった。

かくして両者のにらみ合いの中簡易バレーボルのスタートとなった。

試合は相手側に慶一がいることもありかなり苦戦するものと思われたのだが、なぜだか慶一の調子が今一つな感じだった。

「っ、くそ、またミスった・・・」

「大丈夫?慶ちゃん、何かやりにくそうにも見えるけど?」

「先輩、さっきはあんなに大きな口叩いたんだからちゃんとしなさいよ?」

「わかってるよ・・・(くそう、あの二人が敵に回るのは厳しすぎるぞ・・・)」

どこか照れているそんなようにも見えたのだが、このチャンスを逃

す私ではない、この気に乗じて攻勢をかけた。

「おら、慶一返してみろよ」
「ああ、またミスを・・・くっそー」
「どうした、だらしねえな?慶一」

「日下部先輩やっぱ運動神経いいですねー」
「流石にスポーツのクラブに所属してるだけの事はありますね。」
「へへへ、ありがとな。でも、うーん、慶一もそれなりにやると思ったんだけどなんだかやりにくそうにしてるよな?」

しばらくすると慶一も少しずつ調子を戻してきたのだが、その頃になって慶一が不調だった理由に気付いたのだ。

「あ、なんとなくわかったぞ?」
「何がです?日下部先輩。」
「何か気付いた事でもありましたか?」
「ああ。あいつお前らがいるとやりくそうにしてるみたいだ」
「え?私たちが?・・・・・あ、そういう事ですか」

八坂も何かに気付いたようだった。

「あの?どういう事でしょう?」

よくわからないと言った様子の高良に八坂がニヤニヤとしながら

「高良先輩ちょっとお耳を・・・」

そう言って高良に耳打ちをすると途端に高良は顔を真っ赤にして

「そ、そういう事でしたか・・・」

高良も事情を理解したようだった。

どうも慶一は高良と八坂に気を取られてミスがでているようだった。

まあ、あれだけ揺らされていたら集中できなくもなるよなあ・・・

と心の中で思いつつもなんかあまり釈然としない感じだった。

結局最後まで本調子を取り戻せない慶一チームが敗北、慶一は私達に飲み物を奢るというペナルティを課されることとなったのだった。

「ま、負けた・・・不覚・・・相手にみゆきとこうさえいなかったら・・・」

「慶ちゃん、気を取られすぎたわね・・・」

「情けないわよ?先輩・・・」

「う、返す言葉もない・・・すまん二人とも・・・」

そう二人に突っ込まれて落ち込む慶一だった。

「ちょっと休憩するよ。みんなまだ遊ぶのなら遊んでてくれ」

私らとの遊びで疲れたのか慶一はそう私らに告げて黒井先生らのいる私らの拠点へと体を休めるために移動を始めた。

ビーチパラソルのある場所へ戻ってくると黒井先生はビールを空けまくって眠り込んでいてそれに少し付き合ったっぽいゆいさんも若

干赤い顔でそこにいたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

ビーチバレーで散々な目にあった俺はとりあえず一度休憩をするために黒井先生らのところへ戻っていったのだが・・・・・・

「見事に酔いつぶれて寝てますね・・・」

だらしない姿で寝る黒井先生をみながらため息をつく俺に少し飲んだ物のまだ正気をたもっているゆいさんがにこにこしながら声をかけてきた。

「やあ、慶一君見てたよー？見事に負けちゃってたねえ。」

というゆいさんに俺は苦笑しつつ

「あはは、不覚でした・・・。ゆいさんも少し飲んでたんですか？」

ゆいさんに質問するとゆいさんも

「ちょっと付き合わされてねー。でも正気は保ってるから平気だよ？元凶も酔いつぶれてねちゃってるからこれ以上は飲む事もないから安心だね。」

へらへらと笑いながら相変わらず楽天的な事を言っているゆいさんを見て軽いため息を一つつきながら俺はゆいさん達の側で少し昼寝をする事にした。

「ゆいさんすいません。少し横になりますから何かあったら起こし

てください。」

俺はゆいさんにそう伝えるとゆいさんも「わかったよー」と言ってくれたので俺はとりあえず横になったのだった。

こなたｓｉｄｅ

私達もある程度海に使って涼んだ後海岸へと戻ってきていた。

ふいにゆいねーさんの方を見てみると慶一君が昼寝をしているのが見えたので私達はゆいねーさん達のいる方に様子を見に行くのだった。

「お？よーく寝てるね。これはチャンスだね。」

私がほくそえんでいるとかがみが怪訝な顔で私に

「こなた、一体何をするつもりなの？寝てるんだったら寝かしておいてあげれば？」

そんなかがみにつかさも私がほくそえんでる意味を分かりかねて尋ねてきた。

「こなちゃん、何か笑顔がこわいんだけど何かするつもりなの？」

と言う二人に私は親指をびしっ！と立てて

「ふっふっふ、実はだね・・・・・・」

私は二人に耳打ちをすると二人は最初は驚いたような顔をしていた

が私とおなじようないたずらっぽい笑顔になって

「それは面白そうね。」

「けいちゃんびっくりするかな？」

といいながら私の企みに同意してくれたので早速実行に移す事にした。

私達は３人で慶一君を起こさないように気をつけながら体に砂をかぶせていく。

うまく体を覆い尽くすほどの砂で固められたので私達は満足げに慶一君を見下ろしていた。

そんな私達の行動に気付いた他のみんなもこっちに集まってきた。

「こなたおねーちゃん、一体何やってるの？」

というゆーちゃんの質問に私は自分の足元を指差してゆーちゃん達に見せるとゆーちゃん達は私の指差した方をみて軽く驚きつつもくすくすと笑っていたのだった。

「森村先輩埋まってるー。でもどうして起きないのかな？」

「・・・ここまでされていて気付かないのもすごいかもですね・・・」

「先輩おいしいとこどりっスねー」

とゆーちゃん達３人が慶一君を見下ろしながら言う。

「なあなあ、どうせならかぶせてある砂もう少し形変えないか？」

「って、どうするつもりなの？みさちゃん」

みさきちとあやのさんが何やら相談しているようだ。

私は興味が湧いたのでみさきちに「みさきち、何かするの？」と尋ねるとみさきちは「みてろよ？」と言ってにやりと笑って慶一君の砂の形を変え始めた。

その様子を伺っているとしばらくして形が完成したのだが、私はその形をみて思わず吹き出してしまうのを止められなかった。

「ぶふっ！みさきち、それって」

みさきちは慶一君の体の砂の形を女体にしたのだった。

それを見て他のみんなも笑い出す始末。

「あはははは！何これ面白い！」

「お、おねえちゃん、わ、わらっちゃ・・・だ、だめだよう・・・あはははは！」

「い、いくらなんでも・・・こ、これはひどいんじゃないかな？・・・くすくすくす」

「だ、だめ・・・笑っちゃ・・・いけないって・・・わかっているけど・・・耐えられない・・・」

「先輩ほんとに・・・おいしいとこ・・・もっていってる・・・あはははは！」

「み、みさちゃん・・・これは・・・やりすぎだと・・・思うわよ？くすくす」

そんな風にみんなで笑っているとさらにみゆきさん達までもやって

きて

「泉さん、一体何があったんで・・・ぷっ！だ、だめです・・・これは・・・くすくす」

「あはははは！先輩なんでこんなになってても起きないんだろう、あははは！」

「こ、こう、あんまり・・・笑ったら・・・悪いわよ？・・・くくくっ」

「や、やまとだって人の事言えないじゃんーあはははは！」

その笑い声に起こされたのか黒井先生達もこっちにやってきて

「なんや？ずいぶん楽しそうやな、どれ？ぶっ！あはははは！なんやそれ！森村なんやそれ！」

「これは、流石に笑っちゃうねー、あはははは！」

みんなしてひとしきり笑っていると慶一君がようやく目を覚ました。

慶一ｓｉｄｅ

なんだか笑い声が聞こえて来て俺の意識がようやく覚醒した。

寝ぼけた頭で周りを見ると俺をみながら笑っているみんなの姿が目に入った。

俺は何で笑われているのかわからずに頭にハテナマークを飛ばしながら起き上がろうとしてみたが、体が妙に重くて体を起こせなくなっている自分に気付き自分の首から下を眺めてみると多量の砂で自分の体が埋められているのがわかった。

そしてその砂に細工がなされている事もわかったがそれが何かを確認すると俺は大慌てで

「な、なんだこりゃ、こんなのいつの間に?って誰だこんな事やったのはー!!と言うか笑うなお前らー!」

慌てて抗議する俺にこなたが笑いすぎて涙目になりながら

「いやー、堪能させてもらったよ慶一君。」

と言うこなたの言葉に俺は殺気をはらんだ表情で

「ほほーう?ではこれをやった犯人はお前だというわけだな?うんうん、いい度胸だ」

凄みを含ませた声でこなたにそう言うとこなたは途端に顔色を変えて

「ちょ、ちょっとまった。埋めたのは確かに私だけどそこまではやってないよ。信じて?」

とわざとらしく可愛いい仕草でいいながらもこなたの視線がみさおの方に向けられたのを見て

「・・・なるほど・・・よくわかった。とりあえずここから出してもらおうか」

と言う俺の言葉にみさおも危険を感じ取ったらしく慌てながら

「け、慶一、ほんの出来心だってヴァ、怒らないで、な?」

両手を合わせて懇願してくるみさおだが、ようやく砂から出してもらった俺はまずこなたにデコピン（強）を一閃させ、ついでみさおの元にいってデコピンの刑を食らわせた。

「あうう、痛いよ、慶一君・・・」

「悪かったってヴァ・・・痛い・・・」

涙目の二人をギロリと睨みつけると二人とも小さくなっていた。

そんな俺達をみながらかがみとあやのは

「まあ、自業自得よね。いい薬だわ。」

「みさちゃんもちょっと調子に乗りすぎだったわね」

と呟いていたのだった。

ほかのみんなも苦笑しながら俺達をみていたのだった。

やがていい時間になったので俺達は海から引き上げて宿泊施設へと戻ってきた。

「みんな。風呂沸いてるそうだから入ってきちゃえよ、海水洗い流さないとな。」

そう促すとみんなは連れ立って風呂へと行った。

俺と親父は残って今日の夕食の食材のチェックとかをやっていたのだが、不足してる物があったので軽くシャワーを浴びた後買い物に出かける事となった。

買い物から帰ってくると丁度みんなが風呂から出てきた頃だったので早速夕食の準備を始めた。

「今日の当番は私達だね。さあ、一丁腕を振るいますか。」
「ちびっこ、指示は頼むゼ？」
「泉先輩、お手柔らかにたのむっス」

こなた、みさお、ひよりの３人がこなたの指示の元夕食を作り始めた。

俺達は俺たちの出来る準備を済ませてこなた達に協力して食事の準備は整った。

「「「「「「「「「いただきまーす」」」」」」」」」

という全員の合図で食事が始まった。

食事をしながら明日の予定について俺はみんなに

「明日は趣向を変えてこの近くにある山にでも行って見ないか？そんなに高い山じゃないけど頂上から海を見渡せる絶景ポイントもあるよ？」

と言うと賛成してくれる人も何人かいたけど他の何人かは海にも行きたいという意見も出てきたので明日は海チームと山チームに分かれる事となった。

ちなみにチームは

海チーム、こなた、こう、ひより、ゆたか、みなみ、つかさ

山チームは、かがみ、あやの、みゆき、やまと、みさお、俺

食事の後、山チームの面々と明日の打ち合わせをする事になったので部屋に集まって時間とか場所、持ち物等の確認をした。

「・・・・・とまあ、こんな感じでだな。何か質問ある？」

俺が山チームの面々を見回しながら聞くと

「とりあえずは確認できたからいいわ。明日は寝坊しないようにしないとね。」

かがみがそう言うとみゆきも頷きながら

「そうですね。山にも行けるとは思っていなかったので少し楽しみです。」

と言うみゆきにあやのもいつもの笑顔で

「たまにはこういうのもいいかもね。私も楽しみだな。」

二人して微笑みあっていたのを見ながらみさおも

「趣向を変えるってのもいいものだよな。運動は好きだし丁度いいゼ」

わくわくという擬音が聞こえてきそうなほど楽しそうなみさお。

「たまにはこうと離れてみるのも悪くないわね。」

こうの方をちらりと見つつこちらも楽しげなやまと。

俺達は最後に持ち物の確認を行って今日は休む事となった。

ちなみに先生達は明日も海チームのようだが、やっぱり年なのかな？とか心の中で考えていたら二人に

「「今なんか失礼な事考えてなかった（か）？」」

と突っ込まれて慌てて否定する俺だった。

明日の事を考えながら布団に入り、俺はみんなとこうして楽しめる幸せをかみ締めつつ夢の世界へと旅立つのだった。

旋律達の夏休み1～海へ、第二話～（後書き）

二チームに分かれた二日目はどうなるのか。慶一視点メインになるかもですがお楽しみに

旋律達の夏休み1～海へ、第三話～

波乱と疲労の一日目が過ぎ、二日目の朝いつもの通り早起きをした俺は今日もまた海を眺めて目を覚ますために海岸へと赴いた。

かがみｓｉｄｅ

なんとなく今朝はいつもよりも早く目覚めた私はとりあえず顔でも洗ってこようかな?と思い早めに部屋を後にしたのだが、洗面所に向かう途中で外に出て行く慶一くんを見かけて今日はひょっとしたら一番かもしれないと思い、急いで慶一くんの後を追って合宿所を出た。

息を切らせながら追いついてみると案の定今日はみゆきの姿はなかった。

私は息を整えながら慶一くんの側へ寄って朝の挨拶をする事にした。

「おはよう慶一君。やっぱり起きるの早いわね。」

私がそう挨拶をすると慶一くんは私の方を振り返って笑いながら

「おはよう、かがみ。今日はお前が一番だったか。今日もいい朝だな。」

という彼に私も笑顔を返しながら

「そうね。私も今日はなんだか早めに目が覚めちゃったのよ。それで昨日慶一くん達とのんびりしてた時の事を思い出して来てみたの。

そうしたら慶一くんがいたから声かけちゃったんだけどね。」
（なんて、本当は慶一くんの姿が見えたから慌てて追いかけてきたんだけど、恥ずかしいから本当の事はだまっておこうっと・・・）
そう私が説明すると慶一くんも特に深く追求はせずに私に
「なるほど。まあとりあえずしばらくのんびりしてようぜ。」
私から海の方へ視線を移しつつ言う慶一くんに私も
「うん。とりあえず隣座ってもいいかな？」
と聞いてみると慶一くんは「ああ。」と短くだけど返事をしてくれたので私は彼の隣に腰を降ろした。

慶一ｓｉｄｅ

突然かがみに声をかけられて驚いていた俺だったが、かがみほどしっかりしてる娘ならこういう事もあるかな？と何となく納得できていた俺だった。
「とりあえず座ってもいいかな？」
と聞いてくるかがみに俺は短く「ああ。」と返事をするとかがみは俺の隣にちょこんと腰を降ろした。
そんなかがみの横顔をちらりと覗くと少し顔を赤らめているようだった。
少しの間そうしているとかがみは俺に話し掛けてきた。

「慶一くんて普段も朝早いのはやっぱり鍛えられたせいだったりするの？」

そう話を振って来るかがみに俺は頷きながら

「ああ。規則正しい生活もまた大事なんだとか親父に言われてたからね。いつのまにか身についちゃったってところだな。」

そう答えるとかがみは納得しつつも腕組みをして考え込んでいるようだったが不意に俺の方を向くと

「なるほどね。ねえ、それってさつかさでも早起きできるようになったりするかな？あの娘朝起きれないのが悩みだっていってたからさ。」

かがみの質問に俺も頭を捻りつつ

「うーん・・・こいつは普段からの生活習慣ってやつが重要だからなあ・・・つかさが起きれないとか眠いとか言ってるのはつかさ自身、変なタイミングで目覚めたりとかしてる可能性はあるかもだけどね」

「変なタイミング？」

「うん。睡眠の周期ってやつさ。大体1時間半ごとにレム睡眠とノンレム睡眠が交互にきてるんだけどその範囲がおかしいとすっきり目覚めなかったりするんだよ。だからその時間を測らせてやってみるしかないかもしれないな。」

俺はさらに言葉を続けて

「つかさの周期ってやつが分かれば後はそれを目標に起きるように改善していけばおそらく少しはましになるとは思うよ。」

俺がそう説明し終わるとかがみは

「そうね。慶一くんのアドバイスどおりあの娘にやらせてみようかしら？貴重な意見をありがとう、慶一くん。」

かがみが俺にお礼を言って来たので俺は「まあ、役に立ってくれればいいけどな。」と返事をするとかがみも笑顔で頷いてくれた。

俺はかがみに一つ教える事があったのを思い出したのでかがみに

「かがみ。実は今日の山登りなんだが、山を登るほかにもう一つ目的があるんだ。その事を教えておこうと思ってさ。ちょっと耳貸して？」

俺がかがみにそう促すとかがみは再び顔を赤らめつつ俺に耳を寄せてきたので

〈実は山にはね・・・・・があるんだよ。しかもある程度は自由に取れるから今日の夕食は豪勢にいけると思うぞ？〉

そう耳打ちするととたんにかがみの顔がものすごい笑顔になっていくのが見て取れた。

かがみは少し興奮気味になりながら

「慶一くん！それ、ほんとなのね！？嘘じゃないのよね！？嘘だったら酷いわよ！？」

というかがみに少し気圧されながらも俺は

「嘘じゃないって。だから楽しみにしててくれ。」

親指をびしっと立ててかがみにそう言うとかがみは「うんうん！」と頷いていた。

「よし、それじゃ朝飯に戻るか。持ち物確認したら出発だからかがみも抜かりないようにな。」

そうかがみに言うとかがみも頷きながら「わかってるわ。とりあえず朝御飯食べて準備しちゃうから」

二人して頷きあった後俺達は朝御飯を食べに宿泊施設へ戻っていった。

施設に戻り朝御飯を食べると早速山チームの面々を集めて荷物等の最終チェックを行った。

俺は山チームの面々を見回しながら

「準備の方はできたか？俺達は海チームより先に出る事になるから今のうち忘れ物がないかどうか確認しておいてくれよ？」

そう促すとみんなは自分の持っていく荷物の最終確認をし始めた。

俺はみんなが最終確認を行っているうちに海チームの付き添いの３人に声をかけに行っておく事にしたのだった。

「黒井先生、ゆいさん、親父。海チームの面々の面倒、よろしくお願いします。」

俺がそう声をかけると3人は

「おう、こっちはまかしとき。森村も無茶な事はしちゃあかんぞ?」

「こっちは私達がついてるから大丈夫だよー。でも、何かあったらかならず連絡を入れること、いいね?森村君。」

そう言ってくる二人に俺も

「わかってますよ。黒井先生、ゆいさん。何かまずい事が起きたりしたら即連絡を入れますから、とりあえずちゃんと電話つながるようにしておいてくださいよ?」

そう念を押しておくと二人も「わかってるから心配せんでもええ。」

「抜かりなくしておくから大丈夫。」

と自信満々に言ってくれたその言葉をとりあえずは信用する事にした。

最後に親父が俺に

「慶一、あの山へいくのだろ?土産は期待してるぞ?今年も大分成長してるはずだからな。夕飯は豪勢にいくのもよかろう。」

うんうんと頷きながら言う親父に俺も

「ああ、わかってる。まあ、期待しててくれ。それと黒井先生達にはまだ内緒にしておいてくれよ?びっくりさせたいからさ。それと、

こなたたちに何事もないようにボディガードも任せるからな。」

そう親父に言うと親父も

「大丈夫だ。心配せずに行って来い。それとボディガードは引き受けるからそっちも安心するがいい」

と言ってくれたので俺も安心して山チームへと戻っていった。

山チームに戻る途中でこなたと会ったのでこなたに

「こなた。今日も楽しんできてくれ。俺達は山へ行くけど、ちょっとしたお土産持ってこれると思うから楽しみにしといてくれよ?それと海のほうではあまり無茶はしないようにな。」

そうこなたに言うとお土産の部分に反応したようで

「うん、楽しんでくるよ。それとお土産って何なのかな?すごく興味あるんだけど」

そんなこなたに俺も笑いながら

「ははは。しいていうなら食べ物さ。夕食時にはこなたにも腕ふるってもらうつもりだから期待しててくれ。」

こなたにそう返事するとこなたも「わかったよー。」と言いながら俺に手をふって部屋へと戻っていった。

俺はその後ゆたかたちとも行き会い、ゆたかたちにも「楽しんでこいよ?」と伝えてから山チームの面々の元へ戻っていった。

「慶一くん遅いわよ?もうみんな準備オーケーなんだからそろそろ出発しようよ。」

朝にかがみに教えた事が気になってるようでかがみはなんだか落ち着きがなくまた嬉しそうな顔をしながら俺に出発を促していたが、その様子が気になったみさおが俺に

「なあ慶一、柊は何であんなに嬉しそうなんだ?」

と言って来たので俺はみさおの背中をぽんと一つ叩いて

「それは向こうに着いてからのお楽しみだ。」

そう言った後みんなの方を向いて

「それじゃ山チーム出発するぞー」

みんなに声をかけるとみんなは「おー!」と答えて俺たち山チームは出発したのだった。

しばらく海岸に沿って歩き山の入り口へと向かいながら軽い雑談を楽しみつつ進んでいく俺たち。

「山自体はそんなに高い山じゃないんだな。」

山の方を見ながらみさおが見た感じを口にすると

「そうみたいですね。慶一さんが余り時間はかからないと言っていた意味がわかります。」

そのみさおの感想にみゆきが答える。

「でも、海に来て山登りまで出来るなんて思ってなかったわね。」

楽しそうに言うあやのにかがみも

「そうよね、そう考えると結構贅沢な旅なのかもしれないわよね。」

そう口にしていた。

「先輩、合宿所って言うくらいだからやっぱり施設の近くにあるこの山も鍛えるのに使っていたって事なのかしら?」

やまとが何気なく疑問に思った事を俺に尋ねてきたので俺は

「そういう事さ。山篭りするためにあの山を使っていたって所だよ。懐かしいよなあ・・・」

やまとの疑問に答えつつ俺も合宿をしてたころの事を思い出しながら思い出にふけりつつさらに言葉を続けて

「鍛える為に使いはしたけどそれだけじゃない物もあの山にはあるんだ。だからみんなを誘ったっていうのもあるんだけどな。」

やまとはふと昨日俺が言ってたことを思い出したらしく

「先輩が言っていた絶景ポイントとかかしら?」

やまとの言葉に頷きつつ

「それもあるが、あとは山の幸なんかもあったりするのさ。しかもとびきりのやつがね」

笑いながら言う俺の言葉に今度はみさおがにやにやとしつつ

「山の幸って事は食べ物って事だよな？そうか、柊が嬉しそうな理由はそこにあったんだな？」

かがみの方を見ながらそう言うとかがみは顔を真っ赤にしながら

「う、うるさいわね！別にいいじゃない！それにあんただってきっと驚くわよ」

「ほーう？そんなにいいものなのか？一体何なのか言ってみ？」

「う、そ、それは・・・」

かがみはみさおの突っ込みに思わずたじたじになり俺の方を向いてどうするべきかという視線を向けてきていたが、俺は黙って口元に人差し指を立てて”シー”というジェスチャーをすると

「と、とにかく着いてからのお楽しみよ！今言っちゃったら楽しみが減っちゃうじゃない！」

そうかがみが言い切るとみさおもしぶしぶながら

「まあ、そういう事なら楽しみにすっか。」

一応納得したようだった。

そうこうしているうちに気がつくと山を登り始めていた俺たちだっ

たが、山に入ってからみさおが何故かかなりはしゃいでいるようだったので

「みさお、楽しいのか？」

そう尋ねるとみさおは満面の笑みで

「ああ。なんかこういうのも悪くねえなーって思ってさー」

そう答えながら鼻歌交じりでどんどんと俺たちの前を歩いていくみさおをみながらかがみはやれやれというジェスチャーをしていてみゆき、あやの、やまとの3人は苦笑しながらその様子を見つつ歩いていた。

「結構なだらかだから歩きやすいわね。」

なんともなしにかがみがそう言ったので俺は

「まあ、今歩いてるコースは一番楽なコースでもあるからな。特訓の時使ったところはこれの比じゃないとだけ言っとくよ。」

そう答えるとかがみは両肩をすくめながら

「私達には理解できない世界よね・・・それに慶一くんは自分のお父さんの事を化け物って言ってたし、ほんとあんたのとこってどんだけよ・・・」

半ば呆れつつそう答えるかがみの横からあやのが

「化け物に育てられた慶ちゃんだからやっぱり慶ちゃんも化け物な

のかしらね？」

俺たちの会話を聞いていたらしくそう聞いてきたが、俺は

「いや、親父とは比べるべくもないさ。俺はまだまだ”人”のレベルだよ」

そう答える俺にさらにやまとも

「先輩の言う”人”のレベルってのも怪しい気もするけどね・・・第一基準ってものがわからないわよ。」

そんなやまとの突っ込みに俺も困惑しながら

「そう言われてしまうと説明のしようもなくなるんだけどな・・・」

後頭部を掻きつつそう答える俺。

さらにそれからしばらく歩くと徐々に坂の傾斜と足元の悪さが目立ってくるようになる。

みんな少し疲労の色が見えはじめていたようだったが休憩ポイントまではまだ少しあったので俺はみんなに

「休憩ポイントまでもう少しだからがんばってくれよ？そこで休憩取ったら後少しだからな。」

目的地が近づいていると言う事を告げてみんなの気力を奮い立たせるように誘導しつつさらに歩を進めた。

そしてようやく休憩ポイントに到着する。

「よーし、休憩ポイントに到着だ。みんな少しゆっくりしてくれ。水分補給とかも忘れないようにな。」

「ふうー大分登ったなー。なあ、慶一その辺少し見てきてもいいか？」

みさおは大人しく休憩するつもりはなさそうだったのでとりあえず俺は

「それは構わないが余り遠くへ行くなよ？それと今から２０分したら出発するからそれまでには戻ってくる事、わかったな？」

そうみさおに言い含めてこの場を少し離れる事を許可したのだった。

みんなもそんなみさおをみながら

「まったく元気な奴よね・・・あいつには疲れるって事がないのかしらね？」

「みさちゃんらしいけどなんか山に入ってからさらに元気になったような気がするわね」

「元気なのはいい事ですよ。とはいえ私達は少し休んでおかないとつらいですね。」

「一応スポーツ系のクラブ所属って事なのかしらね。私達よりはずっと体力があるみたいだし・・・」

と各々みさおに対する感想を口にしつつセミの鳴き声も響き渡る緑映える林の中で俺たちはそれぞれに休憩を取っていた。

「緑の中っていうのも良い物ですね」

周りを見渡しながらぽつりとみゆきがそう呟くのが聞こえたので俺は

「そういえばみゆき、緑は目にもいいんだぞ？お前も視力低下を悩みにしてたようだしこの緑を目に焼き付けておけばいいさ。」

俺のその言葉にみゆきはにっこりと笑って

「そうですね。いい機会ですからそうしてみます。」

そう言いながら木々の緑を見回しはじめるみゆきを俺も微笑みながら見守っていた。

しばらくして指定した休憩時間が終わる頃みさおが何かを持って帰ってきた。

「おーい慶一、みんなー、こんなもんみつけたぞ？」

といいながらみさおが差し出したものは”あけび”だった。

俺はそれを見ながら

「へえ？こんなのよく見つけたな。これは果物みたいなものだから食べれるぞ？みさお、ちょっと食ってみたらどうだ？」

俺がそう言うとみさおは目を輝かせつつ”あけび”にかぶりついた。

「お？こいつは意外といけるゼ」

結構満足げなみさおだったが俺はかがみがなんだうらやましそうな視線を向けているのに気付いたが自身の保身のために何も言うまいと心に決めてみんなに出発を促した。

「さあ、後少しがんばろう。みんな、いくぞー」

俺たちは頂上に向かって再度歩き始めた。

それからしばらく歩いた後、ようやく頂上の看板が見え、俺たちは頂上に辿り着いたのだった。

「みんな、お疲れさん。これで到着だ。少し休んだら弁当にしよう。」

俺がそう言うとみんなはそれぞれ近くに残っている切り株をイス代わりにして座り、弁当を広げ始めた。

「お？流石につかさとこなたが用意してくれた弁当だ、うまそうだな。」

俺が弁当をみてそう呟くとみんなも

「我が妹ながら流石にしっかり作ってくれてるわね。こなたの腕もなかなかか、やっぱり私ももう少し出来るようになったほうがいいのかな？」

そう呟きつつ少し気落ちしてるかがみ。

「やっぱ、柊妹とちびっこは中々だな。料理関連では認めざるをえないなあ」

ひとしきり感心しながら弁当をつつくみさお。

「私ももう少しがんばってみようかしら。」

さらに腕を磨く決意をするあやの。

「泉さん達に教わるべきかもしれませんね。でも美味しいです」

「泉先輩とつかさ先輩って料理の腕前大した物ね。なんとなく悔しいかも・・・」

みゆきとやまとも弁当をつつきながらそう呟いていた。

実は山チームの昼食の弁当はこなた達にお願いして作ってもらったのだった。

食事も済んで一段落した俺たちだったがやまとが俺に

「先輩、絶景ポイントってこの近くなの?折角来たのだから見て行きたいのだけど」

というやまとの言葉をきっかけに他のみんなも

「そういえばそんな事言ってたわよね。私も見ておこうかな?慶一くん、案内してよ。」

「柊が行くなら私もついてくぜー。」

「絶景ポイントをバックに写真とって帰るのもいいわね。」

「慶一さん、是非案内をお願いします。」

というみんなの願いを聞き入れて俺はみんなをとっておきの絶景ポ

イントに連れて行くことにした。

「みんな、こっちだ。足元には注意してな。」

みんなに注意を促すとみんなも慎重に俺の後に着いてきた。

やがて絶景ポイントに到着し、俺はみんなに

「ほら、ここだよ。今日はすっきり見渡せるな。」

そう促すとみんなはその場所から眼下を見下ろして口々に

「わあー、これは凄いわね」

「おおーすげー、あれってひょっとして私らの泊まってる合宿所か？」

「綺麗・・・水平線もよく見えるわ。」

「素晴らしい景色です。まさに慶一さんの言うとおりでしたね。」

「・・・すごくいい眺め・・・いい景色が見れたわね・・・」

そう言いつつみんな感動してるようだった。

俺たちはそこに集まってみんなでセルフタイマーを使い記念写真を撮った。

そうして一通りの事を済ませ、そろそろ下山となる頃かがみは俺に

「ねえ、慶一くん。例の奴はどこで？」

と聞いてきたので俺はかがみに

「降りる途中にあるよ。そこに着いたらさっそく集めるとしようか。」

そう返事をするとかがみは嬉しそうに「うん、楽しみ」と頷いていた。

みんなに下山を促して少し下ったあたりで俺は少しコースを変え、例の物が取れる場所へみんなを誘った。

しばらく歩くと目的の場所に到着したので俺はみんなに

「さあ、みんな。今日のメインとも言っていい場所に着いた。これからこの周りを探索して松茸を狩るから心行くまで取ってくれ」

俺がそう言うとかがみは一層嬉しそうな顔になりかがみ以外のみんなは目を丸くして驚いていた。

「け、慶一、松茸って言ったか?今・・・まじでなのか?」

「慶ちゃん、そんな高級品がこんな場所にあるの?信じられない・・・」

「まさか山に来た目的の一つがその事だったなんて思いもしませんでした・・・」

「で、でも先輩、勝手に取ってしまっていいの?山の所有者がいるんじゃ勝手に取ったら私達泥棒になっちゃうわよ?」

最後にやまとが言った言葉に俺は笑いながら

「心配ないよやまと、みんな。何せこの山の所有は龍神の物だからね。」

俺の爆弾宣言にみんなは目を点にして

「・・・・・・へ？・・・・・・・今、なんて・・・・・・・」

呆然とした顔で聞き返してくるみんなに俺は

「だから、この山の所有は龍神家の物だっていったんだけど・・・」

そう改めて言うと

「「「「「えええええええええ！？」」」」」

みんなは揃って絶叫し、その絶叫はこだまとなって帰ってくる。

俺は笑顔でみんなに

「まあ、そういう事だから存分に取ってくれよな。夕食は豪勢にいこう」

親指をびしっと立てながらそう言う俺にみんなはこくこくと頷きそれぞれに松茸を狩るために散っていった。

「うふふふ。土瓶蒸しに網焼きもいいわね。混ぜ御飯も捨てがたいなー」

とものすごく嬉しそうに夕食の献立に思いを馳せているかがみ。

「うーん、それにしても柊の聞いていた事がこれだったなんてわからなかったってヴァ・・・でもどんな味すんのかな？初めてだから楽しみなような、怖いような・・・」

いまだ戸惑いを隠せずにいつつもとりあえず松茸を狩るみさお。

「改めて慶ちゃんの実家ってすごいのね・・・慶ちゃんはああ言ってくれたけどとりあえず程ほどにしておきましょ」

高級品なだけにどことなく腰が引けてしまい取る量を抑えがちにしてるあやの。

「つくづくスケールが凄いですね・・・ともあれ人数分は確保しませんと・・・」

とりあえず慶一の育った家に驚きつつもきっちり人数分確保するため動くみゆき

「宿代かからない代わりに食事等は私達でやると言う条件だったけどその中にはこういう風に食材を調達するという事もあったのね・・・つくづく慶一先輩は凄い家で育ってきてるのね・・・」

なんというか慶一の凄さの一端を見た気分になりつつとりあえず食材確保を続けているやまとだったがここで予期せぬ事態が起こった。

やまとｓｉｄｅ

「大分集まったわね・・・そろそろみんなのところに戻ろうかしら・・・」

しばらくの間、私は食材確保を続けていたが、そろそろいい感じになったので切り上げてみんなのところに戻ろうとして立ち上がった。

その瞬間、私のいる場所の近くの茂みがガサガサと音を立て始めたので私はなんだろう?と思い茂みの方を見た。

茂みの方を凝視していると突然茂みから大きな物が飛び出してきた。

突然の出来事で私は何が起きたのかわからず少しパニックになっていたが、気持ちを落ち着かせてよく見るとそれは大きな猪だった。

猪は私のほうへと少しずつにじり寄ってきた。

おそらく私の持っている松茸の匂いに誘われてきたのだろう、それを奪うべく私に飛び掛る体制になってきていた。

私は恐怖のあまり持っていた松茸を猪に投げつけ注意をそらしてその場から逃げようと試みた。

猪は私が投げた松茸をむさぼっていたのでその隙に逃げ出したのだが、私が動いた事に気付いた猪は私が投げつけた松茸を食べ尽くした後、私を追いかけるべく走り出した。

私は恐怖のあまりに「きゃあああああ!?だ、誰かー!」と思わず叫びながら走った。

慶一ｓｉｄｅ

みんなも松茸を取り終えて集まり出してきた頃、ふいにやまとが向かった方角からやまとの悲鳴が聞こえてきた。

「きゃあああああ!?だ、誰かー!」

俺たちはその声に驚き声のした方を向いた。

「な、何？今の悲鳴って永森さんの声じゃ？」

「何があったんだってヴァ、様子が変じゃねえか？」

「何か足音が聞こえて来ない？」

「あ！慶一さん、あそこを！永森さんの後ろに何か大きな物が！」

と言うみゆきの指摘を受けてそっちに目をやると全力で走ってくるやまとの少し後ろから何やら茶色い塊がやまとを追いかけてきてるのが見えた。

「な！？あれは猪か？まずいな・・・」

俺はそう呟くと地面に落ちていた堅い丸太を掴みあげやまとの後ろの猪に向かって投げつけた。

ドカッ！！という音と共に俺が投げつけた丸太が猪にぶち当たりその突進を思わず止める猪。

やまとはそのまま全力で俺達のほうに戻ってきてかがみ達と合流した。

「やまと、みんな木の影に隠れてろ！俺が良いと言うまで出てくるんじゃないぞ？」

俺がそう促すとかがみたちは猪に見つからない木の影に隠れると

「慶一くん！慶一くんも逃げて！まともにやりあったらとても敵わないわよ！」

「先輩！逃げて！お願いだから！」

「慶ちゃん、だめよ！お願い、逃げて！」
「慶一、逃げろ！相手にするなんて絶対無理だって！」
「慶一さん逃げてください！無茶です！」

口々に俺に逃げろと訴えるみんなだったが、俺はここで逃げ出せば今度は他のみんなの方へこいつが行くだろうとわかっていたから逃げずに再び丸太を持って猪に対峙した。

「みんな、心配してくれているところをすまんがこいつを野放しにしたらみんなに危害が及ぶ事になる。何とかこいつを追い払うからそこから絶対動くなよ！」

俺がそう伝えるとみんなはなおも俺を気遣って声をかけてきてくれたが、今はこいつをどうにかする事が先決と考え、猪の動きに意識を集中していく。

猪は俺を正面から見据えるように俺に飛び掛るタイミングを見計らっているようだった。

俺はどんな些細な動きも逃すまいとさらに意識を集中して猪を見据えた。

緊張感が高まりそしてついに猪が先に動いた。

猪は俺に向かい、まさに猪突猛進の如くまっすぐに俺に突っ込んできた。俺はぎりぎりのところで横っ飛びして猪の側面に回り持っていた丸太を叩きつける。

ドカッ！！という鈍い音と共に猪の体の側面に叩きつけられた丸太の衝撃で一瞬動きが鈍る猪にさらに俺は追い討ちの一撃を叩き込ん

だ。

「うらあっ！！」

猪を突き倒すように今度は丸太で胴体を突く。

ドスッ！！という音と共に胴体にめり込む丸太、さらに追い討ちをかけようとした俺に猪のまさかの反撃がなされた。

一瞬ひるんだ猪はさらに丸太を振りかぶった俺に体当たりをかけてきた、俺はその反撃は予測してなかったのでとっさに持っていた丸太でガードするが猪の一撃は俺を丸太ごと吹き飛ばした。

「ぐはあっ！っくそ・・・」

木に叩きつけられはしたがすぐさま体制を立て直し猪の動きに気を配る。

しかし思ったよりダメージがあったようで左の肩口がズキンズキンと痛んでいた。

やまとｓｉｄｅ

私が恐怖のあまりに連れてきてしまった猪を追い払うべく先輩は私達を安全な場所へと避難させた後猪と対峙していた。

私はどうしていいのかもわからずに泣きながら、先輩が猪と戦う姿を見ているしかなかった。

何度目かの猪との攻防の末にふいに猪に体当たりを食らった先輩が

背後に立っている木に吹き飛ばされたのを見て私はもちろん、一緒に事の成り行きを見守っている先輩達も思わず悲鳴をあげていた。

「きゃあ！慶一くん！」
「やべえよ！慶一！」
「もういいから逃げて・・・」
「慶一さん！もう、見てられない・・・」

かがみ先輩達が声をあげる中私は声すらも発する事も出来ずにただ先輩を見つめつづけるだけだった。

（先輩！やめて！お願い！もうやめてー！）

心の中では私は狂ったように声をあげつづけているのに実際の私はどうしてかその心の叫びが口を突いて外に出てくる事がなかった。

左肩を抑えて立ち上がり猪と再度対峙する先輩が動き出す。

私達は結局無力だった。

慶一ｓｉｄｅ

（みんなの声は届いているが、やっぱりこのままこいつを放置する訳には行かない。だが、決着へのきっかけはできた。次で・・・決める！）

俺は少しづつ猪を岩壁のある場所へと誘導していく。

俺の動きを追うように少しずつ俺に狙いを定めるように動く猪を誘導しつつ俺は岩壁を背にするように立ち、自分の手前に落ちている

岩の塊に手にした丸太をテコのようにセットするとそこで猪の次の動きに集中し始める。

「こい！これで決めてやる！」

挑発するように猪に声をあげる俺に猪はついに俺にとどめの体当たりをかまそうと動き出した。

一気にダッシュして距離を詰めてくる猪を俺はぎりぎりまで引き寄せると猪の胴体が丸太の上に乗った瞬間丸太を踏みつけて猪の体ごと跳ね上げると同時に鋭く回転し渾身の回し蹴りを跳ね上げられて頭が下に向き無防備になった猪の顎めがけて叩き込みそのまま突進力＋遠心力で倍化した威力のまま岩壁に猪の頭をサンドイッチのように挟み込んだ。

「うおらあああああ！！」

ドグシャツ！！という鈍い音が響き、ズズウン！！と地響きを立てながら猪はその場にうずくまる。

体をピクピクと数度痙攣させた後完全に猪は沈黙した。

俺は大きく喘ぎながら猪の状態を確認するとそのまま大の字に寝っころがった。

「はあ、はあ、ぜえ、ぜえ・・・何とか・・・やったぜ・・・」

俺がそう呟くと同時に事の成り行きを見守っていたみんなが俺の元へ走り寄ってくる。

「慶一くん！大丈夫？生きてる？」

泣きながら俺の様子を確認するように声をあげるかがみ。

「慶一！大丈夫か？死んでねえよな？な？」

大慌てで俺を揺さぶるみさお。

「慶ちゃん・・・無茶、しすぎよ・・・」

そう言いながらも泣きじゃくっているあやの。

「慶一さん！よかった・・・本当によかった・・・」

泣きながら俺に抱きついてくるみゆき。

「先輩・・・先輩！先輩っ！ばか！ばか！ばかあああ！」

同じように抱きついてきて泣きじゃくるやまと。

そんなみんなを見ながら俺はみんなを助けられた事への安堵とみんなを心配させ泣かせてしまったことに対する罪悪感にとらわれつつ

「みんな、ごめん。心配かけたな。俺は何とか大丈夫だ。」

顔を上げながらそう言うとみんなも緊張の糸が切れたようで俺に抱きつきながらしばらくの間泣いていた。

しばらくしてみんなが落ち着いた頃みんなはさっきの事で気が動転していたとはいえ自分達がした行為にを思い出してみんな顔を赤く

しつつ帰る支度を済ませていた。

俺はというと山の管理をしてもらっている所に電話で問い合わせて先程仕留めた猪を引き取りに着て欲しいという依頼をだした。

それらの事を済ませた後俺はみんなを見回して

「それじゃ、その・・・そろそろ戻るか」

俺もみんなに心配させてしまった手前その事を気にしていたためかなんともばつの悪い物言いになってしまっていたのだがそれはみんなも同じだったようで

「そ、そうね。そろそろ戻りましょ？」
「あー・・・えっと・・・とりあえずもどっか」
「・・・うん、そろそろ、いこっか？」
「そ、そうですね。皆さん行きましょう」

みんななんだかギクシャクとしていたが俺たちは山を降りるために動き出したのだが、さっきの事以来宿につくまでの間なぜかやまとは無言で俺の腕に抱きついたままだった。

かがみとみさおは少し不機嫌そうだったが、俺の昔話を知っていたみゆきはなんとなくやまとの行動を察していたようで俺たち二人の様子を黙って見守っていた。

山の幸の収穫を終えて宿に帰宅すると俺たちの帰りに合わせて山の管理者の人が先ほどの猪をさばいた肉を届けてくれた。

「ただいまーっと・・・」

俺が代表でいいながら宿に入ると海から戻って来てたこなた達に出迎えられた。

「お帰りー、慶一君って・・・どうしたの？その有様は」

その質問に俺はどう説明すべきか悩んだが結局正直に答える事にした。

「山に行ってお土産取ってきたのはいいんだがそこで猪に遭遇してな、とりあえず仕留めてきた。」

そういいながら取ってきたお土産をこなたに渡しつつそう説明すると

「あ、ありがとうーってこれって松茸！？お土産ってこれなの！？それに猪仕留めたって・・・」

こなたが大慌てしながらそう言うと俺は

「さっき肉届いたろ？あれは俺が仕留めた猪さ。」

俺がそう言うと他のみんなも

「け、けいちゃん、猪たおしたの？」

「先輩！怪我は平気ですか？」

「・・・よく・・・無事で・・・」

「先輩・・・半端ないっすね・・・」

「じゃ、じゃあさっきやまとが言ってた事って・・・先輩！無茶しすぎです！」

驚愕しながら口々に言うみんなに

「あー、とりあえず左肩打撲にはなってるとは思うけど何とか生きてるよ」

つとめて明るく言う俺に海チームから

「「「「「当然です！」」」」」

と鋭い突っ込みが入った。

「森村！なんでそないな事になったのに連絡の一つもよこさんかったんや！」

「そうだよ？森村君みんなを心配させちゃいけないよ？」

付き添いの二人からも突っ込みが入るが俺は

「すいません、ですがそんなのやってられる余裕があったらやってましたよ。それに連絡できたとしても先生達を待ってる余裕はなかったですから。」

心配してくれる先生達に悪いと思いつつもそういわざるをえなかった。

「ほう？猪か。肉が届いていたから何かと思ったらお前が仕留めたとはな。だがよくみんなを守りきったな。よくやったぞ？慶一」

親父からのまさかの誉め言葉を聞いた俺は照れながら

「な、何だよ、普段は俺の事ぼろくそ言うくせに気持ち悪いな」

照れ隠しに言う俺の言葉に親父はカチンときたようで

「気持ち悪いとはなんだ！全くたまに誉めてやればそんな減らず口を・・・」

何やらぶつぶつ言い始めた親父をほっといて俺は

「こなた、つかさ、まあ、そう言うわけだからこれらの食材の調理は任せるよ。俺はちょっと手当てしてくるから。他に手が空いてる人がいたらこなた達を手伝ってやってくれないか？」

そう伝えると何人かはこなた達の手伝いにもう何人かは風呂へと向かった。

俺は親父に

「親父、すまないけど治療を頼むよ」

そう言うと親父も

「奥の部屋へ来い。」

と短く俺に言うと先に奥の部屋へと向かって行った。

俺も親父の後を追おうと動こうとしたとき俺の後ろから声をかける二人がいた。

「先輩、私も付いていきます。」

「私も一緒に・・・」

振り向くとそこには怖い顔をして立っているこうとやまとがいた。

俺は二人に「わかったよ、ついてこい」と声をかけると二人は頷いて俺の後をついてきた。

奥の部屋につくと親父に入室するむねを伝えて部屋に入った。

「ん？こうちゃんとやまとちゃんも一緒か。まあいい、そこで見ていなさい。慶一、肩を見せろ。」

二人にそう促して俺に患部を見せるように言う親父に俺は肩を捲り上げてみせた。

怪我の状態を診ながら親父は

「ふむ、外れていたか。自分で無理にはめてきたようだな。だがこれならなんとかなるだろう」

そう、俺の肩は打撲ではなく脱臼をしていたのだ。

あの時はとりあえず肩をはめなければ勝負をつけれないと判断した俺は荒療治だったが動かせるように肩をはめ込み最後の攻撃をしたのだった。

親父の俺の肩が外れているという言葉を聞いたやまとはまた涙をこぼし始め、俺に

「先輩・・・ごめんなさい・・・私のせいで・・・」

俺に謝ってくるやまとに俺は慌てながら

「お、おい、やまと。大丈夫だから、お前のせいじゃないから、な？怪我は俺の自己責任なんだから、だからもう泣くなよ」

やまとをなだめるように言い聞かせていると今度はこうもやまとと一緒にいつのまにか泣いていて

「先輩、中学生の時の事覚えてますよね？あの時も先輩は私達に心配かけてるのを忘れていませんよね？」

さらにこうは言葉を続けて

「あの時も怖かった。折角友達になれた先輩を失うんじゃないかって、今回もそう。私は先輩達の身に起こっていた事を知らなかったけどやまとから話を聞いて私も怖くなった。先輩、お願いですから私達を不安にさせないでください・・・」

そう訴えるこうとやまとの二人を俺は優しく抱きしめながら

「そうだな。ごめん・・・心配かけてごめんな？俺が悪かったから、だからもう泣かないでくれ」

親父の治療を受けた後も俺達はしばらくの間お互いに謝りあいながらそうして抱き合っていた。

治療を終えて食堂に顔をだしてみると今回の収穫を使った料理が完成していた。

「おー、なかなか美味そうだな。さすがこなたにつかさだ。」

出来あがった料理を見て俺はそう感想を言うとこなたたちは照れ笑いをうかべながら

「何とかがんばったよ。さてそれじゃそろそろいただこうよ。」

というこなたの声をきっかけに

「「「「「「「「「「「いただきまーす」」」」」」」」」」」

の声とともに豪勢な夕食が始まった。

松茸御飯や土瓶蒸し、猪鍋等等が並び、とくにかがみやみさお、黒井先生らは凄く喜んでいた。

こなたたちも普段食卓に並ぶ物ではないものだけにちょっとした高級料理に目を輝かせていた。

ちなみに食材は余っていたのでその分などはお土産に持ち帰るつもりのようだ。

こうして波乱の二日目が終わった。

命の危険と隣り合わせだったが、俺は俺のために泣いてくれる人がいるという事がとても幸せな事なのだということを理解すると同時にみんなを心配させるような無茶はしないようにしなきゃなと心に誓う俺だった。

旋律達の夏休み1～海へ、第四話～

やまとｓｉｄｅ

昨日の夕食後、私達は海チームの人達にも昨日の山の中であった猪襲撃の件を詳しく話したのだけど海チームの人達も昨日の絶景ポイントで写してきた写真を見ながら改めて事の重大さを認識する事となった。

各人色々と考えた事もあるのだろうけどとりあえずその日は次の日の事を話した後みんな体を休めるために床についた。

・・・・・ここは・・・・・・どこ？・・・・・・

夢の中・・・なの？・・・・・・あれは・・・先輩？・・・・・・

私の前を私に背を向けたまま歩いていく先輩。

その背中を私は必死に追いかけるがどんなに走っても先輩の背中は遠くなる一方だった。

思わず私は遠ざかっていく先輩の背中に呼びかけていた。

「先輩！待って！先輩！私の声が聞こえないの！？先輩！いかないで！」

何度目かの呼びかけに先輩は歩みを止め私の方を振り向いた。

その先輩の顔はどこか悲しげに私の方をじっと見つめていてふとそ

の口元が何かの言葉をつむぎ出そうとしているのが見て取れた。

「・・・ごめんな・・・やまと・・・」

先輩は確かにそう言っていた。

そして再び私に背を向けるとゆっくりと私の前から遠ざかっていった。

私はその姿にその言葉に言い知れぬ不安を覚えて再び先輩に呼びかけながら先輩の後を追った。

そのうちに先輩の姿が闇に溶けて消えうせ私はその場で呆然と立ち尽くしている所で目が覚めた。

「・・・っ！はあっ、はあっ・・・い、今のは、夢？・・・先輩・・・」

気付けば夜が明けていたが、私はさっきの夢の事で不安になり部屋を飛び出して先輩の部屋へと走っていった。

先輩の部屋につき私はおもむろに先輩の部屋へと飛び込みまだ眠っている先輩を揺すり起こすのだった。

「先輩、起きて下さい！先輩！先輩！」

私の呼びかけに軽く唸りつつも目を覚ます先輩。

それを確認した私は思わず先輩に抱きついていた。

慶一ｓｉｄｅ

昨日の一件の事もあり俺は疲れも手伝ってか早めに就寝したのだが、俺の部屋に誰かが進入してきた気配を眠りつつも感じているとその気配は俺を揺すり起こし始めた。

俺は気配の主をそっと薄目で確認してみるとその主はパジャマ姿のやまとだった。

「・・・起きて下さい！先輩！先輩！」

なにやら必死な形相のやまとに驚きつつも俺はやまとの呼びかけに応じて布団から起き上がった。

俺が布団から起き上がるのを確認したやまとは泣きそうな表情で俺に抱きついてきた。

「お、おい、やまと、一体どうした？こんな朝っぱらから」

俺に抱きつきすすり泣きを始めるやまとに困惑しつつもやまとの背中を優しくぽんぽんと叩いてやりながらやまとに聞いてみると

「先輩、よかった・・・」

その短い言葉を言ってすすり泣くやまとに俺は頭にハテナマークを飛ばしていた。

とりあえず落ち着くまでは好きにさせておこうと思いそのままの体制でしばらくやまとを受け止めていた。

しばらくするとようやく落ち着いたのかやまとは俺から体を離しつつ

「・・・ごめんなさい、先輩。みっともないとこみせちゃって」

俺の顔を覗き込みながらばつの悪そうに俺に謝るやまとに俺は何故こんな事をしたのかをやまとに聞いてみる事にした。

「それで、一体どうしたんだ？やまと。」

やまとはいいにくそうにしていたが

「その・・・実は夢で・・・先輩が悲しそうな顔をしながら消えていく姿を見てしまって・・・昨日の事もあったし先輩も怪我したりしてたわよね？だから・・・不安に・・・なったのよ・・・」

悲しそうな顔で俺に訴えてくるやまとの頭を優しくなでながら

「そうか・・・悪かったな、お前をそんなに不安にさせちまって。けどこの通りなんでもないからさ、そんな悲しそうな顔するなよな。」

出来る限り優しい声でやまとにそう言うとやまともどこか安心したのかほっとした表情を見せて

「・・・先輩は・・・いなくなったり・・・しないわよね？」

俺に確認するように聞いてくるやまとに俺は微笑みながら

「そんなわけないだろ？大切な仲間や・・・」

一端言葉を切ってやまとの頭をなでながらさらに言葉を続けて

「大事な後輩達がいるんだ。俺もみんなの側に居たいって思ってるんだから居なくなるなんてありえないよ。」

俺がそう言いきるとやまとは心底安心したような顔になって

「わかったわ・・・ありがとう先輩。それといきなり迷惑かけてごめんなさい・・・」

顔を赤らめながら俺に謝ってくるやまとに俺も苦笑しながら

「いや、いいさ。ともあれ結構びっくりしたけど、ただそれだけさ。」

そうやまとに返事するとやまとも俺に笑顔を向けながら

「ふふ・・・よかった。それじゃ私は部屋に戻るわね。」

といいながら部屋を出て行こうとするやまとに俺は「ああ、また後でな。」といいながら手を振ってやまとを見送った。

やまとが部屋を出て行くと同時に突如として恐ろしいほどの殺気とオーラを部屋の外に感じ、思わず身構えているとゆっくりと部屋の引き戸が開きそこには・・・・・・鬼の形相のかがみが立っていた・・・。

かがみがゆっくりと部屋に入ってくるのを俺はただ震えながら見ているしかなかった。

そしてかがみは俺に

「慶一くんー？朝っぱらから一体何をやっていたのかなー？なんだか永森さんと抱き合っていたわよねー？」

恐ろしい笑顔で俺に詰め寄るかがみに無駄かもしれないと思いつつも弁解を試みようとかがみに

「か、かがみ、とりあえず落ち着いて聞いてくれ、これはだな・・・」

そう言う俺にかがみはにっこりと笑って

「問・答・無・用」

という言葉と共にかがみの鉄拳が炸裂したのだった。

「うわあああ！またか？またなのかーーー！？」

という絶叫と、鈍い音が響き渡った。

その後朝御飯の時間になり中々起きて来ない俺の心配をしたこなた達が俺を発見するまで俺は部屋で気絶したままになっていたのだった。

殴られた右頬に氷を当てながら朝食後部屋でくつろいでいると部屋にこなた達がやってきた。

「やほー慶一君。今日は災難だったねえ」

ニヤニヤしつついうこなたに俺は

「ちょっとした誤解が原因なんだけどな。それにしてもまさか気絶させられるとは思わなかったよ・・・かがみ、恐るべしだな」

そんな俺の言葉をききながらみさおは

「柊凶暴伝説って感じだよな。」

我ながら上手い事を言ったという顔で笑っていたがその後ろからいきなりかがみに殴られて後頭部を抑えていた。

「うるさい！殴るぞ？」

というかがみの言葉にみさおは涙目で

「もう殴ってるってヴァ・・・」

そんなかがみとみさおのやり取りを見ながらこなたはいつものように目を細めつつ

「やっぱりかがみの突っ込みは鋭いねえ。それにしても慶一君。猪仕留めるほどの君がかがみの拳を避けれなかったってのはちょっと信じられない事だと思ったんだけど？」

そう俺に聞いてくるこなたに俺は自嘲の笑みを浮かべつつ

「・・・まあ、わざと受けたからな・・・かがみの拳をさ・・・」

申し訳なさそうな表情でそう言うとこなたはその事を不思議に思っ

たのか「どうして?」と俺に聞いてきたので

「あいつの目の前で命の危険をおかして心配させたからな。泣かせるまでの事になったんだ。俺がこのくらいの罰受けなくてどうするって思ってな。とはいえまさか気絶させられるとは思ってなかったけどな・・・。」

苦笑しながらこなたにそう言うとこなたも少し考える仕草をしてたがおもむろに俺の頭に拳を落とした。

「あだっ!こ、こなた?」

俺は驚いてこなたの方を見上げるとこなたは少し悲しげな表情で

「・・・話は聞いてるよ・・・私はその場には居なかったけど、もしその場に居たとしてもかがみたちと同じように慶一君を気遣って泣いていたと思うよ・・・慶一君には私達を心配させた罰としてこれくらいは受けてもらわないとね・・・」

そんなこなたを見ながら俺は申し訳ない気持ちになって

「・・・そうだな・・・すまん・・・こなた。」

心配させた事を詫びる俺にこなたは一つ大きく深呼吸すると

「・・・はあ・・・とりあえずこれで昨日の件に関してはおしまい。私も気が済んだしね。でもゆーちゃんたちやつかさたちにも改めて謝っておきなよ?みんな慶一君の事心配してるんだからね?」

俺にウインクしながらそういうこなたに

「ああ、わかってる。その辺はちゃんとするつもりさ。とにかく今日一日はのんびりだな。」

そうこなたに声をかけるとこなたも俺の肩の包帯をみながら少し残念そうな顔をしつつも

「そうだね。昨日話し合って決めた事だし、今日はみんな思い思いにのんびりしよっか。」

そう、昨晩は昨日の一件の事もあり俺の怪我の事も考慮して一日のんびりする日にしようという事になったのだ。

「じゃあ、慶一君。私はちょっと町の方に行ってみるよ。ちょっと気になる店がありそうだからね。」

そう言って俺に手を振りながら出かける準備をするため部屋に戻っていくこなたを見送ると入れ替わりでつかさたちが俺の部屋に来た。

「おはよ、けいちゃん。さっきは大変だったね～」

苦笑しながら俺にいうつかさ。

「あはは。まあ、仕方ないさ。」

つかさにそう返事を返すとその後ろからゆたかが

「先輩、ほっぺは大丈夫ですか？」

と心配そうな顔をして俺の顔を覗き込んでくる。

「問題ないよ。今冷やしてるところさ。」

ゆたかに笑顔で返す。

「・・・腕の怪我の事もありますし・・・あまり無理はしないでください・・・」

こちらも心配そうな顔でみなみが言ってきた。

「はは、確かにちょっときつかったかな」

苦笑しながら答えるとみなみはますます心配そうに俺を見ていた。

「先輩の武勇伝はネタになりそうですがそれでもその程度で済んでよかったですよね」

とりあえず心配してくれているっぽいひよりとその横からこうも

「まあ、それが先輩をネタにした遺作にならなかっただけよかったですけどね」

昨日の事もあるのだろう、少し棘のある言い方で遠まわしに俺を非難するこうに俺は

「はは、手厳しいな・・・でも・・・」

俺はそう言うとみんなのほうに向き直ってその場でみんなに土下座して

「緊急時だったとはいえ、みんなに心配と不安を抱かせてしまった事、本当に悪いと思ってる。すまなかった。」

そうみんなに謝罪する俺だった。

みんなは俺の突然の土下座に困惑しつつも

「いいよ、けいちゃん。無事に戻って来てくれたもん。ちゃんとけいちゃんがここに居るんだからいいんだよ?それで。」

「先輩がまた私達の前にいる。それだけで安心できますから。」

「・・・小早川さんの言う通りです・・・」

「先輩は不思議な人っす。私もこうして目の前にいる先輩を見ていると安心できますよ。」

「先輩が居なくなる事なんて考えたくもないですから、これからも無茶はしないで下さいよ?」

4人は俺に温かい言葉を投げかけてくれる、そんな会話を聞いていたかがみたちも

「そうよ?あんたが私達を大切に思ってくれるように私達もあんたの事は大切だって事少しはわかってくれなきゃね。」

みさおもかがみの言葉に頷きながら

「そうだぜ?慶一。私らが泣いた事、その思いを忘れるなよな?」

そう俺に言ってくるみさおの後ろにいつのまにか部屋に来ていたあやのとみゆきも

「みさちゃんや柊ちゃんの言うとおりよ?あなたが居なくなる事想

像したら凄く怖かったんだから。」

少し悲しげな表情で俺に訴えるあやの。

「慶一さん、以前あなたが昔話をしてくれた時、私言いましたよね？あまり無茶はしないで下さいと。以前に慶一さんが拾った命をここで捨ててしまうのかとものすごく不安になりました。折角拾った命だったんですから、今後も無茶に捨てるような真似だけは絶対にしないでください・・・」

少しうつむき加減で俺に強い口調でそう訴えてくるみゆき、みんなの言葉を受け止めて俺は再び熱いものがこみ上げてくるのを抑える事が出来ずにみんなに再度土下座をしながら俺は泣いていた。

「ごめん・・・みんな・・・本当に・・・俺は・・・幸せな奴だよな・・・」

途切れ途切れにみんなに泣きながらそう言う俺の側にみんなが来て、土下座する俺の背に手を添えて「わかってくれればいいんです」といいながら優しく微笑んでくれたのだった。

そんな俺達のやり取りを部屋の外から見守る3人がいた。

「森村のやつもいい友人ができたみたいやな。昨日の話聞いた時には気が気ではなかったけどまあなんにしても無事でなによりや」

顎に手を当てにこにことしながらそう呟く黒井先生の隣でゆいさんも

「うんうん。青春してるねー。でもゆたかを助けてくれた人があの子でよかったかもだねーあの子ならこなたやゆたかを守ってくれそ

うだし。」

そんな二人の後ろで表情をゆるくして親父は

「今までのあいつの苦労はまさに今の瞬間、心からの友人を得る事で報われる事だろう。先生、成実さん、これからもあいつの事を見守ってやってください。」

そう二人に言うと二人も頷きながら「「まかしてください。」」と返事をするのだった。

それから少しして昼食を終えた俺達は午後の時間を思い思いに過ごす為自由時間にする事になったのでみんなはそれぞれやりたい事をするために動こうとしていた。

（さてと、ちょっと港の方まで行ってみようかな？）という事を心の中で考えつつこれからの行動に思いを馳せていると

「慶一くん、午後からの予定って決まった？」

かがみが部屋にやってきて俺にそう言った。

「うん。とりあえず港の方へ行ってみようかと思ってるよ。」

「港？」

「うん。夕食の事もあるんだが、魚でも見に行ってみようかと思ってな。」

俺がそう返事をするとかがみは途端に瞳を輝かせて

「魚？お刺身とか食べれるのかな！？」

かがみの食いつきっぷりに驚きつつ苦笑しながら

「ま、まあ、そういうのも手に入ると思うよ。」

そう答えるとかがみは俺に詰め寄ってきて

「私も行く！いいわよね？慶一くん」

というかがみの勢いに押されて俺は思わず

「あ、ああ、いいよ。んじゃ一緒に港行くか。」

「ほんと？やったあ！」

ものすごくかがみは喜んでいた。

そうして準備を済ませて玄関に向かうと玄関に行く途中でみゆき、こう、やまとに合い、みんなは俺の行く所を尋ねてきたので俺は目的地を伝えると3人も一緒に行くと言い出したのでそれじゃ一緒に行くか、ということになった。

5人で連れ立って歩きながらかがみは上機嫌で

「うーん、お刺身、焼き魚、ウニとか蟹も捨てがたいわね。ねえ慶一くん、魚を選ぶ際は私の希望もいれてもらってもいいかな？」

そう聞いてきたので俺もかがみに

「ああ。ある程度の希望は入れるつもりだよ。だからみんなも何か希望があれば言ってくれ。」

そう言いながらみんなにも希望を募ると

「ギンダラとかカレイ、ヒラメの焼き魚なんかもいいですね。煮魚でも美味しそうです。」

みゆきは白身系の魚を選びたいようだ。

「趣向を変えてエビ買ってきてエビフライにしたりするのもいいんじゃないですか？ここなら新鮮なの買えそうですし。」

こうはエビ等を選ぶつもりのようだった。

「ちょっと旬は外れているけれどさんまのような魚もいいかもしれないわね。」

こちらは無難な選択をするようだ。

俺はとりあえずそれぞれの希望は取り入れようと考えつつ港へと歩いていく。

その途中にある電柱にあるポスターが貼ってあるのを見つけて俺は足を止めてそのチラシに見入っていたのだが、それに気付いたかがみたちは俺の方へとやってきて

「どうしたの？慶一くん。何かあった？」

「何を見ていたんですか？あら？これは・・・」

「面白い物でもありましたか？先輩」

「そのポスターがどうかしたの？・・・なるほど」

みんな俺が見ているポスターを見ながら俺が足を止めた理由に納得したようだった。

「今夜は花火大会があるらしいな。夕食済ませたらみんなで見るか。うちの合宿所の裏手の海岸で見えるからね。」

みんなにそう言うとみんなもにっこり笑いながら頷いてくれた。

しばらく行くと目的の港が見えてきた。

「へえ?結構活気があるわね。」

港の喧騒を見ながらかがみが呟くとみゆきも

「ここなら色々見つけられそうですね。慶一さん、とりあえずどの辺りを見るのですか?」

話を振って来るみゆきに俺は周りを見渡しつつ

「そうだな・・・向こうの奥から行ってみる事にするか。」

大体の目星をつけて俺達は移動を開始しようとした時、横から聞き覚えのある声が飛び込んできた。

「あれ?慶一君じゃん。それにみんなも、どうしたの?こんなところに来てさ。」

「あ、おねえちゃん達だ。けいちゃんもいる~。みんなに会えるとは思わなかったよ~。」

という声の方をみるとこなたとつかさが居た。

「お前らこそ町の散策に行ってたんじゃなかったのか？何でこんなとこに？」

そう聞き返すとこなたが

「うん。つかさにつきあってもらって町の散策してたんだけどさ、夕食の事思い出してどうしようか？ってつかさと相談したんだけど魚とかいいんじゃないかな？っていう事になってねー。」

その後を補足するようにつかさが

「それで、お魚を扱ってそうなところを捜し歩いていたらここに辿り着いたの～。」

俺がそんな二人の説明に「なるほど」と納得していると横からかがみが

「ふうん？でもよくここの事わかったじゃない？他にもそういう所ありそうな感じだったけどさ。」

かがみの疑問にこなたが人差し指を立てながら

「町の方で聞いたんだけどさ、ここで扱ってる魚の方が新鮮だよって教えてもらったんだよね。それでここの場所を教えてもらったのだよ。」

というこなたの説明に納得して頷いているかがみの後ろからみゆきが

「なら泉さん。目的も一緒な訳ですしこのまま合流して回りません

か？それでいかがでしょう？慶一さん。」

俺にこなたたちとの合同行動の許可を求めてきたみゆきに俺も断る理由はなかったので

「そうだな。んじゃみんなで回ろう。」

俺の言葉にこなたとつかさも喜んで、俺達のメンバーに加わり、夕食の買い物をすることとなった。

「とりあえずこれは今日の買い物の為の予算だ。ここからは手分けして食材をそろえていこう。そのために班分けするぞー。」

というわけで班分けはこうなった。

こなた、かがみ組。

つかさ、こう組。

やまと、みゆき組。

買い物をしつつも要所で締めてくれるパートナーとしては最良の選択を取ったつもりだが＜特にこなたとかがみ。食に目がくらんだかがみを止めてくれそうだったから＞とりあえずみんなにそれぞれ目標の食材確保を頼み、俺は一人知り合いの漁師さんのいるところへと向かうつもりだったので

「みんな、それじゃここを集合場所にして各々買い物を済ませたら戻って来てくれな。」

という俺にかがみが俺が単独行動することに疑問を持ったのか

「あれ？慶一くんはどうするの？まさか私達におしつけてさぼろうとか考えてるんじゃないわよね？」

疑惑の目を向けてきたので俺は慌てて

「ちがうちがう、俺は知り合いの所へ食材を見に行くだけだよ。一ついいものが手に入るかもしれないからさ、楽しみにしてて欲しいって事かな。」

そう説明するとかがみは一瞬目を輝かせたが、隣にいるこなたに悟られないように慌てて

「ま、まあ、そういう事なら期待してみようかしらね？」

気丈に振舞ってみたが、どうやらこなたは一瞬だけ輝かせたかがみの目に気付いていたっぽい感じでかがみを横目でみつつニヤニヤとしているのが見てとれた。

俺はなんとなくそんなやりとりに気付きつつも苦笑しながら

「それじゃみんな、また後でここでな。それぞれ買い物任せたぞ？」

と言うとみんなも「「「「「了解ー」」」」」と返事をした後各々の買い物へと散っていった。

俺はそれを見送ると自分の目的を果たす為に知り合いの漁師のいる所へとむかうのだった。

こなたｓｉｄｅ

とりあえず夕食の食材確保とかがみの暴走を止めるため＜多分慶一君はそれを見越して私にかがみとペア組ませたんだろうな・・・＞に一緒に食材探しに回る事になった。

「さてと、とりあえずますはお刺身でも・・・って、かがみ？」

かがみに話を振ろうとするとかがみは試食コーナーのところで引っかかり、お刺身等の試食をして満面の笑みを浮かべていた。

そんなかがみに呆れつつも私はかがみのところに行き声をかける。

「かがみ、だめだよこんな所で道草食ってちゃ。それにここで食べちゃったら夕食入らなくなるよ？もっとも、体重増えるの関係ないっていうんならほっとくけどー？」

私の夕食という言葉と体重という言葉にビクッときたのかかがみは苦笑を浮かべつつ

「や、やだわ、こなたったら、わかってるわよ、みなまで言わなくても。ちょっと美味しそうだったから試食させてもらってただけじゃない。」

「はいはい、とりあえず買い物途中だからいくよー？」

といかにも説得力なさそうな言い訳をしつつ試食コーナーに未練たっぷりな表情のかがみを引きずって

目的のお刺身を買いに向かうのだった。

「・・・よし、こんなもんでいいよね。それじゃかがみ、戻るよー

？ってかがみ・・・」

用事も済んだのでそろそろ戻ろうとかがみに声をかけてそっちを見るとまだその他の試食コーナーに後ろ髪引かれてるかがみがいた。

「・・・えっ？あ、こ、こなた、用事すんだの？」

「まあね、でもかがみ合宿所戻ったらたくさん食べれるから今は我慢してね？それじゃいくよー」

またもかがみを引きずりながら集合場所へと向かうのだった。

こうｓｉｄｅ

私とつかさ先輩とで私の希望でもあった海老関連を見るために一緒に歩いていた。

「そういえばつかさ先輩はエビの調理ってできます？」

横でぽやぽやとした笑顔で歩きながら魚介類をチェックしていたつかさ先輩に声をかけると

「エビ？うん、エビフライとかもできるよ？でも甘エビも美味しそうだよね～。」

私の念願もかないそうでなおかつ甘エビも捨てがたかったので

「それじゃ、車エビと甘エビを買っていきましょうよ？」

「うん、そうしよっか。八坂さん、ちょっと予算とお会計の計算してくれる？」

私の提案に賛成しつつ、会計計算を頼んでくるつかさ先輩に頷きながら私は会計の計算を行い支払いをすませた。

「それじゃ、集合場所に戻りましょうか。」
「そうだね、いこっか～」

食材を手に入れた私達は集合場所へと戻っていく。

やまとｓｉｄｅ

私と高良先輩は白身系の魚をメインにあとはさんまとかの魚を求めて市場を歩き回っていた。

「先輩、いい物見つかった？」

私が先輩に尋ねると高良先輩はにっこり微笑みながら

「ヒラメのよさそうなのとお刺身にハマチもいい感じでしたのでそちらは確保しました。永森さんの方はいかがです？」

私の成果を尋ねてくる先輩に私は

「ギンダラとカレイね、焼き魚にしてもいいし煮魚でもいけそうよ？」

自分の見つけた魚を見せた。

「なら、このあたりで決めましょう。それじゃまとめて支払いますので永森さん、品物をこちらに。」
「わかったわ。高良先輩、これを」

自分の選んだ魚を高良先輩に渡し、高良先輩に会計をお願いするのだった。

「こんなものですかね。永森さん、それじゃもどりましょうか。」

「そうね、いきましょう。」

高良先輩に促されて私達は集合場所へと向かって移動を始めた。

慶一ｓｉｄｅ

俺はみんなと離れ、一人知り合いのいる漁師さんのやっている市場へと足を運んだ。

しばらく歩くとその市場へと辿り着き、そこにいる一人の男の人に声をかけた。

「こんにちは、しばらくですね。今日は何かいいもの入ってますか？」

俺の声に気付きこっちを見る漁師さんは俺に

「おお、君は龍神さんのとこの慶一君じゃないか。久しぶりだねえ、今回珍しく来たってことはまた山篭りとかしにきたのかい？」

豪快に笑いながら俺に声をかけてくる漁師さんに

「いえ、今回は俺の通ってる学校のクラスメートと遊びにきてるんですよ。一週間ほどの滞在予定でね。」

そう返事をすると漁師さんも顎に手をあてながら

「おお、そういう事だったのかい。それで？今日はその食事のために食材探しに来たって所かな？」

そう尋ねてきたので俺は頷きながら

「ええ、そういう事です。何かいいものありますかね？」

そう切り出してみると漁師さんは「ちょっとまってな。」といって奥のほうへと入っていき、少し待っていると奥からお勧めの物を持ってきてくれた。

「今回はマグロの中トロと赤身のいい所があるよ。それも冷凍物じゃないやつだ。うまいぞ？それと、タラバガニがある。後はウニのいいやつとイカだな。」

俺はそれらを見てそのお勧めを買う事にした。

「それじゃそのお勧めをください。」

「あいよ。それじゃこれは例の合宿所へ届けておけばいいかな？」

という漁師さんの返答に「お願いします。」といって会計を済ませた後、俺もみんなの所へと戻っていった。

集合場所に戻ると買い物を済ませたみんなが待っていた。

「お？やっともどってきたね。ってあれ？手ぶらなの？」

俺が単独行動するときいいものが手に入るという事を言っていたの

に何も持たずに戻ってきた事に疑問を感じたこなたが俺に聞く。

「はは。手には持ってないけどちゃんと手に入れてる。合宿所に届けられる事になってるから大丈夫さ。まあ、そんなわけだからみんな持ってる荷物を俺に貸せ。合宿所まで運んでやるからさ。」

事情を説明するとみんなは納得してくれたようだが、荷物を誰一人俺に渡そうとする物がいなかったので俺は不思議に思い

「あれ?どうした、みんな。」

そう尋ねるとこなたが俺に

「慶一君、荷物を持ってくれるという君の気持ちは嬉しいけど、君は肩を怪我してる事忘れてるんじゃない?いくら私達だって怪我人に荷物持たせるほど鬼じゃあないよ?」

というこなたの言葉にみんなも頷くのを見て俺は少し申し訳ない気持ちになりつつも

「はは、ちょっとみっともないけど頼ってもいいかな?」

という俺の言葉にかがみはにっこり笑いながら人差し指を立てて

「こういうときは遠慮は無用よ。私達も慶一くんに助けてもらったりするんだから私達だって慶一くんを助けたいって思うしこういう時くらいは頼って欲しいとも思ってるわよ。だからそんな申し訳なさそうな顔はしない。」

そう言ってくれたので俺はみんなに「ありがとう」とお礼を言うの

だった。

みんなも満面の笑顔で頷き返してくれたの見て、少しみっともないながらも嬉しく思う俺だった。

それからみんなで食材を持って合宿所に戻ってきたが、その時に俺の買い込んだ食材も丁度届いたところだった。

みんなは、＜特にかがみは＞俺の買った食材をみて大分喜んでいたようだった。

こなた達は早速買って来た食材の調理を開始した。

今回は調理の手伝いにこうやまと、あやの、みなみの参戦で行う事になったので俺達はそれ以外の準備をするのだった。

ちなみに帰ってきたときにゆたかたちにも花火大会の件は伝えておいた。

やがて料理が出来上がり並べられた料理を見て

「おお、こいつは中々だな。」

「お刺身も焼き魚も昨日の松茸も美味しそうね。」

「今日も美味しい物をいただけそうですね。」

「おー、これは美味そうだってヴァ。」

「海のもものもいいっスね。」

「食べるの楽しみです。」

という俺達と共に黒井先生らも

「おお、今日もまたすごいごちそうやな。こら酒がうまそうや」
「どれもおいしそうー、来てよかったー。」
「今日はいい物があったようだな。さあ、みんな席につきなさい。慶一、頼むぞ?」
最後に親父が俺に言うと俺は咳払い一つして「それじゃ、いただきます。」
と号令をかけるとみんなも「「「「「「「「「「いただきまーす」」」」」」」」」」
という声と共に食事が始まった。
ちなみにその食事を終えた後風呂場にてかがみが体重計に乗って相当に落ち込んでいた姿を見かけたというこなたの証言をもらう事となった。
一通りの食事を終えて風呂を済ませ俺達は花火大会を見るために裏手の海岸へ集合していた。
「そろそろかな?」
俺のほうを向いてこなたが聞いてきたので俺も
「そろそろじゃないか?」
と声をかけた瞬間花火の打ちあがる音が聞こえてきたので俺達はそっちに目を移す。
空に上がる色とりどりの花火を見上げながら俺はいつしか砂浜に座

り込んでいた。

そんな俺の周りにみんなも腰を降ろして花火を見上げているといつのまにか俺の左右にはやまととかがみがそれぞれ陣取り、他のみんなも寄り添うように俺の側に来ていた。

空を見ながらやまとは

「綺麗・・・やっぱり花火はいいわね。」

ポツリと呟くのを聞いた俺は

「今回は運がよかったかもな。時期をずらしてしまってたら見れなかったかもだしな。」

同じように空を見上げながらやまとに言うと「そうね、運がよかったのかも」とやまとは俺に言う。

「この時期に海に連れて行ってくれた慶一くんに感謝かな。」

反対側に陣取るかがみがそう言ってくれたので俺も

「楽しんでくれてるならそれでいいさ。連れて来た甲斐もあったってもんだ。」

笑いながらそう返事をするとかがみも俺を見てにっこりと笑ってくれた。

そうしているとこなたが後ろからのしかかってきて

「またこうして花火見たいなあ・・・みんなで一緒にさ。」

俺の背中でそう呟くこなたに俺は

「言ったろ?俺達がそうしたいと望むのなら何度だって出来るってさ。また来年も、いや、俺達が望む限りはこうして、ここじゃない場所かもしれないが花火をみんなで見よう。」

力強く言う俺にこなたは頷きながら

「うん、そうだね。不思議だな。慶一君がそう言うとなんだかそうする事なんて難しい事じゃないって思えるよ。」

こなたの言葉を聞きながら俺はみんなを見回して

「難しい事じゃないさ、みんながそう望んでるってわかるからな。その思いを感じられるからきっと出来るって思えるよ。」

俺の言葉にみんなも力強く頷いてくれたのだった。

そのみんなの意思を確認して花火に目を戻そうとするときやまとが俺の手を握ってきて俺に

「その時も先輩は私達の側にいてくれるわよね?」

俺を見つめその事を確かめるように問い掛けてくるやまとに俺は

「あたりまえだ、やっと出来た俺の居場所だからな。その居場所を自分から捨てるような真似はしないさ。」

という俺の宣言にみんなもどこかほっとしたような顔していた。

こうして3日目は終わりを告げるのだった。

旋律達の夏休み1～海へ、第五話～

一昨日の事件による怪我のせいもあり、昨日は一日ゆっくりとする日として思い思いに過ごしてきた。

一日の最後にみんなで見た花火大会は俺達の思い出の1ページに刻まれる事となり、そして今日という日を迎える事となった。

俺はこの旅行を計画した本当の目的の実行を今日行おうと心に決めてもう一度その覚悟を確かめるべくいつものように早起きをして海を見に外へと向かった。

海を見ながら静かに心を静めて心を落ち着けていると早起きには縁のない珍しい3人組が現れたのだった。

こなたｓｉｄｅ

昨日の花火大会後、珍しく早めに私もみんなも体を休めた。

その所為か、いつもよりも早い時間に目が覚めて時計を確認すると丁度慶一君も起きている時間だと思ったので私はひょっとしたらまた海岸にいるかもと思い外へと向かったのだった。

その際にどういうわけかこれまた珍しくつかさとみさきちが起きていて私は二人と鉢合わせをすることになった。

事情を聞くと二人もやはりいつもより早めに休んだ事によって少し早めに目が覚めたのだという。

もう一度寝るのもなんなので海を見に外に行く所だったのだと二人は私に言ったのだった。

目的地は結局一緒なので私は二人に声をかけて海岸へと向かうと海を見ながらただずむ慶一君の姿があったので、私達は慶一君に朝の挨拶も兼ねて声をかけることにした。

「おはよ、慶一君。相変わらず早いねえ」

私が挨拶するのに気付いたのだろう、つかさとみさきちも慶一君に朝の挨拶をしていた。

「あ、おはよ～けいちゃん。いつも早いんだね～」

「慶一、おはよー。なんだかいつもより早く目が覚めちゃったぜ」

それぞれ声をかけると慶一君は私達の方にゆっくり向き直って挨拶を返してくれたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

じっと海を見つめる俺の後ろから声をかけてくる3人がいた。

俺はゆっくりと振り向きその3人に挨拶を返す。

「おはよう。こなた、つかさ、みさお。3人とも珍しく早いんだな。」

そう声をかけると3人も

「なんだか早めに寝たらいつもより早く起きれたよ。みゆきさんも

やっぱりこんな感じで起きてたのかな？」
「私もいつもは眠いはずなんだけどね～。なんだかすっきりしてるよ。」
「不思議だけど私も起きれたぜ。でもたまには清々しくていいもんだな。」

3者3様に返してくる様子を見て俺も笑いながら

「これが習慣化すれば大分生活も変わるんじゃないか？この際努力してみたらどうだ？」

そう返すと3人とも苦笑しながら

「私は今回たまたまそうなっただけだし、ネトゲとか深夜アニメは捨てがたいからねえ」
「あはは・・・それでも朝苦手だし・・・」
「そうだよな、やっぱしゆっくり寝てえもんなあ・・・」

と根性のない事言っているのを聞いて俺はため息一つついて呆れていたが、俺は3人に話すべき事を話さないとと思い3人に声をかけた。

「3人とも、後で他のみんなにも話すけど今日はちょっと付き合って欲しい場所があるんだけどいいかな？」

俺の言葉に3人はハテナマークを頭にとばしつつ

「付き合って欲しい場所？それって？」
「みんなも連れて行かないといけないとこなの？」
「私は別に構わないけどな。」

そう答えると俺も真剣な顔になって

「うん。とても大事な事だから、みんなにも来てもらいたいんだ。」

そう伝えたのだった。

こなたｓｉｄｅ

突然慶一君がみんなにも付き合って欲しい場所があると話を振ってきた。

私達は戸惑いつつも返事していたが、ふいに見せた慶一君の真剣な表情を見てこれは何か大事な事なのかもと考え、それなら一緒に行こうと思い慶一君に

「わかったよ。なにか大切な事なんだね？私達でいいなら一緒に行くよ。」

そう返事をするとつかさも真面目な顔になって頷きながら

「私もいくよ？私達がいないといけないことみたいだし」

慶一君に返事をしていた。

みさきちはあまり深く考えずに

「来て欲しいっていうならついてくぜ？」

と言っていたがその３人の返事を聞くと慶一君はどこか安心したよ

うな顔になって

「ありがとう。俺の我侭に付き合ってもらってすまないな。」

という慶一君に私は首を振って

「気にしなーい。私達の我侭に付き合ってもらう事もあるんだからこの位おやすい御用だよ。」

親指をびしっと立ててそう言うと慶一君は

「ありがとうな、みんな。」

と言ってくれた。

慶一ｓｉｄｅ

目的はまだ明かしてはいなかったものの、俺の頼みを聞いてくれた3人に俺は感謝をしつつ朝食後に集まって欲しい旨を伝えて俺達は朝食を取る為合宿所へと戻っていった。

朝食後にみんなにさっきの話をするとみんなは少し不思議そうな顔をしていたが、それでも一緒に行くと言ってくれたのだった。

いくつかの準備を済ませて持ち物の最終確認をしていると親父が俺の部屋に入ってきた。

「・・・慶一、覚悟はできたんだな?」

俺の背後から真剣な声で俺に問い掛けてくる親父に向き直り俺もゆ

っくりと力強く頷いて

「ああ。俺は今日、自分の過去と向き合う。本当は逃げ出したいほど怖いけど、みんなも居てくれるから・・・みんなが俺に過去と向き合う勇気をくれたから・・・だから俺は・・・過去のしがらみに決着を付ける。」

俺の決意を聞いて親父は瞳を閉じて腕を組みしばらく思案していたがやがて

「・・・わかった・・・私も見ていてやる。だからぶつかって来い、そして乗り越えろ。この先に進む為にな・・・」

そう激励してくれる親父に俺は力強い頷きで返してみんなの待つ外へと向かうのだった。

外に出るとみんなは俺を待っていてくれたので俺は

「悪い、待たせちまった。それじゃ行こうか。」

とみんなに声をかけるとみんなも「それじゃ行こうよ。」と言い、合宿所を後にした。

俺はみんなを引き連れて一昨日に登った山へと歩を進めて行く。

一昨日の事件の事もあり、山チームとして一緒に行ったかがみが俺の目的地があの山にある事に気付き、慌てながら俺に聞いてきた。

「け、慶一くん。目的地ってあの山にあるの？一昨日の事もあるし、危険じゃない？」

というかがみに俺は

「大丈夫さ。今回は猪の襲撃もたまたまだったし、そこまで登るわけじゃないからね。みんなも心配しないでいいよ？」

何人か、特に山チームの面々は緊張してるようだったので俺はその緊張を解かせるためそう言うと山チームのメンバーは少し安心したようだった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君の目的はあの山にあるようだったが、かがみたちはどうやらあの日あの山へ登ったらしくその時に起きた猪襲撃事件の事を思い出してか少し緊張気味だったようだ。

そんなかがみ達に慶一君が安心させる言葉を言ってみんなの緊張が和らいだようだった。

「こなた、慶一君に一緒に来てくれって最初に言われたのあんたたちなのよね？目的地とか聞いてる？」

かがみの質問に私も困惑しつつも

「いや、私も慶一君には一緒についてきて欲しいとだけしか言われてなくてねー」

そう答えるとかがみは腕を組んで考え込んでいた。

「私も何も聞いてないんだよね。」

「私もだな。とりあえずついていくしかねーとおもうぜ？」

つかさとみさきちもそう答える。

「うーん。大切な事って先輩いってたんだよね？岩崎さんわかる？」

ゆーちゃんが考え込みながらもみなみちゃんに話を振るとみなみちゃんも困惑しつつ

「・・・私にも検討がつかないかな・・・でも行ってみればはっきりするのなら行くしかないよ・・・」

そう答えるとひよりんも頷きながら

「とにかくついて行こうよ。そうすれば答えは出るはずだから」

そうひよりんも言う。

八坂さんと永森さんも困惑の表情で

「先輩の事に関しての事なのかな。どう思う？やまと。」

「おそらくそうだと思うけどまだはっきりとはわからないわね・・・」

そう話しているのが聞こえた。

これまで言葉を発さずにいたみゆきさんと峰岸さんが

「・・・実はさっき慶一さんの部屋の前を偶然通りかかった時に慶一さんのお父さんとの会話を聞いてしまったのですが、なんでも今

回の事は慶一さんの過去に関係してる物らしいですね・・・」

「私も高良ちゃんと一緒に聞いていたから間違いないと思うわ。」

二人から出てきた過去という言葉にみんなも色々憶測を飛び交わせて話をしていたが私は一人

（慶一君の過去、か・・・）

みんなとその事について話しながら考えていた私だった。

そして慶一君の過去の事について何も知らない黒井先生とゆいねーさんもその事を聞いてきたので私達が聞いてきた話を二人にして事情を説明した。

慶一ｓｉｄｅ

一昨日の半分も登らないうちに途中でルートを変えて俺はある場所へとみんなを引き連れて向かっていた。

ここから先は上には登らないコースでもあり、みんなも少しは楽だろうなと思いつつ目的地を目指した。

しばらく歩くと少し開けた切り立った断崖に近い場所にぽつんと立っているお墓が見えてきた。

俺はお墓の前に立ち、みんなの方を振り向いて

「みんな、ここが目的地だ。ちょっと色々する事あるから少し待っててくれるか？」

俺がみんなにそう言うとみんなも頷いてくれたので俺はお墓の周りを掃除したり花を換えたりといった事を始めた。

そんな俺の行動をみてみんなもお墓周りの掃除とかを手伝ってくれたりしてくれたのだった。

俺はみんなにお礼を言うとお墓に向き直り線香に火をつけてお墓に添えて俺は手を合わせてしばらくそのままでいた。

こなたｓｉｄｅ

慶一君が連れてきてくれた所は切り立った崖の側にある小さなお墓だった。

あそこまで丁寧に掃除をしたりする所を見ると、そのお墓は慶一君にとっても大事な物だと思えた。

私達はお墓に手を合わせてしばらくじっとしている慶一君を後ろで見ながら小声で話をしていた。

『誰のお墓なんだろうね？』

『慶一くんにとって大事な人の、なのかも』

『ねえ、ゆきちゃん。お墓に書かれてる名前見えた？』

『ちょっとここからだと遠目でよくわかりませんね・・・』

『目的地はわかったけど結局大事な部分はまだわからないままね・・・』

『たぶんもうすぐはっきりするんじゃねえか？』

『なんとなくですけどさっき高良先輩達が言っていた慶一先輩の過去に関係あるんじゃないでしょうか？』

『・・・となると・・・何となく予想できる答えがありますね・・・』

『私にはさっぱりっスね・・・先輩との付き合いもまだ短いですし・・・』

『やまとはわかる?』

『なんとなく、だけどね・・・』

八坂さんの質問に答える永森さんの言葉にみなみちゃんが

『永森先輩、先輩の予想ってやっぱり・・・』

永森さんにそう聞くと永森さんもみなみちゃんに頷きながら

『ええ、多分あなたが考えている事と同じだと思うわ・・・』

そう答え、そして

『・・・先輩の・・・ご両親のお墓じゃないかしら・・・』

という永森さんの言葉にみなみちゃんもこくりと頷いていた。

私達はその答えに驚きながらまだお墓に両手をあわせている慶一君の後ろ姿に目を戻したのだった。

そしてしばらく慶一君を見ているとぽつりぽつりと何かを話し始めたのを私達は黙って聞いていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

お墓に両手を合わせながら今までの事を思い出し、自分の歩んでき

た道を振り返っていた。

そして改めて両親の眠るお墓を見てそして後ろに居るみんなの事を考えながら俺は気がつくとお墓に向かい語りかけ始めていた。

「父さん・・・母さん・・・ずいぶん時間かかっちゃったけど、俺ようやくここに来れたよ?つい最近まで俺は父さん達の事を知らずに生きてきた。そして本当の両親の、父さんと母さんの事を知らされて俺は困惑したよ・・・俺はずっと龍神の家の子だと思って生きてきたんだから今更俺に本当の両親がいる事を知らされてもその事実は俺にとっては受け入れがたいものだった。」

そこで一端言葉を切り一つため息をついてさらに言葉を続ける

「それを知った頃の俺は大分荒れたっけな・・・。そしてその結果親友を再起不能に追い込む事までもやってしまった。けど、その親友に促されて俺は父さん達の事、龍神さん達の事を受け入れるためのきっかけを作ることができたんだ。そして何とか立ち直った俺は中学時代に二人の年下の友人と知り合う事が出来た。その二人との出会いは俺のすさんでいた日常を変えるきっかけにもなってくれた。その後中学を卒業して父さん達と俺が暮らしていた本当の家に高校に上がる頃に移り住み、少しでも父さん達の事を知りたいと思い、俺はもう一度父さん達に向き合うきっかけを探していた。」

俺はみんなのほうに向き直ると左手を向けて

「さらにもう一歩勇気を欲しがっていた頃に俺は・・・見えるかい?父さん、母さん。俺はあの子達に出会ったんだ。あの子達との生活はとても楽しくて、俺はあの子達を大切に思った。そしてみんなも俺を大切に思ってくれた。そしてそんなみんなと過ごすうちに俺

はもう一歩の勇気をみんなからもらう事ができたんだ。その勇気は仲間を守りそして、こうして俺の過去と向き合う原動力にしてくれた。」

そしてまたお墓の方に向き直り

「今日俺は父さんと母さんの事を受け入れるつもりで、過去を乗り越えるつもりでここに来たんだ。とても怖かったけどみんなが俺を後押ししてくれたからここに立つことが出来た。俺を生んですぐに居なくなってしまった父さん達の事を一時は恨みもしたけれど、今は凄く感謝してるんだ。俺をこの世に送り出してくれた事に、そして・・・みんなと出会わせてくれた事に・・・だから・・・ありがとう・・・父さん・・・母さん・・・俺を生んでくれて・・・ありがとう・・・」

最後の言葉を言い終えると同時に俺はこみ上げてくるものを抑えられずに肩を震わせて泣いていた。

そんな俺の横に親父が立ってお墓に手を合わせながら親父もお墓に語りかけた。

「森村さん。心配しなくても大丈夫です。慶一は、あなた方の息子さんは立派になりましたよ?一時は自分の運命を呪いつつもそれでも希望を捨てる事をせずにそして私達の息子である事を受け入れて生きてきました。慶一を支えてくれる友人が出来た事で私自身も安心が出来るほどになりました。これからもあなた方の息子さんはあなた方の分もしっかりと生きていく事でしょう。私も慶一の支えになってやるつもりです。どうか安心してください。」

その親父の言葉に俺は立っていることが出来なくなり、両膝をつい

てお墓の前で泣きつづけていた。

そんな俺の側にみんなも泣きながら集まってきた。

こなたｓｉｄｅ

慶一君は自分の本当のご両親に自分の今までの思いをぶつけると慶一君は感極まって泣き始め、龍神のお父さんの言葉はさらに慶一君の心に響いたようでその場に立っていることも出来なくなって慶一君はその場に両膝をついて涙を流しながらうつむいていた。

慶一君の言葉を聞いて私達もみんな慶一君の私達への思いを知り、みんなもその気持ちに打たれて泣き始めていた。

私達は泣きながらも慶一君の側へと駆け寄っていった。

「慶一君、ありがとう。私達をそこまで思ってくれる気持ち、嬉しかったよ？」

「勇気をくれたのはあんたも同じよ。そうでなかったら私はあんたと話してこうして友人になる事だってなかったもの。」

「けいちゃんはわたしにも勇気をくれたんだよ？だからこうしてみんなと仲良くなれた。私の日常を変えるきっかけだったんだから。」

「私の世界観を変えてくれたのも慶一さんです。あなたとの出会いは私に新しい世界を教えてくれたんですから。」

「変わったのは慶ちゃんだけじゃないわ。私達もよ？みんなとつないでくれたのも慶ちゃんのおかげなんだから」

「お前と話すこと、遊ぶ事は悪くねーって思える。それにお前が居なかったら私はここに遊びに来る事もなかったんだからな。このきっかけもお前が作ってくれたんだぜ？」

「私も先輩があの時助けてくれたから今でもこうしてやまととつながっていられる。本当に感謝してるんですよ？」

「こうと私の仲を取り持ってくれたあの時から私は先輩とこうとする事がより楽しくてかけがえのないものになったわ。その影響は私が目標にしていた高校を蹴らせるほどのものだった。そしてさらに私に新たな友人すらも与えてくれた。これも先輩が変えてくれた事なのよ？」

「私は先輩の居る高校を目指したけど、その目標を持ってる人は居ないって思ってた。でも先輩は同じ目標を持った岩崎さんを、田村さんを私に紹介してくれた。高校に上がったとしても仲良くやっていける友人を先輩がくれたんです。」

「・・・私は・・・高校に上がってからはみゆきさんだけを頼る事になるかもしれないと思っていました・・・けど、みゆきさんを通して先輩と知り合って、先輩はさらに同じ学校を目指す友人を私に紹介してくれました・・・高校に上がっても一人じゃない、そのきっかけは先輩がくれたものです・・・」

「先輩と私はまだ付き合いは短いっス。けど、こうちゃん先輩が森村先輩とつながってる事を知り、そしてそのつながりは泉先輩達も私の前に連れてきてくれました。そして同じ学校を目指す二人とも出会うきっかけを作ってくれたのは先輩と私が秋葉腹での一件で出会えたからだって思ってます。私の転機にも先輩はかかわってくれ

たんっスよ。その事をすっごく感謝してるんですから。」

「森村ー、これからもこいつら大切にしてやらなあかんで？こいつらに悲しみの涙流させてみい、うちがきっちりしばいたるから覚悟しいや？」

「ゆたかを救ってくれたあの時からゆたかは少し変わったようだった。君には感謝してるんだよ？だから、これからもこなたやゆたかの事守ってやってね？」

みんなで慶一君に声をかけると慶一君は何度も頷きながら涙をこぼしつづけていた。

私達も慶一君が落ち着くまでの間一緒になって泣いていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

俺はみんなに自分の本音を語った。

そして俺の本音を聞いたみんなも自分が変わるきっかけを俺が与えたのだと言ってくれた。

その言葉がとても嬉しくて、そして人の出会いというきっかけはともすればそれに係わる人達の運命すらも変える力すらあるのだと言う事を改めて思い知った。

俺はみんなと共に泣きながら改めてこの場にみんなとともに居られる幸せを感じながら両親へ再度心の中で（ありがとう）と言うのだった。

しばらくして落ち着いた俺達は再びお墓の前に立ち、今度はみんなで手を合わせて心から両親への冥福を願った。

俺はみんなに向き直ると

「・・・みんな、ありがとうな。改めて、これが俺の両親の眠っているお墓さ。両親の死後、親父達がお骨を預かってこの場所にお墓を建ててくれたらしいんだ。俺をなすりつけあい死んだ両親を罵倒する親戚達の所には安心しておいて置けないって気を使ってくれてな。ここの事を知ったのは一昨年の山篭りの為に合宿所を使った時親父が教えてくれたんだ。」

一端言葉を切り軽く深呼吸してさらに言葉を続ける

「その頃の俺は父さん達の事を知り、親父達の事を聞かされて俺自身不安定な時だったからな。結局その時はここに来ることも出来なかった。でもみんなと出会い一緒に過ごすうちに俺は俺の過去と向き合おうという気持ちが少しずつ膨らみ始めて来ていた。後もう一押し欲しいと思っていた所に勉強会でのこなたの一言が俺の背中を後押しする事になった。いいきっかけが出来たと思ったもののやはりまだ不安のあった俺はその一押しの勇気を出したい一心でみんなを誘い、この旅行に連れて来た。」

目を伏せしばしの間を取り最後の締めの言葉を続ける

「・・・情けない話だけど一人で向き合う事が怖かった。だからみんなにも側にいてもらいたいと思った。だから本当の目的を隠したまま今日までみんなに付き合ってもらったんだ。みんなも側に居る、後は俺の勇気一つと思っていた時、一昨日の事件がおきてみんなを危険に晒しかけ、必死にみんなを守った時俺はようやく今日の決意

を固める事ができた。そして、みんなにも父さんと母さんに会って欲しいという思いがあったからここにみんなを連れてきたんだ。」

とりあえずの事情を話し終えて俺はみんなの顔を見ながら

「・・・結局は自分の目的の為にみんなを利用する形になったよな？ごめん、結局言い出せなかった。全てを終えてから告白してるんじゃみんなも呆れるよな・・・」

という俺の言葉にかがみは腕を組んで俺を睨みつけつつ

「・・・そうね、本当呆れるわね。私は、いえ、私達は慶一くんの事を信頼してきたわ。そして慶一くんも私達を信頼してくれてると思ってた。だからこそ私達に話して欲しかったわよ。あんたの決意を、目的をさ。」

その後に続きこなたも少し不機嫌な表情で

「そんな私達が慶一君にこの事を相談されて嫌な顔すると思う？私達が信頼した慶一君の悩みだもん、話してくれたなら私達はちゃんとそれに応えてあげられたよ？」

そう言い、それに続いてつかさも

「わたしたちにできる事は大した事じゃないのかもしれないけど、いつもけいちゃんを頼ってきたわたしだから頼ってくれた時にはわたしはそれに応えてあげたいなって思うよ？」

みゆきも厳しい表情で

「それとも慶一さんにとって私達はそんなにも頼りになりませんでしたか?相談する価値もないと思ったのですか?」

俺に問い詰めてくる。

みさおとあやのも少し怒ったような表情で

「私は慶ちゃんを信頼していたけど、慶ちゃんにとっては私への信頼ってその程度だったの?」

「お前にとって私はそんなに信用ねーやつだったんか?私はお前の事信用してるのによ」

と言う二人の言葉にも困惑しているとさらにこうとやまとも

「先輩、先輩に助けてもらった事を私は忘れていませんよ?あの時から私は何かあった時には先輩に応えたいと思って来たんです。」

「こうとの事、そして一昨日の命がけの行動に私はいつか先輩に恩返しが出来たらと思ってきたわ。そして今がその時だったなら先輩の胸の内、話して欲しかったわよ・・・」

そう強い口調で責めてくる、そしてゆたかたちも

「先輩、私はあの時先輩に助けてもらった事、そして今回お友達を紹介してもらった事に恩を感じています。まだ同じ学校に通ってはいない私ですけどそんな先輩に応えてあげたいと言う気持ちはあるんですよ?」

「・・・小早川さんと田村さんと知り合うきっかけをくれたのも先輩です・・・私もその事には感謝しています・・・だからこそ先輩の悩みを少しでも軽くできるなら・・・私にも話して欲しかったです・・・」

「私もあの時助けてもらった事忘れていません。先輩とはもっとも付き合いの短い私ですがそれでも私に友達をくれた先輩の為に何かしてあげたいと言う思いはあるっスよ？」

そして最後にこなたが俺に

「ね？簡単な事だったんだよ。慶一君が勇気を振り絞って私達に一言相談してくれればよかったんだ。でももうわかったでしょ？私達の気持ちがさ。もしまたこんな事があるときはちゃんと相談してよね。」

と言う言葉に俺は自分の愚かさを悔いてこなた達に頭を下げて

「そうだな、そうだったんだよな・・・ごめん、そしてありがとう。今度はちゃんとみんなに言うよ。だから今回の事は許して欲しい・・・」

と言う俺の謝罪にみんなはさっきまでの不機嫌そうな顔はどこへやらでにっこりと笑って大きく頷いてくれたのだった。

そしてすべき事を終えた俺達はお墓を後にしたのだが、その時俺はもう一度お墓の方に振り返り心の中で（来年からは毎年来るからね。またな、父さん、母さん）そう呟いてから俺達は山を降りた。

俺は今日、自分の過去の一つと決着をつけた。

一つ大きな壁を乗り越えた俺はようやくここから先に進んでいけると言う事を実感していた。

その時にはみんなと共に進みたい、そしてみんなとならばどんな困

難が来ても跳ね返せる。

俺達はさらに強い信頼で結ばれる事になったのだった。

旋律達の夏休み1～海へ、第六話～

両親の墓参りの後俺達はさらに強い信頼で結ばれた事を確認して合宿所へと戻って行った。

その日の夜は食事を済ませた後はみんなで一つの部屋に集まりずっと夜が明けるまでみんなでこれまでの事、これからの事、それ以外にもいろいろな事を語り明かした。

外が明るくなってくる頃俺達は揃って夜明けを見ようということになりみんなで海岸へ赴いていた。

じっと水平線を見つめる俺達。

徐々に水平線から太陽が顔を出し始めるのを俺達は無言のまま見つめ続けていた。

「綺麗だね・・・」

昇ってくる朝日をみながら誰ともなく呟くその言葉にみんな揃って頷いていた。

こなたｓｉｄｅ

登ってくる朝日をみんなで見ながらもちらりと慶一君の横顔をみんなが見ていたのを私も慶一君の顔を見たときに気付いた。

毅然と顔を上げて朝日を見つめる慶一君の顔はどこか吹っ切れたような顔になっていて以前まであった陰りのような表情が消えていた

のを見て私は安心していた。

（一つ慶一君は乗り越えるべき事を乗り越えられたんだな・・・）

慶一君の顔を見ながらそう私は心の中で思っていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

その後は一端合宿所に戻って午後から遊ぶ予定を立てて午前中は少し休む事になりそれぞれしばらく眠る事にした。

しばらくして目覚ましのアラームが鳴り俺は出かける準備をする。

今日はまた海に行く事になってるのでその支度を終えた俺は荷物を持って部屋を出る。

玄関に来た時あやのとみさおが丁度準備を終えて出てくる所だった。

「よう、二人とも昨日は思わず徹夜になっちゃってたけど少しは休めたか？」

声をかけると二人とも笑いながら

「あら、慶ちゃん。少しは眠ったから平気よ？慶ちゃんこそ大丈夫？」

「私はこれくらいなんてことねーぜ？とはいえちびっこ達はまだ起きてないっぽかったけどな。」

と言う言葉に俺も苦笑しつつみさおに

「こなたの他につかさもなのか？一応聞くけどさ。」

そう尋ねるとみさおも

「柊妹もだったな。まあ、ちびっこはともかく柊妹は今回の徹夜ってはじめての経験なんじゃねえか？まあ無理もないとおもうぜー？」

そう答えるみさおに腕組みして考え込みつつ

「まあ、無理させてもいいって訳でもないしな・・・とりあえず俺達は先に行くか。」

俺が二人にそう促すと二人も頷きながらも

「そうね。でも、柊ちゃんや高良ちゃん、それに小早川さん達のトリオもすでに先に向かったわよ？」

「そういやそうだっけな。けど八坂と永森はまだみたいだったな。先生達も遅れていくらしいから場所取りしとこうぜ？」

他の数名が先に行っている事を知り俺も

「そうだな。みんなを待たせるのも悪いから行こうぜ？」

二人に促すと「行きましょ？」「行くかー」と頷いて俺の後についてきた。

海岸につくとかがみたちがすでに準備を終えて俺達を待っていたようで俺達に気付くと

「あ、慶一くんー、日下部ー、峰岸ー、遅いよー？ほらこっちこっ

ちー」

そう大声で俺達を呼び手を振っていた。

俺達は苦笑しつつもかがみたちの所へと向かいかがみに

「すまん遅れた。でもかがみやみゆきだけでなくゆたかたちも先に来てるとは思わなかったよ。」

そう言うとかがみも笑いながら

「昨日が昨日だったし遊べるのも後1日しかないからね。時間がもったいないなって思ったらつい急いで準備しちゃってたわ。」

かがみの言葉に俺は今回の旅行の目的が遊びが本当は二の次だった事を思い出し、申し訳なさそうな顔で

「・・・ごめん、かがみ、みんな・・・本当はもっと楽しんでもらいたかったけど結局は俺の都合の所為だよな・・・思い出を作るはずの旅行だったのに情けない話だ。その事ばかりを気にしてこの数日間俺も本当の意味で楽しめてなかった・・・なのにみんなまでもそんな俺の身勝手の所為であまり楽しめていないのでは？と思うと何か申し訳なくてな・・・」

落ち込みながら言う俺にかがみは俺の頭に軽く拳を落として

「今更言っても始まらないわよ。それよりも残りの時間を楽しむ事を考えればいいじゃない。そして今回慶一くんがそんな風に私達に悪いって思ったのなら今度はしがらみなしの旅行とか企画しなさいよね。」

呆れ顔をしつつも最後は笑顔で俺にそう言うかがみ。

「そうですよ？慶一さん。もう済んでしまった事は仕方のないことです。ですが、私達はまだここに居ますしここに居れる時間も残っています。今まで心から楽しめなかった分はここでぶつければいいんですよ。そして、慶一さんが言ったようにまたそうしたいと望んで実行すればいい事ですよ。私達には望むならそれが出来ると慶一さんが言ってくれたんですから。」

いつもの柔らかな微笑をたたえながら俺に言うみゆき。

他のみんなも二人の物言いにうんうんと頷いて見せてくれた。

俺はしばらく二人の言葉を聞いて目を伏せて考え込んでいたがやがて

「そうだな・・・少し悪い方へ考えすぎてしまうようだ、俺の悪い癖だな・・・よし、残りの時間、そしてまた来年もみんなとどこかへ行きたいし楽しみたいから今は過ぎた事は振り切って心からみんなと楽しむ、そう決めたよ。今からの俺は過ぎた事にはとらわれない俺としてみんなと遊ぶぞ。」

俺の決意にみんなは笑って頷いてくれた。

みんなとの話を終えて俺はとりあえず場所取りをしてしまおうと思い拠点にすべき場所にビーチパラソルを立てて拠点を示した。

「よし、こんなもんだろう。」

と言いながら荷物をそこに降ろした時黒井先生達と共にこなた達も

ようやく現れた。

まず先に来たのがこうとやまとの後輩コンビ。

「先輩、遅くなってすいません。」

「まったくよ。先輩を見かけたときには一緒に行こうって言ってたのにこれだもの」

そんな二人のやり取りに苦笑する俺だったがその後に続いてこなた達もやってきた。

「やー、ちょっと遅れちゃったよー」

「おねえちゃん、けいちゃん、それにみんなもごめんね～」

ところらは中々起きれなかった二人。

「森村、今回も場所取りすまんな。」

「荷物番はしてるから思い切り遊んでおいでー」

「私もお前達の動向には目を光らせておく、安心して楽しんで来い。」

大人チームが俺達にそう言っていたので俺達はその言葉に甘える事にした。

「おーし、んじゃパーっといくかー、いくぞみんなー」

と言う俺の声にみんなも「「「「「「「「「おー！」」」」」」」」」という声と共に海へと突っ込んでいった。

「慶一さん、よろしければ泳ぎを教えていただけませんか？」

「慶一先輩、私もお願いします。」

泳ぎを教わりたいというみゆきとゆたかに俺は泳ぎを教える。

「よし、みゆきは顔を水につけるのを怖がってたよな？なら顔を水につけずに泳げる平泳ぎのやり方を教えるか。ゆたかはあまり無理はしないようにな。みなみ、ゆたかのフォローを頼むよ。」

ゆたかが心配で一緒に来ていたみなみに声をかけるとみなみはコクリと頷いてゆたかの側について泳ぎの教えのフォローをしてくれた。

「そう、そうだ。みゆきもゆたかも中々飲み込み早いな。」

みゆきもゆたかも結構飲み込みが早くてちょっとコツを教えてやればすぐに泳げるようになった。

「はあ、はあ、こんな感じでいいんでしょうか？」

「これなら確かに息継ぎしないでも結構な距離泳げそうですよね。」

みゆきとゆたかは思いがけない成果に二人して顔を見合わせて笑いあっていた。

みなみもそんなゆたかたちを見てほっとしているようだった。

二人に泳ぎを教えた後は再び少し深い方で浮き輪に乗ってゆったり浮いているこなた達の所へと泳いでいった。

「・・・でさー・・・なんだよねー。くさいよねー」

「くさいわよねー、それであれだけどさ・・・」

「こなちゃんそれは違うよ・・・という感じじゃない？」

何やら雑談を交わしている3人の近くまで泳いで行き声をかける。

「よっ。楽しそうだな。3人とも」

今回は脅かさないように近づいていたので3人とも普通に

「あ、慶一君いらっしゃーい。」

「みゆきとゆたかちゃんに泳ぎ教えてたみたいね。そっちは済んだの？」

と言うかがみの質問に俺は

「ああ。二人とも飲み込みが早かったからな。コツを教えてやったらあっという間だったよ。」

と状況を説明するとつかさも少し考える仕草をしながら

「わたしも少し自信ないから後で教わろうかな？」

と言っていたので俺は苦笑しながら

「それは構わないけど、少し苦労しそうかもしれないなあ」

と言いにくそうにいうとつかさはいきなり

「けいちゃんのくせにー！！」

と叫んで怒ってしまったので俺は驚いてつかさに平謝りしていた。

「ごめん、ごめんよつかさ。このとおり」

両手を合わせて頭を下げつつ、つかさに謝り倒しているとそんな俺達の様子を見ていたこなたが

「あはは。つかさ、どんまい。それにしても・・・」

そう言いながら俺の顔をじっと見てきたので俺はなんだか照れくさくなってこなたから視線を外した。

「な、何だよ、俺の顔じっとみて。海藻でもくっついてるか？」

照れながらこなたにそう言うとこなたはなんともいえない柔和な笑顔で

「ううん、そうじゃないよ。慶一君の顔がさ、今までと違って凄く明るくなったなって思ってさ。」

その言葉にかがみも続いて

「そうね。あのお墓参りの以前の慶一くんは普通にしてるようでどこか余裕がない感じがあったけど今の慶一くんは心のつかえが取れたようなすっきりとした顔してるもんね」

そういうとさっきまで怒ってたつかさも急ににっこりと笑顔になって

「うん。わたしもそう思うよ。いまのけいちゃんはとっても優しい顔をしてるよ。」

と言う3人の言葉に俺は顔を赤くして

「ははは。そ、そうかな。でもあの事を終えてからは確かに俺の心は以前までに比べて大分すっきりした感じはあるよ。」

そう言った後俺はみんなに笑顔を向けながらさらに言葉を続けて

「それに、みんなの俺への信頼の程がわかったしね。だから今度は俺もみんなに言われたようにみんなを信頼して話せることはみんなに話して行きたいって改めて思ったから。」

と言う俺の言葉にみんなも笑顔を俺に返しながらも顔を少し赤らめていたようだった。

「その言葉、信じるからね？もし約束破ったら酷いよ？」

こなたが少し怒ったような表情をしつつ俺に言ってきた。

「約束するよ。俺を信じてくれるみんなに応えるためにさ。」

こなたのその言葉に力強い頷きと言葉で返事をする俺だった。

俺のその言葉にかがみとつかさも笑顔で頷いてくれ、その後は一端海岸に上がろうということになりこなたたちの浮き輪を引っ張りながら泳いで海岸へと戻って行った。

海岸へ戻ると俺を待っていたのはビーチボールを片手に仁王立ちして俺が戻るのを待っていたみさおだった。

「戻ってきたか慶一。もう一度これやらねーか？」

みさおはビーチバレーをもう一度やりたいようで俺にそう持ちかけてきた。

初日の屈辱を思い出した俺はみさおの提案に頷いて。

「よおし、初日での屈辱は晴らしてみせる。今度は負けんぞ?みさお。」

そう応えるとみさおは満足そうに頷いて

「よーし、よく言ったー。あの時の二の舞にさせてやるぜー!」

という事でビーチバレー再びという事になり、今回はかがみ達や後輩組みも加わっての多人数戦となった。

じゃんけんでのチーム分けの結果

みさおチーム

みさお、つかさ、ひより、こう、みゆき、ゆたか

慶一チーム

慶一、あやの、かがみ、やまと、みなみ、こなた

となった。

俺はみさおに猛抗議をするのだった。

「おい!みさお、またその組み合わせなのかよ!陰謀か?これは何

かの陰謀なのか！？」

その抗議にみさおは鼻で笑い飛ばしながら

「へえ？慶一、自信ないんだ？確かに一度負けたシチュだけどさ、男なら同じシチュでも乗り越えて勝ってみろよ。悔しかったらなー」

人を小ばかにしたように言うみさおに俺は

「・・・上等だ、やってやるぜ！あとで泣くんじゃねーぞ！」

挑発に乗ってしまう俺、そんな俺を見て他のみんなは苦笑を浮かべていたのだった。

かくしてビーチバレーリベンジ戦スタート。

今回はかがみたちのサポートもあってみゆきやこうに惑わされかけつつもなんとか相手の攻撃を凌ぎつつポイントを重ねていく俺達。

「うりゃっ」

みさおのアタックを上手く拾う俺。

「はい、柊ちゃん！」

俺のレシーブをトスしてかがみに託す

「ナイス峰岸、いっくわよー！」

強烈なアタックで相手のコートにボールを叩き込むかがみ

みさおも奮闘するが、かがみとこなた、そして意外にもみなみの好活躍で俺達はかなり戦力的にもいい状態だった。

しかしみさおたちも負けておらず、要所要所で穴を突かれて一進一退の攻防になっていた。

後もう1ポイントで勝負が決するあたりになり、みゆきとこうを使った誘惑作戦が通じなくなってきた事を悟ったみさおはここでまさかの行動に出た。

みさおのレシーブからこうのトス、みゆきのアタックにつなげた瞬間みさおはみゆきの背後に回った。

かがみがレシーブして俺がトスをあげようとした瞬間それは起こった。

みゆきの背後に回ったみさおはみゆきのブラの紐を解いたのだった。

落ちるみゆきのブラ、そして止まる時間・・・・・・。

その間わずか数秒、みゆきの悲鳴、そして事態を把握した俺が速攻で顔を背けるのと同時に「みるなー！！」というかがみの絶叫とともに顔を背けた方からかがみの拳が飛んできてもろにカウンター気味に俺の顔面に食い込むかがみの拳。

俺は盛大に鼻血を吹いて昏倒する。

かがみｓｉｄｅ

日下部が引き起こした事態にパニックになった私は思わず顔を背けた慶一くんの顔面に拳を打ち込んでしまった。

それがもろにカウンターになり慶一くんが鼻血を吹いて昏倒するのを見て私は我に帰って慌てて慶一くんのところに駆け寄った。

「慶一くん、大丈夫？しっかりして、慶一くん。」

慶一くんを揺すってみるがピクリとも動かない。

私はそんな慶一くんを見ながらただただ慌てていたが、水着を直して私たちの側に駆け寄ってきたみゆきが慶一くんを診てくれた。

「・・・軽い脳震盪を起こしているかもしれませんね、とりあえずは寝かせて様子を見るしかないですね。」

みゆきの言葉に一応安心する私だったが、みゆきの寝かせると言う言葉にこなたがニヤリといたずらっぽい笑みを浮かべているの見て

「・・・こなた、あんた何か企んでるでしょ？」

という私の言葉にこなたは

「まあ、見ててよ。とりあえず慶一くんをパラソルのある日陰まで運んでいこう。みんなちょっと手伝ってー」

こなたがみんなを呼ぶと八坂さんや日下部、岩崎さん、田村さんが慶一くんを運ぶのを手伝ってくれた。

パラソルの所まで慶一くんを運び、とりあえず鼻血の止血をして頭

を冷やしたあとこなたは日下部に手伝ってもらいながら慶一くんを砂に埋め始めた。

「ちょっとこなた、前それやって痛い目にあったの忘れてない？面白かったけどさ。」

と言う私の指摘にこなたはニヤリと笑いつつ

「今回は女体じゃないから大丈夫だよ。」

というこなたの言葉に初日でのあれを思い出して吹き出しながらも

「お、思い出させないでよ。ってそれは・・・ぶふっ！」

またしても吹き出してしまう私達だった。

慶一ｓｉｄｅ

かがみにノックアウトされてしばらくして体にかかる重さに俺は目を覚ました。

すこしぼーっとする頭で自分の状況を見てみるとまたしても砂に埋められているようだった。

しかし今回はあの時とは様子が違うようだったのでよく見てみると自分の体の上に墓石のように砂を固めらていてそこには”慶一君の墓”と言う文字が確認できた。

俺を見ながらクスクスと笑っているこなた達を見つけ

「こ〜な〜た〜！またお前かー！！」

と言うが早いか今回はすぐさま這い出してこなた達を追い掛け回す

「やっほー、そう簡単には捕まらないよー」

「慶一、お気の毒だったなー」

「待ちやがれこらー！！」

そんな3人を他のみんなも笑いながら見ていた。

そして二人を捕まえてデコピン（強）の刑を執行して一騒動に区切りがついたのだった。

俺はかがみから受けたダメージが体に残っていたらしくこなた達を捕まえたあと軽いめまいを起こして片膝をついた。

デコピンを食らって涙目だったこなた達だったが俺の異変に気付いて

「大丈夫？慶一君。起きてすぐ無理したからだよ」

「慶一、平気か？もう少し休んでろよ」

と言う二人に俺も少し冷や汗をかきつつ

「無理させたのはどこのどいつだ、まったく。でもそうした方がよさそうだな。」

二人に支えてもらいながら再びパラソルの所まで戻るとみんなも

「慶一くん、ふらついてるのが見えたけど大丈夫？」

「顔色ちょっと悪いね、もう少し休んでたほうがいいんじゃない？」

「一応脳震盪起こしていたんですからあまり無理はされてはいけませんよ？」
「そうね、タオル冷やしてくるわ。ここで待ってて。」
「すまない、あやの。脳震盪起こしてたのか・・・しらなかったよ・・・」
かがみたちは俺を気遣ってくれ、あやのもタオルを冷やしに行ってくれたようだ、そしてこうたちも
「先輩、大丈夫ですか？さっきも痛そうでしたし・・・」
「まあ、自業自得かもしれないわね・・・」
やまとはどこか不機嫌そうに言葉の槍を突き刺してくる。
「一応はもう少し休めばなんとかなるだろうさ、やまと、さっきのは不可抗力だよ・・・」
いまだ不機嫌そうなやまとに弁解する俺だった。
「先輩、無理はしないでくださいね。」
「・・・もうすこし・・・休んでてください・・・」
「かがみ先輩の拳強烈そうでしたもんね・・・というか先輩が死んだかとおもったっス・・・」
ゆたかたちも心配をしてくれたが俺は
「心配してくれてありがとう。けど大丈夫さ、だから俺の事は気にしないで残りの時間思いっきり楽しんできてくれよ。」

3人に心配させないようにそう元気な顔で言うと3人とも安心してくれたようだった。

そしてまた残りの時間、俺はみんなが楽しく遊びまわるのをパラソルの下から眺めていた。

日も大分傾いてきた頃俺も大分体が回復してたのでみんなの所にいくとみんなはここで色々写真撮らない？という相談をしていたので俺も混ざってみんなであちこちで写真を撮る事になった。

集合写真もとったけどこなた達にはなぜかツーショットの写真も撮りたいと言われてみんなに付き合った。

かなり照れくさかった事はみんなには言えなかったが・・・

そろそろいい時間になったので俺達は合宿所に引き返してシャワーを浴びたり着替えたりとしながら夕食までの時間を過ごす事になった。

時間まではまだあるので俺は近くの店まで買い物に出る事にした。

玄関で靴を履き外へ行こうとしているとゆたか達がちょうど部屋から出てきていて俺が外へ行こうとしてる姿を見つけて声をかけてきた。

「あ、先輩。どこかへお出かけですか？」

そう聞いてくるゆたかに俺は笑いながら

「ああ。ちょっと近くの店に買い物に行こうと思ってさ。」

そう答えるとゆたかも興味をもったのか

「何を買うつもりなんですか?」

と聞き返してきたので

「花火買おうって思ってね。」

そう答えるとゆたかは

「なら私達も一緒にいってもいいですか?ね?岩崎さん、田村さん。」

二人に声をかけると

「・・・小早川さんが行くのなら私もご一緒します・・・」

「私もお手伝いするっス」

そう答えたので俺は3人に

「わかった。それじゃ3人とも用意してくれ。」

と言う事で一緒に花火を買いに行く事になった。

店への道中にゆたかが

「慶一先輩、今回は色々ありましたけどこの旅行に誘ってもらって本当にありがとうございます。」

俺に対して改まったお礼を言ってきたが俺は

「どうしたんだ？急に。改まって言われると照れるよ。それに今回はあの時も言ったように俺の私用が真の目的だったから本当の意味でみんなが楽しめていただろうかって所が気になってるからね・・・」

複雑そうな表情で俺が答えるとゆたかは笑顔になって

「そんな事ないですよ。確かに先輩の用事がメインだったのかもしれませんけどそれでも私達は楽しんでいますから。本当に楽しかったんですよ？明日帰るのが残念なくらいに。それに受験のストレス解消にもなりました。だから本当に感謝してるんです。」

それに続いてみなみも俺に頭を下げつつ

「・・・小早川さんの言うとおりです。私も受験で煮詰まりかけていた所でしたから・・・今回のお誘い、とても嬉しかったんです。それに新しいお友達もできました・・・」

ひよりもそれに続いて

「二人のいうとおりっス。私もかなり壁にぶち当たっていましたからそんな時にこうちゃん先輩を通してですが先輩が私の同行を許可してくださった時は凄く嬉しかったんですから。それに友達も作れました。先輩のおかげっス。」

俺はそんな3人の言葉に照れながら

「そっか、ありがとう。3にんとも。かがみにも言われたけどさ、

今度はしがらみなしの本当に心から楽しめる旅行を企画するから次も来てくれたなら今度は気兼ねなしに楽しもう。」

俺がそう言うと3人とも笑顔で「はい！」と答えてくれたのを見て俺も頷き返したのだった。

店について俺達は早速花火を選び始めた。

「先輩、こんなのどうですか？」

ゆたかが選んできたのはファミリー用の花火だった。

「それは買っておくか。あとはこれとこれと・・・」

ゆたかの選んだ花火を買い物かごに入れながら俺はドラゴンやら打ち上げ花火やらの派手な物を手にとって買い物かごにつっこむ。

「・・・先輩、そのファミリー用花火にも少しは入っていますがもう少しこれを入れたいです・・・」

みなみはそう言って線香花火を持ってきた。

「確かにこの中のだけじゃちょっと足りないな。よしそれもいれよう。」

みなみの持ってきた花火をかごにいれる。

「先輩、こんなのはどうっスか？」

ひよりはロケット花火を持ってきた。

「面白そうだな。よしそれも追加だ。」

ロケット花火も買い物かごに入れて一通り選別を終わらせて支払いを済ませて戻る事にした。

合宿所に帰ると丁度夕食の準備が出来ていて食事をしながら俺達はみんなに花火の事を伝えた。

夕食が終わり俺達は浜辺へ後始末用のバケツ等を持って花火をしに出かけた。

ファミリー用の花火をみんなに配り早速花火を始める俺達だった。

「うわー、綺麗だね。」

「こなちゃん、こっちも綺麗だよ～」

こなたとつかさはお互いに花火を見せ合いながら楽しんでいる。

「これもいいですね。」

「高良ちゃんのはいい感じね。私のは黄色い色が出てる花火よ?」

「あやのも高良のも綺麗じゃん。私はなんといってもこれだなー。」

みゆき、あやの、みさおもそれぞれに楽しんでいるが、みさおは俺が買ったドラゴンを連続点火していた。

「まったく・・・あいつは少しは加減ってものを知って欲しいとこよね・・・」

「あはは、かがみ先輩の苦労も何となくわかる気がします。」

「・・・小早川さん、こっち終わりそう・・・」

「かがみ先輩、次は何をやるっスか？」

かがみを筆頭に後輩組みが固まって花火をやっていた。

「私は派出にこれをやってみるかな。行くよ？やまとー」

「こう、ちゃんと真上に飛ばしなさいよ？間違っても人に向けるんじゃないわよ？」

こう、やまとの二人組みはロケット花火を打ち上げて楽しんでいたようだ。

「おーし、でかいのに火をつけるぞーみんな注ー目ー」

と言う俺の言葉にみんな一斉に俺のほうを見ると俺はそれを見計らい大きな打ち上げ花火に火をつけた。

ドーンと派手な音を響かせ空に咲く花を俺達は見つめていた。

そして線香花火をやっているときかがみが俺の側に来て

「慶一くん、昼間はごめんね？私も慌てちゃったからついあんなことを・・・痛かったでしょ？」

昼間のあの一件の事を気に病んでいたようだ。

「不可抗力だし、仕方ないよ。別に気にしてないからさ、そんな顔するなよ。」

かがみに笑顔でそう言うとかがみは心持ち安心したような顔になって

「よかった・・・ずっと気にしてたからさ・・・ありがと、そんな風に言ってくれて・・・」

俺はそんなかがみの頭をなでながら

「そういう事もまた、俺達の楽しい思い出の一ページになるさ。明日は帰る日だけどさ、最後まで楽しく行こう。」

そう言うとかがみも笑顔になって

「明日は最後だからもう一度みんなで写真撮ったりしたいわね。・・・ねえ、慶一くん。今後もこういうのがある時はまた連れて行って欲しいな。」

と言うかがみの言葉に俺は力強く頷いて見せるのだった。

そんな二人の会話を耳にしたのかみんなも集まってきて

「私もまた連れて行ってもらうからね。置いて行くのはなしだよ?」
「わたしも一緒に行きたいな。みんなとなら楽しいよね。」
「私も出来る限りご一緒したいです。みなさんともっともっと思い出を作って行きたいですから。」
「私もみんなとの思い出をこれからもつくりたいな。行く時は声かけてくれなきゃいやよ?」
「楽しい事は大歓迎だぜー。慶一、当然私も誘ってくれるよな?」
「私は受験終えるまでは厳しいですけど、もし陵桜に合格できてみなさんと一緒になれたらまた行きたいです。」
「・・・私も小早川さんやみなさんと・・・また色々な事をしてみたいです・・・その時にはまた誘ってもらえたら嬉しいです・・・。」

「私もがんばるっスよ?そしてまたこのメンバーで楽しみたいっス。」

「ひよりん、がんばれ、だね。私も凄く楽しかったからまた皆さんとご一緒したいですね。」

「先輩、また迷惑をかけてしまうかもだけど、私も誘ってほしい。楽しかったから・・・今回の旅行。」

そんな風に言ってくるみんなに俺は笑いながら

「よーし、ならまとめて面倒みてやるさ。今回以上に楽しむとしようか。その時にはまた声をかけるからな。」

と言う俺の言葉にみんなはにっこり笑って頷いてくれた。

最後の花火を終え、後始末をして俺達は合宿所へと戻っていく。

俺達の夏休み旅行も後1日で最後を迎える事になるが、これからもこのメンバーで旅行したりと言う事もあるだろう。

今度こそはなんのしがらみもない心から楽しめる旅行を企画しないとな、と心に誓う俺だった。

余談だが、昼間の浜辺において俺を無防備状態からのカウンターで見事に沈めたかがみを親父がえらく気に入ったらしく、道場にスカウトしていたのを後から知ったのだった。

旋律達の夏休み1～海へ、第六話～（後書き）

次回で旅行編終了です。その後はコミケの話も予定

旋律達の夏休み1～海へ、最終章～

昨日の晩に花火をして今度もまたみんなで旅行をしようと約束しあってその日は終わった。

そして今日は俺達の海旅行の最終日でもある。

俺はいつもと同じように早起きをしてまず最初に今日行っておきたい場所があったので軽く準備を済ませて合宿所を後にしようとしたが、最終日はみんな早めに起きていたらしく施設を出る所でみんなに声をかけられることになった。

「おはよう慶一君、相変わらず早いね。それで今からどこへ向かうつもりなの？」

こなたが目的地を尋ねてきたので俺は全員が揃っている事に驚きつつも

「おはよう、ってみんなが起きてるなんて驚きだがとりあえず帰る前にもう一度父さんと母さんの所へ挨拶に行っておこうかと思ってさ。」

という俺の説明にかがみも

「そうなんだ。なら私達も一緒に行ってもいいかな？私達ももう一度手を合わせて行きたいしね。」

みんなの方に目を向けつつそう言うとみんなも頷いてついていくと言ったので俺はみんなに感謝しつつみんなとともにもう一度両親の

眠るお墓へと向かうのだった。

「朝早くの山の中っていうのも結構気持ちのいいものだね。」

こなたが周りを見渡しながらそう言うとかがみも

「そうね。早朝の山って意外と涼しい物なのね。」

つかさも鼻歌を歌いながら

「空気もいいし最高だよね～」

というつかさに頷きながらみゆきも

「目にも鮮やかな緑、済んだ空気。鳥のさえずりも心地いいものですよね。」

あやのとみさおも笑いながら

「自然は心の癒しにもいい感じだと思うわ。」

「なんかこうやって山の中歩いていると元気がでるんだよなー。」

こうとやまともゆったりと歩きながら

「都会の喧騒を離れてたまにはこういうのもいい物ですね」

「前みたいに怖い事がなければもう少し気に入ったのだけどね」

そう話しつつもあの時の一件はやまとにとってトラウマになったようだ。

「海に山に、本当に楽しい旅行だったよね、みなみちゃん。田村さん。」
「・・・そうだね・・・今日帰るのがなんだか残念・・・またこれたらいいね、ゆたか。」
「受験勉強に向けてのいいリフレッシュができたっスね。改めて先輩には感謝っス。」

3人は俺にそう言ってくれる。

いつのまにかゆたかはみなみを、みなみもゆたかを名前で呼び合うようになっていたの聞いて俺は驚きつつ

「ゆたか、みなみ。いつの間にお前ら名前で呼び合うようになったんだ?」

と聞いてみた。

「実は昨日の夜からなんですよ。私もみなみちゃんの事名前で呼びたいなって思ってて昨日思い切って呼んでみたんです。そうしたらみなみちゃんも応えてくれて・・・」
「・・・ゆたかがそう呼んでほしいと望んだから・・・私はそれに応えました・・・。」

そう二人は俺に説明してくれるの聞きつつひよりに関しては名字なままなのはどうしてだろう?と思った俺は二人に聞いてみると何となく名字で呼ぶほうがしっくり来るからなのだという事だそうだ。

そんな二人の言い分にひよりは苦笑を浮かべていたが俺はひよりにこっそりと

『大丈夫さ、呼び方はそうでも二人ともちゃんとお前も友達だって思ってるから』

そう小声で言うとひよりもどこか安心したような顔になったのだった。

しばらく歩いて二人の眠るお墓へと到着すると花を換えて水を入れ替え、新たに線香を添えて俺達は全員でお墓に手を合わせた。

（父さん、母さん。俺達は今日帰るけど、来年もまたお盆の時期には尋ねていくよ。だから今日は一旦さよならだ。）

そう心で思い、その思いをお墓に投げかける。

そして帰る前の挨拶を済ませた俺達はこなた達前に二チームに分けた際に絶景ポイントを見れなかった海チームの希望によりそこから絶景ポイントを目指す事になった。

この場所からはそう遠い場所ではなかったのでみんなを連れて絶景ポイントを目指す。

そして程なくしてポイントに到着して俺達は絶景ポイントで本当の集合写真を撮る事になった。

「どうだ?こなた、ゆたか、みなみ、ひより、こう、ここからの眺めは。」

俺がそう言うとみんなは

「流石に凄いねー。かがみたちが言うとおりだね」

「凄く綺麗な景色、頑張ってきてみてよかったです。」
「・・・素晴らしいですね・・・個人的に写真に収めておきます・・・」
「世の中広いっスね。色んな場所があり色んな景色がある。まだまだ知らない事って一杯あるんだなあと思いますねー」
「あそこが私達のお世話になった合宿所なんですね。そこまで見渡せるのもまた凄いですね」
というみんなの答えに俺も満足げに頷いて
「みんな運がいいよ、霧なんかかかっちゃったら景色全く見えないからな。」
という俺の言葉にみんなは運良くこの景色が見れた事を喜んでいた。
「さあ、改めてみんなで集合して本当の集合写真を撮ろうか」
そしてみんなでポジション決めをしてセルフタイマーで記念撮影をした。
一通りの事を終えて山を降りた頃には朝食には少し遅い時間だったけれど食事の準備が終わっていたので俺達は少し遅めの朝食を取った。
部屋で帰りの支度をしつつ荷物の確認等を行っていると親父がやってきた。
「慶一、帰る前に肩の怪我の療養も兼ねてあの温泉に行っておけ。」
と言って修行時代によく怪我をした時に使った温泉の事を思い出して

「あそこか、まだ時間もあるしちょっと行っておくかな。それにしても珍しいな、親父が俺の怪我気遣ってくれるなんてさ」

親父の親切心になにやら不信を覚えつつもそう言うと親父は

「ふん、今回のお前の怪我は予想外だったからな。それにこれでも一応お前の育ての親でもあるのだ、少しくらいは息子の心配もするさ。ともかく、滅らず口叩いていないでとっとと行って来い。」

なおも不信感を覚えつつもとりあえず親父の言うとおりにする事にした。

「わかった。とりあえず行ってくるよ。みんなが俺の事聞いたら温泉行ってるといってくれよ？」

そう言って親父に伝言をたのみつつ俺は怪我の治療の為温泉へと向かった。

俺を送り出した後二ヤリとほくそえんでいる親父に気付かぬまま・・・・

親父ｓｉｄｅ

息子を温泉へ送り出し、私は彼女らの元へ慶一の事を伏せた状態である事を伝える為に向かった。

女性陣の部屋をノックしてみると中から「はーい」とこなたちゃんの声がしたので

「こなたちゃんか、私だ。ちょっといいかね？」

と声をかけると「どうぞー」という声と共にふすまが開いたので私は中に入りみんなに

「ありがとう。ところでこの近くに温泉があるのだが帰る前に一度いってみてはどうかね？まだ時間もあることだしそのくらいの時間は取れるだろうからね。」

と私が言うとみんなが顔を見合わせながら話合いはじめるのをだまって見ていた。

「温泉だってさ、かがみどうする？」

「帰る前に行くのもいいかもね。」

「楽しい時間に美味しいお料理、さらには温泉もあるなんて贅沢だよね。おねえちゃん、いこうよ。」

「先程の山歩きの疲れもありますし、それをとる意味でも行くのもいいかもしれませんね。」

「柊ちゃん達が行くのなら私もいくわ。」

「私もついてくぜー」

「私達も行こうか、やまと？」

「そうね。みんなで行くのもいいかもしれないわね。」

「温泉かー、ゆっくりできるよね。」

「・・・帰る前の最後のリフレッシュ、だね・・・」

「ゆっくり温泉につかればなにかいいアイディアも浮かびそうな気がするっスね」

一通り話した後こなたちゃんが

「その温泉行ってみます。場所ってどこなんですか？」

みんなを代表して言って来たので私はこなたちゃんに場所を教えて

「・・・・・が、温泉の場所だ。時間までは楽しんできなさい。自然の環境にある温泉だから猿なども入りに来る事もある。何かのためにとりあえず水着も持っていくといいだろう。」

と私が言うとこなたちゃんは

「ありがとうございます、あの、ところで慶一君はどうしたんですか？」

というこなたちゃんの質問に私は適当に誤魔化しながら

「ああ、奴なら帰り支度の後軽く散歩にでかけたぞ？」

と適当な嘘をついておくのだった。

「散歩、ですか。わかりました。それじゃ私達は温泉に行きますね。情報ありがとうございました。」

お礼を言うこなたちゃんに私も

「なあに、この程度の事はなんてことはない。ゆっくりとしておいで。」

そう言ってこなたちゃん達を送り出したのだった。

慶一ｓｉｄｅ

親父に言われ、俺は怪我の治療も兼ねて温泉へとやってきた。
とりあえず海パンを着用しつつ温泉に浸かる俺。
「ふう、ここを使うのも久しぶりだ。あの頃はよく世話になったもんな・・・」
というように昔を思い出しながら俺は温泉に浸かって傷を癒していた。

こなたｓｉｄｅ

慶一君のお父さんに教えられて私達は温泉へとやってきた。
自然に囲まれたいい場所にその温泉はあった。
脱衣場のような場所を見つけた私達はそこで服を脱いでタオルで体を覆い温泉へと向かったのだが、その時に私達以外の脱いである服があったことに私達は気付かないで湯船の方へと行くのだった。

「へえ?中々凄いねここって・・・」
「まるっきり自然の温泉ね・・・こんな所があるなんて・・・」
「お猿さん、いたりするのかなあ・・・」
「こういう場所だとそれもありえますね。」
「うーん、いたずらされないといいんだけどね」
「まあ、そんときゃ私が追い払ってやるってヴァ」
「大丈夫なんですか?日下部先輩」
「心配ならこうも頑張ればいいんじゃない?」
「私こういうの初めてです。」
「・・・私も、かな・・・」

「体にはよさそうっスねー」

みんなでわいわい言いながら温泉に向かっていくと少し広めの湯船があるのがわかった。

湯気はかなり立ち上っていて少し先が見え難い状況になっていた。

けど、その先に私はなにやら人影のような物が見えた気がした。

慶一ｓｉｄｅ

湯船に浸かってのんびりしていると俺の背後の方で人の、しかも女の人の話し声見たいのが聞こえてきたようだった。

最初は気のせいだろうと思っていたのだが、しばらくそのままでいると話し声は段々はっきりとしてきたのでまさか女の人がここにきたのか?と思い、俺はしばし様子を見る事にした。

しばらく様子を見てるとやはり女の人達の集団が近寄って来てる様子だったのでとりあえずでないとまずいと思い移動をしようとしたとき俺の視界に飛び込んできた人に驚愕した。

こなたｓｉｄｅ

湯気の先に見えた人影のような物をよく見ようと私は移動していった。

その人影のような物はやはり人で私達の事に気付いたらしく湯船から出て行こうとしていたのが見えたのでよく姿を確認してみて私は驚いた。

「け、慶一、君？」

慶一ｓｉｄｅ

俺の視界に飛び込んできた人は紛れもなく泉こなたその人だった。

そして「け、慶一、君？」と驚きの声を出すこなたに俺も訳がわからずに

「こ、こなた、お前こんな所で何してるんだ？」

俺が慌てて聞くとこなたは顔を赤くして湯船にしゃがみこんで

「け、慶一君こそこんな所でなにしてるのさ！」

というこなたの問いに俺は素直に

「俺はいつもこの合宿所にきて修行する時怪我をしたらここに来て傷の治療をしていたんだよ。今回も親父に言われてここにきたんだ。お前こそ何でこんな所に来てるんだよ・・・って！？」

こなたと問答をしていて気付かなかったがこなたの他に俺の見知ったメンバーが近くにいることに気付いた俺はますます頭を混乱させてしまっていて

「え？え？なんで、みんなも・・・」

回らない頭でそれを言うのがやっとだったが俺に気付いたみんなは

「け、慶一くんあんたなにやってんのよー！！」
「ひゃあ、けいちゃんこっちみないでー！」
「こ、これは一体どういう事ですか？慶一さん！？」
「慶ちゃん、見損なったわ！」
「慶一、お前スケベだな」
「先輩、何してるんですか一体！」
「・・・最低ね・・・」
「はわわわわ・・・」
「・・・先輩、何してるんですか・・・」
「ハーレムイベントキター！じゃない！自重しろ私ー」

口々に言われながらなおも混乱して

「あ、いやその、俺はただ怪我の治療に・・・本当にそれだけなんだ、信じてくれよ・・・」

さらに言葉を続けて

「だ、大体俺が先に来てたんだぞ？それにこの場所はみんなには言ってないはずだ。それなのになんで？」

というパニックがあってからようやく落ち着いた俺達は全員水着着用で今は湯船に浸かっている。

「・・・・・そうか、親父の所為か・・・親父め・・・」

と呟く俺にこなたは目を細めながら

「いやー、さっきは本当にびっくりしたねー。でも慶一君がそういう人じゃないってのがわかったから安心だね。」

というこなたののん気な台詞に

「あたりまえだ・・・みんなの信頼地に落とすような真似してたまるかい・・・」

と疲れたように返答する俺にかがみは

「慶一くん、本当に見てないんでしょうね？本当よね？」

念を押すようにいってくるかがみに俺は

「見てないよ、というよりも混乱しまくってて覚えてない・・・」

そんな俺につかさとみゆきも

「でも驚いたよ～、ここにけいちゃんいるとは思わなかったもんね。」

「私も全くの予想外でした・・・慶一さんのお父さんに騙されたって事になるのでしょうね。」

という二人に俺も申し訳なさそうな顔で

「すまん、二人とも。親父の所為で迷惑かけたな・・・」

というと二人も「もう気にしてないからいいよ。」「慶一さんの所為ではありませんし気にしないでください。」と言ってくれた。

あやのとみさおもさっきの俺への物言いは行き過ぎたと思ってたようで

「慶ちゃんごめんなさい。さっきはついあんな事言っちゃって・・・」

「まあ、誤解だってわかったからいいけどな。」

あやのたちにも俺はもう一度謝ったのだった。

「ごめん、二人とも。いきなり俺がいたんだから驚くよな」

というと二人とも苦笑していた。

こうとやまとは誤解が解けると

「いやーつい怒鳴ってしまいましたが、やっぱり先輩がそういう事するはずないですよね。」

「・・・ごめんなさい・・・先輩」

と言って来たので俺は二人に

「気にするなって、どちらも不可抗力だったんだしあの場合はそう言われてもしかたなかったさ。」

俺にきつく言った事を気にしていたようなので気にするなと伝えたのだった。

ゆたかたち3人もようやく落ち着いたらしく

「あはは、ちょっとびっくりしました。」

「・・・同感です。けど誤解でした、すいません・・・」

「私は信じてたっスよ?先輩がそんな事するはずないって」

俺はそんな3人に

「脅かしてすまなかった。それとひより、信じてくれたのは嬉しいが、凄い台詞聞こえていたような気がしたぞ？」

二人に謝罪し、ひよりにツッコミをいれた。

そうしているうちにやまとは俺の肩の怪我の事が気になったようで

「先輩、肩の怪我の状態はどうなの？」

少し心配そうなやまとを安心させるように怪我した肩をぽんと叩いて

「親父の処置もよかったからな。今は痛くもないよ。」

という俺の言葉にかがみたちもあの時の事を思い出したのか俺の側に来て俺の肩に触れながら

「・・・ごめんね、私達を助けるために負った怪我だもんね・・・」

「見ている事しか出来なかった・・・でも、助けてくれてありがとう、慶ちゃん。」

「考えてみたらよくこれだけで済んだよな・・・」

「とても怖かったです・・・そして、生きていてくれただけでも・・・」

「私の・・・私のせいよね・・・ごめんなさい先輩・・・本当にごめんなさい・・・」

そんなかがみたちの雰囲気を察したのかこなた達も黙って俺の方を見ていた。

俺はそんなかがみたちを憮然とした表情で見つめて

「・・・前にやまとにも言ったけどな、これは俺の自己責任において負った怪我だ。だからそれに関してお前らが気にする事じゃない。それにお前らを助けようと思ったのも俺の意思だ。俺を心配してくれるお前らの気持ちはとても嬉しい。だけど、もう終わった事だからな。すぐに気に病むなとは言えないがいつまでも気にはしないで欲しい。そんな顔を見る俺のほうがつらいからさ。」

一旦言葉を切って一度深呼吸してさらに言葉を続ける

「原因を作った俺が言うなって言うのは百も承知だ。けど、これからはみんなに笑っていて欲しいからさ。それに、誇らせて欲しい。お前らを守れた事をさ。そしてこれからもお前らを守れる俺でありたいからな。勇気をくれたお前らの為に俺はこれからも俺の出来る事をしたいから。」

かがみ達も、そしてこなた達も俺の言葉を黙って聞いていたが俺の言葉が終わると共にみんな涙を流しつつも嬉しそうな顔をしていた。

その後は俺はみんなより先に温泉から上がって行く事を告げて温泉を後にして全ての帰り支度を済ませた。

俺が帰り支度を済ませた頃みんなも温泉から戻って来てそれぞれ帰り支度を済ませた後、帰りの車のチームを再び決める事になったのだが、俺はどうやら黒井先生のナビとしていて欲しいらしく俺の黒井先生の車は無条件確定となった。

帰りの車は安全も兼ねてゆたかややまと、みなみたちは親父の車に

乗ってもらう事になり、帰りはみゆきやこう、ひよりがゆいさんの車に乗る事になった。

こなたは行きと同じ、かがみとつかさは黒井先生の車となった。

みさおも行きと同じになり、帰りも絶叫するはめとなる。

色々とあった夏休みの海旅行から俺達は戻ってきた。

最後にみんなは

「とても楽しかったよ。慶一君今度もまた声かけてね。こんども楽しみにしてるよー。」

「色々あったけど楽しかったわ。またみんなで行きたいわよね。」

「とても楽しい一週間だったよ。絶対またみんなで行こうね。」

「色々な事、色々な楽しさがありました。また次があるのなら私も一緒に。」

「また何かあったら声かけてね?絶対よ?」

「楽しい事なら歓迎だぜー。慶一、次も私らをのけものにすんなよ?」

「とても楽しかったです、先輩。また遊びに行きましょう。」

「私もその時は一緒に行ってもいいわよね?先輩。」

「次は私も同じ陵桜の生徒として一緒に遊びたいです。受験頑張りますから応援してくださいね。」

「・・・大分リフレッシュできました。私もゆたかと陵桜で会いたいからこれからの受験勉強を頑張ります・・・そして・・・また、みなさんとも・・・一緒に遊びたいです・・・。」

「私もがんばるっスよ。絶対またこのメンバーでどこかへ行きましょう。それをモチベーションにやっていくっス。」

そんなみんなの言葉に俺も笑顔で

「俺も楽しかった。またこのメンバーで遊びに行こうな。」

そう言って手を振ってみんなと別れたのだった。

帰り際黒井先生とゆいさんも

「森村ー、色々あったが結構たのしめたで？酒や肴も美味い物食えたしな。なんにしてもあいつらをよくまとめて頑張ったな。ご苦労さんや」

「私も役に立てたかなあ？でも楽しかったよ、森村君。これからもこなたやゆたかをよろしくね。」

という二人に俺もねぎらいの言葉を返すのだった。

「こちらこそ、お二人にはお世話になりました。お二人ともゆっくりと休んでくださいね。」

という俺の言葉に笑って手を振りながら帰って行く二人を見送って俺も自分の家へと戻るのだった。

こうして俺達の海旅行は幕を閉じる。

余談だが、親父の企みをその後お袋に告げ口しおいたが、お袋は親父に絶縁状を叩きつけて家を出かけるという騒動があったのだった。

そしてみんなで撮った写真を眺めながら荷物の整理をしているとかがみからのメールが携帯に飛び込んできた事に気付いたのだった。

旋律達の夏休み2～柊家再訪問～

夏休みの海旅行から帰ってきて荷物を整理しながら向こうで撮った写真を見てのんびりとしていると俺の携帯にかがみからのメールが飛び込んできたので内容を確認すると・・・・・・

ＦＲＯＭ：かがみ

慶一くん、一週間お疲れ様。私達も丁度家についてのんびりしていたんだけど、今回の旅行の事で家のお父さんとお母さんがお礼をいいたいと言ってるのよ。
もし明日慶一くんの予定がないのなら家に来てくれないかな？慶一くんの都合がよければ電話してくれる？電話が来ない時はだめだったと諦めるからさ。

Ｐ．Ｓ　前の誕生日会の時慶一くん姉さん達がいる時来れなかったよね？その事でも突っつかれてるからというのもあるんだけど・・・ごめんね、こっちの都合の所為でさ。

俺はメールを見て（ふむ・・・わざわざお礼なんていいんだけど、ここはかがみの顔を立てといたほうがいいかもだな・・・）と考えたのでかがみに電話を入れる事にした。

数回のコールの後かがみが電話に出た。

「もしもし、慶一くん？」
「かがみか？今大丈夫か？」
「うん。部屋でのんびりしてたからね。慶一くん今回はお疲れ様。楽しい旅行だったよ？」

「喜んでくれたならなによりさ。ところでメールの件だけど・・・」
「あ、読んでくれた？そうなのよ。お父さんとお母さんがわざわざお礼言いたいって言ってるのよね」
「俺としては俺の私用の為にかがみやつかさに来てもらった訳だからお礼言われるのも妙な感じなんだけどね」
「まあ、それだけじゃないっぽいけどね。猪の一件も話したんだけどそうしたらなおの事お礼言わなきゃって言っててさ。」
「ええ？あれは一歩間違えば俺がかがみたちを危険に晒したかもしれないんだから逆に恐縮しちゃうんだけどな」
「ふふ。慶一くんらしいね。とはいえ電話してくれたって事は明日の件オーケーと思っていいのかしら？」
「うん、そのつもりで電話したからね。それで何時ごろ行けばいいかな？」
「それじゃ午前１０時頃に来てくれるかな？それとついでだから夏休みの宿題も進めましょ？」
「それもそうだな。それじゃその時間に。」
「うん、またね。慶一くんもゆっくり休んでね。それじゃ。」
「ああ。お休み、かがみ。」

かがみとの電話のやり取りを終えると俺はかがみの家に持っていく宿題等の準備をして体を休めるのだった。

次の日の朝、俺は朝食を済ませ猫達に餌をやった後、頃合の時間を見計らい家を出る。

電車に揺られる事１０分弱でかがみたちの使う最寄駅へと到着した。

あの日は夜に町並みを軽く見てただけだからわからなかったが、昼間に見るとまた違った趣のある町並みだと思えた。

以前かがみからもらった地図を頼りにかがみの家を目指して歩いていくとかがみの家の近くに神社があるのがわかった。

軽く中を覗いてみると結構由緒ありそうな広い神社だった。

やがて時間ぴったりにかがみの家へと到着すると呼び鈴を押す。

しばらく待っていると家の中から足音が聞こえ玄関の扉が開いた。

「はーい。あ、慶一くんいらっしゃいー。」

と言って出迎えてくれるかがみに俺も

「時間ぴったりで来たけどよかったかな?」

と聞くとかがみも頷いて

「うん、大丈夫よ。それじゃ上がって?」

そう促すかがみの後について「お邪魔しまーす」と言って上がっていくのだった。

かがみに案内されて居間へと向かいがてらふと気付いた事があったのでかがみに

「なあ、かがみ。つかさはどうしたんだ?」

と尋ねるとかがみは苦笑しながら

「ああ、あの子は昨日までの旅行で疲れてたみたいでまだ寝てるわ。

といっても休日とかは昼まで寝ちゃうほどだからね」

というかがみの言葉に俺も苦笑しつつ

「はは、つかさらしいっていうか・・・まあとりあえず後で会えるだろうしな。」

と話してる間に居間へと辿り着いた俺は中に案内されて客席に腰を落ち着けた。

「ちょっと待っててね」

と言ってかがみはご両親や姉妹を呼びにいったようだった。

しばらく待っているとかがみのご両親らしい人とお姉さん達が居間に入ってきたので

「こんにちは。森村慶一と言います。今日はお邪魔させていただいています。」

と挨拶するとかがみのお父さんらしき人が俺に握手を求めながら

「君がかがみやつかさが言っていた森村君か、話は聞いているよ。私は柊だたお、よろしく。」

そして次にお姉さん?らしき人も俺に柔らかい笑顔を向けながら

「あなたが森村君なのね?私はかがみの母で柊みき、よ?よろしくね。」

母という言葉に俺は目を点にして驚いていたが何とか正気を取り戻し

「こちらこそよろしくお願いします。いやそれにしてもてっきりお姉さんかと思いましたよ」

と苦笑しながら言うとみきさんは

「あらやだ、森村君ってお世辞が上手いのね。でもなぜか年相応に見られないのよねー」

と言うみきさんを見ながら（お姉さん二人もいるって言ってたから４児の母って事だよな・・・とてもそうは見えないし年相応に見られないって事も納得できるな・・・）と言う事を漠然と考えていると、今度こそお姉さんらしい人が俺に挨拶をしてきた。

「君が森村君ね？私は柊まつり。柊家の次女よ。よろしくね。一度君に会いたかったんだよねー。」

といいながら握手を求めてくるまつりさんに俺も

「は、はあ、恐縮です。前回の誕生日の時にはお邪魔できず、申し訳ありませんでした。」

と恐縮する俺にまつりさんは

「いいのいいの。今日来てくれたんだし、前回の事はチャラよ。今日はゆっくりしていってね？」

と言ってくれたので俺も

「ではお言葉に甘えさせていただきますね。」

と返しているとその横からもう一人のお姉さんも俺に挨拶をしてきた。

「もう、まつり、次は私の番よ？こんにちは、森村君。私は柊いのり、柊家の長女よ、よろしくね？」

と言う挨拶に俺も

「いのりさん、ですね？森村慶一ですよろしくお願いします。」

そう挨拶を返す俺を見ていのりさんは

「へえ、結構礼儀正しい子じゃない。まだ若いのにたいしたものじゃない。」

と言って誉めてくれたので俺は恐縮しながら

「いえ、これは俺の鍛えてきた道場で叩き込まれた物ですから。礼は武術には必要な武術を学ぶ者の心構えのようなものだと教えられましたから鍛えていくうちに自然と身についたんですよ」

そう答える俺をにこにこしながら見ているいのりさんだった。

「かがみから話は聞いたよ。今回の旅行に誘ってくれた事、そしてその旅行の最中に猪と遭遇してその危険からかがみを守ってくれた事も。改めて御礼をいいたくてね。かがみに頼んで君に来てもらった訳さ。ありがとう、かがみを助けてくれて、かがみが今無事にここにいるのも君のおかげだ。」

ただおさんが俺に改めて御礼を伝えるのを聞きながら俺は

「いえ、旅行の件に関しても正直自分の私用を優先させる事となりました。猪の件に関してもともすればかがみさんを危険に晒す可能性だってあったわけですから・・・」

俺が謙遜しながら答えるとみきさんも

「それでも今ここにかがみが無事でいることは私達にとっても安心できる事だから、かがみを助けてくれたあなたには感謝してるのよ？」

というみきさんの言葉にさらに恐縮しながら

「恐縮です。とは言え、あの時は必死でしたから」

と苦笑交じりに答える俺にいのりさんとまつりさんも感心しながら

「でも、かがみから聞いたけど結構大きい猪だったんでしょ？よくやっつけられたわよね？」

「人間て必死になれば何でもできるって事なのかしら？」

という二人の言葉に俺はただただ頭掻きながら複雑な顔をしていた。

そんな俺の様子を見ながらただおさんは俺に

「それと、これもかがみから聞いた事なのだが、君には生みの親と育ての親がいるという事みたいだね。君の過去の事も今回の旅行に関係している事だったと聞いているよ。若いのにかなり苦労してい

るみたいだね。」

というただおさんの言葉に複雑な顔をしながら

「はは。結局そのせいで育ての親の方には大分苦労かけてしまいましたが・・・育ての親からその事を告げられた時にはかなり荒れていた時期もありましたし・・・」

一旦言葉を区切り再び言葉を続ける

「けれど、かがみさんを初めとして俺の周りに集まった友達達のおかげで俺は過去に向き合う事ができました。だから、かがみさんやつかささんには本当に感謝をしてるんですよ。」

俺がそう言うと隣にいたかがみもにっこりと笑って、ただおさん、みきさん、いのりさん、まつりさんも感心したように俺を微笑みながら見ていた。

「そうか。こんな娘達だけど、これからも仲良くしてあげて欲しい。娘達も君と出会ってさらに変わってきたからね。」

というただおさんに続いてみきさんも

「森村君さえよければいつでも遊びにいらっしゃい。娘達も喜ぶだろうし、私達も歓迎よ?」

と言ってくれ、いのりさんとまつりさんも

「そうね。君ならかがみたちの良いお友達になりそう。それとも彼氏かなー?」

「たまには私とも遊んで欲しいかも。君ならそれも良いと思うし」

二人ともニヤつきながらそんな事を言う。

俺とかがみは赤くなって慌てて

「い、いや、その、か、彼氏とか彼女とかまだそういった関係では・・・」

「そ、そうよ、姉さん達なに言ってるのよ、別に私達まだそんなんじゃ・・・」

と慌てる俺達を４人は笑って見ていたのだった。

その後はもう一度挨拶をした後俺とかがみは宿題の片付けも兼ねてかがみの部屋へとお邪魔する事になった。

かがみの部屋へついて宿題の準備をしながらかがみは

「ごめんね、慶一くん。お父さんやお母さんはともかく姉さんたちが色々と・・・」

と言う言葉に俺も苦笑しながら

「あはは。でもかがみの言ってたとおり中々凄いお姉さん達だね。前の誕生日会でてたらあんな風になってたのかな？」

と言う俺の言葉にかがみは困ったような顔で

「たぶんね。とはいえ、慶一くんが帰った後絶対ひやかされるだろうな・・・」

というかがみの言葉に俺は軽いため息を一つついて

「ご愁傷様、かがみ。」

と言うとかがみは怒ったような顔で

「人事のように言わないでよ、凹むからさ」

というかがみに俺は「ごめんごめん」と謝ったのだった。

「ちょっと飲み物持ってくるから待っててね」

と言って部屋を出て行くかがみを見送って俺はかがみの部屋を改めて見回してみる。

「へえ?結構綺麗に片付いてて物もそんなに多くはない感じだ。それにあの本棚・・・」

本棚の方に目を向けるとかがみが好きだといっていたラノベがかなりの量おいてあるのが見えた。

「かがみはラノベ本当に好きなんだな・・・」

と呟いているとふいに部屋のドアが開いてつかさがひょっこりと寝ぼけ眼のまま俺が部屋にいる事に気付かずに入ってきて

「・・・ふああ、おねえちゃんおはよ~」

というつかさに俺は苦笑しながら

「もう昼だぞ？つかさ。それとせめて着替えてから来ような？みっともないぞ？」

と指摘するとつかさは俺がかがみの部屋にいる事にようやく気付いたようで慌てながら

「え？ええ！？どうしてけいちゃんがお姉ちゃんの部屋に？あれ？お姉ちゃんは？」

というつかさにため息一つついて俺は

「つかさ、落ち着け。かがみは今飲み物取りに行ってる。それと俺がここにいるのはかがみに招待されたからだけど、かがみから聞いてないのか？俺がお邪魔する事をさ。」

つかさに落ち着かせつつ事情を説明するとつかさは

「え～？全然聞いてなかったよ～。そっか～、改めていらっしゃい、けいちゃん。」

と言うつかさに俺は

「お邪魔してるよ、はいいんだが・・・つかさいい加減着替えて来い。それと夏休みの宿題やるなら道具もってこっちに来いよ？」

と言う俺の指摘につかさ自分の格好を思い出し慌てながら

「は、はわわっ！うん、すぐ着替えてくるね。それじゃ後でー。」

慌てて部屋を後にするつかさを苦笑交じりに見送りつつ待っているとそこに飲み物を用意したかがみが戻ってきた。

「慶一くん、お待たせー。さっきなんか話し声聞こえていたみたいだったけど何かあった？」

飲み物をテーブルに置きながら聞いてくるかがみに俺も

「ああ、さっきつかさが寝ぼけながら部屋にきてな。宿題やるなら準備して来いと言っておいた所さ。」

と言う俺にかがみも呆れたような顔で

「ようやく起きたのねあの子ったら・・・旅行中に慶一くんに教わったやり方試した方がよさそうね」

かがみの言葉に俺も

「それはいいが、つかさに俺が来ること言ってなかったのか？つかさは何も知らないみたいだったが」

と言う指摘にかがみは、はっとした顔で

「えーっと・・・言うの忘れてたわ・・・」

ばつの悪そうな顔で答えるかがみに俺は「おいおい・・・」と言いながら苦笑していた。

「まあ、でもさ。いい人達じゃないか。お父さんやお母さんやお姉さん達もさ。」

さっきの事を思い出しながらかがみに言うとかがみも笑って

「そうなのかな？お父さん達はともかく姉さん達とはケンカとかもしょっちゅうなのよ？」

かがみの言葉に俺はあのお姉さん達とかがみの事を想像してみたが

「うーん・・・ちょっと想像してみたけどありそうな感じだな、とくにまつりさんとはよくぶつかりそうな感じがするよ。」

かがみは苦笑しながら

「慶一くんの想像のとおりかな、特にまつり姉さんとはよく衝突するわ。」

俺はそんなかがみを見ながら少しうらやむ気分になって

「俺には兄弟とかいないから、何か少しだけ羨ましい気もするね」

と言うとかがみは

「姉妹なら姉妹なりの苦労ってものもあるわよ。それを言ったら私なんかは慶一くんやこなたやみゆきを羨ましく思うときだってあるわ。」

そう言って来たので俺は

「そういうものなのか？一人でも兄弟姉妹が多くてもどっちも一長一短なのかな？」

かがみはそんな俺の疑問に

「どっちもそういう立場になってみないとわからない事もあるのかもしれないわね。」

などと言うやりとりをしているとつかさが部屋にやってきた。

「おまたせ～。おねえちゃん、けいちゃん。早速宿題やっちゃおうよ。」

準備をしてきたようなので俺達も

「つかさー、とりあえずそっちすわんなー？」

「待ってたぞ？早速始めるか。」

という言葉と共に俺達は宿題を始めた。

「ねえ、おねえちゃん。ここなんだけど・・・」

「ここはこうやるのよ、わかった？」

「かがみ、すまん。ここなんだが、これでよかったかな？」

「ここはこれであってるわ。慶一くん、ここなんだけど、これでいいのかな？」

「ああ、問題なしだ。後、こうやるのもいいぞ？」

「けいちゃん、ここはどうやるの～？」

「これはだな・・・というわけだ。そっちはあってるからこれはこうな？」

「ありがと～」

お互いに分からない場所を教えあい、俺達は前に勉強会で使ったや

り方で効率良く宿題を進めていった。

しばらくして一段落ついたので今日やる分はこれでおしまいと言う事になりつかさが

「けいちゃん、お姉ちゃんちょっと待っててね。お茶とクッキー焼いてくるから。」

つかさの言葉に俺はあの日つかさたちがはじめて俺の家に遊びにきた時のことを思い出して

「お？あの時の約束か。楽しみにしてるよ、つかさ。」

俺の言葉につかさは顔を赤くしながら

「うん、約束を果たすいいチャンスだから頑張ってくるよ。それじゃしばらく待っててね？」

そう言って部屋を出て行くつかさを見送ってるとかがみも

「わ、私もちょっとつかさの手伝いに行ってくるね。慶一くんはラノベかなんかでも読んで時間潰してて？」

と言ってつかさの後を追いかけて部屋を出て行った。

俺はとりあえずかがみに言われたとおりラノベでも読んでいようとかがみの机の側にある本棚を見に言ったのだが、その際に机の上に旅行の時撮った写真が飾ってあったのを見て少しだけ顔を赤くしていた。

かがみの机に飾ってあった写真は集合写真もあったのだが個別に撮っていたツーショット写真もあったからだ。

極力意識しないようにとりあえずラノベを選んで本を読みつつ時間を潰していたのだが、どういうわけかあまり本に集中できずにいた俺だった。

しばらくしてかがみとつかさがお茶の準備を終えて部屋に帰ってきた。

「お待たせけいちゃん。クッキー焼くのに少し時間かかったけど食べてくれたら嬉しいな。それとお姉ちゃんも手伝ってくれたんだよ？」

といいながら俺の前にお茶とクッキーの皿を並べるつかさ、その後ろでかがみも少し照れながら

「私はこういうのあまり得意じゃないからちょっと形変かもしれないけど・・・食べてみてくれる？」

と言う二人に俺は笑いながら

「ありがとう、二人とも。とりあえずいただいてみるよ。」

そう言って二人の作ったクッキーに手を伸ばす俺を緊張の面持ちで見つめるかがみとつかさ。

俺はつかさの作ったらしいクッキーからまずは食べてみる事にした。

「お？これはなかなか美味いな。こなたの言ってた事もまんざらじ

ゃないな。」

と素直にクッキーが美味しかったので感想を言うとつかさは顔を赤くして嬉しそうにしていた。

「さて次はかがみが作ったっぽいクッキーをっと・・・」

次に少し形がいびつだけどかがみが作ったクッキーに手を伸ばす俺。

「うん。形は少しいびつだけどこれも美味い。大した物だよ」

と感想を言うとかがみは照れながらもかなり喜んだようで俺に嬉しそうな顔を向けながら

「あ、ありがと・・・つかさに教わりながら作ってみたの。上手く行っててよかったな・・・」

と言うかがみにつかさも笑顔で

「よかったね、お姉ちゃん。」

と言っていたのだった。

それからしばらくは3人で雑談などをしながら過ごしていたが、そろそろ頃合の時間になり俺は柊家を後にしようとしたのだが、ただおさん達に夕食を食べていって欲しいと言われ、みんなに引き止められたので俺はお言葉に甘える事にしたのだった。

大家族での夕食は俺にとってもはじめての経験で、俺は騒がしい家族を見ながらこういうのもいいものだな、としみじみ感じていたの

だった。

夕食後は俺もお世話になった事もあるので後片付けを手伝う事を申し出たのだが、俺はお客さんだからと言う事でやんわりと拒否されてしまった。

そして家に帰る時間になったので俺はみんなに挨拶をして柊家を出る事になった。

「今日はお招きありがとうございます。夕食もごちそうになってしまってなんだか恐縮です。」

と言うとただおさんは

「いいんだよ。かがみやつかさの友達だしかがみの恩人でもある君へのお礼みたいなものでもあるんだからね。それと、またいつでも遊びにおいで。」

そう言ってくれ、みきさんもにこにことしながら

「家族が増えたみたいで楽しかったわ。また遊びにいらっしゃいね？」

そう言ってくれるのだった。

いのりさんやまつりさんも

「また遊びにおいでー？私達も歓迎するよ。」

「今度は私とも遊んでよね？森村君。」

まつりさんの言葉に少し慌てる俺だったがかがみが

「まつり姉さん何言ってるのよ、慶一くんが困ってるじゃないの」

と突っ込みを入れていたがまつりさんもそんなかがみに反論して軽い言い争いを起こしているのを苦笑交じりに見つつ

「あはは。とりあえず、また今度お邪魔させていただきます。今日は本当にありがとうございました。」

そう言って家をでる俺にかがみとつかさがついてきて

「慶一くん、駅まで送るわ。一緒に行きましょ？」

「わたしも一緒に行くよ～。」

と言って来たので俺はその申し出を受ける事にした。

駅への道中にかがみはにこりとしながら

「今日は来てくれてありがとう。お父さん達も慶一くんの事気に入ってくれたみたい。」

今日の事に対するお礼を言って来たので俺も

「はは、それは嬉しいな。でも楽しい時間だったよ。ありがとな、かがみ。」

かがみに御礼を言うとかがみも顔を赤くして

「そ、それならよかったけどさ・・・最後も結構騒がしくなっちゃ

ったでしょ?ちょっと心配はしてたのよね、こういう雰囲気慶一くん大丈夫かなって」

というかがみにさらにつかさも笑いながら

「うちは家族多いし賑やかだもんね~」

と言う二人に俺も笑いながら

「ああいうのも初めてだけど悪い気はしなかったよ。それに賑やかさだったら俺達も負けてないと思うけどな。」

俺がそう言うと二人とも納得したようで

「言われて見ればそうね・・・私達も十分騒がしいわ・・・」

「あはは。でも楽しいから私は気にしないよ~?」

と言う二人に俺も笑顔で頷いていた。

そうこうしてるうちに駅へと辿り着いて俺は二人に

「それじゃ今日はこれで。二人とも、ここまで送ってくれてありがとな。気を付けて帰ってくれよ?」

そう言って手を振ると二人も

「今日は楽しかったわ。また遊びに来てよね。」

「じゃあねけいちゃん。また遊ぼうね~」

と言って俺を見送ってくれた。

プレゼントを渡しに行って以来今回はまともに柊家にお邪魔する事になったわけだが、俺はあの家族の事を思い出しながらああいうのも悪くはないな、と思いながら家へと帰っていった。

二匹の猫の家族以外はいない広い家、なぜか俺は少しだけ人のぬくもりのない家に寂しさを感じたのだった。

旋律達の夏休み2～柊家再訪問～（後書き）

この後はコミケの話を書く予定です。

旋律達の夏休み3～コミケへ行こう前編～

ここは有明ビック○イト、俺とかがみの二人はこなたに連れられ駐車場広場の一般入場ゲートで見渡す限りの行列を眺めながらかがみとともに大きなため息をついていた。

「それじゃ、作戦を説明するよ？・・・・・・」

こなたが気合の入った表情で俺達に作戦説明を始めるのを聞きながら俺は（・・・結局こうなる運命か・・・）と心の中で考えつつ事のいきさつを思い出していた。

それはさかのぼる事3日前・・・・・・

俺はいつものように早起きをし猫達に餌をやって適当に作った朝食で朝の空腹を満たそうとしていた時、こなたからふいに一本の電話が入った。

とりあえず朝食を中断し、電話に出る俺。

「もしもし、こなたか？どうした、こんな朝早くから。」

「あ、おはよー慶一くん。ちょっと聞きたいんだけど今日は暇してる？」

自分の今日の予定を頭に思い浮かべ何もない事を確認した俺は

「特に予定は入ってないな。何か用事でもあるのか？」

「うん。ちょっと相談したい事があってね。お昼頃慶一君の家にいってもいいかな？」

「相談したい事？俺にできる事か？」
「うん。まあ、その辺は慶一君の家に行ってからと言う事で。」
「なんだかよくわからんがとりあえず来るの待ってるよ。じゃあまた昼頃にな。」
「うん。それじゃねー。」

こなたとの電話のやり取りを終え俺は頭にハテナマークを飛ばしていたが、とりあえず中断していた朝食の続きを取ってリビングを軽く掃除しておく事にしたのだった。

ＰＭ１２：３０、玄関の呼び鈴が鳴ったので玄関に出てみるとそこにはかがみがいた。

「おーす、慶一くん。こなたに慶一くんの所に行っておいて欲しいと言われてきたんだけどさ。」

と声をかけてくるかがみに俺は

「こなたがかがみも呼んだのか？今朝の電話の件だろうけど一体なんなんだろう？」

と言う俺の言葉にかがみも不思議そうな顔で

「今朝の電話？こなたからあったの？」
「ああ。まあ、その話は中でしよう。とりあえず上がってくれ。」

そうかがみに促すとかがみは「お邪魔しまーす」と言って上がって来たので俺はリビングに案内して

「適当に座っててくれ。今麦茶出すからさ。」

そう促すとかがみは適当な場所に座った。

俺は麦茶を入れてかがみの待つリビングに戻りかがみの前に麦茶を置いて俺も適当に腰を降ろした。

「ほい、かがみ、麦茶だ。さっきのこなたからの電話の件なんだが、何でも俺に相談があるとの事だ。」

と言う俺の言葉にかがみは首を傾げつつ

「相談？あの子がねえ・・・またろくでもないことじゃないかしらね？」

苦笑交じりに俺にそういうかがみに俺は

「まあ、なんにしてもこなたが来たらわかるだろ。それまでは少し待ってみるしかないな。」

俺の言葉にかがみも頷いて

「そうね。とりあえず私はラノベでも読みながら時間を潰す事にするわ。」

と言いながらラノベを取り出すかがみに俺は

「かがみ、他に持ってるものあったら貸してくれないか？俺も自分の持ってるものは読み尽くしちゃったからな。」

と言う俺の言葉にかがみは満面の笑みを見せつつ鞄からかがみが今

読んでる以外のラノベを取り出し俺に貸してくれた。

「これなんかもお勧めよ？とりあえず読んでみて？」

「ああ。早速読ませてもらうよ。それじゃ借りるな？かがみ。」

かがみからラノベを受け取った俺はかがみの隣で本を読み始める。

それから読みふける事1時間、ようやくこなたがやってきたらしく家の呼び鈴を鳴らす音が聞こえたので俺はこなたを迎えに玄関へと行く前にかがみに

「かがみ、こなたが来たみたいだ。迎えに行ってくるよ。」

「ようやくか、相変わらず時間にルーズよね。とにかくいってらっしゃい。」

そう告げて玄関へと向かうのだった。

「今開けるよ、ちょっとまってろ。」

外にいるであろうこなたにそう言って玄関を開くといつもの細い目をしながらこなたが

「いやーおくれちゃった。ごめんね慶一君。」

まるで反省の色などないかのような物言いのこなたに軽いため息一つつきながら

「かがみも待ってるぞ？とりあえず上がれよ。」

家へとあがる事を促すとこなたは「お邪魔しまーす」といって上が

って来た。

こなたを伴いリビングに向かいながら

「リビング着いたら適当に座ってな。麦茶用意するから。」

そう言うとこなたは俺に頷きながら

「了解ー、とりあえずそれが来たら今朝の相談の件を話そうか。」

というこなたに俺も頷きで返して途中でキッチンへと向かう。

こなたｓｉｄｅ

慶一君と途中で別れ私はかがみの待つリビングへと向かった。

リビングに到着するとかがみはラノベを読んでいるようだったが、

私に気付くと

「こなた、遅かったじゃない。自分から約束したんだからもっと早く来なさいよね？」

「いやーごめんごめん、ちょっと準備とかに色々手間取っちゃってさ。」

「まったく、慶一くんも呆れてたわよ？」

「あはは、まあ、とにかく慶一君が戻ってきたら早速話しに入るからさ。」

「それはいいけど、私まで呼ぶ意味あったの？」

「まあ、それも慶一君が来てからでね」

そう言って一旦会話を打ち切り、私は慶一君が戻るのを待つのだっ

た。

慶一ｓｉｄｅ

キッチンに来た俺はこなたの分の麦茶とついでにかがみの分のお代わりを持ってリビングへと戻っていく。

リビングに戻るとこなたとかがみがたわいのない雑談で盛り上がっていた所だった。

「お待たせ。こなた、麦茶だ。かがみのもお代わり持ってきた。」

といってこなたとかがみの前に麦茶を置く。

「おお、ありがとー慶一君。この暑さに麦茶はありがたいよねー」

「ありがと。でも夏はほんとこれって美味しいわよね。」

という二人に俺も頷きながら

「うん。確かに夏はこれがなきゃ夏じゃないって気がするな。毎年必ず作ってるからなあ。」

といいながら俺も自分の分の麦茶を飲みつつこなたに

「さて、こなた。今朝言ってた相談事に関する事なんだが、話してもらえるか？」

俺が今朝の件に関して促すとこなたは持ってきた鞄から何かを取り出してテーブルの上に置いた。

置かれた物をよく見るとそれはコミ○ットカタログだった。
俺は嫌な予感を覚えつつも一応確認の為こなたに
「なあ、こなた。まさかとは思うが・・・」
という俺の言葉に大きく頷いて
「うん。実はそのとおりなのだよ。私一人で行くの面白くないからさ、慶一君も経験者みたいだしどうかなーって・・・」
というこなたの言葉に俺は0．1秒で
「却下だ」
と即答するとこなたは途端に涙目で
「ええー？いきなり即答は酷いよー。慶一君友達でしょー？せめて少しは考えてよー」
という俺達のやり取りを見ていたかがみはテーブルの上のカタログを一瞥して
「こなた。これは一体なんなの？なんかのイベント？」
という質問にこなたは目を輝かせてかがみの方に向き直り
「良くぞ聞いてくれました。これぞ日本でも屈指の大イベント、コ○ックマーケットというものなのだよ。たくさんの漫画やアニメ好きな人達がそれらを元に制作した自費出版の漫画等を持ち込み販売

したりする催し物なのさ。中にはコスプレをする人やかがみの好きなラノベみたいなのを持ち込む人、ゲームソフトを制作して持ち込む人なんかもいるんだよ?そこでしか手に入らない限定グッズや本等も目白押しなのだよ。」

こなたは一旦言葉を切って一つ深呼吸すると再び

「しかも、今現在プロの作家としてやってる人なんかも本を持ち込むこともあるし、そこからプロへとデビューを果たした人もいる未来のプロ漫画家候補の卵達が集まっているのだ。それに今回は八坂さん達も参加してるみたいだしねー。」

かがみはこなたが言っていたワードの中の”ラノベ”という言葉に反応していたようだった。

「う、うーん、よくわからないけど大きなイベントだって言うのは何となくわかったわ。こなたが出したカタログの厚さが半端じゃないのをみても相当ね」

重さ数キロはありそうなカタログを横目にかがみが言う。

「確かにイベントの規模としては他に類を見ないものだろうよ。けどな、そのカタログ見てもわかるだろうがそれだけの厚さになるほどの参加者がいるって事だ。その人数を見るだけで辟易するぞ?」

一応の経験者ゆえ、かがみにもそう教えると

「それは、きつそうね・・・こなた、悪いけど私も・・・」

かがみが断ろうと言葉を出しかける瞬間こなたはニヤリと笑いながら

「かがみー？ちょっとここ見てー？」

おもむろにカタログを開き、あるページをかがみに見せる。

「なによ？何かあるの？ってこれは・・・」

そのかがみの反応を見てこなたはしめたと思ったようでさらに畳み掛けにいった。

「この絵、どこかで見たことない？」

「これは私が好きなラノベの挿絵に書かれてる絵よね？一体何故？」

「そうだよー？この人も今回のこれに参加してるんだよ。かがみはこの人の絵好きだっていってたよね？」

「う、うん。確かにそう言ってたけど・・・」

「このイベントに行けば、この人のオリジナル絵の作品集とか手に入れられるんだよ？それに書いてる本人も来てるからサインだってもらえちゃうよ？」

「え？オリジナル作品集？それに書いてる人が来てる？サインももらえる？ほ、ほんとなの？こなた！」

「うん。だって参加しない人はここに載らないしさ。絶対確実だよ？だからさ、一緒に行こうよー？」

「・・・・・行く。」

まさにとどめの一撃だった。

「か、かがみ？」

俺は今まさに目の前で起こった出来事に対処しきれず混乱しまくっていた。

そして二人が

「ねえ、慶一君。かがみも一緒に行くってさー。かがみも行くって言うんなら慶一君も来てくれるよねえ？」

「慶一くん、折角だし一緒に行ってみようよ。ね？私も行くからさ。」

二人にそうまでも詰め寄られてはもはや観念するしかなかった俺は

「・・・・・わかったよ・・・一緒に行くよ・・・」

大きなため息をつきながらそう返事をするしかなかったのだった。

そして、こなたが回りたいサークルやその回り方等の作戦会議をこれでもかというくらい行ってその日はお開きになった。

俺は仕方なく覚悟を決めて行くならば万全を期すかと思い、そのための準備を行ったのだった。

・・・・・そして現在。

「・・・・・・・というわけで作戦の再確認は以上。何か質問は？」

こなたが俺達を見回してそう言うと俺とかがみは

「今のところは特になしだ。」

「・・・・・右に同じく・・・」

かがみは想像以上の人数をみて辟易してるようだった。

ようやくここに来てかがみは自分が地獄に足を踏み入れたのだと悟ったらしい。

しかし今更言っても後の祭りだと覚悟を決めたようだ。

俺はそんなかがみを見つつ、こなた達にもう一つ告げるべき作戦を告げるため二人に声をかける。

「二人とも、今度は俺から伝える事がある。俺も数回こうに付き合ってわかった事があるんだが、この会場内では相手との連絡方法が最も重要になるだろうという結論に至った。そこで俺はその方法をいくつか摸索してみて二つの方法を考えたんだが、片方はどうも使えなくはないだろうが、かなり厳しい物になることがわかったから俺はもう一つの方法をとることにした。」

そう言って俺は鞄の中からあるものを取り出し二人に渡した。

「これがその結論だ。」

俺が渡した物を二人はまじまじと見て

「これってトランシーバー？」

「おもちゃみたいね、でもこれがいいの？」

という二人にさらに説明を加える

「見た目は小さくておもちゃみたいだが、半径1キロの範囲で電波が届くし何より携帯よりもつながりがいい。この異常空間内じゃ携帯なんてほとんど無意味になってしまうほど電波が飛び交う場所だ

からな、ここは。けど、トランシーバーなら周波数さえちゃんとなってれば他に邪魔される事なく交信が可能だ。この会場内でなら十分な武器となりえる。」

という説明に二人は感心しながら

「へー、中々凄いねー。こんなの考え付かなかったよ。」

「中ってそんなに携帯通じ難いのか・・・」

二人を見ながら俺は

「ともあれ緊急通信はこれで行うようにしよう。周波数の合わせ方と使い方を教えるからちょっとテストしてみよう」

と言った後俺は二人に使い方等を教えて

「まあ、俺からは以上だ。後は中に入ってからだな。」

という俺の顔をまじまじとみながらこなたは

「なんというか、一番乗り気でなかった慶一君のはずなのにえらく本気じゃない？」

そう俺に言ってくるこなたに俺は苦笑しながら

「やると決めたからには本気でいくさ。こうなりゃやけってね。」

そう言うとこなたは軽いため息を一つつきながらも笑って

「まあ、なんにしても来てくれたのは嬉しいしね。折角だから楽し

もうよ。」

というこなたにかがみは早くも疲れたような顔をしながら

「楽しめればいいけどね・・・」

と言っていた。

俺は二人の肩を軽くぽんと叩くと

「これもまた、高校2年生の夏の思い出になるさ。後で笑って話せる思い出にさ。だから俺は楽しむって決めたんだ。こなた、かがみ。楽しんでいこうぜ。」

俺の言葉にこなたは俺に笑顔を向けながら

「思い出か。楽しい思い出は多く作りたいよね。よーし気合いれていくよー。」

そんな俺とこなたにやれやれといった感じのかがみだったが、意を決したらしく

「仕方ないわね。こうなったら私も楽しんでやるわよ。」

そう言った後俺達は3人でエイエイオーと気合をいれて会場入りを待つのだった。

旋律達の夏休み3～コミケへ行こう後編～

こなたやかがみとコミケを楽しむ事に決めた俺は、会場への入場開始を今か今かと待っていた。

やがてＡＭ１０：００を時計が示すとスタッフから「では、これより入場を開始します。焦らずゆっくりと前の人について会場入りしてください！！」という声がかかり、前列から徐々に会場へ向けて列が動き始めた。

「始まったね。」

列が動き出すのをみて呟くこなたに俺も

「ああ。さあていっちょ気合入れていきますか。かがみ、入る時は東館からになるから入ったらお前は右のエリアへ入り込むと言う形になる。俺とこなたは左側だ。」

一応方向の指示をかがみにしておく。

「入って右のエリアね？わかったわ。」

さらに俺は言葉を続けて

「わからなくなったらトランシーバーで現在位置等を連絡してくれ。エリア上部に掲げられている表示標と番号を教えてくれればある程度の位置はわかるからなんとかなる。」

かがみ俺に頷いて

「わかったわ。その時はよろしくね。」

俺もかがみに頷くと列の様子を伺うため視線を戻した。

そして少しづつ俺達のいる列も動き始めたのだった。

「うーん、今回も楽しみだねー♪」

こなたは満面の笑顔で楽しそうにそう呟く。

俺はそんなこなたを見ながら軽いため息を一つつきながらも

「なんだか嬉しそうだな、こなた。」

と言う俺の言葉にこなたは親指をびしっと立てながら

「まあねー。だっていつもはお父さんが来れないときは私一人できてたんだもん。だけど今回は慶一君やかがみが一緒だからさ。一人じゃないって事が嬉しいんだー♪」

笑いながらそう言うこなたに俺はこういうのは理解のある人がいないと結局は一緒に行ってくれる人は限られてるのだと言う事を改めて考えつつ

「そうか、確かにこういうのって理解してくれる友達とかいないと一緒になんて中々来てくれないよな・・・」

難しい顔をしている俺にかがみがやれやれと両手をひろげつつ

「そんな中では慶一くんはこなたにとって理解者の一人だったのかしらね？」

と言うとこなたはちっちっちっと人差し指を振りながら

「慶一君程でなくてもかがみもだよ？ある程度は私の事理解してくれる人だって思ってるから今回思いきって声をかけてみたのだよ。結果は私にとって満足のいくものになったけどねー」

とにんまりとした顔で言うこなたに俺達は苦笑するしかなかった。

「まあ、友達ならその義理を果たすとしますか。」

こなたに笑顔を向けながらそう言うとこなたも嬉しそうにしていた。

そうこうしているうちに東館エリアに入り込む俺達。

「建物の中もなかなかの広さね・・・」

中を見回しつつそう感想を呟くかがみにこなたは

「前の晴海会場も広かったけどここもなかなかだと思うよ？」

そう説明するとかがみは額に手を当てながら

「行った事もない会場の事を言われてもよくわかんないわよ・・・ともかく私は右側ね？それじゃ行ってくるわ。」

そう言いながら右側の会場へ突入していくかがみを見送り、俺とこなたも

「よし、それじゃ俺達も行動開始といきますか。」
「そうだね。それじゃ慶一君、作戦どおりによろしくね。」
「おう。それじゃ何かあればトランシーバーに連絡な。」
「わかったよー。それじゃがんばろうね。」

お互いに頷いて東館左エリアへと突入する俺達だった。

かがみｓｉｄｅ

二人に言われて私は会場の見取り図を見ながらこなたに頼まれた本を置いてある場所を探して歩く。

その会場内もうんざりするような人の波で私は早くも心がくじけそうになっていた。

それでも人ごみを掻き分け目的地を目指して進むとまず最初の場所へついたので

「すいません、新刊3冊づつお願いします。」

そう言ってこなたからもらってあるお金を支払い受け取った本を見て私は思わず

「な、何よこれ！！」

とその場で顔を赤くして叫んでしまった。

周りの人が奇異の目で私を見て通り過ぎていく中私は我に帰り

（な、なんなのよ、なんなのよこれ、こんな本扱ってるなんて全然聞いてないじゃない！ひょっとして他に回る所もこんなのばっかりなの？こなため・・・後で文句いってやるわ！）

そう考えつつもとりあえず果たすべき役割はきっちり果たしておこうと他の頼まれた場所を回る私だったがその度に本を見ては赤面するを繰り返していた。

ほとほと疲れてきた頃、こなたから頼まれた所は何とか回り終えたので、私の目的の場所に向けて移動を開始した。

人垣を掻き分け、目的地に辿り着いてみると机の周りには私の知ってるラノベの挿絵を書いてる人の絵が飛び込んできた。

私はそれを見た瞬間嬉しくなり、その机の所へ行って売り子さんに

「あ、あのすいません。こちらの作品集ってまだありますか？」

おずおずと質問してみると

「ええ。まだ在庫はありますからどうぞ見ていってください。」

と言う売り子さんの言葉に甘えてしばしその人の作品集とかを見ていた。

「えっと、これとこれを下さい。」

「ありがとうございます。全部で１８００円になります。」

そう返事をしてくれる売り子さんにお金を渡して私はお気に入りの絵師さんの作品集を手に入れたのだが、もう一つ気になっているこ

とがあったので

「あ、あの、これを描いてらっしゃる方が来ているって事を友人に聞いてきたんですけど・・・」

と売り子さんに聞くと売り子さんは

「〇〇さーん?ファンの子らしい人が会いたいらしいですよー?」

と絵師さんを呼んでくれたみたいで奥からこの絵を描いた絵師さんが来てくれて

「やあ、こんにちは。僕を呼んだのは君かな?」

若くて人のよさそうな絵師さんらしい人が私に声をかけてきたので私は緊張しながら

「あ、は、はい。その、私、あなたの描く絵のファンでして、ラノベの挿絵とかもかかれていますよね?」

と私がラノベの事を尋ねると

「うん、そこでも僕は描かせてもらってるね。そうか、嬉しいね、わざわざ訪ねて来てくれたなんて。」

〇〇さんは照れながら私にそう言う。

「あ、あの、お願いすればサインもいただけるとか友人に聞いてきたんですが・・・」

というと○○さんも私の聞いた事ににっこりと笑って

「うん。まあこんな僕のサインでよければいいけど、それでどこにかくといいかな?」

と言って来たので私はさっき買った作品集にサインをしてもらおうと先程買った物を取り出して

「こ、これにお願いしてもいいですか?あの、できれば柊かがみさんへと入れてもらえると・・・」

そう言うと○○さんは私から作品集を受け取り、その余白のページにサインをしてくれた。

「・・・・・柊かがみさんへ、っとこれでいいかな?」

といってサインを描いた作品集を返してくれた。

「あ、ありがとうございます。これ、大事にしますね?これからもお仕事がんばってください。」

サインをもらえた事のお礼を伝えると○○さんは

「こちらこそ、わざわざ来てくれてありがとう。これからも応援してね?」

そう言う○○さんに「はい!」と返事をしてぺこりと頭を下げてその場を立ち去ったのだった。

全ての用事を終えた私はとりあえず人ごみから逃れられる場所へと

向かい、こなた達に連絡を取るのだった。

こなたｓｉｄｅ

かがみと別れ慶一君とも分散して私は私の目指す目的地を回っていく事にしたのだった。

「ふむ、いい流れかもしれないね、今回は買いのがしは少なくて済みそうだよ。」

そう呟きながら目的地を次々と回っていく。

「これ3冊づつね。」
「はい、毎度ありー」
「こっちも新刊よろしくー」
「はい１５００円です。」
「この限定グッズをお願いー」
「これは２０００円になります」

矢継ぎ早に買い物を済ませて行き、私はいよいよメインの買い物をするべく壁サークルへと足を運ぶ事にしたのだった。

「こちらが最後尾になりますー。４列でお願いしますー」

スタッフの声とともに列が形成されている場所へと行き、最後尾の札を持つ。

そしてすぐ後ろに人が並びその札を渡しながら私は順番を待つのだった。

順番を待ちながら私は二人に一応の連絡を入れるためトランシーバーを用意して連絡を試みる

《こちらこなた。慶一君か、かがみ、聞こえてたら応答してください、どうぞー?》

しばらくするとかがみから連絡が入った。

《こちらかがみ、こなた、あんたの方はどうなの?》

《かがみ?私は今大手のサークルに並んでるとこだよ?そっちの用事は済んだ?》

《まあ、あんたに言われたところは大体ね。それとこなた、あんた私にこういう本扱ってる事言ってなかったでしょ?おかげでこっちはものすごく恥ずかしかったのよ?それに私達まだ18歳にもなってないのにこういう本買ってもいいわけ?》

私はかがみにこういう本を扱ってる事を伝えるの忘れていた事に気付き少し焦ったが

《あはは、でも私が読むわけじゃないからさー、お父さんに頼まれたからついね。》

《ついでこんな本買わせようとするな!!それと、あんたの方はどのくらいかかりそうなのよ?》

《えーっと今大手のサークルのとこ並んだんだけどそこが後30分ほどかな?後一箇所あるんだけどそこが1時間程度で何とかなればいいんだけどね。》

《そんなに?私はどうしてればいいのよ?》

《とりあえず私の現在位置教えるからこっちに来る?それとも慶一君と合流しとく?》

《・・・とりあえず慶一くんの方にも聞いてみるわ。その上でどう

するか決めたらまた連絡するわ。≫
≪わかったよー、それじゃあとでねーオーバー?≫
そう言うやり取りをしているうちに徐々に私の順番が近づいてきた。
（うーん、かがみに説明し忘れたから後で殴られるかもしれないなー（汗）でも向こうは何とかなったみたいだね。でも流石は大手、できる列は半端ないね・・・）
等という事を考えているとようやく私の番がきたので私は新刊を購入して次の大手へと回りに行くのだった。

慶一ｓｉｄｅ

かがみと別れ、こなたとの分散して俺は俺の担当を回っていた。
俺の方は時間のかからない中堅はあまりなく、大手の方に目標が集中する形になった。
手早く中堅を片付け大手サークルに並ぶ俺だったが順番待ちをしている時かがみからの連絡が入った。
≪こちらかがみ、慶一くん聞こえる?≫
（ん?かがみから?とりあえずトランシーバーを・・・）そう考えながらトランシーバーを取り出す俺。
≪こちら慶一、かがみ、どうした?≫
≪あ、慶一くん?こっちは済んだからこれからどうしようかと思ってさ。さっきもこなたの方にも連絡はしたんだけどね。慶一くん

の状況を見て決めようって思っててさ。≫
≪うーん・・・こなたはなんて？≫
≪大手に並んでるらしくて後1時間以上は戻れなさそうなのよ。≫
≪そうか、ならこなたの方へ行けばいい。俺の方が時間かかりそうだからな・・・ちょっと待ってろかがみ≫
そう言って一旦かがみとの交信を切り、俺はこなたに連絡をいれる。

≪こちら慶一、こなた聞こえてたら応答しろ、どうぞ？≫
≪ん？こちらこなた、聞こえてるよ？どうぞー≫
≪かがみから今連絡来たんだがそっちの状況はどうだ？≫
≪今私は自分の回るとこの最後の所並んでるよ？後３０分弱かな。そっちは？≫
≪俺は残りを考えると2時間ちょいかかりそうだ。とりあえずかがみをそっちに向かわせる、現在位置を教えてくれ≫
≪わかったよー。今ねえ・・・・・って所だよ。かがみを誘導して向かわせてー。≫
≪了解、それじゃそっちが済んだら待ち合わせ場所決めといてくれ。俺もそこへ向かう。≫
≪了解したよ。それじゃ後でねーオーバー？≫

とりあえずこなたとの通信を終えて俺は再びかがみを呼び出す。

≪かがみ、聞こえるか？≫
≪うん、聞こえるよ慶一くん。それでどうなった？≫
≪今から誘導するからそこへ向かってくれ。こなたの用事の方が先に終わりそうだ。≫
≪わかったわ。指示お願いね。≫
≪了解、まず現在地を教えてくれ・・・・・オーケー、そうしたら・・・・・そのルートを通って・・・・・そう、そうだ。で

そこを行けば・・・・・といわけだ。わかったか?》
《うん、わかった。それじゃ先に向かってるわね。慶一くんも必ず来てよね。》
《了解だ。それじゃ後でな。》
と言うやり取りを終える頃一つ目の大手が終了した。
俺は次に並びながら再び終わるのをひたすら待つのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんから教わったルートを通って私はこなたの元へと向かった。
私が指定された場所に辿り着くととりあえず用事を終えたこなたが私を待っていてくれたのだった。

「こなた、来たわよ。とりあえずあんたに頼まれてた物だけど・・・かなり恥ずかしかったんだからね?」

そうこなたに声をかけて買った物を渡すとこなたはニマニマと笑いながら

「いやあ、ご苦労様かがみ。でもこういう物を見てそう言う反応、中々萌えるねえ。」

と言うこなたに私は顔を赤くしつつ

「も、萌えとか言うな!!それにこのこと説明しなかった事かなり頭にきてること忘れてないわよね?」

そう私が凄むとこなたは途端に慌てだして

「い、いや、それは悪かったけどさ、とにかく目的の物はちゃんと手に入ったでしょ？だからそれで勘弁してよー。ね？お願いー」

手を合わせて上目使いで私を見ながらそう懇願するこなたに私はこなたの頭に一発拳を落として

「これで勘弁しといてあげるわ。まったく、私には刺激が強すぎよ・・・」

そう言う私にこなたは頭を抑えて涙目になりながら

「ううん、痛いよかがみ・・・何も殴る事ないじゃん・・・」

というこなたを再度睨みつけながら

「なんかいったか？それともう一発欲しい？」

拳をちらつかせながらそう言うとこなたは小さくなって

「いえ、結構です。すんませんした・・・」

そう言って謝るこなたを横目で見つつため息をつきながら慶一くんの帰りを待つ私達だった。

慶一ｓｉｄｅ

かがみとの通信の後並ぶべき大手に並んでかなりの時間が経過していた。

俺は少し焦りを覚えつつも今回最後となるサークルに並んでいた。
おもむろに時計を確認すると午後1時30分を示していた。
（後少しだな・・・）という事を考えながら順番を待つ俺。
すると、ふいに俺の携帯に電話がかかってきたので電話に出るとその主はこうだった。
「もしもし、先輩？私です。今日はここに来てるって聞いたんですけど、今どちらなんですか？」
「こうか？今はこなたに頼まれた最後のサークルに並んでるよ。それが済んだら適当に昼にしてその後そっちへ向かうつもりだ。」
「そうなんですか。それじゃこちらに来る頃に一度連絡をお願いしますね。」
「携帯つながったらな。今はたまたまつながったからいいが、ここじゃそっちの方が稀だ。」
「あはは、そうですね。とりあえず電話の方、挑戦してみてくださいよ。それでつながらなかったらこちらに直接来ちゃってください。」
「了解だ。それじゃ後でな。」
「はい。待ってますねー」
一連のやり取りを済まして電話を切ってから15分後、ようやく最後の本を購入する事ができた俺はこなた達に連絡をいれてこなた達が待っている場所へと移動していくのだった。
人ごみを掻き分けて待ち合わせ場所へ行くと談笑しているこなたとかがみを見つけたので俺は二人の所に向かっていき

「二人とも、待たせてすまん。流石に大きい所は時間かかるのが難点だよ」

そう声をかけると二人は俺の方を振り向いて

「あ、おかえりー慶一君。その様子だと戦果はあったみたいだね。」

「おかえり、慶一くん。ずいぶん待ったわよ?流石におなかすいたわ・・・」

二人に俺は苦笑しながら返事を返す。

「とりあえずミッションコンプリートかな、こなた。昼も結構過ぎてるしな。こうの所行く前に昼飯行っておくか。」

という俺の言葉に二人は頷いてとりあえずその場から移動を開始する俺達だった。

東館の中央にでてエスカレーターを目指し歩く俺達。上がった場所から右側に売店があるので軽くそこで食べれる物を買うことにした。

「ほんと、凄い人よね・・・」

かがみは大分参ってるようで俺にそうこぼす。

俺はかがみの方を向きながら

「前に聞いた事あるけどさ、３日間の開催期間の間でのべ４０万人ほどの人が来るらしいぞ?」

その数字にさらに凹むかがみ

「４０万人てどんだけよ・・・」

というかがみにこなたも人差し指を振りつつ

「まあ、確かに開催される度人数が増えてる気がしないでもないね？」

というこなたの説明に俺も苦笑するしかなかった。

「でもさ、すごい事だと思うぞ？たった3日の間にどれだけのお金が動いてるか想像すると半端ない。」

という俺の言葉にかがみは感心したような顔で

「まあ、言われてみれば確かにそうよね、一冊１０００円の本を一人一冊買うだけでも相当のお金になるわね。」

というかがみにこなたも

「だから結構バカにもできないイベントでもあるわけなのだよ。経済効果って凄いと思うし。」

等という事を談笑しているうちに目的地の売店へと到達すると俺達は適当に食べ物を買い込み休憩できる場所まで移動をした。

東館からこうたちのいる西館の間にあるちょっとしたスペースに休憩場所があるのでそこを目指す。

運良く座れる場所を見つけたので俺達はそこに腰を落ち着けた。

「運良く空いててラッキーだね。」

俺はこなたに頼まれた本を渡しながら食べ物も取り出しつつ

「そうだな。この時間、力つき始める人が増えてくる頃だし下手したらそういう連中でここらが埋まる可能性もあったわけだしな」

という俺の言葉にかがみはほっと胸をなでおろしながら

「まさに不幸中の幸いともいえるわね。」

かがみの”不幸”という言葉に反応するこなた

「かがみー、不幸ってなにさー?」

というこなたの反論にかがみはやれやれというジェスチャーをやりながら

「何も知らないであんたにこんな所に連れてこられた事よ。」

かがみがそう言うとこなたはむくれて

「その事ならさっきもあやまったじゃん。私も殴られたんだしもういいでしょー?」

という二人のやり取りをみながら俺は（やれやれ・・・）と心の中で思いつつ食事を終えた。

「さてと、こうのところに行く前にこなた、企業ブースには寄っていくのか？」

かがみと散々やりあっていたこなたが俺の声に振り向き

「うーん、今から行ってもどうせ何も手に入らないし、このまま八坂さんのサークル行っちゃおう。」

こなたの言葉に俺も同意して

「んじゃそうするか。ちょっとまっててくれ」

そう言って俺は携帯電話をとりだしてこうに連絡を入れる。

しかし、この電波無法地帯では携帯はやはり役に立たないらしくさっきつながったのが奇跡とさえ思えた。

「だめだな、仕方ない、直接いくぞ。こなた、かがみ、準備いいか？」

俺の確認に二人は

「いつでもオッケーだよ。」

「お昼も食べたし、少しは回復したわ。私もいけるわよ？」

という二人に俺も「よし、出発だ。行こう。」

そう言って二人を連れてこうのいる西館を目指すのだった。

西館へ向かうには一度下に下りる行程を踏まないといけないので俺

達は一度下へと降りていく。
そして西館へつながるエスカレーターに乗って上がっていくのだった。
そしてしばらくして西館到着と相成り、俺達はこうのいるサークルのテーブルを目指した。
「おおー、こっちはやっぱりあれ系の人達が多いね。」
周りを見渡しながらこなたはそう口にするとかがみはそれに疑問をもったようでこなたに
「あれ系ってなによ?時折あんたの言うことがよくわからんわ・・・」
呆れつつもそう呟くかがみにこなたはサークルの一つを指差して
「ああいうのだよ、見てみなよ。」
とこなたが指差す方をかがみが見に行ってみるとそれを見た瞬間かがみが真っ赤になるのがわかった。
「な、ななな、これは一体・・・」
赤くなり呆然としながら呟くかがみに俺は苦笑していたがこなたはニマニマとしつつ
「BL本、すなわちボーイズラブ系をおもに描く腐女子と呼ばれる人達なのだよ。こちらはそういう系が多い場所なんだよねー。」

というこなたの説明を聞いているのかいないのか興味ありげなカップリングの本に顔を赤くしつつも見入っているかがみに売り子さんからの声がかかる。

「興味がおありでしたら一冊どうぞ。５００円になりますが？」

という声にはっとしたかがみは

「い、いえ、私には刺激がー！！」

といいながら俺たちのほうに顔を真っ赤にしながら逃げてきたのだった。

「はあ、はあ、び、びっくりした・・・八坂さんてこっちに来てるって話よね？ってことはまさか・・・」

かがみがかなり不安そうな顔で俺達に聞いてくると俺達は重々しく頷いたのだった。

俺達二人の頷きを見たかがみは「ううううう」と終始うめいたままだったがとりあえずこうの所へ行かなければと思い、かがみをとりあえず正気に戻して移動するのだった。

やがてサークル捜索すること数分後、ようやく俺達はこうのいるサークルへと辿り着いた。

「こう。連絡入れてみたけどやっぱりだめだったから直接来たよ。」

「八坂さんー来たよー。いいのあるー？」

「うう、疲れる・・・八坂さんこんにちは・・・」

俺達が3者3様の挨拶をするとこうは俺たちに気づいて

「あ、先輩達。よく来てくださいましたー。待っていましたよ?泉先輩、とりあえずこちらに。慶一先輩とかがみ先輩もこれをどうぞ」

といってこなたを奥に呼び、俺達に飲み物をくれた。

「ありがとう。この暑さだからな、流石に水分は補給しないと厳しい。」

「あ、ありがとう。とりあえずいただくわね。」

俺達二人は早速もらった飲み物を飲んで喉を潤すとこうのサークルを改めて見るのだった。

するとそこに俺達の見知った顔がもう一人いた。

「森村先輩、かがみ先輩、旅行以来っスね。ひよりっス、覚えてますか?」

ひよりの声に俺は笑いながら

「あれから数日しかたってないのに忘れるかよ。元気そうだな、はいいが、受験勉強はいいのか?」

俺がひよりにそう言っていたがすぐにかがみもひよりに挨拶を返していた。

「田村さん、旅行以来ね。元気そうじゃない。ところで、その様子だとあんたも手伝わされてるの?」

というかがみにひよりは笑いながら

「いえいえ、私がやりたくてやっている事ですし、それに私も作品だしてるんスよ。自分の作品も売るためにやってるっス。」

そのひよりの言葉をきいてかがみはひよりに

「田村さんの作品ってどれなの？ちょっと見せてよ。」

かがみに言われてひよりは一般向けっぽい同人誌を取り出してかがみに見せた。

「これっス。結構頑張ってるんスけどどうっスかね？」

俺もかがみに手渡された同人誌を横から見ながら

「へえ？結構上手い絵描くんだな。こうがアニ研の期待の新人というだけはあるな。」

「そうね。結構見やすいし面白さもあっていいかも・・・」

俺とかがみがひよりの作品に感心していると

「恐縮っス。お二人にそう言ってもらえると自信がつきます。」

照れながらひよりは答える。

「まあ、その前に陵桜に合格を果たす事をまずは目標にしないとな。」

そう突っ込みを入れる俺にひよりは

「わ、わかってるっス。これもやってますけど受験勉強も頑張ってますから。」

という答えに俺とかがみは顔を見合わせて頷いて

「なら、よし、だ。俺達以外にもお前には頑張ってほしいと願ってる奴の事も忘れるなよ?」

こうの方に視線を移しながら言う俺にひよりも頷いて

「もちろんわかってるっスよ。こうちゃん先輩のおかげでみんなとも出会えたんスからそれを無駄にするような事はしません。」

俺とひよりがそんな話をしている事など露とも知らずこうは俺達に気付き

「何の話してるんですか?」

俺達に聞いてくるこうに

「んー?ひよりに受験頑張れって言ってただけだよ。なあ、ひより。」

俺が話を振るとひよりも笑いをこらえながら

「そういう事っスよ。先輩に活いれられてました。」

俺とひよりの言葉に頭にハテナマークを飛ばしながら俺達をみてい

るこうだったがそのうちにコ○ケの終了時間が来たのだった。

「以上を持ちまして第○○会コ○ックマーケットを終了いたします。」

という放送が入ると同時に沸きあがる拍手、俺はこのシーンをなんとも複雑な表情で見つつも机などの片付けを手伝うのだった。

片付けを手伝いながらこなたは俺に

「今年の夏のコ○ケも終わったね。私はこの最後の瞬間はいつも寂しさに包まれるよ。」

そう言いながら少ししんみり気味のこなたにかがみも

「来て見たらものすごい人と広い会場、騒がしいイベントだなと思ったけど確かに終わった時のこの喧騒がなくなる感じはなんだか寂しいものがあるわね。」

どことなく寂しげに言う。

「一種のお祭りみたいなものですし、やっぱり祭りの終わりって物は何となくそう感じるものですよ。」

こうも心持ち表情は寂しさを見せている。

「でも、これで終わりじゃないっスよ?漫画がある限り、アニメがある限り、そしてそれらから本を作る人達が消えない限りはこのイベントはまだまだ続くっス。だから寂しくなんかないっスよ。次に向けて頑張るだけっス。」

一人次に向けて張り切るひよりを見て俺は軽いため息を一つつきながらひよりの頭をぽんと叩いて

「張り切るのはいいけど、あまり暴走し過ぎないようにな。」

という俺の言葉にひよりは「わ、わかってるっスよ」と慌てながら言っているその姿を見て俺達はみんなで笑っていたのだった。

とりあえず会場を後にしなければいけなかったので俺達はこう達と共に水上バスを目指した。

そしてさらなる行列、待ち時間に翻弄され家に着いた頃にはくたくたになっていたのだった。

俺はこのイベントには二度と行くまいと思いつつもまた流されて行く羽目になるかもしれないと今からまた頭を痛めているのだった。

余談だが、かがみはラノベの挿絵の絵師さんの作品をそれはそれは大切に保管しているそうだ。

旋律達の夏休み４～慶一の誕生日～

コ○ケから数日後の朝、俺は夢の中を彷徨っていたのだが俺を揺り起こす声で意識を覚醒させる事になった。

「・・・・・君～。起きてよー？朝だよー？」

その声に反応して目覚めてみるとそこにいたのはこなただった。

「・・・ん？・・・ふぁ～あ、おはようこなた。というか、ちゃんと俺が起きる時間より早めに来れたんだな？」

こなたにそう言うとこなたは得意げに

「ふふん。私だってやればできるのだよ。少しは見直したかな？慶一君。」

そんなこなたに俺は苦笑交じりに

「ははは。普段もそうだったらもっと見直すところだけどな。それより悪いな、朝食わざわざ作りに来てくれてさ。」

こなたは俺が言った最初の部分に少しほおを膨らませながら

「むう、余計なお世話だよ。後、朝食の件については私がやるって言ったからね。言った以上はその義理は果たすよー？」

そう言うこなたに俺はこなたの頭を軽くぽんと叩きながら

「ありがとな、こなた。とりあえず着替えてくるから先にキッチンに行っていてくれ。」

そう促すとこなたはいたずらっぽい顔をしながら

「着替えるの手伝ってあげよっか？」

とか言って来たので俺は慌てながら

「いらん！ったく、変な事言ってないでキッチン行ってろよな」

こなたに促すとこなたは不満げな顔をしつつも「ちぇー、わかったよー。早く来てよね。」と言いながら部屋を出て行った。

何故こなたが俺の家に来て俺を起こし、朝御飯まで作ってくれているのか、その理由は数日前の柊家訪問後、俺自身が以前から感じていた奇妙な感覚の正体に気付き、俺が”あることを”実行に移したからだった。

こなた達と出会い、みんながこの家を出入りするようになって俺はこの家に帰ると常に一人きりだった事を意識するようになっていたらしい。

だが、柊家にお邪魔するまではその感覚は漠然としたものであってはっきりと認識できていたわけではなかった。

柊家において家族や姉妹に触れ、俺はその時味わった楽しい時間の余韻を残したままかがみたちと別れた時に、そして自分の家には自分を迎えてくれる者は猫だけしかいない、そこに人がいないのだということにはっきりと気付いてしまったのだ。

俺は一人でいる事は実の両親もいない、そして実家にいるのでもない訳だからそれが当然の事だと今まで意識すらしていなかった。

だが、今回の旅行において俺はみんなとの絆を確かめあい、みんなとの距離がさらに縮まった事で一人という事を意識した時これほどに自分が寂しさに脆い人間なのだという事を思い知った。

そんな俺が柊家を訪れた日以降に取った行動はこなた達に自分の家の合鍵を渡し、この家を好きなように使ってもらおうと思ったのだ。

そうする事で常に誰かしらが俺の家にいる状況を作りたかったと言うのが本当の本音だった。

こうする事で俺は自分が寂しさに弱い人間だという事をこなた達に知られ、からかわれたり笑われたりもしたが、その程度の事を受け入れる事で孤独を減らせるのなら、それがかなうのならそんな事は俺にとって些細な事だと切り捨てた。

その後はこなた達も今回のように好きなように家に遊びに来てくれるようになった。

俺は着替えをしながら柊家に訪れてからの事を思い出していたが、ふいに俺の携帯が着信を告げたので携帯のディスプレイを見て相手を確認すると、こうからの電話だったのでとりあえず電話に出た。

「もしもし？こうか？こんな早くから用事か？」

「おはようございます先輩。先輩、今日は何か予定はありますか？」

こうの言葉にとりあえず今日の予定について頭を巡らせてみたがな

にもなさそうだったので

「今日は特にこれといった用事はないな。」
「それなら今日は私とやまとと3人でちょっと出かけませんか?」
「別に構わないが何時に待ち合わせなんだ?」
「じゃあ、10時頃に多宮駅構内でどうですか?」
「わかった。それじゃその時間までに向かうよ。」
「それじゃ待ってますね?それではー」
「ああ、後でな。」

こうとの電話を終えると俺はキッチンへと降りていった。

キッチンに顔を出すと俺を待っていたこなたが

「あ、慶一君、遅かったね。着替え手間取ったの?」

と言うこなたに俺は首をふって

「いや、降りようとしたときに電話が来てな。ちょっと話し込んでたんだ。」

俺の答えにこなたがかすかに口元を緩ませたような気がしたが、気のせいだろうと思い特に追求はしなかった。

「そっかー。とりあえず食べちゃってよ。片付けたらすぐ帰るからさ。」

と言うこなたに俺も頷きを返しつつ

「ああ。とりあえずいただくよ。それじゃいただきまーす。」

そう言って朝食を食べ始めた俺達だった。

やがて朝食を食べ終えて俺は部屋に戻り出かける準備を始めた。

こなたは洗い物を終えると俺に「これで帰るねー、また暇な時には来るよー。」と言って帰っていった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君に朝食を作り慶一君が出かける事を確認して私は家を出た。

家を出てしばらくして私はおもむろに携帯を取り出すと八坂さんの所へと電話をかけた。

数回のコールの後八坂さんが電話にでた。

「もしもし、八坂さん？私だよ。上手くやってくれたみたいだね。」

「あ、泉先輩。はい、こちらはばっちりです。そちらの準備はよろしくお願いしますね。」

「まかせたまへー。これからすぐに皆を招集するから準備できるまで慶一君と時間稼ぎよろしくね。」

「了解です。では後ほどー。」

「うん。後でねー。」

と言って電話を終えて次はかがみ達に連絡を入れるために登録番号を呼び出してかがみに連絡を入れる。

かがみはすぐに電話に出てくれたので私は用件を伝えるのだった。

「もしもし、かがみ？私だよ。予定通りに慶一君を連れ出してもらったからこっちは準備ができるよ。他の人に連絡しつつつかさと一緒にこっちに来てねー。」
「わかったわ、こなた。それじゃ予定通りにね。」
「おけー。それじゃ後ほどー。」

と言って電話を終えると、今日の日の事を考えながら事の顛末を思い出していた私だった。

さかのぼる事3日前・・・・・・

私はかがみの家で宿題をすべくみゆきさん達も呼んで勉強会を開いていた。

勉強をしながら私はもうすぐ慶一君の誕生日だなあとカレンダーを見ながらそんな事を考えていたのだがふいにこれは面白そうなイベントになるかもと思い、かがみたちに相談を持ちかけるために誕生日の事を話題に出した。

「かがみ、かがみ。もうすぐ２０日になるけどさ。その日って慶一君の誕生日なんだよね。」
「え？あ、そういえば８月２０日だったわね。けど、それがどうかしたの？」
「うん、私達さ慶一君に誕生日にお世話になったじゃない？だからさ、そのお返しに私達も慶一君の為に心に残る誕生日会でも開いてあげようかなって思ってさー。」

そう言う私の言葉につかさは誕生日にもらったプレゼントの事を思い出したのだろう。

「そういえばあの時もらったプレゼントはうれしかったな～」

ニコニコと笑いながら首にかかっている月のペンダントを触りつつ言うつかさにかがみも同じように自分の首にかかる太陽のペンダントを触りながら

「そうね。私もこれは嬉しかったな。慶一くん日付変わる前に間にあうように家に来てこれを渡してくれたんだっけ・・・。」

かがみもその時の事を思い出してか少し顔を赤くしつつも嬉しそうにしていた。

なんだか少し面白くなくなった私は自分の腕に光るブレスレットを触りながら

「私だってこれ慶一君からもらったんだもんね。」

と呟くとみさきちも同じように首にかかっている星のペンダントを触って

「これだってあいつがくれたもんだもんな。私もそれなりには嬉しかったんだぜ？」

それぞれにプレゼントをもらった時の事を思い出していたが、私は話がそれた事に気付いて慌てて

「っと、そうじゃなかった。誕生日会の事だよ。みんなはどうかな？」

「私は賛成よ。旅行の事でもお世話になっているんだからささやかでもお返ししたいしね」

「わたしも～。けいちゃんの為になにかしてあげたいな。」
「私もです。旅行の件や勉強会においてもかなりお世話になっていますし何かお返しができればと思います。」
「私も賛成。慶ちゃんに喜んでもらおうよ。」
「賛成だー。こいつのお礼もしたいしなー。それに騒げるならなおいいしな。」

皆賛成してくれたようなので私は誕生日をどう演出しようかと考えていたがやがていい事を思いついたので皆に

「皆、ちょっと思いついたんだけどさ・・・・・というのはどうかなあ？」
「いいんじゃない？」
「ならお料理は私ががんばるよ」
「私も飾りつけ等を頑張ります。」
「私もプレゼントとか用意しておかないとね」
「私はクラッカーとかも用意するかなー？」

当日の計画を決めて私は最後に

「ならそれで決まりって事で、当日は八坂さん達にも協力してもらわないとね。後はゆーちゃん達も呼ぼうかな？」

と言う私にかがみも頷きながら

「いいんじゃない？それじゃあんたは八坂さん達と打ち合わせておきなさいよ。もろもろの準備は私達でやるからさ。」

かがみの言葉に私も頷いて

「わかったよ。それじゃそういう事で、当日は驚かせてあげようかね」

私の言葉に皆も全員で頷きあい

「「「「「了解ー」」」」」

と言って計画の実行の為に八坂さんに連絡を取る私だった。

・・・・・そして現在、そんな事を思い出しながら誕生日会のプランに思いを馳せているとかがみたちが丁度やってきた所だった。

「こなた、お待たせ。それじゃ早めに準備始めちゃいましょ？」

「了解、かがみ、みんな。それじゃすぐに行こうー」

「「「「「「「「「おー！」」」」」」」」」

と気合を入れつつ私達は準備を済ませる為に再び慶一君の家に行くのだった。

慶一ｓｉｄｅ

自分の自宅でそんな事が画策されているとは露知らず、俺はこうとやまととの待ち合わせの為多宮駅に向かった。

待ち合わせの時間を確認して時間にまだ余裕があることを確かめると俺は待ち合わせ場所でこう達を待つべく指定の場所でただずんでいようとしていたのだが、そこにはすでにこうとやまとの二人が待っていたのだった。

「あ、先輩こっちですー。」

「待っていたわ、先輩。」

そう俺に声をかけてくるこうとやまとを見て俺はやまとはともかくこうが俺達の待ち合わせにおいて俺よりも早く待ち合わせ場所にいる事に驚いて

「・・・・・こう、今俺は奇跡でもみているのか?」

そう聞くとこうは頬を膨らましながら俺に

「先輩、たまに時間どおりに来れたからってそれはないんじゃないですか?私だってこういう時くらいは・・・ってなんでもないないです・・・」

『っ!馬鹿、こうそれは黙ってなさいよ!』

こうは俺に抗議しつつも何かを言おうとしたらしいのだが、言いそうなったのを慌てたやまとに止められていたような感じだったが、また変な事でも言いかけたんだろうという解釈をして俺はその事に関しては追及はしなかった。

「まあ、それはともかく俺を呼び出したんだからどこか行く所があるんだろ?」

二人に向かってそう言うと二人も頷きながら

「そうなんですよ、実はちょっと買い物があるので先輩にも手をお借りしたいなと思いまして。」

「私はこうの付き添いも兼ねてなのだけど付き合ってもらってもいいかしら?先輩。」

俺は頷きながら

「わかった。それじゃ案内頼むよ。俺はあまり詳しいわけじゃないから二人について行くからさ。」

俺の言葉に二人は頷いて歩き出したので俺はそれについて行くのだった。

二人が向かった先は駅前の大きなデパートだった。

「へえ?中々大きな所だな。」

デパートを見上げて俺は感想を呟いていたがそれを聞いていたやまとは

「これくらいの大きい所は結構あるものよ?でもこれくらい大きければ色々な物が探せて便利よね。」

やまとの言葉にこうが苦笑しつつ

「大きいのはいいけど大きすぎても逆に探しにくくなる時ってない?」

そう返すとやまとは軽いため息を一つつきながら

「まあ、その辺は否定しないわよ。けど一言言わせてもらえばそのあたりはこうの探し方に問題があるんじゃないの?」

やまとの指摘にこうは「うぐ・・・」と一声うめくとやまとの言っ

た事を否定できずにいた。

俺はそんな二人のやり取りを苦笑交じりで見ていたがそのうち二人が動き出したので俺も二人を追いかけたのだった。

二人は洋服やアクセサリー等のお店を中心に見回っていたようだった。

そんな中で俺もいくつか立ち寄った場所に興味を引かれる物があったりもして時折立ち止まってはそれに見入ったりもしていた。

その時俺が見ているものをこうたちがさり気なく見ていた事には気付かずにいたのだが・・・・・。

いくつか見回っていた中でこうたちはそれぞれの買い物をしたようだった。

少ししてとりあえず休憩でもしようかということになり、俺達は手近なデパートの中にある飲食店で休憩を取る事になった。

休憩をしながらたわいのない雑談をしているときこうが

「すいません先輩、ちょっとお手洗いに行ってきますね。」

といってお手洗いへ行く為にその場を立ったのを俺とやまとは見送ってまた雑談をしていた。

しばらくしてこうが戻ってきたがそれを見計らったように今度はやまとがお手洗いに行くと言ってこの場を立った。

当然ながらその行動に違和感など感じていなかったので俺はその行動を気にも止めていなかったが。

しばらくしてやまとも帰って来たのでそろそろ出ようかって事になり、俺達はデパートを後にした。

戻る途中でこうがどこかへ電話をしていたの見たが、おそらく知り合いにでもかけているのだろうと思い特に気にはしなかった。

こうｓｉｄｅ

先輩と買い物を済ませて私は大分いい時間になったので泉先輩に連絡を取って状況の確認とともに先輩と一緒に家に向かうために携帯を取り出し、泉先輩へ電話をした。

何回かのコールの後泉先輩が電話に出たので私は確認を取ってみる事にした。

「もしもし？泉先輩ですか？そちらの準備はどうですか？」

「あ、八坂さん。時間を稼いでくれたおかげでこっちはばっちりだよ。そろそろ帰ってきてもいいよ？」

「了解です。それじゃそちらで。」

「うん。気をつけて戻って来てね。」

と言う短いやり取りを終えて電話を切ると私は先輩に

「先輩。とりあえずこれからなんですが、そのまま帰るのもなんなので先輩の家に行ってもいいですか？」

と聞くのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こうからどこかへと電話したらしいのを見た後家に寄りたいと言って来たので俺は

「お前が忙しくないというのなら別に構わないぞ？」

そう返事をするとこうとやまとは

「ならお邪魔させてもらいますね。」

「私も付き合わせてもらうわよ？とりあえずいきましょう？」

と言う二人の言葉に俺は頷きで返して俺達は家へと帰っていった。

そこに何が待っているのかも知らぬままに。

３人で雑談を交わしつつ家の前まで来るとなにやら家に人の気配のような物を感じた俺だった。

（ん？だれかいるっぽいな・・・こなたは朝には帰ってるし、かがみか誰かでも来てるかな？）

そう感じつつも玄関の扉を開いた時いきなり俺に向かってクラッカーが鳴らされた。

こなたｓｉｄｅ

慶一君が帰ってくる少し前に私達はこっそり飛ばしてくれた八坂さんのメールを受けて慶一君が家に辿り着き玄関を開けるタイミング

でクラッカーを鳴らそうと皆で玄関の扉の前で待機していた。

「もうすぐだね。ちょっとわくわくしてきたよ。」

「慶一くんきっと驚くわよね。」

「よろこんでほしいな～。準備がんばったもんね。」

「きっと喜んでくれますよ。慶一さんですから。」

「うふふ。慶ちゃんの驚く顔が見ものね。」

「皆が来てるなんて事しらねーだろうからなー。」

「旅行の時のお礼が少しでもできるといいな。」

「・・・先輩に何か・・・お返ししたいなと思ってましたから・・・いいチャンスです。」

「私もいい機会をもらった気分っス」

皆で頷きあっていると玄関の前に人の気配が近づいてくるのを感じた私は皆に

「3．2．1のタイミングで行くよ？みんな準備いい？」

とそう言うと皆は頷きながらクラッカーを構えた。

「3～2～1～、それー」

と同時に玄関が開き私達は玄関の前に立つ人にクラッカーを一斉に発射したのだった。

慶一ｓｉｄｅ

いきなりの事に驚いてしばらくは何が起きたのかわからない状態で俺はその場にただずんでいたがよく見るとみんなが揃って俺の家の玄関に立っていることに気付いた俺はみんなに

「・・・・・すまん。これは一体何のドッキリなんだ?みんな集まってさ。」

まだ混乱した頭でとりあえず現状の説明を求める俺にこなたは

「今日は何の日か慶一君忘れちゃったんじゃないよねえ?」

というこなたに俺は今日の事をいろいろ考えてみたが未だ掴みきれていない俺は

「すまん、何の日だっけか・・・」

そう答えるとこなたは俺を呆れたような目で見ながら

「はあ・・・まったく自分の誕生日の事忘れちゃったの?自分の事に関しては慶一君て無頓着な方なのかな?」

というこなたの言葉に俺はその事を思い出して

「あ、そういえばそうだっけか・・・最近祝ってくれる人もいなかったからすっかり忘れてたな・・・」

俺のその答えにこなた達は少し寂しげな表情になりつつも

「そっか・・・慶一君私達を会う前は友人もあまりいないっていってたよね・・・でも、今日はそんな事はないよ?私達が君の誕生日を祝ってあげるんだからさ。だから今日の誕生日は楽しんでよね。」

と言うこなたの言葉を聞きながら俺はものすごく嬉しい気持ちにな

っていた。

そして玄関に突っ立ったままの俺にこなたは俺の手を引きながら

「まま、それはともかく上がりなよ。今日のために皆で準備したんだからさ。慶一君を驚かせてあげたかったからね。」

と言いながら俺の手を引くこなたに連れられてリビングに向かう俺だった。

リビングにつくと部屋には飾り付けがしてあり、ケーキや料理が並べてあった。

そしてそこには俺の見知った仲間達が俺を笑顔で迎えてくれたのだった。

「慶一くん、お誕生日おめでとう。これ私からのプレゼントよ?受け取ってくれると嬉しいな。」

「けいちゃんお誕生日おめでとう~これは私からだよ?役に立つと思うから使ってね?」

「慶一さんお誕生日おめでとうございます。これは私からささやかではありますがプレゼントです。」

「慶ちゃんお誕生日おめでとう。これは私からよ?」

「慶一、誕生日おめでとう。あやのと一緒に選んだ物だけどさ受け取ってくれな。」

「慶一先輩お誕生日おめでとうございます。以前からお世話になりっぱなしでしたからこれはほんの気持ちです。」

「・・・先輩、お誕生日おめでとうございます・・・これはゆたかと一緒に選んだ物です・・・」

「先輩、おめでとうございます。これは私からっス。先輩の似顔絵

を書いてみました。」

そして後ろにいたこうとやまとも

「先輩、お誕生日おめでとうございます。これはさっきのデパートで先輩が興味を持った物を買ってみたんですよ。受け取ってください。」

「先輩、誕生日おめでとう。これは私から。いつもお世話になってる先輩にお礼もかねて買った物よ?」

俺はみんなからのプレゼントを受け取りながら半ば呆然としながらこの状況を見ていた。

自分自身が忘れていた誕生日、それを皆が祝ってくれる。

その状況があまりにも夢みたいで、今こうなっている事が信じられなくて俺はただただみんなの笑顔をみながらこれが夢ならば覚めないでくれと心の中で考えていた。

未だ呆然としている俺の手を引きこなたは俺をケーキの前に座らせて

「さあ、慶一くん。ケーキに立てた蝋燭を吹き消してよ。」

そう促すこなたに俺はまだ呆然とした頭で頷きながらも蝋燭の炎を吹き消したその瞬間皆からの歓声があがった。

「おめでとう。慶一君。」

「おめでとう。慶一くん。」

「けいちゃんおめでとう~」

「慶一さん、おめでとうございます。」

「おめでとう。慶ちゃん。」
「慶一、おめでとう。」
「慶一先輩。おめでとうございます。」
「・・・先輩・・・おめでとう・・・」
「先輩。おめでとうっス」
「よかったですね。先輩」
「先輩、おめでとう。」

というみんなの言葉を聞きながら俺は涙が頬を伝うのを感じながら

「みんな、ありがとう。俺自身が自分の誕生日を忘れていたってのに・・・凄く嬉しいよ。プレゼントもありがとうな。絶対に大事にするから。」

そう皆に告げるとみんなはにっこりと笑って頷いてくれたのだった。

その後はつかさの作った料理に舌鼓を打ったりケーキを食べたりみんなでゲームしたりとかしながら次の日の朝日が昇るまで俺達は楽しんでいたのだった。

皆が帰って行くのを見送りながら俺は今回の誕生日の事をずっと忘れないと心に誓いながらまた一つ思い出を心に刻み付けるのだった。

旋律達の夏休み5～夏休み最後の大勉強会～

あの誕生日から一週間程の時間が経ったある日の事、大体真面目にやるべき事を済ませた学生であるならば夏休みの宿題はすでにこの頃までには終わらせて9月の始業式まではのんびりしている者がほとんどであると言うところだろう。

だが、俺の周りには何人かの勉強が苦手な奴がいるわけでなんとなくな嫌な予感を感じていた俺だったが、その予想は計らずとも当たる事となった。

それは8月28日の昼間、とりあえず部屋の掃除をしつつのんびりとしていた時の事。

俺の携帯が突如の着信を告げたので携帯を手に取りディスプレイをチェックすると電話の主はみさおだった。

「もしもし、みさおか？今日は何の用での電話かな？」

「あ、慶一。助けてくれってヴァ。宿題終わりきってなくて柊にも手伝って欲しいって頼んだんだけど断られちゃってさー・・・」

みさおの返答に呆れつつ

「おいおい、まさかぎりぎりまで宿題済まさずに遊んでたのか？」

「う、実はそうだったり・・・慶一、後はお前しか頼れる奴がいないんだよ。だから頼む、宿題手伝ってくれってヴァ」

俺はしばらく無言で考え込んでいたのだが誕生日会の事もあったので

「わかったよ。引き受けるから来い。出来る限り手を貸してやるから。」
「ほんとか？慶一。わかった。すぐ行くから頼むぜー」
「ああ。それじゃ後でな。」
「すまない慶一、恩に着るぜー。」
という言葉の後電話が切れた。

俺は電話の内容に呆れてはいたものの誕生日会での恩を返せるしいいかな？と思いながらもみさおの来訪を待つ事にしたのだった。

みさおからの電話の後少しして玄関の呼び鈴が鳴った。

みさおからの電話の後そんなに時間が経っていないはずなのにもう来ているとかあるのだろうか？と不思議に思いながらもとりあえず玄関に行って確かめてみようと思い扉を開けるとそこに立っていたのはこなたとつかさの二人だった。

「や、やふー慶一君。元気かな？」
「け、けいちゃん。いてくれてよかったよ～」
かなり気まずそうな顔をしてやってきた二人に俺はため息を一つついて

「この通り俺は元気だがお前らが来たということになんとなくだが予想できる展開があるな」
一呼吸置いて俺は二人をじろりと睨みつけて
「二人とも宿題だろ？」

核心を突いた言葉に二人は「あうっ！」「はうう！」とうめいて二の句が告げずにいたが俺はみさおを見るのもこの二人を見るのも一緒だと思い二人に

「はあ・・・とりあえず上がれよ。面倒見てやるから」

というこなた達が予想していた答えとは違う答えが来た事に二人は驚きつつ

「え？いいの？慶一君」
「ほんとに？嘘じゃないよね？」

そう聞いてくる二人に俺は苦笑しながら

「今更増えたところであまり変わらないからな。やるならまとめてやってしまうまでさ。」

俺の増えるという言葉を聞いてこなたはピンときたらしく俺に確認してきた。

「増えるのってひょっとしてみさきちの事？」

俺は頷きながらこなたに

「そのとおりさ。結局似通っちゃうところはお前らしいと言えばらしいがな」

そう答えるとこなたはあまり釈然としない表情をしていたが、とりあえず問題を先に片付ける事を優先させたようで

「何かあまり納得行かない部分あるけどまあいっか。それじゃ上がらせてもらうよ？慶一君。」
「おじゃましまーす」

つかさもそう言いながら上がって来たので俺は二人をリビングに連れて行くと二人に麦茶を振舞うためにキッチンへと行こうとしたらこなたが

「あ、慶一君は宿題の準備しておいて？お世話になるから飲み物とかの方は私がやらせてもらうからさー」

そう言いながら俺を制してキッチンへと向かうこなたに

「わかった、じゃあ、そっちは頼むな。ちょっと準備してくる」

そう言って俺は自分の部屋に宿題を取りに行きリビングに戻ってきた。

「さて始めるか、とは言っても俺のやつ写すのみなんだろうけどな」

そんな俺の言葉に二人とも苦笑しながら

「あはは・・・お見通しだね・・・」
「ううん、ごめんね？けいちゃん」

そんな二人に頭を軽くぽんと叩きながら

「気にするな、とりあえず始めちゃえよ。時間なくなるぞ？写す物は交互にずらしてやっていけばいいさ。そうすれば満遍なく終わら

せられるだろうからな。」

俺がそう言うと二人は頷きあいながら早速宿題を始めたようだった。

それから３０分程が経過しただろうか？玄関の呼び鈴を鳴らす音が聞こえたので俺は二人に

「みさおが来たっぽいな。俺は迎えに出てくるからそのままやってろよ？」

そう言い残して玄関に行き玄関を開けると満面の笑みを浮かべたみさおが立っていた。

「いらっしゃい、みさお。」

「慶一ー、きたぜー。ってあれ？ほかに誰かきてんのか？」

こなた達の靴に気付いたみさおに俺は

「ああ、こなたとつかさが来てるよ。お前と同じ理由だ。とりあえず上がれよ。」

そう促すとみさおは「お邪魔しまーす」と言って上がって来た。

リビングに向かう途中みさおは俺に

「ちびっ子達もやっぱし同じこと考えてたって事か」

そう聞いてくるみさおに頷きを返しつつ

「そういう事だな。とりあえずリビングついたらこなた達が手をつ

けてない宿題から始めてればいい」

そう俺が言うとみさおも「わかったぜー」と返事をして俺についてきたのだった。

リビングに到着してみさおを席につかせるとこなたとつかさがみさおに挨拶をしていた。

「みさきち、いらっしゃーい。」

「日下部さんいらっしゃい。がんばってやっちゃおうよ。」

と言う二人にみさおも笑いながら

「ああ。よろしくなー、二人とも」

そう返した後宿題を鞄から取り出して早速始めたので俺はみんなの分の飲み物を用意するべくみんなの邪魔をしないようにそっとリビングを出てキッチンへと赴いた。

キッチンへ向かう途中俺の携帯が着信を告げたので確認してみるとかがみからの電話だったので俺は電話に出る。

「もしもし、かがみか？何か用事か？」

「あ、慶一くん。そっちにつかさ行ってない？宿題をこなたと一緒にやるって言って家を出て行ったんだけどさ、こなたの家に電話したら一緒にどこかへ出かけたっていうからさ。」

「あー・・・それなら今俺の家に二人ともいるよ。まあ、みさおも来てるから3人だけどな。」

「え！？日下部までそっちにいるの？まったくしょうがないわね、あいつらは・・・」

「俺と会う前はかがみも大分苦労してたんだな。」
「・・・はあ、分かってくれた？私の苦労ってやつを」
「ああ、存分にな。それでどうするんだ？つかさを迎えにでも来るのか？」
「そうね、３人も面倒見るんじゃ慶一くん一人じゃ大変そうだし、私も手伝いに行くわよ。」
「いいのか？かがみ。お前も何か忙しかったんじゃないのか？」
「特に忙しいって用事はないわ。だから心配しなくても平気よ。とにかくそっちに行くからね。それじゃまた後でね？」
「ああ。気をつけて来いよ？」
「うん、それじゃー。」

という感じでかがみとの電話のやり取りを終えた俺は飲み物を持ってリビングに戻って行った。

「ほら、少し休憩しろよ。飲み物持ってきたぞ。」

そう言いながら俺は３人の前に飲み物を置く。

「ありがとー。」
「つかれたねー。」
「私はちびっ子達より遅くに始めたんだし、もう少しがんばらねーとな」

３者３様の会話を交わしつつ飲み物を飲みながら休憩に入る３人を見ていたがふいに玄関の呼び鈴が鳴るのが聞こえたので俺は３人に

「あれ？またお客さんかな？ちょっといってくるよ。」

そう３人に告げて部屋を出て行く際に「「「いってらっしゃーい」」」

」といって見送ってくれるのだった。

玄関へ向かいながら俺は（かがみが来るまではまだ時間かかるはずだよなあ？）と心の中で考えつつ玄関の前に行って扉を開くとそこにはみゆきを始めとしてゆたか、みなみ、ひよりの３人が立っていたのだった。

「こんにちは慶一さん。」
「先輩、こんにちは。」
「・・・こんにちは・・・」
「こんにちはっス」

挨拶する４人に俺は挨拶を返しながら来訪の理由を聞くのだった。

「おう。はいいが、一体どうしたんだ？４人揃ってさ。」

俺の質問にみゆきが代表で答えてくれた。

「実はみなみさんの家に小早川さん達が受験勉強と夏休みの課題を終わらせる為に集まっていたらしいのですが、そのサポートをして欲しいと私が頼まれたのですが、流石に３人を見るのは大変だと思いましたのでかがみさんと慶一さんにも手助けをお願いしたいなと思ったんです。とりあえず連絡を入れたのですがどちらも電話をするたび話中でしたし、かがみさんに至っては電話がつながった折に出かけた所だと言う事でしたので仕方ないと思い、慶一さんの方に直接訪ねさせていただきました。」

俺はみゆきが凄く絶妙なタイミングで電話してたらしい事を想像していた。

おそらくこなたやかがみが電話してきたタイミングでかけたのだろうと言う事、そしてかがみにつながった頃にはかがみはすでに俺の家に向けて出発した後だったのだろうと。

「事情は分かった。とりあえず上がってろよ。他に来てるやつもいるから賑やかだけどな。」

みゆきにそう言うとみゆきは驚いた表情で

「他にどなたかいらっしゃっているのですか?」

というみゆきの質問に俺は笑いながら

「ああ。こなた達が来てるよ。もっとも、それと今日の日付を見れば何しに来てるかはみゆきにも一目瞭然じゃないかとは思うけどな。」

そう答える俺にみゆきは苦笑していたがこなたの名前を聞いたゆたかがそれに反応して

「え?こなたおねーちゃんが来てるんですか?こなたおねーちゃん遊びに来てるのかな?」

ゆたかの言葉に俺は苦笑しつつ

「一応、勉強と言えば勉強だが・・・くれぐれもいっておくがゆたか、こなたを見習っちゃだめだぞ?特に今日のは悪い所だしな・・・」

俺の言葉にゆたかは頭にたくさんのハテナマークを飛ばしていたが

俺はみんなに

「まあ、それはともかく皆上がれよ。ゆたか達は俺とみゆきとかがみで面倒見るからさ。」

家に上がるように促すと４人とも「「「「お邪魔しまーす」」」」と言って上がって来てリビングに向かう途中みゆきが

「かがみさんもこちらに来られるのですか？それじゃさっきのかがみさんの電話で聞いた事は・・・」

そのみゆきの言葉に頷きながら

「ああ。まさに家に向かう途中だったと言う事だ。結局みんな家に集まる事になった訳だがな。」

そう言うとみゆきはにっこりと笑いながら

「それなら丁度よかったです。それにかがみさんも居てくれればさらにやりやすくなるでしょうし。」

俺はそれに頷きつつ３人に

「まあ、そういうわけだから受験勉強は心配しなくていいぞ？俺たちで面倒みるからな。」

そう言うと３人とも

「ありがとうございます。とても助かります。」

「・・・お世話になります・・・」

「お手柔らかにお願いするっス」

改めて挨拶を返す3人だった。

とりあえずリビングに連れて行くとゆたか達にきづいたこなたが

「あ、ゆーちゃんどうしたの？急に現れたからびっくりしたよ。それにみゆきさん達も」

4人に声をかけると4人もそれぞれこなたに

「泉さんこんにちは。今日はみなみちゃん達の受験勉強のサポートのために慶一さんにお手伝いをお願いしたくて来たんです。」

「こなたおねーちゃん。高良先輩に受験勉強のお手伝いをお願いしたんだよ。」

「・・・慶一先輩にもお願いする為に来ました・・・」

「私達絶対陵桜に受かりたいっスから頑張ろうかと思いまして。」

そう答えるとこなたも納得したようで

「そっかー。みゆきさん達に見てもらえば大丈夫だね。ゆーちゃん、みなみちゃん、ひよりん、頑張りなよー？」

こなたがそう声をかけると3人とも大きく頷いて「「「はい！がんばります」」」と気合を入れて答えていた。

俺は別にテーブルを用意した方がいいかもしれないなと思いゆたか達に

「もう一つテーブル用意しておいた方がいいと思ったからちょっと

取ってくるよ。こなた達、そのテーブルを少し移動させておいてくれ。」

テーブルを取りに行く事を伝えた後こなた達にテーブルの移動を頼むと3人は返事を返しながら

「了解ー。こっちはやっておくから大丈夫だよ?」

「わたしはそっちを持つね?」

「じゃあ、私はこっちを持つからせーので運ぼうぜ?」

そう言いながらテーブルの移動を始めたのを見て俺はテーブルを取りに物置へと行くのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんの家に3人がお邪魔している事を知った私は慶一くんのサポートをしようと思い、慶一くんの家に向かっていた。

家の側まで来た時慶一くんの家の前で私は見知った顔を見つけたので声をかけることにした。

「峰岸、あんたこんな所でなにしてるのよ?」

私の声に峰岸はこちらに振り向いて私の顔を確認し、困惑した顔になりながら

「あ、柊ちゃん。実はみさちゃんを探してここに来てみたの。みさちゃんの家に行ったらお兄さんが何か慌てて出かけていったと言ってたからみさちゃんの行く所を探してみたんだけど柊ちゃんの家以外は後はここくらいしかないかな?と思ったの。」

ここに居る理由を説明してくれた峰岸に私は苦笑しながら

「あんたの勘は当たってるわよ?あいつもここに来てるって慶一くんが言ってたから。」

私の答えに驚いた表情になった峰岸は軽いため息をつきながら

「はあ・・・という事は慶ちゃんに迷惑かけちゃってるのね・・・後できつく言っておかなくちゃ・・・」

そう呟いたあと峰岸は私が何故ここにいるのかが気になったらしく

「そういえば柊ちゃんはどうしてここに?」

その理由を聞いてきたので私は峰岸に

「つかさがここに来てるからよ。こなたも一緒に来てて慶一くんに宿題手伝ってもらってるって聞いたから3人への説教と慶一くんの手助けも兼ねてここに来たのよ。」

説明をした後峰岸は軽いため息をつきながら

「柊ちゃんも大変なのね・・・お互い苦労するわね・・・」

そう言う峰岸に私もため息をつきつつ

「まあね・・・最近は慶一くんにも私の苦労が分散しつつあるから少しは助かってるんだけどね・・・」

そう答えると峰岸も苦笑していた。
いつまでもここでこうしていても仕方がないので私は峰岸に
「峰岸、日下部に会いに来たのなら一緒にいきましょ?どの道目的地は同じなんだから。」
そう促すと峰岸も頷きながら
「そうね。慶ちゃんにはまた迷惑かけちゃう事になるかもだけど行ってみましょ?」
峰岸の言葉に頷いて私は慶一くんの家の呼び鈴を押すのだった。

慶一ｓｉｄｅ

物置からテーブルを取ってリビングに戻り、ゆたか達のために新しい場所を用意した後しばらくはみゆきにゆたか達の様子を見させつつ俺はみゆき達への飲み物を用意する為キッチンへと向かっていたのだがふいに呼び鈴が鳴ったので俺はかがみが来たな?と思いながら玄関へと出迎えにいく。
「ちょっと待ってて、今あけるから。」
そう言いながら俺は玄関を開けるとそこにはかがみだけなくあやのも立っていた。
「こんにちは、慶一くん。あんたの手助けに来たわよ?」
「慶ちゃんこんにちは。」

挨拶してくる二人に俺は挨拶を返すのとあやのがここに居る理由を聞いてみた。

「いらっしゃい、はいいが、かがみはともかくあやのも一緒ってのはどういう事なんだ？」

その事を聞くとあやのが俺に苦笑しながら

「実はみさちゃんを探してここに来たのよ。そうしたら玄関前で柊ちゃんとばったり、って訳なの。」

そう俺に答えると俺も納得がいった。

「そういう事か。けどみさおはお前に行き先言っていかなかったのか？」

軽く疑問に思った事を聞いてみるとあやのは

「それが、みさちゃん大分慌てていたらしくて行き先を告げずに家をでたらしいのよね。」

困惑顔で言うあやのに俺はやれやれとジェスチャーしながら

「あいつもなかなかの慌て者だな。あ、そうだ。かがみ、あやの、ちょっと頼みがあるんだがいいか？」

そう言いながらもかがみだけでなくあやのも居るならばと思い、俺は二人に頼みたい事がある事を告げた。

二人は首を傾げつつ俺に

「なあに?頼みごとって私にできる事?」
「みさちゃんの事では迷惑かけちゃってるから私の出来ることならするわ。」
そう言ってくれたので俺は二人に
「実はうちにはゆたか達も来ててな。陵桜への受験勉強をやってるんだが、その面倒を見るのを手伝って欲しいんだ。みゆきもフォローしてくれているけど流石に手が足りない状況だからさ。」
そう説明するとかがみは頷きながら
「いいわよ?ゆたかちゃん達を手伝うのならやりがいありそうだしね。でも、みゆきまで来てたのね。今日は先客万来ね。」
苦笑しつつも引き受けてくれた。
「いや、みゆき達の事はまったくの想定外でな。かがみ、面倒かけて悪いな。」
協力に感謝しつつかがみにお礼を言うとかがみはにっこりと笑いながら
「困った時はお互い様よ。私と初めて会った時に慶一くんが私に言ってくれたわよね?」
その言葉に俺はかがみと初めて会った時の事を思い出し
「あ、そういえば俺はかがみにそんな事を言ったっけな。分かった、

よろしく頼むよかがみ。」

そう言うとかがみは大きく頷いて

「分かったわ、任せて。」

と言ってくれた。

あやのも頷いてくれて

「私も及ばずながら手助けさせてもらうわね？それと慶ちゃんごめんなさい。みさちゃんの事で迷惑かけちゃって。」

協力すると言ってくれつつみさおの件に関して謝ってきたあやのに俺は

「気を使ってくれる所はあやののいい所でもあるが、別に迷惑と思ってるわけじゃないんだからそんな顔しないでくれよ。友達にかけられる迷惑ならこの程度は別に構わないしそれに・・・・・・」

一度言葉を切ってさらに言葉を続けて

「誕生日の事もあるからな。みんなの事を引き受けたのもこういう形でもみんなに何かお返しができたらと思っての事だからさ。」

少し照れながらあやのから視線をはずしつつそう言うとあやのは俺の気持ちを理解してくれたようで柔らかく微笑みながら

「ふふふ。慶ちゃんは優しいね。分かったわ。それと、ありがとう。」

その言葉に顔を赤くしつつもとりあえず2人を家に上げる事にした。

「立ち話もなんだからとりあえず上がってくれ。みんなも待ってるだろうしな。」

そう促すと二人とも「「お邪魔します」」と言って上がって来たので俺は2人を連れてみんなの居るリビングへと連れて行くと二人に気付いたこなた達が驚きの声をあげた。

「おかえりーって、かがみ?峰岸さんも?」

「あ、おねえちゃん・・・」

「あ、あやの、どうして私がここにいるってわかったんだ?」

その3人の声に2人は

「こ~な~た~?それにつかさも慶一くんに迷惑かけてなにやってんのよ!」

「みさちゃん?あまり慶ちゃんの迷惑になるような事しちゃだめじゃないの」

そう言う二人に3人は言い訳をするのだった。

「い、いやーかがみにも頼れないしどうしたものかと思っていたんだけど慶一君が引き受けてくれたからさー・・・」

頬をぽりぽりと掻きながら冷や汗をたらしつつ言いにくそうに話すこなた。

「ごめんなさい、おねえちゃん。でもどうにもならかったからこな

ちゃんと相談して来たの。けいちゃんに断わられたら自分で何とかしようとは思ってたんだよ・・・」

ばつが悪そうに言うつかさ。

「私も他に慶一しか頼れる人が居なかったんだってヴァ。だけど慶一が引き受けてくれたからつい・・・」

こちらも縮こまりつつあやのに言い訳をしていた。

その3人に2人からさらなる説教をくらって凹んでいた。

俺はそんな様子を見ながら苦笑していたが。

「かがみ、あやの。とりあえず宿題終わらなくなるからそのくらいにしておいてゆたか達の面倒を見てやってくれ。こなた達はそのまま続けていてもらえばいいしな。」

俺がそう二人に言うと二人はとりあえずは気が済んだようで

「そうね。それじゃ私達はゆたかちゃん達の勉強を見るわね。こなた、つかさ、日下部、ちゃんと反省しなさいよ?」

「みさちゃん?後で慶ちゃんにはお礼とお詫び、ちゃんと言っておかなきゃだめよ?」

そう3人に釘を刺すと2人はみゆきの所へ行き

「みゆき、私達も協力するからがんばりましょ?」

「高良ちゃん。できる限りの事はするからもし間違ったりしたら指摘してね?」

その二人の申し出にみゆきもいつもの柔らかい微笑みで頷きながら

「お二人ともご協力よろしくお願いしますね？」

そう2人に言うと、さっそくゆたか達の勉強を見始めた。

俺はさっき飲み物を取りに行く途中だったのでもう一度キッチンへと戻って行った。

飲み物を取って帰ってきてみんなに振る舞いながら俺もゆたか達の勉強を見る。

しばらくやっているとこなた達がなにやら呟いているのを聞いたのだった。

「あ、あれー？おっかしいなあ、ただ宿題を写すだけのはずなのにギャラリーが居ると何かこう、プライドのようなものが・・・」

「あはは・・・わたしも、なんだか・・・」

「なんなんだろうな？この感覚・・・」

その呟きを聞いた俺は3人の所へ行って3人に

「ほう？一応はそういうものがまだお前らにもあったって事か。あの3人に恥ずかしい所を見せたくないっていうものが少しでもあるなら、あの3人の見本になれるようにがんばってみろよ？特にこなたはゆたかにとっては義妹みたいなものなんだろ？だったらがんばれ、おねーさん。」

こなたにはっぱをかけるように言うとこなたは

「うーん、おねーさんて大変だね・・・」

そう呟いていたのだった。

やがて宿題も終わり、ゆたか達の受験勉強にも区切りがついた頃・・・・・

「はあー・・・・・やっと終わったー・・・」

「なんとか無事に宿題終わったね。」

「慶一、本当に助かったぜ」

そう言ってくる3人に俺は苦笑しながら

「何にしてもちゃんと計画立ててやっておけば後で慌てる事もないだろうからな。これからはそういうのも心がけてみたらどうだ?」

という俺の言葉に3人とも苦笑しながら

「いやー、最初はそうするんだけどついつい計画に破綻をきたしちゃってさー」

「最後にはうまくいかないんだよね・・・」

「遊びの計画なら色々立つんだけどな」

という言葉にかがみが呆れ顔で「・・・あんたらは・・・」と呟いていた。

「慶一先輩、それに高良先輩とかがみ先輩に峰岸先輩。おかげで受験勉強がはかどりました。今日は本当にありがとうございました。」

「・・・みなさんのご協力のおかげでとてもいい勉強ができました・

・・ありがとうございます・・・」
「煮詰まってたところもなんとかなりましたっス。皆さんには感謝です。」

3人の言葉に俺は照れながら

「3人とも中々飲み込みがよかったからな。かがみ達も教えやすそうだったよ。その調子でがんばって来年は陵桜の受験をクリアして3人とも俺たちの前に揃って来てくれる事を祈ってるよ。」

そう激励の言葉をかけるとかがみも3人に

「大丈夫よ。みんなとても理解が早かったしこのまま落ち着いてやっていけば陵桜合格もいけるわ。」

そう激励の言葉をかけるとみゆきも3人に

「みなさんならきっと受験にも成功できますよ。今日勉強した事ももう一度しっかりと復習すればさらに皆さんの力となるはずですから。」

と激励の言葉をかけ、あやのもそれに続いて

「この中の誰一人かけることなく陵桜で会いましょう?みんならきっとできるわ。」

3人に激励の言葉を送ると3人もみんなの言葉に答えるように「「「ありがとうございます」」」とお礼を返していた。

みんなを見送って今日の慌しい一日を思い出し、こういうのも悪く

ないなと思うと同時にゆたか達の受験の成功を祈りながらその日を終える俺だった。

こうして波乱と冒険と激動の旋律達の夏休みは終わりを迎える。

2学期には何が起こるのだろうか?と再び学校で皆と騒げる事を楽しく思っている俺だった。

旋律達の夏休み5～夏休み最後の大勉強会～（後書き）

これにて夏休み編終了です。
最近サイトがリニューアルしたのもあっていまだ不安定なところがあり、執筆が遅れ気味になっています。
今しばらくはいつもよりも遅れるかもしれませんがどうか暖かい目で見守っていただきたく思います。

旋律達の新学期～新たに始まる学校生活～

旋律達との夏休み最後の大勉強会をやってから3日が過ぎ、9月1日、俺達はいよいよ2学期を迎える事となった。

長い夏休みを経て久々に行く学校でまた新たな騒動が待っているのだろうな、と思いながら俺はいつものように早起きをして朝食を済ませ、猫達に餌を与えて家を出る時間まで少しの間のんびりとしているのだった。

やがて家を出る時間が来て俺は鞄を持ち玄関をでた時、新学期最初のサプライズを目にしたのだった。

「おはよう、慶一くん。時間は丁度よかったみたいね。それじゃ早速学校へ向かいましょ？」

「ふあぁ～、おはよう、けいちゃん・・・うーん・・・まだねむいよう・・・」

そこに立っていたのはかがみとつかさの2人だった。

俺はいきなり2人が立っていることに驚いて

「お、おはよう。かがみ、つかさ。けど何で2人がここに？」

かがみに訪ねるとかがみは少し照れた顔で

「慶一くんの家の場所は私の家からだと通り道のようなものだから一度迎えに行って驚かそうと思ってね。」

いたずらっぽく微笑みながら言うかがみに俺も少し照れつつ

「ま、まあ、理由はわかったけど一度電車を降りてからここへ来るのは面倒じゃなかったか？」

かがみにそう聞き返してみるとかがみはすぐ側に止めておいた自転車を指差して

「あれがあるから大丈夫なのよ。慶一くんも駅までは自転車を使う事あるんでしょ？」

かがみの乗ってきた自転車を見て俺は成る程と頷きながら

「そういや俺もたまに使ってたな。それじゃ今日は自転車使って行くとするか。準備してくるからかがみとつかさもすぐ出れるようにしといてくれよ？」

2人にそう伝えると2人とも頷いて

「わかったわ。つかさ、自分の自転車を持ってきなー？」

「・・・うん、わかったよ。おねえちゃん・・・」

そう言って自分の自転車をまだ眠そうな顔をしながらも取りにいくつかさを見つつ俺も自分の自転車を出しにいった。

自転車を出してきて二人と合流する。

「お待たせ。さあ行こうか。」

「うん。それじゃいきましょ？つかさー、いくよー？」

「まって～、おねえちゃん、けいちゃん～」

3人は駅に向かって走り出す。

走りながら俺は一つ疑問に思った事があったのでかがみに訪ねてみることにした。

「なあ、かがみ。いつも電車を使って家に来てたお前が自転車でよく家の場所分かったな？」

俺の質問にかがみは軽く笑いながら

「それは慶一くんの知らない時に一度、お使いを頼まれて自転車でこっちの方に来た事があったからよ。その時ついでに慶一くんの家の場所を覚えたの。」

かがみの答えを聞いて俺は頷きながら

「なるほどな。そういう事だったか・・・・・おっと駅が見えてきた。かがみ、つかさ。俺が使ってる駐輪場に自転車を置いていけばいいよ。空いてる場所案内するからついて来て？」

そう2人に促すとかがみが「じゃあ、お願いね？」といいながらつかさを誘導して俺の後について来た。

俺は自分が使ってる場所に自分の自転車を止めた後かがみたちを駐輪場の空いてる場所へ連れて行き自転車を止めさせた。

「これでいいな。かがみ、時間は？」

「電車の時間はまだ余裕よ？つかさ、いくわよー？」

「・・・ふああ・・・は～い・・・おねえちゃん・・・」

かがみがつかさに声をかけるがつかさはまだかなり眠そうだった。
俺はそんなつかさを苦笑交じりで見ながらも2人を伴って駅のホームへと向かった。

「途中の駅でこなたと合流する予定だから私達はいつもこなたが乗ってくるこの場所に乗ればいいわ。」

駅で電車を待ちながらこなたとの合流の事を教えてくれるかがみに従って俺もこなたが乗り込んでくる場所へとついていく。
やがて電車が到着して俺達は電車に乗り込んだ。

「28日は迷惑かけちゃったわね。」

ふいにかがみが俺に話を振ってきたので俺は軽く笑いながら

「結果的に皆で勉強できたんだし、宿題も間にあったのなら別にいいさ。」

そう答えると眠そうなつかさも俺に

「・・・あの時は本当にたすかったよ～。ありがとね?けいちゃん・・・ふああ・・・」

そうお礼を言って来るつかさに俺は一応釘をさそうと思い

「今度はきちんと自分の力でやれるようにがんばらなきゃだめだぞ?つかさ。」

俺のその突っ込みにつかさは苦笑をうかべながら

「・・・あはは・・・がんばってみるよ・・・」

なんとも歯切れの悪い答えに俺もやれやれと心の中で思いつつ窓の外に目をやった。

しばらくしてこなたが乗ってくる駅へと到着し、こなたが電車に乗り込んできたので俺はこなたに朝の挨拶をした。

「こなた、おはよう・・・ってお前凄い顔してるな・・・髪もぼさぼさだし、一体何があった?」

俺の声に半ば朦朧とした意識でこなたは俺に挨拶を返した。

「・・・あー・・・慶一君、おはよう・・・うう・・・眠い・・・」

そのこなたの態度にかがみも呆れながら

「まったく、酷い顔ね、こなた。またゲームでもやりこんでたの?」

そうかがみが聞くと想像よりも凄い答えが帰ってきた。

「いやー・・・かれこれ3日徹夜でゲームをさー・・・」

こなたの言葉に俺とかがみは大きなため息をついて

「お前な・・・少しは自重しろ。日常生活にまで支障をきたしてどうする気だ・・・」

「呆れて物も言えないわね・・・まったく、いつか体を壊すわよ?」

俺たちの忠告など聞こえてないかのようにふらつきながらこなたはつかさの元へと移動して

「・・・あー・・・おはよう・・・つかさ・・・眠いねえ・・・」

「・・・おはよう、こなちゃん。ほんとにね~・・・眠いね・・・」

その2人を見てかがみは拳を握り締めながら

「まったく、こいつらはだらしのない所ばっかり似やがってー!」

そう突っ込みを入れているかがみをとりあえずなだめる俺だった。

「とりあえず落ち着けかがみ。皆が見てる」

かがみにそう言うとかがみは”はっ”と我に帰り顔を真っ赤にしていた。

いつもならここでこなたのからかいが始まる所なのだが今日に限っては体調不良のほうが勝っているようで今のこなたにはかがみを弄ぶ余裕もないようだった。

そうこうしているうちに電車は粕日部へと到着したので俺はこなたを、かがみはつかさを引っ張って電車から降りた。

「まったく、しっかりしろよな?こなた。」

「つかさ、あんたもしゃきっとする!」

俺達は2人に激を飛ばしつつ学校前まで行くバスに乗り込む。

「おはようございます。慶一さん、かがみさん、つかささん、泉さん」

そう声をかけてくる女生徒に振り返り俺とかがみは挨拶を返していた。

「おはよう、みゆき。このバスで会えるとは思ってなかったけどな。」

「みゆき、おはよ。そういえばあんたとこのバスで会うのもめったにない事よね？」

みゆきは微笑みながら

「うふふ。そうですね。私も驚いていた所です。そういえばつかささんと泉さん、なんだか体調が悪そうですが大丈夫なんでしょうか？」

心配そうなみゆきに俺達は軽いため息をつきながら

「あー・・・あいつらの事なら心配いらないよ。日ごろの不摂生が出ただけだ。」

「つかさはいつものとおり朝が弱いだけだから心配はないわ。」

俺たち2人の言葉にみゆきはほっとしていたようだった。

そんなやり取りをしてるうちにバスは学校前のバス停へと到着する。

俺達はいまだ体調が戻らないこなた達を引き連れバスを降りて昇降口へと向かうとその途中で

「あ、おはようございます先輩達。」
「おはよう、先輩達。今日から新学期ね。」

こうとやまとの2人に声をかけられたので俺達も2人に挨拶を返しながら歩く。

「おはよう、こう、やまと。2学期もよろしくな。」
「おはよう。八坂さん、永森さん。」
「おはようございます。八坂さん、永森さん。お2人はお元気そうですね。」
「・・・おはよー・・・八坂さん・・・永森さん・・・」
「・・・ふああ・・・おはよう・・・八坂さん・・・永森さん・・・」

俺たち以外の2人にこうとやまとは驚きながら

「泉先輩につかさ先輩、なんだか体調悪そうですねー」
「慶一先輩、かがみ先輩。大丈夫なの?この2人」

という2人の質問に俺とかがみは先程バスでみゆきにした説明を再度するのだった。

そうしてこなた、つかさ、みゆき、こう、やまと、とも別れ、自分達の教室にかがみと共に向かう俺だった。

教室につくと俺達の姿を見つけたあやのがこちらにやってきて

「おはよう。慶ちゃん、柊ちゃん。今日から新学期ね。」

そう声をかけてくるあやのに俺達も

「おはよう、あやの。今日からまたよろしくな、はいいがみさおはどうしたんだ？」

「おはよ、峰岸。そういえば日下部は挨拶にこなかったわね。」

挨拶を返しつつもみさおの事が気になった俺はあやのに聞いてみるとあやのはみさおの席を指差しながら

「みさちゃん、あんな状態なのよね・・・ずっと眠そうなのよ。」

苦笑しながら俺達にそう言うあやのに俺達もみさおの方を見て呆れたため息をつきながら

「まったく、こなたやつかさだけでなくみさおもか・・・」

「ほんといつも手を焼かせてくれるわよね。峰岸、あんたも少しは日下部に言ってやりなさいよ？」

俺達のその言葉にあやのは困った表情を俺達に向けるしかなかった。

そうこうしているうちに予鈴が鳴り、教室に桜庭先生が入ってきた。

「みんなおはよう。早速だがこれから始業式があるから全員体育館へ集合するように。」

桜庭先生が皆にそう告げると俺達も始業式のために体育館へと向かうのだった。

「さあ、体育館に行くか。かがみ、あやの、みさお。」

「そうね、慶一くん。いきましょ？」

「ほら、みさちゃんもしゃきっとしないと。」
「・・・ヴァー・・・わかったよー・・・」
俺達は頷きあいながら教室を出た。
こなたｓｉｄｅ
慶一君達と朝出会ってから教室に辿り着いてようやく私の意識も覚醒してきていた。
つかさは相変わらずまだ眠そうだったけどとりあえず席について黒井先生が来るのを待っていた。
ところがかなりぎりぎりの時間になってもやってこない黒井先生に私はどうしたんだろう?と心の中で考えていると廊下の方で誰かがものすごい勢いで走ってくる音が聞こえた。
何事かと思っていると教室の扉が凄い勢いで開きそこには髪の毛がぼさぼさでかなり息を切らせている黒井先生が立っていて
「みんなー、席つけー!」
(あぶな!よかった、ぎりぎりセーフや)
私達にそういいながら教室に入ってくる黒井先生に私も心の中で(アウトです。)と突っ込みを入れていた。
いまだ息切れ状態のままで壇上に立ち、私達に
「あー、これから新学期が始まるわけやけど、いつまでも休み気分でいないで心機一転がんばるように。」

そこまで言い切ると途端に黒井先生の顔が真っ青になり壇上に倒れこんだ。

そんな様子を見ていた生徒一同は（説得力ねえ！）と心の中で力いっぱい突っ込んでいたのであった。

とりあえずなんとか回復した黒井先生は私達を見回して

「これから始業式がはじまるから、みんな体育館に移動するようになー。」

という言葉と同時に私達は席を立ちつかさとみゆきさんに体育館へ行こうと声をかけると2人は頷いて

「それじゃ体育館にいこっか。」

「うん。ゆきちゃん、いっしょにいこ～」

「そうですね。行きましょう。」

そう言って私達は体育館へと移動した。

慶一ｓｉｄｅ

始業式もつつがなく終わり、教室に戻ってきた俺達は朝のＨＲを終えてその日の授業を行い、昼で授業は終了なので帰りのＨＲを終えた後こなたたちと合流するためかがみやみさお、あやのに声をかけて2年Ｅ組へと向かう事にした。

「かがみ、みさお、あやの。こなた達誘って昼にしようぜ？」

「そうね。いきましょ？」

「慶一、私達も一緒に行っていいのか？」
「1学期は誘われる事なかったからちょっと驚きかな。」
2人が少し遠慮がちに聞いてきたので俺は笑いながら
「何言ってる。1学期の頃とは違うだろ？今の俺達の関係ってやつはさ。遠慮する事はないさ。」
俺がそう言うとかがみはうんうんと頷いていてみさおとあやのは凄く嬉しそうな顔を向けて
「ありがとなー、慶一。なんだか私らもやっとみんなの仲間になれた気がするぜ」
「嬉しいな。これからはみんなともお昼御飯食べれるのね？」
俺は2人に大きく頷きながら
「そういう事だ。こなた達も待ってるから行こう。」
そう促すと3人とも頷きながら俺の後についてきてくれた。
教室を出ると今まさに俺達を迎えに来ようとしていたこなた達と会った。
「あ、慶一君。呼びに行こうと思ってたんだよ。丁度良かった。」
そんなこなたの後ろでにこにこしながら俺達を見ているみゆきとつかさ。
「俺達もこなた達を呼びに行くつもりだったんだが、丁度いいから

このままみんなで昼飯にしよう。とりあえず学食へ向かおうか。」

俺がそう促すとみんなも頷いてくれたので俺はみんなを引き連れて学食へと向かった。

その途中でこうとやまとにも出会い、2人にも声をかけると2人とも一緒についてきたのだった。

学食に来たとはいっても大体の人が弁当持参だったので俺達はすぐさま場所取りをしてそこに腰を落ち着けてさっそくお昼御飯とあいなった。

皆で楽しく雑談をしながらお昼を終えた後、こうに声をかけられた。

「先輩。一応仮部長ですので、部活再開のために一言挨拶をしていってもらえませんか？」

アニ研の仮部長だということをこうに言われるまでさくっと忘れていた俺はこうの言葉でその事を思い出したので

「あ、そういや俺はそう言う立場だったな。わかった、部室には顔を出していくよ。」

そうこうに告げた後皆に

「とりあえず部長としての義理を果たしにいってくるよ。みんなは用事とかあるなら先に帰ってもらっててもいいぞ？」

そう告げるとこなたは

「そっかー。それじゃ私はゲマズに用事があるから先にいくね？かがみ達も一緒に行く？」

かがみ達に話を振るとかがみ達は

「私は今日はいいわ。また今度付き合うからさ。」

「わたしも今日はけいちゃんを待ってるよ。こなちゃん、ごめんね～？」

「私は委員会がありますのでお先に失礼しますね。」

「ちびっ子ー、私も一緒に行ってみてもいいか？少し興味あるからさ。」

「みさちゃんが行くのなら私も行ってみようかな？泉ちゃん、いいかな？」

みさおとあやのの申し出にこなたは少し驚いていたようだったが

「いいよー？みさきちに峰岸さん、一緒にいこー。」

「おう、それじゃ行くかー。慶一、柊、高良、それじゃなー。」

「先にいくわね？柊ちゃん、高良ちゃん、慶ちゃんまた明日。」

そう言って帰ろうとする3人に俺は

「気をつけてな。また学校でなー。」

そう声をかけるとみゆきも俺達にお辞儀をしながら

「それでは慶一さん、かがみさん、つかささん。私もお先にです。」

そう声をかけて委員会へと向かうみゆきを見送って俺はこうたちと共にアニ研の部室へと向かった。

やがて部室前に到着し、こうが部室に入ったのを見届けて俺もノックをして部室へと入っていく。

「失礼します。みんな揃ってるみたいだな。」

俺がそう声をかけると顧問の桜庭先生が俺に

「森村、珍しいな。お前が部室に顔を見せるなんて。」

少し驚きながらそう言ってくる桜場先生に俺は

「一応仮部長ですしね。っていうか先生、俺の役職忘れないで下さいよ。」

そう軽く抗議すると桜庭先生は「すまんすまん、忘れていた。」と言って俺をがっくりとさせていた。

そんなやり取りを見ていたこうは部室のメンバーに

「今日から新学期が始まるからうちの仮部長に挨拶をしてもらう。みんな心して聞くように。それでは先輩、こちらにどうぞ。」

そう告げた後俺を机の壇上へと誘導してくれたので俺はそれに従って定位置につくと

「みんな。これからまた新しい学期が始まった。こういう事ばかりでなく、勉強や運動なんかもやったりするだろうから活動の時間も限られてきてしまうかもしれないが、できる限りの範囲で頑張って欲しい。くれぐれも無理をして体を壊す等しないようにな。俺から

は以上だ。」

そう言うとみんなからの拍手が起きた。

俺は拍手を受けながら壇上を降りるとこうに

「こんな感じでいいのか？」

そう聞くとこうも頷いて

「ええ。問題なしですありがとうございました。」

こうの返事に俺も頷いてこうに

「それならよかった。俺はそろそろ帰るけど部員達の事任せたぞ？こう。」

そう、こうに告げるとこうも頷きながら

「任せてください。先輩お疲れ様でした。」

こうのその言葉を聞いた後俺はやまとに

「それじゃこうの事は任せるぞ。何かあったら連絡してこい。俺で出来る事なら手助けに行く。」

俺の言葉にやまとも頷いて

「わかったわ。まあ、先輩の手を煩わせる事はないと思うけどね。よっぽどのことでなければ、ね。」

やまとの返事を聞いて俺は頷きながら最後に桜庭先生の所に行き

「先生。それじゃこの後もよろしくお願いします。俺は先に帰りますから。」

先生にそう告げると先生も俺に

「わかった。わざわざご苦労だったな。くれぐれも事故等にはあわないように気をつけて帰れよ?」

という先生の言葉に頷きながら俺は部室を後にした。

昇降口まで戻って来るとそこには俺を待っているかがみとつかさがいた。

2人は俺を見つけると

「あ、おかえり慶一くん。待ってたわよ?」

「けいちゃんおかえりー。」

そう声をかけて来てくれたので俺も

「ただいま。かがみ、つかさ。待たせちゃったか?」

そう訪ねると二人は首を振って

「このくらいは大した事ないわ。とりあえず用事が済んだのなら帰りましょ?」

「おねえちゃんと色々話していたから平気だったよ?それじゃいこ

うよ。」

そう否定しつつ言う2人に俺も「それじゃ行くとするか。」と言って2人を伴って学校を出る。

駅に着いたとき2人に俺は待たせていたお詫びも兼ねてジュースを買ってきて2人に渡した。

「ほら、これ。待たせたお詫びさ。」

「え？別に大した事じゃないんだから気を使ってくれなくてもいいのに。」

「いいの？けいちゃん。」

2人はそう言いながらジュースを受け取るのを渋っていたが、もう一度俺が2人に受け取って欲しいと促すと2人はにっこりと笑いながら受け取ってくれた。

俺達は電車に乗り込み、俺達の降りる駅につくまでたわいのない雑談で盛り上がっていた。

「そういえば猫は元気にしてる？」

「ああ。あれから大分大きくなってきたぞ？」

「へえ～。また遊んであげたいな。」

「いつでも来ればいいさ。あいつらも喜ぶだろ。」

「いいの？けいちゃん。」

「かまわないさ。それとあの時取った金魚は元気か？」

「うん。ちゃんと毎日世話してるわ。」

「あの時より育ったかもね？おねえちゃん。」

「うーん・・・育ったといえば育ったかもしれないけど・・・」

「あはは・・・」

「なんか気になる笑いだな？何かあったか？」
「いや、まあ、その・・・ただあの時より3倍くらいに大きくなっただけで・・・」
「さ、3倍？一体どうやったらそんなに・・・」
「あはは、まあとりあえず今度私達の金魚も見に来てよ。」
「大事に育ててるって事は確かだから安心して～？けいちゃん。」
「はは。それじゃ今度またお邪魔するかな。」

そんな話をしているうちに俺達の降りる駅に近づいてきた。

電車を降りて自転車置き場に自転車を取りに行き乗りながら俺は2人に

「どうする？2人とも。家によって行くか？」

そう声をかけると2人とも考える仕草をしていたが何か思い出したみたいで俺に

「ごめん慶一くん。お母さんに買い物頼まれてたから行かないといけないからさ。私達はこれで行くね。慶一くん。たまにこうして一緒に行ったりしてもいいかな？」
「朝の事はあまり覚えてないんだけど、わたしもまたこうして一緒に行きたいな。だめ、かな？」

自分達の用事の事と今朝の事を俺に言って来る2人に俺は

「そうか。それじゃ今日はこれで、だな。それと、かがみたちがそうしたいなら無理のない範囲でならかまわないぞ？それじゃ気をつけてな。2人とも。」

2人にそう伝えると2人ともにっこり笑って

「あ、ありがと。それじゃ私達いくね？また学校でね、慶一くん。」

「けいちゃん、ばいばい～。また明日ねー。」

そう言って2人が去っていくのを見送った後俺は一人自転車を走らせて家に向かいながら、たまにはこういうのも悪くないな、と思うのだった。

今日から新学期も始まり、旋律達との新たな学校生活が始まった。これからどんな事が待ち構えているのか見当もつかなかったが、それでもこれからの日々を楽しみにする俺だった。

蠢く旋律～追いかけてくる過去の影～

昨日のサプライズに驚かされた新学期のスタート、これはこの先も色々ありそうだなとため息をつく反面、退屈しないですみそうだなという思いもあった俺はこれからの日々を楽しみにしつつも今月に一つの懸案事項を抱えていたのだった。

いつもの時間に目を覚ましいつものように学校へ行く準備をして玄関を出るとまたしてもサプライズがあったのだった。

そこに立っていたのは意外な人物で、俺は物凄く驚きを隠せない表情でそいつに声をかけた。

「おはよう、こなた。俺は今物凄く驚いているんだが、これは一つの奇跡と言っていいのかな？」

俺が声をかけるまで後ろを向いて立っていたこなただったが、声がかかると俺のほうを振り向き、少し不機嫌そうな顔をしながら

「おはよう慶一君。はいいけどさ、奇跡とか言うのってひどくない？こっちは折角君を驚かせようと思ってわざわざ早起きしてきたんだよ？」

そんなこなたの言葉に俺は困惑したような顔で

「ああ、いや、悪い。あまりにも驚いたものでな。でも、どうしてこんな事を？」

こなたにそう質問を投げかけるとこなたは親指をびしっと立てて

「昨日かがみとつかさが朝早くに迎えに行って慶一君を驚かせたって聞いたからさ。私も真似してみようと思った訳なのだよ。」

ない胸を張って説明するこなたのあたまを軽くなでてやりながら

「それはいいが、大変だったろ?俺の最寄駅、こなたの所とは逆方向だしなあ・・・」

一応こなたの苦労をねぎらいつつ言うとこなたも少し顔を赤くしつつ頷きながら

「まあねー。一度逆方向に来なきゃならないのが難点だよね。でも私も一度はこういう事やってみたかったからさー。」

照れながら言うこなたに俺は優しげな微笑を向けながら

「ならその労力に免じて今日は俺が自転車の後ろに乗せて行こう。ちょっと待っててくれるか?」

そうこなたに言うとこなたは嬉しそうにしながら

「うん。それじゃ門の所で待ってるね。」

そう言ってこなたは家の門の前へと小走りに走って行った。

俺は自転車を取りに行ってこなたの所へ行くとこなたに

「こなた、お待たせ。さあ、後ろに乗ってくれ。さっそく駅へ向かうぞ?」

こなたにそう促すとこなたも頷きながら

「おっけー。それじゃ慶一君安全運転でよろー」

と言いながら俺の自転車の後ろに乗ったこなたに気を使いながら自転車を走らせて駅へと向かったのだった。

その間こなたは俺の腰にしがみついていたのだが、その時こなたが顔を赤くしていた事には気付かずにいた。

やがて駅に着くとこなたを降ろして俺はいつも使っている自転車置き場に自転車を預けに行く為、こなたに

「ちょっと自転車を預けてくるから待っててくれ。ん?こなた、顔少し赤くないか?」

少し赤みのかかったこなたの顔に気付き、俺は何気なしにこなたに尋ねてみるとこなたは少し慌てながら

「い、いや、なんでもないから心配しないでいいよ?それより早く預けてきちゃいなよ。」

そうこなたに促され、俺は自転車を預けに行きこなたの所に戻って来て

「それじゃ行くか、こなた。」

こなたに促すとこなたも頷いて

「うん。それじゃいこっか。」

そう言って俺達は駅のホームへと向かって行った。

ホームについてから程なくして電車が着き、俺とこなたは電車に乗り込んだのだがそこで俺達に気付いたかがみとつかさに声をかけられたのだった。

「おはよ、慶一くん。今日も早いわねー。って、あれ?そこにいるのはまさか、こなた?」

「おはよ~けいちゃん。あれ?こなちゃんだ。どうしてけいちゃんといるの?」

「かがみにつかさ、おはよー。いやあ、ちょっとしたサプライズでねー」

かがみとつかさは俺と一緒にいるこなたの存在に気付き、こなたはそれに挨拶を返していたが、こなたが何故ここにいるのかに2人は驚きを隠せずにいたのだが、俺は2人に挨拶すると同時に事情を説明する事にしたのだった。

「おはよう、かがみ、つかさ。俺も驚いたんだが、朝学校に行こうとして玄関をでたらこなたが家の前に立っててな。昨日かがみとつかさがやった事を聞いて真似してみたくなったらしい。」

その答えにかがみは呆れ顔で、つかさは苦笑しながらこなたを見ていた。

やがて2人のやり取りが始まった。

「まったくあんたってやつはこういう時とかはちゃんと起きれるの

に何で普段はだめなのよ?」
「だってイベントもなにもない時に早起きしたってつまんないじゃん?」
「つまんないとかそう言う問題じゃないでしょ?普段からちゃんと起きていれば遅刻とかしなくて済むじゃないのよ!」
「そこにわくわくドキドキのない早起きは無意味なのだよ。」
「威張る事か!だいたいそんなだからあんたは・・・」

大分ヒートアップしているようだったので俺は周りの視線も痛くなってきたのでそろそろ二人を止めることにした。

「2人ともいい加減にしとけ。みんな見てるぞ?」

俺がそう言うとかがみは顔を真っ赤にして俯き、こなたはとりあえず口をつぐんだ。

そんなやりとりをしていると粕日部駅へと到着したので俺達は電車を降りてバスに乗り込み学校へと向かうのだった。

昇降口でこなたとつかさと別れた後俺とかがみは一緒に教室に向かっていたのだが、その途中で

「・・・あー、恥ずかしかった・・・あいつといるとついついこうなっちゃうわね・・・」

と言うかがみの呟きに俺も苦笑しながら

「なんだかんだでかがみもこなたに付き合ってやってるよな。傍目には結構いいコンビだと思うけどな。」

そうかがみに言うとかがみは俺を軽く睨みつけながら

「勘違いしないでよね、私は結構迷惑してるんだから！コンビとか言われちゃたまらないわよ！」

といいながら顔を赤くしつつ反論するかがみを見て（素直じゃないなあ）と微笑ましく思うのだった。

その後教室に入ると、いつものようにみさおとあやのが俺達に挨拶をしてきたので俺達も挨拶を返しつつ席についた。

こなたｓｉｄｅ

かがみといつものやり取りをして私とつかさは自分達の教室へと辿り着いた。

教室に入ると私達を見つけたみゆきさんが側に来て挨拶をしてきたので私達も挨拶を返した。

「おはようございます。泉さん、つかささん。」

「みゆきさん、おはよー。」

「ゆきちゃん、おはよ～。」

いつもより少し機嫌がいい私の様子に気付いたみゆきさんが私に

「あら？泉さん、何かいい事ありましたか？いつもよりご機嫌みたいですが。」

と言うみゆきさんに私は今日の朝の事を話して聞かせるとみゆきさんは少し複雑そうな顔をしながら

「そうでしたか・・・なんだか少し羨ましい気もしますね。私の家はみなさんとは離れてますし、泉さんがしたような事を私も一度はやってみたいなと憧れますね。」

そんなみゆきさんの言葉を聞きながら私は

「なんならみゆきさんもやってみたら？みゆきさん、早起きできるんだからいけるんじゃない？」

と、軽い気持ちでみゆきさんに言うとみゆきさんは何か考え事を始めたようだった。

そんなみゆきさんを見ながらつかさが私に小声で

『ねえ、こなちゃん。ゆきちゃんまさかやる気なのかな？』

『いや、流石にみゆきさんとこからじゃきついでしょ？』

などと言う事をやり取りしてるうちに予鈴がなったので私達は自分の席に戻っていった。

その際、今だ考え事を続行しているみゆきさんはそのままの状態で自分の席へと戻っていったのだった。

やがて先生が教室に入ってきてＨＲが始まったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

２時間目の授業終了後、俺は休み時間に飲み物を買うため星桜の樹の見える所の自販機に行った。

ジュースを飲みながらぼんやりと星桜の樹を見上げているとふいにみゆきが俺に声をかけてきた。

「あら?慶一さん。こちらに居たんですね。私も休憩しようと思ってここに来てみたのですが慶一さんがいらっしゃったので驚きました。」

と言うみゆきの声に俺はそちらに顔を向けて

「おう、みゆき。たまにはここで休憩取るのもいいかな?と思ってな。」

そうみゆきに答えながら俺は一つ思い出した事があるのでみゆきに尋ねてみる事にした。

「そうだ、みゆき。今日の放課後は予定とかあるか?」

俺の言葉にみゆきは少し考えるような仕草をした後

「今日は特には用事はありませんが、何かあるのですか?」

そう返事をしてくるみゆきに俺は軽く頷きながら

「ああ。今月みなみの誕生日があるだろ?みなみも受験で忙しいだろうし誕生パーティする余裕もないだろうからせめてプレゼントだけでも渡そうと思ってな。」

事情を説明する俺にみゆきは少し驚いたような顔で

「慶一さん、みなみちゃんの誕生日を覚えていたんですか？」

と言うみゆきの質問に俺は頷きながら

「まあ、みなみだけじゃなく俺の知り合いや友人達のそういう日ってやつは忘れないようにしてるつもりだからな。もちろん、みゆきの誕生日だって覚えてるさ。ともかくだ、俺はみなみの好きそうな物とかがよく分からないし、みゆきならそれがわかるかもしれないとも思うから。だから頼むよ、プレゼントを選ぶのを手伝ってくれないか？」

と言う俺の答えにみゆきは顔を赤らめながら

「そ、そう言っていただけると嬉しいですが・・・わかりました。それじゃ今日の放課後にプレゼント選びにお付き合いさせていただきますね？」

俺の頼みを聞いてくれたみゆきに俺は微笑みながら「ありがとう。」と短く言うとみゆきは赤い顔を少し俯かせながら

「い、いえ。この程度の事でしたら構いませんから。」

そう言ってくれたのだった。

休み時間も終わり俺とみゆきはそれぞれの教室へと戻っていく。

教室に戻ると3人に「「「おかえりー」」」と出迎えらたのだった。

みゆきｓｉｄｅ

慶一さんと別れて教室に戻ると私を見つけた泉さんとつかささんが私の方へ来て

「おかえりー、みゆきさん。あれ？少し機嫌いい？」

「ゆきちゃんおかえり～。そういえば少し嬉しそうだよね？」

慶一さんがみなみちゃんのプレゼント選びの為とはいえ私を誘ってくれた事と慶一さんがみなみちゃんの誕生日だけでなく私達の誕生日の事も覚えていてくれたことが嬉しかったのでそれが少し顔に出ていたようでした。

私はつとめて冷静にお2人に

「大した事ではないのですが、今月にみなみちゃんの誕生日があるのですが先程慶一さんとお会いした時に慶一さんがみなみちゃんの誕生日を覚えていてくれて誕生パーティできない代わりにプレゼントでも渡したいとおっしゃっていただけたものですから。みなみちゃんの姉みたいな立場の私も妹のようなみなみちゃんに気を使っていただける慶一さんの行為が嬉しくなったものですから、つい顔に出てしまっていたようです。」

と言う私の説明を聞いて2人は顔を見合わせながら

「みなみちゃんの誕生日って今月だったんだ？何日なの？みゆきさん。」

「そうなんだ～。わたしも何かプレゼントしてあげたいな。ねえ、ゆきちゃん。みなみちゃんの好きそうな物ってなにかな？」

そう聞いてきたので私は泉さんに誕生日の日にちを、つかささんにはみなみちゃんが好きそうな物を教えながら色々と話していました。

「それにしても慶一君も誕生日覚えているとかやる事はマメだねえ。」
「どういこと？こなちゃん。」
「つまり、そういう大事な日の事を覚えている事でみなみちゃんの好感度アップを狙っているって事だよ。」
「ええ～？けいちゃんそんな事を～？」
というお2人に私は困った顔をしながらも
「で、ですが、慶一さんは私達の誕生日も覚えているとおっしゃってましたから。友人や仲間のそういう日は絶対に忘れないんだと・・・」
そうお2人に慶一さんがおっしゃられていた事をお伝えするとお2人とも顔を少し赤くし慶一さんから頂いたという誕生日プレゼントに目をやって黙ってしまいました。
私も自分で言っていて改めてあの時の慶一さんの顔を思い出して少し顔を赤らめていたのですが、結局しばらくの間3人して顔を赤くして黙り込んでしまっていました。
そうこうしているうちに授業開始のチャイムが鳴ったので私達は我に帰りそれぞれの席に戻っていきました。
慶一ｓｉｄｅ
次の授業の後の休み時間、俺はかがみ達にもさっきみゆきと話していたことを持ちかけてみることにした。

俺は3人の所に行って

「かがみ、あやの、みさお。ちょっと話があるんだけどいいか？」

そう声をかけると3人とも俺の方を見て

「ん？話ってなに？」

かがみが俺に聞いてきたので俺はみんなに

「実は今月の１２日ってみなみの誕生日なんだけどさ、みなみも受験勉強の追い込みの時期でもあるし、誕生パーティは出来ないと思うからせめてプレゼントだけでも渡してやりたいって思ってさ。皆はどう思う？」

話を振ると3人はそれぞれ

「いいんじゃない？受け渡しはみゆきに頼もうかしらね？」
「みなみちゃんももう私達のお友達だものね。私も賛成よ。」
「じゃあ、私はあやのと一緒に選んでくるぜー」

そう言って賛成してくれたようなので俺は3人に

「悪いな、突然こんな事言ってさ。受け渡しはみゆきに頼むとして、当日までにはプレゼント用意しよう。」

という俺の言葉に3人とも頷いてくれたのだった。

そしてその日の放課後・・・・・・

「ふう、今日の授業もこれで終わりだな。」

自分の席で伸びをしながら言う俺にかがみが寄ってきて

「慶一くん。私と日下部と峰岸の3人でみなみちゃんへのプレゼント、何がいいかちょっと見に行ってきてみるわ。だから今日は先にいくわね？」

そう断りを入れて帰ろうとしていたかがみに俺も

「ああ、わかった。あ、それとかがみ。俺は今日都内の実家の方へ行くから今日は森村家の方には俺いないからさ。」

そう返事を返すとかがみは首を傾げながら

「実家？用事でもあるの？」

そう聞いてきたので俺も頷きながら

「ああ、ちょっと顔出しに行く予定もあってさ。向こうに泊まってくる事になるかもだからとりあえず言っておこうと思ってな。こなた達にも伝えといてくれないか？」

という俺の答えにかがみも頷きながら

「わかったわ。こなた達にも伝えておくから。」

そう言ってくれたので俺はかがみに「よろしく頼む」と伝えて教室を出た。

帰り際アニ研に顔を出してこうとやまとにもその事を伝えに行くと二人とも快く＜やまとは少し渋っていたみたいだが＞返事してくれたのでそれを見届けた後、俺は昇降口に向かったのだった。

昇降口につくと俺が来るのを待って昇降口に立っているみゆきの姿を見つけたので俺はみゆきの側に行って声をかけた。

「みゆき。すまない、ちょっと遅れた。」

俺に気付いたみゆきは俺の姿を確認するとにっこりと微笑んで

「いえ、そんなには待っていませんでしたから大丈夫ですよ?それじゃ行きましょうか。」

そう答えるみゆきに俺も頷いてみゆきと共に学校を出る。

みゆきの家の近所のみゆきがよく行くお店を紹介してもらい、そこでみなみへのプレゼントを選ぶのだった。

プレゼントを吟味しながら俺は少し考え込みながら

「うーん・・・みなみはどういうものが好きかな?」

そう呟くとみゆきも同じように考えるような仕草をしながら

「そうですね・・・基本的に可愛いものとかは好きみたいです。後は動物系のアクセサリーみたいのでしょうか?みなみちゃんの家でも犬を飼っていますからね。」

その言葉に俺も納得しつつ軽く2人のやり取りを始めた。

「なるほどな・・・受験勉強もやっているし、それに役立つ物とかもいいだろうか？」
「それもおそらくみなみちゃんは喜んでくれると思いますよ？」
「それなら、勉強にも役に立って可愛いものを選んでみるかな・・・」
「いいと思いますよ？私も探してみますね？」

2人して頷きあうと俺達はそれぞれプレゼントを選ぶために店の中を見回った。

俺は星の模様が入った髪留めとノックする場所に動物の人形がついたシャープペンを選びそれを包んでもらうと同時にメッセージカードもそれに添えた。

みゆきもみなみに渡すプレゼントを選び終え、店を出た頃には大分陽も傾いてきていた。

俺はみゆきに今日のお礼もしたいと思っていたので

「みゆき。今日はありがとうな、わざわざ付き合ってもらってさ。お礼といってはなんだけどうちの実家で夕食を食べていってくれないか？」

そう持ちかけるとみゆきは驚いた顔で

「い、いえ。この程度の事でしたらわざわざお礼を言っていただけるほどの事ではありませんし、気になさらないでください。ですが、お夕飯の件もお気遣いはありがたいのですが、そこまでしていただくのも気が引けますね・・・。」

と言うみゆきに俺は微笑みながら

「実はさっきお袋に電話入れたんだよ。今日はそっちへ帰るから一晩よろしくってな。それで今日の件を話したら、是非夕飯に連れていらっしゃいってお袋が言ってくれたからさ。まあ、それでもみゆきの気が引けるというのなら俺も無理強いはしないよ。その辺はみゆきに任せるから。」

と言う俺の返事にみゆきはしばらく考え込んでいるようだったがやがて何かを決めたらしく顔を上げて

「慶一さんのお母さんのお誘いという事もあるのでしたらお断りするのも悪い気がしますので、お言葉に甘えさえていただいてもいいでしょうか？」

そう答えるみゆきに俺も頷きながら

「ああ、構わないよ。それじゃ行くとしようか。」

みゆきに促すとみゆきは「はい」と言って俺について来てくれた。

しばらくは学校の事や夏休みの時の事を談笑しながら歩いていたが、ふいに少し先の路地で女性の悲鳴が上がった。

「なんだ？女の人の悲鳴？」

「何かあったのでしょうか？」

俺たち2人がそう言いあっていると路地から飛び出してくる男が出てきてその後ろから数人の男の怒号と女の人の「引っ手繰りよ！捕

まえてー！！」という声があがったのだった。

男は慌てながら俺の方へと走ってくる。

俺はみゆきに「下がってて、すぐ済むから」

そう言うとみゆきは「わ、わかりました。けど、あまりご無理はしないでください」

と言って少し下がった位置で俺と引っ手繰り犯を見ていた。

俺はみゆきが下がった事を確認すると足元にある小石を引っ手繰り犯に向けて蹴りつける体制をとりながら男の動きに注意を向ける。

男は「どけどけ！邪魔だー！」と言いながら俺の方へと向かってきた。

俺は素早く足元の小石を男に向かって蹴りつけると同時にそのまま間合いを詰める。

ふいに飛んできた小石にひるんだ男は一瞬動きを止めてたたらを踏んだ。

その時にはもう俺は男の懐に飛び込んでいてすでに攻撃の態勢を取っていた。

「龍神流、螺旋連弾四壊！（たつかみりゅう　らせんれんだんしかい）」ドカカカカッ！！

俺は一瞬にして螺旋のように捻りを加えた拳を両肩の付け根と両股

関節に叩き込んで四肢の関節を外した。

関節を外された男はまるでダルマのように動けなくなったのでそれを確認した後俺はみゆきに

「みゆき、もう終わったから平気だ。」

そう言うとみゆきはおそるおそる俺の方へと寄ってきた。

と同時に後ろから男を追いかけてきた複数の男達のうち2人が動けなくなった引っ手繰り犯人を押さえ込んでもう一人は俺の方に来て

「おい、あれはお前がやったのか?」

少し不機嫌そうな顔で引っ手繰りを追っていた男の一人が俺に言う。

「ああ、ちょいと四肢の関節を外してダルマにした。関節はめなおしてやらないと動けないはずだ」

と言う俺の答えに男はチッと舌打ちすると

「・・・まあいい、とりあえず氷室さんに報告しないとな・・・」

踵を返して引っ手繰り犯の方へ向かおうとする男に俺は

「おい!ちょっと待て、今氷室って言ったか?ひょっとして氷室結城(ひむろゆうき)の事か?」

俺があいつらの言う氷室と言う名前を知っていた事を驚いたのか男

は俺に

「お前、その名前をどこで知った！あの人の事を知っている人間は少ないはずだ！」

俺に詰め寄って質問してくる男に俺は冷静に

「奴に連絡を取るんだろ？なら呼んでくれ。龍神慶一と言えばわかるはずだ。奴との関係はその時に話してやるよ。」

その俺の冷静さに男も俺を不信な目で見ていたが仲間に合図して連絡を取ってもらうと途端に男達の表情に驚愕の色が伺えた。

「お前、本当に何者だ・・・氷室さん、すぐにこっちに来るそうだ。」

男達とのやり取りをわけもわからずに見ていたみゆきは俺にそっと

『慶一さん、氷室さんという方とお知りあいなのですか？』

そう聞いてくるみゆきに俺も小声で

『ああ。中学の俺が荒れていた時代にちょっとな。心配するな。何も起きやしないから。』

そう囁いてみゆきを安心させた。

そのやり取りの後、引っ手繰りにバックを取られて男達と共に犯人を追いかけていた女性が俺のところに来て

「あの、捕まえてくれて助かりました。本当にありがとうございます。」

と言うお礼の言葉に俺は少し照れながら

「いえ、俺は自分の出来る事をしたまでですから。」

などと言うやり取りをしていたのだった。

少ししてバイクに乗った一人の少年が現れた。

「「「氷室さん！お疲れさまっす！」」」

男達の出迎えを受けて少年はバイクから降りて男達にねぎらいの言葉をかけてから俺の方へとゆっくり歩いてきた。

ヘルメットを取りながら少年は俺に

「久しぶりだね、慶一君。中学の時以来かな？」

俺に親しげに挨拶をする少年に取り巻きの男達も驚きの表情を見せていた。

「ああ、そうだな。お前は相変わらず、みたいだな。」

「これでもこのあたり一帯の領域を牛耳っている族の頭をやっているからね。ところで、あいつを捕まえてくれたらしいね。僕からも礼を言おう。」

「いいさ、もののついでだ。けど、ああいうのは警察の管轄じゃないのか？お前らがああいうのを追いかけるには何か理由でもあるのか？」

そう氷室に問い掛けると少し考え込んでいたがやがて俺に

「慶一君。成神章（なるかみあきら）を覚えているかい？」

俺は氷室が告げた名前に聞き覚えがあった。

「覚えてるさ、俺がぶちのめした不良の一人だったな。」

「最近彼の指示する窃盗団グループが僕の領域まで進出してくるようになってね。」

「あいつにそんな事ができたのか？」

「どうも彼にはそういったコネがあったようでね。そこから引っ手繰りをする連中を操って資金調達をしているらしいのさ。」

「実にくだらないやり口だな、あの頃からその小物っぷりは変わってないと言う事か」

「こちらとしても領域をあらされては黙っていられないのでね。仲間を動員して奴に繋がる連中を捕まえて奴らの居場所を吐かせてけりをつけようと思っているのさ。」

「成る程な。事情はわかったよ。だが、お前が出張ってくるとなるとよっぽどって事か・・・」

「てこずってはいるよ。これまでも何人かを捕まえたがみんなトカゲの尻尾切りというやつでね。なかなか巧妙に逃げ回っているようだ。」

「あの頃からそういう所には頭の働くやつだったな・・・」

そんな話の後、氷室は俺の側にいるみゆきに気付いて

「慶一君、その子は君の彼女かい？名前はなんていうの？」

氷室の彼女と言う発言にみゆきは顔を真っ赤にして俯いてしまい俺

も顔を赤らめつつ

「い、いや、彼女っていうわけじゃないんだが俺の友達であり、仲間ってところさ。彼女の名前は高良みゆきだ。」

最後の部分を聞いたみゆきは少しだけがっかりした表情をしていた事に気付かない俺だったがそれでも俺がみゆきを紹介したのでみゆきも

「氷室さん、でよろしかったでしょうか？私は高良みゆきといいます。」

俺達2人の慌ててる様子をみながらにやけていた氷室だったが俺に

「なるほど、可愛い子だね。僕は氷室結城、よろしくね、高良さん。慶一君、ちゃんと守ってあげないとだめだよ？」

と言う氷室の言葉に俺はまたも顔を赤くしつつも

「お前に言われるまでもないさ。俺が仲間を守る。」

そんな俺の言葉に氷室はさらににやにやとしていたのだった。

俺たちのやり取りを黙って見ていた男達が氷室の元に行って

「氷室さん。こいつと知り合いなんですか？どういう関係だったんです？」

という男の言葉に氷室は愉快そうに笑いながら

「ああ。彼とは中学の頃の知り合いさ。君らも噂くらいは聞いた事があるだろう?〇〇中の修羅と噂された男の名前をさ。」
「〇〇中の修羅・・・まさかあいつがあの龍神慶一?」
「そう、そのとおり。僕はあの頃彼にケンカを売り、気持ちいいくらいに圧倒的にぶちのめされたんだよ。」

氷室の言葉に男達が驚愕の表情になるのがわかった。

「ひ、氷室さんが、負けた?あのケンカ百戦錬磨の氷室さんが?」
「そう、負けたんだよ。あの頃の彼はまさに修羅だったからね。でも僕は真っ向勝負でぶちのめされてから彼の強さに心酔してね。今では彼も僕を一人の友人として見てくれているのさ。」
「そ、それにしても、まだ信じられません・・・」
「ふむ、なら仕方ないね。慶一君、こいつらの前であれをやってみせてくれないか?」

話の一部始終を聞いていた俺は軽いため息を吐きながら

「やれやれ、見世物じゃないんだがな。まあいいか、そのかわりジュース代はお前が持てよ?氷室。」
「ふふ、そう言うと思ってすでに用意済みさ。これでいいね?」

氷室の取り出したジュースは炭酸なしのスチール缶のオレンジジュースだった。

「それじゃ投げるよ、それっ」

そう言って氷室は俺の目の前に落ちるようにジュースをほおり投げた。

落ちてくるジュースの軌道を見極めまっすぐ突き出した腕と同等の高さで俺は一瞬で踏み込み

「螺旋掌！（らせんしょう）」

腕を捻りこみながら缶の胴体に打ち込むとスチール缶の背中部分が裂けてジュースが噴出した。

そのまま壁まで飛んで行くジュースの缶を男達も呆然とした顔で見守っていたのだった。

「まあ、久しぶりだけどなんとかできたな。」

俺のデモンストレーションに氷室はニコニコとした顔を見せて、男達は缶を拾って

「うおお！背中部分が裂けてるぞ！」
「すげえ、こんなの食らったらひとたまりもないぞ・・・」
「噂は本当だったのか・・・」

そう口々にまくし立てていたがやがて俺の方へとやってくると

「慶一さん、さっきは失礼な事を言ってすんませんでした。」
「その実力、確かにこの目で見させていただきました。」
「すげえっす。ほんとに強いんですね」

憧れの眼差しを向けられる俺は困惑の表情で男達を制しつつ

「わかった、わかった。とにかくお前ら、氷室の事はよろしく頼む。何かと助けになってやってくれ。」

「「「わかりましたっす！」」」

元気よく答える3人を見て氷室はニコニコとしていたがふいに何かを思い出したらしく俺に

「慶一君、そういえば思い出した事があるんだが成神はまだ君に対して強い恨みをもっているらしい。窃盗団連中以外に人を使い、君の身辺を探り始めていると言う噂を聞いた。くれぐれも気をつけてくれよ?僕らの力が必要になったときは言ってくれ、君の力になる。これは僕の携帯の番号とアドレスだ。何かあれば僕に連絡をして欲しい。」

そういって携帯番号とメールアドレスを俺に渡してきた。

俺はそれを受け取りながら

「わざわざすまないな。何かあった時は頼りにさせてもらうよ。」

そう返事を返すと氷室は

「そうならない事が一番いいんだけどね・・・ともかく僕たちはこれで失礼するよ。っとそうだった、慶一君。彼の関節を元に戻してやってくれないか?これぱかりは僕にもできないからね。関節を戻したら尋問した後に警察に突き出しておくから。」

その氷室の言葉に俺は自分のした事をすっかり忘れ去っていたので

「おっとそういえばそうだった。すぐに戻すよ・・・・・・っとこれでよし、後は任せるぞ?」

関節を戻してやって氷室たちに男を預けると氷室達は俺に礼を言いながら去っていったのだった。

全てが終わり、俺の実家への道を急ぐ俺たちだったがその道すがらみゆきは俺に

「慶一さん、さっきの事もそうですけどやっぱり慶一さんの過去には色々あるみたいですね・・・」

俺は心配そうに俺を見るみゆきに

「まあ・・・な、心配か？みゆき。」

そう聞き返すとみゆきは不安を拭えない表情で

「少し、でしょうか・・・それ以上になんだか不安を感じてしまって・・・」

俯きながら俺にそう答えるみゆきの頭をぽんと軽く叩いて

「大丈夫さ、俺が守る。絶対に守ってみせるから。だから心配するなって、な。」

みゆきの不安を取り除くように明るく言う俺にみゆきも心持ち気分が軽くなったのか

「ふふ。ありがとうございます。心なしか少し楽になった気分です。慶一さん？ちゃんと守ってくれるって言ってくれたのですから、ちゃんと約束、守ってくださいね？」

いつもの微笑みで俺に言うみゆきに俺も微笑を返しながら

「ああ、わかってる。さて、暗い話はもうおしまいだ。家も見えてきたし、御飯食べて嫌な事も吹っ飛ばすか。」

俺たちは夕食の支度をしてくれているお袋の所へと急いだのだった。

先程の事など忘れたかのように楽しい夕食を終えて俺はみゆきを家に送っていく。

みゆきの家の前で俺は笑顔を向けながら

「今日は色々あったけど、みなみのプレゼント選び、付き合ってくれてありがとうな。」

そうみゆきに言うとみゆきも笑顔を返してくれながら

「こちらこそお役に立てたかどうかはわかりませんが、きっとみなみちゃんも喜んでくれると思いますよ?それでは今日はこの辺で、明日また学校でお会いしましょう。」

「ああ、またな。俺は今日は実家に泊まるし、明日は一緒に学校行くか?」

俺がそう言うとみゆきは顔を赤らめて

「え?い、いいのですか?私が、その・・・」

しどろもどろになりながら言うみゆきに俺は少し照れながらも

「俺もこっちにいるんだしみゆきもいつも一人での登校なんだろ？たまには寂しくない登校もあってもいいだろうしな。俺でよければ、だけどさ。」

そういうとみゆきは俺に

「なら、お言葉に甘えさせていただきます。明日は何時ごろにお伺いすればいいでしょうか？」

と言う感じで明日の時間を確認した俺たちはここで別れたのだった。

家に戻る道すがら夜空を見上げながら俺は今日あった俺の過去への邂逅を思い出していた。

それと同時に俺が犯した罪がまだ残っている、それを清算できるまではまだ俺は苦しむ事になるかもしれないなと言うことを頭の片隅で考えつつもその時が来るまでに俺は後悔のない日常を送っていこうと心に誓うのだった。

追いかけてくる過去の気配を感じながら・・・・・・

蠢く旋律～追いかけてくる過去の影～（後書き）

少しだけ慶一の過去の因縁の片鱗をだしています。とともに新キャラ2人の登場なのでかるくプロフィールを

名前：氷室結城（ひむろゆうき）
身長：１７８センチ、体重５８キロ
痩せ型で少し鋭い目をしている。性格は意外と落ち着いた感じ。慶一の中学時代に慶一にケンカを売り、きれいに一撃で倒された。こうとやまとと慶一とのエピソードで出てきたその後ガラクタに突っ込んで盛大に自爆したあの人。
今は実力をつけ、地元の族、紅（くれない）のリーダー。
慶一の実力に心酔し、今は慶一を友として見ている。

成神章

身長１７０センチ体重６０キロ
氷室と同じように痩せ型だが、勝気な釣り目をしている。ケンカの実力的には氷室にも劣るが、狡猾で人を扱うのが上手い。
慶一のもう一つの過去において牧村瞬一を格闘家として再起不能に追い込む。
その後切れた慶一にフルボッコにされるが、その時の事を恨みに思っているようだ。
現在は窃盗グループなどを使い、自分が活動する為の資金を集めさせていたりする。
同時に慶一に復讐する機会を狙っているようだ。

誓い合う旋律～体育祭前の出来事～（前書き）

今回でしばらくは過去の動きがなくなります。

誓い合う旋律～体育祭前の出来事～

みゆきとみなみへの誕生日プレゼントを選ぶ為地元に戻っていた俺は、はからずも自らの過去に邂逅する事となった。

過去に残した俺の罪は憎しみを引き寄せる事になるかもしれないと心のどこかで思いつつ、運命の警告というものを改めて肝に銘じながら俺はその日はみゆきと別れた。

そして一夜が明けて翌日・・・・・・

「ふあーあ・・・久々の実家での朝か、たまには悪くないもんだ・・・」

俺はいつものように目を覚まし、窓から外の風景を見ながら軽く伸びをしてさっそく制服に着替えはじめる。

着替えを済ませたあと、下からお袋が「慶一ー、朝御飯できてるわよー？降りてらっしゃいー」と呼ぶ声が聞こえたので俺は「わかった、すぐいくよー。」と返事をして1階のキッチンへと降りていった。

キッチンに入ると久々のお袋の手料理が並べられていてそれを見た俺は少しだけ懐かしい気分になったのだった。

年寄りの朝は早い、という言葉があるように親父もすでに起きていて朝御飯の席に着いていた。

「慶一、今何か失礼な事を考えなかったか？」

妙な所で勘が鋭い親父の突っ込みに俺は特に気にせず

「気のせいだろ？それとも幻聴が聞こえる程にボケが始まったか？」

とさり気なく言い返すとその言葉に切れた親父が

「ふざけるな！まだボケたりなんぞしとらんわ！」

と俺に怒鳴りつけてきたので俺は適当に「はいはい」と言いながら親父の怒りを受け流していた。

親父はなおも俺に文句を色々並べ立てていたが、お袋にいいタイミングで制されて結局黙り込んだのだった。

「「「それじゃ、いただきます。」」」

3人はそう言うと朝御飯を食べ始めた。

やがて朝食を終えて俺はそろそろみゆきとの待ち合わせ時間だなと思い、2人に

「それじゃ俺は学校に行くと同時にまた向こうの家に戻るから。長い休みの前とかにまた帰ってくるよ。それじゃ行って来ます。」

出かける挨拶をすると2人は

「いってらっしゃい。またこっちにも顔出してね。」

「ふん、当分帰ってこなくても構わんぞ？」

それぞれの反応で俺を送り出してくれた。

家の門の前へと歩いていくとそこに俺を待つみゆきの姿が・・・・・・（あれ？何か人数が多い気がするんだが気のせいかな？）と考えつつみゆきの側まで来てこの二日間とはまた違ったサプライズに見舞われたのだった。

俺の姿に気付いたみゆきが俺に挨拶をしてきた。

「おはようございます、慶一さん。時間どおりですね。」

俺はみゆきに挨拶を返す。

「おはよう、みゆき。お前も時間には正確で助かるよ。」

というやり取りをしているとそれ以外にいた二人も俺に挨拶をしてきた。

「おはようございます、先輩。まさかこっちに戻ってるとは思いませんでしたよ。」

「おはよう、先輩。戻ってるのなら連絡の一つ位は入れてくれてもよかったんじゃない？」

そんな二人の姿を見て俺は軽いめまいを覚えつつ

「おはよう、こう、やまと。連絡し忘れたのは俺が悪かった。だが一つ聞きたい。何故お前達がこの時間を知っていたんだ？」

俺が尋ねると2人はいたずらっぽく笑って

「実は昨日の夜に慶一先輩のお母さんから連絡がありまして。」
「高良先輩とも待ち合わせをしてるとの事だったから私達も、なら久しぶりに一緒に学校へ行きたいって思って押しかけさせてもらったのよ。」

2人の説明をため息混じりに聞きながら俺は

「はあ・・・まったく実家に来た時はお袋には隠し事も出来ないよな・・・。ええい、仕方がない。もうどうにでもなれだ。3人とも一緒に学校へ行くぞ?時間も押して来てるから急ごう。」

そう3人に促すと3人とも頷きながら

「そうですね。行きましょうか。」
「先輩、急ぎましょうよ?」
「電車に間に合うようにしないとね。」

という3人の言葉に俺も頷きで応え、駅へと向かうのだった。

その時のみゆきは笑顔ではあったものの、少し浮かない表情をしていた事に俺は気付かずにいた。

電車の中で談笑する俺達。

「先輩、どうして突然地元に戻ってきてたんですか?」
「私もそれが知りたいわね。どうしてなの?」
「昨日お前らにも言わなかったか?みなみの誕生日プレゼントの事をさ。みゆきに探すの手伝って貰うのもあってみゆきが地元の方が探しやすいと思う、って言ってたからじゃあこっちで探そうって事になったんだよ。」

「あ、そういえばそんな事を言ってましたね。それでプレゼントは見つかったんですか？」
「ああ、みゆきのおかげでばっちりさ。後は当日にみゆきに受け渡しを頼む所だな。」
「ふふ。その際には任せてください。ちゃんとみなみちゃんにお届けしますから。」
「ああ、その時にはよろしく頼むな？みゆき。」
「高良先輩、私も先輩にお願いしてもいいかしら？」
「ええ、構いませんよ？その時には一声かけてくださいね。」
「わかったわ。その時には声をかけさせてもらうわね。」
「あ、私もお願いしますね。ちゃんと選んできますんで。」
「ありがとうございます。みなみちゃんも喜んでくれると思います。」
「そういう事も遅れる事がないようにな？みゆきに迷惑かけるなよ？こう。」
「わ、わかってますよ。先輩最近また酷くないですか？」
「お前が心配だから言ってるんだ。言われたくなければ普段からちゃんとやっとけ。」
「そうよ？あなたが普段からちゃんとやってれば言われずに済む事よ。」
「やまとまで・・・酷いよ（涙目）」
「「あははは」」
そんな会話をしながら電車に揺られ、俺達は学校の最寄駅へと到着し、バスに乗り込んで学校へと向かう。
昇降口で3人と別れて俺は自分の教室へと向かったのだった。
「おはよーっす。」

そう言いながら教室に入るとかがみとあやのとみさおが俺の声に気付いて俺の方へとやってきて朝の挨拶をしてくれた。

「おはよう、慶一くん。久々の親子水入らずはどうだった？」

「おはよう、慶ちゃん。猫ちゃんはちゃんと様子見といたから大丈夫よ？」

「おはよ、慶一。みなみへの誕生日プレゼント選んできたぜ？」

という3人に俺も挨拶を返しつつ

「おはよう、かがみ、あやの、みさお。親父とは相変わらずだったけどな。それとあやの、猫の事面倒見てくれてありがとな。みさお、プレゼントは当日前までにはみゆきに渡しておいてくれよ？」

そんな風に話しながらＨＲの時間まで俺達は談笑をしていた。

みゆきｓｉｄｅ

昨日の事が一晩明けてもまだ心に引っかかっていたせいか、皆さんと話しつつもどこか楽しめていない自分に気付きつつもどうにもできないままで私は学校へと辿り着きました。

教室に入り「おはようございます。」と声をかけると泉さんとつかささんが私に気付いて私の側に来て

「おはようみゆきさん。ん？」

「ゆきちゃんおはよ～。」

つかささんは気付かなかったみたいですが、泉さんは私に挨拶を返しつつも私のどこか浮かない顔に気付いたみたいで

「ねえ、みゆきさん。何かあったの？なんだか朝から浮かない顔してるからさ。」

私を心配して聞いてくる泉さんに私はどうするべきか悩みましたが、思い切って昨日あった事を泉さんに話してみる事にしました。

「泉さん、実はちょっと相談したい事がありまして。お話を聞いていただいても構いませんか？」

という私の言葉に泉さんは少し驚いているようでしたがそれでも私の言う相談したい事の内容が気になったのか私に

「いいけど、私が聞いても力になれることなのかな？」

そう答えてくれ、なんだかよく分からないけど好奇心の眼差しを向けてくるつかささんも

「わたしも話を聞いてもいいかな？」

そう訪ねてきたので私は皆にも知ってもらった方がいいのかもしれないと思い

「構いませんよ？それと泉さん。私もどうしたらいいのか答えに苦しんでいる所ですので、できることなら泉さんのご意見もお聞かせ願いたいのです。」

私の真剣な言葉に泉さんも頷いてくれ

「わかったよ。とりあえず聞かせてくれる？」

泉さんに促され、私は昨日あった事を泉さんに説明しました。

「実は昨日・・・・・と言う事があったんです。私はこの先慶一さんの身に何かよくないことが起きるのでは?と思ってしまっていて、どうにも気が気でなくて・・・」

ある程度の説明を終えると、つかささんがおずおずと私に

「ねえ、ゆきちゃん。ゆきちゃんのお話だとけいちゃんはその成神って人にいずれはなにかされちゃうかもしれないってこと?」

つかささんの指摘に私は考えるような仕草をしてから

「はっきりと言える訳ではありませんが、その可能性がないともいいきれません。それに、慶一さんに係わりのある私達にも何らかの影響が出ないとも言い切れませんし・・・」

私の言葉に泉さんは腕組みをしながら

「つまり慶一君に向けられている悪意が慶一君をさらに苦しめる為に私達の方にも向く可能性もあるって事だね?」

泉さんの言葉に私は困惑しながら

「その可能性も否定はできないかもしれませんね・・・」

そう私が答えを返すと泉さんは何事か考え込んでいるようでした。

その様子を見てとりあえず私は泉さんからの言葉を待つ事にしまし

た。

こなたｓｉｄｅ

朝からみゆきさんの浮かない顔を見て私はこれは何かあるかもと思い、みゆきさんに事情を訪ねてみるとそれは私が危惧していた事なのだという事が分かり、私はみゆきさんに今後どうすべきかの対応を相談され私はどう答えるべきかを考え込んでいた。

実の所みゆきさんが話してくれた事はみゆきさんが知る以前に私達が牧村君と会ったあの日に私一人が牧村君から聞かされていた事だった。

慶一君の過去に係わった慶一君に恨みを持つ人の名前、逆にその強さに惚れ込まれ友となった人の事、そして牧村君は慶一君のために慶一君に恨みを持つ成神という人が特に危険だと感じ、独自にその動向を調べさせている事も教えてもらった。

そのために私だけがその情報を掴みやすいように牧村君の連絡先を教えてもらっていた。

そして今回みゆきさんから出た成神の名前を聞いて私は来るべき時が近づいているのかもしれないと思った。

みゆきさんは私の言葉を待っている。

私はとりあえず自分の考えをある程度まとめてからみゆきさんに答えた。

「話は分かったよ、みゆきさん。何にしてもその情報があるだけで

もありがたいしね。それで私も色々考えたんだけどさ、これからの私達が取るべき行動についてなんだけど・・・・・・」

私は一旦言葉を切って一呼吸置き、また言葉を続ける。

「実の所、みゆきさんが知った事は私はみゆきさんが知る以前から知っていたんだよね。以前慶一君の実家にお邪魔した時に会った牧村君って覚えてるよね？」

みゆきさんに尋ねるとコクリと頷いて

「はい。慶一さんの親友とおっしゃられていた方ですよね？」

みゆきさんの答えに私も頷いて

「そう。その牧村君も私がその事を知る以前からその人の事についてはマークしてくれていたらしいんだよ。大分巧妙に隠れ、逃げ回ってるらしいけど牧村君もその人の事を追ってくれているらしいんだよね。慶一君の事もそうだけど、私達にもその人の悪意が向かないように牧村さんのとこと慶一君の実家の所と連携して目を光らせていてくれてるみたいなんだ。」

その言葉にみゆきさんの表情が驚きに変わるのが見て取れた。

「あの日に牧村さんとの間にそんなやりとりがあったなんて知りませんでした。しかし、何故泉さんはその事を私達に教えてはくれなかったのですか？」

私に事情を説明しなかった事の理由を尋ねるみゆきさんに私は

「それなんだけど、あの時にはまだ情報そのものも曖昧だったというのと、牧村君の指示だったっていうのもあるかな。不確か過ぎる情報を下手に私以外の人にも伝えることで無用に混乱させるような事をしたくなかったんだと思う。それに・・・・・・」

私は複雑な表情をしながら一旦言葉を切ると軽く一度深呼吸をして

「あの場に慶一君もいたから私達がその事を知ったとき私達のためにも慶一君が気を使ってしまうだろうって思ったんだよね。だからはっきりとした情報が出てくるまでは私の胸の中にしまっておいたんだよ。けど、みゆきさんの口からその人の情報がでてきたのならこちらもそろそろ情報を公開して皆にも知ってもらって対策を立てるのがいいのかもしれないね。もちろん慶一君には知られずに、私達だけでね。」

私の言葉にみゆきさんは不安げな表情で

「おおむね理解はしました。ですが、私達は何をしたら・・・」

そんな風に私に不安をぶつけてくるみゆきさんに続いてつかさも

「なんとなく大変なんだって事は理解できたけど、けいちゃんの為にわたし達はなにができるかな?」

そう言ってくる2人に私は現時点で出来ること、私達がすべき事を伝えるのだった。

「私達以外のみんなにこの事を伝える前に私達ができる事を言うよ。問題が解決するまでは大変かもしれないけど今私達ができる事はこの情報を心の中に持ちながら慶一君に気を使わせない事、だね。そ

のために私達はこの事については何も見なかった、何も聞かなかったを貫く事かな。」

その私の言葉にみゆきさんは不思議そうな顔で

「それはどういう事ですか？私達はその事を知りながらその事から目を背けて見て見ぬふりをするって事なのですか？」

みゆきさんの言葉に私は慌てて

「ごめん、言葉が足りなかったね。見て見ぬふりをするんじゃなくて知っていても慶一君の前では私達はいつものように振舞うって事だよ。変にその事を意識すれば慶一君の事だからきっと私達に気を使うだろうしさ。だからそうさせない為にも私達は普段どうりでいる。ともすれば大変な事だけどさ、２人に聞くよ？この事を知ってなお普段どおりにできる？慶一君の為に普通にしているっていう覚悟あるかな？」

私の言葉にみゆきさんとつかさは考え込んでいたが、やがて意を決したらしく

「そうする事が慶一さんの為になるのであるのなら私はがんばります。」

「わたしもちょっと自信ないけどけいちゃんの為にそうするのがいいのならがんばってみるよ。」

２人の言葉に私も満足げに頷いて

「わかった。それじゃつかさ、かがみにメール送ってさり気なくみさきちと峰岸さんも呼び出すようにかがみに頼んでくれるかな。み

ゆきさんは八坂さん達の方をお願い。それと牧村君とのやりとりはこっちにまかせて。」

「わかったよ、こなちゃん。すぐおねえちゃんにメールしとくね？」

「こちらもお任せください。泉さん、そちらの方はお任せしますね？」

「うん、任せてよー。」

そんなやり取りを終えて私は牧村君にメールを送り、つかさとみゆきさんもそれぞれにメールを送って休み時間を終えたのだった。

そしてその次の休み時間で慶一君に気付かれぬようにみんなを集めて私達が話していた事をみんなに伝えると、みんなそれぞれに不安な顔になりつつも私が言ったように慶一君の前では普段どおりにするという事を約束してくれた。

みんなと共通の秘密を持ち、それぞれの胸の中にこの事をしまいこんでこの話は一旦おしまいにする事にしたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなた達の間でそんな事が話し合われていた事など露知らず、俺はかがみたちが教室に戻ってきた時の顔が何かの決意に満ちた物である事に気付かずにいた。

そしてその事情すら知らぬままその後、午後のＬＨＲ（ロングホームルーム）が始まり、俺達は今月にある体育祭に向けてそれぞれの競技の出場者を決める事になった。

そしてその結果。

慶一：２００メートル走、チーム対抗リレーのアンカー。
かがみ：パン食い競争と走り幅跳び。
あやの：走り幅跳び、障害物競走。
みさお：１００メートル走、玉入れ
という事に相成った。

「俺は走るのばかりだな。」

自分の競技を確認しながら言うと、かがみは

「私も変わった競技になったわね。けど、片方はあまりこなたに知られたくない競技かも・・・。」

自分の競技を確認しながら少し落ち込むかがみだったが、あやのも自分の競技を確認しながら

「柊ちゃんと一緒の競技あるわね。お互いにがんばりましょ？」

そうかがみに言うと、かがみは「そうね。よろしく、峰岸。」と言いながらあやのとがっちりと握手を交わしていたのだった。

「私は走るのと、玉入れか。走るのは好きだけど玉入れは難しいなー」

そんな風に呟くみさおに俺は

「そういやみさおは陸上部だったっけな。けど、投げたりは苦手か？」

という俺の言葉にみさおも頷きながら

「あまり得意じゃねえな・・・けどその分走る方で頑張っかなー？」

というみさおに俺は一つ思いついた事があったので

「みさお。お前を陸上部と見込んで頼みがあるんだが、体育祭の時までの自主トレにちょいと付き合ってくれないか？走り方くらいなら教われそうだしな。」

そんな俺の提案にみさおは不敵な笑みを浮かべながら

「いいけど、私は結構スパルタだぜー？それでもよければ自主トレにつきあうぞ？」

そんなみさおに俺も不敵に笑い返しながら

「望む所だ。一つよろしく頼むぜ？」

と返事をするとみさおも笑いながら

「わかったぜー。それじゃ詳しい事は後で相談すっか。」

そう答えるみさおと俺とのやり取りを見ていたかがみとあやのも

「慶一くんが自主トレするのなら私もそれに付き合ってみてもいいかな？」

「私も指導してもらえるかな？みさちゃん。」

みさおに2人が頼み込むとみさおも「任せろ。私が面倒みてやるぜ」と言って豪快に笑っていたのだった。

こなたｓｉｄｅ

私達のクラスでも今度の体育祭に向けて出場競技の話し合いがなされていた。

そんな中でみゆきさんが障害物競走に出たいと希望していたのだが、私の

「だめだよみゆきさん。体の凹凸激しいしいろいろくぐるし」

という一言でみゆきさんの出場競技はチーム対抗リレーに変更されたのだった。

そんな感じで私達のほうの競技は

こなた：１００メートル走

つかさ：１００メートルハードル

みゆき：チーム対抗リレー

白石：５メートル走

という形になった。

何か最後の５メートル走という競技に首を傾げたのだが、とりあえず私達の出る競技は決定したのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こうとやまともそれぞれに出る競技が決まったようで俺達にその報告をしてきた。

２人はそれぞれ１００メートル走と幅跳びに出るようだった。

今回は２人とも同じクラスの友人達と共に自主練するつもりらしかったので俺達とは別々でがんばるつもりらしい。

俺は２人に激励の言葉を送って体育祭の日までがんばろうと伝えるのだった。

その日の放課後俺達は今度の体育祭に出場する競技の事で誰がどの競技に出るということを確認し合い、話をしながら学校を後にする。

「へえ？みゆきは俺と同じようにリレーにでるのか。」

みゆきにそう話を振るとみゆきも少し赤くなりながら

「はい。色々ありまして、そういう事になりました。」

そのいきさつをこなたが話してくれたのだが、話を聞き終わり俺とかがみは「「セクハラ親父かお前は！」」と突っ込みを入れていた。

「ねえ、かがみ。かがみは何に出るの？ひょっとしてパン食い競争とか？」

というこなたの指摘にかがみはこなたから無言で視線をそらすと

「図星？ねえ、図星？」

とこなたに突っ込まれ顔を真っ赤にしながら「こいつむかつく」と言っていた。

つかさは１００メートルハードルに出るとの事なので俺は

「ハードルか、大丈夫か？つかさ。早さもそうだけどハードルを飛び越すタイミングもいる競技だからな。」

そう俺が言うとつかさは自信のなさそうな顔で

「正直不安だよ～。わたし運動神経あまりよくないし・・・」

というつかさの答えの俺は軽いため息をつきながら

「なら俺達と一緒に練習するか？実はみさおに頼んで自主トレすることにしたんでな。それにみさおは陸上部だからハードルの方も何かしらアドバイスがえられると思うぞ？」

つかさにそう言うと

「う～ん・・・そうだね。わたし頑張ってみる。日下部さんよろしくね？」

そう言いながらみさおに頼み込むとみさおも満面の笑みで

「柊妹もやるっていうのなら私はかまわないぜ？それじゃ時間を決めてがんばっか。」

そう答えるみさおにつかさは頷きながら

「うん、頑張るよ。」

と返事を返すつかさを見ていたこなた達も

「私も今回は真面目にやってみようかな？みさきち。私も混ざっていい？」

「みなさんと頑張ってみたいので私もよろしいでしょうか？」

そう頼み込んでくる2人にみさおは

「ならみんなでやっか。やるだけやってみようぜ？」

みさおの言葉に俺も頷いて

「よし。それじゃみんなで時間作って自主トレだな。がんばろうぜ？みんな。」

みんなにそう促すとみんなも「「「「「「おー」」」」」」と気合を入れて体育祭までの間共に練習をしていく事を誓ったのだった。

これから始まっていく体育祭、俺達はどんな結果を残すのだろうか。

旋律達の挑戦が始まっていく。

そして、俺の過去は今しばらくの間なりを潜める事になり、こなた

にも新たな情報が入る事はなかった。

それでも俺以外のみんなは今回の事を心にとどめて日々を過ごす事になる。

普通の日々をみんなで普通に送る。

それが旋律達の誓いにもなったのだった。

誓い合う旋律～体育祭前の出来事～（後書き）

今回からまらしばらくはほのぼので行くと思います。
前回での補足
慶一の繰り出した技について

龍神流で使われる拳打は捻りを加えて打ち込む2種類の拳打があります。
螺旋弾は拳で、螺旋掌は掌で同じように捻りを加えつつ打ち込む技です。

今回だした螺旋連弾四壊はその名前のとおり4箇所の関節及び急所の破壊で使う技です。慶一のレベルだと関節を外す程度ですが、親父さんがやると関節を破壊されます。
そしてその上の禁じ手として五壊があるのですが、親父さんが使うと確実に人を殺せてしまう技なので普段は親父さんも四壊以上は出しません。
そして、慶一もこの技の恐ろしさを知っているので使う事はありません。修行はしてますが・・・。

高めあう旋律～体育祭練習風景～

体育祭の出場競技も決まり、俺達は体育祭までの間少しでも鍛えようということになりそれぞれに自主トレをしつつみさおのコーチを受けながら日々を送るのだった。

俺の体育祭までの間の自主トレは走り込み主体で行う事にしたので、みんなで頑張ろうと誓い合ったあの日から俺は毎朝鷹宮神社と自宅の往復をして走り込んでいたのだった。

鷹宮神社と自宅の往復を決めて走り始めてから6日目の朝、俺はいつものように鷹宮神社へとランニングにでかけ、なかなかのタイムで神社へと到着する。

「はあ、はあ、ふう・・・中々いいペースだったな。今日も好調だ。」

息を整えつつクールダウンをしていると俺の後ろから声をかけてくる人がいた。

「おはよう、今日もがんばってるみたいだね。感心感心。」

その声に振り向くとそこには柊家の御頭首柊ただおさんがにこにこしながら立っていた。

「おはようございます、ただおさん。競技に出る以上は無様な姿は晒せませんからね、とりあえずやれる所までがんばってみようかと。」

そんな俺の言葉にもう一人声をかけてくる人がいた。

「えらいわねー、森村君。ところでうちのかがみとつかさはどんな様子かしら？」

その人に俺も挨拶を返しつつ現状を話す俺。

「あ、おはようございます。みきさん。とりあえず悔いは残したくないですからね。それと2人ならそれなりにがんばっていますよ。もうすぐここに着くと思います。」

そう返事を返した相手はこれまた柊家の御頭首の奥様、柊みきさんだった。

「なんだか悪いわね。うちの妹2人がいつもお世話になってばかりでさ。」

その後ろからは柊家長女の柊いのりさんが俺に声をかけてきた。

「いえいえ。2人には俺自身も結構お世話になってますし、こういう時に助け合うのも友達として当然ですから気にしないで下さいよ。」

俺の返事にいのりさんはまた感心したような顔になっていてその横で柊家次女のまつりさんが俺に

「うーん。森村君やっぱいいわー。ねえ、この際だから私と付き合ってみない？私なら歓迎だよ？」

何故かあの時から俺はまつりさんにも気に入られたようで事あるご

とに今のようにからかって?（本気なのかな?）くるのを俺は苦笑交じりに受け流すのだった。

「はあ、はあ、はあ・・・ちょっと・・・まつり・・・姉さん・・・はあ、はあ、・・・慶一くんに・・・変な事・・・はあ、はあ・・・言うんじゃないわよ・・・」

息を切らせながらようやくかがみが到着して早速まつりさんに突っ込んでいた。

「お?ようやく到着か。お疲れ、かがみ。」

俺が遅れてやってきたかがみにねぎらいの言葉をかけるとまだ息が整いきっていないが、かがみは

「はあ、はあ・・・あ、ありがと・・・はあ、は・・・いいんだけど・・・慶一くん・・・はあ・・・なんで私よりはるかにハイペースで走っていたの・・・にもう・・・はあ、はあ・・・息が・・・はあ・・・戻ってるのよ・・・」

そのかがみの言葉に俺は首を軽く傾げつつ

「うーん?親父のしごきに耐えてきたから?」

そうしれっと答えるとかがみは一気に脱力して

「本当に・・・あんたのとこって・・・どんだけよ・・・」

そう言いながらもようやく息が整ったようだった。

「かがみ。つかさ達は？」

まだこちらに着いていないつかさ達の事が気になり、俺はかがみに尋ねてみた。

「あの子も頑張ってるけど大分遅れてるわね。日下部とこなたがフォローに回ってるわ。みゆき達ももうすぐ着くはずよ？」

かがみの言葉に俺は腕組みをしつつ

「そうか。でもつかさも泣き言を言う割にはよくついてきてるよな。根性は認められるよ。あいつのけして諦めない姿勢はつかさの長所だな。」

そんな俺の感想にかがみもうんうんと頷きながら

「そうよね。特訓しようと言い出して走り込みにも距離的に慶一くんの家から家の神社までが丁度いいってことで慶一くんの家に体育祭まで泊り込んでみんなで練習しようって事になってから最初はすぐに根をあげそうになってたわよね、あの子。でもみんなが一緒だから頑張るって言って諦めないでついてきたっけ・・・。」

そんなかがみの言葉を聞きながら俺は練習を始めた頃の事を思い出していた。

練習初日・・・・・

「よーしそれじゃ、最初はならし程度でゆっくり行くぞ？みんな。、1、2、1、2で声だしていくぞ？せーの・・・」

「「「「「「「1！2！、1！2！・・・」」」」」」」」

しばらく走ると、つかさのペースが徐々に落ち初めてきた。

「つかさ！遅れてるぞ！？大丈夫か！」

俺はペースを落としてつかさにあわせつつ走る。

「つかさ、大丈夫か？」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・く・・・苦しいよ・・・」

「がんばれ。まだ始めたばかりだぞ？」

俺はつかさを励ましつつ、つかさにあわせて走りつづけていた。

そして半分くらいきた頃ついにつかさに限界がきたようだった。

徐々に走る速度から歩きの速度に変わってくる。

そしてついに立ち止まってしまった。

「はあ、はあ、はあ・・・もう・・・もう・・・無理・・・だよ・・・走れ・・・ないよ・・・」

俺もつかさが止まるのにあわせて立ちどまる。

俺達の様子を察したかがみ達がが俺達の方へ走ってくる。

「つかさ、大丈夫？」

かがみがつかさの顔を覗き込みながら聞く。

「・・・・・」

つかさは無言だった。

こなた達もつかさに声をかける。

「つかさ、大丈夫？疲れちゃった？」
「つかささん。大丈夫ですか？」
「妹ちゃん。平気？」
「柊妹、グロッキーか？」

そんなみんなの声を聞いていたつかさは目に涙をためながら

「ごめんね・・・私・・・また足引っ張ってるね・・・みんなと一緒なら頑張れるって思ったけど・・・結局だめだった・・・ごめんね、ごめん・・・」

ついに泣き出してしまうつかさに俺はどういうべきか考えていたが一つ意を決するとつかさに

「つかさ、つらいか？練習。このままやめるか？みんなに迷惑をかけているから、自分が足手まといだからってこのまま諦めるか？この練習はあくまでも自主トレだ。強制というわけじゃない。やめるのも続けるのもお前の自由だ。でも・・・結局はこれも自分自身との戦いでもある。つかさ、お前はこのままで満足か？自分に負けたまま全てを投げ出して満足か？」

俺の言葉につかさは涙で濡れた顔を俺に向けながら真剣な顔で俺の話を聞いている。

俺はさらに言葉を続けて

「つかさ、誰だって最初はつらいもんだ。こなただって、かがみだって、陸上部でがんばってるみさおだって、あやのもみゆきも、俺だってそうだ。最初は何度も心が折れたりもした。そんな時俺は自分の周りを見た。俺以外の人間がどうなってるのかを見た。みんな苦しそうだった。つらそうだった。こんな思いをしてるが自分だけじゃないんだって思った。そしてつらそうにしてる周りの連中がそれでもなお前へ進もうとしてる、それを見た時、みんなが頑張れる、なら、俺も頑張れるはずだと思えた。そう思えたとき俺は気付いたらみんなと共に再び走り出せていたよ。」

一旦言葉を切って一呼吸置いた後最後の言葉をつかさに投げる

「それとな、つかさ。お前はみんなに迷惑がかかる、足を引っ張る事でみんなに何か言われるんじゃないかって思い、その事を恐れるあまりに自分自身を萎縮させすぎてる所がある。だから自分が本当に言いたい事があってもそれを全部自分の中に閉じ込めて抱え込もうとする。いいんだよ、つかさ。泣き言を言ってもいいんだ。迷惑かけてもいいんだ。俺達には何も遠慮する事はないんだ。何故なら俺達は仲間なんだから。みんなのそれぞれの弱い部分を受け止めてフォローしあえる仲間なんだからだから、お前の言いたい事をさらけ出してもいいんだ。そして頼ってほしい。自分が一人だと思わずにさ。その時は俺達がお前を・・・俺がみんなを・・・助けてやる。」

俺は自分の言うべき事を言い終えるとつかさの答えを待った。

こなた達は俺の言葉に感じるものがあったのかそれぞれつかさに

「つかさ、あんたの弱い所も私は知ってる、けどあんたの支えになることだってできるわよ。フォロー歴１６年をなめんな！」
「つかさ、私もだらしないところもあるけどさ、そんな所もさらけ出してみんなに頼ってる。けどみんなに頼りにされた時は私もそれに応えるよ。」
「つかささん。私も弱い所、つらいこともたくさんあります。けどみなさんがそんな私のそう言う部分をフォローしてくれるおかげで乗り越えていく事ができました。つかささんも決して一人じゃないんですよ？」
「妹ちゃん。私も運動はあまりしてない方だから結構つらかったわ。でもみんながいることが私の支えになったの。つらい事があったら私にもいってね？私も助けてあげられると思うから。」
「柊妹ー。あやのの言うとおりだぜ？私も出来る限りフォローしてやるから頑張ってみろよ？」

つかさは黙って俺とみんなの言葉を聞いていた。

俺達の言葉を聞きながら考え込んでいたつかさはふいに顔を上げて

「ありがとう。けいちゃん、みんな。私がんばってみる。また泣き言とか言うかもしれないけど、それでも絶対諦めないから、だから・・・わたしを助けてほしい・・・」

そのつかさの言葉に俺達は満面の笑顔で頷いたのだった。

・・・・・そして現在。

「あれからつかさも少し強くなった気がするな。」

そんな俺の呟きにかがみも俺に笑いかけながら

「そうね。慶一くんがあの時つかさに言ってくれたことがあったから、なんだろうけど、私も嬉しかったな。あの言葉はつかさに向けたものだったけど、でも・・・私もつかさの事を見て思う所があったしね。ねえ、慶一くん?私の事も助けてくれるのよね?」

そんな風に俺に笑顔で言うかがみに俺はどきりとして少し顔を赤くしながら

「つかさにも言ったけど、あの言葉はかがみにだって言ったようなものなんだし、俺が出来る事なら手を貸すさ。」

かがみと視線を合わせていられなくなり俺はかがみから視線を外してそっぽを向いた。

そんな俺を見ながらかがみは満面の笑みを浮かべていた。

「はあ、はあ・・・かがみだけ・・・助けるってのは・・・はあ、はあ・・・ずるくない?・・・はあ、はあ・・・慶一・・・君・・・」

「はあ、はあ、はあ・・・そ・・・はあ・・・そうだよ・・・けいちゃん・・・はあ・・・はあ・・・」

「はあ・・・はあ・・・その優しさを・・・はあ・・・はあ・・・私達にも・・・分けてほしいです・・・はあ・・・はあ・・・」

「はあ・・・はあ・・・私達も・・・はあ・・・はあ・・・平等で・・・はあ・・・はあ・・・あるべきよね?・・・はあ・・・はあ・・・」

「はあ、はあ・・・慶一は・・・私達には・・・はあ、はあ・・・そういうのなしってのは・・・はあ、はあ・・・ゆるさねえぜ・・・

」

他のメンバーも到着したはいいが、かがみに言った事を聞かれてたようだ。

口々に私達も助けろと言ってくる状況に俺は苦笑しながら

「何を言ってるんだよ、そんなのは当然だ。俺はあの時つかさだけじゃなくみんなにもあの言葉を投げかけたんだからな。」

そんな俺の答えにみんなも満足そうな表情で頷いていた。

「さあて、今日が体育祭前の最後の練習だからな。みんな気合入れて最後までがんばろうぜ？」

と号令をかけるとみんなも「「「「「「「「「」」」」」」」」と言って気合を入れなおしていた。

そして俺達の最後の練習が始まった。

「みさお、スタートを見てくれ。」

みさおにスタートのタイミングを見てもらう俺。

クラウチングに構え、1、2、3！でタイミングを計る。

「1、2、3！！」

と同時に地を蹴って前へ飛び出す。

「大分よくなってるぞ？慶一、こっちも才能あるんじゃねえか？」

みさおに褒められて少し自信を持つ事ができた。

「ありがとな、みさお。後は俺は走り込むからつかさたちの方みてやってくれ。」

みさおに他の人の練習を見てやってほしいと言うとみさおも頷いて

「わかった。私は柊妹やあやのを見るから残りの自主トレがんばれよなー。」

そう言ってみさおはつかさたちのほうへと走っていった。

「慶一さん、バトンタッチの練習にお付き合いしていただいてもいいでしょうか？」

俺と同じでリレーに出るみゆきがバトンタッチに不安があるということで俺に練習相手をして欲しいと言ってきたので俺も同じくリレーに出る立場である以上俺もやっておかないといけないなと思い

「よし、それじゃ一緒にやるか。みゆき、軽く後ろを確認しつつなるべく俺を引っ張りながらバトンを受け取れ。」

そう指示を出すとみゆきも

「わかりました。それじゃ慶一さん、お願いします。」

というみゆきに頷いて位置につき練習をスタートさせる。

「いくぞー、それっ！」

俺はなるべくみゆきとタイミングを合わせるように動くと、みゆきもなかなかの反射神経をみせてくれ、ほぼこちらの指示どおりに動いてくれた。

「はいっ！」

上手くバトンをキャッチするみゆきに俺も

「よし、いい感じだ。そのまま何度か練習しよう。」

そう言うとみゆきも頷き、そのまましばらくバトンタッチの練習を続けていた。

ある程度練習を終えてふとかがみの方に目をやると、幅跳びの練習をしていたのだが、どうも本人はあまりしっくりいっていないように見受けられたので俺はみゆきに

「みゆき、ちょっとかがみの練習を見てくるよ。そのまま自主練しててくれ。」

みゆきにそう伝えるとみゆきも頷いて

「分かりました。こちらはやっておきますのでかがみさんをよろしくお願いしますね。」

そう言ってくれるみゆきに頷いて俺はかがみの方へと向かった。

「かがみ、どうした？あまりしっくりいってないって感じだが？」

何事か考え込み首をかしげているかがみに声をかけるとかがみは俺の方に向き直り

「あ、慶一くん。うん、なんか踏み切りのタイミングがいまいちね・・・」

なんとなく納得がいってない風なので俺はかがみに

「かがみ、俺が見てるからちょっと目の前でやってみてくれるか？」

かがみに一連の動きを見せて欲しいと言うと、かがみも頷いて

「わかった。ちょっとやってみるから見てて？」

そう言ってスタート位置に行くと「いくよー！」と言って助走を始めた。

タッタッタッタットーン！というリズムで飛び出すかがみだったが、俺は飛び出すときのタイミングに違和感を覚えたので

「最後に飛び出すタイミングが微妙におかしい気がするな。飛び出すときに上手く利き足が乗ってない感じだ。それが乗るようになればもっと良くなるはず。」

という俺の指摘にかがみも納得して

「なるほど、それか。わかったわ。そこを意識してもう少しやってみるわね？」

というかがみの答えに俺も頷いて

「がんばれよ？かがみ。それじゃ俺はこなたの方を見てくるから。」

そうかがみに伝えるとかがみは

「わかったわ。私のほうも見てくれてありがとう。こなたはそんなに問題はないかもだけどがんばってね？」

かがみの言葉に俺も頷いてこなたの方へと向かったのだった。

「こなた。調子はどうだ？」

何本か軽く流していたこなたに俺は声をかけてみると

「あ、慶一君。今の所は問題ないかな。私は結構走るの得意だしね。」

というこなたの言葉に感心しながら

「なるほど。こなた、とりあえず俺と軽く何本か流さないか？」

そう提案する俺にこなたも頷いて

「いいよー。それじゃ一緒にやろっか。」

俺達は並んでスタートラインに立ち、俺が”よーい、スタート！”の合図を出して軽く流していく。

何本かやり終えるとこなたは俺に

「いやー、慶一君も結構足速いねー。私も結構自信あるほうだけどちょっと驚いたよ。」

笑いながらそう言ってくるこなたに俺も

「走り込みの成果かもな。基礎体力上げる運動は結構やったからなあ・・・」

そう言いながら親父のしごきを思い出している俺だった。

「まあ、この分なら慶一君の1位姿を見れそうな感じだねえ。」

というこなたに俺は慌てながら

「俺よりも速いやつだっているだろうさ。こなたの言うように1位が取れるとも限らないしな。」

と謙遜する俺にこなたは

「そっかなー?慶一君ならいけるとおもうけどなあ・・・」

俺が1位を取れると信じて疑わないようだった。

その後はあやのとつかさの練習をみさおと一緒に見たのだが、つかさのハードルに関しては思いのほか苦労する事となった。

とりあえず各々納得できるところまで練習をして今日のメニューを終えて明日の本番に備える俺たちだった。

終わり際にみんなで最後の励ましあいを行った。

「みんな。今日までやれる事はやれたと思う。明日は全力を出し切ろう。」

「練習の成果、出せるようにがんばるよ。」

「悔いは残さないようにやりましょ？」

「みんなと一緒にがんばったから、明日も最後まで諦めないよ。」

「思い出に残る体育祭にしましょう。」

「私も全力をつくすわ。今日までの練習を忘れないようにしてね。」

「私もベストをつくすぜ。明日はみんなで笑おうなー。」

最後のみさおのしめに俺達は「「「「「「「ファイト、オー！！」」」」」」」と最後の気合を入れて今日を終えるのだった。

明日はいよいよ本番、みんなは共に笑って終われるだろうか・・・少しの不安もあった俺達だが、自分を信じて全力を出し切ろうと誓い合うのだった。

高めあう旋律～体育祭練習風景～（後書き）

次回は体育祭本番です。

競い合う旋律～体育祭午前の部～

体育祭前の自主トレを終えて、いよいよ迎えた本番の日。

果たしてどんな結末を迎えるのだろうか・・・・・・

本番当日はみんな俺の家に泊まりこんでいたのでここから全員で学校へと行こうという話になり、一夜が明けてその日の朝、1階から聞こえるこなたたちの声で俺は目を覚ました。

1階ではこなたたちの楽しそうな声が響いていて、耳をすましてみると今日のお弁当作りと朝食の支度をしているようだった。

俺は1階の状況を確認すると、学校へと向かう準備の為、着替えや持ち物の準備をする。

程なくして準備を終えた俺はこなた達のいるキッチンへと降りて行くのだった。

「おはよう、みんな。今日はみんなで早起きなんだな。」

そうみんなに声をかけるとこなたが俺のほうに振り向いてウインクしながら

「あ、おはよー、慶一君。今日はお弁当とかいるだろうからみんなで作ってたんだよ。ついでに朝御飯もね。」

俺に挨拶を返してきた。

かがみたちも俺の声に振り向きながら

「私は少しだけお弁当のおかず作り手伝ったわ。後、前の勉強会で好評だったお味噌汁もがんばってみたのよ。」

「お弁当は主にわたしとこなちゃんと峰岸さんでがんばったよ。」

「私は朝食の方をがんばらせていただきました。」

「美味しく出来たと思うから、楽しみにしててね？慶ちゃん。」

「私も及ばずながら朝御飯の方がんばってみたぜ。」

というみんなの言葉に俺もねぎらいの言葉をかけつつ

「そうか。みんな朝早くからご苦労様。とりあえず朝食済ませちゃうか。みんな席に着いてー」

席に着くように促すとみんなも頷きながらそれぞれの席に着いて

「よし、それじゃいただきまーす。」

と号令をかけるとみんなも「「「「「「「「」」」」」」」」と言って朝食が始まった。

朝食を取りながら俺は何気なしにキッチンに置いてあるテレビをつけてニュース番組にチャンネルを変える。

ニュースには昨日の録画取りらしい他の学校の運動会シーンが映し出されていた。

『この秋、一番の陽気となった今日、各地で運動会が開かれます。』

というアナウンサーの声を聞きながら俺達はＴＶに見入っていると、

一人の中年男性がインタビューを受けてる場面が映し出された。

『いやー、娘の応援に来たんですが、こんなに盛り上がるとは思いませんでしたー。いやー、いい写真が取れましたよー。』

とインタビューを受けていた中年男性が言っているのを俺達は何気なしにみていたのだが不意にこなたが

「おとーさん?娘っていったい、どこの?」

という一言にこの場の空気が凍りついた。

「こ、こなた、今ＴＶに写ってた人のことをお父さん、って言ったか?」

俺がおそるおそる聞くとみんなも半ば唖然としながら

「あ、あれが、こなたのお父さんなの?」

「確かにほくろとか似てる気はするけど・・・」

「と、いいますか、泉さんのお父さんだとして一体何をなさっているのでしょうか・・・」

「泉ちゃんのお父さんて、変わった人なのね・・・」

「てか、ちびっ子が言ってる事がほんとなら、あれってまずいんじゃね?」

口々にこなたにそう言っていたが、こなたはあまり動じてない様子で

「まあ、ああいうお父さんなのだよ。確かにはたから見たらちょっと危ない人かもねえ・・・」

とのん気に言うこなたに俺とかがみは

「「人事のように言うな！お前の（あんたの）父親（おとうさん）だろうが！」」

と2人同時に突っ込みを入れたのだった。

そんな俺達の突っ込みも軽く流したこなたは俺達に

「あ、そうそう。今日の体育祭にお父さん多分来ると思うから迷惑かけちゃったらごめんねー？」

へらへらとした顔でそうのたまうこなたに俺達は大きなため息をつくのだった。

朝からいきなり疲れる思いをしつつも俺達は学校へ行く準備をして家を出る。

みんなで一緒に来たおかげで誰一人遅刻する事無く学校に着いた俺達はそれぞれの教室に行って着替え等の体育祭の準備を終えると、開会式があるので俺達はグラウンドへと出て行くのだった。

グラウンドで隣のクラスのこなたたちやこうやまと達と会い声を掛け合う。

「おはよ、こう、やまと。自主トレはばっちりか？」

「あ、先輩。おはようございます。それなりに練習は出来たと思いますよ？先輩達こそどうですか？」

「俺達はやれるだけの事はやったよ。後は本番で力を尽くすだけだな。」

「先輩が出る時は応援させてもらうわね？その代わり私達の方も応

援よろしく。」
「ああ、そうさせてもらうよ。今日は悔いのないようにがんばろう。」
「ですね。」
「がんばりましょう。」
「慶一君。ここからはクラス別々だけど練習の成果出してがんばろうね。」
「ああ。お互いにベストを尽くそう。」
「けいちゃんもおねえちゃんも峰岸さんや日下部さんもがんばってね。わたしもがんばる。」
「あんたも最後まであきらめるんじゃないわよ?」
「私も練習の成果を出し切っていきます。みなさんもがんばってください。」
「やれるだけの事はやるわ。」
「私もやるからには全力だぜー」
「よーし、いっちょやるか。みんな、健闘を祈る。」

最後に俺がメるとみんなも大きく頷いて笑顔でそれぞれのクラスに戻って行くのだった。

開会式も無事に終わり、それぞれの場所に戻っていく最中、俺に声をかけてくる人達がいた。

「慶一先輩、こんにちは。今日はこなたおねえちゃんの応援も兼ねて招待してもらったんですよ?」
「・・・先輩、お久しぶりです。今日はみゆきさんと共に・・・先輩も応援させてもらいますね・・・?」
「先輩、旅行以来ですね。今日は色々と楽しませてもらいますよ?こうちゃん先輩も応援しないとですし。」

その見覚えある3人に驚きながらも俺は笑顔で挨拶をした。

「ゆたか、みなみ、ひより。まさかお前らが来るとは思ってなかったが、いい機会だし陵桜を見ておけよ？学校を雰囲気をそして行事をな。俺達もがんばるから応援してくれよな。」

俺の言葉に3人とも元気に「「「はい！」」」と返事をしたのを見て俺は満足げに頷くと自分達のクラスの待機場所へと戻って行くのだった。

「慶一くん、どこ行ってたの？もうすぐ競技が始まるわよ？」

待機場所に戻ると同時に最初の競技、パン食い競争に出るかがみが俺と入れ違いで出て行こうとする際に俺にそう声をかけてきた。

「ああ。戻る途中でゆたかたちに会ってな。あいつらも応援に来てくれてるんだよ。受験で忙しいってのにありがたい事だよな。」

ゆたかたちの事を話すとかがみも驚いたような表情で

「へえ？ゆたかちゃん達が来てたんだ。なら私も先輩としてがんばらないとね。」

未来の後輩の応援があると知って俄然張り切るかがみに俺も

「そうだな。まずはトップバッターだからしっかりな、かがみ。」

そう言ってかがみを激励しつつ送り出した。

「分かってるわよ。頑張ってくるわね。」

そう言いながら選手の集合場所へと走っていくかがみだった。
緊張の面持ちで自分の順番を待つかがみ。
そこにこなたがニヤニヤしながら
「優勝しなさ～い。女の子はエレガントにねー。」
そうかがみに声をかけるとかがみはいつもの調子でこなたに
「エレガントなパン食い競争なんてあるか！！」
とツッコミを入れていた。
やがてかがみの順番が来ていよいよスタートラインに立つかがみ。
俺達はみんなでかがみに声援を送っていた。
「かがみ、落ち着いていけ！練習の成果を見せるんだ！」
「柊ちゃん、がんばって！」
「いけー！柊ー」
2年E組の席からも
「かがみー。とりあえずがんばれー！」
「おねえちゃんファイト～」
「かがみさん。がんばってください！」
1年生の席からもこうとやまとが声援を送る

「かがみ先輩！がんばれー！」
「かがみ先輩、落ち着いていけばいけるわ！」
観客席からはゆたかたちが声援を送っていた。
「かがみ先輩、がんばってくださいー！」
「かがみ先輩！ファイトです！」
「柊先輩！がんばってくだいッス！」
例の３人の声援が上がっていたが、予想外の人の声も聞こえてきた。
「かがみー、がんばりなさいよー？」
「私らに恥かかせないようにしなさいよー？」
「かがみ、がんばってー」
「がんばれ、かがみ！」
俺は声のするほうに顔を向けて見て驚いていた。
何故なら、柊一家が応援に来ていたからだ。
俺は苦笑しながら柊一家を見ていて、かがみは声の主に気付くと顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。
そしていよいよスタートする。
かがみｓｉｄｅ
私を応援してくれるクラスメートや後輩達の声が聞こえた。

（みんな応援してくれてるわね・・・あ、慶一くんも私を応援してくれてる・・・よーし、がんばってみよう。って、あれはお母さん達？何でいるのよ！ああ、恥ずかしい／／／）

私は顔を真っ赤にしつつスタートを待ったのだった。

「位置に着いて、よーい！」パアン！！

ピストルの合図で飛び出すかがみ達、かがみは他の２人を気合を込めながら引き離しつつ目標に向かって疾走する。

「どおおりゃあああ！、たあっ！」

という気合の咆哮とともにパンに食いつくかがみだったが、ここで勢いがつきすぎたために咥えたパンごと全てをなぎ倒してしまった。

慶一ｓｉｄｅ

その様子を見ながら俺は顔に手をあてつつ「あちゃー・・・」と呟きながらその惨状を見ていた。

他のみんなも驚きを隠せない表情でその様子を見守っていて、柊一家も苦笑とため息の混じった複雑な表情を見せていたのだった。

結局やり直しになりはしたが、文句なしに１位をゲットするかがみだった。

１位は取ったものの、最初のやりすぎに素直に喜べない様子でかがみが戻ってきた。

「おつかれ、かがみ。最初のはまあ・・・勢いつきすぎたけど1位取れてよかったな。」

かがみに祝福の言葉を送るが、かがみは複雑な表情で

「ありがとう・・・でもなんか素直に喜べないのよね・・・」

というかがみに俺も苦笑するしかなかった。

次はこなたとみさおの１００メートル走ということなので俺は2人にな。１００メートル走かち合わずに済みそうだしな。」

「こなた、みさお、がんばれよ?とはいえ、順番がずれてよかった

そう声をかけるとみさおはこなたを見ながら

「私は別に同じになってもよかったけどな。ちびっ子と勝負すんのもわるくねえなって思ったしな。」

そんなみさおにこなたは手を振りながら

「いやいや、私が頑張ったとしても現役陸上部員のみさきちにはかなわないよ、きっと。」

謙遜しつつそうみさおに言うこなたにみさおは

「そっかー?私はちびっ子の足の速さには一目おいてるんだぜ?」

何気に飛び出したみさおの褒め言葉にこなたは少し照れながら

「ありがとうっていっておくよ。とにかく私達はそれぞれベストをつくそうよ。」

そんなこなたにみさおも頷きながら「そうだなー。」と言っていた。

そして2人の出番がやってきた。

最初はみさおが走るようなので俺達もみさおに声援を送る。

「みさお、がんばれー！」

「日下部、陸上部の意地、みせなさいよ！？」

「みさちゃん、ファイトー！」

みさおも俺達の送る声援に満面の笑顔とピースサインで答えていた。

みさおｓｉｄｅ

ようやく私の出番になりスタート位置に行くと、自分のクラスから私に向かって声援が飛んできた。

（柊にあやのも応援してくれてるな。あ、慶一も応援してくれてる、よし、ここは張り切らなきゃな）

そう考えながら私は柊達の方に向かって満面の笑顔ピースサインを送るのだった。

慶一ｓｉｄｅ

そしてクラウチングスタートの体制で構えてスターターが銃を上にあげる。

緊張感が走り、そして”パアン”という銃の音でみさおたちが一斉にスタートを切った。

５０メートル付近までは横一列で走っていたが、そこを超えたあたりでみさおがスパートをかけた。

不意のスパートで他の選手達は反応が遅れ、結局最後までみさおに追いつけないままみさおがトップでゴールに入った。

「みさお！１位おめでとう、いい感じだぞ！」
「日下部！ナイスよ！」
「みさちゃんおめでとう！」

俺たちが声をかけると同時にクラスのみんなもみさおの健闘をたたえて盛り上がった。

そしてその状況を横目でこなたが見ていたのだが、次はこなたの順番が回ってきたので応援を切り替えた。

こなたをよく見ると、あまり緊張した様子はないようだった。

「こなた、練習の成果をみせろよ！？」
「がんばりなー、こなたー！」
「ちびっ子、私も１位取ったんだからお前も頑張れよなー！？」
「泉ちゃん、がんばってー！」

とこなたを応援していたら桜庭先生から

「お前ら、敵を応援するな！気持ちはわかるがな」

そんなツッコミが入ったので俺達は一時自重する事にしたのだった。

こなたｓｉｄｅ

ようやく私の順番が回ってきたのだけど、敵のクラスであるはずの慶一君達が私の応援をしてくれていた。

はたから見るとなんともシュールな光景ではあったけど嬉しさはあった。

（かがみやみさきちたち、慶一君も応援してくれてる。ここはがんばってみようかな？）

そう考えつつスタートラインに行く途中で桜庭先生が慶一君達にツッコミを入れている声が聞こえ、私は苦笑していた。

そしてスタートラインに立つ。

慶一ｓｉｄｅ

桜庭先生のツッコミをもらった所で俺達はこなたのスタートを緊張しながら見守っていた。

そしてクラウチングスタートの体制に入る選手全員をみてスターターが銃を上にあげる。

一瞬の間を空けて”パアン”という音と共にこなた達の組のスタートとなった。

はいいのだが、やっぱりこなたは速かった。
５０メートル付近辺りまでにはすでにこなたはトップスピードに乗っており、そのままの勢いでゴールまで一直線だった。
余裕で１位をゲットするこなた。
「こなた、お疲れ。かなり余裕だったな。」
「まあ、あんたの事はあまり心配はしてなかったけどね。」
「やっぱちびっ子の足は速いぜ、私の見立てに間違いはなかったな。」
「凄いのね、泉ちゃん。私あんなに速くは走れないわ。」
そう言いながら俺達はこなたを迎えたのだった。
そして次は俺の２００メートル走の番になった。
「慶一君、いってらっしゃーい。」
「がんばってね？慶一くん。」
「けいちゃんがんばれ～」
「慶一さん、頑張ってくださいね。」
「慶ちゃん、頑張ってね？」
「慶一、お前の実力見せてもらうぜ？」
そんなみんなの声援を受けて俺はみんなに大きく頷きながら「それじゃいってくる」と言って選手達の集まってる場所へと向かう。
その途中でこうとやまとの声援も飛び込んできた。
「先輩、がんばってくださいー」

「勝ってよ?先輩!」

こうはいいとしてやまとはなんだか俺にプレッシャーをかけてくれたのを苦笑しつつ2人に軽く手を上げて応える俺だった。

観客席の方を何気に見ると、ゆたかたちが俺に手を振っているのが見えたので俺も手を振り返して応えた。

さらには「森村君、超がんばれ!」というまつりさんの声援が聞こえてきたのだが、俺はまたも苦笑する事になったのだった。

そして俺の走る順番が回ってくる。

クラウチングスタートの体制で合図を待つ俺。

スターターの動きを注意深く見守りつつ神経を集中させていく俺だったが、俺の組に伏兵が潜んでいる事に俺は気付かないままスタートする事となった。

そして緊張の一瞬”パアン”という銃の音と共に飛び出す俺。

１００メートルラインまでは横一列で走っていたが、ここで飛び出した選手がいた。

後で教えてもらってわかった事だが、この選手こそ陸上部の短距離専門の選手だった。

一瞬動揺した俺だったがすぐに追走を開始する、しかし、相手はすでにトップスピードに乗っていたため、ぎりぎりの所で距離を縮められずそのまま押し切られる結果になった。

結果は2位、まさに俺の油断が招いた2位だった。
相手を舐めきっていた事が俺の油断に繋がった事を今はただ反省する俺だった。

「おしかったね。2位だったけど陸上部の人だし、しょうがないよ。」
「でも慶一くんも負けてなかったわよ。もう少しだったしね。」
「けいちゃん、どんまい」
「本当に残念でしたね。でも次は勝ちましょう。私も頑張りますから。」
「それでも慶ちゃん、かなり速かったわよね？みさちゃん。」
「ああ。慶一も陸上部でもいけるんじゃねえか？って思えたぜ？」
そんなみんなの言葉に俺は申し訳ない顔で

「すまない、折角応援してくれたけど俺自身の油断だ。この結果は・・・だけどリレーできっと取り戻してみせる。」

そんな俺の決意にみんなは俺の肩を叩きながら「がんばってね」と励ましてくれたのだった。

午前中の競技は後二つあやのの障害物競走とつかさの１００メートルハードルだ。

次はあやのの障害物競走の番だったので、あやのは集合場所へと向かった。

「あやの、怪我しないように頑張れ。」

「峰岸さん、色々と期待してるよ？」
「峰岸、期待はしてるわよ？」
「峰岸さん、がんばれ～」
「峰岸さん、一つ一つ確実に、ですよ？」
「あやのー。ファイトだぜー？」

俺達があやのに声をかけるとあやのもにっこり笑いながら「ありがとう、いってくるわね？」といいながらスタートを待つのだった。

障害物の概要はこうだ。

走る選手は2人、平均台を渡り、網をくぐり、跳び箱を超えて、ハードルを超えて最後に小麦粉の中に埋まっている飴を見つけてゴールという感じだ。

そしてあやのの順番が回ってきた。

あやのは緊張の面持ちでスタートラインに立つ。

スターターが銃を上げ一呼吸おいて”パアン”と銃が鳴らされると同時にあやのは飛び出した。

最初の平均台にさしかかりもたつく事無く台に乗ったあやのは上手くバランスを取りながら平均台をクリアした。

そして次の網くぐりに差し掛かる時にあやのに追いついてきた選手と同時に網に飛び込むと二人して網を動かしている為かなりてこずる展開になっていた。

どうにか網をくぐりぬけはしたが、もう一人の選手に引き離され、

あやのはその選手を追走しながら跳び箱に向かうと、軽くこれをクリア。

次のハードルで再びトップに立ったあやのはそのまま飴探しに入る。

少し遅れて選手がきて飴探しを始める頃にはあやのは上手く飴を見つけ出しゴールした。

結果は1位の大健闘だった。

「あやのおつかれ。顔洗って来いよ?」

「峰岸さんお疲れ様、見てて飽きない展開だったよー?」

「ぷぷ、面白い顔ねー。」

「真っ白だね~。」

「競技が競技ですし仕方ないのでしょうけど、とりあえずこれをどうぞ」

みゆきはあやのにタオルを渡した。

「ありがとう、高良ちゃん。みんなもね。」

「ともあれ1位だったんだからよかったじゃんか?飴美味いか?」

「もう、みさちゃんたら。みんな、私顔洗ってくるわね?」

みゆきからタオルを受け取りつつみさおの言葉に苦笑しながらあやのは顔を洗う為お手洗いへと向かったのだった。

そしていよいよ午前中最後の競技、つかさの100メートルハードルの番がまわってきたのだった。

「つかさ、練習を思い出していけよ?」

「つかさー、こっちも色々期待してるよー?」

「失敗しても最後まで諦めちゃだめよ？」
「つかささん。なるべくリラックス、ですよ？ハードルを超えるタイミングを思い出してください。」
「柊妹ー。とにかくベストを尽くせって奴だってヴァ。」
そんな俺達の声援につかさは緊張気味に
「う、うん。とりあえずがんばってみるよ。」
そう言っていたが、まだ硬さが取れていない様子のつかさを見て俺は大丈夫かな？と心の中で思っていた。
つかさはそのままの状態で選手の集まってる場所へと向かった。
つかさｓｉｄｅ
（えーっと、ゆきちゃんから教わったハードルを超えるタイミングは・・・1、2、3でだったよね？よーしがんばるぞー）
わたしはゆきちゃんから教わったタイミングを頭の中で反芻しつつスタートを待つ。
そしてスターターの銃が上がりスタートの合図が鳴った瞬間わたしは頭の中が真っ白になったのだった。
とにかく走らないとと思い、ハードルに向かって走って行ったものの、完全に飛び越すタイミングを忘れてしまっていた。
そして、一つ、また一つとハードルを倒していくたびわたしは冷静さを取り戻せなくなっていた。

慶一ｓｉｄｅ

スタートの時つかさの頭の中が真っ白になったであろうことをここからでも感じ取れていた。

そして案の定ハードルを超えるタイミングを忘れてしまったようでことごとくハードルを倒しながら進んでいくつかさ見ていた俺達だった。

「うーん、ものの見事に全部倒していくね・・・」

「ある意味才能かもね・・・」

こなたとかがみはそんなつかさを見ながらそんなことを言い合っていたが、俺は何とかしてやりたいと思いつかさに

「つかさ、もう一度練習を思い出せ！失敗しても関係ない、開き直るんだ。もう一度よくハードルを見ろ！まだ半分残ってる、けして諦めるな！あの時にも約束した事を思い出せ、つかさー！！」

俺のその言葉にびくりと反応するつかさ。

つかさｓｉｄｅ

もう自分でも訳の分からないことになっている状況でわたしは半ば諦めかけていた。

けど、ふいにけいちゃんの声がわたしに飛びこんできたのでわたしはけいちゃんの言葉をもう一度反芻する。

（練習・・・そうだ、練習をおもいだすんだよ。もっとよくハードルをみるの。がんばるんだよ、わたし）

その瞬間わたしの動きが変わったのを感じていた。

慶一ｓｉｄｅ

俺のとっさの呼びかけに反応を見せたつかさの動きが目に見えて変わったのが見て取れた。

半分を超えたところからつかさはハードルに引っかかる事無く最後までクリアする事ができるようになっていた。

結果は最下位だったものの、最後まで諦めなかったつかさを俺達は笑顔で迎えたのだった。

「つかさ、よくやったな。順位は最下位だけど最後まで諦めずにがんばれた。えらいぞ？」

「あそこから立て直すなんてやるねー。私も見直したよ。」

「つかさごめん、正直あんたの事信じてなかった・・・姉として失格よね・・・」

「つかささん、最後までよくがんばりましたね。順位以上の成果を出せたと思いますよ？」

「妹ちゃん、すごかったよ。みんなとの約束果たせたね。」

「私も見直したってヴァ。根性あるよな？お前はさ。」

口々につかさを褒める俺達につかさは感極まって涙を流しながら

「ありがとう、みんなありがとう。けいちゃん、あの時声かけてくれてありがとうね？けいちゃんのおかげでわたし、練習を思い出す

事できたんだよ?最後まであきらめなかったよ?」

そんなつかさを見ながら俺達は優しく微笑みながらつかさを見ていたのだった。

午前中の競技はこれでほぼ終了となった。

午後の激戦において俺達は最後まで悔いを残さない一日にしようと改めて思うのだった。

競い合う旋律～体育祭午前の部～（後書き）

次は午後の部となります、どんな結末が待っているか、お楽しみに。

競い合う旋律～体育祭午後の部～

午前中の競技を終えた俺達は、ひとまず昼食を取る為にみんなで集まり、朝にこなた達が作っていたお弁当を広げる準備をしていた。

俺は午前中の自分の競技の結果についてまだ納得がいっていなかったため、その事について未だ考え込んでいたのだがそんな俺にみゆきが

「慶一さん。先程の結果に納得がいっていないのはわかります。ですが、それを引きずってしまえば午後の競技にも響いてきてしまうかと思います。ですから一旦ここで気持ちをリセットされるべきです。次は勝つために、ですよ？」

そう言って俺を励ましてくれるみゆきを見て俺は自分の顔を両手で”パン”と張って気合を入れなおして気持ちを切り替えるのだった。

「ありがとな、みゆき。その事に固執してばかりじゃいい結果が残せるわけじゃない。もう大丈夫だ。次に向けて英気を養うとするか。」

そう言ってみゆきに笑いかけながらこなた達の用意してる弁当の所へ行く俺達だった。

「いえ、少しでも慶一さんの為になったのならそれで・・・」

そう言って顔を赤らめるみゆきに俺も頷きで返す。

「慶一君、みゆきさん、こっちだよー。一応みんなの分も考えてそ

れなりの量にしてみたけどどうかな？」

２人でそんなやり取りをしながらこなた達のところに来た時、そう声をかけられたので俺は広げられた弁当を見ながら

「おお、こいつは結構凄いな。本当にご苦労さん、３人とも。」

改めてこなた、つかさ、あやのの３人にねぎらいの言葉をかけると３人とも笑いながら

「いやあ、この位かるいかるい。」
「こなちゃんと一緒にがんばったよ？」
「足りないって事はないと思うわ。」

そう答えてくれたので俺たちは改めてみんなの所に座り弁当を食べ始めた。

「それじゃさっそくいただきます。」

そう言って色々なおかずに手をだしつつ、みんなでわいわいやりながら食事を始めたのだが、その後ろでこなたがニヤニヤとしている事に気付かないでいた俺だった。

こなたはそーっと俺の横に寄ってきておもむろにおかずを箸で掴むと俺に

「はい、慶一君。あーんしてー？」

とやってくるこなたに俺は物凄く慌てながら

「な、なにやってるんだよこなた！そ、そんなこと恥ずかしくてできるわけないだろ！？」

顔を真っ赤にしながらそう言う俺になおもこなたは

「えー？いいじゃーん。こういう時のお約束シチュでしょー？」

そういいつつも俺に食べさせようとする行為をやめようとしないこなたに

「そ、そうかもしれないが・・・って違う！そういう事じゃなくってだな・・・」

そんな2人のやりとりをみながらほかのみんなもなんだかうらやましげに俺たちの方を見ていたのだがいち早くかがみが我に帰り

「こ、こなた！やめなさいよ、慶一くん困ってるじゃない！」

と、助け舟を出してくれたのだが、こなたはそんなかがみをニヤニヤとした顔で見ながら

「んー？かがみんひょっとして羨ましいのー？だったら、かがみんもやってみればー？」

というこなたの言葉にかがみは顔を真っ赤にしながら

「ちょ、ちょっと、こなた！何言ってるのよ、そ、そんな事できるわけないじゃない！だって・・・その・・・慶一くんに迷惑じゃない・・・」

最後はしどろもどろになりながらもそう言い訳をしつつ俺のほうを上目使いで見つめてくるかがみを見て俺も顔を赤くして照れていた。

そんな俺の態度に気付いたこなたはさらにニヤニヤとしながら俺に

「ほほう？慶一君もまんざらじゃないって感じだねえ？ひょっとしてさっきのやつをかがみにやってもらいたいのかなー？」

その言葉にさらに慌てる俺は

「ば、ばか！そういう事じゃないって言ってるだろ！？はあ・・・どうしてこういう事になったんだよ・・・」

半ば疲れ果てつつ最後はそう呟いていたが、その時聞き覚えのある中年男性の声が聞こえると同時に物凄い勢いでこちらに走ってくる足音が聞こえてきた。

「こらー！！きさまー！うちの娘に何をする気だー！！」

声のするほうを振り向くと朝テレビで見たこなたのお父さんが鬼のような形相で突っ込んできた。

「きさま！うちの娘をたぶらかすとはゆるせん！」

俺の襟首をつかみブンブンと揺するこなたのお父さんに俺は

「ちょ、ちょっと待ってください！たぶらかすとかそんな事してませんよ、だから落ち着いて下さい！こなたのお父さん！」

とにかく落ち着かせようと俺はこなたのお父さんにそう言ったのだ

が、俺が言ったこなたの名前にさらにヒートアップしながら

「きさま！こなたの名前まで呼び捨てか！？それに貴様ごときに”お父さん”と呼ばれる筋合いはないわー！！」

そんな様子を見ながらこなたは一つため息をつくと俺を締め上げる父親に向かって

「おとーさん、慶一君を離してよ。別に私が何をしてもおとーさんには関係ない事でしょ？」

というこなたの言葉にこなたのお父さんは

「な、何を言うんだこなた。俺がお前の心配をして何が悪い？お前には変な虫をつけるわけにはいかんのだ！何故それをわかってくれない？」

こなたに情けない顔を向けながらそう力説するこなたのお父さんに

「おとーさん・・・うざい」

というこなたの衝撃の一言でこなたのお父さんはその場で石化してしまった。

騒ぎを聞きつけた係員さんがやってきてショックで動かなくなってるこなたのお父さんを引き連れて去っていった。

「いいのか？こなた。お父さんにあんな事言ってさ」

俺はおそるおそるこなたに聞くと

「いいんだよ、あれくらいいい薬だよ。それによく知りもしないで慶一君を悪い虫呼ばわりしたんだから。」

そんな風に言ってくれるこなたに俺はなんだか少し嬉しくなって

「ありがとな、こなた。俺なんかの為に怒ってくれて」

照れながらこなたにそうお礼を言うとこなたも顔を赤らめながら

「あはは。お礼を言われちゃうと照れるねー。でも、慶一君。俺なんか、なんていわないでよ。慶一君は”なんか”なんじゃないんだからさ。」

こなたの言葉に事の成り行きを見守っていたみんなも

「そうよ。慶一くんは悪い虫なんかじゃないわ。」

「けいちゃんは凄く優しい人だから。」

「とても思いやりのある素晴らしい人です。ですからそんなに自分を卑下しないでください。」

「慶ちゃんの事知ってる私達が言うんだから自信持ってよ。」

「そうだぜー？お前のいい所たくさん知ってるんだからさ。」

「私達にとっては大切な人ですしね。」

「失いたくない、そんな価値のある人だわ。」

いつのまにか騒ぎを聞きつけてやってきていたこうとやまとも俺にそんな言葉をかけてくれたのだった。

俺はみんなの言葉が嬉しくて再び涙腺が緩みそうになる目をこすりながら

「はは、みんなありがとう。」

そうお礼を言うとみんなも笑顔で頷いてくれた。

そんな波乱の昼休みを終えて、いよいよ午後の競技に移っていく。

まずはみさおの玉入れからのスタートとなった。

みさおは白のチームになった。

「みさおー！落ち着いていけよー？」
「よーくカゴを狙うのよー？」
「みさちゃん！しっかりー！」

E組の方からも

「みさきちー、面白い事期待してるよー！」
「日下部さんがんばって～！」
「一つ一つ確実に決めてくださいね！」

という声援が上がっていたが、もはやこの頃になると先生もツッコミを入れる気もなくなったようだ。

みさおは苦笑しながらもとりあえず位置につく。

そして合図と共に玉入れが始まった。

一斉に両チームがカゴに玉をほおりこんで行く。

みさおも投げまくっていたのだが、どうもコントロールに難があるようでなかなかカゴに決まる玉がなかった。

それでもチームメイトがその分を補いつつ玉をほおりこみ、”止め”の合図がでて競技が終わった。

結果は白が後一歩及ばずで敗退だった。

「みさお、お疲れ。惜しかったな。」

俺はみさおにねぎらいの言葉をかけるとみさおは苦笑しながら

「がんばったけど、やっぱ厳しかったぜ。でも手抜きはしなかったから悔いはねーぜ?」

そう言って笑っているみさおを俺たちも笑いながら見ていた。

そして次の競技はかがみとあやのの走り幅跳びだ。

「かがみ、あやの。練習を思い出してしっかりな。」

「柊、あやのー。がんばれよー?」

「かがみ、峰岸さん頑張ってね。」

「おねえちゃん、峰岸さん。がんばれ~。」

「練習のイメージを思い出してがんばってください。」

というみんなの応援に2人は

「まあ、やるだけやってみるわよ。悔いは残さないように全力でね。」

「私もがんばるわ。みんな見ててね?」

そんな2人の言葉に俺たちは大きく頷いて見せた。

2人が選手の集まってる場所へと走っていくと、さっそく飛ぶ順番が決められたようだった。

最初はあやのが行くようだ。

スターターの合図とともに助走をしていくあやの。

「えいっ！」

という気合と共にいいリズムで踏み切りを飛び越える。

しかし、空中で少しバランスを崩した為に着地点で尻餅をつく形になってしまった。

手をついた場所が計られるので少し後ろ目の計測になった。

結果はあやのとしては自己ベストになったようであやのは満足気な顔をしていた。

そして次はかがみの番になった。

スタート地点で意識を集中するかがみ。

かがみｓｉｄｅ

（練習を思い出すのよ、かがみ。利き足を乗せる、後はタイミングよ。さあ、イメージするのよ？）

そう頭の中で考えながら私は練習の時のイメージを頭に思い浮かべる、そしてスターターの手が上がる。

慶一ｓｉｄｅ

スタートラインに立つかがみはかなり集中しているように見えた。

これは期待できそうだなと思い、俺はかがみを見守る。

みんなも固唾を飲んでかがみのスタートを見守るのだった。

そして、スターターの手が上がり、いよいよかがみがスタートラインから動き出す。

かがみｓｉｄｅ

ゆっくりと助走を開始する私。

徐々にスピードを上げて行き、ジャンプの瞬間に気合を込めた。

「おおりゃあああああ、だあっ！」

気合一閃で飛び出す私。

ジャンプのタイミングも感触も最高のものだった、ものだったのだが・・・

（きたー！！って・・・あああああ！）

ジャンプの勢いがつきすぎて私は空中でバランスを崩し、顔面から砂場に突っ込んだのだった。

慶一ｓｉｄｅ

かがみがジャンプした瞬間、いいタイミングでの踏み切りが行った！と思ったのだが、勢いがよすぎてかがみの体制が崩れるのが見て取れた。

そしてバランスを崩したかがみは顔面から砂場に突っ込んだのを見て俺たちは顔を手で覆いながら落胆のため息をついていた。

しかしこなたはその状況を見て

「流石かがみ、砂にまでツッコムか・・・」

と呟いていたのを聞いたが、俺はあえて聞かなかった事にした。

幅跳びの競技も終わり、かがみとあやのが俺たちのほうに戻ってくる。

あやのはかがみを元気付けていたようだが、かがみは凄く納得のいかない顔をしながら帰ってきた。

「おつかれ、かがみ、あやの。かがみ、助走と踏み切りのタイミングは悪くなかったぞ？けど、勢いつきすぎちゃったな。」

２人にそう声をかけると２人は

「私もバランスくずしちゃったから思うような結果になってなかっ

たわね。」
「うう・・・納得いかないよ・・・もう一回やりなおしたい・・・」
という2人にみさお以下3人は
「あやの、おしかったなー。柊、どんまい」
「峰岸さんお疲れー。かがみ、楽しませてもらったよ?」
「おしかったね、おねえちゃん。峰岸さんもおつかれさま。」
「お2人ともお疲れ様です。」
それぞれにねぎらいとからかいの言葉をかけると2人は複雑な表情で苦笑していたのだった。
ふとかがみの顔を見るとさっきの砂がまだついていたようだったので俺はタオルを取り出すと
「かがみ、まだ顔に砂ついてるぞ?ちょっとだけ動くなよ?」
そう言いながら俺はかがみの顔についた砂をタオルで拭い取っていく。
かがみはそんな俺の行動に顔を赤くしながらも俺に身をゆだねて拭き終わるのを待つのだった。
「よし、これでいいな。取れたぞ?かがみ。」
俺が拭き終わった事を告げるとかがみはまだ赤い顔のままで
「あ、ありがと、慶一くん。それとごめんね?折角一緒に練習してくれたのに・・・」

さっきの失敗を気にしているようだったので俺は

「確かに失敗しちゃったけどそれでも手は抜かなかったんだろ？ならそれでいいじゃないか。結果はどうあれそこだけは胸を張っていいさ。」

そう言葉をかけるとかがみは少し気が楽になったようで

「うん。ありがとうね？慶一くん。」

少し落ち込んだ顔から笑顔になって俺にそう言ってきたのだった。

俺もその言葉に笑顔で頷いて応えた。

競技もいよいよ大詰め、残すは俺とみゆきのリレーだけだ。

まず最初はみゆきが先に走る事になった。

「みゆき、バトンタッチの練習を思い出せよ？お前ならできるさ。」

「みゆきさん。いいレース期待してるよ？」

「みゆき、私の分までがんばってね？」

「ゆきちゃんファイト～。」

「高良ちゃん、最後だからしっかりね？」

「高良ー、どんな結果になっても全力でなー。」

という俺たちの激励にみゆきも笑顔で頷きながら

「みなさん、ありがとうございます。それじゃいってきますね？」

みゆきは俺たちに軽く手を振って選手達の集まる場所へと向かう。
そして、第一走者がスタートラインへと立つとグラウンドは軽い緊張感に包まれた。
スターターの銃が上へとあがり、一瞬後”パアン”という合図と共にリレーがスタートした。
みゆきのクラスは2位につけている。
そのままの状況を維持して第2走者へとバトンが渡る。
第2走者もなんとか2位をキープしながら第3走者へ。
この時点で1位との差は微妙だったのだが、次の第４走者で3位へと転落する。
俺たちはその状況を固唾を飲んで見守っていた。
「あ、3位になっちゃったよ?」
「これは厳しいかもね。」
「うーん・・・これでこそレースだ!」
「高良ちゃん厳しくなったわね・・・」
「それでも最後まで諦めねーさ。私らだって約束したんだからな。」
口々にみんなが話す中、いよいよみゆきがアンカーとして出て来た。
みゆきｓｉｄｅ
途中まではなんとか2位で健闘していたうちのクラスも第４走者の

ところで3位へと落ちてしまう。

それをスタートラインに立ちながら見ていた私でしたがそれでも最後まで諦めないと心に誓いながら

（私は私の全力を尽くしましょう。それがみなさんとの・・・約束ですから・・・）

そう考えつつ私はコースへと出て待機するのでした。

慶一ｓｉｄｅ

「ゆきちゃん、大丈夫かな・・・」

つかさがそう呟くと俺はつかさの頭をぽんと軽く叩いて

「大丈夫さ、あいつだって最後まで諦めない。だから見ててやろうぜ？」

そうつかさに言い聞かせるとつかさも俺を見上げてコクリと頷くのだった。

そして1位、2位にバトンが渡り、一歩遅れてみゆきにバトンが渡るみゆきの力走が始まり、みゆきは一気に2位を抜き去った。

そのままの勢いで1位を追走するみゆき。

「いけー！みゆき！諦めるな！勝てるぞー！？」

「みゆきさん、がんばれー！！」

「みゆきー！そのままいっちゃえー！」
「ゆきちゃん！がんばれ～！！」
「高良ちゃん！いけるわよ！？」
「負けんなー！高良ー！！」

1年生席からも

「高良先輩！いけますよ！がんばれー！！」
「けして諦めないで！高良先輩！！」

観客席からは

「高良先輩ー！！がんばれー！」
「みゆきさん！負けないで！」
「高良先輩！ファイトっす！！」

ゆたかたちの声援が飛んだ。

みゆきｓｉｄｅ

必死に1位を追走する私に向かってみなさんからの声援が聞こえました。

（みなさん・・・負けない！けして最後まで諦めない！ここで全力を尽くします！）

そしてさらに加速をする私でした。

慶一ｓｉｄｅ

俺たちの声援が届いたのかみゆきはさらにスパートをかけてきた。
そしてほぼ1位と横並びになりその勢いのままにゴールテープをカットしたのだが、その差はほとんど微妙だった。
上がる大歓声とともに結果を待つ俺たち。
そして結果は・・・・・みゆきが1位でのゴールとなった。
みゆきがニコニコと笑いながら俺たちのほうへ戻ってきた。
「みゆき、お疲れ様。いいレースだったぞ?」
「流石みゆきさん、観客サービスも忘れないねー。」
「みゆき、あんたの根性見せてもらったわよ?」
「ゆきちゃんすご〜い。」
「高良ちゃん、流石ね。」
「高良、お前もなかなかやるじゃんか。」
そう言いながらみゆきを祝福する俺たちに笑顔で
「みなさんありがとうございます。みなさんでした約束をどうやら果たせたみたいですね。それと泉さん、観客サービスって何の事だったのでしょうか?」
そう返事をしつつこなたのいった言葉には頭にハテナマークを浮かべていたみゆきだった。
こなたは適当に笑ってはぐらかしているようだったが。
そして最後に俺の番が回ってきた。

「いよいよ最後だね。慶一君、見せてもらうよ？」
「さっきの雪辱は果たさないとね。がんばってね？慶一くん。」
「けいちゃん。約束、わすれないでね？」
「慶一さん。今度は勝ちましょう。応援していますね。」
「慶ちゃん。最後までしっかりね？」
「今度は間違っても油断すんなよな？慶一。」

俺はみんなの声援に強く頷きながら

「ああ、今度は負けないさ。みんな、見ててくれよ？」

みんなにそう伝えると俺は選手の集まる場所へと歩いて行くのだった。

「慶一先輩、がんばって。」
「先輩、今度は負けないでよ？」

観客席の方からも

「先輩ー！応援してますからがんばってくださいー！」
「先輩！ファイトです。」
「森村先輩！ドラマを期待してるっスよ？」

その観客席の声援に右手を上げて応える俺。

そして緊張の中第一走者がスタートラインに立つ。

一瞬静寂に包まれるグラウンド、そして緊張が支配する中スターターの銃が上がり一瞬後”パアン”という音と共に飛び出すランナー

達。

出だしは2位と好調だったが、ここからが波乱の幕開けとなった。

第2走者にバトンが渡る頃には3位へと転落し、第3走者へのバトンタッチの乱れで4位へと落ち込む。

こなたｓｉｄｅ

緊張の中慶一君の最後のレースが始まったんだけど最初は好調の滑り出しで2位をキープしていたのに第2走者、第3走者にバトンが渡るごとに順位を落としていた。

「むう・・・これは中々厳しい展開だね・・・」

私は腕組みしながら状況を見守っているとみんなも不安そうに

「ここに来て4位か・・・確かに厳しいわね・・・」

「けいちゃん、勝てるかな？」

「今のままでは、少々厳しいのではないでしょうか・・・」

「途中の連携でもたつきがでてたものね・・・後に響かなきゃいいのだけど・・・」

「むー・・・このままじゃ1位は厳しいかもなー・・・」

そう言いあいながら状況を見守っていたが第4走者に渡る頃には最下位まで落ちてしまっていた。

「ああ、ついに最下位・・・こりゃ厳しいってもんじゃないね・・・」

半ば絶望感を伴い私は思わずそう呟いてしまっていた。

みんなもこの状況に希望を見出せなくなっているのが見て取れた。

そして、そんな最中最後のランナーである慶一君がスタートラインへと立つ。

状況は絶望的だけど、それでも私はみんなに

「みんな、状況は最悪かもしれないけど最後まで私達も慶一君を応援しようよ。」

私がみんなにそう持ちかけるとみんなもハッとした顔になって大きく頷いて

「そうね、慶一くんは絶対諦めない。だから私達も最後まで応援しましょ？いけー！慶一くん！」

「うん。約束だもんね。がんばれ～！けいちゃん！」

「私達はそれを忘れる所でした。慶一さんの友人としてまだまだですね・・・がんばってください！慶一さん！」

「本人が諦めていないんだもの、私達が諦めたらだめよね。慶ちゃん、最後までしっかりー！」

「ちびっ子に改めて教えられたな。よーし！全力でいけ、慶一ー！」

「慶一君、負けるなー！」

みんなでもう一度声援を送る私達だった。

1年生ｓｉｄｅ

第４走者で最下位まで落ちた慶一先輩のクラスのチームを見て私達

も半ば諦めかけてレースの様子を伺っていたのだが、不意に2年生の慶一先輩のクラスから再び先輩を応援する泉先輩達の声が聞こえた時、私は慶一先輩の方を見てみると先輩はまだ表情に諦めた様子が見受けられなかった。

それを見たとき私はああ、先輩はまだ諦めていない、それなのに私は勝手に諦めてしまった。

泉先輩達もそれに気付いたから改めて声援を送ったのだと私は気付いた。

私はやまとに

「やまと。慶一先輩も泉先輩達もまだあきらめていないよ?私達も最後まで諦めずに先輩に声援を送ろうよ?」

その私の言葉にやまとはハッと顔を上げて

「そうね・・・まだみんな諦めていない、それなのに私達が早々に諦めたら先輩にも悪いわよね。分かったわこう。」

そして私達は2人で

「慶一先輩、がんばってください!まだレースは終わってません!」

「まだまだ希望はあるはずよ!?決して諦めないで!」

そう言って先輩に声援を送るのだった。

観客席ｓｉｄｅ

先輩のクラスのチームがどんどん順位を落としていくのを私達ははらはらしながら見守っていました。

私達もそんな状況を見ながら複雑な気持ちでいたのだけど・・・

「先輩のチーム、最下位におちちゃったね・・・」

「・・・この状況は厳しいね・・・トップは無理でもせめて上位にはいれたなら・・・」

「劇的な逆転狙うにも厳しいよね・・・」

そう私達が相談していると、こなたおねえちゃんたちの声や八坂先輩達の声が聞こえてきた。

「!?あれは、先輩達の声？」

「・・・みんな・・・あきらめてない・・・私達も・・・最後まで応援するべきじゃないかな・・・？」

「そうだね。それに先輩もまだ諦めていないようだよ？」

という田村さんの言葉に私は先輩の方を見てみたら確かに先輩の顔には諦めの色が見えなかった。

「私達も、応援しよう。先輩が諦めていないなら私達も・・・がんばれー！先輩！！」

「・・・そうだね。・・・応援しよう・・・先輩！がんばってください！」

「私も諦めないよ？先輩ー！ファイトっス！」

私達は先輩にあらん限りの声援を送るのだった。

慶一ｓｉｄｅ

静かにスタートラインに立ち、最後の瞬間に全力を尽くそうと心を静めているとみんなからの声援が聞こえてきた。

俺は声のかかるほうを順番にみながらその一つ一つに頷いて見せたのだった。

1位、2位、3位、4位と次々にランナーがバトンを受け取り通り過ぎていく中、俺は静かに最後の力を爆発させる体制をとっていた。

そして第4走者からバトンを受け取った瞬間、それを一気に爆発させた。

バトンを受け取りその一瞬で4位を抜き去り3位を追走する俺。

抜かれた4位は一瞬何が起きたのか分からないという風だった。

そのまま物凄い勢いで3位を追走し、最初のコーナーで3位を抜き去った。

さらにそのまま2位を追走する俺、その頃にはこの快進撃に大きな声援が送られ始めていたのだった。

コース中盤で2位を捉える俺はそのまま2位を抜き去るともはや誰も自分を追走する物がないと舐めきり軽く流す程度の速度で走っていた1位を猛追した。

こなたｓｉｄｅ

まさかの展開に私達は目を見張りながらこの状況を見ていた。

1位すら絶望的なこの状況から気付けば1位を脅かす所まで慶一君が来ていたのだから当然といえば当然の事だった。

私達は我を忘れて慶一君に声援を送る

「いけー！慶一君、そのまま1位もぬきさっちゃえー！！」
「慶一くん、そのままいっちゃえー！勝てるわよ！！」
「けいちゃんがんばれ～！」
「慶一さん！もう少しです！諦めないで！」
「慶ちゃん！勝って！」
「慶一、いけ！1位をもぎ取れー！！」

そう私達は声援を送っていたが、さらに1年生サイドや観客サイドからも声援が上がる。

1年生ｓｉｄｅ

私達は今奇跡を見ているようだった。

もはや逆転すら不可能な状況だった先輩がいまや1位を脅かすほどにまで迫っていた。

その状況に興奮した私達も先輩に声援を送っていたのだった。

「先輩！いけますよ！そのままぬいちゃえ！！」
「勝てるわ！先輩！最後までがんばって！！」

そして他の生徒達もこの状況に熱狂していた。

観客ｓｉｄｅ

私達は今目の前で起きていることが現実なのかよく分からずにいた。

でも、慶一先輩は1位の人を捕らえようとしている、その状況を見たとき私達は先輩に声援を送っていた。

「先輩、いけます！がんばって！！」

「諦めないで！先輩！」

「勝てるっスよ！？いけるっスよ！？先輩ー！！」

そしてその他に先輩に声援を送っている声も聞こえていた。

「森村君！いっちゃえー！」

「森村君！今度こそ超がんばれー！！」

「いけるわよ！？森村君！」

「力を出し切りなさい！君ならできる！」

そしてレースは最高潮に盛り上がる。

慶一ｓｉｄｅ

全てを出し切る走りでついに1位を捉えた俺だったが気付くとそんな俺の走りに大声援が送られていた。

（みんなの声が聞こえる・・・これはやらなきゃ男じゃない！！）

そして俺は余力全てをこのスパートにかけてさらに加速をつけた。

急に沸き起こった大声援に1位のランナーも異変に気付き後ろを見

やると物凄い勢いで猛追してくる俺に気付いて慌ててスパートをかけた。

しかし、その時にはすでに遅く、トップスピードに乗っていた俺はゴールぎりぎりで1位を抜き去りゴールテープを切った。

湧き上がる大歓声を受けて俺は力を使い果たし、その場で大の字に寝転んだのだった。

みんなが俺の側へ駆け寄ってくる。

「おめでとう、慶一君。まさかあそこから1位もぎ取るなんて思わなかった。凄かったよ?」

「凄い走りだったわ。私感動しちゃった。」

「がんばったね。諦めなかったね?けいちゃん。約束守ったよね。凄かったよ~?」

「私も感動しました。慶一さんの底力を見たような気がします。おめでとうございます。」

「慶ちゃん、お疲れ様。まさに奇跡って感じだったわよ?私も感動しちゃったわ。」

「私も予想外だったってヴァ。慶一お前本格的に陸上やってみねーか?」

「慶一先輩、凄かったですよ?私も感動物でした。」

「先輩の力を見せてもらったわ。そして決して諦めない姿勢も。私もみならわなきゃね。」

俺は疲れた体ではあったけどなんとか起き上がるとみんなに、にっこり笑いながら

「ありがとな。みんなの声援も俺に力をくれた。それに約束したし

な、絶対に最後まで諦めない、ってさ。」

そして観客席を見ながら立ち上がると俺に声援をくれたゆたかたちの方に向かって右手を上げて応えると途端に再び沸き起こる大声援に俺は清々しい表情で手を振っていたのだった。

最終的な結果はこなたたちの2年E組の優勝となった。

そして閉会式を終えて今年の体育祭は幕を閉じる事となった。

全てが終わってみんなで打ち上げをするために俺の家へと向かう俺たち。

その帰り際にお菓子やジュースを買い込んで家に帰ると俺たちはその晩遅くまで今日の体育祭の事で盛り上がっていたのだった。

競い合う旋律達の戦いは一時終わりを告げる。

けれどここで俺たちが得た物はそれぞれに意味のある大きな物だったと思っている。

それはこれからの俺たちにも力を与えてくれる物になるだろうと確信していた。

そして俺たちは次の行事に向けてまた新たな戦いの日々へと突入していくのだった。

競い合う旋律～体育祭午後の部～（後書き）

体育祭はこれで終わりです。
次は文化祭までの間の話になると思います。

旋律の休日1～泉家初訪問～

波乱と激闘の体育祭が終わり、俺たちは日をまたいでの大打ち上げ会を行った。

体育祭の次の日に日曜日を設定してあるので俺たちはその疲れを癒す為に貰った休日だった。

午前中のきりのいい時間、こなた以外のみんなが家へと帰ったのだが、こなただけは打ち上げで散らかった部屋を片付けるのを手伝うと言って最後まで残ったのだった。

一通り片付けを済ませてこなたも帰ると言ったので俺はこなたを送って駅まで一緒にいくのだった。

「何か悪いな。最後まで残って片付け手伝ってもらっちゃってさ。」

自転車の後ろにこなたを乗せて走りながら俺はこなたに打ち上げの片付けの事に対する礼を言うと

「いいんだよ。私がやるって言ったんだし、それにいつも慶一君の家使わせてもらっちゃってるしね。たまには役にたたないとねー。」

笑いながら俺にそう言うこなた。

俺はなんともありがたい気持ちになりつつ

「こなたは今日はこれからどうするんだ?どこかへ出かけるのか?」

一応こなたにこの後の行動について訪ねると

「うーん、これから家に帰って少し家の事やろうと思ってるよ。この所泊りがけが続いてたしおとーさんに家の事まかせっきりだったからさ。」

俺はそのこなたの答えにこなたの所は母親がおらず、父親と2人で今までやってきたのだという事を思い出していた。

その事に考えが巡った時、俺はこなたに一つの提案を持ちかけていた。

「なあ、こなた。家事とかやるっていってたよな?それ、俺も手伝ったらだめか?考えてみりゃ俺はいつもお前にそういう面で世話になりっぱなしだ。たまにはお前に何かしてやりたい、って思うからな。」

駅に着き自転車を降りたこなたに俺はそう声をかけるとこなたはそんな俺の言葉に少し嬉しそうな顔を見せたが、そのすぐ後その場で考え込み始めた。

少しの間考え事をしていたこなただったが、ふと顔を上げると

「その慶一君の申し出はありがたいんだけどさ。昨日のおとーさんの剣幕見たでしょ?それに、昨日の今日だから家にきたら慶一君絶対ただじゃすまないと思うよ?それでもいいの?」

俺に確認するように聞いてくるこなたに俺は軽く笑いかけながら

「どの道何らかの用事でいつかはこなたの家にもお邪魔する事にな

るかもしれない、と思ってたんだ。それが今日であるか後日であるかの違いしかないのなら今行ったって状況は変わんないと思うぞ？」

そうこなたに言うと、こなたはまた少し考えるそぶりをしたが再び俺を見ると

「なら、慶一君の気持ちに甘えちゃおうかな？とりあえずはおとーさんの事は覚悟しといてねー？」

いたずらっぽく笑いながら言うこなたに俺も頷き、２人で電車に乗り込みこなたの家へと向かったのだった。

こなたの最寄駅に着き、改めて駅の名前を確認すると、その駅もまた俺の住む町の隣町だという事がわかった。

「幸手駅ね・・・俺の住んでる場所ってこなたやかがみのところの中心にあるのかもしれないな・・・」

何気にそう呟いていた俺だが、その呟きに気付いたこなたも

「どうやらそうみたいだね。みゆきさん所とかとは離れちゃってるけどさ。なんとなく不思議な感じだよねー？」

そう返してくれるこなたに俺も頷きで返してこなたの道案内の元、俺は泉家へとこなたと共に向かった。

こなたの家は駅からはさほど離れていない場所にあり、程なくして俺たちは泉家の前に辿り着く。

家の前で一旦立ち止まりこなたは俺の方を見上げながら

「さあ、着いたよ?ここが私の家。慶一君、覚悟はいいかな?」

不敵な笑みを浮かべながら俺にそう言ってくるこなたに俺は

「ああ。どんとこい、だ。でも・・・2人で暮らすには少し広い家かもしれないな。」

こなたの家に対する俺の感じたままの感想を言うとこなたは軽く微笑みながら

「やっぱりそう思うよね?でもまあ、おとーさんと2人で10数年も一緒に暮らしてるからね。もう慣れっこになってるよ。」

そう言いつつも最後の方は少しだけ寂しそうな表情が見て取れた。

俺はそんなこなたの頭を軽くぽんと叩くと

「お前が望み、お前のお父さんが認めてくれるのならいつだって遊びに来てやるよ。」

軽く微笑みながら俺もこなたにそう返すとこなたはそんな俺を見て顔を赤くしていたがすぐに我に帰ると

「そ、そうだね。そうなると嬉しいけど・・・でも、おとーさんに認めてもらうのは大変だよー?難攻不落といってもいいくらいだからね。そもそも男友達を作る事すら許さないとか言ってるおとーさんだしね。慶一君はそんなおとーさんを攻略できるかなー?」

そう言いながらニヤニヤとした視線を俺に向けてくるこなたに俺も

軽いため息を一つつきながら

「まさに攻略難易度高めだな・・・ま、とりあえずは当たって砕けろ、かな？」

苦笑しながらそう言う俺をこなたは笑って見ていたのだった。

そしていざ心を決めて俺はこなたの後について泉家へと入っていく。

「ただいまー。今帰ってきたよー？」

玄関に入り、こなたがそう声をかけると同時に奥の方から物凄い勢いでやってくる人が見えた。

「こなたー！おかえりー！お父さん、寂しかったぞー！？って、お前はあの時のこなたをたぶらかす悪い虫だなー！？」

こなたを激しく抱きしめながら俺の存在に気付いたこなたのお父さんが俺を睨みつけながらそう怒鳴りつけてきたが、俺はとりあえずきちんと挨拶はしておこうと思い

「あの時はどうもです・・・改めまして、こなたさんのクラスメートの森村慶一といいます。一度ちゃんとご挨拶をしたいと思いまして、今回こなたさんと共にこちらへとお伺いさせていただきました次第です。」

こなたのお父さんに挨拶をするとこなたは抱きついたこなたのお父さんを引き剥がし、そんなこなたの態度に少し寂しげな顔をしてから俺の方に向き直り俺を鋭い目で睨みながら

「森村君、といったね？一応の礼儀はできているようだ。そこの所は認めよう。それで？今日は一体家に何の用があってきたんだ！」

俺はそんな風に言うこなたのお父さんの目を見据えながら

「俺はいつもこなたさんには色々な事でお世話になってきました。けど俺自身はこなたさんに対してお世話になった事に対する恩返しをしていないと思ったんです。それで今回、こなたさんが家の事をするということでしたので、俺はお世話になってきた恩を少しでも返す意味でも今日はこなたさんのお手伝いをしたいと思いましてこちらへとお邪魔させていただいたんです。」

そんな俺にこなたもフォローするように

「まあ、そういう事なんだよ。おとーさん。私は悪いからいいっていったんだけどさ。慶一君がどうしても、っていうから、じゃあお願いしようかな？って事になった訳なのだよ。」

こなたの説明を聞きつつも、未だ不信感を拭えないといったような目つきで俺を見るこなたのお父さんはしばしの沈黙の後

「・・・・・いいだろう。その心がけは認めてやろう。だが、少しでも娘に妙な真似をしたらお前を叩き出すからそのつもりでな。」

渋々、本当に渋々と俺がこなたを手伝う事への許可を出してくれたのだった。

俺はこなたのお父さんに許可をもらった事へのお礼を言って家へとお邪魔させてもらった。

「ありがとうございます。それじゃお邪魔させていただきますね？」

そう言って家に上がらせてもらった俺はこなたに何をすればいいのかを聞いてみることにした。

「こなた。とりあえず俺は何をすればいい？」

こなたにそう訪ねるとこなたは少し考える仕草をしてから

「とりあえず私も着替えたりしてくるから居間で待っててくれるかな？詳しい事はそれからって事で。」

こなたの言葉に俺も頷いて

「わかった。それじゃ居間で待ってるからな。準備は急がなくていいぞ？」

そう返すとこなたも「わかったよー。」と返事をして2階へと上がっていった。

俺はとりあえずこなたに言われたとおり居間へと移動して適当に腰掛けてくつろぎつつこなたを待つ事にした。

そうこうしてるうちにこなたのお父さんもなにやらノートパソコンを持って俺のいる居間へとやってくると手元の資料のような物を見ながら俺に監視の視線を送りつつなにやら作業を始めた。

テーブルに広げられている資料を何気に横目で見ながら、何をしているのだろう？と心の中で思いつつふと1枚の資料に書かれている名前を見て驚いた。

そこには”泉宗二朗”の名前があったからだ。

俺はその名前を見たときほとんど反射的にその事をこなたのお父さんに質問していた。

「あ、あの、こなたのお父さん。その資料に書かれている名前ですが、泉宗二朗ってまさかこなたのお父さんの事なんですか？」

俺の質問に訝しげな視線を送りながら

「そうだけど、それがどうかしたのかい？」

不機嫌そうにそう答えるこなたのお父さんに俺は

「それが本当ならこなたのお父さんは小説家って事ですよね？泉宗二朗先生、なんですか？」

そう俺が質問をするとこなたのお父さんは少し驚いたような表情になって

「君は、俺の事を知っているのかい？」

その答えに俺は喜びと興奮が一気にやってきたような感じになり

「はい！何しろ俺が尊敬している小説家さんのお名前ですから！まさか、こんな場所で会えるなんて思いもしませんでした！」

そんな俺の言葉にこなたのお父さんは急に機嫌がよくなって

「そうかそうかー。君みたいな若者にも読んでもらえているとは光栄だね。ところで俺の作品のどれが好きかな？」

そう聞いてくるこなたのお父さんに俺は

「・・・・・等ですね。「運命の星の中で」は自分の中でもかなりお気に入りですよ。」

俺は自分の知っているこなたのお父さんの書いた作品を列挙して、最後に俺のお気に入りを言うとこなたのお父さんは喜々とした表情で

「おお、なかなか見る目があるね、君。この作品はねー・・・・・・」

そう言いながら俺に作品の説明をしてくれるこなたのお父さんと俺は楽しく談笑しながらこなたを待つのだった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君に居間で待っていて欲しいと告げて私は自分の部屋に荷物等を置いて着替えをすませてしまおうと思い部屋へと向かって２階へ上がった。

部屋に戻り自分の部屋の状態を見ながら

「・・・うーん・・・ちょっと散らかってるかなー？ここも掃除手伝ってもらっちゃおうかな？」

そう呟きながら私は慶一君に手を借りたい場所を考えながら着替えを始める。

そして着替えをしながら先程のおとーさんと慶一君とのやり取りを思い出しながら

「慶一君一人下に残してきたけど、下には確かおとーさんいたよね・・・大丈夫かなあ?慶一君、ひどい事言われてなければいいけど・・・」

そう考えているうちに着替えも済んだので私は部屋を出て1階におそるおそる戻ろうとしたのだが、私の予想に反して下からおとーさんと慶一君の楽しそうに笑う声が聞こえてきたので私は不思議に思いながらもとりあえず居間まで向かうのだった。

そして居間へと戻るとそこには私が思っていた事とは逆の展開が起こっていたのだった。

「慶一君、おまたせー・・・ってあれ?おとーさんも楽しそうに話してるけどなんかあった?」

そう私が声をかけと2人とも笑顔のまま私の方に向き直った。

慶一ｓｉｄｅ

そうじろうさんと＜話しているうちに本名がわかった＞談笑していると準備を済ませたこなたが2階から戻って来て俺たちに声をかけてきた。

まずそうじろうさんがそれに反応して

「おお、こなたか。いやー、こちらの慶一君、中々話せる子じゃな

いか。最初は気に入らなければすぐにでもたたき出してやろうと思っていたけど、彼はお父さんの小説のファンなんだそうだ。それでお父さんの作品の事でいろいろ話をしてて盛り上がってててな。」

というそうじろうさんの答えにこなたは目を丸くして驚いていた。

「こなたも早く俺に教えてくれればよかったのに。俺、そうじろうさんのファンなんだぞ?こんな所で会えると分かってたらサイン色紙でも持って来たのになあ・・・」

さらに俺の答えにも呆然としながら俺を見ているこなた。

「こなた。折角彼が手伝いをしてくれるって申し出てくれてるんだ。彼の好意に甘えさせてもらいなさい。俺は部屋に戻って執筆を続けてるよ。それじゃ森村君。こなたの助けになってやってくれ。」

そう言ってくるそうじろうさんに俺も大きく頷いて

「分かりました。自分の出来る事ならばがんばらせていただきますのでこちらはご心配なく。新作を期待していますからがんばってくださいね?宗二朗先生。」

そう返事を返すとそうじろうさんは照れ笑いをしながら

「いやあ、先生なんて呼ばれたらむずがゆいねえ。ともかく俺の作品を期待してくれる読者の為にもがんばるかー」

そう言いながら自分の部屋に戻っていくそうじろうさんを見送るとまだ呆然としているこなたに声をかける。

「おーい、こなたー？大丈夫かー？戻ってこーい。」

軽くこなたの方を揺すってやるとハッと我に帰ったこなたが俺に

「ね、ねえ、慶一君、一体どうなってるの？なんでおとーさんあんなに上機嫌に・・・それに慶一君、おとーさんの作品を知ってるの？」

そのこなたの質問に頷きながら

「ああ、知ってるさ。なにせファンだからな。それにそうじろうさん、俺がファンだと知ったとたんに上機嫌になったんだよな、それからは意気投合しちゃったというわけなんだが。それとこなたは自分のお父さんの作品を知らないのか？」

俺の答えに前半部分は納得したようだったが後半部分は

「そういう事だったんだ・・・えっと、私活字系苦手なものだからお父さんの小説って読んだ事ないんだよねえ・・・ラノベですら読まないしさ」

そう説明していた。

俺はこなたの説明を聞きながら苦笑していたが

「こなた、今すぐでなくてもいいから一度くらいはお父さんの作品を読んでやれよな。お父さんもきっといつかは目を通してほしいって思っているはずだからな。」

そんな俺の言葉にこなも頷きながら

「そうだね・・・いつかはそうしてみるつもりだよ。ともあれ、なんとかおとーさんに認められたみたいだね、一応ミッションクリアーかな？」

笑顔でそう言うこなたに俺は

「いーや、まだまだだよ。それにお前を手伝う為に来たんだしそれも済ませなきゃ真のミッションクリアーにはならないってもんだ。そうだろ？」

そう言うとこなたはぺろっと舌を出して

「そういえばそうだったね。それじゃ慶一君。手伝って欲しい所なんだけどさ・・・・・・」

こなたは俺に手伝って欲しい場所の説明をすると俺に掃除用具を渡して

「それじゃ、指定の場所をお願い。私も洗濯とかそっち方面を片付けちゃうからさー。」

そう言って風呂場のほうへと向かおうとするこなたに俺も

「わかった。それじゃ言われた場所をやっておくよ。何かあったら呼んでくれよー？」

遠ざかっていくこなたにそう声をかけるとこなたも「わかったよー。」と言って再び風呂場へと向かったのだった。

俺はまずこの居間から始める事にして掃除機をセットすると変な物を吸い込んでしまわないように注意しながら慎重に掃除機をかけていく。

だが、以外にもそんなに汚れてはいなかったようでそんなに時間をかけないまま掃除機がけが済んだ。

俺はそんな意外に綺麗な部屋の状況を見ながら

（こなたがこうやって家事やれるようになるまではそうじろうさんがやってたんだって言ってたよな・・・なんだかんだでそうじろうさんもこなたがいない時でもきっちりとやってる人なんだなあ・・・）

そう心の中で感心しつつも俺は次の部屋へと掃除しに向かうのだった。

こなたの家は二人暮しであるがゆえに部屋数もそれなりにはあるようだった。

そして、その中でこなたに割り当てられた部屋の掃除をこなしながら最後に辿り着いたのはこなたの部屋だった。

俺が丁度こなたの部屋へと辿り着く頃こなたも自分のするべきことを終えて戻ってきてたようでこなたの部屋の前で鉢合わせる形になった。

「お？こなた。そっちは済んだのか？俺の方も後はこの部屋を残すのみだけどさ。」

俺がそう言うとこなたも

「うん。こっちはあらかた完了だよ？後は私の部屋を手伝ってもらうからそのつもりでね。それじゃどうぞー？」

そう言って部屋のドアを開けるこなたに俺は困惑の表情をしながら

「ええ？最後の部屋はこなたの部屋だったのか？けどいいのか？俺がこなたの部屋の掃除手伝ったりしても。」

俺がそう言うとこなたは頷きながら

「うん。それも私が考えていた事だからねー。まあとりあえず入って入って。」

俺の背中を押しながらそう言うこなたの勢いに押され俺はこなたの部屋へと入る。

部屋に入るとそこには所狭しとアニメポスターや漫画、フィギュアなどが並んでいたのだった。

俺はそんなこなたの部屋を物珍しげに見回していたが、こなたがその横で俺のわき腹を肘でチョンチョンとつつきながら

「ちょっと散らかってて恥ずかしいからあまり見ないで欲しいなあ・・・まあ、とりあえず私が指示するからその通りに動いてくれる？」

部屋の状況を見られて少し顔を赤くしているこなたにそう言われ、俺はとりあえずこなたの指示通りに作業をこなしていった。

「あ、それここにしまってー？」
「そう、それはそこでいいよー？」
「あ、それはね・・・」
「それじゃそっちから掃除機がけお願いー。」
とりあえずてきぱきとこなしていく俺。
色々奮闘しているうちに掃除は終了とあいなった。
道具を片付けて俺はこなたに部屋に戻っててくれる？と言われたので掃除用具を片付けた後、俺はこなたの部屋へと戻っていた。
部屋を改めて見回してみると、こなたの机の上には今回の旅行で撮ったツーショット写真が飾ってあった。
それをみた俺は少し顔を赤くしつつもとりあえず意識しないようにとこなたの持っている漫画本へと目を移したのだった。
そうしているうちにお茶とお茶菓子を持ったこなたが部屋に戻ってきた。
「慶一君、今日はお疲れ様。手伝ってくれたおかげで助かったよ。ありがとうね。」
改めて御礼を言われた俺は少し照れながら
「いや、そもそも俺が手伝いたいって申し出たんだから改まって御礼を言われる事じゃあないさ。」
そう謙遜しながらこなたに答えるとこなたはクスクスと笑いながら

「あはは。やっぱり慶一君は控えめだよねえ。変に自慢したりえらそうになったりしない所が慶一君のいい所でもあるよねー。」

そう言いながらこなたはふと机の上の写真立てを見て

「慶一君と出会ってからもう半年くらいたつんだね。ねえ?覚えてる?初めて会った時の事。」

俺に視線を戻しながらそう言うこなたに俺は

「ああ、ちゃんと覚えてるよ。食堂で俺が買ったコロネをお前にあげたんだよな。」

あの頃の事を思い出しながらこなたに言うとこなたも目を細めて

「そうだよねー。あれがあったから私達、友達になれたようなものだよね。」

そう言いながらも何事か考え込んでいるこなただったが不意に俺の方を向くと

「決めた。私正直に言うよ。実はさ、あの時チョココロネを貰った日にさ、私、君に興味を持ったんだよね。同じクラスではあったけど話した事はなかった君だった。だからあの時までは名前すらもうっかり忘れている有様だったんだよねえ・・・」

後頭部をぽりぽりと掻きながら言うこなたの言葉を俺は黙って聞いている。

こなたはさらに言葉を続けて

「けど、あの時君に自己紹介されてから君の事を思い出して君からチョココロネを貰うっていうイベントがあってからさ、もう一度君に会えたなら今度こそは友達になろうよ、って言うつもりだったんだ。そしてそれは君が八坂さん達を連れて二人の合格祝いをしている時に偶然にも再会して実現した。また会えた事が嬉しかったんだよね。」

一旦言葉を切るこなた、一呼吸置いてさらに言葉を続ける

「私はあの3人と話している時も自分の趣味の事も話していたりしたから、君が私をどんな風に思っているのかが気になった。私があの3人と話している内容も君の耳にも入るだろうと思っていたしね。私はこんなだからさ。そして、友達になって欲しいと言った時に引かれるかもしれないとさえ覚悟してたよ。でも君はそんな私の葛藤さえあっさりと蹴散らして私の思いに応えてくれた。本当に驚きだったんだよ?ねえ慶一君。今だから聞きたいんだけどさ。どうして私のその申し出を受けてくれたの?」

俺を見つめながらそういうこなたに俺もこなたが自分の心情を正直に語ってくれた事に敬意を表しながら俺も俺の思っていた事を正直に話すことにした。

「こなたがその時に思っていた事はよく分かったよ。それじゃ俺も正直に言う事にする。実を言うとな、あのチョココロネのイベントがある前から俺はお前ら4人の事は知っていたんだ。お前らが楽しそうに話す姿をいつからか見かけるようになり、俺は気付けばお前らの事を目で追うようになっていたんだ。そうしてお前らの姿を目にするたび、俺もあの輪の中に入れたら楽しそうだなあと思ってい

た。あの頃の俺はきっかけが欲しかったんだよな。みんなと知り合うきっかけがさ。」

一旦言葉を切り一呼吸置いて再び話し始める俺

「そうしてもやもやとしながら気付けば1年が過ぎようとしていた。結局きっかけがつかめないままにもう諦めるしかないかなあ?と思っていた時、こなたと話す機会ができた。あのイベントだな。あの時は俺はお前ががっかりしてる姿に罪悪感を覚えていたと同時にチャンスだとも考えていた。そして思い切ってコロネをだしにお前に声をかけたんだ。結果は、お前と話すことが出来たと同時にコロネをお前に渡す事できっかけにすることができた。けどあれからしばらくはまたお前に接触する機会もなくて再びどうするべきか悩んでいた時にかがみたちとも仲良くなるためのきっかけがそれぞれに出来ていた。」

お茶を一杯すすりながら再び話を続ける

「けどそんな折、こうからの誘いで2人の合格祝いをすることになった時、再びお前と出会えた。俺はあの時はお前にお前が俺に言ってくれた”友達にならない?”って言葉を言いたかった。けどすぐにその言葉を出せなかった時にお前が俺に友達になろうよって言ってくれた。って訳だったんだ。そしてお前の申し出を受けたのは俺もお前と同じ気持ちだったからだな。友達になりたい、ってさ。」

俺の話を聞いたこなたは俺の方をじっと見つめていた。

「面白いもんだね。結局お互いに気付けば友達になりたいって思ってたんだね。私はさ、君と今友達でいる事が嬉しいよ。君はどうかな?」

こなたがそう俺に言う。

俺はその言葉に迷わず

「それを改めて聞くかね?俺の答えは言うまでもないさ。こなたと一緒なんだからな、俺の気持ちもさ。」

そう言いながらさらに言葉を続けて

「それにお前には感謝してるんだぞ?旅行の事もそうだけど、かがみ達とも仲間になれたのはお前が取り持ってくれたおかげなんだからな。2年生になった時、あの日にお前がみんなを紹介してくれたから今がある。俺にとってはかけがえのない思い出でありきっかけさ。」

そうこなたに伝えるとこなたも嬉しそうに笑ってくれた。

「そう言ってもらえると嬉しいかなー。まさに君を友達にした甲斐があるってもんだよね。」

俺もまたこなたに笑い返した。

「俺も同じさ。そしてこれからもよろしくな、こなた。」

「うん。こちらこそだよ。私の方こそよろしく。」

そう言ってこなたは満面の笑みを見せたのだった。

その後もいろいろな事を話ながらゆったりとした時間を過ごした。

しばらくして頃合の時間になり俺は泉家を後にすることになった。

そして帰る頃には俺は上機嫌なそうじろうさんにより泉家への出入りは許可されたも同然になったのだった。

今日俺はこなたと心の中にある真実を暴露しあったが、その事でさらにお互いの距離が縮まり、絆も深まったような気がした俺だった。

そして次に来る時までには今度はサイン色紙を忘れずに来ようと誓う俺だった。

それから、こなたと別れて家に帰る途中、俺の携帯にかがみからの着信が入ったのだった。

旋律の休日1～泉家初訪問～（後書き）

作中の中でそうじろうさんが小説のタイトルにつけそうな名前をつけてみました。一応フィクションですのでみなさんのイメージにお任せします。

旋律の休日2～柊家での夕食会～

こなたの家に初めて訪れた俺はそこでこなたのお父さんとご対面と相成り、初めは物凄い目で睨まれていたが俺がそうじろうさんのファンであるという事がわかると、途端に上機嫌になり家の手伝いをすることと時折こなたの家へ来てもいいという事を認めてもらえた俺だった。

こなたの家で掃除をや片付けの手伝いをしてこなたの部屋でお互いの本心を打ち明けあいつつのんびりとした時間を過ごして俺はこなたの家から帰る事となったのだが、駅のホームで電車を待っているときにふいにかがみからの着信が入ってきたのだった。

とりあえず電話に出てみると

「もしもし、慶一くん？私よ、かがみ。」

「かがみか？少し慌ててるみたいだが何かあったのか？」

「実は今回の泊りがけの時に慶一くんの家に忘れ物しちゃってね、家にいるのならその忘れ物が残ってるのか確認して欲しいの。それでもしその忘れ物があるようだったら明日学校で渡して欲しいのよ。」

「忘れ物？それって一体なんなんだ？」

「それが、家でもよく使ってる勉強用のノートでさ。一応宿題は終わらせてあったけど、ないと物凄く明日困っちゃうからさ。提出も明日だしね。だから、迷惑かけちゃってごめん、なんだけどお願いできるかな？」

「なるほど、わかった。お前が使ってた部屋探せばいいかな？」

「うん、そこにおいてあると思うわ。本当にごめんね。」

「いいって、この位の事お安い御用さ。それじゃ明日学校でな。」

「うん、また明日ね。」

そう言って俺たちは電話のやり取りを終えるのだった。

その後電車に乗り込み家へと戻るとさっそくかがみの使ってた部屋へと赴いてみると、かがみの言っていたノートが見つかった。

かがみのノートを手にとり、ノートを見つめながら俺は少しの間考え事をしていたがふいに再び出かける準備をして俺は自転車を出しに外へと出て行くのだった。

結局俺はかがみの家にノートを届ける事にしたのだ。

自転車をこいで15分、鷹宮神社が見えてきたので俺は神社の駐輪場に自転車を止めて柊家へと向かおうとした時、俺の背後からいきなり飛びついてくる人影があったのだがあまりにも不意を突かれた俺はまともな対処ができずにその人と一緒に倒れこむ形になった。

「あいたた・・・一体なんなんだ?って、あなたは・・・」

俺は痛みをこらえつつ人影の方を見るとそこには見知った顔がやはり痛みに顔を歪めつつ

「いったー・・・ちょっと勢いつきすぎちゃった・・・あはは、森村君ごめんねー?」

あまり反省していなさそうな顔でそう言う見知った人に俺は呆れながら

「ごめんねー、じゃないですよ。いきなり飛びついてきて何やって

るんですか、まつりさん。」

まつりさんにとりあえずツッコミを入れておくとまつりさんはばつの悪そうな顔で

「いやあ、神社で掃除してたんだけどさー、君の姿が見えたからつい嬉しくなってねー」

苦笑しながら言うまつりさんに俺もため息一つつきながら

「まったく、知り合いだったからよかったですけどそうじゃなかったらただの危ない人ですよ?まつりさんも大学生なんだし、もう少し節度のある行動をですね・・・」

軽く説教をするとまつりさんはほおを膨らませながら

「言われなくてもそのくらいは分かってるわよ。それに知り合いじゃなかったらこんな風に飛びついたりはしないわよ。」

と、少し不機嫌になったまつりさんに俺は苦笑しながら

「まあ、わかってくれればそれで。それと挨拶が遅れました。こんにちは、まつりさん。」

結局挨拶がまだだったので俺はまつりさんに挨拶をするとまつりさんも笑いながら

「うん、こんにちは、森村君。今日は一体どうしたの?急に訪ねて来たりしてさ?」

俺はまつりさんの質問に

「実はかがみが家に忘れ物をしたのでそれを届けにきたんですよ。かがみは家に居ますか？」

そう答えるとまつりさんも俺の答えに頷きつつ軽く考える仕草をして

「今はちょっと夕飯の買出しにつかさと一緒に行ってる所ね。かがみの忘れ物、預かっておく？」

というまつりさんの申し出に俺は頷きながら持っていた鞄からノートを取り出して

「なら、お願いできますか？このノートを返しておいて下さい。よろしくお願いしますね。」

そう言ってまつりさんにノートを差し出すとまつりさんは俺からノートを受け取った後

「これね？分かったわ。ちゃんと返しておくから心配しないでね。っと・・・」

ノートを受け取って俺にそう言った後まつりさんは少し考え込んでいたが、おもむろに顔を上げて俺に

「ねえ、森村君。よかったら今日の夕飯家で食べていかない？昨日の体育祭での勝利のお祝いも兼ねてさー。」

というまつりさんの提案に俺は驚きつつ

「ええ?でも折角の休日なのに俺なんかがお邪魔しちゃかえって迷惑かけちゃいませんか?それに勝利っていっても結局うちのクラスは優勝もできてなかったですし。」

まつりさんの提案に恐縮しつつそう言うと、まつりさんは笑いながら

「いいのいいの。家は元々家族多いんだし、君一人増えた所でなんてこともないからさ。それに勝利のお祝いっていうのはかがみもそうだけど森村君のあの最後のリレーでの勝利って事だからさ。」

そんなまつりさんの言葉に俺は顔を赤くして照れながら

「あー・・・あれですか・・・あれも色々な偶然も重なっての勝利でもありますし、そう改まって言われてしまうと照れますよ。でも・・・まつりさん、お言葉に甘えさせてもらってもいいですかね?」

(楽しいんだよな・・・柊家で過ごす時間って・・・)

とりあえず個人的な理由からも俺はまつりさんの申し出を受けようと思い、そう答えると

「うんうん。それじゃちょっと待っててね。家の方に連絡入れてその後残った境内の掃除終わらせちゃうからさー。」

俺が申し出を受けたことを喜んだまつりさんはそう言うと、家の方へと電話をかけていたようだった。

俺はとりあえずまつりさんの掃除を手伝おうと考えていたのでまつりさんの電話が終わるのを待ってまつりさんに

「まつりさん。折角お世話になるんですし、俺もまつりさんの掃除

を手伝いますよ。」

そう声をかけるとまつりさんは少し驚いた顔をしていたが、すぐに笑顔になって

「そう？いやー助かるなー。それじゃほうきが向こうにあるからちょっとお願いできるー？」

ほうきの置いてあるところを指差すまつりさんに俺は頷いて答えると掃除道具を取りに行ってまつりさんとともに境内の掃除を始めるのだった。

しばらくして掃除を終えた俺たちは道具を片付けて改めて2人で柊家へと戻る。

「ただいまー。お父さんお母さん、森村君連れて来たよー。」

まつりさんが家に入りながらただおさんとみきさんにそう声をかけると2人が玄関まで出迎えに来てくれて

「やあ、森村君いらっしゃい。まつりから話は聞いてるよ、さあ上がりなさい。」

「森村君。よく来てくれたわね。歓迎するわよ？さあどうぞ。」

2人にそう促されて俺は照れながらも

「またお世話になります。それじゃお邪魔しますね。」

そう言って柊家へとお邪魔する俺だった。

「いのりももうすぐ会社から戻ってくるだろう。そうしたら夕御飯にしよう。森村君もそれまではゆっくりくつろいでいなさい。」

そうただおさんが言ってくれたのだが、俺は何もしないのも悪いかな?と思ったので

「いえいえ、おかまいなく。お気持ちはありがたいですが、俺も何か手伝う事あればやらせてもらえませんか?お世話になりっぱなしというのもなんですから。」

俺がそうもちかけると着替えを終えて降りてきたまつりさんが俺に

「相変わらず生真面目よねえ、森村君も。それじゃちょっとお願いしようかな?買い物からまだ戻らないかがみとつかさを迎えに行ってきてくれないかな?森村君の分を買うのにたぶんまたスーパーに戻ってるはずだからさ。荷物持ちやってあげてよ。」

まつりさんがそう言って来たので俺は

「わかりました。それじゃスーパーの場所教えてもらってもいいですか?」

まつりさんの頼みを引き受けると同時にかがみたちの行ってるスーパーの場所を教えてもらい、俺は

「まつりさんどうもありがとう。それじゃ迎えに行ってきますね。」

そう言って柊家を出て行く俺にまつりさんも「行ってらっしゃーい。気をつけてねー。」と言って送り出してくれたのだった。

かがみｓｉｄｅ

さかのぼる事2時間前・・・・・・

慶一くんに私の忘れ物を持ってきてもらうように電話でお願いしてから私とつかさはお母さんに夕飯の買い物を頼まれたので自分の部屋の掃除等を済ませた後、私はつかさと共に少し遠い場所にあるスーパーに買い物に来ていたのだった。

「えーっと・・・これと、これと・・・後はこれね？」

私の割り当ての方を見て回り、商品を買い物篭へといれていきながら買い忘れた物がないかどうかをチェックしていた。

それから1時間程つかさと共に買い物をしてスーパーを後にして家まで半分くらいの所まで歩いた時に私の携帯にお母さんからの着信があったので電話に出た。

「もしもし、お母さん、どうしたの？何か頼み忘れでもあった？」

「あ、かがみ。まだスーパーにいるの？」

「もう買い物済ませて家まで後半分って所まで来てるわよ？」

「ごめんなさい、かがみ。悪いんだけどもう一度スーパーに戻って追加の買い物お願いできるかしら？」

「え？でも、お母さんから預かったお金もう残ってないわよ？」

「そうなの？かがみ、かがみ個人でお財布もってない？後で渡すから持っていたら立て替えお願いできるかしら？」

「そういう事ならなんとかなるわ。わかった、それじゃ追加分を買いに行くわね？」

「ごめんね？よろしく、かがみ。気をつけて帰って来るのよ？」

「分かったわ。それじゃ切るわね？」

「ええ、それじゃ。」

お母さんとのやり取りを終えるとつかさが私に

「おねえちゃん。お母さんから？」

という質問に私も頷いて

「そうよ。買い物の追加をお願い、ってさ。」

そう答えるとつかさも首を傾げながら

「何か足りない物でもあったのかな？」

そう言うつかさに私もさっきのやり取りで追加の品物をつかさに言うと

「う～ん？私たちで食べる夕食のおかずにしては多いよね？」

そう言ってくるつかさに私も心持ちそんな気がしていたがとりあえず

「まあ、何にしてももう一度スーパーに戻りましょ？足りない物買ってこなくっちゃね。」

「うん。それじゃもどろうか～。」

2人して頷きあって私たちはさっきのスーパーにもう一度戻って行くのだった。

その頃慶一くんが家に遊びに来ていて私たちを迎えに行く為に家を出たことを知らないでいたのだった。

そして追加の買い物を終えた頃、私の携帯に今度はまつり姉さんから電話が入ったのだった。

「もしもし、かがみ？」
「まつり姉さん？どうしたの？」
「買い物終わった？今帰ってる？」
「買い物終えてこれからスーパーをでるとこよ？それがどうしたの？」
「なら、まだスーパーにいるのね？それじゃそこから動かずに森村君が迎えにくるのを待ってなよ。」
「え？姉さんいま森村君って言ったの？どうして慶一くんが？」
「森村君、あんたの忘れ物届けにわざわざ家まで来たの。それで境内の掃除とかも手伝ってもらっちゃったのもあったから夕飯に招待したんだよ。それでまだ買い物から戻らないあんた達を迎えに行ってもらったの。」
「慶一くん、わざわざそんな事してくれたんだ・・・学校で渡してくれてもよかったのに・・・わかったわ。ここで待ってる。」
「そうしなー？森村君に荷物持ってもらって帰ってきなよ？それじゃ後でね、かがみ。」
「うん。ありがとう、姉さん。」

そう言ってまつり姉さんとのやり取りを追えた私につかさが

「電話はまつりおねえちゃんから？まつりおねえちゃん、なんだって？」

というつかさの質問に私は

「姉さんが言うには慶一くんがもうすぐ迎えに来るからここで待っ

てな、ってさ。」

そう答える私につかさは驚きながら

「え?けいちゃんが迎えに?どうして?」

私は笑いながらつかさに

「私、慶一くんの家に忘れ物しちゃったんだけどさ、学校で渡してくれればいいって言ったんだけど慶一くんわざわざ家まで届けに来てくれたみたいなのよね。それで夕飯食べていく代わりに私たちを迎えによこしたって姉さんが言ってたのよ。」

私の答えにつかさも笑顔になりながら

「そうだったんだ~。やっぱりけいちゃんは優しいね~。」

そんなつかさの言葉に私も

「まあ、優しいというか世話焼きすぎというか、お人好しな所があるわよね?まあそう言う部分嫌いじゃないけど・・・」

最後の方は小声になっていたがつかさにも同意はしていた私だった。

そして、少し待っていると慶一くんがやってきたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

まつりさんに教わった通りに俺はスーパーへとやってきた。

そして両手に荷物を持ったかがみとつかさの姿を見つけると俺は2人の元へと移動していく。

「かがみ、つかさ。待たせたか？」

俺は2人に声をかけると2人も俺に気付いて

「あ、慶一くん。来てくれたのね？わざわざありがとう。」

「けいちゃん。待ってたよ～？」

そんな2人に俺も笑いながら

「今晩は夕飯をご馳走になるんだし何かしらやらないとなんだか悪い気がしてさ。」

「ふふ。慶一くんらしいね。ほんとお人好しよね？」

「わたしはけいちゃんのそういう所好きだよ～？」

と、ここでつかさの天然爆弾が炸裂すると俺とかがみは途端に顔を赤くして

「つ、つかさ、そういう事はさらっと言うな。対応に困る。」

「そ、そうよ。時折あんたのそのとんでも発言は私もどうしたらいいかわからなくなるわよ。」

2人してつかさに言うとつかさは案の定よく分かってないようで

「そんな事ってどんな事だろう？」

頭にハテナマークを浮かべて首を傾げるつかさに俺たちは苦笑するしかなかった。

とりあえず気を取り直して俺は2人に

「ともかく、俺は2人の荷物持ちとボディガードも兼ねてここ来たんだからその荷物を俺に渡してくれ。」

そう促すと2人は持っている荷物を俺に渡しながら

「じゃあ、お願いね。みんな待ってるだろうしそろそろ行きましょ？」

「けいちゃん、重くない？」

そう言ってくる2人に俺は笑いながら

「この程度軽い軽い。それじゃいくとしようか。」

俺がそう言うと2人とも頷いて一緒に歩き出したのだった。

歩いて戻る途中かがみが俺に

「でも、驚いたわよ?急に家の方へ来たって聞いたからさ。でも、来るのなら前もって来るっていってくれればよかったのに。」

そのかがみの言葉に俺も苦笑しながら

「ごめんごめん。かがみの忘れ物を手にとって考え事してたらなんとなく衝動的にね。けど、忘れ物届けてすぐに帰ろうと思ったんだよ。そうしたらまつりさんに捕まっちゃってさ。」

そう答えるとかがみはこめかみを抑えながらやれやれと軽いため息

を一つついて

「姉さんが原因か・・・まったく困った物よね・・・それと慶一くん、注意した方がいいわよ?まつり姉さん慶一くんの事大分気に入ってるみたいだから襲われたりしないようにね?」

そんなかがみの物言いにつかさも苦笑しながら

「お、襲われるって、どんだけ～・・・」

その2人の言葉に俺も困惑の表情をしながら

「なあ、かがみ。それって普通逆だよな?俺が襲うから気をつけろってのなら分かるけどさ。」

そう返すとかがみは俺を一瞥してニヤリと笑うと

「あんたにそんな度胸があるとは思えないからよ。それにあんたは女の子が嫌がるような事をする人じゃないって分かるから・・・。」

そう言いつつも最後の方は顔を少し赤らめて俺から視線を外したかがみだった。

そしてつかさも俺を見ながらニコニコと笑って

「そうだね～。だからわたしもけいちゃんと居ても凄く安心できるんだ～。」

そう言う2人の言葉に俺は照れながら

「ありがとな、2人とも。俺をそこまで信頼してくれて。」

そんな俺に2人とも笑顔で

「それもあんたが今まで見せてくれた行動の結果よ。それだけあんたの誠実さがわかるからね。」

「けいちゃんはわたし達にいつも優しくしてくれる、そんなけいちゃんを見てきたもんね。」

そう言ってくれる2人にさらに顔を赤くしつつ、俺達は柊家へと戻った。

「ただいまー。買い物済ませてきたわよ。」

「ただいまー。けいちゃんのおかげで助かっちゃった。」

「ただいま戻りました。これにて任務完了って事でいいかな?」

俺達が帰ってくる頃、丁度いのりさんも帰ってきてて俺を出迎えてくれた。

「お帰り、かがみ、つかさ、森村君もいらっしゃい。今日はたくさん食べていってね?」

そう言ってくれるいのりさんに俺は

「ありがとうございます。それと他に俺のできる事ってありますか?」

そう聞くといのりさんは首を振って

「後は御飯ができるまではゆっくりしてて?お客さんなんだから遠

慮は無用よ？」

いのりさんがそう言い終わると同時にかがみが

「そういう事。とりあえず慶一くん。私の部屋に行きましょ？ラノベとか読んで時間潰してればいいわよ。」

そう言ってくる2人に俺は

「分かりました。それじゃお言葉に甘えさせてもらいます、いのりさん。それじゃかがみ、部屋にお邪魔させてもらうな？」

2人に言うといのりさんは笑って頷いてくれ、かがみは

「それじゃ行きましょ？慶一くん」

と俺に一緒に来るように言って来たので俺も頷いてかがみの後についていくのだった。

かがみが着替えを済ます間、俺は部屋の外で静かに待っていた。

そして着替えを終えたかがみが俺に部屋に入ってくるように促したので俺もそれに応じて部屋の中へと入った。

「はい、慶一くん。今回の新作よ？きっと面白いと思うから読んでみてね？」

そう言ってかがみのラノベを受け取り俺は適当な場所に座って読み始める。

かがみも俺と同じように読みかけのラノベを手にとり適当に腰掛けて読み始めていた。

気付くと俺は本の世界に入り込みすぎていたようだ。

何時の間にか俺の横に座って本を読んでいるかがみに気付かなかった俺はそれを見た瞬間に顔を赤くしていた。

幸いかがみには俺のその状態に気付かれずに済んだのだが後で落ち着いて考えてみるとかがみの頬も少し赤かったような気がした。

その後夕食が出来たようなので俺たちは居間へと降りていく。

居間に入るとそこには凄いご馳走が並べられていた。

「おお・・・これはすごいな・・・」

思わず感想を述べる俺につかさもニコニコしながら

「お母さんと一緒にがんばってみたよ?遠慮なく食べてね~?」

つかさに俺は「ありがとう」と御礼を言い、所定の場所に座る。

程なくしてみんなが席につき、ジュースで乾杯をする事になった。

乾杯の音頭を取るのは俺をこの夕食に誘ったまつりさんだった。

「ではみなさん。かがみのパン食い競争1位と森村君のリレーぶっちぎりの1位を祝してかんぱーい!」

「「「「「かんぱーい」」」」」

俺は苦笑しながらもその乾杯に応じた。

そしてあの最後のレースを振り返ってみんなは

「それにしても最後のリレー、ほんとに凄かったよねー。私見てて大興奮だったよ。」

と、まつりさんが言うといのりさんもあの時を思い出しながら

「あれは私も鳥肌たったよ。あんなのを見たのは初めてかもね。」

笑いながらそう言ういのりさん。

「あの時は私も応援に思わず熱が篭っちゃったわ。」

微笑みながらそう言うみきさん。

「私は君なら出来ると思えたからね。あんな風に応援したよ。けど、君はそれに応える力を持っていたね。たいしたものだよ。」

感心しながら頷くただおさん。

「今考えても夢見てるみたいだったわよね・・・改めて凄い物見た気分ね。」

少し興奮気味に言うかがみ。

「けいちゃん、約束まもってくれたもんね。絶対諦めないって約束を。うれしかったな～。」

ニコニコしながら言うつかさ。

俺はそんなみんなの前でただただ照れて恐縮していた。

そうこうしながら楽しい夕食は続いていくのだが、時折まつりさんの暴走とそれを力づくで止めようとするかがみにみんなで苦笑していたりした。

もちろん惨事になってはまずいので俺がかがみの拳を受け続けて居た訳だけど・・・。

とりあえず今回は全部捌ききったので気絶の憂き目を見ずには済んだのだが。

そしてその時披露した体捌きを見てみんなにまた感心されたりもしたのだった。

そんな楽しい夕食を済ませて俺は再びかがみの部屋へと食休みも兼ねて戻っていた。

かがみとつかさとしばらく談笑していたのだがふいにかがみが

「ところで、どうして慶一くんは今日私の家にわざわざ来たの？忘れ物なら学校で届けてくれてもよかったのにさ。」

そのかがみの疑問につかさも

「そういえばそうだよね？なんでなの？けいちゃん。」

俺はそんな2人の質問に少し考え込み、そして

「・・・前にも一度こうして柊家にお邪魔した事あったよな？」

俺の言葉に2人は「そうね。」「うん。」と言っていた。

「あの時も俺は夕食をご馳走になったわけだけど、その帰り道にさ、俺が気付かされた事があったんだ。」

その俺の答えにかがみは首を傾げて

「気付かされた事？それって？」

というかがみの言葉に頷きながらさらに言葉を続ける。

「俺には本当の両親はいない。そして育ての親はいるけれどその二人が居るのは都内だ。だから俺の家には今猫しかいない。そして、あの日の楽しい夕食を、家族ってやつを体験した時俺は今まで意識してこなかった孤独の寂しさを意識する事になったんだ。」

一呼吸置いてまた言葉を続ける

「それを感じた時俺はみんなに俺の家の合鍵を渡して俺の家を好きに使ってもらおうと思った。常に誰かが出入りしている家ならば少なからず孤独を感じる事もないだろうと思ってさ。そうしてみんなが家に来てくれるようになったから最近は俺も寂しさを感じずにすんでいた。」

俺は一旦言葉を切り、飲み物を飲んでからまた言葉を続けた。

「俺の寂しさも大分解消されてはいたけれど、かがみの忘れ物のノートを見たときに俺は柊家にお邪魔した時の事を思い出してさ。なんとなくまた柊家に訪れて見たくなったってのが本当の所さ。まさかまつりさんに捕まって夕食ご馳走になるとは思わなかったけどさ。」

後頭部を掻きながら言う俺を見て笑うかがみとつかさだった。

「そういうことか。慶一くんも意外と寂しがりやなのね？」

ニヤニヤしながらかがみが言う。

「でもけいちゃんの寂しさが少しでも紛らわせられるのなら家を頼りにしてくれた事はうれしいかな？」

つかさもニコニコしながらそう言ってくれた。

俺は2人に顔を赤くしつつ

「かがみ。今更その部分は否定はしないよ。それとつかさ、そう言ってくれてありがたいよ。今後も遊びに来る事もあるかもだけどいいだろうか？」

そう2人に聞くと2人とも笑顔になりながら

「構わないわよ？でも今度は前もって言ってから来てよね？今日みたいな不意打ちは流石にびっくりするし。」

つかさも頷きながら

「わたしも歓迎かな？けいちゃんが来てくれる事もうれしいから。」

そう言ってくれるつかさに俺は御礼を言おうと口を開きかけた時ふいにかがみの部屋のドアが開き

「私も歓迎よ？いつでも遊びにおいで。」

「私も大歓迎。森村君、私とつきあおうよー？」

俺たちの話を盗み聞きしていたっぽいいのりさんとまつりさんが飛び込んできて俺にそう言った。

「ちょっと、姉さん達、いきなり飛び込んできてなんなのよ！」

「あはは、おねえちゃんたちどんだけ～・・・」

そして俺も苦笑しながらもそんな風に言ってくれる2人に心の中で感謝していたのだった。

柊家で残りの休日を過ごした俺は、柊一家に見送られて柊家を後にする。

その際にただおさんとみきさんもまた遊びにきなさいといってくれた事が嬉しかった。

明日からまた学校が始まる。

これからも俺はこんな風に柊家に訪れて見たいと思っていた俺だったがその数日後に俺たちの関係に影響を及ぼす事件の気配にもまだ気付かずにいたのだった。

旋律の休日2～柊家での夕食会～（後書き）

次回にはちょっとした事件が発生します、主人公達はどう解決していくのか、次回もお楽しみに。

揺らぐ旋律第1話～衝撃の名前～

こなたの家で掃除を手伝い、かがみの家で夕食をご馳走になり、俺はそれなりに充実した休日を過ごす事ができた。

そして日付も変わって翌日からまた学校が始まるわけなのだが、ここに来て3度目のサプライズを見る事になろうとは思わずに俺は何も知らないまま朝を迎えようとしていた。

ふと俺の横になにやら柔らかな気配を感じて目を覚まし何気に横に首を向けたとき俺は思わず絶句してしまった。

何故ならそこには俺の腕を抱きしめて眠っている制服姿のみゆきが居たからだ。

俺は大慌てでみゆきに声をかける

「み、みゆき、起きろ！どうしてお前がここに居る！頼むから起きてくれ！」

みゆきを揺さぶりつつ起こそうとする俺だったが、みゆきは寝ぼけながらなおきつく俺の腕を抱きしめてきて俺はさらに慌てつつ

「みゆき、おーい！頼むから起きてくれ、このままじゃ理性が持たなくなるから！頼む、みゆきー！」

という俺の必死の呼び声にようやく目を覚ますみゆきは俺の方を寝ぼけ眼でしばらく見つめていたがようやく意識が回復したみゆきは顔を真っ赤にしながら大慌てで

「あ、あああ、あの・・・すいませえええええん！私ったらつい・・・本当にすいません！」

そう言いながら俺の腕を離してベットから出るみゆきはいまだ顔を真っ赤にしながら慌てていた。

俺はそんなみゆきを落ち着かせようと努めて冷静な声でみゆきに呼びかけた。

「・・・とりあえず落ち着け、みゆき。落ち着いたら何でこんな事になってるのか説明してくれるか？」

その冷静な指摘にみゆきはようやく自分を取り戻したようで

「本当にごめんなさい。私、かがみさんや泉さんがやった朝慶一さんをお迎えに来るという事を私も一度やってみたいって思いまして・・・それで、その、予定よりも早く着きすぎてしまったものですから、とりあえず朝食の準備をして、慶一さんを起こそうと思い慶一さんの部屋へと来たんです。」

そういいながらみゆきは自分の頬に手をあて首を軽く傾げつつ困った表情でさらに言葉を続けながら

「それで、最初はまだ時間もあるみたいでしたので慶一さんのお布団を直してそれで私は一旦外へ出て時間まで待とうって思ったんですが、私もまだ眠かったらしく、慶一さんの気持ちよさそうな寝顔とお布団の誘惑に耐えられなくなって、その・・・」

そう言って顔を真っ赤にして俯くみゆきに俺は

「俺の布団に潜り込んで一緒に寝た、と・・・」

最後を俺が補足するとみゆきは真っ赤な顔のままコクンと頷くのだった。

そのみゆきの様子を見て俺は大きなため息を一つついて

「事情はわかったよ。けど、まさか俺を起こす所までやろうとしてたのは驚きだったな。」

苦笑しつつそう言う俺にみゆきは更に申し訳なさそうな顔で

「本当にすみません・・・驚かすつもりはあってもこういう事で驚かそうと思った訳ではないということだけは信じてください。ただ、泉さん達が羨ましかったもので、つい・・・」

悲しそうな顔でそう言うみゆきの頭を俺は軽くぽんと叩くと

「そんな顔するなよ。驚きはしたけど嫌だったり迷惑だったわけじゃないからさ。それに、朝食も作ってくれたんだろ?ならさっさと準備して食べちゃわないとな。」

俺はみゆきに優しく微笑みながらそう言うとみゆきも安心したのか表情を和らげた。

「とりあえず準備して下に行くから下で待っててくれるか?」

俺はみゆきにそう促すとみゆきは俺にいつもの微笑みを向けながらコクリと頷いて下に降りていったのだった。

みゆきが部屋から出て行くのを確認して俺は制服へと着替えを始める。

程なくして準備が出来た俺は鞄を持ってキッチンへと向かうのだった。

「みゆき、お待たせ。おお、これは美味そうだな。みゆき、がんばったなあ。」

みゆきの用意してくれた朝食は和風だったがそれでもみゆきなりにがんばったのが見て取れたので俺は感じたままを素直にみゆきに伝えるとみゆきも顔を赤くして

「そ、そう言っていただけると嬉しいです。それじゃ食べてしまいましょう?」

赤い顔のまま微笑みつつそう言うみゆきに俺も頷いて席につくと「いただきまーす。」の声と共に朝食を取る俺たちだった。

朝食を終えて俺はみゆきに

「みゆき、結構美味かったよ。ありがとな、わざわざこんな事までやってもらってさ。」

素直に感謝の気持ちを言うと、みゆきも嬉しそうな顔で

「いえ。いつもお世話になっている慶一さんに少しでも何か出来たら、と思っただけですから。でもそう言っていただけたら嬉しいです。」

そう言って笑顔を向けるみゆきに俺も笑顔で頷いて返すと

「そろそろ時間だな。みゆき、学校行こうか。」

頃合の時間になったので俺はみゆきにそう促すとみゆきも頷いて

「そうですね。洗い物も済みましたし、そろそろでましょう。」

2人して頷きあって家を出て、今回も自転車を使用して駅へと向かう俺たちだった。

その際にみゆきを自転車の後ろに乗せていたが、俺もみゆきもなんだか照れくさくなって2人して顔を赤くしながら駅に辿り着いた。

駅で自転車を預けて俺はいつもかがみたちが乗っている車両の出入り口付近に行き、そこで電車を待つ。

やがて電車が来て俺とみゆきは乗り込んでいくと、いつものようにかがみとつかさが居たので俺は2人に挨拶をするのだった。

「おはよう、かがみ、つかさ。昨日はありがとな。料理美味かったし楽しかったよ。」

2人に挨拶をすると2人とも笑顔で俺に

「おはよう、慶一くん。楽しんでくれたんならよかったわ。」

「おはよう、けいちゃん。昨日はがんばったから喜んでくれたのならうれしいな。」

互いに挨拶を交わす中、みゆきもかがみ達に挨拶をする。

「かがみさん、つかささん、おはようございます。今日も良い一日になればいいですね。」

というみゆきの声に気付いてかがみ達は驚いてみゆきの方を見て

「おはよう、みゆき。はいいんだけど、なんであんた慶一くんや私達の乗る電車に乗ってるのよ?」

「あ、ゆきちゃんおはよ~って、そういえばどうしてなの?」

そんな2人の疑問にみゆきは苦笑しながらも事のいきさつを説明するのだった。

みゆきの説明を聞いてかがみは呆れたような顔になり、つかさはただただ苦笑していた。

「まったく、みゆきもよくやるわね。あんたもこなたの行動力を羨ましく思ってたみたいだけど、あんたも負けてないと思うわよ?」

「そうだよねえ・・・わたしもやってみようかなあ・・・」

「あんたには無理じゃない?そもそも慶一くんが起きる時間に起きれるの?まずはそこが出来てからいいなさいよね。」

「ううん、おねえちゃんの意地悪・・・」

2人のやり取りを見守っていたみゆきがつかさのフォローに入る。

「つかささん、強い意志でがんばってみればきっとつかささんにもできると思いますよ?だからあまり落ち込まないで下さい。」

そう言ってつかさを慰めるみゆきを俺とかがみは苦笑しながら見守

っていたのだった。

やがてこなたが乗ってくる駅に着くとこなたが乗り込んできて俺たちに挨拶をした。

「おはよー、慶一くん。昨日は色々助かっちゃったよ。おとーさんもまた自分の作品に対する感想を聞きたいって言ってたからまた何かの折には遊びにきてよね。」

笑顔で俺にそう説明するこなたに俺は

「そっか。それじゃそうじろうさんに伝えといてくれよ。また何かの時にお邪魔させてもらいます、ってさ。」

その俺の答えに「うん、わかったー。」と言って頷いた後、かがみとつかさにも挨拶をする。

「かがみとつかさもおはよー。今日も揃い踏みだねー。」
「おはよう、こなた。今日は元気そうね。」
「こなちゃんおはよー。」
「うんうん、みんな元気で何よりだね・・・ってあれ?」

そう言いながらこなたは今日の俺たちの集団に違和感を覚えたようだが、すぐにその違和感に気付いて驚きながらみゆきに声をかけていた。

「あれ?みゆきさんが何でみんなと一緒に同じ電車に乗ってるの?」
「おはようございます。泉さん、実はですね・・・・・」

そのこなたの疑問にみゆきは今朝の事をこなたに説明するとこなた

は顎に手を当てながら

「ふーむ、まさかみゆきさんもやってしまうとは・・・みゆきさんの行動力も侮れないねえ・・・」

そう呟くこなたにみゆきも顔を赤らめつつ

「いえ、その、なんといいますか・・・恐縮です・・・」

と、こなたの呟きに困惑しつつ答えていた。

俺はその様子を苦笑しながら見守っていたが、降りる駅が近づいてきたのでみんなに

「みんな、そろそろつくぞ。降りる準備しないと。」

そう声をかけるとみんなもそれぞれに降りる準備をするのだった。

バスに乗り学校に着くと何か体育祭前とは俺の周りの雰囲気が違うように感じていた。

俺達が昇降口に行くまでに複数の女生徒から声をかけられたり、なにやら手紙を渡されたりした。

そして昇降口で下駄箱を開けるとそこにも手紙が相当数詰め込まれている事態になっていた。

それを見たかがみたちは

「へえ、慶一くんって結構モテるのねえ・・・それだけの手紙を貰

ったんじゃさぞや嬉しいでしょうねえ？」

朝の笑顔はどこへやら、途端に不機嫌オーラを発するかがみ。

「なんだか急にけいちゃんの周りが変化したみたいだよ・・・不安だなあ・・・」

やはり少し不機嫌になりつつも不安な顔をするつかさ。

「うーん。ゲームやアニメとかではありそうなシチュを実際に目の当たりにするなんてね・・・慶一君、ギャルゲの主人公みたいだよ。」

口ではそういいつつもやはりどことなく不機嫌なこなた。

「慶一さん？くれぐれも軽率な行動は控えてくださいね？」

顔は笑いながら恐ろしいほどの黒いオーラを発しているみゆきに俺は怯えつつ

「は、はは、大丈夫だって。こんなの貰ったって誰かと付き合うとか考えてないからさ。」

みんなにそう言うとみんな心なしかほっとしたような顔になっていた。

「でも、その手紙どうするの？返事するの？」

こなたが手紙の処遇について聞いてきたので俺は

「とりあえず手紙の主には会ってくる。その上で全て断ってくるつもりさ。」

俺の意思をみんなに言うとかがみが少し心配そうに

「大丈夫なの？ちゃんと断れるの？慶一くん優しいから流されちゃって断りきれなくなる事が心配なんだけど・・・」

つかさも心配そうな顔で

「それにけいちゃんに思いを寄せてる子にそういう事はっきり言える？まがりなりにもけいちゃんを思ってる子を傷つける事にもなっちゃうよ？」

つかさの言葉にみゆきも複雑な表情で

「慶一さん、それでも断りきる事ができますか？」

そのみんなの心配を受けながらも俺はみんなに

「大丈夫さ。その気もないのに期待させてしまう事のほうがかえって相手を傷つける事になるからね。こういう事ははっきりと断るのがいいんだ。それで相手を傷つける事になったとしても恨まれるのは俺だけだ。その思いを俺が背負えばいいだけの話さ。・・・少なくとも今の俺にはそれを背負う覚悟はある。」

その俺の思いを見たみんなはそれ以上は何も言わなかった。

そしてこなた達と別れてかがみと共に教室に入るとそこでも同じクラスの女子からも声をかけられたり挨拶されたりしていた。

その様子を見ていたみさおとあやのは俺たちの方に来て

「すげえな、慶一。一昨日の体育祭以降、ヒーロー扱いじゃん。モテるようになって嬉しいか？なあ慶一？」

「慶ちゃん、大人気ね。これから苦労しそうね。」

という2人に俺も苦笑しながら

「やっぱりあれで目立ったのが原因か。まあ、男たる者一度はそういう事を夢見るもんだけど今の俺には十分すぎる仲間が居るからな。これ以上は贅沢ってもんだ。」

そんな俺の言葉にかがみとみさおとあやのは驚きの表情になっていたが、すぐに嬉しそうな顔になって

「まあ、慶一くんは私達の側にいてくれる人だって信じてるからね。これ以上の心配も無用かな。」

「やっぱ慶一は私達の仲間だよなー。今の言葉何気に嬉しかったゼ？」

「ふふ。私達も慶ちゃんの仲間なのね。とっても嬉しいわ。」

という3人に俺も照れつつ後頭部を掻いていた。

その後も休み時間のたびに各クラスの女子に追いかけられたりしつつもそのことごとくを振り切って俺はみゆきに会うために待ち合わせをした。

屋上の給水タンクの陰で隠れて俺はみゆきを待つ。

やがて、こっそりとみゆきがやってきたので俺はみゆきに小声で声をかけるのだった。

『みゆき、こっちだ』

声をかけつつ手招きをするとみゆきもそれに気付いて一応後方の確認をしながらこちらにやってきた。

「お待たせしました、慶一さん。それで私に用事とは一体？」

みゆきの言葉に俺は持っていた物をみゆきに手渡して

「これ、みなみの誕生日プレゼントだ。みなみの誕生日って明日だったろ？だからあの時の約束どおりにみなみに届けてくれ。こなた達にもゆうべメールを飛ばしておいたから後でみゆきに託しに行くと思う。そっちも頼むな。」

そうみゆきに言付けるとみゆきも頷いて

「わかりました。それじゃこれはお預かりしていきますね。みなみちゃんにちゃんと責任を持って渡しておきますから安心してください。みなみちゃんからの言付けがあったら必ずお伝えしますから。慶一さんも大変でしょうけどがんばってくださいね。」

心配そうな顔で俺を見るみゆきに俺は笑顔で頷いて

「ああ、今回は心配かけてるな。けど、乗り切って見せるから心配しないでくれ。」

そう俺が力強く答えるとみゆきも安心したようで笑顔で俺に頷きな

がら「わかりました。」といった後尾行に気をつけつつ屋上を後にするみゆきを給水タンクの裏から見送った後俺も適当に時間を潰しつつ休み時間ぎりぎりに教室に戻るという感じで女生徒の追及をなんとか乗り切っていた。

そして次の日も同じように乗り切りつつ今日はアニ研の部室へと逃げ込んでいた俺だった。

「ふう、こう、やまと。かくまってくれてありがとな。まったくあのエネルギーはどこから来るのやら・・・」

少し疲れ気味にそう言うとこうとやまとは

「やっぱりリレーで目立っちゃったのが原因なんですね。まあ、あの活躍っぷりを見たら女の子はしびれちゃいますよ。」

「確かにあの時の先輩がかっこよかったっていうのは認めるけど、でもこの騒ぎっぷりは少し異常じゃないかしら?」

という2人の言葉に俺も苦笑しつつ

「やっぱし目立ちすぎだったんだな・・・やれやれ、さてどうしたものやら・・・はいいけどこう、やまと、みなみの誕生日プレゼントちゃんとみゆきに託したんだろうな?」

一応確認の為聞いてみると2人とも頷いて

「ばっちりですよ。今回は遅れずに準備できましたし、受け渡しもやまとに立ち会ってもらいましたから。」

「今回は抜かりなく、ね。だから安心していいわよ?お人好しの先輩。」

最後に痛烈な皮肉をぶつけてくるやまとに俺は困惑しつつ

「今回はちゃんとやったみたいだな、こう。それと、なあ、やまと。俺、お前になんかしたか？最近お前の言葉の槍がきついんだが・・・」

その言葉にやまとは俺を一瞥すると

「・・・別に？私のこの言葉のきつさは先輩だって知ってるはずじゃない。」

そんな俺とやまとのやり取りを見ていたこうは

「やまと、最近先輩がモテはじめたからやきもちでも焼いてるんじゃないの？最近特に不機嫌じゃない。」

というこうの指摘にやまとは顔を真っ赤にして

「な、何いってるのよ！こう、そんなわけないじゃない、勝手な想像で物を言わないでよ！」

というやまとにこうはニヤニヤしつつ

「ふーん？それじゃやまとは先輩の事はなんとも思っていないんだ？それじゃやまとが不機嫌になる理由も今私が言ったことに対して怒る理由もないはずだよねえ？」

更にツッコムこうにやまとは更に顔を赤くして

「・・・そ、それは・・・その・・・・ううっ・・・」

もはやかなりの混乱をきたしたやまとは何も言えずただ黙って赤い顔をして俯くだけだった。

俺はそんな2人のやり取りを見てため息を一つつくと

「こう、それくらいにしといてやれ。やまと、悪かったな。俺のせいでお前にはいらない心配かけてたようだ。元はといえば俺の撒いた種でもあるし、何とかするよ。それじゃ俺はそろそろ行くから・・・ごめんな?やまと。」

そうやまとに言い残して俺は部室を慎重に出て行く。

そして最後の言葉を聞いたやまとはハッと我に帰ると慌てて

「先輩、待って!、その言葉は、先輩っ!」

俺を引きとめようとしていたがすでに俺は部室を離れた後だった。

やまとｓｉｄｅ

先輩が部室を出る際に私に言ったあの言葉は私が夢の中で私に背を向けて去っていく先輩が言っていた言葉だった。

その言葉を聞いた時私は物凄く嫌な予感に包まれ思わず先輩を呼び止めようとしたのだが、先輩はすでに部室から去った後だった。

私の様子がおかしい事に気付いたこうが心配そうに

「やまと、どうしたの？急にあんなに取り乱して先輩を呼びとめようとして。」

そのこうの言葉に私はどうしようかと悩んでいたのだが、結局こうに打ち明ける事にしたのだった。

「こう、実はね・・・・・というわけなの。それで今先輩が言った言葉がその時とまったく一緒だったから私不安になって・・・」

私の説明を黙って聞いていたこうだったが私の目を見て

「なるほどね？やまとの気になっていた事はそういう事だったか。大丈夫だよやまと。私達はこれまでも3人でちゃんとやってきたじゃない。それに、今でも先輩の事は信じてるんでしょ？だったら、その気持ちを強く持ち続けなきゃだめだよ。それが先輩と私達の絆なんだしさ。」

こうのその言葉を聞いた時私は先輩と私達の原点を思い出したような気がした。

「そうね。私達が信じなきゃだめよね。ありがとう、こう。少し気持ちが楽になったわ。」

その私の言葉にこうも笑って応えてくれたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

女生徒との追いかけっこの3日目を超えてとりあえずは俺の周りの騒ぎも沈静化しはじめてきた。

それでもまだ俺宛に下駄箱などに入ってくる手紙は未だに来ていた。
以前よりは大分数も減ったけど、それでも2．3枚の手紙はまだ来ているようだった。

そして俺はその手紙の主に付き合う意思のない事を伝えて断りを入れるため今日も2人に断りを入れた後最後の1人に断りを入れに行く為屋上へと向かった。

そこで手紙の主を待っていると息を切らせて屋上にやってきた女生徒が現れた。

「君が織部由美子さん？この手紙の人だよね？」

俺がその女生徒に声をかけるとその子も俺に

「ええ、私が織部由美子よ。どうやら手紙読んでくれたみたいね？ならここに呼び出した理由もわかるわよね？」

そう俺に言ってくる織部さんに俺は

「ああ。俺に付き合って欲しいっていうんだろ？その気持ちは嬉しいけど残念ながら俺は君の気持ちには応えられない。悪いね。」

俺を悔しさの混じる瞳で見据える織部さんは

「あなたの周りにいる泉さんや柊さん、高良さん達がそんなに大事なの？他の子と付き合おうとしないのも・・・そうやって他の子達も断ってきたのね？」

その言葉に俺は織部さんの目をまっすぐ見据えて

「俺にその気がなかったのも理由だけど、君がそう思うのならそう思ってくれてもいい。だけど恨むなら俺を恨んでくれ、あの子達には何の関係もない事だ。付き合う事を拒むのは俺の意思だからね。」

そんな風に答える俺を見つめながら織部さんは何かを考えているようだったが、不意に

「・・・・・・成神章って知ってるわよね・・・・・・・？」

俺はその出てくるはずのない名前に驚愕し、そして織部さんを見て

「・・・何故君が、その名前を知っている！？」

俺は彼女に強い口調で叫んでいた。

つづく。

揺らぐ旋律第1話～衝撃の名前～（後書き）

慶一達以外には知らないはずの名前、それを知る少女を巡り事件は更なる発展へ
次回をお楽しみに。

今回出てきたキャラのプロフィール
織部由美子（おりべゆみこ）
身長１５６センチ体重４８キロ
少し釣り目の勝気な顔をして髪の毛はロング。
クラスはこなたと同じ２－Ｅで、なぜ成神章の事を知っていたかはこの後で分かります。

揺らぐ旋律第2話～離れていく心と絆～

体育祭が終わり、１日の休日を経て再び学校生活へと戻る俺達。

そして、体育祭前と後とでは俺の周りの環境に変化があった。

体育祭前と後では俺はあまりに目立ちすぎるリレーの結果により学内の女生徒らからアプローチを受ける日々が始まった。

俺は俺に好意を抱いてくれる子達の気持ちを嬉しく思いつつもその子達と付き合う意思を持っていなかったので事あるごとにその好意を断り続けて来た。

そしてそんな日々の３日目に俺達の関係を崩しかける程の事件が起きたのだった。

３日目の手紙の相手の最後の一人織部由美子、彼女こそがその事件の発端となった。

いつものように俺は彼女にも付き合う意思はないと告げ、言うべき事を言った後俺は屋上を後にしようとしていた。

しかし、苦悶の表情を見せた織部さんが俺の去り際に発した言葉は俺を驚愕させるのに十分なものだった。

慶一ｓｉｄｅ

俺は織部さんに付き合う意思のない事を告げた後この場から去ろうと屋上の出入り口に向かおうとした。

だが、その後ろで彼女は意外な言葉を発した。

「・・・・・・成神章、って知ってるわよね・・・・・・・・？」

その言葉に驚き、俺は彼女の方に向き直り

「・・・何故、君がその名前を知っている！？」

そんな俺の様子を伺うように俺を見つめていた彼女は口の端を少し吊り上げて

「ふふ。あなたにとってはあまり良い思い出のある人じゃないみたいね・・・私の知り合いに彼を知っている人が居る、そういう事よ。そしてその人の悪い噂もね。」

俺は彼女の真意を探るように彼女を見据えつつ心の中で焦りを感じていた。

（そんな馬鹿な・・・この学校の生徒に成神との接点があるやつなんて噂すら聞いた事がない、それなのに・・・唯一知っているとしたら、この前氷室と会ったみゆきくらいのはず・・・これはどういう事なんだ・・・）

そんな俺の心の葛藤を見抜くような目で俺をみて妖しく微笑むと

「・・・つまりは、私は成神章との連絡も取り合う事も出来るという事よ？その事を踏まえた上でもう一度聞くわ？私と付き合いさなさい。」

彼女のその言葉に俺は未だ心の葛藤を続けていたが、そこに彼女はもう一言だめ押しを乗せて来た。

「これを断ったら、あなたが大切に思っているあの子達がどうなるかは・・・保証しないわよ?それを頭に入れた上で再度私の言葉に返事をするのよ?そして、これが最後のチャンス。いい?これが最後だからよく考えなさい。・・・私と、付き合いなさい。」

そのあまりの言葉に俺は愕然となった。

俺は拳を握り締め、ギリリと歯を食いしばりながら彼女を見据え、そして

「・・・わかった・・・君と付き合う。だからあの子達には手を出すな・・・」

その俺の答えに満足げな表情をして彼女は俺に

「ふふ、いい答えね。それと、この事は彼女達にも言ってはだめよ?その事が発覚し次第、私は成神に連絡を取るわ。そうなったら、どうなるか分かるわよね?あの子達を守りたいのなら黙っている事、いいわね?」

彼女の言葉に怒りを覚えつつも俺はみんなを守る事を優先するためにその気持ちを抑えつけ、彼女の言葉に頷いた。

俺の頷きを見て、彼女は俺に近づいて来て俺を見上げると静かに目を瞑る。

「・・・何のつもりだよ・・・」

俺が彼女にそう言うと彼女は一度瞑った目を開いて

「キス、してよ。私達付き合う事になったのよ？恋人になったのならそれくらいはしてくれてもいいと思うわ？それとも断るの？断るつもりなら私にも考えがあるわよ？」

その言葉に俺はどうする事もできず、再度硬く拳を握り締めながら俺は黙って彼女と口づけを交わした。

「ふふ。初めてだからぎこちなかったのは許してあげるわ。それと、携帯の番号を教えてもらえる？ああ、それと携帯の履歴は毎日私に見せなさい。そしてあの子達の電話番号やメールアドレスも消すの、いいわね？それを守れなければどうなるかは、分かるわよね？」

彼女の言葉に俺は黙って頷くと彼女は満足したらしく

「それじゃ、明日からよろしくね？森村君。今日はこの辺で、またね？うふふふふ」

笑いながら去っていく彼女を俺はただ見送る事しかできなかった。

そして、彼女と触れた唇を俺は気付けば何度もごしごしと拭っていた。

俺は半ば放心状態ではあったがとりあえず携帯を取り出すと氷室の所へと連絡を取った。

数回のコールの後氷室が電話に出ると

「もしもし？慶一君かい？君がかけて来るのは珍しいな。」
「・・・氷室、頼みがある。ちょっと調べて欲しい奴がいる。」
「僕に頼みかい？それで内容は？」
「織部由美子という陵桜学園２年Ｅ組の女とその知り合いについてだ。彼女はどういうわけか成神章の事を知っていた。彼女の知り合いに成神と関係のある奴がいるとの事だ。」
「成神だって？そいつは確かなのかい？」
「彼女が言い出した事だが、はっきりとしない。だからお前に探ってもらいたい。俺は、情けない話だがその事をネタに俺の仲間達を盾に脅されて彼女と無理やり付き合わされるはめになってしまった。しかし、彼女の言う事がもしも嘘やでまかせであったなら、俺の仲間が危険な思いをしなくて済むし、俺も彼女と離れる事が出来ると思う。だから、頼む。織部由美子の身辺を探ってくれ。」
「君の頼みは分かったよ。成神とも関係があるかもしれないのならば僕も動く必要がありそうだね。でも、その間君はその彼女に付き合わされる事になるわけだよね？大丈夫なのかい？確か、高良みゆきちゃん、だっけ？あの子も君に少なからず好意を持っているようだった。あの子の悲しむ姿は僕も想像したくはないんだけどね。」
「・・・そこの所は俺の過去の罪として罰を受ける覚悟でやるさ。それで例え嫌われたりみんなが俺の側から離れて行く事があったとしても・・・みんなを守れるのであれば後悔はしない。」
「君の覚悟の程はわかった。おそらく一週間近くはかかると思う。詳細がはっきりし次第君のところへ連絡をいれよう。それでいいね？」
「ああ、頼む。それと、俺への連絡用でもう一台携帯を買っておく。番号が分かり次第そっちに伝えるから連絡を入れてくれる際にはそちらに頼む。」
「ん？何故もう一台携帯を？」
「彼女は俺の携帯の着信、発進履歴、メール履歴すらも管理する気でいる。それを避けるためにももう一つの連絡手段を講じておく方

がいいだろうと思ったからさ。」
「そういう事なのか。彼女は相当君にご執心のようだね。わかった、そっちが整い次第連絡をしてくれる？それとこれからの一週間は君にとっての地獄になるかもしれないけど、なんとか乗り切ってくれることを祈っているよ。それじゃ一週間後に。」
「ああ、よろしく頼む。」

そう言って俺は氷室との連絡を終えて屋上を後にしたのだった。

結局俺は気難しい顔のまま教室へと戻る事となった。

教室へ戻ると俺の姿を見つけたかがみ達が俺の方へやってきて

「慶一くん、おかえり。今日も大変ね。あれ？どうかしたの？なんだか気難しい顔してるわよ？」
「慶一、なんとか無事に帰ってきたみてえだな。ん？何かお前元気なくないか？」
「おかえり、慶ちゃん。今日もご苦労さま・・・あら？慶ちゃん、何かあったの？」

俺を気遣い、声をかけてくれるみんなを俺はまともに見る事ができなかった。

本位ではないとはいえ、手紙の返事を断りに行った相手と付き合う事になり、それに従えなければ今ここに居る３人や隣のクラスの３人にも危害が及ぶかもしれない、それを考えた時俺は気付けば手の平に血が滲むほどに拳を握り締めていたらしい。

俺の手の平から滴る血にいち早く気付いたかがみが

「け、慶一くん、手の平から血がでてるわよ?どうしちゃったの?一体。とにかく保健室いこ?傷の手当てしないと・・・」

そう言ってくれるかがみを俺は手で制しながら

「・・・すまない、俺1人で行って来れるから大丈夫だ。これから授業だろ?席に戻ってろよ。」

俺は努めて冷静にそう言ったつもりだったが俺の表情に何かを感じたらしかったが、かがみは

「・・・そう、それならいいわ。とりあえず私達は席に戻ってるわね?慶一くん・・・何か悩み事があるんなら、私達にいいなさいよ?私達が出来る事なら力になってあげるから。」

そのかがみの言葉に俺はあえて振り返らずに

「・・・ああ、ありがとうな、かがみ。」

短く一言伝えてから俺は保健室へと向かった。

かがみｓｉｄｅ

いつものように慶一くんは未だやってくる女の子達からの手紙に断りをいれるために今日も休み時間毎に出かけていっていた。

でも、今日の最後の子の断りに行って帰ってきた慶一くんの様子がなにやらおかしいと私は感じていた。

教室に入ってきた時の表情、そして先程私と日下部、峰岸との会話

においても何だか思いつめているような表情をしていた。

そして、気付くと慶一くんは血が出るほどに強く拳を握り締めていたのだが、それに気付いて私は慶一くんを気遣って声をかけたが慶一くんは大丈夫だといってそのまま保健室へ行く為に教室をでた。

それを見送った私たちは3人で集まり

「慶一くん、やっぱり何か様子が変ね。最後に断りに行った子の所に行く前はあんな感じじゃなかったわよね？」

その私の言葉に日下部と峰岸も頷いて

「そうだな。何か行く前よりも元気なくなった気がするゼ」
「少し思いつめた表情してたわよね？何かあったのかな？」

その2人の言葉に私も頷きつつ心の中にいいしれぬ不安が広がっていくのを感じていた。

慶一ｓｉｄｅ

かがみたちと別れ、俺は手の平の傷の治療の為保健室へと向かっていた。

（だめだな・・・さっきの事を考えると俺は普通の状態ではいられなくなってしまうようだ・・・かがみ達には心配かけたくないんだが・・・くそっ・・・）

自分でもどうする事も出来ない感情を抱えながら歩いていくうち、保健室の前へと辿り着く。

とりあえずドアをノックして「失礼します」と一声かけて俺は保健室へと入っていった。

保健室に入るとそこには白衣を着た天原ふゆき先生がいて、俺の姿に気付きゆっくりと俺の方に歩み寄ってきて
柔らかな笑顔を向けながら

「あら？あなたは確か森村慶一君ね？今日はどうしたのかしら？」

そう声をかけてくる天原先生に俺は自分の手の平を見せて

「ちょっと手の平に傷を作ってしまいまして、治療をお願いできますか？」

俺がそう言うと天原先生は薬棚から消毒液等を取り出すと

「さあ、傷を見せて？ちょっとしみるわよ？少し我慢してね？」

そう言いながらゆっくりと俺の手に消毒液をつけ始める。

俺は少しだけ染みる消毒液の痛みに我慢をしていたがそうこうしている内に治療が終わった。

「はい、これでいいわ。それじゃ、怪我には気をつけてね？」

消毒などをしまいながらニコニコと笑いながらそう俺に言う天原先生。

俺は、なんだか教室に素直に戻る気になれなかったので

「天原先生、少し気分がすぐれないので休ませてもらってもいいですか？」

そう天原先生にお願いすると先生は俺の顔をじっと見ていたが、再び笑顔に戻ると

「わかりました。桜庭先生には私から伝えておきますからゆっくりお休みなさい。」

俺はそう言ってくれる先生の言葉に甘える事にした。

「それじゃ失礼しますね。」

そう言ってベットに潜り込み、俺は先ほどのこと、これからのことに思いを巡らせ始めていたのだが不意に天原先生が

「・・・森村君、何か悩んでいる事等があるのでしたら話せることなら話してください。生徒の悩みを聞くのも保険医としての義務ですから。」

俺はその言葉を聞いた時、ああ、俺が悩み事を抱えている事が表情にでていたのだな・・・と思い、先生に

「お気遣いありがとうございます。ですが、今のところは先生に相談するほどの事ではありませんので。もしも先生に相談しなければならない時はちゃんと相談に乗ってもらいますから。俺の事・・・気にしてくださってありがとうございます・・・。」

俺がそう答えると天原先生は少しだけ困ったような表情をしたが再

び俺に微笑を向けた後、机に向かって仕事を再開したのだった。

俺はそれを遠目で確認してから改めて先程考えようとしていた事に思いをめぐらせながら、現実から一時的に逃避するためにいつしか眠ってしまったのだった。

かがみｓｉｄｅ

結局あれから、慶一くんは保健室に行ったまま放課後まで教室には帰ってこなかった。

私達は慶一くんがまだ保健室に居るかもしれないと思い慶一くんの鞄を持って保健室へと向かった。

「慶一、まだ居るのかな？」
「とりあえず入ってみましょ？」

日下部と峰岸の言葉に私も頷きで返して保健室のドアをノックしようとした時保健室の中から慶一くんともう1人、女の子と話している声が聞こえた。

日下部と峰岸もその事に気付いたようで、二人とも聞き耳を立てて中の様子を伺っていた。

私も気になったので2人と同じように保健室のドアの前で聞き耳を立てるのだった。

・・・・・保健室内

「森村君、ここにいたのね？教室の方に様子見に行った時、君の姿

が見えなかったから探しちゃったわよ？」
「・・・別にわざわざ探してくれなくてもよかったけどな。織部さんにだって用事くらいはあるんだろ？」
「・・・由美子、よ。」
「は？」
「折角私達付き合ってるんだから、名字でなく名前で呼んでよ。私も今度からそうするから。」
そう言った後、織部さんはまた何かを企むような目で小声で俺に
『そう呼べないって言うのなら、構わないわよ？あの子達が不幸になるだけだからね？』
そう言われてしまっては今の俺にはどうする事もできず仕方なく
「・・・分かったよ、由美子。これでいいよな？」
そう呼んでやると織部さんは満足げに頷いて
「ええ、それでいいわよ？慶一君。」
そう俺を呼んだのだった。
・・・・・保健室の外
私達は今何を聞いたのかが分からなくなっていた。
というよりも信じられない言葉に現実を受け止められない、という感じだった。

「おい、柊、今のって・・・私達の聞き間違え、だよな？」
「な、何かの間違いに決まってるわよ。慶ちゃんに限ってそんな・・・」
2人とも動揺しているのが分かった、そして私も同じように動揺していたが
「・・・そうよ、きっと何かの間違いよ、私真実を確かめてくる！」
私は真実が知りたくなり意を決して保健室へと入っていった。
その私に続くように2人も私の後を追って保健室に入る。
保健室に入るとそこには1人の女生徒と話す慶一くんの姿があった。
私は2人の側に行って
「ちょっとあんた！慶一くんと付き合っているって一体どういう事なの！？」
「そうだぜ？慶一には今までそんな噂なんてなかったんだ。適当言って慶一を困らせてんじゃねーのか？」
「慶ちゃんは手紙を貰った子達全てに断りを入れに行ってたのよ？告白の成功した子の話なんて聞いた事もないわ。」
その3人に織部さんは鼻で笑い飛ばし得意げな目を向けると
「あなた達が慶一君にまとわりついていた慶一君を困らせていた子達ね？残念だけど慶一君は今日から私と付き合ってるの。だからもうあなた達の出る幕はないのよ？それがわかったならさっさとここから立ち去る事ね。」

その織部さんの言葉に3人とも気色ばんで

「なんですって!?そんな事あんたに言われる筋合いはないわよ!慶一くんは私達にとって大事な人なんだからね!?あんたの方こそ引っ込んでなさいよ!!」

「わりーけど今の言葉は聞き捨てならねえな!慶一は私らの仲間だ!おめーみてえな奴と付き合うような奴じゃねーんだよ!」

「慶ちゃんはあなたのような人に簡単についていくほど軽い人じゃないわ!私達の事をとても大切に思ってくれてる人なんだから!」

俺はそんな3人の言葉に嬉しさを感じると共に例え様のない罪悪感にもさいなまされていた。

その3人の激昂にも余裕の表情を崩さない織部さんは3人に

「・・・ふうん?なら本人に聞いて確かめてみなさいよ?それならはっきりするでしょ?」

織部さんの言葉に3人は俺の方に向き直り

「慶一くん、あの子と付き合ってるなんて嘘よね?あの子が勝手に言ってるだけなんでしょ?」

「慶一、お前は私らの仲間だよな?あんな奴と付き合っちゃいねーよな?」

「慶ちゃん、何かの間違いよね?私達から離れるなんて事ないわよね?」

俺はそんな3人の問いかけに心を苦しめながら顔は努めて平静を装いつつ、俺が尤も言いたくない言葉を口にするのだった。

「・・・その子の、由美子の言う通りさ・・・俺は・・・俺は、由美子と・・・付き合っている・・・」

俺がそう言い終わると織部さんは勝ち誇ったような顔をして、かがみ達3人は信じられないような物を見る顔で

「・・・そんな・・・嘘よ・・・」
「なんで?慶一、なんでだよ!」
「そんなの信じられないわよ!慶ちゃん!」

そんな3人に俺は心の中で何度も詫びるしかなかった。

ショックを受ける3人の顔を見ていると俺は涙をこぼしそうになったので3人から顔をそらした。

その俺の仕草を見て3人は自分達が拒絶されたのだと思ったのだろう、俺に短い言葉で

「・・・さよなら、慶一くん・・・その子と仲良くね・・・」
「・・・お前にはがっかりだゼ・・・じゃあな、慶一」
「・・・信じていた、信じたかったわ・・・でも、さよなら・・・慶ちゃん・・・」

そう俺に告げると、3人とも下を向いたままで保健室から走り去っていった。

その様子を見ていた織部さんは勝ち誇った笑みを浮かべて3人の去った方を見ていたのだった。

その後はこなた達とは会う事はなかったが、俺は織部さんと共に学校を出た。

途中までは一緒に帰った俺だが、織部さんと別れると俺は携帯電話の店にもう一つの携帯を購入するために向かった。

そして携帯を購入し、俺は改めて氷室に連絡を入れ新しい携帯の番号を伝えた。

その後家に戻って俺はみんなで撮った夏休みの旅行での集合写真を見て、別れの言葉を告げて去っていった3人を思い出すと体の奥からふつふつと湧き上がって来た激情と共に俺は気付いたら壁に拳を叩きつけて泣いていた。

「・・・ごめん・・・ごめんよ・・・かがみ、みさお、あやの・・・でも・・・これが俺の罪に対する罰の一つなんだな・・・ちくしょう・・・ちくしょう!!俺は、俺はいつまでたっても、っ!」

その日、俺達が奏でていた旋律が歪みを持ち始めた。

俺は自分したことに対する罪深さを改めて思い知らされると共に、あの3人から告げられた別れの言葉がこんなにも自分に辛くのしかかる事の辛さを知った。

今の俺には何も出来ない、だからその事に対する悔しさで俺は悔し涙を次の日まで流し続けた。

明日には更に厳しい現実が待っている事を予想はしているものの、その辛さに心が折れない事を祈るのみだった。

そして、俺にとっての地獄とも言える一週間の幕開けでもあった。

揺らぐ旋律第2話～離れていく心と絆～（後書き）

慶一の身に起きたこの事態、そして離れてしまった旋律は再び元へと戻る事ができるのか、事件はまだまだ終わらない。

揺らぐ旋律第3話～大切な人を取り戻す為に～

昨日の事を思い、悔し涙とそれに加えて眠れぬ夜を過ごした俺はその日の朝鏡に映る自分の姿を見て大きくため息をついていた。

目は腫れ上がり、目の下には隈もできていてかなり酷い姿になっていた。

あれから俺の携帯には織部さんからの着信とこなたやみゆき、つかさ、こう、やまとからの着信も入って来ていた。

一応、織部さんからの着信には出はしたが、こなた達からの着信には出ないでいた。

そして、こなた達からの着信履歴を消すと俺は重たい体を引きずりながら学校へと向かう。

玄関から外へ出たとき、一瞬だがあの日かがみとつかさが迎えに来てくれた時の幻を見たような気がした。

そして、俺に申し訳なさそうに謝りながら苦笑するあやのの姿や俺に拝み倒して宿題を写させてもらいに来たみさおの姿も幻となって現れて消えた。

それを思い出した時かなり凹みもしたのだが、それでも今は、皆の為に・・・俺はそう自分に言い聞かせて家を出る。

俺はかがみとつかさが乗ってくる電車の時間帯をずらして更には乗る車両も変えて電車に乗り込み学校へ向かった。

今のままで2人に会うのは俺にとっても辛い事だったからというのもある、そして、2人が俺の顔を見たらどんな表情をするのだろうか？それを考えたら怖くなったというのもあった。

これも一種の逃げなのかもしれない、そうも思ったがこのままでかがみ達に顔を合わせる事が辛かった。

今朝は織部さんには会わないまま学校へと辿り着く。

「おはよ、慶一君。私達が声をかけた理由、わかってるよね？」

昇降口で靴を履き替えていた時、俺はこなた達に捕まった。

俺はそのこなたの言葉に無言で頷きを返す。

そして時計を確かめてまだ時間に余裕があることを確認すると俺はみんなに

「ここじゃ人目につき過ぎる。場所を移そう。」

俺の言葉に皆もうなずきで返した後、俺達は屋上へと向かった。

屋上についてとりあえず人目がない事を確認するとこなた達は俺に聞きたかった事を聞いてきた。

「昨日、かがみから電話があったよ。私達のクラスの織部由美子さんと付き合うことになったんだってかがみが言ってた。それは本当なの？」

その言葉に俺は俯きしばし無言でいたがゆっくりと顔を上げて

「・・・・・ああ・・・本当だ・・・・・・」

俺の肯定の言葉に皆は絶句していた。

ただ、こなたとみゆきは俺の真意を計っているかのようだった。

「どうして、そのような事になったのですか？」

少し悲しげな表情でみゆきは俺に聞いてくる。

「・・・すまん・・・その理由を、お前らに話す事はできない・・・本当にすまん・・・」

悲痛な思いで俺はみゆきに返答するとこうやまとは俺にくってかかってきた。

「どうして言えないんです！？先輩は言ったじゃないですか！相談事はなるべくお前らに話すようにするって！あの言葉は嘘だって言うんですか？」

「先輩はあの時私に約束したわよね！？私達の側にいてくれるって！その言葉も出まかせなの！？」

その2人の剣幕を見てつかさは涙を流しながら

「けいちゃん。おねえちゃん、泣いてたよ？けいちゃんが遠くに行っちゃうって、もうわたし達と笑いあえないって、けいちゃん、わたしやおねえちゃんにあげたプレゼントは嘘じゃないよね？わたしは信じてるよ？今でもけいちゃんの事信じてるんだよ？おねえちゃ

んだってそうだよ。日下部さんや、峰岸さんだって、きっとまだけいちゃんを信じてる。ねえ、これは悪い夢なんだよね？そうなんでしょ？けいちゃん・・・」

俺にくってかかるこうとやまと、そして涙ながらに訴えるつかさの気持ちが俺には痛いほど伝わってきた。

それでもなお、今の俺には何も出来ない。

このどうしようもない無力感に俺は押しつぶされそうになりつつもそれでも耐えていた。

「嫌です、先輩！私は先輩がいなくなるのはいやです！今までもずっと3人でやってきたじゃないですか！先輩、・・・やまとや私を悲しませないでください！」

「先輩、お願い！私達の側にいて！？私は・・・先輩がいなくなるのは嫌だ！お願いよ・・・先輩・・・」

涙を流しながら訴える2人。

「けいちゃん！おねえちゃんや私達の為にも一緒に居て！？私はおねえちゃんのあんな顔みたくないもん・・・」

つかさもなおも訴えかけてくる。

その3人を見ながらこなたとみゆきは無言で俺を見つめ続けていた。

そこへ、俺を探していた織部さんが現れた。

「あら？こんな所にいたのね？おはよう、慶一君。探したわよ？そ

れじゃ行きましょ？」

皆の間に割って入り、俺の手を取って連れて行こうとする織部さんにこう達が声をあげた。

「待ってください！あなたが織部由美子先輩なんですね？お願いです！先輩を、連れて行かないで下さい！」

「織部先輩、慶一先輩を取らないで・・・」

「織部さん！けいちゃんは私達の大事な人なの！連れて行かないで！お願い！」

3人の言葉を受けながらも織部さんは余裕の表情を崩さずに

「・・・うるさいわね、慶一君はもう私と付き合ってるの。あなた達が何を言ってももう変わらないのよ？いい加減諦めたら？」

織部さんは俺のほうに向き直って

「ねえ？慶一君、あの子達に言ってやってよ。私達にはもう2度と係わらないでってね。」

俺は悔し涙がでそうになるのをこらえながら皆を見て

「・・・みんな、そういう事だから・・・悪いけど、もう口出しはしてこないで欲しい・・・」

その言葉にショックを受けて何も言葉を発せなくなるみんな。

俺の言葉にそれまで無言で事の成り行きを見守っていたこなたが

「・・・慶一君・・・本当に・・・それで、いいんだね？」

その言葉に俺はこなたの目を見据えながら俺の目に無言のメッセージを乗せてゆっくりと頷いた。

しばらく俺の顔を見つめていたこなたはふっと軽いため息をつくと、なおも何かを言おうとしているみんなに

「みんな、そういう事らしいから、私達は退散しようか。」

皆はこなたなら何かを言ってくれる、と期待をしていた。

けれどこなたが発した言葉はそんな皆の期待を裏切るものであった。

そのこなたの言葉にみんなは

「泉先輩！いいんですか！？もう慶一先輩と話したりする事も出来なくなっちゃうかもしれないんですよ！？」

「泉先輩・・・あなたならこの現状を何とかしてくれると思ってたのに・・・失望したわ・・・」

「こなちゃん！いいの？このままでいいの？けいちゃん、いっちゃう。２度と帰ってこなくなっちゃうよ？」

その３人の言葉にみゆきも悲しそうな表情で

「これは私達が立ち入れる問題ではないようです。慶一さんがそれを選んだのなら・・・私達がそれにとやかく言う事はできません。悲しいことですが・・・」

そう言うとこなたも頷きながら

「そうだね、それに・・・今ここで騒いでも、慶一君は戻っては来ないよ。だからもう、私達に出来ることはないね。」

こなたの言葉に満足そうな表情で織部さんが

「ふふ。泉さんと高良さんはわかってるみたいね。そういう事よ。もうあきらめる事ね。それじゃ行きましょ？慶一君。」

織部さんの言葉に俺は頷いて一緒に屋上を出て行く。

つかさたちは悔しそうに涙を流していたが、こなたとみゆきは去っていく俺の後ろ姿を無言で見つめ続けていた。

こなたｓｉｄｅ

去っていく慶一君の後姿を見つめながら私も内心は物凄く悔しい気持ちで一杯だった。

けれどこれ以上騒ぐ事は慶一君にとってもよくないことになるかもしれないと思い、私は八坂さん達をあえて制したのだった。

落ち込みながら屋上を後にする八坂さん達を見送りつつ私はこっそりみゆきさんに小声で声をかけたのだった。

『みゆきさん、ちょっといい？』

私のその言葉に気付き、振り向くみゆきさんに

「ねえ、みゆきさん。さっきのやり取りを見てどう思った？」

そう言うと、みゆきさんも少し考え込む仕草をしてから

「最初に話を聞いた時には驚きました。実際にこの目で見るまでは信用できなかったのですが・・・でも実際に目の当たりにした時、私は何か不自然さを感じましたね・・・」

みゆきさんのその言葉に私はみゆきさんも見るべき所をちゃんと見ていたのだと思い

「やっぱりみゆきさんにもそう感じたんだね?私もそうだよ。慶一君、明らかに無理してるのが見て取れた。」

その私の言葉にみゆきさんも頷きながら

「そう思えた点がいくつかあります。まず1つ目ですが、慶一さんの表情です。確かに恋人ができたという事で私達に対する罪悪感があるとは思いますが、それでも好きな人と恋仲になれた人は罪悪感は感じていても表情には嬉しさも見え隠れしてもおかしくないとおもいます。ですが、慶一さんにはそんな嬉しさの部分を感じる事ができませんでした。ただただ辛いだけ、そう思えたのが1つ目です。」

一旦言葉を切り、みゆきさんは一つ深呼吸をしてから言葉を続ける

「そして2つ目ですが、突然に恋人になったとしても、そのいきさつを話せないということはないはずだという事ですね。あの時の慶一さんは明らかにその事を話せないという態度でした。隠し事をする理由はないはずなのに、です。そして最後に、先程言った隠し事という事なのですが、慶一さんは私達に話せない何かを隠している

ように見えました。慶一さんにはそれを言葉にできない理由があるように思えます。」

みゆきさんの言葉を聞いて私もそこの点に引っ掛かりを覚えていたので

「さすがはみゆきさんだね。私もその部分が妙だと思ってたんだよね。それで私はいくつかの仮説を立ててみたんだけど、今からそれを話すよ。」

一呼吸置いて私はみゆきさんに話し始めた。

「まず第1に慶一君と織部さんの関係についてだけど、どうもこの関係は自然じゃない。さっきの態度を見るにつけ、おそらくだけど無理やり付き合わされた感があるね。そして第2に私達に隠してる事、だけどこれは慶一君が何らかの弱みを握られた可能性があるね。その弱みにつけこまれ、脅迫っぽい事をされたんじゃないかな?と思ってる。そしてそれはおそらくだけど・・・・・・」

私の言葉をみゆきさんがさらに補足する。

「私達に何らかの実害が出るかもしれない可能性があって、話してしまえば私達に迷惑をかけてしまうかもしれない、そういう事なのかもしれませんね・・・それを心配したからこそ慶一さんは私達に話す事ができなかったのではないでしょうか・・・?」

みゆきさんの言葉に私は大きく頷いて

「おそらくはみゆきさんの言う通りじゃないかな?って思ってる。そうなると次は、私達にも慶一君にも実害になりそうな可能性の摸

索がいるねー・・・何にしても今この場だけじゃ思いつかないから放課後までに考えようよ、みゆきさん。そろそろ授業も始まるしね。」

私のその言葉にみゆきさんも頷いて

「そうですね。私もその可能性について考えてみようと思います。放課後までに纏まるようでしたらその時にまたお話しましょう。」

みゆきさんの答えに私も頷きで返しながら

「そうだね。それじゃとりあえず授業に戻ろう。・・・みゆきさん、ひょっとしたら今慶一君を助けられるのは私達かもしれないよ？だから、がんばってみよう。」

私の言葉にみゆきさんも頷いて

「そうですね。そのためにも頑張りましょう。慶一さんのあんな辛い顔を見てはいられませんから・・・慶一さんは明るく笑ってるほうがいいんですから・・・」

みゆきさんの言葉に私は大きく頷いて

「うん。そうだね。優しく笑う慶一君の顔が好きだから、私も頑張るよ。慶一君にあんな顔させるあの子を私は許さないからね。取り戻そう、慶一君をさ。」

私の決意にみゆきさんも笑って「はい！」と応えてくれたのを確認して私達は教室へと帰っていくのだった。

慶一ｓｉｄｅ

つかさやこなた、みゆき、こう、やまとと顔を合わせ、その皆すら本位ではない拒絶をして俺は織部さんと教室へと帰っていった。

教室の前で別れ、俺は自分の教室へと入る。

そしてふと視線を巡らせた時かがみ達の姿が目に入った。

かがみ達も俺に一瞬気付いたようだったが、すぐに俺から視線をそらして俺の方を見ないようにしていた。

そんなかがみ達を見たとき、俺は3人にあげたプレゼントのペンダントやカチューシャが外されているのを目の当たりにすると、その途端に物凄く辛い気持ちになった。

結局俺は休み時間になるたび、その辛さから逃げるように教室から離れたのだった。

こなたｓｉｄｅ

みゆきさんと2人で屋上で話をしてから私は授業中も慶一君が弱みを握られるとしたらどういう条件があるか、そしてその影響を及ぼす要因はなんなのかを考え続けていた。

みゆきさんも同じだったようで私は授業中に注意を受ける珍しいみゆきさんの姿を見たのだった。

そして私も同じようにノートに慶一君の一件に関する解決策を色々書き込んで摸索していた時不意に私の頭上に拳骨が降ってきて

「泉～?今は世界史の授業中やぞ?何の落書きしとるんやお前は!」

私は黒井先生に注意されつつ、拳骨を貰った頭をさすりながら

「す、すみませんでした。以後気をつけます。」

と一応体裁を取り繕いつつ、再び考えに没頭し始めた。

そして放課後、つかさはかがみを気遣って先に帰ったのを見て私はみゆきさんに声をかけた。

「さて、放課後になったわけだけど・・・みゆきさん、さっきの事に関する答えはでたかな?」

そうみゆきさんに訪ねるとみゆきさんも頷きながら

「はい。あれから色々と私の知っている情報を改めて洗い直してみたときに慶一さんが弱みを握られる要因とそれに関係する人物の名前に行き着きました。」

みゆきさんの答えに私は頷きつつ

「へえ?それは奇遇だねえ。私も色々と摸索してみたけどみゆきさんの言う要因と人物の目星がついたとこだよ。」

私のその答えにみゆきさんはにっこりと笑って頷きながら

「それでは泉さんの意見を聞かせてください。」

そう私に促すみゆきさんに私も頷いて

「うん。それじゃまずは要因についてだけど、これはおそらく私達だね。その理由としては慶一君は私達の事を大事に思っているから私達に何らかの危害が加えられる事を恐れているって思うんだよね。だから、私達に実害を及ぼす要因を突きつけられたとき、慶一君は私達を守るために下手な真似ができなくなったんじゃないかな？って思うよ。」

その私の答えにみゆきさんも満足げに頷きながら

「そのとおりです。そして、これは私の意見なのですが、織部さんは私達に実害を及ぼせる相手の名前を知っていたのではないでしょうか？そして、その人物の名前を出す事で慶一さんが私達に危害を加えられる危険性を認識させられ、織部さんと付き合うことを拒めないようにした、というところでしょうか。」

そのみゆきさんの考えに私も大きく頷いて

「うん。そこらへんは私も行き着いた結論だよ。そして、その要因になった人物の名前だけど、１人だけ心当たりがあったよ。」

その言葉にみゆきさんも私を見て

「私もその人物の名前に行き着きました。それじゃ泉さん。２人同時にその人の名前をあげてみませんか？」

そう促すみゆきさんに私も頷いて

「いいよ？それじゃ言ってみようか。・・・せーの！」

そして2人同時に出た名前は「「成神章」」だった。

それを確認しあって私達2人は笑みをもらし、そして

「あはは。さすがだよ、みゆきさん。さて、これで慶一君が脅迫される要因と人物に行きついたわけだけど、これからの事考えないといけないね。」

その言葉にみゆきさんも頷いて

「そうですね。私達の推測はそこに行き着きましたが、実際の所は慶一さんに確認を取って私達の推測が正しいのかどうかを明確にしないといけませんね・・・」

みゆきさんは少し困惑したような表情で私にそう言ってきた。

「みゆきさん、その確認についてなんだけどさ。みゆきさんに頼む事できないかな?というかみゆきさんじゃないとできないかもしれない。」

そう私が言うとみゆきさんは少し首を傾げながら

「私じゃないと、ですか?それは一体どういう事なんですか?」

みゆきさんの困惑したような顔を見ながら私は

「みゆきさんは前に私に慶一君の事で相談してきた事あったの覚えてるよね?」

「はい。慶一さんと一緒にみなみちゃんのプレゼントを選びに行っ

た帰りに氷室さん達と会い、慶一さんの過去に触れました。その時に泉さんに相談を持ちかけたんでしたね。」
「うん。そうだよ。そして私もその事に関しては知っていたけど、あの時慶一君と一緒に居たのはみゆきさんだけだったよね？」
私がその事を指摘するとみゆきさんはピンと来たようで
「なるほど・・・泉さん達は本来は知らない事になっている成神章さんの事を私はあの時に慶一さんの側で聞きました。つまり事情を知っている私なら・・・」
みゆきさんの言葉に私は頷いて
「そう。唯一一緒にいたみゆきさんなら慶一君は事情を話してくれるかもしれない。だからみゆきさん。なんとか慶一君と接触を取って慶一君に話しを聞いてきてもらえないかな。」
その私の言葉にみゆきさんも力強く頷いて
「分かりました。慶一さんへの接触は私がなんとかやってみます。それで、泉さんは事の詳細がはっきりしたらどうされるつもりなんですか？」
そのみゆきさんの問いに私は
「慶一君の事情がはっきりし次第私も牧村君に連絡をとって事情の裏付けを取るつもりだよ。そしてその後はその後の展開次第だね。」
私の答えにみゆきさんは少し考え込みながら

「・・・なるほど、分かりました。とにかくまずは慶一さんとの接触、そして事情の確認、ですね。」

改めて確認を取ってくるみゆきさんに私も頷いて

「うん。織部さんの監視も考えられない事もないから接触の際には十分注意してね。それと、結局大変な役目を押し付ける事になっちゃったね。私が知っていたら私が行ったんだけどさ。事情を知らない事になってるからね。」

自嘲の笑みを浮かべながらみゆきさんにそう言うとみゆきさんは首をフルフルと振って

「いえ、これも慶一さんを取り戻す為ですし、私の出来ることなら頑張ってみたいですから。だから泉さんも泉さんのできる事をお願いしますね。」

みゆきさんのその言葉に私も力強い頷きで応え

「わかってる。とにかく慶一君の方、お願いするよ。頑張って？みゆきさん。」

私の激励にみゆきさんも力強い頷きで返しながら

「はい、お互いにがんばりましょう。私達で慶一さんを・・・取り戻します！」

そうお互いに覚悟をしてから私達は行動を開始する事となった。

（慶一君。私達が君のためにきっとこの状況を乗り切るきっかけを

作ってみせるから、だから、待っててね？）

私はそう心に誓いを立てたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

結局その日一日もまともに過ごせず、織部さんに振り回され俺は心も体もくたくたになりながら家へと戻ってきた。

極度に疲れていた事もあってか俺は自分に何時の間にか自分の動向を見張る物がいる事に気付かなかった。

そして、知らないうちに俺の家の場所を知られ、織部さんは俺の家へと訪れるようになった。

未だにこの現状の打開策を見出せないまま2日が過ぎていった。

氷室の調査の結果が出るまであと3日、俺は色々な事と戦わなければならなかった。

そして俺は残り3日の1日目にある決断をしてもう一つ新しく買った携帯からみゆきの携帯へと電話をかけることを試みた。

この電話にみゆきが出てくれる事を祈りながら・・・・・

揺らぐ旋律第3話～大切な人を取り戻す為に～（後書き）

ついに事態の打開に動き出す慶一と慶一を救おうとするこなた達。
みゆきの慶一との接触は成功するのか、そして再び旋律は音楽を奏でる事ができるのか、次回もお楽しみに！

揺らぐ旋律第4話～真実の告白、動き出す旋律達～

みゆきｓｉｄｅ

泉さんと共に慶一さんが今の状況になったいきさつを推測し、慶一さんを助ける為になんとか慶一さんと接触する事を試みようとしてきましたがそのタイミングを掴めないまま2日が経過してしまいました。

その間も慶一さんと織部さんは私達に見せ付けるかのよう仲の良さそうな所をアピールし、その度に笑顔の失われていく慶一さんの姿を見るたび私達は心が締め付けられるようでした。

そして3日目の土曜日、この日も慶一さんとうまく接触する事ができなかった私は、何かいい方法がないだろうかと頭を悩ませていました。

そうして悩んでいた時、不意に私の携帯が着信を告げました。

私は電話の主を確認するため携帯のディスプレイを見てみるとそこには知らない電話番号が表示されていました。

知らない人からの電話だし出なくてもいいだろう、一瞬そう頭で考えたのですが、何故か私はその電話に妙な予感めいたものを感じて慌ててその電話に出ました。

「もしもし?どなたでしょうか?私は高良みゆきといいますが、かけ間違えという事はありませんよね?」

念のため電話してきた人に確認するようにそう言うとそこから返って来た声は私のよく知る人の、大切な人の声でした。

「・・・よかった・・・出てくれて。俺だ、みゆき、慶一だ。しばらくだな。」

その声に私は慌てながら

「その声・・・慶一さんなんですね!?本当に・・・しばらくぶりですね・・・ですが、この電話番号は一体どうしたのですか?」

そう訪ねると慶一さんは少し疲れたような声で

「元の携帯は織部さんに監視されているんだ。だから、お前への連絡に元の携帯は使えない。だから新しい携帯を購入した。今お前が見てる番号は新しい方なのさ。」

という慶一さんの説明で合点がいった私は慶一さんに電話の用件を聞いてみる事にしました。

「ところで慶一さん。今回は一体何の御用で私に電話を下さったのですか?」

その問いかけに慶一さんはしばらくの間無言でいましたが、やがて

「俺の今の状況をみゆきも知っているよな?そして俺はみんなを拒絶した。今の俺に何かを話す権利もないだろうという事は十分わかっている。だが、お前にだけは伝えたい事があるんだ。もしもまだ、俺の話を聞いてくれるというのなら会って話すことはできないか?」

私はその慶一さんの言葉を聞いてこれはチャンスだと思い

「わかりました。私も慶一さんとはお話したい事がありましたので。それで、どちらで待ち合わせますか？」

慶一さんに待ち合わせの希望を聞くと

「今日の夕方6時頃、場所は龍神道場で、俺はなんとか監視の目を欺いてそっちへ向かう。だからみゆきもその時間までには道場へと行っていてくれ。親父には話を通しておく、だからそっちは心配しなくていい。」

待ち合わせの時間と場所を伝えてきましたが、私は慶一さんから聞いた監視という言葉にうすら寒いものを覚えながらも

「龍神道場、ですね？わかりました。それと先程気になる言葉をおっしゃっていましたよね？監視、とか。」

私の問いに慶一さんは大きなため息をついて

「そうだ。織部さんは俺も気付かぬうちに何時の間にか俺への監視のための人間を雇っていたようなんだ。それで自宅の場所も知られてしまった。それからは織部さんは俺の家へと押しかけてくるようになったんだ。だから俺が自由に外に出るためには監視の目を欺く必要がある。そっちの方は何とかするつもりだから心配はいらない。みゆきは道場へ向かってくれ。」

慶一さんの現状を改めて考えるうちに私は怒りや悲しみが湧き上がってくるのを感じながらも

「・・・わかりました。くれぐれもお気をつけて・・・お会いできる事を祈っています。」

そう私が返事をすると慶一さんもどこかほっとしたように息をつき

「ああ。それじゃ俺はこれから監視対策を取るからその後にそっちへ向かう。向かう際にはまたこの携帯で連絡を入れるから。」

「はい。それではまた。」

私もそれに短く答えて電話を終えたのでした。

慶一ｓｉｄｅ

一縷の望みを託して思い切ってみゆきにかけた電話は俺の祈りが通じたのか上手くみゆきへと繋がってくれた。

俺はみゆきと用件についてのやり取りを終えるとさっそく氷室に自分の監視のかく乱の策を取る為連絡を入れるのだった。

数回のコールの後氷室が電話に出た。

「もしもし、氷室か？俺だ。」

「おや？慶一君かい？折角電話してくれた所悪いけど、まだ調査はすんでないから君に結果を伝える事はできないよ？」

「いや、今回は調査結果を聞くために電話したわけじゃないんだ。それ以外に一つ頼みがある。」

「ほう？今回はどんな事だい？」

「俺と背格好や体つきの似てる人間がいたら俺の家によこして欲しいんだ。」

「君と背格好が似てる人間ね・・・でもなぜ人がいるんだい？」

「俺が成神と関係のあるかもしれない女と付き合わされてる事は知ってるよな?そいつが事もあろうに俺に動向の監視までつけてきてな・・・俺はみゆきにだけは真実を伝えたいから先程みゆきに電話して何とか連絡を取る事ができた。だが、俺がみゆきに会う為に出かけるには監視の目が邪魔になる。だから俺と背格好の似ている奴をおとりにして家を出たいと思ってな。どうだ?なんとかなりそうか?」

「なるほど、その子はそこまで君を縛り付けたいとみえる・・・分かった。とりあえず今の君の身長や体重、体型、髪型などを教えてくれるかい?それに近い人間を送るから。後はそっちで上手くやってくれればいいよ。」

「ああ、ありがとう。恩に着るよ。それじゃ送る人間が決まったら俺にそいつの名前を教えてくれ。」

「分かったよ。その折にはもう一度連絡をいれよう。それじゃ後ほど。」

「すまないな。」

そう言って氷室とのやり取りを終えた俺はおとりに着せる服を選び始めたのだった。

程なくして氷室からおとりになる人間の名前とその人間をこちらに送った旨の連絡をくれたので、俺はそいつが来るまで自宅でじっとしていた。

1時間後くらいにそいつは俺の家にやってきた。

「こんにちはっす。氷室さんから言われてきました。森村さんっすね?おとり役、任せてください。」

「わざわざ呼びつけてすまないな。それじゃ早速俺の部屋に来てくれ、変装用の俺の服を選んでおいたからそれに着替えて欲しい。」

「わかりましたっす。それにしても・・・居ますね、監視の奴・・・女の愛情もここまで来たら異常ですよねえ・・・」
「そうかもしれないな・・・ともかく時間差で家を出よう、監視のひきつけは頼む。それを確認したら俺は裏口から出て行くから。」
「了解です。」

そんなやり取りの後俺の姿をしたおとりは正面玄関から家を出るとそれを俺と勘違いした監視を上手い事別方向へと引っ張っていってくれた。

俺はそれを確認するとそっと裏口から家を出る。そして素早く自転車を準備すると全力に近いスピードで駅に向かって自転車を飛ばした。

尾行がいない事を注意深く確認した後俺は電車へと乗り込んで実家へと向かったのだった。

みゆきｓｉｄｅ

慶一さんとの電話のやり取りの後、私は慶一さんとの待ち合わせ場所と時間を再確認して出かける用意をすると頃合の時間を見計らい、家を出ました。

「・・・こんにちは・・・みゆきさん。大分慌てているみたいですが何かありましたか・・・？」

家の門の所で不意に私に声をかけられ私は驚いてそっちを見るとそこにはチェリーちゃんを散歩させて丁度帰って来た所だったみなみちゃんが立っていました。

私はみなみちゃんに挨拶を返しつつ理由を話したのでした。

「こんにちは、みなみちゃん。これから私は慶一さんに会わなければならないんです。」

その私の言葉にみなみちゃんは何かを察したらしく

「・・・先輩、どうかしたんですか・・・？いつもならみゆきさんも先輩と会う時はそんな怖い顔をしないはずですよね・・・？」

みなみちゃんのその言葉に私はどうするべきか悩みましたが、とりあえずありのままを話す事にしました。

「実は今、慶一さんの周りで慶一さんにとってもよくない事が起きています。そのせいで慶一さんは私達と普通に会う事もままならなくなっているんです。その最中に私と会うきっかけを作ってくれました。私は慶一さんを救う為にも話を聞きにいかなければならないんです。」

私の言葉にみなみちゃんの表情に驚きの感情が見えました。

「・・・先輩、困っているんですか・・・？私も・・・私も先輩の力にはなれないでしょうか・・・？」

少し悲しげな表情でみなみちゃんは私に言いますが、私はそんなみなみちゃんの言葉に首を振り

「今は、みなみちゃんに出来る事はありません。残念ですが・・・いえ・・・一つだけありましたね・・・みなみちゃん。慶一さんの事は私と泉さんがなんとかしてみせます。みなみちゃんは・・・慶

一さんの無事を祈っていてあげてください。全てが済んだら、みなみちゃんにもちゃんと説明しますから。だから今は私達を、慶一さんを信じて待っていてください。」

私の決意の言葉にみなみちゃんは少し考え込んでいましたが、ふっと顔を上げて私の目を見つめると

「・・・わかりました・・・みゆきさん。頑張ってください・・・全てが上手く行く事を・・・祈ってますから・・・」

みなみちゃんの言葉に力強く頷いて、私は龍神道場を目指して走り出したのでした。

やまとｓｉｄｅ

あの時から・・・先輩が織部さんと付き合っている、そして私達の前から消えようとしたのを見た時から私とこうはずっとその事を信じたくなくて落ち込んでいた。

こうと2人、いつもなら楽しい会話をしながら学校から帰っていたけれど、ここ最近はこうと話す事すらも辛くなっていたから一緒には帰っていたけどここ何日かはほとんど会話らしい会話をしなかった。

今日もまた、打ちひしがれながら家へとこうと2人で帰っていたが私はその帰り道に思いつめた表情で走って先輩の家の方向へ行く高良先輩を見かけた。

私がこうに声をかけようとこうの方を向こうとした時、こうも高良先輩に気付いたようで私が声をかけるより先に私に

「ねえ、やまと。あれって高良先輩だよね？どうしたんだろう？あんなに慌てて。それにあの方向って確か・・・」

こうの指摘に私も頷きながら

「ええ。あの方向は慶一先輩の実家のある方向よね？・・・こう、私なんだか気になるわ。高良先輩の後を追ってみない？」

私の提案にこうも”にっ”といたずらっぽい笑みを浮かべると

「そうだね。ちょっと後つけてみようか。行こう、やまと。」

こうの言葉に私も頷いて私達は高良先輩に気付かれないように後を追っていった。

そして私達が思った通り、高良先輩は慶一先輩の実家へと辿り着き先輩の家へと入っていくのを見た私達は

「ねえ、やまと。どうする？高良先輩、慶一先輩の家に入っていったよ？」

「・・・そうね・・・高良先輩の行動が気にはなるけど・・・どうしよう・・・」

私達が2人してこの先をどうするべきか悩んでいた時、高良先輩が来た方向とは反対から今ここに居るはずのない人が走ってくるのが見えたのだった。

私達はそれに驚いて

「や、やまと、あれって慶一先輩じゃないの？」
「そんな・・・どうして先輩が・・・まさか高良先輩が慶一先輩の家に来た目的って先輩と会う為、だったの？」
その私の言葉にこうは困惑しつつ
「でも、おかしいよね？慶一先輩は織部先輩と付き合っているはず・・・私達の事を見限ったのなら、高良先輩と会う理由もないはずだよね？」
そう聞いてくるこうに私も頷きつつ
「そうね・・・あの時確かに先輩は確かに＜悪いけど、もう口出しはしてこないで欲しい＞と言っていたわ・・・。それなのにどうして今になって慶一先輩は高良先輩と会おうとしてるのかしら・・・？」
首を傾げつつそう言う私の言葉を聞きながらこうは慶一先輩の家の方をじっと見ながら
「・・・やまと、行こうよ。こうなったら真実が知りたい。先輩の家に来た理由なんてどうとでもでっち上げて乗り込もうよ。」
こうのその言葉に私もこうと同じ気持ちになって
「ええ。いきましょう。このままじゃ納得なんてできないから、少しでも何かが得られるのなら私も行くわ。」
2人して頷きあって私達は先輩の家へと走り出した。

慶一ｓｉｄｅ

氷室に用意してもらったおとりのおかげで俺はなんとか監視の目を欺いてみゆきの待つ実家へと向かう事が出来た。

多少のてこずりもあったがために時間に少し遅れた俺だったが、実家の最寄駅につくと俺はみゆきに再度連絡をとるのだった。

「もしもし？慶一さんですか？私は今待ち合わせの道場にいます。慶一さんはもうすぐこちらへ到着するのですか？」

「ああ。すまない、少し手間取ったおかげで待たす事になったな。俺ももう少しでつくから、みゆきはそのまま道場内で待っていてくれ。」

「わかりました。気をつけてこちらへいらしてください。待っていますから。」

「ああ、それじゃ後でな。」

「はい。それでは」

みゆきとのやり取りを終え、携帯をしまいながら俺は実家へと急いだ。

程なくして実家に辿り着くと俺はみゆきの待つ道場へと向かった。

その時にもう2人の来客を知らないまま俺は道場へと上がるとそこには俺の顔をじっと見つめるみゆきが立っていたのだった。

「・・・みゆき、ありがとう・・・来てくれて・・・。」

俺はぎこちない笑顔でみゆきにそう言うとみゆきはそんな俺を見て悲しそうな顔をしながら

「慶一さん・・・すっかりあの頃の笑顔が消えてしまっていますね・・・今のあなたが見せてくれた笑顔は私が見たくなかった笑顔です・・・。」

そんなみゆきの言葉に俺は力なく笑いながら

「あれから俺は・・・以前のように笑う事もできなくなっている・・・みんなを裏切った自責の念と織部さんと付き合う事の苦痛が俺から自然に笑うという行為を奪ってしまったようだ・・・。」

俺は目を伏せてしばらく考えこんだ後スッと目を開き

「みゆき、電話でも言ったと思うが、俺はお前にだけは真実を告げておきたいと思った。お前だけが唯一あの時に俺の過去に触れた人間だからだ。聞いてくれるな？みゆき。」

俺はみゆきにそう言うとみゆきも黙って頷いてくれた。

みゆきｓｉｄｅ

慶一さんの言葉を私は黙って聞いていました。

私自身、慶一さんに聞きたい事もあったのですが、今は慶一さんの話を優先させるべきと考え、慶一さんの告げる真実を聞き逃さないようにその一言一言に神経を集中させる私でした。

やがて慶一さんは一呼吸置いてからゆっくりと話し始めたのでした。

「俺は、織部さんからの交際の申し込みを断りに屋上へと出向いた。

そして交際の申し込みを断った俺は屋上を後にしようとしたが、その際に彼女は俺にみゆき以外に知っているはずのない人間の名前を俺に言ってきた。みゆきも知っているだろう？”成神章”だ・・・。」

私は黙って頷き、そして一呼吸置いてさらに慶一さんは言葉を続けて

「彼女は俺が奴との因縁のある男である事を知っていた。そして、成神という男がどういう人間なのかもな。その上で彼女は俺に自分と付き合え、と迫ってきた。俺はうろたえていたのだが、さらにそこにだめ押しの言葉を乗せて来て自分と付き合わなければ俺の仲間達が不幸になる、と脅しをかけてきた。」

（やはり、私達の推測どおりでしたか・・・）

そう心の中で思いつつ、次の慶一さんの言葉を待つ。

「その時の俺には彼女の出した名前、そしてその関係が真実であるかどうかの確証も持てず、かといってそれを無視する事も出来なかった俺は仕方なく彼女の申し出を受け入れた。万が一、それを懸念した結果だ。そしてこの事を他の皆にばらせば成神と連絡をとる、そうなった時の皆の安全は保証できない、そう言ってきた。」

（皆さんや私を盾に取った脅迫、でしたか・・・なんて卑劣な・・・）

私は心の中で怒りを覚えつつも次の慶一さんの言葉に耳を傾けた。

「だから、かがみたちが保健室に乗り込んで来た時も、屋上でこうたちに説得されても何も言えなかった。言えばみんなに迷惑がかか

る。それに知ってる者が少なければ皆にも余計な気遣いをさせずに済む。この事は俺の胸の中にだけ仕舞い込めばいい、そう考えた。俺一人が辛い思いをする事でみんなを守れるならそれでいいと思った。」

私は慶一さんの言葉を聞いて心の中を悲しみで一杯にしながら

「だから、私達に何も話さなかったのですね？私達を大切に思ってくれたから・・・」

私のその言葉に慶一さんは黙って頷いた。

その慶一さんの姿を見ながら私は、慶一さんに確認すべき事を聞く為に慶一さんに質問を投げかけたのだった。

「慶一さんのお話はわかりました。私から慶一さんに確認をとりたい事があります。よろしいでしょうか？」

私のその言葉に頷く慶一さん。

私はいくつかの確認事項を慶一さんになげかけて、簡単なやり取りを始めたのでした。

「それでは質問させてもらいますね？まず、織部さんとお付き合いする事になった事ですが、これは慶一さんの本意ではない、と言うことですね？」

「ああ、その通りだ。皆に危害が及ぶ事を恐れた俺の苦渋の決断だった。」

「わかりました。次に、ですが、慶一さんは私達を拒絶したわけではないのですね？」

「それは、俺がここに来ている事を考えてくれれば分かってくれると思う。」
「・・・次に、ですが、何故今私と接触を持とうとされたのですか？」
「俺の事情を知るお前に真実を告げたいという事と共に、聞いてもらいたかったんだと思う・・・俺の懺悔を・・・そして今の状況の打開に繋がる何かを得たかったんだと思う・・・。」
「・・・最後にお聞きします。今回の事に関してなにかしら慶一さんの方でこの事態を打開する為の行動はとられましたか？」
「ああ。織部さんに付き合うと言ったあの日に即座に氷室に彼女の身辺調査を依頼した。結果は後2日で出るはずだ。それまでは、俺もどうする事もできないが・・・」
「わかりました。ありがとうございます。それを聞けて安心しました。」

私は改めて慶一さんは今でも私達の側の人間なのだという事理解しました。

と同時にこれまでの慶一さんのご苦労を考えた時私は自然に慶一さんの側に行き、気付けば涙を流しながら慶一さんを優しく抱きしめていました。

慶一ｓｉｄｅ

みゆきからに俺の真実と懺悔を聞いてもらった後、みゆきからいくつかの質問を受けることとなり俺はとりあえずその全てに答えたのだった。

そして質疑応答を終えた後、みゆきは俺のほうへと近づいてきて俺を優しく抱きしめてくれた。

その抱擁とみゆきの体温を感じた時俺は気付いたら滂沱のように涙を流していた。

「つらかったでしょう・・・苦しかったでしょう・・・あなたは、私達の為にがんばってくださいました。今私達があなたに出来ることがない事が悔しいです、悲しいです。今の私にはこうしてあなたを抱きしめる事しかできませんが、少しでも・・・少しでもいいですからあなたのその辛い心を分けてください。大丈夫です・・・きっとなんとかなりますから・・・だから・・・まだ辛い事が続くかもしれませんが、もう少しだけ頑張ってください、慶一さん・・・」

俺はみゆきの優しさとぬくもりに打たれながらしばらくの間涙を流しつづけていた。

そして気がつくと俺とみゆきを抱きしめて泣いている2人の後輩の姿が目に入ったのだった。

少し落ちつきを取り戻した俺とみゆきは驚きながら

「こ、こう、やまと、お前ら一体どこから・・・」

「八坂さん、永森さん、あなたたち、どうして・・・」

その俺たちの言葉にただただ涙を流している二人だった。

やまとｓｉｄｅ

先輩のお父さんから許可を貰って私達は先輩達が行った方へとこっそりと近づいて物陰から2人の様子を伺っていた。

やがて先輩達が語る驚愕の真実を耳にしてそして、高良先輩が慶一先輩を抱きしめた時慶一先輩の目から涙が溢れ出したのを見た私達は気付いた時には私達も涙を流しながら2人に抱きついていた。

少し落ち着いた先輩達が私達がここに居る事に驚きを隠せないでいたが、私達はそれすらおかまいなしでしばらく先輩達に抱きついたままになっていた。

そして、私達も少し落ち着いた頃先輩に事情を説明したのだった。

慶一ｓｉｄｅ

突然に現れたこうとやまとに驚いていた事もあったが、問題は俺たちの話を2人に聞かれた事だった。

俺は少し落ち着いた2人に

「お前ら、どうしてここに居たんだ?俺がみゆきと会う事は誰にも伝わっていないはずなんだが・・・」

俺が理由の説明を求めると2人はばつの悪そうな顔で

「実は私達が2人で家に帰ろうと歩いていたんですがその時に慶一先輩の家に走っていく高良先輩を見かけたんです。その後に慶一先輩が来るのを見かけてそれで・・・」

「あんな事があってから2人が接触するのはおかしいと感じたから私達は真実が知りたくなってここに来たのよ・・・」

2人の説明にみゆきも軽いため息をつきながら

「慶一さんとの事に頭を一杯にしていたせいで気付けなかったんですね・・・こういう時こそ慎重にならないといけないはずなのに・・・私はまだまだですね・・・」

と自分の不覚を反省していた。

2人は俺の方に向き直り真剣な顔で

「先輩、悪いと思いましたが話を聞かせていただきました。成神章、でしたっけ?そいつが絡んでる事で今回こんな事になってたんですね・・・でも、よかったです。先輩は私達を見捨てたんじゃないってわかって・・・」

「もっと、先輩をよく見るべきだったわね・・・私は先輩の親友なのにその先輩の苦しみにも、私達を思う気持ちにも気付いてあげられなかった・・・ごめんなさい先輩・・・」

その2人の言葉に俺は嬉しく思いながらも

「本当はお前らには知られたくなかった。もちろんこなた達にもなんだがな・・・知れば皆に気を使わせる。俺はそれが嫌だったから今回の事も俺の胸一つに閉じ込めようとした。けど知られてしまった以上はお前らも巻き込む事になるかもしれない。すまない、こんな情けない先輩で・・・」

そう2人に詫びると2人は力強く首を振り

「そんな事はないですよ先輩。例え何があっても先輩が私達の側にいてくれるなら私達も先輩と共に立ち向かいますよ。ねえ、やまと?」

「そうよ?先輩。先輩の親友たる私達を見くびらないで欲しいわね。

この程度で壊れてしまう程私達の絆は弱くないわ。そして、真実を知った今、私達は先輩の力になりたい、そう思ってるから・・・」

2人のその言葉に俺は再び涙を流しながら

「ありがとう、2人とも。お前らがそうしてくれるように、俺も絶対にお前らを守ってみせる。今回の事も乗り切って見せるからだから、俺を信じていてくれ。」

俺のその言葉に力強く頷いてくれる2人だった。

そして俺たちはここで一旦別れ、それぞれの帰路につく。

再び監視付きの家に戻った俺に試練がまっていたが、俺はこの状況の打開を最後まであきらないと心に誓った。

そして残りの2日を俺は希望を持って過ごすのだった。

みゆきｓｉｄｅ

3人と別れ、私は家に戻りながら泉さんへと今回の接触の結果報告の為連絡を入れた。

「もしもし?泉さんですか?」

「あ、みゆきさん。どうしたの?」

「先程慶一さんと接触が取れました。慶一さんの口から真実といくつかの質問の答えも聞いてきました。今からそれをお話しますね・・・・と言う事です」

「なるほど、やっぱり私達の推測は間違ってなかったね。ありがとうみゆきさん。こっちもすぐに裏付けを取るために牧村君に連絡す

るよ。こっちも結果がわかり次第連絡するからね？みゆきさん、がんばろう。」
「はい！絶対に解決しましょう。慶一さんの為に・・・」
「うん。それじゃ」
「ではまた学校で」

泉さんとのやり取りを終えた私は問題解決に力を尽くす事を改めて心に誓うのでした。

やまとｓｉｄｅ

先輩達の話を聞き、真実を知った私達はこれから私達が出来る事はなんだろうか？と、こうと話をしていたのだった。

「それにしても卑怯な先輩だよね・・・私ああいうのは許せないな・・・学校であったらぶん殴っちゃおうか？」
「それはだめよ？こう。そうすれば慶一先輩に不利になるわ。私達が今先輩の為に出来る事は泉先輩もいったように知っていても知らないふりをする事だけ・・・悔しいけど今はそれしかないわ。調査結果が出るまでは辛いけど我慢するのよ？こう。」
「うー・・・いまいち納得できないけどそれしかないんだね？はあ・・・これからの先輩を見かけるのはさらに辛いけどこれも先輩の為、だよね？」
「そういう事よ・・・今は先輩の為にも・・・」

先輩のために私達は泉先輩の言ったとおりにする事を改めて決意したのだった。

こなたｓｉｄｅ

みゆきさんから慶一君の方に関する話が聞けたので私は牧村君に裏付け調査を頼む為牧村君の携帯に電話を入れた。

「もしもし？牧村君？私だよ、泉こなた。」
「おお？こなたちゃんか。あれから何か進展があったかい？」
「うん。その事なんだけどさ・・・・・って言うわけなんだよ。牧村君、この事に関する裏付け調査をお願いできる？」
「なるほどな・・・分かった。こっちは任せてくれ、２．３日で結果が出せると思う。分かり次第君に連絡するよ。」
「お願いね。牧村君、それじゃまた今度」
「ああ、それじゃね。」

牧村君との連絡を終えた私はかがみ達の誤解をどう解こうかと思案していたのだった。

いよいよ各所での動きが始まる。

果たして真実は何なのか、そして、旋律は再び一つになれるのか、俺達の決着へ向けての戦いは加速を始めたのだった。

揺らぐ旋律第４話～真実の告白、動き出す旋律達～（後書き）

ついに解決に向けて動き出す旋律達、調査の結果は果たしてどう出るのか、そしてかがみたちの誤解は解けるのか、もう一度皆で笑いあえるのか、次回もお楽しみに！！

揺らぐ旋律第5話～全ての決着、再び一つになる旋律～

真実の告白により今の慶一の状況と心境を把握した旋律達は慶一の力になる方法を探すべく奮闘を開始していた。

そしてさらに2日の時間が過ぎ、ついに調査結果がわかる時が来た。

俺には少なからずまだ味方がいてくれる、信じてくれる人がいてくれる。

その思いを力に変えて残りの日々を耐えてきた。

そしてようやく全てに決着をつける時が来たのだった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君の依頼している調査よりも1日早く私の方の調査結果が出た。

私は部屋でネトゲをしつつその一方で調査結果の事で頭を一杯にしながら部屋でのんびりと過ごしていたが、そこについに牧村君からの連絡が入った。

私は慌てて電話に出て、牧村君とのやりとりを始めたのだった。

「もしもし？こなたちゃんかい？お待ちかねの調査結果が出たよ。」

「本当！？それでどうだったの？」

「うん。彼女は成神との接点は持ってない。そして知り合いがいると言っていた事に関してだけど、その知り合いは確かに成神の事はしっていたが、連絡を取り合ったりする仲ではないと言う事だね。」

「と、いうと？」
「その知り合いも成神の評判、そして慶一が成神を倒したという噂を知っていて、その事を話していた時、その場に織部由美子がいたんだそうだ。そして、その時に成神が慶一に恨みを持っている事も聞いていたらしい。だが、その知り合いも成神を良く思っていないし連絡を取り合おうとも思っていない、むしろ係わりたくないとさえ思っているらしい。ということだ。」
「ふーむ・・・つまり織部さんの言ってた事はすべて・・・」
「そう、慶一を繋ぎ止めたいが為の出任せ、真っ赤な嘘って事だね。」
「・・・なるほどね・・・それじゃ、その事を突きつけたとして織部さんには慶一君の心配してる私達への実害というものもありえない、という話なんだね？」
「そうなるね。この事に関してよーく裏づけ調査を行ったから間違いないよ。」
「そっか、わかったよ。牧村君ありがとう。今度御礼に何か奢るからさー。」
「ははは。楽しみにしてるよ、けどこなたちゃん。今回はこうだったからいいけど、それでもまだ成神章の脅威が消えたわけじゃない。やつの影が消えない限りはまだ本当には安心できないかもしれない事を心にとどめておいてね。」
「・・・うん、わかったよ。これからも情報関連はよろしくね。」
「ああ。任せてくれ。慶一や君達の為にも協力は惜しまないつもりだからまた何かあれば連絡してくれ。」
「うん、わかった。それじゃ今日はこれでー。」
「慶一を頼むよ？こなたちゃん。」
「まかせたまへー。この問題、解決してみせるよ！」
そして私達のやり取りは終わったのだった。

事情の裏付けも取れたので私はみゆきさんにこの結果の報告をするため電話を入れた。

「もしもし？みゆきさん？」
「泉さんですか？今日はどんな御用でしょう？」
「実はさっきこっちの調査結果がでたんだよ。」
「！？それは本当ですか？それでどうだったんですか？」
「うん、それがね・・・・・・というわけなんだよ。」
「そうですか・・・織部さんの嘘、だったと言う事なんですね？ならば私達は慶一さんを疑う理由ももはやなくなりましたね。」
「私達はね・・・けど、まだかがみ達の誤解が解けてないんだよね。だからこっちは私がなんとかするよ。」
「わかりました。では私の方も八坂さん達にこの事を伝えます。泉さん、ようやく慶一さんを取り戻せそうですね。」
「うん。でも最後まで気は抜けないよ？そして・・・全てが終わったら笑って慶一君を迎えてあげよう。」
「はい。必ず・・・それではこれで。泉さん、また皆で笑い会う日々を楽しみにしています。」
「うん、私も。それじゃ私はかがみ達と連絡とるからこれで。」
「はい、それでは。」

みゆきさんとのやり取りを終えた後、私は早速かがみ達への連絡を取る事にしたのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんがあの日、織部さんと付き合っているという衝撃の告白を受けてから数日、私は未だあの時の事で頭を悩ませていた。

慶一くんから貰ったプレゼントのペンダントを見るたび楽しかった

思い出がよみがえり、私はその度にため息をつく日々が続いていた。

学校に行っても慶一くんの顔をまともに見れず、ふいに慶一くんと目が合ってもすぐさま目をそらしていたのだった。

明日もまた慶一くんとあってもそうなってしまうんだろうな、と今日も憂鬱な気分のまま部屋で天井を見上げながらぼんやりとしていた。

しばらくそうしていると私の携帯に着信が入る。

私は携帯を手に取り電話の主を確認した。

電話の主はこなただったので私は電話に出る。

「もしもし、こなた?」

「やふー、かがみん。元気してるかな?」

「・・・元気なわけないじゃない・・・あんな事があったのに・・・こなたは平気なの?あんな・・・あんな事・・・」

「あはは・・・その様子だと大分参ってるみたいだね・・・でもそんなかがみに朗報だよ。とりあえず全ての説明はみさきち達を集めてからするから、かがみはつかさを連れて神社まで出てきてくれる?」

「朗報・・・ね、まあ、どんな話かは分からないけどとりあえず行くわ。それじゃ、また後でね。」

「うん。それじゃ着いたらまた連絡するよ。」

そう言ってこなたとのやり取りを終えると、私はつかさの部屋につかさを呼びに行くのだった。

つかさの部屋の前に立ってノックをすると中から「どうぞ～？」と言う声が聞こえたので私はつかさに「入るわよ？」と一声告げてから部屋に入った。

「あれ？おねえちゃん。どうしたの？」

ふいの私の来訪の不思議そうな顔で聞いてくるつかさに私はこなたからの電話の事を言う。

「さっきこなたから電話があってなにやら私達に話したいことがあるみたいなのよ。つかさも連れてきてくれ、との事だから悪いけど一緒に来てくれる？」

こなたからの電話の事を伝えるとつかさは少し首を傾げていたが

「こなちゃんからか・・・何の用なのかな？とりあえずわかったよ。それでどうすればいい？」

そう聞き返してくるつかさに私は

「こっちに着いたらこなたから連絡入る事になってるわ。連絡が来たら神社へ出て行くという感じよ？」

その説明につかさも頷いて

「わかったよ、おねえちゃん。こなちゃんから電話が来たら教えて？」

と言うつかさに私も頷いて

「わかったわ。それじゃ後でね。」

と言う私の返事につかさも頷きを返してくれた。

そして私が部屋に戻ってしばらくして、こなたから神社に着いたという電話を受けて私とつかさは神社へと出向いていった。

神社に行くと、そこにはこなた以外に日下部と峰岸の姿もあった。

「あ、かがみん、こっちこっちー。」

私を見つけたこなたが私をそう呼んだので私はいつもの乗りで

「かがみんいうな!!ったく・・・それで、こなた。皆も集めて一体なんだっていうの?」

そうこなたに質問すると日下部と峰岸も

「そうだぜ?ちびっ子。私らをここに呼んで一体何しようってんだ?」

「泉ちゃん、何か話したいことあるって言ってたわよね?もしかしてその事なのかな?」

そしてつかさも何が何だか分からないという風で

「こなちゃん。何の話なの?」

そのつかさの言葉にこなたは満を持してと言う感じで私達に話を始めた。

「うん、皆に集まってもらったのは他でもない。慶一君の事に関してだよ？」

こなたから出たその言葉に私達は一斉に不快の色を示して

「・・・今更話す事なんてなにもないわ・・・行きましょ？つかさ・・・」

「・・・何かと思えばそんなくだらねー事かよ・・・わりいな・・・もうその事に関しては話したい事なんてねえぜ？」

「今更もう話しても仕方のない事じゃない？それに、話す気にもなれないわ・・・私も帰るわね？」

「・・・もう帰ってこない人の事を話してもどうにもならないんじゃないかな・・・？こなちゃん・・・」

その私達の態度を見てこなたはふっと真剣な顔になって

「・・・話の内容が、今回の慶一君の一件の真実だったとしても？」

こなたの真剣な言葉に話を切り上げて帰ろうとする私達も思わず足を止めてこなたの方に向き直り、そして

「・・・どういう事？真実って、ねえ？こなた。」

「どうやら真剣みてえだな・・・わかったよ。話くらいは聞いてやるぜ？」

「泉ちゃんは何かを知っているのね？わかったわ。話を聞かせて？」

「わたしも聞きたい！こなちゃん、話して？」

私達の言葉にこなたは満足げに頷くと私達を集めた事情を話し始めた。

「それじゃ話して進ぜよう。慶一君が織部さんに告白されて付き合うことになったあの時、慶一君はその告白を断れない事態になっていたんだよ。私が前にみんなに話した事が合ったよね？慶一君の過去に係わる因縁の人物”成神章”の事を。」

私達はこなたの言うその人物を教えられていたのでこなたのその説明に頷いてこなたの次の説明を待つ。

「織部さんはその時慶一君に、織部さんの知り合いには彼を知る人物がいる。そしてその人物に話して連絡を取る事ができる。彼に連絡されたら私達がどうなるかは保証しない、だからそうされたくなければ私と付き合え、っていう脅迫をされたんだよ。」

こなたのその言葉に私達全員が驚愕の表情に変わるのがわかった。

「そして、その時彼女に対して決定的な情報も持ち合わせていなかった慶一君は万が一を考えて私達に危害が及ぶ事のないように彼女に従うという苦渋の選択を取った。」

こなたの言葉にショックを受けつつも私達は黙ってこなたの次の言葉を待った。

「さらに彼女は私達にもこの事を話すことがないように、話せば私達がどうなるかは保証しないと言って慶一君の口を封じた。だからかがみ達が慶一君に問い詰めた時も、つかさたちが説得を試みた時も慶一君は本当の事をいえなかったんだよ。言えば私達に実害が及ぶかもしれない事を、慶一君は恐れたから・・・私達を大事に思ってくれたから・・・例え私達と一緒に居られなくなったとしても、私達全員から拒絶されたとしても・・・それでも慶一君はそれを1人で抱え込む事を決めたんだ・・・。自分の為じゃない・・・私達

の為に・・・私達を守るためだけに・・・」

最後の言葉を言い終えるこなたは気付いたら涙を流していた。

そして私達もその慶一君の苦しみと悲しみを思った時、全員が涙を流していたのだった。

「そんな・・・そんな事だったなんて・・・慶一くん、どんな思いで・・・それを私は・・・慶一くんごめん・・・わかってあげられなくてごめんね・・・」

「くそ・・・なんだよ・・・やっぱし慶一は慶一だったんじゃねーか・・・今はあいつ自身はここにはいねーけどあいつの心は私達の側にあったんじゃねーか・・・」

「慶ちゃん・・・やっぱりあなたは信じられる人だった・・・ごめんなさい・・・あなたを疑って・・・」

「けいちゃんかわいそう・・・でも、わたしたちを忘れていなかったんだね・・・けいちゃん・・・しんじてたよ・・・？」

そんな風に慶一くんを疑った事をひとしきり涙を流し、後悔して少し落ち着いてきた頃こなたは

「これが慶一君の真実。そして慶一君も黙っては彼女の言いなりにはなってなかった。慶一君自身も即座に彼女の身辺に関する情報収集を始めてたんだよ。そして私もみゆきさんが慶一君から真実を聞いてきてくれたおかげでこの一件に対する裏付け調査を行う事ができたんだよ。そしてその結果を今日私も知ったんだ。慶一君に対する誤解を解きたかったから、今かがみ達に教えに来たんだよ。」

こなたのその言葉に私達は

「そうだったんだ・・・ありがとうこなた。私達はこのまま慶一くんを失ってしまう所だったわ。それにしても・・・許せないわ・・・織部由美子・・・慶一くんの弱みに付け込むなんて・・・」

「ああ。最低な女だ・・・慶一を傷つけた罪と私らを惑わせた罪はきっちりと償ってもらわねーとな・・・明日あいつに文句でも言ってやっかな・・・？」

「ねえ泉ちゃん。私達が慶ちゃんに出来る事ってないの？私は慶ちゃんの力になりたい」

「わたしも。こなちゃん、わたしたちに何か出来ないのかな？」

私達のその言葉にこなたは腕組みをして少し考え込んでいたがやがて顔をあげて

「みんな。悔しい気持ち、織部さんを許せない気持ちはわかるよ？けど今の私達は慶一君とみゆきさんが知る情報を知らない事になってる。だから直接慶一君に対して力になる事はできないね、けど・・・」

こなたは自分の腕についている慶一くんから貰ったブレスレットを触りながら

「慶一君から貰ったこれをつけつづけて、私達は慶一君を信じている事をアピールして慶一君の力に変えてあげる。それが私達の出来る事かな。そして織部さんを許せない気持ちはあってもその事を騒ぎ立てれば慶一君の不利になりかねないから決着がつくまでは黙って見守る。無論、慶一君を信じてね。」

こなたの言葉にみんな考え込んでいたが私達は

「・・・わかったわ。今はそれが慶一くんの助けになるのなら・・・

私はこなたの言うとおりにする。そして、心で慶一くんと一緒に織部さんと戦う。」

「悔しいけど、それしか出来る事がねーなら私もやってやる。慶一と共に」

「私もやるわ。そして、慶ちゃんにまた私達の前に戻って来てもらいたいから・・・」

「わたしも、がんばるよ。心の中で一杯けいちゃんを応援する！」

私達の決意を聞いたこなたは満足そうに頷いてそして、私達は笑いあったのだった。

（頑張ってね、慶一くん・・・そしてもう一度・・・私達の前に戻ってきて・・・私達の心はあんたと共にあるからね・・・）

そう心の中で私は慶一くんに呼びかけたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなた達のやりとりがあったその翌日、氷室から調査結果が出たという報告の電話があった。

そしてその結果は彼女は成神とは連絡をとりあえる訳じゃない、そして知り合いもまた成神を嫌悪しているがゆえに連絡をとりあうなどしたくないと思っているのとの事だった。

それを確認した俺は、今日中に彼女との仲にけりをつける事を心に決めて学校に行く為に家をでた。

そして学校についていつものように少しだけ憂鬱な気分で教室に入った俺の目に飛び込んできたのは、俺があげたプレゼントを再び身

に付けてそして俺に向かって何かを決意するような目を向けてくる3人の顔だった。

俺はその3人の突然の行為に驚きつつも心の中に力がみなぎってくるのを感じていたのだった。

そして放課後、俺は織部由美子を屋上へと呼び出した。

しばらく待っていると、織部由美子は屋上へと現れた。

「私に改まって話ってなんなの?慶一君。」

俺は織部さんを見据えながら今こそ全てに決着をつける戦いを始めるのだった。

「話って言うのはね。今日をもって君との事はなかった事にしてもらいたい、そういう事さ。」

その俺の言葉に目を見開き驚いている織部さんだったが、睨みつけるような目になって

「どういう事?私は言ったはずよね?私の言う事を拒めばどうなるかを・・・」

彼女のその言葉に俺は軽いため息を一つついて

「ああ、そうすれば君は成神章に連絡を取る、そしてみんなの安全は保証できない、そういう事だったね?」

その俺の答えに織部さんはニヤリと笑いながら

「わかってるじゃない・・・ならどうして今更そういう事を言うのかしら?」

俺はそんな織部さんを睨みつけながら

「君が成神と連絡を取り合える人間じゃない事、そしてその知り合いもそれをしたくない事がわかったからだよ。」

その言葉に織部さんの顔色が明らかに青くなっていくのがわかった。

俺は更に言葉を続ける

「君は俺と付き合いたいが為、そして俺を無理やり繋ぎ止めたいが為にそんな嘘をついたんだろう?おっと、否定をしたとしても無駄だよ。すでに調べはついてるからね。」

織部さんの顔が明らかに悔しそうに歪み、涙をこぼし始めるのが見て取れた。

そして織部さんは俺にぽつりぽつりと語り始めた。

「・・・・・そうよ・・・あの日あなたに告白を断られた日、私はどうしてもあなたを手にいれたかった。あなたを本当に好きだったから・・・あなたは覚えていないかもしれないけれど、私はあなたと同じ中学の出身なのよ?そしてその時にあなたと成神の事を知り合いが話しているのを盗み聞きして知ったの。」

彼女は言葉を一端切り、一呼吸おいて再び話し始める

「その時から私はあなたに少なからず興味を持っていた。そして、あの体育際で見せたあの走りを見て私はあなたの事が好きになったのよ。だから・・・告白を断られた時とっさにその時の事を思い出してあなたに脅しをかけた・・・そうすればあなたは私の側にいてくれる、そう思ったから・・・」

そこまで話し終えた時突然彼女の後ろから声をかけてくる人がいた。

「だから・・・慶一さんにそんな嘘をついたのですね?慶一さんを自分の物にしておきたかったから・・・」

そう言いながら現れた人物は、みゆきだった。

織部さんは突然現れたみゆきに驚いて

「どうして、高良さんが・・・?」

彼女の言葉に俺はみゆきを見ながら

「みゆきも俺の過去に触れた事のある一人だからさ。彼女も成神章の事は知っていた。だから彼女には真実を話せたんだ。」

俺のその言葉にふっと俯いて彼女は肩を震わせながら更に言葉を続ける

「そう、だったのね・・・いいわ・・・話を続けるわね?その後は私はあなたに監視をつけるような真似もした。あなたの喜びそうな事も色々やってみた。けれど、あなたはそんな私に心を開いてくれる事はなかった。ずっとずっと辛い顔ばかりして・・・私はあなたの笑っている顔が好きだった。だから今はこんなでもいつかはあな

たに笑顔になってもらいたい、そう思ってた。だけど、ようやくわかったわ・・・あなたにあの笑顔をさせられるのは私じゃないって・・・私には・・・絶対に出来ないんだって・・・それが、とても悔しかった・・・・」

俺とみゆきは彼女の思いを黙って聞いていた。

更に彼女は言葉を続ける

「それでも諦めたくなかった・・・いつか必ず彼のあの笑顔を見たいと思ってた。でも、それももう終わりね・・・私は結局、慶一君に好きにはなってもらえなかったのだから・・・だから、もういいわ・・・慶一君、あなたを開放してあげる。」

彼女の言葉を黙って聞いていた俺は彼女に

「・・・嬉しかったよ、俺なんかに好意を持ってくれた事はさ・・・だからこそ君を憎む気にはなれない。もう少し俺たち、違った出会い方をしてたら恋人どうしにもなれてたのかもしれないよな・・・でも・・・今はこれが現実なんだ。いつか君に、俺よりももっといい人が見つかる事を祈っているよ。」

俺は彼女に最後にそう伝えてみゆきと頷きあい、屋上を後にしたのだった。

彼女が泣き崩れ大声で泣いている声を背中に受けながら俺はようやくこの問題に決着をつけられた事を感じた。

教室に戻りながら俺はみゆきに

「・・・これでようやく終わったな・・・ありがとう、みゆき。お前にも心配かけたな。」

その俺の言葉を聞きながらみゆきは目に涙を溜めて俺に抱きついてきて

「よかった・・・本当によかったです・・・お疲れ様・・・慶一さん・・・本当に・・・」

俺はみゆきを受け止めながら黙って頷いてみゆきの背中をぽんぽんと優しく叩いていた。

そして教室に戻ってきた俺だったが教室の前の廊下で集まっているこなた達がいたのだった。

こなた達は俺に気付くと俺の側にやってきて

「「「「「「「「「「おかえりなさい」」」」」」」」」」

笑顔でそう言ってくれたのだった。

それを見た瞬間俺は今までの事を思い出し、涙を流してみんなのその言葉に頷いていたのだった。

かくして揺らぎ、離れそうになりかけた旋律達の絆はここに再び一つになった。

だが、それと同時に俺はみんなとの絆の強さはそう簡単にはびくともしないほどに強いものであるということもわかった。

今後も辛い出来事が起こるかもしれない、けれど皆とならそれすら乗り越える事も難しくないのかもしれないと改めて思う俺だった。

同時に、俺にはまだ成神章の影が未だついて回っている事も再度自覚する事となった。

いつかこの過去に向き合う時が来るだろうと言う事を俺は心の中で覚悟を決めたのだった。

揺らぐ旋律第5話～全ての決着、再び一つになる旋律～（後書き）

今回で揺らぐ旋律編、決着です。この後はエピローグの後、文化祭、みゆきの誕生日などイベントがまっています。次回もお楽しみに。

揺らぐ旋律最終話～エピローグ、そして新たな誓い～

長かった一週間、俺はその一週間にようやく決着をつけることができた事を心から安堵していた。

教室に戻り、みんなに”おかえりなさい”と笑顔で迎えられ、俺は今までの一週間を振り返り、ようやくその思いが報われた事に涙していた。

そしてその日1日は休み時間になるたびに皆が集まり、時間一杯この一週間で味わった嫌な事を忘れるかのように語り合った。

そのうちに俺は、この一週間が始まる前まで自然に出来ていた笑顔のやり方を取り戻す事ができたのだった。

そんな俺の顔を見てみんなは

「うん。やっぱり慶一君の笑顔はこうじゃなくっちゃね。」

「同感。今日までの慶一くんの笑顔って本当の笑顔じゃなかったもんね・・・」

「やっとけいちゃんがもどってきたよ。うれしいな～。」

「ええ。今の慶一さんこそが本当の慶一さんです。」

「まさにゾンビみてえだったよなあ。でも、私も戻って来てくれて嬉しいぜ？」

「思えばあの時の慶ちゃんの顔って本当につらそうだったわよね・・・私何を見てたんだろう・・・あの顔を思い出せば慶ちゃんの本心に気付けたのかもしれない・・・」

「気付かなかったのは私達も同じですよ。だから峰岸先輩達だけのせいじゃありません。」

「本当に動揺しちゃったものね・・・先輩はいつでも先輩だったのに・・・」

各々に俺にそう言ってくれた。

俺も嬉しさ半分、申し訳なさ半分で

「みんな、ありがとう。とっさの事とはいえみんなには辛い思いさせちゃったよな・・・今回の事のお詫びになるかはわからないけど、今度何か奢らせて欲しい。」

俺がそう言うとみんなの目がキラーンと光ったような気がした。

「ほほう?言ってくれるねえ慶一くん。ならば覚悟してもらおうじゃないか。」

「うふふ。ケーキバイキングとかもいいわねえ・・・それとも回る方のでもいいからお寿司もいいかも・・・」

「あはは。わたしはなんでもいいよ~?」

「しっかりと苦労した分の報酬は頂きませんと。」

「ふっふっふ。慶一、言っちまった以上は撤回はさせないからな?」

「私も楽しみにさせてもらおうかな?」

「いやー、悪いですね、先輩。ごちそうになります。」

「ふふ。私もあの店のパフェが食べたいわね。」

そのみんなのものすっごく期待したような目を見せられては俺も何も言えなくなってしまった。

俺は半ばやけくそ気味に

「わかった、わかったよ。まとめて面倒見させていただきます!」

そう答えると皆は満面の笑みで頷いたのだった。

みんなの頷きを見ながら俺は心の中で（俺、やっちゃった？）と自分で言っておきながら後悔をしていた俺だった。

そして俺は久々に監視も何もない家へと今までとは違い楽な気分で帰ってきた。

部屋に戻って着替えを終えて夕食の支度まで時間もあったので俺はベットに寝転んで天井を見つめながらこの一週間を振り返っていた。

辛い部分を思い出すと涙も出そうになったがそれでも再びこの日常を取り戻せたんだという実感が湧いてきていた。

そうしてしばらくぼんやりしていたが、頃合の時間になったので俺はそろそろ夕食の準備をしようと思い、下へと降りていくと、ふいに玄関の呼び鈴が鳴ったので俺はとりあえず玄関へ向かった。

こんな時間に誰だろう？と思いつつ俺は玄関を開けてみるとそこには食材と荷物を抱えたこなたが立っていた。

「やふー、慶一くん。もう夕食の準備しちゃったかな？」

俺が声をかけようとする前にこなたはそう言って来たので俺は

「いや、これからする所だったんだけど、どうしたんだ？急に訪ねてきて。」

ふと湧き上がった疑問をこなたにぶつけるとこなたは笑いながら

「慶一君、あれから今まで今回の事で神経すり減らしちゃってまともに御飯食べてないんじゃないかな？って思ってさ、今日ぐらいは私が君の苦労に免じて夕御飯を作ってあげようと思ってさ。」

そのこなたの申し出に俺は嬉しくなって

「そうか。わざわざすまないな。そういう事ならお言葉に甘えさせてもらうよ。」

そう言って俺はこなたに家に上がるよう促すとこなたも頷きながら

「うん、まかせてー。それじゃお邪魔するね？」

そう言って上がってくるこなたを伴い俺はキッチンへと向かった。

こなたはキッチンでエプロンをつけながら俺に

「慶一君、今日は私が一通りの事やるから慶一君はゆっくりしていいよ？他にやる事あるのならそっちやってくれてもいいから。」

と言うこなたの言葉に俺はとりあえず風呂の準備しとこうと思い

「なら風呂の準備した後ゆっくりさせてもらうよ。・・・ありがとうな、こなた。」

風呂に向かう前にこなたに一言礼を言うとこなたは顔を赤くして

「いいよ。私がやってあげたいって思ったから来たんだし。そう改まってお礼言われると照れるよ。」

そう返事をするこなたに俺は微笑んで再び風呂場の方へ向き直ると風呂の準備をしに向かった。

風呂の準備を終えて俺はリビングでこなたの言葉に甘えさせてもらいのんびりしていた。

程なくしてこなたから「御飯の用意できたよー?」と言う声がかかったので俺はリビングのテレビを一端落とすとこなたの待つキッチンへと向かった。

「おまたせ、こなた。って、おお、これは美味そうだ。今日はハンバーグか。」

その俺の賞賛の言葉にない胸を張って

「ふふん。今回ははりきったからねー。それにただのハンバーグではないよ?私の好きな鶏肉を入れたチキンハンバーグなのだよ。」

こなたの説明に感心しながら

「へえ?ビーフやポークのハンバーグは結構見るけどチキンが入ってるのはあまりみないよな。これは楽しみだ。」

と言う俺の言葉にこなたは笑顔になって

「家でもおとーさんにも結構好評なんだよ?とりあえず食べよ?」

こなたに促されて俺も席に着き「「いただきまーす」」の掛け声と共にハンバーグを一切れ切ってほおばってみる。

その様子を心配そうに見つめるこなた。

「どう、かな？」

そのこなたの不安そうな顔に俺は親指をびしっと立てて

「美味いよ。ビーフやポークとは違って結構あっさりしたハンバーグだな、俺の好みかも。」

と言う俺の感想にこなたは顔を赤らめながらも笑顔になって

「よかったー。喜んでくれて、頑張った甲斐があったね。」

その言葉に俺も頷きで返して俺達は久々に楽しい夕食を楽しんだ。

食事も済んでこなたが洗い物をしている姿を眺めていたがこなたがふいに

「ねえ、慶一君。思い出すね、こうしてるとあの勉強会合宿の事をさ。」

こなたの言葉に俺もあの時の事を思い出しながら

「ああ、そういえばあの時も突然お前が訪ねてきたんだったな。」

そう答えるとこなたも満面の笑みで答えて俺たちのやり取りが始まった。

「うん。そして慶一君と夕食の買い物行って私が君にチキンカレー

を作ってあげたんだよね？」
「そうだな、あれも美味かった。こなたの料理の腕を知った初めての瞬間だったっけな。」
「あの時も緊張したよー？美味しいって言ってもらえるかな？ってさ。」
「そういえばあの時もお前は緊張の面持ちでカレーを口にする俺を見ていたっけなあ・・・」
「まあね。それに、男の人に手料理食べさせるのってさ、おとーさん以外では君が初めてだったから余計に緊張しちゃったんだよねえ・・・」
「そうだったのか。それで？こなたの感想は？」
「・・・すっごい緊張したけど喜んでくれた事が嬉しかった。」
「そうか、なら俺も食べさせてもらった甲斐があったというもんだな。」
「それでさ、その後の事は覚えてる？」
「ああ、よーくな。お前が俺が風呂入ってるの知っててスク水でなだれ込んできたんだったよな？」
「まあ、私としては君が1日前に来ちゃった私を受け入れてくれた事に対するお礼のつもりだったんだけどね。」
「それにしちゃ過激すぎないか？あの時は本当に焦ったんだぞ？」
「その割に慶一君も楽しんでたじゃん？」
「あれは仕方なくだな・・・結局のぼせる寸前まで風呂場にいて危なかっただろうが。」
「あはは、そうだったねー・・・・・・でも私、今回の事怖かったからね・・・」
先程まで明るく話していたこなたの表情が急に真剣になった。
「え？こなた？」
「こんな風にまた君と笑いあえなくなるんじゃないかって、こうし

て一緒に食事したりも出来なくなるんじゃないかって思った・・・」
「・・・・・すまん・・・俺のせいで・・・」
俺は一歩間違えばこなただけじゃない、二度とこうしてみんなとも笑いあえなくなるそれ程の事をしでかしかけた事を改めて思い出し、こなたにその事を詫びていた。
「いいよ。今こうして慶一君は私達の前に戻ってきてくれた。その事実があるからそれでいい。でもさ、もう2度とあんな事は御免だからね？」
そう悲しそうな顔で言うこなたを俺は優しく抱きしめて
「そうだな・・・俺はもう、大切な物を失いたくはないから、だから2度とお前や皆に心配かけるような事はしないよ。だから、ごめんな？こなた。」
こなたも俺を抱き返しながら
「ありがとう、わかってくれて・・・ふふ。あったかいね、慶一君の体は・・・」
「こなたの体だってあったかいじゃないか。」
そう2人で言った後しばらくの間お互いのぬくもりを確かめ合うように無言で抱き合っていた俺たちだった。
しばらくしてお互いに体を離すとこなたも顔を少し赤らめていたが
「あはは。何だかシリアスになっちゃったね。とりあえずこういう空気苦手だからこれでおしまい。慶一君、お風呂いってきちゃいな

よ。」

俺もまたこなたと抱き合っていた事で少し顔を赤くしていたが、こなたに促され

「あ、ああ。それじゃ入ってくるよ。こなたも片付け適当に終わらせたら家に帰れよ?今ならまだ電車も間に合うだろうしな。」

俺がそう言うとこなたは洗い物の片付けを再開させながら

「わかったよー。それじゃ後で駅まで送ってね。」

と言うこなたに俺も「わかった。それじゃ後でな。」と返事をしてから風呂へ向かった。

俺はなんとなく予感めいたものを感じていたのであらかじめ海パンをはいて風呂に入った。

しばらく湯船に浸かってのんびりしていると風呂場のドアがガラッと開きそこには案の定スク水を着たこなたがタオルを持って立っていたのだった。

「ふっふっふ、慶一君、背中を流して・・・ってあれ?」

俺は面食らっているこなたにニヤリと不敵な笑みを浮かべて

「甘いな、こなた。お前がそう来ることは想定済みだ。だから今回はまったく慌てていない。」

という俺の言葉にこなたはがっかりしたような表情になったがすぐ

に気を取り直して

「ちぇー・・・今回は読まれてたか。まあ、仕方ないね。慶一君も用意していたって事はそのまま背中流してもおっけーって事かな？」

その言葉に俺も頷いて

「まあ少々行き過ぎてる部分もあるがお前の折角の好意だからな。無下にしちゃお前にも悪いからな。」

その俺の言葉にこなたは途端に笑顔になって

「よしよしいい心がけだね。それじゃ背中向けてくれる？洗わせてもらうからさ。」

「ああ、よろしくな？」

そう言ってこなたに背中を流してもらう俺だった。

こなたと共に湯船に浸かりながら軽い雑談を交わしていたのだがふいにこなたは真剣な表情になって

「ねえ、慶一君。私ずっと悩んでた事があるんだけどさ、今日思い切って君に言おうって思った事があるんだよ。」

そのこなたの表情を見て俺は何か重要な事っぽいな？と思いながら

「大事な事、なんだな？」

俺がそう聞き返すとこなたも頷いて

「うん。とても大事な事。」

そう言って真剣な表情で俺の目を見つめてくるこなたにこれはひょっとして告白、ってやつか?と内心ドキドキしながらこなたに

「わ、わかった。聞くから話してくれ。」

俺の言葉にこなたは一度軽く深呼吸をした後

「慶一君の過去の事に触れたのはみゆきさんだけだったんだよね?」

突然のその言葉に驚く俺

「何故、それを・・・?まさかみゆきがお前に話したのか?」

こなたは俺の問いかけに黙って頷くと

「慶一君が氷室君、だっけ?その人とみゆきさんと一緒に会ったあの翌日にね、私はみゆきさんから慶一君の過去に因縁のある人がいる、今後私達はどうするべきなのかって言う事を相談されたんだよ。」

俺は内心で(みゆき、何故こなたに話したんだ・・・)と考えながら

「それで?お前はみゆきとその事について話し合ったという事なのか?」

そうこなたに聞くとこなたは俺の問いに頷いて

「うん。だけど、実は私はみゆきさんや慶一君が氷室君に会う前か

らその事を知っていたんだよ。」

そのこなたの言葉は俺を驚愕させた。

「なんだって?俺の過去の事はみゆき以外は後知っているとしたら・・・まさか・・・」

俺の行き着いた答えにこなたも頷いて

「そうだよ。慶一君とみゆきさん以外に慶一君の過去を知る人物、それは牧村君だった。そして私はあの日慶一君の実家に行った日に牧村君が私にだけその事を教えてくれたんだよ。近いうちに成神章の影が影響を及ぼす事になるかもしれない、だから君にだけはこの情報を教えておくから慶一のために影で力になってやって欲しいって頼まれたんだよ。」

俺の知らないところでそんな事になっていた事などまったく知らなかった俺は

「そんな・・・そんな事になってたなんて・・・」

軽くショック状態な俺を見つつも更に言葉を続けるこなた。

「そして今回の騒ぎでも私は事前にその事をしっていたおかげでみゆきさんに頼んで慶一君から真実を聞き出してもらって牧村君に慶一君から聞いた事の裏付け調査を依頼したんだよ。」

そこまで言った後こなたは苦しげな表情になりながら

「・・・本当は慶一君が気を使っちゃうと思ったから私は言わない

つもりでいたんだけど、私は君のためにかがみ達にもこの情報を公開した。みゆきさんに相談を受けたその日にね。そして君に気を使わせないように私達は知っていても知らないふりをしていたんだよ。」

俺はこなたを見つめながら

「・・・こなた、お前、それがどういう事かわかった上で、なんだろうな?それを知らせれば皆にもなんらかの実害が起こる事も十分考えられたんだぞ?」

こなたは俺のその言葉に目に涙を浮かべながら

「わかってたよ!この事を私達が知ることは私達の身も危険に晒す可能性もある事も。でも、私達はそれでも慶一君と共に戦っていきたかった、乗り越えていきたかったんだよ!・・・君を救いたかったんだよ・・・ねえ、慶一君。私達には君と直接的に一緒に戦う事はできないよ?けど、君と一緒に私達の心で一緒に戦っていく事はできる。だから慶一君。君の荷物を、慶一君自身が背負った重い荷物を私達に分けてよ。私達皆がそれを少しずつ背負ってあげる。それくらいしか私達にはできないけれどそういう形でも君の力になりたいから・・・。」

最後はほとんど涙声になっていた。

俺はそれを聞いた時、今日の自分のクラスに行った時のかがみたちが俺から貰ったプレゼントを再び身につけ俺に何らかの決意に満ちた目を向けていた事を思い出して

「そうか、かがみたちがもう一度俺から貰ったプレゼントを身に付

けていたのも、何らかの決意に満ちた目を向けていたのも、全ては俺と・・・せめて心だけでも戦いたいって思っていたみんなの意思だったんだな・・・そして、こなた。お前はその橋渡しをしてくれた、って事か。それにみんなは、俺の荷物を少しずつ背負ってくれたんだな・・・。俺と一緒に戦ってくれるために・・・。」

俺の言葉にこなたは泣きながらコクリと頷いた。

俺はこなたを湯船からあげて俺自身も上がり、こなたを再び優しく抱きしめながら

「すまん、こなた。俺は1人で色々抱え込もうとしすぎていたようだな。今日のかがみ達を見たとき、俺の心に力がみなぎるのがわかった。お前が、そして皆が支えてくれたから今がある。今日の事はお前のかがみ達への説得がなければ成し得なかったかもしれない。やっぱり俺は・・・俺には皆が必要なんだ・・・それがよくわかったよ。」

そう言った後俺はこなたから体を離してこなたを見つめ

「こなた。俺の過去のせいでまたお前に、お前達に迷惑をかけてしまうかもしれない。けど、またその時は俺に力を貸して欲しい。お前にその情報を持たせておく危険性は十分承知してるつもりだ。だけど、確かにお前達の心は俺の力になったから・・・だから危険かもしれないが俺と共にこれからも・・・」

こなたは俺の最後の言葉を補足するように

「うん。これからも慶一君と共に戦ってあげる。力を貸してあげる。だから、負けないでね？慶一君。どんな事にも・・・そしてみんな

で最後には笑いあいたい。君にもその時には側にいて欲しいと思うから。」

そのこなたの言葉に俺は力強い頷きで返したのだった。

そしてその話を終えた俺達が風呂から上がった頃にはすでに終電が終わってしまっていた後だった。

しかたがないのでこなたはこのまま俺の家に泊まり、明日は一緒に学校へ行く事となった。

今回の件で俺は一人きりで色々な事と戦う事の困難さを知った。

そして影で支えてきてくれたこなた達のことも知り、俺は皆が俺の過去に関する情報を持つ事を受け入れた。

それと同時にこれから何が起ころうとも皆と共に戦い、乗り越えていく事を改めて覚悟した俺だった。

こうして長かった9月が終わりを告げる。

俺達は次の戦いの前につかの間の平和な日々を過ごして行くのだった。

揺らぐ旋律最終話～エピローグ、そして新たな誓い～（後書き）

これで完全に揺らぐ編完結です。
ここからはまたしばらくはのんびりまったり展開となります。次回もお楽しみに

こなたに自分の思い、そして決意を聞かされた日、俺は全てを晒して改めてみんなに共に戦って欲しいという事を伝えようと心に決めた。

そして次の日の朝俺は新たな決意と強い気持ちをもって目を覚ました。

勉強会合宿時にこなたに貸した部屋で寝ているこなたを起こさないように俺は学校へ行く準備を済ませると1階に降りて朝食の準備を始めた。

ほどなくして準備を終えていまだ起きてこないこなたを起こしに俺は部屋へと向かった。

部屋の前について俺はとりあえずノックをしてみるとあの時と同じように返事がない。

とりあえず部屋に入ると断りをいれて俺は部屋に入ってこなたの様子を見た。

あの時同様、だらしない姿で夢の中を彷徨うこなたを俺はとりあえず揺すってみるが、「もう少し寝かせて・・・」と言って起きようとしない。

次に俺は「こなたー、起きろー、朝だぞー？」そう声をかけながらこなたを揺すって起こす事を試みてみたが結局効果なし。

昨日の事もあるから穏便に優しく起こしてやろうという俺の努力が水泡に帰した事を悟った俺は神の右手の人差し指に全てを託してこなたの額に一閃させた。

「はぅっ！！」

という情けない声と共に飛び起きるこなた。

寝ぼけ眼で周りを見渡してすぐに痛みが額にきたらしく涙目になって俺を見て

「・・・ねえ、慶一君。これやめようよ・・・ほんと痛いから・・・」

そんな風に抗議してくるこなたに俺は

「一応の努力はした。昨日の事もあるから出来るだけお前を優しく起こそうとがんばった。けどな、結局起きなかったんだよ、お前は。まったく・・・結局最終手段をとらざるを得なかったよ・・・」

呆れたようにそう言いながらこなたに

「とにかく起きたんなら着替えて下に来い。朝飯作ってあるからきっちり食って学校行こう。」

額をさすりながら俺の言葉にこなたも頷いて

「わかったよ。着替えて行くから下で待っててー？」

その言葉に俺も頷き返して

「ああ。時間的にはまだ余裕あるしあまり慌てなくていいからな？」

こなたの返事を聞いてから俺は部屋を出て下へと向かう。

少しして学校へ行く準備を済ませたこなたが降りてきた。

「おまたせー。うーん、慶一君は洋食派なのかな？」

並べられたトースト等を見てこなたがそう感想を漏らすのを見て

「うーん、まあ、作るのが楽といえば楽だからな。これなんかただ焼くだけでいいしさ。」

と言って目玉焼きの乗った皿を持ち上げて見せる俺。

「まあ、わからなくもないけどね。でも御飯も食べた方がいいとは思うよー？」

その言葉に俺も考え込みながら

「まあ、頑張ってみるよ。それじゃ食べちゃうか。ほら、こなたコーヒー。」

そう言ってこなたにコーヒーを差し出して俺たちは食事を始めた。

「ありがとう。そういえば合宿の1日目の朝もこうやってコーヒー飲んだね。」

こなたの言葉に俺もその時の事を思い出して

「そうだな。あの時からそう時間は経ってないはずだけど何だか懐かしい気がする。」

こなたはそんな俺の言葉に笑いながら

「あはは。それだけ色んな事あったからじゃないかなー？でも、こんな些細な事も思い出になるといいよね。」

そのこなたの言葉をしみじみとかみ締めながら

「・・・ああ、そうだな・・・」

俺はこんな些細な事ではあっても心に刻んでおこうと思ったのだった。

やがて朝食も済んで洗い物を終えた俺たちは学校へと行く準備をして玄関で靴を履いていたが、こなたがふいに忘れ物を思い出して部屋に取りに戻ったので俺はそのまま玄関でこなたを待ったのだった。

程なくしてこなたが

「ごめーん。お待たせー。」

そう言いながら玄関にやってきたので俺はこなたが靴を履き終わるのを確認した後2人して”いってきまーす”と返事の返ってこない家に向かって声をかけて外に出た時俺は絶句した。

「おはよー。慶一くん、一緒に学校・・・って、こなた！どうしてあんたが慶一くんと一緒に家から出てきてるのよ！！」

そう声をかけてきたのは俺を迎えに来たかがみだった。

だが、俺が驚いたのはそれだけじゃなかった。

そこにはつかさやみゆき、みさお、あやの、こう、やまとまでもが揃っていたからだった。

半ば呆然としつつも俺はかがみに

「お、おはよう、かがみ、みんな。えーと、これは一体何があったのかな？」

その俺の言葉にみんなも挨拶を返しながら

「おはよ～けいちゃん。わたしたち今日はみんなでけいちゃんを迎えに行こうって相談したの。それでみんなで来たんだよ？それよりも、ねえ、どうしてこなちゃんもけいちゃんの家にいたの？」

不思議そうな顔をするつかさ。

「おはようございます慶一さん。とりあえず状況の説明をお願いできますか？」

顔は笑っているが、その背後に物凄いどす黒いオーラを纏っているみゆき。

「おはよう慶一。私も理由がききてえなあ？」

不機嫌そうに理由を尋ねてくるみさお

「おはよう。慶ちゃんもすみにおけないわね。」

笑顔だけど少し怖さを感じるあやの。

「おはようございます先輩。先輩もなかなかやりますねー？」

ニヤニヤしながら俺にそう言うこう。

「おはよう、先輩。泉先輩を連れ込んで何をしてたんですか？」

相当に不機嫌そうなやまと。

俺は一部の黒オーラに怯えながら

「ああ、その、実は昨日こなたが気を使って俺に夕食をご馳走しにきてくれてだな・・・それでその後話し込んでたらこなたの終電に間に合わなくなって仕方なく・・・こなたを泊めたんだよ・・・」

最後の方は黒いオーラを纏ったままにじりよってくるみゆきを前にしてしどろもどろになる俺

その後ろでこなたはかがみに大いに怒られていた。

「こなた！あんた昨日私達と約束したわよね！？皆で一緒に慶一くんを迎えに行くって！その事の確認であんたの携帯に電話かけたのよ！？なのに電話に出ないと思ったらあんたまた勝手になにやってんのよ！！」

そのあまりのかがみの剣幕にこなたもたじたじになりながら

「ご、ごめんって、かがみ。昨日は電車に間に合ったらそのまま帰ろうとしたんだよ。でもつい話し込んでたら時間が過ぎちゃったから・・・」

そしてその矛先はついに俺にも向けられた。

「慶一くんも慶一くんよ！どうしてちゃんとこなたを帰さなかったの！？それと念のために聞くけど変な事してないでしょうね！？」

かがみの詰問に俺は首をブンブンと振って

「ない！かがみが考えているような変な事は断じてないから！だからもう勘弁してください・・・」

そんな騒動があったがようやく場が治まり落ち着いた頃、皆はそれぞれの方法で家に来ていたがここはこの人数だとバスに乗った方がいいだろうと思い俺はみんなを最寄のバス停に連れていった。

そして、バスを待ちながら俺はみんなの方に向き直ると

「みんな。聞いて欲しい事がある。」

俺は昨日の決意をみんなに聞いてもらおうと思い、声をかけるとみんなは俺に注目して

「聞いて欲しい事？一体なんなの？」

かがみが代表で俺に聞いてきたので俺は頷いて

「実は昨日こなたからみんなが俺の過去の事、その因縁の人物の事についての情報を得ているという話を聞いたんだ。」

その言葉にこなた以外は皆驚いたような顔をしていたがかがみがこなたに

「こなた、あんた慶一くんに言っちゃったの？あんたが言ったんじゃない。慶一くんに気を使わせない為に知っていても知らないふりしてよう、って」

かがみの言葉にこなたも真剣な表情を向けて

「うん。その事については大分悩んだよ。でも私はみんなの気持ちを慶一君に知って欲しかった。そして慶一君の背負っている荷物を私達で少しずつ背負ってあげたいって思ったから。私達は直接慶一君と一緒には戦えないけど心で一緒に戦う事くらいはできる、その事を慶一君に伝えたかったんだよ。みんなもそうだよね？」

こなたが他の皆を見回しながらそう言うとみんなも頷いて

「まあね。私は慶一くんの力になりたいって思うから、それが例え心だけだとしてもね。」

「わたしもそう。けいちゃんを一杯応援してあげたいよ。」

「私もです。私の心も慶一さんと共にあります。」

「私もだぜ？お前と共に心で戦う覚悟はあるつもりだかんな。」

「私もよ？私だって慶ちゃんの友達で大切な仲間だって思ってもらっているから。」

「私もです。先輩との絆はやわじゃないですからね。そこの所はわかって欲しいですね」

「私も。何も出来ない私だけど心は先輩と一緒に戦いたいって思っ

ているから・・・」

俺はそんなみんなの言葉に力強く頷いて

「俺は昨日こなたに今回の一件の最後の決着をつける際にかがみたちを教室で見たとき俺の心に力がみなぎるのを感じた。みんなのその思いがあるから俺は戦えた。戦えるんだと思った。だから、この先俺の過去がみんなにとって危険を呼ぶかもしれないけど、俺にはみんなが必要だから、だからこれから起こるかもしれない困難に立ち向かう時、俺と共に戦って欲しい、力を貸して欲しい。その事を改めてみんなに言いたかったんだ。」

俺がそう言い終えるとみんなは力強く頷いてくれた。

「君が私達を必要としてくれるなら、私達はいつでも君の力になってみせるよ?」

「たとえ側にいなかったとしても、私達の心はあんたと共にあるから、それを忘れるんじゃないわよ?」

「わたしたちはいつでも一緒だよ?けいちゃん。」

「今回の事に立ち向かってから私はこんな形でもあなたの力になれる事を知りました。また何が起きても、私は今回のように力になってみせます。」

「私もだぜ?大した事はできねーかもしれねえけど、私もいるって事だけは覚えておいてくれな?」

「私も力になってみせるわ。何も出来ないかもしれないけどそれでも慶ちゃんの私達を大事に思ってくれる心に報いたいから。」

「私も力になりますよ。先輩、頼りないかもしれませんが頼ってください。」

「先輩は私達を助けてくれたから。だから私も先輩の困難に一緒に立ち向かってあげたいって思う。だから私も頼って欲しい。」

改めてみんなは俺にそう言ってくれた。

俺は改めて皆に頭を下げて礼を言うとみんなもにっこりと笑って答えてくれたのだった。

そして俺たちは学校へと向かう。

そして学校の校門前で俺たちは織部由美子と鉢合わせる事となった。

俺にもみんなにも緊張が走る。

だが、織部さんは俺たちの前に来るとみんなの前で深々と頭を下げて

「ごめんなさい、みんな。私のせいで色々と迷惑かけちゃって・・・もう、あんな事はしないわ。今日皆を待っていたのは皆に今までのお詫びを言いたかったからなの・・・そうしないと気がすまなかったから・・・」

そう言って織部さんは俺たちに詫びてきたのだった。

俺もみんなも困惑していたが俺は織部さんに

「君の気持ちはよくわかった。でも勘違いしないでくれ、俺は君を恨んだりしちゃいない。恨むとしたら俺が自ら作ってしまった過去に対してだ。だからそこの所は気にしないで欲しい。それが俺の罪なんだから。」

そう俺が言うと織部さんはふっと微笑んでから俺たちに頭をもう一度下げると踵を返して校舎に入っていったのだった。

「あの子も出会い方を間違えなければ、ひょっとしたら私達の仲間になっていたのかもしれないね・・・」

ふとこなたが漏らした言葉に俺を含めた全員が頷いていた。

俺は気を取り直すと

「さあて、これからまた色々行事もあるんだし、テストだってある。心機一転、張り切っていこうぜ？」

俺のその言葉に若干名はテストという言葉に少し嫌な顔をしていたが皆で頷くと俺たちはそれぞれの教室へと入っていった。

俺は久々に何のしがらみもない授業時間を過ごしていた。

それと同時に悩んでいる間、俺は大分授業が頭に入っていなかったことを改めて知る事になり

「かがみ、すまないがこの一週間の授業のノートを見せてくれないか？」

そうかがみに頼んでノートを借りて必死の復習を開始したのだった。

その横で笑いながら俺にアドバイスを送ってくれるかがみとあやの、俺はその風景にようやく日常を取り戻した事をしみじみと嬉しく思っていた。

そしてお昼休みになり久々にみんなでお昼を食べる事になり今日はみんなで屋上で食べようという事になったのだった。

みんなで集まり早速弁当を広げる俺達だったが、こなたはいつものとおりなのだが、今日に限っては俺も弁当を作れなかったので学食でパンを買ってきたのだった。

俺が珍しくパンを食べているのを見たかがみが

「慶一くん、今日はお弁当じゃないのね？いつもはちゃんと作ってきてるのに珍しいわわね。」

そのかがみの言葉に俺は苦笑しながら

「いや、実は昨日夕食の準備に買い物行こうと思ったんだがこなたが来て夕食作ってくれたからさ結局買い物いかずじまいになっちゃってな、食材の買い置きがなかったからさ。」

後頭部を掻きながらかがみに事情を話すとかがみは呆れつつも

「はあ・・・ほんとしょうがないわね・・・はい慶一くん、これどうぞ」

俺に自分の弁当のおかずの卵焼きを差し出してきたかがみに俺も慌てつつ

「え？ちょ、ちょっと待ってくれ、いいのか？かがみだって自分の食べる分しかおかず作ってきてないんだろ？」

とりあえず遠慮するとかがみは少し照れながら

「い、いいのよ、今日はいつもより多めに作っちゃったんだから。

だから遠慮しないで食べなさいよ。」

なおも俺におかずを差し出そうとするかがみの気持ちを無にするのは悪いと思った俺は

「じゃ、じゃあ、頂かせてもらうよ。」

そう言ってかがみからおかずを受け取り早速食べてみる。

その様子を不安そうに見つめるかがみに俺は

「お？これは美味いな。かがみ、この卵焼き、いい味付けだよ。ありがとな？」

俺は素直にかがみに感想とお礼を言うとかがみは顔を真っ赤にして

「そ、そう？喜んでくれて嬉しいな・・・もう一つどう？」

そう言ってさらにもう一つ卵焼きを差し出してくるかがみからそれを受け取って食べる。

その様子を見ていたほかの皆が羨ましそうにこの状況を見ていたが、そこにみゆきも

「慶一さん、あの・・・私も、これ作りすぎちゃったんですが、よろしければどうぞ・・・」

今度はそう言って唐揚げを俺にすすめてきたのでそれもいただく事にした。

「ありがとう、みゆき。これも中々美味いな。味付けは結構好みかも。」

俺の感想に顔を赤くして俯くみゆき。

それをみていたあやのとこなたを除く他の皆も一品ずつ俺におかずを進めてきたのだった。

その様子をみながらこなたはかなり不機嫌そうな顔をしていたのだが・・・。

そして食事を終える頃には俺は食いすぎで倒れていたのだった。

１０月といってもまだまだ暑さの残るこの陽気の中、俺はみんなの雑談の喧騒を聞きながら側で寝転んで空を見上げながらのんびりとしていた。

まだ時間の残る昼休み、俺はいつしか眠ってしまっていたらしい。

そして後頭部にふいに感じた柔らかな感触を感じて目を覚ますと俺の顔の上には俺を顔を真っ赤にしながら見下ろしているやまとがいた。

俺はまだ少し寝ぼけた頭で

「なあ、やまと。どうして俺の上にお前の顔があるんだ?」

やまとに訪ねるとやまとは赤い顔のまま俺に

「私の顔が先輩の上にあるんじゃなくて先輩の頭が私の太腿の上に

あるのよ。」

俺はやまとの言った言葉を反芻してみる、そしてその状況に気付いて慌てて

「ちょ、ちょっと待て！という事は今俺はお前に・・・膝枕・・・されてるって事なのか？」

俺の言葉にやまとは黙ってコクリと頷く。

その瞬間俺は慌ててやまとの太腿から飛び起きて

「す、すまん。うっかり寝てしまっていたとはいえお前にそんな事させてたなんて」

俺があたふたしながらやまとに謝っているとそのすぐ後ろで

「あーあ、起きちゃったね。残念。」

ニヤニヤしながら軽いため息をつくこなた。

「でも、慶一くんのあわてっぷりは面白かったわね・・・ちょっと羨ましかったけど・・・」

最後の方は皆に聞き取れない程の小声なかがみ。

「けいちゃん気持よさそうに寝てたね～。」

ニコニコしながら言うつかさ。

「勝負の結果だから仕方ないですね・・・」

少し憂鬱そうにため息をつくみゆき。

「どうせだったら顔に落書きでもしてやればよかったんじゃねーか？」

俺のあわてっぷりに笑いをこらえられず笑いながら言うみさお。

「それにしてもよく眠れるわよね？そんなに気持ちいい陽気だったのかな？」

少し呆れ気味にいうあやの。

「やまと美味しいとこどりだねー。今度は私が先輩にやってあげようかな？」

心臓に悪い冗談を言うこう。

「ごめんなさい、先輩。一応罰ゲームだから・・・」

膝枕の理由を話すやまと。

とりあえずやまとの言っていた罰ゲームという言葉が引っかかったので俺はみんなに聞いてみた。

「罰ゲームって何の話だ？」

その質問にこなたが答えてくれた。

「実はじゃんけん勝負して一番最初に負けた人が慶一君に膝枕をするというゲームをしてたんだよね。」

そのこなたの説明に額に手をあてて呆れつつ

「なんで俺に膝枕するとかってなってるんだよ・・・他に罰ゲームとか考えるならあるんじゃないのか？」

その俺の言葉にこなたはニヤニヤとして

「えー？こういう罰ゲームだから面白いんじゃん。それとも慶一君、嬉しくなかったのー？」

と言うこなたに俺は

「い、いや、嬉しくない事もなかったが・・・って何を言わせる！！」

そう言いかけて顔を真っ赤にして乗りツッコミした。

そしてそんな俺の言葉にやまとも再び顔を赤くしてたのだった。

その後はこうやみさおらに色々ツッコまれたりしていたが、色々ごまかしてとりあえず昼休みを乗り切ったのだった。

午後の授業の後ＬＨＲがあり、俺たちは文化祭の出し物について話し合いをしたのだが、今日中には出し物を決定する事ができなかった。

そして放課後になり再びこなた達と教室の外で鉢合わせたのだが、

何故か落ち込むみゆきがいたので俺はこなたに

「なあ、こなた、みゆき落ち込んでるみたいだけどなにかあったのか？」

と聞いてみるとこなたは苦笑しながら

「いやー実は今日のＬＨＲの時にさ、文化祭の出し物について決めてたんだけどさ、みゆきさんが提案した出し物に票がみゆきさんの一票だけしか入らなかったから落ち込んでるんだよね。」

そう話すこなたに俺はみゆきが提案した出し物について聞いてみる。

「こなた、みゆきが提案した出し物って？」

俺の問いにこなたは困った顔で

「実はね、みゆきさんが提案したのは桐たんすの文化と歴史的背景の展示なんだよね。」

そのテーマに俺もどういったら良いのかわからずに困惑していたがとりあえずみゆきを慰める事にした。

「まあ、なんだ。自分の意志を示した事だけでも評価できる事だから、な？とりあえず元気だせ。」

俺と共にこなたもとりあえずみゆきを慰める言葉を言うのだった。

「頑張った！感動した。その努力は認められるよ！」

俺達2人の慰めにみゆきはますます落ち込んでいた。
それを見守るかがみたちも苦笑しながら困った顔をしているのだった。

とりあえずかなり苦労したがみゆきをなんとか立ち直らせて俺たちは学校を後にする。

学校から帰る途中でみゆきが俺たちに

「みなさん。みなみちゃんへの誕生日プレゼントありがとうございました。みなみちゃんも凄く喜んでいましたよ?みなさんにお礼を言っておいて欲しいとことづかってきました。」

そんなみゆきの報告に俺たちも笑顔で応えていた。

そしてみゆきは俺に小声で

『慶一さん、みなみちゃん、慶一さんからのメッセージカードを受け取ってとても喜んでいましたよ?私からもお礼を言わせてください。』

そのみゆきの言葉に俺も笑って頷いたのだった。

ちなみに俺が送ったメッセージは

「みなみ、誕生日おめでとう。受験の追い込みがあるから誕生日会を開いてやれないけど、プレゼントだけでも受け取って欲しい。そしてひよりやゆたかと一緒に陵桜に来てくれる事を待っている。だから最後までがんばれよ?」

という内容だ。

俺はもう、みんなが陵桜にいるイメージをしている。そしてそれは現実になるだろうという妙な確信があった。

何故ならみなみもゆたかもひよりも俺にとってもみんなにとっても大切な旋律の一つだから。

俺はその日を楽しみにしながら、文化祭の出し物やみゆきの誕生日、そしてうっかりやっちゃった「お詫びに何か奢ります」イベントにとりあえず頭を悩ませていたのだった。

緩やかな旋律～帰ってきた日常～（後書き）

さあ、次回はついに慶一のサイフが大ピンチだ！果たして慶一は役1名の脅威に耐えられるのか！？次回もお楽しみに。

穏やかな旋律～文化祭に向けて、そして大打撃の慶一～

あの一件を終えた翌日、俺たちは学校で再び織部由美子と再会をした。

だが、俺達の懸念とは裏腹に織部さんは俺達に今までの事に対するお詫びを伝えたのだった。

そして俺自身も織部さんに自分の心境を伝え、今回の問題に完全に決着がついた事を安堵している自分がいた。

そうしてなんのしがらみもなしに俺はその日1日の学校生活を楽しんだ。

俺は今までみんなと過ごしてきたこのあたりまえの日常を改めて大事に思ったのだった。

そんな中で自分がみんなとうっかりやっちゃった約束を今日から少しずつ果たしていく事になるのを俺は自分のサイフとにらめっこしながら大きなため息をついて悩んでいたのだった。

とりあえず今月にはみゆきの誕生日もある、だからこそそのための資金を稼がないといけないと思ったので、俺は再びバイトするべきだろうな・・・と考えていた。

そんな風に考え込んでいたその日の放課後。

「さて、今日も文化祭の出し物決まらなかったな・・・」

そう、今日も文化祭の出し物に関して俺達のクラスは大いにもめた。
しかし、それでも意見が一つにならず結局この日も文化祭の出し物は決まらなかった。
ちなみにこなたたちのクラスはメイド喫茶をやるらしいという情報が入っていた。
（一体どうやって許可とったんだろうな・・・）
そう心の中で突っ込みを入れながら俺は今日はどうしようかと考えながら教室の前でただずんでいると、ふいにつかさが俺に声をかけてきた。
「あ、けいちゃん。今帰るとこなの？」
その声に俺も振り向きながら
「あ、つかさ。帰るとこは帰るとこなんだがこの後どうしようかと思っててな。そういえばこなたやみゆきは一緒じゃないのか？」
つかさに訪ねるとつかさはいつものような笑顔で
「こなちゃんはアニメの録画忘れたから先に帰るって言って帰っちゃったよ？ゆきちゃんは委員会と文化祭の件での打ち合わせだって。けいちゃん、おねえちゃん達ははどうしたの？」
二人の事情を話してくれた後俺にそう聞いてくるつかさに
「かがみも委員会だそうだよ。あやのとみさおは今日は用事がある

からと言って先に帰った。」

つかさはそう答える俺をみて少し考え事をしているようだったが、
考えがまとまったのか俺を見て

「ねえ、けいちゃん。それじゃ今日は一緒に帰ろうよ。」

そのつかさの提案に俺も断る理由もなかったので

「そうだな、それじゃ一緒に帰るか。」

そう言うと、つかさもにっこり笑って頷いたのだった。

そして帰り道の途中、つかさはある場所で足を止めて俺に

「ねえ、けいちゃん。覚えてる？この場所。」

そう言ってつかさが指し示した場所は俺も忘れはしない、俺とつかさが友達になるきっかけになった場所だった。

「覚えてるよ。確かここで転んで涙目になっていたつかさに声をかけたんだっけな。」

その答えにつかさは笑顔になって

「よかった、覚えててくれて。忘れられちゃったかと思ったよ～。」

そのつかさの頭をかるくぽんと叩いて

「忘れようったって忘れられないさ。ここでの事がきっかけでつか

さと今こうして話していられるんだからな。」

俺がそう言うとつかさは嬉しそうな顔になって

「うれしいな。けいちゃん、わたしね？初めてここでけいちゃんに話し掛けられたときとってもびっくりして、そしてとっても怖かったんだよ。だってわたし同じ学年の男の子と話したりするのってけいちゃんが初めてだったんだよ？だから最初はけいちゃんがわたしの怪我の手当てしてくれるって言ってくれた時かなりとまどってたんだ～」

その頃の事を目を細めて思い出しながらつかさはさらに言葉を続けた。

「でも、話してみたらとっても優しくてわたしにも気を使ってくれて、凄く嬉しかったの。あの時にけいちゃんの前で3回も転んじゃってすごく恥ずかしかったんだけど、でもけいちゃんはわたしを助けてくれた。だからわたし、あの時からけいちゃんとお友達になりたいな、って思ったんだよ？」

つかさはもう一つ思い出している事があったようで俺に

「何かきっかけがないかな？と思ってたときこなちゃんがわたし達をけいちゃんに紹介してくれてそれでわたし達お友達になれたんだよね。だからあの時、始業式の日にけいちゃんと会えた事がとても嬉しかったんだ～。そしてお友達になってみたらやっぱりけいちゃんは優しくて頼りになる人でわたしにとってもおねえちゃん達同様側にいてほしい人なんだよ？」

そのつかさの気持を聞いた俺は嬉しさと照れで少し顔を赤くしながら

「つかさにそう思ってもらえてるなら嬉しいかな。あの時つかさを助けた甲斐もあったってもんだ。それに、忘れるなよ?俺もつかさには色々感謝してる事があるんだって事をさ。」

俺の答えにつかさもにっこりと笑い、俺もつかさに笑い返して俺達はその場所を後にした。

そして駅前に来た時俺はあの約束を実行しようと思い、つかさに声をかけた。

「つかさ。ちょっと寄り道していかないか?」

その俺の言葉につかさも驚いた顔で

「ふぇ!?よ、寄り道?でも、どこいくの?」

そう聞いてくるつかさに俺は近くの喫茶店を指差して

「あそこさ。前に俺が言った事、その約束を果たそうと思ってな。あそこのティーセットは結構美味いんだ。」

俺の答えにつかさは不思議そうな顔で

「約束?そんな約束あったかな?」

そのつかさの答えに脱力しながら

「俺が言っただろ?あの一件で迷惑かけたからお詫びに何か奢るってさ。」

そう言うとつかさもようやく理解したようで

「あ、そういえばけいちゃんそんな事いってたね。それじゃごちそうになっちゃおうかな。」

ニコニコしながらそう言うつかさに俺も頷いてつかさを伴って喫茶店に入る。

「ここでいいな。それじゃつかさ、このティーセットでいいか？ケーキが欲しければ追加してもいいぞ？」

席についてメニューに見入っているつかさに俺はそう声をかけるとつかさは顔を上げて

「え？いいの？それじゃティーセットとこのショートケーキお願いしちゃおうかな？」

つかさの指差したメニューを確認すると俺は店員を呼んでティーセットとケーキを注文する。

そしてしばらくしてティーセットとケーキが届くと、俺達は談笑しながらお茶を楽しんでいた。

「ふう、やっぱりここのティーセットはいいな。つかさ、味の方はどうだ？」

幸せそうな顔でケーキを食べるつかさに聞くと

「うん。とっても美味しいよ？ケーキも良いし、お茶もいいね～。」

どうやらつかさにも中々好評だったようだ。

「喜んでくれたなら奢った甲斐があるな。そういえばつかさは将来の進路とか決まってるのか？」

そろそろ進路に関しても考えなければいけない時期に来ていた事もあり、俺はつかさに聞いてみた。

「うーん・・・まだわたしもはっきりと決まってないんだよね・・・」

ちょっと考える仕草をしながらそう答えるつかさ。

「そっか、つかさもなのか。実は俺もまだ明確に決まってないんだよなあ・・・」

俺は進路に関して考えを巡らせつつ

「つかさ。つかさはさ、お菓子を作ったり料理したりとかが結構好きだっていってたよな？」

ふいの俺の質問につかさも驚きつつも頷いて

「うん、そうだよ？わたしの作ったお料理で喜んでくれる顔を見るのがうれしいんだ～。」

そう言ってその状況を想像するつかさのなんとなく嬉しそうな顔を見ながら

「ならさ、まあ、俺がつかさの進路に口出しするのもなんだけど、そういう道を目標にしてみたらいいんじゃないか？俺はつかさなら出来そうな気がするよ。」

俺の言葉をつかさは考える仕草をしながら反芻しているようだった。

「・・・うん、ありがとうけいちゃん。進路の参考にさせてもらうね？」

笑顔で俺にそう言ってくるつかさに俺も笑顔で返して

「はは。でも最後にはつかさが自分で決めるんだぞ？俺のはあくまでも意見だって事忘れずにな。」

そう俺が言うとつかさもにっこり笑って頷いた。

そして会計を済ませた後俺はつかさを家まで送っていったのだが、そこでまたしてもまつりさんに捕まり、結局この日も夕食を柊家でご馳走になり、俺はひたすら恐縮していたのだった。

そしてかがみにつかさにティーセットを奢った事を感づかれ、明日は私にも奢るようにと釘を刺されて柊家を後にした。

そして次の日、俺達のクラスの文化祭の出し物は昨日行った喫茶店のティーセットの事が決めてとなり、ケーキと紅茶メインの喫茶店をやろうということになったのだった。

そしてその日の放課後、俺はかがみとみさお、あやのの3人と一緒にかがみの買い物に付き合った後、3人に奢りの約束を果たす為俺も秋葉までついていった。

「かがみ、今回も新刊でてるのか？」

かがみがラノベを選んでいるのを見ながら俺は声をかけてみるとかがみはラノベから目を離さないまま

「うん。それで今日は何冊か選びに来てみたのよ。まあ、後もう一つ目的あるんだけどね。」

そのかがみの言葉に別の方で同じようにラノベを見ていたあやのとみさおが

「目的？他に寄る所でもあるの？柊ちゃん。」

「うーん・・・私にはこういうの読めそうにないなあ・・・ん？他にどっかいくんか？」

そうかがみに話を振ったのでかがみは笑いながら

「ちょっとゲームセンターにね。ＵＦＯキャッチャーの景品でちょっと気になるものを前に見かけたからさ。」

ＵＦＯキャッチャーという言葉に俺はみさおとこなたの誕生日会の時の事を思い出して

「かがみ、やるのはいいけどあまり使いすぎるなよ？前も苦戦してたんだからな。」

俺の指摘にかがみは苦笑しながら

「あはは・・・まあ、今回は熱くならないように気をつけるわよ。」

俺はその言葉がどうにも信用できなかった。

何にしても何があっても大丈夫なように用意はしておくべきかもしれないと近くのコンビニでとりあえず多めにお金をおろしておく俺だった。

本屋での用事を済ませて、俺達はかがみのもう一つの目的のゲームセンターに来ていた。

そして、かがみは気になってる景品を見つけると、さっそくそれを取る為に奮闘を開始した。

「柊はああいうのも興味あんのか？・・・あ、これいいな。」

「柊ちゃん、がんばってるわね。あら、これも可愛いわね。」

かがみの奮闘っぷりを見ながらみさお達もそれぞれに気になる景品を見つけたようだ。

そして2人はかがみのやり方のみようみまねでＵＦＯキャッチャーをはじめた。

「あ、失敗・・・結構難しいなー」

「中々上手いタイミングつかめないわね・・・結構あっさり取ってる人もいるのに・・・」

やはり初心者ゆえの手探りなだけにかなり苦戦をしている2人だった。

それを見ていた俺は軽いため息を一つついて2人の所に行って

「狙ってんのはどれだ？俺がやってみるよ。」

そう声をかけると２人は俺の方を振り向いて

「お？慶一、やれんのか？お前も。なら頼むぜ？」

「慶ちゃん、お願いしてもいい？」

と言う２人に俺も頷いて

「ああ、まあ、あまり期待はしないでくれよな。とにかくやってみるよ。」

そう言って俺は２人の狙う景品を見定めてお金を投入、クレーンを動かして狙い始める。

だが、この日に限って俺の調子はいまいちでいつも以上に失敗しまくっていた。

それでもなんとか２人の合計６０００円を使ったところで景品をゲット、後から考えたらなんでこんなに熱くなったのかわからなかったのだが、俺自身相当悔しかったらしいというのだけはわかった。

「サ、サンキューな慶一・・・大丈夫か？結構使ったみたいだけどさ？」

「慶ちゃん、あまり無理しなくてもよかったのに・・・でも大切にさせてもらうわね？」

苦笑しながらも嬉しそうな２人を見て一応ほっとした俺はとりあえずかがみの方に何気なく視線をやるとそこにはｏｒｚの姿勢で盛大

に凹んでいるかがみがいたのだった。

俺達は呆れたようなため息をつきながらかがみの元に行って

「どうした?かがみ、取れなかったのか?」

「柊、大分凹んでんなー?ひょっとしてつかいこんじまったか?」

「柊ちゃん、さっきの慶ちゃんもそうだけど、あまり熱くなり過ぎないようにしないと・・・」

俺はあやのの言葉に苦笑しつつ、かがみはその俺達の言葉にただただ悔しそうに涙を流して

「・・・わかってはいたんだけど・・・つい・・・悔しい・・・」

そう無念さを訴えてくるかがみを見ていられなくなった俺はやれやれというジェスチャーをした後

「かがみ、どれだ?俺がやってみるよ。」

そう言うとかがみは途端に顔を上げて狙ってる景品を指差して

「あ、あれなんだけど・・・慶一くん、取れる?」

かがみが指差す方を見ると微妙な所まで引っ張られている景品が目に入ったので俺は

「あれだな?よし・・・やってみるか・・・」

そしてお金を投入し、再びチャレンジするとまたしても上手く取れない事に俺自身が熱くなり、またしても６０００円使ってしまう結

果になったのだった。

とりあえず取れた景品をかがみに渡す俺

「・・・ほら、かがみ、これ・・・」

景品を受け取り嬉しそうな顔をした反面、俺にかなりお金を使わせた事を悪いと思ってかその表情を少し曇っていたのだが

「ありがとう、でも大分使っちゃったよね？いいのかな？もらっちゃっても・・・」

俺は精一杯の強がりで

「構わないさ、その為に取ったんだからな。さあてこれで後はお前らの希望のケーキバイキングだけだな？こなた達とも待ち合わせてるし、急ごうか。」

俺のその言葉に皆も苦笑しながら頷いていたが、とりあえずみんなの待ち合わせ場所へと向かう事にした。

その途中でもう一度サイフに現金を補充しつつ自分の貯金残高とこれからの事を考えて少しだけ憂鬱になっていた俺だった。

とりあえずその感情を表に出さないように気をつけながら俺達は待ち合わせのケーキバイキングの店に行くとそこには俺たちを待ってこなたとみゆきが来ていたのだった。

「よっ、2人ともお待たせ。」

「ごめんね、途中いろいろあって遅れちゃったわ。」

「待たせちまったなー。とりあえず店に入ろうぜ？」
「高良ちゃん、泉ちゃん、遅くなってごめんね？」

そんな俺達に2人も

「いいよー。私達もそんなに待ってなかったしさ、その分慶一君に頑張ってもらえばいいわけだしね。」

ニヤニヤと俺に含みを持たせた視線をむけてくるこなた。

「あの、慶一さん、本当によろしいんでしょうか？ご馳走になってしまって・・・」

こちらはなんとなく悪いと思っているのか複雑そうな表情のみゆき。

「いいんだよ、俺が言い出したことだ。それに本当に皆には世話になったからな。とりあえず店に入ろうぜ？」

そうみゆきに言い、他の皆にも店に入るように促して俺達は店へと足を踏み入れる。

そして俺達全員が座れる場所を確保してさっそくバイキングの開始となった。

俺はとりあえず紅茶を頼んで様子を見つつケーキを取ってくることにしたのだがこなた達は

「あんた、そんなに取って食べきれるの？」
「そういうかがみんだって人の事いえない量だよ？」
「私も甘い物は好きなのですが、さすがにいっぺんは厳しいですね・

・・」

「まあ、これくれー普通じゃん？なあ、あやの。」

「うーん、それでも少し量が多い気がするわよ？みさちゃん。」

それぞれにそう言いながらケーキを取り皿にとって持ち帰ってきたのを見て俺は驚きつつ

「すごいな、そんなに食べれるのか？女の子の甘い物好きってのも凄いもんだ・・・」

俺の言葉にこなたは

「このくらい普通だよー？そう言う慶一君はあんまり持って来てないよね？もしかして甘い物って苦手？」

こなたの言葉に俺は首を振って

「いや、どっちかというと好きな方だが量をそんなに食べる方じゃないってとこだな。」

その俺の言葉にかがみは俺の体をじろじろと見て

「それでも慶一くんあんまり太ってないよね？なんだか羨ましいわ。」

かがみのため息を見て俺は苦笑しつつ

「そういやかがみはよくダイエットとかやるって言ってたけどさ、俺から見たらお前も全然太ってなんか見えないけどな？」

俺の言葉を肯定するかのようにこなたも

「うんうん、そうだよねえ・・・かがみは少し気にしすぎだと思うなー。」

こなたのその言葉にかがみはこなたをキッっと睨みつけて

「私はともかく、あんたが変わって見えない方が不思議よ！同じように食べているはずなのに・・・」

こなたは得意げに笑って

「私は代謝がいいのだよ。誰かさんとは違うからねー。」

こなたのその言葉にかがみは思わず

「納得いかねえ！！」

と叫んでいたが、まわりの視線が集中して恥ずかしかったのでとりあえずかがみを落ち着かせたのだった。

「・・・まったく、たかが1キロ増えた減ったと一喜一憂して、これだから女ってやつぁー・・・」

そのこなたの言葉にかがみは

「あんたも確か女だったはずだよな？」

と冷静にツッコミをいれているのを俺たちは苦笑しながら見ていたのだった。

「でも、本当、ここのケーキは美味しいですね。」
「ああ、甘さも適度でいい感じだよなー。」
「そういえばうちのクラスはケーキと紅茶の喫茶店をやるんだったわよね？ここのケーキとかも参考にできるかもしれないわね。」
「そういえば発案もあんただったわよね？でもよくみんなやる気になったわよね？」

かがみの疑問に俺は腕組みをしながら

「作れる奴がいたってのもそうだけど、やっぱり女生徒達にとってもケーキって魅力だったのかもしれないな。」

俺の言葉に妙に納得している5人だった。

「うちはメイド喫茶やるんだよねー。ねえ？みゆきさん。」

こなたの突然の振りに困惑しながら

「え、ええ、そうですね。まさか企画が通ると思いませんでしたが・・・」

苦笑しながらそう答えるみゆきに俺とかがみは呆れ顔で

「みゆきは反対しなかったのか？学校的に見てあまりいいとも言えないと思うんだがな・・・」
「まったくよ。そもそも喜ぶ人だってごく1部なんじゃないの？」

俺達のその物言いに頬を膨らませながら

「そんな事ないよー！結構流行ってるんだよ？メイド喫茶を馬鹿にしちゃいけないよー？」

こなたの抗議に俺とかがみは「「はいはい」」と言って呆れるのだった。

その様子を見ていたみさおとあやのも困惑した顔でこっちを見ていたが。

「ともかく明日以降から準備を始めていかないといけないよな？」

「そうね。明日からしばらくはそっちにかかりっきりになりそうよね。」

「まあ、こんな事ができんのもとりあえず文化祭が終わってからになりそうだよなー。」

「それでも皆で一つの事を頑張れるいい機会だし、がんばってみようよ。ね？みさちゃん。」

「まあ、がんばってみっか。」

そしてこなた達もお互いに

「私達も忙しくなりそうだね。アニメ録り溜めしとかないとだめかも」

「教室の飾りつけや設備関連は大変になりそうです。でも、委員長として頑張らせてもらいますから。」

「頼りにしてるよ？みゆきさん。」

「頑張りましょうね、泉さん。」

がんばっていく事を決めたようだった。

そして結局、序盤の取り過ぎが原因でケーキが入らなくなり、最後

の一つをどうしても食べきれなかったかがみたちに代わり、俺が６人分のケーキ代を支払う事となったのだった。

結局１２０００円を支払い、今日の出費に大打撃を受けて今日俺は自分から言い出したことを改めて後悔する事となったのだった。

本日の出費額電車賃等含め２６０００円なり・・・あああ・・・・・・

あの後かがみたちはみんなして俺に詫びていっていたものの、しばらくはまともな食事ができない事を覚悟した俺だった。

そして、俺にはまだ後2人奢っていない奴が残っている事を思い、憂鬱な気分で家に帰ったのだった。

いよいよ文化祭の準備も本格化する今日、結構手痛かったけどこういう事も悪くはないなと思った俺だった。

蘇る旋律～親友の復活そして、慶一の嘆き　前編～

昨日のサイフへの大打撃は俺にとっても苦しい物となった。

このままでは本当に次のバイト代が入る頃までには確実に食費は尽きると考えた俺は今日の放課後に泣く泣く実家に頭を下げに行こうと思っていたのだった。

そして今日の放課後になり俺は明日が休みという事もあり、今日は実家に行くついでに泊まって来ようと思っていたのでかがみ達に

「かがみ。今日は俺実家に行って来るつもりだから、今日はたぶん家に戻らないと思う。明日休みだし、顔出しがてら一晩泊まってくるつもりからだからさ。」

そう声をかけるとかがみは俺の方を向いて

「あれ？そうだったんだ、わかったわ。でも明日は居るのよね？」

かがみのその言葉に俺は少し考えると

「帰りは夕方頃になるかもしれないな。でも早めに帰れるようなら連絡入れるよ。」

かがみにそう伝えるとかがみは頷いて

「わかったわ。それじゃせいぜい親孝行でもしてきなさいよ？普段あんななんだからさ。」

俺は苦笑しながら

「まあ、親父とはどうかは知らないが、お袋には孝行してくるかな？」

かがみも俺の言葉に苦笑すると

「まったく、あんたの所は相変わらずよね。」

やれやれというジェスチャーをしながら呆れるかがみ。

「慶一、また実家へ行って来るんか？それじゃ猫達は私らで様子みといてやろうか？」

「そうね。慶ちゃん、猫達は私達にまかせて、安心していってらっしゃい。」

そう2人が言ってくれたので、俺はその言葉に甘える事にしたのだった。

「悪いな、二人とも。それじゃモモとミィの事任せたよ？向こうで美味い物でもお土産に買ってくるよ、と言っても食べ飽きてる物しかないかもだが・・・」

その言葉にかがみも笑いながら

「別にいいわよ、そんな気を使わなくてもさ。それにあんたは私達に奢って大分財政難になってんじゃないの？だから無理しなくていいわよ。」

そのかがみの言葉に俺は苦笑するしかなかった。

そして俺はそんなかがみ達と別れてとりあえず学校を出るために昇降口に向かい靴を履き替えている時、俺の後ろから声をかけてくる2人に気付いた。

「先輩、今帰りですか？」
「こんな所で会うなんて珍しいわね。」

俺はその声の主に振り向き挨拶を返す。

「よう、こう、やまと。お前らも帰る所だったのか？」

俺の言葉に2人とも頷いて

「はい。とりあえず文化祭の準備の事があったんですが、資材が届かないので今日明日は出来そうにないのでとりあえず今日はおしまい、という事になりまして。」
「今回は資材の発注等に手間取りがでたせいもあるわね。まあ、これはこうを責められる事じゃないけれど・・・。」

その2人の答えに連携において生じたズレが影響しているようだな、と思いながら

「そうか、色々大変だな。とりあえず、今日は一緒に帰らないか？俺も行くとこあるしな。」

俺の言う、”行く所”というのが気になったのかこうは俺に

「行く所、ですか？一体どこへ行くんです？」

こうの質問に俺は笑いながら

「すぐにわかると思うぞ？それじゃ帰るとするか。」

そう2人に言って俺は学校を後にすると俺の”行く所”に疑問をもちながらも

「待ってくださいよ先輩ー！」

「こう、早くしなさいよ。待って、先輩。」

そう言いながら俺についてきた。

俺達はバスに乗り込み、駅へとむかう。

そしていつもならばお互いに違うホームに行くはずだったが、今日は俺はこう達の居るホームに向かった。

その事に驚いた2人は

「せ、先輩？どうしたんです？先輩はいつもはこっちのホームじゃなかったはずですよね？」

「それとも、先輩がさっき言っていた”行く所”に関係しているの？」

そう聞いてきたので俺はいたずらっぽく笑いながら

「あはは。まあ、そんなたいそうな事じゃないさ。俺の行く所は実家だからな。」

そう言うと2人は脱力しながら

「ちょ、先輩。意味深に言うからどこか特別な所なのかと思ったじゃないですかー。」
「まったく、人が悪いわね・・・」
そんな2人に俺も笑いながら
「はは、すまんすまん。まあ、そういう事さ。ちょっと用事でな。」
そう言うとこうは苦笑しながら
「またお父さんとケンカですか？」
と聞いてきたので俺は適当に
「まあ、それは選択肢の一つかな？」
そう答えると、やまとは呆れ顔で
「ほんと、相変わらずなのね、先輩の所は・・・」
そう言っていたのだった。
やがて電車が来たので俺達は電車に乗り込み実家の最寄駅に着くまでの間俺達は雑談を交わした。
「そういえば中学校以来ですね、こうやって3人一緒に帰るのって。」
「そういえばそうだな・・・悪いな、2人とも・・・俺が実の両親と住んでいた家に入るって事になったから一緒に帰ったりも出来な

くなっちゃったもんな・・・」
「・・・それも先輩が自分で選んだ事なのだから仕方がないわよ・・・」
「すまない、やまと。そう言って貰えると少しは気が楽になる。」
「まあ、それでも私達はちゃんと繋がっているんですから問題なしですよねー。」
「この縁は切れるもんじゃないなあ、とは思ってるがな。」
「そうね。そして先輩が受け入れてくれたから私も陵桜に通えているし、先輩やこうともこんな風に話せるのよね。」
「それもまた俺達の絆なのかもな。そういや2人とも覚えてるか？中学の頃よく俺達が利用したあの店。」
「あ、ひょっとしてあの喫茶店レゾンですか？」
「そうそう、その店だ。今もまだ残ってるんだよな？」
「ええ。今も私達もたまに利用してるから、今でも健在よ？でも、それがどうしたの？」
「あの一件が片付いた時俺が言ってた事を覚えてるか？」
「えーっと・・・確か世話になった礼に何か奢る、って言ってましたっけ。」
「そういえば先輩はそんな事を言ってたわよね？ひょっとして？」
「そういう事だ。なつかしのあの店でお前らに奢ろうかと思ってな。実家に行こうと思ったときに思い出したんだ。」
「いいですねー。あのチーズケーキがまた食べたいですね。」
「まあ、先輩のお財布事情を考慮してあげるわ。あそこで食べたパフェをお願いしようかしら？」
「ははは。よし、ならそういう事で、だな。今日は直で実家に行かなきゃならないから明日の休みでいいか？」
「かまいませんよー？」
「先輩、後で実家の方にお邪魔させてもらってもいいかしら？」
「ああ、それなら問題ないぞ？こうもよかったら来い。お袋がおそらく夕食をご馳走してくれるだろうからな。」

「ほんとですか？なら帰ったらやまとと一緒にお伺いしますね。」
「わかった。それじゃ来る時に連絡いれてくれ。」
「わかりました。」「わかったわ。」

そんな風に話してるうちに最寄駅へとついた俺は後でこうとやまとが家に来る事再度確認した後、実家へと戻っていったのだった。

「ただいまー。お袋、帰ってきたよ。親父はくたばったか？」

そう声をかけるとお袋はいつものようにニコニコしながら

「お帰り、慶一。お父さんは相変わらずよ？とりあえず上がりなさい。」

そうお袋に促されて俺は上がってとりあえず元自分の部屋に荷物を置いて着替えた後下に行ってお袋に

「お袋、電話でも話したと思うんだけど実はさ・・・・・と言う事で悪いんだけどお願いできるかな。」

俺がそう言うとおふくろは微笑みながら頷いて

「事情はわかったわ。とりあえずこれを足しにしなさい。」

そう言って俺にバイト代が入るまでの生活費を渡してくれた。

俺はお袋に礼を言うと、こうとやまとが家に来ることをお袋に伝えた後、俺は瞬のところに電話をかけた。

数回のコールの後、瞬が電話に出た。

「もしもし、瞬か？俺だ、慶一だ。」
「お？慶一か、珍しいな、お前が電話かけてくるなんてな。」
「・・・一応、お前に礼を言っておきたくてな。今回の俺の一件では世話になったようだからな。」
「ん？ということは、こなたちゃんお前に話しちゃったって事か。」
「まあな。それとさ、お前との誓いも果たせたからな。その事も報告しとこうと思ってな。」
「・・・そうか・・・じゃあ、お前らが海へ旅行に行ったあの日にって事なんだな？」
「ああ。俺に勇気をくれたみんなには感謝してる。そして、過去と向き合うきっかけをくれたお前にもな。」
「別に俺は大した事しちゃいないさ。乗り越える事ができたのはお前の強さだよ。」
「・・・まあ、とにかくだ。明日なんだが、お前予定空いてるか？」
「ん？なんだ？藪から棒に。」
「今回の事に対する感謝としては割に合わないかもしれないがお前に俺達の思い出の店で何か奢りたいと思ったからな。それで、どうだ？」
「思い出の店？・・・・・・レゾンの事か。そうだな、久しぶりに行ってみるのも悪くないか。」
「なら明日の1時頃に店で待ち合わせよう。」
「それはいいが他に誰か来るのか？喫茶店で野郎2人なんて色気も何もあったもんじゃないぞ？」
「それに関してはこうとやまとに声をかけてあるよ。久々の同窓会気分でいいんじゃないか？」
「へえ？なるほど、それもいいな。わかった、1時にレゾンだな？行かせて貰うよ。」
「ああ、待ってる。・・・・・・瞬、俺は過去を乗り越え、そして今回の事件を乗り越えてようやく自分を許してやれそうだ・・・も

う一度・・・お前を親友と呼ばせてもらってもいいだろうか？」
「・・・ばーか・・・お前はあの頃からずっと俺の親友だ。それは今だって変わっちゃいないぞ？それを忘れんな！」
「・・・ありがとう・・・親友・・・。」
そして電話を切った俺は喜びの涙を流していた。
まだ乗り越えるべき事はある、それはわかってる。
けれど、俺は過去を乗り越え、今回の一件を乗り越えてようやく自分を許す事ができた。
そして、もういちどあいつを親友と呼べる日がきたことがこんなにも俺の心を歓喜で満たしてくれるとは思ってもみなかった。
俺は、あいつとずっと親友でいたい、いたかったんだと改めて思ったのだった。
そして、その後、こうとやまとが家にやってきてこの家での久々の賑やかな夕食が始まった。
俺は2人に夕食の後、先程の瞬とのやり取りを伝えた。
2人も俺と瞬との事を気にしていたからというのもあったが、それ以上に俺自身が嬉しかったのだと思う。
数年ぶりに復活した親友、そうあいつの事を呼べることが俺にはこの上なく嬉しかった。
2人もまた、俺の報告を聞いて嬉しそうな笑顔をしながら

「よかったですね、先輩。」
「一つ先輩の助けになれた事、嬉しく思うわ。これからも先輩の助けになりたい。」
そう言ってくれる2人に俺も笑顔で頷いて応えたのだった。
そしてその日はこうとやまとと遅くまで話し込んでしまい、俺は2人を家に送っていった。

「すいません先輩。わざわざ送ってもらっちゃって。」
「ちょっと遅くなりすぎたわね・・・ごめんなさい、先輩。」

俺は申し訳なさそうにそう言う2人に笑いながら
「いいさ。俺も楽しかったからな。それよりも明日の1時レゾンでな。遅れるなよ?特にこう!」
「どうして私を強調するんですかー!酷いですよ、先輩。」
「まあ、普段の行いが原因と思う事ね。」
「やまとまで・・・わかりましたよ、ちゃんと行きますから。」
「ならよし!お?そろそろだな。それじゃ2人ともここで、じゃあな。」
「はい、ここまでありがとうございました先輩。」
「先輩も気をつけて帰りなさいよ?それじゃまた明日。」
「ああ、楽しみにしてるぞ。」

そういうやり取りをして別れると俺は家へと急いだ。
家に着き、風呂に入って疲れを癒して明日のために早めに休んだ。

だが、この時俺は気付いていなかった。

次の日に待っている昨日以上の地獄があることを。

そして次の日の早朝、俺はいつもどおりの早起きをして軽く散歩をするために外に出る。

家の前で軽く柔軟体操をやっている時、ふいに後ろから声をかけられたのだった。

「・・・慶一先輩？・・・どうしてここにいるんですか・・・？」

その声に振り向くとそこに立っていたのはみなみとゆたか、ひよりの３人だった。

「ん？みなみ？おはよう、それにゆたかにひよりも？お前ら一体なんで？」

俺の間の抜けた台詞にゆたかとひよりも

「おはようございます。慶一先輩。先輩こそどうしてここにいるんですか？」

「おはようございます先輩。こんな所でお会いするとは思ってなかったっスよ？」

その２人に俺は苦笑しながら

「どうして俺がここにいるのかというとだな、ここは俺の実家だから、というのが答えだな。お前らこそ３人揃って何してるんだよ？」

俺の問いかけに3人は笑いながら

「ここが先輩の実家だったんですね？初めて知りました。実は私と田村さんとみなみちゃんは時々こうやって受験勉強をするために集まってるんです。今日もたまたまそういう日だったんです。」

「はー・・・かなり大きな道場じゃないですか・・・ええ、小早川さんの言うとおりです。煮詰まったりした時はこうやって集まってお互いに頑張ってるんです。」

「・・・そして、この時間に居たのは昨晩から家に泊まってもらって・・・早朝のチェリーの散歩に来ていたから・・・です。先輩こそ・・・どうして実家に戻っていたんですか・・・？」

俺はみなみの説明に納得して

「なるほど、そういう事だったのか。まあ、ちょっと野暮用でね。今日にはまた埼玉の家に戻るつもりなのさ。」

俺の説明に納得しつつ、みなみは俺に

「・・・先輩、みゆきさんから聞きました・・・かなり大変だったみたいですね・・・。もう大丈夫なんですか・・・？」

そう言って来たので俺はその言葉に驚きながら

「みなみ、お前も知っているのか？俺が陥っていた状況の事を・・・」

そう訪ねるとみなみはコクリと頷いて

「・・・はい。凄く心配していました・・・。先輩が居なくなって

しまったら・・・私の目標の一つが消えてしまう、そう考えたら・・・不安で・・・。」

そのみなみの言葉に続くようにゆたかとひよりも

「私も、みなみちゃんから聞いた時には信じられませんでした。そして凄く悲しくなったんです。でももう大丈夫なんですよね？」

「正直、驚きましたっス。そんな事って漫画とかの世界の事と思ってましたっスからね。でも、今の先輩の顔を見たときに確信しました。大丈夫なんだと。」

俺はそんな2人の頭を軽くポンと叩きながら

「心配、かけちゃったみたいだな。ごめんな？けど、もう心配ない。きっちり決着つけてきたからな。」

そういうと3人とも”ほー”っと軽いため息をついた後緊張が解けたようだった。

「そうだ、3人とも今日の1時頃は空いてるか？」

俺の言葉に3人は顔を見合わせて相談していたがやがてみなみが俺に

「・・・はい、大丈夫だと思います。それで・・・何かあるんですか・・・？」

みなみの言葉に頷いて

「ああ。今回の件で他の皆にも大分心配と迷惑かけちゃってたからな。そのお詫びで何か奢ろうと思ってな。それで今回俺の中学時代

使っていたなじみの店に行こうと思ってな。その時によかったらお前らもどうだ?と思ってさ。」

みなみに説明するとみなみは少し遠慮がちに

「・・・でも、私は・・・今回は何もしてません・・・ですから少し気が引けます・・・」

そんなみなみに俺は微笑みながら

「いいんだ。俺がそうしたいって思ってるんだからそこらへんは気にしなくていいよ。心配させたんだからそのくらいはさせてくれ。」

俺がそう言うとみなみは俯いて何事か考え込んでいたようだったがやがて顔を上げると

「・・・なら、先輩のご好意に甘えさせてもらいます・・・待ち合わせはどうしますか・・・?」

俺の申し出を受けてくれたみなみに笑顔で頷くと

「12:30頃に俺の実家へ来てくれ。そこからみんなでその店へいこう。」

そう伝えるとみなみはコクリと頷いて

「・・・わかりました・・・12:30頃にこちらに伺いますね・・・それでは私達はチェリーの散歩の続きがあるのでこれで・・・。」

俺に軽くお辞儀をするとゆたか達と一緒にチェリーの散歩の再開を

した。

その際にゆたかとひよりが俺に

「先輩。気を使ってくれてありがとうございます。みなみちゃんと一緒に行きますね？」

「先輩、ご馳走になります。３人でこちらに行きますから、よろしくっス。」

その２人の言葉に俺も頷いて去っていく３人に手を振って見送ったのだった。

３人を見送った後俺は自分の当初の目的だった散歩を済ませ、時間まで家でのんびりしていた。

時間が丁度１１：００を回る頃、家に来客が来たので俺は応対にでたのだが、俺はそこで信じられないものを見たのだった。

「やふー、慶一君。遊びにきたよー」

皆を代表して挨拶してくるこなた。

そしてその後ろにはかがみ達ご一行が俺に向かって手を振っていたのだった。

俺はまたしても嫌な予感にとらわれつつ皆を出迎えたのだった。

蘇る旋律～親友の復活そして、慶一の嘆き　前編～（後書き）

長くなりそうだったので2部構成でいきます。

蘇る旋律～親友の復活そして、慶一の嘆き　中編～

現在のサイフピンチ状態を脱すべく、実家にバイト代が入るまでの間を凌ぐ為、俺はお袋に都合をつけてもらいに帰っていた。

その際にこうとやまとに中学時代によく利用した店にあの時の一件の後、世話になった2人に奢る約束を果たす為そこで奢る約束をしたのだった。

そして実家に戻り、こうとやまとを夕食に招待して俺は2人を待つ間に瞬の所に電話をかけて今回の一件に対する礼と共にそれを乗り越えた事で俺は自分をようやく許す事が出来、再び瞬と親友として元の関係に戻れたのだった。

次の日に思い出の店レゾンに瞬も誘い、久しぶりに元同じ中学の者同士、同窓会気分で会うことになったのだが、当日の朝にまさかのみなみ達と出会う事になり、みなみ達を心配させていた事を知った俺はみなみ達もレゾンへと誘う事になった。そして待ち合わせ時間までのんびりしている時、突然にこなた達が実家にやってきたのだった。

「やふー、慶一君。遊びにきたよー。」

と俺ににこやかに挨拶するこなたの後ろで少々苦笑ぎみな面々も俺に手を振っていた。

「こなた。お前一体なんでここに？」

そう俺が尋ねるとこなたも笑いながら

「いやー、かがみから慶一君が実家に帰ってるって話を聞いちゃってさー。それで峰岸さん達も慶一君の猫の世話してるって聞いたから、峰岸さん達を迎えに行ってさ、まだ慶一君の実家に行った事のない峰岸さん達を慶一君の実家に連れて行ってあげようかなって思ってねー。」

俺は軽いため息を一つついて

「あやの達の事はわかったけど、なぜにかがみたちも居るんだ？」

とかがみに質問をぶつけるとかがみは俺から目をそらして

「いや、その・・・こなたが慶一くんが実家に帰ってる事を話したらこなたが遊びに行くから一緒に行こうっていうからつい・・・」

俺はかがみの言葉に苦笑しながら

「なるほど・・・それでみゆき達も来た、と。」

みゆきもなんとも答えずらそうに

「泉さんに誘われて、つい・・・すいません、慶一さん。慶一さんにもご都合というものがあったかも知れない事を考慮していませんでした・・・。」

心からすまなそうに言うみゆきに俺も

「ああ、いいよ。今日は特に忙しい訳じゃないからさ。」

そうみゆきを安心させるように言うと、みゆきもほっとしたようで

「そうですか・・・それならよかったです・・・」

そう言いながら胸をなでおろしているみゆきの後ろでつかさもニコニコしながら

「大丈夫だよゆきちゃん。けいちゃん、怒ってないからさ。」

とのん気な事を言っているつかさを見て俺は苦笑していたのだが、そこにあやのとみさおが

「慶ちゃん、モモちゃんとミィちゃんのお世話はちゃんとしてきてるから安心してね。それと、突然押しかけてごめんなさい。」

「わりーな慶一。私もお前の実家ってのに興味あったからさー。それにしてもなかなかでけー道場じゃね？」

俺はそんな2人にも声をかけた。

「あやの、お世話してくれたみたいで助かるよ。それに気にしてないから安心してくれ。みさお、俺はここで育ち、ここで鍛えられたんだ。後で道場内も見せてやるよ。」

俺がそう言うとあやのはほっと一安心し、みさおは目を輝かせて

「ありがとう慶ちゃん。少しは役に立てたみたいでよかったわ。」

「ほんとかー？慶一、絶対だかんな？後で嘘だとかいうなよなー？」

そんなみさおに俺は苦笑しつつ

「わかってるって。嘘は言わないさ。」

そう答える俺にこなたは何かを思いついたのか俺に

「なら慶一君、みさきち達に”あれ”を見せてあげたら?」

そう提案してきたので俺は少し考えつつ時間を見ながら

「そうだな、まだ少し時間もあるしいいだろ。じゃあ、みんな。道場の方へ案内するから来てくれ。」

そう皆に声をかけて移動しようとした時、俺たちの後ろから声がかかったのだった。

「あれ?こなたおねーちゃん、それに皆さんも。どうしてここにいるんですか?」

「・・・こんにちは、先輩。少し早いですが・・・来て見ました・・・!?泉先輩達、どうしてここに・・・?」

「こんにちはー。先輩、来たっスよー。ってあれ?泉先輩?何でいるっスか?」

その声に俺たちも振り向いて

「お?ゆたか、みなみ、ひより、早かったな。」

「ゆーちゃん達こそどうして?慶一君、これってどういう事?」

俺にそう聞いてきたので俺は朝にあった事をこなたに説明するとこなたは納得したようで

「そうだったんだ。ゆーちゃん達もがんばってるんだねえ。丁度い

いや。慶一君、ゆーちゃん達にも”あれ”見せてやってよ。」

こなたの言葉に俺もやれやれというジェスチャーをして

「まあ、見てない人もいることだし、いいか。それじゃ道場に案内するからみんなついてきて？」

俺がそう促すとみんなも頷いて俺の後について来て道場内に入る。

それを見届けた俺は胴着に着替える為に皆にここに居るように言い残して離れの家に戻っていった。

「なあ、ちびっ子。一体何が始まるんだ？」

「泉ちゃんの言ってた”あれ”って何なの？」

「まあまあ、すぐにわかるから待ってようよ。」

とこなた達が話している向こうでみなみ達も

「ねえ、みなみちゃん。先輩何かやるつもりなのかな？」

「はあー・・・それにしても大きな道場だね。慶一先輩はここで体を鍛えたんだねー・・・そういえば岩崎さんは何か知ってるみたいだよね？それって？」

「・・・待っていればわかるよ・・・」

みなみはゆたかとひよりにそう答えたのだった。

程なくして俺は胴着に着替えて道場に戻ってくるとみさお達やゆたか達が「おおーかっこいーなー」「慶ちゃん中々様になってるわ。」「慶一先輩かっこいいなー。」「これはいいネタの予感！」

と様々に話しているのを聞きながらも俺はみんなに

「こなた達は知っているけどみさお達やゆたか達は知らないと思うから言うが、これから俺のやっている武術の演武をやる。そこで見ていて欲しい。」

そう伝えるとみんなは頷いて静かにして俺の動向を見守った。

そんな中で俺はいつもの演武をするのだった。

一通りの演武を終えるとみさお達が俺のところにやってきて

「慶一すげーなー。動きがかなりキレがあってかっこよかったぜー。」

「私も見とれちゃったわ。慶ちゃん凄いのね。」

「先輩、凄かったです、かっこよかったです。私も感動しちゃいました。」

「いやー、先輩のあの動きとか武術漫画の参考になるっスねー。いいネタいただきました。」

若干1名別の事で賞賛しているようだったが、皆一様に喜んでくれたようだ。

「ははは、それでも大分鈍ってるけどな。やっぱり少しブランクあるようだよ。とりあえず俺は一度シャワーを浴びて準備してくるから道場内で待っててくれ。」

俺の準備という言葉に引っ掛かりを覚えたかがみが俺に

「慶一くん、準備ってなんなの?どこかにでかけるとか?」

俺はかがみの質問に頷いて

「ああ、そういえばこなた達には言ってなかったっけな。もう少ししたら俺が中学時代によく行っていたなじみの喫茶店へと行こうと思っててな。」

そう答えると今度はこなたが俺に

「喫茶店？思い出の場所なの？」

そう聞いてきたので俺は頷きながら

「まあ、そういったところだ。ゆたか達が来たのも俺がそこに連れて行こうと思ったからなわけだけどな。」

俺の言葉にこなたは目を輝かせながら

「ねえ、慶一君、私達も一緒に行っていい？なんとなく見てみたいなって思ったからさー。」

俺は軽いため息を一つつくと

「今更ダメなんて言えないさ。とにかくお前らも連れて行ってやるからちょっと待っててくれよな。」

俺がそう言うとこなたは満面の笑みで

「うんうん。待ってるから早く来てねー。」

というこなたの態度に苦笑しながら俺は道場を後にしてとりあえずシャワーを浴びに向かったのだった。

そしてシャワーから戻ってきた時、皆が来てる事に気付いていたお袋が俺にこっそりとお金を余分に渡してくれたので俺はその事にお礼を言うとこなた達の待つ道場へと戻っていった。

「お待たせ、さて、それじゃ行こうか。みんな、俺についてきてくれ。」

みんなにそう促すとみんなも頷いて俺の後についてきたのだった。

喫茶店へとつくまでの間歩きながら軽いやり取りをしていた俺たちだった。

「ねえ、慶一君。その喫茶店って何かお勧めとかある?」

「そうだな・・・ケーキとかパフェなんかはお勧めかな。」

「ケーキか・・・食べたいけど・・・うーん・・・どうしよう・・・」

「かがみ、またダイエット中?どうせ無駄なんだから諦めたらー?」

「う、うるさいわね!まだダメだって決まったわけじゃないでしょ!?まったく・・・」

「パフェか~。わたし食べようかな~?」

「私も興味がありますね。慶一さん、お勧めを教えてもらえませんか?」

「まあ、それは店についてからって事でだな。あやのやみさおも何か食べたい物あるか?」

「え?でも前回奢ってもらってるわよ?なんだか悪いな。」

「私はケーキだなー。慶一、また奢ってくれるんだろ?」

「みさちゃん、だめよ。慶ちゃんに前回も大分お金使わせちゃった

のよ？」
「あ、そういやそうだっけ。わりい慶一。」
「いいよ、気にすんな。お袋が俺に余分にお金渡してくれたからな。それにゆたか達にも奢るつもりだったのにお前らだけ奢らない訳にもいかないだろ？」
「え？でも、本当にいいの？」
「ああ。任せてくれ。だからあやのもそんなに気を使わなくていいよ。」
「そう？それじゃお言葉に甘えちゃおうかな？」
「私もいいんだよな？慶一。」
「ああ、構わんさ。」
「・・・あの慶一くん・・・私達もいいのかな？」
「まとめて面倒見るよ。だから遠慮するな。」
「ありがとう、けいちゃん。」
「ありがとうございます、慶一さん。でも今回は慶一さんにも悪いので一品程度にしますね？」
「ありがとうございます先輩。」
「・・・ありがとう・・・ございます、先輩・・・ご馳走になりますね・・・？」
「気を使わせてしまってすいませんっス、先輩。」
「いいさ、今日は頼ってくれ。それと、向こうで俺の親友も待ってるだろうからな。知らない顔が居ると思うけど皆にも紹介したいからさ。」
「親友？慶一君、ひょっとして・・・」
「ああ、そういう事だ、こなた。俺は昨日あいつの所に電話を入れて、今回の一件で世話になった事に礼を言い、そしてあの夏に過去を乗り越えてそして、今回の一件も乗り越えて俺はようやく自分自身を許せるようになった。だからその事をあいつに伝えて俺はあいつとの親友関係を復活させたって事さ。」
「そっか・・・よかったね、慶一君。」

「ありがとう。この事もこなたには感謝かな。お前が俺に話してくれたから俺は瞬に対して素直になることが出来たんだしな。」
「あの?先輩、何かあったんですか?親友とか自分自身を許す、とか・・・」
「ん。昔にちょっとな。その辺はこなた達にも話してあるからさ、後で聞いてみてくれ。おっと、ようやく着いたな。みんな、この店だよ。」

俺が店を指差すとみんなも店のたたずまいを見ながら

「へー・・・結構年代物って感じだねー・・・」
「アンティークな感じがいいわね。」
「雰囲気あるね~。」
「なんだか懐かしくなるような気分ですね。」
「どことなく時代を感じさせるっていうか・・・」
「私は結構好きだな、こういうのはさ。」
「なんだか時間が戻ったような気分ですね。」
「・・・ここの事でしたか・・・レゾン・・・私も利用した事ありますよ・・・?」
「これはまたいい建物のモデルになりそうっスね」

俺はみんなの反応を見つつ、みなみが呟いた事に驚いて

「へえ?みなみもここに来たことあったのか、以外だったな。」

そう訪ねるとみなみもコクリと頷いて

「・・・はい・・・去年の今ごろでした。何回か足を運んだ事がありました・・・。」

俺はそんなみなみに笑顔を向けながら

「そっか。でも知ってる人がいるのは嬉しいもんだな。」

みなみはそんな俺に顔を赤らめつつ

「・・・私も、です・・・ここを知ってる人はあまり居ないと・・・思ってましたから・・・」

店の前でそんなやり取りをしていると俺たちの後ろの方でバイクが止まる音が聞こえた。

そしてバイクから降りてくる人はヘルメットを取りながら俺に話し掛けてきたのだった。

「・・・おや？慶一君じゃないか。店の前でこんなに大人数で何をやってるんだい？」

俺はその声に驚きつつふり返るとそこには微笑をたたえた氷室結城が立っていた。

「俺はみんなを中学時代に使ってた懐かしい店に連れて来たのさ。氷室、お前こそこんな所で何してるんだよ？」

俺の質問に相変わらずの微笑のままで

「僕もこの店はいつも憩いの時間を過ごす為に中学時代から使っていたからね。今日もゆったりとした時間を過ごしたいと思ったからここに来たのさ。それに普段はこんな風にのんびりはできないからね。こういう時間を僕は大切にしているのさ。」

そう答える氷室に俺は

「へえ？これまた意外な事だな。ひょっとして俺達の中学はこの店って結構知れ渡ってたりしたのか？」

そう質問すると氷室はゆるやかに首を振って

「いや、そんなには有名じゃなかったよ。それに君が利用してたまたま僕も利用していた、そして今日君と偶然ここで出会ったというだけの話さ。」

俺はそんな氷室の言葉に納得しつつ

「そういう事か・・・そうだ、氷室。今回の一件では世話になったな。改めて礼を言わせてくれ。」

俺の言葉に氷室は笑いながら

「いいよ。僕も君には成神の件でお願いする事もあるだろうからね。持ちつもたれつ、さ。それにしても・・・」

そう言いながら俺の後ろに居るみんなに視線を向かわせて

「君の後ろにいる子達が君の言ってた仲間なのかい？大分賑やかそうだね。」

その言葉に俺も頷きながら

「そういう事だ。こいつらが俺の守りたい仲間って訳さ。」

そんな俺に視線を戻した氷室はクスクスと笑いながら

「いや、それにしても見事に女の子ばっかりだとはね。まさにハーレム状態ともいえなくもないんじゃない？」

その言葉にみんなは顔を赤くして俺も慌てて

「ば、馬鹿言うな。そんな風には思ってないよ・・・ったく・・・ともあれ、今回の件での報酬には物足りないかもしれないが、お前にも今日は何か奢らせてくれ。」

俺の言葉に氷室は俺やみんなを見て考えながら

「でも、いいのかい？僕がお邪魔しちゃってもさ。」

そんな氷室に俺は笑いながら

「いいさ、お前にも何らかの形で礼がしたいと思っていたしそれに、瞬も来てるはずだからな。あいつもお前の話をしたらもう一度会って見たいといっていたし。」

氷室は俺から出た意外な名前に驚きながら

「へえ？瞬君が来ているのか。なら、君のお誘いを受けるとしようか。久しぶりに〇〇中学の同窓会気分に浸るのもいいね。」

その答えに俺も頷いて

「なら、そういう事で。それじゃ皆、店に入るぞ？」

そう皆に促すとみんなも頷いて俺について店に入った。
その際に氷室はみゆきに何事か話し掛けていたようだったが。

氷室ｓｉｄｅ

慶一君に誘われ、久々に同窓会気分を味わう事になった訳だけど、僕は今回の一件で高良さんが少なからず傷ついたかもしれないなと思っていたのでこっそりと高良さんに声をかけた。

「高良さん、ちょっといいかな？」
「はい？なんでしょう？」
「今回の事、大変だったね。高良さん、彼の事ではずいぶん心を悩ませていたんじゃないかな？って思ってね。」
「・・・お気遣いありがとうございます。確かに辛い事もありましたが、今はまたこうして慶一さんや皆さんと一緒にいられます。ですから何も心配はいりませんよ？」
「そうか、それなら良かった。僕も彼に協力した甲斐があったというものだよ。」
「今回の事でお手数をおかけしてしまったようですね。私からもお礼を言わせてください。」
「気にしなくていいよ。僕も彼には協力して欲しい事がある。だからこそ彼に力を貸したんだしね。」
「やはり、成神章さんの事、なのですね？」
「うん。彼は野放しにはしておけないからね。まだ手がかりはつかめていないけど、いずれは彼よりも先に行方を掴んで彼には近づけさせないように努力するつもりだよ。」
「！？どうして氷室さんは慶一さんに協力してくださるんですか？」
「前に会った時も言ったよね？彼とは友達だからって。僕は彼にの

されはしたけど、彼の強さに惚れ込んだ1人だからね。それゆえに彼の力になりたいと思っているから、だね。」

「そうですか・・・ありがとうございます。氷室さんはいい人なんですね。」

「はは、ありがとう。それとね、彼が傷つく事で君の泣く姿を見たくないからというのもあるかな?君は彼の側で笑っている方がいい、そう思ったからというのもあるね。」

その僕の言葉に高良さんは顔を赤らめて

「か、からかわないで下さい・・・。」

そう言って困ってる彼女を見て僕は

「からかってるわけじゃないよ?本当にそう思っているだけさ。」

僕のその言葉に彼女は柔らかい微笑みを僕に向けて

「ありがとうございます。氷室さん、氷室さんも暴走族のリーダーをされているんですよね?危険な事も多いのでしょうけど、あまりご無理はなされないようにしてくださいね。」

その言葉に僕は驚きつつも嬉しくなって

「ありがとう、君に心配してもらえるとは思わなかったな。これからも慶一君の周りが落ち着くまでは協力させてもらうつもりだよ。それと、これを君に。」

そう言って僕は彼女に自分の携帯番号とメールアドレスを渡して

「彼にも連絡先は教えてあるけれど、なにかあればここに連絡してくるといい。僕達も君達を守ってあげられる限りは守るから、安心してほしい。」

僕の連絡先を受け取って彼女は僕にぺこりと頭を下げると

「ありがとうございます。何かの折にはお願いする事もあるかもしれませんが・・・その時には頼らせてください。」

そんな彼女に僕もにっこりと笑って頷いたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

皆を連れて喫茶店に入ると懐かしい顔がそこにはあった。

「いらっしゃい。龍神君、いや、今は森村君だったね。久しぶりだねえ。」

喫茶店のマスターが俺に声をかけてくる。

「久しぶりですね、マスター。元気そうで良かった。今日は客一杯引き連れてきたから売上は任せてください。」

そう言って笑う俺にマスターも笑顔で

「おお、これは確かに大人数だね。それじゃこっちにくるといいよ。特別席にご招待だ。」

そう言って俺達を大人数が座れる席に案内してくれた。

俺たちもそこに向かい、円を描くように皆で席について、集合時間まで後少しの間を待つのだった。

その間に、氷室と皆もお互いに自己紹介を済ませ、俺と氷室との関係について話し終える頃、こうたちがようやくやってきた。

そして俺達を見るなり3人は

「うわ、先輩、これって一体どういう事なんですか？」

「まさか、泉先輩達や氷室先輩まで来てるなんて・・・」

「おいおい、慶一、俺達だけって事じゃなかったのか？よう、氷室、久しぶりだな。」

そう声をかけてくる3人に俺は事のいきさつを説明するのだった。

「・・・・・というわけでな？この店で色々話そうかって事になった訳だ。」

俺の言葉に苦笑する瞬は

「けど、この大人数を奢る気か？大変だろうが。なんなら俺は自分の分出すからいいぞ？」

瞬の言葉に俺は手を振って

「ああ、心配すんなって。そっちは大丈夫だからさ。実はお袋が気を使ってくれた。」

その言葉に瞬は驚いて

「そういう事なのか、後でお前のお袋さんにお礼いっとかなきゃな。」

瞬の言葉に氷室も頷きながら

「瞬君、僕の分も一緒にお礼を言っておいてくれるかい？」

そんな氷室に軽いため息をついて瞬は

「わかったよ。お前の分も礼を言っといてやる。」

そう言うと氷室は微笑みつつ「ありがとう」と瞬に言っていた。

「それにしても○○中学卒業生、揃い踏みだな。まあ、高校行ってからできた仲間もいるけどな。」

俺はそう言いつつ氷室や瞬、こう、やまと達とそれ以外の皆を見回して

「何にしても、またこの店に来れたのは嬉しい限りだ。俺は向こうの家に移り住んでしまったから、たまにでなければここに来る機会もないからな・・・」

その言葉にこうとやまとが少し寂しそうな顔をして

「先輩、実家の方に戻ってきた時でいいですからその折にはここに来てくださいよ。」

「そうね、せめてこっちに帰ってきてる時くらいは・・・」

その言葉に俺も頷いて

「そうだな。その時位はここに来るようにするよ。その時にはお前らにも付き合ってもらうぞ？」

そう言うと2人とも笑顔になって

「もちろんです。その時には声をかけてくださいよ？」

「私も付き合うわ。私にも声かけるの忘れないでよ？」

そういう2人に瞬は面白くなさそうな顔で

「・・・2人とも、俺には声かけてくれないのか？」

その瞬の言葉に2人は慌てて

「も、もちろん瞬一先輩にも声かけますって。」

「わ、忘れているわけじゃないんだから大丈夫よ。」

慌てて取り繕う2人に瞬はため息一つついて

「はいはい、俺は所詮慶一のおまけですよ。それでも声かけてくれるのなら嬉しいがな」

そんな瞬に2人ともただただ苦笑をしていた。

そんなやり取りを俺も苦笑しつつ見ていたのだが、俺はみんなに

「そろそろ注文するとしよう。皆、メニューを見て好きな物頼んでくれ。」

俺がそう言うとみんなはメニューを見はじめて次々に注文をしていったのだった。

注文の品が来るまでの間、俺達は色々と話をしていたのだがふいにこうが俺に

「そういえば先輩、覚えていますか？私達がここに初めて来た時のことを」

こうのその言葉に俺は昔の記憶を辿ってみると

「ああ、覚えてる。確かあの時はこうとやまとと瞬の3人で来たんだよな？」

俺のことばにやまとはなんともばつの悪そうな顔で

「う・・・あまり思い出したくない思い出でもあるわね・・・」

俺たちの話に瞬は昔の事を思い出したようで

「あー、あの時の事か。よく覚えてるよ。」

そしてその事に興味を持ったのか、こなたが俺たちに

「何の話？ねえねえ、聞かせてよ。話してもいい事なら聞きたいな。みんなはどう？」

「私も興味あるわね。ねえ、聞かせてもらっていい？」

「わたしも聞きたいな～」

「昔のお話なのですね？気になります。」

「面白そうな話なら歓迎だぜ？」

「慶ちゃん達の過去か、私も少し興味あるかな。」
「私も聞きたいです。先輩。」
「・・・よければ・・・聞かせてもらえませんか・・・？」
「うーん。ネタの予感・・・是非聞きたいっス。」
「ほう？それは興味深いね、僕も是非伺いたいものだね。」

そのみんなの食いつきっぷりに苦笑しながらもどうしようか悩んでいると瞬が

「そんなに聞きたいのなら話そうかな。いいよな？慶一、こうちゃん、やまとちゃん。」

瞬の言葉に2人は少し嫌そうだったが俺も別に話しても構わないだろうと考えて瞬に

「まあ、いいか。特に隠すほどの事でもないしな。瞬それじゃ頼むよ。」

そう言って瞬に話すことを促すと瞬はコホンと一つ咳払いをしてゆっくりと話をはじめたのだった。

蘇る旋律～親友の復活そして、慶一の嘆き　中編～（後書き）

中学時代の思い出話は後編へと続きます。

蘇る旋律～親友の復活そして、慶一の嘆き　後編～

皆と共に思い出の喫茶店へと行った俺たち。

そこには親友の瞬達だけでなく、中学時代に係わりを持ち、今回の一件において世話になった氷室もまたこの喫茶店を自らの憩いの場として使っていた事を知る。

そして、今回の報酬には割に合わないかも知れないが、とりあえずは氷室にも奢る事になり俺達はその店でしばらくの時間を楽しむ事になり、それぞれに好きな物を注文してそれを待つ間、ふいにこうが俺に

「先輩、覚えていますか？私達が初めてここに来たときの事を」

そう言ったのがきっかけとなって俺たちのちょっとした過去を話す事になった。

こうや、やまとは渋っていたのだが、みんなの興味津々な眼差しを見てそして別段隠す事のものでもないと判断した俺は同じくその時ここに来ることになった事に係わった瞬に話してもいいと言うのだった。

かくしてここに俺達４人の過去の話が始まるのだった。

「・・・コホン、それじゃ話すとしようか。あれは俺と慶一が中学３年、こうちゃんとやまとちゃんが中学２年の秋頃の事なんだが・・・・・

皆も知っているように慶一は小学校6年の後半から中学2年の前半くらいまで荒れていた時期があった。

学校の皆や教師達もその事を知っていた。

だから、中学3年の頃になっても、当時よりは大分慶一に対する風当たりは弱くなりつつあったが、それでも「暴れ者」「不良」そして「悪」そんなイメージが未だに根付いていた。

それは俺が慶一と共に成神章の謀略にはまって俺がやつに人質として捕まり、それを助けた慶一が原因で俺の足がこんな風になった事がさらにあいつに対して悪いイメージを植え付ける要因になっていた。

なんとなく事情を察していたこうちゃんとやまとちゃんの2人はそれでも慶一の本当の姿を知っていたがゆえに他人の慶一に対する悪評を聞くたびになんともやりきれない思いになっていたらしい。

「ねえ、こう。どうして先輩は未だに皆から嫌悪の篭った目で見られてしまうのかしら・・・」

「先輩も自分で言っていたけど、先輩自身が自ら引き起こした事が原因だからだという事みたいだね、でもさ、皆には今の先輩の姿を知って欲しいよね・・・」

「そうね・・・そうすればきっと先輩の事わかってもらえるはずよね・・・」

「それまではさ。私達が先輩の側にいて先輩の力になろうよ。」

「それは当然よ。私は先輩から受けた恩を忘れてはいないわよ?」

「それは私もだよ。それに、もう1人、先輩の事をわかってくれる人がいるからきっと大丈夫。」

「先輩の親友と言っていた瞬一先輩の事ね?」

「うん。だから今はさこの3人だけでも先輩の支えになろうって思う。」

俺はこうちゃんややまとちゃんのそんな話を偶然にも耳にした。

そして2人の元に行って

「こうちゃん、やまとちゃん、悪いと思ったけど2人の話、聞かせてもらったよ。君たちの気持は嬉しい。だけど、今のあいつは俺をこんな風にした事を悔やみ、責めて、俺を親友と呼ぶ事すら出来なくなってしまってる。だから今の俺はおおっぴらにはあいつの支えになってやる事はできない。けど、もしあいつの事で何かあれば俺の所に相談に来て欲しい。俺の出来る事なら協力は惜しまないつもりだからさ。」

そう伝えると、2人は少しがっかりしたような顔をしつつも

「そうなんですか・・・でも、先輩も慶一先輩の事を考えていてくれる事はわかりました。何かの時には相談させてください。」

「それまでは、先輩の側には私達がいるから・・・」

2人の思いに俺も頷いて

「よろしく頼むよ、2人とも。」

そう2人に頼むと2人は力強く頷いたのだった。

それから何日かが過ぎた頃、俺は自分の足のリハビリも兼ねて地元の町を散策していた。

そうして歩いているうちに、俺は一軒の喫茶店を見つけた。
その店の外観や雰囲気に惹かれて俺は気付くとその店に入っていた。
「いらっしゃいませ。お一人様ですか？こちらへどうぞ。」
今も現役で変わらないマスターが俺を出迎えてくれ、俺を席へと案内してくれた。
俺はマスターに促されるままに席について店の中を見回してみる。
そこに広がる空間は俺にとってもかなり居心地のいい、癒されるような空間がそこにはあった。
俺は一目でこの店が気に入った。
そして、事あるごとに俺はこの店へと通うようになったのだった。
その頃、学校の方では・・・・・・
『見て？またあの3人一緒にいるわよ？』
『あの子って確か家が結構有名な八坂さんと永森さんだよな？森村なんかと一緒に居たらあの子ら自身もイメージ落としちゃうんじゃないの？』
『森村君も森村君よね。彼のせいであの2人もイメージ悪くしちゃうかもしれないって事わかってないのかしら？』
『あー、無理だろ？そんな自覚あったらとっくにあの2人を自分の側から離してるだろうさ。』
『無神経なのもこまりものよねえ・・・なんであんな人がうちの学校にいるのかしら・・・』

『あーやだやだ、まったく面倒ごとはごめんだよ、あいつどっかに行ってくれねえかなあ』

今日もまた慶一をやっかむ声が聞こえていた。

こうちゃんとやまとちゃんも慶一と共にその声をいつも聞かされていながらもそれでも慶一の側を離れなかったのは2人が慶一の本当の姿を知っていたからだったが、この日はついに2人の我慢が限界を超えた。

「・・・っ!うるさい!!、何も知らないで勝手な事ばかり言わないでよ!いつもいつも陰口ばかりで、言いたいことがあるならはっきり言ってよ!」

「私達が何をしてようとも、誰と一緒に居ようともあなた達には関係のない事だわ!見た目のイメージだけで先輩を見る事がどれだけあの人を傷つけているのか考えた事なんてないんでしょうね!」

それを皮切りにその場で慶一をやっかむ連中と2人との言い合いが始まった。

俺はその日は医者によってから学校に来る事になったのでいつもより遅れて学校に入ったときこの騒ぎに気付いて俺は2人を止めにいったのだった。

「おい、落ち着け2人とも、何があったか知らないが、とりあえず頭冷やせよ!」

俺が喧騒に割って入り、両者を止めつつ2人に呼びかけると2人は一瞬体をびくりと震わせた後、俯いて

「ごめんなさい、瞬一先輩、つい興奮してしまいました・・・。」
「慶一先輩の言われようがどうしても我慢できなかったから・・・
ごめんなさい・・・」

そう言うと2人は教室を飛び出していった。

俺は言いあいをしていた連中の方に振り向いて

「おい、何を言ったかしらないがな、あいつは俺の親友だ。その親友を悪く言うつもりなら俺もお前らを許さないからそのつもりでいろよ?」

そう言ってそいつらを睨みつけて俺は自分の席へと戻っていった。

言われた連中も何かいいたげではあったが、俺の迫力に押されたのかしぶしぶと自分たちの席に戻っていった。

俺はふと教室の窓から慶一が例のお気に入りの場所へと向かう姿を見かけて、ぼーっとその様子を見ていた。

あいつはいつも嫌な事や辛い事があるとあの桜の樹の所へ行ってのんびりしてる癖があった。

そんな感じであいつが授業をサボる事もあったのだが、教室にいないほうが平和だという理由もあってか慶一のあの行動を咎める教師もあまりいなかった。

また、そうやってくさいものには蓋をしようとする教師達の事を慶一自身もわかっていたようで、何も言われないのなら、自分が席を外している事で波風立てずに済むのならということで慶一は進んで

こういう行動を取っていたようだった。

そしてその日の放課後に俺は慶一のお気に入りの場所へこっそりと足を伸ばしてみた。

すると、そこで3人の話し声が聞こえたので俺はとりあえずその話に聞き耳を立てる事にしたのだった。

「・・・先輩、いいんですか？いつまでも言わせておいても・・・」
「私は悔しかったわ・・・それでつい言い合いになっちゃって・・・」
「そうか・・・それでさっき教室の方から騒ぐ声が聞こえていたのか。」
「先輩は、悔しくないですか？自分の事が理解されない事を・・・」
「先輩の・・・本当の姿を知ってもらえさえすれば少しは・・・」
「少しは・・・ましになるってか？いいんだよ。今の俺のイメージは俺自身の行動が原因で作ってしまったもんだ。それが俺の罪ならば仕方がない事さ。けどな、俺はこの状況であっても辛い訳じゃないさ。だって俺の側にはこんなに俺を心配してくれるお前らがいるんだしな。だから、言いたい奴には言わせとけ。俺は、俺を信じてくれるお前らさえいるならそれでいい。」
「・・・先輩・・・。」
「私達はあなたの側にいるわ。これからも・・・」

その3人のやり取りを聞いてこれからも俺はあいつらをフォローしてやんなきゃな。と心に改めて誓うとその場を気付かれないようにそっと離れたのだった。

それから数日が過ぎてある日、慶一にとっても危機となる事件が起こった。

それはその日の昼休みの事だった。

その日は給食費の回収もありクラスの全員がそれを持って学校へときていた。

そして慶一はと言うとタイミング悪く教室を抜け出していつものお気に入りの場所へと行っていたのだった。

いざ、給食費の回収となった時、一人の生徒が自分の鞄を見て騒ぎ出したのだった。

「な、ない！俺の持ってきたはずの給食費がなくなってる！」

その言葉がきっかけで騒ぎが起きたのだった。

「よく調べたのか？家に忘れてきたって事はないよな？」

その生徒の友人がそいつに訪ねるとそいつは首を振って否定して

「それはない！確かに俺は鞄に封筒に入れた給食費を入れたんだ。それに家にも確認の電話を入れたら母さんも俺がちゃんと鞄に給食費を入れていた所を見てるって言ってた。」

その答えにざわつき始める教室内だったが、事態はこれだけではなかった。

「な、ないわ！私のもない！」

「俺のもだ！俺もちゃんと持ってきたはずだ！誰かが盗んだのか！？」

「俺のもないぞ！」
「私のも！」

クラスの約半数の給食費が紛失するという事態になった。

その頃、慶一にぶちのめされた成神もその時の傷も癒えて、慶一に恨みを持ちつつも学校へと復学していた。

それも要因の一つだったのだが、慶一の悪評も重なって2人が真っ先に疑われる事となった。

だが、この時、成神にはアリバイがあった。

教室の片隅にいたところを同じクラスの生徒に目撃されていたからだったのだがタイミング悪く教室を後にした慶一はアリバイすらはっきりしない状況だったので疑いの目は慶一に向く事となった。

そして慶一は事情聴取も兼ねて職員室に呼び出される事となった。

俺達はそんな事態を見ながら

「瞬一先輩、何かの間違いですよね？慶一先輩はなにもしてませんよね？」
「そんな事あるわけないじゃない！こう、あなた慶一先輩を信じられないの？」
「そうだ、こうちゃん。あいつがそんな事するわけがない。だから俺達はあいつを信じて待とう。」
「あ・・・ごめん、やまと。私先輩の事信じているって言っておきながら・・・なんて事を・・・すみません、瞬一先輩、私ももう一度信じて見守ります。」

こうちゃんのその言葉に俺は力強く頷いたのだった。

職員室内・・・・・・・

「森村、正直に言ったらどうなんだ？お前がやったんじゃないのか？」

「先生、何を根拠にそんな事を言うんです？」

「お前だけがその時のアリバイがないんだ。そして、皆から逃げるように例の桜の木の所へ行ったのを見た生徒の証言もある。これだけの状況証拠がありながらお前が何もしてないとは言い難い。それに・・・」

「お前の評判が良くない事も知っているはずだ。何しろお前はうちの中学ではかなりの暴れ者だったからな。疑われるには十分な理由だ。」

「・・・先生達はそれだけの事で俺を犯人と決め付けるのですか？ちゃんと物的証拠も調べてくれなければ納得いきませんし、それに、俺はそんな事をするような卑怯な人間じゃない！」

「・・・物的証拠、か・・・ならこれを見てもそう言いきれるなら反論してみなさい。」

そう言って教師が取り出したのは慶一の鞄だった。

そしてその中から出てきたのは、盗まれた人数分の給食費の入った封筒だった。

そして・・・・・・

「こ、これは何かの間違いだ、俺はやってない！絶対にやってない！」

「言い訳は警察で聞こう。仮にもこれは窃盗罪にあたる。そうなっては警察に介入してもらうしかないからな。」

学校に警察が呼ばれる事になり、事態は急速に大きな方向へと動いたのだった。

突然に学校にやってきた警察、そしてパトカーに乗せられて連れて行かれる慶一を俺達は信じられないような気持で見て、そして俺達は教師達の所に行き

「先生、どうして慶一が警察に連れて行かれるんですか!?」

俺の抗議に教師は

「どうしてといわれてもね、彼がいなくなった時に給食費の盗難騒ぎがでた。そしてその場にいなかった森村が疑われてなおかつ彼の鞄から盗難にあった給食費が入った封筒がでてきたんだ。そこまでの物的証拠が揃ってしまっている以上はもはや窃盗事件だ。警察に引き渡すのもやむなしだろう?」

俺はその教師の言葉が信じられなかった。

「そんなはずはありません!何かの間違いだ!あいつは人の物を盗むようなそんな卑怯な人間じゃない!俺が、俺たちが必ず証拠を掴んでみせる!」

そう言葉を叩きつけて職員室を飛び出して俺は2人の元へと向かった。

「こうちゃん、やまとちゃん。今慶一が警察に連れて行かれた理由

を聞いてきた。実はな・・・・・」
「そんな！何かの間違いです！先輩はそんな事する人じゃない！」
「そうよ！絶対何かの陰謀があるはずだわ！私達で証拠を掴んで先輩を助けるわ！」
「ああ、このままじゃ腹の虫が収まらないからな。俺もやる。３人であいつの疑いを晴らそう」

そう言って頷きあった俺達はその日から慶一の疑いを晴らすために色々と調査を開始したのだった。

慶一が警察から戻るまでの間にどうしても真犯人を見つけたかった俺達は各所での聞き込みや目撃情報などを集める為に奔走した。

そしてなお一層、慶一に対する風当たりが強くなっているのを聞くたびにこうちゃんとやまとちゃんは俺の所に来て悔し涙を流していたのだった。

そしてその翌日も聞き込みや目撃情報を探してうろついて帰るときに慶一の悪評を聞き、またも生徒達と激突した２人を連れて俺は俺の見つけたあの店に２人を落ち着かせる為に連れていったのだった。

「瞬一先輩、この店は？」
「なかなかいいだろう。たまたまリハビリで散策してた時に見つけた俺のお気に入りの店でな。お前らを落ち着かせる為に連れてきてみたんだよ。」
「・・・いい雰囲気のお店ね・・・」
「いらっしゃい、牧村君、今日は連れが一緒なんだね？」
「あ、マスター。今日はあのケーキとパフェをこの２人にお願いします。」
「わかりました。それでは少々お待ちください。」

「あの、いいんですか？奢っていただいても・・・」
「なんだか悪い気がするわね・・・」
「気にするなよ。こういう時だからな。甘い物でも食べて元気取り戻そう。」
「・・・ありがとうございます、瞬一先輩・・・」
「ご馳走になるわ。先輩」
「ああ、心行くまで味わってくれ。」

そう言って俺は2人にチーズケーキとミックスパフェをご馳走した。

それらを食べて落ち着いた頃、明日の対策を話し合って俺達はその店で別れた。

次の日も俺達は証拠探しに奔走していた時、ついに決定的な証言と証拠が見つかる事になった。

それは、教室にいたという成神のアリバイを崩す決定的な証言だった。

俺はその生徒に話を聞いた。

「ああ、成神の居たって所には俺がいたんだよ。あいつその日に俺にお金を渡してきながら俺の言うとおりに動いて欲しいと言ってきてさ、俺はあいつに似た髪形に変えて皆から顔がわかりにくい位置であいつを見たって場所にいたんだよ。あいつはこっそり教室から出て行ったのを俺だけが知ってたんだ。」

俺は一つ疑問に思っていた事を聞いてみた

「どうして君はその事を言わなかったんだ？」

そう訪ねるとその生徒は

「あいつはたまに替え玉を使って授業をさぼったりしていたし、今回もまたそれだと思っていたからね、何も怪しいとは思わなかったんだ。それにあいつはクラスでも嫌われ者だからね、自分から進んで係わろうとする人間はいなかったから。だから時たまこうやってあいつの方から俺に持ちかけてくる事があってさ、今回もいい小遣い稼ぎになると思って替え玉をやったんだ。」

俺はその生徒の証言を録音して証拠として残した。

そしてさらにもう1人の証言をこうちゃんが取って来てくれた。

しかも、何の因果かその証言をしてくれた生徒は慶一が以前、氷室とのケンカの時に助けたあの生徒だった。

こうちゃんは俺が成神の替え玉になっていた生徒から証言を取り終える頃に俺の元にその生徒を連れてきてくれ、俺はその生徒からも証拠になる証言を聞くことになった。

「瞬一先輩。もう1人証言してくれる人を連れてきましたよ。」

そう言って1人の生徒を引き連れてこうちゃんがやってきたので俺はその生徒の顔を見ると

「ん?こうちゃん、本当か?そいつは・・・そうか、まさか君だとは思わなかったな。」

俺がその生徒にそう言うとその生徒は俺を見て

「森村君の友人だったよね?あの時は助けてくれてありがとう。今回はあの時のお礼とお返しも兼ねて、この事件の犯人らしい奴をたまたま森村君の教室付近で見かけたからその事を伝えたいと思ってね。」

その言葉に俺は「詳細を教えて欲しい」と彼にいうと彼は事件の起きたときの事を思い出しながら

「うん。実はあの事件が起こる昼休み前の授業が始まる少し前なんだけど、その頃彼らのクラスは体育で人がいなくなっていた。それと同時に森村君も皆から疎まれる視線を受けながらみんなの前から姿を消そうとしていた所を見ていたんだ。それでそのすぐ後なんだけど、その後を狙ってこっそりと彼らの教室に入っていく1人の生徒の姿を見たんだ。僕にはそれがなんだか不自然に見えてね。気になったものだからこっそりと教室の外から中を覗いてみると給食費をなくしたと騒いでいたその生徒達の物と思われる机の側で何やらごそごそやっているのを見てね、さらには森村君の物らしい机の側に行って何かをやっているようだったよ。そうしているうちにそいつは僕に気付いたみたいで慌てて教室から出て行ったんだ。」

俺はその証言を聞いてなるほど、と心の中で頷きながら

「話は分かった。一つ聞くけど、君はそいつの顔とかは見たのか?」

その俺の問いかけにその時の事を必死に思い出しながら考え込んでいた彼は

「ごめん、顔ははっきり分からなかったよ。けど、少し特徴的な髪型をしていたのは覚えてる。たしか・・・・・こんな感じかな?」

彼の言う髪形の特徴にピンとくるものがあったので俺は

「ありがとう、参考になったよ。俺は慶一を何とか助けたい。ほかに何か気付いた事があったら俺に連絡して欲しい。」

そう彼に告げると彼も頷いて

「わかったよ。他の皆は彼を疎ましく思っているようだけど僕は彼に救われた時、彼の優しさを見た気がするからね。僕も彼のために協力は惜しまないつもりだよ。」

その言葉に俺は彼に

「ありがとう、慶一もきっと喜んでくれると思う。きっと俺達はあいつを救ってみせるから。君の事も彼に伝えておくよ。」

俺のその言葉に彼も力強く頷いてくれたのだった。

そうして彼と別れてさて次はどうするべきかこうちゃんと相談しようとした時、息を切らせてやまとちゃんが飛び込んできた。

「瞬一先輩！証拠品になりそうな物が見つかったわ！これよ！」

そう言ってやまとちゃんはハンカチにくるんだ一枚の封筒を俺に差し出してきた。

「やまとちゃん、これは？」

俺がそう訪ねるとやまとちゃんは少し興奮気味に

「これは慶一先輩のクラスの子の1人が持っていた給食費を入れてあった封筒よ。誰かがこれを中身だけ出して処分しようとしていたみたいでゴミの処理をしようとしていた慶一先輩のクラスの給食費を盗まれた子達の一人が自分の封筒を見つけたみたいで驚いていたわ。私はその子に頼んで自分の指紋をつけないようにハンカチにくるんでこれをもらって来たの。これにひょっとしたら犯人の指紋がついてるかもしれないわ。」

俺は証拠品を差し出すやまとちゃんの頭を軽くなでて

「でかした！やまとちゃん。これを早速証拠品として提出して調べてもらおう。」

ハンカチごと封筒を受け取った俺は教室を飛び出そうとしたのだが、それを教室の外で話を聞いていた教師が呼び止めた。

「あー・・・張り切っているところを悪いんだがな、それはもう必要ない。」

俺達はそんな風に言う教師の態度に腹を立てて

「必要ないって、どういう事ですか！あいつを助ける必要はないって事なんですか！？」

「そうですよ、先生！どうして私達の邪魔をするんですか！」

「邪魔はさせないわ！折角証拠がそろったんだから！」

そうまくし立てると、教師は俺たちに

「落ち着け！そういう事じゃない、まずは話を聞きなさい。」

その言葉に頭に上った血を下げながら教師の次の言葉を待つ。

「実はさっき警察からの連絡があってね、彼の無罪が確定したから戻ってくるという事なんだよ。」

俺は教師の言葉に驚いて

「え？どういうことです？一体何があったんですか？」

そう問いただすと教師はばつの悪そうな顔をしながら

「それなんだが、彼の持っていた封筒と中身の現金に付着してる指紋を調べたらしいんだが、封筒からは彼の指紋がでてはいたものの、中身の現金からは彼の指紋が一切検出されなかったとの事だ。封筒には彼の親の指紋もついていたので事情を聞いた所、彼は封筒を受けとりはしたが、中身には触れていないこともわかったんだよ。」

俺はおそるおそる教師に

「じゃ、じゃあ、慶一はやっていない、ということになるんですね？」

俺の確認するような言葉に教師も頷いて

「そういう事だ。それに彼の持っていた封筒の中身のお札の1部から成神章の物と思える指紋が1枚だけ見つかったんだ。彼は森村とはクラスが違う、クラスの違う者の指紋がそのお札についている事は不自然だという事でね、それが更なる決定的な無罪の証拠となったということだ。そして今君達が話していた事が真実だとするなら

ば、ほぼ今回の事件の犯人は成神章で間違いないだろうな。だから、我々は彼に警察へ出頭するように言い、今引渡しをしてきた所だ。」

そう説明し終わった後教師は俺たちに頭を下げて

「すまなかった。彼のイメージや素行のみを問題にして彼を犯人とすぐさま決め付けてしまった。そのせいで彼だけでなく、その友人たる君達にも不快な思いをさせてしまったようだ。申し訳ない。」

俺はその教師の態度を見て

「・・・話はわかりました。ですが、詫びるのなら、慶一に直接詫びてください。心配せずとも、あいつはその程度で先生達を恨んだりはしないでしょうから。」

俺の言葉に教師は顔を上げて自嘲の笑みを浮かべながら

「・・・君は彼のよき友人なんだな。わかった。彼に直接謝罪しよう。今回の件はこれで終わりだ。」

そしてもう一度俺たちに頭を下げると職員室へと戻って行った。

俺達はそれを見送った後

「〜〜〜!!やったぜ!」

「やっぱり先輩は無罪だった。そうだよ、先輩がそんな事するわけがない!私達は正しかったんだ!」

「私は最初から信じてたわよ。こう、あんたと違ってね。」

「ちょ!やまと!その事ならもう反省したから許してよー。」

「私に言っても仕方ないでしょ?先輩に直接いいなさい。」

「ははは。何にしてもこれで解決だな。慶一が戻ってきたらあの店でパーっと慶一の出所祝いでもやろうぜ？」
「しゅ、出所って先輩・・・」
「人聞き悪すぎよ？先輩。でも賛成。何とか先輩もこれなら無事に卒業できるわよね？」
「うん。きっとできるよ。」
「だな。さあて、レゾンに予約入れとくか、いくぞ？２人とも。」

俺が最後にそう言うと２人とも笑って「「はい」」と返事を返したのだった。

そしてその後無事に警察から戻ってきた慶一と一緒にこの店に来て出所祝いをやったんだが、その時によほど慶一が戻ってきた事が嬉しかったのか、こうちゃんとやまとちゃんが大泣きしていたのだった。

その後は慶一もその店を気に入り、何かあったりするとその店に必ず立ちようようになっていた。

「・・・・・というわけさ。」

慶一ｓｉｄｅ

瞬が過去の事を話し終えるとみんなも”ほーっ”と大きくため息をついていた。

「なるほど、そんな事があったんだねー。」
「まさか盗みの濡れ衣着せられかけたなんてね・・・」
「よかったよ・・・けいちゃん・・・今ここにいてくれて・・・」
「それにしても・・・また・・・成神章さんが原因なんですね・・・

」
「酷い話ね・・・許せないな」
「慶一、そいつぶっとばしちまえばよかったんじゃねーか？」
「まったくですよ！ずるすぎます！」
「・・・けど、結局証拠を残すミスをしたせいで・・・自業自得になったようですね・・・」
「その、まぬけっぷりもネタにはなりそうですねー」
「僕の知らない所でそんな事をしてたとはね、成神章、やはり小物だったようだ。」

皆が口々に感想を言うのを聞いていた俺だったが

「何にしても、改めて礼を言うよ。瞬、こう、やまと。お前らが俺を救ってくれた事は決して忘れない。」

俺の裏で起きていた事を知った俺は、３人に素直に礼を言うのだった。

「へっ、まったく手のかかる友人を持つと苦労するぜ」

そう言って照れ隠しにそっぽを向く瞬。

「あの時にも弁解はしましたけど、ちゃんと先輩の事信じてましたからね？本当ですよ？だから私の言う事も信じてくださいよー」

未だ一瞬ではあったが俺を信じきれなかった事を引きずっているこう。

「私はいつだって信じてたから。誰かさんとは違ってね。」

こちらも顔を赤らめつつそっぽを向きながら言うやまと。

そんな3人を友人に持てた事を改めて誇りに思う俺だった。

そしてふいにこなたが

「ねえ、結局2人のあまり思い出したくない事ってなんだったの？」

そう聞くとこうとやまとの2人は途端に慌てだして

「な、なんでもないですよ、気にしないで下さい。」

「そ、そうよ。つまんないことだわ。だから気にする必要はないわよ？」

そう弁解する2人の様子を見ながら二ヤリと笑った瞬が

「それはな。慶一の出所祝いの時に嬉しさのあまりに人目をはばからず2人が大泣きしたのを慶一や俺ばかりではなく他のお客にも見られてしまったからさ。あんなに泣いたのも大勢の人の前で泣くのも初めてだったと2人が言っていたからね。」

その言葉に2人は真っ赤になって

「しゅ、瞬一先輩!!」

「いじわるよ・・・先輩・・・」

そう抗議する2人にこなたが「萌えー」と叫んでいたのだった。

俺は思う。

俺はこれまでに何度も誰かの心に救われてきたのだと。

今回の事も、あの時も、いつも誰かしら自分を思ってくれる人間の存在がある、俺はその事を改めて確信させられる事となった。

そして、願うならば今度は俺がみんなのために何かが出来たらとこなた達の騒ぐ姿を見ながら考えていたのだった。

余談だが結局全員に奢って会計を済ませてみるとなんとまた１２００円を突破する事態になっていた。みゆきへのプレゼントの事も考えた時、もはや塩粥生活も覚悟せねばならないと情けなく思う俺だった。

蘇る旋律～親友の復活そして、慶一の嘆き　後編～（後書き）

次は文化祭の準備のお話の予定、お楽しみに。

思い出を紡ぐ旋律、第1話~文化祭の準備開始~

・・・・・何だか俺のサイフに一足早い冬がきてしまった休日を終えて俺達は本格的に文化祭の準備に入るのだった。

教室内の飾り付け、レイアウトの変更、各種設備の設置等、やる事は山積みだった。

しかも俺達のクラスは出し物の決定が遅れた所為もあり、準備のスタートも他のクラスよりも遅れるという結果になっていた。

その分遅くまで居残るとかはやらざるをえなくなり、今日もまたそうなろうとしていた。

「なかなか進まないな・・・こんなんで間に合うのかな?」

作業を手伝い、その様子を見守りながら俺はそう呟く。

その呟きを耳にしたほかの男子生徒も

「仕方ないだろ?俺達のクラスはスタート遅くなっちまったんだから。文句を言ってないでちゃっちゃと手を動かす!」

そうせかされて俺もとりあえず作業に戻るのだった。

今日の作業も一段落した頃、打ち合わせから戻ってきたかがみが俺に

「慶一くん、今日もご苦労様。やっぱり進行は遅れ気味ね・・・最悪は泊り込み作業も覚悟しなくちゃならないわ。」

かがみのその言葉に俺も重いため息をつきながらも

「やっぱりスタートの遅れは結構響いたな・・・けど、やるしかないか・・・」

やれやれというジェスチャーをしながらかがみに言うとかがみも困ったような表情で

「そうね・・・何にしてもやるしかないし、作業を進めましょ?今日はもうこれ以上は出来ないから明日ね。」

かがみの言葉にみさおやあやのもほっとした顔をして

「よかった、とりあえず今日はここまでなのね。体を休めて明日もがんばらなきゃ。」

「はあ・・・疲れたぜー・・・それじゃ柊、慶一、私らは先に行くぞー?」

みさおの言葉に俺とかがみも頷いて

「ご苦労様。しっかり体休めて明日もよろしくね?」

「お疲れ、2人とも。明日もがんばろうな。」

そう言って手を振り2人を見送ったのだった。

2人を見送った後俺はかがみに

「かがみ、お前も今日は終わりか?それなら一緒に帰るか?」

そう言うとかがみはコクリと頷いて

「うん。ちょっと帰る支度してくるから待ってて。」

そう言って自分の机の所に鞄を取りにいったのだった。

俺はその間に教室の戸締りを確認する。

程なくして帰りの支度を終えたかがみが俺の所へとやってきて

「お待たせ慶一くん。それじゃ行きましょ？」

そう言ってくるかがみに頷いて俺も教室を後にする。

教室を出てふとこなた達のクラスに目をやると、まだ誰かが居残っているようだった。

「かがみ、ちょっとこなた達のクラス覗いてくるからここで待ってくれるか？」

こなた達のクラスの事が気になった俺はかがみにそう伝えるとかがみは頷いて

「わかったわ。私先に昇降口に行ってるから用事が済んだら来てよね。」

かがみの言葉に俺も頷いて

「わかった。終わり次第すぐ行くから。」

そう言って手を振って別れると俺はこなた達のクラスを覗きにいった。

そっと教室のドアを開けるとそこには書類整理をしているみゆきがいた。

俺はみゆきを脅かさないように声をかけることにした。

「よう、みゆき。遅くまでご苦労さんだな。まだ仕事終わらないのか？」

俺の声に気付いたみゆきは俺の方を向いて

「あ、慶一さん、こんばんは。ええ、まだ少し整理しなくちゃいけない資料がありまして、もう少しかかってしまいそうです。」

苦笑交じりに俺にそう言ってくる。

「そっか。大変だな、お前は学級委員長もやってるんだし、文化祭の実行委員と兼任じゃきついよな。」

みゆきの労をねぎらうようにそう言う俺にみゆきはいつもの柔らかい微笑みを向けながら

「そうですね・・・大変ですが、誰かがやらなければならない仕事ですから・・・」

俺はそう答えるみゆきの側にゆっくりと歩み寄ってみゆきの肩をぽんと軽く叩くと

「何でも頑張る所はお前のいい所だけど、無理はするなよ?こういうのは体が基本だ、無理してダウンしてしまったら元も子もないからな。だから、休める時にはゆっくり休めよ?」

俺の言葉にみゆきは嬉しそうにしながら

「お気遣いありがとうございます。慶一さんがおっしゃられる事も心にとどめておきますね。」

そう答えるみゆきに俺も笑いながら頷きつつ、いくつか気になってる事があったのでそれをみゆきに訪ねてみることにした。

「なあ、みゆき、こなたはどうしたんだ?」

俺の質問に苦笑しながらみゆきは

「泉さんでしたら、御自分の作業が終わり次第帰られました。アニメだけは見逃せないとおっしゃっていましたが・・・」

その答えに苦笑する俺だったが、続けざまにもう一つ質問をした。

「みゆき、お前はこの後都内の自宅に戻ってそしてまた学校へ来るんだよな?大丈夫なのか?今からの時間じゃたいして休めないんじゃないか?」

その質問に困ったような表情で

「ええ、そうですね・・・今からですと大して休める時間は取れません、ですが、仕方ないです。私の家はそちらにありますから・・・」

みゆきの答えに俺は腕組みをしてしばらく考え込んでいたがとりあえず一つみゆきに提案してみる事にした。

「なあ、みゆき。お前さえよければだが、文化祭が終わるまでの間、俺の家を利用したらどうだ?俺の家ならお前の所よりはるかに近いしそれだけ休む時間も取れる。今のままじゃお前が体を壊すのは目に見えてるからな・・・。」

俺の提案にみゆきは驚きの表情をしていたがやがておずおずと

「お気持は嬉しいです。でも、いいんですか?慶一さんのご迷惑になりませんか?」

みゆきの言葉に俺は笑いながら

「心配するな、迷惑になるようなら俺はお前らに家の合鍵渡さないさ。お前らに鍵を渡した時にも言ったろ?この家を自由に出入りしていいからって。」

俺の言葉に目を伏せて考え込んでいるみゆきだったが、どうやら心を決めたらしく目を開き俺の方を見て

「わかりました。慶一さんのご好意に甘えさせていただきますね。正直な所、本当に助かります・・・」

そのみゆきの言葉に頷きながら

「いいってことさ、今日はお前自身の荷物とかもないだろうから準備をして明日から来るといい。」

そう言うとみゆきも笑顔を俺に向けて

「はい、明日からお世話になりますね。」

そう答えるみゆきに俺も頷いた後ふと時計を確認すると、かがみを相当待たせている事に気付いた俺は慌てて

「おっと、いかん、話し込んでいたら大分時間経ってたな、みゆき、まだかかりそうか？」

みゆきに尋ねるとみゆきは頷いて

「はい、後もう少しはかかりそうです。慶一さん、御用があるのでしたらお先に帰られてかまいませんよ？」

みゆきのその答えに俺は少し悩んでいたが、とりあえずは先約を優先しようと思い

「すまないな、今日は先にいくよ。とりあえず今日はこれで、じゃあな、みゆき。」

手を振って教室を出る俺にみゆきも背後から

「はい。事故等にあわないよう、気をつけて帰ってくださいね。それでは明日に。」

みゆきの見送りの言葉を受けて俺はかがみの待つ昇降口に向かったのだが、待たせたお詫びも兼ねて俺は途中の自販機で飲み物を買ってから戻ったのだった。

昇降口に戻ると不機嫌そうなかがみが1人下駄箱の前でただずんでいるのを見た俺は（あちゃー・・・こりゃ相当怒ってるかもかもなあ・・・）と思いつつかがみの側に行くとそっと声をかける。

「あー・・・かがみ、すまん。ちょっと時間かかりすぎだったな。」

俺の言葉にかがみは不安そうな顔で俺の方を振り向いたが、その表情はすぐに怒りの顔に変わり

「・・・何やってんのよ、あんたは！すぐに戻るとか言って中々帰って来ないで！・・・少し、不安だったんだからね？」

最後は寂しげな表情でそう言うかがみに俺は持っていたジュースを手渡しながら

「ごめん、全面的に俺が悪い。そのお詫びと言ってはなんだが、お前にこれを。」

心からかがみに謝るとかがみは表情を和らげながら

「・・・ふーん？まあ、いいわ。私を置いて帰ったわけじゃなかったみたいだしね。許してあげる。」

ジュースを受け取りながらそう言ってくれるかがみに俺はおどけながら

「へへーっ、お許しいただき感謝の極みです、かがみ様。」

その俺のふざけ様に顔を赤くしてそっぽを向きながら

「かがみ様っていうな！恥ずかしいじゃない。」

恥ずかしそうにしているかがみを見てクスクスと笑いながら

「くくく。すまんすまん、ついこなたの真似をしちゃったよ。あー、それと、かがみ。遅くなりついでで悪いんだけどさ、もう少しだけ待ってもらっていいか？」

俺の言葉に照れからたち直ったかがみが

「え？どういう事？待つって何を待つのよ？」

かがみの言葉に頷きながら

「うん。さっきこなたのクラスを覗いてきた時にまだみゆきが居残っていてさ、後もう少しだけかかりそうだって言ってたんだよ。けど、このまま俺達が帰ってしまうとみゆき1人での下校って事になるからな。俺もあいつの友達である以上は、1人きりで帰すのは忍びないな、と思ったんでな。」

俺の説明を聞いてかがみはじっと俺の方を見ていたが

「ふーん？まあ、理由はわかったけどさ、あんたもたいがいお人好しよね？」

かがみの言葉に俺は両手の平を上に向けて首をすくめて

「まあ、性分だからな。自分でもいやというほど自覚はしてるさ。」

そんな俺を見てかがみもクスリと笑うと

「いいわ。そういう事なら一緒に待ってましょ？それにみゆきは私にとっても友達だしね。」

笑顔でそう言うかがみに俺は

「すまないな、かがみ。」

お礼を言うとかがみは途端に慌てながら

「べ、別にあんたのためじゃないわよ。あくまでもみゆきの為なんだからね？そこの所勘違いするんじゃないわよ？」

顔を赤くしつつそう言うかがみに俺は苦笑していたのだった。

そうしてしばらく待っていると、今日の仕事を終えたみゆきが昇降口に現れ、俺達の姿を見つけると驚いた顔で俺達の側に来て

「け、慶一さん。それにかがみさんもどうしてここにいらっしゃるんですか？」

その言葉にかがみが俺の方を横目で見ながら

「慶一くんがあんたを1人で下校させるわけにはいかないから待っていてやろう、って言ったからよ。」

かがみのじと目の視線を受けながら

「まあ、そういう事だ。本当はかがみと一緒に帰るつもりだったけ

ど、お前と話をしてかがみを待たせちゃってさ。なら、かがみを待たせたついでにみゆきも待ってやろう、って思ったんだ。」

俺の説明にみゆきは嬉しそうな表情になって

「ありがとうございます。お2人とも気をつかわせてしまってすみません。」

俺たち2人にぺこりと頭を下げながらそう言うみゆきに俺たちもにっこりと笑って頷いたのだった。

そして俺達は夜の学校を後にする。

帰りがてら俺達は軽くやり取りをするのだった。

「それにしても、今回は出遅れだったな。大分厳しい状況だよ。」

「まあ、出し物の決定が遅かったし、仕方ないわよ。」

「私達のクラスも少し手間取ってますね・・・最悪は泊り込みも考えなければならないかもしれません。」

「ん？みゆきのクラスもなのか？うちのクラスも一応視野に入れてるとこだけどな・・・」

「ねえ、慶一くん。喫茶店の看板の事だけどさ、誰か知り合いで絵が描けそうな人いないかな？」

「んー・・・そうだなあ・・・一応、アニ研の部員を当たってみるかな。」

「ならそっちの方は頼める？私はメニュー関連をもう少し煮詰めてみるわ。」

「ああ、けど、期待はしないでくれよ？こっちも確実な事言えないからな。」

「大変ですね。私達のクラスも後は衣装の調達も何とかしないとい

けませんね。」
「出し物のいいだしっぺはこなたなんだろ?当てがあって言ってたんじゃないのか?」
「ええ、お伺いしてみましたが、バイト先の衣装を借りれそうだという話です。」
「え?今バイト先って言ったか?まさかこなたのバイトしてる所って・・・」
「コスプレ喫茶だと、おっしゃっていました。」
「あいつ、そんな所でバイトしてたのか・・・と言うか、よく採用されたわね。」
「かがみ、それは思っていても口に出しちゃいけない事だと俺は思うぞ?」

その最後のやり取りにみゆきも苦笑していたのだった。

その頃の泉家・・・・・・

「はーーーくしょん!!ズズッ・・・誰か噂してるのかな?」

かがみのした噂はこなたに届いていたようだ。

そして駅に着いて俺達はお互いの電車のホームへと歩いていく。

そしてホームの別れ際にみゆきが

「それでは今日はこれで、慶一さん、かがみさんまた明日。それと慶一さん、明日からしばらくお世話になりますね。」

そう言ってぺこりとお辞儀をしてみゆきはホームへと降りていく。

さっきのみゆきの言葉が気になったのかかがみは俺に

「ねえ、慶一くん。さっきみゆきが言ってたしばらくお世話になるってどういう意味？」

そう聞いてきたので俺は

「ああ、みゆきの家って都内だろ？それにここの所あいつも仕事に追われて家に帰るとかなり遅い時間だ。それこそ帰ったらすぐ休まなきゃならないくらい時間がない状況だ。だから俺はあいつに文化祭の間だけうちに泊まれと言ったんだ。うちならみゆきの家に帰るよりはずっと学校にも近いし、その分体を休められそうだと考えたんだよ。」

俺の言葉にかがみは俺の顔をじっと見つめて

「ふうん？ずいぶん優しいのね。けど、本当にそれだけでしょうね？何かやましい事考えてたりしてるんじゃないわよね？」

疑り深い目で俺を見ながらそう言うかがみに

「それはお前の考えすぎだ。仮にお前がみゆきと同じ状況だったらお前にだって声をかけたぞ？それに、あいつはちょっと頑張りすぎる所があるからな。体壊しそうで見てられなかったんだ。」

かがみはそんな俺の言葉に軽いため息を一つつくと

「まあ、信用してあげるわ。それにしても、あんただって他人ばかりに目を向けていすぎだと思うわよ？たまには自分の足元を見るようにしないと、あんただってどこかで体を壊す時があるかもしれな

いわよ？」

そのかがみの忠告に俺は”はっ”となって

「・・・すまん、かがみ。お前の忠告、心に刻んでおくよ。どうも俺は大切なものの為に自分を見失う所があるようだ。自覚はしてたつもりだったけど、何時の間にか忘れそうになっていたようだ。」

俺の言葉にかがみは笑顔になって

「まあ、それがあんたのいい所でもあるけどね。でも、分かってくれたならいいわ。さあ、電車が来たから帰りましょ？」

そう言って自然に俺の手を引いて電車に乗り込むかがみに俺は一瞬ドキリとしつつも

「あ、ああ。帰るとするか。かがみ、お前も帰ったら体は休めておけよ？俺もそうする。」

そう俺が伝えるとかがみもウインクして

「わかってるわよ。お互いに無理はしないように頑張りましょ？まだまだ準備の期間はあるんだからね？」

その言葉に俺も頷いて

「そうだな。さて、これから追い込んでいかないとな。かがみ、明日も頼むぜ？」

そう言ってお互いに笑いあって今日は家へと戻った俺たちだった。

ちなみに今日、お袋からの仕送りをもらえるまでの間の数日間、俺は文字通りの塩粥生活を送っていたので今日の振込みを駅から戻る途中のコンビニのＡＴＭで下ろして、久々に肉のある食事を摂ったのだった。

後１日塩粥生活が続いていたらやばかったなあ・・・と情けなく思いつつ今日はゆっくり体を休めた俺だった。

そして次の日も授業は半分、その後は文化祭の準備の為の時間に当てられていたので、俺は昨日かがみに頼まれた喫茶店の看板の絵に関してこう達に相談するためにアニ研の部室へと向かったのだった。

部室のドアをノックして俺は中へと入る。

「入るぞー。こう、やまと、それに皆も文化祭の準備、頑張ってるな。」

俺が声をかけるとこうたちも俺に気付いて

「あ、先輩。とりあえずぼちぼちって所ですよ。」

「先輩はこんな所で油売っててていいの？かがみ先輩から聞いたわよ？かなりきついスケジュールだ、って。」

「あ、部長ー、お疲れ様です。」

「森村、お前も自分のクラスの手伝いはしっかりやれ。こっちは我々で何とかする。」

俺はそれぞれに返事をする。

「そうか、それはよかった。まあ、大変だけど何とかするさ。みん

なも2人を助けてやってくれよ?それと桜庭先生、今日はちょっとこうに用事があってきたんです。」

俺の言葉にこうは首を傾げて

「私に、ですか?用事って一体?」

その言葉に俺も頷いて

「実は俺のクラスの店の看板の絵を描ける奴がいないかなと思ってさ。うちのクラスの連中で上手い奴がいなくてな。」

こうは俺の問いかけに少しの間考え込んでいたが、1人の部員を呼んで

「先輩、この子なら出来ると思いますよ?看板の絵の作成に使ってやってください。」

俺に1人のアニ研部員を紹介してくれた。

俺はこうに礼を言って部室を後にしようとしたのだが、一つ気になった事があり、こうとやまとに

「2人とも、文化祭の準備は遅くまでやってるのか?」

そう訪ねると2人は苦笑しながら

「そうですね、一応私は先輩の代わりに責任者としての立場もありますので最後まで残ることはよくありますよ?」

「私はこうに付き合っているっていう感じね。もっぱらこうのフォ

ローが主だけど。」

その2人の返事を聞いて俺は少し考えて

「こう、やまと。お前ら2人、文化祭が終わるまでの間、俺の家を使え。」

そう伝えると2人は驚いたような顔で

「ええ?先輩それって一体どういう意味ですか?」

「いまいち的を得ないわね、先輩、説明してくれる?」

俺はそんな2人に昨日みゆきにした説明を聞かせると2人とも俯いて何やら考え込んでいたようだが、ふいに顔を上げると

「そういう事でしたら、お世話になってもいいですか?」

「私も一緒に行くわ。こうだけじゃ心配だもの。それに、先輩の折角の好意だしね。でも先輩、どうして私達にに声をかけてくれたの?」

やまとの質問に俺は2人を見て笑いかけながら

「俺達の中でみゆきとお前らのみが一番遠い都内組だってのもあるけど、それ以上にお前らの体の事を考えた上でそうしようと思った、ってとこかな。だから、みゆきにも声はかけてあるがな。それに、お前らは俺の大事な後輩であり親友であり仲間だからな。少しでも長く体を休ませられる方法があるのなら俺が協力すべきだと思ったんだよ。」

俺の答えに2人は嬉しそうに笑って

「ありがとうございます先輩。私達の事を考えてくれる先輩の気持、嬉しいですよ。」

「高良先輩共々お世話になるわ。ありがとう先輩。」

その2人の言葉に俺も笑って頷くのだった。

そして、文化祭当日までは今日はみゆきが、明日はこうとやまとの2人が俺の家を使う事となったのだった。

まだまだ準備は時間をくいそうだが、最後まできっちり頑張ろうと思う俺たちだった。

思い出を紡ぐ旋律、第1話～文化祭の準備開始～（後書き）

都内トリオがやってきて今度はどんな騒動が起きるのか、次回をお楽しみに。

思い出を紡ぐ旋律、第2話～みゆきとの約束～

文化祭の準備が始まり、仕事も山積みでみゆきやこうもそれぞれの責任者として他の生徒達以上に忙しい毎日を送っていた。

そんな中で俺はやまとも含めた3人を少しでも体を休めるのに役立てばと思い、俺の家に文化祭が終わるまでの間泊り込むように言う。

こうする事で少しはましになるだろうとは思うが、それでも開催まではまだまだ忙しさは続くようだった。

みゆきには先日に伝えてある為にこう達より1日早く俺の家に来る事となった。

そんな話を聞きつけてきたのかこなた達も泊まりに行くと言い出したのだが、この状況でこなた達の相手をする事は俺にとっても厳しいと判断したので今回は何とか説得して遠慮して貰ったのだった。

今日の作業も大詰めとなり、俺は教室内を軽く片付けて戸締りを確認した後、鍵を持って教室を出て職員室へ向かおうとしたが、ふと、こなたのクラスに目をやるとまだ教室には灯りがついていて誰かが残っているようだった。

（またみゆきが頑張ってるのかな？）俺はそう思いながら教室を覗き込んでみると、案の定みゆきが1人明日の書類の整理に追われていた所だった。

俺はみゆきに声をかけてみる事にした。

「みゆき、今日も頑張ってるみたいだな。まだ終わるまでかかりそうか？」

俺の声に気付いたみゆきは俺の方を向いて微笑みながら

「今日は後少しで終われそうです。慶一さんはもう帰られるのですか？」

そう訪ねてきたので俺は頷きつつ

「こっちは今日の分は終わったからな。後は鍵を返して来たら終わりだ。みゆき、今日からしばらくは帰る所は一緒だから終わるまで待っててやるよ。」

俺の言葉を聞いてみゆきは俺に

「ありがとうございます。は、いいのですが、今日はかがみさんとは一緒ではないのですか？」

昨日の事もあったのでそう聞いてくるみゆきに俺は首を振って

「いや、今日はかがみは用事があるから先に帰るって言ってたからな。とっくに俺たちより先に帰ったよ。」

そう答えるとみゆきも納得したようで

「わかりました。それじゃ、私も仕事済ませてしまいますね？」

そう答えるみゆきに俺は頷いて

「俺はこの鍵を職員室に返してからまた戻ってくるから教室で待っててくれるか？」

そう伝えるとみゆきもにっこり笑って

「わかりました。教室でお待ちしていますね。」

そう言うみゆきに俺は手を振ってとりあえず鍵を返しに職員室へと行くのだった。

職員室のドアをノックして「失礼します。」と声をかけて職員室に入るとそこにはまだ居残りをしていた黒井先生が書類とにらめっこをしていたが、俺の声に気付いて

「ん？おお、森村か、ご苦労さんやな。お前らのクラスの準備はちゃんと進んどるんか？」

笑いながらそう声をかけてくる先生に

「ぼちぼちですね。スタート遅れたのが響いてますが何とか間に合わせますよ。」

そう答えると先生も腕組みして考える仕草をしながら

「そっか。まあ、何にしてもあまり無理はするんやないで？根詰めすぎて体壊したりしたら本末転倒やさかいな。」

その言葉に俺も苦笑しながら

「わかってますよ。先生の方こそ遅くまで見回りとかされるんでし

ょうから無理しないようにして下さいよ?あ、それと、これ教室の鍵です。」

そう言いながら俺は先生に教室の鍵を渡すと先生もカラカラと笑いながら

「なーに、心配せんでもこの程度なんてことないわ!お前もこれから家に帰るんやろ?気いつけて帰り。事故にはあわんようになー。」

そう言いはなつ先生に俺も笑いながら

「わかってますよ。それじゃ今日はこれで失礼します。」

そう言って俺は職員室をでてみゆきの待つ教室へと戻って行った。

教室に戻ると今日の分の仕事を終えたみゆきが帰る支度を終えて俺を待っていたのだった。

「お待たせ、みゆき。」

そう声をかけるとみゆきも鞄を手に持ち俺の方を向いて

「いえ、丁度私の方も帰り支度が済んだ所ですから大丈夫ですよ?それじゃ鍵を返してから帰りましょう。」

微笑みながらそう返事するみゆきに俺も笑顔を返しながら

「よし、それじゃ行くか、みゆき。」

俺の言葉にみゆきは頷いて教室に鍵をかけるとそれを職員室に返し

に行き、俺達は一緒に帰路へとついたのだった。

帰る際に家に来るにはあまりに軽装な感じがしたので俺はその事を訪ねてみることにした。

「そういややけに軽装だが、家に来るのにそんな軽装で大丈夫なのか？」

そう訪ねるとみゆきはにっこり笑いながら

「実は駅前のコインロッカーに荷物を預けてきてあるんです。申し訳ありませんが、そこまでお付き合いしていただいても構いませんか？」

俺はそう言ってくるみゆきに頷くと

「コインロッカーか、なるほどね。わかった、一緒に行くか。」

そう答えると俺達はみゆきの荷物が置いてあるというコインロッカーに向かったのだった。

そしてコインロッカーから荷物を取り出すと、俺達は電車に乗り込み、家へと向かった。

その途中で夕食の食材を少し買い込んで家に戻る俺達だった。

家に辿り着くと、俺はみゆきが前の勉強会の時に使っていた部屋にみゆきを通して

「さ、ここを使ってくれ。俺はとりあえず夕食の支度をしてくるか

ら着替えを済ませて少しのんびりしてろよ。準備できたら呼ぶからさ。」

俺の言葉にみゆきは恐縮しながら

「で、でも、いいんですか?私、何かお手伝いした方が・・・」

みゆきのその言葉に俺は軽く笑って

「いいよ。元々その為にお前をここに泊まらせる事にしたんだから、その時間を有効に使えばいいさ。それに、俺はお前ほど根を詰めている訳じゃないからな。お前よりは体の疲れもましだし、鍛えていたから体力もまだまだある。だから心配するな。」

そう答えるとみゆきはなんとなく申し訳なさそうな顔をしながらも

「そ、そうですか?ならお言葉に甘えさせていただきますね?」

そう言うみゆきに俺は頷いて答えて夕食の準備をするためにキッチンへと向かったのだった。

みゆきｓｉｄｅ

慶一さんにゆっくりしていろと言われ、とりあえず着替えを済ませてのんびりしていましたが、どうにも落ちつかない感じでしたので私はこっそりとお風呂の準備をしておこうと思い部屋を抜け出してお風呂場へと向かったのでした。

(慶一さんはああおっしゃって下さいましたが、どうにも手持ちぶさたですしね・・・これくらいはさせていただきましょうか・・・)

そう考えながら私はお風呂場を軽く洗い、風呂桶にお湯を溜めてお風呂の準備を済ましてまた自分の部屋に戻ろうとした時、丁度夕食の支度を終えて私を呼びに来ようとしていた慶一さんに見つかってしまいました。

「ん？みゆき、こんな所で何してるんだ？」

慶一ｓｉｄｅ

みゆきを部屋で休ませつつ、俺は夕食の支度をした。

とりあえず準備が済んだので、みゆきを呼びに部屋へ向かおうとした時、風呂場からこっそりとした足取りで部屋に戻ろうとするみゆきに出会ったので、俺は（あれほど言ったのに何かやってたな？）と少し呆れつつもみゆきに声をかけたのだった。

「ん？みゆき、こんな所で何やってるんだ？」

俺がそう声をかけるとみゆきは目に見えてうろたえはじめて

「え、ええっと、その・・・慶一さんに休んでいろって言われましたが、その、何となく落ちつかなかったのでせめてお風呂の準備だけでもと思いまして・・・その・・・」

その答えに俺は軽いため息を一つつきつつ呆れたような顔で

「風呂の準備をした、と言う訳か？・・・はあ、まったく・・・」

俺が怒ったと思ったのかみゆきは悲しそうな顔で

「す、すみません・・・慶一さんに休めと言っていただきながら・・・私・・・すみません・・・」

俺は今にも泣きそうなみゆきを見て慌てながら

「おいおい、勘違いするなよ?俺は別に怒ってるわけじゃないんだから。まあ、でも、それがお前なんだなって改めて思っただけだからさ。」

そうみゆきに伝えるとみゆきはきょとんとした顔で俺を見て

「え?慶一さん?それじゃ、その・・・」

そう聞いてくるみゆきに俺は苦笑しながら

「みゆきが自分の意志でそうしたい、っていうんなら仕方ないさ。俺は忠告はするけどそれを止める権利はないしな。だけど、できることなら自分の体、大切にしてくれ。お前は医者を目指してるんだろ?それを目指すお前が体壊すような真似してたら本末転倒だからな。」

俺のその言葉にみゆきは緊張が解けたようででも何だか申し訳なさそうな顔になって

「そうですよね・・・すいません、慶一さん。でも、私の意思を尊重してもらえた事、嬉しく思います。」

俺はその言葉に笑いながら

「まあ、それでも、程ほどにな。俺だってお前を心配してる事、忘れるなよ?それじゃ飯食っちまって少しのんびりしようか。」

俺のその言葉にみゆきは笑って頷いて一緒にキッチンへ行って夕食を摂ったのだった。

御飯を食べながら俺達は軽いやり取りをしていた。

「慶一さん、覚えていますか?私が慶一さんを朝早くに起こしに行った日の事を」

「ああ、覚えてるよ。あれは本当に驚いたからな。」

「あの日もこうやって2人で食事しましたね。」

「そうだな、確かみゆきが作ってくれたんだったよな。結構美味かったぞ?あれは。」

「そう言っていただけて嬉しいです。あの事もそうですが、今回の事もまた私達の思い出の一つになればいいなと思っています。」

「たわいのない事でも、きっと貴重な事なんだろうなって最近思うよ。今の俺は一日一日がとても大事だ。」

「私も、です。私は慶一さんや皆さんと出会えたことをとても嬉しく思います。そしてこんな楽しい思い出を作れる今がとても愛しいです。」

「学生時代は短いけど、でも悔いなく過ごしていきたいよな。これからもみんなでさ。」

「そうですね・・・・・改めてありがとうございます、慶一さん。今まで泉さんやかがみさん、つかささんの4人で仲良くやってきましたが、慶一さんが峰岸さんや日下部さん、八坂さん、永森さん。小早川さんや田村さんとつないでくれました。私にとっての更なる世界が広がったのもあなたがいてくれたからだと思っています。」

「よせよ、照れるから。それを言うなら俺だってお前らに感謝してるんだ。中学校時代を後悔で過ごした俺だ。高校に行っても俺の世

界が広がるかどうかが不安だった。けど、お前らは俺を受け入れてくれた。俺の世界を広げてくれたんだぜ?だから俺もお前らにはありがとうと言いたい。」

「・・・慶一さん、これからも私はみんなや、そしてあなたとも一緒にいたいと思っています。大学に通うようになる時、ひょっとしたら私達は離ればなれになるかもしれません、それでも・・・出来る事ならば一緒に・・・」

「・・・・・・なら努力しよう。」

「え?」

「俺達がこれからも一緒にいるために、できる努力はやってみよう。その努力の果てにばらばらになったとしても、俺達はきっと繋がっていられると思うから。心は繋がっていられると思うから。」

「・・・・・・そうですね。私もがんばります。あの時の体育祭で誓った時のように、最後まで諦めないで努力してみます。その時は慶一さんも・・・」

「わかってる。俺も諦めずにやるさ。」

そう言った後俺達はお互いに笑いあった。

その後洗い物を終えてお互いの部屋に戻ってくつろぐ俺達だった。

そして次の日の朝、俺はいつもの時間に目を覚ました。

顔を洗いに部屋をでてみると、どうやらまだみゆきは起きていないようだったが、念のためみゆきの部屋をこっそりと覗いてみると、まだ寝息を立てているみゆきの姿があったので俺はみゆきの身支度等の時間を考慮しつつぎりぎりまで寝かせてやろうと思いそっとみゆきの部屋から離れて自分の部屋へ戻り、身支度等を整えて朝食の準備の為にキッチンに向かったのだった。

やがて朝食の準備を終えて俺は一息ついてから時間を見てそろそろ頃合かな?と思った俺はみゆきを起こしにまた2階に上がっていったのだった。

みゆきの部屋のドアをノックして部屋に入る旨を告げてから俺はそっとドアを開けて中に入ると、まだ寝息を立てているみゆきを揺すって起こそうと試みた。

だが、みゆきは中々起きようとはしなかったので俺は揺すりながら「みゆき、朝だぞ?起きろー」と声をかけつつ様子を見ると、みゆきはそれにようやく気付いたようで

「ん・・・んん・・・あ・・・」

そう言いながらぼーっとした目を俺に向けていたがやがて俺がみゆきを起こしている事に気付いたのか

「・・・あふ・・・おはようございます、慶一さん・・・今何時でしょうか?」

少しずつ意識を覚醒させながら俺に聞いてきたので俺はベットの側に置いてあった目覚まし時計をみゆきに渡した。

それを受け取ってまじまじと時計をみて時間を確認すると途端に慌てながら

「え?えええ?も、もうこんな時間なんですか?た、大変、早く準備しないと!」

そう言いながらいきなり俺の目の前でパジャマを脱ぎ出すみゆきに

俺は顔を真っ赤にして慌てて目を手で覆い隠すと

「み、みゆき、落ち着け！お前は俺の家にいるんだ、忘れたのか！？それにお前が起きる時間よりも遅くても俺の家から学校の距離は近いんだから大丈夫なんだよ！だからとりあえず俺の目の前でパジャマ脱ぐのはやめろー！」

そう俺が言うとみゆきははたと我にかえり、自分の今の姿と俺がみゆきの前にいる状況に気付くと途端に顔を真っ赤にして

「き、きゃあああ！すいません、部屋から出てくださいーーー！」

それを聞くと同時に俺は部屋の外へと飛び出してドアを閉め乱れた息を整えながらドア越しにみゆきに

「みゆき、とりあえず朝食の支度できてるから準備できたら下りてこいよ？それじゃ俺は先に行ってるからな？」

そう伝えてキッチンにまた戻っていく俺だった。

程なくして学校へ行く準備を整えたみゆきが顔をまだ赤くしながらばつの悪そうな顔で

「あ、あの、先程は失礼しました。それと、その・・・さっきの事は気にしていませんから。」

みゆきの言うさっきの事という言葉を聞いて俺は先程の事をうっかり思い出して顔を再び赤くしながら

「く、くれぐれも言っておくが不可抗力だからな？とにかく飯食っ

て学校行こう。」

みゆきも俺の言葉に頷いてけれどまだ赤い顔のままとりあえず朝食を摂る俺たちだった。

朝食をとりながらみゆきはふいにクスクスと笑うと

「ふふ。前とは逆ですね。今日は慶一さんが朝食の用意をしてくれました。」

そう言うみゆきの言葉に照れつつも

「まあ、これでも一人暮らしは1年以上やってきたからな。この程度は作れるよ。」

そう返すとみゆきはにっこりと笑って

「慶一さんの経験のたまものという事ですね。私ももう少し上手くなりたいですね。それに・・・些細な事ですけどこんな事も思い出になるのなら楽しいですよ?」

俺はそんなみゆきの言葉に「そうだな。」と短く返しながら（どんな些細な事でも思い出として積み上げていこう。）そう改めて思う俺だった。

朝食を終えて俺達は学校へと向かい、今日もまた準備という名の戦争を始めるのだった。

「おーい、そこの釘取ってくれ！」

「そこ押さえててー！」

「こっちの固定頼む！」
「それはそこに置いてー！」
「こっちも手を貸してくれー！」
「これはこれでいいかな？」
「こっちのセッティングはいいわよ？」
「それじゃもう一度見直してみるね？」

クラスの連中とこんなやり取りを交えつつ準備を進めていった。

だが、今日に限ってかがみの様子が少しおかしい事に何となく気付いた俺はかがみの様子を伺いつつ作業をこなしていった。

しばらくしてまたかがみの方に視線を向けると、少し青い顔をしながらふらついているかがみの姿が見えたので俺は側に行って

「おい、かがみ、大丈夫か？顔色少し悪いぞ？それにふらついてたようだし」

そう言葉をかけるとかがみは俺をキッと睨みつけて

「大丈夫よ。あんたに心配してもらうまでもないわ。ちょっと疲れてるだけだし問題なしよ？あんたこそ、こっちに気を取られてないで作業進めなさいよ。」

明らかに無理をしてるのが丸わかりだったが、こうなると意地でもこちらに心配させるまいとするだろうと思った俺はかがみの動向に注意しつつ俺の作業を再開させたのだが、その矢先にかがみが眩暈をおこして倒れたのだった。

俺はかがみの体が床につく前に一瞬で移動してかがみの体を受け止

めると

「おい、かがみ！しっかりしろ、おい！」

そうかがみに呼びかけるも返事はなく、完全に意識を失ってしまっていた。

それを心配したみさおとあやのも俺達の側に来て

「柊、大丈夫か？しっかりしろよ！」

「柊ちゃん、私の声が聞こえる？柊ちゃん！」

そう呼びかけたがやはり意識は戻らないようだったので俺はかがみをお姫様だっこで抱えあげると

「みさお、あやの、この場は頼む。俺はこいつを保健室に運ぶから。」

そう告げると2人は頷いて

「わ、わかった。慶一、柊の事頼んだぞ？」

「慶ちゃん、お願いね。」

その言葉に俺も頷きで返すとかがみを連れて保健室へと急いだのだった。

その途中でこなたが慌てて走って行く俺達に気付いて

「慶一君！待って！、何かあったの！？」

そう言いながら俺達の所に来たこなたは俺の腕に抱えられている未だ意識を取り戻さないかがみに気付いて

「!?かがみ?かがみ!大丈夫!?」

そう声をかけるがかがみは意識を取り戻さない。

俺はこなたに努めて冷静に

「こなた、かがみが教室で倒れた。俺はこれから保健室に連れて行く。こなたも一緒に来てくれ。両腕ふさがっているとドア開けれないからさ。」

そう伝えるとこなたも頷いて

「わかったよ。それじゃ慶一君について行くね?」

俺もこなたの言葉に頷きで返した後2人で保健室へと走っていった。

そしてこなたにドアを開けてもらい保健室内へと入ると

「あらあら、森村君に泉さん。どうかしたんですか?」

そう聞いてくる天原先生に俺は腕に抱いているかがみの事を伝える。

「実はかがみが教室で急に倒れまして、俺がこいつをここまで連れてきたんです。」

そう伝えると天原先生はかがみを一目見た後

「それならこちらのベットにかがみさんを寝かせてください。ちょっと診てみますから。」

その言葉に頷いて俺はかがみをベットの所まで連れて行き、寝かせた。

そして天原先生はかがみの体の状態をチェックするのを俺とこなたは黙って見守っていた。

程なくして天原先生は俺たちのほうに振り向いて

「過労、ですね。かがみさんも責任者としての激務に疲れていたんでしょうね。とりあえずはこのまましばらく寝かせて様子をみましょう。それと、それ以外の事は何もありませんから心配は要りませんよ？」

その言葉に俺とこなたは”ほーっ”と大きくため息をついて安堵したのだった。

その後は俺とこなたも体に疲れがでているようだから少し休んでいきなさいと天原先生に言われて2人でかがみのベットの側で様子をみながら心配そうに見守っていた。

そのうちに疲労がでたのだろう、俺とこなたはイスに腰掛けながら眠ってしまっていたのだった。

かがみｓｉｄｅ

突然意識を失った私は気がつくとなにか柔らかい物の上で寝かされていることに気づくと共に私の意識が覚醒していくのを感じた。

そして意識を取り戻した私は自分の置かれている状況を確認する為周りを見渡す。

すると、ここが保健室である事がわかったのだった。

「何で、保健室に・・・あ！」

私は自分が教室で倒れた事を思い出したのだった。

思い出したはいいのだけど、どうしてここに寝ているのかが思い出せず、頭にクエスチョンマークを飛ばしていたのだが、ふいに私のベットの側でイスに座って寝息を立てているこなたと慶一くんを見つけたのだった。

（え？何で慶一くんとこなたがここに？）

いくら考えていても答えが出ないで困惑していたのだが、私が意識を取り戻した事に気付いた天原先生が

「あら？かがみさん、意識が戻ったんですね？よかった、大した事なくって。」

ニコニコしながら私にそう言って来たので

「は、はあ・・・お手数をおかけしました。でもどうして私、ここにいたんでしょうか？」

その言葉に天原先生は笑顔のままで

「そこで眠っている森村君があなたを保健室まで連れてきてくれたのよ?」

その言葉に驚いて私は慶一くんを見た。

「そ、そうだったんですか・・・慶一くんに迷惑かけちゃったかな・・・」

その言葉に天原先生は首を振って

「いいえ。彼はきっとそう思ってはいないと思うわよ?何よりお友達の事を心配する子ですからね。」

天原先生の言葉に私は嬉しさと申し訳なさが沸きあがってきた。

そして私は眠る慶一くんの頬に触れながら

「ありがとう、ごめんね?手をかけさせちゃって・・・気にしてくれた事嬉しかったわ・・・」

そう言い終えると同時に慶一くんが目を覚ました。

私は慌てて手を引っ込めて顔を真っ赤にしながらベットに体を横たえたのだった。

そんな私に気付いた慶一くんは私に

「お?かがみ、気がついたんだな。良かった、心配したんだぞ?」

そう言いながら私の頭をなでる慶一くんに私は申し訳なさで一杯に

なって

「ごめんね・・・あんたにえらそうに説教しておいてこうなってあんたに迷惑かけちゃった・・・本当にごめん・・・」

そう私が彼に謝ると慶一くんはにっこり笑いながら

「まあ、大した事なくてよかったさ。お前も結構無理する所あるんだし、これからも気をつけろよ?俺もそうするようにするからさ。」

その言葉に私は素直に頷いて

「うん。私も今度は注意するわ。だから慶一くんも無理はしないでね?」

私の言葉に慶一くんも力強く頷いて

「ああ。気をつけるよ。それじゃ俺は作業に戻るからかがみはもう少し休んでろよな?それと、こなたもそうだけど、みさおやあやのもお前の事心配してたから、後でちゃんと声かけておいてやれよ?」

そう言いながら慶一くんはまだ隣で寝ているこなたの頭をなでてから

「それじゃ、天原先生。後はよろしくお願いしますね?」

そう伝えると保健室を後にしようとドアに手をかけたとき、いきなり保健室のドアが開いてつかさが泣きながら、みゆきも心配そうな顔をしながら保健室に入れ違いで入ってきたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

とりあえず意識を取り戻したかがみを見て安心した俺は、後は天原先生に任せて保健室を後にしようとしたのだが、丁度いいタイミングでかがみの事を聞きつけたつかさとみゆきが入れ違いのタイミングで保健室に入って来たのだった。

とりあえず2人に声をかける

「つかさ、みゆき、かがみはもう大丈夫だ。ちょっと過労気味だったらしいけどな。俺はとりあえず作業に戻るから2人はかがみの側についていてやってくれ。」

そう伝えると2人とも頷いて

「わかったよ、けいちゃん。おねえちゃんをここまで運んでくれてありがとね?」

「大事にならずに済んでほっとしました。後は私達がついていますから慶一さんは作業に戻ってください。」

その言葉に俺も頷いた後自分のクラスに戻っていった。

教室に戻ると俺に気付いたみさおとあやのが真っ先に俺の所にやってきて

「け、慶一。柊はどうだったんだ?」

「大分時間かかってたみたいだけど、大丈夫なの?」

2人に俺はかがみの状態を伝える。

「少し過労気味だということだ。休めば大丈夫という事だから心配

はいらない。」

そう伝えると2人ともほっとしたようだったが、みさおは俺に

「あーよかった・・・けどよ?慶一、お前なかなかやるじゃん?柊をお姫様だっこだもんなー。」

そう言いながらケラケラと笑うみさおに俺は顔を真っ赤にして

「あ、いや、その・・・とっさだったから、ああなっただけだよ・・・」

しどろもどろになりながら言い訳をしたが、みさおのからかいはやまなかった。

そしてかがみは大事を取り俺たちよりも先に家に帰り、みゆきも今日は一足先に家に戻っていたので俺はこうとやまとが今日からしばらく俺の家に泊まることとなっていたのでアニ研の部室へと2人を迎えにいったのだった。

思い出を紡ぐ旋律、第3話～こうのはた迷惑な企み～

文化祭の準備も始まり、その日々の中でみゆきやこう、やまとの都内組の体への負担を考えた俺はより学校に近い場所にある俺の家に文化祭の間までは泊まるように言う。

先にその事を伝えておいたみゆきはこう達より1日早く家に訪れて文化祭までの間の生活を始めた。

そしてその翌日の準備の時にかがみが過労で倒れるというハプニングがあり、その一件を落ち着かせた俺はアニ研の部室へと2人を迎えに行くのだった。

部室の前に着き、俺はドアをノックして「入るぞー」と声をかけて部室内へと入っていく。

「あ、先輩、お疲れ様です。今終わった所ですよ。」
「後は戸締りしておしまいってとこね。先輩、わざわざ迎えに来てもらって悪いわね。」

やまとの言葉に俺は

「ああ、俺が行くって言ったんだから構わないさ。それじゃ支度が済んだら行くぞ?」

そう答えると2人とも頷いて

「わかりました。それじゃやまと、戸締りやっちゃおう。」
「そうね、先輩、もう少し待っててくれるかしら。」

そう言う2人に俺は頷いて

「別に焦らなくてもいいぞ?その代わり不備は残さないようにな。」

そう答えた俺だった。

2人は戸締りを済ませて最後に部室から出て俺に

「先輩、鍵返しにいくのに付き合ってもらっていいですか?」

「何言ってるのよこう、それくらい1人で言ってきなさいよ。私と先輩は昇降口で待ってるから。」

そう言ってきたのだが、やまとがこうを突き放す一言を言ったのでこうは涙目になりつつ

「ちょ、やまと。それは友達としてあんまりなんじゃ・・・」

一応抗議を試みてみたが無駄とわかり諦めて肩を落として職員室へと、とぼとぼと歩いていくのを俺は苦笑しながら見送ったのだった。

「やまとも手厳しいなあ、そのくらい付き合ってやってもよかったんじゃないか?」

一応やまとにそう言ってみるがやまとは

「その位のことは一人でやってもらわないと困るわよ。子供じゃないんだから自分の役目はきっちり果たしてもらわないとね。」

腕組みしてやまとは不機嫌そうにそう答えるのを見て俺は軽いため

息を一つつくのだった。

昇降口まで移動してこうを待っている間、俺はやまとと軽いやり取りをしていた。

「そういえば先輩、かがみ先輩が倒れたって事聞いたけど大丈夫なの？」

「ん？情報はそっちにも行ってたか。まあ、天原先生の言う事には過労が原因らしいけどな。」

「かがみ先輩、学級委員長と先輩のクラスの作業チームのリーダーやっているのよね？倒れるほどじゃかなり疲労が貯まってたって事なのね。」

「それもあるんだろうけど、あいつ頑固なとこあるからな。自分が辛くても弱い所を見せたくないっていう妙な意地を張るんだよ。だから結局無理がたたったって結果になったけどな。」

「先輩の性格考えると納得できるわね。でも、そういう先輩も自分の事より相手の事を考える方が多いわよね？先輩も無理、しないでよ？」

「その忠告はかがみからされたよ。それに今日の事もあってはなおさら注意しなきゃって自覚したからな。ともあれ、お前らも無理しすぎるなよ？その為に俺の家に呼んだんだから。」

「わかってるわ。先輩、ありがとう。おかげで助かるわ。」

「はは、何にしても帰ったらゆっくり休む時間をとってくれな。」

そうしてお互い笑いあった頃、こうが用事を済ませて戻ってきた。

「お待たせー、先輩、やまと。それじゃ行きましょう。」

俺達は頷いて学校を後にした。

帰りの電車に揺られながら俺達は少しやり取りをした。

「先輩と一緒に同じ方へ帰るのも中学時代以来ですね。」

「そうかもしれないな。前に実家に戻った時はそうだったけどあれもその時のみだったからな。」

「何だかあの頃を思い出すわね。あの頃も私達3人揃ってるだけで楽しかった。」

「・・・悪いな2人とも・・・」

「急にどうしたんですか?先輩。」

「悪い、って何が悪いのよ?」

「俺がお前らの側にいたせいでお前らから離れていった友人もいただろうしな。もっと俺以外の友達ともそうやって楽しく帰ったりできたろうに、俺はそんなお前らから友人を奪ってしまった事を今でも気にしてる。」

「・・・先輩、怒りますよ?私達にはちゃんと友人がいました。先輩という友人が。それに、先輩の事を見ようともしない、ただの風評で先輩と付き合ってきた私達を見限った友人なんて友人じゃないですよ。それこそそんな人はこっちから願い下げです。だからそんな風に言わないで下さいよ。私達は後悔なんてしてないんですからね?」

「そうよ?その時に出来た友人もいたけど、結局は上辺だけでしか私達に接してこない人達ばかりだったわ。そんな中でこうと先輩だけは心から付き合えた友人だもの。だからそんな事気にすることないのよ?」

「・・・ははは。馬鹿だな、お前らはさ・・・」

「それを言うなら先輩もですよ?」

「そうね。私達と同じくらい馬鹿よね。」

「あはは。そうだな。馬鹿同士だから付き合って来れたんだな、俺達は。」

「まあ、これからも私達は先輩に付き合っていきますよ?あの時か

らそう決めてましたからね、あの事件で先輩の味方をした時から。」
「私もよ？これからだって先輩と付き合っていく。私も決めていたから、あの事件からずっとね。」
「そうか・・・ならこれからもよろしくな？２人とも。」

そう俺が言うと２人とも笑顔で頷いてくれたのだった。

そんなやり取りをしているうちに最寄駅についたので俺達は電車を降りて家に向かう

そして玄関前に着くと２人は俺に

「先輩、今日からしばらくお世話になりますね？」
「よろしく、先輩。」
「ああ、少しでも長く、体を休めるようにな。それじゃ入るか」

そう促すと２人も頷いて俺についてきた。

玄関を開けて俺は「ただいまー。」と声をかけるとキッチンの方からみゆきが出てきて

「お帰りなさい、慶一さん。それにいらっしゃい、八坂さん、永森さん。」

そう言ってくるみゆきに２人も

「今日から私達もお世話になります。文化祭終了までよろしくお願いしますね？高良先輩。」
「しばらくの間、よろしく、先輩。」

そう言うとみゆきもにっこりと笑いながら

「こちらこそです。お互いに文化祭の最後までがんばりましょう。」

そう答えるみゆきを見て俺は

「とりあえず、挨拶はその辺にして上がれよ、2人とも。部屋に案内するから。」

2人に促すと「「おじゃましまーす」」と言って上がってきたので俺は2人を部屋に案内した。

「とりあえずここ使ってくれ。落ち着いたら着替えてみゆきの用意してくれた夕食を食べよう。準備できたらキッチンへ来るといい。」

2人は俺の言葉に頷いて早速荷物の整理を始めたようなので俺は自分の部屋に戻って着替えをしてくる事にした。

着替えを済ませた後風呂の準備をしようと思い、風呂場へ向かってみたが、みゆきがこれもやってくれていたようだったので、俺はそのままキッチンへと向かうのだった。

「みゆき、風呂の準備までしてくれてありがとな。程なくして2人も来ると思うから2人がきたら食べよう。」

そう言うとみゆきも頷いて

「はい。それでは私達は席についていましょう。」

みゆきに促され俺も頷いて席について2人を待った。

程なくして2人がキッチンにやってきて

「お待たせしました。おお、これは美味しそうですねー。これ高良先輩が作ったんですか？」

「お待たせ。高良先輩も頑張ってるのね。私も役に立てればいいのだけど。」

そう言いながら席につく2人だった。

「それじゃ、揃った事だし食べようか。いただきまーす。」

「「「いただきます」」」

みんなで食事の挨拶をして食べ始めた。

「でも、こうやってこっちの先輩の家に泊まりに来るのは初めてですね。なんか新鮮ですね。」

「勉強会の時は教えてもらえなかったものね。ねえ？先輩？」

そうやって俺を責めてくるやまとに俺は慌てながら

「いや、そうはいっても泊り込みになるなんて俺も知らなかったし、仕方ないじゃないか。」

俺の言葉にみゆきもクスクスと笑いながら

「そうですね。慶一さんの知らない所で私達で決めてしまいましたから。でも、大丈夫ですよ、八坂さん、永森さん。もし慶一さんが知っていたのならきっと受け入れてくれたと思いますよ？」

みゆきなりにフォローをしてくれたようだった。

「まあ、今度の時は私達も行かせて貰いますから拒否とかはなしでお願いしますよ？先輩。」

「私達を差別したりはしないわよね？先輩。」

その言葉に俺も苦笑しながら

「わかってるよ。ちゃんと声かけるから心配するなって。」

そう答えると2人とも実に嬉しそうな顔で笑っていてみゆきもまたその様子を見ながらにこにこと笑っていた。

その後夕食を終えてこう達に先に風呂に入らせて俺は部屋でくつろいでいたが、俺の携帯にメールが飛び込んできたので確認してみる。

メールの差出人はかがみだった。

ＦＲＯＭ：かがみ

慶一くん、今日は迷惑かけちゃってごめんね？慶一くんに説教しておいて私があんな事になっちゃって今日はずっと反省しきりだったわ。

今は部屋でゆっくりと体を休めながらメール打ってるの。

もちろん遅くならないうちに体休めるから心配しないで。

改めて慶一くんに謝りたかったからメール送ったの。

今度このお礼はさせてもらうつもりだから。

最後に、本当にありがとう。

お休みなさい、慶一くん。

俺はかがみからのメールを見て軽いため息を一つつきながら

「はは、わざわざ律儀だよな、かがみも。でも、かがみにそう言った以上は俺も気をつけないとな・・・」

そう1人呟いた後俺はかがみに返信のメールを作成して飛ばした後、3人が風呂から上がった事を確認して俺は風呂へと向かったのだった。

風呂に入る前にこうがいるという事に何となく嫌な予感を感じていた俺は水着を一応着用して風呂で湯船につかりながらのんびりしていたのだが、ふいに風呂場のドアが開き、そこに現れた2人の姿に驚いて慌てて声をかけた。

「こ、こう、やまと、お前ら何やってるんだ！」

俺のその言葉にこうはニヤリと笑い、やまとは顔を赤らめてもじもじと恥ずかしそうにしていた。

さかのぼる事30分前

こうside

私達は先輩のご好意で私達が文化祭の準備においていつも遅くまで居残り、疲れを溜めている事を心配してくれて家に泊まれと言ってくれたことに感謝をしていた。

そして、今回の事に対するお礼をしたいな、と思っていた私は何をするのがいいのか部屋で悩んでいたのだが、ここはお約束イベントのあれしかない！と思った私は先輩がお風呂に向かうタイミングを

見てからそれを実行に移すべく準備をしようとしていた。
そんな事をやろうとしているとき、やまとが私の部屋を訪ねてきたのだった。

「こう、ちょっといい？明日の事だけど・・・ってこう、あんた何をしようとしてるの？」

風呂場に乗り込む準備をしている時にやまとに見つかった私は

「何って、先輩がそろそろお風呂いくから私、先輩の背中を流してあげようかなってね。今回の事でもお世話になるわけだし、お礼はしなくっちゃねー。」

笑顔でそんな事を言う私にやまとは顔を赤くして慌てて

「な、何を考えてるのよこう！いきなりそんな真似したら先輩にも迷惑じゃない！」

やまとの言葉に私はしれっと

「えー？別にこういうのって初めてじゃないんだからいいじゃん。海に行ったときだってみんなで温泉浸かったんだしさ。」

そう返すとやまとはさらに文句を言ってきた

「あの時はみんな水着を着てたから問題なかったけど、今回は違うじゃない！とにかくそんな非常識な事はやめなさい！」

そう激昂しながら言ってくるやまとに私は

「えー？じゃあ、やまとは先輩に対して何もお礼とかしたくないの？私は私に出来る事でお礼を返したいだけだよ？そして今出来る事をしようとしてるだけかだら。」

私の答えにやまとは呆れながら

「それは、お礼はしたいと思うわよ！だけどこんな事するだけがお礼じゃないでしょ！？」

そう言うやまとに私は

「ねえ、やまと。今回さ、文化祭の準備による疲労の軽減の目的とはいえ先輩が家に招待してくれたんだよ？私達がこうやってここに来れる機会なんてそうはないと思わない？大体の場合、泉先輩達も一緒にいるしさ。」

そう言うと、やまとは私の言葉に

「そ、それはそうかもしれないけど・・・」

と戸惑うような返事をし、私はさらに言葉を続けて

「こういう事ってさ、泉先輩達がいたら出来ない事だし、今回は私達と高良先輩しかいないんだよ？その高良先輩ももう休んじゃってる。今は私とやまとだけなんだよ？だったらさ、これから先できないかもしれない事をやってみたいって思うじゃん？いいチャンスなんだよ？これってさ。」

私の言葉にやまとはしばらく考え事をしているようだったが、ふい

にため息を一つつくと

「結局それを口実にあなたがやりたいってだけでしょ？だったら、私も行くわ。」

やまとのその言葉に私は驚いたが、すぐにニヤリとしつつ

「へー？結局やまとも行きたいんじゃない。素直じゃないねえ、やまとも。」

その言葉にやまとは顔を赤くして慌てながら

「か、勘違いするんじゃないわよ！私はあくまでもあなたが変な事をしないように見張る為に行くの！あなた1人にしておいたらどんな暴走するかわからないじゃない！」

やまとのその言葉に私はさらににやけながら

「はいはい。やまとも素直じゃないねー。まあ、何にしてもそろそろ先輩動くと思うから準備してきなよー？」

私がそう言うとやまとは赤い顔のまま

「わ、わかってるわよ・・・言っておくけどこう、勝手な真似はするんじゃないわよ？行く時は一緒に行くんだからね？わかってる？」

私はやまとのその言葉に頷いて

「わかったよ。待ってるから準備してきなよー？」

私はやまとを自分のペースに引き込めた事に満足して頷いていたのだった。

・・・・・そして風呂場

慶一ｓｉｄｅ

俺は風呂場に入って来た2人に

「こ、こう、やまとお前ら何をやってるんだ！」

と思わず声を荒げていたがこうがにやにやとしながら

「先輩には今日からお世話になるわけですし、お背中でも流そうかなと思いまして。」

そう言い、やまとは相変わらず真っ赤な顔のまま

「わ、私は、こうが暴走しないように・・・見張って、必要なら止めようと思って・・・来たのよ・・・」

俺に視線を合わせないようにしてそう言ってきた。

俺は困惑して

「気持はうれしいけど、まずくないか？この状況。」

そう言うとこうは親指をびしっと立てて

「大丈夫ですって、変な事をするわけじゃないですし。たかが背中

流すくらいじゃないですか。」

そう言った後俺の目を覗き込んで涙目＜演技＞になりつつ

「それともご迷惑でしたか?」

その仕草に俺は迷惑だと言えなくなり

「・・・はあ・・・わかったよ・・・好きにしてくれ・・・」

俺が諦めてそう言うと、こうは目を輝かせて

「ありがとうございます、ささ、先輩洗い場に座ってください。背中流しますから、やまと。あんたもいっしょに、ほら。」

そう言って俺を洗い場に座らせてやまとを呼び、俺の背中を流し始めるこう。

やまとも顔を真っ赤にしながらこうと一緒に背中を流してくれたのだった。

そして背中を流しながらやまとは俺の左肩に見入っていたのだが、ふいに

「・・・先輩、肩の怪我はどう?あの時から大分時間は経ったけど・・・やっぱり先輩の肩を見るたびに思い出すわ・・・」

その言葉にこうも俺の左肩を触りながら

「そういえば、先輩はここを怪我したんでしたね・・・今は大丈夫

なんですか？」

俺はそんな2人の言葉を聞いて俺は自分の肩をぽんと叩いて

「すっかり何ともないさ。でも、やまと、ごめんな。お前にはいらないトラウマ背負わせる事になっちゃったな。」

俺の言葉にやまとは複雑そうな表情で

「・・・怖かったわ・・・本当に。私の身が危険に晒される以上に・・・あの時に思ったもの・・・私達3人の誰もが欠けちゃいけないって・・・3人のうちの誰かが欠ける事が怖いって感じた・・・」

こうもあの時の事を思い出したのか少し元気がなくなったようで

「そうだね・・・それ以前にも先輩が倒れて危険だったのを目の当たりにしてるから、凄く不安だったな。やまとから話聞いた時は私も怖かったですよ・・・けど・・・」

その言葉の後こうは再び明るくなって

「今こうして先輩がいてくれるからよかったです。いなくなってたらこんな事も出来ませんでしたしねー。」

そんなこうに俺とやまとは

「「お前は（あなたは）もっと常識をわきまえろ！（なさい！）」」

とダブルでツッコミを入れるとこうは苦笑しながら小さくなっていた。

俺の背中を流した後少し雑談を交わしてこうとやまとを先に上がらせようとしたのだが、ふいにこうが石鹸を踏みつけて転び、体に巻いていたタオルがはだけ、俺は顔を真っ赤にして大慌てで湯船に飛び込んで後ろを向いた。

「いたた・・・先輩、見ましたか？」

顔を真っ赤にしながらもニヤニヤしながら聞いてくるこうに

「見てない、断じて見てない！」

と言いながら後ろを向いている俺だったがやまとが慌てて

「いいから、早く出なさい！こう。先輩が困ってるわよ！」

そう言いながらやまとはこうを引っ張って風呂から出て行ったのだった。

いつも以上に疲れた俺は風呂に入っても結局休めた気がしなかったがとりあえず明日の為に眠った。

結局それなりに大騒ぎしたのにみゆきが起きてくる事がなかったのを見てよっぽど疲れていたのかな？と思ったのだった。

そして次の日の朝、いつもどおり目を覚まし朝食の準備をしようと思って、学校へ行く準備をしてからキッチンへ行くと

「あ、おはようございます、先輩。朝食の支度できてますよ？今日は私とやまとで頑張りました。」

「おはよう、先輩。昨日は色々ごめんなさい。とりあえず席について？」

その2人に俺は驚きつつも

「おはよう。こう、やまと。何だかんだでも結局早起きなるな、俺たちも、それとやまと昨日の事は気にしてないから。」

そう言いながら2人に促されるままに席に着く。

「そういえば高良先輩はまだ起きてきませんか？」

「高良先輩も早起きしてるみたいだけど、私達より遅いのも珍しいわね？」

そんな疑問を俺に投げかけてきたので俺は

「あいつは俺が気を使ってぎりぎりまで寝かせてやってるんだ。あいつは学級委員長と文化祭実行委員長の兼任だし、俺たちよりもずっとハードな仕事してるからな。少しでも長く休ませてやろうって思ったんだ。だから・・・分頃に起こしてやってくれ。

そう2人に説明すると2人は不思議そうな顔で

「え？先輩が起こしに行くんじゃないんですか？」

「私達にやれ、という事なのかしら？」

そう聞いてきたので俺は昨日あった事を2人に説明したら2人とも納得してくれたのだった。

「ふーむ、まさに歩く萌え要素ですねえ・・・」

「何言ってるのよ、こう。高良先輩も結構慌て物なのね・・・」

そんな2人の言葉に苦笑しながら

「人間誰しもそういう部分があるって事だな。」

そう言いいながら俺は時計を確認するといい時間だったので

「それじゃ、こうかやまと、みゆきを起こしてきてくれ。朝飯食べちまおう。」

俺の言葉にやまとが

「私が行ってくるわ。先輩達も飲み物の準備お願いね。」

そう言って来たので俺たちは頷いて準備をはじめた。

そしてやまとに起こされてみゆきも学校へ行く準備を済ませてキッチンに来て一緒に朝食を摂るのだった。

「「「「いただきまーす」」」」

朝食をとりながら俺達は今日以降の準備予定に思いを巡らせていたのだった。

思い出を紡ぐ旋律、第3話～こうのはた迷惑な企み～（後書き）

次回は準備の追い込みで学校へ泊り込む旋律達、そこで巻き起こるドタバタにご期待ください。

思い出を紡ぐ旋律、第4話～季節はずれの肝試し～

文化祭準備の疲労軽減の為、みゆき、こう、やまとの3人を俺の家に泊まらせて生活するようになってから3日が過ぎた。

いよいよもって文化祭の準備も追い込みになろうというところ、準備の遅れている俺達のクラスもそうだったのだが、何故かこなた達のクラスやこう達のアニ研もまた同時期に追い込みと相成り、学校へと泊り込む事になったのだが・・・・・・

「なあ、こなた。そろそろ戻った方がいいんじゃないのか？」

俺がため息混じりにこなたに言うとこなたは俺に人差し指を立てながら

「だめだよ慶一君。こんなチャンスは2度とないかもしれないんだからね？まだまだ巡る所あるんだから。」

意気揚揚と言うこなたにかがみたちも呆れ顔だった。

俺達は今、学校内をうろついていた。

さかのぼる事1時間前・・・・・・

「ふう、やっぱこうなったか・・・」

作業用の道具を片手に一息つく俺にかがみも苦笑しながら

「スタートの遅れは、やっぱり響いちゃったわね・・・慶一くん、

お疲れ様だけど、後もう少し追い込めばなんとかなると思うから。」

かがみの言葉を聞きながら何気に時計を見た俺だが、時間は8時を回っていた。

この時間まで夕食も摂らずに作業をやり続けていたのもあるが、俺は大分空腹を感じていたのでかがみに

「なあ、かがみ。時間も時間だし、一端休憩して夕飯でも食べないか？」

俺がそう言うとかがみも時計を見て少し考え込んでいたがふいにおなかに手を当ててさするような仕草をすると

「そうね・・・時間的にも丁度いいし、夕食にしましょ？みんなー！一端作業中断ー！これから夕食も兼ねてしばらく休憩を取ります。各自、食事を済ませて少し休んでー！」

作業チームリーダーのかがみがそうみんなに通達するとみんなも安堵の表情を浮かべて各々夕食を取りに教室を出て行ったのだった。

「はあ～・・・腹減ったってヴァ・・・慶一、ナイス提案だぜ。」

「そうね。そろそろ夕食食べておかないと残りがきついわね。」

「はは、お疲れ様だな、みさお、あやの。」

俺の側にやってきたみさおとあやのも少し疲れたような顔でそう言ってきた。

「この時間だと学食はやってないわよね・・・と、なると、コンビニとかに行って夕食の調達してこないとだめよね・・・。」

かがみが顎に手を当てながらそう言いつつ考え込んでいた。

「なら、俺が行ってこようか？」

そう俺が言うと考え事をしていたかがみがびっくりして

「わっ！び、びっくりした・・・慶一くん、声かけるときは一言いってよ、びっくりするじゃない。」

俺はそんなかがみに苦笑しながら

「悪い、考え事してたなんて気付かなかったからさ。それで、どうする？」

改めて聞くとかがみは少し考えた後俺に

「それじゃ、お願いしようかな。私はここにいないといけないから、悪いんだけど行ってきてくれる？」

かがみの言葉に俺は頷いて

「わかった。それじゃ食べたい物を教えてくれ。さっさと行ってくるからさ。」

俺がそう言うとかがみは食べたい物を俺に伝えてきたので俺はそれをメモしてサイフにしまいこみ、教室を出ようとした時、みさおが俺に声をかけてきた。

「慶一、待てよ、私も一緒に行ってやるよ。1人じゃ大変だろうし、

今手が空いてるのも私だけだかんな。」

そのみさおの申し出を俺は受けることにしたのだった。

「じゃあ、よろしく頼む。あやの、みさおと2人で買い出し行ってくるから教室の方はよろしくな。」

そう声をかけるとあやのは頷いて

「わかったわ。気をつけて行って来てね?」

そう言って俺達を送り出してくれたのだった。

コンビニへ行ってかがみやあやのから頼まれた物を買い込み、最後にかがみの好きなポッキーもおまけで買ってから俺たちは学校へと戻って行く。

その帰りの途中でみさおと軽いやり取りをした。

「とりあえず、買い忘れはないな。みさおの方も大丈夫か?」

「ああ。私の方は問題ないぞ?それにしても慶一、お前、そのポッキーは狙ってんだろ?」

「はは。かがみのやつよくこれを食べてたからな。お前こそ俺を責めるような事言いながら笑ってるじゃないか。」

「いやー、想像したらついなー。まあ、これでまたダイエットがどうのとか言い出さなきゃいいけどなー。」

「うーん・・・けど俺から見たらかがみって全然太ってるようには見えないんだがな。」

「まあ、本人が気にしすぎてるだけだと思うけどな。」

「やっぱそうだよなあ・・・そういやみさおはあんまりそういう事

言わないよな？お前はあんまり気にしてないって事か？」
「んー？私は普段から運動してるってのもあるけどさ、正直気にするほど太ってるわけじゃねえしな。」
「ふむ・・・まあ、かがみが聞いたら激怒しそうだな。」
「慶一、私が今言った事は柊には内緒な。ぜってー怒られるし。」
「はは。わかってるよ。おっと、着いたな。」

話してるうちに学校へと辿り着いたので俺達は買出しの物を手に教室へと戻る。

「ただいまー。買出し行ってきたぞ。ってあれ？こなた達にこう達もいたのか。」

教室にはいつのまにかこなた達やこう達がいたので俺はみんなに声をかけると俺の声に気付いたこなた達が

「あ、慶一君おかえりー。私達も一緒に夕食にしようと思ってさ、こっちの教室に来たんだよ。」
「おかえり、慶一くん、日下部。ご苦労様。」
「けいちゃん、お邪魔してるよ？」
「お疲れ様です、さっそく食べましょうか。」
「慶ちゃん、みさちゃんおかえりなさい。」
「先輩、お邪魔してます。一緒に食べましょうよ。」
「お疲れ様、先輩。お邪魔してるわ。」

それぞれに返事してくれたので俺はみんなの所へ行き、かがみとあやのに頼まれた物を渡し、なおかつかがみにポッキーを渡して、早速食べ始めた俺達だった。

ちなみに、ポッキーを渡されたかがみは顔を赤くして慌てていた所

をこなたにからかわれるのを笑いながら見ていたのだった。
そうして和やかに夕食を済ませて少し休憩していたのだが、ここに来てこなたがとんでもない提案をしてきたのだった。
「ねえ、折角夜の学校にいるんだしさ、普段できないような事やらない？この休憩時間にさ。」
こなたの突然の言葉に俺は頭にハテナマークを飛ばしながら
「普段出来ないような事ってなんなんだよ？」
そう聞き返すとこなたはニヤリと笑って
「肝試しも兼ねて学校の七不思議の検証してみない？みんなでさー。」
その言葉にかがみが訝しげな表情で
「肝試しって、あんたそういうのは今やる事じゃないと思うわよ？それに私達は遊びでここにいるわけじゃないって事忘れてるんじゃないでしょうね？」
かがみの指摘にこなたはやれやれというジェスチャーをして
「わかってないねえ、かがみ。肝試しは夏！なんてそんな固定概念そのままじゃやりたい事をやる機会を失うよ？それに普段は学校に夜中まで残ってるなんて事出来ないんだし、こういう時しかチャンスなんてないよ？」

そのこなたの言葉にかがみ呆れつつ

「あんたの言う事にも一理あるとは思うけど、それでも私達は文化祭の準備って物があるんだからさ。」

かがみの言葉を聞いてこなたは”ふう”と軽いため息をついた後

「なら、みんなにも聞いてみるよ。それで否定されたんなら諦めるから。というわけなんだけどみんなはどう?」

そう話を振ってきたので俺達はその問いに

「まあ、息抜きにはいいんじゃないか?ここの所根詰めっぱなしだったしな。」

「わ、わたし、怖いのはちょっと・・・」

「・・・ちょっと怖い感じですが、興味もありますね。」

「面白そうじゃん。私はちびっこに賛成だぜ?」

「みさちゃん!まったく・・・私も怖いのは苦手ね・・・」

「面白そうですね。私も行きたいです。」

「ちょっと、こう!あなたも何調子に乗ってるのよ!私達だってまだ準備残ってるのよ?」

「いいじゃん、やまと。こんな機会めったにないよ?」

「そ、それはそうだけど・・・」

「ひょっとしてやまとも怖かったりするの?」

「なっ!そ、そんなわけないじゃない!わかったわよ、私もいくわよ!」

「だ、そうです。先輩。」

意見を聞き終えたこなたは満面の笑みでかがみに

「5対3の多数決で決まりだね。かがみ、なにか反論あるかな?」

こなたがそう聞くとかがみは渋々と

「・・・わかったわよ・・・私も一緒に行けばいいんでしょ?はあ・・・まったく・・・」

そう答えるかがみにこなたは

「まあまあ、かがみ。こういう事も私達の思い出の一つになるって考えればいいじゃん。というわけで出発しようかー。」

この決定に苦笑する者もいたのだが、とりあえず俺達は懐中電灯等を準備して陵桜の七不思議の検証に出かける事になったのだった。

まず最初の目的地は星桜の樹だった。

「最初は噂の星桜の樹の所だね。ここの不思議は夜中に樹が光るというものらしいんだけどね」

こなたの説明を聞きながら俺達は星桜の樹の所までいったが、噂は噂に過ぎなかったようで、特に何もなかった。

「やっぱりただの噂ね。夜中にこの枯れ木が光るなんてそんな事ある訳ないものね。」

かがみは呆れたように言う。

「でも、ほんとに光ってたら怖いよ・・・」

早くも怖がっているつかさがそう言うと俺は

「まあ、そんな事あるわけないけどな。けど、どこからそんな噂立ったんだろうな？」

その俺の言葉にみゆきも首を傾げて

「私もよくは知りませんが、何時の間にかそんな噂が立ったのだということだけは聞いた事がありました。」

そう言うみゆきの言葉を聞いた後こなたは少しがっかりした感じで

「まあ、しょうがないよね、それじゃ次いこっかー。」

という事で再び動き出した俺達だった。

次の場所はどこの学校でも噂だけはあるトイレの花子さんだが、これは今は電気の消えてしまっている奥の校舎の一角にあるトイレだった。

薄暗い廊下を懐中電灯の明かりを頼りに進んでいく俺たち。

気がつくと、かがみとつかさ、あやの、やまとが暗闇の恐怖があったのか俺の側に寄り添って進んでいた。

「あー・・・４人とも、そんなにくっつかれると動きにくいんだけど・・・」

そう声をかけると４人ともびくりとなって

「な、何よ、別にいいじゃない。この暗がりじゃ足元こころもとないのよ！」
「ごめんね、けいちゃん。私怖くて・・・」
「慶ちゃんごめんね。やっぱり苦手だから・・・」
「べ、別に怖いわけじゃないわよ・・・」

やまとが説得力のない事を言っていたが俺はただ苦笑するのみだった。

程なくして例のトイレに到着した俺達だったが、女子トイレであったがゆえに検証はこなた達に任せる事となった。

とりあえず内部を確認しにいったのはこなたとこうとみゆきだったが結局これもただの噂だったようで、ここにはもう用がなくなった俺達は次の七不思議の検証へと向かった。

次の噂は屋上近くの階段で夜中に何故か段数が1段増えて13階段になる不思議な階段だった。

ここも例によって電気は消えていて、懐中電灯を照らしながら俺達はゆっくりと階段を上がっていった。

「な、なんというか、夜の学校って不気味ね・・・」

かがみが身をこわばらせながらそう言う他の皆も

「だよねえ、いい雰囲気でてると思うよ。」
「何でこんなに怖いのかなあ・・・」
「そうですね・・・不思議な感じです・・・」
「この雰囲気がいいんじゃねえか？とはいえちょっと不気味だけど

な。」
「そういえば慶ちゃんはあまり怖がっていないわよね？どうしてなの？」
「そういえば先輩は一人冷静ですよねえ？中学の頃私とやまとが学校に忘れ物をして夜中に教室まで取りにいくのに付き合ってもらった時も先輩は何ら平気そうな顔してましたよね？」
「そう言えばそうよね？先輩は怖くないの？」
あやのたちの言葉に俺は
「んー？特に怖いって事はないな。本物も見た事あるけどそんなに怖いとは感じなかったな。」
俺の最後の言葉に凍りつく全員だったが、こなたが
「ほ、本物を見たって・・・ひょっとして幽霊？」
おそるおそる俺にそう訪ねてきたので俺は頷いて
「ああ、そうだ。まあ、もう少し小さい頃だがな。最近は見ないよ。」
その言葉に全員が絶句したのだった。
「そもそも普通の幽霊はこっちが何もしなけりゃ害を及ぼす事もないからな。本当に怖いのは悪霊になったやつだからな。」
俺のその言葉にかがみは
「なんというか、頼もしいわね・・・ねえ、あんたは幽霊がそこに

いるとかそういうのは分かるの？」

そう聞いてきたので俺は首を振って

「いや、残念ながらそういう所まではわからないんだよな。それに今見えなくなってるって事はもう少し小さい頃にあった霊能力的な物がなくなったんだと思うから。」

俺の答えにかがみは考える仕草をして

「そっか、それじゃ今のあんたは普通の人と何ら変わらないって事なのね。」

その言葉に俺は頷いて

「まあ、そういう事だな。けど、もし見えたりしたとしてもそんなに怖くないのは変わらないけどさ。」

俺の言葉に皆は感心しているようだった。

そんなやり取りをした後、噂の検証を終えて俺達は次の噂の場所へと向かったのだった。

「次は音楽室の怪ってやつだね。夜中に勝手にピアノが鳴り出すとかいうあれ」

音楽室に向かいながらこなたが軽く説明をしてくれた。

「そういうのもよくある噂よね。でも、誰もいない音楽室でそんな事起きたら怖いわよね・・・」

体をぶるっとふるわせつつかがみが言う。

「まあ、実際そういうのもそうそう起きるもんじゃないさ。」

皆を安心させるように言うと、心なしか全員に安堵が広がるのを感じたのだった。

そして音楽室に辿り着き早速検証を開始する。

ピアノの周り等を見回っている時に誰かが楽器を蹴倒したようで大きな音がでた。

その音に驚いて悲鳴が上がる

「きゃあああっ！何？何？何なの！？」

「怖いよ～けいちゃん～！」

「ひゃああっ！何が起きたの！？」

「きゃあっ！何！何なのよ！？」

一斉に俺に抱きついてくる４人をとりあえず倒れないように受け止めつつ

「だ、大丈夫だみんな。誰かが立てかけてあった楽器に足引っ掛けたんだろ。」

そう言いつつこなた達の方を見ると悲鳴こそ上げなかったもののかなりびっくりしてたようだった。

そしてばつの悪そうな顔でみさおが

「わ、わりい。今の私がやっちゃった。」

その言葉と同時に怒涛のように皆から文句の嵐を浴びせられてしこたま凹んでいるみさおの姿があった。

俺はみさおの頭を軽くぽんと叩くと

「みさお、どんまいだ。失敗は誰にだってつきものなんだから気にするな。」

と、一応慰めた俺だった。

結局、音楽室も何もなかったので俺達は次へと移動をする。

「なあ、こなた、そろそろ戻った方がいいんじゃないのか？」

と、ここで冒頭の状況になったのだが、こなたはまだ納得がいっていないようで

「だめだよ慶一君。こんなチャンスは2度とないかもしれないんだからね？まだまだ巡るところあるんだから、まだ諦めないよ？」

意気揚揚と言うこなたに俺達は苦笑するしかなかった。

その後、校長室の歴代校長の写真の怪とか美術室の幽霊の噂の検証を行ったが結局何事もなく、最初の勢いはどこへやらでこなたは意気消沈といった感じだった。

テンションの下がった状態のまま最後の理科室の動く人体模型の検

証の為、俺達は理科室に近づいていたのだが俺は室内に人の気配を感じ取りこなた達に声をかけたのだった。

「こなた、ちょっと待て。皆も止まってくれ。」

俺の静止の声にみんなも少し驚きつつも止まってくれたので皆に小声で説明した。

『誰もいないはずの電気の消えている理科室に誰かいる。こんな時間に、しかも電気もつけずに理科室内に人がいるのはどう考えてもおかしい。何かあるかもしれないからみんな俺の指示通りに動いてくれ。』

俺の言葉に皆が怯えたような表情になるのが見て取れた。

『ね、ねえ、それって本当なの？まさか幽霊・・・とかじゃないわよね？』

怖がりつつ聞いてくるかがみに俺は首を振って

『いや、この気配は生きてる人間の物だ。幽霊じゃない。とにかく、不審者なら捕まえなきゃまずい事になるかもしれないから皆、協力してくれ。』

俺の言葉に緊張を表情にだしながらこなたが

『わ、わかったよ。私達はどうすればいいの？』

そう聞いてきたので、俺はみんなに指示を出した。

『まず、こう、やまと。お前達2人は左側のドアについていてくれ。みゆきとかがみは右側だ。つかさは危ないからかがみたちと一緒に居ろ。俺とこなたとみさおで室内に入るから俺達が入ったのを確認したらあやのは廊下の電気をつけてくれ。そしてこなた、みさお。お前ら2人は中に入ったら理化室内の電気スイッチの側で待機、俺が指を鳴らす音が聞こえたら電気のスイッチを入れるんだ。いいな？』

『わ、わかったぜ』『了解ー』

『大丈夫なの？慶一くん・・・。』

『無理はしないでくださいね・・・。』

『けいちゃん、無事に戻って来てね？約束だよ？』

『慶ちゃん、怪我だけはしないでね。』

『先輩、危なくなったら逃げてくださいよ？』

『先輩、いなくなったりしたら許さないからね？』

俺はこなた、みさお以外の6人に頷くと慎重に理化室内へとこなたとみさおを従えて入って行く。

あやのは俺の指示通り廊下の電気スイッチの所で待機し、俺達が理化室内に入ると同時にスイッチを入れた。

こなたとみさおは理化室内の電気スイッチの側に移動してかがみ達とこう達も配置についたのを瞬時に見回して確認した後暗がりに向かって声を発した。

「・・・おい！いるのは分かってるんだ、いつまでも隠れてないで大人しく出てきたらどうなんだ！？」

そして気配のある方へ声をかけた俺は目を閉じて気配の出方を待つ。

しばしのにらみ合いにも似た状況を続けていたが、やがて気配の主はこのまま隠れつづけていても無駄だと悟ったのかついに動き始めたのを俺は感じ取っていた。

俺の方に徐々に向かってくる気配を感じながら俺はさっきの打ち合わせどおりに指を鳴らすと、それに反応したこなたとみさおの2人が一斉に室内の電気スイッチを入れたのだった。

そして灯りがついた瞬間目を見開き、俺の目の前に迫っている覆面をつけた男が突進してきていた。

「怪我したくなければそこをどきやがれ！」

そう叫びながら俺に突進してくる覆面男の手にはナイフが握られており、どうやら俺を刺すなりして怪我を負わせつつ逃げようという算段らしい。

俺は即座に相手のナイフを持つ腕を蹴り上げた。

「甘い！！」

俺の気合の声と共にナイフを持つ腕を蹴り上げられた覆面男はナイフを離しはしなかったものの上に向いた腕はすぐには元に戻らないようだったので俺は間髪いれずに相手との間合いを詰めると

「螺・旋・掌！！」

それでも抵抗を試みた覆面男はナイフを持つ腕を俺の顔に向けて突き出してきたのを頬を切らせながら避けつつ

俺は捻りを加えた掌打を叩きこむと覆面男はうめき声を一つあげるとそのまま気を失った。

事の成り行きを心配そうに見守っていた皆が俺の所にやってきて

「慶一君、大丈夫!?」
「慶一くん、頬から血が・・・。」
「どうなったの?けいちゃん!」
「大丈夫ですか!?慶一さん!」
「慶一!あっ!ほっぺたが・・・」
「慶ちゃん、しっかり!」
「先輩!大丈夫なんですか!?」
「先輩!よかった・・・本当に・・・」

心配する皆をとりあえず落ち着かせて俺はこうとみさおに

「みんな、心配かけたけどもう大丈夫だ。それと、こう、みさお。そいつを壁にもたれかけさせるように立たせてくれ。」

俺の言葉にみんなはほっとしていたが、俺が男を立たせるように指示するとみさおとこうは俺の指示通りに壁に持たれかけさせるように男をたたせたのを見て

「さてと、意識戻ってから逃げ出されないように今から保険をかけておくから、かがみ、みゆき、それが済んだら職員室行って先生を呼んできてくれ。」

俺の保険、という言葉に皆不思議そうな顔で見ていたが、みゆきだけは俺がやろうとしてる事に気付いたようで

「慶一さん・・・程々にしておいてあげてくださいね？」

というみゆきの言葉に苦笑しながらも頷く俺だった。

そして

「螺旋連弾四壊！！」

あの時と同じように四肢の関節を外してだるまにすると、みんなは俺の繰り出した技に驚いていたのだった。

「慶一君、今なにやったの？」

そう聞いてくるこなたに俺は

「ああ、瞬時に捻りを加えた拳を四肢の関節に打ち込んで関節を外したんだよ、まあ、逃げられないようにするための保険ってやつさ。」

俺の言葉にかがみは気の毒そうに相手を見て

「まあ、自分がしでかした事とはいえ・・・少しは同情するわね・・・」

やれやれというジェスチャーをしながらそう言うかがみに俺は

「はは、まあ、犯罪行為をしでかす相手なら仕方がないってやつだな。それじゃ、かがみ、みゆき。先生を呼んでくれ。」

俺がそう言うと2人とも頷いて職員室へと向かって行くのを俺達は

見送っていたが、ふいにあやのが俺の頬にハンカチを当ててきて

「慶ちゃん、頬の傷、まだ血が止まってないからこれを当てていて？」

と言うあやのに俺は慌てながら

「あやの、気持は嬉しいが折角のハンカチが汚れちまうよ。俺もハンカチはあるし、それを当てておくからさ。」

あやののハンカチを汚す事を気にして俺はそういうのだが、あやのは頑として折れず

「だめよ？傷口にバイキンが入ったりしたら大変だもの。」

強い口調でそう言ってくるあやのに俺は仕方なく従うのだった。

やがて先生達が俺達のいる理化室前にやってきて

「森村！一体何があったんや！ちゃんと説明してもらうで！？」

その言葉に俺は事のいきさつを話すと

「まったく、お前は強いとはいっても無茶しすぎや！お前にもしもの事があったらこいつらが泣くんやぞ！？その事もちゃんと考えや！ともあれ、無事ですんでなによりや、こいつは警察に引き渡しておくさかい、お前らは今日は家に戻り。」

黒井先生にそう言われ、俺達は今日は家に帰る事となったのだった。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。後の事はよろしくお願いしますね？それじゃ行くか、みんな。」

皆に声をかけてその場を立ち去ろうとする俺に黒井先生がもう一度声をかけてきた

「待ちや、森村。」

俺はその声に振り向いて

「なんですか？先生。」

と声をかけると、犯人を縛り上げた先生が

「帰る前にこいつの関節元に戻していき。このまんまで警察に引き渡すわけにはいかんわ。」

そう言われ、俺は苦笑しながら犯人の関節を元に戻したのだった。

そして次の日警察の事情聴取と共に俺は学校に侵入した不審者を捕まえた事が広がり、ちょっとした話題を呼んでいた。

そしてその日の昼頃に俺は校長室に呼び出されると

「森村君。君にお願いがあるのだが。」

校長が俺にそう言ってきたので俺は

「お願いってなんでしょうか？」

そう聞き返すと校長はばつの悪そうな顔で俺に

「うちの学校のセキュリティに穴があったという事が今回の事で発覚する事となった。だが、我が校の名誉の為にこの事を表に出されてしまう事を避けたいのだよ。ゆえにこの事実は君の胸の中にしまっておいてくれないだろうか？」

そう懇願してくる校長に俺は少し考えた後

「その頼みを聞いてもいいですが、一つだけ条件があります。それを聞いてくれるなら今回の事は他言はしませんが、聞いてもらえないのであればどうなっても責任持ちませんよ？」

俺の言葉に顔色を変える校長は

「条件？君は我々を脅すつもりなのかね？」

おそるおそるそう聞いてくる校長に俺は

「いやあ、一つだけ可愛い生徒の我侭を聞いてくだされればいいんですよ。それだけで今回の事は他言はしませんから。」

と、したり顔で言う俺に校長は

「とりあえず、君の言う条件とやらを聞かせてもらおう。その上で判断させてもらいたい。」

そう言って来たので俺は校長に

「それならば。俺が聞いて欲しい我侭と言うのはですね・・・・・・

と言う事です、出来ますか？」

俺の出した条件を聞いて校長は

「ふむ・・・その程度の事でいいというのならその条件飲むとしよう。それじゃこの件はこれで終わりと言う事でいいかな？」

俺は満面の笑みで頷きながら

「結構ですよ。それじゃ校長先生、くれぐれもよろしくお願いしますよ？」

俺の出した条件を守ると言う約束に念を入れて俺は校長室を後にした。

俺は3年になった時の事を思い浮かべながら、そこに向けての行事を終わらせつつ確実に進んでいこうと改めて気合を入れなおしたのだった。

思い出を紡ぐ旋律、第5話～桜藤祭1日目～

文化祭の準備による泊り込み、そしてその時にやったこなたの提案による季節はずれの肝試しの最中に俺は校内に進入していた不審者を撃退する一幕がありながらも何とか文化祭の準備を開催日までに間に合わせる事ができた。

そしていよいよ文化祭当日、俺達２－Ｄの生徒は開会式の前に作業チームリーダーのかがみの激励によって気合を入れ直していた。

「みんな、今日まで大変なスケジュールの中での準備ご苦労様。これから3日間桜藤祭の開催となるけど、最後まではりきっていきましょ！」

その号令とともに「おーっ！！」と言う掛け声と共に気合を入れて俺達は体育館へと開会式へ向かうのだった。

つまならない校長の挨拶や文化祭開催の前座を終えて俺達は自分達の教室に戻り、さっそく俺達の出し物、ケーキと紅茶の喫茶店の開店となった。

午前中は俺達は店の手伝いをせねばならなかったので皆と共にウエィターをやったり掃除係をやったりと大忙しで動いていた。

以外にも店の状況は好調でお客の入りもなかなかのものだった。

そして俺達のクラスの出し物に俺達の見知った顔がやってきたのだった。

「ほほー・・・慶一君達のクラスもなかなかの客の入りだね。これはライバル店として負けられないねー。」

腕組みをして店内を見回しつつ感心したように言うこなた。

「意外とお客さんはいってるね～。すごいな～。」

意外な盛況っぷりに驚くつかさ。

「シンプルですが、癒しの空間という感じですね。」

店内を見回して分析をするみゆき。

俺は3人の側に来て

「いらっしゃいませ。3名様ですか?」

とウェイターとしての挨拶をすると俺の姿を見たこなた達が

「おー、慶一君なかなか似合うじゃん。」
「かっこいいよ?けいちゃん。」
「すごくお似合いですよ?慶一さん。」

3者3様に誉めてくれるのを俺は照れつつ

「はは、ありがとう。とりあえずこっちだ。お前らも俺たちのクラスの偵察だけをしに来たわけじゃないんだろう?」

そういいつつ3人を案内すると、こなたは俺に

「まあねー、どんなケーキが食べれるのかってのも楽しみだからね。って慶一君。だめだよー？いくら知り合いが来たからって言ってもウェイトレスの言葉使いを崩したらさー。ちゃんとプロとしての自覚持たなくっちゃね。」

人差し指を立ててそう言ってくるこなたに俺は苦笑しつつも

「はは。まさかこなたに説教されるとは思わなかったな。よし、それではお客様、ご注文がお決まりになりましたらお呼びください。それではごゆっくり。」

言葉使いを直して俺はメニューをこなた達の机の上に置くと先に注文を受けていたお客の対応の為に席を離れた。

厨房スペースの所で材料の下ごしらえとかをしているかがみやあやの、みさお達の側に行き、先に受けていたお客の注文を伝えていたが、その時にかがみたちはこなた達が来てる事に気付いて

「慶一くん、お疲れ様。こなた達来てるのね。うちのクラスの偵察かしら？」

「ちびっ子達もお客として来てくれたんなら売上に貢献してくれんじゃねえか？」

「楽しんでもらえるといいわね。はいこれ、５番テーブルのお客さんの注文、あがったわ。」

俺はそう言ってくる３人に

「偵察うんぬんもあるだろうけど、俺たちのクラスに遊びにきてくれたんならちゃんとしたお客さんだからな。まあ、売上の足しにはなってくれるだろうさ。」

そう言ってあやのから注文の品を受け取ってその場を離れる俺だった。

「よしっと。サンキューなあやの。これは2番テーブルのお客さんの注文だ。よろしくな。」

そして2番テーブルに注文の品を届けに行って

「お待たせしました。ティーセットと特製ショートケーキになります。」

品物を置いて次のテーブルへと向かったのだった。

こなたｓｉｄｅ

私達は午後からの出番となるので、午前中は自由時間があった私達は慶一君のクラスと八坂さん達のアニ研を見にいっておこうと思い、まずは慶一君のクラスにお邪魔した。

慶一君のクラスはなかなかお客の入りも好調のようで私達も感心しながら店内を見ていると、私達に気付いた慶一君が私達の所に来て席に案内してくれるという事なので私達はそれに従って席へと向かった。

その際に慶一君のウエィター姿を見て、その格好になかなか似合ってるなあと思いつつその姿をニヤニヤとしながら見ていたのだった。

そして私達が注文した物が届き、ケーキのセットを食べながら私達は軽いやり取りをしていたのだった。

「うーん、中々美味しいねえ。このケーキも手作りみたいだよ？」
「あの時けいちゃんに奢ってもらったティーセットを思い出したよ～。」
「つかささん、つかささんは慶一さんにティーセットを奢ってもらったんですか？」
「うん、そうだよ～。けいちゃんが見つけたお勧めの店だったんだよ。けいちゃん、そのお店を参考にしたんじゃないかな～？」
「なるほどねー、あの時つかさがいなかったのはすでに奢ってもらっていたからだったか・・・」
「こなちゃん達は奢ってもらったの？」
「はい、私達はケーキバイキングに行ったんですよ？」
「あの時も一杯食べまくっちゃったねー。結局食べきれなくて慶一君に負担かける事になっちゃったけどね。」
「う～ん、今度わたしもみんなと一緒にいってみたいな～。」
「なら、今度何かの折にでもいこうよ。ねえ、みゆきさん。」
「そうですね。その時にはまたご一緒します。」

そんな風にまた今度ケーキバイキングに行く事を約束しつつ、ケーキセットを楽しんだ私達だった。

そして慶一君のクラスを後にした私達はアニ研へと顔をだしに向かった。

アニ研の前に行くとそれ系の人達がアニ研の展示物等を興味深そうに見ている姿を横目でみつつ私達は八坂さん達の所に行った。

「やふー。八坂さん、来たよー。」
「こんにちは～。こなちゃん達と遊びにきたよ。」
「お邪魔しにきました。八坂さん、永森さん。」

私達がそう声をかけると2人も私達に気付いたようで

「泉先輩、つかさ先輩、高良先輩、いらっしゃいー。とりあえず見ていってください。」

「いらっしゃい、先輩。こんな所だけど来てくれてありがとう。」

「ちょっ、やまと、こんな所ってないんじゃないの?」

「私は事実を言ったまでよ?まあ、この部に在籍してる以上はつきあうけどね。」

私達に声をかけつつ2人して軽い漫才をしているのを私達は苦笑しながら見ていたが

「おお、泉に柊、高良。よく来たな。うちの展示物も見ていってくれ。」

そこに部の責任者でもある桜庭先生が声をかけてきたのだった。

「あ、桜庭先生、お邪魔してます。」

私が代表で挨拶をすると、先生はニヤリと笑いながら私に

『なあ、泉、いい物があるんだが見ていくか?』

小声でそう言ってくる桜庭先生に私は興味を引かれたので

『いいもの?それって一体?』

と聞き返すと桜庭先生は私を引っ張って展示の奥へと連れて行くとまさに隠れ展示品とよべる限定物グッズの山がそこにあった。

私は目を輝かせながら

「こ、これはすごいですね。これ先生が集めたんですか？」

そう聞くと先生は得意げに

「ああ。結構大変だったぞ？これとかこれはあの時になー・・・・・・」

その説明を聞きながら私は限定グッズ談義に華を咲かせていたのだが、つかさとみゆきさんがおいてきぼりになってるのをすっかり忘れていて

「こなちゃん、楽しそうだね～。でもわたし達忘れられてるような・・・」

「つかささん、それは言わない約束です・・・」

そう呟きながらただただ私が戻るのを待っていてくれたのだった。

そして、みんなと合流した後適当に興味を持った場所に入ったりしながら午前中の私達の自由時間を終えて自分達のクラスに戻って準備をするのだった。

慶一ｓｉｄｅ

午前中の俺達の仕事が一段落して交代の生徒と入れ替わった後、俺達はとりあえず昼飯を食べる為に他のクラスの食べ物屋を巡るべくかがみ、みさお、あやのの３人と共に校内を見回って歩く事になった。

こなたのクラスは最後に巡る予定で俺達は校内をうろつく。
色々な食べ物主体で出しているクラスを見ながらみさおは
「あ、あそこがいいんじゃねえか？」
みさおの指差した方を見てみるとそこはカレー専門店と書かれていた。
「へえ？カレーか。珍しいな。」
俺が関心しながら店を見てるとかがみたちも
「いい匂いしてるわね。ねえ、慶一くん、峰岸、ここに決めない？」
「そうね、お昼御飯としてはボリュームもあるしいいかも。」
その2人の言葉に俺も頷いて
「ならここにしよう。みんな行こうぜ？」
という俺の言葉に皆も頷いて後についてきたのだった。
カレーを食べながら俺達は軽く雑談を交わしていた。
「それにしても、去年とはまた違った雰囲気があるな。今年の桜藤祭はさ。」
「どうして？」
「1年の頃はこんな風に仲のいい友人達と協力しあって何かをするって事もなかったからな。協力はしたけど、結局ノルマこなすだけ、

って感じだったからな。」
「慶一は去年はつまんなかったか?」
「正直言って今思えばそう感じていたなあ・・・でも今年はお前らという友人が出来て、その友人と共にこういう事をやっている、その事に楽しさや嬉しさを感じてる。それが去年とは違うなって思うよ。」
「慶ちゃんが私達のお友達じゃなかった頃、私達も柊ちゃん達と一緒に文化祭の準備はしてたけど今年みたいに楽しいとは感じてなかった気がするわね。」
「・・・まあ、それに関しては私も一緒かな?どことなく味気なかったというか・・・なんだろう、あんたって色がないあの頃ってなんか心から楽しめてなかった気がするわ。」
「そう言う意味じゃ慶一の存在って色々な事を変えてくれたきがするぜ。」
「そうかな?そう言われると少し照れるが俺は特に大した事をしたつもりはないんだけどな。」
「ふふ。十分してくれたわ。慶ちゃんは私達にとっての日常を変えてくれた人よ?」
「そうだぜー?お前がいなかったら私らもずっと女同士だけでやってたかもしれねえしさらにはちびっ子達とも友達になれてたかも怪しかったからな。」
「そうね。慶一くんはこなた達と私達をつないでくれただけじゃなくて八坂さんや小早川さん達も私達の前に連れてきてくれた。色々な色がついたって思ったら凄く楽しくなったわよ。」
「こう達の事はともかく、ゆたか達は俺にとっても意外な出会いではあったな。」
「でも、こうやって出会ったから今の私らがあるんだし、やっぱ出会いってやつは重要なんだろうなー。」
「そうね。私もそう思うわ。だから今私はあの頃よりもずっと今が楽しいわ。」

「それは同感。慶ちゃん。私達のお友達になってくれてありがとうね。」

「・・・それを言うなら俺だってそうだ。それまで灰色だった俺の世界に色をつけてくれたお前らにありがとう、だよ。」

お互いにそう言いあうと俺達は笑顔を交わしていた。

そして食事を終えた俺達はこう達のいるアニ研に顔を出しに行く事にした。

アニ研の部室前へ来て見ると、それ系の濃い人達が大分集まっていてかがみたちもその光景に苦笑を浮かべていたが、とりあえずこう達に挨拶をしに行く為、奥へと入っていった。

そして奥の受け付けっぽいテーブルに座って客の相手をしてるこうを見つけて俺達は挨拶をしにいった。

「よう、こう。それなりに盛況みたいだな。」

「こんにちは八坂さん。結構賑やかね。」

「様子見に来たぜ？八坂ー。なんだかここだけ別世界みてえだなー。」

「八坂さんみんなと一緒に見に来たわ。それとあそこにあるリラッタヌのカップって売ってるの？」

俺達がそう声をかけるとこうとやまとは

「あ、先輩。かがみ先輩と日下部先輩、それに峰岸先輩もわざわざすいません。それと、峰岸先輩。それは売り物として用意していますが、お気に入りなんですか？」

「こんにちは先輩達。わざわざここに来てくれてありがとう。」

そう挨拶を返すと俺たちも笑顔で頷き、あやのは嬉しそうにリラッタヌのカップを買い込んでいた。

俺は部室内を見回しながら

「へえ？色々な展示物もあるけど、おまえらの作った一般向けの同人誌もおいてあるんだな？」

そう呟くとかがみも少し呆れながら

「まったく、こなたの好きそうな物とか多いわね・・・って・・・あれはっ！！」

かがみが突然何かを見つけてそこに向かって突進していく。

何事かと思って様子を見るとどうやらかがみがファンであるラノベの絵師さんが書いたイラストが売られていたようだ。

俺とみさおは喜々としてそれを買い込むかがみを苦笑しながら見守っていた。

「柊ああいうのが好きなんか？」

というみさおの疑問に俺は笑いながら

「どうやらそうらしいな。コ○ケというイベントでもああいうのに釣られてついてきたくらいだしな。」

という俺の答えにみさおは腕組みをして考え込みながら

「私も少しは柊の好きそうな物も知った方がいいんかなー・・・」

とか呟くのを聞きながら俺は軽いため息を一つつきつつ微笑んでいた。

やがて、あやのもかがみも満足したのか買う物を買い込んで戻って来て

「お待たせ、慶一くん。それじゃそろそろいきましょ？」

「ごめんなさい慶ちゃん。待ったかな？」

という2人に俺は手を振りながら

「いやいや、こっちはそんなに待ってないから大丈夫さ。それじゃそろそろこなた達の所行って見るか。」

そう答えるとみさおも頭の後ろで手を組みながら

「そうだなー。ちびっ子達、どんな出し物なんだろうなあ・・・メイド喫茶って言ってたけどよくわかんねえんだよなー。」

そう言って笑っていた。

そして4人で部室を出て行こうとしたときこうたちから

「あ、先輩。あとで先輩達のクラスの喫茶店にもお邪魔させてもらいますね。」

「美味しいケーキとお茶のお店らしいわね。楽しみだわ。こうと一緒にいかせてもらうわね。」

そう言って来たので俺も笑顔で

「ああ。当店を是非ご利用ください。ってやつだな。」

そう言ってウェイターよろしくうやうやしく礼をすると2人も笑顔で俺に

「あはは、先輩なんですか?それー。」

「くすくす。先輩、結構様になってるわよ?」

そう言って来たので俺は後頭部を掻きながら

「あー、まあ。俺も自分のクラスでウェイターやってたからな。まあ、そんなわけで一つよろしく・・・っと忘れてた。こう、やまとちょっといいか?」

俺は2人に確認する事があったので2人の側に行って小声で

『2人とも、例の物は準備してあるか?』

そう聞くと2人も小声で

『ええ、ばっちりですよ。後で渡しに行ってきます。』

『こちらもぬかりはないけど、でも先輩もやっぱりお人好しよね?』

そう答えてきたので俺は苦笑しつつ

『まあ、そう言うなよ。ともかく、みゆきとまた会えた時に頼んだぜ?』

そう伝えると2人とも頷いて

『分かりました、まかせてください。』
『先輩も抜かりなく、ね。言い出しっぺが失敗してたらしゃれにならないわよ?』

という答えに俺は頷いて

『わかってるさ。それじゃ今日はこれでな。2日目には一緒に回れる事があったらいいな。』

そう伝えると2人は

『そうですね、その時には先輩につきあわせてくださいよ?』
『そうよね、こうと2人だけじゃつまらないものね。どうなるかは分からないけど楽しみにしてるわ。』

その言葉に俺は頷きで返した後入り口で待ってくれてるかがみたちの元に走っていった。

かがみたちの元に戻ると3人は俺に

「遅いわよ?もう少し遅れたらおいてくとこだったわよ。3人で何話してたのよ?」
「慶一、時間は限られてんだからもたもたすんなよなー?」
「はは、すまない。それとあいつらと話していたのは例の事さ。」

俺の言う”例のこと”と言う単語にピンときたかがみは

「ああ、あの事ね。私達もぬかりはないけど慶一くんも大丈夫なんでしょうね？」

俺に確認するように聞いてきて、その言葉にみさおも

「まあ、慶一の事だから忘れる事はねえと思うけどな。まあ、その事は私らもちゃんと準備してあっから大丈夫だぜ？」

得意げな顔でそう言うみさおにあやのも苦笑しつつ

「みさちゃんだって私が覚えてなかったら忘れてたかもしれない事自覚してよ？」

そうツッコミを入れるとみさおはばつの悪そうな顔で小さくなっていた。

最後にあやのが収めてくれて俺は苦笑しながらも3人を連れてこなた達のクラスへと足を向けた。

「さあ、こなた達のクラスへ行くか。」

気を取り直してそう言いつつ歩き出す俺の後ろをかがみたちがついてきたのだった。

そして、こなた達のクラスに来た時その派手な看板と、あきらかにそれ系の人達がこなたのクラスに群がってるのを見て若干引き気味に見ながらも外に立っていたメイド服を着た案内係の子に案内されて教室内へ入ると

「「「お帰りなさいませ、ご主人様」」」

俺たちに気付いたメイド服に身を包んだこなたとつかさとみゆきが俺達を出迎えてくれた。

その出迎え方に驚きつつも俺は

「えーと、４人だけど席あるかな？」

とこなたに言うとこなたは俺達に

「かしこまりました。こちらへおいでください、ご主人様方。」

うやうやしく優雅に頭を下げながら俺達を席へと案内してくれたのだった。

席に案内された俺たちはこなたからメニューを受け取り、注文する物を決めていたのだが、こなた達３人が俺たちのテーブルの所に来て

「ねえねえ、慶一君、どうかな？この衣装はさ。」

「似合ってるかなあ・・・」

「初めてこういうのを着ましたが何だか不思議な気分ですね。」

そう聞いてきたので俺たちはそれぞれに感想を伝えた。

「こなた、中々似合ってるよ。つかさやみゆきも見違えたようだ。」

「なんというか凄い格好ね・・・でも、結構可愛いかも・・・」

「いやー、こんな世界ってあるんだなー。私初めて知ったゼ。」

「泉ちゃん達よく似合ってるわよ？私もちょっと着て見たいかも。」

そう言うと、３人とも顔を赤くして照れていた。

そして注文の決まった俺たちはこなた達にオーダーすると注文を持って奥へと戻っていった。

注文の品が来るまでの間俺たちは色々と話していた。

「それにしてもこういうのがあるってのはテレビとかでもやってたけど、なんか凄い世界だよなあ・・・。」

「そうよね・・・実際ちょっと引いたわよ・・・お客に濃い系の人も多いしね・・・」

「何だかここが私らの学校って事を忘れそうになるよなあ・・・」

「ふふ。でも泉ちゃん達楽しそうだったわね。」

「まあ、それは認めるけどさ。けど本当によく許可が下りたよな?」

「私はこんな企画通るわけないって思ってたわよ。」

「実際通ってるから、今更じゃねえか?」

「そうね。日々文化祭も色々やるようになったわよね。また来年はさらに新しい物がでてくるのかしら。」

「それでも倫理に反しない物が出る事を祈るのみだな。」

「あいつはまた何か企みそうよね・・・今度は私も全力で阻止かしら・・・」

「まあ、私は面白けりゃなんでもいいかんな。」

「だめよ?みさちゃん。一応の常識はわきまえとかなきゃね。」

「何気に酷い一言のようにも思えるぞ?あやの。」

「あら?そうかしら、そんなつもりはなかったんだけど・・・」

「うう、ちょっとだけ凹んだってヴァ・・・」

「お前の場合は自業自得だ!ちょっとは懲りなさい!」

最後のかがみの突っ込みでひとしきり笑った頃、注文の品が届けられたので俺達はそれぞれ食べてみたが意外にもしっかりと作ってあったのには驚かされた俺たちだった。

「へえ、こいつはたいしたもんだ。」
「ほんとね。こっちにも力入ってるわ。流石にこなたやつかさがいるクラスってとこかしら。」
「おお、うめーなー。このパフェ最高だぜ」
「このゼリー寄せも美味しいわ。うちも負けてられないわね。」
「なら、俺達は正統派喫茶店として勝負だな。」
「そうね、がんばりましょ？まだ勝負はこれからよ。」
「うちだってケーキと紅茶じゃ負けてねえってとこ教えてやろうぜ？」
「ふふ。こういうのもいいわね。」

そう言って俺達はこなた達のクラスに対抗意識を燃やしつつ残り2日間、ライバル店としてがんばろうと心に誓ったのだった。

「ふふ、盛り上がってるとこ悪いけど、私たちだって負けないよー？」
「わたし達っだってがんばるもん。」
「負けませんよ？私の望んだ出し物がなくなり、これになってしまった以上はせめて勝ちます！」

3人が俺達に宣戦布告をしてきたのだが、みゆきだけは自分の却下された出し物の提案の事を未だに引きずっているようだったので俺達はそのみゆきの思いに苦笑するしかなかったのだった。

こうしてお互いに火花を散らした売上勝負くいつの間にそうなったんだろう（汗）＞の幕は切って落とされたのだった。

残り2日、これからどうなるのかは俺たちにも予想は出来なかったが、せめて最後までは楽しもうと密かに心に決めている俺だった。

思い出を紡ぐ旋律、第5話～桜藤祭1日目～（後書き）

次回は一般客もお目見えするので更なるカオスになるかもです。次回もお楽しみに。

思い出を紡ぐ旋律、第6話～桜藤祭2日目、また一つ消える罪、前編～

桜藤祭も開催となり、俺達とこなた達はお互いの喫茶店の売上勝負と何時の間にかなってしまったのだが、これもまた思い出の一幕だと思って楽しもうと心に決めて、俺は残り2日の日程を過ごすのだった。

今日からは一般客の来場もあるのでより一層クラスの手伝いは忙しくなりそうだった。

そしてこの日ちょっとした事件が起きる、その気配に気付くものはいなかった。

いつものように開店準備を手伝った俺は、今日は午前中が抜け番だったのでかがみ達に店を任せてまだ見回っていない展示物や出し物を見に行く為に教室を後にした。

しばらく1人で見回っていたのだが、俺の後ろから

「あ、先輩。どうしたんですか？こんな所で。1人でいるなんて珍しいですね。」

「他のみんなとはぐれでもしたのかしら？迷子の先輩。」

そう声をかけてくる2人に俺は向き直り

「あー、今は俺の抜け番なんだよ。だから1人だったんだがな。それとやまと、迷子はないんじゃないか？いくらなんでも自分の通う学校でそうそう迷子にはならないよ。」

事情を説明しつつやまとの皮肉に苦笑しながら答える俺だったが、
こうとやまとは俺に

「そういう事だったんですね。先輩、昨日の会えたら一緒にまわろうって約束、早速実行しましょうよ。」
「そうね。丁度いいわよね。こうと2人だけだったし泉先輩達にも会えないから折角の機会だし一緒に行きましょ？」

そう言って来たので俺も頷いて

「ああ、俺が言い出したことでもあったっけな。それじゃまわってみるとするか。」

そう俺が言うと2人は俺を真中に左右に並ぶ配置になり

「それじゃ出発しましょう。」
「ええ、時間までよろしくね？先輩。」
「そうだな、時間も限られてるから早速動くか。」

3人して頷きあいながら早速展示物や出し物、出店等を回って歩き出した。

「あ、先輩。あそこ面白そうですよ？」
「お？あれは腕相撲に挑戦ってやつか？変わった出し物だよな。」
「先輩、挑戦してみるの？」

やまとの言葉に俺は少し考え込んでいたが何だか面白そうだったので

「よし、やってみるか。いくぞ？2人とも。」

そう言い、２人を伴って腕相撲に挑戦すべく俺はそのクラスへと入って行き、受け付けの人に

「あのー。これに挑戦してみたいんですが。」

と告げると、受付の人は「１名様ご案内ー」と言って俺達を奥へと通してくれた。

そこには数人のいかにも力持ちという感じの運動部系の生徒がいてその生徒の側で待機していた子が俺にルールの説明をしてくれたのだった。

「えー、ルールを説明します。腕相撲に挑戦される方は左から順に５人の力自慢の運動部系の生徒と対戦していただき、勝った人数の場所に応じて景品を差し上げます。見事最後まで勝ち残ればあれに見える豪華景品のプレゼントとなりますので頑張ってください。」

そう言って豪華景品の置いてあるほうに腕を向ける生徒の先を見るとそこには３８型液晶テレビが置いてあった。

俺はそれをちらりと見た後審判兼、司会進行役の生徒に

「ちなみにこれまであれに手が届いた人っているのか？」

そう訪ねるとその生徒は不敵な笑みを浮かべて

「ふふふ。残念ながらまだいませんねー。何しろ自慢の精鋭ですからね。せいぜいいけた人でも３人目止まりってとこですからねえ。」

その言葉に密かに闘志を燃やす俺だったが、こうとやまともあの生

徒の物言いにはカチンときたようで

「先輩、5人抜きいっちゃいましょうよ?なんか頭来たし。」

「こう!あんまりたきつけないの!?先輩、無理はしないでよ?」

その2人の言葉に俺は頷いて

「まあ、やれるだけやってみるさ。それじゃ一人目よろしく。」

そう言うと1人めの生徒がテーブルに着き、俺と腕を組み、静かにスタートを待つ。

「それでは一回戦目、レディ!ゴー!!」

という掛け声と同時に力を込める一人目の生徒に俺は涼しい顔でそれを受け止めて、そしておもむろに捻りと力を加えて生徒の手の甲を机に張り付ける。

「それまで!森村君、一人抜き!」

俺の勝利宣言と共に俺に祝福の声をかける2人

「やった。先輩流石に余裕でしたね。」

「まあ、まだ一人目だしね。想定の範囲内よ。」

俺は2人に

「はは、ありがとな2人とも。それじゃ次行って見るか。」

俺のその宣言と同時に2人目の生徒がテーブルに着き、俺と腕を組

んでスタートの合図を待つ。
審判は俺たちの両拳に触れて
「では、2回戦、レディー！ゴー！！」
という合図と同時に今度は俺から動いた。
一気に相手の力が乗る前に手首を捻り相手の手の甲を机に叩きつける。
「それまで！森村君、2人抜き！」
2人目の生徒は手を振りながら元の位置へと戻って行く。
そして司会者の言っていた3人目の所まで来た。
「ここまでは順当に勝ってこられたみたいですが、次は甘くありませんよ？それでは3人目、準備を。」
司会者の声に答えてのそりと3人目がテーブルに着く。
それを見たこうたちは不安の声を上げていた。
「うわ、がっしりしてる腕・・・先輩、大丈夫かな・・・」
「流石にここからは甘くないって事ね？先輩！がんばって！！」
俺はやまとの声援に力強く頷いて答えると3人目の生徒と腕を組み、スタートを待った。

そして今まで誰も抜けていない3回戦が始まる。

「いきますよ？レディー！ゴー！！」

今度は同時に力を込めて相手の力に対抗するが、今度はそう簡単にはびくともしないようだった。

互いに力を振り絞り、膠着が続く。

何時の間にかギャラリーが集まり始め、この勝負の行方を見ていたのだった。

そして俺と相対している3人目が俺に

「ふん、さっさと負けて楽になっちまえよ。お前は中々やるみたいだが、この程度では俺の後を勝ち進む事は到底できないからな。」

そう挑発してきたのだった。

俺はそんな3人目の言葉に不敵に笑うと

「ふうん？ならちょっとだけ本気、出して・・・いきますか・・・ねっと！！」

そう言い終わると同時に俺は隠していた力を少しだけ解放し出すと3人目の腕が徐々に押され始めたのだった。

その様子にざわめくギャラリー達。

慌てた3人目が俺の腕を押し返そうとするが、すでに返すには無理

な位置まで押さえ込まれており、そこに俺の最後の一捻りを加えて勝負がついた。

「うおっ!?ばかな・・・」

それを少しほうけた顔で見ていた司会者が俺の勝利を確認すると

「そ、それまで!森村君、３人抜き!!」

というと同時に湧き上がるギャラリーだったが、そこに俺の知っている声が聞こえていたのを聞き逃さなかった俺は３人に声をかけていたのだった。

「よう、ゆたか、みなみ、ひより。おまえらも桜藤祭に来てたんだな。ちょっと待ってろよ?後２人捻って終わらせるからな。」

俺の声に３人は前の方に来て

「先輩達、お久しぶりです。何だか騒がしい所あるなあと思ってみなみちゃん達と来て見たら先輩がいたんでびっくりしました。途中からですが見てましたよ?先輩、残りの２試合も頑張ってください。」

「・・・お久しぶりです、先輩。私達も応援してますから・・・頑張ってください・・・」

「先輩、しばらくっス。なんだか面白い展開になってますねー。あと２戦、じっくり拝ませてもらうっスよ?」

俺はその３人に

「おう。じっくりと見ていってくれな。それじゃ司会者さん、４人

目、よろしく。」

俺の余裕発言にいらつきを見せる司会者と明らかに俺に敵意を持った４人目だったが、司会者も本来の仕事をしなければと思ったようで

「え、えー。それでは気を取り直しまして、一体誰がこれを予測したでありましょうか！今まで超えられなかった３人目を超える初めての人間が現れました！ですが、ここから先は未知の領域！さて、この先へ進む事ができるのでしょうか！？それでは４人目、スタンバイを！」

闘志を燃やしながら席に着く４人目を見据えながら俺は腕を組み開始を待つ。

緊張感が支配し、静寂に包まれる会場。

そして「それでは始めます。レディー！ゴー！！」

掛け声と同時に力を込めようとするが今度は相手のほうが一瞬早く、俺は一気に劣勢になる。

そんな俺を見ながら余裕の笑みを向けつつ

「３人目を抜くとは見事だったけど、結局はこうなる運命だったな。お前はよくやったよ。このまま楽になっちまいな！！」

さらに力を込めようとする４人目の腕、迫る机。

誰もが俺の負けを確信し、見ていられなくなったものは目をつぶる。

だが、一向にテーブルに拳が叩きつけられる音が出なかった。

目をつぶった者がおそるおそる目を開けたとき、そこには信じられない光景があった。

「どうしたよ？俺を楽にしてくれるんじゃなかったのか？それともこれで限界なのかな？お前の力は」

机に触れる寸前の腕を押し戻し、逆に４人目を追い込んでいる俺の姿がそこにあった。

苦悶の表情を見せる４人目に俺はさらに信じられない事を言ってのける。

「おいおい、頼むぜ？俺はこれでも半分程度の力しか出してないんだ。もう少し楽しませてくれよな？あれだけの口叩いたんだからさ。」

その台詞と状況に唖然となる観客と司会者、そしてそれを厳しい目で見つめる５人目。

その状況に飽きた俺は４人目の腕を机に叩き付けて勝負を決めたのだった。

司会者は信じられない物を見る目でこの勝負を見つめていたが、勝負がついたことに気付くと

「そ、それまで！森村君、４人抜き！！」

そう告げると同時にわっと歓声があがる。

それを見ていたこうたちも体を興奮で振るわせながら

「す、凄い、凄いです。先輩！思わず鳥肌立ちました！」

「何だか信じられない物を見ている気分ね・・・でもここまで来たら最後まで頑張って！！」

「すごいすごい！先輩すごい！かっこいいです！」

「・・・先輩の底力ってどれほどなのか・・・想像つきません・・・」

「ネタだ！これはいいネタだ！！先輩、最後も魅せて下さい！！」

そう声援を送っていたのだった。

興奮覚めやらぬ状況だったがいよいよ最後の５人目の登場となった。

「誰が・・・一体誰が、彼が５人目を引きずり出す事を想定したでしょうか！？私でさえ、それを想像できなかった！！しかし、もはや彼の快進撃もここまででしょう。何故ならこの５人目は我がクラスでも最強の力の持ち主でもあるからです！！その５人目にどこまで食い下がれるか、見せてもらいましょう！！それではどうぞ！！」

司会の紹介でついに出てきた最後の１人。

厳しい目のまま俺の前に座る最後の１人は今までの連中とはまた違ったオーラを発していた。

緊張感の走る最中、２人はその腕を合わせると静かに最後の戦いの開始を待つのだった。

「泣いても笑ってもこれが最後の戦いです！それでは！レディ！ゴ

ー！！」

その合図と同時に一気に勝負を決めにいこうとして力を加える俺の腕を5人目はどっしりと受け止めながら

「ほう？言うだけの事はあるな、なかなかの力だ。だが俺も伊達に重量上げをやってるわけじゃないぞ？そおら！」

そう言いながらその腕に力を込めて俺の腕をたたみに来る5人目の腕力に俺は少し焦りを感じていた。

「っく！さ、流石にきついな・・・重量上げか、確かに半端ない力だぜ・・・けどなっ！！」

とりあえず俺は4人目を倒したときのように半分の力で受け止めていたがさらに3割の力を乗せて押し返す。

押し返されるはずがないと思い、俺を少し侮っていた5人目の表情に焦りが見えたのを俺は見逃さなかった。

「どうした？徐々に押されてるぜ？あんたの力はたいしたもんだけど、俺はまだ余力って奴を残してんだよっ！！」

そう言いながら俺はさらに腕をたたみにかかるがぎりぎりまで来てまたも動きが止まる俺達だった。

「くくく。楽しい事してくれるぜ、けど、これで勝ったと思うなよ！？そおらっ！！」

そう言いながらさらに俺の腕を押し返し始めたが、俺は押し返され

かけた腕にさらに力を込める。

「やるねえ・・・けど、これで終わりにしようぜ!?うおぉっ!!」

俺はついに１００％全開の力を腕に込めたそしてその腕をさらに押し返し徐々に机に近づけていく。

ギャラリーもこの攻防戦に興奮のるつぼとなっていた。

「先輩!いっちゃえー!!」

「もう少しよ!?先輩!!」

「がんばれー!先輩がんばれー!」

「・・・決めてください!・・・先輩!」

「おおお、凄いっス!盛りあがるっス!先輩ファイト!!」

というこう達を筆頭に森村コールが室内に響き渡る。

そしてついにこの戦いに決着がついた。

重苦しい音と共に5人目の手の甲が机に張り付くとその時点で勝負が決まった。

その様子を呆然としながら見ていた司会者だったが、”はっ”と我に帰ると渋々ながら俺の勝利宣告をするのだった。

「そ、それまで・・・森村君脅威の5人抜きです・・・おめでとう・・・」

おそらくこの景品を取られる事なんて予想だにしていなかったのだろう、この出し物のクラスの面々は一様に暗い顔になっていた。

俺の勝利が告げられると同時に湧き上がる歓声、そして祝福の言葉、俺はそれを聞きながら心地よい疲れに身を任せていたのだった。

「やった!勝った!さすが先輩だー。景品の液晶テレビゲットですね!」

「まさか、5人本当に抜くなんてね・・・凄かったわ、先輩。」

「景品ってテレビだったんですか!?凄いです、先輩!」

「・・・素晴らしい勝負でした・・・おめでとうございます、先輩・・・」

「すごくいいネタ、ありがとうございます!それ以上に先輩の凄さって奴を改めて見た気分っスよ。」

「はは。皆、応援ありがとな。」

皆にお礼の言葉を返すとみんなは笑って頷いてくれた。

興奮も覚めやらぬままに俺は優勝商品の授与を受け、景品は家に宅配便で送ってもらう事になり、こう達とともに腕相撲の出し物のクラスを後にした。

「さてと、大分時間がたっちゃったな。そろそろ俺も自分のクラスの出し物に戻らないとな。」

「あ、もうそんな時間なんですか?それじゃ私達もこれから先輩のクラスにお邪魔してもいいですか?」

「そうね。先輩のクラスに遊びに行くつもりだったんだし、ケーキも楽しみだしね。先輩が戻るついでに一緒に行くわ。」

「構わないぞ?なら一緒に行くか。」

「先輩のクラスって何をやってるんですか?」

「うちはケーキと美味しい紅茶が自慢の喫茶店さ。みなみやひよりもよかったら来いよ。」

「・・・私達も・・・行ってもいいんですか・・・？」
「先輩の折角のお誘いですしお邪魔させてもらうっスよ？」
「是非とも遊びに来てくれよ。それじゃ行こう。」

最後にそう言って自分のクラスに向かって歩き出そうとした時、前の曲がり角付近で妙な殺気を感じた俺はそこに行く前に念のため歩みを止めると同時に俺の目の前を何者かが飛びつく格好で曲がり角から飛び出し、そのままの勢いで壁に激突し、「むぎゅ」という情けない声を出してその場に倒れこんでいる人を見ていた。

俺はそれを半ば呆然と見ていたのだが、それが俺の知り合いだとわかると盛大にため息をついて

「・・・まつりさん、何やってるんですか・・・前にも言いましたよね？飛びつくのはやめてくださいって。」

俺がそう言うとまつりさんは激突して打って赤くした鼻をさすりながら

「うう、酷いよ森村君。避けるなんてさ。」

俺はそんなまつりさんに苦笑しながら

「今回の場合避けたと言うよりは事前回避というのが正しいですがね。」

やれやれというジェスチャーをしながら俺はまつりさんにそう言うと

「むうう・・・どうしてわかったのさ・・・」

何だか納得がいかないという風で聞いてくるまつりさんに

「いや、あれだけ殺気出してたらある程度使える人になら察知されますって」

少し呆れつつ説明する俺になおも抗議の目を向けているまつりさんだったが、俺は挨拶をしとこうと思い

「何はともあれ、桜藤祭にようこそ、まつりさん。これから俺たちのクラスに戻りますんでまつりさんもうちのクラスの売上貢献よろしくです。」

そう挨拶するとまつりさんもようやく笑顔になって

「ケーキの店って話よね？かがみからも聞いてるよ？そういう事なら行ってみようかな。」

そう言ってくるまつりさんだったが呆然とこのやり取りを見ていたこう達が俺に

「あ、あの先輩？そちらの人は一体どなたですか？」

「先輩の知り合い、なの？」

「よかったら紹介してください、先輩。」

「・・・どことなく誰かに似ている気がしますね・・・」

「そう言えば何となく・・・どこでかで見たような・・・」

そう言って来たので俺はまつりさんを皆に紹介する事にしたのだった。

「みんな、この人は、柊まつりさん。かがみとつかさのお姉さんだ

よ。かがみの家にはもう1人お姉さんがいて、その人はいのりさんと言うんだ。」

俺の紹介にまつりさんは皆にぺこりと頭を下げて

「柊まつりです。うちのかがみやつかさがお世話になってるみたいね。2人に代わってお礼を言うわ。よろしくね。森村君、この子達、君の事先輩って呼んでたみたいだけど、この子達は君の後輩さんなの？」

そう聞いてくるまつりさんに俺は頷いて

「はい。右から順に八坂こう、永森やまと。その2人は中学時代からの後輩でその横の小早川ゆたか、岩崎みなみ、田村ひよりはうちの学校を受験しようとしている仮の後輩って感じですね。」

「八坂こうです。かがみ先輩やつかさ先輩にもお世話になっています。」

「永森やまとよ？私もお2人には大分お世話になったわ。」

「小早川ゆたかです。先輩達と知り合ったのは海へ行ったときです。」

「・・・岩崎みなみです・・・私もゆたかと同じで知り合ったのは海へ行ったときでした。」

「田村ひよりっス。私はその前に秋葉腹でお会いしていますね。何にしてもよろしくお願いするっス」

そうしてまつりさんとみんなは握手を交わし、連れ立って俺のクラスへと向かった。

クラスに戻ると丁度かがみたちも休憩を終えて戻って来たところで、俺たちと鉢合わせる事となった。

「お帰り、慶一くん・・・って、またずいぶんぞろぞろと引き連れて来たわね・・・」
「お？小早川達もいるじゃん？よく来たなー。うちのクラスでゆっくりしていってくれよな。」
「あら？もう1人はひょっとしてまつりさん？いらっしゃいませ、ゆっくりしていってください。」

かがみの疲れたような顔とお客が増えた事で喜ぶ2人に苦笑しつつ

「まあ、戻る途中で会ったのとクラスの出し物見回ってるときに合流したのと、だけどな。とりあえず俺は先に中に入って準備済ませてくるからかがみ達はお客さんを中に案内してやってくれ。」

そう言って俺は先に店内へと入っていくと、ゆたかたちはかがみ達に

「かがみ先輩お久しぶりです。今日は受験勉強の息抜きも兼ねてみなみちゃん達と遊びに来させてもらってます。」
「・・・お久しぶりです・・・今日は陵桜の文化祭の体験もしたかったので、お邪魔しにきました・・・。」
「先輩方、お久しぶりっス。私も今日の文化祭は見ておきたかったので小早川さん達と遊びにきました。」
「かがみ先輩。昨日の約束どおりお邪魔しにきましたよ。」
「先輩、ケーキセット楽しみだわ。売上貢献もさせてもらうわね。」
「かがみー？美味しいケーキ期待してるわよー？それじゃ早速案内よろしくね。」

そう挨拶してくるみんなを引き連れて店内へと案内するかがみたちだった。

「いらっしゃいませ、６名様ですね？こちらの席へどうぞ。」

かがみはゆたかたちを６人が座れるテーブルへと案内した後自分達も準備をするために控え室へ戻っていき、その入れ替えで準備を終えた俺が注文を取りにテーブルへと向かった。

「改めて、いらっしゃいませ。ご注文をどうぞ？」

ウエイターの格好に着替えた俺がこう達のテーブルへ行きうやうやしく頭を下げながら挨拶すると

「おおー！！先輩似合ってるー！！これは意外でした！！」

「こうってば興奮しすぎ。けど・・・中々いい感じね、そういう格好も意外と合うものね。」

「わあー・・・何だか新鮮ー。ねえ？みなみちゃん。」

「・・・うん。ちょっと驚きました・・・似合ってます、先輩・・・。」

「コスプレキター！！って違う、自重しろ、私ー！！」

「へー。さすが森村君、いいねー。」

それぞれの反応を苦笑しつつ受け止めながら

「こう、とりあえず落ち着け。やまと、ゆたか、みなみありがとな。ひより、視線集めてるぞ？お前・・・まつりさん、なんか照れますね。」

俺の照れ笑いにニヤニヤとした視線を送るこうとひよりにため息をつきつつもみんなの注文を受けて俺はオーダーを届けに向かったのだった。

そしてこう達に注文の品を届けにテーブルのところへ行ったとき、
また新たなお客が教室に入ってきたので、俺は

「いらっしゃいませ、何名様・・・ですか・・・？」

最後の方は俺は上手く言葉にならなかった。

そこに現れた客は、かつての中学時代の同級生の集団だったからだ。

そして今また、俺の過去が再び俺の前に姿を見せたのだった。

思い出を紡ぐ旋律、第６話～桜藤祭２日目、また一つ消える罪、前編～（後書き）

少し長くなりそうだったので前後編に分けます。

腕相撲補足。

５人目の相手はベンチプレスでも１２０キロを上げれる程の腕力の持ち主です。

次回、また一つ乗り越える慶一の過去。

どうぞお楽しみに。

思い出を紡ぐ旋律、第7話～桜藤祭2日目、また一つ消える罪、後編～

文化祭の2日目、俺は午前中の自由時間をこう達と共に回り、腕相撲の出し物で勝負をしてゆたか達と合流した後まつりさんとも合流した俺たちは自由時間もそろそろ終わるという事だったのでみんなを伴って自分のクラスに戻った。

そして俺も午後の手伝いもあるので手早くウエイター姿に着替えると、連れて来た皆の注文を取る為にテーブルへと赴く。

そしてみんなの注文の品をテーブルに届けて次のテーブルへ注文を伺いに行こうとしたとき新たなお客がやってきた事に気付いた。

そして妙に聞き覚えのある声がしたと思ったらそのお客の集団は俺が通っていた中学の3年生の時のクラスメイト達だったのだ。

しかもクラスメイト達は俺の過去にあったあの濡れ衣事件において給食費を盗まれた生徒達だった。

「いらっしゃいませ。何名様・・・ですか・・・？」

俺の声に気付いた生徒達の1人、白川が俺に

「ああ、こっちは6人だけど・・・ってお前・・・ひょっとして森村か？」

そう声をかけるとそれに気付いた残りの生徒達も俺を見て

「あ、森村君？君はこのクラスの人だったんだ・・・」

「・・・なんかあの頃と少し変わったんじゃない？」
「何となく雰囲気違ってる感じだな・・・」
「・・・・・」
「・・・怖くは・・・ないな・・・」

そう口々に言うのを俺は黙って聞いていたのだが、俺の本来の仕事を思い出して

「・・・みんな、久しぶり・・・ともかく、６名様ご案内だ、さあこちらへどうぞ。」

白川以外は何となく恐縮してる感じだったのだが、白川は俺に敵意にも満ちた目を向けていた事に何となく気付いていたのだが、あえて気付かないフリをして６人を空き席へと案内すると

「それでは、ご注文がお決まりになりましたらお呼びください。」

そう言ってメニューを席に置き、俺はその場を後にしようとしたのだが、ふいに白川から声がかかったのだった。

「ふーん・・・結構様になってるんじゃねえか？まあ、泥棒のお前にしてはいい格好だよなあ。そんな風に真面目そうな顔して今度はこの店の売上に手をだそうとしてるんじゃないだろうな？」

その言葉に白川以外の５人の態度が妙におどおどしたような感じになるのが見て取れた。

俺はそんな白川の言葉を受けながらも白川に対して何も返さず、ただその目をまっすぐ見据えるとおずおずと俺にメニューの注文をしてきた５人の希望を聞くとそれを持ってオーダーを出しに向かった。

その際にも白川は俺の後ろで

「けっ、何も言いかえさねえのかよ。つまらねえ・・・」

と呟くのが聞こえたが、俺はそれにも何も答えずに戻って行く。

こうｓｉｄｅ

私達の接客をした後先輩は後から入ってきた客に対応しようとしていたが、入ってきた客達は私ややまともよく知るあの時の事件の当事者達だった。

私もやまとも驚きつつ様子を伺っていたが、ふいに1人の先輩の元クラスメートが先輩に嫌味交じりの言葉を吐いたのを私達は聞いていた。

「ねえ、やまと。あの人達って先輩の元クラスメートだよね?何であの人達がここに現れたんだろう?それに、あの言葉・・・頭にくるね・・・」

「あの人達には聞き込みもしたからよく覚えているわ。とはいえ、さっきの先輩を馬鹿にした言葉は許せないわね・・・」

私とやまとが2人してこそこそと話をしていると、事情を知りたがっているゆたかちゃん達が私達に聞いてきた。

「八坂先輩、永森先輩、先輩達はあの人達の事知ってるんですか?」

「・・・慶一先輩の態度やあの人達の態度を見ると・・・先輩達が知り合い同士みたいだという事はわかるのですが・・・。」

「慶一先輩も少し話ずらそうにしてた感じっスね・・・ちょっと気

になるっス・・・」
「それはいいけどさー、何?あの態度、森村君あの子達と何かあったの?」

その言葉に私はゆたかちゃん達にはあの時の過去の話に関する人だと言う事を教えて、まつりさんには先輩の中学時代に起きた事件の事を話した。

「そうだったんですか・・・あの人達がその時の・・・でも、慶一先輩に対する疑惑は晴れたはずでずよね?」

ゆたかちゃんの言葉に私も頷きながら

「そうだね。あれ以降は先輩もその件に関しては終わった事だけど、結局あの後先輩は一方的に疑われた事に対する謝罪もされてはいないって聞いてるんだよね。」

そしてやまとも不機嫌そうにあの頃の事を思い出しつつ

「あの時の私もその事には結構腹立てたものだけどね・・・」

私達の言葉にみなみちゃんも首を傾げながら

「・・・なら、何故・・・今頃先輩の前にあらわれたんでしょうか・・・?」

みなみちゃんの問いに私も考え込みつつ

「うーん・・・他に同じ中学、同じクラスからここに来た生徒もいてその生徒と友達だからその生徒から招待を受けて遊びに来て、そ

してたまたまこの店にやってきた・・・とも考えられるけど・・・」

私の意見を聞きながらやまとは

「その線が強いとは思うけど・・・でも、そうだとして先輩に絡んだあの人以外の5人の態度が気になるわ・・・。」

そう私に言うとひよりんも自分の意見を口に出した。

「そうっスよね？もし先輩にちょっかいかけに来たんだとしたら他の5人も同じような態度であってもおかしくはないっスよね？でも、なんか他の5人は妙な後ろめたさのような物を感じます。」

私もひよりんの意見に頷きつつ

「確かに・・・とにかく今はもう少し様子を見よう。何にしても情報も少なすぎるしね・・・」

と言う私の言葉にみんなも頷いてとりあえずは事の成り行きを見守る私達だった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんが八坂さん達を接客し、八坂さん達のテーブルに注文の品を運んだ後入ってきたお客に慶一くんは驚いているようだった。

二言三言、言葉を交わし、慶一くんがそのお客達を席につかせてメニューを渡し、注文を取ってる時にも何かを言われてるようだったのが見て取れた。

何となく浮かない表情をしながら慶一くんがこっちへ戻ってきたので私は事情を聞いてみようと声をかけた。

「ねえ、慶一くん。今来たお客って慶一くんの知ってる人なの？何やら話し掛けられていたみたいよね？」

私がそう訪ねると慶一くんはなんとも複雑な表情で

「ああ、彼らは俺の出身中学のクラスメートさ、それも前に過去の話をした時の給食費を盗まれた連中だよ。」

慶一くんの答えに私もあの時の話を思い出しながら慶一くんが案内したテーブルの方をちらりと見ると

「あの人達がそうだったんだ・・・でも、どうして今頃現れたのかしらね？」

私が首を捻りつつそう呟くと

「まあ、この学校に来た同じ中学の出身者は俺だけじゃないしな。大方俺意外のクラスメートに会いに来てそのついでに色々まわってたまたま辿り着いたんじゃないかな？」

そう言う慶一くんの表情はあまりすっきりとしたものではなかったのが少しだけ気になったが私は慶一くんの受けてきたオーダーを準備して慶一くんに手渡すと

「はい、これ、注文の品上がったわよ？それじゃよろしく。」

そう言って慶一くんを送り出すと私は向こうを気にしつつ次のオー

ダーの準備に取り掛かったのだった。

そして慶一くんが彼らのテーブルにオーダーを運んでいった時、そこにこなた達もやってきたのだった。

こなたｓｉｄｅ

こちらの営業も一段落したので私はライバル店であることは分かっているのだけど、ついここのケーキが美味しいのでまた食べに来たくなり、みゆきさん達を伴ってやってきたのだった。

なんだかんだで結局慶一君達も来てくれているのだからお互い様だよね、そう自分を無理やり納得させて今日もケーキに舌鼓を打つつもりだった。

そして店内に入ると丁度慶一君が６人のお客が座っているテーブルにオーダーを運んできたところだった。

「いらっしゃいませ、何名様でしょうか？」

私達に気付いた店員の１人が声をかけて来たので私は

「３人です。席ありますか？」

そう伝えると店員はにっこりと笑って

「では、こちらへどうぞ」

そう言って私達を丁度慶一君が応対してる客の近くの席に案内してくれた。

私達は席についてメニューを見ながら何を頼むか悩んでいたのだが、ふいに慶一君の応対してる客から声が聞こえてきたのだった。

「お待たせしました。これでご注文の品は全部ですね？ごゆっくりおくつろぎ下さい。」

そう言って次の応対に向かおうとする慶一君をそのテーブルについてる1人が

「待てよ、森村。お前あの時俺らにかけた迷惑の詫びにしてはサービス悪いんじゃねえか？」

その言葉に慶一君は

「あの時の事は悪いとは思ってるよ、けど、平等に接してる以上はお前らだけを特別扱いする訳にはいかないんだ。悪いけどな。」

そうやんわりと伝えるのだが、そいつはさらに

「はあ！？なんだそりゃ？お前の俺たちに対する詫びの気持ってのはその程度の物なんかよ？散々俺たちに嫌な思いさせておきながら誠意を見せれない？お前は所詮その程度の人間なんだな？」

彼に絡まれている慶一君は困ったような表情を浮かべて彼の対応に追われていたが、彼の発した言葉は周りの空気を嫌な物に変えつつあった。

そして私達はお互いに顔を見合わせながら

「何？あのお客、慶一君に執拗に絡んでるけどさ・・・何だか見てて気分悪いね。」
「けいちゃん、困ってるね・・・なんであんなひどい事言うのかな・・・」
「話を聞いている限りでは彼らは慶一さんの事を知っているみたいですね・・・」

そう言いながらも何だか腹立たしく思いながら私達はさらに聞き耳を立てていたが彼はさらに

「へっ、お前じゃ話にならねえよ。ここの責任者呼べ。こんな盗人野郎は店員から外しとけって言ってやるからよ。」

その言葉に私達は思わず大きな声を上げていた。

「ちょっと待ってよ！慶一君が盗人ってどういう事さ！いくらなんでもその言葉だけは聞き逃せないよ！？」
「そうだよ！けいちゃんはそんな事する人じゃない！あやまって！？けいちゃんにあやまってよ！！」
「どのような理由で慶一さんをそのように言うのかは知りませんが、その言葉だけは許せません！」

そう怒鳴りつけると彼らの話に夢中になっていて気付かなかったのだが、そこにいたゆーちゃん達までもが大声を出していたのだった。

「あの時の一件は先輩のまったくの濡れ衣だったはずだよ！？あんたらもその事知っているはずじゃない！何で今だにそんな事言うのさ！！」
「むしろ疑いが晴れた後も先輩に嫌がらせのように接していた事を謝るべきはあなた達じゃないの！？」

「本当の先輩の姿も知らないで勝手な事ばかり言わないで!?先輩が可愛そうだよ・・・」
「・・・むしろ、先輩の真実の姿ももみようともしなかったあなた方には・・・先輩をどうこう言う理由もないと思います!」
「噂だけで人を判断するあなた達のような人間こそもう少し自分を見たほうがいいんじゃないっスかね?」
「森村君はいい子だよ!あんたら勝手な事ばっかり言ってると私が許さないから!」

そして何となく様子を伺いに来ていたかがみたちまでもがこの言動には腹を立てたようで

「いつまでも昔の事をぐちぐちと!もう終わった事にいつまで執着してるつもりよ、あんたら!!」
「あいつは確かに昔暴れたかもしんねー!けどな、今のあいつはその事をちゃんと受け止めてんだ!それを認識した上でお前らに迷惑かけないように自分から色々やってきてたんだぞ!?」
「慶ちゃんは信頼できる人、私達のお友達であり仲間よ!?そして慶ちゃんは私達に嘘偽りのない姿を見せてくれてきた!その人をののしるなんて許せないわ!?」

その全員の剣幕に慶一君もそして慶一君に絡んだ彼も呆然と私達の方を見ていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

白川と何度かのやり取りをしていた時、白川の俺に対する侮辱の言葉を聞いて何時の間にか来ていたこなた達やこう達、様子を見に来ていたかがみ達までもが白川の言葉に腹を立てて思わず大声で抗議をしたのを俺は驚きながら見ていたのだが俺よりも少し先に我に帰

った白川が

「な、なんだよ、こいつら・・・森村、お前こいつらの知り合いなのかよ?」

その言葉に俺は大きく頷いて

「ああ、そうさ。俺の大事な友達で、そして愛すべき仲間達ってやつだ。それとな、お前の言ってた責任者はそこにいるツインテールの子だよ。俺が気に入らないって言うのならその子に言えばいい。俺はその決定にただ従うだけからな・・・。」

俺がそう言うと白川は気を取り直して

「・・・ふん・・・そうかよ・・・ならそこの責任者さんよ。あんたが話を聞いていた通りだ。こいつを追い出して別の奴に俺たちの接客やってもらえないか?」

その白川の言葉にかがみはキッと相手を睨みつけながら

「・・・残念だけど、あんたの要求は聞けないわ。彼はうちのクラスでの大事な戦力なんだからね?それが気に入らないと言うのならあんたがここを出て行けば?」

そう伝えると白川は気色ばんで

「何だと?こっちは客だぞ!?その客に対して気に入らないなら出てけとかそれが責任者としての台詞なのかよ!!」

その言葉にさらに強い決意でかがみは

「私の仲間を友達を侮辱するような輩に、お客としていて欲しいなんて思えないわ！むしろそういう人こそ私が客として認めない！！」

そして2人のにらみ合いが起きたのだが、そんな様子を伺っていた白川の連れの5人が

「・・・もういいよ。白川、私達の負けよ。」

「そうね。それに、私達の本来の目的はこうじゃなかったでしょ？」

「そうだよ。俺達がここに来たのは彼とケンカする事じゃない。」

「だから、もう引け、白川。」

「そうそう。そして改めて本当の目的を果たしましょ。」

そう声をかけるとかがみとにらみ合っていた白川が急に態度を変えたのだった。

「・・・ちっ、しゃーないな。すまん責任者さん、騒がせたな。」

その突然の態度の変化に俺はもちろん、周りのみんなも戸惑っているようだった。

そして俺がおそるおそる、その理由について訪ねてみると

「なあ、どういう事なんだ?俺とケンカすることじゃない、本来の目的はそうじゃないってのはさ。」

そう訪ねると5人が俺に

「うん、実はね。この学校に遊びに来たのはうちのクラスから仲のいい友達がここに通っていると言うのもあったんだけどさ。それと

共に私達はね・・・・・君に謝りに来たの。」
「あの時の給食費盗難事件で君は無実の罪を着せられて警察に捕まった。けど真実を知った後も俺たちは君の噂を知っていたのもあったから怖いってのもあって君に謝る事も出来ずに卒業まで過ごしてしまった。」
「ずっと、気に病んでいたんだ。君を傷つけたかもしれない事を・・・」
「でも、あの後君に何度か係わる事があったけどそのたびに君は何も言わず私達を助けてくれたりした事もあったよね？」
「それが嬉しかったっていうのもあるけど・・・それ以上に散々疑いをかけた僕らに何も言ってこない君がどんな気持でいるのだろうという事がずっと気になってたんだ。」

そしてその後に白川が何となく言いにくそうに

「だから、俺達はみんなで話し合って、この桜藤祭でお前に会って一言謝ろうと思ってな。お前のクラスを探してうろついてたらここに辿り着いた。そしてお前を見つけた俺は、あの時お前に散々ひどい事をした事に対する怒りの気持をあの頃から溜め込んでいた気持をぶつけて欲しいと思ったからあえてお前を挑発したりする行為をしたんだ。けど、お前はあの時同様何も言わなかった・・・どうしてだ？なんであの時もそうだったけど何も言わないんだよ。」

俺はみんなの気持を聞いて少し考えた後

「みんな、ありがとう。俺に対してそう思ってくれる気持はありがたい。けど、俺があの時も今回もみんなに対して、そして今日の白川に対しても何も言わなかったのは、それが俺の、弱い自分が作り出した罪だからさ。自分の境遇を恨み、ぶつけどころのない気持を暴力に転化し、俺は親友を傷つけた、そしてみんなの心にも恐怖を

与えた。だからこそ、俺はみんなにそんな目で見られようとも、なんと言われようとも、それが己の罪に対する罰だと思い、あえてその事の全てを受け入れてきた。いつか俺が全ての罪を許される時まで、俺が背負うべき物だったからな。そんな俺だから、お前らには何も言わなかったし、言えなかった。」

その俺の言葉を黙って聞いていた6人は

「そっか・・・君は凄い人だね・・・けど、私は君の罪を許してあげる。だから私達の罪も、許して欲しい。」

「君を散々に言ってきた事、本当にすまない。この通りだ。」

「ごめんね、そしてありがとう。ひどい事を言った私だけどそれでも私に手を貸してくれたこと嬉しかった。」

「すまん・・・君の背負ってる物の重さを今回ようやく認識できた。でもそれにも負けない君がうらやましいとさえ思えるよ。」

「ごめんね。傷つけるような事言ってごめんなさい。」

「・・・悪かった。心から詫びるよ。もっと早くお前の事を知っていればいい仲間になれてた気がするぜ。お前を庇ったあの子らを見てれば分かるよ。だからもうあの事は気にするなよ？」

俺はそんなみんなの謝罪を受けて心に暖かい物を感じながら

「みんな、ありがとう。俺を許してくれて。そして、みんなもどうか気にしないでくれ。俺はもう気にしていないからさ、そして楽しんでいってくれ。俺が初めて出来た仲間たちと創る桜藤祭を、うちの出し物をさ。」

俺がそう言うと6人はようやく緊張を解き笑ってくれたのだった。

そして白川が5人の方を向いて

「よーし、お前ら。今からこの店の売り上げに貢献するぞ？じゃんじゃん注文するんだ、いいなー？」

「「「「「おー！！」」」」」

そして俺の方に向き直ると

「というわけだ。ウエイターさん、注文頼んだぜ？」

親指をびしっと立てて俺に言ってくる白川に俺も笑顔で頷きかえして

「よーし、かがみ、みさお。注文とってくれ。あやの、ケーキの方任せたぞ。こなた達もこう達も楽しんでいってくれ。それじゃ営業再開だ。他のお客さん方、お騒がせして申し訳ありませんでした。引き続き当店をお楽しみください。」

そう言って注文を取ってオーダーを渡しに向かう俺だった。

「ふふ。よかったね、慶一くん。」

オーダーを渡してる時にかがみが俺にそう声をかけてくれたので

「ああ。また一つ心が軽くなった気分さ。それとありがとな、かがみ。俺を庇ってくれてさ」

そうお礼を伝えるとかがみは顔を赤くして

「べ、別に、あんたのためじゃないわよ！あんたがいなくなったら他の人達の負担が増えるからやっただけなんだから！か、勘違いしないでよね・・・」

最後の方は小声になっていたのを俺は苦笑しながら見ていた。

「また一つ終わったな、慶一。」

「よかったね、慶ちゃん。」

その後ろから声をかけてくるみさおとあやのに俺は笑顔で頷いて

「ありがとう。みんなのおかげさ。」

そう伝えると2人は照れた顔で

「へへ。照れるぜ」

「なんとなく気恥ずかしいわ。」

そう言いながらも笑っているのを俺も穏やかな笑顔を向けて見ていたのだった。

こうｓｉｄｅ

あの人達の先輩への物言いに腹をたてて思わず怒鳴り込んだ私達だったが、真実を聞かされると一つ先輩の罪が消えたのだと思い、私とやまとは気付いたら涙を流してあの時の思いが報われた事を悟った。

そしてゆたかちゃんたちも皆一様にほっとした表情を浮かべながら

「そういう・・・事だったんだね・・・なんだ・・・先輩の無償の優しさはあの人達にも届いてたんだじゃない・・・何だか、嬉しいなあ・・・」

「そうね・・・ようやくあの事が報われた気分よ・・・凄く嬉しい・・・」
「よかったですね、八坂先輩、永森先輩。そして慶一先輩も・・・」
「・・・先輩のまっすぐな気持は・・・あの人達の心に届いたんだね・・・よかった・・・」
「何だかまた一つ先輩の事を知れた気分ですね。うーんこれもネタにすべきかな？」
「ひよりん？自重しなよ？」
「わ、わかりましたっスからそんな怖い顔で睨まないで下さいよ・・・」
「青春だねー・・・でも森村君、よかったね・・・」

そう口々に言いながら私達はケーキセットをもう一つ追加注文して楽しんでいたのだった。

こなたｓｉｄｅ

彼らの真実を知って私達は少しだけほっとした気分だった。

それと同時に、これからもどんどん慶一君の罪がなくなっていけばいいなと思いながら私達は

「よかったね。慶一君嬉しそうだったし。私もちょっと嬉しいかな？」
「けいちゃんの努力が報われた瞬間を見たんだね。何だかすごくいい場面に立ち会えた気がするよ～。」
「彼らもまた、慶一さんに対する罪悪感を持っていたんですね・・・でもお互いに許しあえたのなら、それは素晴らしい事なんだと思いますね。」
「うん。そうだね。それじゃ私達も彼らに謝って、そしてうちの店

の売上にも貢献してもらっちゃおうか。」
「こ、こなちゃん、それはちゃっかりしすぎてると思うよ・・・？」
「商魂たくましいですね・・・泉さん。ともあれ私達のお店に戻りましょうか。」
「その前に、このケーキセットを食べてからねー」

最後にそういう私につかさとみゆきさんも苦笑を浮かべつつも同じようにケーキセットを食べていたのだった。

俺が犯してきた罪、それは俺の愚かさから招いた物だったが、みんなと出会い、その一つ一つを確実に消していけてると思う。

そして今日もまた、俺の犯した罪が一つ消えることとととなった。

俺はそれを感じながら、これからもまだ残る俺の罪を受け止めながらもそれをみんなと共に乗り越えていこうと改めて思うのだった。

思い出を紡ぐ旋律、第7話～桜藤祭2日目、また一つ消える罪、後編～（後書き）

そして最終日、売上勝負の行方は？こうご期待！！

思い出を紡ぐ旋律、最終話～文化祭最終日～

文化祭の2日目、俺にとって新たに罪を消すための機会があった。

それはあの中学3年生の頃に起きた給食費盗難事件の被害者の生徒達があの日に俺に詫びれなかった事を悔やみ、そして改めてその事を詫びる為に来てくれたのだった。

そして、彼らと和解した俺はまた一つ自分の中の罪が消えていった事を実感していたのだった。

そして迎えた高校2年での桜藤祭最終日、何時の間にか始まっていた売上勝負の決着をつける事となったのだった。

最終日の俺の抜け番は午後からだったので、午前中は接客にいそしむ事となったのだった。

「いらっしゃいませ、何名様でしょうか。」

「ご注文を承ります。」

「お待たせしました、ご注文の品、以上でよろしかったでしょうか。」

「ありがとうございました、引き続き桜藤祭をお楽しみ下さい。」

矢継ぎ早に案内、注文受け付け、品物のお届けと業務をこなしていく。

そして売上勝負の最中だというのに今日もまた俺達のクラスに顔を出してこなた達はケーキを食べて行った。

「売上勝負とか言っといて勝つ気あるのか？あいつは・・・」

来てくれた事を喜びつつもこなたの行動にため息をつきつつそう呟く俺だった。

そして程なくして俺の抜け番が来たので丁度交代の為に戻ってきたかがみ達に

「おかえり、かがみ、みさお、あやの。そろそろ俺の抜け番だから俺が戻るまでは頼むよ。」

そう伝えるとかがみ達も頷きながら

「わかったわ。行ってらっしゃい慶一くん。後でまたよろしくね。」
「楽しんで来いよ？慶一ー。」
「こっちは任せてね。それじゃ息抜き行ってらっしゃい。

そう言ってくれる3人に俺は手を振って学校の制服に着替え直したあと店を出た。

今日はぶらぶらと1人で回りつつ、とりあえずアニ研に顔を出してみようと思い、俺は部室の方へ歩いていく。

そしてアニ研部室の側に来た時曲がり角から飛び出してきた女の子と衝突したのだった。

「いたた・・・あ、あの、大丈夫ですか？」

お互いに尻餅をついたため、女の子も自分のお尻をさすりながら申し訳なさそうに俺にそう聞いてきた。

俺は取り立てて問題なかったので

「ああ、俺は大丈夫だよ。君こそ平気か？」

相手の子にそう訪ねるとその子は苦笑しつつ

「はい、ちょっとお尻打っちゃいましたけど、大丈夫です。それでは急いでますのでこれで。」

何やら急いでいたようでその子は慌てて立ち上がると俺にぺこりと頭を下げるとそのままその場を走り去ってしまった。

俺は（気をつけないとだめだな）と心の中で思いつつ、その場を後にしようとしたのだが、ふと女の子のいた場所に何かが落ちているのを見つけると、俺は落し物を拾い上げたのだった。

それは学生証のようだった。

一応それを確認してみると、”若瀬いずみ”と名前が書かれていた。

俺は心の中で（あー・・・こりゃあの子、慌てるだろうなあ・・・けど、走り去ってしまった後だし、この人数の中を捜すのは容易じゃないし・・・困ったなあ・・・）

そう考えつつももう一度出会える事を祈りながらとりあえずその場を後にしたのだった。

そしてアニ研前まで来た時、今度は何やら言い合いをしている姉妹らしき人達を見かけた。

「ちょっと！おねえちゃん、約束が違うじゃない！ここに来て色々食べようっておねえちゃんが言ったんだよ！？なのに、どうしてその分のお金が同人誌に化けるのよ！！」
「だってぇ～・・・まさかこんな所で見つけられると思わなかったんですもの～見つけた以上は買うのが使命というものよぅ～？」
「いっつもいっつもおねえちゃんはそうやって私達の食費までそういうものにつぎ込んじゃうんでしょ！？どうするの？また塩粥なんていやだよ！！」
「心配ないわよぅ。またバイト増やすから～。ね？ひかげちゃん。」
「そういう問題じゃないわよ！もう知らない、勝手にすればいいのよ！！」

小さい方の子がそうお姉さんらしき人に気持を叩きつけるとそのままどこかへ走り去っていった。

その子の後姿を見送ったお姉さんらしき人は頬に手を当てて困ったような顔をしてその場に立ち尽くしていたのだが、俺はなんとなく見てしまった以上は無視する事も出来なかったのでおそるおそるお姉さんらしき人に声をかけてみた。

「あ、あのー・・・いいんですか？妹さんらしい人、どこかへ行ってしまったみたいですが・・・」

俺の言葉に気付いたお姉さんらしき人は俺の方を向いてにっこりと笑うと

「いいのよ。この学園内にいるのなら探す事は出来るから。騒がせてごめんね～？」

俺にそう言いつつ、その場から立ち去ろうとしたお姉さんらしき人に俺は

「あの、もし俺の自由時間範囲内でその子を見つけられたら校門前に行くように伝えましょうか？そこで待ち合わせするのが良いのではないかと思うので。」

そう言うとその人は俺に

「そう？ならお願いできるかしら～。あの子の名前は宮河ひかげっていうのよ。そして私は宮河ひなた。もしあの子を見つけたら私が校門で待ってると言っていたって伝えておいてくれる～？」

俺はそのひなたさんの言葉に頷いて

「わかりました。伝えておきます。それじゃ俺はこれで。」

ひなたさんにそう言うと俺はその場を立ち去り当初の目的だったアニ研部室へと足を運ぶ。

アニ研の部室に入り、俺はこう達に挨拶をするのだった。

「こう、やまと。また遊びにきたぞ？ここも結構盛況だな。」

俺の声に気付いた2人は

「あ、先輩。今は抜け番なんですか？」

「今日は先輩1人なの？珍しいわね、他の人と抜け番が被らないのも。」

そう挨拶を返してきたので俺は頷きながら

「うん、何故か今日は誰とも被らなかったんだよな。まあ、そういう事もあるって事で。」

俺の言葉に納得しつつ、さっきの姉妹の騒ぐ声が聞こえていたのだろう、こうは俺に

「先輩。先程部室前で騒いでいる姉妹っぽい人いませんでしたか？」

こうの言葉に頷きながら

「ああ、姉妹ゲンカだったようだ。この大人数が集まる最中に妹は姉を置いてどこかへ走り去ったみたいでな。ぶらつきがてらその子を見かけるようだったら言伝をするつもりなんだがな。」

その言葉にやまとは

「また何やら引き受けたのね？先輩もほんと人が良すぎるわよ・・・いつか誰かに利用されたりしても知らないわよ？」

その言葉に俺は苦笑しつつ

「ははは、大丈夫さ。そのくらいの判断はつくよ。俺だって誰彼ってわけじゃないからな。」

俺の答えにこうとやまとは苦笑を俺に向けていたのだが、ふいに後ろから声をかけられた俺は驚いてその声の方に向き直った。

「森村、ご苦労様だな。お前の店のケーキ食べさせてもらった。中

々美味かったぞ？」

その声の主に俺は笑顔を向けつつ

「はは、喜んでもらえたならよかったですよ、桜庭先生。とはいえ先生は俺のクラスの担任なんだし、こっちももう少し見てもらいたかったですけどね。」

軽く皮肉を混ぜて返すと

「まあ、こっちの方が忙しかったからな。それに向こうはお前や柊がいるんだから問題なかろう？」

しれっとそう返してくる先生に俺は苦笑しながら

「信頼してくれるのは嬉しいですが、最後くらいは様子見にきてやってくださいよ？」

そう言うと桜庭先生は手をパタパタと振って

「分かった分かった。後で顔出してやるからもうその話はおしまいだ。ともかく、楽しむ為に来たのだろう？ゆっくりしてけ。」

そうしてやり取りを終えた終えた俺はその言葉に頷いてしばらくの間アニ研でたむろっていたのだった。

そして頃合の時間で俺は部室を後にしたのだが、その入り口付近で何かを探しながら歩いているっぽい、先程俺とぶつかった女の子がいた。

いずみｓｉｄｅ

アニ研の部室から立ち去り、急いでお兄ちゃんと合流するつもりで走っていた時、私は曲がり角から現れたこの学校の男子生徒とぶつかってしまった。

その時に私はここに入場する為に必要だった学生証をうっかり落としてしまい、ここまで探しに戻って来ていた。

「うーん・・・ないわねえ・・・どこで落としちゃったのかな・・・」

そう呟きながらアニ研部室側まで来た私は部室から出てきた男子生徒を見て驚いたのだった。

（あれ？あの人はさっきの・・・そうだ！？あの人が何か知らないか聞いてみよう！）

そう心の中で考えた後、私はその男子生徒に声をかけたのだった。

「あの、先程はすいません。ちょっとお聞きしたい事があるのですが・・・」

そう声をかけると男子生徒は私の声に反応してくれた。

慶一ｓｉｄｅ

先程部室前で会ったあの子が何かを探しているような感じでここまでやってきて、俺に気付いたあの子は

「あの、先程はすいません。ちょっとお聞きしたい事があるのですが・・・」

そう声をかけてきたので俺は

「聞きたい事？何かな？」

そう答えるとその子はばつが悪そうな顔で

「先程私とぶつかった時に私、何か落とさなかったでしょうか？実はあの時に大事な物をなくしてしまったらしくて、ここまで探しに戻ってきたんです。」

そう聞いてくるその子に俺は懐から先程拾った生徒手帳を取り出して

「もしかして、これの事かな？」

生徒手帳をその子に見せると途端に喜びの表情になって

「そうです！これです！ありがとうございました。本当に助かります。」

そう言って笑顔で俺に礼を言って来たので俺は謙遜しながら

「いやいや。すぐに気付いたから拾っといたんだけどさ、よかったね、見つかって。」

生徒手帳を返しながらそう言うとその子も再び頭を下げながら

「はい。お手数をおかけしてすいませんでした。あの、もしよろし

ければお名前を教えていただけませんか?今はすぐに帰らなければなりませんのでちゃんとしたお礼ができませんが、私はここを来年受験する予定ですので私が入学した折にお会いできたならお礼をしたいですから。」

その言葉に俺は

「いや、俺は別にたいしたことをしたわけじゃないから恐縮しちゃうな。俺は森村慶一、この学校の2年生さ。ここを受験するって事は君は俺の後輩になるかもしれないって事か。」

お礼に対して謙遜しつつも名前を教えるとその子も俺に

「森村先輩、ですね?私は若瀬いずみといいます。お名前、覚えさせてもらいますね。それでは私は急ぎますから今日の所はこれで、本当にありがとうございました。」

そう答えつつも急いでいるようだったので自分の名前を告げてその場から立ち去るのを俺は見送りながら

「今度は落とさないように気をつけるんだよー!?」

そう声をかけた後、その場を後にした俺だった。

そして、食べ物屋周辺を歩いている時、先程ひなたさんと言い合いをしていた妹のひかげちゃんの姿を食べ物屋の前で店の中をうらやましそうに見つめている姿を見つけた俺はさっきのひなたさんの伝言を伝えるべくひかげちゃんの側へと行く俺だった。

そしてひかげちゃんを脅かさないようにしながらそっと声をかける。

「こんにちは。君は宮河ひかげちゃんだよね？俺はこの学校の生徒で2年生の森村慶一というんだ。」

俺の声に気付いたひかげちゃんは俺のほうに顔を向けると不機嫌そうな表情になって

「何よ、あんた！何で私の名前知ってるのよ？それに、私はあんたなんか知らないわよ！」

その言葉に苦笑しながらも俺は

「そりゃまあ、今初めてこうして話をしたわけだから無理はないけどね、とりあえず君のお姉さん、宮河ひなたさんから伝言を預かってきてるからそれを伝えておこうと思ってね。」

俺の口から出たひなたさんの名前に訝しげな表情を俺に向けて

「おねえちゃんから？あんたおねえちゃんの事知ってるの？」

そう聞いてきたので俺は先程のひなたさんとのやり取りを簡単に説明するとまだ完全ではないにしろ納得はしたようで

「そっか・・・わざわざありがとう。私に教えに来てくれて。」

一応俺に礼を言ってくるひかげちゃんに俺は

「とりあえずケンカをほおって置けなかったからね、おせっかいかとおもったけど伝えさせてもらったよ。それと、ひかげちゃん。お姉さんの所戻る前に俺のクラスのおいで。ケーキを食べさせてあげ

るからさ。それを食べた後ひなたさんの所へ行けばいいさ。」

俺のケーキという言葉にひかげちゃんの表情がぱあっと明るくなるのが見て取れた。

「ほんと!?ケーキ、食べさせてもらえるの!?あ・・・でも私・・・お金ないよ?」

途端に暗くなるひかげちゃんに俺は

「それは心配しなくていいよ。ケーキは俺のおごりだ。だから食べたいだけ食べるといいよ。」

そう言うと暗くなっていたひかげちゃんの表情が再び明るくなり

「ほんとに!?ありがとう、おにいちゃん。でもどうして私にケーキご馳走してくれるの?」

そう訪ねてくるひかげちゃんに俺は心の中で

(塩粥生活とか言う話聞いたら気の毒すぎたからとか言えないよなあ・・・)

そう考えながら俺は

「おなか空かせてるんじゃないかなって思ったからね。とりあえずおいで?」

適当に誤魔化しながら俺はひかげちゃんについてくるように促すとひかげちゃんは俺の態度に訝しげな視線を向けつつも喜々として俺

の後についてきたのだった。

ひかげちゃんを連れて自分のクラスに戻る途中に俺に声をかけてきた人がいた。

「森村君、こんにちは。君のクラスにいくつもりだったんだけど迷っちゃってね。よければ一緒に連れてってくれないかな？」

その声に振り向き俺は挨拶をした。

「こんにちは、いのりさん。まさか来てるとは思いませんでしたよ。丁度俺も自分のクラスに戻る所だったので一緒に行くとしましょうか。」

そう答えるといのりさんはにっこりと笑って

「ありがとう。ところで、一緒にいるその子は誰？まさか森村君にそんな趣味があるわけじゃないわよね？」

俺の側にいるひかげちゃんに気付いたいのりさんが俺にそう質問を投げかけてきたので俺は素直に答えた。

「実はですね・・・・・というわけでして、うちのクラスの店でケーキをご馳走しようと思い連れて来た訳ですよ。それに、ちょっといいですか？お耳を拝借。」

そう言うといのりさんも俺に耳を向けてきたのでもう一つの理由をこっそりと説明するといのりさんはひかげちゃんを見て同情の眼差しを向けると

「・・・なるほどね・・・ねえ、ひかげちゃん。ケーキは私がご馳走してあげるわ。だから一緒に行きましょ？」

いのりさんがひかげちゃんにそう声をかけるとひかげちゃんは驚いた顔をしていたがおずおずと

「いいの？いのりおねえちゃん。」

いのりさんにそう訪ねるといのりさんも笑顔で

「もちろん！おなか一杯食べなさいね？」

そう言うとひかげちゃんは満面の笑みを浮かべて

「ありがとう、いのりおねえちゃん。」

そう言っていのりさんと手をつないで一緒に俺たちのクラスへと戻っていったのだった。

やがて俺達のクラスに辿り着くと俺は2人に

「ちょっと待っててくださいね。先に中へ入ります。」

そう言って俺は中に入っていき、かがみの所へ行って

「かがみ、ちょっと頼みがあるんだが。」

そうかがみに言うと俺の声に気付いたかがみは俺の方を見て

「あら、慶一くん、交代まではまだ時間あるわよね？どうしたの？

それに頼みって？」

首を傾げつつそう聞いてくるかがみに俺は

「うん、実はな・・・・・と言う訳でな。２人を頼みたいんだが、いいかな？」

事情を説明するとかがみは複雑そうな表情で

「姉さんと、その子ね・・・？わかったわ。面倒みとくから心配しないで。」

了承してくれたかがみに俺は

「すまないな。もう少ししたら戻ってくるからひかげちゃんには改めてお姉さんからの伝言を帰る際に伝えておいてくれ。それじゃ俺は一端出るから、また後でな。」

そう伝え、かがみが頷いてくれたのを確認して俺は再び教室を後にする。

その際に２人には事情を説明して俺はこなたのクラスへと向かったのだった。

が、そこで何やら怪しい人影を見つけたので俺はその人影をよーく観察してみると、カメラを隠し持っているそうじろうさんがそこにいたのだった。

俺は軽いため息をつきつつもそうじろうさんに声をかけた。

「こんにちは、そうじろうさん。何してるんですか?こんな所で」

俺の言葉に驚きながらそうじろうさんが

「う、うわっ!お、驚いた。なんだ、森村君じゃないか。しばらくだね。いやあ、実は娘が文化祭の出し物でコスプレ喫茶をやっていると聞いてね。これは是非その姿をカメラに収めねばと思ってねえ。」

何となく予想してた答えだったが流石に予想通りすぎる答えに軽いため息をつきつつも

「事情はわかりましたが、確か撮影は禁止だったはずですよ?残念ですが・・・」

その事をそうじろうさんに伝えるとショックだったのか何やら落ち込むそうじろうさんだったが気を取り直すと

「ううむ、ならば写真を取れないのならこの目に娘の晴れ姿を焼き付けるのみ!!」

と気合を入れて店の中に入っていくそうじろうさんをやれやれというジェスチャーをしながら見送る俺だったが、とりあえず俺も店の中へと入っていくのだった。

「お帰りなさいませご主人様。」

という声と共に迎えられた俺は適当な席について注文をしようとメイドさんを呼ぶと、みゆきが俺のところにやってきた。

「ご注文はお決まりでしょうか？ご主人様。」

というみゆきにとりあえず注文をした後俺は小声で

『みゆき、桜藤祭が終わった後会う事はできるか？』

そう訪ねるとみゆきは少し考え込む仕草をしていたが

『片付けの終わった教室でなら会えると思います。一応携帯に連絡してください。』

そのみゆきの返事に俺は頷きで答えるとみゆきはオーダーを持って奥へと戻っていった。

そして、注文の品を食べながら店内を見回してみると、父親の応対に嫌な顔をしながらやっているこなたの姿を見つけて俺は苦笑していた。

そろそろ時間が来たので俺は店から出て自分達のクラスへと戻るとすぐさま着替えを終えて俺は残りの時間接客業をがんばるのだった。

そしてついに今年の桜藤祭も終了の時を迎える事となった。

体育館にて閉会式を行い、俺達は各々のクラスに戻って今回の売上勝負の結果を見ることにした。

２－Ｄ　ｓｉｄｅ

「みんな、お疲れ様。この３日間はかなり売上も出たわ。これもみんなの協力のおかげよ？それと残ったケーキ等は持ち帰ってもいい

そうだから好きなようにね。」

チームリーダーのかがみの挨拶による締めでひとまずの解散と相成ったのだった。

だが、俺達はこなた達のクラスの結果を聞くのもあって、教室に残っていた。

「みんなおつかれさん。結構忙しかったから売上は期待できるみたいだな。後はこなた達の結果待ちだな。」

「向こうも結構入っていたもんね・・・侮れなかったわ・・・」

「何にしてもどうなるかが楽しみだよなー。」

「何時の間にかに勝ち負けにこだわっちゃたわよね。今となってはどちらが勝っても負けてもどうでもいいかなあ・・・」

「まあ、あやのの言うとおりかもな。俺達は精一杯やったんだし、結果がどうあれ文句はないさ。」

「ふふ。まあ、それもそうね。でも今年は楽しかったな。」

「私も楽しかった。久々に充実した文化祭だった気がするぜ。」

「そうね。私もそう思うわ。後1年あるけれど、最後の桜藤祭も悔いなくやりたいわよね。」

「今度はみんなで、かな・・・」

最後に俺が呟いた言葉の意味に気付く者がいなかったのはみんな疲れていたというのもあったのだと思う。

そうこうしてやり取りしてるうちにこなた達が俺のクラスにやってきたのだった。

2－B　side

「みなさん、お疲れ様でした。皆さんのご協力のおかげで売上もかなりいい感じになったようです。片付けの方は後日となりますので今日は皆さんお体を休めてください。それでは解散です。」

みゆきさんの挨拶と共に私達以外のクラスの面々はそれぞれに疲れた表情をしながら帰っていった。

そして残った私達は

「いやー、終わったねー。以外にも結構受けてたから驚きだったね。」

「最初はどうなるかと思ったよ～。でも、成功してよかったね。こなちゃん、ゆきちゃん。」

「そうですね。私も結構楽しめたと思います。この服も気に入りましたし。」

「おお！？それじゃみゆきさん、今度は別の服でコスプレしてよー。みゆきさんなら何着ても似合うと思うからさー。」

「そ、そうですね。考えておきます。」

「ねえ、こなちゃん。私も可愛いのがあれば着てみたいな～。」

「ほほう？つかさもついにコスプレに目覚めたのかな？よろしい。いくつかみつくろってしんぜようではないか。」

「ほんと？ありがとう、こなちゃん。」

「ふふふ。それはともかく、この結果を持って慶一さんのクラスへと行きましょう。皆さんきっと待っていらっしゃるかと思いますから。」

「おっと、そうだね。すっかり忘れてたよ。それじゃつかさ、みゆきさん、行こうかー。」

「うん、行こう、こなちゃん、ゆきちゃん。」

「では、参りましょう。」

そう言って私達は慶一君のクラスへと向かうのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなた達の持ってきた結果とうちの結果を照らしあわせて見ると、なんと、メイド喫茶の勝利となった。しかもかなりの差をつけられていた事に俺達は驚きを隠せなかったのだが、実際に数字が出てしまっている以上は素直に敗北を認めるしかなかった。

「まさかの結果だな・・・うちも大分客来てたと思ったんだがな。」
「・・・納得いかないわね・・・」
「ちびっこのとこ結構凄かったんだな・・・なんか悔しいゼ・・・」
「いい勝負してると思ったけど・・・確かにちょっと悔しいかもしれないわね・・・」
「ふふふ。どうだい？私達の実力を持ってすればこれくらいは軽いって事だよ！」
「でも、ちょっとびっくりかな～？」
「私もこれは意外でしたね・・・コスプレ喫茶、侮れませんね。」
「まあ、何にしても、３日間お疲れ様だ。軽くみんなで打ち上げでもしようぜ？ケーキまだ残ってるからな。」

最後の俺の言葉に皆も頷いて軽い打ち上げをする俺達だった。

そして最後の戸締りを済ませた後、みゆきから連絡が入ったので俺は電話に出ると

「もしもし、みゆきか。今どこにいるんだ？」
「慶一さん、私は今屋上に来ています。慶一さんも来れますか？」
「屋上か、わかった。すぐ行くからそこにいてくれ。」
「分かりました。お待ちしています。」

「ああ、それじゃな。」

そう言って電話のやり取りを終えて俺は屋上へと向かった。

屋上に出るとそこには一人ただずむみゆきの姿があったので俺は

「お待たせ、みゆき。ところで、みんなからはもう受け取ったのか？」

俺は気になっていた事をみゆきに尋ねてみるとみゆきは笑顔で俺に

「はい。まさかみなさんからお誕生日のプレゼントをいただけるとは思いませんでした。すごく嬉しかったです。」

そう言ってくれたのを見て俺も自分の鞄の中からみゆきへのプレゼントを取り出すとみゆきに手渡して

「これは俺からだ。悪いな、みゆき。丁度文化祭ともお前の誕生日が重なったから誕生パーティもしてやれなかったからな。せめて日にちは過ぎてしまったが、プレゼントだけでも渡したかったからな。」

そう言う俺からプレゼントを受け取ったみゆきは嬉しそうな顔をしながら

「ありがとうございます。お誕生日の事にも気を使っていただいて嬉しいです。これ、開けてみてもいいでしょうか？」

というみゆきの言葉に俺は頷いて

「ああ。お前に合うかもと思って買ってみたけど、気に入ってくれればいいけどな。」

そう返事をするとみゆきはプレゼントの袋を開いて中身を確認する。

そこには涙のような形をした石の中に星の模様が入ったイヤリングが入っていた。

「これは・・・いいんですか?こんな高そうな物をいただいてしまって・・・」

驚きの表情でそう言ってくるみゆきに俺は

「そのために買った物だからな。ちょっとつけてみてくれよ。」

そう言うとみゆきは少し顔を赤くしつつもイヤリングを身に付けて俺に見せてくれた。

「どう・・・でしょうか?」

イヤリングをつけ、おずおずと俺に聞いてくるみゆきに

「うん。イメージ通りかな。よく似合ってるよ。」

そう感想を言うとみゆきは顔をますます赤くして

「あ、ありがとうございます。これ、大事にさせてもらいますね?」

顔は赤かったが笑顔でそう言ってくれたので俺も照れつつ

「気に入ってくれてよかったよ。また来年もひょっとしたらまた文化祭でつぶれちゃうかもしれないけどさ、それでもまたこうやってお祝いするよ。みゆきさえよければね。」

そう言うとみゆきは嬉しそうな顔で

「ありがとうございます、慶一さん。慶一さん、今年の文化祭はとても楽しかったです。出来る事なら来年はこなたさんやつかささん達だけではなく、慶一さんやかがみさん、日下部さん、峰岸さんと共に一緒の事をやれたらいいなあと思っています。」

しみじみとそう言うみゆきに俺は

「そうだな。俺もそう考えているよ。みゆき、あの時お前とした約束覚えてるか？」

そうみゆきに聞くと、みゆきは頷いて

「はい。私達が一緒にいられるように努力しよう、って言った事ですよね？」

その答えに俺は頷いて

「そうだ。そして、俺はそのためにできる努力を一つやったよ。」

その言葉に驚きの表情を見せつつみゆきは

「え？そ、それは一体どういう事ですか？」

困惑するみゆきに俺は笑いながら

「あの日学校に不審者が侵入し、撃退した次の日に俺は校長に呼び出されてな。セキュリティ関連に穴があった事を公表される事を恐れた校長は俺に口止めをしてきた。だから俺はその時にある条件を飲んでもらう事でその口止めを受け入れると言ったのさ。そしてそれは・・・・・というわけさ。」

俺の言った言葉に喜びの表情を浮かべたみゆきは

「そうだったんですか・・・それじゃ来年は・・・」

そのみゆきの言葉に笑顔で頷く俺にみゆきもにっこりと笑顔を向けてくれたのだった。

今日俺達2年生での文化祭は終わりを告げた。

それぞれに充実した時間を過ごせた俺達は今日までの事も思い出に紡ぐ事が出来たと思う。

そして、来年はもっともっと楽しい思い出を作ることができるだろうと俺は心の中で考えていた。

その時に向かって俺達はさらに騒がしく、楽しい日々を送って行きたいと願うのだった。

思い出を紡ぐ旋律、最終話～文化祭最終日～（後書き）

これにて桜藤祭編終了です。これ以降はやまとの誕生日やちょっとした日常の一幕があると思います。
次回もお楽しみに。

笑いあう旋律～やまとの2つの誕生日会～

文化祭も滞りなく終わり、こなたのクラスとの売上勝負にも敗退するという一幕はあったが、この文化祭もまた俺達にとっての大事な思い出の一つになったと思う。

そして、先月のみゆきの誕生日もそうだったのだが準備等の関係で同じように誕生パーティを開けなかったあやのの為に俺達はせめてプレゼントだけでも渡そうと思い、それぞれに選んだプレゼントをあやのに手渡したのだった。

パーティの方は彼氏さんと一緒にやるならそれでいいと思ったのもあったのだけど。

そしてその後、もう1人同じ月に誕生日の奴がいるので、俺はそちらをどうするべきかと悩んでいたのだが、昼休みの食事中にふいにこなたが俺に言った一言で改めてそれを考える事となった。

「ねえ、慶一君。そろそろ永森さんの誕生日近いよね？慶一君は何かやろうとか考えてる？」

そのこなたの発言を聞いてみんなもそれぞれに

「そういえばそろそろだったわね。まあ、慶一くんの事だし何かしらやろうと思ってるんじゃないかしらね？」

「そうだね～。わたしもお祝いしてあげたいな～。」

「慶一さん、永森さんのお祝いもされるのでしょう？」

「あいつも私らの仲間だしな。パーっと騒ぐのがいいんじゃねえか？」

「そうね、私もプレゼント貰ったし、何かお返ししたいわ。」

そのこなたの言葉とみんなのそれぞれの言葉に思考状態から現実に引き戻された俺はとりあえずこなたの質問に

「んー・・・一応はな。まあ、何にしてもだ。その為にはお前らの協力が不可欠だからさ、今回もまた協力してくれないかな？」

俺がそう言うとみんなは笑顔で頷いてくれた。

「それで、具体的にはどうするの？」

そう訪ねてくるこなたに俺は

「うーん、とにかくだ、こなた、ちょっと耳を貸してくれ。」

そう言うとこなたは俺に耳を寄せてきたので俺は計画の詳細を伝えるとこなたはニヤリと笑って

「なるほど、それは面白いかも。ちょっと待ってね、慶一君。今かがみ達と相談するからさ。かがみー、みんなちょっとこっち来てー。」

そう言ってかがみたちを呼んで円陣を組んでなにやら話し込んでいたが相談がまとまったのかこなたが俺の方を向いてオーケーサインを出していたのでそちらの準備はこなたに任せる事となったのだった。

俺はそちらの準備ができることを確認してその日の帰りにこうに会う為にアニ研の部室へ顔を出しにいった。

ノックをして部室に入るとそこにはやまとの姿はあったがこうの姿は確認できなかった。

「あら？先輩。部室に用事かしら？」

そうやまとが訊ねてきたので

「ちょっとこうに用事があってきたんだが、今日は一緒じゃないのか？」

そうやまとに聞くとやまとは

「こうなら委員会に出席してるはずよ？後３０分は戻って来ないわ。」

その答えに俺は腕組みをして考え込みつつ

「しょうがない、待ってるしかないかな？やまと、お前もこうを待ってるのか？」

俺の言葉にやまとは首を振って

「今日はちょっと用事があるから先に帰るわ。こうにもその事は伝えてあるから大丈夫だけど。」

そう答えるやまとに俺は

「そうか、わかった。俺はこうを待つとするよ。やまと、くれぐれも事故とかに遭わないように気をつけてな。」

そう伝えるとやまとは薄く微笑みながら

「誰かさんみたいにドジしないから大丈夫よ。先輩こそあまり遅くならないうちに学校出たほうがいいんじゃない？」

と言うやまとに俺は苦笑しながら

「用事が済んだらすぐ帰るさ。あー・・・それとな、やまと。２６日は空いてるか？」

一応の確認の為にやまとに訊ねると少し考える仕草をした後

「・・・その日は特に何かあるわけじゃないわね・・・でも、どうして？」

そう聞き返してくるやまとに俺は

「ちょっと用事で実家に帰るからな。こうも一緒に遊べるのなら地元で久々に遊ぼうかと思ったからな。」

俺のその言葉にやまとは一瞬寂しそうな顔をしたものの

「・・・そういう事なら、大丈夫だと思うわ・・・・・先輩・・・あの・・・」

何かをいいたげなやまとを見て俺は不思議そうな顔をしつつ＜演技だが＞

「ん？どうした、やまと。何か俺に言いたい事あるのか？」

そう聞き返すとやまとは何かを言いかけていたのだがその先を言葉にできなかったようでキュッと唇を一瞬噛み締める仕草をすると

「いいえ・・・なんでもないわ、それじゃね、先輩・・・」

そう言って部室を出て行くやまとを俺は心の中で（済まない）と思いながら見送ったのだった。

やがて３０分程してこうが戻ってきたので俺は当初の目的をこうに伝えこうと綿密な打ち合わせをするのだった。

やまとｓｉｄｅ

後何日かで私の誕生日が来る。

私はこうにその事に関する相談をしたかったからこうの事を待っていたのだけど、私自身の用事もあってそろそろ帰らないと、と、思っていた時そこに先輩が現れた。

先輩はこうに用事があったらしく私にこうの事を聞いてきた。

こうは委員会に出席していたのでその旨を伝えると先輩はこうを待つと言うのだった。

こうとの事、そして私が帰るにあたっての事、そして私の誕生日の日に先輩はその日に実家に戻るから3人で遊ばないかと言ってきた。

私は誕生日の事を意識しつつも先輩に２６日に私を誘った真意を聞かせて欲しかったから先輩に何かを言おうと思ったのだけど先輩は

私が言おうとしてる事にも気付いてくれなかったようで、だから私は先輩にそれ以上の事は聞けずにそのまま先輩に帰る挨拶をして部室を後にした。

帰り道に私は

「・・・はあ・・・先輩・・・忘れちゃってるのかな・・・私の・・・誕生日の事・・・」

憂鬱なため息をつきながら私は重い足取りで帰っていく。

「・・・仕方ないわね・・・こうなったら先輩やこうが２６日の私の誕生日を覚えていてくれる事を願うだけね・・・」

そう自分に言い聞かせて家へと帰る私だった。

慶一ｓｉｄｅ

こなた達とこうに仕込みを頼み、俺はやまとが欲しがっていたオルゴールを誕生日プレゼントとして送るべく買い物をしていた。

そしてプレゼントにリボンをかけてもらい、俺の準備を完了させてこうへと連絡を取るのだった。

携帯を手にとり、こうへと連絡を入れる。

「もしもし、こうか?俺の方の準備はできた。こうの方はマスターにお願いできたか?」

「ええ、こっちはばっちりです。事情を話したらマスターも快く引き受けてくれましたよ?後は当日の作戦だけですね。こっちはうま

くやりますから先輩も頑張って下さいよ?」
「ああ、わかってる。俺達でやまとにとって忘れられない誕生日にしてやろうぜ。」
「そうですね、でも・・・ちょっとやまとが羨ましいかな。」
「まあ、お前の時も何か考えてやるさ。とにかく今回はこの計画の成功の為にがんばろう。」
「その言葉、覚えておきますよ?何にしても当日は成功させましょう。それじゃー。」
「ああ。それじゃ当日にな。」

そう言ってこうとのやり取りを終え、俺は当日のやまとの誕生日に思いを馳せるのだった。

やまとｓｉｄｅ

あれから結局自分の誕生日の事について言い出すことも出来ず、私はもやもやとした気持のまま誕生日の前日を迎えた。

その日までの間、先輩もこうも私の誕生日について何も触れてくれなかったのもあって、私は半ば落ち込みながらも当日の事についてこうに確認の連絡を取ったのだった。

「もしもし、こう?明日の事だけど先輩から聞いてる?」
「先輩が実家に戻ってくるから3人で遊ぼう、って事だよね?ちゃんと聞いてるよ。それで待ち合わせは何時にする?」
「・・・そうね・・・午前9時頃、駅前でどうかしら。」
「分かった。それじゃその時間に行くよ。久々に3人だけで遊べそうだから楽しみだね。」
「それはいいけど、当日は遅れないでよ?前よりましになったとはいえ、それでもあなたは遅いんだから。」

「わかってるよー。もし遅れそうな時は一本電話入れるからさ。」
「そうならない事を祈ってるわ。それじゃ。」
「うん。明日ねー。」

と言うやり取りを終えて私は先輩にも明日の時間を伝える為に連絡を取るのだった。

慶一ｓｉｄｅ

やまとの誕生日を前日に控え、俺はこなた達に最終確認を取って準備を終えた後、やまとからの確認の当日の待ち合わせに関する確認の電話を貰い、俺は前日の晩から実家へと戻って行く。

無論そこにこなた達も同行させて戻った。

そして実家に着いた俺達はとりあえずこなた達が来てる事をやまとに悟られないようにこっそりと準備を始めた。

準備を進めながらこなたは

「いやいやこういうイベントもいいもんだねえ。やっぱり色々楽しまなくっちゃね。」
「あんたはほんとこういう騒ぎとか好きよね。日下部もだけどさ。まあ、年一回の事だしいいかな？とは思うけどさ。」
「わたしたちもお祝いしてもらってるんだし、それにこのみんなでやるから意味があるんじゃないかなって思うよ？」
「そうですね。永森さん達は慶一さんを通して知り合えた後輩さんでありお友達ですから。」
「私達の時にもあいつらが来てくれたのに私達がその礼もしないんじゃあ、義理がたたねえよな。」

「そうね。私もプレゼント貰ったからそのお返しはしたいから。」
「私も招待してもらってよかったのかな？」
「・・・ゆたかも先輩やみんなと仲間だから・・・いいと思う・・・
それに、喜んでくれると思うから・・・」
「私もこうちゃん先輩や永森先輩、それに皆さんとも友達っスからね。」
「みんな、無理聞いてもらってありがとな。その代わり明日は思い切り楽しもう。」

その言葉にみんなは「「「「「「「「「「おー！！」」」」」」」」」」と気合を入れ直すのだった。

そして当日、みんなに準備の続きをしてもらいながら俺は待ち合わせの場所へ向かいつつこうと連絡を取り作戦開始を伝える。

今回取り決めた待ち合わせ場所に向かうといつもの時間でやまとを待つ俺だった。

やまとｓｉｄｅ

結局当日になっても私の誕生日の事に関して先輩やこうからも何も無く、私は今年の誕生日を意識する事をやめようと思い、出かける準備をして先輩やこうとの待ち合わせ場所へと向かった。

そして待ち合わせ場所に行くと、先輩は待ち合わせ時間の１０分前、いつも私が来る時間前には待ち合わせ場所に辿り着いて私を待っていた。

私に気付いた先輩は片手を上げて

「よう、やまと。いつも通りだな。こうはまだかかるんだろうけどな。」

そう声をかけてくる先輩に私はいつもどおりの態度で

「おはよう先輩。いつもの事とはいえもう少し早く集合時間には来て欲しいとこだけどね・・・」

そう答えると先輩は苦笑しながら

「まあ、いつもの事だな。とはいえ、本当は、こういうのにも慣れるってのもおかしいんだろうけどな。」

先輩の言葉に私も軽いため息をついて

「そうね。いつかは治ってくれるといいのだけど・・・」

そうして先輩とやり取りをしてるうちに携帯が着信を告げたので発信者を確認してみるとこうだった。

私はとりあえず電話に出ることにした。

「もしもし、こう?どうしたの?もっと遅くなりそうだとかそう言う感じ?」

「あ、やまと、ごめん。ちょっと急用できちゃってさ、行けなくなっちゃったんだ。悪いんだけど先輩と2人で行ってくれるかな。それとこの事は先輩に伝えておいて欲しいんだけど。」

「どうしてよ!昨日電話した時には大丈夫だって言ってたじゃない!」

「ほんとにごめん。今回の事は個人的なことじゃないからさ、どう

しても抜けられなかったんだ。この埋め合わせはきっとするから先輩にも謝っておいてよ。」

「・・・仕方ないわね・・・わかったわ。先輩には伝えておくわ。それとさっきの約束守ってもらうわよ?」

「分かってるよ。それじゃやまと、先輩とのデート、がんばってきなよー?」

「ちょ!な、何言ってるのよ!こう!これはそんなんじゃ・・・あ、切れた・・・もう、こうったら・・・」

こうから言われた最後の言葉に私は顔を真っ赤にして反論したがすでに電話が切れた後だった。

電話に怒鳴りつけて顔を赤くしてる私に気付いた先輩は不思議そうな顔で私を見ていたが、私はとりあえずこうからの伝言を伝える事にしたのだった。

「・・・・・というわけで、こうは来れなくなったわ。そんな訳で私と2人だけなんだけど、先輩、どうするの?」

そう訊ねると先輩は少し考える仕草をしていたがすぐに私に

「こうが来れないんじゃ仕方ないか、けどこのまま帰るのもなんだし、遊びに行くか?やまと。」

と言う先輩の提案に私は顔をまた赤くして

「え?で、でもいいの?私なんかと一緒じゃ、面白くないんじゃ・・・」

少し嬉しい気持になりつつ、私はこうと一緒じゃないと自分はそん

なに楽しい人間じゃないと思っていたため少し落ち込みながらそう先輩におそるおそる言うと先輩は笑って

「何言ってるんだよ。お前がどんな奴かなんて俺やこうが一番わかってるんだぞ?そして俺はそんなこうやお前と一緒に居たんだ。そんな中で俺がお前に対してつまらないとかいう態度を取ってきたつもりはないけどな。それともお前はそう言う俺の言うことが信じられないか?」

両手を広げてやれやれとジェスチャーをする先輩を見て私は驚きで目を見開いていたのだがそう言ってくれる先輩の気持が嬉しくなって

「・・・いいえ・・・ごめんなさい。先輩はいつだって私達に付き合ってくれてたわね。時には私と2人だけになった時もあった。でも先輩は変わらず接してくれたものね・・・そんな先輩を信じないんじゃ私は先輩の親友として情けないわ・・・」

そう自重気味に言う私に先輩はにっこりと笑って応えてくれた。

「・・・それじゃ、行きましょ?折角の機会だし、楽しませてもらうわよ?先輩。」

もはやこの時点で私は自分の誕生日の事を忘れかけていたのだけど、先輩の気遣いが嬉しかったからその事の方に意識を集中させる事になったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

計画実行の当日、俺はやまととの待ち合わせ場所でやまとと会い、そしてこちらの思惑通りこうがやまとに電話を入れた事をさっきの

やり取りをさり気なく聞いていた事で知った。

そして俺も計画どおりにやまとを誘い、あちこちをぶらつきながら最後にこうと待ち合わせるあの場所を目指す予定でやまとに一緒に行こうと言うと、やまとは頷いて俺の誘いに乗ってくれたのだった。

「さてと、まずはどこへ行ってみるか・・・やまと、あのゲームセンターに行ってみないか?最近この地元にもできたんだろ?」

俺がやまとに行き先を言うとやまとも頷いて

「そうね、新しく出来た所だってこうにも聞いてるわ。またＵＦＯキャッチャーでも楽しもうかしら?」

そう言うやまとに俺は先月それで酷い目にあった事を思い出しつつも

「ま、まあ、それでもいいんじゃないか?それじゃ行くか、やまと。」

やまとに移動開始を促すとやまとも頷いて俺の後ろからついてきたのだった。

そしてゲームセンターについた俺は建物の外観や広さに感心しながら

「へえー・・・大きいとこだなー。なあ、やまと。こうもこの店にはよく来るのか?」

そうやまとに聞くとやまとも頷いて

「ええ。結構いい格闘ゲームコーナーもあるからお気に入りだって、

こうも言ってたわ。私も実はここのＵＦＯキャッチャーの景品にいいものがあるから気に入ってたりするのだけど。」

そのやまとの言葉に俺は少し考え込みながら

「・・・なら、俺が見ててやるからやまとの好きな物やってみろよ。それで取れない時は俺がやってやるから。」

そう言うとやまとは薄く微笑んで嬉しそうにしながら

「なら、遊ばせてもらうわね？でも先輩はいいの？私ばっかり楽しむ事になっちゃうかもしれないけど。」

そう言ってくるやまとに俺は笑いながら

「いいんだよ。今日はそうするつもりだったんだからな。ま、とにかく頑張れ、やまと。」

俺の言葉に頷いてやまとは早速お金を崩しに向かった。

何度かミスする場面もあったのだが、俺のフォローもあって何とか景品を取ることが出来たやまとは何だか嬉しそうだった。

そしてその後はウインドーショッピングや本屋を巡っていたのだが、もうそろそろ目的の場所に行かないといけないな、と思い、俺はこうとの待ち合わせ場所である”レゾン”を目指して歩き出したのだった。

レゾンへ行くまではやまとと色々会話もしていたのだが、その会話の節々に、何かを言いたそうにしているやまとの姿を見るたびに少

し心苦しくもなったが、その気持を押し込めてレゾンへ向けて歩く俺たちだった。

やまとｓｉｄｅ

先輩と久々に2人で楽しむために私はひとまず自分の誕生日の事を忘れようとしていたのだが、ここまで先輩に自分の誕生日の事を気付いてもらえない状況に少し悲しさを感じ始めていた。

そして、それは無理やり押さえこもうとしていた自分の誕生日への思いをより意識させる事になった。

先輩が向かおうとしてる場所、その道筋に見覚えがあった私は先輩に

「ねえ先輩。ひょっとしてレゾンへ向かうつもりなの？」

そう訊ねると先輩は少し驚いたような顔をして

「へえ？向かってる場所、わかったのか。そうさ。そこに行くつもりだよ。お前に奢ってやろうと思ってな。今日の締めくくりにな。」

そう言う先輩の言葉に私は密かに心の中で（なら、ケーキを奢ってもらってそれを私の誕生日としよう・・・）そう考えていたのだった。

「なら、ケーキでも奢ってよ。それくらいは良いわよね？」

と言う私の言葉に先輩は笑いながら頷いてくれたのだった。

そうして歩いているうちに懐かしい店、レゾンへと着いた私は先輩

に促されて店内へと足を踏み入れる。そしてマスターから声をかけられた先輩はマスターと軽いやり取りをしていたのだけどそのうちにやり取りを終えて私を伴いある席へと移動した。

そしてそこにいた人間をみて私は驚いたのだった。

「やっほー。やまと、待ってたよー。」

電話で急用が出来て来れないと言っていたはずのこうがそこに座っていたのを見た私は思わず

「こう!?あなたどうして・・・急用で来れなかったんじゃなかったの?それとも用事が済んでその帰りってとこなのかしら?」

こうに問いただすとこうはぺろっと舌を出して

「実はね、これが私の言ってた急用って訳なんだよ。とにかく座って?やまと。」

そのこうの言葉に訳が分からない顔をしている私だったが、とりあえずこうに言われたとおりに席についたのだった。

そしてその横に先輩も座ったのだが、その先輩も何やらにこにこと笑って私を見ているのを私も不思議そうな顔で見ていたのだった。

「それで?どういう事か説明してくれるわよね?」

そうこうに言うとこうはおもむろにマスターを呼んで

「マスター。お願いしていた物をよろしくです。」

そう声をかけると奥からマスターが大きなケーキを持ってこっちに来るのが見えたのだった。

「お待たせしました。永森やまと様。これはお2人からのやまと様への心づくしです。」

そう言って私の前にそのケーキを置くとマスターはぺこりと頭を下げた後クラッカーを取り出して

私に向けてクラッカーを鳴らしたのだった。

突然の事に私が混乱しているとマスター周りの客が

「誕生日おめでとう!!」

と言ってきたのだった。

そして先輩とこうも私に「誕生日おめでとう、やまと。」「おめでとう、やまと。」

そう言ってくれたのだった。

その時初めて私はこの事が仕組まれた事なのだという事を知った。

と同時に私に内緒でこんな誕生日をプレゼントしてくれた先輩やこうの気持が嬉しくなって、そして2人が私の誕生日を忘れていなかった事が嬉しくて思わず私は2人に飛びついて泣きじゃくったのだった。

「ありがとう、先輩、こう。私、忘れ去られていたのかと思った・・・嬉しい。本当に嬉しいわ・・・」

そう言って泣きじゃくる私をこうと先輩は優しい目をしながら受け止めてくれていたのだった。

そんな様子を見ていた店のお客もマスターも私達の様子を暖かく見守っていてくれたのだった。

しばらくして落ち着いた私に2人が誕生日プレゼントを渡してくれた。

「やまと、これは私からだよ?」「これは俺からだ、受け取ってくれ」

そう言って渡してくれたプレゼントを見てまたしても嬉しくなった私だった。

「ありがとう、先輩、こう。最高の誕生日よ。」

私は嬉しい気持を素直に言葉にすると、先輩達もにこにこと笑ってくれたのだった。

そうしてレゾンでしばらくの間楽しい会話をしてケーキも食べてそろそろ夕方のいい時間になったので私達は店を出る事にした。

その際にマスターにも今日のお礼を言って店を後にする。

そして帰り際先輩が私に

「やまと、こう。うちに寄ってけよ、夕飯ご馳走するからさ。」

そう言ってくれたので私は今日はその言葉に甘える事にした。

そこで待つもう一つのサプライズに気付かないまま。

慶一ｓｉｄｅ

上手く時間を稼ぎ、やまとにまず俺とこうからの2人によって、俺達3人だけの誕生日を終わらせて、今俺はやまとをつれて今回のメインのために実家へと夕食をご馳走すると口実をつけて来てもらう事となった。

レゾンから出る前に俺はお手洗いでこなた達とこっそり連絡を取って準備の終了を確認したので後は実家にて2つ目の誕生日を行う為だった。

最初の誕生日で、あれだけ喜んでくれたやまとだから、こっちでもきっと喜んでくれるだろうと思えた。

そんな事を考えながら実家へ向かっていた俺達だったが、やまとが不意に俺に

「ねえ、先輩。私の誕生日の事覚えていてくれてたのよね?忘れたフリなんて人が悪いじゃない・・・」

どこか少し拗ねたような顔で俺にそう言ってくるやまとに俺は苦笑しながら

「ごめんごめん。お前を驚かしてやりたいと思った俺とこうの考え

た事なんだよ。それに、お前が陵桜に来て初めてのお前の誕生日でもあったからな。中学時代はこの3人でお互いに誕生日を祝ってきたんだし、そうするのがいいと思ったんだ。そのためにちょいとドッキリを仕掛けたが、喜んでくれたみたいでよかったよ。」

そう言うとやまとは顔を赤らめながら

「あ、ありがとう、先輩。私やこうの事を大事に考えてくれる先輩の気持、うれしかったわ。私達3人でやってきた事・・・それを大事に思ってくれた事も、嬉しい・・・」

そう言うやまとをみてこうも

「親友の誕生日だもんね。忘れるわけないよ。そこのところはもう少し信用して欲しかったなあ。」

意地悪そうに笑うこうにやまとも照れながら

「それは・・・悪いと思ってるわよ。とにかく・・・その・・・ごめんなさい・・・そして、ありがとう。」

赤くなりながらいうやまとにこうは

「うーん、その表情、いいねー。萌えだよ萌え。やまとは可愛いねー。」

と言うこうの言葉にやまとは顔を真っ赤にして黙り込んでいたのだった。

俺はその様子を苦笑しながら見守っていたが、やがて実家に着いた

ので2人に

「よし、それじゃ家に入るか。2人ともついてこいよ。」

そう促すと2人とも頷いて俺の後についてきたのだった。

「ただいまー。お袋ー、こうとやまとを連れて来たぞー。さあ、上がれよ2人とも。」

そう言って家に上がるように促すと2人とも「「お邪魔しまーす」」と言って上がってきたのだった。

「こう、やまと。俺は部屋に荷物を置いてくるから先にリビングへ行っていてくれ。」

そう言って2人を先にリビングに行かせて俺は部屋に戻るフリをして2人の後をこっそりとつける。

そして2人がリビングについた瞬間に鳴らされるクラッカー、それを浴びるやまと。

そこに居たみんなから送られる「「「「「「「「「誕生日おめでとうー。」」」」」」」」」の言葉にやまとは何が起きたのかよく分からない表情でしばらくほうけていたが、それが自分の誕生日を祝う事だとわかった時、再びやまとは嬉しさの涙をこぼしていたのだった。

「誕生日おめでとう永森さん。これ私からのプレゼントだよ。」

「おめでとう、永森さん。これは私から。」

「おめでとう〜。これ私が選んだんだよ?」

「おめでとうございます永森さん。これは私からです。お役に立てばいいのですが。」
「おめでとう、永森。これは私からだ。使ってくれなー。」
「おめでとう永森さん。私からはこれを。」
「おめでとうございます永森先輩。これは私がみなみちゃんと選びました。」
「・・・おめでとう・・・ございます・・・これは私からです・・・」
「永森先輩、おめでとうっス。これは私が選んでみました。」
「おめでとう、やまとちゃん。これは俺からだ受け取ってくれ。」
「おめでとう、永森さん。これは僕から送らせてもらうよ?」
「ふふ、おめでとう。やまとちゃん。これは私からよ?」
「おめでとう、やまとちゃん。これは私から君に。これからも馬鹿な息子とよい友人でいてやってくれ。」

最初はこなた達だけの予定だったのだが、ここにきて親父や瞬、氷室、お袋までもがやまとに誕生日プレゼントを渡すという凄い状態になっていた。

やまとは嬉し涙を流しながらみんなからのプレゼントを頷きながら受け取っていた。

そして今日2つ目の俺たちの企画する誕生日会が始まったのだった。

終電ぎりぎりまで騒ぎ、みんなを駅に送り、俺はこうとやまとを家に送り届ける為に一緒に歩いていた。

そしてこうを送り届けてやまとと2人になった時、やまとは俺に

「先輩、今日は本当にありがとう。どれだけ感謝しても足りないく

らい嬉しい誕生日だったわ。3人での誕生日だけでなく、実家で高校で知り合ったみんなとの誕生日会。一生忘れられない誕生日を本当にありがとう。」

心から嬉しそうにそう言ってくるやまとに俺は照れながら

「そう改まって礼を言われると照れるな・・・俺だってお前らに俺が忘れかけてた自分の誕生日を祝ってもらった。そして、高校に入って出来た仲間達だけど、俺たちはみんなそれぞれに絆で繋がってると思ってる。そんなみんながお前の誕生日を祝ってくれる、そう言ってくれた。やまと、今度は俺達、3人だけじゃない誕生日ができるようになったんだ。その事を忘れないで欲しい。」

俺の言葉にやまとはじっと俯いて考え込んでいたが、おもむろに顔を上げると

「そうね・・・中学時代以来私達に出来た仲間達。とても嬉しい事だわ。私は忘れない。今日の事を、そして私達にはみんなが居る事を・・・それを心に刻み込んでまた皆と楽しくやりたいわ。そして今度は私が、皆の誕生日にはお返しをしてあげたいと思う・・・その時にはまた素敵な提案を期待しているわよ?先輩。」

最後にそう言って笑うやまとに俺は苦笑しつつも頷いたのだった。

「まあ、俺に何ができるかは分からないけどさ。せいぜい頑張るよ。その時には協力してもらうからな?やまと。」

そうやまとに言うとやまとも満面の笑みを浮かべて

「その時は遠慮なく言ってよ?先輩。」

そう答えるやまとと笑いあったのだった。

今日はやまとの誕生日。

俺はあいつに忘れられない誕生日をプレゼントしてやれた事を嬉しく思っていた。

そして、２年生の終わりの足音が少しずつ聞こえはじめている事を感じながら、この１１月を振り返っていた俺だった。

笑いあう旋律～やまとの２つの誕生日会～（後書き）

ここで皆さんに報告があります。
７月から現在まで小説を投稿してきましたが、それに対する総アクセス数が３７万を超えました。
これも一重に自分の作品を読んでくださった皆様のおかげだと思っております。
これからも頑張っていきますので、引き続き～変わる日常～をどうぞよろしくお願いします。

祈りの旋律～受験に向けての健康祈願～

やまとの大掛かりな2重の誕生日を終えて、俺はその日実家に泊まる事になった。

やまとの喜びっぷりを見れた事と楽しかった1日の余韻は未だ心の中にくすぶっていたが、それでも今日はいい夢を見れそうだと思いながら床へついたのだった。

そして次の日の朝、俺はいつものように早起きをすると、学校へ向かう支度をして朝食を摂るためにキッチンへと下りていくとそこにはお袋と一緒に朝御飯の支度をしているやまとの姿があったのだった。

キッチンに来た俺に気付いたやまとは

「あ、おはよう、先輩。朝御飯もうすぐ出来るから座っててくれる？」

そう声をかけてきたので俺はびっくりしつつも

「あ、ああ。おはようやまと、はいいんだが、何でお前がお袋と一緒に朝御飯の支度してるんだ？」

そう訊ねるとやまとは照れたように顔を赤らめて

「そ、それは、昨日の事が嬉しかったし先輩もこっちに戻って来てるし・・・お礼をしたかったから・・・」

少し俯き加減でそう言うやまとの頭をぽんと叩いて

「そうか。ありがとうな、やまと。でも、ここまでさせちゃったらかえって悪いなって思うよ。」

俺の遠慮がちな言葉にやまとは首を振って

「いいの。私が自分でそうしたいって思ったんだから。だから先輩は気にしなくていいのよ?」

そのやまとの気持が本気なのだというのが感じられた俺は（それ以上言うのは逆にやまとに悪いな・・・）と心の中で思い、やまとに

「わかったよ、やまと。お前の好きなようにやってくれ。準備できたら一緒に飯食っちまおう。」

そう伝えるとやまとはにっこりと笑って

「わかったわ。もう少しで出来るから座って待っててて?」

と言うやまとに促され俺はいつのの席について朝食の準備を待つ。

そのうちに親父も起きてきてやまとに

「おはよう。お?やまとちゃん。珍しいな、うちに来て朝御飯の準備しているとは。」

やまとにそう声をかけるとやまとは親父に

「おはようございます、おじさん。すぐに出来ますから先輩と一緒

に座って待っていてください。」

そう返すと親父もうんうんと頷きながら所定の席へと座ったのだった。

そして親父はニヤニヤと嫌な笑いを浮かべながら俺に

「慶一、いい子じゃないか。やまとちゃんは器量よしだからな。お前の嫁にはいいんじゃないのか？」

と、とんでも発言をしてきたので俺は顔を真っ赤にして慌てながら

「な、何言ってるんだよ親父！やまとの気持も無視してそんな勝手な事言ってんな！だいたい、やまとにだって迷惑だろうが！」

そう反論するが、親父はにやけた顔のまま俺たちを見つめていた。

そしてやまとは親父のその発言に顔を真っ赤にして慌てていたのだが、ちらりとやまとの顔をうかがうとやまとも満更ではない表情をしているようだったので、俺はますます顔を赤くして困惑していたのだった。

その様子を見ていたお袋は親父に

「お父さん？あんまり2人をからかわないの。然るべき時が来たらそうなるんだからあまり2人を困らせちゃだめよ？」

更なる爆弾発言をしたのだった。

俺とやまとはさらに顔を真っ赤にしながら慌てていて俺はお袋に

「だーっ！お袋も何言ってるんだよ！」

混乱しつつもそうツッコミを入れるのだった。

そのうちに朝食も完成して皆で朝御飯になったのだが、未だに赤い顔が元に戻らないまま、朝食が始まったのだった。

「今日のオムレツと味噌汁はやまとちゃんのお手製よ？２人ともどうかしら？」

そうお袋が話を振ってきたので俺はとりあえず、オムレツと味噌汁に箸をつける。

その様子をみながらやまとは緊張の面持ちで俺たちの様子を見ていたのだった。

そしておずおずと

「あの、先輩、おじさん、どうでしょうか？頑張ってみたんですが・・・」

そう上目使いで聞いてきたので俺は

「美味いよ。味付けも好みだ。味噌汁もいいな。やまと、お前も結構料理できるんだな、驚いたよ。」

そう答え、親父も

「うん。いい味だ。これならいつ慶一の嫁になっても文句はないな。

」

その言葉に俺とやまとはまたもや顔を真っ赤にしていたが、俺は親父に

「だから！からかうなって言ってんだろ！？」

そう怒鳴りつけると親父は俺に不思議そうな顔を向けて

「ん？慶一はやまとちゃんじゃ不満なのか？やまとちゃんはどうなんだ？慶一じゃ不満か？」

そう切り返して来たので俺とやまとはしどろもどろになりながら

「い、いや、だから、そういう事じゃなくってだな・・・」

「え、えっと・・・その・・・私は・・・別に・・・」

「っ！あー！もう！！この話題は中止！！」

ついには照れのあまり話題を強引に打ち切った俺だった。

やまとはというと終始顔を真っ赤にしたまま少しぼーっとしながら俺達の会話を聞いていたようだった。

そして程なくして朝食を終えて俺とやまとは学校に行く為に家を出る。

玄関で靴を履きながら俺はやまとに

「ごめんな、やまと。親父達が変な事ばかり言ってさ・・・」

ばつが悪そうな顔で俺はやまとにそう詫びたのだがやまとはフルフルと首を振って

「気にしてないわ。私は・・・その・・・嫌じゃなかったし・・・」

また少し顔を赤くしつつ最後は俺にも聞き取れない程の小声だったのだが。

そして玄関から出て俺たちは門の所へと歩いていくと、そこにはみゆきとこうが待っていて

「おはようございます。慶一さん。あら?少し顔が赤いですね?それに・・・何故永森さんが慶一さんの家から一緒に?」

「おはようございます先輩。あれ?やまとも一緒だったんだ?一体なんで?」

みゆきは俺に挨拶しながらもやまとを確認すると何やら黒いオーラを発し始めて、こうは何が何だかよくわからないといった風だった。

俺は朝の事を2人に説明すると2人は

「そういう事でしたか。(うっかりしてました・・・慶一さんがこっちに帰ってきてる事を忘れているなんて・・・私にもチャンスがあったはずなのに・・・)」

「そっかー、よかったね、やまと。先輩に早速恩返しできたんでしょ?」

こうの言葉にやまとは苦笑しながら

「この程度で恩返しになったかどうかはわからないけどね・・・」

そう言うやまとに俺は

「そんな事ないぞ？ちょっとびっくりしたけどありがたかったしな。」

そう答えるとやまとは顔を赤らめつつもいつもの薄い微笑みを俺に向けていた。

そうこうしているうちに時間も押してきたので俺は3人に

「何にしてもそろそろ時間だ、行くぞ？3人とも」

そう促すと3人とも頷いて俺の後についてきたのだった。

電車の中でこうたちとの雑談をする俺だった。

「もうすぐ12月だな。そろそろ寒くなってきたよなー。」

「そうですね。もうすぐクリスマスも近いですよね。先輩は何か考えていますか？」

「その事を決めるにはまずは皆の予定を確認しないといけないだろ？」

「そうね。私達が大丈夫でも他の先輩達の予定とかも確認しないと何も決めれないわよね・・・」

「私は特に予定とかは入っていませんから参加は可能ですよ？」

「高良先輩はおっけー、と。慶一先輩はどうなんですか？」

「俺も特に予定があるわけじゃないから問題ないが。」

「私も大丈夫よ？今度は先輩、どんなプレゼントをくれるのかしらね？」

「ちょっと待て！俺がプレゼントあげる前提なのか！？」

「慶一さんだったら、きっと素敵なプレゼントを下さいますよ。」
「そうですよね。楽しみだなー。」
「お、おまえら・・・はあ・・・わかったよ・・・何か用意させてもらいます・・・」
俺の言葉に満足げに頷くみんなだった。
それからも色々談笑してるうちに学校へと着いた。
自分のクラスに来て俺は教室に入りながら朝の挨拶をする。
「おはよーっす。」
俺の声に気付いたクラスメートも俺に挨拶を返してくれる。
そしてかがみたちも俺に気付き、俺の側にやってきた。
「おはよう、慶一くん。昨日はお疲れ様。永森さん、喜んでくれたわね。」
「おっす慶一。昨日は楽しかったぜー？永森も嬉しそうだったしい誕生日だったんじゃねえか？」
「おはよう、慶ちゃん。昨日は大変だったね。今朝も猫ちゃんの様子見てきたから大丈夫よ？」
それぞれに挨拶をしてくるみんなに俺も
「おはよ、かがみ、みさお、あやの。昨日は協力ありがとな。みさおの言うとおりやまとも大分喜んでくれたよ。それとあやの、毎度の事だけど猫の事ありがとな。いつも助かってるよ、今度何か礼をさせてくれないか？」

そうあやのに言うとあやのはにっこり笑いながら

「いいのよ。私がやりたくてやらせてもらってるようなものだしね。あ、そうだ、慶ちゃん。今日の放課後空いてるかしら?」

猫の世話に関してはやりたいからやっているというあやのの言葉に感謝を感じつつ最後の言葉に俺は

「ん?今日は特に用事があるわけじゃなかったけど何かあるのか?」

そう訊ねるとあやのは頷きながら

「今更なんだけどさ、旅行の時に慶ちゃん、私やみさちゃんを助けてくれたよね?みさちゃんのお兄さんが慶ちゃんにお礼を言いたいっていってるのよ。」

そう答えるあやのの言葉に何か違和感を感じてあやのに

「事情は分かったけど、どうしてそれをあやのが言うんだ?みさおの口から聞いてもよさそうな事だよな?それって・・・」

あやのに聞くとあやのは少し照れながら俺に

「えー・・・っと・・・それは・・・慶ちゃん、ちょっと耳貸してくれるかな。」

というあやのに俺は自分の耳を寄せるとあやのは小声で俺に

『実はみさちゃんのお兄さんが私の付き合ってる人なの。だから、

私の事も含めてお礼を言いたいって言ってたから・・・』

というあやのの言葉に俺は納得して

「そういう事だったか。わかったよ。でも、あの件は俺もあやのやみさおを危険に晒す可能性もあった訳だからかがみの時もそうだったけどお礼とか言われても何だか恐縮しちゃってな・・・。」

俺の言葉にあやのはにっこり笑いながら

「ふふ。慶ちゃんらしいね。でも、ここはみさちゃんの顔を立てると思ってお願いできないかな?」

というあやのに俺は（ここで断ったらあやのにも悪いよな・・・）と考えたので

「わかったよ。それじゃ放課後に寄るって事でいいかな。」

その答えにあやのは微笑みながら「ありがとう。」と言ったのだった。

その会話の様子を少し離れた場所で見ていたかがみは話の内容がいまいちわかりにくかったようで首を傾げながら不思議そうな表情で俺たちを見ていた。

その時俺は一つかがみに頼みたい事があった事を思い出したのでかがみに

「あ、かがみ。今日、俺、みさおの家に行く事になったんだがその帰りにお前の所に寄らせてもらっていいか?ちょっと頼みたい事が

あるんだ。」

そう声をかけるとかかがみは俺に

「頼みたい事？はいいけど、何時ごろになりそうなの？」

かがみは俺にそう聞いてきたので俺は

「時間ははっきりとは言えないけど行く時には連絡をいれるよ。」

という俺の答えにかがみも頷いて

「わかったわ。それじゃ来る時には連絡いれてね？たぶん家にいるから大丈夫だとは思うけど。」

そう言ってくれたので俺はかがみに

「了解。それじゃ後でな。っとそうだ、皆に聞きたいんだけど今年のクリスマスの予定ってどうなってる？」

かがみに返事をした後に朝電車内でこうたちと話していた事があった事を思い出し、皆に尋ねると

「うーん、何もなければ私達はいつもどおり家族と過ごす事になるかも。」

「私は今の所予定はないなー。」

「私は、ちょっと用事があるかな。」

２人の予定は分かったたが、あやのに関してはあれだろうな、と推測したので俺は

「オッケー。それじゃ、できる人間で集まってクリスマスパーティでもやるか？」

俺がそう言うとかがみは腕組みしながら

「私達はいいけどさ、こなた達の予定なんかも聞いてみないと、じゃない？」

そう聞いてきたので俺は頷いて

「そうだな。とりあえずはこうとやまと、みゆきは空いてるってのは聞いてる。後は・・・」

俺の言葉を補足するようにかがみが

「つかさなら私と同じような物だし問題ないわよ？」

その答えに頷いて

「なら、後はこなただけだな。こっちに関しては俺が後でこなたに聞いておくよ。それによっては２５日にやる事になりかねないかもだが・・・」

その俺の答えにかがみは首を傾げながら

「どういう事？２５日になるかもって。」

かがみの質問に俺は推測ではあるが答えを返した

「こなたはコスプレ喫茶でバイトしてるっていってたよな？２４日はともすればかきいれどきでもあるし、店に借り出されることに成るんじゃないかって思ってな。そうなると自由になるとしたら２５日以降かもしれないとも思ってさ。」

そう答えるとかがみも納得したようで

「なるほどね・・・それはありえそうだわ。おおよそ信じられない事だけどこなたも一応は働く人なわけだしね・・・」

かがみの答えに俺は苦笑しながら

「何気にひどい事言ってるような気もするけど、ともあれこなたに聞いてみてそれで改めて話し合おう。それでいいよな？」

そう言うとみんなも頷いて

「そうね。それでいいわ。」

「じゃあ、慶一、はっきりしたら教えてくれよ。」

「そうね。それでもし出来るようなら皆で楽しみたいわ。」

そう言ってくれたので・・・（ってあれ？あやのも乗り気？あやのはデートじゃ？）一瞬心の中でそう考えた後俺はあやのにこっそりと

『なあ、あやの。お前は彼氏さんとデートなんじゃないのか？いいのか？参加したいとか言っても。』

そう訊ねるとあやのは頷きつつ俺に

『あの人とのデートは高校を卒業してからもできるわ。でも、今こ

うしてみんなと何かできるのは後何年もないかもしれないじゃない？だから私もそんな時間を楽しみたいの。大丈夫よ。あの人もわかってくれてるから。』

あやのの言葉に俺は嬉しい気持ちになりながら

『そっか、ありがとう。あやの。お前のその気持は無駄にはしないからさ。』

そう答えるとあやのはにっこりと笑って頷いてくれたのだった。

みさおは何となく俺たちの話している内容をわかっているようだったが、かがみだけは俺とあやののやり取りに不信な物を感じているようだった。

ともかく俺はみんなに

「それじゃ、この件は後でって事で、おっと、そろそろ授業が始まるな。また後で。」

そう伝えてその日の授業をこなすのだった。

そして昼休みにこなたに２４日の予定を聞いてみたが、案の定バイトに借り出される事になっていた。

と同時にこなたが店ではかなり人気らしい事も聞いたので俺は世の中わからないものだ、と頭の墨で考えていたのだった。

そして放課後、俺はみさおとあやのと共にみさおの家にお邪魔する事となった。

みさおの家の場所を知り、みさおのお兄さんと会い、俺は2人を助けた事を感謝されたが、やはり危険な目にあわせる可能性もあり、一歩間違えばこの場で殴られてもおかしくない状況だった事を考えると、どうしても素直に喜べない自分がいたのだった。

そして学校に通ってる間は俺に2人を頼むとお兄さんから言われ、俺はその頼みに首を縦に力強く振って頷いたのだった。

用事を済ませた俺はかがみとの約束があったのでかがみの携帯に連絡を入れる。

「もしもし、かがみか？用事済んだからこれからそっちへ向かうよ。今は大丈夫か？」

「うん。丁度私も一度出かけて来て帰ってたところだから問題ないわよ？それじゃ、待ってるから。」

「了解、なるべく早く行くよ。それじゃ後でな。」

「うん、気をつけて来てね？」

と、軽いやり取りを終えた後俺は柊家へと足を運んだのだった。

一度家にもどり、自転車を用意して俺は柊家へと自転車を走らせる。

ほどなくして柊家へと着いた俺は玄関の呼び鈴を押すのだった。

呼び鈴を押してしばらくの後、「はーい、今開けます」という声と共に玄関が開くとみきさんが俺を出迎えてくれたのだった。

「あら？森村君、いらっしゃい。かがみに用事かしら？」

そう聞いてくるみきさんに俺は頷いて

「はい、ちょっと約束してまして。かがみは居ますか？」

俺がみきさんに尋ねるとみきさんはにっこりと笑って

「ええ、ちょっと待ってね。かがみ～！森村君が来たわわよー！？」

その声に反応してかがみから「今行くー！」という返答があり、かがみは急いで部屋から降りてきたのだった。

「お待たせ、慶一くん。それで、私に頼みたい事ってなんなの？」

早速本題をふって来たので俺は

「実は、お守りを3つ欲しいんだ。これから陵桜を受験する3人に送ってやりたくてね。」

俺の言葉にかがみは頷くと

「なるほど、ゆたかちゃん達に渡すのね？なら、ちょっと神社の方に来てくれる？まつりねえさんが居ると思うけどそこで手に入れられると思うわ。」

そのかがみの言葉に「ありがとう、早速行ってみるよ。」と伝えるとかがみは顔を赤くして

「別にあんたのためじゃないわよ。あくまでもゆたかちゃん達の為なんだからね？」

そっぽを向きながらそう言うかがみに苦笑しつつ俺は早速神社へと足を向けたのだった。

神社の社務所へと出向くと、そこには巫女服姿のまつりさんがいたのだが、俺の姿に気付いたまつりさんがまたも飛びついて来ようと身構えたので俺は先手を打って

「まつりさん？人目もあるんだから自重してくださいよ？」

そう言うとまつりさんは実に残念そうな表情で

「ちぇー・・・いいじゃん・・・別にー・・・」

と言いながら少し拗ねていたのだが、改めて俺に向き直ると

「いらっしゃい、森村君。かがみから話聞いてるよ。お守り欲しいって事よね？どれがいいの？」

そう聞いてきたので俺は

「健康祈願のお守りをお願いできますか？」

そう伝えると、まつりさんは少し不思議そうな顔で

「え？かがみの話だとこの前文化祭で会ったあの子達に渡すって事よね？それだったら学業祈願の方がいいんじゃないの？」

そのまつりさんの指摘に何時の間にかまつりさんの後ろに来ていたかがみも

「そうよね？こういうものに健康祈願っていうのも何か違うような気がするわよね？」

そしてお互いにうんうんと頷きあいながら

「「やっぱりそうよねー。」」

と同意してるのを俺は苦笑交じりに見ていたのだがとりあえず選んだ事情を話しておこうと思い、声をかけた。

「はは。確かに2人の言う事もわかるんだけどさ。どんなに勉強をがんばったとしても、受験に自信をつけたとしても、本番で体調を崩したりしたらそれらがすべて無駄になっちゃうだろ？だから、これは本番で体調を崩す事がないようにという願いでもあるわけさ。」

そう説明すると、2人ともなるほど、と納得してくれた。

「そうね、確かに本番でそんな事になったら何もかもが無駄になっちゃうわね・・・それで試験受けれないとか目も当てられないし・・・」

「うーん、今まで意識した事なかったけど、健康な体って意外と大事なんだね・・・私も気をつけないと・・・」

という2人に俺は笑いながら

「そうですよ？何をするにしても健康な体あっての事です、まずはそこをしっかりしないとやりたい事もできなくなりますからね。そういうのつまらないでしょ？」

俺の言葉に再びうんうんと頷く2人だった。

そして健康祈願のお守りを買った俺はこれと共に3人に送るクリスマスプレゼントについても考える事になった。

その日は結局またしてもまつりさんに捕まり、柊家で夕食をごちそうになったのだった。

楽しい夕食を終えて俺は、またしばらくバイトしないとな、と心の中で考えながら来たるべきクリスマスに向けて思いを馳せるのだった。

祈りの旋律～受験に向けての健康祈願～（後書き）

今年の更新はこれで最後となります。
今まで変わる日常を読んでくださったすべての読者の方にお礼と、
そして来年もまた変わる日常にお付き合いいただけたらありがたく思います。
これからも頑張っていきますので、よろしくお願いします。

護りの旋律～慶一のバイト、こなたのボディガード～（前書き）

あけましておめでとうございます。
早速新年一発目、行かせていただきます。
今年もガイアードと変わる日常をどうぞよろしく。

護りの旋律～慶一のバイト、こなたのボディガード～

みさおの兄＜あやのの彼氏＞から夏休みの一件でお礼を言われ、そしてゆたかたちの受験の為にかがみの所で健康祈願のお守りを手に入れて次の日。

俺はいつも通りの早起きをして朝食を済ませ、学校に行く準備をしていると玄関の呼び鈴が鳴ったので俺はこんな朝っぱらから誰だろう？と思いつつ玄関に行き、「はーい、どちら様？」と声をかけ玄関を開けるとそこにはみさおとあやのの2人が立っていた。

「おはよ、慶一。今日はお前を迎えにきたぜー。」
「おはよう慶ちゃん。学校行く前に猫ちゃんのお世話しようと思ってきたの。」

その2人に俺は驚きつつも

「おはよう。みさお、あやの。そっか、わざわざ悪いな。まだ時間あるから少し上がれよ。お茶を飲んでいく時間位はあるからさ。」

そう言って2人に家に上がるように促すと2人も

「「おじゃましまーす。」」と言って上がって来たのだった。

俺は2人をキッチンへと案内してお茶の準備をはじめるとあやのは早速猫の様子を見に行ってくれたのだった。

お茶の用意をしてる俺に話し掛けてくるみさおと軽くやり取りする俺だった。

「なあ、慶一。私らいきなり来て迷惑じゃなかったか？」
「ん？そんな事ないぞ？それに俺は言ったよな？いつでも家に出入りしていいってさ。その為に合鍵渡したんだし。」
「そういや慶一、１人なのが寂しいって事だったよなー。あの時は思わず笑っちゃったけどさ。考えてみたらお前は私らと居ない時って家には猫しかいなかったんだもんな。それにお前の過去の事考えたらさ、なんかお前の事笑ったの悪かったなーって思ってさ・・・」
「ふうん？お前でもそういう事気にしたりするんだな。これは意外だったな。」
「おい、それはどういう意味だよ？私にはそう言うデリカシーがないって言いたいのか？」
「冗談だよ。そう怒るなって。それに今更その事は気にしちゃいないさ。けど、俺の事を少しは気にかけてくれた事嬉しかったぜ？」
「そ、そりゃ私だってお前の仲間だかんな。私やあやのを仲間と認めてくれた事私だって嬉しかったんだぞ？」
「なら、お互い様って事でいいじゃないか。だからこれからも遊びに来てくれ、みさお。」
「お前がそれでいいって言うんじゃ、私もお前の頼みを断るわけにはいかねえよなー。」
「そういう事さ。これからも頼み、聞いてくれよ？」

最後にそう言って俺達は笑いあってると、猫の世話を終えたあやのがキッチンに戻ってきて俺達を不思議そうな顔で見ながら

「お待たせー・・・って、みさちゃんに慶ちゃん、何かあった？２人とも何だか嬉しそうな感じだったから。」

そう聞いてきたので俺はあやのに

「なあに、大した事じゃないさ。俺がみさおに俺の頼みを聞いてくれってお願いしてただけだからな。」

そう答えると、みさおもあやのに

「そうそう。慶一の頼みを聞いてやるって言っただけだかんなー。」

その答えにあやのは首を傾げながら

「頼み?頼みってなんなの?」

そう訊ねてくるあやのに俺は笑いながら

「これからも寂しい俺の為に、いつでも家に遊びに来てくださいって言ったんだよ。」

その言葉にみさおも満面の笑みで頷いたのを見て

「あら?みさちゃんだけなの?私は慶ちゃんのそのお願い、聞かなくってもいいのかな?」

いたずらっぽい笑顔で俺にそう言ってくるあやのに俺はおどけながら

「いえいえ、もちろんあやの様にもお願いしたいところですよ。では改めて、お願いします、あやの様。」

その答えにあやのも笑いながら

「くす。いいわよ?それに猫ちゃんのお世話もしに来てあげる。遠慮なく私に頼ってね?」

その言葉に俺は2人に「ありがとう」と笑顔で伝えると2人も笑って頷いてくれたのだった。

そして、お茶を飲んで頃合の時間になったので俺達は揃って家をでて学校へと向かう。

いつものようにかがみたちと合流して学校へ行く俺達。

大分冬も近づいて来ていて寒い日だったが、心は暖かな物を感じながら俺はその日の授業を受けるのだった。

そしてその日の昼休み、いつものメンバーで昼食を摂っていると、こなたが俺に

「ねえ、慶一君。今日の放課後暇？」

そう聞いてきたので、俺は今日は特に予定が入ってなかった事を確認すると

「今日は特に用事はないな。どこか行こうとか、そんな感じか？」

こなたにそう答えるとこなたは俺に

「うん。今日私バイトなんだけどさ。バイトに行く時間まで結構余裕あるからそれまでの暇潰しに付き合ってほしいなーってね。」

その言葉に俺は腕組みしながら

「暇潰しねえ・・・まあいいか。それに俺もちょっと買い物あった

しな。」

特に断る理由もなかったのでそう答えるとこなたは満面の笑顔で

「やったー。ありがとー慶一君。それじゃ放課後にね。」

そう言うこなたにかがみも横から

「待ちなさいよ。そういう事なら私も付き合うわよ?」

というかがみにこなたは

「あれ?かがみも用事あるの?それなら一緒に行く?」

そう訊ねるとかがみは頷いて

「丁度ラノベの新刊が出てる頃なのよね。だから寄れる時に寄って買っておきたいのよ。」

かがみの新刊の言葉に俺は

「お?今回は何が出てるんだ?後で教えてくれよ、かがみ。」

かがみにそう言うとかがみは嬉しそうな顔で

「いいわよ?それじゃ秋葉行く時に話すね。」

その言葉に頷く俺だったが、さらにつかさも

「おねえちゃん達が行くのならわたしも行こうかな。私も欲しい漫

画あるんだ～。」

その言葉にこなたは

「何々？つかさの探してるのって何なの？そっちも秋葉行く時に教えてよ。私も一緒に探してあげるよー。」

喜々とした表情でいうこなたにつかさも

「うん。それじゃ、その時にね～。」

そう答えるつかさにこなたは頷きで返したのだった。

「私は今日は委員会もありますのでお付き合いできません。ですが、今度私の予定がない時にはお付き合いさせてください。」

その言葉にこなたは親指をびしっと立てて応えるのだった。

あやのとみさおも今日は予定があるようだったのでつきあえず、こうとやまとも部活があるので今回はパスと言う形になった。

放課後に昇降口の前で待ち合わせることを約束して俺たちは午後の授業へと向かうのだった。

午後の授業を終えて俺とかがみは揃って教室を出て、待ち合わせ場所の昇降口へと向かう。

どうもこなた達の方が終わるのが少し早かったようで、俺達が後から着くという形になった。

俺に気付いたこなたが手を振りながら声をかけてくる。

「あ、慶一君、かがみ、待ってたよー。」

その声に俺も軽く答え、かがみも申し訳なさそうに

「すまんすまん、待たせたか？」

「ごめんね？こなた、つかさ。」

そう答えるとこなたはいつものように目を細めて

「そうでもないよ？私達も慶一君達が来る少し前に着いたからね。」

そんなこなたに便乗するようにつかさも

「うん。だからわたし達全然待たなかったよ？」

そう言ってくれたので俺たちはほっとしながら

「ならよかった。それじゃ行くとしようか。」

「そうね、早速行きましょ？」

そう言うと2人も

「おっけー、それじゃいこうかー。」

「うん。いこ～。」

そう言う2人と連れ立って俺達は秋葉を目指すのだった。

電車を乗り継ぎ、俺達は再び秋葉の地に降り立った。

するとこなたが突然

「秋葉腹よ！私は帰ってきた！」

と叫び出したのでかがみが

「やめんか！恥ずかしい！」

そう言いながら力づくで治めるとこなたは涙目で頭を押さえながら

「痛いよ・・・殴らなくたっていいじゃん・・・」

とかがみに抗議していたが、かがみはそんなこなたを睨みつけて抗議を封殺するのだった。

俺とつかさはその様子を苦笑しながら見守っていたのだが、とりあえず当初の予定を済まそうという事になり俺達は連れ立ってア○メ○トへと足を運んだ。

店内に入り、中を見渡しながら俺は

「相変わらず凄い雰囲気だな、ここって・・・」

そう呟く俺にこなたが俺を見上げながら

「んー？慶一君、まだこの雰囲気に慣れないかな？」

そう聞いてくるこなたに俺は複雑な表情で

「いやあ・・・雰囲気は大分慣れたんだが、どうも店内に入ると途端に感じるこの気配がな・・・」

そう答えるとこなたはいつものふにふにした笑顔で

「まあ、そういうものだと思っていれば気にはならなくなると思うよー？」

そう返してくるこなたに俺は苦笑していた。

「それじゃ、つかさ。探してる漫画、見つけにいこー？」

こなたは早速つかさにそう促すとつかさも頷いて

「うん。それじゃこなちゃん、探すの手伝ってね？」

と言うつかさにこなたは親指をびしっと立てて

「まかせたまへー。それじゃ慶一君、かがみ、また後でねー・・・・・・あ、そうだ、２人とも、後で買い物分のポイント頂戴？」

ちゃっかりとまた買い物ポイントをたかろうとするこなたに俺とかがみは軽いため息をつきながら

「相変わらずその辺はしっかりしてるよな、お前は。」

「・・・はあ・・・わかったわよ。そっちの買い物済んだら連絡しなさいよ？そうしないとほっといて会計済ませちゃうからね？」

かがみの言葉にこなたは頷きながら

「了解ー、それじゃ私達はこっちだから行くねー。また後でー。いくよ？つかさー。」
「待って、こなちゃん～。」
そう言ってつかさと共に漫画コーナーへと移動していく2人を見送って俺とかがみは
「それじゃ、俺達も行くか、かがみ。」
「そうね。とりあえず新刊を見てこないと。」
お互いに頷きあって俺達はラノベコーナーへと移動をするのだった。
ラノベコーナーで俺達は新刊のチェックと購入の為に目的の物を手にとり話していた。
「これこれ、今回はこれが出てるのよね。」
「へえ？それも面白そうかも。俺はこれもお気に入りかな。」
「あ、それもよさそうね・・・うーん、どうしよう・・・このままじゃお金、厳しくなりそうね・・・」
「心配しなくても読み終わったら貸すよ。だからかがみもそれ、読み終わったら貸してくれよ。そうすればお金かけなくて済むだろ？」
「そうね。それじゃそういう風にするって事で。」
「じゃあ、これとこれ買いでいいな？」
「なら私はこれとこれを買っておくわ。」
「決まったな。それじゃ、こなた達の連絡を待ちつつレジ近くに行っていようぜ？」
「うん。いこっか。」
そして買うものを決めた俺達はこなた達からの連絡を待ちつつレジ近くへと移動していたのだが、俺はふと目に入ったアルバイト募集

の案内に思わず足を止めて見入っていた。
俺が急に立ち止まった事に気付いたかがみは俺の側に来て
「どうしたの？慶一くん。何か珍しい物でもあった？」
そう訊ねて来るかがみに俺は
「あー・・・ちょっと・・・な。」
俺がアルバイト募集の案内に見入っていたせいで歯切れの悪い答え方になってしまったがかがみが俺の見てる物に気付いて
「これって、アルバイト募集の案内よね？あんたバイトでもするつもりなの？」
そのかがみの言葉に俺は少し考え込みながら
「うーん・・・これからクリスマスもあるだろ？プレゼントとかで少し入用になりそうだしな。」
そう答える俺にかがみもアルバイトの案内を見ながら
「あー・・・そういえばそんな話してたわね・・・うーん、確かに何か考えないといけないかもね・・・でも、これも短期のバイトみたいだけど条件は悪くなさそうよね？」
かがみの言葉に俺も頷きつつ
「そうなんだよなー・・・だから悩んでるっていうか・・・」

そう答えた時、俺の背後に現れた怪しげな気配に思わず振り向くとそこには前にこの店で会ったアニメ店長と同じような気配を持つ人の姿だった。

「えーっと・・・どちら様でしょうか？」

おそるおそるその怪しげな気配を発する人に話し掛けるとその人は俺をギロリと睨みつけながら

「・・・君は、あの伝説の少女Ａの知り合いだな？前に兄沢から聞いた事がある！」

俺はその物言いに何となく嫌な予感を覚えつつも

「あー・・・その、泉こなたの事ですよね？伝説の少女Ａって。ところで、あなたは何者なんですか？」

そう訊ねるとその人はカカッ！！と目を光らせると

「その通りだ・・・ふふふ、良くぞ聞いてくれた。私はこのア○メ○ト電気街店の店長をやっている殿鬼ガイだ！！前にこの店に来ていた池袋店店長の兄沢命威斗とは同士であると共に売上を競うライバルでもある！！」

そう熱く説明してくれる殿鬼さんに俺は軽いため息をつきつつも

「えっと・・・あなたが何者かという事はよく分かりました。それで、俺に声をかけた理由ってなんなんですか？」

殿鬼さんにそう訊ねると殿鬼さんは俺を見て

「君はアルバイトを探しているという事を先程の会話から聞き取る事ができた。もし君にやる気があるのならうちでアルバイトをやってみないかね？無論、君が伝説の少女Ａの知り合いである事を考慮してそれなりの待遇を約束しようではないか！！」

俺は、それなりの待遇という言葉に心動かされかけたが

「俺を見込んでくれる事は嬉しいのですが、少し考える時間をいただいても構いませんかね？その上でバイトしたいってなった時には改めてお願いしたいのですが。」

俺の言葉に殿鬼さんは腕組みをしながら考え込んでいたようだが

「なるほど、それならばよく考えた上でまたアルバイトをしたいとなった時には店にきたまえ。その時には君を歓迎しようではないか。」

そう言ってくれたので俺は殿鬼さんに

「ありがとうございます。それではまた後日に。」

そう言って話を切り上げようとした時俺の携帯にこなたからの着信が入ったのだった。

俺達はその後こなた達と合流し、今回の買い物ポイントをこなたに渡して店を後にした。

そして、こなたをこなたのバイト先まで送って行き、今日はお開き

となり、俺とかがみとつかさは一緒に帰路についていた。
電車内でかがみとつかさと軽くやり取りをする。

「それにしても、今日は驚いたな・・・まさか兄沢さんみたいな人が他にもいたとは・・・」
「なんか、あの店に行くのが怖くなった気がするわね・・・」
「わたしもちょっとびっくりだったよ～。けいちゃん、あの店員さんに絡まれているの見てどうなるかと思ったし～・・・。」
「ははは。けど、バイトの条件は悪くなさそうだったな・・・真剣に考えてみようかな・・・」
「クリスマスの事があるとはいえ、そんなにお金必要なの？」
「そりゃそうさ。だって、こうたちにプレゼント期待されちゃってそれを用意するって言っちゃった以上はかがみ達にも用意しないわけにもいかないだろ？」
「え？わ、私達の分まで考えてくれてるの？無理しなくていいわよ、１０月にかなり出費してた事覚えてるんでしょ？」
「そうだよ～。そうでなくてもけいちゃんには文化祭前とかにも色々おごってもらっちゃったりしてるもん。気をつかってくれるけいちゃんの気持は嬉しいけど、やっぱり悪いよ～。」
「まあ、それはそうなんだけどさ・・・厳しいけど、やっぱりみんなの喜ぶ顔が見たいからな・・・」
「・・・はあ、ほんとあんたって・・・馬鹿よね・・・つくづくお人好しすぎるわよ・・・」
「まあ、馬鹿には違いないな。」
「ほんと・・・馬鹿よね・・・嬉しいけど・・・」
「やっぱりけいちゃんは優しいね～。プレゼントもらわなくても、わたしもその気持だけでも嬉しいよ～？」
最後の方は小声すぎて聞き取れなかったけどそんなかがみの言葉と

つかさの嬉しそうな言葉で締めて俺達は最寄の駅で

「それじゃ俺はここだから。２人共、家まで気をつけてな？」

と言う言葉に２人も俺に手を振りながら

「大丈夫よ。あんたこそ気をつけて帰ってよ？」

「うん。ありがとうけいちゃん。また学校でね～？」

そう言って俺達は別れたのだった。

そして家について夕食を済ませて風呂の準備をしてのんびりしていると、こなたから携帯に着信があったので俺は電話に出る。

「もしもし、慶一君？今日は暇潰し付き合ってくれてありがとね？」

「俺も目的があったから問題はなかったさ。それより何か用事あって俺に電話したんだろ？」

「うん。実はおとーさんが慶一君に話があるって言うからさ。」

「そうじろうさんが？」

「うん。今代わるね？」

「もしもし、森村君かい？」

「はい。そうですけど、俺に何か用事ですか？」

「ああ、その事なんだけどね、こなたが秋葉のコスプレ喫茶でバイトしてる事は君も知ってるよね？」

「ええ。その事はこなたからも聞いていますし、今日もこなたの暇潰しに付き合った後、バイト先まで送っていきましたから。」

「これからクリスマスシーズンだし、こなたも毎回１人で店に通っているからね、父親の俺としては何かありはしないかと不安でね、近頃何かと物騒だし。」

「そうですね・・・確かにあまり望ましい事ではないと思います。」

「そこでだ、君は大分強いそうじゃないか。それを見込んで君に頼みがあるんだ。」
「頼み、ですか？」
「うん。クリスマスシーズンが終わるまでの間でいいからこなたのボディガードをやってはもらえないかな？俺は仕事の事もあるし、こなたの側についていてやれないからね。」
「なるほど・・・でも、俺でいいんですか？」
「君をこなたの”友達”と見込んで頼みたい。君なら安心できそうだからね。」
「・・・分かりました。引き受けますよ。こなたにもそう伝えておいて下さい。」
「おお！！そうか！引き受けてくれるか！ありがとう。その事はこなたに伝えておくよ。早速明日からお願いするよ？」
「了解です。それでは今日はこれで。」
「よろしく頼むよ？それじゃ。」

電話を終えた俺は（うーん、何だか面倒な事になったか？）と考えつつ、こなたのボディガードをするためにはどうすべきかを考える事にしたのだった。

そして翌日・・・・・

「らあああっしゃいませえええええ！」

店に轟く俺の挨拶、俺は一番近くでこなたを守る為に秋葉ア○メ○トでバイトをする事に決めたのだった。

その帰りにこなたを迎えに行き、一緒に帰ってくる。

時にはこなたと一緒に秋葉へ行き、時には先にバイトをし、時には

こなたのバイトの帰りに立ち寄ってもらうという形で俺はクリスマスシーズンが終わるまでの間、こなたのボディガードをする。

そんな日々が始まったのだった。

俺がこなたの知り合いであったが為に、バイトに関しても俺は伝説の少年Aと銘打たれ好待遇を約束された。

クリスマスまでの資金稼ぎには事かかなくなったのは幸いだったのだが、その状況をかがみたちが気にし始めている事がなんとなくわかっていたのだが、これも仕事のうちだしな・・・と心の中で思いつつバイトを続ける俺だったが、まさにこれがこれから起こるカオスの始まりになるとは俺も気付かずにいるのだった。

混沌の旋律～慶一のバイト騒動記～

俺がそうじろうさんにクリスマスシーズンの間こなたのボディガードを頼まれてから数日が過ぎた。

こなたｓｉｄｅ

数日前、おとーさんが慶一君に何やら頼み事をしたようだったのだが、それはクリスマスシーズンの間だけでも私のボディガードをつとめて欲しいという内容の物だった。

２人が話をしている所を私も側で聞いていたのだけど、まさか慶一君が引き受けてくれるなんて思わなかったので少し困惑もしたのだけど、この状況もいいかな、と思う自分がいた。

そして、今日も私のバイトの終わりを待って慶一君は店の側に来ていたのだった。

窓から見える慶一君の姿を見て私は少しだけこの状況が楽しいと思えていた。

慶一君の事は店の店員達にもそのうちに知られるようになった。

そして私が何気なく窓の外を見る仕草を見た娘達に

「ねえねえ、泉さん。あの人泉さんの彼氏なの？」

「結構かっこいい人じゃない？いいなー、私もああいう彼氏が欲しいー。」

「泉さんが羨ましいなー。」

等ともてはやされる事もあったのだがそのたびに私は照れながら

「うーん、そういうのだったらいいんだけどね、まだ私、彼とはそういう関係って訳じゃないんだよね。」

そう否定しつつもなんとなく複雑な心境の自分がいたのだった。

そして今日も仕事が終わり、慶一君の側に行って声をかける。

「お待たせ、慶一君。待った?」

私の言葉に気付いた慶一君が私を見て

「ん。今日はもう上がりなんだな?そんなに待ってたわけじゃないから大丈夫だよ。」

軽く笑いながらそう言ってくれる慶一君に私は店内で買ったホットコーヒーの缶を手渡しながら

「こんなものでごめんだけど少しはあったまると思うからさ。はい、これ。」

そう言う私に慶一君は微笑んでくれて

「ありがとな。こなた。さて、それじゃそろそろ行くとしようか。」

そう言って私に帰る事を促す慶一君の横に並んで歩きつつ慶一君の手を握る私だった。

「お、おい、こなた？」

照れて慌てながら私にそう言う慶一君に私は笑いながら

「ずっと外にいたんだし、手も冷えちゃってるでしょ？こうすれば暖かいからいいじゃん？」

そう言うと慶一君はますます顔を赤らめて慌てる姿を私は微笑ましく見ていた。

慶一ｓｉｄｅ

いつものようにこなたとの待ち合わせ場所で俺はしばらくの間待機をしていたのだが、３０分程経った頃、こなたの仕事も終わったようで店の中から出てきたのを俺は出迎えたのだった。

そしてこなたは俺を待たせたお詫びの代わりといって店の中で買ってきたらしいホットコーヒー缶を俺に手渡してくれたので、俺はこなたに礼を言ってこなたに帰ろうと促した。

俺の言葉に頷いたこなたは待ってる時に冷えた手を握ってきて「こうすれば暖かいからいいじゃん。」と言って来たので俺はその行為に顔を赤くして照れていたのだった。

そしてこなたと一緒に歩きながら軽いやり取りをする俺達だった。

「ここのとこ毎日みたいだな。大分忙しいのか？」

「今の時期は特にみたいだね。結構シフトも大変な感じだよ？」

「じゃあ、やっぱり２４日は難しいよな？」

「うん。みんなには悪いなって思ってるけど、どうしてもって店長

にも言われちゃったからさ。こんななりの私を採用してくれた店長さんへの恩もあるし、せめて恩返ししたいなって思ってさ。」

「ふーん？意外と義理堅い所もあるんだな、こなたも。でも、その気持は大事にしろよ？これからもその気持を忘れなければその行為はお前の助けになってくれるはずだからな。」

「私も働くようになって分かってきた気がするよ。そういう事の大事さってやつをさ。それにこれも君からも教わったようなものだからね。だから君にも感謝してるんだ。」

「俺は別にたいした事しちゃいないぞ？それこそ買いかぶりすぎじゃないか？」

「うーん・・・相変わらず謙虚な所は慶一君って感じだね。でも少しは誇ってもいいと思うよ？」

「そういうもんかな・・・？」

「そういうもんだよ、慶一君。」

そう言って俺を見上げて笑ってくれるこなたの顔を見ていたらまた照れくさくなって視線を外す俺だったがふいにこなたが俺に

「あ、そうだ。慶一君に聞きたかったんだけどさ。どうして私のボディガード引き受けてくれたの？」

そう聞いてきたので俺は少し考え込みつつ

「んー・・・ここ最近の世の中が物騒になってるっていうのもあるけどさ。俺が、そうしたいって思ったのが理由かな。お前は俺にとっても大切な友人であり、仲間だからさ。」

俺の言葉をじっと聞いていたこなたが俺を見つめながら

「・・・慶一君にとって私はただの仲間？友人？それだけなのかな・

・・」

俺はいつになく真剣な表情のこなたにどきりとしながら

「こなた、それはどういう・・・」

俺がその理由を聞こうとした時こなたは急に我に帰ったようになって

「あ・・・えっと・・・ごめん。今の忘れて？あはは・・・今日は私も少し変みたい。」

そう言って慌てて自分の顔の前で両手をぶんぶん振るこなたを俺は半ば呆然としつつ見ていた。

お互いに少し気まずい雰囲気の中でその後はあまり話せずにいた俺たちだったが、こなたを無事に家に送り届けた後、俺は自宅へと帰る事となった。

帰る際ににも先程のこなたとのやり取りを思い出しながらこなたの言った俺にとってのこなたは友人、仲間、それだけなのかな？という言葉の意味について色々考えていたのだが、今の俺にはその事に対する答えを見つける事ができなかった。

だがこの時俺は気付いていなかった。

ここ数日の間、かがみ達が何の行動も起こしていないかのように見えた状況を。

かがみ達が俺やこなたにも気付かれないようにある行動を起こしていた事を。

そしてその2日後のバイトにおいてその事を知らされることとなった。

その日の放課後、俺はこなたといつものようにバイト先へ向けて学校を出ていた。

道中、ここ最近何となく気になっていた事があってこなたに聞いてみることにしたのだった。

「なあ、こなた。最近かがみ達の様子、変じゃないか？いつものように接しているようで、どこかこう・・・うーんうまく言葉にできないが不自然な感じがするというか・・・」

俺の言葉にこなたも少し考え込む仕草をしていたがやがて俺の方を見て

「やっぱり慶一君もそう思った？私も何となく妙だなあ？と思ってたんだよ。」

こなたの言葉に俺は腕組みしながら

「そっか、俺の気のせいって訳じゃなかったんだな。これは俺の感じた事なんだが、何かやろうとしてる感じに見えなかったか？俺達に気付かれないようにさ。」

俺の言葉にこなたも頷いて

「うん。確かにそう言う感じだったね。でも、何をしようとしてるかはよく分からないから判断しにくいけどねー。」

俺はそんなこなたの答えを聞きながら（まあ、考えていても仕方ないか・・・）と心の中で思いつつ

「ま、いずれはっきりするかもしれないな。その時まではどうしようもないからこれ以上は詮索するのやめよう。」

そうこなたに言うとこなたは頷きながら

「そうだね。えっと、今日は君が迎えに来てくれるパターンだったよね？またいつもの場所で待っててね？終わったらすぐ行くからさー。」

そう伝えてくるこなたに俺も頷いて

「ああ。それじゃあの場所でな。」

そう俺が言った時、電車は秋葉に辿り着いたのだった。

こなたをバイト先に送った後俺も自分のバイトの為に店へと向かう。

そしてスタッフ通用口から中に入ってバイトの準備の為、着替えを済ませて店に出る準備をするために殿鬼さんの所へと挨拶に行く。

「ちはーっす。森村慶一、出社しました。これから店内へと行きますね。」

俺の声に気付いた殿鬼さんは俺に

「おお！今日もよろしく頼むぞ？伝説の少年Ａ！」

その殿鬼さんの物言いに苦笑しつつも

「分かりました。それじゃ早速行きますね？」

そう言って店長室を出て行こうとすると殿鬼さんが何かを思い出したらしく、急に俺を呼び止めて

「おっと、待ちたまえ。その前に君に紹介しておきたい人間達がいる事を思い出した。その人間達はいわば君の後輩だ。今日からよろしくしてやってくれ。それじゃ入ってきたまえ！」

と言う殿鬼さんの声に反応して店長室へと入ってくる人間達を一目見てその人間達が誰かという事を確認した俺はただただ絶句していたのだった。

「・・・今日から一緒に働かせてもらうわ。よろしくね？慶一くん。」

「わたしも頑張るから、お仕事教えてね？けいちゃん。」

「至らぬ所もあるかと思いますが、しばらくはよろしくお願いしますね？慶一さん。」

「よっ。面白そうだから私もバイトする事にしたぜー？よろしくな慶一。」

「慶ちゃんや泉ちゃんの知り合いだと言ったらやらせてくれる事になったわ。よろしくね？」

「レジ打ちとかは任せてください。これでも生徒会会計ですから。そんなわけでよろしくです先輩。」

「・・・こういう店でアルバイトするのは初めてだけど、がんばってみるわ。よろしくね？先輩。」

しばらく放心状態だった俺がようやく立ち直るのに数分の時を要したのだった。

そして額に手を当てながら大きなため息をついて

「・・・これは俺も予想外だったよ・・・かがみはあの時俺が見入っていたバイトの案内を見てたからってのはわかるけどさ・・・他のみんなはなんで？」

俺がそう訊ねるとかがみ以外のみんなが

「お給料とか結構いいっておねえちゃんが言ってたから。それにクリスマスに向けてわたしも少しお小遣い欲しかったし・・・」

「条件がよかったのもありますが、やはり人用でしたので・・・」

「私もそうかなー。クリスマスはみんなで騒ぎたいじゃん？」

「私は、それ以外にも必要な物あったから・・・」

「これもみんなで騒ぐためですよ？先輩。条件もいいし。」

「私も、丁度アルバイト探していた所だったし・・・」

最後にやまとが少し顔を赤らめつつそう言うのを見て俺は再度重いため息をついたが、こうなっては仕方がないと覚悟を決めたのだった。

「とにかくだ、これから仕事を始めるから、みんなは俺の指示通りに動いてくれ、頼んだぞ？」

そう声をかけるとみんなも「「「「「「「「「よろしくお願いします」」」」」」」」」と言って俺についてきたのだった。

「あやの、こうはレジを主に頼む。つかさとみさお、やまとは商品

の補充、整理だ。かがみ、みゆきは俺と一緒に店内を巡回しつつお客様への案内や高いところにある商品を取るのを手伝ったり、お客様の要望を聞いたりしてそれを処理する事を主にやる。つかさ、みさお、やまと、商品補充等に関しては補充倉庫の方にも先輩がいるからその人に教わりながらやってくれ。あやの、こうもレジ担当の先輩に教わる事。店内巡回は俺がかがみとみゆきに教えながらやる。そういうわけでそろそろみんな持ち場へついてくれ。」

俺の言葉と共にみんなは頷いてそれぞれの持ち場に散っていく。

それを見届けて俺はかがみとみゆきに声をかけ、店内の巡回を開始する。

「それじゃ、いくぞ？かがみ、みゆき。」
「わかったわ。慶一くん、お願いね？」
「よろしくお願いします、慶一さん。」

その2人の返事に頷き、俺は早速仕事を開始するのだった。

俺は歩きながら2人に

「まずは俺がやって見せるからよく見ててくれ。」

そう言うと2人とも頷いて俺のやり方を見る。

「あの、店員さん。この商品を探してるんですが・・・」
「こちらの商品は2階のコーナーにあります。向こうの階段か、エレベータで上がってもらって奥の方に表示が出ていると思いますのですぐおわかりになるかと思います。」
「ありがとう。」

「あの、店員さんあれを取りたいんですが・・・」
「少々お待ち下さい。今台を用意してお取りしますので。」
「・・・はいどうぞ、こちらになります。」
「ありがとうございました。」
「店員さん、これの予約はどうすればいいでしょうか?」
「こちらはレジの方にてご予約を承っておりますのでそちらへどうぞ。」
「どうもです。」

その後も2人の前で案内や要望処理を行っていく。

そうしていくうちに2人とも大体の事を覚えたようなので、今度は俺が見守る中での実践が始まった。

2人とも流石にそつなく接客をこなしていくのを見ながら少しほっとしていた俺だったが、商品陳列と補充をしているみさお達のほうからあがる声がこの後に起こるカオスの引き金となるのだった。

「日下部さん!何してるの!?それ全部並べるところ違ってるわよ!?」

その声に気付いた俺は先輩とみさおがいる方に目を向けるとみさおが先輩に怒られていたようだったので俺はそっちの方へと行って先輩に

「先輩、どうかしましたか?」

そう訊ねると先輩は俺に

「日下部さんに陳列と補充お願いしたんだけど、見てよ。見事に違

う場所に並んじゃってるのよ・・・」

先輩の指差す方を見てみるとなるほど、確かに並べる物が違っていた。

しかもそのエリア全てが・・・。

俺は先輩にお詫びしつつみさおに

「ほら、みさお。俺も手伝うからちゃんと並べ直そう。」

そう言うとみさおは落ち込みながら

「ごめん、慶一、先輩。手間かけさせちゃって・・・」

そう言って来たので俺は軽いため息を一つついて

「やっちゃったものは仕方ないだろ?それよりも今はこれを一刻も早く正しく並べるんだ。気持を切り替えていけよ?みさお。」

その俺の言葉にみさおは”きっ”と顔を上げると

「そうだな。悪い、慶一。がんばるから手伝ってくれな?」

その言葉に俺は安心して

「ああ、任せとけ。それじゃやっちまうぞ?」

俺の言葉に先輩も大変ではあったが俺たちの手伝いをしてくれ、何とか元の形に収めることができた。

一仕事終えて一息ついた時、第2のカオスがやってきた。

「けいちゃん。補充用の商品運んできたんだけどどこに置けば・・・はわわっ！！」

補充用の商品をおぼつかない足取りで運んできたつかさが直前でつまづき商品が宙を舞う。

「それはまるでスローモーションのようで・・・ってそうじゃない！！」

1人でナレーションをいれて1人でツッコミを入れて俺は宙を舞う商品を一つも落とさないように、しばらく使ってなかった龍神流の歩法をおそらく今までで一番本気で使って全ての商品をキャッチしまくった。

しかし、最後の一つを取り逃し、その商品は地面に落下しおしゃかになってしまうと思われたのだが、俺達の様子を見ていたかがみがとっさにその商品に飛びついて

「なんとぉっ！！」

という気合と共にダイビングキャッチしてくれたのだが、その時かがみはスカート姿でなおかつとっさのダイビングでスカートがめくれ、背後にいたお客にその姿を見られてしまい、恥ずかしさのあまりパニックになったかがみが

「きゃあああ！見るなー！！」

という声と共に背後の客にバックキックを放つのを感じた俺はとっさに客とかがみの間に入ってかがみの蹴りを体で止めた。

「ぐはあっ！！」

その一撃はもろにみぞおちにヒットし、俺はその場で悶絶していたが、何とか立ちなおった俺はお客に先ほどの非礼をかがみと共にひたすら詫びていた。

そして、ようやく場が落ち着いてきた頃、今度は第3のカオスがもう1人によって引き起こされたのだった。

それは、接客をしてその商品をみゆきがお客から受け取ってその商品名をなぜか復唱したことがきっかけになったのだった。

「お客様、ご確認ください。これがお探しの『いけないお兄ちゃん』と『あぶない妹』という本になります。」

そんな事をみんなにも聞こえるような声で話すみゆきに店内では

「「「「「「ぶーーーーーーーーっ！！！」」」」」」

と一斉に近場にいた客までもが吹き出し、俺は大慌てでみゆきの所に行って

「み、みゆき！いいから！それは復唱しなくていいから！そういうのはレジに任せて、な？みゆき。」

という俺の言葉にみゆきはよく分からないという感じで首を傾げていたのだが俺がみゆきに商品の説明を耳元で小声でしてやると途端

に顔を真っ赤にして

「すいません！すいません！すいません！」

と恥ずかしい思いをさせたお客に平謝りしていたのだった。

それからも店内はてんてこまいな状況が続いていたのだが、その中でこうとやまととあやのだけはちゃんと業務をこなせていたのだった。

みんなの初日のバイトも何とか終了し、俺はすっかり疲れきってスタッフ控え室で休んでいたが、そこにかがみとつかさとみゆきとみさおの４人が入ってきて

「慶一くん。ごめんね？なんかパニックになって迷惑かけちゃって・・・私が蹴った所、大丈夫？」

申し訳なさそうな顔をするかがみに俺は

「いいよ。状況的に仕方がない事だ。けどな？相手はお客様であれも不可抗力なんだからお客は悪くないって事だけは覚えておいてくれよ？それで俺がとばっちり受ける分には構わないから。」

そう伝えるとかがみはますますすまなそうな顔で

「わかってる。慶一くん、本当にごめんなさい・・・」

そんなかがみの頭をぽんと軽くたたくと

「気にするなよ。仕事事態はちゃんとやれてた。たまたまが重なっ

ただけの事だし早々起こる事じゃないんだからな。だから、明日からちゃんと切り替えていけばいいよ。」

俺の言葉にかがみは頷いて

「うん。ありがとう。それじゃ私、着替えてきちゃうわね？」

そう言って部屋を出て行こうとするかがみに俺は

「ああ。待ってるからみんなで帰ろう。」

そう声をかけるとかがみは俺に手を振って着替えに向かったのだった。

そしてつかさも俺にさっきのドジの事を謝りに来たのだった。

「けいちゃん、ごめんね？またわたしドジやっちゃった・・・けいちゃんにもお店の人にも迷惑かけちゃった・・・わたしってやっぱりだめだね・・・」

俺は自分を責めるつかさにどう言葉をかけるべきか思案していたがやがて心を決めるとつかさに

「なあ、つかさ。俺がお前らと何度目かの昼休みに言っていた事覚えてるか？お前らが俺やかがみの家事の事で話していたあの時の事だ。」

俺の言葉につかさはその時の事を思い出したようで俺に

「わたしやこなちゃんが料理うまいのは最初からじゃない、ってけ

いちゃんが言ったあのときの事？」

つかさの言葉に俺はこくりと頷くと

「そうだ。そしてその時に俺はかがみにつかさやこなたはそれだけの経験を積んだから今のように料理ができるようになったと言ったよな？かがみができないのは2人よりもそういう経験に差があるからだと。」

俺の言葉につかさもコクリと頷いて俺の言葉の続きを待つ。

「今のつかさも、俺もだけどそうさ。こういう仕事の経験なんて今回が初めてなんだぜ？だから、うまく出来なくてあたりまえなんだよ。それこそ何の経験もないのにいきなりそういう事が上手くできる人間なんて天才くらいなもんさ。だから、今日始めたばかりのお前が上手く出来なくても何の不思議もない。俺はお前にそれを責める資格もない。」

俺は言葉を一旦切って深呼吸するとさらに言葉を続ける

「お前は一度しくじったりするとパニックになりやすい。だから仕事でしくじったらそのミスを取り返そうとしてさらにドジを上乗せする形になってしまう。だから、失敗してしまった、と思ったらそこで一旦深呼吸しろ。そして周りの状況と今の自分がやろうとしてる事を落ち着いて見直してみろ。その上で自分のすべき事がわかったら、ひとつずつでいいから確実にやってみるようにしてみろ。そして体育祭のハードル走の本番の時お前がやった事を思い出せ。あの時お前がパニックから立ち直れた時のことをな。」

俺の言葉に真剣に耳を傾けていたつかさは俺に強い決意の瞳を向け

ると

「うん！ありがとうけいちゃん。見てて？わたしがんばるから。そしてまたわたしがくじけそうになった時は・・・」

俺はつかさの最後の言葉を補足する

「俺がお前を助けてやる。」

その言葉につかさは嬉しそうな笑顔を俺に向けてきて俺もそれに応えるように微笑みながら頷くのだった。

そしてつかさも着替えに戻ったのを見届けて

その後、みゆきとみさおの謝罪を受けたが、大した事ではなかったので俺は2人にも気にするなと伝えたのだった。

そして2人も着替えて来ると言って出て行くのを見送った後、入れ替わりでやまとが控え室に入ってきたのだった。

「先輩、今日はお疲れ様。大変だったわね、色々と。」

俺はやまとのその言葉に苦笑しながら

「ははは・・・けど、まさかみんながこのバイト先に来るなんて思わなかったからなあ・・・」

そんな俺の言葉にやまとは少し考え込んでいたようだったが俺の方に目を向けるとぽつりぽつりと話始めたのだった。

「実は私達、高良先輩から聞いたのよ。先輩とした約束の事・・・。」

やまとのその言葉に俺はあの時みゆきとした約束の事を思い出していた。

「先輩は言ってたわ。慶一先輩と共に私達が一緒にいられるように努力しよう、って話したんだって事を。慶一先輩もそのための努力をすると言っていたって事も。そして先輩が泉先輩のボディガードをするためにこのバイトを始めたのだと言う事も知ったわ。あれ以来しばらく2人とは距離が開いた状態になっていた。その事を考えた時かがみ先輩が慶一先輩のバイト先の事を教えてくれたのよ。そして、そこなら泉先輩の関係者たる私達ならば採用されるかもしれないってかがみ先輩が言ったから私達は思い切って面接を受けにきてみたの。そうしたらこの店の店長さんが慶一先輩と一緒にいたかがみ先輩の事を覚えていてくれて、それで私達全員、採用になったって訳なのよ。」

そして一旦言葉を切ったやまとは一呼吸おいてさらに言葉を続けた。

「高良先輩の願いを、慶一先輩の願いを、その努力を私達もしてみたくなった。それが同じ場所へのバイトを望んだもう一つの理由よ？」

俺はみんなの気持が理解できたような気がした。

それと同時に、2人で約束した努力をみんなもしてくれようとした事がとても嬉しく思えた。

「なるほどな・・・みんなも同じように思っていてくれたのか。何

だか嬉しいな。」

1人そう呟いた後に俺はやまとに

「よっし。それなら今しばらくは戦場になるぞ?やまと、お前の思いも見せてもらう。これから大変だがその努力をすると言ったからには付き合ってもらうぞ?」

そう言うとやまとも不敵に笑って

「ふふ。望む所だわ、先輩。これからしばらくよろしく。」

俺もその言葉に頷きで応えたのだった。

そして全員で帰る準備を終えて俺はいつものようにこなたを迎えにこなたのバイト先へと向かった。

バイトを終えて出てきたこなたが俺達を見て凄く驚いていた。

俺達はその理由をこなたに話したのだが、こなたはその後しばらく何事かを考え込んでいたようだった。

そして後日こなたはある行動を起こすのだが、今の俺たちにはその事に気付く者は誰もいなかったのだった。

混沌の旋律～慶一のバイト騒動記～（後書き）

こなたの取った思い切った行動の理由とは？
次回をお楽しみに。

さらに混沌の旋律～こなたの参戦、旋律の大集合～

突然のこなたを除く全員の俺のアルバイト先への参戦があり、またその日のバイトはカオスの様相を呈したが、俺だけが盛大に疲れる事になったが何とか無事にみんなの初日を終えることができた事に俺はほっとしていた。

そしてその日の帰りにみんなでこなたのバイト先へこなたを迎えに行った時、こなたは予想だにしなかった俺達の登場にかなり驚いてもいたのだった。

そして、この状況になった事をこなたに説明した時こなたは何事かを考え込んでいるようだったのだが、結局その日は何事もなく終わり、俺は安心してその日は眠りについたのだった。

そして期末も近づきつつある12月の初旬も終わりに近づく頃、俺達は図書室に集まってみんなで試験勉強にせいを出していたのだった。

「そろそろ今年最後の試験も近いな。みんなの勉強の進行状況はどうだ？」

みんなを見回して俺はそう聞いてみると

「私は慶一君に教わったやり方でやってみてるけど、おそらく一夜漬けもありうるかもしれないねー。」

と、ゆるゆるな表情で言うこなたにかがみが

「まったく、そんなんじゃダメじゃないの！あんたは！！」

そう突っ込んだ後に

「私はいつもどおりある程度計画を立ててやってるから今回もそんなに慌ててないわね。」

と説明してくれた。

つかさは苦笑いしつつ

「わたしもけいちゃんに教わったやり方でやってみてるけど、ここ最近はちょっと上手く行ってないかな・・・」

そう自分の状況を説明するとかがみもやれやれと軽くため息をついていたのだがその様子を見ていたみゆきも

「つかささんらしいというか・・・私は、自分のペースでいつもどおりにやっていますから今の所は大丈夫ですね。」

自分の状況には問題ないと言っていた。

「私は今はあやのと一緒に帰ってからもやってんだよなー。前よりは勉強はかどってる感じだ。」

みさおの説明にあやのも頷きながら

「そうね。ここの所みさちゃん調子いいから私も少し安心かな。」

柔らかく微笑みながらそう言うあやのにみさおも満面の笑顔で応え

ていた。

「私とやまとも問題ないですよ？私達も一緒にやってますからね。」
「こうも普段の生活はだらしないけど勉強に関しては私もあまり心配はしてないのよね。」
「やまとー・・・一言余計だよー・・・」
「事実でしょ？今更違うなんて言わせないわよ？」

最後にそうツッコミを入れるやまとにこうは軽く涙目になっていた。

そんなみんなの状況を確認して俺は

「みんな。今回はバイトの事もあるから勉強会として集まれないけどその分こうやって図書室である程度苦手分野の克服をしていこう。」

みんなを見回しながらそう伝えるとみんなも頷いて「「「「「「賛成ー」」」」」」と答えるのだった。

俺はみんなの答えを聞いてこれからテストまではそんな日々を送ろうと心に決めた。

その日の昼休み、俺達はいつものようにみんなで集まりお弁当を食べていたのだが、こなたを除く俺達は今日の仕事内容等について色々話していたのだけどこなただけはその話の輪に入れず、ひとりぽつんと俺達の相談の様子を複雑な表情で見ていた。

その視線に何となく気付いた俺はある程度の打ち合わせ的な話し合いを終えてこなたに向き直り

「悪い、こなた。今日の仕事の事でみんなと話しちゃっててつまんなかったんじゃないか？こっちの話は終わりだから今度はみんなで話すか。」

そう言うとこなたは少し寂しげな表情を見せたがすぐに笑顔になって

「いいよいいよ。大事な事なんだし、仕方ないもんね。でも話済んだんでしょ？それじゃ今度は私の話にもつきあってもらうよ？」

その言葉に俺を始めとしたみんなも頷いて

「おう。仕事の事は一旦忘れて話そう。どんな話だ？こなた。」

それをきっかけにいつものように楽しく談笑を始める俺たちだった。

そして午後の授業を終えて俺達はこなたを伴いいつものように秋葉へと向かおうとしたのだが今日に限って何故かこなたは

「あ、慶一君、みんな。今日は一緒に来なくてもいいから大丈夫だよ？だからみんなは私の事は気にしないで仕事に向かってよ。」

そう言ってくるこなたに俺達は首を傾げつつもとりあえずはバイト先へと向かう事になったのだった。

電車の中で俺達は今日のこなたの事について話していた。

「今日はこなた、変だったな。俺はそうじろうさんからあいつのボディガード頼まれてるのもあるからあんな風に断られると困るんだがなあ・・・」

「昼休みに話してたときもちょっと寂しそうだったかしらね？あい

つの事無視したりしたわけじゃないけど・・・」
「お仕事の事だから仕方ないよね・・・こなちゃんはこなちゃんでしてるお仕事あるんだし。」
「それでも、その後お話してる時にはいつもの泉さんに見えましたが・・・」
「私もちびっこはあまりいつもと変わっては見えなかったゼ？」
「私も、かな？ひょっとしたらたまたま今日は一緒に行かなくてもいい日なんじゃない？慶ちゃん、今日のパターンてどういう感じなの？」
「それなんだが、今日は俺達が迎えに行く日なんだよな。だから行きも俺達と一緒に行ってもいいはずだったんだが・・・」
「泉先輩にも今日はちょっとした用事があったんじゃないですかね？先輩にもそういう時もあるでしょ？」
「そうね。私もそんな風に見えたわ。先輩の考えすぎじゃない？」
「うーん・・・やっぱりそうかなあ？まあ、考えていても仕方ないか。帰りにいつものように迎えに行こう。」

最後のやまとの言葉に首を捻りつつも俺はとりあえずこなたをいつもの通り迎えに行けばいい、と心で決めてみんなと共に仕事場に向かった。

そして今日も忙しい日々が始まる。

「こちらの商品は向こうの・・・・・・」
「こちらですね？少々お待ちください。」
「申し訳ありません。この商品はただいま入荷待ちでして・・・」
「ご予約ですね、ではレジ前で承っておりますのでそちらへどうぞ。」
「お客様のお探しの品は・・・・・・ですね？少々お待ちください。今、確認してまいります。」

「・・・・・円となります、１万円からお預かりいたします。・・・・・円のお返しです。ありがとうございました。」

接客、レジの俺達はいつもどおりにこなしていく。

かがみもみゆきもこうもあやのも大分慣れてきたらしく、そつなくこなしていた。

そして商品補充の方でも

「日下部さん、そっちをお願い。うん、いいわよ？最初に比べてミスなくなったわね。」

「ありがとうございます。それじゃ次はあれですよね？場所の指示、お願いします。」

「わかったわ。こっちよ？」

「先輩、これは向こうでいいんですよね？」

「ええ。それとこれの陳列もお願いするわ、永森さん。」

「わかりました。それじゃ行って来ます。」

「先輩～。補充用の商品です～。こちらに置きますね？」

「ええ、助かるわ柊さん。あなたも大分出来るようになってきたじゃない。」

「えへへ。ありがとうございます。」

みさおの最初の頃のミスは大きい物だったのだが、あれからきちんと出来るようになっていた。

そしてやまとはそつなくこなせていたので問題なかったが、つかさの成長はかなり目を見張る物があったのだ。

あの時俺がしたアドバイスを生かして、失敗したら一度立ち止まり、

落ち着いて周りや自分を見るようになった。

パニックを起こしやすかった最初の頃のつかさを見ていた俺はその事を喜びつつそれでもさり気なく様子を伺って、何かあればフォローできるように俺も準備はしていたのだった。

接客しながらかがみが

「それにしても、最初つかさがこういうところでの仕事できるかな？って物凄く心配だったんだけど・・・最初の頃にもドジしてたしね・・・でも、慶一くんがあの子にしてくれたアドバイスのおかげで上手くやれるようになったわね。姉として慶一くんに感謝かな。」

そんなかがみのお礼の言葉を聞きながら俺は

「はは。感謝してくれるのは嬉しいけど、俺はつかさだってやればできる、って思ってたからな。ただあいつはいっぺんに色々やろうとしてパニックになるそういう要領の悪さがあったんだ。だから失敗するとそれも含めて取り戻そうとするから余計にドジをする事になってた。俺はそれを確実に一つ一つやってみろってつかさに教えただけさ。それを実行に移せたのはやっぱりつかさのやればできる、って部分が出てるんだと思うよ。」

笑いながらそう言った後俺はかがみに

「だから、かがみはつかさの姉なんだから、ちゃんとつかさの事信じてやらないとだめだぞ?あいつはお前にも信じて欲しいんだと思ってるはずだからな。」

そうかがみに言うとかがみは”はっ”としたような顔になって

「・・・そうよね。姉の私がつかさを信じてやらなくちゃだめよね・・・それが姉妹ってものなんだし・・・」

俺はかがみの言葉に笑って頷いたのだった。

「慶一さん、ちょっとわからない事があるのですが・・・」

みゆきが俺達の所に来て尋ねる。

「ん？わからない事？とりあえず話してくれ。」

話を振るとみゆきも頷いて

「実はあのお客さんが探している物なんですが・・・・・・と言う訳なんです。」

俺はみゆきから聞いたお客の探し物をエリア地図を頭の中に描いて探ってみたが、どうもイメージできる場所がなかったので

「分かった。ちょっと中でパソコンで探してみるからお客には申し訳ないが少し待ってもらってくれるよう伝えてきてくれ。」

そう伝えるとみゆきも頷いて

「分かりました。それじゃお願いしますね。私はお客さんに伝えにいきます。」

俺はその言葉に頷いたあと

「分かったら内線飛ばすから居場所教えてくれな、すぐ行くから。」

俺の言葉にみゆきは頷いた後お客の元に歩いていったのだった。

俺はみゆきから預かったメモを持って在庫管理のパソコンの所へと行こうとしたが、ふっと思い出したのでかがみに

「すまん、かがみ。ちょっと調べ物してくる間は接客の方、頼んだぞ?少ししたら戻るから。」

俺がそう言うとかがみも頷いて

「わかったわ。それじゃこっちは任せて?何かあったらあんたに内線飛ばすから。」

俺もかがみのその言葉に頷くと早速お客の探す商品を見つける為に調べ物をするためパソコンの所へと向かうのだった。

そして今日も業務を終えて控え室に戻りみんなが帰りの支度をして迎えに来るのを待ちながら俺は少しのんびりとしていたのだった。

その後みんなが帰り支度を終えて俺を迎えにきたので、俺はみんなと共にこなたを迎えに行く為にこなたのバイト先へと向かったのだった。

いつもの場所に待機して普通なら30分で出てくるはずのこなたが今日に限って時間を過ぎても現れなかった。

何となくその事を不振に思いつつも俺はとりあえずみんなを先に帰してしばらくこなたを待ってみる事にした。

しかし、いつまで経ってもこなたは店から出てくる様子がなく、そのうちに店の営業も終わる時間となり、店の従業員さん達が店から姿を現し始め、そのうちの1人が俺に気付き声をかけてくれた。

「あ、あの・・・いつも泉さんを迎えに来てる人ですよね？」

その声に俺は振り向いて声の主を見るとこなたと同じくらいか一つ二つ年上っぽい女の人だった。

「ええ。いつもこなたがお世話になってます。あの、今日はこなた、どうしたんですか？いつものように待っているんですが店から出てこないしで、ちょっと困惑してた所なんですよ。」

俺がその人にそう尋ねるとその人は少し驚いたような顔で

「え？泉さんなら今日でバイトやめる、って店長に言いに来ましたよ？もう3時間近く前の事ですが・・・」

俺はその言葉を聞いて驚いてその人に詰め寄りながら

「ええ！？それはどういう事なんですか？俺はそんな話を聞いてません！いったい何があったんです！？」

俺の突然の詰め寄りに困惑しつつもその人は

「お、落ち着いて下さい。泉さんが特に何かをしたっていうわけではありませんから。ただ、ちょっとした事情があるからなのだと言っていただけですので・・・」

その言葉を聞きながら俺は突然の事とはいえ、女性にいきなり詰め寄るという失態をやらかした事に気付いて

「あ！ああ、どうもすいません、こなたがバイトやめたと聞いて驚いたのでつい・・・でも、事情ですか？こなたはその事について何か言っていましたか？」

女性から身を離しつつ謝罪しながらその人にこなたのやめると言った事に心当たりがあるかを訊ねてみたが

「いえ、詳しい理由は言ってませんでした。でも、突然やめる事に対しては店長にかなり申し訳なさそうに謝っていたみたいですから・・・」

俺はその答えを聞いて腕組みしながら

「そ、そうですか・・・お手数をおかけしてすいません。後でこなたと連絡を取ってみます。それじゃ今日はこれで帰りますので。それでは。」

女性にそう告げて俺はその場を後にした。

そして帰りながら携帯を取り出してこなたの所に連絡を入れる。

しばらくのコールの後こなたが電話にでた。

「もしもし？泉ですが。」

「こなたか？俺だ。さっきお前のバイト先に迎えに行ったんだがお前がいつもの時間になっても出てこなかったからしばらく待っていたが、同じ店の従業員さんがお前がバイトをやめたって言ってたの

を聞いたんだよ。どうしたんだ?こなた。突然バイトやめるなんてさ。」
「あー・・・その事聞いたんだ・・・まあ、ちょっと色々とね。でも大丈夫だよ。慶一君が心配するようないい加減な理由じゃないからさ。」
「その理由は俺に話せることなのか?」
「・・・・・ごめん、今はまだ話せないんだ、でも信じて?バイト嫌になって途中で投げ出したわけじゃないからさ。これだけは本当だから。今言えるのはそのくらい。」
「・・・・・わかった。俺もお前を信じると言った以上はお前のその言葉信じるよ。でも、何か抱えてる事があったりするんなら俺にも相談くらいはしてくれよ?俺はお前の・・・・・」
「友人であり、仲間だ、っていうんでしょ?分かってるよ。でも今回の事とかは私自身で答えを出したいんだよ。だから、慶一君は私を見守っていて欲しい。だめかな?」
「わかった。けど、あまり俺やみんなを心配させるような事するなよ?とにかく今回はこなたの意志を尊重するって事でいいな?」
「うん。我侭言ってごめんだけどね。それじゃ私、これから夕飯の支度とかしないとだから。」
「分かった。また明日学校でな。」
「うん、それじゃね。」

そう言って電話を終えたのだった。

俺は結局こなたが何をしようとしているのかが分からずじまいだったが、こなたの言うようにこなたの事を信用しようと思うのだった。

こなたｓｉｄｅ

秘密裏に事を進めようとは思ったけれど、やっぱりばれる所ではば

れちゃうみたいだな、と思いながら私はこれからの事に思いを巡らせていた。

「慶一君には黙ってて悪い事しちゃったかな?でも、私を信じてくれてるみたいだしその信頼は裏切らないようにしなくっちゃね・・・・」

そう呟きながら私は私の中に芽生えつつある感情にも戸惑いを見せていた。

(慶一君が私のボディガードをやってくれてた時は楽しかったし慶一君の気遣いが嬉しかった、けど、あの時みんなが私を迎えに来てくれてみんなが慶一君のバイト先で一緒に働いている、その事を知った時、私は何だか凄く寂しい気持になった・・・それに、少し胸が痛んだような気がするな・・・なんでだろう?あの時私は慶一君がみんなに取られたような、そんな気持になったよね・・・この感情ってなんなのかな?でも・・・明日からは私も・・・)

明日からの事を新たに決意しながら私は整理のつかない感情と共に今日は眠りにとついたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなたとの電話を終えて俺はとりあえず家へと戻った。

ここ何日かのこなたの様子を少し妙に感じていた俺だったが、結局その日もその事に対する答えは出せないままに終わった。

そして次の日の学校で昼休みにこなたの様子を伺ったが、いつもとあまり変わってない様子のこなたを見て俺の取り越し苦労なのかな

？と思いつつ、いつものように楽しい雑談で盛り上がり、その日の学校を終えて俺達はまた連れ立ってバイト先へと向かおうとしてたのだが、みゆきとつかさから今日はこなたは俺たちよりも先に教室を出て行ったという報告を受けていたので、その事を不思議に思いつつ道中軽くやり取りをする俺たちだった。

「昨日あれからしばらく待ったんだけどさ、こなたが店から出てこないと思ったらどうやらあいつバイトをやめたらしいんだよな。」
「え？あいつが？結構好きでやってたっぽいけどね・・・でも妙ね・・・慶一くんはこなたがバイトやめた理由聞いたの？」
「聞いてはみたんだが、悪いけど今は話せないって言われてな。けどいい加減な理由じゃないからそこの所は信じて欲しいって言われたよ。」
「ふーん・・・あいつの考えてる事は時々よくわからないけど、あんたはあいつを信用するって事よね？」
「まあね、俺も自分を信用してもらう以上は、あいつやみんなの事も信用したいからな。」
「それなら、今ここでとやかく言っても仕方ないわね・・・あいつの意思を信じましょ？」
「そうだね。こなちゃんもきっと何か理由があるんだと思うし、そのうちにこなちゃんもわたしたちに話してくれるよ、きっと。」
「私達は、それを待ちましょう。泉さんの友達として、仲間として。」
「そうだな。あいつはいい加減な所はあっけど、私達との事はちゃんと考えるやつだかんな。」
「みさちゃんの言うとおりね。私達だって泉ちゃんを信頼してるんだから、きっとその答えもわかる時がくるわ。」
「そうですよね。それまでは黙って待ちましょう。」
「あれで意外といろいろな事考えてる先輩でもあるしね。とにかく今は今日の仕事の事を考えていきましょ？」

「うっし、それじゃつく前に簡単に打ち合わせするぞ？まずはだな・・・」

そう言って俺達はとにかくこなたの事を信用するという事でおちつき、気持を切り替えて今日の仕事の打ち合わせをするのだった。

そして、バイト先についた俺達はそれぞれに準備を済ませて店に出て行くのだが、そこで俺は再び店長である殿鬼さんに呼び止められることになった。

「伝説の少年Aよ、今日からまた1人君の後輩に当たる人間が入る事となった。ここでは君の方が先輩なのだからしっかりと指導するようにな。では入りたまえ。」

店長に促されて入ってきた人間を見て俺は

「・・・こ・・・こな・・・た？」

驚きのあまり途切れ途切れに名前を呼んでしまうのだった。

「まあ、そういう事なのだよ。今日からよろしくね？慶一君。」

俺はとことん混乱しまくっていたのだが、殿鬼さんが

「ふふふ、まさに、まさに我々が望んでいた光景がここに！！伝説の少女Aと共に伝説の少年Aが我らの店に降臨した！！これで・・・これで、我が店の売上は安泰も同然だあああああああ！！頼んだぞ！？2人とも！！」

その言葉にこなたは親指をびしっと立てて応えていたのだった。

だが、驚くべき事はそれだけではなく、殿鬼さんはこなたの前のバイト先の事も知っていたようで、こなたにメイド服姿のままで接客をやらせようと言う事だったのだ。

そして、今日の仕事が始まった訳なのだが、そこに現れたこなたの姿を見てかがみたちも物凄く驚いていたのだった。

「こ、こなた、あんた何やってんのよ・・・」
「こなちゃん・・・びっくりだよ・・・」
「まさか泉さんまでもが、こちらにいらっしゃるなんて・・・」
「やるなー、ちびっこ。だけどここでは私が先輩だかんな?」
「こんな事になってるなんて思わなかったわ・・・」
「先輩の行動力に脱帽です・・・」
「まさかお店も即採用するとは思わなかったわね・・・」

と言うみんなの言葉にこなたも笑いながら

「あはは。まあ、そういうわけだからみんな、これからもよろしくねー?」

その言葉に俺はただただ苦笑するしかなかった。

思いがけず、バイト先に旋律達が大集合した。

これからしばらくはみんなで仕事する事になるのだろうけど、この先どうなる事かと頭を悩ませる俺だったが、こうなったら開き直ってこの状況を楽しもうと心に決める俺だった。

そして、後にだが、こなたの参戦によりこの店の売上は過去最高の

ものにまで伸びる事になるのだが、それは後のお話である。

さらに混沌の旋律～こなたの参戦、旋律の大集合～（後書き）

何かが始まってしまったア○メ○トこなたは伝説を作れるのか？
クリスマスもそろそろ近づく次回をお楽しみに。

舞い戻る旋律～帰ってきた義兄～

突然にバイトをやめ、俺達のいるア○メ○トに急遽参戦してきたこなた。

俺はそんなこなたの行動力に驚きつつもそれがこなたの意思ならばとかなり呆れはしたが、尊重する事にしたのだった。

そしてクリスマスも近づく中、俺達にとっても今年最後の期末試験に臨む事となった。

こなたやつかさ、みさおは終始いやそうな顔をしていたが、それでも昼休みにみんなで行った苦手な部分の強化が効いていたのか、それなりに手応えを感じているようだった。

テストも2日目、俺達はいつものように集まって試験の中間報告をしあっていた。

「とりあえず試験も中日となったわけだが、みんなの調子はどうだ？」

みんなを見回しつつ聞くと

「私はいつもよりはいいかもしれない。一夜漬けはやったけどそれ以前からやってた慶一君から教わったやり方と弱点克服の図書室での勉強が効いてるみたい。」

珍しい答えを返すこなたにかがみも感心しつつ

「へえ？珍しいじゃない。いつもテストで喘いでいたあんたからそんな答えを聞くなんてさ。とはいえ、私も図書室でやったあれは効いてるわね。今回もいい感じよ？」

かがみの前半の言葉にむくれるこなたに”にひひ”と言う笑いを向けるかがみを苦笑しながら見ているつかさは

「わたしもいつもよりはいい感じ。やっぱりけいちゃんから教わったあれはいい感じだね～。それにみんなでやった勉強も身についてたよ～。」

予想以上に調子がでていて嬉しそうなつかさにいつもの微笑みを向けながら

「私も今回の弱点克服の勉強は役に立っているみたいです。いつもよりも手応えを感じています。」

自信ありげに言うみゆきを羨ましそうに見つつみさおは

「やっぱ、優等生は違うよなー・・・とはいえ私も今回は調子いいぜ？なあ、あやの。」

みさおもそれなりに調子を上げているみたいで、成果が出ている感じを嬉しそうに見ながらあやのも

「そうね。今回はみさちゃん、がんばってるからきっと結果でると思うわよ？私もみさちゃんに教えながらいい勉強になってるしね。」

にこにこしながらそう答えるあやの。

「さすが先輩達ってとこですね。でも今回は私も自信ありですよー？」

自信満々にそう答えるこうに軽いため息をつきながらやまとは

「張り切るのはいいけど、それが空回りして悲惨な結果にだけはならないでね？私もいつもよりはいい感じね。」

いつもながらきついツッコミをこうにいれて自分の調子も報告するやまと。

「やまと・・・相変わらず、ツッコミきついよ・・・」

こうもそんなやまとに抗議していたが、結局やまとに一蹴されて、またも涙目になっていたのだった。

そんな様子を俺達は笑いながら見ていたが、そろそろ時間も来たので俺達は今日もまたバイト先へと向かう事となったのだが、テスト中という事もあり、時間も結構空いていたので今日は一度各自の家に戻ってそれぞれにバイト先へ向かおうと言う事になった。

今日はかがみ達も早めに帰ったので俺は珍しく1人の帰り道を歩いていたのだが、後ろから突然鳴らされたクラクションに驚いてそっちを見るとそこには笑顔で俺に手を振るゆいさんがいたのだった。

「おーい、森村君！私だよー！！旅行以来だねー！！」

と、かなり大声で俺に叫んでいるゆいさんに恥ずかしくなった俺は慌てて車にかけよって

「ゆ、ゆいさん、恥ずかしいので大声は勘弁です。」

そうたしなめるとゆいさんは笑いながら

「いやー、ごめんごめん。久々に君の姿見たものだからついねー。ところで森村君、これから少し時間ある？」

そう訊ねてくるゆいさんに俺はバイトの時間の事も考慮しながら

「ええ。ある程度ならありますが、俺に用事ですか？」

俺の質問にゆいさんは大きく頷いて

「うん。君を見つけたっていうのもあるんだけどあの時の旅行のお礼ってしてなかったなーって思ってね。家でお茶でもどう？ゆたかも君に会いたがってたみたいだし。」

その言葉に俺は苦笑しつつ

「わざわざその為に俺に声をかけてくれたんですか。あの事なら自分の意志でそうしたわけですからお礼を言うとしたら車を提供してくれた事に対して俺がしたいとも思ってたところですけどね。けど、そういう事でしたら少しお付き合いさせてもらいますよ。ところで、ゆたかは元気にしてますか？」

ゆいさんの提案を受けつつゆたかの事を訊ねるとゆいさんは自分の車の後部席を指差して

「あはは。森村君は謙虚だねー。ゆたかなら後ろの席でお休み中だよ？」

そう言うゆいさんに促され後部席を見ると顔色を悪くして気絶してるゆたかを見て俺は思わず

「ゆいさん！あれはお休みしてるんじゃなく、気絶してるんですよ！！とにかく家まで早く！！」

そう言いながら慌てて俺はゆいさんの車に乗り込むとそのままゆいさんの家に向けて出発したのだった。

道中俺はずっとゆたかの様子を見つづけつつも道を覚えたいと思ったのもあって俺はちらちらと窓から見える風景を頭に焼き付けたのだった。

そして小早川家についた俺達はゆたかを極力刺激しないようにゆっくりと部屋に運び込みベットに寝かせてしばし様子を見ていると顔色が良くなって来たので俺はひとまず安心してリビングへと降りていった。

そしてリビングで苦笑しているゆいさんをじろりと睨みつけると

「・・・まったく、だめじゃないですか。あなたはゆたかの姉なんですからゆたかの体調をもう少し気遣ってあげないと・・・」

そう言って軽く説教したのだが、当のゆいさんは謝りつつもあまり反省してないようだった。

「ごめんごめん。気をつけてはいるんだけどついね。とりあえず紅茶でいいかな？森村君。」

俺の説教を切り上げたいゆいさんはそう言って話をそらすと逃げるようにお茶の準備をしにキッチンへ走っていったのだった。

俺はその様子を見て重々しくため息を一つついて

「ゆいさんにも困ったもんだな・・・」

そう呟いていると、後ろから俺に声をかけてくる人の気配に気付いた。

「あ、あの。慶一先輩、ですよね?どうして家にいるんですか?」

その声に振り向くと、ゆいさんの運転からようやく復活したらしいゆたかが首を傾げながら俺に聞いてきたのだった。

「お?ゆたか、もう起きても大丈夫なのか?いや、実はゆいさんに旅行の時のお礼をしたいからお茶でもどうかな?って誘われたからね。お邪魔させてもらったんだ。その時一緒の車に乗ってたんだが、どうやらゆたかは気絶してたから気付かなかったんだろうな。」

そう説明するとゆたかは途端に慌てて

「そ、そうだったんですか。ごめんなさい先輩。ゆいお姉ちゃんがご迷惑を・・・」

そういいつつ落ち込んだので俺はゆたかの頭を軽くポンと叩いて

「気にするなよ。俺もゆいさんのご厚意を受けるつもりできたんだしな。それよりもゆたか、体の方は大丈夫か?」

そう訊ねるとゆたかは顔を少し赤らめつつも

「は、はい。少し休んだら楽になりました。そうですか、でしたらゆっくりしていってください。私も先輩とお話したいですし。」

そう言ってくれたので俺もゆたかに笑いかけながら

「ありがとう。けど、俺もバイトやってる身だからね。その時間の事もあるしあまり長居はできないけど時間内はつきあうよ。それにゆたかももうすぐ受験だしな。あまりお前の迷惑にもなる訳にいかないからな。」

そう伝えるとゆたかも笑って

「わかりました。ならその間だけでも・・・それと、受験がんばりますね。きっと私合格してみせますから。」

俺はその言葉に頷いて

「ああ。がんばれよ?ゆたか。きっと3人揃って俺達の前に来てくれ。」

その言葉に嬉しそうに頷くゆたかに俺も笑って頷いていたが、そこにゆいさんが紅茶を準備して戻ってきたので俺はゆいさんも交えて3人で時間近くまで久々の語らいを楽しんでいたのだった。

そしてバイトに向かう時間も近づいて来たので話をきりあげて俺はゆいさんに送ってもらって自宅近くまで戻ってきた。

そして家の前まで来た時、俺の家の前でたたずむ1人の男の姿を見

つけた俺はその男に近づいて

「あのー、この家に何か御用ですか？」

そう訊ねると男は俺の方に振り向いて

「ん？いや俺の親父からここに俺の義弟（おとうと）が住んでるって聞いてきたんだがな・・・・・・ん？お前、慶一か？ひょっとして。」

俺の名前を呼び驚いている男を見て俺はさらに驚いて

「た、龍兄？ひょっとして龍兄なのか？」

そう訊ねると龍兄は昔から知っている懐かしい笑顔で

「おう、俺だ。久しぶりだな、慶一。ずいぶん元気そうじゃないか。」

俺はいつかまた会いたいと思っていた義兄（あに）に出会えた事に驚きと喜びを感じながら

「龍兄こそ6年前に武者修行に出るっていって以来音沙汰なしだったじゃないか！俺も親父達も心配してたんだぞ！？」

ついつい興奮で強めの口調になっている事に気付きつつもそれを抑えられずに言葉を続ける。

「無事でいるんだったら手紙の一つぐらいよこしてもいいじゃないか！」

そんな俺の言葉にあの頃と変わらない優しい微笑みをたたえながら龍兄は

「ははは。そう怒るなよ。便りのないのは元気な証拠とも言うだろ？けど、慶一。しばらく見ない間にずいぶん大きくなったじゃないか。」

その言葉に俺は涙が出そうになるのをこらえながら

「まだ、龍兄には及ばないよ・・・俺はまだまだ龍兄に追いつけてない・・・」

その言葉を聞いた龍兄は俺の頭をかるくポンと叩くと

「あまり自分を卑下するな、慶一。あんときゃほんの餓鬼だったお前だけど、今はかなりいい顔してるぜ？だから自信を持て。お前は俺の誇るべき義弟なんだからな。」

その言葉に俺はもはや涙をこらえられずに泣いてしまっていたのだった。

かがみｓｉｄｅ

今日のバイトは慶一くんと一緒に行こうと思い、私はつかさと共に慶一くんの家に彼を迎えにいったのだけど、そこで私とつかさは家の前で見慣れない男の人と話す慶一くんの姿を見つけたのだった。

その人と話している慶一くんを隠れて様子を伺っていたのだが、話しているうちに慶一くんが涙をこぼし始めたのを見た私は、一体何が起きているのか分からないままじっとその様子を見つづけていた。

「あの人、誰なんだろう・・・何だか慶一くん、やけに親しげに話してるわよね・・・」
「うん。でも、悪い人じゃなさそうだよね・・・」
「あ！慶一くんが涙を流してる・・・一体何が起きてるの？」
「でも、おねえちゃん。あの人、雰囲気がけいちゃんに似てないかな？」
「え？そ、そうかな？・・・・・・言われてみるとそんな感じね・・・」
「ひょっとしてけいちゃんの関係者なんじゃないかな？」
「うーん・・・でも、なんとなくでていきづらい雰囲気よね・・・」
「どうしようか・・・」

そう言って私とつかさは困惑しながら2人を物陰から見続けているのだった。

慶一ｓｉｄｅ

俺が龍兄と久々の対面を果たして、その懐かしさと会いたいと思っていた思いがあふれて涙を流していた俺だったが、龍兄は俺を慰めつつも近くにあった2つの気配に気付いたようで

「おい、そこの奴、大人しく出て来い。俺達の様子を伺っているみたいだが隠れていて無駄だぞ？」

その言葉に気配の主はおそるおそる物陰から出てくる。

そして俺はその姿を確認して思わず声をあげたのだった。

「か、かがみ、つかさ。お前らどうしてここに？」

その2人が俺の知り合いだとわかると龍兄は警戒を解いたようで

「なんだ、慶一。お前の知り合いか？」

そう言ってくる龍兄に俺も頷いて

「ああ。今俺が通ってる学校の友人達さ。そっちのツインテールの子がかがみ、そっちのショートの子がつかさだ。」

そう紹介するとかがみとつかさもとりあえず自分たちの自己紹介をするのだった。

「あ、あの。私は慶一くんの友人で柊かがみっていいます。そしてこっちは妹のつかさです。」

かがみの紹介にぺこりと頭を下げるつかさだった。

「柊つかさです。私もけいちゃんとはお友達です。ところで・・・その・・・あなたはいったい誰なんですか？」

その言葉に龍兄は優しく笑うと

「そうかそうか。ごめんごめん。驚かしちゃったみたいだな。俺は龍神龍也（たつかみたつや）。慶一とは血は繋がっていないが義兄弟（きょうだい）だ。俺が兄にあたる。」

そう言って2人に握手の手を差し出すと2人もおずおずと龍兄に握手を返していた。

「そ、そうだったんですか。慶一くんに義兄さんがいたなんて驚きです。私達全然知りませんでしたから・・・」

かがみがそう言うと龍兄は俺をあきれたような目で見て

「おいおい、薄情な義弟だな。俺の事この子らに話してないのか？」

その言葉に俺はうろたえながら

「だ、だって、龍兄、帰ってくるかもわからなかったじゃないか！もしかしたらこのまま会えないかも知れない人を紹介できるかよ！」

龍兄は軽くため息を一つつくと

「まあ、そう言われりゃそうだよな。すまん慶一、無理言った。」

龍兄の言葉に俺も軽くため息をついてやれやれと心の中で思いながら

「それはともかく、久々に会ったんだ。義兄弟水入らずで久しぶりに話さないか？」

という龍兄に俺は

「悪い、龍兄。俺はこれからこの子らとバイトいかなきゃならないんだ。しばらく居るって言うんなら、俺の家で待っててくれないか？話は俺のバイトが済んでからしよう。」

そう言うと、龍兄はやれやれとジェスチャーしながら

「つまり俺に留守番していろ、と言う訳か？まあ、そういう事なら

仕方ないな。なら待っててやるからバイト済ませて来い。俺は家で待ってるから。」

その言葉に俺は頷きながら

「悪いな、龍兄。とりあえずは家に上がってくれ。俺も着替えてからでなきゃならないからな。かがみ、つかさもちょっと上がって待っててくれ。すぐに準備済ますから。」

俺の言葉に頷く3人を連れて家に入ると同時に俺はすぐにバイトに向かう準備をするため部屋に行くのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんがバイトへ行く準備を済ませるのを待つ間、私とつかさと龍也さんはリビングで顔をつきあわせていたのだが、ふいに龍也さんが私に声をかけてきたのだった。

「ええっと・・・柊、かがみちゃん、だったかな？慶一の友達だって言ってたよね？」

龍也さんの言葉に私は頷きながら

「はい。慶一くんには色々とお世話になってます。」

その言葉に龍也さんは優しげな笑顔を向けながら

「そうか。ありがとうな、柊さん。義弟と仲良くしてくれて。あいつ昔に色々あったからね。まともな友達できるかどうか心配だったんだ。でも、君達とあいつの顔を見てるといい関係なんだって事が

分かるよ。俺はあいつが１１歳の頃に武者修行の旅にでちゃったからな。あいつの大事な時に側に居てやれなかったから少し心配してたんだ。」

そう言ってくる龍也さんに私は

「いえ、こちらこそ、慶一くんには色々良くしてもらってますから。それと慶一くんが１１歳の頃武者修行に出られたと言ってましたけど、龍也さんて今おいくつなんですか？」

少し疑問に思った事があったので訊ねてみると龍也さんはクスっと笑いながら

「俺は今２４歳さ。武者修行の旅には１８歳の頃に出てるからね。あれから６年って訳さ。」

龍也さんが大分年上だと言う事に驚きつつ

「そうだったんですか。あの、龍也さんは慶一くんの事は今でも大切に思っていらっしゃるんですか？さっきのやり取りを見た限りだと龍也さんの慶一くんを見る目が優しいと思ったから・・・」

そう訊ねると龍也さんは笑いながら

「ああ。あいつの事は今でも大事に思ってるよ。同じように本当の親がいないもの同士だからな。そう言う部分でも余計に共感した。だからこそ同じ境遇のあいつを守ってやりたいとさえ思っている。龍神流の正当伝承者としてね。」

私は龍也さんの正当伝承者の言葉に驚いて

「え?龍也さんがそうだったんですか?今まで慶一くんがそうだとばかり思ってました。」

私の答えに龍也さんは苦笑しながら

「何だ、あいつ。そんな事もちゃんと話してなかったのか・・・とにかくだ。龍神夫妻の間には本当の息子がいたんだけどその子は不幸にも事故にあい他界してしまったんだ。そのショックでお袋も子供を生めない体になってしまった。精神的な物が大きかったんだろうな。だから、龍神流の正当な血筋はここで絶えるかと思われたんだが、親父はそれをよしとしなくてな。養子を取ってでも龍神流を残したいと思った親父は俺を分家筋の両親を亡くした家から引き取って正当伝承者として育てたんだ。そしてその後11年ほど経った頃に同じく両親を亡くした慶一を親父は引き取った。俺は正当伝承者としての技を叩き込まれ、その合間に慶一にも全ての技ではないが親父は龍神流の技を教え込んだ。けど、俺と慶一と決定的に違うのは慶一には教えなかった伝承者のみが教わる技を知らない事だ・・・家の流派ってな。人殺しの技を習得するんだ。親父が慶一にそこまでしなかったのはおそらくだが、慶一には人のままで居て欲しいと願ったんじゃないかな?と思ってる。人を超えた化け物は俺たちだけで十分だと感じたんだろうな。それが慶一が正当伝承者ではない理由だな。」

私は龍也さんから聞いた途方もない話に2人にある違いのようなものがなんなのかが分かったような気がした。

確かに2人の雰囲気は似ている、けれど、纏っているオーラのようなものに、その強さに違いを感じた。

慶一くんから感じるオーラは強さを感じる事はあってもどこか優しい感じがしたが、龍也さんの纏うオーラはそれよりも異質でどこか怖ささえ感じたのだ。

けど、一つだけわかった事がある。

龍也さんはそんなオーラを纏う人だけど、慶一くんのような優しさを持つ人だということを。

それを感じるからこそ、私は龍也さんという人にどこか安心感を覚えたのだった。

「何だか凄い話ですね・・・でもわたし、義兄さんは人として好きになれそうだなあって思いました。」

つかさがいつもの笑顔で龍也さんに話し掛けると龍也さんも優しく微笑みながら

「おや？そう言ってもらえるのは嬉しいね。ふむ・・・よし、君達に何かあったら俺に言いなさい。俺が君達を、慶一の手が及ばない場合がある時は守ってあげよう。君達は慶一にとっても大切な人みたいだからね。そして慶一が大切に思う人ならば、俺にとってもそうだからね。ドーンと任せなさい。」

そう言って胸を叩く龍也さんに私達は思わず笑いあっていたのだった。

そうこうしてるうちに慶一くんが準備を終えて下りてきたのでひとまず話は切り上げとなった。

慶一ｓｉｄｅ

バイトに行く準備を終え、リビングに向かうと、楽しく談笑している3人の姿が目に入った。

俺はリビングに入りながら

「お待たせ、かがみ、つかさ。ずいぶん楽しそうにしてたみたいだけど、どうやら龍兄と打ち解けたみたいだな、2人とも。」

俺の言葉に2人とも頷きながら

「うん。龍也さん、凄くいい人だわ。私も一緒にいて安心できたものね。」

「やっぱりけいちゃんに雰囲気似てるだけはあるよ～。すごくお話しやすかったもん。」

その2人の褒め言葉に照れた龍兄は

「いやあ。かがみちゃんとつかさちゃん、2人ともいい子だからね。俺もそんな子が慶一の友人である事が嬉しいよ。慶一、これからもちゃんと2人を守ってやれよ?こんないい子達泣かせたら俺が許さんからな?」

そう言ってくる龍兄に俺は照れながら

「そ、そんなのあたりまえだろ?だれがこいつら悲しませるような真似するかよ。それよりもバイト行って来るから龍兄、猫達の相手でもしてやってくれ。それじゃいくぞ?かがみ、つかさ。」

俺の言葉に頷く2人と共に俺を笑いながら見送る龍兄は

「おう、がんばってこい。帰ったらここ6年の事でも話して聞かせてくれ。俺は1年ほどは実家の方にいるつもりだからな。」

そう言って俺達を送り出したのだった。

バイト先に向かう電車の中で俺達は先ほどの事についての軽いやり取りをする。

「ふう、それにしても驚いたよ、まさか龍兄が突然帰って来るなんてな・・・」

「私達も最初は驚いたわよ。慶一くん知らない男の人と話してるんだもん。でも、いい人よね、龍也さん。」

「ああ。俺にとっても武術の面でもそうだけど、人としても俺が目標にする人なんだよな。」

「わかるきがするな～。すごく大きい人って感じしたもんね。」

「それにしても、龍也さんから聞いたわよ?あんたの家の事やあんたが正当伝承者じゃないって言う事も・・・ねえ、どうしてその事を話してくれなかったの?」

「・・・龍兄が武者修行から戻らなかった場合、俺が本当に龍神流の後継ぎになるかもしれなかったから、っていうのもあるかな。そうなると龍兄が話した事を俺が結局は話す事になってただろうから・・・だから、遅かれ早かれ結局はかがみ達の耳にも入ってたと思うよ。」

「そっか、あんたにも色々あったのね・・・何にしてもあんたに義兄弟がいたってのはニュースよね。この事こなた達に話しても・・・」

「かまわないさ。どの道に龍兄は1年はこっちに戻ってるっていうんだし、今喋らなくても結局は発覚するだろうからね。」

「でも、一番最初にわたしたちが知れたのは得したかも～。」
「そういうもんかなー・・・」
「そういうものなんだよ～？」
「まあ、つかさの言ううとおりでもあるかもね。あ、そろそろこなたと合流よね？それじゃこなたが乗ってきたら仕事の打ち合わせしちゃいましょ？」
「そうだね。がんばろ～。」
「ああ、今日もがんばってやるとするか。」

そう言ってしばらくの後こなたと合流した俺達は仕事の打ち合わせをしながら今日旅から帰ってきた俺の義兄の事について盛り上がるのだった。

そして仕事を終えて帰宅した俺は、その日は遅くまで龍兄と6年分の1部だけだが語り合ったのだった。

突如戻ってきた俺の義兄、それはこの先何を意味するのか。

龍兄の目的も、戻ってきた理由も今はわからない状況だったが、俺はこの6年を少しでも埋めたいと思うのだった。

舞い戻る旋律～帰ってきた義兄～（後書き）

ここで龍神家についての不明になっていた部分を書いておきたいと思います。
龍神家の頭首、慶一の親父の名前は龍真（りゅうしん）お袋の名前は桜（さくら）といいます。

そして、２人の間には実子がいましたが、不幸にも事故によって亡くなってしまい、龍神流の血筋が絶える事を懸念した親父は分家筋の慶一と同じように両親を亡くした子供を引き取り、その子に龍神流の正当伝承者として技を仕込みます。

そしてその子の名前は龍神龍也（りゅうかみたつや）といい、慶一のいわば義兄となります。

それから１１年が過ぎた頃、慶一と龍也は出会い、それがきっかけになり龍也は自分に厳しく人に優しい人間となり、その後は伝承者としての技の全てを習得した龍也は慶一が１１歳の頃に武者修行の旅に出ます。

その頃龍也１８歳、そしてそれから6年以上を経て龍也は再び慶一の前に姿を現しました。

現在の龍也は２４歳となっています。

これが謎の部分と夫妻の秘密となります。

龍也は1年近くはこちらに戻ってるとの事なのでこれからも物語りに絡んでくると思われます。

さらに広がる変わる日常をどうぞよろしく。

舞い戻る旋律の裏側、その1～義兄の決意～（前書き）

今回は慶一と再会する前の龍也のお話です。

外伝っぽい感じになってますがよろしくお願いします。

舞い戻る旋律の裏側、その1～義兄の決意～

時間は、慶一と再会する前までさかのぼる・・・・・・

龍也ｓｉｄｅ

俺が親父の元から武者修行の為に離れて６年の歳月が過ぎていた。

修行そのものは順調だったが、そろそろ親父達にも無事を知らせて安心させてやろうと思い、実家へと連絡してみた所、帰ってこれるのなら帰ってきて欲しいという親父の言葉の中に、少し焦りのようなものを感じた俺は、何らかの予感を感じつつもとりあえず実家へと帰った。

久々に見る実家のたたずまい、そして道場を目にして俺は６年前からあまり変わってない実家の姿にどこか懐かしさを感じながら家の玄関をくぐった。

そして、お袋に

「ただいま。お袋、しばらく留守にしてたけど、親父に言われて帰ってきたぜ？それで、親父はどこだ？もうくたばったとか？」

俺の声を聞きつけ俺を出迎えたお袋は昔からあまり変わらない微笑をたたえながら

「あら、龍也、お帰りなさい。６年間音沙汰なかったから心配してたのよ？でも、よく無事で帰ってきたわね・・・。それとお父さんなら道場の方にいるわよ？慶一といい、あんたといい、お父さんに

は相変わらずね？」

そう言うお袋に俺は苦笑しながら

「何だ、慶一もそんな事言ってたのかよ。あいつ変な所を真似してやがるな・・・」

そう言いつつも俺はお袋に

「とりあえず、親父に会って来る。それじゃお袋、また後でな。」

そんな俺にお袋はにこにこしながら

「積もる話もあるでしょうからゆっくりしてらっしゃい。それと、話が終わったら久しぶりにのんびり家で過ごしなさい。」

そんなお袋に俺は「あいよ。」と短く言った後俺は親父の待つ道場へと足を向けたのだった。

そして道場に入るなり俺は

「親父！今帰ったぞ？まだ現役引退してないか！？」

そう声をあげると親父は途端に切れて

「お前もか！まったく変な所ばかり慶一に教えおって！！・・・ふん、まあいい。よく戻った。龍也」

一度激昂した後すぐに冷静に立ち返り俺にそう言う親父に

「元気そうだな、親父。で?俺を今になって呼びつけるって事は何かあった、って事だろ?」

そう言う俺に親父は重くため息を一つついたあと頷いて

「ふ、察しがいいな。お前も覚えているだろう?数年前に先代と私と、そして牧村流、そして”焔(ほむら)”という暴走族のチームの頭と共に粛正を行ったあの犯罪組織の事を・・・」

俺はその言葉を聞いたとき、昔じいさんと親父から聞かされたある事を思い出して

「ああ。じいさんと親父が俺に語って聞かせたっけな。よく覚えてる。」

・・・・・20年以上昔の事だが、親父がまだ若く、龍神流の継承者となって2年くらいが過ぎた頃、龍神流道場のある近辺で窃盗や傷害、殺人が起こるようになった。

最初は犯罪意識を持たない者の無法の犯行と思われたのだが、その裏にそれらの犯罪者を纏める組織の存在があった。

調べを進めて行くうちにその組織に辿り着いた親父達は牧村流や当時、なわばりを荒らされ必死に犯人を探していた”焔”という暴走族のチーム<今は改名され”紅”と名乗っているようだが>とはからずも協力しあう事となり情報交換をしあいながら犯罪組織、そしてなわばり荒らしの犯人を見つけ出した親父達は警察も手に負えなかった犯罪組織を壊滅させた。

そしてその当時、その組織のトップだった男が神崎流(かんざきながれ)という男だっ

たのだが、その男が逮捕され組織は解散に追い込まれたのだった。
そうして、それまで起こっていた犯罪はぴたりと止み、この近辺にも平和が戻った。
それが昔の事だ・・・・・。
俺はその事を思い出した後、親父に
「けど、何故今になってその話を?」
俺の質問に腕組みをしながら親父は
「実はここ最近の事なのだが、この近辺でまたあの時と同じような犯罪がおき始めているのだ。気になった私はその事を龍神のお抱えの諜報員に調べてもらったのだが驚くべき事がわかってな・・・」
親父の言う”驚くべき事”が気になった俺は親父に
「驚くべき事?それはなんなんだ?」
親父は一つ重々しく頷いて
「うむ、当時粛正し、壊滅させた組織の人間の幹部の1人だった男が上手く逃げ延びていたらしくてな、当時の神崎を真似て同じような犯罪を行う犯罪組織を作ったらしいという事なのだ。そして、元幹部の男は我々に強い恨みを持っているようでな、力をつけて我々を潰す事を画策しているらしいとの事だ。」
その言葉に俺は親父に

「それで?俺にそいつらを潰すために協力しろ、とそういう事か?」

俺の言葉に親父は一つ頷くと

「うむ。そして、今度こそ完全に連中を壊滅させ、この街から奴らの脅威を除く。それを牧村とも話し合い決めたのだ。」

俺は腕組みしてしばらく考え込んでいたが

「だが、そういう事なら俺じゃなく慶一でもよかったんじゃないのか?その程度の連中なら慶一でも十分に用は成せたはずだろ?完全な龍神流を習得してないとはいえ、あいつもかなりの腕のはずだ。」

俺の言葉に親父は苦しげに唸ると

「・・・確かに、慶一が1人の頃であればそれも考えた。しかし、今の慶一は守るべき者達を持ってしまった。慶一を巻き込む事で、その守るべき者達にまで迷惑をかけるような真似はできなかったのでな・・・」

俺はそんな親父の言葉に驚いて

「守るべき者?慶一がか!?へえ、あいつ何時の間にかそう言う奴を持ったのか。あの俺以外誰とも打ち解けようとしなかったあいつがなあ・・・」

俺が慶一と会ったあの当時、あいつは親父から真実を聞かされる前から何となく自分の境遇が他の同じ年代の子達と違ってる事を子供心に気付いていたようだった。

そのせいもあってか同じ世代の子とも中々仲良くなれず、いつもあいつは一人でいたのだと親父から聞いていた。

そして俺と会った慶一は俺に自分と同じ境遇のにおいを察したのか、俺に懐いた。

たった1年の間あいつと一緒にいただけだったが、俺はあいつを実の弟のように、あいつも俺を実の兄のように慕ってくれた。

けど、俺がいる間は結局あいつは友達らしい友達を作らなかったのだ。

その後は、真実を知らされて慶一が荒れたのだという事を親父から聞いていた。

「そういえばあいつが中学の頃、初めて心から打ち解けられた年下の友達が出来たって親父から聞いたな。ああ、後牧村の長男とも親友だったとも聞いたっけな。」

俺の言葉に親父は頷いて

「うむ。永森やまとちゃんと八坂こうちゃんという2人の女の子だ。その子らがあいつが中学の頃、牧村君以外に打ち解けられた友達だったのだ、そして高校に進んだあいつに、さらに大勢の素晴らしい友人ができたのだ。」

俺はその言葉にさらに驚いて

「高校でさらに大勢だって?信じられないな。でも・・・そうか、

ようやくあいつにも守りたいと思える友人ができたんだな・・・。」

俺の言葉を聞きながら親父は俺を見て

「慶一が守るべき者の数は多い。それゆえに慶一をこちらに呼ぶ事は、その子らを守る者がいなくなる事と同義。私は慶一の為に、そしてその子らの為にもこの一件に慶一を絡ませる訳にはいかないのだ。もし万が一の事があれば・・・またあいつは一人になってしまうやもしれない・・・慶一にそんな思いを・・・もうさせたくはないのでな・・・」

俺はそんな親父の思いを受けて一つ決断すると

「・・・わかった。あいつにそんな思いをさせたくないのは俺も同じだ。この一件、俺が引き受ける。だから、親父、その友人らにも危害が及ばないようにガードをつけさせてくれ。俺も係われる限りはあいつの友人達を守ろう。」

その言葉に親父も頷いて

「すまん。伝承者となったお前に過酷な運命を背負わせる。この私を恨んでくれてかまわん。だが、この一件、今回で決着をつける。そのために、頼むぞ?龍也。」

その言葉に俺も頷いて

「伝承者となった俺が背負う道ならば、伝承者らしく戦うのが俺の責任だ。これが俺の運命であるならそれに準じよう・・・それが・・・龍神流を継ぐ者の戦いならば!!」

俺の覚悟に親父も黙って頷くのだった。

そして俺はこれからすべき事を親父に尋ねる。

「親父、さしあたって何をしたらいい？」

俺の問いかけに親父は

「まずは、組織の存在の確証を得る事だ。その為に情報収集を龍神家だけでなく牧村家とも協力して当たっている。お前もそれに協力して欲しい。おそらく勝負はこの1年の間となるだろうからな。」

親父の答えに俺は

「わかった。ともかく当たれる所は当たってみよう。親父の方でも何かわかったら情報を頼むぞ？」

俺の言葉に親父は頷きながら

「わかった。それとだ、龍也、折角戻ってきたのだから久しぶりに慶一の所に顔を見せに行ってやれ。今はあいつは本当の両親の住んでいた家、つまり、森村家に戻っているからな。」

親父から聞いた名前に俺は

「森村・・・そうか、あいつ、その事を受け入れたんだな・・・」

そう呟いたのだが、それを聞いていた親父が

「うむ。今年の夏にやつの本当の両親の墓へ行った時、あいつはそ

れを完全に受け入れた。それも、あいつが守りたいと思った者達が奴の勇気の後押しをしてくれたからこそ、だ。そんな友人達だからこそ、その子らも守ってやりたいのだ・・・」

親父の言葉を聞いて俺は

「任せろよ。あいつの手の及ばない所があるなら俺や龍神家、牧村家の人間でフォローする。あいつに絶対悲しい思いはさせないさ。」

そう言った後俺は親父に

「まあ、そんなわけだから、俺は親父の言葉に甘えさせてもらってあいつの顔見に行ってくるよ。その前にちょいと牧村家等も寄っておくがね。」

俺の言葉に親父は

「うむ、何かわかったらよろしく頼む。こちらも全力を尽くそう。」

俺はその言葉に頷いて道場を後にした。

そして家に行ってお袋に

「お袋ー、すまないが俺は牧村の家に行ってくる、ゆっくりできなくてごめんなー。」

そう伝えるとお袋も声は少し残念そうにしていたが

「わかったわ。気をつけていってらっしゃいー！」

お袋の返事を聞いた俺は家を後にし、牧村道場へ向けて足を運んだ。
そして、牧村道場についた俺は道場へと足を向け、扉を開いて
「ちはー。龍神龍也です。御頭首の牧村麗真(まきむられいま)さんはいらっしゃいますか？」
俺の声にざわつく道場内、そして俺の見知った3人が俺の所にやってきたのだった。
「まさか・・・龍也さんですか!?お久しぶりです!覚えてますか？瞬一です!」
「お久しぶりです。現継承者の祐次です。武者修行に行かれてから音沙汰なかったと聞いていましたが・・・」
「覚えてますか?浩也です。俺も龍也さんには会いたかったですよ。」
その3人を見て俺は懐かしい気持ちになりながら
「ああ、覚えてるとも、瞬坊、祐坊、浩坊。」
そう言うと3人は苦笑しながら
「懐かしい呼ばれ方ですが、もう坊って年じゃないですよ。」
「そうです。いつまでも子ども扱いはないんじゃないですか？」
「俺は、そう呼ばれても一向に構わないけどな。」
そう答える3人に俺は思わず吹き出しそうになるのをこらえていたのだがそこに頭首の麗真さんがやってきて柔らかな微笑をたたえながら

「やあ、龍也君。しばらくぶりだね。武者修行に行ったきり戻ってこないと聞いていたけど、珍しい事もあるものだね。」

その言葉に俺は苦笑しながら

「はは、手厳しいですね。実はこちらに戻ってきたのは親父から例の件の進展があったかどうかについてを確かめておこうと思いましてね。」

俺の言葉を聞くと同時に麗真さんから笑顔が消えうせ突如真剣な顔へと変貌した。

「やはり、その事で龍真（りゅうしん）さんは君を呼び戻したのか・・・来たまえ。今わかってる事を説明しよう。」

そう言って俺に奥へ来るよう促した麗真さんに俺はついていくのだった。

結果だけを聞けばそれほどは進展していなかった。

だが、一応の情報を仕入れて俺は道場を後にしようとしたのだが、道場を出るとき俺は瞬一君に呼び止められた。

「龍也さん、ちょっといいですか？」

俺はその声に振り向いて

「ん？どうした、瞬坊。」

そう返すと瞬一君は俺に

「家の親父から今回の件について伺っています。それで、龍也さんにお聞きしたいのですが、今の所どの程度の情報を聞いていますか？」

そう訊ねる瞬一君に俺はこれまで聞いてきた事を教えると

「なるほど・・・”焔”・・・ですか・・・今の”紅”ですね・・・紅なら、俺にも知り合いがいます。そいつからも情報を得るといいでしょう。それと今回の件に係わるかもしれない奴がいるんです。そいつの名前も教えておきますよ。」

俺は瞬一君に

「紅に知り合い？それに今回の件に係わるかもしれない奴？・・・ふむ・・・詳しく教えてもらえるかい？」

そう促すと、瞬一君は携帯を取り出しながら

「ちょっと待っててください。今電話してみます。話はそいつと連絡が取れ次第って事で。」

その言葉に俺は黙って頷いて電話の終了を待つのだった。

そして、電話を切った瞬一君は俺の方に向き直って

「連絡が取れました。今からそいつとの待ち合わせ場所へ向かいますから一緒に来てください。」

そう言ってくる瞬君の言葉に頷き、俺は彼の後について電話の主との待ち合わせ場所に出向く。

そして辿り着いた場所は喫茶店だった。

看板には”レゾン”の文字があった。

俺と瞬一君は店内へと足を踏み入れ、指定の場所へと歩いていく。

まだ相手は到着していないようだったが、俺達はそこに座り相手を待ちながらかるくやりとりをした。

「瞬坊、済まんな。足の具合はどうだ?慶一が迷惑かけた事、改めて謝らせてくれ。」

「いえ、俺はもうその事は気にしていませんから。ここだけの話ですがあいつには少し感謝してるんですよ、俺は弟達と違って武の才能は劣っている。だから自分が牧村流を継ぐ事が重荷だったんです。その重荷を慶一が取り払ってくれたのだから・・・結果的に足を壊しましたが内心ほっとしてるんですよ。怪我を負わされた俺が言うのもなんですけどね・・・」

「そうか、瞬坊も色々悩んでいたんだな・・・それでもあいつは自分を責めたろうな・・・自分のせいで瞬坊が武術家として再起不能になってしまったんじゃな・・・」

「ええ。あいつはずっとその事で自分を責めつづけていました。けどようやくあいつは自分を許す事ができたようです。最近俺達、親友を復活しましたからね。」

「そうか・・・それもやっぱりあいつの周りに出来た友人達の影響って訳か・・・」

「ええ。あの子達はいい子達ですよ。ちょっと前にこんな事がありまして・・・で、俺が手伝って情報をですね・・・というわけで見

事に解決する事ができたんです。あいつの為にそこまでしてくれる友人ですからね。本当にいい子達と出会えましたよあいつは。」
「なるほど・・・なら余計に、守ってやらないとな・・・」
「はい。俺もあの子達の悲しむ姿は見たくないですからね。」
お互いに頷きあってるいた時、ようやく待ち人がやってきたのだった。

「やあ、瞬君。急に僕を呼び出して何の用なんだい？」
その言葉に瞬一君は
「氷室、よく来てくれたな。実はお前に会わせたい人がいてな。そこに座ってる人だ。名前を・・・」
その言葉の先を俺が続けて
「龍神龍也だ。よろしく。君の名は？」
俺が答えると、氷室と呼ばれた少年は俺を一瞥して
「僕は氷室結城。龍神、と言ったね。あなたは、慶一君の関係者かなんかなのかな？」
その言葉に俺は頷いて
「ああ。俺は慶一の義兄だ。君も慶一の事は知ってると見える。」
俺の言葉に驚きの表情を見せた彼は

「慶一君の？まさか・・・瞬君それは確かなのかい？」

彼は瞬一君に確かめる為に聞くと瞬一君も頷いて

「ああ。彼と血は繋がっていないけど、龍也さんは慶一の義兄さ。そして龍神流の正当伝承者でもある。」

その言葉を聞いてさらに驚きの表情を見せる彼は俺に

「そ、それは確かなのかい？僕はてっきり彼が正当伝承者だと思っていたのだけど・・・」

その言葉に俺は頷き

「俺が武者修行から戻れなかった場合は君の言うとおりだったがな。まあ、色々事情があって戻って来たと言う訳だ。」

そう答える俺に氷室君は

「一つ、確かめさせて欲しい事がある。話はその後でということでいいかな？」

その言葉に俺は怪訝な表情で

「確かめたい事？一体何をだ？」

俺の言葉に氷室君は不敵に笑うと

「とりあえず表へいきましょう。僕に付き合ってもらうよ？」

その言葉に俺は心の中でやれやれと思いながら

「分かった。そうしなきゃ話が進まないと言うのなら付き合おう。だがその後はちゃんと話をさせてもらうからそのつもりでな？」

その様子をため息をつきながら見守っていた瞬一君だったが俺達の後に一緒について表に出てきたのだった。

氷室君は俺を見据えて

「あなたの実力を見せてください。僕は慶一君に示された力に心酔して彼の友人となった。あなたが正当伝承者でなおかつ慶一君の義兄であるならば僕を納得させる事ができるはず。この試し、受けてもらうよ？」

氷室のその言葉に俺は軽いため息を一つついて

「実力を示さないと話が出来ないというなら、やるしかないようだな。まあ、せいぜい、死なないようにはやってやる。手加減はするけど怪我したら許してくれな？」

そう言いながら俺は気を集中させて静かに構えを取る。

氷室ｓｉｄｅ

瞬君から呼び出され、待ち合わせ場所に行ってみると僕の知らない人と一緒にいる瞬君が待っていた。

彼に話を聞いてみると彼は慶一君の義兄さんであるという、さらには龍神流の正当伝承者であるとも。

確かに目の前にいる彼は慶一君と似た感じを受けた、だが、その実力を見せてもらわない限り僕は話をする気にはなれなかったので彼に実力を見せてもらうように言う。

そして今、静かに構えを取った彼を見て僕は慶一君と戦った時のあの恐怖の感じを思い出すのだった。

（す、すごい・・・あの時の慶一君からも今のような威圧感のような物を感じていたけど・・・目の前の彼から発せられる感覚はあの時の比じゃない・・・これは・・・本物だ・・・）

僕の精神は臆していなかったが、体は敏感に相手の力を感じ取っていたようだ。

自分の意志に反してどんどん動かなくなってくる体の状態に僕は焦りを感じていた。

だが、僕はそこで自分の中の勇気の全てを振り絞り

「・・・いくよ。これでも僕はこの辺を牛耳る紅のリーダーだ。半端な相手には負けるつもりはない！」

そう言って渾身で踏み込み、彼の顔面にパンチを叩き込みに行ったのだが間合いに入った瞬間に僕の意識が飛んだのだった。

龍也ｓｉｄｅ

相手が俺の気に飲まれ、萎縮しているのが見て取れたが、それでもひるまずに踏み込んでくる彼に俺はゆるやかに体を流し、急所に一

発指を突き入れると彼はそのまま意識を失い倒れふした。
それを確認すると俺は彼の元に歩み寄り、彼に活をいれて意識を復活させたのだった。
咳き込みながら意識を取り戻す彼は俺を見て
「い、今・・・何が・・・」
そう訊ねてきたので俺は
「君が踏み込むのとあわせて緩やかに体を動かして君の急所に指一本突き入れた。その衝撃で君の意識が飛んだのさ。尤もこれも龍神流にとっては初歩の技なんだがな。」
そう解説する俺に氷室君は驚愕の視線を向けていたがやがて
「ふふ。あなたの実力は分かりました。本物ですね、いやそれ以上だ。僕は彼より強い男はそうはいないと思っていたけど、世の中というものは本当に広いのだね・・・」
自嘲気味に笑う彼に俺は
「なあに。それでも俺の気に当てられながら踏み込んできた君は普通よりは上だよ。ただ、俺が、少々人のレベルを上回ってるがゆえにの事だ。俺に対し踏み込むまで出来た君は自分を誇っていいよ。」
その言葉に彼は困ったように笑いながら
「ふふ・・・つくづく化け物ですね、あなた達は・・・いいでしょ

う。あなたの話を聞かせてください。」

俺と瞬一君は笑って頷くと彼を連れて再び店内へと戻って行き、席についた俺達はようやく本題に入れたのだった。

「それで、龍也さん。僕に何が聞きたいんですか？」

実力差を見せ付けてからすっかり敬語で話すようになってしまった氷室君に俺は

「うん。実はね、俺はある犯罪組織を追っているんだ。その昔君が所属している今の名前に変わる前の”焔”というチームと共にその組織を一度は壊滅させたんだ。だが、その犯罪組織は完全に消滅してなかったんだよ。最近になってまたこの近辺を荒らしだしているとの事だ。」

俺の言う”焔”の名前に驚いた氷室君は

「あなたはどこでその名前を!?それじゃ先先代が話してくれた先代の言っていた潰した犯罪組織の事っていうのはその時の事だったのか・・・!?それじゃ先先代と共に協力した武術道場の連中っていうのは・・・龍神流？」

氷室君の言葉に瞬一君は

「それと、うちの牧村流もだ。その3勢力でもって当時の犯罪組織を潰したらしい。」

俺はさらに言葉を続けて

「その時に逃げ延びた当時の幹部だった男が組織を立ち上げ直したらしい。その男の名前についても今は調べているところだが、君はその事に関する情報を何かしらないか?例えばそれに係わってるらしい人間の名前とか。」

その言葉に氷室君はしばらく考え込んでいたのだがふいに

「その組織に関係してるかどうかはこちらも調べている所ですが、1人だけ心当たりがあります。」

その言葉に瞬一君も頷きながら

「俺もだ・・・おそらく俺達は同じ考えに行き着いてると思うがな・・・」

俺は2人に

「そいつの名前は?」

そう訊ねると2人は頷いて

「「成神・・・章・・・という男です。」」

俺はその名前をメモに取ると

「そいつはどんな奴なんだ?」

と2人に訊ねると2人はそれぞれに説明をしてくれた

「自分では手を汚さず、他人の手を利用して姑息な真似をする小物

ですね。」
「中学時代には慶一をボコる為に俺を拉致し、手出しの出来なくなった慶一をやはり自分の手は汚さず兵隊にやらせる姑息なやつです。俺の足もそいつのせいでなったようなものですし。」

その後は慶一に対してしかけようとした窃盗の濡れ衣を着せようとして失敗した話や、今現在も氷室君から逃げ回りつつ窃盗犯を操っている事も教えてくれた。

「なるほどな・・・まさか慶一が係わった奴が今それだけの重要な手がかりになろうとしてるとはね・・・」

俺が呟くと氷室君は更に

「これはここ最近入手した情報なのですが彼もまたその後ろに控えてる組織に利用されているだけらしいとの事です。彼が慶一君と接触し、その恨みを今でも抱えてる事を利用されたらしいと。」

そして瞬一君も

「こちらの情報ではそれを足がかりに俺達3勢力への恨みを晴らすべく動きはじめているらしいという事です。」

俺はそれを聞いてしばらく腕組みしながら考え込んでいたがふいに顔を上げると

「慶一と起こしたいざこざだけの問題じゃなくなってきてるな、これは・・・そして、それに係わる人間達が一同に揃い始めている。さらには、瞬坊や氷室君もまたしかり、か。」

俺の呟きを黙って聞いている二人に俺は

「これも運命なのかもしれない・・・慶一の、瞬坊の、氷室君の、そして・・・俺達龍神流の・・・」

俺の言葉に無言で頷く2人に俺は

「氷室君、瞬坊、これは俺達3勢力の問題だ。そして、今回でこの因縁を絶つ為に協力しあわないか?君達にとっても悪い話じゃないはずだ。」

そう氷室君に話を振ると彼も頷いて

「そうですね。自分もまた運命的なものを感じます。なら、この運命に決着をつけるためにも僕はあなた方と協力を共にしましょう。」

そして瞬一君も

「俺達牧村も忘れてもらっちゃ困るよ?戦うのなら俺達が揃わなきゃ、だぞ?」

俺もそれに頷いて

「ああ、3勢力すべてでこの運命と戦わなきゃ終わらない。俺もそう思う。氷室君君に頼みがある。」

俺の言葉に氷室君は俺を見て

「頼み、ですか?」

そう聞いてきたので俺は彼に

「その前に今の慶一の周りにいる人間の事を知ってるか？」

そう聞くと彼は頷いて

「はい。とても魅力的な子達が居ますよ。」

俺はその答えを聞いた後

「俺達の方でも人員は出すけど、君らの方からも彼女らを守る兵隊を貸して欲しい。万が一にでも慶一を巻き込みたくないのもあるが、それ以上に彼女らに何かあることで慶一に悲しい思いをさせたくないからな。」

俺の答えに驚きの表情で俺を見ている氷室君だったが

「義弟さん思いなんですね、龍也さんは。心配しないで下さい。僕もそのつもりですから。彼とは友人ですしね。あの子らの悲しむ顔は僕も見たくない所です。」

その答えを聞いて俺はほっと胸をなでおろすと

「すまないな。その代わり戦う時となったら俺は君達の兵隊にも極力手出しはさせないよ。それを約束しよう。龍神流の正当伝承者としてね。」

俺の言葉に氷室君は笑って

「ふふ。頼りにしてますよ？龍也さん。では僕はそろそろ彼女らを

守る兵隊の手配と共に更なる情報収集にあたりますので。」

そして瞬一君も

「俺ももっと情報を集める為に色々回ってみるつもりです。」

俺は2人に頷き返すと

「わかった。俺も色々あたるつもりだからよろしく頼む。俺はこれから慶一の所へ行って来るから何かあったら連絡をよこしてくれ。勝負はこれから1年間の間だ。それまでに決着をつける。だからみんな。必ずやつらを潰そう。」

俺の言葉に2人とも力強く頷いて俺達3人は店を出たのだった。

2人と別れ、俺は親父に教わった住所を頼りに昔の慶一の本当の両親が住んでいた家へと向かう。

慶一の家へ向かいながら俺は

（この一件において俺は誰も悲しませないで戦おう。そして慶一には幸せで居て欲しいと思うから俺はあいつの為に出来る限りの事をしよう。もうあいつは幸せになってもいいんだからな・・・全てを被るのは俺だけでいいのだから・・・それが・・・正当伝承者である俺の役目だからな・・・）

そう考えながら歩き、俺は慶一の家の前についた。

そして家を見上げながら俺は

（ここが慶一の本当の両親が住んでいた家か・・・この場所も・・・俺が守らなきゃな・・・）

そう考えている時後ろから俺に声をかけてくる者がいた。

「えーと・・・この家に何か御用ですか？」

その声に俺は振り向き声の主に

「いや、実は俺の親父からここに俺の義弟が住んでいるって聞いてきたんだが・・・って、お前、慶一か？」

そして、俺達は再会した。

舞い戻る旋律の裏側、その1～義兄の決意～（後書き）

次回から本編が進みます。

話の中でてきた犯罪者のリーダー神崎流（かんざきながれ）について。

彼は当時の3勢力により警察に捕まり服役しますが、その途中に病に倒れ現在は亡くなっています。

そして、牧村流道場頭首の名前を改めて公開

牧村麗真（まきむられいま）

瞬一、祐次、浩也の父親で牧村流の頭首。彼も瞬一君が怪我をした時は龍神流に怒鳴り込みに行くほどでしたが瞬一君の素質を見抜いていたため少し複雑でもあったようです。

今は3人の中で尤も素質のある祐次君に期待を寄せているといったところです。

友情の旋律～龍兄の思い、みんなの思い、そして慶一の思い～

龍兄の突然の帰還から一夜明け、俺の家に泊まった龍兄は昨晩の俺との約束のためにすでに起きていたのだった。

いつもよりも早い時間に起きた俺達は久々に2人で朝の稽古をするために家を出た。

そして向かった先は十分なスペースのある鷹宮神社の敷地だった。

「へえ?慶一、こんな場所を知ってたとはな。確かにここなら朝の稽古にはいいかもだ。」

その言葉に俺も笑いながら

「はは。ここには何度か来た事があったからね。それにうちの近所には広い場所は中々ないからさ。それと、龍兄、ちょっと待っててくれないか?」

俺の説明に龍兄も感心しつつ周りを見渡していた。

俺は朝の稽古を始める前に朝早くから神社内の掃除をしていたただおさんを見つけ、鍛錬の為の敷地の使用許可をもらうために挨拶にいった。

「おはようございます、ただおさん。ちょっとお願いがあるのですが・・・」

俺の声に気付いたただおさんはいつものようににこにことしながら

「やあ、森村君おはよう。今日はまた更に早起きのようだね。ところで、お願いというのはなんだい？」

そんなただおさんに俺は恐縮しつつ

「実は俺の義兄が久々に戻ってきてましてね。義兄との武術鍛錬の為に朝ちょっと敷地をお借りしたいと思いまして。それをお願いするために声をかけさていただいた次第です。」

俺の言葉に龍兄も俺の側に来て

「突然お伺いしてこのような申し出で恐縮なのですがご許可願えますでしょうか？」

その言葉にただおさんも感心しながら

「ほう、君が森村君の兄さんなのか。兄さんもまた礼儀正しい人のようだね。うちの敷地でよければ使ってくれてかまわないよ。それに森村君にはうちの娘達も世話になっている事だしね。」

ただおさんのその言葉に驚いた龍兄は

「え？あなたの娘さんを慶一は知っているんですか？」

その質問にただおさんはにっこりと笑いながら

「彼は夏の旅行の時においても娘の命を救ってもらっている恩人でもあるからね。ああ、申し遅れたね。私は柊ただお、この神社の神主をやっているんだよ、よろしく。そして、娘の名前は柊かがみと

つかさというんだよ。森村君とは同じ学校に通うよき友人なのでね。」

その名前に龍兄は昨日あった2人の事を思い出して

「かがみちゃんとつかさちゃんのお父さんだったんですか。どうりで・・・それにしても、中々由緒ある神社みたいですよね?ここは。」

その言葉に気分を良くしたただおさんは

「県下ではそれなりに古い歴史を持つ所ではあるかな。しかし、君のような若者にもそう言ってもらえるのならまだまだ家の神社も捨てた物ではないようだ。」

その言葉に龍兄も

「何をおっしゃいます。十分に素晴らしい所ですよ。これからも時折こちらに来させてもらってもいいですかね?」

その言葉にただおさんも頷いて

「家のようなところでよければいつでもどうぞ。おっと、少ない時間なのに邪魔をしちゃったね。それじゃ、鍛錬がんばりなさい。」

その言葉に俺と龍兄は

「「ありがとうございます。」」

そうお礼を言った後2人して朝の稽古を始めるのだった。

「よーし、まずは基本から復習していくぞ？構えろ慶一。」

龍兄の言葉に頷いて俺は静かに構えを取る、そして基本の型から体を動かしていくのだった。

ただおｓｉｄｅ

今朝もいつもどおりに朝のお勤めを果たしていたのだが、森村君達の来訪が会ったので驚いた。

何でも彼らは自分らのやっている武術の稽古のために家の敷地を貸して欲しいとの事、彼のお兄さんが久々に戻ってきたのだという事を森村君が教えてくれた。

彼の兄もまた流石に武術を修める人間だけに礼儀のできた人間だと思えたので私は彼らに鍛錬の為の敷地の使用許可をだしたのだった。

そして朝のお勤めを終えた私は家に戻ると

「あら、おかえりなさい、あなた。にこにことしてるけど何かよい事でもありましたか？」

私をでむかえてくれたみきが私にそう聞いてきたので私は朝の出来事をみきに話すと

「まあ、森村君にお兄さんが・・・私もちょっと見てこようかしら？」

そう言っていたので私は笑いながら

「ははは、それはいいが、あまり彼らの邪魔にならないようにな。ところで朝食の準備はできてるかい？」

その言葉にみきも頷いて

「ええ、もうすませてあるわ。そろそろいのりやかがみも起きてくる頃でしょうし、私はちょっと様子を見にいってみるわね。」

そう私に告げたみきは神社の方へ彼らの様子を見に出て行くのだった。

そして、そのすぐ後にいのりとかがみが起きてきて

「おはよう、お父さん。なにやらお母さんとの話し声聞こえてたけど、何かあったの？」

「おはよー・・・ああ、眠いわね・・・」

かがみの質問に私は

「うん。実は今朝森村君とそのお兄さんが武術の鍛錬の為に敷地を貸して欲しいってやってきてね。今はその稽古をしてるはずだ。お母さんも興味を持ったみたいでね、彼らを見に出て行ったところなんだよ。」

私の言葉にかがみは驚きの表情で

「え？龍也さんが慶一君と一緒に来てるの？ちょっと私も様子見にいってくるね。」

そう言って慌てて家を飛び出すかがみを見送りつついのりが私に

「森村君にお兄さん？ほんとなの？お父さん。」

そう私に尋ねてくるいのりに私は頷きながら

「うん。雰囲気も礼儀正しさも彼にそっくりだった。中々良さそうな人だったよ。っていのり？」

私がそう言い終わると同時にいのりも慌ててかがみの後を追って家を飛び出したのだった。

その様子を軽いため息を一つつきながら見送った私は朝食を取る為にキッチンへと向かったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

龍兄と共に基本の型からの鍛錬をする。

基本をチェックしながら龍兄の叱責が飛ぶのを懐かしく思いつつ、鍛錬に集中してやっていった。

「次！弐の型！はじめ！！」

「はい！！はああっ！！」

そして弐の型の鍛錬に進む俺だったが俺の甘い部分に龍兄の叱責が入った。

「慶一！まだ動きに無駄があるぞ！小さく素早くだ！！」

「はい！！」

そうこうしながら鍛錬してるうちに気付いたらみきさんとかがみといのりさんが近くに来ていた事に俺達は集中していたあまりに気付かなかった。

かがみｓｉｄｅ

お父さんから神社に慶一くんと龍也さんが来てる事を知った私は2人の様子を見に行く為に家を飛び出してきたのだが、そこにお母さんが先に来て鍛錬の様子をにこにこしながら見守ってるのを見つけて私はお母さんの所に駆け寄って声をかけた。

「おはよう、お母さん。2人ともやってるわねー。」

私の声に気付いたお母さんは私に

「あら、かがみ。おはよう。ええ、中々迫力あるわよ?あっちの子が森村君のお兄さんかしら?」

というお母さんの言葉に私はお母さんの指差す方を見て

「うん。そうよ。あの人が慶一くんの義兄さんで龍神龍也さん。慶一くんとは血のつながりはないんだけど彼の事を実の弟のように思ってるのよね。」

その言葉にお母さんも驚きながら

「そうだったんだ・・・彼にもまた複雑な事情があるのね・・・」

そう言いながらも再び私とお母さんは2人の鍛錬に目を向けたのだ

がそこに少し遅れていのり姉さんがやって来て

「おはよう、かがみ、お母さん。あの人が森村君のお兄さん？」

という姉さんの質問に私は先ほどお母さんにしたのと同じ説明をすると

「へえー・・・でも、優しそうな人よね。それに弟思いなんだ・・・」

その姉さんの言葉に私も頷いて

「あの兄弟を見ていると血のつながりだけで絆があるわけじゃないってわかるわよね・・・」

その言葉にお母さんと姉さんも頷いていた。

そして少しして彼らの鍛錬も一段落したようで2人とも一息ついていたところに私達は近づいて声をかけたのだった。

「おはよう、森村君。それと龍也さんでいいのよね？」

「おはよう、慶一くん、龍也さん。朝からがんばってるわね。」

「おはよう、森村君。それとお兄さんもお疲れ様。」

その言葉に2人とも驚きながら私達の方を向くのだった。

慶一ｓｉｄｅ

鍛錬も1段落して体を休めていると俺達に声をかけてくる人達がいたのでそっちを向くとそこにはみきさんとかがみ、いのりさんの3

人がいたのだった。

俺は3人に

「おはようございます、みきさん。それにかがみにいのりさんも。鍛錬の為にちょっと敷地をお借りしています。」

そう声をかけると龍兄も俺に

「おい、慶一。この人等もお前の知り合いなのか？」

そう聞いてきたので俺は頷きながら

「ああ。この人はさっきのただおさんの奥さんとかがみのお姉さんだよ。他にもう1人お姉さんがいるんだけど今日はこの場にはいないみたいだな。」

そう説明するとみきさんといのりさんが自己紹介を始めたのだった。

「初めまして。龍神龍也さんでよかったかしら。私は柊みき。そこのかがみといのりの母親です。」

「初めましてー。私はかがみの姉のいのりです。森村君のお兄さんだそうで、森村君同様いい男ねー。」

みきさんはともかくいのりさんの言葉に龍兄も苦笑気味に

「みきさんといのりさん、ですか。家の弟がお世話になっています。龍神龍也です。それにしてもみきさんがかがみちゃん達のお母さんだとは・・・見た目にはそう見えませんね。それといのりさんでしたか？そう言ってもらえるのは嬉しいですが何だか照れますねえ・・

・」

そう言いつつも満更でもなさそうな龍兄に俺も軽いため息をついていたのだった。

龍兄の挨拶に2人とも感心しながら

「森村君同様、礼儀正しい子ね。龍也さんは今おいくつなのかしら？」

「森村君とは見た目的にはそう離れているようには見えないけど・・・」

そう言ってくる2人に龍兄は

「ありがとうございます。俺は今年２４歳になります。それを言ったら俺もみきさんが４人の子持ちの母親にはとても見えませんよ。」

その言葉に少し驚きの表情のみきさんと目を輝かせるいのりさんは

「まあ、あなたも年相応には見えないわ。見た目少し幼さも見える感じだし。」

「２４歳!?そっかー、私と近いのね。うーん・・・」

いのりさんの視線に照れる龍兄は

「はは、恐縮です。それといのりさんと年近いんですか？自分の方が上なのかな？」

その言葉に頷くいのりさんは

「一つ上ね。そっかー・・・これは狙ってみるべきかな・・・」

そう言っていたが最後の方の言葉はかなり小声だったので聞き取る事はできなかった。

「でも、2人とも中々かっこ良かったわよ?でも龍也さんと慶一くんとじゃ大分違って見えたのは驚きだったけど・・・」

かがみは俺達2人の鍛錬の様子を見てそう感想を言ってくれたが俺は

「そりゃ当然さ。龍兄は龍神流の正当伝承者だからな。俺みたいに技の全てを教わっていないのとは比べるべくもないさ。」

俺の言葉にかがみは複雑そうな表情をしてみきさんは感心したような顔でいのりさんは更に目をかがやかせているのだった。

「大した物ね。正当伝承者か・・・龍也さんから出ていた雰囲気はその貫禄でもあるのねえ・・・」

「正当伝承者・・・玉の輿・・・やっぱり狙ってみようか・・・」

やっぱり最後のいのりさんの最後の言葉を聞き取れなかったが、遠目に何事かを画策してるっぽいのは見て取れた。

「確かに慶一は正当伝承者ではありませんが、こいつもなかなかの素質の持ち主ですよ。」

という龍兄がフォローしてくれたが俺はその言葉にもただただ苦笑を浮かべていたのだった。

その後色々と話をした後みきさんに一緒に朝食でもどうかと誘われ

たのだが、先に済ませて来ていたので今回は丁寧にお断りさせてもらったのだった。

そして鍛錬の帰り道・・・・・・

「かがみちゃんのお父さんも大変だな。女5人に男1人じゃさ。」

龍兄は何となく感じた感想を口にしていた。

「まあね、見る人によっちゃあれを勝ち組みと呼ぶのもいるのかもしれないけどな・・・」

そんな俺の答えに龍兄は笑いながら

「でも、いい人達みたいじゃないか。よかったな、慶一。俺はずっと俺が居なくなってからのお前の事を心配していたからな。あの人達を見ればその心配もなかったと改めて思うよ。」

その言葉に俺は嬉しさを感じながら

「うん。俺もそう思うよ。龍兄、俺のこと気にかけてくれていてありがとう。」

俺の言葉に龍兄は照れながら

「よせよ、照れくさい。ま、お前は俺の大切な義弟だからな。お前を気にかけるのは兄として当然の事さ。」

そんな龍兄の言葉を聞いて俺はもう一度「ありがとう」と伝えると龍兄は後頭部を掻いていた。

自宅に戻り、学校に行く準備をして家を出る頃、龍兄は俺に

「今日も留守番しててやるから心配せずに学校へ行って来い。」

そう言ってくれたので俺は家を龍兄に任せて学校へと向かった。

「おはよう。」

そう挨拶しながら教室に入ると、俺の声に気付いたあやのとみさおが

「おはよう、慶ちゃん。今日も元気そうね。」
「おはよ、慶一。何だか柊が元気ねえんだよなー。」
「おはよう。2人も今日は元気そうだ。ん?」

2人に挨拶を返しつつ俺はかがみの方をちらりと見るとかがみはなにやら疲れたような顔で席についているのが見えたので俺はかがみの所に行って声をかけてみた。

「おはよ、かがみ。朝にあったときは元気そうに見えたんだが、なんかあったか?」

俺の声に疲れたような表情を向けながら

「おはよ、慶一くん。実はあの後さ、家に戻った時にまつり姉さんが起きててさ、お母さんが龍也さんが来てる事をまつり姉さんに教えたらしいんだけどその事で姉さんが私に「なんで私を呼ばなかったんだ」と文句言ってきてさ、そのまま言い合いに・・・」

俺はその様子を想像してため息を一つつくと

「なるほどな・・・かがみ、まつりさんに言っておいてくれよ。今度龍兄連れてくからってさ。そうすりゃお前の顔も立つだろ?」

俺の言葉にかがみは少し驚いたような顔で

「いいの?龍也さんに迷惑だったりしない?」

かがみの言葉に俺は否定するように手を振って

「大丈夫、大丈夫。こっちに戻って来てる間は融通きくから大丈夫さ。龍兄もああ見えて意外と付き合いいいからね。」

俺の言葉にほっとしたような顔になりながら

「そっか。ありがとう、なんかごめんね?姉さんのせいで手間かけさせちゃってさ。」

そんなかがみに俺は

「気にするな。俺だって柊家の人達にも大分世話になってるんだしこの位はしないとな。」

そんな俺の言葉にかがみもようやく笑顔を見せながら頷いてくれたのだった。

「龍也さんて慶ちゃんのお兄さんよね?昨日のバイトの時に聞いた人。」

あやのが俺にそう訊ねてきたので俺もうなずいて

「そうだよ。今はしばらく俺の家に泊まってくらしいからまあ、見に来たければきてもいいよ。」

そんな俺の言葉にかがみは「見世物かよ！！」といつもの切れのあるツッコミを披露していた。

かがみの突っ込みに苦笑しつつ

「まあ、そんなんでも龍兄は気にしないから大丈夫だけどな。」

俺の言葉にみさおは

「なんだかある意味すげー兄ちゃんだな。」

そう言うみさおに俺は笑いながら

「まあ、色んな意味でね。」

そう答えるのだった。

そしてその日の昼休み、俺はみんなと共にアニ研部室に集まりいつものように昼食を取っていた。

もはやこの時期になると屋上へ行くのは寒すぎるという判断と、ここなら俺達だけで食事できるので気兼ねがなくていいというのもあったのだが。

そんな中、今日は今朝の柊家においての話題で盛り上がっていた。

「へぇー？かがみの家で2人して鍛錬かー。私も見てみたかったかも。」

なんとなく惜しい物を見逃したかのように残念そうに言うこなた。

「まあ、あんたが慶一くん達の来る時間に起きて来れれば見れるんじゃない？」

という強烈なツッコミをいれるかがみにこなたは軽くむくれていた。

「あはは、わたしはまだ眠ってたからけいちゃん達が来てたことにも気付かなかったよ～。」

のほほんと言うつかさにみゆきは

「それも・・・つかささんらしいですね。私は家が遠すぎますから駆けつけるのも無理ですね・・・」

そう言いつつ少し落ち込んでいたのをみたあやのが

「高良ちゃん。慶ちゃんにお願いして鍛錬の様子をみんなが見れる時に見せてもらうようにしたらいいかもよ？大丈夫よね？慶ちゃん。」

そう言いながら俺に話を振ってきたので俺は

「まあ、龍兄に言えば融通利かせてくれるとは思うけどね。そんなに見たい？鍛錬の様子。」

俺の言葉に一番にみさおが反応して

「みてえなー。なんか凄そうだもんなー。」

そういうみさおにさらにこうも

「先輩のお兄さんを見てみたいってのもありますけどね、私は。」

その言葉にやまとも頷きながら

「そうね。私もどんな人か会ってみたいわ。先輩と雰囲気が似てるってつかさ先輩もいってたわよね？」

その言葉につかさも頷いて

「うん。あの時は遠目から見ただけだったんだけどけいちゃんと一瞬見間違えそうになった位だよ～。」

そう言うつかさにかがみは

「慶一くんとみ間違えそうになったのはあんたくらいよ。とはいえ、似てるといえば似てるわね。」

そんなかがみの言葉にみんなも興味深々で居たのだが、その時部室のドアがわずかに開いていたことに気付くものが居なかったのだが、ふいに俺達とは別の声がかかったのだった。

「似ているのは俺じゃないよ？慶一が俺に似ているんだよ。」

その言葉にかがみは

「ああ、そういう事なのね・・・って、龍也さん!?」

かがみのツッコミに俺達は一同に声の方を振り向くとそこには陵桜の制服に身を包んだ龍兄がにこにこしながら立っていたのだった。

「た、龍兄!何やってるんだよこんなところで!」

俺とかがみの言葉にそこに立つ人物が先ほど噂をしていた龍也さんである事がわかり、みんなして驚いていた。

「あの人が慶一君のお兄さん?龍也さんなんだ?」

「わあ!龍也さんだ~。でもどうしてここにいるの?」

「そ、それ以前に慶一さんのおっしゃられた事が真実なら龍也さんは確か２４歳のはずですよね?それにその制服は・・・」

「え!?龍也さんてそんなに年上だったの?その学生服の似合い方見てるとそうは見えないわ。」

「へー・・・確かに慶一に似てるなー・・・」

「で、でも、血は繋がってないんですよね?」

「まるでもう１人の先輩と会ったかのようね・・・」

口々にそう言うみんなに龍兄はのほほんと笑いながら

「みなさん、初めまして。俺は慶一の兄、龍神龍也です。皆さん、慶一が日頃色々とお世話になっています。兄としてお礼を言わせてください。」

その言葉にみんなも慌てて自己紹介をするのだった。

「あ、えと、泉こなたです。慶一君にはお世話になってます。」

「高良みゆきです。慶一さんとは仲良くさせていただいています。」

「峰岸あやのです。私も慶ちゃんには色々良くしてもらいました。」
「日下部みさおだ。私も慶一とは友達だぜー？」
「八坂こうです。先輩とは中学時代からの付き合いです。」
「永森やまとです。こうと共に中学時代の後輩です。」

その後に龍兄が補足をいれて

「そして、柊かがみちゃんとつかさちゃん、だよね。そっかー君らが慶一が守りたい者達って事か。」

その龍兄の言葉を聞いた瞬間俺も含めてみんなが一斉に顔を真っ赤にして照れていた。

「慶一、俺がここにいるのは、ちょいと学校へ侵入させてもらったからだよ。それと共に、慶一が守りたい者達の顔を拝んでおきたかったっていうのもあるけどな。」

その言葉に俺は思わず龍兄に

「何で、そんな事を？」

そう訊ねると龍兄は笑って

「お前の守ろうとする者達を俺も守りたいと思うからだ。その為には守るべき者をその姿を把握しておく必要があるしな。」

俺は少し呆れつつも俺が守りたいと思う人を龍兄も守りたいというその気持ちが嬉しかった。

「龍兄の気持はわかったけど、あんまり無理するなよ。いくら龍兄

が陵桜の卒業生だからといってもその格好はやりすぎだと思うしな。
まるでそれじゃなんちゃって高校生じゃないか。」

照れ隠しに言った一言に龍兄は慌てながら

「悪かったな！それでもあんまり違和感ないだろ？」

それでも余裕そうにそう言う俺は呆れたようにため息をついていた
がみんなは龍兄が陵桜の卒業生である事、そして制服姿にそんなに
違和感がない事に驚いていた。

「えー・・・とても年相応には見えない・・・」
「というか、その姿で高校生と言っても通用するわよね・・・」
「あはは、どんだけ～・・・」
「とても変わった方なのですね・・・」
「流石にこれは私も驚きね・・・」
「確かに高校生にしかみえねー・・・」
「なんだか、それでいてかっこいいのは反則じゃないですか・・・
？」
「先輩以上の凄い人、ね・・・」

みんな苦笑しながら見ていたのだった。

龍兄はそんなみんなの言葉に頭にハテナマークを飛ばしながら不思
議そうな顔で見ていたがふいに

「えっと、泉さんと高良さんだっけ？少し前に慶一の周りで起きた
一件では慶一の為に力を尽くしてくれたそうだね。俺からも改めて
礼を言わせてくれ。」

その突然の言葉にこなたとみゆきは

「い、いえ。そもそも私達が慶一君を助けたくてやった事ですから。」

「私も、ただそれだけでしたから、改まってお礼を言われると恐縮します・・・」

顔を赤らめながらそう龍兄に返事をしていた。

そんなこなた達を見て龍兄は柔らかく微笑んでいたが、さらにこうとやまとに

「こうちゃん、やまとちゃん。中学時代は慶一の親友としてよくあいつを見捨てないでいてくれた。こちらも礼を言いたい。」

その言葉にこうとやまとは泣きそうな顔になって

「そんな事ないです！先輩が私達を、友情が壊れそうになっていた私達を救ってくれたんです。見捨てるなんてとんでもないです。先輩には返していない恩がたくさんありますから・・・」

「そうよ。そんな先輩だったから私達は一緒にいたのよ?私達の恩人を本当の親友を見捨てるなんて絶対できないから・・・」

俺は2人のその言葉に中学時代の頃を思い出して泣きそうになったがぐっとこらえて2人を見つめた。

「やっぱりいい子達だ。それに、日下部さん、峰岸さん。こいつの友達でいてくれてありがとう。できればこれからも一緒にいてやって欲しい。こいつはもう、1人きりでは居させたくはないからね。」

その言葉にみさおとあやのも頷きながら

「私達こそ慶ちゃんにはこれからも友達として一緒に居て欲しいって思ってるわ。大丈夫よ？お兄さん。私達は慶ちゃんを1人にはしないから。」

「そうだぜ？こいつは私らの為に今までもがんばってくれてきたんだ。私はこいつのいいところをたくさん知ったからな。そんないい奴とはこれからも一緒にいてやるつもりだぜ？」

その言葉に更に胸が詰まる思いをしながらみさおとあやのを見つめる。

「そして、かがみちゃん、つかさちゃん。何か困った事があればこいつに頼ってやってくれ。こいつはお人好しだから頼まれれば嫌とは言えない奴だからな。特に友達の頼みはさ。それにこいつはそうされる事を嬉しく思う奴だからね。」

その言葉にかがみとつかさも頷いて

「慶一くんの性格は最近よくわかってきたわ。それに私も慶一くんだから安心して色々相談できるんだもの。慶一くんの優しさを私は知っているから・・・」

「わたしもけいちゃんには頼りきりだけど、いつでもわたし達を支えてくれたけいちゃんの事大好きだから、また迷惑かけちゃうかもしれないけど、けいちゃんの思いに応えてあげたいって思ってるから。これからも頼らせてね？」

その言葉がとどめだった。

俺はみんなの思いを改めて知り、そして俺の為に一緒に居てくれよ

うとするみんなの気持にその涙を止めることができなかった。

そんな俺を龍兄は優しく見つめていたのだが、ふいに時計をみた龍兄は俺に

「慶一、そろそろ時間みたいだ。俺は先に帰る。がんばれよ?慶一。お前を思ってくれるその子達を悲しませるな。そして、守れ!できるよな?お前が守りたいと思う人達なんだから。俺も支えてやる。これから何が起ころうとも、お前はこの子らを守るという事だけは忘れるな。そして、友達をこれからも大切にしてやれ、いいな?慶一。」

その龍兄の言葉に俺は力強く頷いて

「わかってる。俺は必ずみんなを守りつづけてみせるよ。みんなの思いに応えるためにも。」

その言葉に満足気に頷いた龍兄は再びこっそりと部室を出て行くのだった。

龍兄の真意は未だにわからずじまいだが、俺は龍兄の言うように俺の仲間を俺を慕ってくれる者達をこれから何が起ころうとも守りつづける事を心に誓った。

俺が越えるべき戦いがまだ残っている事を改めて認識しながら、そして俺を笑顔で見つめるみんなを見ながら俺はますますその思いを強くするのだった。

きっかけの旋律～龍也の存在とひよりの苦悩～

龍兄の思い、そしてみんな思いを改めて知り、俺もまたみんなへの思いを新たにしてその日の授業を終えた俺はみんなと待ちあわせてから学校を後にしていた。

今日はバイトも休みという事もあり、俺はみんなと共に下校しつつ、さっきの龍兄の訪問等に関してやりとりをしていた。

「それにしても、まさか龍也さんがうちの学校の卒業生なんてねー。」

「制服を持ってる理由は納得できたけどそれが違和感ない理由がなっとくできん・・・」

「でも、制服着てる姿見た時はやっぱりけいちゃんに似てるな、って思えたよ～？」

「そういえば龍也さんは”俺が慶一に似てるんじゃない、慶一が俺に似てるんだ”とおっしゃっていましたよね？あれはどういう事なんでしょう？」

最後のみゆきの質問に俺は

「ああ、それは。俺が龍兄に追いつきたいと思うから龍兄の真似をしてきたからって事かな。だから俺は龍兄に雰囲気も似るようになってきたのかもしれないな。嬉しい事だけどさ。少しでも目標としてる人に近づけたんだしな。」

そう答えるとあやのやみさおも

「そっか、慶ちゃんは龍也さんを目標にしてきたんだもんね。」

「分かる気がするなー。なんかかっこいい、って思えたもんな。」

何となく納得してる感じだったが、俺は

「かっこいいと思える、じゃなくて本当にかっこいいんだよな、龍兄はさ。境遇は俺と同じだった。けど、俺みたいに自分に負けなかった。弱くなかった。龍兄は強かったんだ、本当に・・・」

そう言って龍兄への素直な感想を言うと、こうとやまとはそんな俺に

「先輩の過去の事知りましたが、それでも立ち直った先輩は弱くなんかないですよ。」

「そうよ。そんな境遇にあって荒れても最後には自分の罪すら受け入れて私達と出会い、今の先輩になれたんじゃない。普通の人が挫折してしまうような状況を跳ね返した先輩はやっぱり強いと思うわ。」

そう言ってくれたのを俺は照れながら

「それは、お前らが俺を救ってくれたからだ。お前ら2人に会えなかったら俺はずっと一人きりで中学時代を過ごしたろうさ・・・心から笑える自分になれなかったろうさ・・・結局俺はみんなに頼ったんだ・・・」

2人にそう言いつつもどこかに他人に頼る弱さを感じた俺は今の自分の状況を口にするとかがみ達は

「いいじゃない、それでも。龍也さんが独りでも強いのだとしても関係ないわ。なら慶一くんは私達を頼る事で強くなっていけばいいのよ。あくまでも龍也さんは龍也さん。慶一くんは慶一くんなんだ

から。」
「そうそう。慶一君は慶一君のままで強くなればいいじゃん。それが他人に頼る事だったとしてもそれで君が強くなるならそんなの些細な事だよ。」
「わたしは今のけいちゃんだって強いって思うよ～?」
「そうですね。慶一さんは私達を守ってくれる強さを見せてくれました。その強さは慶一さんの心の強さでもあると私は思います。」
「慶ちゃんが強くなれる手助けができるのなら、私は慶ちゃんのお友達でいれる事を嬉しく思うわ。」
「それにお前は私らにだって勇気や力をくれたぜ?勉強の面で知恵も、だけどな。」

そんな風に俺に言ってくれる言葉を俺はしみじみ噛み締めながら

「龍兄は龍兄、俺は俺、か・・・」

そう言いながらあくまでも俺は俺なのだと実感するとそこにこうとやまとも

「そうですよ先輩。先輩はあくまでも先輩でいいんです。龍也さんを真似たい気持もわからなくはないですけど先輩も自分自身にもっと自信を持っていいと思いますよ?」
「そうね。私もそう思うわ。中学時代から見てきた先輩は本当に強い人だと思った。あの時どれだけの逆境があったか・・・私とこうはそれを知っているのよ?あの嫌な思いをした2年間を・・・それを乗り切ってきた先輩なんだからやっぱり先輩も強い人なのよ。だから自信を持って?」

今までの俺を見てきた感想と気持を言ってくれたのだった。

「ありがとな。こう、やまと、それに、みんな・・・これからも俺はみんなを頼らせてもらう。それが・・・俺が俺として強くなる方法なんだと分かったから・・・」

俺がその事を改めて決意し、みんなにそう伝えるとみんなもにっこり笑って頷いてくれたのだった。

そこでふと、こなたが何かを思い出したように

「そういえばさ。慶一君は龍也さんを真似したいと思ったって言ってたよね？人としてもそうだけど武術においても、ってさ。」

その言葉に頷いて俺は

「ああ。そうだけど、それがどうかしたのか？」

こなたにそう訊ねるとこなたは

「うん。慶一君が陵桜に来た理由もそれなのかな？って思ってさ。」

その言葉にほかのみんなも”はっ”としたような表情になっていた。

俺はこなたの言葉に

「こなたの思った通りさ。俺は龍兄を追うあまりに行くべき学校も真似たいとまで思っていた。だからここに来る事は龍兄がここに通ってる時から決めてた事だったんだよ。」

その言葉にこうとやまとは

「そ、そういう経緯があったんですか。先輩が陵桜を受けようと思ったのは・・・私は親から言われていた事ももありましたが、それ以外に色々探してみましたが結局ここがしっくりいったので決めたんですけどね。」

「私は最初は聖フィオリナへ行くつもりでした。けど先輩と知り合ってそして、なぜか陵桜も受験してみようと思って、ここに合格できたのをきっかけにフィオリナを蹴る事になったわ。そして私は陵桜を選んだ・・・」

こうたちの言葉を聞いてかがみたちは

「私は自分の進路に進んでいく為に陵桜は最適だと思えたっていうのもあるけど、日下部や峰岸、そしてつかさも同じ所を受けてみたい、がんばってみたいっていうのもあったからみんなでがんばったのよ。そしてその結果私達は全員合格できたわ。」

「わたしはおねえちゃんと一緒にいたい、って思ったからがんばったの。」

「私も自分の進路の為に陵桜を選んだような物ですね・・・ですからそこにとりたてて深い意味はありませんでした。」

「私は柊ちゃんが言った通りね。みんなでがんばってみよう、って事から受けた感じ。それでも私とみさちゃんと柊ちゃんとは付き合い長かったから。」

「私は最初はあんまし深く考えてなかったんだよなー。柊とも長く付き合ってきたから高校も一緒になれたらな、って感じだったんだ。でもそのうちにその気持は本物になってさ。それこそ一生懸命勉強したってヴァ。んで今があるんだけどな。」

そして最後にこなたが

「私はおとーさんと賭けしてたんだよね。受験する高校のランクに

よって買って貰う物をさ。それでその条件の中で一番いいものだったのが陵桜合格できた時の物だったんだよねー。私はそれが目標だっただけだったんだけど。」

うんうんと頷くこなたにみんなは呆れながら見ていたのだがこなたは更に言葉を続けて

「陵桜を受ける理由ってさ。今聞いただけでも様々あったけど結局みんながここを目指したからここにいるんだよね？そしてこうして出会ってみんな仲良くなった訳だよね。」

その言葉にみんなも大きく頷く。

それを確認した後こなたは更に言葉を続ける。

「でもさ、私思ったんだ。今の私達の関係ってさ。慶一君がつないでくれたものじゃん？だからもし慶一君が陵桜に来ていなかったら今の私達ってなかったわけだよね？」

その言葉にかがみも頷いて

「確かにそうよね？私やつかさ、みゆきは一緒にいたかもしれない。けど、日下部達や八坂さん、永森さんがそこにいたかどうかってなると、ありえなかったかもしれないわよね？日下部達はいずれそうなる可能性はあったにしてもさ。」

かがみの言葉に他のみんなもうんうんと頷いている。

こなたはそれを見て

「慶一君が陵桜に来る事になったのは龍也さんがこの学校に居てくれたおかげでもあるわけじゃん？慶一君は龍也さんを真似てここを目指したんだからさ。」

俺はその言葉に頷きながら

「そうだな。それがあったから俺はここに居るわけだ。」

その言葉を聞きながらこなたは俺を見て

「だから私思ったんだよ。すごいな、って。今のこの状況を用意してくれたのは、慶一君を私達の前に連れてきてくれたのは龍也さんなんだって。私達みんなが今ここに居るのは、そのきっかけは龍也さんが作っていてくれた物だって考えたら、運命がそこから始まったって考えたら凄いなって思えたんだよ。」

こなたの言葉に俺も含め全員がこの状況に改めて凄さと運命を感じていた。

「やっぱかなわないや・・・龍兄。あんたはやっぱり凄いな・・・そして、俺にこんな運命をくれた事をありがたく思う。」

俺の呟きにみんなもまた同じように感じ、そして頷いていた。

俺はみんなの方に向き直り

「運命のきっかけは龍兄がくれた物。だけど、ここからは俺達が作る運命だ。この先どうなるかは予想もつかないけど、俺はこれからもみんなと共にこの運命を進んで行きたいと思う。それが俺の今の思いだ。」

俺の言葉にみんなもそれぞれに

「私もみんなと一緒にこの運命の先、見届けたいな。とはいえ、このメンバーなら一緒に居つづけられると思うよ。今の私にはそう思える。」

「私もよ?どんな運命が待っているのかわからないけど、私達が一緒に居れる事が運命ならこの先もきっと私達は居られると思うから。」

「運命ってよくわからないけど、少なくとも今はこなちゃんやけいちゃん、それにみんなと一緒に過ごしたいな。」

「それが運命なら、私達はこれからも一緒に居れるはずです。私はそれを信じようと思います。」

「ここにいるみんなとお友達になることが私の運命ならこの先もきっと一緒にいけるわよね?」

「今こそもう一度あの時慶一が言った事を望む時なのかもな。みんなと一緒に居たいって事を望むってさ。」

「全てが繋がっているのならこれからも繋がっていられるはずですよ。私はそう信じます。」

「私達の出会いは必然だったのね・・・ならこれから一緒に居つづける事ができるのも必然よね・・・」

「そうだな、きっとそういう事なのかもしれないな。みんな、これからも俺達は一緒に・・・一緒にやっていこうぜ。楽しい事も、辛い事も、みんなとならきっと乗り越えていけるから。」

俺の言葉にみんなも力強く頷いてくれたのだった。

俺達の運命を改めて知り、その運命と共に進んでいく事を決意して俺達はそれぞれの家に帰っていく。

そして家の側まで来たとき、門の側に何かが落ちているのを見つけた俺はそれをおもむろに拾い上げてみると、それは学生証だった。

「何で俺の家の前にこんなものが？」

そう呟きながら俺は拾った学生証を確認してみるとそこには「田村ひより」の名前が書かれていたのだった。

「ひより？あいつ、家まで来たのか？それでいて大事な物落としていったら世話ないよなあ・・・」

学生証を更によく確認してみるとそこにはひよりの住所も載っていたので俺は軽いため息を一つついた後家に入り出かける準備をしてひよりに学生証を届けるために家を出たのだった。

住所を頼りにひよりの家をを探して歩きつづける事1時間、ようやく俺はひよりの家を見つけたのだった。

「ここか、それにしても大分迷ったよな・・・まさかここまでてこずろうとは思わなかったが・・・」

そう呟きつつ俺はひよりの家の呼び鈴を押してみる。

しばらく待つと家の中から人が少し慌て気味に出てこようとしているのを軽いため息を一つつきながら感じていると玄関のドアが開き、そこにはどこかひよりににも似た感じの男の人が俺を見るなり声をかけてきたのだった。

「お待たせっス。どちら様？」

俺を観察するように見つめる男の人に俺は

「えっと、俺は森村慶一といいます。こちらは田村ひよりさんのお宅でいいんですよね？」

そう訊ねると男の人は俺を怪訝な表情で見ながら

「ええ、そうっスけど・・・ん？森村？」

俺の名前に聞き覚えがあったのか男の人はしばし考え込んえいたが、やがて掌をぽんと打つと

「ひょっとして今年の夏休みに妹が世話になった森村さんってあんたかい？」

その妹という言葉に驚きつつも

「ええ、そのとおりです。失礼ですがひよりさんのお兄さんですか？」

俺の言葉にその人は頷きながら

「ああそうだよ。俺はひよりの兄貴だ。よろしく。それで今日は一体何の用で家に？」

その人がひよりのお兄さんだという確認が取れると俺は

「ええっと、実はですね。俺の家の側でひよりさんの学生証を拾いましてね。困ってるかもしれないと思ったので届けに来たんですよ。それで、ひよりさんはいらっしゃいますか？」

そう訊ねるとお兄さんは腕組みしながら

「いや、実は結構前に出掛けたんだけどまだ帰って来てないんだよ。なんなら俺がひよりの学生証、預かろうか？」

その言葉に俺は頷きながら

「なら、お願いできますか？これがそうです。」

そう言って俺は持ってきたひよりの学生証を手渡すとお兄さんはそれを受け取りながら

「うん。確かに預かったよ。わざわざ悪いね。ひよりにはよく言っておくからさ。」

そう言うお兄さんに俺も頷いて

「わかりました。よろしくお願いしますね？では、俺はこれで。」

そう言って踵を返して立ち去ろうとした時、丁度出先から帰ってきたひよりと会った。

「あ、あれ？森村先輩、何でこんな所いるっスか？」

俺も突然帰ってきたひよりの姿に驚きつつ

「お前の落し物を拾ったんでな。困ってるかもしれないと思って届けに来たんだよ。お兄さんに落し物の学生証預けといたから後で受け取っておけよ?」

俺の届けに来たものの事に驚いたひよりは

「え?学生証っスか?・・・・・・ああああっ!!さっき無くしたと思って諦めかけてた・・・で、でも、どこに落ちてたっスか?」

俺はその質問に軽いため息をつきつつ

「俺の家の門の前だよ。お前俺に何か用事あって家に来たんじゃないのか?そうじゃなきゃあんな場所にお前の学生証落ちてるなんて考え難いしな。」

そう指摘するとひよりは苦しげに言葉を詰まらせて俯いていたが、おもむろに顔をあげると

「・・・先輩。学生証拾っていただいたお礼も兼ねてで申し訳ないっスがちょっと家に寄っていってもらえないっスかね?」

その言葉に俺は（俺の家に来た目的についてかもしれないな）と思ったので

「わかった。とりあえずお前も話したい事あるみたいだからお前の言葉に甘えさせてもらおうかな。」

そう返事をするとひよりはほっとしたような表情になって

「ありがとうございます。それじゃ先輩、あがってください。こっ

ちっス。」

そうひよりに促されて俺はひよりの家に上がることとなった。

そして俺はひよりの部屋に案内されて

「すいません、先輩。ちょっと待っていてほしいっス。飲み物でも用意してきますので」

俺を自分の部屋に入れたひよりは俺にそう言うと、俺は飲み物の準備をするために部屋をでようとしているひよりに「おかまいなく。」

そう伝えたのだった。

俺はひよりが飲み物を取りに行っている間、ひよりの部屋をざっと見回していた。

前に同人誌などを手がけているという事も聞いた事があったし、俺自身もひよりの作品は見せてもらった事があったのでやはり部屋には漫画を描く為の道具も置いてあった。

「なるほど・・・あいつはよっぽど好きなんだな・・・漫画描くことが・・・」

それらの道具を感慨深げに見つめながらそう呟いていると飲み物を持ったひよりが部屋に戻ってきたので

「お待たせしましたっス。って先輩、あまりじろじろ見ないで下さいよ。恥ずかしいっスから・・・」

照れて顔を赤らめたひよりに俺も苦笑しつつ

「いや、すまんすまん。漫画書くことが本当に好きなんだなって漫画の道具見ながら思ってただけだよ。特に弄繰り回したりはしていないから心配するなって。」

ひよりを安心させるようにそう言うとひよりもどこかほっとしたような顔で俺の前に飲み物を置いてひよりも向かい側に座ったのだった。

そして「いただきます」と言って飲み物を一口飲んだ後さっそくひよりに本題を切り出したのだった。

「それで？突然に俺の家に訪れた理由はなんなんだ？何か相談事か？」

俺の言葉にしばらく悩んでいたひよりだったが意を決したようで俺にぽつりぽつりと家に訪れた理由を話し始めた。

「・・・実はですね・・・もうすぐ私も受験じゃないですか。今まで頑張って勉強してきたっスけど、このぎりぎりの所まできて急に物凄く自分が不安になってしまったんです・・・ちゃんと合格できるのか・・・みんなと一緒に陵桜行けるのか・・・みんなの期待どおりに私は皆さんの前に立てるのか・・・色々考えるようになってしまってそれが物凄くプレッシャーになってしまって、自分でもどうしたらいいかわからなくなっちゃったんス・・・だから先輩に会って何か私にアドバイスでもしてくれたらと・・・そう・・・思って・・・先輩の家に行ったんです・・・でも、タイミング悪かったのか先輩いなくてそれで・・・気付かないうちに学生証も落とすし・・・悩みは解決しないしで・・・凹みながら戻ってきたんです・・・

」

俺はそんなひよりの告白を聞きながら（プレッシャーの原因の一端は俺にもあるよな・・・）と思いながらとりあえずひよりにかける言葉を捜す俺だった。

「そうか・・・受験前にありがちな不安てやつだな・・・プレッシャーの原因の一端を作った俺にも非があるからな・・・とりあえず聞くが最近は受験勉強はちゃんとやれてるか？」

俺の言葉にひよりは暗い顔になって

「実は・・・プレッシャー感じ出してから前みたいに上手く行かない日々が続いてるっス・・・」

そのひよりの答えに（うーん・・・こいつは相当だな・・・仕方ない、とりあえずは・・・）

「そうか・・・よし、それなら俺がお前に龍神流に伝わるプレッシャー跳ね除けるおまじないと気功による身体のリラックスを施してやる。とりあえずひより、椅子をこっちに持ってきてそこに座れ。そしたら始めるぞ？」

俺の言葉にひよりはわらにもすがる程切羽詰った表情で椅子を持ってくるとそこに座って俺がやろうとしてる事に期待をかけているのが見て取れた。

俺は椅子に座ったひよりに

「まずは気功による身体のリラックスだ。ひより、ゆっくり深く深

呼吸をするんだ。そしてそれを徐々に俺の呼吸に合わせるようにしていくんだ。いいな?ゆっくりだぞ?」

そう言うとひよりは頷いて俺の呼吸に合わせるようにゆっくりと深呼吸を始める。

俺はひよりの呼吸を感じ取りながら気を練って行き、ゆっくりとひよりの頭と背中に手をかざして気を送り始めた。

徐々に気持がよくなってきたのか表情が柔らかくなってきたひよりに俺は静かに問い掛ける

「どうだ?気持が落ち着いてきただろ?そのままもう少し続けるぞ?」

俺の言葉にひよりはこくりと頷いて俺に身を委ねていた。

約10分ほどそれを続けて次に俺はひよりに

「よし、次はプレッシャーを跳ね除けるおまじないだ。ひより、両の掌を俺に向けて差し出すんだ。そして腕は胸の高さで固定する。そして目をつぶって楽しい事をイメージするんだ。その間におまじないを終わらせる。」

俺の言葉にひよりはおずおずと手を俺の言った位置にあげて

「こ、こうっスか?」

そう聞いてくるひよりに俺は頷いて

「そうだ。そのままゆったりとしながら目をつぶるんだ。そして、イメージな？」

俺の言葉に従い、ゆっくりと目を閉じるひより。

俺はひよりの両の掌と額に指を当て、おまじないの文字をなぞる。

ひよりも俺がやっている事に気付いたのかくすぐったそうにしていた。

そうしてそのまま１０分、俺はひよりにリラックスさせてから目を開くように促すとひよりはゆっくりと目を開けて

「あ・・・すごいっス！不思議っス！さっきまでのプレッシャーが無くなってるっス！先輩、このおまじないす凄いっスね！？」

すっかり緊張が解けたひよりが少し興奮気味に俺に言うと

「龍神流に伝わるおまじないだからな。効かないはずはないさ。それと最後にこれをお前に。」

そう言って俺はひよりに前に鷹宮神社で購入した健康祈願のお守りを渡して

「これは俺がかがみの神社から買ってきた物だ。こいつを持って受験に望んでくれ。これがお前にあげられる最後の薬ってやつかな？」

俺が笑いながらそう言うとひよりは俺から受け取ったお守りをしげしげと見つめながら

「ありがとうございます、はいいですけど、こういうのって普通学業祈願のお守りじゃ？」

そのひよりの疑問に俺はあの時かがみ達に言った事をそのままひよりにも伝えると

「なるほど、確かに先輩のいうとおりっスね。どんなに勉強がんばっても体調壊したら元も子もないですし。」

ひよりの言葉に頷きながら

「そういう事だ。何をするにしても体が、健康が基本だ。お前が漫画描くのだってそうだろ？」

俺の言葉にうんうんと頷くひよりに

「まあ、そういう事だから後は受験までつっぱしれ。また不安になったらおまじないしに来てやるから。なんならお前からまた尋ねてきてくれてもいいがな。」

俺がそう言うとひよりは嬉しそうな顔で

「ほんとうっスか？また凹んだらお願いしたいっス。先輩、私受験がんばりますから。絶対に小早川さん達と先輩達の前に行きますから待っててくださいね。」

そう意気込むひよりに俺も笑顔で頷いたのだった。

そして用事を済ませた俺はひよりの家を後にする。

家に戻りながら俺はさっきのひよりの事を考えていた。

「受験のプレッシャーか。ゆたかもみなみも感じているんだろうけどな・・・ひよりは特にプレッシャー感じちゃったんだな・・・ま、今回ひよりに施したでっちあげでひよりがリラックスできたみたいだし結果オーライだよな・・・」

そう、俺がさっきのひよりに施したおまじないはひよりの心を楽にするためにわざとそういうものがあると思わせるでっちあげだったのだ。

普通の薬もこれがよく効く薬だと信じ込ませればいつも以上の効果を発揮するプラシーボ効果ってやつを俺は狙ったのだ。

ひよりは結構思い込みやすい性格だった事もあり、その効果は絶大だった。

けど、これがひよりの為になる事だし、あいつに余計なプレッシャーを与える原因の一つを作った俺が取れるあいつに対する贖罪でもあった。

それでもひよりには十分効果が出た事が分かったのでこれからもあいつの為になる嘘を受験が済むまでつきつづけてやるかな、と思う俺だった。

もうすぐクリスマスもやってくる。

そしてそれが終われば後何日かで今年1年も終わりを迎える事だろう。

俺は陵桜に入ってから今までの事をもう一度思い出しながら、来年もまたみんなと共に楽しくやろうと改めて思う俺だった。

そしてそれと同時にクリスマスプレゼントに頭を悩ませつつ、みんなのプレゼント選びにデパートへ訪れるのだった。

悩む旋律達～プレゼント選びの苦労、そして2学期の終わり～

龍兄のくれた運命を知り、そして受験に悩むひよりのケアをして俺はもうすぐやってくるクリスマスの為にプレゼント選びも兼ねてデパートへと赴いた。

みんなに送るプレゼントは何がいいだろうか、と思いながらアクセサリーや小物等を見回っていたのだが、なかなか”これ！”といった決定的な物が見つけられずとりあえず気分転換の為に本屋へと新刊のチェックをしに行ったのだった。

しばらく色々な本をチェックしながらうろついていたのだが、ふいに俺に声をかけてくる者がいた。

「あれ？慶一くん、何やってるの？こんな所で。」

という声に振り向いてみるとそこにはラノベを片手に少し驚きの表情をして俺を見ているかがみがいた。

「誰かと思ったらかがみか。お前こそ何してるんだ？新刊のチェックとか？」

俺も予想外の相手と会った事でいささか驚きつつかがみに訊ねるとかがみは少し困ったような顔をしながら

「あー・・・まあ、それもついでって事なんだけどさ。クリスマスのプレゼントの事もあってね。家族に渡す物もあるけどさ、他に渡したい人もいるわけだしさ・・・悩んでたのよね。」

そう言うかがみの言葉に俺も苦笑しながら

「かがみも、か。実は俺もだったりするんだよな・・・中々決められなくて気晴らしにここに来たんだ。」

と、自分がここに居る経緯を話すとかがみも苦笑しながら

「あはは。考える事は同じなのね。でも、悩んじゃうわよね・・・」

大きくため息をついて考え込むかがみ。

「そうだよなあ・・・なあ、かがみ。今日はお前1人なのか?」

プレゼントの事に悩みつつもとりあえずかがみが他に一緒に来てる人間がいるのかどうかを聞こうと思い、そう訊ねるとかがみは首を振って

「一応つかさと一緒に来てるわ。つかさも色々見てまわってるみたいなのよね。」

その答えに俺は少し悩んだ末に

「なら、一緒にプレゼント探ししてみないか?結局1人じゃ決められないかもって思ったからな。」

俺の提案にかがみは少し俯いて考え込んでいたが、考えが纏まったらしく、顔を上げて俺を見ると

「私も結局1人じゃ決められそうにないし、つかさとだけじゃ分からない事もあるからいいわよ?一緒に回りましょ。」

その答えに俺も頷いて

「なら、とりあえず新刊買ってからまわるか。」

そうかがみに伝えるとかがみも自分の手持ちの新刊を見て

「そうね。それじゃ私、これを買うから。慶一くん、後で慶一くんの買ったやつ貸してよね。私も今買ったやつ読み終えたら貸すから。」

俺もその言葉に頷きながら

「ああ。それじゃ会計済ませて行くとしよう。」

俺の言葉にかがみも頷いて一緒にレジまで本を持っていき、本の会計を済ませると俺たちは連れ立ってクリスマスプレゼントを選ぶ為にデパート内を回り始めたのだった。

「そういや、つかさはどの辺まわってるんだ?待ち合わせとかしてるのか?」

歩きながらかがみに訊ねるとかがみは”はっ”としたような表情になって

「しまった・・・つかさにその事伝えてない・・・ちょ、ちょっと待っててね?慶一くん。今つかさに連絡取るからさ。」

慌てながら携帯を取り出してつかさに電話を入れるかがみを見ながら俺は

（しっかりしてるようで時折抜けてる時あるよな、かがみも・・・）

そう心の中で考えていたが、電話を終えたかがみが俺の方を向いて

「とりあえず待ち合わせ場所は指定したわ。それと慶一くん、さっき何か失礼な事考えてなかった？」

かがみの鋭い指摘に内心焦りつつ

「いや、別に何も考えてないぞ？」

とぼけるようにそう答える俺にかがみは疑いの眼差しを向けていた。

その視線に耐え切れなくなり俺はさり気なく話題転換をする事にした。

「それはさておき、つかさとは色々回った後で合流するのか？それとも先に合流してから回るのか？」

かがみに訊ねるとまだ納得いかない感じで俺を見ていたが

「・・・3階の洋服売り場で待ち合わせてるわ。つかさも待ってると思うからとりあえず行きましょ？」

そう言ってまたも無意識に俺の手を引いて歩くかがみに俺は照れながら

「あ、ああ。それはいいんだが、ここの所そうやってかがみから手を引くようになったよな、無意識なのかもしれないけどさ。」

そう指摘するとかがみははっとなって俺の手を離して

「う、嘘、よね？今回たまたまよね？私前にもやった事あったの？」

顔を真っ赤にしながら確認してくるかがみに俺は

「お前が覚えてるかどうかはわからないけど文化祭の準備の日の帰りにもな。」

そう答えるとかがみは赤い顔のまま何事か考え込み始めたがやはり思い当たる節がないらしく

「覚えてない・・・ねえ、慶一くん、私をからかってるとかしてないわよね？」

俺を睨みつけながらそう言うかがみに

「そんな事しないよ。とはいえ、覚えがないんじゃよっぽど無意識だったんだろうな。」

苦笑しながらそう言うと再びかがみは顔を真っ赤にして

「そ・・・そんな恥ずかしい事やっちゃってるんならすぐ言いなさいよ！は、恥ずかしいじゃない・・・」

そう言うかがみに俺は複雑な顔で

「それを伝えたらかがみ、もっと恥ずかしがってパニックになりそうだったからな、それを収拾するためにさらに恥ずかしい思いする

かもとか考えたら言えなかったよ。」

その言葉にかがみも「あう・・・」と言いながら更に真っ赤になって俯いていたがやがて気を取り直すと

「も、もうこの話題はおしまい！ほら、慶一くん。つかさが待ってるんだからちゃっちゃと行くわよ？」

そう言いながらまたしても無意識に俺の手を引っ張ってるかがみに俺は苦笑しながらなすがままにつかさとの待ち合わせ場所へと向かった。

待ち合わせ場所の洋服売り場につくと、俺達に気付いたつかさが寄ってきて

「おねえちゃん、けいちゃん、待ってたよ？でもけいちゃんもここに来てたんだね～。」

つかさがにこにこしながらそう言うとかがみもつかさに

「私たちと一緒よ。中々決めれなくていたらしいわ。この際だから一緒に選びましょ？ってことでね、慶一くん連れて来たのよ。」

そう説明するかがみの手元にふっと視線を移したつかさは

「そうだったんだ～。それでおねえちゃんけいちゃんの手を引っ張ってきたんだね？」

というつかさの発言にかがみはまたも顔を真っ赤にしながら手元に目をやると「あ、ああっ！」と言いながら慌てて俺の手を離すかが

み。

「こ、これは違うのよ？やりたくてやったんじゃなくて、気付いたら、その・・・と、とにかく！つなぎたくてつないだんじゃないんだからねっ！？あくまでも事故よ、事故！わかった？つかさ。」

もの凄く自爆的言い訳をするかがみをつかさはいつものぽやぽやとした笑顔で見ていて、俺は軽いため息をつきながら苦笑していたのだった。

こうしていても埒があかないと思っていた俺はとりあえずかがみに

「あー・・・とりあえずかがみ。いつまでもこうしていてもしょうがないからプレゼント選びしちゃおうぜ？でなきゃいつまでたっても決まらないしな。」

俺の言葉に”はっ”と正気を取り戻したかがみは

「そ、そうね・・・私ったら何を・・・とにかく、いきましょ？慶一くん、つかさ。」

その言葉に俺もつかさも頷いて

「そうだな。それじゃいくか。」

「うん。あ、そうだ、おねえちゃん。ここの売り場で見つけた物なんだけさ、ちょっとおねえちゃんにも見て欲しいなって思って。いいかな？おねえちゃん。」

そのつかさの言葉にかがみは

「つかさの見つけた物ねえ・・・いいわ、ちょっと見せてくれる？」

そう言ってかがみは頷いて先に進むつかさについていった。

俺もその後を追っていく。

そこには帽子が売っているコーナーがあった。

かがみとつかさは洋服や帽子を見ながら談笑している。

俺はそんな2人を見ながらもかがみとつかさの手をじっと見ていた。

そして、近くにあった毛糸の手袋のいくつかを見繕い、2人の手の大きさをイメージしながら選んでいく。

「うーん・・・このあたりかな？後、色は、っと・・・」

そう呟きながら選んでいると、2人から声をかけられたのだった。

「お待たせ、慶一くん。あれ？何見てるの？」

「お待たせ～。あ、毛糸の手袋？」

その声に振り向いて俺は

「ん？お前らの方も終わったのか？俺はもう少しって所だけどさ。あ、そうだ。かがみ、つかさ。この手袋はめて見せてくれないか？」

そう言って俺はいくつか見繕った手袋を2人に渡してはめてみても

らう事にしたのだった。

手袋を受け取った2人はとりあえずその手袋をはめて俺に見せてくれた。

「どうかな？」「似合ってる～？」

という2人に俺は頷きながら

「うん。いい感じだな。サイズはどうだ？」

そう聞くと2人は手袋のサイズを確認するように手を開いたり握ったりしたりして感触を確かめていた。

「大丈夫みたいね。」「わたしも丁度いいみたい。」

そう言いながら手袋を外しつつ渡してくる2人に俺は

「そっか、それじゃ後は、っと・・・」

そう呟きながら俺は2人に送るプレゼントをこれに決めようと思っていた。

もちろん、手袋だけじゃなく、マフラーや毛糸の帽子も選ぶつもりだった。

そういいながら考え事をしている俺の後ろからそろりそろりと近づいて来たつかさが「え～い！」と言いながら俺にジャケットをかぶせてきたので俺は慌てながら

「うおっ！あー、びっくりした。ん？つかさ、これは？」

俺はつかさにこのジャケットの事を尋ねるとつかさは満面の笑みで

「けいちゃんに似合いそうだなって思って持ってきてみたの～。ちゃんと着てみてくれる～？」

そう言ってくるつかさの言葉に頷いて俺はジャケットを着直してつかさにその姿を見せると

「わあ～。似合ってるよ、けいちゃん。こっちはどうかなあ？」

そう言って差し出してきたもう一つのジャケットを受け取り、こっちに着替え直してみるとつかさはさっきの俺の姿と今の俺の姿を見比べていたようだった。

「う～ん・・・やっぱりさっきの方がいいかも～・・・ありがとね？けいちゃん。そっちも返してくるから～。」

そう言って俺からジャケットを受け取り、元の場所へと戻しに行くつかさを見送っているとかがみが

「あの子、ジャケット探してたのね・・・。ねえ、慶一くん。慶一くんの足のサイズって何センチ？」

そう言って俺の足のサイズを聞いてきたかがみに俺は

「俺は２６センチだ。」

そう答えるとかがみはいくつか見繕ってきたらしい靴を俺に見せて

「ねえ、ちょっとこれはいてみてくれないかな?」

そう言ってきたので俺はかがみの持ってきた靴に足を通してみる。

かがみは俺のつま先等を触りながら

「どう?つま先の感じとか、きつくない?」

そう聞いてきたので俺は首を振って

「大丈夫だぞ?きつさは感じない。結構いい靴だな。」

その言葉にかがみも満面の笑みで

「慶一くんにあいそうな靴探してみたしね。でもよかったわ。私のセンスも捨てたもんじゃないわね。」

その言葉に俺は笑いながら

「お前のセンスは悪くないと思うぞ?実際俺もお前が選んでくれた靴は結構気に入ったしな。」

そう答えるとかがみは顔を赤らめながら

「そ、そうかな?そう言ってくれるなら嬉しいな。」

照れてそう言うかがみに俺も笑って頷いたのだった。

その後もかがみたちと共にみんなにも渡すプレゼントを探してまわ

った。

ある程度の物を探してプレゼントの目星をつけた俺達はプレゼントを買い込み、デパートを後にした。

「そろそろ日も暮れるわね。今日は色々買い物しちゃったなあ・・・」

そう言いながらかがみは感慨深げに自分の手荷物に視線を落としていた。

「でも、みんなに渡すプレゼントが決まってよかったよ～。」

ほっと一安心なつかさを見て俺も笑いながら

「まあ、こういうのも1人で決めるってのも限界って物がある事もわかっただけでも収穫だな。」

俺の言葉に納得の頷きをするかがみは

「そうね。結局私も決めれなかったし、あそこで慶一くんに会えたのはよかったわ。つかさも悩んじゃう方だから慶一くんが決断してくれなかったらあの子も結局決めれなかったと思うしね。」

その言葉につかさも苦笑しながら

「えへへ。色々あるからつい迷っちゃった。ごめんね?おねえちゃん、けいちゃん。」

俺達に謝るつかさだったが俺は

「その気持はわかるから気にするな、つかさ。俺だってかがみやつかさがいてくれたから決めれたんだしさ、迷ったのはお互い様だ。」

そう言うとかがみも複雑な顔で

「あはは・・・その事に関しては私も人の事言えないわね・・・」

そう言いながら苦笑するかがみを俺とつかさも苦笑しながら見ていたのだった。

そしてその後も色々談笑しながら2人を家に送り届けてさあ、帰ろう、と思ったら今回もまた、まつりさんに捕まる羽目になった。

俺は今回もまた夕食にお呼ばれする事になったのだった。

そしてその翌日・・・・・・

「おはよーっす。」

そう言いながら俺は教室へと入っていくと俺に気付いたかがみ、みさお、あやのの3人は俺の机の周りにやってきて

「おはよ、慶一くん。昨日はお疲れ様、色々助かったわ。」

「おっす慶一。クリスマスの予定そろそろ話し合わないと時間ねえぞ？」

「おはよう慶ちゃん。とは言ってもイブと25日はバイトでつぶれちゃうわね。結局26日にやる事になりそうだけど。」

俺は3人にそれぞれ

「おはよ。かがみ。昨日の件はこっちも助かったよ。みさお、予定は昼休みに、だな。あやの、結局忙しい時期だから仕方ないよな。来年はバイトいれずにやろうぜ。高校最後のクリスマスだからな。」

そう返しつつ最後の一言を言うとみんなも頷いて

「そうね。最後は思い出に残るクリスマス過ごしたいしね。」

「私らの付き合いは続きそうだけど高校でやれるのは後2回だもんな。」

「みんなとの思い出は大切だものね。」

その言葉に俺も頷いて

「そうだよな。それを過ぎればもう高校時代のクリスマスなんて2度と出来ない。クリスマスは来るだろうけどそれはもう違うクリスマスだからな。」

俺の言葉にみんなも感慨深げに色々と考えているようだった。

そんな思いを持ちながらその日の昼休み、いつものようにみんなで集まってクリスマスの予定を聞いていたのだが・・・・・・

「みんなのクリスマスの予定はどうなんだ?って言っても今年はバイトで潰れちまいそうだから日をずらすしかないけどな・・・」

そう切り出すとこなたは

「25日までは店長も離してくれなさそうだしねー。」

そう言いながらやれやれとジェスチャーをしていた。

「まあ、それでもみんなといれるからいいけどね。みんなバイト先に行くんだしさ。」

そう言って自分を納得させているかがみ。

「そうだね～。落ち着いてとはいかないけどそれでも一緒に過ごせるもんね。」

つかさもかがみの意見に頷いていた。

「働くクリスマス、ですか。普通じゃできないクリスマスですよね。それもいいかもですね。」

一風変わったクリスマスに思いを馳せるみゆき。

「考え様によっちゃ、料理とかはねえけどクリスマスソングとか何もしないでも聞けるなら雰囲気だけでも味わえそうじゃん？」

チャームポイントの八重歯を見せながらケラケラと笑うみさおを見ながらあやのは

「それに気をとられて仕事おろそかにしちゃダメよ？みさちゃん。」

とりあえずみさおに釘を刺すのだった。

「クリスマスプレゼントにお給料貰うって言うのはめったに体験できる物じゃないんじゃないですかね？」

人差し指を立てつつみんなにそう言うこうにやまとは呆れ顔で

「夢のないクリスマスね、まあ、仕方がないけど・・・」

半ば諦め気味にそう呟くのだった。

「ま、何にしてもちゃんとしたクリスマスパーティ兼バイトの打ち上げは２６日にやろうぜ？みんな、それでいいかな？」

みんなを見回してそう確認を取ると皆も「「「「「「「「「「賛成ー」」」」」」」」」」と声を上げるのだった。

そんな事があってから3日後、２学期の終了式になり、俺達は先生から嫌なクリスマスプレゼントを貰う事となったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

終了式も終わり、２学期最後のＨＲで俺達は貰いたくないクリスマスプレゼントを貰う事となった。

「これより成績表を渡すから名前を呼ばれた順に取りに来い。」

という先生の声と共に机に突っ伏して心から嫌そうな声をあげるみさおだった。

「ヴァー・・・成績表なんて見たくねー・・・」

そんなみさおにかがみは

「しっかりしなさいよ。以前よりは慶一くん達とも勉強会やったり

して結果出してきたんだから自信持ちなって。」

そうはっぱをかけていてさらにあやのも

「そうよ。前よりはかなり成績あがってるんだし堂々と受け取ればいいわ。」

そう言ってみさおに励ましの言葉をかけていた。

俺もみさおに

「今回の期末の結果だってお前順位１００位も上げれたんだから問題なんてないだろ？」

そう言うとみさおはついに決意したようで

「うー・・・そうだったっけ・・・試験も結果出せたんだよな・・・うっし！こうなったら腹くくるぞー！」

そう気合をいれてみさおは成績表を取りにいったのだった。

ちなみに今回の期末の結果だが

みゆき１位、かがみ５位、慶一７位、あやの３６位、こなた１１０位、みさお１２５位、つかさ、１３０位。

学年総数３６５人。

１年生では、学年総数３３０人に対して、こう３５位、やまと２０位とこちらもかなり上位だった。

以前のみさおが２３０位あたりにいたのだからかなりの躍進だ。つかさやこなたも２００位台にいたのだから勉強の成果は確実に出ていると言えた。

そして成績表を見るなりみさおは歓喜の声を上げたのだった。

「うおーやったー！前よりあがってるー！サンキューな、慶一ーあやのー柊ー！」

どうやら前よりよくなっていたようでみさおは大喜びだった。

そんなみさおを見ながら俺たちもほっと胸をなでおろしていたのだった。

こなたｓｉｄｅ

終了式も終わり、最後は成績表を貰って終わりだったのだが１年の頃からあまり良い成績ではなかった私は成績表を見るのが怖くなっていたのだった。

そして先生は私に成績表を渡しながら

「これはうちからのクリスマスプレゼントや。成績に応じた数字を入れてあるさかい、よっく噛み締めや。」

そう言ってくる先生にすごく嫌な予感を覚えながらも成績表を受け取りながら

「先生ー！こんなクリスマスプレゼントはいりませんー！」

半泣きで先生に訴えていたのだが見事に却下されたのだった。
その後みゆきさんやつかさと成績表の見せあいっこをしていたのだが私はみゆきさんの成績表を見ながら
「うーん、これだけ負けていると何だか悔しいものがあるねー。」
そう呟く私につかさが
「しょうがないよ、こなちゃん。ゆきちゃんとわたしたちとじゃ勝負にならないよ。」
苦笑しながらそう言ってきたのを聞いた私が
「いや、成績はともかく胸とか・・・」
と言った途端みゆきさんが顔を真っ赤にして慌てるのを見て私はにやりとしていたのだった。
そして、つかさの方を何気なく見るとつかさもさっきの”胸”の一言で何やら落ち込んでいるようだったのでとりあえず慰める私だった。

慶一ｓｉｄｅ

終了式、ＨＲを終えて俺達は帰りに待ち合わせて一緒に帰る事となった。
学校の門の前で待ち合わせる俺達。

「お待たせー、慶一君、みんなー。」
「ごめんね～。」
「お待たせしてすいません。」
という声と共にやってくる3人に俺は
「そんなに待ってないから大丈夫だぞ？こうとやまとはまだかな？」
そう言いながら更に少し待ってると
「遅れました、先輩達。」
「今日はこうの所為じゃないけどね。」
そのやまとの言葉にピンときた俺は
「部活の締めだったか。それならしょうがないもんな。」
その言葉に2人とも頷いて
「というか、先輩仮部長なんですから挨拶には来て欲しかったですよ。」
「先輩も自分の立場忘れちゃってないわよね？」
その言葉に俺は何も言えなくなって冷や汗をたらしながら苦笑していた。
その様子をみた2人は大きなため息をついてあきれていたのだった。
「その件は後で追及すればいいわよ。それじゃ帰りましょ。」

「ま、色々あったんだからしゃーねーよな。八坂、永森、あんまり慶一を責めてやるなよなー。」
「そうね、その後でしっかりとやってもらえばいいものね。頑張ってよ?慶ちゃん。」
その3人の言葉にますます、すまないという気持で一杯になるのだった。
「こう、やまと。ごめんな。」
一言謝らないときがすまなくなった俺は思わず2人に謝っていたのだが2人は苦笑しながらも
「今度はちゃんとしてくれればいいですよ。来年はしっかりお願いしますね。」
「くれぐれも役職を忘れないようにね?先輩。」
そう言って許してくれたのだった。
今日で2学期も終わり、今年も残すところ後数日となった。
俺は2年に上がってから今までの事を思い出しながら来年はどんな年になるのだろうか?と考えながら期待と不安の入り混じった気持を胸に秘めたのだった。
そして、今年のクリスマス、俺は24日にある事をしようと考えていたのだった。

クリスマスの旋律～幸せを運ぶ慶一 サンタ前編～

皆へのプレゼント選びも終わり、２学期の終了式を終えて俺達は冬休みへと突入していた。

そして俺達の今年のバイトも２５日の最終日までは目一杯続く事となり最終日に向けて俺達はがんばっていたのだった。

それから2日後の２４日、この日は朝から夕方までの時間帯が俺達のアルバイト時間だった。

店内に流れるクリスマスソング、そして店員もみなサンタクロースのコスプレをしてそれぞれが仕事を行っていたのだった。

「いやー。やっぱしクリスマスのコスはこれじゃないとねー。」

自分以外のみんなのコスプレ姿を見ながらうんうんとしみじみ頷いているこなたに

「クリスマスだからって私達もこんな格好しなきゃならないなんて・・・いくら接客の為とはいえ、少し恥ずかしいわ・・・」

接客担当なだけに人目に晒されて恥ずかしさで小さくなっているかがみがそう愚痴をこぼしているとこなたは満面の笑みで

「見られてこそのコスプレじゃん?それに私達は接客処理担当なんだし、見てもらうのも仕事だよー?」

あっけらかんとそういうこなたにかがみは

「私はそんな趣味になった覚えはないわー！！」

と激昂してこなたに詰め寄るかがみに俺は

「おいおい、かがみ。気持はわからなくもないが、今は業務中だぞ？見ろ、お客さんが変な目で見てる。」

そう指摘するとかがみは途端に顔を真っ赤にして俯いたのだった。

「うーん、やっぱりかがみんは可愛いねえ。」

にやにやとしながらかがみにそう言うこなたに俺は

「お前もあんまりかがみをからかってやるなよ？あれじゃかがみ本来の動きすらできないぞ？」

そう忠告する俺にこなたは

「うーん・・・まあ、しょうがないね。かがみが立ち直ったら接客処理の続きやらせてよ。それまでは私が頑張るからー。」

そのこなたの言葉に俺も経験者の頼もしさを感じながら

「わかった。とりあえずそれまでは頼むぞ？こなた。」

俺の言葉に頷いてこなたは接客業務へと戻っていくのだった。

「あの、慶一さん。かがみさん、大丈夫ですか？何だか泉さんとお話してから動きにくくなっているみたいですけど・・・」

そこにやってきたのは俺やこなた、かがみと共に接客処理業務をやっているみゆきだった。

「こなたがちょっとからかってたからな。かがみ意識しちゃってるみたいでな。みゆき、お前は大丈夫なのか？」

そう俺が尋ねるとみゆきは少し顔を赤らめながら

「お恥ずかしながら、私も少し照れているのですが、お仕事と割り切る事である程度は慣れて来たみたいです。ただ、他の男性客の方々から何だか注目を浴びているみたいで・・・」

そう説明するみゆきのコスプレ姿をみて何となくは納得できる俺だった。

みゆきは元々スタイルもいい方だからこの衣装はみゆきの体のラインを浮き上がらせるデザインとなっていたのもある。

こなたもみゆきの姿を見た時には「萌えー」とか言ってたくらいだ。

俺がそんな事を考えているとみゆきは俺の顔を覗き込みながら

「あの、慶一さん。どうかしましたか？」

そう聞いてくるみゆきに俺は慌てながら

「い、いや、なんでもない。ちょっと考え事してただけだから。とりあえずだ。仕事終わるまでは頑張るしかないからな。みゆきも頼むぞ？」

そう言うとみゆきはにっこりと笑って

「はい。頑張ってきますね。それでは慶一さん、後ほど。」

そう言って再び業務に戻るみゆきを見送った時、いつのまにかこなたからの羞恥プレイから立ち直ったかがみがジト目で俺の事を見てることに気付いた。

「・・・なんだよ、かがみ。その目は？」

俺の言葉にプイッと横を向いて

「・・・別に、なんでもないわよ。私も仕事に戻るわ。」

そう言って少し不機嫌になりながら仕事に復帰するかがみに俺は頭にハテナマークを飛ばしていたのだった。

そして俺も仕事を再開させようと動こうとした時に最初にア○メ○トに来た時に感じた気配に気付いて店内を見回すと物陰で血の涙を流しながらこちらを恨みがましく見ている兄沢店長の姿を見つけたのだった。

兄沢店長は俺と目が合うと途端に俺の側まで走り寄って来て俺の両肩を掴むと

「電気街店の売上が急に伸びたと思ったら！何故だ！伝説の少年Ａ！！何故この店でアルバイトをしているんだ！何故伝説の少女Ａもこの店でアルバイトしている事を隠していたんだーーー！！」

そのあまりの迫力に若干引き気味になりながら

「い、いや、何故と言われても丁度アルバイトを探していた時にこの店での募集がありましたから・・・。」

そう言い訳をしていると兄沢店長の肩をがっしりと掴む者が現れたのだった。

「兄沢ー!!今更見苦しいぞ!!貴様が何を言おうとも、もはや伝説の少年Aと伝説の少女Aのうち以外でのバイトはありえんのだっ!大人しく引き下がれい!!」

その殿鬼店長の言葉に兄沢店長は真っ赤な炎を燃え上がらせながら

「おのれ!殿鬼!!こちらが知らぬ間に卑怯な真似を!!見ているがいい!!貴様の所よりもいい条件で伝説の2人を引き抜いて見せるわっ!!」

兄沢店長の言葉に殿鬼店長も

「ふはははは!!無駄無駄無駄だっ!うちを上回る条件など貴様の所で出せる訳もないわっ!!諦めるのだな!」

そうやって火花を散らす2人をとりあえずほっといて俺は業務へと戻るのだった。

実のところここにアルバイトに来てから何度かこういう事が起こっていたのだが、最初のうちは止めていた俺も最近はすっかり本人達同士で好きにさせておこうと思い、止める事すらしなくなっていた俺だった。

とはいえ、２人の張り合いのせいで俺達の自給はとんでもない額にまであがっていたのだが・・・

最初のうちこそ自給１２００円とそれでも高配当だった状況だったが、２人の争いがいつしか自給８０００円とかいうとんでもない額まで上がってしまったのだった。

流石にこれ以上は一介の学生の貰うバイト代ではないと思った俺は店長に遠慮をしていたのだが、どうしても殿鬼店長は俺達を兄沢店長に渡したくないという思いからこの条件を出し、俺達もそこまで出してくれる殿鬼店長を裏切れないなと思ったのでとりあえず兄沢店長の誘いを断りつづけてきたのだった。

人件費にそこまでかけて経営やっていけるのかという心配もあったのだが、俺達がバイトに入ってからは売上の伸びが半端ないらしく、俺達にそこまでの配当を配っても余裕が出来てしまうほどなのだと殿鬼店長が言っていたのだった。

しかしながら当然この高配当を貰ってるのは俺達だけだったので他のアルバイトの人には内緒なのだが・・・。

ある意味兄沢店長と殿鬼店長の対決もこのア〇メ〇ト電気街店の名物みたいな物にもなっていたので一種のイベント扱いにもなっていた。

だから放置した、というのもあるのだけど他に様子を見に行こうと思っていた場所もあったからというのも理由なのだった。

俺はそんな事を漠然と考えながらみさおたちの様子を見に行った。

「よう、みさお、つかさ、やまと。順調みたいだな。」

商品の補充陳列担当の3人の所に言って声をかけると3人は

「お、慶一。店長達またやってんのか？いつも飽きねえよなあ。」

「2人とも何だか怖くてまだなれないよ～。」

「ある意味似たもの同士なのかしらね？あの人のおかげで高給取りになれたようなものだけど。」

その言葉に苦笑しながら

「はは。あれがあの人達のライフワークってやつなんじゃないか？なんだか色々あるから飽きないけどさ。」

そう言う俺にやまととつかさが仕事の件で思い出した事があったようで

「先輩、そういえば・・・・・・の商品の事なんだけど在庫まだ残ってたかしら？」

「けいちゃん。・・・と・・・の商品の在庫切れちゃってるみたいなの。それと・・・の在庫チェックして欲しいんだけどいいかな？」

その2人に俺は頷いて

「わかった。ちょっと在庫状況見てみるから、後で内線飛ばす。とりあえずは今の商品の陳列まかせるぞ？」

その言葉に2人とも頷いて「お願いね、先輩。」「内線もらったら動いてみるから連絡お願いね～」と言う2人に俺も頷いて

「オーケー。それじゃこっちは頼むぞ、みさお。2人のフォロー任せたぞ？」

俺がそう言うとみさおは頷いて

「分かった。こっちは任せろってヴァ。とりあえず残りの作業やっちまおうぜ？」

みさおがつかさとやまとに声をかけると2人とも頷いて作業に戻って行ったのを俺は見送りつつレジの側のＰＣの所に向かった俺だった。

「あ、先輩。お疲れ様です。」
「こっちは問題ないわよ？慶ちゃん。」

俺に気付き、そう声をかけてくるこうとあやのに俺は

「2人ともお疲れさん。ちょっと在庫チェックするから引き続きレジの方頼むぞ。何かあったら呼んでくれ。」

と言う俺の言葉に2人とも頷いて

「分かりました。こっちは任せてください。」
「何かあれば声をかけるわ。慶ちゃんはそっちに集中して？」

と言う2人の言葉に甘えさせてもらって俺は早速在庫チェックを始めるのだった。

そんなこんなで今日も仕事終了の時間まで頑張った俺たちは今日の

イブはそれぞれの家で過ごす為に駅で別れ、それぞれの家に戻るのだった。

俺はというと実家の方に一度顔見せに戻らないといけなかったのでそのまま実家へと向かった。

その際にみゆきたちはそれぞれに用事があると言う事で今回は俺一人で実家へと向かう事となったのだった。

実家の門をくぐり、俺は玄関で靴を脱ぎながら

「ただいまー！お袋、親父。顔見せに来たぞ。龍兄も帰ってるのか？」

そう声をかけながら居間に行くとお袋はいつもの笑顔で

「あら、慶一。おかえりなさい。龍也はちょっと出かけているわ。お父さんは牧村さんの所よ？」

との言葉に少々拍子抜けしながらも俺はとりあえず元自分の部屋へと向かい、今日の為に準備をしていた事を始める為にあらかじめ送っておいた荷物を持ち下へ下りると

「お袋、親父や龍兄に顔見せていけなかったけど、俺、これからやる事あるから出かけるよ。年内にはもう一回位戻る予定だけど今日はこれでな。それじゃお袋、元気でやってくれよ。」

そう声をかけるとお袋も

「あら、忙しいのね。わかったわ。お父さんと龍也には伝えておく

から。またうちに来なさいよ？」

そう言ってくれるお袋に「わかってる。それじゃなー。」と言って俺は実家を出たのだった。

実家を出てまず立ち寄ったのはみゆきの家の向かい側の家、つまり、みなみの家だった。

俺はサンタクロースの帽子を被り、岩崎家のインターホンを押してしばらく待つ。

少し待つとインターホンから『はーい、どなたー？』という声が聞こえてきたので俺は

「夜分にすいません。森村慶一といいますがみなみさんはご在宅でしょうか？」

俺がインターホンの声の主に名乗るとしばしの間があいた後

『あなたが夏の旅行の時にみなみがお世話になった森村君ね？ちょっと待っててね、今開けるから。』

インターホンの声の主がそう言って少しすると玄関が開き、そこに先ほどの声の主が立っていた。

「こんばんは、森村君。私はみなみの母親のほのかです、よろしくね？」

そうほのかさんが挨拶してくれたので俺も

「初めまして、ですね。森村慶一です。それと、メリークリスマス。」

そう言って挨拶するとほのかさんも柔らかく微笑みながら

「ふふ。メリークリスマス。ちょっと待ってね、今みなみを呼んでくるから。みなみー！森村君が来てるわよ？下におりてらしゃいー！」

そう言って2階にいるらしいみなみを呼んでくれたほのかさんと共にしばし待っていると、いきなり俺に向かって白い大きな物体が飛びついてきたのだった。

「うおっ！？びっくりした。チェリー、脅かすなよ。」

俺に飛びつき顔を舐めまわすチェリーの頭をなでながらそう言っているとほのかさんも微笑みながら

「あら、見知らぬ人にいきなり懐くなんて珍しいわね。チェリーは結構人を見る犬なんだけどそのチェリーがそこまで懐くなら森村君はチェリーにとって安心できる人なのね。」

そのほのかさんの言葉に照れながら

「いやあ、照れますね。でもチェリーと俺は初対面と言うわけじゃないんですよ。お宅のみなみちゃんと初めて出会った時からチェリーにはこうされていましたからね。」

そうほのかさんに説明すると少し驚いた表情で

「まあ、そうだったんですか。あなたも犬はお好きなんですね。」

俺にそう言うほのかさんに頷きながら

「ええ、とはいっても犬だけではなく猫も好きですけどね。実際家で飼っていますから。」

そう説明するとほのかさんもにっこり笑っていたのだった。

そうこうしているうちにみなみが2階から降りてきたらしく俺の姿を見て

「・・・お待たせしました・・・。こんばんは、先輩。今日は突然どうしたんですか・・・？」

俺にそう聞いてくるみなみに

「よっ、みなみ。メリークリスマス。今日は２４日だからな。」

そう言う俺にみなみも

「・・・メリークリスマス・・・そういえば今日は・・・そういう日でしたね・・・。」

みなみの言葉に頷きながら

「そういう事だ。クリスマスにはサンタ、そしてサンタと言えばプレゼント。つまりだな・・・」

そうみなみに言いながら俺は自分の持っている荷物からみなみへの

プレゼントを取り出して

「ほら、みなみ。慶一サンタからお前にクリスマスプレゼントだ。」

そう言って笑いながら俺はみなみにプレゼントを渡すとみなみは

「・・・え?これ、もらってしまっていいんですか・・・?」

突然のプレゼントに驚きながら俺に聞き返してくるみなみに俺は

「ああ。その為に選んできたものだからな。これからまだまだ寒い日も続くし受験に向けて風邪を引かないようにって思ってな。暖かく出来るものを選んできた。」

俺の言葉を聞いてみなみは

「・・・あの、これ・・・あけてみてもいいですか?」

そう聞いてくるみなみに俺は頷いて

「ああ、まあ、気に入ってくれるかは分からないけどな。」

そう答えるとみなみはプレゼントの包みを開け始める。

中に入っていたのはマフラーとセーター、そしてかがみの所で買ったあの時のお守りだった。

それを見たみなみは嬉しそうな顔で

「・・・ありがとうございます・・・とても暖かそうで・・・そし

て・・・とても嬉しいです・・・私、受験頑張りますから・・・先輩も私を応援していてください・・・。」

俺にそう言うみなみに微笑みながら頷く俺だった。

「がんばれよ?みなみ。それじゃ俺はまだ回る所あるからこれで行くよ。来年は皆揃って陵桜で会おうな。」

手を振りながら玄関を出ようとする俺にみなみは

「はい・・・必ず・・・必ず合格してみせます・・・だから、待っていてください、先輩・・・。」

その言葉に俺も力強く頷いて見せるのだった。

「あー・・・それとな、みなみ。ありがとう。俺が過去を乗り越える事が出来たのもお前にも勇気をもらったおかげだ。その事も一言礼を言っておきたくてな。今日のプレゼントにはその感謝の意味もあるんだ。」

そう俺がみなみに伝えたい事を言うとみなみは顔を赤くして照れながら

「・・・い、いえ・・・私は・・・あの場に一緒に居ただけですし・・・先輩のお役に立てていたかどうかも・・・わかりませんでしたから・・・」

そう言いながら慌てているみなみに俺は

「役に立っていたさ。あの時どれほどに心強かった事かわからない。

だから本当に感謝してる。それは俺の正直な気持だからさ。だから、ありがとう。」

笑顔でみなみにそう言うとみなみも赤い顔のままではあったが

「私こそ・・・素敵なプレゼントをありがとうございます・・・先輩の気持・・・受け取りました・・・とても・・嬉しかったです・・・」

そう言ってくれたのだった。

俺はみなみに感謝しつつ、みなみと別れの挨拶を交わして次の目的地を目指す。

みなみｓｉｄｅ

突然に先輩が家を訪ねてきたので何事だろうと思い、玄関口まで行った私に先輩から思いもかけないプレゼントをもらう事になった。

まったく予想外の出来事と、先輩の気遣いが嬉しくて私は先輩からもらったプレゼントを改めて見て、受験への闘志を新たにするのだった。

「いい子ね、森村君って。みなみも彼の事気に入ってるみたいね。」

と言うお母さんの言葉に私は顔を真っ赤にして俯きながら

「・・・うん。とっても優しくて・・・暖かい人・・・だから・・・」

私の言葉にお母さんもにっこりと笑って頷いていたのだった。

そして別れ際に先輩が言ってくれた言葉は私にとっても凄く嬉しい言葉だった。

（・・・ありがとう先輩・・・私・・・頑張りますね・・・そして、ゆたかや田村さんと共に・・・きっと先輩の前に・・・立ちますから・・・）

先輩の言葉を噛み締めながらそう改めて心に誓う私だった。

慶一ｓｉｄｅ

自分からやろうと思った作戦だったが、事のほかみなみも喜んでくれたので俺はやってよかったな、と心の中で思いながら今度は向かいのみゆきの家へと伺う事にしたのだった。

道路を渡り、俺は高良家のインターホンを押す。

しばらくするとインターホンからみゆきの声が聞こえた。

『はい。どちら様でしょうか?』

と言うみゆきの言葉に俺は

「俺だ、慶一だ。急にすまないな。」

そう返事をするとみゆきは少し驚いたような声で

『慶一さん、なのですか?ちょっと待っていてください。今そちら

に行きますから。』

と言った後、少し待っているとみゆきが玄関から出てきてこちらへやってくるのが見えた。

「お待たせしました、慶一さん。あら?その帽子は、サンタクロースの帽子ですか?」

俺が被っているサンタ帽を見てみゆきがそう言うと俺は頷きながら

「その通り。メリークリスマス、みゆき。慶一サンタからお前へのプレゼントだ。」

そう言って持っている荷物からみゆきへのプレゼントを取り出してみゆきに渡すとみゆきは驚きながら

「え?これ、いただいもいいのですか?」

そう聞き返してくるみゆきに俺は頷きながら

「ああ。その為に選んだプレゼントだからな。気に入ってくれるといいけど。」

そう答えつつも少し照れてる俺だった。

「ありがとうございます、慶一さん。これ、開けてみてもいいですか?」

というみゆきに俺は頷くとみゆきはプレゼントの包装を開いて中を見る

「わあ！これってストールですね。とても暖かそうです。ありがとうございます、慶一さん。とても嬉しいです。」

とても嬉しそうに俺のあげたプレゼントを見ながらお礼を言うみゆきに俺はさらに照れながら

「ま、まあ、喜んでくれたのなら選んだ甲斐もあったというものさ。これからまだまだ寒いからな、風邪だけは引くなよ？みゆき。」

そう言うとみゆきも頷きながら

「はい。私の体の事までお気遣いいただいてとてもありがたく思います。これ、大事に使わせてもらいますね。」

満面の笑顔でそう言うみゆきに俺も笑顔で頷き返すのだった。

「慶一さん、お茶くらいは用意させてもらいますので一度家へどうぞ。」

何かお礼がしたいと思ったみゆきは俺にそう声をかけてきたのだが、俺はみゆきに悪いと思いながら首を振って

「その気持は嬉しいんだが、俺は他にもまだ行く所があるんだ。もしみゆきさえよければ今度また俺が遊びに来た時にでもお茶につきあわせて貰うよ。悪いな。」

そう言う俺にみゆきは少し残念そうな顔をしたが、再び笑顔に戻ると

「そうですか。それじゃ今度、私の方から誘わせてもらいますね。

その時にまたゆっくりと。」

俺にそう伝えてくるみゆきに俺も頷いて

「ああ。その時にはゆっくりつき合わせて貰うよ。それじゃ今日はこれでな。」

そう告げてみゆきの家を後にしようとした時、俺はみゆきに大事な事を伝え忘れそうになった事を思い出して

「おっと、みゆき。言い忘れていた事がある。みゆき、今年1年お前や皆と出会えて楽しかった。それに海では俺の過去と向き合う為に俺に勇気もくれたよな。本当に感謝してる。ありがとう。来年も、こんな俺だが1年間仲良くやっていきたいと思ってる。俺はお前にそれを言いたかった。」

そうみゆきに告げるとみゆきも嬉しそうな、それでいて柔らかな微笑みを俺に向けながら

「それを言うなら私もですよ？慶一さん。今年になって慶一さんと出会いましたが、それは私にとっても大切な思い出となっています。それに、私だって慶一さんに勇気を頂きました。みんなと一緒に居れるように努力する、あの約束は私にとっても勇気のいる決断だったんです。けど、そんな私の言う事を慶一さんは受け止めてくれてそして、私との約束の為に動いてすら下さいました。とても、本当にとても嬉しかったんです。私の方こそ、来年も、いえ・・・それ以降もまた慶一さん達と過ごしたいと思っています。私こそよろしくお願いします、慶一さん。」

そう言ってにっこり笑うみゆきに俺も笑顔で返してみゆきと別れの

挨拶を交わして高良家を後にしたのだった。

みゆきｓｉｄｅ

慶一さんの訪問は予想していなかった事でもあったので、今日の突然の訪問には驚かされました。

けれど慶一さんは私にとっても素敵なクリスマスプレゼントを下さいました。

そして最後に私に言ってくださったあの言葉は私にとって凄く嬉しい言葉でもありました。

私は頂いたストールを改めて見ながら、慶一さんがこれを選んでいる時の苦労を想像して思わず微笑んでしまう私でした。

（苦労したのかもしれませんね。でも、驚きましたが、とても嬉しかったです・・・って、あああ！私、プレゼントを頂きましたが、慶一さんに何もお返しをしていません！何てことでしょう・・・と、とにかく私も慶一さんへのプレゼントを明日のアルバイトの帰りにでもお渡ししませんと・・・）

そう心の中で考えながら自分が慶一さんへのプレゼントをお返ししていない事に気付き、落ち込む私でした・・・。

慶一ｓｉｄｅ

みなみに引き続き、みゆきにもクリスマスプレゼントを渡してきた俺だったが、こちらも喜んでくれたようだったのでほっと一安心した俺だった。

都内組みは後2人いるので俺は早速2人の所へと向かったのだった。

とりあえず俺は最初にこうの所に行ってみる事にした。

しばらく歩き、こうの自宅前に着くと俺はインターホンを押してみる。

少し待つとインターホンから「はい。どちら様でしょうか?」というこうの母親の声が聞こえたので

「いつもお世話になっています。森村慶一ですが、こうさんはいらっしゃいますか?」

そう訊ねるとこうの母親は

『まあ、慶ちゃん。いつもうちの娘と仲良くしてくれてありがとう。今こうは家にはいないのよ。やまとちゃんの家に遊びにいってるわ。そっちを訊ねて見るといいと思うわよ?』

そう教えてくれるこうのお母さんに「わかりました。ありがとうございます。」と告げた後、俺はやまとの家に向かったのだった。

しばらく歩くとやまとの家に到着したので俺はやまとの家のインターホンを押そうとしたのだが、ふいに後ろから声をかけられたのだった。

「あら?先輩。私の家の前で何をしてるの?それにその帽子は・・・」

「あれ?先輩だ。どうしてこんな所にいるんです?というかいつこ

っちに戻ってたんですか？」

と言う声に振り向き、俺は2人に

「お？やまと、こう、メリークリスマス。今お前の家を訪ねようと思ってた所だったんだよ。それにしても、その荷物、買い物にでも行ってたみたいだな。あー・・・それとこっちには今日戻ってたんだ。けどすぐに自宅の方へ戻るけどな、埼玉のな。」

そう言うと2人は

「ふふ。メリークリスマス。とりあえず2人で形だけでもクリスマスしようか？って事でね。買出し行ってたのよ。と言う事は先輩は今日はゆっくりしていけないのね？」

「メリークリスマス、先輩。そうだったんですか。でもすぐ帰っちゃうんじゃ残念ですね。」

そう言いながらも俺がすぐに帰ってしまう事を気にして少し残念そうな顔をしていたのだが俺は気を取り直して持っていた荷物から2人へのクリスマスプレゼントを取り出すと

「まあ、俺も今日はちょっと忙しくてな、申し訳ないんだが。やまと、こう。これは慶一サンタから2人へのクリスマスプレゼントだ。受け取ってくれるか？」

そう言って2人にプレゼントを渡すと2人は驚いた表情で俺を見ていたがやがてその表情が嬉しさに変わり

「ありがとう、先輩。突然で驚いたけど凄く嬉しいわ。でも、慶一サンタって自分で言ってて恥ずかしくない？」

「なるほど、それで先輩その帽子被ってたんですね。でも、プレゼント嬉しいです。慶一サンタは笑えますが。」

2人とも俺の言った事がおかしいようで笑いをこらえているのが見て取れた。

俺は少々不機嫌になりながら

「うるさいな。いいだろ?こういう時くらいはさ。そんなに笑うんなら今あげたプレゼント返せよ。」

少しむくれつつそう言うと2人は慌てて

「ご、ごめんなさい、先輩。プレゼントは本当に嬉しかったから、どうか取り上げるのだけは許して?」

「すいません、すいません。このとおりですからプレゼント下さい、お願いします。」

そう言って謝ってきたので俺は軽いため息を一つついてから

「まあ、わかればいいよ。ともあれこれからまだまだ寒いし、それつけて風邪ひかないようにな。」

俺がそう言うと2人は俺のあげたプレゼントを見て

「先輩、これあけてみてもいいかしら?」

「私も中身見ていいですか?」

そう言って来たので俺は頷いて

「ああ。見てみてくれ。一応デザインは俺なりにイメージして選んだつもりだけどさ。」

俺がそう言うと2人は早速プレゼントの包みを開いてみるのだった。

「わあ。毛糸の手袋とマフラー、それに毛糸の帽子まで・・・先輩、ありがとう。デザインもいいし気に入ったわ。ちょっとつけてみるから見てくれる？先輩。」

「へー。これはあったかそう。先輩ありがとうございます。とても嬉しいですよ。私もちょっと付けてみますね？」

そう言って2人は帽子とマフラー、手袋をつけて俺に見せてくれたのだった。

「うん、中々似合ってるぞ。俺のセンスも捨てた物じゃないな。」

その言葉に2人とも嬉しそうに

「こうのも中々あってるじゃない。私もこれは気に入ったわ。」

「やまとも中々いいよー？先輩のセンスも大した物ですよ。」

そう言って喜んでくれたのだった。

俺はそんな2人に向き直り

「2人とも、中学時代から俺の事を友人として見てくれただけでなく、いつも俺の側にいてくれた事を今でも嬉しく、そしてありがたく思ってる。このプレゼントもお前らのそんな気持に感謝したくて渡したんだ。今まで本当にどれほど心強かったか、そして過去を乗り越える事においてもどれほどの勇気をもらったか。どれだけ感謝

の言葉を並べても足りないくらいだ。来年も俺たちは一緒に過ごしていく事だと思うけど、よろしくな、２人とも。」

俺がそう２人に告げると２人とも目に涙を浮かべながら

「私だって先輩にはあの頃から感謝しっぱなしなのよ?壊れかけた友情を修復してくれた事、その後も私達の力になってくれた事、私が陵桜を選んだ時だって先輩は私を黙って受け入れてくれた。それがどれほどにありがたくて嬉しかったか・・・さらにはこんなプレゼントまでも私にくれた。本当に嬉しいのよ・・・先輩・・・こちらこそ、来年も、それ以降も・・・よろしくね・・・」

最後には涙をこぼしながら言うやまと。

「あの時に先輩は私達をほおっておいても良かったのに先輩はそうしなかった。私とやまとの為に手を差し伸べてくれた。嬉しかったんです、本当に。あの時に私は先輩と友達になりたいと言いましたよね?あの言葉は先輩に本当に感謝をしていたから。私の偽りない本心をぶつけたんです。それを受け止めてくれた先輩の優しさに私の方こそ感謝を言いたいです。そして、これからも先輩には苦労かけてしまうかもしれませんが、どうぞよろしくお願いします。来年も、それ以降も・・・一緒に・・・先輩と皆と歩みたいですから。」

こうもまた、同じように涙をこぼしながら俺に言ってくれた。

俺も、涙が出そうになるのをこらえながら

「俺たちはこれからも一緒にいけるさ・・・俺たちがそう望んだんだからな・・・だろ?こう、やまと。」

無理やり笑顔を作りながらそう言う俺に2人もまた無理やリ涙をとめて頷いて笑ってくれたのだった。

「それじゃ俺はまだこの後もやる事が残ってるからこれで行くよ。こう、やまと26日は派出にやろうな。」

そう告げると2人も

「そうですね、思い切り楽しみましょう。ついでに私達の忘年会と行きましょうよ。」

「忘年会って・・・まあ、学生の身でありながら働いてる私たちには違和感はないかもね。」

笑いながら言う2人に俺は

「違いないな。ま、とにかく風邪引くなよ?2人とも。そして笑って来年を迎えようぜ。」

俺の言葉に2人とも頷いてくれたのだった。

そして俺は2人に別れの挨拶を交わして永森家を後にしたのだった。

こうｓｉｄｅ

クリスマスイブの24日はバイトもあったりして普通にイブは過ごせないだろうと思い、私はやまとと2人でイブを過ごそうと思い、やまとの家に来た。

とりあえず足りない食材等があったから私達は買い物にでたのだけど、2人してやまとの家に帰り着いてみるとそこにはやまとの家を

訪ねてきたサンタ帽を被った先輩がいたのだった。

そして先輩は私達にとても嬉しいクリスマスプレゼントをくれたのだった。

「それにしても、まさか先輩に会うとは思わなかったわね。」

「うん。ちょっとびっくりだったよ。と言うか先輩がこっちに帰って来てた事すらしらなかったしね。」

「先輩、ひょっとしてみんなの所も回って歩くつもりなんじゃ・・・」

「確かに突貫で回ればいけそうかもだけど・・・タフだね、先輩は。」

そう言って2人して苦笑しながら軽いため息をついた後私たちはやまとの家に入っていった。

やまとの部屋に向かいながら私は

（でも、先輩からもらったこれ・・・嬉しかったな。あったかいしデザインもいいし。それに何より、私達の事を今でも考えていてくれる事が特に嬉しかった。来年も先輩と楽しくやりたいな。）

そう心の中で思っていた。

そしてやまとも

（先輩の突然の来訪には驚いたけど、誕生日プレゼントに続いてクリスマスプレゼントまでもらえるなんて思ってなかったわ。それに、最後に私達に言ってくれたあの言葉は本当に嬉しかった。来年も私は先輩と一緒に・・・いたいな・・・そう思う・・・）

そんな事を考えているのだった。

慶一ｓｉｄｅ

都内組みを回り終えて、俺は都内を離れた。

そして残りの仲間達の元へと急ぐ。

クリスマスイブはまさにこれからが本番と言えるのだった。

クリスマスの旋律～幸せを運ぶ慶一サンタ前編～（後書き）

長くなりそうだったので前後編に分けます。
自分の作品を呼んでくださってる方の感想もお待ちしておりますので書いてもいいよ、と言う方がおられるようでしたら書き込んでくださると嬉しいです。
そしてこれからも変わる日常をどうぞよろしくお願いします。

クリスマスの旋律～幸せを運ぶ慶一サンタ後編～

クリスマスイブの日、俺はみんなへのプレゼントを配る為に俺は自らサンタクロースの役を演じようと決めた。

そして、まず最初に都内のみなみ、みゆき、こう、やまとの４人にプレゼントを配った俺だった。

俺が何故そうしたかったのか、それは今年１年みんなにも俺自身の事について色々な意味で世話になったので俺はそんなみんなに感謝の心をプレゼントに込めて渡したかった、というのがあったからだった。

だからこそプレゼントを渡す時に俺はそれぞれに感謝の言葉も添えてプレゼントを手渡したのだった。

そして、都内組みを回り終えた俺は一路、今度は埼玉を目指して電車に乗ったのだった。

最初に回る家の最寄駅で電車を降りて俺はその家を目指した。

しばらく歩くとまず最初に立ち寄る家へと辿り着いたので俺はその家の呼び鈴を押すのだった。

そして少し待つと「はーい」という声と共に顔を出したのは・・・

「はいはいーどなたー？んぅ？君は森村君じゃん。どうしたの？今日はー。」

ゆたかのお姉さんのゆいさんだった。

俺はゆいさんに

「メリークリスマス、ゆいさん。今日はお早いお帰りなんですね。」

そう挨拶するとゆいさんは照れたように笑いながら

「メリークリスマス、森村君。実はうちの旦那が今日は単身赴任から帰って来れてねー。ゆたかと一緒にクリスマスしてたんだよー。そう言えば君の姿はさしずめサンタさんだねー。」

その言葉に俺も笑いながら

「それはよかったですね。ええ、実はちょっとサンタの真似事をやってましてね。あ、そうだゆいさんこれ。俺からプレゼントです。中々いいドライバーグローブ見つけたんでどうだろうか？と思いましてね。」

自分の荷物からゆいさんへのプレゼントを取り出して渡すとゆいさんはとても嬉しそうな顔で

「おー。これはなかなかだね、森村君も見る目あるじゃん。これ大事に使わせてもらうよー。」

ゆいさんの言葉に俺も笑って頷きながら

「是非そうしてやってください。それと、ゆたかを呼んで貰っていいですか？」

と、ゆいさんにお願いするとゆいさんは満面の笑みで頷いて

「わかったよー。今回はゆたかの為にも来てくれたんだね？それじゃちょっと呼んでくるから待っててねー。」

そう言ってゆいさんは奥に引っ込み、ゆたかを呼びに行ってくれた。

そうして少し待っていると奥からゆたかが走ってきて

「お、お待たせしました、先輩。あはは。サンタ帽子、よく似合ってますよ？」

俺のサンタ帽姿を見ながら笑顔でそう言うゆたかに

「ありがとな。それとこれ、お前にだ。メリークリスマス。」

そう言ってプレゼントをゆたかに渡すとゆたかは驚きながら

「え？これ、いいんですか？もらっちゃっても。」

と言うゆたかに俺も頷いて

「ああ。その為に選んでみた。後、かがみの所で買ってきたお守りも一緒だ。そのお守りを持って体調を崩さないように気をつけて受験に臨んでくれ。」

そう言うとゆたかはとても嬉しそうな笑みを浮かべながら

「ありがとうございます、先輩。私きっと合格してみなみちゃん達と一緒に先輩の前に立ってみせますから。」

俺もゆたかのその言葉に満足気に頷くと

「がんばれよ?ゆたか。それとな、夏休みの時、一緒に海に来てくれてありがとうな。お前にもあの時には過去を乗り越える為に勇気をもらったからちゃんとお礼を言いたかったんだ。それと共にそんな感謝の意味もそのプレゼントに込めさせてもらった。」

俺のその言葉にゆたかは顔を赤らめて照れながら

「そんな事ないですよ。それを言うなら私だってそうです。体の具合を悪くして先輩に助けてもらった事から始まって、その後は先輩に海に誘ってもらって、受験勉強の気晴らしが出来たんですから。そんな風に先輩にお世話になったんです。それに、私達の為に勉強会もしてくれました。とっても嬉しかったんですよ?だから私こそありがとうです。」

俺はそんなゆたかの感謝の言葉に照れていたのだった。

「はは、照れるな。おっと、俺はそろそろ行かないと。ゆたか、ゆっくり出来なくて悪いけど、これでな。受験に向けて頑張れよ?それじゃなー。」

ゆたかに手を振って俺は小早川家を後にする時ゆたかも

「はい。とても嬉しいクリスマスをありがとうございます。」

そう声をかけ、そして手を振って見送ってくれるゆたかに俺も手を振り返しながら去っていくのだった。

ゆたかｓｉｄｅ

きよたかさんとゆいお姉ちゃんと一緒に楽しくクリスマスをやってる時に先輩が突然やってきた。

私は先輩が来るなんて思っていなかったので驚いていたのだけど、ゆいお姉ちゃんと私に先輩はクリスマスプレゼントを贈ってくれたのだった。

私の受験の事も気にかけてくれる先輩の気持がとても嬉しかったし、もらえたプレゼントも私の体を気遣ってくれる物だったので私は改めて先輩に感謝を心の中で言うのだった。

（ありがとうございます、先輩。私きっと先輩の期待に応えてみせますから。そして、きっと合格して先輩と同じ学校で楽しくやるんだ！）

感謝と共に新たな決意をみなぎらせた私だった。

慶一ｓｉｄｅ

ゆたかへのプレゼントを渡し終えた俺は次の目的地へと向かって歩いていた。

しばらく歩くと次の目的地へと到着したので、俺は呼び鈴を押した。

少し待つと玄関を開いて出てきたのは・・・

「はーい、どなたっスか？ん？あんたは・・・森村君か。」

その言葉に俺は頷いて

「はい。夜分にすいません。ひよりさんのお兄さん。ひよりさんは家にいらっしゃいますか？」

そう訊ねるとひよりのお兄さんは

「ああ。今部屋で勉強してるかもしれないな。ちょっと待っててくれ、今呼んでくるから。」

そう言ってひよりを呼びに戻って行った。

少し待ってると慌しい足音と共に玄関の戸が開いて、軽く息を切らせているひよりが現れた。

「こ、こんばんはっス先輩。突然どうしたっスか？こんな時間に。」

不思議そうな顔で俺に聞いてくるひよりに俺は

「メリークリスマス、ひより。今日は俺からお前にプレゼントを届けにやってきたのさ。」

そう言って俺は持っていた荷物からひよりへのプレゼントを取り出すと

「ほら、これだ。気に入ってくれればいいんだがな。これからまだまだ寒いし、受験に向けて風邪引かないように、って思ってな。」

そう言いながらひよりに手渡すとひよりは驚いたような表情で

「ええ!?い、いいんですか?これ、いただいちゃっても。」

ひよりの言葉に俺も頷いて

「まあな。その為に選んできた物だからな。本当はお守りとセットで渡すつもりだったが、前の時に先にあげちゃってるからな、そっちは勘弁しろよ?」

そう説明するとひよりは嬉しそうな顔になって

「あ、ありがとうございます。私なんかに気を使ってもらって、感激っス。これあけてみてもいいっスか?」

その言葉に頷く俺。

それを確認してプレゼントを開くひよりを俺は微笑みながら見守っていた。

「あ、これって、セーターと、マフラーっすね?あと手袋も・・・先輩、ありがとうございます。凄く嬉しいっス。私これをつけて受験まで体調崩さないように気をつけるっス。」

俺もその言葉に頷きながら

「是非ともそうしてくれ。そして、ゆたかたちと一緒に陵桜合格、目指してくれよな。」

そう告げるとひよりは

「はい。必ず。先輩のご期待に応えてみせるっスよ?見ててくださ

い・・・あ、でも、またプレッシャーで調子悪くなった時はあれをお願いしますね。」

その言葉に頷いて俺は最後に

「わかったよ。それとだ、俺の過去の事でお前にもかなりの勇気を貰った。海での一件は本当に感謝してる。ありがとな。今回のプレゼントはそんな感謝の意味も込めさせてもらった。それと同時にこうの為に、アニ研の期待の星となってくれ。まあ、これは俺のお願いでもあるが。ともかく、来年一緒の学校に通うことになった時は1年間よろしくな。」

最後の方は照れながらひよりにそう言うとひよりも笑顔で

「いやー・・・あの時は私もただ先輩の側にいただけっスから感謝って言われると照れますね。私こそ先輩には色々と気を使ってもらいました。それに、私に小早川さんや岩崎さんのような友達さえも作ってもらいましたし、こちらこそ感謝です。陵桜に行ったなら、私こそよろしくお願いします。」

ひよりの言葉に笑顔で頷くと

「さてと、それじゃ俺はそろそろ行くよ。まだ行かなきゃならない所もあるからな。ひより、無理せず頑張れよ?それじゃなー。」

そう言ってひよりに手を振って俺は走り出したのだった。

去り際にひよりも

「はいっス。先輩も気をつけて行ってくださいね。今日はありがと

うございましたー。」

そう言いながら同じように手を振ってくれたのだった。

ひよりｓｉｄｅ

クリスマスも勉強、という事で私はあの時から先輩に貰った自信を継続させながら勉強に取り組んでいた。

そうして勉強に没頭していたら急にお兄ちゃんが部屋に来て先輩が来ていると言う事を告げられて私は慌てて玄関へと向かった。

玄関で先輩を出迎えると、先輩はクリスマスの時の挨拶と共に私にまさかのクリスマスプレゼントを贈ってくれたのだった。

（私は先輩や小早川さん達ともまだまだなじみは浅いけど、まさか先輩がそんな私にプレゼントくれるなんて思わなかったな・・・私は先輩に対してこんな風にして貰うほど大した事した訳じゃないのにそんな私にも気を使ってくれた・・・この前の受験のプレッシャーで潰されそうになってた時もそうだった・・・なんか、すっごく嬉しいっスね・・・先輩にここまでしてもらったんだから、私も受験を成功させて先輩に応えなきゃ申し訳ないっスね・・・よーし！燃えて来たっスよー！？）

先輩に感謝しつつ受験に向けて改めて闘志を燃やし直しながら私はそう心で考えていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

ゆたか、ひよりへのプレゼントを届けて俺は次の目的地に向かって

電車で移動をしていた。

そして俺はこなたの最寄駅である幸手駅へと到着する。

時間を確認して、さあ、こなたの家へ行こう、と思い移動をしようとした時、俺の後ろからふいに声がかかったのだった。

「おや？君は森村君じゃないか？しばらくだね。元気だったかい？」

その声に驚いて振り向くとそこにはそうじろうさんが立っていたのだった。

「あ、こんばんは。と同時にメリークリスマス、そうじろうさん。」

俺がそう挨拶をするとそうじろうさんもにっこりと笑いながら

「おお、メリークリスマス。そういえば今日はそんな日だったね。そういえば君はこんな場所で何をしていたんだい？」

そう聞いてくるそうじろうさんに俺は

「実はちょっとこなたに用事があったのでこれからお宅へ伺おうと思っていた所でして・・・」

恐縮しながらそう言うとそうじろうさんは

「おや？そうなのか。だったら俺もこれから家に戻る所だし、一緒に行かないか？」

そう言うそうじろうさんに俺も頷いて

「わかりました。それじゃ一緒に行きましょう。あ、それとこれは俺からそうじろうさんへのクリスマスプレゼントです。」

そう言って俺はそうじろうさんへのプレゼントを取り出して渡す。

プレゼントを受け取ったそうじろうさんは驚きながら

「いやー、悪いねえ。本当によかったのかい？これ、もらっちゃっても。」

その言葉に俺も頷いて

「はい。これからまだ寒くなりますし、風邪引かないようにと思いましてマフラーと靴下等を選んで来たんですよ。」

と歩きながら俺が説明するとそうじろうさんは嬉しそうな表情で

「助かるねえ。足元とか結構冷えるからこういうのはありがたいよ。」

そう言って喜んでくれたので俺はほっと一安心したのだった。

しばらくそうじろうさんと次の新作小説の事などについて談笑しながら歩いているうちにこなたの家に着いた。

「森村君、寒いだろう。ちょっと上がってあったまって行くといい。」

そのそうじろうさんの言葉に俺は申し訳なさそうに

「お気持はありがたいんですが、用事を済ませてすぐに行かなきゃならない所がありますので。本当にすいません。それと、申し訳ないのですがこなたを玄関に呼んでいただけませんか？」

そうじろうさんは俺を少しじっと見つめた後軽いため息をつきながら

「そうか。なら仕方ないね。ちょっと待っていなさい。今こなたを呼んでくるから。」

そう言って2階のこなたの部屋にこなたを呼びにそうじろうさんは上がっていったのだった。

少し待っていると上から慌てて下りてくるこなたらしき足音が聞こえて、玄関先にこなたが現れた。

「お待たせーって、慶一君、どうしたの？こんな時間に。それにその帽子はサンタクロースの帽子だよね？」

俺はこなたが降りてくる前にサンタ帽を被って準備していたのだが、こなたはそれに気付いたようだった。

俺は笑いながら

「まあな。こなた、メリークリスマス。今日はちょいとサンタの真似事をやってる所なんだよ。ほら、これ、お前への俺からのプレゼントだ。」

そう言って持っていた荷物の中からこなたへのプレゼントを取り出して渡す。

こなたは驚いた表情でそれを受け取りながら

「あ、ありがとう。それにしてもまさかのサプライズだね。びっくりだよ。これ、開けてみてもいい？」

その言葉に俺も頷いて

「一応こなたが欲しがっていた物と俺が独自で選んだ物をセットにしといた。まあ、気に入ってくれればいいけど。」

そしてプレゼントの包みを開けたこなたは

「あ、これって私が欲しがってた限定版の奴だ！それにこれはマフラーと手袋と猫耳みたいな毛糸の帽子かー。うんうん。慶一君、ちゃーんとわかってるねえ。」

と、満面の笑みで嬉しそうにプレゼントを見るこなたに俺は

「どうやら喜んでくれたみたいだな、よかったよ。」

そう言った後俺はこなたと向き合って

「・・・こなた。俺と出会って友達になってくれた事もそうだけど、みんなと俺をつなぐ掛け橋になってくれた事、俺の過去を乗り越える為に勇気をくれた事、俺が窮地に陥ったあの時に俺の為に力を貸してくれたこと、俺の背負う荷物を持ってくれた事、数え上げたらきりがないくらいお前には世話になった。本当にありがとう。このプレゼントには俺のそんな感謝の気持を込めさせてもらった。もっとも、これだけでお前に報いきれたとは思ってないけど、俺はお前

に、少しでも恩を返したかったんだ。俺は来年も、いやそれ以降だってお前やみんなと仲良くやって行きたいって思ってる。こんな俺だけど、来年もよろしくな。」

そう告げるとこなたは照れながらも嬉しそうに瞳に涙を光らせながら

「何いってるのさ。それを言うなら私だってそうだよ。初めて会った時にコロネ譲ってもらったし、私が友達になって欲しいって言った時も受け入れてくれた。素敵な誕生日プレゼントももらったし、海に遊びにも連れて行ってくれたし、勉強も力を貸してくれたよね？それに、私達４人以外にも仲間を作るきっかけもくれた。私が君に料理を作った時も嬉しそうに食べてくれた。皆、君がいてくれた事で出来た思い出なんだよ?そんな思い出をくれた君に私だって感謝しっぱなしなんだからね?だから、来年もそれ以降も楽しくやって行きたいから、私こそこれからも・・・よろしくね?慶一君。」

最後は少しだけ涙を流しながら俺に笑顔でそう言ってくれるこなたに俺も力強く頷くのだった。

そしてふいに時計を確認した俺は

「おっと、もうこんな時間か。悪いな、こなた。俺、まだ行かなきゃならない所あるからさ、これで行くよ。２６日のパーティは楽しくやろうな。それに明日は今年の仕事の最終日でもあるからな。最後までがんばろうぜ?それじゃなー。」

そう言って手を振って走り出す俺にこなたも手を振ってくれながら

「うん。プレゼントありがとうね。私も明日はがんばるから、２６日は楽しくやろうねー。それじゃ慶一サンタの無事を祈ってるよー。

」

そんなこなたの最後の言葉に俺は苦笑しながら走って行くのだった。

こなたｓｉｄｅ

バイトも終わり、おとーさんと家で2人だけのクリスマスをする為にとりあえずの準備をしていた私だったのだが、あらかた準備を済ませて後はおとーさんの帰りを待とうと思い部屋でネトゲをしていたのだが、帰ってきたおとーさんから慶一君の来訪を告げられて私は驚きつつも玄関まで出迎えにいったのだった。

そこに居た慶一君はサンタ帽を被っていてなにやらおかしかったので慶一君に気付かれないように笑いをこらえていたのだけど、慶一君はそんな私にクリスマスプレゼントを贈ってくれたのだった。

私の欲しがってた物と共にマフラー等の防寒グッズをもらえたので私はとても喜んだのだった。

そしてそれと共に慶一君から貰った感謝の言葉は私にとって物凄く嬉しい言葉だった。

（慶一君も律儀だよね、わざわざ感謝の気持ち伝える為にこんな事までしてさ。でも、慶一君がそんな風に思っていてくれた事は嬉しかったなー。それに私も、思っていた感謝の気持を伝えられたし、すっきりしたかな。でもね、慶一君。私はこれからもずっと、君と一緒にいたいな。君と、皆と、一緒に笑っていたい。でも慶一君ならこういってくれるんだろうな。望むならできる、ってさ。だから、私は望むよ？いいよね？慶一君。）

慶一君からもらったプレゼントを改めて見ながらそう、心の中で思う私だった。

慶一ｓｉｄｅ

こなたへのプレゼントも届け終えて俺は次の目的地に向けて走っていた。

幸いにもあやのたちとかがみ達は同じ市内に住んでいるので最後は市内の移動だけで終わりそうだな、と内心安堵していたのだった。

そうしてまず辿り着いたのはみさおの家だった。

俺はみさおの家の呼び鈴を押してみる。

少しすると玄関の扉越しに声がかかった。

「はーい、どちらさまですか？」

その声に俺は

「夜分にすいません。森村慶一といいますが、みさおさんはご在宅でしょうか？」

そう訊ねると玄関の戸が開きそこには驚いたような表情のみさおが立っていたのだった。

「びっくりしたなー、慶一何やってんだよ？こんな夜にさー。それにその帽子は？」

俺がここに居る理由がわからないという感じに俺に聞いてくる

「メリークリスマス、みさお。この帽子と今日といえばこれしかないだろ?というわけでほら、クリスマスプレゼントだ。」

そう言って俺の荷物からみさおへのプレゼントを取り出してみさおに渡すとみさおは驚きの表情から物凄く喜びの表情になって

「おー!まじか?これ、もらっていいのかー?」

俺はそんなみさおに頷きながら

「おう。その為に選んできたプレゼントだ。気にいってくれればいいけどな。」

俺の言葉にみさおはプレゼントを見ながら

「なあ、これ開けてみてもいいか?」

というみさおに俺も頷きで返すと、みさおは早速プレゼントの包装を取って中を見る。

「お?これって最新の冬用ランニングウェアーじゃん。それにスポーツ用の手袋とかサポーターも、それにマフラーとイヤーウィスパーまであんのか。これは嬉しいゼ。今の時期、走るのも寒いかんな。」

満面の笑みでそう言うみさおに

「ま、喜んでくれて何よりだ。ところでみさお、あやのはやっぱり

？」

俺の言葉にみさおは頷きながら

「ああ。あやのは兄貴と出かけてるぜー？ひょっとしてあやのの分も持ってきたんか？」

というみさおに俺も頷いて

「予想はしていたけど、一応な。できればあやのが出かける前には渡せたらと思ってたけど、やっぱ順番的に無理だったな。仕方ないからみさお、これをあやのに・・・」

そこまで言いかけた時に俺達の後ろからふいに声がかかった。

「あら？慶ちゃんにみさちゃん。どうしたの？こんな時間に2人して。」

その声の方に振り向くと、そこにはみさおのお兄さんと2人で出先から帰ってきたらしいあやのがいた。

「お？あやの、お兄さんと今帰ってきたのか？」

そう訊ねるとあやのはにっこり笑って頷いて

「ええ。みさちゃんのお兄さんと食事して帰って来たところなのよ。慶ちゃんこそどうしたの？いきなり訊ねて来たみたいだけど？」

あやのの言葉に俺の代わりにみさおが

「慶一は私らの為にクリスマスプレゼント届けにきてくれたらしいぜ？私も今貰ったところなんだよなー。」

そう言って嬉しそうに俺から貰ったプレゼントをあやのに見せるみさお。

「そうなんだ。よかったわね、みさちゃん。」

にっこりと笑いながらみさおにそう言うあやの。

その様子を見ていたみさおのお兄さんは

「あやの、みさお。俺は先に戻ってるから後は3人でゆっくりと話すといいよ。それじゃな、森村君。」

そう俺達に告げてみさおのお兄さんは先に家へと帰って行く。

その背中に俺は頭を下げていたのだった。

そしてあやのの方に向き直ると

「あやの、みさおに預けようと思っていたお前へのプレゼントだ。受け取ってくれるか？」

そう言って俺はあやのに持ってきたプレゼントを手渡した。

「私にも、なの？いいの？慶ちゃん。」

少し戸惑いの表情で俺に言うあやのに俺は頷いて

「その為のプレゼントさ。遠慮はいらない。というか、貰ってくれたら嬉しいけど。」

軽く笑いながらそう言うとあやのは

「ふふ。ありがとう、慶ちゃん。これ、開けてみてもいい？」

そのあやのの言葉に頷くとあやのは早速プレゼンを開け始める。

「あ、これって、マフラーと手袋ね、それにこの絵柄はリラックマヌの。ありがとう慶ちゃん。私これ好きなんだ。」

嬉しそうに言うあやのに俺は

「前に文化祭とかでもあやのがそのグッズを買っていたとこうから聞いていたからな。余程にお気に入りなんだろうって思って選んできたんだ。」

その言葉に嬉しそうに俺を見るあやのにみさおも

「よかったなー、あやの。それもあやのが欲しかったけど買えなかった奴だもんなー。」

みさおの言葉にあやのも頷いて

「そうなのよね、結局あの人へのプレゼントでお金足りなくなって諦めかけてたやつだから・・・だから、ありがとう慶ちゃん。これ、大切にするね？」

その言葉に俺も笑顔で頷くと2人に

「喜んでくれてよかった。それと2人に言っておきたい事がある。同じクラスになってそして、勉強会や海での旅行、お祭り、色々な事があった。それに、俺の過去を乗り越える事にさいしても2人に勇気をもらった。俺の窮地には俺と一緒にも戦ってくれた。すごくありがたかったんだ。心強かったんだ。俺はその感謝の思いも今回のプレゼントに込めさせてもらったよ。そして、来年以降もまた、俺はお前らとも楽しくやっていきたい。だから、これからもよろしくな、2人とも。」

俺の感謝の言葉に2人も笑いながら

「そんなに感謝される事ねえって。それを言うなら私らだってそうだぞ？お前と同じクラスになってから柊や隣のクラスの高良、ちびっ子、柊妹、それにお前の後輩達、さらには来年うちを受験する小早川達も私らの前に連れてきてくれてさらには私達も仲間にしてくれたじゃん？一気に私らの仲間を増やしてくれた事も皆とつないでくれた事もお前には感謝してんだ。私こそこれからもよろしく、だぜ？慶一。」

その言葉にあやのも頷きながら

「そうよ？それに今も慶ちゃんは私達の為にこんな風に色々やってくれてる。バイトの無茶も、それ以外の事でも私たちを受け入れてくれた事、本当に嬉しかったんだから。だから私こそありがとう。こちらこそよろしくね、慶ちゃん。」

すごく優しげな笑顔を俺に向けてそう言ってくれるあやのに、そしてみさおに俺も力強い頷きで返したのだった。

そして俺は2人に

「ありがとう、2人とも。そう思ってくれてるだけでも嬉しいよ。さてと、俺はまだ行かなきゃならない所があるからこれで行くよ。悪かったな、2人とも、こんな寒い中に時間取らせちゃってさ。そろそろ家に戻れよ、そして風邪ひかないようにな。それじゃ俺は行くから、またなー、2人とも。」

そう言って2人に手を振ってこの場から離れる際に2人も

「気にすんなー。こんなサプライズもあって嬉しかったかんなー。お前も気をつけて行けよー?」

「26日は皆で楽しくやりましょうね。私も楽しみしてるわよ?」

そう言って2人ともにっこりと笑いながら俺に手を振ってくれたのだった。

みさおｓｉｄｅ

あやのも兄貴とデートだし、1人寂しいクリスマスを家族と過ごしていたが、突然に慶一が家にやってくるというサプライズがあった。

何事かと思ったのだけど、慶一は私にクリスマスプレゼントを渡してくれたのだった。

そんな慶一の気遣いに私はすごく嬉しくなったのだが、私だけではなく、あやのにも慶一はプレゼントを持ってきたと告げた。

あやのは兄貴とデートでいなかったので私はあやのの分のプレゼントも預かるつもりだったが、そこに兄貴を伴い帰って来たあやのと

会った。

兄貴は私らに気を使ってくれて私ら3人だけにすると、自分は家へと戻っていったのだった。

そして最後に慶一は私らに感謝の言葉も置いて行ってくれた。

（まさか慶一が来るとは思ってなかったからびっくりしたってヴァ。でも、慶一なりに気を使ってくれたのが嬉しかったなー。それにあの言葉も私にとっても胸が熱くなったゼ・・・でも私はあいつに本当に感謝してる、その思いは本物だかんな・・・来年も慶一とあやのと、そして皆と楽しくやりてえな。）

そう私は心の中で考えていたのだった。

そしてあやのも

（ふふ。今日、慶ちゃんが尋ねてくるなんて思わなかったから驚いたな。でも私が欲しがっていた物を贈ってくれたね。それにあの言葉もとても嬉しかった。慶ちゃんとのきっかけは私の交友関係も広げてくれたし本当に感謝よね。だから私も来年も、もっともっと楽しくやっていきたいな。）

慶一から貰ったプレゼントをじっと見ながら何かを考えていたようだった。

慶一ｓｉｄｅ

みさお、あやの達にプレゼントを渡し終えていよいよ最後の2人の元へと俺は走って行く。

しばらく走ると、柊家が見えてきたので俺は再びサンタ帽をかぶり直して準備を整えると改めて家の呼び鈴を押してみた。

少し待つと中から「はーい」という声と共に玄関の扉が開き、俺を出迎えてくれたのは

「どちらさま?あら、森村君。こんばんは。どうしたの?こんな時間に。」

柊家の母親、みきさんだった。

「こんばんは、みきさん。そしてメリークリスマス。かがみとつかさはいますか?」

そう訊ねるとみきさんは柔らかく笑いながら

「ええ。私達と一緒に家族でのクリスマスを過ごしてたから居るわ。森村君も折角きてくれたんだからどうぞあがって?」

そう言ってくれたみきさんに俺はどうしようか迷ったが、目的地はここが最後なんだしという事を考えて俺はその言葉に甘えさせてもらう事にしたのだった。

「それじゃ、ちょっとだけお邪魔しますね。お邪魔しまーす。」

そう言って俺は柊家にお邪魔するのだった。

部屋に案内されて俺はその後ろを付いて行った。

そして部屋に辿り着くとみんなが俺の姿に気付いたようで

「お母さん、お客さんは誰だったんだい？おや、君は。」

「あー！森村君じゃない、どうしたの？突然。」

「まさか君がやってくるとは思わなかったわね。」

「慶一くん。突然どうしたの？いきなり現れたから驚いたわよ。」

「うんうん。わたしもびっくり～。」

そんな風に口々に言ってくる皆に俺は

「皆さん、メリークリスマス。慶一サンタがやってきましたよ？」

もはや一度笑われているから関係ないと思いつつ恥ずかしい台詞を口にすると案の定みんなに笑われたので軽く落ち込みつつも

「まあ、いいや・・・とにかく皆さんに俺からプレゼントです。」

そう言って持ってきていた荷物から皆へのプレゼントを取り出して1人1人に手渡した俺だった。

「いいのかい？貰ってしまっても。」

「まあ、私にもあるのね？嬉しいわね。」

「おー、まさか私にもあるとは思わなかったわ。」

「うんうん、流石は森村君。私が見込んだ子だけはあるねー。」

「あの時私達と一緒にプレゼント選んでいたけれど、まさか家族の分まで選んでいたなんて思わなかったわ・・・」

「あはは。でもありがとうけいちゃん。わたしとっても嬉しいよ？」

皆笑顔で俺からのプレゼントを受け取ってくれたのだった。

そして俺は柊家のみなさんへ伝えるべき事を伝えようと口を開いた。

「みなさん。改めて、ありがとうございます。俺が初めてこちらにお伺いした時から、柊家の皆さんにはお世話になりっぱなしでした。それに、本当の家族の事も知らない俺に、優しさと暖かさを教えてくれました。俺を暖かく迎えて下さったことが本当に嬉しかったんです。今回のプレゼントはそんな感謝の意味も込めさせてもらっています。」

俺の言葉にただおさん達は

「気を使ってもらってありがとう。けど私らも君には娘の命を救ってもらったりしてるからね。それに娘達にとってもいい友人が出来たのだから私も喜んでいるんだよ。」

「そうよ?だからこれからも遠慮しないで遊びにいらっしゃい。」

「君なら私も歓迎だよ。」

「私も。今度はお兄さんも連れておいでよー。」

「まったく・・・あんたは変な所で義理堅いわよね。でも、お母さん達も言ってたようにまた遊びに来てよね。」

「わたしもけいちゃんが来るなら歓迎だよ?一緒に遊んだりするの大好きだから。」

その言葉に俺も心を嬉しい気持で一杯にしながら再度頭を下げて

「ありがとうございます。」

そう心から言うのだった。

そして、その後はしばらく柊家の人達とクリスマスならではの料理を一緒に食べさせてもらったりと歓待を受けた俺だったが、食事後

に俺はかがみの部屋でつかさと3人で話していたのだった。

「それにしても急に訪ねてきたから驚いたわよ。あんたもよくやるわね。」

「あはは。でもけいちゃんから貰ったプレゼント、嬉しかったよ～？」

つかさの言葉に少し顔を赤くしながら

「そ、それに関しては私もそうだけど・・・」

そう言うかがみに俺は

「喜んでくれてよかったよ。ともあれ、これで全員に渡し終える事ができたな。」

俺のその言葉に”ぎょっ”となったかがみがおそるおそる俺に

「ま、まさかあんた・・・私達以外の仲間全員に贈ってまわった、とか？」

そう聞いてくるかがみに俺は頷いて

「まあね。それに・・・」

かがみに答えながら俺は2人に向き直って

「かがみ、つかさ。改めて、ありがとう。俺が2人と出会ってから今まで色々あったけど、俺は2人に出会えた事が嬉しかった。それに、海での事も過去を乗り越える勇気を2人にも貰った。そして、

柊家で家族というものの暖かささえも教えてくれて、俺の窮地の時にも俺を一度は信頼できなくなっていた事もあったけど再度俺を信じて俺にあの一件を乗り越える力もくれた。俺はそんな2人に感謝の意味もプレゼントに込めさせてもらったんだ。こんな俺だけど、来年もまたよろしく頼むよ。」

そう改めて言うと2人は嬉しそうな顔で

「それを言うなら私もよ?中学高校とあんたと出会うまでは私は新しい世界なんて知らずにいたんだもの。それをあんたが教えてくれた。さらにはゆたかちゃん達や八坂さんという仲間とも私達をつないでくれたのよ?それに私も、あんたには色々良くしてもらったし、私を命がけで助けてもくれた。嬉しかったわ。と同時にはらはらもしたけどね。だから私もあんたには・・・その。うう・・・ま、まあいいわ。私こそ、これからもよろしく。慶一くん。」

そしてつかさも

「けいちゃんはわたしに一杯お友達を作ってくれた。それに、何度もわたしを助けてもくれたよ?いつもけいちゃんを頼っちゃうわたしに優しくアドバイスまでしてくれた。嬉しかったんだよ?それにけいちゃんのおかげで色々変われたと思ってる。だから、ありがとう。そしてわたしも改めてよろしくね?けいちゃん。」

そう言って笑ってくれる2人に俺も笑顔で頷き返したのだった。

そして、頃合の時間になり、俺はそろそろ家へと帰る事になった。

「それじゃ俺はそろそろ帰るよ。ありがとな、かがみ、つかさ。一緒にクリスマスする事になるとは思わなかったけど、ただおさん達

にお礼言っておいてくれ。」

そう言って家を出るときに2人が俺を見送ってくれた。

「私こそ、プレゼントありがとう。手袋以外にももらったから嬉しかったわ。あの時選んだ靴をお返しにあんたに贈ったけど、それでよかったかな？」

「マフラーとか帽子も一緒だったもんね。嬉しかったな～。わたしもあの時のジャケットをお返しにしたけど、２６日にはケーキ作っていくから期待しててね～。」

俺はその言葉に頷きながら

「かがみ、それで構わないさ。俺も嬉しかったからな。つかさ、ケーキ楽しみにさせてもらうよ。２６日は楽しくやろうな。」

そう告げると2人ともにっこりと笑って頷いてくれたのだった。

そして俺は今年の大仕事を終えて晴れやかな気持ちで家路についたのだった。

かがみｓｉｄｅ

家族と過ごしていたクリスマスだったけど、突然そこに慶一くんがやってきたのだった。

お母さんに伴われてやってきた慶一くんは私達にメリークリスマスと言った後、家族全員に持ってきたプレゼントを配ってくれたのだった。その事に私もみんなも驚きながらも喜んでいたのだった。

そして私の部屋でつかさと3人で話している時に慶一くんは私達にプレゼントを持ってきてくれた真意と感謝の言葉を私達に置いていってくれたのだった。

その際に慶一くんが私達だけでなく、他の仲間達にもプレゼントを配っていた事を聞いて私は呆れつつも感心していたのだった。

慶一くんからのプレゼントを見ながら私は

（今日は家族で過ごそうと思ってただけに、いきなり慶一くんが来てくれたのには驚いたわね。慶一くん、私達以外にもプレゼント配って歩いたって言ってたけど、何だか納得できちゃったな。彼優しいしお人好しだからなあ・・・でも・・・プレゼントもそうだけど、あの言葉も嬉しかった。私も本当は慶一くんに感謝してる事一杯ある。でも私、こういう性格だもんね。素直には言えなかったな。でもいつかは慶一くんには私の素直な思いを言葉にできたらいいな・・・だからその為にも私も皆と、慶一くんとこれからも付き合って行きたいな。）

そう考えていたのだった。

そしてつかさもまた慶一くんからもらったプレゼントを見ながらニコニコとしていた。

（今日のクリスマスは楽しかったな～。けいちゃんが突然やってきたのには驚いたけど、でも今までにないクリスマスになったよ～。それにけいちゃんから貰った言葉も嬉しかったな～。プレゼントのお返しに私も２６日には美味しいケーキを準備するんだ。そして皆で楽しんで来年も、その先もずっとずっと皆と、けいちゃんと一緒にいたいよね。）

（きっとつかさも私と同じように思っているのかもしれない、だって私達双子だもんね。）

私はつかさを見てそう考えながら、２６日の打ち上げと遅めのクリスマスパーティに思いを馳せるのだった。

今年のクリスマスも過ぎて行く。

けれど、素敵な仲間達がいる限り、今後も退屈しないクリスマスになるだろうな、と私はそう思っていた。

慶一ｓｉｄｅ

家に戻りながら俺は今日の事を振り返っていた。

そして、みんなの喜ぶ笑顔が見れた事を俺は喜びつつ、来年は何をやろうかな？と今から考えを巡らせ始めていたのだった。

旋律達のクリスマス、来年はもっと多くの仲間とも過ごせるクリスマスとなるかもしれない。

来年もまた、皆と笑い会って過ごすクリスマスを迎えたい、そう思いながら俺は２６日を楽しもう、そう決めたのだった。

クリスマスの旋律～幸せを運ぶ慶一サンタ後編～（後書き）

後一つ大きなイベントを経て、小説内での1年は終了になります。
そして2年目の3月までは2年生編が続きます。
これからも変わる日常をどうぞよろしく。

消えかける旋律～地獄と化したクリスマスパーティ～

皆への感謝のクリスマスプレゼント配りも無事に済ませ、俺は今年のクリスマスイブを充実したものとする事ができた。

そして、今年1年も残りわずかになり、俺は最後までこの1年を楽しもうと決めたのだった。

アルバイト最終日・・・・・・

「ありがとうございましたー。またお越しください。」

俺達は最終日も忙しく動き回っていた。

今日はクリスマス最後のイベントも店であり、店員の代表がサンタクロースのコスプレでダンスを披露するという事になっていた。

そして、その役に選ばれたのはこなたとみゆき、こうの3人だった。

イベントの開催時間も近くなり、俺はスタッフルームに3人の様子を伺いに行くのだった。

ドアをノックすると「どうぞー」という声が聞こえたので俺は

「俺だ、入るぞ？」

そう言ってスタッフルームに入ると少々緊張気味のこうとみゆき、そして何故か落ち込んでいるこなたの姿があった。

「あ、先輩、お疲れ様です。こっちに様子見に来て大丈夫ですか？接客はバイトの先輩が居てくれてるとはいえ、かがみ先輩1人きりになってるんじゃ・・・」

少し心配そうにそう言ってくるこうに俺は

「大丈夫だ。長居する訳じゃないしな。それより3人とも大丈夫か？特にこなた、何か落ち込んでないか？」

そう声をかけるとみゆきとこうは

「私はこういう事をするのは初めてですので、少々緊張しています。」

「私は何とか大丈夫です。私意外とこういうの好きみたいですしね。」

そう言っていたのだがこなただけは暗い表情をしながら無言でいたので、俺は気になってこなたに声をかけてみた。

「どうしたんだ、こなた。お前こういうの慣れてるってイベントに立候補した時言ってたよな？そんなお前が何故落ち込んでいる？」

そう訊ねるとこなたは暗い顔を俺に向けながら

「・・・そりゃ、私は前の店でもこういう事やってたよ・・・だけどさ・・・今回のって私に対する嫌がらせ以外の何者でもなくない？」

何か、泣きそうな表情のこなたに俺は理由を尋ねてみた。

「嫌がらせって・・・どういう理由でだよ。」

そう訊ねるとこなたは”ぶわっ”という表現があっていそうなほどに涙を流しながら

「だってさ！八坂さんやみゆきさんと私を並べるんだよ！？しかも私、真中のポジションなんだよ！？嫌がらせだよね！？私の胸のなさを強調する嫌がらせだよね！？」

その言葉にこうは苦笑して、みゆきは真っ赤になり、俺も真っ赤になって慌てて

「な、何言ってるんだお前は！何かと思ったらそんな理由かよ！」

その言葉にこなたは大いに反論して

「そんな理由って何さ！私にとっては大問題だよ！胸のある人になんかない人の辛さなんてわかんないんだ・・・」

そうやっていじけるこなたに俺はどう言うべきか大いに悩んでいたのだがとりあえず意を決すると

「落ち着けよ、こなた。お前だって言ってたじゃないか、コスプレ喫茶でバイトしてること教えてくれた時にお前は自分の体型を誇ってたろう？”貧乳はステータスだ！希少価値だ！！”ってさ。お前がそれを誇りにしてるんだったら、自信をもってやればいいだろう？お前の希少な所を見せてやればいいだろう？」

その言葉にこなたは”はっ”とした表情になり、少し考え込んでいたがやがて

「むー・・・そうだね、私は私にしかない希少な武器を見せつければいいんだよね・・・ありがとう、慶一君。少しだけ自信出てきたよ。」

そう言うこなたに俺は（なにやらむちゃくちゃな理論で納得させちゃったかも・・・）と心の中で複雑な思いを感じながらもとりあえず立ち直ったこなたに

「それならよかった。とりあえず3人ともそろそろ時間だからしっかり頑張ってくれよ?俺はまた接客に戻るからな。」

そう言うと3人とも

「分かりました。こちらの方はしっかりとやりますからお任せください。」

「先輩も自分の仕事、頑張ってくださいよ?」

「後は私達のトリオにまかせたまへー」

という言葉に俺も頷きで応えて接客へと戻る俺だった。

接客に戻って来ると俺の姿を見つけたかがみが

「あ、お帰り、慶一くん。様子どうだった?」

そう聞いてきたので俺は

「こうとみゆきは少し緊張気味だったな。こなたは変な事で落ち込んでたみたいだったから活入れてきたが・・・」

そう応えるとかがみは不思議そうに首を傾げながら

「こなたが？珍しいわね・・・一体何で落ち込んでたのかしら？」

その言葉に俺は答える術を持たないでいたので話しにくそうに

「あー・・・ちょっと俺の口から言える事じゃないとだけ言っておくよ・・・ただ、かがみが聞いたら下らないと思うかもしれない事だというのだけは言っとくよ。詳しく知りたかったら後でこなたに訊ねてみてくれ。」

苦笑しながらそう言う俺に少し納得がいかないという視線を投げていたかがみだったが俺が話しにくそうにしている姿に何かを察したらしく、それ以上は聞いてこなかった。

「・・・まあ、いいわ。後でこなたに聞いてみるわよ。それより、さっきお客さんからね？・・・・・・ってのを聞かれてさ、まだ在庫あったかな？」

かがみの言葉に少し心の中でほっとしつつ

「あ、それだったらまだあると思う。後でみさお達の所に行ってみればいい。さて、そろそろイベントの仕切りをやんなくっちゃな。かがみ、また後でな。」

そう言って話を切り上げてイベントのサポートのに向かおうとしてる俺にかがみも

「うん。それじゃまた後でね。何かあればあんたに内線飛ばすわ。イベントの仕切り、頑張ってね。」

その言葉に俺も頷きながら

「ああ。そっちも引き続き接客、任せるぞ。」

そう言って手を振って俺は仮設ステージの方へと歩いていくのだった。

イベントでは、こなたこう、みゆきの3人による、ハレ晴レユカイだった。

こうとみゆきの硬さは少しあったのだが、こなたが上手い具合に2人を引っ張る形になり、店に訪れているお客にも大分うけていたようだった。

しかしながら、何故か男性客がかなりをしめていたのを見て俺は複雑な心境で苦笑していたのだが。

そして、仕事も一通り終わり、俺達は最後に今年お世話になった殿鬼さんの所へ挨拶に出向いた。

「店長、今年はこれでバイトも終わりとなりますが、自分達を雇っていただきました事、本当にありがとうございました。それではよいお年をお迎えください。」

皆を代表して俺が殿鬼さんに挨拶をすると

「うむ。短い間であったがご苦労だった。できれば来年もうちで働いて欲しい所なのだが、もしそのように考えてくれた時にはまたうちに来てくれたまえ。その時も歓迎させてもらおう。」

そのように力強く言いながら俺にがっしりと握手を求めてくる殿鬼さんに俺も握手を返しながら

「そのような機会がある折には相談させていただきます。その時にはよろしくお願いします。」

そう挨拶を返すとみんなも「「「「「「「「「お世話になりましたー」」」」」」」」」と言って店を出るのだった。

帰り道に俺達は軽いやり取りを交わす

「とりあえず今年も終わりだな。こなたのボディガードを引き受けてここにバイトに来てそして、みんながやってきて最後にはこなたまでやって来て、短い間だったけど楽しいバイトだったな。」

そう言うとこなたは

「私は最初はみんなが慶一君のバイト先へ行くなんて思ってなかったからね、あの時は本当にびっくりだったよ。」

そう言うとかがみも軽く笑いながら

「あはは。でも、私達だって採用されるなんて思ってなかったわよ。あくまでも私達は伝説のお2人の関係者ってだけだったんだからね？」

そう皮肉混じりに言うかがみ。

「でも、賭けてみよう、って言い出したのはおねえちゃんだったよ

ね？」

まったく意識せずかがみの裏をばらすつかさ。

「ちょっ！つかさ、何でばらしちゃうのよ！」

そのつかさの言葉に途端に顔を真っ赤にして慌てるかがみにつかさは相変わらずのぽやぽやとした笑顔で

「え？言っちゃいけなかった？ごめん、おねえちゃん。」

反省の色があるのかどうかも分かり難い顔でいうつかさにかがみはため息をついていた。

「そっかー。結局かがみんも寂しかったんだねー。」

その様子をニヤニヤしながら見ていたこなたがそう突っ込むとかがみはさらに慌てながら

「う、うるさい！かがみん言うな！！大体あんただって、元々やってたバイトやめてまでこっち来たのはなんでなのよ！」

というかがみのまさかの反撃にこなたも途端に慌て出して

「え、えーっと・・・そのう・・・」

そう言いながら答えに困ってるこなたを見ながらみゆきが

「まあまあ、お2人とも。私や皆さんと一緒ですよね？結局みなさんと一緒に居たいって思ったのが理由なのでしょう？」

というみゆきのフォローに2人とも便乗するように

「ま、まあ、そういう事ね。慶一くんとみゆきがした約束に私達も噛ませて貰おうと思っただけよ。」

「うんうん。そうそう。そういう事なんだよ。」

その2人の様子を見て苦笑しているみさおとあやのは

「私らもそうなんだけどなー。ま、結局はみんな同じだってことだよなー。」

「うふふ。そうね、その方が楽しいって思ったんだものね。」

そう言って笑いあっていた。

こうとやまとも同じように笑いながら

「そうですよー。慶一先輩と高良先輩と交わした約束なら、私達だって乗る権利はありますからね。」

「そうよ?ここで仲間はずれなんて認められないわよ。もう私達はそんな簡単な仲間じゃないはずだしね。」

その言葉にみんなして笑顔で頷いていた。

「結局はみんなの願いが形になったんだな。まあ、結果オーライという事でいいよな。」

俺の言葉にみんなは

「楽しめたからいいじゃん?」

「ま、私もいい経験できたわよ。」
「わたしも仕事覚えられたからよかったよ〜。」
「貴重な体験でしたね。」
「いい給料もらえたよなー。」
「それも慶ちゃんや泉ちゃんのおかげかしらね。」
「またみんなで行ったら採用してくれますかね？」
「きっとしてくれると思うわよ？2人の先輩がお願いしてくれれば
ね。」

そう言って笑いあっていた、そして最後に俺が

「ま、何にしても明日は打ち上げも兼ねた少々遅めの俺達のクリス
マスパーティだからな。明日は思い切り騒ごうぜ？」

その言葉にみんなも「「「「「「賛成ー」」」」」」と言
って応えてくれたのだった。

帰る際にこなたとかがみ、つかさ、あやのが俺の家に泊まって行く
ことになった。

こなたの話で今日のうちに仕込める料理は仕込んでおきたいという
提案があったのも理由なのだが。

なお、当日には今回は黒井先生も呼んだ。

24日には先生の自宅の場所がわからず、プレゼントも渡せなかっ
たからというのもあるのだが、先生は一緒に過ごせるいい人もいな
さそうだったのでせめて教え子の俺達がパーティに誘おうという事
になったのだった。

家に帰る間際に食材を買い込んで家に帰って来た俺は、料理の仕込みの前に体を温めて疲れをとってもらおうと思い、先に俺が風呂の準備を済ませてこなた達に入ってしまうように進めた。

そして部屋の準備も済ませて俺はこなた達が風呂から上がるまでの間俺ものんびりとさせてもらっていたのだった。

しばらくするとこなた達も明日の仕込みの為に2階から降りてきたのを確認した俺は、こなた達を追ってキッチンへと入っていった。

「これから仕込みだろ？俺にも手伝える事あるか？」

そうこなたに言うとこなたは俺を見て

「あれ？手伝ってくれるの？でも慶一君って料理とかできたっけ？」

俺を見てそう言うこなたに俺は呆れながら

「あのな、俺はたいがい自分の弁当は自分で作って来るんだぞ？お前もそれ知ってただろうが。」

そう言うとこなたは少し考える仕草をした後”はっ”とした表情になって

「そう言えばそうだったね、慶一君の所に泊まりに来た時とかも朝食なんかも作ってくれたっけ。でも、まずは慶一君もお風呂入って疲れとってきちゃいなよ。その後で何か手伝ってもらう事あれば呼ぶからさー。」

ばつの悪そうな顔でそう言いつつ俺に風呂に入って来いと促すこな

たに俺は

「そうか？ならそうさせてもらっちゃうかな。じゃあ、風呂行って来るから続きは後でな。」

俺がそう言うとこなたやみんなも頷いて

「うん、いってらっしゃい。」
「ゆっくりしてらっしゃいよ。」
「こっちはまかせて～。」
「私もいるし、大丈夫よ？慶ちゃん。」

そう言ってくれたので俺もみんなの好意に甘える事にして部屋に着替えを取りに戻り、風呂へと向かった。

こなたｓｉｄｅ

私達でクリスマスパーティ用の料理の仕込みをやろうと思っていたけれど、慶一君も手伝うと言ってきた。

私達はその言葉に驚いて思わず料理出来るのかな？と訊ねたが、私は慶一君がいつもお弁当を自分で作って来ていた事をすっかり失念していて間抜けな質問になってしまったのだった。

結局その事を慶一君に突っ込まれて苦笑しながらも私は慶一君にお風呂いってきちゃいなよ、と告げると慶一君も私の好意に甘えてくれるみたいだった。

とりあえず慶一君をお風呂に行かせてから私は

「ふう・・・とりあえず行ってくれたね。慶一君もいつも動き回ってるからこういう時くらいは休んでてもらいたいよね。」

そうみんなに言うとみんなも

「そうね。あいつは自分の体省みないで無茶してるから少しは休んだ方がいいんだわ。」

「うん。そのかわりわたしたちがけいちゃんの分までがんばればいいよね。」

「何かと理由をつけて、慶ちゃんには体休めてもらうようにしましょ？」

そう言う峰岸さんに私達も頷いていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

俺のいない間にキッチンでそんな会話がなされている事も知らず、俺は風呂に浸かって体を休めた後、キッチンでこなた達を手伝おうとしていたが、事あるごとにはぐらかされ、誤魔化され、結局俺は何も手伝う事が出来なかった。

そのうちにこなた達も料理の仕込みを済ませて後は明日の飾りつけや本番を待つ事となり、俺達は今日は休む事にしたのだった。

そして次の日の朝、俺はこなた達に料理の仕上げと飾り付けを任せて、駅までみゆき達を迎えに行った。

「わざわざ迎えに来ていただきまして、ありがとうございます。家に着き次第、泉さん達と共に飾り付けをやってしまいますから。」

「わりーな慶一。私も準備がんばっからよー。」

「私も頑張りますよー。先輩、向こうについたら指示お願いしますよ？」

「年に一度の事だけど、今年は3人だけじゃないクリスマスパーティなんだから私も張り切るわよ？」

と言う4人に俺も頷いてみんなを家に連れて行き、飾り付けの指示を出した後、頃合の時間になったので俺は黒井先生を迎えに駅まで向かったのだった。

「おー、森村。今日はわざわざ招待してくれてありがとなー。料理の足しになるかわからんが、鳥腿買うてきたで？」

鳥腿の入った箱を見せながらそう言う先生に俺は

「わざわざありがとうございます。今日は楽しんでくださいね。それとこれは俺から先生へのクリスマスプレゼントです。」

そう言ってプレゼントを渡すと先生は嬉しそうな顔で

「おー？これもらってもええんか？気い使わせてしまって悪いなあ、森村。」

そう言ってくれる先生に俺も笑顔で

「24日に渡せなかったですからね、今日お渡ししようと思っていたんですよ。中身は後で家に帰ってからあけてみて下さいね。」

と言う俺の言葉に満面の笑みで頷く先生だった。

そして、先生を家に連れてきて、いよいよ2日遅れのクリスマスパ

ーティが始まったのだった。

だが、ここにいる面々の誰もが気付かずにいた。

黒井先生が引き起こす、最大の地獄が待っているという事を・・・・・。

「それでは皆さん、飲み物を持って下さい。せーの！メリークリスマスー！」

「「「「「「「「「メリークリスマスー！！」」」」」」」」」

そう言って乾杯して楽しいクリスマスパーティが始まったのだった。

「おお、料理もなかなかだな。こなた達がんばったなー。」

「うん。めっちゃいけるで？これ。ケーキも美味いしなー。」

こなた達の作った料理を食べてその美味しさに舌を巻く俺と黒井先生。

ケーキはつかさと峰岸さんが作ってくれたのだった。

「つかさ、あやの。ケーキも美味いよ。ありがとな。」

俺がそう言うと2人とも照れながら

「えへへ。あの時けいちゃんとも約束したからね。頑張ったよ～。」

「美味しく出来ていてよかったわ。流石は妹ちゃんね。私もほっとしてるけど。」

そう言って笑顔を見せてくれていた。

「私も料理がんばったんだけどなー・・・」

その後ろでそう呟くかがみの声を聞いて

「わかってるさ。俺も見てたからな。かがみの作ったピザも美味いよ。」

俺はかがみがピザ作りで奮闘していた事を知っていたし、実際に美味かったのでそう言うとかがみは嬉しそうに

「あ、ありがと・・・喜んでくれたからよかったな。」

顔を少し赤くしながらそう言うかがみに俺も微笑みながら頷いていたのだった。

「今回はかがみも頑張ったねー。私もかがみの事見直したしね。」

そんなかがみの様子をニヤニヤしながら見ていたこなたがそう言うとかがみが途端に真っ赤になって

「な、何よ突然・・・気持悪いわね・・・あんたが褒めるなんて珍しいじゃないの。」

と言うかがみにこなたは少し不満顔で

「むうー・・・本当にそう思ったから褒めたのにその言われよう・・・私は傷ついたよ・・・」

そう言いながらこなたは傷ついたと言う演技をしているのが俺達か

らみたらバレバレだったのだが、かがみはそのこなたの態度に慌てていて気付かないようだった。

「ご、ごめん、こなた。褒めてもらったのにそんな事言っちゃだめよね。このとおり！謝るから機嫌なおしてよ、こなた。」

というかがみの様子を伺いながらにやりとしているこなたを俺は見逃さなかったが、あえて黙っている事にしたのだった。

その後はゲームをしたり、皆で選んだ映画を見たりと楽しんでいたのだが、程よく酔っ払って気持よくなってる先生がふいに俺のところにお酒を持ってやってきて

「うー・・・いい気持や。ほれ、森村。お前も飲まんかい、ほれほれ！」

そう言って俺に無理やり酒を飲まそうとしてきたので俺はそれを避けようとしたのだが、一瞬妙な動きを見せた先生に気を取られ、酒を飲まされたのだった。

「わ！ちょ！待ってください、先生っ！う、むぐ！んぐんぐ・・・ぷはっ！！」

その場の乗りで俺に酒を飲ませた先生は上機嫌でカラカラと笑っていたのだが、飲まされた俺は急に酔いが回ってきて足元がふらふらしだしたのだった。

俺と先生の様子を見ていた俺達に一番近い所にいたこうが俺のふらつく様を見て心配になったらしく、俺の側に寄ってきた。

「だ、大丈夫ですか?先輩。」

そう聞いてくるこうに俺はろれつが回らない声で

「ら、らいりょうぶら・・・ふこししたらなおるからひんぱい・・・ふるな・・・」

そう言った瞬間俺は自分の足に自分の足を引っ掛ける形になりこうの方へと倒れ込む形となった。

「あ、あら?」

「ちょ!先輩!ってむぐっ!」

そしてこうの所に倒れた俺は・・・・・こうにキスしてしまっていたのだった。

途端に真っ赤になるこう。

さらにその様子を見ていて顔を真っ赤にするみんな。

俺も慌てて立ち上がろうとするが酔いのせいで上手くいかず、それを見ていたかがみとやまとが顔を真っ赤にしながら俺をこうから引っぺがすと

「何やってんのよあんたはー!!」

「こうから離れなさい!先輩!」

そう言いながらかがみとやまとにダブルで鉄拳を貰い吹っ飛ぶ俺。

そして派手な音を立てて俺はその場に倒れ込んだのだった。

こなたｓｉｄｅ

黒井先生の悪乗りにより、慶一君が先生に無理やりお酒を飲まされて酔っ払わされ、ふらふらとしている所に一番近くにいた八坂さんが慶一君を心配して駆け寄っていた。

そして慶一君がふらつき、八坂さんの方へ倒れ込んだのだけど、その時に慶一君と八坂さんは・・・その・・・キスをしてしまっていたのだった。

私も何が起こったのか一瞬分からなかったのだが、事態を把握したかがみと永森さんが慶一君を八坂さんからひっぺがして錯乱のあまり慶一君に鉄拳を叩き込み吹っ飛ばしていた。

その時かがみが放った一撃は慶一君があの時不審者を撃退し、保険をかけるといって見せた螺旋弾そのものだった。

そして、その一撃が見事に慶一君の急所に突き刺さっていたのもしっかりと見えたのだった。

かがみに吹っ飛ばされ近くの家具に激突して倒れ込んだ慶一君はピクリとも動かなかったのだが、私は未だにパニックから抜け出せなかったのか、すぐに動く事が出来なかった。

そして私よりもいち早くパニックから抜け出たみゆきさんが慌てて慶一君の側に駆け寄って慶一君を診ていたのだけど、その時みゆきさんの「ひぃっ！」という短い悲鳴が上がったのだった。

その悲鳴を聞いて我に帰った私はみゆきさんに

「み、みゆきさん、どうしたの？何かあったの？」

そうみゆきさんに聞いてみるとみゆきさんは私の方を青い顔を向けながら見て

「け、慶一さんが・・・慶一さんが・・・息していません！」

その言葉を聞いた私達は一瞬にして顔が青くなったのだった。

その言葉に我に帰ったかがみと永森さんとそしてみんなと共に慶一君の側に駆け寄ると

「慶一君！慶一君！しっかりして、慶一君！」

体を揺すって呼びかけてみたが反応なし。

かがみたちも大慌てで

「慶一くん！起きて！ねえ、慶一くん！」

「先輩！目を開けて！先輩！先輩！！」

「けいちゃん！しっかりして～！お願い～！」

「慶一！目えあけろ！慶一ーー！！」

「慶ちゃん！戻って来て！慶ちゃん！逝っちゃダメ！！」

「先輩！起きて！お願い！起きて！」

「森村！しっかりしい！！こんな所で死んでる場合やないやろ！目えあけえ！」

最後の黒井先生の言葉に皆で

「「「「「「「「「先生が原因作ったんでしょ！？」」」」」」」」」

と突っ込みを入れると先生は途端に落ち込むのだった。

そんなやり取りもお構いなしに慶一君を診ていたみゆきさんがおもむろに

「泉さん！この場で蘇生させましょう！心臓マッサージをお願いします！」

というみゆきさんの言葉に私は”はっ”となって慌てて

「わ、わかったよ！みゆきさんはどうするの？」

そう訊ねるとみゆきさんは真剣な顔で

「私は慶一さんに人工呼吸を施します。私が息を吹き込んだらそれにあわせて心臓マッサージをしてください！」

とにかく慶一君を助けたい一心で私はみゆきさんの指示に従うのだった。

みゆきさんが人命救助の基本である気道確保を行い、人工呼吸を開始した。

それにあわせて私も心臓マッサージを行う。

そんな行為をみんなは真剣な、それでいて心配そうな眼差しで見守っていたのだがその行為を数度繰り返すと・・・・・・

「・・・う・・・ごほっ！ごほっ！っはあっ！！」

という声と共に心臓も動き出して慶一君の呼吸が戻ったのだった。

それを見た私達は一気に緊張が解けて、みんな慶一君が助かった事に安堵の涙を流していた。

「・・・よかった・・・よかったよ・・・」

「よかった・・・あのまま慶一くんが戻ってこなかったら・・・私・・・」

「生きてる・・・けいちゃん生きてるよ・・・よかった～・・・本当によかったよ～・・・」

「・・・危ない所でした・・・でも、いち早く蘇生できてよかったです・・・」

「・・・高良が医者目指していたからよかったよな・・・そうでなかったらと思うとぞっとするゼ・・・」

「・・・怖かったわ・・・本当に・・・どうなる事かと思った・・・」

「・・・よかったです、先輩・・・本当によかった・・・」

「・・・ごめんなさい先輩・・・本当にごめんなさい・・・助かってくれてよかった・・・」

そんな中、私達以上に落ち込んでいたのは元凶を作ってしまった黒井先生だった。

「すまん、森村・・・ほんまにすまん・・・うち、教師失格やな・・・」

そう言いながら自分のやった事に深い後悔をしていた。

とりあえず私達はそのまま先生には反省していてもらい、蘇生はしたけど未だ意識が戻らない慶一君を部屋のベットまで連れて行くことにしたのだった。

ベットに慶一君を寝かせた後、私達はクリスマスパーティの後片付けをするのだった。

そして片付けが済んだ後、慶一君が心配だった私達は今日も慶一君の家に泊まって様子を見ようという事になった。

そして少しして落ち着いた頃、みゆきさんは慶一君を助ける為とはいえキスをしてしまった事を思い出してその日はずっと真っ赤な顔のままだった。

そして何気に八坂さんの方を見ると少しだけ頬を赤らめて嬉しそうな感じだった。

慶一ｓｉｄｅ

俺は酷く痛む頭に耐えられなくなり、目を覚ました。

黒井先生から酒を飲まされた後の記憶もはっきりせず、困惑していたのだが、ふとベットの横を見ると、俺の側に付き添いながら眠り込んでいるかがみとやまとの姿があった。

そして俺が体を動かしたのがかがみ達にも伝わったのかかがみ達も目を覚まして俺をじーっと見つめていた。

俺はその視線に耐えられず目をそらそうとしたのだが、そのかがみとやまとの目にどんどん涙がたまって行くのが分かり、俺はそれを

見た瞬間目をそらせなくなった。

と同時にかがみとやまとが2人して俺に飛びついてきて

「慶一くん！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「先輩！よかった！そしてごめんなさい！」

泣きじゃくりながら抱きついてくる2人に俺は困惑しつつ

「お、落ち着け、2人とも。一体何があったんだよ。」

そう2人に聞いてみるが、2人は喋れるような状態じゃなかったので俺はますます困惑していたのだった。

そうしているうちに俺の部屋のドアが開き、みゆきが俺の部屋に入ってきたのだった。

「あ、慶一さんおはようございます。意識も戻ったみたいですね、本当によかった。」

そう声をかけつつ俺に抱きついて泣きじゃくってる2人を見て優しく微笑むみゆきは俺に事情の説明をしてくれた。

「2人の代わりに私が説明しますよ。実は昨晩ですね・・・・・・っていう事があったんですよ。」

事情を聞いて俺は青くなった。

「俺は・・・一歩間違えばやばかった、という事か・・・。それに俺は・・・こうに・・・うあああああー！！」

俺は記憶がないとはいえ、こうにしでかした行為に恥ずかしさで思わず頭を抱えて叫んでいた。

そして少し落ち着いた俺は泣きじゃくる2人の背中をぽんぽんと叩きながら

「事情はわかったよ。けど、ちゃんと戻って来れたんだし、もう気にするな、っていうのは難しいかもしれないけど、とにかくもう泣くなよ。俺は気にしないからさ。」

そう優しく声をかけると2人とも涙目の顔を俺に向けながら

「許して・・・くれる・・・の?」

「・・・先輩、ありが・・・とう・・・それに・・・ごめんなさい・・・」

そう言う2人に俺も笑顔で応えたのだった。

やがて2人は落ち着いたのか顔を洗いに部屋を出て行ったのだがみゆきは俺の顔をじっと見つめると何かを思い出したのか”ボンッ”と言う音が聞こえそうな勢いで顔を真っ赤にしたのを見て

「ど、どうした、みゆき?何かあったのか?それとも俺は俺が記憶のない時に他になにかやらかしたのか!?」

そう訊ねるとみゆきはもじもじとしながら言おうか言うまいか悩んでいたようだったが、覚悟を決めたのか俺に

「実は・・・その・・・呼吸の止まった慶一さんを蘇生させる時に・

・・ですね・・・その・・・私が・・・慶一さんに・・・その・・・人工呼吸を・・・施したんです・・・」

俺はその衝撃の台詞に頭の中が真っ白になっていた。

そして、物凄い衝撃に耐えながら俺はおそるおそるみゆきに

「つ、つまり・・・俺は・・・お前とも・・・その・・・した、って事・・・なのか?」

俺の言葉にまたしても顔を真っ赤にしてみゆきが小さく頷いたのを見て俺もまた”ボンッ”と言う音が聞こえそうな位の勢いで顔を真っ赤にしていたのだった。

そして、その場に居たたまれなくなったのかみゆきも赤い顔のまま俺に「し、失礼しますね。」と言いながら部屋を出て行ったのをぼーっとしながら見送ったのだった。

俺はそのまま自分のした行為に自己嫌悪になりながら落ち込んでいたのだが、そこに俺の様子を見にこなた達もやってきた。

「おはよう、慶一君。目が覚めたんだね?本当に安心したよ。」
「よかった~。けいちゃん、ちゃんと無事だった。」
「けど、あぶねー所だったのはかわんねえぞ?」
「何にしてもほっとしたわ。慶ちゃん、気分はどう?」

最後のあやのの言葉に俺は

「とりあえず、昨日のお酒の影響で二日酔いっぽい感じだよ。頭痛い・・・」

そんな俺の言葉にあやのは

「そうかもしれないと思ってはいこれ、水と胃腸薬持ってきたわ。」

そう言って水と薬を渡してくれたので俺は

「お、ありがとな。あやの。まったく、酒なんて飲むもんじゃないよ・・・」

そう言って軽く凹んでいるとこなたが不機嫌な表情で

「でも、そのおかげでイベント起きたじゃん?お酒も満更悪いもんじゃないんじゃない?」

少しトゲのある言い方をしてきたので俺は苦笑しながら

「いや・・・あんなのはもう勘弁だよ・・・俺はまだ死にたくない・・・」

その言葉にはこなたも苦笑せざるをえなかったのだった。

その後みんなは部屋を出て行ったので俺は薬を飲んでゆっくりしてる事にした。

それからしばらくして今度はこうが俺の部屋に来たのだった。

「先輩、痛い所とかないですか?昨日はかがみ先輩とやまとのダブルパンチ食らってましたしね。」

俺の体を心配してそう言ってくれるこうに俺は

「とりあえず大丈夫だ。二日酔いみたいで頭痛いけどその程度だしな。」

そう言った後俺はこうに

「こう、昨日は酔っ払っていたとはいえ、お前に変な事しちゃって悪かった。一言謝っておかないときが済まなくってな。」

そう言うとこうは少し不機嫌そうな顔で

「何で謝るんですか?あれは不可抗力ですし、それに先輩は私とキスするのって嫌でしたか?」

そう聞いてくるこうに俺は困惑しながら

「い、いや、その・・・嫌って訳じゃないけどあんなのはまともなキスとはいえないだろうしさ・・・こうとしても嫌だったんじゃないか、って思ってな・・・。」

俺の言葉を聞きながら俺の顔をじっと見ているこうだったが

「私は別に嫌じゃなかったですよ。でも、先輩も嫌じゃないって言うのならもういいじゃないですか。私も気にしてないんですから先輩ももう気にしないで下さいよ。」

そう言ってくれたのだが俺は何となく気がすまなかったので

「ありがとう、こう。そう言ってくれるのはとてもありがたいが、

それじゃ俺の気が済みそうにないから、お前が俺に望む事があれば言ってくれ。今回のお詫びに一つだけ言う事を聞こう。」

その俺の言葉にこうはにやりと笑うと俺に

「そうですか?それじゃ遠慮なく言わせてもらいますね。私は先輩に・・・・・・・」

そして俺はこうの願いを聞いた事を後悔する事となったのだった。

そしてそれから3日後の29日から31日、俺は戦地に借り出される事となった。

消えかける旋律～地獄と化したクリスマスパーティ～（後書き）

いよいよ今年最後の大イベントの締めくくりとなります。
それを乗り切り年を明かす旋律達の物語を今後ともよろしくお願いします。

行く年の旋律～今年最後の聖戦、地獄の慶一の羞恥プレイ～

地獄のクリスマスパーティにおいて俺は自分の命すら危うくしたが、みゆきの適切な処置によってあの時意識を失っていた時見えた両親の元に行かなくてよかったと心から安堵していたが、その際におきたこうとのアクシデントで俺はその責任を取るべくこうの願いを一つ聞く事を承諾した。

そしてこうが俺にお願いした事は、この日の3日後から開催される夏にも行ったあの地獄への誘いだった。

俺はこうとの約束を守るべく、前途に多大な不安を抱えながら今回も参加をする事になったのだった。

そして俺のこうによる3日間の羞恥プレイが始まるのだった・・・・・

「・・・・・というわけで、初日と2日目はお願いしますね？」

俺はこうから2日間のやるべき事を聞いて重いため息をついていた。

「・・・なあ、こう・・・せめてＢＬ物の同人誌だけは勘弁してくれないかな・・・」

そう懇願してみたがこうはにやりと笑うと

「残念ですが先輩、そのお願いだけは聞けません。何しろ私達だけじゃ回りきれないんですから頑張ってもらわないと困りますよ？それとも、男に2言あり、ですか？」

という言葉に俺はぐうの音も出せなくなり、しかたなくこうから言われた部署を回る事となった。

「・・・あ、あの・・・これ、3冊お願いします・・・」

そう言いながらこうから頼まれた目的の本を買うのだが、売り子のお手伝いさんや周りの客達のひそひそと小声で話しながら俺を奇異な目で見る視線がとても痛くて、俺は精神的にかなりきつかった・・・。

その後も同じように回り、そして同じように見られ、俺は胃を痛くしながらこの2日間を回りきったのだった。

そして3日目がいよいよメインだった。

3日目はこうのサークルで売り子の手伝いをしつつ、チャンスがあれば3日目の同人誌探しにまわる、というものだったのだが、売り子をするといってもただするのではなく、俺はル○ーシュのコスプレをさせられてこうたちの側に配置され、さらし者となったのだった。

さらに最悪な事に、3日目には何故かやまとがこうの本の販売を手伝いにきており、俺はやまとからも冷めた目で見られていた。

「・・・・・先輩も、物好きよね？こうに付き合ってこんな事してて。」

冷たい目で俺を見つめながらさらに冷たい言葉で俺を射抜くやまと。

「・・・そう言うなよ、やまと・・・それよりもお前こそどうしてここにいるんだ。お前はこういう事手伝わされるのをあんなに嫌がってたじゃないか。」

そう切り返すと途端に赤くなりながら慌て出すやまと。

「べ、別にどうだっていいじゃない。今回はたまたまこうの誘いに乗ってやろうって思っただけよ。決してこうと先輩の事が気になったとかそういう事じゃ・・・な、なんでもないわ!!」

ぶんぶんと手を振りながら必死に否定するやまとだったが、俺は最後の方の言葉をよく聞き取れていなかったので頭にハテナマークを飛ばして慌てるやまとを見ていたのだった。

俺達のやり取りを見ていたこうが少し呆れた声で

「何してるんですか?先輩、やまと。お客さんが変な目で見てますから真面目にやってくださいよ。」

その声に我に帰ったやまとは

「あ・・・ごめん。つい慌てちゃったわ。とりあえず、売り子再開ね。」

そう言いながらも売り子を続けるやまとを俺も軽いため息をつきながら見ていたのだった。

そしてその頃・・・・・・

こなたｓｉｄｅ

「さあ、みんな。準備はいいかな?」

作戦を説明し終えたこなたが皆を見回しながら言う。

「とりあえず、理解はしたわ。ところで慶一くんにはちゃんと伝えてあるのよね?それにトランシーバーも。」

そう言うかがみに私は頷きながら

「うん。そっちも抜かりないよ。ちゃんと後で会場内で合流する事になってるから心配ないって。」

親指をびしっと立てながらそう言う私につかさが

「そ、それならよかったけど・・・やっぱりこの人の数・・・こわいなあ・・・」

とおどおどしながら言うとみゆきも

「泉さんが以前お祭りのときにおっしゃられていた事も本当でしたね・・・これは確かに凄いです。」

そう周りを見ながらおどおどして言うとみさおは不安そうな顔で

「どうでもいいけどよ、こんな人数の中で本当に慶一達さがせるんか?」

そう言うとあやのも同じように

「そうよね・・・これだけの人いると人1人見つけるのも困難だと思うわ。」

その2人の不安を吹き飛ばすように私は笑いながら

「大丈夫だよ。慶一君の居場所はちゃんと皆に手渡したエリアマップに示してあるからさ。私達は記しのつけてある所へ行けばいいんだから。」

そう伝えるとみんなはほっとしたような顔になっていた。

そしてまもなく会場入りが始まるので私は皆に再度

「そろそろ入場が始まるからみんな、改めて気合いれてねー。」

と伝えるとみんなも「「「「「「お、おー！」」」」」」と応えたのだった。

そう、今回は私とかがみ以外に、つかさ、みゆきさん、みさきち、峰岸さんまでもが参戦するという事になったのだった。

かがみは、前の時と同じ、ラノベの絵師さんの作品を求めてやってきた。

つかさは、興味本位で、みゆきさんも今回は田舎へ戻らずにこちらで過ごす事になったらしく、私達が行くならと、ついてきた。

峰岸さんは企業ブースのリラッタヌ展に興味があったらしいがゆえに私達についてきた。

そして様々な思惑が絡まるコ○ケ最終日が幕を開けたのだった。

そして・・・・・・

「ただいまより！第○○会、コ○○クマ○ケ○トの開催です！！」

というスタッフの声と共に私達は移動する列について行くのだった。

「さて、私はいつもどおり行こうかね。みんな、他はよろしく。後で場所決めて集合しようー。」

みんなにそう言って私は自分の目的の元へと移動して行く。

みんなも作戦どおりに会場内へと散っていった。

かがみ、つかさｓｉｄｅ

今回はつかさが心配だったからつかさと一緒に回っているけど、前回、こなたに頼まれた物を買った事があったとはいえ、それでもまだ慣れない私はやっぱり本を買う時には顔を赤くしていたのだった。

「おねえちゃん、大丈夫？顔赤いよ？」

そう聞いてくるつかさに私はつとめて冷静に

「だ、大丈夫よ。私はあんたと違って以前にも来た事あるからね。あんたよりはましってもんよ。」

そう言いながらも少しだけ心は動揺していたのだけど。

「さ。それじゃ次行くわよ。」

つかさの手を引きながらそう言って次へと移動を始める私達。

「ありがとうございましたー。」

そしてこなたから頼まれた最後の本の買い物を終えて私は自分の本来の目的へと向かう事となった。

目的の絵師さんの所で、買い物をしている時ふいに人の流れがこっちに来たのだが、その時。

「はううう～おねえちゃあああん～！」

その人波につかさがさらわれたのを一瞬唖然として見ていたが手早く用事を済ますと

「つ、つかさ、待ちなさいー！」

と言って慌ててつかさを追って流された方へ急ぐ私だった。

みゆきｓｉｄｅ

初めて来る場所、そして、その会場の大きさ、人数の多さに私はただただ驚いているばかりでしたが、泉さんから頼まれた本を買うために必死に移動をして行く私でした。

「はあ、はあ、ふう・・・あ、あの、こちらの新刊をお願いしたいのですが・・・」

そう声をかけると売り子さんは

「はい、合計で３０００円になります。」

そう言われたので私は泉さんから預かったお金を支払い、本を受け取り、その表紙をふっと目にした時途端に私は顔を真っ赤にして

「え、ええっ!?こ、これは・・・お、女の人の・・・は、はだ・・・」

ひたすらにパニックになっている私でしたが、慌てて本を持っていた紙袋の中に突っ込むとパニックのままその場を後にしながら

（こ、これって、いいんでしょうか?私こういうものだなんて知りませんでした・・・泉さん、こんなの恥ずかしすぎますよ・・・ひょ、ひょっとして他にもこんなものが・・・）

混乱した頭でそう考えながらとりあえず次の場所へと移動していった私でした。

あやの、みさおｓｉｄｅ

私達の割り当ては少なかったのでとりあえずそこを先に済ませたのだけど・・・

「いやー、ちびっ子もすげえ事知ってるよな。本買う時はめっちゃ恥ずかしかったゼ・・・」

そのみさちゃんの言葉に私も頷きながら

「そうね・・・私もまさかそんな本を売ってるイベントだと思わなかったから本当に戸惑っちゃったわ。それにすごく恥ずかしかったし・・・」

先ほどの買い物の事を思い出しながらそう言う私にみさちゃんも

「まさに、私らの知らない世界だよなー」

そう言うみさちゃんに頷きながら

「そうね。私達の知らない事ってほんと色々あるのね・・・」

少し疲れたようにそう私が言うとみさちゃんは

「ま、何にしても後はあやのの目的の所だな。早く行っとかねえと待ち合わせにも間に合わなくなっからすぐ行こうぜー。」

みさちゃんの言葉に頷いて

「そうね、行きましょう。早く行かないとなくなっちゃうかもしれないものね。」

私達は頷きあうと、2人で企業ブースのある方へと向かっていったのだった。

???side

お兄ちゃんと一緒にここに来て2人で割り当てを決めて回り、ある程度落ち着いた頃お兄ちゃんから私への連絡があった。

『あ、お兄ちゃんお疲れ、もうノルマの分は終わったよー？』
『そっか、お疲れさん。後は自由でいいよー。』
『うん、そうするねー。』

そう言って電話を切った後何気にカタログを再チェック始める私だったが、ふいに一つサークルカットで良さそうな所を見つけたので私はそっちにいってみるついでに企業ブースに寄ってみることにしたのだった。

そしてやってきたのはリラッタヌ展。

私はそこに欲しいグッズがあったのでここにやってきたのだが、来るタイミングが遅れていたので欲しいグッズが残っているかが心配になったが、そこまで慌てて向かってみると、一個だけグッズが残っているようだったので

（よかった、間に合った。最後の一個だけ残ってたわ。）

そう思いながらグッズに手を伸ばすと、もう1人グッズに向けて手を伸ばしてくる人に気付いて私はグッズを取る事をためらったのだが、その人もまた、私がグッズに手を伸ばしかけていたので遠慮したのか手を止めた。

2人して気まずい思いをしているとそこに更に「一個だけ残ってた、よかったー。」と言ってもう1人の子がそのグッズを持ち去ってしまい、その場に残された2人は（何だか納得できない物が胸に残った・・・）と落ち込みながら考えていたのだった。

「なんだよ、あやの。欲しかったんなら戸惑わずに持っていっちゃえばよかったじゃんか。」

「でも、あの人も欲しがってたみたいだから、悪いなって思って・・・」

「まったく、あやのはそういう所遠慮しがちだよなー。もっと積極的に行ってもいいと思うぜー？」

「ふふ、そうかもね。でも仕方ないわ。」

と言う2人の女の人の会話を聞きながら（私もそうすればよかったな・・・）と後悔だけを胸に残して落ち込んだのだが、とりあえず行かなきゃならないサークルもあったので、気持を切り替えてそっちに行く事にしたのだった。

こなたｓｉｄｅ

あれから私達もなんだかんだで目的を果たしてかがみ達と合流したのだが、峰岸さんとみさきちは先に慶一君達のいるサークルへ向かうと言う事だったので、私達もそろそろ出発しようと考えていた。

「峰岸さん達は先に慶一君達のいるサークルへ行ったみたいだよ？私達もそろそろ行こうか。」

そう私が話を振ると、かがみとつかさは

「それはいいけど・・・つかさを保護するのに手間取って疲れたわ・・・もう少し休んでいかない？」

「あはは・・・ごめんね？おねえちゃん・・・」

かなり疲れた表情でそう言っていた。

そしてみゆきさんも

「ここまで体力を使う事になるイベントだとは思いもしませんでした・・・それに、泉さん・・・その・・・こういう本を買うのはいかがな物かと思うのですが・・・」

顔を赤らめつつ私に戦果を手渡すみゆきさんに私は

「あー、また説明し忘れていたね、ごめんごめん。私が読むわけじゃないから大丈夫だよー。」

と親指をびしっと立ててそう言う私にかがみが

「だから!そういうのを娘に買わせる父親もどうなのよ!?まったく!」

と突っ込んできたので私は

「あはは、とりあえず気にしなーい。」

と返すとさらに

「気にしろ!少しは気にしろよ!おまえは!」

とさらに激しく突っ込むかがみに私はそのツッコミをさらりとうけ流しつつ

「まあ、とりあえず、そろそろ合流しないと厳しくなるからみんなもう少しがんばってねー。」

そう声をかけると3人とも

「・・・はあ・・・とりあえず行くしかないみたいね。」
「うう、またあの人ごみを移動するの～？」
「分かりました。泉さん、案内をよろしくお願いします。」
最後のみゆきさんの言葉に私も頷いて
「まかせたまへー。さあ、みんな行くよ？」
と言う言葉に皆も頷いて
「わかったわ。いくわよ？つかさ、みゆき。」
「お、おねえちゃんまって～。」
「分かりました。参りましょう。」
そう言いながら私達は慶一君の居るサークルに向かって移動を始めたのだった。
慶一ｓｉｄｅ
ＢＬ本を買わされ、そして今こうしてコスプレによるさらし者の羞恥プレイをさせらてる最中、こなた達が用事を済ませたのでこちらに向かうという連絡を受け取って俺はこの姿をみんなに見られてしまう事に恥ずかしさを感じていた。
そうしているうちにこうの売り出す本も大分はけてきて完売までもう少しとなってきたが、そこに
「お待たせ、慶ちゃん。八坂さん、永森さん。用事を済ませてようやく辿り着いたわ。」
「待たせちまったなー。やっと着いたぜ、って慶一すげえかっこし

てるなー。」

案の定俺を見て笑い出すみさおにあやのはあやので少し複雑そうな表情で

「なんだか凄い衣装ね。慶ちゃんそう言う趣味が？」

というあやのの発言に俺は思い切り首をふりながら

「いや！ないから！俺にはそんな趣味ないから！これはこうの頼みでだな！！」

必死に説明する俺にこうは

「まあ、そういう事ですよ。峰岸先輩。あの時のお詫びをしたいという先輩の気持を汲んだわけです。」

涼しい顔で言い放つこうに俺は

「・・・ぐ・・・反論できなん・・・事実なだけに・・・それに、俺は・・・はあ・・・」

あの時の事を思い出して落ち込む俺だったがそんな俺にやまとは俺を冷たい目で睨みながら

「そうね。先輩が隙だらけだったから起きた事よね。しっかりしてなかった先輩が悪いんだから自業自得よね。」

と不機嫌そうに俺に言い放っていた。

俺はますます凹んでいたのだがそこに

「あの、この本見せてもらってもいいですか？」

と1人のお客がやってきたのでこうは

「はいはい、どうぞー。よろしければ買っていってくださいな。」

そう言うとお客はこうの本が気にいったのか

「すみません、これ一冊下さい・・・あれ？あなたは？」

そのお客が俺の事に気付いたみたいで俺に

「あの、失礼ですが、文化祭の時に私の学生証を拾って下さった森村さんじゃないですか？」

そう聞いてくるお客に俺はふいに顔を向けるとその子は確かに見覚えがあった。

「えっと、確か・・・若瀬・・・いずみさん・・・だっけか？」

そう答えるといずみさんはにっこりとしながら

「はい。覚えていていただけて光栄です。」

そう言って来たので俺は

「君こそ、俺の事覚えててくれたとは思わなかったよ。あれ？でもどうしてここに？」

そう言うと途端にいずみさんは慌てだして

「え?あ、いや、その、こ、これはですね。私のお兄ちゃんに付き合ってここに来たのであって、決して私はそのような趣味があると言うわけじゃ・・・」

ぶんぶんと手を振りながら必死に否定するその子にこうが

「ふうん?その割には手に持ってる本は結構な大手系みたいだけどね?素人だったら、そんな事わからないはずだけどねえ?」

と、にやにやしながらいずみさんに言うといずみさんは”しまった!!”と言う顔をして焦っていた。

「ねえ、先輩。その子先輩の知り合いなの?よかったら私達にも紹介して欲しいんだけど?」

と、更に不機嫌になったやまとが俺に言ってきた。

だが、その時、いずみさんに気付いたあやのが

「あっ!あなた、あの時の。」

と言う言葉に反射的に振り向くいずみさんはあやのの顔を確認すると

「え?あ!さっきのリラッタヌグッズの時に会った人!」

と言って驚いていたのだが、そこに更に

「やふー、おまたせー。私達も到着だよーって、何か賑やかだね。」
「ふう、やっと辿り着いたわね。つかさ、大丈夫？」
「ううん、きつかったよ～・・・」
「流石に体力を使いました・・・」
と言いながらこなた達も到着したのだった。
俺は４人に
「お疲れ、こなた、かがみ、つかさ、みゆき。いや、ちょっと知り合いにあったんでな。その子の事をみんなに話そうとしてた所さ。」
そう言うとこなた達はいずみさんの方を見て
「ん？この子がそうなの？」
「慶一くん、女の子の知り合い多すぎるんじゃない？」
「いったい誰なんだろう？」
「私達の周りでは見ない顔、ですよね？」
とそれぞれ言っていたがこのままじゃ埒があかないと思った俺は
「まあいいや、とにかく紹介するよ。この子は若瀬いずみさん。前に俺達の文化祭で学生証を落として困ってたんだが、俺がそれを偶然拾ってな。それで知り合った、というわけだ。」
そう紹介するといずみさんもなんだかよくわからないという感じではあったがとりあえず
「えっと、皆さんはじめまして。若瀬いずみです。森村さんには文化祭の時にお世話になりました。ところでみなさんも森村さんのお

知りあいの方なんですか？」

という質問にみんなも

「知り合いというよりは仲間、だよね。硬い絆で結ばれた、さ。ともかく私は泉こなた。よろしくね、若瀬さん。」

「柊かがみ。よろしくね。」

「柊つかさだよ。私はおねえちゃんと双子なの。」

「高良みゆきです。お見知り置きを」

「日下部みさおだ、よろしくなー。」

「峰岸あやの。さっきは同じ所であったわね。」

「私は後輩の八坂こうだよ。よろしくね。」

「私も後輩の永森やまと、みんなと同じ陵桜の生徒よ。」

最後のやまとの言葉にいずみさんは驚きながら

「え？という事はみなさん陵桜の人なんですか？実は私も陵桜を受けようと思ってるんです。」

という言葉にかがみが驚きながら

「え？という事はいずみさんてまだ中学生・・・いいの？こんな場所に来てて。」

というかがみの指摘に慌て出しながらも

「え、えっと、お兄ちゃんも一緒に来てますからとりあえずは・・・」

そしてその言葉を聞きながらこなたは

「ほほう、お兄さんとな?という事は兄妹揃ってオタクって事なんだねー?」

という言葉に更に慌て出すいずみさんは

「い、いや、そのっ!私は、ただのつきあいでしてっ!!」

その言葉に更にニヤニヤしながらこなたが

「ふっふっふ。誤魔化そうとしてもその手に持ってる本を見れば一目瞭然なのだよ。残念だったねえ・・・さあさあ、自分が私達と同じ側の人間である事を認めてしまいなよー?そうすれば楽になれるよー?」

というこなたの言葉にもはや逃げ道がなくなりおろおろとしているいずみさんを見て俺とかがみがこなたの脳天に拳骨を叩き落して

「「やめろ(なさいよ)彼女が困ってるだろうが(でしょう!!)」」

と言うとこなたは涙目で頭を抑えながら

「痛いよー・・・2人して殴る事ないじゃん・・・」

と抗議してるしてるのを俺達は眼力で黙らせて

「ごめんな、いずみさん。こいつの暴走は突然始まるからさ。まあ君がひけらかしたくない趣味だって言うのなら俺達も他に漏らしたりはしないよ。」

謝りながらそう言うといずみさんも少しほっとしたような顔で

「そ、そう言ってもらえたら助かります・・・」

そう言ういずみさんに俺は少しだけ俺の思っている事をぶつけたのだった

「いずみさん。確かにこの趣味は他にひけらかせるような胸をはれる趣味じゃないかもしれない。けど、自分が好きだと思う事を、やりたい事を持っていることは素晴らしい事だ。だから、そういうものを持つ自分を卑下しちゃいけないよ。むしろ自信を持っていい。そして、そういうものを捨てずにこれからも自分の気持ちを偽る事のないようにね。」

俺がそう伝えるといずみさんは驚きの表情で俺を見ていたがやがて

「・・・ありがとうございます。森村さんの言った言葉、改めて噛み締めさせてもらいます。そして、来年陵桜でお会いできた時はまた声をかけていただけたらうれしいです。」

俺もその言葉に笑顔で頷いて応えるのだった。

「みなさんももし私の事を学校で見かける事があったら声をかけていただけたら嬉しいです。」

こなた達にそう言ういずみさんに

「おっけー。みんなに知られたくないなら今度は私達と一緒に来ようよ。」

「こなた!まったくあんたは・・・ここで知り合ったのも何かの縁

だものね。私も声かけさせてもらうわ。」
「新しいお友達なら大歓迎だよ～。」
「私も、是非お声をかけさせてくださいね。」
「陵桜にぜってー合格しろよな。私らも応援してるぜー？」
「無事学校で会いましょう。そして一緒にリラッタヌの事でお話しましょうね。」
「私達にとって後輩になるかもしれないんだね。もし陵桜来たらアニ研を訪ねてよ。」
「こう？あまりあなたの仲間を増やすんじゃないわよ？ともあれ、陵桜にきたらよろしくね。」

そう声をかけるといずみさんは嬉しそうな顔で俺達にお辞儀をして帰っていった。

俺達はそれを見送った後、今度は俺の格好等についてみんなから更なる羞恥プレイをさせられる事となった。

そしてぐったり疲れきった俺だったが、無事にコ○ケを終えてみんなとも別れ、家についてから今度は初詣の準備をする俺だった。

また1人加わるかもしれない旋律の可能性を今日は見た気がした。

そして、いよいよ終わる今年を振り返りながら来年に向けて俺は思いを馳せつつ、鷹宮神社へ向けて自転車を走らせるのだった。

行く年の旋律～今年最後の聖戦、地獄の慶一の羞恥プレイ～（後書き）

これで小説内の1年が終わります。そしてお正月やバレンタイン等のイベントを経て3年生へと進んで行きます。
これからも変わる日常をどうぞよろしく。

そして、総アクセス数５０万突破、感謝です。
これも皆さんのおかげです。これからもがんばっていくのでどうぞよろしくお願いします。

来る年の旋律～旋律達の願い事～

コ○ケでの羞恥プレイ、そして、まさかのいずみさんとの遭遇もそうだけど、今回のコ○ケにこなた、かがみ以外のつかさ、みゆき、あやの、みさお、更にはやまとの参戦があった事にも驚いていた。

何故なら、そのうち数人はおおよそこういうものに似つかわしくないイメージのある子達だったからだ。

そんなこんなでクリスマスパーティからの地獄の日々も終わりを告げ、俺は一路鷹宮神社を目指して、自転車を走らせていた。

後もう数分で年が明ける。

俺は年明け最初の初詣を鷹宮神社でやろうと前から決めていたのだ。

そして、神社に辿り着く頃、年明けを告げる鐘の音が響き渡った。

俺は鐘の音を聞きながら（ああ、ついに年が明けたか・・・今年はどんな年になるのかな？）と考えつつ、自転車を駐輪場に止めて神社に向けて歩き出す。

そして、その途中で俺はふいに声をかけられた。

「よう、慶一。あけましておめでとう、だな。お前がここに来るかも、と思ってな。」

そう俺に声をかけてきたのは、龍兄だった。

俺は驚きながら

「た、龍兄!?一体どうして?あ、えと、あけましておめでとう。」

そう返事をすると、龍兄は不敵に笑いながら

「この龍也を甘く見てもらっちゃ困るぜ?と言いたいところだが、かがみちゃんの所に電話して聞いたんだよ。まあ、そうでなくても俺は前にこの神社を鍛錬で使わせてもらった事があったからな。その時に、初詣はここもいいかもな、と思ってたんだ。」

という龍兄の答えに俺は少し呆れつつ

「・・・なんだよ、一瞬すげえ!って思っちゃったじゃないか。でも、結局年明け前に家にも戻れなかったしな。ここで龍兄に会えてよかったかも。」

その言葉に龍兄は笑いながら

「そういやお前は２４日にはサンタクロースの真似事してたんだってな。かがみちゃんから聞いたぞ?それにその時に一度家に帰ってきてた事もお袋から聞いたしな。」

龍兄の言葉に俺は恥ずかしさで顔を赤くしながら

「かがみの奴、そんな事まで龍兄に話したのか?お袋にも内緒でやってたって言うのに・・・」

そんな俺の言葉に龍兄は

「まあ、そう言うな。かがみちゃん達も喜んでたって言うんならいいじゃないか。それに、お前がそんな事までもやってるって言うのは俺にとっても嬉しい事だったからな。けどな・・・お前はそう言う部分では、俺を超えてる。俺がお前に唯一勝てない部分だ。」

その龍兄の言葉に俺は驚きながら

「え?龍兄?、どういう事だよ。俺はまだ、あんたを超えちゃいない、そのはずだよ。だからそれは買いかぶりすぎじゃ・・・」

俺の言葉に龍兄は首を振って

「俺は、正当伝承者として修行を積むうちに、人として大事な心を、優しさを、失くしかけている。これも修行のせいもあるんだろうが、お前のように俺の周りには俺を思う仲間の存在はなかった。だが、お前の周りにはお前を思う者達が、お前に心を与えてくれた者達がいる。そしてその者達と接して行くうちにお前は大事な物を手に入れた。俺にはない、仲間を思う気持だ。仲間を守りたいと思うその心だ。俺は、お前を守りたいと思っている。だが、俺はそれ以外の仲間を持たない。あくまでもお前だけ、そして確かに俺はお前の仲間も守ろうと言ったが、それはあくまでもついで、だという事さ。」

一端言葉を切り、更に言葉を続ける龍兄

「本当の意味でお前らは仲間だ。だからこそ、それを守ろうとする心は俺よりも強い。だから俺は、お前が俺を超えた部分だ、と言ったのさ。誇っていいぞ?慶一。それがお前の育んできた力だ。俺にはない力だ。俺よりも強い力だ。」

そんな龍兄の言葉に俺は涙をこぼしながら

「龍・・・兄・・・俺は・・・」

何かを言おうとするが上手く言葉にならず俺は泣いていたが、その俺の肩を龍兄はぽんと軽く叩き

「泣くなよ、慶一。まったく、泣き虫な所は昔から変わってねえな・・・ははは。」

そう言いながら苦笑する龍兄と共に俺は鷹宮神社へと足を踏み入れていった。

そして少し歩いた時俺達に近づく人の気配を感じてそっちを振り向くと、そこには晴れ着姿のみゆきとこうとやまとの3人が立っていたのだった。

「あけましておめでとうございます、慶一さん。それに・・・龍也さん？」

「あけましておめでとうございます先輩。今年もよろしくお願いします。あれ？龍也さん、どうして？」

「あけましておめでとう先輩。今年もよろしく。それに、驚いたわね、龍也さんも一緒だなんて。」

新年の挨拶をしてくる3人に俺と龍兄も

「あけましておめでとう、みゆき、こう、やまと。今年もよろしくな。」

「あけましておめでとう、3人とも。ちょっと俺もこっちで初詣したかったから来たんだよ。」

新年の挨拶と龍兄がここにいる事情の説明をすると3人とも納得したようで

「そうでしたか。龍也さんもお元気そうでなによりです。」
「そういえば龍也さんは1年ほどこちらに戻っていると言う事でしたよね？」
「そういえばそんな事を聞いたわね。でも、その後はまた武者修行の旅にでるのかしら？」

と言う3人に龍兄は笑いながら

「ありがとう、みゆきちゃん。こうちゃん、とりあえずそういう事だな。やまとちゃん、事が済んだらまた旅に出ると思うよ、その時には慶一の事よろしくな。」

龍兄の最後の言葉にやまとは顔を赤くしながら

「え、えっと・・・その・・・わかってるわ・・・こうも私も先輩の側にいるから・・・その・・・安心して？」

照れながらそう言うやまとを見て龍兄は優しく微笑んでいた。

そして何故か少し黒いオーラを発しながらみゆきが

「龍也さん、大丈夫ですよ？私も慶一さんの側にいますから。だから何の心配もないです。」

その言葉に俺と龍兄とこうの3人は少し顔を引きつらせつつ苦笑していた。

俺はとりあえず場の空気を変えるため3人に

「と、とりあえず、折角合流したんだし、一緒に初詣回ろうぜ?それに3人とも晴れ着、似合ってるぞ?」

そう言うと3人とも顔を赤らめながら

「あ、あの・・・そう言っていただけると嬉しいです・・・」

「久々に先輩に褒められた感じ、嬉しいけど照れくさいですね。」

「お、おだてたって何もでないわよ?でも、ありがとう・・・」

そう言う3人を見て何とか空気を変えれた事にほっとしている俺だったのだが、その横で龍兄がニヤニヤとしているのを見て

「た、龍兄!何にやついてんだよ!」

と抗議をすると龍兄はとぼけながら

「んー?別にー?いいんじゃないか?青春してさ。」

と言う言葉に俺達4人は再度顔を真っ赤にしていたのだった。

そんな俺達を笑いながら見つつ、龍兄は俺達の前を歩いて行く。

そんな龍兄を俺達は慌てて追いかけてしばらくいくと、巫女服に身を包んだかがみとつかさの姿が見えてきたのだが・・・昨日の今日なだけに何だか滅茶苦茶疲れているようだった。

それでも2人にはちゃんと新年の挨拶をしておこうと思い、俺たちは2人の元へ歩いて行き、そして声をかけた。

「あけましておめでとう、かがみ、つかさ。昨日の今日でご苦労様、だな。」
「あけましておめでとう、かがみちゃん、つかさちゃん。ん?昨日の今日って何かあったのか?」
そう声をかける俺たち2人に気付いたかがみとつかさは
「あ、慶一くん。それに龍也さんもあけましておめでとう。今年もよろしく・・・はあ・・・眠いわね・・・」
「けいちゃん、龍也さん、あけましておめでとう~・・・つかれたよ~・・・」
と言いながらかなりしんどそうだった。
俺は龍兄が昨日の今日という言葉に首を傾げているのを見て
「あー・・・龍兄、こっちの話だ。龍兄には縁のない世界のね。だから気にしなくていいよ。」
と言う俺の言葉にいまいち納得がいっていない風の龍兄だった。
そこに更にみゆき達も
「あけましておめでとうございます。かがみさんにつかささん。今年もよろしくお願いしますね。」
「あけましておめでとうございます。先輩達、巫女服いいですねー。」
「こら、こう!何言ってるのよあなたは!あ、あけましておめでとう。ごめんなさい、こうが変な事言って」

その言葉とみゆきがこの場に居る事に驚いたかがみとつかさは

「ああ、あけましておめでとう、って珍しいわね、みゆきがここに初詣なんて。それと永森さん、別に気にしていないから大丈夫よ。あいつが来たらどうせ同じ事言われるだろうからね。」

「あけましておめでとう～。そういえばそうだね？ゆきちゃん去年も田舎に帰ってるって事だったもんね。」

その言葉にみゆきはがらにっこりと笑いながら

「ええ、実は私の希望で今年と来年はこちらで過ごさせてもらう事にしたんですよ。田舎には高校時代以外でも帰る事はできます。ですが、高校時代、私達がこうやって初詣をする機会は今と来年の２回しかないですから。大事な時間をこちらで過ごしたい、そう思ったんです。」

その言葉にこうとやまとも感心していて、かがみとつかさもどこか嬉しそうな顔をしていた。

そして俺も

「そっか、あの約束をみゆきも果たしたいが為に、って事なんだな。なんだかんだでみゆきもこだわるなあ。」

俺がそう言うとみゆきはクスッと笑って

「当然ですよ。貴重な機会は２回しかないんですから。やると決めたからには悔いは残したくないですからね。」

そう説明するみゆきに俺たちも笑いながら頷くのだった。

そして、7人で話をしていると俺たちの背後から声をかけてくる者がいた。

「やふーかがみん、つかさー、あけおめー、ってあれ?みんなもいたんだ。」

と言う言葉に振り向くとそこにはそうじろうさんと一緒にこなたがいたのだった。

「よっ、こなた、そうじろうさん、あけましておめでとう。今年もよろしく。」

と言う俺の挨拶にこなたとそうじろうさんも

「あ、慶一君、あけおめー。今年もよろしくねー。」

「やあ、森村君。あけましておめでとう。今年も俺の作品で楽しんでくれたら嬉しいよ。」

こなたとそうじろうさんからの挨拶が返ってくるとそれを見ていたみゆき達も同じように挨拶をこなたに返していた。

「へえ?あんたこういうのめんどくさがると思ってたけど、中々殊勝じゃない。」

かがみが感心したように言うとこなたはいつものように目を細めながら

「一年の計は元旦にありって、さ。おとーさんが言うから。」

「どうも～」

そうじろうさんの挨拶にかがみと俺は心の中で

（急に何かが引っかかるー！！）

と突っ込んでいたが、こなたとそうじろうさんはそんな俺たちの事など意にも介さないようで

「いやあ、眼福眼福。」

「巫女服新鮮ー！」

と言って親指をびしっと立てているのを俺たちは呆れながら見ていたのだった。

そして、そんな俺達を見ていた龍兄が

「なあ、慶一。あの人もお前の知り合いなのか？」

そう訪ねてきたので俺は龍兄に

「ああ、あの人はこなたのお父さんだよ。そして俺が尊敬する小説家の先生でもある人さ。」

そう言う俺に龍兄はそうじろうさんを見ながら何事か考え込んでいたがふいにそうじろうさんの所へ行って

「初めまして。俺は森村慶一の義兄の龍神龍也といいます。うちの義弟があなたのファンだそうで。」

そう挨拶するとそうじろうさんも龍兄を見て驚きながら

「ああ、こちらこそ初めまして。成る程、森村君にお兄さんがねえ・・・俺はこなたの父の泉そうじろう。よろしく。そういえば君と森村君とは性が違うみたいだね、何か事情があるのかい？」

と聞いてくるそうじろうさんに龍兄は事情を説明しつつ談笑していた。

そしてその様子を見ていると俺達の後ろから2人、声をかけてくる者がいた。

「慶一ー、みんなーあけおめー。私らも初詣きたんだけどお前らに会えると思わなかったぜー。」

「慶ちゃん、みんな。あけましておめでとう、今年もよろしくね。あ、それに龍也さんもいるのね？」

その言葉に気付いたかがみ達も挨拶を交わしていた。

そして俺はみさお達に

「お？みさお、あやの。あけましておめでとう。まさかお前らとここで会えるとは思ってなかったけどお前らも確かここが地元だったもんな。」

そう言うと2人も頷きながら

「おう。そうだぜ？私ら2人で初詣行こうか、って話してたんだ。」

「私もまさか慶ちゃん達と会えるとは思わなかったわ。でも、こうして会えたのなら私達には縁があるのかもしれないわね。」

あやのの言葉に俺をはじめとするみんなも納得するように頷いていたのだった。

俺は皆を見回しながら

「なあ、みんな。ここで会えたのも何かの縁だし、みんなでおみくじでも引きに行かないか？」

と提案するとみんなも同意してくれたので俺達はおみくじを引く場所へと向かったのだった。

おみくじを引く場所に来ると、カウンターの所にはまつりさんが座っていた。

「あけましておめでとうございます。まつりさん。新年の一発目と言う事でおみくじを引きに来ましたよ？」

そう声をかけると俺に気付いたまつりさんは

「あー！森村君いらっしゃーい。早速やって行くんだね？ん？森村君の後ろにいるお兄さんは誰？」

挨拶を返しつつ、俺の後ろにいる龍兄に気付いたまつりさんに俺は

「ああ、そういえばまつりさんは初めて会うんでしたね。この人が俺の義兄の龍神龍也。前にまつりさんが龍兄に会いたいって言ってたとかがみから聞いたから連れて来たよ。と言うより、ここに来たら来てたんだけどね。」

苦笑しながらそう言う俺にまつりさんは瞳を輝かせながら

「おおー！この人が森村君のお兄さんなんだ。結構いい男じゃない。えっと、龍也さんでしたよね？初めまして、柊かがみ、つかさの姉の柊まつりです。」

そう自己紹介するまつりさんに龍兄も

「初めまして。龍神龍也です。義弟がいつもお世話になっています。柊さんの家は美人さんが多いですねえ。」

とまつりさんを褒めると、まつりさんも満面の笑みを浮かべながら

「いやー、嬉しい事いってくれるねー。よーし、そんな龍也さんにはおみくじ代金、特別サービスだよー。」

となにやら勝手にやろうとしてるところを見たかがみが

「姉さん！何勝手な事してるのよ！お客さん他にもいるんだからそんな事しちゃ苦情きちゃうじゃない！」

と突っ込みを入れるとまつりさんは不満気な顔をしながらもしぶしぶと

「ちぇー、わかったよー。かがみはほんと堅いわよねえ・・・」

と、不満を口にするとかがみはすかさず

「姉さんがいい加減だからでしょ！？少しは鷹宮神社の巫女としての自覚をもったらどうなのよ！」

と言うのを皮切りに2人の言い合いが始まってしまった。

俺達はその様子を苦笑しつつどうすればいいか悩んでいたが、そこに神主のただおさんが現れて

「こら、かがみ、まつり！お客さんの前だぞ？2人ともいい加減にしないか！」

と言って2人を一喝すると2人ともすぐに黙り込んだのだった。

一応の騒ぎが収まったのを見て俺達は小声で

『やっぱりあの2人はぶつかり合うなー・・・気の強そうな性格似てるし・・・』

『おい、慶一。お前も大変だな、柊さん所は良さそうな人達がいるけど、ああいう騒ぎよく見てるんだろうからな。』

俺は苦笑しつつ

『まあ、激しいからなあ・・・でも俺も止めるようにはしてるけどね。』

そう言うと、龍兄もどんな顔をしていいのか迷っているようだった。

さらにこなたが

『流石に姉妹だねえ、なかなか激しいぶつかり合いだったねー』

そう小声で言うとそうじろうさんは羨ましい物を見る目で

『柊さんの所も勝ち組みみたいだな。うちも負けてはいないけどな。』

そう呟いたのを聞いたこなたが何かを思い出したらしくそうじろうさんに

『そういえばゆーちゃんも受験成功したらうちで一緒に暮らすんだよね？』

そう聞くとそうじろうさんも頷いて

『おう、そうだぞ？こなたはおねーさんなんだからちゃんと面倒みてやらなきゃだめだぞ？』

その言葉に苦笑しながら

『それ、前にも慶一君に言われたね・・・』

ばつの悪そうな顔で言うこなただった。

みゆきも2人の喧嘩を見て

『それにしてもなかなかに激しい姉妹喧嘩でしたね・・・』

そう感想をもらすとみさおとあやのは俺達よりも前からかがみの家へ遊びに行ったときの事を思い出して

『柊んとこは前からあんな感じだぜ？私らもよく見てたかんな。』

『そうね。いのりさんはそうでもないんだけど、柊ちゃん、よくま

つりさんとああなるものね。』

そう俺達に2人の事を教えてくれた。

こうとやまとも複雑そうな顔をしながら

『色々苦労してるんですねえ、かがみ先輩も。』

『でも、流石にかがみ先輩のお父さんね。きっちり喧嘩を収めちゃったわ。』

そう言っていたのだが、俺はここに来た目的を果たそうと思い、みんなに

「とにかく、おみくじ引いちゃおうぜ？」

そう促すとみんなも頷いておみくじを引きに行ったので俺も後についておみくじを引いた。

「よーし！私は何かなー・・・って凶！」

「お、大吉かー。幸先いいなあ。」

まずこなたとそうじろうさんの結果が出た。

その結果を見ていたつかさが、落ち込むこなたに

「大丈夫だよ。今が最低なら後は登って行くだけだもん。」

と慰めるとこなたは少しだけ元気を取り戻しつつも

「うう・・・物は言い様だね・・・でも、ありがと、つかさ。」

とお礼を言っていた。

そして次はみゆきなのだが・・・

「あ！大吉です。」

流石と言うか、みゆきは前から思っていた事だが運がいいと思っていたのでこれには納得の俺だった。

「おめでとう、みゆき。」

そう俺が言うとみゆきは照れながら

「あ、ありがとうございます。慶一さんもいい所引けるといいですね。」

と言みゆきに俺も頷いていた。

「んー？どれどれ・・・お？末吉か。」

「私は・・・っと、中吉ね。」

みさおとあやのは良くもなく悪くもなく、無難な線の結果だった。

「2人ともそれなりの物だな。でも、悪くはないな。」

俺の物言いに一応この結果に納得していたようだった2人は笑顔で頷いていた。

「私はどうかな？・・・ふむふむ・・・小吉か。微妙だなー・・・」

「私は・・・と。あ、大吉ね。今年は幸先がいいのかもしれないわね。」

その結果を聞いて俺は

「こう。それでも悪くはないんだし、よかったじゃないか。しかし、やまとも案外運がいいのかもしれないな。」

俺の言葉を聞いて2人は

「まあ、私はこれを大吉に昇格できるようにがんばりますよ。」
「私はこれを維持して行きたいわよね。」

顔を見合わせてそう言っていたのだった。

そして俺と龍兄の番になったので2人でおみくじを引く。

「俺は・・・っと。あらま、凶だ。」
「慶一、のっけから運がないな。俺は・・・ふむ、中吉か。」

と言う結果になった。

そしてこなたは同じ凶の仲間がいた事にかなり喜んで

「慶一君と一緒だー。出たやつは最悪だけど、何か嬉しいなー。」

そう言っているこなたを苦笑しながら見つつ、俺はもう一度自分のおみくじを見る。

そして、俺は何故か、この結果に妙な胸騒ぎを覚えたのだが、自分

の気の回し過ぎかもな、と自分を無理やり納得させてこなたに

「ま、とりあえず引いちゃったものは仕方ないからな。こなた、厄払いでその辺の木の枝に結び付けてこようぜ？」

と言うとこなたも頷いて

「うん、そうしてきちゃおっかー。それじゃ、行こう？慶一君。」

そう言って俺の手を引いて歩き出すこなたと一緒におみくじを結びにいったのだが・・・

「わ！一杯！！あ！こっちも！！」

どこもかしこも結ばれたおみくじで一杯だったのだがこなたが一つ いい場所を見つけたらしくそこに結びつけようとしたところ、あまりにも細い枝だったが為に枝がへし折れてこなたは泣きながら

「うう・・・これが凶ってやつなのかなー？」

と言いながら凹んでいた。

そんなこなたに俺は苦笑しながらもいい場所をもう一つ見つけたので

「おい、こなた。こっちにいい所あるからここに結ぼう。位置的にちょっと高いからお前のおみくじを俺に貸せ。」

そう言うとこなたは俺に自分のおみくじを差し出して

「うん。それじゃこれお願いー。」

と言うこなたに俺は頷いておみくじを枝に結び付けた。

それを終えて戻ってくると、俺達の結果を聞いたかがみが

「こなたも慶一くんも凶だったんだって?でも、落ち込む事もないわよ。こういうのも結局は自分次第なんだしね。」

と言う言葉にこなたは苦笑しながら

「理屈はわかるけど、関係者の台詞じゃないねえ。」

と言っていたのだった。

おみくじも引き終えた俺達は最後に境内で今年の願い事をして行く事になった。

それと共に、ある程度の仕事を終えたかがみとつかさも俺達について一緒に願い事をするのだった。

「ふう、やっと辿り着いたな・・・流石に凄い人だ。さて、5円玉をっと・・・」

俺は財布から5円玉を取り出して賽銭箱にほおり投げて今年の願い事をするのだった。

(今年も皆と仲良く、そして、何事もなく無事に過ごせますように・・・)

そんな俺を習ってみんなも賽銭を投げ入れて願い事をする。

こなたｓｉｄｅ

（今年も皆と一緒に楽しくやれますように・・・慶一君に何も悪い事が起きませんように・・・）

私はまだ、慶一君に成神章の影がある事を懸念していたのでその事も重ねてお願いをしたのだった。

かがみｓｉｄｅ

（今年は皆と同じクラスになれますように・・・慶一くんとも同じクラスならなおいいので、よろしくお願いします・・・）

今年こそは皆と一緒のクラスになりたいと思っていた私は密かにそんな事を願っていた。

つかさｓｉｄｅ

（今年もみんなと一緒でありますように・・・喧嘩もしないで楽しくやっていけますように・・・）

おねえちゃんが一緒のクラスになりたがっていた事を知っていたわたしは密かにその事も強くお願いした。

みゆきｓｉｄｅ

（後一年しかありませんが、皆さんと共に居れますように・・・慶一さんも私達の側にいてくれますように・・・悔いのない高校生活が送れますように・・・）

結局私はあの時慶一さんとした約束にこだわりたかったのもあったのと、みんなと一緒にいい思い出を作りたいと思ったのでそのように願ったのでした。

みさおｓｉｄｅ

（私やあやのも柊や慶一達とこれからも居れますように・・・私らだけはぶられませんように・・・って・・・もう仲間と認めてもらってるのにネガティブすぎじゃん！！）

願い事ををしながらなんか妙なコンプレックスに凹む私だった。

あやのｓｉｄｅ

（今年もみんなと一緒にたのしくやれますように・・・あの人といつか一緒になれますように・・・）

さり気なくみさちゃんのお兄さんとの事も願う私だった。

こうｓｉｄｅ

（今年も先輩やみんなと仲良くやっていけますように・・・アニ研がますます発展しますように・・・ひよりんが無事合格しますように・・・先輩がまたコ○ケに来てくれますように・・・やまととこれからも親友でいれますように・・・）

結構多くのお願いをしてしまった私だった。

やまとｓｉｄｅ

（今年だけでなく、それ以降もみんなと上手くやっていけますように・・・先輩がこうの趣味に染まりませんように・・・こうの遅刻癖が治りますように・・・先輩がこれからも私達の側にいてくれますように・・・）

こうと親友でいれますようにというのを願い忘れたけどまあいいか、と思う私だった。

龍也ｓｉｄｅ

（慶一がこれからもみんなと居れますように・・・俺達の戦いにあいつを巻き込みませんように・・・誰も悲しむ事がありませんように・・・そして、全てに決着をつけられますように・・・）

慶一にも明かしていない俺の真の目的の完遂と慶一の幸せを願っておいた。

それぞれが願い事を終えて俺達は再び広場に集まっていた。

「んー・・・っ、疲れたけど一通り終わったな。」

大きく伸びをしながらそう呟くとこなたが

「ねえねえ、慶一君は何をお願いしたの？」

そう聞いてきたので俺は

「俺はみんなとこれからも仲良くやれますように、ってな。」

そう、自分がお願いした事を言うとこなたも笑いながら

「へえー？それって私と一緒だね。」

と言っていたのを見てかがみも

「あんたもそう願ったんだ？まあ、私もだけどね。」

同じ事を願った事を言うとつかさがにこにこしながら

「わたしもそうだけど、おねえちゃんの場合、一緒のクラスになりたい、っていうのもだよね？」

そう言うとかがみは途端に赤くなって

「つ、つかさ、あんたなんでばらすのよ！」

かがみの言葉にしまった、と言う顔でつかさが

「え、えへへ。ごめんね？おねえちゃん。」

そうつかさがいうとこなたがニヤニヤとしながら

「そっかー、かがみは私達と同じクラスになりたかったんだー。うんうん、寂しがりやなかがみはやっぱり可愛いねえ。」

そうからかうとかがみは途端に真っ赤になって

「こ、こなたー！！修正してやるからそこになおれー！！」

そう言ってこなたを追い掛け回すかがみを苦笑しながら見ていると

「まったく、しょうがないなあ、あいつらも・・・」

呆れながら俺がそう言うとみゆきも微笑みながら

「うふふ。かがみさんらしいですね。でも、去年もそれで落ち込んでいましたからかがみさんの願いが叶えばいいですが。」

そう言っていたが、みさおも笑いながら

「ま、たとえちびっ子と一緒のクラスになれなくても私らがいるから安心だよなー。」

そう言うとあやのも苦笑しつつ

「それはそれでいいかもしれないけど、どうせなら皆一緒がいい気がするわよね。」

その言葉に追いかけっこをする2人をみながら「どんだけ～・・・」と呟いていたつかさが

「うん。わたしもそうなったらいいなあ、って思ってるんだよ～。」

その言葉にこうが難しそうな顔をしながら

「うーん、でも、結構厳しいかもしれませんね。基本、双子とか身内はクラス一緒にしないとかいうのがあるって聞いた事ありましたし。」

その言葉にやまとも頷きながら

「そうね。学校の方針の一つだっていう事を聞いた事があるわ。そうする事で、均等になるようにするのだって。」

やまとの言葉に龍兄は

「ふーん？結構面倒な事やるようになったんだな。俺が通ってた頃はそんなのなかったけどなあ。」

と、顎に手を当てながら言っているのを聞きながらかがみ達を見ていたが、ついにかがみに捕まり、鉄拳制裁を貰って涙目になったこなたを引っ張ってくるかがみに

「なあ、かがみ。俺と賭けをしないか？」

そう持ちかけた。

かがみは俺の言葉に不思議そうな顔を向けて

「賭け？一体何を賭けるって言うのよ？」

そう聞いてきたので俺は

「今年のクラス分けでかがみがこなたと一緒のクラスになれるかどうか、ってやつさ。」

俺の言葉に訝しげな瞳を俺に向けてきたかがみだったが

「・・・いいわ。乗ってあげるわよ。それで、あんたはどっちに賭

けるの？」

そう聞いてくるかがみに俺は

「俺は・・・お前がこなたと一緒のクラスになれないほうに賭ける。」

俺のその言葉に驚きの表情を見せたかがみはすぐに不機嫌な表情に変わり、俺に

「どういう意味？あんたは私がこなたと同じクラスになれなくてもいいって思ってるわけ？」

そう言ってくるかがみに俺は

「かがみ。お前が俺がどう言っても自分はこなたと同じクラスになれるんだ、って信じてるなら、信じるのなら、お前は自信を持って俺と真逆の答えを言えばいいだろ？それとも、自信ないか？同じクラスになれるかどうか、って事が。」

俺の言葉に”はっ”とした表情になったかがみは俺を見据えながら

「・・・ふん、いいわ。私は一緒のクラスになりたいと思ってるから、こなたと一緒のクラスになれるって方に賭けてやるわよ。それで？この勝負をするって事は勝った方が負けた方に何かするとかそういう事があるわけ？」

その言葉に俺は頷きながら

「まあな。どちらが勝つにせよ負けるにせよ、負けた方は勝った方

の言う事を一つ聞くっていう事だ。」

俺の言葉に不敵な笑みを浮かべたかがみは

「いいわ。その勝負受ける。私が勝った時はあんたに言う事一つ聞いてもらうからね？でも、もし私が負けたらあんたの言う事一つ聞いてあげるわよ。」

そう言い放ったのを見て俺も力強い頷きでかえし

「なら、そういう事で、だ。クラス分け発表の日を楽しみにしてるぜ？かがみ。」

俺がそう言うとかがみも

「望む所よ？絶対に勝ってみせるんだから！」

そう言い放つのだった。

そして、一通りの事を終えて俺達はそれぞれ帰途についたのだが、龍兄とみゆきとこうとやまとの４人はすでに電車がなくなっていたので今夜一晩家に泊める事にして、自転車１台の俺は龍兄以外の３人をピストン輸送で家に送っていたのだった。

龍兄はというと、修行になるからと走って家へ向かったのだった。

そして、みゆきを最後に乗せて家に戻る途中みゆきが

「慶一さん、先ほどのかがみさんとのやり取りを見ていましたが、何故あのような事をおっしゃられたんですか？」

その言葉に俺は笑いながら

「んー？何となくああやった方が盛り上がっていいかなーと思ったからかな。」

俺の答えにみゆきは困惑しながら

「けれど、もし同じクラスになれなかったら、かがみさんが可愛そうです・・・」

と言うみゆきの言葉に俺は

「おいおい、みゆき。俺が文化祭の最終日にお前にプレゼント送った時に言った事を忘れたのか？大丈夫なんだよ。校長とのあの約束があるんだから。」

その俺の言葉にみゆきはあの時の事を思い出したようで

「あ・・・そういえば、そうでしたね。すっかり忘れてしまっていました。あ、けどそうしたらこの賭けは慶一さんの負けじゃないですか？何故それがわかっていてあのような事を？」

その言葉に俺は笑いながら

「ははは。そういうのも面白いだろ？それに、かがみが喜ぶ顔が見れるならそれでいいじゃないか。それに、俺なりのかがみへの恩返しみたいなもんさ。」

俺の言葉にみゆきは嬉しそうな顔で

「ふふふ。慶一さんらしいですね。それにかがみさんの喜ぶ顔が今から楽しみです。」

その言葉に俺も頷きながら

「そうだな。俺も楽しみだ。あ、それと、みゆき。この事は誰にも言うなよ？俺達の秘密って事でよろしくな。」

俺の言葉にみゆきは微笑みながら

「ふふ。わかっていますよ。その時までは私達2人だけ胸の中にしまっておきましょう。」

その言葉に俺も笑いながら頷いたのだった。

旋律達と知り合い、初めての年越し。

そして初詣においては旋律のみんなと共に、それぞれの願い事をした。

俺はその願い事の中に確実に叶うものがある事を心に隠しつつ、桜咲く日を心待ちにするのだった。

来る年の旋律～旋律達の願い事～（後書き）

新たな年の始まり。
旋律達は新たな1年にどんな物語を見せてくれるのか。
次回もお楽しみに。

旋律の不幸～新年一発目の風邪、凶の効果発動～

色々あった初詣、まさかの龍兄の来訪、そして田舎に帰らなかったみゆきもまた鷹宮神社を訪れた。

そんな意外な仲間と出会い、おみくじを引いたり、願い事をしたり、最後にはかがみと今年のクラス分けの事で賭けをしてその日の俺達の初顔合わせも済んだ。

時間も時間だったので俺は龍兄とこう、やまと、みゆきを自宅に泊まらせる事にした。

その帰り道にみゆきを自転車の後ろに乗せて走りながら俺はかがみとの賭けの事をみゆきと話した。

俺たち2人しか知らない事情をお互いに胸に秘める事を改めて確認しつつ俺はみゆきを自宅へと連れて行く。

みゆきから聞いた話だが、みゆきの両親は今、2人とも田舎へ帰ってしまっているらしく、家に戻ってもみゆき1人きりなのだそうだ。

なので両親の戻ってくる3日まで家に泊めてほしいという事だった。

そんな話を聞いてから家に辿り着いた頃には午前3時を軽く回っていたのだった。

「ただいまー。」

俺はおそらくもう休んでしまってるであろう3人を起こさないよう

に小声でそう言いながら家に上がる。
その後ろからみゆきも小声で「失礼しますね。」と言って上がってきた。

「みゆき。もう時間も大分遅い。けど、お前も晴れ着姿だし寝にくそうだよな?それ、どうするんだ?」

と一応訪ねるとみゆきはにっこり笑って

「大丈夫ですよ。着物は脱いでちゃんとパジャマ着て寝ますから。慶一さんもそろそろ休んでください。」

と言うみゆきの言葉に驚きつつ俺は

「え?でも、他に荷物なんて見なかったぞ?」

そう訪ねると、みゆきは何時の間にか気付かないうちに置いてあったバックを手にとり

「初詣に行く前にすでに慶一さんの家に寄らせてもらってこれを置いておきましたから大丈夫です。」

と言うみゆきに俺は感心しつつも

「まったく気付かなかった・・・そっか、俺が家を出発する頃にみゆき達は家に来て初詣の準備してからやって来たって訳か。」

俺が一人納得しながら頷いているとみゆきは微笑みつつも首を振って

「いえ、違います。実はこれは文化祭の準備で慶一さんの家に泊まらせていただいた後にこっそりと持ち込んだ非常用の着替えセットなんですよ。今日みたいな時等に慶一さんの事ですから家に泊まっていけ、とおっしゃると思いましたから、それを見越してあらかじめ用意させていただいたんです。」

俺はその言葉に呆れつつも苦笑しながら

「はー・・・流石と言うかなんというか。用意周到ってやつだな。あ、それじゃひょっとしてこうや、やまとも・・・」

俺の言葉にみゆきは頷いて

「はい。お二方も同じように準備してあったようです。私がそうすると言ったらお2人も、なら私たちもそうしておいたほうがいいね、とおっしゃって、それで、私と一緒に密かに持込をしました。」

その周到っぷりに感心しつつも俺の言うとおりに家を使ってくれてる事を心の中で喜びながら

「だったら、後でこうとやまとにも言うけどさ、貸した部屋にタンスあったろ?あれにお前らの衣類をしまい込んでおけばいいさ。置いてあるだけで中には何も入ってないタンスだからな。使ってくれれば嬉しい。」

自分のした事を咎められるかもと思っていたのだろう、みゆきは驚いて目を丸くしながら

「え?でも、よろしいのですか?そこまでさせてもらうのはかえって悪い気もしますが・・・」

その言葉に俺は頷きながら

「いいさ。自由に使ってくれ。俺はそう言ったからな。だから気にすることはない。」

そう言うとみゆきはほっとしたような表情になりつつも笑顔で「ありがとうございます。」と俺に言ったのだった。

俺もそれに頷いた後

「それじゃ俺も部屋で休むわ。みゆきも普段なら寝てる時間なんだし、ゆっくり休めよ？」

そう言うとみゆきもにっこり笑って

「はい。慶一さんも４日前から動きづめなのですし、ご無理をせずにしっかりとお体を休めてくださいね。」

と言うみゆきの心配の言葉に手を振って俺は部屋へと戻って着替えを済ますと、布団に入ってそのまま眠気に任せて眠りについたのだった。

次の日の朝に、凶の効果が早速発揮される事に気付かずに・・・・・

結論から言えば、俺は1月1日の初日の出を見る事が出来なかった。

元旦から天気が悪かったというのも原因の一つだったが、もう一つ大きな原因があったのだ。

それは、朝俺が目覚めた時の事だった。

「う・・・ん・・・あ・・・こ・・・声・・・が・・・でな・・・」

体の最悪なだるさと喉の痛み、そしてその影響で上手く声が出せなくなり更にはどうやら熱まで出ているようだった。

俺は寒気のする体を縮こませて布団に包まる、だが、この寒気はいつもの風邪以上にきつく感じた。

そうこうしてるうちに俺の部屋の入り口をノックする音が聞こえた。

「先輩。朝よ？お正月だからっていつまでも寝てるのはだらしないわよ？」

そう言いながら俺の部屋に入ってきたのはやまとだった。

俺はやまとを見ながら

「う・・・や、やま・・・と、すま・・・ん・・・か・・・風邪・・・引いた・・・・・・みたい・・・」

何とか言葉を搾り出してやまとに訴えるとやまとは顔色を変えて俺の側に来て

「ちょ、ちょっと先輩、大丈夫？」

心配しながら俺の額に触れるやまとはその熱さに驚いたのか

「あ！凄い熱・・・ちょっと待ってて、先輩。今高良先輩を呼んでくるから。」

そう言って慌てて部屋を飛び出してみゆきを呼びにいったのだった。

やまとｓｉｄｅ

昨晩の事もあり、いつもよりは遅い起床だった私だったが、お正月だからといっていつまでも寝てる訳にはいかなかったので先輩もついでに起こす為に部屋にいったのだが、先輩は突然風邪を引いてしまっていた。

先輩の顔色を伺い、額に手を当てて見た私はかなり高熱が出てる事を確認して驚いたのだった。

そして先輩に、高良先輩を呼びに行くと言って部屋を後にした。

高良先輩の部屋に着いた私は部屋をノックする。

「おはよう、高良先輩。もう起きてる？」

そう声をかけてみると中から

「おはようございます、永森さん。ええ、もう着替えも済ませてありますよ？少し慌てている声ですが、どうかなさいましたか？」

という返事が聞こえてきたので私は

「よかった。とりあえず部屋に入るわね？先輩。」

そう言って部屋に入り、先ほどの先輩の事を高良先輩に伝える。

「高良先輩。慶一先輩が大変なの。急に風邪ひいてしまったらしくて今先輩の額に触れてみたんだけど凄い熱だったわ。普通の風邪ならいいんだけど、私じゃよく分からないから先輩、慶一先輩の容態を見てもらえるかしら。」

事情を説明すると高良先輩は驚きの表情になり

「慶一さんが風邪、ですか？わかりました。すぐに慶一さんの部屋へ行きます。永森さんはタオルと氷嚢を用意してください。」

高良先輩の指示に頷いて

「わかったわ。後風邪薬も必要かしら？」

と聞くと、高良先輩は少し考えこんでいたがやがて

「永森さん、お粥は作れますか？もし作れるのでしたらそれと一緒に風邪薬も持ってきてください。空腹のままでは薬を飲ませられませんからね。」

その答えに私も頷きながら

「わかったわ。お粥と風邪薬も任せて。高良先輩は慶一先輩の所へ急いで。」

そう言うと高良先輩も頷いて

「分かりました。それじゃそちらはよろしくお願いしますね。」

そう言ってすぐに慶一先輩の部屋へと向かったのを確認すると、私はお粥と風邪薬と氷嚢の準備をするためにキッチンへと向かったのだった。

その途中で寝ぼけ眼で起きてきたこうに出会った。

「ふあ～・・・おはよ、やまと。何か慌ててるみたいだけどなんかあったの？」

そう聞いてきたので私は先輩の事をこうに伝えるとこうは途端にしゃっきりと目を覚まして

「ねえ、やまと。先輩、大丈夫なの？」

そう聞いてきたので私は

「今高良先輩が診てくれてるわ。ただの風邪だとは思うけど、こうも心配なら先輩の部屋へ行ってみたら？」

そう伝えるとこうは頷いて

「わ、わかった。じゃあ、私は先に先輩の部屋に行ってるからね。やまとも準備すませたら早く来なよー？」

という言葉に私も頷いて

「わかってるわ。用意する物が用意できたらすぐに向かうわよ。それまでは高良先輩と共に慶一先輩の事、頼むわよ？」

そう言うとこうも頷いてすぐに慶一先輩の部屋へと向かっていった。
それを見届けた私は改めて準備すべき物を集めに行くのだった。

慶一ｓｉｄｅ

熱で意識も朦朧としつつも寒気もあったので俺は布団に包まって暖を取っていたのだが、そこにみゆきがやってきた。

「失礼します。慶一さん、どんな感じですか？」

そう訪ねてくるみゆきに俺は痛む喉を使いつつ

「さ・・・さむいし・・・頭いたい・・・喉も・・・それに体の節々も・・・痛んでる・・・頭も・・・ぼーっとして・・・る」

そう伝えるとみゆきは俺の額に手を当てて熱を測りながら

「インフルエンザではなさそうです。熱は少し高いですが、症状はそれとは違うようですから・・・慶一さん。とにかくあったかくしてゆっくり休んでください。今風邪薬等が届きますから。」

その言葉に俺も頷きで答えるのだった。

そして改めて布団に横になった時に俺の部屋のドアが開いて慌てた様子のこうが入ってきた。

「せ、先輩。いきなりの風邪との事ですが、大丈夫なんですか？」

そう俺に聞いてきたのだが、喉のしんどい俺に変わってみゆきがこ

うに答えてくれた。

「熱も大分高いですが、インフルエンザではないようです、ですが、喉をやられていますのであまり喋らせるも慶一さんの負担になります。喉の方が落ち着くまでは余り慶一さんに喋らせないようにお気遣いをお願いしますね。」

そう俺の状況を代弁してくれるみゆきにこうも頷きつつ

「わ、わかりました。先輩、今日は私達も側にいますから、ゆっくりしててくださいね。」

そう言ってくれるこうの言葉に頷く俺だった。

そして、少し遅れてやまとがお粥と風邪薬を持って部屋に入ってきたのだった。

「お待たせ、先輩。お粥作ってきたわ。食べ終わったら風邪薬も飲んでしっかりと休んでね?」

そう言いながらお粥を俺の側の机に乗せると、やまとは俺に無理をさせないようにと思ったのだろう、部屋を出て行こうとしたのだが、こうが変な事を口走った。

「先輩、ちゃんと1人で食べれます?なんなら私が先輩に食べさせてあげましょうか?」

という言葉で部屋の空気が一転した。

「・・・慶一さんの看病をするのは医者を目指す私の努めでもあり

ます。ですから、この事も私がやらせていただきます。」

何故か妙な使命感に燃えるみゆきのその言葉にやまとが

「それは納得できないわね。先輩に迷惑をかけてしまったのは私も同じ。ならばそのお詫びに私が先輩の面倒を見るのは当然の事だわ。高良先輩ばかりに負担をかけるわけにはいかないしね。」

そう答えるとみゆきとやまとの間になにやら不穏な空気が渦巻き始めるのを感じ、俺は風邪以外の寒気を覚えるのだった。

そして、いいだしっぺのこうはこの雰囲気を見てニヤついているのが見て取れ、俺は大きなため息をついたのだった。

しばらく2人の睨み合いにも状況が続いたが、俺はこのままじゃ埒があかないと思ったので

「・・・2人の・・・気持はあり・・・がたい・・・だから・・・せめて仲良く・・・どちらかが・・じゃなくて・・・2人で面倒・・・見てくれればいいから・・・」

そう2人に辛い喉を振り絞って言うと、2人ははっとして

「そ、そうですね。すみません、慶一さん。何だか妙な使命感が湧き上がっていましたので、つい。」

「私もつい、むきになっていたわ・・・先輩の過去の事思い出したせいかもね。あの時は本当に危なかったし。」

そして2人はお互いに

「永森さん。私の至らない部分もあるかと思います。その部分のフォローをお願いできますか？」

そう言うみゆきにやまとも頷いて

「分かったわ。私にも何か出来ることがあれば言って？高良先輩。お互いに助け合いましょ？」

その言葉に頷くみゆきを見て俺はほっとしていたのだった。

そして何時の間にか蚊帳の外になっていたこうは

「私も、一応いるんだけどなあ・・・3人とも私の事忘れてない？」

と言って何時の間にかはぶられていた事にかなり落ち込んでいるこうだった。

その後はお粥は自力で食べ、薬を飲んで俺は休ませてもらう事になった。

何かあれば、携帯を鳴らすようにする事にして3人とも一旦俺の部屋を後にする。

みゆきｓｉｄｅ

慶一さんにお粥を食べさせて薬を飲ませ、一旦落ち着いたので私たちはリビングでのんびりとした時間を過ごしていましたが、ふいに玄関の呼び鈴がなったので私は誰かが来たのかな？と思い、玄関へと出向いていったのでした。

「はい、どちら様でしょうか？」

そう声をかけて玄関を開けるとそこには驚きの表情で立っているかがみさんとつかささんがいたのでした。

「み、みゆき？どうしてあんた、慶一くんの家にいるの？」

「わたしもびっくりだよ。でもどうして？」

そう訪ねてこられたので私は昨日の事情をお２人に説明すると

「そういう事だったのね・・・まあ、あの時間からじゃ仕方ないわね・・・それで？慶一くんは？あんたがここにいるのなら慶一くんも家にいるんでしょ？」

「わたし達今日は暇をもらったから遊びに来てみたんだよ～。」

その２人の言葉に私は困ったような顔をして

「実は、申し上げ難い事なのですが、あの後慶一さんは急に風邪を引かれてしまっていまして、少し前に風邪薬を飲んで休まれた所なのですよ。」

その事を伝えるとお２人は

「え？あいつが風邪？珍しい事もあるものね・・・それで？容態はどうなの？」

「けいちゃんが風邪？大丈夫なの？」

そう訪ねてくるお２人に私は

「熱は若干高いようでしたが、今はお食事も済ませて風邪薬を飲ん

で休まれています。インフルエンザではないようでしたので、2.3日で回復するでしょう。」

私の言葉に2人ともほっとしたような顔をしつつも

「そっか・・・それなら大丈夫か・・・ねえ、みゆき。私達も慶一くんの顔見ていっても大丈夫かな?」

「わたしも様子見ていきたいな。ゆきちゃん。大丈夫かな?」

お2人の願いに頷きながら

「大丈夫ですよ。ただ、今はお休みされてると思いますのでお静かに。」

私の言葉に2人も頷いて

「わかってるわ。とりあえずお邪魔するわね?」

「大丈夫だよ。おじゃましま～す。」

という2人を伴い私は慶一さんのお部屋へと連れて行きました。

「では、私はリビングの方に戻っていますので、何かありましたら呼びに来てくださいね。」

という私の言葉にお2人も頷きで応えて部屋の中に入っていくのを見送った私は再びリビングへと戻っていくのだった。

かがみｓｉｄｅ

とりあえず今日は暇がもらえたので私とつかさは暇潰しも兼ねて慶

一くんの所に遊びにきてみたのだが、そこにはみゆきが居たのだった。

みゆきがここに居る事を不思議に思った私はみゆきに事情を尋ねると、昨晩からの事を説明してくれた。

しかし、同時に、慶一くんが突然の風邪で寝込んでいる事も聞かされて私たちはとても驚いていた。

せめて慶一くんのお見舞いだけでもするべきかな?と思った私たちはみゆきにお願いして慶一くんの様子を見ていくことになった。

そして、みゆきに案内されて私たち2人は慶一くんの部屋へと足を踏み入れたのだった。

部屋に入り、ベットの方をみると少し苦しげな寝息を立てて慶一くんが眠っているのが見えた。

私たちはベットに近づいて慶一くんを見た。

「よく眠ってるみたいね・・・でも、凄い汗・・・つかさ、近くにタオルか何かある?」

そうつかさに聞くとつかさも周りを見ていたが、探してる物がない事を確認すると

「部屋にはないみたいだね、私、洗面所に行ってタオルとって来るよ。」

と言うつかさに私も頷いて

「うん。お願いね、つかさ。それと、キッチンへ行って氷もよろしく。氷嚢の氷がすっかり溶けきってるみたいだからさ。」

部屋を出ようとするつかさにそう伝えるとつかさは

「うん、わかったよ～。おねえちゃんはけいちゃんの様子見ててね？」

そう言って部屋を出て行った。

慶一くんと2人きりの部屋、私は慶一くんの顔を見ながら

（まったく、私が心配してた事が現実になったわね・・・でも、たまにはいい休憩だと思って体休めてもらわないとね・・・ほんとこいつって無茶ばっかりするもんね・・・でも、そんな慶一くんだから・・・私は・・・）

そこまで考えた時、慶一くんがふいに目を覚ました、そして私の方を見て

「ん・・・かが・・み？何で・・・お前が・・・俺の部屋に？」

まだ喉が調子悪そうで枯れた声で私にそう言う慶一くんに

「無理してしゃべらなくていいわ。今日は家から暇をもらってね。暇潰しにあんたの家に遊びに来たのよ。そしたら家にみゆきがいて、あんたが風邪引いて寝込んでるっていうからさ。お見舞いがてらに、ってわけ。」

私が事情を説明すると慶一くんは喋る代わりにメモを取り出して

＜そっか。悪いな、折角来てもらったってのにこのザマでさ。家にはみゆき達もいるから暇ならゆっくりしていけよ。＞

と書いて私に見せると私は笑いながら頷いて

「そうね。そうさせてもらおうかな。それと、風邪ちゃんと治しなさいよ?あんたもいないと何か物足りないからさ。それに、元気なあんたの方がいいしね。」

そう慶一くんに言うのだった。

その言葉に照れたように顔を赤らめて、慶一くんはすまなそうな顔をしていたがそこに

「おねちゃんおまたせ～。あれ?けいちゃん、起きちゃったんだ?」

というつかさに慶一くんはまたもメモに書き込み、つかさに見せてコミニュケーションをとっていた。

そして、私達は慶一くんの氷嚢の氷を取り替え、濡れたタオルを手渡して汗を拭かせて、再び布団に横にならせてから、慶一くんが着替えるといったのでみゆき達のいるリビングへと戻っていったのだった。

リビングには永森さん達もいて、私達はみんなと談笑したりゲームしたりしながら過ごしていた。

慶一ｓｉｄｅ

風邪で寝込んでいる俺の元に、暇になったからと言う事でかがみとつかさがやってきた。

俺が風邪を引いたと言う事に驚いていたのだが、それでも俺の世話を焼いてくれた事が嬉しかった。

声も満足に出せない状態ではあったが、筆談と言う手段を使って何とか2人とコミニュケイトする事ができたので軽くやりとりをしていた俺だった。

そして夕食時にはつかさも俺にお粥を作ってくれたのだった。

そんな事もあって、俺は久々に引いた風邪に苦しめられつつもその日を無事に過ごし終える事ができたのだった。

風邪が完治するまで3日かかったが、その間にみさお達やこなたも俺の見舞い＜そう称しているが実際は冬休みの宿題を写したかったらしいが・・・＞に来てくれた。

そして風邪の治った頃に俺は3人に例の如く宿題を写させるのだった。

それでも、お見舞いしてくれた時はみさおもこなたも真剣に心配してくれたのでその事は嬉しかった。

新年から風邪っぴきで始まった年だけど、もうすぐ3学期が近づいていた。

体調管理は気をつけないとダメだなあ、と思いながら俺は新たな学

期を迎える心構えをするのだった。

旋律の不幸～新年一発目の風邪、凶の効果発動～（後書き）

いよいよ3学期ですが、あのイベントも近づいているのでそのあたりも面白くかけるように頑張っていきます。

新たな始まりの旋律～新学期のスタートとこなたとのハプニング～

正月一発目から風邪を引き、皆に迷惑をかけてしまうという情けない事をしてしまったものの、なんとか風邪も回復し、こなた達にも冬休みの宿題を見せたりなどをやって、無事に冬休みを終えた。

そして今日、2年生最後の学期の始まりとなり、俺はいつもの時間に起きて学校へ向かう準備をする。

キッチンで朝食を作り、のんびりしてる所に最近は猫の世話でよく来てくれるようになったあやのがやってきた。

「おはよう慶ちゃん。お正月は散々だったわね。もう体の具合はいいの？」

猫の餌の準備などをしつつ、俺にそう聞いてくるあやのに俺は頷きながら

「ああ。もうすっかりな。あれからみゆきにも言われたけど、疲労も大分貯まってたって事だから、ゆっくり休ませてもらったよ。」

笑いながら言う俺にあやのも笑顔で

「そっか。なら、安心ね。慶ちゃん、こっちは終わったわ。まだ時間ある？」

そう聞いてくるあやのに頷いて

「ああ、まだ余裕あるよ。今お茶入れたから、少しのんびりすると

いい。それはそうと、今日はみさおの奴は一緒じゃないのか？」

そう訪ねるとあやのは俺に頷きながら

「ええ。今日は部活の朝練もあるからって早めに出て行ったわ。だから今日は私1人ってわけ。」

その言葉に納得して俺は

「そっか、なら一緒に行くとするか。折角だしな。」

という俺の言葉にあやのは微笑みながら頷いて

「ふふ。そうね。慶ちゃんの準備はもういいのかしら？」

というあやのに俺も自分の鞄を持ち上げつつ

「ああ、この通りいつでも行けるぞ？それじゃ、お茶が済んだら行くとしよう。」

そう俺が言うと、あやのも頷きで応えるのだった。

程なくして学校へ行く支度を整えた俺たちは2人揃って家を出る。

そして、バスを使って駅へ向かい、電車へと乗り込む俺たちだった。

電車内ではいつものようにかがみとつかさが俺の乗る時間に合わせて来てくれている。

ここ最近はこういうのもいつもの光景になりつつあった。

そして俺は、この光景を自然な物として受け止めるようになっていたわけだけど。

「おはよう、かがみ、つかさ。」
「おはよう、柊ちゃん、妹ちゃん。」

俺たち2人がかがみ達に挨拶をすると、2人も俺達に

「おはよう、慶一くん、峰岸。一緒に来たって事は、猫の世話してきたのね？」
「おはよう、けいちゃん、峰岸さん。猫ちゃん元気だった？」

そう挨拶して来た2人にあやのは

「ええ。最近はよく面倒みさせてもらってるわ。慶ちゃんの所の猫ちゃんは病気とかしないものね。」

あやのの答えにかがみはにひひと笑いながら

「誰かさんみたいに風邪とか引かないって事ね。うんうん、健康なのはいい事よね。」

という言葉に俺は苦笑しながら

「おいおい、かがみ、勘弁してくれよ。俺だって人間なんだし、時にはそういう事もあるさ。それに、文化祭の時のお前の事、忘れたわけじゃないだろ？」

そう返すと、かがみは〝しまった！〟という顔になって

「ふう、うっかりやぶへびだったわね。まあ、これからもお互いに気をつけましょ？」

というかがみの言葉に俺も頷いて

「そうだな。ああいう事になって初めて健康の大切さってやつがわかるようだよ。」

その言葉にかがみだけだけでなく、あやのやつかさもうんうんと頷いていたのだった。

そうこうしてるうちにこなたとも合流し、俺達は学校へとむかった。

学校へ着くと俺たちはそれぞれの教室に入っていく。

そして、軽く雑談を交わしながら先生の来るのを待っていた。

「おはよ、みさお。今日も結構寒いけど、朝練がんばってるな。」

そう声をかけるとみさおは満面の笑みで

「まあ、私が好きでやってる事だかんなー。そういや慶一は部活やってねえよな？お前に好きなスポーツとかあるんか？」

その質問に俺は少し考える仕草をして

「うーん、俺はそういう事をやってきているようなもんだしな。それに、部活と武術の２足の草鞋は履けなかったからなあ・・・」

その言葉にあやのが

「そういえばそうよね？慶ちゃんは龍神流の武術家なんだものね？」

そう言うと、かがみがまたもにひひと笑いながら

「もっとも、今はあまり鍛錬してなさそうだけどねー？いいの？慶一くん、仮にも龍神流の息子なのにさ。」

と言うかがみに俺は困ったような顔で

「なあ、かがみ。今日はやけに絡んでくるよな？俺、お前になんかしたか？」

そう言うとかがみはしてやったりの表情で

「べっつにー？今の現状を指摘してあげただけよ？」

そう言うかがみに俺は苦笑するしかなかった。

そして、そんな話をしてるうちに先生もやってきて、今日の朝のＨＲが始まった。

「あけましておめでとう。今日から新学期が始まる訳だが、みんな何事もなく過ごせたか？ともあれ、これから始業式が始まるから全員体育館へ集合するように。」

と言う先生の言葉で俺達は一斉に体育館へと向かう。

そして、校長のつまらない話を聞かされつつ、始業式を無事に終え

ると再び教室に戻ってＬＨＲが始まった。

それらの用事も済ませて今日の初日の終了と相成ったのだった。

今日は半ドンなので午後はみんな下校をするもの、とりあえず昼食を取ってから帰る物がいたのだが、俺達は後者だった。

例の如く、アニ研部室へ集まり昼食を取る俺たち。

「年も明けて新たな学期が始まったけど、後３ヶ月程でおれ達も３年生か。長いようで短い気がするな。」

と感慨深げに俺が言うとこなたは笑いながら

「それだけ楽しい時間が多かったんじゃない？楽しい時間は過ぎるのが早いっていうしね。」

そう言うとかがみも

「そうね。なんだかんだで慶一くんと出会って今まで楽しかったものね。」

かがみの言葉につかさも頷きながら

「うん。わたしの学校生活も大分変わったよ。けいちゃんに会えてよかったな～。」

その言葉にみゆきも

「慶一さんとの出会いは私にとっても私の世界を変えてくれる程の

物でしたからね。そのおかげでみなさんとも繋がれました。」

そう言うとみさおも

「慶一が取り持ってくれたから私らもみんなと仲間になれたもんな。お前と出会えなかったらずっとこの状況にすらなれなかったかもなあ・・・」

あやのもその言葉に頷きながら

「そうね。私たちにはクラスという隔たりもあって、今のような関係になるなんて思ってもみなかったわ。でも、慶ちゃんの存在がそんな隔たりすらなくしてくれた。まさに、新しい世界を見せてくれたものね。」

そんな話を聞きながらこうは少しだけ自慢気に

「私は中学の頃から先輩がそういう人、新しい可能性を見せてくれる人だって思ってましたからね。ここでもきっと何かやってくれるって思ってましたから。」

こうの言葉にやまとも頷いて

「そうね。先輩と出会ったあの時から私の進む道が変わっていったわ。あの時から私はフィオリナを目標にしていたはずだったのに、気付いたら私も先輩の後に付いていってた。今ここでこうして陵桜の制服を着ていることだって、あの時からじゃ想像もつかなかったものね。」

そんなみんなの言葉に俺も照れながら

「そんな風に言われると照れるな。俺は取り立てて何かした訳じゃないんだけどなあ・・・でも、もしそうなったのだとしたらそれは・・・皆がそうしたいと選んだからだと俺は思う。俺達の出会いにしても、みんなと今こうなってる事も、俺達はそれぞれに選択を重ねてきたはずだ。だからこそ今こんな結果がでてる。そして、その結果が満足いくものになってるんだとしたなら、それはお前らにとってもいい選択だったと言う事だよ。」

俺の言葉にかがみが

「選択、か・・・意外と色んな所で私たちって選択を繰り返してきたのね。そういうのもゲームの中だけだと思ってたけど・・・意外と馬鹿にはできない物なのかもね。」

しみじみとかがみがそう言うとこなたもうんうんと頷いて

「そうだよ?かがみ。これからはたかがゲームとか、ゲームの中の事だとか馬鹿にはできないね。現にこんな風に形に表れてる以上はねー。」

といつものような細い目をしながらかがみに言うと

「確かにそうかもしれないけど、全部が全部そうだとも言えないでしょ?あんたこそゲームとか言ってないでもう少し現実をみなさいよね!」

と言うかがみのツッコミをさらりと受け流すこなただった。

そして、こなたは

「まあ、それでもさ。これからもみんなと一緒にやっていきたいね。」

そう、しみじみ言うこなたにみんなも

「そうね・・・こんなに楽しい毎日だもの。出来る事ならこれからも、一緒に・・・」

「わたしも、みんなと一緒がいいな。」

「叶わない夢かもしれませんが、でも、私もそう思います。」

「高校を出たって私は、みんなと係わりたいぞ?だって私も仲間だもんな。」

「私も出来る事なら、そうしたいわ。」

「だったら先輩に期待しましょうよ。今度もきっと何かやってくれますって。」

「ふふ。そうね。何しろ私達を引き合わせてくれた先輩だものね。」

最後のやまとの言葉に俺は困惑顔で

「おいおい、いくらなんでもそうそう上手くはいかないって。俺は神様でも何でもない、ただの高校生だぞ?」

そう言うとこなたが

「だめだよー?慶一君。君がそんな弱気な事いっちゃあさ。君が言ってくれた事、忘れたのかなー?」

と言うこなたの言葉に俺は”はっ”となったが

「そういや、そうだっけか。そうしたいと思うなら強く望む事、だ

っけな・・・。けど、俺だけじゃ無理かもな。みんなも望んでくれなきゃな。」

と言う俺の言葉にみんなはにっこりと笑って

「慶一君に言われるまでもないよ?」
「私も、ね。望んでる、強く。」
「わたしも~。一緒にいたいから。」
「そう強く思う事がきっと私達の絆を強くするはずです。」
「慶一にあん時言われた頃からずっと望んでるゼ?」
「私も。みんなと気持は一緒だから。」
「私もですよ。これからだって、ずっと。」
「私も。それが私の願いでもあるから・・・」

その言葉に俺も力強く頷くのだった。

お互いの気持を確かめ合い、お昼を終えて俺達は学校を後にするのだが、今回はこなた以外の皆が用事があるとの事で俺はこなたに誘われて秋葉腹へとやってきていた。

「珍しく今回は私と2人だけだね。」

と言うこなたの言葉に頷きつつ

「まあ、今回は他の皆もそれぞれに用事があるらしいからな。けど、こなた。今回俺を誘ったのは何でだ?」

そう訪ねるとこなたは俺の顔をじっと見つめると

「一緒に来れそうなのが君だけだった、ていうのもあるけどさ。結

局君が風邪引いたからお正月遊べなかったじゃん？だから、その埋め合わせしてもらおうかな？っていうのも理由かな。」

少しだけ寂しげな表情を見せるこなたに俺は

「あ、そういえばそうだったっけな・・・すまん、こなた。俺もまさか風邪引いてしまうとは思ってなくてさ。けど、そうなってしまった以上は言い訳もできないもんな。」

そう言うとこなたは

「いいよ。あの後みゆきさんにも聞いたけどさ。慶一君、大分疲労が貯まってたらしいじゃん？そうさせてしまったのも私達にも原因があったんだからさ。だから、君だけのせいじゃないし、まあ、責任半分って事で。」

少しその事を気にしてるらしいこなたの頭を軽くなでながら

「いいさ。したくてやった苦労だからな。そんなに責任感じる事はないよ。いまいち加減がわからなかったのも原因かもしれないし、まあ、お前の言う埋め合わせで今日はお前につきあうよ。」

そう言うとこなたは笑顔になって

「よーし、そうこなくっちゃね。それじゃまずはゲ○ズからいってみようかー。」

そう言いながら俺の手を引いて走り出すこなたに俺は（やれやれ）と心の中で思いつつこなたに引かれるままについて行くのだった。

そしてゲ〇ズ店内・・・・・・

「それじゃ慶一君。買い物ポイントまたよろしくねー？会計する時になったら教えてよ？」

と言うこなたに俺は苦笑しながら

「はいはい、わかったよ。で？集合場所はここでいいのか？」

今いる場所を指し示しながら俺はこなたにそう問い掛けるとこなたは周りを見渡してから頷いて

「うん、ここで集合で良いね。レジも近いし理想的だよ。それじゃ私は漫画とかの方行くけど、慶一君が先に選ぶの済ませてまだ私が戻らなかったら私を迎えに来てくれてもいいよ？」

と言うこなたに俺は

「うーん、でも、お前の居場所分かるかどうかが不安だぞ？」

そうこなたに言うとこなたはニヤリと笑って

「大丈夫だよ、今回はちゃんと携帯持って来てるからさ。」

こなたは自分の鞄に下げてある携帯を俺に見せてそう言うと俺はほっとして

「それなら安心か。逆にお前の方が早かったら呼んでくれてもいいぞ？」

そう俺が言うとこなたは頷いて

「わかったよー。それじゃ慶一君、後でねー。」

俺に手を振りながら目的の場所へと向かうこなた。

それを見送って俺はとりあえずラノベのコーナーへと向かったのだった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君とひとまず別れて私は自分の目的である漫画コーナーへとやってきた。

漫画を物色しながら私は

（そういえば、慶一君も漫画にも興味はあるんだ、って言ってたよね・・・もし慶一君の方が早めに終わるようならこっちに呼んでお勧めの漫画を慶一君に教えようかな？いつもかがみの方ばかりに付き合うのを見てたけど、少しだけ寂しいなって思ってたんだよね・・・って！私何を考えて・・・で、でも、たまにはこっちも付き合ってもらおうっと。）

途中に浮かんだ奇妙な感情に頭を振って私は心の中でそう考えていた。

とりあえず、その事はひとまず置いといて漫画の物色を進める私だった。

慶一ｓｉｄｅ

こなたとひとまず別れて俺はラノベを見に、それらの集まるコーナーにやってきた。

そしていくつかのラノベを手にとりながら

（うーん、これ、かがみ持ってたかな？俺はこっちのは持っていたけど、ちょっと自信ないな。後でかがみに聞いてみるか・・・それ以外では俺はこんなもんか・・・こなたはまだみたいだな、連絡来てないし。とりあえずこなたに連絡入れてみるか。）

そう考えて、とりあえず買う物を手に取りつつ、かがみに自分がラノベ以外で、気になってるラノベをかがみが持っていないかどうかを確かめる為、かがみにメールを飛ばした。

程なくしてかがみから返ってきたメールを見て、俺は確認したい物の確認ができたので次にこなたへ連絡するために電話をかける。

数回のコールの後、こなたが電話に出て

「もしもし、慶一君？そっちは済んだの？」

「ああ。思ったよりは時間かからなかったよ。こなたの方はまだ？」

「うん、もう少しかかるよ。ねえ、慶一君。悪いんだけど私のいる所まで来てもらってもいいかな？」

「ん？別に構わないぞ？それで？どう向かうといい？」

「えっとね・・・と言う感じで回れば私のいる所に辿り着けるよ？それじゃ待ってるからねー。」

「ああ、すぐ行くからな。」

そう言って電話を終えた俺は、こなたの待つ、漫画のコーナーへと

足を向けたのだった。

そして、こなたに教わったルートを通って俺はこなたがいる漫画コーナーへと辿り着いた。

漫画を物色してるこなたを見つけて声をかける。

「こなた、とりあえず来たぞ？まだかかりそうなのか？」

俺がそう訊ねるとこなたは俺を見て

「もう少しかな。ねえ、慶一君。君に薦めたい漫画があるんだけど、どうかな？」

そう聞いてきたので俺は

「漫画？とりあえず、どんなのか見せてくれるか？」

そう答えるとこなたは途端に嬉しそうな笑顔で

「うん。それじゃちょっとこれ見てー？後は、これとか、これも・・・」

とても嬉しそうに俺に漫画を薦めるこなたに俺もつられて笑顔になりながら

「ん？こいつはコードギアスか・・・こっちは・・・ひぐらしのなく頃にか、これも中々面白いよな。」

俺の言葉にこなたはうんうんと頷きながら

「うみねことかも面白いよね。後はさあ・・・」

とひとしきり漫画を見ていくつか買うのを決めて俺はこなたと共にレジへと向かった。

「すいません、ポイント全部、このカードにお願いします。」

そう言って俺はこなたのポイントカードに俺の分のポイントも追加してもらった。

そしてカードをこなたに返すとこなたはほくほく顔で

「ありがとー慶一君。また一歩野望に近づいたよー。」

と言って喜ぶこなたを見て俺は軽いため息をつきつつも微笑んでいたのだった。

そして、ゲ○ズを出て俺たちはゲーセンへと向かう。

ゲーセンにつくとこなたは

「ねえ、慶一君はまだ私と格ゲーの勝負した事なかったよね？一回やってみない？」

と言うこなたの誘いに俺は少し考えると

「まあ、一度くらいはいいか。思えばまだ一回もやった事なかったもんな。」

そう言うとこなたは親指をびしっと立てて

「さすが慶一君。そうこなくっちゃね。それじゃいこー。」

そう言って俺の手を引っ張って筐体の所へ連れて行くこなただった。

そして、結局一回だけのつもりが気付けば１０回以上もこなたと対戦をやっていたのだった。

「むう、また負けた・・・って、もうこんなにやってるのか。俺も結構熱くなるタイプみたいだな。」

そして反対の筐体からこなたが顔を覗かせて

「中々いい線行ってるけど、まだまだ甘いねー。とはいえ、２回私に勝ったのはお見事だったよ。慶一君がコツ掴んだら中々怖い対戦相手になりそうだねー。」

と言う言葉に俺も苦笑しながら

「はは、後少しで何か掴めそうな気はするけど、それがいまいちわからないからな・・・とりあえず、今日は完敗だな。それじゃこなた、俺は一旦休憩するよ。対戦終わったら奥の休憩所でな。」

そうこなたに言うとこなたも

「わかったよー。それじゃ私はもう少し修行してくとするよ。後でねー慶一君。」

と言うこなたに頷いて俺は休憩所に向かったのだが、その途中にあ

るＵＦＯキャッチャーを見てこなたが欲しがってた景品があったのを見た俺はよせばいいのにそれに挑戦する事にしたのだった。

「ん・・・お？今回は調子いいみたいだな。まさかの一発取りだ。」

今回は狙った物が一発で取れたので俺はその結果に満足しつつ、飲み物を買って休憩所でこなたを待つことにしたのだった。

しばらくのんびりしながら待つこと３０分、ようやく対戦を終えてこなたがこちらへと戻ってきた。

「お疲れ、こなた。ほら、ジュース。」

そう言いながら俺はこなたが戻ってくるのが見えた時すぐに買ったジュースをこなたに手渡すと

「あ、ありがとうー。丁度喉渇いてたんだよね。んぐんぐ・・・んーっ、生き返ったー。」

と言うこなたの台詞に俺は笑いながら

「おいおい、それは大げさじゃないのか？」

と言うとこなたはいつものように目を細めつつ人差し指を立てながら

「結構対戦で集中してたからねー。意外と疲れるものなのだよ。」

こなたのその言葉に苦笑しながらも俺は

「こなた。これ、さっきＵＦＯキャッチャーで取ったんだ。お前欲

しがってたもんな、これ。」

そう言いながらさっき取った景品をこなたに渡すとこなたは驚きの表情をしてすぐに笑顔になり

「ありがとうー。これ欲しかったんだー。さすが慶一君、抜け目がないねー。欲しがってる物よく見てるんだもんね。」

その言葉に俺は照れつつ

「よ、よせよ。たまたまそういうのが見えただけだって、特に意識をしていたわけじゃないさ。」

そう言うとこなたはいつもの調子で

「照れる慶一君、萌えー。」

と言ったので俺は慌てつつ、こなたに

「萌え、とか言うな！恥ずかしいだろうが・・・」

顔を赤くしつつそう言うとこなたはニヤニヤとしながら俺を見ていたのだった。

そして、一通りの遊びを終えてそろそろ帰る頃になったが、最後にこなたがコスプレ衣装の売ってる店を見ていきたいとの事だったので俺はそれに付き合って衣装を見に行った。

「ねえ、これはどうかな？」

そう言いながらいくつかの衣装を試着して俺に見せるこなた。
俺はまさに着せ替え人形の如くなこなたの姿を見て
「なんだか、似合ってるんだけど不思議な感じだな。」
その言葉にこなたは少し困惑する表情をしていたが、それでも似合ってると言う言葉が嬉しかったのか
「何か微妙な感想だけどまあいいかな、似合ってる、とは言ってくれたしね。とりあえず一着買っておこう、っと」
そう言って選んだ物の会計を済ませようと喜々としてそれを持っていくこなたを見ながら
「ほんとああいうのが好きなんだな・・・でも、こなたらしいか・・・」
そう呟きながら俺は改めてこなたらしさと言うものを見たような気分だった。
そして、会計を済ませて店の階段を下りている時、俺の後ろを歩いていたこなたがふいに「わっ！」と声をあげたのを聞いて俺は振り向いたのだが、そこには階段で躓いて俺の方へ落下してくるこなたの姿があったのだった。
俺は慌ててそれを受け止めようと両腕を広げて体制を作ろうとしたのだが、それよりも一瞬早くこなたが落ちてきたために間に合わずに俺ごと階段を落ちる事となった。

しかし幸いにも低い所でこなたをキャッチしていたために大怪我はせずに済んだのだが・・・俺は一瞬とはいえこなたと・・・キスしてしまっていたのだった。

「あ、あいたたた・・・ごめん、慶一君、怪我はない？」

そう聞いてくるこなたに俺は顔を真っ赤にしながら

「い、いや、怪我は大丈夫だ。こなたこそ大丈夫か？」

そう言うとこなたは顔を赤くしてる俺を見て自分が俺にしてしまった事を思い出したのか途端に顔を真っ赤にしつつ

「わ、私は大丈夫だよ・・・その、慶一君が庇ってくれたからね・・・え、えっと・・・と、とりあえず2人とも怪我はないみたいだし、い、いこっか？」

と言うこなたの言葉に俺もまだ赤い顔のまま頷いて

「そ、そうだな・・・ごめん、こなた、その・・・」

俺がこなたに事故とはいえしでかした事を謝ろうとするとこなたは慌てて

「い、いいよ。事故だったんだし、気にしないで。それに・・・嫌じゃなかったし・・・」

最後の方は俺にも聞き取れない程の小さい声で言うこなただったが、俺はまだ気が動転してたらしく、最後のこなたの言葉を聞き取る事ができなかった。

こなたの言いかけていた言葉を聞いてみようか、とも思ったのだが、なんだか改めて聞くのも気恥ずかしい感じだったので結局そのまま俺たちは動揺しっぱなしのまま秋葉を後にしたのだった。

「そ、それじゃ慶一君。今日は楽しかったよ?また暇な時はつきあってよね。」

少し照れながら言うこなたに俺も

「あ、ああ。俺なんかでよければな。ま、まあ、とりあえず、気をつけてな。」

そう言うとこなたも手を振りながら

「うん、慶一君もあんまり体に無理はさせないようにねー、それじゃー。」

そう言って去って行くこなたを見送って俺も家へと帰るのだった。

こなたｓｉｄｅ

今日は思いがけず慶一君と学校の終わった放課後に2人きりで秋葉巡りをする事となった。

慶一君に漫画も薦められたし、ゲーセンでも遊べたし、私が欲しがっていた景品ももらえたから今日は凄く充実した日になった。

そして最後に立ち寄った所で、事故とはいえ慶一君と・・・キスしてしまった事に私は自分の胸のあたりがむずむずとしているのを感

じていた。

（何か思いがけずデートみたいになっちゃったね、今日は。でも慶一君も楽しんでくれたみたいだし、結果オーライかな?とはいえ最後のあれは・・・恥ずかしかったけど、なんか、嫌じゃなくて・・・むしろ、嬉しかったかも・・・やっぱりこれって・・・そういう気持なのかな?もっともっと慶一君と色々やっていけば分かるのかも・・・。）

そう心の中で考えながら私は自分の中の気持に少しづつ気付き始めていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

学校も終わり、こなたと2人でまわった秋葉腹、色々あったけど楽しかったと今日を振り返っていた。

そして、最後の場所でのトラブルを思い出した俺は再び赤面していたのだった。

（こなたに誘われて遊んで回ったのはいいけど、最後にあんなハプニングが起きるなんて・・・クリスマスの時もやっちゃったし、俺って事故に巻き込まれる体質なのだろうか・・・でも・・・今回はシラフだったもんな、俺・・・こなたも・・・怒ってなかったな・・・あー・・・・・・）

自分でもよく分からない感情に頭を悩ませる俺だった。

去年からのハプニング続きはここでもそれを継続させる事となった訳だけど、ここの所の事もやっぱり”凶”が影響を及ぼしているの

だろうか?という風にも考える俺だった。

とはいえ、今回の事は不幸、という訳ではなかったのだが、これが悪い方へ作用しない事をまだわずかに消えない、あの時くじを見たときの胸騒ぎが俺を少しだけ不安にさせていたのだった。

波乱含みで始まった今年1年、俺はどんな風に過ごして行くのだろうか、1年はまだ始まったばかりだった。

託された旋律～旅行にあぶれたかがみとまつりさん～

新学期のスタート、そして、こなたとの2人だけでの秋葉巡り。
その時に起きたハプニングで俺はこなたとキスをしてしまったのだった。

それからこなたと顔を合わせる事になったが、こなたは別段意識をしてるわけでもないように見えた。

だが、俺は少しの間はこなたを見る度にあの時の事が頭をよぎり、少し顔を赤らめてしまうという状態が続いていたのだが、それもようやく慣れて来た頃、成人式を含めた3連休のスタートが明日に近づいていた。

そして連休を2日後に控えた晩の事、家事等やるべき事を終えた俺は部屋でのんびりとしていたのだがふいに俺の携帯に着信が入った。

携帯を開き、相手の確認をすると電話の主はよくわからなかったのだが、俺はとりあえず電話に出るのだった。

「もしもし、森村ですが。」
「やあ、森村君。私だ。すまないね、突然電話をかけて。」
「あ、その声はただおさんですか？」
「うん。そうだよ。実は君に折り入ってお願いがあるんだよ。」
「俺に、ですか？一体どんな事でしょう？」
「年末の福引で旅行が当たってね。それで明日から行く事になったんだけど、人数制限があってうちの家族全員が行けなくてね。それで、くじ引きの結果、まつりとかがみが残る事になってね。娘2人

の留守番では心配だ、というのもあってね、君に3日間、2人を託したいと思ったのだけど君の都合はどうかな?と思ってね。」
「なるほど・・・そういう事でしたら特に用事もあるわけではないので構いませんよ?それで、かがみ達がこちらに来るのですか?それともこちらが伺う事に?」
「とりあえず、君さえよければそちらにお邪魔させてもらってもいいだろうか?と考えたのだけどどうだろう?」
「分かりました。なら、3日間責任を持ってお預かりします。安心して行って来て下さい。」
「そうか。本当にありがとう、おっと、かがみが君と話たいらしい。今代わるから。」

そうただおさんが言うと、慌てた様子のかがみが電話に出た。

「・・・もう、お父さんは・・・あ、ごめんね慶一くん。いきなりこんな頼み事してさ。でも、いいのかな?慶一くん、予定とかあったんじゃない?」
「いや、取り立てて大した用事があるわけでもないし、心配はないよ。とりあえず明日からだな?」
「う、うん。それじゃ慶一くん、悪いんだけど、よろしくね?」
「ああ、それじゃ、来る時には一度連絡いれてくれな。」
「うん、わかった。それじゃ明日ね。」
「ああ、お休み。かがみ。」

そう言って電話を切った後、俺は2人を泊めるための部屋のチェックと簡単な掃除を済ませるために出向いたのだった。

そして、軽く部屋の掃除をして今日は休む事にしたのだった。

翌日の昼間・・・・・

かがみからの電話が入った。

「もしもし、慶一くん？今からそっちへ行くからよろしくね？」

「ああ、わかった。来る時には気をつけてな。」

「うん、後でね。あ、そうだ慶一くん。読みたいラノベとかある？ついでだからもっていくわ。」

「ん？そうだな・・・それじゃ・・・・・・を頼もうかな？もうそれは読み終わってるか？」

「うん。そっちはもう終わってるわ。それと、慶一くんの所にもゲームあったわよね？ソフトも何本か持っていくわ。」

「わかった。それじゃ後でな。」

そう言ってやり取りを終えて時間を見ると、午前１１時を少し回った所だったので、俺は（お昼でも準備しつつ、到着を待つかな？）と心の中で思いながら冷蔵庫を開けて中を見るのだった。

とりあえず簡単な物でも作るか、と思った俺は、残り物の冷御飯と卵、ひき肉、玉ねぎ等を使い、オムライスを作る事にした。

オムライスを作りながら俺は勉強会でつかさが作ってくれたオムライスの事を思い出しつつ材料の下ごしらえが済んだ頃、玄関の呼び鈴が鳴ったので俺は玄関へと出向いていったのだった。

「はいはいっと、今空けますよー。」

そう言いながら玄関を開けるとそこにはかがみとまつりさんの姿があった。

「おーっす、慶一くん。今日から3日間お世話になるわね。それと、

私たちを引き受けてくれてありがと。」
「ごめんねー、森村君。私たちだけくじの当たり引けなかったから留守番になっちゃってるからさ。悪いけどお世話になるわね。」
という2人に俺は
「いえいえ、俺も柊家では色々お世話になっているんですから困った時はお互い様ですよ。大したもてなしは出来ませんが、ゆっくりしていってください。丁度お昼も準備しましたので、どうぞあがってください。」
そう言うと2人は少し驚いたような顔をしながら
「私達の来る時間に合わせてお昼まで用意してくれてるなんて・・・ありがたいけど、何か悪いわね・・・」
「早速気を使ってくれる所も嬉しいね。とりあえずかがみ、このまま玄関で話しているのもなんだし、森村君の言葉に甘えましょ。」
まつりさんがそう、かがみに言うとかがみも気を取り直して
「そうね、それじゃ慶一くん。お邪魔するわね。部屋は前に使わせてもらった所でいいわよね?」
というかがみの質問に俺は頷いて
「ああ。その為に部屋は掃除しておいたよ。まつりさんの部屋も用意してありますからどうぞこちらへ。」
そう言って2人を家に上げて俺はまつりさんを寝泊りしてもらう部屋へと案内する。

「ここです。広さもそれなりにあると思いますからどうぞ使って下さい。」

そう言うとまつりさんはにっこりと笑いながら

「ありがとう、森村君。いやしかし、森村君の家って結構大きいね。部屋数も結構あるみたいだし。」

と言うまつりさんに俺も笑いながら

「俺の実の両親がどういう意図でこの家を建てたのかは謎のままですけど、自分も初めてこの家に帰って来た時にはそう思いましたね。まあ、もっとも・・・1人で住むには広すぎる家ではありますけどね・・・」

最後は少し寂しげな表情をしていたのかもしれない。

まつりさんは同情するかのような表情で

「ごめんね、何か森村君が言い難い事を聞いちゃったかな?」

と言うまつりさんに俺は慌てて手を振って否定しながら

「そんな事ないですよ。すいません、何かこっちもしんみりさせるような事言っちゃって・・・」

お互いに謝りあう俺達だったが、その姿がおかしかったのか、俺達は2人してクスクスと笑っていた。

「あはは。なんかお互いに気を使い合っちゃったね。でも、安心してよね。しばらくは私達もいるから寂しくはないよ？」

と言う言葉に俺は赤くなって慌てつつ

「ちょ！な、何言うんですか・・・お、俺は別に・・・」

そう言い訳する俺をまつりさんはにっこりと笑って抱きしめてくれながら

「ふふ。ここにいる間は君も私の事をまつり姉さんと呼びなさいよ？遠慮はしなくていいからね？」

その言葉に俺も困惑を隠せず

「ま、まつりさん？そ、それって・・・どういう？」

俺の問いかけに”にっ”と笑ったまつりさんは

「この家にいる間だけ私は君のお姉さんになってあげよう、って事よ。まあ、私の君のお兄さん同様、血は繋がっていないけどさ、まあ、これからお世話になる君に私の唯一の出来る事だと思うしね。」

そのまつりさんの言葉が嬉しくなって俺は

「あ、ありがとうございます・・・その・・・まつり・・・姉さん・・・」

そう言うとまつりさんはにっこりと笑って頷いてくれたのだった。

そして、次の瞬間物凄いオーラを感じて部屋の入り口に視線を向けるとそこには・・・笑顔ながら物凄い威圧感を放つかがみが立っていたのだった・・・。

「慶一くん～？いつまでもキッチンに戻って来ないからおかしいと思って見に来てみれば・・・あんた、何やってるのかしら？姉さんと抱き合って、いいご身分よねー・・・・・・」

と言うかがみの言葉に俺はしどろもどろになりながら

「い、いや、これはだな・・・俺の方からこうしたわけじゃなくて・・・まつりさんが俺を抱きしめてくれてだな・・・」

ふと、まつりさんのほうに視線を移すと両手を合わせて”ごめん！”とジェスチャーしているまつりさんの姿が目に入り、俺は諦めたように大きくため息をついて

「・・・わかったよ・・・思い切りやってくれ・・・」

俺は覚悟を決めてかがみにそう言うとかがみはオーラを出したままの状態で満面の笑顔を浮かべながら

「いい心がけねえ・・・それじゃ受けて貰いましょうか・・・天誅！！」

その瞬間俺は思い切り歯を食いしばり目をつぶった。

ゴン！！という音がしたものの、いつものような衝撃ではなかったので俺は不思議に思い、おそるおそる目を開けてみたのだがそこにはオーラを引っ込め、呆れたような顔をしているかがみの顔があっ

た。

「かがみ？どうして？」

いつものダメージ以下の攻撃に思わず俺は聞き返していたのだがかがみは複雑そうな顔で

「仕方ないわよ・・・私はあんたを本当に死なせかけた事あったんだしさ・・・あれを思い出したら力が抜けてたわ・・・もう、あんな思いはごめんだしね・・・」

最後は少し悲しげな顔でそう言うかがみに俺は

「あ、そうか・・・お前、あの時の事まだ気にしてたんだな・・・ごめん、お前には2度も命の事に関しては怖い思いさせてたんだっけな・・・いいか、かがみ。これだけは覚えておけ。お前は悪くない。猪の時も、あの時も、結局は俺の自己責任において負った怪我だし、状況でもあった。だからもう、自分を責めるのはよせよ？」

俺のその言葉に少しだけ緊張が解けたような感じになったかがみを見ていると

「ありがと・・・でもあんたもたいがいお人好しよ・・・ねえ、慶一くん、覚えておいてね？その優しさは嬉しいけれど、時にはそういう事で責められない自分が辛い事もあるんだって事もさ・・・」

俺はかがみの言葉に頷きながら

「わかったよ。かがみの言葉もよく覚えておく。さてと、色々あったけど、そろそろお昼食べちゃわないとな。キッチンへ行こうか、

かがみ。」

俺の言葉に笑顔になって頷きながら

「そうね。色々やってたらお腹すいちゃったわ。慶一くん、お昼何作ってくれるの？」

その言葉に俺は

「2人がくるまでにオムライスの仕込みをしといたんだ。後は御飯を炒めて卵を巻いて出来上がりかな。まあ、楽しみにしててくれよ。」

そう言いながらキッチンへと移動を始めると、かがみも満面の笑みをうかべながら俺についてきたのだった。

キッチンに戻って来るとさっきの事はどこ吹く風な顔をしたまつりさんが待っていた。

「あはは、森村君ごめんねー？ちょっと調子に乗っちゃったかな？」

一応謝罪の言葉は言いつつもあまり反省してなさそうな顔でそう言うまつりさんに俺とかがみは軽いため息をついて

「はあ・・・とりあえず、程ほどにお願いしますね。」

「姉さん？少しは自重しなさいよ？まったく・・・」

そう2人で言った後俺は

「とりあえず、かがみ、まつりさん。そこで出来上がりを待ってい

てください。すぐに作ってしまいますので。」

そう2人に言ったのだが、かがみは

「ねえ、慶一くん。私も側で作ってるところ見せてもらってもいい？私も少しは覚えたいからさ。」

と、どうやら料理の経験を積みたいらしく、そう言って来たので俺は

「ああ、いいよ。まあ、俺のやり方が参考になるかはわからないが、見ててくれ。」

そう言うとかがみは頷きながら俺の料理してる所を凝視しはじめた。

俺はそんな状況に照れつつもオムライス制作に入るのだった。

御飯の方はすでに仕込みをしておいたので、フライパンに溶いた卵を乗せて焼きながら御飯を乗せてくるりとフライパンを上手く返して御飯を卵で包み込む。

流石に俺もつかさやこなたほどにできるわけではないので、多少形が崩れかけたがなんとかオムライスを作り終えることができたのだった。

それを見ていたかがみが気付けばなにやらメモに俺の作り方と卵の返し方を書き込んでいた。

「・・・で、手首をくいっと・・・それで・・・」

とりあえずメモを書き終えたらしいあたりで俺はかがみに声をかけ

る。

「かがみ、とりあえず完成したから食べちゃおう。これ、運んでくれるか？」

と、出来上がったオムライスを皿に盛ってかがみに手渡すとかがみはそれを受け取って

「わかったわ、とりあえずまつり姉さんの分をもっていくわね。」

そう言って運んで行ってくれたので、俺は残りの分も作って皿に盛り、テーブルへと運んで行くのだった。

「お待たせ。かがみの分と俺の分も完成だ。さあ、食べちゃおうか。」

そう言ってかがみの前にもオムライスを並べる俺だった。

「ありがと。うん、とても美味しそうね。それじゃ食べちゃいましょ？その後は少し勉強してからゲーム、付き合ってよね。」

と言うかがみに俺も頷いて

「了解だ。それじゃまつりさんも遠慮せずにどうぞ。」

そう言うと待ちきれなくなっていたまつりさんは俺に

「うーん、待ちくたびれたよ。もうお腹ぺこぺこー。それじゃいただきますー。」

そう言って食べ始めるのを見て俺たちも

「はは。それじゃ俺たちも。」

「うん。いただきまーす。」

お互いに顔を見合わせて笑いながらそう言って食事を始める俺達だった。

そして、食事を終えて少し休憩の後、俺とかがみは3時間程勉強をする事になった。

まつりさんはのんびりリビングでテレビを見ているようだったので俺の部屋でやる事にしたのだった。

「えっと・・・ここの公式はこれで、っと・・・」

「ねえ、慶一くん。これはこれであってる?」

「うん。大丈夫だ。かがみ、これなんだが、この訳であってるか?」

「えーっと、どれどれ?うん、大丈夫よ。後ね・・・」

という感じで勉強も進めてきた俺達だったが、勉強が終わる頃、俺は何気に時計を見て

「ん?もうこんな時間か。かがみ、悪いんだけどゲームの相手するのは夕飯の後でいいか?ちょっと食材足りないから買い物いってこないと、だからさ。」

そう聞くとかがみは頷いて

「いいわよ?それと買い物行くなら私と姉さんとで家の中の事少しやっておくわ。」

そう言って笑うかがみに俺は

「それは助かるな。それじゃお土産にかがみの好きなポッキーでも買って来よう。楽しみにしててくれ。」

とさり気なく言うとかがみは途端に顔を赤くして慌てながら

「べ、別にいいわよ!あんた私がいつもポッキー食べてるとか思ってない?」

その言葉に俺もニヤニヤしつつ

「別にー?ただ、よく食べてる所を見かけるから聞いてみただけだよ?」

そう言うとかがみから突然黒いオーラが立ち上るを感じたので俺は

「おっと、ちょっとからかい過ぎたな、ごめんごめん。それじゃ行ってくるよー。」

そう言いつつ、逃げるように部屋を出て買い物に出かけたのだった。

さっきのやり取りを思い出しながら俺は

「やれやれ、あの時の仕返しのつもりでからかっちゃっけど、ちょっとやりすぎだったかな?まあ、美味しい夕食作って機嫌直してもらうか・・・」

そう呟きつつスーパーへ行って買い物を済ませるのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんの所で3日間お世話になることになって、お昼を済ませた後、私と慶一くんは勉強をしていた。

頃合の時間になって、慶一くんは私に夕食の買い物に行くとからゲームの相手は夜にと言われたので特に異論のなかった私は慶一くんが買い物に行ってる間に姉さんと家の中の事やらせてもらおうと思って声をかけた。

その事を快く承諾してくれた慶一くんだけど、いつかの私のからかいをさり気なく仕返された事に冷静になってから気付いて苦笑していたのだった。

「まったく、あいつもいい根性よね・・・ちゃっかり仕返されたわ・・・っと、そう言えば慶一くんの部屋にまともに入るのは今回が初めてじゃないかなあ・・・あの時も死なせかけた慶一くんが心配だったから結局慶一くんの部屋の中見てないものね。それに前回の風邪の時もお見舞いするだけで精一杯だったしね・・・。ふーん？」

そう呟きつつ改めて慶一くんの部屋の中を見回す私。

「なかなか片付いてるわね。それだけは2度の部屋訪問でも確認は出来てたけど・・・あ、これって・・・」

慶一くんの机に飾ってある写真立てを見つけた私はそれを手にとってまじまじと見てみる。

「慶一くんと一緒に写ってるこの人達・・・これが慶一くんの本当

のご両親なのね？確かにどことなく慶一くんにもその面影があるわ・・・」

そのやさしそうな姿を見て私は心の中が暖かくなるのを感じながらもう一つの写真立てを見た。

「あ、これって、旅行の時の・・・ふふ。慶一くん、照れて赤くなってるわね。でも、ちょっと嬉しいかな・・・私達の思い出も大切にしてくれてるみたいだしね・・・」

そして私は、初めて慶一くんを出会った時の事を思い出していた。

「あの時は驚いたわよね・・・なくしてしまった携帯電話探してたら突然に声をかけてきて・・・最初は、なんだろ？この人、って感じだったもんね・・・。でも、一緒に携帯探してくれるって言ってくれた時、私すっごいお人好しな人だな、って思ったわ・・・そうやって手伝った所で何の得にもなるわけじゃない、それどころか下手すれば不審者と見られてもおかしくないほど、だったものね・・・でも、困った時はお互い様、あの言葉がとても嬉しかったな。あれからよね、慶一くんに興味持ったのって・・・何だか、懐かしいな・・・」

独り言のようにそう呟いて私は目を閉じて

（あれから、こなたを通じて慶一くんと仲良くなった。でも、慶一くんは初めて会ったときから変わらなくて・・・今でもお人好しで・・・私達のために色々やってくれた。一時は慶一くんを信用できなくなった事もあったっけね・・・でも、やっぱり彼は彼だった。あんな時でも変わらなかった。私は・・・そんな慶一くんの力になる事ができたのかな・・・）

等という事を考えていたのだが、ふいに自分から家の事をやると言っておきながら何も行動してない事に気付いた私は慌ててまつり姉さんを呼びに部屋を出たのだった。

慶一ｓｉｄｅ

とりあえず夕飯の買い物を済ませて俺は家へと戻ってくる。

「ただいまー。」

そう言って玄関をくぐると、慌てた様子のかがみが俺を出迎えてくれた。

「お、おかえりなさい。ちょっと考え事してたら時間経っちゃってて今、姉さんと慌てて掃除とかしてたのよ。」

少しだけ息を切らせながらそう言うかがみに俺は苦笑しながら

「なんだ。そんなに慌てなくてもよかったのにさ。でも、ありがとうな、かがみ。」

かがみにそうお礼を言うとかがみは顔を赤らめつつも

「こ、この位構わないわよ。お世話になってるのは私達なんだしさ。それに、あんたの為じゃなくて私達にはその責任があるって言うだけの事よ。」

と、そっぽを向きながらも相変わらず素直になれないかがみに俺は思わず苦笑していたがそれに気付いたかがみが慌てて

「な、何笑ってるのよ！とにかく、いつまでも玄関にいないでさっさとそれキッチンに置いてきなさいよ！ほらっ！」

そう言ってまたも無意識に俺の手を引いてキッチンまで連れてくかがみに俺はまたしても苦笑していたのだった。

結局その後、その事を指摘すると案の定真っ赤になっていたのだが。

更にはその会話をまつりさんにも聞かれていてさらに顔を赤くするかがみを見る事にもなった。

その後は、夕食の支度をする事になったのだが、今回もかがみが手伝うと言ってくれたので、練習がてら野菜の皮むきや切り方を教えつつやったのだが、そこにまつりさんも参戦してきて結局2人に指導する事となった。

かがみもまつりさんも意外と飲み込みが早かったのでかなり上達したのを見て俺は

（2人とも意外と才能あるみたいだな。）

と心の中で感心していたのだった。

夕食を終えた俺達はそれぞれにのんびりしつつ、かがみのゲームの対戦相手をしていた。

「かがみ、シューティング結構上手いな。俺、意外と苦手かもしれない。」

そう言うとかがみは得意げに

「一応私の得意分野だからね。こっち方面はこなたにも負けるつもりはないわよ？」

と言う言葉に俺は感心しつつ

「なら、こっちのはどうだ？これなら俺も簡単には負けるつもりはないぞ？」

そう言って取り出したソフトはぷよぷよだった。

「へえ？あんたもそう言うのやるのね。いいわ。それじゃ勝負よ！？」

「望む所だ！いくぜ！？」

そして白熱のぷよぷよミニ大会が始まったのだった。

2人ともじわりじわりと連鎖を組み上げつつ牽制しながら徐々に相手陣地におじゃまぷよを落として妨害する。

じりじりと、しかし確実にお互いにチャンスを待ちつつ仕掛けるポイントを探っていた。

そして俺の方に連鎖を切るおじゃまぷよが落下したのをみたかがみが攻勢にでた。

連鎖ポイントにぷよを落とし、連鎖が始まる。

俺はそれに一歩出遅れる形となった。

かがみの方の連鎖が積み重なって行く中、俺も一瞬のチャンスに連鎖を爆発させる。

お互いに連鎖の相殺を行っていたが、ふいに連鎖を止められる所にかがみからおじゃまぷよのプレゼントを受けた。

そこで手詰まりとなり俺は連鎖を返す術を失って負けたのだった。

「ふっふっふ。私の勝ちね。」

得意満面の顔でそう言うかがみに俺は軽いため息をついて

「うーん、おしかったな。あそこで邪魔が入らなかったら分からなかったけどな。」

そう言うとかがみはニヤニヤとしながら

「あらら？負け惜しみ？それじゃもう一戦やってみる？」

と言うかがみの一言に俺はこなたと対戦した時のように熱くなってしまい

「おう！やってやるさ！次は勝つ！」

と言って結局遅い時間までかがみと数十回に渡り対戦をしたのだった。

対戦結果は１００戦４８勝５１敗１引き分けで俺の負けだった。

2人とも肩で息をしながら

「な、なかなかやるわね・・・まさかここまで互角の戦いされるとは思わなかったわ・・・あの1引き分けがなかったら負けてたかもね・・・」

と言うかがみに俺は

「くそー・・・及ばなかった・・・あの引き分けは悔やまれる・・・」

そう言うと2人して顔を見合わせた後笑ったのだった。

「さて、大分遅い時間になっちゃったな。今日はここまでにするか。」

俺がそう言うとかがみも頷いて

「そうね。ねえ、慶一くん。今日はラノベ読めなかったし明日読もう。慶一くんに読ませて欲しい物もあるし、私のお勧めもあるからさ。」

というかがみの言葉に俺も頷いて

「そうだな。その為にかがみにもラノベ持ってきて欲しいって頼んだんだしそうするとしよう。」

俺の言葉にかがみも満面の笑顔で

「うん。それじゃ今日はこれで。お休み、慶一くん。」

そう言うかがみに俺も

「ああ、お休み、かがみ。」

そう言ってお互いに部屋へと戻っていくのだった。

かがみｓｉｄｅ

お母さん達の旅行、そして思いがけず慶一くんの家でお世話になることになり、少し戸惑っていた私達だったけど、とりあえずは何事もなく1日を過ごせた事に安堵しつつ布団に入る私だった。

（ふう。一時はどうなる事かと思ったけど、何事もなく過ごせたからよかったわよね・・・明日はラノベも読まないとね・・・なんだか勉強合宿の頃を思い出したわね・・・楽しいな・・・でも、こういう事、後何回できるだろう・・・それを考えると少しだけ寂しいかもしれないわね・・・）

そこまで考えて私は”はっ”と気付き、頭をぶんぶんと振って

（いけないいけない、折角来てるんだし、楽しむ事だけかんがえましょ。折角なんだしね・・・）

ちょっとだけ寂しい考えを振り払って私は明日を楽しむ事を考えてそのまま眠りについたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

急にかがみたちを託されて俺はちょっと慌ててはいたものの、とり

あえずは問題もなさそうだったのでその事も含めて安堵していた。

（最初はどうなる事かと思ったけど、意外とかがみたちも動いてくれたりして助かったな。まだ2日あるんだしこれなら大きな問題もないかも、だな。折角だし、俺もこの状況を楽しむとするか。）

そう考えながら眠気に身を任せて夢の中へ旅立つ俺だった。

とりあえずただおさん達が帰ってくるまでは、何事もないように2人を預からないと、と改めて思う俺だった。

託された旋律～旅行にあぶれたかがみとまつりさん～（後書き）

一応2話完結予定ではありますが、長くなったら3話になるかもしれません。

慌しき旋律～慶一の疲れる1日模様～

柊家において家族旅行が当たり、家族でのくじ引きの結果今回は留守番をする事になったかがみとまつりさん。

ただおさんは2人を残して行く事を心配し、俺に旅行の間2人を預かって欲しいと頼んだのだった。

ただおさんの頼みを快く引き受けた俺は早速2人を自宅に招く。

そして、3人での3日間だけだが、一緒の生活が始まったのだった。

慌しい初日を終えて次の日の朝、俺はいつもの時間に目を覚ます。

「うーん・・・今日もいい朝だな。さて、と・・・」

そう呟いた後俺は早速服を着替えて顔を洗う為に洗面所へと向かう。

まだまだ水温は低い今の季節、顔を洗って目を覚ますにはもってこいの水の冷たさだった。

そして、2人が起きてくる前に朝食の用意をしようとキッチンへ行った俺だったが、そこに何時の間にか来ていた人物に俺は驚いて思わず声をかけたのだった。

「た、龍兄？いつ家に来たんだよ？」

そう訊ねると龍兄は笑いながら

「慶一、朝の挨拶はおはよう、だろ？まあ、お前が起きるちょっと前くらいだな。お前に親父から伝言預かってきたんでな。」

という龍兄の指摘に俺も思わず

「お、おはよう。ん？親父から伝言？」

挨拶を返しつつ、龍兄の言う伝言の事が気になったので聞いてみると龍兄は頷いて

「ああ。正月も風邪引いたりして結局家に顔見せにも帰ってきてないから今日一度顔見せに来い、ってさ。」

そう言う龍兄の言葉を聞いて親父からの伝言の内容にあきれつつ

「何かと思ったらそんな事かよ・・・まったく・・・あ、でも、まいったな、今うちにはかがみとまつりさんが居るんだよ。」

そう、龍兄に言うと、龍兄は俺に

「ん？かがみちゃんとまつりさんが？一体何でだ？」

と言う龍兄に俺は事情を説明すると

「成る程な・・・なら俺がお前が戻ってくるまで代わりに居てやろうか？親父の所には泊まってくる必要もないから日帰りで帰ってくればいいしな。」

そう言う龍兄の言葉に俺はしばし考え込んでいたがやがて顔をあげると

「うーん、それならちょっと任せてもいいかな？今行っておかないと何だかうるさそうだし、行ってきちゃうよ。」

と言う俺の言葉に龍兄は頷いて

「おう、そうしろ。こっちは俺に任せておけばいい。あんな親父でも俺達の事を心配はしてくれてるみたいだからな。顔みりゃ安心もするだろ？」

俺はそんな龍兄の言葉に頷いて

「まあ、それもそうか。じゃあ、龍兄、こっちは任せるよ。2人をよろしく頼む。」

俺の言葉に頷く龍兄。

そんなやり取りをしているとかがみがキッチンへとやってきて俺と龍兄の姿を見てびっくりしていた。

「おはよう慶一くん、ってあれ？龍也さん？何時の間に来てたんですか？」

かがみの言葉に龍兄は笑いながら事情を説明すると

「そういう事だったのね。そっか、慶一くん、実家に顔出しに行くのね？」

その言葉に俺も頷いて

「ああ。前々からの親父達との約束でもあったからな。でも日帰りで帰ってくるから大丈夫さ。それまでは俺の代わりに龍兄が居てくれるから何の問題もないよ。」

俺の言葉にかがみは苦笑しながら

「まあ、私は別に構わないけどさ。まつり姉さん、龍也さんの事気に入ってるみたいだもんね・・・大丈夫？龍也さん、姉さんの相手するの結構しんどいかもしれないわよ？」

かがみの言葉に龍兄は苦笑しつつも

「まあ、なるようになるさ。それじゃ朝御飯食ったら早速出発だな。慶一、今日の献立はなんだ？」

そんな龍兄に苦笑しながらも俺は

「あはは・・・とりあえず今日は和食メインで塩鮭に漬物、大根の味噌汁って所だな。」

と、一応説明をすると龍兄は満面の笑みを浮かべて

「おー、いいねえ。まさに俺好みの朝食だ。楽しみだぞ？」

そんな龍兄に俺とかがみは顔を見合わせつつ

「ねえ、慶一くん。龍也さんて和食好きなの？あ、それと味噌汁今回も私に任せて欲しいな。」

「ああ。龍兄は昔から和食派だよ。前にも好評だったし、今回も期待してるぞ？かがみ。」

そう言うとかがみは顔を赤くして照れつつ

「あはは、そう期待されちゃうとプレッシャーかかるけど、とにかくやってみるわ。」

と言うかがみの言葉に俺も頷きで応えるのだった。

程なくして朝食も出来上がり、おれたち3人は食卓を囲んでの朝食となった。

この場にまつりさんがいなかったのは、もう少し寝かせておこうと言う事にしたからだったのだが。

そして今回もかがみの味噌汁は龍兄にも好評だったようで、龍兄に褒められたかがみは顔を赤らめつつ照れていたのだった。

その後、洗い物を済ませた俺は実家へと行く準備を整えてかがみ達に出発の旨を伝えて家を出た。

「それじゃいってきまーす。かがみ、帰ってきたらラノベの約束果たすからさ、ごめんな。」

見送ってくれるかがみにそう言うとかがみは笑いながら

「いいわよ。実家の事だって大事なんだからちゃんと顔見せて安心させてきなさいよ?私はちゃんと待っててあげるから。」

その言葉に俺も頷いて手を振って家を出て駅へと向かった。

そして、時間通りに電車に乗り込んで俺は一路実家を目指すのだった。

電車に揺られる事1時間、ようやく俺は実家の最寄駅へと辿りついた。

一応持ってきた手土産の確認をして、いざ実家へと歩き出そうとした時、俺はふいに後ろから声をかけられたのだった。

「あら?あなたは確か、みゆきのお友達の森村君だったかしら?」

と言う言葉に俺は声の方に振り返ってみるとそこには買い物帰りらしいみゆきの母親、ゆかりさんがにこにことしながら立っていたのだった。

「あ、こんにちは。ご無沙汰しています。ゆかりさん。」

そう声をかけるとゆかりさんはにっこり笑いながら

「そういえばそうよね?以前にみなみちゃんと一緒に一度家に来てくれて以来、家には遊びに来てくれてないわよね?」

軽く首を傾げつつそう言うゆかりさんに俺は苦笑しつつ

「いやあ、俺も埼玉に住んでますしね。親父達への顔見せとかで戻る程度で余りここのとこちらへ来なかったですから。でも、去年のクリスマスには立ち寄らせてもらったんですよ?まあ、ゆかりさんには会えませんでしたけど・・・」

俺の説明にゆかりさんは頬に手を当てながら

「まあ、そうだったの。ねえ、森村君。これから少し時間、あるかしら。折角また会えたんだし、家でお茶でもどう？みゆきも居るし、久しぶりにお話聞きたいわ。」

ゆかりさんのお誘いに俺は少し考えつつ

「そうですね・・・ちょっとこちらの用事済ませていきたいので、その後でも構いませんか？用事済ませたらそちらにお邪魔させていただきますから。」

そう言うとゆかりさんも頷いて

「わかったわ。それじゃ用事を済ませたら家に立ち寄ってね？みゆきと一緒に待ってるから、忘れて帰っちゃいやよ？」

と一応念を押してきたので俺は笑って頷きながら

「分かってますよ。それじゃ後ほど。」

そう言ってゆかりさんに手を振って俺は実家へと足を向ける。

実家に辿り着くと玄関をくぐって俺は声をかける。

「ただいまー！お袋、親父ー、言われたとおり顔見せに帰ってきたぞー！？」

そう叫ぶと奥からにこにこと笑いながらお袋が出迎えてくれて

「あら、慶一、お帰り。お父さんも奥にいるわよ？さあ、あがりな

さい。」

そう促されたので俺は頷いて家に上がり、奥へと向かった。

そして親父を見つけた俺は

「よっ、親父。龍兄に言われた通り顔見せに戻ってきたぞ？」

そう声をかけると親父はギョッとしたような表情で俺を見て

「・・・珍しい事もあるものだな。いつも私の顔を見るなり憎まれ口を叩くお前が。」

そんな親父に俺はそっぽを向きつつ

「俺だってたまにはそういう時もあるさ。それに今回帰れなかったのは俺にも原因あったからな。まあ、その事の反省の意味もあるって思ってくれ。」

そんな俺の言葉に親父はニヤリと笑いつつ

「ふん、聞く所によれば無様に風邪を引いたらしいじゃないか。気合と鍛え方が足りんからそうなるんだ。そのあたりもしっかりと反省するがいい。」

その言葉にカチンと来た俺は

「おい、親父。風邪は不可抗力だ。それに気合とか言うがな、昔それを俺に言って無理させて死なせかけた事忘れてないよな？親父。」

そう指摘してやると親父はその事を思い出したのか急に苦しげに唸ると

「ううむ・・・その事はよく分かってる。私の過ちだったからな。まあいい、とにかく元気そうでよかった。こうして顔を見せられるのならこちらも安心できる。」

俺の言った事に対して素直に自分の過ちを認める親父に俺は少しだけ拍子抜けしつつも一応は俺の事も気遣ってくれている事に絶対に表には出さないが、心の中で礼を言う俺だった。

しばらくはお袋や親父と談笑していた俺だったがそろそろ頃合の時間になったので俺は高良家へと向かう為に家を出る準備をしていた。

「慶一、そろそろ行くのね?また顔見せにいらっしゃい。」

俺はその言葉に頷きながら

「分かってるよ。また長い休みの前とかに戻ってくるようにするから。お袋も元気でな。」

そう返事をするとお袋はにっこりと笑って頷いてくれたのだった。

玄関で靴を履いているとき親父が俺の側にやってきて

「慶一、お前に尋ねたい事があるのだが、最近お前の周りでは変わった事は起きていないか?」

何時になく真剣な表情の親父に俺は

「変わった事？例えばどんな事だ？」

そう聞き返すと親父は言葉を濁すように

「いや・・・近頃結構物騒になっているからな。犯罪も多発してきている事だし、少し気になったのでな。」

そう言う親父に俺は何となく何か隠しているようなそんな雰囲気を感じ取ったが、それでも心配は本当にしてくれてるのも見て取れたので

「まあ、確かにそういうの増えて来てる感じだけど、大丈夫だ。ここの所も平和そのものだよ。」

そう伝えると少し緊張気味の表情を緩めながら

「そうか、それならばいい。」

短くそう言って踵を返して立ち去ろうとした親父に俺は

「でも、珍しいな。親父がそんな事気にするなんてさ。」

何となく気になった事を口にすると親父は

「ふん！お前の事は特に気にはしとらん。むしろ、お前の周りのあの子らの事が少し心配なだけだ。」

そう言う親父に俺はニヤニヤとしつつ

「ふーん？何だかんだ言ってても親父のあいつらの事気にするんじ

ゃやっぱりそっちの気があるって事か？いいのか？お袋に愛想尽かされてもさ。」

その言葉に親父は大慌てで

「な、何を言ってる！あの子らに何かあった時にお前が・・・いや、なんでもない・・・」

その親父の台詞を聞いて俺は親父の真意を知った気がした。

俺は親父を馬鹿にした事を反省しつつ親父の顔を見ないように後ろを向いて

「悪かった・・・親父。それと、ありがとう・・・」

そう言うと親父も少しだけ優しげな声で

「・・・ふん・・・かまわんさ・・・それに、これこそが私とお前だろう？だから、いつもどおりで構わん・・・」

結局俺も親父も同じように素直になれないのだと改めて思いつつ

「ま、それもそうだな・・・親父」

俺がそう呼ぶと親父は「何だ？」と俺に返事を返す。

「俺は何時までもあんたの息子だ。だから親父も何時までも俺の親父であってくれ。その俺の気持ちを此処において行く。また憎まれ口叩くとは思うが・・・これからもまた何かあれば戻ってくる。だから、元気で居ろよ？それじゃな、親父。」

そう言って家を出ようとする俺に親父は

「慶一、お前は私の息子だ。そしてここはお前の家だ。覚えておけ、お前の帰る場所はここにもあるという事をな。まあ、達者でやれ、それだけだ。」

俺にそう言い残して奥へと戻って行く親父の背中を俺は改めて目に焼き付けて道場を後にしたのだった。

少しだけ心の中を暖かくしつつ、俺は先ほどの約束の通り、高良家を目指して歩き出した。

程なくして高良家に着いた俺は、インターホンを鳴らす。

しばらく待っていると、インターホンからゆかりさんの声が聞こえてきた。

『はーい。どなたー？』

と言うゆかりさんに俺はインターホン越しに

「森村です。約束どおりお邪魔しにきました。」

と言うと、ゆかりさんは

『あ、森村君。今玄関を開けるわ。そこまで来てくれるかしら？』

そう言ったので俺も

「わかりました、それじゃそっちに移動しますね。」

そう伝えた後玄関口へと移動すると、玄関を開けて俺を手招きするゆかりさんの姿が見えたので、俺はゆかりさんのいるほうへと向かう。

「いらっしゃーい。森村君。さあ、あがってあがって?」

と言って俺を促すゆかりさんに従い、俺は家へとお邪魔する事になったのだった。

「こちらにお邪魔するのは2度目ですが、改めてお邪魔します。」

そう言って上がって俺はゆかりさんに連れられてリビングへと行くのだった。

「今お茶用意するから、そこに座っててね?」

そう言ってお茶を入れに行こうとするゆかりさんに俺は

「あの、みゆきの姿が見えないみたいですが、今日はどこかへ出かけてるんですか?」

と聞くと、ゆかりさんは微笑みながら

「みゆきは今自分の部屋で勉強してると思うわ。ついでに呼んでくるつもりだったのよねー。」

と言うゆかりさんの事場に俺も納得して

「そういう事でしたか。わざわざ引き止めてしまってすいませんでした。」

そう言うとゆかりさんは手を振りながら

「いいのよー。そのまま森村君はゆっくりしててね？」

と言ってキッチンへ姿を消すゆかりさんを見送って俺はお言葉に甘えさせてもらい、しばらくのんびりとしていたが、少し待っているとみゆきがリビングに顔を出してきて

「慶一さん、いらっしゃい。お母さんから聞いて驚きました。まさかこちらにいらしてるなんて思っていませんでしたから。ところで慶一さん、いつこちらにお帰りになったんですか？」

そう聞いてくるみゆきに俺は

「俺も今朝方龍兄から親父が正月帰っていないのだから顔をだせ、という伝言を預かってきたと聞いたんだよ。それで急遽、って訳さ。で、駅に着いたらゆかりさんと会った訳だ。」

そう言った後、俺はみゆきを見て

「ゆかりさんに誘われた事もそうだけどさ、お前ともクリスマスの時に約束したからな。今回のお誘いは丁度いい、って思ってな。お邪魔させてもらったんだ。」

俺の言葉にみゆきも納得して、嬉しそうに微笑みながら

「そうですか・・・あの時の約束、覚えていて下さったのですね？

ありがとうございます、慶一さん。」

そのお礼の言葉に俺も照れつつ

「ま、まあ、俺の方からした約束だったからな。言った以上は実行しなきゃ、お前にも悪いからな。」

と言う俺の言葉にますます嬉しそうにしているみゆきだった。

そうやってみゆきと談笑してるとお茶を入れ終わったゆかりさんがティーセットを持ってリビングに戻って来て俺達の前に紅茶を並べてくれた。

そして、お茶受けにクッキーをつまみつつ、俺達3人は談笑を始めたのだった。

「さあ、召し上がれ。」

「どうもありがとうございます。それじゃいただきますね。」

「私もいただきます。お母さん。」

「どうぞどうぞー。それじゃお話聞かせてもらいましょうか。」

「話と言ってもどこから話せばいいですかね?」

「そうねえ・・・クリスマスの後からの事が聞きたいわね。」

「そういう事でしたら・・・・・・という事がありましてそれで・・・・・って事がありましてね。」

「そう言えば慶一さんは・・・・・・でしたよね?あれは私もとてもお似合いだったと・・・・・・そういう事もありましたね。」

「ふーん?中々楽しく過ごして来たのね。ねえ、みゆき?あの事はどうなの?」

「あの事?どの事でしょうか?」

「うふふ。みゆきが森村君とキスした事よ?」

いきなりのゆかりさんの爆弾発言に俺とみゆきは

「「ぶーーーーっ!!」」

と思い切り紅茶を噴出してむせ返っていた

「ゲホ!ゴホ!ゴホン!!」

「こほっ!けほ!」

その様子を見てゆかりさんは細い目をさらに細くしながら

「あらあらー?どうしたのかしら?2人とも慌てて」

と自分が爆弾発言した事に自覚なしという顔で聞いてくると俺達は顔を真っ赤にしながら

「ゆ、ゆかりさん、どうしてその事知ってるんですか・・・」

「お、お母さん、その話は・・・」

そう訊ねるとゆかりさんはしれっと

「え?この事はみゆきから聞いたのよ?まあ、人工呼吸だったって事だけど、でもそれをしたって事は、やったって事よね?」

その言葉にみゆきは更に顔を赤くして慌てながら

「し、仕方なかったんです!慶一さんの呼吸が止まってしまっていたんですから!医者を目指す者としてはほおって置けない状況だったんですよ!」

俺もみゆきの言葉に続いて

「そ、そうですよ！立派に医療行為です。ゆかりさんが思っているようなそんな事ではなくてですね！」

その言葉にゆかりさんは軽く笑いながら

「うふふ。若いっていいわねえ・・・」

と言うゆかりさんの言葉に結局俺達は終始真っ赤になって慌てていたのだった。

そんな疲れるお茶会を終えて俺はみゆきに見送られて高良家を後にする。

「慶一さん、すみません。母が変な事口走って・・・」

さっきの事を思い出していたのかみゆきはまたも頬を赤く染めながら俺に言う。

「い、いや、気にしてないから。それに・・・」

言葉を一度切り、みゆきの顔を見ながら

「命を救ってもらったのは事実だからな。俺思い出したんだけど、あの一件が起きて混乱しまくっていて結局お前にその事に対するまともなお礼すらしてなかった事に気付いたよ。改めて、ありがとうな、みゆき。」

俺の言葉に顔を更に赤くしながら

「い、いえ、私も必死でしたから・・・でも、本当に・・・助かってよかったです・・・」

少しだけあの時の怖さを思い出したらしいみゆきは、心持ち元気をなくしながらそう言うのだった。

「お前には、大きな借りができちゃったな。」

俺がそう言うとみゆきは慌てて手をぶんぶんと振って

「そんな事ないですよ！それ以前に慶一さんから色々お借りしました。今回の事でも私自身はまだ慶一さんから受けた借りを返しきれたとは思っていません。まだ、私は・・・」

そんなみゆきの頭をぽんと軽く叩いて

「いや、それを帳消しにできるほどの大きな借りさ、今回のはな。だから、また何かさせてくれ。その借りを返すためにさ。」

みゆきに微笑みながらそう言う俺に

「ありがとうございます・・・慶一さん。」

にっこりと笑いながらそう言うみゆきに俺も笑顔で応えたのだった。

そして、みゆきに手を振りながら俺は高良家を後にして家へと向かう。

道中に今日の事を思い出しながら、改めて俺は幸せな人間なのだと思ったのだった。

家に帰り着いた俺は玄関を開けて中に入り「ただいまー」と声をかけると奥から俺の声に気付いたかがみが出てきて俺を出迎えてくれた。

「お帰りなさい、慶一くん。どう?今回は親孝行してこれた?」

そう声をかけてくるかがみに俺は苦笑しながら

「かがみ、お前それが限りなく難しい事を知っていてそう言ってるだろ?」

そう突っ込むとかがみは舌をだして

「あはは。ばれてたか。まあ、とりあえずお疲れ様、かしらね。」

その言葉に俺も頷きつつ

「ありがとう、かがみ。そっちは何かあったか?」

家に上がりながらそう訊ねるとかがみは苦笑しながら

「私は問題なかったけど、姉さんがね・・・」

その言葉に俺は思わず「何かあったのか?」と訊ねると

「実はね、姉さんが龍也さんとデートしたいと言い出してさ。龍也さんに散々迫ってたのよ。最初のうちこそかわしていた龍也さんだ

ったけどそのうちに姉さんに押し切られちゃってね、すぐさまデートにでかけちゃったの。私は仕方ないから留守番していたのよ。まだ帰ってきてないしね・・・」

その言葉に俺も大きなため息をついて

「はあ・・・まつりさんらしいな。そっか、かがみ、1人きりでつまらなかったろ？朝にした約束もあるし、早速実行するか。かがみ、俺の部屋にラノベ持ってきてくれ。」

そう俺が言うと、1人きり、と言う部分に反応して赤くなりつつ

「べ、別に寂しかったわけじゃないわよ！うるさいのが出て行ってくれたからせいせいしてたんだからね！？で、でもあんたの約束に付き合うわよ・・・ラノベ準備して部屋に行くから。」

その素直じゃない物言いに苦笑しつつも

「はは。わかった。着替えも済ませちゃうから一応部屋はいる前にノックしてくれ。それじゃ後でな。」

そう言って俺は2階の自分の部屋に上がっていく。

かがみは俺を見送りつつ

「うん。それじゃ準備したら部屋いくわ。後でね？慶一くん。」

そう言って自分の部屋へラノベを取りにいくかがみだった。

自分の部屋で着替えつつ、何気に窓の外に目をやると、なにやら見

知った顔が家の近くにいるのが見て取れた。

（ん？あの人は確かうちの道場の弟子の1人だったはずだよな？何でこんな所にいるんだ？）

心の中で不思議に思っていると、弟子は家を一目見てからその場を立ち去ったのを俺はなんともなしに見送っていたのだった。

考えてもしかたないか、と思いつつ俺はラノベを準備して部屋でかがみが来るのを待っていた。

しばらくすると、部屋をノックする音が聞こえてきたので俺はドアに向かって「どうぞー？」と声をかけるとドアを開けてかがみが部屋に入ってきた。

「お待たせ、慶一くん。はいこれ、新作と前に買ったやつよ。慶一くんの方はどれなの？」

かがみからお勧めを受け取り、俺は自分の持ってるかがみがまだ読んでないやつを手渡して

「俺からはこれだな。それじゃ早速読むとするか。」

俺の言葉にかがみも頷きで応えて2人してラノベを読み始めるのだった。

しばらく読んでいると、かなり本の世界に入り込んでいたようで、気付いたらかがみが俺の隣に座っていたのだった。

俺はそんなかがみに少しドキリとしつつ、極力意識しないように意

識を本に向けようとしたのだが、ふいにかがみが

「・・・ねえ、慶一くん。あんたさ、始業式の日にこなたと秋葉行ったのよね？で、その時にこなたと・・・その・・・キス・・・したんだって、聞いたわ・・・」

そう言って来たので俺は慌てながら

「な、何でかがみがその事を？まさか・・・」

俺の予想の的中を裏付けるようにかがみはゆっくりと頷いて

「うん、こなたから聞いた・・・。」

そう短く言った後押し黙るかがみに俺は

「そっか・・・でも、今回の事も事故だったんだよ。あいつが階段を踏み外して落ちてきた。それを俺が助けようとしたが、タイミングが合わなかった、で、気がついたら・・・って事さ。」

軽いため息をつきながらそう説明するとかがみは心持ちほっとしているようにも見えた。

「クリスマスパーティの時もそうだけどさ、全部・・・事故・・・なのよね？それって気持の入らないキス、だよね？」

かがみの言葉にどう応えればいいか困惑していたのだが

「まあ、かがみの言うとおりだな。全部事故、お互いに気持のあるキスではなかったな。」

そう応えるとかがみは再び押し黙り、俺もどう言葉を発すればいいのか迷っている、と言う状態がしばらく続いたが、その雰囲気に耐え切れなくなってきた俺が言葉を発しようと口を開きかけた時かがみが急に立ち上がって

「あはは、ごめん。何か変な空気になっちゃったね。私何か飲み物取って来るわ。ついでに慶一くんのも取ってくるからここで待ってて？」

なんとも複雑な表情で笑いながらかがみはそう言うと、部屋を出て行こうとする。

俺もかがみに何か声をかけようとかがみを見上げるように顔を上に向けた瞬間、突然部屋のドアが開き、上機嫌のまつりさんと疲れたような表情の龍兄が一緒に帰ってきて俺達に声をかけるのだった。

「やっほー、森村君、かがみー、今帰ったよー！」

「慶一、お帰り・・・」

そう声をかける2人、そして、その声に驚いて慌てたかがみは足元に置いてあったラノベに足を取られてバランスを崩して俺の方に倒れこんできた。

「ちょ！慶一くん、あぶな・・・」

俺も慌てながらかがみを受け止めようとして

「か、かがみ！ってうわっ！」

かがみを受け止めながら倒れ込むと次の瞬間

「かがみ、森村君、大丈夫!?って、ああーー!!」

「慶一、かがみちゃん、無事か?って、うわ・・・」

2人が俺達を見てそう声をあげる。

そして、俺とかがみは自分達の状況を把握して2人して顔を真っ赤に染めるのだった。

俺とかがみは・・・キスをしてしまった事を互いに認識したのだった。

大慌てで離れる俺達。

「あ、ううん、その、大丈夫か?かがみ。」

顔を真っ赤にしながらかがみにそう声をかけるとかがみも同じように真っ赤になって慌てながら

「う、うん・・・だ、大丈夫、怪我はないわ・・・えと・・・その・・・の、飲み物取ってくる!!」

そう言って猛ダッシュで部屋から飛び出していくかがみを俺達3人は呆然と見送っていた。

その後、その事を思い切り2人にからかわれて、俺達2人はその日は寝るまで顔を真っ赤にしていたのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんとこなたの事が少し気になっていた事もあったのだけど、私はラノベを2人で読んでいるあの時間に、慶一くんにどうしても確かめておきたい事があったので、思い切って聞いてみた。

それは、いずれのキスも慶一くんの望みでしたのではないのかどうかという事だった。

その事を訊ね、納得の行く答えを貰って安心した私は気分を変えようと慶一くんに飲み物を取ってくると言い出して部屋を後にしようとしていた。

しかしそこに、デートから戻ってきたまつり姉さんと龍也さんが現れて、いきなり声をかけられた私は自分の持ってきた本に足を取られてバランスを崩し、慶一くんの方へ倒れ込む事となった。

そして、私も・・・慶一君と事故によるキスをしてしまったのだった。

その後、2人に、ずっとその事でからかわれてほとほと疲れ果てた私今布団に入って今日の事を思い出していた。

（クリスマスパーティでの事故の事から今回のこなたの事もちょっと気になっていたのよね・・・慶一くん、どんな気持でいたのだろうって・・・今日その事を思い切って聞いたけど、やっぱり事故は事故だったって事みたいで少し安心したな・・・でも・・・私・・・慶一くんと・・・しちゃった・・・キス・・・うわーうわーうわーー！！）

最後の方はもう混乱しまくりで考えもどこかへ吹っ飛んでしまって

いたのだった。

結局その事に終始思い出しては顔を真っ赤にしていた私はその日まともに寝ることが出来なかったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

急遽実家へ向かう事となり、親父の真意を知り、そして、みゆきとの約束も果たして俺は疲れる会話もあったことを思い返し、少しだけ参っていた。

そんな状況で家に戻って俺はかがみとの約束も果たす為にかがみを部屋に呼んだ。

そして、一緒にラノベを読んでいたのだが、そこでふいにかがみが振ってきた話で微妙な空気になり、その空気を変えようとかがみが動いたが、そこに偶然まつりさんと龍兄が帰ってきてそれに驚いたかがみが本に足をとられて俺の方に倒れ込みそして・・・・・事故とはいえ、今度はかがみとのキスをしてしまったのだった。

結局その日は龍兄とまつりさんに終日からかわれ続けて俺はくたくたの状態で布団に入ったのだった。

（今日は色々な事ありすぎだ・・急に龍兄はくるわ、実家に帰らなきゃならないわ、ゆかりさんに出会うわ、高良家で疲れる話されるわ、家に帰ったら今度はかがみと・・・・・ここの所事故ばっかしだよな・・・これもやっぱり凶の効果なのか?でも・・・悪い事、って訳じゃないから複雑だな・・・あー・・・明日まともにかがみの顔見れるかなあ・・・）

そう考えながら眠れぬ夜を過ごす事になった俺だった。

2人を預かるのも後1日、俺はこのまま何事もなく過ぎて欲しいと願うが、その願いも空しいかもしれないな、と思う俺だった。

慌しき旋律～慶一の疲れる1日模様～（後書き）

次の話を終えて、小説時間内ではバレンタインの話を書く予定ですので次回もお楽しみに。

見破られる旋律～秘密のばれた2人～（前書き）

総アクセス数６０万突破しました。これも一重に皆様方のご支援のおかげだと思っています。
これからも変わる日常をどうぞよろしく。
では、本編をどうぞ。

見破られる旋律～秘密のばれた2人～

龍兄の訪れ、そして、実家からの呼び出し、ゆかりさんと久々に再会し、クリスマスの時のみゆきとの約束を果たす為に俺は高良家を訪れた。

そしてその後家に帰り、かがみとのやりとりがあったのだがその際に俺はまたしても事故によるキスをかがみとする事になった。

俺はその晩はほとんど寝付けないままにかがみとまつりさんを預かる最後の日の朝を迎えたのだった。

寝不足の目をこすりながら俺はとりあえずベットからでると、朝食の準備をするために着替え始める。

着替えを済ませてキッチンへ向かうとそこには俺よりも早く起きて味噌汁を作っているかがみがいたのだった。

俺はどうすべきか悩んだのだが、とりあえずかがみに朝の挨拶をしないと、と思い、声をかけるのだった。

「お、おはよう、かがみ。えと・・・きょ、今日は早いんだな。まさか俺より先に起きているとは思わなかったよ・・・」

と声をかけると、味噌汁を作りながら俺に背を向けていたかがみが見た目でもわかるほどに”びくん”と震え、おそるおそるこっちを振り向いた。

「あ・・・えと・・・その・・・おはよう・・・なんかその・・・

よく眠れなくて気付いたら朝だったからさ・・あはは・・・」

顔を赤くしつつ俺にそう言うかがみに俺もなるべく意識しないようにと頑張っていたのだが、かがみの赤い顔を見たら俺もまた顔を赤くしつつ

「あー・・・まあ、俺もそんな感じだ・・・えーと、だな・・・と、とりあえずメインのおかず作りは俺がやるからさ、かがみは漬物とかの用意頼むよ。今朝は浅漬けでいいだろうからな・・・」

極力朝御飯の支度に集中し、この顔の熱を取ろうとしてかがみにも指示を出す俺。

かがみはそれに頷きつつ

「わ、わかったわ。それじゃ、お皿とかも用意するね？慶一くん、お漬物は冷蔵庫かな？」

そう聞いてくるかがみに俺は

「あ、ああ。昨日のうちに用意した奴が冷やしてあると思うからよろしく頼む。」

そう言いながら今朝はだし撒き卵を作りつつ、漬物のある場所をかがみに伝えると、出来上がっただし撒き卵を皿に盛り付けてテーブルへと運んで行く。

そして、その入れ替わりでかがみが味噌汁の鍋を取りに、コンロへと向かった。

「ふあーあ・・・おはよう慶一。今日も美味そうだな。」

眠そうな目をこすりつつ、龍兄がキッチンにやってきたので俺も

「おはよう、龍兄。丁度支度できたところだ。さあ、食べちゃうか。」

という俺の言葉の後にキッチンの入り口から

「ふあー・・・おはよう、龍也さん、森村君、かがみ。何だか私も今日は早めに目が覚めたよ・・・」

といいながらラフな格好のまつりさんがやってきてテーブルについた。

「おはようございます、まつり姉さん。いいタイミングですよ。丁度朝御飯出来たところです。」

俺の言葉にテーブルに並んだ朝食を見ながらまつりさんは満面の笑みで

「おー！これは美味しそうだねー。森村君、料理もできるんじゃ中々頼りになるよね。」

というまつりさんに俺も後頭部をかきつつ照れていた。

そうしていると、味噌汁の鍋を持ってやってきたかがみが

「はいはい、味噌汁の鍋ここ置くわよ?好きな量盛って飲んでね?それじゃ私も席につこうっと。」

鍋をテーブルの中央に置きつつ席に着いて御飯を盛り始めるかがみを見つつ、俺達もそれぞれに御飯を盛って、「「「「いただきまーす」」」」と言う声と共に朝御飯が始まった。

今回もかがみの味噌汁は好評だったので、かがみは味噌汁に関しては何の問題もなさそうだ、と納得する俺がいた。

朝食を済ませた俺達はそれぞれに思い思いに過ごす事になったのだが、連休中の宿題があった為、俺とかがみはその宿題を片付ける為にリビングにて一緒にやる事となった。

ちなみにまつりさんと龍兄はまたしてもまつりさんに押し切られてデートへと出かける事となった。

いつか本当にまつりさんに押し切られるままに結婚までいっちゃったりしないだろうな?と心の中で思いつつ、龍兄が無事に戻れる事を祈って宿題を始めた。

始めたのだが・・・・・・

「うーん・・・これは・・・どうやったっけな・・・」

「えーっと・・・この公式は・・・あれ?」

「ここの意味は・・・っと・・・辞書、辞書」

「ええと・・・ここの所はこうで・・・」

何気に2人きりになり、俺とかがみはお互いに集中できない状態が続いていた。

慶一ｓｉｄｅ

かがみと2人きりの状況、そして今だに昨日の事を引きずっている俺。

その状況が、かがみを意識するまいと思うほどに逆に作用している状況に俺はどうしたらいいだろう?という思考を巡らせまくっていた。

その所為もあり勉強に集中しきれず、俺は簡単なミスを繰り返していた。

(うう・・・気まずい・・・くそ、この空気、そしてこの状況、どうにかならないかな・・・かがみとまともに顔合わせられないぞ・・・あー・・・・・・。)

と心の中で頭を抱える俺だった。

かがみｓｉｄｅ

思いがけず今日はまつり姉さんや龍也さんが居てくれるから慶一くんの事意識しなくて済みそうかな?と思っていたのだけど、結局姉さんは龍也さんをデートに引っ張っていてしまい、再び慶一くんと2人きりの状況を余儀なくされてしまった。

その所為で私は2人きりの状況で慶一くんを意識してしまい、まともに宿題が出来ない状況になってしまっていた。

時折慶一くんの方を見てみると、彼もなんだかやりにくそうにしているのが見て取れた。

そんな感じで私もケアレスミスを繰り返す結果となってしまっていたのだった。

（ううう・・・どうしてこんな事になったんだろう・・・事故とはいえあんな事になって、それを意識しないように頑張っているけど、どうしてもだめね・・・いっその事嫌だったら、こんな風に意識しなくてもいいんだろうけど・・・嫌じゃ・・・なかったもんね・・・って何考えてるのよ！私はっ！！・・・あああ、誰かこの空気、何とかして・・・）

私は無駄かもしれないと思いつつ、この空気を変えてくれる何かきっかけがないだろうかと思いながら心の中で考えていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

俺はかがみを見ながら、かがみも同じように悩んでるっぽいな・・・と思いつつ、この状況を如何にするかと頭を悩ませていたが、その時玄関の呼び鈴が鳴る音が聞こえて俺とかがみは２人して”ビクッ”となって驚きつつ
俺はかがみに

「びっくりした・・・どうやらお客さんみたいだな、俺ちょっと行って来るよ。かがみはそのまま宿題続けていてくれ。」

そう言ってかがみの前から逃げる口実を作ると俺は部屋を出て行こうとする。

その俺にかがみが遠慮がちに

「う、うん。私は勉強続けてるから行って来て？」

そう言ってくれたので俺は部屋をでると部屋の外で大きく深呼吸して赤くなってるであろう顔を鎮めると、早速玄関にお客を迎えに行くのだった。

玄関に着いた俺はお客を出迎える為に声をかけつつドアを開く。

「はーい、どちら様ですか？」

声をかけながらドアを開けるとそこには、こなたとみさおの2人が立っていたのだった。

「や、やふー、慶一君。突然やってきてごめんね？実はさ・・・」
「慶一ー、頼むよー！宿題写させてくれってヴァ！あやのはデートでいないし、柊も家いったらいないしもうお前しか頼れる奴いねえんだよー！」

なんか以前にも聞いたことのあるような台詞を耳にして俺は呆れつつ

「なあ、2人とも。お前ら去年の夏休みの時もそんな事言ってたよな？ったく、懲りてないなあ・・・」

じろりと2人を睨みつけつつそう言うと2人は縮こまりながら

「あ、あはは・・・わかっちゃいるんだけど、ついね。お願い慶一君、助けてー。」
「慶一、頼むー！」

必死に頼み込んでくる2人を見て俺は軽いため息を一つつきつつも今の俺の状況を緩和するには2人にもいてもらったほうがいいだろ

うと思い、俺はその申し出を了解する事にしたのだった。

「はあ・・・。わかったよ。面倒見てやるからとりあえず上がれ。」

そう言うと2人とも物凄く喜んで

「ほんと!?ありがとー、慶一君。」

「マジでか!?助かるゼ、慶一ー。」

そう言いながら上がってくる二人に

「とりあえずリビングへ行っててくれ、俺は飲み物用意してから向かうから。」

かがみのいる部屋へ行って貰うように指示した後、俺は飲み物を用意しにキッチンへと向かったのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんが突然の来訪客の対応に行っている間、私は何度か深呼吸をして気持を落ち着かせていた。

少しすると、リビングに人が来る気配を感じて私は様子を伺っていると、そこに現れたのはこなたと日下部だった。

「こ、こなた?それに日下部、あんたたちだったの?お客って。」

そう声をかけると2人とも私に気付いて

「あ、かがみ、家にいないと思ったらここにいたんだ?でもどうし

て慶一君の家にいるの？」
「そういやそうだよな？なんでなんだ？」
という2人に私は事情を説明すると2人は
「ふーん？結局あぶれちゃうあたり、かがみもくじ運はあまりよくないみたいだねえ？」
そう言いながらニヤニヤと嫌な笑いを向けるこなた。
「柊はそんなに運が悪いようには見えねえけどなー。あれ？なら、この家にはまつりさんもいる筈だよな？まつりさんは部屋でのんびりしてるんか？」
そう聞いてくる日下部に私は複雑な表情で
「あー・・・実は姉さんは今ね・・・」
と事情を説明すると2人とも瞳を輝かせて
「おおー！？まさかまつりさん、龍也さん狙うつもりなのかな？うーん、これは先が楽しみだねー。」
「まつりさんもついに春が来るのか！？意外と龍也さんとお似合いな気がするよなー。」
という2人に私は苦笑しながら
「そう言うけど、いのり姉さんも龍也さん狙ってるし、そう簡単にはいかないんじゃない？それに龍也さんの気持もあるだろうしさ。」

その言葉にさらに瞳を輝かせる2人は

「おおー!?じゃあ、じゃあ、まつりさんといのりさん、龍也さんの三角関係勃発!?うーん、これは面白そうだねー。」

「修羅場か?修羅場見れるんか?泥沼化するのかー?すげーな、三角関係。」

という2人に私は呆れたように「あんたらは・・・」と突っ込みを入れつつ改めて2人がここに来た理由を聞いてみることにした。

「それはいいけど、結局あんたらは何の為にここに来たの?」

そう質問すると2人は”ビクッ”と震えつつ物凄くばつの悪そうな顔になって

「いや、そのー・・・実はね?ええっと・・・」

「あー、まあ、なんだな、そのー・・・」

そんな風に言いよどんでいる2人にハテナマークを飛ばしつつ答えを待っていると、そこに飲み物を持ってやってきた慶一くんが

「かがみ、2人は宿題を写させて欲しいという事らしいぞ?」

慶一くんの言葉を聞いて私は

「あんたら・・・またぎりぎりまで遊んでたわね?だめじゃない!その位の事きっちりやらなきゃ!まったく、毎回毎回呆れるわよ!」

という私の言葉に2人とも縮こまってしまっていた。

「とはいえ・・・まあ、今回は大目に見てあげるわ。やるならさっさと用意しなさいよ。」

私は2人にそう言うと2人は驚いたような表情で私を見て

「・・・かがみ、何か企んでる？」

「柊があっさり折れるなんて珍しいぞ？」

という2人に私は慌てながら

「う、うるさいわね！変な勘ぐりするんじゃないわよ！そんな風に言うなら宿題見せないわよ？」

と言う私の言葉に慌てた2人は私に謝り倒しながら

「ご、ごめん。このとおりだから宿題見せてください。」

「ひ、柊、悪かったってヴァ。だから機嫌直してくれよな？」

私は何となく納得行かない感じだったのだが、これ以上はやぶへびになりそうだと思ったので

「分かればいいわよ。ほらちゃっちゃと座って準備する！」

そう言うと2人は慌てて宿題の準備をするのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなた達を迎え入れ、飲み物を用意してリビングに戻ってみると、いつもの調子でかがみをからかう2人とそんな2人に突っ込みをいれてるかがみのやり取りがあったのだが、俺はそれを苦笑しつつ見

守っていた。

そして、ようやく宿題をする準備が整ったので、俺達はこなた達の側について宿題をやる事となった。

何にしても全部見せるのはこなた達の為にもならないだろう、と思ったのである程度は見せつつ、ある程度は教えつつで宿題をやろうという事にした。

そして、かがみの横にこなた、その隣にみさお、そして俺が陣取る形になり、早速宿題を始めるのだった。

「さて、とりあえず、写す部分は先に写しちゃえよ。その後は俺がやり方教えるからそのとおりに解いて行く事、わかったな？みさお。」

その言葉にみさおは少しいやそうな顔をしつつも頷いて

「うー・・・分かったってヴァ。それじゃ写す部分見せてくれー。」

と言ってきたので俺は頷いて写させる部分を開いてやる。

それを確認したみさおはさっそく宿題の写しを始めるのだった。

その間の俺は少しだけ手持ち無沙汰だったのでこなたの様子も見にいった。

こなたもまた、早速写し始めていたのを見て俺はこなたの進行具合を確認する。

「こなた、丸写ししつつも少し考えてやってみろ。そうすればただ丸写しよりは少しは覚えられると思うから。」

そうアドバイスするとこなたも頷きながら

「わかったよー。やれるだけやってみるよ。」

と言うこなたに頷いて俺は再びみさおの方へ戻る。

そういう事を1時間程やって、その後は残りの分を問題を考えさせつつ、解かせて勉強させた。

そしてさらに2時間が過ぎ、俺達の宿題はようやく片付ける事が出来たのだった。

「っはー！終わったー・・・ありがとう、慶一君、かがみ。おかげで宿題御終わらせれたよ。」

そう言いながら大きく伸びをするこなた。

「はー・・・頭使ったのはきつかったゼ。でも2人ともサンキューなー。」

肩こりをほぐすように肩を回しつつそう言うみさお。

「お疲れさん。今回は見てやれたけど、いつもこうだとは思うなよ？お前らが本当に覚える気にならなきゃ身にはつかないんだからな。」

2人に軽いため息をつきながらそう忠告する俺。

「わかってるよー。ともあれ、時間に余裕もできたし、遊ぼうよ。いいもの持ってきてるんだー。」

俺の忠告を軽く流しつつこなたは持ってきた荷物からゲームソフトを数本取り出した。

「まったく、そう言う準備だけはぬかりないわね、あんたは。」

かがみも少し呆れ気味でそう言うとそれを見ていたみさおも

「お?ちびっ子、何やるんだ?面白そうなら私にもやらせてくれよー。」

と言いながらこなたの所へ行くみさおを見ながらかがみはもう一度大きなため息をついて

「はあ・・・それにしても、こなたと日下部ってどこか似てるわよね・・・片やゲーム好きなインドア派で、片やスポーツ好きなアウトドア派、共通してる所なんて一見してもなさそうに見えるのにね・・・」

かがみの言葉に頷いて俺は

「そうだな。けど、勉強苦手な所や手がかかる所はそっくりだな、と思うよ。」

俺の言葉にかがみはクスッと笑って

「そっか、そういう所が似てるのね、あの2人って。」

そう言いながら俺に笑いかけるかがみに俺も笑い返しつつ

「でも、2人ともいい奴だよな。俺はそう思う。」

その言葉にかがみも頷いて

「そうね。それはわかるわ。特に日下部との付き合いは長いからね。でも、こなただって負けないくらい、いい子だと思うわ。まあ、私をからかったりするのさえなければね。」

最後の言葉に自分で苦笑するかがみ。

そんな俺達の言葉に気付かないこなた達は俺達がもたついてると思ったらしく、俺達に声をかけてきた。

「慶一君、かがみー。何やってるのさ。はやくはやくー。」

こなたがそう言うとみさおも

「そうだぞー？早くこねえと仲間に入れてやんないぞー？」

と言う2人に俺達は顔を見合わせて苦笑しつつ2人のところへ行くのだった。

「お待たせだ。こなた。まず何をやるんだ？」

そう訊ねるとこなたは親指をびしっと立てながら

「まずは格ゲー大会から行こうかー。慶一君のリベンジも受け付け

るよー？」

と言うこなたの挑発に俺はあえて乗ってやろうと思い

「望む所だ。けど、みさおたちにも順番回してやれよ？」

そう言うとこなたはニヤニヤと笑いながら

「慶一君が熱くならなければ順番回ると思うよー？」

と突っ込まれて俺はこなたとゲーセンで遊んだ時の事を思い出して

「う・・・気をつけるようにするよ・・・みさお、かがみ、俺が熱くなりそうになったら止めてくれ。」

俺の言葉にかがみとみさおは呆れたような顔で

「わかったわよ。私とのぷよぷよ対決でも熱くなってたもんね。まあ、頃合見て止めてあげるわよ。」

「そうしねえと私らに順番回らないんじゃつまんないもんなー。」

2人の言葉に頷きつつ格ゲー大会がスタートした。

それでも、数回やっていると熱くなり始めていたのだが、それを感じたかがみ達に止められてなんとか暴走だけはしないで済んだ。

みさおやかがみもこなたに挑むが、やはりやり込みの差は大きく、結局こなたの1人勝ちとなった。

「あーもう、やっぱりこなたには格ゲーでは勝てないわ・・・」

「ちびっ子つえええなー。手も足もでなかった。」

その言葉にこなたは得意げに

「ふっふっふ。3人ともまだまだ修行が足りないね。さあ、次は何で勝負するの？」

そのこなたの挑発に乗り、俺たちはぷよぷよ勝負、クイズゲー勝負、ボードゲー勝負などをやったのだった。

そして、こなたとみさおの勝負の最中、俺とかがみがその様子を観戦していた時の事、飲み物などが切れたので俺はその補充をするべくキッチンへ行こうとかがみにその事を伝えて立ち上がったのだが、そこにモモとミィの2匹がやってきて俺の足にまとわり着いた。

「お？モモ、ミィ、どうした？ってあぶ！」

その瞬間俺は猫を踏み潰さないように足を動かしたのだが、その所為で体制を崩してかがみの方へ倒れ込む形になった。

「うわ、かがみ。危ない！」

その俺の声に気付いたかがみは俺の方を見て

「わ！ちょっ慶一くん！」

そう言うと同時にもんどりうって転び、かがみの膝の上に倒れ込む事となった。

「あ、あいたたた・・・大丈夫か？かがみ。」

すぐさま身を起こしてかがみに確認を取るとかがみも尻餅をついたようでお尻をさすりつつ

「うう・・・いたた・・・もう！慶一くん、気をつけてよ！まったく・・・。」

そう言うかがみに俺は謝りつつも手を出して

「ごめんごめん。ほら立てるか？」

そう言って手を引いて立ち上がらせてかがみの顔を見た時、俺はふいに昨日の事を思い出してしまい、顔を赤くしたのだった。

そんな俺の変化に気付いたかがみも同じように昨日の事を思い出したらしく顔を赤くしていたのだった。

こんな所をこなた達に知られてはまずいと思った俺は即座にかがみに

「か、かがみ。俺、キッチン行ってくるから猫達の相手してやってくれるか？」

そう言うとかがみもすぐに我に帰って

「あ、うん。任せて。そ、それじゃそっちは頼むわね？」

そう言って猫の相手をしだしたかがみを確認して俺はキッチンへと飲み物を取りに行くのだった。

しかし、俺は気付いていなかった。

さっきの2人の様子をこなたがちらりと見ていた事に。

かがみｓｉｄｅ

ゲームで楽しんでいる時、私と慶一くんは日下部とこなたのプレーを観戦していたのだが、飲み物が切れた事に気付いた慶一くんがその補充をするためにキッチンへと行こうとして私に声をかけてくれた。

そしてその時にモモちゃんとミィちゃんの2匹の猫がリビングに入ってきて慶一くんの足元に擦り寄るのが見えた瞬間慶一くんは2匹を踏み潰さないように動こうとしてバランスを崩したのだった。

そしてそのまま私の方へ倒れ込んできて私を突き飛ばし、慶一くんは私の膝に倒れ込む事となったのだった。

慶一くんは私に謝りながら手を差し伸べてくれたのでその手を取って立ち上がりお互いの顔を見合った時に昨日の事をうっかり思い出してしまい、2人して軽く赤面していたのだが、すぐに気を取り直した慶一くんは私にキッチンへ行くと言ってすぐに出ていった。

それを見送って一息ついていた私だけど、プレーを終えたこなたが私の所にやってきて

「ねえ、かがみ。慶一君となんかあった？」

などという事を聞いて来たので私は内心慌てつつも努めて冷静を保ちつつ

「・・・別に何もないわよ。ちょっと事故で慶一くんが倒れてきただけだし。」

そっぽを向きつつそうこなたに説明する私だったが、こなたはなおも

「ほんとに?ほんとに何もなかったの?」

としつこく聞いてくるので私は

「何もないって言ってるじゃない。どうしたのよ?そんな事聞いてきてさ。」

そう私がこなたに聞くとこなたはポツリポツリと理由を話し始めた。

「実はさっきかがみと慶一君が事故で倒れ込んだ所を見てたんだよね・・・それでさ、その後慶一君とかがみが顔を見合わせた時、2人して顔赤くしてたよね?それにいつもの慶一君と違ってなんか慌ててたし・・・かがみの態度もなんかいつもと違ってたのがわかったからさ・・・気になったんだよね・・・」

そのこなたの指摘にドキリとしつつ

「な、何言ってるのよ。大体ああいう事って今までもあったじゃない!今更珍しい事じゃないわよ!」

つい、こなたへの反論の声が大きくなる。

こなたはそんな私にごまかしの効かない決定打を言ってきた。

「・・・その動揺もそうだけどさ・・・かがみはああいう事になっ

た時って大体慶一君を即座に殴り飛ばしてたはずだよ?そうしないまでも大声で文句言うとかさ・・・でも、今日のかがみはそれをしなかった・・・それにさ、似てるんだよ。」

こなたの言葉聞いて私は思わず聞き返す。

「似てる、って何がよ?」

その言葉にこなたは少しだけ頬を赤くして

「前に私が慶一君とキスした、って事はかがみにも教えたよね?」

その言葉に頷く私を見てこなたはさらに言葉を続ける。

「今のかがみの態度はさ、あの時事故でキスしちゃった時の私と似てるんだよ。普通、私もあんな事あったら他の男の子とかなら殴っちゃってるかもしれない。けど、慶一君にはそんな態度すら取れなかった。むしろ照れちゃってさ・・・思わず慶一君の顔見た時に顔を赤くしてたんだよ。だからかな?慶一君とかがみに何かあったんじゃないか、って思ったのはさ・・・。」

こなたの指摘に私は何かを言って誤魔化そうとするのだが、どうしても、何を言っても不自然になりそうだった。

色々考えた末に私はついに観念する事にしたのだった。

「・・・こなたの言うとおりよ・・・私昨日、慶一くんと・・・事故だったけど・・・キス・・・しちゃったのよ・・・」

私の告白にこなたは目をまるくして驚いていた。

「後はこなたの言うとおり・・・その事を意識しちゃってた・・・意識をするまいとして頑張ってたんだけどさ・・・私達の間にいて欲しいまつり姉さん達は出かけちゃうし、再び2人きりになっちゃうしでどうしたものかと思ってたのよ・・・そうしたらタイミングよくあんた達が来てくれたから意識を外すことが出来てたんだけど、あの時にまた意識しちゃったみたいね・・・あんたに気付かれちゃったしね・・・」

その言葉にこなたは複雑そうな表情で

「・・・そう・・・だったんだ・・・それで?かがみは慶一君としたとき・・・どんな気持だった?」

こなたの質問に私は顔を赤くしつつ

「びっくりしたけど・・・その・・・嫌だとは・・・思わなかったかな・・・」

その答えにこなたは頷きながら

「そっか・・・私と一緒だね・・・私もそうだしね・・・あはは・・・なんというか複雑な気分だったねー・・・。」

そう言った後こなたは私を見て

「まあ、何にしてもさ。私たちは慶一君とキスをした仲間だよね。他に八坂さんやみゆきさんもいるけどさ。」

こなたの言葉に私も頷いて「そうね・・・」と短く返事をすると

「何々？何の話だってヴァ？」

そこに日下部がやってきて私達の話に割り込んできた。

「な、なんでもないわよ。あんたには関係のない話よ。」

そう言うとこなたがニヤニヤとしているのが見えて、私は嫌な予感を覚えたのだが私が口止めしようとするより早く、こなたが

「かがみが慶一君とキスしちゃったーって話だよ。」

と言うこなたの言葉に私は途端に顔を真っ赤にして慌てながら

「こ、こなた、あんた何勝手にばらしてるのよ！」

と言うとこなたはしてやったりの表情で舌を出して笑っていた。

「え？マジか！？マジなんか！？柊も慶一とキスしたのか？」

こなたを追いまわすより先に日下部に詰め寄られ、あたふたしながら

「だ、だからっ！そ、それは事故だったのよ！あんたが考えてるような事じゃないんだからね！？」

と言い訳をしていたのだが、結局日下部の質問攻めに疲れ果てる私だった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君とのからみでかがみの様子がいつもと違うと感じた私はかがみに問い詰めて真実を聞きだしたのだった。

そして聞いてみると案の定私や八坂さんと同じように事故によるキスをしてしまっていた事がわかった。

かがみの告白を聞きながら私は胸の中で妙な気持が湧き上がるのを感じていた。

だから、みさきちが私達の話題に飛び込んできたとき、私はさり気なくかがみのキスの事をばらしてこの気持をうやむやにしようとしたのだった。

（何か様子変だな？と思ったけど、まさかかがみもそんな事になってたなんて知らなかったな・・・その事を聞いた時、胸に嫌な気持が沸くのが分かった時、何か怖くなったよ・・・だからその気持を消す為に、みさきちを利用させてもらっちゃったけどね・・・でも最近分かってきた気がする・・・この気持の正体もさ・・・でもまだ・・・確信持てないから当分は様子見てみようかな・・・）

そう心の中で考えていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

リビングでのかがみとのやりとりで再び昨日の事を思い出して意識してしまった俺だったが、すぐさまにキッチンへ向かって飲み物を持ってリビングに戻ってみると、なにやらこなたとかがみが話をしているのが聞こえてきた。

俺は入るに入れず、部屋の外でこなた達の話に聞き耳を立てていた

が、そのうちにこなたの方から妙になりかけていた空気をぶち壊したみたいだった。

けど、確実にかがみとの事がばれた事を会話の内容から悟る俺だった。

そして、俺は一つ覚悟を決めてリビングへと入ってくのだった。

「お待たせ、飲み物の追加持ってきたぞ？なにやら賑やかそうだけど何かあったのか？」

そう、わざととぼけながら聞いてみると3人とも「「「なんでもないよ」」」と言ってきたので俺はあえてそれ以上追及はしなかった。

そして皆に飲み物を配って再びゲームのプレイをして遊んでいたが、時間が来たのでこなた達は帰っていったのだった。

そして、その後にまつりさんと龍兄が戻ってきて、そろそろかがみたちも家に帰る事になったのだった。

俺と龍兄は、名残惜しそうにしているまつりさんとかがみを自宅まで送り届ける為に一緒に出かけた。

そして柊家に着いた俺と龍兄は

「かがみ、まつりさん。今日でとりあえず泊り込みは終わりですが、何かあればまた頼りにしてください。まつりさん達は歓迎ですから。」

「まつりさん、かがみちゃん。こいつの言うとおり、頼りにしてやってね。そうしてやれば喜ぶからさ。」

そう言うとかがみとまつりさんも

「こちらこそ3日間お世話様。凄く助かったわ。こっちこそ慶一君や龍也さんに何かある時は声かけてよね?」

「龍也さんー、寂しいよー。また遊びに来てよ、絶対だよー?森村君もね。」

お互いにそう言いあって俺達は別れたのだった。

その後龍兄はその足で都内の実家まで走って帰った。

俺は家に戻り、後片付けをしながらこの3日間の事を振り返っていたのだった。

(色々あったけど、やっぱり家に誰かいるのはいいな・・・つくづく俺は寂しがりやなんだなあ・・・でも、仕方ないよな・・・ああ、でも・・・またあんな事もあったし・・・ここのとこ事故ばっかりだよなあ・・・もっと気を引き締めていかないとな・・・さあ、明日から学校だ・・・まだまだ1年これからなんだから、がんばっていくかな・・・)

そう改めてこの1年を過ごしていこうと誓う俺だった。

もうすぐ2月、俺は何となくだが、また一波乱ありそうだなあと思いつつさらにはこうの誕生日の事にも頭を悩ませるのだった。

見破られる旋律～秘密のばれた2人～（後書き）

次回はバレンタインに向けてこうの誕生日と共に進むと思います。
ちょっと更新に間があいてしまいました事をお詫びいたします。

祝いの旋律～今年最初の誕生日会～

かがみとまつりさんを預かる波乱の3日間、そして最近立て続けに起きている事故、そして、正月早々に引いた風邪の事を含め、俺は鷹宮神社のおみくじって本当はよく当たるんじゃなかろうか？とさえ思い始めていた。

ちなみにあの後なのだが、案の定宿題をやっていなかったつかさにせがまれてかがみはしぶしぶ宿題を見せる羽目になったとの事。

今朝の通学の時にかがみが憂鬱そうに俺に話して来るのを聞きながら俺はただただ苦笑するしかなかったのだが・・・・・・

そんなこんなで1月が過ぎようとしている月末の学校で俺は間近に迫っているこうの誕生日の事に頭を悩ませていた。

前にあいつと話した時に何か考えてやると言った、その事が結果的に俺の首をしめてしまっていた。

うっかり予告なんかをしてしまったものだから、もはやこうが俺が何かを企んでいるという事は容易に想像してしまうだろう。

だからこそ、こっそり何かをやろうという企みは意味をなさなくなっていた、というのもあった。

俺が一人教室で自分の席に座りながら難しい顔をしているとあやのが俺の側にやってきて

「あら？慶ちゃん。なんだか考え込んでるみたいだけど何かあった

の？」

そう声をかけてくれたので俺は困ったような表情で

「あー・・・まあ、ちょっとなー・・・実はもうそろそろこうの誕生日なんだけど、その事で悩んでるんだよ。」

その説明にあやのは

「八坂さん、誕生日近いのね？なら永森さんの時みたいに何かやってあげたらいいんじゃないかしら？」

頬に人差し指を添えつつ考えるように言うあやのに俺は苦笑しながら

「それなんだけどさ、うっかり俺が予告みたいなこと言っちゃったからこっそり何か準備してやる、っていう手が使えなくなっちゃってな・・・だからこそ困ってるって訳なんだけどさ・・・」

そんな俺の言葉にあやのは首を傾げつつ「どうして？」と短く聞いてきたので俺は

「向こうがこちらが何かを企んでる事を知らないというのであれば、前のやまとの時みたいに感動させられる演出も効果がでるだろうけどすでに知ってしまってる状況じゃ相手にも心の準備が出来ちゃってるからな・・・だからこそやりにくいんだよなあ・・・・」

その言葉にあやのは少し考え込んだ後

「いいんじゃない？それでもさ。慶ちゃんが八坂さんに何かをしてあげるって事が大事なんだと思うわよ？それが例え相手の心の準備

ができていたとしてもね。だから、慶ちゃんは慶ちゃんがやってみたいようにやればいいと思うわ。もちろん私達にも声かけてくれるのならちゃんと協力はするしね。」

そう言って笑顔で笑うあやのに俺は

「うーん・・・そうか、そうだよな・・・。ありがとう、あやの。何ができるか分からないけどやってみるよ。その時は声かけるから協力たのむな。」

俺もあやのに笑顔で返しつつそう言うとあやのも嬉しそうに頷いてくれたのだった。

あやのとのそんなやり取りの後、その日の昼休み、俺は珍しく星桜の樹の側にある自販機で飲み物を購入しつつ1人で休憩していたのだが、そんな俺に声をかけてくる者がいた。

「あ、あのー・・・森村先輩、ですよね?アニ研の仮部長されている。噂は色々聞いていますよ?」

「こら、たまき。いきなりそれは失礼だよ。すいません、この子私の幼馴染なんですよ。」

という声に振り向いてみれば、そこには2人の女生徒の姿があった。

「えーと?君達は?」

俺が聞くと、最初に声をかけてきた子に注意を促した子が

「あ、申し遅れました。私は毒島みく、といいます。こっちの子は私の幼馴染で山辺たまき。私達はこの学校の1年です。」

そう自己紹介すると、もう1人の子も俺に

「えっと、山辺たまきです。さっきはいきなり声をかけてすみません。」

そう言って来たので俺も

「いやいや、ちょっと驚いただけだし、構わないよ。俺は森村慶一よろしくな。」

そう言うと毒島さんが

「よろしくお願いします、先輩。それでですね、先輩に声をかけさせてもらったのはアニ研の部長の先輩にお願いがあるからなんです。」

毒島さんのお願いがなんなのかを訊ねてみようと思い、俺は

「お願い？どういう内容？話によっては聞けない事もあるけど？」

そう言うと毒島さんは山辺さんに目配せして先程の声かけに関する事を改めて話してくれた。

「はい。実はですね、私達もアニ研に入りたいと思いましてそれならば部長である先輩に相談するのがいいと思ったんですよー。」

俺はその言葉に苦笑しつつ

「なるほど、そういう事か。実質そっちの方もこうに任せっきりだ

ったからすっかり忘れてたな。それで？入部希望は君だけかい？」

そう訊ねると、山辺さんの代わりに毒島さんが

「私も一緒に、です。構いませんでしょうか？」

そう言って来たので俺は頷いて

「ああ。構わないよ。部員が増えるのは嬉しい事だし、こうも喜ぶだろう。それじゃ、入部届けを書いて俺に・・・まてよ？」

俺はそう言った後少しの間考え込みはじめる。

やがて考えが纏まったので俺は顔を上げて2人に

「なあ、君達にちょっと頼みがあるんだけどいいかな？」

俺がそう言うと2人はきょとんとした顔で

「私たちに、ですか？なんでしょうか？」

「私たちに出来ることですか？」

そう聞いてきたので俺は頷きながら

「ああ、実はね・・・・・という事なんだけどどうかな？」

俺の頼みに2人は顔を見合わせていたが2人して頷くと

「ええ、構いませんよ。それじゃ細かい連絡などは先輩からよろしくお願いします。」

「ちょっとしたサプライズですねー？そういうのも面白そうです。私も協力させてもらいますよー？」

俺の頼みを快く承知してくれる2人に俺は改めて御礼を言うと、俺はこう以外のメンバーを集めて早速誕生日の計画を練り始めるのだった。

ちなみにやまとにはこうに気付かれる事を防ぐ為に、何かとストッパーになってもらう事にした。

そして、屋上にて・・・・・・

「・・・・・以上が今回の誕生日会に関する計画だ。何か質問はある？」

一応の計画の概要を説明するとこなたが

「なるほど、今回はアニ研部室を使うんだね。こういうのも中々面白そうじゃん？それで、慶一君。当日はちゃんと使用許可とってくれるんだよね？部室使えなかったら意味ないよー？」

と言うこなたに俺は頷きながら

「そこらへんは抜かりない。ちゃんと桜庭先生に許可取って来たから。」

俺の言葉に納得して頷くこなた。

「それじゃ、私達は永森さんが八坂さんを連れて来るまでの間に準備済ませればいい訳ね？」

かがみの言葉に頷いて

「ああ。また準備の方頼んじゃうけどよろしく頼むよ。」

そしてつかさも俺に

「わたしと峰岸さんとでケーキとか用意するよ～。だからこっちはわたし達に任せてね？」

その言葉に俺も頷いて「ありがとう。」と短く礼を言う。

つかさも俺の言葉ににっこりと笑って頷いてくれた。

「では、私達は飾り付け等をがんばりましょうか。」

「そうだなー。それでまた派出に誕生日を祝おうゼ？」

みゆきとみさおが2人してそう言ってくる。

俺は2人に頭を下げつつ

「そっちの方はよろしく頼むよ。ただ、今回は当日に飾り付けて当日に撤去するようにするから直前までは飾りつけがすぐできるように手配を頼むぜ？とは言え、まあ、みゆきに任せておけば安心かな。」

冗談交じりに俺がそう言うとみさおは頬を膨らませながら

「何だよ慶一！私じゃ信用ないっていうのかよー！それはあんまりじゃねえか？」

と怒ってしまったので俺は慌てて

「いやいや、悪かった。そんなつもりで言ったんじゃないんだ。すまん。」

みさおに謝ると、横からかがみが

「まあ、普段のあんたの行いが原因って事ね。少しは反省したら？」

ニヤつきながら突っ込みを入れるとみさおは涙目になって

「あやのー・・・そこに悪魔がおるよ？」

そう言いつつあやのに泣き付くみさおをあやのは「よしよし」と言いながら頭をなでてやっていたのだった。

その微笑ましい光景に俺も思わず笑みをこぼすと

「ま、とにかく、当日はよろしくな。みんな。」

改めてそう言うとみんなは笑って頷いてくれたのだった。

その後の俺達はなんとかこうに気付かれるのを防ぎつつも着々と準備を進めていった。

俺も俺でこうのためにプレゼントを購入しつつ、こうの誕生日に備えた。

そしてこうの誕生日前日の2月2日の土曜日、桜庭先生の機転で早

めに部活を終えたこうとやまとは俺達が部室付近で2人が出て行くのを確認してから部室に入り込み、誕生日会の飾り付けをするのだった。

「おーし、あんまり派手な物でなくていいぞ?やり終えた直後はすぐに片付けられるようにそっちの準備もしなくっちゃな。」

俺は手が空いていたので、料理担当のこなた達以外のメンバーと共に飾り付けにいそしむ。

「慶一くん、これはここでいいかな?」

飾りの設置をしながらかがみが俺に確認を取ってくる。

俺は頷きながら

「ああ、それでいいぞ。みさお、それはそこでいいぞ?みゆきと一緒に頼む。」

誕生日おめでとうと書かれたボードを正面の黒板にくっつける作業をみさおたちはやっていた。

「おう!こっちはまかせてくれー。高良ー、そっち頼むぜー?」

反対側を持ちながら、もう反対にいるみゆきに指示を出すみさお。

「こうでいいでしょうか?日下部さん。」

角度の確認をするようにみさおに言うみゆき。

みさおは頷いて

「ああ。それでいいぞ？んじゃ次はこれかな？」

そう言って手作りの花飾りをつけて行く。

みゆきも同じように手伝いつつ作業を進めた。

俺はある程度一段落した事を確認して明日の事で新入部員の2人に確認の連絡を入れる。

数回のコールの後、毒島さんが電話に出た。

『もしもし。毒島さん？俺だけど、明日の準備、こっちは着々と進んでるよ。2人はどうかな？』

『あ、先輩。ご苦労様です。こちらは大丈夫ですよ。ですが念のため、一度こちらに連絡が欲しいです。集まる1時間前くらいに連絡を一本入れてくれますか？』

『オッケー。その頃にもう一回連絡するよ。山辺さんの方にも君から連絡入れておいて欲しい。』

『分かりました。それでは明日に。』

『ああ、よろしく。』

そう言って電話を切り、俺は今度は料理チームの方に連絡を取る。

数回のコールの後、こなたが電話にでた。

『もしもし、慶一君？どうしたのー？』

『こちらは大分準備が済んだからそっちの様子確かめておきたくな。そっちの状況はどうだ？』

『こっちは抜かりないよ。ケーキも完成したしね。私から見てもなかなかの出来栄えだったよー？これなら明日八坂さんも喜んでくれるよ。』

『そうか、それなら安心だな。つかさとあやのにもご苦労様って伝えておいてくれ。明日はとりあえずがんばろうぜ。』

『うん。思い出に残る誕生日になればいいね。』

『そうだな、あ、それとだ、こなた。くれぐれも言っておくが、今日は深夜までのゲーム禁止な。それで遅れてこられちゃ困るからな。』

『ぶー！分かってるよー！わざわざそんな風に釘刺さなくていいじゃん！慶一君の意地悪ー！』

『その３人の中じゃお前が一番心配だからだ！ふう・・・まあいいや、とにかく明日な。こなたの料理も楽しみにしてるからな。』

『え！？あ、うん。わ、わかったよ。まったく、ずるいよね、慶一君は・・・』

『ずるいってなんだよ？俺、なんかしたか？』

『・・・はあ、これだもんね・・・いいよ、わからないならそれで。とにかく明日ちゃんといくから楽しみにしててねー』

『ああ、待ってるぞ。』

そう言って電話を切る俺だった。

ただ、最後にこなたが俺に言った事の意味がいまいちわからず頭にハテナマークを飛ばす事になったのだが。

そして、何故かその様子を見ていたかがみもまた俺を見ながら苦笑を浮かべているのを見てさらにハテナマークの数が増えた俺だった。

そして少しの不安をよそに迎えた当日、俺達はやまとに細工を頼み、いつもの集合時間をずらしてもらって先に部室に集合していた。

毒島さんと山辺さんも時間に来てくれたので部室の準備室で待機してもらう。

そこに時間にはまだ余裕があったものの、少し遅れてこなたが到着した。

用意してた料理は柊家で作っておいたのでそっちはかがみとあやの、つかさ、みさおに頼んで運んでもらっていた。

「よしよし、こなた。少し遅れたが今までよりは早いし余裕もあるからいいぞ。それじゃみんな最終確認だ。各自チェック頼む。」

そう指示を出すとこなたは

「料理は大丈夫だよ。ケーキも準備よしだね。」

そう言って、かがみ、みさお、みゆきも

「飾り付けの方も大丈夫よ。ちゃんと出来てるから。」

「こっちもオーケーだゼ？」

「こちらもおかしいところはないようです。心配入りませんよ。」

と最終報告をしてくれた。

俺はそれに頷いてあやのとつかさを含めた全員にプレゼントの確認を促すと全員が持ってきたものを確認してこちらの準備は完了した。

そしていよいよ誕生日会、なのだが、予想通りというかなんというか・・・やっぱりこうは遅れてきた。

予定の時間を３０分程オーバーした頃、こうがやってきた。
俺達はその事をすっかり失念していたために、逆にこっちが虚を突かれる事となったのだった。

「いやー、みなさんお待たせです・・・ってあれ？」

後ろで呆れ顔をしているやまと、そして部室に入るなり頭にハテナマークを飛ばすこう、そして、すっかりタイミングを外されて逆に脅かされる俺達。

「うお！びっくりした・・・こう！お前、いい加減遅刻癖直せ！タイミング狂っただろうが！」

皆を代表して俺がこうに突っ込むと
こうは未だに何が何だか分からないという風で俺に

「す、すいません。けど、みんなも集まっていったいどうしたんです？今日、何かありましたっけ？」

というこうの言葉に俺たちは揃って脱力仕掛けたのだが、何とか持ち直してこうの後ろにいたやまとが呆れたような声で

「こう、あなた、自分の誕生日忘れたの？まったく、あきれるわね・・・」

と言うやまとの指摘にこうは少し考える仕草をしていたがやがて掌をぽんと一度打つと

「そうでした、色々忙しくてすっかり忘れてましたよ。あの、もしかしてこれって・・・」

おずおずと俺に聞いてくるこうに俺は大きく頷くと

「そうだよ。みんなも俺も、お前の為に集まったんだ。今日はお前の誕生日だからな。みんなで祝ってやろうと言う事でな。」

そう告げるとこうは途端に嬉しそうな顔になって

「あ、ありがとうございます。みなさん。とても嬉しいです。先輩もありがとう。そっかー、それで最近やまとは私との付き合いよかったんだね。」

こうがそう言うとやまとは軽くため息をつきながら

「おおむねはあなたに先輩達の企みに気付かれないようにあなたを引き離す事が目的だったんだけどね・・・誕生日の事本人が忘れてるんじゃ本末転倒ね・・・」

やれやれ、とジェスチャーするやまとにこうは両手を合わせて謝り倒していた。

「ごめん、ほんとごめんって、ね？この通り！」

そんなこうにやまとは

「謝るならあなたの為に準備してくれた先輩達に言いなさいよ。私に言ってもしょうがないでしょ？」

と言うやまとのことばにこうは俺達の方に向き直って

「みなさん！本当にすいませんでした！」

と言って頭を下げるこうに俺は苦笑しながら

「もういいよ。とりあえずこのままじゃ先にも進まない。だから・・・皆、飲み物を手に持ってくれ！やまと、こうにも飲み物を渡してやってくれ。」

何時の間にかこうの分の飲み物を用意してやまとに手渡されていた飲み物をこうに渡すと

「ほら、主役なんだからしっかりしなさい。」

と言うやまとからこうは申し訳なさそうな顔で飲み物を受け取っていた。

「はは、そうだね。よしっと、準備オッケー。」

そう言って飲み物を掲げるこうの姿を確認した俺はみんなを見ながら

「では、改めて、こう、誕生日おめでとう！」

と言う掛け声と共にみんなも「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」と一斉に声をあげてグラスを掲げる。

その声に応えるようにこうも

「みんな、ありがとー。部室でやるっていうのが斬新でいいね。皆さんの好意に感謝です！！」

と、俺たちに負けない声で返した。

「こう、これは俺からお前にプレゼントだ。」

「これは私からだよ？限定物のアニメＤＶＤ選んできたから資料にするなり自分で楽しむなりしてねー？」

「こなたは相変わらずね・・・これは私から。おめでとう八坂さん。」

「これはわたしからだよ～？ケーキと一緒に作ってみたんだ～。よかったら食べてね？」

「これは私からです。お役に立てばいいのですが・・・」

「これは私からだゼ？大事に使ってくれよなー。」

「これは私からよ？私のお気に入りを元にチョイスしてみたの。」

皆からのプレゼントを受け取って満面の笑みをうかべるこう。

「皆ありがとうー。凄く嬉しいですよ。これ大事にしますね？」

そして最後にやまとが

「これは私から。まあ、あなたに使ってもらえればそれでいいわ。」

とプレゼントを手渡すとこうは凄く嬉しそうに

「ありがとう、やまと。これ使わせてもらうからね。」

と言うこうにやまとは照れながらそっぽを向いて

「あなたには以前に私の為にしてもらってるからね、そのお返しをしただけよ。」

そのやまとの態度にこうはニヤニヤしながら

「ツンデレなやまと萌え！」

とこうが言うとこなたもそれに同意して

「うんうん、いいツンデレ、かがみにも引けをとりませんなー。」

と言いながらニヤついていた。

さらにそこにかがみも突っ込みをいれて

「私はツンデレじゃないっての！まったく勝手な事言うんじゃないわよ！！」

そう言うとやまともこうに顔を赤くしつつ

「萌えとか言わないでよ！ほんとにあなたって人はー！！」

2人してこなたとこうに説教する姿を見て俺達は苦笑を浮かべるのみだった。

そして俺はここでもう一つこうへのプレゼントを渡す事にしたのだった。

「こう、俺からもう一つプレゼントがあるんだが、受け取ってくれるか？」

そう切り出すと、こうは俺を見て

「もう一つのプレゼント、ですか？まあ、いただけるものでしたら遠慮なくいただきますけど。」

そう言いつつも少し不思議そうに俺の顔を見るこうを見つつ、俺は待機してもらっていた2人を呼ぶ。

「なら、受け取ってくれ。おーい！2人とも、入ってきていいよー！！」

と準備室の方に声をかけると、そこから2人の女生徒が入って来たのだった。

それを見たこうが俺に

「どういう事ですか？先輩、これって・・・私、その気ないんですけど？」

と、的外れな事を言うこうに俺は呆れつつ

「そういう事じゃない！ったく・・・はいはい、2人とも自己紹介よろしく。」

俺達の側にやってきた2人にそう促すと2人とも頷いて自己紹介を始めたのだった。

「初めまして、八坂さん。私は山辺たまき、よろしくね？」

「初めまして。私は毒島みく、よろしく。」

と言う2人にこうも思わず自己紹介を返す。

「あ、ども。私は八坂こう。よろしくね。2人とも同じ学年？」

そう訊ねると、毒島さんが頷いて

「うん、同じ1年。クラスは違うけどね。」

そう答える毒島さんにこうもなるほど、と頷いていた。

そして俺は2人をプレゼントと言った理由を説明する。

「こう、実はこの2人な、アニ研には入りたいって事らしいんだ。うちの部は未だ部員数も少ない状況だからな。こうも結構人材探しは苦労してるみたいなようだったし2人から俺に部に入りたいって言ってきたんでな、なら、お前の誕生日プレゼントの一つで部員を進呈しようと思ったのさ。」

その俺の説明に納得したらしく、こうは俺に

「そういう事でしたかー。いやー、助かります。2人とも改めてよろしくー。」

そう言って握手のために手を出すこうに2人も同じように手を出して

「「よろしくね」」

そう言って握手したのだった。

それと同時に起こる拍手、俺も同じように手を叩いていた。

そして俺はその2人にも

「さあ、顔合わせはこれで終わりだ。2人もこうの誕生日を楽しんでくれな。」

そう言うと2人とも笑いながら

「ありがとうございます。それじゃ楽しませてもらいますね。」

「私たちがプレゼントになるとは思いませんでしたがこれもいい経験だね。」

と言っていたのを見て俺は苦笑しながら

「はは、いきなりこんな事頼んで悪かったね。でも、乗ってくれた事、感謝してるよ。これからもこうと一緒にアニ研、よろしく頼むよ。」

そう言うと2人とも頷いて

「任せてください。先輩が立ち上げた部ですし盛り上げていきますよ。」

「でも、時折先輩も顔出しに来てくださいね?待ってますから。」

と言う2人に俺も頷いて

「まあ、正式にこうが部長になる時までは顔出すようにはするよ。」

そう言って笑うのだった。

今日はこうの誕生日。

いつも手渡すプレゼントと一風変わったプレゼントをこうに手渡して俺はとりあえずは成功かな?と心の中でほっとしていたのだった。

そんなこんなで誕生日会も終了し、片付けを終えた俺達はそれぞれに家に戻って行くのだが、バレンタインが近づいていた事をこなた達は意識していたようで、その準備の為に、こなた、みゆきはつかさに、かがみはあやのにそれぞれチョコレートの作り方を教わる事になったようだ。

かがみがつかさに教わろうとしなかったのはかがみにはかがみの考えがあるからしいという事と、作ってる所をこなたにからかわれたくないという思いがあったという事を後々俺は知る事となった。

俺自身も特には気にしていたわけじゃなかったバレンタインだが、また一騒動ありそうなそんな予感を俺は心の中で感じていたのだった。

そして、乙女達の戦いの日は、徐々に迫って来ていた。

1953

祝いの旋律～今年最初の誕生日会～（後書き）

次回はいよいよバレンタインです。
果たしてどんな事になっていくのか、次回もお楽しみに。

波乱の旋律～乙女達の戦い、バレンタイン騒動記、前編～

こうの誕生日を何とか苦心しつつ演出して祝う事に成功し、さらにはアニ研にとっての人材さえも増やす事が出来た。

今後あの２人は何かとこうの役に立ってくれる事だろうと思いつつ、俺達はパーティの後片付けをして学校を後にした。

そして、こなた、つかさ、みゆきは柊家で、かがみとみさおはあやのと共に峰岸家に行きそれぞれにバレンタインの準備をしようとしていた。

少しだけ話はパーティの準備中までさかのぼる・・・・・・

こなたｓｉｄｅ

今回も慶一君のアイデアにより、八坂さんの誕生日を祝う為に私達は準備にいそしんでいたのだが、それと同時にもうすぐやってくるあのイベントの事に思いを馳せていた。

そして、皆にも事情を聞くべく慶一君もいない今の状況に皆に話を振ってみた。

「ねえ、もうすぐ２月１４日、バレンタインだよね？皆は今年何か用意しようとか思ってる？」

そう話題を振るとみんなはそれぞれに

「よ、用意っていったって誰かにあげる予定なんて・・・」

「わたしは今年もがんばろうって思ってるよ～？」
「こ、今年は・・・その・・・一応準備はしようと思っていますが・・・」
「私も今年は義理だけど用意してみようかな？」
「私も兄貴以外にも今年はあげれそうだなー。」
という言葉を聞いた私は
「皆それなりに考えてるんだねー。じゃあさ、今年は皆で作ってみない？幸いここにはお菓子作りが得意な人が2人もいるしさー。」
私がそう言うとつかさと峰岸さん以外の人が
「それは・・・是非教わりたいですね。お願いできますか？つかささん、峰岸さん。」
「手作りかー・・・それも面白そうじゃん？あやの、頼むぜー？」
そして私も2人に
「私も今回は指導お願いするよー。」
そう言うと2人はにっこりと笑いながら頷いて
「うん。いいよ～？一緒に手作りチョコ作ろうか～。」
「私も及ばずながら協力させてもらうわね？」
と言ってくれたので私も2人に「ありがとう、2人ともー。」とお礼を言うのだった。
しかし、その中に何故か、かがみの声があがらなかった事に気付い

た私は頭にハテナマークを浮かべつつ

「あれ？かがみはいいの？2人に教わらなくて。」

そう声をかけると、何やら考え込んでいたかがみが驚きつつ

「え？あ、いや、私は・・・別に・・・」

と、明らかに動揺を見せている様が感じられたのだった。

私はそんなかがみの様子を見て、どうするべきだろうか？と少し悩んでいたが

「とりあえず、かがみ。私達はチョコ作りをこのパーティが終わった後に教わるからさー、かがみも一緒に習うつもりなら後で声かけてよね？」

そう改めてかがみに言うと、かがみは戸惑いつつも

「わ、わかったわよ・・・どうするかはこのパーティが終わってから決めるわ・・・」

少し気のないかがみの返事を貰いつつ、私は気を取り直して

「それじゃ皆、そういう事で。とにかく今はパーティの準備終わらせちゃおう。」

と言う私の言葉に頷いてくれるみんなだった。

かがみｓｉｄｅ

八坂さんの誕生日の準備中にこなたはみんなに今年のバレンタインの事についてみんなに持ちかけてきた。

私もそれを意識してなかった訳じゃないけど、いざその事に話題が行くと、改めてその事を意識させられる事となった。

そしてこなたはみんなに今年はチョコを手作りしようと言いだし、そしてそれをつかさと峰岸から教わろうと言うのだった。

私はそれを聞いたとき、どうしようかと悩んでいたが、私が中々決断できずにいると、とりあえず話を終えたこなたが私に改めてチョコ作りを習おうよ、と言って来たので私はそこで我に帰り、こなたに曖昧な返事をしたのだった。

とりあえずは誕生日会が終わるまでにどうするかを決める事となった。

パーティの間もずっと考えていたのだが、私はその時に考えていた事を実行に移す事にした。

パーティ終了後、私はこなたに

「こなた、さっきの事だけどさ。私は一緒にはやらないわ。」

そう告げるとこなたは驚いたような表情で

「え?どうして?皆で作って皆で渡そうよ、かがみん。」

そう言ってくるこなたに私は

「かがみん言うな！私はそういうの苦手だから、市販の物を用意しようと思う。だから、こなた達はこなた達で頑張りなさいよ。」

そんな私の言葉にこなたは少しがっかりした顔で

「うーん、それじゃ仕方ないねー・・・でもかがみも一応は用意するんだね？まあ、それが聞けただけでもよかったかな？」

最後の方はニヤニヤとしつつ私にそう言うこなたに私は心の中で（しまった！）と思いつつ

「べ、別に用意しないとは言ってないわよ！それにあくまでも今までお世話になった御礼みたいなものよ！それに特別な意味なんてないんだからね！？」

と、顔を赤くしつつ慌てて取り繕うが、それがかえって逆効果になってしまい、さらにこなたに嫌な笑顔を向けられる事になったのだった。

「あれあれー？私は誰に、とかは言ってないんだけどなー。そうかそうか、かがみもやっぱり・・・」

その言葉に私は大いに慌てながら

「な、何言ってるのよ！私は、べ、別にそういう事じゃ・・・」

と、言ってみるものの、結局はこなたに弄ばれる事となってしまった。

そんなこなたとのやりとりでかなり疲れた私だったが、気を取り直してこなたがお手洗いに行ってる隙に私は峰岸に

「ねえ、峰岸。ちょっと相談あるんだけど、いいかな?」

そう声をかけると峰岸は私の方を向いて

「なあに?柊ちゃん。相談って?」

そう聞いてきたので、私は他の人達もいない事を確認した後

「実は峰岸にチョコ作りを教わりたいのよ。」

そう告げると、峰岸は不思議そうな顔をして

「え?でも、さっき柊ちゃんは市販の物を用意するって・・・」

その言葉に私は峰岸の側に寄り、小声で

「あれはこなたの追求を誤魔化す為の嘘よ。それに、こなたはつかさとあんたに教わりたいと言っているけど私はどうにも照れくさいから皆と一緒にはどうしてもできないのよね・・・それに一緒に作ってる所をこなたにひやかされたくもないからさ・・・だからお願い。こなた達を教えた後でいいから私にその後で、大変かも知れないけど教えて?」

そう説明すると峰岸はにっこりと笑って

「そういう事だったのね?いいわ。泉ちゃん達へのレクチャーが済んだら私が連絡するから連絡を受け取ったら、私の家でやりましょ

う。」

その峰岸の言葉に私は

「ありがとう、峰岸。恩に着るわ。今度何か奢らせてもらうから。それと、今回の事、こなたには内緒でお願いね？」

峰岸に念を押すように言うと、峰岸も頷いて

「わかったわ。私は口は堅い方だから安心してね。それじゃ後でまた連絡するわね？」

そう言ってくれたので私は

「うん。ありがと。それじゃ後でね。」

そう言った後、手を振って別れる私だった。

その後、こなたがお手洗いから戻って来ると、つかさたちを引き連れて自宅へと向かったのを見届けて、私もとりあえずチョコ作りに関する本などを漁ってみようと学校を出るのだった。

やまとｓｉｄｅ

泉先輩達がバレンタインの事を話し合っている事など露知らず、私達はとりあえず先輩が用意しているパーティ会場にこうを連れて行くためにこうと一緒に学校へ向かっていた。

「まったく・・・今日は部活で急がなきゃならないのなら、どうして待ち合わせに遅れて来るのよ！？」

移動しつつ、先輩の希望どおりにこうを連れて来れなかった事に罪悪感を感じつつ、私はこうに強い口調で文句を言っていた。

「ごめん、やまとー。まさか目覚まし鳴らなかったとは思わなかったんだよー。その代わりいつも以上に急いで動いてるから勘弁して？」

私に平謝りしながらも移動するこうだったが、ふいに何かを思い出したようで私に

「ねえ？やまと。そろそろバレンタインが近いよね？やまとは先輩に何か用意するの？」

そういきなり振られて私は顔を赤くしつつ

「え？あ、そ、そういえばそうね・・・ま、まあ、いつもお世話になってる先輩だし、そのお礼に何か用意してあげてもいいわよね。」

と、照れながら言う私にこうも

「あはは。素直じゃない所はやまとらしいよね。私も一応用意するつもりなんだよね。クリスマスとかのお返しもしてないもんね。」

笑いながらそう言うこうに私もその時と誕生日会の事を思い出すと

「そういえば先輩にはそれ以降何もお返ししてないわね・・・まあ、”義理”でも用意しようかしら・・・」

わざと”義理”の部分を強調して言ったのだが、それを聞いたこう

がニヤニヤとしながら

「”義理”？本命の間違いじゃないのー？やまと。」

そのこうの言葉に途端に真っ赤になる私。

「な、何言ってるのよ！大体私は先輩に対してそんな風になんて・・・」

その言葉にこうはさらにニヤニヤしながら

「えー？ほんとかなー？怪しいなー？」

と言うこうに私はなおもむきになって反論したのだった。

しかしながら、それが逆効果になる事を分かってはいながら、どうしてもその行動を止めれない私だった。

結局散々からかわれ、私達はようやく学校へ辿り着き、３０分は遅れてしまったが、先輩への義理を果たした私だった。

慶一ｓｉｄｅ

あれから数日が過ぎ、俺はかがみ達がチョコ作りに奮闘している事など知る由もなく、ここの所学校から帰るときもこなた達は何かをするために急いで帰っている事は知っていたものの、結局俺はその事を聞く事も出来ずにいた。

そんな事があってから3日が経ち、いよいよあのイベントの当日となったのだった。

とはいえ、その当日になっても俺はいつもと変わらない普段どおりの行動をしていた。

いつもの時間に目を覚まし、いつもの時間に朝食を作り、そしてのんびりとしている所に呼び鈴が鳴るのが聞こえ、俺は玄関へと出迎えに向かった。

「はいはいっと、今日は誰かな？」

そう言って玄関を開けるとそこにはまたここの所猫の世話をしにやってきてくれるようになったあやのとみさおの2人が立っていた。

「おはよう、慶ちゃん。今日も様子、見に来たわよ？」
「おはよ、慶一。今日は私もあやのにつきそいだゼ。」

そう言う2人に俺は頭を下げながら

「ここのとこいつも立ち寄ってくれるよな。ほんと助かってるよ。ありがとな、あやの。」

あやのにそう伝えるとあやのも微笑みながら

「いいのよ。私がやりたい、って思ってやってる事だもの。それじゃ今日もやることやってくるわね？」

というあやのに俺は頷きながら

「ああ、頼むよ。それじゃ、みさお、お前はキッチンへ来い。お茶いれてやるから。」

何だか存在を忘れ去られたかのようにがっかりした表情をしてるみさおに声をかけてやると途端に満面の笑顔になって

「よかったー。私、忘れ去られたのかと思ったぜ。んじゃお邪魔するな？慶一ー。」

そう言って上がってくるみさおを伴い、俺はキッチンへと行くのだった。

そして、あやのとみさおの分のお茶を用意している時、みさおが俺に

「あ、そうだ、慶一。お前に渡す物あるんだ。ほら、これ。受け取ってくれよなー。」

そう言って丁寧にラッピングされたチョコレートを俺に手渡してきた。

「お？これってひょっとして手作りか？悪いな、みさお。」

そう言って礼を言うとみさおは笑いながら

「ああ、すっげえ苦労したけどその甲斐あって上手くいったぞ？会心の作だから味わって食ってくれよな。」

そう俺に言ってくるみさおに俺は貰ったチョコをじっと見つめていたのだが、おもむろにラッピングを取るとみさおの作ったチョコをほおばった。

そんな俺の行動に驚いたみさおは俺に

「ちょ!?慶一?食ってくれとは言ったけど今すぐとは言ってねえんだけど・・・。」

と言うみさおの言葉に答えず俺は黙々とチョコを食べる。

そしてすべて食べきると俺はみさおに親指をびしっと立てて

「みさお、お前の苦労の甲斐もあったな、チョコ美味かったぞ?」

そう告げるとみさおは俺の行動に驚きつつも満面の笑顔になって

「あはは。突然のお前の行動には驚いたけどさ、美味いって言ってくれて嬉しかったゼ?」

と言うみさおに俺も笑顔を返していると、猫の世話を終えたあやのが戻って来て

「あら?ずいぶん楽しそうね。あ、みさちゃん、それ慶ちゃんに渡したのね?あれ?ラッピングが解かれてるという事は・・・」

テーブルに置いてあるラッピングを見ながらあやのがそう言うと俺は

「ああ、早速いただかせてもらった、と言う訳さ。」

そう言う俺にあやのも優しく微笑みつつ

「そうだったの。よかったわね?みさちゃん。みさちゃんも頑張ったもんね。」

その言葉にみさおも頷きつつ

「まあなー。でも、突然食い出したのには驚いたけどな。」

みさおの言葉に苦笑しつつ、あやのも自分の鞄からチョコを取り出して俺に手渡してくれた。

「はい、慶ちゃん。これは私から。いつもお世話になってるお礼も兼ねて義理だけど作ってきたの。」

そう言うあやのに俺も

「ありがとう。あんまり意識してはいなかったけど、義理でももらえると少しは嬉しいもんだな。」

と言うとあやのもいたずらっぽく笑いながら

「義理でも心は込めたわよ?」

そう言ってくれるあやのに俺は頷くと、またしてもラッピングを剥ぎ取りあやののチョコも食べ尽くすのだった。

あやのもまた、俺のこの行動に驚いたようで

「け、慶ちゃん?大丈夫なの?一気に2つもいきなり食べちゃって・・・」

と少し心配そうに声をかけてくれるあやのに俺は頷きつつ

「ああ、問題ないよ。あやの、これも美味かった。改めてありがと

うな。」

そうお礼を言うとあやのは嬉しそうに首を振りながら

「ううん。喜んでくれたのならよかったわ。私も作った甲斐あったわね。」

と言うあやのに俺も笑顔を向けながら

「ああ。実際バレンタインでチョコ貰うなんて初めての事だからな。驚きはしたけどさ。さて、お茶を飲んでそろそろ学校へ向かうとしようか。」

チョコを食べつつもあやの達に用意したお茶を出して自分もお茶をすすりつつそう言うと、そろそろ学校へと向かう時間となったので俺達は3人で家を出た。

そして電車に乗り込み学校を目指したが、その日に限っては俺はかがみやつかさ、こなたに電車の中で出会えなかったのだった。

珍しい事もあるものだと思いつつ学校に近づいた時、俺は何やら周りの空気が変わったようなそんな感覚に襲われたのだった。

そして、学校の近くで俺は知らない女生徒数人からチョコを受け取る事となった。

「お?慶一、モテモテだなあ。早速5個ゲットかー?」

「体育際以降、沈静化してたと思ったけど、まだ慶ちゃんの事諦めてない子がいたのね。」

と言う2人の言葉に俺は困惑しつつ

「うーん・・・嬉しい反面、何だか嫌な予感もするんだよなあ・・・
また織部さんみたいな子が現れたりしないよな・・・？」

そう呟いていると俺の後ろから声をかけてくる子がいたのだが、俺
がその声に驚いて振り向いてみるとそこには織部さんが立っていた。

「おはよう、森村君。私がどうかしたの？」

そんな織部さんに思わず警戒しつつ身構えてると織部さんは俺に

「もう、今更何もしやしないわよ。だからそんなに構えないでくれ
るかな。それと、はいこれ。」

そう言って俺にチョコを渡して来たので慌てて俺はそれを受け取る。

「え？あれ？これって・・・」

いきなり渡されたチョコに困惑してそう聞き返すと織部さんはにっ
こりと笑いながら

「まあ、義理だけどね。仮にも私は一度はあなたの事好きになった
訳だしね。それにあなたはあんな事をした私を嫌わないでくれた。
そんなあなたの気持が嬉しかったって事もあったんだけど、それと
共にあなたにかけた迷惑に対するお詫びも兼ねてるんだけどね。と
りあえず私のやりたい事は済んだし、そろそろ行くわ。それじゃね
？森村君。」

そう言って俺に手を振って去って行く織部さんを半ば呆然と見守り

つつ

「うーん・・・やっぱし、根はいい子みたいだよな・・・でも、お詫びのためとはいえ、こんな事してもらったら逆に気がひけるなあ・・・」

そう呟いているとその様子を見ていたみさおとあやのが

「なあ、慶一。今の織部だよな？あいつお前になんか言ったんか？」

「様子は見ていたけど、あの時のようなトゲトゲしさはなくなってはいたわね。それで？慶ちゃん、大丈夫だったの？何か言われた？」

少し心配そうに俺に聞いてくる2人に俺は首を振って

「いや、俺にかけた迷惑のお詫びも兼ねて、チョコをくれただけだよ。それ以外には特に変な事言われたりはしてないよ。」

そう伝えると、2人とも安心しつつ俺に

「そっか、何事もなくってよかったけどよ。心配はいらねーぜ？私らはもう何があってもお前の事を信じるからな。お前と一緒に困難に向かう覚悟できてるしな。」

「私もよ？慶ちゃん。だから、何も心配要らないわ。」

そんな2人に俺は心から「ありがとう」と伝えると、2人とも満面の笑顔で「「どういたしまして」」と言ってくれたのだった。

そして2人と話しながら下駄箱に着いた俺は早速下駄箱を開けて上履きを取ろうとしたのだが、そこからチョコが雪崩のように落ちてきたのを見て俺はしばし呆然としていた。

俺の様子に気付いた2人も俺の所にやってきて

「どうしたんだ?慶一、うお!すげえな、これ・・・」

「何かあったの?慶ちゃん。あらら・・・凄いわね、これ・・・」

俺はとりあえずチョコを拾い集めて鞄の中に入れておいた紙袋を取り出すとその中にチョコを詰めた。

そんな俺の用意周到振りを見た2人は

「慶一、ずいぶんと用意いいじゃねえか。お前この事態を想定してたのか?」

「朝に私達からチョコもらった時は初めてだ、って言ってたわよね?それも本当なの?何だか怪しいんだけど?」

少し黒いオーラを放ちつつ言う2人に俺は

「みさお、言っておくが俺はいつでもこれは持ち歩いているんだぞ?突然荷物増えた時や体操着を持ち帰る時なんかにあると便利だからな。それと、あやの、朝も言ったとおり、貰うのは初めてだよ。けど、それがいきなりこんな風になるなんて想像すらしてなかったからな・・・それに2人とも見てただろ?俺がこのチョコを見た時の反応をさ。慣れてるんならあんな風に呆然としたりしないはずだ。もっと余裕もってチョコをかき集めていたろうさ。」

軽いため息をつきつつ2人に説明をすると俺の行動に納得がいったみたいで

「それもそうか。よくよく思い出してみたら、どう見てもさっきの

慶一の反応は素人の反応だよなあ・・・疑って悪かった。」
「確かにそうね・・・さっきの態度が演技にはとても見えなかったものね。疑ってごめんなさい、慶ちゃん。でもこうなるとまた、あの時のような生活にもなりかねないかもしれないわね・・・あの時慶ちゃんが急にモテ出して逃げ回る事になっていた体育祭の後の日みたいな事に・・・それがちょっとだけ心配だわ。」

そんなあやのの言葉に俺は少しだけ不安を心に抱きつつ

「確かに、これはあの時と状況が似てるな・・・あ、ひょっとして、またこうなったのは・・・」

俺が何かを思い出したように呟いた言葉を聞いて2人は

「ん?慶一、何か思い出したんか?」
「慶ちゃん、この状況になった事に何か心当たりでもあるの?」

そう聞いてきたので俺はバツの悪そうな顔をしながら

「ありえそうな事が2つほどね・・・一つは文化祭の準備してる時に俺が不審者を捕まえたあの時、もう一つは文化祭の最中に腕相撲で5人抜きをやった時、おそらくあれで目立ったんじゃないだろうか・・・?」

そんな俺の言葉に2人は

「不審者の事は私らも当事者だったからわかるけど、腕相撲の事は知らなかったなー。」
「そうね、あの時も確かに話題にはなっていたけど・・・でも、腕相撲か・・・それは私も知らなかったわね。」

俺は頭をかきつつ2人に

「腕相撲の件に関しては俺もその後で色々な事あったからな、話し忘れてたよ。でも、お前ら気付いたんじゃないのか?俺の家のリビングにおいてあるテレビが変わってた事をさ。あれ、その時の優勝景品だったんだぜ?」

その言葉に2人とも”はっ”となって

「そういや最近慶一の家のテレビが立派になったと思ってたけど、あれってそういう事だったんかー。」

「慶ちゃんの家の大きさにマッチしているテレビだっただけに違和感なさ過ぎて気付かなかったわね・・・」

そんな2人の言葉に俺も苦笑しつつ

「まあ、何にしてもだ。今日は色々と苦労しそうだな、これは覚悟して臨まないと厳しそうだ。」

そう言う俺に2人は笑いながら

「まあ、せいぜい頑張れよ?慶一。一応応援はしてやるぞ?」

「今日一日の無事を祈っているわ。頑張ってね?慶ちゃん。」

そう言う2人に俺は力なく笑い返すのだった。

そして、教室に辿り着くやいなや、同じクラスの女子数名からチョコを渡される俺。

そして俺達よりも先に来ていたかがみがそんな俺の様子に気付いてこちらを見ている事に気付かず、波乱の一日が幕を開けることとなった。

果たして俺は今日1日無事にこの状況を乗り切っていけるのだろうか、そして、このバレンタイン騒動の結末は？

誰にも予想できない1日が今はじまりを告げた。

波乱の旋律～乙女達の戦い、バレンタイン騒動記、前編～（後書き）

今回は前後編で構成します。
慶一は無事に一日を乗り切れるのか、そして、逃げ回る慶一にこなた達はチョコを渡す事ができるのか、波乱の後編をお楽しみに。

波乱の旋律～乙女達の戦い、バレンタイン騒動記、中編～

こうの誕生日会を終え、バレンタインの相談をするこなた達。

かがみはそんなこなた達と一緒にチョコ作りをするのが照れくさいのもあって、こっそりと準備をする。

そんな中、やまととこうも慶一へのチョコを用意しようと考えていた。

それから数日後、ついにその日がやってきたのだが、俺はいつもどおりに行動をする。

いつものように朝にやってきたみさおとあやのを迎えて、俺は2人からバレンタインのチョコをもらったのだった。

その場で俺は2人から貰ったチョコを食べる。

そして、学校に向かう途中で俺は複数の女子と織部さんからもチョコを貰う事となった。

そして、下駄箱での詰め込まれたチョコを見た時、俺はこの日を無事に乗り切れるのだろうか?と考えるのだった。

やがて、自分のクラスへと辿り着く俺に、クラスの女子数人からもチョコを貰う。

そんな俺を見ているかがみの視線に気付かないまま今日がスタートしたのだった。

俺は今貰ったチョコを、持っていた紙袋に修めると軽いため息をついた。

「うーん・・・俺、予想以上に目立っちゃったのかな・・・さっきから他の男子生徒からの殺気の篭った視線も届いてるしなあ・・・」

そんな事を呟きつつ自分の席に戻ると、途端にやってくる男子生徒の群れ

「おい！森村、てめえ、１人だけいい思いしやがって！」

「羨ましすぎるぞ？チキショー！！」

「・・・呪ってやる・・・」

「・・・お前、俺らを完全に敵に回したぞ！？」

「更には柊達からももらえるんだよなあ・・・いいよなー・・・お前・・・」

そんな男子生徒達の剣幕に俺はただただ困惑と苦笑をするしかなかった。

かがみｓｉｄｅ

今日はバレンタインという事もあり、こなたにも内緒で峰岸に教わり、手作りのチョコを作った私だったけど、何となく照れくさくて今日は慶一くんに会わないように先に学校へ来て心の準備をしていた私だった。

そして、私の来た３０分後位に慶一くんが教室に入ってくるのを確認すると、一気に緊張が増してきた私だったが、そんな私の心情などお構いなしに他の数人の女生徒達が慶一くんに一斉にチョコを渡

しに行ったのを見て私はその勢いに驚いていたのだった。

慶一くんも彼女らから受け取ったチョコを持って困惑の表情を見せていたのだが、私はそれを見た時になんだが少し腹が立ったのだった。

そして、自分の席に戻った慶一くんを待っていたのは血の涙を流すほどの勢いで慶一くんを羨ましがりながら何事かをまくしたてる男子生徒達の姿があった。

「・・・うーん・・・今はちょっと渡すの無理そうね・・・チャンスを待つしかないかな・・・」

そう呟いていると何時のまにか私の側にやってきた日下部と峰岸が挨拶をしてきたのだった。

「おはよー柊ー。今日はいつもの電車にいなかったよな?どうしたのかと思ったゼ?」

「おはよう、柊ちゃん。今日は早かったのね。」

という2人に私も

「おはよう、日下部、峰岸。まあちょっと色々あってね。あのさ・・・あんたらは慶一くんと一緒に今日は来たのよね?もう渡したの?」

そう訊ねると2人は満面の笑みで

「ああ。朝に慶一の家にあやのと一緒に行った時に渡したゼ?しかも渡して速攻で食ってくれたしな。何か嬉しかったよなー。」

「私ももう渡したわ。そうね、あれは本当にびっくりしたわね。で

も、私も嬉しかったかな。」

そう言う2人に私は

「そ、そんな事があったんだ・・・よ、よかったじゃない、2人とも。」

私は少し動揺しながらも2人にそう言うと日下部が

「柊も慶一に渡すつもりなんだろ?」

と聞いて来たので私は慌てつつ

「え!?あ、その・・・別に私は・・・そんな事・・・」

少し顔を赤らめつつそう返すと峰岸は

「うふふ。頑張ってね?柊ちゃん。あ、後これは私の勘なんだけど、慶ちゃんはきっと柊ちゃんのチョコもその場で食べてくれるかもしれないわよ?」

という言葉に私は驚きながら

「え?それってどういう事なのよ?」

そう聞き返すと峰岸は笑いながら

「何となくだけど分かるんだ。それに、他の子から慶ちゃんもチョコ受け取ってるけど、そっちには一切手をつけてない、って所からもそうじゃないかな?って思えるのよね。だから、柊ちゃんもちゃ

んと慶ちゃんに渡さなきゃだめよ?そのために私も頑張って教えたんだから。」

峰岸のその自信がどこからくるのかは分からなかったけど、少しでも私を心配してくれる峰岸に

「・・・ありがと、峰岸。どうなるか分からないけど、頑張ってみるわ。」

そう返事をすると峰岸は笑って頷いてくれたのだった。

峰岸に返事をした後、私は何気なく時計に目をやってまだＨＲまで時間があることを確認すると

「峰岸、日下部、ちょっとこなた達の様子、見に行ってくるわ。」

そう伝えると、私はこなた達のクラスへと足を向けるのだった。

こなたｓｉｄｅ

八坂さんの誕生日会から今日まで、私はつかさと峰岸さんに手作りチョコの作り方を習って、時間を作っては練習し、当日までに満足のいく物を作る事が出来た。

つかさは言うに及ばず、みゆきさんも納得のいく物が作れたと今朝教室で私やつかさに言っていたのを聞いていた。

そして私達は慶一君へどうやってチョコを渡そうか、その事を話あっていたのだが・・・・・・

「さてさて、つかさ、みゆきさん。私達もチョコを用意した訳だけど、どうやって渡そうか？」

そう2人に聞いてみると2人は少し赤くなりつつも

「わたしは休み時間とかにけいちゃんのクラス覗いてみて渡せそうなら渡そうかなって・・・」

「私はお昼休みとか放課後を考えていますが・・・」

その2人の答えに私も頭を捻りつつ

「うーん、学校内ではやっぱりそれしかないよね・・・じゃあ、私もその路線で狙ってみようかな？」

と、一応の意見交換をしている所にかがみがやってきた。

「おはよ、こなた、つかさ、みゆき。あんたらも、その・・・持ってきてるのよね？」

少し聞きづらそうにかがみが私達に言うと、私達も頷いて

「まあねー。この日の為に頑張って作ったからね。万事抜かりなしだよ。」

「わたしも今回はいつも以上にがんばっちゃったな～。」

「私も今回は納得のいく物が出来ました。なので、お渡ししたいと思っています。」

その私達の言葉を聞いて、かがみは言いにくそうに

「実はその事であんた達にも情報持ってきたのよ。」

と言うかがみに私は「情報?どんな?」と短く聞き返すと、かがみはさっき慶一君が教室に入ってきた時の様子等を私達に教えてくれたのだった。

「ふーむ・・・なるほど、今回もそんな事になっているのだね?」
「またけいちゃん、逃げ回るのかな?」
「そうなると、慶一さんとの接触を如何にするか、が問題になってきますね・・・」

3人でそんな事を呟きつつ、私はかがみを見て

「でも、かがみはいいよねー。」

そう声をかけると、かがみは私の方を見て

「いい、って、何がよ?」

と短く答えるかがみに私は

「だって、かがみ、慶一君と同じクラスだから渡そうと思えば私達よりチャンスあるじゃん?私達はクラス違うから結構厄介だしね。」

と言う私の言葉にかがみは軽いため息をつきつつ

「あんたが言うほどいいと言うわけでもないわよ・・・特に今日なんて常に慶一くんの机の周りには人が一杯だから近づけないしね・・・しかも、慶一くんを妬んで集まってる男子生徒の方が多いって言うのが今の状況よ・・・」

少し落ち込みつつ言うかがみに私も苦笑するしかなかった。

そして、そろそろＨＲの始まる時間が近づいたのでかがみも

「まあ、そんな訳で私はそろそろ時間だから自分のクラスに帰るわね。学校で慶一くん捕まえるのは難しいかもしれないけど、無事に渡せればいいわね。」

そう言いながら手を振って教室を出て行くかがみに私も

「かがみー、かがみも渡せる事祈ってるよー！」

とわざと大声をかけるとかがみは途端に真っ赤になって

「うっさい！！、恥ずかしいから大声で言うな！！」

と突っ込みを入れつつ、かがみは自分のクラスへと戻って行くのだった。

それを見送った私はこれからどうしようかな？と今後の行動を色々思案しつつ、自分の席に戻ってＨＲを待つのだった。

慶一ｓｉｄｅ

とりあえず朝の騒ぎを何とかやり過ごした俺は、朝から少し疲れつつもＨＲを行った。

そして、１時間目の授業が始まり、俺は休み時間の過ごし方を考えつつ気が気でない授業を受けるのだった。

休み時間になった時、俺は隙を見て教室を抜け出し、適当な所に隠れて授業開始ぎりぎりに戻るという作戦にでるのだった。

（とりあえず、これで放課後までやり過ごすしかないよな・・・はあ・・・目立つのも考え物だな・・・気をつけないと・・・）

そう考えつつ、チャイムが鳴り、授業終了の号令と同時にダッシュで教室を抜け出る俺だった。

こうｓｉｄｅ

先輩達がそんな状況に陥っている事など露知らず、私とやまとはいつものように先輩の教室に行き、先輩にチョコを渡すべく移動をしていた。

その際に、やまとが恥ずかしいからみんなの前での手渡しは嫌だとごねていたのだが、散々に説得して今は私と同行し、不満な顔をしつつも同じように先輩の教室へ向かっていた。

先輩の教室に辿り着き、教室から出てくる先輩と同じクラスの男子生徒に

「あのー、すみませんが、森村先輩呼んでもらえないでしょうか？」

と言うと、男子生徒は一瞬教室の中を見て

「森村は今いないみたいだな、さっき、授業終了と同時にダッシュで教室から出て行ったの見たからね。」

その言葉に私は少しがっかり（やまとは何だかほっとしている）し

つつ

「・・・そうですかー・・・あ、それじゃ、代わりに柊先輩を呼んでもらっていいですか？」

そう、男子生徒に持ちかけた時、丁度教室から出てくる峰岸先輩がいたので私は

「あ、すいません、やっぱりいいです。ご迷惑をおかけしました。」

そう男子生徒に言った後、私は峰岸先輩に声をかけた

「峰岸先輩、ちょっといいですか？」

私の声に気付き、こちらにやってくる峰岸先輩は私に

「あら？八坂さん、永森さん。おはよう。どうしたの？」

そう挨拶してきたので、私も

「おはようございます、峰岸先輩。先輩、慶一先輩がどこ行ったかご存じないですか？」

そう訊ねると、峰岸先輩は軽いため息をつきながら

「慶ちゃんは、たぶん、どこかに逃げ込んでるかもしれないわ。実は今朝からね・・・・・・」

と、先輩の身の上に起きていた事を説明してくれた。

「なるほど・・・それで、先輩はほとぼりが冷めるまではどこかに逃げ込んでようとして教室を抜け出たと、そういうわけですか。」

一応納得して私は少し考え込みつつおもむろに携帯を取り出すと、先輩の携帯にメールを打った。

その様子を見ていたやまとが私に

「こう？一体何をやっているの？」

と聞いて来たので私はやまとに

「先輩の携帯にメールしておいたんだよ。逃げ込む場所にアニ研の部室も開けておきますってね。あと、今日のお昼は部室で食べましょう、とね。」

その説明にやまとも考え込む仕草をしながら

「まあ、その方が無難かもね・・・こう、今回も私達でかくまいましょう。（そうすれば隙を見て渡す事もできそうだしね・・・）」

そう言うやまとに下心ありありなのが見て取れたのだが、あえて気付かないふりをして

「そうだね。それじゃ早速部室の鍵借りてきて逃げ場所確保しとこうかー。それじゃ峰岸先輩、情報ありがとうございます。先輩達も後ほど部室でお会いしましょう、それではー。」

そう言いながら先輩の逃げ場所を確保する為に部室を開ける為、私達は鍵を借りに職員室へと向かったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

あれから休み時間になるたびに教室を抜け出して隠れる為に出て行くのだが、完全には回避しきれず、何人かに捕まる事もあった。

そんな中でこうからのメールをもらい、俺はこうの用意してくれた逃げ道を使わせてもらう事となった。

こうにお礼のメールを送りつつ俺は昼休み1時間前の休み時間、アニ研部室に隠れていたのだが、そこに2人の女生徒がやってきた。

「・・・でさー・・・それが面白くてねー・・・なのよ・・・」

「・・・そうなんだ・・・でも・・・だよね・・・」

部室のドアを開けて入ってくる2人の女生徒に緊張して思わず後ずさりする俺だったが、その姿を確認するなりほっとする俺だった。

「・・・ふう、誰かと思ったら君達だったか。部室に何か用事かい？山辺さん、毒島さん。」

と、2人に声をかけると2人は俺を見て

「あ、部長ー。こんにちはー。あれ？部長はこんな所で何をしてるんですか？」

「普段はやさこに任せてる部長が珍しいですね。何か用事でも？」

と言う2人に俺は苦笑しつつも自分の事情を説明した。

「・・・・・とまあ、こういう訳でね・・・。」

俺の説明に納得する2人は

「なるほど、確かに部長は伝説の持ち主ですからねー。女の子が部長を追いかける気持もわからなくもないですよ。」

「体育祭の時もそうだけど、腕相撲や、不審者撃退は確かに目立っていましたね。実は私達もそんな先輩にも興味があったのもこの部に入ろうと思ったきっかけでもあったんですよ。」

と言う2人の説明に俺は驚きながら

「そ、そうだったのか・・・なあ、2人とも、頼みがあるんだが・・・」

俺がそう話を持ちかけようとしたとき、毒島さんが

「みなまで言わなくてもわかっていますよ。私達は先輩の居場所を他言したりはしませんから安心してください。その代わり・・・」

そう言いながら2人はお互いに頷きあうと持っていた荷物からある物を取り出して俺に

「これ受け取ってください。今日はそういう日ですし義理ではありますけど、部に入れてくださった先輩への感謝の気持です。」

「市販品ですみませんー。私達なりのお礼って事で。」

毒島さんと山辺さんは俺にチョコをくれたのだった。

「え?いいのか?わざわざすまないな。お礼と言うならこうの誕生日会で俺の頼みを聞いてくれた事に対して俺がしなきゃいけないと

は思ってたけどさ。」

そんな俺の言葉に2人は笑いながら

「あはは。先輩は生真面目ですね。そこの所は好感持てますよ。」

「みくも意外と生真面目だよねー。意外と先輩と似てるよ。でも、みくを知ってるから先輩の事も分かりますねー。」

と言ってくれる2人に俺はただただ照れていた。

その後用事を済ませた2人は俺の隠れ家を他言しないと言う事を俺に改めて伝えて部室を出て行った。

それを見届けて授業開始ぎりぎりに俺は教室へと戻ったのだった。

かがみｓｉｄｅ

何とか慶一くんにチョコを渡してしまって、この落ち着かない気持をどうにかしたかったのだけど、休み時間になるたびに慶一くんは教室を素早く抜け出してしまい、結局慶一くんと接触する事が出来なかった。

今日の昼休みはアニ研部室で取るという事を峰岸から八坂さんから預かってきた伝言で知ったのだけど、そこでもみんなの前だからたぶん渡せないな、と思い、私は軽く落ち込んでいた。

そうこうしているうちにお昼休みになってしまったので、私はとりあえずお弁当と密かにチョコを忍ばせてアニ研部室へと出向いていったのだった。

こなたｓｉｄｅ

休み時間になり、そのたびに慶一君と接触しようと3人で試みていたのだけど、私達が行く頃にはすでに教室に慶一君の姿がなく、肩透かしをくらって結局４時間目までチョコを手渡す事も出来なかった。

こうなったらアニ研の部室でのお弁当タイムで慶一君に渡すしかないと思った私達は、そのチャンスを生かそうとお弁当と共にチョコも持ってアニ研部室へと向かったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

お昼休みになり、俺はこれもまた素早く弁当を手に、教室から抜け出してアニ研の部室を目指した。

そして、部室に一番乗りした俺はとりあえず部室内に身を潜め、皆がやってくるのを待つ。

そうこうしているうちに、まず、こうとやまとがやってきた。

2人は部室のドアを開け中に入り、俺を呼ぶ。

「慶一先輩ー！私達です。隠れてなくてももう大丈夫ですよー！」

「安心して出てきていいわよ！？先輩！」

と声をかけられた俺はおそるおそる2人の前に顔を出したのだった。

「ふう・・・こう、すまないな。お前の機転のおかげで助かったよ。」

弁当を机に置いて席に着きながら俺はこうに逃げ場所を作ってくれた事を感謝する。

「いえいえ。とはいえ、ようやく会えましたね先輩。やまとも先輩を探して、ごふぅ！！」

いきなりこうの台詞が中断されたと思ったら、やまとが真っ赤な顔をしてこうのわき腹に肘鉄をかましていた。

悶絶するこう、そしてそんなこうを一瞥した後、赤い顔のまま俺の方に向き直って

「先輩？こうの言うことをうのみにしちゃだめよ？別に私は先輩の事探してなんていないし・・・」

最後の方はごにょごにょと言い訳をするやまとと未だ悶絶中のこうを見て俺は苦笑していた。

やっと、悶絶から立ち直ったこうはやまとに

「や、やまと、酷いよ・・・息止まるかと思った・・・」

涙目でやまとに抗議するが、やまとはぷいとそっぽを向いて

「あなたがあることない事言うからでしょう？自業自得よ。」

そう言ってこうを突き放していた。

そんなやり取りをしていると、他の皆もようやく集まって来た。

次々と部室に入ってくる旋律のメンバー達。

みんなは部室に入ってくるたびに挨拶してくれたのだった。

「あ、慶一君。ようやく会えたねー。今回も逃げ回ってたらしいじゃん？」

と、まずはこなたがやって来てそう言う。

「まあ、さらに目立ってしまったらしくてな・・・」

すまなそうな顔でこなたにそう言う俺。

「あ、けいちゃん。やっとあえたよ～。」

次に入って来たのはつかさだった。

「ごめんな、つかさ。こっちも色々大変でさ。」

そんなつかさに詫びる俺。

「慶一さんもご苦労なさっていますね。ですが、もう少しの辛抱ですよ？」

つかさと共にやってきたみゆき。

「まあ、何とか乗り切って見せるよ。」

苦笑しつつみゆきに答える俺。

少し間があいてみさおとあやのもやってきた。

「お、慶一。お前も苦労してんなー。でもようやく落ちついてみんな集まれそうだなー。」

「ふふ。でもまだまだ油断は禁物よ？頑張ってね、慶ちゃん。」

そう言ってくれる2人に俺も

「はは、まあ、何とか頑張るよ。」

と力なく答える俺。

そして最後にかがみがやってきた。

「あ、慶一くん・・・何だか大変そうね？大丈夫なの？」

少し元気がなさそうなかがみだったが、俺は

「まあ、なんとかね・・・今回は織部さんみたいな事にはならなそうだけどさ。」

という言葉にかがみも心持ちほっとしている表情をしていたのだった。

そして念のため部室の入り口に鍵をかけて、雑談を楽しみつつ俺達はお昼御飯を食べるのだった。

「あれ？慶一君、いつもよりお弁当の量、少なくない？」

と、俺の弁当がいつもよりも少なめな量に気付いたこなたがそう聞いてくる。

「ああ、ちょっと今日は少なめに作ったからな。」

と答える俺にこなたは

「ひょっとしておかずの買い込み忘れたとか？」

そう言ってくるこなたに俺は

「まあ、そんな所さ。さて、と・・・」

いち早く弁当を食べ終えた俺は持ってきたお茶をすすりつつのんびりとする。

そんな俺の様子を、弁当を食べ終わって見ていたこう、こなた、つかさ、みゆきの４人が俺のところにやってきて

「あの、先輩。今日はバレンタインなのでいつもお世話になってる先輩に用意させてもらいました。」

「慶一君、つかさに教わりながらだけど手作りしてみたよ？後でゆっくり食べてねー。」

「わたしも今回だいぶ凝っちゃったよ。食べてくれたら嬉しいな。」

「わ、私も不器用ながらも頑張りました。食べてもらえたら嬉しいです・・・」

と言いながら４人が俺にチョコを渡してきた。

俺はチョコを受け取りながらみんなに笑顔で

「ありがとう、みんな。俺なんかの為にわざわざ手作りしてくれるなんて、嬉しいな。」

そう答えると４人とも赤くなりながら

「あ、あはは。そう言って貰えると頑張った甲斐がありますよ。」
「な、何だか照れるねー。でもそう言ってもらえて嬉しいね。」
「あはは・・・けいちゃんに少しでも恩返しできたかな～？」
「そんな風に言っていただけてとても嬉しいです。」

とそれぞれ答えるのだった。

俺はみんなのチョコをじぃっと見つめていたが、おもむろにラッピングを外すと４人のチョコを食べ始めたのだった。

そんな俺の突然の行動に驚いた４人は

「あ、あの先輩？別にいますぐでなくても・・・」
「慶一君・・・？」
「はわわ、大丈夫？けいちゃん。」
「４人分なんてご無理をなされなくても・・・」

と心配そうに俺を見ていたが、俺はそんなみんなににっこりと笑顔を見せて

「なあに、丁度食後のデザートも欲しいと思ってた所さ。それに、みんなのチョコ美味かったぞ？」

そう答えると、途端にみんなまたも顔を赤くして照れていたのだっ

た。

そして、そんな俺の行動を見て驚いているのがもう2人いた。

かがみｓｉｄｅ

皆でチョコを持ってアニ研部室に集まり、お昼御飯を食べ終えて私はみんなの様子を見ていたのだが、やはり、こなた達が先に動いたのだった。

そして、４人同時に慶一くんにチョコをあげたのだが、その直後に峰岸が言った通りの事が起こった。

なんと、チョコを貰った慶一くんはその場でラッピングを剥ぎ取ると、４人のチョコを食べ始めたのだ。

そして、そんな様子を見ていた私に峰岸が

『ね？私が言った通りになったでしょ？慶ちゃんはきっとそうするって。』

小声でそう言ってくる峰岸に私は

『う、うん・・・でも、どうして慶一くんはあんな行動を・・・他の女子から貰ったチョコには一切手をつけてないのに・・・』

そう返すと、峰岸も首を傾げながら

『その理由は慶ちゃんに直接聞いてみないとわからないわね・・・でも、慶ちゃんの事だからきっと何らかの理由があると思うわ。だ

から、後できいてみましょ？』

私は慶一くんの行動の理由は知りたいと思ったけど、持ち前の性格が邪魔してるのもあるけれど、他の皆もいる前では聞けないなあと思いつつ、ふともう1人の同じく慶一くんにチョコを渡せずに今の慶一くんの行動を呆然と見ている永森さんに気付いたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

思いがけず、みさお、あやのだけでなく、こなた、つかさ、みゆき、こうからもチョコを貰った俺はみさお達と同様その場でチョコを食べたのだが、それを見ていたこなた達もかがみややまとも俺のこの行動にはだいぶ驚いていた。

そうしているうちにこなたが呆然とこっちを見ている2人に気付いたみたいで

「あれー？かがみと永森さんは慶一君にチョコ渡さないのー？」

とニヤニヤしながら言う。

その言葉で我に帰り、途端に慌て出す2人。

「え！？あ、えと・・その・・・」

歯切れの悪い返事になっているかがみ。

「あ、えっと・・・わ、私は・・・」

こちらも大分テンパってる様子のやまと。

そして、パニックになった2人が次の瞬間、皆が驚愕する言葉を放つのだった。

「「あ（せ）」」

「あ？」短く発した言葉を復唱するこなた

「「あんた（先輩）なんかに用意しているチョコなんてないんだからね！！」」

2人ははっきりとそう言い放ち、そして、その場にいる全員が驚愕の表情を向けていたのだった。

後編へ続く。

1999

波乱の旋律～乙女達の戦い、バレンタイン騒動記、中編～（後書き）

前後編の予定でしたが、３部構成に変更しました。
次回でバレンタイン編終了予定です。

波乱の旋律～乙女達の戦い、バレンタイン騒動記、後編～

朝から波乱含みで始まったバレンタイン。

俺は他の女子生徒達から逃げる為に、毎回休み時間に身を隠していた。

そんな俺を捕まえられずやきもきしている旋律達。

こうのはからいによって、昼休みにはなんとか俺達はアニ研の部室へと集まる事が出来ていた。

そして、このチャンスにとこなた、つかさ、みゆき、こうの４人は俺にチョコを手渡す。

俺はみんなから貰ったチョコをその場で食べたのだが、その様子を呆然と見ていたかがみとやまとにこなたが俺にチョコを渡さないのか？と促すと、かがみとやまとは慌てながら俺を見てそして、俺にあげるチョコなんて用意していない！と言い放つ。

そんな２人の台詞を聞いて、俺を始めとするほかのみんなも驚きの表情を見せていたのだった。

「・・・えーと、かがみん、永森さん？今のって、本気？」

そうこなたが２人に訊ねるが、２人は軽く青ざめつつ、やってしまった！という表情で焦っていてこなたの質問に反応できなかった。

そんな２人を見てこなたは再度先程の質問を投げかけると、２人は、

はっと気付いて視線を泳がせつつ

「・・・あ、あたりまえじゃない！別にバレンタインだからって必ずチョコをあげなきゃいけないなんてそんなきまりはないでしょ！？」

そんなかがみの言葉に便乗するようにやまとも

「そ、そうよ！チョコをあげるだけが先輩へのお礼という訳じゃないもの！べ、別にそんなものじゃなくたって・・・」

つくづく素直になれない2人にこなたは軽いため息をつきながら

「・・・だそうだよ？慶一君。残念だねえ。」

と、ここで俺に話を振ってくるこなただったが俺もこの展開に対してどう言っていいかわからず

「いや、そこで俺に振られてもだな・・・あくまで本人達の問題なわけだし・・・」

という答えを返すと、こなた以外にも他の皆も何だか呆れ顔になっていたのだった。

そんなこんなで結局昼休みは終わってしまい、俺は最後に部室を出るため残り、他の6人に先に教室へ戻ってもらうのだった。

こうｓｉｄｅ

昼休みにようやく慶一先輩と会えて、他の先輩と共に慶一先輩へチ

ョコを渡したのだけどやまとも本当は準備してきているはずなのに照れとパニックのあまりにやまとが放った言葉に私は困惑していた。

やまとも本当は先輩へチョコを渡したいと思っていたはずなので、あの言葉を予想できなかったからというのもあるのだけど、その時に同時にもう一つ、やまとの性格を見落としていた事に気付いたのだが、その時にはもう取り返しのつかない事態になっていた。

当のやまとはというと、自分で言ってしまった言葉とはいえ、そんな自分の発した言葉に相当凹んでいるみたいだった。

「・・・ねえ、やまと。どうしてあんな事言ったの?チョコを用意してる事、私も知ってるのにさ。」

その言葉にやまとは私の方を見て

「・・・うるさいわね・・・いいでしょ?もう、そんな事はさ・・・あなたに何言われようともう関係ないわよ・・・」

と、半ばやけっぱちになっている様子が見て取れた。

「そっか・・・でも、やまと、まだ、今日は終わってないんだし、チャンスはまだあると思うから頑張りなよ?最後まで後悔のないようにね。」

その言葉にやまとは短く

「・・・はあ・・・そうね、ありがとう、こう・・・」

ばつの悪そうな顔でそう私に返事をするやまとを見て私もやれやれ

と思いつつ微笑むのだった。

こなたｓｉｄｅ

この昼休みにようやく慶一君と接触できた私達は、お昼御飯の後、慶一君にそれぞれ用意していたチョコを手渡した。

その際にかがみと永森さんもチョコを渡していない事に気付いた私は、２人をけしかけたのだけど、それがどうもまずかったらしい。

２人の性格はある程度分かっていたはずの私だったが、今回はつい、それを見逃してしまっていたが為に２人の得意のツンデレが出てしまったのだった。

永森さんもそうだったのだが、かがみもかがみで、どうにも引っ込みがつかなくなってるのが見て取れたのだが、結局私達はそんなかがみに何も言えないままにお昼休みを終えたのだった。

私達３人はさっきの事で教室に戻りながら話をしていた。

「それにしても、変な事になっちゃったねー・・・。」

「そうだね・・・でも、こなちゃんも悪いよ？おねえちゃんの性格はこなちゃんもよく知ってるよね？それであんな風に言えばどうなるか、ってこなちゃんも分かってたはずだよね？」

「かがみさんは中々素直になれない性格ですからね・・・皆さんの前でああ言ってしまった手前、引っ込みはつかないでしょうし・・・」

つかさとみゆきさんの言葉に私は苦笑しながら

「あはは、ごめん、２人とも。かがみの性格の事、一瞬頭から飛んでたよ。その事に関しては私も後でかがみに謝っておくつもりだから許して？」

そう言った後私は考え込みながら

「それはともかく、かがみ、どうするつもりなのかなあ・・・」

「何かいい方法ないかな？」

「そうですね、しかし・・・今の私達が何かを言ったとしてもかがみさんの火に油を注ぎかねませんよね・・・」

３人でそう言いながら私達は考え続けていたのだった。

あやのｓｉｄｅ

朝に柊ちゃんに慶ちゃんにちゃんとチョコを渡さないとだめだと言ったのだけど、お昼休みのあの騒ぎで柊ちゃんが発したあの言葉に私とみさちゃんも困惑していた。

そして、あの言葉を言ってしまった手前、後には引けなくなってる柊ちゃんの姿を横目で見つつ、どう声をかけようかと悩んでいたのだった。

「・・・なあ、柊、よかったんか？あれでさ。」

そんな私の葛藤をよそにみさちゃんが柊ちゃんに声をかけていた。

柊ちゃんはみさちゃんを睨みつけて

「・・・うるさい！別に構わないわよ！どうしてもあげなきゃなら

ないなんて決まりはないんだからいいじゃない！もう、ほっといてよ！」

みさちゃんにそう怒鳴りつけると柊ちゃんは憮然とした表情で教室への道のりを歩いて行く。

私は怒鳴られて凹んでいるみさちゃんに

「もう、みさちゃん。だめじゃないの。そんな言い方はかえって柊ちゃんを意固地にさせるだけよ？柊ちゃんの事は私に任せて、ね？」

そうみさちゃんに言うと、みさちゃんは私に頷いてくれた。

そして、私は柊ちゃんに一言伝える為に側へ行く。

「・・・柊ちゃん。確かにあなたの言う通りあげなきゃいけない、という決まりはないわ。けど、私は、少なくとも柊ちゃんには後悔はして欲しくない、それだけは伝えたいの。柊ちゃん・・・勇気を持って？まだ、時間はあるから・・・」

私の言葉に柊ちゃんはばつの悪そうな顔を向けていたが、教室に入る間際に私に

「・・・ありがと・・・峰岸・・・ごめん・・・」

そんな短い一言を言った後自分の席に戻って行ったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

朝から色々ごたついていて、ようやく皆とまともに出会えたのは昼

休みになってからだったのだが、その時にこなた達は俺にバレンタインのチョコを渡してくれたのだった。

そして、まだ俺に渡していないかがみとやまとにこなたが言った一言が、2人の素直になれない心をあおったせいで2人が意地を張るという結果になってしまったのだった。

俺は困惑しつつもこの事態を見つめていたが、今は何かを言えるときじゃないな、と思った俺は成り行きに任せてみようと思い、ぎりぎりの時間に、再び教室に戻った。

今日の残りは後2時間、そして今、そのうちの1時間後の休み時間に再び部室に逃げ込みにいったのだが、そこには俺より先に先客がいたのだった。

「はあ、はあ・・・ふう・・・何とか逃げ切ったな・・・」

部室に飛び込み息を整えている時、俺に声をかける者がいた。

「・・・あ、先輩・・・あの・・・」

その声に振り向いてみると、そこには少し思いつめたような顔をしているやまとの姿があった。

「ん?その声はやまとか?どうした?やまと。」

やまとは何度も周りを見渡してなおかつ俺を上目使いで見つつなんだか踏ん切りをつけられない感じで落ち着かない様子を見せていたが、やがて何かを決意したようで俺をきっと見据えると

「あ、あの・・・先輩・・・さっきは・・・つい勢いであんな事いったけど・・・その・・・ほ、本当は先輩に渡す物があって・・・その・・・こ、これを・・・先輩に・・・あげる・・・」

顔を真っ赤にしながら俺に持っていたチョコレートを差し出してくるやまとを見て俺は苦笑するとそれを受け取って

「ありがとうな、やまと。貰えて嬉しいよ。」

そう言うとやまとは赤い顔をほころばせて

「そ、そう?それならよかったけど・・・ごめんなさい、先輩・・・私・・・」

先程の事で罪悪感があったのだろう、やまとはすまなそうに俺に謝ってきたが、俺は笑いながら

「いいさ。俺は気にしちゃいないよ。それに、お前との付き合いは長いんだ。性格くらいは把握してる。まあ、あおったこなたも悪いけどな。」

その言葉にやまとは心持ちほっとしているようだった。

そんなやまとを見て、そして貰ったチョコに視線を移し、俺はチョコのラッピングを剥ぎ取るとやまとから貰ったチョコをその場で食べ始めたのだった。

そんな俺を見てやまとは慌てながら

「せ、先輩。別に今食べなくても後でゆっくり食べてくれればそれ

で・・・」

そう言って一応止めはしたものの、俺はそれに構わずやまとから貰ったチョコを完食する。

「ん。中々美味かった。あらためてありがとな、やまと。」

俺のお礼の言葉に照れながらもやまとは俺に

「よ、喜んでくれたのならそれで・・・でも先輩、先程の泉先輩達の時もそうだけど、どうしていきなり受け取ったチョコを食べたの？先輩は他の子からももらっているってのを聞いていたけどそっちには手をつけなかったって先輩達も言ってたわ。だから私、その事がずっと疑問だったのよ。」

そう聞いて来たので俺は軽く目を閉じて少し考え込むとある程度考えが纏まったのでそっと目をあけてやまとに
理由を話すのだった。

「しいていうなら・・・お前らに対するこれが、俺の誠意ってやつかな。」

「誠意？」

「そうだ。俺とあの子達ととそしてお前らとの関係には違いがある。それは、やまと達は中学からだけど、こなた達も2年に上がってから付き合うようになった。その絆はつい最近俺を知ったあの子達とは比べ物にならない程、濃密で深いものだ。そして俺はその事をとてもありがたく、そして嬉しく思っている。だからこそ、あの子ら以外から貰うお前らからのチョコを何よりも先に食べる事が俺の、みんなへの絆の証であり、感謝の心だって事さ。」

そこまで話して一旦言葉を切り、軽く深呼吸した後

「俺は不器用だからな。皆への感謝の思いを表す上手い方法を知らない。だからこそ俺の出来る事で皆に対しての俺の思いを見せるにはどうすればいいだろう?って考えた時、こういう方法しか思い浮かばなかったんだよな・・・。」

そう言って照れながら話す俺に、気付くとやまとは瞳に涙を貯めながら俺を見ていたが、やがて俺の胸に飛び込んでくると

「ありがとう・・・先輩、本当に・・・私達の事を思ってくれて・・・何よりも・・・絆を・・・重んじてくれて・・・嬉しい・・・本当に・・・」

俺の胸の中で泣きながらやまとはしばらくの間嬉し涙を流していた。

俺はそんなやまとの背中を軽くぽんぽんと叩きながらやまとの気が済むまで受け止めつづけていた。

そして、時間ぎりぎりになり、部室から出て行く時にやまとは

「ねえ、先輩。泉先輩達にも今の事、話すのよね?きっと、皆喜んでくれると思うわよ?」

やまとは嬉しそうに俺にそう言いながら手を振って去って行く。

そんなやまとに俺は頷きを返して教室へと戻っていったのだった。

その後、残りの時間を上手く逃げ切り、今日の学校は終わりを告げたのだった。

学校から帰る時、こなた達と一緒に帰ったのだが、その時に先程部室でやまとにされたのと同じ質問をされたので、俺はあの時やまとに言った言葉をそのままこなた達にも伝えると、こなた達も嬉しさの涙を流して喜んでくれたのだった。

そして結局最後まで学校ではかがみと接触する事が出来なかった俺だった。

そんなかがみはみさおやあやのと一緒に帰っていたらしいのだが。

かがみｓｉｄｅ

峰岸に言われて私はとりあえず慶一くんに接触を試みようとしたのだが、私の読みがことごとく外れてた結果、慶一くんの隠れているポイントを見つけられずにその日の学校が終わってしまった。

そして、チャンスを生かせなかった事を落ち込んでいる私に気を使ってくれて峰岸と日下部が私と一緒に帰ってくれたのだった。

「・・・柊ちゃん、元気だして？まだ、学校は終わったけど今日という日は終わっていないわよ？」

「そうだぜ？柊ー。まだ時間あるんだから最後まであきらめんな、な？」

そんな２人の憐れみが身にしみていたが私は

「・・・うん・・・ありがとう・・・峰岸、日下部・・・」

結局立ち直れないまま家に帰ったのだった。

そして、自室で落ち込みつつ、どうしようかなと悩んでいる私だったのだが、散々迷ったあげく、峰岸の言っていた勇気を振り絞ってみようと思い、家についてから3時間後、私は慶一くんの携帯に電話を入れたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

その日逃げ回った末に疲れ果てた体を引きずって俺は家へと辿り着く。

だが、そこに、俺を待っている3人が居たのだった。

「あ、先輩、お帰りなさい。」
「お帰りを・・・お待ちしてました・・・。」
「そろそろ時間だと思ってましたっス。」

そんな風に俺に声をかけてくれる3人に俺は驚いて

「ゆ、ゆたか、みなみ、ひより、お前ら、どうして?というか受験はどうした、受験は。」

そう訊ねると3人は笑って

「もう済ませましたよ。先輩。」
「・・・後は、結果発表を待つだけです・・・。」
「死に物狂いで頑張りましたっス。それで、発表までは時間も出来たし、今日はこういう日っスからね。3人で相談して来てみたんです。」

そう言って3人はにっこり笑うと俺にチョコレートを差し出してきた。

「これ、私からです。去年から今までお世話になったお礼です。」
「・・・クリスマスプレゼントも、嬉しかったですから・・・」
「先輩に貰った気合とおまじないのお返しっス。受け取ってください。」

という3人に俺も笑いながら

「そっか、わざわざありがとな。受験終わったか。全員合格してるといいけどな。さて、と・・・」

俺はそう3人に言うと、おもむろにチョコの包みを解いてその場で食べ始めた。

そんな俺の行動に驚いた3人は俺に

「せ、先輩、今じゃなくても後でもいいですよ。」
「・・・落ち着いてから食べてくれれば・・・」
「3人分はきつくないスか?」

と心持ち心配そうな顔を向けて来たが、俺は

「心配ないよ、それに・・・・・・」

こなた達ややまとに言った言葉を伝えると、3人とも感激していたのだった。

俺はチョコを食べた後、3人を家に上げてお茶をご馳走してしばら

く間、談笑していたが、みなみが帰る時間となったので俺は3人を駅まで送っていったのだった。

そして家に戻り、自室で着替えを済ませてから夕食の支度をする為にキッチンへ行こうとしたのだが、そこにかがみからの電話が入ったのだった。

俺は電話に出ると

「もしもし?かがみか。どうしたんだ?」

「・・・あ、慶一くん?あ、あのさ、私、前に慶一くんの家にまつり姉さんとお世話になった時にね?ラノベを忘れたやつがあったんだけどさ・・・・・・」

「・・・ん?かがみ?」

「・・・あ、ご、ごめん。それを・・・その・・・・・・」

「・・・・・どうしたんだ?」

「・・・あ・・・明日、学校で渡してくれないかなーって・・・」

「ん?用件はそれだけなのか?なら、引き受けるが。」

「・・・え?、あ、うん・・・それだけ・・・お願いね・・・慶一くん・・・」

「あ、ああ、わかった。」

俺がそう言った後かがみはがっかりしたような声で電話を切った。

そんなかがみの態度を思い起こしつつ、とりあえず頼まれたラノベをかがみの泊まっていた部屋から探し出すと、俺はそれを手にとり、しばらく考え込んでいたが、軽くため息をついた後、俺は出かける準備をして自転車にまたがり、柊家を目指したのだった。

かがみｓｉｄｅ

思い切って勇気を振り絞って慶一くんに電話を入れた私だったのだが、結局、それをだしにして慶一くんを呼ぼうという私の思惑は見事に失敗に終わったのだった。

私は素直になれない自分の性格をこの時ほど恨めしく思ったのだった。

そうして後悔しているうちに、もうチョコの事はどうでもいいや、と思った私は、このチョコを自分で処理してしまおうと思い、ラッピングを解いて一粒づつチョコを食べ始めたのだった。

凄く悲しい気持になりながら・・・。

一粒一粒を悔しいような空しいような気持でゆっくりと食べて行く。

最後の一個になる頃には私は気付けば情けなさで泣いていた。

（私ってどうしていつもこうなんだろう・・・自分が情けない・・・）

そう思いつつ最後の一個に手を伸ばそうとした時、家の呼び鈴が鳴るのだった。

そして少しして、慶一くんが来たとお母さんから呼ばれ、私はチョコに伸ばした手を止めた。

慶一ｓｉｄｅ

かがみからの電話を受けて俺はかがみが本当に言いたかった事は別

にあるんだろうなという事がありありとわかったのでその事を確かめようと思い、柊家へ自転車を飛ばしていた。

そして、いつもの半分の時間で柊家に辿り着いた俺はかがみから頼まれたラノベを手に、柊家の呼び鈴を鳴らす。

「よう、慶一。お前もここに用事か？」

人が出てくるのを待っていた時に俺に声をかけてくる人がいたので声の方を振り向くとそこには龍兄がいた。

「あれ？龍兄じゃないか。どうしたんだよ？こんな所で。」

俺が不思議そうな顔でそう訊ねると龍兄は苦笑しながら

「いや、実は今日はバレンタインだろ？だから、まつりさんにどうしても来て欲しいって頼まれちゃってなー・・・。」

その答えに俺も苦笑しながら

「うーん・・・まつりさんは本気みたいだなあ・・・龍兄、ここにはもう1人龍兄を狙ってる人いるの忘れてないよな？せいぜい修羅場にはならないように気をつけてくれよ？」

俺の言葉に龍兄は”はっ”として

「そういえば・・・いのりさんもいたんだよな・・・うーむ・・・まあ、なるようになれ、だな。それはそうと、慶一こそどうしてここに？」

その言葉に俺は後頭部を掻きつつ

「かがみの忘れ物届けに来た、ってのもあるんだけどさ・・・かがみも話したい事あるみたいだったし、話聞いてやろうと思ってさ・・・」

最後は少し複雑な表情で俺は龍兄に告げると龍兄は軽いため息を一つついて俺の肩を叩くと

「そっか・・・まあ、何があったかはわからないが、お前も頑張れ。かがみちゃんの悩みなのかもしれないが、解決するといいな。」

そう言ってくれたので俺も頷きながら

「ああ、そうだな。ありがとう。龍兄。」

そうお礼を言うと龍兄は軽く笑って応えてくれた。

そうこうしているうちに玄関が開いてみきさんが俺達を出迎えてくれたのだった。

「はいはい。あら?森村君と龍也さんじゃない?家に何か用事?」

その言葉に俺達もそれぞれの目的を言う。

「はい、実はかがみの忘れ物を届けに来たんですよ。」

「俺はまつりさんに呼ばれましてね。」

そう告げるとみきさんはかがみとまつりさんに声をかけた。

「かがみー!?森村君が来てるわよー!?まつりー!?龍也さんが来てくれたわよー!?」

その声がかかると同時にまつりさんが凄い勢いで玄関へやってきて

「あ、龍也さん、来てくれたんだー。いらっしゃーい。あれ?森村君も一緒なの?」

俺が返事をしようと声をあげようとした時少し遅れていのりさんも出迎えにやってきてくれた。

「まつりー?抜け駆けは許さないわよ?こんにちは。龍也さん。それに、森村君も。さあ、あがってあがって。」

といういのりさんの言葉に苦笑しつつ俺は

「はは、それじゃお邪魔します。」

と言って上がり、龍兄も圧倒されつつも

「お、お邪魔します。」

と言って家に上がったのだった。

上がってから俺は2人に引き止められ、しばし待つとまつりさんといのりさんが俺にチョコをくれた。

「はい、森村君。義理だけど私から。」

「これは私からだよ?義理だけど味わって食べてよね。」

と言う2人に俺も嬉しくなり

「ありがとうございます。それと、龍兄の方はお手柔らかに。」

そう言って2人からチョコを受け取った後俺は龍兄と2人に

「それじゃ、俺はかがみの所へ行って来るから龍兄?2人の相手は任せたよ?まつりさん、いのりさん。龍兄をよろしく。」

その言葉に2人とも満面の笑みで頷いて困惑顔の龍兄を引きずって連れて行く。

龍兄は俺に何か言いたそうにしていたが、俺はあえて無視を決め込んだ。

それを確認した後、俺はかがみの部屋へと足を向けた。

かがみの部屋の前へ来た時、丁度部屋から出てくるつかさと出会った。

「あ、けいちゃん。来てたんだ。いらっしゃ〜い。ひょっとしておねえちゃんに用事?」

声をかけてくるつかさに俺は

「よっ、つかさ。お邪魔してるよ。まあ、そんなとこ。忘れ物もあったみたいだからそれを届けるのも目的だけどな。」

そう返事するとつかさは少し考え込む仕草をした後俺に

「ねえ、けいちゃん。お昼休みにおねえちゃんが言った事、きっと本心じゃないと思うんだ。だから・・・」

それ以降の言葉を紡ごうとするつかさの口元に人差し指を立てて俺は

「わかってる。まあ、こっちは任せてくれ。つかさ、わざわざ気を使ってもらってすまないな。」

俺がそう言うとつかさはほっとしたようなそれでいて嬉しそうな表情になって

「ううん。いいんだ。みんなで笑っていたいもん。だから、おねえちゃんにも悲しい思いしたままでいて欲しくないから、お願いね？けいちゃん。」

その言葉に俺は黙って頷くと一つ深呼吸をした後かがみの部屋をノックした。

少し待つと中からかがみが

「・・・慶一・・・くん？」

とおずおずと聞いて来たので俺は

「ああ。俺だ。中入ってもいいかな？」

と聞くと、少しの間の後

「・・・うん、いいよ。どうぞ・・・」

そう言ってくれたので俺はかがみの部屋のドアを開けて

「よっ、かがみ。頼まれた忘れ物届けにやってきたぞ?」

そう挨拶するとかがみはすこし呆れたような表情で

「電話でも言ったけどさ・・・明日でよかったのよ?なのにわざわざ持ってきてさ・・・あんたも暇よね・・・」

そう言うかがみの顔に俺は涙の跡のような物を見つけたが、あえてその事は口にせずに

「あはは。まあ、そうかもしれないな。ほらかがみ、頼まれていた物だ。」

そう言って俺はかがみに持ってきた忘れ物のラノベを手渡す。

「・・・あ、ありがと・・・でも・・・助かったかな?」

そんな風に言うかがみに俺も頷きつつ、俺はもう一つの目的の為にかがみに

「・・・なあ、かがみ。お前、俺に何か言いたい事、あったんだじゃないか?」

そう切り出すと、かがみは驚きで軽く目を見開いていたが、やがて

「・・・そんな・・・言いたい事・・・なんて・・・」

少し落ち込み気味にそう言うかがみに俺は軽いため息を一つつくと

「あの電話の話し方で、話したいことなんてない、って言われても説得力ないぞ？」

その言葉にますます落ち込むかがみを見つつ、俺は部屋を見回すと、かがみの机の上にあるラッピングの解かれたチョコを見つける。

そこには最後の一個が残っていた。

俺はかがみの机に近づき、その最後の一個をおもむろに手にとって

「なあ、かがみ。これ、もらっていいか？」

そう訊ねると、かがみは途端に慌てながら

「え？あ、ま、待って？そ、それは・・・」

そう言うかがみを見つつ、俺はその一個を口の中へほおりこんだ。

「お？結構美味いな、これ。」

その俺の言葉を聞いたかがみは急に涙を流し始めた。

「・・・ごめんなさい、慶一くん・・・本当は・・・本当はね？それを慶一くんに渡したかったの・・・でも、私はこんな性格だから、素直に言えなくて・・・慶一くんに渡すチャンスを逃しちゃってそれで、最後の勇気を振り絞ってさっき電話をかけたけど、そこでも言えなくて・・・もう渡す事出来ないって思ったら、どうでも良くなって・・・慶一くんに渡す為のチョコ、自分で食べちゃった・・・ごめん・・・ごめんね・・・ちゃんと渡せなくてごめん・・・」

俺はそんな風に泣きじゃくるかがみをそっと抱きしめて

「いいさ・・・お前の性格はやまととそっくりだからな・・・素直になれないその気持は俺にはわかるから・・・それに、最後の一個だったけど、あれ、かがみが手作りしてくれたんだろ?凄く美味かったよ。お前の気持が篭ってた。だから、もう泣くな、な?」

そう言いながらかがみの背中を優しくぽんぽんと叩きつつかがみが泣き止むまでそのままでいた。

しばらくして泣き止んだかがみが俺から体を離しつつ

「みっともないとこ見せちゃったな・・・何だか恥ずかしいわ・・・」

そんなかがみに俺は笑いながら

「時にはそういう事だってあるさ。でも、素直に気持、出せたじゃないか。」

俺の言葉にかがみは微笑みながら

「ふふ。そうね・・・でも、やっぱり、普段はこんな風に言えそうもないわ・・・」

自嘲気味に言うかがみに俺も苦笑しつつ

「それもかがみの性格だから仕方ないさ。」

そんな言葉を交わした後かがみが思い出したように笑いながら

「あはは。でも峰岸の言った通りね。慶一くん、チョコをその場で食べてくれた。何だか嬉しい。」

その言葉に俺は照れながら

「それが俺のお前らへの誠意だからな。俺なりの、さ。」

案の定こなた達同様その理由を聞いて来たので俺はかがみに説明するとかがみは嬉しそうな顔をしていた。

「・・・慶一くん、あのさ?」

少し考える仕草をした後かがみが俺にそう聞いて来たので俺は

「ん?なんだ?かがみ。」

そう聞き返すとかがみは照れたような顔になって

「今からもう一回、あんたにあげるチョコ作らせてくれないかな?折角食べてくれたけどさ、結局は私勝手に絶望してチョコほとんど食べ尽くしちゃってたし、あれ一個だけっていうのが私としても納得いかないからさ。」

そんなかがみの言葉に俺は

「はは。なら、かがみの納得いくようにすればいいよ。俺は出来るの待ってるから。」

その俺の言葉にかがみは嬉しそうに頷いて部屋を出るとつかさを呼んでつかさに見てもらいながら改めてチョコ作りをするために台所へと向かった。

そして俺はさっきのよりももっと立派なチョコを改めてかがみからもらったのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんが家に来た目的が何なのか、その意図がわからなかった私だったが、ラノベを私に返した後慶一くんは私が電話した訳に気付いてくれていたみたいで、私の言いたかった事を聞きに来てくれたのだった。

色々凹んでいた事もあって、慶一くんの前で感情を爆発させてしまった私だったが、それでも、私の話を聞いてくれ、そして私の作ったチョコを食べてくれた事がとても嬉しかった。

そして、慶一くんがチョコを貰ってすぐに食べていたあの行動の意味も教えてくれたのだが、それを聞いた時、私はとても嬉しい気持になったのだった。

折角食べてもらったチョコだけど、結局私が食べ尽くした所為でほとんど慶一くんに食べてもらえなかった分に納得いかなかった私は、つかさに教わりながら改めてチョコを作って慶一くんに手渡した。

慶一くんはまたしてもその場で食べてくれようとしたのだけど、少なかったとはいえ、もう食べてもらっていた事もあったので後で食べて欲しいと慶一くんを説得して持ち帰ってもらったのだった。

かくして最低になるかと思われた私のバレンタインも最後には上手く行った事に私は密かに喜んでいたのだった。

（お昼休みにあんな事になってしまってもうだめかな?と思っていたけど、慶一くんが私の事に気付いてくれた。嬉しかったな・・・。それに本当にチョコをその場で食べてもくれたしね・・・その意味も聞いた時は本当に私たちの事を大事に思ってくれてるんだ、ってわかったし・・・やっぱり慶一くんは私達にとって、側にいて欲しい人よね・・・）

そんな風に考えながら、明日からの学校生活に思いを馳せる私だった。

慶一ｓｉｄｅ

色々あったバレンタインだったけど、とりあえず今日1日を無事に過ごす事ができたようだ。

かがみの話を聞きにいき、その問題を何とか解決できた事にもほっとしていた。

そして、かがみから改めてもらったチョコも家に帰った後しっかりと完食したのだが、流石に一日にチョコを食べ過ぎた俺は、その日の夜には胃腸薬のお世話になったのだった。

それでもみんなに俺の誠意を示せた事を嬉しく思いつつ、これからも皆と居たいと思う俺だった。

2027

2028

波乱の旋律～乙女達の戦い、バレンタイン騒動記、後編～（後書き）

これにてバレンタイン終了です。ここからまたゆるゆるな日常を描きつつ、2年生の終わりを目指します。

2029

新たな旋律～秋葉での出会い、パトリシア・マーティン～

みんなからの気持を受け取り、その感謝の気持をその場で貰ったチョコを食べる事で示し、最後はかがみの悩みを解決して色々あったバレンタインが終わった。

そして、俺は昨日のチョコの食いすぎに胃をもたれさせながらもいつもの時間に目を覚まし、朝食作りと学校へ行く用意をして着替えを済ませると洗面所に顔を洗いに下に降りたのだが、ふいにキッチンから漂ういい匂いと聞き覚えのある声での鼻歌に気付いた俺は、キッチンを覗きに行った。

キッチンの中を覗きこむとそこには上機嫌で鼻歌を歌いながら朝食の準備をするかがみの姿があった。

俺は驚きつつもかがみに声をかける。

「お、おはよう、かがみ。今日は一体どうしたんだ？」

そう声をかけるとかがみは満面の笑顔でこっちに振り向き

「あ、おはよー♪慶一くん。ちょっと思い立ってねー。もうすぐ朝御飯できるから準備して待っててね。」

その、物凄いいい笑顔に俺は圧倒されつつ

「あ、ああ。わかった。じゃあ、ちょっと顔洗ってから戻ってくるから。」

そう応えるとかがみも頷いて

「うん。こっちは任せてね。それじゃいってらっしゃーい♪」

朝からのあまりのテンションに少し引き気味になりつつも俺は顔を洗いに洗面所まで行くのだった。

洗面所から戻り、キッチンに入った俺はかがみを横目で見つつ、席につく。

それと同時に朝食も出来上がったようなので、かがみが作った料理を持ってきて俺の前に並べてくれた。

今日の献立は、甘シャケの焼いた物とひじきの煮付け、そしてきゅうりのおしんこと味噌汁だった。

俺は並べられた料理を見て

「へえ?これは中々美味そうだな。かがみ、早速いただくよ。」

と言う俺の言葉と共にかがみは俺に茶碗に盛った御飯を渡してくれる。

「どうぞ、召し上がれ。今日は私、頑張ったからね。」

御飯を俺に渡しながら笑顔でそう言うかがみを見ながら俺は早速箸をつける。

「ふむ。魚の焼き加減も丁度いいな。それに、この煮付け、手作りじゃないか?結構手間かかるやつだけどこんなの食材で買ってきて

たっけな？」

そう言うと、かがみは照れながら

「ありがと。その煮付けは昨日の晩につかさに教わりながら作ったのよ。何回か失敗しちゃったけど最後は上手くいったからね。」

その言葉に俺は感心しながら

「大したもんだよ、かがみ。それに味噌汁は相変わらず美味いしな。」

得意の味噌汁を褒めるとかがみは赤くなって

「それは慶一くんやみんなや、龍也さんも褒めてくれたからね。でもやっぱり褒めてもらえたら嬉しいな。」

そんなかがみに俺も微笑みを返す。

するとかがみはますます赤くなって視線をそらした。

そんな感じで朝食を取りつつ談笑している時、かがみに今日の事を訊ねた。

「なあ、かがみ。今日はどうしてこんな事を？」

そう訊ねるとかがみは赤くなって少しもじもじとしながら

「・・・昨日のことがさ・・・凄く嬉しかったから・・・だから・・・何かお礼したいな、って思ってさ・・・ひょっとして、迷惑だっ

たかな？」

上目使いでそう聞いてくるかがみに俺は少しどきりとしつつも

「いや、そんな事ないよ。いつ来てもいいように鍵渡してあるし、それに、俺もありがたかったからさ。」

そんな俺の言葉を聞いてかがみは表情をほころばせて嬉しそうに

「ふふ。そう言ってくれるなら来た甲斐もあったってもんね。よかった、喜んでくれて。」

笑顔でそう言うかがみに俺も笑顔で頷き返したのだった。

そして、お茶を出そうと準備してる時に玄関の呼び鈴が鳴ったので、あやのが来たのかも、と思いながら

「かがみ、あやのが猫の世話に来たかもだ。俺は迎えに行ってくるから片付け頼むな。」

かがみにそう言うとかがみは

「わかったわ。こっちは任せといて。峰岸、出迎えてきなさいよ。」

と言うかがみの言葉に頷いて俺は玄関へと向かった。

「はいはい、今開けるよー。」

そう言って玄関を開けるとそこには思ったとおり、あやのの姿があった。

「おはよう、慶ちゃん。今日も寄らせてもらったわ。あら？」

あやのが玄関に置いてあるかがみの靴に気付いたようで、俺に

「慶ちゃん、今誰か来てるの？あら？この靴は、確か・・・ひょっとして柊ちゃん？」

あやのの言葉に俺は頷きながら

「ああ。かがみが今朝、俺に朝食を作ってくれに来たんだ。俺がいつも作る時間にキッチンにいたからびっくりさ。」

そう説明するとあやのは驚きつつ

「まあ、そうだったの。でも、珍しいわね、柊ちゃんがこういう事しにくるなんて・・・昨日何かあった？」

少し考え込みつつそう聞いてくるあやのに俺は

「実はな・・・・・と言う訳でな。」

と昨日かがみの家に行った時の事を説明すると、あやのは嬉しそうな顔になって

「そっか、慶ちゃん、柊ちゃんのメッセージに気付いてくれたのね。」

そう言ってくるあやのに俺は照れつつ

「ま、まあ、あの話し方で気付けないようじゃな・・・でも、かがみも自分の気持出せたみたいだからすっきりした顔してたな。」

そんな俺にあやのは笑顔を向けながら

「ふふ。ありがとう、慶ちゃん。柊ちゃんの事気付いてくれて。」

嬉しそうなあやのの顔を直視できず、視線をそらしながら俺は

「かがみも俺にとっては大事な仲間であり友人だからな。」

ほおを掻きつつそう答えるとあやのは少し呆れるような表情を見せていたが、すぐに笑顔になると

「ともあれ、今日もやる事やっちゃうわね?それじゃ上がるわ、慶ちゃん。」

そのあやのの言葉に俺も頷きながら

「ああ、いつもありがとな、あやの。今日もお茶用意してるから落ち着いたら学校いこうぜ。」

俺の言葉に頷くあやのだった。

そしてキッチンに戻ってくる俺をかがみが出迎えてくれた。

「おかえり、やっぱり峰岸だったの?それにしては少し遅かったんじゃない?」

と言う言葉に俺は苦笑しながら

「はは、すまない。少し話し込んじゃってな。さて、それじゃお茶用意するよ。かがみ、カップとソーサー頼む。」

そう言うとかがみも「わかったわ。」と言ってお茶セットの準備をしに行ってくれた。

俺はその間にお湯を沸かし、お茶の用意をする。

そして、そろそろ鞄取ってきたほうがいいなと思った俺は準備を終えた後鞄を取りに2階へと行く際にかがみに

「かがみ、鞄取って来ちゃうからそこで待っててくれ。」

と言う俺の言葉にかがみも頷く。

それを確認してキッチンを出る時、あやのとすれ違った。

「あら、慶ちゃん。忘れ物かしら?」

と言うあやのに俺は

「今、鞄を取りに行こうと思ってな。あやのはかがみとキッチンにいてくれ。」

そう告げるとあやのも頷いて「わかったわ、いってらっしゃい。」

と言ってくれたのだった。

あやのｓｉｄｅ

今日もいつものとおり、慶ちゃんの家の猫の世話にやってきた私だったが、私を慶ちゃんが出迎えてくれた時玄関に柊ちゃんの靴が置いてあるのを見つけた。

その事を慶ちゃんに聞くと、朝早くに家にやって来て朝食の準備をしているという。

驚いた私は慶ちゃんに事情を聞いたのだけど、昨日の事が原因なのだと慶ちゃんは説明してくれた。

そして、柊ちゃんの心の叫びに気付いてくれた慶ちゃんを私はとても嬉しく思ったのだった。

いつものように猫を世話を終えてキッチンへ向かうと、鞄を取りに行くと言う慶ちゃんとすれ違った。

慶ちゃんを軽く見送って私はキッチンへと入って行くとそこにはこちらからみても明らかに上機嫌な柊ちゃんが私を出迎えてくれたのだった。

「あら、峰岸、いらっしゃい。お茶の準備できてるわよ?」

そう言って席につくように促してくれる柊ちゃんに

「ふふ。その様子だと、昨日は上手く行ったみたいね。よかったわね、柊ちゃん。」

私がそう言うと柊ちゃんは顔を赤くしつつ照れながら

「あはは、本当は最後の勇気振り絞った時も失敗しちゃってさ、諦めかけてたんだよね。でも、慶一くんが私の言いたかった事に気付いてくれてね。」

嬉しそうに言う柊ちゃんに私は頷きながら

「時折鋭い時あるわよね、慶ちゃん。でも、私もほっとしたわ。」

そう言うと柊ちゃんは私に

「うん。そうね・・・。ありがと、峰岸。あんたに言われた通り、諦めないでよかった。後悔せずに済んだものね。」

そんな柊ちゃんの言葉に私は

「どういたしまして。私も柊ちゃんのお友達だからね。私に出来ることなら力になるわ。」

そう言うと柊ちゃんも私に笑ってくれたのだった。

そうこうしているうちに慶ちゃんがキッチンに現れたので

「お帰り、慶ちゃん。」

と言って出迎えてあげたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

鞄を取ってキッチンに戻るとかがみとあやのが楽しそうに談笑していた。

俺はそんな姿を見て改めて微笑ましい気持で2人を見ていたのだった。

そして2人にお茶を振舞って俺達は学校へ向けて出発する。

いつもの電車に乗るといつもの時間につかさも電車に乗って来ていたので俺達は合流する。

こなたとも合流していつもの朝の通学風景になった。

「おはよ、つかさ、こなた。改めて、昨日はありがとな。チョコ美味かったよ。」

そう言うと2人とも顔を赤らめながら

「あはは。喜んでくれたなら嬉しいよ。とはいえびっくりはしたよー？突然食べ出すんだもんね。」

「そうだよね～。でも、けいちゃんの本心聞けて嬉しかったな。」

俺はそんな2人の言葉に照れながら

「ま、まあ、それしかチョコをくれたお前らに報いる方法を思いつかなかったってのもあるけどな。」

そんな俺の言葉を聞いた2人はとても嬉しそうな顔をしていたが、俺はそんな2人の顔を照れで直視できずに視線をそらした。

そんな俺をニヤニヤとしながら見ているこなたに、かがみとあやのも挨拶をするのだった。

「おはよう、こなた。つかさ、ちゃんと起きれたみたいね。」
「おはよう、泉ちゃん、妹ちゃん。良かったね、慶ちゃん喜んでくれて。」

そんな2人にこなたとつかさも

「おはよー、かがみ、峰岸さん。うん、頑張った甲斐があったよー。」
「おはよう～おねえちゃん。何とか起きれたよ～？それと峰岸さん、喜んでくれた事も嬉しいけど、けいちゃんの本心と共に食べてもらえた事も嬉しいよ？」

そんな2人にかがみもにこにことして、あやのも微笑みながら頷いていた。

そんなかがみの様子を見たこなたが

「かがみんもその様子だと、慶一君に渡す事出来たみたいだね？」

さり気なくこなたはかがみに突っ込まれるような事を言ったのだが、今日のかがみはそんな事など意にも介さずににこにこにこの顔を崩さず

「昨日、渡せたわよ？私も嬉しかったしね♪」

そんなテンションのかがみにこなたがかなり引き気味になりながら

「・・・かがみが壊れた・・・」

と呟くのを聞いて俺は苦笑していた。

その後もかがみのテンションは落ちる事を知らず、学校に行ってもこのテンションを持続しつづけて、みゆき達すらも若干引かせていたのだった。

ちなみにかがみのテンションはそれから3日間は持続しつづけて、そんなかがみを見ているこなたは大分疲れているように見えた。

そして、その次の日は休日だったのだが、今日は珍しく全員に用事があったようで、俺は久々に1人での休日を過ごす事となった。

軽く部屋の掃除をして、猫に餌をやったりと、午前中は家の事を重視で動きまわり、午後からはラノベの新刊等を見るのとパソコンのパーツを探す為に秋葉腹へと向かった。

秋葉に着いてパソコンのパーツを選び終えて次はア○メ○トかゲ○ズにでも立ち寄ろうかと考えながら歩いていると、何やら助けを求める女性の声が聞こえてきた。

「・・・・・デス！ダレかワタシにミチをオシえてクダサイ！」

言葉の感じから、どうも日本人ではなさそうだなと思いつつ、声のする方を見てみると、そこにはショートの金髪でボーイッシュないでたちの外人の女の子がしきりに道行く人に声をかけて道を尋ねようとしていたが、外人ともなるとどうにも目をそらす人が多いみたいで、声をかける人かける人にことごとく無視をされていた。

その子の様子を見ていると相手にしてもらえない状況から、徐々に落ち込みの表情を見せ始めていたので、俺はその様子を見てため息を一つつくと、その子の側にいって声をかけた。

「あー・・・エクスキューズミー・・・」

と言う俺の呼びかけにその子はこちらを振り向いて困ったような表情で

「えーと・・・ワタシですヨネ?シンパイいりませんー。ニホンゴわかりマスから。」

そう返してきたので、俺は驚いて

「え?あ、そ、そうなんだ。えーっと・・・何だか困っているみたいだったからね、お節介かな?と思ったんだけど声かけさせてもらったよ。君は何か聞きたい事あるんじゃないか?」

その子にそう言うと困ったような表情で頷きながら

「ジツはそうなのデース。ワタシ、二ホンのアニメとかダイスキなのデスが、このマチにはア○メ○トとやゲー○ーズというショップをサガシにキタデスヨ。けど、ショップのバショがよくワカラナイのでミチをキキたかったのデスガ、ミンナワタシのコエにコタエてくれないのでコマってイマシタ。」

その子の言葉に俺は頷きながら

「なるほどね・・・うーん・・・君の行きたがっていた店なら俺が場所知ってるし、丁度行こうとしてたところだから一緒に行くかい?」

俺がそう持ちかけると、その子は途端に笑顔になって

「ホントですか?サンキューデス。それではサッソクいきまショウ。」

そう言いながら俺の手を取って走り出そうとするその子に俺は

「ははは、慌てなくてもいいよ。ところで、えーっと・・・君はなんて呼べばいいかな?」

俺がそう訊ねるとその子は笑いながら

「そうイエバまだナマエをイッテませんデシタ。ワタシのナマエはパトリシア・マーティンとイイマス。アナタのナマエはなんとイウのデスか?」

自己紹介してくれた子に俺も自己紹介を返す。

「パトリシアさんというのか。俺は森村慶一。俺の事は呼びやすいように呼んでくれ。」

そう言いつつ手を出すとパトリシアさんも俺に右手を差し出してきてお互いに握手を交わして

「ケイイチ・モリムラなのデスね?ならケイイチとヨバせてモライマス。ワタシのコトはパティとヨンでクダサイ。」

というパティの言葉に俺も頷くのだった。

そして再び俺の手を取って走り出すパティに俺は道案内をしながらも一緒についていく。

そして、店に辿り着くと俺はパティにここが目的の店だと言う事を伝えるとパティは物凄く目を輝かせながら

「コレがア○メ○トなのデスネ?ワオ!ネットでミタトオリデス!グッズやマンガがイッパイデスー!!ケイイチ!サッソクマワリましょウ!」

俺の目的などお構いなしでパティは俺を店中引っ張りまわすのだった。

「おいおい!パティ、落ち着けって!」

店内を引きずりまわされながら俺はパティに声をかけるが、らんらんと目を輝かせているパティに俺の言葉が届かなかった。

そして・・・・・・

「ハルヒのＤＶＤデス!これはカイデスネ!こっちはコミックスデス!これもカイマス!」

ＤＶＤ、マンガコーナーへ行っては買い込み・・・

「オウ!これがニホンのゲームデスね?これもカイマス!」

ゲームのコーナーに行っては買い込み・・・

「グッズもタクサンありマスね。これもカイデス!」

お気に入りのグッズを見つけては買い込んでいた。

俺も自分のラノベを買い込みながらそんなパワフルなパティに終始圧倒されていた。

（外人さんで日本のこういうのが好きな人もいるみたいだけど、エネルギーは半端じゃないなあ・・・）

そう心の中で思いつつも苦笑している俺だった。

やがて、買い物が済む頃にはパティの手荷物はかなりの量になっていたのだが、パティはとても満足そうにほくほく顔で

「イヤー、キョウはタクサンカエマシタ。これもケイイチのおかげデス。ケイイチにはとってもカンシャデスよ。」

その言葉に俺も少し疲れた顔を向けながら

「はは、満足できたならよかったよ。しかし、パティ、凄いエネルギーだよな。ずっと圧倒されっぱなしだったよ。」

と言う俺の言葉にパティは満面の笑みで

「それはトウゼンデース。スキなモノのタメ（アニメ、マンガ、グッズ）にイノチをかける。それがオタクというものデース！」

そう力説するパティに俺はまたしても苦笑するのだった。

そんなやり取りをして何気に時計を見た俺はいい時間だったのでそろそろ引き上げようと思い、パティに声をかけた。

「パティ、そろそろ時間も時間だから俺はそろそろ帰るよ。」

その言葉にパティは慌てて俺に

「ちょっとマってクダサイ。キョウのコトにタイするオレイをまだシテマセン。カイモノでおカネをツカイすぎマシタのでタイしたモノはゴチソウデキませんが、ゼヒそこでオゴらせてクダサイ。」

そう言いつつパティはマクドナルドを指差す。

俺は困惑しつつパティに

「しかし、買い物でお金結構つかっちゃんだろ?きついのなら無理しなくてもいいよ?」

そう言うと、パティは激しく首を振って

「イイエ!おセワになっているのデスからこクライはしないとワタシのキがスミマセン!ワタシのコトはシンパイせずにゼヒ!!」

そこまで引き止められては俺も無下に断るわけにも行かず、俺は結局パティに言われるままにマクドナルドでご馳走になる事となった。

「わかった。パティの顔を立てよう。先に注文させてもらうよ?席の確保しておくからさ。」

俺がそう言うとパティも頷いて

「なら、ソチラのほうはおネガイシマス。ワタシもチュウモンをスませてそっちにイキマス。」

と言うパティに俺も頷いた後、注文をして俺はパティの分の席も確保した。

そして、自分の分を持ってやってきたパティに席へと誘導すると、ハンバーガーを食べながらパティとの談笑をしていた。

「そういえばパティっていくつなんだ？」

「ワタシデスか？ワタシは今年で１６歳になりマス。」

「へえ？俺より２つ下か。日本へは何をしにきたんだ？」

「ケイイチはトシウエでしたか。日本にはコウカンリュウガクセイとしてやってキマシタ。シガツからリョウオウガクエンとイウトコロにカヨうヨテイなのデスヨ。」

その聞き覚えのある名前に俺は思わず

「え？陵桜だって？そいつは奇遇だな。俺も陵桜の生徒なんだよ。」

そう聞き返すとパティはかなり驚いたようで

「オウ！それはホントウデスか？ナルホド、これはヒョットしたらウンメイというヤツなのかもしれマセンネ。」

などと言うことを言って来たので俺は呆れつつ

「運命、って大げさな・・・ただの偶然だろ？」

そう言うとパティは人差し指を顔の前で数回振ると

「アマイデスね、グウゼンとはすなわち、ヒツゼンというものデス

ヨ？つまりワタシにとってケイイチはウンメイのヒトとイウわけデスヨ。」

と言うパティに俺は軽い頭痛を覚えつつ

「はは、なんと言うかお前って俺の知ってるやつに似てるな・・・たぶんお前となら話合うかもしれないな。」

俺の言葉にパティは瞳を輝かせると

「ホントウですか！？ケイイチのカヨうガッコウにワタシとハナシのアイそうなオタクがいるのデスネ？」

その言葉に俺は慌てつつ

「ば、馬鹿、声が大きい！あまりそう言う言葉を出すなって・・・まあ、そういう事だ、２人はお前にとって先輩になるだろう。どちらも年上だしな。もう１人は、今年試験に合格していればおそらく入学してくるはずだ。パティ、お前にもわかるように名前を教えておいてやる。学校に来たら、話してみろよ。」

そう言った後俺はパティに３人の名前を教えるとパティはその名前を噛み締めるようにして笑顔を浮かべて

「コナタとコウ、そしてヒヨリとイウのデスネ？よくオボエておきマス。サンキューネ、ケイイチ。」

お礼を言うパティに俺も頷いて笑顔を返した。

「・・・ケイイチも、ワタシのフレンドになってくれマスカ？」

ふと思い立ったように俺に言うパティに俺は少し驚いていたが

「それは構わないが、俺でいいのか？」

そう訊ねるとパティは満面の笑みで

「モチロンデス！ケイイチからうけたオンはワスレてはいないデスからネ。それに、ケイイチならいいフレンドになってくれそうデスカラ。」

そんなパティに俺も照れながら

「そんな風に言われると照れるな、でも、改めてよろしくなパティ。」

「ワタシこそよろしくデス。」

そう言って再度俺達は握手を交わすのだった。

そして、食事を済ませて俺とパティは秋葉を後にする。

その際にパティと携帯電話のメルアドと番号の交換をして別れたのだった。

今日俺は新たな出会いを果たす事となった。

その子は意外にも日本人ではなく、交換留学生として日本にやってきたアメリカ人の女の子だった。

そして話を聞いてみると偶然にも留学してくる学校は俺や他の旋律

達と同じ所だと言う。

俺はこの偶然の一致にあの子が最後の方で言っていた運命という言葉を思い出した。

改めて考えてみた時、俺はあの子の言う運命という奴もあるのかもしれないな、と思うのだった。

この子は今後俺達の旋律の中に加わる事になる、という事を何故か疑いもしなかった。

それを自然と感じた事も運命と言う言葉を否定せずに受け入れられたのかもしれないとさえ思う。

だが、俺はさらにこの後でとんでもない事態になる事にその兆候すらも気付きもしないまま、日々を過ごす事になるのだった。

また一つ現れた旋律の調べはどんな音楽を奏でるのか、今はまだ、誰にも分からない。

そして旋律達の運命はさらに広がって行くのだった。

新たな旋律〜秋葉での出会い、パトリシア・マーティン〜（後書き）

ついにパティ登場。
さらにパティにはもう一つオリジナル設定をつける予定です。
次回もお楽しみに。

舞い戻る旋律の裏側、その2～徐々に明らかになる組織～

時はバレンタインの少し前、慶一が旅行にあぶれたがかがみ達を預かる頃までさかのぼる・・・・・・

龍神家にて、龍也ｓｉｄｅ

「よう、親父。あれから少しは進展あったか？」

家に帰り、あれからの捜査の進展を親父に確認する為に戻って来ていた。

親父はそんな俺を見て難しい顔をしつつ

「・・・うむ・・・まだこれといって新しい進展はないな・・・お前の方はどうだ？」

そう尋ねてくる親父に俺も苦笑しながら

「俺の方も動いちゃいるがさっぱりだな。末端の連中は時折捕まっているみたいだが、それを操る奴らには逃げられてしまっていて肝心な事が分からずじまいだ。」

その報告に親父も軽くため息をつくと

「・・・そうか・・・何にしても、今しばらくは奴らとの追いかけあいになりそうだな。龍也、まだまだ情報が必要だ、引き続き牧村さんや”紅”と連携を取り合って情報収集に当たってくれ。こちらも再び探らせるようにする。」

親父の言葉に俺も頷いて

「わかった、引き続きこっちはこっちで動こう。親父の方も任せる。それじゃちょっと出て来るかな。」

そう言って道場を後にしようとする俺に親父は

「お前なら問題はないかもしれんが、気をつけてな。」

そう言ってくれたので俺も振り返らずに片手を上げて

「分かってるよ。親父も気をつけとけよ?俺はまだこの年で道場なんて継ぎたくはないからな。」

そう言うと親父は怒ったのか俺に

「やかましい!まだお前に任せるほどこっちも衰えてはおらん!変な心配してないでとっとと言って来い!!」

という親父から逃げるように外に出た俺だった。

「まあ、あれなら当分は安泰だな・・・」

そう呟きつつ、俺は次の情報収集に関して考えを巡らせていたが、そこに”紅”の氷室君からの電話が入ったので俺は電話に出る。

「もしもし?俺だ。氷室君か。何か進展があったか?」

「龍也さん、こんにちは。とりあえず話したい事がありますから、レゾンへ来て欲しいのですが、今大丈夫ですか?」

「話したい事？今回の一件に関することか？」
「それも含めて、ですが、龍也さんに相談したい事もありますので。」
「わかった。何時ごろにそっちへ行けばいい？」
「午後1時に、ですが？どうでしょうか？」
「1時にレゾンだな？わかった。それより、今回の話に瞬坊は必要か？」
「いえ、今回の事に関しては龍也さんだけで大丈夫だと思いますので、では1時にレゾンで待っています。」
「ああ、了解だ。それじゃ後でな。」

そう言って電話を切った後、俺は、牧村道場に足を向けたのだった。

程なくして牧村道場に着いた俺は道場へと足を踏み入れると俺に気付いた牧村流の門下生や瞬坊達が俺に気付いて側までやってきて

「龍也さん、お疲れ様っス！」
「龍也さん、今度稽古つけて下さい！」
「俺もお願いします！」

という門下生を制しながら牧村3兄弟が俺に

「おい、お前ら、あんまり色々言って龍也さんを困らせるな！すいません、龍也さん。うちのものは血気盛んで。」
「俺達もよければ今度稽古つけて下さい。」
「龍也さんとの手合わせを楽しみにしていますから。」

という3人と門下生に俺は

「みんな！希望は受け取るよ。今日は無理だが、今度来た時稽古つ

けてやる。、祐坊、浩坊お前らもな。それと瞬坊、ちょっといいか？」

俺の呼び掛けに瞬一君は側に来て

「なんでしょう?あ、ひょっとして例の件ですか?」

その言葉に俺も頷きながら

「ああ。一応情報収集の状況を知りたくてな。で?どんな感じだ?」

それを訊ねると、瞬一君は複雑な表情になり

「それが、中々進んでません・・・どこへ行ってもトカゲの尻尾切りですからね・・・連中をつるし上げても何も出て来ていないのが現状です、あいつら余程に巧妙に隠れているみたいです。」

その答えを聞いた俺は頷きながら

「そうか、わかった。それじゃ引き続きそちらも動いてくれ。俺はこれから氷室君に会って来る。俺に話したい事もあるという事だからな。」

俺の言葉に瞬一君は

「氷室に会うんですか?俺は一緒に行った方がいいですかね?」

そう確認してきたので俺は首を振って

「いや、今回は俺だけでいいそうだ。後で話の内容を教えるから瞬

坊は瞬坊のやるべき事をやってくれ。」

そう言うと瞬一君は頷きながら

「分かりました。何か役立つ情報が聞ける事を期待します。頑張って下さい。」

俺はそんな瞬一君に片手を上げて答えると、氷室君との待ち合わせ場所へと向かった。

レゾンに辿り着いた俺はコーヒーを注文し、ゆっくりと氷室君の到来を待つ。

しばらくゆったりと時間を過ごしていると、ようやく氷室君が現れた。

俺はすぐに氷室君に声をかけた。

「おーい！氷室君、こっちだ！」

その声に気付いた氷室君は俺に気付くと、急いでこちらへとやって来て

「どうも、龍也さん。わざわざご足労ありがとうございます。とりあえず席に着きますね。」

そう俺に挨拶しつつ席につく氷室君に俺も

「いや、構わないさ。取り合えずなんか飲むか？ここは俺が奢ってやる。」

そう言うと、氷室君は薄く微笑みながら

「はは。それじゃご馳走になります。マスター！僕にもコーヒーを！」

コーヒーを注文してから氷室君は俺の方に向き直り、早速用件の事について俺達はやり取りを始めた。

「早速ですが・・・うちのほうでも情報収集は続けていますし、末端の連中に辿り着く機会もありました。しかし、年が明けてから少し奇妙な事が起きています。」

「奇妙な事？」

「はい。連中の情報を掴み、末端をかぎつけてテコ入れに行くのですが、ここの所いつも僕達が現場に着く頃には末端の上にいるやつらはすでに逃げ去った後、という事が起きているんです。最初から数回は僕達の手際の悪さが原因で逃げられている、そう思っていたんですが・・・それにしては取り逃がす回数が多すぎるのですよ。」

「ふーむ・・・それで？」

「僕はその事を奇妙に思いましてね。ここの所のテコ入れの状況を調べさせました。すると、僕達が向かう頃にはすでにその事が相手に知れてしまっているらしい、という事が分かりました。」

「・・・つまり、情報がどこからかもれている、と？」

「はい・・・あまり考えたくない事ですが、うちのメンバーの中に奴らと通じている者がいるのではないか、そう考えるようになりました。そして同時に、それが起こり始めたのは年明けに数人のうちのメンバーに加わった者が入ってからなのだという事もわかってきたんです。」

「なるほどな・・・と言う事はその中に・・・」

「はい。内通者の存在があると僕は踏んでいます。ですが、可能性

の段階ですからまだ確証は持てません。なので龍也さんに何かいい考えはないだろうかと思いましてね。こうして来て頂いた訳なんです。」

「そうか・・・うーん・・・・・君達の中で特に信頼できるナンバー2の奴はいるかい?」

「ええ、いますよ。けど、それでどうしようというんですか?」

「情報を漏らしている内通者を炙り出すいい手があるんだが、それにはそいつの協力が不可欠だ。氷室君、内通者候補に悟られずにそいつを呼び出す事は可能かい?」

「ええ、出来ますよ。今から呼び出しますか?」

「ああ、頼む。そして、そいつと氷室君と俺とで打ち合わせて作戦を実行するぞ。」

「分かりました。少し待ってください。」

そう言うと氷室君は携帯を取り出してチームの信頼できるナンバー2の呼び出しをした。

しばらく氷室君と2人で待っていると、チームのナンバー2と呼ばれる奴らしい男が店にやってきて氷室君に挨拶をする。

「よお、氷室。俺を呼び出して何か用か?」

その男が氷室にそう言うと、氷室は薄く笑いながら

「お前を呼んだのはこの人さ。お前も聞いているだろう?龍神龍也さんだ。僕達と共に例の犯罪組織つぶしを協力してくれてる人だよ。さあ、坂上、自己紹介だ。」

そう氷室が言うと、その男が俺の方を見て

「あんたが氷室の言っていた龍也さんか。なるほど、確かにただものじゃないな。俺は坂上健也、”紅”ではナンバー2を張らせて貰ってる。よろしくな。」

その自己紹介に俺も頷きながら

「坂上君か。龍神龍也だ、よろしくな。早速だけど、あぶり出しの件について作戦を教えるぞ。2人とも近くに来てくれ。」

そう言うと2人とも俺の側に来てそして小声で

「いいか?まずはだな・・・・・・そして・・・・・・で、上手く接触できたら・・・・・と言う事だ。この作戦、氷室君にも坂上君にも結構厳しい作戦になるが、成功は2人の演技力にかかってくる。どうだ?やってくれるか?」

俺が2人にそう促すと2人は少し考え込んでいたが、やがて顔を上げて

「分かりました。確かにその方法なら内通者を釣れるかもしれませんね。坂上、連中を潰す為の作戦の一つだ。お前にも覚悟はしてもらわなきゃならないが、いけるか?」

そう坂上に振ると、坂上は大きく頷いて

「俺達の相手は潰さなきゃならない連中だ。その為ならこの程度の屈辱は甘んじて受けてやる。その代わり成功したら、氷室、何か奢れよ?」

その言葉に氷室もニヤリと笑いながら

「ああ。飛び切り美味い物を奢ってやるさ。それじゃ後は僕達で綿密な打ち合わせをしよう。龍也さん。ご協力感謝します。」

そう言い、坂上君も

「ああ、わかった。龍也さん。今度はあんたの実力も見せてもらいたいもんだ。」

その言葉に俺も不敵に笑いながら

「まあ、そのうちにな。とにかく、2人とも頼んだぞ。」

その俺の言葉に頷いて2人は店を出て行く。

それを確認した後、俺もまた店をでて新たな情報収集へ向かうのだった。

俺が2人に指示した作戦はこうだ。

今度のテコいれがあった時、またしても逃げられるだろうから、その際に坂上を一緒に連れて行き、現場に居合わせる。

そこで坂上に最近の失態を責めさせる。

その指摘に腹を立てた振りをした氷室に坂上を殴らせ、その事に坂上が激しく反発する演技をさせる。

そして、末端に逃げられるようになる前にチームに入った新人らに坂上が上への不満をさかんに口にするように見せつける。

連中はチームの連携を崩すいい機会だと考えて潜り込ませている内通者にそいつを利用するように指示を出すと思われるので、そいつからの接触を待つ。

そして、接触してきた内通者の話に乗った振りをしてそいつから話を聞きだし、内通者も捕らえてしまおう、というものだ。

うまくいけば、指示している奴の尻尾を捕まえる事ができるかもしれない。

そして、尻尾を掴めれば上の組織の全貌も明らかになってくるだろう、俺はそう考えたのだった。

この作戦には少時間がかかると思われるので、俺も作戦の結果を待ちつつも自身も情報収集へ向かう。

この事をきっかけに物事が動くと信じて。

氷室ｓｉｄｅ

最近のチーム内の妙な動きが気になった僕は龍也さんに事のあらましを話して、今後どうするべきかのアドバイスをもらいたかったので龍也さんを呼び出し、話を聞いてもらう事にした。

そして、龍也さんと会い、今の現状を伝えると、龍也さんは信頼の置けるチームのナンバー2を呼んで欲しいとの事、僕はすぐにチームのナンバー2でもっとも信頼のおける坂上を呼び出した。

そして、2人で龍也さんの立てた作戦を聞いて、僕達は早速作戦の

実行を行う事にしたのだった。

そして、チームの詰め所に戻ってみると、次の末端の連中の情報が入って来ていたので僕達は早速作戦の実行に動くのだった。

その際に、坂上と、末端連中に逃げられ始めたころに入った新人数人を引き連れて僕達は連中の隠れ家へと赴く。

その際にこっそりと坂上に作戦の開始を告げるのだった。

連中を取り逃がす回数の増えた時期にうちに入りたいと言ってきた新人は3人。

服部雄二（はっとりゆうじ）、岸辺友也（きしべともや）、石山勇（いしやまゆう）と言う名前だ。

この3人とうちのメンバー2人、そして坂上を連れて現場へと赴いた。

現場につくと、末端の下っ端連中はまだアジトに残っていて、そいつらは捕まえる事ができたが、肝心の上の奴はすでに逃げられてしまっていた。

そして、ここから作戦が開始された。

「・・・ふう、また逃げられた、って事か・・・連中も中々にすばしこいようだね。」

僕が呆れたようにそう言うとそこに坂上は

「へっ、お前のやり方に問題があるんじゃねえのか?前もそうやっ

て逃げられていたよな？もっとやり方考えねえといつまでたっても同じ事の繰り返しになるぜ？」

そう言う坂上に僕は彼を睨みつけ

「ふん、何も知らない奴がえらそうに言うな！お前は僕の言うとおりに動いていればいいんだよ！」

そう言いながら僕は彼を殴りつける。

「ぐっ！て、てめえ！やりやがったな！？上等だ！てめえとは決着つけたいと思ってたんだ！前から思ってた事だがな！？このチームのナンバー1は俺のほうがふさわしいと思ってたんだ！今ここでてめえを叩きのめしてその座を奪ってやらあっ！！」

そう激昂して＜演技だが＞僕に食って掛かろうとした坂上を一緒についてきたチームのメンバーが止める。

「や、やめてください！今はそんな事で争っている場合じゃないでしょう！！」

「そうですよ！坂上さん！落ち着いて！！」

「俺達が争って結束が崩れたら元も子もないですよ！だから落ち着いて下さい！！」

そうやって他のメンバーに止められる坂上を一瞥して僕は

「ふん・・・そんな単純思考では、ナンバー1等つとまらない。事態はそんなに簡単な事じゃないという事も分らないほどお前は馬鹿なのか？少しは頭を冷やすんだな。」

そう言い放つと僕は暴れる坂上を無視して現場を探る。

そして、ようやく落ち着いた坂上は

「ちっ！何であんなやろうがナンバー1なんだよ。喧嘩だって俺はあいつには負けてねえ。まったくうんざりだぜ、いっつも後手後手に回ってしまってて一つも成果出てねえじゃねえか。いずれあいつは俺が叩き落してやる。」

そんな坂上の上への不満を聞いて、一人の男がニヤリとしていた事にこの場の誰もが気付かなかった。

そして、そんな事が何度かあったある日、ついに僕達の撒いた餌に1人の男が引っ掛かる事となった。

坂上ｓｉｄｅ

ここまでは順調に作戦を進めてきた俺達だが、ようやく俺達の撒いた種に引っかかる奴が現れた。

それは、俺が意図的に氷室との距離を開けていたときの事、1人の男が俺に話し掛けてきた。

「坂上さん、ちょっといいですか?」

その声に顔を向けると、そこには新人の1人、岸辺友也だった。

「俺に何か用か?」

そいつを一瞥して俺は短くそう言い放つとそいつは俺に愛想笑いを

振り撒きながら

「ええ。ここ最近、氷室さんとは上手く行ってないご様子。それに、あなたが氷室さんの事をよく思ってない事も最近になってわかってきました。坂上さんは氷室さんを引き摺り下ろしてナンバー1になりたいのではないですか？」

そう聞いてきたので俺はとりあえず奴の話を聞いてみようと思い、話に乗った振りをした。

「ほう？俺の事をよくみているようだな。確かお前は岸辺と言ったか？その口ぶりだと、何かいい考えを持っているみたいだな？」

そう持ちかけるとそいつは俺の側に来て小声で

「ええ、実はそうなんです。俺にはある知り合いがいましてね。そいつに協力すれば、活動の為の資金にも不自由せず、また、氷室を引き摺り下ろす事もできるようになると思いますよ。どうです？この話に乗ってみませんか？」

俺はその話を聞いてニヤリと笑うと

「おもしれえ。その話、聞かせてもらおうじゃねえか。」

そう言うと、その男もニヤリと笑ってそいつの知る事を俺に話し始めた。

「氷室は今、やっきになってある犯罪組織を追っていますよね？けど、ここ最近は失態続きで確実に下の者達からの信頼が揺らいでいる状況です。だから、今後も更に失態を重ねさせて完全に下の者の

信頼を奪い、そして、それに乗じて坂上さんが氷室を叩き落せば、坂上さんが”紅”のナンバー1となれるでしょう。その為に、あいつらが突き止める末端の隠れ家の情報を犯罪組織の人に伝えて末端のまとめ役の人を事前に逃がすようにすればいいでしょう。そして、その情報は俺がその人等と連絡を取って伝えましょう。」

その言葉に俺は頷きつつ

「成る程な、そうすればあいつは破綻する、という事か。面白そうだな、一つ乗ってみるか。」

そう言うとそいつはニヤリと笑うと、連中と連絡を取り合う為に外へと出ていった。

俺はそいつがいなくなった事を確認すると、氷室に連絡を取った。

「もしもし、坂上か。どうした?」

「氷室、どうやら俺達の撒いた餌にかかったみたいだぞ。俺は引き続きそいつと行動を共にしつつ動く。事の次第がはっきりするまでは奴を泳がせるからな。」

「分った。任せたぞ?坂上。」

「ああ、任せとけ。これで一歩近づけるはずだ。」

「また連中に気付かれないように連絡を頼む。それじゃ切るぞ。」

「おう。そっちも上手くやれよ?」

そう言って俺は電話を切ったのだった。

この頃、成人の日が後1日に迫る日だった。

龍也ｓｉｄｅ

とりあえず、内通者の件を任せつつ俺は俺で情報収集に当たっていたのだが、思ったよりも状況が進展しないので仕方なく一度家に戻る俺だったのだが、家に戻った時親父にお使いを頼まれる事となった。

「ただいまー、っと。お袋、親父は？」

家に帰り、お袋に挨拶をするとお袋は俺に

「お父さんなら居間にいるはずよ？龍也、いつもお疲れ様ね。」

そうねぎらいの言葉をかけてくれるお袋に俺は

「仮にも正当伝承者だからな。それに慶一達の為でもあるし。」

そう返事をするとお袋もにこにこと笑顔を向けてくれた。

俺はそんなお袋に笑い返しつつ、居間へと向かった。

「ただいま、親父。今日もあまり進展なし、だ。」

そんな俺を見て親父も軽いため息をつきつつ

「そうか。ご苦労だったな。龍也、お前に一つ頼みたい事があるのだが、明日、慶一の所へ行って伝言と共にこれをあいつに渡して来てくれないか？」

そう言って俺に手紙のような物を手渡し、更に

「慶一には、正月にも顔見せに来れなかったみたいだからな、明日にでも一度顔見せに来い、と伝えてくれるか？あいつが来た時に、少し確認したい事もあるのでな。」

そう言うと俺は今の状況、捜査の進展も望めないし、それもいいかもしれないな、と思い

「わかった。明日の朝一番で俺があいつにその伝言と手紙を渡して来よう。」

そう返事をすると親父も俺に「すまんな。」と短く答えて、俺はそれに頷きを返すのだった。

そして、次の日の慶一が朝食を作る前の時間に慶一の家に行き、慶一に親父からの伝言と手紙を渡そうと思ったのだが、手紙の件を慶一に話し忘れたのを後で気付いたが、まあ後で伝えればいいだろう、と思ってそのままにした。

まさか、まつりさんに押し切られてその日デートする事になるとは思わなかったが・・・。

そして俺はかがみちゃん達が帰る日までは慶一の家にいた。

その日もまたまつりさんの押しに負けてデートと相成ったのだが。

２人を見送った後、俺も家へと戻ったが、手紙の件を慶一に言うのを忘れてしまい、仕方ないから今度会う時にでも伝えるか、と思ったのだった。

坂上ｓｉｄｅ

内通者と共に行動して、ついに奴らの尻尾を捕らえる時がやってきた。

俺は内通者に悟られぬように共に行動し、何度か隠れ家で奴の組織の上の者と会う機会があった。

そいつは、ここ数回出会った末端の隠れ家には必ず現れていたのだった。

俺は内通者を通じてそいつとも知り合いになり、そいつの信頼を得るまでになった。

そして、今回、再び”紅”が掴んだ隠れ家の情報を元に、ここで奴らを取り押さえる事にした。

そのためにまず、内通者だった岸辺友也を2人きりの時にぶちのめし、身柄を抑えて、俺は今回の情報を届けると言う名目で”紅”の兵隊数人を伏せさせてコンタクトを取りに行った。

その男の名前を秋吉勝（あきよしまさる）と言った。

俺は秋吉を呼び出して、今回の情報を伝える。

「秋吉さん。あの場所がかぎつけられたようだぜ？連中は後３０分もすればやってくるだろう。そろそろここも引き払うのがいいと思うが？」

俺がそう言うと秋吉は俺に

「・・・いつもすまんな。所で、岸辺はどうした。お前と一緒じゃなかったのか？」

そう訊ねて来たのでお俺はとぼけつつ

「あいつ、ちょっと用事に手間取っているみたいでね、だから俺に先に行ってこの事を伝えておいてくれ、って頼まれたからな。」

そう言うと、俺を少し不審な目で見つつ

「・・・そうか、まあいい。お前が情報を持ってきてくれてるからな。奴にはきちんとあとで言っておかねばならんだろうが・・・」

その言葉に俺は不敵に笑うと

「そうだな。次があるならそうしてくれ。」

そう言ってパチンと指を鳴らすと近くに伏せていた”紅”の兵隊が秋吉を取り囲む。

この状況に血相をかえた秋吉は俺に

「っ！坂上っ！！これはどういう事だっ！！」

激昂しながらそう怒鳴りつける秋吉に俺は

「どうもこうもないぜ？俺は始めっからあいつの仲間になんぞなってはいなかったってだけの話だ。」

ニヤリと笑いながら俺がそう言うと秋吉は

「おのれっ！裏切り者めっ！！」

そう吐き捨てるように言う秋吉を睨みつけ

「言いたい事があるなら、”紅”の詰め所でじっくりと聞かせてもらうさ、まあ、運の悪い自分を恨む事だな。おらあっ！！」

そう言って奴のみぞおちに一撃を加えて昏倒させると”紅”の兵隊達が奴を縛り上げた。

「よし、作戦は成功だ。このまま”紅”の詰め所に運んでこいつを尋問する。いくぞ！？お前ら！」

そう言うと、俺達は奴を”紅”の詰め所に運ぶのだった。

詰め所につくと氷室が俺を出迎えてくれて

「よくやってくれた、坂上。ここから手がかりが掴めそうだ。約束どおり美味い物を奢ろう。」

そう言う氷室に俺も笑って頷きながら

「へっ、散々苦労したんだからな。それなりの物じゃなきゃ納得しねえぞ？」

そう言うと氷室も微笑みながら

「望むところだ。お前を満足させられる所へ行くとしよう。」

そう言った後俺たちはがっちりと握手を交わしたのだった。

龍也ｓｉｄｅ

今回の事に関する重要参考人になりそうな男を捕らえたと言う報告を受けて、俺はそいつの尋問を氷室君達に任せつつ、次の手を練っていた。

その頃には１月も過ぎ、バレンタインも近づく頃だったが、そこに俺の携帯にまつりさんからの電話が、かかってくる。

「もしもし？まつりさん？」
「龍也さん、こんにちはー。ねえ、２月１４日は予定はあるかな？」
「うーん・・・その日は特になにもないけど？」
「ほんと！？ならさ、その日にチョコプレゼントしたいから家に来てくれないかな？」
「え？うーん・・・わかったよ、１４日にそっちだね？」
「来てくれるんだね？やったあ！それじゃ待ってるからねー。」
「あ、ああ、わかったよ。」

そう言って電話を切って俺は軽いため息をつきながら

「何だか俺、まつりさんに気に入られちゃったみたいだな・・・１４日か・・・仕方ないから行くとするか・・・」

そう呟いたのだった。

そして２月１３日、ついに組織の名前等がはっきりとする事となった。

組織の名前はシャドウ。そして、それを取り仕切る者の名前は、親父達が壊滅させたと思っていた組織のリーダーの幹部の１人、非村（ひむらた）崇（かし）と言うらしい。

だが、秋吉も所詮は組織の末端を任される程度の男、上の詳しい所はよく分らないとの事。

とりあえず、少しの進展を見せたこの状況から、次の手を考えつつ俺は１４日、柊家へと向かっていた。

そして、柊家の玄関に近づいた時、呼び鈴を押している慶一に出会ったのだった。

そして俺はそんな慶一に声をかける

「よう、慶一。お前もここに用事か？」

そう声をかけて、その後俺はまつりさんといのりさんの争奪戦に巻き込まれる事となる。

かくして明らかになってきた組織の実態、そして、それを牛耳る者の名前。

俺は、必ずやつらの所在を突き止めて今度こそ組織を潰す、そう改めて心に誓うのだった。

舞い戻る旋律の裏側、その2～徐々に明らかになる組織～（後書き）

今後は何度かこういう形で本編の裏側も書いていきたいと思っています。
今回の新キャラの紹介。

坂上健也、紅では氷室に次ぐ実力の持ち主。口が悪く、氷室とは仲が悪いのでは？と誤解されがちですが、実は氷室がもっとも信頼を置く人間です。

服部雄二（はっとりゆうじ）、岸辺友也（きしべともや）、石山勇（いしやまゆう）

この3人は年明け後に紅に入った新人3人です。
そして、岸辺は紅にいながら、組織とつながりのある内通者でもあります。

秋吉勝（あきよしまさる）

この男が唯一末端を仕切る、組織との連絡係でもありました。
こいつを捕らえた事により、組織の事が少しわかります。

非村崇（ひむらたかし）

この男こそが組織のトップであり、最終的に潰す相手でもあります。

成神章は末端の1人ですが、秋吉程の権限は持っていませんので、今まで捕まってきた連中と一緒ですが、龍神の息子とのつながりがある事から少し特殊な立場にいるようです。

困惑の旋律～2年最後の勉強会、そして、やってきたパティ～

パティとの秋葉での出会いから数日、俺達は2年生最後の期末試験に向けて、学校が終わってから家に集まって勉強する、という毎日を過ごしていた。

それに際し、若干名は勉強したくないと不満をぶちまけていたが、俺とかがみに物理的に黙らされる事となった。

そして、今日も家へと皆で向かいながら歩いている。

「・・・はあ・・・テスト、めんどくさいねー・・・」
「だよなあ・・・こんな事せずに私は走ってたいゼ・・・」
「けいちゃんのおかげで大分勉強しやすくなったとはいっても、やっぱりいやだよね・・・」

と、勉強嫌い3人組が言うと、俺とかがみのツッコミ組みは

「そう腐るなよ。2年生最後のテストなんだから少しは気合いれたらどうだ?」
「大体、あんたらはいつもテストの度にそんな事言ってるじゃないの!まったく、毎度毎度呆れるわよ!!」

そう、がなり立てるとみゆき、あやののフォロー組みが

「まあまあ、お2人とも。泉さん達もまったく勉強をしていないというわけでもないんですから、その辺で。」
「慶ちゃんや柊ちゃんの言い分もわかるけど、みさちゃん達も頑張ってるし、あまりきつく言わないであげて?」

と言うと、勉強嫌い組みはそれに便乗して

「そうだよー？私達だって何もしてないわけじゃないんだからさー。」

「ちびっ子の言う通りだゼ。私らだって頑張ってるんだからそんなにきつい物言いしなくてもいいじゃん？」

「みんな仲良く穏やかに行こうよ～。」

と言う3人に俺とかがみがため息をつく、という感じでループしていた。

そんなやり取りをしつつ、家へと辿り着くと、そこには今日から一緒にテスト勉強をしたいというこうとやまと、そして、それに便乗したいと言う毒島さんと山辺さんもまた俺達とテスト勉強する事となった。

あっちの2人はこうや、やまとと話していて一緒にやりたいと思ったらしい。

今更人が増えた所で一緒なので俺も勉強会をやる事を了承した。

「あ、先輩ー。一足先に来て待ってましたよー？」

「お帰りなさい、先輩方。」

「森村先輩、今日からテストまでお世話になりますね？」

「分らないところあったら教えて欲しいです。」

と言う４人に俺は頷いて

「お待たせ、４人とも。とりあえず家に上がってくれ。場所の準備

はもうできてるからね。まあ、俺に教えられる範囲でならなんとかするよ。」

そう言うと４人は頷きつつ、他の皆も揃って俺に着いてきて家へと上がるのだった。

「「「「「「「「「お邪魔しまーす！」」」」」」」」」と言って上がってくる皆を俺はリビングに通すとそこにあらかじめ用意しておいた勉強用のテーブルに皆をつかせる。

「飲み物とか準備してくるから皆そこで勉強の準備しといてくれな。」

そう言って部屋を出て行こうとする俺にこなたとやまとと毒島さんが

「慶一君、１人じゃ大変でしょ？私も手伝うよー。」
「先輩、私も手を貸すわ。手分けして用意しましょ？」
「森村先輩、私にも手伝わせて下さい。しばらくお世話になるんですし、その位はさせてくださいさい。」

という3人に俺は頷いて

「分かった。それじゃ、３人とも頼むよ。一緒にキッチンへ来てくれ。」

そう言うと3人とも俺に着いてきてくれたのだった。

キッチンで飲み物などの準備をしている時、俺を見ていた毒島さんが声をかけてきた。

「ふふ。やさこが言ったとおりの人ですね、森村先輩って。」

その声に俺は振り向きながら

「え?あいつ、俺の事なんて言ってたんだ?」

俺の問いに毒島さんは笑顔になって

「先輩は面倒見のいい人だって、困ってる人を見るとほおっておけなくなる人だって言ってましたよ?今の先輩を見ていたら本当にそうだな、って思えます。」

その言葉に俺は照れながら

「はは、照れるな。なんというかさ・・・頼ってくれる人、困ってる人、見て見ぬふりって出来なくてな・・・おかげで結構馬鹿も見てるけどな。」

ははは、と笑いつつそう言うと毒島さんは

「優しいんですね、先輩は。やさこがちょっと羨ましいかも。そんな良い人と友達で・・・。」

複雑そうな表情でそう言う毒島さんに俺は

「今からだっていいじゃないか。」

そう声をかけると毒島さんは俺を驚きの表情で見て

「え?今からって?」

そんな俺の言葉に何だか訳が分からないという感じで聞き返す毒島さんに俺は笑いながら

「部活の後輩という事で知り合った俺達だけどさ、今からだって友達にはなれると思うぞ？それに、山辺さんや、俺の周りの仲間達もな。」

そんな俺の言葉に便乗するようにこなたとやまとも

「そうだよ。毒島さんさえよければ私たちだって友達になれるよ？」
「私はこうと一緒にすでに友達になってるけど、先輩やみんなとも友達になれると思うわ。」

俺達の言葉を聞いて喜びの表情を見せる毒島さんは俺達に

「私も、皆さんのお友達になってもいいんでしょうか？」

と、おそるおそる聞いてきたので俺達は揃って頷き、「「「もちろん」」」と答えると毒島さんも嬉しそうに

「あ、ありがとうございます。この話、たまきにもしますね。えっと？もちろんたまきも、いいんですよね？」

そう聞いてくる毒島さんに俺達は笑いながら大きく頷くのだった。

そして、俺やこなた、やまとよりも先に皆の所に戻って行く毒島さんの後ろから俺達3人もそれぞれ飲み物を持って移動していたが、その際に2人が俺に

「・・・まったく、慶一君、またフラグ立てたねー？君は天然でそんな事してる自覚ないみたいだよねー。」
「お人好し過ぎよ？先輩、そのうち痛い目見ても知らないわよ？」
と、なんだか2人してきつい言葉を浴びせられた俺は

「フ、フラグって、別に俺はそんな事してるつもりはないんだけどなあ・・・」
そんな俺に2人は呆れたような顔で
「これだよ・・・ほんと、前途多難だよね。」
「先輩は中学時代からこうよね・・・ほんと呆れるわ・・・」
やれやれ、と首を振る2人に俺はますます困惑していたのだった。

毒島さんと俺達がリビングに着くと、さっそく先程の話を聞いた山辺さんが俺達に「よろしくおねがいします！」と挨拶をし、俺は俺で、数人に冷ややかな視線を浴びつつもみんなは2人を受け入れてくれたのだった。

そして、今日も勉強会が始まる。

俺と、かがみ、みゆき、あやのの4人は例の如く、3人の指導をしつつ、時折、こうたちの様子を見ていた。

「ほら、この公式、違ってるぞ？前に教えた事思いだせ。」
「この訳はこうよ？後でもう一回復習してやってみなさい。」
「ここはこうなりますから、後は・・・」

「ヒントはこうよ？後は教えた通りにやってみて？」

3人に指導する俺達。

「うー・・・難しいよ・・・」

「頭爆発しそうだってヴァ・・・」

「えっと、えっと、ここはこうで、ここは・・・はうう・・・わからなくなっちゃったよう・・・」

そんな3人に苦笑する俺達、そして、後輩組みから

「先輩ー、ちょっとこっちお願いしたいんですが。」

「高良先輩、ここ、合ってるか見て欲しいんだけど・・・」

「柊先輩、ちょっといいですか？」

「峰岸先輩、これ、見てもらっていいですか？」

そう声がかかると、俺達はこなた達に問題をやらせてる間に後輩組みの様子を見たのだった。

そして、後輩組みの様子を見ている時、ふいに呼び鈴が鳴ったので俺はみんなに

「あれ？どうやらお客さんみたいだ。ちょっと行って来るから、みんな勉強続けていてくれ。」

そう伝えて俺は玄関へと向かった。

「はいはい、どちら様ですか？」

そう言いながら玄関を開けるとそこにはゆたかとみなみ、そしてひ

よりの3人がいたのだった。

「こんにちは、先輩。お邪魔しにきちゃいました。」
「・・・こんにちは・・・みゆきさん達も・・・ここに来ているときいていましたので・・・」
「受験も済みましたし、勉強会されているとの事で、陵桜の程度を知りたいと思いまして、3人で話し合って来てみましたっス。」

俺はそんな3人に驚きながら

「まさかお前らだとは思わなかったよ。けど、なかなか殊勝な心がけだな。まあ、参考になるか分からないけど、見ていってくれ。」

そう言いつつも3人を家へと上げる俺だった。

「「「お邪魔します」」」

そう言って上がってくる3人に俺はリビングへ案内しつつ

「お前らの分の飲み物も用意してくるから先に行ってろよ。あー、それと、ゆたか。」

キッチンへ行く前に声をかける俺にゆたかは振り向いて

「なんですか?先輩。」

そう訊ねてくるゆたかに俺は苦笑しながら

「こなたがだらしなくしてるかもしれないが、お前はこなたの悪い所は見習っちゃだめだぞ?」

そんな俺の言葉にゆたかも苦笑しつつ

「あはは・・・大丈夫ですよ、先輩。そんなこなたお姉ちゃんでも私にとっては大好きなお姉ちゃんですから。」

そんな言葉を聞いて俺はゆたかに微笑むと

「はは、俺の取り越し苦労だったな。ゆたかはこなたの事よく見ていたって事か。」

そう答える俺にゆたかもにっこりと笑いながら「はい！えへへ。」と答えると、笑顔のまま3人とリビングへ向かうのを微笑ましく見送ると、3人の為に飲み物を用意しにキッチンへ足を向けた。

こなたｓｉｄｅ

今日もここ最近の恒例の試験前の勉強会という事で私たちはそろって慶一君の家に集まり、勉強をしようとしていたのだが、その勉強会に八坂さん達も参加したいと言い出した。

さらにはこの前アニ研に入部を果たした毒島さんと山辺さんも便乗する事になり、私はかなり賑やかな勉強会になりそうだなあ、と思っていた。

慶一君の家の前で八坂さん達と合流した時、私の思った通りになりそうだな、と思ったのだった。

家に上がり、勉強の準備をする時慶一君が飲み物を準備すると言ったので、私は慶一君1人でこの人数はきついだろうと思い、手伝い

を志願したのだが、そこに永森さんと毒島さんも名乗りをあげた。

結局3人で慶一君を手伝う事になり、私は慶一君達と共に飲み物を準備している時、毒島さんが私達が羨ましいと言った。

そんな言葉を聞いた慶一君は案の定、毒島さんに友達になろうというのを、私は半ば呆れつつ聞いていたけど、結局私も仲間が増える事が嬉しかったのもあるみたいで、そんな慶一君の言葉に便乗して毒島さんに私達だって友達になれる、と言うのだった。

何となく毒島さんに優しくしている慶一君を見て一瞬いらつきを感じた私はそんな感情の捌け口に慶一君に嫌味をぶつける事ですっきりさせたのだった。

そして私達がひとまずリビングに戻り、さっきの事をみんなや山辺さんに話して盛り上がっている時、この家にまたお客が来た事を知らせる呼び鈴が鳴る。

慶一君が出迎えに行き、そこに現れた3人を見て私は驚きつつ声をかけたのだった。

「ゆ、ゆーちゃん?それに、みなみちゃんやひよりんも、どうしたのさ、いきなり。」

その言葉にゆーちゃんは笑いながら

「あはは。受験も終わったし、時間も出来て、それで、こなたおねーちゃん達が勉強会してるって聞いたから、陵桜の勉強ってどんな感じなのかな?って思って、みなみちゃん達と一緒に見に来たんだよ。」

そして、みなみちゃんも

「・・・折角の機会でもありますし、どの程度難しいのか・・・知りたかったんです・・・」

そう言うとひよりんも頷きつつ

「あはは・・・まあ、今のうちから心構えつけておけば焦らずにもすむかなーって思いまして・・・」

そんな3人に私はニヤリと笑いながら

「ふふふ・・・覚悟しなよー？3人とも。陵桜のレベルは半端ないからねー？さあ、どの程度ついて来れるかな？」

そう言って脅かすと3人ともびくり、として怯えたような感じになるのを見て私は満足気に頷いたのだがそこにかがみの鉄拳が脳天に振ってきて

「こら、こなた！あんまりゆたかちゃん達脅かすんじゃないわよ！！」

そう突っ込まれ、私は涙目になりながら殴られた頭をさすって

「ちょ、ちょっとした冗談じゃん・・・こぶできるほど殴らなくたっていいでしょー？」

と抗議の声を上げるが、ぎろりと睨みつけるかがみを見てすぐさま黙る私。

そんなやり取りをしていると、ゆーちゃん達の分の飲み物を用意した慶一君が戻ってきて、私を見るなり苦笑していたのを見て、私は頬を膨らませて慶一君を睨みつけた。

慶一ｓｉｄｅ

まさかのゆたか達の来訪で俺はもう一度ゆたかたちの分の飲み物を用意すべくキッチンに向かう。

そして、飲み物を用意し終えてそれを運んでリビングに近づいた時、ゆたかたちとこなた、かがみのやり取りが聞こえ、少し耳を済ませていたのだが、こなたのかがみから鉄拳を喰らった音を聞いた俺は驚きつつも部屋の中へと入って行くと、頭をさすって涙目のこなたと苦笑を浮かべる皆と困惑顔のゆたかたちが見えたので俺もまた苦笑してしまった。

そんな俺を見たこなたは、頬を膨らませて俺を睨みつけていたのだが、俺は軽く肩をすくめるとゆたかたちの所へ用意した飲み物を持っていき、３人に配った。

「ほら、３人とも。これでも飲め。それと、こなた。あー・・・俺が悪かったからそんなに睨まないでくれ。」

困惑しながらそう言うと、こなたはぷい、と横を向いてしまったのを見て俺は更に困惑するのだった。

そんな俺にかがみが助け舟を出してくれた。

「慶一くん、気にしなくていいわよ。こなたの自業自得なんだから。

」

かがみの言葉にこなたはぼそぼそと

「別にちょっとゆーちゃん達からかっただけじゃん、それだけなのに、何も殴らなくたってさー・・・」

と言うこなたの言葉を目ざとく聞いたかがみはこなたを”きっ”と睨みつけると

「あんたの場合はやりすぎる事が多いの！それを自覚しなさい！！」

と、またもこなたを怒鳴りつけるかがみを何とかなだめて再び勉強会を再開するのだった。

「・・・うん、いい感じだ。その調子で次を・・・」

「中々いい感じよ？後はそれを応用して・・・」

「それを例題にしてですね・・・と言う感じで・・・」

「こっちは合ってるわよ。それじゃ次はそっちね？」

こなた達に教え、下級生組みに教え、自分たちの勉強を行い、そんな様子を見ているゆたかたちは俺達のやっている勉強を見ながら

「・・・やっぱりかなり難しそうだなー・・・陵桜ってレベル高いねー・・・」

「・・・流石にこれは頑張らないと・・・ついて行くのも大変かも・・・」

「正直、舐めてたかもしれませんね・・・うーん・・・」

と、それぞれに感想を漏らしていた。

俺はそんな3人に

「おいおい、まだ入学もしていないうちからそんな事じゃ困るぞー？確かにパッと見、難しいかもだけど、お前らなら十分やっていけるって。」

そう励ますと3人とも複雑な表情を見せつつも頷いて

「そ、そうですね・・・がんばってみます。」

「・・・わからない所とかがあったら・・・頼っても・・・いいでしょうか・・・？」

「私にも力を貸してくれたなあ、と、あはは・・・」

そんな3人の言葉に軽いため息をつきつつも頷く俺だった。

そして、3人を改めて見据えながら

「・・・とにかく、新学期には3人とも欠ける事無く俺達の前に来てくれる事、最後まで祈ってるからな。」

そう言って笑うと3人とも少し驚きの表情をした後、それぞれに笑ってくれた。

俺はそんな3人を見て満足気に頷くと改めて勉強会を再開する。

そして、予定の所まで終わらせた時、不意に俺の携帯が着信を告げたので俺は携帯を開いて番号を確認する。

すると、番号は見た事のない番号で、俺は少し不審に思いつつも電

話にでる。

「はい、もしもし、森村ですが。どちら様でしょうか?」
「もしもし、森村さんですね?私は留学生支援団体の者ですが、この度あなたの家にホームステイの予定の人がいまして、その確認の電話をさせていただきました。」
「は?俺の家に、ですか?何かの間違いじゃ・・・」
「ええと、あなたは龍神龍真さんの息子さんで合っていますよね?」
「え、ええ、そうですけど?」
「実は本来は龍神さんのお宅に予定があったんですが、龍神さんの方が取り込んでいる事があるとの事で、龍神家で預かれない代わりに息子さんであるあなたを指名されたのですよ。」
「え?親父が?でも、俺には何の連絡もないんですが・・・」
「え?しかし、龍真さんはあなたに委任状を送られたとおっしゃられていましたが・・・」
「委任状?そんなのも貰った覚えはないと思いますが・・・うーん・・・ちょっと後でかけなおさせてもらってもいいですか?家のほうに確認取ってみますから。」
「ええ、それでは、後ほどもう一度こちらにおかけ直し下さい。」
「はい、それでは。」

そう言って俺はなにやら訳のわからないうちにとりあえずさっきの電話の確認の為に実家に電話を入れようとしたのだが、そこに先程の電話の内容を聞いていたこなたが俺に

「ねえ、慶一君。さっきの電話ってなんなの?ホームステイがどうとか言ってなかった?」

そう聞いてきたので俺も困惑しつつこなたに

「あ、ああ。確かにそう言ってた。でも、どういう事なのかさっぱり分からなくてさ。今実家に電話して聞いてみるつもりなんだよ。」

そんな俺の答えにこなたも困惑しているみたいだった。

とりあえず実家に電話を入れる俺。

数回のコールの後、親父が電話に出た。

「もしもし、慶一か?急に電話してきてどうした?」

「親父か?実はさっき・・・・・ってな訳でな、一体どういう事なのか聞きたくてな。」

「ん?その事か?それならお前に龍也に頼んで委任状を届けてもらったはずだが。」

「え?いつの話だよ、それって・・・」

「確かお前に龍也に頼んで伝言してもらった日だから・・・1月、お前が顔見せに来てくれた日だな。」

「ん?あの日?けど、龍兄、手紙なんて・・・待てよ?」

そこまで話して俺はあの時、龍也が手紙入れの近くに何かを置いていた事を思い出して

「ちょ、ちょっと待っててくれ、親父、確認してみるから。」

「うむ。」

俺がそう言い、親父の短い返事を聞いて俺は手紙入れをあさりにキッチンへと走って行く。

そして手紙入れをあさってみるとそこに見慣れない手紙を見つけたので俺はその手紙の封を切り、中身を確認した。

そこには確かに、親父の直筆による委任状が入っていたのだった。

俺はそれを確認した後、親父に

「委任状は見つけた。はいいんだが、なんで留学生をそっちで受け入れなかったんだよ？」

「その事なのだが、最近、家の近辺も何かと犯罪が多発するようになっていてな。町内の自治を預かる家としては色々と動かねばならんのだ。それに、そんな物騒な場所にいるよりは、今の所何の問題もないお前の所に預かってもらうのがいいと考えてな。なあに、心配せずとも、留学生の分の生活費は出るから心配はいらん。」

「いや、そういう事じゃなくてだな・・・ふう・・・だからあの日実家を出るときに親父は俺に俺の身の回りの事を確認したのか・・・」

「・・・その事もあったが、だが、あの時お前に言ったお前の周りの子らに何かあったら、と言うのも嘘と言うわけじゃない。まあ、今更信用してもらえるかはわからんがな・・・」

「あー・・・その事に関しては俺は信用はしてるよ。これでも親父が嘘ついてるかどうかぐらいは分かるようになったつもりだ・・・」

「・・・ふ、言ってくれる・・・まあ、とりあえず、慶一よ、お前に頼んでもいいだろうか？私らに留学生の子を相手にできるほどの余裕がないのだ、すまんが、頼みたい。」

俺はそんな親父の言葉に少し考えてから

「・・・わかったよ。親父の頼み、聞いてやる。ま、この借りはいつか返してもらうって事でな。それじゃ俺はもう一度留学生支援団体に連絡を取ってみるよ。」

その言葉に親父はほっとしたような声で

「・・・そうか。引き受けてくれるか。なら、頼むぞ。借りはいずれ返すとしよう。ではな、慶一、元気でやれ。」

そう言う親父に俺も

「ああ、親父もな。犯罪者相手にするっていうなら無理はするなよ？」

そんな俺の心配に親父は

「ふ、お前に心配されるとはな。お前、私を見くびっておらんか？なあに、そこらへんの連中では私の相手にすらならんわ。まあ、すぐに決着（けり）はつけるつもりだ。」

そう言う親父に俺は苦笑しつつ

「ま、とりあえずこれで、な。」

「ああ、また顔見せには戻って来い。」

そう言って俺は電話を切った。

そして、再度、留学生支援団体に電話を入れる。

「もしもし？森村ですが、先程の支援団体の・・・はい、確認はしました、それで留学生はいつこちらに？」

「すでに、留学生の子はこちらに降ります。これからお宅へ伺わせていただく事になりますが、ご都合の方はいかがでしょう？」

「こちらは特に問題はないですよ？」

「そうですか、それでしたら、今から３０分後位にお伺いいたします。」
「分かりました。お待ちしています。」
そう言って電話を切り、俺はみんなの待つリビングへと向かった。
リビングに着くとなにやらみんな心配してたようでこなたが代表で俺に
「あ、慶一君、どうだったの？結局。」
と聞いてきたので俺は
「騒がせてすまん。今実家に確認を取ってきた。留学生は家で引き受ける事となったよ。」
と言うと、他の皆も驚いた顔で
「え？それじゃ、受け入れるんだ？そういえばその子って男の子なのかしら、女の子なのかしら？」
「アメリカ人なのかな～？それとも、韓国人とかアジア系の人？」
「そこらへんの確認はされたんですか？」
そのみゆきの言葉に俺は”はっ”となって
「しまった、そこらへん確認するの忘れた・・・」
そんな俺の言葉にこなたとかがみ、つかさ、みゆきは呆れ顔になりみさおとあやのは

「何だかおもしれえことになりそうだな。」
「私もお友達になれたらいいなあ・・・」
そう言っていたので俺は笑いながら
「たぶん大丈夫だろ?まあ、お互いに慣れなきゃいけないだろうけど。」
そう言うと2人は複雑な表情をしていた。
「年っていくつなんですかね?」
「男の子か女の子かそこらへんはどうなの?」
「ちゃんと日本語もわかりますかね?」
「英語は苦手ー・・・」
と後輩組みが言う。
ゆたかたちも突然の事に困惑を隠せないようで
「何かいきなりすごい事になっちゃったね。」
「・・・学校、どこに通う人なんだろう・・・」
「興味はあれど、怖いような気もするし・・・複雑っスねー・・・」
と3者3様の意見を言い合っていた。
俺もそこらへんの詳しい所を確認する事を忘れていたので自分のミスに凹んでいたが、そうこうしているうちに30分が過ぎ、玄関の呼び鈴が鳴らされたので俺は
「あ、どうやら来たみたいだな。俺、ちょっと行って来るよ。」

そう言うとみんなも「「「「「「「「「「「「いってらっしゃーい」」」」」」」」」」」」と言って見送ってくれた。

そして玄関へ着いた俺は「今開けまーす。」と言って玄関を開けると、そこには先程の電話の留学生支援団体の職員らしき人が立っていて、俺を見て

「こんにちは。私は留学生支援団体の〇〇と言いますが、あなたが森村慶一さんですね？」

そう確認をしてくる職員さんに俺は頷いて

「はい、そうです。それで、留学生の子ってどんな子なんですか？」

そう訊ねると、職員さんは自分の後ろに控えていた留学生の子を呼んで

「この子です。さあ、自己紹介して。」

そして、一歩前に出てきた子を見て俺は驚きの表情になった。

「ハジメまして。ワタシ、パトリシア・マーティンといいマス。あ！」

自己紹介しながら俺に挨拶するパティは俺を見て驚いていた。

そして俺も

「家にホームスティしてくる留学生って・・・パティ、お前の事だ

ったのか？」

驚きながらそう返事をするとパティは途端に笑顔で俺に抱きついてきて

「オウ！まさかここでケイイチとサイカイデキルとはオモいませんデシタ！やっぱりケイイチはウンメイのヒトでしたネ！！」

そんなパティに困惑する俺だった。

かくして・・・俺は留学生のホームステイを受け入れる事となったのだが、それは、あの時出会った子との再開となる事等、まったく予想もしなかったのだった。

そして、俺の家にパティはやってきた。

困惑の旋律～2年最後の勉強会、そして、やってきたパティ～（後書き）

2年生編終わりも見えてきました。
このまま突っ走って行きたいと思います。

加わる旋律～新たな家族、そして、これからの日々～（前書き）

パティｓｉｄｅの部分、ちょっと実験でパティの話し方で試してみていますが、出来れば感想をいただけたときに他と同じでいいか、パティだけは今回みたいでいいかを感想で書いてもらえたらありがたいです。
それによって今後のパティの書き方を統一したいと思います。
では、本編をどうぞ。

Ｐ．Ｓ　今回は投稿までちょっと日が開いてしまいました。その事も重ねてお詫び申し上げます。

加わる旋律～新たな家族、そして、これからの日々～

２年生最後のテスト勉強会。

それに参加するメンバーは後輩含めて計１０人。

その中で、今回アニ研に入った毒島さんと山辺さんとも友達となった。

そんな最中に訪れるゆたか達。

ゆたか達は受験も済んでいたので、もてあましていた時間で俺達の勉強会を見に来た。

３人が陵桜のレベルにくじけそうになっていた時、俺に一本の電話が入る。

そして、それは、留学生のホームスティに関する連絡だった。

親父に事情を聞き、俺は留学生を受け入れる決意をする。

そしてやってきた子は、以前秋葉であったパティだった。

パティは俺との再会を喜び抱きついてくる。

俺はそんなパティを困惑しながら受け止めたのだった。

「お、おい、パティ、嬉しいのは分かったからそろそろ離れてくれないか？ちょっと照れくさいからさ。」

抱きついているパティにそう声をかけると

「フフフ・・・ケイイチはウブデスね。でも、アメリカではこれがフツウのアイサツですヨ？」

笑顔のままでそう答えるパティに俺は困惑しつつ

「それはわかるけど、人目もあるだろう？だから少し自重してくれよ。」

俺の言葉にパティはやれやれという感じで首を振ると俺を開放してくれた。

そんな俺達を見て苦笑を浮かべていた支援団体の人は俺に

「ははは・・・しかし、驚きました。まさかすでにお知り合いだったとは・・・それならなおの事安心してお任せできますね。これから1年の間、パティの事をよろしくお願いします。ほら、パティもちゃんとご挨拶して。」

パティにそう支援団体の人が言うとパテイは改めて俺に向き直って

「フツツカものですが、イチネンカン、よろしくオネガイシマス。」

と言うパティの挨拶に俺は慌てながら

「おいおい・・・それは、何か違うんじゃないのか？まあ、いいか・・・こちらこそ、よろしくな、パティ。」

そう言って手を出すとパティも俺の手を握り返して

「よろしくデス。」

そう言ってにっこりと笑うのだった。

「では、パティの荷物も明日中には届くと思いますので、今日は最低限の物だけもって来させましたから、今日はそれでお願いしますね。もし、何か不都合等ありましたら、先程の番号へおかけ下さい。」

と言う支援団体の人に俺も

「わかりました。それじゃ行くか、パティ。丁度皆も来てる事だし、お前を紹介するよ。」

俺の言葉にパティは首を傾げながら

「ミンナ？ミンナってダレのコトデスか？」

そう訊ねてくるパティに俺は笑いながら

「ははは。俺の友達、仲間の事さ。大丈夫、きっと皆も友達になってくれるはずさ。」

俺の言葉にまたもぱあっと笑顔になって

「オウ！ケイイチのフレンド、デスか。とてもタノしみデスネ。」

そんなパティに頷いて俺は玄関を開き、中に入ったのだが、すぐさ

ま俺は凍りついた。

そこにはこっそりと俺達の話を盗み聞きしに来たこなた達が黒いオーラを放ちながら仁王立ちしていたからだった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君の家で皆で勉強会という事になり、みんなで勉強していたが、そこにゆーちゃん達がやってきたのを見て驚く私だったが、更に驚く事に、慶一君の家にホームスティにやってくる人がいるという事だった。

突然の電話に驚いていた慶一君だったけど、実家の方とのやり取りを経て、とりあえず納得の行く答えを向こうからもらい、改めて先程の電話の主に連絡している慶一君を見ていたが、話が終わってから３０分後にその子がやってくるという事になった。

そして、その子を迎えに行く慶一君を見送った私だったが、どんな子がやってくるのかが気になった私はこっそりと話を盗み聞きしようと考えたのだった。

「・・・うーん・・・気になるね、ちょっとこっそり覗きに行って来ようかな？」

そんな私の呟きに気付いたかがみが私を止めようと

「別にそんな事しなくても、慶一くんの事だから私達に紹介してくれる為に連れて来るでしょ？余計な事はしないほうがいいんじゃない？」

そう指摘してきたが、私は好奇心を止められず

「なら、かがみはここで待ってればいいじゃん。私は行ってくるよ。面白そうでもあるしねー。」

そう言って部屋を出ようとする私をもう一度かがみは止めようとしたが、言ってもきかなそうな様子だと分かると、私を止めることを諦めたらしい。

他の皆も苦笑しているようだったが、とりあえず私は玄関の方へとこっそり向かって行ったのだった。

そして、玄関側でこっそり聞き耳を立てていたのだが、ふと背後に人の気配を感じて振り向いてみると、そこには先程私を止めようとしていたかがみや、他のみんなだった。

私はニヤニヤとしながらかがみに

「あれー？かがみは来ないんじゃなかったの？さっきは私の事止めようとしてたのにさー？」

そう言うとかがみは途端に慌てながら顔を赤らめつつ

「う、うるさい。別に私は気になったから来た訳じゃないわよ！あんたが変な事しないように監視に来ただけなんだからね！か、勘違いするんじゃないわよ！」

そう言いながらそっぽを向くかがみに私はニヤニヤを崩さずに

「はいはい、そういう事にしておくよー。それと、かがみ、こっそ

り来てるんだからそんな大声出すと気付かれるよー？」

そう指摘するとかがみは”はっ”となって慌てて黙り込んだのだった。

それを確認した私はこっそりと玄関を少し開いてその隙間から外の様子を伺うと、ちょうど慶一君が金髪の女の子に抱きつかれてる所だった。

私はその光景を見て、何となく面白くないなと心の中で思いつつ様子を伺っていると、話を終えた慶一君とその子が玄関に戻ってくるのを見てとりあえずかがみたちの方へ戻って慶一君が玄関を開くのを待った。

そして玄関が開き、金髪の女の子を連れて入って来た慶一君に私は黒い笑みを見せたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

この場所にこなたが達がいるという事はホームステイに来る子の事が気になって集まっているという事は容易に想像できたが、こなたの黒い笑みの意味がわからず、俺はおそるおそるこなたに尋ねてみたのだった。

「・・・こ・・・こな・・・た？えーっと・・・なんか笑みが怖いんだが・・・」

そう訊ねるとこなたは黒い笑みのまま俺に

「んー？そう？そんな事はないと思うけどねー。それにしても慶一

君。その子がホームステイに来た子なのかな?ずいぶんと可愛い子だよねえ?」

そう言いつつ、黒い笑みのまま更に

「それにさっきはこっそり覗いてみたけど、何か抱き合っていたよねえ?白昼堂々とさ。」

そのこなたの言葉に、こなたの後方から更に黒い気配が増えたようだった。

「い、いや、それはだな、この子の国では普通の挨拶みたいなものなわけだし、俺としてはやましい事なんてこれっぽっちも・・・」

そう言うと、その後ろから

「ほんとかしらね・・・案外鼻の下伸ばしてたんじゃないの?先輩」

黒い気配と共にきつい言葉の槍を飛ばしてくるやまとにたじたじとなりながら

「な、なんでだよ、俺はそんなにだらしないつもりはないぞ?」

そう反論すると、やまとはぷいとそっぽを向きながら

「どうかしらね、夏休みの海の時とかだってこうや高良先輩を見てだらしない顔してたんだから、あまり説得力ないわよ?」

そんなやまとに俺はただただ苦笑するしかなかったが

そこに更に黒いオーラのみゆきが

「・・・とりあえず、慶一さん。軽率な行動は極力控えるようにしてくださいね？」

物凄く怖い笑顔でそう言ってくるみゆきに俺も思わずこくこくと頷いていたのだった。

そんな空気の中、俺達のやり取りを見ていたパティが

「ケイイチ、このヒトタチがケイイチのフレンドタチなのデスか？」

そう声をかけてきたので俺はその言葉に”はっ”となって

「あ、ああ。そうだよ。そういえばすっかり紹介を忘れていたよ。皆、この子が今日から家にホームステイで来るパトリシア・マーティンだ。ほらパティ、自己紹介して。」

いい具合に話題がそれた事に内心ほっとしつつ、パティの紹介をする事にした。

「ハイ！ミナさんハジメまして。キョウからケイイチのイエでおセワになるパトリシア・マーティンといいマス。よろしくデス。」

その自己紹介に、黒いオーラを解除しつつ皆もパティに自己紹介をするのだった。

「泉こなただよ。よろしく、パトリシアさん。」

「柊かがみ、よろしくね。」

「柊つかさだよ。よろしく、パトリシアさん、でいいのかな？」

「高良みゆきといいます。どうぞよろしく。」
「峰岸あやの、よろしくね。」
「日下部みさおだ。私の事は呼びやすいように呼んでくれなー。」
「八坂こう、よろしくね。パトリシアさん。」
「永森やまと、よろしく。」
「毒島みくです。よろしく。」
「山辺たまきだよ。よろしくねー。」
「小早川ゆたかです。パトリシアさん、よろしくね。」
「・・・岩崎みなみ・・・よろしく・・・パトリシアさん・・・」
「田村ひよりっス。パトリシアさん、よろしく。」

と、みんなそれぞれに挨拶を交わして握手を返していた。

そして、そんな皆と俺を見てパティはとんでもない事を口にした。

「・・・フーム・・・ケイイチ・・・モノのミゴトなハーレムデスね。」

その言葉に俺は大慌てで

「パ、パティ、そんなんじゃないぞ?勘違いするなって。」

他の皆も苦笑するもの、困惑顔をするもの、何故か顔を赤らめる物、反応が様々だったが、その中で3名ほどパティのある言葉に反応する者がいてパティの所に行って

「パトリシアさん、ちょっといいかな?」
「ちょっと話聞きたいけどいい?」
「我々としてはなんとも共通のキーワードを聞いた気がするので話してみたいっスよ。パトリシアさん。」

そう声をかけていた。

その最中にかがみが俺の側に来て

「ねえ、慶一君。こなた達、なにやらパトリシアさんと話してるみたいだけど、さっきの発言といい、何だか私、あの子にこなたと同じような匂いを感じるんだけどさ・・・」

というかがみの言葉に俺は苦笑しながら頷いて

「かがみの思った通りだと思うよ。あの子はこなたやこうやひよりと同じさ。おそらく変な所で気が合う事だろうな・・・」

そう言うと、かがみは盛大にため息をついて

「・・・はあ・・・また頭痛の種が増えそうね・・・慶一君、ご愁傷様、かしらね？」

かがみのその言葉に俺もがっくりとうなだれつつ

「・・・そう言ってくれるなよ、かがみ・・・退屈はしないかもだけど、これから大変そうだな。」

そうかがみに言いつつ、俺はこれからの生活に予想すらつけられない状況に困惑していたのだった。

そして、俺達はそれぞれに自己紹介をすませ、やはり、話の合った４人はあの後もオタク談義に花を咲かせていて、その後は結局勉強会にならなくなり、今日の所はこれで解散と相成った。

そしてその日の夕食。

「大分みんなと打ち解けていたみたいだな、パティ。」

パティの希望の献立を用意しつつ俺はパティにそう声をかけるとパティは笑顔で

「ハイ！ミンナいいヒトタチでした。ケイイチのフレンドはいいヒトがオオイのがいいデスね。」

俺はそんなパティの感想に笑いながら

「まあな。俺もいいやつらと仲間になれたな、って思ってるよ。そんな中でもやっぱりこなた達は特に意気投合していたようだったな。」

そう言うと、パティは大きく頷いて

「そうデスね。ケイイチがあのトキオシえてくれたトオリ、ハナシのワカルヒトタチでした。ケド、アトフタリ、ワタシとハナシのアうコがイマシタね。タシカ・・・ミク・ブスジマとタマキ・ヤマベ、このフタリデスね。」

そんなパティの言葉に俺も頷きつつ

「はは。それはそうだろうな。あの子達もこうと同じ、アニ研の所属だからな。パティ、お前も学校に来るようになったら、アニ研に入ってみたらどうだ？」

そう説明すると、パティは少し考える仕草をした後、俺に

「ケイイチ、アニケン、ってナンデスか？」

そう訊ねてきたので俺はパティに概要を説明してやると、瞳を輝かせながら

「オウ！それはゼヒハイリたいデスヨ。コウにタノめばニュウブデキマスか？」

俺はその言葉に頷きながら

「ああ。こうに言えば喜んで迎えてくれると思うぞ。なんなら後で俺がこうにお前の事話しといてやるよ。」

そう言うとパティは満面の笑顔になってまたも俺に抱きついてきて

「サンキューデス！ケイイチ！これからのガクエンセイカツがタノしみになってキマシタ！」

そんな風に喜ぶパティを苦笑しながら引き離しつつ

「わかった、わかったからいちいち抱きつかないでくれって・・・俺が持たなくなるよ・・・」

力なくそうパティに反論するが、すでにアニ研入部に思いを飛ばしてしまっているパティの耳には入っていないようだった。

疲れる夕食を済ませた後、パティは持ってきたノートＰＣを使いたいとの事で、俺は、ネット環境は整えてあったので無線式のアダプ

ターを設置して俺とは別に回線を使えるようにしたのだった。

その後は部屋に戻ったパティは持ち込んだＰＣでアニメＤＶＤを見たり、ネットに潜ったり等をやっていたようだったので俺はそんなパティの様子を確認した後、こうにアニ研入部の件で連絡をつけた後、パティより先に風呂を済ませてしまおうと思い、パティに声をかけてから風呂へ向かう。

「おーい！パティ！俺、先に風呂に入ってしまうから、お前もきりのいい所で風呂にしちゃえよー！？」

部屋の外からそう声をかけるとパティも

「ワカリマシタ！ケイイチ、ごユックリどうぞデス！」

そう、返事を返してきたのを確認して俺は風呂に行くのだった。

しかし、俺は失念していた。

パティはこなたやこうと同じ人種なのだという事を。

俺に声をかけられたパティが俺に返事を返しながらほくそえんでいた事を・・・・・・

パティｓｉｄｅ

以前に慶一と秋葉で出会って、私はそれを運命と慶一に言いましたが、今日、ホームスティの家が決まったという事で、私はその家にやって来ました。

そして、その家の人を見た時、私はまさかもう一度再会出来るとは思ってなかったので、もう一度会えたた事に驚きと喜びを感じて思わず慶一に抱きついてしまいました。

慶一が赤くなって照れていた姿には萌えましたね・・・・・。

その後、慶一は私に慶一の友人を紹介してもらい、皆さんと仲良くなる事ができましたが、あの日、慶一が教えててくれたこなた、こう、ひよりともここで会う事がが出来たのでした。

慶一の言うとおり、私とその3人とは話も合った事もあり、すぐに仲良くなれました。

けれど、更にに後2人、私と話の合う子がいたので、その子達とも仲良くなれました。

私は慶一にこうの所属している部の事を聞きましたが、私がその部に入りたいと慶一に言うと、慶一はこうに私の入部を頼んでくれるとの事。

私はそんな慶一に感謝の気持で一杯でした。

なので、慶一がお風呂に向かったのを確認した私は、このシチュエーションで慶一に感謝する為に”アレ”をする為に準備をして慶一の居るお風呂へと向かったのでした。

そして、お風呂の入り口に鍵がかかっていない事を確認した私は早速、慶一へのお礼の実行の為にお風呂へと飛び込んだのでした。

「ケイイチ！キョウからオセワになるコトへのオレイです！ケイイ

チのセナカをナガシまショウ！！」

と言うと、慶一はしばしの間、固まっていました。

慶一ｓｉｄｅ

「ケイイチ！キョウからオセワになるコトへのオレイです！ケイイチのセナカをナガシまショウ！！」

そう言いながら体にタオル１枚の格好で風呂場に飛び込んでくるパティの姿に俺は虚を突かれる形となった。

俺は、パティがすっかりアニメのＤＶＤやら何やらを見ているパティの姿を見て、大いに油断をしていた。

そしてその結果、いきなりそう言いながら風呂場に飛び込んできたパティにしばし呆然となり、頭はすっかりパニックになっていた。

そして状況を確認した俺は大慌てでタオルを腰に巻きながら

「パ、パティ！お前突然何してるんだよ！！お前確かさっきアニメに見入ってたはずだったよな！？」

そんな俺の指摘にパティは指を振って

「チッチッチッ、アマイですネ、ケイイチ。こういうトキにこんなオヤクソクのシチュをミノガシはシマセンヨ？こういうトキにゼンリョクでこのシチュをタノシンでこそ、オタクのダイゴミというものデース！」

パティのその言葉に俺はたじたじになりつつも

「だからって、今それを実行するなっての！！俺の立場はどうなるんだよ！？」

そんな俺にパティは首を傾げつつ

「デモ、オトコのヒトはこういうのはウレシイものじゃナイデスか？それをキョヒするのはオトコとしてはヘタレというホカないデスネ。」

そう言うパティに俺は呆れつつ

「いや、むしろそう言う問題じゃないと思うんだが？」

なおもパティの攻勢をそらしていると、パティは突然涙目になって上目使いで俺を見て

「・・・ケイイチ、ひょっとしてワタシ、メイワクデシタか？ワタシはケイイチにホントウにカンシャしてるんデス！サイカイできたコトもウレシカッタデスし、ワタシのタメにイロイロしてくれたコトもアリガタくオモっているのデスヨ・・・だからこそ、ワタシにできるホウホウでケイイチにカンシャのキモチをツタエたい。そのキモチはウソじゃないデスヨ？それもケイイチにはメイワクデスか？」

そんなパティの気持とその顔を見せられたら、俺はパティを怒れなくなってしまった。

しばらく考え込んでいた俺だったが、仕方なく

「・・・わかったよ・・・お前の気持はよくわかった。今日はお前の気持に免じて許してやるからせめて、水着だけつけさせてくれよ・・・」

パティにそう言うと、パティは俺に

「ワカッてくれたのならそれでいいデス。ミズギをキてまたモドッてクダサイね？」

そう言うパティに俺も複雑な心境で頷いて

「あ、ああ。それじゃ少し待っていてくれ。」

そう言って風呂場の脱衣所に出ると、こなたやこうの時から念のため準備しておいた海パンを脱衣所の下着入れから取り出すとそれをはいて、俺は風呂場へと戻る。

そして、風呂場に戻ってきた俺の姿を見るパティの顔を見た時、先程の涙目などどこへやらな様子のパティに俺は心の中で（・・・やられた・・・パティの奴、さっきのは演技か・・・はあ・・・仕方ないか・・・）と思いながら、風呂場で待っているパティに声をかけた。

「戻ったぞ、パティ。とりあえず、お前は俺の背中を流してくれるんだよな？」

パティに聞くと、パティは頷いて

「そうデスヨ？そのタメにここにキタんデスから。ささ、ケイイチ

はそこにスワッてクダサイ。」

と言うパティの言葉に従い、俺は洗い場の椅子に腰を降ろすと、俺の背中にスポンジに石鹸をつけたパティがにじりよってきて

「では、ナガシます。それにしてもケイイチのセナカはヒロくてタクマシイですネ。」

そんな感想を聞いて俺は照れながら

「はは、一応これでも武道家のはしくれだからね。親父に散々鍛えられたからな。」

そんな俺の言葉にパティは首を傾げながら

「ブドウカ、デスか？ケイイチはカラテでもやってイルのデスか？それに、ケイイチのファーザーもブドウカなのですネ？」

そんなパティの疑問に俺は

「まあ、そんなようなものさ。それに親父も、だな。パティ、お前が本当はホームステイするはずの家こそが俺の親父の家だったんだよ。」

その言葉にパティは驚きながら

「え？ワタシはサイショはリュウシン・タツカミのイエにホームステイするはずデシタ。で、では、ケイイチはリュウシンのムスコ、なのデスか？」

俺はパティの言葉に頷きながら

「そうさ。俺は龍神龍真の息子だよ。親父の方でお前を預かれなくなったから俺が親父の代わりに指名されたって訳だ。」

俺の言葉にパティは戸惑いながら

「そうイウコト、デシタか。けど、ケイイチのファミリーネームはモリムラ、リュウシンのファミリーネームはタツカミ、チガっているのはナゼなのデスか？」

そのパティの疑問に、俺は簡単に事情を説明してやるとパティは納得したようで

「・・・そうイウコト、デシタか。ケイイチもクロウしているのデスネ。サビシクないデスか？このイエでヒトリきり、とイウのは・・・」

そんな風にしんみりとした顔になるパティに俺は笑いながら

「確かに苦労はしたさ、それに、寂しくもあったけど、それでも今はみんなが居てくれる。そして、今日からはお前も1年だけだけど家に居てくれるんだろ？だから、寂しくはないさ。」

パティの頭をなでつつそう言うとパティはおもむろに俺の背中に抱きついてきて

「キョウからワタシもケイイチのファミリーデスから。ワタシがイルアイダはケイイチにサビシイオモイはさせませんデスヨ。だからケイイチもエンリョなくワタシにアマえてクダサイ。」

そんなパティに俺は顔を赤くしつつ

「・・・そうだな。これからしばらく、よろしくな？パティ。」

そう言うとパティも俺に満面の笑みで頷いてくれたのだった。

そんな慌しい風呂を終えた俺は、パティに風呂に入らせたまま、先に風呂場を後にして風呂上りの飲み物を準備してキッチンで待つとパティに告げて、俺は着替えを済ませてキッチンへと向かったのだった。

やがて、風呂から上がり、キッチンに来たパティとその日は遅くまでパティの事、俺の事を色々と話して過ごした。

そして次の日の朝、俺の布団に何時の間にか潜り込んでいたパティを叩き起こしてその日1日が始まりを告げる。

俺はこの先、退屈だけはしなさそうだが俺の身も持つだろうか、という不安に駆られつつも突然に増えた家族を歓迎したのだった。

パティを見ながら俺は、こいつも何故か旋律の一人なのだろうと言う事に疑問をもたなかった。

パティの言う運命というものがあるならば、俺はまた、旋律と言う名の運命との出会いを果たしたのだろうと妙に納得が出来ていたという事も、その要因かもと思えていた。

新たな旋律はどんな音楽を奏でてくれるのか、それを期待する俺がそこに居た。

加わる旋律～新たな家族、そして、これからの日々～（後書き）

自分の小説もあと1話で１００話の大台に乗ります。
ここまでやってこれたのも、皆さんの励ましと感想、評価の賜物だと思っております。
本当にありがとうございました。
これからも変わる日常の連載、がんばっていきますのでどうぞ今後もお付き合いの程をよろしくお願いします。

賑やかな旋律～ドタバタな雛祭り～（前書き）

これを投下してついに１００話の大台に乗りました。
まだ初投稿から1年経っていませんが、いいペースで書けたのではないかと思っています。
そして、ＰＶ７０万突破とお気に入り小説登録件数の3桁超えもあり、さらに嬉しく思っています。
これからもこんな駄文ではありますが、変わる日常にお付き合いいただけたらと思っています。
皆様に最大の感謝を、という事で本編をどうぞ。

賑やかな旋律～ドタバタな雛祭り～

いつもよりも大人数での勉強会、そして、その最中に以前に秋葉で出会ったパティと再びホームステイとして再会を果たす。

そして、そんなパティに翻弄される生活が始まって数日、日付は2月を過ぎ、3月へと進んでいた。

3月ともなると、女の子にとっては雛祭り等のイベントもある。

そんなイベントに柊家からの招待を受ける事となったのだが、俺はパティに日本の伝統行事を見せるいいチャンスとも思ったのだけど、結局数人の女の子の中で俺1人という状況を考えた時、照れくささもあったので俺はその招待に龍兄も巻き込む事にしたのだった。

「・・・・・・という訳なんだが、龍兄、柊家へ来れる？」

そう確認の為に龍兄に聞くと、俺の思惑を計るかのように

「・・・どうでもいいが、本当に柊家からの招待なんだろうな？また俺を巻き込もうとか考えてるんじゃないのか？」

龍兄の言葉に俺は

「疑うなら柊家に電話して聞いてみればいいよ。もっとも、俺が連絡を受けた時にまつりさんやいのりさんに龍兄に声かけてくれと言われたから俺は言う通りにしただけだし。」

その言葉に龍兄は疲れたような、呆れたような声を出して

「おまえな・・・それを真に受けて馬鹿正直に声かけるとかしてるのかよ・・・俺の都合はどうなるんだ?」

俺はそんな風に言う龍兄に

「まあ、龍兄にも色々都合があるって事はわかってるよ。だから、もし、都合が悪いとか言うのなら龍兄が直接連絡を入れて断りをいれたら?」

しれっとそう言うと龍兄は

「む・・・そうするしかないかな・・・。」

少し悩みながら言う龍兄に俺はわざとらしく

「まあ、それでいいんじゃない?でも、そうなると、まつりさん達がっかりするだろうなあ・・・でも仕方ないよな、龍兄にも都合って物があるんだしさー。」

俺の言葉に電話口の向こうで動揺する気配を見せる龍兄。

「・・・なあ、慶一、お前、それって卑怯じゃないか?」

俺はさらにとぼけた声で

「どうして?だって龍兄、用事あるんでしょ?なら仕方ないじゃないか。ま、ともかく、そういう事なんだし、まつりさん達には上手く言っておくよ。」

そう答えると、龍兄はしばし無言だったがやがて

「・・・慶一、後で覚えておけよ?修行、3倍にしてつけてやる。ともかく、明日、柊家だな?」

俺は修行3倍の言葉にびびりつつも

「そうだよ?って龍兄、来るの?」

とぼけてそう答えると龍兄は疲れたような声で

「それで行かないと言ったら、俺は最悪の悪者になるだろうが。ったく・・・で、詳しい時間は?」

まんまと龍兄を連れ出すことに成功した俺は修行に覚悟しつつも龍兄に詳しい時間を伝えた。

「時間は・・・だよ。俺の方が先に着いてると思うけど、そういう事だから。」

そう話して俺は龍兄との電話を切る。

そして、3倍の修行に頭を痛めつつ、パティに声をかけるため、部屋へと赴く俺だった。

パティの部屋をノックして声をかける。

「パティ、俺だ。ちょっといいか?」

俺の言葉に部屋の中からパティが

「ケイイチ？ワタシにヨウジですカ？」

そう返事をしつつドアを開けてくれたので、俺は今回の事をパティに話す。

「ああ、実は明日、柊家で日本の伝統行事である雛祭りをやる事になってな。お前も日本の文化には興味もあるんだろうし、向こうからの希望もあったから、お前に伝えておこうと思ってな。」

そう説明するとパティは少し考える仕草を見せていたがやがて

「ヒナマツリ、デスか。タシカ、オンナノコのおマツリだとキいていますネ。ニホンのデントウテキなニンギョウをカザるとイウコトはシッテマスが、それをミられるのならワタシもイッテみたいデスね。」

そんなパティの言葉に俺も頷いて

「そっか、それじゃ、向こうには俺から連絡しておくからな。」

俺の言葉にパティも頷いて

「ワカリマシタ。アシタはタノしみにしてイマス。ケイイチ、これからジカンアリマスか？」

そう聞いてくるパティに俺は

「ん？連絡した後なら特に予定はないけど？」

そう答えるとパティは満面の笑みを浮かべながら

「ナラ、ケイイチ、ワタシとイッショにこれをミまショウ！」

そう言って俺に差し出したのは、パティのはまってるアニメのＤＶＤだった。

「ケイイチにもこれのオモシロさをオシエテあげたいデスから。」

というパティの言葉に俺は軽いため息をつきつつ

「・・・しょうがないな・・・じゃあ、連絡したらリビングのでかいテレビで見るか。」

と言う俺の言葉にパティもうんうんと頷いて

「デハ、このＤＶＤはリビングにモってイキマスね？ケイイチ、ちゃんとキテくれなきゃイヤですヨ？」

俺に念を押していくパティに俺も苦笑しながら頷いたのだった。

その後俺は柊家へ、明日の事についての連絡を済ませた後、パティの待つリビングへ行き、一緒にパティお勧めのＤＶＤを5時間見させられる事となった。

そして、身も心も疲れ果てて俺は明日のこともあるので、その準備をして早めに休む事にしたのだった。

次の日の朝、俺はいつもの時間に起きて朝食の準備を済ませてパティを起こしに行く。

一応パティの部屋のドアをノックしてみるが、起きてくる気配はなさそうだったので、俺は部屋に入る旨を告げてから部屋に入っていくと、まだ寝息を立てているパティを見る。

「おーい、パティ、朝だぞ?飯も出来てるからそろそろ起きろー。」

と一応声をかけてみるが、パティは「うーん・・・」とうめくばかりであまり効果がなかったので俺は更にパティの体を揺すりつつ、もう1度声をかけながら起こそうと頑張ってみたが、起きてくれない。

仕方がないので、俺は最終手段に出る事にした。

パティの額に照準を合わせて指を一閃する。

その衝撃でパティは「アウチ!!」という声をあげながら目を覚ました後、額の痛みが襲ってきたのか額をさすりながら涙目になって

「アウ・・・イッタイナニゴトですカ・・・オデコがとてもイタイデス・・・」

と言うパティに俺は呆れつつ

「起きたか?パティ。中々起きないから目覚まし使わせてもらったぞ?」

俺がそう声をかけるとパティは少し寝ぼけた表情でこっちを見て

「ふあー・・・グッモーニン、ケイイチ・・・ところで、メザマシ

ってナニをシタンデスか？」

そう言いながら俺に訊ねてくるパティに俺はでこピンの形指で作って見せて

「こうやったんだよ。お前もこなた同様、中々起きないみたいだったからな。」

そんな俺を見てパティは呆れたように

「ムー・・・ヒドイデスケイイチ。これはリッパなＤＶですヨ」

とんでも発言をするパティに俺は慌てながら

「待て待て待て！それは夫婦の間で起きる暴力行為として使う言葉だろうが！俺はお前とそう言う関係になった覚えはないぞ！？と、言うか、使いどころ思いっきり間違ってるだろうが！」

俺がそうツッコミを入れると、パティは途端に泣きまねをしながら

「ううん、ヒドイデスヨ、ケイイチ。あのヨルのコトはアソビだったのですネ？」

更にとんでも発言をするパティに俺は

「あの夜ってどの夜の事だっての！馬鹿言ってないでとっとと飯食う支度しろ！」

そう言ってツッコムとパティはつまらなそうに

「ぶー。ケイイチ、ノリがワルイですヨ。」

と言うパティに俺は呆れつつ

「何が悲しくて朝からお前と漫才などせねばならんのだ・・・とにかく、飯の準備はできてるから、用意できたら降りて来いよ?」

パティにそう言って部屋を出ようとする時パティは俺に

「ワカリマシタ!ケイイチのツクるゴハンはオイシイデスからネ。ケサもタノシミですヨ。」

そんなパティに俺は照れつつも

「褒めたって何もでないぞ?とはいえ、サンキューな、パティ。」

そう言って礼を言う俺にパティも満面の笑みを向けてくれたのだった。

そして、2人で朝食を済ませて俺達は柊家へと赴く準備をして俺とパティは自転車で向かう事にしたのだった。

俺の後ろに乗って俺にしがみつきながらパティはしきりと自分のみゆき並みの胸を押し付けてきていたので俺は

「おい、パティ。あまり密着されると運転しずらいし照れくさいんだが?それに、当たってるんだけど・・・。」

そう言うとパティはしれっとした顔で俺に

「アテてんのヨ！」

と言うパティに俺は重いため息をついたのだった。

そんな俺の様子を見てパティは

「これもまた、オヤクソクですネ。」

と言うパティに俺は思わず

「誰とした約束だよ、それは！」

と思わずツッコミをいれていたのだった。

そんな疲れる状態のまま、柊家に到着した俺は自転車をいつもの場所に止めて、パティと共に柊家の玄関へと向かう。

その際にパティは通りがかった神社を見て、感嘆の言葉を発していた。

「オウ！これはスゴイデスネ！まさに二ポンってイウカンジですヨ！スバラシイタテモノデス！」

そんなパティに俺も笑いながら

「結構すごいだろ？かがみの家は神社だからな。俺もこの神社を目にした時には驚いたもんさ。」

俺も初めてこの神社をまともに見た時の感想をパティに言うと、パティはまた変なキーワードに反応したようで

「ジンジャ、デスか。と、イウコトはひょっとしてミコがイルのデスか？ミコフク、ミタイデス！！」

妙に興奮しているパティに俺はやれやれと首を振りつつも

「社務所の方にでも後で行ってみればいいんじゃないか？それよりも俺達はかがみ達に呼ばれてここに来てること忘れるなよ？」

と、一応釘を刺しておくと、パティはその事を思い出し、少し残念そうな顔をしながら

「ソウでしタ・・・シカタないデスね。でも、ケイイチがツレてキテくれたおかげでバショがワカリマシタ。コンドはユックリキテミマスヨ。」

俺はそんなパティに（そこまでして見たいものか？）と心の中で思いつつ苦笑しながら

「行ってみたいなら自転車貸してやるから、お前の都合のいい時にでも行ってみろよ。けど、あまり無茶はするなよ？パティ。」

そう言うと、パティは嬉しそうに

「ホントですカ？サンキューデス、ケイイチ。でも、トキドキでいいデスからイッショニイキまショウ。ヒトリというのもツマラナイバアイもアリマスからネ。」

俺はそのパティの言葉に軽いため息をつきつつも

「まあ、時々はな。けど、その時には事前に言えよ？いきなりじゃ予定空いてない時もあるんだからな？」

俺の言葉にパティも頷いて「ワカッテマス」と言うと、俺も苦笑しながらも頷くのだった。

そして、柊家玄関の呼び鈴を鳴らす。

しばらく待つと、中から「はーい。」と言う声と共に玄関が開き、かがみが俺達を出迎えてくれた。

「いらっしゃい、慶一くん。パトリシアさん。今日は来てくれてありがとう。こなたや八坂さん達以外はすでに集まってるわ。後、龍也さんも来てるけど、姉さん達に捕まっていたわね。」

俺の方が先に着くだろうと思っていただけに、龍兄が先に着いていることに驚いた俺は

「え？龍兄、もう来てるの？俺の方が先に着くと思ってたんだけどな。そっか、２人にすでに拉致られたのか。それじゃ、俺達も行くか、パティ。かがみ、お邪魔するよ？」

俺がそう言うとパティも頷いて俺に着いてきて、かがみも「どうぞー」と言って俺達を誘導してくれた。

かがみの案内の元、雛人形の飾ってある部屋へと行くと、そこには立派な雛壇と人形、そして、２人に言い寄られている龍兄と先に来ていたみゆき達がいた。

「みんな、少し遅くなったかな？ともあれ、パティを連れて来たよ。

」

そう言うと、俺に気付いたみんなが

「いらっしゃい、けいちゃん。時間はほぼぴったりだし、遅れてないから大丈夫だよ～？」

「私達の方が少し早めに来ただけですから問題はありませんよ？」

「私達は慶ちゃん達より柊ちゃんの家に近いしね。」

「ま、慶一達がかかった時間は妥当だと思うゼ？」

「そうですよ。私達もそんなに待ってなかったですから。」

「・・・私達も結局早く来過ぎただけですから・・・」

「上手い具合に2人と一緒に合流できたっスよ。」

そして、龍兄に絡んでいたまつりさんといのりさんも

「龍也さんが結局一番乗りだったもんね。」

「いきなり訪ねて来た時には驚いたけど、森村君、龍也さんに声かけてくれてありがとね？」

そう言ってくれたのだが、龍兄だけは何だか恨みがましい目で俺を見ていた。

そんな龍兄の視線を受けながら俺はその視線に気付かない振りをしつつ

「それなら良かったよ。それと、俺はただまつりさん達に言われたとおりにしただけですからね。」

そう言ってとぼけるたのだった。

そんな最中、じっと雛人形を見つめるパティだったが、人形を見ながらまたとんでもない事を口にするのだった。

「ウーン・・・いまいちモエませんネ。ワタシがソウゾウしていたモノとはスコシチガウみたいデスネ。」

そのパティの呟きを耳にした俺は呆れながら

「あのな・・・パティ、お前何を考えてたんだ・・・確かに世の中にはそういう雛人形もあるかもだが、あれはあくまでもアレンジみたいなもんだぞ?本来の雛人形はこんな感じだよ。」

さり気に突っ込みつつそう言う俺にパティは

「ナルホド、そういうコトなんデスね?そういうメでミなければナカナカオモムキがありマスネ。」

そんなパティの言葉にかがみも感心して

「へえ?パトリシアさん、”趣”なんて中々難しい言葉知ってるのね。」

かがみのその言葉にパティは胸をはりつつ親指をびしっと立てながら

「二ポンのコトはかなりベンキョウしましたデスヨ!」

と、得意げに言うパティに俺は軽いため息をつきつつ

「その勉強の方向性にも少し問題ありそうな部分もあるみたいだがな・・・。」

そんな俺の言葉にパティは頬を膨らませつつ

「ケイイチ、ヒドイデス。ワタシだって二ポンのコト、シりたくてガンバリましたヨ？」

そう抗議するパティにかがみもパティを庇うように

「慶一くん、ちょっと言い過ぎな所、あると思うわよ？パトリシアさんだって日本になじみたくて頑張った部分もあるんだろうし、そこの所は認めてあげなくっちゃ。」

そう言うかがみに俺は

「わ、わかってるよ。悪かったなパティ。」

そう、パティに謝ると、かがみの後ろでこっそりと舌を出しているパティに気付き、俺は軽いため息を一つついたのだった。

そうこうしてるうちにこなたとこう達も到着した。

「やふー。ごめんねー、少し遅れちゃったよ。」

まずそう言いながらこなたがやって来て次に

「すいません先輩、忘れ物したら遅くなってしまいました。」

「・・・まったく、こうは・・・先輩、みなさん、ごめんなさい、迷惑かけちゃって・・・」

そんなこなたにとこう達に俺は

「そんなに遅いってわけじゃないけれど、いい加減時間を守る事を覚えないと社会にでてからもつらいぞ？」

その言葉にかがみややまとも

「そうよ？こなた。今は私達の間でだからいいけど、これからもっと重要な待ち合わせが起きる事だってあるんだからね？まだ間に合うんだからその癖なんとかしなさいよ。」

「こうもそうよ？こんな事ばっかりしてたら、今度は先輩達にだって愛想つかされかねないからね？そうなったら知らないわよ？」

という2人のおしかりにこなたとこうも今回は大分凹んでいた。

ともあれみんなが揃ったので、龍兄やまつりさん、いのりさん達を交えた雛祭りをしたのだった。

その中でやっぱり、こなた、こう、ひより、パティの4人は集まってオタク談義に花を咲かせていた。

「やっぱり、雛人形も萌えフィギュアで構成する物があってもいいよねー。」

「そういうのも新しい雛祭りのスタイルとして確立して欲しいとこですよね。そうしたら私も自分の趣味全開のフィギュアを雛人形に飾るんですけどね。」

「やっぱりここは、好きなキャラ同士のカップリングをさせるのが・・・」

「ヤッパリ、コナタ達はワカッテいマスね。コレカラいくスクールにドウシがいるのはウレシイコトデス！」

そんな話題で盛り上がる４人に俺達はただただ苦笑するのみだった。

そんな中でパティとも友達になりたいと思ったゆたか達もパティ達の居るほうへといって、話しに紛れ込みつつ、楽しそうに笑っているのを俺達は微笑ましく見守っていた。

「あはは。わたしたちには分かりにくい事結構話してるけど、パトリシアさんも気の合いそうなお友達ができそうでよかったね、けいちゃん。」

「結局は類友でしょ？とはいえ、こなた達とも打ち解けられたならパトリシアさんも運がよかったのかもね。」

「奇妙な感じではありますけど、これもまた縁という事なんでしょうね。そういう意味で言うなら不思議なものです。」

「でも、私達とも仲良くできそうよね。私もパトリシアさんみたいな子は嫌いじゃないわ。」

「言ってる事はちびっ子達と同じで分かり難いけど、いい奴だってのはわかるな。」

みんながそれぞれ言う中俺も

「パティは悪い子じゃないよ。ちょっとだけずれてる所はあるけど、それだけは分かる。だから、俺達もあいつの友達になってやろうと思う。こうして出会ったんだしな。だからみんなもこれからもパティと仲良くしていこう。」

俺の言葉にみんなもにっこりと笑って頷いてくれたのだった。

その後は、雛あられを食べたり、ゲームを楽しんだりしてひとしきり騒いで、今日はお開きという事になった。

後でパティに聞いてみると、とても楽しかったと言ってくれたので、連れて行った甲斐もあったな、と心の中で思いつつ、今日を終えたのだった。

そして、次の日の朝、俺はいつものように朝食を作り、学校へ行く準備をしていると、今回はしっかりと起きてきたパティに声をかけられた。

「グッモーニン、ケイイチ。キョウはワタシもケイイチとイッショにスクールへとツいていきマスので、ヨロシクデス。」

と言うパティに俺は驚きつつ

「え？けど、お前の入学はまだ先だろ？それに俺は普通に授業だからな、お前を連れまわす訳にもいかないぞ？」

そう言うと、パティは

「キノウ、ワタシのケイタイにリョウオウハイスクールからレンラクがアリまシタ。ワタシのセイフクとキョウカショがソロったとのコトなのデス。なので、それをトリにクルついでにスクールをケンガクしないかとイウ、ティーチャーからのオサソイがあったのですヨ。」

そう言う、パティの言葉に納得した俺は

「なんだ、そういう事だったのか。わかった。それじゃ出かける準備をして一緒に行こう。」

俺がそう言うとパティも満面の笑みで頷いて

「ジュンビはバンタンですヨ。アトはケイイチのツクったオイシイブレックファーストをタベるだけデス！」

パティの言葉に俺も頷いて

「なら、食べてしまうか。それと学校に行く際に、バスの時間とか電車の時間も教えてやるからメモして忘れないようにしとけよ？」

そう言うと、パティも「ワカリマシタ。」と言ったので、その後、俺達は朝御飯を済ませて家を出た。

いく途中、途中でパティにバス時間や電車の時間を教えつつ、俺達はいつもかがみ達と合流する電車の乗車口で電車を待ち、いつものように乗り込んだ。

そして、かがみ達と会うと、俺とパティは2人に挨拶をするのだった。

「おはよう、かがみ、つかさ。」

「グッモーニン、カガミ、ツカサ。」

そんな俺達に気付いてかがみ達も挨拶を返す。

「おはよう、慶一くん、ってあら？」

「おはよう～けいちゃん、あれ？」

俺と一緒にいるパティに気付いた2人は不思議そうな顔をこちらに向けて事情を聞いてきた。

「ねえ、慶一くん。どうしてパトリシアさんも一緒にいるの？」
「パトリシアさんもこの時間におでかけなの？」
と言う2人に俺は朝のパティから聞いた事を話すと2人とも納得して
「そういう事だったのね。パトリシアさん、うちの学校はかなり大きいから、迷子にならないように気をつけてね。」
「わたしでも時々迷子になりそうになるもんね。」
「それはあんたの学校内部の把握が甘いからでしょ？仮にも在校生なんだから恥ずかしい姿をパトリシアさんに晒さないように注意しなさいよ？」
「はうう・・・酷いよ、おねえちゃん・・・」
そんな2人の会話にパティも笑みを向けながら
「ツカサ、ドンマイデス。ワタシもハジメてデスからツカサのコトをどうこうイエマセンですヨ。デキルコトならケイイチ達がワタシをアンナイしてくれるのがウレシイデスが、ケイイチ達もジュギョウがありマスよネ？」
パティの言葉に俺は頷いて
「たぶん、その所為でお前の学校見学する時間には付き合えないだろうな。でも、いいじゃないか、パティ。学校に通うようになったらいつだって俺達が学校案内できるだろうからな。だから、焦る必要はないと思うぞ？」
俺の言葉にかがみやつかさも頷いて
「そうよね。パトリシアさんが入学してからでもチャンスはいくら

でもあるんだし、その時には私も学校案内に付き合ってあげるわよ？もっとも、他の皆もそうしようとするかもだけどね。」
「パトリシアさんも、もうわたし達のお友達だもんね。そのお友達の力になれるなら、わたしも協力するよ？」
そんな2人の申し出にパティは嬉しそうに
「ワタシをフレンドとミトめてくれるのデスか？サンキューデス。カガミ、ツカサ。」
かがみ達に礼を言うパティに俺も
「よかったな、パティ。すぐに多くの友達ができるなんて恵まれてるぞ？そんな友人達をこれからも大事にしないとな。」
俺の言葉にパティも頷きながら
「ソウデスね。でも、こうしていいフレンドにメグリあえたのもケイイチとデアったからデスね。ケイイチにもカンシャデス。」
そんな風に言ってくれるパティに俺も照れながら
「俺は別に何もしちゃいないさ。それもパティの運だよ。俺がやったのはせいぜいきっかけを作っただけさ。」
そんな俺にパティはいきなり抱きついてきて
「ケイイチはケンソンしすぎですヨ？でも、そこもモエですネ。」
そう言うパティに俺は慌てつつ

「お、おい、パティ、やめろって、みんな見てるだろ？」

そう言って引き離そうとする俺を、かがみとつかさが呆然とした顔で見ていて、更にタイミングが悪い事にちょうどこなたの乗り込んでくる駅に着き、こなたが乗り込んだと同時にこの姿を見られてその日１日中、こなた達は不機嫌で、俺はそんなこなた達をなだめるのに一苦労する事となった。

その後は学校見学をしてきたパティに家に戻ってから色々聞かれ、俺もまた学校の事についてパティに教えてその日もまた疲れる１日を終えたのだった。

もうすぐ期末も終わり、２年生最後の春休みが迫っていた。

俺は、賑やかになった家の中を嬉しく思いながら、春休みの予定に思いを馳せつつ、パティを始めとするゆたか達もまた、無事に合格を果たして俺達と過ごす事が出来るように祈りをこめつつ、これからの時間も楽しく過ごしていけたらと願う俺だった。

賑やかな旋律～ドタバタな雛祭り～（後書き）

１００話記念の短編を書こうと画策しております。
そちらの方は別途で投稿を考えていますので、今後はそれを起点に少しずつ短編を書いていけたらと思っていますのでどうぞよろしく。

緩やかなる旋律～試験に向けてのみさおの受難～（前書き）

１００話という節目を迎えて更なる一歩を踏み出していく所存です。
これからも応援の程、よろしくお願いします。

緩やかなる旋律～試験に向けてのみさおの受難～

パティに日本の文化を見せるという名目で、今回の柊家の招待に応じた俺。

その際に、俺1人だけは照れくさかったのもあり、龍兄を巻き込む。

何となくオタクな反応をしつつも、とりあえずはパティも喜んでくれた事に安堵しつつ、龍兄の報復の修行3倍にため息をつく俺。

そして、雛祭りも終わり、パティの制服等が学校に届いたという連絡をパティは受けた。

学校見学という教師からの誘いもあり、俺と共に学校へと向かうパティ。

そして、学校へ向かう途中でまたもパティに抱きつかれ、それをこなた達に見られ、その日、1日はこなた達のご機嫌取りに奔走する事となったのだった。

そして、それから数日後・・・・・・

「ほら、みさお。次だ。後何問か解いたら休憩だからがんばれ。」

みさおを指導しつつそう言う俺にみさおは

「ううー・・・慶一ー、もう少しお手柔らかに頼むってヴァ・・・」

弱々しい声でそう言うみさおに俺は呆れつつ

「あのな。今回も試験勉強も兼ねて宿題を写させてやったんだぞ？それでいて赤点取りそうなおまえの願いを聞いてこうして勉強も見てやってるんじゃないか。中々寛大だとは思わないか？」

その言葉にみさおは言葉を詰まらせ

「う・・・そ、それはわかってるけどさー・・・頭パンクしそうだよー・・・」

頭を抱えながら弱音を吐くみさおに軽いため息をつきつつ

「後もう少しだろ？頑張れよ。そこまで解けたらこれをやろう。」

そう言ってみさおに有名どころのプリンを見せる。

すると、みさおは途端に目を輝かせて

「おおおー！！そ、それは私の大好物・・・おーし！慶一、頑張るから終わったらそれくれよな。絶対だぞ！？約束だかんな！？」

その言葉に俺は苦笑しながらも

「分かってるよ。だから頑張れ。」

そう言うと、みさおは満面の笑みで頷くのだった。

今どうしてこんな状況になっているかというと、その理由は、これより3時間程前までさかのぼる・・・・・・

「パティ、おはよう。学校見学してきたんだろ?どうだ?陵桜の感想は。」

パティのそう声をかけると、パティは満面の笑みで

「・・・スゴク・・・オオきいデス・・・」

と、どこかで聞いたような台詞を吐くパティに俺は脱力しながら

「それは何かのネタか?・・・はあ・・・まあいいや。ともあれ、俺もまだ知らない場所もあるんだよな。だから、それもお前が入学してきた時にお前を校内案内する時に一緒に回ってみないか?」

俺の言葉にパティも頷いて

「そうデスね。ワタシもまだまだシリたいバショ、ミタイトコロ、たくさんありマスね。そのトキにはケイイチ達にもアンナイしてもらえたらウレシイデスね。」

その言葉に俺も頷きながら

「ああ、まかせろ。って、学校全体を把握しきれていない俺が言うのもなんだけどな。まあ、楽しみにしてろよ。」

俺の言葉にパティも笑顔で頷きながら

「ハイ!タノシミにしてマスよ。あ、そろそろデカケなければ・・・ケイイチ、あまりオソクならないようにカエリマスから。それと、ナニかあれば、ケイイチのケイタイにレンラクいれマスね?」

その言葉に俺は

「ん?今日はどこかへでかけるのか?」

そう訪ねるとパティは頷いて

「ハイ!キョウはユタカ達とヤクソクがあるのデスよ。ナンでもワタシのタメにヒツヨウなブンボウグをエランデくれるとのコトデスので。ホントウにフレンドというものはアリガタイデスね。」

その言葉に俺は笑いながら

「そっか。良かったじゃないか、パティ。ゆたか達とも友達になれてさ。まあ、俺が言うのもなんだけど、友達は大切にしろよ?」

俺の言葉にパティもにっこりと笑って

「ワカッテいマスよ。そんなユタカ達がダイスキデスからね。ケイイチがシンパイするほどのコトではアリマセーン!」

その言葉に俺も笑いながら頷くと、パティは時計を見て

「イケマセン!イソガなくては・・・ケイイチ、キョウのディナーもキタイしてマスよ?それではイッテキマス。」

俺にさり気にプレッシャーをかけてから家を出るパティを、苦笑しながら見送る俺だった。

「・・・ったく、パティめ・・・さり気にプレッシャーかけていきやがった・・・しゃあない、がんばってみるかな?」

そう思いながら夕食の献立に思いを馳せつつ、部屋に戻って宿題等を終えてしまおうとしていたのだが、そこに俺の携帯に着信が飛び込んできたので俺は発信者を確認して電話に出た。

「もしもし？みさおか？今日はどうした？」

俺がそう話し掛けるとみさおはなんとも歯切れの悪そうな声で

「あー・・・慶一・・・その・・・な？もうすぐ期末も近いじゃん？それに、今日も宿題でてただろ？それでさ・・・あの・・・」

俺はみさおの言いたい事が何となく理解できたので

「宿題の掃除も兼ねて勉強会しないか？と言った所か？」

俺の指摘に電話口でみさおは

「あう！・・・うう・・・だめかなー・・・？慶一ー・・・頼むよー・・・柊もあやのも今日は捕まらないんだよー・・・」

相当に凹んでるらしいみさおに俺は軽いため息を1つつくと

「・・・はあ・・・わかったよ。引き受けてやるから来るなら来い。ただし、宿題も全部見せないからな？教える所は教えるから、頑張って問題解けよ？俺の所に来る以上はその位は覚悟してもらうぞ？」

一応の妥協案を示すと、みさおは途端に元気になって

「ほんとか！？お前に手を貸してもらえるんならその位は頑張るゼ

！それじゃすぐ行くから待っててくれよなー？」

その言葉に俺も

「わかった。こっちに来るのはいいが、慌てて事故とか起こさないようにな。それじゃ待ってるぞ？」

そう言うと、みさおも

「分かってるってヴァ。それじゃ、後でな？慶一ー。」

そう言って通話を終えると、俺はあいつに対する飴と鞭を準備する為にキッチンへと赴くのだった。

そして、しばらくしてみさおがやってきて、冒頭の状況に戻る。

俺は必死で問題を解くみさおを見ながら

「なあ、みさお。かがみとあやのが捕まらなかったって電話口で言ってたよな？一応2人には連絡は取ってみたって事なのか？」

そう訪ねると、みさおは頷きながら

「ああ。あやのはデートらしくてさー。邪魔するの悪いもんな。柊の方は電話した時にはちびっ子や柊妹と出掛けた後だったんだよ。それでさ、今回は珍しくちびっ子も柊妹も宿題終わらせてたらしいんだよなー・・・。んで、私1人だけこの有様で・・・。」

最後の方はため息をつきながらそう言うみさおに俺は

「ふーん?珍しい事もあるもんだな。つかさは、かがみに頼る事はできるかもしれないが、こなたはなあ・・・。」

俺の言葉にみさおもうんうんと頷いて

「そうなんだよなー。私もちびっ子はてっきり柊を頼る物だと思ってたかんな。それに夏休みの時のあの姿見てっから、また柊家でぶつかるかも、って思ってたしな。」

その言葉に俺も苦笑しながら

「まあ、お前とこなたはかがみを巡ってのライバルでもあるわけだしな。(かがみ本人は結構迷惑してるみたいな感じだが・・・)」

俺が最後の方で心の中でそう考えていると、みさおは俺を見て

「なあ、慶一。お前、今なんか妙な事考えてなかったか?」

そんなみさおの指摘にギクリとしながらも努めて平静を装って

「別に?何も考えてはいないぞ?」

そうとぼけておいたが、不信な目で俺を見つづけるみさおの視線に耐えつつ

「ほらほら、そんな事よりもとっとと問題終わらせちゃえよ。でないと、いつまで経ってもプリン食えないぞ?」

そう言ってみさおの意識をプリンに向けさせると、みさおは慌てながら

「そ、そうだったー！よーし、後3問だ！がんばるぞー！」

そう言って必死に問題を解き始めたのを見て、俺はほっと胸をなでおろしていたのだった。

そして、ようやく問題も解き終わり、みさおに約束のプリンを渡すと、みさおは満面の笑みを浮かべながらそれを食べ始めた。

とても幸せそうにプリンを食べるみさおを見て

「・・・お前ってそういうのってほんと幸せそうに食べるよな。」

そんな俺の言葉にみさおは満面の笑顔のまま

「そっかー？自分の好きな物を食べてる時って誰でもこんな風になったりしないか？私はすっげえ嬉しいし、幸せだけどな。」

みさおの答えに俺は笑いながら

「はは。でも俺はお前ほど好きな物を食べる時に幸せそうな顔をしてる奴を見た事は・・・」

そこまでいいかけてはたと俺は思い出した。

もう1人そんな顔をしてる奴を見たことがあった事を。

俺のそんな何かを言いかけてやめたのを見たみさおは俺に

「ん？どうしたんだ？慶一。何か今言いかけてたよな？」

その言葉に俺は苦笑しつつ

「いや、ちょっとお前みたいに幸せそうな顔してた事のある奴の事思い出してな。」

俺の言葉にみさおは何やらピンときたようで

「なあ、慶一。それって柊じゃね？あいつもお菓子とか好きだから私もあいつの幸せそうにしてる顔見たことあんだよなー。」

みさおの言葉に俺も驚きつつ

「お？よく分かるな、みさお。夏休みの旅行の時も松茸とか食べて満面の笑顔を見せてたのを思い出したからな。とはいえ、流石にみさおもそれが分かるって事は付き合いの長さって事なんだな。」

俺の言葉にみさおも頷いて

「まーなー。それにそういう時に限って柊はダイエットとか言い出すかんなー。」

その言葉に俺も複雑な表情を見せながら

「分かるような気がするけど、あまりかがみの前じゃ言えないなあ・・・」

俺がそう呟くと、みさおも頷きながら

「そうそう。そんな事言うと必ずって言っていいほど柊の鉄拳が飛

んでくんだよなー。」

みさおがそう言った瞬間、いきなりみさおの脳天に拳骨が振り下ろされた。

鈍い音と共に涙目になりながら拳骨を放った相手を見ると、その姿を確認した途端に顔を引きつらせるみさお。

「・・・日下部・・・何やら面白そうな話してたじゃない？」

そう威圧感を放つ顔でみさおを見下ろすかがみを見てみさおは

「うう、痛えよう・・・ひ、柊！どうして柊がここにいるんだよ？」

そんなみさおの言葉にかがみは軽いため息を1つついて

「私は慶一くんにこれを貸そうと思って来たのよ。こなた達との用事も済んだからね。」

そう言って持っていた荷物の中からラノベを取り出すかがみ。

俺はそれを見て

「あれ？それってこの前お前が言ってた奴か？そっか、もう出てたんだな。それはいいけど、かがみ。お前いつ家に来たんだ？というか、呼び鈴鳴ったのすら気付かなかったんだが・・・」

前に自分が頼んでいた物である事を確認すると同時に俺はかがみに家に来てる理由を訪ねると、かがみは困ったような顔で

「来たのはついさっきよ。それに、何故か今日に限ってあんたの家の呼び鈴が鳴らなかったのよね。何度か押してみたけど反応なしでさ。それにあんたの家は私たち出入り自由だから、とりあえず声かけて上がらせてもらったのよ。でも、私に気付かなかったのなら、よっぽど慶一くん達は話に夢中になってたみたいね。」

その言葉に俺は首を傾げつつ

「え？音が鳴らない？妙だな、そんなはずは・・・あれ？もしかして・・・」

俺は何かを思い出すと、その事の確認の為にキッチンへと向かう事にした。

「かがみ、みさお。ちょっとキッチン確認してくるからここで待っててくれ。ついでに飲み物とかも用意してくるからな。」

俺の言葉に2人は頷くと俺はそれを確認してから部屋をでた。

かがみｓｉｄｅ

今回は珍しくこなたとつかさの宿題が終わっていて、以前からこなたとしていた約束の為に、私とつかさは待ち合わせ場所に向かった。

その際に日下部からの連絡もあったのだけど、その内容は宿題を見せて欲しいとの事なので、私は日下部に出かけてる旨を伝えて、宿題は自分で頑張れといい含めてこなたとの用事を済ませた。

そして、私自身の用事も終わったので、慶一くんの家に寄っていこうと思い、慶一くんの家を訪ねたのだが、どういうわけか家の呼び

鈴が反応しなかった。

どうしようか迷った私だったけど、慶一くんからこの家は自由に出入りしていいと言われていた事もあったのでとりあえず合鍵を使ってお邪魔する事にしたのだった。

一応「お邪魔します」と声をかけて上がって行くと、リビングで楽しそうに話す慶一くんと日下部を見つけたのだが、日下部が私の事で何やら失礼な事を言っているのが聞き取れたので、私は日下部の側に無言で近づき、拳骨を落としたのだった。

涙目で私にに抗議する日下部と、私がここにいる理由がわからずに聞いてくる慶一くんの質問に答えると、慶一くんは何かを思い出したみたいで、私達にここで待っていて欲しいと伝えた後、キッチンへと走っていったのだった。

私は未だ涙目な日下部をじろりと睨みつけながら

「まったく、人が聞いてないと思って、好き放題言ってくれるじゃない？」

そんな私の言葉に多少びくびくとしながら日下部は

「そ、そんなに睨むなよー・・・ちょっとした出来心じゃん・・・」

そんな日下部に私はさらに

「あんたはいつも余計な事言いすぎるのよ！少しは自重しなさいよね！ったく・・・」

そう突っ込みを入れると日下部は涙目になりながら縮こまるのだった。

そんな日下部に私は軽いため息を1つつきながら

「まあ、いいわ。けど、あんたがここに居るなんて珍しいじゃない？」

私のその言葉に日下部は途端に視線を泳がせながら

「ま、まあ、私もたまにはそういう事だってあるさ。」

少し挙動不審ながらそう言う日下部の視線が机の方を向いたので私も何気なしにそっちに視線を送ってみると、そこには教科書とノートという勉強道具一式があったので私はそれを見た瞬間日下部の本当の目的を理解した。

そして呆れるような声で

「・・・なるほど、そういう事ね・・・まったく、あんたといいこなたといいつかさといい・・・いつもいつも慶一くんや私や峰岸に面倒かけて・・・少しはあんたにもプライドというものはないのかしら？」

そんな私の物言いにさらに凹んだ日下部は

「ヴァー・・・柊の言う事もわかるけどよー・・・プライドじゃ宿題おわらねえんだよう・・・」

しょんぼりとしながらそう言う日下部に私は少し考え込んでやがて

「・・・しょうがないわね。ここに来たのも何かの縁でしょ？あんたがやる気あるなら私もあんたの宿題面倒みてやるわよ。」

その言葉に日下部は驚いたような顔をしていたが、すぐに笑顔になって

「ほ、ほんとかー？さすが柊、私の嫁だぜー！」

と言う日下部の言葉に私は赤くなりながら

「誰があんたの嫁よ！まったく・・・どこでそんな言葉覚えて来たのよ・・・」

少し呆れつつそう言うと、日下部はしれっと

「えー？だってちびっ子もいつも柊にそんな事言ってるじゃん？」

その言葉に私は思わず

「だからって、それを真に受けんな！」

そう突っ込みを入れた時、私の後ろから

「お待たせ、飲み物を持ってきたぞ。」

そう慶一くんが声をかけてきたので、私は驚いて振り返ったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

みさおと勉強を進めていたが、みさおとたわいのない話をしてる時に俺も気付かないうちにかがみがやってきていた。

俺はかがみに何時来たのかの事情を聞くと、インターホンの呼び鈴が鳴らなかったとの事。

それを聞いた俺は原因の究明と2人への飲み物を取りにいく為に部屋を出たのだった。

そして、キッチンにインターホンの受話器もあるのでそこを調べに行って見ると、電源が外れていたので俺は慌ててそれを嵌め直して修理した。

「・・・なるほど、これが原因だったか。」

呼び鈴の機能回復を確認して俺は冷蔵庫からゼリーと飲み物を取り出すと、それを持ってリビングへと戻って行ったのだった。

そして、リビングの側まで来た時に、何やら怒られているみさおと声を荒げているかがみを見たのだが、一区切りつくまでは割って入らない方がいいだろうと思い、俺はリビングの入り口近くで待機していた。

かがみとみさおの話もとりあえず纏まったようなので、俺はそれを見極めて部屋に入り、かがみに声をかけた。

「お待たせ、飲み物持って来たぞ。それと、かがみ。お前にも面倒かけさせて悪いな。後もう少しだから、このまま協力頼むよ。」

そうかがみに言うと、かがみは頷きながら

「わかってるわ。とりあえずはじめましょ？そうしないと終わらなくなっちゃうしね。それに、峰岸ももう少ししたら来ると思うから。日下部を迎えにね。」

俺はその言葉に驚きつつ

「ん？なんであやのがここに来る事をお前が知ってるんだ？俺、連絡はしてないと思ったが・・・」

その疑問にかがみは苦笑しながら

「慶一くんの家に来る途中でね、峰岸から連絡があったのよ。日下部と会ってないか、ってね。それで、日下部を見つけたら峰岸に連絡する事になったんだけど、慶一くんの家に用事もあったから来てみたら、日下部を見つけたからさ、部屋に入る前に峰岸にメール送っといたのよ。さっきマナーモードの携帯が震えたから、返信来てると思うわ。それと同時に峰岸も動き出してる、って事ね。」

そう説明してくれたので俺は納得して

「そういう事か。それじゃあやのの分もお茶用意しとかないとな。あ、それと、みさお。残りの問題解いたらそのゼリーはおまえの物だから頑張れよ？」

その言葉にみさおを満面の笑顔になり、かがみはそんなみさおを見てやれやれ、と首を振っていた。

そして、俺とかがみでみさおの残りの宿題の片付けを手伝った。

色々苦戦もしたが、ようやくみさおの宿題が片付き、みさおはゼリーを食べながら幸せの笑顔をしているのを見ていたとき、家の呼び鈴が鳴ったので俺は

「ん？あやのが来たかな？ちょっと迎えに行ってくるからみさおも勉強道具の片付けとかしとけよ？」

そう言うと、みさおは

「分かったゼ。こっちはやっとくからあやのの出迎えよろしくなー？」

その言葉に俺も頷いて玄関へと向かう。

そして「はいはい今あけるよー。」と言いながら玄関を開けると、そこには困った顔のあやのとちょうどゆたか達との用事を済ませて帰ってきたパティがいた。

「いらっしゃい、あやの。と、お帰り、パティ。」

そう声をかけると2人とも

「ごめんね、慶ちゃん。またみさちゃんが慶ちゃんの手を煩わせる事になっちゃって・・・」

「タダイマデス、ケイイチ。そこでグウゼンアヤノとデアッタですヨ。」

そう言って来たので俺は

「あやの、気にしなくていいよ。ともあれ、折角来てくれたんだ、少しゆっくりしてけよ。パティ、お前も着替えて来ちゃえよ。荷物もずいぶんあるみたいだからな。」

そう2人に言うと、パティは頷いて自分の部屋へと向かい、あやのも気を使いながら上がって来た。

「お邪魔するわね。とりあえず慶ちゃんの言葉に甘えさせてもらうね？」

俺にそう言ってリビングの方へと歩いていくあやのを見送った俺は、キッチンに人数分のお茶を準備しに行った。

そして、お茶を用意してリビングに向かうと、今度はあやのに怒られて凹んでいるみさおがいたが、それを見た俺は苦笑するしかなかった。

「まあまあ、あやの。みさおも大分反省してるみたいだし、そのくらいにしておいてやってくれよ。それと、みんなにお茶だ。」

そう言って、俺は皆に用意してきたお茶を配る。

そのうちにパティも着替えを終えてリビングにやってきた。

「おマたせデス。ケイイチ、ワタシのブンもありマスか？」

そう言うパティに俺も頷いて

「ちゃんと用意してあるから心配するな。ほら、お前はそこに座れよ。」

俺がパティの座る場所を指差して教えると、パティは小走りでそこへ行って座った。

それを確認してから、俺達は今度のテストの事について話をした。

「期末まで後もう少しだな。皆、対策の方はどうだ？」

「私は今回も問題はなさそうよ？」

「私もかな。範囲はちゃんと勉強出来てると思うわ。」

「私も頑張ってはいるけど、まだまだ自信ねえな・・・でも、あやのと一緒に頑張るゼ！」

「頑張るのはいいが、あやのの負担にはなりすぎるなよ？どうしてもとなったら、俺が手を貸してやる。」

「慶一くんは甘いわよ。そんな事だからつけあがるのよ？まったく・・・でも、皆でやるって言うなら私も手を貸さないわけにはいかないわね・・・」

「ふふ。なんだかんだで柊ちゃんも人の事言えないんじゃない？でも、こうなったら乗りかかった船よね。」

「う、うるさい！そんな事あんたに言われなくても分かってるわよ！」

「おおー・・・慶一ー、柊ー、あやのー、よろしく頼むゼー！」

そんなみさおに俺達も苦笑しながらも頷きで返すと、パティが

「ケイイチ、カガミ、アヤノ、ワタシもスクールにカヨウようになったトキにはベンキョウオシエテほしいデス。」

そんなパティに俺達は笑いながら

「いいとも。パティにも分かり難い所あるだろうしな。俺の出来る

範囲で教えてやるさ。」
「日本と向こうとじゃ勝手も違う部分もありそうよね。でも、そういうのもこっちにとってもいい勉強になりそうね。」
「パトリシアさんなら意外と飲み込みも早そうな気もするわ。あ、そうだ、パトリシアさん。あなたの勉強の面倒見る代わりに、私達にも英語の指導をお願いしてもいいかしら？」
そのあやのの言葉にパティは笑顔で頷いて
「サンキューデス。ミナさん。イングリッシュにカンしてはワタシにオマカセですヨ？」
そう言うパティに俺達も笑顔で頷いたのだった。
その後はみさお達を駅まで送ると、俺はパティに言われた通り、期待してる夕食を作ってパティに食べさせた。
今日の夕御飯も美味しいと言って食べてくれたパティに照れつつも俺は、とりあえず今日のミッションが達成できた事に安堵していた。
そして、またパティに捕まってアニメＤＶＤを見させられてその後はかがみから借りたラノベを無理して読んだら、朝寝坊しかけて焦る事になったのだった。
今日の勉強会を振り返り、俺は出来ることなら仲間の誰も赤点を取らずにテストを乗り越えられる事を祈りつつ、試験に向けて気合を入れなおしていた。

移り行く旋律～期末試験とアニ研世代交代～

みさおとの宿題兼勉強会を済ませ、俺達はついに2年生最後の期末試験に臨む事となった。

あの後もぎりぎりまで勉強会をくりかえし、万全の体制で最後の試験に臨んだ。

臨んだのだが・・・・・・。

試験中日、俺達は今回の試験の答え合わせも兼ねて図書室に集まっていた。

「・・・・・で？3人とも、今回の結果について何か言う事はある？」

かがみがこなた、つかさ、みさおの3人を睨みつけつつそう言うと3人とも縮こまりながら

「す、すいません・・・」
「ごめんなさい・・・」
「このとおりです・・・」

と3者3様に謝っているのを見て、俺達は苦笑していた。

最後の試験だからこそ、赤点なしですっきり終わろう、と、当初はそんな目的で勉強会をやっていた。

もちろん、かがみもみゆきもあやのも自分の勉強にも時間を使わな

ければならなかったのだが、そんな中でも、3人ともにそんな貴重な時間を割いてまでこの3人に赤点を取らせたくなくてがんばった。

しかし、結果は苦手科目を落とす事となったようだった。

「・・・あんた達のがんばりは認める。けど、届かなかったわね・・・せめて・・・せめて赤点ぎりぎりで突破できれば、って思ったけど・・・」

かがみが残念そうな声をあげると怒られてる3人はさらに申し訳なさそうに

「言い訳もできないね・・・」
「あうう・・・ごめんなさい・・・」
「ほんとにごめん・・・」

そうやって落ち込む3人に俺はいたたまれなくなって間に割って入る。

「かがみ、気持はわかる。すごくわかるからとりあえずはその位にしといてやれ。」

そう言った後俺は3人の方に向き直り

「お前らも少しでも反省してるなら、まだ試験日程は後半分あるんだからそっちを落とさないようにがんばれ。赤点教科はもう一度お前らさえやる気があるなら見てやるから。」

俺の言葉にかがみはしぶしぶながら

「・・・はあ・・・仕方ないわね。とりあえず切り替えていきましょ？」

そう言って、怒られてる3人は

「う、うん。とりあえず残りを頑張って汚名返上するよ。」
「わたしもがんばるよ～。だから、見捨てないで？」
「これ以上は落とさないように頑張るゼ！だから、苦手教科の方頼むー。」

その言葉にかがみは

「その言葉、本当でしょうね？ちゃんと宣言したからにはしっかりやりなさいよ？ここは慶一くんに免じて私も赤点教科の克服には手を貸すから。」

3人を睨みつけつつもそう言ってくれるかがみに3人は

「ほんと！？ありがとーかがみー。慶一君もよろしくね？」
「わたしも頑張る！皆で一緒に春休み過ごしたいもん。」
「私もやるぜ！ここで燃えなきゃ嘘だよなー！」

そう言って気合を入れなおしていた。

それを見たみゆきやあやのも

「私も及ばずながら手助けをさせていただきますね？私も皆さんと共に春休みを過ごしたいですから。」
「泉ちゃん、妹ちゃん、みさちゃん。がんばろうね？」

その言葉にこなた達もうんうんと頷いていた。

その後、残りの教科の試験日程をチェックして今日はこれで家に帰る事となった。

その際に俺はアニ研の部室に寄る用事もあり、皆には先に行っててもらって部室へと赴いた。

俺は部室をノックする。

すると、中から「どうぞー。」という毒島さんの声が聞こえたのを確認して俺はドアを開ける。

「失礼するよ。あれ？毒島さんだけかい？こうとやまとと山辺さんがいないな。」

3人の行方を尋ねると毒島さんは

「ああ、やさこ達なら桜庭先生に呼ばれて職員室ですよ？先輩、やさこに用事でしたか？」

そう聞いてきたので俺は頷いて

「ああ。というか、あいつからここに来るように声かけられたんだけどな。まあ、いつもの事か。」

軽いため息をつきながら肩をすくめる俺を見て毒島さんは

「ずいぶんと慣れてるみたいですね。あ、そういえば先輩とやさこって・・・」

毒島さんの言葉に俺も頷いて

「うん。中学時代からの付き合いさ。だから、あいつのいい加減な所も、こうやって待ち合わせに遅れる所も知っているって事だな。まあ、この状況に慣れる事事態俺もどうかしてるのかもしれないけど。」

そう言って苦笑する俺に毒島さんは

「へえ?先輩って結構面倒見がいいんですね。私だったら数回で見限りそうですよ。」

そんな毒島さんに俺は複雑な表情で

「あはは。毒島さんは結構厳しそうだね。俺はまあ・・・甘いのかもしれないな・・・。中学時代はあいつらに助けられる事が結構あったからね。それに対する恩返しを無意識にしたいとおもってるのかもしれないな。」

そんな風に言う俺を見て毒島さんは微笑みながら

「甘さ、っていうのもあるのかもしれませんが・・・やっぱり先輩は優しいんだと思います。それに、手のかかる子程、先輩ってほおっておけないっていうのあるんじゃないかなあって思いますよ。」

そんな毒島さんの言葉に俺は照れながら

「それはあるかもしれないな・・・でも、毒島さん、よく見てるねえ。俺達まだ友達になってそんなに経ってないのにさ。」

そんな俺の言葉に毒島さんは軽く笑って

「人間観察は得意ですよ?でも、先輩を見ていてもなんか信じられませんねえ・・・」

その言葉に首を傾げつつ俺は毒島さんに「何が?」と訪ねると、毒島さんは苦笑しつつ

「やさこから聞いてますよ?先輩。中学時代は大分暴れ者だったって言う噂があったと。でも、今の先輩を見ているととてもそうは見えませんね。」

その言葉に俺は苦笑しつつ

「こうの奴そんな事を話したのか・・・はあ・・・その事は出来ることなら忘れたい事なんだがな・・・そのせいで結構馬鹿を見て来たしなあ・・・。」

俺の言葉に毒島さんは困惑顔で

「その事以外にも先輩はちょっと辛い事もあったんですよね?だから、それを考えると先輩の当時は仕方がなかったのかもとさえ、思えましたが・・・。」

俺はその言葉にため息を1つつくと

「あいつそんな事も話したのか・・・でも・・・ありがとう。その言葉だけでも少しは救われるかな、気分的にね。」

後頭部を掻きつつそう言う俺に毒島さんは

「1つだけ言っておきますけど、私はこの事は嘘じゃなくて本心で言ってますからね？だから、安心してください。」

そんな風に言う毒島さんに俺は頷いて

「うん。分かってるよ。君の言葉に嘘がない事はこうして話していると分かるから。だから、改めて、ありがとうな。」

そんなお礼の言葉に毒島さんも微笑みながら頷いてくれたのだった。

そして、いきなり部室のドアが開く音が聞こえて、俺達は驚きつつ、そっちへ顔を向けたのだった。

「あ、先輩。来てくれたんですね？すいません。桜庭先生に呼ばれていましたから。少しお待たせしちゃいましたかね？」

そう言って俺に詫びてきたのはこうだった。

「なに、今日はお前を責められる事情じゃないからな。心配はないぞ？」

そう言うと、こうは少しほっとしたような顔をしていたが、その、こうの後ろからやまとと山辺さんの2人もやってきて。

「ごめんなさい、先輩。少し話しが長引いてしまったわ。」

「呼んだのは私達なのに、お待たせしちゃいましたね。ごめんなさい。」

そんな2人に俺はさっきこうに投げかけた言葉を伝えると、2人ともほっとしているようだった。

そして、こうは俺を少しニヤニヤしながら見て

「でも先輩。退屈はしなかったでしょ？こうなるかもと思ったからみくだけここに留守番してもらったんだしね。」

その言葉に毒島さんはにっこりと笑い、俺は呆れつつも

「成る程な、そういう事だったのか。まあ、お前にしては中々の機転だったと褒めておくが、こう・・・後でお前にすご～～く大切な話がある。覚悟しとけよ？」

俺はこうに黒いオーラを放ちつつそう言うと、こうはとたんに怯えて

「え？あの、先輩・・・それってどういう・・・」

そうやって慌てるこうに俺は黒い笑みを向けながら

「なあに・・・すぐにわかるさ・・・」

その言葉にこうは本気でびびっているようだった。

そんな俺とこうのやり取りを見ながらやまとは

「こうが何をしたのかは知らないけど、先輩のあの怒り様を見るにつけ、こうがやっちゃいけない事したかもしれないと言う事だけはわかるわね・・・」

隣にいる山辺さんにそう言うと、山辺さんも苦笑しつつ

「やさこ、骨は拾ってあげるよ？」

そんな風に言うのだった。

その言葉にさらに怯えるこうに俺は軽いため息を1つついてとりあえず黒いオーラを収めると

「まあ、それはともかく、俺に用事だったんだろ？こう。まずはそれから聞こうか。」

俺がこうに俺を部室に呼び出した用事について訪ねると、こうは収支ビビリっぱなしだったのだが、本題を思い出したようで、恐怖をとりあえず押さえ込みつつ

「そ、そうでした。先輩、実はですね、もうすぐ先輩も3年生になりますよね？そして、私達も2年生へとあがります。ですから、今後受験勉強等で忙しくなるだろう先輩に代わり、私がアニ研の正式な次期部長を引き継ぐ事になったんですよ。」

その後を補足するようにやまとが

「それで、このアニ研も部員も大分揃い、部活らしくなってきたと言う事もあって、先輩を仮部長の任から解放するために桜庭先生と話してきたって事なのよ。」

その2人の説明に俺は

「そうか・・・もう3年になる俺の事も一応は桜庭先生も考えてく

れたって訳だな。じゃあ、今後のアニ研部長は、こう、お前が引き継いでくれる、って事か？」

俺の言葉にこうは頷いて

「はい。そうなります。そして、副部長にみくとたまきがなってくれる事となりました。」

俺はそこまで聞いた時、妙な違和感を感じてこうに

「あれ？副部長は毒島さんと山辺さんがやるのか？俺はてっきり、やまとがやるものとばかり・・・」

その言葉にやまとが

「私は辞退させてもらったわ。元々こうとはただの付き合いでこの部にいただけだし、何より私よりもみくさんやたまきさんの方がこうには合ってるもの。」

そんな風に言うやまとにこうは少し残念そうに

「うーん・・・残念だよねえ・・・ここまで一緒にやってきたのにさ。この部を盛り上げる為に一緒にやってきたじゃない？やまと～。」

そんなこうの言葉にやまとはこうをじろりと睨みつけて

「・・・結成当時には私は仮の部員という約束であなたに付き合ったのよ？その義理はもう果たしたんだから、もう私は自由になってもいいはずよね？それに、そっちの２人の方があなたにはやりやす

いと思うからそうしたのよ?今更文句言われても困るわよ。」

そんなやまとの言葉にこうは心底残念そうな顔をしつつ

「・・・まあ、そういう訳ですので。先輩も仮部長、お疲れ様でした。そして、私達も今日、正式なアニ研部長と副部長として先輩にご挨拶をしてその役目を引き継がせてもらいますから。」

そして、そんなこうの言葉の後に毒島さんと山辺さんも

「先輩、今までこの部の為にありがとうございました。これからは私たちがやさこと共にこの部を盛り上げていきますから。」

「部の立ち上げに係わってくれた先輩は名誉部長でもありますからね。部長を降りてもまた、この部に遊びに来てください。」

そんな3人の言葉に俺は大きく頷くと

「わかった。結成当時はどうなる事かと思ったけど、何とかやってこれたな。部員も増えたし、新たな部長も決まった。そして、頼りになりそうな副部長もね。俺はここで引くけど、3人でこれからも部を盛り上げていってくれ。俺はたまにでも、遊びに寄らせてもらうからな。」

そんな俺の言葉にこうがおずおずと

「あ、あの、先輩?さっきの台詞の中に私の事なかった気がするんですが・・・私って頼りになりませんか・・・?」

そんなこうの言葉に俺は意地の悪い笑みを浮かべつつ

「んー？そうだったか？よく覚えていないなあ。」

と言う俺の言葉にこうは涙目になりながら

「・・・そ、そんなあ・・・」

と言うこうを見て、俺達は大いに笑ったのだった。

そして、落ち込むこうを慰めつつ

「まあ、今のでさっきの後で話があるというのはチャラにしてやるよ。改めて、これからも頑張れよな？こう。中学時代からのお前の夢の１つが叶ったんだし、全てはこれからだぞ？」

俺のその言葉に涙目だったこうは”ぱあっ”と笑顔になって

「はい！この部の事は任せてください。これからも楽しい部になるように頑張っていきますから！」

その言葉に俺は笑顔で頷き、やまとも軽いため息をつきながらそんなこうを見て、そして毒島さんが俺の側に来て小声で

『やっぱり先輩は甘いですね。結局やさこを許しちゃうあたり、優しいな、って思いますよ？』

そんな毒島さんの言葉に俺も照れつつも

『まあ、この部の新しい門出でもあるからな。変ないざこざはなく、すっきりと送り出してやりたいからな。でも結局俺はお人好し、か。』

そう言いながらも苦笑する俺に毒島さんもにっこりと笑って頷いていた。

そんな俺達の事に気付いたやまとが

「先輩？みくさん？２人でこそこそ何をやってるのかしら？」

不機嫌オーラを飛ばしながら言ってくるのを俺達は苦笑しながら

「い、いや、別になんでもないさ。なあ、毒島さん。」

「ふふ。そうですね。先輩はお人好しだなあ、って言っていただけですよ。」

その言葉にやまとも呆れたようなため息を１つついて

「そうね、みくさんのいうとおりね・・・先輩はお人好しすぎるわ・・・」

そんな風にいうやまとに毒島さんは

「そうね。やまとさんも苦労するわよねえ？先輩があんな感じじゃあね・・・」

その言葉に俺は頭にハテナマークを飛ばし、やまとは赤くなって慌てながら

「な、何言ってるのよ？みくさん、私は別に・・・」

そう言うやまとに毒島さんはニヤニヤとしながら

「あれー？別に先輩とどうこう、とかは言ってないけどなあ？もしかしてやまとさんはその気があったりするの？」

そう追い討ちをかけるとさらに真っ赤になったやまとがしどろもどろで

「そ・・・その気って・・・何よ？べ、別に先輩の事なんて特に・・・どうこう思ってるわけじゃないわよ。へ・・・変な勘ぐりは・・・しないでほしいわ。」

そんなやまとの言葉を聞いた毒島さんは俺に

「だ、そうですよ？先輩。先輩もお気の毒ですねえ・・・」

そんな毒島さんの言葉に俺はただただ困惑をしていて、やまとはただた真っ赤になっておろおろとしていた。

それから４人でこれからの事や活動に関する事等を色々と話し合い、改めてこうたちに部の事を頼み、俺は部室を後にしたのだった。

だが、その際にまだ試験期間中でもあったので、やまと達も俺の家に立ち寄り、試験勉強をする事となった。

「すいません、先輩。お世話になります。」

「一応の復習とテストの傾向と対策をしないとね。」

「私達も面倒みていただいてありがたいです。」

「皆で一緒に残りを乗り切っていきましょ？」

そんな４人に俺も頷きながら

「お互いにこの学年では最後の試験だ。悔いを残さないように頑張ろう。」

俺の言葉に４人とも頷くと、俺達の学年最後の試験に向けて、最後のとも言える勉強会が始まった。

自分たちの教科の範囲を確認し、そこを重点的に復習したりしていった。

そして、４人のわからない所等の質問にも答えつつ、勉強を進める。

「先輩、ここなんですが・・・」
「ここはこれでいいのか見てくれる？先輩。」
「これってこれであってますか？」
「うーん、ここは難しいな。先輩ちょっといいですか？」

勉強を進めつつ、後輩達からも質問が飛んでくる。

俺はそれを裁きつつ、俺自身も１年の頃の勉強の復習をする事となった。

ある程度勉強も進み、今日はこれでお開きと言う事になった。

「先輩。今日はありがとうございました。」
「残りも油断せず乗り切っていくわ。」
「先輩のアドバイス、とても参考になりましたよ。」
「やっぱり先輩は頼りになりますね。部のほうでもまたよろしくお願いしますね？」

そんな４人に俺は

「はは。役に立てたのなら嬉しいよ。テストもきっちり終わらせて新たな学年へと進みたいからな。それと山辺さん。そっちもたまに立ち寄らせてもらうよ。だから、部のほうはよろしくな。」

そう伝えると、４人とも頷いてそして、俺に手を振ってそれぞれの家へと帰っていった。

それを見届けて俺は、パティの待つ家へと帰っていったのだった。

「ただいまー。ん？」

家に帰り着き、ただいまと声をかけた時、キッチンの方から漂ってくるいい匂いに気付き、俺はとりあえずキッチンへ顔を出しに行く。

すると、そこでは鼻歌を歌いながら料理をしているパティがいた。

俺はパティに

「ただいま、パティ。今日はお前が作ってくれたのか。でも、驚いたな。お前もそんな事出来たなんてさ。」

俺のその言葉にパティは得意げに

「フフン。モトモトはホームスティサキがミつからなかったトキはヒトリグラシもシヤにイれてましたからネ。そうなってもいいように、リョウリ等はレンシュウしてキましたヨ？」

そんなパティの言葉に俺は感心しつつ

「成る程な。それじゃ今日はパティの料理に期待させてもらおうかな。」

その言葉にパティも満面の笑みで頷いて

「オマカセです。いつもケイイチにはオイシイゴハンをタベさせてもらってイマスからネ。ワタシもケイイチにタイするギリはハタさないと、ですヨ？」

そんなパティの気持に俺は素直に甘える事にした。

そして、パティとの楽しい夕食を過ごし、試験勉強をする。

試験が終わるまではパティにもアニメＤＶＤの観賞等は自重してもらった。

そして、俺は残りの日程も順調に消化していった。

試験最終日に最後の答え合わせをみんなで行う為に図書室に集まる俺達。

例の３人も、落とす教科は苦手分野のみで済んだようだった。

「さて、これでようやく２年生として最後の試験が済んだわけだけど、何にしても今後はこなた達の赤点教科のフォローをしなきゃならないな。」

と、俺がみんなを見回しながらそう言うと、かがみは

「まあ、他に落とす教科がなかっただけましかしらね？でも、赤点教科の勉強だけはしっかりやらせるから覚悟しなさいよ？」

かがみのその言葉に3人も

「取ってしまった教科は仕方ないよね・・・でも、私達も頑張るから、フォローよろしくね？みんな。」

「次はきっとパスしてみせるから勉強見てね？」

「今度は絶対取り戻すから頼むぜ？みんなー。」

そして、みゆき、あやのの2人も

「春休み前の再試で決めましょう。私もお手伝いさせてもらいますから。」

「みんなで揃って春休みを過ごす為にも頑張ってもらうわよ？」

そんな2人に対してもこなた達も力強く頷くのだった。

そして、それから再試までの間俺達による特訓を開始、苦手教科の克服に努めた。

その甲斐あって、何とか再試は全員通る事が出来たのだった。

そして、全てを終えたその日の帰り、試験におけるストレスの解消と言う事で、俺達はケーキバイキングにやってきていた。

「うーん。やっぱり、ストレス解消には甘いものだよね？」

「同感。だけど、この反動で太らないかが心配だわ・・・」

「あはは。あまり食べ過ぎないように気をつけなくっちゃね。」

「それでもついつい甘いものを食べたくなってしまいますねー。」

「柊ちゃん達の気持も分からなくもないわね。私もこういうの好きだし。」
「幸せを感じる時っていうのはこういう時でもある訳だよなー。」
そんな6人を見ながら俺は苦笑しつつ
「幸せそうに食べるのはいいけど、ケーキばかりで胸やけがしてきそうだなあ。」
そう言うと、何故か皆に軽く説教をくらってしまった。
そして、ケーキを食べながら俺達は春休みの事について色々と話をしていた。
「ねえ、ねえ。春休みにはみんなでどこかに遊びに行こうよ?」
「どこかって、どこよ?」
「こなちゃんはどこか行きたい所あるの?」
「皆さんが行かれるのでしたら私もお付き合いしたいですね。」
「映画とかはどうかしら?今確か面白いのが来てたと思うわよ?」
「ああ、あのアクション物かー?あれは私も見てみたいなって思ってるんだよなー。」
あやのの提案に俺も興味を示しつつ
「映画?なるほど、それも良さそうだな。」
そう言うと、こなたが
「じゃあ、映画も予定の1つって事で。他には何かないかな?」

こなたの言葉にみんなが悩んでいたが、俺は1つ思いついた事があったので

「なあ、俺の親父の知り合いに温泉旅館を経営してる人がいるんだが、そこに2泊3日くらいで泊まりに行ってみないか?親父の知り合いだから、格安で泊まれる筈だよ。」

俺の提案にこなたは瞳を輝かせつつ

「おお!?それはいいねー。ねえ、みんなはどうかな?」

こなたが皆に話を振ると、みんなは少し考え込んでいたが

「・・・そうね。この際だから行ってみるのもいいかもしれないわ。」

「わたしも賛成~。お母さんに話してみるよ~。」

「いいですね。それでは慶一さんに手配の方をお任せしましょうか。」

「楽しそうね。それにいい思い出にもなりそう。慶ちゃん、お願いできるかな?」

「温泉でのんびりかー。楽しそうでいいなー。私も賛成だゼ?慶一、任せたゼー?」

そんな皆に俺も頷いて

「ああ、任せてくれ。詳しい事決まったら連絡いれるよ。こなた、みゆき。ゆたかとみなみにも声かけといてくれ。俺の方もこうややまと、ひよりに声かけといてみるから。後パティも連れて行ってやらないとな。」

そう言うと、みんなも満面の笑みで頷いた。

そして、春休みの予定を決めた俺達はケーキを食べ終えた後に解散する事となった。

家に戻り、俺は親父に温泉旅館の件について連絡を入れる。

「もしもし、親父か？実はな・・・と言う訳なんだけど、予約とか取れそうか？」

「ん？あそこへ行くのか？それなら私が話を通しておいてやろう。心配はいらんぞ？それと、今回も私がついていった方がいいだろうか？」

「引率はいた方がいいだろうしな。親父さえ忙しくなければ頼みたいけど・・・」

「ふむ・・・おお、そうだ。今回は龍也に頼む事にしよう。あそこへは電車を使う事になるだろうしな。それならば龍也でも十分に役目を果たせるだろうからな。」

「そうか・・・なら龍兄に頼んでおいてくれるか？日取り決まったらまた連絡してくれ。」

「わかった。龍也に連絡させよう。じゃあ、今日はこれで切るぞ？慶一、達者でやれよ？」

「分かってるさ。ありがとな、親父。」

「ふん。このくらいはたやすい事だ。」

そう言って電話を切る俺。

さらに俺はこうややまとにも連絡を取って旅行への参加希望を取ったが、２人とも来てくれる事となった。

パティにもその話をしたら、相当喜んでくれたので俺はほっとして

いた。

2年生最後の春休み、どんな出来事がまっているのか。

俺はわくわくとした気分になりながら、春休みの訪れに期待を寄せていたのだった。

移り行く旋律～期末試験とアニ研世代交代～（後書き）

次回はいよいよ春休み。
その物語を経て3年生編への突入と行きたいと思います。
これからも変わる日常をどうぞよろしく。

終わりと始まりの旋律～終わる2年生と映画館での出来事～（前書き）

ついに春休みが始まりました。
そして、その初日に起きる出来事をお楽しみください。

終わりと始まりの旋律～終わる2年生と映画館での出来事～

波乱の2年生最後のテスト、そして、ようやく正式な部となったアニ研の部長引継ぎにより、俺は今後は一般生徒として、そして、こうは正式にアニ研の部長に就任という事になり、こうの誕生日の時に入部した2人がこうを補佐する副部長となった。

ここに本格的にアニ研は新しい時代への動きを開始する事となる。

そして、苦手教科を落としたこなた達は俺達の支援もあり、何とか再試をクリア、これにより春休みの補習は免れる事となった。

こうして春休みを共に過ごせるようになった俺達は、いくつかの春休みの計画を立てた。

そんな事を経て、今日は2年生最後の終了式。

校長の長い話を適当に聞き流し、教室でのＨＲを終えた俺達は星桜の樹のある場所で待ち合わせをしていた。

「ほい、3人とも。頼まれた飲み物買ってきたぞ？」

そう言って俺はかがみとあやのとみさおにジュースを手渡す。

「ありがとう慶一くん。悪いわね、お願いしちゃって。」

「慶ちゃんもこういうところはマメにやってくれるわよね。でもありがとう。」

「ま、結構助かるし、いいけどなー。サンキュー慶一。」

そう言いながら俺から飲み物を受け取る3人。

「まあ、この位なんて事ないさ。それにしても、こなた達遅いな。」

俺の言葉にかがみは呆れたような声で

「ほんと、いつもの事とはいえ自重してほしいわよね。」

そんな風に言うかがみにあやのが

「まあまあ、柊ちゃん。ひょっとしたらＨＲが長引いてるのかもしれないし、もう少し待ってみましょ？」

あやのの言葉にみさおも便乗しながら

「そうそう。柊はカリカリしすぎだぜー？もう少し心に余裕を持った方がいいと思うけどなー。」

そう言うみさおをかがみはキッと睨みつけて

「ほお～う？毎回の待ち合わせに遅れて来ながらそういう事を言うのか？そんなえらそうな事を言えるのはどの口かしらねえ～？」

そう言いつつみさおのほっぺたを両サイドからびろーんと引っ張ったり戻したりするかがみにみさおは涙目になりながら

「い、いひゃいいひゃい、ひいらひ、わるかっは、わらひがわるうございまふた、だから、かんべんしてくらはい。」

ほっぺたを引っ張られてまともな言葉が出せないみさおをみながら

俺は笑いをこらえつつ

「くくく・・・か、かがみ、面白いけど・・・くく・・・その位に・・・くはは・・・しといてやれよ。」

そして、あやのもまた笑いをこらえつつ

「くすくす・・・柊ちゃん・・・くす・・・みさちゃんも反省してるみたいだし・・・ね？くすくす・・・」

そんな俺達を見て、かがみは軽いため息を1つつくと、みさおのほっぺたを離した。

「ふう。まあ、しょうがないわね・・・日下部？2人に感謝しなさいよ？」

みさおを軽く睨みつつそう言うかがみにみさおは涙目のまま

「うう・・・ひでえよ、柊ー・・・それに、慶一とあやのも笑うなんてひでえじゃん・・・」

ついにこらえきれなくなった俺達はは笑いながら

「あははは！わ、悪い悪い、でも、こらえられなかったよ、ほんとすまん、あははは！」

「ご、ごめんね？でも、つい・・・くすくすくす。」

そんな風に笑う俺達ににみさおは「ヴぁー」と言いながらさらに落ち込むのだった。

そんな風にやっていると、ようやくこなた達が待ち合わせ場所にやってきた。

「お待たせーって何してるの？慶一君と峰岸さん、何か笑ってるみたいだけど？」

「ごめんね、おくれちゃった～。あれ？ほんとだ～。」

「ＨＲが長引いてしまい、遅れてしまいました。慶一さん、かがみさん、峰岸さん、日下部さん、申し訳ありません。」

そんな3人に俺は

「おう。まあ、そんな事じゃないかとは思ってたけどな。それと、ちょっとさっき面白い事があったからな。」

そう挨拶をした後面白い事の説明をこなた達にすると

「むう、それは残念。みさきちの面白い顔を見そびれたね。」

こなたが腕組みしながら面白いものを見れなかった事を残念そうにしているのを見て、つかさは苦笑しながら

「こ、こなちゃん、それは悪いんじゃないかなあ？」

と遠慮がちに言っていて、みゆきも同じように苦笑しながら

「そ、それは災難でしたね、日下部さん。でも、人は誰しもそういう事は一度はしてしまうものですし、あまりお気になさらず・・・」

というみゆきの言葉を遮るようにかがみが

「甘いわ、みゆき。こいつらの場合、1度や2度という訳じゃないのよ?どこかで引き締めないとずっと同じ事し続けるわよ?」

そう言われてしまうとみゆきも苦笑しながらも何も言えないようだった。

そんなかがみの言葉を聞きながらこなたとみさおは

「・・・別に少し遅れるだけじゃん。そんなに迷惑かけてないとは思うけどなー・・・」

「そうだそうだ。大体柊は怒りすぎなんだよな・・・」

そうぶつぶつ言っていたが、その呟きを聞き取られ、かがみが2人を睨みつけると、途端に縮こまる2人だった。

そうこうしているうちにこうとやまとの2人もやってきた。

「皆さんお待たせしました。」

「HR、こっちも少し長引いてしまったわ。ごめんなさい。」

その言葉に俺は手を振りながら

「なに、こなた達もそうだったんだから問題はないさ。それよりも、っとほらこれ。」

俺はこう達とこなた達にもあらかじめ買ってあったジュースを渡した。

「お?ありがとー慶一君。」

「もらっちゃってもいいのかな?」

「お気遣いありがとうございます、けど、よろしいのでしょうか？」
「先輩、すいません。いただきますね？」
「ありがとう、先輩。いただくわ。」

そんな5人の言葉に頷いて俺は改めて星桜の樹を見つめる。

そんな俺の視線を追って、みんなもまた星桜の樹を見つめていた。

「ここで、皆と出会って仲間になってもう1年経つんだな・・・」

何となく感慨深げに俺がそう呟くとこなたも頷きながら

「そうだね。1年前は君とこうして一緒にジュース飲みながらこの樹を見上げる事になるなんて考えもしなかったね・・・。」

そう言うこなたにかがみも頷いて

「そうね。私なんか一緒のクラスになるなんてことすら予想もしてなかったわよ。それ以前に慶一くんに助けてもらう事だって今からしたら信じられない事だったものね・・・。」

かがみの言葉につかさも懐かしそうに

「そういえばけいちゃんと知り合いになるきっかけって、けいちゃんがわたしを助けてくれた事がそうだったよね？」

つかさの言葉を聞きながらみゆきも樹を見上げつつ

「私もそうでした。重い荷物を抱えた私を慶一さんが助けてくれました。それがお知り合いになるきっかけでしたよね・・・。」

同じように樹を見上げながらあやのとみさおも

「私たちの場合は柊ちゃんと話している慶ちゃんに話し掛けた事がきっかけになったわよね？」

「そうだなー。慶一が柊を助けてくれた。その話を聞いて私も慶一と友達になったんだよな？」

そんな言葉を聞きながらこうとやまとは

「私たちは中学生の頃に先輩に会いましたが、その時もやっぱり私たちを助けてくれた事が知り合うきっかけになりましたね。」

「結局どこかでみんな慶一先輩に助けられたりする事がきっかけで知り合ったのね。」

そんな皆の言葉に俺は照れながら後頭部を掻きつつ

「ま、まあ、結果的にそうなった訳だが結局そんな風に困ってる皆を見てほおっておけなくなったからだしなあ・・・」

その言葉を聞いたこなたはニヤニヤとしながら

「そうだよねー。あの時だって私がコロネ売り切れて落ち込んでたのを見て私に譲ってくれたしさ。」

かがみも少し顔を赤らめつつも腕組みしながら俺を見て

「そうね、私の時も探し物手伝ってくれたし。」

そしてつかさもほわほわとした笑顔で

「わたしが怪我した時も治療してくれたよね～？」

そう言うとみゆきもにっこりと笑いながら

「あれだけの大きい荷物をわたしの代わりに持ってくれましたしね。」

そう言い、あやのとみさおも

「みさちゃんが迷子になった時は一緒に探しにいってくれもしたわね。」

「勉強や宿題も慶一はよく助けてくれたよなー。私結構感謝してるんだゼ？」

そんな2人の言葉を聞きつつこうとやまとも

「アニ研の仮部長も部の立ち上げの時に引き受けてくれましたよね。」

「私がフィオリナではなく陵桜を選んだ時も先輩は私を受け入れてくれたわよね。それに・・・。」

やまとのその言葉にかがみとみゆき、あやの、みさおの4人は頷き合うと

「猪の襲撃の時は命をかけて私達を助けてくれた・・・。怖かったけど、嬉しい事だったわ・・・。」

俺はそんなやまとの言葉に複雑な表情を向けつつ

「あれは、それこそ必死でだな・・・でも、あの時は心配かけてしまった。みんな、本当にあの時はごめんな?」

そんな俺の言葉にやまとは笑顔で

「いいですよ、先輩。今はこうして私達の前に居てくれるんですから。」

そう言うと、俺が猪から助けた４人も頷いてくれた。

俺はそんな言葉に嬉しい気持になり少し顔を赤くしながら笑っていた。

そんな俺を見てこなたはまたもニヤつきながら

「でも、慶一君との事はそれだけじゃなかったよねー。ここにいるみんなと友達になれたのも慶一君が私達をつないでくれたからでもあるよね。」

その言葉にかがみも頷いて

「そうね。日下部や峰岸はともかく、八坂さんや永森さん、それに、小早川さんや岩崎さん、田村さんにパトリシアさん、山辺さんに毒島さん、それに若瀬さんなんかも慶一くんを通して知り合ったわよね。」

かがみの言葉につかさも

「うん。あれから時間が経って、気付いてみたらわたしの周りにはお友達が一杯できてたよ。」

そう言うと、みゆきも感慨深げに

「そうですね、それに。学校内以外の方もそうですね。牧村さんや氷室さん、それに慶一さんのお兄さんである龍也さんも。」

その言葉にあやのは頷きつつ

「なかでも龍也さんの事は本当に驚きだったわ。龍也さん、この学校の卒業生だったんだものね。」

あやののその言葉にみさおもうんうんと頷いて

「だよなー。そして私らをつなぐきっかけを作った慶一がここにいるのは龍也さんが居たからだって聞いた時には私は運命すら感じたもんなー。」

俺はそんなみさおの言葉を聞きながら

「それは俺も、かな？気付かせてくれたのはこなただったけどな。」

そう言うとこなたは照れたように赤くなりつつ「えへへ。」と笑っていた。

そしてそんなこなたを見ながら俺も微笑みつつ言葉を続けて

「ここに来ようと思ったのは龍兄の真似をしたかったという思いからだ。だから、ここでこなた達に出会う事、今こうして仲良くなって1年を終えようとしている事も当時の俺には考えすらつかない事だった。でも、こうして皆に会えた事、学校で仲間を増やせた事も

今はとても嬉しく思っているよ。」

ここに居る全員を一人一人見回しながら俺はしみじみとそう言うとみんなも

「私達もそうだよ？慶一君と出会ってよかったって思ってるからね。それに、かがみやつかさ、みゆきさん以外の人とも仲良くなれた事もね。」

「私もそうね。きっと慶一くんと出会えなかったら、私たちはこんなに友達も増えていなかったかもしれないわ。」

「わたし本当はたくさん友達を作りたかったんだ。でも、こなちゃん達がいればそれでいい、ってこなちゃん達とお友達になった時、それ以上の友達を作る事も諦めかけてたんだよね。でも、けいちゃんはそんなわたしにお友達をくれた。」

「慶一さんは私達にとってさらに大切なものを私にくださいました。そして、一緒に笑い、泣き、協力し会える仲間達も作ってくれたんです。」

「そしてそれはいつしか慶ちゃんを助ける為の力にもなりえたわ。そんな人達が慶ちゃんの為に立ち上がってくれた。あなたがきっかけをつくらなかったら出来なかった事だものね。」

「私らだけじゃなく、他にもお前の事を考えてくれる。お前はそんな人間達を集める橋渡しにもなってたんだゼ？」

「先輩のおかげで私の夢も1つ叶いましたしね。そのための仮の部員ではありましたが、その協力者も先輩がくれました。さらに、新たな人材も、ですね。」

「私に忘れられない思い出の誕生日をくれたのも、先輩が皆をつないでくれたからよ？みんなと仲良くなっていなかったらあの誕生日は実現なんてできなかったもの。」

そんな皆の思いを一言一言を心に刻みながら俺は

「結局みんな、繋がっていたんだな。こうしてみんなでここに立っている事もまた俺にとって、皆にとっての必然に何時しか変わっていたって事だよな。」

俺の言葉に頷くみんな。

俺は少しの間目をつぶり、今までの思いとこれからの思いを考えていた。

そして、静かに目を開けて

「俺はこれからも、みんなと共に進みたい。係わって、そして、楽しみながら残りの1年も過ごしていきたいと思う。みんな、こんな俺だけどこれからもみんなと一緒にいたい。いつかは、はなればなれになるとしてもその時が来るまでは皆と一緒に・・・。」

俺のその言葉にみんなも

「私だって同じだよ?慶一君と一緒に、皆と一緒に過ごしたいからね。でも私はそれが最後だなんて言いたくはないよ?だって私は望んでるからね。慶一君が言ったとおりにね。」

「私もかな。だって私達はもうそんな柔な繋がりじゃなくなってるものね。それがある限りはいつまでも付き合っていけるわよ。」

「わたしもそう思うよ~?みんながそう思ってくれてるからきっと大丈夫だよ。」

「私達は本当の仲間ですからね。私も泉さんやかがみさんの言う通りだと思っています。」

「私達は一生の友達になれる、ってなんかそう思えるのよね。不思議なんだけどね。」

「私もそれは疑っちゃいねーぞ？なんとなくだけどわかるんだ。」
「私もですね。先輩と友達になれたあの時から思ってます。」
「私も何故かそう思えるわ。きっといつまで経っても先輩は私たちの側に居る、みんなも居る、そう思えるから。」

そんなみんなの思いを受けて、俺も何故か自然に頷く事ができた。

俺もまたその事を何故か疑いもしなかったのは、そんな思いが俺の中にあったのだと思えたからだった。

これからも一緒に行こう、その思いを確認しあい、俺達は2年生最後の学校を後にしたのだった。

そして、当初の計画どおりまずはみんなで映画を見ようという事になり、俺は今かがみ達と共にこなたやみさおを待っていた。

「ふう。まだ来てないみたいね、あの子は。ほんと毎度毎度困ったものよね・・・。」

呆れ顔のかがみにつかさは

「まあまあ、おねえちゃん。もう少しだけ待ってみようよ。」

そう言ってなだめる姿を見ながらみゆきも

「まだ、時間的には余裕はありますよね？私もちょっとその辺りを見て来ますね？」

そう言ってこなたを探しに付近を捜索に行くみゆき。

そうこうしてるうちにあやのとみさお、こうとやまともやってきた。

「ごめんなさい、慶ちゃん。待たせちゃったかな？」

「わりい慶一、柊ー。でも今日はそんなに遅れなかったゼ？」

そして、こうとやまとも

「何とか間に合えましたね。まだ来てない人いるんですか？」

「こうにしては上出来かしらね？そういえば泉先輩の姿だけまだみたいね？」

その言葉に俺も苦笑しつつ

「みさお、あやの、まだ時間には余裕あるから大丈夫だ。こうとやまともとりあえずはチケット買って来ちゃえよ。こなただけまだ姿が見えないんだよなあ・・・どうしたものやら。」

俺の言葉に４人はとりあえず映画のチケットを買いにいき、俺は何気に周りを見渡していたが、俺の側にいた背の小さい、帽子を被った女の子がおもむろに帽子を脱ぐと、とたんにぴょこんと跳ね上がるあほ毛を見て俺とかがみとつかさは驚いて

「え？こ、こなた？お前もしかしてずっといたのか？」

「あんたのくせっ毛が見えなかったから気付かなかったわよ・・・。」

「わたしもびっくりだったよ、こなちゃん。」

そんな俺達にこなたはかなり不機嫌そうな顔で

「みんな酷いよね、今日は私、ちゃんと時間どおりに来たのにさー。

」

そんな風に言うこなたに俺達はひたすら謝り倒していたが、そのうちにこなたを探しに行ったみゆきを呼び戻してない事に気付いて、俺はすぐさまみゆきに連絡を入れた。

そして、みゆきと合流したあと、俺達は映画館へと入り、席につく事にしたのだが、ここでちょっとした軽い争いが勃発していた事に俺は気付かなかった。

こなたｓｉｄｅ

いつもとは違い、私も珍しく待ち合わせ時間に遅れないようにと家をでたのだけど、今日に限って帽子を被っていった事が失敗だった。

みんなと同じような時間でついていたにもかかわらず、帽子を取るまでは自分とは気付いてもらえなかったからだ。

そんな状況に慶一君をはじめとするみんなも苦笑しながら私に謝っていたんだけど、やっぱりどこか面白くなかった私は少々不機嫌になった。

ともあれ、このままでいても仕方ないので、私も映画のチケットを買って映画館へと入っていったのだが、そこでちょっとした出来事が待っていた。

そう、それは・・・・・

（うーん、これはいいチャンスだね。どさくさにまぎれて慶一君の隣に座っちゃおうかな？）

そんな事を考えつつ席の方を見ると、やはり同じように考えていたのか、かがみや永森さん、みゆきさん、それに何も考えていなさそうなみさきちやつかさまでもが慶一君の側へ陣取ろうとして向かっているのが見えた。

それを見た私は慌ててかがみたちの方へ行って小声で

『かがみ、つかさ、みゆきさん、永森さん、みさきち、ちょっといい？』

そう声をかけるとかがみ達は私を見て

『なによ？どうかしたの？』

とかがみが代表で私に聞いてきたので私はかがみに

『えっと・・・さ・・・かがみ達もひょっとして慶一君の隣に座ろう、とか考えてない？』

少々照れが入りながらではあったがそう言うとかがみ達は途端に顔を赤らめつつ

『な、何言ってんのよ・・・わ、私は・・・べ、別にそんな事なんて・・・』

『あ、あはは、こなちゃんの気のせいじゃないかな～・・・。』

『わ、私は・・・その・・・けしてそのような・・・』

『い、泉先輩の考えすぎじゃないかしら、偶然にもそうなろうとした、ってだけだし、その事にこだわってるという事は・・・。』

『ぐ、偶然だよ偶然。ちびっ子も気を回しすぎじゃねえか？でもよ、

私らにそう聞いてくるちびっ子はどうなんだよ?』

みさきちが私に反撃でそう聞いてきたので私ははっきりと言い放った。

『もちろん、私は狙ってるよ?だからみんなに聞いたんだよ。』

と言う私のの言葉にみんなはとたんに絶句した。

その状況にもかかわらず私はさらに

『もしみんなもそれを狙っているんならさ、ここは1つ公平に座る場所を決めない?』

そう投げかけると、かがみとつかさは

『わ、私は遠慮するわ。別に今回どうしてもって言う訳じゃないしさ。』

『わ、わたしもかな?そこまではわたしもこだわっていないから。』

そう言うかがみ達同様みさきちも

『わ、私も特にはこだわってねえかな?まあ、近くにいれりゃそれでいいかんな。』

そう言って、この勝負から降りたのだった。

だが、永森さんとみゆきさんの2人は

『泉さんのお話はわかりました。今回は慶一さんの隣の席をかけて

の勝負お受けしたいと思います。』
『わ、私も今回だけはやらせてもらうわよ？それで？泉先輩、どうやって決めるの？』
かなり乗り気だったので私は2人に
『なら、ここはじゃんけん3回勝負と行こうか。勝っても負けても恨みっこなしで、それでどうかな？』
私の言葉に2人とも頷いて
『わかりました。お受けします。』
『こちらもそれでいいわ。』
そう言うと私も頷いて
『よーし、それじゃいくよー？じゃーんけーん・・・ぽい！』
そして、1回戦目、結果は永森さん勝利、私とみゆきさんの負け。
続いて2回戦目はみゆきさんの勝ち、私と永森さんの負け。
みゆきさん永森さん共に1勝1敗、私は2連敗となった。
後がなくなった私は3回戦目に少々意気消沈しながら挑む。
そして、私の勝ち、永森さん、みゆきさんの負け。
これで共に1勝2敗同士で3人が横並びとなった。

『次で1人が負けたら慶一君の隣の席の権利は残り2人のものだよ？いい？いくよー・・・じゃーんけーん！ぽい！！』

そして最終結果は・・・・・私と永森さんが権利を獲得する事となった。

この結果に落ち込むみゆきさんを見て私と永森さんも少しだけ罪悪感を感じつつ

『・・・ごめん、みゆきさん。でも今回は・・・』

『今回は私が勝ったけど、でも・・・。』

私の言葉を遮ってみゆきさんが

『ええ、わかっています。公平な勝負の結果ですからね。でも今度またこういう勝負がある時は私も負けませんからね？』

ちょっと落ち込んだ表情のみゆきさんだったが、最後にはにっこりと笑ってそう言ってくれたことで私もいくらかは救われたような気持になって

『ふふ。望むことろだよ。でも安心して？みゆきさん。みんなに頼んで慶一君の斜め後ろの席にしてもらうようにするからさ。』

その言葉にみゆきさんも少し驚いたような顔をしていたけど微笑みつつ頷いてくれた。

そして、私と永森さんは勝利者の権利である慶一君の隣の席へと向かうと、事情を察していてくれたみんなが慶一君の両隣の席を空けて待っていてくれた。

私はちょうど慶一君の斜め左後ろに座っていた峰岸さんに事情を話してみゆきさんにその場所を譲ってもらったのだった。

かくして、私と永森さんは共に慶一君の両隣に座る事が出来たのだった。

慶一ｓｉｄｅ

映画館内に入り、席を決めたまではよかったのだが、何故か俺の両隣の席が空くようにみんなが席についたのを見て、俺は頭にハテナマークを飛ばしていた。

そして、そんなみんなの中に、こなたとみゆきとやまとの姿だけが見えなかった事に気付いたが、少しして3人がやってきて、こなたが俺の右隣、やまとは俺の左隣へと座る事となった。

そして俺の左斜め後ろにみゆきが座った。

俺はこなたに

「なあ、お前らだけ少し遅かったみたいだけど、何かやってたのか？」

そう訪ねると、こなたはいつものように目を細めながら

「まあ、色々あったのだよ。ねえ?永森さん、みゆきさん。」

2人に声をかけると2人とも頷いて

「ええ、ちょっと話し込んでいただけですよ。」
「ま、まあ、そういう事ね。大した事じゃないわ。」

そう言う3人に俺は特に他には問題なさそうかな？と思ったのでそれ以上は聞かない事にしたのだった。

そして、そうこうしているうちに映画が始まった。

映画はアクションあり、涙あり、愛ありの中々に面白い内容だった。

こなたｓｉｄｅ

席取り合戦に勝利して、慶一君の隣の席を見事勝ち取った私。

少しだけドキドキとしながら私は映画の始まりを待った。

そして、映画が始まり、泣けるシーンの所に来た時、私は無意識に画面を見ながら慶一君の手を握り締めていた。

すると、慶一君も無意識にみたいだったけど私の手をそっと握り返してくれたのだった。

それに驚いた私が慶一君の方を見ると、元々涙もろい慶一君は感動のシーンで涙を流して泣いていた。

それを見た私は心の中で

（慶一君やっぱりこういうシーンに弱いんだなー・・・でも、改めて慶一君の優しい所が分かるね。それに、私の手を握り返してくれたのも無意識だろうけど、なんだか嬉しいな・・・。今日はいい１

日だねー・・・。）

そんな風に心の中を暖かくして映画を見続けていた私だった。

やまとｓｉｄｅ

思いがけず泉先輩と高良先輩と3人で慶一先輩の隣の席を賭けた勝負をするとは思わなかったのだけど、運良く先輩の隣の席に座る権利を獲得できた。

そして、泉先輩は慶一先輩の右隣、私は左隣へと座る事となった。

少しドキドキとしながら先輩の横顔を横目でちらちらと見つつ、映画が始まったので私はそっちに意識を移した。

そして、映画の物語の感動シーンに来た時、私は気付いたら先輩の手をそっと握っていた。

それに気付いたのは、先輩が私の手を握り返してきた感触に気付いたからだったのだが、それを自覚した途端、私は再び心臓がドキドキとなり顔が赤くなるのを感じていた。

そして、ちらりと先輩の方を見ると、先輩は映画に感動して涙を流しているのが見えたが、先輩は私の手を握り締めている事には気付いていないようだった。

私はそんな先輩を見ながら心の中で

（こんな風に先輩の隣で映画を見れる事になるなんて思わなかったな・・・勝負は厳しかったけど、この権利を獲得できてよかったわ・

・・それに、先輩はやっぱり泣き虫ね・・・中学の時にも見せてくれた事のある顔だけど・・・でも、それだけ先輩の心は優しいんだなってわかるわ・・・何時の間にか私も先輩の泣き虫が移ったかもしれないわよね・・・夏休みのあの時とかもそうだったしね・・・私はこれからもそんな先輩の顔を見ていきたいな・・・）

そんな風に思う私だった。

みゆきｓｉｄｅ

泉さんや永森さんと慶一さんの隣の席をかけての勝負となりましたが、私は一歩及ばず、この勝負に負けてしまいました。

そんな私を見て泉さんも永森さんも気を使ってくださったみたいですが、それでも慶一さんの斜め後ろではありますが近い場所に座らせてもらえた事は嬉しく思いました。

ここからでも慶一さんの表情も伺う事もできるので、今回はとりあえずは慶一さんのお顔を映画を見つつ、みていましょう、そう思いながら、映画の鑑賞に入りました。

そして、映画の感動するシーンに来た時、私も思わず感動で涙を流しましたが、そっと慶一さんの横顔を伺うと、慶一さんもまた、感動シーンで涙をながしていたようでした。

そんな姿を改めて見たとき、やっぱり慶一さんは優しい心の持ち主なのだなあと思いなんだか少しだけ嬉しくなりました。

慶一さんの事を見ながら私は心の中で

（ふふ。私たちの前でもよく、慶一さんは涙を見せていましたね。でも、素直な涙を流せる慶一さんはやはりとても心の優しい人なのだと改めて感じます・・・。今回は泉さんや永森さんにお隣の席を譲る事となりましたが、またこんな機会があった時には、今度こそ慶一さんのお隣に座りたいですね。）

静かに感動の涙を流しつづける慶一さんを見ながらそう思う私でした。

慶一ｓｉｄｅ

こうして色々あったけれど、今日の映画をみんなで楽しく見ることができたのだった。

帰りにこなたとやまとがやたら上機嫌だったのが気にはなったものの、きっと映画が楽しかったのだろうと納得する俺。

そんな中で少しだけ寂しげな視線を俺に送るみゆきに気付いたが、そんなみゆきに視線を送ると、みゆきは照れたように顔を赤くして俯くのだった。

そして、俺達は電車に乗り、家へと戻るのだが、その途中でみさおとかがみ、つかさの３人が交互に俺の隣の席に座ったりして、そんな３人がなんだか嬉しそうにしていたのを見て、俺はよく分からずに首を傾げていたが、それを見ていたあやのがなんだか苦笑しているのを見て俺は少し困惑していた。

そして家に帰った俺にかがみからメールが入って来たのを俺は確認してみる。

ＦＲＯＭ：かがみ

慶一くん、今日は映画楽しかったね。次はいよいよ温泉旅行よね。
私結構楽しみにしてるのよね。

それでさ、私うっかりその事をまつり姉さん達に話しちゃったのよね。

そうしたら、姉さん達が私達も連れて行けー！ってうるさくてさ・・・。

ねえ、慶一くん、いきなりで悪いけど姉さん達の方も都合つけられないかな？

ほんと迷惑かけちゃうけどごめんね？

もし何とかなるようならその時点で私の携帯に連絡してくれる？

それじゃお願いね。

Ｐ．Ｓ

もうすぐ私達の賭けの結果がでるわよね？それでもし私がその賭けに勝ったらその時は私と２人で映画に行く、って事でいいかしら？
あんたが勝ったらあんたの条件も考えておきなさいよ？

そのメールを見て俺はどうしたものかと悩んだのだが、とりあえず実家に連絡をして聞いてみると、以外にあっさりと許可がでた。

そして、俺は内心びびりながら龍兄への連絡をすると、案の定その事に対する追及がきたのだが、かがみから送られたメールをそのまま龍兄の携帯へ送って確認をしてもらうと、龍兄は諦めたようにため息をついていたのだった。

今回に関しては俺も謀略はめぐらせてはいなかったので、それを悟ってくれた龍兄は俺に修行3倍、という事は言わなかったが、大分気が重そうな感じだった。

ついに終わった2年生。

いろいろな事があった1年間だったけど、俺は忘れられない1年間を過ごせたと思っている。

そして始まった春休みの最初に俺達は映画を見にいった。

そこでもいろいろな事はあったけど、すごく楽しかったと俺は思っている。

春休みはまだ始まったばかり、次は2年生最後にする温泉旅行が待っている。

俺はそこで起きそうないろいろな事に思いを馳せながら、この旅行もみんなで楽しんでいこうと思うのだった。

そして、そんな楽しい思い出を経て、いよいよ間近に迫る3年生に向けての心構えもしておこうと思う俺だった。

終わりと始まりの旋律～終わる2年生と映画館での出来事～（後書き）

次回からいよいよ温泉旅行出発です。
ここでの旋律達の物語もお楽しみに。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行初日～（前書き）

さるめさんの小説でできた設定も少し使わせてもらいました。
それらを踏まえつつ、お楽しみください。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行初日～

それぞれの1年を振り返り、そして、みんなとの絆を再確認し、2年生最後の春休みへと突入した俺達。

その初日に当初から予定を立てていた映画館への映画鑑賞を実行する。

いろいろな事があった映画館での出来事を終えて1日空けた後、いよいよ温泉旅行の前日となった。

パティと共に明日の準備をしつつ、部屋で持ち物の確認等をやっていたが、そこにパティがやってきて

「ケイイチ、イチオウのジュンビはカンリョウしましたが、ゲーム等のモチコミはカノウですカ？」

そう聞いてくるパティに俺は頷いて

「その位なら大丈夫だろ？ゲームの持ちこみをしてはいけません、なんて事はないだろうからな。それに、どの道こなたも持ってくる事は予想してる事だからなあ・・・。」

そう言うとパティは俺に

「コナタとコウはありそうですネ。ケイイチもタシカＰＳＰはモッテいませんでしたカ？」

その言葉に俺は頷きつつ

「一応は俺もこなたに付き合う事もあったから買いはしたけど、その実こなた達と遊ぶ以外はあまりやってなかったな。」

俺の言葉にパティは首を振りつつ

「それはザンネンですネ。せっかくのＰＳＰなのにモッタイナイですヨ。ケイイチ、コンドワタシがオシえますからイッショにプレイしまショウ。」

そんなパティに俺は苦笑しながらも

「ああ。そうだな。その時にはパティにでも色々と教わるとするか。」

俺がそう言うとパティは嬉しそうな顔で

「フッフッフ・・・カクゴしてもらいますヨ？ケイイチ。」

そんなパティに俺は首をすくめてやれやれというジェスチャーをするのだった。

そうやってパティと話をしているうちに、家の呼び鈴が鳴ったので俺はパティに

「パティ、お客さんみたいだ。ちょっと玄関行ってくるからお前はキッチンで待ってろ。お客さんの相手が済んだら飯作るから。」

そう言うとパティは頷いて

「ワカリマシタ。キョウのディナーもキタイしてますヨ？」

にっこり笑いながら言うパティに俺はまたもプレッシャーを感じつつも頷いて玄関へと向かった。

「はいはい、どちら様ですか？」

そう言って玄関を開けると俺はそこに立っている奴に絶句した。

「やふー、慶一君。来たよー？」

のん気な声で俺に挨拶してきたのは、大きな荷物を抱えたこなただった。

「・・・あー・・・こなた、何でお前ここにいるんだ？」

少し呆れつつもこなたがここにいる事情を尋ねると

「んー？明日は集合場所に遅れたくないから慶一君の家に泊めてもらって明日一緒に行こうかなーって思ってさー。」

そのこなたの言葉に脱力しつつ

「あのなあ・・・お前、前に2度それでかがみに怒られていたよな？また繰り返す気か？」

俺がそう言うとこなたは親指をびしっと立てて

「だいじょーぶなのだよ。かがみにはすでに事情を話してあるからねー。集合時間に遅れない為だと言ったらあっさり納得してくれた

よー？」

そのこなたの言葉に俺は軽いため息をつきつつ

「なあ、こなた？お前、それで納得されるとか普段どんだけ信用されてないんだよ・・・。」

俺がそう突っ込んでやるとこなたは、ない胸を張って

「ふふん。結果さえよければいいのだよ。そこに今までの事など関係ナッシングってねー。」

そう自信満々に言うこなたに俺は再度呆れたのだった。

俺はそんなこなたを見て、かがみとは連絡とってあるなら良いかな？と思い

「・・・はあ、まあいいか。こなた、上がれよ。ちょうど今夕飯作る所だったんだよ。」

俺がそう言うとこなたは

「ありがとー慶一君。これから夕食だったんだね？なら、私が今日は頑張ろうか？また押しかけでお世話になる訳だしね。」

そう言ってくれたので、俺は少し考えてから

「なら、頼めるか？こなた。パティもいるから3人分の用意だな。」

そう言うと、こなたも頷いて

「りょうかーい。ならいつもの部屋に荷物置いたらすぐやるねー？」

その言葉に俺も頷くと

「うん。よろしく頼むな？それと、こなた。」

俺がこなたに声をかけるとこなたは俺に振り返って

「んー？なにー？」

俺はそんなこなたに満面の笑顔を向けて

「今回は前のとは違ってなんのしがらみもない旅行だからさ。３日間楽しんでいこうな。」

そう言うとこなたも同じように満面の笑みで

「もっちろん！あ！慶一君！」

俺に何かに気付いたように声をかけてくるこなたに俺は

「ん？どうした、こなた。」

そう聞き返すとこなたは嬉しそうに

「君の言ったとおりになったねー。『俺達が望むなら出来る』ってさ。楽しい事望んだら、今回の旅行だもんね。君の言ったことに嘘はない、改めて分かった気がするよ。」

俺はそんなこなたの言葉に驚きつつ

「はは。そうだな。その通りになったよな。うん、これからも俺達はそういう事を望んでいこう。そうすればまた、俺達なら・・・」

こなたも俺の言葉に頷きながら

「そうだよ。私たちなら・・・願いを、祈りを現実に変えることもできるよね。」

そんなこなたの言葉に俺も力強く頷くと、こなたは笑顔のまま俺にやはり同じように力強く頷いてくれた。

そして、部屋に走っていくこなたを見送って俺はパティの待つキッチンへと足を向けるのだった。

キッチンに顔を出すとパティが

「おかえりデスケイイチ。オキャクサンのおアイテはスミましたカ？」

そう聞いてきたので俺は頷いて

「ああ。お客はこなただったよ。何でも集合時間に遅れたくないから家に泊まるって言っててな。」

俺の言葉にパティはパアッと笑顔になって

「オウ！コナタがキタのですカ？まさかのライキャクですネ。コナタがいるならまたカタリあえます！けど、わざわざこのホームにク

ルホドにコナタはマチアワセにジシンないのでしょうかネ？」

その言葉に俺は苦笑してパティに返事を返そうと声を出そうとしたのだが、そこに丁度夕食の支度をしようとやって来たこなたが

「んー・・・それも少しあるけど、こういう時の突発イベントはお約束じゃん？」

といきなり声をかけてきたので俺は「うぉっ！びっくりした・・・」と言うと、パティもこなたの言った事に反応して

「フフフ。サスガコナタはワカっていますネ。」

そう返して、こなたもまたニヤリと笑いつつ、パティに親指をびしっと立てて応えていた。

俺はそんな2人を見ながら苦笑していたが、こなたが自分のすべき事を思い出して

「おっと、いけないいけない、私のやるべき事を忘れる所だったよ。慶一君、パティ、メインの方は私がやるから、食器出しとかお願い！。」

そう言いながらエプロンを占めてキッチンに向かうこなたに俺達も

「わかった。やるぞ？パティ。」

そう声をかけるとパティも頷いて

「リョウカイです。ケイイチ。」

そう言って、人数分の食器出しやサイドのメニューの調理をするのだった。

それらを済ませて3人でテーブルにつくと

「「「いただき（イタダキ）まーす（マース）」」」

と言う掛け声と共に食事を始める俺達だった。

ちなみに今日の夕食のメニューは、以前こなたが俺に作ってくれたチキンハンバーグだった。

俺はそれを口にしながら

「おお、これはあの時こなたが俺に作ってくれたチキンハンバーグじゃないか。やっぱり俺の好みだな、これは。」

俺がそう感想を言うと、パティもまた満面の笑顔で

「うーん、デリーシャスですネ、コナタ。とってもよくできてますヨ。」

そう感想を言うと、こなたは照れながら

「いやー、そう言って貰えると作った甲斐もあるよねー。それに、パティにも受けてよかったかな？」

そんなこなたに俺達は笑いながら頷きつつ、食事を済ませた。

そして、こなたとパティを先に風呂に入れて、俺は2人が上がった頃に風呂へと向かった。

無論、2人に風呂への乱入禁止を言い渡して、だが。

しかし、その忠告も空しく、よりにもよって2人で風呂場になだれ込んできたのだった。

「やほー。慶一君。背中流してあげるよー？」

「これもまたおヤクソクのテンカイネ！」

そんなパティに、無駄だとは思いつつも

「だから、誰とした約束だっての！！はあ・・・もういい・・・好きにしてくれ・・・」

そう言って諦める俺に2人とも喜々とした表情で俺の背中を流し始めた。

もう、この2人が揃っている時の風呂には海パンはかかせないものだと改めて考えると、俺はただただ大きなため息をついて情けなく思いつつも2人の好きにさせていたのだった。

そして、そんな中で思っていたのは、こなたは家に泊まりにくる時には必ずスク水を持ってきてるんだなあというしょうもない事だったのだが。

風呂を上がった後は2人ともゲームをしたり、アニメＤＶＤとかを見ていたのだが、ほおっておくと徹夜しそうな勢いだった為、2人にきつく言って早めに就寝させた。

そして、俺も部屋へと戻ると、明日の準備の最終確認をしてから布団へ入った。

それから、俺はいつもの時間に起床すると、朝御飯の準備をするため着替えたり顔を洗ったり等をしていたのだが、それらを済ませてからこなた達が起きてくるのを待ってみた。

しかし、2人とも結局は時間通りに起きてきてくれなかったのと、起こしに行っても素直に起きなかった為、俺特性の目覚ましを2人にお見舞いして2人を起こすと少し呆れつつも2人に出発準備をさせて朝食を摂ってしっかりと戸締りを済ませて家を出た。

ちなみに今回はみきさんが猫の世話を引き受けてくれるとの事なので任せてきたのだった。

そして、待ち合わせ場所に着くと、やはりトップで来ていたのは龍兄だった。

「おはよう、龍兄。相変わらず早いね。」
「おはようございます龍也さん。今日から3日間よろしくお願いします。」
「グッモーニン、タツヤ。おセワになりますヨ？」

俺達が龍兄に挨拶をすると、龍兄も笑いながら

「おう。お前も結構時間には律儀な所あるよな。それにこなたちゃん、パティもおはよう。今日から3日間だが、楽しんでくれよ？」

そう挨拶をかえしてくれたのだった。

そして、そのすぐ後にかがみ達がやってきた。

「おはよう、慶一くん。相変わらず時間には正確ね。あら？こなた、パトリシアさんもおはよう。慶一くんに任せるとやっぱり遅れて来なくて済みそうね。こなたに許可だして正解だったかも。」

「おはよう～。けいちゃん、こなちゃん、パトリシアさん、それに龍也さんも。今日からよろしくね～？」

「おはよー。龍也さん、森村君、こなたちゃんにパトリシアさんも。飛び入リで悪いけどお世話になるわねー？」

「おはよう、龍也さん、森村君。それと泉さんとパトリシアさんよね？私も飛び入リだけど、よろしくね？」

上から順にかがみ、つかさ、まつりさん、いのりさんの４人だ。

俺は４人に

「おはようございます。かがみ、つかさ、まつりさん、いのりさん。今日から3日ですが、是非楽しんで下さいね。」

そう挨拶すると、こなたとパティも

「かがみん、つかさ、まつりさんにいのりさんもおはようー。今日から楽しんでいこうね？」

「カガミ、ツカサ、マツリ、イノリ、３カカンよろしくデス。」

そう返すと、かがみ達もこなた達に挨拶を返していたのだが、ふと、かがみがこなたとパティの額が赤い事に気付いて

「ん？こなた、パトリシアさん。額少し赤くなってない？何かあっ

たの？」

そう聞くと、２人はバツの悪そうな顔になりそんな２人に代わって俺が

「ああ、あれは２人に対する俺の目覚ましの結果ってやつだよ。こう、ビシッとね。」

そう言いながらデコピンの指の形を作るとかがみは呆れたような顔になって

「なるほどね、結局慶一くんの手を煩わせた、って事か。まあ、自業自得かしらね。これに懲りたら少しはまともに起きてみなさいよ？」

と、２人に言うと、２人は面白くなさそうに

「ぶー！そんな風に言われなくたってわかってるよー。かがみの意地悪ー。」

「ワタシもスキでネボウしたわけではないですヨ。そこのトコロはワカッテほしかったですネ。」

そんな風に言いながら言い合いをしていると、他のメンバーもぞろぞろと集まってきた。

まずやってきたのはみゆき。

「皆さん、おはようございます。今日から３日間お世話になりますね？」

そう言って挨拶してくるみゆきに皆もそれぞれに挨拶を返していると、次に現れたのはゆたか達だった。

「おはようございます。先輩、それに皆さんも。今日からお世話になりますね？」

「・・・おはようございます・・・今日からよろしくお願いしますね・・・？」

「おはようございまっス。小早川さん達同様、お世話になります。」

と言いながら合流してきた。

そして次にやってきたのは、みさおとあやのだった。

「おはようー。慶一、みんなー。ちょっと遅れちゃったけど、時間にはまだ余裕あるよな？」

「もう、みさちゃんは・・・起こすの苦労したんだからね？遅れなくてよかったけどもっとちゃんとしてよね？・・・あ、ご、ごめんなさい。おはよう、みんな。みさちゃん起こすのに手間取って少し遅れちゃったわ。今日から3日間、よろしくね？」

そんな2人に俺達も苦笑しつつも挨拶を返していると、最後のメンバーがやってきた。

「もう！こう！あなた、どうしてこういう時にもう少し早く起きれないの？間に合ったからいいけど、そうじゃなかったら私たちだけ置いてきぼりだったとこなのよ？少しは反省しなさいよ！？」

「ご、ごめん、ってやまとー。アラームのセット時間少し間違えちゃったのはこっちのミスだからそれは謝るからさー・・・」

そう言いあいながらもとりあえず俺達の方へやって来た2人は、俺

と皆に挨拶をする。

「遅れてしまってごめんなさい。こうもいつもよりは早かったんだけど、それでも結構ぎりぎりになってしまったわ。ともあれ、これから3日、お世話になるわね？先輩、皆さん。」

「今度こそ遅れないように来るつもりだったのに失敗してしまいました。皆さん、ご迷惑をおかけしてすいません。今日から3日間、お世話になります。」

そんな2人に俺は笑って頷きながら

「ああ。今回は何のしがらみもない旅行でもあるし、皆で楽しんでいこう。さて、そろそろ出発と行こうか。みんな、行くぞー？」

俺がそう声をかけると皆も「「「「「「「「「「おー！！」」」」」」」」」」と言っていよいよ旅のスタートとなった。

今回の旅の目的地は箱根の温泉だ。

なので、移動は電車を利用する事になる。

俺達は電車に乗り込み、一路、箱根を目指すのだった。

上野からの電車の乗り換え後はゆったりと席に座っての移動となったのだが、今回もまた、俺の隣と近くの席の争奪戦が俺の知らない所で起きていた。

今回は俺の隣も含めて獲得できる席は3っつ。

そして、今回は俺の隣にみゆき、前2つにかがみとつかさ。俺の後

ろにこなた、みさお、あやの、こう。そしてゆたかたちと固まってやまとが席に着いていた。

龍兄の側は言わずもがななな、まつりさんといのりさん。しかも2人は横並び席で中央に龍兄、左右にまつりさんといのりさんという配置になった。

俺の隣に座って上機嫌なみゆきが俺に

「慶一さん。今回の温泉旅行ですが、今回宿泊する場所は慶一さんはご存じなのですか？」

そう聞くと、俺の前に座るかがみも

「そういえば、泊まる場所に関しては詳しい事聞いてなかった気がするわね。どうなの？慶一くん。」

興味津々にそう聞いてきたので、俺は2人に

「うん。俺もよく知ってる所だよ。なにせそこは龍兄のおじさんの経営する旅館だからね。」

そう答えると、2人だけでなく後ろの席のこなた達も

「え？そうなんですか？それは驚きですね。」

「前の合宿所といい、あんたの所って結構手広く色々な事やってるのねえ・・・。」

「ねえ、ねえ、慶一君。その旅館の名前ってなんていうの？」

「わたしも知りたいな。」

そう言いながら質問攻めをしてくる皆に答えたのは龍兄だった。

「それは俺から教えるよ。旅館の名前は草薙亭、というのさ。俺の叔父である草薙聡（くさなぎさとる）が経営してるんだ。」

その答えにみゆきが

「草薙、ですか？聞いた事がある気がしますね。とはいえ、1つ気になった事があるのですが、龍也さんの名字は龍神、なのですよね？その叔父の名字が草薙、これはどういう事なのですか？」

龍兄の答えに疑問を持ったみゆきがそう訪ねると、龍兄は軽く笑いながら

「はは。さすがにいい所に気付いたね。そうだなあ・・・かがみちゃんとつかさちゃんには俺が龍神家の息子ではあるが、俺もまた龍神家とは血のつながりのない養子だという事は話したよね？」

龍兄は2人にそう言うと、2人は頷いて。

「はい。龍也さんと初めて会ったときにその事を聞かせてもらいました。」

「2人とも龍神さんの息子さんなのに2人して血のつながりがないって事を聞いた時にはショックでした。」

そんな2人の言葉に頷いて

「龍神家の分家、そして、俺の本当の両親の名字は草薙、と言うんだよ。草薙たつみ。それが俺の親父の名前なのさ。そして、その親父と一応の血のつながりがあったのが叔父の聡なんだ。家とは従兄

弟の間柄でね、けど、家のように武術はやってはいなかった。それとは切り離された世界で叔父達は生きてきたって事だね。でも、そんな叔父達であっても俺とも血は繋がっている人だから、ある意味もう1人の父って呼べるかもしれないな。」

そう説明すると、みんなもその話を聞きながら、ほーっ、と感心しているようだった。

「まあ、そういう場所だから、俺も結構連れてきてもらった事もあってな。それに、結構いい所でもあるから皆も連れて行ってやりたかったんだよな。」

そんな皆に俺は今回の温泉旅行を計画した経緯を話すと、みんなも嬉しそうな笑顔を向けてくれたのだった。

その一方でこの話を聞いていたまつりさんといのりさんは

「龍也さんの叔父さんであり、もう一人のお父さん、か・・・これは私もちゃんとご挨拶しておいた方がいいかも・・・」

と言うと、いのりさんも負けじと

「ちょっと、まつり?抜け駆けは許さないと言ったわよね?悪いけどあんたの好き勝手にはさせないわよ?」

と龍兄をはさんでの火花の散らしあいが始まり、龍兄はもとより、俺達もその光景を見ながら苦笑していたのだった。

その後は車内でトランプをしたりしつつ、目的地までは楽しく過ごした。

そうこうしているうちに箱根駅に辿り着いた俺達を待っていたのは、旅館への送迎バスだった。

そのバスに乗り込み、俺達は一路旅館を目指す。

それから３０分程車に揺られて俺達は目的地の旅館へと辿り着いたのだった。

「みんなー、着いたぞー。さあさ、降りた降りた。」

そう言いながらみんなをバスから下ろして、旅館のロビーへと向かう。

「おおー。ここが龍也さんの叔父さんの旅館なんだね？」
「へえ？中々いい所じゃない。近くに富士山も見えるのね。」
「景色最高だね～。でも、まだこの時期だから寒いね～。」
「でもその分空気が澄んでいて気持がいいです。」
「建物も結構立派じゃん？こりゃー今回も期待できそうだよなー。」
「そうね。楽しんだり、のんびりとできそうよね。」

そして、こうとやまとも

「他にもお客さんもいて中々活気がありますねー。」
「意外と広い敷地だし、暇潰しの散歩もいいかもしれないわね。」

そう言って、ゆたかたちも

「わあー。すごく素敵な雰囲気です。今回も来れてよかったですよ。」

「・・・今回も先輩のお心遣いに感謝、ですね・・・。」
「いやー、都会の喧騒を離れてのんびりするのもいいかもしれませんよね。」
「ヒイラギ家でミたジンジャもナカナカのフンイキありましたが、こちらもナカナカヨイですネ。」

そう言うと、まつりさんといのりさんも感心しつつ

「これはますます狙って行きたいわね・・・。」
「まつり、そう簡単には譲るつもりはないからね？」

そう言いながらまたも火花を散らす２人に俺達は軽いため息をついていた。

そこへ、この旅館のご主人である聡さんがやってきて

「やあやあ。遠い所からわざわざいらっしゃい。私がこの旅館の主人の草薙聡といいます。いつも皆さんには龍也や慶一がお世話になっていると聞いていますよ。こんなひなびた旅館ですが、存分に楽しんでいってください。」

その叔父さんに俺と龍兄は

「お久しぶりです、叔父さん。今日から3日ほどお世話になります。」
「元気みたいで何よりだよ、叔父さん。まあ、そんな訳だからよろしくな？」

そう言い、他の皆も「「「「「「「「「お世話になりまーす」」」」」」」」」と挨拶をしていた。

そんな俺達に叔父さんもにこにこしながら

「それではお部屋へとご案内しましょう。みなさん、こちらへどうぞ。」

そう言うと、みんなと共に俺達も叔父さんの案内の元、自分たちの部屋へと案内してもらった。

ちなみに、部屋割りは

俺と龍兄

こなた、かがみ、つかさ、みゆき、みさお、あやのの6人部屋。

ゆたか、みなみ、ひより、パティの4人部屋。

こう、やまと、まつりさん、いのりさんの4人部屋。

と言う風になった。

夕食時まではまだまだ時間もあるので、各自それまでの間、自由時間となった。

俺は1人、久しぶりに来る旅館を散策して歩いていたが、そんな俺を見つけたゆたかが俺の側に走ってやってきた。

「慶一先輩、お1人ですか？」

と言うゆたかに俺は頷いて

「うん。久しぶりに来たからね。昔に浸りつつ館内を散策してた所さ。ゆたかは何をしてたんだ？それに、みなみ達は？」

俺の質問にゆたかは

「私はちょっとお手洗いに行っていたんですよ。みなみちゃん達はロビー横にあるお土産コーナーでお土産を見ていますよ？あ、そうだ、先輩。私先輩に報告があるんです。」

そんなゆたかに俺は

「報告？何だか良く分からないけど聞こうじゃないか。」

そう言うとゆたかは満面の笑みを見せながら

「先輩、新学期が始まり、始業式が済んだら星桜の樹の所に来てもらえますか？」

その言葉に、俺はゆたかの言いたいことを理解して

「そうか・・・おめでとう、ゆたか。」

そう言うと、ゆたかは嬉しそうに笑いながら

「ありがとうございます！先輩。でも、私だけじゃないんですよ？みなみちゃんも田村さんもちゃんと合格できました。これも先輩のおかげですね。」

そう言ってくれるゆたかに俺は照れながら

「俺は別に何もしちゃいないさ。陵桜に合格できたのもお前達の頑張りがあったからだよ。俺はそんなお前らの軽いサポートをしたにすぎないさ。」

そう言うと、ゆたかは首を振って

「いいえ、先輩。それだけでも私達にとってはとても心強いものになったんですよ?だから、私は心から先輩にお礼を言います。ありがとうございました、先輩。」

そんなゆたかの頭をぽんぽんと軽く叩きながら俺もまた嬉しそうな笑みをゆたかに向けていた。

そしてゆたかはみなみ達を待たせているからと言って、小走りでみなみ達の待つ土産物屋へと走っていった。

それを見送ってから俺はこれからの事を考えつつ、ゆたかたちが陵桜に来れる事になった事を喜びながら、夕食の後、皆で温泉に行ってのんびりして（無論、男女別々の温泉だが。）明日以降の計画を練りつつ体を休めたのだった。

今日からの3日、俺は楽しい思い出を作っていこうと心に決めて夢の世界へと旅立っていくのだった。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行初日～（後書き）

ここで新たに出てきたキャラの紹介を。
草薙たつみ（くさなぎたつみ）
龍也の亡くなった実の父親で龍神家の分家でもある。
たつみの家は武術家の一家であり、龍神との血のつながりもある。

草薙聡（くさなぎさとる）

たつみとは従兄弟同士の間柄ではあるが、たつみの所とは違い、武術はやっていない。
その代わり、代々経営をしてきた旅館を続けている。
慶一や龍也も小さい頃にはよくお世話になった事がある。
なので、２人はこの旅館の事は知っていた。

思い出作りの旅律～箱根温泉旅行2日目前編～

2年生最後の春休みも始まり、俺達は当初の計画通りに温泉旅行2泊3日の旅へと出発する事となった。

出発日前日に集合場所に遅れたくないという理由で俺の家に押しかけてきたこなたを受け入れて、夜中までどたばたしつつも当日はこなたも遅れずに来る事が出来た。

そして、予定通りに集合を果たした俺達は電車へと乗り込み、一路、龍兄の叔父さんの経営する草薙亭を目指す。

電車内での軽い席取り争奪戦等もありつつも無事に目的地へと辿り着く俺達。

そこでは俺にとってもゆたかからの嬉しい報告もあった。

その後は温泉に浸かり、のんびり食事も済ませて自由時間を満喫し、次の日の予定に思いを馳せつつ眠りに着く俺達だった。

そして、次の日の朝・・・・・・

「うおおおっ！な、なんじゃこりゃー！！」

と叫ぶ龍兄の声に驚いて飛び起き、俺は龍兄に

「ど、どうした、龍兄。何かあった・・・」

そこまで言いかけて俺は絶句する。

何故なら、龍兄の布団にいつのまにかまつりさんといのりさんが潜り込んで一緒に寝ていたからだった。

俺は半ば頭を混乱させつつ龍兄に

「た、龍兄・・・これは・・・いったい？」

そう訪ねると、龍兄は訳が分からないという風で

「お、俺にもさっぱりだ・・・気付いたら2人が俺の布団の中にいたんだよ・・・。」

その龍兄の返答に俺も困惑顔で龍兄以外の2人を見ていたが、俺達2人の話声で2人が目を覚まして

「・・・ふ、ふあ～あ・・・んー・・・おはよう、龍也さん、森村君。朝から騒がしいけどどうしたのー？」

「ん・・・んん・・・うーん・・・ふああ・・・おはよう、龍也さん、森村君。もう朝ー？」

そんな2人に俺と龍兄は呆れつつ

「おはようございます、はいいですが、まつりさん、いのりさん、2人して何やってるんですか・・・。」

「ま、まったくだ・・・突然2人がいたから驚いたよ・・・。でも、どうやって部屋に入ったんだ？各部屋に入るには鍵が必要なはずだよな？」

その言葉にまつりさんといのりさんはぺろりと舌を出しながら

「えへへ。実は、龍也さんの叔父さんにご挨拶した時に龍也をよろしく、と言われてこっそり龍也さんの部屋の鍵を貸してくれたんですよね。」

「それを知った私はまつりが抜け駆けして変な事をしないように、って、まつりを監視する為に一緒にこの部屋に来てそれで・・・」

龍兄は呆れたように重いため息をついて

「俺の布団に潜り込んで寝た、と？」

その言葉に頷く2人を見て龍兄は困ったような顔をして、俺は俺で苦笑していた。

そんな2人に龍兄は

「・・・まったく・・・自重して下さいよ？2人とも。俺を慕ってくれている事は嬉しいですが、見境なくこんな事をやられては困ってしまいますよ。2人とも物事の分別はつく年頃なのですから、自分の行動には責任を持ってですね・・・・・・。」

そんな風に2人に説教する龍兄を見て軽いため息をつきつつ、俺はとりあえず顔を洗って来ようと思い、部屋の外へ出たのだった。

部屋にも洗面所はあるのだけど、あの状況のままでのん気に部屋で顔を洗ってはいられないなあ、と思ったので、俺は外のお手洗いに近い場所に設置してある洗面所へと向かう。

そして、俺はそこで4人に声をかけられる事となったのだった。

「おはよう、慶一くん。今朝も早いわね。今から顔洗う所？」
「おはようございます、慶一さん。今朝もお早いですね。私達も顔を洗いに来たところなんですよ。」
「おはよう、慶ちゃん。昨日はよく眠れたわ。私達だけ先に起きたから柊ちゃんと高良ちゃんと3人でここに来たんだけどその途中でやまとちゃんにも会ったのよ。」
「おはよう、先輩。いつもながら感心するわね。今峰岸先輩が言った通りで途中で行き会って一緒に来たのよ。」

と声をかけてくれる4人に俺も挨拶を返す。

「おはよう、かがみ、みゆき、あやの、やまと。そういう事だったのか。俺も顔を洗いに来た所なんだよ。」

そう返すと、やまとが何かを思い出したみたいで俺に

「そうだったの。あ、そうだ、先輩。まつりさんといのりさんを見なかったかしら。朝起きた時に部屋にいなかったからどうしたんだろう、って思ってて・・・。」

やまとのその言葉にかがみが反応して

「え？姉さん達が？それって昨日から？永森さん。」

その言葉にやまとも頷いて

「それが・・・寝るときまでは一緒にいたんだけど、それから2人が部屋を出て行ったような気配を感じた後、何気にお手洗いに起きた時に2人の姿がなかったことに気付いたのよ。」

その言葉にかがみは少し心配そうに

「うーん・・・どこいったのかしらね・・・ともかく、顔洗ったら姉さん達を探してみるわ。」

そう言うかがみにみゆきとあやのも

「そんな事が起きていたんですね？心配ですね・・・。」

「2人とも、それなりに大人だし、行動はわきまえているとは思うけど・・・柊ちゃん、私も手伝うわよ？」

という2人にかがみも頷いて

「ごめん、2人とも。私の身内の事で迷惑かけちゃって・・・ねえ、慶一くん。慶一くんも手伝ってくれないかな？」

俺に向き直り、そう言うかがみに俺はバツの悪そうな顔をしながら

「・・・あー、かがみ。その事なんだが、俺は2人の居場所を知ってるんだ。」

そう切り出した俺の言葉に驚いたかがみは俺に詰め寄って

「え？どういう事なの？慶一くん。姉さん達の居場所を知ってるって・・・。」

そんなかがみの剣幕に3人も心配そうにこっちを見ていたが、俺はかがみに言いにくそうに

「うん。まあ、聞いたら呆れると思うけど、実はな・・・・・と

いう事なんだ。」

俺の言葉を聞いたかがみはしばし呆然としていたが、やがて

「・・・まったく、姉さん達はー・・・身内の恥晒して何やってんのよ！まったく！！慶一くん。悪いけど、私先に姉さん達の所へ行くわね？それじゃ後でね、慶一くん。」

そう言って走り出すかがみに俺は

「かがみー！出来れば穏便になー！」

そう声をかけたが、かがみはそんな俺の声が届いてないかのような勢いで俺達の部屋へと走っていった。

それを見送った俺達は苦笑しながら

「うーん、かがみの家の人達はパワフルだなあ・・・。」

「すごい行動力ですね・・・でも、大事にならなくて良かったです。」

「あの2人の行動力は時にすごいわよね・・・龍也さんも災難ね・・・。」

「かがみ先輩もあれだけの行動力を出せるって事なのかしら・・・でも、ひとまずは安心かしらね・・・それにしても、先輩も苦労するわね。龍也さんもだけど・・・。」

やまとの言葉に俺は苦笑しながら

「うーん、龍兄は特に、かもしれないな・・・あの2人との争奪戦は激しそうだよ・・・。」

そう呟くと、3人ともうんうんと頷いていたのだった。

それと同時にみゆきとやまとに意味深な視線を向けられていたのだが、俺がそれに気付かずにいると、あやのはそんな俺を見ながら軽いため息をついていたのだった。

そうして、洗顔を終えた俺達が軽く雑談をしている所にゆたかとみなみ、そして、2人の姉に説教を終えてきたらしいかがみが俺達と合流する。

「おはようございます、先輩。海の時もそうでしたけど、朝早いんですねー。」

「・・・おはようございます。私も早い方ではありますけど、先輩にはかないませんね・・・。」

という2人に俺達も挨拶を返す。

そして俺は6人に

「丁度良いや。6人とも、俺に付いてきてくれ。今の時間なら綺麗に見えるだろうからな、俺達だけの特別な場所に連れて行ってやるよ。」

俺の言葉に6人とも首を傾げつつ

「特別な場所？それって？」

かがみが代表で俺に聞いてくると、俺は頷いて

「うん。俺と龍兄だけが叔父さんに許可されてるとっておきの場所があるんだ。そこに今から皆を連れて行くよ。」

その言葉にかがみたちは期待の眼差しを俺に向けつつ移動を始めた俺の後についてきた。

そして向かった先は、関係者以外立ち入り禁止の旅館の屋上だった。

「さあ着いたぞ、ここだここだ。」

そう言いながら俺は屋上のドアの鍵を開ける。

そして、みんなを伴い屋上へと出ると、そこには富士山を目の前にした大パノラマが広がっていた。

「うわー・・・きれーい・・・。」

「素晴らしい眺めですね・・・これは美しいです・・・。」

「まさに絶景ポイントってやつね。そうだ、携帯のカメラで写真取っておきましょう。」

「いい眺め・・・先輩、素晴らしいわ。」

「綺麗だねー、みなみちゃん。」

「・・・そうだね、ゆたか・・・こんな眺めはめったに見れないね・・・。」

皆それぞれに感想を漏らしていたの聞いて俺はここに連れて来たことは正解だったなと思い、景色に見とれる皆を見つつ、俺もこの景色を楽しんでいた。

「お前らやっぱり運がいいよ。この時期なんかも結構霧もかかりやすいからこんな風にはっきりと景色が見える事もそうそうないから

な。」

そんな俺の言葉にみんなも景色を凝視しつつ頷いていた。

そして、しばらく景色を楽しんだ後、俺はみんなに

「みんな。ここに来てみたくなったら俺に言ってくれればいいよ。いつでもここの鍵は開けてやるからさ。」

その言葉に皆も嬉しそうな顔で頷いたのだった。

景色を楽しんで俺達は朝御飯を食べに部屋へと戻ると、丁度よく朝御飯が部屋へ運ばれてきた所だった。

そして、俺も部屋に帰ってた時にはすでにまつりさんといのりさんも自分達の部屋へと帰っていたようだった。

俺は龍兄に

「龍兄、さっきかがみがまつりさん達に説教しにこなかったか？」

そう訪ねると、龍兄は苦笑しながら俺に

「ああ、すごい剣幕でかがみちゃんが飛び込んできてな。それはもう凄かったぞ？その後でかがみちゃんが俺に散々謝り倒していったが、あのかがみちゃんの姿を見てると不憫になったから俺は特に気にはしてないと言ってあげたけどな。それに、まつりさん達も大分落ち込んでいたようだしなあ・・・。」

そう説明してくれたのだが、俺はそのシーンを想像した時、ただた

だ複雑な笑みを浮かべる事しかできなかった。

そして、朝食を済ませた俺達は今日の予定の話し合いも兼ねてロビーに来ていた。

俺の姿を見つけたこなたが俺の所にやってきて

「ねえねえ、慶一君。さっきかがみから聞いたんだけどさ。特別な場所ってのがあるって話じゃん？慶一君に頼めばそこに連れてってくれるの？」

そう聞いてきたので俺は頷いて

「ああ。行きたいんなら俺に声かけてくれれば何時でも案内してやるよ。」

その言葉にこなたは笑顔になって

「ほんとー？なら今日の自由時間から戻ってきたらお願いしようかな？いいよね？慶一君。」

俺はそんなこなたの頭をぽんと叩いて

「いいけど、その時には俺に声かけてくれよな。ところでこなたは今日はどうする予定なんだ？」

こなたに今日の予定に関して聞いてみると、こなたは

「今日はちょっとかがみ達と色々歩いて回ってみよう、って思ってね。慶一君はどうするの？」

こなたがそう訪ねてきたので俺は

「俺は叔父さんの手伝いも兼ねて今日は温泉街の散策と買い物だな。その後で時間あったら皆と散歩してもいいかな？って思ってるが。」

俺の答えにこなたは少し考える仕草をしていたが、やがて

「そっかー。それなら私達が帰ってきたら一緒に行こうよ。」

こなたの言葉に俺も頷きつつ

「ああ、いいぞ。こなた達もじっくりとこの辺りの自然も満喫してくれ。」

俺の言葉にこなたも頷いて

「うん。わかったー。それじゃ後でね？慶一君。」

そう言ってこなたはかがみたちのいる所へと戻っていった。

その後、俺と共にゆたか達が俺と一緒に、そしてこうとやまと、みさおあやのの４人がグループで町の散策をする事となった。

龍兄は当然、まつりさんといのりさんと共にデートとなったが。

だが俺はこの時はまだ気付いていなかった。

この後に起きる、ちょっとした騒ぎの事を。

今はまだそれを知らず、俺達はそれぞれの予定に向かって動き出した。

慶一ｓｉｄｅ

ロビーにて今日の皆の予定を聞き、俺とゆたか達はそろって叔父からの用事のついでで温泉街の散策に行く事となった。

「先輩。これからどこへ向かうんですか？」

そう聞いてくるゆたかに俺は

「叔父さんから頼まれた食材の注文とかをする為に叔父さんがお得意様としてる所へ行くのさ。その後は色々と見て回ろう。」

そう言うと、ゆたかも笑いながら

「分かりました。それじゃ、行こうよ。みなみちゃん、田村さん、パティちゃん。」

ゆたかがそう声をかけると3人とも頷いて

「・・・そうだね、ゆたか・・・先輩、付いて行きますから・・・。」

「この辺りの風景も漫画の背景にも最適っスね。色々楽しみっス。」

「このアタリのフウケイも、二ポンというカンジがあっていいですネ。ワタシもタノシミです。」

そんな４人に俺も頷いて

「うっし、それじゃ行くか。」

そう声をかけると、４人とも俺についてきてくれたのだった。

町の名所などを案内しつつ、俺はお得意様の店を目指す。道中にゆたかが気に入った土産物屋を見つけたようなので、帰りにそこに寄る事となった。

そのうちにお得意様の店に辿り着くと、俺はゆたか達に外で待っているようにと伝えて、店の中へ入っていく。

そして、お店のご主人と会って、叔父さんからの発注依頼をこなすのだった。

ゆたかｓｉｄｅ

私達は慶一先輩と共に先輩の叔父さんからのお使いとその後に温泉街を見て回ろうという事になり、みなみちゃん達と一緒に先輩について先輩の叔父さんのお得意様のお店へとやってきた。

そして、先輩が用事を済ませに行ってる間、私達は雑談をしながら先輩の帰りを待っていた。

「ねえねえ、さっきのお土産物屋さん、面白そうだったよね?私今から楽しみだよー。」

そう皆に持ちかけると、みんなも頷きながら

「・・・あの辺りでは大分目立って見えたね・・・品揃えも豊富そうだし、少し楽しみかな・・・。」

「家の親にもお土産買っていってあげなきゃねー。」
「メズラしいものがホシイですネ。」

と口々に言っているのを見て私もにっこりと笑いながら頷いていたのだった。

そうして話していると、突然私達の後ろから声をかけられて私はびっくりしてました。

「ねえ、君達。どこから来たの？暇してるのなら俺達と一緒に遊ばないー？」
「皆可愛い子じゃん？俺達も暇してるからサー、一緒に行こうぜー？」
「退屈はさせないからさ、ねえ、行こうよ。」
「・・・お前らの好きだな、まあ、こちらも４人いることだし、問題ないか。」

そうやって声をかけてきた人は、地元の人みたいで、私は男の人にあまり免疫もないのでおどおどしながら

「あ、あの。私達、今人を待っていますから。ごめんなさい。」
「・・・私達はここに・・・いなければなりませんので・・・申し訳ないのですが・・・。」
「すいません、フリーではないっスから、他を当たってくださいませんか？」
「アナタ達にツイテいったら、ケイイチがシンパイしますデス。」

そう言ってみんなで断ろうとしたんだけど、それを聞いても男の人達は諦めてくれなくて

「えー？いいじゃん、君達を待たすような奴なんてほっとこうよ。」
「そうそう。女の子を待たすのは最低の男のする事だよ。」
「俺達だったら退屈はさせないよー？」
「もし心配なら後でその人に連絡いれておけばいいだろう？」

そう言って来る男の人達に怯えながらも私達は

「わ、私たちの事はほおっておいてください。私達はここを離れるわけにはいかないですから。」
「・・・約束だから、この場所は動けません・・・お引取り下さい・・・。」
「そう言う訳でして、申し訳ないんですが・・・」
「そうデース。あまりしつこいとキラワレますヨ？」

最後に言ったパティちゃんの言葉に男の人達はどうも怒ったみたいで

「ちっ・・・優しく言ってるうちについてきたほうがいいぞ？」
「そうそう、そうしないと痛い目見せちゃうよー？」
「できれば優しくしてあげたかったけどそういう態度とるんじゃあ、仕方ないよなあ・・・」
「まあ、そういう事だ、これ以上俺達を怒らせる前に大人しくしたがっておけ。」

そう言いながら男の人達は私達の手を引いてこの場から私達を連れ出そうとしてきた。

私は怖くなって

「や、止めてください、離して・・・。」

そう懇願すると、それを見たみなみちゃんが鋭い目を向けて

「・・・ゆたかに手を出さないで・・・ゆたかに手出ししたら許さない・・・。」

そう言って私をかばおうとしてくれて、さらに他の皆にも手出しをしようとしている人達に田村さん達も

「ちょ、ちょっと、やめてください！暴力反対っスー！」

「そのケガラワしいテをはなすデス！」

そう言いながら抵抗していた。

「いいから大人しくしろ・・・っ！！」

男の人の1人が私の手を引っ張ろうとした時、ふいにその腕をを握りしめて怖い顔で男の人達を睨みつける先輩がそこにいた。

慶一ｓｉｄｅ

お得意様との発注交渉をして一通りの用事を済ませた俺は、ゆたか達を待たせていたので手早く明細等を受け取り、店の外へでたのだが、その時にゆたか達の怯えるような声が聞こえたので俺は慌てて声の聞こえた方へと向かった。

すると、嫌がるゆたか達を無理やり連れて行こうとする連中がいてゆたかの腕を乱暴に引っ張る男を見た俺は即座にその男の側に近寄り、その腕を握り締めた。

「おい！お前らこの子らに何してる。この子らを傷つけるつもりな

らただじゃすまさないぞ？」

ゆたかの腕を引っ張っていた男の腕を取りながら俺はその他の連中にも睨みを効かせる。

「先輩！来てくれたんですね？」

涙目の顔を俺に向けてそう言ってくるゆたか。

「・・・先輩、ナイスタイミングでした・・・。」

俺が来た事に安堵の表情を見せるみなみ。

「こ、怖かったっス、先輩・・・」

顔に恐怖を滲ませながら俺にそう訴えかけて来るひより。

「ケイイチ、タスカリましたデス。」

俺の登場にほっとした顔のパティ。

そして、俺に腕を握り締められている男が俺に

「な、なんだてめえ！いきなり横からしゃしゃりでて来やがって、どういうつもりだ、つっ！それはともかく、この手を離せよ！！」

俺の腕を引き剥がせずにうろたえながらそう言ってくる男の腕をいきなり離すと、その男はたたらをふんで仲間たちの方へと倒れ込んでいった。

仲間に無様に助けられる男をねめつける俺に他の男達が

「てめえ、何者だ。いきなり横から俺達の邪魔しやがって・・・」

「色男もたいがいにしねえと、怪我するぞ!?」

もう1人の男もいたが、そいつは俺をじっと睨みつけて言葉を発さずに俺を観察しているようだったが、俺は他の3人の質問に答えてやった。

「その子等は俺の連れだよ。だから助けた。お前らみたいな下衆に触れさせるわけにはいかないんでな。」

その言葉に気色ばむ男達。

「下衆だと、てめえっ!!」

「女の前だからってかっこつけてんじゃねえぞ!!」

「今からてめえをボコってやるから覚悟しろや!」

そう言って今にも飛び掛って来そうな男達に俺も身構えると、それまで言葉を発しなかった男が

「・・・お前ら待て。お前らじゃこいつには歯がたたない。ここは俺がやろう。」

男たちを制しながらそう言うと、男たちは

「なっ!、村木さんそれは本当っすか!?」

「あいつ、そんなに強そうに見えないけど?」

「村木さんがそう言うなら、任せますよ、とっととぶちのめしてあの子らを連れていきましょう。」

その男たちの言葉に、”村木”と呼ばれた男が頷いて

「任せろ、俺も一応は”その道”の人間だからな。相手の力量はある程度読めるつもりだ。おい、おまえ、俺は、村木信也だ。お前の名前を聞いておこうか。」

村木信也と名乗る男を見て俺も奴が只者ではないという事をその身にひしひしと感じられた。

だが、同時に、久々の強敵に出会えたことに少しだけ格闘家としてわくわくしてる自分も自覚した。

そして俺は

「俺は、森村慶一。あんたも中々使えるみたいだな。俺も一応はあんたの言う”その道”の人間さ。あんたみたいな奴と戦りあえるのは楽しみだ。」

そう名乗り、そして、静かに構えを取る。

俺のそんな構えを見て村木は

「・・・成る程な。中々どうして、たいしたもんだ。あんたほどの男なら遠慮はいらなそうだ。」

そう言って村木も構えを取る。

村木を見据えながら俺は

「おい、村木。1つだけ約束しろ。この勝負に俺が勝ったらこの子達には手出しをしないとな。」

俺の言葉に不敵な笑みを浮かべつつ村木も

「・・・いいだろう。だが、俺が勝ったら好きにさせてもらおう。お互いに条件は対等でないとな。」

その言葉に俺もまた不敵に笑って

「いいだろう。だが、そうたやすくはいかないぜ?」

そう言う俺に村木もまたにやりと笑いながら俺を見据える。

そんな俺の事を心配したゆたかたちが

「せ、先輩。お願いです、無理しないで。」

「・・・先輩、どうか無事で・・・。」

「負けないっスよね?先輩・・・。」

「カってくだサイ。ケイイチ・・・。」

そんなゆたか達の言葉を背に受けて俺はゆたか達に背を向けたまま

「・・・大丈夫だ。絶対に勝つから、俺を信じていてくれ。」

そう告げて俺は改めて村木と向き合う。

じりじりと村木が間合いを詰めてくる。

その動きに合わせながらこちらもじりじりと間合いを詰めていく。

そして、一定の距離になった瞬間、村木が仕掛けてきた。

一瞬の踏み込みで俺の間合いへ飛び込みながら村木は俺に死角からの拳を放ってくる。

俺はそれをかろうじて避けて少し大ぶりになった拳の間に踏み込んで

「螺旋しょ・・・！」

螺旋掌を放とうとしたが、その隙こそが奴の狙いだったらしく、螺旋掌を寸前でかわし、カウンターで3発拳を放ってきた。

「くっ！！」

俺はとっさにガードするが一発だけ拳を貰い、よろけた。

そこにさらに踏み込んできた奴はよろけた方の側から鋭い蹴りを叩き込んできた。

「うおっ！！」

それも間一髪ガードするも、その威力に俺の体が飛ばされた。

だが、衝撃を逃がす為に自ら飛んだが為に少々派出に吹っ飛ぶような感じに放ったが、ダメージは最小限で抑えた。

体の埃を払いつつゆっくりと立ち上がる俺。

そして、村木を見据えながら

「・・・なかなかやるな。今のはかなりやばかったぜ・・・。」

そんな風に言う俺に村木は呆れたような顔で

「ふん・・・よく言うぜ・・・さっきのカウンターと蹴りで仕留められたと思ったんだがな、どうやらこっちもお前の実力を見間違えていたらしい。だが・・・」

そう言った瞬間一瞬で間合いに飛び込んできた村木に俺は迎撃でカウンターを放つがそれも読まれていたようでカウンターを放った先に奴の姿はなく低い位置で俺の死角に入り込んだ村木は俺のかわせない位置から掌抵を叩き込んできた。

「しまっ！ぐあっ！！」

この一撃は避けきれずまともに貰って吹き飛ぶ俺

そして思わず地面に片膝をついてしまう。

打たれた場所を押さえつつ、俺は村木を見た。

村木は俺を見て

「ふっ。今のは効いたみたいだな。それにしても・・・お前はもうちょい使える奴かと思ったが、それもどうやら俺の見込み違いだったようだな。」

俺を見下すようにそう言い放つ村木に俺は

「・・・いや、お前の見立てに間違いはないぜ？それと同時に、すまなかったな。どうやら俺はお前の事を少し舐めていたらしい。その甘さがこんな風に無様にお前の打撃をもらう事になっちまったようだ。お前も実力を見せてくれたみたいだし、俺もそれに応えなきゃ悪いよな？」

そう言いながらゆっくりと立ち上がると、俺は目を閉じて気を集中し始める。

気を集中しながら俺は村木に

「村木、次は俺も本気でいく。」

そう宣言しながら再び構えを取り、そして、静かに目を開く。

俺の顔を見た村木が驚きながら俺に

「おい、そりゃなんだ？何でお前の目が金色に変わっている？」

突然俺の両目が変化した事に驚いた村木がそう言って来ると俺は

「これが、俺の本気の一端だからさ。この目を龍眼（りゅうがん）と言う。お前は俺にこの目を出させた数すくない男だ。」

俺の言葉に困惑しつつも不敵に笑い

「龍眼、ね。それがお前の本気か。けどなっ！！」

そう言いながらさっきとは比べ物にならない速さで間合いに飛び込んで拳を放って来たが、俺は緩やかに体を流してその攻撃をいなす。

村木はその俺の動きと回避行動に驚いていた。

「なんだと!?なんだ今の動きは!」

俺はその一瞬の隙を見逃さず、間合いを詰める。

村木はそんな俺に迎撃をかけようとするが、その攻撃すらまるで読んでいたかのようにあっさりと回避しつつ死角を取るとそこに螺旋弾を打ち込む。

村木はそれを回避しようとしたのだが、俺の放った螺旋弾は村木が回避しようと動いた方向へと打ち込まれた。

傍目にはまるで村木が俺の放った攻撃に吸い込まれるかのように自分から当たりに行くかのようになった。

そして、その一撃で村木の動きを止めて俺は

「螺旋掌・通し!」

村木の胴に掌抵を沿えて体内で練り込んだ気を打ち込んで内部を通した。

その衝撃で倒れる村木。

かろうじて意識のあった村木は俺に

「な、なんださっきのは・・・どうして俺の踏み込みや迎撃の方向、それに俺が攻撃を避ける動き方までも読めたんだ・・・一体どうし

て・・・。」

その村木の言葉に俺は

「それはな、この龍眼は相手の動きや攻撃を見切る目だからだ。その読みは先の先までも見通せる。だからこそ、お前の迎撃の動き、回避の動きまでもが読めたのさ。俺はただ、その流れに合わせて最善の回避と攻撃をすればいい。そういう事だ。」

その言葉に村木は

「くくく・・・つくづくとんでもないやつだぜ・・・それに、その技・・・草薙の技だな?」

その言葉に俺は驚きながら

「っ!村木、何故お前がその名前を知っているんだ。」

俺がそれを尋ねると、村木は

「俺も一応は草薙の道場とは交流のある道場の1人息子なんでな。その技を一度見たことがあったんだ。だからだ。知っていたのは。お前は草薙の者なのか?」

そう聞いてくる村木に俺は首を振って

「いや、違う。むしろ草薙はうちの、龍神の分家筋だ。この技の本家は龍神にある。だが、同じ流派に近い技を草薙は使う事ができるからな。」

俺の言葉に村木は驚きつつ

「そ、そういう事だったか・・・なるほど、な・・・。」

そう言って村木はついに意識を失った。

それを見届けた俺はいまだ龍眼のままの目を他の男たちに向けながら

「勝負はついた。これで大人しく引き上げてくれるか?」

そう言うと、男たちは村木を助けて

「約束は、約束だからな。これで引こう。」

3人のうちの1人がそう言うと、他の2人も頷き合って村木に両肩を貸しながらその場を離れていった。

それを見届けて俺はゆたかたちに向き直ると

「もう大丈夫だっ!?」

そう言い終わらないうちに俺に向かって飛び込んでくるゆたか達4人。

俺は思わずその体当たりにむせ返りながら4人を見たが、4人は泣きながら

「先輩!怪我は、怪我は平気ですか?ごめんなさい!私のせいで・・・。」

「・・・とても怖かった・・・先輩が倒れた時はとても・・・先輩、

あまり心配させないで下さい・・・。」
「よかったっス・・・本当に、心配したっスよ・・・。」
「グレートネ！ケイイチ！でもシンパイしたですヨ・・・。」

そう言って俺の胸の中で泣きじゃくる４人の頭を優しくなでながら

「心配かけてすまない。けど、どうしてもお前らを守りたかったからさ。もう大丈夫だから、な？」

そう言ってなだめる俺だった。

その後しばらくして落ち着いた俺達は例の土産物屋で買い物などを済ませてから旅館へと戻った。

そして、その道すがら

「それにしても、先輩のあの目、不思議だったなー。」
「・・・そうだね・・・でも綺麗な色だった・・・。」
「これはいいネタになりそうっスよ。先輩。漫画の参考にしたいですから後でもう一回見せてもらえないっスかね？」
「ワタシもゼヒミたいデス。」

そんな４人に俺は苦笑しつつも

「わかったわかった。後でまた見せてやるよ。でも、程ほどにしてくれな。これ、発動するの結構疲れるんだ。」

そう言いながら、俺は旅館に着いた後もう一度あの目を見せるのだった。

その後は龍兄にさっきの勝負で受けたダメージの治療をしてもらい、旅館でのんびりする事にした。

ふいにゆたかたちに降りかかった災難だったが、その災難を何とか払ってやる事が出来た。

けれど、この災難はまだまだ序の口だったのだと後々知らされることになる、俺はまだそれに気付いていなかった。

まだ戻らないほかのメンバー達の動向がどうなっているのか、それは次で語ろうと思う。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行2日目前編～（後書き）

新キャラの登場と新しい技の解説

村木信也（むらきしんや）箱根にある草薙流道場と交流を持つ、同じ箱根に存在する村木流道場の一人息子。

龍神流の技の1つ龍眼（りゅうがん）

気を集中させ、発動する事で相手の動きや技を読むことができるようになる。そして、それは2手、3手先の動きすら予測する。さらには発動状態の体もまたその予測の動きに対処できるほどになっている。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行2日目後編～（前書き）

何か前編よりも長くなってしまいましたが、楽しんでいただけましたら幸いです。
では本編をどうぞ。

思い出作りの旅律～箱根温泉旅行2日目後編～

2年生最後の春休み、俺達は2年生最後の思い出作りの為に春休み中に温泉旅行へと出かける。

そして、旅館に着いた次の日の朝、ちょっとした騒ぎが起きた。

それは、俺達も知らぬまにこっそりと俺達の部屋の鍵を叔父から入手したまつりさんといのりさんが俺達の部屋に忍び込み、龍兄の布団にもぐりこんで一緒に寝ていた。

同じ部屋に泊まっていたやまとが朝にその事に気付いて俺に2人が行方知れずだという事を知る。

心配するかがみだったが、俺は居場所を知っていた為に、慌てる事なくかがみにその事を伝えると、2人の説教の為にダッシュでその場からいなくなるかがみを見送ったのだった。

その後は俺の知るとっておきの場所にかがみ達を連れて行き、景色を見せた後、今後の行動予定を話し合う俺達。

こなた達は何やら回ってみたい所があるとの事でかがみ、つかさ、みゆきさんと共に行動する事になり、こう、やまと、みさお、あやのは4人で連れ立って温泉街へと向かった。

そして、俺とゆたか、みなみ、ひより、パティの5人は叔父のお使いも兼ねて温泉街の散策。

龍兄とまつりさん、いのりさんはデートとなった。

そんな最中に、ゆたか達が地元の人間に危害を加えられそうになるという事態が発生し、俺は自らも傷つきながらも４人を守ったのだった。

とりあえず４人を守れた事を安堵している俺だったが、これよりももっと厄介な事が、今後起きる事になる事をこの時点の俺は気付く事もなかった。

こうｓｉｄｅ

今日の自由時間に付いて、私達はどのように行動しようかという事を話し合ったのだが、その時にやまとと日下部先輩、峰岸先輩の４人で温泉街を回ってみよう、という話になったので、私達は４人で温泉街へと足を運んでいた。

「うーん、意外と活気あるねー。それに、結構色々温泉もあるみたいだね。」

街を見回しつつそう言う私にやまとも頷いて

「そうね。空気も澄んでて気持良いし、賑わってもいて中々良い所だわ。連れてきてくれた先輩に感謝かしらね。」

そんなやまとの言葉に日下部先輩と峰岸先輩も頷きながら

「むぐむぐ・・・そうだなー。それに温泉饅頭も結構いけるぞ？」

「そうよね、ってみさちゃん。食べながら話すのはみっともないわよ？」

街を歩いた時に日下部先輩が美味しそうだと言って買った温泉饅頭をほおばりつつ私にそう返す日下部先輩に峰岸先輩は困ったような顔をして、私とやまとは苦笑していた。

「あはは・・・日下部先輩もなんだかんだで結構食べますよね？元気いっぱいな感じは見ていて清々しいですが。」

そんな私の言葉に日下部先輩はあっけらかんと笑いながら

「ははは。私結構こういうのって好きなんだよなー。ご当地のうまいもんはこうして食べるのが一番美味しい食べ方だと思わねえか？」

そんな日下部先輩にやまとは苦笑しつつも

「まあ、わからなくもないわね。それに、私も日下部先輩を見ていたらちょっと欲しくなったから羊羹を買ってしまったわ・・・。」

やはり、手に持った羊羹を少しずつつまみながら歩くやまとに私は

「やまとそれ大好物だもんね。私もこの際だから何か買おうかなあ・・・。」

私がそう言うと峰岸先輩も少し考えるような顔をしながら

「そうね・・・私もちょっと自分の好物探してみようかしら・・・。」

その言葉に、これからの行動予定を閃いた私はみんなに

「なら、ご当地食べ歩きでもしてみましょうよ。折角ですしね。」

「まあ、それもいいかもね。」
「賛成ー！色々珍しいもん探そうぜー。」
「ふふ。面白そうね。じゃあ早速いきましょうか。」

峰岸先輩の言葉に私達はそれぞれ頷くと、早速ご当地うまいもの巡りをするために移動を開始する私達だった。

それから私達は色々な食べ物を見て、それを試食したり、お土産で買ったり、しながら楽しく温泉街巡りをするのだった。

そして、美味しいものを食べながら一休みしている時、私は普段からも仲のいい日下部先輩と峰岸先輩に話し掛けてみた。

「日下部先輩と峰岸先輩って仲が良いですよね。慶一先輩からも聞いていますけどお2人は幼馴染だそうですね？」

私の言葉に日下部先輩は満面の笑顔で

「まあなー。小さい頃からずっと一緒だかんな。」

そう答えると、峰岸先輩も微笑みながら

「そうね。でも、まさか高校生になってまで一緒だとは思わなかったけどね。下手したら私達も学校違ってたかもしれないし。」

そう言うと、日下部先輩は

「まあ、そうかもしんねえよなあ・・・でも私はあやのみたいに頭よくねえけどさ、一緒に居たいって思ったから頑張ったんだ。」

そう言う日下部先輩に峰岸先輩も嬉しそうに「みさちゃん・・・。」と呟いているの聞きつつ

「それでもそのために陵桜に合格するんだから日下部先輩もたいしたもんですよ。」

その言葉にはやまとも頷いて

「そうね。陵桜のレベルは私から見てもかなり高いと思うわ。でも、先輩はそんな陵桜の試験に打ち勝てたんですものね。峰岸先輩と一緒に居たいという日下部先輩の思いは本物なんだな、って分かるわ。」

そんなやまとの言葉に日下部先輩は照れながら

「いやー、照れるゼー。そういや、八坂と永森も仲のいい友達なんだろ?それに、永森は本来は陵桜(うち)に来る予定じゃなかったんだよな?」

日下部先輩の言葉にやまとはばつの悪そうな顔で

「・・・そうね、確かに日下部先輩の言う通り、私は本来は聖フィオリナ女学院に行く予定だったわ。けど・・・ここを選んだ。こうの事だけだったら、私はきっとフィオリナに行っていたかもしれないわね・・・。」

そして、そのやまとの言葉を私は勝手に補足する。

「だよねえ。慶一先輩がやまとを陵桜に呼び寄せたようなものかもだしねえ。」

ニヤニヤとしながらやまとに言うと、やまとは途端に顔を真っ赤にして

「な、何言ってるのよ！そ、そんな訳ないわ！ここを選んだのはあくまでも私の意思よ？それ以上でもそれ以下でもないんだからね！？変な勘違いしないでよ！！」

そうやって言い訳するやまとにさらに私は

「ふーん？まあ、そういう事にしといてあげるよー？やまと。」

ニヤニヤの顔のままそう追い討ちをかけると、やまとはさらに顔を真っ赤にしておろおろとしていたのだった。

そんな私達を見て峰岸先輩は

「ふふ。なんだかんだで八坂ちゃんと永森ちゃんも仲がいいわよね？少しだけ私達に関係が似ているかもしれないわね。幼馴染と中学時代のお友達という違いはあるかもだけど・・・。」

そんな風に言う峰岸先輩に日下部先輩もなんだか納得するかのように頷きながら

「そっか。お前らを見ててなんか感じてた事があるなーって思ったけどさ、お前らと私らは微妙に関係が違っていてもなんとなく似てる部分があったからそういう所を私らと重ねてみていた部分あるなって気付いたぞ。」

そんな日下部先輩の言葉に私も少し納得できたので

「うーん・・・日下部先輩の感じてるとおりかもしれませんね。私も言われてみてなるほど、と思いました。」

そう答えるが、やまとは

「そうかしらね?仲の良さで言えば、私達は日下部先輩達に負けてるような気がするけど?」

そんな風に言うやまとに私は慌てながら

「ちょ、やまと、それはないんじゃない?」

そう言うとやまとはしてやったりの黒い笑顔で「冗談よ。」と言っていたので私は心穏やかではなかったが、とりあえず安心したのだった。

そんな私達を見て笑う日下部先輩と峰岸先輩に釣られて私達も笑ったのだった。

そんな風に両先輩方と親睦を深めて私達は旅館で食べるお菓子等を買い込んで宿へと戻ったのだが、それからしばらくして大変な事件が起こったのだった。

かがみｓｉｄｅ

私達のチームはいろいろな所を見て回ろうという事で動く事となったのだけど、こなたが勝手に行き先をどんどん変更するという状況になり、気付いたら私達は山の中へと入り込んでいた。

それはいいのだけど、ここで私達の身にまずい事が起きてしまっていた。

それは・・・・・・

「天は我らを見放したーっ！！」

そう叫んでぱたりと寝転がるこなたに私は呆れつつ

「なにやってんのよ、あんたは・・・。」

そう言うと、こなたはむっくりと起き上がって

「ちょっと雰囲気出してみた。」

と、あっさり言い放ったのを見て私は思わず

「誰のせいでこんな事になってると思ってるのよ！まったく！！」

そう強い口調で言うと、こなたは

「まあまあ、かがみん。起きてしまった事は仕方がないし、とにかく戻る道を探そうよ。」

さして慌ててもいない口調でそう言うこなたに私はまたも呆れて軽いため息をつくのだった。

そんな様子を見ていたつかさとみゆきは

「困っちゃったね・・・おねえちゃん。わたし達ちゃんと帰れるか

なあ・・・？」
「このままでは皆さんにご心配をおかけする事になってしまいますね・・・これ以上危険な事になる前に帰り着ければいいのですが・・・。」
と2人して困惑顔で話すのだった。
そう、私たちはこなたの後について動き回ってるうちに、気付いたら山の中に入り込み、遭難してしまったのだった。
時間は少し前に戻る・・・・・・
慶一くん達と別れて行動を始めて私たちは温泉街の回りなどを見回って動いていた。
そして、そうやって歩いているうちにこなたが街に隣接する登山道を見つけ、私達に
「ねえ、みんな。ここから山に登れるっぽいよ？せっかく来たんだし、ちょっと登ってみようよ。」
そう言うこなたに私はその時はすぐに戻れるだろうし、良いかな？と楽観的考えて
「それも面白そうね。つかさ、みゆき。私達も行ってみない？」
2人に話を振ると、2人とも頷いて
「うん。面白そうだし、いってみようよ。」
「山の自然に触れるのもいいかもしれませんね。私も賛成です。」

そう言ったので、私たちは先頭を行くこなたの後ろについて山道を上がっていったのだが、所々でこなたが自分の判断で道を決めて誘導した事がまずかった。

そのうちに私たちは帰り道を見失い、山道を彷徨い、現在に至る。

「・・・まったく、あんたの根拠のない自信に従って付いて来たことが悔やまれるわよ・・・。」

呆れたように言う私にこなたは

「まあまあ。起きてしまった事はしょうがないんだし、それよりも帰り道を探さないとね。」

と、あんまり反省してない表情で言うこなたに私は本当に今の事態を把握してるのかしらと思い、軽いため息をつくのだった。

そして、そんな私達につかさとみゆきも

「こなちゃんの言う通り帰り道を見つけないと大変だね・・・。」

少し元気のない顔でいうつかさ。

「あれから結構時間も経っています。それにこの時期ですから日没も早いでしょう。さらには山の中という環境では、夏場に比べて気温の低下も心配です。せめて携帯が使えればいいのですが・・・。」

今の現状を分析しつつそう言うみゆきに私も考え込みながら

「そうね、みゆきの言う通り、なんとかしないといけないわ・・・
それに、食料だって今の私達にはふもとで買って来たおやつ程度の
ものと水もそんなには残っていないわ。ここでは携帯も圏外だし、
困ったわね・・・。」

そう言いつつも周りを見ると、もう大分時間も過ぎていて、さらに
は日が傾き始めていたのがわかった。

さらに私は周りを見渡しながら

「せめて、街か何かが見えるならいいんだけど・・・。ここまで奥
に来ちゃうとそれすら見えないわね・・・。」

そこまで言ってから私は、心の中に大きな不安が広がり始めている
事を自覚しはじめていた。

それから3時間近くが経過した・・・・・。

慶一ｓｉｄｅ

それぞれの自由時間を終えて、みんなもぞろぞろと旅館へ戻って来
ている事を確認してはいたが、ふいに俺の部屋へ飛び込んで来たゆ
たかが

「先輩！こなたおねーちゃんを見ませんでしたか！？」

慌てながら飛び込んできて俺にそう聞いてきたので俺はあれからも
こなたの姿を見かけていない事に気付き

「いや、あれからまだ姿は見ていないけど、ずいぶん慌ててるが、

何かあったのか？」

そう訪ねると、ゆたかは

「実は、こなたおねえちゃんが未だに帰って来ていないみたいなんです。あれからも大分時間経っていますし、もう日も暮れかけてきています。でも、帰ってくる気配がないので私心配で・・・。」

そんなゆたかに俺も困惑顔で

「うーん、あいつの事だからいろいろな所回ってる可能性もあるよな。意外と好奇心旺盛だしな。まあ、心配なのもわかるけど、かがみやつかさ、みゆき達も一緒に居るんだし、それなりに分別のつく年齢でもあるだろうから大丈夫じゃないか？心配なのは分かるけど、こなたを信じてもう少し待ってみろよ。」

そう諭すとゆたかも少し落ち着いたようで

「そ、そうですね・・・。すみません、先輩、お騒がせしました・・・。」

そう言ってゆたかは部屋を出て行こうと踵を返したが、そこにもう1人慌てながら俺の部屋に飛び込んで来た2人がいた。

「慶一ー！！柊が戻って来てねえんだが、お前見なかったかー！？」

「慶ちゃん、妹ちゃんと高良ちゃんもまだ帰ってないみたいなのよ。あれから大分時間も経っているし日も暮れかけてるから少し心配だわ。」

そんな2人にゆたかも驚きながら

「え？日下部先輩、峰岸先輩。柊先輩達もまだなんですか？」

そう言うゆたかに2人も頷いて

「ああ。部屋で待っていたけど、帰ってくる様子がねえんだ。」

「それに、柊ちゃん達の携帯に電話してみたけど、電波が届かないってなってしまっていて連絡が取れないの。」

その言葉に俺とゆたかも顔を見合わせて

「それは本当か？2人とも。携帯が繋がらない、って・・・。」

「こなたおねーちゃんの方はどうでしたか？」

そう訪ねると2人とも首を振った。

そこで初めて俺は、4人の身に何か起きたのかもしれないと思い始めていた。

俺は少し考えてから、3人に

「これはちょっとただ事ではなくなってるかもしれないな・・・みさお、あやの、ゆたか。とりあえずもう一度4人へ連絡を入れて、それでだめそうならあいつらの画像をもって温泉街で聞き込みをしよう。その際にこう達やみなみ達やまつりさん達にも声をかけて手分けして当たってみてくれ。俺も龍兄と一緒に動いてみる。」

そう言うと、3人は頷いて

「わかりました。すぐに行って見ます。後で何かわかったら連絡し

てくださいね。」
「おっし、わかったゼ！今から聞き込みに走るってヴァ！」
「いきましょ？みさちゃん。柊ちゃん達が心配だわ。」
そう言って走り出す3人を見送った後、俺はロビーで休んでいる龍兄の所へと急いだのだった。

ロビーで龍兄を見つけた俺はすぐに
「龍兄、大変だ。こなた達が自由行動からまだ帰って来ていない。ゆたかから話は聞いたけど携帯の電波も届かない状況のようだ。ひょっとしたらあいつら山に行ったんじゃないかな、って思ってるんだが・・・。」
そう声をかけると龍兄も血相をかえて
「なんだと？確かに携帯の電波が届かないとなると、その可能性はあるな・・・それで、慶一、お前はどうする？」
龍兄の言葉に俺は頷いて
「うん。俺はとりあえず温泉街で聞き込みをして４人の目撃情報を探すよ。そして、行き先が判明したら俺達で４人を連れ戻しに行こうと思うんだが・・・。」
俺の言葉に龍兄も頷いて
「うん。それがいいだろう。よし、俺もすぐに聞き込みに向かう。何かわかったら俺に連絡を入れろ、いいな？慶一。」

その言葉に俺は頷いて

「わかった。日が暮れたら厄介だし、すぐに行く。龍兄も何かわかったらよろしく頼む。」

そう言うと龍兄も「ああ、任せろ。」とそう言うと、叔父の所に何かを伝えに走って行ったのを見届けて俺も街へと出た。

温泉街を走り回って俺は４人の目撃情報を探す。

すると、そんな俺に声をかけてくる奴がいた。

「おい、確か森村だったな。どうしたんだ?そんなに慌てて。」

その声に振り向くとそいつはさっき死闘を演じた村木とその取り巻き達だった。

俺はそんな村木達を睨みつけたが、村木は

「おいおい、さっきので勝負はついたし、俺はもうお前らに手出しするつもりはねえよ。けど、何かお前が妙に慌てているようだったからな。何かあったのかと思って声をかけただけだ。」

俺は奴のそんな言葉に少しだけ警戒を緩めつつも完全には警戒を解かない状態で

「・・・実は俺の連れの４人が昼間から行方がわからなくなっていてな。未だに旅館に戻らない状況だし、携帯まで繋がらない、さらには日没が近いってのもあって慌ててその４人を探して聞き込みをしている所だったんだ。」

俺がそこまで説明すると、村木は

「なるほど、それは穏やかじゃないな・・・なあ、その４人の姿が写ってる物とかはないか？」

そう聞いてきたので俺は訝しがりながら

「何故だ？それをお前が知ってどうするんだ。」

そう言うと、村木はやれやれというジェスチャーをしながら俺に

「そう警戒するなよ。さっきも言ったが、もうお前らに手出しはしたりしない。だが、事件が起きてるかもしれないという事であれば、俺達もその４人の捜索に協力するって言ってるんだ。だからだよ。」

そう事情を説明してくれた村木に俺は

「いいのか？仮にもさっきはあんな死闘を繰り広げたばかりだぞ？」

そう言うと、村木は笑いながら

「あの勝負はあの勝負さ。俺が負けた時点でもうその時の遺恨はなしだ。けど、誰かが困っているなら俺はそれに協力したい。これでも一応は武を修める人間だからな。そんな状況は捨て置けない。」

そんな風に言う村木を見て俺は少し考えた後

「なら、協力頼めるか？行方不明はこの子らだ。」

そう言って携帯の写真を見せる俺に村木達はじっくりと写真を見た後

「なるほど、よく分かった。森村、何かあったらお前に連絡を入れたい。お前の携帯番号を教えてくれ。」

俺にそう言う村木に俺は頷いて携帯番号を教えると

「よし、それじゃこっちも人手を出して捜索に当たらせるから何かあったらそちらに連絡をよこす。お前はいつでも連絡を受けれるようにしていてくれ。お前ら、いくぞ!?」

村木は取り巻きにそう言うと、取り巻き達は「「「オッス!!」」」と掛け声をかけて走っていった。

俺はそれを見送った後、俺自身も４人の情報集めに奔走した。

そして、しばらくすると、俺の携帯に村木からの連絡が入った。

「もしもし?村木か?何かわかったのか?」

「森村か?街の外れに近い山道入り口付近で４人の姿を見かけた者がいたようだ。何度か特徴を聞いてみたが、ほぼ間違いなさそうだ。どうする?これから山狩りするならうちの道場からも人を出すが。」

「村木、悪いが頼んでもいいか?俺も一緒に山狩りには参加する。この寒さだし、急がないと手遅れになるからな。」

「わかった。山道入り口の場所を教えておく。お前もそこへ来い。お前が到着し次第、捜索を始めよう。」

「ああ、わかった。すまないな、村木。うちの者が迷惑をかけてしまって。」

「気にするな、お前とは拳を交えた仲でもある。それに俺も、同じような境遇に陥った事もあったからな。あの時は助けられなかった

から、今度は助けてやりたいと思っている。」
「なるほどな・・・それじゃ後でな。必ず見つけ出そう。」
「うちの道場のメンツにかけてもやってみせるさ。」

そう言って電話を終えた俺は龍兄にこの事を伝えて教わった山道入り口へ急いだ。

その際にゆたか達には旅館に残ってもらい、俺達だけで行く事にした。

だが、叔父は俺達のそんな事態に草薙の道場の人にも声をかけてくれたみたいで捜索の人数は一気に膨れ上がったのだった。

そして、山道の入り口で村木と合流した俺は

「ここがそうか?」

と訪ねると、村木は頷いて

「ああ。ここから山道に入っていく4人を見かけた者がいた。だから間違いないと思う。ここをあがったところにもいくつか分岐がある。そこから人員を分けるべきだろうな。」

その言葉に俺達も頷いて

「よし、なら早速出発しよう。みんな、急にこんな事になってしまってもうしわけないが、人命もかかってるから協力してくれ。」

俺の言葉にその場に集まってるみんなも声をあげてくれて俺はそれを確認した後に先頭をきって山道へ飛び込んだのだった。

そして、いくつかの分岐点で人を分けてそれぞれの担当として捜索を進めていった。

俺と龍兄もこなた達が入ったであろう山は俺達もかつて修行の為に訪れた山であったがゆえにこのあたりの地理も頭には叩き込まれていたので、こなた達がそちらへ行っていて欲しいという願いを込めつつ、足を速めた。

かがみｓｉｄｅ

あれからまた時間も経ち、私たちはそのまま山の中を彷徨い続けていたのだが、どうにも同じ場所をぐるぐると回っているらしい錯覚に捕らえられて自分達の状況がわかりにくくなっていることに焦りを感じ始めていた。

そして、そうやって彷徨っているうちについに日が暮れ始めてしまい、その頃にはこなたもつかさもみゆきも、まだ寒さの残る山にかなり元気を無くしてしまっているようだった。

携帯も試してみたものの、やはり電波は繋がらず、私達の不安は相当に大きくなって来ていた。

「どうしよう・・・もう日が暮れちゃうわ・・・それに伴って気温も下がってきてるし、今晩一晩をここで過ごす事になったら・・・いえ、それでも帰れなかったら・・・。」

その呟きにつかさとみゆきも不安な顔で

「おねえちゃん・・・わたし、怖いよ・・・。これからどうなっち

ゃうのかな・・・。」
「つかささん、不安なのはわかりますが、最後まで希望は捨ててはいけません。きっと、諦めなければ帰る手立てもあるはずです。」
そんな私達にこなたが物凄く申し訳なさそうな顔で
「・・・ごめん、みんな・・・私のせいだね・・・本当にごめん・・・。」
こなたにしては珍しく物凄く落ち込んだような顔でそう言うのを見て私は少し驚きつつも
「・・・反省してるのはわかったわよ。でも、ただここで反省だけしていても事態は良くはならないわよ?この状況を打開するためにも、悪い方に考えちゃだめよ。きっと助かる。そう信じて行動しましょ?」
こなたにそう諭すとこなたも顔をあげて1つ頷くと
「うん。そうだね。私達4人いればなにかいい知恵も浮かぶよね、きっと。」
そんな風に言うこなたに私も頷きで返しながら
「そうよ?いつもは一番楽天的なあんたがそんな顔してたら皆も不安になるわ。あんたの取り得はその元気さなんだからしっかりしてらわなくっちゃね?」
こなたをからかうように言うと、こなたも少し驚いたような顔で

「取り得がそれだけって酷くない？でも、ありがとう、かがみ。少しだけ元気出てきたよ。って事でここは１つ・・・。」

そう言うこなたを見て苦笑するつかさとみゆきだったが、こなたが何かをやろうとしているのが見て取れたので

「こなた、あんた何を・・・」

そこまで言いかけた時にこなたはまたもぱたりと倒れて

「天は我らを見放したーーっ！！」

と大声でさっきやっていた事をやっていた。

それを見た私は呆れたようなため息をつくと

「はいはい、わかったからさっさと立ちなさい。とにかく進むわよ？」

そう言ってこなたを立ち直らせながら私は心の中で（少しは雰囲気も和らいだかな？こなたはそういう所がいい所の１つよね、なんにしてもまだ頑張れるわね、これなら・・・。）

そう考えつつ、そんな私たちを見て笑う２人にも声をかけて先へと進む事にしたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなた達の捜索を開始して結構な時間が経ったが、俺達は中々こなた達を見つけることが出来ずにいた。

そして、そうしているうちに心の中は不安が溢れ出していたのだが、悪い方向には考えまい、とそんな不安を強気で振り払ったのだった。

そして、さらに先へと進んだ時、俺はぴたりと足を止めた。

「なんだ・・・？今のは・・・声？・・・どっちだ・・・。」

一瞬俺の耳に飛び込んで来た微かな声を俺は捕らえていた。

そして、声の聞こえた方へ向かおうとして足を出した瞬間、暗がりに足を取られて俺は茂みを滑り落ちたのだった。

そして、体を打って俺は一瞬気絶した。

気絶した中で俺は、一瞬夢を見ていたらしい。

それは・・・・・・

「・・・きて、ねえ、おきて？森村君、起きて？」

俺はその声に反応するかのように目を開けるとそこには白いワンピースをきて白い帽子を手に持ったこなた？が立っていた。

「・・・こな・・・た？いや、違う・・・あんたは誰だ？あんたはこなたじゃないな？」

よく見るとこなたに似た女の人にはこなたの特徴の１つであるあほ毛がなかった。

それと同時に目の下の泣き黒子も。

そして、その子は俺に

「森村君、はじめまして。私は泉かなた。こなたの母親です。」

こなたにそっくりな女の人は自らの名前をそう語った。

「こなたのお母さん?でも、確かこなたのお母さんは・・・。」

そう言うと、かなたさんは悲しそうな顔で

「ええ。あなたの言う通りです。私はこなたが物心つく前に亡くなりました。」

そう言うと俺は

「で、ではあなたはもしかして・・・幽霊?」

そう訪ねるとかなたさんは悲しそうな顔のまま

「ええ、そうなりますね。それはともかく、今あの子はピンチです。あなたの助けがいります。私が今からあの子の居場所を伝えますから、どうかこなたを、娘を助けてあげて欲しい。」

そう懇願してくるかなたさんに俺は頷きつつ

「わかっています。その為に俺はここに来たんですから。かなたさんは今のこなたの居場所をご存じなのですね?」

そう訪ねるとかなたさんは頷いて

「ええ。今からあなたの心をそこまで導きます。後はその通りに走ってこなたの所へと行ってください。」

俺はその言葉に力強く頷いて

「わかりました。お願いします。」

そう言うと、かなたさんは俺の心を今のこなた達が居る場所へと飛ばしてくれた。

かがみｓｉｄｅ

あれからもしばらく歩き回ったけど、結局立ち往生になってしまった私たちは、下手な体力の低下を防ぐために寒さの凌げそうな場所で４人で寄り添って休んでいた。

「・・・寒いね・・・。流石に３月とはいえ、山は気温低いや・・・。」

「そうね・・・山の事結構甘く見すぎていたわ・・・。」

「わたしたちちゃんと帰れるかなあ・・・。」

「大丈夫ですよ・・・きっと、慶一さん達は私達の事に気付いてくれているはずです・・・。」

そんなみゆきに私も頷いて

「そうよね・・・流石にこんな時間まで帰ってこなきゃ、ちょっとした騒ぎになっていてもおかしくはないわね・・・。」

そう言うと、こなたは罪悪感のある顔で

「ごめん、みんな・・・。」

と言うのを聞いて私はこなたの頭をぽんと叩きながら

「ほらほら、そんな顔しない。まだまだ希望がなくなったって訳じゃないのよ?慶一くん達を信じて私達も希望を捨てないで頑張りましょ?」

そう言うと、こなたも俯きながらも

「うん、そうだね・・・頑張らないと・・・。」

そう返答するこなたを見て私は心の中で

（こなたを励ますためにああは言ったけど、正直私も不安だわ・・・それに、夜の山って結構怖い・・・慶一くん、お願い・・・私たちを見つけて?このままじゃ怖いよ・・・。）

弱気になっていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

かなたさんに今のこなたがいる場所へ心を飛ばしてもらってその場所に着いたが、そこで俺は４人を発見した。

４人は相当疲れきってるように見えたが、側に立った時、彼女達の心の叫びが聞こえてきた。

（慶一君。怖いよ・・・早く助けに来て・・・。このまま死にたくない・・・もう一度君に会いたいよ・・・。）

（私達これからどうなっちゃうのかな・・・このまま助けがこなかったら・・・嫌！そんなの嫌！皆に、お父さんやお母さんに、お姉ちゃん達に、そして、慶一くんに会えなくなるのは嫌！そして、私達の事で泣く慶一くんを見たくない・・・助けて！誰か私達を！！）

（怖いよ・・・もうどうなっちゃうのかもわからない・・・このまま死んじゃうのかな？もう、みんなに会えないのかな・・・嫌だよ・・・そんなの嫌だ・・・けいちゃん・・・。）

（不安です、正直・・・ここまで強がって来ましたが、この先がどうなるのかを考えたら、不安で仕方ありません・・・このまま死んでしまったらお母さんも悲しむでしょうね・・・それに、みなみちゃんや慶一さんも、きっと・・・そんなのは・・・嫌ですね・・・会いたいです、もう一度・・・慶一さん・・・助けて・・・。）

その言葉を聞いた俺はいても立ってもいられない衝動が起きた。

それを察したかなたさんは俺に

「こなた達はこの場所にいます。お願いです、森村君。こなた達を助けてあげて？」

俺はそんなかなたさんに頷いて

「大丈夫ですよ。俺がきっと救ってみせます。ですから安心してください。」

俺がそう力強く宣言せうと、かなたさんは安心したような表情になり

「ありがとう。こなたの事お願いね？」

かなたさんのその言葉と共に俺の意識は覚醒した。

そして、体を起こして俺は自分の体のダメージを確かめる。

「よし、大丈夫だ。深刻なダメージはないな。それにしても・・・。」

俺は先程の夢の事を思い出していた。

（夢、だったのかな？と思ったけど、違う。そう思える。かなたさんはこなたを助けて欲しくて俺の前に現れた。俺を導く為に・・・なんでかわからないけど、俺はそれを素直に受け入れられたな。とにかく、あの場所は俺の知っている場所だ。すぐさま動くぞ！）

そう考えた俺はその場を飛び出してこなたたちのいる場所へと走って行くのだった。

かがみｓｉｄｅ

あれから私達はしばらくの間そこにいた。

今の私達にはまだまだそこから動ける程に体力が回復してないからというのもあったのだが。

けど、そのうちに私達の緊張の糸は切れ始めていたのだった。

「・・・ぐすっ・・・寒い・・・怖いよ・・・」

そう言ってまず泣き出したのはつかさだった。

「つ、つかさ?大丈夫だから、きっと助けが来るから、ね?だから泣かないで・・・。」

それが皮切りだった。

さっきまで元気だったこなたもつかさにつられるように泣き始めた

「・・・ぐすっ・・・ううっ・・・助けて・・・誰か・・・」

そして、さらにそれはみゆきにまで伝染した。

「・・・ひっく・・・ぐす・・・な、泣かないで下さい、泉さん、つかささん、泣いたら・・・私まで・・・うう・・・。」

そしてそれは私にも飛び火した。

「・・・な・・・ぐすっ・・・ひっく・・・泣かないで・・・って・・・い・・・うう・・・言ってるじゃない・・・ぐすっ・・・。」

そしてついに限界に来た私達は全員でその場で泣き始めてしまった。

けど、その時に私達を助けに来た人がそこに近づいている事に今の私達は気付かなかったのだった。

そして、しばらく泣きつづけていた私達の側で私達に声をかけてくれる人がいたのだった。

「・・・やっと見つけたぞ?まったく、散々心配かけやがって・・・。」

その声に驚いて私達４人は一斉に声の方を振り向いた。

慶一ｓｉｄｅ

必死に走りつづけてかなたさんから教わった場所を目指し、進んでいくと、そこに俺はようやく見慣れた４人の姿を発見する事が出来た。

そして俺はゆっくりと彼女達の側へ近づいていき、声をかけたのだった。

「・・・やっと、見つけたぞ？まったく、散々心配かけやがって・・・。」

そう声をかけると、はじかれるように俺の方に向き直る４人。

その顔は涙で濡れていた。

そして俺の顔を確認するやいなや俺の胸に４人が飛び込んで来たのだった。

「慶一君！！来てくれたんだね！？ありがとう！助けに来てくれてありがとう！」

「慶一くん、怖かった！このまま私達どうなっちゃうんだろうって思って！ありがとう！来てくれてありがとう！！」

「けいちゃん、怖かったよ～！もう帰れないって思ってたよ～！心配かけてごめんなさい！来てくれて嬉しいよけいちゃん！！」

「このまま死んで慶一さんにももうお会いできないかと思いました！慶一さんは命の恩人です！ありがとうございました！本当にあり

がとうございました！！」

そう言って俺の胸で泣きじゃくる４人を受け止めつつ、俺は４人が無事だった事に安堵していたのだった。

そして、俺は懐から非常通信用の広域トランシーバーを取り出すと、捜索に当たってくれてるメンバーに４人発見の報を伝えるのだった。

そして、４人が落ち着くのを見計らって俺は４人を連れて山を下った。

そして、旅館に無事に戻ると、ずっとみんなを心配していたゆたか達やみさお、こう達、そしてまつりさん達に散々怒られていたようだった。

そして、まもなく山狩り部隊も戻って来たので、俺は４人に探してもらった礼をしろと言うと、４人は山狩りに協力してくれた人達に頭を下げに行ったのだった。

それを終えて、散々の山歩きでおなかを空かせた４人に改めて食事が振舞われ、それを食べて風呂に入った後のこなた達は疲れもあったのだろう、そのまま眠ってしまったようだった。

そして俺と龍兄も捜索部隊の人にお礼を言った後は部屋に戻り、滑落時に負った怪我の治療をしてもらい、俺も軽く汗を流してから休んだのだった。

こうして、４人が巻き起こした大騒動は幕を閉じる事となったのだが、これからはより一層こなた達の動向にも目を光らせないといけないな、と思う俺達だった。

とんでもなく疲れた2日目だったが、これもまた思い出になるのだろうなと考えつつ、俺はかなたさんに心の中で感謝をしていたのだった。

そういう事も、こなたに明日話してやろうという事を考えながら俺は夢の世界へ旅立っていった。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行2日目後編～（後書き）

次は旅行最終日となります。
これを終えていよいよ3年生編へ向かいたいと思います。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行3日目前編～（前書き）

思いのほか長くなってしまっていますが、今回も前後編でお送りします。
では前編をどうぞ。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行3日目前編～

昨日のゆたか達の報告を受けて、そして、こなた達が山で遭難をした事を知った俺達はゆたか達にちょっかいをかけようとし、俺と死闘を演じた村木の協力もあり、こなた達の居場所を探して、温泉街で聞き込みを行う。

そして、こなた達が登山道入り口付近で見かけられたという目撃情報を得て、俺達は早速山狩りを行い、こなた達を探した。

その際に俺は、足を滑らせて斜面を滑落し、一時意識を失う。

そして、その最中で俺は亡くなったはずのこなたの母親に会い、こなたの居場所を教えられる。

その導きにに従ってこなた達を探し出し、何とか無事に保護をして４人を旅館まで連れて帰り、一連の騒ぎは収束を見た。

流石に長時間山の中を彷徨っていたこなた達は、旅館に辿り着き、夕飯を食べると一気に疲れが出たようで、温泉に入った後はそのまま眠ってしまったらしい。

そして、俺もまた山の中を走り回った疲れから、こなた達と同じようにすぐに体を休める事となった。

そして次の日の朝・・・・・・

「・・・ん・・・んん・・・ふあ～～あ・・・って痛てててて！！
久々に走り回ったから筋肉痛だ・・・あたた・・・。」

結局俺はたとえ疲れていても普段の生活習慣はそのまま出ていたようで、いつもの時間に目を覚ましたのだが、昨日の晩に恐れていた通り、斜面からの滑落と無駄に走り回った影響で体中が筋肉痛と打撲でひどい事になっていた。

それでも顔を洗っておかなければいけないと思い、まだ眠っている龍兄を起こさないように俺はそっと洗面所へと向かったのだった。

ちなみに昨日散々かがみに怒られていたまつりさんといのりさんは今日はこの部屋に来ていないようだった。

「・・・ふー・・・やれやれ、まいったな・・・。」

痛む体を引きずりながら俺は昨日使った洗面所へと辿り着く。

すると、俺の背後から俺に声をかけてくる人物がいた。

「おはようございます、慶一さん。昨日あれだけお疲れになったというのに今朝もお早いのですね。」

その声に振り向いてみると、俺を見て少しだけ顔を赤らめつつにこにこと笑うみゆきがいた。

「ははは。なんというか、俺もこの生活習慣が骨の髄まで染み付いているみたいだよ。」

痛みを伴う体ではあったが、無理に笑顔を作ってそう言う俺にみゆきは

「ふふ。実は私もなんです。いつもの調子で目が覚めてしまいました。でも、今日はまだかがみさんは目を覚ましてはいませんね。やはり昨日の事が堪えているようですね。」

苦笑しながらそう言うのだった。

俺は顔を洗いながら

「まあ、無理もないだろうな。お前らがいなくなった時間から考えたら、かなりの時間歩いていたんだろうしさ。」

そう言うと、みゆきもくすりと笑いながら

「そうですね。泉さんの提案に乗って山へ入ってしまいましたが、それから先あれほどに歩く事になるなんて思いもしませんでした。実は私、あの後筋肉痛になってしまったんですよね。」

そう言いつつ少し痛みが来たのか顔を軽くしかめるみゆきを見て俺は

「まあ、仕方ないさ。普段あまり使わない筋肉を酷使してるはずだからな。だから今日は温泉でも巡ってゆっくりしよう。」

俺の言葉にみゆきもにこりと笑って

「そうですね。それがいいかもしれません。あ・・・慶一さん・・・色々な所に傷出来ていますね・・・昨日斜面を滑落した、とおっしゃっていましたよね?これはひょっとしてその時の・・・。」

俺の腕や顔などについたバンソーコー等を見ながらみゆきが少し落ち込みながら言うと、俺は

「まあな。けど、お前らを救えたのならこの程度の傷、なんて事ないさ。だから、お前は気にするな、いいな？みゆき。」

みゆきが俺のこの傷の事を気にしそうだったので先に釘を刺しておくと、みゆきは少し驚いたような顔になりつつも

「は、はい・・・あの、慶一さん。顔のバンソーコーが1つ取れかかっていますよ？」

その言葉に俺は顔をまさぐるように手を伸ばす。

それを見たみゆきは俺に

「慶一さん、私が直してあげますからそのままで動かずにいてください。」

そう言って来たので俺は頷いて

「わかった、じゃあ、頼むよ。みゆき。」

そう言うとみゆきは頷きつつ俺の顔に手を添えながら顔を近づけてきた。

「そのままでいてください、すぐ終わりますから。」

そう言いながら俺はみゆきにされるがままになっていたのだが、ふいにみゆきが俺の唇に自分の唇を重ねてきたのだった。

驚く俺は、そのまま凍りついたように動けなくなった。

そうしておよそ３０秒程度だろうか？その状態でいたみゆきはおもむろに俺から唇を離すと顔を真っ赤にしながら

「ご、ごめんなさい。慶一さん。私、昨日の事が嬉しくて・・・そして、慶一さんに何かお礼をしたいと思ったのですが、色々悩んだ結果、その・・・こうしたい、って思いましたので・・・その・・・こ、これが私の慶一さんへの精一杯の感謝の気持です。」

そこまで言うと、みゆきはさらに恥ずかしくなったのか、踵を返してそのまま走り去って行くのを俺はただ呆然と混乱しまくった頭で見送っていたのだった。

しばらく思考回路がショートしていた俺だったが、ようやく思考が元に戻って来て先程の事を思い出した時、俺は顔を真っ赤にして慌てていたが、頭を冷やそうと思い、冷たい水で顔を冷やして俺はとっておきの場所へ足を向けた。

屋上のあの場所で頭を冷やす為、俺はドアを開けて絶景ポイントへ足を運ぶ。

そこで、冷たい風を受けながら火照った顔と頭を冷やしていた。

しばらくそうしていると、ドアが開く音が聞こえ、誰かがこの屋上へ来たらしい事を悟った俺はそちらの方へと目を向けると、そこにはかがみが立っていた。

かがみは俺を見つけると、小走りでこちらへ寄ってきて

「おはよう、慶一くん。今日もいい朝よね。」

そう言って笑顔で俺に挨拶をしてきたので俺も

「ああ、そうだな。昨日はとてもあんな事があったとは思えないような朝だ。」

そう言うと、かがみは少しばつの悪そうな顔で

「ご、ごめん。慶一くん。昨日は本当に心配かけちゃったわよね・・・。」

そう言うと、俺はかがみの頭をなでながら

「いいさ。お前らが無事だったんだからそれでさ。それより、昨日は筋肉痛等にはならなかったか？あれだけ山道歩きまわったんだしさ。」

そう言うと、かがみは苦笑しながら

「慶一くんの言う通りね。私も体中痛いわ。特に足が酷いけどね・・・。」

そんなかがみに俺も頷きながら

「まあ、そうだろうな。だから、今日は温泉巡って疲れた体を癒すとしよう。叔父のはからいでもう1日泊まれる事になったからな。せめて最後の1日は湯治では終わらせたくはないだろ？」

そう言うと、かがみも頷いて

「そうね。そんなんじゃ確かにつまらないわ。まだ春休みに余裕あるからこそ出来た応用なのかしらね？あれ？慶一くん、よくみたらあんたの体中、細かい傷だらけね・・・これってやっぱり昨日言ってた斜面を滑落した時の奴なの？」

そう言いながら、俺の体中の傷痕とバンソーコーに気付いたようで、俺に心配そうに声をかけてくる。

俺はそんなかがみにこれ以上は心配させまいとして

「まあな。けど、大した事ないしかすり傷だからお前が気にする事はないんだぞ？これはお前らを救えた俺の勲章みたいなもんだからな。」

そんな風に言う俺を見てかがみは困ったように微笑みながら

「・・・まったく・・・ほんと、優しすぎるわよ、あんたは・・・。」

そう言った後かがみはおもむろに俺の足元を指差して

「ねえ、慶一くん。あんたのスリッパに傷ついてるんじゃない？」

そう言うかがみの指摘に俺はしゃがみこんでかがみの言う傷を確認しようとする。

そして腰を落とした瞬間かがみが俺の側に素早く寄って来たかと思うと俺の頬を両手ではさんで俺の唇にキスをした。

俺はその瞬間、またも自分の頭がオーバーヒートするのを感じて動

けなくなった。

かがみもまた、みゆき同様の時間程度にキスをすると唇をゆっくり離して

「ありがとう、慶一くん。昨日、あんたが来てくれるまでの間、私はずっと不安だった。このまま帰れなかったらどうしよう、家族に、そして、あんたに会えなくなったらどうしよう、って考えてた。でも、あんたはそんな傷だらけになっても私達を助けに来てくれた。嬉しかったわ、本当に・・・だから、これは・・・あんたへの感謝と、そして・・・あんたともう一度生きて会えた事を喜んだ私の・・・その・・・気持・・・だから・・・。」

顔を真っ赤にしてそう言いながらかがみは踵を返すとそのまま屋上を出て行くのだった。

俺は呆然とそれを見送って、そして、再び頭を冷やす為にしばらくの間そこにいつづけたのだった。

とりあえず自分の頭と気持を落ち着けはしたものの、それでもさっきの感触が妙に生々しくて俺はかがみとみゆきの事を考えつつ、ロビーに足を向けていた。

そうして、気もそぞろのままに廊下を歩いていると、ドテッという誰かが転んだような音と共に

「ふええ・・・痛いよう・・・足が筋肉痛で動かないよう・・・」

と言う聞きなれた声が聞こえてきたので、俺はそっちの方へ様子を見に行ってみると、そこには案の定つかさが転んで痛む筋肉痛の足

をさすっていた所だった。

俺は軽いため息を1つつくと、つかさの側に寄って

「大丈夫か？つかさ。昨日あれだけ歩き回ったんだからあまり無理はするなよ？」

そう言うと、つかさは俺の声に気付いて顔を上げながら

「あ、けいちゃん、おはよ～。えへへ・・・そうだね・・・歩けるかな？って思って試しに歩いてみたけど、思ってた以上に酷いみたいだよ・・・。」

そんなつかさに俺は

「どれ、足を見せてみろ。少しマッサージしてやる。」

そう言いながら俺はつかさの足の筋肉をマッサージしてほぐしたり、もんだりして、足の痛みを和らげさせた。

「ありがとう、けいちゃん。大分楽になったよ～。あ・・・けいちゃんその怪我・・・。」

ここに来てつかさは俺の顔や腕や足などに出来ている傷に気付いたようだった。

「ん。まあ、お前らを助けに行ったときにドジってな。けど、かすり傷だから心配ないぞ？」

俺はつかさの足のマッサージを続けながらそう言うとつかさは泣き

そうな顔になって

「ごめんね？けいちゃん。わたし達が心配かけるような事したから・・・。」

そう言うつかさの頭に俺はぽんと掌を乗せて

「反省してるならそれでいいさ。それに、俺はお前らを怒っちゃいない。むしろ、無事だった事を喜んでるからな。だから、お前は気にする事はない、それだけは言っておくからな？その後で変な心配したら、つかさにデコピンの刑かますからな？だから、もう変な心配するんじゃないぞ？」

そう言って聞かせると、デコピンという言葉に少し緊張したように見えたつかさだったが、それでもにっこりと笑って俺の言う事に頷いてくれたのだった。

そして、つかさはおもむろに俺の後方を指差して

「あ、けいちゃん。あれ、なんだろう～？」

そう言うつかさの言葉に俺は思わずつかさの指差した方に顔を向けたのだが、すぐにつかさに肩を叩かれて俺はつかさの方へ顔を向けたのだが、その瞬間つかさが俺の唇に自分の唇を重ねて来た。

そして、みゆきやかがみよりも短い時間ではあったが、俺はつかさとキスをしたのだった。

俺は突然の出来事に再び思考がショートするのを感じたが、その俺の状況等おかまいなしにつかさは顔を赤くしながら俺から唇をゆっ

くりと離すと、俺に

「ありがとう、けいちゃん。わたしあの時すっごく怖かった。もうわたし、2度とみんなの前に、けいちゃんの前に帰れないんじゃないか、って。それを思った時、すごく悲しくなったの。でも、けいちゃんはわたし達を助けに来てくれた。すごく嬉しかったよ?今わたしがここにこうして居れるのも、けいちゃんのおかげ。ささやかだけど、これが・・・わたしの気持だよ?ちょっと照れちゃうけどね。」

つかさはそう言いながらもゆっくりと立ちあがり、俺に

「あはは・・・。勢いでやっちゃったけど、結構恥ずかしいね・・・。けいちゃん。後で一緒に、みんなで一緒に温泉めぐりいこうね?おねえちゃんからもその事聞いてるから、わたし楽しみにしてるよ?そ、それじゃけいちゃん。また後でね~。」

俺にそれを伝えると、自分の部屋へと走って戻って行った。

俺はつかさを見送った後、自分の頭を冷やす為にその場で床に頭を数度打ち付けた。

そして、頬をパンパンと叩いて自分を落ち着かせている時に丁度その場面を見ていたらしいこうとやまとに声をかけられた。

「おはようございます、先輩。昨日はお疲れ様でしたね。はいいですが、何やってたんですか?いきなり床に頭打ち付けたりして?」

「はたから見たらかなり危ない人だったわよ?先輩も自分の行動にはちゃんと責任持ってくれないと困るわ。そうじゃなきゃ私達が変な目で見られる事になっちゃうから。」

そんな2人に俺は先程のつかさとの事は見られていないようだと思い、ほっとしつつも

「わ、わかってるよ。ちょっと気分を落ち着かせたいと思ってついな。それより、ありがとうな。2人とも。突然の事とはいえ、昨日はお前らにも走り回ってもらったからな。」

俺の言葉に2人とも笑顔で

「当然ですよ。泉先輩達だって私達の仲間なんですから。その仲間のピンチとあっては私達だって動かないわけにはいかないですよ。」

「そうね。それに、私達は楽しい思い出を作りにきたんだからこういう事でそれが駄目になるなんて納得できなかったもの。」

俺はそんな2人の言葉に頷いて

「そうだな。下手したら楽しい思い出が悲しい思い出になるとこだったよな。ともあれ、4人とも無事で良かったよ。」

そんな俺の言葉に、俺の体や顔を見た2人は俺に

「それにしても、見事に傷だらけですね、先輩。昨日は武術家とも戦ったって聞いてましたしね。それに、その細かい傷は捜索途中で斜面を滑落した時に出来たっていってましたよね？」

「小早川さん達から話を聞いた時は気が気じゃなかったわ。それに山での事も、私達はかなり心配した事を忘れないで欲しいわね。」

俺はその言葉に申し訳なさそうな顔になって

「そうだな、すまん、2人とも。要らない心配またかけさせちゃったよな。」

そんな風に言う俺に2人は

「もういいですよ。こうして今先輩が無事に私達の前にいるからそれで。」

「そうね。それだけで安心だし、もういいわ。そろそろ朝御飯よね？行きましょ？先輩。」

一応2人とも俺を許してくれたようなので、俺はその提案に頷くとその場から立ち上がって2人を伴って朝食へと向かうのだった。

食事できる大広間へと着くと、そこにはすでに先に来て朝食を食べ始めているゆたか達やみさお、あやの、かがみ、みゆき、つかさの8人がいたが、俺達に気付くと

「あ、先輩ー。先に食べてますよー？先輩達も早く席に着いてくださいー。」

とゆたかが手を振りながら言って来たので俺達もそれに頷きつつ、それぞれの席について朝食を始めた。

俺はその中にこなたと龍兄、まつりさん、いのりさんの姿だけが見えない事に気付いて

「あれ？こなたはともかく、龍兄やまつりさん、いのりさんはどうしたんだ？」

とゆたかに訪ねると、ゆたかは

「こなたおねえちゃんはまだ寝ているらしいです。それと、龍也さんはもう食事を終えてまつりさんいのりさんと一緒に適当にくつろぎに行ったみたいですよ？」

その言葉にかがみは呆れたような声で

「・・・まったく、同じようにつかさも筋肉痛になりながらもその痛みの所為で起きたっていうのに、あいつはそんな痛みはものともしないのかしらね？私やみゆきが起きた理由もそこにあるっていうのに・・・。」

と足をさすりながらかがみが言うと、つかさとみゆきも同じように足をさすりながら

「あはは・・・この痛みのせいでわたしもよく眠れなかったよ・・・。」

「日頃の運動不足もたたっていますね・・・仕方がない事ではありますが・・・。」

そう言っていたのだった。

そんな3人とまだまともに顔を合わせられず、そして、3人もまた、そういう感じらしくて俺達はお互いに意識をそらしつつ、食事を済ませた。

済ませたのだが・・・・・・

「こなたの奴まだ起きて来ないのか？」

みんなが食べ終わる頃になっても姿を見せないこなたに俺も少し心配にはなったがそのうち起きて来るだろうと思い、俺はロビーで少しくつろぐ事にした。

少し経って、俺の側にみさおとあやのがやってきた。

「おはよう、慶ちゃん。昨日はお疲れ様。柊ちゃん達を見つけてくれてありがとう。」

「おはよう慶一。私からも礼を言わせてくれ。サンキューな、慶一。」

そんな2人に俺は照れながら

「はは。とにかく必死だったからな、昨日は。それより、2人とも4人を探す為に動き回ってくれたんだろ?お前らこそお疲れ様だよ。おかげで手早く情報も集まったから対処が早く出来たんだしな。」

そう言うと、2人とも笑って

「柊ちゃん達は私達の大切なお友達だもの。当然よ?」

「そうだゼー?柊はなんていっても私の嫁なんだからな。助けるのは当然だゼ!」

そう言う2人だったが、ふいに後ろから現れたかがみがみさおに一撃いれて

「誰があんたの嫁よ!まったく、こんなとこでそんな恥ずかしい事言ってんじゃないわよ!!」

そうツッコミを入れると、みさおは頭を押さえながら涙目で

「いてえよー、柊ー・・・。そんな本気で殴る事ないじゃん・・・。」

そんなみさおにかがみはキッと睨みつけると

「この位いい薬よ！まったくいつまでたっても懲りないんだから！」

その言葉にますます凹むみさおだったが、俺とあやのはそんな2人を見て苦笑を浮かべていたが、あやのは俺の体中の傷に気がついて

「慶ちゃん、その傷、昨日のでしょ？大丈夫？痛くない？」

そんな気遣いをしてくれるあやのに俺は頷きながら

「大丈夫だ。見た目はこんなんだが、ただのかすり傷だからな。」

そして、何時の間にか復活したみさおが後ろから俺の背中を”ドン”と叩いて

「そうそう、この程度は慶一にとっては何てことないってヴァ。な？慶一。」

そんな風に言うみさおの言葉とは裏腹に、その衝撃が体中の傷に響いた俺は苦悶の表情を浮かべながら

「・・・ぐ・・・い・・・痛えよ・・・みさお・・・。」

とぎれとぎれにそう言いながらみさおに文句を言うと、俺の様子を心配したかがみとあやのが

「だ、大丈夫？慶一くん。ひょっとしてあんた・・・やせ我慢してたんじゃ・・・。」
「痛い？慶ちゃん、痛い？大丈夫？」
そんな2人と共に俺の突然の様子の変化に焦ったみさおも
「わ、わりい、慶一。大丈夫か？その様子、結構痛そうだぞ？」
そうやって心配そうに見つめる3人に俺はなおも強がって
「だ、大丈夫だ。この位・・・龍兄との本気組み手でぼろぼろにされた時に比べたら大した事ないって・・・。」
その俺の言葉に呆然とした表情のみさおとあやの。
そして、かがみはそんな俺の言葉に呆れたように
「ほんと、あんたの所はどんだけよ・・・龍也さんのしごきってそんなにきついの？」
その言葉に俺はただ黙って重々しく頷くと、そんな俺を見て苦笑を浮かべる3人だった。
そして、そんな最中でかがみは俺に伝えようとしている事があった事に気付いたらしく
「あ、そうだ。ねえ、慶一くん。これから今日は温泉巡りするのよね？今からだと結構回れそうだけどさ、いい加減こなた起こさないとその時間もなくなりそうなんだけどさ、私達がどんなにやっても

こなた起きてくれないのよ。慶一くん、こなたを起こすの得意よね？だから、部屋行って起こしてきてくれないかな？」

両手を合わせて拝むようにして俺に頼み込んでくるかがみに俺は呆れつつ

「・・・はあ・・・ったくしょうがないやつだな、こなたも。分かった、はいいんだが、俺の目覚ましはこれだぞ？それでいいのか？」

そう言ってデコピンの構えを見せると、かがみは

「構わないわ。起きないこなたが悪いんだから。それに早く起こさないとこなたの朝食もなくなっちゃうわよ。」

そう言って来たので俺は軽いため息を1つついた後頷いて

「分かった。それじゃ行ってみるよ。こなた起こしてこなたが飯食ってる間に行く準備済ませよう。こなたを起こしたら呼びに行くからロビーあたりにでもいてくれ。」

俺がそう伝えると、かがみ達も頷いて

「わかったわ。それじゃ、お願いね？」

「私たちもここにいるから、事が済んだら声かけに来てね？」

「慶一ー、ちびっ子の事は任せた！」

そう言って俺を送り出してくれたのだった。

そして、俺はかがみに部屋の鍵を借りてこなたの部屋へと向かう。

部屋の前に着いた俺は、部屋の呼び鈴を押してみる。

だが、案の定無反応だったのを確認した俺は鍵を使って部屋へと入ると、未だに夢の中を彷徨い、幸せそうな寝顔でだらしない格好で寝ているこなたの姿を見つける。

俺はとりあえず側に行ってテンプレ通りに起こしにかかってみたが、こなたが起きる様子がなかったのでいつも通り、こなたの額に照準を合わせて一撃を叩き込む。

「はうっ!!」

という情けない声を上げて飛び起きるこなた。

飛び起きて何事かと周りをキョロキョロと見回すこなただったが、額の痛みに気付いたこなたが額を押さえて涙目になりながら「・・・痛い・・・」といってるの聞いた俺は

「起きたか?こなた。昨日の事があったとはいえ、少し寝すぎだぞ?お前は。」

その俺の声に気付いて俺の方を見るこなた。

「・・・うー・・・やっぱり慶一君だったんだね・・・ねえ、どうして慶一君はいつも私にデコピンかますのさ・・・。」

そんな風に俺を睨みつけながら言うこなたに俺はやれやれというジェスチャーをしながら

「お前が素直に起きれば痛い思いしなくてすむんだぞ?」

俺がそう言うと、こなたはぶちぶちと

「・・・だって、仕方ないじゃん・・・昨日あんな事あったんだし、山の中歩き回って疲れちゃってるんだよ・・・。」

そのこなたの文句が聞こえた俺はこなたを軽く睨みつけて

「こなたー?その原因を作ったのはどこの誰なんだっけなー・・・・?」

俺の言葉に「うぐっ!」と軽くうめいて2の句がつげなくなるこなた。

「・・・悪かったよ。確かに私のせいだもんね・・・だから、みんなにも探してくれた人達にもちゃんとあやまったよ?心からさ。」

そんな風に落ち込みながら言うこなたに俺は表情を崩して微笑みながらこなたの頭にぽんと手を置いて

「分かってるならそれでいいさ。何にしても、無事に帰ってこれてよかったな?こなた。」

俺のその言葉にこなたはうんうんと頷きながら

「そうだね。本当に何事もなくてよかったよ。これも慶一君のおかげかな?・・・あのさ?慶一君。」

俺の顔を覗き込みながらそう言うこなたに俺も頭にハテナマークを飛ばしながら

「ん？なんだ、こな・・・」

そこまで言いかけた時、俺の唇はこなたの唇で塞がれてしまい、それ以上の言葉を発する事が出来なかった。

そして、少しの間そうしていて、こなたは俺の唇からゆっくり自分の唇を離すと

「・・・ありがとう、慶一君。自分でしでかしてしまった事だったとはいえ、今回の事は私にとっても怖い事だったよ。ともすれば私は自分の手で自分の友達を不幸な目にあわせる所だった。ううん、それだけじゃないね。私の行動は慶一君以外の人達にも迷惑をかけちゃったよね？でもさ、あの時に慶一君が助けに来てくれた事、嬉しかったんだ。あの時は本当に絶望しかけてたからね。だから、これは私の、君への感謝の気持だよ？とはいえ、事故だったけど、一度はしちゃってるから2度目だって大丈夫だよね？」

そう言って顔を真っ赤にしながら照れるこなたを見て俺は再び思考回路がショートするのを感じていた。

「・・・っと、慶一君。大丈夫？ねえ！」

そう言いながら俺を揺するこなたの声に俺の意識はようやく覚醒を果たしたが、その瞬間さっきの事がフラッシュバックされて顔を真っ赤にして押し黙る俺だった。

そんな俺を見たこなたも自分のした事を思い出したのか、同じように顔を真っ赤にして押し黙り、まるでお見合いのようになってしまっていた。

しばらくして何とかその状態から復活した俺はこなたに話しておかなければならない事を思い出して、俺はこなたに真剣な表情を向けて向き直り

「こなた。実はお前にその事に関して話しておきたい事があるんだ。」

俺の真剣な表情を察したこなたは同じように真剣な表情でコクリと頷くと俺の次の言葉に耳を傾けたのだった。

「あの時お前らが遭難して、俺達がお前らを探して山に入って走っている時にな、どこからか俺を呼ぶ声が聞こえたきがしたんだ。俺はその声の聞こえた場所を探そうとして足元をよく確かめずに一歩踏み出したんだが、丁度その場所が急な斜面になっていてな、俺はそこから滑落し、体を打って一瞬気絶した。」

俺の言葉にうんと頷くこなたにさらに話を続けて

「その時に何やら夢を見ていたらしいんだが、その夢にな、”泉かなた”さんという人が現れたんだ。」

俺のその言葉に驚きの表情を見せるこなたは俺に

「え?その名前って・・・私のお母さんだよ?で、でも、私は慶一君に私のお母さんの名前は教えていなかったよね?」

その言葉に俺も頷きながら

「ああ、その通りだ。だから俺も驚いてな。で、そのかなたさんが

俺にお前らがピンチだと言う事、そして、お前らの居場所を俺に教えてくれたんだ。それがあったから俺はお前らを見つける事ができたんだ。だから、本当の功労者はお前のお母さん、って事なんだよ。」

俺の言葉を聞き終わったこなたはしばし黙り込んでいたが、そのうちにその目からは涙がこぼれ始めていた。

「・・・うっ・・・ぐすっ・・・ひっく・・・お・・・お母さん・・・私を・・・守ってくれたんだね・・・ありがとう・・・お母さん・・・うぁぁぁ！！」

そして、とうとう泣き出してしまったこなたを俺は優しく抱きしめて

「・・・よかったな、こなた。かなたさんは・・・お前のお母さんはお前の事ずっと見守ってくれてたもんな。なあ、こなた。今度、かなたさんのお墓参りに行ってやろうな。その時は俺も一緒に行ってお礼を言わせてもらうからな？」

俺のその言葉に俺の胸に顔をうずめて泣きながらなんども「うん・・・うん・・・。」と言うこなたの頭を優しくなでてやりながらこなたが落ちつくまでそうしていたのだった。

やがて、泣き止んだこなたは俺に笑顔を向けながら

「ありがとう、慶一君。お母さんの事、教えてくれて。私、お母さんの事を誇りに思うよ。」

そんな風に言うこなたに俺も笑って頷きながら

「そうだな。俺もかなたさんには感謝だ。みんなを救えたのもかなたさんのおかげだしな。」

そう言うと、こなたはにっこりと笑って頷いて

「そうだね。あっと、そうだ。こうしちゃいられないよ?今日は温泉巡りするんだよね?私も御飯食べてきちゃうから慶一君も準備しておいでよ。それに、その体も癒さないときついでしょ?」

俺の体の傷の事に気付いていたらしいこなたが俺にそう言うのを聞いて、俺は驚きながら

「気付いてたのか?」

俺が短くそう言うと、こなたはチッチッチッと指を振って

「君のさっきの話とかがみ達から聞いた話を総合すればその位はわかるよ。滑落した時に作った傷なんでしょ?それに私に抱きつかれてる時も結構痛そうにしてたしね。私も筋肉痛だけど、私は格闘技やってた経験あるからね。多少のケアはできるから君やかがみたちよりはましだしね。」

俺はその言葉を聞いてさっきまでのこなたがかがみ達の時より足が痛くなさそうにしているのを思い出しながら

「なるほどな。蛇の道は蛇って事か。俺もその経験とケアの仕方を生かしたから足はさほどでもないからな。けど、それでもまだまだこの状態じゃきついし、今日は湯治をするとしようか。」

こなたも俺の言葉に頷いて

「そうだね。とにかく御飯食べてきちゃうから。慶一君、また後で迎えに来てね？」

俺はその言葉に頷きを返し、自分の部屋へと一旦戻り、出かける準備をするのだった。

今日1日は痛めた体のケアの日になりそうだな、と思いつつ。

引き伸ばしたもう1日でみんなとの楽しい思い出を作って帰ろうと改めて心に決めてこなた達の準備が終わるのを待つのだった。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行3日目前編～（後書き）

次回は後編です。
最終日は1本で纏められれば、と思いますが。
次回も頑張りますので、これからもお付き合いお願いいたします。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行3日目後編～

こなた達の山での遭難騒ぎを解決して、俺達は無事旅館へと戻る事ができた。

その後はこなた達も大分皆に心配かけた事で絞られたりしていたけど、俺はそれでもみんなが無事だった事に安堵していた。

しかしながら、その時にした色々な無茶がたたり、俺の体はかなりがたがたになっていた。

けれど、それはこなた達遭難組みも同じだったようで、山を歩き続けていたこなた達は筋肉痛等で苦しむ事となった。

そんな俺達の状態を慮ってか、叔父は俺達にもう1日の滞在を許可してくれた。

その好意に感謝しつつ、俺達は今日は昨晩の疲れを癒す温泉巡りをしようと言う事になったのだが、俺はその日の朝から4人に命を救われたお礼と称して俺はこなた達にキスをされると言う事になったのだった。

突然の事で色々と混乱する事も多々あったが、今回のこなた発見の真実をこなたに伝えた俺はとりあえず温泉巡りの準備をすべく一度部屋へと戻って行く俺だった。

そして、その途中・・・・・・

「あ、いたいた。森村くーん！。」

その声に振り向いてみるとそこにはまつりさんといのりさんの２人が居た。

「おはようございます。まつりさん、いのりさん。あれ？龍兄と一緒じゃなかったんですか？」

そう訪ねると、まつりさんは

「龍也さんなら温泉巡りの準備しに行くからって部屋へ戻ったわよ？それよりも、昨日はありがとね、森村君。かがみ達を見つけてくれて本当に感謝してるわ。」

そんな風に言ってくれたのだが、俺は恐縮しながら

「いえ、俺は大切な仲間のピンチに動いただけですから。自分がそうしたいと思ってやった事ですから改まってお礼を言われると照れますね。」

そう言うと、いのりさんも

「ふふ。流石は森村君だね。でも、色々あったみたいね、その体の怪我、かがみ達を探しにでた時にはなかったものよね。ごめんね？森村君。痛い思いさせちゃって・・・。」

俺の体の怪我を見ながらそう言ういのりさんに俺は

「この程度なんて事ないですよ。それ以上に俺が痛い思いしても４人を救えた事にこそ意味があるんですから。それとですね、実は・・・・と言う事なんですよ、だから、もしまつりさん達がお礼を

したいと言う事であれば、お墓参り、一緒に行きませんか？」

俺の言葉に驚きの表情を見せながらも2人は

「そっかー・・・こなたちゃんのお母さんがね・・・森村君。後で私も一緒に行かせて貰うわね？そういう事ならきちんとお礼しなくっちゃね。」

「私も行くわ。妹達の恩人とあってはご挨拶しないわけにはいかないものね。」

そんな2人に俺は頭を下げて

「ありがとうございます。それじゃ、旅行から戻った時にまたこの件に関しては連絡させてもらいますので。それじゃ俺も温泉巡りの準備してきちゃいますので。後でロビーでお会いしましょう。それではー。」

そう言って俺は自分の部屋に戻って行く。

部屋に戻ると、龍兄が丁度準備を終えてそろそろ部屋を出ようとしていた所だった。

俺は龍兄に

「おはよう、龍兄。もう準備できたみたいだな。俺も準備していくから先に出てていいよ？」

そう言うと、龍兄は

「分かった。鍵の件はお前に任せるよ。それと・・・俺もこなたち

ゃんのお母さんのお墓参りはさせてもらうぞ?慶一。さっき、まつりさんといのりさんと廊下で話してる声が聞こえたからな。あの４人を助けるきっかけになったのがこなたちゃんのお母さんと言う事なら、俺も捜索に加わった人間としては挨拶しておきたいからな。」

その言葉に俺は頷きながら

「わかったよ。じゃあ、旅行から戻ったら、と言う事で。後でロビーで落ち合おう。」

俺の言葉に頷いて龍兄は先に部屋を出て行った。

そして、俺も程なくして出かける準備を終えると、部屋を出て行き、こなたの部屋へさっきの言葉どおり迎えにいくのだった。

部屋の呼び鈴を押すと、中から「どうぞー。」というこなたの声が聞こえたので

「こなた、約束どおり迎えに来たぞ?準備は済んだか?」

そう言うと、すぐに部屋のドアをあけてこなたが出てきた。

「このとおりばっちりだよ。それじゃロビーへいこっかー。」

そう言って俺の手を引いてロビーへ歩き出すこなたについて俺も一緒に移動する。

ロビー付近でこなたは俺から手を離すと、かがみ達の所へと走っていく。

俺はそんなこなたを見送りながら他のメンバーの到着を待っていたが、そんな俺にゆたか達が声をかけてきた。

「おはようございます、先輩。昨日はお疲れ様でした。それと、ありがとうございます。こなたおねえちゃん達を見つけてくれて・・・それに、その所為で怪我もしてしまったんですよね？」

「・・・先輩、私からもお礼を言わせて下さい・・・みゆきさんを救ってくれてありがとうございます・・・私は昨日は気が気ではありませんでした・・・。」

「先輩、お疲れ様っス。今日は存分に体を癒しましょうよ。」

「やはりケイイチはタヨリになりますネ。キョウはイチニチのんびりしまショウ。」

そんな４人に俺も頷きつつ

「はは。お前らにも走り回ってもらったからな。お疲れ様はお互い様さ。それとさ、ゆたか。こなた達を見つけられたのは・・・・・・と言う事があったからなんだ。だから、俺は旅行から戻ったらかなたさんのお墓参りに行くつもりなんだよ。ゆたか達も一緒にいかないか？」

そう持ちかけると、ゆたかは驚いたような顔をしながらも

「かなた叔母さんが、こなたおねえちゃんを・・・先輩！私も行きます！かなた叔母さんにお礼言わなくっちゃ！」

そう元気に言ってくれたので俺も頷きながら

「なら、そうしようか。」

そう言うと、みなみやひより達も

「・・・私も一緒に行かせて下さい・・・みゆきさんの恩人であるなら・・・私もお礼をしたいです・・・。」

「泉先輩のお母さんには感謝っスね。私も一緒に行きます。」

「コナタをスクったのはハハオヤのアイジョウなのですネ。ワタシもダイジなフレンドをタスケてくれたおレイをしたいデス！」

そんな3人の気持が嬉しくて俺は笑顔で頷くのだった。

そして、そんな俺達の会話を何時の間にか来て聞いていたこうとやまとも

「なるほど、泉先輩達救出劇の裏側にそんな事があったんですねえ・・・。」

「そういう事があったなんて知らなかったわ・・・でも、大事な仲間を助けてくれたのなら私もそのお礼をしに行きたいわね。」

俺はそんな突然の2人の言葉に驚きつつも嬉しそうな顔で

「なら、旅行が終わったら一緒に行くか。きっと喜んでくれるさ。かなたさんもさ。」

そう言う俺に2人とも笑顔で頷いてくれた。

そうして俺はロビーでみんなと合流すると、頃合を見計らい、温泉巡りへと出発するのだった。

まず俺達が向かったのは、足湯を使える場所だった。

「筋肉痛で足には結構ダメージあるから、まずはこれで行こう。」

俺のその提案もあって、まずはそこを目指した。

そして、少し歩いて俺達はそこに辿り着き、さっそく足湯に浸かる事にしたのだった。

「流石に色々あるもんだね。温泉の種類って物もさ。」

「そうねー。でも、だからこそ楽しい気もするわ。」

「だよね。わたしものんびりしようっと。」

「特に足には負担がありましたからね。こういうのもありがたい物ですね。」

そんなこなた達にゆたか達も

「おねえちゃん達は特にそうするのがいいんじゃないかな？昨日の今日だもんね。」

「・・・ゆたかの言う通りです・・・ゆっくりしてください・・・。」

「私達もついでにお付き合いさせてもらいますけどね。」

「二ポンのオンセンはスバらしいですからネ。ワタシもキョウはタノシませてもまいマース！」

そう言ってこなた達に気を使いつつも自分たちも楽しんでいた。

「温泉１つとっても色々ありますよねえ。まあ、退屈はしなさそうなのでいいですが。」

「日本の誇るべき文化の１つよね。私は好きよ？こういうのって。」

そんな風に言うやまとはそれなりに楽しそうだった。

俺もまた、そんなみんなを見ながら楽しい気持になりつつも一緒に足湯に浸かってのんびりとしようと思うのだった。

「しかし、結構気持のいいものだな。」

そう呟く俺に龍兄は

「まあ、あれだけ走り回った後の足には丁度いいだろうな。特にお前やこなたちゃん達はな。けど、その原因の1つもお前が最近稽古をサボリ気味だという所にもあるようだけどな。」

そう言いながら苦笑している龍兄に俺は

「はは・・・耳が痛いね。確かに最近は稽古もする機会はかなり減ったと思うよ。」

その言葉に龍兄は微笑みながら

「まあ、それもお前にそれ以上に気にする仲間が増えた事が原因みたいだがな。けど、俺にとってはそれは嬉しい事さ。」

そこまで言った後、また厳しい表情になって

「けど、そんな仲間を守るならお前はその為にもっと努力はしなきゃななならないぞ？みんなを悲しませるような真似はしたくないだろ？お前はさ。」

俺はその言葉を噛み締めるように頷くと

「・・・そうだな。簡単に守るとか言っている俺だけど、このままでは確かに厳しい・・・俺もまだまだ頑張らないと駄目って事だな・・・。」

そんな俺の肩を叩きながら龍兄は

「お前にその気があるなら、俺がいる間はお前の鍛錬には手を貸してやるさ。まあ、俺が鍛えるからには覚悟はしてもらうがな。」

そんな龍兄の言葉に苦笑しながら俺は

「今更そんな事言わなくても分かってるさ。龍兄のしごきは昔から経験済みだよ。けど、よろしく頼むよ、龍兄。」

俺の言葉に笑いながら頷く龍兄。

そして俺達はしばらくここで足を癒した後、別の温泉へと足を向けたのだった。

「うーん・・・中々気持よかったね。足も大分楽になった気がするよー。」

「そうね。起きた時よりは大分いい感じね。次は全身浸かれる所みたいだけど。」

「それもいいかもね。まだまだ体も疲れてるもんね。」

「温泉の癒し効果は素晴らしいものがありますよね。次はゆっくりとしたいです。」

そんな風に言う４人にみさおとあやのは

「泉ちゃん達は特に疲れをとらないと、だもんね。」

「まあ、仕方ねえって。とはいえ私らもついでに癒されるゼ。」

４人に笑いかけながらそう言うと、４人も頷きながら

「そうだねー。今にして思えばよくあんな時間歩いてられたなあ、と。」

「確かにそうね・・・でもそれだけ私達は必死だったんだと思うわ。」

「歩いてないと不安だったもんね・・・。」

「立ち止まる事が怖かったのかもしれませんね・・・。」

そんな４人に俺も

「それだけお前らは自分の置かれた状況を心の中では分かっていたって事じゃないかな。生きたいと思うから、帰りたいと思ったから必死になれたんだろうよ。」

そう言うと、４人ともその時の事を思い出して考え込んでいた。

そして、こうとやまとは俺に

「でも、人間のそんな思いって凄い力を出させるものなんですね。」

「自分の限界すら麻痺させる程に、って事なのね。だから泉先輩達はあそこまで足を痛める事になった訳ね。」

俺はそんな2人に頷いて

「そうだな。おそらくそれが火事場の馬鹿力という奴なのかもしれないが。」

そんな俺の言葉にその場にいる全員が頷いていた。

そうこうしているうちに次の温泉へとやって来た俺達はそれぞれ、男湯女湯に分かれて入った。

その後もいくつかの温泉を回って俺達は旅館に帰ったのだが、一度部屋に戻った俺達は部屋でくつろいでいたのだが、龍兄が何かを思い出したようで

「なあ、慶一。久しぶりにあそこへ行ってみないか？一般客も知らない俺達が見つけたあの秘湯にさ。」

俺は龍兄の言葉に、昔に一緒に入りに行ったあの場所を思い出して

「あそこか？まだ残ってたんだなあ・・・懐かしいけど。」

そう言いながら当時に龍兄と共に修行の後偶然にも見つけた温泉の事を思い出していた。

そんな懐かしさに少しの間浸っていたが、俺はふとあれから数年もそこに行っていない事を思い出して龍兄に

「なあ、龍兄。あそこってもう何年も行ってないはずだよな？そんな所がまだ残ってるのか？」

俺の疑問に龍兄は笑いながら

「それについては心配ないぞ？叔父さんが俺達だけでなく自分達も使いたいと思ったからあれからずっとあの場所を管理してくれているからな。」

その言葉に俺は驚きながら

「叔父さん、わざわざそんな事してくれてたんだな。でも、まだあの当時のままで残されているっていうなら楽しみだよ。」

そう言う俺に龍兄も頷いて

「ま、とにかく行こうぜ？俺はいつでもいいぞ？」

と言う龍兄に俺も

「おっし、それじゃ久しぶりに行ってみるか。」

そう言って頷くと、龍兄と一緒に部屋を出たのだった。

こなたｓｉｄｅ

私達も大分体の疲れも取れて楽になっていたのだけど、私はふと飲み物が欲しくなり、ロビーの自動販売機まで買いに行ってみようと部屋を出た。

その時にたまたま龍也さんと共に部屋を出て行く慶一君の姿を見かけた私はこっそりとロビーへ向かいつつ、慶一君達の後をつけてみる事にしたのだった。

ロビーで2人に気付かれないように様子を伺っていると、慶一君達は叔父さん達に何かを話した後、旅館を出て行くのを見て、私はその事に興味を持ったので叔父さんに話を聞いてみることにしたのだった。

私は叔父さんの近くに行って

「あのー、叔父さん。慶一君達どこへ出掛けたのかわかりますか？私、何となく気になったもので。」

そう訪ねると、叔父さんはわりにあっけらかんと慶一君達の目的地について話してくれた。

「ああ、その事かい？実はね、彼らがこのあたりで山篭りの修行をしていた時に偶然見つけた一般の人も知らない温泉があってね。彼らはそこへ向かったのさ。何しろ私もあそこは管理しているところなのでね。興味があるなら後で行ってみるかい？」

そう話す叔父さんに私は一般客も知らない秘湯という言葉にわくわくして

「是非おねがいします！ところでそこって男女って分かれてますか？」

そう訪ねると叔父さんは

「いや、大きい温泉でもないもんだし、自然のままの温泉でもあるからね。分かれてはいないんだ。」

それを聞いて内心ほくそえみつつ叔父さんに温泉の場所を教えてもらった私はこの情報をもって部屋へと戻ったのだった。

そして、私は慶一君達が先にその秘湯へ向かった事を伏せたまま、かがみ達に水着を持たせて慶一君達の後を追ったのだった。

「それにしても、そんな秘湯があるなんてこなたもたまにはいい情報もって来るじゃない？」

と、うきうきしながらその場所へ向かいつつかがみが私にそう言うと、私は

「たまには、は余計だよー。でも、私達だけが知る特別になるみたいだからね。私も少し楽しみだったりするよ。」

そんな私の言葉につかさも笑いながら

「なんかいいな～。わたし達だけの秘密の場所なんてさ～。」

そう言うと、みゆきさんもにこにことしながら頷いて

「そうですね。これもまたいい旅の思い出ですね。私達だけの。」

みさきちとあやのさんもそれに頷きながら

「そうね。なんだかそれだけで特別って感じがしてきたわ。」

「なあなあ。後で慶一達にも教えてやろうゼ？折角私らで来た旅行だし、慶一達にも私らと秘密を共有したいもんな。」

そして、そんな言葉を聞きながら八坂さんと永森さんも

「まったく、先輩もこんな時にどこかに出かけちゃうなんて、ほんと間が悪いですよね。」

「そうね。思い出を作るいいチャンスってこういう時だと思うわ。」

そして、ゆーちゃん達もまた

「ならこなたおねーちゃん。今回は私達が先に来ちゃってるけど帰る前にもう一回皆で行ってみればいいんじゃないかなあ？」
「・・・そうだね・・・ゆたかの言う通りかも・・・。」
「まだ1日あるんですから大丈夫っスよ。」
「そのトキにはまたワタシがケイイチとタツヤのセナカをナガしてあげるデス！」

そんなパティにまつりさんといのりさんは

「おーっと、パトリシアさん？龍也さんの方は譲れないよ？」
「そうそう。龍也さんの背中は私が流してあげるんだから。」

と言うのを皮切りに2人の言い合いが始まったのを見て私は苦笑しつつ

（あははー・・・すでに2人が向こうにいるって知ったらきっと驚くよねー・・・でも、それが今日であるか明日であるかの違いだけだもんね。後でかがみに殴られそうだけどとりあえずこのままいっちゃえ）

と、心の中で思いつつ、私達は秘湯を目指して進んで行く。

そして、ついにその場所へと辿り着いたのだった。

そこは、まさに天然の露天風呂という感じで、お風呂の石組みも自然が作り出した不思議な感じを秘めていた。

そして私は湯気の奥の方に2人の姿をぼんやりと確認したのだった。

けど、２人は服を別の場所で脱いでいたのか、近くには２人の服は見当たらなかった。

とりあえず私達は荷物の置けそうな場所に荷物を下ろし、各自水着に着替えつつ湯船の方へと向かう。

何も知らないかがみ達を伴い、湯船の奥に進んだ時、私達の姿を見つけて驚愕する２人の姿を見たのだった。

慶一ｓｉｄｅ

龍兄と２人、修行時代の事を思い返し、俺は龍兄と話しながらのんびりと温泉に浸かっていた。

だが、しばらくすると、俺達のいる場所より奥側から誰かが近づいて来る気配を感じた。

龍兄もそれを感じていたようでふいにそちらへと視線を向けると、そこには水着を着たこなた達の姿があったのだった。

俺はこなた達がここに居る理由がわからず、驚きながら

「こ、こなた？お前どうしてここに居るんだ？」

そう訪ねると、こなたはぺろりと舌を出しながら

「あはは。実はさっき龍也さんと一緒に旅館を出て行く慶一君達の姿を見かけてさ、それで叔父さんに行き先を聞いてやって来たんだよねー。ねえ、おどろいたがっ！」

こなたの最後の台詞が言われる瞬間に背後からこなたが殴られたようだったのでよく見てみると、そこには・・・・・・皆が揃っていた・・・。

「こ～な～た～？あんたこの事知ってたわね！？何で黙ってたのよ！あんたはっ！！」

凄い剣幕で言うかがみにこなたは殴られた頭をさすりながら

「い、いやあ、こういうサプライズもありかなあ、って思ってさー。」

そんなこなたの台詞にさらにかがみが激昂して

「だからって、私達が水着持ってきてなかったらどうするつもりだったのよ！！私達に慶一くん達の前で裸さらさせるつもりだったの！？あんたは！！」

その言葉にこなたは怯えつつ

「だ、大丈夫だよー。元々ここって水着着用で入る温泉らしいからさー。だから初めからちゃんと水着持たせたじゃん。」

そんなこなたにかがみは

「それはわかったわ。後もう1つ。あんたはここが混浴だって事、言ってなかったわよね？これはどういう事なのかしら？」

こなたを睨みつけながら言うとこなたは

「い、いやー。皆で思い出作りたいって思ったからさー。それに、ここを知ってるのは私達だけなんだし、別にいいじゃん。」

そのこなたの言葉に呆れて大きなため息をつくかがみ。

俺はそんな2人のやり取りを見ながら

「事情はおおむね理解したよ・・・それにしても・・・叔父さんも叔父さんだな、あっさり教えたみたいだしなあ・・・。」

そう言うと、龍兄もなんだか疲れたような表情で

「・・・はあ・・・まあ、来てしまった以上は仕方ないだろ・・・とりあえずみんな、水着同士だし、ゆっくりしないか?このまま立ってても仕方ないだろうしな。」

そう言うと、かがみとこなたの2人のやり取りを呆然と見守っていた皆も我に帰って

「あ、そそうだね。とりあえずお湯に浸かろうよ。」

「そ、そうですね。それじゃ失礼します。」

「あはは・・・泉ちゃんにしてやられたってところなのかしらね・・・。」

「あいつって妙な所で行動力あるよなあ・・・。」

「私も少しは見習うべきなのかな?」

「そういう部分は見習うべきではないと思うけど?」

「時々こなたおねえちゃんには付いていけなくなる時あるなあ・・・。」

「・・・突発的に、と言う事はあるね・・・。」

「それが泉先輩の凄さでもありますけど。」
「フフフ。コナタにはマケていられませんネ。」
「た、龍也さん。隣失礼しますねー。」
「あ、ちょっと！まつり！ずるいわよ！？」

そう言いながらもみんな次々湯船に浸かるのだった。

「私たちも浸かろうよ、かがみ。」

そんな風に言うこなたにかがみもやれやれといった感じで

「・・・はあ・・・仕方ないわね。ここまで来ちゃったんだから浸かっていくしかないわね・・・あ・・・。」

その時まだ俺は湯船の中で立っていたのだが、そんなかがみが俺のわき腹の所に付いている手の平の形の痣に気付いて

「ねえ、慶一くん。その痣って一体？」

俺はかがみが指摘した所に目をやるとそこには村木との戦いでつけられた掌打の跡がくっきりと残っていた。

かがみの指摘に俺は言いにくそうに

「んー・・・実はな・・・。」

そこまで言いかけたときゆたかが声をあげた。

「先輩、それってあの時のですよね？」

そう言ってゆたかは立ち上がって俺の側まで来て痣にそっと触れながら

「痛いですか？先輩・・・。」

心配そうに見つめるゆたかの頭を軽くぽんと叩いて

「大丈夫さ。この程度は何てことはない。ええとな。これはゆたか達が絡まれていた時があってな。その時にその中の1人と戦りあってできたやつさ。綺麗に一発もらっちまったからな。」

ゆたかに心配ないと言ってからみんなに説明する。

そんな俺の傷を心配そうに見つめるみんなに

「大丈夫だって。こんなの龍兄と修行したらあたりまえのようにつけられるからな。それに、怪我は負ったけどゆたか達を守れたからな。これはその勲章だ。」

そんな風に言う俺にこなたとみゆきは

「そうだったんだ・・・慶一君。ゆーちゃんを助けてくれてありがとうね？」

「慶一さん。みなみちゃんを助けてくれてありがとうございます。」

そして、こうもまた俺に

「先輩。ひよりんとパティを助けてくれてありがとう。2人とも期待の部員候補だからね。何事もなくてよかったよ。」

そう言うと、ひよりとパティも俺に

「先輩、改めて感謝っス。そしてその為に怪我させてしまってすいません。」

「ケイイチ。あまりムチャはいけませんデスヨ？」

そう言われたので俺は苦笑しつつも頷いたのだった。

そして、やまとは

「まったく・・・先輩は私達に心配かけさせないって事出来ないのかしらね？いつもはらはらさせられるわよ・・・。」

そう呟いていたのだった。

俺は気を取り直すとみんなに

「みんな、ここから見える景色は雄大だぞ？みんなもよーく目に焼き付けておいてくれ。」

そう言って湯船の端を指差すとみんなもそちらを見たのだが、その景色の壮観さにみんなは言葉をなくしているようだった。

その様子を見つつ、龍兄は小声で

「まあ、運良く今回は守れたみたいだが、結局はお前の未熟さが招いた結果でもあるって事をよく肝に銘じておけよ？」

そう俺に突っ込みを入れるのが聞こえた俺はその言葉に凹みつつ苦笑を浮かべていたのだった。

そして、みんなで風呂に浸かりながらみんなから俺達の鍛錬の様子や昔の俺達の事をみんなに質問されたりしたのだが、そこで調子に乗った龍兄に俺の恥ずかしい思い出までも暴露される事となり、俺ははずかしさで顔を赤くして凹んでいた。

そして、ある程度ここでの時間を過ごした俺達は帰りはみんなで一緒に温泉地を後にして旅館へと戻ったのだった。

こうして今日一日で体のダメージをある程度拭い去る事ができた俺達は、明日の最終日にみんなで色々回ろうと言う事を話し合い、それぞれの部屋へと戻った。

そして、午後9時頃、俺は例の場所へと夜風に当たりに行こうと部屋を出る。

俺が部屋から出る時に例の4人に出会った俺は、4人にどこへ行くのか訪ねられて例の場所へ行くと言うと、4人とも俺に付いていくと言ったので、俺は4人を伴いあの場所へ向かった。

そして、鍵を開けて外へ出ると、外はすっかり暗くなっていて気温も大分下がって寒くなっていたが、その分空気も澄んで星もよく見えるもう1つのいい景色を見られる事となった。

みんなと共に星を見上げていたが、ここで俺達は軽いやり取りをした。

「うわー・・・凄い星空だねー・・・。都会や地元と違ってよく見えるよ。」

「そうね。降るような星空ってこういうのを言うのかしらね?」

「すごく綺麗～。ここがけいちゃんの言ってたとっておきの場所なんだね？」
「昼間の景色も素晴らしいものですが、夜の景色もまた素晴らしいですね。」
「この星空もこの季節ならではだな。けど、大分冷え込んできてるから程ほどにしつつ、だぞ？」
俺が皆の体の事を考えつつそう言うと、こなた達は改まって俺に
「わかってるよー。でも、慶一君。本当にありがとう。今こうしてこの星空を見てられるのも君のおかげだね。」
「そうね。もし慶一くんの助けが来なかったらと思うとぞっとするわ・・・。」
「大感謝だよ？けいちゃん。」
「とても嬉しかったです。私はあの時、半ば絶望しかけていましたから・・・。」
こなた以外の3人にも真実を伝えなければならないと思い、俺は
「その事なんだけどな・・・。お前らを見つけられたのは俺だけの力じゃなかったんだ。」
そう言うと、かがみとつかさとみゆきは不思議そうな顔をしつつ少し落ち込みつつ
「え？それって、捜索に協力してくれた人達も、って事なの？」
「確かに他の人にも大分迷惑かけちゃったね・・・。」
「皆さんも私達も探す為に必死になってくれたのですしね・・・。」
そう最後に言ったみゆきの言葉にこなたが

「ううん・・・それもあるけどさ、本当はね？慶一君を私達の元に導いてくれた人がいたんだよ。」

いつものこなたとはちょっと違い、なんだか嬉しそうにそう皆に告げるとみんなはその事が気になったようで

「えっ？捜索隊の皆さん以外にそういう人が居たの？私、その事知らなかった。」

「旅館に戻った時はお世話になった人すべてにわたし達ちゃんとご挨拶しにいったよね？いい忘れた人いなかったはずだよね？」

「・・・確かにそのはずでしたが・・・。泉さん、その方とは一体、どなただったのですか？もし、お礼をいい忘れた方がいらしたのであれば、私はその方にもご挨拶しなくてはいけませんね。」

そんな風に言う3人にこなたは誇らしげに

「あはは。その人はね、私のお母さんだったんだよ。」

そう言うこなたに驚く3人だったが、3人はこなたにおそるおそる

「ほ、本当なの？でも、こなたのお母さんは・・・その・・・もう亡くなっているはずよね？」

「うん。わたしもこなちゃんからそう聞いてるよ？本当なの？こなちゃん。」

「それが事実だとしたら・・・すごい事ですね・・・。」

そう言う3人にこなたに代わって俺が

「ああ、みんなの言う通りこなたのお母さんはもう亡くなってる。

けど、俺があの時斜面から滑落して意識を失った時、確かにこなたのお母さんが俺の夢の中に現れた。そして、俺の心を皆のところへと飛ばしてくれ、俺はみんなの居場所を掴み、皆を助ける事ができたんだ。」

そう補足説明をすると、3人は

「・・・そう・・・だったんだ・・・。」

「わたし達、こなちゃんのお母さんにも助けてもらったんだね・・・。」

「魂だけになっても・・・泉さんを救いたかったのですね・・・。」

そう言いながらしんみりとしていたが、俺はそんな3人に

「そういう事だな。それで俺から提案なんだけどさ、旅行が終わったらみんなでこなたのお母さんにお礼を言いにお墓参りに行かないか?俺は、是非ともそうしたい、そう思ってるからな。」

俺の言葉に3人は力強く頷いて

「それを聞いたとあっては、きちんとお礼に行かなくっちゃ罰が当たるわね。私は行くわ。今ここでこうしていられるのはこなたのお母さんから命をもらったからだしね。」

「わたしも行く!こなちゃんのお母さんに貰った命に感謝する為に!」

「私も行きます。救っていただいたこの命をありがたく思いますから。そして、未来を下さった泉さんのお母さんに感謝したいですからね。」

その3人の言葉にこなたも嬉しそうに

「みんなありがとう。お母さんもきっと喜んでくれるよ。私も改めてお母さんに感謝するためにお墓へ行くよ。」

そう言うこなたに俺達は笑顔で頷くのだった。

そして、俺達はこなたのお母さんへの感謝を胸に、旅行が済んでからご挨拶に行こうと心に決めてこの場所を後にした。

残り1日、俺達が共に過ごす2年生最後の旅行の思い出。

最後まで悔いを残さず楽しもうと思う俺だった。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行3日目後編～（後書き）

後、2．3話位で2年生編完結予定です。
皆さん、それ以降もまたのお付き合いの程をよろしくお願いいたします。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行４日目～（前書き）

短編の執筆で少し間が空いてしまいましたが、なんとか本編完成です。
それと同時にＰＶ８０万、ユニーク６万５千を突破しました。
改めて皆さんへ感謝です。
本編遅延のお詫びをしつつ、本編をどうぞ。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行４日目～

一昨日のこなた達の遭難から１夜明けて俺達はガタガタになった体を癒す為に、泊まりを１日延長してこの日は温泉巡りを敢行する俺達。

その際にいくつかの温泉を巡り、ある程度体を癒した俺達は一度旅館へと戻る。

そして、龍兄と共に修行の時に使った一般客も知らない秘湯へと足を運ぶ。

そんな俺達の様子を伺っていたこなたはみんなを欺き、俺達の入っている秘湯へメンバー全員を引き連れてやってきた。

そんなこなたの行動に呆れつつも温泉を楽しみ、俺達は旅館へと帰った。

そして、とっておきの場所に行った俺達５人は今回の救出劇の裏側を知り、皆それぞれにかなたさんへのお礼をしにお墓参りへ行こうと心に決めたのだった。

そして、俺達の最後の思い出作りの朝が来た。

今日もまたいつもの時間に起き出して俺は洗面所へと足を向ける。

すると、今日は珍しくこなた達も普通に起きていたのを見て俺は驚いていた。

俺に気付いたこなた達は

「あ、おはよー。慶一君。今日は最終日だからね。みんなできっちり起きて朝御飯食べて皆と一緒に色々回ろうって思って早起きしたんだよ。」

「まあ、いつものあんたから見たら頑張った方よね。おはよう、慶一くん。今日は色々巡りましょ？」

「おはよ～けいちゃん。今日はわたしも頑張ったよ～？2年生でのみんなと一緒に作れる最後の思い出だもんね。」

「おはようございます、慶一さん。今日も1日楽しみましょう。」

「おはよう、慶ちゃん。みんなで忘れられない思い出を作って帰ろうね？」

「おはよ、慶一。今日は楽しんで3年に向けて気合いれるぜー！」

そんなみんなに俺も頷きながら

「そうだな。今日は写真とかも撮ったりして思い出を持ち帰ろう。」

そう答えると、同じように顔を洗いに来ていたこうやまとも

「おはようございます、先輩。私も今日は思い切り楽しんで良い思い出を持ち帰りたいと思います。」

「楽しい旅行だったって言えるような思い出を作りたいわね。」

俺は2人にも頷くと

「ああ、もちろんさ。今日は楽しもう。」

そう言うとゆたか達もまた

「おはようございます、先輩。今日こそは初日のような邪魔も入らなければいいですよね。」
「・・・うん・・・あんな事はもう・・・こりごりだから・・・。」
「何事もなく過ごしたいっスよねえ・・・普通っていうのも案外難しいものなのかもしれませんね。」
「オミヤゲたくさんカイコミますデスヨ！これぞタビのオモイデのダイゴミネ！」

最後のパティの言葉に苦笑しつつ

「ははは・・・まあ、それも思いでの1つかもしれないが、それ以外でも楽しもうぜ？パティ。」

そんな俺の言葉にパティも親指をビシッと立てて応えていたのだった。

そして、顔を洗い終えて少し時間があったので俺達はあの場所へと行ってみる事にしたのだった。

ゆたかとみなみ、こなた、かがみ、つかさ、みゆき、あやの、以外にまだあの場所に連れて行っていない面々も引き連れ、俺は屋上のドアを開ける。

そして、朝の風景をみんなに見せると、みんなは凄く驚きつつも喜んでくれたのだった。

そんな俺達の後を追って、龍兄やまつりさん、いのりさんもこの場所にやって来て風景を眺めて軽く談笑してるうちに時間が来たので俺達は朝御飯を食べに広間へと向かう。

朝食を終えた俺達はまず最初に旅館の前に集合して全員での集合写真を撮ろうという事になった。

叔父さんに頼んでシャッター押してもらう事になったのだが・・・・・・ここでもちょっとした争いが展開されていたのだった。

こなたｓｉｄｅ

集合写真を撮るという事で、今回もまた、慶一君の隣に立つ権利をかけて、私達の仁義なき戦いの火蓋が切られようとしていた。

「よーし、ここは1つ私が慶一君の隣へ・・・。」
「ちょっとこなた?前はあんたがその権利取ったんだから今回は譲りなさいよ!」
「今回はわたしも隣に行きたいよ。」
「前回の勝負では負けてしまいましたから今回は譲れません!」
「それならまた公平にじゃんけんで決めようゼ。」
「く、日下部先輩、今回はあなたも参戦なの?」
「だって面白そうじゃん?」
「ならここはもう一度じゃんけんで決着をつけようではないか!」

そんな風に喧々轟々とやっていると、そんな私達に慶一君から声がかった。

「おーい、こなた達、何してるんだ。さっさと撮るからこっち来いー!」

その呼び声に振り向いてみると、慶一君をはじめとして、この争いで集まってる私達以外の人間がすでに慶一君の側に並んで立っているのを見た私達は、その状況に思い切り脱力したのだった。

そして、がっかりとしながら私達は集合写真を撮る為に慶一君達の所へ向かったのだが、こうなったら少しでも慶一君の側に近いところを確保しようと、足早にみんなの所へと向かう私達だった。

そして、みんなでの集合写真撮影を済ませた後、私はある事を思いついて慶一君に持ちかけた。

「ねえ、慶一君。お願いがあるんだけどいいかな？」

そう私が慶一君に言うと、慶一君は私に

「ん？お願いってなんだ？」

そう聞いてきたので私は慶一君に

「うん。私とのツーショット写真を撮ってくれないかなあ？ってね。」

その言葉に慶一君は少し顔を赤らめながら慌てつつ

「ちょ、ちょっと待てこなた。以前にも海に行った時に撮った奴あるだろ？今更また撮る必要もないんじゃないか？」

そう言ってくる慶一君に私は笑いながら

「確かに慶一君の言う通り海でみんなとのツーショット写真も撮ってたよね？でもさ、今の私達はあの時の私達とはまた違うよね？だから、あの時とは違う君との写真を撮りたいんだよ。だめかな？そういのってさ。」

そんな風に言う私に慶一君は少し困ったような顔をしていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

集合写真でなにやら揉めていたように見えたこなた達だったが、そんな争いをしているうちにゆたかたちも配置についたのでこなた達を呼んだのだが、俺の方を見るなり、こなた達はなんだかがっかりしてるように見えた。

そんなこなた達と集合写真を撮った後、こなたは何かを思いついたのか俺にある提案をしてきた。

それが、”私とツーショット写真を撮って欲しい”という事だった。

こなたの提案に困惑してた俺だったが、こなたの言う事にも何となく頷けた俺は、そのこなたの提案に乗る事にした。

「あの時とはまた少し違う、か・・・わかったよ。ちょっと待ってろ？叔父さーん！ちょっと写真お願いしまーす！！」

そう言って叔父さんを呼んで、俺は叔父さんに事情を説明してこなたとのツーショット写真を撮ってもらう事にした。

叔父さんはカメラを構えると

「はいはい、もう少しくっついてー・・・それじゃ撮るよー？ハイ、チーズ！」

そう言って叔父さんがシャッターを切る瞬間にこなたは俺の腕に抱きついて来たので俺は思わず驚いたのだが、その驚きの顔のまま写真を撮られてしまった俺だった。

俺はこなたに

「おい、こなた。突然びっくりするじゃないか。」

そう言うと、こなたはしれっとした顔で

「んー？別にいいじゃん。こういう写真は自由だもんねー。慶一君だって満更じゃなかったでしょ？」

そのいたずらっぽい顔に俺は呆れて何も言えなくなった。

「やれやれ、まったく・・・。」

そう言って苦笑する俺に、そんな俺達の様子を見ていたかがみたちも

「慶一くん？こなたとも写真撮ったんだから私ともいいわよね？」
「わたしも改めて撮りたいよ。いいよね？けいちゃん。」
「泉さんばかりでは不公平ですからね。私ともお願いします。」
「私も新しい写真欲しいから頼むぜ？慶一ー。」
「私も海とは違う写真が欲しいですね。先輩私ともよろしくです。」
「私ともお願い・・・。これもまた思い出になるし・・・。」

そして、ゆたかたちも

「私も先輩との写真撮りたいな。いいですよね？先輩。」
「・・・これから先輩達と同じ学校に行く事で作れる思い出の第一

歩として、私も先輩と一緒に撮らせてください・・・。」
「私達もこれからは本当の仲間っスからね。私もいいですか?」
「ワタシはコンカイがハジメてのオモイデヅクリとなりますからネ。キョヒケンはミトメませんヨ?」

そう言って来たので、俺は苦笑しつつもとりあえずみんなとの写真撮影を行ったのだった。

そして、撮った写真をきちんと送ってもらう事をお願いして、お土産屋さん等を巡ろうと、俺達は歩き始めたのだった。

道中はこなた達もかわるがわる俺の横に来たり、手をつないできたり、こうやこなた、パティに至っては腕を組んでくるなどして俺を困らせつつ騒がしい一団となっていた。

「・・・はあ・・・疲れたな・・・。」

お土産屋でみんなが土産物の物色をしている最中、俺は一人それを見守りつつしばしの静かな時間を堪能していたのだけど、その時に「きゃっ!」というゆたかの軽い悲鳴が聞こえて俺はすかさず声の聞こえた方へ向かう。

すると、そこには少し怯えるゆたかとゆたかを庇うように前に立つみなみの前にはあの時ゆたか達に絡んだ連中の1人がいたのだった。

みんなも見守る中で緊張が走っていたが、俺はゆっくりとみなみの前に出ると

「お前はおとといの村木と一緒にいた奴だな?今度は何をした?」

俺がそいつにそう尋ねると、そいつは俺に

「いや、変なことは何もしてないぞ？それにここは俺のアルバイト先だからな。それに、もう俺はその子達にちょっかい出す気もないしな。」

俺はそう言う男の態度や顔を見ながら男の様子を伺っていたが、男の言葉に悪意なしと感じ取ると

「・・・どうやらお前の言葉には悪意はないようだ。疑ってすまなかったな。みなみ、お前ももう警戒しなくていいぞ？それとゆたかももう怖がらなくていい。」

俺がそう言うと、みなみとゆたかも、そしてそれを見守っていたみんなも緊張を解いたようだった。

「悪かったな。でも、お前にも非はあるぞ？最初の出会いでこいつらを怖がらせたんだからな。とはいえ、お前もこなた達捜索に協力してくれたんだったよな。そこは礼を言わせて欲しい。ありがとう。」

俺の言葉にゆたかやみなみも、そして当事者であるこなた達やまつりさん達も彼に

「・・・あの・・・こなたおねえちゃんを探すのを手伝ってくれてありがとうございます。おかげでおねえちゃんも無事に帰ってきました。それと、怖がっちゃってごめんなさい。」

「・・・みゆきさんを探すのにご協力感謝します・・・ありがとうございました・・・。」

「私達の為に動いてくれてありがとうね？まあ、そうしてくれたと

いう事でゆーちゃんにちょっかいかけようとしたことは不問にさせてもらうよ。」
「なんか色々あったみたいだけど、私達の為に捜索に加わってくれたのよね？そこの所はお礼を言わせて貰うわ。ありがとう。そして、迷惑かけてごめんなさい。」
「本当にありがとう。みんなとまた会えるきっかけを作ってくれて感謝だよ。」
「お世話になりました。それと共にご迷惑をおかけしました。」
「ありがとね。妹達を探すの手伝ってくれて。」
「まあ、色々あったみたいだけど、これで丸く収めましょ？」

そんな俺達の言葉にそいつは照れながら

「いや、俺はただ村木さんの気持ちに応えただけだから。それに、最初は怖い思いさせちゃったからな。あの時の事考えたらお礼言われるのはなんとも照れくさいもんだよ。ともあれ、無事でよかった。村木さんにとっても自分の無念の一部でも晴らせただろうしな。よし、今日は特別だ。店長に頼んでお土産安くするから是非見ていってくれよ。」

そう言ってくれる奴に俺は

「いいのか？そんな事言ってもさ？」

そう尋ねると奴は

「いいって。元はと言えばこっちが悪いんだしな。せめてもの罪滅ぼしさ。」

そう言ってくれたので俺は改めてみんなに

「だ、そうだ。ここは彼の気持に報いるために土産物見て行ってやろうぜ？」

俺の言葉に皆が頷くと、それぞれに物色を開始したのだった。

俺はゆたか達の所へ行くと

「ゆたか、みなみ、ひより、パティ。色々あったけど、改めてあいつの事許してやってくれるか？あいつも反省してるみたいだしさ。」

そう言うと４人とも頷いて

「大丈夫ですよ、先輩。私はもうとっくに許してますから。おねえちゃんを探してくれたんですし。」

「・・・私もです。もう水に流そうと思います・・・。」

「私ももう気にしてないっスよ？あの人悪い人じゃなさそうですからね。」

「これぞアメフってヂ、カタマルってヤツですネ。せっかくのコウイデス。タノシませてもらいますヨ？」

そう言ってくれる４人に俺もほっとしていたのだった。

「慶一君ー！ちょっとこっち来てー！」

すると間髪いれずに俺を呼ぶこなたに苦笑しつつも

「待ってろ、今そっちいくから。」

そう言って俺はこなた達の方へ向かった。

「で？俺を呼びつけて何か用か？」

そう尋ねる俺にこなた達はお土産に選ぼうと思っているキーホルダーを数種類俺に見せて

「うん。実はこれなんだけどさ、どれが良いか慶一君の意見を聞きたいと思ってね。」

「色々迷っちゃったから、あんたに選んで欲しいかな？ってね。」

「わたしもちょっと迷ってるからけいちゃんに選んで欲しいな。」

「是非ご意見をお伺いしたいですね。」

そう言ってこなた達が俺に見せてきたキーホルダーはいくつかの種類の水晶でかたどってあるものだった。

俺はそれをまじまじと見ながらそれぞれにあいそうなデザインの物を選んでみた。

こなたには星の形をデザインしたものを、かがみとつかさには紫に輝く水晶を、みゆきには鳥の形をかたどった水晶のキーホルダーをそれぞれ選んだのだった。

そして俺は自分の選んだキーホルダーを４人に手渡すと

「こんな所でどうだ？まあ、俺のセンスなんてそんなにいいって訳じゃないけどな。」

そう言ったのだが、４人は俺の選んだキーホルダーに見入っていて、そして、少し頬を赤く染めた後

「ありがとう、慶一君。これ買ってくるね？」
「ま、まあ、あんたにしてはいいデザインの奴を選んだわよね。私も買ってくるわ。」
「ありがとう、けいちゃん。わたし大事にするよ。」
「ありがとうございました。また1つ思い出ができました。私も買ってきますね？」

そう言って4人はレジへ俺の選んだキーホルダーを買いに向かったのだった。

それを見届けていると、俺の後ろから

「先輩ー。泉先輩達だけでなく、私たちのも選んでくださいよー。」
「・・・ね、ねえ先輩・・・これはどうかしら・・・。」

そう言ってくるこうとやまとの手に持ってる土産物を見て俺は軽いため息をつきつつも選んでやると、2人とも喜びながらレジへとお土産を買う為に向かった。

同じようにみさおとあやのもやってきて同じように俺に選んで欲しいと言い、ゆたか達もまた俺に選択権を託しつつお土産を選んでいた。

それにしても驚いたのは、こうはペナントを探していたようだったのだけど、やまとがTシャツを持って来た事が特に驚きだった。

土産物屋を後にした時、こっそりやまとにさっきのTシャツの事について聞いてみようと思ったので声をかけてみた。

「なあ、やまと。お前それ、普段着ようとか考えてはいないよな？」

俺はやまとは普段これは着ないだろうと言う淡い期待を込めてやまとにそう尋ねてみたのだが、やまとから貰った答えは

「え？普通に着るわよ？何か変かしら？」

俺の期待を裏切るものだった。

ちなみにやまとの選んだTシャツは胸の部分に大きく”箱根”の二文字が書かれているだけのなんというかシュールなデザインだったのだが、やまとは妙にそれが気に入ってるようだった。

そして俺はそんなやまとの姿を想像した時、大きなため息を1つついたのだった。

そんな俺を見るやまとは頭にハテナマークを飛ばしていた。

中学時代からそうだったのだが、やまとは土産物の選択に関して、普通の子とは少しずれた物を選ぶ事があった。

実際に中学時代に行った修学旅行でも何故か木刀を買っていくという事をやって俺達を困惑させていた事もあった位だし。

だからこそ今回もやまとがそんなシュールなお土産を選んだ事を受けて俺とこうは中学時代を思い出して苦笑していたのだった。

その後、温泉街を散策していると、今度は村木達と出会った。

「よう、森村。大人数で大変そうだな。でも、行方不明だった4人が見つかってよかったな。」

そう声をかけてきたので俺は

「ああ。それもこれも、お前らがこいつらの捜索に協力してくれたおかげだ。改めて感謝するよ。」

俺がそう言うと、こなた達も改めて村木達に礼を言っていた。

突然にこなた達やそれ以外の人間達からも礼を言われた村木は少し面食らいながらもなんだか照れているようだった。

そして、改めて俺達に向き直ると

「えっと・・・小早川さん、岩崎さん、田村さん、それに、パトリシアさんだったね?あの時はすまなかった。君達に怖い思いをさせてしまって申し訳ない。この事は一度謝りたいと思っていたんだ。本当にすまなかった。」

それと同時に取り巻きの2人もまたゆたかたちに謝罪をしていた。

そんな3人にゆたか達もこなた達を見つけるために協力してくれたのだから、と3人の事を許したようだった。

その後は俺達に迷惑をかけたお詫びと称して地元の人もあまり知らない観光スポット等に案内してくれた。

そうやって触れ合っていくうちに俺達は村木達とも打ち解けていったのだった。

そして、今日の予定を済ませて旅館に戻る時、村木は俺に

「森村。お前らに危害を加えようとした俺がこんな事を言う義理じゃない事は分かってる。けど、俺はお前の事が気に入った。だから、俺の友人となってはくれないだろうか？」

そう言ってきた。

俺はその言葉に少し考える仕草をしたが、村木に手を差し伸べると

「色々あったけど、俺もお前みたいなライバルが居るなら張り合いもある。こちらこそよろしく、だ、村木。またここには遊びに来ることもあるだろうからその時にはまたお互いの実力を競いあおう。」

そう言う俺に、村木も手を差し出して来て俺達はがっちりと握手を交わしたのだった。

こうして、最初のトラブルこそあったが、ここに俺の新たな友が出来たのだった。

村木との友の契りを交わした俺はいずれまたするであろう再会を約束して旅館へと戻り、夕食を済ませる前に各々旅館備え付けの温泉へと行ってのんびりとしているようだった。

俺もまた、同じように温泉に浸かってのんびりした後部屋に戻ったが、まだ龍兄も戻って来てないし、鍵は龍兄に預けてあるという事もあり、部屋に帰れないので仕方なく例の場所へ行こうと思い、そちらへと足を向けた。

そして、その場所へ向かう途中で俺はやまとと廊下で鉢合わせた。

「あ、先輩。これからどこかへ行くの？」

そう聞いてくるやまとに俺は頷いて

「ああ。部屋の鍵を龍兄が持っているから部屋にも帰れないんでな、あの場所へ行ってすこし涼みがてら時間でも潰そうかと思ってな。」

そう説明すると、やまとはちょっと考え込む仕草をしていたが俺の方に顔を向けると

「・・・なら、私も一緒に行ってもいいかしら？こうもまだ戻らないし、少し暇を持て余していた所なのよ。」

そう言って来たので俺は

「ん？なら一緒に行くか？」

そう持ちかけるとやまとも頷いて

「ええ。それじゃ先輩？エスコートをお願いするわ。」

やまと特有の薄い微笑みを俺に向けながらそう言うやまとに俺も少しだけ大げさに

「ははーっ。かしこまりましてございます、姫。」

まるで召使のようにうやうやしく頭を下げて手を出す俺にやまとは顔を赤くして慌てながら

「ちょ！ちょっと、先輩！は、恥ずかしいからやめてよ・・・。そ

れに姫って何なのよ・・・。」

最後の方は小声で俺に抗議するやまとに俺も苦笑しながらも

「はは。ちょっとだけおどけてみた。ま、とにかく行くか。」

そう俺が言うと、やまともはっと我に帰って

「そ、そうね。こうしていてもしょうがないわ。それじゃ、行きましょ？先輩。」

そう言って俺の後ろからついてくるやまとだった。

そして、屋上へ辿り着くと俺はドアを開けて外に出る。

そんな俺にやまとも続くのだった。

俺は空を見上げながら

「ほら、やまと。上見てみろ。今日もいい星空だ。」

そう促すとやまとも空を見上げて

「・・・本当・・・凄い眺めね・・・ねえ、先輩。陵桜に来てから私達、色々あったわね・・・。」

星を見ながらやまとは俺にそう切り出してきた。

俺もそんなやまとに頷きながら

「ああ、そうだな・・・。最初は俺とこうだけが知り合いのはずだった。けど、何故かフィオリナへ行くはずのお前が来て・・・こなた達と友達になって・・・さらに、ゆたかやみなみ、ひより、パティの俺達とは直接の繋がりのない奴とも気付いたら仲間になってたな。そしてその輪は今もなお広がっていってる。」

そんな俺の言葉にやまとは

「・・・そうね・・・先輩？私達は高校に上がっても・・・ずっとこの3人でやっていくのかもしれない、そう思ったわ。たぶんこうも、そして私も・・・先輩とはそう簡単に離れられないかもしれない、って最近は思うようになったわ・・・。それだけ先輩との付き合いは・・・先輩の存在は・・・私にとってもとても居心地のいいものになってる。この居心地の良さを知ってしまったら・・・たぶん離れられない、そう思うから・・・。」

俺はそんなやまとの言葉に照れながら

「はは・・・俺の事をそんな風に思ってくれるのは嬉しいが、やっぱり照れるな・・・。けどな、やまと。俺もお前と同じだ。今のこの場所に・・・俺は居心地のよさを感じてしまった。俺もまたお前と同じようにこの居心地のいい場所を手放す事は難しいだろうな・・・。」

そして俺は少し間を置いた後

「なあ、やまと。」

俺の言葉にやまとも

「何？先輩。」

そう返すやまとに俺は

「これから先、後どのくらいこの場所に居られるのかは分からない。けど、行ける所まで・・・居られるところまで居てみようと思ってる。やまとはどうだ？」

俺がそう聞くとやまとは再び空を見上げながら

「私も先輩と同じかな・・・どこまで居れるのかわからない・・・けど・・・しがみつく理由はある、そう思えるから・・・私も皆や先輩と一緒に・・・行ける所まで行ってみたいわ・・・。」

そんなやまとの言葉を聞いて俺も1つ頷くと

「・・・なら、行ってみるとしようか・・・。この先に何が待っているのかはわからないけど・・・どんな結末があるかはわからないけど・・・皆と一緒に・・・最後まで行ってみよう。」

そんな俺の言葉に

「大丈夫だよ。私達ならきっと行けるよ。」

「今更簡単に切れる程度の絆じゃないつもりよ？」

「みんなそう思ってるからきっと大丈夫だよ。」

「私は最後まで皆さんと歩きたいです。」

「だってそれが私達のつながりだもんね。」

「私は微塵も疑っちゃいねーゼ？」

「私も先輩達と一緒に突き進みたいですね。」

「私もです。こなたおねえちゃんや皆さんと一緒に。」

「・・・私も・・・みなさんの仲間ですよね・・・？」
「ここまで来て仲間外れはないっスよ？」
「ソーデス！そのトオリですヨ！ワタシもフレンドですから。ファミリーですからネ？」
「まあ、その為にもお前は頑張らなきゃいけないがな？慶一。」
「まあ、森村君や皆なら大丈夫でしょ？」
「うーん、青春だね。友達だね、仲間だねー！！」

と、何時の間にか来て居たみんなにそう声をかけられて驚く俺達だった。

そして、俺とやまとは顔を見合わせて笑いあうと

「んじゃ、皆にはこれからも付き合ってもらわくっちゃな。よろしく頼むぜ？みんな。」
「・・・仕方ないからこれからも付き合っていくわ。みんな、よろしく。」

そう言う俺達にみんなも笑って頷いてくれたのだった。

1年を振り返って見て改めて思う自分の居場所。

そして、それをみんなが俺に、そしてやまとに与えてくれたようだった。

俺もやまともその居場所の心地よさを知ってしまった。

この誘惑はまさに逃れ難い物だった。

だからこそ、俺は俺の居場所を守る為に改めて皆と共に歩もうと心

に刻んだのだった。

明日で旅行も終わりとなる。

けれど最後まで楽しみたい、そして、いつまでもこの思い出を忘れずにいたいものだと強く思う俺だった。

思い出作りの旅律～箱根温泉旅行４日目～（後書き）

後２話で２年生編終了予定です。
３年生編になってますます賑やかになる変わる日常をどうぞよろしくお願いします。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行最終日と2年生編エピローグ～（前書き）

変わる日常2年生編ついに完結です。
それに伴い、タイトルの変更をしました。
活動報告にコメントを寄せてくださった皆さん、どうもありがとうございました。
少しだけタイトルを変えて、変わる日常はこのまま突っ走るつもりです！
それでは本編をどうぞ。

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行最終日と2年生編エピローグ～

温泉巡りによる前日の疲労回復、そして、次の日には市内の観光や土産物屋巡り、さらには新たなツーショット写真の撮影など、その日1日で出来る限りの事をやって、思い出を作れたと思う。

そんな中で初日にゆたか達にちょっかいをかけていた村木一派と出会うが、お互いに許しあい、俺達は打ち解ける事ができた。

そして、最後には俺は村木とライバルと共に友人関係になり、ここに俺の新たな友が誕生した。

その後、温泉でのんびりした後に俺は部屋に戻ろうとしたが部屋の鍵を持った龍兄がまだ部屋に戻っていないようだったので、例の場所で時間を潰そうとした時に同じように暇を持て余していたやまと出会った。

例の場所でやまとと2人、陵桜に来た頃の事を思い出した俺は、やまとと共にこの先の事を話していたが、何時の間にか集まっていた皆に俺達の話を聞かれつつも、みんなもまたこの居心地のいい場所を守っていける所まで行きたいとそう誓いあった俺達だった。

そんな1夜も明けて早朝、俺はいつもより少し早めに目を覚ました。

今日は昼頃には旅館を発つ予定でもあったので、俺は最後にもう一回あの秘湯に行っておこうと思い、出かける準備をすますと、龍兄を起こさないように部屋を出る。

そして、すでにフロントで朝の準備を始めていた叔父に出かける旨

を伝えると、俺は一路あの秘湯を目指した。

秘湯に着いた俺はとりあえず周りを確認すると、水着に着替えて見晴らしの一番良いポイントに行って湯に浸かった。

しばらくのんびりと風景を眺めながら俺はこれまでの事を思い出していた。

（あれから1年か・・・あの時には俺は自分の周りがこんなにも騒がしく、そして楽しくなるなんて考えもしていなかったよな・・・。何しろ最初の1年目はこなた達とさえ知り合っていたけど、話すらしてなかったんだもんな・・・。でも、やっぱり最初のきっかけは・・・こなたにコロネあげた事、だったんだろうな・・・。あの時から・・・俺の日常は変わった・・・。俺にとって素晴らしく・・・俺にとってかけがえなく・・・俺にとって大事な仲間達・・・皆との出会いは・・・俺を幸せにしてくれた・・・。時には泣いて・・・時には笑って・・・時には喜んで・・・時には共に苦しんで・・・きっと俺は・・・こんな幸せが欲しかったのかもしれないな・・・でも・・・。）

そこまで考えた後俺は無意識に声を出していたようだった。

「・・・俺は・・・幸せでいいんだろうか・・・？」

そう呟きを漏らした時、俺に声をかける者がいた。

「・・・今まで苦労してきたんだもの・・・いいんじゃない？幸せで・・・。」

その声に驚いて俺は声のしたほうを振り向くと、そこにはいつのま

にか水着を着てやってきていたやまとが居た。

「や、やまと？お前いつからここに・・・？」

俺は驚きながらやまとに尋ねると、やまとは少し照れながら

「ちょっと前に、かしら。一昨日いったこの温泉が気持ちよかったから帰る前にもう一回行っておこうと思って来たのよ。そうしたら先輩が居て何か考え事してるみたいだったから、つい声をかけちゃった、という訳。」

そう説明するやまとに俺はとりあえず心を落ち着けて

「そういう事だったか。お前がそう思うっていうのならよっぽどここはお前にも合ってたんだな。」

そう言う俺にやまとも頷きながら

「そうね。初めて入った温泉なのに何故か気に入ってしまったのよ。とりあえず私も立っているのもなんだから浸からせてもらうわ。」

そう言うとやまとはそっと俺の側に近寄ってきて俺の隣にゆっくりと腰を落ち着けた。

「ふう・・・いいお湯ね・・・。先輩は昔はここで傷を癒したりしてたのね？」

そう尋ねてくるやまとに俺も頷いて

「まあな。でも、ここでの修行はそう長い期間はやっていなかった

んだ。元々はこの前に連れて行った海の方にある合宿所がメインだったからな。こっちはいわば草薙との交流も兼ねての一時的な物だったのさ。」

俺の言葉にやまとは納得が行ったような表情で

「そういう事だったのね。でも、龍也さんは違うの？元はここは龍也さんが見つけたんでしょう？」

そう聞いてくるやまとに俺は

「ああ、その通りさ。ただ、俺とは違い、龍兄は正当伝承者としての使命があったのと、龍兄の父親がここの出身でもあった。だから、ここは龍兄にとっての故郷みたいなもんでもあり、地元みたいなものでもあり、って所だったんだ。」

そう答えると、やまとは納得してくれたようだった。

「そういう事だったのね・・・・・。先輩、話は変わるのだけど、さっき先輩が言った事について聞きたいわ。”俺は幸せでいいんだろうか？”ってどういう意味なの？」

そのやまとの問いかけに俺は苦笑しながら

「はは・・・その言葉聞かれちゃってたのか・・・。俺はさ・・・色々不幸あったからな。お前らと出会って変わる事が出来たけど、それだけでも十分幸せだと思ってた。そんな俺に、さらにこなた達までもが俺に更なる幸せをくれた。その事自体は嬉しいんだ・・・けどさ・・・なんだか、いいのかなあ？って思っちゃってな。俺ばっかりが皆から幸せを貰ってる。けれど、俺は皆に何も返せては居

ないんじゃないか、って思ったら、どうにも不安になってしまってな。だから、ついあんな独り言を言ってしまったんだ。」

そんな俺の言葉をじっと俺を見つめながら聞いていたやまとだったが、少し考えた後、やまとは俺の頭に拳骨を落としてきた。

「あいたっ！や、やまと？いきなり何を・・・。」

軽く抗議する俺をやまとは睨みつけながら

「・・・先輩は何も分かってない・・・。自分ばかりが幸せを貰ってるって？私達に何も返せてないって？冗談言わないでよ！先輩に助けてもらったあの時から今まで、私は先輩に多くのものを貰ってきたわ！そして、それは私にとって、皆にとってもかけがえのない、何者にも変えられない幸せなのよ？私だけじゃないわ！泉先輩達だって、小早川さん達だって、そして、みくさん達も皆、先輩から幸せの種をもらってる。私達だって十分すぎるものを先輩からもらった！ちゃんと返せているわよ！皆その事をわかってるんだから、そんな風に言わないで！むしろその言葉は私達にも失礼よ！？」

そんな剣幕でまくし立てるやまとに俺はあっけにとられつつも俺はやまとのその言葉に思わず涙を流しながら

「・・・ごめん、やまと。お前の言う通りだ・・・俺は、思い違いをしていたんだな・・・。」

俺のそんな言葉に声をかける者が居た。

「その通りよ？見くびってもらっちゃ困るわ。」

「私は慶一さんにこれまでも色々な物をいただきました。それは私

にとってもかけがえのない財産でもあるんですよ?」
「慶ちゃんはそんな私達の言葉を信じられない?」
「先輩のおかげで私は陵桜受験にもはずみがつけられましたよ?私に力をくれた先輩に私も私の出来る事で応えたいです。」
「・・・幸せを教えてくれたのは先輩です・・・。ゆたかという友達も先輩がくれました・・・些細な事ですが・・・私は幸せをもらっています・・・。」

そんなかがみ達の言葉を聞きながら、そして皆がここにいる事に驚きつつ

「・・・みんな、ありがとう・・・は、いいんだが、何で皆もここに?」

一応感謝の言葉をかけつつもとりあえず尋ねてみる俺だったが、6人は俺にやまとと同じ理由を説明してくれた。

「そっか。朝食まではまだ時間もある。もう少しゆっくりしていくか。」

その言葉にかがみ達は笑って頷いてくれた。

俺はふと気になった事があるので皆に

「なあ?つかさやこなた、みさお、こう、ひより、パティはどうしたんだ?」

そう尋ねると俺の質問にかがみとやまととゆたかが答えてくれた。

「こなたとつかさはまだ寝てるわ。あいつらも帰る前にもう一回行

っておきたいって言ってたのに結局寝坊したみたいね。」
「みさちゃんもまだ眠ってたわね。一応書き置きは置いて来たけどね。」
「こうも部屋を抜け出てくる時にはまだ寝ていたわ。」
「田村さんとパティちゃんもですね。起こすのも可愛そうだったので私達だけできちゃいました。」

そんな3人の言葉に俺は苦笑しつつ

「そういう事か・・・でも、帰るまでに時間あるなら来ればいいだろう。ともあれ、もう少しゆっくりしたら戻ろうぜ?朝食終えたら帰る準備だ。皆、忘れ物だけはしないようにな。」

そう言う俺に頷くみんなだった。

そして、もう少し談笑しようとした時、凄い勢いで温泉に突っ込んでくる影が見えたので俺は驚いてそちらを凝視すると、そこには息を切らせたこなた達が居たのだった。

「はあ、はあ、ま、間に合ったー・・・。酷いよかがみ、私達の事置いてくなんてさー・・・。」
「はあ、はあ、はあ・・・こなちゃん・・・もう・・・走れないよ・・・。」
「だらしねえなー、柊妹。でももう着いたから大丈夫だぞ?」

そんな3人にかがみが呆れたように

「起こそうとしても起きないあんたらが悪いんでしょうが!とにかく一息ついたならゆっくりしなさいよ。」

そう突っ込みを入れた後、とりあえず休めと言うかがみだった。

「やまと、置いてきぼりは酷いよ。」

そう言うこうにやまとは

「自業自得よ。一応私はあなたを起こそうとはしたわ。でも起きなかったんじゃない。」

こうに突っ込みをいれると、やまとの言葉に凹むこうだった。

「うあー・・・しんど・・・。」

「ヒヨリン、ファイト、ですヨ?このテイドでヘバっていてアリアケでタタカえますカ!?」

そんな2人にゆたかとみなみは苦笑しながら

「あはは・・・おはよう、田村さん、パティちゃん。」

「・・・お疲れ様、2人とも・・・ゆっくりするといいよ・・・?」

そう言っていたわってあげていたのだった。

俺はこの場に龍兄とまつりさん、いのりさんの姿が見えない事に気付いて

「こう、やまと。まつりさんといのりさんはどうしたんだ?」

そう尋ねると、やまとが

「私が出てくる時にはまだ寝ていたわね。でも、あれから少し時間

が経っているし、そろそろ起きていても不思議はないかもしれないわね。」

そう言っていたが、後発できたこうが

「私が起きた時にはすでに起きてたみたいですよ？出てくる時に会いましたし、龍也さんと後でここに来るって言ってましたから。」

その言葉に俺は少し考え込みつつ

「うーん、ひょっとしたら龍兄は俺達に気を使ってくれたのかもしれないな。旅の最後の日だし、俺達だけにしてくれたんじゃないかな？」

そう言うと、こなたが

「そっかー。それじゃ残り時間はあまりないかもだけど、少しの時間でも一緒に居ようよ。みんなでさー。」

その言葉に俺達はお互いに頷きあうと

「そうするか、と言いたいが、俺は少し湯船から体出させてもらうぞ？俺とやまとは一番長く浸かってたから下手したらのぼせてしまうよ。」

俺の言葉にやまとも頷いて

「そうね。正直浸かってる時間長かったからそろそろ辛くなってきてたし。まあ、足は湯につけたままでいいかもしれないわね。」

そう言うと、こなた達も納得してくれたようだった。

そして、朝食のはじまる時間ギリギリまで俺達は旅の事や今までの事を話し合った。

俺にとってその時間もまた、凄く充実した時間となった。

そうして納得の行く所まで話し込んだ俺達は旅館に戻って朝食をとった後、部屋に戻って帰りの準備をしつつ忘れ物等がないかどうか荷物の確認をしていた。

しばらくそうしていると、フロントから俺宛に呼び出しがあった。

俺は内線の受話器を取ると

「もしもし、慶一か？フロントに村木君が来ている。慶一を呼んで欲しいという事だ。」

そう言ってくる叔父に俺は

「村木が？わかりました。すぐに行きますので。」

そう言って俺は受話器を置くと、部屋を出てフロントに向かった。

俺の姿を確認した村木は

「よう、森村。悪かったな。急に呼び出したりして。」

そう言ってくる村木に俺は

「構わないさ。帰る準備もあらかた済んだしな。それで？俺に何か用か？」

そう尋ねると、村木は取り巻き連中を呼んで、そいつらの持っていた物を受け取ると俺に

「これは俺達からの餞別だ。３日前のお詫びとしてはちょっと不足かもだが、俺達の気持ちだ。受け取って小早川さん達に渡してくれたらありがたい。」

そう言って俺にあの時のお詫びと称して土産物らしいものを俺に渡して来た。

俺はそれを受け取ると

「ありがとう、村木。でも、いいのか？」

俺のその言葉に村木は笑いながら

「構わないさ。お前らとはちゃんと詫びて仲直りをしたい、そう思ってたからな。それに最初にあの子達に怖い思いをさせたの俺達だ。それに対するけじめだけはつけないと俺が納得できないからな。」

俺はそんな村木の言葉に

「そうか。お前の詫びの気持は受け取った。なあ、ゆたか、みなみ、ひより、パティ。」

そう返事をしつつ、俺はこっそり呼んでおいた４人の名前を呼ぶと４人は俺達の所へやってきて

「はい！あの時は驚きましたけど、私はあなたの事はもう許していますから。」
「・・・先輩との戦いはひやひやしましたが・・・今は先輩の友人であるのなら私はそんな人を憎む気にはなれません・・・。」
「その後には泉先輩達の捜索にも手を貸していただいたんスから十分村木さんは罪を償ってますよ。」
「ムラキがケイイチのフレンドなら、ワタシにとってもフレンドですヨ？デスからワタシはもうキニしていまセン！」

突然やってきた４人と共にそんな４人からかけられた言葉に驚いた村木だったが、４人に再び頭を下げると

「ありがとう。怖い思いさせてごめんな。森村にお詫びのしるしを託したから後で受け取って欲しい。」

そんな村木に４人は困惑していたが、俺が村木の気持ちを汲んでやって欲しいと言うと４人とも頷いてくれたのだった。

「・・・ともあれ、一時のお別れだな。また来いよ？森村。ここはいい所だからな。」

俺はそんな村木に

「ああ。また遊びに来させてもらうよ。ここでの数日の事、忘れないぜ？信也。」

そう言って俺は村木の事を下の名前で呼ぶと、信也は驚いたような表情を見せていたがやがて笑顔になって

「ふっ。最後の最後でしてやられたな。俺もだぜ？お前みたいな強い奴の事は忘れない。だから、また遊びに来いよ？慶一。」

俺の言葉に答えて信也もまた俺を名前で呼んでくれたのを受けて、俺もまた満面の笑顔を返す。

そんな光景を見ていたみんなもつられるように笑顔となっていたのだった。

そして、俺は信也とがっちりと握手を交わすと、再会を約束しあって部屋に戻った。

部屋に戻って帰る準備を済ませた俺はそろそろ駅へと向かう時間となったので部屋をでた。

そして、フロントでチェックアウトを済ませた俺達は駅へ向かう送迎バスに乗り込んだ。

駅に辿り着いた俺達は叔父にこの４日間の礼を言うと、電車に乗り込み、箱根を後にする。

電車の中で俺達は今回の旅の事を話していた。

「楽しかったねー。ちょっとハプニングもあったけど、いい旅行だったよー。」

「ハプニングという言葉は痛いわね・・・実際洒落じゃすまない所だったし・・・でも楽しかったな。」

「この旅行を通してまた皆との絆も強くなった気がするよね。」

「そうですね。とても充実した旅行でした。」

「慶ちゃんにはまた何か企画してもらいたいわね。もっともっと思

い出が欲しいな、って思うし。」
「だよなー。私らの楽しい時間は後1年しかねえもんな・・・もっともっと楽しい事したいぜ！」
「日下部先輩、弱気になってませんか？私達は望むなら出来るってこの前確認しあったばかりじゃないですか？」
「そうね。その思いがあればまた色々な事も出来るはずよ。」
「もっともっとみんなと一緒に色々な事やっていきたいよね。ねえ、みなみちゃん。」
「・・・そうだね・・・。だから信じよう・・・先輩の言ってくれた事・・・。」
「私達ならできるはずっスからね。その為にもまずは入学式を終えて先輩達の前に立たないと。」
「タノシイジカンをツクルのはワタシタチのツヨイオモイでどうにでもデキルはずデス。だからワタシはジカンのユルスカギリみんなとタノシンデいくつもりですヨ？」

そんなパティの言葉に皆も頷いてそして俺も

「それが俺達が共通して願う事ならきっと出来る。だから俺も俺の出来る限りでみんなとやっていくさ。」

そんな俺の言葉に皆の顔にも決意のようなものが見えた気がした。

そんな皆の決意を感じながら家路に着く俺。

こうして2年生最後の思い出作りの旅行は幕を閉じる事となった。

2年生編、エピローグ・・・・・・

その後家に着いて、俺は荷物の整理をしていたのだが、俺の携帯に

数件の着信が入る事となった。

着信は、泉家、柊家、高良家からのもので、どうやら今回の旅行でおきた遭難事件をこなた達は親に報告したのだろう。

娘達を救ってくれた事に対するお礼の言葉をもらう事となった。

そして、俺は次の日、お墓に供える為の花を買い込んでこなたとの待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所でかがみたちと合流したが、こんな時でも遅れて来るこなたに俺は苦笑していたものの、とりあえず全員が揃ったので俺達はかなたさんのお墓へと向かったのだった。

今回はそうじろうさんも一緒に来てくれたので、泉親子を伴ってかなたさんのお墓へと歩みを進めた。

そして、かなたさんのお墓に着いた俺達は、お墓の周りを綺麗にしたり、水を取り替えて花を供えたりという事をやってお墓に向かって手を合わせていた。

「・・・かなた。ありがとうな？お前が森村君を導いてくれたおかげでこなたも無事だった。今回の事でお前がいつでもこなたの事を見守っているんだ、という事がわかっただけで嬉しいもんだ。もちろんこなたが無事に帰って来てくれた事もそうだけどな。かなた、みんなこうしてお前に感謝する為にやってきてくれたよ。俺も嬉しいが、お前もきっと嬉しいよな？なあ、かなた。」

そうやってお墓に語りかけるそうじろうさんの言葉を俺達は黙って聞いていた。

そしてその後にこなたも

「お母さん。私を助けてくれてありがとう。私は今とても素晴らしい仲間達と一緒にいるよ?今まではおとーさんと2人で少しだけ寂しい思いをした事もあったけど、今はそんな事ないからさ。だから安心してよね?ほら、見える?お母さん。私たちの後ろにいる人達が私の大切な仲間だよ?これからも私はみんなと一緒に頑張っていくから、だから、安心して見守っていてね?お母さん、私はお母さんを誇りに思うよ?」

そう語りかけるこなたの姿を見ながら俺もまた心の中で

(かなたさん。こなたにはきっと、俺達が寂しい思いをさせないようにします。それと共に改めてあの時はこなた達を救う手助けをしてもらえた事、とてもありがたく思っていますよ。安心してください。俺達はずっと、こなたの側にいてやるつもりですから。それが、俺にとってのあいつへの恩返しでもあるんですから・・・。)

そう考えるのだった。

そして、墓参りから戻った俺は新学期へ向けての準備を済ます事となった。

明日には学校が始まる。

俺はパティに明日に支障の出ない程度にゲームやアニメを切り上げておけ、釘を刺しながら明日からの新たな学校生活に思いを馳せるのだった。

らき☆すた～変わる日常、２年生編～　完

思い出作りの旋律～箱根温泉旅行最終日と2年生編エピローグ～（後書き）

2年生編完結でこのまま3年生編へ突入していく事になります。
これからも変わる日常をどうぞよろしく。

新たな始まりの旋律達～始まる1年、加わる仲間達～（前書き）

ここから3年生編のスタートとなります。
高校生編では後1年となりますが、これからもよろしくお付き合いの程を。
それでは本編をどうぞ。

新たな始まりの旋律達～始まる1年、加わる仲間達～

2年生最後の旅行を終えて、旅行中に起きたこなた達遭難事件の際に出会ったかなたさんへのお礼をするためにお墓参りをした俺達。

様々な思いを胸に、俺達はこの1年間を終えた。

そして、新たな思いと、これからの生活に思いを馳せて、俺は新たな1年の始まりの日を迎えたのだった。

パティには今日の日に寝坊されても困ると思った俺は、アニメやゲームは程々にしておけと釘をさしておいたのだが、なんだかそれでも不安になった俺は、一応パティを起こそうと思い、部屋へと訪れたのだった。

パティの部屋の前に着いた俺はドアをノックしながら声をかけてみる。

「おーい！パティ、そろそろ起きておかないと学校に間に合わないぞー！？」

そう言って少し様子を見るためにその場で待っていると、部屋のドアが開いてすでに着替えも済ませたパティが現れた。

「グッモーニン、ケイイチ！キョウからシンガッキですネ。アタラしいセイカツ、ガンバっていきまショウ！」

そう言って満面の笑顔を見せるパティを見て、俺も笑顔で返しつつ

「ん。初日にちゃんと起きれたならえらいぞ？パティ。そうだな。今日からまた新しい1年のスタートだな、もっとも、俺にとっては高校生としての最後の1年だけどな。」

そう言う俺にパティは少しだけ寂しそうな表情を見せながら

「ケイイチにとってはそうなんでしたネ・・・。セッカクケイイチとデアって、ミンナともデアって、これからもっとタノシイコトしたいとオモイましたが、アトイチネンしかイッショにスゴせないのはスコしだけサビしいですネ・・・。」

そんなパティの頭に手をぽんと乗せると

「それも仕方のない事さ。俺の方がお前よりも少しだけ早く生まれたからこそこうなったんだ。これもまた運命という奴さ。でもな？確かに学校は後1年しか居られないが、俺達自身の付き合いはその後もずっと続いていく、そう思ってるからな。だから、寂しくなんかないさ。それともパティは俺達との付き合いを後1年で終わらせたいか？」

俺の言葉にパティは首を振って

「オワらせたくはアリマセンですヨ？そんなのはトーゼンデース！」

そう答えるパティに俺は頷いて

「なら、寂しいと思う必要はないよ。俺達ならずっと、固い絆で繋がっているんだからな。それがわかったなら、飯にしよう。」

そう言うとパティも満面の笑みで頷いてくれたのだった。

そして、俺達は朝食を済ませて、余裕の時間をもって家を出る。

「いってきまーす！！」
「イッテキマース！！」

2人してそう言うと、俺達は意気揚揚と家を出たのだった。

そして、いつもの電車、いつもの時間でかがみとつかさ、こなたと合流する。

「おはよう、かがみ、つかさ、こなた。今日からまた新しい1年だな。今年も色々あると思うけど、よろしくな？」
「グッモーニン！カガミ、ツカサ、コナタ！キョウからヨロシクデス！！」
「おはようー。慶一君、かがみ、つかさ、パティ。今日からまた1年よろしくね？」
「おはよう、慶一くん、こなた、パトリシアさん。今日からよろしく。」
「おはよう～、けいちゃん、こなちゃん、パトリシアさん。わたしこそよろしくね～？」

そうやって挨拶を交わした俺達は初日から雑談をしつつ、学校へと向かったのだった。

「おはようございます。慶一さん、泉さん、かがみさん、つかささん、パトリシアさん。今日からまた1年間よろしくお願いしますね？」
「おはよう、慶ちゃん、泉ちゃん、柊ちゃん、妹ちゃん、パトリシアさん。」

「おはよー、慶一、ちびっ子、柊、柊妹、パトリシア。」
「おはようございます、先輩達、それとパティ。」
「おはよう、先輩達、パトリシアさん。」

俺達を校門の前で待っていてくれた5人が俺達に挨拶をしてくれた。

俺はみゆき達に

「おはよう、みゆき、あやの、みさお、こう、やまと。今日からまたよろしくな?」

俺の挨拶を受けて笑顔で応える皆、その挨拶を皮切りに他の皆も挨拶を交わしていた。

そして、そんな様子を見ながら俺は桜の舞散る校庭に目をやった。

俺は1つ深呼吸をした後、ゆっくりとクラス分けの掲示板があるところへと歩き始める。

そして、そんな俺について来る皆を横目に見ながら俺は1年前のあの日の事を思い出していた。

あの時の俺と今の俺とでは違う所がある。

1つはあの時俺はクラス分けの掲示板を見に行った時、1人きりだったが、今の俺は俺の周りを囲んで楽しく話しているこなた達が居る事。

そして、2つ目はあの時には本来ならこの学校に来るはずのなかったやまとが、今この場で皆と一緒にいるという事。

3つ目は、俺とこなた達の関係は、もう、知り合い程度の間柄ではなくなっていて、固い絆で繋がった仲間になっているという事。

そして、最後の1つは、期せずしてこの学校へと受験をする事になり、見事に合格を果たした新たな仲間達がこの学校へ来るという事、だった。

俺はそんな1年前の事を懐かしく思いながら、そして、これから始まる新しい学校生活の事に思いを巡らせながら掲示板の近くまでやってきた。

そして、まずは俺自身が自分のクラスを確かめに行く。

クラスを確かめて見ると、俺は3年B組に在籍されていた。

俺が自分のクラスを確かめて戻って来ると、こなたが俺に

「ねえねえ、慶一くん。今年はクラスはどうだったの？」

そう訊ねて来たので、俺は今確かめてきたクラスをこなたに報告すると、こなたは

「そっかー・・・私も、今度は一緒のクラスになりたいよ。ちょっと私も確認しにいってみるね？」

そう言ってこなたは自分のクラスを確認する為に掲示板の人だかりを掻き分けてクラス分けを見に行ったのだった。

そして、自分のクラスを確認し終わったこなたは俺達の所へ戻って

来て

「やったー！今年は慶一君と一緒だよー！！今年は退屈しないで済みそうだよ！！」

少々興奮気味で言うこなたに俺は笑みを浮かべて

「そっか。それならよかったな。今年は一緒のクラスで頑張るか。」

そう言うと、こなたも満面の笑顔で頷いてくれた。

そして、それを聞いたと同時に俺は、（あの時に校長とした約束は一応果たされているみたいだな）と心の中で思っていた。

その後はみゆきとつかさも自分のクラスを確認しに行って戻ってきた2人はとても嬉しそうに

「今年はけいちゃんと一緒だね。なんだか嬉しいな～。」

「私も一緒のクラスでした。慶一さん、今年はよろしくお願いしますね？」

と言う2人に俺も笑顔で頷いて

「ああ、こちらこそよろしくな、2人とも。楽しい1年にしようぜ？」

そう言うと2人とも笑顔で頷いてくれた。

その後、みゆきが俺に小声で

『慶一さん、あの時の約束は一応果たされているみたいですね？』

そう囁きかけてきたので俺も小声で

『うん。今の所はそうみたいだ。だが、まだ結果の出ていない３人が残ってる。それを確認するまでは安心できないぞ？』

そう告げると、みゆきは少し不安げにかがみとあやのとみさおの方を見ていたのだった。

そして、あやのとみさおもクラスの確認に行って来て、戻ってくるなり興奮気味に

「信じられない！私も慶ちゃん達と一緒のクラスだったわ！よかったー、本当に。」

「私も慶一やあやの達と一緒だ！すっげー！こんな偶然あるんだなあ！！」

という言葉を聞いて俺とみゆきは内心ほっとしつつ

「良かったな、２人とも。今年１年よろしく頼むぜ？」

「お２人とも、今年１年間よろしくお願いしますね。」

そう言うと、２人とも満面の笑顔で頷いてくれたのだった。

そして、俺は、掲示板の前にまだ行ってない奴が１人残っているのに気付いた。

俺はそいつの側に行って

「かがみ。後はお前だけだぞ？確認しなきゃならないのは。それと、覚えてるか？元旦に俺とした賭けの事をさ。」

そんな俺の言葉に俯きながらビクリと反応するかがみは

「・・・わ、わかってるわよ・・・い、今から確かめに行こうとしてるんだから、余計なプレッシャーかけないでよ・・・。」

少し弱気なかがみが俺にそう言うと俺は苦笑しながら

「はは、すまんすまん。でも、確認してこないといつまで経っても自分のクラスが分からずじまいだぞ？」

そう言う俺にかがみはさらに不安を募らせたようで

「わ、わかってるってばっ！だから、プ、プレッシャーかけないでよ、お願いだから・・・。」

ますます弱気になるかがみに俺はやれやれとジェスチャーをすると、かがみの動向を見守ったのだった。

そして、ようやく心を決めたのか、かがみはクラス分けの掲示板の所へと歩き始めた。

俺達は緊張の面持ちでその様子を伺う。

そして、覚悟を決めてかがみは掲示板を凝視したようだった。

かがみｓｉｄｅ

ついにやってきてしまったクラス分け発表の日。

慶一くんとの賭けの事も会ったのだけど、それ以上に自分が今年は皆と一緒のクラスになれるのかどうか、その事が気になって仕方なかった。

私と、2年生組み以外の全員がクラス分けを確認しおわり、私以外の3年生組が同じクラスとなっていた。

残るは私1人、それを考えた時物凄いプレッシャーを感じていた。

そして、そんな私の心の葛藤に気付かない慶一くんは私に賭けの事について確認をしてきたのを受けて、さらに緊張が高まってしまうのを感じていた。

私は心の中で

（ううー・・・緊張してきた・・・もし・・・もし私だけ違うクラスだったらどうしよう・・・そんなの・・・嫌だな・・・私も皆と一緒がいいよ・・・怖い・・・見るのが怖いよ・・・神様、どうか・・・どうか私を皆と一緒のクラスに・・・お願いします・・・。）

そう神様に祈ると、私は意を決して掲示板を見に行くのだった。

そして、壊れそうなくらい大きく心臓がドキドキいう中で、私は掲示板を見上げて自分の名前を探した。

（A組にはなし、B組・・・・・・あっ！え！？見、見間違いじゃ、ないよね？もう1度・・・あ、ある・・・やっぱり、ある・・・間違いない・・・私も、私もB組だ・・・嘘じゃないよね・・・？夢

じゃないよね・・・？）

そう考えた後私はおもむろに自分の頬をつねってみる。

「痛い！」

私に走る痛みがそれが嘘や冗談や夢じゃない事を物語っていた。

（夢じゃない！本当に・・・本当に私は・・・皆と・・・皆と同じクラスになれたのね・・・。）

クラスを確認した私は半ば放心状態でみんなの元へと戻って行くのだった。

慶一ｓｉｄｅ

クラスを確認するかがみが掲示板を見上げた後、自分の頬をつねっているのが見えた。

俺はその様子を見て、校長の約束がちゃんと果たされたのだという事を改めて思いながら、ほっと胸をなでおろしていた。

そして、少し放心状態ながらも俺達の側に戻ってきたかがみに俺は

「かがみ、結果はどうだったんだ？」

そう尋ねると、かがみはピクリと反応して俺の顔を見つめると急に涙を流し始めて

「・・・ったの・・・私の名前が・・・うっく・・・Ｂ組に・・・

ひっく・・・あったのよ・・・あったのー！！」

そう言った瞬間かがみが俺の胸に飛び込んできて泣き始めたのだった。

俺はおろおろとしつつもこの結果にほっとして泣きじゃくるかがみを黙って受け止めつつ、みゆきと顔を見合わせて笑いあったのだった。

そして、そんなかがみの様子を見てこなた達も

「よかったねー、かがみん。今年は皆一緒だー。」

「おねえちゃん、よかったね。わたしも嬉しいよ～。」

「今年は皆と一緒に過ごせるのですね？私もとても嬉しいです。」

「皆一緒で過ごす1年、楽しくなりそうね。」

「これで今年はどうどうと柊をちびっ子に独占させずに過ごせそうだぜー！」

その言葉に鋭く反応したこなたはみさおにくってかかっていた。

「おーっと、そうはいかないよ？みさきち。かがみはうちのだっていうのは変わってないからね？」

それに負けじとみさおも

「そう言っていられるのも今のうちだぜー？今年はチャンスは毎日あるようなものなんだかんな？ちびっ子の好きにはさせねえぞ？」

そして、そんな2人に何時の間にか復活したかがみが

「おまえらだまれ！私はおまえらの所有物じゃない！」

そうツッコミを入れると、2人とも凹んでいたのだった。

そして、ようやく落ち着いたらしいかがみが俺の方に向き直って

「さあ、慶一くん。賭けは私の勝ちよ？約束は約束よね？」

そう不敵な表情でいうかがみに俺は苦笑しつつも

「どうやらそうみたいだな。あーあ、負けた負けた。」

俺はそう言いつつもこの結果に喜んでいたのだった。

そんな俺のあまり悔しそうじゃない態度に不信感を持ったかがみが

「慶一くん、あんた、賭けに負けたっていうのにあんまり残念そうじゃないわね？」

そんなかがみに俺は

「んー？そうか？まあ、いいじゃないか。確か、賭けに勝ったら映画に行こう、って事だったよな？予定組めたら連絡してくれよ。」

そんな俺の言葉にあの時かがみ自身が俺に宣言のメールを送っていた事を思い出したのか、顔を真っ赤にしながら

「わ、わかったわよ。その代わり、代金はあんた持ちね？賭けに負けたんだからその位はしてもらわないとね。」

照れながらそう言うかがみに俺も頷いて

「そっちの方は請け負うよ。ともあれ、よかったな、かがみ。」

俺の言葉にかがみは改めて同じクラスになれた事を実感したのか嬉しそうに

「うん。ありがとう。1年、2年とクラス違ったままだったから、やっぱり嬉しいかな。最後だけは一緒になれたら・・・一緒になりたいって思ってたから・・・。」

そう言うかがみにみんなもまた嬉しそうに笑っていた。

「んじゃ、そろそろ教室戻って始業式に備えるか。」

頃合が良さそうだったので俺はみんなにそう言うと、皆も頷いて

「うん、行こっかー。」

「そうね、それじゃいきましょ？」

「みんなで一緒に同じ教室へ～。」

「ふふ。楽しくなりそうです。」

「今年は楽しみね。」

「今年はもっと楽しむぜ？みんな一緒だもんな。」

そう言うと、みんなで教室に向かって歩き出したのだった。

教室に辿り着くと、さっそく示してある席順に俺達は荷物を置いていく。

そして、しばらく待つと、担任の先生がクラスへとやってきた。

うちのクラスの担任は黒井先生だった。

黒井先生も俺達の姿を見て驚いているようだったが、とりあえず、始業式兼入学式が始まるので、俺達は体育館へと移動した。

校長の長い話やら、校歌斉唱やら色々やって、面倒な式を終えた俺達は教室に戻り、ＨＲをする。

そして、初日終了となり、俺達は揃って星桜の樹の所へと向かった。

その際にこうとやまと、毒島さん、山辺さんとも合流した俺達は、星桜の樹の下でしばしの間新しい仲間達が現れるのを待った。

しばらくすると、息を切らせてやってくる４人。

４人は俺達の前に立つと、俺達に笑顔を向けて

「えへへ。先輩、皆さん。約束、果たしましたよ？」

「・・・皆さんと、そしてみゆきさんと一緒に同じ学校で過ごせることが嬉しいです・・・。」

「これからは私たちも正式な仲間っス。皆さんよろしくお願いしますね？」

「ワタシもハイスクールセイカツをエンジョイしますヨ？アラタめてヨロシクデス。」

そう言ってくる４人に俺達は

「頑張ったな、みんな。みんなが一同にそろえた事が凄く嬉しいよ。俺達は後１年で卒業だけど、残りの時間、楽しくやっていこう。」

「まあ、ゆーちゃん達なら大丈夫って思ってたしね。改めて、ようこそ、陵桜へ。」
「学校生活はさらに賑やかになりそうね。ともあれ今日からよろしくね？」
「やっぱりみんながいるといいな、って思うよ～？今からわくわくしてるよ。」
「この先もっと充実した学園生活が送れそうなそんな予感ですね。」
「1年前まではつながりが無かったなんて、今考えたら不思議よね。でも楽しくなりそうだわ。」
「そうだよなあ・・・でも不思議なもんだよな。私らは小早川達が陵桜に来る前にすでに仲間になってたんだもんな。」
「私達もそうですよ。慶一先輩がいなかったら泉先輩達とすらも繋がっていたかどうかも怪しいですもん。」
「そうね。でも、こんなつながりも悪くないもんだわ。先輩に感謝しなきゃね。」

やまとの言葉に皆もまた、今のつながりというものを改めて考えさせられたようだった。

そして、そんな俺達を見ながら毒島さん達は

「そのつながりの中に私達もこれから加わっていけるんですよね？」
「そうですよ？ここまで来て仲間外れは勘弁ですからね？」

そんな2人に俺も笑って頷いて

「そんな事今更しても意味はないしする意味もないさ。それと、こう、やまと、毒島さん、山辺さん。ひよりとパティの2人をよろしく頼む。アニ研への入部、させてやってくれな？」

そう言うと、部長であるこうが

「任せて下さい！我が部の新たな戦力ですからね。きっちりと面倒見ますよ？」

その言葉を聞いて俺は安心する。

そして俺達はその場でしばらくの談笑をした後、明日からの生活を楽しみにしつつ、この場を後にした。

その際に俺が一人になる頃を見計らい、こなたが俺の所にやってきた。

「ねえ、慶一君。ちょっと聞きたい事あるんだけど、いいかな？」

そう尋ねてくるこなたに俺は

「ん？なんだ？聞きたい事って。」

そう返すと、こなたは

「うん。さっきのクラス分けの掲示板の所での事なんだけどさ、慶一君、かがみが自分のクラスを確かめに行って、かがみの名前が同じクラスにある事を確認して戻って来た時、嬉しくて泣いているかがみを受け止めながらみゆきさんと2人で笑いあっていたよね？ひょっとして慶一君、今回の件に関して何か知ってるんじゃないの？」

そう聞いて来たので俺は内心ドキリとしながら

「何でそうだと思ったんだ？」

そう聞き返すと、こなたは

「根拠としては、かがみとの賭けをしていて結果的に負けだったにもかかわらず残念がるどころか、少し嬉しそうだった事、そして、他の皆は何も知らなそうだったけど、何故か慶一君とみゆきさんの態度が、お互いに事情を知ってそうなそんなやり取りに見えたからだよ。」

そこまで見抜くこなたの洞察力に感心しつつ、俺は隠していても仕方ないかな?と思い

「こなた、ずいぶんと良く見てるな。そうなると、お前に隠し事はしていても仕方ないな・・・その通りだ、こなた。今回の件は俺もみゆきも知っている事だったんだよ。」

俺の答えにこなたは

「やっぱりそうだったんだ・・・ねえ、慶一君。よければ事情を知っていた理由を教えてくれないかな?」

そう聞いて来たので俺は1つ頷くと

「ああ、いいとも。今回の事のきっかけは文化祭の準備をやってた時に起きた不審者進入事件なんだ。」

俺の言葉にこなたは驚きつつ「えっ?あの時の?」と聞いて来たので俺は頷きつつ

「うん。あの時不審者を捕まえた際に、学校内のセキュリティに穴

がある事が発覚してな。校長はそれを公に公表される事を恐れていた。だから、俺にその事を黙っていて欲しいと持ちかけてきたのさ。それで俺は、その要求をのむ事を条件に校長にある取引を持ちかけたんだ。」

俺の言葉にこなたも「取引？」と聞き返してきたので俺は頷いて

「そうさ。この事を黙っている代わりにこちらの我侭を聞いてもらおうと思ったんだ。それが、今年のクラス分けにおいて、俺達を同じクラスにする、そういう事だったんだ。」

その答えにこなたは驚いて

「じゃ、じゃあ、今私達が皆同じクラスになったのは、慶一君が影で努力してくれた結果、って事なんだね？」

こなたの言葉に黙って頷く俺。

そんな俺をこなたなじーっと見つめていたが、やがて嬉しそうに笑うと

「あはは。さっすが慶一君だね。まさかそんな事をやっていてくれてたなんて。まさに慶一君様様だね。あ、それと、不審者にもちょっとだけ感謝かな？」

そんな風にいうこなたに俺も苦笑しながら

「おいおい・・・まあ、確かにあのきっかけがなかったら難しい事だったろうけどな。あの日あの時に不審者がいた事もまた、１つの運命だったのかもしれないな。」

そんな俺の言葉にこなたも頷いたが、こなたは俺を見ながら

「でもさー、元旦でのあれも慶一君は賭けの結果は最初から分かってたんでしょ?それにもかかわらずあんな演出するんだから慶一君もたいしたタマだよね?」

笑いながらそう言うこなたに俺も同じように笑いながら

「ははは。でも、盛り上がっただろ?案の定かがみは乗ってきたしな。」

俺の言葉にこなたも頷いて

「そうだねー。でも、改めてありがとう、慶一君。私達のために努力してくれた事、嬉しいよ。おかげで今年は去年以上に楽しくなりそうだよ。」

俺はそんなこなたの言葉に照れながら

「いいさ。皆の為に俺が出来ることがあるのなら俺はその事に努力を惜しまない。皆で笑いたいからな、これからもさ。」

そう言うと、こなたも笑って頷いてくれたのだった。

「・・・さて、そろそろ行かないと皆が待ってるぞ?校門前まで競争だ、行くぞ?こなた。」

そう言って駆け出す俺にこなたも慌てて

「ちょ、慶一君。いきなりずるいよ！待ってよー。」

そう言うと同時に俺の後ろをついて来るこなたを見て俺も笑っていたのだった。

校門前に辿り着く前にこなたに今回の一件に関して黙っておくようにと言い置いて、皆と合流したのだけど、結局こなたは俺の密かな企みをばらしてしまい、皆にさらに感謝の言葉を言われて俺はそこでも顔を赤くして照れていた。

結果的に仕組まれていた事だからという事でかがみとの賭けもなかったことになりかけたが、賭けが無効になる事を落ち込む姿を見ていたら俺もそれを保護には出来なくなってしまったので、賭けの結果は結果として受け入れて、かがみに付き合うことになった。

そんな風に慌しい１日を終えて俺達がそれぞれに家に帰る。

俺はこれかも楽しいことがありそうだと思いながら、かがみとの予定の打ち合わせをするのだった。

今日からまた新たな１年が始まる。

この先に広がる未来に何が待つのか、今の俺達にはまだ見えないけれど、残りの学生生活を１日１日悔いのないように過ごして行こう、そう思うのだった。

新たな始まりの旋律達～始まる1年、加わる仲間達～（後書き）

感想等の設定がちょっと前に変わっていました。
現在は、ログインなしでも書き込みが可能になっています。
ユーザー以外の方の感想等も書き込み可能ですので、感想やご意見を寄せていただけましたら励みになります。

動き回る旋律～新入生の学校案内～（前書き）

今回は若瀬いずみの出番がありです。
では本編をどうぞ。

動き回る旋律～新入生の学校案内～

新学期と始業式、新しい1年が始まった。

俺達3年生組みは、あの時の予定通り、全員が同じクラスになれた。

かがみは1年の頃にこなた達と仲良くなって以来、2年生、3年生と同じクラスになりたいと思って来たようだった。

だからこそ、今回の事は泣くほどに嬉しかったようだ。

俺はそんなかがみを見てほっとすると共に、皆と一緒になれた事に喜びも感じていた。

更には今年はゆたか達も受験を成功させて陵桜にやってきた。

それにより、ゆたか達も正式に俺達と同じ学校に通う仲間となった事もまた、俺は喜んでいたのだった。

色々な事が起きそうなこの1年、俺は期待に胸を膨らませていたのだった。

日付も変わって翌日、俺とパティはいつもの時間に起きて学校へ行く準備を済ませてキッチンでくつろいでいた。

以前のデコピンのトラウマも原因なのか、パティはあまり俺に手を煩わせる事なく起きれるようになってきたみたいだ。

そんな事を思いつつパティを見ながら考え事をしていたがパティが

そんな俺に気付いて

「ケイイチ、どうかしまシタカ？ワタシのカオにナニかついてますカ？」

首を傾げてそう尋ねてくるパティに俺は首を振って

「いや、すまん。ちょっと考え事をしてたんだ。」

そう言うと、パティは軽いため息をつきつつ

「ケイイチ？アサからボーッとしていてはいけませんヨ？これからスクールへイクんですからしっかりしてもらわないとコマリますヨ。」

そう言うパティに俺も苦笑しながら

「はは。わかってるよ。さてと、そろそろかな？」

俺はそう答えつつ時計に目をやると呼び鈴が鳴ったので俺はすぐに立ち上がり、玄関へと向かう。

そして、玄関の扉をあけて

「はいはいっと。おはよう、あやの。いつもすまないな。」

そう言う俺ににっこりと笑うあやのは

「ふふ。おはよう、慶ちゃん。もういつもの事なんだからそれは言いっこなしよ？それじゃ、いつもの、やっちゃうからね？」

そう言うあやのに俺も頷いて

「ああ、よろしくな。それと終わったらキッチンな。今日もお茶用意してるからさ。」

俺がそう言うとあやのも頷いて

「ええ、わかってるわ。それじゃキッチンで待っててね？パトリシアさんももう行く準備は出来てるのよね？」

と言うあやのの言葉に頷きながら

「ああ。とりあえずあまり俺の手を煩わせないでいてくれるから助かってるよ。そういうわけだから先にキッチンに戻ってるな？じゃあ後でな、あやの。」

そう答えるとあやのも笑いながら頷いて

「うん。それじゃ後でね？」

そう言ってモモとミィの世話をしに行ってくれた。

あの時からずっと、あやのはほとんど毎日モモとミィに世話に来てくれるようになった。

そして今ではこれも俺の日常の風景の1つとなりかけていた。

当時を思い出しながら俺は、懐かしい気分に浸りつつキッチンへ戻ったのだった。

キッチンへ戻るとパティが

「ケイイチ、アヤノはキョウもキテくれたのですネ？ケイイチもちゃんとアヤノにカンシャしなきゃイケマせんヨ？」

人差し指を立ててそう言うパティに俺は笑いながら

「ははは。お前に言われるまでもないさ。俺はずっと感謝してる。ありがたいって思ってるからな。だから、そんな心配は無用だ、パティ。とりあえずあやのの分のお茶準備するからカップとソーサーを出してくれ。」

俺がそう言うとパティは満面の笑みで頷いて

「オマカセですヨ？アヤノのブンはワタシがウケオイました。」

そう言うと、パティは早速あやのの分のカップとソーサーを用意してくれた。

そして、それに俺が用意した紅茶を注ぐと、その頃にあやのが猫の世話から戻ってきた。

「お待たせ、慶ちゃん、パトリシアさん。」

そう声をかけてくるあやのに俺は頷いて

「ああ、待ってたよ。丁度準備も出来たから少しくつろいでくれ。」

そう言うとあやのも微笑みながらお茶の用意してある席へついた。

そして、時間ぎりぎりまでのんびりと談笑してからいつものように家を出る俺達。

パティが家にやってきてからも続いている俺達の日常なのだった。

かがみたちと合流して、電車に揺られる俺達だったが、ここにまた1つ新たな日常が加わる事になった。

それは、いつもこなたと合流するのだけど、そこにゆたかの姿も加わった事だった。

初日は早めに行きたかったらしく、俺達とは会わなかったゆたかだったが、今日からは一緒に通いたいとゆたかが言い出したとの事、俺達もまた、その気持を尊重するために、ゆたかに応えようと思ったのだった。

「おはよう、こなた、ゆたか。今日からは一緒に行く事になるのか？」

「グッモーニン、コナタ、ユタカ。キョウからはイッショですネ！」

「おはよう、こなた、ゆたかちゃん。今日からよろしくね？」

「おはよ～。こなちゃん、ゆたかちゃん。また登校が楽しくなりそうだよ～。」

「おはよう、泉ちゃん、小早川ちゃん。何かあったら遠慮なく言ってね？それと、気分が悪くなったりした時もよ？」

そんな俺達の挨拶にこなたとゆたかは

「おはよー慶一君、パティ、かがみ、つかさ、あやのさん。今日からゆーちゃんも一緒に行きたいって言うからさ、これからよろしく

ね？」
「おはようございます、慶一先輩、パティちゃん、かがみ先輩、つかさ先輩、峰岸先輩。私こなたおねーちゃんの家に居候させてもらっていますから、登校するときは一緒なんですよ？今日からは私も皆さんと一緒にいきたいですから、よろしくお願いしますね。」
そう言い、俺達も笑顔でそれに頷いて応えると2人とも喜んでくれたようだった。
そして、俺達は今日もまた学校へと辿り着く。
そこでは俺達が来るのを待っていたみゆきやみなみ、こうやまと、ひよりとも合流し、それぞれの教室へと向かったのだが、その際にゆたかが俺に
「あ、先輩。今日の放課後に暇ありましたら、校内の案内をお願いしたいですが、いいでしょうか？」
そう言って来たので俺は今日は特に用事がなかったので
「ああ、構わないぞ？そういや、校内案内もまだだったな。俺も知らない所もまだあるし、皆で回ってみるか？」
そう言うと、みんなも
「いいね。この際だから私も改めて学校の事を知ろうかな？」
「それもいいかもね。私も入ったことのない所とかまだあるしね。」
「わたしもかな？自分の学校なのにまだまだ知らない所あるよ。」
「中々回る機会もなさそうですし、丁度いいかもですね。」
「ごめんね？今日はちょっと用事あるから一緒には回れないわ。」

「私も部活あるからちょっと無理だなー。わりい、小早川。」
「まあ、そういう事なら仕方ないですね。私はお付き合いしますよ？」
「私もまだ知らない所もあるから回っておきたいわ。」
と言う俺達の言葉を聞いて1年組は
「・・・私も一緒に行かせて貰っても構いませんか・・・？」
「私もこの機会に回っておきたいっス。」
「ケイイチにはヤクソクをハタしてもらいマスヨ？オトコに二ゴンはユルされませんデスからネ？」
という言葉に俺は苦笑しつつ
「行くつもりなら一緒に行こう。それとパティ、言われなくてもわかってるよ。忘れちゃいないから心配すんな。」
そう言うと1年組みもほっとしているようだった。
とりあえず放課後の約束を交わした俺達はそれぞれの教室に行って授業を受ける。
そして、その日の昼休みの事、俺はみんなとアニ研の部室にて昼食をとっていたのだが、飲み物を忘れた事を思い出して、外に買いに出ることにした。
だが、そんな俺の行動に気付いたこなた達はそれに便乗して
「慶一君、私は烏龍茶お願いー。」
「なら、私はアクエリアスを。」

「こら！こなた！日下部！あんたら何ちゃっかり頼んでるのよ！」
そう突っ込みを入れるかがみに俺は苦笑しつつ
「ったく、しょうがないな。いいよ、かがみ。皆も欲しい物あるなら言ってくれ。ついでだから行って来る。」
という言葉にかがみは
「・・・え？いいの？でも、なんだかあんたにも悪いわよ・・・。」
そう言いにくそうにいうかがみに俺は
「何、この程度の事はお安い御用だよ。それで？どうするんだ？」
俺がそう言うと、かがみは言いにくそうに
「そ、それじゃ・・・コーヒー牛乳を・・・。」
そう言うと、こなたとみさおが
「ぶー！なんだよかがみん、私達にあんな事言っておいて結局かがみも頼むんじゃん。」
「だよなー。どっちがちゃっかりしてるんだよって感じだよなー。」
そんな風にいう2人にかがみは顔を赤くしつつも
「う、うっさい！！慶一くんが気を使ってくれるって言うんだからその気持を汲んであげなきゃ、って思っただけよ！！あんたらはただ、便乗しただけでしょ！？」

そう突っ込みを入れると2人はまだなにやらぶつぶつと文句言ってたようだったけど、そんな3人を見て苦笑しながら俺は他のみんなにも一応聞いてみた。

「とりあえず、他の皆はどうする？」

そう尋ねるとみんなは

「わたしは今持ってきてるのがあるから大丈夫だよ～？」
「えっと・・・慶一さん。お茶をお願いしても構いませんか？」
「私も午後の紅茶のストレートティーをお願いできるかな？」
「私はカルピスウォーターをよろしくです。」
「こう、あなたもなの？まったく・・・先輩、1人じゃ大変だろうから私も一緒に行ってあげるわ。」
「私も家から持ってきてますから大丈夫ですよ？」
「・・・私も、先輩のお手伝いをします・・・。」
「私も持ってきてるのがあるから大丈夫っスよ？」
「ケイイチ。コーラをよろしくデス！」

そう言ったので俺は

「了解だ。それと、やまと、みなみ。手伝ってくれるというなら手を借りてもいいかな？」

そう言うと、2人は頷いて

「ええ。任せて。結構量がありそうだし、抱えきれないなら持つ人が多い方がいいでしょう？」
「・・・それに、皆で運べば楽ですよ・・・。」

そう言ってくれたので俺は頷いて

「ありがとな、2人とも。それじゃさくっと行って来よう。んじゃ皆待っててくれよな。」

そう言い残して俺とやまと、みなみは部室を出て自動販売機のある星桜の樹のある裏庭へと向かった。

そして、俺達が自分の分も含めて飲み物を購入してる時に俺は背後から声をかけられた。

「あ、あの・・・森村先輩ですよね?覚えていますか?若瀬いずみです。」

その言葉に俺とやまととみなみも振り返り

「お?若瀬さん。久しぶり、になるのかな?ともあれ陵桜には無事に合格できたみたいだね。おめでとう。」

「あなたは確か、去年の冬コミで出会った人よね?」

「・・・あ、委員長・・・先輩達とも知り合いだったの・・・?」

そう言うと、若瀬さんは驚きながら

「お、覚えていてくださったんですね?よかった。お祝いの言葉、ありがとうございます。それと、岩崎さん。私は去年の文化祭の時に森村先輩と初めて出会ったのよ。」

その言葉に俺は笑って

「そういう事さ、みなみ。あの日に若瀬さんはお兄さんと一緒に桜藤祭に来ていたんだよ。そして、アニ研部室前でぶつかって若瀬さんが落とした学生証を俺が拾った事がきっかけだな。」

そう言うと、みなみとやまとは

「・・・そうだったんですか・・・先輩、若瀬さんはうちのクラスで学級委員を任されているんです・・・。」

「そういう事があの日にあったのね?あの日騒いでいた姉妹以外にも出会ってる人がいたなんてね。」

納得しながらそう教えてくれ、やまとはどこか不機嫌になりつつそう言った。

俺はそんな2人に

「へえ?そうだったんだ。まあ、やまと。そういう事だな。けど、これも結局人助けの一環だっただけさ。」

その言葉に若瀬さんも照れながら

「そういう事ですね。あの時は本当に助かりましたけど・・・。それと、コ○ケで先輩に言われた言葉もまだ覚えていますよ?」

その言葉に俺も微笑みながら

「お?そうか。ちょっと余計な事言ったかな?と思ったけど、覚えていてくれたなら何よりかな。」

俺の言葉に若瀬さんも笑ってくれて

「あの言葉は心に染みましたからね。それと同時に今先輩に声をかけたのもあの時のお礼をしたかったからなんですよ。それで、色々と考えてみましたが、結局これを渡したいと思いまして・・・。」

そう言いながら持っていたバックから何かを取り出して俺に渡してくれた。

「これ、私が作ったものなんですが、良かったら食べてください。」

そう言って渡してくれたものはケーキだった。

俺は若瀬さんに

「ありがとう。後でいただかせてもらうよ。それと、若瀬さん。あの時も言ったけど、君さえ望むなら俺達は君の友達になってあげるよ。それに、君の趣味の事を話せる奴も俺の仲間達の中にはいるからさ、そんな話をしたいと思ったら、俺達を訪ねて来てくれればいいよ。」

そう言うと、若瀬さんは少し驚いたような表情を見せたが、すぐに嬉しそうな笑顔になって

「お気遣い、ありがとうございます。でも、本当にいいんですか？」

そう聞いてくる若瀬さんに俺は力強く頷いて

「構わないさ。君もまた、俺達の仲間なんだから。同じ学校に通う、そして、秘密を共有する、ね？」

俺の言葉に若瀬さんは一瞬顔を赤くすると

「そ、その事は・・・あの・・・確かに・・・そうですよね・・・でも、ありがとうございます。私の趣味の事も理解してくれて・・・。」

その言葉に俺は笑いながら

「俺の仲間にはもっと凄い趣味の奴がいるからね。そいつの事も受け入れられたんだから問題はないさ。それに、君の方がまだ可愛げがあると思えるほどに濃い奴がいるからな。」

俺のその言葉に驚く若瀬さんは

「・・・先輩のお友達は色々な人がいるんですね・・・。」

そう言う若瀬さんに俺ややまとは苦笑するしかなかった。

みなみだけは俺達の話す事にすこし理解が追いつかない感じで不思議そうな顔でこっちを見ていたが。

「とにかく、以前にアニ研の部室に来た事もあるみたいだし、場所は分かるよね?俺達はここの所はお昼はそこで集まって食べてるから、もし、若瀬さんさえよかったら訪ねておいで。」

そう言うと、若瀬さんはにっこりと笑って

「ありがとうございます。それじゃその折にはお邪魔させてもらいますから。それじゃ今日はこれで。」

そう言って俺達に頭を下げて去っていく若瀬さんを見送りつつ

「ちょっと驚いたけど、まあ、無事に合格できたのならよかったかな？」

そう俺が呟くと、俺達の様子を伺っていたやまとが少し不機嫌そうに

「それはいいけど、先輩。そろそろ戻らないと皆待ってるわよ？」

やまとにそう言われて俺は当初の目的を思い出して

「そうだった。やまと、みなみ。急いで戻ろう。」

俺の言葉に2人も頷くと、頼まれた物を手にして部室へと戻ったのだった。

そして、帰ってくるのが遅かった事に対して皆から問い詰められたのだが、俺は適当に誤魔化そうとしたのだけど、やまとに遅れた理由を告げ口されて皆から質問攻めにあったのだった。

それでも、皆は若瀬さんを友人として迎える事には賛成してくれたので、俺も少しだけほっとしていた。

そして、午後の授業を終えた俺達はゆたか達と待ち合わせをしていた。

朝に言っていた校内案内兼、施設再確認をするために。

「お待たせしました。先輩達。少し遅れてしまいましたが、ＨＲも終わりましたので。」

「・・・こちらに来る時に委員長にも声をかけてみました・・・。」
「委員長、皆が行くなら行ってみたいと言ってたっスから一緒に来ましたっス。」
「ニューメンバーのイズミもイッショにイキマスですヨ？」
「今日再会したばかりですみません、ご無理を言って。」
ゆたか達と同じようにやってきた若瀬さんに俺達は
「いやいや。俺達も今日は自分の学校の再確認をするつもりだったんだし、構わないよ。」
「そうだね。この際一人増えても一緒だよね？」
「そうね。校内の事知らないという事ではゆたかちゃん達とも一緒なんだし、なら、まとめて面倒みちゃいましょ？」
「また1人お友達が増えそうだから、なんだか嬉しいな～。」
「私たちもまだ完全には校内の事は把握しきれているわけではありませんが、ある程度は分かるかと思います。ですから、ある程度の質問もお答えできるかと思いますよ？」
「部室練の方もまだまだ分からない所もありますしね。この機会におさらいしないと。」
「とりあえず、校内の案内図を探してきたわ。これを参考にしつつ、回りましょう。」
やまとの言葉に頷いて、俺達は早速校内めぐりを始めた。
「先輩。最初に教えてもらいたい所があるんですが。」
歩き始める時にゆたかが俺にそう聞いて来たので俺は
「ん？どこが知りたいんだ？ゆたか。」

そう言うと、ゆたかは俺に

「私、体が弱いので保健室はよく利用する事になるかと思います。だから、保健室の場所を最初に知っておきたくて・・・。」

そう言うゆたかに俺は頷いて

「わかった。まずはそこからだな。って、どうした?こなた。」

俺とゆたかのやり取りに腕組みをしながら考え込んでいるこなたに尋ねてみると、こなたは

「いやー・・・保健室ってどこだったっけ?って思ってさー。」

と言い、俺達はそれを聞いて脱力した。

「・・・あのな・・・お前が身体測定やった所や去年の文化祭で倒れたかがみを運び込んだ所はなんだよ?お前、あの時も俺の後についてきてドアまで開けたよな?」

そう突っ込むとこなたは焦りつつ

「そ、そういえばそうだったね・・・。自分でも保健室に行った事すっかり忘れてたよ。」

後頭部を掻きながらそう言うこなたに俺達は苦笑していたのだった。

ともあれ、気を取り直して俺達はまず保健室へと向かった。

そして、保健室の前に着いてから俺はゆたかに

「ここが保健室だ。部屋の周りにあるものとかをよーく記憶しとくといい。それが目印になるからな。」

そう言うと、ゆたかとみなみが俺に

「ありがとうございます。場所をよく覚えておきますね？」

「・・・ここがそうなんですね？よかった・・・これでゆたかが気分を悪くしてもすぐに連れて来れます・・・。」

そう言うみなみに俺は

「ん？お前がゆたかの面倒見てくれてるのか？」

そう尋ねると、みなみの代わりにゆたかが

「そうなんですよ。みなみちゃん、私の為に保健委員を引き受けてくれたんです。私それがとっても嬉しかったんですよね。」

そう言うと、みなみは真っ赤になって

「・・・ゆたかは・・・私の大切な友達だから・・・。」

照れながらそう言っていた。

俺もそんなみなみに微笑みながら

「そっか。みなみ、これからもゆたかの事頼むな？」

そう言うと、照れながらもみなみはコクリと頷いてくれたのだった。

そんな様子を見ていたひよりが背後でなにやら騒いでいるのが聞こえたのでそっちに耳を傾けてみると

「・・・来た来た来たーっ！これはいいネタが手にはいりそうっス！次の原稿はこれで決まりっスね！」

等と口走っているひよりの元へ行って

「ひより、ネタ探しはいいが、仲間や友人を漫画のネタにするのは自重しろよ？もし、おかしなものを作ろうものなら・・・俺が裁くからそのつもりでな？」

にっこり笑いながら圧力をかけてやると、ひよりは途端に我に帰って「わ、わかりましたっス・・・すみません・・・」

と言って凹んでいた。

俺達はそんなひよりに軽いため息をつきつつこうにも原稿のチェックを厳しくするようにと言いおいて、更に別の場所へと向かったのだった。

「へえ？茶室なんてものがあるとはね？」

いくつかの特別教室等を歩き回って部室練を見回っていたとき、たまたま見つけた茶室を俺達は覗いていた。

「こんなのあるなんて知らなかったねー。」

「茶道部ってあったかしらね？永森さん、校内案内に書いてある？」

「ええ。一応は乗ってるわよ？」

「こうしてみると、部活もいろいろあるんだね～。」
「それに一昨年に私達で立ち上げた部活もありますし、あれからも別のものが増えていたとしても不思議はないかもしれませんね。」
「そうですね。そこも含めてもう少し回ってみましょうよ。」

そう言うこうの言葉に俺達も頷いてさらに校内を見回って行く。

以前に肝試しで回った理科室や音楽室、さらには美術室や視聴覚室も見つかった。

「ここは、自習室か。俺達はテスト勉強の時には図書室をよく利用してたからあまり来た事なかったな。」
「私はここにはよく来るよ？」
「意外ね、あんなに勉強が嫌いって言ってるあんたがさ。」
「だって、静かだから寝るのに丁度いいんだよねー。」
「「勉強する所なんだから、勉強で使え！！」」

と、思わず俺とかがみとのダブルのツッコミが炸裂するも、こなたはさほど堪えてはいないようだった。

そんな俺達を見て苦笑する他の皆。

そして、俺達はまた移動をしていく。

「ここは家庭科室ですね。家庭科の授業があるんでしょうけど、私、少し自信ないなあ・・・。」

と言うゆたかに俺は

「ゆたかは、料理とかは苦手か？」

と尋ねると、ゆたかは苦笑しながら

「経験が少ないって言うのもあるんですが、まだこなたおねえちゃんみたいには出来ないので。もう少し出来るようにはなりたいですけど・・・。」

そう言うゆたかにかがみが

「大丈夫よ、ゆたかちゃん。最初から上手い人なんていないんだから、ゆたかちゃんもゆっくりと経験を積んでいけばいいのよ。」

そうやって励ますと、ゆかたも少し驚いたような表情を見せていたがすぐに笑顔になって

「そうですね。ありがとうございます、かがみ先輩。少しだけ気が楽になりました。」

そう言うゆたかとかがみの様子を伺っていたこなたはニヤニヤとしながら

「ねえ、かがみ?それって慶一君の言ってた台詞だよねえ?それに、自分の事を棚に上げてゆーちゃんに言うとかなかなかちゃっかりしてるじゃん?」

そう言うと、かがみは途端に顔を真っ赤にして

「う、うっさい!!家事がまだ上手くないって事は自覚してるわよ!!いいじゃない!これだってアドバイスなんだから!」

そう言うかがみにこなたはなおも

「はいはい。そうですねー。もう少し説得力あるならましだったかもだけど。」

というこなたの言葉にかがみは「こ、こなたー！！」

と叫んでこなたを追い掛け回し始めたのを見て、若瀬さん以外の面々は苦笑していた。

「・・・森村先輩・・・あの2人っていつもああなんですか？」

呆然としながらそう尋ねてくる若瀬さんに俺もまた苦笑しながら頷いていた。

「そういえば若瀬さんは俺にケーキ作ってくれたよね？若瀬さんは家事とかはある程度できるの？」

そう尋ねると若瀬さんは少し顔を赤くしつつ

「お菓子作りは何とかできますが、料理とかとなると、まだ私もまだまだでして・・・。」

という言葉にパティとひよりが

「まだまだイズミもシュギョウがタりんということですネ。」

「でも、委員長のお弁当見たことあるっスけど結構美味しそうでしたよ？」

そう言うと、若瀬さんも複雑な表情で

「あはは・・・そういう事ね、パトリシアさん。田村さん、それでも冷凍食品がほとんどだから、まだまだかな？」

そう答えると、俺はそんな若瀬さんに

「さっきかがみが言ったように、何事も経験だから、色々やってみるのが一番さ。だから、頑張りなよ？若瀬さん。」

そう言うと、若瀬さんも頷いてくれて

「そうですね。私も頑張ってみます。アドバイス、ありがとうございます。」

そう言う若瀬さんに俺も頷きで答えるのだった。

そして、いい加減2人を止めないと、回り終えられないと思った俺は何とか2人を止めると、まだ回っていない施設を目指すのだった。

それからしばらく施設を見回って、大体を把握した俺達は時間も時間だったので下校時間前には学校を出たのだった。

その際に、学校案内をしてくれた事に対する礼をゆたか達から言われたが、お互い様だからと俺もゆたか達に伝えたのだった。

そうして今日の学校案内は幕を閉じる。

そして、パティと一緒に家に向かっている時にパティが俺に

「ケイイチ、タノミたいことがあるのデスガ。」

そう言って来たので、俺はパティに

「頼みたい事？一体なんだ？」

そう言うと、パティは１つ頷いて

「ジツはこれからケイイチのイエにオセワになるにアタリ、ジブンのコトイガイでツカウオカネがタリないかもしれまセン。ですから、よいアルバイトがないかとオモイましてケイイチにキいてみたかったのですヨ。」

そう説明するパティに俺は少し考え込んでいたが

「アルバイトねえ・・・ん？そういえば１つ良さそうなのあるな。」

そう言うと、パティは俺の方に身を乗り出して

「ホントウですか？そのアルバイトとはどうイウモノなのですカ？」

俺はそんなパティに笑いかけながら

「パティにとっては仕事しやすいかもしれないな。とりあえず俺が電話を入れておくから後で結果を教えるよ。」

そう言うと、パティは嬉しそうに頷いて

「サンキューです！ケイイチ！いいケッカをキタイしていますヨ？」

そう言うパティに俺も頷いて

「わかった。結果が出たらお前に伝えに行くから部屋で待っててくれ。とりあえずは家に帰って飯の準備もしなきゃ、だからな。」

その言葉にパティも頷いてくれ、俺達は急いで家に戻ったのだった。

そして、夕食の準備をしつつ、俺はパティのバイトの件であの人の所へ電話を入れてみた。

そして、その結果を持って俺はパティの部屋へ行く。

部屋のドアをノックしてパティを呼ぶと、パティはドアを開けてくれたので俺はさっきのバイトの件の結果を伝えた。

「パティ、とりあえず採用してくれるようだ。場所は秋葉の・・・・・。」

俺の言葉に目を輝かせてパティは喜びながら

「ホントウですか!?まさかケイイチにそんなコネがあったなんて・・・ワカリマシタ!アシタにはメンセツにイキますデス!ガンバってハタラきますのでキタイしててクダサイね?ケイイチ。」

俺はそんなパティに笑いながら

「ああ。でも、くれぐれも、無茶はしないようにな。それと何かあったら俺に連絡をきちんと入れること、いいな?パティ。」

そう言うと、パティも満面の笑みで頷いたのだった。

学校案内、若瀬さんとの再会、そして、ふいに決まったパティのバイト。

けれど、この時にはまだ俺は再びあの店でバイトする事になろうとは思いもしなかったのだった。

そうなるのはまだまだ先だったけど、あの店をパティに紹介した時から小さな予感を感じた俺だった。

働く旋律達～パティのバイト確定と、慶一達の再びのバイト～（前書き）

お気に入り登録件数１４０件を超えました。
皆さんの応援のおかげです。
どうもありがとうございます。
それでは本編をどうぞ。

働く旋律達～パティのバイト確定と、慶一達の再びのバイト～

後輩達の校内案内と共に俺達在校生組も学校の施設の再確認をするべく、施設を見て回った俺達。

その中で色々と俺達が知らなかった所も再確認ができたので、俺達は改めて俺達の通う学校を知ったのだった。

そして、その帰り道にパティが俺に言ったのはお金が入用だという事で、アルバイトをしたいという事だった。

俺はそんなパティの頼みを聞いて、と、ある場所へのアルバイトを思いつく。

そして、その場所に連絡をしてみた所、一発で採用が決定し、面接という名の、契約をしに行く為に店長との約束をしたのだった。

そして、その日の朝・・・・・・。

「グッモーニン、ケイイチ。キョウのホウカゴはアルバイトサキへのアンナイをよろしくデスヨ？」

そう言ってくるパティに俺も頷きながら

「うん。とりあえず、俺も一緒に行って場所を教えなきゃいけない関係もあるしな。今日の帰りは校門前で待ち合わせようか。」

そう言うと、パティもいつもの笑顔で頷きながら

「リョウカイです。ホームルームがスんだらコウモンマエでマってますカラ。」

そう答えるパティに俺は

「ああ。よろしく頼む。終わり次第すぐ向かうからな。」

そう言う俺にパティも「ハイ！」と元気よく答えるのを見て俺も笑顔で応えたのだった。

そして、いつものように合流して俺達は学校へと辿り着く。

再度、パティと放課後の件の念押しをして俺達はそれぞれの教室へと向かうのだった。

そして、その日の朝のＨＲでの事。

「あー・・・みんなも分かってると思うけどなー、そろそろ本格的に進路の事について考えていかなあかん。これから進路希望の用紙を配るから、よく考えて書き込むようになー。」

と言う黒井先生の言葉と共に進路希望用紙が配られ、俺達はそれを受け取って今後の進路について話す。

「うーん・・・進路かー・・・私まだどうするか考えてないやー・・・進学、するのかなあ？」

「・・・あんたは・・・もう3年生なんだからちゃんと進路考えないと駄目じゃない、まったく・・・。」

「わたしもどうしようかなあ・・・前にけいちゃんに貰ったアドバイスを参考にしてみようかなあ・・・。」

というつかさの言葉にかがみが

「ん？つかさ、慶一くんからどんなアドバイス貰ったのよ？」

と尋ねると、つかさは照れながら

「うん。実は私、お料理とか好きでしょ？だからそう言う方面で考えてみたらどうか、って言ってくれたんだよね～。」

そう答えるつかさにかがみとみゆきは

「へえ？確かにあんたにはそういうのって合うかもしれないわね。と、なると、調理師とかの学校に行くのもありじゃない？」

「家事が得意なつかささんらしい進路ですね。なるほど、慶一さんのアドバイスも中々良い所をついていますね。」

そう言うと、つかさも赤くなりながら「えへへ～。」と笑っていた。

そんなやり取りを見ながら俺はかがみとみゆきに

「かがみとみゆきはどうするか決めているのか？」

と尋ねると、２人とも頷いて

「うん。私は弁護士を目指そうと思ってるから法学部に進学希望かしらね。」

「私は医者にを目指したいので医学部希望ですね。」

そう言っていた。

俺はそんな2人の進路に感心しながら

「かがみ、弁護士とは中々かっこよさそうだな。みゆきもまさか医者希望とは思わなかったけど、それもお前らしいかもしれないな。」

そう言うと、2人とも顔を赤らめつつ照れながら

「・・・あはは、かっこいい、か。そんな弁護士になれるかな？」

「私らしい、ですか。そう言っていただけるのは嬉しいですね。」

と言う2人に俺は頷いて

「かがみならなれると思うよ。みゆきの白衣姿も見てみたい気もするな。」

そう言うと、ますます顔を赤くして照れていた。

そんな2人を見て微笑んでから俺はさらに、あやのとみさおにも進路の事を聞いてみた。

「あやのとみさおはどうなんだ？具体的な進路って決まってるのか？」

そう尋ねてみると、その質問にまずみさおが答えた。

「私は走るのが好きだし、陸上をこれからも続けて行きたいって思ってっから、スポーツ推進の学校でもいいかなって思ってるゼ？」

そして、その後にあやのが答えようとしたのだが、みさおはあやの

の代わりに

「あやのはお嫁さんだもんな。こんなかじゃすでに大体の進路が決まってるってなもんだぜ？」

そう答えると、あやのは途端に顔を真っ赤にして

「み、みさちゃんたら・・・もう、恥ずかしいじゃない・・・。」

かなり困ったような顔でそう言うあやのに他のみんなが

「峰岸さんて乙女だねえ。」

「ちょっと、峰岸。あんたも大分夢見る人になってない？」

「でも、あこがれちゃうよね～。」

「私達にもいつかそういう日が来るのでしょうか・・・。」

最後のみゆきの言葉にみさおが

「あやのの場合はかなり具体的な話だぜ？」

そう言うと、４人は一斉にあやのに詰めよって

「「「「そこのところを詳しく！！」」」」

と言うこなた達に苦笑を浮かべていた。

結局その時にあやのがみさおのお兄さんと付き合っている事がばれる事となり、こなた達から羨望の眼差しで見られていた。

さらに、追記するならば、その後、勝手にその事をばらしてしまっ

たみさおにきついお仕置きがなされたとか・・・。

その後数日はあやのを見るたびびくつくみさおを見ることになった。

そんな後日談はさておき、今度は俺がこなたに質問される事となった。

「うーん・・・かがみ達の事はわかったけどさ。慶一君はどうなの？進路って決まってる？」

そんなこなたの質問を皮切りに俺に注目する皆。

けれど、俺はまだこの時点では具体的な進路が決まっていなかった事もあり、皆に

「俺も、まだはっきりとは決まってないんだよな、けど、ここで見つけられないなら、大学行ってその中でやりたい事を探すのもいいかな？と思ってたりもするよ。」

俺の言葉に、皆はそれぞれ考えるような仕草になって

「慶一君も具体的にはまだ決めてないのかー・・・うーん・・・慶一君の言うように私も大学行ってやりたい事見つけるのがいいかな？今から焦ってもいいもの見つかりそうにないしねえ・・・。」

「一種の逃げ、みたいにも聞こえなくもないけど、でも、それもまた道かしらね？」

「焦らずにじっくりと、か～・・・。それも選択肢に入れてもいいかもしれないね～。」

「そうですね、私やかがみさんみたいに決まってないのだとしたら、それは１つの方法でもありますね。焦ればいい進路が見つかるかと

いえば、必ずしもそうとは言い切れませんね。」
「私は結婚が進路とは言ったけど、大学は行きたいなって思っているのよね。あの人も私が大学出るまで待ってくれるとも言ってくれたから・・・。」
「私ももう少し学生はやりてえかなー・・・。なんだか、まだまだ学ぶ事がありそうな気がすんだよな。」

そんな皆に俺は

「進路を決めるのも目標を定めるのも人それぞれかもだな。それと、かがみ。お前の言う事も否定はしないよ。結局は今の段階で俺自身がやりたい事が見つかってないのは事実だしな。」

そういう俺に、かがみは複雑そうな表情を見せて、それ以外のメンバーは人それぞれという俺の言葉に頷いていた。

とりあえずは進路の提出期限はまだまだあるので、じっくり考えてみようという事で落ち着いたのだった。

そして、その日の昼休みの事。

今日からは俺達の中に若瀬さんも加わってのお昼となった。

昨日の俺の言葉を聞いて考えてくれた若瀬さんは思い切って俺達の中に飛び込んでみようと思ったらしい。

そんな若瀬さんをからかうこなたにツッコミを入れるかがみの姿を皆で苦笑しつつ見ていたが、ふいにこなたが俺に

「あ、そうだ。ねえ、慶一君。今日は放課後暇かな?」

そう聞いて来たので、俺はこなたに

「ん？突然どうした？こなた。」

そう聞くと、こなたは

「今日暇だったら遊びに行こうよ、って思ってさ。ここの所遊びに行ったりしてないじゃん？」

そう言ってくるこなたに俺はすまなそうな表情を向けて

「そういやそうだな・・・でも、すまん、こなた。今日はちょっと用事があってな。」

そう言うと、さらにそれに補足するようにパティも

「そうなのデス。キョウはワタシのバイトサキのメンセツのタメにケイイチにはミチアンナイをタノムのですヨ。」

そう説明すると、こなたは興味深そうな顔で

「そうなのかー・・・でも、パティ、バイトするんだ？それってどこでやるの？」

そう尋ねるこなたに俺は笑いながら

「はは。俺達もバイトした事のある場所で、だよ。昨日店長に連絡取ってみたら引き受けてくれるとの事だからな。」

そう言うとこなたは

「なんと、あそこでバイトする事になるなんてね・・・という事は、あの店に行くんだね?だったら私も付き合うよ。面接の帰りにでもゲーセンとか寄って行こうよ。」

そう言うと、俺は少し複雑な表情で

「うーん・・・でも、いいのか?こなた。色々寄ったりは面接の後じゃないと無理だぞ?俺もパティを待っていてやらなきゃならないしな。」

そう言うと、こなたは自分の胸をぽんと叩いて

「大丈夫だよ。その間はその店で色々時間つぶししてればいいんだしさー。だから、私もついていってもいいよね?」

というこなたに俺も軽いため息を1つつくと

「まあ、こなたがそれでいいと言うのなら構わないけどさ。んじゃ、放課後にパティと待ち合わせるから一緒に行くとするか。」

そう言うと、こなたも

「おっけー。それじゃ放課後に、だね?」

そう言うこなたに俺も頷きで答える。

すると、そんな話を聞いていた他の皆も

「ねえ、慶一くん。あんた達だけで話進めてるみたいだけどさ、私たちの事忘れてんじゃないの？」
「けいちゃん達が遊びに行くのならわたしも行きたいな～。」
「私もご一緒したいですが、今日は委員会がありますし・・・残念です。」
「私も久々に店長さんにご挨拶してこようかしら？」
「去年は私ら、あそこで頑張ったもんなー。」
「そうですね。思い出してみても楽しいバイトでしたよ。あ、先輩。私も一緒に行ってもいいですか？」
「こう、あんたも行くつもり？しょうがないわね・・・先輩、私も一緒に行くわ。」

と言う皆に俺は

「行くつもりなら、俺は構わないけどな。みゆき、また予定が合う時には一緒に行こうか。」

そう言うと、行きたいメンバーの面々はうんうんと頷いていた。

そんな俺達の様子をみていたゆたか達が

「先輩、去年はアルバイトしてたんですか？」
「・・・あ・・・それじゃ、あの時のプレゼントは先輩がアルバイトして作ったお金で買ったのですか・・・？」
「先輩がそんな事をやっていたなんて気付きもしなかったっスね。なら、あの時貰ったプレゼントはますます大切にしないと・・・。」
「アルバイト、ですか・・・私も少し考えてみようかな・・・。」

そう言う後輩達の言葉に俺は照れながら

「まあ、そういう事かな。でも、俺がやりたくてやった事だし、プレゼントの事は気にしなくていいんだぞ？それと、若瀬さん。そこらへんの所はこれからゆっくり考えればいいと思うよ？まだまだ時間はあるんだしね。俺達と違ってさ。」

そう声をかけると、ゆたか達は嬉しそうな顔をして、若瀬さんも俺の言った事を反芻して考え込んでいるようだった。

結局あの後、ゆたか達も俺達のバイトした所を見てみたいとの事で、みんなして秋葉へと行く事になったのだった。

そして、放課後、俺達はパティとの約束どおりに校門前に集合していた。

「お待たせ、パティ。これで全員かな？それじゃ早速出発と行くか。」

そう言って、先に来ていたパティに声をかけると

「リョウカイデス。ケイイチ、しっかりとアンナイをよろしくデス。」

俺はそんなパティの言葉に頷くと皆にも

「おっし、それじゃみんな、早速行くとしよう。」

そう声をかけると、俺の言葉に皆も頷いて早速駅へと移動を開始する俺達だった。

そして、秋葉に向かう車内で俺達は軽くやり取りを交わした。

「そういえば慶一君のバイトのきっかけってなんだったんだっけ？」

そうこなたが訊ねて来たので、俺はそのきっかけを思い出しながら

「それは、去年の１０月頃に俺にとっても皆にとってもちょっと嫌な事件があったよな？その時に皆に世話になって、そんな皆に何かお礼をしたかった俺がお前らに色々奢ると言った事だな。あの時に相当散財しちゃってて、ちょっと苦しくなってたってのもある。後はまあ・・・クリスマスプレゼントを用意する為、かな？」

そう言うとこなたもその時の事を思い出しながら

「そっかー・・・あの時からだったんだね・・・まあ、あの時は私達も結局君の好意に甘えちゃったもんね。」

そうこなたが言うと、かがみ達もまたその時を思い出しつつ

「そうね・・・考えてみたら、ケーキバイキングは私たちのせいかもしれないわよね・・・。」

「わたしはその時はもうけいちゃんに別のところで奢ってもらってたからいなかったんだっけ。」

「そういえばあの時は妹ちゃんの姿はなかったわね。」

「それに、その後は慶一の実家の方でもまた奢ってもらう事になっちゃったもんなー。」

「確かに、あの時は私達も結局先輩のご好意に甘えてしまいましたね。私達はそれが一回目ではありましたが、泉先輩達はあの時には２回目だったんですね？」

「なるほどね・・・それじゃ流石の先輩も財政は厳しくなっちゃうわね・・・。」

「その事が分かってたら私も遠慮したかもしれないですね。」
「・・・先輩は、何も言わなかったから、私も先輩の好意を無にはできませんでしたし・・・。」
「そういう事っスか・・・これは私も先輩に何かお返しした方がいいのかもしれませんねえ・・・。」
「ケイイチはクロウしているのですネ・・・。」
「私は皆さんとは係わっていませんでしたが、そんな事があったんですね・・・。」

そう言っていたが、最後のひよりの言葉に俺は笑いながら

「ひより、それも俺がしたいと思ってやったことだ。お返しなんか考えなくてもいいよ。そうでなくても俺にはもう十分過ぎるほどの見返りはもらってるんだからな。」

その言葉にいまいち事情が飲み込めない若瀬さん以外は嬉しそうに笑ってくれた。

そして、そんな俺にこなたは

「まあ、そうでなくても私達も慶一君にはもうずいぶんと良くしてもらってるよね。私達の絆も仲間も慶一君がくれたようなもんだしね。」

そう言うと、みんなもまた、そのこなたの言葉に頷いてた。

俺はそんな皆の姿を嬉しそうな顔で見ていた。

そんな俺達に若瀬さんは

「・・・みなさん、本当にいい仲間なんですね。なんだか羨ましいですよ。」

そう言う若瀬さんに俺は笑いながら

「何言ってるんだよ。俺達と係わりを持ったなら、君だって俺達の仲間のようなものだぞ？それにここにいる皆も君の事は仲間だと認めてくれるはずさ。」

そんな俺の言葉に他の皆は少し呆れるようなため息をつきつつも

「まあ、慶一君の言う通りだね。私達と係わったなら、もう仲間って言えるよ。」

「結局私達もそんな風にして集まったのよね。」

「そうだね～。もうわたし達はお友達だよ？」

「そうね。私も歓迎よ？人の輪が広がるのは嬉しい事だしね。」

「結局はあいつが引っ張って来たよな。まあ、悪くはねえけどな。」

「やっぱり先輩には人を惹きつける何かがある気がしますね。」

「別名、お人好しともいうけどね・・・。」

「あはは。でも、私もそのおかげでみなみちゃんや田村さんと会えたんだもんね。」

「・・・私も、ゆたかや田村さんに会えたのも先輩のおかげだと思います・・・。」

「私はこうちゃん先輩や山辺先輩、毒島先輩とも仲良くなれましたし、小早川さん達以外の人は私にとっても予想外の事でしたよ。」

「ワタシはケイイチのイエにキタヒからミンナとデアイましたネ。あっというマにフレンドがデキタのもケイイチのオカゲだとオモッテいますヨ？」

そして最後に俺が若瀬さんに

「・・・まあ、こういう訳さ。ちょっと照れくさいけどね。だから、君さえよければだけど、俺達の仲間になってみないか？」

そう薦めると、若瀬さんは俺達を見回して少し考えたあと

「・・・私なんかでよければよろしくお願いします。」

おずおずとそう言う若瀬さんに俺達は満面の笑顔で頷くと

「ようこそ、若瀬さん。今日から君も俺達の仲間だ。」

そう言うと、若瀬さんも嬉しそうな笑顔で

「はい！これから色々あるかと思いますが、皆さんどうぞよろしくお願いします。」

そう言って頭を下げる若瀬さんに俺達はにこにことしながら頷いたのだった。

そして俺たちは秋葉へと辿り着く。

早速俺たちは前にバイトをしたア○メ○トを目指した。

ぞろぞろと連れ立ってア○メ○トへ向かう途中に、なんだかつかさに寄ってくる妙な連中がいた。

「あ、あの、１枚写真、いいですか？」

「まさかここで神○あ○りのコスプレに出会えるとは思ってなかったなー。」

「ひ、ひ○ゆきちゃんって言って見てください！」

最後の男の言葉に思わず声を発しそうになるつかさにかがみが庇うように立ちはだかって

「なんなのよ！あんたたち！うちの妹は見世物じゃないわよ！あっちへ行きなさい！！」

そう言うのだが、男達はなおもしつこくつかさの写真を撮ろうと寄って来る。

そんな様子を、こなたと俺以外の面々ははらはらしながら見ていたが、こなたは俺に

「・・・慶一君、よろしくー。」

そう言って来たので、俺は軽いため息をつきながらもつかさ達を守る為に連中の前へと歩いていった。

そして、連中の前に立ちはだかると、途端に正面から俺を見るものには恐怖を感じさせるほどのオーラを出して

「なあ、あの子も嫌がってるからさ、自重してくれないかな？俺も出来れば実力行使だけはしたくないからさあ。」

にこやかに、けれど、とてつもない恐怖を纏わせて俺は連中にそう話し掛けると、俺の気を浴びてすっかりすくみあがった連中がひたすら謝り倒しながら俺達の前から去って行った。

そして、危機が去った事を確認したかがみ達が俺に

「あ、ありがとう、慶一君。おかげで助かったわ。」
「ご、ごめんね？けいちゃん・・・それに、ありがとう。」
そう言う2人に俺もオーラを静めると2人に向き直って
「この位は大した事ないさ。何にしても、無事でよかった。」
そう言うと、2人とも笑顔を見せて頷いてくれたのだった。
そして、かがみ達は少しだけ緊張の面持ちでこなた達の方へ行って何事かを話していたのだった。

こなたｓｉｄｅ

つかさが厄介なカメラ小僧達に捕まってしまい、かがみもつかさを助けようとつかさを庇う為に向かったのだが、それでもひるまないカメラ小僧にいらついた私は、慶一君に2人を助けて来て欲しいと頼んだ。
そんな私に言葉に軽いため息を1つつきながらも2人を助けに行く慶一君を見送ったのだけど、そこで慶一君がカメラ小僧に見せた物は遠目から見ている私たちですら恐怖に飲み込まれるものだった。
慶一君はカメラ小僧の前に立つと、一言二言何かを言った後、それを感じるものが萎縮してしまうほどの殺意の篭ったオーラを発したのだった。
その状況に思わず言葉をなくす私達。

そして、カメラ小僧達もその殺気を感じて慌ててその場から逃げ出してしまったのだった。

殺意のオーラを収めてかがみ達に声をかける慶一君を見て私達も顔を見合わせて苦笑していた。

そして、かがみ達が私達の所へ戻って来ると、私はそんなかがみ達に声をかけたのだった。

「いやあ、災難だったね、かがみ、つかさ。」
「まったくよ・・・いきなり写真撮影されるとか驚いたわよ。」
「わたしもびっくりしたし、怖かったよ・・・。」
「でも、おかしな事にならなくてよかったわよね?柊ちゃん、妹ちゃん。」

その峰岸さんの言葉に2人とも苦笑しながら

「まあね・・・慶一くんのおかげで助かったわ。」
「あはは。どうなるかと思ったよ~。」

そして、そんな2人を見ながらみさきち達も

「柊はともかく、妹の方は、ああいう連中にもはっきりと嫌とは言えなさそうだもんなあ・・・。」
「まあ、どこにでもマナーのなってない奴はいるって事ですね。」
「こう?あなたは大丈夫なんでしょうね?」
「だ、大丈夫だよ、やまと。私はああいう連中は許せない性質だし。」

永森さんの言葉に慌てつつもそう言う八坂さん。

「この町には色々な人達がいるんだねー・・・。」
「・・・ゆたかも気をつけないとね・・・。」
「ゆーちゃんなら、みなりんがいるから大丈夫っスよ。」
「ミナミはユタカのガードですからネ！」
「確かに岩崎さんは小早川さんの事は大事に思っているみたいね。」

最後の若瀬さんの言葉に顔を赤くするみなみちゃんを見て私はいまだ周囲を警戒している慶一君を見ながら皆に

「・・・それはともかく、皆。さっきの慶一君から発せられたオーラを感じたよね？」

その言葉にかがみ達はびくりとなりながら

「・・・真後ろにいたけど、感じたわ・・・。」
「あ、あはは・・・わたしも・・・。」
「・・・すごく、怖かったわね・・・。」
「・・・さっきのあいつの前に立ったら気絶できるんじゃねえか？」
「あんな殺気は・・・初めて感じましたねえ・・・。」
「あの気配が静まるまでは冷や汗が止まらなかったわ・・・。」
「私も震えがとまりませんでした・・・。」
「・・・私も、鳥肌が立っていました・・・。」
「あのオーラを見せられて正面に立つ勇気なんてないっスよ・・・。」
「ほぼマチガイなく、イシキはトブでショウ・・・。」
「・・・先輩って、凄いんですね・・・。」

最後の若瀬さんの台詞に頷きながら私は皆に

「今後は慶一君を本気で怒らせるのは自重しよう・・・。」

そう言うと、みんなもこくこくと激しく頷いていたのだった。

そんな事を話しているとも知らない慶一君は周囲がもう安全だと分かると、私達の方へ戻ってきたので私達は慶一君をぎこちない笑顔で迎えたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

つかさにちょっかいを出すカメラ小僧を追い払ってから俺は周囲を警戒しつつ、こなた達の所へ戻ったのだが、何故かこなた達はぎこちない笑顔で俺を迎えてくれた。

俺はそんなこなた達を頭にハテナマークを飛ばしながら首を傾げて見ていたのだった。

そして再び合流した俺達はア○メ○トを目指す。

程なくして店に着いた俺達は、合流場所を決めておいて散開した。

俺とパティは店員さんにアルバイトの件で尋ねて来たことを伝えると、店員さんはすぐに店長を呼びに行ってくれた。

そして、物凄い勢いで俺達の前に現れる店長に俺は久々の挨拶をするのだった。

「お久しぶりです。店長。今回は無理を聞いていただいてありがとうございます。」

そう挨拶をすると、店長も豪快な笑顔で

「おお！良く来てくれたな、伝説の少年Ａよ。うむ、だいたいの話は聞いている。さあ、奥へと来るがいい！」

そう言う店長に俺達も頷いて、俺はパティを連れてスタッフ控え室へと赴いた。

そこで、俺の見守る中でパティの面接という名の契約が始まったので俺はその様子を見ていた。

「君が伝説の少年Ａの関係者であるパトリシア君だな？改めて聞こう。ここで働く気はあるかね？」

そう尋ねると、パティは満面の笑顔で店長に

「トウゼンですヨ！？そのタメにここにやってきまシタ！アニメテンチョウはワタシをヤトってクダサイますよネ！？」

そう言うと、店長は大きく頷いて

「うむ！君のやる気が気に入った！君をここで雇おうじゃないか！それでは、君の都合とシフトの話をするとしよう、まずは・・・・・。」

そうやってパティの都合にあわせたシフトや時間帯が決められて行く。

パティも真剣にそれを決めていた。

そして、あらかた話しが終わった頃、店長は俺に

「うむ！この子は私が責任を持って預からせてもらおう！時に、少年Aよ！君は再びここでバイトをする気はないかね！？」

そう言ってくる店長に俺は

「声をかけて下さるのはありがたいですが、俺も今年は受験に備えなければなりませんからね。あまり時間も取れそうにはないですよ。」

そう言うと、店長は少し考えるような仕草を見せて

「なるほど、確かにそれは大事な事だな。君の事情は理解した。ならば、パティ君と同じように周３でどうかね？」

そう言う店長に俺は呆れつつ

「あの、さっきの俺の話を聞いていましたか？受験があるから時間は取れないと言いましたが。」

その言葉に店長は腕組みをしながら俺に

「その事情はわかっている。しかしだな、聞く所によれば、君はパティ君をホームステイとして預かっているそうじゃないか。周３のバイトとはいえ、彼女を１人きりでバイト先に行き来させるのはよくないのではないかね？もしも何かがあった場合、１人きりではなにもできまい。だが、君がいるならば、もしもの時でも何らかの対処は可能なはずだ。彼女の身の安全の為にも一緒に行き来してやるのが他人の娘さんを預かる君の責任であると思うがどうだ？」

そう言われてしまうと、俺には何も言えなかった。

確かにこのままパティ1人きりで通わせるというのはやはり店長の言う通り、少し心配だ。

俺は少し悩んでいたが、パティの事を考える為に

「・・・確かにその通りですね。わかりました。パティと同じシフトでならお受けします。」

そう言うと、パティも満面の笑顔になり、店長もまた満足そうにうんうんと頷いて

「サンキューネ！ケイイチ！ワタシのコトをシンパイしてくれるケイイチのキモチはアリガタイですヨ！？」

「よくぞ言った。それでこそ、男だ！よろしい。では来週より、パトリシア君と共に来てくれたまえ！」

そう言う2人に俺は照れながら

「まあ、俺もお前を預かる身であるからな。そうなった以上は俺にも責任があるという事だ。それと、店長。了解しました。来週からよろしくお願いします。」

そう言うと、俺もまた、バイトの契約書へとサインをするのだった。

そして、一通りの契約を済ませた俺達は、こなた達と合流する為に集合場所へと向かった。

その際に、（店長に上手く乗せられちゃったかな？でも、仕方ないか・・・。）そう考えつつ集合場所に行くと、用事を済ませた面々が俺達を待っていた。

「皆、お待たせ。とりあえず俺達の用は済んだぞ？」

そう言うと、みんなも「「「「「「「「「おかえりー」」」」」」」」」と言って俺達を出迎えてくれた。

そして、パティのバイト確定と共に俺もバイトをやる事になった事を皆に話すと、パティを含む1年生組以外は何事かを考え込んでいたようだったが、ふいに顔を上げると俺に

「慶一君、ちょっとここで待っててくれる？」

こなたがそう言うと共に店の奥へと走って行った。

それを見たかがみ達もまたこなたの後を追って店の奥へと向かって行ったのだった。

結局、その後、皆も店長の所へ面接をしてもらいに行ったらしい。

皆の帰ってくるまでの間、俺達はとりあえず店を回っていたのだが、1年生組以外の全員の面接が終わるのを待っていたら、ゲーセンによる時間がなくなってしまった。

皆が戻って来た時にはみんなもまた満面の笑顔を向けて

「私達もバイトが決まったよー。また皆で楽しくやろうねー。」

「慶一くん達と同じく周3でやることにしたから、またよろしくね

？」

「頑張っていくよ～。またみんなでね。」

「またここでバイトする事になるとは思わなかったけど、また楽しんでいけそうね。」

「おーし、いっちょやろうぜ？小遣い稼いでおけば後で便利だしなー。」

「今年は入用ですから、助かりましたよ。部の発展の為の資料もこれで買い込めますね。」

「今年は誕生日会でのプレゼントも多くなりそうだしね。ここで稼いでおくわ。」

そう言う皆に、俺は苦笑して、パティは満面の笑顔になって

「結局、こうなったか・・・まあ、仕方ないな。やるからには頑張ろう。」

「ミナさんはワタシのセンパイとなるワケですネ？イロイロゴシドウをヨロシクデスヨ？」

そう言うと、みんなもまた気合を入れていたようだった。

そして、そんな俺達を見るゆたか達の顔はなんだか羨ましそうに見えたのだった。

結局またやる事になってしまったバイト。

その後にこの話を知ったみゆきもまた、バイトの面接にやってきて俺達の仲間に加わる事になった。

俺は、やれやれと思いつつも、今しばらくはこの状況を楽しんでみるか、と思うのだった。

憂鬱な旋律達～身体測定とバイトの再開～（前書き）

今回はらきすたでも有数のネタであるこの話を書いてみました。
それでは本編をどうぞ。

憂鬱な旋律達～身体測定とバイトの再開～

パティのバイトの決定と共に、俺もまた、前にバイトをしたア○メ○トでパティのボディガードも兼ねてのバイトをする事になった。

それを皆に話した途端、皆もすぐにバイトの面接をしてもらうために店の奥へと向かって行った。

結局俺達は再びこの店でバイトをする事になったのだった。

そして、その翌日にはみゆきさえもが面接に行ったらしく、前のメンバー全員が採用される事となったが、今回はそれにパティを含めたメンバーでのバイトとなったのだった。

そんな事があってから2日後、学校では年に一度のとある学校行事が行われる事となった。

登校中、いつものようにこなた達と合流したのだが、こなたとゆたかとつかさがなんだか元気がなく、かがみも少し顔色がよくない感じだった。

俺は何となくそのことが気になり、４人に声をかけてみた。

「おはよう、こなた、ゆたか、つかさ、かがみ。４人とも少し元気がない感じだけど、何かあったのか？」

そう尋ねると、４人はそれぞれ

「・・・まあ、ちょっと、色々とね・・・。」

「今日、学校で行われる行事で少し不安があって・・・。」
「わ、わたしもちょっと気になってる事があるから・・・。」
「・・・私は今日はちょっと朝御飯を抜いてきたから・・・。」

そう言ったので、俺は（今日の学校行事って何かあったかな?）と思案に暮れていると、そこに俺に小声であやのが

『慶ちゃん、今日は身体測定がある日よ?たぶん、４人ともその事を気にしてるんじゃないかな?』

そう教えてくれたので、俺はなるほど、と納得しつつ

『そういう事か、でも、たかが身体測定だろ?そんなに気にする程の事なのかな?』

そう言うと、あやのは苦笑しながら

『ふふ。女の子は色々悩みがあるものなのよ。慶ちゃんももう少しその辺を理解できるようにならないとだめよ?そうじゃなきゃ泉ちゃん達を傷つける事にもなっちゃうからね?』

と言うあやのの言葉に俺は頭にハテナマークを浮かべていたが、そんな俺を見たあやのは首を振りながら軽いため息をついていたのだった。

そんな中で俺は少し疑問に思った事があったのであやのに

『そういえばあやのはあの４人に比べると、なんというか普通にしてるよな?』

そう尋ねると、あやのは苦笑しながら

『あはは・・・まあ、私はそんなに気にはしてない所為かもしれないわ。』

と言うあやのの言葉を聞いて俺はなるほど、ととりあえずは納得していた。

それと同時にパティもまた、別段動じている様子もなさそうだった。

そんな中で俺はふいに、パティの胸元に視線を集中させているこなた、ゆたか、つかさの3人に気付きはしたものの、結局理解も出来ずに頭にハテナマークを飛ばしたままだった。

その後、校門前でみなみ達とも合流したのだが、みなみもまた、なんだか元気がなさそうに見えた。

そして、それぞれの教室へと行く為に昇降口で別れて俺達は教室へと向かったのだった。

教室に入ると先に朝練で学校に来ていたみさおが俺達に声をかけてきた。

「おはよ、みんなようやく来たなー。あれ?ちびっ子と柊と柊妹、なんだか元気ねえじゃん?何かあったんかー?」

という言葉に俺は

「おはよ、みさお。お前は朝練か。まあ、こなた達には色々あるみたいだよ。」

そう言うと、みさおは頭にハテナマークを飛ばしていたが、そんなみさおにこなた達は

「みさきちは悩みがなさそうでいいよねえ・・・。」
「日下部は、能天気だからね・・・はあ・・・。」
「あはは・・・まあ、色々だよ～・・・。」

そう言っていたのだが、そんな様子の3人にみさおはなにやらピンときたみたいで

「・・・能天気で悪かったな。あ、ひょっとして今日の身体測定の事気にしてんだろ?」

そうツッコミを入れると、3人ともびくりとなって

「な、何の事だか・・・。」
「べ、別にそんなの気にしてないわよ!」
「はうう・・・どうしてわかっちゃったのかな・・・?」

折角こなたとかがみが隠そうとしていた事をつかさが天然で暴露してしまい、それを聞いたみさおはニヤニヤしながら

「なるほど、やっぱしなー。ちびっ子と妹はともかく、柊が気にしてんのはやっぱりあれかなー?」

そう言ってかがみをからかうみさおだったが、その言葉にかがみは顔を真っ赤にして慌て始めて

「あ、あれって何の事よ?勝手な想像で物を言わないでくれる?」

そう否定しようとするかがみにみさおが更にニヤつきながら

「何って柊、それは体・・・おぶっ！！」

みさおが最後まで言い切る瞬間にかがみの鉄拳がみさおの脳天を直撃した。

そして、みさおを見下ろしながら真っ黒なオーラを出しつつかがみが

「・・・それ以上言ったら・・・殴るわよ・・・？」

と言うかがみにみさおは涙目で

「も、もう、殴ってるってヴァ・・・。」

と言うのを俺達は苦笑しながら見ていた。

そうこうしてるうちに黒井先生が教室に入って来て、今日の朝のＨＲが始まったのだった。

「おーし、皆席につけー！これからＨＲはじめるからなー。」

という声と共に全員が席につくと

「今日は身体測定があるから、準備はちゃんとしていくこと、ええなー？それじゃまずは男子からいこか。準備を済ませた奴から保健室へ行くよーに！」

その言葉を聞いて俺を含む男子が立ち上がり、更衣室へと向かいだ

す。

「慶一君、いってらー。」
「あんたは何も問題なさそうだからいいわよね・・・。」
「後で結果教えてね～。」
「行ってらっしゃい、慶一さん。」
「慶ちゃん、がんばってきてね？」
「私も後で結果見せてもらうからな？」

そう言ってくれる皆に

「ああ。それじゃ行って来るよ。というか、あやの。身体測定の何を頑張れと？」

最後にあやのにそう言いながら苦笑している俺だったが、とりあえず、皆に見送られて俺も更衣室へと向かった。

それから３０分程で身体測定を終えた俺は教室へと戻って来た。

「ふう、ただいまーっと。」

そう言いながら教室に入ると、俺の姿を見た皆が

「おかえりー。どうだった？」
「おかえり。その様子だと別段たいした問題はなさそうね。」
「おかえり～。わたし達はこれからだよ～？」
「結果は出ましたか？後で私も見せていただければと思っていますが。」
「おかえりなさい。丁度今教室を出ようとしてた所よ？」
「まあ、どっちにしても私らも終わってからじゃないと、ゆっくり

と結果は聞けねえよな。」

そう言って来たので俺は笑いながら

「まあ、前回よりは少し変化があったって感じだな。どっちにしても皆が終わらないとゆっくりと話せなさそうだし、先に皆も済ましてきちゃえよ。」

そう言うと、こなたが

「うー・・・こうなったら覚悟を決めるしか・・・それじゃ皆、行ってこよーよ。じゃあ、慶一君、また後でね？」

そう言うと、その言葉に皆も頷いて、女子の身体測定へと向かったのだった。

皆が戻って来るまでの間、俺達男子は適当に自習をしつつ女子の終了を待った。

そうして適当に時間を潰していると、ようやく女子の方が終わったらしく、皆が戻ってきた。

そして、なんというか、こなたとかがみとつかさの表情が暗いのが見て取れたので、一応それとなしに聞いてみようと思い、声をかけた。

「お帰り、皆。所で、こなたとかがみとつかさ。なんだか暗いぞ？何かあったのか？」

そう聞くと、３人は俺をキッと睨みつけて

「慶一君にはわからない事だよ！」
「・・・あまり聞かないでくれる？」
「・・・ちょっとショックな事があったから・・・。」

そう言ってきたのだが、そこにあやのが素早くやってきて

『慶ちゃん、３人とも身体検査の結果が思わしくなくて落ち込んでるのよ。だからあまり聞かないであげて？』

俺はそんなあやのの言葉に頷いて

『わ、わかったよ。あやのの言う通りにする。』

そう言うと、あやのもほっとしたような顔をしていた。

そして、そんな風に落ち込む３人をみゆきがなだめていたが、そんなみゆきにこなた達は

「みゆきさんが羨ましいよ・・・。」
「おのれ！１人だけ余裕そうな顔しおってー！！」
「いいなあ、ゆきちゃん・・・。」

そうみゆきに自分達の不満を叩きつけると、みゆきはそんなこなた達におろおろとしながら

「え、えっとその・・・なんというか・・・その・・・すみません・・・。」

そんな風に謝るみゆきを見て俺とあやのとみさおは苦笑を浮かべて

いたのだった。

俺はそんなこなた達に

「おいおい、そんなにみゆきを責めてやるな。それに、今出た結果だけが全てじゃないだろ?そこから先、まだまだ変化をしていくんだ。それは、これから先のおまえらの理想的になりたいと思う気持ちと努力しだいなんだからな?」

そんな俺の言葉にかがみとつかさは

「・・・そうね・・・確かに慶一くんの言う通りかも・・・今回出た記録だけが全てじゃないわよね?」

「・・・うん。何となく希望が持てて来た気がするよ。これから先、わたし達が自分の目標にどれだけ近づく努力ができるか、なんだね?」

その2人の言葉に俺は頷いて

「まあ、そういう事だな。これから2人がどうしていくか、それが大事だって事だよ。一時の結果だけがすべてじゃないって思わないとな。」

俺の言葉に納得して頷く2人だったが、こなたはまだ落ち込みながら

「かがみとつかさはまだいいよね・・・まだ希望あるしさ・・・でも、私は・・・どうにかなるのかなあ・・・努力だけじゃどうにもならない事って言う物もあるよね・・・?」

その言葉を聞いて俺は少し考えた後

「・・・こなたの場合、確かに遺伝的な物もあるかもしれない。けど、まだ諦めるのは早いだろ？俺達はまだまだ成長期だ。２５歳までは俺達の体は成長を続ける。だから、後７年はこなたにだってまだまだ希望はあるぞ？だから元気出せ。」

そんな俺の言葉にこなたは”ハッ”と顔を上げて

「そっか・・・まだまだ時間はあるんだね？よーし、なんだか元気が出てきたよ。ありがとう慶一君。」

そんなこなたに俺も笑顔で頷いたのだった。

そして、そんな俺にまたもあやのが側に来て

『ふふ。慶ちゃん、流石ね。柊ちゃん達も泉ちゃんも元気が出たみたいよ？』

そんな風に言ってくれるあやのに俺は照れながら

『俺はただ、皆に知って欲しかっただけだよ。今出ている結果だけが全てじゃないんだって事をさ。後はあいつらのやる気と気力が戻ればいい、ってそう思っただけだからさ。』

そう言うと、あやのは笑顔で

『そうね。案外それだけで自己完結しちゃってる子って多いのよね。だから、それに気付かせてくれた事は大きいと思うわ。』

そう言うあやのに俺は

『そういうものかな?でも、皆元気になってよかったよ。』

そう言う俺にあやのも笑顔のまま頷いていた。

そしてその日の昼休み。

いつものメンバーでアニ研部室での昼をとろうと部室へと向かっていた時の事、同じように身体測定を終えたこう達も部室に向かう道すがらに合流する事となったのだけど、その時に突然こうが俺の腕に抱きついてきた。

「お、おい。いきなりどうした、こう。」

その行動に驚いた俺はこうにそう尋ねると、こうはニヤリと笑いながら

「今日の身体検査でまた大きくなったのを確認したので先輩に報告も兼ねてますが。」

そう言ってきたのだが、俺は何の事かわからずこうに

「大きくなった、って何がだよ?」

そう尋ねると、こうはいたずらっぽい笑みを浮かべながら

「今先輩に押し当てているものですが?」

そう言った途端、俺はその事を理解し、顔を真っ赤にしたのだが、即座にこうにデコピンをかまして

「お前のスキンシップは精神衛生上にもよくないと、前にも言った筈だ！」

赤い顔のままこうにそう言うと、こうは涙目になりながら

「・・・痛い・・・すいません、調子に乗りました・・・。」

そう言って謝っていて、さらにはその様子に気付いたやまとが

「こう！！あなた、またそんな事やって！いい加減にしないと私も怒るわよ！？」

と言うやまとにこうは小さくなりながら

「ご、ごめんって、やまと。ほんの出来心だからさー。」

と言うこうにやまとはなおも説教モードを持続していたのだった。

そして、そんな俺達を見ていたほかの皆もまた、何名かは黒いオーラを発していて、更に何名かは不機嫌な顔をしていた。

俺はそんな気配に気付いたが、どうする事もできずにただビクビクしながら部室を目指した。

そして、部室で昼食を取りながら、今回の身体検査の結果についての話等をする俺達。

そんな中でやはり、こなた同様に元気のないゆたかとみなみだったのだが、こなたはさっき俺から言われた台詞を2人に言って聞かせ

たらしく、少しだけ元気を取り戻したようだった。
そして、何気にこなたが俺に
「そう言えばさ、慶一君の結果はどうだったの？私達の何名かはまあ・・・あまり納得のいく結果じゃなかったんだけどさ。」
と言うこなたに俺は
「ん。身長は去年より２センチ伸びたな。体重も３キロ増えた。まだベストの範囲内だから大丈夫だけどな。」
そう答えると、かがみが
「ふーん？じゃあ、慶一くんは今１７８センチなのね？でも、体重がそんなものならあんたもまだ痩せ型な方よね？」
その言葉に俺も頷いて
「そうだな。俺の場合、あまり脂肪がついてないからな。鍛えこんだ分、それが筋肉になってるって所だし。」
そして、気付いたら俺の腕を触っているつかさが
「そっか～。だからけいちゃんの腕はこんなに堅いんだね～。」
とのん気な声をあげているのを俺は少しだけ顔を赤くして照れつつ
「つ、つかさ、お前いつの間に・・・ま、まあ、そういう事だよ。」

そんな俺の体に興味を示したのか、みゆきや更にはゆたか達までもが俺の体のあちこちを触って

「やっぱり無駄のない筋肉ですね。見事です。」
「胸板も中々厚いわね。」
「腹筋もかなり鍛えこまれてんな。」
「わあー・・・足もがっしりだねー。」
「・・・背筋もすごいです・・・これがあるからあの攻撃ができたんですね・・・？」
「プロレスラーとはまた筋肉のつき方が違う感じっスね。先輩はあまりレスラーみたいに太った感じはないですし。」
「フクラハギもすごくハッてますネ！このキャクリョクであのウゴキをジツゲンしていたんですネ！」
「先輩って、格闘技やっていたんですねえ・・・。」

そんなみんなの行動をくすぐったく感じていたが、さらに毒島さんや山辺さんまでもが

「いっそのこと、先輩に格闘家の肉体のモデルを頼んでみてはどうですか？」
「田村さんの漫画に活かせそうだよね。うんうん。」

そう言ってうなずく山辺さんに俺は照れながら

「そ、それは流石に恥ずかしいぞ？大体、俺の体なんてそんなに価値なんてないって・・・。」

そんな俺にこなたがさらにニヤニヤしながら

「あれあれー？何を今更照れてるのさ、慶一君。温泉や海水浴でも

散々に慶一君は私達にその肉体をさらしてきたじゃん?」

その言葉に途端に真っ赤になる俺と、毒島さん、山辺さん、若瀬さん、こう以外のメンバー。

「・・・考えてみたら、俺は相当恥ずかしい真似してるな・・・特に温泉とかは・・・。」

その時の事を思い出し、そして、そんな事に慣れて来ている自分に複雑な思いの俺。

それは皆もだったようで、お互いに気まずい状態になってしまった。

そんな様子をくすくすと笑いながら見ているこうが俺に

「でも、先輩。私達にはそれ以前から裸晒してますよね?中学時代に一緒にプール等に行った時とか。」

その言葉に俺は少し慌てながら

「そ、そういやそうだな・・・。でも、そんな事も最近まで忘れていた気がするよ。」

その言葉にこうとようやく復活したやまとが

「ちょっと先輩、それは酷いんじゃないですか?私は今でも覚えてますよ?凄く楽しかったし。」

「そうね。私も覚えているわ。先輩に泳ぎを教わったのもあの時だったしね。それを忘れるとか、先輩って案外薄情なのね?」

その言葉に俺はさらに慌てて

「そ、そう言うなよ2人とも・・・すまん、俺が悪かったよ・・・。」

なんだか申し訳なくなって2人に詫びると、2人は苦笑しつつも

「まあ、分かってくれればそれでいいですよ。それに、今だって先輩との付き合いは続いてますからね。」

「まあ、そうね。今度またレゾンでご馳走になるという事で手打ちでいいわ。」

こうの言葉に嬉しくなりつつもやまとの言葉に苦笑する俺だった。

そして、2人は俺をもう1度見つめながら

「それにしても、先輩が卒業してから1年会えなかったし、久しぶりに合格祝いで遊びに行ったあの時先輩と再会して思いましたが、やっぱり先輩、大きくなってるなあ、って思いましたよ。」

「・・・そうね。卒業当時の先輩は確か、今より10センチくらい背が低かったわよね?」

その言葉に俺は首を傾げつつ

「んー?そうだったか?そういや、あの時は168センチだった気がするな・・・。言われてみれば確かに、成長してるかもしれないな。」

そんな風に言う俺に2人は笑いながら

「そう言う点から言えば、過去の先輩を知ってる私達は少しだけ優越感がありますね。」
「まあ、その点については同意かしらね。」
そんな2人の言葉を聞いてこなたは
「むう・・・いいもん。今は対等だもんね。同じ場所にいる以上は差なんてあってないようなものだよ。」
そう呟いていたが、その呟きを聞いた全員もうんうんと頷いていたのだった。
そして、ゆたか達や毒島さん達は俺の中学時代の事に興味を持ったのか、こう達に詰め寄って色々と質問攻めにしていたようだった。
詰め寄られて困惑してる2人を見ながら俺はただただ苦笑していた。
そして、学校が終わり、俺達の改めてのバイトの初日と相成った。
皆で集合し、バイト先へと向かう俺達。
俺達の担当は大体あの時と一緒だったが、とりあえずはバイト先へ向かう前に簡単な打ち合わせをする俺達だった。
「おーし、今日からバイトだけど、みんな。部署は前とほぼ一緒だ。皆、自分のやってた事を覚えているよな?」
皆を見回してそう言うと皆も
「当然だよ。仕事の仕方はまだ体に染み付いてるから問題なしだよ。

」

「なんだかんだで仕事して、それ以降は一旦は退いちゃったけど、まだやっていた事は思い出せるわ。」

「よ～し。私も今日からは頑張っていくよ～？けいちゃん。また何かあったらフォローしてね？」

「あの時の仕事のポイント等をメモした手帳はまだ残っています。こちらも問題ないですよ？」

「私の方も大丈夫よ？後は実践で感を取り戻して行くつもりよ？」

「私の方も大丈夫だゼ？いっちょがんばってみっか。」

「また私はレジですね。慣れてる仕事だからやりやすくて助かります。」

「私はまた日下部先輩やつかさ先輩と一緒ですね。お2人ともよろしく。」

「ワタシはコンカイがハジメてですからヨロシクですヨ？」

最後のパティの言葉に俺は頷きつつ

「ああ、わからない所等は俺達に聞いてくれ。それと、あの時の面接ではパティは確か、俺たちと同じ接客処理担当だったな。俺達も出来るだけフォローするが、俺達よりバイトの経験そのものが多いこなたに頼る方がより確実かもしれないな。」

そう言うと、パティも頷いて

「ワカリマシタ！コナタ、イッショにガンバッテいきまショウ！」

そう言うと、こなたもビシッと親指を立てて

「私にまかせたまへー。すぐにパティも一流にしてしんぜよう！！」

と、自信たっぷりに答えるこなたに俺たちは苦笑していた。
そんな事をやってるうちに秋葉に到着する電車。
俺たちは電車を降りてア○メ○トへと向かう。
そして、控え室で着替えを終えて俺達は店長の控え室に顔を出しに行く。
ドアをノックして帰ってきた声に俺は少し違和感を覚えた。
とりあえず中に入らなければと思い、俺は「失礼しまーす。」と言って部屋へと入ったのだが、そこで待っていた人物に俺達は驚きを隠せなかった。
その人は腕組みをしたままこちらに振り返り
「・・・よくぞ来たな。伝説の少女Aと少年A、そして、その仲間達よ!今日からはこの電気街店はこの俺が取り仕切る!少年達よ!今再び、この電気街店に奇跡を起こすのだっ!!」
そう熱い台詞をぶつけてくる店長に俺は驚きと困惑を交えながら
「・・・えーと・・・何故あなたがここにいるのでしょうか?兄沢店長・・・。」
俺が呆けている皆の代わりに代表で質問をすると、兄沢店長は俺たちにびしぃっと指を刺すと
「よくぞ聞いてくれた!実はな、前回君達がこの電気街店に配属に

なり、伸ばした売上が上の方に殿鬼の功績として認められたのだ！
そして、殿鬼は池袋本店へと栄転となった！その後に再び君達が殿鬼を訪ねてきたようだが、そのすぐ後で人事異動が決まってしまった殿鬼はすぐさま池袋本店へ行かざるをえなくなってしまったのだっ！ゆえに、今まで池袋本店でやっていた俺がここに来る事となったのだっ！人事異動という屈辱があったが、それはどうやら君達との邂逅、まさに運命だったようだ。そう言う訳だから今後は俺の元でこの店の売上の為に頑張ってくれたまえ！！」

最後に何故か兄沢店長の背後で爆発が見えたような気がしたが、そういう事ならしかたないと割り切って俺達は

「「「「「「「「「「分かりました（ワカリマシタ！）。今日から（キョウから）よろしくお願いします（ヨロシクオネガイしまス！）。」」」」」」」」」」

そして、俺達のバイトは再開されたのだった。

パティは結構飲み込みが早くて、すぐにこなたや俺の教えた事をこなせるようになった。

他の皆もあの時の感覚を取り戻すかのように自分達の仕事の一つ一つを噛み締めながらの初日となった。

つつがなくバイトを終えて、俺達は帰宅したのだが、夕食を済ませてのんびりしていた時、俺の携帯にかがみからのメールが飛び込んで来たのだった。

ｆｒｏｍ：かがみ

慶一くん、まだ起きてたかな？前に言った件だけどさ、行きたい映画と日にち決めたから、その連絡をしようと思ってメール送らせてもらったわ。
日にちは明後日の土曜日の放課後、場所は前に皆で行ったあの映画館で。
映画については当日に私が指定した奴を見る、って事でいいかな？
時間についても後で学校で打ち合わせましょ？
じゃあ、そういう事だから。

P．S　べ、別に楽しみにしてるって訳じゃないから、あくまでも賭けの報酬よ？だから、そこの所は勘違いしないでよね？

そんなかがみからのメールを見て俺は苦笑していたが、とりあえず返信を返すと、俺は明後日にやってる映画が何があるのかを調べ始めたのだった。

（賭けの結果は結果だからな・・・。）俺はそう思いながら、明後日の事について色々と考えるのだった。

憂鬱な旋律達～身体測定とバイトの再開～（後書き）

次回はかがみとした賭けの一件について書く予定ですのでどうぞよろしくお願いします。

近づく旋律～ゆたかと皆、そして、かがみと俺～（前書き）

かがみとの約束を果たす慶一、そしてその結果は？
それでは本編をどうぞ。

近づく旋律～ゆたかと皆、そして、かがみと俺～

こなた達の悩みの種でもあった身体測定もなんとか終わり、俺達は再び決まったアルバイトへと顔を出しに行く。

そこで待っていたのは殿鬼店長ではなく、なんと、兄沢店長だったのだ。

俺達は栄転された殿鬼店長の安否を心配しつつ、電気街店の新たな店長である兄沢さんの元、新たなバイト生活のスタートとなったのだった。

色々と不安を残しつつも初日のバイトを終えた俺は、パティと共に帰宅して、部屋でのんびりとしていたが、そこにかがみからの賭けの件に関するメールが入って来たのだった。

俺はかがみからのメールを確認しつつ、明後日の映画鑑賞の事で色々と考えていたのだった。

そして、次の日、俺はこなた達の邪魔が入らない所で、明日に関する打ち合わせをかがみとする事となった。

俺はかがみに言われた通り、こなた達の尾行に気をつけながら屋上の給水タンクの影で待っているかがみの元へと急いだ。

タンクの側に着くと、俺を待っていたかがみが俺にこっそりと手招きするのが見えたので、俺は背後に注意を配りつつかがみの側へと行った。

『かがみ、遅れてすまん。こなた達を撒くのに時間がかかったよ。』

かがみにそう謝りつつ言うと、かがみは苦笑しつつも

『ま、まあ、仕方ないわよ。とりあえず来てくれてありがと。それで、明日のことなんだけどさ、学校が終わったら私そのまま慶一くんの家に行くから、そこから出発しましょ？』

そのかがみの提案に俺は首を傾げつつ

『ん？俺の家に寄るのか？別に構わないが、何か理由あるのか？』

そう尋ねると、かがみは頷きながら

『うん。折角だから、制服のままで行くより、慶一くんの家に着替え持ち込んでそこで着替えてから行こうかな？って思ったのよね。それに出発場所が一緒なら待ち合わせに遅れるとかは回避できるでしょ？ねえ、どうかな？』

そう言うかがみに俺は少し考え込んでいたが、納得して

『なるほど、そういう事か。確かにそれならすぐに家を出れるし、待ち合わせうんぬんの心配もないな。ならそれで行くとしよう。』

そう言うと、かがみは少しだけ顔を赤くしつつ

『う、うん。そ、それとさ・・・その時もできるだけこなた達と出会わないようにしない？うっかり見つかってからかわれるのはなんだか嫌だから・・・。』

その言葉に俺も頷きながら

『それもそうだな・・・わかった。できるだけ目立たないように学校を抜け出して家まで行こう。抜け出す手順等は俺が考えておくから、当日にそれとなくかがみに伝えるよ。それじゃ、そういう事でいいかな?かがみ。折角だから当日は楽しもうぜ?』

最後の俺の言葉にかがみは顔を赤らめながら少しだけ嬉しそうに

『・・・ま、まあ、あんたが楽しみたい、って言うのなら付き合ってあげるわよ。け、けど、勘違いしないでよね?あくまでの賭けの報酬よ?あ、あんたと一緒に映画に行くのが楽しみって訳じゃないんだからね?』

最後に赤い顔のままそっぽを向くかがみに苦笑しつつ俺は

『はは。わかったよ。それじゃ当日にな。そろそろ授業も始まるし、戻ろうぜ?』

そう促すと、かがみも頷いて

『そ、そうね。慶一くん。先に戻ってくれる?私は後から適当に戻るからさ。』

かがみの言葉に頷くと、俺は再度周りをよく確認しながら教室へと戻って行った。

その5分後位にかがみもまた教室へと戻ってきたが、その前に教室に着いた俺はこなた達からこの休み時間に姿をくらましていた理由について色々と追求される事となったが、適当に誤魔化しておく俺

だった。

だが、何故かかがみだけは追求されていなかったので、その事に俺は少しだけ理不尽さを感じながら苦笑していたのだった。

そして、その日の学校は無事に、とはいい難いが、終わろうとしていた。

だが、1年生教室のエリアの廊下を歩いていた時、俺は廊下にうずくまる人影を見つけたのだった。

その人影に見覚えのあった俺はすぐにその場所へ駆け寄ってその子に声をかけたのだった。

「おい、ゆたか。大丈夫か?また気分悪くなったのか?」

俺がそう声をかけると苦しそうにしつつも俺に顔を向けて

「・・・あ、先輩・・・はい・・・ちょっと気分が悪くなっちゃって・・・みなみちゃんも今日は用事があったみたいでもう・・・帰ってしまっていますから・・・うっ・・・。」

そこまで話してまた気分が悪くなってきたみたいでゆたかは顔をしかめた。

俺はそんなゆたかの様子を見ておもむろにお姫様抱っこで抱え上げると、ゆたかに無理させないようにゆっくりと保健室へ向かって歩き始めた。

そんな俺の行為に気分を悪くしつつも慌てながら

「・・・せ、先輩、あの・・・。」

そう声をかけようとしてきたゆたかの言葉を遮って俺は

「いいから何も言うな。お前は具合を悪くしてるんだから、黙って大人しくしてればいい。それと、くれぐれも言っておくが、迷惑な事じゃないからな?俺が俺の意思でやってる事だ。そこの所は勘違いするなよ?それと、遠慮もするな。気分が悪くなった時はこれからもみなみが居ない時、俺がお前を見つけるような事になった時には遠慮なく頼れ、いいな?ゆたか。」

ゆたかは遠慮しすぎる所があるから、俺がそう言いおくと、ゆたかは少し躊躇してる部分もまだあったが、そんな俺の言葉に頷いてくれて

「・・・わかりました。先輩の言うとおりにしますね?それと、私を見つけてくれてありがとうございます。」

少し顔を赤くしながらそうお礼を言うゆたかに俺も笑って

「気にすんな。友達の、仲間のピンチだからな。」

そう言うと、ゆたかもちょっと驚きの表情を見せつつも俺に

「あ、ありがとうございます・・・。」

と言うゆたかに俺も頷きで応えたのだった。

そして、ゆたかを保健室へ連れて行くと、そんな俺達をみた天原先

生が

「まあ、小早川さん。ひょっとしてまた気分を悪くしてしまったのかしら?森村君。悪いけど、小早川さんを奥のベットに寝かせてあげてくれない?」

そう言って来たので、俺は頷いてゆたかを奥のベットへと連れて行った。

そして、ゆたかをゆっくりとベットに寝かせると、俺はとりあえずゆたかの回復を待つためにこのまま保健室に居残ったのだった。

「森村、ご苦労だったな。ふゆきに聞いたが、小早川は保健室の常連だそうだな?小早川もあまり体は丈夫な方ではなさそうだし、その苦労には同情するよ。」

そう俺に声をかけてきたのはかつてのクラスの担任でもあり、今は俺達が立ち上げたアニ研の顧問でもある桜庭先生だった。

「確かに本人にしてみればしんどい所でしょうね。けど、そうであっても俺達がゆたかの面倒を見れる限りはあいつを助けるつもりです。」

その俺の答えに天原先生と桜庭先生は感心しつつ

「ふふ。流石は森村君ね。君のような生徒が居てくれれば小早川さんも安心できるわね。」

「義理と人情に厚いのがお前のいい所でもあるな。これからもその気持は大事にする事だ。」

そう言ってくれる先生2人に俺は照れながらも頷いたのだった。

それからしばらくしてゆたかも回復したみたいで、俺は念のためにゆたかを家まで送り届ける任を天原先生から受けて、俺とゆたかは一緒に保健室を出て昇降口へ向かっていた。

「・・・先輩。迷惑かけちゃってごめんなさい。先輩の家と私の家は方向違うのに・・・。」

申し訳なさそうにそう言うゆたかの頭に手を置いて頭を軽く撫でると

「さっきも言ったけど、俺がそうしたい、って思ってやることだ。だから、お前は何も気にする必要はないぞ?」

そう笑いながら言う俺にゆたかも俺を見て少し顔を赤らめると

「先輩は・・・優しいですね・・・。とりあえず今日のところは先輩の言う事を聞いておきますね?」

俺の言葉に甘える事に決めたらしいゆたかからそんな言葉を聞いた俺はその言葉に満足気に頷くと

「そうそう。それでいいんだ。ゆたか、覚えておけよ?お前は決して1人じゃない。お前の姉さんや親友のみなみ、そして、その周りにいるみんなに、後、俺も。お前の周りにはお前を気にかけてくれる、助けようとしてくれる人がいる。けど、その人達はな、お前の事を思っているからこそお前に手を差し伸べてくれるんだ。だから、相手の事を思うなら、差し出された手になるべく応えてやれ。時にはそういう事もやり難い事もあるかもしれないが、それは決して恥ずかしい事じゃないんだからな?」

そんな風に言う俺をしばらく凝視していたゆたかだったが、俺の言葉に何か感じるものがあったのだろう、力強く俺に頷いて見せてくれた。

そんなゆたかの体調を気にかけつつ昇降口まで来た時、丁度部活を終えたこう達と鉢合わせる事となった。

俺達に気付いたこうが

「あ、先輩。いまお帰りですか？てっきり先に帰ったものかと思っていましたよ。」

そう言うと、さらにやまとが

「小早川さんと一緒なんて珍しい組み合わせね？」

そう言って来て、そこに毒島さんや山辺さん、ひより、パティの４人も

「そう言えばそうですね・・・ひょっとして先輩、そっちの気が？」

「先輩も墨にはおけませんねー。」

「先輩がまさかのロリ・・・・・・へぶっ！！」

「ケイイチ？サスガにジチョウすべきだとオモイマスよ？アウチ！！」

そんな６人のうち２人に制裁を与えつつ俺は

「お前らこそ今帰りか？実はちょっとゆたかの奴が気分を悪くしてな。俺が丁度ゆたかを見つけたから保健室に連れて行って様子を見

てた所だったんだ。それで、具合もよくなったからゆたかを家まで送ろうと思ってな。はいいが、毒島さん、山辺さん、勘違いはしないでくれよ?俺にその気はないんだからな?それと、ひより!パティ!お前らこそ自重しろ!!」

事情を説明すると、ひよりとパティは涙目に、その他の連中は苦笑しながら

「なるほど、そういう事でしたか。」
「今回も先輩のお人好しだって事ね?まあ、今回は人助けみたいだからいいけど・・・。」
「いやあ、早とちりしてしまってすいません。」
「そういう事だったんですね?なるほど、お人好し、納得です。」

そう言い、ひよりとパティは

「うう・・・すんませんっした・・・自重します・・・。」
「ケイイチ、ボウリョクハンタイネ!」

そう抗議してきたが、俺はパティに睨みを効かせて大人しくさせたのだった。

そして、いつまでもここでこうしていても仕方ないと思った俺はみんなに

「ま、とにかくそういう事だから俺はこれからゆたかを家に送り届ける。お前らも気をつけて帰るんだぞ?それじゃ、行くぞ?ゆたか。」

皆に挨拶をしつつゆたかにそう言うと、ゆたかも「はい!」と返事

をした後皆にも挨拶をして学校を出るのだった。

そして、無事にゆたかを家に送り届けて、俺のミッションは終了となるはずだったのだが、ゆたかを気にかけてくれた事を感謝してくれたそうじろうさん達に捕まってお茶をご馳走になる事となった。

そうして、少し遅くなりつつも家に戻ると、今晩の夕食はパティが準備をしてくれていたようだったので、俺は

「パティ、今日はちょっと遅くなってしまったけど、準備任せちゃって悪いな。」

そう言うとパティは手を振って

「ノープロブレム、ですヨ？ケイイチ。ケイイチはいつもワタシイジョウにカジをやってくれてマス。トキにはワタシもケイイチのタメにコウケンしなくてはバチがアタリますからネ。」

そう言ってくれるパティに俺も感謝の言葉を改めて言いつつ、今日の夕食となったのだった。

そして、次の日、いよいよ賭けの約束の実行の日がやってきた。

いつものように授業を終えた俺は、かがみと示し合わせた通り、こなた達に気付かれないように用事があるから先に帰るといいおいて学校を出て、最終的に俺の家で待ち合わせる事にした。

その際にはこなた達には気取られる事もなく、上手く誤魔化す事が出来たようで俺もかがみもほっとしていた。

やがて、お昼を用意している頃にかがみが時間差で到着した。

「お待たせ、慶一くん。すぐに私着替えてきちゃうから、お昼の準備よろしくね？」

俺にそう言っていつもの部屋へと荷物を置きに行くと同時に着替えに行くかがみを見送って俺はお昼の準備を済ませた。

やがて、着替え終わったかがみがキッチンにやって来た。

「準備は出来たわ。それじゃお昼食べて出かけましょ？それと・・・その・・・えっと・・・。」

そう言いながらなんだか少しだけ顔を赤くしながらもじもじとしているかがみを見て俺は

「ん？どうしたんだ？かがみ。なんかそわそわしてるみたいだが。あ、それと、その服似合ってるぞ？」

とりあえず素直にいまかがみが着ている服がそう思えたので褒めると、かがみはさらに顔を真っ赤にして

「・・・え？あ、えっと・・・その・・・あ、ありがと・・・。」

そう言って俯くかがみに俺は苦笑しつつ

「はは。とりあえず、食べよう。時間なくなるからな。」

そう言うと、かがみもどうにか立ち直ったみたいで俺の声に

「そ、そうね。それじゃいただきまーす。」

そう応えると、2人でお昼を済ませて映画鑑賞へと出かけることにした。

「それじゃ、出発するか。かがみ、忘れ物はないか？」

一応確認の為にかがみに聞いてみると、かがみは一応自分の荷物を確かめて

「うん。大丈夫みたい。それじゃいこっか。」

その言葉に俺も頷いて、駅まで向かう為に自転車をだした。

俺はかがみに後ろに乗るように促すと、かがみはかなり照れながら

「わ、わかったわ。慶一くん、安全運転でお願いね？」

そう言うかがみに俺も頷いて

「ああ。任せろ。それじゃしっかり捕まってろよ？」

俺がそう言うと、かがみはおそるおそる俺の腰のあたりに腕を回して

「こ、こうでいいかしら？」

そう聞いて来たので俺は

「うん。それでいい。それじゃ行くぞー？」

そう言うと、俺は自転車を漕ぎ出した。

その後ろで真っ赤になって俺にしがみつくかがみに気付かないまま、俺は駅まで自転車をとばした。

駅に着いて自転車を置くときにかがみの赤い顔に気付いて俺は一応かがみに「大丈夫か？」と聞いてみたが、かがみは赤い顔のまま「大丈夫よ。」と俺に言って来たので俺はその言葉に一応納得して電車へと乗り込んだ。

車内は意外と込んでいて、俺とかがみは窓際に押しやられたのだが、かがみの負担を減らす為にドアに両腕をついてかがみをガードするように立って、かがみを俺の腕の中に出来た空間に立たせて目的の駅まで耐えていた。

そして、かがみは俺のそんな行為に俺の顔を見上げながら顔を赤らめてぼーっと俺を見ていたのだが、俺もそんなかがみの視線に照れくさくなって少し顔を赤くしながらかがみの視線を外したのだった。

そんな俺の様子を見てかがみは赤い顔をしながらもクスッと笑っていたようなそんな気がしたが、照れくささで視線をそらしている俺にはその表情を見る事ができなかった。

やがて、目的地の最寄駅に辿り着くと俺達は揃って電車を降りて映画館を目指した。

そして、そんな最中に自然とかがみが俺の手を握ってきた。

それを意識し、かがみを見た瞬間、俺は照れで顔を赤くしながら

「あ、あの、かがみ？これは・・・？」

思わず聞き返すと、かがみもまた顔を赤くしながらも

「・・・今日は2人だけだから、こうするのもいいかな？って思ってね。もしかして迷惑だったかな？」

最後の方は少しだけ落ち込む表情を見せるかがみだったが、そんなかがみの顔を見た俺は

「い、いや、そんな事はないけど・・・でも、いいのか？その・・・そんな風にする相手が俺なんかで・・・。」

そう、かがみに言うと、かがみは少し呆れたような表情をしつつ

「・・・しょうがないわね、あんたは・・・。いい？一度しか言わないからよく聞いてよ？私はね、えっと・・・その・・・あ、あんただからいいの。そうしたい相手があんただから出来るの。わかった？」

上目使いで俺を見ながらそう言って来るかがみに俺はくらくらとしながら

「そ、そうか・・・わ、わかったよ。ありがとう、かがみ。」

なんだかしどろもどろになりながらかがみにそう応える俺だったが、かがみはそんな俺に赤い顔を向けながらにっこり笑って

「わかればいいのよ。それじゃ、いこっか。」

そう言うかがみの言葉にしたがって結局そのまま映画館まで歩く俺達。

俺はかがみを意識しないように冷静でいようとして必死だった。

かがみはというと、俺と手をつなぎながら上機嫌な様子だった。

そして、映画館に着いた俺達はチケットを購入する事となったのだが、俺は、見る映画の種類は私が決めるから、と言っていたかがみの言葉を思い出して

「かがみ、見る映画はお前が決めるって言ってたよな？結局何を見るんだ？」

そう尋ねると、かがみは新作のアクション映画を指差して

「あれよ。以前から面白そうだな、って思ってたのよね。それとも慶一くんは他に見たい映画あった？」

そう聞いてくるかがみに俺は

「いや、とりあえず見る映画はお前に一任するという事だったしな。俺はその決定に従うまでだよ。それに、お前が選んだ映画は俺も少し興味があったんだよな。」

と正直な所をかがみに伝えると、かがみは満面の笑顔で

「そう？ならよかったかな。それじゃ、チケット買って中に入りましょ？」

そう言うと、かがみは映画のチケットを買いに窓口へと向かった。
それを見た俺は慌ててかがみの後を追い、チケットの購入代金を出そうとしたのだが、それをかがみが遮った。
俺はそんなかがみに不思議そうな顔を向けて
「おい、料金は俺が持つ事になってたんじゃないのか？」
そう言うと、かがみは俺に
「まあね。最初はそのつもりだったわ。でも、あんたが私の願いを叶えてくれた事を知ったからさ。だから、そのお礼の意味も兼ねてここは私が出したい、そう思ったの。いいでしょ？それでもさ。」
そんな風に少しだけ嬉しそうな表情で言うかがみを見て俺はその好意に遠慮しちゃいけないと思い
「そ、そうか・・・ならかがみのお言葉に甘えさせてもらうかな。」
照れながらもそう言うと、かがみも笑顔で頷いて俺の分のチケットを買い込んで俺に渡すと
「それじゃ早い所席とっちゃいましょ？この映画結構人気みたいだし込みそうな気もするしね。」
そう言って俺の手を引くかがみに俺は
「そうだな。手っ取り早く席を決めちゃうか。それと、館内で席を決めたら今度は俺が飲み物とかの代金出させてもらうからな。飲み

たいものとかあったら俺に言ってくれ。すぐに買いに行って来るよ。」

そう言うと、かがみは1つ頷いて

「わかったわ。それじゃ、そっちは任せるから。」

そう言うかがみに俺も頷きで返すと、席を確保する為に館内へ入って行くのだった。

そして、2人が座れる席を見つけて俺達は隣り合わせで席につく。

席を決めてから俺はかがみに言われた通りの飲み物とポップコーンを買いに売店へと行くのだった。

そして、飲み物などを買って席に戻り、かがみに買って来た物を渡して、ようやく映画鑑賞の準備も済んだので後は上映開始を待つ俺達だった。

「うーん・・・内容はCMなんかで少しは知ってるけど、どういう話になるのかが楽しみね。」

俺にそう話し掛けてくるかがみに俺も

「そうだな。でも、映画館で真実を知るのも映画鑑賞の楽しみでもあるしな。とりあえず期待しよう。」

俺の言葉にかがみも頷いてそして、上映開始のブザーが鳴ると、いよいよ映画の上映が開始された。

映画を見ながらしばらくすると、俺の肩に何かが乗る感触を感じてかがみの方を向くと、かがみは俺の肩に頭を預けてなおかつ俺の手を握ってきた。

俺はそんなかがみの行動にドギマギしつつ

『お、おい、かがみ。一体どうした?突然肩に頭乗せて来たから少し驚いたぞ?それに手も・・・』

小声でかがみにそう言うと、かがみは俺に視線を向けながら

『・・・お願い・・・今日だけ・・・今日だけでいいから・・・私のしたいようにさせてくれない?それとも慶一くんには迷惑な事だったかな?』

そう言ってくるかがみに俺は、はっきりと

『そんな事はないぞ?かがみがそうしたい、って言うのなら俺は構わない。迷惑って事はないからそれだけははっきり言っておくぞ?そこだけは勘違いしないで欲しい。』

そう言うと、かがみはほっとしたようになって

『・・・ありがと。やっぱりあんたは優しいね・・・。でも、ごめんね。私の我侭に付き合ってもらってるし・・・。』

そんな風にいうかがみの頭を軽く撫でてやりながら

『いいさ。それでかがみが満足するならどうって事ないよ。』

そんな俺の言葉にかがみは嬉しそうな顔で

『ふふ。ありがとう、慶一くん。』

そう言うかがみに俺も頷いたのだった。

そうこうしているうちに映画も佳境に入り、いつしか俺達は映画の世界に見入り、ハラハラドキドキしながらクライマックスまで楽しんだ。

結果から言うと、映画はとても面白く、評判通りのものだと言えた。

映画を終えて帰りながら俺とかがみはさっき見た映画の事で興奮しながら話しをしまくっていた。

そして、柊家に戻る途中に、森村家に着替えを取りに戻り、俺はかがみを送って柊家へと向かった。

帰りも俺はかがみを自転車に乗せて送っていったのだった。

そして、鷹宮神社の前で俺達は今日の最後の挨拶をしようとしていた。

「ふう、到着だ。ようやく着いたな。」

自転車を止めてかがみを降ろしながら俺はかがみにそう言うとかがみは俺に笑顔を向けながら

「ふふ。お疲れ様、慶一くん。今日は付き合ってくれてありがとう。慶一くんは楽しめた？」

俺にそう確認するように聞いてくるかがみに俺は笑顔で

「ああ。楽しかったよ。映画も当たりだったし、お前の意外な一面も見れた気がするしな。」

そう言うと、かがみは途端に顔を赤くして

「あ、あれは、普段出来ないような事をやってみたいと思っただけよ・・・べ、別に特別な意味なんてないんだからね！」

そっぽを向きながらそう言うかがみに俺は苦笑しつつ

「そ、そうか・・・。まあ、俺は楽しめたけど、かがみはどうだったんだ？」

そう尋ねると、かがみはまだ赤い顔のままそっぽを向いた状態で

「・・・ま、まあ、一応は楽しめたかしらね。」

その答えを聞いた俺はとりあえずほっとしながら

「そうか。それならよかった。ま、とりあえずこれで賭けの約束は果たしたわけだな。」

そう言うと、かがみは俺の方を見て表情に寂しさを浮かべながら

「そ、そうね・・・。もう、こういう事も出来ないかもしれないわよね・・・今回のはあくまでも賭けでの約束だったものね・・・。」

そう言うかがみに俺は

「・・・そうだな、その結果した約束にすぎないよな・・・だけど・・・。」

俺はそこまで言って1度言葉を切る。

そんな俺の言葉にかがみも

「・・・だけど・・・慶一くん、私・・・私は・・・これが最後になんてしたくない・・・。」

そんな風に言うかがみに俺は

「・・・なら、やる事はわかるよな？かがみ。」

そう言うと、かがみは俺の言葉の意味を少し考えていたようだったが、”その事”に思い当たった時、かがみは俺に決意のような眼差しを向けて

「・・・そうね。ありがとう、慶一くん。それと・・・」

そう言うと、かがみは俺の側に寄って来て俺の唇に軽くキスをすると

「これは今日付き合ってくれた事に対する私のお礼よ？今日はこれで帰るわね？でも、”また今度”付き合ってよね？」

そう言って赤い顔の笑顔を俺に向けながら俺に手を振って帰っていくかがみを俺は呆然としながら見送ったが、それからしばらくしてかがみの最後の言葉を思い出した俺は

（・・・あー・・・びっくりした・・・。でも、かがみ、俺のいいたかった事、気付いてくれたみたいだな。）

そう心の中で考えると、俺は今日のかがみとの事を思い出しながら家へと帰ったのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんとの賭けの約束で今日は一緒に映画へと行った私だったけど、慶一くんは私の服装を褒めてくれたり、私の我侭にも付き合ってくれたりと優しい所をまた見せてもらった。

そして、帰ってきて今回のこれが賭けの約束で行った事だったという事を感じた時、今後はもうこういう事も出来ないかも知れないと思った時、私は凄く寂しい気持になった。

けれど、最後の最後で慶一くんが私に言ってくれた言葉は、私達が誓い合ったあの言葉を思い出させてくれるものだった。

私は慶一くんに言われた言葉を改めて反芻しつつ、心の中で

（今日は色々な事しちゃったな・・・でも、慶一くんも特に迷惑だとは思っていないみたいだったからよかったかも・・・そして、今日の最後に言ってくれた事、私の心にも響いたわ。でも、私にそれを言ったっていう事は、私はまた、それを望んでもいいのよね？だって私は・・・楽しかったから・・・慶一くんに強がってああ言ったけど、本当は楽しかったから・・・だから、もう1度、私は慶一くんと一緒に・・・また一緒に出かけたりしたいから・・・あいつと一緒に居たいから・・・私は・・・あいつが・・・）

そこまで考えた時私は、あいつへの自分の気持が少しだけ分かったような気がした。

私達のこれからの時間の中で、私はこの気持についてじっくりと考えて行こうと思うのだった。

あちこちで奏でられる旋律～慶一とみゆきの思い、ゆたか達の思い、そして、そ

かなり期間があいてしまいましたが、次話投稿です。
今回でＰＶ９０万、ユニーク７万５千到達です。
皆さんに改めて感謝を、それでは、本編をどうぞ。

かがみとの賭けの約束の打ち合わせの後、気分を悪くしていたゆたかを偶然にも見つけた俺はそんなゆたかを保健室へと送り届ける。

そして、その帰りにこう達に出会い、からかわれもしたが、とりあえずゆたかを泉家へと送っていったのだった。

そして、その次の日にいよいよかがみとの約束を果たす事となり、映画館へと出発する俺達。

そんな中でかがみが普段見せないような態度を見せられて俺はかなり戸惑っていた。

そして、約束も果たし終え、今日が終わる頃にかがみは俺に礼を言っていたのだがその表情はなんだか寂しそうでもあった。

そんなかがみの心に気付いた俺は、かがみに俺達が誓いあったあの事をヒントとして告げると、かがみはどうやら元気を取り戻したようで、最後は笑顔で帰って行ったのだった。

そして、その翌日から、かがみのテンションはまたもバレンタインの後の時と同じようになり、そんなかがみを見たこなたが「かがみがまた壊れた・・・。」と呟いていたのだった。

そんなある日の昼休み、俺は前に皆と話あった進路の事について、色々調べ物をするために図書室へと向かっていた。

すると、背後から俺に声がかかったのだった。

「・・・先輩、こんにちは・・・。先日はゆたかを助けてくれたそうですね・・・。そんな先輩に私もお礼を言いたくて探していたところでした・・・。」

その声に振り向いてみると、そこに立っていたのは俺に微笑みを浮かべるみなみだった。

「お？誰かと思ったらみなみか。いや、あれはたまたま俺が気付いたからであって、ほんと偶然みたいなもんだったんだよ。」

みなみのお礼に照れながら答えると、みなみは

「・・・それでも・・・私はあの時にゆたかを見てあげる事ができませんでしたから・・・。」

少し落ち込むような顔でそう言うみなみに俺は軽いため息を1つつくと

「・・・あのな。俺もお前も四六時中ゆたかの事を見てられる訳じゃない。お前にもお前の事情もあるだろうし、俺もそうだ。そして、ゆたかの体調も俺達の見ていない所で変わる事もある。これは俺達にとっても不可抗力でしかない事だ。だから、俺達が手を貸せない場合があったとしても仕方のない事なのさ。みなみ。お前はゆたかの事を気にしてくれる、それは嬉しい事だけど、それはお前の目の届く範囲で気にしてやればいい。目の届かなかった所は仕方のない事だと割り切らなきゃお前自身もつぶれちまうぞ？それに、自分の事で元気をなくすお前を見たらゆたかだって悲しむだろう？だからお前はゆたかがお前を見ていても安心できる状態でいてやるようにする事だ。わかるな？みなみ。」

俺の言葉を聞いてその言葉について考え込んでいるみなみだったが、ふいに顔を上げて俺を見ると

「・・・そうですね・・・先輩の言う通り、少し気にしすぎていた所がありました・・・。これからは先輩の言葉をよく噛み締めながらゆたかと接して行こうと思います・・・。先輩、私にその事を分からせてくれて・・・ありがとうございます・・・。」

そんな風に言うみなみに俺は笑いながら

「いいさ。ああはいったけど、ゆたかに対するお前の気持はありがたいものだからな。だから、みなみ。これからもゆたかの事、頼むぞ?」

そう言うと、みなみは再び微笑みながら短く「・・・はい・・・。」と答えてくれたので俺はそんなみなみに頷くのだった。

その後、みなみと別れて俺は改めて図書室を目指していたが、そこにあのテンションのままのかがみがやって来て俺に声をかけてきた。

「やっほー、慶一くん。探してたわ。あのさ、今日バイトあるじゃない?その時に時間までちょっとラノベの新刊選びたいから付き合ってくれないかな?」

そんなかがみのテンションに少し引き気味になりながら

「あ、ああ。そういう事なら別に構わないぞ。それじゃ後は放課後に、だな。」

そう答えるとかがみは満面の笑みを見せて

「ほんと!?やったあ!!それじゃ放課後にね?またあとでね、慶一くんー♪」

そう言いながら鼻歌交じりに俺の前から去っていくかがみを見送りつつ、苦笑を浮かべる俺だった。

そして、気を取り直して改めて図書室へと向かい、俺は図書室に設置してあるパソコンの前へと行くと、そこから色々と検索を始めるのだった。

しばらくパソコンと向き合って検索を続けていると、そんな俺の姿を見つけたみゆきが俺の側にやってきて小声で

『あら?慶一さん。教室にいらっしゃらないと思っていたらこちらにいらしたんですね。なにやら熱心になさっているみたいですが、何を調べていらっしゃるのですか?』

その言葉に俺はパソコンの画面に向けていた顔を上げて

『ああ、みゆきか。いや、ちょっと先日の進路の事について考えていてな。俺が考える大学がないかどうかをネットを使って調べていた所なのさ。』

そう答えると、みゆきは俺の横に座って同じように画面を見ながら

『・・・なるほど、色々調べられてるのですね・・・。あ、と言う事は、慶一さんはあの時おっしゃられていたやりたい事を探す為に大学へ行くと言う事を考えられている、と言う事なのでしょうか?』

そのみゆきの言葉に俺は静かに頷くと

『まあ、そういう事だな。もっとも、俺だけの事じゃないんだけどな。みゆき、お前としたあの約束の事覚えてるよな?』

そうみゆきに尋ねると、みゆきは俺の言葉にこくりと頷いて

『忘れてはいませんよ?皆で一緒に居れるように努力する、そういう事でしたね。』

みゆきの答えに俺もこくりと頷いて

『そうだ。俺は今回もその事に関して動いている。まだみんなの進路は出きっていない所ではあるけど、俺は皆が習いたいと思う学部の揃ってる大学を探っているのさ。もっとも、見つかるかどうかの確立は相当低いがな・・・。でも、俺はお前と約束したようにその事を最後まで諦めたくないと思ってるからな。』

そんな俺の言葉にみゆきは頬に手を当てながら

『そ、そうだったんですか・・・。でも、皆さんが習いたいと思う学部が揃っている学校となると、探すのは容易ではないでしょうね・・・。』

少し困ったような顔のみゆきに俺は苦笑しながら

『確かにな・・・。けど、俺はそれでも最後まで諦めるつもりはないよ。みゆき、お前もそう思ってくれるなら、少し俺に付き合って協力してくれないか?』

そう伝えると、みゆきは少し考える仕草を見せた後

『私が・・・慶一さんのお役に立てるでしょうか？』

そう聞いて来たので、俺はみゆきの言葉を肯定するように頷いて

『お前に、その気があるならば、それを望んでくれるならば、俺達で開けない道はないと思うぞ？後は・・・そうだな・・・お前があの約束を果たしたいという気持があるなら、俺達ならきっと・・・。」

そう言う俺の顔をしばらく凝視していたみゆきだったが、その顔に優しい微笑みを浮かべると

『そうですね。私も慶一さん同様、諦めたくはないですから、私も精一杯頑張ってみようと思います。』

そう言ってくれたので俺は笑顔を向けながら

『お前なら、そう言ってくれると思ってたよ。それじゃ、みゆき、こうしよう。俺達で定期的に情報を持ち寄ってその上で当たりをつけていくという感じで。』

俺のその言葉にみゆきも頷いて

『わかりました。では、周期は一週間事に、場所はこの図書室で、時間はお昼休みにしましょうか？』

その言葉に俺も頷くと

『ああ、それでいいだろう。そして、納得の行く所が見つかったその時には、俺とみゆきで皆に話してみよう。そこまでやっても皆が自分達の望む学校へ行きたいと言うなら・・・。』

俺の言葉をみゆきが補足して

『・・・その時は、それで私たちも納得するしかないでしょうね・・・それでも・・・結果は出したいですね・・・。』

そんな風に言うみゆきに俺は重々しく頷くと

『・・・ああ。そうだな・・・せめて悔いのない結果を・・・。』

そう、短く言うと同時に時間が来たので俺は調べ物を中断して

『みゆき、今はここまでのようだ。そろそろ教室に戻ろうぜ?』

そう、声をかけるとみゆきも頷いて

『そうですね。それでは、今日から始めていきましょう。私も家に帰ってからも調べていってみますから。』

そう言ってくれるみゆきの肩を軽くぽんと叩くと俺とみゆきはお互いに頷きあった後、午後の授業の待つ教室へと帰って行くのだった。

教室に戻った時、俺とみゆきだけが教室に居なかった事をこなた達に追求されもしたが、それぞれに調べ物があったから図書室に行っていたんだと伝えると俺はともかく、みゆきは納得されたみたいでまたも理不尽さを感じつつ苦笑していた。

そして、その日の放課後、俺は皆とバイトに行く為に校門前で待ち合わせをしていたのだが、教室に忘れ物を思い出して皆には先に校門前へ行っていてもらって俺は一人、教室へと戻っていた。

その帰りにゆたか達と出会った俺は、３人に声をかけてみる事にしたのだった。

「よう、ゆたか、みなみ、ひより。今帰りか？」

そう声をかけると、３人は俺に気付いて

「あ、先輩。はい、今日は田村さんも部活はないみたいなので一緒に帰る事にしたんです。」

「・・・今日は３人で帰れそうだったので・・・それで、一緒に・・・。」

「先輩達がバイトに行く日は大概こうなるっスね。」

そんな風に言う３人に俺は聞いてみたい事があったので質問をぶつけてみる事にした。

「なあ、ちょっとお前らに聞きたいんだけど、お前らの進路ってどう考えてるんだ？」

そう尋ねると、３人は少し考えながら

「私は、まだ具体的には決めていません。やってみたいな、って事はあるんですが、それが続くかどうかを考えると、まだはっきりと決めきれない所があるんです。」

「・・・私は・・・ちょっと悩んでいる事があります・・・。」

「私はプロの漫画家を目指したいと思ってるっス。」

そう答える3人のうち、ゆたかとみなみの事が気になった俺は2人に

「ひよりの事はよくわかった。ゆたか、みなみ。お前ら2人の悩んでいる事っていうのをよければ俺に教えてくれないか?」

そう尋ねると、2人は少し悩む素振りを見せた後

「・・・わかりました。実は私は絵本を作るのが好きなんです。なので、その作家さんにあこがれているんですけど、私のこの体じゃないですか。続けることができるのかどうかが不安なんですよね・・・。」

そう、ゆたかが答え、そして、みなみも

「・・・私は最初は家にチェリーもいますし、動物を助けられる獣医を目指そうかと思っていました・・・。しかし、最近ゆたかと友達になって、ゆたかの体を心配するうちに・・・みゆきさんの目指す人間相手の医者の道も考えるようになったんです・・・。なので、今、その2つの道で揺れているんです・・・。」

俺はその答えを聞いて、少し考える仕草をすると

「そうか・・・ゆたかは絵本作家・・・みなみは人間相手か動物相手かの医者の道で悩んでいると言う事なんだな?」

そんな俺の言葉に頷く2人。

俺はまず、ゆたかとみなみに

「ゆたか、みなみ。お前らはまだここに入学してそんなに時間も経っていない。だから、まだ考える時間はあるだろう。後2年の間、じっくりと悩んで結論を出すといいさ。」

そう言うと、2人は頷き、そして、さらに俺はひよりに

「ひよりはすでに目標を持っているみたいだな。その目標に揺るぎがないのであれば、これからもその道にまい進して行けばいい。」

そう言うと、ひよりも頷いて

「ええ。これからも私は頑張って行く所存っスよ！」

そう言ってガッツポーズをとるひよりに俺は微笑ましさを感じた。

そんな3人に俺は一応話しておくべきかもしれないと思い、3人に声をかけた。

「3人とも、ちょっと聞いて欲しい。俺は今みゆきと共に皆の進路を聞いて、そして、学びたい学科の揃っている学校を探して奮闘している所だ。何故そうしたのか、なんだが、俺とみゆきで約束をした事があったからだ。」

そこまで話すと、3人は俺に

「「「約束（ですか？）（っスか？）？」」」

そう聞き返してきたので俺は頷いて

「ああ。出来る事ならば、大学へ行く時までも俺達は一緒に居たい。そのためにできる努力は最後までやりたい、そういう事なんだ。そんな学校を探す事も難しいし、万が一見つかったとしてもそこが皆の学びたい事に対するレベルがあるかどうかも怪しい。けど、それでも、俺達は共に歩む道を摸索したかったんだ。だから今、その為に頑張っている。」

そこまで言ってから一息ついて、そして更に俺は言葉を続ける。

「もし・・・もしもだ。そんな学校が見つかったとしたら、ゆたかやみなみやひよりはどうする?俺は・・・俺の望みはみんなと大学でも一緒に過ごせたらと思ってる・・・けど・・・俺にはそれを強要する気も権利もないし、それが無理で皆がそれぞれの意思があるなら・・・俺は皆の意思を尊重しようと思ってる。俺は・・・この事をいずれこなた達にも持ちかけてみるつもりだ。こなた達がどういう反応をするかはわからないけど・・・それでこなた達も自分の意思を貫くつもりならそれでもいいとも思ってる。ゆたか達にはまだ時間もあるしな。俺の言う事も頭の墨にでも置いてもらってその上でじっくりと考えて行って欲しいんだ。とりあえず今は、俺とみゆきがそんな事を考えているって事だけでも知っておいて欲しい、って事かな。」

そんな俺の言葉をゆたか達は反芻しながら考え込んでいるようだった。

そこまで話し終えてから俺はみんなを待たせてる事を思い出して

「おっといかん・・・みんなが待ってるんだった・・・ごめんな、俺は先に行くから。とりあえず、話だけでも覚えておいてくれな?それじゃな、3人とも。」

俺は3人にそう言いながら手を振ってその場を後にした。

3人もそんな俺に手を振り返してくれたのを視界の隅に捕らえつつ校門前へと急いだ。

そして、皆を待たせた事に対するお詫びとしてジュースを奢るように言われた俺だった。

ゆたかｓｉｄｅ

みなみちゃんや田村さんと一緒に帰ろうと廊下を歩いていた時、ふいに慶一先輩から声をかけられて私たちは先輩に挨拶をした。

その時に先輩は私たちの進路について聞いてきたので、田村さんは明確に進路を考えているみたいだったけど、私とみなみちゃんはまだ悩んでいる事があったので、その事を先輩に伝えた。

すると、先輩は、高良先輩と一緒にある事をしようとしている、その事を私たちに伝えてくれた。

それは、私たちも思いもしない、実現は限りなく難しい難問だった。

先輩に難問に関して考えて欲しいと言われ、私達は先輩の思いを感じつつも内心複雑な心境だった。

「なんか、すごい事聞いちゃったね、みなみちゃん、田村さん。」

そう2人に話を振ると、2人は頷きながら

「・・・そうだね・・・先輩やみゆきさんがそこまで考えているなんて思いもしなかった・・・。」
「私達が学ぶ教科のある、それでいてそれなりのレベルの学校かー・・・でも、本当にそんな場所があるなら、私、乗ってもいいって思うかなあ・・・。」
そんな風に言う田村さんに私は
「田村さんは先輩の話を考えるつもりなの？」
そう尋ねると、田村さんは苦笑しながら
「もしも、本当にそんな学校があるなら、だね。それに、なんだかんだで先輩は私達との繋がりも大事にしたいんだな、って思ってる事が嬉しくもあったり。」
その言葉にみなみちゃんも頷いて
「・・・先輩のその思いは・・・本物だな、とは思えるね・・・私も・・・そんな先輩の絆を重んじる気持に応えてもいいかな？って思う・・・。ゆたかは、どう・・・？」
そんな風に問い掛けてくるみなみちゃんに私は少し考えてから
「・・・私も、かな？そこにやっぱりみなみちゃんや田村さんが居てくれるなら、すごく心強いな、って思うよ？それが甘えてるって言われちゃうかもしれないけどね。でも、甘くても・・・一緒に居たいって思うのは我侭かなあ？」
そんな風に言う私にみなみちゃんは

「・・・いいんじゃないかな・・・そんな我侭言えるのは学生の間だけかもしれないけど・・・それでも・・・今の私達はやりたいように学生時代を過ごすのがいいんじゃないかな?って思える・・・。」

そんなみなみちゃんに田村さんも頷いて

「そうだね。だったら学生の時にしか出来ない事やってみようよ。その中に先輩の言っていた事も含めるのも悪くないよね。」

その言葉に私も頷いて

「そうだね。それも先輩が示してくれた道の1つだもんね。それに、先輩も言ってくれたけど、私達にはまだ考える時間もあるんだしね。」

私の言葉にみなみちゃんも薄く笑って頷いてくれた。

そんなみなみちゃんを見ながら田村さんは

「・・・でも、みなりんはひょっとしたら先輩に付いて行く道を選ぶかもしれないね。」

少しニヤニヤとしながらそう言う田村さんに私とみなみちゃんは「どうして?」「・・・?」と頭にハテナマークを浮かべていたが、そんな私達に田村さんは人差し指を立てながら

「みなりんは高良先輩にあこがれていて、それで目標にもする人だよね?」

その言葉にこくりと頷くみなみちゃん。

田村さんはそれを確認してから更に言葉を続けて

「たぶん、いや、ほぼ確定事項だと思うんだけどさ、高良先輩は慶一先輩が選んだ所に付いて行くと思うんだよね。そうなるとさ、高良先輩を目標としているみなりんとしては後を追いたい、と思うんじゃないかな、ってね。」

そんな田村さんの言葉にみなみちゃんは少し慌てつつ

「・・・確かに私は・・・みゆきさんを追いたいと思っているけど・・・田村さんはどうしてみゆきさんが慶一先輩に付いて行くって思うの・・・？」

その言葉に田村さんは少し驚きの表情を見せてからまたニヤニヤとして

「・・・みなりん、それ、本気で言ってる？と言うか、気付かない？」

その言葉に私もみなみちゃんも頭にハテナマークを飛ばしていたけど、そんな私達に少し呆れつつも田村さんは

「・・・はあ・・・ゆーちゃんはともかくみなりんは気付いてると思ったけどなあ・・・。それはね？高良先輩は慶一先輩に惚れてるから、って事だよー？」

そんな田村さんの言葉に私とみなみちゃんはしばし呆然としていた

が、田村さんの言った言葉に気付くと途端に顔を赤くして慌てながら

「えっ？ええっ！？そ、そうだったのー？」

「・・・気付かなかった・・・今考えてみたらそんな素振りもあったような・・・。」

そんな私達の姿を見ながら苦笑を浮かべつつ田村さんは

「いやあ、ゆーちゃんとみなりんも以外にこういう部分では疎い所があるみたいだねえ。まあ、もっとも、泉先輩達もまた、慶一先輩に付いていきそうな感じだけどね。先輩達もまた、慶一先輩に対しては好意を持ってるみたいだしね。」

そんな田村さんの言葉に私たちは”ほう”とため息をつきつつも

「・・・はー・・・こなたお姉ちゃん達もそうだったんだね・・・。」

「・・・でも、田村さん、よく見てるね・・・先輩達の事・・・。」

そんな私達の言葉に田村さんは笑いながら

「いやあ、漫画を描いたりする事をしているとね、ネタを探して色々な物を見るようになるからさー。特に先輩達は結構いいネタを提供してくれたりするからね。そんな先輩達を見ているうちに気がついたってとこかな。」

そんな田村さんに私たちは感心したような目を向けていた。

そんな中でみなみちゃんがふと気になった事があったみたいで田村さんに質問をしていた。

「・・・先輩達の事はわかったけど・・・田村さんはどうなの・・・？先輩の話に乗ってみようって考えたのは、田村さん自身も先輩に対して何か思うところがあるから・・・？」

そんなみなみちゃんの質問に途端に慌て出す田村さん。

「え？あ、えっと、その・・・わ、私も確かに先輩は嫌いじゃないけど・・・どっちかっていうと憧れみたいなものもありましてー・・・恋愛感情的なものとはちょっと違うかもって・・・って私何言っちゃってるっスかー！！」

何だか自爆っぽい事を言ってしまってる田村さんに私とみなみちゃんは苦笑していたが、そんな私達に田村さんも反撃の質問をぶつけてきたのだった。

「そ、そういうゆーちゃんやみなりんはどうなんスか？私もうっかりとはいえ言ってしまったんだから答えて欲しいなあ。」

少し顔を赤くしつつそう言う田村さんに私たちは再度慌てながら

「え？あ、わ、私は、その・・・どっちかというと先輩は私のお兄ちゃん的な感じかなあ？って思って・・・はっ！？」

「・・・私は・・・まだ良くは分からないかな・・・先輩は優しくて頼りになって・・・私達に色々と良くしてくれる・・・先輩の事嫌いじゃないし・・・人としては好きになれる人だって思ってるのは変わらない・・・かな・・・？・・・あ・・・！？」

そんな風に馬鹿正直に質問に答えてしまった後で2人して顔を真っ赤にして慌てる私達だった。

その後で田村さんが「いいネタいただきー！」と言っているのを聞いて私達はそんな田村さんを苦笑を浮かべながら見ていたけど、その時私の心の中にあったのは、私もひょっとしたら先輩に付いて行くかもしれないな、というどこか確信にも満ちた気持だった。

慶一ｓｉｄｅ

ゆたか達が俺と別れた後でそう言う話題で盛り上がっていることなど露知らず、俺はゆたか達と話し込んで集合場所に遅れてしまった事を焦りながらみんなの元へと急いだ。

そして、集合場所に着くと、こなたが第一声で

「遅い！罰金！！」

とハ○ヒネタで俺にそう突っ込みをいれていたのだった。

その後は遅くなった理由を皆に話して、こなたの罰金の件を受け入れつつも打ち合わせをしながら俺達はバイト先へと向かった。

「・・・とまあ、今日はこんな感じかな？」

そう俺が、打ち合わせの締めをすると皆も再度打ち合わせの内容を噛み締めるようにしてから

「了解ー。それじゃ後は時間まで暇潰しだねー。」

「慶一くん。約束、忘れないでよ？」

「こなちゃん。わたしの探し物も手伝ってくれると嬉しいな。」

「私はかがみさん達の方にお付き合いさせてもらいましょうか。」

「私も一緒に回ってみたいわ。」
「んじゃ私はちびっ子らに付き合うゼ？」
「私も泉先輩達に付き合いますよー？」
「私は慶一先輩達の方へ行くわ。」
「ワタシはコナタ達とイッショにイきまース。」

と、それぞれに分かれる事となった。

その際に俺は、ゆたか達に話したように、こなた達にも”あの話”を伝えた。

「みんな聞いてくれるか？実はな・・・・・と言う訳で俺は今そんな大学を探している所だ。ゆたか達にも言ったんだが、もしもそんな大学が見つかった時には皆にも話はしたいけど、それでも自分の選ぶ大学がいいと言う事ならその意思は尊重するつもりだ。そのあたりはみんなの判断に任せるよ。まあ、じっくりと考えて結論を出して欲しい、そういう事だ。」

その事を伝えた後、皆は色々と考えているのが見て取れた。

とりあえずは種を撒く、それを終えておきたかったのもあって俺はみんなにこの話をした。

後は、その種から芽を出す事ができるかどうか、それが俺とみゆきの手腕にかかっている、改めて俺は自分がしようとしている事に対する困難さを理解すると共に、それでも最後まで悔いは残さないと心に誓う俺だった。

あちこちで奏でられる旋律～慶一とみゆきの思い、ゆたか達の思い、そして、そ

今回は前後編の2部構成で行く予定です。

あちこちで奏でられる旋律～慶一とみゆきの思い、ゆたか達の思い、そして、そ

後編投下です。
では、本編をどうぞ。

あちこちで奏でられる旋律～慶一とみゆきの思い、ゆたか達の思い、そして、そ

みゆきと共に俺達が一緒に居る事のできる大学を探す決意をした俺。

そして、俺が今やろうとしている事をゆたか達やこなた達にも伝えつつ、俺は新たな決意を持ってこの問題に挑む事にした。

そして、俺の言葉を聞いてこなた達もまた、バイトに向かいながらも色々と考え込んでいるようだった。

そうこうしているうちにバイト先へと到着した俺達は、開始時間まではまだ時間も残っていたので、当初の予定通りに暇潰しを行う為にそれぞれがそれぞれの目的の場所を回る事となった。

「んじゃ、時間まではまだまだあるからそれぞれに回る所へと行くとしよう。かがみ、お前に付いて行くから先導、よろしく頼む。みゆき、あやの、やまと。お前らも付いて来てくれ。」

俺の言葉にかがみも頷くと

「おっけー。それじゃ行きましょ？慶一くん、みんな。」

他の皆にもそう声をかける。

声をかけられた皆も頷いて先を行く俺とかがみの後から付いてきたのだが、かがみはまだあの時のテンションのままだったので、自然と俺の手を引きながら行く事となった。

そんなかがみと俺の様子を見てみゆき達も少し唖然としつつも俺達

の後に付いてきたのだった。

そんな俺達の様子を少しだけ不機嫌そうな顔で見送っていたこなた達もまた、回る所があると言う事だったので

「・・・むう・・・かがみんめ、なかなかやるね・・・とりあえず、私たちも行こうか。つかさ、みさきち、八坂さん、パティ。」

そう声をかけると、そんなこなたに苦笑しつつもつかさ達も後に続いたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなた達とひとまず別れて俺達はラノベのコーナーを目指していた。

そうして動いている際にもかがみは俺の手を取っていたのだけど、かがみはどうやら俺の手を引いている事に対する自覚はあるみたいで、けど、あのテンションのかがみなのでそんな事すら些細な事のように振舞っているかがみに俺は苦笑するしかなかった。

そして・・・・・・

「ねえねえ、慶一くん。これなんてどうかな?それともこれは?」

すごく上機嫌で俺に買いたいラノベ、薦めたいラノベを俺の所に持ってきては相談するかがみ。

そんなかがみの勢いに押されつつ俺は

「あ、ああ、それはいいと思うぞ?後、それは俺も少し興味あるか

な？」

と、若干引き気味になりつつもそう答えるとかがみは物凄く嬉しそうな顔をしていた。

そんな最中にみゆきやあやの、やまともまた俺の所に判断を仰ぐ為にそれぞれの作品を持ってやってきた。

「慶一さん、かがみさん。私もちょっと選んでみた物があるのですが、どうでしょうか？」

「私もこれは読みやすそうかもって思って持ってきてみたわ。慶ちゃん、柊ちゃん。２人の意見を聞かせてくれる？」

「私はこのシリーズを先輩の所で見せてもらってから興味を持ったんだけど、その続きを見つけたわ。それ以外で何かお勧めを教えて欲しいのだけど・・・。」

そう言うみんなに俺も答えていたのだけど、一気にラノベ仲間が増えた事が更にかがみのテンションを上げることとなり、物凄くいい笑顔のかがみは物凄く上機嫌でみゆき達に色々アドバイスをしてあげていたのだった。

「みゆき、後私がすすめるのは、これとこれかしら？峰岸、あんたの趣味も悪くないわよ？私もそれは今度読ませて欲しいな。永森さん、それとはまた別の角度から見た話の奴もお勧めよ？」

すごく生き生きしているかがみを見て俺は思わず微笑みを浮かべていたのだった。

それぞれの会計を済ませようとした時、こなたから俺の携帯に連絡が入ったので俺は電話に出てみたが、何となくしていた予感はやは

り当たる事となった。

今回もまた、買い物ポイントをたかられる事となったのだった。

仕方なく俺達はこなた達がやってくるのを待つことにしたのだが、
俺は他に見ていきたい所があったので

「かがみ、みんな。ちょっと見て来たい所があるから行って来るよ。
ここで待っていればこなた達もやってくるだろうし、みんなはここ
に居てくれないか？」

そう言うと、かがみが俺に

「わかったわ。私たちはここで待っているから用事済ませてきちゃ
いなさいよ。」

そう言ってくれたので、俺はかがみに

「ああ。悪いな、それじゃちょっと行って来るよ。そんなに時間か
からないと思うから少しだけ待っていてくれ。」

そう言い残してその場を後にする俺を皆も手を振って見送ってくれ
たのだった。

かがみｓｉｄｅ

慶一くんとみゆき達と共に私はラノベの新刊を探しにやってきたの
だけど、そんな中でみゆきや峰岸、永森さんまでもがラノベに興味
を持ってくれた事に凄く嬉しくなり、今までの鬱憤を晴らすかのよ
うにみゆき達にラノベのお勧めなどを教えた。

そうして買う物を選んでいざ会計、となった時、慶一くんの携帯にこなたからの電話が入り、またしても買い物ポイントをたかろうと言う事だった。

結局お人好しな慶一くんはこなたを待つ事にしたらしく、それと同時に慶一くん自身もまだ済ましていない用事があったみたいで、私達をここに残して自分の用事を済ませに向かった。

それを見送って私はみゆき達と共にこの場所で雑談をしていたのだけど、私はさっき慶一くんから電車の中で告げられたあの事に対して、みんなの意識が気になったのでこの場を借りて聞いてみる事にしたのだった。

「ねえ、みゆき。あんたは慶一くんと一緒に慶一くんが目標としている大学探しをしているって言う事よね？無論あいつの定めた条件では私達も一緒に行けるような学部の揃った大学を、と言う事みたいだけど・・・。」

そうみゆきに尋ねると、みゆきは頷いて

「はい。かがみさんのおっしゃる通りです。皆さんがそこで学んでも遜色のないレベルの所であれば、大学に行ってもみんなと居られるかもしれない、慶一さんはそう考えていたみたいです。もっとも、それも私としてくれた約束の為に慶一さんが努力をなさってくれている訳なのですが・・・。」

そう言って1つ言葉を区切ったみゆきは更に言葉を続けて

「かがみさん、峰岸さん、永森さん。皆さんにお聞きしたいのです

が、もしもそんな大学が見つかったなら、皆さんはどうしようと考えますか?よろしければ皆さんのお気持を聞かせて欲しいですが・・・。」

そんなみゆきの言葉に私を始めとする後の2人も少し考え込んでいるみたいだったけど、それぞれの気持をみゆきに伝える私達だった。

「・・・私は、もしもそんな大学があって、相応のレベルがあるのならそこを選んでも構わないと思ってるわ。確かにみゆきや慶一くんの言うそれはかなりの理想かもしれない、けど、心の奥では私もそんな理想を持っていたしね・・・。」

私がみゆきにそう答えると、その後に峰岸が

「私もまだまだ皆と一緒に過ごしたいって思うし、後4年そのチャンスがあるなら、その時間を持てるのなら私もそれを目指したいって思うわ。」

そう答えて、そして私達以上に考え込んでいた永森さんもふっと顔を上げると何かを決意するかのような顔をみゆきに向けて

「・・・私はまだ、将来の進路は明確に決まっていないわ。ひょっとしたら高校在学中には見つけられないかもしれない・・・けど、私ももう、皆と、先輩達といる楽しさを居心地の良さを覚えてしまったから・・・今更1人で別の所なんて考えられないかもしれないわ・・・だからたぶん私も・・・付いて行くと思うわ。」

そんな私達の答えを聞いて、満足そうな笑みを浮かべながらみゆきは

「ふふ。嬉しいですね。皆さんも同じ思いを持っていてくれました。

きっとこの事を聞いたら慶一さんも喜んでくれると思いますよ？」

そんなみゆきの言葉を聞いたとき、私は何だか凄く気恥ずかしくなって

「べ、別に慶一くんの為とかじゃないわよ？あくまでも私が皆と一緒に居たいからであって、だから私は自分の意思でそれを選ぶだけの事なんだから。か、勘違いしてるんじゃないわよ？みゆき。」

そんな風に言う私をみゆきはいつもと変わらない微笑を浮かべた顔で見て、そんな私達を峰岸は苦笑しながら見守り、永森さんもまた、自分の言った事に対して照れているのか顔を赤くしてそっぽを向いていた。

そんな事を話した私達だったけど、やっぱり皆と一緒に居たいという気持は峰岸達にもあったのだと思った時、少しだけ嬉しくなった私だった。

こなたｓｉｄｅ

かがみ達と別れて漫画捜索組みの私達は、つかさやみさきち、八坂さん、パティらと共に漫画コーナーにやって来ていた。

つかさは探したい物があるとの事だけど、それと同時に八坂さんやみさきちもそうだけど、パティも探したい物があるようだった。

それと同時に私は皆にも私のお勧めを教えたいと思っていたのだった。

「ねえ、つかさ。探している物見つかった？」

自分の探そうとしている本を手にとってああでもない、こうでもないとやっているつかさにそう尋ねると、つかさは困ったような顔を私に向けながら

「それが、まだ見つからないの・・・。ねえ、こなちゃん。私の探してる奴のタイトルって・・・・・・なんだけど、こなちゃんも探すの手伝ってくれない？」

つかさから探してる本のタイトルを聞いた私はつかさに頷いて

「おっけー。私に任せなさい！つかさの探してる本はすぐに見つけてあげるよ？」

そう言って私は自分の胸をぽんと叩くと、早速つかさの探してる漫画をチェックし始めた。

その時にみさきちもまた私に

「ちびっ子ー。私にもお勧めあったら教えてくれよ。」

そう言って来たので私は自分の胸をぽんと叩いて

「任せなさい！私がどーんと面倒を見てあげようではないかー！」

そう言うと、みさきちも私に「んじゃ、まかせるゼー？」と言ってくれたので、私はつかさの探し物と同時にみさきちにお勧めの漫画を教えてあげるのだった。

その頃、少し離れたエリアでは八坂さんとパティがアニ研で使えそ

うな資料になる漫画等を探していた。

こうｓｉｄｅ

私とパティはアニ研で使えそうな資料の漫画を探るべくパティと一緒に泉先輩達と少しはなれた場所で漫画の物色をしていた。

「お？これもよさそうだね。後はこれかな？」

そう言いながらいくつかの漫画を見繕っていく。

そして、パティも同じように日頃からチェックしていた漫画等を探していたようだった。

そんなパティに私もとりあえず声をかける事にしたのだった。

「パティ、探してる物は見つかった？こっちはもう済んだよ？」

そうパティに声をかけると、パティは２つの漫画を手にして悩んでいたようだった。

「うーん・・・こっちにするべきか、それともこっちか・・・バイト代ハイラないとキビシイですネ・・・。」

そんな風に呟くパティに私は

「パティ、その２冊のどちらかで悩んでるの？それとも両方欲しいとか？」

そう尋ねると、パティは苦笑しながら

「コウ、ジツは2サツともホシイトコロだったりするのデスが、おコヅカイのカンケイもあってどちらかにしないとキビシイジョウキョウでして・・・。」

そんな風に言うパティに私は

「んー？それなら私がお金貸そうか？なんならバイト代入った時にでも返してくれればいいしね。」

パティにそうもちかけると、パティも少し悩んでいるみたいだったけど私の方に顔を向けると

「・・・そうですネ。ではコウ、ホンのダイキンはバイトダイがハイったらカエシますからここはタヨラせてください。」

そう言うパティに私も頷いて

「おっけー。この位は任せてよ。それに、可愛い部員の為でもあるからね。先輩としては頼ってもらえたら嬉しいし。」

その言葉にパティも満面の笑みを浮かべながら

「サンキューです！」

親指をビシッと立ててそう言ったのを私も笑顔で頷いて応えるのだった。

「それじゃ、泉先輩達の方に戻って一緒に会計を済ませちゃおう。」

そう言うと、パティも頷いて私の後に付いて来るのだった。

そして、私は柊先輩や日下部先輩となにやら話している泉先輩に声をかけたのだった。

「泉先輩、こちらも買う物は決まりましたよ？後はお金払ってくるだけですけど、そちらも用事が済んでいたら一緒にいきませんか？」

そう言うと、泉先輩は私の方を見て少し考え込むような顔をしていたのだった。

こなたｓｉｄｅ

私達の方の探し物も済んで、そろそろ会計を済ませようと思った時、私は大事な事を忘れていた事を思い出し、すぐに携帯で慶一君達の所に電話して買い物分のポイントを譲って欲しいと言う事を伝えた。

幸い、まだ会計は済ませていないと言う事だったので、私はほっとしつつ、後はつかさとみさきち、八坂さん達にもそれをお願いしてみようかと考えていた。

そして、つかさに聞いてみたらあっさり了解してくれたのでほっとしていると、そこに探し物を終えた八坂さん達がやって来たので私は2人にも一応尋ねてみようと、声をかけてくれた八坂さんを見て考えていた。

「あのさ、八坂さん、パティ。一応2人にも聞きたいんだけど、買い物ポイントとかは集めてる？」

私のその質問に2人は

「ええ。やはりこういうのも楽しみの1つですからねー。」
「ポイントカードにはミリョクイッパイですし、ワタシもアツメていますネ。」

その言葉に、（そういえば2人は私と同じ人種だったっけ）と心の中で思いつつ

「そっか。それならいいんだ。ちょっと聞いてみたかっただけだしね。それじゃ、かがみ達の所へ行って会計すませちゃおうか。行くよー?皆。」

私がそう声をかけると皆も頷いて先ほど慶一君達と連絡を取った時に決めた待ち合わせ場所に向かって動き出す私達。

そして、その場所に移動しながら私はさっき電車の中で慶一君から聞いたことに対して皆がどう思っているのかを聞いてみたくなり、私は皆にその話題を振ってみた。

「ねえ、皆に聞きたいんだけどさ、電車の中での慶一君の話を聞いて、皆はどう思った?」

その言葉につかさが

「けいちゃんやゆきちゃんが皆と一緒にいける大学を探してるっていう話?」

そう聞いて来たので私は頷いて

「うん。そうだよ?私もちょっと気になってたからさ、聞いてみた

いなって思ってね。」

そう返すと、つかさは少し考えるような仕草をした後

「わたしはたぶんだけど、けいちゃん達がそんな所を見つけてくれたなら一緒に行きたいって思うかも。」

そう答え、みさきちと八坂さんもまた私達の話を聞きながら

「私も皆と一緒の方がいいなって思ってるゼ？まあ、私の方のはちょっと難しそうだけどな。」

「私はきっと、やまともそうなった時に先輩達に付いていこうとするかもって思ってますし、私も先輩達ややまととも一緒に居たいですからね。おそらくは私もついていく事になるかも、ですねー。」

そう答えてくれたのだが、パティは少し寂しそうな顔をしながら

「ワタシもデキルコトならミナさんとイッショのトコロへイキたいとオモっていますが、イマのトコロはイチネンカンがスぎたらアメリカへカエラねばなりませんから・・・。でも、デキルコトならもうイチド二ポンへキタイとオモっていまス。」

そんな風に言うパティを見ながら私はパティにはパティのどうにもできない事情があったのだという事を思いだして

「そっか、パティはパティの問題があるんだね。私達と何ら変わらずに接してきてたから私もパティの事情には気付けなかったよ。でもさ、パティが望みたいと思うなら、また留学してくればいいんじゃないかな？そうなったら私も嬉しいけどね。たぶん、ゆーちゃん達もだろうけど。」

私の言う、留学と言う言葉にパティはしばらく考え込んでいるようだったけど、ふいに顔をあげて

「そうですネ。コナタのイうようにリュウガクもカンガえてみたいとオモイマス。そのトキにはミナサンがカヨウガッコウのコトをオシエテもらえたらウレシイですガ。」

そんな風に言うパティに私は笑いながら

「大丈夫だよ、パティ。その頃までにはきっと私達の行く大学は決まってると思うからさ。それ以降はパティ次第だよ?」

そんな風に言う私にパティも頷いて

「そうですネ。そのトキにはワタシもフタタビのリュウガクのタメにドリョクをしてみますヨ?」

そう答えるパティに私達は笑いながら頷いて答えるのだった。

そんな中で八坂さんが私に

「私たちはいいですけど、泉先輩はどうするんですか?」

そう聞いて来たので私は人差し指を振りながら

「それは聞くだけ野暮というものじゃない?八坂さん。もちろん皆が行くなら、私だって行くよ。今更私だけ仲間外れは嫌だしねー。それに、私だって皆と居たいもん。」

そう答える私に八坂さんはニヤニヤとした顔を見せながら

「皆と、と言うのもそうでしょうけど、慶一先輩とも居たいんですよね？泉先輩も。」

と言う八坂さんの言葉に私は顔を赤くして慌てながら

「え？あ、その、なんといいますか・・・。ま、まあ、慶一君とも一緒に居ると楽しいしね。そ、それに慶一君だって”皆”の中に入る訳だから、それは当然といえば当然な訳でー・・・。」

しどろもどろになりながらそう答える私だったけど、そんな私をニヤニヤとした顔のままで見る八坂さんに私は照れ隠しで

「ちょ、何ニヤニヤしてるのさー。そういう八坂さんだって結局は付いて行こうって思ってるのなら一緒でしょー？」

そんな風に言う私に八坂さんは笑いながら

「あはは。確かに先輩の言う通りですね。私も人の事は言えませんけど。ともあれ、ちょっとだけ安心ですね。皆がそう思っていただけでも、ですけどね。」

そう言う八坂さんに私やつかさ、パティも頷きながら

「そうだね。私もちょっと安心したかも。」

「わたしも～。皆と一緒なら楽しいよね。」

「またしなければならないコトがデキましたネ。でも、モクヒョウがあるならガンバレマス！」

最後のパティの言葉に私達も頷きながら皆の待つ待ち合わせ場所へと向かうのだった。

そして、待ち合わせ場所で私は再度皆に今回の事についての話題を振ったが、皆もまた同じように考えてくれていた事が凄く嬉しかった。

そうこうしているうちに慶一君が個人の用事を終えて戻ってきたので、先ほどの電車での事に対する私達の思いを伝えると、慶一君は驚きつつも喜んでくれたのだった。

そして、私はちゃっかりと八坂さんやパティ以外の人達の買い物ポイントを貰ってほくほく顔になっていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

自分の用事を済ませるために皆にこの場所に居てほしいと告げてこの場を後にした俺だが、用事を済ませて戻ってみると、そこにはこなた達も合流していて皆もまた楽しそうに話をしているのが見て取れた。

そんな皆の所に行くと皆も俺を笑顔で出迎えてくれた。

そして、こなたの計画通りに買い物ポイントを手渡す事となり、みんなの会計を済ませる時に、こうとパティ以外の皆からポイントを貰ったこなたは凄く嬉しそうな顔をしていたのだった。

「ありがとー、皆。これでまた目標に近づけたよー。」

ホクホク顔でそう言うこなたに俺達は苦笑していたのだった。

そうこうしているうちに時間も来たので、俺達は今日のバイトの為に店内控え室へと足を向けた。

バイトの準備を済ませていざ、仕事場へという時に兄沢店長から俺に声がかかったのだった。

「伝説の少年Aよ。ちょっと話があるから店長室へと来てくれないか？」

そう言われた俺は、とりあえず話を聞くために店長室へと向かう事にしたが、仕事の方も皆には打ち合わせ通りやってもらいたかったので

「わかりました。すぐに行きます。それと、皆。俺はちょっと行って来るけど、皆は打ち合わせ通りに頼んだぞ？」

そう伝えると、皆も頷いて

「おっけー。任せてー。」
「ちゃんと打ち合わせ通りやるから大丈夫よ？」
「こっちも頑張ってるから大丈夫だよ～？」
「何かあれば皆さんと共に対処しますからご心配なく。」
「こっちは任せて、慶ちゃん。」
「柊妹と永森とちゃんとやるから大丈夫だゼ？」
「レジは問題なくやれると思いますのでご安心を。」
「先輩達と共にやっていくから心配ないわ。」
「ワタシもガンバリマです！ファイトでイキマスよ！？」

そんな皆の言葉を聞いて安心しつつ俺も頷きで返すと、俺は店長室

へと兄沢店長と共に向かうのだった。

そして、店長室へと入った俺は

「それで、兄沢店長。俺にどんな用事ですか？」

そう尋ねると、兄沢店長は俺をビシィっと指差して

「伝説の少年Ａよ。君の働きと実績を見込んで頼みがあるのだ！君に電気街店の統括主任を任せたい！！」

その言葉を聞いて俺は一瞬パニックに陥って

「・・・え？あの？統括主任って、俺がですか？」

そう聞き返すと、兄沢店長は重々しく頷いて

「そうだ。君のこの店での実績は素晴らしいものだし、それに伝説の少女Ａやその関係者および、この店で働く従業員達にも君は大きな信頼を得ている。それは、前にこの店において統括主任をやっていた者とは比べ物にならない程のものなのだ。どうだろうか？君にも負担が大きくなってしまう事は百も承知だが、この役目、引き受けてもらえないだろうか？」

兄沢店長のその言葉に俺はしばらく考え込んでいたが、俺は店長の方に顔を向けると

「その申し出、そして評価はありがたいものですが、俺は受験生という身分でもあります。ですので、四六時中店内を見ているというのは厳しいかと思いますよ？」

そう言うと、店長はその言葉は想定済みと言わんばかりに俺に再びビシッと指を差すと

「その答えは想定済みだ。だからこそ、今回は統括主任を2人作る事にしたのだよ。一人は君に。そして、もう一人は前の統括主任よりはそれなりの信頼と実績もある人間を抜擢した。」

そして、店長室のドアに向かい、声をかける兄沢店長。

「その者を今ここに呼ぶ！入ってきたまえ！杉田店員！！」

そう言うと、ドアの外で「う～す・・・。」と言う少しやる気のなさげな声と共に”杉田”と呼ばれた店員さんが入ってきた。

そして、俺の前にやってくると俺にぺこりと頭を下げて

「ども。ご紹介に預かりました杉田です。君と共にこの電気街店の統括主任を任される事となりました。君がこちらに来れない日は俺が統括主任を担当しますのでどうぞよろしく。」

そう言って俺に手を出してきたので俺もその手を握ってとりあえず握手を交わして

「こちらこそよろしく。えっと、とりあえず、この杉田さんが俺の来れない日に統括主任としていてくれる、という事なんですね？」

そう兄沢店長に尋ねると、店長は大きく頷いて

「その通りだ！君は君の来れる日にのみ統括主任をしてくれればい

い！そう言う条件だが、どうかな？やってくれるか！？」

その店長の言葉にまたも少し考えていたが、店長の方に向き直ると

「そういう事でしたら、折角ですので引き受けます。」

そう言うと、店長は満面の笑みを浮かべると

「よろしい！！それでは後で伝説の少女Ａらにもこの事を伝えておいてくれたまえ！これで話は終わりだ！今日の業務、頑張ってくれたまえ！！」

という店長の言葉に俺も頷いて

「わかりました。これより業務に付きます。それでは杉田さん、今後ともよろしくお願いします。」

杉田さんにそう言いながら頭を下げると杉田さんも

「こちらこそよろしくな。それじゃ俺も作業に戻ります。」

そう店長に伝えて俺と杉田さんは店長室を出て行った。

その後、業務に戻って今日のバイトを終えた後、帰り道に皆に今回の事を話したら

「へー？凄いじゃん。慶一君、大出世だ。」

「あんたが統括主任ねえ・・・でも、あんたならやれそうな気がするわ。」

「けいちゃんすご～い！」

「何時の間にか慶一さんが私達の上司ですか。私も驚きですね。」
「でも、慶ちゃんの下でなら働きやすそうね。」
「だなー。気兼ねしなくてもいいかんな。」
「でも、先輩もよほどあの店長に見込まれているんですねー。」
「なんていっても伝説と呼ばれているほどだしね。」
「サスガですケイイチ。これからもワタシタチのボスとしてガンバってもらいまショウ！」

そんな風に言う皆の言葉に俺はただただ苦笑するしかなかった。

その後はふいにみゆきと2人きりになった時にみゆきがこっそりと皆が俺の考えている事に関しての自分達の思いを教えてくれたのだが、それを聞いたとき、俺はとても嬉しくなった。

そして、改めてみゆきと共に大学を探そうと決めたのだが、以外にもそれは結構あっさりと見つかる事となった。

と言ってもそれを知る事になるのはそれから2週間程経った頃だったのだけど。

そして、その時に迫っていた事件の足音にその時の俺は気付かないでいた。

あちこちで奏でられる旋律～慶一とみゆきの思い、ゆたか達の思い、そして、

次回は今回の最後で少しだけ触れた事件に関する事が最後の方で出てきます。

急変の旋律～決まる進路、そして、起こる事件～（前書き）

今回は旋律達の進路がほぼ決定の様相を見せます。
それと、事件も起きます。
それでは本編をどうぞ。

急変の旋律～決まる進路、そして、起こる事件～

みゆきとした約束の為、そして、自分の為に俺は大学を探そうと決意する。

だが、俺は、その中で皆もまた同じ大学へと進む道がないだろうか、という事も考えていたので、とりあえずは皆の進路について、後輩組みや同級生組みにも話を聞いた。

ある程度進路のはっきりしている者とそうでない者もいたが、それでもできる事ならば同じ大学へ行きたいという気持が皆の中にある事が分かり、俺はそんな皆の気持を知って嬉しくなった。

皆と行ける大学を探す事を決意してその事に気合を入れていた俺だったが、それと同時にバイト先ではまさかの出世をする事となる。

俺は俺の来れる日のみだが、電気街店を纏める統括主任として動く事となった。

そして、そんな事があってから数日、俺は学校探しとバイト先での仕事とをこなす日々を送っていた。

「・・・ありがとうございました！またお越しください！」

俺は、今日もお客の１人をお見送りしつつ、業務に励んでいた。

「・・・ふう。今日も中々繁盛してるよな、この店も。店長の言う通り、何故か俺達が仕事し始めてから売上の伸びが半端ない感じだ・・・。」

そう1人呟く俺だったが、店内を巡回して戻って来ていた元、この職場の先輩の立場だった店員の1人が俺に声をかけてきた。

「主任。こちらの方は順調です。私はちょっとお客に頼まれた商品の在庫チェックに行って来ます。」

次の自分の行動をそう報告してくる元先輩に俺は

「あ、ああ。了解。そちらの方はよろしく頼みます。それと、元々はそちらの方が俺よりも先輩なのですから俺に敬語を使う事はないですよ。」

そう言うと、元先輩は俺を見て

「確かに前は私があなたの先輩としてやっていたわ。けど、今の売上を出すほどの実績を叩き出したのは君のおかげでもあり、実力よ。だから、私はそんな君に敬意を払って君を主任と呼ばせてもらってるのよ?それにあなたの方が杉田さんよりもやりやすいのよね。私はあの人よりもあなたに主任としての器を見たからこそ、あなたを主任と認めたからこそなの。だから、何も遠慮する事はないわ。」

そう言った後、元先輩は慌てて

「と、とにかくそう言う訳なので、これからもあなたに対する態度はさっきの通りで行かせてもらいますから。では、主任。在庫チェックに行きますので、これで。」

そう言う元先輩に俺は複雑な表情をしながら

「わ、わかりました。ともあれ、在庫チェックはお願いします。」

そう言うと、元先輩は俺にぺこりと頭を下げた後、レジ横の端末へと歩いていった。

俺はそんな様子を見ながら1つため息をつくと他の部署のチェックもしなければと思い、そちらに足を向けようとしたが、そんな俺にたまたまさっきのやり取りを見ていたらしいかがみが声をかけてきた。

「ふふ。見てたわよ?元先輩であるあの人にもそんな風に声をかけられる程に皆からも信頼されてるみたいね?主任さん。」

俺はそんな風に言うかがみに苦笑しながら

「勘弁してくれよ、かがみ。元々はこなたが発端だったんだぞ?伝説の少女とか言われてるのはさ。俺はそんなこなたのたまたま友人だっただけさ。それがいつの間にか伝説の少年Aとか呼ばれるようになって、それで気付いたらこれだもんな・・・。」

そんな俺の言葉にかがみもまた苦笑しながら

「確かにそうよね。元々はあんたは何の関係もなかったはずだけど、こなたとここに来てから店長に目をつけられていたものね。」

かがみのその言葉に俺はため息を1つつきながら

「まあな・・・。おかげで去年の時はバイト代かなり稼げたのはよかったけど、本当に売上とかも伸びたもんな・・・あれには俺も驚きだったよ。」

俺の言葉にかがみもうんうんと頷いて

「私だってあんたらの事は眉唾物と思ってたわよ。だから、結果出るまでは本当に信じられなかったしね。」

そんな俺達の所に何時の間にかみゆきもやってきたようで、話し込んでいる俺達の姿を見つけると

「主任、かがみさん。だめですよ?今は仕事中なのですからしっかりとしてもらいませんと。」

そんなみゆきに俺は慌てつつ

「ちょ、みゆき、いいって、俺の事は普通に呼んでくれればさ。今更改まってその役職名で呼ばれるのは何だかむずがゆい。」

そう言うと、みゆきは俺ににっこりと微笑んで

「駄目ですよ?仕事中は慶一さんは統括主任なのですからきちんとそう呼んでけじめをつけるべきです。そうしなくては下の者も付いて来てはくれなくなってしまいます。慶一さんにはそれだけの手腕と実績がおありなのですから。」

そんな風に言うみゆきの笑顔の中に遠まわしに（さぼらずに仕事してくださいね?）と言うみゆきの心が見えた気がした俺は、やれやれとジェスチャーをすると

「・・・わかったよ、みゆき。とりあえず仕事を再開する。かがみも引き続きよろしくな?」

そんな俺の言葉にかがみも思わず吹き出しながら

「ぷぷっ！わ、わかったわ。主任さんのお言葉にはちゃんと従わないとね。それじゃね、主任、みゆき。私も仕事に戻るわ。」

そう言って俺達に手を振って仕事に戻るかがみを見送って俺達もまた業務再開と相成ったのだった。

かがみを苦笑交じりに見送った後、俺は杉田さんに聞く事があったので、杉田さんの所へと向かった。

俺は何だか少し暗くなっている杉田さんを見つけると、側に行って声をかけた。

「あの、杉田さん。ちょっとお聞きしたい事が・・・。」

そう声をかけた瞬間、杉田さんはその暗い表情を俺の方へと向けると

「・・・聞きたい事？今更自分に何を聞くというんだ？業務も人望も、そして、仕事においての腕も自分よりも上な君が何を聞くというんだ？」

そして、そこまで言って、杉田さんは何やら抑えていたものが破裂するかのように俺に詰め寄りながら

「君はいいよねえ！？伝説の少女Ａと共に伝説の少年Ａとして店長からの信望も厚い！それに、君よりもずっと長くやってるはずの俺よりも仕事もこなせるし、何よりも、実際に利益を大幅に上げるという実績すら作った！だが、俺は、部下には馬鹿にされ、仕事も君

よりも劣る！今回統括主任という任を受けたが、それにおいても部下にすら見向きもされない始末！！そんな俺に君は一体何を聞こうというんだい！？聞く事なんてないよねえ！？聞かなくても出来るよねえ！？だって君は俺よりもう・・・ぐはあっ！！」

そこまで言った瞬間、ドグシャアッという物凄い音と共に殴り飛ばされる杉田さん。

「い、一体何が・・・。」

そう言いながら我に帰る杉田さんと、そして、俺の前には洗い息をつく兄沢店長の姿が。

店長は杉田さんをビシッと指差して

「頭は冷えたか！？この愚か者がー！！確かに、彼は君以上のやり手だし、実際の売上にも貢献するほどの実績と部下からの信頼も厚い男だ！！だが、君はそれでもこの俺と共に今まで一生懸命に頑張ってきたのではないか！？どんな時でも俺を支えて来てくれたのではないか！？事、それに関しては君は彼にはない実績をもっているのだぞ！？それを忘れたか！！杉田店員！！」

その兄沢店長の指摘に物凄いショックを受けてｏｒｚの格好になる杉田さん。

「そ、そうでした・・・。すみません、店長。自分は我を失ってしまっていました。おかげで目が覚めました。」

その杉田さんの言葉に兄沢店長も大仰に頷いて

「うむ！分かればよろしい！！杉田君。君もこの店にとってはなくてはならない人員なのだ！そこの所をわかってくれたまえ！そして、伝説の少年Ａと手を取り合い、この店の為に尽くしてくれたまえ！！」

兄沢店長の言葉に杉田さんは

「はい！店長！申し訳ありませんでした！さあ、森村君、いや伝説の少年Ａ、自分に聞きたい事とは一体何かな？」

気を取り直しながら俺に改めて聞いてくる杉田さんに俺は２人の熱いやり取りに疲れたような表情を向けながら

「え？あ、えーとですね、実は、あの商品に関しての事なんですが・・・・。」

そう聞いて、俺は杉田さんからある商品に関しての事を相談したのだった。

そうして、とりあえずあの２人の対処を終えた俺の所に店内を巡回していたこなたがやってきて

「いやあ、大変だったねえ、慶一君。いつもながらの熱血ぶりだしね、あの店長も。」

そう言うこなたに俺も疲れたような顔を向けて

「まあな。悪い人達じゃないんだが、どうにもやりすぎな所があるのが玉に傷だしなあ。そのたんびに殴られる杉田さんが少し不憫に思えてならないよ・・・。」

そんな風に言う俺を慰めるようにこなたは笑いながら

「まあまあ。それでも出世なんかも出来たんだし、私たちもそんなに長くは今年はバイトもできないかもなんだから、あまり深くは考えなくてもいいんじゃない？」

そう言うこなたに俺は再びため息を１つつきながら

「まあ、それもそうか。それに、仕事が辛いって訳でもないんだしな。お前や皆がいるから楽しくもやれるよ。」

半ば諦めも混じったような感情でそう言いながらこなたに笑いかけると、こなたはそんな俺を見て少し顔を赤らめながら

「・・・まったく・・・慶一君は本当に無自覚でそんな事言ってるんだから性質悪いよねえ・・・。」

そんな風に言うこなたに俺は頭にハテナマークを飛ばしつつ

「ん？こなた、それってどういう意味だ？」

そう尋ねると、こなたは何かを諦めるように重くため息を１つつくと

「わかんないならいいよ。でもね、慶一君。あんまり鈍いとそのうち誰かに愛想つかされちゃうから注意した方がいいよー？とにかく、私は仕事に戻るから。それじゃね、主任。」

そう言って俺に手を振ってこなたは仕事へと戻って行った。

そんなこなたを見送りながら、俺はこなたの言った事の意味についてあれこれと考えを巡らせていたのだが、どうにも納得のいく答えに辿り着けなかった俺は、仕方なくその問題を保留にして業務へと戻って行くのだった。

こなたを見送って一瞬後、再び大きな音が聞こえた。

「こおの！大馬鹿者どもがー！！」

という叫び声と共にグシャアッ！！という何かが殴り飛ばされて叩きつけられる音を聞いた俺は慌てて音のした方に走っていく。

そして、そこにはそれなりの年齢で威風を放つ見慣れないお客がいて、その人が店長達を殴り飛ばしているのがわかった。

俺がその状況に慌てて店長達の所へと近づいていくと、そのお客は店長達にビシッと指をつきつけると

「君達のお客に対するサービス精神、そして、熱い思いは大いに結構！そして、お客様を満足させる為に君達の考えるお勧め商品を紹介する君達の気概も感服した！しかしながら、そのために不人気キャラ商品をお客様に押し付けようとする君達のさもしい精神は見過ごせん！！」

そう言うと、店長と杉田さんは自分達がそれぞれに手に持っていた商品をそのお客に見せて

「「いえ、どっちも主人公なんですけど・・・。」」

何だか落ち込みつつもそう言っていた。

とりあえずそれで何とかその場が収まったのだが、俺は先ほど店長達を殴り飛ばし、店長達に演説をしていたお客の側へ行って

「あの、何があったかは分かりませんが、店長達が何かお気に触る事をしてしまったのであれば自分からもお詫びします。」

そう言って頭を下げると、そのお客は俺を少しの間厳しい表情で俺の顔を凝視していたのだが、ふいに表情を緩めると

「ふふ。成る程、君が店長達の噂する伝説の少年Aなのだな?君の事は店長達からも聞いているよ。バイトの身ではありながらも中々のやり手だという事だそうじゃないか。」

そんな風に自分を褒めてくれるそのお客の言葉に驚いて、俺は

「え?あの、俺の事を知ってるんですか?というか、あなたは一体・・・?」

そう尋ねる俺にそのお客は自分の懐から名詞を取り出して俺に手渡しながら

「おっと、自己紹介が遅れたね。私はこのア○メ○トの代表取締役をやっている高橋という者だ。去年は君達がバイトに来てくれた時には今までに類を見ない売上を記録したと聞いている。そして、そんな実績を持つ君が再びこの店にバイトに来てくれたという事で私も君に興味を持ってね。どんな人間なのかを見に来させて貰ったと言う訳だ。」

俺はそのお客から出た言葉に驚きながら

「え?あなたは社長、なんですか?こ、これは飛んだ失礼を。改めまして、森村慶一です。こちらのお店には去年からお世話になっています。」

そう、改めて自己紹介すると、高橋社長はおもむろに俺に手を差し出して

「そうかそうか。それは何よりだ。今日は君やその仲間達の行動を見させてもらったが、その年で中々に上手く人員を纏めているみたいだな。成る程、兄沢が君を統括主任に推した理由も頷ける。」

そう言い、俺はそんな社長に思わず自分も手を出して社長と握手を交わしたのだった。

「いえ、俺なんてまだまだ経験も浅いですし、まだまだです。毎回のバイトの時にはいつも勉強させてもらっている立場ですから。」

恐縮しながら俺がそう言うと、社長は俺を見てニヤリとしながら

「ふふ。その謙虚な態度、いつでも自分を厳しく律している所も好感が持てるな。どうかな?君さえよければいずれはどこかの支店の店長を任せてみたいと思うが。」

その申し出に俺はかなり驚きつつも

「そ、そんな。俺はまだ高校も出ていませんし、これから受験もあります。ですから、その申し出はありがたいですが、今はとてもお受けできる状況ではありません。」

今の現状とこれからの事を考えて俺は社長にそう言うと、社長は笑いながら

「ふむ。成る程。確かに君にも君の事情と言うものがあるな。ともあれ、話半分で聞いてもらえればいい。そして、もしもいつかこの申し出を受けてもいいと思ったならば、また私の前に来てくれたまえ。とりあえず今日は君の顔も見れたことだし、この辺でお暇するとしよう。兄沢君！杉田君！彼と彼らを今後ともよろしく頼むぞ！？それではな、森村君、いや、伝説の少年Ａ！！」

そう言って豪快に笑いながら俺の事を店長や杉田さんに託した社長は嵐のように去っていったのだった。

半ば呆然と社長を見送った俺だったが、そこにこうやあやのが来て俺に

「先輩、なんかすごい事になりかけてませんか？」

「慶ちゃんが店長か・・・確かに凄いわね。もしそんなお店が出来たら私達も雇ってほしいわね。」

と言う2人に俺は苦笑しながら

「あはは・・・俺達の進路はこれからな訳だし、選択肢の1つに入れといてもいいかもしれないが、今はまだその事も考えられないよ。」

複雑な表情でそう言う俺に2人とも笑って俺を見ていたが、すぐにまたレジに戻って業務を再開した。

それ以降は特に大きな問題も無く、今日のバイトを終えた俺は、帰

り道に皆と話してる時に今日の社長の言葉を話すと、みんなそれぞれに驚きながら

「へー？主任だけでなく、店長か、凄く見込まれてるねえ、慶一君。」

「あんたが経営する店、ねえ・・・。ま、まあ、あんたがいるのなら覗きに行ってあげてもいいかしらね。」

「わたしも～。もしそういう事になったらわたしも遊びにいかせてもらうね？」

「慶一さんのお店なら、時折バイトさせてもらうのもいいかもしれませんね。」

「ふふ。私もお小遣い稼ぎさせてもらうかしら？」

「慶一ー、私らが行ったらお前、ちゃんと雇ってくれるよな？断ったりしねえよな？」

「先輩のサポートをするのもいいかもしれませんね。ついでに資金も稼ぐのもいいかも。」

「私も手伝いに行こうかしら・・・？優秀な人材は必要じゃない？」

「ケイイチのショップというならトクベツワリビキをオネガイしたいデスね。」

そう言っているのを聞いて俺は重いため息を1つつきながら

「おいおい、あくまでも選択肢の1つと言ったろう？決定と言うわけじゃないんだからそう期待されてもだな・・・。」

そんな風に言う俺の言葉など意にも介さないように、みんなは帰るまでこの話題で盛り上がっていたのを見て、俺は再度ため息をついていたのだった。

そして、そんな事があってから一週間が過ぎた頃、いつものように

俺は図書室に大学検索の為に向かおうとしてた時の事だった。
いつものように廊下を歩く俺に、背後から黒井先生が俺に声をかけてきた。

「お?森村。お前、最近大学を探して図書室に通いづめているそうやないか。それも、あいつらと一緒に行ける大学をな。」

その言葉に俺は驚きつつ

「え?何で先生がその事をご存じなんです?」

と聞き返すと、黒井先生は笑いながら

「教室で泉達が嬉しそうに話しているのを聞いた事があってなー。それで知ったんや。それで?お前の探す大学は見つかったんか?」

そう聞いて来たので俺は苦笑しながら

「いやあ、実は結構探しているんですが、中々条件に合ったところがなくて苦戦していますよ。」

そう言うと、黒井先生は少し考える仕草をした後

「なあ、森村。あいつらの大体の進路ってきまっとるんか?」

俺にそう尋ねる黒井先生に俺は少し考えてから

「俺やこなたはまだ完全には・・・ですが、他の連中は大体決まってるみたいです。えーっとですね・・・・・・という感じです。」

俺が簡単に皆の進路について説明をすると、それを聞いた黒井先生はしばらく考え込んでいたが、やがて、何かを思い出したようで

「森村、後で職員室に来い。お前の役に立てる資料を渡せるかもしれん。それを見てどうするかはお前次第や。それでも決まらん場合はもう少しお前もがんばらないかんだろうけどな。」

そう言う黒井先生の言葉に俺も頷いて

「そうですね、わかりました。後で職員室へ伺います。では後ほど。」

そう言うと、黒井先生もニカッと笑って

「おう、せいぜいきばりやー！それじゃ後でなー。」

そう言って手を振って歩いて行く黒井先生を見送って俺は図書室を改めて目指した。

散々今回も検索をして成果が得られずに少し落ち込んでいたが、気を取り直すと、先ほど先生に言われた通りに職員室へと足を向ける。

そして、職員室のドアをノックして俺は中に入ると、黒井先生を探した。

「失礼します。黒井先生はいらっしゃいますか?」

近くにいた桜庭先生に声をかけて、黒井先生がいるかどうかを尋ねてみた。

「桜庭先生、黒井先生はいますか?先生にここへ来いと言われたので来てみたんですが。」

そう声をかけると、桜庭先生は

「黒井さんなら向こうだ。行ってみるといい。」

そう言いながら黒井先生のいる方向を指差してくれたので、俺はそっちを確認して移動する。

そして、黒井先生を見つけた俺は机で何やら資料をだしていた先生に声をかけた。

「先生、言われた通りに来ましたが、先生の言う資料とは一体?」

そう聞くと、黒井先生は俺に資料を渡しながら

「おう、来たか森村、これだこれ。そら、目をとおしてみい。」

そう言ってくれたので俺は渡された資料に目を通すとそこには、今年の夏ごろに完成予定の新設校の事が載っていた。

俺はその資料に載っている学部を一つ一つチェックしていく。

そして、一通りチェックし終わった時には俺はかなりの驚きに包まれていた。

それは、まさしく俺が理想としていた学部の揃った学校だった。

更に驚いたのは、それが俺達の住む場所に近い所に出来る学校であった事、更にその名前には俺達の今通うこの陵桜の名前が入っていた事だった。

そう、その大学は、陵桜の姉妹校として現在建設中であるという事だったのだ。

大学の名前は陵桜学園総合大学、といった。

そんな俺の驚き様を見て、黒井先生は

「うちもちょっと前までうっかりわすれとったんやが、うちの学校の近所に新設の大学を作る事になったそうなんや。ちょっと前に大学の資料が届いておったんやが、お前が大学を探しているっていう事でその事を思い出したんや。うちから見てもこの大学はレベルもここ以上やし、お前らが望むには問題ないところや、思うで？」

そんな風に説明する先生に俺は満面の笑みを浮かべながら

「ありがとうございます！確かにこれは、俺の理想とする学校です！今年中に完成なら受験も十分間に合いますよね？俺、ここも視野に入れてみようと思います！先生、本当にありがとうございました！」

弾むような思いで俺は先生にそうお礼を言うと、その資料を持って職員室を出た。

そして、みゆきと合流して今回の黒井先生から貰った資料に２人で目を通し直して改めて３つ上がった候補のうちの１つとして組み込むことにしたのだが、俺はおそらくここが最有力だろうと考えてい

た。

その次の日に皆でアニ研の部室に集まって大体纏まった資料を皆に見せながら説明をした。

皆も俺達の探した学校が気に入ったみたいで、目標とする大学はこの時点でほぼ固まる事となり、俺達は改めてそこを目指しての受験勉強をしていく事で合意したのだった。

学校が始まってからの忙しさですっかり忘れていたパティの誕生日を、日にちは過ぎてしまったが、みんなでやろう、という事になり、俺の家でパーティを行った。

「パティ、遅くなったが、これが俺からのプレゼントだ。」
「パティ、誕生日おめでとうー。これは私からー。」
「パトリシアさん、これは私からよ。おめでとう。」
「パトリシアさん、わたしはケーキをプレゼントだよ～?」
「パトリシアさん、これを、お役に立てば嬉しいです。」
「パトリシアさん、私からはこれを送るわ。」
「パトリシアー。私はこれをお前にやるよー。」
「パティ、これは私からだよ?後で楽しんでね。」
「パトリシアさん、私はこれを送るわ。きっと役立つと思うわよ?」
「パティ、おめでとう。私はこれ持ってきたよ?」
「パティ、誕生日おめでとう。これをあなたに送るわ。」
「パティちゃん、おめでとう。これは私からだよー?」
「・・・パトリシアさん、私からはこれを・・・。」
「パティ、おめでとうっス。私はパティの好きだって言ってたアニメＤＶＤを進呈するっスよ?」
「パトリシアさん、おめでとう。何にするか迷ったけど、これでどうかな?」

そう言って、全員がパティにプレゼントを渡すと、パティも満面の笑みで

「ミナさん、サンキューです！二ポンにキてデキタナカマとハジメテのバースディですが、とてもウレシイです！ハッピーデス！キョウのコト、ワタシはゼッタイワスレません！！」

そう言ってお礼を言うパティに皆も笑顔で頷いていた。

そして、パティがひよりから貰ったＤＶＤを皆で見ようと提案し、俺はその準備をする為にＤＶＤプレイヤーの準備をして、テレビの電源を入れた。

テレビにはニュースが映っていたのだが、俺は映像切り替えをしようとリモコンのボタンを押そうとしたが、次に映ったニュースを見た瞬間、その手が止まった。

『・・・続きまして、次のニュースです。本日午前3時頃、都内に住む牧村瞬一さん、（１７）が夜道を歩いている時に背後から来た車に轢き逃げされ、それを発見した人が救急隊に通報し、病院に運び込まれましたが、その数時間後に亡くなるという事故がありました。警察は現在、逃げた犯人の捜索に全力を・・・・・。』

俺は、このニュースを見て、本人じゃない、きっと同姓同名の誰かだろうと思っていたが、その後映像にでてきた写真は、他人の空似であり、ただの同姓同名だろうと頭の片隅で思っていた俺の希望を崩す物だった。

俺は、ショックのあまり言葉を発する事が出来なかった。

事情を知らない、毒島さん、山辺さん、若瀬さん、パティの４人以外はこのニュースを見て固まってしまっていた。

だが、こなたはその映像を見て

「・・・何、これ・・・どういう事？嘘だよ・・・こんなの・・・嘘だ・・・慶一君！！」

叫ぶようなこなたの言葉に我に帰った俺は、震える手で実家へと連絡を取る。

だが、実家には誰も居ないみたいで、連絡がつかない。

どうしたものかと焦っている俺にふいに入った着信は龍兄からのもので、俺は電話に出てさっきのニュースの真意について龍兄に尋ねてみた。

「もしもし！？龍兄！さっきテレビでニュースを見たんだが、あれは事実なのか！？」

俺は、あの事は嘘であって欲しいと心の中で願っていたが、龍兄は俺に、残酷な現実を突きつけてきた。

「・・・慶一、落ち着いて聞くんだ。あのニュースは事実だ。そして今俺は瞬坊の眠る病院に居る。お前にも知らせなきゃと思ってたところだった。すぐにこっちに来れるか？病院の場所は・・・・・・だ。気持を少し落ちつけてから駆けつけて来い。」

悲しそうな声で龍兄は俺にそう告げた。

俺はしばし呆然としながら電話を切ると、皆の方に向き直って

「・・・みんな・・・あのニュースは・・・事実だそうだ・・・。俺はこれから、病院へ行く。皆、悪いけど今日はこれで・・・。」

そこまで言った時、こなたが代表で声を上げた。

「私達も行くよ！牧村君とは友達だったもん。行ってあげたいから、いいよね！？慶一君！！」

そのこなたの言葉に頷く事情を知らない４人以外の皆。

そんな皆に俺は苦しげな顔で

「・・・ありがとう。それじゃ行くとしよう。毒島さん、山辺さん、若瀬さん、パティ、済まない、突然こんな事なってしまって・・・悪いけど今日はこれで解散にしよう・・・。」

そう言うと、４人は俺に

「私もご一緒させてもらってもいいですか？私も一応は先輩の関係者でもありますし。」

「こんな時に私たちだけ、はい、さよなら、なんて言えませんよ。私たちも行きます。」

「私も先輩に認めてもらえた仲間ですからね。仲間が大変な事になっているなら私も何か力になりたいですから。」

「ケイイチ！ワタシもイキます！！こんなトキにミズクサイですヨ？ワタシだってイマはケイイチのファミリーなんですカラ！！」

そう言ってくれたので俺はその気持ちをありがたく思いつつ

「・・・ありがとう。それじゃ悪いけど、一緒に来てくれるかな。病院の場所までは俺が案内するから。」

そう言うと、皆も頷いて、そして、俺達は家を飛び出して龍兄達の待つ病院へと急いだのだった。

幸せを積み上げていくその日常だったが、その矢先に突然起こった事件、俺は、纏まらない頭の中で、先行きに妙な不安を感じていたのだった。

急変の旋律～決まる進路、そして、起こる事件～（後書き）

今回起こった事件の裏側を次回に書いて行きます。

舞い戻る旋律の裏側、その3～起こる悲劇、そして、迫る決戦の予感～（前書き）

前回の急変する～の裏側です。
それでは本編をどうぞ。

舞い戻る旋律の裏側、その3～起こる悲劇、そして、迫る決戦の予感～

バレンタイン以降、俺達はある程度判明した組織の実情と本体を探るべく、あの後も情報収集を続けていた。

それと同時に、徐々に奴らの組織の末端を潰しつつ、連中への包囲網も狭まってきている事を実感していた。

俺は更なる追撃を行うべく、氷室君や瞬坊らと共に、シャドウの本部や非村の居場所を探っていた。

それは、あの事件が起こる少し前の事だった。

「すいません、少し遅れました。龍也さん、話はいつもの所でいいですかね？」

そう言って、瞬坊は俺にレゾンへと来て欲しいと俺に言う。

俺は瞬坊に頷きで返しつつ

「ああ。今回は氷室君も一緒なんだったな？少しは成果が出た、と見て良いという事だな？」

そう尋ねると、瞬坊も頷いて

「はい。どうやら本体へと切り込むきっかけとなるかもしれません。氷室と共にこの事を龍也さんにも伝えて今後の対策を練ろうと思っています。」

俺はその言葉に頷いて

「よし、それじゃ話を聞かせてもらうか、行くぞ？瞬坊。」

俺の言葉に瞬坊も頷いて、俺達は氷室君の待つレゾンを目指した。

そして、店につき、店内へと入ると、そこには俺達を待っていた氷室君達が俺達に気付いて手を振っているのが見えた。

俺達はそれを確認すると、氷室君達のいる席へと向かった。

「やあ、龍也さん、瞬一君。わざわざすいません。」

「お久しぶりです、龍也さん。それと、そっちの奴は会うのは今回初めてだったな。」

そう言って挨拶してきたもう一人は以前の組織の末端のまとめ役であり、組織との連絡係でもある秋吉を捕まえる時に協力してもらった坂上君がいた。

「2人とも久しぶりだな。氷室君に坂上君。今回は俺の方もこの一件に協力してくれている牧村の人間を連れて来た。氷室君は知ってると思うから、坂上君に紹介する。彼は牧村道場の元継承者である牧村瞬一君だ。よろしく頼む。」

俺がそう言うと、瞬坊も坂上君に

「初めまして、だな。今回の事で協力させてもらってる牧村瞬一だ。坂上君、君の事は氷室から聞いてるよ。彼の信頼厚い男だそうだな。これからの事をやるにつけ、君とも上手くやっていきたいと思っている。1つよろしく。」

そう言って握手の為に手を出す瞬坊に、坂上もじっと瞬坊を見ていたが、やがて、同じように手を出して握手すると

「成る程、氷室から聞いていたが、元武術家というのは本当みたいだな。どうやら足を悪くしてしまってるらしいが、それでもその面影は感じ取れる。こちらこそよろしく頼む。あんたの情報収集能力はうちでも買ってる所だからな。」

そう言って握手を交わす2人はを見届けて俺も席へとついた。

席につくと、早速俺達は今回の件に関する情報交換を開始した。

「さて、今回龍也さんにわざわざ来てもらったのは、僕達の方でも組織の事について動いていた結果に関して報告しておく事があったからです。」

その氷室君の言葉に俺は頷いて

「ふむ、と、いう事は何らかの進展があった、という事なのか？」

その言葉に今度は坂上君が

「ああ。徐々に何だが、現組織の幹部連中が捕まり始めてる。それによって奴らの勢力が弱まり始めている、そういう事さ。」

そして、その坂上君の言葉の後に氷室君が

「最近になって、何人かの幹部クラスが捕まるようになってきました。最初は末端の連中だけでしたが、徐々に小さい所は消滅の一途

を辿っているようです。現にあれ以降、末端の奴らをほとんど確認できなくなってきています。今はそれよりも上の連中が係わる所と変わってきている、そんな感じです。それでも、まだ奴らの力をそぎきれているわけではないので、そこから更に深い部分を見据える必要があります。」

氷室君の説明に頷いて俺は

「成る程な。いよいよ中堅どころが引っかかるようになってきた、と言う所か。」

そう言うと、その言葉に瞬坊は頷いて

「そうなりますね。そして、中堅連中を締め上げるうちに、組織の全容も徐々にですが、明らかになってきています。どうやら、捕まえた幹部の1人が口を割った時に聞いた話ですが、組織は3部構成に分かれているらしいとの事です。まず、俺達の捕まえてきた末端連中。奴らをブロンズシャドウと呼んでいるらしいですね。そして現在捕まり始めている中堅どころがシルバーシャドウ。そして、俺達の目指す組織の本体、それがゴールドシャドウという連中らしいです。ブロンズやシルバーと違い、ゴールドはわずか数人の少数精鋭で本体を名乗っているとの事、そこには荒事にはめっぽう強い連中が控えているという事らしいです。」

俺はその瞬坊の説明に頷きつつ

「成る程な。最後のゴールドを潰す事ができれば、この戦いは終わらせられる、って事か。」

俺の言葉に3人が頷いて

「そうなりますね。そして、もはやブロンズレベルは壊滅状態ですので、それほど心配はしなくてもいいでしょう。問題はシルバー、ゴールドの連中ですね。奴らに関してはまだ全てが判明していませんので居場所も未だに手探り状態と言えます。」

「だが、俺達の睨んだ所では、シルバーもそれ程人数はいないかもしれないという事と、そのシルバーの中にちょいと聞き覚えのある奴がいるらしいという事実が判明したのさ。」

「そう。彼の言う通りです。俺も最初はその情報に辿り着いた時には目を疑いましたがね、そこにいた奴というのが”成神章”でした。」

俺は瞬坊の言葉に驚いて

「なんだと?ここでその名前が出てくるなんて・・・あいつは君らの見立てでも小物だという事だったはずだな?そんな奴が上に行けたとは驚きだ。」

俺の言葉に瞬坊は苦笑しながら

「確かに人間的には小物です。しかし、奴はその狡猾さでシルバーに登ったという噂を聞きました。人に取り入る、自分の為に様々な策を弄する所はあの時代からも非凡な所がありました。それを活かしたのだと思います。」

俺はその言葉に考え込みつつ

「成る程な・・・。どうやらこれは、まだまだ時間がかかりそうな問題のようだ。なら、これからは更にそこの所に関する情報を中心に探っていく方向で行こう。3人とも、更なる調査をよろしく頼む。

」

俺の言葉に3人は頷いて

「任せて下さい。きっと突き止めて奴らを叩き潰して見せますよ。」

「ま、俺らに逆らった連中には痛い目を見せてやらなきゃな。」

「俺は直接戦う事は出来ないが、情報収集に関しては任せてくれ。きっと役に立ってみせる。」

そう言う3人に俺は一応、老婆心で

「くれぐれも気をつけろよ?最近の奴らの動きは少し不穏さがましてきているように感じる。油断をしてれば俺達も寝首を掻かれる、という事になりかねないからな。それに、そろそろ連中も死に物狂いになってくるだろう。自分らの身辺には細心の注意を払うようにな。」

そう伝えると、3人共俺に

「大丈夫です。油断はしませんよ。それじゃ僕達はこれで。行くぞ?坂上。」

「あんたの忠告はよく心にとどめておくぜ?それじゃ行くか、氷室。」

「俺も油断はしませんよ。それじゃ俺も更なる情報収集にまわります。」

そう言うと、それぞれがそれぞれにすべき事をする為に店を出て行く。

俺もまた、自らの足で動くべく、店を後にしたのだった。

非村ｓｉｄｅ

奴らとの戦いにおいて、戦力は十分に整えておきたかったが、ここの所は奴らに先手を打たれる事が多くなり、組織も大分当初よりも力を弱めている。

それもこれも、龍神の連中の所に力強い助っ人が加わり、我らの行方を探り出したからに他ならない。

そして、忌々しいがその結果は確実に現れて来ていた。

私は組織のゴールドシャドウの面々を集め、緊急の対策会議を行う事にした。

「さて、今日集まってもらったのは他でもない。最近の奴らの動きと、我々の組織力の弱体化が進み始めている件についてだ。そこで、今後の対策をどう取るか、それを話し合いたいと思う。まずは現状の報告を聞こう。柳沢、よろしく頼む。」

私はゴールドシャドウの中でも指折りの情報担当者である柳沢聡（やなぎさわさとる）に現状の報告を頼む。

その声に答えるように柳沢は報告書を手に立ち上がって現状の報告を開始した。

「は！それでは、現状の報告をしたいと思います。ブロンズ連中の取りまとめたる秋吉が捕まり、そこからブロンズ全体、そして、ここ最近ではシルバーの領域にも連中の手が入る有様となってきました。その所為もあり、我らの戦力は相当の痛手を受けているとの事、

そして、奴らの中にもかなりの情報収集の能力を持つ者がいるようで、そいつを中心に我々の事が調べられているという事です。下手をすればそう遠くないうちに我々に辿り着かれる恐れも出てきています。奴らと渡り合う為にはこれ以上の戦力ダウンは避けたい所、今回はこの件を如何にするべきかを話し合いたいと思います。」

その報告に私は頷き、柳沢に「ご苦労、座ってくれ。」そう促すと、柳沢も頷いて自分の席へとつく。

そして、全員を見回しながら私はこの場にいる12人に声をかける。

「さて、現状はこういう事になっている。ここにいる皆に今後の対策について意見を出してもらいたい。」

そう言うと、まず12人のうちの2人目である山城仁（やましろじん）が立ち上がり声をあげる。

「現状、シルバーのこれ以上の減少は防がねばならんだろう。それゆえに今後はシルバーの居場所をこれまでよりも分かりにくくして極力奴らを守り、戦力ダウンを食い止めねばならん。」

そして、次に立ち上がったのは12人のうちの3人目、シルバーの取りまとめと連絡を唯一取り合う男、真崎修（まさきおさむ）だった。

「すでにそちらの方は対策はしてある。今後はそう簡単には尻尾はつかまれないはずだ。だが、これだけでもまだ心配はある。こちらの方は任せてもらいたい。」

そして、そんな真崎の言葉の後に立ち上がる4人目は神崎流（かんざきながれ）の一人息子で龍神流（りゅうと）にかなりの恨みを持つ神崎隆人だった。

「その対策も重要だが、後もう1つやらねばならない対策もあるだろう？そっちはどうするんだ？」

その言葉に私は神崎に

「やらねばならない対策？それは何だ？」

私の言葉に神崎は”ふん”と鼻を鳴らして

「今の現状、情報を集められている不利の打開策ですよ。非村さん。俺はそこを押さえるべきだと考えるが？」

その言葉に私は成る程と頷いて

「確かにそれも重要だ。その事に関してここにいるメンバーに何か妙案はないか？」

そう問い掛けると、5人目の黄瀬孝（おうせたかし）が

「それならば1つ良い方法があるぞ？」

その言葉に私は黄瀬に

「その方法とはなんだ？言って見ろ。」

そう言うと、黄瀬はニヤリと笑って

「その情報収集のエキスパートとやらを暗殺する、という事ですよ。非村さん。」

その言葉に私は眉をひそめて

「暗殺？確かにそれが出来れば我々を探る力も大分落とせる事にはなるが、その分リスクもあるだろう？下手な真似をすれば、自らの首を締めかねん結果になるだろう。」

その私の言葉に黄瀬は

「確かに、やり方を間違えればこちらにとってもマイナスとなります。だが、方法はあります。その為にシルバーの１つを潰す事になりますが、試してみますか？非村さん。」

黄瀬の言葉に私は少し考え込んでいたが、とりあえずはその方法を聞こうと思い、黄瀬に

「とりあえず話してみろ。どうするかはその後だ。」

そう言うと、黄瀬は頷いてその方法について語り始めた。

「シルバーの中に、シノギも大分落ち込んでいるグループの１つがあります。そのグループの纏め役の男に奴を暗殺させるのです。最近のシノギが落ち込んでいる事で奴は大分焦っているとの事、この件が成功すれば落ち込んでいるシノギの分は不問にすると言えば、奴はその為に必死でやる事でしょう。よしんば奴がしくじって捕まったとしても元々切り捨てる予定の連中です。こちらの腹は痛みません。そして、成功しても、すぐに奴を始末すればいい話です。その為に奴にはニセの連絡先を設け、そこでやり取りをさせます。それも、奴と同じ組の連中を連絡係に立てて、ですね。そして、いつでもそちらも切り捨てるようにしておけばいいでしょう。」

その言葉に私は二ヤリとしつつ

「ふむ。成る程、いい方法だ。それで?そのヒットマンの役をやらせる男の名前はなんというのだ?」

私の言葉に黄瀬は手帳を取り出して名前を確認して私に告げた。

「その男の名前は成神章です。」

その名前を聞いて私は頷くと、全員に

「よし!この策を持って情報収集の要を潰し、我らの勢力を取り戻す!そして、必ずや龍神とその連合を潰すのだ!これより作戦を開始する!!」

そう号令をかけると、全員頷いてその場を去る。

私はそれを見届けて次の一手を摸索するのだった。

成神ｓｉｄｅ

俺は、中学を一足遅くに卒業し、色々な場所を巡ってきた。

そして、色々見て回っていくうちに俺はある組織と出会った。

それが、俺が現在所属するシャドウだった。

巧妙に頭を使い、口八丁手八丁でシルバーまで登りつめたのはいいが、そこからまたしても牧村達に邪魔される事となった。

奴とは中学時代からの因縁もあり、更にはこの組織はもう1人俺の憎む相手、森村慶一とも係わりがあるらしいと知った。

俺は、それを知り、憎しみを持ちつづけながらもシノギを続けてきたが、最近はそれも落ち込んでしまい、この組織に居る事もかなり危険な状況になってきたようだった。

この状況を如何にすべきか悩んでいた時、俺の携帯にゴールドからの連絡が飛び込んで来た。

俺は慌てて電話を取り、ゴールドと話す。

「もしもし。成神です。今日はどういったご用件で?」

と、おそるおそる尋ねてみると、電話の向こうから

「君が成神か。君に頼みたい事がある。君の同級生である牧村瞬一の事は知っているな?非村さんからの指令だ。奴を暗殺しろ。それが出来たなら、最近のシノギの落ち込みの件は不問にしてやろう。それだけじゃない、君をゴールドに取り立ててやる用意もある。悪い話ではないと思うが?」

その言葉と出てきた名前に驚愕する俺だったが、それ以上の最近のシノギの落ち込みが不問になる事とゴールドへの取り立てという言葉が俺を激しく揺さぶった。

「その話、本当でしょうね?本当に俺をゴールドに?」

俺の言葉にゴールドの男は

「ああ。それは間違いない。それを実行するという事はそれだけの重要な価値があるという事だ。お前は確か、車は乗れたな？」

そう聞いて来た男に俺は

「はい。みようみまねで練習して、乗り回して、最近はすっかり運転もできるようになってます。」

そう言うと、ゴールドの男は

「うむ。それならいい。暗殺には車を使おうと思っていたところだからな。その車はこちらで用意する。準備が整い次第実行に移せ。それとくれぐれも言っておく。失敗したらお前の命も保証はしない。しかし、成功すれば、わかるな？」

俺はゴールドの男の言葉に薄ら寒いものを感じつつも

「わ、わかりました。その代わり成功した時には、先ほどの話、忘れないでくださいよ？」

そう言うと、ゴールドの男は電話口で笑うと

「分かっている。お前は失敗さえしなければいいのだ。それと、連絡はこっちから行うからそっちからは取れん。どうしてもという場合はお前の所に立てている連絡係を頼れ。そいつに頼めば取次ぎも可能だ。」

その言葉に俺は

「わ、わかりました。それでは次の指令が来る時を待っています。」

そう俺が言うと、ゴールドの男は

「わかった。おそらく次に電話を入れた時が実行の時となるだろう。それまでは奴の身辺を洗って、行動パターンを押さえておけばいいだろう。では、今回はこれで切る。最後に1つ。決して逃げよう等とは考えるな?もしもそんな真似をすれば、お前の明日は保証しない。」

その言葉に俺は背筋に冷たいものが走る感覚を覚えつつ

「わ、わかっています・・・それでは・・・これで。」

そう言って電話を切ってからしばらくして俺は事の重大さを改めて感じる事となった。

しかし、逃げる事も、しくじる事もかなわない俺は次第にその心が追い詰められていく感じを味わう事となったのだった。

そして、それから1ヶ月近くの間、俺は迫り来る実行の日を待ちながら怯える日々を過ごしていた。

その緊張が限界に近くなった時、俺の携帯に計画の実行を促す電話がかかってきたのだった。

俺は張り詰めすぎた状態のままで促されるままに車に乗り込み、この一ヶ月で調べてきた奴の行動パターンを確認し、覆面を被って奴の通る場所付近で車を待機させてその時を待った。

俺は車の中で（ついにこの時が来たか・・・こええ・・・けど、成功すれば俺は・・・だけど、失敗したら俺には明日はない・・・やるしか、やるしかないんだ・・・お前らが悪い・・・お前らさえ奴らの事を探り、焦らせなければ俺はこんな真似しなくても済んだんだ・・・だから、恨むなら、自分達の行動を恨め・・・俺は悪くない・・・俺は悪くない・・・俺の為に・・・死んでくれ！！）

そして、俺は奴の姿を見つけて、ほぼ半狂乱な状態で車をスタートさせて奴の所に突っ込んだ。

そして、俺の車に気付いた奴は目を見開いて驚きながらドカッ！！という音とともに跳ね飛ばされた。

奴の荷物がぶちまけられる。

俺は即座に荷物の所へと行くと、奴の持っていた端末を破壊してすぐさまその場を車で走り去った。

瞬一ｓｉｄｅ

あれから1ヶ月以上の月日が経ち、俺はある所からシルバー連中が捕まりにくくなった現状に焦りを感じ、必死で情報収集を続けていた。

だが、今回捕えたシルバーから運良くゴールドに関する情報が手に入った。

それは、ヒントみたいなものではあったが、確実に奴らに近づく手掛かりになるものだった。

俺はそれを自らのパソコンに保存をして持ち歩いていたが、俺は気付いていなかった。

もう、この先俺が情報収集にあたる事はできなくなる事を、そして、2度と慶一や皆と会えなくなる事を。

そして、それは、世間でもゴールデンウィークが始まる一週間前、午前3時頃に俺がコンビニに夜食を買いに行った時の帰りに起きた。

突如背後から無灯火の車が俺の所に突っ込んできた。

俺はこの足のせいもあり、車を避けることができなかったので、そのまま車に跳ね飛ばされ、持っていた荷物をその場にぶちまけられた。

そして、出血の影響で朦朧とした意識の中で、俺は車から降りてきた覆面男の姿と俺の端末を踏み壊すそいつの姿が目にはいり、更にそいつが俺の側で

「・・・が悪いんだ、お前さえいなかったら・・・お前さえいなかったらっ！！」

そう言うと踵を返して車に乗り込んでその場を逃走した。

それを見送ってから俺はその体で自分の荷物の所へはいずっていって鞄の中にあるメモリースティックを取り出して確認すると、それが壊れていない事にほっとしてそのまま意識を失った。

そして、それから少しして誰かが通報してくれて俺は救急車に乗せられて病院へと運び込まれた。

俺の事を聞きつけて龍也さん達が病院へと駆けつける。

龍也さん達は俺の姿を見ると慌てて側に寄ってきて

「瞬坊！しっかりしろ！大丈夫か！？一体何があった？」

「牧村君！大丈夫か！？」

「ちっ！何が起きたってんだ！！誰がこいつをこんな目に！！」

そんな3人に俺は途切れ途切れに

「・・・龍也・・・さん・・・氷室・・・坂上・・・や・・・奴ら・・・だ・・・俺を・・・消す為に・・・俺を狙って・・・や、奴は・・・俺の端末を必死に壊していた・・・おそらく・・・これ以上探られる事は・・・奴らにとって・・・も・・・まずい事・・・だったんだと思う・・・お・・・俺は・・・もう駄目です・・・た・・・龍也さん・・・こいつを・・・奴らの嫌がるデータは・・・万が一を考えてこれに・・・移してあります・・・ごほっ！げほっ！！はあ・・・はあ・・・どうか・・・これを使って・・・奴らを・・・どうか・・・そして、俺の仇を・・・。」

そこまで言うと、龍也さんは俺からメモリースティックを受け取ると

「・・・すまん・・・お前の足の事、もっと考えるべきだった・・・今回の事は完全に俺のミスだ・・・すまん瞬坊・・・任せろ、こいつはきっと役立てる。お前の仇もきっと取ってやるからだから、もうしゃべるな。」

俺にそう言ってくれ、氷室達もまた悔しそうな表情で

「牧村君、済まない、僕ももっと君に気を使うべきだった。この事は僕達のミスでもある、本当に済まない・・・君の仇は僕達も取ってやる・・・それが僕のしなければならない事だ。」
「この一ヶ月あんたにはずいぶん助けられたぜ。安心しな、きっと俺達があんたの仇を取ってやるよ。」

そう言ってくれた。

俺は最後の力を振り絞って

「・・・龍也さん・・・氷室・・・坂上・・・頼みがある・・・慶一の・・・親友の事だ。あいつには俺の為に復讐者という業を背負って欲しくない・・・だから・・・あいつには本当の事は・・・言わないでおいてくれ・・・そして、慶一に・・・すまないと・・・言っていたと・・・伝えておいて下さい・・・それと・・・龍也さん・・・こなたちゃんにだけは真実を話して・・・事が片付くまでは警戒して欲しいと・・・伝えて下さい・・・さ・・・最後に・・・龍也さん・・・氷室・・・坂上・・・短い間だったが・・・お前らとつるめてよかったよ・・・た・・・たの・・・む・・・きっと・・・奴らを・・・叩き潰して・・・くれ・・・それと・・・親父達にも・・・済まないと・・・伝えておいてください・・・お願い・・・します・・・。」

その言葉を最後に俺は2度と意識を取り戻す事も無く、この世から去った。

龍也ｓｉｄｅ

突然の瞬坊の事故の報を聞いた俺達は大急ぎで瞬坊の担ぎこまれた病院へと向かった。

そこで目にしたのは全身に酷い怪我を負い、もはや命の灯火もつきかけている瞬坊の姿があった。

瞬坊は俺に最後の力を振り絞り、瞬坊の持っていたデータのバックアップが入ったメモリースティックを手渡してくれた。

そして、慶一の事、やつらの事、みんなの事を俺達に託して瞬坊は息を引き取った。

それを見た瞬間俺は力任せに床を殴りつけていた。

「・・・そったれ!ちくしょう!!何で俺は気付けなかった!何で俺は瞬坊の体の事を考慮してなかったんだ!!ちくしょう!!」

そうやって何度も床を叩いている時、俺の側で血が滴るのが見え、俺はまだ冷めやらぬ頭でその方向に視線を移すと、鬼のような形相で拳を血が出る程に握り締めた氷室君と相当に不機嫌そうな坂上君の顔が見えた。

そして、2人は俺に

「龍也さん。慶一君に連絡を取ってやってください。これから俺達はすぐさま動きます。牧村君を轢き逃げした犯人を探し出します。」

「何かわかったら連絡する。あんたは牧村の側に居てやってくれ。いくぞ?氷室!」

「ああ!絶対に許さない・・・奴らを・・・潰す!!」

そう言って出て行く2人に俺は

「済まない、２人とも。俺も体制が整い次第、君らと共に奴らを探す。それまでは頼らせてもらう。」

そう言うと、２人とも手を振って応えてくれた。

俺はそんな２人を見送ってから自分を冷静にする為に少し時間をおいた後慶一の所へと連絡しようとした矢先、慶一の方からこちらに連絡が入った。

慶一はどうやらニュースでその事を知ったらしいとの事、俺は慶一に真実を＜隠すべき所は隠して＞伝えると、慶一はすぐにこちらへと来るとの事だった。

俺は慶一がどんな顔をするだろうかと憂鬱になりながらも慶一の到着を待った。

しかし、その頃に更に恐るべき事が実行に移されている事をこの時の俺達は知らなかった。

成神ｓｉｄｅ

任務を成功させて俺は車を廃棄する場所へとやって来ていた。

その場所へとやってくると、そこには見慣れない男が立っていて、俺を手招きして

「成神、こっちだ。よくやったな。車は今処分する。さあ、疲れただろう、ご苦労だった。これを飲んで落ち着くといい。」

そう言ってその男は俺にホットコーヒーを渡してくれたので俺はそ

れに口をつけた。

「ふう。美味いです。わざわざありがとうございます。」

俺はとりあえずその男に礼を言うと、その男は二ヤリと笑って

「なあに、大仕事をしてもらったんだ。この程度は何てことはない。さあ、車の処分は終わったぞ。さて次はお前の番だな。」

その男が何を言っているのか一瞬理解できなかった俺だったが、すぐに物凄い眠気が俺を襲ってきて俺はその場に倒れた。

そして、それが俺の最後となった。

黄瀬ｓｉｄｅ

首尾よく任務を果たした成神を、車の処分工場へと誘導し、車を処分させた。

だが、我々にはもう1つやるべき事があったのでそれの実行の為に成神に大量の睡眠薬入りのコーヒーを飲ませる。

そして、意識を失った成神を、あらかじめ奴に書かせたダミーの遺書と共に奴の隠れ住むアパートへと連れて行き、布団を敷き、そこに成神を寝かせ、遺書を枕もとに置くと、全ての証拠を隠滅して本部へと戻った。

「ふふ。これでいい。牧村瞬一は事故死、そしてその犯人もまた、恨んでいたとはいえ牧村を殺した事を悔やんで自殺。これで我らにとっての邪魔者も始末ができた。まさに一石二鳥だ。情報源を失っ

た奴らの慌てる顔が目に浮かぶようだな。よし、後は非村さんへの報告だ。」

俺はそう呟いて本部へと帰還した。

決着はかなり近い所まで迫っている。

来たるべき戦いの予感を、双方共に感じ取っていたのだった。

舞い戻る旋律の裏側、その3～起こる悲劇、そして、迫る決戦の予感～（後書き）

今後の展開をお楽しみに。

悲しみの旋律～瞬一の死、そして、告げられた真実と龍也の覚悟～（前書き）

短編もありましたので大分お待たせしてしまいました。申し訳ありません。
後半はほとんど龍也視点となっています。
そして、変わる日常も一周年を迎えました。
これからも頑張って行きますので、どうぞこれからもよろしくお願いします。
それでは本編をどうぞ。

悲しみの旋律～瞬一の死、そして、告げられた真実と龍也の覚悟～

進路の摸索、バイトの出世、それを続けていくうちに目指すべき学校を見つける事が出来た。

俺達は新たなる場所へ向けて、一致団結で挑んでいこうとこれからの事に気合を入れようとしていた。

確実に俺はその先の幸せに向かって進み始めている、そう思った矢先に悲劇は起こった。

パティの誕生日パーティを開き、ひよりのプレゼントのＤＶＤを再生する為にテレビの入力切替をするために電源を入れた時、そこにたまたま流れたニュースは俺達に多大なショックを与えた。

それは、俺自身も信じられない事だった。

誰が想像するだろうか・・・いきなり親友を失うなどと・・・。

俺は混乱した頭で龍兄へと連絡を取り、事の真意を確かめるべく連絡を取った。

そして、そこで聞かされた事実は、もはやその事を否定できないものだった。

俺は急いで親友の、瞬一の居る病院へと向かおうとした。

そんな俺に、瞬一と係わったこなた達や事情をよく飲み込めていない毒島さん達も一緒に行くと言った。

そんな皆の気持をありがたく思うと共に、俺はとるものもとりあえず、こなた達を連れて電車へと乗り込んだのだった。

向こうに行く間、俺達は終始無言だった。

お互いに気を使いあい、共に目的地を目指す。

そして、目的の病院に着いた俺達は、龍兄達のいる霊安室へと足を向けた。

俺は霊安室を目の前にするまでも、心のどこかで瞬一が死んだという事実を信じずにいた。

そんな状態のままで俺は霊安室のドアをノックする。

すると、中から龍兄が姿を現して俺に

「・・・来たか、慶一。さあ、中へ入れ。瞬坊が・・・待っている・・・。」

俺にそう言う龍兄はかなり辛そうな顔をしていた。

俺はそんな龍兄の言葉に頷いて室内へと足を踏み入れる。

その時、俺以外にこなた達が来ていることに驚いた龍兄は

「こ、こなたちゃん?それに、皆も・・・どうして、君達がここに?」

龍兄の問いにこなたは暗い表情で

「・・・この事を知った時・・・私達も慶一君と一緒に居たんです。それに、私達も・・・牧村君とは係わりがありましたから・・・慶一君を救う手助けをしてくれた事もあったくらいですし・・・。」

そう答えるこなたに皆もゆっくりと頷いていた。

そんなこなた達の姿を見た龍兄は１つ頷くと

「・・・わかった。君達も入れ。きっと・・・瞬坊も喜ぶだろうさ・・・。」

そう言い、こなた達に中に入るよう促すと、こなた達も俺に続いて室内に入ってきた。

そして、こうとやまとが俺の横へと並び、台の上で顔に白い布を被せられて横たわる瞬一の姿を見ていた。

俺は、そっと、瞬一の顔にかかる白い布を取って顔を見る。

その顔には轢き逃げによるものと思われる傷らしきものが少し残っていたが、その顔にはこころなしか無念さが浮かんでいるように見えた。

俺は瞬一の顔に触れながら

「おい、何寝てんだよ・・・急に俺をこんな所に呼びつけたと思ったら、性質の悪い冗談やってんじゃねえよ・・・起きろ、起きろよ・・・瞬・・・目えあけろよっ！！てめえ！ふざけんなっ！！俺達や

っとまた親友に戻れたんじゃねえか！！これから失ってきた４年間を取り戻すんじゃねえか！！なのに、死にました、だ！？くだらねえ真似してんじゃねえ！！起きろ！起きろよ！！起きてくれよ！！！瞬ーーーーーー！！！！！」

そう言って俺は瞬の亡骸にすがり付いて大声で泣いた。

俺の後ろでこうとやまとも

「先輩っ！！瞬一先輩っ！！こんなのってないじゃないですか！！」

「私は・・・まだ先輩に返してない恩があるのよ？あんまりよ・・・こんなのって・・・。」

そう言いながら俯いて涙を零していた。

「・・・牧村君・・・どうして・・・まだ・・・終わってない・・・まだ私達がやる事は終わってないよ？それなのになんでさ！牧村君！！」

そう叫ぶこなたの後ろで他の皆も泣いていた。

そんな俺達の様子に事情を知らない４人もこの辛い空気を感じ取ったようで、俺達と一緒に涙を流していたのだった。

瞬一の遺体にすがり付いて泣く俺に龍兄は俺の側に来て

「慶一・・・瞬坊からの伝言だ。すまない、そう伝えて欲しいと・・・あいつは言っていた。あいつ自身もお前とまた親友に戻れた事を凄く喜んでいた。その無念さは・・・言葉に出来ないものだろうな・・・。」

瞬一の最後の言葉を龍兄から聞いた俺は

「っ！！・・・うう・・・うおおおおおおお！！うわあああああ！！」

更に大きな悲しみにさっき以上の声をあげ、涙を流した。

こうややまとも、そして、こなた達も龍兄のその言葉を聞いて凄く悔しそうな顔をしていたのだった。

そして、俺とこうとやまととこなたの４人を残し、かがみ達は一旦霊安室を出た。

龍也ｓｉｄｅ

瞬坊の事故の件を俺は真実を伏せたままで慶一に伝える事となった。

俺にとっても中々に辛い所だが、瞬坊とした約束でもあるので、俺は毅然とした態度で事に臨んだ。

ある程度の予想はしていたものの、やはり慶一の態度は予想通りで、俺としてもかなり堪えた。

だが、俺にとっての予想外もあった。

それが、慶一と一緒に付いて来たこなたちゃん達の存在だった。

話を聞くと、偶然にも慶一と一緒にいたらしいとの事。

俺はさらにもう1つ、こなたちゃんにも瞬坊から託された約束を果たさねばならないと思い、様子を見ていたが、慶一ややまとちゃん達と共に霊安室に残ったので、とりあえず俺と一緒に部屋から出てきたかがみちゃん達と話す事にしたのだった。

「かがみちゃん、それに皆も。突然の事で驚いただろう・・・。俺も瞬坊とは幼い頃から交流もあったからね、やっぱりこういうのは辛いよ。」

少し沈みがちに俺はそう声をかけると、とりあえず涙を拭いたかがみちゃんが

「・・・はい。事件の事はニュースで見ましたが、私は今でも信じられません。あの時の牧村くんは元気そうにしていましたからね・・・。」

暗い表情でそう言い、そして、そんなかがみちゃんの言葉の後につかさちゃんも悲しそうな顔で

「けいちゃん、やっとわたし達と一緒に行きたい大学を見つけた所だったんです。けいちゃんは、出来る事なら瞬ちゃんを誘ってみたい、って言ってたんですよ?」

そんな2人の言葉に俺は

「そうか、あいつ、そんな事を考えていたのか・・・。」

そう呟くと、悲しそうな表情のみゆきちゃんが

「元々、それを考えようと思ったのは私と慶一さんがした約束から

だったんです・・・。私は皆さんと出来る事ならこれから先も一緒にいられたら、と望みました。そして、慶一さんも私としてくれた約束の為に動いてくれたんです・・・。そして、ようやく・・・道が見えたと思ったのに・・・。」

そう言いながら最後は悔しそうな表情で俯くみゆきちゃん。

そんな3人を見ながらあやのちゃんは俺に

「・・・龍也さん、今回のこれは轢き逃げだと聞いています。あれから何か犯人に係わる情報なんかはでていないんですか?」

堅い表情でそう言ってくるあやのちゃん。

それをさらに後押しするようにみさおちゃんも

「そうだゼ?龍也さん。私らもそこが気になってるんだ。私は牧村をあんな目にあわせた奴が許せない。あいつの為にも犯人を捕まえてやらなきゃあいつもうかばれねーよ。」

俺はそんなみさおちゃんの言葉に大きなため息を1つつくと

「そうだな・・・。けど、安心してくれ。家の者、それに牧村家、さらには氷室君率いる”紅”も犯人探しに動いてくれてる。後はもう1つ掛け合ってみたい所もあるからそこにも連絡してみるつもりさ。」

俺の言葉にかがみちゃんが

「掛け合ってみたい所、ですか?それは一体どこに、なんですか?」

そう聞いて来たので俺は頷いて

「慶一からも聞いたんだが、こなたちゃんの義姉で交通課の婦警さんをやってる人がいるんだよね？事件が起きたのは都内だけど、犯人が埼玉に逃げ込んでるとも考えられるからね。埼玉県警の方にも協力を仰ごうかと思ってるよ。」

その俺の言葉にみゆきちゃんが心配そうな顔で

「で、でも、大丈夫なんですか？成美さんだけでは心許なくはありませんか？」

そんな風に言うみゆきちゃんに俺は

「その辺は心配ないよ。俺の親父、龍神龍真は県警のお偉いさんともつながりをもっているんだ。だから、親父にそのお偉いさんに働きかけてもらって動かしてもらえばそう時間もかからずに犯人の足取りも掴めるはずだからね。」

自信あり、と言うように俺が答えると、皆は目を丸くして驚きながら

「つ、つくづく凄いですね・・・龍神さんの所は・・・。」

「なんだかびっくりだよ～・・・。」

「あれだけの力のある道場だから背後の繋がりも何かしらあるのでは、と思っていましたが・・・まさかその方面にも顔が利くとは思いませんでした・・・。」

「でも、警察に協力してもらえれば早く見つけられるかもしれないわね・・・。」

「だな。龍也さん。そっちの方はよろしく頼むゼ！」

「ゆいお姉ちゃんなら、きっと頑張ってくれるよ！」
「・・・牧村さんや先輩の為にも・・・犯人はつかまえなくてはいけませんね・・・。」
「そうっスよ！そして、牧村さんの前で、慶一先輩の前できっちり謝罪してもらわなきゃけじめもつけられないっスからね！！」
そう言い、そして、事の成り行きを見守っていた毒島さん達も
「私達は今回の事について、先輩やそのご友人の事も私はあまり知りません。けど、こんな事が起きてしまっている以上は、一刻も早い犯人の逮捕がなされる事を祈るばかりですね。」
「先輩、可愛そうだもんね・・・。犯人見つかればいいね・・・。あんな風に泣く先輩は見てられないよ。」
「何か、私達にも出来る事はないでしょうか？先輩や皆さんの為に、何か・・・。」
「コノママじゃケイイチがカワイソウです！ハンニンはゼッタイユルシマせんヨ！！」
そんな風に慶一を心配してくれる皆の気持が今はとてもありがたく感じ、俺は
「ありがとう。毒島さん、山辺さん、若瀬さん、それにパティちゃん。君達の気持はとてもありがたい。なら、君達にもお願いしようかな。願わくば、慶一の側についていてやって欲しい。今のあいつは相当に不安定になるだろうし、それに、かなり凹むだろう。出来るだけ1人きりでいさせたくないからね。」
そう皆に言うと、皆は俺に
「わかりました。今は先輩にそうするのが良いと言うのであれば、

私は協力します。」
「私もやるよ。こういう時こそ頑張って恩返しもしたいもんね。」
「私も頑張ってみようと思います。私に道を開いてくれた先輩のご恩に少しでも報いる事が出来るのなら・・・。」
「トウゼン、ワタシもデス!!ワタシはケイイチとはファミリーのようなものですから!イッショにクらすケイイチのヤクにタってミせます!!」

まず4人がそう答え、そして、かがみちゃん達も

「ちょっと待ちなさいよ。あんた達だけにその役目を押し付ける訳には行かないわ。こういう時の為の仲間なんだから私もやるわよ?」
「わたしも!けいちゃんを元気付けてあげたいもん。」
「私もです。これまで慶一さんに助けられてきたんですから、ここで私も頑張らないと。」
「慶ちゃんは大事なお友達よ?私だって力になる!」
「私もやるゼ?それが仲間ってもんだかんな!」
「私も、いつも先輩に元気をもらってばかりですから、今私に出来る事があるのなら頑張ってみたいです。」
「・・・私に色々してくれた先輩の為に・・・今度は私が力になります・・・。」
「今回で少しでも先輩にご恩返ししたいっスね・・・。私も何か自分にできる事をするっスよ。」

そんな風に言ってくれたのだった。

俺はそんなみんなの気持が嬉しくて、そして、そこまでに慶一と皆との繋がりが強いのだという事に少しだけ羨ましくも思ったのだった。

そして、俺は皆にここで待っていて欲しいという旨を伝えて慶一達のいる霊安室へと足を向けた。

霊安室の前に着いた俺は、ドアをノックする。

俺のノックに気付いたらしい、こなたちゃんがドアを開けてくれた。

俺はドア越しにこなたちゃんの顔をちらりと見たが、慶一と一緒に今まで泣いていたようで、その目にはまだ涙が光っていた。

『龍也さん、何か用事ですか？』

こなたちゃんが慶一達を刺激しないように小声で聞いて来たので俺は

『うん、ちょっとこなたちゃんに話があるんだ。俺と一緒に来てくれないか？』

そう言うと、こなたちゃんはちらりと慶一達の方を見てから俺に向き直り

『・・・わかりました。それじゃ、そっと出ましょうか。』

こなたちゃんはそう言うと、慶一達を霊安室に残して出て来てくれた。

俺はこなたちゃんに

「ここじゃ話しにくいから屋上へ出ようか。」

そう言うと、こなたちゃんも頷いて

「わかりました。それじゃ、ついて行きますね？」

そう言ってくれたので俺も頷いてこなたちゃんと一緒に屋上へと向かった。

屋上の扉を開けると、ちょっと強めの風が吹いていたが、俺は人気のない所を見つけて

「よし、あそこで話そう。こなたちゃん、こっちへ。」

俺がこなたちゃんに促すと、こなたちゃんは「はい。」と言って、俺に付いてきてくれた。

そして、再度人気がない事を確認してこなたちゃんに向き直った時、こなたちゃんは

「それで、私に話って一体何ですか？」

そう聞いて来たので俺はその問いかけに頷くと

「うん。実はね、瞬坊が亡くなるちょっと前に、あいつは君への伝言も残したんだ。俺は君にそれを伝えなきゃならない。」

そう切り出すと、こなたちゃんの表情が真剣になったのが見て取れた。

そして、俺にその表情を向けて

「伝言、ですか？かなり大事な事、みたいですね？その様子だと・・

・。」

そう返してくるこなたちゃんに俺も頷くと

「そうだね、かなり大事だ。何故なら瞬坊はね、君には今回の一件の真実を伝えて欲しいと俺に言い残したからなんだ。」

その言葉にこなたちゃんの表情が驚きに変わる。

そして、複雑な表情で「真実、ですか？」

そう聞いて来たので俺は

「そうだ。だが、その事を話す前に君には俺が何故今回になって武者修行から帰ってきたのか、何故慶一に会いにきていたのか、そこから説明する必要があるな。」

そう言うと、こなたちゃんは無言で頷いてくれ、そして短く「お願いします。」と言ったのでさらに話を続ける。

「俺が今回、武者修行の旅から戻ったその理由は、先代の龍神流当主が係わったある犯罪組織の事が関係しているんだ。」

俺の言葉にこなたちゃんは「犯罪組織？」と返してきたので、俺は頷いて

「そうだ。龍神流は昔、この辺を荒らしまわるある犯罪組織を粛正するために牧村君の所や氷室君の前の組織の暴走族と手を組み、これを潰した。けど、連中は完全には息の根は止まっていなかったんだ。その犯罪組織にいた幹部の１人が上手く逃げ延び、もう一度昔

のような犯罪組織を立ち上げ、俺達龍神流の連合に復讐をしようと企てている。」

俺の言葉に驚きつつ頷くこなたちゃん。

俺はさらに続ける。

「そして、俺が呼び戻される事となった今回、その犯罪組織がついに復活を果たしたらしいんだ。俺達と牧村流、そして、氷室君達と再び連合を組み、今度こそこの組織を完全に叩き潰す。それが俺に課せられた役割だったのさ。そしてそれは、この1年の間で決着をつける、その予定だった。それからは時折慶一の所に顔を出しつつも、その犯罪組織と戦い続けていた、という訳だ。」

俺の話を黙って聞いていたこなたちゃんは俺に

「・・・なるほど、そういう事だったんですね?でも、龍神さんの所で起きたごたごたなら、どうして慶一君にもお呼びがかからなかったんですか?慶一君も龍也さん同様、龍神さんとは血は繋がっていなくても一応は関係者でもある訳ですよね?」

そう聞いて来たので俺はその質問に軽いため息をついて

「・・・確かにこなたちゃんの言う通り、あいつも血は繋がっていなくても龍神流の関係者だ。中学時代に慶一が荒れていて、結局そのまま友人すら作らず、1人のままでいるようだったら親父も慶一を頼ろうと思った事もあったようだ。けど、それを頼もうとした時の慶一にはもはや、協力してくれ、とは言えなかったのさ。」

俺の言葉にこなたちゃんはいまいち的を得ないという顔で「どうし

てです？」と聞いて来たので俺は

「・・・その理由は、こなたちゃん。君達だよ。」

そう言うと、こなたちゃんは驚いたような表情で

「え？わ、私達、ですか？それってどういう事なんですか？」

そう聞いて来たので俺は

「あいつが1人のままなら何の問題もなく、今回の事もあいつに一任出来た。けど、今のあいつはあいつにとって守るべき者が出来てしまった。それが・・・君達なんだよ・・・。」

そう答えると、こなたちゃんはその言葉に少しだけ顔を赤くしつつ

「慶一君の守るべき者・・・それが・・・私達・・・なんというか、照れますねえ・・・。」

頬をぽりぽりと掻いて照れるこなたちゃんに俺は頷いて

「そういう事さ。そして君達という友人を得て変わったあいつに、あの頃のような苦しみを味わわせたくはないと思った親父は、慶一の代わりに俺を呼び戻した。あいつに、そして君達に迷惑をかけないように、あいつを2度と不幸な目に合わせないように、慶一に気付かれずに俺達だけでこの問題を解決しようとしたのさ。」

俺の言葉にこなたちゃんはまたしても驚きの表情を見せながら

「・・・そ、そうだったんですか・・・。あ、1つ気になったんで

すが、龍也さんはうちの学校に忍び込んで来た事がありましたよね？それで、その時に龍也さんは慶一君に「守るべき者達の顔を拝みに来た。」と、そう言っていましたよね？あれはどういう理由があったんですか？」

そう聞いて来るこなたちゃんに俺は真剣な表情を向けると

「・・・それは、慶一が俺達との繋がりを持っていると連中に気付かれた時、君達にも奴らの攻撃の矛先が向くかもしれない事を親父も俺も恐れたから、だな。そうなった時、俺達が人員を割いて君達を守らなければ、とそう考えていたからね。慶一の為にも、そして、君達に怖い思いをさせない為にも事前に食い止める為の布陣を敷きたかったから。その為には君達を守るためのボディガードに君達を認識してもらわなきゃならなかった。という事さ。」

俺の言葉にこなたちゃんの表情が硬くなるのが見て取れた。

そして、こなたちゃんはおそるおそる俺に

「そう、だったんですか・・・。龍也さん、今の私達に危険が及ぶ可能性はまだあるんですか？」

その言葉に俺は腕組みをして考え込みつつ

「・・・ない、と断言は出来ない。最近の奴らは目的の為に手段を選ばない動きをするようになってきている。俺達との戦いを有利にする為に君らの事に奴らが気付けば、君らをを人質に取ろうと考えないとも限らない。けど、安心して欲しい。君達にはちゃんとしたボディガードを俺達の仲間の中から信頼できる人間を選んでつかせるつもりだ。ただ、それでもあからさまには守らせない。それこそ

奴らに感づかれても困るからね。つかず離れずだが、君達を影から見守る形でついてもらうつもりだから安心してくれ。それに、おそらくもうすぐ決着もつくだろう。俺達の調査もかなり深いところへ届いているからね。今しばらくは不自由になるかもだけど、後もう何ヶ月もなくそれも済ませる事が出来ると思う。それまでは我慢して欲しい。」

そう言うと、こなたちゃんは色々と考えを巡らせていたようだったけど、俺に顔を向けて

「・・・わかりました。少しの間不自由にはなりそうですが、自分達の身の安全の為、そして、慶一君に迷惑をかけないために、そちらの件は龍也さんにお任せします。」

そう言うと、俺はそんなこなたちゃんに頷いた。

そして、俺は顔写真入りのボディガードの名簿をこなたちゃんに今の友人の人数分手渡して

「これを渡しておくからかがみちゃん達にも配ってやって、そして、伝えて欲しい。今しばらくは警戒して欲しいという事と、そして、真実を。君の仲間達は信頼できる人間達だよね？」

俺の問いかけにこなたちゃんは胸を張って

「当然ですよ！私達はそんな柔な信頼関係ではないですからねー。」

そう言うこなたちゃんを見て俺もにこりと笑うと

「それなら安心だな。それと最後に、君に伝えておきたい事実があ

る。」

最後の言葉で再び真剣な表情を作るとこなたちゃんもまた真剣な表情に戻って頷いたのを見て、俺は伝えるべき辛い事実をこなたちゃんに話し始めた。

「今回の瞬坊の轢き逃げは・・・奴らの仕業だ・・・。」

その俺の言葉にこなたちゃんはかなりショックを隠せない表情で

「・・・え?そ、それってどういう事なんですか?牧村君の件は事故ではない、って言うんですか!?」

そう聞いてくるこなたちゃんに俺は頷きで返しつつ続きを話す。

「その通りさ。瞬坊はうちの連合の中では腕利きの情報収集能力を持っていたんだ。そして、今まで奴らを追い詰める事ができたのも瞬坊の力による所が大きい。そして、その能力は奴らの最深部にまで調査が届こうとしていた。最深部を調べられ、俺達と戦えなくなる事を恐れた連中はこれ以上深入りされないように・・・瞬坊を・・・始末する為に動いたんだ・・・。」

俺の言葉を信じられないとでも言いたげなこなたちゃんは「・・・ひどい・・・そんなのって・・・。」と悔しそうに呟いた。

俺はそんなこなたちゃんにさらにもう1つ重要な情報を渡しておこうと思い、さらに言葉を続けた。

「後もう1つ君に伝えたい事がある。君も慶一の過去を知ってるんだったよな?」

俺がこなたちゃんに問い掛けると、こなたちゃんは頷いて

「はい。慶一君から、そして、牧村君からも聞きましたから、大体は・・・。」

俺はその答えに頷いてさらに言葉を続ける。

「その中に＜成神章＞の名前が出てくるけど、その事は？」

俺の言葉にこなたちゃんも頷いて

「はい。知っています。慶一君とは何かしら因縁を持っているって言う事も。それに、去年の１０月頃に慶一君を苦しめたのもその名前でしたからね。忘れようって言ったって忘れられるもんじゃないです。」

その言葉に俺は去年に慶一にそんな事があった事に驚きつつも

「その＜成神章＞が、俺達の追っている犯罪組織に所属しているらしいという情報が入っている。」

そう伝えると、こなたちゃんはそれに驚いて

「え！？それって本当なんですか！？」

そう返してくるこなたちゃんに頷く俺。

そして、こなたちゃんは俺に

「どうして・・・あいつはその犯罪組織にいたんですか？まさか、慶一君を今でも狙ってるんですか？」

そう聞いて来たので俺はその問いに首を振って

「慶一に対していまだ恨みは持っているようだというのは情報を集めているうちに知った事だ。けど、あいつが犯罪組織に所属しているという事はまったくの偶然だったんだ。今ではあいつは組織の中堅どころへと登っているというのが、瞬坊から伝えられた最後の情報だった。」

俺の言葉にこなたちゃんは苦しそうな顔で

「そんな・・・最悪ですね・・・あいつは、まだ慶一君を苦しめるつもりなのかな・・・？ねえ、龍也さん。成神の足取りは掴めていないんですか？」

そう聞いてくるこなたちゃんに俺はため息を１つつくと

「瞬坊の事件以降、あいつの足取りが何故か掴めなくなった。あいつが何を企んでいるのかは俺にもわからないが、ろくでもないことを画策してる可能性はあるな。」

俺のその答えにこなたちゃんも短く「そう、ですか・・・。」と言うのだった。

俺はとりあえずこなたちゃんに大体の事を伝え終えたので

「今の所、君に伝える事はこの位だな。こなたちゃん。君とはこれからも情報交換をしていこうと思ってる。間接的に君を巻き込む事

になってしまうけど、協力してくれるかな？」

俺の言葉にこなたちゃんは苦笑しながら

「ここまでの事を聞いておいて協力しない、なんて言えませんよ。
それに、皆と、慶一君と、龍也さんの橋渡しになれるのは私ぐらい
しかいないでしょうからね。」

その言葉に俺は安堵しつつ

「すまない。そして、ありがとう。慶一の事、そして、これからの
事、皆の事、よろしく頼む。任せてくれ。なるべく早く終わらせる
ようにするから。」

そう言うと、こなたちゃんも笑みを浮かべつつ

「了解です。龍也さん、くれぐれも無理はしないで下さいね？龍也
さんが倒れたら泣く人がいるって事は覚えておいて貰わないとね。」

その言葉に俺も笑いながら

「わかってるさ。無理はしないよ。慶一や親父達の為にもね。」

そういう俺にこなたちゃんはニマニマとした表情で

「えー？まつりさんやいのりさんの為にも、じゃないんですかー？」

そう言って来たので俺は顔を赤くして慌てながら

「ちょ、ちょっと待ってくれ、なんでそこでまつりさんといのりさ

んの名前が出てくるんだ。」

その言葉にこなたちゃんはニヤつきながら

「だって、龍也さん2人にあれほど好かれてるじゃないですかー。龍也さんだって満更じゃなさそうに見えましたけど?」

と言うこなたちゃんに俺はふいに真剣な顔になって

「・・・否定は・・・出来ないかなー・・・でも、2人もまた、俺が死んだりしたら、泣くよな・・・。ありがとう、こなたちゃん。改めて下手な真似はしない覚悟ができたよ。こなたちゃん。慶一はしばらく落ち込むかもしれない。だから、慶一の事を見てやって欲しい。」

その俺の言葉にこなたちゃんも真剣な表情で頷いて

「わかってます。心配しないで下さい。慶一君は私達で支えてみせますから。」

そんな風に言ってくれるこなたちゃんに俺はほっとしながら

「ありがとう。こなたちゃん。」

そう言うと、こなたちゃんも笑みを浮かべながら頷いてくれたのだった。

その後は組織に関する事を少しこなたちゃんに話して、ボディガードの面々の名簿を手渡し、一応の話は済ませたのだった。

こなたちゃんは待合室にいるかがみちゃん達の所に戻り、事情を説明して名簿を配っていた。

それを見ながら俺は、いくつか取るべき対策を講じようと考えていたのだった。

あれから大分時間も経ち、霊安室にいる3人の事が気になった俺達は3人の様子を見にいったのだが、3人は泣きつかれてその場で眠ってしまっていたのだった。

俺はとりあえず3人を霊安室から起こさないように連れ出すと、病院側が用意してくれたベットに3人を寝かせて俺達も瞬坊の葬式の準備を頼んだのだった。

他のメンバーも今からの時間では帰る事は出来なかったので、うちの道場へ連れて行き、道場内に布団を敷かせて寝てもらう事にした。

俺は慶一達の事、瞬坊の事、こなたちゃん達の事を考えながら、迫る戦いの予感を感じ取りつつ、これ以上の被害を出さない事を強く心に誓ったのだった。

悲しみの旋律～瞬一の死、そして、告げられた真実と龍也の覚悟～（後書き）

しばらくはシリアス展開が続くかもしれません。

贖罪の旋律～慶一の咎、みんなの決意と動き始めた事態～（前書き）

体調不良により、投稿が遅れてしまった事をお詫びします。

贖罪の旋律～慶一の咎、みんなの決意と動き始めた事態～

龍也ｓｉｄｅ

昨日の慶一達の悲しみを目の当たりにし、さらにはそこに一緒にやって来たこなたたちゃんに瞬坊からの伝言を伝え、皆にこなたたちゃんに伝えた真実を伝えてもらい、今後の自分達の身の回りを警戒するようにと忠告をした俺だった。

更にみんなの所への戻り際に俺はこなたたちゃんに慶一にはこの事は伏せて欲しいとその理由も添えて、改めてお願いをした。

俺は、慶一を復讐者にはしたくない、そう思っていたからだ。

だが、それでも、俺は瞬坊に手を下すように命じた者を見つけ出した時にはそいつのみを慶一の前に引き出してやってもいいかもしれない、とも考えていた。

せめて、あだ討ちだけでもさせてやるのもいいかもしれない、しかし、慶一に手を汚させずに置くほうがいいかもしれない、どうするべきかな?俺はそんな2つの相反する思いに揺れてもいた。

俺はその2つの思いに思考を巡らせていたが、どの道それはそいつを捕らえる時までの課題とすべきだろう、今はそう思考を打ち切り、次の日の朝を迎えた俺は、瞬坊の葬儀を済ます為に道場に寝泊りさせた皆に声をかけ、そして、病院で寝ているであろう、慶一達の様子も見に行くのだった。

結論から言うと、慶一は未だにショックを隠しきれず、表情は暗く

なり、その目からは光も失われているようだった。

俺と共に慶一を迎えにやってきたこなたちゃん達もまた、そんな慶一を辛そうに見つつも、極力慶一の側に居てくれたのが見て取れたので俺は少しだけ安心したのだった。

そんな状況の中で、静かに、そして厳かに瞬坊の葬儀は始まった。

慶一ｓｉｄｅ

昨日の悪夢と呼んでいい程の出来事を受け、俺は気付けば瞬の傍らで泣きつかれて眠ってしまっていたようだった。

その間も俺はずっと夢の中を彷徨っていたが、俺は夢を見ながら、今日あった事もまたただの夢に違いない、目が覚めたらきっと元の日常に戻るだろう、そう思っていた。

けど、目が覚めて俺が見上げた天井は、そんな俺の僅かな望みさえも打ち砕くには十分なものだった。

「・・・やっぱり・・・夢じゃ・・・ないんだな・・・瞬・・・。」

俺は俯きながら親友の名前を呟いたが、俺と一緒に病院に泊まったこうとやまとも何時の間にか起きだしていたみたいで、俺に遠慮がちに声をかけてきたのだった。

「・・・先輩、夢じゃ・・・ありませんでしたね・・・。これが、現実なんて・・・これが瞬一先輩の運命だというんでしょうか・・・私は・・・こんなの認めたくないですよ・・・。」

「・・・それは私もよ？こう。こんな形で瞬一先輩と別れる事にな

るなんて・・・私だって納得いかないわよ・・・。先輩、私、悔しいわ・・・。」

そんな2人の言葉を聞いて俺は落ち込みつつ

「・・・ああ、そうだな・・・俺も・・・凄く悔しいよ・・・。」

そう言って俺達は3人で落ち込んでいた。

そこに俺達を迎えに龍兄がやってきた。

「・・・起きたか、慶一。行こう。瞬坊の・・・葬儀の準備は出来ている。後はお前達が揃えば始められる。つらいだろうが・・・ちゃんと送ってやれ。それが・・・瞬坊の為だ・・・。」

俺達と同じように辛い表情を見せながら龍兄も俺にそう告げる。

俺はその言葉にしばしためらいを見せた後、3人で顔を見合わせて頷いて、俺達は龍兄の後について泊まっていた病室を出て瞬坊の安置されている葬祭場へと向かった。

葬祭場へつくと、そこにはすでにこなた達も待っていて、俺の姿を見つけるなり、小走りでこちらへとやってきた。

こなたは俺に心配そうな表情を向けつつ

「・・・慶一君、大丈夫?少し顔色悪いね・・・それに、八坂さん達も・・・。」

俺にそう言った後、こう達にも心配そうな視線を向けた。

俺はそんなこなたに何とか頷いて

「大丈夫、とはいい難い、かな・・・はは・・・。」

力なく笑みを浮かべつつそう言うと、こう達もこなたに

「・・・私は、先輩よりは少しましですね・・・。」

「・・・私も、こうと似たようなものではあるわ・・・泉先輩、心配してくれてありがとう・・・。」

そう言っていたが、それを聞いたこなたも少しだけ緊張を緩めつつ

「・・・そっか・・・とりあえず中に行こう?皆待ってるから・・・。」

そう言って踵を返し、皆の所へと誘導してくれるこなたの後に付いて俺達も歩き出したのだった。

そして、皆の集まってる場所へと着いた時、こなた以外の皆も俺達に気付き、心配そうな顔を向けていた。

俺はそんな皆の顔を一瞥すると、瞬のお父さんである麗真おじさんを見つけ、足早に側へ歩み寄ると、俺はその場で麗真おじさんに土下座をした。

俺の突然の行動に一瞬騒がしくなる会場内だったが、麗真さんはいきなり土下座をする俺に困惑しつつも

「け、慶一君。一体どうしたんだい?急に土下座なんてして、とり

あえず立ちなさい。皆さんも驚いているからね。」

そう言ってくれる麗真さんに俺は土下座の姿勢のままで

「・・・すみません・・・麗真おじさん・・・今回の事・・・俺が・・・俺が悪いんです・・・俺が、馬鹿な事をしなかったら・・・瞬が、瞬が馬鹿な俺の事を庇って足に怪我さえしてなかったら・・・ひょっとしたら助かってたかもしれない・・・足が万全だったら・・・車を避ける事も出来ていたかも知れない・・・全ては・・・原因を作った俺が悪いんです！すいません！どんなに詫びても詫びたりない！麗真おじさん！俺を！俺を殴ってください！せめて、せめてあいつの受けた痛みの一部でもこの体に受けなければ俺の気が済みません！麗真おじさん！どうか俺を！俺に制裁を！！」

最後には再び俺は涙しながらそう麗真おじさんに訴えた。

麗真おじさんはそんな俺を見下ろしながら少しの間何事か考え込んでいるみたいだったが、やがて膝を折って俺の背中に触れると

「・・・顔を、上げてくれないか？慶一君。確かに君の言うように足の怪我さえなければ避けれた事故かもしれない。けどね、私も死んだ瞬一も、もうあの事はすでに終わった事と思っている。だから、今更その事で君を責めるつもりはないよ。そうでなくても龍真さんにはかなりの制裁は受けているはずだしね。今回はただ・・・ただ、瞬一に運がなかった、という事なんだ。」

俺はそんな風に言う麗真おじさんの言葉を受けて俺は、涙でくしゃくしゃの顔を上げ、麗真叔父さんを見つめる。

そんな俺に麗真おじさんは

「君がこれからも幸せに生きて欲しい、その事を常に息子は願っていた。だから、私から君にお願いだ。息子の願いを・・・聞き届けてくれないか?そして、ちゃんと幸せになったら・・・その時には息子の墓前に訪れてやって欲しい。これは・・・私から君へのお願いだ。いいね?慶一君。」

その麗真おじさんの言葉に俺は再び涙が溢れ出すのを止められなかった。

そして、言葉にならず、俺はただ、麗真おじさんに対して何度も首を縦に振っていた。

そんな俺の姿を麗真おじさんは優しい顔で見守ってくれていたのだった。

しばらくしてその場から立ち上がると、俺を心配してこなた達も俺の側に来てくれたのだった。

そして、同じように涙を流しながらも、何も言わずそっと俺の側にいてくれたのだった。

あれから、告別式も終え、瞬の体が荼毘にふされる時がやってきた。

窯にいれられる瞬の棺を見送る俺達。

それを涙を流しながら見送りつつ、俺はこなた達にも聞こえるような声で

「・・・瞬、俺はお前に言われたように・・・お前が願うように・・

・きっと幸せになる・・・ここにいる、皆と一緒に・・・そして・・・もう、誰一人・・・失わせない・・・俺の魂にかけて、ここに誓うよ。だから、瞬、俺を見守っていてくれ。」

そう言うと、皆も俺を見た後、正面を見据えて力強く頷くのだった。

その後は、こうとやまとも一旦は自宅へと戻って行った。

それを見送って俺達もまた、都内を後にし、自宅へと戻って行く。

自宅に付いた後、俺はこの一件の為に告別式も含めて3日学校を休んでしまう事になったので、黒井先生に報告の電話を入れた。

「・・・と言う訳なんです。突然学校を休んでしまって申し訳ありませんでした。」

俺の報告に少し辛そうな声で先生は

「・・・そか・・・それはきつい話やな・・・それで?森村、お前はどうするんや?すぐに学校に出るのが辛かったらもう数日学校を休んでもええよ?」

そう言いつつ、先生なりに俺に気をつかってくれたようだった。

俺は、先生の言うように、すぐに学校に出れる感じではなかったので、その言葉に甘えさせてもらう事にした。

「・・・すいません。今回はお言葉に甘えさせてもらいます。大丈夫です、きっと元気になってみせますから・・・。」

俺の言葉に先生は軽くため息をつきながら

「・・・わかった。とにかく今は、ゆっくりしいや。残酷な事ではあるけど、こういうのも時が解決してくれるもんやしな。まあ、重要なプリント等は泉らに届けさせるからそっちは心配せんでええよ？」

そう言う先生に俺は

「わかりました。それじゃしばしの間だけ、すいません。」

そう言うと、先生も努めて明るい声で

「何、気にせんでええ。ともあれ、元気な姿を見せてくれる事を期待してるでー？それじゃな。」

そう言ってくれる先生に俺も

「はい。ありがとうございます。それでは。」

そう言って電話を切った。

その後はバイト先へも連絡を入れて、俺はしばしの休息の為に数日の間学校を休むのだった。

かがみｓｉｄｅ

牧村君の突然の死、そして、悲しみに打ちひしがれる慶一くんを見て、私もまた、慶一くんの思いを感じた時、胸が痛くなる思いだった。

そして、告別式の会場へと姿を現した慶一くんの取った態度を見て私はすごく悲しくなり、いまだ苦しみ続ける慶一くんを思い、私もつかさも涙を流していたのだった。

最後に牧村君や私達に向けた慶一くんの言葉を聞いて、私達は、牧村君の分まで頑張らなければ、と思いながら慶一くんと共に火葬場を後にしたのだった。

帰りの電車の中で、慶一くんはまだ悲しそうな顔をしていた。

慶一くんの降りる駅で慶一くんと別れた私達は、家につくまでの間、2人して少しやり取りを交わしていたのだった。

「・・・お別れ、終わったわね・・・。急にこんな事になって私も驚いたけど・・・慶一くん、大丈夫かな・・・？」

「けいちゃん、凄く泣いてたよね・・・わたし、けいちゃんがかわいそうで見てられなかったよ・・・。」

「・・・つかさ、頑張りましょ？」

「ふぇ？おねえちゃん？」

「慶一くんは今、凄く悲しんでる。でも、その悲しみを軽くしてあげられるのは、私達しかいないと思う。これまで私達は慶一くんに色々な面で助けられてきたわ。だから、今度は・・・私達が慶一くんの為に力になってあげなきゃね。」

「・・・そうだね、そうだよね。わたし頑張るよ、おねえちゃん。私の出来る事でけいちゃんを元気にする。だってわたしは・・・。」

「・・・私は、慶一くんの笑顔が、好きなんだから（もん）。」

私達は2人してそう言いあうと、顔を見合わせて笑うのだった。

そして、その後家に戻った私達は姉さん達やお父さん、お母さんにも今回の事を聞かれ、それを説明すると、お母さん達も姉さん達も悲しそうな表情を見せつつも慶一くんの事を心配していたのだった。

みゆきｓｉｄｅ

牧村さんの告別式の後、私とみなみちゃんは一度自宅へと戻らねばならなかったので、会場内で解散という事になりました。

まだ悲しみの表情を見せながら歩く慶一さんを見ているのは辛かったのですが、私とみなみちゃんは龍神さんの所のお弟子さんに伴われて自宅へと戻ったのでした。

そして、私とみなみちゃんは自宅前で今回の事についてやり取りを交わすのでした。

「突然のこととはいえ、今回の事は驚きましたね・・・。まさか、牧村さんがあのような事になってしまうとは・・・考えもしませんでしたからね・・・。」

「・・・そうですね・・・それに・・・あんなに悲しそうな先輩は見ていられませんでした・・・。」

「・・・私もです・・・。慶一さんにとっては唯一の親友なのですし、慶一さんの悲しみの深さを思い知りましたね・・・。」

「・・・先輩きっと、落ち込んでいますよね・・・。みゆきさん、私達に出来ることって、ないのでしょうか・・・。」

「難しい所ですね、けど・・・２つ程はありますよ。私達に出来ることが・・・。」

「・・・教えてください、みゆきさん。その２つの出来る事というのを・・・。」

「・・・１つは・・・慶一さんに心配かけないように私達が元気で

いること。そして、もう1つは、今までお世話になってきた慶一さんの為に、私達が元気付けてあげる事、ですね。それは、私達だからこそ、いえ、私達でなければ出来ない事です。慶一さんと深い絆で繋がっている私達でなければ・・・。」

「・・・わかりました・・・。みゆきさん、一緒に頑張りましょう・・・。私達で先輩を元気付けてあげましょう・・・。今こそ先輩にご恩返しをする時ですよね・・・。」

「そのとおりです。みなみちゃん、頑張りましょう。慶一さんの為に。」

「・・・はい・・・。」

私達はお互いに頷きあい、これからの事に対する決意を固めると、それぞれの自宅へと戻って行くのでした。

そして、家についた私をお母さんが出迎えてくれて、お母さんも慶一さんの事が気になっていたみたいで、色々と私に聞いて来たので、一通りの説明をしたのでした。

そうして一旦落ち着いて、自分の部屋へと戻った時、龍也さんから私の携帯へと連絡が入ったのでした。

私はその事に驚きつつもとりあえず電話をとります。

「もしもし、龍也さんですか?突然お電話いただいたので、驚きました。私に何か御用ですか?」

「すまないね、みゆきちゃん。急に電話をして。実はね、君の所とみなみちゃんの所のご両親にも相談して欲しい事があってね。それで電話したんだ。」

「相談、ですか?私は何をすればいいのでしょう?」

「うん。こなたちゃんから今回の事に関して聞いているよね?それ

で、これから2．3ヶ月の間はこのあたりは相当物騒になると思う。だから、みゆきちゃんとみなみちゃんは慶一の所へ、みゆきちゃんのご両親。そして、みなみちゃんのご両親に安全の為にうちへと移って欲しいという事なんだ。」

「えっ？私とみなみちゃんが慶一さんの所、そして、お父さんやお母さん、それにみなみちゃんの所のご両親が龍神さんの所へ、ですか？」

「そうだ。君達は慶一にとっても関係の深い人達だ。それに、これからの事は下手をすれば君らのご両親もこのごたごたに巻き込む事になるだろう。そうなった時、また慶一は悲しい思いをする事になる。それこそ、痛烈に自分を責める程にね。今回の事があったんだ。これ以上はあいつに重荷を背負って欲しくないからな。なあに、慶一には上手く俺から説明しとくさ。だから、みゆきちゃんはご両親の説得と、みなみちゃんへこの事を伝えて欲しい。頼めるかな？」

そう説明する龍也さんの言葉に私はしばし考え込んでいましたが、私は考えを素早く纏めると、龍也さんに

「わかりました。両親の説得とみなみちゃんの所への伝言はお任せください。それで、慶一さんの所へはいつ頃お伺いすればいいのでしょうか？」

そう返すと、龍也さんは少し電話口で考え込んでいるようだったので、私は龍也さんの言葉を待ったのでした。

そして、龍也さんは

「一週間、時間をもらえるかな。たぶん、いきなり慶一にみゆきちゃん達の事を話しても今のあいつの状態じゃ事情は受け入れられないかもしれないからね。一週間の間にあいつと話ができるほどのな

れば、その時に話すようにするよ。で、話が決まったらすぐにみゆきちゃんの方へと連絡するようにするから。」

その答えを聞いて私は

「わかりました。ご連絡、お待ちしています。それと、龍也さん・・・。」

龍也さんに対する返事をした後、一旦言葉を切って、私は龍也さんに伝えるべき事を伝える為に声を出しました。

「くれぐれも、ご無理はなさらないで下さい。牧村さんもそうですが・・・龍也さんもまた慶一さんにとっては大事な人なのですから・・・。」

私がそう言うと、龍也さんは電話口で軽くため息をついて

「・・・ありがとう。みゆきちゃん。大丈夫、あいつの為にも、そして、君達の為にも俺は無茶はしないよ。それは約束する。だから、安心してくれ。」

そう答える龍也さんに私はほっと胸をなでおろしながら

「わかりました。そう言っていただけてほっとしました。それではこれで、ご連絡、お待ちしています。」

そう伝えると、龍也さんも電話口で軽く笑いながら

「うん。それじゃまた連絡するから、そっちの方は頼んだよ?みゆきちゃん。」

そう言う龍也さんに私も電話口で頷きつつ

「はい。こちらはお任せください。それでは。」

そう言うと、龍也さんとの通話を終わらせるのでした。

その後、私はお母さんやお父さんへの説得と、みなみちゃんの所への伝言をしに走ったのでした。

みなみちゃんとそのご両親もこの事を聞いて、少し不安がっているようでしたが、ごたごたが解決するまでは、という事で、この相談を受け入れてもらえたのでした。

あやのｓｉｄｅ

慶ちゃんの親友である牧村君に起きた突然の出来事で私達は真実の確認と牧村君の見送りをする事になった。

あんなに悲しそうな慶ちゃんを見たのは、去年にあった織部さん事件以来だったけれど、今回はあの時以上だと思えた。

牧村君との最後のお別れをして、慶ちゃんは私達や牧村君に対して改めて自分の誓いを口にした。

それを聞いた私達も慶ちゃん同様、牧村君に心の中で誓いをしたのだった。

牧村君の分まで皆で幸せになるのだ、と。

そして、私達は一旦、会場内で解散する事となった。

私達は慶ちゃん達とも別れてみさちゃんと2人で、今回の事を話していた。

「大変だったわね・・・今回はいきなり辛い事になっちゃったし・・・。」

「・・・だよな。あんな辛そうな慶一の顔見るのは、あん時以来だもんな、いや、あん時よりひでえか・・・。」

「そうだね・・・。私も辛かったし・・・。」

「・・・なあ、あやの。私、あの慶一の牧村に対する、そして私達に対する最後の言葉を聞いたとき、私はあいつの決意みたいなものを知った気がするよ。でも、それはあいつ1人だけに背負わせちゃいけないんじゃねえかな?って思った。それと同時に私らが今すべき事も、だけどな。」

「・・・うん。私達のすべき事、それは・・・・・・。」

「ああ・・・。あいつに心配かけずに、そして、あいつを元気にしてやる事、だよな。」

「みさちゃん、私、がんばるわ。慶ちゃんは私達の大切なお友達だもんね。」

「私もだゼ?あやの。そんで、元気なあいつの顔をまたみてえかんな。」

最後のみさちゃんの言葉を聞いて私はみさちゃんと顔を見合わせて笑顔で頷きあった。

そして、これからの事に思いを巡らせながら、今回の一件の終結を願う私達だった。

ひよりｓｉｄｅ

パティの過ぎ去ってしまっていたけど、とりあえず誕生日会を開いていたその日に起きたこの悲劇、私も大いに混乱していた。

私は一度、牧村さんと会ったことがある程度で、そんなには面識もない人ではあったけれど、先輩との過去の話をあの時に聞いてから、牧村さんの事は色々と想像して漫画のネタを考える事もあった。

今回の一件でこんな事になり、私は先輩と一緒に牧村さんに会った。

もう、何も話さない、話せなくなった牧村さんを見て、そして、その事で涙を流し、悲しむ先輩を見て、いつしか使おうと思っていた漫画のネタをここで封印する事を決めた。

そして、会場で解散となってから私はパティと一緒に自宅へと戻って行ったのだけど、その時にパティは先輩に気を使ったのか、少し間を置いてから帰るつもりだったようで、一度私の家に立ち寄って行こうとしていた。

私はそんなパティを伴い、自宅へと向かう道すがら、今回の事でパティと色々とやりとりをしていたのだった。

「なんか大変な事になってしまったっスね・・・。私も一度しかお目にかかったことはないけれど、優しそうないい人だったよ。先輩が親友と呼んでた気持もなんかわかるなー・・・。」

「ワタシはマキムラのコトをゼンゼンシリません・・・レイアンシツでカオをミタのがハジめてでしタ・・・ヒヨリ、イエについたらヒヨリのシっているコト、オシエてクダさい。コンカイこうしてヒヨリのイエにヨろうとオモったのはケイイチにキをツカったコトもありますガ、ワタシのシラないマキムラのコトをヒヨリにキキたか

ったというのもリユウです。ケイイチがあれホドにオチコムくらいデス、マキムラがケイイチにとってどれホドタイセツなフレンドだったのかはミテいてワカりましタ。ヒヨリからハナシをキクことは、ダイジナコトだとオモえましたカラ・・・。」

「わかったよ、パティ。家についたら私が取っていたメモと一緒に話してあげる。」

「サンキューです、ヒヨリ。」

「どういたしまして。でも、大丈夫かな、先輩・・・ちゃんと立ち直れるかな・・・それだけがちょっと心配だね。」

「ダイジョウブですヨ、ヒヨリ！ワタシタチにデキルコトはきっとありマス！ケイイチをゲンキにするタメにこれからガンバッテいきマスヨ！？」

「・・・そうだね、それに・・・そうしてあげる事が先輩対する恩返しでもあるっスから・・・。」

「コンドはワタシタチがケイイチのタメにガンバルバンです！さあ、イキマショウ！ヒヨリ！！」

最後のパティの台詞に頷くと、私は先輩の為に何ができるだろう？と考えながら、パティと一緒に家に戻って牧村先輩の事をパティに聞かせたのだった。

これから先、先輩に私たちのしてあげられる事を考えながら、パティと色々話し合うのだった。

みくｓｉｄｅ

私たちの後輩でもあり、留学生でもあるパティの誕生日会をやっている時に事件は起こった。

先輩達の慌てている様子から、それは、先輩の知り合いでもあり、

親友でもある人らしかった。

先輩は私達が事情を知らない事を考慮して私達に今日はお開きにする、と言う事を伝えてくれたが、私達もまた、お世話になった先輩の一大事だという事で、何が出来るかわからなかったけれど、とりあえず先輩達に付いて行くことにしたのだった。

霊安室で先輩の親友と対面し、先輩の悲しみを知り、私達3人は言葉もなかった。

火葬場で先輩の私達や牧村さんに対する先輩の最後の言葉を聞くまで、私は今後自分達はこれから何が出来るだろう、その事をずっと考えていた。

そして、とりあえず解散したその帰り道、私はたまきやいずみさんと今回の件について色々と話したのだった。

「・・・なんか、大変な事になっちゃったね。先輩、大丈夫かな？」
「先輩にとっては親友だった人みたいだもんね。先輩、酷く落ち込むんじゃないかな・・・。」
「悲しそうだったよね、先輩・・・。」
「そうだね・・・。先輩が涙もろい事はやさこ達からも聞いて知ってはいたけど・・・あれは見てられなかったよね・・・。」
「それに、葬祭場での土下座も驚きだったね・・・。先輩が過去に牧村さんにしでかしてしまった事はやさこからも聞いていたけど・・・先輩、自分を責めてるみたいだったよね・・・。」
「聞けば先輩は牧村先輩も自分達が目指そうとしている大学に誘いたかったみたいだし・・・。」
「「「やりきれないね・・・。」」」

3人揃ってため息をつきながらそう言う私達。

でも、そんな中で私は先輩のあの言葉を聞いてからずっと考えていた事があったので、皆にその考えを聞いてもらおうと思い、声をかけた。

「ねえ、たまき、いずみさん。私、あの時から考えていたんだけどさ、先輩には色々とお世話にもなっているから、私達の出来る事で先輩を励ましてあげたいな、って思うけど、みんなはどう？」

「・・・そうね。私も同じこと考えてた。私たちがアニ研に入れたのも先輩のとりなしのおかげでもあるし、それに、便りになりそうな後輩や新しい友人も先輩は作ってくれたしね。」

「・・・私も・・・先輩のコミケでのあの言葉を聞いたから、少しだけ自分の好きな事に誇りを持てるようになったのよね・・・。だから、私に大事な事を気付かせてくれた先輩の為に何かしてあげたいね・・・。」

いずみさんの言葉を聞いて私は皆も同じ気持でいてくれたのだという事を改めて知り、とても嬉しくなった。

「なら、私達も先輩が元気になってくれるように、私達のやれる事で先輩を元気づけよう。そのために協力しようよ、たまき、いずみさん。」

私の提案に2人も頷いてくれて

「もちろん。少しでも先輩に恩返ししなくちゃね。」

「私も。頑張ってみるよ。」

そう言ってくれたのを聞いて、私もまた決意を新たにしたのだった。

それから私達はあれこれと今後の事を相談しつつ、自宅へと戻ったのだった。

こうｓｉｄｅ

パティの誕生日を祝っている時に起きた突然の悲劇、私とやまと、そして先輩はこの事実が真実とは認めたくはなかった。

けれど、龍也さんからの連絡、そして、実際にもはや私達に話し掛ける事もなくなってしまった瞬一先輩の姿を目の当たりにして、この事が現実だと知らされた。

私ややまとはもちろん、先輩も瞬一先輩との付き合いの長さもあったからこの事実にとても悲しみ、そして、悔しく思った。

結局私達３人は瞬一先輩の眠る霊安室で泣きつかれて眠る事となったのだが、私達に気を使ってくれた人のおかげで病院ではあったけどベットで眠る事ができたのだった。

そんな中でも先輩同様、私達も目が覚めたら何事もなく元にもどっているだろうという夢落ちを期待したが、結果は、そんな私達の淡い期待を打ち砕く現実だった。

私達は精神的のにも相当に参っていたが、龍也さんの瞬一先輩を送ってやれ、の言葉に悔しさと悲しみを滲ませながらもその言葉に従った。

葬祭場で瞬一先輩のお父さんに土下座する先輩を見て私達もまたも泣く事となったけど、そんな思いをしつつも何とか瞬一先輩を最後

まで見送れた事に少しだけ安堵していたのだった。

火葬場で先輩が私達や瞬一先輩に対して呟いた言葉は先輩の決意を示すものでもあったけれど、私達はそんな先輩の為に出来ることを探していた。

そして、火葬場で一旦解散となり、私達はとりあえず自宅へと戻っていたが、その帰る際に龍也さんからしばらくの間慶一の家へと移ってくれ、君達のご両親はうちの来てくれるように説得して欲しい、事件が解決するまでの間、慶一の所とうちで匿わせてもらうから、と言われた私達はその説得もする事となった。

帰り道に私とやまとは今回の事で色々とやりとりをするのだった。

「・・・はあ・・・何か大変な事になっちゃったね・・・。瞬一先輩の事もそうだけど、まさか龍也さん達があんな危ない事に係わっているなんてね・・・。」

「そうね・・・。龍也さん、よっぽど先輩を巻き込みたくなかったみたいだし、それに・・・先輩を復讐者にはしたくない、って言ってたわね・・・。」

「・・・それは、私も賛成かな・・・いくら瞬一先輩の為とはいえ、鬼の形相で仇を探す慶一先輩の姿は私も想像したくないし、見たくないもんね・・・。」

「・・・こう、約束して？この一件、先輩の家でお世話になる事になっても絶対に先輩には本当の事を言わないと・・・。」

「わかってる。先輩の為にも私は絶対に言わないよ。それと同時に、やまと。」

「ええ・・・。瞬一先輩の分まで私達で先輩を元気付けてあげないとね・・・。」

「・・・だね。私達は牧村先輩の次だけど、慶一先輩の親友なんだ

から。」
「〇〇中からの縁の力、やわじゃない事を先輩にもわからせてあげなきゃね・・・。」
私達はお互いに頷きあうと、お互いの家に戻って両親の説得をするのだった。
そして、後は慶一先輩と龍也さんとの話し合いが済むまでは様子を見る事にした私達だった。
こなたｓｉｄｅ
パティの誕生日会の時にたまたま飛び込んで来たニュースは慶一君のみならず、八坂さんや永森さん、そして、あの時慶一君を助ける為に情報を共有した皆よりもちょっとだけ付き合いの深かった私にもかなりのショックを与える事となった。
いずれ慶一君の過去の脅威を取り除くつもりでいた私はその事を知り、そして、霊安室で牧村君の姿を見た時、私はまだやるべき事を終えきらずに途中退場した牧村君にその悔しさをぶつけていた。
そして、冷静になった時、私は自分の思わず口走ってしまった事に、慶一君に何かを気付かせるきっかけになっちゃっただろうか?と焦りもしたが、悲しみの大きい慶一君は私のうっかり口にした言葉にも気付いてはいないようで、少しほっとしていた。
けれど、今回の事を私は凄く悔しく思っていたので、犯人は絶対に捕まえたいとも思っていた。
そんな折、少し落ち着いた頃に龍也さんから私に話しがあるとの事

だったので、私は龍也さんの話を聞くために病院の屋上へと移動する。

そこで聞かされた話は、龍也さんが急に今回戻って来た理由と犯罪組織の事、そして、牧村君の死亡の真実だった。

そこで話に出てきた人物に私は憤りを覚えつつ、今後は龍也さんとの情報のやりとりをする事となった。

その後、葬祭場での慶一君土下座や火葬場での慶一君の決意を聞き、私達は一旦それぞれの自宅へと帰って行く事となった。

自宅に向かいながら私はゆーちゃんと今回の事に関してやりとりをしたのだった。

「・・・何か大変な事になっちゃったね、こなたおねーちゃん・・・。」

「そうだねー・・・。慶一君も辛そうだったけど、私も慶一君が困ってる時に慶一君を助ける為に力を貸してくれた人がこんな事になったからね。彼とは今後とも仲良くしていきたいと思っていただけに、残念だよ。」

「こなたおねーちゃん。それは慶一先輩の為にも、って言う事だよね？」

「そうだね。私は牧村君と2人で慶一君の過去の脅威を取り除きたかった。それがある限りは私もゆーちゃんも・・・そして、他の皆の身にも危険が及ぶ可能性をはらんでいたからね・・・。それが除かれるまでは・・・協力していきたかったんだよね。」

「私もこなたおねーちゃんから今回の事の真実を聞いたよ？ねえ、こなたおねーちゃん。私は今後どうすればいいかな？先輩には本当の事、話せないよね？」

「・・・そうだね・・・。もし話してしまえば慶一君、きっと復讐者になってしまう。それこそ、龍也さんの懸念してる通りになっちゃうだろうね・・・。だから、ゆーちゃん。慶一君には絶対にこの事は言っちゃダメだよ？」

「・・・うん。わかったよ。こなたおねーちゃん。先輩の為にも私、絶対に黙っておくから。」

「まあ、ゆーちゃんなら心配ないかな？後でちょっと口が軽そうなのには改めて口止めしとかないとね・・・。それと・・・。」

「先輩の為に私達が出来る事、だよね？」

「うん。今しばらくは慶一君も落ち込むだろうからね、そんな慶一君を私達の出来る事で励ましてあげたいからね。」

「ねえ、こなたおねーちゃん。私に出来る事あるなら言ってね？私も先輩の為に頑張りたいから。」

「了解だよ、ゆーちゃん。私も慶一君を元気付けてあげたいからね。だから、頑張っていこう、ゆーちゃん。」

「うん！頑張ろう、こなたおねーちゃん。」

そう言いながら私達は頷きあって決意を新たにすると、自宅を目指して歩き始めた。

家に着いてからはおとーさんが今回の事で色々と私に聞いて来たので一通りの説明をすると、おとーさんも慶一君の事を少しだけ心配しているようだったので、私もそんなおとーさんの気持が少しだけ嬉しかった。

それから数日、慶一君はバイトも学校も休んでいたが、バイトの方は私が慶一君の代わりに慶一君の分まで頑張ったのだった。

それと同時に今回の事を聞きつけた兄沢店長も慶一君の事を気にしてくれ、私に慶一君へのお見舞いも持たせてくれたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

あの日のショックから俺は数日学校を休み、バイトさえも休んでしまった。

でも、店長も先生もそんな俺を責めるどころか、優しい言葉すらかけてくれた事が俺にはとてもありがたかった。

俺の休んでいる間、こなたもバイトを頑張ってくれ、他の皆も俺を心配してかわるがわるに俺の家へと訪れてくれた。

パティもまた、俺に気をつかってくれたみたいで他の皆が居ない時は黙って俺の側にいてくれた。

その間にも俺は、少しずつ瞬一への思いも整理していった。

そんな事をしながらも、俺はまだ自分が立ち直るまでは時間がかかるかもしれないと思うのだった。

それから一週間ちょっとが過ぎた頃、俺の元に龍兄からの電話がかかってきたのだった。

贖罪の旋律～慶一の咎、みんなの決意と動き始めた事態～（後書き）

まだ少し体調不良が良くなっていませんが、次話はもう少し早めに投稿できればと思っています。

癒しの旋律達、第1話～やってきたこなたとゆたか～（前書き）

次までの期間が大分開いてしまいました。
お詫びをしつつ、本編をどうぞ。

癒しの旋律達、第1話～やってきたこなたとゆたか～

突然の瞬一の死、そして、それを悲しみ、友と永遠の別れをして俺は悲しみを抱えたまま家へと戻った。

皆はそれぞれに俺を心配してくれているようだったが、悲しみの方が大きかった俺はそんな皆の気持に気付かないまま自宅へと戻って来た。

黒井先生や兄沢店長へとりあえずの現状報告を果たし、俺は黒井先生や兄沢店長の好意に甘えさせてもらい、しばらくの間、学校とバイト先を休む事となった。

それでも・・・やっぱり皆は皆だったのだと俺はこれからの一週間で改めて知る事になった。

俺が休んでいたこの一週間あまりは、俺にとっては涙が出る程にありがたいと思えた一週間だったと言えた。

そして、今日からその一週間が始まる。

一週間の最初の日、まずやってきたのはこなたとゆたかの2人だった。

こなたｓｉｄｅ

あの一件の後、慶一君はやはりショックが大きかったみたいで、黒井先生にしばらく学校を休むと言っていた事を先生から聞く事になった。

私はそんな事情を聞いてどうしようか？と悩んでいたが、それでも、慶一君に元気になって欲しいと思う私は、ゆーちゃんを誘って早速慶一君の家へと向かう事にしたのだった。

私のその行動にかがみ達は、すぐに慶一君の所に行くのはまずいのではないか？まだあれから時間もあまり経っていないのだし、と言い、戸惑いを見せていたが、私に出来る事はこれしかないから、と皆に自分の決意を言うと、皆もそれ以上は何も言わなかった。

ゆーちゃんも少し戸惑っていたみたいだったけど、最終的には私の判断に乗ってくれたのだった。

私とゆーちゃんは慶一君の家に行く際に夕食の食材を買っていく事にして、慶一君にとりあえずメールを飛ばした。

そして、返信を待つ時間も惜しかったので私とゆーちゃんは夕食の食材を買い込む為にスーパーへと立ち寄ったのだった。

「うーん・・・今回は前に作ったチキンカレーをもう一回作ろうかな？」

そう呟く私にゆーちゃんは

「こなたおねーちゃん、チキンカレー作るの？おねえちゃんのカレー美味しいからきっと先輩喜んでくれるよ。それに私もおねえちゃんのカレー少し楽しみだしね。」

私に満面の笑顔でそう言うゆーちゃんに私は照れながら

「あはは。そう言ってくれると嬉しいかな。なら、ちょっと張り切っちゃおうかな？よーし、ゆーちゃん。私の言う材料探してきてー？私も買うものを集めておくからー。」

そう言うとゆーちゃんは笑顔で頷いて

「うん。わかったよ、おねーちゃん。こっちは任せといてー。」

そう言うと私から食材のリストを受け取って買い物篭を持って走っていった。

私もそれを見送った後、自分の買う食材を探しに籠を手に歩き出したのだった。

その頃、慶一ｓｉｄｅ

あの一件後、俺は心の傷を癒し、立ち直る為に学校を休んでいた。

パティも俺に気を使ってくれ、俺を1人にしておいてくれたのだが、程なくしてこなたからメールが届いたのだった。

ＦＲＯＭ：こなた

慶一君、昨日は大変だったね。

昨日の今日だから、たぶんまだまだ君は落ち込んでるよね？それは私もわかってるけどさ、君の事、少しでも元気づけてあげたいんだ。

だから、今日の夕食は私が作らせて貰いに行くよー。

そう言う訳だから今日は夕食の支度をしないで家で待っててよ。

私にはこういう事しかできないけど、私の今出来る精一杯の事で頑張らせてもらうからさ。

だから、期待して待っていてくれたまへー。

P．S　ゆーちゃんも一緒に連れて行くからよろしくねー。

俺は、こなたからのメールを確認し、軽くため息をついた。

「・・・ったく、こなたの奴・・・でも・・・・・・。」

1人呟きながら俺はそんなこなたの気持ちを嬉しく思っていた。

あんな事があって1人しばらく塞ぎ込んでいたい、そうも思ったが、俺のやかましい友人はそれを許してはくれないみたいだ。

落ち込んでばかりいるのもよくない事はわかってる。

だからこそ、俺はこの事も、立ち直る為のいいきっかけに出来たら、と思ったのだった。

とりあえず、俺はこなたにメールの返信を返すと、こなたの言う通りに2人を待つ事にしたのだった。

そうして1人、部屋の中でいろいろな事を考えながらこなた達を待っていたが、そこに昨晩は家に帰ってきていなかったパティが戻ってきたようで、急ぎ足で部屋に行く足音が聞こえた。

俺はそんなパティに声をかけるべく、パティの部屋へと赴いた。

そして、パティの部屋のドアをノックしようとした時、部屋から突然パティが飛び出して来て俺とぶつかったのだった。

「アウチ!!イタタ・・・トツゼンナニゴトですカ・・・?あ、ケ、ケイイチ、ダイジョウブですカ?」

尻餅をついたパティが俺にそう言ってきた。

俺もまた痛みに顔をしかめつつ

「あ、ああ、何とかな・・・それより、パティ、お前こそ大丈夫か?派手に転んでたみたいだが。」

そう声をかけるとパティは苦笑しつつ立ち上がって

「ワタシならシンパイいりまセーン!それよりケイイチ、ちょっとワガママをキイテホシイのですガ、カマいませんカ?」

そう言ってくるパティに俺は首を傾げて

「我侭?一体なんだ?」

そう尋ねると、パティは真剣な表情で

「これからイッシュウカンのアイダ、ヒヨリのイエにトマリにイキたいのデスよ。ちょっとヒヨリとイロイロやりたいコトがありマスから。もちろんレンラクはイレます。ケイイチ、カマいませんカ?」

その言葉を聞いて俺は少し考えた後

「ひよりの家に行くんだな?そういう事ならまあ、いいか。とりあえずひよりの家についたらひよりに一本連絡させてくれ。まあ、何をするのかは聞かないが、やりたい事をやってくるといい。」

そう言ってパティに許可を出した俺だった。

パティは俺の許可にほっとした表情を浮かべると

「サンキューデス、ケイイチ。ケイイチにイワれたトオりレンラクはちゃんとしますからシンパイしないでクダサイ。」

そう言うパティに俺も頷きで返すと、パティは俺にぺこりと頭を下げて家を出て行った。

パティｓｉｄｅ

あの事件があってから慶一は大分落ち込んでいるみたいでした。

私はひよりとあの日にひよりの自宅に招かれた際に色々と話し合い、せめてしばらくそっとしておいてあげよう、と思い、私は思い切って慶一が学校やバイトを休んでいる間だけひよりの家で泊まる事にしました。

昨日一晩ひよりの家に泊まり、私は急いで家に自分の荷物を取りにもどりましたが、私の帰宅に気付いた慶一に部屋の前で鉢合わせる事になり、私も慶一もびっくりしていました。

そして、思い切って慶一にひよりの家に泊まる事を話してみましたが、慶一は私のそうしようとした理由がわからないような顔をしつつも、私に許可を出してくれました。

私はそんな慶一の好意に感謝しつつ、離れ際に見た慶一の少し寂しそうな表情に胸を少し痛めながら、慶一に心の中で詫びつつ家を出

たのでした。

（ソーリィ、ケイイチ。イマのケイイチのソバにワタシのようなゲンキすぎるコがいるコトはツライコトでしょうから・・・スコシのアイダだけケイイチをそっとしておいてアゲタイですから・・・しばらくワタシはケイイチのソバからハナれていますネ？コロアイをミハカらってモドリマス。それまでは、しばらくサヨナラです。）

そんな風に慶一を思いつつ、ひよりの家へと向かったのでした。

慶一ｓｉｄｅ

突然のパティのお願い、それを俺は聞き届けたけど、パティを見送ってから俺は、家に1人きりになったのだと自覚した。

あんな事件もあって、確かに塞ぎ込みたい気分ではあったけど、そう思いながらも俺はこういう時に誰かに側にいてほしいとも思う自分に重いため息をつくと共にいいしれぬ寂しささえも感じていた。

「・・・パティがいないだけで・・・こんなにも静かだったんだな、この家は・・・。」

俺は今、自分の側に誰もいないこの事実に、そして、瞬がいなくなった事が更に俺に悲しさと寂しさを増幅させたようで、思わずこの状況に涙したのだった。

そして、重い足取りで部屋に戻った俺は、ふいに自分の携帯に目をやると、さっきこなたから届いたメールに再び目を通し、こなた達が来てくれる、その事を再度確認し、ほんの少しだけ救われる気分になった自分を自覚した。

それからこなた達が来るまでの間、俺はキッチンの方の準備を済ませつつ再び部屋に戻り、ベットに寝転がりながら天井を見上げつつ、今回の事を思い返してまた悲しい思いに浸っているうちに眠ってしまったのだった。

こなたｓｉｄｅ

買い物中に慶一君からのメールを確認した私は、ゆーちゃんが戻るのを待って一緒に慶一君の家へと向かう事にしたのだった。

その時に慶一君からのメールの事もゆーちゃんに伝えて、私達は慶一君の家へと向かったのだった。

慶一君の家に着くと、とりあえず呼び鈴を押してみる事にした。

呼び鈴を鳴らして少し待ってみたが、慶一君が出迎えてくれる様子もないのでゆーちゃんと頷きあって合鍵を使い、家の中へと入る私達。

私とゆーちゃんはキッチンへと向かい、とりあえず買ってきた食材をテーブルの上に降ろすと、ゆーちゃんに

「ゆーちゃん。慶一君の部屋に行って慶一君に声かけてきてくれない？私は先に食事の準備始めておくからさ。」

そう言うと、ゆーちゃんは頷いて

「わかったよ、おねーちゃん。ちょっと部屋まで行ってみるね？」

そう言ってキッチンから出て行くのを見送って私は早速食事の準備を始めたのだった。

ゆたかｓｉｄｅ

こなたおねーちゃんに言われて私はとりあえず慶一先輩の部屋へと先輩の様子を見に行ってみた。

部屋の前に来て一応ドアをノックしてみたが、返事が返ってこなかった。

でも、部屋の中には人の気配があったので、誰かがいる事はわかった。

とりあえず私は「はいりますよー？」と声をかけてから部屋の中へと入る。

初めて入る先輩の部屋を見て私は部屋が綺麗に片付いているのを見てしきりに関心していたが、ふと先輩の机の上を見た時、旅行の時に取った写真が飾ってあるのが見えた。

私は机に近づいて写真手にとって見てみる。

（わあー・・・先輩もこの写真、大事に持っていてくれたんだね・・・。何か嬉しいな。この旅行は本当にいい思い出になったもんね・・・。先輩には本当に感謝だよね・・・おっと、いけない。先輩の様子を見に来たんだっけ・・・忘れる所だったよ・・・。さて、先輩は、っと・・・。）

そう、心の中で考えながら私は部屋の中を見回してみると、ベット

の上で寝息を立てている先輩を見つけたので、私は先輩の所へと移動した。

そっと顔を覗き込んで見ると、先輩は泣いていたのか、目元に涙の後が見て取れた。

それを見たとき私は思わずあの時の悲しい先輩の顔を思い出して涙が出そうになったけど、それでも当初の目的を果たさないと、と思ったので私は先輩を起こしてみる事にした。

「先輩、慶一先輩、起きてください。こなたおねーちゃんと一緒に来ましたよ？おねーちゃんも食事の支度始めていますよ？先輩の為に私達、頑張ろうと思って来たんですから。だから、起きてくださいよー、先輩ー。」

少し先輩の体を揺すりつつそう声をかけてみたが、先輩は何事か唸るばかりで中々起きてくれない。

困った私はもう一回揺すってみようと先輩に近づいた次の瞬間、私は寝ぼけた先輩に思い切り抱きしめられていた。

「え？ちょっ！せ、先輩！あ、あのっ！」

あたふたしながら先輩にそう言うと、先輩はその私の声に目を覚ましたみたいで

「・・・ん・・・ふあー・・・・・・ん？」

先輩はそう言いながらふいに抱きしめている私の事に気付いたみたいで大慌てで私から離れて

「うわ！！ど、どうしてゆたかが・・・って、何で俺ゆたかを抱きしめてたんだ？」

そんな風に慌てる先輩に私は顔を赤くしつつ苦笑しながら

「・・・えっとですね・・・こなたおねーちゃんと先輩の家に来たんですけど、先輩眠っていて私達が呼び鈴を押した事に気付いてないみたいだったので、こなたおねーちゃんに食事の支度の下ごしらえを任せて私はおねーちゃんに言われて先輩の様子を見に来たんです。先輩寝ているみたいだったから、私先輩を起こそうと思って先輩に声をかけつつ先輩の体を揺すったんですが、ふいに寝ぼけた先輩に抱きしめられて、って事です。」

そう説明すると、先輩は途端に顔を赤くして落ち込みつつ

「そういう事か・・・ごめん、ゆたか。寝ぼけてたとはいえ、俺はなんて事を・・・。」

そう言う先輩に私も顔を赤くしつつ慌てながら

「い、いえ、気にしないで下さい。私も別に嫌じゃなかったですし、怒っている訳でもないですから。」

先輩にそう言ってあげてその気持を伝えたが、先輩はまだ自分の私にした事に対してまだ落ち込んでいるみたいだった。

とりあえずこのまま問答していてもしょうがないと思った私は、先輩に

「と、とにかく。おねーちゃんと一緒に夕食の支度してますから、先輩もキッチンに顔出してくださいね？」

そう言うと、先輩ははっと顔をあげて

「あ、そ、そう言えばそういう事だったっけな・・・。えっと・・・ゆたか、その・・・来てくれてありがとうな？」

何だか済まなそうにそう言う先輩に私は満面の笑顔で

「いいんですよ。私達、先輩の為に何かしてあげたい、ってそう思ったんですから。それに、いつも先輩には助けてもらっていますから、私、そんな先輩に何かお返しが出来たら、って思ってたんです。」

私のその言葉に先輩は何だか嬉しそうなそんな表情を見せてくれた。

先輩のそんな顔に少しだけ安心した私は

「先輩にも色々準備もあるでしょうから、それが済んだらキッチンへ来てくださいね？それじゃ私はおねーちゃんのお手伝いに行きますから。」

先輩にそう告げると、部屋をでておねーちゃんの頑張っているキッチンへと向かうのだった。

慶一ｓｉｄｅ

あれから悲しみと寂しさを思い出しながら何時の間にか眠ってしまった俺だったが、それからしばらくして俺を揺する誰かの気配を感

じ、そして寝ぼけながら俺は何かを抱きしめていたようだった。

そして、戸惑いと驚きの声に気付いて目を覚ましてみると、俺は何故か何時の間にかやってきたらしいゆたかを抱きしめていたのだった。

顔を赤らめつつ大慌てでゆたかを離し、ゆたかに詫びる俺だったが、俺はそんなゆたかから事の経緯を聞き、更に自己嫌悪に陥っていたが、ゆたかはそんな俺に気にしていないといってくれた事が救いだった。

そして、ゆたかは俺に色々準備してからキッチンへ来て欲しいという事を告げると、俺に笑顔を向けながらも部屋を出て行くのだった。

それを見送った後、俺はとりあえず着替えを済ませつつ先ほどの事を思い返していた。

「・・・はあ・・・。寝ぼけていたとはいえ、何てことをしちゃったんだろうな、俺は・・・。いくら寂しいからって・・・無意識にあんな事しちゃうんだから、呆れるよな・・・。でも・・・来てくれたんだな、こなた、ゆたか・・・。」

俺は1人そう呟きつつ、とりあえず着替えを済ませてキッチンへと向かうのだった。

こなたｓｉｄｅ

ゆーちゃんを慶一君の様子を見てもらいに行かせた後、私は今晩の食事の下ごしらえを始めていた。

しばらくして、ゆーちゃんが戻って来たのだが、少しだけ顔を赤くしているゆーちゃんに気付いて

「おかえり、ゆーちゃん。少し顔赤いね？何かあったの？」

そう声をかけると、ゆーちゃんはその呼びかけに驚きつつ苦笑しながら私に

「え！？あ、えっと、さっき慶一先輩の部屋に行ったときに先輩が寝ていたから、起こそうと思って揺すってみたら寝ぼけた先輩に抱きつかれちゃって、それで、ちょっとまだ照れてたから、まだ顔赤かったのかも。」

そう答えるゆーちゃんに私は内心複雑な気分になりつつも

「そっかー。慶一君眠ってたんだね？とはいえ、寝ぼけてたとはいえゆーちゃんにそんな真似をするとはねえ・・・。」

私自身は普通にそう言っていたつもりだったんだけど、何故か怯える表情を見せたゆーちゃんが、おそるおそる私に

「え、えっと・・・こなたおねーちゃん？何だかその・・・怖いんだけど・・・どうしたのかなーって・・・。」

その言葉に私は”はっ”となり、そして少し慌てながら

「あ、あははー・・・。大丈夫だよ、ゆーちゃん。別になんでもないからさー。と、とにかく、チキンカレーの仕込みをやるから、ゆーちゃんも手伝ってね？」

心を静めつつそう言うと、ゆーちゃんもほっとしたような表情になり、頷くと

「うん。私もがんばる！おねーちゃん、何をすればいいのか指示してね？」

ゆーちゃんの言葉に頷いた私は

「よーし！それじゃがんばろっか。ゆーちゃん、そこのにんじんとジャガイモの皮むきをお願い、後ねえ・・・・・。」

そう言いながら、私は慶一君が来るまでの間、ゆーちゃんにも作業の指示を出しつつカレーの仕込みをするのだった。

慶一ｓｉｄｅ

とりあえず、ゆたかに言われたとおり部屋で着替え等の準備を済ますと、俺はキッチンへと顔を出しに行く。

そして、キッチンに着いて中を覗いてみると、こなたとゆたかが忙しそうに夕食の仕込みをしているのが目に入った。

俺はそんな2人にありがたい気持ちになりつつキッチンへと入ると

「こなた、ゆたか。わざわざ来てくれてありがとな。夕食の支度、任せちゃってすまん。」

そう言うと、こなたとゆたかは俺の声に気付いてこちらに振り向いて

「いいって事だよー。私がそうしたい、って思ったんだから。私に

はこのくらいの事しか出来ないけど、君が少しでも元気になってくれるなら、って思ったから。」

「私もです。あんな悲しい事になってしまいましたけど、少しでも先輩の役に立てたら、って思いましたから。」

そう言う2人に俺はとても暖かい気持ちになりつつ

「ありがとう、2人とも。なあ、俺にも何か手伝える事、ないかな？」

俺の言葉にこなたは首をふって

「いいよ。君はそこでどっしりと座って料理が出来上がるのを待っててよ。今の慶一君には少し休養も必要だと思うから。こういう事は私達に任せてさ。」

そう言うこなたに俺は

「こなたとゆたかの気持はありがたい。けど、じっとしてると悪い事ばかり考えてしまうから、何かやって気を紛らわせる方がいいんだ。だから、俺のためを思ってくれるなら、俺のやりたいようにさせてくれないか？」

そう言うと、こなたは俺の顔をじっと見つめてしばらく考え込んでいるようだったが、やがて、軽いため息を1つつくと

「・・・はあ・・・しょうがないね。慶一君がそうしたい、って言うなら手伝ってもらうかな？料理の仕込みは私達でやるから、慶一君は食器などの準備をしておいてよ。」

そう言うこなたに俺は頷いて

「わかった。それじゃ用意するよ。」

そう言うと、俺は食器の準備を始めるのだった。

俺の出している食器の数を見て、こなたは

「あれ？食器の数、少なくない？パティの分は出さなくていいの？」

そう聞いて来たので、俺は苦笑しながら

「あー・・・。実はな、あいつ、突然に一週間程ひよりの家に泊まりに行きたいって言い出してな。それで、お前らが来る少し前に家を出ていってしまったんだよ。だから、今日は、いや、これから一週間は俺は実質1人きりだ、って言う訳さ。」

そう説明すると、こなたはまた何事か考え事をしていたみたいだったが、何かに納得したらしく

「・・・そっか。そういう事なら仕方ないね。一応パティの分も想定して材料買い込んで来ちゃったし、カレー少し余っちゃうかもしれないけど、残った分は後で食べてよ。」

そう言うこなたに俺も頷いて

「わかった。そっか、今日はカレーなんだな？お前が作るの、というと例のあれだな？」

そう言うと、こなたは少し顔を赤くして照れながら

「あはは。お見通しだね？でも、いいでしょ？前も美味しいって言ってくれたんだし。」

その言葉に頷いて

「まあね。むしろ、歓迎だな。お前のカレーは好きだからな。」

その言葉に更に顔を赤くするこなた。

そして、こなたは照れつつ

「・・・はあ・・・。まったく慶一君は嬉しい事言ってくれるよね。よーし、それじゃ、そんな慶一君の為に私も張り切らせてもらうよ？だから、楽しみにしててね？」

俺はそんなこなたの言葉に笑顔で頷いたのだった。

そんな俺達の会話を聞きながらゆーちゃんも笑顔でこちらを見ていたが、俺はそんなゆたかの視線に気付くと、頬を掻いて照れていたのだった。

やがて、カレーも出来上がり、皆で食卓へと着く。

そして、夕食が始まったのだった。

俺はこなたとゆたかの合作のカレーを口に運ぶ。

２人はそんな俺の挙動を緊張の面持ちで見守っていたが、俺が「うん。美味い。」と口にすると、２人とも何だかほっとして喜びの表

情を見せていた。

それからは、お互いに気遣いあったのか、あまり会話のない食事が続いた。

それでも俺は、今のこの家にこの2人が居てくれる事がとてもありがたく、そして嬉しかった。

やがて、食事も済ませ、後片付けを手伝って、俺達はリビングに移動して、のんびりくつろいでいた。

その間もあまり会話のない状況ではあったが、俺はそれでも誰かが側に居てくれる事がとても安心できた。

そのうちにそろそろ2人が帰る時間になったようで俺の顔を見たこなたは

「・・・そろそろ、私達、行くね?慶一君、つらいかもしれないけど、頑張って?そして、もう一度元気な姿を私達に見せてよ。私はそれを、待ってるからさ。」

俺に笑顔を向けてそう言ってくれるこなた。

そしてゆたかも俺に

「先輩。私には先輩にしてあげられる事はあまりないかもしれません。でも、先輩を心配な気持、そして、元気になって欲しいって思う気持はありますから。だから、時間がかかっても・・・元気になってくださいね?」

そう言って笑うゆたか。

俺はそんな2人の姿を見ていたらとてもたまらない気持になって、思わず俺は2人を抱きしめていた。

そして、そんな2人の耳元で俺は

「・・・行かないでくれ・・・今晩だけでもいい・・・2人とも、俺の側にいてくれ・・・。お願いだ・・・このまま1人でいるのは寂しいから、頼む・・・こなた、ゆたか。」

最後の方は涙声で2人にそう言う俺だった。

そんな俺の言葉を聞いて2人とも抱きつかれた事も含めて驚いたような顔をしていたが、やがて、2人とも俺に

「・・・わかったよ。慶一君。君の寂しい気持に免じて、今日は一緒に居てあげる。でも、明日は私も学校あるんだから、今日だけだよー?」

「・・・そういう事で先輩のお役に立てるのなら私も一緒に居させてもらいますよ?だから、安心してくださいね?先輩。」

その言葉に俺は嬉しさとありがたさで更に涙を流しながら何度もありがとう、と2人に言っていた。

2人はそんな俺を見て、優しい笑顔を見せてくれたのだった。

こなたｓｉｄｅ

少しでも慶一君の気を紛らわせて元気付けてあげられればいいと思

って、今回の事、実行したけど、慶一君の家に来てパティも居ない事を知り、そして、帰り際には慶一君の本音も聞く事になった。

私は、そんな慶一君の願いを無下にできなかったから、今日は慶一君の側にずっと居てあげよう、そう思ったのだった。

そして、私は今日、ゆーちゃんと慶一君の家に泊まる為に家に連絡を入れた。

おとーさんは大分渋っていたけど、慶一君の事情を考慮してくれたみたいで、何とか許可をもらう事が出来たのだった。

実の所、慶一君のこの行動は何となくだけど予想できていたので、泊まる準備はあらかじめしてあった。

そして、蓋を開けてみればやはり、予想通りの結果になったので、私は自分の予想の正しさに満足すると同時に、慶一君の為に今日は一緒にいてあげないと、と思うのだった。

今回は事が事だったので、いつものお約束は自重しつつ、慶一君の部屋で3人で話をしたり、漫画を読んだり等をしながら一晩を過ごした。

まだ慶一君の心は癒されてはいないけれど、少しだけその為に役に立てた事を嬉しく思った私だった。

（かがみ達に反対はされたけれど、今回は自分の気持ちに正直に行動を起こしてよかったな。まさかパティが慶一君に気を使ってしばらく家を出るとは思わなかったから、夕食の準備の時には少し戸惑ったよ。でも、そのおかげで慶一君の本音も聞けたし、結果的に一

晩、慶一君の側に居てあげられたからよかったかな?ゆーちゃんもこんな形でも慶一君の役に立てた事を喜んでいたみたいだし、よかったよね。慶一君の心の傷はまだ癒えないけど、少しでもその手伝いが出来たし、満足かな?慶一君、私、待ってるよ?君が立ち直って私達にまた元気な姿を見せてくれる事を・・・それまで、つらいだろうけど、何かの折には私は君の力になってあげるから・・・だから、頑張ってね?)

慶一君やゆーちゃんと話しながら私はそんな事を考えつつ、夜を明かしたのだった。

ゆたかｓｉｄｅ

先輩を元気付ける為にこなたおねーちゃんと一緒に行動を起こし、そして、最後には先輩は私達に側に居てくれと言ってくれた。

すがるような先輩の気持が悲しくもあったけど、私はこなたおねーちゃんと共に先輩の側に居てあげる事にしたのだった。

そして、先輩の部屋で3人で話しながら私は心の中で

(さっきはびっくりしちゃったな。まさか先輩にそんな風に言われるなんて・・・でも、先輩、自分の気持ちに素直にそう言ってくれたよね?だから、私はそんな先輩の思いに応えてあげたいな、って思った。私はこなたおねーちゃんより付き合いは浅いけど、先輩の事は大切に思うから、だから、今日はおねーちゃんと一緒にいてあげます。先輩、こんな事しか出来ない私ですけど、元気になってくださいね?)

そう心の中で考えながら私は出来るだけ先輩を元気にしてあげたい

と思うのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなた達と食事を終え、俺はいよいよこなた達が帰ると知った時、思わず、寂しさのあまりに2人に抱きついて帰らないでくれ、今日は一緒にいてくれと我侭を言ってしまった。

でも、2人はそんな俺の願いを聞き入れてくれ、その日の晩は一緒にいてくれた。

瞬の事で心が傷ついていた俺にはそんな2人が側に居てくれる事はとてもありがたかったから、俺の無茶な願いを聞いてくれた2人には本当に感謝していた。

そして、その日は俺達は存分に語りあい、夜をあかした。

次の日、学校に行くこなた達を見送りながら、俺は

「・・・こなた、ゆたか、ありがとう。俺の我侭を聞いてくれて、一晩一緒に居てくれた事、とても嬉しかった。俺、頑張るよ。きっと立ち直って、またみんなの前に行ってみせる、だから、待っててくれよな。」

そう言うと、2人とも笑顔を俺に向けながら

「私達が君の役に立ててよかったよ。大丈夫、私達は君の事待ってるから。だから、ゆっくりと元気になってね?何かあったら、また呼んでよ。出来る限り駆けつけてあげるからさ。」

「私も先輩のお役に立てて嬉しいです。いつも先輩には助けてもら

ってばっかりでしたから。私も先輩の事待っていますから、だから、きっと元気になって下さいね？」

そう言うと、俺に手を振って学校へと出て行くのだった。

俺は心の中で２人に

（ありがとう・・・。少しでも俺の力になってくれようとしてくれた２人の気持、俺は忘れない。きっと立ち直るよ。だから、もう少しだけ、俺に時間をくれ。２人の思いはきっと無駄にはしないから・・・。）

そう言うと、再び俺は瞬との思い出に向き合いつつ、１日を過ごすのだった。

この後も次々と俺の家へとやってくる来客の事を知らないまま・・・・

癒しの旋律達、第1話～やってきたこなたとゆたか～（後書き）

こなた達の行動に触発されて次にやってくるのは誰なのか？
次回もお楽しみに。

癒しの旋律達、第2話～やってきたまさかの柊家の人々～（前書き）

ＰＶ１００万突破しました。
これも一重に読者の皆様の応援の賜物だと思っています。
本当に感謝です。
それでは、本編をどうぞ。

突然の瞬の訃報、そして、悲しみに暮れる俺は相当に落ち込みながら、葬儀を終え、自宅へと戻る。

俺はその事件の事でかなり落ち込み、悲しんでいたが、そんな俺に気を使ったパティはしばらく俺の前から姿を消し、俺を1人にしてくれた。

俺は、むしろ1人にされる事の方を辛く感じていたが、まだまだパティとの意思の疎通はしきれていない状況で、お互いに気持にすれ違いを起こしていた。

そんな最中に、俺の事を気遣ってくれたこなたとゆたかが家に俺の様子を見て、元気付けてくれる為にやって来てくれた。

俺はそんな2人の気持を嬉しく、そしてありがたく思いながら、少しだけ癒された自分の心を感じていたのだった。

そして、次の日にこなた達を学校に送り出した俺は、今日も孤独と闘いつつ、過ごすのだった。

けれど、今日もまた、家にやってくるものがいる事を、この時の俺は知らずにいたのだった。

こなたｓｉｄｅ

昨日は無理にでも慶一君の所へと行って、慶一君を元気付けようと思った私だったけど、その行動は慶一君にとっても意味のあるもの

となったようだった。

そんな事を思い返しつつ慶一君の役に立てた事を嬉しく思いつつ、学校に着いた私に、かがみ達も昨日の私の事が気になっていたみたいで、私に色々と聞いて来たのだった。

「おはよー。とりあえず昨日は慶一君の所へ行ってみたよ。」

皆に挨拶をしつつ、そう言うと、皆は私の側に来て

「おはよう、こなた。そ、それで、慶一くんの様子、どうだったの？」

「おはよう、こなちゃん。けいちゃん、まだ落ち込んでた？」

「おはようございます、泉さん。昨日は私も思わず泉さんを止めようとしてしまいましたが、私も結果が気になっていました。」

「おはよう、泉ちゃん。私も踏ん切りつかなかったから、すぐには動けなかったわ・・・。気にはしてたんだけどね・・・。」

「おはよーさん、ちびっ子。私も実は気になってたんだ。で？どうだったんだよ、慶一は。」

そうまくし立ててくる皆に私は腕組みしながら

「うん。やっぱりまだ、大分参ってるみたいだったね。心持ちまだ落ち込んでるようだったよ。でも、パティが慶一君に気を使って家をしばらく留守にする事になっちゃっててさ、それがさらに慶一君の寂しさをあおる事になっちゃったみたいでねー・・・。帰ろうとしたけど、慶一君に抱きしめられて、今晩だけで良いから一緒に居てくれ、って言われちゃったんだよねー。」

最後の方は照れ笑いしながら言ったのだが、その最後の部分に他の

皆も激しく反応して

「ちょ、ちょっとこなた！最後の抱きしめられたって、一体・・・。」

「ふえええ!?けいちゃん、そんな事したんだ～・・・。」

「何と羨まし・・・い、いえ、なんでもありません・・・。」

「泉ちゃん、大胆ね。それに慶ちゃんも寂しいからとはいえそんな事をしちゃったのね・・・。」

「むう・・・なんかおもしろくねーなー。でも、慶一やっぱり寂しいんだな。」

そんな皆に私はにまにまと笑みを浮かべながら

「まあ、慶一君もよっぽど心細かったんだと思うよー?それとさ、そんなに気になるなら、今日、慶一君の家に行ってみればいいじゃん?今日は私、ちょっと用事あるから行けないしね。」

そう言うと、皆はそれ以降黙り込んでしまい、何事かを考え込んでいるようだった。

かがみｓｉｄｅ

こなたが昨日、慶一くんの家へ様子を見に行くと言ったのを聞いて、私達はまだ慶一くんに会うのは早いのではないだろうか?と慎重になり、こなたのように行動に移せないでいた。

しかし、昨日からの一連の行動の結果をこなたから聞いて、私達も行ってみようかな?と考えた。

私はつかさに声をかける。

「つかさ、今日、慶一くんの所へ行ってみよう。こなたの行動は結果的に慶一くんにとってもプラスになったみたいだし、それなら私達も行動を起こすべきだと思わない？」

そう声をかけると、つかさは私の言葉に頷きながら

「そうだね。わたしは昨日の今日だから、つい、すぐにけいちゃんの所へ行ってもいいのかな～？って思っちゃってためらっちゃったけど、こなちゃんが大丈夫だって証明してくれたもんね。ゆきちゃん達はまだ踏ん切りつけれてないみたいだから、今日はわたし達が行ってあげるのもいいかもしれないね～。」

そんなつかさの言葉に私も頷いて

「そうね。慶一くんがまだ寂しい思いしてるのなら、私もそんな慶一くんの寂しさを紛らわせてあげたいし。」

そう言うと、つかさもうんうんと首を振りながら

「そうだよね。やろうよ、おねえちゃん。今日は2人でけいちゃんのとこ行こう？」

つかさのその言葉に私も頷きつつ

「そうね。とりあえず家に帰ったら慶一くんの家に向かう準備して行きましょ？場合によっては、こなた達みたいに泊まる事も考えつつ、ね。」

その言葉に笑顔で頷きながらつかさは

「わかったよ～。おねえちゃん。それで、どうする？けいちゃんに行くから、ってメールしとく？」

つかさのその言葉に私も少し考え込みつつ

「・・・そうね、今回は慶一くんをおどかしてあげる意味でも予告しないで行きましょ。」

そんな私の提案につかさも頷いてくれたのだった。

その後私は学校が終わるまで、今日の事をずっと気にしつつ、つかさと家へと急いだのだった。

ゆたかｓｉｄｅ

昨日の慶一先輩のお見舞いの事で、私は朝からみなみちゃん達に質問攻めにされていた。

「・・・ゆたか・・・慶一先輩の様子、どうだった・・・？」

「ゆーちゃん、先輩はまだ落ち込んでたっスか？」

「イチオウ、ワタシはケイイチにキをツカって、ヒヨリのイエにトまりにイくとイってイエをデてキマシタ。けど、ワタシもケイイチのコトはキニしていましたカラ、ヨウスがキニなっていましたヨ。」

「私も様子を見に行ってあげたい、って思うんだけどね・・・。でも皆と同じように私も気になってたから・・・で、どうなの？小早川さん。」

そんな皆に私は軽いため息を１つつきつつ

「やっぱりまだ、落ち込んでたよ、先輩。私先輩が眠っている時に先輩の部屋に入って寝顔みたんだけど、目元に涙の後があったんだよね・・・。それに私達が帰る頃には行かないでくれ、って私とこなたおねーちゃん抱きしめて泣きながらそう言ってたしね・・・。先輩、寂しそうだった・・・。」

そう答えると、皆も何やら落ち込みつつ

「・・・そう・・・まだ先輩の悲しみは癒えてはいないんだね・・・。」

「まあ・・・1日2日でどうなるって問題でもないっスよね・・・これればかりはやっぱり時間も必要みたいっスね・・・。」

「サビシイ、デスか・・・。ケイイチのタメにキをツカったつもりでしたが・・・ウラメにでましたかネ・・・。」

「寂しがってるのか・・・先輩、可愛そうね・・・。」

そんなみんなの様子を見ていて私も少し落ち込みそうになったけど、一緒に暗くなってちゃいけない、と思い、私は皆に

「ほら!だめだよ、皆しておちこんでちゃ!こういう時だからこそ、皆で先輩の為に出来る事考えようよ!きっとまだ、私達にも出来る事はあるはずだからさ。ね?みなみちゃん、田村さん、パティちゃん、若瀬さん。」

そんな風に励ます私に皆は驚きの表情を見せていたけど、すぐに皆、笑顔になって頷くのを見て、私も頑張らなくっちゃ、と思うのだった。

かがみｓｉｄｅ

とりあえず皆と別れて家へと帰った私達だったが、私の急いでいる様子を見たお父さんが

「おかえり、かがみ。何やら慌しいけど、何かあったのかい？」

そう聞いて来たので、私は頷いて

「うん。実は先日の慶一くんの一件でね、こなたが慶一君の家に様子見に行ったみたいなんだけど、慶一くん、まだ落ち込んでいるみたいなのよね。だから、今度は私とつかさで慶一くんを元気付けてあげようかなって思ってね。その準備をする為に早く帰って来たのよ。」

そう説明すると、お父さんは「ふむ・・・。」と顎に手をやって何事かを考え込んでいるみたいだったけど、やがて考えを纏めたらしく私に

「・・・その件は確かに森村君にとっても辛い事だったね・・・。よし、それなら、かがみ。お父さんにちょっと提案があるんだが・・・・・というのはどうだろうか？」

そのお父さんの提案を聞いて、私は思わず驚いて

「え？お、お父さん、それ本気？」

そう聞き返すと、お父さんも頷いて

「ああ。かがみの事では彼には2度も危ない所を助けてもらってるからね。こういう時にこそ、恩は返すべき、そう思うからね。とりあえず、この事はお母さんとまつりにも話してくるよ。だからかが

みは先に森村君の所へ行っていなさい。」

その言葉に私は胸中複雑なものがあったが、それでも、その方が慶一くんにはいいかもしれないかな？と思い、お父さんの提案に乗る事にしたのだった。

そして、程なくして準備を終えた私はつかさに声をかけ、お父さんにも出かけると言って、家を出たのだった。

慶一ｓｉｄｅ

柊家でかがみとただおさんがそんな話をしている頃、こなた達を学校に送り出し、今日も俺はゆっくりと心の整理をしつつ、休養を取っていた。

昼には昨日のこなたが作ってくれたチキンカレーを温めて食べて、改めてこなた達の行動にありがたさを感じていた俺だった。

「・・・やっぱりこなたのカレーは美味いな・・・半日寝かせて改めて食べてみたけど、さらに美味しさが増している気がする。そういえば、こなたは、前にカレーを家で作った時に何故か腐らせてしまって落ち込んでた、ってつかさから聞いた事あったよな・・・もう、あの頃から、大分経つんだなあ・・・。」

そう独り言を呟きつつ、当時を振り返って懐かしんでいる俺だったが、そんな事を考えていた時、またしても今の現状に寂しさを感じて落ち込む俺だった。

それから少しして、家の呼び鈴が鳴るのが聞こえたので、俺は玄関へと向かった。

そして、「はい、どちら様ですか?」そう言いながら玄関を開けると、そこにはかがみとつかさの2人が立っていたのだった。

俺は、玄関で少しだけバツの悪そうな顔をしているかがみとつかさに驚いた表情を向けていたのだった。

かがみｓｉｄｅ

お父さんからの提案を受けて、私とつかさは先に慶一くんの家へとやってきた。

こなたはああ言ってくれてはいたけれど、やっぱりまだ少し緊張しつつ、私は慶一くんの家の呼び鈴を押すのだった。

少しして、「はい、どちら様ですか?」と言って慶一くんが出迎えてくれたのだけど、その顔にはまだ暗い影が見てとれたのを、私は少しだけ胸に痛みを覚えつつも感じたのだった。

その所為で少しバツの悪い表情になった事に気付いた私は、気を取り直すと

「おっす、慶一くん。昨日こなたから聞いたわよ?まだ落ち込んでるみたいだって。だから今日は私とつかさがあんたの様子を見に来てあげたわ。」

そう挨拶をする。

そして、そんな私に続いて、つかさも笑顔で

「こなちゃんから聞いたよ?けいちゃん、寂しがってたって。だから今日はおねえちゃんと一緒に居てあげたいな、って思ったんだよ?おねえちゃんもこなちゃんから、けいちゃんがまだ落ち込んでる、って聞いて、心配してたんだよ?」

と、またも天然で本音をばらすつかさに私は顔を赤くしつつ慌てながら

「つ、つかさ!あんたは余計な事言わないの!!」

そう咎めるが、つかさはよく分かっていない顔で頭に大きなハテナマークを浮かべていた。

私はそれを見て大きなため息を1つつくと

「・・・ま、まあ、とにかく。お邪魔するわね?つかさ、あんたもおいで?」

そう言ってつかさを呼ぶと、つかさも頷いて

「あ、まってよ、おねえちゃ~ん。」

慌てつつ私の後に付いてきたのだった。

慶一くんはそんな私たち姿を見て驚いたような表情を向けていたけど、ふっと顔に微笑みを浮かべると

「いらっしゃい、かがみ、つかさ。2人とも、ありがとな?」

そう言う慶一くんに私は思わず顔を赤くしながら

「べ、別にいいわよ・・・。あんたのいない学校も、ちょっと張り合いないって思ってたからね。それに皆だってあんたの事心配してるんだから、早いとこ元気になってもらわなきゃこっちだって困るんだから。」

慶一くんから視線を外しつつそう言う私。

そして、つかさも慶一くんに笑顔を向けながら

「わたしもけいちゃんには早く元気になってもらいたいな、って思ったんだよ?だからおねえちゃんと一緒にけいちゃんの様子を見にきたの。あ、後ね、もう少ししたらもっと驚く事あるよ?だから、楽しみにしててね?」

そう言うつかさに私は再度慌てつつ

「しーっ!つかさ、まだ言っちゃだめよ。それじゃサプライズにもならないじゃない!」

そう言ってつかさの口を塞いだ。

そんな様子を頭にハテナマークを浮かべつつ見ている慶一くんに私は

「・・・はあ・・・つかさが言っちゃったから仕方ないけど、まあ、そういう事だからさ、楽しみにしてて?」

そう言う私に慶一くんは頷いて

「何だかよく分からないけど、そういう事ならそうさせてもらおう

かな?それじゃ2人とも、リビングへどうぞ。」

そう言って私たちをリビングへと誘導してくれたので私達はそれに従ってリビングへと移動した。

「適当に座ってくれ。それと、今お茶入れてくるから。」

そう言って席を立とうとする慶一くんをつかさが

「いいよ、けいちゃん。その位の事は私がやってあげるよ。だから、今日はくつろいでてよ。」

そう言って慶一くんを制して立ち上がり、キッチンへと向かう。

慶一くんは何か言いたそうだったけど、私はそんな慶一くんに

「慶一くん。つかさはあんたの為に色々頑張りたいって言ってたから今回はその気持を汲んであげてくれないかな?慶一くんは私達に悪い、って思うかもしれないけど、私達はその為に今日、ここに来たんだしね。」

そう説明する私に慶一くんは苦笑を浮かべていたが、やがて頷くと

「ありがとう。それじゃ、その・・・お言葉に甘えさせてもらうよ。」

そう言ってくれる慶一くんに私もほっとしたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

今回は何の予告もなしにやってきたかがみとつかさに驚いていた俺だったが、2人の俺を心配してくれる気持がありがたいと思った俺は、2人を受け入れつつ、あがってもらった。

その際につかさが言っていた”驚く事”というのが気になっていた俺だったが、とりあえずはそれを楽しみにしてみよう、と思うのだった。

（つかさの言う、”驚く事”ってのが気になるけど、とりあえずは、2人が来てくれた事は嬉しいな。寂しさ、か・・・俺ってこんなに弱い奴だったかなあ・・・。まあ、いいか・・・今は、今だけは、こんなでも・・・。）

そう考えつつ、お茶の準備をして戻って来たつかさを迎えて俺達はゆっくりとお茶タイムを楽しむのだった。

そうして、1時間ばかり経っただろうか?またしても家の呼び鈴が鳴る音が聞こえたので、俺は立ち上がって玄関へといこうとしたのだけど、その俺の行動をかがみが制して

「あ、慶一くん。あんたはここで座ってて?私が行って来るから。」

俺はそんなかがみに何かを言おうと口を開きかけたのだが、すぐさま立ち上がったかがみは玄関へ向かって走って行ったのを俺は見送る事しかできなかった。

そして、何気につかさの方に視線を向けると、俺の視線に気付いたつかさはにこにこしながら俺に笑顔を向けていたのだった。

そして、少しして、かがみが誰かを伴ってリビングに現れたのだが、

俺はその人達を見て思わず驚きの声をあげたのだった。

「え？ただおさん、みきさん、まつりさんに、それに、いのりさんも・・・皆さん、一体何を・・・？」

混乱しつつそう言う俺に、ただおさん達はにこにこと俺に笑顔を向けていた。

かがみｓｉｄｅ

お父さんからの提案を受けて、私は先に慶一くんの家に行ってつかさと2人でお父さん達がやってくるまでの間、慶一くんの話し相手をしつつ、時間を稼いでいた。

しばらくすると、家の呼び鈴が鳴り、お父さん達がやって来た事に気付いた私は、お客さんに対応しようと席を立とうとした慶一くんを制して、お父さん達を出迎えに行く私だった。

そして、玄関に来て、私は「今あけるわ。」と言って玄関を開けると、そこにはお父さん達が立っていたのだった。

「待ってたわ。でも、つかさがうっかり余計な事言っちゃったから、サプライズも半減しちゃってるわよ？」

そんな私の言葉にお父さんは苦笑しつつ

「ははは、まあ、言ってしまったのなら仕方ないね。とりあえずお邪魔させてもらうとしようか。行くよ？みき、いのり、まつり。」

後ろに控える3人に声をかけると、3人とも苦笑しつつも家に上が

り、私の後についてリビングへと向かうのだった。

そして、お父さん達を見た慶一くんは、凄く驚きの表情で

「え?ただおさん、みきさん、まつりさんに、それに、いのりさんも・・・皆さん、一体何を・・・?」

そう言うと、お父さんはにこにことしながら

「今回の事はかがみとつかさから聞いているよ。かなり大変だったみたいだね。私達も君には娘の事で大分世話になった。君がつらい今、私達は君への恩を返すチャンスだと思ったんだよ。だからこうして、家族揃ってやってきた、と言う訳なんだ。」

そう説明するお父さんの後に、お母さんも微笑みながら

「かがみからも森村君が今回の事で落ち込んで寂しがってる、って聞いたの。だから、今晩は私達は森村君の家族になってあげようと思って来たのよ。」

そう言ったのだった。

まつり姉さんといのり姉さんもまた満面の笑顔を浮かべて

「そういう事だよ?だから森村君。今日はたっぷり私達に甘えていいんだよ?」

「ふふ。あの時みたいにまたまつり姉さん、って呼んでよね?今日は私は君のお姉さんになってあげるから。」

そう言う2人に私は呆れつつも軽いため息をついて

「・・・まったく姉さん達は、調子に乗ってくれちゃって・・・でも、まあ、そういう事よ。今日だけは私もあんたの家族。３つ子の兄妹って所かしらね？」

そう言う私につかさも満面の笑顔を浮かべつつ

「わたしとおねえちゃんとけいちゃんが兄妹なんて、なんだかおかしな気分だね～。でも、これで今日は寂しくないよ？けいちゃん。」

そう慶一くんに言うつかさを見ながら慶一くんはまだ呆然と私達を見ていたが、その顔が徐々に歪んできたかと思うと、慶一くんは感極まったのか、涙を流し始めたのだった。

「あ、ありがとう・・・ございます・・・お、俺なんかの為に・・・皆さんにそんなにも気を使って・・・もらって・・・うぅ・・・嬉しいです・・・俺を家族と言ってくれて・・・嬉しいです・・・。」

泣きながら私達に自分の正直な気持を吐き出す慶一くんを見て、つかさもまたもらい泣きをして、私も、そんな慶一くんの姿に思わず泣きそうになったけど、私は気を取り直すと、慶一くんの側に行って

「ほらほら、泣かないの。今日は皆で側にいてあげるから、早く元気になってよね。」

そう言って慶一くんの肩をぽんぽんと叩く。

そんな私に慶一くんはうんうんと泣きながらも頷いて、そんな慶一くんを見たお母さんや姉さん達も慶一くんを抱きしめてあげて

「・・・つらかったわよね。でも今日は寂しくないから、だから、元気出してね？」
「今の君は1人じゃないわよ？だから、安心してよね？」
「可愛い弟の為に、私も今日は張り切らせてもらうよ？だから、頑張ってね？」

そう優しく言う3人に慶一くんも悲しみを吐き出すように泣きつづけていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

突然のただおさん達の家への訪問。

そして、それはかがみとつかさが俺の為に用意してくれた最高のサプライズと言えた。

次々に俺に暖かい言葉をかけてくれる皆さんの言葉が、気持がありがたくて、俺の今の境遇を考えた時、思わず俺は感極まって泣いてしまっていた。

そして、泣きながらお礼を言う俺に、みきさんといのりさんとまつりさんが俺を優しく抱きしめてくれながら、更にありがたい言葉をかけてくれた事が嬉しかった。

俺はみんなの気持に、心にとても暖かなものを感じながら、皆と一緒に今日は過ごす事となった。

あの後、みきさんやかがみ、つかさが食事の準備を始めた。

俺はその準備を任せつつ、ただおさん達にリビングでくつろいでい

てもらう事にして、俺は食器等の準備を済ませた。

今日は久々にリビングでの食事となりそうだったので、食器類はすべてそこに持ってきて並べたのだった。

料理に関してはみきさん達に任せっきりだったいのりさん達も食器運び等は手伝ってくれたので思いの他早く準備が出来たのだった。

リビングでくつろぎながらテレビを見ていたただおさんが俺に

「森村君、中々立派なテレビだねえ。これはかがみ達が言ってた文化祭の時の奴なのかい？」

そう、聞いて来たので、俺は照れながら

「はは。そうです。文化祭の出し物で腕相撲がありまして、俺はそこで全勝してその景品であるそれを貰って来たんですよ。」

その言葉にまつりさんもあの時の事を思い出したのか、俺に

「お？ひょっとして私と森村君が文化祭で出会った日に取った奴？」

その言葉に頷く俺。

そんな俺に感心しつつ、いのりさんも

「中々やるじゃない、森村君。流石にあの龍也さんの義弟と言うだけはあるわね。」

その言葉に俺も笑いながら

「はは。龍兄のしごきも親父同様、きつかったですからね。鍛え込んだ結果って奴ですかね、いのりさん。」

そう言うと、いのりさんは俺の言葉に頷きながらも俺を睨んで

「・・・森村君?”いのりさん”じゃないでしょ?”いのり姉さん”よ?はい、やり直し。」

その言葉に俺は苦笑しつつ更に照れながら

「あ、その・・・えと・・・いのり・・・姉さん・・・。」

慌ててそう返すと、いのりさんは満足そうに笑顔で頷いて

「そうそう。それでいいのよ?さて、森村君。お風呂どこかな?軽く掃除してお湯はっておくから、場所教えてくれない?」

その言葉に俺はやや驚きつつ

「え?でも、その位の事なら俺が・・・。」

そこまで言いかけた時、いのりさんは俺の顔の前に人差し指を立てて

「今日は私達がやってあげる、って言ったはずよ?私達が何の為に今日、ここに来ているのか、忘れてもらっちゃ困るわね。」

そう言ういのりさんに俺はたじたじになりつつ

「わ、わかったよ。いのり姉さん。そこの廊下をでて・・・・・・

です。それじゃその・・・お願いします、いのり姉さん。」

俺の案内を聞いて、笑顔で頷くと、いのりさんはお風呂の準備をしに行くのだった。

それと入れ替わりで入ってくるまつりさんが俺に

「あれ?森村君、いのり姉さんは?」

そう聞いて来たので俺は、いのりさんがお風呂の準備をしに行ったと伝えると

「そっかー。それじゃ私もちょっと手伝ってくるわ。森村君はお父さんと一緒にリビングで座っててよ。もうすぐ食事も出来上がるからさ。」

そう言うと、すぐさま部屋を出て行ってしまったのを、俺はただ見送る事しかできず、仕方ないのでただおさんと一緒にリビングで食事の出来上がるのを待つのだった。

そんな俺にただおさんはにこにこと笑いながら

「そういえば今年に入って、君のところでまつりとかがみを預かってもらった事があったね。あの時は助かったよ。改めてお礼を言うよ。」

その言葉に俺も照れながら

「い、いえ。俺もかがみやつかさにも色々とお世話になっていましたから、俺の出来る事ならば、って思っただけですよ。そんな大し

た事ではありません。」

そんな風に言う俺にただおさんは1つ頷くと

「うん。森村君、君に頼みがあるのだけど、いいかな?またあの時のような事があった時には君にお世話になりたいと思うが、構わないかい?」

そう言って来たので俺は恐縮しつつ

「え?でも、俺なんかでいいんですか?」

そう返すと、ただおさんは頷きながら

「君だから、かな?娘達を預けても心配ないって思えるからね。それに、いざとなったら娘達を護ってくれるのだろう?君なら。」

その言葉に俺は思わず力強く頷くと

「それは、当然です。俺にとっても大事な仲間であり友人であり、そして、護りたいと思える人達ですから・・・。」

とっさにそう言葉がでたのだが、その言葉にただおさんはにっこり笑いながら

「なら、大丈夫だね。これからも娘達の事をよろしく頼むよ。まあ、なるべくならそうならないように、私達も今回のくじで決まった旅行のようにあぶれるものが出ないようにはするつもりだけどね。」

そんなただおさんの言葉に俺もただただ苦笑していた。

ただおさんとの話をしていると、食事の準備が済んだのか、みきさん達が出来上がった料理を運んできた。

「はいはい、夕食が出来たわよ?席についてみんなで食事にしましょう。」

そう言って料理を並べるみきさんに続いて、かがみ達もそれぞれの料理を運んできた。

かがみは相変わらず味噌汁を頑張ったみたいで、今回も自信ありげだった。

つかさもサイドメニュー等を作ってきたようだった。

そして、今回並べられた料理は全員でつつける鍋料理、すき焼きだった。

全員に器を配り終えてそして、一晩だけの暖かい食事の幕開けとなった。

「・・・でね?こなちゃんが~・・・・・・。」

つかさが話しに夢中になって肉を食べれずにいたのを見かねてかがみが

「ほら、つかさ。あまりおしゃべりに夢中になっていたらお肉なくなっちゃうわよ?ほら、私のを分けてあげるから。」

そう言って自分の取っていた肉をつかさに分けてやるかがみ。

かがみはつかさに肉を分けながらまつりさんといのりさんに

「もう！2人してお肉食べまくってたらつかさの分がなくなっちゃうじゃない！」

そう言うと、2人もまたそんなかがみに反論した。

「何よ、私達にそんな事言う割にはかがみだって食べまくってたじゃない？」

「そうだよ。自分の事棚に上げて私達だけにそんな事言うのはおかしいじゃん！」

そう返されると、かがみも顔を赤らめつつ黙り込んでしまった。

それを見かねたみきさんが

「ほらほら、3人ともケンカしないの！お肉はまだまだあるから心配ないわよ？」

そんな風に、かがみやまつりさん達、それに俺にもそう言ってくれるみきさん達を俺はまるで夢心地でぼんやりと見つめていた。

そんな俺の様子に気付いたみきさんが俺に

「あら？どうしたの森村君。なんだかぼーっとしちゃってない？」

そう聞いて来たのを受けて俺は”はっ”と意識を戻して慌てつつ

「い、いえ、なんでもないです。ただ・・・こんな食事風景もいい

もんだな、って思っちゃって・・・。」

顔を赤くしつつ照れながら俺がそう言うと、皆が俺の顔を見てそして、にっこりと笑ってくれたのを見て、俺は更に心が暖かくなるのを感じたのだった。

そんな、暖かな夕食を終えて、みきさんとかがみとつかさが食事の後片付けをしている間に、まつりさんといのりさんがお風呂へと行っていたので、俺はリビングでただおさんとくつろいでいた。

そして、まつりさんといのりさんが風呂からあがり、今度はかがみとつかさが風呂へと向かった。

リビングでくつろぐ俺にまつりさんといのりさんは

「ふう、いいお湯だったー。慶一、ありがとね？」

「慶一の所はお風呂も結構大きいからいいわよね。家もリフォームしてもう少し大きいお風呂にしたいわねー。」

と言う2人の風呂場に対する感想もそうだったが、ふいに俺を名前で呼び捨てにした2人に俺は目を丸くしつつ

「いや、満足してもらえたのならいいですが、その、2人とも俺の事名前で呼び捨てにしましたよね？ちょっと驚きましたが、一体どういう事なんです？」

そう尋ねてみると、2人とも少し不満な表情を見せつつ俺に

「慶一？今日は一晩だけとはいえ、私とあんたは姉弟なのよ？姉が弟を名前で呼ぶのは当然の事じゃない？」

「そうそう。あんたは私の弟なんだから別段おかしい事なんてないよ？」

そう答える2人に俺はひたすら照れていたのだった。

更にはみきさんも俺に

「慶一、私も先にお風呂いただくわ。私達が入った後はあなたもはいっちゃいなさい。」

と言われたので、俺は更にその言葉に驚く事となったのだった。

そして、みきさん、ただおさんもお風呂に入り、最後は俺の風呂の番になったので、風呂場へと向かった。

だが、更にここに、柊４姉妹の思惑がある事に俺は気付かないまま、風呂へ入る。

しばらく湯船につかりながら、俺は今日のかがみ達の言うサプライズを思い返していたが、ふいに風呂のドアが開いたと思ったら、そこには水着を着用した柊４姉妹が立っていた。

俺は一瞬何が起きたのかわからずに一時思考停止の状態に陥っていたが、状況を察すると、途端に顔を真っ赤にして

「ち、ちょ！いきなり何やってるんですか！４人とも！今は俺が入っているのであって、その、あの、だから・・・・・・。」

そう言って混乱しまくっていると、４人ともいたずらっぽい笑みを浮かべると

「ま、まあ、私はやめよう、って言ったんだけどさ。姉さん達が慶一くんの背中を流してあげよう、って言うから・・・。」
「あ、あはは。おねえちゃん達に押し切られちゃったよ・・・。でも、何かけいちゃんの為にがんばりたかったから・・・。」
「あの時温泉で皆で露天風呂に浸かったじゃない。水着も着てるし、お互いに肌をさらしてるんだから今更よ？」
「そうだよ？だからとっととあがったあがった。私達で慶一の背中を流すサービスだよ？じっくり堪能してねー？」

そんな４人の勢いに押されて俺は、仕方なくタオルを腰に巻いて湯船から上がると、４人に背中を流してもらうというとんでも体験をする事となったのだった。

風呂の熱気と恥ずかしさから何だかのぼせるような感じになってしまった俺だった。

そうして、物凄く疲れる入浴タイムを終えて俺は自分の部屋に戻り、ベットに倒れ込んでいた。

しばらくそうしていると、俺の部屋のドアをノックする音が聞こえたので俺は「・・・どうぞー。」と声をかけると、ドアを開けて入って来たのはかがみだった。

「慶一くん、まだ眠くないからちょっと遊びにきちゃった。慶一くんもまだ寝ないわよね？」

そう言うかがみに俺も頷いて

「ああ。まあ、確かにかなり疲れる事になったけど、不思議とまだ

眠くはなってないからな。それで、どうするんだ？」

そう尋ねると、かがみは新刊のラノベを取り出して

「新しいの手にいれたから、読まない？眠くなるまでさ。」

そんなかがみの提案に俺も乗る事にした。

「わかった。しばらく読んでるとするか。」

そう言うと、かがみも満面の笑顔で頷いたのだった。

そして、しばらくは2人してラノベを一緒に読んでいたが、気付くとかがみはまた、俺の隣に座ってラノベを読んでいた。

あの時は照れていた俺だけど、今はそんな風にかがみが俺の側に居てくれる事が嬉しかったから、俺も自然とその形を受け入れる事ができた。

そうしているうちにかがみは俺に

「・・・ねえ、慶一くん。今日は色々慌しくなっちゃったわよね？今回の事はお父さんが提案してくれた事だけどさ、正直私も不安だったわ。慶一くんはまだ牧村君の事で傷ついている。そんな状況の中で、慶一くんの寂しさを紛らわせる為とはいえ、ちょっとやりすぎちゃったんじゃないかな？って不安に思ってた。慶一くんを励ましてあげたい気持は確かにあったの。でも、本当によかったのかな？ってつい考えちゃうのよね・・・。」

そんな風に言いながら不安げな目を俺に向けてくるかがみの頭にぽ

んと手を乗せると

「・・・確かに色々驚かされたり、慌しかったり、って言うのはあったさ。でも、俺は凄く嬉しかった。一晩だけのかりそめの家族だったけど、俺は、いなくなってしまった自分の両親の姿をただおさんとみきさんの中に見たような気がした。そして、俺を弟と呼んでくれるまつりさんといのりさんの気持も、俺の為に一生懸命になってくれるつかさも、そして、こうやって俺の為に気を使ってくれるかがみも、みんなみんな、俺の為に、って思ってくれる気持を感じたら、凄く嬉しくなった。俺は瞬を失って不幸だと思っていた。でも、それ以上に俺に幸せをくれる皆に感謝してるんだ。だから、かがみも胸をはってくれ。俺にこんなにも幸せな気持を与えてくれたきっかけをかがみが作ってくれたんだからさ。」

かがみを安心させるように俺は優しい言葉をかがみにかけた。

かがみはそんな俺の言葉を聞いて、自分のした事が改めて間違っていなかった事に対する安堵感と嬉しさで少しだけ涙ぐみつつ

「・・・よかった。私もあんたの役に立てたのね？あんたを元気付ける事ができたのね？嬉しいな・・・誰かの役に立てるっていうのはこんなにも嬉しい気持になるのね・・・。」

そんな風に言うかがみに俺も笑顔で頷き、そんな俺にかがみもまた笑顔で頷いてくれた。

そうして、一晩だけの家族タイムは幕を下ろしたのだった。

次の日、大学に向かうまつりさん、仕事に向かういのりさん、そして、神社へと戻るみきさんただおさん、学校へ向かうかがみとつか

さを俺は見送った。

柊一家を見送りながら俺は、一晩の幸せだったけど、決してこの事は忘れないと心に誓いながら、自分の心が更に癒された事を感じていたのだった。

（かがみとつかさの来訪から、あんな事になったけど、凄く嬉しかった。柊家の人達の気遣いと暖かさは本当にどれだけお礼を言っても足りない程に、俺に力をくれたな・・・。俺も頑張らないと・・・俺を励ましてくれた皆の気持に応えて、一日も早く元気にならなくっちゃな・・・。）

今日も1人になった時に俺は心の中でそう考えていたのだった。

かがみｓｉｄｅ

最初は私とつかさだけで慶一くんを励ましに行く予定が、何だか凄い事になってしまった。

私はその事に不安を感じていたけれど、慶一くんはそんな私の不安を吹き飛ばすように、私を安心させてくれる言葉をくれたのだった。

学校に行く時に見た慶一くんの顔は昨日よりも元気そうに見えて、今回の試みは成功だったかも、と密かに思っていた私だった。

そして、私は学校に向かいながら

（いきなり家族で押しかける事になったけど、慶一くんが喜んでくれてよかったかな。昨日見た時よりも慶一くんの顔に元気が戻っているのが見て取れたから、私もちょっと安心かな。今回、私もあい

つの役に立てたみたいだし、後は、あいつが学校に戻って来てくれることを祈るばかりね。まあ、あの状況なら大丈夫かな？慶一くん、私達あんたを待ってるから、早く元気になってよね。）

そう考えていたのだった。

つかさｓｉｄｅ

おねえちゃんと一緒にけいちゃんを励ましてあげたくて、けいちゃんの家に行ったわたし達だったけど、そこにお父さん達も一緒に来る事になって、わたしは驚いていたのだった。

それでもけいちゃんは、そんなわたし達を受け入れてくれて、その日は一晩だけの家族になったわたし達だった。

色々とどたばたしちゃったけど、それでも次の日の朝にはけいちゃんは昨日よりも元気な顔を見せてくれたので、わたしもほっとしていた。

おねえちゃんと一緒に学校に向かいながら

（最初はわたし達だけだったのに、急にお父さん達も来ることになったからわたしも驚きだったよ～。でも、けいちゃん、喜んでくれてたからよかったな・・・。けいちゃんには元気な姿でわたし達の前に戻って来てほしいから、その為に役に立ててよかったよ・・・。まだけいちゃんは学校には来れないけれど、きっとすぐに戻ってくるよね。わたし、待ってるよ？けいちゃん。元気な顔見せてくれるのを。だから、頑張ってね？）

そう、心の中で考えつつ、私はおねえちゃんに

「ねえ、おねえちゃん。」

そう声をかけると、おねえちゃんも私に振り向いて

「何よ？つかさ。」

そう言って来たので、私は

「最初はどうなる事かと思ったけど、けいちゃん、喜んでくれたみたいでよかったよね。」

その言葉におねえちゃんも微笑みながら

「そうね。お父さん達も行く事になってちょっとやりすぎかも、って私も内心不安だったけど、慶一くんは嬉しかった、って言ってくれたから、私もほっとしたわ。」

その言葉にわたしも嬉しくなって

「そっか～。けいちゃん、早く元気になるといいね～、おねえちゃん。」

にこにこしながらそう言うと、おねえちゃんも少し顔を赤くしながら

「・・・そうね。あいつには早く学校に戻って来て欲しいし、それに・・・あいつが居て、私たちが居てが本当の在るべき姿だって思うから・・・だから、あいつが早く学校に戻って来れるようにいのってましょ？つかさ。」

そんなおねえちゃんの言葉にわたしも大きく頷くのだった。

わたしはおねえちゃんと話しながら、わたし達の願いはそう遠くないうちに叶うと確信していた。

そして、同時にみんなと一緒に笑っているわたし達のビジョンも見えたような気がした。

わたしはそのビジョンを胸に、今日も1日頑張っていこう、と気合を入れなおしたのだった。

癒しの旋律達、第2話～やってきたまさかの柊家の人々～（後書き）

活報でも予告を書きましたが、次回は本編を一旦お休みして、１００万ヒット記念短編を執筆予定です。

癒しの旋律達、第3話～親父の謝罪、瞬の遺品、そして、高良家と岩崎家の人々～

短編の事あり、大分間があいてしまいました。
ここにその事をお詫びしつつ、本編をどうぞ。

昨日の柊一家の来訪とそして、暖かい皆の励ましは俺に元気と力をくれた。

俺はそんな柊家の人達に感謝しつつ、楽しくて優しい時間を過ごした。

また少し元気になった自分の心を感じつつ、帰っていく皆を見送ったのだった。

俺はみんなの思いに応える為にも早く元気にならなくては、と改めて思うのだった。

そして、今日もまた、家でのんびりと心の傷を癒す為に読書をしつつ、気持を落ち着けている時、俺の携帯に着信が入って来たので、電話に出てみた。

「もしもし？龍兄？急に電話してきて、俺に用事なのか？」

そう、龍兄に聞くと、龍兄は

「ああ。今、お前はしばらく学校を休んでいるんだったよな？だから、一度実家に戻って来い。」

そう言って来たので俺は

「実家に？親父達が俺に帰ってこい、って言ってるのか？」

そう尋ねると、龍兄は

「親父達もそうなんだが、麗真さんがお前に用事があるらしい。なんでも、お前に瞬坊の形見の品を受け取って欲しいらしいのさ。」

その龍兄の言葉に少し落ち込みつつも気をとりなおして

「・・・わかったよ。それじゃ準備してそっちに行くから。まずは実家に行けばいいのかな?」

そう、龍兄に尋ねると、龍兄は

「ああ。先にこっちに寄ってくれ。牧村さんの所はその後に行くといい。」

そう言ったので俺は

「わかった。それじゃ向こうでな、龍兄。」

そう返すと、龍兄も俺に

「ああ。気をつけて来いよ?まあ、お前の事だから心配いらないとは思うがな。」

そう言ったので、俺は

「はは。とりあえず切るよ?龍兄。」

そう返してから電話を切ったのだった。

そして、俺は1つ気持ちを切り替えると、実家の方へと顔を出す為に出かける準備をした。

着替えなどを済まして準備を終えると、俺は実家に向かう為に家を出た。

道中、いつもならばなんでもないこの道のりが、なんだか、とても辛く感じるようになってしまった事に気付いた時、悲しい気持になる自分を感じる事になる事等思いもしなかった。

まだ俺には時間が必要なのかもしれないと思いながら、俺は実家へを目指したのだった。

その後、実家への最寄駅へと到着し、俺は、そのまま実家へと足を向けた。

そして、実家の門の前まで辿り着き、俺は大きなため息をつきながら実家を見た。

（・・・よもや、こんな気持で実家を見つめなきゃならない日が来るなんてな・・・。でも、約束は約束だし、仕方ないよな・・・。とりあえず、龍兄達に顔を見せないと・・・。）

そう、心の中で考えつつ、俺は玄関をくぐり、声をかけた。

「龍兄！親父！、お袋！言われた通り帰って来たぞ！？」

そう言うと、お袋が俺を出迎えてくれたのだった。

「・・・お帰り、慶一。大変だったわね、色々と。龍也もお父さん

も中にいるわ。さあ、あがりなさい。」

そう言って俺に家に上がるように促すお袋に頷いて

「ただいま、お袋。正直辛いけど、仕方ないよな・・・。」

そう言って家に上がり、俺は龍兄達が待つ居間へと足を向けた。

そして、居間で俺を待つ2人に俺は声をかけるのだった。

「龍兄、親父、言われた通り、顔を出しに来たよ。」

そう言うと、龍兄と親父は複雑な表情を見せつつ

「悪いな、慶一。まだお前には時間が必要だと言う事は分かっていたんだが、麗真おじさんも親父もお前に言うべき事、託すべき遺品があるとの事だったからな。少々無理言ったが、お前にこうして来てもらった訳さ。」

そう俺に言うと、側で控えていた親父が俺の前に来て俺に土下座をしたのだった。

突然の親父の行動に驚いた俺は慌てつつ

「お、親父、いきなり何の真似だよ！いいから顔を上げてくれ！」

親父の側に寄り、親父を起こそうとしたが、親父はそんな俺の行動を手で制して

「・・・いいのだ。慶一。私はお前に詫びねばならん。私はこの町

の自治を預かる者。そんな私のはずなのに、お前の友人を護ってやる事が出来なかった。お前にはもう悲しい思いをさせたくないと思っていたのに、情けない限りだ。慶一よ、すまん。私を軽蔑してくれても構わん。お前がそれを望むなら、それすらも甘んじて受け入れよう。それがお前に対する私の罪であり、受けるのが当然の罰なのだからな。」

俺はそんな親父の言葉にかなりの驚きを隠せずにいた。

あの、高慢で俺と顔を合わせればお互いに口喧嘩すらしていた親父が、今目の前で俺に土下座して頭を下げている。

俺はそんな親父の姿を見て、１つ頷くと

「・・・顔を上げてくれ、親父。親父がこの町の自治を任されて居る事は知ってる。けど、そうだとはいえ、この町は広い。だから、親父の目が届かない所が出たとしても不思議な事じゃないさ。それに、親父は何もしていない訳ではなかったんだろ?確かに瞬の事は悔しいし悲しいさ。けど、起きてしまった事はもうどうしようもないし、それに・・・調子狂うんだよ。いつも高慢で俺の顔見たら悪態つく、そんな親父の癖にそんな風にしおらしくしてさ。親父の気持はわかるけど、俺を思ってくれるならいつも通りの親父でいてくれよ。」

そう親父に言うと、親父は土下座の姿勢のままでしばし考え込んでいるみたいだったが、おもむろに立ち上がり、後ろを向くと

「・・・ふん。たまにこうやって素直に頭を下げてやったというのに、まったく可愛げのない。一体誰に似たのだろうな、この馬鹿息子は・・・。」

少しだけ震える声でそう言う親父に、俺も背中を向けて上を向きながら涙をこらえつつ

「・・・俺は・・・そんな可愛げのない・・・親父に似たんだよ・・・何しろ俺は・・・そんな親父の息子、だからな・・・。」

俺の今の素直な気持ちを言葉に出したのだった。

そんな俺達を見ていた龍兄もどこか複雑そうなそんな表情を見せていたのだが、気を取り直して

「・・・ほらほら、親父ももう慶一に言いたい事はいったからいいだろ？慶一、そろそろ麗真さんの所へ行って来い。そして、少し落ち着いたら帰って来ればいい。」

そう言う龍兄の言葉に俺は頷いて

「・・・わかったよ。それじゃ、ちょっと行って来る。じゃあな、親父、龍兄。」

そう声をかけて居間を出ようする慶一に親父が

「・・・つらいかもしれんが、行って来い。きっとお前の為になるはずだ。」

その言葉を背中に受けながら俺は片手を上げて親父に応えて家を後にしたのだった。

龍也ｓｉｄｅ

今回の一件の真相を知ってる俺は、今の慶一と親父のやり取りを見て、真実を話せない苦しさと、瞬坊に何もしてやれなかった悔しさが俺の中で渦巻いているのを感じていた。

これ以上はこの場の空気に耐えれそうもないと判断した俺は、慶一に麗真さんの所へ行って来いと促してその場をとりあえずは収めたのだった。

（・・・すまん、親父。俺の思いも一緒に俺の代わりに慶一に伝えてくれてありがとう。親父の悔しい気持もわかるが、それ以上に俺が悔しい・・・。けど、これ以上は誰も失わせずに終わらせる。それが、俺の戦いだからな・・・。）

俺はそう心の中で考えつつ、改めてこの問題に収束をつけると誓うのだった。

慶一ｓｉｄｅ

親父との邂逅は、なんとも緊張した重苦しい雰囲気を味わう事となった。

俺も親父もいたたまれなくなっている時に龍兄からの助け舟のおかげで、とりあえずは俺のもう１つの目的に向けて動く事ができるようになった。

とはいえ、こっちもまた、俺にとって重い空気を感じる事になりそうだと牧村道場に足を向けつつも、少しだけ足取りの重い俺だった。

牧村道場に向かいながら俺は、瞬との今までの事を思い返していた。

わかってはいたけれど、やっぱりあいつと過ごせた時間が少なかった事は、俺にとってはいつまでたっても後悔の要因となるようだった。

そんな事を考えているうちに俺は牧村道場へと辿り付く。

緊張で体を硬くしつつ、俺は道場の門をくぐった。

道場を左に見ながら俺は瞬の自宅の方へと足を向ける。

すると、玄関から瞬の弟の祐次と浩也が出てきた。

2人は俺に気付いて側にやってきて

「こんにちは。慶一さん。家に何か用事ですか？」

「先日は色々ドタバタしてしまってて声もかけれませんでしたね。もしかして瞬兄に線香でもあげに来てくれたんですか？」

そう言って来たので俺はそんな2人の言葉に複雑な表情を見せつつ

「・・・今回は、大変だったな。俺も親友を失ってしまってつらかったけど、お前らも身内をなくす事になってしまったもんな。祐、浩、それもあるんだけど、ちょっと麗真おじさんにも呼ばれていたから来たんだよ。麗真おじさんは家にいるかな？」

俺の言葉に祐が頷いて

「そういう事でしたか。親父なら家にいますよ。俺達はこれから出かけなければなりませんが、親父と、瞬兄に会っていってやって下

さい。」

そう言ってくれて、浩も俺に

「そうしてもらえば瞬兄も喜ぶと思いますから。じゃあ、俺達はこれで行きますから。行こう、祐兄。」

俺にそう言った後、祐にそう促して、2人はどこかへと出かけていったのだった。

俺はそんな2人の後ろ姿に一礼して、家の呼び鈴を押す。

少し待つと、麗真おじさんが俺を出迎えてくれて

「やあ、よく来たね。あの時からあまり時間は立っていない状況で無理行ってすまなかった。さあ、あがりなさい。」

そう促してくれたので俺は

「いえ、今回の事は俺にとっても大事な事だと思えましたのでやってきました。それじゃ失礼します。」

そう言って俺は家に上がり、麗真おじさんに導かれるままに瞬の遺影の飾ってある仏壇へと案内される。

「さあ、ここだ。とりあえず、今、君に渡す物を取ってくるから、その間に瞬に線香でもあげてやってくれるかい?」

俺を仏間へと案内した後に麗真おじさんはそう言って部屋を出て行った。

俺は静かに仏壇の前に正座して、仏壇の蝋燭に火を灯し、そして、線香を立てて手を合わせた。

そして、仏壇に手を合わせながらもまた瞬との事を思い出した俺は、少しだけ泣いたのだった。

そうしているうちに麗真おじさんは何かを手にして戻って来た。

「お待たせ、慶一君。これを君に渡したかったんだ。これは瞬がずっと大事にしてきたものだと言っていた。君と親友が復活したなら君にこれを送って2人で付けたいと思っていたようだよ。」

俺が麗真おじさんから渡された瞬の遺品は左手首にはめるリストバンドだった。

「リストバンド？片方しかありませんね？」

その俺の疑問に麗真おじさんも頷いて

「そうなんだよ。どうやら瞬は右手にはめるリストバンドを使っていたんだ。親友の証として、左右片方ずつにリストバンドをはめたかったようだね。これがある限り、俺は慶一と親友で居つづける、とそう誓っていたようだ。そして、瞬のつけるべきバンドは瞬と共に荼毘にふしてしまったからね。今残ってるのはそれだけだったんだよ。これを君に託す事は瞬の願いでもあったから、どうか受け取ってもらえないかな？」

麗真おじさんのその言葉に俺は再び胸に熱いものが湧き上がるのを感じていたが、俺は麗真おじさんからリストバンドを受け取ると、

左腕にそれをはめた。

「・・・あいつの気持、ありがたく受け取らせてもらいます。そして、このリストバンドに誓って言います。俺はこれからもずっと、あいつの事は忘れない。生きている限り、俺はこれを持ちつづけます。」

そう俺の決意を麗真おじさんに言うと、麗真おじさんはにっこりと笑って

「ありがとう。瞬もきっと喜んでくれてるだろう。私も瞬の心を君に託せたし、1つ肩の荷が下りた気分だ。こんな事になってしまって少し気は引けるかもしれないが、これからも瞬に会いに来てやってくれ。私はいつでも歓迎するよ?」

その言葉に俺は深く頭を下げると

「・・・ありがとうございます。またこちらに寄らせていただきますね。それじゃ、今日の所はこれでお暇させてもらいますね。」

そう言うと、俺は玄関へと足を向ける。

そして、家を後にする俺を麗真おじさんは見送りに出てくれた。

そんな麗真おじさんに手を振って俺は実家を目指して歩き始めたのだが、その途中で俺は2人の女の子に声をかけられたのだった。

「あら?慶一さん。てっきり自宅の方にいらっしゃると思っていましたが、どうされたんですか?」

「・・・こんにちは、先輩・・・。私も先輩に出会えるとは思って

いませんでしたから、驚きです・・・。」

その声の主はみゆきとみなみだった。

俺も偶然とはいえ、2人に出会ったことに驚いて

「よう、2人とも今学校の帰りか?ちょっと俺は実家に呼ばれたんでね、今日は帰って来てたんだよ。今ちょっと瞬の家に行ってな。これを受け取って来た。」

そう言って俺は左腕を2人に見せる。

2人は俺の言葉に戸惑いながら

「・・・牧村さんの所、ですか・・・お辛いでしょうね、心中お察しします・・・。それと、これはリストバンドですね?片方だけ、なのですか?」

「・・・突然の事でしたから、大変でしたね・・・先輩・・・何故片方だけ、だったんですか・・・?」

そう言う2人に俺は麗真おじさんから聞いた事を説明すると、2人は少し落ち込んだような表情で

「・・・そういう事、だったんですね・・・。でも、大丈夫ですよ、慶一さん。牧村さんの思いはこのリストバンドにこめられているはずですから。」

「・・・先輩が牧村さんの事を忘れなければ・・・きっといつまでも先輩の心の中で生き続けるはずです・・・。」

その言葉に俺も複雑な表情を見せつつも

「そうだな・・・。ありがとう、２人とも。俺は忘れないさ、だって俺はあいつの親友だったんだからな。」

その言葉に２人は少しだけほっとしたような表情で

「よかったです。慶一さんも少しだけ、あの時よりはお元気になられたみたいですから・・・。」

「・・・私達は先輩の事を心配していましたから・・・。」

そう言ってくれる２人の気持が嬉しくて、俺も微笑みながら頷いたのだった。

みゆきｓｉｄｅ

今日も慶一さんの事で皆さんと色々な事を話し合い、そして、泉さんやかがみさん達の話を聞いて、次は私達が動くべきでしょうか？と思案をしていました。

そして、学校の帰りにみなみちゃんと出会い、これからの事を話し合いながら一緒に帰って来たのですが、その途中でまさか慶一さんに出会う事になるとは思いもしませんでした。

驚いた私達は慶一さんにこちらにいらっしゃる理由を尋ねてみましたが、実家から呼び出され、そして、牧村さんの所に行ってきたという事を慶一さんから聞かされて、私達は慶一さんの気持を考えた時に少しだけ辛くもなりましたが、牧村さんの遺品であるリストバンドを腕にはめた慶一さんは少しだけあの時より元気を取り戻しているようにも見えました。

私はこの状況をチャンスと考え、慶一さんの為に行動を起こそうと考え、声をかける事にしました。

「・・・あの、慶一さん。よろしければこれから家にいらっしゃいませんか？」

私の言葉に慶一さんは驚いたような表情を見せて

「え？これからか？でも・・・。」

そう言う慶一さんに私は更に言葉を続けて

「慶一さんの事情は存じています。ですが、こういう時こそ私はあなたの力になりたいのです。あなたを元気付ける為に、私の出来る事をしたいのですよ。」

私の言葉に慶一さんは戸惑っていつつも慶一さんはその場で考え事を始めたのを私はじっと見つめて慶一さんの動きを見守っていました。

慶一さんの考え事が済むのを見守っていると、みなみちゃんが私に

「・・・みゆきさん。私も今日は・・・みゆきさんの家にお邪魔してもいいですか・・・？」

そう聞いて来たので私は頷いて

「ええ。いいですよ。みなみちゃんも慶一さんの寂しさを紛らわせてあげたいのですよね？」

そう言うと、みなみちゃんは少しだけ顔を赤くしつつ、コクリと頷いたのだった。

そんなみなみちゃんを見て私はクスリと小さく笑ったのでした。

それから少しして慶一さんの考え事も終わったみたいで

「・・・みゆきのその言葉に甘えさせてもらっていいかな？」

と、遠慮がちに聞いてくる慶一さんに私も笑顔で頷いたのでした。

慶一ｓｉｄｅ

瞬の家から戻る時にふいに出会ったみゆきとみなみ。

２人は俺に自分の家に来ないか？と声をかけてくれた。

実家や牧村家で重い空気を味わって少しだけ疲れが出ていたのかもしれない。

俺はその提案に少しだけ考えた末に乗る事にしたのだった。

俺はみゆきにその言葉に甘えさせて欲しいと頼むと、みゆきは嬉しそうに微笑んで頷いてくれたのだった。

そして、俺が２人と一緒にみゆきの家に向かおうと足を踏み出そうとした時、みなみが俺に

「・・・あの、先輩・・・。みゆきさんの家に行く前に私の家に・・・来ていただいても構いませんか・・・？」

そう声をかけてきたので、俺は少し驚きつつ

「みなみの家か？何かあるのか？」

そう尋ねると、みなみは俺の顔を見つめながら

「・・・はい。私が・・・先輩にしてあげられる事が見つかったので・・・それで、それをする為には・・・家に行かないとできませんから・・・。」

俺がその言葉に頭にハテナマークを飛ばした状態でいたが、みゆきはみなみが言いたい事に気付いたみたいで

「みなみちゃん、ひょっとして”あれ”ですか？なるほど・・・それならば慶一さんも喜んでくれるかもしれませんね。」

みなみにそう言うと、みなみはコクリとみゆきに頷いていた。

俺はそんな2人のやり取りを見て

「なあ、みゆきは何かわかったみたいだけど、一体なんなんだ？」

そう聞くと、みゆきはいたずらっぽく笑って

「ふふ。みなみちゃんの家に行けばわかりますよ。それまでは内緒です。」

そう言って人差し指を立ててウインクするみゆきに何か納得の行かないものを感じつつも

「・・・まあ、みゆきがそう言うなら楽しみにしてみるか・・・。」

そう言うと、みなみも心なしか少しだけ嬉しそうな表情を見せた。

そして、みゆきと共にみなみの家にやってきて、俺はみゆきと一緒にみなみの家へと入って行く。

すると、俺の予想が当たったみたいで、チェリーが俺に向かって突進してきたので俺はすんでの所でチェリーのタックルをかわしてみる。

だが、相手の方が一枚上手だったみたいで、俺は突然タックルの軌道を変えたチェリーにのしかかられて顔を舐められたのだった。

おろおろしつつもチェリーを引き剥がすみなみ。

再びチェリーのリードをしっかりと結びつけて、俺達はみなみの家へとお邪魔したのだった。

玄関で俺達を出迎えてくれたほのかさんに挨拶をしたのだが、俺はほのかさんに励ましの言葉をもらう事となり、また少し心の中が癒され、暖かくなった気がした。

家に上がった俺達は、ピアノの置いてある部屋へと通された。

みなみは部屋に着替えに行き、しばらくするとこの部屋へと戻って来たのを俺達は出迎えたのだった。

「なあ、みなみ。この部屋で何をする気なんだ?」

ピアノの準備をしているみなみにそう尋ねると、みなみは俺に

「・・・私は、少しだけピアノが弾けるんです・・・ですから、先輩に元気になってもらえる音楽を・・・先輩に聞かせてあげたいと思いまして・・・それで・・・少しでも心を癒す手助けができたら、と思ったんです・・・。」

そのみなみの気持が嬉しくなった俺はみなみの頭を撫でながら

「ありがとう。俺のためにそんな事も考えてくれてたなんて、本当に嬉しいよ。ごめんな？みなみ。俺、まだまだこんなでさ・・・お前のその気持の為にも一日も早く元気になるから。だから、もう少しだけ俺に時間をくれ。」

俺の言葉にみなみは顔を赤らめつつ

「・・・わかっています・・・私は、いえ、私達は先輩が元気になる日を待っていますから・・・。」

その言葉に俺は力強い頷きで応えたのだった。

みなみの演奏が始まり、俺はその旋律に耳を傾けた。

とても優しくて、そして繊細な音色は俺の心に暖かさと癒しを与えてくれたようだった。

気付けば俺は、そんなみなみの奏でた音楽に対して最大の拍手で応えていた。

みなみもまた、照れつつも嬉しそうだったのを見て、みゆきもほのかさんもまた微笑みを浮かべて俺達を見ていたのだった。

みなみの素晴らしい癒しをもらって、俺達は岩崎家を後にし、今度は高良家へとお邪魔する事となった。

玄関で俺達を出迎えてくれたゆかりさんは俺を抱きしめて優しい言葉をかけてくれた。

「大変だったわね、慶ちゃん。でも、心配しないで？慶ちゃんには家のみゆきやみなみちゃんもついているんだからね？」

そんなゆかりさんの言葉に顔を真っ赤にしてみゆきは

「お、お母さん、何を言ってるんですか！私だけじゃありませんよ。泉さんやかがみさん、それにクラスメートの方々や後輩の方々だっていらっしゃるんですから。」

そう少しテンパリ気味に答えていたが

「あら？みゆきは慶ちゃんの力になりたい、って私に言ってたじゃないの。あんなに慶一さんの為に、慶一さんの為にって。」

その爆弾発言に更に顔を真っ赤にして慌てるみゆき。

「お、お母さん！そ、それはっ！ですから、その・・・。」

そんなみゆきを見てゆかりさんはニヤニヤとした顔で

「あらら～？顔真っ赤よ？みゆき。」

その言葉にみゆきはゆかりさんに抗議しつつ

「だ、誰の所為だと思っているんですかー!?うう・・・あの、慶一さん、お騒がせしてすいません・・・。」

最後にはばつの悪そうな顔で俺に詫びるみゆきに俺も苦笑しながら

「ははは・・・なんというか、その・・・俺の事を考えてくれた事は嬉しかったけどな。」

そう答えると、みゆきはまたもや顔を真っ赤にして照れながら

「慶一さんまでそんな事を・・・もう、みんな意地悪です・・・。」

俺はこの台詞は狙ったわけじゃないのだけど、どうもそう言う風にとられてしまったようだったので、俺は更に苦笑するしかなかった。

それからしばらくはみゆきが立ち直るまでに時間がかかっていたのだが、何とか元に戻ったみゆきは部屋に戻って着替えを済ませて下に降りてくるのを俺達はリビングで待っていたのだった。

それまでの間、ゆかりさんと前回の温泉旅行の事でみゆきを助けた事に対するお礼を改めて言われたり、みゆきもそうだけど、ゆかりさんもまた、俺の事を気にかけていてくれたみたいで、瞬の一件の事についても慰められる事となった。

そんな話をし終わる頃にみゆきが現れて、一旦は話はお開きになったのだが、その後でみゆきは俺を自宅に連れて来た理由を言ったのだが、俺はその理由に驚きを隠せなかった

「慶一さん。今日はみなみちゃんと一緒に家に泊まっていって下さい。」

そう言い放ったのを俺は慌てつつ

「ちょ、ちょっと待て、みゆき。みなみも一緒だとはいえ、年頃の男を泊まらせるのは問題があるんじゃないのか？」

そう返すと、みゆきは特に慌てた様子もなく

「？何も問題はありませんよ。それに私も文化祭の時にも、勉強会の時にも、お正月のあの時も、私は慶一さんの家に逆に泊まらせていただいているんですよ？もしここで私の申し出を断ると言うのでしたら、その時の３回のお泊りの時も何らかの問題があったはずじゃないのですか？」

その言葉に俺は、自分から勉強会以外ではみゆき達を自宅に泊まらせた事があったことを思い出し、ため息を１つついた後

「そういや、そうだっけな・・・何だかいろいろな事があったからすっかり忘れてたよ・・・。でも、いいのか？お世話になっちゃってもさ。」

俺の遠慮がちな言葉にみゆきは頷いて

「はい。先ほども言いましたが、これは慶一さんを元気付けてあげたいからやるのです。それは私の希望でもあるのですから、そこの所はご理解いただきたいと思います。」

その言葉に俺はみゆきのその気持ちが嬉しくて

「悪いな、なんだか今回は迷惑かけっぱなしだ。でも、ありがとう。あ、それと、泊まると決めたからには俺も実家に戻って着替えを取ってきたほうがいいかも、だな。」

そう言うと、みゆきはにっこりと笑って

「いえ。これはあくまでも私の意思ですから。それと、着替えを取って来られると言う事でしたら、みなみちゃんと一緒に夕飯のお買い物をお願いできませんか？今日は私も夕食の仕込みの方は頑張ろうと思いますから。これでも私、あれから練習したんですよ？その成果も見ていただきたいですから。」

そう言うみゆきに俺も頷いて

「わかったよ。それじゃ、ちょっと行って来るから買い物リスト頼むよ。」

俺の言葉にみゆきはすぐにメモをつづって俺に手渡すと

「では、この通りにお願いしますね？」

そう言ったので、俺は頷いてみなみにも声をかけて一緒に着替えを取りに行くのと同時に買い物に出た。

家に戻って女の子の家に泊まる事になった事を報告すると、親父はさっきの湿っぽさはどこへやらで俺を散々にからかっていた。

俺はそんな親父の態度に安心しつつもむくれながら家を出ると、み

なみと一緒に夕食の買い物を済ませた。

そして、改めて高良家へと戻った俺は買い物してきた物をみゆきに渡すと、みゆきは早速夕飯の支度を始めた。

俺も世話になるのだから、という事でみゆきを手伝おうとしたけれど、今日は1人でやらせて欲しいというみゆきの頑なな態度に負けて、俺はみゆきに全てを任せる事にした。

そして、みゆきが作ってくれた食事は、こなたのとはちょっと違うハンバーグだった。

こなたはチキンを加えたチキンハンバーグなのに対して、みゆきはオーソドックスな牛と豚の肉のひき肉で作ったハンバーグだった。

俺やみなみやゆかりさん達がハンバーグを口にする所を緊張の面持ちで見るみゆきに俺は親指をビシッと立てて

「美味いぞ？みゆき。頑張ったな。練習の成果でてるじゃないか。」

そう褒めると、みゆきは顔を赤くして照れながらもほっとしているようだった。

みなみやゆかりさんやご主人もみゆきの作ったハンバーグを美味しいといっていたので、みゆきは結構嬉しそうだった。

高良家での時間は、悲しい事があったなんて事さえも忘れさせてくれる程に楽しくて、騒がしくて、そして暖かかった。

今回は寝るときは俺とみゆきとみなみの3人で広い部屋で布団を敷

いて寝ることとなったのだが、それもゆかりさん達のはからいで、３人で心行くまで語り明かせるようにということだったのだが、規則正しい生活をしているみゆきやみなみには遅くまで起きているなどという事が出来る訳もなく、１２時を過ぎる頃には轟沈していた。

俺はそんな２人の寝顔を見ながら苦笑を浮かべていたが、２人の布団を直してやると、俺もそのまま自分の布団に入り込んで眠りについたのだった。

あの時から寝つきの悪い夜を過ごしていた俺だったけど、久々に今回はゆっくりと眠れた気がした。

俺は改めて高良家の人達とみなみに心の中で感謝したのだった。

（ふう・・・突然の事で驚いたけど、高良家に人達も、そして、岩崎家の人もみんないい人達ばっかりだな・・・。また少し、俺は癒された気がする。本当にありがたいよな。こういう人達が居てくれる事はさ・・・。俺もいつまでも落ち込んでいちゃいけないよな・・・頑張って立ち直ろう・・・俺を心配してくれる、俺を待っていてくれる皆の為にも・・・。）

そう考えながら久々によく眠れた俺だった。

そして、朝御飯を終えて、みゆき達を学校に送り出して、俺も高良家の人や岩崎さんにもお礼を言うと、埼玉の自分の家へと帰っていったのだった。

みゆきｓｉｄｅ

思いがけず慶一さんに出会い、私の出来る事が出来た事を私はよろ

こんでいました。

私の隣を歩くみなみちゃんもまた、慶一さんに対して自分の出来る事が出来たという事に満足しているようでした。

「みなみちゃん。あそこで慶一さんに出会えた事には驚きでしたが、私もみなみちゃんも慶一さんに対して出来る事が出来た事はよかったですよね。私も少しでも慶一さんのお力になれた事が嬉しかったですよ。」

そう言うと、みなみちゃんも私に笑顔を返しながら

「・・・はい。些細な事でしたが、先輩の為になった事は・・・私にとっても嬉しい事でした・・・みゆきさん・・・。先輩はきっと立ち直ってくれますよね・・・？」

みなみちゃんのその言葉に私も力強く頷くと

「ええ。きっと立ち直ります。慶一さんならきっと。ですから、私達はそれを信じて待ちましょう。大丈夫ですよ。きっと元気な姿で私達の前に戻って来てくれますから。」

そう言うと、みなみちゃんも私の言葉に同じように力強く頷いてくれたのでした。

（慶一さん。私達は待っていますよ。慶一さんが元気な姿で私達の前に戻って来てくれる事を。ですから、乗り越えて下さい。慶一さんならきっと出来るはずですから・・・。）

どこまでも青い空を見上げながら、私は心の中でそう考えていたの

でした。

みなみｓｉｄｅ

色々と忙しい時間だったけれど、先輩を元気付ける事に対して役に立てた事がとても嬉しかった。

みゆきさんの確信に満ちた言葉を聞きながら私は心の中で

（・・・大丈夫。あの時に比べたら先輩は格段に元気になってきてる・・・。きっと先輩は私達の前に戻って来てくれる・・・。私もそれを信じられるから・・・だから・・・頑張って下さい・・・先輩・・・。）

改めて先輩に対して祈りながらそう考えたのだった。

先輩の立ち直る日を心待ちにしながら、私はみゆきさんと一緒に学校を目指したのだった。

癒しの旋律達、第3話～親父の謝罪、瞬の遺品、そして、高良家と岩崎家の人々

次は毒島さん達の予定です。

癒しの旋律達、第４話～みさおとあやののの気遣い～（前書き）

前回の後書きに毒島さん達を予定と書きましたが、それをずらして
今回は背景コンビのお話です。
それでは本編をどうぞ。

癒しの旋律達、第４話～みさおとあやのの気遣い～

突然の実家からの呼び出し、そして、親父から受けた謝罪に俺は困惑しつつも親父の気持を受け止め、自分の気持ちを伝えて、俺は龍兄からの指示で瞬の家へと遺品を受け取りに行く事となった。

麗真おじさんとまみえ、瞬の仏壇に線香をあげて、俺は瞬の遺品を受け取り、牧村家を後にする。

そして、実家へ戻る途中で出会ったのは、みゆきとみなみの２人だった。

２人は学校の帰りだったみたいで、こんな所で俺と出会うとは思っていなかったらしく、かなり驚いていた。

俺もまた、そんな出会いに驚きを隠せないでいたのだが、２人は俺に、自分の家へ来て欲しいと言って来る。

俺は困惑しつつも、そんな２人の気持に応えて２人の家へとお邪魔する。

みなみには音楽を、そして、みゆきには高良家において俺に優しさを暖かさを与えてくれ、俺は更に自分の心の傷が癒されるのを感じていた。

翌日、みゆきとみなみを学校に送り出した後、俺は一度実家に戻ってから自宅を目指したのだが、その帰りの電車内で俺は忘れていた事を思い出して少し焦っていた。

「・・・しまった・・・昨日は色々な事があったから、モモとミィの事すっかり忘れてたぞ・・・あやのあたりが気付いていてくれればと思うけど、俺の状況しってるあやのはひょっとしたら来るの遠慮してる可能性あるもんな・・・現にここ数日はあやのは猫達の世話に来てくれてなかったし・・・あいつら、腹空かしてなければいいけどな・・・。」

そう呟きつつ家に戻り、俺は猫の様子を見るために急いで家の中を確認した。

そして、キッチンの方へ行ってみた時、テーブルの上に書置きが置いてあるのを見つけ、俺はそれを手にとってみた。

【慶ちゃんへ】

『高良ちゃんからメールをもらって、慶ちゃん、猫の事忘れちゃってると思ったので今日は学校行く前にいつものように立ち寄らせてもらったわ。
ちゃんとやるべき事は済ませてあるから安心してね?それと、後で高良ちゃんにお礼のメール送っておく事。
そう言う訳だから、大変かもしれないけど、頑張ってね?慶ちゃん。
私達は慶ちゃんが立ち直って元気な姿を見せてくれる日を待ってるからね?

ｂｙあやの。』

俺はその手紙をみて、凄くありがたい気持になって、丁度今日は昼で学校も終わる頃だという事を確認した俺はまず、みゆきに連絡を入れた。

数回のコールの後、みゆきが出た。

「もしもし?慶一さんですか?」

「ああ、俺だ。みゆき、俺の忘れてた事をあやのに伝えてくれてありがとうな?おかげで助かったよ。」

「い、いえ・・・。慶一さんに心配事があっては家で楽しんでいただけないかも、と思った私の個人的考えによるものですから・・・。もし、ちゃんとお礼をしたいという事であれば、それは私の伝言を実行してくれた峰岸さんにお伝えすべきだと思いますよ?」

「そっか、それもそうだな・・・。分かった、後であやのにもちゃんと連絡いれて礼を言っておくよ。でも、俺の忘れた事に気付いてくれた事にだけは礼を言わせてくれよ?ありがとな、みゆき。」

「それが良いかと思いますよ?それと、その・・・恐縮です。」

最後に少し照れているらしいみゆきに俺は

「はは、お前らしいな。それじゃみゆき、これで切るぞ?俺も一日も早く立ち直って見せるから、みんなともう少しだけ待っててくれな?」

そう返すと、みゆきも

「・・・はい。その日をお待ちしています。くれぐれもお大事に、慶一さん。」

そう言ってくれたので、俺も努めて明るい声で

「ありがとう、みゆき。それじゃな?」

そう言うと、電話を切ったのだった。

そして、次にあやのへと電話をかけた俺だった。

あやのはみゆきから俺からの電話がある事を教えて置いてくれたのだろう、すぐに電話に出た。

「もしもし？慶ちゃん？高良ちゃんから電話かかってくると聞いて待ってたわ。」

「あやの。いつもだけど、今回も世話になっちゃったな、ありがとな。」

「ふふ。どういたしまして、それで？高良ちゃんの所で楽しんできたんでしょ？少しは元気出た？」

あやののその言葉に俺は苦笑しつつ

「はは・・・楽しんできたって言うか、元気付けてもらって来たっていうか、まあ、そんな感じだけど、確実に元気はもらえたと思ってるよ。」

そう返すと、あやのは嬉しそうな声で

「そう？それならよかったかな？私も少しは慶ちゃんの役に立たなくっちゃね。」

そう言ったのだった。

俺はその言葉に感謝を感じつつ

「おいおい。お前はちゃんと役に立ってくれてるよ。俺はずっと感謝してるんだぜ？だから、ありがとうな、あやの。」

俺の心の中の素直な気持を伝えると、あやのは

「ふふ。なんだか照れちゃうわね。どういたしまして。かな？何にしても、早く元気になってね？あ、それと、明日からまたいつものようにお邪魔してもいいかな？」

そう言って来たので、俺は

「もちろんだ。俺に気を使ってくれる気持は嬉しいけど、やっぱり皆がいつも通りなのが安心できるからな。って今の俺が言う台詞でもないんだが。」

苦笑しながらそう言うと、あやのは笑いながら

「そうよね。でも、いいのよ？慶ちゃんには辛い事があったんだから立ち直れるまでは無理しなくてもね。その分、私達が普通にしてあげるから。」

そのあやのの言葉に不覚にも涙が出そうになったが俺は気を取り直して

「・・・そうだな、ありがとう。とにかく、お前にも一言礼が言いたかったからさ、電話で悪いんだけどな。」

そう言うと、あやのは優しい声で

「いいよ。そうやって私達に声がかけれるくらいになってきてるんだものね。あの事件の当日に比べたらかなりの回復だと思うわ。」

そう言ってくれた。

俺はそんなあやのの気持が嬉しくてありがたくてあやのに

「そうだな・・・。でも、もう少しだけ・・・時間が欲しい。悪いな、あやの。」

そう返しつつもまだ立ち直りきれていない自分を自覚したのだった。

あやのはそんな俺の心の葛藤に気付いているのか俺に

「わかってるわ。だから、ゆっくり傷を癒してね？そろそろ私達も下校だから、これで切るわ。」

そう言いながら励ましてくれた。

俺はそんなあやのに

「ああ。じゃあ、気をつけて帰ってくれな。じゃあ、また明日。」

そう言って電話を切ったのだった。

あやのｓｉｄｅ

昨日、高良ちゃんからの電話をもらって慶ちゃんが高良ちゃんの家に来ていること、そして、一晩泊まって行く事を聞いた。

それと同時に慶ちゃんが猫ちゃん達の事を忘れているみたいだからと私にいつものお世話をしてあげて欲しいと高良ちゃんから頼まれたのだった。

そういう事ならば、と私はいつも通り慶ちゃんの家に行って猫ちゃん達の面倒を見てから書置きを残して学校へと行ったのだった。

翌日、高良ちゃんの家から帰宅した慶ちゃんは私の書置きに気付いたみたいで、私と高良ちゃんにお礼の電話をしてくれたのだった。

久しぶりに聞いた慶ちゃんの声だったけど、徐々に元気を取り戻している事がわかったので、”ほっ”と胸をなでおろしていた私だった。

慶ちゃんの様子に少しだけ上機嫌になった私だったけど、そんな私に気付いたみさちゃんが声をかけてきたのだった。

「なあ、あやのー。さっき慶一と電話してたんだよな?あいつ、どんな様子だったんだ?」

みさちゃんのその言葉に私はにっこりと笑うと

「そうね、あの一件の時よりは大分声は元気そうだったわ。だから、私も少し安心してたんだけどね。」

みさちゃんにそう言うのだった。

みさちゃんはそんな私の言葉に笑顔を見せながら

「そっかー。それはよかった。あいつの落ち込んでる姿って見てて辛かったかんな。昨年の時も似たような顔してた時あったけどさ、今回の比じゃなかったからなあ・・・。」

そう言うみさちゃんに私も頷きながら

「そうね。あんな悲しい顔はもう見たくないかも、って思えるしね。」

そう言う私にみさちゃんも頷いて

「ああ。やっぱあいつは笑ってなくっちゃなー。私はあいつの笑顔が大好きだかんな。それに仲間だしな。」

そう言うみさちゃんに私は頷きながら

「うん。大切なお友達。そんなお友達だから、元気になって欲しいって思うもの。」

そう答えると、みさちゃんは何事か考え込み始めたようだった。

しばらく考え事をしているみさちゃんだったけど、ふいに私の方を向くと

「なあ、あやの。これから午後は時間あるよな?だからさ、これから慶一の家行かねえか?ちびっ子や柊も行ってるんだし、私らもあいつを元気付けてやりてえよ。」

そう言ってくるみさちゃんに私はどう返事をすべきか悩んでいた。

慶ちゃんは確かに元気になってきたけど、それでもまだ心に傷を残している。

そんな状況の慶ちゃんに私達が会いに行って本当にいいのだろうか

？と。

そうして悩んでいると、みさちゃんが私に

「あやのー。何を悩んでるのか知んねえけどさ、こういう時は悩むより行動してみるべきだと私は思うゼ？それでだめだったんなら、仕方ねえよ。けどさ、余計な事考えてるよりはいいと思うゼ？」

そんなみさちゃんの言葉が私の背中を押した気がした。

私はみさちゃんの顔を見て１つ頷くと

「そうね。みさちゃんの言う通りかもしれないわ。どうなるかはわからないけど、当たってみましょ？」

そうみさちゃんに言う私だった。

そんな私の答えに満足げに頷いたみさちゃんは

「おっし、それじゃいっちょ慶一の家に行ってみっか。私としては慶一をそのまま家から連れ出してやりたいけどなー。」

そう言ってにかっと笑いながら言うみさちゃんに私も頷くと

「外、か・・・。みさちゃんの言う通りかも。部屋に篭って落ち込んでばかりいたって精神衛生上としてもよくないわよね。何にしても慶ちゃんの所へいきましょ？」

みさちゃんにそう言うと、みさちゃんも頷いて

「そうだな。そうと決まったら行くか、あやの。」

私にそう言って走り出すみさちゃんに驚きつつ

「み、みさちゃん、待ってー!?」

そう言いながら私はみさちゃんの後に付いて走って行くのだった。

慶一ｓｉｄｅ

あれから俺は、家の中の掃除をしたり、本を読んだりしながらゆっくりと心を落ち着けていた。

そして、昼食を済ませてから2時間くらい経った頃、家の呼び鈴が鳴るのが聞こえて、俺は玄関にお客さんの相手をする為に足を向けた。

そして、「どちら様ですか?」と声をかけながら玄関を開けると、そこには笑顔のみさおと息切れしてつらそうなあやのの2人が立っていた。

俺はそんな2人の姿に驚いて

「みさお?あやのもどうしたんだ?急に家になんか来てさ。」

その俺の言葉にみさおは笑いながら

「おっす、久しぶりじゃん、慶一。あやのからもお前の様子を聞いてさ、お前を元気付けてやりたいと思ってさー、あやのと一緒にお前の家に来たんだよ。」

そう言うみさおの後にようやく息を整えたあやのが俺に

「ふう・・・そういう事なの。泉ちゃんや柊ちゃん、高良ちゃんも慶ちゃんの事を心配して元気付けに来てたでしょ？だから、私達もそうしてあげたいって思って来たのよ。」

俺はそんな2人の言葉を聞いて、驚きつつ

「そ、そうだったのか。悪いな、2人とも。わざわざ俺の為にさ。」

俺のその言葉にみさおは笑顔で

「気にすんなって。いつもは私がお前に宿題とかの事で世話になってんだ。こういう時位、私だって役立ちてえよ。」

そう俺に言う。

そして、あやのも俺に

「みさちゃんの事もそうだけど、私も慶ちゃんには色々と助けられてきたからね。命を救ってもらった事だってあったくらいだもの。こういう時こそ私達が頑張らなきゃって思ったの。」

ニコニコと笑いながら言うあやの。

俺はそんな2人の気持が嬉しくて照れ笑いしながら

「べ、別に俺は大事な仲間の為に何かをする事は苦なわけじゃないさ。それでお前らの役に立ってたんならそれでいいんだよ。」

そう言った後、更に

「それで?家に上がってのんびりして行くのか?それならそれで、こっちもお茶とか出させてもらうけど?」

俺の言葉にみさおは首を振って

「いや、それも惜しいけど、それはまた今度でいいや。その代わりといっちゃなんだけどよ、私らと外に遊びに行かねえか?うじうじ家に篭ってちゃ、元気になるものもなりゃしないと思うゼ?」

そう提案してきた。

そして、あやのも俺に

「この事はみさちゃんと私で決めた事なの。でも慶ちゃんが無理だって言うなら・・・私達は無理強いはしないつもりよ?」

俺を外に連れ出す経緯を説明しつつ、俺に選択権を与えてくれたあやの。

俺はそんな2人を見て少し考え込んでいたが、やがて腹を決めると

「・・・なら、2人のその提案に乗せてもらうとしようか。」

そう2人に答える俺だったが、その答えに驚きの表情を見せつつあやのがおそるおそる俺に

「・・・いいの?慶ちゃん。無理してるんだったら断ってくれても

構わないのよ？」

そう聞いて来たので、俺はその言葉に首を振って

「・・・正直まだ、はしゃぎまわれるほどな訳じゃない。でも、２人の言う通り、このまま家に篭っているのも良いという訳じゃない。だから、俺も思い切って２人の提案に乗ってみようと思ったんだ。これは俺の意思でもあるんだから、心配はないよ。」

そう言うと、２人ともほっとしたような表情を見せた。

そして、俺はそんな２人に微笑みを向けてから

「それじゃ、ちょっと用意してきちゃうからキッチンで待っててくれないか？」

そう言って２人にとりあえず家に上がるように促した。

「わかった。それじゃ、待ってるぞ？慶一。」

「急がなくていいわよ？ゆっくり準備してきてね？」

そう言って２人とも家に上がりつつ、俺にそう促したのを聞いて、俺も頷いて自分の部屋へと戻っていった。

そして、２人のそんな気持をありがたく思いつつ、俺は出かける準備を済ませて２人の所へと戻った。

「ただいま、２人とも。それで、外に出かけるという事だけど、どこへ行こうと考えてるんだ？」

キッチンにいる2人に俺は目的地について尋ねると、みさおが俺に

「それなんだけどよー。今からの時間じゃ遠い所は無理じゃん？でも、幸い、私らの近所にいい所があるからそこへ行こうか、ってあやのと話してたんだってヴァ。」

そう言うと、あやのも頷いて

「ふふ。そうなのよ。慶ちゃんも知ってるでしょ？糖部動物公園よ。」

その言葉に俺も自分の通う学校に行く際に通り過ぎてる駅の名前を思い出して

「あ、そうか、確かにあそこは少し小さいけど立派に外遊びができる遊園地だったな。」

と、掌をポンと打ちながらそう言うと、みさおは笑いながら

「そうそう。わかってんじゃん、慶一。そう言う訳だから、今からそこへ出発だ！」

そう力強く宣言するみさおに俺も頷きで答えるのだった。

そして、俺達は糖部動物公園へと出発したのだった。

電車で移動し、糖部動物公園へとたどり着いた俺達は、入園券を買って中に入り、俺はみさおに

「とりあえず、どうするんだ？ここは動物園と遊園地がいっしょの

場所だからな。」

そう尋ねると、みさおは少し考え込んでいたが、とりあえず考えが纏まったみたいで、俺の方を見て

「時間的には動物園は回ってられる余裕なさそうだから、今日は遊園地の方だけにしとこうゼ？」

そう言ってあやのにも同意を求めていたが、あやのもその考えに頷くと、それを見た俺も同じように頷いて

「じゃあ、それで行くか。遊園地は奥の方だし、早速行くか。」

そう言うと、みさおは満面の笑みを浮かべて

「おっしゃ、行こうゼ？慶一、あやのー！」

そう言って俺とあやのの手を取ると、俺達を引っ張って走り出した。

俺とあやのは苦笑しつつ慌てながら引っ張られるままに付いて行く。

「おいおい、みさお、慌てなくっても乗り物は逃げたりしないぞ？」

「そうよ？みさちゃん。楽しみなのはわかるけど、私達にはちゃんと目的って物がある事を忘れてないわよね？」

そう俺達が言うと、みさおは前を向いたままで

「わかってるよー！けど、楽しい時間は待っちゃくれないんだゼ？それにここ何日かは慶一とも会えず、皆も気を使って遊んだりも出来なかったんだから、その分は付き合ってもらわねえとなー。」

そのみさおの言葉にあやのは慌てながら

「み、みさちゃん！！」

とみさおに激しく叱咤し、俺もまた心にグサリと針が刺さるような感じになって俺は思わず

「・・・悪い、みさお。俺のせいだよな・・・ほんとにすまん・・・。」

みさおに詫びなきゃ気がすまなくなった俺はそう言葉を発した。

そんな俺の言葉を聞いてみさおはビクリとしながら

「わ、わりい、慶一・・・お前も辛かったって事わかってたはずなのに無神経な事言っちまった・・・。悪気はなかったんだ、慶一、ほんとにごめん・・・。」

そのみさおの謝罪を受けながら俺は複雑な心境のままみさおに言うべき言葉を探っていたがとりあえず

「・・・いいよ。それでもお前は俺を元気付けたいと思ったから、俺をここに連れて来てくれたんだろ？お前のその気持は嬉しいし、嘘はない言葉だとわかってるから、だからもういいよ、みさお。」

そう言うと、みさおは相変わらず前を向いたままだったが、少し元気を無くしたような感じだった。

そんな感じで少しだけ空気が重くなってしまったのだが、俺はこの

ままじゃいけない、と思い逆にみさおとあやののの手を引っ張って俺が先頭に立って2人を引っ張りながら

「おいおい、俺を元気付けてくれる為に俺を誘ってくれたんだろ？そんな辛気臭い顔してないで元気出せよ？今度は俺がお前らを引っ張っていくからな？それっ！！」

そう言って走り出す俺に2人は困惑しながらもそれでも俺の意図を察してくれたようで

「・・・よっし、気を取り直して行くぞー！！慶一、さっきの詫びも含めて今日は飲み物とか奢るゼ！？」

「そうね。せっかく楽しむ為に来たんだから、暗い顔はしてられないわ。さあ、見えて来たわよ？まずはどれから乗るの？」

あやののその言葉にみさおはまずコーヒーカップを指差して

「おっし、まずは一番近い、あれからだ、行くゼ！？」

そう言って俺達2人の手を引いて更に走る。

俺も苦笑しつつもさっきまでの嫌な空気を吹き飛ばすつもりでみさおに引かれるままにコーヒーカップに乗った。

そして、コーヒーカップが動き出すと、みさおはこれでもかというくらいにぐるぐるとハンドルを回し始めた。

俺とあやのはその様子を見て慌ててみさおを止めようと声をかける。

「こ、こら！やめろ、みさお！やりすぎだ！！うわわわっ！」

「み、みさちゃん、やめて！き、気持悪くなるよ・・・。」

そんな俺達の静止の声もなんのその

「わはははは！そら、まわれまわれー！！」

そう言いながらぐるんぐるんとハンドルを回しつづけたのだった。

そして、俺達もそうだが、やった本人すらふらふらになりながらコーヒーカップを降りると、俺は無言でみさおの額にデコピン（強）を叩きこんだ。

「ヴァっ！？い、痛い・・・ごめんよ、慶一、あやのー・・・」

涙目になりながら俺達に謝っていたみさおだったが、あやのもすっかり機嫌を悪くしてしまい、みさおの謝罪も届いていないようだった。

「もう、みさちゃんたら。知らないっ！」

そうやってそっぽを向くあやのの態度に凹むみさおを見ていたが、俺は軽いため息を1つついて

「とりあえず、しっかり反省するんだな、みさお。それじゃ、次行くか。あれなんてどうだ？」

そう言って俺が指差したのはミラーハウスだった。

「お？ミラーハウスかー。面白そうじゃん？」

「そうね。行ってみましょうか。」

そう言って2人も同意してくれたので、俺は2人を伴ってミラーハウスへと入っていった。

ここで、みさおは1つの提案をしてきたのだった。

「なあ、慶一、あやの。3人で勝負しねえか？」

その言葉に俺とあやのは首を傾げながら「「勝負？」」と2人して聞き返すとみさおは頷いて

「ああ。3人で誰が一番早くこのミラーハウスから出られるかの勝負だ。負けた人は勝った人に飲み物を奢るって事でどうだ？」

その言葉に俺とあやのも顔を見合わせて軽いため息を1つついたが、俺はみさおに

「よっし、その勝負、受けるぞ？あやのはどうする？」

俺の言葉にあやのはちょっと考えていたみたいだけど、すぐに頷いて

「2人がやるのなら私もやってみようかな？」

そう言ったので、俺達も頷いて

「おーっし、そんじゃ行くぞ？3．2．1でスタートと合図したら飛び出す。いいな？2人とも。」

そう言うと、2人も頷いて

「それでいいゼ！」
「慶ちゃん、合図お願いね？」

そう言ったので、俺も2人に頷くとカウントダウンを開始した。

「よし、行くぞ？3！2！1！スタートっ！！」

そのスタートの合図で飛び出す俺達だったが、次の瞬間”ガンッ！！”という音が響いたかと思うと、頭を抱えてうずくまる俺達3人の姿があった。

「・・・痛たた・・・いきなりミラーかよ・・・。」
「すげえ痛かったってヴァ・・・。」
「あうう・・・。」

いきなり出鼻を挫かれる展開になったが、気を取り直して再び競争が始まった。

そして、そのつど鏡に幻惑されつつもなんとか出口までたどり着いたが、結果はあやのの1人勝ちになったようだった。

「むう、やるな、あやの。」
「まさか負けると思わなかったってヴァ・・・。」

俺達2人の言葉にあやのはクスクスと笑いながら

「最初は慌てちゃったけど、その後はじっくりと行ったのが良かったんだと思うわ。それじゃ、2人には何かジュースを奢ってもらわなくちゃね？」

と言うあやのの言葉に俺達2人は顔を見合わせながら苦笑したのだった。

そして、次に行ったのはお化け屋敷。

ここは、俺が別段怖がる事ももなく、だったのだが、以外にもみさおもこれにはちょっと弱いみたいで

「うひゃう！怖えよう、慶一・・・。」

「きゃあ！慶ちゃん！怖い！！」

悲鳴をあげていたのだが、あやのは元々怖がり立ったのもあって、みさおの悲鳴に感化されて同じように悲鳴をあげて俺に抱きついて来た。

俺はそんな2人を苦笑しつつも受け止めてやりながらみさおに

「みさお、お前、前回の肝試しの時はあんまり怖がってなかったのに、どうして今回のは駄目なんだ？」

そう尋ねると、みさおは涙目の顔を俺に向けて

「わ、私はああいうのよりもこうやって脅かされる方のが怖えんだよ！ああいうのは何かいるかも、っていう心の準備がある程度あるからいけるけどさ・・・こういうのはそういうの一切なしでどこから脅かされるかわからねえんだもん・・・。」

俺にそう言うみさおの言葉に俺は何となく納得できたのだった。

「ま、確かにお前の言う事もわかるな。こういうのは予測が出来な

い事の方に恐怖を感じるものだしなあ・・・。」

俺の言葉にあやのもうんうんと頷いて

「そうよね・・・私も苦手よ・・・。」

そう言ってやっぱりみさお同様涙目な顔を俺に向けていうあやの。

俺は2人に

「でも、そうやって我慢しないで大声出す方が良いんだぞ?前にそんな実験をテレビでやってたのをみた事あったからな。叫び声を我慢する事でより恐怖を感じるようになるらしいんだよな。」

そう説明したのだが、そうこうしているうちに出口へと辿り付く俺達だった。

そして、俺の説明に2人は感心して、俺に尊敬の眼差しを向けていたのを、俺は照れつつも視線をそらしたのだった。

その後お化け屋敷を後にした俺達は次は絶叫マシンに乗ろうという事になり

「さあて、次はここの名物とも言える木製コースターレジーナに乗ろうぜー!」

と言う、みさおの提案により、俺達はジェットコースターへと向かったのだった。

「木製ってのがまた珍しいよな。俺も興味はあったんだが。」

コースターを見上げながら俺がそう言うと、あやのは

「私は何回か乗った事があるかな？みさちゃんともここは結構来てた所だから。」

そう言ってにっこり笑っていた。

そうこうしているうちに俺達の番が来たのでコースターに乗り込む。

俺を真中に両隣にみさおとあやのの２人が並ぶ格好となった。

そして、諸準備を終えていよいよスタートしたのだった。

高いところまでゆっくりと上っていくコースター。

俺は動くコースターから周りを見渡してみた。

そこからの眺めもまたいい感じで、俺はしばらくそんな景色に見入っていたのだった。

そして、ぼーっとしていたらしく、頂上にたどり着いた事に気付かなかった俺は、身構えが一瞬遅れた。

一気に加速しだすコースターに思わず驚いて

「う、うぉわっ！！」

と情けない悲鳴を上げていたのだった。

そんな俺の失態を見て笑うみさおとあやの。
それを苦笑しながら俺も見つつ、コースターのスピードを楽しんだのだった。
そして、コースターを降りてから、さっきの事でみさおとあやのに
「慶一、お前、情けなかったぞ？『うぉわっ！』とか言っちゃってさ。」
「くすくす。あの顔は本当に面白かったわね。」
そう言って笑われた俺は、軽いため息を1つついて
「情けないのは認めるから、勘弁してくれよ・・・はあ・・・。」
そう言って凹んでいたのだった。
その後も色々、時間近くまで乗り物に乗って楽しんだ俺達だったが、最後に観覧車に乗ろう、と言う事になった。
「最後の〆でこれに乗ってこーゼ？」
と言うみさおの言葉に俺達も同意して観覧車へと乗り込んだのだった。
ゆっくりと上がっていく観覧車から夕焼けに染まる外の景色を俺達はしばらく無言で眺めていたが、俺はふいに2人に向き直ると
「・・・みさお、あやの。今日はありがとうな。あの時からずっと家に閉じこもりがちだった俺だったけど、2人のおかげでいい気晴

らしができたよ。」

そう言って2人に頭を下げた俺だった。

そんな俺に2人は笑顔を向けながら

「あはは。ちょっと強引にお前を外に連れ出すことになっちまったけど、少しでも元気になってくれたんなら私らも嬉しいからな。」

「そうね。ある意味賭けだったんだけど、上手くいったから良かったわ。また1つ慶ちゃんの為にしてあげる事ができたものね。」

そんな2人の言葉に俺も感謝の気持で胸を一杯にしながら

「ありがとう。2人とも。また少し俺は2人にも元気をもらえた。おかげでもう少し時間がかかるかもだけど、立ち直りのきっかけにできそうだよ。頑張って立ち直ってまたみんなのいる学校へ戻るから、それまではもう少しだけ、待っていて欲しい。そして、また普通に過ごせるようになったその時には・・・今度はもっと大きい遊園地に皆で行こう。その事を今日はここで2人に約束させて欲しい。」

そう伝えると、2人とも頷いてくれて

「わかったゼ。私らはお前が学校に戻るのを待ってるから、また元気な姿を見せてくれよな。そして、今言った約束を忘れんなよ?」

「ちゃんと心の整理をつけられるその時まで、頑張ってね?慶ちゃん。そして、忘れないで?あなたの側には私達がいるんだから。」

そう言ってくれる2人に俺も頷いて

「ああ。わかってる。それもまた、俺の励ましになってるのは事実だからな。俺にとって物凄く心強いよ。」

そう言うと、２人も笑顔で頷いてくれたのだった。

今日もまた、俺の心を癒してくれる為に２人の旋律が俺の側に来てくれた。

その２つの旋律の優しさに俺は更に心が元気になるのを感じながら、遊園地を後にしたのだった。

そして、きっと立ち直ろう。

みんなの前に戻ろう、そう改めて誓う俺だった。

あやのｓｉｄｅ

今回の慶ちゃんからの電話、そして、みさちゃんの行動が今日の私達の行動につながり、そして、慶ちゃんを更に元気付けてあげる事につながったようだった。

私は今日の事を思い出しながら心の中で

（慶ちゃんの為に泉ちゃん達が行動を起こしていた事は知っていたけど、私も今回は思い切っちゃたわよね。でも、結果として慶ちゃんの為になったからよかったかな？慶ちゃんはあの時に比べて大分元気になってきてるのも感じられたしね。明日からはまた普通に慶ちゃんの家に行って猫ちゃん達のお世話もしてあげなきゃね。慶ちゃん、学校に出てくる日を私は待ってるよ？それまでは心の傷をゆっくりと癒してね？）

そう考えながら家へとみさちゃんと一緒に帰る私だった。

みさおｓｉｄｅ

あやのと慶一との電話でのやり取りの様子を見てて私は何だかいても立ってもいられなくなった。

そして、綾乃を焚きつけて私は思い切って慶一を外に連れだして気分転換させてやろうと思ったのだった。

結果は慶一が私らの話しに乗ってくれた事で上手くいった。

（ちびっ子達も慶一の為に元気を取り戻させてやる為に行動を起こした。私はあいつみたいに思い切れなかったけど、今日のあやのと慶一の電話のやり取りを聞いていて何だか行けそうかも、って思って思わず行動しちまったなー・・・。でも、あいつは私らの誘いに乗ってくれた。作戦としてはおおむね成功だよなー・・・。でも、ちょっとあいつに対して無神経な事も言っちまったよな・・・それはちゃんと反省しねえとな・・・。でも、あいつは少し元気を取り戻してくれたみたいだから良かったゼ。最後にした約束もちゃんと果たしてもらうためにはあいつには早いとこ元気になってもらわねえとな。待ってるぜ？慶一、もう一度元気な姿で私らの前に帰って来てくれよな。）

１部自分の軽率な発言を反省しつつも私はあいつがまた元気な顔を見せてくれる事を、学校に出てきてくれる事を望みながらあやのと一緒に家へと戻ったのだった。

癒しの旋律達、第４話～みさおとあやののの気遣い～（後書き）

次は前回の予定通りとします。

癒しの旋律達、第5話～アニ研部員達の来訪と暴走～（前書き）

ようやく最新話、あがりました。
次は短編を書くと思いますので本編が少し遅れます。
では、本編をどうぞ。

癒しの旋律達、第5話～アニ研部員達の来訪と暴走～

みゆきの家からの帰りに俺は、家で飼っている猫の事をすっかり忘れてしまって、その事を思い出して焦っていた。

だが、俺の心配も、みゆきの機転によってあやのに俺の忘れている事を伝えてくれ、猫の問題は解決したのだった。

その後、その事をみゆきとあやのに連絡して礼を言う俺。

2人の気遣いに俺はとてもありがたい気持になったのだった。

そして、俺とのやり取りを聞いていたみさおが、俺を元気付けようとあやのと一緒に家までやって来て俺を外に連れ出した。

俺もまた、みさおに言われた通り家の中でうじうじしてばかりもよくないと思い、みさおの誘いに乗ってみる事にしたのだった。

その後は糖部動物公園へと繰り出した俺達は、3人で気晴らしをしたのだった。

また少し自分の心が癒される感覚を味わいながら、俺は2人に改めて礼を言い、頑張って立ち直ろう、と心に誓ったのだった。

そして、その翌日陵桜学園、アニ研部室にて・・・・・・

みくｓｉｄｅ

今日はやさことやまとさん、パティもバイトの日だったので、私と

たまき、ひよりん、いずみさんの４人で部室で色々な事を話していたのだけど、その話の中でひよりんから慶一先輩の事が出てきたのだった。

「・・・そういえば、慶一先輩はどうしてるっスかね？泉先輩が慶一先輩を元気付ける為にゆーちゃんと一緒に慶一先輩の家に乗り込んだという話を聞いたんですが、その後は柊先輩達や高良先輩達、峰岸先輩達らも慶一先輩を元気付ける為に会いに行っていた、って聞いてるっスよ？」

ひよりんの言葉に私も頷いて

「確かにお昼休みに泉先輩達と話している時にそんな話が出てたね。積極的に真っ先に行動したのは流石先輩だと思うけど、泉先輩達の実績があるんだし、そろそろ私達も行動を起こしてもいいかもしれないね。」

私のその言葉にたまきも頷きながら

「そうだよね？それに私達は他の先輩やひよりん達よりもまだ付き合いは浅いけど、先輩は私達の事も友達だと言ってくれたし、なにより、アニ研入部の時の恩もあるもんね。」

そう言うと、そんな私達の言葉を聞いていたいずみさんが

「・・・私も、先輩の言葉があったから自分の趣味にも自信が持てるようになったものね。それに、私の事も先輩は仲間だ、って言ってくれた事もとても嬉しかったし。」

私達３人の言葉に考え込んでいたひよりんが

「みく先輩、たまき先輩、委員長。今度は私達が動きましょう。先輩の為に何が出来るかはわからないっスけど、それでも先輩の為に何かしましょうよ。」

そのひよりんの言葉に私達もお互いに頷きあうと

「そうだね、今こそ私達で少しでも先輩に恩返しする為に・・・。」
「先輩の心の傷を癒すために・・・。」
「私達をも仲間と呼んでくれた先輩の為に・・・。」

私を含めた3人がそう言うと、ひよりんも頷いて

「私に友人をくれた、そして、受験の時にも力になってくれた先輩の為にも・・・。」

そして、私達は全員で声を揃えて

「「「「先輩を元気付けよう!!（るっス!!）」」」」

4人が全会一致でそれを決意したのだった。

そして、具体的にどうするのかを私達は話合い始めた。

「それで、具体的にどうする?」

私が皆に話しを振ると、みんなは一様に考え込み始めた。

私もまた、皆に意見を振りつつも考え込み始める。

そして、少ししてひよりんが何かを思いついたらしく声をあげた。

「そうだ！今日は一晩先輩の家に泊まりに行って家事とかを手伝ってあげましょうよ。」

その言葉に私達は慌てつつ

「ち、ちょっと待ってよ、ひよりん。泊まる、って簡単に言ってくれるけどさ、先輩以外は私達全員女の子だよ？流石にそれはまずいんじゃ・・・。」

その言葉にうんうんと首を振るたまきといずみさん。

そんな私の言葉にひよりんは

「だーいじょうぶっスよ。先輩の家にはパティがホームステイで一緒に暮らしているんですから。それに私も先輩とは泊りがけの旅行だって行ってるんスよ？しかも2回も。でも、そんな中でも先輩は凄く信頼のできる人だったっス。危険な事などなにもないっスよ。むしろ、私らの暴走で先輩を困らせる事はあったっスけど・・・。」

最後は苦笑しながらそう言うひよりんの言葉に驚きながら

「え？ひよりんて先輩と一緒に泊りがけの旅行に行った事あったの！？」

「えー？いいなあ・・・ちょっと羨ましいかも・・・。」

「で、でも、それは先輩の周りに田村さん以外にも人がいたからじゃないの？そう言う状況なら先輩が手出しとか出来なくっても不思議はないと思うけど・・・。」

と、3人してひよりんにそう言うと、ひよりんは首を振って

「そんな事はないっスよ。海の時だって先輩は命がけで猪から他の先輩達を護ったりもしたし、温泉旅行でも地元の性質の悪い男達にちょっかいかけられた時だって私達を助けてくれた人なんですよ？それに・・・まあ、なりゆきっスけど、泉先輩の罠にはまって一緒に混浴の温泉に浸かったりもしましたが、そんな時でも先輩からは危険な空気は感じなかったっスからね。」

ひよりんのその言葉に私達は再度驚きながら

「・・・え!?ひ、ひよりん、こ、混浴って・・・そんな事、したの？」

「うわー・・・大胆だね、ひよりん・・・。」

「そ、それは流石にやりすぎじゃ・・・先輩は何も言わなかったの？」

そう言うと、ひよりんは苦笑しながら

「あはは・・・1回目の時は先輩が先輩のお父さんに騙されて私達と鉢合わせしたようなものだし、2回目は何も知らない先輩の所へ私達が泉先輩に騙されて行ったようなものだからねー・・・だから、どっちも不可抗力だったんだよね。まあ、それでも私達も水着はちゃんと着ていたから結局はプールとかにいるのと一緒だったんであんまり意識はしなかったっスけどね。」

そんなひよりんの言葉に私達も顔を見合わせて困惑していた私達だったが、先ほどのひよりんの言葉の中にスルーできないワードを聞いて私達は

「それと・・・あ、あのさ?ひよりん。さっきの言葉の中に無視できないワードがあったから聞いてみたいんだけど、猪って・・・?」
「先輩が命がけで護った、って言ってたよね・・・?」
「・・・何かかなり・・・ただ事じゃない感じなんだけど・・・。」

そんな私達の言葉にひよりんも苦笑しながら

「その事っスか?後で聞いた話っスけど、かがみ先輩、高良先輩、日下部先輩、峰岸先輩、それに永森先輩の5人が夏の旅行に行った時に慶一先輩と山へ登ったんですが、その時に永森先輩が猪に襲われたみたいで、その猪を追い払う為に慶一先輩が猪と戦ったらしいんスよね。結果は怪我はしたけれど見事に仕留めたらしいっス。その日の夕食に先輩の仕留めた猪の肉を食べたっスからね。」

その言葉に思わず絶句して冷や汗をたらす私達。

「・・・先輩って凄いんだね・・・。」
「というか、人間って猪倒せるの・・・?」
「あ、あはは・・・あ!それじゃ田村さんが書いたあの漫画のネタって、ひょっとして?」

いずみさんのその言葉にひよりんは急に焦り出し

「え、えっと、その、なんと言いますか・・・その時の事を想像しながら、ちょっと・・・。」

そう言うひよりんに私達は

「そうか、そうか・・・あれはそう言うネタだったのか。後でもう一回あの漫画見てみよう。」

「私ももう一回確認してみたくなったかな？」
「で、でも、あの漫画のアクションは田村さんの想像なんでしょ？」
と言う私たちにひよりんも複雑な表情を見せつつ
「うーん・・・かがみ先輩達が見た一部始終の状況を聞いて私なりにアレンジしてみたっスけど、後で永森先輩にこの漫画が見つかって問い詰められた時に確認させてもらいましたが、大体このような感じだったらしいっスよ？」
と言うひよりんの言葉に私達は漫画のシーンを想像して
「・・・うーん・・・まるで漫画みたいだよね、でも・・・かっこいいかも・・・。」
「私も生で見てみたかったかも・・・。」
「先輩ってかなりの身体能力あるんですね・・・。でも、毒島先輩の言うようにかっこいいかも・・・。」
3人ともぼーっとしながらそんな事を呟いていた。
そして、しばらくして”はっ”と我に帰った私達は
「そ、それはともかく、私達も先輩の家にはお邪魔した事もあるんだし、問題はないと思うけど。」
「そうだね。一度お邪魔してるんだし、今更って感じだね。」
私たちが同意していると、その同意に焦ったいずみさんは
「せ、先輩達はいいかもしれませんが、私はパティの誕生日にお邪魔した事がある位ですし・・・。」

そう言って渋っていたが、私はそんないずみさんに

「大丈夫だよ。私達もいるんだし、先輩の家に泊まりに行くんじゃなくてパティの家に泊まりに行くって思えばさ。それに、今回は緊急な訳だしね。」

そう、いずみさんに言って聞かせると、いずみさんも少し考え込んでいたが、”ふう”と1つ軽いため息をついてから

「・・・わかりました。確かに今の先輩をほおって置けない事は確かですしね・・・私もお付き合いします。」

その言葉に私達も頷くのだった。

そして、満場一致となった所でひよりんが

「先輩の所へ行く前に私はパティにも声をかけておきますよ。パティもいい加減先輩の事気になっていたみたいですし。駅でパティと合流してから行きましょうよ。」

そう言ってきたので私も頷いて

「わかった。それじゃそっちは任せるよ。それじゃ、私達は先輩の為に何かおいしいものでも作ってあげれるように夕飯の食材を用意しますか。」

「え?でもいいの?私達、人に自慢できる程料理は上手くないよ?」

「なら、私はお菓子でも作ろうかな?」

「ん?いずみさんはお菓子作りが出来るの?」

「あ、はい。とは言っても得意なのはそれだけなんですけどね、料

理の腕は人並み程度ですし。」

最後のいずみさんの言葉に私達が感心していると、その言葉を聞いたひよりんが私達に

「いいじゃないっスか。ようは気持が肝心っスよ。人並みなものでも先輩に喜んでもらえればいいんスから。私も料理はほとんど出来ないっスけど、何かしら手伝わせてもらうっス。だから、胸を張って行きましょう！」

そう言うひよりんの言葉に私達も頷いて

「そうだね。よーし！それじゃ早速行動開始だね。ひよりん、パティへの連絡よろしく！」

「じゃあ、私達は早速買い物に行こうか。」

「そうですね。私もお付き合いします。」

口々にそう言うとひよりんも頷いて

「了解っス！それじゃ早速行動開始と行きましょう！」

その言葉に全員が頷いて部室を出て行く。

そして、そんな中、空気になっていた桜庭先生が

「・・・私もここにいたんだがな。とはいえ、ああまでも皆に心配してもらえる森村は幸せものだな。森村、仲間はこれからも大事にしろよ？」

そう呟いて部室を出て行く桜庭先生の背中には哀愁が漂っていたと

いう事を、その後に他のアニ研部員が見たのだという話を後に聞く事となるのだが、それはまた別の話。

そして、私達は食材の買い物を済ませてパティと駅で待ち合わせをした。

「ミナサンおマたせデス！ワタシもチョウドケイイチのコトがキになっていたトコロですから、コンカイのコトはワタりにフネデスね！」

待ち合わせ場所に現れたパティがそう言って来たのを聞いて私は苦笑しながら

「お帰り、パティ。やっぱりパティも気にしてたんだね。でも、パティも妙な言葉を知ってるよねえ・・・。」

そう言うと、たまきやいずみさんも

「時々パティが外国人と思えない時があるよ。」

「パティは日本文化に相当馴染んでますよねえ・・・。」

苦笑しながらそう言っていた。

そして、更にひよりんが

「お帰りパティ、それはともかく、先輩への連絡はついた？」

そう聞くと、パティはコクリと頷いて

「カエルマエにケイイチにレンラクしましたが、キョウはイエにイ

ルとのコトデス。アンシンしてムカイましょう！」

その言葉に私達もほっと胸を撫で下ろしつつも先輩の家へと向かうのだった。

慶一ｓｉｄｅ

連日押しかけてくるこなた達の相手をしつつ、俺自身も心が癒されて行くのを感じながら徐々に自分が元気になっていくのを実感しながら、もう少しで俺は立ち直れる所まで来ているのだと思えた。

そして、ここ数日の事を思い返しながら俺は今日もゆっくりと心を落ち着けながら過ごしていたが、ふいに俺の携帯に着信が入ったので俺は携帯のディスプレイをチェックすると、そこにはパティの携帯番号が出ていたので俺は電話に出る。

「もしもし、パティか？」

「モシモシ、ケイイチ？しばらくルスにしていてスミマセンでした。ヨテイよりはスコしハヤイデスが、キョウ、ホームへモドります。キョウはケイイチはホームにいるのデスか？」

「ああ。今日は特に出掛ける用事はないからな。そうか、それじゃ気をつけて戻って来いよ？駅の方へは迎えに行かなくても平気か？」

「ノープロブレムです！ミクやタマキ、ヒヨリやイズミとイッショですからシンパイはありませんヨ？あ、それと、オネガイがあるのですが、ヒヨリタチのシュクハクをキョカしてもらえませんカ？」

「ん？ひより達は泊まりに来るのか？まあ、俺は別に構わないが。」

「サンキューデス！ケイイチ！！それではこれでデンワをキリますね？」

「ああ、気をつけてな。」

そう言ってパティとの会話を打ち切って俺も電話を切る。

そして、さっきの電話での会話を思い出して（今日は少し騒がしくなるかもな。）と心の中で考えている俺だった。

それからしばらくして家の呼び鈴が鳴ったので俺はパティ達を出迎えに玄関へと向かった。

「はいはい、っと。お帰り、パティ。それといらっしゃい、毒島さん、山辺さん、若瀬さん、ひより。」

俺の言葉にパティが

「タダイマです！ケイイチ！しばらくヒトリきりでサビシクなかったデスか？」

そう言って、他の４人は俺の言葉に驚きつつ

「あ、えと、こんばんわ先輩。何か私達の来るのわかってたって感じですが・・・。」

「そ、そうだね・・・。私達、誰か先輩に家に行く事言ったっけ？」

「言ってないと思いますが・・・。」

「んー・・・あ！ひょっとしてパティ、先輩の状況確認の時に私達の事言っちゃったんじゃ・・・。」

最後のひよりの言葉にパティはさも当然、というような顔で

「イグザトリィ！そのトオリですヨ？ナニかモンダイアリマシタか？」

そう言うパティにひより達は軽いため息をつくと

「はあ・・・せっかく内緒で驚かそうと思ったんだけどなあ・・・。」

「私達のささやかな計画が・・・。」

「パティは意外と口が軽いのかもしれませんね・・・。」

「サプライズ失敗っス・・・。」

そう言って落ち込んでいた。

俺はそんな４人を見て不思議そうな顔を向けているパティを見つつ、４人に苦笑しながら

「あー・・・まあ、なんだ・・・。４人とも俺の為に来てくれたって事かな？一応聞くけど。」

俺も少しばつの悪そうな顔でそう尋ねると、４人は重々しくコクリと頷いて

「泉先輩達も慶一先輩の為に行動したって聞きました。だから、私達も今回の事で落ち込んでいる先輩の為に少しでも元気付けてあげたいと思いましたから。」

「先輩には色々とお世話にもなってますしね。」

「私も先輩には大切な事を教わりましたから・・・。それに落ち込んでいる先輩の姿がとても辛く感じたので・・・。」

「私は先輩に受験の時には色々助けてもらった恩があります。少しでもその恩が返せるのなら、それが今の瞬間だというのなら私も先輩の力になりたいと思いまして。」

そして、そんな４人の言葉を聞いてパティも

「ワタシもそうしたい、とオモっていましたが、コンカイはワタシのキヅカイがウラメにデてしまいました。ワタシもケイイチのヤクにタチたいとオモっていたトキ、ヒヨリからのデンワをモラったんデス。だから、カエってキタのですヨ。」

その5人の言葉に嬉しい気持になった俺は

「みんなの気持はよく分かった。ありがとうな、俺の為にそんな風に考えてくれて。なら、今回はそんな皆の気遣いに甘えさせてもらっちゃってもいいだろうか?」

そうおそるおそる尋ねると、5人とも自分達が受け入れられた事に驚きの表情を見せつつも

「もちろんです。今日は食事の支度から部屋のお掃除までやらせてもらいますよ?」

「私もがんばりますよ?だから、先輩はくつろいでいてください。」

「私も先輩達と一緒に頑張ります。」

「私も何が出来るかわからないっスけど、皆と一緒にやらせてもらうっス!」

「だからケイイチはドーンとカマエているといいデスよ?」

そう言ってくれる5人の言葉に俺も頷いて5人を家に上げた。

俺は4人に寝るべき部屋へと案内をした。

パティは元々割り当てられた部屋があったのでそこへ行く。

4人は自分達の部屋に荷物等を置いて一段落すると、まずは夕食を

作りにキッチンへと向かったのだった。

俺は４人に言われるままにキッチンへと案内する。

そして、４人にキッチンの場所を教えた頃にパティが着替えを終えてやってきた。

「ソーリィ、ミナさん。ワタシもジュンビバンタンですヨ？それじゃミンナでレッツクッキング、デス！！」

そう言うパティの言葉に４人とも頷いて早速夕食の準備を始める皆を見つつ、俺も軽く食器を出したりして準備をすませた。

そして、５人の様子を少し心配しつつ見守っていた俺だった。

「たまき、それ取って？」
「はいよー。みく、これはこれでいいの？」
「うん。それはそうでいいよ。」
「先輩、これは皮むきしといた方がいいですよね？」
「うん。よろしく、いずみさん。」
「ミク、これのシタゴシラエをヨロシクです。」
「はいよ、パティ。じゃあ、こっちの奴煮込んどくね。」
「先輩、材料は何とか全部切り終わりましたっス。」
「ありがとう、ひよりん。それじゃ次はー・・・・・・。」

そんな風に会話しながら全員で協力しあう姿を見て、俺は気付けば微笑んでいたようだ。

そんな俺の顔に気付いた若瀬さんが

「せ、先輩。なんだか頬を緩めているみたいですけど、何か私たちの行動におかしな所でもありました？」

ちょっと慌てながらそう確認をとってきた若瀬さんに俺も慌てて手を振って

「いやいや、ごめん。そうじゃないんだ。騒がしいけど何だかこの光景がとても嬉しくてね。つい頬を緩ませてしまっていただけだよ。勘違いさせちゃってごめん。」

そう言うと、若瀬さんも少しほっとした顔で

「そうですか。それならよかったです。私達も少しは先輩の役に立てていますよね？」

その言葉に俺は力強く首を縦に振って

「もちろんさ。ありがたいよ。俺なんかの為に皆がこんな風に集まってくれてさ。」

そう答えると、若瀬さんもにっこりと笑ってくれたのを見て俺もほっとしたのだった。

そんなやり取りを交えつつ、食事の準備も出来たみたいだったので、俺達は揃ってテーブルについて早速食事を始めるのだった。

「「「「「「いただきまーす。」」」」」」

と、全員で言った後、俺は早速箸をつけてみた。

今日のメニューは肉じゃがとほうれん草のおひたし、きんぴらごぼうときゅうりの浅漬け、大根の味噌汁だった。

中々和風な感じの夕食を俺は口に運んでみる。

その様子をドキドキしながら見守る5人の姿に俺も少々緊張気味だったが、「お、これは美味い。」と俺が料理の賞賛をすると、5人ともほっとしたような表情を見せつつも喜んでいたのが見て取れた。

そんな皆の姿を見て、俺も再び頬が緩むのを感じていた。

そして、食事を済ませた後は洗い物を済ませた皆が各部屋に散って掃除を行ってくれた。

俺は、そこまでしてくれなくても、と思って皆にそう言ったのだけど、皆は自分達がそうしたいから、と譲らなかったので、仕方なく皆のしたいようにしてもらった。

そして、風呂の準備をしてそれぞれにはいってもらったが、俺が入っている時にパティが

「ケイイチ！ヒサビサにセナカナガしてあげまース！」

と言って飛び込んで来た。

流石に他の４人は真似はしなかったけど、今回もまさに不意打ちだったので凄く驚く俺だった。

そして、その後は何故か、皆俺の部屋に集まっていた。

「へー・・・これが先輩の部屋ですか・・・綺麗に片付いてますねー・・・。」
「先輩は思ったほど物は持っていないんですねえ・・・。」
と言う毒島さんと山辺さんの2人の言葉に俺は照れながら
「ラノベみたいな本とかは結構ある方だけどな。それでもちょっと散らかったらすぐに片付けちゃうからな。」
そう言うと、2人ともしきりに感心していたのだが、更に若瀬さんとひよりも
「うちのお兄ちゃんの部屋なんかかなり散らかってますよ?」
「うちの兄貴の部屋もっスねー・・・。流石は先輩っスね。」
と言う2人の言葉に苦笑しつつ
「そういえば若瀬さんやひよりにもお兄さんが居たんだっけな。うちの兄貴も意外と綺麗好きだから部屋も結構片付いてるよ。でも、ひよりも若瀬さんもそう言う部分は反面教師としていいと思うぞ?」
そう言うと、2人ともしばし考え込んでいるようだった。
すると、普段俺に部屋の事で注意されているパティが
「ケイイチはジブンにもそうデスが、タニンにもキビしいですからネ。ワタシもよくチュウイされますヨ?」
そんな事を言ったので俺は軽いため息を1つつきながら

「お前は言わなきゃ散らかしっぱなしにしてるだろうが。それに、そんなには厳しくしてないつもりだがな。お前にそう思われているのはちょっと胸に何か刺さるものがあったぞ？」

そう言って少し凹んだ俺だった。

そんな俺の言葉にパティも舌を出して笑っていたのを見て再度ため息をついたのだった。

その後は皆で撮った集合写真等を見て、旅行の時の話を聞きたいと言う毒島さん達に俺は旅行での思い出を話して聞かせたのだった。

その中でやはり、猪のエピソードと温泉に関するエピソードは特に詳しく話して欲しいと言われて俺は苦笑しながらもとりあえずその事を話したのだった。

「・・・なるほどー・・・猪の一件は相当にやばかったみたいですね。でも、先輩本当によく生きてましたねー・・・。」

「まったくですよ。そういえば私達は先輩のやっている武術の事は知りませんでしたね。」

「先輩が本当は強い人だ、って言うのも田村さんやパティから聞いて知ったんですしね。」

猪の一件の事を話す3人にひよりが

「実は私は2回目だったりするんスよね。先輩の強さを見たのって。」

そう言うひよりにパティが興味の目を向けながら

「オウ！そうだったんデスか？オンセンでのあれはヒヨリはハジメテではなかったのですネ？」

その言葉にひよりは照れ笑いをしていたが、俺がその先の補足をした。

「ああ。そういう事さ。最初にひよりと会った時にひよりはこうと一緒に不良どもに絡まれていたからな。それを助けたのが最初さ。で、後は温泉旅行中の事、だな。」

その言葉に皆は感心しながらほーっと息を吐いていた。

そして、そんな話をしていた時にパティが

「ソウダ！ケイイチ！あのトキワタシタチのマエでミせたあのメをまたミせてクダさい！ミクやタマキ、イズミにもミてホシイデスから！」

その言葉に俺は困惑しながら

「え？あ、あれか？うーん・・・。」

そう言うと、ひよりを除く3人が

「目、って一体何なんですか？凄く興味ありますけど。」

「まさか、某漫画の忍者よろしくな目が使えるとかそういうのなんですか？」

「私も見てみたいですね。それってすぐに見せれるものなんですか？」

凄く目をキラキラさせながら迫ってくる3人に俺は苦笑しながら

「ちょ、ちょっと落ち着けって。わかった、わかったよ。見せてやるからとりあえず下がってくれ・・・はあ。」

3人を制して軽いため息を1つついた後、俺はおもむろに目に気を集中させ始める。

そして龍眼を発動して3人に見せた。

「・・・おおー・・・凄い。目の色完全に変わってますねー・・・。」

「綺麗ー・・・でも、某漫画の忍者のとは違いましたね。不思議な感じですが・・・。」

「・・・人間ってこんな事もできちゃうものなんですか?」

最後の若瀬さんの言葉に俺は苦笑しつつ

「この技は完全に目を変化させるからな。色は完璧に変わってしまう。後、某漫画の忍者みたいな万能さはないけど攻撃や動きを見切る力は格段にあがるよ。それと、誰でも、って訳じゃない。この技は龍神に連なる者だけが使える技さ。後は、俺の中にも流れている龍神の血も関係あるらしいんだけどな。ふう・・・こいつを発動し続けるのは結構しんどいから、もう解除するぞ?」

そう言って俺は龍眼を解除して一息ついたのだった。

そうこうしながらしばらく色々な事を皆で話していたが、そのうちに俺の旅行でのエピソードと今見せた龍眼が漫画のネタに使えるかもという話にシフトして行き、アニ研部員達は次第に暴走していっ

た。

何だか変な方向へ話が行きそうになっていたので、俺はとりあえず話題転換してその場を収めた。

その後、かなり遅い時間となり、皆は各部屋に戻って眠りにつき、その日を終えたのだった。

次の日の朝にまたいつものようにあやのが猫の世話にやってきてくれて、そんなあやのと毒島さん達が鉢合わせてお互いに驚いていたのだった。

あやのは毒島さん達より一足早くに学校に行き、その後で毒島さん達も学校へと向かう事となったので5人を見送ったのだった。

そして、その時に毒島さん達は俺に

「さて、それじゃ私達は学校へ行きますね。先輩、何だか色々慌しくなってしまってすいません。先輩を元気付けてあげたいと思っていたのに何だかあまりお役に立てなかったかも、とちょっと思っていたりしましたから。」

「目的が結局は達成されてない気がします・・・すみません、先輩。」

「旅行の思い出話とか、アニ研の漫画作りのネタに関してとかになりましたね・・・なんか、すいません。」

「ううん・・・先輩の為にと思って意気込んで来たのに面目ないっス・・・。」

「ソーリィ、ケイイチ。ハメをハズしスギました・・・。」

そんな風に言う5人に俺は苦笑しつつも

「そんな事ないさ。俺の為に来てくれた事、家の事を手伝ってくれた事、食事を作ってくれた事、楽しい話が出来た事。とても嬉しかったよ。皆のその気持がその中にあったから俺にとっても凄く充実した日になった。ありがとうな、皆。後もう少しで俺も立ち直れると思う。今回もそのきっかけをもらえたしな。だから、もう少しだけ待っていて欲しい。きっと俺は皆の前に戻ってみせるからさ。だから、これからも遊びにでも来てくれよ。俺は歓迎するからさ。とにかく、もう出ないと学校遅れるぞ？それじゃ気をつけてな。」

そう言って驚きの表情を見せる5人を送り出す俺だった。

俺はまた1つ心が癒されるのを感じながら、今日の事も忘れずに心の中にしまっておこうと思うのだった。

みくｓｉｄｅ

当初は先輩を励ますために、と意気込んで先輩の家に行った私達だったけど、結局暴走が出てしまい、自分達の考えていた事とは逆の事になってしまった。

先輩の家から学校へ向かう時に先輩にその事を詫びたのだけど、先輩は気にしてない、それ以上に自分を気遣ってくれた事が嬉しかったと言ってくれた。

私はその言葉を聞いてほっとしつつ、先輩の復帰を心の中で望んだのだった。

そして、私は皆に

「いやーそれにしても今回は当初の目的とずれた事になっちゃったから少し焦ったよ。」
「だよね。でも、先輩は喜んでくれたね。だから、一応の目的は達成だよね。」
「そうですね。先輩も昨日よりも今日、って言う感じでまた少し元気になったような気がします。」
「そうっスね。この分ならもう少しで先輩も復帰してくれるはずっス。」
「そのタメにもワタシはケイイチのイエにスんでるのだからこれからもケイイチをハゲましてイクですヨ。」
「そうだね。私達は頻繁には来れないからここはパティに頑張ってもらいますか。お願いね?パティ。」
「オマカセデス!そして、またアニケンでミンナでランチをタベたいデスからネ!」

パティのその言葉に私達も頷いて、そして、その光景をイメージするのだった。

(先輩、待ってますよ?だから早く元気になって学校へ来てくださいね?)

そう心の中で思いながら今日も学業に、部活に、と精を出す私達だった。

先輩の復帰をそれぞれに願いながら・・・・・。

癒しの旋律達、第5話～アニ研部員達の来訪と暴走～（後書き）

最後はこうとやまとのコンビです。
この話を終えて慶一は復活となるでしょう。

癒しの旋律達、最終話～こうとやまとの決意、そして全てを受け止める慶一～

長らくおまたせしてすいません。
ようやく最新話アップです。
では本編をどうぞ。

瞬が突然の事故で他界し、俺はその日から悲しみながら日々を過ごした。

そんな俺を旋律達はかわるがわるに慰め、癒しに来てくれた。

この一週間、皆から元気をもらってきた俺だったが、その甲斐もあって立ち直るまで後1歩と言う所まで心が回復してきた。

回復へもう一押し欲しいと思っていた俺だったが、その事に思いを馳せている時に俺の携帯に着信が入ったので、ディスプレイを確認してみると、電話の主は珍しくやまとだった。

俺はとりあえずやまとからの電話に出る事にした。

「もしもし？やまとか？珍しいな、お前から電話かけて来るのはさ。」

「・・・しばらくね、先輩。ふふ、そうかもしれないわね。」

「それで？俺に用事があってかけてきたんだろ？」

「ええ。私もこうもあれからしばらくは大分落ち込んでいたわ。でも、先輩が皆に励まされている間、私達も同様に泉先輩達に励ましてもらっていたのよ。私達は間接的に瞬一先輩と係わっていた事もあって、慶一先輩ほどに酷い落ち込み方はしていなかったわ。だから、慶一先輩よりも立ち直りは早かったわ。」

「なるほど。じゃあ、お前らは何とか立ち直る事が出来たって事だな？」

「そうね。それでもまだ少し瞬一先輩を失った心の痛みは残っているのだけど・・・。」

「そうか・・・それでも少しはその悲しみが和らいでるのならなによりか・・・。それで？今回の電話はその報告なのか？」
「・・・それもあるのだけれど、こうと２人で相談した事もあって、先輩に会えるかどうかを聞きたかったの。」
「ん？俺なら別に構わないが、どこで会うんだ？」
「慶一先輩の実家に戻って来れる？もし戻れるのなら、そこで詳しい話をしたいわ。」
「実家に？うーん・・・わかった。それで、いつ頃向かえばいい？」
「明日は日曜日よね？だから、出来るなら今日の晩に向こうへ行って泊まってもらって、次の日の朝からがいいんだけど・・・。」
「・・・わかった。じゃあ、今日の夜からそっちへ行っておくよ。そっちに着いたら連絡を入れる。」
「それでいいわ。それじゃ先輩、連絡、待ってるわね？」
「ああ、それじゃな。」
そう言って電話を切る俺。

やまとからの誘いの電話に驚きつつ、俺はとりあえずあやのに日曜日の猫の世話を頼む為に電話入れた。

そして、あやのに猫の世話を頼むと、俺は実家に向かう準備を始めたのだった。

やまとｓｉｄｅ

こうと一緒に私は、泉先輩達にも今回の一件の事で元気付けてもらっていた。

そして、そんな風に気遣ってもらえる中で、私は先輩が立ち直る最後の詰めを摸索していた。

色々考え、こうとも話し合った結果、私は先輩にある提案を持ちかけてみる事にしたのだった。

その事の電話を先ほど終えて、私はこうに向き直って

「とりあえず先輩への連絡は済んだわ。後は明日、どうなるかね・・・。こう、明日は私達にとっても試練よ?覚悟はいい?」

そう告げると、こうは少し戸惑いつつも決意に満ちた視線を私に向けて

「・・・わかってるよ。でも、きっと乗り越える。私達と先輩は、きっと・・・だって、私達には頼りになる仲間がいるもんね。だから、きっと大丈夫。信じようよ、やまと。先輩の強さをさ。」

そう確信を持って言うこうに私も目を伏せつつも頷くと

「そうね・・・。いつだって私達は先輩の事を信じてやってきたんだから・・・。」

そう、こうに答えて私もまた、明日の決意を固めたのだった。

そして、私は更にもう1つするべき事を終える為に再び電話を取ったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

一通りの準備を済ませて俺は家を出る。

やまととのやり取りの事を気にしつつ、俺は電車に揺られていたのだった。

この時の俺には俺の知らない所でもう1つの動きがあった事を知らずに居た。

今はまだその事にすら考えも及ばないままに、俺は実家の門をくぐる。

玄関に入ると、俺はお袋達に声をかけたのだった。

「ただいまー！親父、お袋、龍兄！戻ったぞー！？」

そう声をかけると、奥から驚きの表情で俺を出迎えてくれたお袋の姿があった。

「あら？慶一、急に戻って来てどうしたの？何も連絡なかったから驚いたわ。」

そのお袋の言葉に俺は苦笑しながら

「いや、向こうに居る時にやまとから電話があってさ。会って話したい事もあるからこっちに戻っていて欲しいという連絡を受けてさ。で、急遽戻って来た、と言う訳だ。」

俺の言葉に頬に手を当てつつ首を傾げながらお袋が

「やまとちゃんから話、ねえ・・・。ひょっとして慶一と付き合いたい、とかそういう事かしらね？」

と言うお袋の爆弾発言に俺は顔を赤くして慌てながら

「まてまて！どうしてそう言う方向に話が行くんだよ！お袋はいちいち飛躍し過ぎだって！！」

そう言うと、お袋は軽いため息をつきながら

「あら、残念。やまとちゃん、とってもいい子なのにねえ・・・。ねえ、慶一はやまとちゃん、嫌い？」

そう言うお袋に俺は更に顔を赤くしながら

「い、いや、好き、嫌いで言えば好きと言えるけど・・・って違う！！とにかくそう言う話と違うから！！」

そうやって慌てて否定すると、お袋はにっこり笑って

「まあ、いいわ。とりあえずあがりなさい。部屋に荷物を置いてゆっくりするといいわ。」

そう言うお袋に俺は疲れを感じつつ

「・・・ああ、そうするよ・・・はあ・・・。」

そう言って軽くため息をつきながら家に上がり、俺は自分の部屋に荷物を持ち込んだ。

その後、親父や龍兄にも声をかけたのだが、事情を話すと、お袋同様にからかってきたので、俺は半ばなげやりになりつつも何とか対応し、事無きを得たのだった。

そして、翌日。

俺はやまとに呼び出され、２人との待ち合わせには良く使っていた公園に来ていた。

しばらく待っていると、こうとやまとの２人が待ち合わせ場所に現れた。

「はあ、はあ・・・。お待たせ、先輩。いつもながら時間に正確で助かるわ。今回はこうも一緒に連れてきたからこうも遅れはしなかったのだけどね。」

「はあ、はあ・・・。こ、今回は間に合えました。今日ばかりは遅れる訳には行きませんからね。」

そう言って息切れしながら話すこうとやまとの２人に俺は苦笑しつつ

「まあ、今回は大事な用事っぽかったしな。それに、お前の集合時間の正確さは知っているからな。」

そう言うと、やまとはいつも通りの薄い微笑みを向け、こうは遅れなかった事にほっとしていた。

そして、俺はそんな２人を見ながら今回の目的について尋ねた。

「やまと。今回俺を呼び出したのはどういう理由からなのか、教えてくれないか？」

俺の言葉にやまとは少し考える仕草をした後

「先輩。先輩もそうだと思うけど、私達もあの一件からもう一週間が経過しようとしているわ。泉先輩達の励ましや癒しがあったおかげで私達は立ち直る為の力をもらった。でも、まだ後1歩足りない、そう思っていたの。そして、私とこうはその足りないものが何かを色々考えたわ。そして、気付いたの。私達が立ち直る為に最後に必要なものは、瞬一先輩の一件から逃げずにその事実を受け入れ、そして、瞬一先輩との思い出の場所を巡ってもう一度、瞬一先輩と向き合う事だと。慶一先輩にとってこの事は辛いだろうと言う事はわかるわ。でも・・・このまま逃げたままでは瞬一先輩があまりにもかわいそうだと思うから・・・。」

そう訴えるやまと。

そして、そんなやまとを後押しするかのようにこうも

「先輩。この事はやまとと2人で考えました。瞬一先輩の思い出と向き合うのは辛いかもしれませんが、大丈夫です。私達も一緒ですから。1人で受け止めさせはしませんから、だから先輩、行きましょう。瞬一先輩を忘れる為じゃなく、いつまでも私達の心の中に生きていてもらうために。」

そう言う2人の言葉に俺は俯いたまま黙っていたのだが、ふいに顔をあげると

「・・・ありがとう、2人とも。そうだな・・・俺もお前らの言うように立ち直る最後のきっかけって奴を探してた。でも、お前らからその事を聞いて、俺も覚悟が出来たよ。行こう。このままじゃ瞬は俺達の中から消えちまう。それだけは駄目だからな・・・そうなっちまったら・・・本当の意味で瞬は・・・死ぬ。俺達がいつまでも忘れなければあいつはずっと生きていられるんだもんな。」

そう2人に言うと、2人は俺の顔を驚きの表情で見つめて、その目を潤ませると、2人とも俺に抱きついて来たのを俺は受け止めた。

「・・・ありがとう、先輩。この提案、受け入れてくれてよかった・・・一生懸命考えた甲斐があったわ・・・。」

「先輩に決別される事すら覚悟していました・・・。こんな辛い提案を受け入れてくれてありがとうございます・・・。」

泣きながらそう言う2人の頭を撫でながら俺は2人に

「お礼を言うのはこっちだよ。後1歩、俺の背中を押してくれたお前らの気持が嬉しかった。それに・・・俺は1人じゃないからな・・・お前らが居る・・・そして、こなた達も・・・。」

そう言って俺は2人に感謝しつつ、2人が落ち着くまでその場で2人を慰めていたのだった。

そして、2人も落ち着きを取り戻した事を見て取った俺は2人に

「・・・どうやら2人とも落ち着いたみたいだな。よし、それじゃ早速巡るか。せっかくお前らが作ってくれた時間だしな、このままここでぼーっとしてるのはもったいない。行くぞ?2人とも。」

そう言って俺は瞬との思い出の場所を巡る為に歩き出した。

そんな俺を慌てて追いかける2人は

「あ、ちょ、ちょっと待ってよ。先輩!」

「急に歩き出さないで下さいよー!先輩ー!!」

そう言って俺の後に付いてきたのだった。

そんな2人を連れてまずやって来たのは・・・・・・。

「先輩、ここって先輩の道場、よね？」

「ここが思い出の場所の1つ、なんですか？」

俺の連れて来た場所に戸惑いながらもそう尋ねる2人に俺は頷いて

「ああ、そうだよ。ここがあいつとの原点。俺があいつと初めて出会った場所さ。」

そう言って俺は道場の中央へと歩いて行き、そこでそっと目を閉じて当時を思い出す。

そんな俺を見ながら2人は俺に

「ここが・・・そうなのね？ねえ、先輩。初めて会った時の事、聞かせてくれる？」

「私も聞きたいです。先輩さえよければ、ですけど・・・。」

そう聞いて来たので俺はそっと目を開いて2人に向き直ると、その時の事を2人に話し始める。

「いいよ。俺と瞬が初めて出会ったのは今から7年位前の事さ。当時の俺は龍神流の技を使える自分に天狗になっていてな、俺の周りの同世代の連中は皆俺よりも弱いと思い込んでいた。そして、そんな時に親父から牧村さんの事を紹介されてな。その時に一緒に道場にやってきたのが瞬だったんだ。麗真おじさんから紹介された瞬は、

今でもよく覚えているが、その当時から結構風格を持っている奴でな、俺を前にしても物怖じしないその態度が当時の俺には鼻についた。その後、2人の道場主の提案によって俺達は他流試合をする事になったんだが・・・その時に俺は鼻持ちならなかった瞬を自分の相手に指名したんだ。」

そこまで話すと、2人は俺に

「なるほど・・・。それで、瞬一先輩と慶一先輩は戦う事になったのね?」

「それで?結果はどうなったんですか?」

そう聞いて来たので俺は苦笑しながら

「結果は・・・俺の見事な敗北だったよ。」

そう告げると、2人は驚きの表情になって

「ええ!?でも、瞬一先輩は自分は道場を継ぐ器じゃない、って言ってたのよね?そんな瞬一先輩に慶一先輩が負けたの?」

「な、何か信じられない話ですねえ・・・。」

その言葉に俺は笑いながら

「当時の俺の実力と瞬の実力は同じくらいだった。俺は天狗になっていたからそんな瞬の実力を見抜けなかった。結果、瞬を侮り、隙を突かれて瞬に有効打を入れられてダウン、て言う訳さ。いくら強くなっていても俺は実戦での経験は圧倒的に足りなかった。その差は当時の俺の実力を容易に凌駕するには十分すぎる程の物をあいつはもっていたんだよな。」

そう言う俺の言葉に2人も感心したように唸っていた。

そんな2人に俺は更に言葉を続ける。

「だから俺はその敗北から自分に足りない物を知り、その後は足りない部分を補う修行を続けてそして、再戦をした時にはお互いがお互いのもてる技術と力の全てを出し切って戦い、俺達ははれて親友となった、と言うわけだ。」

そんな俺の言葉に2人は

「なるほどね・・・あ、それじゃ、初めて出会った場所もここだけど、再戦をした場所もひょっとして?」

「まさか、それもここ、だったんですか?先輩。」

そう聞いてくる2人に俺は頷くと

「そういう事だ。初めて出会い、親友となる。ここはそんな俺達の原点の場所って事だ。」

2人にそう言うと、2人はおずおずと俺に

「そういう事なのね・・・。先輩、あの・・・。」

「えーっと・・・あはは・・・。」

何やら言い難そうに俺にそう言ってくる2人に俺は微笑みながら

「・・・大丈夫だよ。ちゃんと受け止めた。悪いな、2人とも。気を使わせちゃってさ。」

そう言うと、2人は安心したようで、深く息を吐き出しながら脱力すると

「はあ・・・よかった・・・。」

「・・・安心しましたー・・・。」

そんな2人を見て俺はクスリと笑うと

「さあ、ここでの思い出はこれで終わり。次に行こうか。」

そう言って2人に促すと2人も頷いて俺の後に付いて来た。

そして、歩きながらやまとが俺に

「あ、先輩。出会いの事もあるけど、最近は久々に帰省した日に瞬一先輩と再会してるわよね?それはいいの?」

そう聞いて来たやまとに俺は苦笑しつつ

「いいんだ。それは最近の事だしな。十分思い出に残っているから問題なしさ。それに、さっきの時にその事もあわせて思い出した。だからすでに目的達成さ。」

そう言いながら俺は、次の目的地に向かうまでに2人にその後の瞬一との事を話して聞かせた。

2人の知らない瞬の話を聞きながら、2人もまた、その一つ一つに真剣に聞き入っていた。

そうこうしながら歩いているうちに俺達は次の目的地に到着した。

「さて、次はここだな。」

足を止め、俺はその目的地を見つめる。

そこは俺達の母校でもある中学だった。

「やっぱり次はここなのね・・・。ここは私達にも思い出があるわね・・・。」

「うん。今でも覚えてるよ。瞬一先輩と一緒に慶一先輩の汚名を晴らそうと走り回ったもんね・・・。」

俺と同じく母校を見つめながらそう呟く2人に俺は

「俺も忘れてはいないさ。あの時俺を助けようとしてくれたあいつの気持も俺には伝わって来てた。でも、あの時の俺はあいつに対しての負い目があったからな。感謝はしてたけど、結局親友復活はさせれなかった、そんな場所でもあるからな・・・。とりあえず、行くぞ?2人とも。」

そう言って、2人に移動する事を促すと、2人とも無言で頷いて俺の後についてきた。

少し歩くと俺達を呼び止める声が聞こえた。

「こらこら、君達はどこの学校の生徒かね?他校の人間がこの学校に勝手に足を踏み入れてはいかんぞ?」

と言う聞き覚えのある声に俺は振り向いて

「あ、岡崎先生。お久しぶりです。覚えていますか?森村です。」

そう言って声をかけた先生はかつての俺のクラスの担任だった。

俺の言葉に岡崎先生は驚きの表情を見せると

「これは驚いた。誰かと思えばうちのかつてのナンバーワンに匹敵する問題児の森村じゃないか。久しぶりだな。その様子だと元気にやっているようだな。」

そんな先生の言葉に俺は苦笑しながら

「問題児ナンバーワンとは手厳しいですね。とはいえ・・・それを否定できない自分が何だか複雑な気分ですが・・・。」

そう言うと、先生は穏やかな笑顔を俺に向けていたが、すぐに真剣な表情になると

「ふふ。お前には結構手を焼かされたものだが・・・それとだ・・・聞いてるぞ?牧村の事は残念だったな・・・。私も牧村の葬儀には出させてもらったが、私もやりきれんよ。牧村も中々に友情に厚い男だったからな。今でもよく覚えているよ。牧村がお前の無実を晴らす為に駆けずり回っていたあの日の事をな。」

本当に残念そうにそう言う先生に俺も軽く目を伏せながら

「ええ。俺も悔しく思っています。ただ、その原因の一端は俺にもありますからね。俺はその事を一生背負ってこれからも生きていくつもりです。」

そう言う俺に先生は悲しそうな表情を向けていたが、俺は先生に

「実は今回この学校にお邪魔させてもらったのは、こいつらと一緒に瞬の思い出の場所を巡り、全てを受け止めて立ち直りたい、と思ったからなんです。先生、俺達は少しの間、その為に学校を見て廻りたいですが、構いませんか？」

今回の訪問の理由を伝えると、先生は頷いて

「そうか、永森と八坂も一緒に来たのだな。なあに、構わんよ。そうでなくてもここはお前らの母校だ。遠慮する事はない。他の先生方にも事情は説明しておくからゆっくりと廻って行きなさい。」

そう言ってくれたので、俺達は先生に頭を下げて

「ありがとうございます。それじゃ少しの間だけ、お世話になります。」

「ありがとう、先生。許可してくれて。」

「ありがとうございます先生。それじゃ少しの間だけお邪魔します。」

そう言うと、先生はにっこりと微笑んで職員室の方へ足を向けた。

そして、先生を見送ってから俺達は瞬と同じクラスだった事もあるので、当時の俺達の居た教室や、瞬とだべっていた所等を廻って歩いた。

そして、例の桜の樹の所へと足を向ける俺達。

その場所に辿り付き、俺達3人は桜の樹を見上げた。

「・・・ここは変わっていないみたいだ。少し安心したかな?」

俺のそんな呟きに2人は

「ここは先輩のお気に入りだった場所よね?私達のケンカを見たのもこの場所だったのよね?」

「懐かしいなあ・・・あの時先輩が私に初めて声をかけてくれたのもここでしたね。その時に先輩に会ったおかげで私はいまこうして先輩ややまとと一緒に居られるんですねえ・・・。」

そう言ってあのときの事を思い出しつつ、懐かしそうにそう言う2人に俺は

「そうだな。けど・・・改めて瞬に感謝だな。この場所はさ、瞬が俺に教えてくれたんだ。とても落ち着ける場所がある、って言ってな。そして、俺はこの場所が気に入って、人目を避ける時も、のんびりしたい時もこの場所を選ぶようになった。そういうきっかけがあったからあの時に俺はお前らにも会えたんだ。」

そう伝えると、2人はその事実にショックを受けていたようだったが、やがて少しだけ涙を流して

「・・・そうだったのね・・・。瞬一先輩、慶一先輩に会わせてくれてありがとう・・・。」

「慶一先輩と出会うきっかけを作ってくれた瞬一先輩、この運命を私はこれからも大切にして行きますね・・・。ありがとうございました・・・。」

そういう2人に俺も少しだけ涙を流しながら

「改めてありがとうな、瞬。今の俺があるのはお前のおかげでもある。と同時に悲しいよ。お前と言う親友をうしなった事がさ・・・。でも、見ててくれ。俺は絶対にお前のくれたきっかけは無駄にはしない。その事を今ここで、この桜の樹に誓うよ。」

そう力強く言う俺の側に2人も寄り添って同じように決意に満ちた眼差しをこの桜の樹に向けていたのだった。

そして、俺達は、ここでの思い出もしっかりと受け止めて最後の場所へと足を向けた。

2人は俺の向かおうとしている所が分かったみたいだったが、俺にとりあえずの確認を取ってきた。

「ねえ、先輩。最後に向かおうとしてる場所ってやっぱり・・・。」
「あの場所、しかないですよね？一応確認はしたいですが。」

そう聞いてくる2人に俺は頷いて

「2人の思っている通りだ。最後の場所は・・・レゾン。」

俺の言葉に2人は”やっぱり”と言うような顔をして、そして、こうはふいに携帯を取り出すとどこかへメールを打っているようだった。

俺はそんなこうの行動に頭にハテナマークを浮かべていたが、特に追求はしなかった。

そして俺達は最後の目的地であるレゾンへと辿り付く。

店を見上げて俺は感慨深げに

「やっと着いたな・・・俺達の思い出の終着点。」

そう呟く俺に2人もまた俺と同様に店を見上げて物思いにふけっていたが、俺はそんな2人に

「さ、いつまでも店を見上げていても埒があかないからな。店に入るぞ？2人とも。」

そう促すと、2人ともはっとして俺の言葉に気付いてすぐさま俺の後を追いかけてきた。

そして、懐かしさの溢れる店内へと入ると、俺達をレゾンのマスターが出迎えてくれたのだった。

「いらっしゃいませ、何名様でしょうか？やあ、森村君に永森さん八坂さん、いらっしゃい。珍しいね。」

と言うマスターに俺は笑いかけながら

「マスターも元気そうでなによりです。実は今日は瞬の事もあってこの店に来させてもらったんです。」

そう言うと、マスターは少し悲しげな表情になって

「牧村君の事は聞いているよ。気の毒だったね。ここは君にとっても彼にとっても思い出のある店らしいね。そういう人が居てくれて

嬉しい限りだけども・・・。」

俺はそんなマスターに苦笑しながら

「そうですね・・・。今回はその事も含めてあいつとの思い出を振り返ろうと思ってやってきたんですよ。」

その言葉にマスターは”ふっ”と笑顔になって

「事情はわかった。今日はゆっくりしていくと良いよ。それじゃ君達を特別席にご案内だ。さあ、こっちへ。」

そう言うと、俺達を特別席へと案内すると言い出した。

俺はそんなマスターの態度に慌てながら

「い、いえ。今日はそんなつもりで来たわけではないですし、普通の席で構いませんから。」

そう言うと、マスターは含みのある笑いをしながら

「まあ、まあ、そう言わずに。さあ、こっちへ。」

そう言ってなおも俺達を特別席に連れて行こうとするマスターに俺は再び苦笑しつつも案内されるがままに特別席に行った俺はそこに集まってる連中を見て絶句した。

「やほー、慶一君。待ってたよー。」

俺に気付いたこなたが俺に手を振りながらそう言うのを見て、俺は

混乱した頭で

「こ、こなた?何でお前がここに・・・。」

そう言うと、今度はかがみが俺に

「あら?こなただけじゃないわよ?私達もいるしね。」

と言う言葉を皮切りにそこに居る全員が声をかけてきた。

「わたしも居るよ?けいちゃん。」

「八坂さんからメールをいただきまして、私達もここに集まらせていただきました。」

「今回は慶ちゃんが大きな決心をしたって聞いてたから、そんな慶ちゃんの助けになれないかな?って思って。」

「1人じゃつれえ事でも皆がいたらなんとかなんだろ?」

「私達も先輩の為に何かしてあげたかったから・・・。」

「・・・私も、ゆたかやひより、パティ、委員長とも話し合ってここに来て見ようと思いましたから・・・。」

「私に何が出来るかわかりませんけど、私も何かしたかったっスから。」

「どんなにツライコトでもミンナでセオえばツラクはないデスよ?」

「小早川さん達の言う通りですよ。私達は仲間なんですから。」

「そんな仲間の為に立ち上がらせてもらいました。」

「先輩には元気になって欲しいですからね。」

「僕も君の友人として、そして、瞬一君の友人として君を励ます義務があると思ったからね。」

最後の氷室の言葉を聞いて俺は再び皆の気持に打たれて涙を流した。

そして、涙を流しながら俺は

「ありがとう。俺の為にまさか皆が集まってくれるとは思わなかった。こなた、かがみ、つかさ、みゆき、あやの、みさお、ゆたか、みなみ、ひより、パティ、いずみさん、みくさん、たまきさん、結城。俺は皆のような仲間が居てくれて幸せだよ。」

そう言うと、皆は俺の顔を見てにっこりと笑ってくれた。

若干名、急に名前で呼ばれて驚きの表情を見せる子もいたけれど。

その若干名が俺におそるおそる声をかけてくる。

「あ、あの、先輩。さっき私たちの事名前で呼んでくれましたよね？一体またどうして？」

そう言ってくるみくに俺は笑いながら

「みくさんもたまきさんもいずみさんも俺達の仲間になった。そして、3人は俺の為にあの日元気付けてくれに来てくれたよな？そんな事もして貰うほどなんだし、そんな3人も名前で呼ばなきゃ申し訳ない、って思ってな。嫌だったらやめるけど・・・。」

そう言うと、3人は首を振って

「いえ、むしろ嬉しいですよ。これで私達本当の仲間になれたんだな、って思えますしね。」

「実の所、少しだけ先輩に名前で呼んでもらう事にあこがれもあったりしました。」

「何だかくすぐったい気分ですが、でも、悪い気分じゃないですね。

それに、これで私も本当に皆さんの仲間になれたんだな、って思うと、何か嬉しいです。」

そう言う3人に俺は照れながら

「そう言ってもらえるならよかったかな。とにかく、改めてよろしくな?」

そう言うと、3人とも「「「はい!」」」と言って笑ってくれたのを見て、俺も少しほっとしていた。

そして、俺はこうとやまとの2人に向き直り

「2人とも、ありがとう。最後に大きなサプライズだったけど、凄く元気をもらえたよ。」

そう言って改めて2人に礼を言うと2人は複雑そうな表情で

「・・・正直ほっとしたのはこっちね・・・。先輩、怒るんじゃないかな?って思ったもの・・・。」

「あはは。正直最後のこれは賭けでした。でも、先輩が喜んでくれたなら私も安心です。」

そう言う2人に俺は笑いながら

「2人とも俺の為に考えてくれた事だろ?そんなお前らに怒るような真似はできないさ。とりあえず俺達も席に着こう。皆も待ってるしな。」

そうやって2人を促し、俺達は皆の待つ席に着いた。

「慶一君。私達にも牧村君の思い出を話して欲しいな。もちろん私達も受け止めるよ？皆と一緒にね。」

そう言ってくるこなたに俺は頷いて

「ああ。皆にも聞いて欲しい。俺とこうやまとと瞬の思い出を。そして俺は全てを受け止めるから、だから、皆にも少しだけ元気を分けてもらえないかな？」

皆を見回してそう言うと、皆ももまたにっこり笑って頷いてくれたのだった。

そして、俺達は遅くまでこの店で瞬との思い出話をも含めて色々な事、これからの事を話し合った。

そうして俺はその日、瞬の事に対する全てを受け止め、前へと進む決意をして家路につく事となった。

家に帰る途中、俺は心の中で

（瞬。お前と親友だった事、その日々を俺は忘れない。その事を胸に秘めて、そして、俺は前を向く。今俺の側に居てくれる皆と一緒に。だから、天から見ていてくれ。俺はお前の分まで生きて行ってみせるから・・・。）

そう決意を固めた俺だった。

そして、次の日の朝、俺は久々に学校の制服に袖を通して、今日からまた前へ進もうと自分に気合を入れたのだった。

色々あったが、皆のおかげで俺は完全に立ち直る事が出来たのだった。

癒しの旋律達、最終話～こうとやまとの決意、そして全てを受け止める慶一～

次回から再び慶一は復活します。
更なる旋律達の物語をどうぞよろしく。

再び奏でる旋律～慶一の復帰と事件の胎動～（前書き）

最近スランプ気味でかなり投稿が遅れてしまいました。
ご期待いただいている皆さんにお詫びしつつ、本編をどうぞ。

再び奏でる旋律～慶一の復帰と事件の胎動～

瞬の事があって、この一週間色々あったのだが、皆からの励ましをもらった俺は、ようやく立ち直る事が出来た。

最後にやまと達と会った次の日の朝、俺は新たな決意を胸に制服に身を包んで、そして、朝食の準備にとりかかった。

一通りの準備を済ませると、俺はパティを起こす為に部屋へと赴く。

一応部屋のノックはしたのだけれど、結局返事は返ってこなかったので、俺はパティに部屋に入ることわりを入れると、そっと部屋の中へと入っていった。

そして、ベットを覗くと、だらしない格好で眠っているパティがいたので、俺は軽いため息を1つつくと、パティを起こしにかかった。

「ほら、パティ、起きろ。もう朝だぞ？朝食の準備もすでに出来ているんだから、さっさと起きて準備済ませちゃえよ。」

そう言いながらパティを揺するが、起こそうとする俺がうっとうしいかのように俺を手で払いつつ、唸っているのが見えたので、俺は仕方なく強硬手段を取った。

そして、目覚ましのデコピンをかますと、パティは額を押さえて起き上がり、寝ぼけ眼で周りをキョロキョロ見回しながら

「・・・イタイです・・・イッタイナニゴトですか？」

そう言っていたが、俺の姿を見つけると、パティは俺が制服姿である事に気付いたようで

「グッモーニン、ケイイチ。キョウはセイフクをキているみたいデスが、ナニかアリマシタか？」

そう聞いてくるパティに俺は呆れつつ

「あのなあ・・・ここ一週間、学校を休んではいたが、俺もお前同様に陵桜の生徒だぞ？それに、今日から俺も復帰しようって思ったから制服着ただけだ。何もおかしな所などないだろう？」

そう言うと、パティはしばし呆けたような顔で俺を見ていたが、やがて満面の笑顔になると

「オウ！！ついにケイイチフッカツなのですネ？マッテました！マッテいましたよ！？このトキを！！それをシったからにはこうしちゃイラレマセン！！ワタシもキガエてしまいますからケイイチはシタでマッテいてクダさい！！」

そう言いながら俺を部屋から追い出すパティに俺も苦笑しながら

「はは。あんまり慌てずにな？朝食の準備も出来てるから、準備できたら下に来いよ？」

そう言って俺はキッチンへと戻って行ったのだった。

程なくしてパティも着替えを終えて降りてきたのが見えたので、俺達は久々に2人で顔をつき合わせての朝食となった。

朝食を終えてパティと2人、お茶の準備をしていると、いつものようにいつもの時間に家の呼び鈴が鳴る。

パティがそれを聞いてあやのを出迎えに行こうとしたが、俺はそれを制すると、あやのを迎えに行く為にキッチンを出た。

そして、玄関に行って「今開けるよ。」と声をかけて玄関を開くと、やはりいつもと同じようにあやのが立っていたのだが、ここの所パティに出迎えてもらっていた事もあり、玄関にいる俺の姿を見たあやのは驚きの表情を俺に見せながら

「おはよう、慶ちゃん。ここ最近はパトリシアさんが出迎えてくれていたからびっくりしたわ。それに、その制服は、ひょっとして？」

そう、俺に言いながら俺の服装に気付いたあやのがそう尋ねて来たので、俺は照れながら

「・・・あはは。ま、まあ・・・そう言う訳だ。ここ一週間心配かけちゃってすまなかったな、あやの。」

視線をそらしつつ、そう言う俺に、あやのはにっこりと笑って

「ふふ。そっか。いいのよ、慶ちゃん。あんな事があったんだもの。それでも立ち直ってくれたなら嬉しいわ。皆もきっと喜ぶわね。あ、それと、いつもの奴やっちゃうわね？」

そう言ってくれたあやのに俺は頷きながら

「そう言ってもらえるなら何よりだよ。それと、そっちが済んだらいつものようにお茶準備してるからな。」

そう言うと、あやのもそれに頷いて、猫達の方へ向かうのを見届けて、俺はパティの待つキッチンへと戻って行ったのだった。

程なくして猫の世話を終えたあやのとパティの3人で軽くお茶をした後、俺達は戸締りを済ませて家を出た。

そして、いつもの時間に電車に乗り込む俺達だったが、今回はかがみ達が乗ってくるドアより1つずらして乗り込む事にしたのだった。

パティとあやのは俺のこの行動に首を傾げていたが、2人を脅かしてやりたいから、と事情を説明すると、少し苦笑を浮かべつつも、2人はいつもの場所で待機してくれ、俺のやろうとしている事に協力してくれる事になった。

そして、いつものようにかがみ達と合流する時間に2人は時間どおり電車に乗り込んできたので、俺は少し離れた位置からかがみ達の様子を見ていると、あやのとパティは2人にいつも通り朝の挨拶をしていた。

あやのｓｉｄｅ

朝のいつもの時間にいつも通り電車を待ち、乗り込む私たちだったけど、慶ちゃんは柊ちゃん達を脅かしたいという事を考えているみたいで、いつもとは違う場所から電車へと乗り込んだ。

そして、私達はそんな慶ちゃんの思惑に乗る事にして、私達だけいつも通りの場所へと移動をし、柊ちゃん達が乗り込んでくるのを待っていたのだった。

そして、時間どおりに電車に乗り込んできた柊ちゃん達に私達も声をかける。

「おはよう、柊ちゃん、妹ちゃん。」

「グッモーニン！カガミ、ツカサ。キョウもキモチのいいアサですネ！」

と言う私たちの言葉に柊ちゃん達もいつものように

「おはよう。峰岸、パトリシアさん。あんたたちはいつも遅れてこなくて助かるわね。まったく、誰かさんも見習って欲しいものよね・・・。」

「あはは。おはよう、峰岸さん、パトリシアさん。わたしも朝は結構苦手だよ～。」

そう言って挨拶してくる2人に、私達も苦笑を交えつついつものように談笑を始める。

そんな最中に2人に気付かれないようにそーっと近くまで来て様子を伺っていた慶ちゃんが、おもむろに2人に声をかけた。

「よっ！おはよう、2人とも。今日も元気そうだな。」

その言葉にはじかれたように声のした方を見る2人。

私は事の成り行きを固唾を飲んで見守っていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

あやのとパティと結託してかがみ達を脅かそうという事を考えた俺

だったが、上手い具合に2人はかがみ達の注意をひきつけてくれているのを見て、俺は2人に気付かれないように側へと寄って行き、タイミングを見計らって声をかけた。

「よっ！おはよう、2人とも。今日も元気そうだな。」

そう声をかけると、2人は俺の声にはじかれたようにこちらを向き、そして、俺の姿を見て驚きの表情を見せて呆けていたが、やがて我に帰ると、俺の側にやって来て俺の顔を見ながら

「・・・おはよう・・・慶一くん・・・。えっと、その・・・もう、大丈夫なの？」

「けいちゃん・・・びっくりしちゃったよ・・・まさかこの電車に乗ってるって思わなかったから・・・。それと・・・無理はして、ないよね？」

おそるおそるそう尋ねる2人に俺は大きく頷くと

「ああ。2人とも散々心配かけちゃったけど、この通り俺はもう大丈夫さ。今日からまた復帰するからよろしくな。ま、一応どっきりは大成功って事かな？」

そう言って俺はいたずらっぽく笑う。

そんな俺の言葉にかがみとつかさはほっとしたような顔をした後、すぐに俺のいたずらに対するツッコミを入れてきた。

「・・・まったく。復帰するなら普通にしなさいよ！いきなり現れるからびっくりしちゃったじゃない！！」

「ほんとだよ～。わたし、一瞬何が起きたのかわからなかったもん。

」

そんな2人に俺は脅かした事に対する詫びを入れて謝り倒していた。

「いや、ほんとすまん。復帰するなら劇的に、って思っててさ。この通り、頭下げるから許してくれ。」

そんな風に謝る俺の姿を見た2人は、俺のいたずらに怒りつつも、凄く安心したようなそんな笑みを見せていたのがその顔に見て取れたのを感じて、俺も心の中で”ほっ”としていたのだった。

そのうちにこなたとゆたかとも合流する駅に辿り着き、電車に乗り込んできたこなたとゆたかを驚かせる事になったのだが、それもそのはずで、ここ最近居ない筈の人間が突然いたのだから、やはり2人ともその事に驚いていた。

そして、そんな2人にも俺は復帰の意思を告げると、2人とも満面の笑顔を俺に見せてくれ、そんな顔を見る俺の心も何となく嬉しい気分になった。

その後も色々な事を話しながら学校へ向かう俺達だったが、昇降口で靴を履き替えている時、俺は皆に

「皆、俺はちょっと職員室へ寄ってから行くよ。だから、先に教室へ行っていてくれないか?」

そんな俺の言葉にこなたが

「おっけー。黒井先生に報告だね?それと、みゆきさん達へは話しちゃっていいの?」

そう聞いて来たので、俺は少し考えてから

「どのみちクラスに行けば確実に分かっちゃうんだから、普通に話してくれていいぞ？」

そう伝えると、こなたは「わかったー。」と言ってかがみ達と共に教室へと向かったのでそれを見届けてから俺も職員室へと足を向けた。

こなたｓｉｄｅ

昇降口の所で慶一君に「職員室に寄るから先に教室へ行っててくれ。」、と言われ、私達は慶一君の言葉どおりに先に教室へと向かう事にしたのだが、その際に慶一君の復帰の件をみゆきさん達に伝えなくていいのかどうかを聞いてみたところ、「教室に戻ればわかる事だから話してもいい。」と言われたので、最初は言われた通りにしようと思ったのだけど、ここで私のいたずら心が働き、教室に向かう途中でかがみ達に声をかけたのだった。

「ねえ、かがみ、つかさ、峰岸さん。慶一君の復帰の事、慶一君が教室に現れるまで黙っていようよ。」

そう切り出すと、かがみは少し呆れたような表情になって

「なんでよ？別に伝えちゃっても構わないじゃない。」

そう言って来たので、私はにやりとしながら

「だって、その方が面白いじゃん？だから、つかさと峰岸さんも”

これ”って事で。」

そう言って私は自分の口元に人差し指を立てて”しーっ”というジェスチャーをすると、つかさと峰岸さんも苦笑しながら「わかったよ、こなちゃん。」「泉ちゃんの言う通りにすればいいのね？」

そう言って来たので、私もその２人の答えに満面の笑みを浮かべて頷いた。

そんな私たちの様子を見ながらかがみは呆れたような視線を私に送りつづけていたけれど。

そんな訳で、みゆきさん達にはまだ慶一君復帰の件に関しては伏せておく事にしたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなたに教室に居るであろう、みゆき達に俺の復帰の事を話してもいいか？聞かれ、どのみち教室へ行けば俺の事もわかっちゃうんだろうからと思った俺は、こなたに俺の事は話してもいいと伝えてから職員室へとやってきた。

ドアの前で一度軽く深呼吸をすると、ドアをノックして「失礼します。」と一声かけた後入室する。

俺は黒井先生のいる机へ歩いていく。

その途中で俺の存在に気付いた桜庭先生が俺に声をかけてきたのだった。

「おや？森村じゃないか。お前にとっても大変な事があって、しばらくは学校を休んでいたようだが、もう大丈夫なのか？」

そう声をかけてくれる桜場先生に俺は頷いて

「はい。少しの間休む事になってご心配をおかけしましたが、もう大丈夫です。今日から復帰する旨を黒井先生に報告しにきました。いい機会ですし、桜庭先生も元は自分のクラスの担任ですしね。桜庭先生にも今、報告して行きますよ。」

その言葉に桜庭先生も1つ頷くと

「そうか。それはよかったな。森村、その一週間の間にお前の仲間達もお前の様子を見に行っただろうな。せいぜい感謝する事だ。お前を立ち直らせる為に奮闘した仲間に。そして、そんな仲間達がいるお前自身はかなり幸せな人間なのだという事に。そんな環境に身を置ける幸運にな。」

そんな風に言う桜庭先生の言葉の一つ一つを噛み締めつつ俺も力強く頷くと

「はい。もちろんです。俺はこれからも感謝を忘れず生きていきますよ。そして、そんな風に心配してくれる先生もいる、という事の幸せも。」

そう答える俺に桜庭先生は顔に微笑みを浮かべて大きく頷いた。

俺はそんな桜庭先生にぺこりと頭を下げると、本来の目的である黒井先生のいる机へと足を向けた。

先生の机に近づく俺に気付いた黒井先生が俺に声をかけてきた。

「お？なんや聞き覚えのある声がしてると思ったら森村やないか。久しぶりやなー。制服を着てここに来たっちゅう事は、もう・・・ええんか？」

俺の様子を伺いつつ、俺にそう声をかけてくる黒井先生に俺は頷いて

「はい。色々ありましたが、何とか。それで、今日から復帰したいと思いましたので、その報告も兼ねてこちらに立ち寄らせてもらいました。」

俺の言葉に表情に安心した様子をたたえつつ、先生は

「そっか。それなら何よりや。今まで休んどった分、これからきっちり行かしてもらうからな？まあ、覚悟しとけよ？森村。それと・・・よう戻ったな。」

俺に厳しい言葉をかけつつ、最後には俺を気遣ってくれる言葉をかけてくれる先生に俺も嬉しくなり

「わかってますよ。これからもまた、よろしくお願いします。それと、ありがとうございます、と同時にご迷惑をおかけしました。」

そんな風にお礼をいいつつ謝る俺に、先生も満面の笑顔で頷いてくれたのだった。

そして、俺は復帰の報告をした後、職員室を後にして教室へ向かった。

みゆきｓｉｄｅ

私はいつも通り泉さん達よりも早く学校にたどり着いていたので、先に教室にいて、泉さん達のくるのを学級委員長の任をこなしながら待っていました。

日下部さんもまた、部活の朝練だったらしく、泉さん達よりも早くに教室に来ていたので、結果的に日下部さんと私が先に揃う事になりました。

私は日下部さんに挨拶をした後、一緒に泉さん達が来るのを待っていましたが、程なくして泉さん達も教室に現れたので、私と日下部さんは泉さん達に朝のご挨拶をしたのでした。

その後でふと気付いたのですが、泉さん達は何やらいつもよりも嬉しそうな、そんな表情をしているのが見て取れたので、私は泉さん達に何かあったのだろうか?と思い、尋ねてみたのですが、泉さんはそんな私の質問にも適当にはぐらかす感じで、結局の所、よく分からずじまいとなりました。

少しだけその状況に落ち込みつつも、とりあえずはそれ以上の事は聞かずに、ＨＲの始まる時間を待っていたのですが、そこに少し遅れて教室のドアを開けて入ってくる人の姿を見て、私は凄く驚いたのでした。

そして、私も驚いたのだから、他の皆さんもそうだろうと思ってこっそり様子を伺ってみると、何故か日下部さん以外はこの事が分かっていたようなそんな感じで、にこにこと笑いながらその人を出迎えていたのでした。

こなたｓｉｄｅ

慶一君の事を内緒にして教室に来た私たちだったけど、慶一君復帰はやっぱり嬉しかったみたいで、みゆきさん達にこの事を内緒にしようとしていたにもかかわらず、私たちの表情に喜びの色があったのをみゆきさんに察知されて、その理由を尋ねられてしまった。

私は内心慌てつつも適当に答えをはぐらかしてみゆきさんの追及を逃れたのだけど、そのうちに慶一君が職員室での用事を済ませて戻って来て、教室に入ってきた瞬間のみゆきさん達の驚きの顔を見て、何とか作戦が成功したと内心でほくそえんでいたのだった。

そして、慌てて慶一君にかけよるみゆきさんとみさきちの姿をにこにこしながら見守っている私たちだった。

慶一ｓｉｄｅ

職員室での用事も済ませ、俺は自分の教室へと向かった。

その途中で俺の事に気付いて声をかけてくれるほかのクラスメートや女生徒らにも声をかけられたりしたのだが、俺はそんな皆の声に照れながら答えつつ、教室まで急いだ。

そして、自分の教室に入って行くと、俺の事に気付いたみゆきとみさおが俺が教室にきた事に驚いて、慌てて俺の側にかけよってきた。

「お、おはようございます。慶一さん。もう大丈夫なのですか？今日復帰なされる事を全然知りませんでしたので、驚きました。」

「おはよ、慶一！今日からもう来ても大丈夫なんか？お前が来ること、全然しんなかったから驚いたゼ！？」

そう声をかけてきた2人に俺も驚きつつ

「おはよう、みゆき、みさお。はいいんだが、俺はこなた達に俺の事話してくれていい、って言っといたはずなんだけどな。こなた達から何も聞いてないのか？」

そう尋ねると、2人とも首を振って

「いえ、泉さんが何か嬉しそうだったって言う事は分かったのですが、それが何なのかも結局わからずじまい、でしたので・・・まさか、この事だとは気づきもしませんでした。泉さん達も結局教えてはくれませんでしたから・・・。」

「私もそうだぞ？ったく、あいつら人がわりいよなー。」

そう言う2人に俺は大きくため息をついてこなた達の方を見る。

俺の視線に気付いたみんなは苦笑しながら、そして、こなたは冷や汗を流しながら

「あ、あはは。こういう時は驚かせる方が楽しいと思ったからさー・・・だから、許して？」

両手を合わせて俺に謝ってくるこなたに俺はまたもため息をつくと

「まったく、相変わらずで安心するよ。もういいよ。ともあれ、今日から俺も学校に復帰だ。改めてよろしくな？皆。」

そんな俺の言葉にみゆきとみさおは

「はい！それにしても安心しました。復帰の早かった事もそうですけど、それ以上に・・・凄くお元気そうでしたから・・・。」
「私もだゼ？でも、お前を励ましに行った甲斐はあったから、よかったゼ！」

そう言って笑顔で俺に言い、そして皆もまた改めて俺を迎えてくれた事を俺は心の中で喜んでいた。

そして、この時の俺は、皆からまだある一言をもらっていない事に気付かなかった。

それに気付いたのはその日の昼休み、久々にアニ研部室にて皆でお昼を食べる事になった時だった。

およそ一週間ぶりに俺は、その前までは頻繁にここに通って皆とお昼休みを過ごしていた事を思い出した。

そして、そんな思いを胸に秘めつつ、部室のドアを開けると、俺の事に気付いたこなた達以外の皆が

「あ、先輩。泉先輩から聞きましたよ？今日から復帰なんですね？」

と、俺に言って来るこう。

「・・・ゆたかから聞きました・・・。先輩、無事に戻って来てくれてよかったです・・・。」

そう言って笑顔を向けるみなみ。

「お久しぶりですね。お元気そうで何よりですよ。たまき達も先輩

のこと心配してましたからね。」

と、照れくさそうな顔を俺に向けながら言うみく。

そして、そんな3人と一緒に俺に笑顔を向けてくれるやまと、ひより、いずみ、たまきらに、俺も笑顔を返しながら

「皆にはこの一週間、心配をかけてしまって本当にすまなかった。今日からまた俺も復帰して頑張っていくから、改めてよろしく頼むよ。」

そう言うと、こなたたちは揃って俺を見て、そして、「「「「「「「「おかえりなさい」」」」」」」」と改めてそう言ってくれるのを見て、俺はすごく嬉しい気持ちと、そして、目頭が熱くなる思いを同時に味わいながら、改めて皆に「ただいま、みんな。」とそう答える俺だった。

そして、お互いににっこり笑って、いつもの俺達のお昼休みが始まったのだった。

みんなはここ一週間に学校等であった事等を俺に話して聞かせてくれた。

俺もまた、そんなみんなの話を聞きながら、改めてこの日常に戻ってこれた事を実感したのだった。

そして、その日の放課後、俺は今日、もう1つの場所に復帰報告をするために、こなた達と一緒にその場所へ向かった。

こなた達はそこへの復帰に関しては、まだ少し心配してくれていた

のだが、俺もいつまでも休んで迷惑をかけるわけには行かなかったからこなた達にも大丈夫だから、と言って聞かせて、そこへと向かうのだった。

その際にこなたはどこかにメールを飛ばしていたようだったのを俺は見ていたのだが、それが何なのかまでは俺は気にはしていなかった。

そして、俺は一週間ぶりのバイト先へとやってきた。

そして、店長室へと赴いて、ノックをして、俺は店長室に入ったのだが、そこで驚かされる事事となった。

「失礼します。」

そう言って俺は店長室に入ると、俺を見て、店長と杉田店員、そして、主だった部署の人がそこにいてくれて、そして、俺に花束を渡してくれた。

「伝説の少年Aよ。伝説の少女Aよりメールはもらって、事情は知っている。今回の事は相当に大変な出来事だったみたいだが、何とか乗り越える事が出来たみたいだな。そして、今日から復帰しようとしてくれてもいるらしいじゃないか。それを知った我々は君にこれを用意させてもらった。受け取ってくれたまえ。」

そう言う店長から花束を受け取り、そして、杉田店員も

「いやあ、君が大変な事になっていると聞いてこちらも心を痛めていたよ。でも、復帰がかなってなによりだ。君がいない間は結構大変だったからね。これからもよろしく頼むよ。」

そう言って俺にさらに花束を渡してくれ、そして、その他の人からもまた復帰に関してのお祝いの言葉をもらった。

そんな状況に驚きつつ、そして嬉しい気持になりつつ、俺は店長達に

「ご心配おかけしましたが、今日からまたしっかりとやっていきますので、これからもよろしくお願いします。早速着替えて現場に入りますので、それでは。」

そう言って店長達に一礼をすると、俺は着替える為にロッカールームへと足を運んだ。

そして、リハビリも兼ねての復帰後の初仕事が始まった。

俺の事を知ってくれているお客や、その他の店員さんにも声をかけられ、俺は恐縮しつつも仕事をこなしていった。

流石にブランクもあり、復帰初日の今日は、自分の仕事の再確認と他の部署の改めての見回りで費やす事となったが、何とか仕事を終えることが出来た。

そうして心地よい疲れと共に今日の業務を終えて、俺達は帰路についた。

みゆき達都内組と別れ、帰りの電車の中でこなたたちとやり取りをする俺。

「ふう、1日色々あったけど、何とか終わったな。」

そう俺が言うと、こなた達も

「お疲れ様、慶一君。でも、無事に復帰してくれて嬉しいよ。私たちも君を励ましに行った甲斐があったね。」
「そうね。今日1日を振り返って思ったけど、やっぱり慶一くんが居る方がより楽しい、そう思えるわ。あんたの存在って結構大事になってきてるって思えるわね。」
「うん。わたしもそう思うな。やっぱりけいちゃんがいないと寂しいね。」
「もうすっかり慶ちゃんも私たちにとっても居てあたりまえの存在になってきてるね。」
「だよなー。お前が居ねえとなんか物足りねえって思えたかんなー。」

そう言っていたが、それを聞いたパティが顎に手を当てながら

「フム。ミナさんのナカではケイイチはトクベツなソンザイになっているのデスね？」

そう分析するパティに俺は照れで顔を赤らめ、あやの以外の皆も顔を赤くして慌てながら

「あはは、ま、まあ、大切な友達ではあるよね？」
「わ、私は別に、そんな風には・・・」
「そ、そうだよ、パトリシアさん。」
「そ、そりゃ大事な友達ではあっけどさ、仲間なんだし心配して当然じゃん？」

そんな風に言う皆をあやのは苦笑しながら見守り、パティはニヤニヤとしながら皆を見つめ、俺はそんなパティにデコピンを食らわせて

「・・・まったく、お前は突然に皆が答えに窮するような事を言うな。皆困ってるじゃないか。」

そう言うと、パティは額を押さえて涙目になりながら

「ヒドイですケイイチ。ワタシはただジブンのオモったコトをイっただけデスよ・・・。」

その言葉に俺は呆れつつ

「それは時と場合によるもんだ。お前もそこらへんは分かってくれよ、頼むから。」

という、俺の言葉に皆もうんうんと頷き、そしてパティはそんな俺にまだ不満気だった。

結局その後、家に帰る前にパティに飲み物を奢ってやって、機嫌を直してもらい、さらに夕食で頑張る事でパティの機嫌も直ったようだった。

俺は部屋に戻り、今日の事、そして、今までの事を思い出しながら、改めて先へと向かう決意を固めたのだった。

そして、そんな考え事をしている時にこなたからの電話があり、俺は電話を取った。

「もしもし?こなたか?こんな時間にどうしたんだ?」

「あ、慶一君?大変だよ!ちょっとテレビのニュースをつけてみて!?」

「ん？ニュース？何かあったのか？」
「いいから早く！！」
「わ、分かったよ。ちょっと待ってろ。」

そう言ってから、俺は居間まで行って、テレビをつけると、そこにはニュースが写し出されていた。

『・・・・・のアパートで、成神章さんのものと思われる遺体が発見されました。遺体は丁度、布団に入って眠っているような形で発見され、部屋からは遺書らしき物が見つかったとの事です。警察は、これは自殺であるだろうと、断定し、現在、遺書を分析し、その原因を探っているとの事・・・・・・』

俺は、そのニュースを見て、衝撃を受けた。

そして、再び電話口のこなたとやり取りを再開する。

「・・・・・こなた、これは一体どういう事なんだろう？」
「私にもわからないよ。ねえ、慶一君。このニュースに出て来た成神章ってやっぱりあの成神章、なのかな？」
「写真は公開されていなかったみたいだから良くは分からないな、でも、俺としては別人であって欲しいが・・・」
「うーん・・・今はまだ、なんとも言えないよねえ・・・この事件のあった場所はゆいねーさんの管轄だし、ちょっと聞いてみようかな？」
「ん？でも、ゆいさんは交通課だろ？こういう事件に関する情報なんてもらえるものかな？部署的に。」
「まあ、確かにね。でも、当たって砕けて見ないとなんとも言えないよ。やるだけやってみる。何か分かったら慶一君にも連絡いれるからー。」

「わかった。期待はせずに待ってるよ。それじゃまたな。」
「うん。それじゃねー。」

そう言って俺達は電話でのやり取りを終えた。

俺は電話口でこなたには別人であって欲しいとそう言ったが、内心では本人かもしれないと言う妙な確信があった。

ともあれ、今の状況ではこれ以上の事は探れないと思ったので、俺は続報を待つしかなかったのだった。

今回のニュースを気にしつつ、その日を終える。

そして、次の日の夕方に龍兄からの電話をもらう事となったのだった。

こなたｓｉｄｅ

慶一君の復帰もあって、今日は楽しい１日になった。

バイトを終えて、久々に慶一君を交えての楽しい会話をした事が嬉しくて、私は上機嫌になりながら食事を終えた後、ゆーちゃんと一緒にテレビを見ていた。

そして、ゆーちゃんがチャンネルを変えて欲しいと言って来たので、私はチャンネルの変更をやったのだけど、その際にたまたま押したチャンネルがニュースだったのだが、そのニュースを見て私は驚いた。

そこには私の、そして慶一君の知ってる人物の名前があったからだ

った。

私はすぐに慶一君の携帯に電話を入れてニュースを見るように伝えた。

そして、ニュースを見終わった慶一君とさっきのニュースの内容について話す私だった。

慶一君は、それが本人でなければいい、とはいっていたけれど、私には何となくわかった。

慶一君は口でそう言いながらも、このニュースに出て来た人物はおそらく本人だろうと思ってることが。

そして、私もまた、これが成神本人である事を何となくだけど確信できた。

慶一君にはゆいねーさんに事件について聞いてみると言ってはみたものの、この一件を聞くのは龍也さん達の方がいいかもと思っていた。

だから、慶一君との電話を終えた後に私はすぐに龍也さんの所へと電話をかけたのだった。

「もしもし、龍也さんですか?私です。」

「こなたちゃんかい?ひょっとして今日の電話の理由はあのニュースかい?」

「やっぱり龍也さんにもわかりましたか?それで、あのニュースの人物ってやっぱり本人なんですか?」

「うちの方で警察に掛け合ってもらって得た情報によると、本人で

間違いないようだ。」
「・・・やっぱりそうですか・・・。龍也さん、教えてください。今一体どういう事になっているんですか？」
「どういう事になっているのか、そこらへんの細かい所は今調べている所さ。だから、何かわかり次第君に連絡をするよ。それまでは、君もこの事に関してはあまり慶一には意識させないように気をつけていてくれ。」
「・・・わかりました。それじゃ、何か分かりましたらよろしくお願いします。」
「うん。とりあえず今はこれで。また連絡するよ。」
「はい。それじゃ龍也さんも気をつけてくださいね？」
「ありがとう。こなたちゃん。君の忠告は胸に刻んでおくよ。」
「はい。それじゃお休みなさい。」
「うん。お休み。」

そう言って私は龍也さんとの電話を終えた。

私や慶一君の推測どおり、ニュースの人物は成神本人であるようだ。

その後、私は龍也さんからもう一度電話をもらい、今、どのような事になっているのかを教えられた。

その状況を知り、私はまだまだこの事件は色々と面倒な事になりそうかも、と思いながら今日は体を休める事にしたのだった。

この先の日常に少しだけ不安を感じながら・・・・・。

再び奏でる旋律～慶一の復帰と事件の胎動～（後書き）

次は再び舞い戻る旋律の裏側を書く事になると思います。
まだまだスランプ抜けきっていない感じではありますが、頑張って行きますので次回もどうかお付き合いいただけますよう。

舞い戻る旋律の裏側、その４～瞬坊と成神章の不審な死、そして、見えてきた真実

今回は結構早めに仕上げる事ができました。
それでは本編をどうぞ。

舞い戻る旋律の裏側、その4～瞬坊と成神章の不審な死、そして、見えてきた真実～

俺が慶一に電話を入れる5日前。

時間は、瞬坊の葬儀が済んでから2日後までさかのぼる。

あの一件後、俺達はようやく葬儀から2日目にして一時の落ち着きを取り戻した。

そして、その日、龍神道場には、牧村家、紅の氷室、坂上、そして、俺の親父と俺の各勢力の代表が集まっていた。

今後の事、そして、失ってしまった情報収集の役目をどうするか、と言う名目で俺達は顔を付き合わせる事となった。

円を描くように俺達は道場の中心で座り込み、話し合いを行う。

まず最初の声を発したのは親父だった。

「皆、緊急で集まってもらって済まない。我々の情報収集の要であった麗真殿の息子、瞬一君が連中の手にかかり、命を落とすと言う事態となってしまった。連中との戦いは未だ終わっておらず、現在、その後を継ぐ物に関してどうしたものかと悩んだ末に君らに集まってもらった、と言う訳だ。この件について君らから何か意見があるかね？」

皆を見回しそう言う親父に他の皆もしばし考え込んでいるようだった。

そうしているうちに最初に口を開いたのは氷室君達、紅の面々だった。

「今回の事、我々にとっても大きな痛手となりますね。しかし、うちの方にも残念ながら瞬一君ほどの能力を持った者がいないのが現状です。ですので、うちの方では少々厳しい事になりそうですね・・・。」

と、まず氷室君が発言をした。

そして、坂上君も

「今からあいつの後継を育てるにしても、時間も足りない状況だ。もたついていれば連中につけ込まれる事になりかねないからな・・・。そこが頭が痛いぜ。」

難しい顔でそう言う。

そして、そんな2人に俺達も

「うーむ・・・。うちの諜報員も手一杯で動いている状況だからな、こちらに人員を割く余裕がないのが現状だな・・・。」

顎に手をあてながらそう言って考え込む親父。

「・・・麗真さん。浩坊か祐坊のどちらかはこの任務はこなせませんか?彼らも瞬坊とは兄弟だ。素質はありそうな感じはするけど・・・。」

そう、俺が麗真さんに話を振ると、おじさんは少し考え込み、そし

て俺に

「確かに素質はあるかもしれないね。でも、今からノウハウを教え込んでいてはおそらくは間に合わないと思うね・・・・・・そうなると・・・この任は私がやるのがいいだろう。」

その言葉に俺達は驚きながら

「牧村さんが?だ、大丈夫なんですか?」

「あんたも俺の見た所、実戦派な感じに見えたんだがな。ちゃんと務まるのか?」

氷室君と坂上君がそう言う。

そして、俺も氷室君達と同じ意見だったので

「麗真さんがやるのはいいですが、大丈夫なんですか?技能の修得は下手をすれば時間がかかってしまう事になりかねないですし、まして、今まで瞬坊に任せきりだったのでは?」

そんな俺達の言葉に麗真さんは”ふっ”と軽く笑うと

「心配ないさ。元々技能は私が瞬に叩き込んだのだからね。そこに更にアレンジをしてくれたのは瞬のセンスだが、その基本はすでにあるから問題はないよ。」

そう、自信ありげに言う麗真おじさんに、まだ多少不安の目を向ける俺達だったが、親父はそんな麗真さんに

「・・・すまん、先代の時に続いて、今回も頼る事になりそうだな。

お前には自分の息子達の事を気にかけてやって欲しかったが・・・。」

そんな親父の言葉に俺は驚きながら

「親父、どういう事だ？先代の時も、って・・・・・まさか！？先代の時、麗真さんが今の瞬と同じような事をしていた、って事なのか！？」

俺の言葉に親父は大きく頷きながら

「その通りだ。先代の時には麗真殿が今の瞬君のように情報収集を行ってくれていた。それによって奴らを一端は壊滅近くに追い込む事が出来た。瞬君が足を悪くしてからは、道場を継げない瞬君に、代わりに麗真殿は自分の情報収集の技術を教え込んでいた、という事だ。たとえ当主となれなくとも道場の為に、そして友人の為に自分の出来る事をしたいと言う瞬君の願いを受けてな。」

そして、その後を継ぐように麗真叔父さんがさらに言葉を続ける。

「龍真さんの言う通りだ。私は瞬に私の持てる情報収集の技術を叩き込んだ。更にはあの頃とは違い、さらに便利な情報収集用の機材等も今の世の中には出回っている。私は瞬に基礎を叩き込む傍らで、逆に瞬から新しい物も吸収させてもらっていたからね。すでにそちらの方も学習は済んでいる、という事さ。だから、心配はない。」

そんな風に言う麗真さんに俺達もようやく安心する事が出来た。

そして、俺達は麗真さんに

「麗真殿、すまんが今回もよろしく頼む。先代と今回、両方を任せてしまい、すまん。その代わり我々は必ず奴らを叩きのめし、瞬君の仇を取ってみせる。」

親父がまずそう告げ、次いで氷室君達が

「我々も全力を尽くします。それと、うちの方の人間で比較的そっちに向いている人間を送りますので、牧村さんのノウハウを叩き込んでやってください。そうすれば少しは負担を減らす事もできるでしょうから。」

「あんたに頼りきり、ってのも良くないからな。俺達で出来る事は俺達でやるつもりだ。」

そう言い、そして俺も

「俺は、恥ずかしい話、麗真さんに頼りきるしかなさそうです。しかし、動く方ではきっちりと働いてみせます。ですから、今後の情報収集の方はよろしくお願いします。」

そう言うと、麗真さんも頷いて

「任せたまえ。それと、氷室君。明日からでもその人を呼べるかい？やるならば早い方がいい。すでに奴らに少し遅れをとっている状況だからね。坂上君、気をつかってくれてありがとう。私も全力は尽くす。君達も君達の出来る事を任せるよ。そして、龍也君。連中を潰すための鍵は君だと思っている。実戦の方では頼りにさせてもらうよ?それじゃ、龍真さん、皆さん、今日はこれでよろしいか？」

そう、全員を見回して言う麗真さんに俺達も力強く頷き、新たな布陣で連中との勝負に出る事となった。

麗真さんが情報収集の陣頭指揮を取る事になり、急遽、”紅”からもその補佐を育成、及び即戦力として投入を図り、次に備えるようにした。

それまでは麗真さんにはかなり負担がかかってしまうが、それでも息子の仇を取る為に、という気概を持って臨もうとしてくれていた。

俺の出来る事はそんな麗真さんの為に、奴らの本体に近づけた時には最大にこの腕を奮い、連中を叩き潰す事だった。

俺はそんな思いを胸に誓いつつ、来たるべき決戦に気を引き締め直すのだった。

そして、葬儀から3日目、麗真さんから家に電話がかかってきた。

その電話の応対はお袋がしたようだった。

「はい、もしもし？龍神ですが。」
「あ、桜さんですか？牧村です。」
「あら、麗真さん。今日はなんの御用かしら？うちの人は今、町内の見回りに出ていて留守ですよ？」
「いえ、今日は龍真さんにという訳ではないんです。桜さん、慶一君に連絡を取る事は出来ますか？」
「慶一に？ええ、できますよ？慶一に用事ですか？」
「はい。実は、息子の遺品を慶一君に受け取って欲しいと思いましてね。」
「まあ・・・そういう事でしたか。わかりました。すぐに連絡を取りますから、連絡がつき次第、その旨をまた電話させてもらいますね？」

「よろしくお願いします。今日は私も家の方におりますので、もし慶一君が来れるようでしたら来て欲しいとお伝え下さい。」
「分かりました。それでは後ほど。」
「はい、それでは。」

と言うのが、今回の電話の内容だったのだとお袋に伝えられた。

俺は早速慶一に連絡を取るべく、携帯を開いて慶一の携帯に電話をかける。

何回かのコールの後、電話に出た慶一に俺は今回の事を伝えた。

慶一はまだまだ落ち込んでいる状況ではあったが、とりあえずは実家に戻ってくるとの事だ。

俺はその事をお袋に報告すると、お袋は麗真さんの所へと結果報告の電話をかけていたようだった。

麗真さんの所に電話をかけるお袋を見ながら俺は

「・・・遺品か・・・つらいかもだが、その人の思い出でもあるからな・・・。」

今回の件の重要性を何となく感じながら、俺はそう呟いていた。

しばらくの後、慶一は実家に帰ってきた。

玄関先でお袋にからかわれ、そして、親父との意外なやり取りを目の当たりにし、さらには俺の慶一に本当は言うべき事を親父に代弁してもらう事となり、その事を親父に心の中で感謝しつつ、俺は慶

一に麗真さんの所へ行って来いと促した。

慶一も複雑な表情をしながらも俺の言葉どおりに麗真さんの所へと向かうのを見送ってから、俺は町内を見回るついでに情報の収集もして来ようと思い、家を出た。

慶一が丁度、麗真さんの所へお邪魔している頃、俺は町内を歩いている時に学校から戻って来たみゆきちゃんとみなみちゃんに出会った。

「あ、こんにちは。龍也さん。今日も見回りなんですか？」
「・・・こんにちは・・・龍也さん・・・。」

そう声をかけてきたみゆきちゃん達に俺も

「お？こんにちは。みゆきちゃん、みなみちゃん。今学校の帰りかい？」

そう挨拶を返すと、２人とも頷いて

「そうなんですよ。龍也さんもご苦労様です。」
「・・・無理は・・・しないで下さいね・・・？」

そう言ってくれたので俺も笑いながら

「はは。ありがとう。大丈夫、無理はしないからさ。あ、そうだ。２人に伝える事があるんだ。」

そう言うと、みゆきちゃんは首を軽く傾げながら

「お伝えする事？なんでしょう？」

と聞いて来たので、俺は

「今日、慶一が牧村さんに呼ばれてこっちに帰って来てる。たぶん、後３０分くらいで戻ってくるんじゃないかな？だから、２人にさ、慶一を元気付けてやってくれないかな？ってね。」

そう言うと、２人は少し驚いたような顔になりつつも

「え？慶一さんが、こちらに、ですか？なるほど・・・わかりました。ありがとうございます、龍也さん。その事を教えていただいて。私も実は慶一さんを元気付けてあげる為にどう行動を起こすかを散々悩んでいた所でした。今の龍也さんの一言で私にも決心がつきました。今日、私は慶一さんに思い切って声をかけてみようと思います。」

その言葉に俺も頷いて

「そうか。それじゃ頼むよ。あ、ちなみに俺がこの事を教えた、と言うのは内緒ね？」

そういたずらっぽく笑うと、みゆきちゃんもクスリと笑って

「ええ。わかっていますよ？それでは私はこれで。龍也さん、ありがとうございました。」

そう言ってみゆきちゃん達は俺にぺこりと頭を下げると、慶一の居る牧村道場の方へと歩き出したのだった。

俺はそれを見送ってから見回りを再開させた。

みゆきｓｉｄｅ

慶一さんの事でみなみちゃんと共に悩みながら学校から戻って来た私達でしたが、その帰りに偶然、龍也さんと出会いました。

そして、私達が龍也さんに挨拶をすると、龍也さんは今日は慶一さんがこちらに戻って来ている事を教えてくれました。

その事を知った私は、今日思い切って慶一さんに声をかける事を心に決めて龍也さんにお礼を言うと、その場をみなみちゃんと後にし、牧村道場の方への道へと歩き出したのでした。

私が、これからどのように慶一さんに接しようかと摸索している時にみなみちゃんが

「・・・みゆきさん。慶一先輩を元気付けるつもりなんですよね・・・？私も・・・何かしたいです・・・今すぐにはまだ、その方法が思いつきませんが・・・それでも・・・何かしたいです・・・。」

その言葉に私もみなみちゃんの気持が嬉しくなって

「わかりました。それじゃ、２人で慶一さんの為に何かしてあげましょうか。慶一さんが戻るまではまだ時間もある事ですし、その間に考えてみるといいと思いますよ？」

そう言うと、みなみちゃんもコクリと頷いて

「・・・そうしてみます・・・ありがとうございます、みゆきさん・

・・私の我侭を聞いてもらって・・・。」

そう言うみなみちゃんに私はふるふると首を振ると

「いいんですよ。みなみちゃんももう、私達の、慶一さんの仲間なんですから。」

そう言うと、みなみちゃんは嬉しそうに微笑んでくれたのでした。

そして、程なくして道場から出てきた慶一さんに私達は偶然を装って声をかけ、みなみちゃんもまた、自分の出来る事を見つけたらしく、慶一さんを自宅へと招待する事となったのでした。

そして、その日は慶一さんに私の家に泊まってもらい、一晩中とはいかなくても語れる限り、時間の許す限り慶一さんを元気付ける為に語ろうとしましたが、やはり、いつもの生活習慣だけは私を規則正しい就寝時間に眠らせるという事になり、結局私とみなみちゃんが眠ってしまうという事になってしまいました。

その際に私は慶一さんの家の猫の事に気付き、峰岸さんにお世話をお願いする旨のメールを送っておいたのでした。

龍也ｓｉｄｅ

慶一とみゆきちゃん達がそんな風に過ごしている頃、町内を見回っていた俺に、氷室君からの電話が入ってきた。

「もしもし、氷室君か？突然の連絡だが、何かあったのか？」

「龍也さん、ちょっとおかしな事が起きているみたいです。それの報告の為に連絡させてもらいました。」

「おかしな事？」
「はい。実は、瞬一君が亡くなったあの日から僕達は瞬一君を手にかけた犯人の行方を追いかけていました。そして、その手掛かりなりそうな男を捕まえたんです。」
「ん？手掛かりになりそうな男だって？」
「ええ。こいつはシルバーシャドウの仲間の一人でしてね、しかも成神章の直属の奴だったんです。」
「なんだって？ここでまたあの男の名前が出てくるとは・・・それで？」
「その男の話では、成神の率いるシルバーが解体されたのだという事なんです。」
「解体？それはまた、一体どうして？」
「その男の話によると、瞬一君の亡くなる3週間程前までは成神はゴールドへのシノギが落ち込んでいる事に悩んでいたらしいんです。成神の下のついていた連中もまた、ゴールドの影におびえながら成神からの指示を実行し、とりあえずのシノギを得るために活動はしていたらしいんです。しかし、瞬一君の亡くなる3週間前になり、成神は下の者達に言っていたそうです。ゴールドへのシノギの落ち込みによるお咎めをなくすチャンスが出来たと。これに成功すれば俺達はゴールドとして新たに活動できるようになると。」
「なるほど・・・シノギの件を不問にし、さらには上への昇格もある、という上手い話があった、という事だな？」
「その通りです。そして、それから後、成神の様子は瞬一君の亡くなるあの日までの間にどんどん変わっていった、との事です。まるで何かに怯えるような、そして、自分自身が追い詰められているかのようなそんな感じだったと。」
「ふむ・・・。」
「そして、ここが重要な所なんですが、瞬一君が亡くなったあの日から、成神の行方がわからなくなっているみたいなんです。」
「何！？それは確かなのか！？」

「はい。あの日以来、成神と連絡も取れなくなり、更には急に成神所属のシルバーが解体されたんだそうです。そいつも今後の自分の身の振り方を考えていたらしいですが、そんな折に僕達に捕らえられる、という事になりました。」
「・・・成る程な・・・。氷室君、すまないが、その事に関して更なる詳しい情報を集めてくれないか？それと、その男はもうシャドウとは関係ないんだな？」
「わかりました。ええ、そうです。もう自分の所属する所は無くなったと。これを機に足を洗うつもりだったのだ、と言っていました。」
「そうか。なら、そいつは情報を引き出せるだけだしたら解放してやってくれ。連中ともう係わりが無いのであれば、いつまでも拘束しておく理由もないからな。」
「わかりました。それじゃ、僕らはさらにこの件についての調べを進めます。何かわかり次第、連絡を入れますので、今回はこれで。」
「ああ。今後も奴らの動きに注意しつつ、よろしく頼む。」
「はい。それでは。」

という言葉を最後に俺は氷室君との電話を終えた。

俺は氷室君から得た情報に関して少し引っかかりを覚えていた。

それは、成神の置かれていた状況と、瞬坊の亡くなるまでの間に奴に何かがあったのではないか、という事だった。

それと同時に瞬坊が亡くなった日から奴の消息が掴めなくなった事も気になっていた。

そこに、今回の事件の真相の１つがあるのではないか、俺はそう思っていた。

とにもかくにも、これ以上の事は氷室君からの続報を待つより手はなかったので、俺は今しばらく自分でもこの件についての調査を進めながら更に3日を費やす事となった。

そして、あの報道が流される日の前日、もう一度氷室君からの電話を受ける事となった。

「もしもし?龍也さんですか?氷室です。」
「やあ、氷室君。あれから何かわかったかい?」
「・・・ええ。実はとんでもない事がわかりました。」
「とんでもない事?」
「はい。あれから紅の人員を使い、あちこちで成神に関する情報や消息を調べまわっていたんですが、その最中に僕達は成神の隠れ家とも呼べるアパートを発見したんです。」
「何だって?それで?そこに奴の痕跡があったのか?」
「・・・ええ、ありました。とんでもないものがね・・・。」
「!!とんでもないもの?」
「・・・・・・。」
「ん?どうした?氷室君。」
「すいません、なんと言うかショックでしたから・・・。とにかく、そこで見つけた物ですが、それは・・・・・・成神章の・・・・・・遺体でした。」
「!!何だって!?奴は死んでいたのか!?」
「はい・・・。奴の部屋で、奴は布団の中で寝ていました。しかし・・・それはすでに物言わぬ屍だったんです。」
「・・・なあ、氷室君。それが成神本人だとちゃんと確かめたのか?他人のそら似、という事じゃないよな?」
「そのあたりの事は・・・警察に通報し、遺体を引き取ってもらって現在身元を確認してもらっています。しかし、その部屋の奴の机

の上に・・・奴の遺書がありました・・・。奴はどうやら・・・自殺を図ったようです・・・。」

「・・・なんてこった・・・。！？氷室君、その遺書の内容は確認したのか？」

「・・・すいません。遺体を見つけた、というショックもあって、僕は即座に警察に通報してしまい、遺書の方も証拠品の１つとして警察に押収されてしまいました・・・。遺書の内容を知るには警察に掛け合う必要があると思います。」

「・・・わかった。そちらの方は俺が親父に頼んで何とかしてもらう。氷室君、少し気持を落ち着ける為にも休んでいてくれ。何かわかり次第、今度はこちらから君に連絡を入れる。」

「・・・・・わかりました・・・。ご迷惑をおかけします。何かわかり次第、連絡を入れてください。こちらもいつでも連絡が繋がるようにしておきます。」

「ああ。任せてくれ。それじゃ。」

「はい。それでは・・・。」

そう言って俺は氷室君からの連絡を一時打ち切った。

氷室君から告げられた事実に衝撃を受けつつも、俺は親父へと連絡を取った。

そして、警察にかけあってもらい、発見された遺体の身元と遺書の内容についての情報を得る事となった。

そして、その結果を氷室君に知らせる為に連絡を入れる。

数回のコールの後、氷室君が電話に出た。

「もしもし？氷室君か？遺体の身元と遺書の内容に関する情報が入

った。今からそれを君に伝える。よく聞いてくれ。」
「!!本当ですか!?龍也さん!!それで、結果は!?」
「遺体はＤＮＡ鑑定の結果、成神章本人のもので間違いない、との事だ。遺書についてだが・・・・・・」
「龍也さん?どうしました。」
「・・・すまん、ちょっと思い出したら怒りがな・・・。とにかく、遺書の内容だが、簡単に言うと、成神が瞬坊に手をかけたという事、そして、その事に対する罪悪感に耐えられなくなって自殺をした、という内容だった。」
「・・・龍也さん、それは本当なんですか?奴が瞬一君に手をかけた、っていうのは・・・。」
「遺書の内容、ではね・・・。」
「え?龍也さん?」
「・・・俺は、この遺書の内容に不審な物を感じている。」
「どういう事です?」
「氷室君。君が俺に奴の特徴を教えてくれた時の事は覚えているな?」
「はい。あれからまだそんなに日も経っていませんからね。」
「その特徴を思い返してみた時、今回のこいつの行動が不自然に思えたのさ。」
「それは、つまり?」
「奴は自分の為には手段を選ばず、他人を利用して生き延びるような小悪党タイプだ。それだけに、どんなにみっともない事になっても、どんなに窮地に追い込まれる事になっても自身の保身と命をあきらめるような奴とは思えなかった。今回にしたって、シノギの件で追い詰められてはいたが、それを打開できる何かを得たのなら、奴はそのチャンスを最大限に利用しようとするはずだ。そして、その行動の結果に人を死なせる事に成ったとしても、その事に罪悪感を感じるようなそんな奴には思えなかった。」
「・・・確かに、そうかもしれませんね。奴はそんな男でした。あ

の頃からね。」
「そんな奴が、かつての同級生を死なせた事に罪悪感を持つ、その事が引っかかったのさ。何故なら、奴は瞬坊に対して恨みがあれど、瞬坊が不幸になる事に対しては笑って見下すような奴のようだからな。」
「・・・なるほど、確かにそうかもしれません。中学時代に奴ともぶつかった事はありましたが、結局最後まで奴とはわかりあえませんでした。」
「ここからは、俺の推測なのだが、これは成神を自殺に見せかけた殺人ではないか？と思っている。」
「殺人？まさか・・・。」
「俺が考えるに、瞬坊を手にかけたのは成神なのは間違いはないだろう。だが、その成神もまた、何者かに利用されるだけされた後、消されたのかもしれない、と、言う事だ。」
「・・・口封じ、という奴ですか・・・。」
「そうだ。そして、俺達の方での情報収集の要が失われた事、そして、瞬坊に対して恨みを持つ者を犯人に仕立て上げて俺達の目を欺こうとしたのだろう。おそらくはこの裏にはシャドウが係わっているはずだ。」
「なるほど・・・でも、奴らはどうやらボロを出したようですね。遺書を残してしまった事が奴らにとっては奴らが係わったという痕跡を残す事になったようですし。」
「ああ。おそらく偽装遺書がなければ完璧だったかもしれないがな。どうやら上の奴の中にも少し間抜けな奴がいたようだ。だが、それも状況証拠だけでしかない。遺書からも部屋からも成神の指紋以外は物的証拠になるものは出て来なかったからね。後は、犯行には車が使われた、という事だが、その車を処分した可能性もあるようだ。だから、今その車処分した解体工場の捜査も行われているとの事だ。氷室君。俺達は大分奴らに近づいていると見ていいだろう。これからが勝負かもしれないぞ？」

「そうですね。頑張りましょう、龍也さん。そして、瞬一君の仇をきっと取りましょう。」
「ああ。それまではまだまだ戦いは続く。最後まで気を抜かずにな？」
「はい。では、僕はこれからまた連中に関する情報を集めに行きます。龍也さんも頑張ってください。」
「おう。気をつけろよ？氷室君。」
「龍也さんこそ。それじゃ。」

そう言って俺は氷室君との電話を終える。

そして、それから1日が過ぎ、成神の事がテレビで報道される事となり、真意をたしかめようとしているこなたちゃんからの電話を受けた。

俺はこなたちゃんに今わかっている事を伝えた。

そして、翌日、こなたちゃんへの2度目の電話で、現在の状況を伝える事となる。

それと同時に慶一が何とか瞬坊の死のショックから立ちなおる事も伝えられ、俺は兼ねてから準備していた件に関して慶一に電話をかけたのだった。

みゆきちゃん達を慶一の家に預け、そして、その御両親を龍神道場で匿い、しばらくはごたごたする日々を過ごす事となる。

連中との決戦はかなり近づいていた。

舞い戻る旋律の裏側、その4～瞬坊と成神章の不審な死、そして、見えてきた真実

次回はまた、表サイドで話が進んでいきます。

共に歩み出す旋律～龍兄の頼み事、そして、事件を乗り越える時～（前書き）

今回も結構早めに次話アップがいけました。
今後もこのペースを維持できたら、と思っています。

瞬の一件もあって落ち込んでいた俺だったが、みんなの気遣いによって俺は再び立ち直る事ができた。

そして、再びいつもの日常に戻ろうとしていた矢先に新たな事件が俺達に影を落とそうとしていた。

それを思わせる報道を目にしてから次の日の朝、俺は昨日の事を心の中で気にしつつも、今日もまたいつものように学校へと向かう準備をして、パティと一緒に朝食を摂っていた。

そして、食事も一段落した頃に、ふいに俺の携帯に龍兄からの電話がかかってきた。

俺はとりあえず電話に出てみる。

「もしもし？龍兄か？こんな朝っぱらからどうしたんだよ？急に電話してきてさ。」

「慶一か？朝からすまないな。ちょっとお前に頼み事があってな、その事で電話させてもらったのさ。」

「頼み事？」

「ああ。実は明日からしばらくの間、みゆきちゃんとみなみちゃん、こうちゃん、やまとちゃんの４人をお前の所で預かって欲しいんだ。」

「え？どうして、みゆき達を？」

「うちの町内には武闘派のヤクザ連中がいる事はお前も知っているだろう？ここ最近の連中の動きが不穏でな、近く、抗争が始まるかもしれないんだ。そうなったらしばらくは町内はごたごたするだろ

う。そうなった時、みゆきちゃん達やその御両親にもその影響が飛び火しないとも限らない。だから、そのごたごたからみゆきちゃん達を守るためにはお前の方に居てもらった方が安全なんだ。その間に俺や親父、それに麗真さん達でこのごたごたに決着(けり)をつけるつもりだ。それまでの間だけ、お前にみゆきちゃん達を任せたい、という事さ。」

「待てよ。そういう事なら俺も手伝った方がいいんじゃないのか？それに、みゆき達の御両親はどうなるんだよ？」

「みゆきちゃん達の御両親はうちの道場で保護するから心配ない。それに今回の事はお前に手を借りるわけにはいかないんだ。」

「みゆき達の御両親の事は分かった。けど、何でだよ？俺じゃ頼りないのか？」

「そうじゃない。お前にはお前の仕事がある、と言っているんだ。」

「俺の仕事？」

「そうだ。お前の仕事はみゆきちゃん達の側にいてみゆきちゃん達を守ってやる事だ。危険がそっちに飛び火しないとも限らない状況でお前までこっちに参加してしまったら誰がみゆきちゃん達を守るんだ？みゆきちゃん達はお前にとって大切な仲間なんだろう？だったらお前はお前の大切な仲間を守る事に力を尽くせ。心配するな、こっちは俺達で片付けられる。お前は自分の仕事を全うしろ。」

「・・・わかったよ。龍兄、くれぐれも無茶するなよ？親父や麗真おじさんにもそう伝えておいてくれ。」

「ああ、確かに伝えよう。それじゃ、明日からよろしく頼む。事がすんだらお前に連絡を入れるからそれまではお前も頑張れよ？」

「わかってる。みゆき達は絶対に傷つけさせない。こっちは任せてくれ。」

「心配はしてないさ。お前ならやれる、って信じてるからな。それじゃ、これで切るぞ？お前もこれから学校だろう？」

「おっと、いけね、そうだった。それじゃな、龍兄。」

「ああ。またな、慶一。」

そう言って電話を終える頃には結構な時間が経っていて、何時の間にか来ていたあやのとパティと一緒に慌てながら駅へと向かうのだった。

龍也ｓｉｄｅ

慶一との電話を終えて、俺は

（とりあえずはこれでいいだろう。慶一もどうやら俺の言った事を信用したみたいだしな。さて、一応の懸念事項はなんとかなったな。全てはこれからだ。なるべく早い内に決着をつけるぞ。）

そう心の中で考えて、みゆきちゃんに慶一の説得ができた事の報告のメールを飛ばしておくのだった。

慶一ｓｉｄｅ

昨日の報道、そして、今朝にあった龍兄からの突然の電話。

ここ数日に色々と立て続けに起きているこの事態に俺は困惑するしかなかったが、とりあえずは龍兄の言うとおりにしておこうと考え、俺達はいつもの電車へと乗り込んだ。

そして、かがみたちと合流してからは、俺達は昨日のニュースについての話していた。

「慶一くん、パトリシアさん、峰岸、おはよう。ねえ、昨日のニュース見た？」

「あの名前の人って本人なのかなあ？」

そう言って声をかけてくる2人に俺は

「うーん・・・まだその事に関しては詳しい情報がね・・・。」

そう答えると、俺達と同じようにニュースを見たらしいあやのとパティが

「昨日のニュースは私も見たわ。私もちょっと気になってるのよね。」

「キノウのニュースはワタシもミましたが、ケイイチタチのイウ、ナルカミというヒトはイッタイどんなヒトなんデスか？」

そう言って、そして、最後のパティの質問に俺は苦笑しながら

「まあ、俺にとっては因縁のある人間、という事かな？」

そう言う俺の言葉にかがみたちもコクリと頷く。

「インネン、ですカ？」

不思議そうな顔で言うパティのその言葉に俺も頷いて

「そうだな。中学時代には亡くなった瞬と俺にも係わりのある奴だった。瞬の足を砕いたのもあいつだったしな。その事件以降も何かと俺達に絡んできた奴だったよ。俺達には相当の恨みを持っていたと思う。」

そう言う俺の言葉にかがみは更にパティに

「以前にね、そいつの事で慶一くんと私達の間に亀裂が入った事があったのよ。まあ、その時には誤解で済んだけど、もし現実にそいつとの事があれば、間違いなくそいつは慶一くんを苦しめる為の行動を取る、そう言う奴らしいわ。」

そう説明するかがみにパティは不愉快とも取れるような表情を作ると

「ナルホド。それはイヤなヤツですネ・・・。でも、もしそれがホンニンなのだとしたら、ケイイチタチにとってもいなくなってくれてツゴウがいいのではないデスカ?」

そう言うパティにかがみ達もうんうんと頷いていたが、俺だけはその言葉に少し難色を示していた。

そんな俺の気難しそうな表情に気付いたパティは

「ケイイチ?どうしましたカ?」

と、怪訝な表情で尋ねてくるパティと同じようにかがみ達もそんな表情で俺を見ていたが、俺は1つため息をつくと

「・・・パティ、それに皆も、皆の言いたい事も良く分かる。俺もまた、皆に危害を加えられそうな可能性を持つ奴がいなければ、と思う事もあった。けど、俺は、どんなに憎い相手であっても、そいつの死を願った事だけはないつもりだ。相手が誰であれ、誰かの死を願う事は人として最低な行為だと思わないか?だから俺は、少なくとも皆にはそう言う考えを持って欲しくない、って思ったんだよ。」

俺のその言葉に、皆はショックを受けていたようだったが、かがみ

達は気を取り直すと俺に

「そうね。確かに嫌な奴だけどそう考えるのはだめよね・・・。ごめん、慶一くん。」

「わたしも一瞬だけどそう考えちゃった・・・。だめだよね、やっぱり・・・。」

「私も柊ちゃん達と一緒ね。ちょっと軽率だったと思うわ。」

「ソーリィ、ケイイチ。ワタシもカルくカンガエすぎていたようですネ・・・。」

少し凹みながらそう言ってくる皆に俺は苦笑しながら

「いや、わかってくれればそれでいいよ。ともあれ、この話題は一端やめにしよう。新しい情報もないからあーだこーだ言っていても何もわからないからな。だから、一端気持を切り替えよう。」

ちょっと暗くなっていた空気に俺は無理やり明るさを混ぜてそう言うと、４人とも少し困惑しつつも俺の言葉に乗ってくれたようなので、次の話題を、と思っている時に丁度こなたが乗って来る駅についた。

そして、その電車にこなたとゆたかが乗ってきたので、俺は２人に挨拶をした。

「おはよう、こなた。ゆたか。今日も時間どおり来たな？ん？こなた、どうした？何だか凄く眠そうだが？」

と、俺が挨拶をしたのを皮切りに、皆もこなた達に挨拶をする。

「おはよう、こなた、ゆたかちゃん。あら？そう言えばそうね？あ

んたまた遅くまでゲームでもやってたの？」
「おはよう、こなちゃん、ゆたかちゃん。そういえばこなちゃん、眠そうだね～？」
「おはよう、泉ちゃん、小早川ちゃん。調子悪いならあまり無理しない方がいいかもよ？」
「グッモーニン！コナタ、ユタカ。それともキノウはゲームではなく、アニメザンマイでしたカ？」
という言葉にこなたとゆたかは俺達に挨拶を返した。
「・・・おはよー、皆。うん、ちょっと昨日色々あってよく眠れなかったんだよねー・・・。」
「おはようございます、皆さん。おねえちゃんが言うには昨日は一晩中起きてたみたいです。」
というゆたかの言葉に呆れながら俺は
「まったく、相変わらずだなあ、こなたは。電車降りたらバスに乗るんだし、少しだけでも眠っておけよ？学校着いたら起こしてやるから。」
そう言うと、こなたは俺に
「ありがとー・・・助かるよー・・・。」
眠そうな顔でそう言うこなたに俺も苦笑していた。
「あ、そういえばこなた。あんたも昨日のニュース見たの？」
ふと、その事を思い出したかがみがこなたにそう言うと、こなたは

その言葉にピクリと反応して

「私も、って事は、かがみ達もあのニュース見たんだね？」

突如先ほどの眠そうな顔はどこへやらで、真剣な表情へと変貌したこなたがかがみにそう言うと、かがみもその変化に気圧されつつもコクリと頷いた。

「かがみ、それに皆も、今日の昼休みに話したい事があるんだよ。だから、その事に関してはその時でいいかな？」

と言うこなたにかがみも、そして周りの皆も少し困惑しつつもコクリと頷いてそして、俺はこなたのその言葉にピンと来る物があったので

「こなた、それは昨日の俺との電話での事だな？」

そう尋ねると、こなたは頷いて

「うん。その事に関する続報ってやつかな？だから、なるべくこの件に係わってる皆にも話したいんだよ。」

そう言うこなたの言葉に俺も頷いて

「わかったよ。皆、そう言う訳だ。続きは今日の昼休みにな。」

そう俺が言うと、皆も頷いて、とりあえずその場の話はそれで終わったのだった。

そして、学校に着いて教室に入った時にみゆきやみさおからもニュ

ースの件で聞かれはしたが、全ては昼休みに話す、と言う事で全員が納得した。

そして、その日の昼休み。

いつものように俺達はアニ研の部室へと集まり、昼食となったのだが、あのニュースはこうややまと、みくやたまき、いずみ達も見ていたようで、こなたが、今朝言ってた話の続きをしようとした時にみく達に質問された俺は、成神についての簡単な説明をしてから、こなたの話の本題へと入った。

「それで?こなた、今朝の続きについてだけど・・・。」

俺がそう切り出すと、こなたは

「そうだね。けど、その前に昨日の慶一君とのやり取りの事をまず皆に説明しとくよ?・・・って事でね?昨日は慶一君と電話で話をしたんだよ。それでね?ゆいねーさんに掛け合ってみてこの一件に関する情報が何かないかな?と思って、聞くだけは聞いてみたんだけどね?その結果が昨日中に私に届いたんだよ。だから、今日はその事を皆に話そうと思ったんだよね。」

その言葉に皆も頷いて

「そうか、なら、頼むよ。」

俺がこなたに先を促すと、こなたは頷いて

「うん。まずは、あのニュースで見つかった遺体の事なんだけど、成神本人で間違いないみたいだよ?」

その言葉に俺を初めとする全員が驚愕の表情をした。

「・・・やはり、そうなのか・・・あまりそう思いたくはなかったけどな・・・。」

俺のその呟きにこなたも心持ち硬い表情で頷く。

皆もまた少し暗い表情になりつつもこなたの言葉を黙って聞いていた。

そして、その皆の様子を見つつ、こなたは更に言葉を続けた。

「私もそうだけどね・・・それじゃ続きだけど、報道でやっていたように死因は自殺、これも間違いないって事だね。」

その言葉にここにいる全員が複雑な表情を見せる。

俺はそんな皆の様子を気にしつつ、こなたに確認したい事があったので聞いてみた。

「こなた。自殺って事で、報道では遺書も見つかっている、って事だったよな?その内容は教えてもらえたのか?」

俺のその質問に、こなたはかなり困惑の表情を見せていた。

こなたはしばらく何事かを考えた後、意を決するような表情を作ると、更にその先の情報を話してくれたが、その前に俺達にこう前置きした。

「・・・これは、話すべきかどうか、散々悩んだ事なんだけどね・・・それで昨日一晩中悩んでたんだよ・・・
でも、いろいろ悩んだけど、やっぱり話すのがいいと思うから話すね？」

そう言うこなたの言葉に俺達も神妙な顔で頷くと、こなたは遺書に関する情報を話してくれた。

「あいつの部屋から見つかった遺書にはね、こう書いてあったらしいんだよ。内容はかなり端折っちゃうけどさ。ようするに、あいつは牧村君を・・・手にかけたらしいんだ・・・。そして、そうしてからの自分の行動に罪悪感を感じてそれに耐えられなくなったから自ら命を断ちます、と言う事なんだよね・・・。」

その内容にかなりのショックを受ける皆。

だが、それ以上に俺がショックを受けていた。

何故なら、瞬の死は轢き逃げによるものだという事を聞いていた。

そこに、かつての中学時代に因縁を持つ者が係わった等とは思いもしなかったからだ。

そして、ようやく犯人がわかったものの、その本人もまたすでにこの世の者ではなくなっていた、その事が俺の中で複雑な感情として絡み合っていた。

俺は、無言で席を立つと、その場を後にしようとした。

そんな俺の行動に気付いたこなたは俺に

「慶一君、どうしたの？一体どこへ・・・。」

そう尋ねてくるこなたに俺は振り返らずに

「・・・すまん、少し1人になりたい。」

そう言って部屋を後にした。

俺は、部屋を後にすると、星桜の樹の所へと向かった。

こなたｓｉｄｅ

遺書の事を公表するかいなか、私は昨日から一晩中悩んでいた。

でも、この事実は慶一君にも伝えるべきだと最後には決断して、この場で皆と慶一君に話した。

皆も慶一君もショックを受けているようだったけど、慶一君のショックは皆よりも更に大きく感じた。

そして、その場に居たたまれなくなったのか、突然慶一君席を立ち、アニ研部室を後にしようとしたので、私は思わず慶一君を呼び止めた。

しかし、慶一君は私の言葉に振り返らず「1人になりたい。」と言ってそのまま部室を出て行った。

そんな慶一君をこの場にいる誰もが引きとめる事は出来ず、私たちもその事に落ちこんだ。

しかし、そんな時「先輩！」「待って！先輩！！」そう声を上げて八坂さんと永森さんが慶一君の後を追って教室を出た。

私たちはその行動に驚きながら2人を見送り、私は慌てて八坂さんにメールを飛ばしたのだった。

そして、メールを飛ばした後、私はこの場に居る皆に、昨日聞いていた情報の先ほど慶一君の前では話さなかった部分について話す事にしたのだった。

慶一君や八坂さん達の行動に困惑し、とりあえず行動しようと動く体制をとろうとした皆に私は声をかけた。

「待って、慶一君の居場所については八坂さんに見つけたらメールを飛ばして欲しい、って頼んであるから心配ないよ？その前にまだ、皆に話してない事があるから聞いてくれる？」

その私の言葉に皆は私の方を見て驚きの表情を見せていたが、かがみが

「・・・わかったわ。そっちは八坂さんに任せて後で追いつくとして、こなた、その話していない事って言うのを聞かせてもらえる？」

そう言って来たので、私はその言葉に頷くと、皆を一通り見渡して、言葉を発した。

「成神が龍也さん達が今闘っている犯罪組織に所属している事は牧村君の亡くなったあの日に皆にこっそり話したよね？」

その言葉に頷く皆。

私は更に言葉を続けて

「その成神がどうやら、組織の上の人間に美味い話でそそのかされて、牧村君を始末する為に動いたんだよ・・・そして、仕事を終えた成神もまた、連中の偽装工作の生贄となって消されたらしいんだよ。」

その私の言葉にその場にいる全員が衝撃を受けていた。

そして、かがみが

「そ、それじゃ、今回の事は、2人ともその犯罪組織の手にかかってしまった、という事なのね?」

そう聞いてくるかがみに私も重々しく頷く。

「全ての元凶はその犯罪組織、という事ですか・・・悲しい事ですね・・・。」

みゆきさんもこの事にはなんともやりきれない気持のようだった。

つかさもこの事を聞いて

「・・・この事はけいちゃんには言えないね・・・。こなちゃんが黙ってて、と言った意味がよくわかるよ・・・。」

そう言うつかさの表情も暗かった。

「私、この事は絶対に慶ちゃんには言わないわ。みさちゃんも絶対言っちゃだめよ？」
「わかってる。こんな事言えっかよ。言えばあいつは今よりもずっと苦しい思いをするに決まってる。」
そう言う峰岸さんとみさきちもまたお互いに頷きあい、この事は心の中に封印するつもりのようだった。

「私たちも言わない。ね？みなみちゃん、ひよりちゃん、パティちゃん、いずみさん。」
「・・・そうだね・・・事実は、私達の心の中に・・・。」
「こんな事言えないっスよ・・・私だって一応は言っていい事悪い事の区別くらいはつくつもりっス。」
「ワタシもイイません。ジケンはこれでカイケツした、それでいいデス！」
「そうだよね。私も言わないわ。ずっと心にしまっておく。」
そして、毒島さんや山辺さんも同じように頷いて

「何だかすごい事になってしまいましたが、ここは私たちの秘密って事でいいね。」
「うん。そうしよ？先輩を下手に傷つける事はないよ。」
そう言いあい、私たちと一緒にこの秘密を共有する事を改めて約束してくれたのだった。

そして、秘密の共有を誓い合った頃、私の携帯に八坂さんからのメールが届き、慶一君の居場所が判明したので、私達もこっそりと慶一君の所へと行くことになった。

そうして私たちがアニ研部室から移動を開始したその頃・・・・・・。

慶一ｓｉｄｅ

こなたから一連の情報を聞いて、その場に居たたまれなくなった俺は1人きりになりたくてアニ研部室を後にした。

そして、いつも俺が落ち着ける場所として利用した星桜の樹の所へとやってきた。

俺は樹の幹に手を添えながら心の中で色々と考えていた。

（瞬に続いて、成神までもが消えてしまった。そして、瞬の消えた原因が成神にあり、成神もまた、自らの罪の重さに耐え切れずに命を断った・・・。ようやく犯人がわかったと思ったのにこれじゃ・・・俺は、どうしたらいいんだろうか・・・？）

犯人が特定できた事、そして、その犯人がもういない事、それらの事を考えた時、俺は複雑な思いで心がいらつき、俺は気付いたら「ドカアッ！！」と言う衝撃と共に星桜の樹を殴りつけていた。

そして、そんな俺の後ろから声をかけてくる者がいた。

「・・・先輩、ここでしたか・・・。」

「・・・探したわ、先輩。」

その声に気付いて振り向くと、そこには俺を見つけてほっとしているこうとやまとの2人が居た。

「こう、やまと、2人ともどうして?」

俺がそう尋ねると、2人は複雑な表情を見せながら

「今回の事、私達にも少なからず関係のある事です。瞬一先輩の事もそうですが、成神の事も私達には係わりがある事でした。」

「私達は共に過ごしてきたあの頃からの仲間よ?だから、先輩の悔しさも、悲しみも共有できる。今の先輩と一緒の気持を感じられるのは私達しかいないと思ったから、ここに来たのよ・・・。」

俺はそんな2人の言葉に納得しつつ、2人に背を向けて語り始めた。

「・・・そうか、ありがとう、2人とも。こう、やまと、俺はどうすればよかったんだろうか?俺はあいつの仇をこの手で取りたかった。この手で犯人を見つけ出して、瞬の墓前に突き出し、犯人の行為を瞬に詫びさせたかった。でも・・・その犯人ももういない・・・あいつの仇はもう、とってやれないんだよな?けど、事件は犯人の判明と犯人の死によって終わってしまった。事件が解決したのはいいけれど、何だかやりきれない思いで一杯だよ・・・。」

そう語る俺の言葉を黙って聞いていた2人だったが、2人はそんな俺に

「確かに、私も悔しいという思いで一杯です。でも、少なくとも犯人は判明しました。事件も終わりを見ました。」

「すぐにそれらの事実を割り切れ、というのはきつい事かもしれないわ。でも、私達は生きているわ。生きている以上は、たとえ辛い事実であったとしても私達は瞬一先輩の分も生きなきゃいけない、前を見なきゃいけないと思うわ。だから先輩、生きなきゃ、進まなきゃ。瞬一先輩の分まで、これからも・・・。」

そんな2人の言葉に俺は心の中でくすぶっていた複雑な感情が紐解かれていく、そんな気がした。

そして、俺は2人に向き直ると

「ありがとう、2人とも。そうだな、俺達は生きている、これからも生きなきゃいけない。それが、瞬の為でもあるよな。だったら、そんな瞬の思いに俺が応えなきゃ、瞬にも悪いよな。よーし！事件は終わったんだ！いっちょ気合を入れなおして今日から俺は新しくスタートするぞ！？」

そう言った後、俺は気合を入れる為に両手で顔面を張る。

パアン！という小気味いい音と共に俺はそれまでの全ての思いを断ち切るかのように自分に気合を入れなおした。

そんな俺の行動に驚きの表情をする2人は

「せ、先輩？大丈夫ですか？何か痛そうでしたけど・・・。」

「突然そんな事をするからびっくりしたわ。ほんとに脅かさないでよ、先輩。」

そう言って来たので、俺は更に自分に気合を入れる為に2人に

「うーん、これだけじゃまだ気合が足りないな、2人とも、俺の頬を張れ。そして、更に俺に気合を入れてくれ。」

そう言う俺に2人は驚いて

「ちょ、先輩、それは、いくらなんでもできませんよー。」
「そうよ。無茶言わないで欲しいわ。」

そんな2人に俺はなおも

「無茶は承知だ。だけど、これは俺が更にこの先に進む為の儀式みたいなもんだ。だから、付き合ってくれよ。な?頼む。」

俺は必死に2人にそう頼み込むと2人ともしぶしぶながら俺の気合入れに協力してくれた。

「そ、それじゃ、行きますよ?え、えーい。」

ぺちんという情けない音で俺の頬を叩くこう。

そんなこうに俺は

「だめだだめだ!そんな軟弱な打ち方で気合が入るか!?やりなおしだ、やりなおし!もっと思い切って来い!!」

そうあおると、こうはようやく覚悟を決めたようで

「わ、わかりましたよ。もう、どうなっても知りませんからね?ええぃっ!!」

バチーンと言う物凄い音と共に俺の頬にこうの掌が炸裂し、俺の頬に大きな紅葉が出来上がる。

「やればできるじゃないか。それでいいんだ。」

そう言って俺は痛む頬をさすりつつ笑って見せた。

そして、俺は次にやまとにも気合入れを頼んだ。

「よーし、次はやまとだ。ドンと来い！」

と言う俺の言葉にやまとは少し呆れたような顔をしつつ

「・・・まったく、先輩にもしょうがないわね。いいわ。付き合ってあげる。行くわよ?それっ！！」

そう言ってやまとは思い切り手を振りかぶり俺の頬に打ち込もうとする。

だが、何故か俺は、そのやまとの一撃を無意識のうちに避けていた。

そんな俺の突然の回避行動にたたらを踏むやまと。

そして、攻撃を避けた俺を睨みつけて

「・・・ちょっと先輩。先輩が気合入れてくれ、って言ったんでしょ?それなのに避けちゃったら意味ないじゃない！?」

そう言って抗議するやまとに俺は苦笑しながら

「い、いやー、すまんすまん。何故かお前の攻撃が来る瞬間、俺の背中に妙な寒気が走ってな。それを感じた瞬間に体が無意識にお前の攻撃を避けちゃってたよ。すまん、今度はちゃんと受ける。だから、もう一度やってくれ。」

そんな俺にやまとはなおもぶつぶついいながら俺を見ていたが、やがてため息を1つつくと、もう一度俺に気合入れの攻撃をしてきた。

そして、今度こそ俺はやまとの攻撃を受けたのだが、俺は攻撃を受けると同時に何故か意識までもが飛んで、その場に倒れる事となった。

そんな俺を見て、慌てて駆け寄る2人。

「先輩、大丈夫ですか?先輩、しっかり!」

「先輩、ちょっと!先輩、先輩ってば!!」

意識の遠くなっていく最中に2人のそんな必死な声が聞こえていた。

こなたｓｉｄｅ

かがみ達に龍也さんから聞いた情報を話し、皆でこの事を心の中にしまい、慶一君は話さない事を誓いあった私達は、慶一君の事が気になって3人の所へと向かった。

八坂さんからの返信メールをもらっていたので、慶一君達の居場所もわかり、私達は3人の所へと辿り付いた。

そして、こっそりと物陰から様子を伺っていると、慶一君が2人と話しをした後に自分の頬を両手で叩いているのが見えた。

私達はいきなりのその行為に驚き、慶一君達の様子を伺っていたが、慶一君は自分の顔を自分の手で叩くだけでは足りなかったのか、八坂さん達にまで慶一君の顔を張らせていた。

その行動に更に私達は驚いていたのだけど、永森さんの番になって一度は永森さんの攻撃はかわした慶一君だったが、2度目の攻撃を受けた瞬間、慶一君はその場に倒れこんだ。

それを見た私達は慌てて慶一君達の所に行って

「ちょっと、ちょっと！八坂さんに永森さん、突然何してるのさ？と、とにかく、慶一君！ねえ、慶一君！しっかりして！？」

そう言って私は涙目で慶一君を揺すっている八坂さん達と一緒に慶一君に声をかけて起こそうと試みた。

「だめです！泉さん、八坂さん、永森さん！慶一さんは脳震盪をおこしているかもしれません。そのまま動かさずにいて下さい！それと、誰でもいいですから、タオルかハンカチを濡らして持ってきてください！それと、天原先生も誰か呼びに行ってもらえませんか！？」

突然私達にそう叫ぶみゆきさんに驚き、私達はすぐに慶一君を揺するのをやめた。

そして、みゆきさんの言葉に反応した数名が

「・・・タオルが確か教室にあったはずなので、私、行って来ます・・・。」

と言ってみなみちゃんがまずタオルを取りに駆け出し、次にかがみが

「私は天原先生を呼びに行って来るわ。」

と言って保健室へ駆け出して、さらにゆーちゃんが

「私、水を持ってきますね？」

そう言ってその場を後にした。

そして残ったメンバーで慶一君をその場に寝かして様子を見ていた。

慶一君の様子を見ながら私は八坂さんと永森さんに

「ねえ？どうして慶一君や八坂さん達は突然こんな行動とったの？見ててびっくりしたんだけど。」

そう尋ねると、２人は落ち込みながら

「実は、先輩と今回の事、今後の事を話していたんですが、やまとの言葉に先輩が突然自分に気合を入れると言い始めて、それで・・・。」

「慶一先輩が自分だけの気合じゃ足りないから、私達にも協力しろ、って言うから、先輩の言うとおりにしたんだけど・・・何故か私の一発で先輩が倒れちゃって・・・。」

と言う言葉に私は目を丸くして驚いていた。

「うーん・・・永森さんも何気に強かったりしない？慶一君のしちゃう程だし・・・。」

と、頭に大きな汗マークを浮かべながらそう言うと、永森さんはその言葉に落ち込みつつ

「私はそんなつもりはないんだけど・・・なんでなのかしら・・・
それに最初の一発目は何故か先輩も私の攻撃を避けたし・・・。」

永森さんのその言葉に、この場にいる、私とつかさとみゆきさんと
峰岸さんとみさきちは苦笑し、事情のわからない、その他の1年、
2年組は頭にハテナマークを浮かべていた。

そして、苦笑しながら私は永森さんに

「・・・ひょっとしてさー、あのクリスマスの時の奴で慶一君の心
に気付かないうちにトラウマができたんじゃないかなー・・・。」

そう言う私の言葉に永森さんは”ガーン!”という効果音よろしく
物凄くショックを受けたような表情になり、相当に落ち込んでいた。

そんな永森さんをまたも苦笑しながら見ていると、ようやくタオル
を取りに行ったり水を取りに行ったり、天原先生を呼びに行ったり
した面々が戻って来た。

そして、皆の見守る中で天原先生の診断を待つ私達に先生が言った
のは、慶一君は軽い脳震盪を起こしているようだ、と言う事だった。

少し安静にしていれば意識も戻って動けるだろう、という先生の言
葉に私達はようやく安心したのだった。

そして、しばらくして、慶一君が目を覚ました。

慶一君はまだ少し朦朧とした意識で私達を見て

「あれ?皆どうして?それに、俺は一体?」

と言って首を傾げる慶一君だった。

慶一ｓｉｄｅ

今回の事もまた、気合を入れて乗り越えていこうと思い、自分自身とこうとやまとに気合注入を頼んだ俺だったが、何故か途中で意識を失っていたようだった。

皆の声が聞こえてふと目を覚ますと、皆がそこに居て、安堵の表情で俺を見ているのが目に入った。

俺は、そんな皆に

「あれ?皆どうして?それに、俺は一体?」

と、尋ねると、こなたが俺に事情を説明してくれたのだった。

俺にとって衝撃だったのは、やまとに意識を飛ばされた事だったのだが、その事に苦笑する俺に、やまとが涙目になりながら

「・・・ごめんなさい、先輩。痛かったわよね?」

そう言ってくるやまとに俺はふっと微笑むと

「まあ、確かにな。強烈だったよ。おかげで物凄く気合入った。それに俺は怒ってないからもうそんな泣きそうな顔するなって。」

そう言いながら俺はやまとの頭を撫でてやった。

「・・・うん。ありがとう、先輩・・・。」

俺の言葉にやまとは顔を赤らめながらほっとしたような表情を見せていた。

そして、俺は皆に向き直ると

「皆、色々心配かけちゃってすまなかった。今回の事、真相もはっきりしたし、俺はもうこれからはこの事に縛られずに前を向く事にするよ。皆の俺を心配してくれる気持は嬉しいけど、俺はこれから、もっと強くなってみせるから。だから皆も、笑ってくれ。そして一緒に進もう。瞬はもういないけど、俺達はまだ生きてるんだから。俺達がこれから先、笑って過ごしていく事を瞬も望んでいると思うから。」

そんな俺のこれからの決意に皆はお互いに顔を見合わせていたが、全員が頷き、俺を見てそして、笑ってくれた。

そんな皆の笑顔を見て、俺は、心の中で

（これからの俺のすべき事は、皆と一緒に前を向いていく事だ。俺はこれからも、この笑顔と共に行きたい。そして俺もまた、先に進もう。皆と一緒にならきっと、振り返らずに行けると思うから・・・。）

自分がこれからしなければいけない事、その事に新たな決意をする俺だった。

共に歩み出す旋律～龍兄の頼み事、そして、事件を乗り越える時～（後書き）

次回はみゆき、みなみ、こう、やまとの４人が慶一宅へとやってきます。
本当の事件の解決がなるまでの間の６人の生活のスタートとなります。

集まる旋律～瞬への報告、そして、慶一の誓い～（前書き）

何とか余り期間を空けずに次話が上げれました。
では本編をどうぞ。

集まる旋律～瞬への報告、そして、慶一の誓い～

瞬の亡くなった本当の理由と原因。

そして、犯人がわかったものの、その犯人さえももはやこの世の人ではなかった。

そんな事実にやり場のない気持に苦悩する俺だったが、こうとやまとの言葉で俺はこの複雑な気持に決着(けり)をつけて、ここからは前を向いて進もうと決意する。

そして、その為にこうとやまとにも自分自身への気合を入れる手伝いをしてもらったが、やまとの一撃で昏倒してしまう。

意識を取り戻した俺は皆に自分の決意を告げて、この激動の昼休みを終えたのだった。

そして、教室に戻りがてら、こなた達が先に戻ったのを見送ったみゆきが俺の所に来て声をかけた。

「あの、慶一さん。ちょっといいですか？」

その言葉に俺はみゆきの方を見て

「ん？俺に何か用か？」

そう尋ねると、みゆきはおずおずと俺に

「は、はい。あの・・・龍也さんから何かうかがっていませんか？」

と言うみゆきの言葉に、俺は今朝の電話の事を思い出したが、ちょっとみゆきをからかってみようと思い

「んー？龍兄から？さて、どうだったかなあ？」

と、軽くとぼけると、みゆきは途端に慌て出して

「え？ええっ？た、龍也さんは慶一さんに話しておく事があるっておっしゃっていましたのに・・・。」

と、俺のからかいに涙目で凹むみゆきに俺は（ちょっとからかいすぎたかな？）と心の中で思いつつ苦笑しながら

「あはは。冗談だ冗談。ちゃんと聞いてるよ。明日からの事だよな？」

と、軽く笑いながらそう言うと、みゆきは涙目のままではあったが、頬を膨らませて

「もう。慶一さん、意地悪ですよ・・・。でも、よかったです。ちゃんと龍也さんは慶一さんに話してくれたのですね？」

そう言うみゆきに俺も頷いて

「ああ。今朝電話があったよ。まあ、色々とごたごたしてるみたいだな。」

俺のその言葉にみゆきも頷きつつ

「ええ。どうもそうらしいですね。それで、その・・・今回の事はご迷惑にはなりませんか?龍也さんからのご提案とはいえ、慶一さんも色々あったわけですし、まだ気持ちの整理もつけきれない状況で今度は私達、ですから・・・。」

と、瞬の死以降からのごたごたと俺自身の事をみゆきは気にしているようだった。

確かに、色々な事がこの一週間の間にありすぎたかもしれない。

そんな俺の事を気遣ってくれるみゆきの気持は嬉しかったが、それでも、俺の、みゆきに対する答えは1つだった。

「気にするな、みゆき。これは俺が、俺の意思で決めた事だ。だから、遠慮しなくていいぞ?それに・・・今度こそは俺は、大切な者を守りたい。もう誰にも、俺の大切な者を傷つけさせない。だから、俺から頼むよ。お前を、皆を守らせてくれ。」

俺はもう誰にも傷ついて欲しくないと思う気持から、みゆきに俺の決意を投げた。

そして、そんな俺の決意を聞いたみゆきはそんな俺の言葉を驚きの表情で聞いていたが、そのうちにその瞳から涙を落としながら

「ありがとう、ございます・・・。大切な者を守りたい。大切な人に傷ついて欲しくない。そんな慶一さんの思いがとても嬉しいです。でも、慶一さん、覚えておいて下さいね?その思いは私も、そして、皆さんも一緒なんですから。そして、私達を守ってくれると言う慶一さんも、ご自分の考えに固執しすぎて必要以上のご無理はなさらないで下さいね?お互いに無理をせず、助け合って行きましょう。

私達はお互いに1人ではありません。お互いに助け合い、支えあえる仲間がいるんですから・・・。」

そんなみゆきの言葉に俺はその言葉を改めて胸に刻み、みゆきに力強く頷いて

「ありがとう、みゆき。その言葉、よく覚えておくよ。心配するな、無茶はしないよ。」

そう言ってみゆきのその言葉に応え、そして、そんな俺の頷きに、言葉に、みゆきもまた、強く頷くのだった。

お互いに助けあっていく事を確認し合い、俺達は教室へと戻って行く。

そして、午後の授業を終えて、家へと帰る頃に、今度はこうとやまと、そして、みなみにも今回の龍兄の依頼の件について尋ねられ、俺は、４人全員を受け入れると伝えたのだった。

家に戻った俺は、道場の方でのごたごたが起きれば、しばらくは向こうに近づく事も難しくなるだろうと思っていた。

だから、俺は、今日のうちに済ませておきたい事があったので、軽く準備をして、実家に向かう為に家を出た。

そして、電車に揺られて俺は実家の最寄駅へと辿り着き、そのまま実家を目指す。

門をくぐり、玄関を開け、俺は家へと入って行き、そして、声をかけた。

「龍兄、親父、お袋、いるか?ちょっと用事があって帰って来た。」

そう言うと、俺に気付いたお袋がやってきて

「あら?慶一。こっちに戻ると言う連絡もなかったからびっくりしたわ。何か用だったの?」

と言うお袋に俺は頷くと

「ああ。何だか今回は色々とごたごたしそうだったからね。ま、親父達に挨拶も兼ねて来たよ。」

俺はお袋にそう告げる。

お袋は俺の言葉に納得しつつ、俺に

「そうだったの。お父さん達なら道場の方にいるわ。声をかけに行くならそっちへ行ってみなさい。」

と、親父達の居場所を教えてくれたので、俺はお袋に礼を言うと、早速親父達のいる道場へと向かった。

そして、道場に足を踏み入れると、親父に稽古をつけてもらっている龍兄の姿があった。

俺はしばらくその様子を伺っていたが、稽古の切れ間を見極めると、親父達に声をかけた。

「親父、龍兄、精が出るな。親父に稽古つけてもらってる龍兄は久

しぶりに見たよ。」

そう声をかけると、親父達は俺に驚いて

「慶一？何故お前がここに居るのだ？」

「お前、いつ帰って来たんだ？そんな連絡受けてないぞ？」

と言う2人に、俺は苦笑しながら

「はは。それはそうだろうな、いきなり押しかけたんだしさ。それと、今日こっちに戻って来たのは、これからしばらくはこっちに寄り付けなくなりそうだったからな。俺がやっておきたい事を済ませたかったから、帰って来たんだよ。」

そう説明すると、親父は俺に怪訝な表情で

「やっておきたい事？それは一体なんなのだ？」

そう聞いて来たので、俺は頷いて

「うん。まずは、親父達にみゆき達の御両親の事、よろしく頼むよ。って直接伝えたかったのと、後は瞬の仏前に行って、ちょっとした報告をね。」

そう言うと、親父と龍兄は頷いて

「うむ。みゆきちゃん達の御両親の事は我々に任せておくがいい。心配せずとも大丈夫だ。」

「こっちは請け負うから心配はいらない。だから、お前はお前の仕事をまっとうしろ。それと、麗真さんの所へ行くなら急いだ方がい

いかもな、もう大分いい時間だ。」

その言葉に俺も頷いて

「ああ。そのつもりだよ。それじゃ、親父、龍兄、またな。今度は平和になったこの街でみゆき達にも安心して暮らしてもらいたいもんだ。」

そう言う俺に、親父と龍兄は再び重々しく頷いた。

そして、それを確認した俺は踵を返すと、麗真おじさんの家へと足を向けたのだった。

龍也ｓｉｄｅ

明日からの事等を考えつつ、俺は親父に久々に稽古をつけてもらいながら体を動かして少しリフレッシュしていた。

そして、組み手も一段落つく頃、道場に慶一がいきなり現れた。

俺も親父もまったくの想定外の事だったので内心慌てつつも慶一と言葉を交わす。

慶一の目的は俺達に直接みゆきちゃん達に御両親の事を託す事と、瞬坊の仏前で何やら報告していく事があるのだ、と言う事だった。

そして、俺達に最後に言葉をかけて道場を後にする慶一を見送った後、俺は少し考え事をした後に携帯を手に取り、みゆきちゃんの所へと電話をかけたのだった。

3回目くらいのコールで電話にでるみゆきちゃん。

「もしもし?みゆきちゃんかい?俺だ、龍也だ。」

「こんばんは、龍也さん。突然のお電話のようですが、なにかありましたか?」

「うん。実は今こっちに慶一がいきなり現れてね。みゆきちゃんも明日から慶一の家へと行く予定だったろうけど、予定を繰り上げて今日から行ったらどうだろうか?って思ってね。準備はできてはいるんだろう?」

「え?慶一さんが、ですか?え、ええ。確かに慶一さんの家に行く準備は済ませてありますけど・・・。」

「なら、慶一が牧村さんの所から戻るかもしれない時間を見計らって慶一をこっちに寄らせるよ。それと同時に俺も君等を迎えに行く。だから、ここに集合して慶一にエスコートしてもらって行くといいだろう。」

「わかりました。それではお迎えの方をお待ちしています。あ、それと、この事はみなみちゃんにも伝えた方がいいですよね?」

「うん。出来ればそうしてくれるとありがたい。俺はこうちゃんとやまとちゃんに連絡を取るから。」

「わかりました。では、そのようにしますので。」

「そっちは任せるよ。それじゃ俺も2人に連絡してすぐに家を出るから。」

「はい。くれぐれも夜道には気をつけていらしてください。」

「はは。ありがとう。それじゃ。」

「はい、それでは。」

そう言って電話を切った後、俺はこうちゃんとやまとちゃんの方に連絡を入れた。

こうちゃんは大分慌てていたが、やまとちゃんは少し驚いていたよ

うではあったけれど、すぐにこの召集に応じてくれたので、俺は先にみゆきちゃん達を迎えに行ってからすぐにこうちゃん達も迎えに行き、その途中で慶一に連絡を入れたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

親父達に言うべき事を言った後、俺は麗真おじさんの家へと向かっていた。

そして、家の門をくぐると、そのまま本宅へと歩いていく。

玄関のドアの前で軽く深呼吸をすると、俺は呼び鈴を押したのだった。

しばらくして、俺を出迎えてくれたのは麗真おじさんだった。

おじさんは突然の俺の来訪に驚きつつも

「おや？これは誰かと思えば。どうしたんだい？慶一君。いきなり尋ねてきたりして。」

俺はそんな麗真おじさんに

「こんばんは。麗真おじさん。実は、ちょっとこの辺りがしばらくごたごたする、という話を聞いたものですから、俺もしばらくはこちらに戻る事はできなくなりそうでしたので、その前に瞬に報告したい事があってやってきたんです。夜分にご迷惑とは思いましたが、瞬の仏前にお邪魔しても構いませんか？」

そう言うと、麗真おじさんは微笑みながら頷いて

「そうか。確かにこれからこの辺りは物騒になるからね。さあ、あがりなさい。瞬の仏前へ案内しよう。」

そう言って俺を家にあがるように促す麗真おじさんの後に俺はついて行くのだった。

そして、仏前にたどり着くと、麗真おじさんは俺に

「さあ、ここだ。君の気の済むようにするといい。私は居間の方へ戻っているから、すべき事が済んだなら声をかけてくれるかい？」

そう言ったので、俺は頷いて

「はい。ありがとうございます。では、後ほど。」

麗真おじさんにそう言うと、麗真おじさんは1つ頷くと、踵を返し、居間の方へと戻って行ったのだった。

俺はそれを見送った後、瞬坊の仏前に来て線香をつけ、蝋燭を灯して仏壇に手を合わせるとそのまま瞑想のように目をつぶって心の中で瞬に語りかけた。

（・・・瞬。お前の命を奪った犯人がわかったよ。成神章・・・俺達とは因縁のある奴だった。しかし、犯人はわかったけど、もう、そいつにもお前に対する罪を償わせる事ができない。すまないな・・・けど、きっとお前の元へと奴が向かってるはずだから、あの世でボコボコにでもしてやれ。と、まあ、とにかくだ、話がそれちまったけど、俺はこの事件、犯人も判明してもう終わったものと割り切る事にしたよ。そして、俺はお前の分までこれからも皆と一緒に生

きる事を誓った。これからしばらくこちらに来れなくなるからな、報告だけは今日のうちにしておきたかったんだ。これから、俺はみゆき達を守る。心配せずともこれ以上は俺は、俺の仲間達、大事な人達を傷つけさせはしない。改めてお前の前で誓わせてもらう。だから、いつかまた、俺がそっちに行った時には・・・そっちでも・・・親友になろう。それまでは、遠い空から俺達を見守っていてくれ。今日はお前に、その事を報告に来させてもらったよ。じゃあな、瞬。いずれまた会う時に・・・・・・。）

そこまで考えた後、俺はそっと目を開く。

そして、もう一度仏壇に手を合わせてから俺は仏間を後にした。

俺は、居間にいるであろう麗真おじさんに声をかけた。

「麗真おじさん、もう済みました。俺の我侭を聞いていただけでありがとうございます。今日はこれで失礼しますね。またこちらのごたごたが収まった頃には寄らせてもらいますから。」

そう言うと、麗真おじさんも居間から顔を出して俺に

「もういいのかい？ごたごたの方は私も龍真さんらと共に事にあたるつもりさ、だから心配はいらないよ。最近はこの辺りも物騒になってきてるからね、気をつけて帰りなさい。まあ、君なら余程の相手じゃないと危険とは言えないかもしれないがね。」

そう言って一応の心配をしてくれる麗真おじさんに俺は笑いながら

「わかっていますよ。とはいえ、ご忠告、ありがたく受け取っておきます。それではまたいずれ。」

俺はそう言って麗真おじさんに一礼してから家を出たのだった。

そして、家を出て少ししてから俺の携帯が鳴ったので、電話に出る。

電話の相手は龍兄だった。

「もしもし？龍兄？」

「慶一か、今どこだ？」

「今は牧村道場を出た所だよ。」

「そうか。これからお前は家へ戻るのか？」

「ああ。やる事も済ませたし、明日にも備えたいからね。」

「なるほど。慶一、とりあえず帰る前に一度道場に寄って行け。お前に頼んでおきたい事があるからな。」

「ん？だったら、さっき俺が道場出る時に言ってくれればよかったのに。」

「すまんな、お前が道場を出て少ししてから気付いたからな。お前に言いそびれたんだよ。」

「そうだったのか。まあ、いいか。わかったよ。このまま道場へ向かうから。」

「ああ。面倒かけてすまないな。」

「いいって。もののついでだしな。それじゃそっちで。」

「ああ、それじゃ。」

そう言って俺は電話を切ると、一度うちの道場へ寄る為に足を向けたのだった。

そして、俺は道場に着くと、そのまま道場内へと足を踏み入れた。

「龍兄、言われたとおり立ち寄ったぞ？って、あれ？みゆき？みな

み？こう？やまと？何でお前等がここに？」

道場内に入って俺は、龍兄に声をかけたのだが、そこにみゆき達の姿を見つけて驚いた俺は、思わずそう言っていた。

「慶一さん、こんばんは。」

「・・・先輩、こんばんは・・・。」

「先輩、お邪魔してますよー。」

「龍也さんに呼ばれて来たわ。まさかこっちに戻って来てるとは思わなかったけどね。」

俺の姿を見てそう挨拶してくる４人。

俺はそんな４人に

「ちょっとやっておきたい事があって今日、こっちに来てたんだ。お前等こそなんでここに来てるんだ？」

と、不思議そうな顔で俺は皆にそう尋ねたのだが、みんなの変わりに龍兄が

「来たな？慶一。お前への頼みはこれだ。お前が丁度こっちに来ていたからな。明日からお前の家に世話になる、との事だったが、お前が来ているならそのままエスコートさせて今日、連れて行ってもらう方がより安全だろうと考えたのさ。」

そう言って俺に事情を説明してくれた。

俺はその言葉に苦笑しつつ

「はは。そういう事か、龍兄も結構用意がいいよな。わかったよ。確かにそうの方が安全か。まあ、急遽こんな事になったけども、お前等、準備とかは大丈夫なのか？」

そう４人に訪ねると、４人は頷いて

「はい。龍也さんから一週間程前にその事に関する連絡はいただいていましたから、準備だけは済ませてあったんですよ。」

「・・・事前の準備は済ませていたけれど、突然龍也さんからの連絡をもらうとは思っていませんでしたが・・・。」

「そうですね。でも、慌ててですが、何とか準備は出来てますから。」

「こうは直前まで何もやってなかったみたいだものね・・・まったく・・・でも、何とか全員準備は済ませているから、すぐにでも動けるわ。」

と、それぞれに事情を説明しつつ、準備が出来ている事を伝えてくれたので、俺はそれに頷いて

「わかった。それじゃ、早速行くとするか。時間も大分遅くなってるしな。龍兄、改めて頼むけど、みゆき達の御両親の事、よろしく頼むな。」

俺の言葉に４人とも頷き、そして、４人は龍兄に

「龍也さん、お父さんとお母さんの事、よろしくお願いします。」

「・・・お任せする事になってしまいますが、よろしくお願いしますね・・・？」

「ちょっと心配はあるけど、お任せする方が安心ですし、よろしくです。」

「お世話になるわね？龍也さん。」

そう言うと、龍兄も頷いて

「ああ。こっちは任せてくれ、皆もくれぐれも危険な事がないように、と祈っているよ。それと慶一、しっかりと皆の安全を守れよ？」

最後に俺にそう言う龍兄に俺は力強く頷いて

「わかってる。皆は俺がきっと守る。よし、行こうか、皆。」

俺の言葉に皆も頷き、そして、俺達は道場を後にする。

だが、その時、龍兄はみゆきを呼び止めて何事かを話しているようだった。

俺は、２人の話が終わるのを少し離れた場所でこう達と待っていたのだった。

龍也ｓｉｄｅ

慶一にみゆきちゃん達のエスコートを頼む為に道場に立ち寄ってもらい、みゆきちゃん達を託す俺。

そして、その時に俺は慶一に皆をちゃんと守れ、と再度釘をさした。

慶一の決意の言葉を聞いて俺は安心して皆を送り出そうとしたのだが、俺はみゆきちゃんに話しておく事があったので呼び止めたのだった。

「みゆきちゃん、ちょっといいかな？」

と、皆の後について最後に出て行こうとするみゆきちゃんに声をかけると、みゆきちゃんは俺の方に向き直って

「はい？なんでしょう、龍也さん。」

そう尋ねて来たので俺はみゆきちゃんに

「みゆきちゃん、後で皆にも話しておいて欲しいんだけどさ、慶一の事、くれぐれもよろしく頼むよ。瞬坊が亡くなってからあいつは、君達を守るという事に少し気負いすぎている感じもある。だから、あいつが無茶しないように、そして、あいつの心の拠り所としてあいつの側についていてやって欲しいんだ。」

俺の言葉を真剣に聞くみゆきちゃんはふっと微笑むと

「わかりました。でも龍也さんのご心配には及びませんよ？何故なら私達はお互いに支えあい、助け合う、そのつもりですから。ですから、慶一さんにもあまり無茶はさせませんし、なるべく慶一さんの側についていてあげようと考えています。他の皆さんもまた、私と同じ考えみたいですから、大丈夫です。」

そんなみゆきちゃんの言葉に俺は慶一の皆に対する、そして皆の慶一に対する信頼感に軽く驚いていたが

「そうか。どうやら、余計な忠告だったかな？つくづく慶一が羨ましいね。」

苦笑しながら俺はみゆきちゃんにそう言うと、みゆきちゃんも笑って

「いえ、そんな事はありません。龍也さんのご忠告、とてもありがたかったです。そのご忠告もまた、心にとどめさせてもらいますから。」

と言うみゆきちゃんに俺は頷いて

「はは、そう言ってくれるなら立つ瀬もあるというもんだね。それじゃくれぐれも注意して？何かあれば俺の方にも連絡を入れてくれ。」

そう言うと、みゆきちゃんも頷いて

「わかりました。でも、出来ることならあまり龍也さんのお手を煩わせる事はないようにしたいですね。」

その言葉に俺も頷いて

「まあ、それが一番いいんだけどな・・・。ま、とにかく、気をつけてね。」

そう言うと、みゆきちゃんは頷いて

「はい。それでは。」

と、俺に一礼してから慶一達の方へと歩いていくみゆきちゃんを見送ったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

龍兄と何事かを話すみゆきが、龍兄との話を終えて戻ってきた。
俺はみゆきに
「みゆき、龍兄と何を話してたんだ？」
と尋ねると、みゆきは微笑みを向けながら
「いえ、大した事ではありませんよ？くれぐれも気をつけて欲しい、と言う事と、慶一さんの事をよろしく、と言われただけですから。」
そのみゆきの言葉に俺は苦笑しながら
「気をつけろ、って言うのはわかるけど、俺の事をよろしくってのはどういう事なんだかなあ・・・。」
と思わず軽いため息をつきながらそう言う俺にみゆきは
「ふふ。慶一さんは無茶をする事があるから、そうなり過ぎないように見ていてやってくれ、と言う事みたいですよ？」
その言葉に俺は少し凹みながら
「むう・・・反論しずらいところがなんとも、だなあ・・・。でも、わかったよ。龍兄の忠告でもあるし、心にとどめておくさ。」
みゆきにそう言うと、みゆきはにっこりと笑って
「心にとどめておく、そう誓ったのですから、その言葉、ちゃんと守って下さいね？」

そう俺に釘を刺すみゆきに俺は苦笑しながら頷くと

「はは、手厳しいな。よし、じゃあ、俺がその誓いを破ったら罰ゲームでもするか？」

と、ちょっと冗談を交えつつ言う俺だったが、そんな俺の言葉にみゆきは何やら真剣に考え込んでいるようだった。

そして、俺とみゆきのやり取りを聞いていた他の皆もまた、何かを考えていたようだが、ふいにこうが

「なら、その誓いを破ったら先輩に何か奢ってもらいましょうかね？」

と言うこうのことばをきっかけに、みなみややまとまでもが

「・・・レゾンの特性チーズケーキが食べたいです・・・。」

「私の欲しがってるアクセサリーでもプレゼントしてもらおうかしら？」

と言い、その言葉にたじたじとなっていた俺だったが、そんな俺の事など構わずにみゆきも

「そうですね・・・。誓いを破った時には、１日私の言う事を聞いていただきましょうか。」

と、にっこりと笑いながらそう言うと、その言葉にこうとみなみはみゆきをからかうように

「おお！？高良先輩も言いますねー。」
「・・・みゆきさん、大胆ですね・・・。」

ニヤニヤしつつ、顔を赤らめつつそう言い、やまとも顔を少し赤くしながら

「せ、先輩の案、私も考えようかしら・・・。」

と言っているのを、俺は顔を引きつらせながら聞いていた。

そして、疲れを滲ませながら

「・・・４人とも、お手柔らかにな・・・。」

と言うと、４人ともクスクスと笑っているのを、俺は軽いため息をつきながら見ていた。

その後、何事もなく、自宅の最寄駅へと到着し、自宅へ５人連れ立って向かう時、俺はふいに皆の方に向き直った。

俺の突然の行動に皆も驚きつつその場に止まる。

そして、俺は皆に

「皆、これからしばらくの共同生活に入るけど、改めて言うよ。俺は皆を守る。何があっても傷つけさせない。それを改めてここに誓うよ。」

俺の決意を改めて皆に告げると、皆はそんな俺の顔を見て頬を赤らめながら少しぼーっとしているようだったが、やがて我に帰ると

「ご、ご迷惑をおかけすると思いますが、よろしくお願いします。」
「・・・先輩が居てくれるなら、安心ですね・・・。」
「あ、あはは。何だか先輩かっこいいです。ちょっと感動しちゃいましたよ。」
「・・・頼りに、させてもらうわよ？先輩。」

と、それぞれに俺に言葉をかけてくれたのだった。

俺もそんな皆の言葉に照れつつも、改めて皆の言葉に力強く頷くと

「ああ。任せてくれ。さてと、それじゃ帰ろうぜ？もう結構遅い時間だし、明日も学校あるし、更にはパティも待たせてるもんな。皆、今日からしばらく、よろしくな。」

その俺の言葉に皆もまた、笑顔で頷いてくれたのだった。

そして、俺達は俺の家へと歩き出す。

俺は明日からの共同生活に思いを馳せつつ、自ら立てた誓いを通そうと改めて気を引き締めるのだった。

集まる旋律～瞬への報告、そして、慶一の誓い～（後書き）

次からは少しの間みゆき達との共同生活も含めてのゆるゆるまったり展開となります。

始まりの六重奏～不安と苦悩とささやかな幸せの始まり～（前書き）

今回はやまと成分増量で行きたいと思います。
では、本編をどうぞ。

始まりの六重奏～不安と苦悩とささやかな幸せの始まり～

瞬の一件で、俺は事件の犯人を知る事となったが、その犯人もまたこの世の人ではないという事実を受けて、心に少し複雑なものを感じつつもこの一件はこれで終わりだと思い、俺は事件の事を割り切る事にした。

そして、改めて瞬の仏前で報告すべき事を伝え、これからは瞬の分まで皆と共に前に進んで行く事を決意したのだった。

そして、その中で俺は、今度こそは仲間達を傷つけさせない、と心に改めて誓い、龍兄の提案もあってみゆき達を俺の家で預かる事にしたのだった。

そして、そんな事のあった次の日の朝・・・・・・。

俺は、自分が何か柔らかい物を抱きしめているような感覚を感じていた。

それと同時に俺を呼ぶ誰かの声が聞こえて来て、俺は意識を覚醒させる。

すると、そこには俺を真っ赤な顔で見上げるやまとの顔が近くにあったので、俺は驚いて思わず

「・・・え?は?えっと・・・えええええええ!?」

と思わず大きな叫び声を上げてやまとから慌てて離れたのだった。

そして、顔を赤くしながら慌てつつ俺はやまとに

「や、やまと。俺はお前に何をしたんだ?というか、何でお前が俺の部屋にいたんだ?」

そう聞くと、やまとは今だ赤い顔のままではあったけど、俺に

「・・・先輩は、その・・・先輩を起こしに来た私を・・・寝ぼけて抱きしめていたのよ。いきなりであまりの事に私もパニックになっちゃって、それで、先輩に必死に呼びかけていたら、先輩が目を覚まして、って事なのよ。」

と、そう事情を説明してくれた。

俺は、以前にも同じ過ちを犯した事があったのを思い出して頭を抱えて自己嫌悪しながら

「・・・そうか、事情はよくわかった。ごめんな?やまと。寝ぼけていたとはいえ、お前に抱きつく、なんて事しちやってさ・・・。」

と、自分の行動に凹みつつもそうやまとに謝る俺だったが、やまとはそんな俺の言葉に首をふるふると振って

「別にいいわよ・・・。こうなったのも先輩の所為だけじゃないし、私にも油断があったんだろうし・・・。でも、謝らないでよ、先輩。私は別に・・・その・・・抱きしめられた事は嫌じゃなかったから・・・。」

と、最後の方はかなり小声になってしまっていた所為で俺もよく聞き取れなかったが、とりあえずやまとが怒っている、という訳じゃ

なさそうだ、と言う事だけはわかった。

俺は自分の行為に１つため息をついた後

「とにかく、起こしてくれてありがとな、やまと。着替えたりとかして準備していくから、皆と下で待っていてくれ。」

そう言うと、やまとは苦笑しつつも頷いて

「わかったわ。それと、起こした事に対するお礼はいいわよ。これから先輩の家でしばらくはお世話になるんだからこれくらいの手伝いくらいはしないと、だしね。」

そう言って笑うやまとに俺も照れながら

「そっか。なら、これからもお前等の自主性に任せる事にするかな。あ、それと、あまり気負いすぎないでくれよ？俺達はいつもの俺達で行けばいい。ここでも自然体でやってくれればいいしな。」

と言う俺の言葉にやまともクスッと笑うと

「言われなくてもわかってるわよ。それじゃ私は先に下に行くわ。先輩、また後でね？」

そう言って部屋を出て行くやまとを見送リつつ、軽いため息を１つついてから、俺は学校へ行く準備を始めるのだった。

やまとｓｉｄｅ

先輩の部屋から下へと戻りながら、私は今朝の顛末について再び思

い出していた。

昨日から慶一先輩の家でお世話になることになり、私達は明日から少しでも先輩の負担にならないように、と朝食を作ろう、と言う事になり、慶一先輩が起きる時間よりも早起きをして４人で朝食の準備をした。

そして、あらかた出来上がる頃にはそろそろ先輩の起きる時間も近づいて来ていたので、高良先輩が私に

「永森さん。申し訳ないのですが、そろそろ慶一さんを起こしに行って来ていただけませんか？後の準備は私達でやっておきますから。」

そう言って来たので、私は先輩の言葉に頷いて

「わかったわ。それじゃこっちの方はお願いね？こう、岩崎さん。こっちは任せるわ。」

そう言うと、こうと岩崎さんも頷いて

「りょうかーい。こっちは任せといて。先輩起こしに行って来なよ。」

「・・・後はもう大した事はありませんから大丈夫です・・・。永森先輩は慶一先輩の事、よろしくお願いします・・・。」

と言う2人に頷くと、私は踵を返して慶一先輩の部屋へと向かった。

先輩の部屋の前に来て、一応ドアをノックしてみたが、先輩からの返答はなく、私は小声で「入るわよ？先輩。」と言いながら先輩の

部屋へと入って行き、先輩が寝ているベットへと歩いていった。

そして、気持よさそうに寝ている先輩を見て私は少しの間、そんな先輩の寝顔を眺めていたけど、自分の頼まれた事を済ませてしまおうと思い、先輩を起こす事にしたのだった。

最初は軽く呼びかけてみたけれど、反応なし。

次は先輩の体を揺すって声をかけて起こそうと試みてみたのだが、その時に私にとっても思いがけない事がおきたのだった。

先輩の体を揺すっている時、寝ぼけた先輩が私を突然抱きしめたのだ。

私はそんな先輩の突然の行為に赤面してパニックになった。

そして、私は慌てた声で先輩に

「せ、せせせ先輩!?いきなり何を?ちょっと先輩!先輩ってば!」

と言いながらも混乱しまくっている私は先輩を振りほどきもせずにその状態で少しの間いたのだけど、やっと先輩を振りほどかないと、と思った時、私の脳裏に以前、泉先輩が言っていた事が浮かび上がってきた。

(・・・・・でも、パティが慶一君に気を使って家をしばらく留守にする事になっちゃってさ、それがさらに慶一君の寂しさをあおる事になっちゃったみたいでねー・・・。帰ろうとしたけど、慶一君に抱きしめられて、今晩だけで良いから一緒に居てくれ、って言われちゃったんだよねー。)

あの時泉先輩が言っていた慶一先輩が寂しがっていた、だから泉先輩を抱きしめたのだという事だったのだと言っていた事を思いだした。

だから、私はそんな先輩のために少しの間だけ先輩の抱きしめるがままにされていよう、と思い、ほんの数分だったけれど、先輩の好きにさせておいた。

でも、流石にそろそろ起こさなければと思った私は先輩に再び声をかけると、先輩はようやく起きたみたいだったのだが、私の顔が近くにある事に驚いたらしく、傍目でみたら笑ってしまうほどにびっくりしていた。

そして、慌てる先輩に、私は先程まで私と先輩の間に起きていたことを話したのだった。

自分のした事に軽く落ち込む先輩だったが、私も嫌だったという訳ではなかったので、その事を先輩に話して安心させると、先輩に学校へ行く用意をして降りてきて?と声をかけたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

いくら寝ぼけていたとはいえ、俺はやまとに対して物凄く恥ずかしい真似をしてしまった。

俺はその事に落ちこんでやまとに謝ったのだけど、やまとは気にはしていない、と言ってくれたので、俺はその事に少しだけほっとしていた。

とりあえず、いつまでもこうしていても仕方がないと思ったので、俺は着替えを済ませて学校へ行く準備を済ませると、皆のいるキッチンへと降りていったのだった。

だが、俺はこの時失念していた。

この家には小悪魔的存在の奴が居たという事に。

そして、その小悪魔は俺の後にキッチンに姿を現すと同時にやってくれた。

「おはよう、皆。朝御飯等の準備を任せちゃってすまないな。」

と、皆に朝の挨拶をしつつ、自分の席へとつく俺に、皆も

「おはようございます、慶一さん。お気になさらずともいいですよ？今回の事は私達の意思でやった事なんですから。」

「・・・これからしばらくお世話になるんです・・・。このくらいの事はしないと、って思ったので・・・。」

と、みゆきとみなみが俺に言い、こうとやまとも

「高良先輩の言う通りですよ。しばらくお世話になる以上は家事も協力しないと、って話です。」

「だから、先輩もさっき私に言ってくれた通り、自然体でやってくれればいいわ。」

と言ってくれたので、俺は

「そっか。なら、これからも家事は分担でやったりとかしていくか。

でも、皆、俺にも遠慮はするなよ？お前等が俺に気を使うかもって事は何となくわかるから、その所為で自分が、自分がって言う風にはならないように気をつけなきゃな。」

そう言うと、みゆきがいつもの微笑みを浮かべながら

「わかりました。慶一さんのおっしゃる通りにしますね？ですから、慶一さんも、慶一さんがおっしゃられたように自然体でやってくださいね？」

と、そう言うと、俺も笑って頷きながら

「わかってるさ。なら、今日学校が終わって家に戻ったら改めて家事の分担なんかを決めようぜ？」

そう、俺が言うと、皆もコクリと頷いてくれたのを確認してから朝食を摂る為にコーヒーを入れて、皆にも配りつつ、自分も席に落ち着いたのだった。

そして、席に着いてすぐにパティもやってきて「グッモーニン！！」と皆に元気よく挨拶をしながら自分の席に着くのを見届けてから俺は早速コーヒーを一口飲んだ。

俺が一口コーヒーを飲み終わる頃にはパティも皆との挨拶を終えて朝食を食べ始めたのだが、その時にパティはふいに俺の方を見てニヤニヤと笑みを浮かべながら

「グッモーニン、ケイイチ！サキホドはオタノシミでしたネ？」

そう言って、この場に大きな爆弾を投下したのだった。

その言葉にやまとは真っ赤になり、俺はもう一口含んだコーヒーを「ぶーーーっ！！」と思いっきり噴出し、むせ返った。

「ゲホ、ゴホッ、パ、パティ、お前一体・・・。」

俺はむせ返る状況を必死にもと戻しつつ、尋ねると、パティは

「サキホドケイイチのヘヤからケイイチのサケビゴエがキコエました。ワタシもビックリしたのでヨウスをミにイキましたが、こっそりケイイチのヘヤをノゾいてみると、ケイイチとヤマトがダキあっていたのをミましたヨ？」

その言葉に俺は額に手をあてながらため息をつき

「あ、いや、あれはだな・・・っ！！」

事情を説明しようと言葉を発しようとした瞬間、突然にこの場の空気が張り詰める感覚に思わず俺は言葉を失った。

この冷たく、そして威圧的はオーラを纏った空気の出所を探るべく、おそるおそる周りを見渡してみると、それは物凄い良い笑顔で笑っているみゆきが目に入った。

だが、その笑顔とは裏腹に恐るべき圧力のオーラを俺にぶつけてくるみゆきに俺は顔を引きつらせながら

「あ、あの・・・み、みゆき、さん？」

と、おずおずと声をかけてみると、みゆきはその笑顔のままで

「どうかしましたか?慶一さん。何だかお顔が引きつっていらっしゃるみたいですが?」

その言葉に俺は背筋に冷たいものが走るのを感じて、そんなみゆきにびびりながら

「い、いや、えっと、その・・・もしかして怒っていらっしゃる?」

と、つい丁寧語で聞き返す俺に、みゆきは更にオーラを膨らませながら

「怒る?何の事でしょう?慶一さんは私に怒られるようなやましい事でもおありでしたか?」

その言葉に更にしどろもどろになりつつ俺は

「い、いや、べ、別にそんな事はないんだけどさ・・・。」

そうみゆきに言うと、みゆきは笑顔を崩さぬままに

「そうですよねえ・・・。永森さんと抱き合った事なんて慶一さんにとってはやましい事ではないですよね?そうですよねえ?」

その言葉に俺は胸に何かが大きく突き刺さる感覚を覚えながら

「み、みゆき?あのな?それは事故、事故だから。俺自身にはやましい気持ちなんてないんだから、だから、誤解しないでくれよ。」

と、必死にみゆきの指摘した部分に対する弁解をしたのだが、今の

みゆきには結局俺の言葉は届かないようだった。

そんな状況を居たたまれなくなりつつも冷や汗をかいている他の皆だったが、あまりの恐怖に他の皆もみゆきには何も言えないようだった。

俺もまた、これ以上の弁解も無駄かもと思い、もはやみゆきを説得する事を諦めたのだった。

しかし、そんな時やまとが

「高良先輩。慶一先輩は悪くはないわ。今回はたまたま先輩が寝ぼけていてやった事だもの。それに、高良先輩、瞬一先輩が亡くなってからの慶一先輩の状況と、初めに慶一先輩の様子を見に行ってその結果を私達に教えてくれた泉先輩の言葉を思い出して？今の先輩がそう言う行動をとってしまう事は仕方のない事よ？あの事件からまだそれ程に時間も経っていないのだもの。普通の人なら下手をすればまだ立ち直れてはいない程度の時間しか経っていないのだから、先輩の心にまだ寂しさを感じる心が残っていてもおかしくはないのよ？」

そう言って俺をフォローしてくれた。

そして、その言葉を聞いたみゆきは、ふっと、オーラを収めて

「・・・そうでしたね。ちょっと大人気なかったかもしれません。でも、慶一さん？今回の事は色々な事があったがゆえの行動と思って咎めはしませんが、それでも節度のある共同生活を送る為にも、軽率な行動はなさらないよう、注意してくださいね？」

と言うみゆきの言葉に俺も頷いて

「わ、わかってる。元よりそのつもりだしな。とりあえず、朝食済ませて学校いかないとな。」

その言葉に他の皆も、やっと緊張が解けたみたいで再び俺達は朝食を再開させて食事を済ませた。

朝食の後片付けをしてる時、こうとみなみは先程のみゆきの状態を振り返り、小声で話していた。

『いやー、さっきは怖かったねー・・・。岩崎さん、高良先輩ってあんなに怖い人なんだ?』

『・・・いえ、あんなみゆきさんは初めて見る気がします・・・。凄く怖かったです・・・。』

そして、そんな2人にパティも

『ウーン・・・これからはミユキをヘタにオコらせないホウがいいようですネ・・・。ワタシもキをつけマス・・・。』

そう言っているのが俺にも聞こえたので、俺はパティの側に行って

『パティ、頼むからあまり変な事言わないでおいてくれよ。お前も怖かったろうけど、俺も寿命が縮む思いだったよ・・・。』

そう言うと、パティもペロリと舌を出して

『ソーリィ、ケイイチ。コンゴはジチョウします。タブン・・・。』

その言葉に俺は思わず

『たぶん、ってなんだよ、たぶんって。はあ・・まったく勘弁してくれ・・・。』

そうツッコムと、パティも苦笑していた。

そして、朝食の片付けを終えてお茶の準備をしている頃、いつものようにあやのがやってきた。

そして、あやのは、予定日よりも早くに皆が来ていた事を驚いていたが、事の経緯を説明すると、納得してくれたようだった。

俺は皆を先に玄関の外に待たせて、最後の戸締りをしていたが、やまともまた、お手洗いに行っていた為に、皆より少し遅れて出てきたが、その際に玄関で俺と鉢合わせる事となった。

そして、俺が靴を履いているときに不意にやまとが俺に声をかけてきた。

「先輩、待って?はい、これ。」

そう言って俺に、何かの包みを差し出してきたので俺は首を傾げつつそれを受け取って

「ん?やまと、これは何だ?」

そう尋ねると、やまとは顔を赤くしながら

「今日からお世話になるんだし、私も先輩にお弁当くらいは作って

あげようかな？ってね。今朝は高良先輩達よりも早めに起きて準備したのよ。その・・・食べてもらえるかしら？」

その言葉に俺も少し顔を赤くしつつも

「そ、そうか。気を使わせちゃって悪いな。でも、ありがとう。これ、ありがたく食べさせてもらうよ。」

そうお礼を言うと、やまとも赤い顔のままだったが、嬉しそうに笑ってくれた。

「後で、感想は聞かせてもらうわね？それじゃ、皆を待たせているから行きましょ？」

その言葉に俺も頷いて「ああ、それじゃ行くか。」と言って、家を出ようとしたが、その前にやまとにもう一言言っておく事があったので、やまとに

「やまと。さっきはありがとな？俺の事フォローしてくれて。それに、気遣ってくれた事も嬉しかったよ。」

そう言うと、やまとは照れながら

「べ、別にいいわよ。今の先輩の状況を考えた上での事なんだし。でも、高良先輩も言っていた通り、今後の行動には気をつけてよ？先輩。次はちゃんとフォローできるかどうかはわからないから。」

そう言うやまとに俺も頷いて

「わかってるさ。とりあえず行こう。皆待ってる。」

そうやまとに促すと、やまとも頷いた。

それを見てから俺は玄関を出る。

外では俺達が遅かった事に対する抗議がなされたが、何とか謝って事無きを得たのだった。

俺達は連れ立って電車へと乗り込む。

その後、かがみ達と合流したが、やっぱりかがみ達もみゆき達がすでに一緒にいる事に驚いていたのだった。

そして、その日の昼休み。

俺達はいつものようにアニ研の部室へと集まり、お昼を摂ろうとしていた。

皆もそれぞれに弁当や購買で買ってきたパン等を取り出して準備をする中、俺もまた朝にやまとから受け取った弁当を出して昼食の準備をした。

「よーし、それじゃ早速食べよっかー。」

と言うこなたの言葉で皆も一斉に御飯を食べ始める。

そんな中、いつもの俺の弁当と少し違うのを感じたつかさが俺に

「あれ？けいちゃん、今日のお弁当はいつもと違うね？今日は何だかいつもよりおかずも充実してるみたい。」

そう言うと、皆も俺の弁当に注目しだした。

俺はそんな皆に

「あー・・・実はこれ、やまとが作ってくれたんだよ。これからしばらくは共同生活だから何か自分にも出来る事をしたい、って言ってな。」

そう説明すると、やまとは途端に顔を真っ赤にし、それを見たこなたは

「へえ?永森さんも料理出来るんだね?これは意外だったよ。」

と、少々不機嫌気味にそう言い、かがみもやはり不機嫌そうな顔で

「ちょっと悔しいわね・・・。私ももう少し料理が出来たらなあ・・・。」

と悔しさを滲ませつつ言う。

つかさはのん気な顔で

「うん。彩りなんかもバランスいいと思うよ~?ここまで作れるなら大丈夫だね。」

とやまとの弁当を評価していた。

みゆきは何故かしてやられた、というような表情で

「永森さんがそんな事をされていたなんて気付きませんでした。いつそんな事をなされたんですか？（・・・次こそは、私が・・・。）」

と、やまとにその事を聞きつつ、何かを決意したような顔をしていた。

そして、みさおはニヤニヤしながら

「おい、慶一、女の子からの手作り弁当もらって嬉しいか？なあ、嬉しいか？」

と俺をからかい、俺がその言葉に顔を赤くしながら困った顔をしているとあやのが

「もう、みさちゃん。あんまりからかわないの。でも、よかったわね、慶ちゃん。」

俺をフォローしつつそう言うもんだから更に困惑し、そしてこうは

「いやー私もびっくりですよ。やまと、思い切った事したねー。」

その言葉にやまとは赤い顔のままみゆきとこうに

「えっと、その・・・高良先輩達が眠った後に仕込みだけは済ませておいたのよ。それと、こう、あんまりからかわないでよ・・・。」

そう言って困ったような表情を浮かべていた。

「私も、もうちょっと練習してみようかな？慶一先輩、こなたおね

ーちゃんにはよく試食はしてもらってますけど、今度は先輩にも試食をお願いしてもいいですか？」

と、こちらは純粋に自分のスキルアップをしたいと思っているゆたかの言葉に俺は

「ああ。いいよ？とはいえ、俺の評価が参考になるかはわからないけど。」

そう答えると、ゆたかは笑いながら

「色々感想とか聞いてみたいですから、その時にはおねがいしますね？」

と言うゆたかに俺も頷いて「ん。わかったよ。」と答えると、ゆたかは再び笑顔になった。

「・・・今度は私も先輩のお弁当を作ってみようと思います・・・。私もゆたかと同じで、料理のスキルアップをしたい、と思っていますから・・・。」

そう言ってくるみなみに俺は

「それはいいけど、朝にも言ったが、あまり気をつかいすぎないようにな？あくまでも自然体、って事でよろしく。」

そう言うと、みなみもコクリと頷いて

「・・・大丈夫です。これも私の意思で、ですから、無理はしてませんよ・・・？」

その言葉に俺は頷いて

「わかったよ。それならいいんだ。とりあえず楽しみにはさせてもらうかな？」

そう言うと、みなみは顔を赤くしながらコクリと頷いたのだった。

「先輩、まさにハーレム状態になってますねー。とはいえ、私もそろそろ家事とかこなせるようになった方がいいかもしれないっスね・・・今後一人暮らしとかありえない事でもないですし。」

その言葉には俺からではなく、こうからツッコミが入った。

「ひよりんもそういう事考えているんなら、今からでも少しはやっときなよー？経験積むだけでもかなり違うんだからね？」

そう言うこうに、ひよりは苦笑しつつ

「わ、わかってるっスよ。私はともかく、こうちゃん先輩はどうなんスか？」

という切り返しにこうは豪快に笑って

「ふはははは！甘いよ？ひよりん。私も必要最低限の事くらいは出来るからね。突然一人暮らしになっても大丈夫だよ。」

その言葉に”ガーン”という擬音が聞こえそうなほどにショックを受けて落ち込みつつ

「そ、そんな・・・こうちゃん先輩はそういうのあまり得意じゃなさそうだってイメージあったのに・・・。」

その言葉に少しだけむっと来たこうはひよりを睨みつけながら

「ひよりんー？人の事を普段、どんな目で見てるのさ？まったく・・・。」

そう言ってひよりに説教モードを展開しはじめたのだった。

そんな2人を尻目にパティは

「まあ、ワタシも二ポンにクルトキにはホームスティデキなかったトキにはヒトリグラシもソウテイはしていましたからネ。ワタシもヒトナミにはデキますヨ？こうミえてもケイイチにディナーナドをツクってあげたコトもありますカラ。」

そう得意げに言うパティにいずみも感心しながら

「へえ？パーさんも出来るんだ？うらやましいな。私ももう少し頑張ろうかな？」

と言うと、パティはそんないずみに

「イズミもオカシヅクリはウマイじゃないですカ？ワタシはむしろ、そっちをイズミからナライたいですヨ？」

そう言うと、いずみは笑顔になって

「それなら、今度パーさんにも教えてあげるね？」

その言葉にパティも満面の笑顔で頷いて喜んでいた。

「まあ、私も弟の面倒見てるからそれなりには出来ますが・・・。」

「そういえばそうだよね？みくはこれで中々家庭的だったりするしね。」

みくとたまきの言葉を聞いた俺は２人に

「ん？みくは弟さんいたんだ？知らなかったよ。そっか、面倒見てやってるんじゃ良いお姉さんなんだな。たまきはどうなんだ？」

そう尋ねると、みくは照れながら

「いやあ、恐縮ですね。まあ、うちは共働きですからね。自分でやれる事は協力しようって事でやってるんですよ。だから、弟に御飯作ってあげる事もありますし。」

そう言い、たまきは苦笑しながら

「私は苦手ですねー。でも、これから覚えたいなあって思ってますよ。」

その言葉に俺も苦笑しながら

「そっか、これからも頑張れ、みく。それと、たまきも覚えてみたい、と言うならこのメンバーの中で家事得意な奴に教わってみればいいと思うぞ？」

そう言うと、みくは照れつつも頷いて、たまきは

「そうですね。相談のってくれる人がいれば相談してみます。」

そう言ったので、俺も頷いて「がんばれ。」と声をかけたのだった。

その後もこの手の話題で盛り上がった俺達は昼休み一杯まで話しつづけていたのだった。

そして、放課後、家に帰る途中でみゆきが俺に

「慶一さん、明日は私がお弁当を作りますから、明日はお任せください。」

そう言って来たので、俺は

「え?でも、無理しなくていいんだぞ?俺も頼んだわけじゃないし。」

そう言うと、みゆきはそんな俺に

「いえ、無理をしている訳ではありません。皆さんと話し合った結果、ですから。」

そう言うみゆきに俺は驚きつつ

「え?話し合った?それってどういう・・・。」

そう尋ねると、みゆきは微笑みながら

「実はあの後、日替わりで慶一さんにお弁当を作ろう、という事に

なったんです。今回は永森さんが作りましたから、次は私の番、そして、その後はみなみちゃん、八坂さん、泉さん、かがみさん、つかささん、ゆたかちゃん、という感じで。その他の方は自信と経験がないという理由からご辞退されていたみたいですが、概ねこんな感じになりました。そうすれば、争う事もないだろうという泉さんの提案でもありましたので。」

その言葉に俺は苦笑しながら

「やれやれ、そういう事になったのか。でも、皆がそうしたいって言うのなら俺はその意思を尊重してやるしかないよな・・・。」

と、困惑顔をしつつ言うと、みゆきは笑顔で

「そうですね。慶一さんには私達の意思を汲んでいただく、と言う事でお願いできたらと、思います。」

そう言うみゆきに俺は頷いて

「わかったよ。それじゃ明日からしばらくよろしくな。それと、帰ってから改めて家事分担を話し合おう。」

そう言うと、みゆき達も頷いて

「そうですね。無理のない程度に頑張りますから。」

「・・・お手伝いできる事は、させてもらいますから・・・。」

「共同生活していくからには、お互いに協力しあっていきましょう。」

「私も皆と協力していくわ。だから、よろしくね？先輩。」

そう言うみゆき達に俺も頷いて

「そうだな。それじゃ夕食の買い物にでも寄って行くか。皆にも付き合ってもらうからな?」

そう言うと、皆も頷いて俺について来てくれたのだった。

朝からのトラブルもあって、この先どうなるのか、俺にも予想がつかない状況ではあったけど、これから先も頑張っていかないとな、と思いながらもこの先大丈夫かな?という不安も脳裏をよぎる俺だった。

その一方でこんな騒動の毎日も悪くないな、とも思うのだった。

旋律達との共同生活、これから先に不安と期待とそして、ささやかな幸せを俺は感じていた。

始まりの六重奏～不安と苦悩とささやかな幸せの始まり～（後書き）

次回はゴールデンウィークに入ります。
みさおとあやのとした約束を果たすべく奮闘する物語をお楽しみに。

賑やかになる旋律～ゴールデンウィークの勉強会前日の大騒ぎ～（前書き）

お待たせしました。本編、やっとアップです。
それではどうぞ。

賑やかになる旋律～ゴールデンウィークの勉強会前日の大騒ぎ～

みゆき達が家に来て共同生活を始めてから数日が過ぎた。

ゴールデンウィークまで後2日までの所に来て、俺達は連休前のテストと格闘する事となる。

だが、俺達の提示した大学を目標にしたこなた達も今回はそれに向けてしていた勉強の効果もあったようで、今回は誰一人赤点を取る事無く連休前の試験をクリアしたのだった。

そして、その日の放課後に俺達は図書室に集まって試験の答えあわせ等を行い、全員の状況を把握する事となったが、俺は誰一人落ちる事無く無事にクリアできた事に内心、胸を撫で下ろしていた。

俺は皆を見回しつつ、今回懸念していた3人に視線を移しながら

「ゴールデンウィーク前の試験はどうなる事かと思ったけど、こなた、つかさ、みさお。今回は3人とも問題なしだったな。勉強の成果も良く出てたみたいだし、ほっとしたよ。」

そう言うと、3人のうち2人は得意げに、そして1人は照れながら

「ふふん。私も目標をもったからね。その目標の為に最近は頑張ってるからねー。」

「見たか慶一！これが私の実力だってヴァ！！」

「あはは。わたしも成果が出せたから嬉しいな。おねえちゃんやけいちゃん達にも感謝だよ～。」

と言う3人にかがみは苦笑しつつ

「私もちょっと心配はしてたけど、結果が出せたから言う事はないわね。とはいえ、あんまり調子に乗って肝心な所でヘマやらないようにしなさいよ?特にこなたと日下部。」

そうツッコムと、こなたとみさおの2人はブーイングを飛ばしつつ

「何さー。ちゃんと頑張ってるんだからそんな言い方しなくてもいいじゃんー。」

「そうだそうだー!柊横暴ー!ちょっとは私らの頑張りも認めろー!!」

と言う2人にかがみが睨みを効かせながら

「・・・あんたら、普段の自分を省みてからいいなさいよ?今だけ良くてもその後がだめだったら、何にもならないんだからね?」

そう言うと、2人は「「うぐ・・・」」と言ってうめきはしたが、それでもあんまり納得いってない、という表情だった。

俺達はそんな3人のやり取りを見て苦笑する。

「私は今回もいつも通りに出来ました。今後もこれを維持していければ、と思います。」

「私も特に問題はなかったわね。これからもこの調子でいければいいんだけどね。」

と、みゆきとあやのも今回の自分達の出来と今後の事を話していた。

俺はそんな2人に

「2人は俺はあまり心配はしていないよ。でも、その調子は維持していければ理想的だな。」

そう言うと、2人ともうんうんと頷いていた。

「私もいつもよりは少し落ちますけど、何とかなりました。」
「・・・次は、もっと上を狙いたいですね・・・。」
「いやー、私も今回はちょっと危なかったですが、何とかなりましたっス。」
「ワタシはコクゴイガイはそれなりでしたネ。やっぱり二ポンゴはムズカしいデス。」

それぞれに今回の出来を報告してくれる4人に俺は

「皆もそれなりに頑張ったみたいだな。ゆたか達はまだまだ時間があるんだし、これからもっと上を目指すようにして行けばいいと思うぞ?今からあまり無理する事はないんだしな。」

そう言う俺に、4人とも

「そうですね。これからじっくり頑張って行きます。」
「・・・皆と一緒に目指していこうと思います・・・。」
「またプレッシャーに潰されそうになった時はあの時のおまじないをおねがいするっス。」
「ワタシのスタディもミてくださいネ?」

そう言って来たので、俺もそれに頷きで応えた。

そんな中で1人落ち込むいずみを見た俺は

「いずみ、そう言えばお前はゆたか達のクラスでは学級委員長を務めていたんだったな?それを引き受けるほどだし、陵桜受験の時もかなり自信ありげに言ってたからそんなに心配はしていなかったんだが、今回の成績にはちょっと驚かされたぞ?」

そう言うと、いずみはかなり落ち込みながら

「・・・実は私・・・そんなに勉強は得意じゃないんですよ・・・今にして思えばよく陵桜(ここ)に入れたなあ、って・・・。」

そう言って落ち込むいずみに俺は苦笑しながら

「あー・・・ともかくだ。勉強見て欲しいって言うなら協力はしてやるつもりだから、頼りたくなったら言って来い。」

俺の言葉にいずみは頷きつつも大きなため息をついていた。

「私は、今回もいつも通りでしたね。あまり問題はないですよ。」
「私もね。とはいえ、こうはやっぱりここの受験もそんなに苦戦しなかっただけの事はあるわね。」

そう言うやまとの言葉にこうは苦笑しつつも

「やまとは私の勉強の出来についてはある程度の評価はしてくれてたね。」

そう言うと、やまとは軽くため息をつきながら

「下手すると私よりも上かもしれないからね、あなたは。とはいえ、そう言う面でもあなたとは張り合いもあったわ。そのおかげで私も自分を高められたと思ってるしね・・・。」

その言葉にこうが感激しつつ

「や、やまとー。まさかあんたが私を認めてくれる部分があるとは思わなかったよー。」

そう言いながらやまとに抱きつくこうにやまとは顔を赤くしながら

「ちょ、離れなさい！あくまでもそう言う部分は、と言う事よ！待ち合わせ等に関してはいまだにあなたは信用薄いって事は反省しなさいよ！？」

そう言いつつ、抱きつくこうを引き剥がそうと奮闘していた。

俺はそんな2人に苦笑しつつ

「こう、やまとー。とりあえず程々になー？」

そう言うと、2人とも我に帰ってバツが悪そうに笑っているのを見て、俺は更に苦笑したのだった。

「私達も問題ないですね。ねえ？たまき。」

「そうね。とりあえずいつも通りクリアできたし。」

そう言うみくとたまきに俺も

「そうか、それなら何よりだな。これからもその調子で維持しつつ、

がんばれ。」

と言う俺の言葉に2人ともにっこりと笑って頷いていたのだった。

そして、俺はもう一度皆を見てから

「ともあれ、明日からゴールデンウィークだ。前半部でなるべく宿題は片付けるようにしておきたいと思うけど、皆は大丈夫だよな？」

そう皆に聞いてみると、ここで4名の手があがったのを見て、俺は苦笑しつつも

「こなた、つかさ、みさお、それといずみ。4人揃って手を上げたようだが、何か問題あり、か？」

何となく4人の答えは想像がついたが、一応聞いてみた。

「・・・えーっと。良ければその前半部の時に慶一君の所にお邪魔させてもらって宿題を見てもらえないかなーって・・・だめ？」

「けいちゃんに協力してもらったらすぐ出来ると思うんだよね～。だから、けいちゃん、お願い～。」

「頼れるのはお前しかいねえし、私らを助けると思って、頼むよ、慶一ー。」

「・・・すみません、先輩。私も力を貸していただけたら、と・・・。」

その、予想通りすぎる答えに俺は大きなため息を1ついたのだが、そんな4人を見たかがみが

「・・・あんたら、またゴールデンウィーク中に慶一くんに迷惑か

けるつもり？いい加減そのくらい自分達で何とか出来るようになんなさいよ！！まったく・・・。特にあんたら3人は来年は皆と一緒の大学受験するんでしょうが！ほんとしょうがないわね・・・。」

そう言って特に3人への説教モードを開始するのを俺は何も言えずに見ていた。

そして、そんな風にしている俺に悪いと思ったのか、いずみさんは

「・・・あの、先輩。ご迷惑おかけしてすいません。やっぱり何とか頑張ってみます。」

そう言って少し落ち込み気味にそう言ういずみに俺は苦笑しながらも

「・・・いいさ。来る気があるなら家に来い。その位は面倒見てやるよ。」

その俺の言葉にいずみは驚きの表情で

「え？で、でも、ご迷惑じゃ・・・。」

そう聞き返してくるいずみに俺は笑いながら

「ま、確かに普通ならそうだろうけどな。でも、俺はお前にも世話にはなったんだ。少しでも恩返しが出来るならこの程度の事なら何てことはないさ。」

俺のその言葉にいずみは嬉しそうな表情を見せて

「先輩にそう言ってもらえるとは思いませんでした。少しは私も先

輩のお役に立てた、と言う事なんですね？なんだかほっとしました。」

そう言って笑顔を見せるいずみに俺も頷いて

「役に立ったさ、だからこそ俺は今こうしてここにいられる。嬉しかったんだぜ？」

そう返すと、いずみも更に笑顔になっていた。

俺達の会話を聞いていたのか、こなた達も俺の所に寄って来て

「慶一君、それってずるくない？私だって慶一君の為にって思って頑張ったんだよ？だったら、私達も助けてくれたっていいじゃん！！」

「そうだよ。いずみちゃんばっかりずるいよ？けいちゃん。」

「私らだってお前の為に頑張ったんだけどなー？それはなかった事なんか？それって酷くねえ？」

口々にそう言ってくる3人に俺はたじたじになりつつも

「わかってる、わかってるよ。だから、そんなお前等の為に、お前等の宿題は面倒みてやる。その事はちゃんと言うつもりだったんだからそう睨むなって。」

その言葉にとたんにぱあっと明るい顔になる3人は

「ほんとに！？さすが慶一君だねー。よーし、これで連休中の宿題はなんとかなるー。」

「ありがと～けいちゃん。わたしもお世話になるね～？」

「やっぱし慶一は話せるやつだぜ！おーしこれで乗り切れるってヴァ！！」

そんな風に言う3人にかがみは慌てつつ

「ちょ、ちょっとあんたら！そんなんじゃいつまでたってもだめでしょうが！！」

そう言って再び3人を怒ろうとするかがみの肩をぽんと叩くと

「いいんだよ、かがみ。俺がそうする、って決めたんだから。まあ、甘やかしてると思われるかもだけど、あいつらに返せる恩があるなら、俺のできる事をするつもりだからな。」

その言葉にかがみはまだ少し納得いかなそうな顔をしていたけど、しぶしぶと

「・・・ふう。慶一くんがそうしたい、って言うのなら仕方ないわね・・・。いいわ。なら、私も手伝うわよ。いくらなんでも4人を1人で見るのは大変でしょ？」

そう言うかがみに俺は驚きながら

「いいのか？かがみ。さっきまであいつらの事叱ってたのに。」

そう言うと、かがみは顔を赤くしつつそっぽを向きながら

「・・・べ、別に。あんたが無茶しすぎてまた倒れたりされたら困る、っていうだけの事よ。せっかく復活したのにまたダウンなんかされたらあんたを元気付けにいくとまた大変ってだけよ？か、勘違

いしないでよね？」

そんな風に言うかがみに俺は苦笑しつつ

「はいはい。かがみにそんな労力使わせないようにする為にもかがみの好意に甘えさせてもらう事にするよ。明日からよろしくな？かがみ。」

そう言うと、かがみは軽いため息を１つついて

「ふう。まあ、仕方ないわね。４人とも？明日はみっちりしごくからね？覚悟しときなさいよ？」

そう言いながら照れ隠ししているかがみをこなた達はからかっていたのだった。

そんな様子を見ていると、みゆき達やまと達も俺に

「慶一さん？私達の事、忘れていませんよね？私だって慶一さんの力になりますよ？分かってくださっていると思ってはいますけど。」

「・・・皆でやれば、負担は軽くなると思いますから、私も協力します・・・。」

「そうですね。私もお手伝いしますよ？遠慮なく言ってください。」

「私もやるわ。と同時に自分の勉強も進めはするけどね。こういう時は助け合いましょ？先輩。」

そう言って来たので、俺は４人に

「ん？なら、みゆき達にもお願いするか。よろしく頼む。」

そう言うと、４人ともにっこりと笑って頷いてくれた。

その後、ゆたか達やみく達もやるなら一緒にやらせて欲しい、と言ってきたので、俺はそれにも許可をだしたのだった。

「じゃあ、明日から3日、集中で宿題と勉強な?片付けてしまうつもりだから、そのつもりでいてくれよ?で、それが済んだら、後半はみさおとあやのとした約束、果たすとするか。」

俺の言葉にこなたは

「みさきちと峰岸さんとの約束?何それ?」

そう聞いて来たので、俺は俺が2人に励ましてもらっていたあの日に2人とした約束の事を皆に話した。

それを聞いてこなたや他の皆も納得したようで、ますます、明日からの3日間の勉強会を気合入れて終わらせようと意気込んだのだった。

そして、その日の帰り道、今日の夕食の当番はみゆきとみなみ、との事だったので、買い物はみゆき達に任せてこう達と共に家に急いでいた。

「そういえば去年は私達は先輩に誘ってもらえなかったんですよね?勉強会は。」

と、去年の事を思い出したこうが俺にそう言うと、やまとも俺に

「そういえばそうよね?結局先輩達の勉強会が済んでから私達も知

ったんだしね。あの時ほど先輩を薄情者と思った事はなかったわね。」

と、やまとがふいに見せる薄い微笑みを向けながら言うのを聞いて俺は軽いためいきをつきつつ

「・・・そう言うなよ。あの時の事は悪いって思ってるし、その証拠にあの後でおまえらがその事を知ってやってきた時だって、ちゃんと勉強見てやったろ？だから、もうあの時の事は勘弁してくれって・・・。」

そう言うと、２人ともいたずらっぽい笑みを俺に向けつつ

「あはは。分かってますよ。ちょっとからかってみただけです。ねえ？やまと。」

「ふふ。そうね。それに今回は初めから皆と一緒に出来るんだしね。」

その言葉に俺はほっとしつつも

「ふう。あまり脅かさないでくれよ。ともあれ、早めに戻ろう。みゆき達が帰ってくるまでに準備もある程度済ませておかなきゃ、だしな。」

そう言う俺の言葉に２人とも頷きつつ

「そうですね。お風呂の準備等は私達でやらなきゃ、なんですから急ぎますか。」

「私と先輩は部屋の掃除等だし、頑張らないとね。」

その言葉に俺も頷きつつ、家までの足を早める俺達だった。

そして、家にたどり着いて俺達はそれぞれに着替えを済ませ、それぞれにやるべき事に取り掛かっていた。

そうこうしているうちに３０分程が過ぎたが、ようやくみゆき達が帰って来たのか、家の呼び鈴が鳴ったのを聞いた俺は、出迎える為に玄関へと向かったのだった。

「おかえりー。って、あれ？」

出迎えに行き、玄関に入ってきたみゆきに声をかけたのだが、そこにいたのがみゆきとみなみだけじゃなかったのを見て、俺は驚いていた。

みゆきとみなみは苦笑しつつ

「ただいま戻りました。慶一さん。」

「・・・ただいま、先輩・・・。」

そう言って、こなたはいつも通りに、ゆたかは遠慮がちに

「やふー。慶一くん、来たよー？」

「お、お邪魔します、慶一先輩。」

そう言って各々挨拶をしてくるのだが、俺はこなたとゆたかに

「こなた、ゆたか。お前等どうして？」

そう尋ねると、こなたはない胸を張りつつ

「ふっふっふ。どうせ明日から勉強会なんだし、また合宿形式でやりたいと思ったから今回はゆーちゃんと一緒に来てしまった、というわけさー。」

得意げにそう言うと、その後にゆたかが何とも申し訳なさそうに

「わ、私は明日からでもいいんじゃない？って言ったんですけど、こなたおねーちゃんが、前もこんな風に前日から行った事あったんだから、今回も構わないよ、って言うものですから・・・。」

そう言って来たのを聞いて俺は呆れのため息をついて

「・・・そうだな、そうだったな。お前は前もそんな事やったんだっけな・・・。はあ・・・仕方ない、上がれよ。今更追い返すなんて事する訳にもいかないからな。」

そう言うと、こなたは満面の笑みを浮かべて

「さっすが、慶一君。話が分かるねー。それじゃお邪魔するよー？それと、これから夕食でしょ？私も前日から来ている以上は手伝わせてもらうからねー？」

そう言って上がって来て俺の横を通り過ぎ際に

「いつものあの部屋でいいよね？今回はゆーちゃんと一緒にあの部屋使わせてもらうからね？」

そう言っていくこなたに俺も頷いて

「ああ。2人でも十分な広さはあるはずだからな。そうしてくれるならありがたい。」

そう言う、俺にゆたかもおずおずと

「すいません、先輩。お世話になりますね？」

そう言ってこなたの後を追っていくのを俺はまた軽いため息をつきつつ見送っていた。

「実はちょっと遅くなったのは、泉さんと買い物の帰りに偶然出会ったからなんですよ。事情をお伺いした所、以前の勉強会と同じような事をするから、っておっしゃられていましたので。」

こなたの後姿を見送っていた俺に、みゆきはこなたがみゆき達と一緒に居た経緯を話してくれた。

「・・・買い物は、私達の分だけの食材しかありませんでしたから、もう一度お店に戻ってお2人の分も買い込んできたんです・・・。」

そこに更に補足してくれたみなみ。

俺は2人に

「はは。まあ、勉強会企画した時点でこうなる、って言う予想は何となくあったから、それ程驚いてはいないけどな・・・でも、2人とも、買い物のしなおし、大変だったろ？ご苦労さん。」

そう言って2人の労をねぎらう言葉をかけると、2人とも笑顔になりながら

「いいえ。泉さんの行動には驚かされはしますが、やはり、皆さんが集まるのは楽しいですから。ですから、この程度の事は大した事ではありませんよ？むしろ、明日からどうなるのかも楽しみだったりしますから。」

「・・・賑やかですけど、先輩も寂しくはならないのなら、それでもいいかも、と思いました・・・。」

そう言う2人の言葉に俺は照れつつも感謝しながら

「まあ、来てしまったものは仕方ないからな。それじゃ早速夕食の準備するか。掃除等の事は済ませておいてあるから、準備の方、頼んだぞ？」

そう言うと、2人とも頷いて

「はい。それじゃ、すぐに着替えて準備してしまいますから。」

「・・・私もすぐに準備します・・・。泉先輩もいるのなら、夕食の準備も心強いですね・・・。」

そう言って買い込んできた食材を運ぼうとしたのだが、俺は2人から食材を取ると

「こっちは俺がキッチンに運んでおくからお前等はお前等で準備してくればいいよ。まあ、この程度は任せてくれ。」

そう言って俺は食材を手にすると、キッチンへ向かって歩き出す。

「ありがとうございます。それじゃ準備してきますから。」

みゆきはそう言い、みなみはぺこりと一礼すると、自分達の部屋へと戻って行ったのを俺は軽く見送った。

そして、食材をキッチンに運び入れる頃にこなた達もキッチンへとやって来て

「お待たせー。あれ？みゆきさん達はまだか。何を作るのかまだ聞いてなかったし、勝手にやっちゃまずいよねえ？」

そう言うこなたに気付いた俺は、こなたの方に顔を向けると

「まあ、そうだな。とりあえずみゆき達が来るまでは食材の確認とかしといたらいいんじゃないか？」

そう言うと、こなたとゆたかは

「そうだね。ゆーちゃん、ちょっと手伝ってー？」

「うん。わかったー。こなたおねーちゃん。どれから取り出そうか？」

そう言って、買い込んできた食材の吟味を始めるのを、俺は食器を用意しつつ、見ていた。

その後、みゆき達もキッチンにやって来て、４人による夕食作りが始まった。

こうや、やまと、そして、パティもこなた達が居ることに驚いていたのだが、こなたから事情を説明されたらしく、３人ともに納得していたのだった。

夕食も出来上がり、俺達はテーブルを囲んでの食事となった。

明日からの予定などについて、食事しつつ、話し合いをして、ある程度の事を決めた後に食事を終えた。

その後、こなた達は風呂へ、俺は部屋でのんびりしていたが、またしても家の呼び鈴が鳴ったのを聞いた俺は

（こんな時間に誰だ？なーんか、嫌な予感がするんだが・・・。）

そう心の中で考えつつ、俺は玄関へと向かい

「はーい？どちら様ですか？」

そう言って玄関を開けると、そこにはかがみ、つかさ、みさお、あやの、ひよりが立っていたのだった。

「今晩は、慶一くん。明日からって事だったけどさ、色々下準備しておきたいから前日からだけどきちゃったわ。」

「わたしはおねえちゃんが行くって言うからついてきちゃった。」

「柊に電話したら柊が慶一の家に行くって言うから一緒に来ちゃったゼ？」

「私は迷惑かけるから明日にしよう、って言ったんだけどね。」

と言う４人の言葉に苦笑しつつ

「はは、そういう事か。まあ、仕方ないよな。」

そう言うと、４人とも

「私はパティと電話していた時に泉先輩達がもう来てるって教えて

もらったんですけど、パティがひよりも来なよ、って言ったので、その誘いを受けて来た次第でして・・・。」

と、ひよりがそう言い終わると同時に、かがみが

「田村さん？今、泉先輩、って言ったわよね？ひょっとしてこなたがもう来てるって事？」

そう問い掛けるかがみに、ひよりは一瞬、しまった！という顔をしたが、かがみにそこを見抜かれ

「・・・なるほどね・・・あいつめ、また私達に勝手にそんな事してるのか・・・慶一くん。とりあえずお邪魔するわね？」

何かを察したかがみは俺にそう言うと、家に上がり込み、物凄い勢いでこなたの居る部屋へと走っていったのを、ひよりは驚きの表情で見送り、みさお、あやのは苦笑して、俺は、その光景にデジャヴを感じつつ、ため息を１つついてかがみの行った方を見つめていた。

心の中でこなたに両手を合わせて冥福を祈った時、こなたの居る部屋からこなたの断末魔が聞こえてきたのを受けて、俺はただただ苦笑するのみだった。

今、この短い時間で立て続けに起きた事に終始混乱気味のひよりは俺に

「あ、あの、慶一先輩、大丈夫なんでしょうか？泉先輩は・・・。」

その言葉に俺も乾いた笑いを向けつつ

「あー・・・去年もこなたは同じ事してかがみに殴られてたからな・・・まあ、大丈夫だろ？」

と言う俺の台詞にひよりもただ引きつった笑いをするしかなかったようだ。

やがて、皆が集まるリビングに俺も戻ると、少し後に涙目のこなたを引きずってリビングにやってきたかがみが現れ、俺達の囲むテーブルの空き席にこなたを座らせ、自分も席につくと

「ごめんね？慶一くん。またこいつが迷惑かけちゃったわね。」

と、申し訳なさそうに俺に言う。

こなたはそんなかがみに涙目のままで

「酷いよ、かがみん・・・ちょっと連絡しそびれただけじゃん・・・それなのに・・・頭陥没するかとおもったよ・・・。」

と言うこなたにかがみはキッと睨みを効かせると

「前回の事といい、今回の事といい、全部自業自得じゃないの！！まったく、いい薬よ。」

そう言うかがみに、こなたはびくびくと縮こまっていたのだった。

とりあえず一通り話が済んだ事を確認した俺はみんなに

「何にしてもだ。来てしまった人達がいるのは仕方ないし、そこらへんの事はもういいっこなしにしよう。で、だ。明日からは今まで

以上の人数による勉強会になりそうだからな。その下準備だけは済ませてしまおう。皆、今日はそれだけ手伝ってくれれば、後は自由でいいからな？」

その言葉にこなたが

「手伝うって、何をすればいいの？」

と聞いて来たので、俺は頷きながら

「とりあえず、もう1つ奥の大部屋でやろうとおもうから、そこに皆がつけるだけのテーブル等の準備をしたりするつもりさ。勉強道具とかもそこに置いておきたい人はその部屋に持っていっておくといいよ。」

そう言うと、こなた、つかさ、みさお、こうが

「なら、私は慶一君のテーブル出しを手伝うよ。」

「わたしも手伝うね？けいちゃん、どうすればいいか指示おねがい。」

「私もやるゼ？力仕事ならどんと来いだ。」

「日下部先輩、一応女の人、ですよね・・・？まあ、いいですけど・・・。とりあえず私もこっちはお手伝いさせてください。」

そう言ってきたので、俺は頷いて

「なら、よろしく頼むよ。手を貸してくれ。」

そう伝えると、４人とも頷くのだった。

かがみ、みゆき、あやの、やまと、みなみ、ゆたか、ひより、パティは４人を従えて部屋を出ようとする俺に

「なら、私達は勉強道具の移動と、軽くその大部屋の掃除をやっちゃいましょ？」

「そうですね。私達が先にそちらへ行っておきましょうか。」

「慶ちゃん、そのお部屋には何が置いてあるか教えてくれない？下手に動かしちゃまずい物とかあったら困るし。」

「そうね。私もそれを聞いておきたいわ。」

そう言う４人に俺は

「わかった。あの部屋にはな・・・・・・という感じだ。あまり問題のあるものは置いてないから、それ程気にする必要はないぞ？」

そう伝えると、４人はそれに頷いて、大部屋へと向かった。

少し遅れてゆたか達が

「じゃあ、私達は掃除道具の準備をしようよ、みなみちゃん、ひよりちゃん、パティちゃん。」

「・・・そうだね・・・。場所は先輩から教えてもらってるから、私が案内する・・・。」

「それは助かるっス。みなりん、よろしく。」

「では、ワタシタチはサッソククリーニングをハジメましょうカ。」

そう言っているのを聞いた俺は

「なら、みなみ。ゆたか達を連れて、そっちは頼む。」

そう言うと、みなみもコクリと頷いて、早速ゆたか達を連れて掃除用具のしまってある場所へと移動を始めた。

俺はそれらを確認し、改めて４人を連れて物置へと向かったのだった。

物置から４人が運べるテーブルを出し、俺も１人で大きなテーブルを持つと、４人と一緒に大部屋まで戻る。

途中、こなたが、俺の持ってるテーブルの大きさを心配して

「ねえ、慶一君。私達の誰か１人でもそれ持つの手伝わなくて大丈夫？なんか、凄く重そうなんだけど。」

そう言って来たので、俺は笑いながら

「この程度は問題ないさ。それよりも俺の方に気をとられすぎてそっちのテーブルを落として怪我なんかしないようにな。」

そう言う俺に、こなたはどこか安心したような表情を見せると

「流石に力持ちだね。まあ、余計なお世話だったかな？」

と言うその言葉に俺は

「はは。でも、心配してくれた事は嬉しかったぞ？」

そう言うと、こなたは少しだけ顔を赤くして

「そ、そう？それならいいけどさ。」

と少し照れたように言うこなたを横目でチラ見しつつ、テーブルを運ぶ俺だった。

俺達がテーブルを大部屋に運び込む頃には大体の掃除や諸準備も済んだので

「皆、ご苦労さん。後は明日に備えてゆっくりしててくれ。俺は部屋にいるから、何かあったら声かけてくれな。」

そう言ってから、俺は自分の部屋へと戻って落ち着いたのだった。

その後は各々自分のしたいこと等をしていたようだったが、そのうちに俺の部屋をノックする音が聞こえたので、俺は

「ん？どうぞー。」

そう声をかけると、部屋に入って来たのはかがみだった。

「お邪魔するわね、慶一くん。ごめんね？色々慌しかったでしょ。ちょっと落ち着きたいんじゃないかな？って思ったからこれ、持ってきたわ。」

そう言って俺に自分の持っていた新作のラノベを渡してきたので、俺はそれを受け取って

「はは。でも、最近はこれが普通になりつつあるよ。ん？これは見たことない奴だな。新刊か？」

そう言いつつ表紙を見る俺にかがみは

「うん。最近出た奴でね、私のお勧めなの。ちょっと読んで見てくれるかな？」

そう言うかがみに俺は頷きつつ俺もかがみの知らない新刊を取り出して

「わかったよ。じゃあ、代わりに俺がこれをかがみに。まあ、かがみの趣味に合えばいいんだがな。」

そう言うと、俺は手に持っていた自分が買った新刊をかがみに手渡した。

かがみは俺から受け取った新刊を手にして

「ふーん？これは初めて見るかも。それじゃ、ちょっと読ませてもらうわね？」

そう言って、俺のベットの側に腰掛けると、早速俺の手渡した本を読み始めた。

俺もそれを見て、かがみから受け取った本を、やはり、自分のベットを背もたれにして読み始めた。

そうして、しばらく読んでいたが、気付けば本にのめりこんでいた俺は、またもさり気なく俺の隣に座って本を読んでいるかがみに気付かなかった。

ふと、その事に気付いた俺は少し照れていたのだが、そこに、俺の部屋のドアをノックする音が聞こえたので、俺はかがみに向けてい

た意識をそっちへと移すと

「どうぞー？開いてるよ。」

そう声をかけると、やまととみゆきが俺の部屋へとやってきたのだった。

「何となくそんな予感がしましたので、来て見ましたが、どうやら当たりのようですね。お2人とも本を読んでいるのでは？と思いましたよ。私もご一緒させていただきたいですが、いいでしょうか？」

「かがみ先輩にお勧めって言われた本もまだ読んでないし、丁度いい機会だから、私も一緒に読ませてもらってもいいわよね？」

と言う2人に俺とかがみは苦笑しつつ

「ははは・・・まあ、この際だしな。眠くなるまでは一緒に読んでるか。」

「そういえば、みゆきと永森さんに私も自分のお勧めを教えたんだっけ。いいわ。なら、一緒に読みましょ？」

そう答えると、2人もにっこりと笑ってそれぞれに座る場所を決めて俺達は眠くなるまで読書をして、ゆったりとした時間を楽しんだのだった。

やがて、3人ともう休む、と言ってきたので、今日はこれでお開きとなった。

部屋を出る際に3人は俺に

「それじゃ私も部屋に戻って休むわ。慶一くん。明日から頑張りま

しょ？それじゃお休み。」
「私もそろそろ休む事にしますね。私も明日からの事が少し楽しみですよ。それでは私はこれで、お休みなさい、慶一さん。」
「有意義な勉強会になるといいわね。まあ、何かあったら言ってね？先輩。私の出来る事なら協力はするわ。とにかく、そういう事で。じゃあ、お休み、先輩。」

そう言って出て行く3人に俺も

「ああ。どうなるか分からないけど、頑張ろうな。それじゃお休み、皆。」

そう言って3人を送り出して、俺も自分のベットへともぐりこんだ。

明日からの勉強会に思いを飛ばしつつ、俺は疲れた心と体を休ませる為に、夢の世界へと旅立って行くのだった。

賑やかになる旋律～ゴールデンウィークの勉強会前日の大騒ぎ～（後書き）

次回はただでは終わらない大騒ぎの勉強会の開幕です。
今、新しい小説もスタートさせるつもりでいますので、それとの絡みで本編もまた少し遅れるかもしれません。

大集合の旋律～大人数の勉強会初日～（前書き）

先月下旬頃に起こしてしまった自動車事故の後処理がようやく終わり、精神的にも日常的にも落ち着いたのでかなり間が開く事になってしまいましたが、ようやく執筆活動を再開です。
ご心配をおかけしてしまった皆さんへのお詫びと共にここに報告したいと思います。

それでは本編をどうぞ。

大集合の旋律～大人数の勉強会初日～

ゴールデンウィークもスタートする今日から、俺達は宿題の片付けと共に勉強会もして、ゴールデンウィークの後半にはみさお達との約束も果たす為に頑張る事となった。

前日にやっぱりというかなんというか、こなたがやってきたのだが、それだけでは済まず、かがみ達もまた、俺の家へとやってきた。

以前以上に騒がしい勉強会前日ではあったけれど、俺はそんな出来事さえも楽しいと思えるようになっている事に、（俺も慣れてきたものだよな・・・。）と心の中で思いつつ苦笑していた。

そして、次の日の朝、いつも通りに目を覚ました俺は、着替えを済ませ、顔を洗うと、キッチンへと顔を出しに行く。

キッチンを覗き込むと、3人の楽しそうな話し声が聞こえた。

「・・・よしっと・・・それじゃみゆきさん、そっちお願い。」

「・・・ました。それではこちらはやっておきますね。」

「・・・なた、こっちは私がやっていいのよね？」

と、なにやら朝食の準備らしい事をやっている3人に俺は挨拶も兼ねて声をかけていた。

「おはよう。こなた、かがみ、みゆき。3人共朝食の準備してくれているのか？」

そう声をかけると、俺の声に気付いたこなたが俺の方に顔を向けると

「あ、おはよー。慶一君。うん、皆で話し合ってここにいる間は当番制でやろう、って事になってさ。初日は私達3人がやる事になったんだよね。」

笑いながら説明するこなたに俺は

「なるほどな。よし、なら、今回は俺も一緒にやらせてもらっていいか？毎回家に来てくれる度に皆に頼らせてもらっていたしな、たまには俺もやらないと、って思ってたんだ。」

そう言うと、こなたとかがみは

「え？いいよ、いいよ。私達でやるって決めたんだしさ。」
「そうよ。ここは私達に任せて？」

そう断ろうとした2人だったが、みゆきだけは

「そうですか？ならお手伝いしていただいて構いませんか？」

そう切り替えしてきたので、俺はその言葉に頷いて

「ああ。それじゃ、何をすればいいのか教えてくれ。」

そう言うと、かがみとこなたは少し慌てながら

「み、みゆきさん？いいの？」
「そ、そうよ。今回の事だって私達でやるって決めたのよ？」

そう言う2人にみゆきはいつもの微笑みを向けながら

「いいんです。それが私達が慶一さんの家でお世話になるための条件なんですから。それが本人の意思であるならば、その意思を尊重する、っていう私達の、なんですよ。常に自然体でいる事、それが慶一さんのおっしゃられた事なのですから。」

その言葉に戸惑う2人に俺は笑いながら補足する。

「ま、そういう事さ。今回の俺の手伝おうという意思も、気遣いからじゃなく、俺がやりたいから、っていう、俺の意思だって事だよ。」

その説明に2人はまだ少し納得していないようなそんな感じだったけど、それでも俺の方を向くと

「そういう事なら、私もその慶一君の意思って奴を尊重するしかないねー。」

「まあ、あんたがそれでいいって言うなら、それ以上は言っても仕方なさそうね。わかったわ、一緒にやりましょ？」

そう言ってくれたので、俺もその言葉に満足気に頷くと、早速3人と一緒に朝食の準備を始めたのだった。

俺はいつも自分が使っているエプロンを取り出して身につけ、まな板を用意すると、こなた達に頼まれた野菜の下ごしらえを始めた。

野菜サラダ用の野菜を切っている時、自分達の仕込を終えた3人は俺の方を見ていたのだが、俺がその視線に気付いて3人に

「ん？どうしたんだ？3人共。俺の手順に何かおかしな所、あった

か？」

そう尋ねると、こなたはニヤニヤしながら

「いやー。慶一君のエプロン姿ってのもなかなか萌えるなあ、って思ってさー。それに、慶一君の料理してる所って初めて見るけどさ、結構上手いな、って思ってねー。」

その言葉に俺は照れて顔を赤らめつつ

「も、萌えるとか言うな！まったく・・・。そういやこなたの前で料理してる所見せるのは初めてだっけな。でも、お前に褒めてもらえるのなら、少しは自信になるな。何しろ、家事の経験ではお前の方が圧倒的に上なんだしな。」

そう言うと、こなたも少しだけ顔を赤くしつつ

「あはは。ま、まあ、そう言われると照れちゃうね。でも、私から見ても慶一君、中々の腕だと思うよ？冗談抜きにさ。」

その言葉に俺は内心、嬉しさを感じつつ「はは。ありがとう、こなた。」と礼を返していたが、そんな俺達のやり取りを見ていたかがみが

「うーん・・・。私は慶一くんの料理してる所を見るのは2度目だけど、あの時に比べて更に腕が上がってるような気がするわよ？私から見てもさ。」

その言葉に俺は更に照れつつ

「そ、そうかな？何にしても少しでも成果が出てるのなら嬉しい物だけどな。とはいえ、レベルがあがってるんだとしたら、それは家にいるグルメな同居人のおかげかも知れないけどな。」

そう返すと、かがみは俺の最後の方の言葉に

「グルメな同居人、ってひょっとしてパトリシアさんの事？」

そう聞いて来たので、俺はその言葉に頷くと

「ああ。あいつの舌を満足させるためにみゆき達が来るまでの間はパティのかけるプレッシャーを跳ね除けるために前以上に努力するようになったからなあ・・・。」

そう説明する俺に、かがみとこなたは驚きの表情を見せつつ

「なるほどね。慶一君にとってのいい練習台が出来たって事か。それなら納得だね。」

「うーん・・・慶一くんが更に料理の経験積んでしまったら私達の立場がなくなりそうかも、それはちょっと悔しいかなあ・・・。」

と、それぞれに感想を述べる2人に俺も苦笑していた。

そんな俺達のやり取りを見ていたみゆきが

「私も慶一さんのお料理をしている所を見るのは初めてですが、私も見習いたい程ですね。まだまだ私も練習不足を痛感してますから・・・。」

と、そう言いつつも、自分の今の料理のレベルを思い出しつつ少し

だけ落ち込む表情を見せるみゆき。

俺はそんなみゆきに

「そんな事はないぞ？俺を元気付けてくれたあの時に作ってくれたハンバーグだって美味かったからな。みゆきも大分レベルがあがってると俺は思うし、そこは自信持っていいと俺は思うけどな。」

そう言うと、みゆきも俺の言葉に少しだけ元気を取り戻してくれたようで

「そ、そうですか？そう言っていただけるのでしたら、私にとっても、励みになります。あの、慶一さん。また機会がありましたら、私の練習の成果を見ていただいても構いませんか？」

と、おずおずと俺にそう言ってくるみゆきに俺は戸惑いながら

「そ、それは構わないけど、いいのか？お前の練習の成果を見るのが俺で。」

そう尋ねると、みゆきはにっこりと笑って頷きながら

「もちろんです。是非お願いしたい所です。」

そう言うみゆきに俺も照れくさくなって苦笑していた。

そんな俺達のやり取りを見ていたこなたとかがみも慌てるように

「そ、それなら私も新作の料理とか作った時には試食してもらってもいい？」

「わ、私も新しく何か作れるようになったらお願いしてもいいかな？」

という2人の勢いに押されつつ、俺はこくこくと頷いて

「わ、わかった、わかった。お前ら2人の方も俺でよければ協力させてもらうから、とりあえず落ち着いてくれ。」

そうなだめるように言うと、2人は落ち着きつつそれでいて少し嬉しそうな顔で、心なしかほっとしているようにも見えた俺だった。

そんなやり取りをしつつ、朝食の準備を済ませる頃、他の皆も徐々に起き出してキッチンへと顔を出しに来た。

「おはようございます。先輩達、今日は朝食の当番、ご苦労様です。って、あれ？先輩のその格好、まさか一緒に準備をしてたんですか？」

「おはよう、先輩達。今朝はお世話になるわ。あら？そういえば珍しい姿ね、先輩。」

そう言ってまずやってきたのはこうとやまとの2人だった。

「おはよう、八坂さん永森さん。明日はよろしくね？」

「おはよう2人とも。慶一くん、自分からやらせてくれって言ってきたから、協力してもらったのよ。」

「おはようございます。かがみさんの言うとおりなんですよ。私達はそんな慶一さんの意思を尊重した、という訳なんです。」

という、かがみとみゆきの説明に俺も頷いて

「まあ、そういう事さ。こう、やまと。他の皆はどうしてる？」

こうとやまとの2人に返事を返してからそう尋ねてみると、2人は

「成る程、そういう事ですか。さっきちらっと洗面所の方を見て来ましたが、小早川さんと岩崎さん、そして、峰岸先輩の姿は見かけましたよ？つかさ先輩、みさお先輩、ひよりんとパティの姿はまだない感じでしたけど。」

「こうの言うとおりね。つかさ先輩達はまだ寝てるんじゃないかしら。」

という2人の言葉に俺は軽いため息をついていたが、そこに遅れてあやの達がやってきた。

「おはよう、慶ちゃん、皆。みさちゃん達を起こしていたら少し遅れちゃったわ。」

という言葉の後にみさおとつかさが眠そうな顔でやってきて

「ふあー・・・おはよー慶一、皆ー・・・ああー・・・眠い・・・。」

「むにゃ・・・おはよう～・・・。なんだかまだ眠いよ～・・・。」

と、そう眠そうな顔で言う2人に俺は苦笑しながら

「あー・・・おはよう、2人とも。眠そうなのは分かるが、とりあえず席についてくれ。後は、ゆたか達が来れば揃いかな？」

そう言う俺だったが、その言葉の直後にゆたか達もキッチンへとやってきたのだった。

「おはようございます。パティちゃんとひよりちゃんを起こして来ましたよ？」
「・・・おはようございます・・・。これで全員揃いましたね・・・？」
「ふあぁ・・・おはようございます。お？中々いい匂いっスね？」
「グッモーニン！ミナサン！！オウ！キョウのブレックファーストはケイイチもテツダったんデスね？」

という４人に俺は頷きつつ

「おはよう。ゆたか、みなみ、ひより。まあ、そういう事だな、パティ。とりあえず全員そろったなら朝食にするとしよう。」

俺の言葉に全員が席に着くと、「「「「「「「「「「いただきまーす」」」」」」」」」」という全員の掛け声と共に朝食が始まった。

今日の予定やこれからの事を話題にしつつ、朝食を済ませた俺達は、さっそく勉強会の為に昨日の晩に掃除を行ったあの大部屋へと勉強道具を持ち込んで準備を済ませた。

その頃には時計を確認すると、丁度９時を示してたのだが、いずみ達が来るのは１０時頃と言う事だったので、俺は冷蔵庫をチェックして食材の買い置きの状態を調べてみた。

とりあえずお昼はこれじゃ足りなそうだと判断した俺は、いずみ達が来る前に買い物をしてしまおうと思い、部屋に財布を取りに行こうと踵を返した時、俺はこうとひよりに声をかけられた。

「あれ？先輩。どうしたんですか？何だか冷蔵庫覗いていたみたいですけど？」
「お昼のメニューでも考えていたっスか？」
と言う2人に俺は
「ん。ちょっと食材の在庫状態を見てたんだ。お昼は更に大人数になりそうだしな。今チェックした感じじゃ足りなそうだと思ってな。今のうちに買い物しとこうと思ってたんだが、丁度いい。お前らも買い物に付き合ってくれないか？」
そう事情を説明した後に2人に買い物に付き合って欲しいと声をかけると、2人は驚きつつ
「え？そ、それは構いませんが、私達でいいんですか？」
「そ、そりゃ、お役に立てると言う事でしたらいいっスけど。」
と言う2人に俺は頷くと
「ああ、構わないさ。それじゃ、出かけられる準備したら玄関に集合な？皆もやってくるからあまり時間をかけるわけにもいかないし、とっとと行ってとっとと帰ってくるぞ？」
そう言うと、2人は
「わ、分かりました。すぐ用意してきますね？」
「こうしちゃいられないっス！！急ぎましょう、こうちゃん先輩！」
そう言って大慌てで自分らの部屋へと走って行くのを見届けた俺は、自分の部屋へ財布を取りに行きつつ、他の皆に買い物に出る旨を伝

えると、玄関で2人が来るのを待っていた。

そして、しばらくすると、準備を終えた2人が玄関へとやってきて

「お、お待たせしました。それじゃ早速行きましょう。」

「ふーっ・・・何とか間に合ったっス。」

と言う2人に俺も頷きつつ

「ちょっと急かしすぎたかな?ともあれ、早速行くとしよう。」

と言う俺の言葉に2人も頷くと、俺達は揃って買い物の為に家を出たのだった。

その頃、勉強会で使う予定の大部屋では・・・・・・

ゆたかｓｉｄｅ

「ふう。とりあえずこれで準備は出来たね。みなみちゃん、パティちゃん。」

そう言いながら、私は部屋の簡単な掃除を手伝ってくれた2人に声をかける。

「・・・そうだね。後は、皆が集まるのを待つだけだし、少し休憩しよう?ゆたか、パティ・・・。」

みなみちゃんが、そう、パティちゃんに言うと、パティちゃんも頷いて

「そうですネ。アトはミンナがソロウまでのんびりしていまショウ。そういえば、サッキからケイイチとコウとヒヨリのスガタがミえませんネ？」

と、ふと3人の姿が見えない事にパティちゃんも気付いたようだった。

「そ、そういえばそうだね？みなみちゃんは気付いた？」

そう尋ねてみると、みなみちゃんも首をフルフルと振っていた。

みなみちゃんに尋ねつつも、私もその事は少し気になったのだけど、そこに永森先輩と高良先輩がやって来て

「小早川さん、岩崎さん、パトリシアさん。先輩はこう達と一緒に買い物へと行ったわ。」

「なんでも、お昼の食材が不足しているから買ってくる、との事ですが。」

そんなお2人の言葉を聞いて先輩達の行方もわかり、ほっとしてたけれど、そこに更に峰岸先輩とつかさ先輩がやって来て

「慶ちゃん達がいないみたいだったからどうしたのかな？と思ってたけど、そういう事なのね？なら、妹ちゃん。私達はこれから来る皆の為にお茶の準備をしておかない？」

と、峰岸先輩がつかさ先輩にそう言うと、つかさ先輩もにっこりと笑って頷きながら

「そうだね～。それじゃ私達でお茶受けのクッキーでも焼いておこ

うよ。いこ?峰岸さん。」

お茶受けを一緒に作ろうとつかさ先輩は峰岸先輩に声をかけ、その言葉に峰岸先輩も「そうね。いきましょうか。」と言って頷くと、つかさ先輩と一緒に部屋を出て行ったのだった。

2人の先輩を見送った私達は永森先輩達と中断していた勉強の準備を再開させたのだった。

その後にこなたおねーちゃんとかがみ先輩も部屋へとやって来て、皆と一緒に下準備を済ませたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こうとひよりを連れて買物に来た俺は、2人にも買い物リストを分けて、手分けして食材を集める事にしたのだった。

「食パンは入れたし、ハムもオーケーだな。野菜を任せたこうと、缶詰を任せたひよりはそろそろ戻る頃かな?」

と呟いた時、丁度頼んでいた食材を集めてきたこうとひよりが戻って来た。

「先輩。頼まれていた食材確保してきましたよ。これでいいですかね?」

「私もバッチリっス。先輩、確認してみてください。」

そう言ってカゴを差し出す2人の集めて来た物をチェックし、全て揃っている事を確認した俺は2人に

「ご苦労さん。頼んでいた物はちゃんとあるよ。後は会計を済ませて戻るとしようか。」

そう言うと、2人とも頷いて一緒にレジまで行くと、順番待ちをしている時に2人が俺に話し掛けてきた。

「先輩。集めた食材から予想したんですが、ひょっとしてサンドイッチを作ろうって考えてるんですか?」

「こうちゃん先輩は慶一先輩が作ろうとしているものの予想がついたっスか?それで、先輩、正解なんですか?」

という2人に俺は頷いて

「こうの言った通りだな。手軽にサンドイッチを作ろうって思ってる。具も色々選べるし、手軽だし、いいだろ?こういうのもさ。」

そう言うと、2人とも頷いて

「そうですね。私も色々作ってみたいですよ。あ、そうだ。先輩にも試食をお願いしちゃおうかな?」

「私はツナサンドとかが結構好きっスよ?ツナにマヨネーズと後レタスを挟むのもいいっスよねー?」

と言う2人に俺は笑いながら

「なら、こうの腕前拝見と行こうかな。それと、ひより。それも美味そうだな。俺も今度やってみるか。」

そう言う俺の言葉に2人とも満面の笑みで頷いていた。

そして、会計も済ませて家に戻る道すがら、俺誰かに声をかけられた。

「あ、先輩、やさこ、ひよりんも。ここで会えるとは思っていませんでしたが、その様子だと買い物帰りみたいですね？」
「ずいぶん大荷物だよね？何が入ってるんですか？」
「私もちょっとだけ気になりますね。」

と言う声の主は丁度、俺の家へと向かっていたみくとたまきといずみの３人だった。

俺達は３人に

「おう。まさかここで会えるとはな。とりあえず今日の昼御飯の食材が足りなそうだったからな。補充しに行って来た所さ。まあ、せっかくだし、一緒に行こうぜ？３人とも。」
「おー。３人共おはよー。先輩の言った通りだよ。一緒に買い物してきたんだー。」
「みく先輩、たまき先輩、委員長。おはようございます。」

そう挨拶すると、３人共も頷いて

「そうでしたか。そうですね、それじゃ先輩、エスコートお願いします。」
「今日から３日間よろしくお願いしますね？」
「お、お世話になります、先輩。」

そう言う３人に俺も頷くと、こうとひよりの外に３人を伴い、家へと帰った。

家へと戻ると、俺達を、こなたとかがみが出迎えてくれ、2人は俺達から食材を受け取ると、早速キッチンへと食材をしまいにいってくれた。

俺はこうとひよりに勉強の準備をしておくように伝えて、みく達を伴い、勉強部屋へと案内する。

「3人共、こっちだ。この部屋でちょっと待っててくれ。俺も準備してきちゃうから。」

3人を部屋に通してから、俺はみく達にそう言うと、3人共頷いて部屋へと入って行くのを見送ってから、俺も勉強の準備をするために自分の部屋へと勉強道具や宿題を取りに行く。

そして、勉強の準備を終えて大部屋へ戻ってみると、全員が部屋に揃っていて、勉強会の準備も完了と相成った。

「よーし。それじゃ、これから始めて行くぞ?まずは各自、各学年ごとに教えあいながらやって行くんだ。その中でどうしても分からない事があったりする場合は俺達に聞いてくるように。それと、前にも教えた通りの勉強の仕方でやっていくから、そのつもりでな。それじゃ、@1分後にスタートだ。皆、行くぞ?」

そう言うと、皆も頷いて、勉強会のスタートを待つ。

そして、そこからきっかり1分後、勉強会のスタートとなった。

「よし、それじゃ始め!」

と言う俺の合図と共に始まる勉強会。

皆もそれぞれの学年ごとに固まって勉強と宿題を始める。

ゆたか達1年ｓｉｄｅ

慶一先輩の合図と共に、私達の勉強会が始まった。

私達はまず、宿題から手をつけて勉強を進めて行く。

「えーっと・・・ここはこうだから・・・あ、これでいいのか。」

「・・・この訳は・・・こうだね・・・。」

「うーん・・・この数式は、っと・・・うう、難しいっスね・・・。」

「ウウ・・・二ポンのシャカイもムズかしいデス・・・まだまだワタシにはタイヘンなブブンありますネ・・・。」

「難しいなー・・・私本当によくこんなレベルの高い学校に合格できたなあ・・・。」

私達はそれぞれそう言いながらも自分達の勉強を進めた。

そして、集中して３０分の最初の休憩時間まで、私達は頑張ったのだった。

２年生ｓｉｄｅ

仲間達と共に始まった勉強会。

私達はそれぞれに得意な教科から勉強を進める。

「ここの漢文はこうだから・・・と。」
「ここの化学式はこうで合ってるわよね？後は・・・。」
「ここの数式をここに当てはめるとこうだから・・・。」
「・・・年には・・・が起こって・・・それで・・・。」

と、それぞれに効率良く勉強を進めて、最初の休憩時間まで突っ走った私達だった。

3年生ｓｉｄｅ

俺達はこの勉強会も何度かこなしてきた事もあり、ある程度の慣れもあったので、いつも通りに事を進めていった。

行ったのだが・・・やっぱり例の3人はいつも通りだった。

「慶一君、ごめんねー？また宿題見せてもらちゃってさー。でも、やっぱり人数増えると、何だか前以上にプレッシャー感じるよー・・・。」
「はうう・・・わたしも～・・・。なんだかやりにくいかも・・・。」
「昨年の時はもっとちびっこ達だけがいたんだけど、今回は八坂達もいるしなー・・・余計になんだかみっともない所見せたくないって思うかも・・・。」

そんな3人にかがみは呆れたような口調で

「・・・まったく、あんたらは今頃気付いたの？そうよ？私たちの後輩達にみっともないとこみせたくないなら精々がんばんなさい。あんたたちに少しでもプライドって物があるならね？」

と、ニヤニヤしつつそう言うかがみに3人共大分凹んでいるようだった。

「分からないところ等は私たちもフォローしますし、がんばりましょう。泉さん、つかささん、日下部さん。」

かがみの物言いに苦笑を浮かべていたみゆきがいたたまれなくなって3人にそう声をかける。

更にあやのも

「そうね。私も及ばずながら協力するわ。だから、遠慮なく頼ってね？」

と、3人だけでなく、みゆきのフォローに廻っていた。

俺もそんな2人を見ながら

「俺もいるし、かがみもいるからな。とりあえずは大丈夫だろ。なあ？かがみ。」

そうかがみに話を振ると、かがみは”はっ”と我に帰って

「え？あ！そ、そうね。ま、まあ、そう言う訳だから、あんたらもがんばんなさい。」

と言ういかにも慌てて取り繕ったようなかがみにこなたとみさおがニヤニヤしながら

「かがみー？今更良い子ぶっても誤魔化せないよー？ちゃんとかが

みのテンパった所見てたからね？」
「そうだぜー？柊ー。ちゃーんと恥ずかしい所見せてもらったかんな。」
と言う2人にかがみは顔を真っ赤にしながら
「う、うるさい！！あんまりからかうとあんたらの勉強と宿題、見てあげないわよ！？」
と、慌てながら言うかがみにこなたは「照れるかがみ萌えー。」と追い討ちをかけて、かがみに鉄拳を脳天に叩き込まれているのを、俺は苦笑しながら見ていた。
そんな風にして、最初の休憩時間まで俺達は頑張っていたのだった。
そして、３０分後に休憩をして、俺達は更に勉強を進めて行った。
４回目の３０分が来ると、もう時間的にお昼になっていたので、俺達はお昼休憩を取ることにした。
お昼のメニューは先程買い物してきた食材でサンドイッチを作る事となり、皆それぞれに好きな具を挟んでサンドイッチを作り、食べたのだった。
その後は十分に昼休み休憩を取って、再度勉強を再開。
そのまま夕方５時くらいまで俺達は勉強を続けていた。
そして５時になり、今日の勉強会はこれで終了と言う事になった。

俺は、みく達を部屋へと案内して、荷物をそこに置いてもらい、皆で改めて軽くそれぞれの部屋の掃除をしたり、夕食の準備をしたりと動き回った。

今日の夕食の当番はつかさとあやのとやまとが担当してくれた。

夕食を終えて、俺達はリビングに集まって今日の反省をしたのだった。

「さて、とりあえず初日は済んだわけだけど、みんなの成果はどうだ？」

と俺が皆を見回しながら聞くと、まずは3年生組が

「私は宿題メインで進めたよ？大分進んでるから、明日中には終わらせたいねー。」

「私はむしろ、自分の勉強を優先したわ。宿題は後でも大丈夫そうだしね。」

「わたしも宿題をメインにしたよ？私もこなちゃんと同じく明日中には終わらせたいな。」

「私は半々で進めて行きました。どちらも良いペースだったと思います。」

「私は勉強メインね。宿題はそれ程慌てなくて大丈夫そうかな？」

「私は宿題の方だな。とにかくそっちを先に終わらせてえしなー。」

と、報告してくれた。

俺はみんなの言葉に頷きつつ

「ふむ。なら、こなたとつかさとみさおは宿題を先に終わらせてい

くのがいいだろうな。かがみとみゆきとあやのは自分のペースで行けばいいだろう。俺もまあ、宿題は勉強会前日に遅くまで頑張って終わらせてるし、勉強の方を進めて行くか。じゃあ、俺達は明日もそう言う方向で行こう。」

そう言うと、3年生組は頷いて次の日の方針固めを終えたのだった。

次に2年生組は

「私は今日は勉強メインで宿題は手をつけていないので、明日以降で、ですかね？」

「私もそうね。宿題も量はそれ程でもないから、慌ててはいないわ。」

「私は今日は少しだけ宿題も進めました。明日は宿題メインで行こうかなと。」

「私もやさこと永森さんと一緒ですねー。宿題は後でもオーケーです。」

と報告してくれたのを聞いて俺は

「そうか。なら、こう達も思う通りに進めて行けばいいだろう。明日も頑張ろうな。」

そう声をかけると、こう達も頷いていた。

最後に1年生組の報告も受けた。

「私は先に宿題を進めました。先輩、明日はちょっと宿題と勉強の方を見てもらっても構いませんか？」

「・・・私も、出来る事ならお願いしたいです・・・いくつか分か

らないところもありましたので・・・。」
「私もお願いしたいっス・・・。とりあえず宿題は進みましたが・・・。」
「ニホンシ、コブン、コクゴ、セカイシ、ムズカしいデス・・・ワタシのホウもヘルプです！」
「・・・うう・・・恥ずかしいですが、私もお願いします・・・お手数かけてすみません・・・。」

と言うゆたか達に俺は

「ああ。余裕が出来たら教えに行くよ。それまでは出来るところは頑張ってな。パティの方は少々苦労しそうだが、そっちもとりあえずは任せておけ。最悪はかがみとみゆき、あやのにも協力を頼むかもだがな。」

そう言うと、ゆたか達もほっとしていたようだった。

そして、かがみとみゆきとあやのは

「・・・ふう。まあ、後輩の面倒を見るのも先輩としての務めよね。いいわ。私も協力するわよ?」
「私も協力させてもらいますね。皆さんで勉強会を成功させましょう。」
「私も頑張らせてもらうわね。慶ちゃんもいれて４人でならなんとかなるだろうし。」

そう言ってくれたので俺は３人に改めて

「すまないな。ともかく、みゆきの言うとおり、皆で協力しあってこの勉強会を成功させよう。そして、ゴールデンウィーク開けのテ

ストできっちり成果を出して行こうぜ？」

そう言うと、皆も俺の言葉に力強く頷いてそれぞれに決意を新たにしているようだった。

俺はそんなみんなの様子を見て安心すると共に、とりあえずの初日のクリアにもほっとしていたのだった。

まだまだ大変な勉強会はまだ始まったばかり。

俺は気合を入れなおして挑もうと思うのだった。

大集合の旋律～大人数の勉強会初日～（後書き）

次回もなるべく早くあげようと思いますのでどうぞよろしく。

大集合の旋律～大人数の勉強会2日目、忘れられていた慶一のもう1つ過去と罪

明けましておめでとうございます。
今年もまた、変わる日常ともう1つの連載、そして短編と頑張って行こうと思います。
今年もまた、応援していただけたら嬉しい限りです。

今回はＭＥ－ＧＡさんが書いてくれた変わる日常とのコラボ短編の設定を本人との相談の上で使わせていただいています。

それでは新年一発目の本編をどうぞ。

大集合の旋律～大人数の勉強会2日目、忘れられていた慶一のもう1つ過去と罪

受験に向けての強化の為、そして、それぞれに学力アップの為、更には宿題を片付ける為に俺達は大人数での勉強会を敢行する。

勉強会前日にこなた達がやってくるという一幕もあったものの、俺達はなんだかんだで無事に初日を乗り切ったのだった。

その日の夜にそれぞれの勉強の進め方を言い合い、2日目はそれを目標に進めて行くこととなったのだった。

日付が変わって2日目の朝、俺は何やら自分の隣に柔らかな感触を感じて目を覚ます。

「・・・ん？ふああ・・・なんだ、この感触は・・・って！みゆき！！」

寝ぼけ眼で隣を見ると、そこにはまたしても俺のベットで眠っているみゆきの姿を見つけたのだった。

一瞬慌てた俺だが、以前にもあったことなので、俺はすぐに冷静さを取り戻すと、とりあえず、みゆきを起こさないようにベットから出て軽くため息をつく。

俺は幸せそうに眠るみゆきを見ながら

「ふう・・・みゆきの部屋までは俺の部屋も通り道になるからなあ・・・少し部屋割りを考え直した方がいいかも、だな。」

と、そう呟きつつ、考え込んでいる俺だったが、そこに、俺の一瞬出した声に気付いたかがみとやまとが俺の部屋に飛び込んできて

「今の声は何!?慶一くん、何かあったの?」

「先輩、驚くような声が聞こえたけど、どうしたの?」

と聞いてくる2人だったが、俺のベットですやすやと眠るみゆきを見つけると

「みゆき?慶一くん、あんたまさか・・・って、それはないか・・・。みゆき、また寝ぼけたのね・・・。」

「高良先輩は相変わらず、みたいね。ともあれ、心配するほどの事ではなかったわね。」

と言う2人に俺はおそるおそる

「えと・・・怒らないのか?2人とも。」

と、聞いてみると、2人とも軽いため息をついて

「前にもあった事だしね。それに、あんたが引っ張り込んだんじゃない、ってのが分かってるからね。私も皆と一緒に慶一くんの家なんかに泊まったりするうちにみゆきの行動が何となくだけど分かるようになってきたのもあるかしらね。」

「高良先輩は結構天然な所ある、って先輩も言ってたものね。それに、文化祭の準備する際にお世話になった時にも高良先輩の時折垣間見せた突拍子もない行動も見ているしね。それに関しては慶一先輩を責められる事でもないもの。」

と言う2人に俺は内心、ほっとしつつも

「とはいえ、この状況に慣れ始めてる俺達も俺達か・・・。」

と呟くと、その言葉に2人もまた、苦笑を浮かべていたのだった。

「とにかく、起きたのなら準備して朝御飯にしましょ?今日は確か当番はつかさと峰岸と八坂さんだったわよね?」

「今朝も料理の得意な人が当番なら、安心はできるわね。こうもあれで意外と料理は出来るし。」

と言うやまとにかがみは驚きの表情を向けつつ

「え?八坂さんも結構できたりするの?知らなかったわ。」

やまとにそう尋ねると、やまとはその言葉に頷きつつ

「そうよ?あれで、いつかは1人暮らししても大丈夫なようにするんだ、って言って鍛えてるらしいわ。」

そのやまとの言葉に俺は中学時代を思い出しながら

「そういや中学生の頃には俺はあいつの料理の試食は結構やらされたっけな。でも、その甲斐もあって大分腕はあげたようだけどな。」

その言葉にやまとは苦笑しつつ

「最初の頃は先輩が気の毒だったわね。ほとんどあの時は毒見のようなものだったし。あの時の先輩には今だから言うけどかなり同情したものよ?」

その言葉に俺はため息をつきながら

「そう思うのなら、何であの時に見て見ぬふりしてたんだよ・・・。まあ、今更言っても仕方ないけどな・・・。」

俺の言葉にやまとはしれっと

「それはまあ、先輩よりもこうと友達やってる長さの違いがあったから、かしらね。先輩が毒見させられてるあの頃より前に私も食べさせられた事があった、と言う事よ。」

そう言うやまとに俺は再び軽いため息を1つついた。

そんな俺達のやり取りを見ていたかがみは

「ふうん？慶一くんの中学校時代って色々あったのね。でも、ちょっとだけ羨ましいかな？永森さんや八坂さんや慶一くんのその関係がさ。話を聞いていると私もその頃から慶一くん達と一緒に過ごしてみたかったかも、って思うしね。」

そう言うかがみに俺は軽く笑いながら

「はは、まあ確かにそれも面白かったかもしれないな。でも、俺はあの頃以上に今が凄く楽しいし、幸せだ。かがみ達とは高校で出会ったけど、そのおかげで凄く楽しい学園生活を過ごさせてもらってるからな。それはそれですごくいい時間の中にいるって思ってるよ。」

その言葉にやまとも頷くと

「そうね、先輩の言うとおりだわ。あの時は私達は3人だけで進んでいくのかもしれない、って思ってたけど、高校に入ってからは本当の意味で信頼できる先輩や後輩達ができたものね。あの時には想像もしなかった事だけど、それが凄く楽しいと思えるわ。」

やまとのその言葉にかがみは嬉しそうな顔をしながら

「そ、そう?そう思ってくれてるならよかったかな?でも、結局お互いに・・・。」

かがみの最後の台詞を補足するようにやまとが

「今が楽しいって思えているのなら、この出会いは意味のあるものだったという事よね?」

と言う2人の言葉に俺は頷いて

「ああ。そうだな、俺もそう思うよ。」

そう言って笑顔を向けるかがみとやまとに俺も笑顔を向けたのだった。

そして、そんな話をしている時にみゆきがようやく目を覚ました。

「ん・・・んん・・・ふあ・・・ここは・・・。」

そう言いながら寝ぼけ眼で部屋の中を見回すみゆきだったが、俺達の姿に気付いたみゆきは

「・・・あ、慶一さん、かがみさん、永森さん。おはようございま

す。ええっと、何故皆さんが私の部屋に集合しているのでしょうか？」

と言うみゆきの言葉にかがみは呆れながら

「はあ・・・みゆき？よーく部屋の中を見てみなさいよ。ここってあんたの部屋じゃないでしょ？」

そう言うかがみに俺とやまとも苦笑していたが、その事を指摘されて再度部屋の中を見回したみゆきは

「えー・・・っと・・・あ、あああ！こ、ここは・・・まさか慶一さんの・・・部屋、ですか？」

と、おそるおそる聞いてくるみゆきに俺達は重々しくうなずくと、みゆきはさーっと顔を青くすると

「す、すすすみませーん！わ、私ったらまた・・・。」

狼狽するみゆきに俺は苦笑しつつも

「慌てるなって、すでにやらかした後だったんだしな。まあ、それよりもそろそろ自分の部屋に戻って着替えて来いよ。もうすぐ朝食だぞ？」

と言うと、みゆきは恐縮しつつも慌てながら

「は、はい。とりあえず着替えて来ますね？本当にすみませんでした。」

そう俺達に告げて俺の部屋を出て行き、自分の部屋へと大慌てで戻って行くのを俺達は見送っていたが、それと入れ替わりでこなたとみさおが俺の部屋へやってきて

「慶一君、もうすぐ御飯できるよ?って、あれ?かがみと永森さんがどうして慶一君の部屋にいるの?」

「慶一ー!ちびっ子と呼びに来たゼー?って、あれ?ほんとだ。」

と、俺を迎えに来た2人の姿に驚きつつも俺達は事の顛末を2人に説明すると、2人とも苦笑しつつ

「みゆきさんも相変わらずの天然行動は萌えだねえ。」

「普段の高良からは想像できねえよなー。」

と言っている2人に俺達は再度苦笑するしかなかった。

そんな朝の一幕もあったが、とりあえず朝食を済ませ、俺達は、早速今日の分の勉強と宿題を始めるのだった。

全員で今までやってきた勉強のやり方で宿題やそれぞれの勉強を進めて行く。

そして、早々に自分の宿題とその日の分の勉強をあらかた片付けた俺とかがみ、みゆき、あやのの4人はまだ宿題や勉強の済んでいない人や後輩達の勉強を見る為にあちこち声をかけられる方へと行ってはわからない所等のアドバイスをするのだった。

「慶一先輩、ここなんですけど・・・。」

「慶一先輩、私もここがよくわからなくて・・・。」

と聞いてくるゆたかといずみに俺は

「ここは、こうやって、こうだ。前の計算式を参考にしながらだな・・・と言う感じだ。いずみ、ここはこの文章をだな・・・と言う感じだ。」

と2人に説明しながら教えていく。

「かがみ先輩、ここはどうやるっスか?」

と言うひよりにかがみは

「ああ、ここはね?こっちの文法がこうだから・・・となるのよ?」

そう言いつつ説明をしながらわかりやすく教える。

「・・・みゆきさん、ここはどうやったら・・・。」

と言うみなみにみゆきは

「ここはですね、教科書のこのページに意味が載っていますよ?」

と教科書を見せながらみなみに説明していた。

「アヤノ、ここはどういうイミになるデスカ?」

と尋ねるパティにあやのは

「ええっと、ここはね?この部分が・・・と言う感じよ?ちゃんと伝わったかしら?」

と言うあやのにパティはビシッと親指を立てて

「バッチリデス！サスガアヤノですネ。とても分かりやすいデス。」

と言うパティの答えにあやのもほっとしていたようだった。

2年生組もお互いに教えあいながらやっていたようで

「やさこー。ここはこれでいいの？」

「ぶっさん、これはこうだよ。」

「永森さん、こっちはあってる？」

「たまきさん、それで正解よ？こう、この部分だけど・・・。」

と、さいごにやまとがこうに問題の事を尋ねると、こうは少し困ったような顔で

「ああ、それは私もちょっと悩んでた所だね、丁度先輩達も小早川さん達の指導が終わったみたいだし、今度は私達も先輩達に教わろうよ？」

そう言い、皆もそれに同意したようで、こうが皆を代表して俺達に声をかけてきたのだった。

「慶一先輩達、私達の方も勉強見てもらえませんか？」

と言って来たので、俺達は頷いて

「いいとも。今ゆたか達の方も終わった事だしな。かがみ、みゆき、あやの、いけるよな？」

と聞くと、３人共頷いて

「こっちはいつでもいけるわよ？」
「お任せください。」
「今度は八坂ちゃん達の方ね？わかったわ。」

と言い、俺達は2年生組みの面倒を見に行くのだった。

そんな折、一生懸命宿題を写していたこなた達が

「ねえねえ慶一君ー。私達の方は見てくれないの？」
「ゆたかちゃん達や八坂さん達は見に行ってるけど、わたし達の方は見てくれてないよね？」
「そーだぞー？そいつ等ばっか見てやってずるいじゃんかー。」

と言って来るのを聞いて、俺は軽くため息をつくと、３人に

「お前らは今宿題を写してるところだろう？まだ勉強の方へ移っていないんだから教えるも何もないだろう？」

そう言うと、３人は”しまった！”というような表情でバツの悪そうな顔をしているのを見て、かがみ達も呆れたような顔をしつつ、３人を見ていた。

俺はそんなこなた達を見て苦笑してから改めてこう達の勉強を見てやりに行った。

そして、その後宿題を終えたこなた達も勉強に移った頃、そっちの様子も見てやり、今日の分は終了となったのだった。

そして、その日の夕食後、それぞれに思い思いに時間を過ごしていたのだが、俺もまた、久々に部屋の中を少し整理しようと思い、軽く押し入れにしまってある実家から持ってきていた私物の整理をしていたのだが、その時に俺はその中からある1枚の写真入りの手紙を発見する。

そして、その手紙の封筒にある名前を見た時俺は、今まで忘れていたある事を思い出すこととなった。

それは、俺が小学校6年生の頃に出会ったある人に関する記憶だった。

その封筒に書かれていた名前は”篠原しおん”

俺が小学生の頃に経験した俺の実らなかった初恋のその人だった。

俺は震える手で当時読めなかった”しおん”からもらった手紙の封を開いて手紙を取り出し、そこに書かれている文章に目を落とす。

そこにはこう書かれていた。

『慶一君へ。

君と過ごした小学校を転校して1ヵ月が経ったけど、慶一君、元気にやってる?

私は新しい学校に通っているけれど、今の私は慶一君と会った時のような周りに壁を作っていた頃の自分じゃなくなっているわ。

これも慶一君が私を変えてくれたからだな、って思ってる。

凄く感謝してるのよ？でもね、やっぱりここに慶一君がいない事がとても寂しい。

慶一君は私に3年待ってくれ、お前につりあうような完璧な男になってみせるから、って言ってくれたわよね？私も慶一君の言葉を信じて3年間を待とうって思った。

最初はそう思ったんだけどね、でもやっぱり、慶一君が今私の側にいない事が凄く寂しくて、何度も慶一君に会いたいって思ってしまうの。

あの時は強がってみたけど、結局自分のそんな寂しい気持ちに負けかけてる。

我ながら情けないなって思ったわ。

でもね、慶一君と離れてみて、私は本当に慶一君が好きなんだって、改めて思った。

だから、今度会う時には、慶一君の事、もっと好きになってそして、あの時よりももっと強い気持を慶一君に伝えるから、だから、待っててね？

誰よりも慶一君を好きな、しおんより。』

俺はその手紙を何度も読み返し、そして、忘れていた気持を思い出すと、気付けばその当時の自分を思い出して涙をこぼしていた。

そんな俺の背後にかがみとやまとの2人がいる事にも気付かずに、俺は少しの間、泣いていたのだった。

かがみｓｉｄｅ

今日の勉強も無事に終わり、私はこの自由時間を満喫しつつ、また慶一くんの部屋に行って一緒にラノベでも読もうと部屋へと足を運んだ。

その途中で同じように慶一くんの部屋へと向かおうとする永森さんに会った。

「あら？永森さんはどこへ行こうとしてるの？」

そう声をかけると、その声に気付いた永森さんは私の方へと向き直って

「あ、かがみ先輩。私は慶一先輩の部屋へと行ってみようと思ってて、その・・・これを読もうかなって思ってたのよ。」

そう言って私に手に持っていたラノベを見せると、私はそれに苦笑しながら

「あはは、永森さんもだったんだ。実は私も、なのよね。」

そう答える私に永森さんも苦笑して

「ふふ。目的は一緒、という訳ね？なら一緒に行かない？かがみ先輩。」

と言う永森さんの提案に私も頷いて

「そうね、それじゃ行こっか。」

そう言うと、永森さんもそれに頷いて、私達は一緒に慶一くんの部屋へと向かった。

そして、一応部屋のドアをノックしてみたものの、慶一くんからの返答もなかったので、私達は顔を見合わせつつ、不審に思いながらも、少しドアを開いて慶一くんの部屋の中の様子を伺ってみた。

すると、部屋の中央で箱のような物を整理してる最中っぽい慶一くんが何かに食い入るように見入っている姿を見つけて、私と永森さんは再度お互いに顔を見合わせると、慶一くんを脅かそうとこっそりと2人して部屋へと進入した。

私達が部屋に入って来たこともそうだけど、わたし達の侵入にすら気付かない慶一くんの背後にまわり、そっと慶一くんの見入っている物を背後から覗きこむと、どうやら手紙らしかった。

と同時に、私はその隣に落ちている写真に目を移す。

どうやら慶一くんが見入っている手紙に、その写真は入っていたようだった。

私は慶一くんが見ている手紙の内容も気にはなったが、写真に写っている女の子の事も気になっていた。

そうこうしているうちに、慶一くんが手紙を読みながら涙をこぼし始めたのを見た私は、今だ私達に気付かない慶一くんに声をかけて

みる事にしたのだった。

「・・・えっと、その・・・慶一くん？」

そんな風に慶一くんに声をかける私を、永森さんもじっと見つめていた。

慶一ｓｉｄｅ

私物の整理をしていて、偶然にも発見した手紙は、俺が激しすぎる悲しさと共に無意識に封印してしまっていた記憶を呼び覚ます物だった。

俺はその記憶を取り戻し、今までこんなにも大事な事を忘れていたという事に情けなさと悲しさと申し訳なさで泣いていたのだった。

そんな時に何時の間にか俺の部屋に侵入し、俺の背後にいたかがみから声をかけられる事となった。

「・・・えっと、その・・・慶一くん？」

その言葉に”はっ”と我に帰ると、涙目の顔のままかがみの方へと振り向いて

「か、かがみ？それにやまとも、お前らいつからここに？」

と少し驚きつつも尋ねると、２人ともバツの悪そうな顔になって

「えっと、その・・・一応声はかけたんだけどね、何か慶一くん、何かに見入っていて私達の気配にも気付かないみたいだったからさ・

・・。」

「それで、ちょっと先輩を驚かせようと思って、私達は先輩の背後にそっと近づいた、って訳。」

そんな2人の言葉に俺はとりあえず涙を拭きつつ

「そっか。おまえ等の事に気付かなかったと言うのなら、よっぽど俺はこの手紙に意識を集中させてしまっていたんだな。で?どうしておまえ等がここに?ってまあ、何となく察しはつくけど、この手紙とその写真の子について聞きたい、って言う所かな?」

その言葉に2人は困惑しつつ

「その、最初は慶一くんの部屋でラノベを読もうって思って来たって言うのが本当の目的だったのよ。でも、部屋に入ってみたら慶一くんが手紙に見入っているのが見えたから・・・。」

「手紙を読みながら泣いている先輩を見て、私達は先輩にその事を尋ねてみたくなったのよ。でも、先輩が泣くなんてよっぽどの事よね?だから、その、先輩が話したくない、話せないという事なら、無理には聞かないつもりよ?」

と言う2人に俺は自嘲の笑みを浮かべつつ

「そうやって強がってるけど、結局は気になってるんだろ?いいさ。話すよ。というか、この事は皆にも話したい。だから、2人とも、皆をあの大きい勉強部屋へ集めてくれないか?」

という俺の言葉に、かがみとやまとは少し驚いたような顔をしていたが、俺の言葉に頷くと

「・・・わかったわ。とにかく皆に声をかけてあの部屋へと集まってもらうわね？それじゃ行こう、永森さん。」
「そうね、行きましょう。じゃあ、先輩、後でまた。」
そう言って部屋を出て行く2人に俺は「よろしく頼む。」と短く言うと、2人が出て行ったその後で勉強専用の大部屋へと足を運んだのだった。

勉強部屋に辿り着いた俺は、皆が集まるのを待っていたが、そうこうしているうちにかがみとやまとが皆を引き連れて部屋へとやってきた。

「慶一くん。言われた通り、皆を連れてきたわよ？」
と言うかがみに俺も頷きを返すと

「ありがとう、かがみ、やまと。皆、突然集まってもらってすまないな。皆に集まってもらったのは、皆に話しておきたい事があるからなんだ。」
と、集まった皆を見渡しながらそう言うと、こなたが俺に

「話しておきたい事、って一体なんなの？」
と聞いて来たので、俺はまず、持っていた手紙をテーブルに置いて

「うん。皆、まずはこれを見て欲しい。」
と、皆に手紙を見るように促すと、みんなは手紙を広げてその文章に見入っていた。

そして、手紙を読み終えたみゆきが黒いオーラを発しながら

「これは・・・慶一さん宛てのラブレターみたいですね・・・。私達にこのようなものを見せて、慶一さんはどうしたい、というのでしょうか？」

と言う、みゆきの言葉を皮切りに、他の数人もまた不機嫌そうな顔を向けていたのを見たが、俺はあえてその視線を受け止めつつ

「・・・まあ、内容的にはそういう事なんだ。そして、聞いてもらいたい事っていうのは、その手紙の主、”しおん”の事、そして、俺が無意識的に封じ込めた記憶、そして、俺の罪を皆に話してここにいる全員から、その事に対する裁きを受けたいと思ったからだ。」

俺のその言葉にやまとが

「裁き？先輩が裁かれるような事をしでかしたとでもいうの？」

そう言い、俺はその言葉に頷いて

「ある意味、俺の罪でもある、と思ってるからな・・・この話をした後の皆からの批判等は甘んじて受けるつもりだ。そうでもしないと・・・俺の気がすまないんだ・・・。」

俺のその言葉にゆたかが

「・・・わかりました。何があったのかは先輩からお話を聞かせてもらわないとわかりませんけど、それで先輩の気が少しでも済むと言うのなら私達は話を聞きますよ。」

ゆたかの言葉に頷くみなみ達、それにこう達やつかさ達。

それを見て俺は1つ頷くと

「ありがとうな。それじゃ早速話すよ。あれは、俺が小学校6年生の頃だった・・・・・・。」

そう言って俺は、当時の事を皆に話し始めた。

大集合の旋律～大人数の勉強会2日目、忘れられていた慶一のもう1つ過去と罪

次回は、忘れられていた記憶の内容と罪について迫って行きます。

大集合の旋律～大人数の勉強会2日目、忘れられていた慶一のもう1つ過去と罪

今回は早めに投稿できました。
次回も頑張って行きたいと思います。
それでは本編をどうぞ。

大集合の旋律～大人数の勉強会2日目、忘れられていた慶一のもう1つ過去と罪

皆の学力アップの為ということで始めた勉強会。

その2日目には、皆もそれぞれの目標を持って勉強に励む。

その日もいい感じに効率良く勉強を終え、自由な時間が出来た俺達は思い思いにその時間を過ごしていた。

俺もまた、久々に実家から持ってきていた、まだ整理しきれていなかった自分の私物をこの機会に整理してしまおうと私物の入った箱を押し入れから取り出す。

そして、私物整理の最中に俺は、俺にとって重要な過去の記憶を呼び覚ます手紙を発見したのだった。

その手紙を見て当時の記憶を呼び覚まし、自らの罪に気付いた俺は、偶然にも俺の部屋に用事があって遊びに来ようとしていたかがみとやまとに手紙を読みながら涙している所を見られてしまう。

この手紙の事を聞きたいと俺に言って来る2人に、俺は自らの罪を打ち明けて裁きを下してもらおうと思いたった。

そして、かがみたちにこなた達を集めてもらい、俺は、俺の無意識に封じられていた過去の事を話しはじめたのだった。

「・・・・・当時俺の通っていたクラスにある時、転校生がやってきたんだ。そいつの名前はその手紙に出てきた”篠原しおん”と言った。初めて会ったあいつは、自分の回りに心の壁を築いて他人

との接触をほとんどしないようなそんな奴だった。新学期になって席変えがあり、俺はそんな変わり者のしおんの隣の席になった。あの時の俺は、少々抜けてる所もあって、４日に１回は教科書を忘れ、隣にいるしおんに見せてもらうというような感じだった。」

そこまで話した時、こなたが俺に

「へえ?慶一君って意外と当時は抜けてるとこあったんだねー。何だか意外ー。」

と言って来たので、俺は苦笑しつつ

「あはは。まあ、なんというか、当時は俺も今みたいにしっかりしようという意識が薄かったっていうのもあるな。とりあえず、話を続けるぞ?最初にあいつが隣の席になった時から、俺は何となくあいつの事が気になってた。だから、教科書を忘れてあいつに見せてもらう事をきっかけにして、あいつに話しかけた。あいつは最初のうちは他人なんて煩わしいだけだ、と俺の事もまた突き放していた。そんなあいつにある時変化が訪れた。」

その言葉にこうが

「変化、ですか?どういう風になったんです?」

そう尋ねて来たので、俺はその言葉に頷くと

「うん。それは、あいつと同じクラスになってからしばらく経った夏休みの事だ。あいつが学校の近くの公園の側でジュースを買って、いざそれを飲もうとしてジュースのプルタブを上げた時、あいつの足元にふいに子猫がやってきたらしいんだ。そして、急に自分の足

元で寝転ぶ子猫に驚いてあいつは思わず持っていたジュースをほおり投げてしまった。そして、そのジュースがたまたま近くを歩いていた不良高校生にかかったらしくて、あいつはその高校生に絡まれる事となった。」

その言葉にいずみは顎に手を当てつつ

「あ、その後の展開が何となく読めますね。ひょっとして先輩はその場所に偶然居合わせていたとかそういう事ですか？そして、しおんさんを助けた、と。」

そう言ういずみにたまきが

「えー？でも、当時の先輩は小学６年生だよ？流石に高校生を相手にするのは無理じゃない？」

そう言うと、その言葉に俺は笑いながら

「はは。まあ、いずみの予想は当たりさ。そして、たまき。実はいずみの予想通りでな。俺は高校生に絡まれているあいつを助けに行った。」

その言葉にかがみが驚きながら

「え？だって、高校生でしょ？いくらなんでも無茶しすぎじゃ・・・。」

そう言うと、ゆたかもそれに同意しながら

「そうですよ。私もかがみ先輩に同意です。」

と言う2人の言葉に俺は苦笑しながら

「まあ、普通ならそうなんだろうな。でも、あの頃から龍神流の技を叩き込まれて来た俺にとって、高校生というのはハンデにはならなかった。むしろ、俺を小学生と侮ったあいつ等が逆に痛い目を見る事となった訳だがな。」

そう言うと、つかさが驚きの表情を見せながら

「え～？けいちゃん、凄かったんだね～・・・ほんとに、どんだけ～・・・。」

つかさの言葉に気を抜かされつつも持ち直して

「とはいえ、俺もやっぱりまだ流神流の技を扱うにはまだまだ雑だったというのもあったから、俺自身も無傷じゃ済まなかった。相手よりはダメージは低かったものの、それでも相手からのダメージをもらう事にはなってしまった。そして、そんな俺を物凄く心配そうな顔で俺の傷を治療してくれたしおんにその時、今までになかった変化が起きた。それは、今まであいつにはそんなに表情や感情といったものが薄かったんだが、そんなあいつがその時、俺の体の事を気遣って涙を流したのさ。」

その言葉にやまとが

「涙を？それまでの”しおん”さんってそんな風に先輩の前で涙を流すとかいう事もしなかったという事なのかしら？」

俺はやまとの言葉に頷くと

「そうだ。なんというのか、それまでの”しおん”には俺と話している時でも感情らしい感情をほとんど見せなかった。ただ、淡々と俺の言葉に相槌をうつ、とか気のない言葉で返すとかそういう感じだった。そんなあいつが初めて俺の前で涙を流した。それだけでなく、ずっと小学生なのに小学生っぽくない態度でいたあいつが、いつでも冷静でいたあいつが、その時にはいつもの冷静さをなくし、自分の所為で俺が傷ついた事にショックを受けてかなり取り乱していた。」

そう説明すると、みなみが

「・・・それで、先輩はそんな”しおん”さんをどうしたのですか・・・？」

そう聞いて来たので俺は当時を思い出しながら

「あいつが落ち着くまで、泣き止むまで俺はあいつを抱きとめて背中をさすってやってた。まあ、そんな感じでその時は終わったんだが、それが、あいつの感情の発露のきっかけとなったんだ。その後はあいつは俺があいつを助けた事に対する礼をしたいと自分の家へ俺を連れて来た。そして、その・・・俺は特に礼に関しては何も考えていた訳じゃなかったし、その時には同級生の言葉をその時にあいつに言ったんだが、あいつはそれを真に受けたみたいでな・・・その・・・。」

そこまで話しつつ言い淀んでいると、そんな俺の言いにくそうな姿を見たみさおが

「ん？そん時慶一は”しおん”になんて言ったんだよ？」

そう言ってくるみさおの言葉に俺は少し言葉を詰まらせたものの

「えっと、な？当時はその・・・同級生同士で話す事っていうのは子供っぽい馬鹿な事ばかりだったから、その時にしていた馬鹿話の事をあいつに言ったんだ。えと・・・お礼って言ったら『ホッペにチューされたら嬉しいよなー？』って同級生が言ってた事を思わず口走ってしまった。と言う訳だ。」

俺は照れながらその事を話すと、みくが俺を見てニヤニヤとしながら

「なるほど。何だか先輩の小学生時代って微笑ましかったんですねえ。想像したら可愛いですね。」

その言葉に俺は顔を赤くしつつ

「・・・う・・・今から思い起こしてみてもかなり恥ずかしいな・・・これは・・・。ま、まあ、とにかくそんな事を言った俺に、あいつは何気に言った俺の言葉を実行した訳だ。俺も不意打ちを食らった感じだったんだが、凄くパニクってな。そんな状況だったんだけど、その時にあいつは”微笑む”事を思い出したらしかった。それからと言うもの、あいつはどんどんと俺やクラスの同級生らとも前以上に話すようになっていった。クラスの連中もそんなあいつの変化に徐々に打ち解けるようになっていったようだった。その後俺達はつるむようになり、互いの家に遊びに行ったり2人して色々と遊んだりするようになっていった。」

それを聞いていたパティがうんうんと頷きながら

「ナルホド！フタリでデートをタノしんでいたのですネ？」

と言う言葉に若干他から黒オーラを感じつつもまたしても照れから顔を赤くしつつ

「あー・・・いや・・・そのう・・・まあ、今から考えたらそう言えなくもないかも、だな・・・。とにかく、そんな事をしていたある冬の日の事。俺達はその日は俺の実家、龍神流の家で遊ぶ事となり、家についた俺達は俺の部屋へと向かう為に家にあがり込み、廊下を自分の部屋に向かって移動していた。その途中で・・・皆も・・・特にこなた達は瞬から直接俺の過去の話はされていて知っているとは思うけど、その時に親父達が俺が本当の龍神家の子供ではない、と言う事を居間で話している所を偶然にも聞いてしまった。そして、その事にショックを受けた俺は訳も分からずにその家を飛び出した。」

そこで言葉を一端切ると、そこにあやのが

「それで?その後はどうなったの?」

と聞いて来たので、俺はその言葉に頷くと

「ああ。その時、いつの間にか寒い冬の雨が外では降り出していた。俺はあの時・・・親父達が俺が本当の息子でない事を明かしてくれなかった事を、真実を伝えてくれなかった事にショックを受け、何もかもがどうでもよくなった俺は、その雨に打たれて死のうとさえ思っていた。だが、そんな俺を救ってくれたのは、あいつの平手打ちとあいつの言ってくれた『いい加減にしなさい!　あんたが今さら『森村』だからってそれがどうしたの!?　あなたは『龍神』や『森村』の前に『慶一』なの!　名字が変わったくらいで何よ!!」

龍神のおじさんもおばさんも、あんたのこと本当の子供だと思っ

てるわよ!!!』と言う言葉だった。そして、俺を必死に探してくれた親友やあいつのおかげで、俺はその時に命を落とさずに済んだんだ。」

俺の言葉にみゆきが少しだけ悲しそうな、それでいてほっとしたような表情で

「そういう、事ですか・・・今この場に慶一さんがいる、という事には”しおん”さんには感謝しなければなりませんね・・・そうでなければ、慶一さんは・・・今頃は・・・。私は改めて今ほっとしています・・・。」

そのみゆきの言葉に俺はすまなそうな顔で

「すまん、みゆきの言うとおりだな。俺も今、こうしてこの場に居れる事にはあいつにも感謝してる。けど、またこうして皆に心配かけてる事に罪悪感を感じてるよ。ともあれ、その後は親父達とも話し合い、今の現状をとりあえずは受け入れた。俺の本当の両親の家、つまりここだが、それが残ってるという事もその時に親父達に教えてもらった。あの当時から俺は、この家に入る事を決意していたんだがな。」

その言葉にひよりは納得した顔で

「なるほど、そういう事っスか・・・。それで、その後はどうなったんスか?」

その言葉に俺も頷いて更に先へと話を進める

「その後は、俺はあいつに命を救ってもらった事のお礼をするべく、

あいつを水族館へと誘った。丁度クリスマスでもあったから、あいつに礼も兼ねたプレゼントを渡したかった、というのがあったからな。とりあえず水族館を2人して廻った後、お互いにプレゼント交換をした。あいつはお手製のマフラーを、俺は当時の小学生としてはかなり高額の５０００円という値段のアクセサリーを送った。そして、その後、あいつは俺に、俺の知らないうちに転校する事になったのだという事を話してくれた。そして、俺はあいつに告白された。俺の事が好きだという事を。」

俺の言葉にこなたはおそるおそる

「そ、それで・・・慶一君は”しおん”さんになんて答えたの？」

その言葉に、俺は苦悶の表情をしながら

「・・・俺は・・・その告白にすぐには応えてやれなかった・・・俺はその当時にはあいつにつり合うような男になっていないと思っていた。だから、俺はあいつへの返事を保留してしまった。３年待ってくれ、そうしたら俺は最高の男になって見せるから、ってな。３年経ってまたあいつと再会した時こそ、あいつに俺の気持を打ち明けよう、そう思っていたんだ。だけど・・・・・。」

その言葉にかがみは不安そうな表情で

「ど、どうしたのよ？その後何かあったの？何だか辛そうな顔してるわよ？」

と言うかがみの言葉に俺は涙がこぼれそうになるのをこらえながら

「・・・結論から言えば、俺はもう2度とあいつに自分の気持を伝

える事は出来なくなった。」

俺がそう言うと、つかさは俺を心配そうな表情で見ながら

「どうして?はなればなれになっちゃったから?”しおん”ちゃんにはもう会いにいけなくなっちゃったの?」

と聞いてくるつかさに俺は頷き

「・・・そうだ。だが、それは・・・俺があいつの転校していった場所へ行けないからじゃない・・・。実際、俺はあいつの転校していった場所は知っているし、会いに行こうと思えば行ける場所だった。けど・・・あいつはいなくなってしまった・・・。あいつの転校先で1ヵ月が経った頃に、あいつは・・・この世から消えてしまったからだよ・・・。」

そこまで言った時、俺は堪らず涙をこぼした。

それを見た皆は、俺の語った事実に驚きと戸惑いを見せていたが、そんな俺の姿を見たゆたかが悲しそうな顔をしながら

「先輩・・・その1ヵ月に何があったんですか?教えて下さい。」

そう尋ねて来たので、俺もそれに頷くと

「・・・うん。あいつが転校して1ヵ月後、あいつは俺への気持を手紙にしたためて自分の家の近所にある信号のある交差点の先にあるポストへとさっき皆に見せた手紙をだそうと向かっていた。あいつはちゃんと信号を守って自分の進む方向の信号がちゃんと青になるのを確認してから渡ったらしいんだが、そこに信号無視して突っ

込んできた車にあいつは轢き逃げされた。そして・・・打ち所の悪かったあいつはそのまま・・・帰らぬ人となった、という訳さ・・・。」

そこまで話終えてから俺は一度気持を落ち着かせる為に深呼吸をする。

そして、落ち着きを取り戻した頃、こうが俺に

「先輩と”しおん”さんの事はわかりました。その上で聞きたいんですけど、先輩が言っていた自分の罪、っていうのは何なんですか？」

その言葉に俺はしばし考え込む。

そして、ある程度考えを纏めた俺は、皆を見回しながら話し始めた。

「俺の罪、それは・・・あいつに対する俺の気持ちをはっきりと伝えなかった事・・・そして、その為に3年の時間が欲しいと言い訳をした事・・・あいつに心残りをさせてしまった事だ・・・。俺の中にもあいつへの気持はあったのに・・・俺は結局・・・逃げたんだ・・・言えばよかった・・・言わなきゃいけなかった・・・それが出来なかった意気地なしの自分を・・・俺は記憶を取り戻した今、後悔している・・・。さらにはあいつの事を記憶から無意識とはいえ消してしまっていた。それが俺の・・・・・・罪というやつだ。皆に問いたい。俺の・・・俺の受けるべき裁きを・・・。」

その言葉に皆も色々と考え込んでいるようだった。

そして、皆は顔をつき合わせて俺の罪についてあれこれと話あって

いるようだった。

しばらくして結論が纏まったのか、こなたが俺の方に向き直って

「話はわかったよ。それで今皆と色々話し合ったんだけどね?今からその結論を言うよ?」

その言葉に俺は頷いて次の言葉を待つ。

そんな俺を見てこなたは再度頷くと、こなたは俺に改めて話し始めた。

「まず、慶一君の罪についてだけどさ、まあ、確かに”しおん”さんに慶一君の気持を言ってあげれなかった事と告白されて逃げてしまった事は確かに罪かもしれないね。まあ、それについては皆から『最低』だの『しおんさんが可愛そう』だのという意見が出てたね。それに関しては私も同意かなー?」

その言葉に俺は心にグサリと何かが突き刺さるの感じながらダメージを受けていた。

そんな俺を見つつこなたは更に言葉を続ける。

「でもさ、慶一君は”しおん”さんを変えてあげられた。僅かな時間だったけれど、彼女に幸せをあげる事ができたのは慶一君が”しおん”さんにそのきっかけを作ってあげたからだよ?そこの所は皆も認めてる。それにね、彼女は慶一君の手の届かない場所で亡くなってしまっているし、慶一君はその時のショックで記憶を失ってしまったんだよね?彼女の事に関する事だけを、さ。」

そこまで言うこなたに俺も頷きで返すと、こなたは更に言葉を続けた。

「その部分は私達もしょうがないって思うよ？だって、その当時の慶一君は小学生だったんだし、どう考えてもそれを受け止めることは出来なかったと思うよ？それこそそれを求める事なんて無茶だと思うしさ。私だって同じようになったらたぶん受け止められないね。」

そこまで話した後、かがみが更に言葉を続けて

「私も同じようだったらたぶんこなたと同じだったと思うわ。それにさ、慶一君が”しおん”さんに対して自分の罪を自覚して受け入れているのなら、それでいいんじゃないかな？その事を受け入れたなら、後は次の事よね？」

そう言うと、さらにみゆきが

「そうですね。今慶一さんがしなければならない事があるとすれば、それは、その罪を自分の心に刻み込んでそして、前を向く事ではないでしょうか？」

その言葉に頷いたこうが更に

「そうですね。高良先輩の言うとおりですよ。慶一先輩は”しおん”さんの分までこれからも生きていくべきですよ。それが”しおん”さんにとっての望みでもあると私は思います。」

そう続け、更にやまとも

「こうや高良先輩の言うとおりね。先輩は”しおん”さんの分まで幸せにならなきゃそれこそ”しおん”さんの気持を裏切る事になってしまうわ。」

そう言い、あやのもまた俺に

「そうね。もしも慶ちゃんがその事を後悔していると言うのなら、今度は誰一人失わせないように、そして慶ちゃん自身も幸せになれるように頑張らないといけないわ。」

そう言うと、みさおが更に

「そうだゼ？お前は今までだって散々不幸な目にあってきたじゃん？だから、お前の罪は十分に償ってきてると思うぞ？だったら今度は、お前も幸せになったっていいはずだ。」

そう言い、最後にゆたかが

「先輩、皆さんの言っている事がわかりますよね？だったら先輩がこれからすべき事もわかってるはずですよ？」

と言う言葉に俺は皆の言葉の一つ一つを受け止めつつ心の中で整理していた。

そして、俺は皆の言葉に思わず涙しつつ皆に

「そうか・・・皆、ありがとう。今後、俺がやるべき事、それが”しおん”への償いと望みを叶える事になるんだな？だったら、俺は・・・あいつの死を受け入れ、そして・・・。」

その後を皆が揃って同じ言葉を発した。

「「「「「「「「「「「「「「「幸せになる事。」」」」」」」」」
」」」」」」

俺はそんな皆の言葉に力強く頷いた。

こうして俺は、無くしていた記憶を取り戻し、その俺の罪を皆に打ち明け、そして、俺のこれからすべき事を知った。

俺はその事に皆に感謝すると、皆も笑って頷いてくれたのだった。

そして、俺はその手紙と写真を、俺の本当の両親の仏壇に持っていき、そこに飾った。

今後俺は、両親と共にしおんも一緒に供養していこうと誓ったのだった。

しおんの事を思い出した俺は、同時に、中学時代のあの時、こうとやまとに初めて会い、助けた時の事を思い出していた。

そして、何故あの時にやまとを助けたのか、その理由に行き当たったのだった。

「・・・そうか・・・やまとは、しおんに似ていたんだな・・・俺は記憶を失っていても無意識にしおんをやまとに重ねたのかもしれない・・・。」

そう呟きながら、俺は、その事が、こうややまとと親友となった事が偶然ではなかった事に戸惑いを見せていた。

勉強会の2日目にふいに復活した過去の記憶、そして俺の罪。

俺は、それを受け止めてこれからも皆と共に行こうと心に誓うのだった。

いつか堂々とあいつの墓前へと立つ事を、幸せになった俺の姿を見てもらう事を思いつつ、今日という日がふけていったのだった。

大集合の旋律～大人数の勉強会2日目、忘れられていた慶一のもう1つ過去と罪

次回は勉強会最終日です。

大集合の旋律～大人数の勉強会最終日、慶一の異変、そして、やまととの約束～

前回投稿より大分間が開いてしまいましたが、何とか完成です。

それでは本編をどうぞ。

大集合の旋律～大人数の勉強会最終日、慶一の異変、そして、やまととの約束～

勉強会2日目に俺の失っていた記憶と共にもう1つの過去が明らかになった。

俺は、自分の犯した罪を思い出し、皆にそれを裁いてもらおうと、俺の罪の事を皆に話したのだった。

皆は俺の告白に辛辣な言葉を投げかけてくる反面、残された俺は、しおんの為にもこれからも生きて幸せにならなければいけないと言われたのだった。

俺はそんな皆の心に感謝しつつ、しおんにも再度詫びて、今後は皆の言うように、しおんの分まで幸せになるために頑張ろう、と決意するのだった。

そして、そんな事があった次の日の朝・・・・・。

（おはよう、しおん、瞬。父さん、母さん。今日からまた俺は頑張って行くよ？だから、俺の事を見守っていてくれな？）

と仏壇に飾ったしおんと瞬と両親の写真に向き合いながら、俺は改めてこれからの自分の精一杯を生きていこうと誓うのだった。

だが、この時俺は、過去を取り戻した事で俺自身にちょっとした異常が起きている事には気づいてはいなかった。

それを自覚するきっかけが今、起きようとしていた。

仏間での挨拶を終えた俺は、部屋を出ると、そろそろ朝食の準備も出来ている頃だろうと思い、キッチンへと向かおうとした。

だが、その途中で俺は、やまとと出会う事になったのだった。

「あら？おはよう、先輩。部屋を見に行った時には姿が見えなかったから、家の中を少し捜してしまったわ。もう朝食ができているから、呼んで来てとみくさん達に頼まれたのよ。」

と言うやまとに俺は顔を向けて

「お？おはよう、やまと。そうか、わざわざすまないな・・・っ！」

いつものように挨拶を返そうとした俺だったが、何故かやまとの顔を見た瞬間に途中まで言いかけていた挨拶も途切れてしまい、そのまま視線をそらしたのだった。

そんな俺の態度にやまとは頭にハテナマークを飛ばしながら見ていたが、やがてこうしていても埒があかないと思ったようで

「？まあ、いいわ。私は先に行ってるから、先輩も顔を洗ったりとか済ませたならキッチンへ来てよ？」

そう言いながら再びキッチンへと戻って行くやまとを見送りつつ、自分が何故あんな態度を取ったのかがよくわからずにいる俺は、心の中で

（なんだ？一体どうした、っていうんだ？いつものやまとといつもの挨拶じゃないか・・・。なのに何故俺はやまとから視線をそらしたんだ？何故妙な罪悪感を感じているんだ？一体、何故・・・。）

と、自問自答を繰り返しつつも俺はやまとに言われたとおりに洗面所に行って顔を洗うと、キッチンへと朝食を摂る為に向かったのだった。

結局その時にはその答えも出ないままに朝食を済ませた俺は、そのまま少し休憩の後、3日目の最後の勉強会を始めたのだった。

勉強会の最中も、俺は朝のあの状態について、色々と考えを巡らせていた。

その所為もあって、俺はこなた達からの質問にいつものように答える事が出来ずに戸惑う事となった。

「ねえ、慶一君。ここなんだけどさー。」
「けいちゃん、ここはこれでいいの?」
「慶一ー、ここを教えてくれよー。」

と3人に質問されると、俺は考え事に集中しすぎた為にこなた達の聞きたい事を聞きそびれてしまった。

「あ、えっと・・・すまん、3人共。もう一回いいか?」

と言う俺の様子にこなたは首を傾げつつ

「どうしちゃったのさ?慶一君。いつもの君らしくもないねえ?」

と言って来るこなたに俺は苦笑しつつ

「はは・・・。言葉もないな。悪い、ちょっと考え事に没頭しすぎ

たようだ。確かに俺らしくなかったかもな・・・。」

そう言う俺に、つかさやみさおがちょっと心配そうに

「だいじょうぶ?ちょっと疲れてるの?」

「お前は結構無茶する所あるし、気をつけなきゃだめだぜー?」

とそう言ってくる2人に俺は複雑な表情を向けつつ

「大丈夫だ。つかさ、みさお。それと、その心配はありがたく受け取っておくよ。」

そう言うと、3人は少しほっとしたような顔になっていたが、そこにかがみが

「あんたらが慶一くんに苦労かけるからじゃないの?慶一くんを心配する前に、まずはそうなってしまう自分達の事を反省しなさいよね?」

と突っ込みを入れると、3人は苦笑しながら

「わ、わかってるよー・・・。一応は私も悪いとは思ってるんだし、そんな風に言わなくてもいいじゃん・・・。」

「あ、あはは・・・ごめんね?けいちゃん。」

「むう・・・私だって少しは責任は感じてるぞ?でも、ついつい慶一に頼っちゃうんだよなあ・・・。」

と言う3人にかがみは大きなため息をついて呆れていた。

あやのやみゆきもそんな光景を見て苦笑を浮かべ、1年生組、2年

生組もそんな俺達のやり取りを楽しそうに見ていた。

そして、そんな中でこうとやまとが

「まあ、なんだかんだ言っても先輩の面倒見の良さはあの頃から変わってないですよね。」

「お人好しな所は確かにあの頃から変わらない所よね・・・。ある意味じゃ先輩らしいけど・・・。」

そう言う2人に俺は苦笑しながら

「まあ、こうの言うように世話焼きではあったというのは今更否定はしないよ。それを言うならこうとやまとだってあの頃からさほど変わっちゃいないよな?ちょっと小生意気な所とか、言葉がきついところと・・・か・・・。」

とこうとやまとの2人に顔を向けて話をしている途中、やまとと目が合いそうになった時、再び朝に感じたあの感覚が蘇ってきて、俺は、やまとへ最後まで言葉を発しきれずに言葉を途切れさせつつ、視線をやまとから外す事となってしまった。

俺のこの変化にこうとやまとはもちろん、俺を見ていた他の皆もまた、俺の異変に戸惑っているようだった。

「先輩、朝もそうだったけど、どうしちゃったのよ?何で私と目が合いそうになると視線をそらすのよ?」

頭にまたもハテナマークを飛ばしつつそう聞いてくるやまとに俺も困惑した顔でそれでも目をあわせられないまま

「・・・俺にもわからん・・・朝からずっとこの事には自問自答してきたんだが・・・どうして突然こうなったのかが俺にも良くわからないんだ・・・。俺、どうしちゃったんだろうか？」

とそう言う俺に、やまとは何やら釈然としない表情を浮かべていたが、俺達のやり取りを見ていたみゆきが

「慶一さん。慶一さんは永森さんに対して何か後ろめたい事があるんですか？先ほどの態度を見る限りでは、慶一さんにそういうものがあるように思えたのですが・・・。」

その言葉に俺はしばし顔を伏せて考え込んでいたが、やがて顔を上げると

「いや、そんな事はない・・・そのはずだ・・・。昨日俺は皆に俺の後ろめたい事を告白したんだし、皆もその事は知ってるはずだよな？だから、後ろめたい事なんてないはずなんだ・・・。だけど、どうしてやまとの顔を見れなくなっちゃったんだろう？昨日までと何ら変わらないはずなのに・・・。」

そう答える俺に、皆もまた、困惑の表情を見せていたのだった。

やまとｓｉｄｅ

昨日の先輩の告白を聞いた私は、皆と同様に大きなショックを受けていた。

けれど、先輩は、皆の言葉を聞き、自らの罪を受け入れて、これから先”しおん”さんの分まで生きて、幸せになる事を改めて皆と共に誓い合ったのだった。

けれど、その次の日の朝から、先輩の身に異常が起こっていた。

それまで私と話をする時も普通に私と目を合わせて会話が出来ていたはずの先輩が、その日の朝には私と話をしている途中で私から視線をそらす、といういつもとは違う行動を取ったのだった。

しかも、それが私以外の先輩達や後輩達と話す時はいつもと何ら変わらない事が、その日の勉強会以降からの先輩の私に対してだけの態度を見るうちに、私自身もいらいらが募ってくるのが感じられた。

どうして突然こういう事になったのか、先輩に問いただしてみても、先輩自身にもその原因がわからずに困惑しているという。

私はそんな先輩を見ながら心の中で

（・・・先輩、一体どうしちゃったの?今までは先輩も私や皆と話す時も何ら態度は変わらなかった・・・。なのにどうして突然私にだけそんな態度をとるようになっちゃったのよ・・・原因を先輩に聞いてみても先輩もわからない、と言っていたっけ・・・なんだかこのままじゃ納得できないわ・・・。こうなったら意地でも先輩には元に戻ってもらうんだから。絶対に・・・。）

そう考えながら、私は絶対に先輩を元に戻してみせると誓ったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

結局その後も勉強会は進み、とりあえずの終わりを見たものの、俺のやまとに対する態度は改善されないままだった。

明日以降のみさおとあやのとした約束も果たさなければいけない中、俺はこの問題だけはどうにかしないと、と頭を悩ませていたのだった。

全ての勉強会の日程を終え、俺はこなた達を送る為に一緒に駅へと向かった。

その際、やまと達は食事当番でもあったため、家に留守番をしてもらい、皆を見送ったのだが、その時にこなたに

「ねえ、慶一君。結局永森さんにあんな態度を取ってしまう原因ってわかったの？」

そう尋ねられたのだが、未だに原因が判明していない状態だったので、俺は素直にその事をこなたに伝える。

「それが、未だにまだわからない状態なんだ・・・。俺もこのままでいいとは思っていないから、なんとしても原因は突き止めたい所だよ。なあ、こなた、みさお、あやの、それに皆。もしも今日中に解決ができないようだったら、もう1日だけ時間をもらっても構わないかな？俺としてもこのままじゃすっきりもしないからな。約束を果たすならば、俺にとっても皆にとっても何のしがらみも無くしておきたいんだ。」

その言葉にこなた達は頷いて

「そうだね。私達としても、今のままじゃやりにくいし、そこの所は慶一君の判断に任せるよ。だから、慶一君も頑張って問題を解決させてよね？」

「まったく・・・これから遊びに行こうって時に妙な問題かかえちゃって、あんたも苦労するわね。でも、こなたの言う通り、さっさと問題解決させちゃいなさいよ？」
「そうだぞ？慶一。そうしなきゃ意味ねえんだからな？」
「心の問題なのかもしれないけど、私達には祈る事くらいしかできないものね・・・。」
という４人に俺も苦笑しながら
「わかってるさ。何とかやってみるつもりだ。何だか皆にも心配かけちゃってすまないな。」
そう言うと、ゆたか達も同じように苦笑しつつ
「時にはそういう事もありますよ。とにかく先輩、頑張って下さいね？」
「そうっスよ？私達も遊びに行ける事を楽しみにしてるんですから。」
「私もです。仲間と認めてもらっての初のお出かけですし、楽しみたいですからね。」
「せっかく先輩も立ち直って初めての皆との交流なんですし、無駄にはしたくないですから、だから、先輩、問題が解決できるように祈ってますよ？」
「そうそう。それが私達の願いでもあるんですから、よろしくお願いしますよ？先輩。」
そう言う皆に俺も頷いて
「そうだな・・・。とにかく、もう一度やまとと向き合わなきゃいけないようだし、皆の期待を裏切らないように頑張るよ。それじゃ、

皆、気をつけてな。」

そう言うと、皆もにっこりと笑って手を振りながらそれぞれの家へと帰って行った。

それを見届けた後、俺は改めてやまとと向き合い、この問題を解決しようと意気込んで家へと戻ったのだった。

結果から言えば、その試み、そして意気込みは空回りをするに至った。

その後の夕食時、そして、居間でのくつろぎ時にも俺は何度かやまとに話し掛けてみようとしてみたが、どうしてもやまとと目が合いそうになると目をそらしてしまう。

そして、そんな俺の態度に、やまともまた、不機嫌度を増しながら爆発寸前になっていたようだった。

その後、俺はもう一度仏間へと赴いて、しおん達の写真を見ながら忘れていた過去の事、そして、それから現在に至るまでの自分の足跡を思い出していたが、その時に俺はようやく今回の事を引き起こした原因へと思い至ったのだった。

それは、やまと達と出会ったあの頃に俺が取った行動こそが、その原因だったのだ。

そこまで思い至った時、”バンッ”と勢いよく仏間のドアが開かれた音を聞いて、俺は驚いてそちらに目をやると、そこには苛立ちの爆発したやまとの姿があったのだった。

「や、やまと?どうしたんだ、一体・・・。」

そう言ってやまとにさらに声をかけようとしたが、その声はやまとの心の叫びによって遮られた。

やまとｓｉｄｅ

勉強会の後、先輩をなんとしても元に戻したいと思った私は、その後も先輩を元に戻す為に、こちらからも積極的に話し掛ける等の努力をした。

けど、こちらの懸命の努力も実らず、皆とくつろいでいた最後の時間においても先輩の態度は朝からのままだった。

先輩の為に頑張ってみようとしたこちらの意図も効を奏さず、私はその思いの空回りにいらいらを募らせ、先輩が私の前から立ち去ってから少しして、私のいらいらはついに爆発する事となった。

かなりの剣幕でこうに先輩の居場所を聞き出した私は、このいらいらを先輩にぶつける為に先輩のいる仏間へと向かい、かなりの勢いで部屋のドアを開けた。

その大きな音に気付いた先輩は、驚きの表情で私を見ながら、私に声をかけてきた。

「や、やまと?どうしたんだ一体・・・。」

そう言った後、更に言葉を続けようとした先輩に、私は今までの感情をぶつけるように先輩に対して大声を上げたのだった。

「先輩っ！どうしたのよ！？どうして今まで私にも皆と同じように普通に話せていたのに今朝からおかしくなっちゃったのよ！？私は先輩に元に戻って欲しくて頑張ってるのに、どうして先輩はその私の思いに応えてくれないの！？先輩もこうと同じように私に普通に接してくれる数少ない理解者だった！私は・・・私はそんな先輩を心から信頼していたのよ！？それなのにどうして・・・どうして今になってそんな態度を取るのよ！？私が・・・私が先輩に何かしたっていうの！？ねえ！答えてよ！？先輩っ！！お願いだから・・・元に戻って・・・。」

と爆発した感情をぶつけたものの、最後には先輩に見放されてしまったのか？という思いが湧きあがり、私は涙をこぼして先輩を睨みつけていたのだった。

先輩はそんな私を見て、心底すまなそうな顔を向けながらも”きっ”と私を見据えると、私の側へと近づいて、泣きじゃくる私を優しく抱きしめてくれた。

慶一ｓｉｄｅ

今朝からの俺の異変。

そして、そんな俺の異変にやまとは相当に感情を溜め込んでいる様子だった。

そして、その鬱積した感情は今、俺に叩きつけられた。

俺はそんなやまとの感情を受け止めつつ、そして、泣きじゃくるやまとをそっと抱きしめながらやまとへと語りかけるのだった。

「・・・すまん・・・すまなかった、やまと。お前には大分辛い思いをさせちゃったな・・・。あの後俺はここに来て、そして、今朝からの異変の原因について思いを巡らせていた。そして、ようやくその原因に思い至ったんだよ。今から俺が言う事をしっかりと聞いてくれるか?やまと。」

そう声をかけると、少し落ち着きを取り戻したやまとが俺の顔を見つめながら

「・・・わかったわ。話してくれる?先輩。」

そう言うやまとに俺も頷くと、今朝からの俺の異変の原因についてやまとに話をはじめた。

「俺が”しおん”をお前等と出会う前に亡くしていた事は昨日話したよな?そして、俺の罪についても。」

その言葉にコクリと頷くやまとを見て、俺は更に言葉を続けた。

「あの後、俺は無意識にその事実を受け入れたくなくて自分の記憶を封印した。でも、俺自身意識していなくても心のどこかで”しおん”の事を覚えていたらしい。そして、あの日、お前達のケンカの場面に出くわした俺は、やまとの姿を見て、そして、無意識に”しおん”に似ているお前にあいつの姿を重ねていたらしいんだ。」

その言葉にやまとはショックを受けたような顔になりつつも

「私が・・・”しおん”さんに似ていたの?そして、先輩は無意識に私に”しおん”さんの影を重ねた?それは・・・つまり・・・。」

そのやまとの言葉に俺は苦しげな表情になりながら

「・・・そうだ・・・。俺はあの時にお前を永森やまとではなく、”篠原しおん”として見ていた。それがわかったのは、過去からの俺の記憶をさかのぼって見た時、だったんだ。そして気付いた。俺は、お前をずっと・・・永森やまととして接していたつもりの俺は・・・過去を取り戻す昨日まで、”篠原しおん”として接していたという事に気付いたんだ・・・。」

その言葉にはやまとは相当に凹んだ様で、俺を悲しげな表情で見つめながら

「・・・そんな・・・。それじゃ先輩が今まで私を私として見て来てくれなかったの？私はずっと、”しおん”さんの代わりだったの？私は・・・私の存在は・・・永森やまととして先輩にはずっと認識されて来てなかった、って言うの？あんまりよ・・・そんなのあんまりだわ・・・。」

そう言ってやまとは再び俺の胸の中で泣き始めた。

俺はそんなやまとにとてもすまない気持になりながら

「なんと言ってくれても構わない・・・。俺は、お前に対してそれだけの事をした。たとえそれが無意識の事であっても・・・俺はお前を傷つけた・・・。お前の存在意義を認めずに来た・・・。たとえお前に愛想を付かされても仕方のない事だと思ってる・・・。そして、そんな俺のお前に対する罪悪感もあって、俺はお前の目を見れなくなってしまっていたんだと気付いたんだ・・・。やまと、俺をののしってくれても構わない。軽蔑してくれても構わない。俺はお前への罪に対する罰を甘んじて受ける。それだけ俺は、お前に対

して許されない事をしたんだから・・・。」

そう言って俺は固く目を瞑り、やまとからの言葉を待った。

「・・・そうね・・・先輩は最悪だわ。私をずっと、私として見てくれなかった。これまでの私と先輩との事もなんだったのか、わからなくなったわ・・・。ずっと私は先輩に騙されていただけなの？先輩の私に対してかけてくれた言葉は私に対してのものじゃなかったの？」

そうやって俺を非難するやまとに、俺は何も言えなかった。

言う資格すらなかった。

俺はそれだけの事をやまとに対してしてしまった。

俺の弁解できる余地など、どこにも残っていないのだから。

そう考えていると、やまとはそんな俺の態度を見ながらも俺の顔をじっと見続けていたが、やがて

「先輩、１つだけ聞かせてくれる？過去を取り戻した今、先輩は私の事を永森やまととして見れるようになったの・・・？」

その言葉に俺は少し驚きつつも頷いて

「・・・ああ。信じてもらえるかわからないけど、今の俺にはちゃんとお前が永森やまとだと認識出来ているよ。そして、今日初めて俺は、永森やまとから言葉を聞いている。永森やまとという人間の言葉を聞いている。それだけは間違いない事だ。」

その言葉にやまとはしばらくの間顔を伏せて考え込んでいるようだったが、ふいに顔を上げると俺の目を見つめながら

「・・・わかった。先輩。先輩は私に愛想をつかされても構わない、そう言ったわね？」

その言葉にコクリと頷く俺。

そんな俺の態度を見て更に話を続けるやまと。

「本当だったら先輩の言うように、なのかもしれないわ・・・。でも・・・今まで私が私として見てもらえなかったのだとしても、今日までの時間、そして出来事は確かにあった事だわ。今更それを否定はできない。それに、今まで楽しかった。その事実は変わらないわ。その記憶と時間は私にとっても真実のものだもの。それを踏まえた上で先輩に聞きたい。先輩はこれから先は私をちゃんと永森やまととして見てくれる？」

その言葉に俺は戸惑いながら

「・・・記憶が戻った今、俺はお前をちゃんと永森やまととして見て行きたいと思っている・・・けど・・・俺は、お前に対して許されない事を・・・。」

そこまで言った俺に、やまとはいつもの薄い微笑みを向けて

「・・・いいわ。許す。これから私をちゃんと見てくれるって言うのなら、私は先輩を許すわ。たとえ今まで私が私として見られてこなかったのだとしても、もう私にとって今までの時間はかけがえの

ないものになっているのよ?そして、私はそんな時間に居心地の良さを感じてしまったもの。今更離れる事なんて出来ない。それに、先輩がどう思っているかは分からないけど、私はそんな先輩を今更嫌う事なんて出来ないから・・・だから・・・お願い、先輩。これからの私をちゃんと見て?それを約束してほしい・・・。」

その言葉に俺は罪悪感と俺の罪を許してくれたやまとの言葉に涙をこぼしながらもやまとの目を真っ直ぐ見据えて

「・・・すまない、やまと。約束する。これからはちゃんとお前をお前として見るよ。そして、これから先お前に対しての罪滅ぼしをさせてくれ。そして、ありがとう・・・俺を許してくれて・・・。」

今度は最後まで目をそらさずに俺はやまとに向き合う事が出来た。

そんな俺を見たやまとは、俺と同じように泣きながらも笑顔を見せてくれたのだった。

こうして俺は、もう一度やまとと向き合う事ができるようになった。

今後、俺は、ちゃんとやまとをしおんの代わりとしてではなく、やまととして見ていこう、そう心の中で誓ったのだった。

ひとまずは俺の異変もこれで終わりを見たのだが、その後でやまとから俺にこんな提案を持ちかけられる事となった。

「先輩、今回の事で私に罪滅ぼしをしたい、って言ったわよね?それじゃ、１つ私のお願いを聞いてもらってもいい?」

そう言うやまとに俺は苦笑しつつも頷いて

「俺に出来る事なら構わないが、やまとのお願いって何だ？」

と尋ねると、やまとは少しだけ顔を赤らめながら

「明日1日、私と・・・デートして欲しい。そう言うお願いはだめ？」

そう言うやまとに俺も驚きつつも顔を赤らめて

「え？あ、いや、やまとがそうして欲しい、って言うのなら俺は構わないけど、でもいいのか？」

その言葉にやまとは頷いて

「うん。だって、今回のデートは私が私として初めてするデートだから、だから、ここからスタートさせたいの。篠原しおんの代わりではなく、永森やまと本人としてね。」

その言葉に俺は頷いて

「わかった。お前の願いを聞くよ。こなた達には明日1日時間をもらうように説得する。そして、ここから始めよう。もう一度・・・。」

そう言うと、やまともまた、満足気に頷いてくれたのだった。

かくして、改めて俺達は本当の意味での永森やまとと俺の関係をスタートさせる事となった。

今度こそはちゃんと俺は見るべき人間を見失わない、そう心に誓ってこれから進んでいこうと思うのだった。

その後、こなた達を説得し、明日のデートへの時間をあける事となった。

大集合の旋律～大人数の勉強会最終日、慶一の異変、そして、やまととの約束～

次回はやまととのデート編、お楽しみに。

別れの旋律～慶一のけじめと約束～（前書き）

今回は結構早めに仕上がりました。

それでは本編をお楽しみください。

別れの旋律～慶一のけじめと約束～

しおんとの記憶を思い出し、そして、次の日には俺はしおんとやまとを重ね合わせて見て、やまとをやまととして見ていなかった事に気付く。

そんな俺の罪悪感は、やまとの視線を受けられない程に、俺自身に後ろめたさを与えた。

しかし、俺の罪を受け止め、もう一度俺はやまとと向き合う事を決意する。

そんな俺の謝罪に、やまとも今後はちゃんと自分を自分として見て欲しいという事を約束する事で許してくれた。

そして、次の日の1日を使い、俺はやまとの要望どおり、篠原しおんではなく永森やまととして初めてのデートに出かける事となった。

だが、あの時俺の胸の中で泣いていたやまとの方にも異変が起きていた事に、あの時の俺は気付かなかった。

そして、その事に気付かないままに俺は次の日を迎える事となったのだった。

???ｓｉｄｅ

＜本当にいいのね?これが可能なのは1回しかないわ。その後は、彼にあなたの事を気付いてもらう事は出来なくなるのよ?それでも・・・・・。＞

そして、そんな声にもう1人、私に協力してくれる人が声をかけてくれる。

＜俺達が力を貸せるのは今回だけしかない。けど、君が後悔しない、って言うのなら俺達は君の思いに応えるよ。本当にいいんだね？しおんちゃん。＞

その2人の言葉に私は力強く頷くと

＜ええ。後悔はしないわ。かなたさん、そして牧村君。ごめんなさい。私の我侭を聞いてもらって・・・でも、私はようやく私を思い出してくれた慶一君と会いたいの・・・会って・・・最後のお別れをしたいのよ・・・だから、その為に、2人とも力を貸して？＞

私の言葉に2人とも悲しげな表情を浮かべたものの、力強く頷いてくれたのだった。

そして、私の体を光が包み込んだかと思うと、ある場所へと私は導かれたのだった。

こうｓｉｄｅ

先輩の態度に何とか元に戻ってもらおうと奮闘していたやまとだったが、結局夜になっても先輩は元に戻らず、その事に業を煮やしたやまとの感情は爆発し、その感情の行き場は慶一先輩への八つ当たりに転化してやまとは怖い顔で部屋を出て行った。

事の顛末が気になった私だったが、やまとの剣幕があまりにも怖かった為、私は今回は部屋で大人しくやまとが帰って来るのを待って

いたのだった。

そして、やまとが出て行ってから1時間後、やまとはようやく帰って来たのだが、そのやまとが出て行った時とは正反対の嬉しそうな顔をしているのを見て私はほっとしつつ、やまとにどうなったのかを聞いてみた。

「ねえ、やまと。先輩との話ってどうなった？先輩とちゃんと話せたの？先輩は元に戻った？」

そうやまとに尋ねると、やまとは笑顔で頷いて

「ええ。何とかね。実はね？こう。今回の原因は・・・・・・だったのよ。それで私は先輩を許す代わりに先輩に明日1日付き合って欲しいと言ったのよ。」

そう言うやまとに私は驚きつつ

「え？そういう事だったの？それに、1日付き合う、ってもしかしてデート？」

とニヤニヤしつつそう聞いてみると、やまとは嬉しそうに

「そうね。そういう事になるかしら。くれぐれも断っておくけど、これは私が私として初めてするデートになるわ。私は本当のスタートをここから切るのよ。永森やまととしてのスタートをね。だから、こう。くれぐれも邪魔はしないように釘を刺しておくわよ？」

と言うやまとに私は苦笑しながら

「わ、わかったよ。その代わり、デートの結果は報告してよね？それくらいはいいでしょ？やまと。」

と言う私にやまとはいつもの薄い笑みを浮かべながら

「そうね、それくらいなら考えておくわ。」

そう言うのだった。

だが、この時私は、そんな風に言うやまとに何故だが違和感のようなものを感じていた。

やまとは先輩に気がある、それは何となく予想はしていた。

でも、やまとは不器用な方だからそんな感情を上手く出せなくて苦しんでいた。

そして、今回のように私がデートの事をあおってもいつものやまとならツンデレを炸裂させて誤魔化す所のはずだと私も思っていた。

しかし、先ほどのやまとは私のあおりを肯定し、デートの結果を教える事を考えておくとまで言った。

いくら先輩との確執が解けたからと言ってあそこまで変わるものだろうか？と何となく今のやまとに対して疑念が沸くのだった。

そして、明日の準備を済ませて布団に入ろうとするやまとに私は何となく声をかけてみた。

「ねえ、やまと？何かあった？」

私の呼びかけにやまとは

「何よ？こう。何かって何？」

そう答えるやまとに私はどう答えようか悩んだが、自分の感じた違和感は気の所為だと考え、私はやまとに

「ん。いや、なんでもないよ。お休み、やまと。」

そう言う私にやまとも

「？ええ、お休み、こう。」

そう言ってふっと笑ったやまとの顔を見た時、その笑顔にまたしても違和感を感じた私だった。

心に妙な引っかかりを覚えながらもとりあえずは休んでしまおうと思い、布団に潜る私。

そのまま夢の世界へと旅立ったのだった。

けど、次の日の夜に私はその違和感の正体を知る事になるのだけど、その時までは特に深くその事を考えずにいた私だった。

慶一ｓｉｄｅ

やまととのデートの約束をしてその翌日。

俺は、いつも通りに目を覚ますと、朝食の準備をする為にキッチン

へと降りて行った。

そして、いつものようにみゆき達がここに来てから当番制で家事をやっているのだが、今日はみゆきとやまとの担当だったので、キッチンにいる2人に挨拶をして、みゆきに今日の事と、昨日までの俺の異常が元に戻った事を伝えた。

「・・・・・と言う訳でな、昨日の事は俺の所為だったんだ。みゆき、余計な心配をかけてすまなかった。」

そう説明するとみゆきは複雑そうな表情を顔に浮かべると

「・・・そういう事、だったんですね?それで、昨日の事はほぼ解決したのでしょうか?」

そう言うみゆきに俺は頷いて

「まあ、大体はな。でも、その為に今日はちょっとやまとに付き合う事になったんだ。これは俺の罪滅ぼしみたいなものでもあるし、皆にも黙って行くわけにも行かなかったからな。こうして事情を説明させてもらった、と言う訳さ。」

その言葉にみゆきは少し不機嫌なオーラを放ちつつ

「・・・事情はよくわかりました。慶一さん?くれぐれも軽率な行動はとりませんよう、お願いしますね?」

と言うみゆきの迫力に押されつつも

「あ、ああ。わかってるよ。これをちゃんと終わらせて、明日は皆

で楽しもう。」

そう言う俺に、ひとまずは黒オーラを消しつつみゆきも頷いて

「そうですね。皆さんもそうですが、私も楽しみにしていますから。」

その言葉に俺も頷いて

「わかってる。それじゃ朝食摂って、出かけるとするか。やまとも早く席に着いてくれ。」

そう言うと、やまとも頷いて

「わかってるわ。それじゃ食べちゃいましょう？いただきます。」

その号令にまだ寝ているパティとこう以外の俺達も「「いただきます。」」

そう言って朝食を摂った。

そして、玄関でやまとが出かける準備を済ませるまで待つ俺だったが、程なくして準備を終えたやまとがやってきた。

「お待たせ、先輩。それじゃ行きましょうか。」

その言葉に俺も頷いて

「ああ。それじゃでかけよう。それと、やまと。その服似合ってるぞ？」

そう褒めるとやまとは顔を赤らめて

「そ、そうかしら?ま、まあ、褒め言葉として受け取らせてもらうわ。」

そう言うやまとを見てやまとに前のような笑顔が少しづつ戻ってる事を感じながら俺達は家を出て行く。

俺はやまとを自転車の後ろに乗るように促した。

「やまと。これで駅まで行くから後ろに乗れよ。」

そう言うと、やまとは照れたように顔を少し赤くすると

「わ、わかったわ。先輩、安全運転でお願いね?」

その言葉に俺は頷いてやまとを後ろに乗せると、駅へ向かって自転車をこぎ始めた。

そして、自転車をこぎながら俺はやまとに

「やまと。今日お前が行きたい、と思ってる場所は決めてあるのか?」

そう尋ねると、やまとは俺の質問にしばしの間を置いた後

「そうね・・・〇〇水族館へ連れてってくれる?」

そう言うやまとの言葉に俺は少し驚きつつ

「〇〇水族館？何だかお前にしちゃ珍しいな。あそこはうちの実家にも近い所にあるが、向こうにいた頃はお前もそこに連れて行って欲しい、って言った事はなかったよな？それに、お前が知ってるかどうかもわからなかったし。」

そう言うと、やまとは俺に

「・・・別に。幼い頃には行った事があった、それだけよ。ちょっと懐かしくもなったからいつかまた行ってみたい、そう思ってたのよ。だから、今回はいい機会だし、と思っただけ。」

そう答えるやまとに俺は頷くと

「そっか。わかった。んじゃ久々に行ってみるとするかな。」

そう言うと、自転車をこぐ足に力をこめて駅まで疾走した。

だが、この会話の時俺の中でやまとに対する本当に僅かな違和感のようなものを感じていた。

それがなんなのか、その時の俺にはわからなかったから、とりあえずは気にしない事にしたのだった。

そして、俺達は数日ぶりに実家の方へと足を向ける事となった。

家に戻る前に道場に立ち寄ってやまとの両親に会わせてもいいかも、とも思いながら、俺達は〇〇水族館へとやってきた。

「ちょっと待っててくれ、やまと。今入場券買ってくる。」

そう言うと、やまとは何故か懐かしさを感じさせる笑みを浮かべて

「わかったわ。ここで待ってるから、行って来て？」

そう俺に言うと、あまり他人の邪魔にならない場所へと移動していくやまとの姿を見送ってから俺は入場券売り場へとやってきて2人分の入場チケットを買った。

そして、やまとが待っている場所まで戻り、やまとに声をかけようとしたのだが、俺はその時、やまとが懐かしげに水族館の周りを見渡しているようなそんな仕草を見て、再び心に違和感のようなものを覚えた。

幼い頃に行った事がある、やまとは確かにそう言った。

だから、あの行動もしばらく来てなかった場所に対するものだろう、というのは何となくわかった。

でも、それだけで説明できない何かがあるように、俺は思えた。

俺はこの違和感の理由が知りたくなってきた。

だから、やまとにチケットを渡して入館する時から俺は、やまとの事を観察してみよう、と思ったのだった。

「うーん・・・懐かしいな、ここは・・・。」

色とりどり、色々な種類の魚を見ながら俺はあの頃を思い出してそう呟いた。

そして、ちらりとやまとの方を見ると、やまともまた、懐かしそうに館内を見ているのが見て取れた。

「・・・前もそう思ったけど、やっぱり退屈ね・・・魚を見るだけなんて・・・。」

懐かしそうにしていたのは最初だけで、少ししたら思わずそう呟くやまとに俺は思わずやまとの顔を無言で見つめた。

そんな俺に気付いたやまとは、俺に

「どうしたの?私の顔に何かついてる?慶一・・・い、いえ、なんでもないわ先輩。」

そう言いかけるやまとの言葉に俺は今朝から感じていた違和感のようなものが少しずつ形をなしていくのを感じていた。

「・・・いや、なんでもない。それよりも、退屈か?やまと。お前がここに来たい、と言ったから連れてきたんだが。」

そう尋ねると、やまとは少し慌てながら

「え?あ、いや、その・・・そんな事ないわ。だって退屈なら初めからここに連れてきて欲しい、って言わないでしょ?先輩の考えすぎよ。それより先輩・・・。」

そう取り繕いつつ、最後に俺を呼んだやまとに俺は「ん?何だ?」と答えると、やまとはおもむろに俺の腕に抱きついて来た。

「ちょっ！？や、やまと、これは？」

その行為に慌てながらそう返すと、やまとはいつものような薄い笑みを浮かべると

「せっかく2人きりなのだし、こうしてみたい、って思ったのだけど、迷惑だった？」

と俺を上目使いで見ながらそう言うやまとに俺はうろたえつつも

「あ、いや、その・・・ま、まあ、お前がそうしたい、って言うのなら構わないんだが・・・いきなりやられたからちょっと驚いた。」

照れながらそう言う俺にやまとはもう一度笑みを浮かべると

「そう？なら、しばらくはこのままでいいわよね？」

そう言うやまとに俺もただ頷くしかなかった。

そして、この行為に於いてもまた、やまとへの違和感を感じていたのだが、やがて、一通り水族館を見終わると、俺達は揃って館を出る。

そして、館を出た後、やまとはおもむろにある場所へ向かって歩き出したのを見て、俺は慌ててやまとの後をついていく。

そして、辿り付いた場所は、俺がしおんと最初で最後のクリスマスプレゼント交換をした場所だった。

そこで佇むやまとを見て、俺はしばらく無言だった。

そんな俺をそのままそこで待たせ、やまともまた、しばらくその場所で何やら考え込んでいるようだった。

そして、俺は確かに聞いた。

俺にもかろうじて聞き取れるような声だったが、確かにやまとはこう言っていた。

「・・・懐かしいな・・・ここで私は・・・慶一君に・・・ブレスレットをもらったのよね・・・。」

その台詞に俺は物凄く驚いていた。

何故なら、やまとが言った言葉はやまとにはまったく関係のない事で、そして、やまとの言うブレスレットをもらった人は、しおんに他ならなかったからだ。

そして、それを聞いたとき、俺の中でばらばらに散らばっていた違和感のカケラが組み合わさるのを感じていた。

と同時に、俺は思い切ってこの違和感の正体を確かめる為にやまとに声をかけていた。

「・・・やまと、ちょっといいか？」

俺の言葉に振り向くやまと。

そして、やまとは俺を見て首を傾げながら

「・・・何？先輩。」

そう言うやまとに俺は思い切って言葉をぶつけた。

「やまと・・・いや、おまえは誰だ。お前はやまとじゃないだろう？ひょっとして、だけど・・・お前はしおんか？」

その言葉にやまとは一瞬驚きの表情を見せたがすぐに後ろを向くと

「な、何の事かしら？私は・・・私はやまと、永森やまとよ？先輩だって知っているでしょう？」

その言葉に俺は軽くため息をつくと

「・・・ああ、確かにやまとだ。見た目はな。だけど、中にいる奴はやまとじゃない、ってのは何となくわかった。何故ならお前はやまとが知らない事、そして、しおんじゃなければわからない事を知っているからだ。水族館の事も、そして、今お前が呟いた俺がクリスマスプレゼントを送ったのがしおんであるという事もな。」

そうやって事実を突きつける俺だが、やまとはなおも

「そ、そんなの偶然よ。水族館だって私は過去にも来た事があるって言ったし、プレゼントの事だって先輩と出会う前にもらったものなら、先輩の推理は・・・。」

そう言うやまとに俺はなおも

「いや、それはありえない。いや、百歩譲って水族館の事はあるかもしれないにしても、この場所で、そして、クリスマスプレゼント

はしおんに渡したものだ。確かに俺はやまとにプレゼントを渡した事はある。だけど、それはこの場所じゃない。この場所には来ていない。何故ならその理由は、一昨日まで俺はしおんとの記憶を失っていたからだ。一昨日にその事を思い出したばかりの俺に、やまとをここに呼び出してプレゼントを渡す事なんてできないんだよ。」

そこまで言って一端言葉を切り、更に言葉を続ける。

「更に決定的なのは、それぞれの呼び方の違いだ。やまとは俺を慶一先輩、と呼ぶんだ。さっきお前が呟いた独り言のように慶一君、とは呼ばないんだよ。」

そこまで言い終わると、俺はやまとの反応を待つ。

俺の言葉に無言で後ろを向いたままのやまとだったが、ふいにこちらに向き直ると

「・・・さすが、慶一君ね。やっぱりばれちゃったか・・・。ネタばらしは最後にしようって思ってたのにな・・・詰めが甘かったと言うわけね。」

そう言うやまとに俺は再度驚きの表情をしつつ

「・・・やっぱりお前はしおん、なのか？一体どういう事なんだよ？やまとはどうしたんだ？」

その言葉にやまと＜しおん＞は俺の目を見ると

「そうよ？わたしはしおん。篠原しおん。あなたの知ってるしおんよ。心配しないで？やまとさんはちゃんとあなたの目の前にいるわ。

私は慶一君の知り合い2人に力を貸してもらって、そして、やまとさんにも協力してもらって、やまとさんの体を一時的に借りてここにいるのよ？」

その言葉に更に驚く俺。

やまと＜しおん＞は俺に

「どういう事か知りたい、って顔ね？いいわ。話してあげる。」

その言葉に頷く俺を見てやまとは理由を話し始めた。

「慶一君、あなたが私の記憶を取り戻すまでの間、私はずっとあなたの側であなたを見守っていた。そして、記憶を取り戻したあなたは私に対する罪に罪悪感を感じる事となった。私は私を思い出してくれたあなたにどうしても伝えたい事があったの。でも、私はすでにこの世の者ではないから、霊感も失せてしまったあなたと話す手立てもなかった。そんな時に、そんな私の苦悩と願いを聞いてくれた人がいたの。」

やまと＜しおん＞がそこまで話すと、一端言葉を切った。

俺はそんなやまと＜しおん＞に

「願いを聞いてくれた人？それって？」

そう聞くと、やまと＜しおん＞は頷いて更に言葉を続ける。

「それは、慶一君もよく知っている人・・・泉かなたさん、という人と、あなたの親友の牧村瞬一君よ？」

その言葉に俺は驚いて思わず聞き返す。

「!?かなたさんと、瞬だって!?」

俺の言葉に頷いて、やまと＜しおん＞は更に言葉を続けた。

「そうよ。2人が力を合わせて私を一度だけ慶一君と話せるようにしてくれた。その際に、やまとさんにもこの事をお願いしたの。やまとさんもこれが最初で最後だと言う事を伝えたら、協力してあげる、って言ってくれたわ。そして、私はやまとさんの体を借りて、慶一君との思い出の場所へとやってきたの。」

その言葉に俺は複雑な表情をしつつ

「そ、そうだったのか・・・。お前は俺に伝えるべき事を伝える前に、もう一度だけ思い出の場所を見たかった、って言うんだな?」

そう言うと、やまと＜しおん＞はコクリと頷いて

「これでもう・・・あなたの前に出てくることは出来なくなるから・・・だから、もう一度だけ・・・見ておきたかった・・・。私とあなたとの始まりと終わりの場所を・・・。」

そう言いながら、やまと＜しおん＞は涙をこぼしながらそう言う。

俺はそんなやまと＜しおん＞の側へと行き、やまと＜しおん＞を抱きしめながら

「・・・そう、だったのか・・・。しおん、俺に伝えたい事がある

って言ったよな?俺もだ・・・俺もお前に伝えなきゃいけない事がある。俺の言葉も聞いてくれるよな?しおん・・・。」

そう言いながら、俺もまた、涙をこぼしはじめていた。

そんな俺の言葉に頷いたやまと＜しおん＞は俺に伝えるべき言葉を話し始める。

「ええ、もちろんよ。その前に私も言葉をあなたに伝えたい・・・。慶一君。私の事を思い出してくれてありがとう・・・。でも、私はもうあなたとは違う場所にいるわ・・・。だから、もう会いたくても会えない・・・。けれど、心配しないで。私はもういなくなってしまったけど、あなたの周りにはあなたを大事に思う人達がたくさんいるわ。だから、これからは、私に囚われないで私の分まで幸せに生きて?それが私の願いだから・・・。そして、最後に・・・好き・・・大好きだよ?私はいつまでも慶一君の事が大好き・・・。それだけは忘れないで欲しいの・・・。」

泣きながらそう言うやまと＜しおん＞の言葉に俺もまたその言葉一つ一つに頷きながら、そして泣きながら

「わかった・・・わかったよ、しおん。お前の願い、受けとった。今度は俺の番だ。しおん、ごめんな?あの時お前に好きだと言われたのに、俺の安っぽいプライドの所為で、俺はお前の告白に対する返事を先送りする事になってしまった。記憶を取り戻した俺は、ずっとその事を気に病んでた。もう伝える事も出来ないその事をずっと後悔していた。けれど、今この瞬間に起きている奇跡は俺にチャンスをくれた。だから、俺は言う。あの時言えなかった事を俺は言う。しおん。俺もお前の事が好きだった。お前に話し掛けたときから、俺はずっとお前の事を気にしてた。お前と一緒に居れる事が嬉

しかった。好きだって言ってもらえた事が嬉しかった。だからこそ、俺は伝える。好きだ、しおん。俺もお前が大好きだ。そして、ありがとう。俺を好きになってくれて。ありがとう、俺と出会ってくれて。俺はずっと・・・あの日々をこれからも忘れない・・・ずっと・・・。」

伝えるべき事をお互いに伝え、俺達はしばらくの間、お互いのぬくもりを感じるかのように抱き合っていた。

そして、俺達はお互いに見つめあい、そして、唇を重ね合わせた。

忘れていた6年以上の思いを込めたキス。

もう2度と出来ないと思っていたキスを俺達は交わした。

そして、お互いに体を離すと、やまと＜しおん＞は

「ありがとう、慶一君。最後に伝えたい事を伝えられた・・・ちゃんとお別れも出来た・・・。もう、思い残す事はないわ。この体ももうすぐやまとさんに帰る。慶一君、お願い。あなたを慕う皆の事をこれからも守ってあげてね?そして、いつか向こうで会えたならまた・・・一緒にいましょうね。それまでは、慶一君は自分の精一杯を生きて欲しい。」

そう言うやまと＜しおん＞に俺は頷いて

「わかったよ。俺は、皆と一緒にこれからも精一杯生きる。それがお前の願いだもんな。心配しないでくれ。お前とした約束、ちゃんと果たすから。」

そう言うと、やまと＜しおん＞はにっこりと笑ってくれた。

そして、いよいよ別れの時がやってきた。

「・・・そろそろ時間ね。もうこれで私は慶一君の前には出てこれないけれど、いつでもあなたの側であなたを見守ってるから・・・。」

そんなやまと＜しおん＞に俺は頷くと

「ああ。元気でな、って言うのも変だけど、元気で、そしていつかまた会おうな？しおん。」

俺の言葉にやまと＜しおん＞は頷いて

「そうね、また、いつか・・・。そろそろ時間だわ・・・さようなら、慶一君。」

そう言うやまと＜しおん＞に俺は

「しおん、そうじゃない。俺達の別れの挨拶はさよならじゃない・・・またな？だよ。」

そう言うと、やまと＜しおん＞は少しだけ驚きの表情を見せた後

「そうね。じゃあ、改めて・・・またね？慶一君。」

その言葉に俺も頷いて「ああ、またな？しおん。」とそう言うと同時にやまと＜しおん＞が急に体の力が抜けたようにふっと倒れかけたのを見て俺は慌てて倒れそうになっているやまとの側へと駆け寄

ってやまとの体を受け止める。

そして、そのままベンチにやまとを寝かせると、やまとの意識の回復を側で待った。

程なくしてやまとが目を覚まし、やまとはぼーっとした目で俺を見ていたが、やがて勢いよく立ち上がると俺の頬を思い切りひっぱたいた。

バチーンッ!!という乾いた音が響き渡り、やまとは荒い息をつきながら

「何やってるの!?何してるのよ!?何勝手にキスなんてしてるのよ!?わ、私はそんなの許可した覚えなんてないわよ!?しおんさんに体を貸すって言ったけど、こんなの聞いてないわよ!!」

と、物凄い剣幕でまくし立てるやまとに俺はおろおろとしながら

「す、すまん、やまと。つい雰囲気に乗ってしまった。そういうつもりじゃなかったんだ。本当にすまん。」

そう言って両手を合わせて平謝りする俺にやまとは大きなため息をつくと

「・・・はあ・・・それで?ちゃんと言いたい事は言えたのね?お別れできたのね?そこの所どうなの?先輩。」

と聞いてくるやまとに俺は頷いて

「ああ。それはちゃんと言えたよ。お互いに伝えたい事を伝え合え

た。もう悔いはないよ。その為に苦労させてしまってすまなかったな、やまと。もう何も心配いらない。これからは俺はあいつとの約束を胸に生きて行くさ。お前や、皆と一緒にな。」

そう言うと、やまとはひとまずほっとしているようだったが、おもむろに立ち上がり

「・・・それならいいわ。先輩、思い切ってひっぱたいちゃったから頬が赤くなってるわ。ちょっとハンカチ濡らしてくるからそこで待ってて?」

そう言ってやまとは近くの水道までハンカチを濡らしに走って行った。

俺は頬を押さえながらそんなやまとの後姿を見送りつつ、やまとが戻ってくるのを待った。

程なくしてハンカチを濡らしたやまとが戻ってくると、俺の頬に濡らしたハンカチを当てる。

「・・・ごめんなさい、あまりの事だったから思わず思い切りひっぱたいちゃったわね・・・。ねえ、先輩?」

そう言って俺の顔を見つめるやまとに俺は

「ん?なんだ?やま・・・・・・。」

そう言って言葉を発しようとしたが、それは、その体制からいきなり俺の唇を塞いできたやまとのよって中断させられた。

そして、少しの間そうしていたやまとはゆっくりと俺から唇を離す。

「え、えっと、あの・・・や、やまと、さん？」

と、半ばパニくりながらそう尋ねると、やまとは顔を赤くしながら

「・・・さっきのは、篠原しおんとしてのキス。今回のは・・・私としての・・・永森やまととしてのキスよ？あんなのでファーストキスなんて納得できなかったから・・・これが本当のファーストキスって事にしておいて欲しい・・・。それに、しおんさんからも情報もらったしね・・・先輩は泉先輩達ともキスをしてるのよね？」

その言葉に俺は冷や汗をだらだらとたらしながら

「え、ええと・・・ま、まあ、その・・・そういう事です・・・。」

と、隠しても無駄だろうと思い、観念して正直に言う俺。

そんな俺を見てやまとはいつもの薄い微笑みを俺に向けると

「回数もこれで互角・・・私も皆と対等よ？それだけは覚えておいて？先輩。そして、これからは私は本当の永森やまととして先輩と向き合って行かせてもらうわ。これは・・・そのスタートの証でもあるから・・・。」

そう言うやまとに俺はただ苦笑するしかなかった。

そして、俺は、やまとの希望でこの後ゲームセンターでやまとの好きなＵＦＯキャッチャーを存分に楽しませて家へと戻った。

こうして、俺は、しおんとのけじめをきちんとつける事が出来たのだった。

これからはしおんとの約束を果たす為にがんばろう。

そして、ちゃんとこれからはやまととも向き合って行く。

俺はそう改めて心の中でしおんと約束をし、今回の奇跡を起こしてくれたかなたさんや瞬に感謝をしたのだった。

別れの旋律～慶一のけじめと約束～（後書き）

次回はみさお達との約束を果たす為に出かけます。

旋律達の遊園地騒動、どうぞお楽しみに。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第1話～（前書

次話投稿がかなり遅くなってしまいました事をここにお詫びしつつ、
久々の投稿です。

今回の話にはオリジナル遊園地が出てきます。

勉強会の最中、俺は無意識に封印していた過去の記憶を思い出し、それと同時に自分の罪にも気付く事となった。

その影響により、罪悪感からやまとと目をあわせられなくなるという事態が発生する。

そして、その原因を掴んだ俺は、俺の態度にいらついたやまとが俺の部屋に飛び込んで来たときに全てをやまとに話す。

今まで自分を自分と見てもらえてなかった事にやまとはショックで落ち込みつつも、今後は自分を自分として見ると言った俺の言葉を信じ、俺を許してくれた。

そして、その罪滅ぼしとして、次の日にデートをして欲しいとやまとから提案される。

だが、その時そこにいたのはやまとの肉体を借りたしおんだった。

次の日のデートで俺はやまとに対する違和感に気付き、それがしおんだと気付くと、しおんも俺もお互いに伝えるべき言葉を伝え合い、改めてしおんとお別れを済ます事が出来た。

成り行きとはいえ、キスをしてしまった俺は、その後改めてやまとからキスされる事となったが、これでようやく問題の解決がなったのだと俺は安堵していた。

しかし、あの後物凄く上機嫌になったやまとが今回の事をこうと話

てる所をたまたま部屋の前を通りかかったみゆきに聞かれたらしい。
俺は今、その事に対して話を聞きたくて俺の部屋に乗り込んできたみゆきの前で正座をして、みゆきの追及を受けていたのだった。

「・・・それで?慶一さん。今回の事に関して慶一さんからの弁明というものがありますか?おありなのでしたらお聞かせ願いたいものですが?」

と、黒オーラを発しつつ俺を見下ろすみゆきに俺は恐怖で冷や汗をかきながら

「え、えっと・・・その・・・話したいけれど、ちゃんと落ち着いて聞いてくれるというのなら・・・。」

と、みゆきをビクビクしながら見つつ、おそるおそるそう言うと、みゆきは見るものを凍りつかせるような笑顔を向けて

「・・・伺いましょう。」

と短くそう言ったのを聞いて、俺は恐る恐る今回の事について話し始めた。

「実はな・・・・・と言う訳で、やまとの体を借りたしおんがだな、自分を思い出してくれた俺に最後のお別れをしたい、って言っていてそれで、俺もまた、悔いを残さないように伝える事を伝えたが、つい、雰囲気に飲まれて・・・その・・・・・・」

その後を補足するようにオーラを強くしたみゆきが

「キスをした、そういう事なのですね？」

その言葉にただただビクビクしながらコクリと頷く俺。

そんな俺を見たみゆきは大きなため息を1つくと、先程まで発していたオーラを消して

「・・・事情はわかりました。もう一度確認させてもらいますけど、慶一さんは本当にそれで悔いなくお別れが出来たのですね？しおんさんもまた同様に。」

そう聞いてくるみゆきに俺ははっきりと力強く頷くと

「ああ。それに関しては間違いなく、だよ。お互いに伝えたい言葉は伝えた。これからは俺は、あいつの願うように生きる事を決めた。そういう事さ。」

その言葉にみゆきは表情を緩めると

「それを聞けて安心しました。キスの事は気にはなりますが、まあ、それはもういいでしょう。私も永森さんやしおんさん同様に慶一さんとはその・・・しているわけですし、永森さんの事だけどうこうとは言えませんしね。慶一さん。しおんさんとの約束は、今後とも守ってあげてください。私も、いえ、私達もしおんさんの最後の言葉を噛み締めて行こうと思いますから。そして、これからも慶一さんの側に皆さんと共に居たいと思いますから・・・。」

そう言ってくれるみゆきに俺は心が温かくなるのを感じながら

「・・・ありがとう、みゆき。」

そう短く言う俺に、みゆきもにっこりと笑って頷いてくれたのを見て、俺は改めてしおんとした約束を守っていかないと、と思うのだった。

その後は皆と共に明日の事を相談し、こなた達にも連絡を回した。

それを済ませた後、俺は明日のみさおとあやのとした約束を果たすという事に改めて気合をいれたのだった。

その後はうちの居候5人を交えて明日の事に関しての打ち合わせを行った。

そして、こなた達にも連絡を済ますと、改めて明日の事に思いを馳せつつ、夢の世界へと旅立つ俺だった。

次の日の朝、俺達は出かける準備を済ませて朝食を摂っていたが、いつもの時間になった時、みさおを伴い、あやのが猫の世話をしにやってきてくれた。

「おはよう、慶ちゃん。出かける前に済ましてしまうわね？ちょっと待ってて。」

そう言って猫の世話に行ってくれるあやのに礼を言いつつ、俺はみさおに話し掛けていた。

「おはよう、みさお。今日はあの時の約束、果たさせてもらうよ。楽しもうな。」

そう言うと、みさおは満面の笑顔で

「もちろんだぜ！でも、ちょっと嬉しいぞ？慶一。私らとの約束をちゃんと覚えててくれたもんな。」

そう言うみさおに俺も笑顔で頷きつつ

「もちろんさ。忘れやしないよ。凄く嬉しかったからな。お前等にも元気をもらえたしさ。」

そう言うと、みさおも照れつつ

「ま、まあ、私らにとってもお前は大切な仲間なんだから、当然じゃん。お前もなんだかんだで私らを大切に思ってくれてるんだ。そんなお前に応えてやらなきゃそれこそ仲間失格ってもんだぜ。」

その言葉に俺はもう一度笑顔を向ける。

そんな俺に更に照れるみさおは、俺に

「そ、それはいいとして、慶一。ちゃんとお前の気がかりには決着つけたんだろうな？わだかまり残しちまってるんじゃ、気が散って楽しめるものも楽しめなくなんぞ？」

そう話題転換してきたので、俺はそれにも頷いて

「ああ。そこらへんは心配しなくても大丈夫だ。その為に昨日1日をもらったんだからな。ちゃんとすっきりさせたから問題ないぞ？」

そう説明すると、その言葉にみさおもほっとした表情を見せた。

やがて、猫の世話を終えたあやのが俺達の所へ戻って来て

「お待たせ、皆。やる事は済んだから、そろそろ待ち合わせ場所へと行きましょ？」

そう声をかけてくるあやのに俺は頷きつつ

「そうだな。あやの、今日もお疲れさん。皆そろそろ行くぞ？忘れ物がないかだけ確認しといてくれよ？」

そう言うと、皆も頷きながら

「大丈夫ですよ。戸締りなども済ませてます。」

「私も大丈夫です。すぐに出れますよ？」

「私も問題ないわ。岩崎さん達はどう？」

とやまとが後輩2人に声をかけると、みなみとパティもやまとに頷いて

「・・・私達も大丈夫です・・・。」

「ノープロブレムですヨ！サッソクシュッパツしまショウ！」

そう答える2人を見て、俺もみさおとあやのと顔を見合わせて頷くと、こなた達との待ち合わせ場所へ向けて出発したのだった。

だが、この時、待ち合わせ場所に向かった俺達は、こなた達の前にとある人物が現れていた事には気付かずにいたのだった。

こなたｓｉｄｅ

今回は慶一君達との待ち合わせにには遅れるわけにはいかなかったので、私はゆーちゃんに起こしてもらったりして、何とか待ち合わせ場所に余裕を持って来る事が出来ていた。

そして、慶一君達を待ちながら、私達は今日の事にわくわくしつつ、皆と話をしていた。

「いやー。今日はいい天気になってよかったよ。折角の約束だし、雨天中止になんてなったら目も当てられないよね？」

そう話を振ると、かがみとつかさは頷いて

「そうね。ゴールデンウィークの思い出にもなるイベントなわけだし、きっちりと楽しみたいわよね。」

「うんうん。私もそう思うよ～。折角だから楽しい思い出作りたいよね～？」

と言う2人に、ゆーちゃんたちも頷いて

「折角皆で行ける機会だもん。雨なんて降っちゃったら悲しくなるよー。」

「こういう機会もめったにないっスから、どうせなら楽しみたいっスよね。＜それに、いいネタも得られそうだし・・・＞」

「私も結構楽しみにしてたし、折角出来た仲間達との初のお出かけだしね。実はこういう事に少しあこがれてもいたり。」

と、1年組みがそう言うと、みくさん達2年生組みも頷きつつ

「私達も誘ってもらえた事が嬉しかったしね。それに、弟の面倒を見る事から少し解放されるのはいい気分転換

にもなるかな？」
「みくは面倒見いい方だしね。今日は羽を伸ばすといいんじゃない？」
と、皆して話していると、そこに声をかけて来る人がいたのだった。
「あれ？こなたちゃん。それに皆も一緒か。珍しいね、こんな場所で会うなんて。」
その言葉に振り向いてみると、そこにはたった今到着した下り電車から降りてきたらしい龍也さんだった。
「あれ？龍也さん？そっちこそ、何故こんな所に居るんですか？」
そう尋ねてみると、龍也さんは笑いながら
「ああ、ちょっと慶一に用事があってね。君達こそ、どうしたんだ？誰かを待ってるのかい？」
そう聞いてくる龍也さんに私は頷いて
「はい。実は、今日は前からの慶一君達との約束もあって、今日は皆で遊園地にでも行って遊ぼう、という事になったんですよ。それで、これから出かけるので、慶一君達の到着を待っていた所だったんです。」
そう説明すると、龍也さんは私の言葉に顎に手を当てて何事か考えているみたいだったが、ふいに私に
「そっか。なら、丁度いいかな？こなたちゃん、松嶋プレイワール

ドという今度オープン予定のレジャーランドの事は知ってるかい？」

そう聞いてくる龍也さんに私はコクリと頷いて

「ええ。今テレビとかでも話題ですよね？中々大きい遊園地だとか、って聞いてますが。けど、それがどうかしたんですか？」

そう聞き返すと、龍也さんは持っていた鞄の中からある物を取り出して私に見せながら

「実はね、うちの親父がその松嶋グループの会長さんとはかなり親しい間柄なんだが、今度オープンする予定のその遊園地に、オープン前に５０人限定の先行体験の招待状をもらったんだよ。それで、ゴールデンウィークもまだ今日を含めて2日残ってるし、慶一が暇してるようなら、こなたちゃん達を誘って行って来たらどうだろうか？って思ってね。その招待状を慶一の所に届けるつもりだったんだ。けど、こなたちゃんとこうして出会ってそして、丁度遊園地に出かける所だって今聞いたから、だったら丁度いいかな？って思ったのさ。」

その説明に驚愕しつつもその遊園地の招待券があるという事に興奮しつつ目を輝かせながら

「本当ですか！？それが本当なら、慶一君が来たら、説得してみます！！皆もそれでいいよね？」

そう話を振ると、皆も目を輝かせながらうんうんと頷いていた。

それを見ていた龍也さんもにっこりと笑うと

「そっか。ならこの券はこなたちゃんに預けるよ。その券は誰か1人が持っていれば、持ってる人が係員に伝える事で、連れて来た全員を招待客として見てくれる事になってるからね。ああ、それと、大事な事を伝えないと。券の効力には条件があって、1泊2日で利用してもらうという条件があるけれど、その条件に同意できないと券は効力を持たなくなるから注意ね。それと、その際には、施設内に建っている専用のホテルが利用できるんだけど、そこの宿泊費も無料だから問題はないと思うよ？」

その言葉に私は驚きつつ

「え？そういう条件があるんですか？うーん・・・皆、どうする？」

と、皆に意見を聞こうと話を振ってみると、皆もそれぞれに考え込んでいた。

私はその様子をじっと見つめつつ、みんなの決断を待っていたが、やがて考えが纏まったらしく、皆は私にそれぞれに言葉を発したのだった。

「条件は理解したわ。一応私も今日明日はゆっくりする予定だったから、特に問題はないわね。この後すぐに家に連絡を入れて許可を取るつもりよ？」

「わたしもおねえちゃんとおんなじだよ？入園料も宿泊費用もかからないっていうんなら、うれしいし～。」

と、かがみとつかさがまずそう言ってきた。

そして、ゆーちゃん達も

「こなたおねーちゃんもいるし、みなみちゃん達も一緒なんだよね？だったら私も一緒に行きたいよ。」
「今話題のあのレジャーランドを先行体験できるっていうんならこんなにおいしい話はないっスよね？私も行くっスよ？」
「ふって沸いた幸運を逃す手はないし、私も行きます。皆が一緒だし、親にも許可は取りますよ？」

そう言ってわくわくするような目を訴えてくるのを私も笑い返しつつ見る。

「2日くらい弟の面倒を見なくても問題はないですし、私も楽しんで来たいですね。」
「私も絶対に行きますよ？こんなチャンスめったにないですからね。」

そう力強く訴えるたまきさんに私も同じように頷いて、私は龍也さんに

「皆も行きたいみたいですし、私もそうですし、折角なのでこの券、利用させてもらいます。龍也さん、本当にありがとうございました。」

と、笑顔でお礼を言うと、龍也さんもにっこりと笑って

「いやいや、喜んでくれたのならよかったよ。それじゃ、慶一の説得もよろしく頼むよ？と言っても、あいつはこの申し出を断らないとは思うけどね。じゃあ、俺はまた戻らないといけないから、行くよ。皆しっかり楽しんでおいでよ？」

その言葉に私を含めたこの場の全員が龍也さんにお礼を言うと、龍

也さんも軽く手を振って再び登り電車のホームへと降りて行ったのだった。

そうして、思いがけず素晴らしい招待券を手に入れた私達は、わくわくしながら慶一君達の到着を待ったのだった。

慶一ｓｉｄｅ

駅でこなた達が龍兄とそんなやりとりを交わしていた事を知らず、俺達は、こなた達の待つ駅の改札口までやってきた。

そして、何やら興奮気味に楽しそうに話しているこなた達に声をかける。

「こなた、皆。待たせたか？ようやく到着だ。所で、何やら嬉しそうにしてるみたいだが、何かあったのか？」

そう尋ねると、こなたが俺に頷きながら

「うん。実はさっき龍也さんと会ってね？龍也さんからある物をもらったんだよ。」

その言葉に俺は首を傾げつつ「ある物？」と聞き返すと、こなたは頷いて手に持っていた券を俺に手渡しながら

「うん。実はこの招待券をもらってね。それで、慶一君達にも意見を聞きたいな、と思ってさ。実はこの招待券ってさ・・・・・・というものなんだよね。」

その説明に俺もそうだが、みゆき達もかなり驚いていて

「そりゃ本当か？だとしたら、これは凄いな。とりあえず皆からの意見も聞いてどうするか決めるか・・・。みゆき、みさお、あやの、こう、やまと、みなみ、パティ、お前等はどう思う？」

と話を振ると、みゆき達は俺の言葉を聞いて少し考えてから

「私は構いませんよ？私も興味がありますし、それに、私達の帰る場所は慶一さんの家なのですから、そうなったとしてもさほど問題はないと思いますし。」
「わたしも賛成だぜ！？こんなチャンスめったにねえもんなー。」
「私も後学の為に見ておきたいかな？どんな所かも興味あるしね。」
「私も賛成ー！オープンしたら行ってみたいって思ってましたし！」
「私も興味はあるわね。結構面白い乗り物なんかもあるって噂だし。」
「・・・私はゆたかやみゆきさんも賛成、という事なら・・・特に反対する理由はないです・・・。」
「タノシイコトならダイカンゲイデス！！それに、ミンナがイクなら、ワタシがイカナイリユウはありませんですヨ！？」

と、それぞれの意見を聞いた結果、反対者はいないという事のようなので、俺はこなたから受け取った券を大事にしまうと、皆に

「よし、満場一致で決まりだな。思いがけない事になったけど、今日から1泊2日、楽しんでいこう。それじゃ早速出発と行こう。」

そう言うと、皆も「「「「「「「「「「おー！！」」」」」」」」」」と気合を入れつつ俺達は早速目的地に向かって出発したのだった。

電車に乗り込み、目的地を目指す俺達。

その際に、昨日の一件について、どこからか情報が漏れていたらしく、俺はこなた達からその事についての追求がなされていた。

「・・・で？昨日の一件についてとある筋からの情報をもらったんだけど、その事に関して何か慶一君は言いたい事はあるのかな？」

と、先ほどまでのはしゃぎようはどこへやら、黒いオーラを立ち上らせながら俺に詰め寄るこなた。

「私も詳しく聞きたいわねえ・・・。どこをどう間違えたら昨日のような結果になってしまうのか、って事をね。」

そのこなたの横でやはり同じように不機嫌な表情をしつつ、黒オーラを発しながら俺にそう言うかがみ。

そんな2人の反応以外にも、昨日の事を聞いてその様子を想像して顔を赤くする者、そして、人知れず妄想に浸っている者、どう反応していいのか対応に困っている者、様々な状況になっているこの中で、俺はしどろもどろになりながらとりあえず2人の追及に正直に答えていた。

「ええと・・・言い訳はないです・・・事実は事実ですし・・・ここで言い訳するのも男らしくないし・・・なので、裁きを下すという事であれば、遠慮なくやってください・・・。」

と、半ば諦め気味にそう言う俺をじっと凝視している2人だったが、ふいに黒オーラを収めると

「ふむ。そういう事ならば、君には今回、私達の言う事を聞いてもらおうかな？それでいい？」
「そうね。きっちりと心配させた罪と不機嫌にさせた罪は償ってもらいましょっか。向こうでは私達の言う事を聞く事、いいわね？慶一くん。」
その言葉に俺はため息をつきつつも頷いて
「・・・わかったよ。それでも少しでも罪が償えるというならやるしかなさそうだしな・・・。」
そう言うと、途端に満面の笑みを浮かべる2人を見て、俺はもう一度ため息をついた。
そんな俺達のやりとりを見ていた他の皆も、なら私達も、と言ってきたのを見て、俺はさらに重いため息をつきつつもその事を了承したのだった。
それで機嫌の直ったこなたは俺に
「それにしてもさ、慶一君のお父さんは結構凄いコネを持ってるよね？松嶋グループって結構有名じゃん？」
そう聞いて来たので、俺は頷いて
「まあな。とはいえ、親父にそんなコネがある事も最近までは俺も知らなかったんだよ。聞くところによると、うちの道場で修行した弟子等はそういう大きな企業や財閥等の要人警護の就職に就く者が多いらしいのさ。それにうちの道場はそういう所からの信頼も高いみたいでな。だから、親父も必然的にそれらのトップ等との繋がり

が出来ているらしいんだ。今回の事も、その1つだったんだろうな。とはいえ、ラッキーだったけどな。」

そう説明すると、かがみはかなり感心したようで

「へえー。慶一くんの所は結構有名だとは思ってたけど、そんな部分でもかなり名が知れ渡っているのね？なるほど、あの夏休みの旅行の時、龍神家で持ち山を持っていた事も半信半疑だったけど、これでその理由にも納得だわ。」

その言葉に、あの時夏の旅行時の事を知らない面々は驚きの表情を見せ、事情を知ってる面々はうんうんと頷いているのだった。

そんな風に雑談をしているうちに、俺達は目的地の最寄の駅へと到着する。

そして、電車に乗る前にプレイワールドの招待券に書かれた電話番号に問い合わせをする事で、事前に呼んで置いた迎えの車が来ているかどうかを、駅前の様子を見て確かめた。

すると、係員らしき女性が俺達に気付き、側に寄って来て声をかけてきた。

「ようこそ。松嶋プレイワールドに今回先行体験招待をお受けいただいた森村様ご一行ですね？あなた方をお迎えにあがりました担当の仲安（なかやす）といいます。これより1泊2日の楽しいひと時へと誘わせていただきますので、どうぞよろしく。」

そう言って来る仲安さんに俺は頭を下げつつ

「どうも。今回はお招きに預かりまして、とても光栄に思います。これから2日間、よろしくお願いします。」

そう挨拶を返すと、仲安さんはにっこりと笑って

「こちらこそよろしくお願い致しますね。それでは皆さん、お車の方へとご乗車下さい。これより、松嶋プレイワールドまで、ご案内させていただきますので。」

その言葉に俺達も頷くと、プレイワールド行きの貸しきりバスへと乗り込む俺達。

バスも流石に新車のバスであり、内装もぴかぴかだった。

「おおー！貸しきりバスとはすごいね。車内もぴかぴかだよ。それに結構ゆったりできそうだし。」

「確かにすごいわね。こんな待遇めったにあるものじゃないしね。」

と、顔を見合わせながらそう話すこなたとかがみ。

「な、何だかこんなに綺麗なシートに座ってしまっていいのかな？って思っちゃうよ～。」

「こういうところから体験させていただける事になるとは思いませんでした。これはプレイワールドの方も期待がかかりますね。」

と、気を使いつつも、この後に待つ楽しみに思いを馳せながらそう言うつかさとみゆき。

「ほんとだよなー。ずっとわくわくしっぱなしだったけど、これで更にわくわくしてきたぜ！」

「まさにめったに出来ない体験ね。ほんと、龍也さんには感謝よね。」

と、まさにわくわくがはちきれそうになっているみさおと、貴重な体験ができる事を喜ぶあやの。

そんな風に3年生組が興奮しながら話しているのを見て、2年生組も

「何だか夢のようですね。向こうでは何が待っているのか、私も楽しみですよ。」

「思っていた以上の物、っていう事はわかったわ。これはますます興味が湧くわね。」

「弟の面倒をほおって来て正解だったね。これは存分に楽しまないと。」

「うんうん。慶一先輩と龍也さんに感謝だね。そして、そんな2人と知り合えた事のラッキーさを噛み締めないと、だね。」

そう楽しそうに言いあっていて、1年生組もまた

「来てよかったなー。どんな乗り物があるか、楽しみだよね?みなみちゃん。」

「・・・そうだね。でも、はしゃぎすぎて体調を崩さないように注意してこう、ゆたか・・・。」

そう言いあうゆたかとみなみにひより達も2人を気遣って

「大丈夫っスよ。私達も一緒なんスから。その時には私達もフォローしてくって。ねえ?パティ、委員長。」

「そうですヨ?ワタシタチがイルカギリ、ノープロブレムデス!ドロブネにノったつもりでドーンとオマカセですヨ?」

「・・・パーさん、それじゃ不安だよ・・・。と、とにかく、そういう事だから心配しなくてもいいよ?岩崎さん、小早川さん。」

そう言うと、2人とも嬉しそうな顔をしながら

「うん。ありがとう、田村さん、パティちゃん、いずみさん。私も無理はしないようにするよ?」

「・・・私からもありがとう・・・みんな・・・。」

そう言って笑っているのを俺は微笑ましく見ていた。

そして、バスは目的地に向かって動き出したのを感じつつ、仲安さんが施設の概要等を、運転席側についている大きなモニターを使って説明してくれているのを聞きながら、俺もまた、久しぶりに楽しくなりそうだと心をわくわくさせていたのだった。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第1話～（後書

いよいよ遊園地での本格的なお楽しみの始まりです。

一応前編という形にしましたが、話の状況次第ではこのサブタイトルが少し変わるかもしれませんので念のため書いておきたいと思います。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第2話～（前書

先日の地震の影響により、本来ならば昨晩には投稿できていた物が、日付が変わるまで停電の復旧がなされず、結局今日に仕上げと相成りました。

今回は以外な人物の登場となります。

それでは本編をどうぞ。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第2話～

みさお達との約束を果たす為、ゴールデンウィークの後半にはその為に予定を入れた俺だったが、そこでまさかの龍兄からの差し入れがなされた。

それは、今度オープンする新しい遊園地の先行体験無料招待券だった。

はからずもふってわいた幸運に喜ぶ俺達は、早速この招待券を使うべく目的地へと繰り出した。

そして、さらに思いがけない事に、向こうのホテルで宿泊する事となり、結局残りの連休はそれで使い切る事になりそうだった。

それでも、皆が楽しそうにしているのを見ながら、たまにはこういうのも悪くないな、と心の中で思いつつ、迎えのバスの中で案内人の仲安（なかやす）さんから遊園地に関する案内を聞きながらこれからの2日間に思いを馳せるのだった。

仲安さんより案内された施設の概要だが、広さはデ○ズニー○ンドには及ばないが、それでもかなり近い広さを持ち、最新鋭の絶叫マシンを含めた乗り物をはじめ、最新台などを揃えたゲームセンター、かと思えば、体を動かすアスレチックもあり、更には、1年を通してどんな季節でも泳ぐ事のできるウォータースラーダー付きのプールと普通の温水プールが敷地内のドームに設置され、更には敷地内に俺達が泊まる事となるホテルもまた存在していた。

そこまでの話を聞いて、そして、施設内のマップを示したパンフレ

ットも配られ、俺達はそれに目を通していたが、皆はパンフレットを見ながら今後の行動について話し合っていた。

「ほうほう?なかなかよりどりみどりじゃん?色々楽しめそうだねー。この最新機種を揃えたゲームセンターも興味あるよ。」

そういい、ゲームセンターへの興味を募らせるこなたにかがみは呆れ気味に

「あんたはそっちばっかりねえ・・・。でも、乗り物やアトラクションも中々楽しめそうなのもあるわね。これは迷うわね・・・。」

そういいつつも、乗り物等にはかなり興味を持っているようだった。

「わたしもおねえちゃんと一緒かな?乗り物が色々で面白そうだよね~。どれも見てみたいからまよっちゃうけど・・・。」

「私もですね。でも、お客が少ないとはいえ、2日で回るにはかなり厳しそうですね・・・。今回の体験ではある程度当たりをつけたほうが良さそうです。」

と、かがみの意見に賛同しつつ3人で顔を見合わせながら悩む。

「それよっかさ。これからだとホテルついてからもあんまし時間取れなさそうだし、これから真っ先に行く場所を決めた方がいいんじゃねーか?私の希望としてはここがいいんだけどさー。」

そう言ってみさおはプールを指差した。

それを見て困ったような顔をしつつあやのは

「でも、みさちゃん。プールって言うけど、私達は水着なんて持ってきてないわよ?それは無理なんじゃない?」

そう言うあやのにみさおも、しまった!という表情をした後落ち込むのを見て、あやのは苦笑しつつもみさおを慰めていた。

そんな様子を見ていた仲安さんが俺達に

「ご心配には及びませんよ?当ホテルにてプールのご利用もありえる事を想定しておりますので、水着の貸し出しを行っております。もし、プールへと行かれたい場合には、ホテルにてその旨をお話くだされば、スタッフが水着を置いてある場所まで連れて行ってくれますので、大丈夫です。」

そう説明してくれたのを受けて、みさおは”ぱあっ”と表情を明るくして

「ほんとかー?それは助かるってヴぁ!皆ー!そういう事らしいけど、皆はどうするー?」

と、皆を見回しつつそういうみさおに、こう達は

「ふうむ・・・。その辺も抜かりないのであれば行ってみるのも面白そうですね。」

「貸しきりプール、みたいなものよね?それも面白そうかもね。」

そういう2人に、みくとたまきは驚きつつ

「え?やさこ、やまとさん、本気?」

「いきなりそういう展開も面白そうだね。私は賛成ー。」

と、片方は渋りつつ、片方は両手を上げて賛成していた。

「プールかー・・・。いい機会だし、体験しときたいかな？みなみちゃんはどう？」

「・・・ゆたかが行くなら・・・私も行く・・・でも・・・あまり無理はしないで・・・？」

「大丈夫だよ。皆も一緒なら楽しいし、それに、皆やみなみちゃんの目の届く場所にいるようにするから。」

「・・・それなら・・・いいけど・・・。」

とゆたかの事を心配そうに見つつも同意するみなみ。

「私達もついてるから大丈夫っスよ。だから、楽しもうよ。＜キタキタキター！ネタきたっスー！！あ、そうだ・・・。＞」

「コレはいいユリですネ！ナイスモエですヨ！？」

「あはは・・・。委員長、みく先輩、たまき先輩、ちょっといいっスか？」

と、パティの発言に苦笑しつつも3人にこっそり声をかけに行くひより。

そして、3人共こそこそと話をしていたのだが、何やらその話の最中に俺のほうへと視線を向ける3人は、何かよからぬことを考えているかのようだった。

そんな3人に苦笑している俺だったが、そんな風に話を進めるみさおにこなたが反論していた。

「ちょっと！みさきち！！勝手に話を進めてもらっちゃあ困るよ！

？私達の意見もあるんだから、そっちも聞いてから決めてよ！！」

と叫ぶこなたに、かがみとつかさとみゆきとあやのは苦笑しながらも事の成り行きを見守っていた。

そして、みさおとこなたの言い合いが始まったのだが、それを苦笑しつつ見ながら、俺はかがみ達に声をかけていた。

「またもこなたとみさおの意見がぶつかり合ったな・・・。かがみ達はあの2人の意見を聞いてどう思う？」

そう尋ねると、4人はそれぞれ

「そうね・・・。こなたの言うゲーセンも確かに興味を引かれる所もあるけど、日下部の言うプールも捨てがたい、って思うわ。」

「わたしもかな？と言うよりは、いろいろな所を見て回りたいって思うんだよね～。何しろ初めて行く何も知らない場所だしね～。」

「私もつかささんの意見には賛成ですね。とはいえ、日下部さんの言うプールも悪くないかも、って思います。前とは違い、慶一さんにも泳ぎを教えてもらっていますので、前ほどプール等は苦手ではなくなっていますから。」

「私はどちらも賛成かな？それに、行くならば、今出た2つに行けばいいんじゃないかな？って思うわ。ゲームセンターもそうだけど、観覧車なんかも夜もやっているみたいだもんね。」

その言葉に俺はなるほど、と頷きつつ、再度、こなたとみさおの方に視線を戻すと、2人はかなりの勢いでじゃんけんを繰り返していた。

そして、数十回のあいこを繰り返した後、軍配はみさおに上がった。

「やったゼ！！今回は私の勝ちだな！？ちびっこー！！」

勝ち誇るみさおの言葉にこなたは心底悔しそうに

「ぐぐぐ・・・まさか負けるなんて・・・おのれみさきち！次こそは絶対に私が勝ってみせる！！」

そう言うこなたにみさおは”ふふん”と鼻を鳴らしつつ

「おー！いつでもかかって来い！！次も返り討ちだってヴァ！！」

と得意げにしていたのだった。

俺は、そんな2人の決着を見届けた後、2人の側に行って、さっきあやのから聞いた事を参考に2人に提案をしたのだが、2人ともそれならば、と俺の提案に同意してくれたので、俺はほっと胸を撫で下ろしつつ、最初の行動を決定したのだった。

そうこうしているうちにバスは目的地へと辿り着き、俺達は施設内をホテルに向かって移動していた。

道中、ぴかぴかの施設内に俺達は目を奪われながら、そして、感心しながらホテルを目指す。

そして、ホテル内に辿り付いた俺達は、真新しいホテルのロビーでその綺麗さ、豪華さに終始感心しきりだった。

「うわー・・・ホテルもぴっかぴかだねー・・・。」

と言うこなたの言葉に他の皆もうんうんと頷いて周りを見渡している。

すると、そんな俺達の側にホテルのスタッフの人がやって来て俺達に声をかけてきた。

「いらっしゃいませ。当ホテルへようこそおいでくださいました。私はこのホテルの案内係を勤めさせていただきます、中浦（なかうら）といいます。早速ですが、皆様の事はすでに承知しておりますので、皆様を当ホテルの客室へとご案内させていただきます。それでは、あちらのボーイに案内させますので、客室へと向かっていただきますよう。それと、私どもに今この場でお聞きしたい事等ございますでしょうか？」

そう言う中浦さんの言葉に、みさおが

「あ、そーだ。私らまずはプールへと行きてえんだけどさ、ここで水着の貸し出しをしてるって聞いて来たんだけど、それってどこへ行けばいいんだ？」

そう尋ねると、中浦さんは頷いて

「それでしたら、お部屋にお荷物を置いて来た後にこちらへといらしていただき、お声をかけていただければ、係のものが貸し出しの部屋へとご案内いたします。」

そう答える中浦さんにみさおはうんうんと頷くと

「わかったゼ！皆、そういう事みてえだから部屋に荷物置いたらここに集合しようゼ！？」

と、皆にそう言うと、皆もその言葉に頷き、俺達は早速部屋へと案内される事となったのだが・・・・・。

ここで問題が勃発した。

それは、ここに来るまでに俺達の部屋割りを決めてなかったからなのだが、それに気付いた皆はすぐさま部屋割りを決める為に話し合う事となった。

部屋は、シングルとダブル、そして４人部屋の３種あるようだった。

その際に、俺は男なのだから、シングルの部屋でもいいと希望を出したのだが、何故かその意見は頑なに皆に却下され、４人部屋４つで、と言う事になってしまった。

そして、グーパーで組み合わせを決めたのだが、中でも俺と一緒の部屋の権利を巡っては後で聞いた話だが、かなりの激闘がなされたと言う事だった。

が、結局、邪な考えを持つ者達の願いはかなわず、部屋割りはこのようになった。

３０１号室：こなた、かがみ、つかさ、みゆき
３０２号室：ゆたか、みなみ、ひより、パティ
３０３号室：こう、やまと、みく、たまき
３０４号室：俺、みさお、あやの、いずみ

と言う並びとなった。

激闘を無駄に熱くなってやっていた面々は相当落ち込んでいたが、俺はとりあえず無難な部屋割りになった事に内心ほっとしていた。

そして、それぞれの部屋へと入り、部屋の中を見渡しつつ、貴重品以外の荷物を所定の場所に置いて、俺達は軽くやりとりをした。

「・・・何だか変な事になってしまったが、3人共俺が居て気まずいかもしれないが、明日までよろしくな?」

俺が複雑な表情でそう言うと、そんな俺にケラケラと笑いながらみさおは

「なーに言ってんだよ、慶一。こんなのはお前と旅行行ったり勉強合宿やったりとかで慣れっこじゃん?今更そんな事私らだって気にしちゃいねーって。なあ?あやの。」

そう言ってあやのに話を振ると、あやのは苦笑しつつも

「そうね。でも、それはあくまでも慶ちゃんが私たちと一緒の部屋にいなかったからだって事よ?今回みたいに一緒の部屋っていうのは初めてなんだから、ちょっと緊張はしてるわよ?」

そう言うあやのにみさおは”はっ”となって何やら考え込んでいるようだった。

そんな2人を見ながらいずみもまた緊張気味に

「お、お2人はそうかも知れませんけど、私は2回目ですし、さらに緊張してますよー・・・。」

とそう言ういずみの言葉を聞いて、3人は改めて俺の顔を見ると

「・・・ひょっとして私ら早まった真似しちゃったかな・・・？」

「慶ちゃんを信用してるから大丈夫だとは思うけど・・・そ、そうよね？大丈夫、きっと大丈夫よ・・・。」

「男の人と同じ部屋で寝泊りなんて・・・いきなりハードルが高いです・・・。」

と言う3人に、俺は大きなため息を1つついて

「・・・そんなに心配なら、今からでも部屋かえて貰おうか？俺だけシングルとかさ。」

そう言うと、みさお達は慌てつつも何かを決意したような表情になり

「慶一が私らに気を使ってくれるのは嬉しいけど、それは却下な。それに、私はお前を信用してっから大丈夫だよ。それにこんな体験もめったにできるんもんじゃねえしなー。」

「ごめんなさい、慶ちゃん。慶ちゃんの事、一瞬でも疑ってしまったわ。今までも慶ちゃんはちゃんと誠実な所見せてくれてたものね。それに、今更慶ちゃんに1人寂しい思いをしてもらう訳にはいかないもの。だから、私たちと一緒に過ごしましょ？」

「そうですね。ここまで来てどうこう言っても仕方ないですし、1泊2日なんですから問題もないですね。先輩、大丈夫ですよ？私たちが先輩に寂しい思いはさせませんから。」

と言ってくれる皆に、俺は苦笑しつつも

「そ、そういう事なら・・・とりあえず俺はここにいるよ。ともあれ、改めてよろしくな？」

そう言うと、３人共笑顔で頷いてくれたのだった。

そうこうしているうちに、部屋の呼び鈴が鳴ったので、俺は部屋のドアを開けると、外にはこなた達が来ていた。

「やふー、慶一君達。そろそろ準備出来たかな？と思ったから呼びに来たよ。早速皆で水着借りに行こうよ。」

と言うこなたに俺は

「お？わざわざ迎えに来てくれたのか。ちょっと待っててくれ、今みさお達を呼ぶから。おーい！みさお！あやの！いずみー！！こなた達が迎えに来てくれたぞー！？」

そう叫ぶと、みさお達もすぐさま準備を済ませてやって来たのを見て、俺はみさお達を先に部屋から出した後、カードキーの所持を確かめ、戸締りがちゃんとなされている事を確かめて、フロントへと皆で降りていった。

「それじゃ慶一君。私達はこっちだから、後でプールで会おうねー。」

そう言って係員に案内されて水着の置いている場所へと歩き出す皆に俺も

「ああ。俺も水着借りたらプールに向かうから、後で落ち合おう。」

そう言って皆に手を振り、俺もまた男用の水着の置いてある場所へと案内されたのだった。

そこで水着を決めた俺は、それを手に、プールのロッカールームへと移動し、早速水着に着替えてプールへと出て行く。

そして、まさに貸切状態のプールを見渡しつつ、俺はひとしきりその広さと綺麗な空間に感動していた。

「おー・・・こいつは結構凄いな。こんなのが貸切で楽しめるなんて、物凄いラッキーだよな・・・。しかも、オープン前のまだ誰も入っていないプールだし、ほんと、こんなに贅沢でいいのかな？って思うよ・・・。」

そう独り言を呟きつつ、プールを見渡していた俺だが、ふいにテレビカメラとそれの前で笑顔を見せているアイドルらしい女の子の姿を見つけたのだが、そちらの方へと視線を向けると、ふいにその子と目が合った。

そして、その子も俺に気付いたみたいだが、そう思った瞬間、その子は俺の方へと駆け寄ってきた。

「森村さーん！お久しぶりですー！私です、あきらですよ。覚えてますかー？」

そう叫びながら走ってくるその子に俺は見覚えがあった。

「おお？久しぶりだな、あきら。２年前のバイトの時以来だな。その様子だと元気でやってるみたいだな。」

と、俺は、その子、小神あきらに声をかけた。

あきらもまた、嬉しそうな顔で俺に

「そうですねー。森村さん、1年足らずで私のボディガードやめちゃったじゃないですか？その後は森村さんのお父さんの道場の人を正式にボディガードとして雇って以来、どうしてるんだろう？ってずっと思ってたんですよー？でも、元気そうで安心しましたー。」

その言葉に俺は苦笑しつつ

「はは・・・俺も色々とあったからな。でも、時折テレビでお前の事は見ていたよ。あれからも何事もなさそうで俺も安心はしてる。」

そう言うと、あきらは笑いながら

「そうだったんですね？一応は私の心配をしてくれていたのなら嬉しいですけどねー。あ、そういえば、森村さんは何故こんな所に居るんですか？」

そう尋ねて来たので、俺はここに来た経緯をあきらに簡単に説明すると、あきらも納得の表情を見せて

「なるほど、森村さんのお父さんの道場って結構すごいんですね。私もここは、所属している事務所のスポンサーさん関連の施設らしいので、宣伝も兼ねてここに来てるんですよねー。まあ、そんな訳で私は仕事なんですけど、連絡先はあの時のままですから、たまには連絡してもらえるとあきら、嬉しいなー。」

そう言うあきらに俺は微笑みつつ

「わかったよ。お前も忙しいんだろうし、中々連絡できないかもだ

が、余裕のありそうな時には連絡するから。」

そう言うと、あきらも嬉しそうに笑っていた。

そうこうしていると、突然後ろから「あー！！ひょっとして、小神あきら！？うそー！本物だー！！」という声が聞こえ、俺は慌てて後ろを振り返ると、準備を済ませたこなた達が俺の姿を見つけてやってきたらしく、その時に一緒に話をしていたあきらの存在に気付いたようだった。

「森村さん、この子達は森村さんの知り合い？」

と俺に聞いてくるあきらに俺は頷くと

「ああ、そうさ。こいつらは俺が通っている学校のクラスメートとその後輩達なんだ。」

その言葉にあきらは目を丸くして驚いていたが、それ以上に俺があきらと親しく話している事にこなた達は驚いているようだった。

そして、こなたは俺に

「ね、ねえ、慶一君。小神あきらと親しげに話してるみたいだけど、2人とも知り合いなの？」

そう尋ねて来たので俺は頷いて

「ああ、そうだよ。まあ、その件に関しては後で話してやるよ。今は、折角の機会を噛み締めたらどうだ？こなたも確か小神あきらのファンだったもんな？」

そう言うと、こなたはうんうんと頷いて

「その通りだよ！なんか私と共通している部分とかありそうで、凄く親近感も沸くんだよねー。あ、あきらさん、少しお話してもいいですか？それと、できればこれにサインももらえると・・・。」

そう興奮しながら言いつつ財布を取り出してその表面にサインをねだるこなた。

俺はあきらに目で合図を送ると、あきらも俺の合図に気付いて、こなた達の相手をしてくれたのだった。

そんな光景を眺めていると、事情の飲み込めないみゆきとつかさと少し不機嫌なやまとが俺に

「あの、慶一さん。あの小神あきらさんと言う方はどういった方なのですか？芸能人らしい、というのはわかりましたが、私もそういうのには疎いもので。」

「わたしもよく知らないんだよね。でも、そう言う人と知り合いなけいちゃんはなんかすごいよね～？」

「・・・まさか私の知らない所でそんな知り合いを作っていたなんてね・・・でも、また女の子、なのね？」

そう言って来る3人に俺は苦笑しつつ

「ああ、みゆき。あいつはアイドルやってるんだ。まだまだ中学生だから、これから売れていくとは思うけどな。つかさ、凄いのは俺じゃないさ。そんなパイプを持っている親父が凄いってだけだよ。やまと、その件に関しては後で皆にも説明するから、とりあえずそ

の黒オーラは収めてくれたらありがたいんだが・・・。」

そう言うと、２人は納得し、やまとは一応は黒オーラは抑えたものの、まだ不機嫌そうだった。

そんな３人と話していると、向こうもようやく話が済んだらしく、あきらは俺に手を振って再び仕事へと戻って行ったのだった。

そして、あきらと話し、サイン等ももらってホクホク顔で帰って来たこなた達に俺は声をかけた。

「おかえり。その様子だとかなり満足行ったようだな。」

そう言うと、こなた達は興奮冷めやらずの状態で俺に

「うんうん。まさにレアなアイテムを手に入れられたからねー。この直筆サイン入り財布は他にはない一品になったし。」

「私もバックにサインしてもらっちゃった。いや、本当にラッキーだったわ。」

「私もです。これはもう、永久保存版ですよ?ほんとラッキーですよ。」

と言うこなたとかがみとこうの３人。

「私もお願いしちゃいました。こういう事って初めてだったから、すごくいい体験できました。」

「・・・私もアイドルの人と話すなんてないと思っていましたから、凄く貴重な経験です・・・。」

「あきら様最高っス!私もこれは永久保存版ですねー!」

「アキラはミニマムでカワイイデス!まさにモエアイドルとイエる

でショウ！」
「私もサインもらっちゃいました。一生の宝物になりそうです。」
と、ゆたかたちも嬉しそうに話すのを俺も微笑ましく見ていた。
「サインも嬉しかったけど、それ以上に先輩という存在の奥深さにも興味が湧きますね。」
「ほんとだよね。先輩ってどれだけのコネを他に持っているのか、興味がでてきちゃった。」
そんなふうに言うみくとたまきに俺は苦笑していた。
その一方で、あきらの事を知らなかったみさおとあやのは少々困惑気味な顔をしつつ、俺達の方を見ていたのだった。
「まあ、それはともかく、慶一君、説明してくれない？慶一君が小神あきらと知り合いだった理由をさ。」
と、皆を代表して俺に当然の疑問をぶつけてくるこなたに俺は頷くと
「そうだな。それを説明しないと、だな。実は俺は高校に入った頃に即座に1人暮らしを始めた訳だったんだが、いきなり俺の本当の両親の残してくれた貯金に手をつける事に抵抗があってな、それで、親父に何か割りのいいバイトはないか？って聞いた所、これからデビューする事になるっていうあきらのボディガードの仕事を紹介されたんだ。学校が終わってからそのバイトをするのは結構きつかったんだが、それでもきつさの割にはかなりの高給だったんでな、とりあえず1年間、そのバイトを続けて自分の貯金を作った、と言う訳なんだ。」

そこまで説明すると、かがみは俺に

「ふうん？何となくは理解したけど、でも、どうしてあんたにその仕事が回って来たのよ？あんたも確かにボディガードとしては役に立つけどさ、あんた以外にも役に立つ人も居たんでしょ？」

そう聞いて来たので、俺はその問いかけに頷くと

「確かにかがみの言うとおり、そういう人も居るには居た。でも、親父が言うには出来るだけ年の近い人間の方が相手も接しやすかろう、という事だったらしい。事実、俺もあいつの事を妹のように見ていたし、あいつも俺を兄貴みたいに見てくれたから、ガードするのもやりやすかったよ。」

その答えにかがみも納得の表情で頷いていた。

「では、慶一さんは何故1年でそのお仕事をやめてしまわれたのですか？お話を伺っている限りでは、中々の高収入のお仕事みたいですよね？」

と言うみゆきに俺は苦笑しつつ

「・・・まあ、確かにみゆきの言う通り、収入はかなりのバイトだった。でも、それをやめるきっかけになったのはさ・・・お前等とその時に友達になったからだよ。お前等と友達になって、俺はバイトに使う時間よりもお前等と一緒に過ごす時間の方が大切になったから・・・だから、少しでも皆と居たかったから俺はバイトをやめたのさ。それに、その頃にはかなり自分の貯金にも余裕がでていたからな。」

そう照れながら答えると、皆は凄く嬉しそうな顔で俺を見つめているのを見て、俺はさらに顔を赤くしつつそんな皆から視線を外していた。

「えへへ、嬉しいな。けいちゃんは私たちとの事を大切に思ってくれてたんだね？その時から私たちの事を気にかけてくれていた事が凄く嬉しいな～。」

そんなつかさの言葉に全員がうんうんと頷いていた。

若干名、頬を赤くしつつ、俺を見ている者もいたのだが、それでも、皆嬉しそうだった。

「なるほどね、でも、そんな慶一君も今じゃ統括主任を任されるほどの人になってるもんねえ。こっちで見つけたバイトも満更でもないよね？」

と言うこなたに俺は苦笑しつつも頷いて

「まあ、な。もっとも、俺自身がこんな事になるとは思いもしなかったけどな。でも、まあ、皆がいるから楽しいよ。それだけは間違いない。」

その言葉にバイトの面々は再度嬉しそうな顔を見せ、バイトしていない組はそんな俺達の様子を羨ましげに見つめていた。

そして、ふと、こなたは何かを思い出したようで、俺に

「とりあえず話はわかったよ。まあ、それはそれとして、どうだい？慶一君。今回私たちが選んできた水着は。」

と言って俺に借りてきた水着を見せつけるこなたと、それ以外の面々も少々照れ気味に俺の反応を見ているようだった。

「え？あ、うん。凄く似合ってると思うよ。こなたもまさかビキニ系をつけてくるとは思わなかったしなあ・・・。」

と、いきなり振られた話に戸惑いつつもそう返すと、こなたは少し複雑な表情を見せたが、それでも嬉しそうだった。

今回の皆の水着は、こなたはスポーツ系のビキニ、かがみもビキニだが、白の胸の部分は大きなリボンのように結ぶタイプの奴だった。

つかさはショートパンツ系のタイプで、みゆきは以前に海で見たようなやはり白系のビキニ、みさおは相変わらずのスポーツタイプのビキニで、今回はあやのも赤のビキニを着けていた。

ゆたかはワンピース系のやはり赤の水着で、みなみはみさおやこなたのようなスポーツ系のビキニ、ひよりは赤のビキニ系なのだが、下半身の方にはフリルのような物がついていた。

パティはブルー系のビキニ、いずみは黄色系のワンピース。

こうとやまとは黄色系のビキニと緑系のワンピースを、みくとたまきは青系のワンピースと水色系のビキニだった。

今回は、みゆきとこうに加え、パティもまた、目のやり場に困る水着姿だったのだが、こなた達はそんな俺の葛藤に気付いているようで、ニヤニヤと嫌な視線を向けているのに気付いた俺は、軽いため息をついていた。

だが、そんな俺の側に、いずみとみくとたまきとひよりがやって来て俺の体を舐め回すようにじっと見つめているのに気付いた俺は、4人に

「？どうした？なんか俺、変だったか？」

そう尋ねると、ひより以外の3人が俺を少し頬を赤くしながら見て

「いや、まあ、ひよりんから聞いてはいましたが、ひよりんのいう通り、凄い体しているな、って思いまして。」

「先輩、やっぱり格闘家の肉体のモデルになってくれませんか？先輩の体は凄く理想的だし。」

「ほんとに鍛え込まれた体ですね。凄く逞しいです。なんか見とれてしまいますね。」

とそういう3人に俺は顔を赤くして照れると

「い、いや、褒めてもらえる事は嬉しいが、なんか照れるな・・・って何してる、ひより？」

こっそりと俺の体を携帯の写メに収めようとしているひよりを見つけてじろりと睨みを効かせる。

「え？あ、いや、その、これはですね・・・ちょっとした資料の1つにしようかと思いまして一・・・。」

その言葉に俺は呆れつつも重いため息を1つついて

「・・・はあ・・・仕方ない奴だな・・・変なことに使わないって

いうんなら構わんが・・・こう、検閲はしっかりやれよ？もしおかしな物見つけた時にはそれ相応の覚悟はしてもらうからな？」

とドスを効かせてこうに脅しをかけると、こうは慌てながら

「わ、わかってます。しっかりと私が管理しますんで、お任せを。」

そう言うこうにやまとはため息をつきながら

「・・・先輩、私もチェックするようにするわ。もし変なのがあったら私が止めて見せるから。こうとの友情を終わらせてでもね・・・。」

そう言うやまとにこうは更に慌てながら

「ちょっ！やまと、それは勘弁してよー。ちゃんと管理するから、変なもの書かせないようにするからさー。」

と言うこうにやまとと俺は目を見合わせてから

「その言葉、信用するからな？やまととの友情を終わらせたくなかったら、ちゃんとしろよ？」

「大丈夫よ？先輩。私もきっちり見ておくから。こう？きっちりと釘刺しておくわよ？」

そう言うと、こうは涙目になりつつも俺達にコクコクと頷いていた。

そんな俺達の様子を苦笑交じりに見ている皆に向き直ると

「さて、それじゃ、早速時間ももったいないし、早速遊ぼうか。」

その俺の言葉に皆も満面の笑顔で頷くのを見た俺は、今からの遊びに心をわくわくとさせていたのだった。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第2話～（後書

今回のあきら様は側に白石がいなかったので、切れモードはなしの状態となりました。

白石付きもそのうちに出そうと思っていますので、よろしくお願いします。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第3話～（前書き）

前回の投稿から大分間が開きましたが、第3話完成です。

それでは本編をどうぞ。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第3話～

ゴールデンウィークの残りの日をみさおとあやのとした約束を果たす為に当てようと俺はその時までに自分自身に起きている問題に決着をつけてその日に望む。

そして、その日に偶然にも俺に用事があってやってきた龍兄に幸運のチケットを渡された俺達は残りの日数をこれに費やす為に遊園地へと赴いた。

そして、初日にすべき遊びの事を色々と決め、とりあえず部屋割を決めて水着を借りた俺達はプールへと集合する事となった。

そして、そこで俺が昔にバイトでボディガードをやっていたアイドルの小神あきらと再会を果たす。

あきらのファンでもあるこなた達との交流もしてもらい、さらに思い出を刻んだこなた達に俺はあきらと知り合いの理由を話す。

一通りの説明を皆にした後、俺達は改めてプールでの遊びから満喫する事となったのだった。

各々プールへと入る為に軽く準備運動をしていたのだが、その時にみさおが俺に声をかけてきた。

「なあ、慶一。私と泳ぎで勝負しねえか？海じゃ泳ぎでの勝負は出来なかったし、私もそれなりに泳ぎにも自信もあるかんなー。」

そう言いつつ不敵に笑うみさおに俺もまた不敵な笑みを浮かべながら

「ほう？走る方だけじゃなくそっちも自信あり、って事か？面白い。今度こそ海での雪辱を晴らしてやるさ。その勝負、乗ったぞ！？」

去年の夏休みの時の事を思い出しながら、俺はみさおにそう言い放ったのだった。

みさおもまた、俺の返答に満足げに頷くと

「じゃあ、この２５メートルプールを１往復にしようゼ！」

と、勝負の方法を提案してきたので、俺もそれに頷いて

「よし、いいとも。じゃあ、準備できたら早速スタートだな。」

と、両手足の関節をほぐしながら言う俺にみさおも頷いて

「おっけー。んじゃ早速準備すっぞー。私の実力を見て驚け、慶一！」

と言う自信たっぷりな言葉に俺も不敵な笑みを返して俺とみさおはお互いに火花を散らした。

「なら、私がスターターをやってあげるよ。」

そんな俺達にそう声をかけてきたのはこなただった。

「ん？ちびっこがスターターやるんか？てっきり私はおまえも挑んで来るものとばかり思ってたぞ？」

そう言うみさおにこなたはいつものように目を細めつつ

「んー？面白そうではあるけどさ、私のこの長い髪は水の抵抗相当受けちゃって早く泳ぐのには向いてないんだよねえ。」

そう説明するこなたに俺とみさおもなるほど、と頷くと

「なら、こなた。スターターはよろしく頼む。みさお、こっちはいつでもいいぞ？」

そう言って2人に声をかけると、みさおも頷きながら

「おう。私もいつでもいいぜ？んじゃ、ちびっこ。合図は任せるかんな？」

そう言うと、こなたもそれに頷いて

「おっけー。それじゃ準備できたらこのスタートラインに立ってねー。」

と言うこなたの指示で、俺達はスタートラインへと立つ。

そんな俺達を他の皆も見つめながら

「慶一くん、頑張れー！」
「けいちゃん、日下部さん、どっちもふぁいと～。」
「お2人とも、頑張って下さい。」
「みさちゃん、慶一君。どっちも頑張ってねー。」

と、3年生組も声をかけてきた。

「お2人ともファイトです！いいレース期待してますよー！！」
「こう、あんまりあおるんじゃないわよ。ほんと、先輩達も子供よね・・・。」
「まあまあ、やまとさん。折角のイベントなんですし、応援しましょうよ。」
「そうそう。やまとさんもここは楽しむのが正解だよー？」

と俺達をあおるこうと呆れるやまと、そして、ふって沸いたイベントを楽しもうとするみくとたまき達も楽しそうに俺達を見ていた。

「慶一先輩、日下部先輩、どっちもがんばれー！」
「・・・お2人とも、あまりご無理はしませんように・・・。」
「おおー！水泳だけど、バトルネタきたっス！これは燃えるっス！！」
「フタリとも、モエツキルまでバーニング！！」
「運動得意同士の2人の対決かー・・・。どうなるんだろう？」

そして、純粋に俺達を応援してくれるゆたかとみなみ、何やら妄想に走り出したひより、この展開に何故だがテンションの高いパティと、俺達の対決の行方を興味津々で見守るいずみ。

俺はそんなみんなの声に苦笑しつつも意識をコースへと集中していくが、その時、かがみに自分を応援してもらえなかった事に少々テンションの下がったみさおが

「・・・ひでえよ、柊・・・たまには私の事も応援してくれたっていいじゃん・・・やっぱり私は柊にとっては背景なんか・・・？」

と呟いているのを聞いて、再度苦笑をする俺だった。

「それじゃ、行くよー？位置についてー。」

と言うこなたの言葉に、少し落ち込むみさおの方に意識を向けていた俺は、はっと我に帰ると、気を取り直しつつコースを見据えてスタート体制に入る。

そんな俺にならうようにみさおもまた気を取り直し、スタート位置についてコースを見据えるのを見て、俺も再度気合を入れなおし、集中する。

「よーい、ドン！！」

と言う合図と同時に俺達はプールへと飛び込み、早速レースの開始となった。

２人はクロールで泳いでいくが、徐々に俺とみさおとの距離に開きが出始めた。

慶一ｓｉｄｅ

ペースを維持しつつ、体力の配分を考えて泳いで行く俺。

ちらりとみさおの方を見ると、徐々にみさおとの距離が広がり始めているのが見て取れた。

（みさおも言うだけあって中々やるみたいだが、それでもペース配分には少々難があるようだな・・・徐々にだが遅れはじめているようだ・・・このままならいけるかも・・・。）

そう考えつつ、少しずつペースを上げていく俺だった。

そして、ターンを決めてさあ、ここで勝負をつけようと力を入れようとした瞬間、俺の右足が何かに掴まれるようなそんな感覚を感じた瞬間、俺の右足が突然つったので、俺はその状況にしばしパニックに陥った。

「!?ゴボッ!?ゴババッ!?な、何が!?」

と、手足をばたつかせて俺は水中へと沈み込んだのだった。

みさおｓｉｄｅ

慶一に水泳勝負を挑んだ私だったが、水泳に関しても慶一はかなりやるようで、私も必至に慶一に喰らい付いて行っているものの、その差が徐々に開き始めているのを感じていた。

（嘘だろ?慶一の奴こっちもここまでなんて意外だった・・・。私も運動部所属だから体力には自信あっけど、それでもこれだけ・・・まずい・・・このままじゃまずいぞ・・・どうする?私・・・。）

前を泳ぐ慶一をちらちらと見つつ、私はこのままではまずいと感じていた。

そして、慶一が折り返しのターンを決めた直後、焦った私は思わず無意識に慶一の足を掴むという行動に出たのだった。

そして、その行為が慶一にとってやばい状況を作り出す結果になったようで、体に異変の起きたらしい慶一は半分パニくりながら水中へと沈んでいくのが私もターンを決めた時に見えて、その状況に私

も慌てた。

「!?慶一!!どうした!?おい!慶一ってヴァ!!」

そう言いながら沈んだ慶一を追って私も潜って慶一を追いかけたのだった。

こなたｓｉｄｅ

夏休みの雪辱を果たそうと慶一君はみさきちの水泳勝負の申し出を受けた。

そして、私がスターターとなって皆が応援するなかで、２人の勝負が始まった。

慶一君は意外と泳ぎもいけるようで、レースの展開的に余力を残しながらみさきちを引き離していたようだった。

そして、そんなデットヒートに声援を送る皆。

「どっちもがんばれー!!」

「日下部ー!万が一勝てたらあんたの言う事１つ聞いてあげてもいいわよ!?」

「けいちゃん～!日下部さん～!がんばれ～!!」

「日下部さん!まだ挽回はできますよ!?諦めないで下さい!!」

「みさちゃん、ファイトー!!」

と声援を送る私たち３年生組。

「おー!２人ともかなり早いなー・・・。ねえ、やまと。あんたは

このレースどう見る？」

「・・・そうね・・・体力的には日下部先輩も負けてなさそうだけど、慶一先輩の地力は更にその上を行っている、と言う風に見えるかしら。その分、日下部先輩には厳しいかもね・・・。」

「うーん・・・それは無理もないかも。何しろ慶一先輩が男って事もあるけど、先輩って格闘技で鍛えた筋力なんかもあるだろうし。」

「そうだね。何かハプニングがあったりすると日下部先輩でもひょっとするかもねえ・・・。」

と状況を分析する八坂さん達2年生組の面々。

「頑張れー！！・・・2人とも凄いね、みなみちゃん。」

「・・・うん・・・。流石に運動系の2人、ってところだね・・・ゆたか・・・。」

「先輩方ー！！両方ともファイトっス！！＜水泳バトル！これもまたいいネタっス！！私にとってはこっちのネタも集められるのも幸運っスね！！＞」

「スバラシイデットヒートデス！！バーニング！バーニングですヨ！？フタリトモ！！」

「頑張って下さい！先輩達ー！！」

と、片や声援を送りつつ、片やその影で妄想しているっぽいと感じつつ2人を応援する1年生組。

けれど、そんな折、慶一君が折り返しでターンを決めた頃、かがみが何やら異変に気付いたようで、ふいに声をあげた。

「ん？ねえ、こなた。何か様子、おかしくない？慶一くんが何か慌てているみたい・・・って、慶一くんが沈んだ！！」

最後のかがみの台詞に思わず驚いてそっちを見る私。

「・・・あ・・・みさきちが慶一君を追っかけて潜った・・・。って、大変だー！！」

そう叫んだ瞬間、皆もはっと我に帰り、私達は折り返し地点に向かって走り出したのだった。

慶一ｓｉｄｅ

突然の足の異常が回復しないままに俺はプールの底へと沈んでいく。

なんとかしようともがいてみるものの、結局どうする事も出来ず、俺は徐々に意識を失いつつあった。

そして、完全に意識が途切れる前に俺の視界に飛び込んで来たのは、俺を追いかけて潜ってくるみさおの顔だった。

みさおｓｉｄｅ

慶一に差をつけられ、このままじゃまずいと思った私は、慶一に負けたくないという思いから、無意識に慶一の足を掴んでいた。

それがきっかけとなり、慶一は私が掴んだ方の足に異常をきたしたみたいで、慶一の体が一瞬硬直したように見えた瞬間、慶一はもがきながら水中へと沈んで行くのが見えた。

私は、それを見た瞬間、大慌てで慶一を追って水中へと潜って行く。

そして、慶一を追う私の顔を見た慶一の意識が失われそうになって

いるのを感じた私は、とにかく慶一に追いついてその体を抱きとめて水面を目指した。

そして、慶一と一緒に浮上した時、私達の異常事態に気付いたちびっこ達が私達の近くまで来ていたので、私はちびっこに

「ちびっこ！慶一を引き上げるのを手伝ってくれ！！慶一の奴、意識を失ってる！私１人じゃプールサイドへ上げれない！だから早く！！」

そう声を張り上げるとちびっこ達は慌ててこちらまでやって来て、柊と高良がプールへと飛び込み、水中から慶一の体を私と一緒に押して、ちびっこと八坂、永森、岩崎らが慶一の両腕を引っ張り、慶一をプールから引き上げた。

そして、プールサイドに慶一を横たわらせると、すぐさま救命処置にかかったのだが・・・・・。

「やあ、これは大変だ。慶一君、溺れちゃって意識を失ってるし、呼吸も止まっちゃってるね。ここは１つ私が人工呼吸をしないとー。」

と、ちびっこはしらじらしくそう言い訳するように宣言すると、慶一に人工呼吸を施そうと慶一の側に行く。

そして、いざ、人工呼吸開始、と言う所で柊達が物凄い速さで慶一の側へと行き、人工呼吸を施そうとするちびっこを邪魔しに行った。

「ちょっと待ちなさい、こなた！あんたどさくさ紛れに何しようとしてんのよ！！」

と、柊がちびっこをはがいじめにしつつ慶一に人工呼吸をするのを阻止する。

「は、はなせー！かがみん！！ここは一番最初に慶一君の救命措置をしに来た私に権利がー！！」

と、叫んで暴れるちびっこに柊が更に

「うるさい、黙れ！あんたみたいな下心ありありの奴に任せられるか！」

そう突っ込みを入れると、さらにそこに高良が

「そうです！医学の知識がないままに素人の民間療法を行うのは危険です！ここは医者志望である私が代わりに・・・。」

そう言って慶一の救命処置を施そうとする高良だったが、それを更に永森が

「そんなふうに言いつつ、前回は慶一先輩に人工呼吸を施してるわよね？先輩は以前にやっているのだから、こ、今回は私が代わりにやらせてもらうわ。わ、私もこういう事を経験して、やり方を知っておきたいしね・・・今後高良先輩が居ない時にこういう事が起きた時の為にも・・・。」

そう顔を赤らめつつそっぽを向いて言う永森に高良は黒いオーラを立ち上らせつつ

「それはそれは・・・よい心がけですね。でしたら、私のやり方を

をもう一度ご覧になって学習されてはいかがでしょう？」

そう言うと、永森もまた黒いオーラを立ち上らせながら

「悪いけど、今回は実戦で覚えようと思ってるから、先輩の気遣いは無用よ。」

そう言ってにらみ合う2人。

そして、ちびっこ達の方にもう一度目をやると、ちびっこと柊がまだ言い合いをしていた。

「むう、かがみ、どうして邪魔するのさ？ひょっとしてかがみがしたいの？救命措置をさ？」

そうニヤニヤしながら言うちびっこに柊も慌てながら

「な！何言ってんのよ！！べ、別に私がしたい、って訳じゃ・・・それに、実際のやり方はよくわからないし・・・。」

と、顔を赤らめつつそう言う柊にちびっこは追い討ちをかけるように

「ふーん？なら、やり方がわかればかがみもやりたいんだね？」

その言葉に柊は更に顔を真っ赤にしながら

「え！？いや、その・・・わ、私は・・・別に・・・。」

と言う柊に、ちびっこは軽いため息をつきつつ

「はいはい、なら、私がやるよ。それでいいよね？かがみはやりたくない、って事みたいだし。」

そう言って慶一の方へ向かおうとするちびっこを再び柊が止める。

「まてい！だから、何であんたが行くのよ！？」

そう言って再び堂々巡りになっていた。

永森と高良も2人して牽制しあっていて、結局慶一が放置される状況になった。

そんな折、柊妹が顔を赤くしつつ

「な、なら、わたしがやろうかな・・・早くけいちゃん助けないと・・・。」

そう言って慶一に近づこうとした時、それに気付いた4人が柊妹を一斉に睨みつけた。

その迫力に思わず後ずさりする柊妹。

「つかさー？抜け駆けはゆるさないよ？」

「あんたもどさくさ紛れに何をしようとしてる訳？」

「つかささん。これは立派な医療行為ですので、私に任せて下がっていて下さい。」

「つかさ先輩？手出しは無用よ？」

そう4人に言葉で脅され、涙目になりながら引っ込む柊妹。

そんな状況を見かねた八坂が

「先輩達！今はそんな事を言い争ってる時じゃないですよ！早くしないと先輩が・・・。」

そして、そんな風に言う八坂にも睨みを効かせる４人。

「みさちゃん、このままじゃ慶ちゃんが危険だわ・・・。」

焦りつつそう言うあやのの声に、慶一の顔を見てみると、どんどんその顔から血の気が失せてきているのが見て取れた。

それを見た瞬間、慶一がやばい！と感じて、私は、喧々轟々と言い争いを続けている５人の事などわき目も振らずに慶一の側に行って、あの日高良がやっていた人工呼吸のやり方を思い出しながら即座に実践に移した。

（やばい、ほんとにやばいぞ、慶一、今私が助けっから・・・早くしねえと・・・えと、確か・・・こうやって顎を上げさせて、そんで・・・こうやって息を吹き込んで・・・）

そう心の中で呟きつつ、私はとにかく急いで慶一に救命処置を施した。

その突然の事に驚くちびっこ達。

「み、みさきち？」

「く、日下部、あんた・・・。」

「く、日下部さん・・・いえ、今はそんな場合ではありませんね・・・日下部さん、そうです。そして、その後は、息を３回吹き込んで

ください。心臓マッサージの方は私がやりますから。」
「あ・・・私は、何を・・・日下部先輩、慶一先輩をお願い！」
「日下部先輩、慶一先輩を助けて下さい！」

そんな風に言うちびっこ達の声を聞きつつ、高良の指示ももらって、慶一の蘇生に努めた。

そして・・・・・・。

「げほっ、ごほっごほ・・・はあ・・・はあ・・・。」

と言う声とともに水を吐き出し、そして、慶一は呼吸を取り戻し、意識も戻ったようだった。

「・・・う・・・俺は・・・一体・・・？」

まだ苦しげにそう呟く慶一に、ちびっこ達も慶一の側へと慌ててやってきたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

水泳バトル中の突然のアクシデントで思わず溺れてしまった俺だったが、俺を追いかけて来たみさおの顔を見た時に俺は意識を失ったようだった。

そして、再び意識を取り戻した時には俺はプールサイドに寝かされていて、そこには俺のすぐ側で涙目になっているみさおと、安堵の表情を浮かべるみゆきが居た。

そして、俺が「・・・う・・・俺は・・・一体・・・？」と呟くと、

その声に気付いたこなた達も一斉に俺の側へとやってきて口々に

「大丈夫？慶一君。とりあえず無事でよかったよ。」
「気分はどう？他に変な所はない？」
「けいちゃん、大丈夫？生きてるよね？」
「ご無事で何よりでした・・・。それと、申し訳ありません・・・。
」
「良かった・・・慶ちゃん・・・。」
「慶一・・・わりい・・・私・・・私は・・・。」

すまなそうな表情と安堵の表情を見せる3年生組。

「はあ・・・よかった・・・手遅れにならなくて・・・。」
「私・・・とんでもない事をする所だったわ・・・。」
「とりあえず無事のようで、ほっとしたね。」
「まあ、永森さんは要反省だね。」
「う・・・。」

と、俺の無事に安堵しつつも、何かあったようで、落ち込むやまと。

「よかった・・・本当によかったよ・・・慶一先輩、どうなっちゃうのかと思った・・・。」
「・・・私は・・・何もできなかった・・・やっぱりみゆきさんは凄いな・・・。」
「一時はどうなる事かと思ったっスね・・・。いやはや、とにかく無事で何よりっスよ。」
「まさにデッドオアアライブネ・・・。ナンにしても、ヨカッタデス。」
「よかったー・・・本当によかった・・・。」

と、こちらも俺の無事に安堵している1年生組。

俺はゆっくりと体を起こすと、皆を見回しつつ

「あー・・・その、なんだ・・・皆、心配かけてすまなかった。皆の様子を見るにつけ、今回も結構やばかったのか？」

そう尋ねると、その場にいる全員が重々しく頷いた。

そして、俺の目の前で涙目になっているみさおが

「・・・ごめん、慶一。私がお前の足を掴んだりしなかったら・・・こんな事になってなかったかもしんねえ・・・本当にごめんな？慶一・・・。」

そう言って謝ってくるみさおに俺はその時の事を思い出して

「あー・・・あの時俺の足が掴まれたような感じがしたのは気のせいじゃなかったって事か・・・みさおー？」

と、みさおを軽く睨みつけると、みさおは涙目のままビクリと一瞬震えた後、俯いた。

それを見ていたあやのが俺に

「慶ちゃん。みさちゃんには私からも後でよーく言っておくから、あまり怒らないであげて？みさちゃんもきっと自分のしでかした事の重大さはわかってると思うから。それに、今回はみさちゃんも慶ちゃんを助ける為に必死に頑張ってたから。みさちゃん無我夢中で慶ちゃんに人工呼吸を施してたしね。」

みさおをかばい、そう言って来るあやのの最後の部分に俺は思い切り驚きつつ顔を赤くし、更に軽いため息を1つついて

「・・・え?そ、それってつまり・・・はあ・・・わかったよ。お説教はあやのに任せるとして、みさお、顔あげろ。」

そうみさおに言うと、みさおはおどおどしつつ顔をあげたのを見て、俺はみさおのおでこに照準を定めてデコピンを一閃させた。

「あうっ!い、いてえよ、慶一ー・・・。」

おでこを抑えて更に涙目な顔のみさおに俺は

「まあ、これで勘弁してやるよ。お前も俺を救う為に必死になってくれたみたいだしな。俺はもう怒ってないから、いつまでも落ち込んでるんじゃないぞ?みさお。お前にも楽しんでもらわなきゃ、ここに皆で来た意味がないんだからな?」

そう言ってやると、みさおは俺の言葉に思わず笑顔を浮かべると

「さんきゅー慶一。そう言ってもらえると、気が楽になるゼ。それに今の言葉も嬉しかったしな。でも、本当にごめんな?」

喜びつつもなおも謝ってくるみさおに俺は苦笑しつつ

「いいって、もう気にするな。俺はそう言ったぞ?さて、俺はもう少しだけ休ませてもらうよ。みさお達はもう少し楽しんで来いよ。俺ももう少し回復したら行くからさ。」

そう言うと、みさおは笑顔で頷き、事の成り行きを見守っていたこなた達もまた、その状況に安堵しつつも肝心な時に言い争いをして、俺を危険に晒しかけた事を詫びると、皆で一緒に改めてプールに向かって走って行くのを俺はまた少し横になりつつ見送っていたのだった。

そして、この後はウォータースライダーでも遊ぶ事となるのだけど、ここでもまた、ちょっとしたハプニングが起きる事をその時の俺には気付きもしなかった。

かくて、命の危険に脅かされた初日だが、まだまだ俺達の初日は続いて行く。

その様子は、また次回に話して行きたいと思う。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第3話～（後書き）

次回は初日の後編となります。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第４話～（前書

最近少し、間が空きすぎてしまっていましたが、何とか今回も更新です。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第４話～

幸運のチケットを手に入れ、俺達は２日間を利用して遊園地を楽しみにやってきた。

そこで、初日の残りの１つに施設内プールで楽しむ事となった俺達だが、そこで勃発した俺とみさおとの水泳対決に於いて、みさおの起こしたトラブルにより、俺はまたしても生死の境を彷徨う事となった。

何とか一命を取りとめた俺は、自分の体を休ませつつ、次のプール内のアトラクションへと向かう事となったのだった。

こうを中心にそのアトラクションであるウォータースライダーへと向かう皆だったが、こなたとみゆきとかがみとつかさ、みさお、やまとの６人は俺を心配してか、俺の側にいてくれたのだが、俺はそんな６人に

「皆はもうウォータースライダーの方へと向かったみたいだけど、お前等は一緒に行かないのか？」

そう声をかけると、５人はばつの悪そうな表情を見せつつ

「あはは・・・さっきの事もあるし、私にもちょっとは責任もあるしさー・・・。」

「・・・その・・・あんたの事、死なせかけておいてそんな状況にもお構いなしに言い合いしてた事を反省してるって事もあるんだけどさ、さっきの今だからちょっと心配で・・・。」

「わたしもけいちゃんの事が心配だし・・・。」

「せめて自分の不手際をお詫びしたいですから・・・。」
「私が一番の元凶でもあるしな・・・。それなのにお前を差し置いて私らが先に楽しむのもなんか罪悪感があってさー・・・。」
「私も・・・ごめんなさい、先輩・・・。」

と、それぞれに落ち込んだ表情を見せる皆に俺は軽くため息をつくと

「まあ、皆の言いたい事はよくわかるし、危なかったのは確かだけどな。でも、もう気にしてないし、それに、俺達は楽しむ為にここに来たんだから、いつまでもそんな顔してても困るってもんだ。とはいえ・・・はあ・・・仕方ないな・・・よいしょっと！」

そう皆を説得しつつ、俺はおもむろに横になっていた体を起こして立ち上がると、皆はそんな俺の行動に心配そうな表情を向けていたが、俺は自分がもうなんともない事をアピールしつつ

「ほら、この通りもうなんでもないから、皆も待ってるし、一緒にウォータースライダーまで行こうぜ？な？」

と、笑顔で皆にそう言うと、皆も戸惑いながらも、笑顔を見せつつ頷いてくれたのを見て

「おっし、んじゃ、あそこまで競争な？一番ビリのやつにはジュースでも奢ってもらうとしようか。」

そう言って笑ってから、俺はおもむろに他の皆が待つウォータースライダーへと走り出した。

俺の突然の行動に一瞬呆けつつも状況に気付いた皆は慌てながら

「ちょっ!?慶一君、いきなりそれはずるいよ!?待ってー!!」
「あんた一応病み上がりのようなものなんだからあまり無茶すんじゃないわよ!!待ちなさい!!」
「わ!わわわっ!!みんな待って～!!」
「は?え?えーと・・・って!待ってくださいー!!」
「ちょ!慶一!!いきなりそれは汚えぞ!?待てよー!!」
「（・・・まったく・・・無理してるのはみえみえなのよ・・・ほんと、先輩はしょうがないわね・・・って、人の心配ばかりしてる場合じゃないわね・・・。）待ちなさい!先輩!!」

それぞれにそう言いつつ俺を追いかけて走ってくるのをちらりと見ながら、俺は本当はまだ動くにはきつい体を無理やり動かしてゆたか達の方へと走ったのだった。

ゆたかｓｉｄｅ

さっきの騒ぎから少しして、先輩が無事に復活を果たした事に安堵していた私達だったのだけど、それでもまだプールサイドで横になったままの先輩を、みんなと一緒にウォータースライダーへと向かいつつも気にしている私だったのだけど、ちらりと先輩の方を見ると、先輩の事が心配で先輩の側に残っていたこなたおねーちゃん達が何やら先輩と話している様子が伺えた。

先輩はこなたおねーちゃん達に何事かを話してからふいに起き上がると、私達の方へ向かってダッシュし始めたのを見て、私はそんな先輩の行動に少し心配になりつつ、みなみちゃんに話かけていた。

「ねえ、みなみちゃん。慶一先輩、あんな風にダッシュしてこっちに向かってきてるけど、大丈夫なのかな?さっきの騒ぎのすぐ後だから、私ちょっと心配だよ・・・。」

そう言うと、みなみちゃんも同じように心配気な表情を私に向けながら

「・・・そうだね・・・私も少し心配かな・・・あんな事があった後でそう簡単に体が回復するとも思えないし・・・それに、先輩がなんだか無理しているようにも見えるし・・・。」

そう言うみなみちゃんに私も頷いて

「そうだよね・・・。先輩大丈夫かなあ・・・？」

そう呟く私にみなみちゃんもまた、不安気に先輩を見つめていた。

そんな私達の会話を聞いていたひよりちゃん達は

「先輩、ああ見えて無理する人っスからね。私達も先輩の仲間なんだし、それとなく気にしてあげていればいいと思うっスよ。まあ、それでも先輩の事だから強がるかもしれないっスけど・・・。」

「それがケイイチのいいトコロでもあり、ワルイトコロでもありますネ。とにかくワタシタチはそれとなくケイイチのヨウスをミマショウ！」

「そうだね。何があっても大丈夫なように・・・。」

そう言い、最後の若瀬さんの言葉に私や他の皆もうんうんと頷いていたのだった。

こうｓｉｄｅ

側で小早川さん達がそんな風に放しているの聞きつつ、私達も走っ

てくる先輩達の方に視線を向けながらみくやたまきらとやりとりをした。

「ん？先輩、復活したっぽいかな？って、先輩また・・・。」

と、先輩の方を見ながら表情を曇らせつつ、そう言うと、そんな私の言葉に頭にハテナマークを飛ばしているっぽい2人が

「どうしたの？やさこ。先輩元気そうじゃない？」

「そうだよ。何でそんなに心配そうな顔してるのさ？」

そう言うのを聞いて、私は2人に曇った表情のまま

「いやー・・・先輩、また無理してるな、って思ってね。」

そう言うと、たまきが私に

「んー？私から見たら、先輩ちゃんと復活してるっぽいけどな。そうじゃないの？」

そう言って来たのを聞きながら私はその言葉に首をフルフルと振って

「一見するとそう見えるけどねー・・・私にはわかるんだよね。これも付き合いの長さなのかもだけどね。それに、中学時代にも先輩は一度無茶をした所を私も見てるからね。おそらくは泉先輩達に心配をかけさせない為に、なんだろうけどね。無理をしてるってのがみえみえだからさ・・・。」

その言葉に2人とも感心しつつも

「なるほど。付き合いの深さに関しては私達は及びもつかないね。」
「とはいえ、私達も小早川さん達同様にそれとなく先輩の様子を見ていた方がいいかもしれないね。」
そう言ってくれる2人に私はありがたい気持になりながら
「ありがとね、2人共。私の知らない所でなにかあるようならすぐに教えて?」
そう言うと、2人共笑って頷いてくれたのを見て、私自身も先輩の様子には気をつけよう、と改めて思うのだった。

慶一ｓｉｄｅ

1年生組や2年生組がそんな事を話している事などつゆ知らず、俺はこなた達を引き連れてウォータースライダーの前で集まっている皆の元へと辿り付いた。
ゆたか達がまだ若干心配そうな目を俺に向けていたようだったが、俺はそんな視線に気付きつつも、その視線に気付かないフリをしつつ、皆に声をかけた。
「皆、心配かけてしまったけど、もう大丈夫だ。今度はこれで遊ぶんだろ?って・・・意外と大きいな、これ・・・俺、ここまで立派なウォータースライダーはそうそう見た事はないぞ?」
その言葉に皆も改めてウォータースライダーを見ながらその大きさに感嘆のため息をついているのが伺えた。
「・・・なるほど、これはやりがいがありそうだね。さて、それじ

ゃー・・・っと、いい事思いついた！」

早速遊ぼうとしているこなたがふいに声をあげたので、俺はこなたに

「ん？いい事？一体何なんだ？」

そう尋ねると、こなたはニヤリと不敵な笑顔を見せてから俺に

「慶一君、ここに来る前に私達とした約束の事は覚えてるよね？」

その言葉に、俺はここへの道中にこなた達から言われた言葉を思い出しながら

「あー・・・確か私達の言う事を聞く事、って言ってたあれか？」

そう返すと、こなたは満面の笑みで頷いて

「そうそう、それだよ。それでだね、ウォータースライダーをやる時に、２人１組でやるのがいいかな？と思ったんだけどさ、その時に慶一君には私を後ろから抱きしめる形で支えてもらいながら滑るってのをやろうと思ってねー。」

その言葉に俺は照れで顔を赤くしつつ

「ちょ、待ってくれ。それは流石に照れくさいぞ？それ以外で他にはないのか？」

と、あたふたしながらこなたにそう提案したのだが、こなたは何かを企む時のような笑みを俺に向けながら

「ほほう？慶一君は自らした約束を守れない、とおっしゃるのですかね？それは男としてどうなのかなー？」

こなたの言葉に俺は思わず言葉を詰まらせる。

「男が一度した約束はきちんと守るのが男ってものだよね？違う？違うのー？」

そう言って詰め寄ってくるこなたに更にあたふたしつつ、俺はふと思いついた意地悪をこの状況に対する反撃としてこなたにしてみる事にした。

「い、いや・・・それはそうなんだが・・・・・・なら、こなたの俺への言う事を聞く事、ってのはこれでいいんだな？お前の望みはこれで使い切る、でいいんだな？」

と、特に回数設定はしていないはずだったが、そんな風にカマをかけてみたところ、その俺の言葉に今度はこなたが慌て始めた。

「え？えっと・・・その・・・え？あ、あれー？ちょ、ちょっと待ってね？えっとええっと・・・・・。」

そう言いつつうーんうーんと唸り、悩み始めたこなたの様子を内心ニヤリとしながら見ていたが、そのうちにこなたが唸りながら俺を見て涙目になり始めたのを見て、俺はそれに慌てながら

「わ、わかった！わかったよ！俺が悪かった！回数制限はつけない。この２日間の間だけ我侭聞いてやるから、そんな顔するなって。な？」

そう言って慌てて妥協案を出すと、こなたは涙目の顔のまま俺を見つめて

「・・・ほんとに？」

と言うこなたに俺は頷いて

「ああ、本当だ。悪かったな、ちょっとからかってみようと思っただけなんだ。」

そう言って謝ると、こなたは頬を膨らませながら

「むう、酷いよ、慶一君。私真剣に悩んじゃったんだからね？じゃあ、早速まずはここでのお願いを聞いてくれるよね？」

むくれつつも気を取り直してそう言ってくるこなたに俺は観念しつつ

「ま、約束は約束だからな・・・。それじゃ行くか。」

その言葉にこなたは満面の笑顔で喜びながら

「やたー！それじゃ行こう！早速行こう！！」

そう言って俺の手を引いてウォータースライダーの上へと登ろうとしたのだが、そこへ事態を見守っていたかがみ達からも声をかけられた。

「待ちなさい！こなたばかりずるいわよ！私も・・・その・・・お願い・・・。」

「わたしもいいよね？けいちゃん。」

「私も・・・お願いしたいです。いいですよね？」
「先輩？当然私もいいわよね？お願いを聞いてくれる、って言ってくれたんだから・・・。」
そう言ってくる４人に俺は大きなため息をつきつつ
「わかったよ・・・。それじゃ、順番でいいよな？・・・はあ・・・・。」
そう言いながら、他にそんな約束をしていた４人の願いを受けたのだが、それを皮切りに、他の連中も私も、私もと言って来たので、俺は半ばやけくそでその申し出を受けたのだった。

こなたｓｉｄｅ

私達とした約束を逆手に取られてからかわれた私だったが、その事に本気で悩んで涙目になった私を見た慶一君が妥協案を出してくれたのを受けて、私はその事に内心ほくそえみつつも、この状況を楽しんでやろうと思うのだった。
そして、まずは私から２人１組でのウォータースライダーを始める。
私を支えるように抱きしめる慶一君の体の感触を感じつつ、私は心の中で
（おお・・・こういうのも結構いいもんだね。前から思ってたけど、やっぱり慶一君は逞しい体してるよ。さて、それじゃ、慶一君の体温を感じつつ、楽しみますかねー。）
そう考えた後、慶一君に「それじゃ行くからしっかりと私を支えて

てよ?」と声をかけてから慶一君が

「わかった。それじゃ行くか。」

と返事したのを確認してから、私達は早速滑り出したのだった。

「いーーーやっほーーーー!!」

「おお!こりゃ迫力だ!!」

と言う声とともに私達はウォータースライダーを堪能したのだった。

かがみｓｉｄｅ

こなたと慶一くんのやりとりを目にして、私もまたこなたに対抗する為に、こなたが慶一くんにした要求を私もする事にしたのだった。

そして、こなたと慶一くんが一回目のウォータースライダーを終えて再び戻って来たのを見て、私は慶一くんに声をかける。

「お帰り、２人共。さあ、次は私の番ね?慶一くん、よろしくね。」

そう言うと、慶一くんは苦笑していたが「ああ、わかった。」と頷くと、早速スタートの準備へと進んだのだった。

そして、心の中で慶一くんに支えるように抱きしめてもらいながら

(あ・・・やっぱり慶一くんの胸板って広いわね・・・。なんだか、恥ずかしいのもあるけど、こうして密着していると落ち着くかも・・・。って、何を考えてるの!?と、とにかく・・・今は楽しむ事に集中しようっと・・・。)

そう考えつつ、顔を赤らめながら私は慶一くんに合図をだして、滑り出したのだった。

「行くわよ？用意はいい？慶一くん。」
「おう。いつでもいいぞ？」
「よーし、それじゃ行くわよ？それー！」

そう言って照れを隠すようにはしゃぎつつ、楽しむ私だった。

慶一ｓｉｄｅ

こなたの願いを聞き、そして、かがみ達からも要望を突きつけられ、俺はかがみの順番まで終えてから次のつかさの順番へと向かう途中も、はあ、と軽いため息をつきながら再び上へと登って行った。

そんな中、俺は心の中で

（・・・ふう・・・言う事を聞く、って事は自分で言い出したことだったとはいえ、しょっぱなからきつい要求だよなあ・・・そりゃ、俺も普通の男だし、そう言う状況は嬉しいとは言えなくもないけど・・・やっぱし理性を保つにはきついし、この状況は拷問にも近いってもんだ・・・でも・・・これも俺のけじめだもんな・・・いいとも、ならば、俺はこの拷問的状況も受け入れてやろうじゃないか。せめてそうする事が、今の俺のけじめのつけ方だしな・・・。苦難困難上等だ！これを乗り切ってまた俺は成長してみせる！）

そう最後は決意しつつ、俺はこの状況を受け入れつつ乗り越えようと思うのだった。

つかさｓｉｄｅ

こなちゃんがけいちゃんにした要求をけいちゃんが受け入れたのを見て、おねえちゃん達もそれに便乗して自分達の要求を突きつける事となった。

わたしもそんなおねえちゃん達の勢いに乗せられる形となり、思わずけいちゃんにこなちゃん達のような要求をしてしまったのだが、おねえちゃんの番が済んでけいちゃんが再び上に上がってくるのを待ちながら、自分の行動を振り返って驚いていた。

（わたしもこんな風にけいちゃんに言えるなんて思ってなかったから、自分の行動にちょっと驚いちゃったよ・・・。今にして思えば、わたし、かなり大胆な事けいちゃんに言ったな～って思ったら、なんだか恥ずかしくなってきちゃったよ～・・・で、でも、言っちゃった以上はわたしも頑張らないと・・・。）

そう心の中で思いながら色々考えていたが、ふいにかけられた声でわたしの思考が中断された。

「・・・つかさ、どうしたんだ？なんだかぼーっとしてないか？次はお前の番だろ？さあ、準備しようぜ？」

その言葉にわたしはビクッとなりつつ

「ひゃあっ！あ・・・け、けいちゃん？ご、ごめんね～？ちょっと考え事してて・・・そ、そうだね？それじゃけいちゃん、よろしくね？」

慌てながらそう言うと、けいちゃんもそんなわたしを見つつ、苦笑

していたが、わたしもけいちゃんに言われた通りにウオータースライダーのスタート準備をするために、けいちゃんに支えるように抱きしめてもらうと同時に、その事で今度はさっきまで考え事をしていた事がふっとんでしまい、その状況に顔を真っ赤にして照れつつのスタートとなった。

「よーし、それじゃ、つかさ。行くぞ？」
「はううう・・・あ、え？う、うん。いいよ？」
「んじゃ、スタートだ！行くぞー！？」
「う、うん・・・はわわわわ～！！」

終始慌てながらのスタートだったけど、凄く楽しかったなと後で思ったのは、その時には恐怖と照れで頭が真っ白になってしまっていたからだった。

みゆきｓｉｄｅ

泉さんの慶一さんに対する要求を見て、私も凄くそれが羨ましくなり、泉さんと同じ要望を慶一さんにお願いしていた私でした。

そして、慶一さんとウォータースライダーを滑る泉さん達の様子を羨ましげに見つめながら、私は自分の順番を待ったのでした。

そして、つかささんの番も終了し、いよいよ私の番が回ってきたので、私は少し恥ずかしさと照れもありましたが、それ以上に慶一さんと楽しむ事ができると言う事に対して、とてもうきうきした気分になっていたのでした。

つかささんとの滑りを終えた慶一さんが再び上へと登って来たので、私は慶一さんに声をかけました。

「お疲れ様です、慶一さん。次は私の番ですね。どうかお手柔らかにお願いします。」

そう言ってにっこりと笑いながら慶一さんに言うと、慶一さんも苦笑しつつ、照れつつも私に

「ああ。やると言った以上は約束は果たすよ。それじゃ、準備しようか。」

そう言う慶一さんに私も頷いて、滑る準備をする為に、私は私を支えるように抱きしめてくれる慶一さんの体に密着しつつ、心の中で

（・・・慶一さんの体にこうして触れる事は何度かありましたが、やっぱり逞しい体をしていますね・・・。それに、今回は私の背中に触れている慶一さんの心臓の鼓動も感じられるようです・・・。なんと言いますか、凄く安心できますね・・・。それに、私もこうされるのはそれ程嫌ではないようです・・・むしろ、安心できるといいますか・・・。）

そう思いつつ、そっと慶一さんの顔を見てみると、慶一さんは顔を赤くしながら緊張している様子が見て取れ、それを見た私は思わず笑みをこぼしたのでした。

「あー・・・とりあえず、準備はいいか？みゆき。」

「はい。私はいつでもいいですよ？」

「よ、よし。それじゃ行くか。」

「はい。それじゃ参りましょうか。行きます！」

そう言ってスタートし、私たちは楽しい時を過ごしたのでした。

みさおｓｉｄｅ

さっきの慶一の事故で、原因を作ってしまった私はかなり落ち込んだのだけど、慶一はあんな目にあっても私をデコピン一発で＜すっごく痛かったけど・・・＞許してくれた。

その後、ちびっこの要求を受け、慶一はそれを実行する事を約束した。

皆もまた、ちびっこが羨ましかったのか、ちびっこと同じように慶一に要求をしていたようだったが、慶一はそんな皆の要求も受け入れた。

私はその時は、慶一に対する罪悪感もあったから、皆が言うように慶一と遊ぶ事に抵抗があったのだけど、慶一はそんな私に気付いてか、ウォータースライダーへと登る際に私に

『みさお、お前がさっきの事を気にしているって事はわかる。だけど、俺はもう怒っちゃいないし、気にもしていない。それに、俺達はここへは楽しむ為にやってきたんだぜ?だから、お前にも楽しんでもらいたい。だから、俺が受け入れたこなた達の要求、お前もしてくれていいぞ?』

そう小声で言って気を使ってくれた慶一の思いに私も応える事にしたのだった。

そして、高良の番が済み、私の前へとやって来た慶一に私も声をかけた。

「よっ、慶一。高良の抱き心地はどうだったんだ?慶一も結構エッチな所あるもんなー。案外嬉しかったんじゃね?」

そうからかうと、慶一は途端に顔を赤くしつつ

「ちょ!みさお、何言ってるんだよ!お、俺は別に・・・その・・・」

そう言いつつ、もじもじとし始めた慶一を見てしてやったり、の笑顔を浮かべつつ、後方から来る不機嫌オーラを感じつつ、私は本来の目的を果たす為に困惑しまくっている慶一に再度声をかけた。

「はいはい。とりあえず次は私の番なんだから、とっとと準備しようぜ?慶一。」

そう声をかけると、慶一もはっと我に帰り

「う・・・話を振ったのはお前だろ?って、後もつかえてる事だし、そうするか・・・。」

そう言って、私と慶一は2人1組のちびっこ達がやっていた形を取る。

そして、慶一に抱きしめられながら心の中で

(へー・・・やっぱ慶一の体ってすげーな・・・。ちゃんとこうやって抱きしめられたのは初めてだけど、がっしりした腕、厚い胸板はやっぱ鍛えてるだけあんなー・・・。うちの兄貴もそれなりに体鍛えてはいたみたいだけど、こりゃ、比べ物になんねえな・・・。でも、不思議と落ち着く感じだ・・・。なんかいいな・・・こうい

うのもさ・・・。）

慶一の体温を感じつつ、この状況を悪くないと思える自分がいた。

「んじゃ、いこーぜ？慶一。」

「おう。こっちはいつでもいいぞ？」

「おーっし！行くかー！！それえええええっ！！」

と、照れ隠しの掛け声とともに勢いよく飛び出していく私達だった。

やまとｓｉｄｅ

この遊園地に来る事になって、その時に慶一先輩は泉先輩達と言う事を聞く、と言う約束を取り交わしていた。

このプールに於いて、その約束が実行される時が来たようだったのだけど、その際に慶一先輩は泉先輩にその件に関して、少し意地悪をしたようだった。

そして、涙目になった泉先輩を見て、慌てて先輩は自分の意地悪を撤回し、この１泊２日の間だけは要求を受け付けるという妥協案を示したのを見て、私は

（先輩、意思が弱すぎるわね・・・。優しい、って事もあるんだろうけど、もっとしっかりしてもらわないと泉先輩達につけこまれちゃうわよ・・・？）

と、そう考えつつ、先輩に冷たい視線を向けていたが、泉先輩の要求に便乗する他の先輩達の様子を見た私も思わず先輩に泉先輩達のような要求を突きつけていたのだった。

そして、これまで順番に楽しんできたのだけど、いよいよ私の順番になったのだった。

何度も往復する慶一先輩に少し疲れが見えているようだったけど、私は

「お疲れ様。次は私の番ね?またご苦労様だけど、泉先輩の言う要求を受け入れたのは先輩な訳だし、私もしっかりと楽しませてもらうわ。」

そう声をかけると、先輩も苦笑しつつ

「はは・・・手厳しいな・・・。でも、男に2言はない、の言葉どおり頑張るだけさ・・・。それはともかく、やまと、早速準備しないとな。」

そう言う先輩の言葉に頷いて、私達はスタートの準備へと入った。

先輩に体を支えてもらいつつ抱きしめてもらいながら、私は心の中で

(・・・ふふ。懐かしいな、この感触・・・。思えば私は泉先輩達よりも前から、先輩の体の感触は知っていたのよね・・・昔のプールで足を吊って溺れそうになった時、先輩が私を抱き上げてくれた事が最初だったっけ・・・その後も何度か、先輩に抱きついたりとかした事もあったわね・・・今思うと凄く恥ずかしいけど、でも、これは私にとってのイニシアチブだし、ここだけは泉先輩達に勝ってる部分だと思いたいわ・・・。そうでなくても最近は泉先輩達に押され気味だしね・・・って!何考えてるの!?べ、別に私は先輩の事なんて・・・)

と、何時の間にか顔を赤らめている自分に気付きつつ葛藤していると

「・・・？やまと、どうした？準備出来たなら、そろそろ行くぞ？」

と言う先輩の声に我に帰り、私は慌てつつも

「え？あ、そ、そうね。それじゃ行きましょ？先輩。」

そう返事をすると、先輩も

「おう。それじゃ行くぞー！」

そう声を上げたのを受けて、私も気合を入れなおして

「行くわよ！？それっ！！」

と言う掛け声とともに、勢いよく滑り出した私達だった。

慶一ｓｉｄｅ

その後は、ゆたか達もおっかなびっくりであったが、ウォータースライダーを楽しんでいたようだったが、俺はあの後は下にいて、皆が滑ってくる様子を見つつ、万が一の為にウォータースライダーの出口付近で待機しつつ、水に浮いていたのだが、この日、プールにて最後のトラブルと遭遇する事になった。

それは・・・・・・

こなたｓｉｄｅ

慶一君とウォータースライダーを楽しんだ後は、ゆーちゃん達も交えて思い思いにウォータースライダーを堪能していた私達だった。

だけど、ここで、再びつかさとみゆきさんのドジっ子属性が発動する事になったのだった。

何度かペアを組替えてウォータースライダーを楽しんでいる時、つかさとみゆきさんの組み合わせになったのだけど、この2人が合わさった時、恐るべき事が起きた。

2人がもう一度滑ろうと準備をしていたのだけど、その時に先に前に座っていたみゆきさんの後ろにつかさがやって来ていた。

そして、もう少しでみゆきさんと合流となった時、つかさがスタート地点付近に溜まっていた水に足をとられた。

そして、「え?あ、あわわわわ・・・はうっ!」という声と共にみゆきさんの方へとつんのめったつかさは、その勢いで、スタート地点で準備をしていたみゆきさんを押し出す形になった。

私がそれを見て慌てて

「つ、つかさ?って・・・遅かったか・・・。」

そう呟いた時にはすでに遅く、つかさに押し出されたみゆきさんが悲鳴をあげながらスタートした所だったのだ。

「え?い、一体何が・・・き、きゃあああぁぁぁぁぁ・・・・・・・」

と言う悲鳴と共に滑り落ちていくみゆきさんと、そんなみゆきさんにもはや声も届かない状況だったけど

「あ・・・ゆきちゃん・・・ごめん・・・。」

と申し訳なさそうに謝るつかさを見て、私やかがみ達もまた、苦笑しつつため息をついていたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

パティやひより、こう達が滑り終わって、ちょうどプールから上がった頃、俺は次の子が降りてくる感じもあったので、ウォータースライダーの出口付近で待機しつつ、様子を伺っていたのだが、ふいにそこへ誰かの悲鳴が聞こえて来たのを感じた俺は、ふと出口の方へと顔を向けた。

そして、次の瞬間

「ぁぁぁぁぁあああああ！！」

と言う悲鳴と共に滑り降りてきたみゆきの姿は完全に俺にとって不意打ちだった。

そして、みゆきの体をかわす事も出来ず、俺はみゆきのボディアタックをもろに受ける事になった。

「へ？おわあああっ！！」ズドン！むにゅり！バッシャーン！！

という感触を受けつつ、俺はみゆきともつれるようにプールへと沈

み込み、またしても俺は気絶するという憂き目にあったのだった。

再び意識を取り戻した俺が見たものは、ひたすら俺に平謝りするみゆきと、俺の方に視線を向けてニヤニヤしているひより達。

そして、不機嫌オーラを発しているこなた達の姿だった。

俺はそんな光景を目にして、みゆきとの激突時の感触を思い出して顔を真っ赤にしたが、少しして冷静を取り戻して、再び陥ったこの状況に、はあ・・・と盛大なため息をつく事になったのだった。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第４話～（後書

次回でようやく1日目が終了です。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第5話～（前書

何とか4月の終わりまでにもう1本上げれました。

それでは本編をどうぞ。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第5話～

プールでのトラブルも一段落し、俺達はこのプールのもう1つの目玉であるウォータースライダーへと向かう。

プールでのトラブルの影響も体に少なからずあった俺だったが、俺はその影響を無理やり押し込めて俺を心配するこなた達をあおってウォータースライダーへと誘う。

その際にこなたがこっちへとやってくる際に俺と交わしていた約束を早速実行すべく提案してきたのを俺は軽い意地悪で返したのだが、そんな俺の返しに悩みに悩んでついには涙目になるこなたに慌てた俺は妥協案を示す。

そして、その妥協案を聞いたかがみ達もまた、こなたの言う要求と同じ事を求めてきたの受けて、俺は大きなため息をつきつつもその事を了承したのだった。

その後、ウォータースライダーで遊ぶ俺達だったが、最後の最後で再びみゆきのボディアタックを受けて気絶するというトラブルにあい、何とか復活した俺ではあったが、その時に蓄積されたダメージがついに俺の体を蝕み、そのダメージをも無理して押さえ込もうとした俺だったが、体のほうはそのダメージに素直に反応してしまった。

それゆえにその後、眩暈を起こして俺は動けなくなり、そんな俺を心配しつつも遊ぶ皆を見つめつつ時間を過ごしていた俺だったが、しばらくすると丁度いい時間になっていたので、俺達は一端ホテルへと引きあげたのだった。

そして、午後６：００にはホテルでの夕食を済ませ、俺は一端はみさお達と部屋に戻り、夜の予定を立てていた。

そして、話し合いの結果、ゲーセンへ行く事になったが、俺はまだ回復しきらない体を押して皆に付いて行こうとしたが、俺の体の状態が不完全である事を見抜いていたこなたが

「無理はしなくていいよ？慶一君、まだ完全に体が回復していないよね？行く時になったら呼びに来てあげるから、それまで寝ていなよ。」

そう言ってくれ、そして、他の皆もまたこなた同様に俺に休めと薦めてきたのを受けて、俺は皆の意見に従うことにして、ベットに横になり、出かける時間まで眠る事にしたのだが・・・・・・

結果から言うと、こなた達は俺を起こしには来なかった。

その代わりに、俺の側には何人かが残っていてくれたようだった。

俺は部屋の中にある何人かの人の気配を感じて目を覚ました。

「・・・ん・・・ふああ・・・あれ？今何時だ・・・？」

少し寝ぼけつつもそう呟く俺の声に気付いた部屋にいる誰かが俺に声をかけてきた。

「あ、先輩。起きたんですね？気分はどうですか？」

という声に体を起こしつつ振り向いてみると、そこには俺を見なが

らニコニコと笑うゆたかとみなみの姿があった。

「ゆたか？それにみなみも・・・お前らも皆と一緒に出かけたんじゃなかったのか？」

そう尋ねてみると、俺の疑問にみなみが

「・・・実は、先輩が休んだ後にゆたかも少し具合を悪くしたので、先輩の様子見も兼ねて、ゆたかを休ませていたんです・・・。それと、今は午後8時です・・・先輩はあれから1時間半くらい休んでいましたよ・・・？」

その言葉に俺は驚きつつ

「え？もうそんな時間なのか？少しのつもりがずいぶん寝ちゃったみたいだな。それで？ゆたかの方はもう大丈夫なのか？」

そう言いながら、ゆたかにも尋ねてみると、ゆたかも頷いて

「はい。少し休んだらすっかりよくなりました。先輩の方こそ大丈夫なんですか？」

そう聞いてくるゆたかに俺はとりあえず自分の体の状態を確認しながら

「ん。俺の方も問題ないみたいだ。なんなら俺の事ほおっておいて一緒にこなた達の所行ってもよかったのに、ゆたか達にも気を使わせちゃったみたいだな。」

そう自嘲気味に笑いながらそう言うと、ゆたかは首をフルフルと振

って

「そんな事はないですよ。それに、みなみちゃんにも残ってもらったのも私の事があったからですし。それに、残ってくれたのは私達だけじゃないんですよ？もうすぐ戻って来ると思いますけど・・・・・」

ゆたかはそう俺に説明した後に入り口のドアの方へ視線を向ける。

俺もまた、そんなゆたかの行動につられながら同じように入り口のドアの方へと視線を移した。

すると、程なくして部屋の呼び鈴が鳴らされたのを聞いたゆたかが「みなみちゃん、お願い。」と声をかけると、そんなゆたかの言葉に頷いたみなみが入り口のドアを開けた。

そして、更に2人が俺達のいる部屋へと入って来たのを見て、俺は思わず驚きつつ声をかけた。

「こう？それに、いずみも・・・ゆたか達以外に残ってくれたのはお前等だったのか。」

その俺の言葉に2人は俺を見てほっとしたような表情を向けつつ

「あ、先輩。起きたんですね？ええ、そうです。私達も先輩の事が心配だったんでここに残らせてもらったんですよ。」

「私もそうです。何となくほおっておけなくてそれで・・・とにかく元気そうな先輩の姿を見れたのでほっとしてますよ。」

と、そう説明してくれた。

俺はそんな４人に感謝の気持を向けつつ

「そうか。でも、なんだか悪いな。俺のせいでゆたか達の楽しむ時間をとらせちゃったようなもんだしな・・・あ、でも、誤解はするなよ?俺を心配してくれた事に関しては本当に感謝してるんだからさ。」

軽く笑いつつそう言う俺だったが、ゆたかをのぞく3人は微笑みながら俺を見ていたが、ゆたかだけはなんとなく複雑そうな表情を俺に向けていた。

その表情が気になった俺は、ゆたかに

「ゆたか、どうしたんだ?何か言いたそうな、そんな感じを受けたけど。」

そう聞いてみると、ゆたかは一瞬はっとして少しだけ俯いたが、ふっと顔を上げると、実に言いにくそうに俺にその理由を語ってくれた。

「あはは・・・さすが先輩ですね。やっぱりばれちゃいましたか。えっと、実はですね、私達がここに残っていたのは私の体の事も確かにあったんですけど、その事もまたこの状況の為に利用したんです。」

その言葉に俺は首を傾げつつ「この状況の為に利用?」と尋ねてみると、ゆたかはコクリと頷いて

「はい、そうです。先輩が寝入ってから、こなたおねーちゃんは先

輩の体の事を心配していました。そんな折に私も少し体調を崩していて、それならば、私の体調が戻るまで先輩の様子を見ていて欲しいと私とみなみちゃんに頼んだんです。その時にたまたま私達の話を聞いていた八坂先輩や若瀬さんがそれなら私達も一緒に様子を見させて欲しい、ってこなたおねーちゃん達に言ってくれてそれで、こなたおねーちゃん達も私達ならば任せられると思ってくれたみたいで、じゃあ、お願い、って事になったんですよ。」

そのゆたかの説明を聞いて、俺は、そんな風に気を使ってくれるこなた達にありがたく思いつつ

「そっか、納得。それにしても、こなた達もあれで中々鋭い所あるよな。まあ、それでも気を使ってくれた事は嬉しいけどな。それに、ありがとうな、ゆたか、みなみ、こう、いずみ。それと、すまないな、俺に気を使わせちゃってさ。ともあれ、俺もようやく復活したし、皆もゲーセン行ってるんだろ?俺達も皆と合流しよう。お前等に付き合ってもらった分の借りも返させてもらわないと、だからな。」

そう言ってゆたか達に礼を言いつつ、俺は皆に皆の所へ行こうと促す。

ゆたか達もそんな俺の言葉に顔を赤らめつつ照れながら

「い、いえ。いつも先輩には色々助けてもらったりしてますから、私もそんな先輩に1つでもお返しが出来た事が嬉しいですよ。私も体の調子は戻りましたし、いつでも行けますよ?」

「・・・私もそうです・・・先輩には誕生日や、クリスマスの事でもお世話になりました・・・それに私達の勉強も見てくれた・・・そんな風に私やゆたかを助けてくれる先輩に私も私の出来る事で応

えただけですから・・・。あ・・・その・・・私もいつでも出られますから・・・。」

「私は先輩に初めて会った時からお世話になりっぱなしでした。それに、私には他にたいした事もできないですし、だったら今の私に出来ることがあれば、そう思っただけですよ。でも、こんな事でも先輩に喜んでもらえるなら嬉しいですけど。私も用意は出来てます。いつでも出れますよ？」

そう言ってくれ、そして最後にこうが

「私はあの時からいつでも先輩の助けになろうと思ってましたからね、今更って奴ですよ。それに、これでも先輩の心配をしているんだって事はわかってもらいたいですよ？あの時から私達はそうして助け合ってきたじゃないですか。まあ、そういう事です。やまとも待っているでしょうし、出るなら行きましょう。あ、後、さっき私といずみさんが居なかったのは私達が先に泉先輩達についていってゲーセンの場所を覚えて来たからです。だから、そこまでの道も心配はないですよ？」

と、そう言ってくれた。

俺はみんなの気持をありがたく受け取りつつ、最後のこうの言葉に頷くと

「ありがとう。なら、今度は皆をつき合わせた分、俺が何かお返ししないと、だな。それじゃ、こう、いずみ。こなた達の所への案内を頼む。ちょっと遅れたけど、出発するとしようか。」

そう俺が言うと、皆も笑って頷いてくれ、そして、きちんと戸締りを確認した後、俺達はこなた達の待つゲーセンへと足を向けたのだ

った。

こうといずみの案内で俺達は苦もなくゲーセンへと辿り付く。

その豪華で立派な建物の外観に俺は思わず感嘆の声を漏らしていた。

「おお・・・こりゃすごいな。流石に話題の遊園地だけの事はある。こっちにもかなりの気合が入った建物の設計だよな・・・。」

俺の呟きに同じようにこの建物を初めて目にするゆたかとみなみも驚いていた。

「わあー・・・綺麗だねえ、みなみちゃん。それに大きな建物だよね？」

「・・・うん。私もこんな立派な建物を見るのは初めて・・・。」

そんな俺達を見て、すでに一度この建物を目にしていたこうといずみは得意げに

「ふふん、どうです？かなりのものでしょう。私も最初見たときには驚きましたけどね。」

「立派な建物ですよねえ・・・一度は見ているはずだけど、やっぱりびっくりしますよね。」

そんな風に言う2人に俺は苦笑しつつも

「こう。別にお前が建てた訳じゃないだろう？いずみ、ここにこなた達が来てるんだよな？」

そう言って一応こうにツッコミを入れつついずみに尋ねると、こう

はそんな俺のツッコミに不満そうな顔を見せて、そんなこうを苦笑しながら横目でみつつ、いずみは頷きながら

「そうです。泉先輩達は挌闘ゲームのコーナーに行ってると思いますよ?それと、柊先輩達はユーフォーキャッチャーの方へ動いていたのをこちらに戻る前に見てますし。」

その言葉に俺は顎に手を当てて、まずはどっちの様子を見に行ってみようかと思案していたが、とりあえず入った時にどちらか近い方の様子を先に見れば良いだろうという結論を出して、４人に

「ふむ・・・。とりあえず居場所は把握したよ。とりあえず、中に入ってみて近いほうの様子を先に見に行ってみようか。行くぞ?４人とも。」

そう言って中に入る事を促し、そんな俺の言葉に４人とも頷きで応えると、俺達は早速建物内へと足を踏み入れた。

そして、外の派手さも驚きだったが、中もまたかなり豪華な装飾をしてあるゲーセンの内部を見ると、どうやら、ユーフォーキャッチャーの方が近そうだと思った俺は、早速かがみ達を探す為に移動を始めた。

その際、こうは俺に

「あ、すいません、先輩。私、泉先輩のいる挌ゲーコーナーの方へ行ってますから。やまと達と後でこっちにも来て下さい。それじゃ、そういう事でー。」

そう言ってすぐさまこなた達がいるらしい挌ゲーコーナーへと走っ

て行くのを、残った俺達は苦笑しつつ、軽いため息をついて見送った。

その後は残った3人と一緒にやまと達が居るらしいユーフォーキャッチャーコーナーへと足を運ぶ。

そして、そこで見たものは、ｏｒｚの姿勢で落ち込む４人を慰める為に声をかけているみゆきとみくだった。

そんな状況を見てゆたか達も驚いていたのだが、俺はそんな6人の姿を見て苦笑しつつも6人の側へと近寄って声をかけた。

「よっ。遅れてすまない。まあ、その様子を見れば何が起きたのかは何となくわかるけど、欲しい物が取れなかった、って所かな？」

その言葉に４人を慰めていたみゆきとみく、そして、落ち込んでいたかがみ、みさお、あやの、やまとの４人が俺の方へと顔を向けて

「あ、慶一さん。もうお体のほうは大丈夫なんですか？」

「よかったです、先輩。私も少し心配していましたから。」

そう言って俺に笑顔を向けるみゆきとみく。

「うう・・・実はそうなんだけどね・・・って、慶一くん、もう体の方は大丈夫なの？」

「・・・結構難しいゼ・・・もう６０００円も使っちゃったってヴァ・・・あ、慶一、もう体の方はいいのかー？」

「やっぱり慣れてないと無理ね・・・あ、慶ちゃん、ようやく来たのね？もう平気？」

「・・・あれはどうしても取りたかったわ・・・あ、先輩。また無

理はしてないでしょうね？」

と、悔しそうな顔をしつつ、俺に体調を聞いてきつつ心配してくれるかがみ達。

俺はそんな６人に頷きながら

「ああ。少し眠ったらすっかり回復したぞ？気を使わせて悪かった。それにしても・・・相当つっこんだみたいだなあ・・・。」

と言う俺の言葉に安心したような表情を浮かべつつも俺の指摘に再び落ち込む４人とそれを苦笑しながら見ている４人。

「かがみ先輩達がやってたのってあれなのかな？よく見るとかわいいぬいぐるみとかあるね、みなみちゃん。」

「・・・そうだね・・・かがみ先輩達が狙いたくなる気持も少しわかるかも・・・。」

「へえ？結構可愛いのあるね。私もやってみようかな？」

「若瀬さんもやるの？なら、私もやってみようかな？」

「・・・ゆたかがやってみるって言うなら、私も挑戦してみようかな・・・？」

「やろうよ、２人共。これもきっといい思い出になると思うし。」

と、最後にいずみがゆたかとみなみにそう言うと、２人も笑顔で応えて、早速やりたいキャッチャーにとりついて品定めを始めた。

そんな３人の様子を見てかがみ達が

「やるのはいいけど、一筋縄では行かないわよ？私達でさえこのありさまなんだし。」

「そうだゼ？まあ、精々私らの二の舞にならねえようになー。」
「上手く取れないと熱くなっちゃうかもだから、お金の使いすぎには注意してね？」
「まあ、現実をその身に体験するのもいいかもね。」

と、そう3人に忠告していたのだが、そんな3人に俺とみゆきとみくは苦笑を浮かべていたのだが、ここでまさかの事態が起きた。

なんと、ゆたかとみなみといずみの3人は、狙った景品のぬいぐるみをそれぞれがあっさりとゲットしてしまったのだ。

「あ、とれたー。」
「・・・あ、私も上手く行った・・・。」
「やったー！一発ゲットー！！」

と言って喜ぶ3人を見た4人は、再びｏｒｚの姿勢で落ち込みながら

「・・・そんな・・・なんでああもあっさり・・・。」
「理不尽だ・・・私らの苦労って一体・・・。」
「あんなに・・・あんなに頑張ったのに・・・。」
「何で？私は何度やってもだめだったのに・・・。」

そう呟くのを聞いて、3人はばつの悪そうな顔をしつつ苦笑しながら

「あ、その・・・ごめんなさい。」
「・・・すみません・・・。」
「えーっと・・・なんて言ったらいいのか・・・。」

と言っていたのだが、俺はそんな4人を見てため息を1つつくと

「・・・まあ、なんだ・・・かける言葉が見つからないが、とりあえずはお前等が狙ってた物ってどれだ？このままじゃ気の毒だし、俺も協力するよ。」

そう言うと、４人は涙目の顔のまま俺の方を見てそして

「・・・ほんと？じゃ、じゃあ、あれなんだけど、取れそう？」

「わ、私はあれな？慶一、仇討ち頼むゼ！」

「ごめんね？慶ちゃん。私も諦めきれなくて・・・あれなんだけど、どうかな？」

「先輩、私もあれ狙ってるんだけど、行けそう？」

と、それぞれに指摘してきた景品を見て、俺はそれらをゲットすべく奮闘を開始した。

「おーし、あれだな？んじゃ、ちょっとやってみるぞ？」

そう言って俺はそれぞれの台でアームを動かした。

結果はそれ程使い込まずになんとか４人の狙った景品をゲットする事が出来た。

そのついでにみゆきとみくの分もゲットし、２人にもプレゼントをしたのだった。

「あ、ありがとう、慶一くん。これ、大事にするね？」

「サンキュー慶一。おかげで手に入ったゼ！」

「ごめんね？慶ちゃん。でもありがとう。凄く嬉しいよ？」

「ありがとう先輩。私の無念を晴らしてくれて。これ、大事にするわ。」

と４人は満面の笑みで俺に礼を言い、そして、みゆきとみくも

「なんだかすみません。私は特に狙っていた訳ではなかったですが・・・でも、嬉しかったので、これ大事にしますね？」

「私の分まで取ってもらえるとは思いませんでした。ありがとうございます。私もこれ大事にしますから。」

そう言って笑ってくれたのを見て、俺は内心ほっとしつつ頷いた。

ゆたか達もそんな俺達を見てほっとしたような笑みを浮かべながら俺達を見ていたのだった。

その後も少しだけこの場にいないメンバーの分の景品も確保した俺だったが、とりあえずここでの目的も果たしたと思ったので、俺は皆に

「そろそろこなた達の居る挌ゲーコーナーへ行くとしよう。皆ももう、こっちでの用事は大丈夫だよな？」

そう尋ねると、９人が頷いたのを見て、今度はこなた達の居る挌ゲーコーナーへと足を運ぶ俺達だった。

建物は２階構造になっていて、１階がユーフォーキャッチャー等の大型筐体が多いコーナーになっていて、２階にはゲーム筐体がメインに並ぶ場所となっていた。

俺達は建物の中央にある螺旋階段をあがり、２階へと移動する。

そして、周りを見渡してこなた達がいるであろう格ゲーコーナーを

探してみると、いち早くこう達の居場所に気付いたやまとが声をあげた。

「先輩、あっちにこう達の姿があるわ。どうやらあそこが挌ゲーのコーナーみたい。」

そう言うやまとの向いている方へと視線を向けると、そこにはまたしてもｏｒｚの姿勢でゲーム筐体の横で落ち込むこうの姿と、それすらお構いなしに得意げな表情でゲームを続けるこなた、そして、そんなこうを慰めるひよりやパティ、たまき、そして、こなたのいる筐体の側からそんな４人を苦笑しながら見ているつかさが見えた。

俺はそんな皆の姿を苦笑交じりに見つつも、かがみ達と顔を見合わせて頷き合うと、６人のいる方へと歩いて行き、こなた達に声をかけた。

「よう、こなた。調子よさそうだな。それと、こう、一応お気の毒様、と言っとくよ。ひより達も楽しんだか？」

と言う俺の声に、こなた達も

「あ、慶一君。どうやら回復はしたみたいだね。来るのを待ってたよ？対戦相手が八坂さんだけだと物足りないし、慶一君もよければ対戦しようよ。」

「けいちゃん、もう大丈夫なの？わたしもちょっと心配してたよ～。でも、とりあえずほっとしたかな。」

「先輩、どうやらもう大丈夫そうっスね。よかったっス。」

「ケイイチもフッカツしたコトデスし、オタノシミはこれからですネ！」

「なんにしても、安心しましたよ？お帰りなさい、先輩。」

そう言ってくれるこなた達に俺も

「ああ、なんとかね。こなた、つかさ、ひより、パティ、たまき、心配かけちゃったけど、もう大丈夫。でも、気を使ってもらって悪かった。感謝してるよ。」

そう言うと、こなた達も照れながらも笑顔で頷いてくれたのを見て、俺もまた笑顔を返した。

そして、たまきの側で落ち込むこうが

「・・・先輩ー、私の仇を取ってくださいよー・・・先輩、泉先輩に勝った事あるんですよね？」

と、涙目の顔を向けて来たが、俺はそんなこうにため息をつきつつ

「そうはいっても、俺だって１０回中２回勝てればいい方だぞ？とてもお前の仇を取れるほど余裕はないって。」

そう言うと、こうはますます涙目で「そ、そんなー・・・。」と言いながら更に落ち込む。

そんなこうを見たやまとは呆れ口調で

「そんなに悔しいなら、もっともっと練習して自分の力でリベンジしないさいよ？そういうのは自分の力で勝ち取ってこそ意味のあるものじゃないの？」

そんな言葉の槍をこうに突き刺すやまと。

その言葉にこうはますます落ち込んでいたのを、俺は気の毒そうに見つつ、さっきのユーフォーキャッチャーでゲットした景品を、こなた達にも渡した。

「待たせたお詫びも兼ねて、こんなものを下で取って来てみたよ。」

そう言って戦利品を手渡す俺だったが、そんな突然のプレゼントにこなた達も驚きつつ

「え？いいの？もらっちゃっても。なら、遠慮なくいただくよー。」

「ありがと～けいちゃん。これ大事にするね～？」

「私の分もっスか？嬉しいっスけど、なんだか悪いっスね。」

「オウ！これはワタシがホシがっていたものじゃないデスか。サスガケイイチ、わかってますネ！」

「ありがとうございます。気を使ってもらっちゃってすいません。」

と、それぞれにお礼を言ってくれ、そして、落ち込んでいたこうもと

「私の分も取ってきてくれてたなんて・・・ありがとうございます。仇討ちはしてもらえなかったけど、私の事も気にしてくれた事は嬉しいですよ。」

そう言うこうたちに俺はフルフルと首を振って

「いや、いいんだ。俺も皆には気をつかわせちゃったしな。それのお詫びみたいなもんだ。だから、この程度はどうって事はないよ。」

その言葉に、他の皆もにこにことしながら俺の方を見ているのを見て、俺は照れ隠しに、そんな皆から視線を外した。

そして、気恥ずかしさを誤魔化すように

「さ、さーて。折角ここに来たんだし、こなた、一手手合わせを頼むぜ？まだまだ時間もあるし、ホテルに戻るまでの時間は楽しもう。」

そう言うと、他の皆もそれぞれに頷きあって思い思いにゲームコーナーを堪能したようだった。

今回も１０戦したが、今回は１０回中３回の勝利を収める事が出来たので、前よりはこなたとの対戦勝率もアップしたようだった。

その後、散々に楽しんだ俺達はホテルのそれぞれの部屋へと戻って行った。

そして、別れ際に

「今日はお疲れ様ー。後１日あるし、明日も最後まで楽しんでいこうね？それじゃお休みー。」

「今日は楽しかったわ。明日ももっと楽しみたいわね。それじゃ、また明日ホテルのロビーで会いましょ？」

「今日は色々あったけど、楽しかったよ～。あしたも皆で楽しもうね？それじゃわたしも部屋に戻って寝るね～？」

「皆さん、今日はお疲れ様でした。私も今日は楽しかったです。明日もまた皆さんと一緒に楽しめる事を期待していますね？それでは私も部屋に戻ります。おやすみなさい。」

そう言って、こなた達４人も部屋に戻って行くのを見送りつつ

「ああ、お休み。明日も楽しんでいこうな。」

そう言って俺達は別れたのだった。

「今日はお疲れ様でした。明日も体調を崩す事無く楽しみたいです。それでは私も部屋に戻りますね?皆さん、おやすみなさい。」

「・・・後1日ありますが、明日も楽しんでいきたいです・・・。私もそろそろ休みます・・・皆さん、お疲れ様でした・・・。」

「明日はどんな事が待っているのか、とても楽しみっスね。私も今日はおとなしく休む事にするっス。それじゃ皆さん、おやすみなさい。」

「二ポンにキてハジメテのテーマパーク、とてもタノしいデス!アシタももっとタノしんでイキマスよ!?それではミナさん、Ｇｏｏｄｎｉｇｈｔ!!」

そう言いながら、ゆたか達も自分達の部屋へと戻って行く。

俺はそんなゆたか達を見送りつつ

「お休み。みなみ、ひより、パティ、ゆたかの事頼んだぞ?」

そう声をかけると、みなみはコクリと頷き、ひよりとパティは親指をビシッと立てて応えてくれた。

「今日は色々ありましたけど、明日は変なトラブルとかはなければいいですね。私も部屋に戻ります。それじゃお休みなさいー。」

「色々あった1日だったけど、楽しかったわ。先輩、もらったこれは大切にするわ。だから明日も楽しんで行きましょ?それじゃお休み、先輩。」

「今日は心地よい疲れがあるので、よく眠れると思います。明日も

よろしくお願いしますね？先輩。それじゃお休みなさい。」
「まだ1日あるし、わくわくしてます。明日も楽しみましょうね、先輩。それじゃ私も今日は休みますねー。」

そう言って部屋に引き上げていくこう達を見送りつつ

「ああ、今日はゆっくりと体を休めて明日に備えろよ？それじゃお休みなー。」

そう言ってこう達がいなくなった後、俺達も自分達の部屋へと戻っていった。

そして、先に俺が寝巻きに着替え終えてから部屋の外へ出て、あやの達の着替えが終わるのを待っていた。

『慶ちゃん、もう入って来ていいわよ？』

と言う声が聞こえたので、俺は『入るぞー』とドアの前で一声かけてから部屋の中へと入ると、着替えを終えたあやの達がそれぞれのベットに座っていた。

「今日は色々あったけど楽しかったわ。明日も楽しい1日になるといいわね。」
「そうだなー。ほんとに今日は色々あった・・・っ！！」
「ですね。でも、この仲間達と一緒なら退屈しなくていいですよ。」

3者3様にそう言っていたのだが、みさおだけが何かを思い出したのか、顔を真っ赤にして黙り込むのを見て、あやのといずみも不思議そうにみさおを見ていた。

俺はそんなみさおに

「どうした？みさお。急に顔真っ赤にして。」

そう尋ねると、みさおは真っ赤な顔のまま俺を睨みつけて

「うっさいな！なんでもねえよっ！＜何で慶一は平気な顔してられんだ？私はすっげえ恥ずかしいってのに・・・＞」

そう怒鳴りつけるみさおの姿に驚きつつ

「そ、そうか？なら、いいけどさ・・・。」

みさおの突然怒り出した理由がわからずにとりあえずそう答えた俺だったが、あやのといずみは何故みさおがあんな態度を取ったのか、その理由に気付いたのか、ニヤニヤしながら俺とみさおを見ていたのだった。

だが、そんなあやの達の態度を見て、俺はみさおの怒った理由に気づく。

けど、意識したら恥ずかしくてこの場にいられそうになかった俺は、その理由を無理やり押さえつけて努めて平静を装いながら

「ま、まあ、とりあえず明日もある事だし、そろそろ休もうぜ？」

そう話を誤魔化しつつそう言うと、みさお以外の2人は頷いて

「そうね。それじゃそろそろ休みましょうか。慶ちゃん、最後にベッドに入るのなら、電気お願いね？」

「ふああ・・・私ももう眠いです。私もそろそろ寝ますねー？」

と言ってベッドに潜り込んだ。

みさおは俺をしばらく赤い顔のまま睨みつけていたが、やがて

「・・・私ももう寝る。慶一、昼間の事に関してはもう一度謝っとく。ごめんな？それと、その・・・慶一も私が顔を赤くしてる理由には気付いてんだろ？誤魔化そうとしてたけど、私にはわかるぞ？最後に1つだけ聞かせろよ？慶一は私とあんな事をして・・・嫌だったか？」

そう言ってくるみさおに俺は再びその事を意識してしまい、顔を赤くして照れていたが、それでもみさおにはちゃんと言わなきゃいけないと思い、俺は電気を消すために部屋の電気スイッチの所に立ってみさおに背を向けながら

「・・・もう終わった事だ。俺は気にしてない、と言ったと思うけどな。それと、流石に気付かれちゃったか・・・俺も結構顔に出やすいみたいだな。さっきみさおが言った事だけどな？俺は別に嫌じゃなかったよ。かなり照れくさかったのは確かだけど、少なくとも俺はお前を嫌だとは思っていない。それだけははっきりと言っておく。ま、まあ、そう言う訳さ。それじゃ、明日も楽しもうぜ？それじゃ、電気を消すぞ？」

そう言って電気スイッチに指を置く俺に、みさおはベッドにもぐりこみながら

「・・・ありがとな？慶一。それ聞けただけでもよかったぜ。それじゃ私もそろそろ寝るよ。慶一、明日も楽しくやろうぜ？」

そう言うみさおに俺も

「ああ。こうやって皆で思い出を作っていこう。いつか皆と笑って話せるように。それじゃ、お休み、みさお。」

そう言った後、電気を消して、俺も自分のベッドへと潜り込み、夢の世界へと旅立った。

みさおｓｉｄｅ

（・・・ふう、今日はほんとに色んな事あったゼ・・・でも、まさか私も慶一とキスする事になるなんて思わなかったよなー・・・それに今日も慶一に迷惑かけちゃったし、正直それを思い出すと凹むゼ・・・。でも・・・あいつは私のあの行為を嫌だとは言わなかった・・・それだけは嬉しいかな？なんにしてもまだ後１日あるんだし、今日以上に楽しんで、慶一が言っていたように、楽しい思い出つくらねえとな・・・。）

そこまで考えたあと、私は睡魔に負けて、そこから先の思考を切り離したのだった。

後１日、どんな思い出を作れるか、その事を期待しながら・・・・・。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、第5話～（後書き）

次は2日目の行動と物語です。

どうぞお楽しみに。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第1話～

前回の投稿より、大分遅れてしまい、申し訳ありませんでした。
今回のスランプはかなり酷かったのですが、徐々に立ち直って行きたいと思っていますので今後ともよろしくお願いします。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第1話～

初日の夜、俺は少しの間、昼間に蓄積させていた体のダメージを心配してくれたこなたの気遣いを受けて少しの間、部屋で休んでいた。

そして、皆はそんな俺を起こさないようにしつつ、夜の予定でもあったゲームセンターへと繰り出していた。

その事に気付かない俺は、結局予定時間以上に休む事となり、しばらくして目を覚ました時、俺の部屋にはゆたかとみなみが俺の様子を見るのと、少し体調を崩したゆたかの様子を見るために部屋に来てくれていたのだった。

そして、俺を気遣い、残ってくれていたのはこの2人だけではなく、こうといずみもまた、俺が起きた時に皆のいる所へと案内をしてくれる為に戻って来てくれた。

俺は、ゆたか達がこの部屋に居た理由を聞き、こう達と合流してからこなた達の向かった場所へとこうの案内で向かった。

目的地についた俺達は、その日の最後を目一杯楽しんで初日を終える。

そして、次の日の朝、俺はあやの達よりも先に起き出し、素早く服を着替えると、ルームキーをあやのの枕元にメモ書きと共に残して部屋を出た。

まだ太陽の登りきっていない時間帯、俺はホテルの案内にあった最上階の展望ラウンジへ朝日を拝みに向かう事にしたのだった。

エレベーターの扉の前でぼーっとエレベーターがやってくるのを待っていた俺だったが、ふいに背後から俺は声をかけられた。

「あ、おはよー慶一君。相変わらず早いねー。」

「おはよう、慶一くん。あんたもどこかへ行くつもりなの？」

「おはよ～けいちゃん。今日はわたしも早めに起きちゃったんだ～。」

「おはようございます、慶一さん。今日もいい1日になりそうですね。そういえば少し気になりますね。よろしければ目的地等を教えていただけたらと思いますが。」

と言う4人の声に俺は振り向くと4人に手を上げつつ

「お？おはよう、こなた。まあ、俺の早起きはいつものことさ。それと、つかさ、よく起きれたな。かがみ、みゆき。これからちょっと最上階の展望ラウンジに上がって朝日でも見てみようかと思ってな。皆もよかったらどうだ？」

そう言って、挨拶を返しつつ、かがみとみゆきに目的地を伝えると、こなたは俺に

「おお！慶一君もそこへ行こうとしてたんだ。奇遇だねー。実は私達もそこへ行くつもりだったんだよね。みゆきさんが皆で一緒に行ってみないか？って私達に声をかけたんだよ。」

そう説明してくれるこなたに俺は頷きつつ

「なるほどな。んじゃ、折角だし、皆で行ってみるか。」

そう言うと、皆も笑顔で頷きつつ

「うんうん。それじゃ早速だね。エレベーターももう少しで来るし、行ってみようかー。」

「どんなのか少し楽しみかな？」

「わたしも～。八坂さん達は昨日の夜に様子見も兼ねて見に来てみたらしいよ～？その時は夜景がかなり綺麗だったって言ってたのを聞いてるしね～。」

「私もそちらが見られなかった事が残念に思いましたので、せめて朝日が登る所だけでも見たいと思いましたから。今の時間なら、丁度日の出に間に合うかと思いますよ？あ、エレベーターが来ました。それじゃ早速行きましょうか。」

と、最後にそう言うみゆきの言葉に頷きつつ、俺達はエレベーターに乗り込んで最上階へと向かった。

そして、最上階の展望ラウンジへとやってきた俺達は、大きな窓際へと行くとそこから眼下を見渡して見る。

「へえ？これは凄いな。ここからほぼ園内を一望出来るみたいだ。確かに夜はライトアップされたりするだろうから、これは夜に見れなかったのは惜しい事をしたかもだな。」

そう言う俺にこなたが頷きつつニヤニヤとした顔を俺に向けながら

「ふーん？だったらさ、また来ればいいんだよ。今度は2人だけで、ってのもいいよねー？」

と、そう爆弾発言をすると、途端にラウンジの空気が冷えたような気配を感じつつ

「・・・あー・・・えっと・・・一応聞いておくけど、本気、か？」

戸惑いつつもそう返す俺にこなたはニヤニヤとしたまま

「んー？私は別に冗談を言ったつもりはないけどねー。」

そう言い、その後不安そうな顔へと表情を変化させたこなたは俺に上目使いで

「・・・それとも、私とじゃ嫌かな？」

そう言ってくるこなたに俺はあたふたしつつ

「い、いや、誰もそんな事は言ってはいないけどさ。でも、いいのか？その相手が俺でさ？」

そう答える俺にこなたは再び笑顔になりつつ

「まあねー。だからこそ意味があるんだしさ。」

と、少し意味深な事を言うこなたに俺は戸惑いつつもその”意味”について考えを巡らせていたが、その背後にて3者3様に考えを巡らせる3人の心の内に俺は気づかずにいた。

かがみ、つかさ、みゆきｓｉｄｅ

私達は慶一くんとエレベーターの所で出会い、目的地が同じと知って、私達は皆で展望ラウンジへと出向いた。

そして、そこで思わずこなたが落とした爆弾に、私達もまた、こなた達に対して黒オーラを発しつつも心の中で考えを巡らせていた。

（こなたの奴めー・・・ちゃっかりとアピールする作戦に出るなんて、こっちはすっかり油断してたわ・・・。それに慶一くんも慶一くんよ・・・ちゃっかりこなたの策に引っかかって・・・でも、その作戦は私も捨てがたいし、私も思いきってアピールしてみるべきかしらね・・・。）

（わあ～・・・こなちゃん、大胆発言だね～・・・でも、わたしも少しうらやましいな～・・・わたしはこなちゃん程積極的になれるわけじゃないしね～・・・でも、思い切ってお願いしてみたら、けいちゃん、応えてくれるかな～・・・？）

（泉さんの積極的な行動は毎回驚かされますが、今回もまた、でしたね・・・。本当に泉さんには見習うべき所がたくさんある事にも気付かされます・・・。でも、私もこのまま引く訳には行きません。私も思い切って慶一さんに声をかけてみるべきでしょうか・・・。それにしても、慶一さん、乗せられすぎだと思いますよ？もう少ししっかりして欲しい所でもありますね・・・はあ・・・。）

と、私達はそれぞれにそう考えつつ、今後の慶一くんへのアピールをいかにすべきか、と悩んでいたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなたの言葉に動揺しつつ、他の３人の思惑にも気付かない俺は、とりあえず景色を見ようと思い直して窓際へと視線を移したのだが、その時に慌ててこの場所へとやってくる騒がしい声に俺は思わず振り返っていた。

そして、視線の先にいたのは・・・・・

「はあ、はあ・・・な、何とか間にあったー・・・。」
「まったく・・・こうが言い出しっぺじゃないの！間にあったからいいけど、間に合えなかったとしても私は知らないわよ？まったく・・・。」
「あ、あはは・・・ごめん、やまと。」
「はあ、はあ・・・つ、疲れた・・・・・・。」
「みく、お疲れー。あれ？先輩達だ。」

と、言い合いをしつつ、最後に俺に気付いたたまきが俺を指差しながらそう言って声をかける。

それに気付いた3人も俺に声をかけてきた。

「あ、おはようございます、先輩達。先輩達も朝日を眺めに？」
「おはよう。先輩達もここに来てたのね？騒がしくしてしまってごめんなさい。」
「おはようございます。どうやら先輩達も同じ考えでここへやってきたみたいですね？」

と言う3人に俺達は頷きつつ

「まあな。昨日ホテルの案内図を見ていて気になっててな。昨日は夜景も見れなかったからせめて朝日でも拝もうかと思ってな。」
「私達も同じだよ？とは言っても、私達はエレベーターを待っている慶一君に偶然会ったんだけどね。」
「まあ、私達は私達で話し合ってここへ向かおうっていう事になっただけだしね。」
「ゆきちゃんから話を聞いてたからね～。起きるのは辛かったけどさ、えへへ。」

「体験は今日までですし、一度見ておきたいと思っていました。八坂さん達もそう見たいですね？その様子ですと・・・。」

そう応えると、こうが頷いて

「なるほど、そういう事ですか。高良先輩の言う通りですよ。夜景見に来れなかったですし、せめて朝日の昇る所でも見ようと思いましたので。結果的にやまと達にも付き合ってもらいましたが。」

その言葉にやまと達と俺達は苦笑していたが、そこに更に1年生組もやってきた。

「あ、おはようございます、先輩達。皆さんここに集まっていたんですね？」

「・・・おはようございます。考えていた事は同じ、という事みたいですね・・・。」

「おはようございます、先輩達。私もゆーちゃん達に付き合って来てみましたっス。」

「グッモーニン！やはりカンガえるコトはミナオナジみたいですネ！こういうトコロでもツナガリをカンじられるのはとてもうれしいデス！！」

そう言う4人に俺は笑顔を返しつつ

「おはよう、皆。そうだな、でもこれであやの達も来たら完璧かもしれないけどな。」

そう言う俺にこなたはニヤリと不気味な笑みを浮かべつつ

「慶一君、それってフラグだよー？まあ、私も何となく全員集合し

そうな気はしてるけどねー。」

とこなたが言った矢先に俺達の後ろから声がかかる。

「あ、いた。おはよう慶ちゃん達。書置きを見て慌ててみさちゃんを起こして駆けつけたの。まだ日の出に間にあってる?」

「ヴァー・・・眠いゼー・・・おはよー皆ー・・・ふああ・・・。」

「あはは・・・日下部先輩、しっかり。おはようございます皆さん。私達間に合ってますか?」

と声をかけてきたあやの、みさお、いずみの3人に俺は軽く笑いつつ頷きながら

「ああ。まだ間に合ってるから大丈夫だぞ?なるほど、こなたの言ったフラグね・・・確かに立ってたな・・・。」

そう言う俺に何人かはサムズアップし、また何人かはため息をつき、そして何人かは意味がわからず苦笑していた。

そうこうしているうちに日が差し始めたので、俺は皆に

「お?どうやら日が昇り始めたぞ?それじゃ早速景色を拝ませてもらいますかね。」

そう言うと、皆も顔を見合わせて頷きあい、景色のよく見える窓際へと歩みを進める。

そして、徐々に眼下のランドへと太陽の光が差し込まれる様を見ながら、俺達はそれぞれに思ったことを呟いていた。

「・・・中々見事なものだな・・・上から見るランドも中々綺麗だ。」
「うーん・・・いい眺めだねー・・・写真取っておこうっと・・・。」
「・・・夜の方もやっぱり気になるわね・・・思い切って私も慶一くん誘ってみようかしら・・・。」
「わあ～・・・なんだか感動するな～・・・みんなで見れたのはよかったかも～。」
「素晴らしい眺めですね。これは本当に夜の方も確認しておきたかったですね・・・。」
「わあ・・・これは見れてよかったかもね・・・今度はあの人と2人で来て見たいかな？」
「おおー！こりゃすげえな。私もちょっと感動だゼ！！」

と俺達3年生組がそう呟くと、2年生組もまた景色を見ながら

「確かにこれは一見の価値あり、でしたね。私も写真はとっておこう。」
「綺麗な朝日・・・夜の方も見てみたかったわね・・・ちょっと惜しい事したかしら・・・。」
「いい眺め・・・今日もいい天気になりそう。この眺めも心には焼き付けるけど、今日の思いでも、かな？」
「うんうん。やっぱり噂どおりいい感じ。これで今日1日も楽しめそう。」

と、思い思いに呟く2年生組。

そして、1年生組もその景色を見て感動したようで、思わず今の気持を口に出していた。

「わあー・・・綺麗だね、みなみちゃん。」
「・・・そうだね、ゆたか。本当に先輩達は私達を素晴らしい所へと連れて行ってくれる。凄くありがたいね・・・。」
「ネタも集めやすくて私としてもとても充実してるっスね。先輩にはいつも感謝かな。」
「まったくデス。ワタシも二ポンにキてからはケイイチにはおセワになってばかりデスね。いつかこのナンブンのイチでもいいからオンガエシをしたいデス！」
「パーさんも結構義理堅いんだね？でも、その意見には賛成かな？」

それぞれに自分達の思いを口にする中で最後の方でパティの言った事に俺は少しだけ照れつつ

「はは。気持だけ受け取っておくよ、パティ。さて、もう少し景色を眺めていたいけど、もう少ししたら朝食だな。とりあえず一度部屋に戻って遊びに行く準備をしてから朝食にするか。それじゃ、皆、行こうぜ？」

そう声をかける俺だったが、こなたが俺に

「待ってよ、慶一君。ここで記念に皆で写真撮って行こうよ。それくらいの時間はまだあるでしょ？」

そう言うこなたに俺は自分の携帯を取り出して時間を確認してから

「・・・ふむ。まだそれくらいならいけそうだな。そういや誰かカメラって持ってたっけ？」

と、皆を見渡しながらそう言うと、こなたは待ってましたと言わんばかりに

「はいはーい！私が持ってるよー。お父さんからお古でもらった奴だけどまだ充分に使えるタイプのデジカメだから、問題はないと思うよー？さて、それじゃ・・・っと。すいません、シャッターをお願い出来ますか？」

そう言ってデジカメを取り出し、丁度近くにいたホテルの従業員さんに写真撮影をお願いすると、従業員さんは快く頷いてくれ、それを確認したこなたはカメラを従業員さんに預けて俺達の方へと・・・猛ダッシュで戻って来たのを見て、俺はその行動に慌てつつ

「お、おい！こなた、いきなりダッシュしてどうし・・・うお！？」

そこまで言いかけた時、こなたの行動に何かを察していた数人がすぐさま俺の側へと配置につこうとしているの感じ、俺はその勢いに押されつつもとりあえずこなた、かがみ、つかさ、みゆき、みさお、やまとの６人が俺を取り囲むように動くのを驚きつつも見ていたのだった。

そして、いち早く俺の両サイドへと配置についたのは、こなたとやまとの２人だった。

「ふっ。もらったよ！！」
「反対側を譲れないわね。」

と言う２人に一歩出遅れた残りの４人は悔しそうな表情を見せつつ

「くっ！出遅れたわ・・・でも、まだ慶一くんの斜め後ろは譲らないっ！！」
「はわわっ！みんな早いよ～・・・。」

「なら私は左後ろを・・・ああっ！！」
「残念だったな、高良。こっちは私が抑えたゼ！？」
という感じで、俺の両斜め後ろはかがみとみさおの２人が配置についた。
ポジションを取れずがっかりした表情を見せるつかさだったが、少しでも俺に近い方へと配置についたようだった。
そして、そんなみんなの行動に苦笑を向ける他の皆にこなたが
「皆ー！皆もおいでよ！全員で集合写真撮ろうよー！」
と、こなたが声をかけると、皆もお互いに頷きあいつつ俺達の方へとやってきて、それぞれに配置についたのだった。
そして、それを確認したホテルの従業員さんは俺達にカメラを向けて
「準備はよろしいでしょうか？それでは撮りますよー？では、はい、チーズ！」
そう言ってシャッターを切る瞬間、両サイドにいたこなたとやまとは俺の腕に抱きついた。
俺はその行動に思わず驚いたような顔になるが、その状態で写真は撮られる事となってしまったのだった。
カメラを返してもらって撮れた写真を確認しながらこなたは
「ふふふ、いい写真が撮れたよ。皆にも後で焼き増しするからねー

？」

そう言うこなたに俺は軽いため息をつき、何人かは不機嫌そうな表情を見せ、また何人かは苦笑していたようだった。

「じ、じゃあ、写真も撮った事だし、朝食に行くか。下へと降りようぜ？皆。」

そう言って、この場に充満しつつあった黒い気配に怯えつつも話を強引に変えると、皆にそう言ってエレベータの方へと逃げるように足を向ける俺。

その言葉に一端は黒オーラを収めつつ皆も俺の方へとやってきたのを見て、ほっと胸を撫で下ろしていた俺だった。

その後、ホテルで用意された食事を済ませて俺達は一端部屋へと戻って園内のガイドブックを手にして再び出かける準備を済ませて俺達はロビーへと集合する事になった。

ロビーに来てみると、俺の他はまだ誰も来ていないようだったので、俺はガイドをめくりつつ皆がやってくるのを待っていた。

「お待たせ、慶一くん。皆ももうすぐ来ると思うわ。」

ガイドを見ていた俺にそう声をかけてきたのは、準備を済ませて一番にやって来たかがみだった。

「お？流石に早いな、かがみ。今日はどこを回ってみるとか、もう決めてあるのか？」

そう尋ねる俺に、かがみは”にしし”と笑うと

「まあね。絶叫マシン系を中心に攻めようかな、と思ってるのよね。もちろん慶一くんにも付き合ってもらうけどね。日下部から聞いてるわよ?前に日下部達と遊びに行った時に慶一くん、ジェットコースターの不意打ちにかなり面白いリアクション見せてたって。」

その言葉にあの時の不覚を思い出した俺は顔を赤くしつつ

「みさおの奴め、余計な事を・・・あ、で、でも、勘違いはするなよ?不意打ちに驚いただけであって絶叫マシンが怖いって訳じゃないんだからな?一応誤解のないように行っておくけどさ。」

そう言い訳する俺にかがみは益々嫌な笑みを浮かべながら

「ふーん?まあ、そういう事にしておいてあげようかしらね?何にしても、私達の時も面白いリアクションを期待してるわよ?」

そう言うかがみに俺はただただ苦笑するしかなかった。

そうこうしているうちに他の皆もやってきた。

「お待たせー。ゆーちゃん達ももうすぐ来るよ?皆が揃ったら早速出発だね。」

「ねえ、こなちゃん。絶叫マシン系、わたしも付き合わなきゃだめ?わたし怖いの苦手だよ~・・・。」

「ふふふ。やると決めたからには皆で行くよ。でも、心配はいらないって。私達も一緒だしさー。」

「泉さん、お手柔らかにしてあげてくださいね。私は興味がありますし、それ程絶叫マシン系は苦手ではありませんのでいいのですけ

ど。」
「へえ?それは以外だね?みゆきさんの事だからてっきりこういうのは苦手なのかと思ったよ。」
「うふふ。実は母と一緒に行った時に母も怖いもの見たさで絶叫マシンには乗るのですけど、私よりも怖がる母を見ていたら、そのうちに私のほうがあまり怖くなくなってしまったんですよね。ある意味母のおかげで絶叫マシンの恐怖を克服できたような感じですけど。」

そう言うみゆきに俺は感心しつつ

「へえ?あのゆかりさんがねえ・・・。なんか、みゆきがしっかり者になったりする理由がわかる気がするな。」

その言葉にみゆきは顔を赤くして照れながら「きょ、恐縮です・・・。」と言うのを見て、俺達も笑顔を向ける。

そうこうしているうちに他のメンバーも集まって来た。

「お待たせ、慶ちゃん。時間まだ、大丈夫かな?」
「わりい慶一、私がちょっと部屋に忘れ物しちゃって、あやのに付き合ってもらってたゼ。少し遅れちまったけど、何とか間に合ってるよな?」

と言うあやのとみさおの2人に俺は頷きつつ

「ああ。他にまだ来てない人もいるし、充分間に合ってるから大丈夫だぞ?」

そう言う俺に、2人共ほっとしたような表情を見せていた。

そして、そのすぐ後にこう率いる2年生組がやって来た。

「お待たせしました。2年生組到着です。」

「今回は中々早かったわよ?こう。普段からもこうしていてもらえるととても楽なのだけど。」

「相変わらずきついね、やまとさん。」

「まあ、やさこの普段の行いってやつじゃないかなー?」

と俺に一応の到着報告をしたこうだったが、他のやまと、みく、たまきに痛い所を突かれたこうは、涙目になって凹んでいた。

「お待たせしましたー。私達も到着です。皆さん、待ちましたか?」

「・・・とりあえず、間に合ったみたいだね・・・。」

「パティ、ガイドブックはちゃんと持ってきたよね?」

そう指摘するひよりにパティも手持ちのバックからガイドブックを取り出して

「もちろんデス!このトオリヌカりはありまセン!ハリキってイくですヨ!」

と、相変わらずのテンションのパティにいずみも圧倒されつつ

「あ、あはは・・・いつもながらテンション高いね、パーさん。とりあえず、こちらも準備良しですよ?先輩。」

若干引き気味に笑顔を引きつらせつつも俺にそう報告してくれるいずみに頷いて

「よし。全員揃ったみたいだし、今日1日楽しんで、俺達の思い出を作って行くとしよう。それじゃ皆、行こうか！」

俺のその言葉に皆もテンション高く「「「「「「「「「「「「

「おー！！」」」」」」」」」」」」

と声を上げて、幸運の招待状の最後の1日を楽しむ為に園内に繰り出していく俺達だった。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第1話（

次回は園内の乗り物に乗っていく予定。

なるべく早い投稿を目指します。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第2話～

スランプや身内の不幸なども重なり投稿が遅れましたことをここにお詫びしつつ、本編をどうぞ。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第2話

初日のドタバタをなんとか乗り切り、体にダメージを残しつつも何とかその日を終えた俺だった。

そして、翌日の早朝に俺は、前日に話題に出ていたこのホテルの展望ラウンジの事を思い出す。

夜景は見れなかったが、せめて朝日だけでも拝もうと俺はまだ薄暗い時間に起きだして展望ラウンジへのエレベーターを待っていたのだが、そこに俺と同じように展望ラウンジへ向かおうとしているこなたたちと鉢合わせた。

目的地は一緒だったので、俺達は連れ立って展望ラウンジへと上がる。

そして、結局全員が同じ場所へと集合する事となり、皆で朝日の昇るランドの様子を眺めて記念の写真を撮る俺達だった。

その後は朝食を済ませ、集合場所にて皆を待ち、全員が集まった所で早速最終日を楽しむ為に俺達は園内へと繰り出して行くのだった。

手始めに俺達がやってきたのは、このランドの目玉の1つでもある絶叫マシンの”セブントルネードスター”と呼ばれる連続弾丸7回転が特徴の結構大きいジェットコースターだった。

俺はジェットコースターを見上げながら

「おー・・・これはかなり凄そうだな。こいつは中々のスリルが期

待できそうだ。」

そう呟く俺にかがみがニヤニヤとしながら

「ずいぶんと余裕そうだけど、ほんとにこういうの平気なんでしょうね？日下部から話を聞いた限りじゃ、慶一くん結構慌ててた、とか聞いてるんだけどさ。」

と言うかがみに俺は苦笑しつつ

「いや、だからそれは不意打ちだったからそうだった、ってだけだよ。心の準備が出来てればこんなのなんでもないさ。」

そう答える俺に、かがみはニヤつきながらもなおも疑惑の目を俺に向けていたが、その後ろでこなたとみさおとこうの3人が何かを企む表情を見せている事に気付かない俺だった。

そして、そんな最中、コースターを見つめながら何かを決意する表情を見せるゆたかと、そんなゆたかに心配そうな表情を見せつつそんなゆたかを見ているみなみの姿が目に入ったので、俺はかがみの追及をかわしつつ、そちらへと足を向けた。

そして、俺はそんな2人に声をかけてみたのだった。

「ゆたか、どうしたんだ？なんだかずいぶんと思いつめたような表情をしてるが。みなみもなんか心配そうな顔しているし、ちょっと気になってな。」

そう声をかけると、ゆたかは少し思いつめた表情のまま、みなみも心配そうな表情のまま俺の方を見ながら

「あ、先輩。実はですね、先輩も私の体の事は知ってますよね？それに、私自身も自分の体の事は良く分かっているんです。そんな私ですが、折角この場所へとやって来れる機会を得た訳ですし、どうせならこの絶叫マシンに挑戦してみたい、って思ったんです。その事をみなみちゃんに話したんですが・・・みなみちゃんはそんな私が心配みたいで・・・。」

「・・・私は、そんなゆたかが心配で、それで、止めようと思ったんですが・・・今回のゆたかの決意はかなり固いみたいで・・・それでどうしよう、って思っていたんです・・・。」

そう答える2人に俺は、腕組みしつつ

「そっか・・・。ゆたか、今回のこれは結構ハードだぞ？それでも挑戦したいと思ってるのか？」

そうゆたかに尋ねると、ゆたかは強い決意を込めた瞳で俺を見つつ力強く頷くと

「はい！いつも体が弱いから、って理由もあって私は今までこの手の乗り物を敬遠させられてきたんです。私自身もその事は分かっていたので仕方ない、って今まで諦めて来ました。でも、これからもそのまま、っていうのは嫌なんです。私は先輩やこなたおねーちゃんやみなみちゃん達とこれまで過ごして来ました。みんなには私も元気をもらって来ましたし、最近では自分の体も少しづつですけど、前よりもずっと丈夫になって来たって感じています。だから、こういうのにも挑戦して、私はもっともっと慣れて、そして、元気になるための力に変えたいって思ってるんです。だから、その為に私はこれに乗りたい、ってみなみちゃんにも言ったんですよ。」

そう、今回の決意の理由についてゆたかは俺に話してくれた。

「ふむ・・・なるほど、ゆたかはゆたかなりに考えていたって事か。みなみは、ひょっとしてその表情はそんなゆたかが心配で、って所か？」

そう言う俺に、みなみは頷きつつ

「・・・私は出来るなら、ゆたかの気持を尊重してあげたいと思っています・・・ですが・・・それでも、今回乗るコースターは他の遊園地で見るものよりも凄そうに思えて・・・だから、私はゆたかの事が余計に心配で・・・・・・先輩、私はどうするべきでしょうか・・・？」

そう言って俺に困惑顔を向けるみなみの言葉に顔を伏せてしばし考え込んでいた俺だったが、考えを纏めてから俺は顔を上げてみなみに

「みなみ、お前がゆたかの気持を尊重しようって言うのなら、ゆたかの意見、受け入れてやれ。その上でゆたかを見守りながら、お前の出来る事をやればいいさ。なあに、確かに凄いコースターだけど、ゆたかは日頃成美さんの運転を体験してるんだから、それに比べたらこっちのコースターの方が可愛いものかもしれないぞ？」

そう言葉をかけると、みなみは俺の言葉に少し考え込む表情を見せたが、みなみもまた何かを決意したような表情を俺に向けると

「・・・わかりました。ゆたかの意見を尊重しつつ、ゆたかを見守ります・・・先輩のご意見も心にとどめつつ私はゆたかの為に出来る事をします・・・。」

そう言葉を返すみなみに俺も頷いて

「ああ。ゆたかの事、頼んだぞ？みなみ。それと、ゆたか。少しづつでも強くなって来ているお前の姿が見れたのは嬉しい事だった。でも、決して慌てるなよ？ゆっくり確実に体を慣らして行くようにな。」

そう2人に答えると、2人は力強く頷いて

「わかってます！先輩の忠告、ちゃんと心に刻んでおきますから。」

「・・・ゆたかは、私が見守りますから・・・。」

そう答える2人に俺は満足げに頷くと、そんな俺達のやりとりを見守っていたひよりとパティ、いずみも俺達の側へとやって来て

「先輩、みなみちゃん。私達も忘れてもらっちゃこまるっス！私だって2人の友達なんスから！」

「ワタシだってそーデス！ワタシもフタリをタスけマス！」

「私達も友達ですからね。友達として2人の手助けをするつもりです。」

そう主張する3人に俺は圧倒されつつも頷いて

「わ、わかったわかった。皆もよろしく頼む。それじゃそろそろ行くとしよう。皆も待ってるだろうしな。」

そう言う俺に、皆も頷くと、俺達はこなた達の待つコースターの入り口へと戻って行くのだった。

俺を出迎えたこなたは俺に

「慶一君、ゆーちゃん達と何か話し込んでいたみたいだけど、何かあったの？」

そう聞いて来たので、俺はこなたに先程のゆたかたちとのやりとりを話す。

こなたは事情を聞くと、顎に手を当てつつ

「・・・なるほどねー。ゆーちゃんも頑張ろうとしてる、って事みたいだね。だったら私も義姉としてゆーちゃんの決意を見守るのみ、かな？」

そう言うこなたにかがみはこなたに少々不信感を思わせる視線を向けつつ

「もっともらしい事言ってるけど、それって本心なんでしょうね？あんたもゆたかちゃんの義姉さんなら、みなみちゃんにだけゆたかちゃんの事任せっきりにしないでちゃんと見てやりなさいよ？ゆたかちゃん、あんたの事は信頼してるみたいなんだしさ。」

そう言うかがみにこなたは視線を泳がせつつ

「わ、わかってるよー。私がゆーちゃんの事ほおっておくわけないじゃん。私はゆーちゃんの義姉さんなんだしさー。」

と、少々説得力に欠ける態度を見せるこなたにかがみは少々呆れたような表情を浮かべ、俺は俺で軽いため息をついていた。

そして、周りを見ると、他の皆もまた苦笑しながら俺達のやりとり

をみていたのだった。

「ま、なんにしても、そろそろ行こうぜ？係員さんも待っててくれてるしなー。」

と言うみさおに俺達も”はっ”と我に帰ると、俺は皆に

「そうだな。よし、皆、早速乗り込むとしよう。」

俺がそう声をかけると同時に皆も頷きつつコースターへと乗り込んでいく。

だが、この時、俺がゆたか達と話している間にこなた達の方ではすでに座る場所についての話し合いが行われていたらしかった。

なので、俺は1番前から2番目の列の席中央付近に座る事となったようだった。

コースターの座席は1列4人が座れる仕様で、俺はその席の右側から2番目番に座る事となり、俺の両隣にはみゆきとかがみ。

そして、1番左外につかさが、俺の前の列にはみくとたまきとこうとパティが、俺の後ろの席にはこなた、やまと、みさお、あやのが、その後ろの席にはゆたかを右側から2番目に据えて、その左側にひよりといずみが、右にはみなみがそれぞれに座る事となった。

俺は全員が席に着いたことを確かめつつ、俺はみゆきに

「なあ、みゆき。今回のこの席順はまた話し合いで決定した、って奴か？」

と聞いてみると、みゆきは俺の言葉ににっこりと微笑みながら

「ええ。慶一さんが小早川さんやみなみちゃん達と話している時に決めたんですよ。今回も恨みっこなしの勝負の結果ですね。」

そう答えるみゆきに俺は苦笑しつつ

「そうか・・・（何の勝負の結果かは深く考えずにおくか・・・）皆！安全バーがきっちりかかっているかもう一度確認しとけよ！？それが済んだらいよいよ出発だからなー！？」

と皆にもそう声をかけると、皆も安全装置をもう一度確かめて自分の安全確認を係員の人と共に行っていた。

そして、それが済んだのを見届けた係員さんが俺達に

「それでは、これから出発します。存分に楽しんで下さいね？それでは、スタート！！」

という係員さんの声と共にゆっくりとコースターは動き始めた。

「う、動いたわね・・・ちょっと緊張するかも・・・。」

「どんなスリルが味わえるのか楽しみですね。」

「ううう・・・皆が乗るから勇気だして一緒に乗ってみたけどやっぱりちょっと怖いよ～・・・。」

「7回転か、迫力ありそうだな。」

と、俺達はそれぞれに思う事を口に出す。

そして、俺の前の席では

「こういうので1番前ってのもいいねー。」
「同感、ここが1番迫力あるかもね。」
「ある意味1番いい席にいるかもだね、私たち。」
「エキサイティング！アンド、スリリング！とてもワクワクしますネ！！」

と言う前列4人の言葉が聞こえていた。

俺達の後ろの席でも

「うーん、わくわくするねー。絶叫マシンはロマンだねー。」
「泉先輩も楽しそうよね。私もこういうのは嫌いじゃないけど。」
「ふふ。泉ちゃんらしいわね。私もこういうのは好きよ。」
「おー！楽しみだなー！！お？そうだ。ちびっ子、さっきの話、覚えてるよな？」
「んー？ああ、あれね？ばっちりオッケーだよ？それで、いつ実行するー？」
「仕掛けるポイントは、コースターの・・・・・」

と言う会話が聞こえていたが、俺はみさおの言葉に何か不審な物を少し感じつつも肝心な部分が聞こえなかったので、その事を少々気にしつつ、更に後ろの列から聞こえる会話にも耳を傾けていた。

「乗ったはいいっスけど、結構凄そうだよね、これ・・・。」
「田村さん、今更言ってももうスタートしてるんだし、覚悟決めなきゃ。」
「そ、それはわかってるっスよ。委員長もきっついよねえ・・・。」
「あはは。ひよりちゃん、どんまい。それにしても、ドキドキする

なあ・・・ねえ？みなみちゃん。」
「・・・そうだね・・・でも、具合が悪くなったらちゃんと言う事・・・。」
「わかってるよ、みなみちゃん。でも、心配してくれてありがとう。」
「・・・私はゆたかの友達だから・・・。」
「ネタキター！ネタ帳ネタ帳っと・・・ってしまったー！ホテル内に置き忘れて来たっスー！って自重しろ、自重しろ私ー！！」
「・・・小早川さん、岩崎さん。友達は選んだ方がいいと思うよ・・・はあ・・・。」

最後に溜息でしめくくる後列の会話を聞いて俺は再度苦笑していたが、その時にこっそりと俺を撮影しようと写メの準備をしているかがみ達の動きに他の皆の会話を聞く事に集中していた俺には気付く事が出来なかった。

そうこうしているうちに加速のスタート地点へとコースターは近づいていく。

一応俺は先程のこなたとみさおの会話から、あの2人が何かを企んでそうな感じがしたのでその事を警戒しつつ加速地点へ向けて緊張を高めていた。

そして、いよいよ加速地点までもう少しの所に来た時、みさおから声がかけられた。

「なあ、慶一ー。あっちの方、大分景色がいい感じだぞー？ちょっと見てみなってー。」

そう言ってくるみさおの言葉に俺は、あの時の遊園地での出来事を

思い出しながら

「・・・みさお、また罠にはめたいと考えているみたいだが、その手には乗らないぞ。お前の方こそ心の準備しとかないとあの時の俺の二の舞になっても知らないからな。」

と冷静にみさおの企みを潰しにかかる俺。

みさおは自分の企みが読まれた事に動揺しつつ

「な、何の事だか。わ、私は別に、ただいい景色が見えたから慶一にも見せたいなーって思っただけだしー。」

と、明らかな挙動不審を見せるみさおに俺は心の中でやれやれと考えていたが、そこに更にこなたが俺に声をかけて来る。

「慶一君ー。ちょっと見せたいものあるんだけど、こっち向いてくれるー？」

そのあからさまに怪しい物言いに俺は呆れつつ

「こなたー？そうやって俺の注意をひきつけたいみたいだが、その手には乗らんからなー？まったくいたずらの好きな奴等だよ。」

と言う俺にこなたもまた”うぐっ”と小さなうめき声をあげると、みさおとなにやら相談を始めたようだった。

こなたｓｉｄｅ

みさきちから以前みさきちが慶一君を元気付ける為に遊園地に誘っ

た話を聞いていた私は、その時あったジェットコースターでの慶一君の面白かった所を話して貰っていた事もあり、今回のこの絶叫マシンにおいても私とみさきちはいたずらを企てていたのだが、どうやらみさきちとの軽い打ち合わせの話の一部を聞かれていたらしく、最初のアタックは失敗に終わったのだった。

焦った私とみさきちは何とか慶一君をいたずらにはめる手立てがないかを残り僅かな時間でみさきちと相談する事にした。

「むう、慶一君にはしっかり警戒されちゃってるね・・・どうする？みさきち。」

みさきちにそう話を振ると、みさきちも困惑顔で

「むー・・・どうすっかなー・・・なあ、ちびっこ。他に何か手はねえか？」

そう返してくるみさきちの言葉に私は腕組みをしながら他の手を探してみた。

私は脳内で今の状況、そして、いるメンバーを考慮して何か手がないかを探ってみた。

そして、１つ妙案を思いついた私は早速その手を実行に移す事にしたのだった。

「みさきち、１つだけ手があったよ。これで失敗したら今回はあきらめよう。今からすぐにやるからちょっと見ててよ。」

その言葉にみさきちも頷いて

「わ、わかった。頼むゼ？ちびっこ。」

そう返してくるみさきちに私も力強く頷いて返すと、後数秒で加速開始のタイミングで最後の手をしかけるのだった。

慶一ｓｉｄｅ

こなたとみさおの企みを退けた俺だったが、それでもまだ何かをしかけようと２人して何かを話している様子が軽く後ろに目をやった時に見えた。

もうすぐ加速地点だし、何かをしかけるにはタイミング的にももう無理だろう、俺はこの時はそう思っていたのだけど、すぐさま俺は、こなたのいたずらにかける執念の凄さを思い知る事となった。

再び視線を前に戻した俺だったが、ふいにこなたが発した言葉に俺ははからずも引っかかる事となったのだった。

「！？ゆーちゃん？どうしたの？気分悪いの？大丈夫！？」

その言葉に俺は”はっ”となって思わず後ろを振り向いて「ゆたか！！大丈夫か！？」と声をかけたのだが、後ろを見た俺に目に飛び込んで来たのは、突然そんな言葉を発したこなたに頭にハテナマークを飛ばしながら困惑の表情で「私は大丈夫だよ？こなたお姉ちゃん。」と言うゆたかと、まんまといたずらを成功させて、これ以上ないほどのいい笑顔で俺を見ているこなたとみさおの２人の顔が目に入り、その瞬間、俺は心の中で”やられた！！”そう思ったと同時に一気にコースターが加速を始めた。

俺は、まんまとこなたにしてやられ、そして、突然始まった加速に対応しきれずに再び俺は無様な姿を晒す事になったのだった。

「うぉあああぁぁぁぁぁぁぁ！！」

心の準備を外された俺にはもはやこれに対処する手立てもなく、みっともない姿を見せる俺。

そんな中、俺の両隣にいたみゆきは俺の腕に抱きついていて、かがみは大笑いしながら俺の無様な姿を写メに何枚も撮っているのが見てとれたが、もはや冷静さを失っている俺にはそれに対応すら出来ず、まさにされるがままとなっていたのだった。

結局その後の7回転でも絶叫し、コースターを降りる頃にはもうボロボロの状況だった。

コースターを降りるといまだ笑いが止まらないかがみ達に

「あはは！！慶一くん、どんまい、あはははは！！」

「お、お姉ちゃん、そんなに笑っちゃけいちゃんがかわいそうだよ～。」

「くすくす。普段はあまり見られない慶一さんの姿が見られて新鮮ですね。」

そんな風に言われ、更にはみゆきすらも俺は笑われていた。

つかさが俺に同情してかがみをなだめてくれているが、そんな様子を見て俺は大きな溜息をつきながら

「・・・悪かったな、かがみ、お前笑いすぎだぞ？流石に凹むって・

・・。」

疲れた声でそう言うのだった。

そして、こうたちも俺の側にやってきて

「大丈夫でしたか?先輩。先輩って確かこういう乗り物にも強かったはずですよね?だから、今回の事は結構驚きだったんですが。」

「くすくすくす。ま、まあ、確かにそうよね。ぷぷっ!流石に先輩も不意打ちで崩されたらだめ、って事みたいね。」

「へえ?先輩ってこういうのは本当は得意だったんですか。意外ですね。」

「不意打ちされたらどんな人でも駄目になりそうな気はするけどねえ・・・先輩に限らず。」

そう言うこう達2年生組に俺は落ち込みながら

「そういや、こうとやまとは俺と一緒にここ以外にも出かけた事があったっけな・・・はいいが、やまと、お前も笑いすぎだ!まったく・・・あ、みく、たまき、勘違いしないでくれな?不意打ちされなけりゃこんなの何てことないんだから。」

と、笑うやまとにツッコミを入れつつみく達にもそう説明をする。

そんな最中、今回のコースターを乗り切ったゆたか達も俺の所へとやって来た。

「先輩。大丈夫でしたか?私は今回はちゃんと乗り切れましたよ?気分も悪くなっていないので平気です。」

「・・・すみません、先輩。先輩の慌てる姿を見て、悪いとは思い

ましたが思わず笑ってしまいました・・・。」
「めったに見れないものを見せてもらいましたっス。私も思わず笑ってしまいましたが、不可抗力って事で勘弁してもらえると嬉しいんですが・・・。」
「ケイイチのオモシロイカオはアトでカガミにミせてもらいマス！ちょっとタノしみですネ！」
「せ、先輩、元気出して下さいね。」

とゆかたかは今回自分に課した試練を乗り切った事を報告してくれ、みなみとひよりは俺を不覚にも笑ってしまった事を詫びて、パティはかがみの撮った写メを後で手にいれようと意気込み、いずみはそんな俺に同情の言葉を送ってくれた。

「ゆたか、とりあえず乗り切れたようだな、おめでとう。みなみ、ひより、今回のは不可抗力だからもういいよ。パティ、後でよーくお話しような？いずみ、気をつかってくれてありがとうな。俺はもう大丈夫だから。」

と４人にそう言った後、俺は、あやのに怒られているみさおとその横であやのをなだめようとしているこなたの側へと歩いて行く。

こなたｓｉｄｅ

執念が実り、私とみさきちのしかけたいたずらは上手くいった。

けど、コースターを降りた後、慶一君に仕掛けたいたずらの事で峰岸さんはみさきちに説教を始めたのだった。

私も共犯者でもあるので、とりあえず峰岸さんをなだめつつ、みさきちと一緒に説教を聞く事となった。

「みさちゃん!?だめじゃないの!慶ちゃん、大分落ち込んでたわよ!?昨日だって慶ちゃんに命に係わるような迷惑かけたばかりじゃない!?わかってるの?そんな事ばっかりしてたら慶ちゃんにも愛想つかされちゃうかもしれないわよ!?」

そうまくし立てる峰岸さんにみさきちもかなり凹みつつ

「ごめんよー、あやのー・・・つい出来心だったんだってヴァ・・・この通り反省してるからさー・・・だからもう勘弁してくれよー・・・。」

そう言うみさきちに私もちょっと気の毒になって

「ま、まあまあ。軽いいたずらなんだし、みさきちも反省してるみたいだしさ、とりあえずその辺に・・・。」

そう言う私に峰岸さんはきっと睨みつけながら

「泉ちゃんも泉ちゃんよ?慶ちゃんの注意を引くためとはいえ、あんな事言えば慶ちゃんは絶対心配するのわかってるでしょ?泉ちゃんが今回やった事は、そんな慶ちゃんの優しさを弄ぶ行為なんだからちゃんと反省しなきゃだめよ?」

と言う峰岸さんの言葉に私は胸に何かが突き刺さるような感覚を受けて落ち込みつつ

「う・・・そ、そうだね・・・言われてみればそうだよね・・・私、後で慶一君に謝ってくるよ・・・。」

と、ここに来て自分のやった事の罪深さを知った私は今回のいたずらに反省するのだった。

慶一ｓｉｄｅ

何やらあやのに2人して怒られているというちょっと珍しい光景を目にしつつ、俺は3人の元に歩いていった。

そして、いまだ怒っているっぽいあやのと落ち込むこなた、みさおの姿を見て俺は3人に声をかけた。

「あやの、こなた、みさお、ここに居たか。こなたとみさおが結構落ち込んでるみたいだが、2人共あやのにでも怒られたか？」

そう言うと、あやのは俺に

「ごめんね？慶ちゃん。みさちゃんや泉ちゃんが今回した事はちょっと行き過ぎだと思ったから私が2人にお説教してたのよ。慶ちゃんも今回の事で思う事もあるかもしれないけど、私がよく言っておいたから、あまり怒らないであげてくれるかな？」

そう言うと、こなたとみさおも俺の所に来て俺にすまなそうな表情を向けながら

「慶一君、ごめんね？ちょっと調子に乗りすぎちゃったよ。本当にごめん。」

「慶一ー、ごめんなー。昨日の事もあったのに私も調子に乗ってったってヴァ・・・このとおりだ慶一、謝るから許して・・・。」

そう言って反省の色を滲ませる2人を見て俺は軽く溜息をつくと

「2人共、本当に心から悪い、って思ってるんだな？」

2人をじろりと睨みつけながらそう言うと、2人共首を激しく縦に振りながら

「うん、思ってるよ。この通り反省してる。」

「私もだ。反省してる。この通り！」

そう言って頭を下げる2人を見て俺は

「そうか。なら、顔を上げろ、2人共。」

そう俺が言うと、2人共おずおずと顔を上げた。

俺はそのタイミングを見計らって2人に軽くデコピンをかます。

ビシッ、ビシッ

「あうっ！」「痛えっ！」と声をあげ、涙目になる2人をみながら

「これで勘弁してやる。とにかく、俺達はここには楽しむ為に来たんだから、つまらないいざこざはなしだ。なんにしてもいたずらは程ほどにしてくれよ？でないと俺が持たないし。」

俺のその言葉に許しが得られた事を悟った2人はもう一度頷くと

「わかったよー。できるだけ努力するー。とりあえず、次に行こうか。まだまだ乗るものあるんだしね。」

「極力気をつけるようにするってヴァ。ちびっこの言う通りまだま

だやる事あるんだし時間も限られてるんだからどんどんいかねえとな。それじゃ次に行こうゼ?慶一、あやの、ちびっこー。」

そうやって再び笑顔になる2人に俺とあやのも苦笑しつつ

「そうだな、それじゃ皆と合流して次に行くかー。」

「ふふ。そうね、行きましょう。もっともっと思い出を作りたいものね。」

そう言うあやのに俺も頷きで応えて、俺達は俺達を待つ皆の元へと向かったのだった。

ハプニングのあったコースターを終えて、俺達は次の場所を目指す。

そこでも波乱を予感する俺だったが、何があっても皆と楽しんでいこうと改めて思う俺だった。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第2話～

今回は一種類の乗り物でしたが、次回は2種くらいはやりたいなと思っています。

早めの更新を目指すつもりですので、お楽しみに。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第3話（

時間がかかってしまいましたが、ようやく本編投稿です。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第3話

ふいに舞い込んだ幸運の招待状。

俺達はその招待状を手に、今度オープンするテーマパークへと1泊2日で遊びにやって来た。

色々あった1日目を終えて、俺達はいよいよメインとなる乗り物を楽しむ為に園内へと繰り出して行く。

そして、そこで最初に乗り込んだ絶叫マシンで、俺はこなたとみさおの企みにかかり、みんなの前で無様な姿を晒す事になったのだった。

今回の事に関しては少々やりすぎだったと反省したこなたとみさおにとりあえず軽い制裁を済ませてから、俺達は次の乗り物へと移動して行くのだった。

ジェットコースターに続いてやってきたのは、メテオ、と呼ばれるいわゆるフリーフォールというタイプの絶叫マシンだった。

「へー・・・中々迫力あるね、これは・・・」

と、メテオを見上げながらそう呟くこなたに皆もまた頷いていたが、メテオを見つめるかがみが

「へえ?座席は6人くらいいっぺんに乗れるタイプみたいね。マシンの規模的には大きい方かしらね?」

と、設置されている座席を確認しつつ呟く。
そのかがみの呟きにこなたは顎に手を当てながら
「ふーむ・・・と、なると6人で2回、最後は4人で、という割り振りで乗るといいかもだね。そう言う訳で、皆に聞くけど、皆もこれに乗る？」
と、周りにいる皆に声をかけると、皆は
「私は当然乗るわよ？これも面白そうだもんね。」
「わ、わたしもちょっと怖いけどやってみたいかも。」
「私も乗ります。色々と楽しみたいですからね。」
「私は言うまでもないゼ？面白そうだもんなー。」
「ふふ。私も乗ってみるわ。興味もあるしね。」
と、3年生組は皆乗り気だ。
そして、2年生組もお互いに頷きあいながら
「私たちも乗りますよー？折角ですしね。」
「私も乗るわ。楽しそうだしね。」
「当然、私もですよ？楽しむ時には楽しまなきゃですし。」
「私もこういうのは大好きだから当然仲間ハズレはなしで。」
と、こちらも楽しげな表情を浮かべていた。
1年生組もゆたかとみなみ以外の面々は
「私も乗るっス。こういうのって中々乗る機会ないっスからね。」

「ワタシもデス！スリルはノゾむところですからネ！」
「私も楽しみたいですし、乗りますよ？」

そう言い、そんな中でゆたかとみなみは少しばかり話し込んでいた。

「私もこっちも挑戦したいな。みなみちゃんはどう？」
「・・・私も乗るのは構わないけど・・・さっきの事もあるからゆたかが少し心配・・・」
「だ、大丈夫だよー。さっきも大丈夫だったんだし、みなみちゃんもいてくれるんでしょ？」
「・・・もちろん・・・私はゆたかの側にいるから・・・大丈夫。」
「だったら、大丈夫だね。じゃあ、みなみちゃん、一緒に乗ろうよ。」
「・・・ゆたかがそうしたいのなら、私はゆたかの意思を尊重する・・・」
「じゃあ、決まりだね。という事で、私たちも乗るよー？こなたおねえちゃん。」

と、とりあえずゆたかとみなみの話し合いに決着がついた所で声をかけたこなたに返事をしている2人だった。

それを聞いたこなたはうんうんと頷くと

「なら、満場一致で決まりだね。それじゃ今度は乗る順番等について話し合おうか、皆、こっち来てー？あ、慶一君はそこで待っててね？」

そう言って皆を集めつつ、俺にはそこで待機しているようにと言うこなたに俺は苦笑しつつ

「はいはい、わかったよ。終わったら声かけてくれよな？」

そう言うと、軽いため息をつきながらメテオを見上げている俺だった。

俺の見ている前で円陣を組んで何やら話し合いを始めるこなた達だったが、そのうちに数名のグループに分かれてじゃんけんをしているような様子が見て取れた。

そうこうしているうちに話し合いを終えたこなた達が戻って来て、こなたが俺に

「お待たせー、慶一君。話し合いが済んだからその結果を君にも報告するよ？」

そう言うのを受けて、俺もとりあえず頷きつつ

「わかった。話し合いの結果とやらを聞こうじゃないか。」

とこなたに先を促すと、こなたもそれに頷いて

「おっけー。じゃあ、話し合いの結果だけど、メテオには６人ずつ乗れるって事で、３つのグループに分けたよ。慶一君にはその３つのどれにも入ってもらう事になったからよろしくね。」

そのこなたの言葉に俺は驚きつつ

「え？って事は俺は３回メテオに乗らなきゃならないのか？」

そう返すと、こなたはにんまりと笑いながら

「当然だよー。だってそうしなきゃ公平とは言えないからね。で、その組み合わせだけど、まず、第1のグループに私、みゆきさん、八坂さん、若瀬さん、毒島さん。第2のグループには、かがみ、ゆーちゃん、山辺さん、つかさ、峰岸さん。そして、ラストグループにはパティ、みさきち、みなみちゃん、永森さん、ひよりんね。さらに席順も決まってるから、そっちは乗る時に聞いてねー。」

と言うこなたの言葉に俺は大きな溜息をついてから

「・・・はあ・・・わかったよ。皆、お手柔らかになー・・・。」

と、半ば諦めの境地でそう言うと、皆もそんな俺に苦笑を向けつつも頷いたのだった。

そして、早速第1グループからのスタートになった。

第1グループの席順はこうだ。

こなた、みゆき、俺、こう、いずみ、みく。

今回はこなたは少しだけ悔しそうな顔をしていて、俺の隣に座ったみゆきは嬉しそうに、いずみも少しだけ嬉しそうな表情が伺え、みくはそんな俺達の様子を見ながらニコニコと笑っていたのだった。

「ちぇー・・・今回は負けちゃったよ、ちょっと悔しいけど仕方ないね。慶一君、皆、楽しもうねー。」

「今回は勝負に勝てました。慶一さん、よろしくお願いしますね？」

「いやあ、まさか勝てるとは思いませんでした。折角の機会ですし、先輩の隣を堪能させてもらいましょうかね。」

「あはは・・・さっきの勝負は中々に熾烈を極めてましたしね。それはともかく、楽しんで行きましょうか。」
「こうも以外に運がいいのかもしれないね。まあ、私は遠くから微笑ましく見守るのみだけどね。」
と言う5人に俺は苦笑しつつ
「はは。そうだな、楽しんでくか。みゆき、そんなにかしこまる事もないさ、いつも通りで行こう。それじゃ皆、準備はいいか?」
その言葉に全員が頷くと、安全確認の後、メテオが動き始めた。
ゆっくりと所定の高さまであがって行く座席部分。
俺達は緊張の面持ちでメテオが所定の位置まで上昇するのを待つのだった。
そして、1分後、所定の高さまで辿り着き、1時停止をするメテオ。
機械音声によるカウントダウンが始まり、俺達は身構えつつ
「いよいよだね、わくわく。」
「き、緊張します・・・何気に結構高いですし・・・。」
「俺もこの手のものは初体験だからどうなるか、だな。」
「いいですねー、この緊張感。やっぱりスリルは最高です。」
「た、高いなー・・・ちょっと怖いかも・・・。」
「さあ、いよいよみたいですよ?後5秒。」
と同時に俺達も残りのカウントダウンをするのだった。

「「「「「「4！3！2！1！ゴー！！」」」」」」

と同時に一気に落ちて行くメテオに俺達は揃って悲鳴を上げつつ楽しんでいた。

「やっほーい！！」「き、きゃあああ！！」「うぉおおお！中々の迫力！！」「いやっほー！！」「ひゃあああ！！」「うわー！！」

とそれぞれに叫びつつ、さり気にみゆきとこうが俺の腕に抱きついている感触を感じながら1回目を終了したのだった。

1回目終了後、こなたは第2グループの面々の元へ声をかけに行っていた。

「じゃあ、ちょっと第2グループの面々に声をかけてくるね。慶一君は次の準備よろしくねー。」

と俺に告げてから第2グループの所へ行くこなたを見送りつつ、俺は、やってきた次のグループとの準備を軽いため息をつきつつする。

こなたに声をかけられた皆は1人、準備を進める俺の側へとやって来て、それぞれに席へと着く。

ちなみに席順は、かがみ、つかさ、俺、ゆたか、あやの、たまきの順。

そして、それぞれの準備が済んだ後、いよいよ第2のグループのスタートの為にメテオが動き始めた。

そして、定位置へと向かう間、俺の周りに座った皆は俺に声をかけ

てきたのだった。

「ま、今回は勝負に負けちゃったし、仕方ないわ。でも、楽しんで行きましょ。」

「えへへ。けいちゃんの隣になれて少し嬉しいかも。けいちゃん、よろしくね～。」

「今回は私も慶一先輩の隣って事になっちゃいましたけど、よろしくお願いしますねー。」

「ふふ。良かったわね、妹ちゃん、ゆたかちゃん。まあ、それはそれとして、楽しみましょう。」

「先輩、今回も面白いリアクション、期待してますよー？」

と言う皆に俺は苦笑しつつ

「はは・・・つかさ、ゆたか、いつも通りでいいさ。あやの、たまき。これ結構迫力あるから楽しいぞ？それとかがみ、写メ準備してる所悪いが、今回はお前の期待には応えられそうにないから一応言っとくぞ？」

そう答える俺に、かがみを除く全員が頷いていたが、かがみだけは少し残念そうな顔をしていたのを俺は再度苦笑しながらも見逃さなかった俺だった。

そして、メテオが定位置に着くと同時に2度目のカウントが始まる。

「いよいよね・・・慶一くんにはああ言われたけど、一縷の望みをかけて携帯を、っと・・・。」

「はわわ・・・緊張するよ～・・・。」

「わ、私もちょっと怖いかも・・・意外と高いですよね・・・。」

「確かにそうかもね。でも、楽しそうよ？」

「乗るのと外から見てるのとはやっぱり違いますねえ・・・でも、面白そう。」

と言う5人の言葉を聞き、そして、カウントしつつも全員の顔をちらりと覗いて見ると、かがみは諦めきれずに俺に携帯をかざそうとし、つかさとゆたかはかなり緊張の表情になっていて、あやのとたまきは楽しそうな表情が見て取れた。

そんな様子を見た俺はとりあえず開きなりつつも皆と共にカウント続行をするのだった。

「「「「「「5！4！3！2！1！ゴー！！」」」」」」

と同時に落ちるメテオとあがる歓声を俺も耳にしつつこの状況を再度楽しんだ。

「シャッターチャンス来い！」「はわわぁわぁ～！！」「うおー！」「うひゃうぅぅ！！」「きゃあああ！！」「やっほー！！」

そうして2回目が終了し、かがみは少々残念そうな表情を浮かべ、つかさとゆたかは少し顔色を悪くしている感じで、あやのとたまきは何やら楽しそうに頷きあっているのが見えたが、気を取り直したかがみが俺に

「じゃあ、私は次のグループを呼びに行くわね？慶一くんは再度準備をしておいてね？」

そう言うと、最後のグループに声をかけに行ったのを見送って、俺は3度目の準備をするのだった。

そして、俺が1回目、2回目同様に中央の席に着くと、かがみに声をかけられたみさお達がやって来た。

ちなみに席順は、パティ、みさお、俺、ひより、みなみ、やまとだった。

「ケイイチ！3ドメになりマスが、オツキアイヨロシクですヨ！」

「へへ。慶一の隣になるとは思わなかったけど、これはこれでいいもんだなー。」

「まさか私が先輩の隣になれるとは思ってなかったっス。とはいえ、お手柔らかにお願いするっスよ。」

「・・・ゆたかの顔色が少し悪い感じがしたので、心配です・・・。」

「まあ、今回は日下部先輩達に譲る事になったけど、勝負の結果だし、仕方ないわね。先輩？くれぐれもおかしな事は考えないようにしてよ？」

と言う5人に俺は最後のやまとの言葉に少し怯えながら

「皆よろしく。みなみ、とりあえず下にはこなたもいるんだし、そっちは任せて今は楽しめ。それと、やまと。変な事ってなんだよ？」

そう言うと、みさお、パティ、ひよりは笑って頷いてくれ、みなみはとりあえず俺の言った事に安心する顔を見せつつ、楽しむ為に切り替えをした感じで、やまとは俺の言葉につんとそっぽを向いて少々不機嫌そうだった。

そうこうしているうちに定位置についたメテオのカウントダウンが始まる。

「オウ！これはワクワクしますネ！！」
「うーん、やっぱり絶叫マシンはこうでなきゃなー。」
「わ、私も少し高い所は苦手っスね・・・」
「・・・高い所は少し怖いです・・・」
「ちょっと緊張してきたわ・・・」

と言う皆の呟きに耳を傾けつつ、最後のカウントに入る俺達。

「「「「「5！4！3！2！1！ゴー！！」」」」」

と同時にスタートするメテオにそれぞれの悲鳴が重なる。

「イェー！！」
「うひょおおお！こりゃすげえええ！！」
「う、うわわわっ！こ、怖いっスー！！」
「・・・っ！！」
「きゃあああ！！」

という悲鳴を聞きながら、流石に3回目で慣れてしまった俺は、今回は悲鳴を上げなかったのだった。

その代わり、恐怖のあまり手を握ってきたひよりに少しだけ照れていた俺だった。

一通り楽しんだ後、俺達は次の場所へと向かった。

次の乗り物はウォーターウェーブという、ちょっと変わった名前の乗り物だった。

ここを選んだのはやまとだったので、俺はどんな乗り物なのかをや

まとに尋ねてみた。

「なあ、やまと。これはどういうアトラクションなんだ?」

と言う俺にやまとは俺の方に向き直りながらクスリと笑うと

「ふふ。先輩は川下りっていうのは知っているわよね?」

と言うやまとの言葉に頷いくと、やまとは人差し指を立てつつ

「このアトラクションはそれに似た事をやるものなのよ。まあ、乗るのは船ではなく、ジェットコースターのような車両で、川もまた、水を張って作った擬似的な物ね。そして、滝にも似た降下ポイントがあるのが特徴らしいわ。その滝に当たる部分が絶叫ポイントらしいわね。」

と説明してくれたのを聞いて、俺も納得して頷き、皆も興味深々のようだった。

「へえ?中々面白そうじゃん?私は乗るよ。皆はどうする?」

とこなたは皆を見回しつつ訪ねると、ゆたかとみなみ、いずみ以外は賛成していたが、3人は俺達に

「ごめんなさい、先輩、おねえちゃん達。私ジェットコースターとさっきのメテオでちょっと疲れちゃったみたい。少し気分が悪くなっているから今回は休むね。みなみちゃんといずみさんも残ってくれるって言うから、皆は楽しんで来て?」

「・・・すみません、私はゆたかの側についています。皆さんは私たちの代わりに楽しんで下さい・・・。」

「私もちょっと心配だから小早川さんについていてあげようと思います。皆さんは私たちの分まで楽しんで来て下さい。」

と、そう言って来たのを受けて、俺は3人に

「そうか。そういう事じゃ無理させる訳にはいかないな。わかった。体調が戻るまでは少し休んでるといい。みなみ、いずみ。ゆたかを頼むよ。」

そう言うと、さらにそこにパティやひよりも声をあげた。

「先輩、ゆーちゃん。私たちも残るっスよ。私もゆーちゃんとは友達なんスから。」

「ワタシもですヨ！？ワタシだってユタカタチのフレンドなんですカラ！！」

と言う2人に俺達は顔を見合わせてから

「そっか、なら、ひより、パティ。お前等にもゆたか達の事を託すよ。友達として見てやってくれ。」

「ひよりん、パティ、みなみちゃん、いずみさん。ゆーちゃんの事よろしくね？」

と、俺とこなたはみなみ達にそう告げると、４人は頷いて「「「「任せて下さい＜デス＞＜っス＞」」」」と応えてくれたのを受けて、俺達は頷きで返してから、改めて１０人でウォーターウェーブへと足を向けた。

そして、やっぱりと言うかなんというか、再び席順争いが勃発している様子を俺は苦笑しながらも見つめていたのだった。

今回の座席は1列4人で座る仕様になっていたので、4・4・3で分れる事となった。

しばらくしてようやく席順も決まり、こなた達はその結果を持って俺の側へとやって来た。

「ようやく決まったみたいだな。それで?今回はどんな風になったんだ?」

そう尋ねると、代表でこなたが俺に席順の説明をしてくれた。

「今回の席順はねえ・・・こうなったよ。まず1番前の列だけど、山辺さん、慶一君、かがみ、つかさ。2列目はみゆきさん、私、みさきち、八坂さん。最後は永森さん、峰岸さん、毒島さんね。」

と言うこなたの言葉に、俺は頷きで返しつつ周りの様子を伺うと、かなり残念そうな顔をしているやまととすごくいい笑顔のかがみと、満更でもない表情のこなた達がいた。

そして、俺達は早速ウォーターウェーブに乗り込んで行く。

その際に係員から俺達はあるものを貸してもらった。

それは、全身を覆える雨具だった。

何でもこのアトラクションではコース内に水が張り巡らされているとの事で、水が結構跳ねたりするらしいので、その為の備えが必要らしい。

そんな訳で俺達は早速借りた雨具を身につけて準備を完了させた。
そして、出発を待つ俺達はそれぞれに言葉を交わしていたのだった。

「うわー、なんだかドキドキするね。どんな風になるんだろう？それに今回は先輩の隣に初めてなれたし、結果オーライかな。」
「私も楽しみ。それに・・・いいポジション取れたのも嬉しいかも。」
「わたしは少しドキドキしてるよ～。１番前になるなんて思ってなかったし。」

と言う３人に俺は笑いながら

「はは。まあ、確かに楽しみではあるな。たまき、そう言われると少し照れる。かがみ、もう写メは勘弁してくれよ？つかさ、なんにしても落ち着いていこう。」

とそう声をかけると、たまきは少しだけ口元を緩ませて、かがみはなんだか今回はそんな事もどこ吹く風の顔をして終始笑顔でいて、つかさはそんな俺の言葉にまだ少し顔に緊張を張り付かせつつも頷いていた。

そして俺の後ろでもこなた達の会話が聞こえていたので、俺はそちらの方にも視線を巡らせた。

「この程度の防御で大丈夫なのでしょうか？ちょっと心配ですね。」
「大丈夫じゃない？一応は全身を覆えてるみたいだしね。それよりもきっちり楽しんでゆーちゃん達に乗った感想等を聞かせてあげないとね。」
「うーん、こういうのもわくわくすんなー。どうなるのか楽しみだ

ゼ！」

「流石に泉先輩と日下部先輩ですねー。とはいえ、私も結構期待してたりしますけどね。」

そう言って笑い合っているようだった。

3列目ではやまと達も何やら話しているのが聞こえたので、こなた達をちらりと見た後そっちにも目を向けて、聞き耳を立てた。

「前の列になれなかったのは残念だったけど、折角だから楽しむわ。」

「そうね。私もそうするつもりよ?今度は彼と一緒に来るつもりだしね。」

「いいですねえ、峰岸先輩にはすでに彼氏さんがいるんですから。」

「ふふ、永森ちゃんや毒島ちゃん達にもきっといい人が現れるわよ?」

「いい人、ね・・・。」

「そうだといいですけどね。」

そう言った後、ふいにこちらを見たやまとと偶然にも目が会い、やまとは顔を赤らめつつもそっぽを向いたのを見て、俺は苦笑していたのだった。

そして、準備も整い、いよいよ出発となったのだった。

「それではいってらっしゃいませ。」

と言う係員さんのお見送りの言葉でマシンは動き始めた。

最初はなだらかにまさに水面を滑るが如くの表現のようにマシンは

ゆっくりと加速をつけながら動いていった。

そして、ある程度加速がついて来た所でついにこのマシンの絶叫ポイントである滝へと飛び込む。

ゴオオォォォ！ザバアーッッ！！！

という激しい音と共に水しぶきが激しくあがった。

俺達はその光景に思わず声をあげた。

「うわー！！すっごーい！！」「うおおおっ、すごいな、こりゃ！！」「きゃあああっ！！1番前ってこんなに水が来るの！？」「ひゃあああ！！お、おねえちゃーん！！」

と、1列目の俺達は相当水を受ける事となった。

そして2列目では

「きゃあ！こ、これは迫力です！」「今こそ慶一君バリアーっ！！」「うっひょー！楽しいー！！」「ちょ！泉先輩、どさくさに紛れて！あはは！！」

と、ちゃっかり俺の後ろで水を防ぐこなたとそれを聞いて笑うこうの声が聞こえていた。

さらに3列目では

「きゃあっ！こっちも結構水が来るのね。でも、1番前が1番迫力ありそうね、私も1番前で体験したかったかも。」

「きゃっ！後ろでも結構水が来るのね。でも、確かにこれは永森ちゃんの言う通りかもね。」
「っ！以外と急でしたね、滝の部分は。」

と、そんな声が聞こえていたのだった。

そして、確かにみくの言う通り、滝の角度は中々のものだった。

おかげで前列にいた俺達は後列の皆に比べるとかなりの水を被る結果になったのだった。

そんな事もありながらも俺達はスタート地点へと戻って来た。

そして、マシンを降り、係員さんに雨具を返す俺達だったが、流石に前列にいた俺達は髪の毛まで濡れる程の水をあびていたので、係員さんはそんな俺達に濡れた髪を拭くタオルを貸してくれたのだった。

髪を拭き終わった後、俺達はゆたか達の側に行ってこのアトラクションの事を報告していたが、少し休んだ事でゆたかの体調も戻ったようで、俺達はほっと胸を撫で下ろしていた。

その後合流した俺達は次のアトラクションへ向けて歩き出したのだが、その最中、俺はこなたに

「おい、こなた。お前さっきのアトラクションで俺を盾にして水を防いでたろ?なんだよ、慶一君バリアーって・・・」

そう言うと、こなたはとぼけたような顔で

「んー？だって丁度慶一君が目の前にいてくれたし、慶一君、体大きいじゃん。まさにバリアーみたいだったしついねー。」

そんな風に言うこなたに俺は軽いため息をつきつつ

「あのなあ・・・はあ・・・もういいや。いずれこなたには制裁を科すという事で。」

と言う俺の言葉に慌てたこなたが

「え？ちょ、ちょっと慶一君。ちょっとしたお茶目じゃん。制裁は勘弁してよー。」

と言うこなたに俺は意地悪く笑いながら

「んー？どうしようかなー？」

と言う俺にこなたは必死に謝っていたのだった。

そんな俺達の会話を聞いていた皆は

「まあ、こなたの自業自得よね？」

「こなちゃん、どんまい。」

「泉さん、無事をお祈りしていますよ。」

「まあ、今回は仕方ねえんじゃね？私は楽しんでたからちびっこがそんな事してたなんて気付かなかったけどな。」

「まあまあ、けいちゃん。泉ちゃんも反省してるみたいだし、その位で・・・」

と3年生組が言うと、それ以外の皆もまた、笑いながら俺達の様子

を眺めていた。

俺もまた、そんな風に笑う皆を見ながらなおも必死に謝るこなたに

「もういいよ、こなた。もう怒ってないからさ。ちょっとお前を困らせようと少し調子に乗りすぎたな、すまん。」

そう言うと、こなたは涙目になりかかっていた表情を一転させ頬を膨らませてむくれながら

「むう・・・慶一君、意地悪だよ。私本気で焦ってたんだからねー？」

そんな風に言うこなたに今度は俺が謝り倒す。

「いや、ほんとすまんって。この通りだ。あの約束もまだ有効なんだから、な？機嫌直してくれって。」

そう言う俺に、こなたは俺をちらりと見つめるとニヤリと何やら邪悪な笑みを浮かべたと思ったら

「まあ、そういう事ならいいかな？それじゃ、気を取り直して次のアトラクションへレッツゴー！！」

こなたはそう言うと、俺の手を引いて走り始める。

そんな俺達の様子を見て他の皆も慌てながら着いてきた。

俺はそんな状況に苦笑しつつも、次のアトラクションに＜次はどんな事があるだろうか？＞という思いを胸にしつつ、皆と共に楽しめ

る喜びを感じていたのだった。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第3話（

次回は遊園地では定番かもしれないアトラクションを予定しています。

総合評価１０００ｐｔ到達記念の短編等も書くかもしれませんので、また投稿に間が空くかもしれませんが、今回よりはもう少し早めにあげれるようにがんばります。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第4話、

いきなりの光電話ルーターの死亡によってネットが繋げなくなり、投稿が遅れてしまいました。

3日遅れではありますが、本編最新話です。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、2日目第4話、

松嶋プレイワールドに来て2日目、俺達は絶叫マシンを楽しむ。

乗る回数等で少々疲れつつも、とりあえずは3種のマシンに乗り終えた俺達だったが、その3種目のマシンに於いてこなたが俺を盾にして水を防ぐという作戦を敢行した。

マシンを降りた俺は、そんなこなたに軽くお仕置きを宣言＜そう言いつつ、冗談で済ましたのだが＞その後必死に謝るこなたにお仕置き宣言の種明かしをしつつ、かつ、ここに来る前に交わした約束の実行で勘弁してもらおうと持ちかける俺にこなたは、何やら怪しげな笑みを浮かべつつ、俺の手を引いて次のアトラクションへ向けて走り出したのだった。

こなたと俺が動き出したのを見て慌てて俺達を追いかけて動き出す皆をちらりと見ながらも俺はこなたに

「なあ、こなた。これからどこへ俺を連れて行くつもりなんだ？」

と、そう尋ねると、こなたは軽くウインクをしながら

「ふふふ。こういう場所では定番とも言えるような場所だよ。ほら、見えてきた。」

そう言って前方を指差すこなたの先に視線を移すと、そこに見えたのは『ゴーストマンション』という大きな看板が掲げられているアトラクションだった。

それを確認して、そのすぐ後に俺達は建物の前で足を止めて皆が追いついて来るのを待ちながら俺はこなたに

「・・・なるほど、遊園地のある意味定番ね・・・。」

そう言って俺はドヤ顔で俺に視線を向けているこなたに軽いため息をつきながらそう言うと、こなたはそんな俺の言葉に頷きながら

「そうそう。カップルとかで楽しんだりもするある意味胸ワクワクするような、そして、背筋がゾクゾクするようなそんなアトラクションなのだよ。遊園地に来たなら一度は必ず立ち寄る場所と言っても過言ではないと思うよー？」

と、得意げに説明するこなたに俺は再度軽いため息をついていたのだった。

そして、そんな俺達にかがみ達もようやく追いついて来たようで、少々息を切らせながら

「はあ・・・はあ・・・ようやく追いついたわよ。まったく・・・動くつもりなら、こっちにもちゃんと動くって声かけなさいよね。」

「はあ・・・はあ・・・はうう・・・ようやく追いついたよ～・・・」

「・・・ふう、急に走り出されたので、慌てて追いかけましたが、何とか追いつけたのでほっとしました。」

「ふふ、突然の行動力はみさちゃんにもひけはとっていないわね。なんだかみさちゃんが2人になったみたいね。」

「えー？そっかなー・・・とはいえ、体使う事なら私だってちびっこには負けねえぞ？ところで、ここはなんなんだ？」

と、最後に言ったみさおの言葉にこなたはニヤリと不敵な笑みを見せると

「みさきち、ここはいわゆるお化け屋敷だよ。遊園地に来たら一度は入ってみたくなるアトラクションってやつだよー。」

と言うこなたの説明にみさお以外の4人は少々怯えたような表情を見せていた。

そして、さらに追いついてきた2年生組みや1年生組も

「ふう、ようやく追いついた・・・お?ここってもしかして・・・」
「突然走り出すからこっちも慌てたわよ・・・ってこれってまさか・・・」
「泉先輩って以外と体力あるみたいだね・・・あ、ここは確か・・・」
「確かにあの行動力は見習うべき所はありそうだよね・・・ん?こう、ぶっさん、ここってパンフレット見て行って見ようって相談してた所だよね?」

と口々に話していたが、最後にそう言うたまきにこうは頷いて

「そうそう。ここがあの時に相談してた場所だよ。って、どうしたのさ、やまと。」

と、建物を凝視しつつ、怯えたような表情を見せるやまとにこうは不思議そうな顔をしつつそう尋ねると、そんなこうの言葉にびくりと反応しつつ

「え!?あ、いや、その・・・べ、別に、な、なんでもないわよ!」

と言うやまとのリアクションを見て、こうはニヤニヤと意地悪そうな笑みを浮かべると

「・・・そういえばやまとはこういうのって結構苦手だったよねえ？という事は・・・怖いのかなー？」

と、まさにやまとの反発を誘導するかのような物言いに案の定やまとは引っかかり

「な！？何を言ってるのよ！！こ、怖いなんてそんな事ある訳ないじゃない！！だ、大体こんなものは作り物なんだから、別に怖くなんてないわよ！！」

と、反論するやまとにこうはしてやったりな表情で

「ふーん？それじゃやまともここに入るって事でいいんだよね？だって怖くないって言ってたしねー。」

と言うこうの言葉に途端にやまとは慌てつつ

「え！？あ、えっと・・・わ、わかったわよ！！入ればいいんでしょ！？入ればっ！！」

と、半ばやけくそ気味にキレているやまととこうのそんな様子を見ながら俺は溜息を1つつきながら心の中で

（あーあ・・・またこうに乗せられてるてるな・・・まったく、やまとはよくこうに引っ掛けられるよな・・・やまとも変なプライドあるから、今更後には引けないだろうし・・・まったく、しょうが

ないなあ・・・）

と、過去の2人のやりとりを思い出しつつ俺はそう考えながら、思案にふけっていたが、そこに少し遅れて1年生組も到着したらしく、俺はひとまず思考を切ると、ゆたか達の方へと視線を巡らせたのだった。

ゆたか達の方へと視線を巡らせると、5人は俺の側までやってきて乱れた息を整えながら

「はあ・・・はあ・・・な、何とか追いつけました・・・急に走り出されたからあわてちゃいましたよ。」

「・・・大丈夫？ゆたか・・・。」

「うん。ちょっと息切れしたけど大丈夫だよ、みなみちゃん。」

「ふう・・・泉先輩の目的地に何とか着けたみたいっスね・・・って、ここってもしかして・・・。」

「ダラシナイデスよ？ヒヨリン。エーット・・・オウ！ここはゴーストハウスではアリマセンか！ここはワタシもパンフレットでチェックしたトキキョウミをモッタバショですネ！コナタ、なかなかワカッテルじゃないデスか！」

「えー・・・パーさんこういうの怖くないの？私は結構苦手なんだけどなあ・・・。」

と言う5人の会話を聞きながら俺は

「ゆたか達もようやくたどり着いたみたいだな。パティはこういうのって平気なのか？」

そう尋ねると、パティは満面の笑顔を俺に向けつつ

「サスガにホンモノはニガテデスが、ツクリモノであるアトラクションならタノしめますネ！」

と、親指をビシッと立てながら俺にそう言うパティに俺は苦笑しつつ

「なるほどな。なら、精々楽しんで行きますかね。とはいえ、こういうのが苦手、って言う奴もいるようだけど・・・。」

とパティに答えながら、俺は軽く回りを見回して見てみたが、以外とこのアトラクションに怯えの表情を見せている連中の姿も見えたので、さて、どうなるやら、と心の中で考えている俺だった。

そうこうしているうちにこなたが俺達に

「とりあえずみんなもこれからここに入るって事は理解してくれたと思うけどさ、私はここで慶一君とした約束を使わせてもらおうって思ってるよ。」

そんなこなたの言葉にかがみは首を傾げながら

「約束はわかったけど、どうするつもりなのよ？」

と、こなたに尋ねると、こなたはいつものような細い目をしながら

「もちろん！２人っきり、ペアで周ってもらうつもりだよ！！」

と力強く宣言したのを受けて、他の皆も一様に驚いていた。

かく言う俺もこなたのその言葉に驚きつつ

「お、おい、待て!そんな話は聞いてないぞ!?」

と言うと、こなたはチッチッチと指を振って

「そりゃーね。今話をした訳だしね。でもさ、私達の言う事を聞いてくれるって慶一君が言ってくれたんだし、別に問題はないでしょー?」

と言うこなたに俺は困惑を隠せないままに

「そ、それはそうだけど・・・でも、いいのか?そんな事で。」

そうこなたに尋ねると、こなたは頷きながら

「うん。それに、私だけじゃないからね。私以外にも希望者がいるならその希望者とも一緒に周れば問題なしだよ?」

その言葉にすかさず反応するかがみ達から声があがる。

「そういう事なら私もお願いしてもいいわよね?＜慶一くんと2人きり、これはチャンスね・・・＞」

「わたしもいいかな?＜けいちゃんと一緒なら大丈夫かもしれないし・・・＞」

「私もいいですか?慶一さん＜慶一さんと2人・・・憧れのシチュエーションですね・・・＞」

「なら、私もだ!あやのと一緒だけどいいよな?慶一＜あの時慶一を元気づけたのと一緒のメンバーだけど、いいよな?あんときにした約束でもあるんだしな。それに、あやのだけ留守番ってのもなあ・・・それに、なんか慶一と2人きりってのも照れくせえし・・・＞」

「え?いいの?みさちゃん。私も一緒でも?」

「おう。このままあやのだけ留守番ってのもなんだしな。楽しむなら一緒に楽しみてえし。」
「わかったわ。慶ちゃん、そういう事なんだけど、それでもいいかな？」
と、３年生組から声がかかる。
俺は軽いため息をつきつつも
「了解だ。男が一度口にした事だし、今更曲げられないしな。それと、あやの。みさおがそう願うって言うならそれで構わないさ。楽しめるかどうかは分からないが、楽しむとしようぜ？」
その言葉にこなた達も満足そうに頷き、みさおとあやのも嬉しそうな顔をして頷いてくれたのだった。
そんな中、２年生組や１年生組からも声があがる。
「先輩、その・・・私もいいかしら。＜折角のチャンスなら、怖いけど乗ってみるべきよね・・・＞」
と言うやまとの言葉を聞いたこうとみくとたまきの３人はやまとに気付かれないように何やら３人で軽く話し合いをしてから俺に
「なら、やまとは先輩にお願いしつつ、私達も先輩とは行かせてもらいますけど、その時には私と山さんとぶっさんの３人でお願いしますね。」
と、そう言ってきた。

それを聞いたやまとは途端に顔を赤くして慌てながら

「ちょ、ちょっと、こう。その組み合わせってどういう事なのよ？べ、別に私は・・・」

と、しどろもどろに答えるやまとに3人は更にニヤニヤとやまとに視線を向けつつ

「いいっていいって。私達はやまとの邪魔はしないから楽しんできなよー。」

「そうそう。折角のチャンスなんだし。」

「後で結果報告だけしてくれればいいよー？」

と言う3人にやまとは更に顔を真っ赤にして黙り込んでしまったのだった。

俺はそんな4人のやりとりを見ながらこういう時にどんな顔をすればいいのだろうな？と心の中で考えながら軽く溜息をついていたのだった。

そして、1年生組も俺に声をかけてきた。

「あの、先輩。私達もちょっと怖いので、私たち5人と一緒に行ってもらってもいいですか？」

「・・・できれば、お願いしたいです・・・私も少し苦手で・・・先輩がいてくれれば心強いですし・・・。」

「私からもお願いしたいっス。こういう中に男の人がいてくれれば心強いっスから。」

「ワタシはケイイチとフタリきりでもよかったのデスが、ユタカタチのコエもムシはデキないデスからネ。」

「あはは・・・私はただ単に苦手だからと言うのが理由なんですけど、いいですよね？先輩。」

と言う5人に俺は頷きながら

「わかった。ゆたか達にも俺が付き合おう。ところでこなた。周る順番ってのは決まってるのか？」

と、俺達のやりとりを横目に何やらかがみ達と話し合いをしているこなたに声をかけてみると、こなたは俺の方に顔を向けながら

「かがみ達との話し合いは済んだ所だよ。後はゆーちゃん達とも話し合うからもうちょっと待っててくれるかな？」

と言うこなたに俺は頷いて

「わかった。それじゃ話し合いが済んだら声をかけてくれ。」

そう言うと、こなたも頷いた後、他の2年生組や1年生組を呼んで何やら話し合いを始めたのだった。

俺はそんなこなた達を横目に今一度自分が持ってきていたランドのパンフレットを開いてこのアトラクションについての予習をするのだった。

一通りの予習が済んだ頃、ようやく話し合いを終えたこなたが俺に声をかけてきた。

「お待たせー慶一くん。話し合いが終わったよ。それじゃ今からその結果を教えるね。」

その言葉に俺は頷きで答え、その俺にこなたも頷きで返しつつ、俺に話し合いの結果を話しはじめた。

「うん。それじゃ、まず最初はゆーちゃん達1年生組について周るのが1番最初ね？そして、次は永森さん以外の2年生メンバーと周ってもらって、その後にみさきちと峰岸さんで、その後は永森さん、かがみ、つかさ、みゆきさん、そして最後に私、という事でよろしくー。」

そう言って結果を告げるこなたに俺は頷きつつも少し疑問に思った事があったので、それを尋ねてみた。

「ふむ。順番はわかった、はいいんだが、こなたが1番最後ってのも珍しいよな？何か理由でもあるのか？」

そう尋ねると、こなたは俺の疑問に少し苦笑しつつ

「特に意味があるって訳じゃないけどね。まあ、私たちの話し合いの結果、そうなっただけの事だから。まさかここまで徹底的にじゃんけんに負ける事になるとは思わなかったけどね・・・。」

と、話し合いの結果そうなっただけ、と言った後の部分が声が小さすぎて聞き取れなかったけれど、とりあえずは事情を理解した俺だった。

そんな訳で、早速第一陣のスタートと相成るのだった。

「先輩、よろしくお願いしますね。」

「・・・よろしくお願いします・・・」

「先輩、頼りにしてるっスよ？」
「ケイイチ！サッソクイキマショウ！！」
「こ、怖いけど頑張ります。」

と言う5人に俺は頷きつつ

「了解だ。それじゃ早速スタートと行くか。」

俺の言葉にコクリと頷き、おそるおそるアトラクションへと入って行く俺達。

ここでもかなりのドタバタが巻き起こる、そんな予感を密かに感じる俺だったが、とにかく動く事にした。

このアトラクションは歩いて周って行くタイプで、ちょっと変わっているな、と思った所は、コース上にあるいくつかの部屋を周り、その部屋に入ると一時的に部屋に鍵がかけられるのだが、その部屋に設置してあるスタンプをチェックポイント票に押印する事でそれを確認したスタッフが部屋の開錠をしてくれ、次のチェックポイントへと向かうことができるというものだった。

そうして、ゴールまでに必要なスタンプを集め、最終的に最後の扉を開く為にはそのスタンプが全部埋まっているチェックシートを最後の部屋のスタッフに提示する事がこのお化け屋敷から出る方法となっている所だった。

ただ、怖くて無理、と思った場合、部屋にいるスタッフにリタイアの声をかけることで、途中で出てくる事も可能なので、最終的にお化け屋敷から出る方法は2通りになる。

どっちを選ぶににしても、そこは俺達次第となるようだった。

俺は、入り口に入ってすぐの所でゆたか達にこの事を簡単に説明し、お化け屋敷を出る最後の鍵となりうるスタンプシートを入り口のスタッフから受け取って、ゆたか達に出発の声をかけるのだった。

「ゆたか、みんなも。とりあえずスタンプシートはもらったからそろそろ動くぞ？ここのお化け屋敷がどの程度かはわからないけど、なるべくリタイアせずに行ければいいけどな。」

そう声をかけたのだが、ゆたか達は緊張に顔をこわばらせつつもスタッフからスタンプシートを受け取って

「そ、そうですね。私も折角なので、このスタンプシートを全部埋めて帰りたいです。皆でここに来た記念にもなりますよね？これも。」

「・・・私も怖いですが、頑張ります・・・先輩が居てくれるならリタイアせずにいけそうですから・・・」

「わ、私もがんばるっス。み、皆と一緒だから怖くないっスよ？ええ、怖くないっス・・・」

「ヒヨリ？セットクリョクないですヨ？さあて、二ポンのゴーストハウスのレベルというものをミセテモライマショウ！」

「パ、パーさんは凄いテンションだね・・・私はそこまでテンションあげれないよ・・・はあ・・・」

最後にそう言ういずみに他の3人もうんうんと頷いていたが、当のパティは得意げに胸を張って不敵な笑みを見せていた。

俺はそんなパティに苦笑しつつ、改めて皆に出発しようと声をかけ、俺達は早速動き出したのだった。

ゆっくりと歩を進める俺達。

だが、すぐさまパティ以外の４人は俺にぴったりと寄り添って動く事となった。

そして、順路を通って最初の部屋へと足を踏み入れる俺達。

部屋の中を見回してみると、不気味な小物や調度品、絵画などが飾られ、いかにも部屋の中で惨劇がありましたよ、と言わんばかりの内装となっていた。

何かしら仕掛けがありそうだと思っていた俺だったが、案の定、絵画や調度品、家具などに来た人を驚かせる仕掛けがあった。

それは、音声による無気味な言葉だったり、絵が変わって見える仕掛けだったり、家具から人型の人形が飛び出して来たり等だった。

それらに俺とパティ以外の４人は揃って悲鳴を上げる。

「きゃあああ！！」
「・・・ひぃっ・・・！！」
「あわわわっ！」
「いやあああー！」

とそれぞれに悲鳴をあげながら俺にしがみついてくる４人。

俺はそんな４人を受け止めるだけで精一杯になっていた。

そんな俺の様子を見ながらパティは俺の横でニヤニヤと人をからか

うような笑みを浮かべているのを見て、俺は心の中で＜やれやれ・・・＞と思っていたのだった。

とりあえず、しがみつく４人をなだめつつ、その部屋のスタンプをゲットして、俺達は次の部屋を目指して行動を再開させた。

各部屋もまた、こういうものになれていない人間を驚かせるには充分なほどの仕掛けがなされていて、部屋に入るなり悲鳴を上げて俺にしがみつく４人を事あるごとに受け止める事となった。

だが、そのうちにパティがどさくさ紛れにその４人に加わっている事に何部屋か移動してる時に気付いた俺は、次の部屋に入った時に再びどさくさ紛れに俺にしがみつくパティをじと目で見ながら

「・・・おい、パティ。お前、こういうのはあまり苦手そうじゃなかったはずじゃないのか？ここに来る何部屋前かあたりからどさくさまぎれに抱きついてるよな？お前。少し前からそういう事をし出した理由ってやつを教えてもらおうじゃないか。」

とパティに少し前からの行動について問いただすと、パティはしれっと

「コウイウトキのコウイウコウドウはこのシチュエーションならオヤクソクですからネ！だからワタシはそのオヤクソクをジッコウしたまでデスよ！ケイイチはこういうのはウレシクなかったデスか？」

と親指をビシッとたてながら力説するパティに俺は軽く溜息をついて苦笑しつつ

「そりゃ、まあ、男としては嬉しくない訳じゃないが・・・って何

を言わせる！」

と、パティの口車につい乗ってしまった俺は思わず自分の言った事に顔を赤らめつつもパティにツッコミをいれたのだった。

パティはそんな俺の言葉に何やら企むような悪い笑みを浮かべつつこの部屋のスタンプを押しに行ったのを俺は恐怖で俺にひっついている４人を伴いつつ見送っていた。

そして、俺達もスタンプをゲットして、最後の部屋へと向かうのだった。

しかし、この最後の部屋で１つだけ問題が起きてしまった。

今まで恐怖に耐えながら頑張って歩いて来たゆたかがついに恐怖と疲労で気を失ってしまったのだ。

「お、おい！ゆたか、大丈夫か！？」
「・・・ゆたか！ゆたか・・・しっかり・・・」
「ゆーちゃん！？大丈夫っスか？しっかりするっス！」
「小早川さん！小早川さん！！どうしよう・・・」
「ユタカ！シッカリするデス！」

と、俺達は気を失ってしまったゆたかに声をかけたが、ゆたかが目を覚ます気配がない。

俺は少し考えてから

「・・・仕方ないな。ゆたかは俺が連れて行く。いずみ、ゆたかのチェックシートを持って最後の部屋のスタンプを押してやってくれ。

みなみ、アトラクションから出たら、ゆたかの介抱は任せるからよろしくな。日より、パティ。それじゃ最後の部屋を出て出口へと向かうぞ？」

そう声をかけると、少し心配そうなみなみや他の皆もとりあえず頷いて、俺達は最後の部屋を出たのだった。

そして、俺はゆたかをお姫様抱っこで抱き抱えてアトラクションを後にした。

出口で俺達を待っていたこなた達は俺達が出口から出てくるの見て、そして、俺の腕に抱えられているゆたかの姿を見て驚いて俺達の側に来て

「ゆーちゃん!?ねえ、慶一君。ゆーちゃんどうしたの!?」

と心配そうに聞いて来るこなたに俺は頷きながら

「アトラクションに入ってからゆたかはずっと恐怖と緊張と戦っていたんだろう。最後の部屋辺りでそのせめぎ合いがピークに達したんだだと思う。とりあえず近くのベンチに寝かせて休ませてやれば大丈夫だと思うよ。介抱はみなみに任せるし、心配ないと思うぞ？」

と言う俺の言葉にこなたや皆はほっとしたような表情を見せ、ゆたかの状態に安心したこなたはにニヤニヤと嫌な笑みを浮かべつつ

「そっかー。それならよかったよ。とはいえ、慶一君、ゆーちゃんをお姫様抱っこなんてずいぶんやるもんだねえ？」

と言うこなたに俺は顔を赤くしつつ慌てながら

「い、いや、だって仕方ないだろう？おんぶしてやるにしてもゆたかが気を失ったままじゃ俺の体につかまれないから危ないだろうし、みなみだって女の子だから任せる訳にもいかないだろ？それにこんな事したのも初めてって訳でも・・・いや、なんでもない・・・。」

と最後の方でうっかりテンパって言わなくてもいい事を口にした事に気付いて慌てて言葉を切ったが、俺の最後の言葉はしっかりと他の皆にも聞こえていたらしく

「へえー？ゆーちゃんにこんな事したのは今回が初めてじゃないんだー？ふーん？」

と、途端に不機嫌になるこなたの言葉にその背後で俺達の話を聞いていた皆の中からも数人、黒いオーラを気配を感じて、俺は心持ちビクビクと怯えるのだった。

そんな様子を苦笑交じりに見ていた次の３人のうち、こうが俺に

「とりあえずは１回目終了ですね。次は私達の番ですので、先輩、よろしくお願いしますね。あ、それと、アトラクションのネタばらしはしない方向でお願いしますね。それだと面白くなくなりますし。」

そう言って来たので、俺はそれに頷くと

「わかったよ。それじゃ次はこう、みく、たまき。行ってみようか。」

そう声をかけると、３人は俺の言葉に頷いて早速チェックシートを

もらってアトラクションへ入る準備をするのだった。

俺はその様子を見ながら更に続くこの後の事を考えつつ、盛大な溜息を1つついていたのだった。

楽しげな旋律～みさお達との約束、思いがけない幸運の招待状、２日目第４話、

今回は全3部作で纏める予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4101h/

らき☆すた～変わる日常、高校生編～

2011年10月1日05時32分発行